八条学園騒動記

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
八条学園騒動記

【Ｎコード】
Ｎ１０６２Ｂ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
星河の覇皇と同じ時代の日本。八条義統が理事長を務める八条学園二年Ｓ１組の面々が引き起こす様々な騒動とは。学園コメディーです。

プレリュード

八条学園騒動記

人類が銀河に進出して一千年あまり。圧倒的な人口と国力を持ちながらも纏まりに欠ける連合、貴族制社会であり人口問題に苦しむエウロパ、戦乱に明け暮れるサハラ、そして連合と同盟関係を結びつつも独自の勢力であり続けるマウリア。その四つの勢力が存在していた。

政治や社会はそうなっていた。四つの世界があり人々はそれぞれその中において暮らしていた。それはどんな時代になっても変わるものではなく飲んで食べて笑って泣いて暮らしていた。これは変わることはない。人間である限り。

つまり人間であるからすることも同じなのだ。この時代でも普通に学校があり、そこに生徒達が通って勉強をしている。それはどの勢力でも同じことだ。エウロパは貴族は別の種類の学校に通ったりするが連合はそうしたことはない。それぞれ自由で階級とかそうしたもののない学園生活を楽しんでいるのである。大衆社会がそのまま学校にも現われていた。

そんな中にある日本。この国にもやはり学校がある。その名を八条学園という。日本の名家の一つである八条家が経営している組織の一つであり幼稚園から大学院まであるかなり大規模な学校である。日本からだけでなく連合中、果てはマウリアからも留学生が訪れている。連合は連合加盟国ならばどの国のどの学校に通ってもよく、それで連合中から生徒が集まるのである。設備等は八条家が資産家である為潤沢な資金を使ってかなりいい。理事長は八条義統。言わずと知れた連合中央政府国防長官であり八条家の嫡子である。その彼が理事長を務めているが彼は多忙なので学園には滅多に顔を見せない。それで実質的な経営は彼の部下達が受け持っている。

そうした学園である。生徒数は途方もないもので大学で四万もい

る。高等部は一万だ。かなり大袈裟な数となっていて街一個が学園にまでなっている。当然文字通りの学園都市になっており大変な状況となっている。そんな学園である。この物語はそんな馬鹿げた学園で高校生活を送る学生達の悲喜こもごもの話である。笑いあれば笑いあり。喧騒があって仲直りがあって。そうした話である。今それが幕を開けようとしていた。

第一話　おっとり優等生その一

おっとり優等生

八条学園高等部二年Ｓ１組。数多いこの学園のクラスの一つである。

このクラスには四十人以上の生徒がいる。連合各国から生徒が集まり実に賑やかである。何とこのクラスでは日本人の方が少なかったりするのだ。

日本人は数える程しかない。そのうちの一人はクラスの纏め役でもある。その名を小式彰子。長い黒のロングヘアに二重の丸い大きな目、人形の様に白く整った顔立ちの少女である。背はあまり高くなく胸はお世辞にも大きいとは言えない。成績は優秀、性格はおっとりしていると評判である。クラスでは何かと人気がある存在である。

「けれどさ」

そんな彰子を見ながらクラスの端で語り合う一組のカップル。

「彰子って何かね」

中国風の赤い派手な上着にズボンの女の子がいた。髪形はかっての中国のそれのお団子頭、黒に少しダークブラウンがかかった髪にダークブルーの目をしている。背はわりかし高く彰子よりは大きな胸が上着からはっきりと出ている。少しすましたような顔をしている。目は切れ長で鼻は少し高い。アジア系に白人が少し混ざった顔をしていた。

「おっとりしてるわよね」

「何を今更」

それに彼女と共にいる男子学生が応えた。こちらはブラウンのサラサラとした髪に黒い目、ソバカスが少し目立つ顔をした背の高い男であった。鼻は高く彫りもある顔立ちだがやはり純粋な白人という雰囲気ではなかった。肌も顔立ちもわりかしアジア系や黒人のル

ーツが見られた。彼はラフなグリーンのシャツに青のジーンズであった。
「彰子だろ、当然じゃないか」
「彰子だからおっとりしてるってこと？」
「そういうこと」
男子学生は彼女に答えた。
「違うかい？」
「いえ、違わないわ」
女子学生の返事も何か素っ気無いものであった。
「彰子はそうでなくちゃ彰子でないし」
「そうそう」
男子学生は彼女の言葉に頷く。
「あれで鋭かったら何か怖いわ。おっとりしてるから何処か落ち着くのよ」
「それは僕達だってだろ」
彼はその中国の少女に対してこう述べた。
「私だからって？」
「そう、劉蝉玉だから」
「何か気になる言い方ね」
その少女劉蝉玉は彼氏にそう言われて少し憮然となる。目を横目にしてジロリと彼を見た。
彼の祖父は連合軍参謀総長劉白凰である。元帥であり連合ではお偉いさんである筈だが軍人の地位がまあ他の職業と変わらない連合においては別にそうは見られない。それは彼女も同じで御爺ちゃんと言えば家になかなかいないといった認識しかなかったのだ。これは彼氏も同じだ。彼氏の名はスターリング＝マクレーン。連合軍宇宙艦隊司令長官であるローラン＝マクレーンの孫である。何と連合軍宇宙艦隊司令長官と参謀総長の孫が互いに同じ学校で同じクラスにいてしかも付き合っている。だがそれも連合では誰も驚くことではないのだ。

「じゃああんたもスターリング＝マクレーンってことになるわよ」
「そうだね」
「そうだねって」
蝉玉はスターリングのその言葉に少し拍子抜けしてしまった。
「僕はそれでいいから」
「そうなの」
「スターリング＝マクレーンってことに満足しているから。それでいいさ」
「だったら私からは何も言えないわね」
「君もそうじゃないの？」
「っていうと？」
蝉玉はスターリングのその言葉に目をしばたかせてきた。
「君も劉蝉玉ってことに満足してるんじゃない？」
「まあね」
言われてみるとまんざらでもない。特にこれといったところはなく頷いた。
「私は今の私でいいわよ」
「そうだろ？僕だって同じさ」
「まあ悪いところはね。変えていきたいけれど」
そうしたところも含めて自分自身がやはり好きだ。人間は大抵そうである。どうしても嫌いで仕方なくて塞ぎ込んだりする場合もあるがおおむねそうなのである。
「嫌いじゃないのは事実よ」
「それは彼女も同じってことなんじゃないかな」
「彰子も」
「そういうこと。少なくとも悪い奴じゃないだろ」
「あんまりおっとりなんで唖然としちゃうけれどね」
「まあそこは置いておいて」
二人は彰子を見ながら話を続ける。今彼女はクラスメイトの一人フック＝チャム＝ハッタンと話をしていた。黒い日焼けした肌にコ

ーカロイドが混じった彫りのある顔、そして髪はイエローだ。タイ出身でクラスきっての好色一代男、女の子の為に全てをかけている男だ。黒を基調としたパリッとした服に身を包んでいる。狙いは言うまでもない。

「でさ、彰子ちゃん」

「何？」

彰子はおっとりした顔でフックに顔を向けていた。

「で、あいつが早速声をかけているけれど」

スターリングがフックを指差しながら蝉玉に言う。

「成功すると思う？」

「無理に決まってるじゃない」

蝉玉はフックを冷たい目で見ながらそれに答えた。

「フックって彰子には全然適わないんだから」

「そうなんだ」

「全くね。歯牙にもかけられてないのよ」

「ああ、やっぱり」

「まあ見てなさいよ、絶対に陥落させられないから」

「あのフックがねえ」

それが少し意外と言えば意外である。フックはとにかく女の子にそのエネルギーの全てを注入しているのだ。その彼が陥落させられない、それはやはり恐ろしいことと言えば恐ろしいことなのである。

「今度の休みだけどね」

「うん」

「テーマパークなんてどうかな」

「テーマパークっていうとオズ？」

「そう、そこ」

フックはオズというテーマパークの名を聞いて顔を綻ばせる。この八条学園がある惑星伊勢はおろか日本においてかなり有名なテーマパークである。

「そこにさ、どうかな」

「悪いけど今度の休みは」
だが彰子は申し訳なさそうな顔でそれに応える。
「妹とね。ちょっと約束があるの」
「じゃあその妹さんとも一緒に」
「流石だな」
「普通ここで諦めるのにね」
スターリングと蝉玉はフックの鮮やかな切り返しを見て思わず唸った。ここで断られて終わりではないのがフックという男の凄いところであった。
「三人でだ」
「ううん、三人だと」
彰子はそれでもおっとりとした声で返す。
「何か。まずくない？」
「いやいや、これがまずくないんだよ」
「まずいよな、やっぱり」
「有り得ないわよ」
二人はそれを見てまた言う。
「両手に花って言うじゃないか」
それもまたよし、やはりフックはそいじょそこらのプレイボーイではなかった。それはそれでよいものだ、あわよくば、という男なのである。
「だからさ」
「お花ならお花屋さんでいいお店知ってるよ」
「なぬっ！？」
これはフックだけでなく様子を見守るスターリングと蝉玉も発した言葉であった。

第一話　おっとり優等生そのニ

「ほら、ロミオ君が今バイトしてるお店」
「そうきたか」
「これはまた」
「いや、あの」
思わぬ切り返しにさしものフックもどう対処していいかわからない。
「そこで買うといいよ」
「いや、それは」
「駄目なの？」
彰子はキョトンとした顔をしてフックに問う。
「ロミオ君も喜ぶよ」
「いや、そうじゃなくてさ」
「だって両手に花って」
「いや、あの、それは」
「勝負ありね」
蝉玉は何を言っていいのかわからなくなってきたフックを見て言う。
「あそこから態勢整えられる奴はいないわ」
「まあそうだろうね」
スターリングもそれに同意だった。
「ああなったらね。どんなプレイボーイでも」
「駄目ね」
「そうだね」
二人の予想はフックにとっては残念なことに的中することになった。もっとも当のフックは二人の話には気付いてもいないのであるが。
「違うの？」

「ま、まあとにかくさ」
形勢は最早挽回不可能、こうなってはどうしようもない。フックは撤退に取り掛かった。撤退こそが戦争においては最も難しい。しかし彼はそれを平然とやってのけたのであった。
「じゃあまた今度でさ」
「その時妹も呼ぶからね。それかロミオ君のお店行こうね」
「う、うん。そうだね」
フックは意図せずしての激しい追撃戦を防ぎながら撤退していく。これはかなり困難な仕事だったが彼は何とかやってのけていた。これは見事であった。
「じゃあまたの機会にね」
「またね」
「予想通りね」
「あのフックでもやはり無理か」
二人はそれを見て関心していた。
「しかしフックの撤退って見事だったね」
「まああいつはね。いつものことだから」
学園きってのプレイボーイ。その彼がどうして一度や二度振られた位でへこたれるのか。そんな筈がないのだ。
「それにほら」
彼は教室の外でまた何かしていた。
「他所のクラスの女の子に声かけてるし」
「男にはかけないんだね」
この時代同性愛はごく普通だ。男同士も女同士も当たり前になっている。
「男の子なら中等部の子にかけてたよ」
「お見事」
流石だ。そこにも抜かりがない。
「引っ掛けれたかどうかはわからないけど」
「まあ声をかけてもそんなには来ないって言うけれどね」

「あんたもそうだったしね」
「そうだっけ」
しれっとしてとぼける。
「私と一緒になった時も」
「まああの時はね」
蝉玉は二人が付き合ったきっかけの時を言っているのだ。
「けど私でよかったでしょ」
そのうえで彼氏に対して言う。
「私みたいな可愛いい娘で」
「普通自分で言う？」
「言うわよ、だって自信あるから」
「やれやれ」
「彰子も美人なんだけどね」
そう言いながらまた彰子を見る。
「けどねえ。あの鈍感さはどうにかならないかしら」
「容姿端麗眉目秀麗」
スターリングは彰子を評して言った。見ればすらりとした小さな身体に清楚な白いブラウスと赤のフレアスカート。非常に品のいい姿である。
「成績優秀才色兼備」
蝉玉も言う。
「おまけにスポーツも料理も何でもござれ。おしとやかで気立てもいい」
「二物も三物も与えられてるのに」
「恋路だけは別ってね」
「天下の副委員長様がね」
彰子はクラスの副委員長でもある。おっとりしているが面倒見がよく優しいのでクラスの皆から頼られるのである。
「嘆かわしいかな」
「けどあれ以上完璧だったら」

「天然なのが救いね」
「うんうん」
スターリングは蝉玉の言葉に頷いた。
「そういえばさ」
彼はまた言った。
「何？」
「さっきのフックの言葉だけれど」
そこに突っ込みを入れる。
「ああ、あれ」
「彰子ちゃんって妹さんいるんだ」
「ええ、一年にね」
蝉玉は答えた。

第一話　おっとり優等生その三

「いるわよ、凄い奇麗な娘が」
「ふうん」
「って知らないの！？」
「知らないっていうか初耳だよ」
スターリングは目を少し丸くさせて言う。
「そんなこと」
「あっきれた。有名じゃない」
「そうだったんだ」
「八条学園の美人姉妹だって」
「だってこの学校生徒一万人以上いるしさ」
「まあそうだけどね」
姉妹といっても何人もいる。それでわかれというのもよく考えれば難儀な話である。
「で、どんな娘なの？」
「若しかして」
蝉玉の目の色が何か疑うものになってきていた。
「まさか、それはないよ」
「それもそうね」
一瞬浮気を疑ったがそれは単なる邪推に終わった。
「僕はフックとは違うからね」
「そうよね。一瞬だけど疑って御免なさい」
「この埋め合わせはデートでね」
「変なことしないでよ」
そう言う顔が少し赤くなった。
「私まだ高校生なんだから」
「了解じゃあファーストキスはまた今度で」
「うん。またね」

何となく気の強さが消えて慎ましやかになる。急に女の子らしくなった感じであった。
「それでさ」
「ええ」
態度も大人しく素直なものになっていた。
「彰子ちゃんの妹さんだけれど」
「ああ、彼女ね」
それに応える。
「明香ちゃんっていうの」
「ふうん、明香ちゃんか」
「一年のね、普通科の」
この学園は普通科の他に商業科、工業科、農業科、水産科、看護科等多くの学科があるのだ。一通り揃っていると言っても過言ではない。なお彰子達のクラスは普通科である。
「小式明香ちゃんだね」
「そうよ」
「じゃあ今度会ったら挨拶しておくよ」
「それだけなのね」
「それだけじゃ駄目なの？」
「逆よ」
顔が少しむっとしたものになる。
「それ以外何かあったら。許さないから」
「わかってるって」
何処となくスターリングが他の女の子に何をするのか不安な蝉玉であった。彰子はそんな二人のことには気付くこともなくいつもの通りおっとりした様子でその日を過ごした。そして家にもおっとりと帰った。
「只今」
「お帰りなさい」
物静かな様子の女の子の声が返ってくる。家からすらりとした長

身の黒髪の女の子が出て来た。
その黒髪は肩まででそこが姉とは違っていた。顔つきは姉と似ているが目が少し切れ長で痩せている為に違う印象を受ける。その雰囲気も姉がおっとりしたものであるのに対して彼女のそれは静かでしっかりとしたものであった。姉妹であるのにその雰囲気は全く違っていた。
「お帰り、明香」
彰子は彼女に挨拶をした。明香は黄色のセーターに黒いズボンを履いている。
「今日は部活はなかったの？」
妹が姉に尋ねた。
「うん、休みだったの」
「そうなの」
「明香は？今日はアルバイトは休みなの？」
「ええ。定休日で」
「そうだったの」
「何か二人この時間に家にいるなんて久し振りね」
「そうね。といっても何もすることないけれど」
二人は廊下を進みながら話をしていた。わりかし広くていい家である。
「明香のバイト先って何だったっけ」
「ケーキ屋さんよ」
明香は答えた。並んで立つと妹の方が背が高い。小さい姉と大きな妹だった。どちらかというと明香の方がお姉ちゃんに見える。それは背の問題だけでなく雰囲気もそうであった。
「そうかあ。じゃあ余りものとかは」
「ある時もあるけれど」
「そういう時ね、持って帰って来て」
「えっ、けど姉さん」
実は彰子はお菓子部に入っているのだ。料理は得意だがその中で

お菓子作りが最も得意なのである。家でもよく作ったりしている。
「いいのよ、お店のケーキとかも食べてみたいのよ」
彰子は言う。
「試しにね」
「勉強の為なの？」
「そういうこと」
妹を見上げてにこりと笑って言う。
「だからね」
「じゃあ」
明香はそれを聞いたうえで言う。
「何がいいのかしら」
「そうね、とりあえず苺とチョコレートとモンブランとピーチ」
「姉さんの好きなものばかりのような気もするけど」
「細かいことは気にしないでね」
「うん」
とりあえずは頷いた。姉の願いを引き受けるつもりであった。
「じゃあ明日」
「お願いね」
こうして明日はケーキパーティとなった。自分で作るのも食べるのも好きな彰子であった。そしてそんな姉が好きな明香であった。
二人は全く似ていないが仲のいい姉妹であった。

おっとり優等生　　完

２００６・８・３１

第二話　妹と兄その一

妹と兄

彰子には明香という美人の妹がいる。そして実はスターリング＝マクレーンにも妹がいるのだ。

「ねえスターリング」

彼女の劉蝉玉が彼の机で声をかけてきた。

「今日妹さんいるかしら」

「アパートにかい？」

「ええ」

アメリカから来ているスターリングはアパートを借りて住んでいるのだ。八条学園は連合中から生徒を受け入れ、他国の生徒はアパートから通う場合が殆どだ。その家賃は学費に入っている。スターリングは妹の隣の部屋に住んでいるのだ。

「どうなの？」

「確かいるんじゃないかな」

スターリングは考える顔でそう答えた。

「いるのね？」

「多分ね」

「多分って」

「あいつのことはよくわからないんだ、実は」

ここで少し困った顔になった。

「隣同士だけど部屋が違うから」

「そうなの」

蝉玉はそれを聞いて困った顔になった。

「それは少し困ったわね」

「困ったって何かあるの？」

「うん、ちょっとね」

蝉玉はその言葉を受けて話しはじめた。

「うちの兄貴がさ」
「兄貴って」
スターリングはそれを聞いて目をしばたかせた。
「大学の文学部にいる君のお兄さん？」
「そう、その兄貴よ」
「そのお兄さんがどうかしたの？」
「その娘の家庭教師になるらしいのよ」
「へえ」
「へえって」
それを聞いても特に驚かないスターリングに蝉玉はむっとした顔になった。
「大事だと思わないの？」
「そういえばあいつに家庭教師をつけたいって実家のパパやママが言ってたから」
スターリングは答えた。
「それが君のお兄さんだったんだなって」
「そう思っただけ？」
「それ以外にどう思うんだよ」
逆にそう問い返してきた。
「家庭教師になるだけでさ」
「うちの兄貴なのよ」
「だからそれが」
「年頃の女の子に若い男がって。どう考えても危ないでしょ」
「そんなこと言ってたら僕達だってそうだし」
両手を頭の後ろに組んで言う。
「一緒じゃないかな」
「あのね、スターリング」
彼女は危機感のない彼氏にムッとしながら言った。
「年頃の女の子がそもそも若い男と一緒の部屋にいたら」
「何かあるっていうのかい？」

「そうよ」
蝉玉はきっとしてこう述べた。
「それ位わかるでしょ。それなら」
「けどそんなの僕達がここであれこれ言ってもはじまらないよ」
「そんなのわかってるわよ」
きっとして言い返す。
「だから今日ね、私が直接あんたの妹さんに言ってやるのよ」
「何て？」
「うちの兄貴に何かされそうになったら」
「うん」
「バットで頭を思い切り殴ってやれって」
「バットで」
「理想は金属バットね」
しれっとした様子で言う。
「軽くて硬いから。脳天なんかやったら一撃よ」
「過激にとんでもないこと言うなあ」
「あんたの妹さんの為よ」
当の蝉玉はそれをとんでもないとは全く思ってはいない。
「当然でしょ」
「当然なんだね」
「そうよ。とにかく今日の放課後よ」
スターリングに拒否権はなかった。
「いいわね、それで」
「わかったよ。じゃあ放課後ね」
「そういうこと」
これで話は纏まった。というよりは蝉玉が強引に纏めさせた。かくして二人はスターリングの隣のアリスの部屋に向かうことになった。だがここで二人途中参加が加わった。

第二話　妹と兄そのニ

「あら、あんた達も」
「ああ」
　一人は黒い髪に目の黄色い肌をした白人の顔の男。鼻と背がやけに高く筋肉質だ。目は小さめで二重になっている。彼の名はベン＝ヒディングストン。二人のクラスメートでオーストラリア人である。黒いズボンに青いシャツを着ている。
「で、私もね」
　ブロンドの髪に青い目の小柄なこまっしゃくれた感じの女の子であった。彼女はエイミー＝サスケード。フェニキア人の女の子でやはり二人のクラスメートであった。青っぽいブラウスとそれと同じ色のロングスカートである。
「何であんた達まで」
「俺はちょっと妹のことでな」
「妹さんのこと？」
「私は一番上のお姉ちゃんのことで」
「あんたはお姉さんのこと」
「それで一緒に行きたいんだ」
「いいかしら」
「何か話がよく見えないけれど」
「まあすぐにわかるさ」
「スターリングのアパートの隣の部屋よね」
「ちょっと待ってエイミー」
　蝉玉がふとエイミーの言葉に反応する。
「何であんたがそれ知ってるのよ」
「だってあれだけ大声で話してたら」
　エイミーがそれに応えて言う。
「誰にだってわかるわよ」

「誰でだってって」
「あっ、やっぱり」
スターリングがそれに頷く。
「聴こえてたんだね」
「聴こえない方がどうかしてるわよ」
「劉ちゃん声大きいからな」
ベンも言う。どうやら蝉玉は周りの人間が話を聞いているとは考えもせずに話していたようである。
「で、それで俺達思い当たるところがあって」
「参加させて欲しいのよ」
「どうする？」
蝉玉はそれを聞いてスターリングに顔を向けて尋ねてきた。
「この二人入れるの？」
「入れるって言われてもどっちみち来るんじゃないかな」
「御名答」
「まあ行く先は変わらないわ」
「やっぱり何かあるのね」
蝉玉はそれを聞いて眉を顰めさせた。
「それが何かはわからないけれど」
「僕にはわかったけれどね」
それに対してスターリングは涼しい顔をしていた。
「そういうことなんだ」
「わかるの、あんた」
「うん」
恋人にも答える。
「これだと大事にはならないね」
「そこまでわかるの」
「まあバットは私も用意しておこうかしら」
「俺もね」
二人はそこまで話を聞いていた。

「男は狼だって言うしね」
エイミーはそう言ってにこりと笑う。場違いに思える笑みがかなり怖い。
「まあそれは同意だけれど」
「同意なの」
「まあ本当に好きな人が相手ならいいとは思うけれど」
そう言って少し顔を赤らめさせる蝉玉であった。
「それ以外は」
「そういや御前等キスまだなんだってな」
「早くしないとスターリング君に悪いわよ」
「な、何でそんなことも知ってるのよ」
「だから話全部聞かれてるんだって」
「うっ、うう・・・・・」
話す度に八方塞りになっていくのがわかる。
「けれどまあ話はそれ位にしてさ」
「いざマクレーンのアパートへ」
「出陣ね」
こうして二人の筈が倍の四人になってスターリングのアパートへ向かうことになった。アパートに辿り着くとそのまますぐにそのアリスの部屋に向かった。

第二話　妹と兄その三

「ここなのね」
「うん、ここ」
スターリングが蝉玉に答える。後の二人は後ろにいる。
扉自体は何の変哲もないアパートの扉だ。本当に何もおかしなところはない。むしろその前にいる面々の方が異様な程であった。
「じゃあ行くわよ」
蝉玉は後ろにいる三人に声をかけた。
「ドカーーーーーーンとね」
「ドカーーーーーーンて」
「何するのよ」
彼女にスターリングとエイミーが尋ねる。
「一体全体」
「決まってるじゃない殴り込みよ」
蝉玉は腕まくりをしていた。
「それでうちの兄貴を」
「蝉玉のお兄さんってそんな人だったか？」
「初耳だよ」
ベンにスターリングが返す。どう見ても蝉玉が勝手に暴走しているだけなのである。
「そんなの」
「そうよね、私も聞いたことないわ」
エイミーも二人の話を聞いて言う。
「私の二番目のお姉ちゃん蝉玉のお兄さんの同級生だけれど」
「あれっ、二番目だったっけ」
「二番目よ」
スターリングに返す。
「大学のね」

「そうだったっけ」
「三番目のお姉ちゃんが一年生で」
「そうそう」
「で、二番目のお姉ちゃんが二年だったじゃない」
「そうだったんだ」
「確か三番目のお姉さんがベスさんだったよな」
「ええ、そうよ」
ベンに答える。
「そして二番目のお姉さんがジョーさんで」
「一番上のお姉ちゃんがメグっていうのよ。覚えた？」
「ああ、まあな」
ベンはその名前とおぼろげに覚えている顔を頭の中でインプットさせながら応えた。
「何となくだけどな」
「うちのお姉ちゃん達皆美人だから言い寄ってくる男が多くて」
ここでエイミーは困った顔になる。
「それでいつも心配なのよ。まあ今のところは大丈夫だけれど」
「まああのお姉さん達なら大丈夫なんじゃないかな」
スターリングが素っ気無い声で答える。
「どんな悪い男が来ても」
「何でそう言えるの？」
「いや、噂で」
「噂！？」
今度はエイミーが首を傾げさせた。
「言ってる意味がよくわからないんだけれど」
「いや、俺はわかったぞ」
どういうわけかベンには納得がいった話であったようである。
「そういうことか」
「うん」
スターリングに顔を向けるとそのスターリングがこくりと頷いた。

「そういうこと」
「あれだったらまず大丈夫だよ。むしろ将来結婚出来るかどうかだな」
「何言ってるかわからないけれど」
「御前も注意した方がいいぜ」
スターリングは何故かエイミーにこう声をかけた。
「下手したらどんな男でも寄り付かなくなるからな」
「一体何言ってるのよ」
エイミーはその整った顔を顰めさせて二人に応えた。
「わかんないわよ、そんなこと言われても」
「わかったら結構ショックだよ」
「ああ、だろうな」
「何が何だか」
エイミーにはどうしても二人の言葉の意味がわからない。首を傾げさせたままであった。
「ちょっと」
ここで蝉玉が三人に声をかけてきた。

第二話　妹と兄その四

「ちょっと」
ここで蝉玉が三人に声をかけてきた。
「人の話聞いてる！？」
「あっ、うん」
「よくね」
「そんなふうには見えないけれど」
慌てた顔で応対する三人を見てあからさまに疑わしげな目を向ける。
「まあいいわ」
だがそんなことを気にしている状況ではなかった。彼女個人にとっては。
「それじゃあ行くわよ」
「結局行くんだね」
「当然よ、いたいけな女の子を毒牙から守るのよ」
言葉だけは偉く危機的である。
「その為には多少手荒なことでもね」
「やれやれ」
「結局こんなものまで持って来て」
ベンとエイミーは溜息をつく。二人は何時の前にか金属バットを持たされている。
「私とスターリングは素手でも充分よね」
「多分」
実は蝉玉は中国拳法、スターリングはマーシャルアーツをやっている。両方共軍人である祖父に教えられたものである。
「じゃあ安心ね。兄貴も拳法やるけど」
「まあ四人がかりならね」
「よし、それじゃあ」

「行くか」
「そうね。こうなったらもうやぶれかぶれよ」
ベンとエイミーは呆れ顔で話を続ける。
「いざ」
「鎌倉・・・・・じゃなかった部屋の中へ」
何故か古い言葉を知っているエイミーであった。
扉を開ける。蝉玉がまず飛び込んだ。
「覚悟なさい、馬鹿兄貴！」
「馬鹿兄貴って！？」
だがそれに帰って来たのはハキハキとした大人の女の声であった。
「あれ、お姉ちゃん」
エイミーがその声に反応した。
「どうしてここに？」
「ん！？エイミー？」
出て来たのは背の高い赤茶色の髪をした背の高い女の人だった。
上は草色のセーターに下はジーンズというラフな格好がよく似合っていた。顔は奇麗というよりは凛々しいといった感じであった。その凛々しい顔に碧の目がよく似合っていた。今さっき話も出ていたエイミーの二番目の姉である。
「あんたこそどうして」
「どうしてって言われても」
思いも寄らない姉の登場にエイミーは動きを止めてしまった。
「ちょっとまあ」
「しかも金属バットなんか持って」
「まあこれもね」
エイミーはバツが悪そうな顔で応える。
「まあそれはその」
「しかもお友達まで一緒で」
「何であんたのお姉さんがここにいるの？」
蝉玉は顔をエイミーに向けて尋ねた。

「私に言われても」
「そうよねえ。何でここに」
「勉強教えてるのよ」
「勉強！？」
「そうよ、ここの娘達にね」
二番目の姉であるジョーは言った。
「教えてあげてるの」
「そうだったの」
「じゃあうちのアリスにですか？」
スターリングが前に出てジョーに尋ねた。
「貴方アリスさんのお兄さん？」
「ええ、まあ」
スターリングはそれに答えた。
「そうですけど」
「そうだったの。それはまた」
「で、俺はその」
「ルーシーとケイトのお兄さんかしら」
「わかります？」
「何か話に聞いてるのと印象が同じだからね。それで最後の貴女は」
「うちの馬鹿兄貴ここですよね」
「馬鹿兄貴とは心外だな」
妙にカラフルに着飾ったみらびやかないでたちの若い男が姿を現わした。顔立ちは蝉玉に似ているが何かが違う。高くスラリとした身体をゴチャゴチャと着飾っているのだ。それがやけに変だ。
「僕みたいな人間を差し置いて」
「やっぱり兄貴いたのね」
「来たの、公明」
「何か騒ぎだからね」
蝉玉の兄である劉公明であった。一目見ただけでかなりの変人であることがわかる。

「嫌でも聞こえてるさ」
「まあそうよね」
エイミーがそれを聞いて頷く。
「玄関でこれだけ騒いだら」
「扉でも結構おしゃべりしていたしな」
ベンも言う。二人にはどうして気付かれたのかよくわかった。
「それで妹よ」
「何よ」
ムッとした顔を兄に向ける。
「僕の何をそんなに警戒しているんだい？」
「全部よ」
返した返事は身も蓋もないものであった。
「それ以外の何だっていうのよ」
「やれやれだ」
それを聞いて嘆いてみせる。
「兄さんを信じてくれないのか」
「お兄ちゃんだから信用出来ないのよ」
蝉玉はなおも言い返す。
「だからここに来たのよ」
「といっても普通に勉強教えてるだけだよ」
「嘘仰い」
「いえ、本当のことよ」
疑う蝉玉に対してジョーが言った。
「私もいるから。これだと信じてくれうわよね」
「ジョーさんが言うなら」
信じることにした。どうあっても兄を信じるつもりはなかった。
「ちゃんと教えてるんだ」
「それでジョーさん」
何か影が薄くなっているスターリングがジョーに尋ねた。

第二話　妹と兄その五

「うちのアリスは何処？」
「ええ、奥の部屋にいるわよ」
ジョーは答えた。
「ルーシーやケイトと一緒に」
「そうですか、よかった」
「いい娘ね。真面目にちゃんと勉強して」
ジョーは笑みを浮かべてスターリングに言う。
「私から教えることはない位よ」
「それはどうも」
「だから私からは何も言うことはないけれど」
「僕からも」
「お兄ちゃんには私から色々言いたいわよ」
蝉玉はまだ兄に対して何かと含むものがあった。
「本当に大丈夫かしらってね」
「公明もちゃんとやってるわよ」
ジョーはむくれ続ける蝉玉にも言った。
「だから安心して」
「そういうことなら」
「それで顔出す？」
ジョーはスターリング達にまた尋ねてきた。
「妹さん達に」
「いえ、遠慮します」
スターリングは落ち着いた様子でそれに答えた。
「勉強の邪魔になりますから」
「俺もそうさせてもらいます」
ベンも言った。
「ここは静かに勉強した方がいいですから」

「そうなの」
「まあ玄関でここまで騒いで今更って気もするけれど」
エイミーは両手を後ろに回してそう述べた。
「ここは帰りましょ。何もなかったってことで」
「ただ単に蝉玉の勝手な暴走ってわけだな」
ベンが溜息混じりに述べた。
「やれやれだ」
「うう・・・・・」
言いたくても言い返せない。何故ならその通りだからだ。
顔を真っ赤にさせて身体を震わせる蝉玉を引き摺って部屋を後にする。そして一旦隣にあるスターリングの部屋に入った。そこのリビングで四人車座になった。
「まあ何もなくて何よりってわけだ」
最初にベンが言った。
「とりあえずこれで一件落着だな」
「私はジョーお姉ちゃんが出て来た時点で大丈夫と思ったわよ」
エイミーがそれに応えて言う。
「こりゃ安心だって」
「僕はまあ最初から」
スターリングは最初から焦らず、落ち着いて考えていたのである。
「わかっていたけれど」
「結局私の一人よがりだったてことね」
「うん」
「それ以外の何なの？」
「まあ気にすることはないよ」
三人はそれぞれ声をかける。優しい言葉はスターリングのだけであった。
「何か馬鹿みたい」
蝉玉は状況を受け入れて言う。同時に天井を見上げた。
「私一人で勝手に騒いで勝手にここまで来て。それでスターリング

のとこに邪魔になって」
「僕の部屋に来るの嫌だったの？」
「えっ」
この言葉は予想していなかった。突然のことなのでギョッとした顔になる。
「来たのはじめてだったけれど」
「あっ、そういえばそうだったっけ」
言われてそれに自分でも気付く。
「うん、そうだよ」
「何かはじめてじゃないみたいだけれど」
蝉玉はその整った顔を急に赤らめさせながら言う。
「いや、いきなりだったから、その」
「それで来てどう？」
「悪いわけないでしょ」
顔を赤くさせたまま答える。
「だって。来たかったんだから」
「そう」
スターリングはその言葉を聞いて嬉しそうな顔を見せた。
「そう言ってもらえると有り難いけれど」
「いい来訪じゃなかったけれど」
それが残念と言えば残念だった。
「けれど。まあいいかしら」
「俺達ぎなかったらもっと？」
ここでベンが笑みを浮かべて言ってきた。
「えっ！？」
「だって彼氏の部屋にはじめての御訪問」
「お邪魔虫がいたらムードがぶち壊しよね」
エイミーも参戦する。ベンと共同戦線を張り蝉玉に意地悪な笑みを浮かべていた。
「ここは退散ってことで」

「後のこと、じっくり聞かせてよね」
「ちょ、ちょっと待ってよ二人共」
本当に帰ろうとする二人に慌てて声をかける。
「何でそうなるのよ」
「何でって」
「私達だってわかってるわよ」
意地悪をしていることがだ。だが別のことをわかっているとあえて言う。
「だからね」
部屋を出ようとする。
「ごゆっくり」
「あの、そのね」
蝉玉が一人で慌てて焦っていた。スターリングは平気な顔でコーヒーを飲んでいる。
「何をそんなに慌ててるの？」
「何がってちょっと」
落ち着き払っているというよりは何処か天然な彼氏の態度にかえって自分が慌てる。
「貴方からもちょっと」
「ちょっとって二人共まだ帰らないでしょ」
「えっ！？」
彼の言葉にピタリと動きを止める。
「あの、今何て」
「だってさ。二人共君をからかってるだけだよ」
「私を！？」
「まあ落ち着きなって蝉玉」
「スターリング・・・・・」
彼を見て何か雨に濡れた猫みたいな顔をする。
「そうやって慌てたままだと余計に不味いからさ」
「・・・・・うん」

スターリングを見る。後ろには今人気の男性五人組バンドのポスターがあった。枕元には本が何冊か置かれていた。そういったものを見ているうちに落ち着いてきた。

第二話　妹と兄その六

「二人だってそうなんだろ？」
スターリングは今度はベンとエイミーに声をかけてきた。
「蝉玉をからかって遊んでるだけなんだろ？」
「やっぱりわかった？」
「スターリングは流石に手強いわね」
二人はそう言って顔を二人に向けてきた。
「そうだよ、蝉玉からかって遊んでたんだよ」
「だってこの娘すぐに顔に出るんだから」
「もう、そんなこと止めてよ」
事情を理解した蝉玉はむくれた顔で言う。
「おかげで恥かいちゃったじゃない」
「いや、それは君が」
「何よ、スターリング」
ムッとした顔をスターリングにも向ける。
「あんたまで言うの？」
「僕は言わないけどさ」
「ホントに。折角ここにはじめて来たのに」
「まあまあ」
「それもいい思い出ってことで」
何時の間にかベンとエイミーまで宥め役になっていた。そっとクッキーを差し出す。
「ほら、クッキーでも」
「ありがと」
蝉玉も蝉玉でそのクッキーを受け取る。そして一つ口の中に入れてガジガジと噛む。
「美味しいわね」
「うん、この前スーパーで買ったら凄くよくて。それで買いだめし

てるんだ」
スターリングはにこりと笑って答える。
「二人もどうかな。コーヒーでも飲みながら」
「あっ、いいね」
「それなら蝉玉とスターリングのお惚気でも聞きながら」
「何にもないわよ」
「だからからかわれてるんだって」
「うう・・・・・」
「ほら、コーヒー」
またスターリングに言われてだんまりになっているところでベンがコーヒーを差し出してくれた。
「とりあえず今日は色んなことを話しようよ」
「気を取り直してさ」
「そうね」
ベンの言葉で気が楽になった。それで蝉玉は落ち着いてコーヒーを口に含んだ。
「あっ、このコーヒー」
「美味しい？」
「うん、とても」
スターリングの言葉にこくりと頷く。
「私コーヒーにはちょっと五月蝿いつもりだけれどこれは中々」6
「うちの実家から送ってもらったものなんだ」
「へえ」
「けれど気に入ってもらってよかったよ」
スターリングの顔が綻ぶ。
「やっぱりね。美味しいって言ってもらうとね」
「スターリングの淹れてくれたのなら何でも美味しいけれど」
「いや、淹れたの俺だから」
ベンが突っ込みを入れる。
「あっ、そうか」

「まったく、のろけちゃって」
「うう・・・・・」
エイミーにまで言われてまたへこまされる。それでもスターリングが意識せずに助け舟を出す。
「じゃあ今度は僕が淹れるよ。それでいいかな」
「えっ、ええ」
スターリングはこの言葉の意味がよくわかっていない。
「じゃあお願いできるかしら」
「うん」
そして蝉玉も。結構二人も鈍感である。
「これはまた」
「先が流そうね」
それを見て苦笑いを浮かべる二人。何だかんだ言っても暖かい目で二人を見ていた。

妹と兄　　完

２００６・９・６

第三話　スポーツはいいけれどその一

スポーツはいいけれど

メキシコからやって来たマルコ＝アミーデスはサッカーも野球も得意なスポーツマンだ。適度な背に引き締まった顔をしている。爽やかな黒髪に健康的な黒い目、実にいい顔をしている。

「とにかくスポーツなら何でもござれだぜ」

彼はにこりと笑ってそう述べる。

「けれどやっぱりサッカーだな」

「サッカーが一番好きなんだ」

「ああ、そうさ」

学校の新聞部のインタビューにも爽やかに答える。サッカーグラウンドをバックにしてユニフォームを着ている。それが非常に絵になっている。

「やっぱりサッカーだよ、俺は」

「けれど野球部にいることもあるよね」

「まあな」

新聞部員の質問に快く答える。

「けれど第一にはサッカーだね」

「そうなの」

「そうさ」

こうした爽やかなインタビューが学園新聞に載った。クラスでもそれは紹介されていた。

「へえ、マルコ君て凄いんだ」

彰子もそれを見てやけに感心している。

「サッカーが一番好きって」

「嘘じゃないぜ」

クラスでも爽やかな物腰なので男女共に人気がある。

「身体を動かすやつの中でもサッカーは最高にいいんだよ」

「そうそう」
それに頷く少女がいた。黒い肌に赤い髪、目は翡翠の色をしている。サバサバとした外見をしている。背はあまり高くはないが均整のとれた身体つきをしている。
「やっぱりサッカーはいいよね」
「そうだよな、レミ」
「ああ」
レミと呼ばれた少女はマルコの言葉に応える。彼女の名はレミ＝ジャノバン。ブラジル人である。
「野球やバレーもいいけれどな」
「俺はバスケも好きだけどな」
「とにかく球技が好きなのね」
彰子がそれを聞いて頷く。
「二人共」
「まあ格闘技とかは苦手かな」
マルコは少し苦笑いを浮かべた。
「ルチャ＝ブリエとかは」
「あたしも。カポエラとかはね」
レミもそれは同じだった。どうやら二人は格闘技には興味がないらしい。
「痛いのは嫌いなんだ」
「同じく」
ここも同じだった。
「苦しいのも？」
「当然」７２
二人は同時に言った。
「スポーツは楽しむ為にやるんだよ」
「すっくりと爽やかにね」
マルコは明るい顔で、レミはウィンクして答える。
「じゃあ気合入れて死ぬ気でやるのは？」

「いや、漫画じゃあるまいし」
マルコは少し引いて言う。実際に身体が引けていた。
「それはちょっと」
「あたしの柄じゃないわね」
「そうなの、やっぱり」
彰子にも何となくわかっていることではあった。一応聞いてみたのだ。
「腰にタイヤつけて走ったりとかもしないわよね」
「あれはするかな」
「ちょっとはね」
「じゃあ火山の噴火口での特訓とかは？」
「いや、そんなの何の意味もないし」
「馬鹿じゃない、そんなのしたら」
「そっかあ」
「そっかあじゃなくて」
「彰子ちゃん、一体誰のこと言ってるの？」
レミはふと聞いてみた。
「そんなのやったら死んじゃうから」
「そうよね」
何と彰子もそれはわかっているようである。わかって聞くから何とも奇妙なことになっているのだ。
「やっぱりそうか」
「あのさ、彰子ちゃん」
マルコもいい加減彰子の天然に呆れてきて尋ね返してきた。
「もしかしてフランツと一緒にしてない？」
「うん」
「やっぱり」
それを聞いてやれやれといった顔と仕草を見せる。レミも同じである。
「あいつは特別だよ」

「特別なの？」
「あんな馬鹿他にいないでしょ」
レミは何気に酷いことを述べる。
「あれは特別なのよ」
「そっかあ」
「そっかあって」
何かさらに彰子に言わずにはいられなかった。
「スポーツと馬鹿は違うの」
「じゃあウィース君は馬鹿なの？」
「そういうこと」
またはっきりと言い切っている。
「あれを馬鹿と言わずして何と言うのよ」
「レミ、それ言い過ぎだよ」
マルコもそれを嗜める。
「あいつもあいつなりに必死なんだからさ」
「確かに必死ね」
それはレミも大いに認めるところである。
「馬鹿な方向に」
「結局それなんだね」
「だってそれ以外に言いようがないじゃない」
レミの辛口は止まらない。
「私には他に言い方が見つからないわよ」
「やれやれ」
そのフランツ＝ウィースとは何者なのか。実は彰子達のクラスメイトである。野球部のエースピッチャーとして知られている。金赤の髪にグレーの目。やけに暑苦しく元気な顔立ちをしている。国籍はニュージーランドだ。
「今日もやってやる！」
彼はグラウンドで思い切り叫んでいた。
「人間努力だ！努力すれば何でも出来るんだ！」

そのグレーの瞳に赤い炎を燃え上がらせている。何か思い切った方向に勘違いをしているようである。

第三話　スポーツはいいけれどそのニ

「またウィースが騒いでるぜ」
「今度は何馬鹿なこと考えてるんだろうな」
サッカー部やラグビー部の面々がそれを見て言う。彼等はどうもフランツのことを知っているようである。
「やるぞ！俺はやるんだ！」
全力でランニングしながら叫ぶ。
「明日という日の為に！思い込んだら試練の道だ！やるぞ！」
「やるのはいいですけど先輩」
その横で後輩達が言う。
「何か滅茶苦茶やってません！」
「滅茶苦茶ならばそれでいいんだ！」
フランツはその後ろに炎を背負って叫ぶ。
「その先に友情、努力、勝利があるならば！俺はやってやる！」
「駄目だこりゃ」
「これさえなければいい人なんだけどなあ」
後輩達も完全に匙を投げている。
「さあ、だから今日も猛練習だ！」
相変わらず走り続けている。それも全力でだ。なお彼がやっているのはランニングでありダッシュではない。だが彼はそんなことは頭には入っていない。
「身体を苛めて苛めて苛め抜き！」
叫びながら走っている。
「そして新たな技の開発だ！」
ランニングが終わった。今度は投球練習である。
「タムタム！」
キャッチャーの赤い髪に黒い肌の少年に叫ぶ。
「今日も俺の剛速球を受けてもらうぞ！」

「剛速球はいいけれどよ」
そのキャッチャータムタム＝ハリオは問う。
「おめえこの前の変化球はどうしたよ」
「ああ、あれか」
彼はそれを聞いて思い出した顔をする。
「安心しろ、マスターした」
「そうか、それは何よりだな」
まずはそれを聞いて頷く。だが目は警戒したままである。
「それでな」
「ああ」
話は続く。
「じゃあ見せてみろ」
「よし、見ろ！」
目だけでなく身体全体が真っ赤に燃えはじめた。
「この俺の必殺魔球そのニ！」
なおその一は縦割れカーブらしい。人はそれを古くはドロップと呼んだが彼はそれを勝手に魔球にしてしまっている。皆呆れて何も言わないだけだ。
「カミソリシュート！」
恐ろしいまでに鋭く曲がるシュートが入った。ミットの中でもまだ回転が残っている。
「どうだ！」
「まあ中々だな」
「おい、それだけか」
タムタムの落ち着いた言葉に少し拍子抜けする。
「もっと他にこう」
「スライダーもあるんだろう？」
感動が足りない、と言いたそうなフランツにそう返す。
「そのスライダーも見せてくれ」
「よし！」

彼はそれを受けて大きく振り被る。どうやら言われるとすぐに動くタイプのようだ。再び左腕が唸る。

第三話　スポーツはいいけれどその三

「超高速スライダー！」
先程のシュートに匹敵する。とんでもない高速スライダーが来た。
またしてもミットの中で回転が残っていた。
「成程な」
タムタムはそのスライダーを受け止めてまた冷静な声を述べる。
「これで第二第三の変化球が出来上がったな」
「魔球だ！」
フランツは沿う主張する。
「名付けてギャラクシアンボール一号二号三号だ！」
「そのネーミングには一体どういう意味があるんだ？」
「格好いいだろう！」
「・・・・・それだけか？」
「それ以外に何があるんだ！」
「・・・・・いや、いい」
これ以上名前について話しても無駄だというのがわかっただけだった。
「だがなフランツ」
「ああ」
「このボールはあまり使うな」
「どうしてだ？」
「魔球だろう？切り札はいざという時の為に取っておけ」
「いざという時か」
「そうだ。三つ合わせてもそんなに投げられないぞ」
「そうか、切り札だからな」
「ああ」
本当は別の理由がある。変化球は肘や爪に影響を及ぼす。それが鋭ければ鋭い程。だから多投はあまりよくないのだ。これで呼称し

たピッチャーも多い。ましてや身体が完全に出来上がっていないところがある高校生ならば尚更だ。だからタムタムはそう言ったのだがフランツにはあえてこう言った。こう言えば彼が納得するとわかっているからだ。

「わかったな」

「ああ、じゃあまずはコントロールか」

「そうだ、そしてスタミナ」

「つまりは足腰か」

「わかってるな。じゃあ」

「よし！また走るぞ！」

この日だけでも何度目かわからないがグラウンドで思いきり叫ぶ。

「この銀河の果てまで！行くぞタムタム！」

「まあ待て」

まだピッチング練習があるのにいきなりそちらへ頭が飛ぶ相棒を窘める。

「まずは投球練習をやってからな」

「おっと、そうか」

「落ち着いてやれ、メニューはまだあるからな」

「そうだったな。日々の努力が魔球を作り上げていく」

「ああ」

「そして勝利を」

どうやら彼にとっては魔球の開発が第一のようである。だが努力を忘れないのは見事だった。

「行くぜジャパニーズ＝ハイスクール＝ベースボールに！」

名付けてＪＨＢである。日本の高校球児達の憧れの場所の一つだ。他にもそうした大会があるが八条学園はこれに参加しているのである。

「そして群がる強打者達を次々に三振に取り！」

勝手にそう決め付けている。

「真紅の優勝旗は俺達が手にするんだ！俺はやるぜ！」

「そうか、じゃあもっと投げろ」
「よし！」
知らず知らずのうちに相方の言葉に乗っている。
「投げて覚える」
「そうだな。まずは投げる」
「同時に投手の肩は消耗品だ」
「！？どういうことだ？」
彼は難しい言葉を理解することは苦手なのだ。
「つまり投げる練習は程々にしとけってことだ」
「その分走るのか？」
「まあそういうことだ」
さりげなくフランツに投げ過ぎを戒める。
「わかったな」
「よし！皆で行くぜ！」
またしても同じことを叫ぶ。
「皆で憧れのあのグラウンドに！いいな！」
「ああ、わかった」
手前勝手に熱血するフランツとそれに合わせるタムタム。そんな二人を彰子達が見ていた。
「フランツ君のこと？」
「その通り」
レミが彰子の言葉に答える。その目の前ではフランツがいちいち叫んで自分で名付けた球種を叫びながら投げている。何とストレートにまで名前をつけているのだ。
「剛球！！ジャイロボール！！」
ストレートが放たれる。確かに速い。そして球威もノビも桁外れだ。
「えっ、横からだと見えないよ」
彰子もそのボールを見て驚く。何とボールが見えないのだ。
そしてミットに収まる。すると重い音だけが響き渡る。

第三話　スポーツはいいけれどその四

ボールがミットに叩き付けられる音だ。凄い音である。
「ドスーーーーンって・・・・・・」
「凄いな」
マルコもそれを見て呟く。
「あれだけのボールを投げられる奴はそうはいない」
「伊達にエースやってるわけじゃないわね」
レミもそれに頷く。
「けれどまあ」
「あれで頭が良かったら完璧なんだけど」
「だから二人共言い過ぎだって」
彰子はそんな二人をまた窘める。
「そんなこと言ったら」
「けれど実際に考えてる方向が常に滅茶苦茶だぜ」
「何するかわからないし」
「それはそうだけれど」
流石にこれには反論出来ない。
「まあそうかな」
「そうそう」
「けどタムタムもいるしね。大丈夫なんじゃない？」
レミはタムタムも見ていた。
「女房役がいるしね」
「女房役」
「野球は一人でやるものじゃない」
マルコは言う。目がマジになる。
「九人でやるものだ。そしてピッチャーと同じ位、いや考えようによっては最も重要なポジションこそが」
「キャッチャー」

レミがそれに続く。
「そう、あいつがキャッチャーだからな」
黙々とフランツのボールを受け続けるタムタムを見ていた。
「フランツも大丈夫だ」
「単純だし案外上手く扱えてるみたいね」
「そうだな」
「行くぜタムタム！！」
フランツはなおも叫び続け投げ続けている。
「皆で行くぞ！！ジャパニーズ＝ハイスクール＝ベースボール！！」
「ああ」
タムタムはそれには強く頷く。その手に凄まじい衝撃が及ぶ。言うまでもなくフランツの投げているボールである。変化球であっても凄まじい球威だ。とても高校生のものとは思えない。やはり彼は本物である。
「そして俺と御前のバッテリーで！！」
投げながらまた叫ぶ。
「宇宙を制するぞ！いいな！！」
「よし！！」
タムタムはその剛球を受け止める。
「御前となら何処までも」
「そうだ！！」
フランツの言葉にさらに力がこもる。
「俺達は何時までも一緒だ！いいな！！」
「ああ、わかっている！」
タムタムも何時の間にか熱血になっていた。
「だからどんどん来い！」
「ああ、何時までもな！」
「けれどタムタム君も」
彰子は今度はタムタムを見ていた。そのうえで呟く。
「何か。熱血してるよね」

「伝染ったかな、あれは」
マルコもやはりそれを見ている。思わず苦笑いを浮かべる。
「参ったなあ」
「いいんじゃない？リードは変わってないし」
レミの顔は温かいものになっていた。
「一緒にホットになれるってのは幸せなことだよ」
「そうだな、何かに熱中出来るってのは」
「そうだよね、一生懸命やれたら」
彰子もまた温かい目になっている。
「それでいいか」
「じゃあ俺も明日またサッカーやるか」
「あたしもね」
マルコとレミは言った。
「それじゃあ私も」
「彰子ちゃんはお菓子ね？」
「うん、今度はキャロットのケーキを作るよ」
にこりと笑ってレミに応える。
「とても甘くて美味しいのをね」
「じゃあ出来たら呼んでよ」
マルコがお菓子と聞いてすぐに反応を示してきた。
「俺人参もケーキも好きだし」
「そうなんだ」
「だからさ、頼むよ」
「任せて、腕によりをかけるから」
「彰子ちゃん！」
何故かここでフランツまで叫びだした。
「俺にもケーキをくれえ！！」
叫びながら投げていた。
「聞こえてるの？」
「そうみたいだね」

「耳までいいんだ」
「食い物のことは別だ！うおおおーーーーーっ！！」
剛速球が炸裂する。
「俺にも一切れ！タムタムにもだ！！」
「わかったわ。じゃあ二人にもね」
「よおおーーーーーし！！」
高く掲げられた左足が鉈の様に振り下ろされ剛速球が再び炸裂する。それはケーキに向けた壮絶な祝砲であった。

第三話　完

２００６・９・１０

第四話　自分達だけ名探偵その一

自分達だけ名探偵

彰子達のクラスで事件が起こった。事件自体は些細なものであった。

「おい、これやったの誰だよ」

その日の日直であるベンがまずそれに気付いた。

教室の花瓶が割られていたのだ。そうしたことは日常茶飯事である。ところが。

それを決して日常茶飯事にしない者達がいた。彼等が今颯爽と姿を現わしたのであった。

「事件か！？」

「あたし達の出番ね！」

背の高い黒人の少年と日に焼けた肌に見事なショートボブの黒髪を持つ緑の目の少女がいきなり出て来た。少年はホームズ、少女はワトソンの格好をしている。

「むむ、これは」

「大事件よ、テンボ」

その少女ジャッキー＝ラオアグはフィリピン人、少年テンボ＝バディアスはケニア人だ。推理研究会に所属しており自分達こそは天才探偵であると自称しているのである。

「この花瓶を割ったのは誰か」

「それが問題ね」

「ってそんなに問題なのかよ」

勝手に騒いでいる二人を見てベンが言う。

「事件なんだぞ」

それに対してテンボが反論する。

「花瓶を割ったのは立派な犯罪だ」

「犯罪、それは人の最大のドラマよ」

「ドリーム＝レーンだな、ジャッキー」
「ええ、テンボ」
「ドルーリ＝レーンじゃなかったかしら」
とりあえず花瓶を片付けているブロンドに青い目、そして白い肌の少女がベンに囁いていた。もう一人の日直でロシアの女の子アンネット＝ケロセルカである。眼鏡がよく似合っている。スキーと本が好きな女の子だ。
「確か耳が聴こえない探偵よね」
「いつもの間違いだよ」
ベンがそれに囁く。
「言ってもその側から間違えるから言わない方がいいよ」
「そうね」
「それでね、テンボ」
「ああ」
二人は花瓶が片付けられているのをよそに話をしていた。
「問題はこの花瓶がどうやって破壊されたのかよ」
「それだな、ジャッキー」
「ええ」
「問題はそこだ」
テンボはそう言いながら側にたまたまあった椅子に座る。
「そこ私の席よ」
「待て、今推理中だ」
クラスメイトの抗議も今の彼には意味がない。ホームズの服のまま何やら考えだす。
「全ては俺のここにある」
自分の頭を指差して言う。
「この灰色の脳味噌の中にな。謎はこれで解かれたようなものだ」
「アルコール＝ポケットね、テンボ」
「ああ、ジャッキー」
「今度はエルキュー＝ポワロよね」

「あいつ等本当に推理研究会か？」

それすらも疑わしくなっている。だがそんな話は相変わらず耳からシャットアウトしてテンボは推理を開始する。全ては事件の解決の為である。

暫く考え込むテンボ。やがて彼は立ち上がった。

第四話　自分達だけ名探偵そのニ

「よし、謎は全て解けた！」
いきなり叫びだす。
「犯人はわかったぞ！」
「いきなり！？」
「こんな展開は流石にないぞ」
これにはアンネットもベンも流石に呆気にとられた。
「犯人は！」
とんでもないオーバーアクションをしながらポージングを取る。
その指先にいるのは。
「御前だ！」
「ちょっと待て」
指差されたのはベンであった。これには皆も呆気にとられた。
「何で俺なんだよ」
「それは決まっている」
テンボは自信に満ちた声で応えた。
「第一発見者だからだ」
「それが犯人になるのかよ」
「第一発見者を疑え」
彼は誇らしげに言う。
「捜査の鉄則だな」
「御前疑ってもいないじゃねえかよ」
「天才には疑う時間なぞない！」
「天災の間違いよね」
アンネットがそれに突っ込みを入れる。
「これで謎は全て解けた！犯人は御前だ！」
「そんなわけないでしょ」
それにレミが突っ込みを入れる。

「むっ」
「さっきから見てたらよくもまあそんな思い切った推理しているわね」
「推理なのかしら、今の」
アンネットの疑問は尽きない。
「そもそもベンが犯人のわけないでしょ。だって今学校がはじまったばかりよ」
「ああ」
そう、まだ一時間目もまだだったのだ。いきなり濃い時間がはじまっているが。
「昨日はまだ花瓶あったし。昨日ベン休んでたでしょ」
「そうだったっけ」
「そうだったっけってあんた」
テンボの言葉を聞いて呆れ顔になる。
「覚えてないの？」
「天才とは余計なことは記憶に留めないからな」
「そうそう」
テンボの言葉にジャッキーが頷く。
「昨日のことは昨日のことを」
「だがベンは犯人でないのはわかった」
それは流石に誰でもわかることであった。テンボとジャッキーであっても。
「済まないな。疑ってしまった」
「疑ってた！？今の」
「決め付けてたわよね、絶対」
レミにアンネットが応える。しかしこれもテンボとジャッキーの耳には入らない。
「まあいいさ」
ベンもいちいち二人のことには気を止めない。いつものことだからだ。

「だがこれで事件は振り出しに戻った」
「厄介なことになったわね」
そもそも全然進んでもいないというのは考えてもいない。彼等の頭の中では話は進んでいるのだ。
「けれど事件を解く鍵はあるわ」
「ジャッキー、それは一体何だ？」
「これよ」
ジャッキーが指差したのは花瓶が置かれていた棚だった。そこにあるというのだ。
「ここに鍵があるわ」
「鍵！？まさかそれは」
「ほら、これ」
本当にそこから鍵を出してきた。見れば窓を閉める鍵である。

第四話　自分達だけ名探偵その三

「これが鍵よ」
「・・・・・本気よね、彼女」
「多分」
レミもアンネットもいい加減呆れ果ててきた。
「この鍵こそが事件のヒントよ」
「それは一体」
「それはね・・・・・あっ」
何を思ったか手を振ってそれがその棚のガラスを直撃した。ガラスは見事に割れてしまった。
「やれやれ、また掃除だよ」
「私がやるわ」
ベンとアンネットの日直二人組は粉々に割れたガラスを見て溜息をつく。
「後で先生に言ってと」
「何か今日は厄日ね。朝からお掃除ばかりで」
「全くだよ」
「これが事件を解いていくわ」
当のジャッキーはそんなことは何も気にしてはいない。全く平気な顔である。
「この鍵が」
「その鍵にどんな謎があるか」
「それはこれからのお楽しみね」
だがそうはならなかった。事件は急に終わったからだ。
「悪いことしたな、皆」
黒いリーゼントの陰のある顔の男が教室に花瓶を持ってやって来た。
「花瓶持って来たぜ、俺の部屋からな」

「ダン」
クラスメイト達は彼に気付いて顔を向ける。このリーゼントの男はダン＝シンゴという。沖縄出身でクラスでは不良と言われている。その彼が花瓶を持って来たのだ。
「アンネット、花瓶かたしてくれたのか？」
「これ貴方がしたの？」
「ああ、登校した時にな。ぶつけてちまって」
ダンは答える。なおダンが姓でシンゴが名前である。アジア式の名前になっている。
「それで代わりの持って来たんだ。皆すまないわ」
「いいっていいって」
「代わり持って来てくれたんだし」
「そうか」
注目されいい人になっていくダン。
「じゃあここに置いとくな。これで元通りか」
「何だ、これで一件落着だ」
「よかったよかった」
だがそうはいかないのが二人いた。
テンボとジャッキーである。二人は皆から賞賛の声を受けるダンに嫉妬しているわけではない。二人のいいところは他人に嫉妬とかそういった感情を抱かないことである。

第四話　自分達だけ名探偵その四

二人が憤っている理由は一つ、それは自分達の推理が外れたことであった。

「そういうことなんだ、これは」

まずはテンボが言った。

「俺の推理が外れるなんて」

「あたしの洞察力に狂いが！？まさか」

「こいつ等本気で言ってるのかよ」

「そうみたいね」

ベンとアンネットがそれを見て囁き合っている。

「そんなことはありえない！」

サルエスラ『酒場の女』の有名なアリアの題名そのままのことを言う。

「俺の灰色の脳細胞に狂いはないんだ！」

「そうよ、あたしだって」

「これは何かの間違いだ！」

テンボは意地でもそれを認めない。

「これは何かの」

「そうよ、こんなこと。どうして」

「どうしたもんかね、こいつ等」

「さあ？放っておいてもいいんじゃないかしら」

「放ってって」

アンネットの突き放した言葉に眉を顰めさせるベン。

「危険だぜ、こいつ等」

「死んでも治りそうにないんだから仕方ないじゃない。それに傍目で見てたら面白い」

「そういうことなんだな？」

「そういうこと。とりあえず日直の仕事しましょう」

「そうだな。そうそう」
「何？」
ベンは思い出したようにアンネットに言った。
「ルシエンが御前のこと探してたぜ、校門でさ」
「また？」
アンネットはそれを聞いてくすりと笑った。
「アンネットは何処だって」
「教室でいつも会えるのに」
「顔見せてやったらどうだ？多分今でも校門で会ってるぜ」
「それで何で会わなかったのかしら」
「多分御前が日直で早いの知らなかったんじゃねえかな」
「いつも声かけるのにそこんところは抜けてるんだから」
しょうがないわね、と言いたげな顔であった。何処かお姉さんめいている。
「まあ日直の方は俺がしとくからさ」
「頼めるの？」
「ああ。早く行って来いよ」
「そうね、それじゃあ」
こうしてアンネットは校門へ、ベンは職員室へ向かう。その間も例の二人は騒いでいた。
「俺は天才だ！俺の手によって連合の推理は生まれ変わる！」
「現代のハニー＝イーストのあたしが！」
「もしかしてあいつ」
ダンがジャッキーが騒いでいるのを見て呟く。
「ハニー＝ウェストって言いたいのか？」
その突っ込みはジャッキーの耳には入らなかった。とりあえず二人のお騒がせ探偵は今回もまた何の役にも立たなかったのであった。
そして役に立つ日は来そうにもなかった。

自分達だけ名探偵　　完

2006・9・12

第五話　好きだから仕方ないその一

好きだから仕方がない

「アンネットは何処！？」

トルコから来たルシエン＝バリケシールは今日もアンネット、アンネットである。実は彼女と同じクラスだがそれでもいつもアンネットと一緒にいたがるのである。黒い波がかった髪に琥珀色の瞳、そして程良く黒く整った美男子といっていい顔だがそれを見事なまでに活かしていなかった。

それは席替えの時でも同じである。

「俺アンネットの隣がいい！」

「ってまだはじまってもいねえだろうが」

立ち上がって叫ぶ彼にクラスメイトが突っ込みを入れる。

「はじまる前に言っておくんだよ」

彼はそう反論する。そして結局アンネットの隣の席をゲットするのである。

「よし、やっぱり隣同士でなくちゃな」

「やれやれ」

「あいつにも困ったものだぜ」

「アンネットも大変ね」

クラスメイト達はそんな彼を見て呆れ顔である。だが当のアンネットはどうかというと。

「ねえアンネットちゃん」

今日はクラスの女の子達の何人かで人口スキー場に出てスノーボードをやっていた。そこにアンネットも参加しているのである。

「何？」

雪の多い惑星の多いフィンランド出身だけあって見事に滑るアンネットに彰子が声をかけてきた。彼女はそれを受けて一時滑るのを止めて彰子の方を振り向いた。彼女達は同じクラスなのだ。

「ルシエン君のことだけど」
「ああ、彼のこと？」
「うん、どう思ってるの？」
「それを聞きたいのかしら」
アンネットはにこりと笑って彰子達に顔を向けてきた。
「うん、どう思ってるの？」
「さあ」
だがそれには答えはせずに悪戯っぽく笑うだけであった。
「さあって」
「それは秘密よ」
「秘密って？」
「あんたもかなりの悪女ね」
彰子はわからなかったが蝉玉やエイミー達にはわかった。ここはやはり知識や経験、それに勘がものを言った。どれも彰子にはないものである。
「まあ誰にも迷惑はかけてないからいいけれどね」
「一人を除いてね」
「その一人にしてもね。本人は迷惑していないわよね」
「何か話がよくわからないけれど」
彰子は蝉玉とエイミーの会話にきょとんとした顔をしていた。
「どういうことなの？」
「あんたもそのうちわかるわよ」
「いや、彰子の場合」
エイミーは首を少し傾げさせた。
「ずっとわからないままかも」
「？」
首を傾げたままの彰子。だがそれで話は終わり女の子達はスノーボードに戻った。そこで渦中の人物が姿を現わしてきた。
「アンネット！」
ルシエンである。彼もスノーボードに乗ってやって来たのである。

格好は黒いラフな服で決めていてゴーグルが日の光に輝いている。
その波がかった髪の毛が風になびいて実に格好いい。
「一緒に滑らないか！？来たぜ！」
「あら、ルシエン」
アンネットはそんな彼を見てにこやかに笑う。
「どうしたの？そんなに急いで」
「急いだもどうしたもないよ！」
彼は急な斜面を滑り降りながらアンネットに向かって来る。
「折角こうして来たんだ！一緒に！」
「だったら追いついてみて」
悪戯っぽく笑うと自分も滑りだす。
「そうしたら考えてあげるわ」
「よし！それなら！」
ルシエンの滑りに気合が篭もった。スピードが速まる。

第五話　好きだから仕方ないその二

「何としても！追いついてやる！」
「じゃあ来てみて」
滑りはじめるアンネットとそれを必死に追うルシエン。傍から見ればアンネットが遊んでいるようにしか見えない。同時に楽しんでいるようにしか。
しかしそれをわからない娘もいる。誰であろう、彰子である。
「アンネットちゃん酷いよ」
そう言って怒った顔をしている。
「あんなに意地悪して。ルシエン君が可哀想じゃない」
「あのさ、彰子」
その言葉に眉を顰めさせた蝉玉が彼女に尋ねる。
「何？」
「あれ見て、そう思ったの？」
「当たり前よ。じゃあ何て思うのよ」
「あのね、彰子」
彰子の発言に脱力感を覚えるも言おうと努力する。
「あれはね」
「何て言うかね」
エイミーも援軍に加わる。だが彰子の護りはあまりにも固かった。
「とにかく意地悪はよくないよ。ルシエン君は一緒に遊ぼうって言ってるのに」
「ううん・・・・・」
「駄目だこりゃ」
二人も白旗をあげるしかなかった。彰子の鈍感さとそうしたことへの疎さは最早ガンタース要塞群級のものであるとわかったからである。二人の手に負えるものではなかった。
「絶対に追いついてやるからな！」

「私にかしら？」
二人はスノーボードでの追いかけっこを続けている。蛇行したりジャンプしたりして。見ればルシエンのセンスはかなりのものである。だがアンネットのそれは。最早神技の域に達していた。
そのスピードもテクニックも桁外れであった。周りの客達の中をまるで無人の野を行く様に通り抜け、そしてルシエンとも適度な距離を保ったままである。ルシエンは必死なあまりそれに一向に気付いていないがそのテクニックとスピードは彼も見ていた。そのうえで呟く。
「くっ、何があっても追いついてやる」
彼は言う。
「そしてアンネットと！」
集中力がぶれた。それが命取りとなった。
バランスを崩す。だがすんでのところで立ち直る。
「やるわね」
アンネットはそれを後ろ目で見て呟く。
「あの態勢から立ち直るなんて」
あやうくこけるところだった。そこから立ち直り、また滑るのは見事という他なかった。それを見たアンネットの気持ちが少し動いた。

第五話　好きだから仕方ないその三

「これは私の負けかしら」
「アンネット！」
ルシエンはまた叫ぶ。
「今日こそは！」
「まあいいわ」
ルシエンに見えないように真正面を見てくすりと笑った。
「今日は。負けてあげる」
気付かれないように速度を緩める。程なくしてルシエンが追いついてきた。
「よし！」
ルシエンが喜びの叫びをあげる。
「追いついたぞ！アンネット！」
「速いわね」
演技で悔しがってみせる。
「まさか負けるなんて思わなかったわ」
「何があっても追いついてやる！」
力瘤を入れて断言する。
「今日は。上手くいったみたいだな」
「そうね」
「それで約束だ」
ゴーグルを外してアンネットを見詰める。こうして見ればかなりの美男子であると言ってもいい。波がかった髪の毛も似合っている。アンネットとしても申し分はないのだ。だが彼女としてもそうおいそれとは自分の本音を見せるつもりはない。これは彼女にとってもゲームなのだから。
「デートだ」
「何処にするの？」

「街のテーマパーク、あそこでどうだ？」
「オーソドックスね。この前貴方が勝った時もそうだったのじゃなかったかしら」
実はアンネットが負けたのは今日がはじめてではない。何回か負けている。わざと負けてみせた時もあれば本気でやって負けてしまった時もある。その辺りは複雑であった。
「そうか。じゃあ」
「駅前のデパートなんてどうかしら」
アンネットの方で提案してきた。
「丁度買いたいものがあるのだけれど」
「じゃあそれでいこう」
ルシエンは言った。
「駅前のデパートで、時間は」
「土曜日ね」
「それでいいんだよな、土曜日に駅前のデパートでデートで」
「待ち合わせ場所は駅前の噴水ね。十時」
「ああそれで」
何か話は全てアンネットによって決められてしまっている。ルシエンは完全の掌の中にいるが彼自身はそれに全く気付いてはいなかった。
「土曜日の十時だ。じゃあ」
「ええ」
にこりと笑ってそれに応える。約束が終わったルシエンは満面に笑みを浮かべて叫ぶ。その姿はまるで別人のようであった。
「やった、やったぞ！」
全身で喜びを表わしている。
「アンネットとデートだ！やった！やったぞ！！」
「あら、アンネットが負けたみたいね」
蝉玉と彰子は遠くからその様子を見ていた。蝉玉がルシエンの叫び声を聞いて言う。

「ルシエンだらあんなに喜んで」
「勝ったからなのね」
「そうね。いつもながら凄い喜びよう」
「アンネットもあんなに好かれてるんだから付き合ってあげればいいのに」
彰子はアンネットを咎めるようにして言う。
「ルシエンの何処が不満なのかしら」
「あんたはもうちょっとそっちのことを勉強しなさい」
蝉玉はくすりと笑ってそんな彰子に言った。
「！？」
「それもわからないようじゃ駄目駄目よ」
「何のことなの？」
「やれやれ」
しょうがないな、といった感じで肩を竦めさせる蝉玉。だがそれでも彰子はわからないままであった。当分彼女がアンネットのこともそうしたこともわかるようになるのは当分先のようである。

第五話　好きだから仕方ないその四

そんな彰子をよそにデートをすることになったアンネットとルシエン。土曜日の十時前にはルシエンはパリっとした見栄えのいい青と緑の服に身を包んで駅前の噴水のところにいた。

「もうすぐかな」

腕時計を見ながらそわそわしている。

「アンネットが来るのは」

「ねえお姉ちゃん」

そんな彼を遠くから見る影が二つあった。

「何でここでルシエンさん見ているの？早く行けばいいのに」

「駆け引きよ」

アンネットは小悪魔っぽい笑みを浮かべて弟のダニーに対して言う。

「駆け引き？」

「見ていればわかるわ」

アンネットは笑ったままルシエンを見ていた。

「いい、ダニー」

「うん」

「男の子はね、女の子を待つものなのよ」

「ふうん」

「そして女の子は男の子を待たせるものなの」

「そうなの？」

「そうよ」

これまた実に女の子に都合のいい言葉であった。それを平気で言うアンネットはかなりの駆け引きの達人であると言えた。少なくともルシエンは手玉にとっているようである。

「だからまだ少し先よ、出るのは」

「時間は遅れるのね」

「勿論」
デートの時間には絶対に遅れてみせる、それがアンネットのやり方である。
「そうしないとね」
「何で？」
「それが駆け引きなのよ」
「よくわからないよお姉ちゃん」
ダニーにはまだわからないことであった。少なくともこれはアンネット程この道を知っていなければわかることではない。そう、彼女程でないと。
「一体何なのか」
「まあ観てなさい」
アンネットは不敵に笑って言う。
「ほら、服だってね」
「何度見ても凄いね、その服」
淡い赤とピンクでフリルがあちこちについている。スカートはくるぶしまで隠れる程である。
「童話か何かの服にしか見えないのよ」
「これもそうなのよ」
「服も？」
「そういうこと、お洒落も大事なのよ」
「何でも大事なんだね」
「お化粧もね。それはわかるかしら」
「ううん」
見ればいつもとは変わっているような変わっていないような。正直微妙なものであった。
「どう違うのかわからないよ」
「そこがいいのよ」
アンネットはまた言う。
「微妙な感じが。ナチュラルメイクってやつよ」

「魔法の言葉？」
「本当の言葉よ」
「訳わからないんだけれど」
これもまたダニーにとっては理解出来ないものであった。
「ぱっと見ただけじゃわからないお化粧なんて」
「鎧は見えてちゃ警戒されるでしょ？」
「まあね」
これは映画や漫画でもわかる。
「それと同じなのよ」
「お化粧って鎧とかと同じ？」
思わず首を傾げる。
「違うと思うけれど」
「武装なのよ、これも」
「ううん」
「香水もつけてるしね」
「それは僕にもわかるよ」
アンネットの身体から甘い香りがする。それは薔薇の香りであった。
「いいね、これ」
「とにかくこっちは準備万端にしておかないと。女の子って大変なんだから」
「そして待たせるの」
「そうよ。さて、一応時間ね」
だが出る気はない。
「まだまだ出ないから」
「わからないなあ、何か」
ダニーはどうしても姉の行動が理解出来なかった。

第五話　好きだから仕方ないその五

「さっさと行けばいいのに」
「そんなのは駄目な娘のすること」
だがアンネットはそれには取り合わない。
「相手を焦らさないと有難みがないから」
「その間に帰ったりすることはないの？」
「ないわ」
ルシエンを見て言う。
「絶対にね」
「他の女の子が声をかけてきたらどうするのさ」
「そうなっても大丈夫よ」
根拠があやふやにしか思えないがアンネットはきっぱりと述べた。
「彼はね」
「そうなの」
「絶対に、何があってもね」
言葉が強くなる。それを見る限りどうにもアンネットはルシエンを信じているように見える。それでもあえてこうしているとは彼女も中々に意地が悪いと言えるものである。
だがそこに一人の少女がやって来た。ブロンドの髪をショートヘアにした鳶色の目の少女である。モデルの様なスタイルの肢体を黒いストッキングに黒レザーのホットパンツとブーツ、胸が大きくはだけたシャツの上にホットパンツと同じく皮のジャケットを着ている。腕や脚には金や銀のアクセサリーがちりばめられ、化粧も濃い。まるでヘビメタである。
「あら、ダイアナじゃない」
「あの人、お姉ちゃんの知り合い？」
「ええ、クラスメイトよ」
「何か凄い人だね」

「いい娘よ、友達だし」
実はその少女もアンネットや彰子のクラスメイトである。名前はダイアナ＝ロスアンヘルス。チリ生まれであり実際に軽音楽部に所属している。クラスでは遊び人と噂され女版フックとまで言われている。
「大丈夫なの、あんな人が出て来て」
派手な身なりで顔もいい女の子が出て来てダニーは不安になる。
「ルシエンさんに声かけられたら」
「かけるでしょうね」
だがアンネットの返事はしれっとしたものであった。
「あの娘は」
「じゃあ危ないじゃない」
ダニーは言う。
「早く何とかしないと」
「貴方に一つ言っておくことがあるわ」
それでもアンネットの態度は不変であった。
「声をかけられてね、ホイホイついていく男には誰もデートに誘わないわ」
「！？」
「見てなさい」
その声がクールなものになっていた。
「ルシエンをね」
「ルシエンさんをって」
ダニーはルシエンに目をやる。そこで見たものは。
「あらルシエン」
ダイアナがルシエンに気付いた。
「どうしたの？こんなところで」
そしてお約束のように彼に声をかけてきた。
「アンネットを待ってるのさ」
ルシエンはダイアナに顔を向けて答えた。

「デートなのね」
「まあな。君は？」
「私？私はただぶらぶらしてるだけ」
思わせぶりに笑ってそれに返す。
「何となくね。一人だけで」
「そうなんだ」
「そうよ。それでね」
「まずいな」
ダニーはダイアナの様子を見て顔を顰めさせる。
「このままだと」
「駄目よ」
ダニーが出ようとするとそれは他ならぬアンネットによって止められた。
「お姉ちゃん、どうして」
「何度も言ってるでしょ、黙って見てなさいって」
「だってこのままじゃ」
「これも言ったでしょ。声をかけられてついて行くようじゃ駄目って」
アンネットはあくまで動こうとしない。
「だから。貴方も動いたら駄目」
「そんなことしてたら・・・・・うっ」
ダニーはアンネットの目を見て思わず黙ってしまった。

第五話　好きだから仕方ないその六

その目は。勝負をしている目だった。じっとルシエンを見据えている。微動だにせずに。彼の一部始終を見据えていたのであった。まるで敵を見据えているように。じっと見ていた。

ダニーは黙ってしまった。姉のそんな目を見たのははじめてだったからだ。彼は結局動かなかった。そして。その前でルシエンと大アなのやり取りが続いていた。

「どう、これから」

「これからって？」

ルシエンはダイアナの問いに目を動かす。

「アンネット待っても来ないんでしょう？それなら」

彼を横目で見てきた。計画的な流し目である。

「二人で。遊ばない？」

「君と？」

「そうよ。デートってのはね、遅れる方が悪いのよ」

誘惑の言葉であった。相手が悪いのであって貴方は悪くはないと。そう言って誘っているのである。

「違うかしら」

「そんなものかな」

ルシエンは微動だにせずにそれに返す・

「そんなものだったらどうするの？」

ダイアナはさらに問う。

「行く？二人で」

これからが分かれ目であった。どうなるかの。アンネットはじっとルシエンを見ている。そのルシエンが取った行動は。今それが見えた。

「いや」

彼は首を横に振った。

「俺はここで待つよ、アンネットを」
そしてこう言ったのであった。
「それが約束だからな。それに」
「それに？」
「悪いけれどアンネット以外の女の子とはデート出来ない。悪いな」
「見事ね」
ダイアナはその言葉を聞いてにこりと笑った。
「そこまで想えるなんて」
「アンネットだからな」
ルシエンの答えはぶれはしない。
「だから俺だって」
「わかったわ。じゃあ私は一人でね」
ダイアナはすっと身を退いてきた。
「遊ぶことにするわ」
「悪いな」
「いいのよ、私だって貴方がそう言うと思ってたし」
「からかいか？」
「違うわ。アンネットがどれだけ好きか試しただけよ。あの娘が羨ましいわ」
何か嫉妬さえ覚えた。
「そんなに好かれるとね」
「俺はアンネットだけでいいんだよ」
彼はまた言う。
「他の娘なんてどうでもいいんだ。悪いな」
「わかってるわよ。それじゃあね」
すっと笑って身を退いてきた。
「また月曜ね。学校で」
「ああ。よかったら今度ＣＤ交換しような」
「ヘビメタでよかったら」
「こっちも持ってるからよ。じゃあな」

「御機嫌よう」
ダイアナは笑顔で別れた。ルシエンは彼女を見送るとすぐに真面目な顔になったのであった。何も言わずそこに立ち続けていた。

第五話　好きだから仕方ないその七

「うわっ、本当に断ったよ」
ダニーは毅然と誘いを断ったルシエンに唖然としていた。
「まさかとは思ったけれど」
「予想通りね」
だがアンネットはそんな凄い場面を見ても落ち着いた様子を崩してはいなかった。ただ厳しい目は元に戻ってそのままルシエンを見ていた。
「予想通りって」
「そうでなくちゃ。私だって」
彼女は言う。
「デートする意味がないわ」
「デートするのに意味がいるの？」
「そうよ、少なくとも私にとってはね」
顔を上げて述べる。
「それだけの心がある人じゃないと。デートする意味がないわ」
じっとルシエンを見ていた。
「だからね。もういいわ」
「行くの？」
「ええ、丁度いい時間だし」
約束の時間から三十分程経っていた。彼女にとっては丁度いい時間であった。
「行って来るわね」
「うん。それにしてもさ」
「何？」
行く前に弟に顔を向けた。
「ルシエンさんって凄いね」
「そうね」

その言葉に頷く。それを言われて悪い気がしないのは事実だ。
「本当にね。そうじゃないとね。私だって」
「お姉ちゃんだって」
「あっ、これはね」
少し困った顔をして口を塞いだ。
「何でもないわ。気にしないで」
そう言って誤魔化す。
「いいわね」
「何だかよくわからないけれどいいよ」
ダニーがまだこうしたことをよく知らないのが救いであった。
「それじゃあね、お姉ちゃん」
「ええ、じゃあね」
弟に別れを告げる。そして何気ない様子を装ってルシエンの前に姿を現わしたのであった。
「御免なさい、遅れたわね」
しれっとして声をかける。
「あっ、全然」
ルシエンもさっきのことはおくびにも出さずにアンネットに応えた。
「俺も遅れちゃって。今来たところさ」
「そうなの」
「そうさ、だからここ来るまでアンネットが怒っていないか不安で仕方なかったわ」
「だったらいいわ。貴方が待っているんじゃないかと思って」
見ていたのはあくまで秘密である。
「それを聞いて安心したわ」
「心配することはないさ。俺だってさ」
「ところでね」
「うん」
話は変わった。

「デート、何処行くの？」
「遊園地って行ってなかったかな」
「あっ、そうだったかしら」
目を斜め上に向けて誤魔化す。ルシエンのことに夢中でそれは忘れてしまっていたのだ。彼女も抜けているところは結構抜けていたりする。
「そうだよ。チケットも用意しといたよ」
「準備がいいわね」
「デートだから当然だろ」
じっとアンネットを見て言う。
「二人でのデートなんだから」
はじめてというわけではないが。彼はアンネットとのデートはいつもこうして全力で真剣勝負を行っているのだ。そこに手抜きや油断は一切ない。
「じゃあ行くぜ」
「そうね。それじゃあ」
そっとルシエンの手に自分の手を回してきた。
「行きましょう」
「ああ」
先に進みだす二人。アンネットはその中で一人思った。
（こっちも意地があるから）
それは心の中の独り言であり決して口には出さない。それでも。本音でありアンネットの偽らない言葉そのものであった。ルシエンは知りもしないが。

好きだから仕方ない　　完

２００６・９・１９

第六話　赤い髪の漫画家さんその一

赤い髪の漫画家さん

イスラエル出身の長く後ろで二つにした赤毛に緑の目の女の子はアン＝エザク。漫画が大好きで部活も漫画研究会に所属している。クラスでもよく漫画を描いている。

「ねえ小式さん」

「私！？」

いきなり彰子に声をかけてきた。かけられた彰子は机の上でネームを描いているアンに顔を向けてきた。

「そうよ。相談があるのだけれど」

「相談って」

澄ました顔のアンに穏やかな顔の彰子という組み合わせは少し妙な感じがしないわけでもない。だが二人はそれは気にはしていなかった。

「今度の新作だけれど」

「うん」

「主人公のモデルにしていいかしら」

「私が漫画に出るの！？」

「ええ」

こくりと頷く。

「どうかしら」

「うん、よかったら描いて」

彰子としては断る理由がない。二つ返事であった。

「どんなふうにしてもいいから」

「わかったわ。じゃあ」

それを聞いてネームに顔を戻す。そのままノートに色々と書いていく。

「ああ、アンもう書いてるのね」

「うん」
そこに黒髪に赤い肌を持つ小柄な女の子がやって来た。ルビー＝ハイマー、キューバから来ている女の子だ。アンと同じく漫画研究会に所属していて一緒に描いている。
「小式さんから許可出たし」
「そうなの。いいの、小式さん」
「私は別にいいよ」
そんなことは気にしない彰子である。断る筈もなかった。
「アンちゃん、好きなように描いていいからね」
「わかったわ。それじゃ小式さんはヒロインでお金持ちのお嬢様」
「うわあ、凄くいい役」
「ルビーがその親友でスポーツ万能、と」
「実際の私は運動苦手だけれどね」
そう言って苦笑いを浮かべる。実は彼女は運動が不得意なのだ。スポーツで有名なキューバ出身でもだ。
「あとレミも出して」
「悪いね、出してもらって」
「いいのよ。それでお笑い担当は」
「きっと蝉玉ね」
「どういう意味よ、それ」
蝉玉はルビーに言われてむっとした顔を見せる。
「だっていつも騒がしいんだもん」
「私は別にそんな」
言われるとかえって腹が立つ。自覚はあったとしてもだ。
「蝉玉は彰子のライバル役よ」
「あら、それは意外ね」
「だってお笑い担当はいるから。それは」
「それは！？」
「委員長」
「何だとっ、この僕が」

眼鏡をかけ服装も髪形もキチンと整えた生真面目というよりは堅苦しく、堅苦しいというよりは暑苦しい黒髪の少年が声をあげてきた。彼がこのクラスの委員長であるギルバート＝フォン＝ザクロイド。マレーシア出身だが何でも先祖がドイツ出身のアメリカ人で改宗してムスリムになり華僑の奥さんと結婚して日本に移住してそこから子孫がマレーシアに移住してタイ人とまた結婚してそこからオーストラリアに移ってまたマレーシアに戻って今度はベトナム人の奥さんを貰ったのがルーツという今度聞いたら絶対に本人でも間違えそうなルーツの持ち主である。

「何故僕がお笑い担当なんだ、言ってみたまえエザク君」

「何となく」

それに対するアンの返事は素っ気無いものであった。

「気分でそうしたの」

「馬鹿な、僕がどうして」

「似合ってるよな、マジで」

「そうだね」

スターリングは茶色でソバカスのある青い目の少年の言葉に頷いていた。彼はトム＝ドビンズ。カナダ出身でやはりこのクラスの一員である。

「僕ならこう熱血格闘漫画の主人公とか」

「熱い漫画は今は描かないの」

「ならロマンスものとか」

「気が向かないわ」

「ファンタジーとか」

「コメディタッチならいい？」

アンはギルバートの方を振り向くことなく言葉を返していく。

「どちらにしろ出すから。いいわね」

「何で僕には許可を取らないんだ！どうしてだ！」

「まあまあギルバート」

ルビーが彼を宥める。

「落ち着いてね。漫画なんだし」
「クッ、アン君は僕を何だと思っているんだ」
「クラスの学級委員」
「それはそうだが」
「だったらそれでいいじゃない」
「よくない！話はまだ」
「それでねルビー」
「うん」
意識してかしてないか。ギルバートを放っておいてルビーと話をはじめた。

第六話　赤い髪の漫画家さんその二

「話はこれでいこうと思ってるんだけれど」
「いいんじゃない？」
「待て！話はまだ終わってはいない！」
「私はもう話すことはないわよ」
アンはしれっとして返す。
「それじゃ」
「うぬぬ！何か凄く馬鹿にされた気がする！」
「じゃなくてしてるわよね」
「まあそれは言わないでおこうよ」
トムにスターリングが言う。
「余計に話がこじれるからさ」
「それもそうか」
「まあいい。とにかくだ」
ギルバートは何の脈絡もなく立ち直った。
「マクレーン君」
「何？」
スターリングは急に話を振られてきょとんとした顔になった。
「前の日直日誌だが」
「何かミスがあった？」
「いや、流石だ」
ギルバートは人のいいところは素直に認められる男であった。単に暑苦しいだけで。
「細かいところまで丁寧に書いていたな。感心したよ」
「どうも有り難う」
「これがバリケシール君だったなら大変なことになっているのだ」
「あいつだったらアンネットのことばかり書いてるだろ」
「その通りだ。最早日誌ではない」

トムの言葉に応える。
「書き直してもらってもこれがまた」
「アンネットのことばかりなんだろうな」
「困ったことだ」
「それでギルバート」
「何だ？」
スターリングの言葉に顔を向けてきた。
「とりあえずさ、今日は日直はフックだし」
「彼か」
「まともに仕事しないと思うから。宜しく」
「全く。困った奴だ」
「おっ、アンちゃん」
丁度いいところにフックがやって来た。ふらふらとアンに近寄ってきた。
「漫画書いてるんだね」
「ネームよ」
フックが来ても微動だにしない。ネームに顔を向け続けている。
「まだペン入れとかはしていないわ」
「そうなんだ」
「そうよ」
味気ない返事であった。
「出来たら見せてあげるわ」
「頼むよ。じゃあさルビー」
「私なの？」
「そうさ。よかったら今日の放課後」
「わ、私はちょっと」
クラスきってのプレイボーイに声をかけられ焦っている。
「今日は」
「今日は今日はでいつもじゃない。今日こそは、だよ」
「け、けど」

「けどもこれもないからさ。どうかな」
「それは・・・・・・」
陥落しそうであった。だがその前にギルバートが動こうとしてきた。
「これは捨ててはおけない」
フックの方へ足を向けていた。当然彼を止めるつもりである。
「そもそも日直であることを忘れて。遊んでいるとは言語道断」
「つってもたかが日直だしな」
「ギルバートはそうは考えていないみたいだけれどね」
トムとスターリングが言い合う。
「ここは僕が」
だがそれより前に。アンが動いていた。
「今日は駄目」
「ルビーが？」
「私のネームを手伝ってくれるから」
感情のない機械的な声のままだったがそれでも充分だった。
「だから駄目なの」
「そうなの。じゃあいいよ」
フックはそれを聞いてすんなりと引き下がった。
「ルビーちゃんまたね」
「う、うん」
「それじゃあ他の娘を。よそのクラスにでも行くかな」
そう言ってあっさりと教室を去る。後には言いそびれたギルバートだけが残される結果となった。彼だけが呆然としてしまっていた。

第六話　赤い髪の漫画家さんその三

「ううむ・・・・・」
「何だかなあ」
「やっぱりっていうか」
スターリングとトムはそんな彼を見て何と言っていいかわからなかった。
「参った、僕の出る幕がなかった」
「予想通りね」
アンは相変わらず冷たい。
「それでギルバート君」
「んっ！？」
ルビーの声に顔を向けた。
「私も日直なのよ」
「ああそうだったな」
言われてやっと思い出す。
「だが君は真面目にやっているし」
「いいのよ、私がやっておくから」
「それはよくない、ああした男は甘やかしては」
「男は甘やかされて幾らよ」
アンがまたしれっと述べる。
「女は甘やかして幾らだし」
「アンってよ」
「何か色々あったみたいな言い方だよね」
それを聞いたベンとスターリングがまた言う。彼等はどうにも戸惑いを隠せなかった。アンの言葉には学生とは思えないものがあったからだ。
「だからそんなに騒がない」
「アン君、君は一体僕に対して」

「からわれてるわよね」
蝉玉はそれに気付いているが本人には言わない。
「アンも意地が悪いっていうか」
「そうなの」
当然彰子はそれに気付いてはいない。
「ううむ、まあいい」
埒があかないと見たギルバートは止むを得なく戦略的撤退に移った。
「あいつは僕が絶対に捕まえる」
そうルビーに言う。
「だから待っていてくれ。それじゃあ」
「もうすぐ授業はじまるんだけれど」
「考えてないわね、そこまで」
アンはネームを見ている。
「すぐに帰ることになるからいいわ」
「そうなの」
「そうよ」
ルビーにも同じ調子で返す。
「だから安心して」
「う、うん」
「それにフック君もちゃんと日直の仕事はやってくれるわ」
「わかるの？」
「ええ、わかるわ」
相変わらず感情のない声であるがそこには確固たる自信があった。
そして放課後。実際にフックは教室の中で一人で日直の仕事をやっていた。
「どういう風の吹き回しだ？」
ギルバートは彼に問う。
「君が真面目に日直の仕事をやるとは」
「いや、ちょっとな」

フックはそれに応えて言う。
「交渉で」
「交渉！？」
「まあギブアンドテイクってやつさ」
「何のことかわからないが」
「まあおめえはわからなくていいよ。関係ねえことだから」
「そう言われるとかえって気になるな」
「全く関係ないことだぜ、本当に」
「そこまで言うのならいい」
他人のことにあれこれ言うがプライバシーにまで介入するような男ではない。そういったところはきちんとわきまえていた。そうした男なのである。
「ではな」
「ああ。じゃあ日誌書いたら先生に渡しておくからよ」
「頼むぞ。それではな」
「また明日な」
最後に挨拶をして別れる。日誌を書き終えたフックは教室を後にして職員室へと向かった。そして担任の先生に日誌を手渡すのであった。
それが終わって廊下を歩いていると。前にすっとアンが出て来た。
「お疲れ様」
「さっきの話だけどよ」
「ええ」
アンはフックの言葉にこくりと頷く。それから言った。
「・・・・・来て」
実に思わせぶりな言葉だった。俯いて視線を逸らしての発言だったので余計に効果がある。まるで狙っているかのようであった。実際に狙っていた。
「それじゃあ」
フックもそれに頷く。そして学校の端にそっと入って行く。如何

にもといった感じの妖しい動きであった。アンはそれを楽しんでいた。

端に入るとポケットから何かを出してきた。

「これよ」

それはクラスの女の子の写真であった。フックはそれを受け取る。

「生写真だから」

「何時の間にこんなのを？」

見ればどれもごく普通の写真である。着替えや水着は流石にない。それでも奇麗な写真ばかりであるのは確かだった。どうやって撮ったのか不思議な程である。

第六話　赤い髪の漫画家さんその四

「ちょっとしたコツよ」
「コツなのか！？こんなの撮るの」
「私を何処の国の人間だと思っているの？」
アンはいきなりとんでもない切り札を出してきた。
「イスラエルよ。こんなものは朝飯前よ」
「イスラエルってそんな国だっけ」
「少なくとも私は。漫画家になろうと思ったらこれ位はね」
どちらにしろアンが変な技術を身に着けているのは間違いがなかった。
「何かすっごい恐い話になりそうだけれど」
とりあえずアンがどんな漫画を描いているのか、本当のところが知りたくなった。
「まあいいや。それでさ」
「ええ」
「ルビーはどうしてるの？」
「普通よ」
アンは答えた。
「何処も変わりはないわ」
「そう、だったらいいけれど」
それを聞いてまずは安心する。
「今度あの娘にも声をかけてみよっかな」
「いいけれど。ただ」
「ただ？」
「泣かしたりしたら・・・・・」
言葉に凄みが加わっていく。
「わかるわね」
得体の知れぬオーラがアンの全身を包む。圧倒的な迫力のオーラ

であった。
それはフックも感じていた。思わず言葉を失う。
「あ、あのさアン」
「わかったわね」
「あ、ああ」
「ルビーは友達だから」
その言葉に全てが集約されていた。
「泣いたりしたらね。私も」
「わかったよ、女の子を泣かせるのは俺の趣味じゃないしさ」
「だといいけれど」
「だからそんな恐いオーラ出さないでくれよ」
アンに必死に言う。
「こっちだって恐いんだから」
「わかったわ。じゃあ」
アンは気配を消してきた。
「これでいいわね」
「ああ。しかしさ」
「何？」
「前から聴きたかったことがあるんだ」
「何かしら」
「ギルバートのことだけど」
フックは尋ねる。
「何であんなにおちょくるんだ？よかったら教えてくれよ」
「面白いから」
表情を変えず答えた。
「それだけ！？」
「ええ」
「本当にそれだけなのか！？」
「他に何があるのかしら」
「いやそう言われると」

何と言っていいのかフックとしても困る。
「それだけなのかよ、本当に」
「何かあると思っていたの？」
「そりゃさ、やっぱり」
夕暮れの赤い、影が長くなっていく校舎の中で言う。
「その、御前がまさかあいつを」
「・・・・・・・・・」
これには答えず口の端の形を微かに変えただけであった。だがフックはそれに気付いた。
「！？まさか」
「どうかしら」
その形は元に戻った。ほんの一瞬のことであった。
「それじゃあ話は終わったわね」
「あ、ああ。まあな」
戸惑いながらそれに答える。
「それじゃあまた明日な」
「ええ、また明日」
二人は別れの挨拶をする。
「しかしまあお互い」
「何かしら」
アンはフックの最後の言葉に顔を向けてきた。
「お互い。素直じゃねえな」
「それは私のことかしら」
「そうは聞こえないかい？」
「さあ」
ここでまた微かに笑ったように見えるがそれは一瞬のこと。すぐに消える。
「さようなら」
「ああ」
二人は別れた。何処か素直でない二人。本当の心はあくまで隠し

て。仮面をつけたままその日の生活を送るのであった。誰にもその素顔を見せずに。

赤い髪の漫画家さん　　完

２００６・９・２３

第七話　音楽は一つにあらずその一

音楽は一つにあらず

クラスでは遊び人で有名なダイアナ。彼女は音楽にかけてはかなり五月蝿い。

「やっぱりここはこうよね」

「そうなるの？」

アンのアシスタントであるルビーを相談役に新曲の作詞作曲に余念がない。この日もギター片手に昼休みの教室でそれをしていた。

「そうよ、それでね」

「ふんふん」

ルビーは彼女の言葉に頷いていた、まずは話を聞いている。

「ここはこうなって」

「そしてここはこうね」

「どうかしら？」

説明したうえでルビーに問う。

「そんな感じでさ、曲のリズムは」

「悪くないと思うわ」

ルビーはまずそう答えた。

「けれどね」

「まずい？」

「ううん、ただここをね」

「うん」

ルビーは楽譜に赤ペンで書き込みを入れてきた。

「こうしたらどうかな」

「そこをそうするの？」

「そうしたらもっといいと思うけれど」

「そうねえ」

ダイアナはそれを聞いて顎に手を当てて考え込む。

「そうなると」
「おっ、事件か！？」
「事件ならあたし達にお任せね」
「ああ、あんた達は関係ないから」
後ろに湧いて出て来たテンボとジャッキーは振り向きもせずあしらう。
「じゃあ試しに弾いてみるね」
「それがいいと思うわ」
「それじゃあ」
ギターを弾きはじめる。まずはダイアナのオリジナル。
「こっちはこうよね」
「ええ」
「それでルビーのは」
そちらも弾く。するとダイアナはあることに気付いた。
「成程ね」
「どう？」
「ルビーの方がいいかもね」
ダイアナは述べた。
「こっちの方が最後が引き締まってるわ」
「そう思う？」
「ええ。私のオリジナルよりね。こっちがいいわね」
「じゃあこの曲はこうね」
「うん」
「作詞の方はいいの？」
「一応こんな感じ」
今度は楽譜ではなくノートを出してきた。銀河語で色々と書き込まれている。
「二曲でね。一曲目はこうで」
「二曲目がそれね」
ルビーはノートに目を通して述べた。

「こっちはどうかしら」
「詞はそれでいいと思うわ」
「有り難う」
「じゃあこの曲はこれで終わりね」
「とりあえずはね」
「じゃあもう一曲は」
「こっちはバラードだけれど」
「それなら私がいいのを知っているわ」
ここでもう一人出て来た。白い髪に黒い瞳。そして黒がかったラテン系のそれに似た肌にふわりとした淡い黄色の服。顔立ちは白人のものでやや彫が深い。・何処かこちらの世界のものとは思えない雰囲気を醸し出している少女であった。
「ウェンディ」
二人は彼女に顔を向けてその名を呼んだ。彼女の名はウェンディ＝イクナートン。このクラスの生徒の一人でセネガルからの生徒である。
「こう言った感じでね」
そして二人の前に楽譜とノートを出してきた。二人はすぐにそれに目をやる。
「これが」
「ええ。私のオリジナルのバラード」
ウェンディは答えた。
「どうかしら」
「はっきり言うよ」
ダイアナはウェンディに顔を向けて言ってきた。
「ええ、いいわ」
悪い言葉かな、とルビーは思った。だがそれはいい意味で裏切られたのであった。
「いいじゃない、この曲」
「有り難う」

「しっとりとした感じでね。あたしはヘビメタだけれどこの曲はいいと思うよ」
「よかったら使って」
ウェンディはそれを聞いたうえでこう申し出てきた。
「私のこの曲」
「いいのかい？あんたは演奏しないのかい？」
「私は気が向いた時に」
彼女は答える。
「演奏させてもらうわ」
「そうかい」
「そうよ」
「じゃあこっちもあんたが気が向いた時に頼むな」
「わかったわ。じゃあ」
「ああ。それでなルビー」
「ええ。ウェンディもよかったら来て」
彼女も話に誘う。
「どんな曲かね。貴女自身にも観てもらいたいし」
「悪いけれど今日は駄目なの」
「何かあるの？」
ダイアナがそれに尋ねる。

第七話　音楽は一つにあらずその二

「ちょっとね。マチアに提供した曲の方で」
「ああ、マチアにも曲提供してるの」
「そうなの。だから」
「わかったわ。それじゃあまた今度で」
「そうさせて」
そうルビーに答える。
「しかしマチアに曲提供してるとは意外ね」
「そうかしら」
今度はダイアナに応える。
「だってね、ヘビメタのあたしにも曲提供してくれて」
「小説も書いて漫画のアイディアも私やアンに出してくれるし」
ルビーも言う。
「多芸多才ってやつね」
「そうね。そこでクラシックまでって。やっぱり凄いわ」
「好きだからよ」
それがウェンディの返事だった。
「どれも好きだからできるのよ」
「好きだから、か」
「そういうこと」
「成程ね」
話を聞いた後でダイアナは納得したように頷いた。
「そういうことならわかるさ。あたしにはね」
「有り難う」
「けどさ、ウェンディ」
「何？」
「マチアと付き合ってるとかそんなのじゃないよね」
「マチアとは単なるお友達よ。クラスメートだから」

「クラスメート、ねえ」
今一つ曖昧な言葉で納得出来ないものもあるがそこはあえて言わなかった。
「まあいいわ。けれどあいつと付き合うのは考えものだよ」
「別に付き合ってはいないわよ」
「いや、そこで真面目に言われると」
どうにも困ってしまう。ダイアナはつい苦笑いを浮かべた後でまた言った。
「ただね、まあ聞いてよ」
「ええ」
やや強引に話を元に戻す。
「あいつと結婚したりしたら因果が出るよ、後で」
「因果って？」
「あんた達はいいんだよ。ただ」
「ただ？」
ダイアナは話すにつれ苦笑いから思わせぶりで少し意地悪い笑いを浮かべてきた。
「あんた達の子供に因果が出るんだ」
「何なの、それ」
ルビーもダイアナの話に興味を持って来た。そっと身を乗り出す。
「教えて、よかったら」
「ああ。呪いさ」
「呪い」
ルビーとウェンディの言葉が重なった。
「子供の髪の毛にね」
「髪の毛に」
急に教室の外から駆けて来る物音が聞こえてきた。
「何といってもあいつの額は」
「ちょっと待てーーーーーーーーっ！」
教室の扉をバン、と開けて背中にバイオリンケースを背負う少年

が登場した。
「ダイアナ！今何を言おうとしている！」
「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーーーーーーン」
「いきなり古い古典的アニメを出すな！そんなので誤魔化されてたまるか！」
黒茶色の髪に青灰色の目をした少し小柄な少年がそこにいた。茶色のネクタイのないスーツを着て黒い靴を履いている。わりかしお洒落で顔立ちも子供っぽくてそれでいて元気のいい顔をしている。だが額が結構広かった。
「俺が禿だと言いたいのか！」
「誰もそんなの言ってないわよ！」
「言おうとしてたじゃないか！」
少年は反論する。彼がそのルチアで本名をルチア＝ペトモローラという。吹奏楽部に所属していてこのクラスの一員でもある。実は額のことをかなり気にしている。
「言っておくが俺は禿じゃない！」
ムキになって主張する。
「それをまず言っておく！」
「あんたそれいつも言ってない？」
ダイアナは彼にそう突っ込みを入れる。かなり醒めた態度である。
「よっぽど気にしてるのね」
横目でルチアを見て言う。左手で頬をつきながら。
「そうじゃなきゃそんなに言わないわよ」
「ううっ、別に気にしては」
「ルチア君、そのね」
ルビーが彼をフォローしようとして言う。
「あの、髪の毛は今は幾らでも治療法が」
「だから違うんだ！」
余計に話が悪化した。
「俺は禿じゃない！これは元からだ！」

「つまり元からそうだってことね」
「おい、まだ言うのか！」
ダイアナはあくまできつかった。
「そもそもさ」
「何だ！？」
「あんたの親戚で禿げているのいるの？」
「いや、いない」
それはすぐに否定した。

第七話　音楽は一つにあらずその三

「ただ、髪の毛が薄かったり額が広かったり」
「じゃあ安心よ」
ダイアナはそれを聞いて言った。クールに。
「髪の毛も結局遺伝だから」
「それはわかっている」
「まあ聞きなさいって。結局誰も禿はいないんでしょ？」
「そこまではいない」
「それだったら大丈夫よ。禿げないから」
「そうか」
「それに禿げだって治すことは出来るじゃない。そんなにぎゃんすか言わなくてもいいでしょ」
「ううん」
「落ち着きなさいって。世の中もっと変な病気で悩んでる人がいるんだから」
「変な病気って？」
「色々あるじゃない」
ダイアナはルビーに答えて言う。
「インキンとか水虫とかね」
「水虫も？」
なおこうした病気に関してもいい薬がある。
「他にも脚が匂ったりとかさ。そっちの方が大変なんじゃないかしら」
「そうよね」
「そっちを気にしたらどうかしら」
「そうね。ところで」
「何？」
「ダイアナってよくそんなこと知ってるわね」

「そうね」
「そういえばそうだな」
それにウェンディとルチアも気付いた。
「ましてや女の子なのに」
「そういえばダイアナ」
ウェンディが気付いた。
「貴女いつもブーツ履いてるわよね」
「まあね」
ダイアナはそれに応える。
「ヘビメタだから」
「そうよね、ヘビメタよね」
「何が言いたいのよ」
いい加減周りの目にイライラしてきた。
「だからブーツだから」
「危ないんじゃないのか？」
「何かとね」
「まさかあたしが水虫だって言いたいの！？」
ここでやっと気付いた。
「詳しいよね」
「言っておくけど違うわよ」
それは否定する。
「あたしは水虫じゃないから」
「本当かよ」
しかしルチアはそれを信じようとはしない。
「今だってブーツだしよ」
黒い皮のズボンとブーツである。黒づくめの格好をしている。それがスタイルのよさと合わさって実に似合う。黒のレザーは中々着こなしが難しいのである。
「若しかしたら」
「じゃあ見せてあげるわよ」

ダイアナはたまりかねて言い返した。
「あたしが水虫かどうかね」
そしてブーツを脱ぎはじめる。それから靴下を脱ぐ。靴下は白であった。
「靴下は白なのね」
「ついでに言うと今日の下着も白よ」
ウェンディに応える。
「そうなの」
「服が黒系統の時はね、そうしてるのよ」
「合わせてるっていうのじゃないわよね」
「コントラストってやつ。黒の下から白っていうのが見栄えがいいでしょ」
「そうね、確かに」
ルビーはそれに頷く。
「もっとも女の子にしか見せられないけれど」
「後の体育の時間で見せてもらおうかしら」
「うふふ」
「そうなのか、女の子ってそんなところまで気を使うのか」
「ルチア、貴方はどうなの？」
「トランクスの柄なんていちいち覚えていられるかよ」
ウェンディにそう返す。

第七話　音楽は一つにあらずその四

「そう」
「男の下着なんて洗ったトランクスを適当に・・・・・って何言わせるんだよ」
「自分で言ってるじゃない」
靴下を脱ぎ終えたダイアナが冷たい横目で見ながら突っ込みを入れる。
「それはそうとしてね」
「ああ」
「ほら、脱いだわよ」
そう言って自分の足を見せる。
「ある？水虫」
「いや、全然」
見れば白くて奇麗な足だった。汚れ一つない。おまけに足の爪には紅いマニキュアがしてあった。それが実によく目立っていた。
「ないでしょ。これでいいわよね」
「ああ、悪いな」
「まあ靴下脱ぐ位ならいいけれどね」
そう言いながら靴下を履く。だがここでルビーが言った。
「ところでダイアナ」
「何？」
「何で足の指の爪にマニキュアを？」
彼女もそれが気になったのである。
「普通手にするものじゃないの？まあ足にもするけれど」
「手は駄目なのよ、あたしの場合」
「あっ、そうね」
言われてすぐ気付く。納得したように頷く。
「だからか」

「そういうこと。ルチアもでしょ？」
「まあな」
ルチアもこれはわかった。
「爪はな、伸ばしてるとやりにくいからな」
「ギターに爪は不要なのよ」
ダイアナは誇らしげに述べる。
「まあマニキュアは時々塗るけれど絶対に伸ばすことはないわ」
「危ないしね」
「邪魔になるし。これでも手入れしてるのよ」
「爪切ってか」
「違うわ」
だがそれは違っていた。ルチアの言葉に軽く返す。
「えっ、じゃあどうやって」
「やすりで削るのよ、爪は」
右の人差し指をチッチッチッとやって振る。
「それで整えるの」
「そうなのか」
「それが女の嗜みってやつよ。覚えておいて」
「そうだっけ？」
「初耳よね」
だがルビーとウェンディの反応は違っていた。
「普通に爪切ってるよね」
「ええ」
二人は顔を見合わせて頷き合う。
「あれっ、あんた達は違うの！？」
これにはかえってダイアナが面食らっていた。その整った目をパチクリとさせている。
「普通に切ったら爪が傷むじゃない」
「だってそんなの大したことはないし」
「同感」

「ううん、これでもあたし気をつけてるんだけれどな」
二人が結構無頓着なので彼女は少しいじけた顔になってしまった。
「皆そうでもないなんて」
「けれどギターで爪傷むんじゃ？」
「だから余計に気をつけてるのよ」
ダイアナはルビーにそう反論する。
「ほら、それに」
「それに！？」
「彼氏にも見せられないじゃない、傷んだ爪なんて。そうでしょ？」
「私彼氏いないし」
ルビーの返事はダイアナにとっては脱力感をもよおさせるのに充分なものであった。
「そこまでは気にしていないわよ」
「あっ、そうなの」
それを言われてはおしまいであった。
「だったらいいわ」
「うん」
「ウェンディもかしら」
「私もそうね」
彼女も同じであった。
「そんなには」
「そう」
「俺もそんなに外見には気を使ってないな。服装位だな」
「あんたには別に・・・・・まあいいわ」
脱力視ながらルチアにも応えた。それで話を聞くことにした。
「そうなの」
「そうさ。気をつけているといえば」
「いえば？」
「髪の毛位だな」
「結局自分で言ってるじゃない」

「ルチア君、今墓穴掘ったよ」
「雉も鳴かずば撃たれまい」
「うっ、しまった」
不覚を取ったルチアであった。結局髪の毛のことをかなり心配していると自分で言ってしまった。こうなってしまってはどうしようもなかった。

音楽は一つにあらず　　完

２００６・９・２８

第八話　お金がないのはその一

お金がないのは

濃い顔触れが揃っていると言われることの多いこのクラスであるがその中でもとりわけ変わっているというとやはり誰なのかわからない。だがペリーヌ＝グラフトンが変わっていないという者はまずいない。

ある者は彼女を気分屋といいある者は前向きだという。白い肌に茶色の長い髪、おっとりした外見に黒い眼の外見は普通の女の子である。

しかし。その性格が問題なのであった。それの為に彼女は変人と呼ばれている。

「失礼するわよね」

「何がよ」

すぐに蝉玉とエイミーから突っ込みが入る。

「だって私が変わり者だなんて」

「あんたが変わっていないのなら誰が変わっていないっていうのよ」

「同感。このクラスに変人は誰もいなくなるわよ」

この二人にもあまり言う資格がないのはここでは置いておく。なお連合においては変わっているというのはある意味褒め言葉である。個性を重んじる連合では個性の証となるからである。それぞれの国でさえ強烈な個性を持っている国ばかりであるから個人もそれに同じなのである。

それでこのペリーヌは服装も地味である。シックな白いシャツとロングスカートを好む。今着ているのは赤いスカートであった。

「このスカートはね」

「ええ」

蝉玉とエイミーが話を聞いていた。

「一〇テラ」

「だったのよ」
「一〇テラ！？」
「まさか」
二人はそれを聞いて思わず声をあげた。
「ちょっと、何よその値段」
「そんなに安い筈ないじゃない。おもちゃみたいな値段じゃない」
普通スカートといえば少なくとも六〇テラはする。一〇テラというのは有り得ない値段なのだ。
「そういうお店で買ったのよ」
「ああ、こっちでいうネオ＝クロみたいなところね」
「それだったのね」
それを聞いて二人は納得した。ネオ＝クロとは日本にある服やそうしたものを取り扱っている企業でありかなりの安売りで知られている。
「それで一〇テラだったのよ」
「そうは思えないわよね」
「ええ、いい生地よね」
「安くて生地がよければそれでよし」
ペリーヌはにこやかに笑ってそれに応えた。
「違うかしら」
「まあね」
「デザインもいいし」
「デザインも見てたの？やっぱり」
「勿論よ」
にこりと笑って述べる。
「当然でしょ。それも考えなきゃ」
「成程」
「そういうところは流石よね」
二人はまずそれは認めて褒めた。
「けれどさ」

だが相手はその変人と定評のあるペリーヌである。ここで怯むことはなかった。
「それ、見つけるのにどれ位時間かけたの？」
「よかったら教えて」
「ほんの三日よ」
「三日って・・・・・」
「ちょっと待ちなさい」
ここで呆れた顔になる。ペリーヌの秘密はここにあったのだ。
「服買うのに三日！？」
「何でそんなにかかるのよ」
「あら、いい服買うのなら当然じゃないの？」
ペリーヌはしれっとした顔でそれに応える。
「まず見つけるのに一日」
彼女は言う。
「チェックに一日、そして値切るのに一日よ」
「安売りショップでさらに値切るか」
「あんた、鬼ね」
「鬼でも悪魔でも安く値切ればいいのよ」
発想が違う。
「そうじゃないの？」
「それって南アフリカの常識！？」
エイミーが呆れきった顔で尋ねる。ペリーヌの生まれは南アフリカなのである。かっては白人と黒人の対立があったがそれはもう千年も昔の話。今では白人と黒人どころか様々な人種の混血がある連合らしい国である。
「まさか、皆そこが甘いのよ」
ペリーヌは残念そうに言う。
「そういうのがないのよ」
「まあそうよね」
「普通はそんなことしないわよ」

「残念よね」
悲しげな顔で述べる。
「お金の大事さがわからないなんて」
「いや、それ違うから」
「あんたの場合は守銭奴っていうのよ」
「いい言葉ね」
そう言われたことにうっとりとしている。そう、彼女が変人と呼ばれる理由はここにあった。

第八話　お金がないのはその二

「その守銭奴って言葉の響きが。お金を大事にするって感じで」
「そうなの？」
「私にとってはね」
そのうえあくまで我が道を行く。その姿勢は見事ですらあった。
「お金がやっぱり大事よ」
「他に大事なのないの？」
「結局お金なのね」
「あら、お金で買えないものだってあるわよ」
それはペリーヌにもわかっていた。
「何、それ」
「チャンピオンベルトとか言わないでしょね」
「まあそれもあるけれど」
「あるんだ」
「勝利はお金じゃ買えないじゃない。買ってもそれは偽者」
「まあね」
「そういう奴は結局は最後は惨めなものよ」
やはり実力で勝って幾らなのだ。買収やそうした醜い工作で勝利してもそれは本当の勝利とはならないのは何時の時代でも同じなのである。
「それは同意するわ」
蝉玉もこれには頷いた。
「私だって拳法で直接倒さないとね」
「そういえば蝉玉拳法やってたんだよね」
「そうよ。痴漢でも何でも一撃よ」
「頼もしいわね」
「まあ私は最高出力のスタンガンで昇天させてあげるけれど」
何気なく頷くエイミーとは違いペリーヌは恐ろしい微笑を浮かべ

ていた。
「一撃でね。うふふ」
「・・・・・一撃なのね」
これにはエイミーも言葉を沈ませた。
「少なくとも再起不能ね。一生廃人よ」
「そこまでするんだ」
「あら、当然でしょ」
その清楚な顔に似合わずしれっととんでもないことを言う。
「だって。女の子を襲う奴なんて最低じゃない」
「そうよね、本当に」
蝉玉はこれにも同意している。どうも彼女とペリーヌは案外近いものを持っているのかも知れない。
「そんな奴は急所をね。思いきり蹴ってやればいいのよ。それで終わりよ」
「・・・・・そうなの」
エイミーはこれにも言葉がない。
「それで一生思い知らせてやるんだから。女は強いんだって」
「そうよね。それで」
「ええ」
話は次にお金で買えないものに入った。
「次にお金で買えないものはね」
「何？」
「人よね。人の心はお金では買えないわ」
「おっ、いいこと言うじゃない」
これは素直にいい言葉であった。
「そうよね。やっぱり人の心はね」
「お金はね。大切だけれどやっぱり買えないものだってあるのよ」
「うんうん」
「確かに」
やっよエイミーも素直に頷ける話になった。

「それはわかるわ」
「けれどねえ」
ペリーヌはふう、と溜息をついた。
「彼氏、いたらなあ」
「あっ、そういえばペリーヌ今フリーだったっけ」
「そうなのよ」
エイミーの質問に答える。
「この学校に来てからね。ずっとなのよ」
「誰か彼氏でも作ったら？」
エイミーが何気なく提案する。
「いいと思うわよ。それにペリーヌの顔だったら」
「皆逃げていくのよ。何故かしら」
「そりゃそんだけ守銭奴だったら」
蝉玉が情け容赦のない突込みを入れる。
「そりゃあねえ」
「お金のことでもこう会う人がいれば」
「一人いるじゃない」
ここで候補者があがった。あげたのはエイミーである。
「誰？」
「ベッカよ。あれも結構守銭奴だし」
「というかあれ一種の宗教よ」
蝉玉がそれに突っ込みを入れる。
「ペリーヌと一緒で」
「ベッカねえ」
だがペリーヌはエイミーの話を聞いて腕を組み考える顔を作った。
「どうかしら」
「あっ、乗り気？」
「悪くはないかしら」
蝉玉にもそう答えた。
「ねえ。貴女はどう思うの？」

「どう思うって言われると」
蝉玉は首を少し傾げさせた。
「私はまあ一回はデートに行ってみたらどうかなあ、って」
「私は賛成ね」
エイミーは積極的に賛成票を投じてきた。
「実際に一回デートしてみたらいいわよ」
「そうね、まあ一回やってみて」
「けれど」
だがペリーヌはまだ困った顔をした。

第八話　お金がないのはその三

「何？」
「私、お金を使うのは」
「お金使わないデートだってあるじゃない」
「そうそう」
「大切なことに使うのなら私もいいのよ」
彼女もそこまで愚かではない。それはわきまえている。言うなら
ば分別をわきまえた守銭奴なのである。
「けれどね」
「どうしたのよ」
「何かあるの？」
「ホテル代って。どれ位かしら」
「なっ」
いきなりストレートな話なので二人は絶句した。なお蝉玉もエイ
ミーもそんな経験はない蝉玉に至っては彼女もスターリングも奥手
だからキスもまだである。この前彼の部屋にエイミー達と一緒に入
ったばかりである。
「あ、あんたねえ」
「いきなりそんな心配しなくていいわよ」
「そうなの」
「あのね、相手はベッカでしょ」
「ええ」
「彼だったら別よ。変なことはしないわ」
「そうそう、フックじゃないんだから」
「へっくし」
教室の片隅でフックがくしゃみをしていた。
「誰か噂してるのかよ」
「風邪じゃないの？」

スターリングがそれを見て声をかけていた。
「風邪にはやっぱりゆっくりと休む方が」
「いや、風邪には薬だ」
だが真っ当な提案はギルバートの熱血提案の前に却下された。
「風邪には休養だけでなく今般からの治療が必要だ。それにはまず」
「薬が一番なのよ」
ヌッと小柄な女の子が出て来た。黒髪を左右で小さくテールにした紫の目の女の子で薄い褐色の肌をしている。コロンビア出身のクラスメイトの一人アンジェレッタ＝ダラゴーナである。
「やっぱりね。病気には風邪よ」
「そうなのか」
「それでね。これをまず」
何か色々と出してきた。
「飲んで。それからこれ。そして」
「ってちょっと待てよ」
嬉々として薬を出してくるアンジェレッタに対して言う。
「一体どれだけ薬持ってるんだよ」
「ってそんなにないけれど」
「何処がだよ。ざっと見ただけで一つ二つ三つ」
わざわざ数える程ある。
「そんなに飲めるかよ。一体何なんだよ」
「全部健康の為よ」
アンジェレッタは平然として言う。
「やっぱり人間お薬で身体整えないとね。よくないよ」
「おい、そんだけ飲んだら身体がかえっておかしくなるよ」
「大丈夫よ。私なんか子供の頃から毎日飲んでるけど平気だから」
「俺は平気じゃねえ。そもそも」
「ほら、風邪なんだから無理しない。委員長、押さえてて」
「うむ」
「おい、ちょっと待て。スターリング、何とかしてくれ！」

「何とかって言われても」
ギルバートの力で後ろから両手を押さえられる。そこにアンジェレッタがにこやかな顔で近付いて来る。その手にはしっかりと薬がある。
「もう僕じゃ何も」
「おい、そんな殺生なって。アンジェレッタ、もう風邪はなおったよ」
「無理したら駄目よ。やっぱりお薬できっちり治さないと」
「って誰か何とかしてくれ！」
「・・・・・あっちはあっちでえらいことになってるわね」
蝉玉はこめかみに汗を一筋たらしながらフック達を見て呟いた。
「アンジェレッタとギルバートが周りにいるのを確認しないから」
「けどアンジェレッタっていつもどれ位お薬持ってるのよ」
エイミーも首を傾げて言う。
「あんな小さなペーチから幾つも幾つも。瓶まで出して」
「あれ四次元につながってるんじゃないの？」
蝉玉も以前からそれを不思議に思っていたのだ。
「何かさ。そんな感じ」
「そうかも」
エイミーもそれに頷く。
「そうじゃなきゃあれだけ入ってないわよね」
「まあ世の中色々とあるから」
「気にしたら駄目ね」
「そうよ。それでね、ペリーヌ」
蝉玉はあらためてペリーヌに声をかけた。

第八話　お金がないのはその四

「ベッカとのデート、気合入れなさいよ」
「デートって気合入れるものなの」
「当たり前でしょ」
蝉玉の声の方が気合が入っていた。
「女の一世一代の大勝負なのよ、デートってやつは」
「蝉玉、それはちょっと大袈裟なんじゃ」
エイミーが力説する彼女を嗜める。ブレーキをかけてきたのだ。
「幾ら何でもそれは」
「私は少なくともそのつもりよ」
それでも蝉玉の主張は変わらなかった。
「スターリングとのデートだって。下着にまで気合入れてるんだから」
「結局するの？」
「だ、だからね」
ペリーヌ本人に言われて顔を真っ赤にさせながらも答える。
「そのつもりで向かえってことなのよ。わかる？」
「下着ねえ」
それを言われると困った顔を見せていた。
「一応お気に入りは幾つか持ってるけれど」
「じゃあいいじゃない」
「シルクとかね。あとミルク」
牛乳から造られた生地である。この時代においてはかなりポピュラーなものなのである。
「そういうのは持ってるけれど」
「いいじゃない。色は？」
「白も黒もあるわよ」
「そう、黒ね」

蝉玉はそれを主張した。
「黒のシルク。これで決まりよ」
「そうなの」
なお今彼女達は教室の中で話をしている。だがそれは奇麗に忘れてしまっている。
「これなら大丈夫よ。いいわね」
「うん、なら」
「いえ、違うわね」
しかしここでエイミーが割って入って来た。
「下着はやっぱり白よ」
「白なの？」
「お姉ちゃんが言うにはね。男ってのは可愛いものが好きなんだって。そう言ってたわ？」
「どの姉さんなの？」
エイミーが上に三人の姉がいることはクラスの誰もが知っていることである。かなりの美人姉妹として評判でもある。三人共八条大学の学生であり姉妹四人で暮らしている。
「ベスお姉ちゃんよ」
「ということは三人目のお姉さんね」
「そう、そのお姉ちゃんよ」
ペリーヌに答えた。
「そのベスお姉ちゃんが言っていたのよ。だから問題ないと思うわ」
両手を腰に置いて誇らしげなポーズで述べる。
「だからここは白のミルクね。清純にいきましょう」
「白かあ」
「そうよ。それもミルクでね。最高の組み合わせでしょ？」
「言われてみれば」
ペリーヌはそれを聞いて白に傾きかけた。だがそれは蝉玉が止める。
「何言ってるのよ」

ここでムキになって言い出した。
「普段はそれでいいけれどこういう時は黒じゃない」
「自然体がいいんじゃないの？」
エイミーはこう反論する。
「やっぱりそういう場合はさ」
「何言ってるのよ、女の一世一代の勝負よ」
蝉玉も引き下がらない。
「やっぱり。色っぽく勝負よ」
「色っぽくなら白でもいいじゃない」
「駄目駄目、黒には勝てないわよ」
「白の色気がわからないっていうの？」
「黒には勝てないわよ」
「勝てるわよ。ベスお姉ちゃんはあれでも彼氏は必ずゲットするんだから」
「それは素材がいいんでしょ。やっぱり黒は」
「素材の問題じゃないわよ。確かにベスお姉ちゃんは奇麗だけれど」
二人はペリーヌを放っておいて言い争いをはじめた。ペリーヌは二人の案を折衷させて白いシルクの下着を選ぶことにした。着飾っていよいよそのベッカとのデートとなった。

第八話　お金がないのはその五

「さてと」
ペリーヌは安売りの店がさらに裏で仕入れてきたルーツはかなりとんでもない銀に近い白のドレスを着て待ち合わせ場所の駅前にいた。そこで腕時計を見ている。その外見だけ見ればかなり上品なお嬢様である。外見だけは。
「ベッカはまだかしら。そろそろだけれど」
「おおい、ペリーヌ」
「あっ、ベッカね」
「ああ、待ったかい？」
そこに一人の少年がやって来た。
黄色の髪に黒がかった鳶色の目をしている。背は普通より少し小さい位で元気がありそうな顔をしている。
彼がそのベッカ、ベッカ＝セリアラームである。ブルネイ出身である。
見れば服も黄色である。しかもズボンは赤なのでかなり目立つ外見だ。しかも帽子と上着は青である。だが決して悪趣味に見えないのが不思議な着こなしであった。
「何処でその服見つけたの？」
「いや、安売りの店でね」
ベッカは元気な声で答えた。
「見つけたんだけれどどうかな」
「そうね」
ペリーヌはその質問に答えてきた。
「ぱっと見ると派手だけれど」
「うん」
「見慣れるとそうじゃないわね。似合ってるわ」
「有り難いね、そう言ってもらえると」

「それで全部で幾ら位なの？」
「一〇〇テラってところかな」
「帽子や靴を入れても？」
「それだと一二〇テラかな」
「それでも安いわね」
ペリーヌも思わず感心する値段であった。
「何処にあるの？」
「うん、ここにあるの」
「この街に！？」
これは気付かなかった。言われてはじめて驚きの声をあげる。
「そうだよ。今から行く？」
「そうね」
話を聞く側から乗り気になっていた。
「悪くないかも・・・・・・っていうか行きたいわ」
「わかった。じゃあ今からそこに行こうよ」
「そうね。じゃあ私も」
「君は何処紹介してくれるの？」
「古本屋なんてどうかしら」
「古本屋なら僕も結構知ってるけれどいい？」
「ええ、いいわよ」
ニコリと笑ってこう返す。
「そのお店かも知れないけれど」
「それはそれで一興だね。じゃあ行こうよ」
「ええ。けれど」
笑いが苦笑いになった。
「何？」
「手、握るのはいいけれど」
「うん」
見ればベッカはもうペリーヌの手を握っていた。彼女はそれはいいと言う。

「それでもね」
「ええと。痛い？」
「痛くはないわ。ただ」
「うん、ただ」
「強く引っ張られると。私足遅いし」
「あっそうか、御免」
ベッカはそこまで言われてようやく気付いた。
「気付かなかったよ。痛かった？」
「だから痛くはないのよ」
これは本当である。
「けれどゆっくりね。お願い出来るかしら」
「御免御免。じゃあ静かに行こう」
「ええ」
「お店は逃げないしね」
「けれど品物は買われてるかも」
「その時はその時は」
ベッカは清々しい声で言った。
「別のものを探せばいいし」
「ふふふ、宝探しかしら」
「そう言えばそうだね。じゃあ今から二人で」
「ええ、宝探しに」
「まずは服を」
「そして次は本を」
二人は互いに言い合う。
「探しに行こう。いざ冒険の旅へ」
「冒険のデートへ」
「あっ、デートだったのね」
「そうよ。忘れないでよ」
その言葉を聞いて今度はクスクスとした笑いになった。案外笑いの表情が多い。

「じゃあ言い換えるね」
「ええ」
「冒険のデートへ」
「出発進行っと」
二人は意気揚々と安売りショップ巡りをはじめた。その中で二人は無数の宝物を発見しその手中に収めていく。とりあえず彼等の冒険、いやデートは大成功に終わったのであった。
「というわけなのよ」
次の月曜ペリーヌは教室の自分の席で上機嫌で蝉玉達にそのデートのことを話していた。
「何、それだけ？」
蝉玉は話を聞き終えて拍子抜けした顔になっていた。
「安売りの店をはしごしただけなの？」
「ええ」
ペリーヌは素っ気無く答えた。
「そうだけれど？」
「何だ」
蝉玉はあらためて拍子抜けした顔を見せた。
「何が起こるかと思ったら」
「それで充分じゃないの？」
「何言ってるのよ」
ペリーヌに言い返す。その両手首の表の付け根を腰の横に当てている。

第八話　お金がないのはその六

「そんなのデートじゃないわよ」
「けれど蝉玉ちゃんこの前のスターリング君とのデートは」
彰子がここで彼女に突っ込みを入れる。
「遊園地で楽しく遊んでたって楽しそうに言ってたんじゃなかったっけ」
「あのね彰子ちゃん」
今度は彰子に顔を向けた。
「遊園地はデートの定番よ」
「うん」
「普通古本屋とか行く!?行かないでしょ」
「そうなの」
「そうなのって」
彰子はこういうことに関してはクラスの誰よりも無知である。鉄壁どころかダイアモンドの様な、いやティアマト級巨大戦艦の装甲に匹敵する防御力を誇る鈍さとまで言われている。
「ああ、もういいわ」
彼女にはもう言わないことにした。
「そのうちわかるかも知れないから」
「そうなの」
「そのうちね、そのうち」
「まあ彰子ちゃんは置いておいて」
エイミーが交代する形でペリーヌに問う。
「結局お店回ってもの買っただけ?」
「ええ」
「ふうん」
手に右手の指を当てて考えながらそれを聞く。
「別にいいんじゃないの?」

「そうなの」
「私はそう思うわ。蝉玉とは別にね」
彰子はとりあえず置いておいた。
「それでもいいんじゃないかしら。楽しかったんでしょ」
「とても楽しかったわ」
「そう、それならそれでいいわ」
エイミーはにこりと笑ってペリーヌにそう言った。
「デートって一つじゃないし」
「色々あるの」
「遊園地行くのもデートだし古本屋とか行くのもデートだし」
「じゃあまた言ってもいいわね」
「ええ。楽しんでね」
「ちょっと、それは邪道よ」
蝉玉がここでクレームをつけてきた。
「デートはやっぱりね。遊園地とか砂浜とか遊歩道とか」
必死に力説する。
「そういうところでムードよくね。それこそが」
「じゃあゲームセンターとか野球場とかは駄目なの」
「それは邪道、いい？デートってのはね」
何も知らない彰子に対して力説する。
「きちんと身なりを整えて男の子とね」
「まあ蝉玉の言うことも一理あるけれどね」
横で言う蝉玉のことを半分放置しながらペリーヌにまた話す。
「うちのお姉ちゃん達は三人共そっちの玄人だから。よかったら何でも聞いて」
「何でもね」
「私の家かペリーヌの家でね」
「お茶を飲みながらね」
「いいわね。それも緑茶ね」
「日本のお茶？」

「最近凝ってるのよ、お茶に」
エイミーは笑って述べる。
「だからね。それで」
「いいわね。青茶なんかも」
こちらはスリランカ名産である。スリランカはお茶の産地で有名な国の一つである。
「あっ、それもね」
エイミーはそれを聞いてさらに目を細める。
「飲みながら色々とお姉ちゃん達の話を聞いてよ」
「そうさせてもらうわ」
「とにかくねえ」
その横では相変わらず蝉玉があまりにも王道でしかないデートのことについて彰子に講義を行っている。
「恋愛はビシッと決めるのよ」
「ビシッと」
「そうよ、いいわね」
「そういうものなの」
ペリーヌはその横でエイミーに尋ねた。
「人それぞれね」
「そうなの」
「蝉玉みたいに力瘤入れてやるのもいいけれどね。マイペースもいいわよ」
「それじゃあ私は」
「うん、自分のペースでね」
「そうね、そうさせてもらうわ」
「とにかくね。男ってのはね」
蝉玉はまだ言っている。
「鈍感だし。とにかく押していかないと」
だが彰子には実感がない。彼女は言っても詮無いことを言い続けているだけであった。しかし本人はそれには全く気付いてはいなか

った。

お金がないのは　　完

2006・10・4

第九話　冷酷な笑みその一

冷酷な笑み

「それで今回はな」

休み時間の教壇で四角い顔の形にひょうきんな顔立ちの少年が何かを皆に話していた。髪は黒くて多い。しかもやけに硬そうだ。韓国からの生徒で朴洪童という。クラスではムードメーカー的位置にいる。

「ちょっと落語を勉強してみたんだ」

「落語か」

ギルバートが腕を組んで洪童の話を聞いていた。

「日本の文化だな」

「ああ、最近ジャパニーズジョークってのにも凝っているんだよ」

洪童は扇をたたんで持っている。それを手に語っている。

「あれは中々よくてな」

「目の付け所がいいな」

「そう思うか？」

ギルバートの言葉に機嫌をよくする。

「だから俺もさ、最近勉強してるんだよ」

「だから私に落語の本借りたのね」

彰子はそれを聞いて言った。

「役に立ってるみたいね」

「おう、有り難う彰子ちゃん」

洪童の方でも彼女に礼を述べる。

「いやあ、落語ってのも奥が深い」

「そうなのか」

「何ていうのかな、間の運びってやつがあってな」

扇を手に語る。

「それが凄い難しいんだよ」

「ふうむ」
「例えばな。酢豆腐って落語だよな」
「酢豆腐？」
「知ったかぶりの若旦那の話ね」
黒いショートヘアに青の目の落ち着いたというよりは無表情の女の子がここで言った。クラスメイトの一人でプリシラ＝ラドリックという。アルム出身である。クラスきってのクールとされている。
「そう、それ」
「あれは難しいわよ」
「そうなんだよな、とにかく一つ一つが深くて」
洪童は思いの他落語を勉強している。
「漫才とは違ってこれも。難しいんだよ」
「君はどちらかというと漫才の方がいいんじゃないのか？」
「そうか？」
ギルバートの言葉に応える。
「俺としちゃ落語もいいんだけれどな」
「他のはどうかしら」
プリシラも尋ねる。
「パフォーマンスとか物真似とか新喜劇とか」
「どれもいいけれどな」
洪童はお笑いの天才とまで言われている。何をやっても最高に笑わせられるのだ。それは最早神業、神童とまで言ってよい程であった。
「今は落語が一番やりたいな」
「そうなのか」
「ああ、何ていうかこれが一番奥が深いしな」
「落語ってそんなに奥が深いの」
「何だ、小式君知らないのか」
ギルバートがその言葉に顔を向けてきた。
「私あまり落語聞かないから」

「馬鹿な、日本人なのに落語を聞かないとは」
ギルバートは驚きを隠せなかった。
「しかもここは日本、やはり落語もまた」
「なあ」
洪童はギルバートの熱の篭もった言葉を聞きながらプリシラに尋ねてきた。

第九話　冷酷な笑みその二

「ギルバートの方がずれてねえか？」
「やっぱりそう思う？」
「何ていうかよ」
彼は言う。
「日本人が全員落語好きだったらそれはかえって恐いよな」
「そうね」
「他にも歌舞伎とかもあるけれどよ」
「本人はわかっていないわね」
「まあ俺は歌舞伎はあまり興味ないんだ」
「お笑いがないから？」
「ああ。ないだろ」
「甘いわね」
プリシラはそれを聞いて言った。
「歌舞伎は只単に芝居をやるだけじゃないのよ」
「そうなのか」
「笑いもあるのよ」
「何っ」
それを聞いた洪童の目が光った。
「それじゃあ」
「興味を持ったようね」
「ああ、今度研究してみる」
「ただし、一つ言っておくことがあるわ」
「それは何なんだ？」
洪童は問う。
「歌舞伎の時代設定に突っ込んでは駄目よ」
「時代設定！？何かあるのか？」
「江戸時代の服を着てても鎌倉時代とか室町時代とか言うから」

「そりゃまたかなり強引だな」
「それは気にしないで。他にも以上に生き別れや偶然の再会が多いけれど」
「なあ」
「何？」
「俺韓国人なんでな。日本のことは詳しいつもりなんだが」
「そうよね」
韓国では何よりも日本を見る傾向がある。日本と自国を比較して考えるし日本の製品ばかり見ている。そうした傾向が千年以上続いているのである。当然日本文化も追い求めている。
「それってストーリー上まずいんじゃないのか？新喜劇でもそれは」
「だから気にしたら駄目なのよ」
プリシラは言う。
「いいわね」
「ううん」
洪童はそれを聞いて難しい顔を作る。
「何とまあ」
実際に歌舞伎では強引な設定が目立つ。死ぬ前に異常に時間がかかるとか偶然の生き別れや通り掛かりも多い。人が死んでも生き返ったり、幽霊になるのもざらであり鎌倉時代に握り寿司や蕎麦があったりする。蕎麦は江戸時代に流行りだした食べ物である。
これだけでもかなりのものだが風俗習慣はそのまま江戸時代である。鎌倉時代の鎌倉に呉服屋があるのだ。なおかつ名前を少しいじっただけで誰にでもわかるような状態で出す。大石蔵之介は大星由良之助である。これでわからない人間がいようか。強引に室町時代と言って上演したのである。これを許した幕府の度量も素晴らしい。
そｒが歌舞伎である。かなり強引なシナリオはいいのである。面白ければそれでいいのだ。例え当時世界一の大都市であった江戸が人口数百人の過疎地に見えても。
「そこは観ないのよ」

「まあお笑いだけ観られればいいか」
「お勧めは法界坊ね」
「法界坊か」
「あれが一番いいと思うわ。他にもあるけれど」
「わかった、じゃあそれを」
「それでだ」
ギルバートはまだ熱い演説を行っていた。
「僕が言いたいのは小式君！」
「ええ」
「あいつまだやってたのかよ」
「あの熱さはかえって鬱陶しいわね」
「大人になったらうざい上司とかになりそうだよな」
「求心力はないわね」
そんな二人の言葉は耳に入らない。だがここで冷酷な突込みが彼を襲うことになった。
「委員長、それは違うと思うよ」
癖のある巻き毛の黒髪に黒っぽい肌の童顔の少年がそこにやって来た。澄んだ空色の目をしている。このクラスの一員であるセドリック＝リミニである。キリバスから来ている。
「リミニ」
「だってさ。それを言うと日本人は全員日本文化を何でも知っていなくちゃいけないよ」
「僕はそこまでは」
「うん、そう聞こえるよ。だからね。あまり彰子ちゃんに言うのも」
「無理があるというのか」
「僕はそう思うね。だから」
「わかった。じゃあこれで」
ギルバートは話を止めた。
「済まないな、小式君」
「私はいいけれど」

優しい性格である彰子はそんなことは気にしない。
「まあそんなところでね。じゃあ」
こうしてギルバートの演説は終わった。セドリックがあっさりと止めたのであった。
「流石ね」
プリシラはその様子を見て言う。

第九話　冷酷な笑みその三

「セドリック君の突っ込みは。委員長も止めるのね」
「まあ彰子ちゃんには助け舟かな」
「本人がそう思っていればね」
プリシラは亮神にそう述べた。
「どういう意味だ、そりゃ」
「だって彰子ちゃんは」
かなりのおっとりなのである。だから助け舟にもあまり気付かないことが多いのだ。このおっとりさはクラスでは文句なしの一番である。
「まあそれが彰子ちゃんの持ち味だけれどな」
「貴方の持ち味はそのお笑いへの情熱ね」
「悪いな、褒めてもらって」
「いいわ、本当のことだし」
「まあそっちはこれからもどんどん精進するさ」
「真面目にお笑いをやってるのね」
「何でも真面目にやらなきゃ駄目だろ」
意外にも真面目であった。
「そうじゃなきゃな。伸びたりしないさ」
「努力が必要、と」
「そういうことさ。そういえばよ」
「何かしら」
「彰子ちゃんってやっぱり努力してるのかな」
彰子を見て囁く。
「何気に運動もスポーツもかなりのものだけれどさ」
「してると思うわ」
プリシラは相変わらず素っ気無い様子だがそれに答えた。
「そうでなければ」

「そうだよな、けれど真剣にしてるとこと見たことないぜ」
実際に彰子はぽやっとしていて何事にも上の空といった感じが強い少女である。自己主張もしないしのんびりしている。それでいて学校の成績もスポーツも優秀なのだ。それがわからないという者も多いのだ。
「何時の間に」
「誰も知らない間にでしょうね」
「そうなのかよ」
「ええ」
「ううん、俺は側に誰がいようと何時何処でもお笑いの勉強をするけれどな」
「それはそれでいいと思うわ」
「いいのか？」
「それが道なら」
「そうか、じゃあ精進していくぜ、これからも」
「他人の迷惑にならなければ」
「ああ、それは気をつけてるつもりだぜ」
あくまでつもりだ。亮神は真剣になるあまりそれを忘れてしまうことが非常に多いのである。困ったところもある御仁なのである。
「一応はな」
「だといいけれど」
「朴君も周りが見えていれば完璧なんですけれどね」
「ぬっ、今度は俺か」
セドリックはにこやかな笑みと共に亮神のところにやって来た。
「困ったことです」
「ううむ」
「それでも努力は流石ですね」
天然でフォローに入る。
「おお、そうか」
「もっと面白ければ完璧ですよ」

「ううう・・・・・」
そして天然で潰す。悪意のない連続コンボの前にさしもの亮神も為す術がなかった。セドリックのあまりもの見事な連続攻撃であった。
「そこも精進ですね」
「ああ、そうさせてもらうよ」
「あの朴君を落ち込ませるなんて」
プリシラはそんな彼を見て呟く。
「やるわね、リミニ君」
「それで彰子さん」
落ち込んでいる亮神からはもう離れて今度は彰子であった。動きが速い。
「何？」
「その落語の本ですけれど」
「うん」
「今度僕にも貸して下さいね。何か面白そうです」
「うん、よかったらね」
人のいい彰子はその言葉ににこりと笑って答えた。
「楽しんでね」
「はい」
最後ににこやかな笑みが見えた。セドリックの微笑みは百万テラの価値があった。それ以上に毒舌は一億テラの価値があるが気付いていないのは本人だけであった。

冷酷な笑み　　完

２００６・１０・６

第十話　推理漫画その一

推理漫画

「さて、と」
アンは今日も自分の机の上でネームを練っていた。新作のネームである。
「問題は主人公よね」
「そうね、どうするの？」
アシスタントのルビーも一緒である。なおルビーの漫画のアシスタントはアンが行っていたりする。
「ここは理知的なのを出したいわね」
「シャーロック＝ホームズみたいなの？」
「それだとちょっとオーソドックスじゃないかしら」
それには少し否定的であった。
「もっとこう。風変わりな」
「最初の頃の明智小五郎なんてどうかしら」
「ううん、あれだとすぐに少年探偵団にいっちゃいそうね」
「じゃあそれも駄目ね」
「ええ。それだと」
「やっぱりここは俺達が出ないとな」
「そうね。真打ち登場ってところかしら」
「・・・・・私、今回はシリアスでいきたいのだけれど」
冷静にテンポとジャッキーに返す。
「何、俺達の何処がシリアスじゃないんだ」
「あたし達は何時だって大真面目よ」
「大真面目なのはわかってるわ」
やはり冷静に返す。
「それでも。やっぱり」
「ぬうう、俺達を馬鹿にするのか！」

「あたし達の力は今まで何度も見せているのに！」
「それはわかってるけれど」
ルビーがやんわりとした声で述べる。
「けれど。探偵としては」
「侮辱だ！」
テンボは抗議を叫んだ。
「俺は現代のエルキュール＝ポワロなんだぞ！」
「あたしは女版シャーロック＝ホームズよ！それかハニー＝ウェスト！」
「ハニーってお笑いだったっけ」
「シリアスよ」
アンはルビーに答えた。
「色気と強さを併せ持つ探偵よ」
「そうよね」
つまりジャッキーとは全然違う。ジャッキーは胸があって顔も中々だが頭がないのである。それも絶望的なまでに。学校の成績はテンボ共々あれである。
「じゃあ違うわよね」
「絶対にね」
「ちょっとテンボ」
ジャッキーはそれでも不満を述べる。
「どうする！？アンもルビーもあたし達の凄さがわかってないわよ」
「クッ、こうなったら」
テンボは何かを決めたようである。
「事件を解決してやる！行くぞジャッキー！」
「わかったわ！まずはそれであたし達の実力を！」
「再認識させてやる！じゃあ」
「いざ出発！」
そして教室から駆け出していった。なお今はまだ午前中で学校の授業はまだまだある。

「・・・・・行ったわね」
「ええ、また急に」
アンとルビーは呆れた顔でそんな二人を見送っていた。
「授業どうするのかしら」
「さあ」
「さあって」
「どうにかするんじゃない？それとも学校さぼって遊んでるのがばれて補導されるか」
「どっちにしろ馬鹿じゃない」
「だってあの二人だから」
身も蓋もない言葉である。
「仕方ないわよ」
「ううん、まあ言っても聞かないわよね」
「理解出来ないのかも」
「明日どうせ平気な顔で戻って来るしいかしら」
「心配しなくていいわ、二人共昨日のことなんて忘れているから」
「それもそうね」
「そういうこと」
これで二人の話は終わった。そして本題に戻る。

第十話　推理漫画その二

「それで主人公よね」
「ええ」
「やっぱ理知的にいきたいのよ」
アンは言う。
「頭が鋭くてクールに」
「クールなのね」
「ええ。誰かいいのはいないかしら」
珍しく困った顔でアンは述べた。
「そういうタイプが」
「男にするの？」
ルビーの問いはアンにとって意外なものであった。
「えっ！？」
思わず声を漏らす。そこにルビーはさらに尋ねてきた。
「だから。男にするの？女にするの？」
「それは」
「考えてなかったの？」
「ええ。どうしようかしら」
アンは困った顔に戻ってそう返した。
「そこまで考えてなかったわ」
「そうなの」
「困ったわね、それもどうしようかしら」
腕を組んで考えはじめた。
「そこのところも」
「女の子にするのならいいモデルがいるわよ」
「ウェンディ」
ここでウェンディが話に入ってきた。
「誰、それ」

「よかったら教えて」
「身近にいるわよ」
それがウェンディの言葉だった。
「身近に！？」
「誰なの、それって」
アンもルビーもウェンディのその言葉に顔を向けてきた。
「ジュリアよ」
「ジュリア！？ああ、成程ね」
アンはその名前を聞いて満足そうに頷いた。
「彼女なのね」
「ええ」
「そうね、あの娘ならいいわ」
「そうね、ジュリアなら」
「呼んだ？」
二人は納得した様に頷き合っているところに本人がやって来た。
褐色の肌にプラチナブロンドのロングヘアーにエメラルドの瞳、抜群のプロポーションをした女の子だった。プリーツの赤いミニに白いソックス、ブイネックの黒いセーターの下は白いカッターである。
彼女がそのジュリア＝クラフトンである。イロコイの女の子でネイティブアメリカンの血がまだ残っている。
「私のこと言ってるみたいだけれど」
「あら、噂をすれば」
「速いわね」
「何となく呼ばれた気がしたから」
アンとルビーにそう返す。
「教室に戻って来たのよ」
「そう、相変わらず勘がいいわね」
アンはそれを聞いて言った。
「流石って言うべきかしら」
実はジュリアはかなり勘がいいことで知られている。そのせいで

ニュータイプとか呼ばれることもある。これもイロコイの血のせいなのかどうかはわからない。
「で、何か用なの？」
ジュリアはあらためて尋ねた。
「私に」
「ええ、実はあるのよ」
アンが言った。
「今度探偵もの描くのだけれどね」
「漫画ね」
「そうなの。それの主人公にどうかなあって」
「私が漫画の主人公に！？」
それを聞いて驚きの声をあげた。
「私なんかでいいの！？」
「ええ、よかったら」
アンはまた言った。
「どうかしら。主人公の女探偵で」
「うん、いいよ」
ジュリアは笑顔でそれに頷いた。
「よかったらね。主人公にしてよ」
「そう。それじゃあ」
これで話は決まった。
「抜群の勘と運動神経で問題を解決していく女探偵ってところね」
「そうね。肌も褐色で」
「嬉しいわね、それって」
ジュリアの方も話を聞いて顔を綻ばせていた。
「私が漫画の主人公になるなんて」
「最初はね。立候補者がいたのだけれど」
「テンボとジャッキーでしょ」
「わかるのね」
「何となくだけれどね。正解？」

「ええ、そのものズバリよ」
アンが答えた。
「あの二人がね」
「で、断ったと」
「ええ」
ここまでは誰にもわかることであった。
「ただ断ったらね」
「何か事件を解決するって言い出して出て行ったのよ」
アンが答えた。
「ああ、そういえばいないわね」
「そういうことよ。街に出て行ったわ」
今度はウェンディが答えた。
「多分あんたね。私を推薦したの」
「わかるのね」
「うん、これも勘よ」
にこりと笑ってウェンディに述べた。
「何となくわかるのよ」
「やっぱり凄いわね」
ルビーはそれを聞いて素直に感嘆の言葉を述べた。
「その勘って」
「まあ何となくだけれどね。わかるから」
「それでその勘でね」
アンがそうした話を受けてジュリアに話し掛けてきた。

第十話　推理漫画その三

「うん」
「あの二人何処に行ったかわかるかしら」
「多分今生徒指導室ね」
「生徒指導室!?学校の？」
「うん、今頃生活指導の先生にこってりと絞られてるよ」
「それも勘？」
「っていうかすぐにわかるじゃない」
今度は勘ではない、そう言いたいようだ。
「今の時間学校から出ようと思ったら」
「それもそうか」
「そういうこと。けれど」
「けれど？」
「あの二人のことだから。そこでまた変なことしてなきゃいいけれど」
「それはあるわね」
何となるわかることだった。わかりたくはなくても。
「まあ明日になったら忘れてるでしょうね」
「それはね」
もっとはっきりとわかることだった。このクラスならば。
「で、風紀委員」
「呼んだ？」
黒い髪と目の結構な男前が出て来た。何かかなり派手な格好をしている。
「あの二人が生活指導の先生に捕まってるかも知れないけれど」
「ああ、また」
「またって」
「そりゃ彼等は悪いんじゃないかな、やっぱり」

「やっぱりって」
アンはその言葉にバツの悪い顔を見せた。
「風紀委員としてその言葉はまずいんじゃ」
「学校はさ、軍隊じゃないんだよ」
彼は言う。
「最低限の風紀さえしていればいいじゃないか」
「そういうものなの」
「そういうものだろ。それにこの八条学園は自由が校風なんだし」
「で、別に動かないってわけね」
「煙草とかそんなのじゃない限りは問題ないよ。学校から抜け出すのなんてあの二人じゃ普通だしフランツは何か激情のあまり崖を転がってたじゃないか」
「そういえばそんなことがあったわね」
ルビーがその言葉でフランツの過去の行動を思い出した。
「タイタンズが優勝逃した時だっけ。何であんなことしたんだろう」
「それも体育の授業中にね」
アンが呆れた顔で言った。
「とことん常識知らないわよね」
「それだって風紀委員の仕事じゃないだろ？」
「いや、それかなりずれてるわよ」
ジュリアがそれに突っ込みを入れる。
「そもそもあんた風紀委員の仕事は」
「何事も自主性だよ」
だが彼はそう言って取り合わない。
「だから僕はこれといって何も言わないんだよ」
「そうなの」
「そういうこと」
これがこのクラスの風紀委員ローリー＝ハイデルであった。ヒッタイト出身でかなりいい加減な風紀委員として知られている。むしろ抜け道に詳しいとさえ言われている。

「それはギルバートがやるし」
「いや、あんたがやったら」
ジュリアは彼にクレームをつける。
「風紀委員なんだし」
「僕も言い出したら五月蝿くなるじゃない」
だがそれでも彼は動こうとはしない。
「だからさ。いいじゃないか」
「やれやれ」
ジュリアもアンもその言葉を聞いて溜息を出してみせる。
「相変わらずね、ローリーは」
「ちょっといい加減過ぎるわよ」
「マイペンライマイペンライ」
かってタイの言葉であった。大丈夫という意味である。今の銀河語にも残っている言葉の一つである。中々使い易い言葉である。
「細かいことを気にしていたら人生楽しくないよ」
「あっきれた」
「本当に」
「けれどそれでもいいんじゃない？」
ローリーはしれっとした様子で女の子達にそう返す。
「やっぱりさ。気を楽して服を着たり身だしなみを整えたり」
「最低限だけ守ってね」
「制服とかないしさ、この学校」
それがかなり大きかった。めいめいで色々着ているのがこの学園の特徴である。
「僕だってこんなのだし」
「今日はまたカナリアみたいね」
「そうかな」
黄色にオレンジと原色使い放題である。だが結構似合っていた。着こなしがかなりよかったせいである。
「これでも校則はクリアーしてるよ」

「ふうん」
「そうなの」
あまりそうは思えないがそうらしい。
「だからこれでいいんだ」
「ならいいけれどね」
「それでね」
「うん」
「生活指導の先生からお怒りが来たらどうするの？」
「あの二人で？」
「そうよ。厳しいから結構言われるわよ」
「聞き流すよ」
「聞き流すの」
「うん、いつもそうしてるから」
彼はしれっとしたものであった。

第十話　推理漫画その四

「気にしていないさ」
「やれやれ。とんでもない風紀委員ね」
「風紀委員も真面目な奴だけじゃないよ」
アンに対して言う。
「僕みたいなのもいるさ」
「まあギルバートみたいなのばかりじゃね。嫌になるわね」
「同感」
「じゃあ耳栓を用意しておいて」
「怒られる時用ね」
「そういうこと。じゃあ」
あっさりした様子で教室を後にしていく。
「二人迎えに行くからね」
「ええ」
「またね」
こうしてローリーは教室を出て行った。それでまたそこにいるのはアンとルビー、そしてウェンディとジュリアだけになったのであった。
「何だかんだで迎えに行ったわね」
最初に気付いたのはウェンディであった。
「いいところあるじゃない」
「そういえばそうね」
それにアンも頷く。
「無責任なようでいてね」
「それでねジュリア」
ルビーがジュリアにまた声をかけてきた。
「貴女はそれでいい？」
「ええ、是非ともね」

右目でウィンクして答える。
「悪役はミンチン先生がいいわ」
「ああ、あの糞婆」
「とっとと死ねばいいのにね」
学園きっての嫌われ者である。同じく嫌われ者では隣のクラスのラビニアがいる。このクラスとは激しい対立関係にあることでも知られている。
「じゃあいつを悪役にして」
「詐欺師がいいわね」
「結婚詐欺師じゃ駄目かしら」
ウェンディが問う。
「駄目駄目、それは」
「あんな婆誰が結婚するのよ」
アンとルビーが次々に言った。普段は大人しめのルビーもこの先生に対しては全然違っていた。かなし悪し様に言う。
「じゃあ止めね」
「保険金詐欺師はどうかしら」
アンが物騒なことを言う。
「それでその助手がラビニアでね」
「あっ、いいわねそれ」
ジュリアがそれに笑顔で頷いた。
「あいつに相応しいわ」
「顔はこんなのでね」
「あはは、そっくり」
アンが描いたその顔を見て腹を抱えて笑う。かなり酷く描いている。
「あっ、何か乗ってきたわ」
「そうね」
アンとルビーの調子が出て来た。
「警部役でギルバート」

「そうそう、それで少年探偵にマルコで」
「おっとりした助手が彰子ちゃんでどう?」
「彰子ちゃんねえ」
ジュリアは彼女の名を聞いて苦笑いを浮かべる。
「彼女絶対に探偵は無理よ」
「まあそうだけれどね」
「そのギャップがいいんじゃないかしら」
「そこはあんた達に任せるよ」
「で、警部と並ぶお笑いにあの自称名探偵二人」
「あはは、それピッタリ」
「面白い話になりそうね」
ウェンディもこの話に目を細めていた。
「キャラがね。いいのがいるから」
「圧巻は糞婆とあのラビニア」
「あいつ等には恨みがあるからね。どんどん描いてやるわよ」
「そのうちギッタンギッタンにしてやるけれど。その前に」
「そうそう、派手に描いてやるわよ」
そんな話をしながら描いていく。かなり楽しそうだ。
だがそれを見て怯える顔をしているのがいた。クラスの男組である。
「ううん、何て言うのかな」
スターリングが苦笑いを浮かべていた。
「確かにミンチン先生やラビニアさんには問題があるけれどあれはちょっとね」
「いや、かなり楽しそうだぜあれ」
タムタムも言う。
「嬉々として描いてるじゃねえか」
「女って怖いな」
「ああ」
ベンの言葉にマルコが頷く。これが結論であった。

「本当にな」
そんな話をしながらアン達を見ている。見られている方はそんなことは意に介さずきゃっきゃっと笑いながら漫画のネームの打ち合わせをしていた。

推理漫画　　完

２００６・１０・１２

第十一話　放浪者その一

放浪者

「あれ、彼はいないのか」
ギルバートが誰かを探していた。
「彼って？」
「彼っていえばわかるだろう」
「わからないわよ」
それにアンが突っ込みを入れる。
「それだけでわかったら苦労しないわよ」
「若しかしてネロのこと？」
ジュリアが勘を利かして尋ねる。
「今クラスに見えないけれど」
「そう、彼だ」
ギルバートがそれに答えて言う。
「彼を見なかったか？」
「何か用があるの？」
「いや、日直のことでな」
アンに答える。
「彼が今日日直だから。話しておきたいことがあって」
「またどっかに行ってるんじゃないの？」
ジュリアが言った。
「よくわからないけれど」
「わからないで済む問題じゃないだろう」
「けれどいないから仕方ないじゃない」
「アン君、どうして君はいつも僕の揚げ足を」
「五月蝿いわね、大体彼だけでわかったらエスパーよ」
「ジュリア君はわかったぞ」
「ジュリアは特別よ、勘がいいんだから」

「全く。どうしてこう君は」
「じゃあ私が探して来るわ」
「アロア君」
黒い髪を三つ編みにしたソバカスの少女が席から立ち上がった。丸い眼鏡を黒の瞳にかけている。美人ではないが可愛らしい感じの少女だ。服も何処か真面目で女の子らしい。膝が隠れる丈の黄色いスカートにオレンジのカッターである。色こそ派手だが着こなしは真面目だった。
「ネロの居場所なら大体想像がつくから」
「そうなのか」
「それでいいわよね」
「うん、君が探してくれるというのなら」
ギルバートも納得した。
「任せる。頼むぞ」
「ええ。それじゃあ」
アロアは教室を出る。その時彰子が声をかけてきた。
「アロアちゃん、何処か行くの？」
「ネロを探しにね」
アロアは答えた。
「あっ、それだったら私知ってるよ」
「本当!?」
「うん。中庭にいたよ。そこで寝転がってたから」
「そう。じゃあそっちね」
「何か用なの？」
「日直の用事でだけれど」
「それなら私がもうやったけれど」
「あっ、そうなのか小式君」
「うん、今日の女の子の日直は私だから」
彰子は答えた。
「はい、日誌」

「う、うん」
彰子から日誌を受け取って答える。
「早いんだな、また」
「時間があったからね」
「ってまだ三時間目もまだだけれど」
「早いっていうかねえ」
アンもジュリアも彰子のこれには少し驚いていた。
「ぽや～～～～っとしていて」
「案外やるのかも」
「それでネロ君はどうするの？」
「まあもうすぐ授業だしな」
どちらにしろ呼ぶということには変わりがなかった。
「アロア君にはどのみち呼んでもらおう」
「ふうん」
「結構御都合主義ね、本当に」
「そうよね。杓子定規なことばかり言ってるけれど」
「何か君達は僕に不満があるのか？」
「なければ言わないわよ」
「それに同じ」
「全く。悲しいことだ」
二人のその言葉に首を横に振って嘆いてみせる。
「クラス委員としてこれでも必死にやっているのにな」
「それは認めるわよ。けれど」
やはりアンは口が減らない。
「ズレてるのよ」
「うっ・・・・・・」
「だから駄目なのよ、ギルバートは」
「きついな、相変わらず」
「言われるだけましと思いなさい」
アンは少し調子に乗ってしまった。口が滑っているがまだ気付か

ない。
「何とも思っていない相手には・・・・・あっ」
それに自分でも気付いて慌てて口を両手で塞ぐ。
「どうしたんだ?」
「な、何でもないわ」
顔を真っ赤にしてギルバートに返す。
「べ、別にね。今の言葉は」
「!?」
だがギルバートには何のことはわからない。
「一体どうしたんだ、そんなに慌てて」
「いえ、これはその」
何か言う度にボロが出て来るように思えた。ギルバートは全くそれに気付いていない。
「風邪か?顔が真っ赤だが」
「えっ、風邪でもないけれど」
「だったら何なんだ?急に顔が赤くなて」
「そ、それは」
「ア、アン急にアイディアを思いついたのよ」
ジュリアが咄嗟に機転を利かしてギルバートに言う。
「漫画の?」
「そうそう、それで興奮してね」
「そうなるのか?」
どうも不自然な気がして首を傾げさせた。

第十一話　放浪者その二

「あっ、前ネーム書いてた推理ものよね」
何もわかっていない彰子がふと言った。
「あのジュリアちゃんが主役の」
「そうそう、それそれ」
何か助かったと思った。彰子の言葉に頷く。
「それのヒントを思いついたのよね、アン」
「え、ええ」
とりあえず少し冷静さを取り戻してそれに頷く。
「だからなのよ」
「そうだったのか」
「だから。気にしないで」
「それだったらいいがな」
ギルバートはとりあえず納得したようであった。
「しかしまだ真っ赤だな」
「興奮したままだからね」
ジュリアが必死にフォローする。
「だからよ。まあアンだって興奮したりするわよ」
「アンちゃんいつもクールだけれどね」
「そういう時もあるわよ。彰子だってそうでしょ」
「うん、まあ」
今度は彰子の天然が変な方に向かう。何か扱い辛い。
「じゃあ漫画のネームしよう、アン」
「そ、そうね」
ジュリアに守られるようにして自分の机に向かう。
「そういえば私も出てるんだったっけ」
「ええ、あたしの助手でね」
ジュリアが言う。

「けれどあんただとねえ」
話をそっちに振って誤魔化しにかかる。こうした時ジュリアはかなり強い。
「私じゃ探偵さんに向かないよね」
「ま、まあね」
「けれど彰子ちゃんは彰子ちゃんで書きがいがあるわ」
アンも段々普段のアンに戻って言う。
「それの打ち合わせもいいかな」
「うん、じゃあ」
「そういうことだから。またね」
「う、うん」
ギルバートは何かよくわからないままに頷く。そして三人はそのままアンの机のところまで言ってネームにかかるのであった。とりあえずアンは虎口を脱したのであった。間一髪であった。それでもギルバートは相変わらず気付いていないが。どうやら彼もかなりあれのようである。

アロアは彰子に言われた通り中庭に出ていた。するとそこに彼がいた。
「あっ、いた」
黒い髪に少し黒い肌のアジア系の顔立ちの少年がそこで仰向けにのどかに寝ていた。白いシャツに黒いスラックスとシンプルな服装である。
「ネロ」
「あれっ、その声は」
その少年、ホワイ＝ユエ＝ネロは彼女の言葉に目を開けた。
「アロアなのかい？」
そして起き上がって背伸びをしてから応えた。その目はダークブラウンでかなり大きい。
「なのかい、じゃないわよ」

アロアは困った顔で彼に返す。
「あんたを呼びに来るのはいつも誰か。考えたらわかるでしょ」
「そういえばそうだね」
何処かのんびりした声で返す。
「ギルバートだよね」
「そうよ。日直のことでね」
「別に急がなくてもいいんじゃないの？」
「あんたはそれでいいけれど」
「ギルバートは違うって言いたいんだよね」
「そうよ。それにもうすぐ授業だし」
「わかったよ」
ネロはようやく身体を起こした。
「じゃあそろそろ行くよ」
身体を思いきり伸ばす。そして述べた。
「そろそろって授業はじまるわよ」
「まだ時間あるよ」
「のんびりしてるわね、本当に」
「焦ったって何もならないじゃない」
ネロは笑ってそう述べる。
「ほんの少しの時間でさ」
「それはそうだけれど」
「大丈夫だよ、間に合うから」
そう言ってアロアを安心させる。

第十一話　放浪者その三

「今から教室に戻ったら丁度先生が来る時間だよ」
「そう上手くいくかしら」
「いくよ。まだ三分あるんだよ、授業がはじまるまで」
「三分しかないって考えないの？」
「全然。三分もあるじゃないか。パレアナとかだったらそう言うよ」
「彼女はまた別よ。とにかく間に合うのね」
「間に合うよ。じゃあ」
やっと立ち上がった。背筋を伸ばしてからまたアロアに言った。
「教室にね。戻ろう」
「そうね。何かこうして話しているだけでもかなり時間が経ってるんだけれど」
「ははは、気にしない気にしない」
ネロはまたアロアを宥めてきた。
「ほら、今から行けばいいから」
「わかったわ。じゃあネロを信じるからね」
「有り難う」
「別に御礼はいいけれど」
ちらりとネロの顔を見て述べる。
「ギルバートが五月蝿いわよ」
「彼があなのはいつものことだし」
「まあね。五月蝿くなかったらギルバートじゃないっていうかあれは五月蝿いっていうより」
「暑苦しい」
「そうなのよ。あの暑苦しさ」
「学級委員らしいかな」
「そもそも纏まりの悪いクラスだしね」
そういうクラスなのである。個性がぶつかり合って一筋縄ではい

かない。かくいうネロもアロアも結構個性の強い面々であったりする。
「そんなクラスにはああした学級委員が必要かも」
「そう言われれば」
「あれで結構鈍感だしね」
「鈍感!?ギルバートが!?」
「あれっ、気がつかなかったの?」
「ええ、そうなのかしら」
アロアは眼鏡の奥の丸い目をさらに丸くさせてキョトンとしていた。
「中々鋭いこといつも言うじゃない」
「そういう鋭さじゃないんだよ、それがね」
ネロは笑って言う。
「自分のことには気付いていないから」
「そうなのかしら?」
「そうだよ。まあ見ていればわかるよ」
「ギルバートを?」
「いや、彼だけじゃないかも知れないよ」
ネロはにこにこと笑っていた。
「案外近くを見ればわかるかもね」
「ううん」
だがアロアにはわからなかった。
「近く・・・・・なの?」
「そう、彼の近く」
「何か余計にわからなくなってきたけれど」
「そうかな。ちょっと見ればわかるよ」
「ちょっとでいいの?」
「そう、ほんのちょっとで」
「ううん」
言われれば言われる程わからなくなってきた。

「何なのかしら」
「教室に入ればわかるよ」
「教室に。何か余計に」
「早ければ次の休み時間にね」
「何かわからないけれど次の休み時間ね」
「そう、ギルバートの周りを見てみて」
「わかったわ、それじゃあ」
「見てみてのお楽しみだからね」
「お楽しみって」
「驚かないようにね」
「！？」
「何があってもね」
「ねえネロ」
何か妙な感じがしてきた。
「何が言いたいの？」
「だから何があっても驚かないでって。ギルバートのことでね」
「何かよくわからないけれどわかったわ」
「じゃあ頼んだよ」
「ううん」
「おい君達」
「あっ」
教室に近付いたところで次の授業の先生とバッタリ会った。

第十一話　放浪者その四

「早く入れ。いいな」
「わかりました」
「ホワイ君の居眠りか？」
「ええ、まあ」
「ちょっと中庭で」
「まあ授業中に寝ていないからいいけれどな」
先生は二人の言葉を聞いてそう笑った。
「じゃあ早速はじめるからな。入れ」
「はい」
こうしてまずは授業を受けた。そのすぐ後の休み時間である。
「ちょっとギルバート」
アンが授業が終わるとすぐにわざわざギルバートの席にまでやって来た。
「どうしたんだ？」
「さっきのことだけれど」
「さっきの！？」
「前の休み時間のことよ」
何かキッとした顔で彼に言う。
「前の休み時間・・・・・ネロのことかい？」
「違うわよ」
何故かそれではないらしい。すぐに否定した。
「あの時私言ったでしょ」
「ええと」
「忘れたっていうの？あの時のことを」
「何を言っているんだ、君は」
「何よ、折角あの時言ってあげたのに」
「ああ、あの時」

ギルバートもやっとわかった。
「いい、言ってあげてるだけ感謝しなさいよ」
顔を前に突き出して言う。
「クラスメイトだし学級委員だからなのよ。そうじゃないと」
「そうなのか。有り難う」
「言ったりしないんだから。感謝するのね」
「ええ、アン」
すぐにジュリアが慌てて出て来た。
「さっきの続きだけれどさ」
「続きって私はまだ」
「いいからさ。ちょっと来てよ」
引き摺るようにしてアンを教室の外へ連れて行く。普段の冷静さは何処へやら、である。
「ねえ」
アロアはそんなアンを見てからネロに声をかけた。
「ギルバートのことってもしかして」
「わかった？まあつっかかってるようにしか見えないよね、普通は」
「ギルバートを何かとからかっているんだと思っていたけれど」
「こうして見るとかわかるだろ？」
「ええ、よくね」
アロアにもそれはよくわかった。
「そうなの。アンってギルバートのことが」
「あれで案外純情だからね。素直じゃないんだよ」
「そうみたいね」
「わかったよね、これで」
「よくね」
答えるその顔は驚きが隠せないものだった。
「しかしまさかね」
「僕だって最初驚いたよ」
「そうよね。私だって今そうだし」

「けれどこれからあの二人面白そうだよ」
「特にアンがね」
「ふふふ」
「まあ気付かないふりしてあげましょう」
人をからかうようなアロアではない。ここは動かなかった。
「暖かく見守るってことで」
「生暖かくじゃなくて？」
「そういうの私の趣味じゃないし」
「優しいね」
「だからあんたをいつも迎えに来てるんでしょ」
そう言葉を返した。
「違うかしら」
「言われてみれば」
「そういうことよ。わかったわね」
「うん」
少なくともこの二人はうまくいっているようである。今の目の前の二人に比べればアンの横でやれやれといった顔をしているジュリアが一人割を食っていた。

放浪者　　完

２００６・１０・１６

第十二話　本能には勝てないその一

本能には勝てない

変わり者ばかりだが美人や可愛い娘が多いこのクラスだがそれを狙う男が多いのが困りものであった。

例えば体育の時間である。白い体操服に黒の半ズボン、かなりいい組み合わせである。なお男は青いジャージ上下で如何にもどうでもいいといった服であった。

服装はそんなところだ。男ははっきり言って何を着ても構わない。下着なんぞトランクスで色気も何も必要ない。はっきり言ってしまえば体操服というのは女の為にある。そこから見えたり透けたりするもの、そして体操服そのものもまた重要なのである。このクラスにはそれを熟知した男が一人いた。

彼が今教室に戻って来た。そして言った。

「皆、朗報だぞ」

「おっ」

「何だ何だ」

クラスで最も背の高い巨漢マルティ＝ヌオリクーラ。黒い髪を短く刈り込んだ黒い目の彼のところに男子生徒がわらわらと集まっていく。

「またマルティのところに集まってるわね」

「ホント、嫌らしいんだから」

蝉玉とエイミーはそんな男子生徒達を冷ややかに見ている。だが中心にいるマルティはそれを全く意に介してはいない。ちなみに彼はウクライナ人である。

「今度の授業な」

「ああ、体育だよな」

「それがどうしたんだ？」

「女子はバレーボールらしいぞ」

「バレー！？」
「だったら俺達と場所一緒だな」
「そういうことだ」
マルティは男子達に語る。男子はバスケットの予定なのだ。
「つまり」
「ああ」
「女子の体操服姿がおがめるな」
「体操服なんかであんなに言うなんて」
「男って本当に弱いわよね」
ダイアナとジュリアは案外余裕といった顔である。この二人にとっては何でもないといった感じである。
「それだけではない、諸君」
「むっ」
マルティの様子が変わった。気合が入ったのだ。
「我が同志よ」
「おう」
豊かな金髪の黒人の少年が出て来た。顔は白人のものである。美男子といっていいが何故か軽薄な感じが露わになっていた。西サハラ出身でこのクラスの一員であるジョルジュ＝ボーダンである。
「準備はいいな？」
「俺は二十四時間スクランブルだぜ」
「何と」
「流石はジョルジュ」
「そして我が竹馬の友よ」
「ああ」
今度はフックが出て来た。
「チェックリストは出来ているな」
「何時でも万全だぜ」
何か気取った動作でさっとファイルを出してきた。
「俺が作ったこのクラスの女の子のファイルデータだ。他のクラス

のもあるぜ」
「流石だなフック」
「何、当然のことさ」
「あいつ何時の間にあんなの作ってたの？」
アンネットがそれを見て眉を顰めさせる。
「何かうちのクラスってこんな手合いが多いわよね」
レミがその横で言う。女子の目はさらに冷たくなっていく。
「このクラスの平均点はな」
「ああ」
「一〇〇点満点で九七・七だ」
「おおっ」
「すげえな、また」
「おそらくこの記録は破られないだろうな。皆凄い美人だからな」
「うちのクラスの男子もねえ」
「黙ってればそれだけいくでしょうに」
またダイアナとジュリアの言葉である。このクラスは男も結構男前が揃っている。マルティにしろ決して醜男ではない。気は優しくて力持ちといった感じである。
「正直甲乙つけ難いぜ」
「じゃあどうするんだ？」
「誰を狙うかだな」
「それは俺に任せるんだ」
ジョルジュが胸を張って言った。
「俺はやる。何があってもな」
「ジョルジュ、まさか御前」
「ああ、見ていろ」
彼は同志達を前に今宣言した。
「やってやるぜ」
「そうか、やり遂げるんだな」
「何があろうともな」

「わかった、同志よ」
「今回の件、御前に託した」
「まあた何企んでいるんだか」
「ふん、今回もやらせないわよ」
蝉玉とエイミーは何故か燃えていた。
「何があってもね」
「うちのクラスの女子の鉄壁の防御、甘く見ないでよね」
何か戦争めいてきていた。マルティの目がその中で光りフックが身構える。ジョルジュには何か策があるようであった。彼等もまた何かを含んでいたのであった。

第十二話　本能には勝てないその二

そして体育の時間。遂に決戦の時が来た。
女子は半ズボン姿、男子はジャージである。色気がまるでない男とはまるで違い女組の方はスラリとした素足が眩しく半ズボンのほのかで健康的な色気が覆っていた。よくもまあここまで差をつけたものだと思う。
「さて、と」
その中でもとりわけ健康美を誇るレミが男組の方を見ていた。
「何してくるかしら」
「更衣室は大丈夫だった？」
「とりあえずはね。真っ先に調べたわ」
ダイアナの言葉に答えた。
「トイレは？」
「そこもね」
何か変質者への対策めいている。だが彼女達は真剣である。
「それじゃあここで勝負をかけるつもりね」
「いい、問題はあの三人よ」
エイミーが男組の中の中心事物を指差す。そこにいるのはマルティ、フック、ジョルジュの三人であった。
「司令塔はマルティね」
「ええ、それは間違いないわ」
蝉玉が言う。
「けれど実行部隊は」
「あの二人ね」
「フックとジョルジュ」
「フックはあたしがやるわ」
ダイアナが出て来た。出ているところは出ていて脚はスラリとしている。バンドで鍛えられているらしい。

「あいつはフットワークがいいからね」
「サポートは私がやるわ」
「レミ」
「貴女でも一人じゃ難しいかも知れないからね。念の為に」
「有り難う」
「で、もう一人のジョルジュは」」
「私に任せて」
出て来たのはプリシラであった。
「いいわね」
「一人で大丈夫？」
「いけるわ」
プリシラは仲間達にクールに述べる。
「実行部隊の二人を潰せば司令塔は黙る」
「多分作戦は一段。ならそれを潰せば」
「それで終りね。いいわね、皆」
「ええ」
「やるわよ」
女組もまた一致団結した。そして三人が動くのを待ちながらバレーボールに入るのであった。
男達は女達の隙を窺っている。まずはフックが動いた。
「よし」
「やるのか！？」
「ああ」
「オペレーション＝ハリケーン」
マルティが呟いた。フックの目が光る。
「発動」
「おう」
フックの身体が流れる様に動く。その瞬間身体が三つになった。
そして。
ボールを逸らす。ボールは転々と女組のバレーボールのコートの

方に行く。
「おい、何やってるんだよ」
「悪い悪い」
タムタムに謝る。だがタムタムは目で語っていた。
(行け、健闘を祈る)
(任せろ)
フックは目でそれを挨拶する。そしてフックはバレーボールのコートに向かった。
「来たわね」
「あのフックがボールを逸らすなんてね。絶対におかしいわ」
「しかもボール投げたの野球部の正捕手のタムタムよ。怪しいわね」
タムタムは只のキャッチャーではない。そのリードとキャッチング、そして強肩と送球の良さ、何よりも頭脳プレイで知られている。そうしたことを踏まえて今彼女達は一つの結論を出していた。
もう一つ結論の根拠があった。それはフックのことである。彼は抜群の運動神経を誇る。それがこうも簡単にボールを逸らす筈がない。ましてや今分身までしたのだ。
怪しいことだらけだ。彼女達はわかっていた。フックがここに来る為の口実であると。

第十二話　本能には勝てないその三

「やあ御免御免」
演技は上手い。一見では普通にボールを逸らしてしまったかの様に見える。
ボールは都合よくコートの真ん中で止まる。フックはそこへ疾風の様に向かう。
「ボール取っていいのね」
彼は女の子達に尋ねる。
「今からそっち行くね」
「あっ、待って」
ここでレミが動いた。さっと彼の前に出る。
「んっ！？」
「あっ、御免なさい」
「どうしたの」
（まさか）
フックは応えながらレミの様子を窺っていた。
（気付いたか）
（何処かしら）
レミは屈みながらフックを窺う。何処に何があるか。それを見極めようとしていたのだ。
（何かを隠しているのは間違いないわ）
（気付くか？いや、大丈夫だ）
「何か凄い殺気ね」
「ええ、あの二人探り合ってるわね」
「ええ」
蝉玉とエイミーがそれを見てまた囁き合う。彼女達は二人が戦いに入っているのを見ていたのだ。
レミはその優れた目で探りにかかる。その後ろでは今ダイアナが

ボールを取った。
「フック、渡すわね」
「うん」
(ちぇっ、ベストは外したな)
彼は応対しながら心の中で呟いていた。
(けれど)
だが彼はそれでも切り札があった。
(俺のこれには気付かないさ、絶対に)
そしてその切り札を切った。胸にそっと手をやろうとする。
(そこ!)
レミは見切った。そのうえで一言言う。
「ダイアナ、ちゃんと胸に投げてあげてね」
「わかったわ」
(よし)
(そこだったのね)
ダイアナの頭の回転は速い。すぐにレミが何を言わんとしているのかわかった。そのうえで投げる。
「行くわよ!」
「なっ!」
渾身のサーブを放つ。その速さと威力は突如として放たれた為フックと言えど避けきれるものではなかった。
フックの胸をバレーボールが直撃する。その奥で何かが砕ける音がした。
「うう・・・・・」
「御免、痛かった?」
ダイアナは白々しい演技でそれに返す。
「受けられるかなっと思ったんだけれど」
「ははは、失敗しちゃったよ」
フックは笑みでそれに返す。だが内心では激しく舌打ちしていたのであった。

（勘付かれたな。鋭い）
　敗北を認めるしかなかった。実はジャージのあちこちに小型のカメラを置いており胸にスイッチがあったのだ。それで女の子達の姿を隠し撮りするつもりであったのだ。
　だが作戦は失敗した。レミとダイアナが二人でそれを防いだ。こうしてオペレーション＝タイフーンは無残にも失敗したのであった。
「じゃあね」
「ええ」
　表面はにこやかに、だが内面では歯軋りしつつフックはボールを受け取って去った。女組は第一の強敵を退けた。だがもう一人強敵が残っていたのであった。
「フックがやられるとはな。意外だった」
　タムタムが敗れ去ったフックを迎えて言う。
「だが。策はまだある」
「うむ、次の作戦だ」
　マルティの細い目が鋭く光る。
「次の作戦は」
「オペレーション＝スピットファイア」
「よし」
　ジョルジュが前に出て来た。
「俺に任せろ。八条学園高等部写真部のロバート＝キャパの実力見せてやる」
「期待している。では健闘を祈る」
「ああ」
　漢達の見送りを受けて今もう一人の戦士が戦場に向かう。タムタムはその勇姿を見送りながら司令官であるマルティに尋ねた。

第十二話　本能には勝てないその四

「ところで作戦の名前だが」
「どうした？」
「適当に付けてるだろ」
「わかるか？」
「第二次世界大戦のイギリス空軍の戦闘機の名前だろ」
「プラモデルも好きだ」
「そういう問題じゃなくてだ。作戦名と実際の作戦につながりはないよな」
「気分で付けただけだ」
「そうか、やはりな」
「駄目か？」
「いや、別に構わない」
タムタムはそれにはこだわらなかった。
「下手にこだわって訳のわからない名前にされるよりな」
「球種でもか？」
「その前にサインやルールを覚えろと言いたい」
相方のことである。フランツとのバッテリーはそれだけ大変だということである。
「大変だな」
「慣れたがな」
「で、覚えそうか？」
「その予定はないな」
そんな話をしている間にジョルジュは配置につく。第二の作戦が今発動されたのであった。
ジョルジュは動く。だが何と戦場はバレーボールのコートではなかった。
「あいつ・・・・・来ないの！？」

「どういうことなの？」
女組はそんな彼を見て眉を顰めさせる。４
「来る筈なのに」
見れば彼は平気な顔でバスケットをしている。フットワークも見事だ。
その相手はマルティだ。彼の動きも巨体からは想像出来ないものであった。
「マルティの動きもいいわね」
「あいつあれで運動神経いいからね」
アロアにアンが答える。彼女達も既に戦闘準備に入っていた。
「けれど・・・・・・妙ね」
最初に気付いたのはプリシラだった。
「妙！？」
「そうよ。マルティの動き」
「あっ」
次に気付いたのは勘のいいジュリアであった。
「何かボールを動かしているけれどゴールには行っていない」
「そうよ。それに」
「ジョルジュの動きも。妙ね」
「あそこに秘密があるわね」
プリシラの目がキラリと光った。
「あの二人、仕組んでいるわ」
「くっ」
「じゃあどうすれば」
「安心して」
だがプリシラは動じてはいない。
「彼の相手は私だから」
「どうするの？」
「トス」
「えっ！？」

「トスよ」
「えっ、ええ。わかったわ」
蝉玉がトスを出す。
「プリシラ」
「行くわよ」
その青い目が今サファイアの様に瞬いた。華麗にして大胆なジャンプで宙に舞う。
そして。左腕がしなった。まるで鞭の様な一撃がボールを襲った。
「ふふふ、何をするかと思えば」
プリシラがサーブを撃ったのを見てジョルジュはほくそ笑んだ。
「僕はここにいる。それでどうして防げるというんだい？」
「考えたな、我が竹馬の友よ」
「当たり前さ、フックの仇は僕が討つ」
自業自得も欲望の前には大義となるのである。
「これで。かなり撮れている筈だ」
「げき恐ろしきはその才」
「これだけは負けないさ。何があってもね」
だが。彼は侮っていた。プリシラの見事なまでの計算を。彼女のサーブは一直線に壁に向かっていた。
壁に直撃して跳ね返る。何とそれはそのままジョルジュに向かっていた。
「なっ！？」
「まさか・・・・・読まれていた！？」
マルティは咄嗟に悟った。自分の作戦がプリシラに見抜かれていたことに。
「いかんジョルジュ、避けろ！」
咄嗟に叫ぶ。
「左だ！」
「わ、わかった！」
「読み通りね」

左に跳ぶジョルジュ。しかしプリシラはそこまでも読んでいたのであった。

何と跳ね返ったボールがカーブする。そしてジョルジュの右手の時計を直撃したのであった。

「くっ、しまった！」

「まさか・・・・・ジョルジュの隠し撮りの秘密を！？」

「見たところ手の動きが一番おかしかったから」

プリシラはジョルジュが右手を押さえて蹲っているのを見て呟いていた。

「そこを狙ったのだけれど。正解だったようね」

「凄いわね」

ジュリアは彼女の呟きを聞いて感嘆の声を漏らす。

「そこまで読んでいたなんて」

「偶然よ」

彼女はそれには謙遜してこう述べる。

「ここまで上手くいくとは思わなかったわ」

「本当！？」

「本当よ」

「そうは思えないけれどね」

ジュリアは勘でこう述べたのである。とにかく信じられないまでに見事に防いだのであった。

「さて、まだあるかしら」

ダイアナが男組の方を見て言う。

「まだあったら驚きだけれど」

「いや、今回はもうないみたいよ」

レミが述べた。

第十二話　本能には勝てないその五

「あの二人だけだったみたい。今回は私達の勝ちね」
「そうなの。だったら」
「まずはよしとしましょう」
「ええ」
「けれど」
彼女達にはわかっていた。
「また来るでしょうね」
「そうね、あいつ等」
じっと男組を見据えていた。彼等もそれを受けている。
「今回はしてやられたな」
「くっ、敵もやるな」
マルティが女組を見据え、ジョルジュが歯噛みしていた。
「僕の隠し撮りを見破るなんて」
「今回は二つとも失敗だ、残念ながらな」
「けれどよ、マルティ」
フックが側に来た。
「これで諦めるつもりはねえだろ」
「勿論」
マルティはそれに答える。
「この程度ではな」
「そうこなくっちゃな」
「じゃあ今度は」
タムタムがすっと前に出る。
「ああ」
「俺もやらせてもらうぜ。頭脳には頭脳だ」
「相方は使わないのか？」
「あいつは駄目だ」

マルティの言葉を受けてこう述べる。
「こういうことには真面目だからな」
「そうか」
「野球も大真面目なんじゃねえのか？あいつは」
フックは何気なくそう述べた。
「だからあそこまで熱中してよ」
「問題はそれが完全に見当違いだということだが」
「まあな」
それはもっともであった。
「あいつのあれはどうしようもねえか」
「つける薬もないな」
「厄介だな」
「そういえばあいつはかなり真面目にバスケやってるな」
ジョルジュがふと気付いた。
「何か一人だけ」
「いや、ギルバートもいるぞ」
「暑苦しい奴だけか」
「やれやれだな」
「燃えろ俺のボール！！」
フランツは空中に飛び上がり叫んでいた。
「海老反りハイジャンプ大回転分身シューーーーーートッ！」
「させん！」
訳のわからない必殺技をギルバートが防ごうとする。この滅茶苦茶な戦いに加わっているクラスのメンバーは殆どいなかった。誰もが己の欲望とそれへの護りに徹した戦いに参戦していたのであった。
「ねえねえアンジェレッタちゃん」
彰子はその中戦いに気付くことなくアンジェレッタに声をかけていた。
「何？」
「ちょっと膝打ったんだけれど」

そう言ってアンジェレッタに自分の膝を見せる。アンジェレッタはクラスの保健委員なのだ。そもそも頭が大丈夫かとい連中もいるがそれにはやはり薬はない。
「大丈夫かな」
「まあこの位だったらね」
アンジェレッタは彰子の奇麗な膝を見て言う。少し赤くなっていた。
「何の心配も要らないよ」
「そう、よかった」
その膝を遠くから見て悔しがる男達。
「ぬうう、このジョルジュ＝ボーダン一生の不覚」
「彰子ちゃんの脚を狙えないとは」
フックも同じ様子であった。
「まあ次だな」
マルティは悔しがりもせずこう呟いた。
「次で決めるだけだ」
そう言ってその場は引き下がった。だが戦いが終わったわけではなかった。

本能には勝てない　　完

２００６・１０・２０

第十三話　オフレコその一

オフレコ

このクラスでウィンタースポーツといえばアンネッタである。だが彼女の他にももう一人それに通じている人間がいるのである。

「私はスキーとかボードだけれどね」

これはアンネッタの弁である。

「けれどスケートとかはね。やっぱり」

彼女も認めている人間がいるのである。

「負けるわ」

「アンネッタちゃんでもそうなの？」

彰子が彼女自身に尋ねる。

「アンネッタちゃんスケートも凄い上手なのに」

「私が得意なのは走る方」

彼女はそう答えた。

「スケートはそれだけじゃないでしょ」

「ええと」

彰子はそれを聞いて考え込んだ。

「っていうとあれ？」

「そう、あれよ」

「フィギュアよね」

「あっちはね」

少し残念そうに笑った。

「どうしてもね」

アンネッタはどうにもそちらは今一つといった様子である。

「私って優雅さがないから」

「そうかなあ」

「自分ではそう思ってるのよ」

「ふうん」

「彰子ちゃんはフィギュア結構上手いじゃない」
「子供の時から時々やってたから」
彰子は答える。
「それでね」
「そうなの」
「アンネッタちゃんはやってなかったの？」
「そっちはね。それより普通に速く滑ったりとか。それで」
「やっぱりスキーね」
「そう、それ。それが一番やったわ」
「成程」
「フィギュアっていえばあいつよね」
赤い髪に青い目のアジア系の顔立ちをした少し小柄な女の子がやって来た。ラフな服装が似合っていて奇麗というよりは健康的な可愛さである。このクラスで数少ない日本人である和泉七美である。
「カトリよね」
「そうね、やっぱりカトリね」
アンネッタはそれに応えた。
「あの娘には負けるわ」
「カトリちゃんなの？」
「あれっ、知らなかったの？」
七美は彰子に顔を向けて問うた。
「あの娘バレエやってるから」
「バレエやってるのは知ってるけれど」
「元々フィギュアってのはバレエから出て来たじゃない」
「ええ」
「それでよ。凄く上手いんだから」
「へえ」
「他にはシンクロナイズドも上手いわよね」
「音感があるのよ」
アンネッタが述べた。

「それがあるのとないのとでは全然違うからね」
「カトリちゃんって凄いんだ」
彰子はそれを聞いてあらためて感心した声を出した。
「一見お嬢様だけれどね」
「クラスの中では大人しいけれど」
その少女カトリ＝ショースキーはクラスでは比較的地味な方である。サラサラとした純金を思わせるストレートな長い髪に黒い琥珀の瞳に人形めいた白い美貌を持つ少女である。このクラスでは希少種とも言える清純なお嬢様といった趣きの少女である。国籍はフィンランドだ。
その彼女のことが話に出た。意外と言えば意外だ。
「決めるところは決めるけれどね」
「フランツとは大違いね」
「あれは決めなくていいところで余計に五月蝿いのよ」
七美が彼のことを口に出すとすぐにアンネッタが返した。
「無駄に熱いし」
「そうかなあ」
「彰子・・・・・あれ見て何も思わないの？」
「何が？」
七美に言われても何とも思わないらしい。
「あれだけ暑苦しいのに」
「雪も氷も溶けちゃいそうなのに」
「それがフランツ君じゃないの？」
的を得ているような完全に外しているような言葉であった。
「何事にも頑張るっているのが」
「まあそうだけれど」
「あいつはちょっとねえ」
二人はバツが悪い顔をした。
「むやみやたらだから」
「テストも静かに出来ないのかしら」

実はフランツはテストの時も叫んでいる。あまりにも熱過ぎて周りが見えていないのである。なおその成績はクラスで最下位の方である。

第十三話　オフレコその二

「仕方ないって言えば仕方ないけれどね」
「それにしても」
二人は今度は彰子に顔を向けてきた。
「やっぱり大きいわね、彰子ちゃんは」
「そこは凄いわ」
「えっ、私が？」
本人はそれを言われてきょとんとした顔になった。
「そうかなあ」
「そうよ」
「器があるわ」
「ううん」
自分ではわからないものである。その日の放課後バレエ部の稽古場では一人の少女がジャージ姿で一人柔軟に励んでいた。
「いつもながら凄いわね」
「そうよね」
床の上でまるでヨガの様に身体を曲げるその少女を見て周りの部員達が言う。
「あの身体の柔らかさ」
「やっぱりね。毎日してるかしら」
「私だって毎日してるわよ」
部員の一人がここで言う。
「本当に毎日」
「あんたは部活に入ってからでしょう？」
「ええ、まあ」
その部員は答えた。
「じゃあまだまだよ」
「だってカトリは子供の頃からだったのよ」

「子供の頃から」
これはかなり驚くべきことであった。
「やっていたっていうの？」
「柔軟だけじゃなくてね」
「バレエそのものも」
「そうなの。ものが違うってことかしら」
「そういうことね」
「だってロシア人よ」
「ロシア」
この時代でもロシアといえばバレエ、フィギュアスケートである。そうした意味でカトリは非常にロシア人らしいと言えた。その容姿も実にロシアらしい。
「そう言われれば納得かしら」
「そうね。ただ」
「ただ？」
「カトリを狙ってる奴がねえ。最近」
「いるのよ」
「ああ、わかったわ」
部員達はそれが誰かすぐにわかった。
「同じクラスのフックね。あいつは」
「いや、あいつじゃないのよ」
「じゃあ誰？」
「ジョルジュよ」
「あの自称現在のロバート＝キャパが！？」
「すっごいキャパに失礼な自称よね」
「全く」
これは同感であった。ジョルジュと言えば天才的盗撮男として知られているのだ。本人の自称と女の子達の評判が見事なまでにかけ離れてしまっていた。
「それでカトリを盗撮しようとしてるの？」

「そうらしいのよ」
「司令塔は誰？マルティ？」
「そうでしょうね」
マルティのスケベへの造詣もまた有名なものになっていた。なおこの二人は実は女の子達からは評判は悪くはない。何故かというと女の子向けの仕事もしているからである。
「あいつね」
「だったら厄介ね」
「今日も来ているのかしら」
「多分」
女子部員達は周りを警戒する。バレエといっても女だけがするとは限らないのだ。
「何処かしら」
「男に紛れ込んでたりしてね」
「あっ」
ここで誰かが気付いた。
「あれっ」
「あっ、確かに」
「ジョルジュよ、間違いないわ」
何と練習場にジョルジュが堂々と入って来たのである。もう立派なカメラまで持っていた。
「インタヴューですけれど」
隣には新聞部の女の子がいた。カトリやジョルジュと同じクラスのナンシー＝アデレードである。マルタ出身で赤茶色の髪を短くして黒い目に細眼鏡をかけている。結構インテリっぽい外見である。胸はあまりない。
「嘘付け」
「何でそれでジョルジュがいるのよ」
「だから取材で」
「それが嘘でしょ」

「また盗撮に来たの？」
「嫌だなあ、人聞きの悪い」
「それだけ過去の行いが響いてるってことなんじゃ？」
「君までそんなこと言うの！？」
しれっとして述べるナンシーに口を尖らせて抗議する。

第十三話　オフレコその三

「この写真部のエースを捕まえて」
「じゃあそのエースが何しに来たの？」
「そのカメラ使って堂々とってわけ？」
「だから取材なんだって」
「本当よ」
ナンシーがそれを代弁した。
「私がいるのはそのせいだから」
「そうなの」
「何だ」
バレエ部の女の子達もそれを聞いてやっと納得した。
「それ早く言ってくれればよかったのに」
「思わず身構えたわよ」
「全く。盗撮なら盗撮でこっそりするよ」
「何か言った！？」
「いや、何も」
失言は誤魔化す。それからさりげなく話に入った。
「それで取材だけれどさ」
「ええ」
「取材ね」
「カトリ＝ショースキー嬢を」
「それならあんた結構知ってるんじゃ？」
部員の一人が言った。
「同じクラスなんだし」
「そうそう」
「生憎クラスメイトとしてしか彼女を知らないんだよ」
ジョルジュはその言葉にはこう返した。
「だからさ。聞きたいんだよ」

「成程ね」
「いいかな」
「じゃあ本人呼ぶね。カトリ」
「何？」
柔軟を止めてこちらに顔を向けてきた。
「取材よ、新聞部とカメラ部から」
「取材？」
「そう、あんたに。来て」
「ええ・・・・・ってナンシーとジョルジュ君」
「どうも」
ジョルジュは軽い調子で挨拶を返した。
「カメラマンとして来たよ」
「ジャージでよかった」
カトリは彼の姿を見てまずはほっと胸を撫で下ろした。
「体操服やレオタードだったら」
バレエだから体操服だけでなくレオタードを着る場合もあるのだ。
カトリのプロポーションはかなりいいと評判であったりする。勿論ジョルジュもそれは知っている。
「何か随分な物言いだね」
「だってジョルジュ君」
「まあ今日は安心してよ」
苦笑いを浮かべてこう返す。
「ちゃんとした取材だからさ。けれど」
「けれど？」
「やっぱり被写体としてはさ。ジャージじゃなくて」
やはりジョルジュはジョルジュであった。
「せめて半ズボンの体操服なんかは」
「あの、それはやっぱり」
「ああ、もう話がややこしくなるから」
隣にいたナンシーが業を煮やして話に入って来た。

「あんたは黙ってて。黙って写真を撮ればいいから」
「ちぇっ」
仕方なく黙ってしまった。
「それでね。カトリ」
「ええ」
まともなインタビューがはじまった。
「今の調子はどうかしら」
「調子ですか？」
「ええ。バレエ部とフィギュアスケート部の掛け持ちで大変でしょうけれど」
「はい、それは」
カトリはにこやかに笑ってインタビューをはじめた。
「どちらも楽しいですから。両立させるようにしています」
「うん、お見事」
ナンシーはその言葉を聞いて頬を和ませる。
「流石ね。しっかりしているわ」
「そんな、私」
「いいのいいの、謙遜は。あっ、こういうところはオフレコね」
「あっ、はい」
「それで今度の舞台だけれど白鳥の湖よね」
「はい、そうです」
言わずと知れたチャイコフスキーの名作である。
「どう、自信の程は」
「白鳥の湖は何度か踊ったことがありますけれど」
クラシックとしては模範的な言葉であった。

第十三話　オフレコその四

「何度やってもその度に新しい発見があって本当に深い作品だと思います」
「成程ね」
「あっ、いい顔」
ここでジョルジュが動いた。
「ちょっと失礼」
そして撮影する。振り向いたその瞬間だったがそれが実によかった。
「いい写真が撮れたみたいね」
「任せてよ」
ジョルジュは得意満面で述べる。
「何せプロだからね」
「やっぱり貴方を連れてきてよかったわね」
ナンシーはジョルジュを見てにんまりと笑う。
「今度の新聞は大人気よ」
「写真なら何でも任せてよ」
「うふふ」
そんなやり取りを暫くしてからまた取材に戻った。
「それで最近何か興味あるものは？」
「興味あるもの？」
「好きな食べ物とか」
「それなら」
カトリは答えた。
「アイスクリームとか」
「アイスクリームが好きなの？」
「あとはケーキも。甘いものが好きなのよ」
「それってまずくない？」

ナンシーはそれを聞いて顔を顰めさせた。
「甘いものはちょっと」
「太るから？」
「そうよ。アイスクリームにケーキはやっぱり」
言うまでもなく太る。これはこの時代でも同じだ。
「やばいんじゃ。それにロシア人よね」
「ええ」
「余計に」
ロシア人と言えば女の人が太る。その方が頼もしいと言われて喜ばれるのだ。それも歳をとればとる程である。一説にはロシア人の中年以上の肥満はほど九割がそうであると言われている。
「やばいでしょ、それ」
「私が太るかもってこと？」
「言いにくいけれどそうよ」
「その割にはっきり言ったわね」
カトリも少し驚いていた。
「言わなきゃわからないじゃない」
「まあそうだけれど」
それも言うのは凄かった。
「それで大丈夫なの？」
「だってカロリー使うから」
カトリは言う。
「平気よ。毎日物凄く汗かくし体力使うし」
「ふうん」
「それに私太らない体質なの」
「羨ましいわね」
これは彼女の本音である。ついつい出てしまった。
「だからね。アイスクリームやケーキ食べても平気なのよ」
「そういうわけね」
「ええ。興味があるのはね」

「うん」
「ロックとかかな。最近そっちの方の音楽にも興味がいってるの」
「ふんふん、カトリがロックね」
それを受けてメモを取りはじめる。
「これは記事にしておくから。あとお菓子のことも」
「ええ、わかったわ」
「これでまずはよし、と。それでね」
「今度は？」
「これからはオフレコよ」
そう断ってきた。
「いい、誰にも話さないから」
「って言ってもここ皆がいるけれど。それにジョルジュも」
二人は囁き合う。顔がそっと近付いてきていた。
「ああ、それなら心配いらないわ」
「どうして？」
「見て」
ここでジョルジュを指差す。見れば彼は他のバレエ部員達の写真を撮っていた。皆ポーズをつけてそれに合わせている。意外と乗り気で撮られていた。

第十三話　オフレコその五

「ジョルジュに撮影頼んでおいたのよ」
「考えたわね」
「任せて、そこんところは。それでね」
「オフレコね」
「そういうこと。今付き合ってる人とかいるの？」
「付き合ってる人？」
「そうよ。内緒でいいから教えて」
そっと囁く。
「誰が好きなの？今」
「本当にオフレコね」
カトリは念を押す。
「新聞部が裏で作っている八条スポーツとかに出ないわよね」
「八条スポーツ？何のことかしら」
それはとぼける。発行所不明の学園で出回っているスポーツ新聞である。でまかせとホラばかり書かれていると評判の新聞紙である。一番恐いのは凄く稀に真実が書かれているということである。一面に学園を狙う宇宙人の化石と言ってコンピューターグラフィックを出すことは平気でやる新聞である。これを出しているのが実は新聞部であるという噂が根強いのである。真意は定かではないが。
「知らないのね、その新聞のことは」
「さて」
彼女はあえて知らないふりをする。
「何のことかしら」
「そう。じゃあいいわ」
「話してくれるのね」
「まあね」
カトリはこくりと頷いた。意を決した顔になっていた。

「それでね」
「ええ」
言おうとする。だがここで異変が起こった。ジョルジュがやって来て伝えたのだ。
「時間だよ」
「なぬっ！？」
ナンシーはそれを聞いて思わず顔を顰めさせた。
「何ですって！？」
「だから時間だって」
「って今はじまったばかりよ」
「けれど時間は時間だから」
「何よそれ、いいところなのに」
「取材は終わったんだろ、そっちも」
「ま、まあね」
こほん、と態度をあらためて述べる。
「終わったわよ」
「じゃあいいじゃない」
「折角オフレコだったのに」
「どうせそのままは・・・・・」
「そっから先は言わないっ！」
「うわっ！」
鉄拳が襲ってジョルジュを黙らせる。
「な、何するんだよ！」
「新聞部と写真部の絶対の秘密でしょうが！若し言ったらマウリアの奥地に放り捨てるわよ！」
「マ、マウリアの奥地だって！？」
連合では何があるかわからない場所の代名詞になっている。そこで撮影されたものがマウリア映画の訳のわからない探検映画に使われている程である。
「そ、それだけはご勘弁を」

「わかれば宜しい」
「ねえ、今の」
「そうよね、はっきりわかる位怪しいわよね」
そのあからさまに不自然な様子ははっきりとバレエ部の面々にも伝わっていた。
「やっぱり噂は」
「有り得るわよねえ」
「大体写真部にしろ新聞部にしろやけに取材費持ってない？」
「その出所がねえ」
「ねえ、まさか」
「あっ、これで取材終わりだから」
カトリにも慌てて返す。
「それじゃあね。お疲れ様」
「え、ええ」
「ほらジョルジュ帰るわよ」
ジョルジュの腕を掴んでせきたてる。
「早く記事書かないといけないからね。あんたも写真があるのでしょ」
「そういえばは・・・・・・」
「だから黙ってろって言うとるんじゃ！」
今度はどっからか出した巨大なペン先で頭を突き刺していた。ペンは剣よりも強しであった。八条学園新聞部は流石と言うべき強さを見せていた。

第十三話　オフレコその六

「やれやれね」
カトリは退散していく面々を見て少し拍子抜けした顔になっていた。
「折角ちゃんと言おうと思っていたのに。これじゃあな」
「まあ騒がしい面々が帰ったところで」
「練習再開しましょ」
「ええ、わかったわ」
カトリは仲間達の言葉に頷いた。そして部活に戻ったのであった。
部活が終わり下校時間になる。部室を出たところでカトリの携帯が鳴った。
「来たわね」
にこりと笑って鞄から携帯を出して見やる。そしてメールを見て笑みを満足したものにした。
「了解」
そのままそっと学校を出る。そのまま向かったのはロシア料理の店であった。
「おう」
「待った？」
「いや、今来たところだから」
「本当かしら」
悪戯っぽく笑って首を傾げさせる。そこにいたのは意外にもマルティであった。
「案外待ってたりして」
「本当だよ」
マルティは素っ気無く返す。
「今までフックと色々話していたから」
「またフックとね」

それを聞いて変に納得したように頷く。
「好きね、本当に」
「男なら誰でもそうさ」
「そのわりには奥手じゃない」
また悪戯っぽく笑って返した。
「またどうして？」
「恋は焦らず」
マルティは静かに述べた。
「そういうことさ」
「そう。じゃあ今からゆっくりしましょ」
「うん、食べながら。ここに来たのは二回目だったっけな」
「三回目でしょ」
「そうだったっけ」
「ピロシキが美味しい店でしょ」
カトリは言った。
「モスクワよ」
「ペテルブルグじゃなかったっけ」
「それはまた別の店よ。いいから入りましょう」
「そうだね。じゃあ」
そんな話をしながら店に入る。すると。
そこには先客がいた。何とあのナンシーだった。
「えっ」
「えって」
何と彼女は彼氏と一緒であった。しかも一つのジュースを二つのストローで飲み合うといういちゃつきぶりであった。見ている方が恥ずかしくなる。
「あ、貴女まさかオフレコの時言おうとしたことは」
「貴女だって」
カトリも彼女もそれぞれ言い合う。
「そういうことだったの！？」

「ってそこにいるの誰よ」
「えっ、そ、その」
彼女は顔を真っ赤にしてその場に気付く。かなりパニクっていた。
「お、同じ部の後輩であ、あのその」
何かアンを思わせる慌てぶりである。普段冷静な人間程慌てるとかなりのものになるようである。
「ちょっとね。美味しいお店を紹介してあげてて」
「そうだったの」
「ここいいから。それで」
「先輩後はいつみたいに僕の家で」
「ちょ、ちょっと黙っててよ」
「経験・・・・・あるの？」
「ないに決まってるでしょ」
彼女はそれを必死に否定する。
「キスだけよ」
こほんと咳払いして言い繕う。それでも顔は真っ赤なままである。
「それだけならいいでしょ」
「そうだったの」
「それでね」
「ええ」
取引に入った。
「お互い秘密にしておきましょう」
「そうね」
「私達は会わなかったわよね」
「うん」
「マルティもそれでいいわよね」
「ああいいよ。けれど」
「わかってるわよ」
マルティとの取引にも応える。
「写真部との全面的な協力ね」

「そういうこと」
「そういうことならいいわ。まあ新聞部から口を利いてあげるわ」
「どうも」
「それにしてもね」
カトリは少し笑っていた。
「貴女が年下趣味だったなんて」
「べ、別にいいじゃない」
横に目を向けて言う。
「誰にも迷惑かけていないでしょ」
「まあね」
「可愛いからよ」
自己弁護を述べる。
「その、色々とね」
「そうなんだ」
「悪い？」
「別にそうは言ってはいないけれど」
「じゃあいいわ。それにしても」
今度は彼女の番であった。
「貴女がマルティとだったなんてね」
「意外だったって？」
「お嬢様だからね」
彼女は言う。
「それがねえ。まあ柔道部のエースだけれど」
学園きってのムッツリスケベというかハッキリスケベである。クラスだけでなく学園のそうした話の総元締めであるとまでされているのが彼マルティなのである。
「まさか」
「人間誰だってそうじゃないの？」
彼女のそんな言葉にカトリは平然として返す。

第十三話　オフレコその七

「誰でもって？」
「そうよ。貴女だって御堅いようで」
「わかってるわよ」
また顔を横に向けて視線を逸らす。
「あまり苛めないでしょ、それで」
「別に苛めてなんかいないけれどね」
「それでどうしてマルティなのかしら」
聞きにくい状況に陥っているがそれでも聞いた。流石は新聞部であった。
「よかったら教えて。あっ、オフレコだから安心してね」
「それじゃあ」
そこまで言われてからようやく話す。前置きが長いのは店の中だからであろうか。
「それはね」
「うん」
ごくりと固唾を飲んで次の言葉を待つ。その言葉は。
「優しいからなのよ」
「それだけ？」
「それだけ充分じゃないの？」
カトリは逆にキョトンとした。
「それだけで」
「けれどマルティよ」
「それでどうかしたの？」
「学園一のスケベ大王が」
「僕ってえらい言われようだな」
「何言ってるのよ。八条スポーツのエロ方面担当じゃない」
「まあね」

「って今」
「あっ、しまった」
また失言であった。
「い、今のもオフレコだからねオフレコ」
「わかったわよ」
ナンシーにそう返す。
「とにかくね。それでね」
「ええ」
何かナンシーの言葉が文法まで変になってきていた。
「優しいからなのね」
「だって男の人って心が大事じゃない」
「まあそう言われるけれど」
「だったらそれでいいんじゃないの？」
「言われてみればそうだけれど。マルティよ」
「人間誰だってそういうこと興味あるじゃない」
カトリの言葉はまたしても真理をついたものであった。
「だから八条スポーツだってそうしたこと書いてるんでしょ」
「まあね」
失言をしてしまったので頷くしかなかった。完全にカトリのペースになってしまっていた。
「誰だって同じだから」
「ふうん」
外見はあえて聞かなかった。そんなものは人の好みでかなり変わるものであるからだ。それを言えばきりがなくなってしまうからだ。
「だからまずは優しさ」
「男は心だってことね」
「そういうことよ」
「成程ね」
そこまで聞いてやっと頷いた。
「わかったわ。それでね」

「秘密にしてってことね」
「だ、だからね」
また目を伏せて視線を逸らす。
「その、私が彼と付き合ってることはその」
「またえらく不安そうだね」
マルティもそんなナンシーの様子にかなり突っ込んできた。
「どうしたんだよ」
「だって。私が」
口をシャコ貝の様に波立たせる。
「男の子と付き合ってるなんてさ。それもこんなにいちゃいちゃして」
「確かに意外だったけれど」
「うんうん」
カトリの言葉にマルティが頷く。
「けれどね。それでも」
「そんなに隠すことないんじゃないかな」
「だって」
それでも目は伏せたままだ。
「私がさ」
「だからそんなの誰だって一緒だから」
「そうそう」
「ううん」
そう言われてもまだ難しい顔をしている。
「とにかく内緒にだけはしてね。ここのお店おごるからさ」
「別にそんなのいいけれど」
お嬢様のカトリはそんなことは一切気にはしていない。
「別に。ねえ」
「僕だってお金あるし」
「いいからおごらせてよ」
それでも彼女は言う。

「お願いだから」
これは口封じの為である。言うならば賄賂だ。
「いいわよね、それで」
「まあそこまで言うのなら」
「僕だっていいけれど」
「じゃそれで決まりね。けれど」
「わかってるわよ」
いい加減そうも言いたくなってきた。くどいからだ。
「言わないから」
「お願いよ、本当に」
「誰にも言わないから。大丈夫よ」
「本当に、本当よね」
「だから言ってるじゃない」
流石にむっとしてきた。
「私がそんなこと言う？」
「言わないけれど」
「僕も言わないよ」
マルティも言った。
「だから安心していいから」
「うん」
これでやっと納得した。どうにもあれこれと難しいナンシーであった。

オフレコ　　完

２００６・１０・２９

第十四話　消える魔球その一

消える魔球

クラスきっての熱血漢フランツは今日も燃えていた。
「うおおおおおおっ！俺はやるぜ！」
何かわからないうちに勝手に教室で一人燃えていた。
「何してんの、今度は」
「ゲームしてるのよ」
彰子が蝉玉に囁く。
「ゲーム一つやるのにあんなに燃えるの？」
「何か運動会ゲームらしいけれど」
「ふうん」
「ここだ！ここで決めてやる！」
全身を派手に動かしながら自分の机の上でゲームをしている。
「そして！今こそ！」
立ち上がって訳のわからない投球フォームに入った。画面は見ていない。
「必殺！ノーザンライトコホーテクアンドロメダスキュリューーーアターーーーーーーーック！！」
どういう技か全くわからないがとりあえずは技の名前を叫んだ。
そしてコントローラーを乱打しながら跳ぶ。
「うおおおおおおおおおおおっ！」
「いい加減にしなさい！」
だが着地したところでエイミーから怒りのジェットアッパーが跳んだ。
「ぐおっ！」
宙に舞い天井にぶつかった後で床に叩き付けられるフランツ。だが全く平気であった。
「一体何をするんだ、ゲーム中に」

「本当にゲームしていたの、今まで」
「これがゲームじゃなきゃ何なんだ」
彼は反論する。
「俺はちゃんとゲームをしていたんだぞ」
「嘘言いなさいよ。暴れてただけじゃない」
「何っ、じゃあエイミーはゲームは静かにするものなのか！？」
「・・・・・あのね、あんた」
疲れを覚えながらも彼に応える。
「何処の世界にそうやっていちいち暴れたり叫んだりしてゲームする人間がいるのよ」
「それがゲームだ！」
フランツは力拳を入れて語る。
「ゲームは全て！全てを賭けてこそのゲームなんだ！」
「それは野球じゃないの？」
「野球もそうだ！俺はやると決めたら全てのことにありったけの情熱を注ぎ込む！俺はやるぜ！」
「やるのはいいけれどね」
エイミーは言う。
「それでも限度ってのがあるでしょ」
「それは違う、エイミー」
フランツはそれに反論する。
「人間は限度を越えたところにあるんだ。そこから何かを掴むんだ」
「馬鹿になったらどうするのよ」
「もうとっくの昔に馬鹿よね」
「ありゃどうしようもねえぞ」
クラスメイト達がエイミーの言葉を聞いて囁く。フランツが馬鹿かそうでないかは言うならばその日に太陽が昇らないかどうかを話すようなものなのだ。太陽は雨の日でも雨雲の上に昇っている。そしてフランツもまた。彼は常にこうなのだ。答えは決まっていた。
「馬鹿！？褒め言葉だ！」

自分でも言い切った。
「俺は何処までも行ってやる！そして目指すは！」
「何なのよ」
「ゲーマーの星だ！父ちゃん、俺はやるぜ！」
「どうでもいいけれど電池切れてないか？」
「あっ、本当だ」
亮神の言葉にセドリックが頷く。
「あれだけ派手に動かしていたから消費が激しいみたいだね」
「普通の十倍は使っているからなあ、乱暴に」
「くっ、いっそのこと核融合のゲーム機を買うか」
「そういう問題じゃないでしょ」
またエイミーが突っ込んだ。
「そもそも落ち着いてゲームした方がよくない？」
「それだと駄目なんだよ、俺は」
フランツは言う。
「身体を動かして叫んでからじゃないとな」
「そうなの」
「ああ。だから思いきりやってやるんだ」
そう主張する。
「そうじゃないとゲームは面白くないからな」
「けれど迷惑なのよ」
エイミーは正論で突っ込む。

第十四話　消える魔球その二

「いい加減ね、常識を持ってゲームしたら？」
「常識を乗り越えてこそそこに本当の栄光がある！」
それに対するフランツの言葉はいつものフランツ節であった。
「そうじゃないのか！？」
「ああ、もう何言ってもわかんないみたいね」
ここでエイミーは言うのを諦めた。
「じゃせめて屋上でやって。いいわね」
「何かぞんざいだな」
「もう言わないから。一人で好きにね」
「常識や理屈で魔球は開発できないっていうのに。俺は今猛烈に悲しい」
「悲しいならそれでいいから。それにしても」
電源が切れた携帯ゲーム機を見る。
「最近こっちじゃあまりやってなかったけれど。そんなに燃えるゲームなのかしら」
「ああ、それか」
それに応えるかのようにダンが出て来た。
「最近人気だぜ、それは」
「そうなの」
「ああ、俺もやるからな」
「ダンもゲームするんだ」
「意外か？」
「いや、何かバイクとかばかりのイメージがあって」
エイミーは言う。
「ちょっとね」
「俺だってゲームはするさ。それにしてもフランツは」
「何？」

「ちょっとばかりゲームの仕方がな。どうにかならないものか」
「どうにかならないからああなんだと思うけれど」
「それもそうか」
身も蓋もない言葉であったが正論であった。エイミーの冷めた声が実に印象的であった。
「まあ今はしていないからいいけれど」
「それでさっきの話だけどよ」
ダンは言う。
「やってみないのか？」
「気が向いたらね」
エイミーはそれに応える。
「何か家にいたら恋愛ゲームとか多くてね。そればかりしてるのよ」
姉達、とりわけメグとベスの影響であるのは言うまでもない。次女のジョーにしても恋愛ゲームは結構好きな方である。意外にも乙女チックな趣味だったりする。
「恋愛育成ゲームか」
「そう、それ」
「あれは俺はちょっとな」
「あんたがしたら何か怖いわよ」
率直に言う。
「完璧にイメージじゃないから」
「確かにな」
本人もそれは認めた。
「俺はそちらはしないな」
「正解ね」
「俺はするぞ」
フランツが話に復帰してきた。実にタフだ。
「そうなの」
「そう、愛もまた燃える」
「萌えるんじゃないのね」

「燃えてこそゲームだ！」
彼は例によって後ろに炎を背負って力説する。
「どんな相手にも果敢に向かいそしてその心を掴む！恋愛ゲームとはそうあるべきものじゃないか！」
「・・・・・お姉ちゃん達そこまではいかないけれど」
「それはまだ恋愛ゲームの本当のよさがわかっていない！いいか！」
彼は力説と激論、というか一人舞台を続ける。

第十四話　消える魔球その三

「一人の心を遮二無二に手に入れるべく突き進む！そしてその果てにあるものを手に入れるんだ！叫べ！その果てまで突き進め！」
「今時珍しい恋愛感ね」
「っていうかあそこまで熱いっていないわよ」
蝉玉とダイアナがそれを聞いて囁き合う。
「あれ？君の為なら。ええと」
「君の為なら死ねる！そこまでいくんだ！」
蝉玉が言う前に叫んだ。
「そしてその心を掴み取る！それまでは！」
「あんたって本当に恋愛ゲームしてるの？」
エイミーは何かそうではないのではとさえ思えてきた。彼のあまりにも熱い様子からである。
「他のジャンルのゲームと勘違いしていない？」
「今やってるのは一緒にメモリアルだけれど」
「それって今ベスお姉ちゃんがやってるのよ。そんなゲームじゃないじゃない」
話を聞いてそう言った。
「何っ、あれは熱いゲームだぞ」
「ベスお姉ちゃんはほんわかしたゲームって言ってたし私もそう思うんだけれど」
「それは気のせいだ」
フランツはそれを完全に否定した。
「あんな熱いゲームはない」
「そうだったかしら」
エイミーにはそれがどうしても信じられない。
「まあいいわ。ゲームはいいとして」
「ああ」

「最近あんた何か訳わからない魔球開発はどうしたの？」
「またえらい言い草だな」
「あれが訳わからないって言わないで何て言うのよ」
「大魔球だ」
フランツにしてみればそうなのだ。
「大魔球、ねえ」
「そうだ。今度開発するのは」
「何？超魔球？」
「いや、消える魔球だ」
「ああ、定番ね」
何か相手をしているだけで疲れる。
「それを今考えている。どうやって消すか」
「とりあえず考えてみたら？できるかどうかわからないけれど」
心の中ではできるわけないだろうと思っていたがそれは言わない。言って聞き入れるような男ではないのはもうわかっているからである。
「よし、それじゃあ放課後に」
「らしいわよ、タムタム」
「勝手にやらしておけばいいさ」
相方は冷たい。
「完成しなかったらしなかったらで凄いボールになるからな」
「そうなの」
「したら儲けものだ。今まで開発した魔球だってそうだったしな」
「高速スライダーとか高速シュート？」
「そう、それもあったな」
フランツの変化球はどれも恐ろしいまでの、そう高校生とは思えないだけのものがあるのだ。それだけのものを投げても怪我一つしない彼の身体の頑丈さも凄いものであるが。
「他には超スローカーブとかな」
「意外と才能あるのね」

「才能はな。ふんだんにある」
「ふうん」
「努力もしてくれる。しかしだ」
「頭が激烈に悪いのね」
「俺は何も言っていないぞ」
誰もが言わずと知れたことである。
「とにかくだ。放っておけばいい」
「じゃあ放置しておくわよ。いいのね」
「崖から転がり落ちても熊と格闘しても生きているどころか一日で全快する。安心していい」
「凄いわね、また」
「今日は女子ソフト部と練習試合もあるんだよ。あいつはそこでも魔球の開発をするらしいが」
「試合中に！？」
エイミーはそれを聞いて眉を顰めさせた。
「何考えてるの、一体」
「考えるんじゃない、感じるんだとか言ってな。いつもこうだ」
「理解出来ないんだけれど」
エイミーにはフランツの頭の中がわからなくなってきていた。
「試合中にって」
「真剣勝負の中にこそ掴むものがあるらしい。確かに真理だ」
「じゃあ実際にバットを刀に変えて試合してみる？」
「止めておけ、本当にやりかねない」
「っていうか本当にやりそうね」
「さて、どうなるか」
「よお、タムタム」
ここでクラスメイトの一人が彼に声をかけてきた。背の高い女の子である。
黒に赤がかった髪にかなりのスタイルをしている。目は黒で生き生きとしている。溌剌とした顔立ちに大きな胸が目立つ。ズボンと

ラフな上着が実によく似合っている。
「ああ、ロザリー」
「今日の試合のことだけれど」
その少女ロザリーは彼に声をかけてきた。名をロザリー＝ヒールという。マダガスカルからやって来た。

第十四話　消える魔球その四

「ああ、それな」
「あいつも出るんだろ？また何か考えてるみたいだけれど」
「まあ何があっても気にしないでくれ」
「わかったよ。それでルールは」
「ああ、それな」
言われてそれに話を向けてきた。
「こっちのルールでいいか？」
「ああ、それでいいよ」
「じゃあそれでな。場所はうちのグラウンドで」
「野球か」
「ボールとかもこっちでな。まあ野球をやるってことでな」
「わかった。それじゃあそれでだ」
「了解。それで次にやる時は」
「こっちのルールでソフトをな」
「お互い勉強の為にな」
タムタムはそこまで考えていたのだ。流石は知略のタムタムであった。
「今日はそういうことで」
「けれどな」
ここでロザリーはちらりとフランツを見た。
「あいつがなあ。大丈夫かね」
「安心しろ、野球は普通にやる」
「あれで普通なのかい」
「一応はな」
タムタムの言葉は実に信憑性のないものである。だがそれがフランツへの正しい評価に聞こえるのだからこれまた不思議なことである。

「まあ放課後な」
「ああ、練習試合でも手加減はしないよ」
「こっちもだ」
二人は互いの顔を見て不敵に笑い合った。
「思う存分やらせてもらうぞ」
「うちのソフト部は強いよ」
全日本レベルである。だからこその自身がロザリーにはあった。
「こっちもだ」
そして野球部もまた。その看板がフランツとタムタムのバッテリーである。この二人はフランツの脳細胞はともかくとしてかなりの力を持っているのは確かであるのだ。
「俺もあいつも容赦はしない。覚悟していてくれ」
「楽しみだね、放課後が」
「ああ」
二人は言い合う。タムタムはフランツには万全の信頼を置いていた。あいつならやってくれる、そう信じていたのである。
かくしてプレイボールとなった。クラスメイト達も観戦に来ていた。
「さて、いよいよだね」
スターリング達もいる。彼等は観客席で観戦している。
「野球部対ソフト部の練習試合」
「今回はどうなるかしら」
蝉玉はスターリングの横にいる。そこで試合を眺めていた。
「今までは五分と五分だったわよね」
「通算で両方共四十勝四十敗」
プリシラが彰子に述べた。
「本当に互角よ」
「そうかあ、実力伯仲なんだ」
「だからこそ面白いんだけれど。ところでさ」
「何？」

「何で審判があいつなの？」
「あいつって」
「ほら」
見れば主審は彼等のクラスメイトの四神正孝であった。名前からわかるように日本人である。黒い髪と目が奇麗な謎めいた雰囲気の少年である。顔立ちは中性的で女の子にも見える。
「何であんなところにいるのよ」
「ああ、あれ頼まれたからしいわよ」
蝉玉にエイミーが答えた。
「頼まれたって？」
「四神君審判部だから」
「そんな部活もあったの」
「あるのよ。それで選ばれたの」
「それでなのね」
「そうよ。ジャッジには定評があるから」
「じゃあそれを見せてもらいますか」
蝉玉はそれを聞いてそちらも見せてもらうことにした。ここでふと彰子に気付いた。
「あら」
見れば彰子は正孝だけを見ているのだ。じっと目を離さない。
「彰子ちゃんってまさか」
そう思った時だった。正孝が試合開始を告げる。
「プレーーーボーーーール」
こうして試合がはじまった。まずはソフト部からの攻撃であった。

第十四話　消える魔球その五

「よぉぉぉぉぉし！やってやる！」
フランツが勢いよく叫ぶ。
「必殺！カミソリシュート二号！うおおおおおおおおおっ！」
「いきなり球種叫んでるわね」
蝉玉がそれを見て呟く。
「何考えてるのよ、あいつ」
「いつものことだけれどね」
エイミーがそれに相槌を打つ。
「馬鹿はこれだから」
「けれどさ。凄いボールだよ」
スターリングは彼等とは違う言葉であった。
「ほら、誰も打てやしない」
「あれはプロでも無理だな」
ダンが言う。
「あんなボールを投げられる人間はいない。わかっていても打てない」
「そうなんだ」
「ああ、凄いボールだ」
彼はそう評する。
「どうやって投げられるのかな。不思議な程だ」
「まあ才能は凄いからね」
それは誰もが認める。フランツは確かに野球の天才なのだ。
「あれは打てない」
ダンの言葉通りだった。そのまま試合は進み延長十一回、ソフト部のエースロザリーも力投し互いに無得点のまま進む。その間フランツが許したヒットは僅か一本、ロザリーが打ったものである。
そのロザリーがバッターボックスに立つ。彼女はフランツとは違

い右利きだ。バッターボックスも右である。
二人はマウンドとバッターボックスで睨み合う。激しい闘志がグラウンドを支配する。
「さて、サヨナラホームランといくか」
ロザリーはフランツを見据えて言う。
「覚悟はいいね」
「それはこっちの台詞だ」
フランツも負けてはいない。
「今こそ切り札を見せてやる！」
「ほお、じゃああれかい？」
ロザリーはそれを聞いて面白そうに笑う。
「消える魔球、遂に出すのかい」
「見たければ見ろ！」
彼はまた叫ぶ。
「俺が編み出した究極の魔球、名付けてインビシブルボールだ！」
「何か凄そう」
「けれど本当に消えるのか？」
「ねえタムタム君」
「何だ？」
主審である正孝がタムタムに声をかけてきたので顔をそちらに向けてきた。
「消える魔球らしいけれど大丈夫？」
「ああ、大丈夫だ」
彼はそれに答えた。
「パスボールしないかどうかだろう・心配しているのは」
「うん」
「ボールは目だけで捕るんじゃないんだ」
彼は言う。
「耳でも捕るんだ」
「耳でも」

「そうだ。だから安心してくれ。俺にパスボールはない」
そこには絶対の自信があった。
「ピッチャーのボールを最高まで引き出し、その最高のボールを受けるのがキャッチャーの務め。だからこそ」
「いいね、その心意気」
これにはロザリーも唸るしかなかった。
「あいつ。いい女房役持ってるね」
「あいつのボールを受けられるのは俺しかいないからな」
彼も彼でフランツを認めていた。
「だから。覚悟しろよ」
「ああ、わかったよ。デッドボールにだけはね」
「行くぞタムタム！」
目に炎を宿らせ、そのミットを見据えていた。
「これが俺の！最高最強のボール！」
振り被ると左足を大きく掲げてきた。それだけで砂塵が舞う。
「インビシブルボール！」
オーバースローで投げた。すると。
「なっ！」
「！！」
（そこだ！）
タムタムは風の軌跡と音でボールの動きを読んだ。そしてそれをミットに収める。
「なっ・・・・・・」
だがそれはロザリーには見えなかった。見えないとあっては打てる筈がなかった。
「今のは一体・・・・・・」
「ねえ、今の見えた！？」
「いえ、全然」
蝉玉もエイミーも誰もそのボールは見えなかった。気が付けばドスーーーン、という重い音がグラウンドに鳴り響くだけであった。

「見えないよね、本当に」
「ええ。あれは一体」
「剛速球よ」
だがそれが見えている者がいた。黒いサラリとした感じのロングヘアに翡翠色の目をしたアジア系の少女であった。だが顔はアジア系でやや面長だ。青いモンゴル独特の上着にズボンにブーツだ。その服装から彼女がモンゴル人であるとわかる。ナン＝ハーバン、やはりこのクラスの一員であった。
「剛速球！？」
「ええ、あまりの速さで普通の人には見えないのよ。私には見えるけれど」
「流石ね」
「モンゴル人だけはあるわ」
皆ナンのその目に感嘆を述べるしかなかった。ナンの視力は五・〇、その動体視力は馬と狩猟によって鍛えられており常人のそれを遥かに凌駕しているのだ。
「けれど。見えていてもこれは」
「打てないのね」
「一番手強いボールは剛速球かどうしようもなく遅いスローボールだから」
下手な変化球よりもこうしたボールの方が厄介なのである。そうした意味でフランツの狙いは正解であった。

第十四話　消える魔球その六

「見事ね、それは」
「そうだったの」
「普通の人には見えないんじゃちょっと」
「ロザリーでも無理ね」
ナンは言った。
「あれじゃあ」
「そうなんだ」
正孝はそれを聞いて言った。
「それじゃあハーバンさん」
「私！？」
「よかったら審判代わって。僕にも見えないから」
「ちょっと待て、じゃあ今のはどうなるんだ！」
フランツがそれを聞いて問う。
「だから無効」
正孝はそう答えた。
「審判が見えないんだから」
「おい、こんなボールがそうそう投げられるか！」
フランツはそれを聞いてさらに叫ぶ。
「一六〇キロ越えているんだぞ！」
「それって本当に高校生のボールなのかな」
「常識外れの身体能力だからやれるんでしょうね」
スターリングと蝉玉がそれを利いて呟く。
「とにかくもう一球」
正孝はフランツに有無を言わせない。
「それでいいね」
「ううう・・・・・・」
彼ですら審判には逆らえない。ここは従うしかなかった。

こうして審判が交代して仕切り直しとなった。ロザリーもフランツもあらためて勝負となった。
「色々あったが行くぞロザリー！」
「ああ、来な」
ロザリーも受けて立つ。
「あんたのボールの弱点はわかったよ。あたしの勝ちだ！」
「何だと！？」
「わかったから投げて来るんだ！絶対に勝つ！」
「言ったな！なら！」
その言葉にカチンときた身体を炎が纏う。
「行くぞ！インビシブルボール！」
振り被り、脚を高々と掲げて投げる。だがそれは。
「ボール！」
主審になったナンが答えた。
「なっ、ボールだと！？」
「よかったらビデオ見る？ビデオさん」
「おうよ」
審判部にはビデオ班まである。これで公平かつ合理的なジャッジを進める為だ。この時代は間違っても特定の球団に有利なようなジャッジは行われない。若しそんなことが発覚すればその審判は審判たる資格を剥奪され永久追放処分となることが定められている。
ビデオ班の判定もボールであった。ナンの目に狂いはなかった。

第十四話　消える魔球その七

「ほらね」
「うう・・・・・」
こうなってはフランツも黙るしかなかった。
「まあいい、次だ。うおおおおおおおおおおおっ！」
また気合を込めて投げ込む。それもボールだった。
三球目も四球目も。結局この勝負はフォアボールとなったのであった。
「よし、あたしの勝ちだな」
「くっ、何故こんな」
「あんた、スピードとノビだけを考えていただろ」
「ああ」
フランツはロザリーの言葉に答えた。
「だからさ。コントロールを考えていなかったからなんだ」
「コントロールか」
「そういうことさ。最初の一球でこりゃ振っても無駄だしまさかと思ってな」
「勘がいいな」
「ジュリア程じゃないけれどね。まあこれであたしの勝ちだね」
「くっ」
「それじゃあね。悪いけれど一塁に行かせてもらうよ」
「この勝負、預けておいてやる」
フランツは述べた。だが目は死んではいない。
「しかし！」
彼はまたしても叫ぶ。
「この試合、負けはしない！後は誰にも打たせない！」
「おおっ」
この気迫にはクラスメイト達も驚きであった。

「行くぞ！後は絶つ！」
彼はその言葉通りにした。結果としてロザリー以後のランナーは許さずその試合は時間の関係でその回で終った。結果として引き分けに終わったのであった。
「終わったか」
「何か凄い試合だったな」
観戦していたクラスメイト達は口々に述べる。
「特にフランツがな」
「あいつってやっぱり凄いんだな」
何だかんだでそのボールと気合は驚異的であった。
「あれだけのボールはプロでもそうはないな」
「そうだな。それはな」
「頭さえよければなあ」
そんな話をしながらグラウンドを後にしていく。野球部もソフト部もそれぞれの部室へと引き揚げて帰り仕度に入った。
部室を出て校門をくぐろうとするフランツとタムタム。そこへ一人の少女が姿を現わした。
「よお」
「よおって御前」
見ればロザリーであった。私服に着替えてすっきりとした顔をしている。どうやらシャワーを浴びた後らしい。
「一緒に帰らないか」
もう夜になっている。星空の下でそう提案してきた。
「一緒にか」
「三人でさ。嫌ならいいけれどよ」
「いや、それは別に」
フランツはそれを断ろうとはしなかった。
「俺はまあ構わないが」
「タムタムはどうだい？」
「俺も」

彼も断る理由はなかった。
「じゃあさ。ラーメンでも食べに行く？」
「ラーメンか」
「どうかな」
「悪くはないな」
タムタムがそれに答えた。
「何か冷えるしな」
「じゃあそれで決まりね。行こっ」
「御前だけかよ」
「ナンも一緒だよ」
「おっ」
「お待たせ」
ナンは馬に乗ってやって来た。颯爽としているがかなり違和感があった。街中に馬である。かなり妙であった。
「御前、馬かよ」
「だってこれでいつも学校来てるから」
ナンは答えた。
「当然じゃない」
「当然か？」
「私にとってはね」
「まあそうだけれどよ」
ナンはモンゴル人である。モンゴル人は今でも馬を足としている。それならば馬での登下校も当然であった。
「ただな」
「何？」
「それでラーメン屋に行くのか」
タムタムはそれが気にかかっているのだ。
「そうだけれど」
「まあいいか」
タムタムとしても釈然としないがそれを言ってもどうにもなるも

のでもない。頷くことにした。
「それでな」
「ええ」
「その馬大丈夫だよな」
「スーホーはいい馬よ」
「お、その馬はスーホーっていうのか」
フランツがそれを聞いて言う。
「そうよ。賢そうな顔をしてるでしょ」
「そうだな。いい顔をしている」
「あんたより賢そうだね」
ロザリーがこう突っ込んできた。
「おい、ロザリー」
フランツはそれにすぐに抗議する。
「俺が馬鹿だっていうのか」
「ああ」
ロザリーは平然として答えた。
「この前のテストも追試まみれだったんだろ?」
「俺には追試なんて何の意味もない」
彼は言う。
「俺は野球さえできればいいんだ」
「それじゃあせめて最低限のサイン位は覚えて欲しいものだ」
タムタムはそれを聞いてポツリと言う。
「全く」
「タムタム、御前まで」
「まっ、それはいいさ。言っても仕方がないよ」
「言い出したのは御前だろ?」
「悪い悪い。それじゃあラーメンを食べにな」
「行きましょ」
ナンは馬の手綱を引きながら言う。
「早く行かないと身体が冷えるわ」

「そうだな。じゃあフランツ行こう」
「ああ。それで店は何処だ？」
「西京飯店でどうだい」
ロザリーはそう提案してきた。
「あそこは美味いし量も多いしな」
「悪くないな」
タムタムがそれに頷く。
「じゃあ俺はそこでいい」
「俺は大蒜ラーメン大盛りだ」
フランツが食べるものも決まった。
「それでまた気合を入れるぞ」
「試合終わってもかい」
「だからだ！」
いつもの熱血モードになった。
「エネルギー補給だ。食うぞ！」
「全く。食べるのにも熱くなって。まあいっか」
「行こう」
「ああ」
四人はそのままラーメン屋に向かった。夜の星空の下を歩いて行く。そしてラーメンを堪能するのであった。勝負の後の身体を安らげる為に。

消える魔球　　完

２００６・１１・４

第十五話　いつも前向きにその一

いつも前向きに

八条学園はアルバイトに関しては非常に寛容である。変な店でアルバイトしなければ形式的な届出を担任に出すだけでそれでいい。これはアルバイトが決まってからでもいいのでかなり寛容である。

彰子達のクラスでもアルバイトに励んでいる面々がいる。このクラスは殆どが外国から来ておりアパート暮らしである。親の仕送りの他にアルバイトもしてそれで遊んでいるのである。

「何かいいバイトねえかな」

「それだったらよ」

クラスでもこんな話をしている。彰子はそんなクラスメイト達の話に今一つ入りきれていない。

「皆頑張ってるんだなあ」

話を見聞きしてそう思うだけである。彼女はこれといってアルバイトする理由もないのだ。家が裕福だからである。こう見えてもお嬢様なのだ。

「何か私も頑張らないと」

「彰子ちゃんは頑張る必要ないんじゃないの？」

黒い肌にそれよりもさらに黒い絹を束ねたような長く少し巻いた髪、それにスカイブルーの瞳の少女が声をかけてきた。エチオピア人のパレアナ＝ホグマンである。やはりこのクラスの一員だ。

「お金持ちじゃない」

「お金の問題じゃなくて」

「何かの勉強に？」

「うん」

彰子はこくりと頷いた。

「どうかな」

「悪くないと思うわよ」

パレアナはそれに答えた。
「勤労は美徳なりって言うからね」
「そうよね。だから私も」
「それならクラスに専門家が一人いるし」
「ペリーヌちゃん？」
「あいつはちょと違うわよ」
「あら」
その言葉に本人が反応してきた。
「どういう意味かしら」
「あんたのアルバイトって勤労とかそんなのじゃないじゃない」
「まあね」
本人もそれは認めた。
「より多くのお金を稼ぐ為よね」
「濡れ手に粟よ」
それがペリーヌの望みであった。
「そうじゃなきゃ働く意味がないわ」
「こうだからね」
「駄目なの？」
「働くことの大切さを勉強するにはちょっと違うと思うわ」
「お金は稼いで幾らよ」
それでもペリーヌは自説を述べる。
「出来る限り楽して多くのお金を手に入れる、これが一番よ」
「法律に触れない限りは？」
「そういうこと。ただし恋は別よ」
「というわけだから」
「恋は別なの」
これは彰子にはわからない言葉であった。
「アルバイトといっても色々あるんだけれどね」
パレアナはまた言った。ハンバーガーショップとか喫茶店とか中華料理店とかうどん屋さんとかパン屋とか」

「食べるところばかりじゃないの？」
「食べないと何にもならないからね」
どうやらこれがパレアナの好きそうなバイト先であるらしい。
「それに後で余りもの貰えるし」
「ふうん」
「それを考えるとケーキ屋さんもお勧めよ」
「そうなんだ」
「後でケーキをただで貰えるから。他にはドーナツなんかもいいわね」
やはり食べ物であった。パレアナの顔は今にも涎を垂らさんばかりになっていた。

第十五話　いつも前向きにその二

「お菓子食べ放題」
「じゃあ和菓子屋さんなんかはどう？」
「最高ね、それ」
特に和菓子が好きらしい。
「お茶は日本茶でね」
「うん」
「やっぱりそれがいいわよねえ」
「それじゃあ和菓子屋さん？」
「ううん、どうしようかな」
「それなら、ほら」
ペリーヌがそっと雑誌を出してきた。アルバイト雑誌である。
「それ読んで選んだらいいわ」
「有り難う、ペリーヌちゃん」
「私も良く使うのよ、この雑誌」
「そうなんだ」
「少しでも実入りのいいアルバイト探す為にね。使えるわよ」
「そういえばきっちりとチェックは入れているわね」
付箋や折り目が入ったその雑誌を見てパレアナが言う。そうしたところのチェックも抜かりがない。
「成程ねえ。これが実入りのいいアルバイトなのね」
見れば家庭教師とかそんなものが多い。若しくは肉体労働だ。
「ふむふむ」
「家庭教師かあ」
「彰子ちゃんいいんじゃない？」
パレアナがふと言ってきた。
「頭いいしさ」
「どうかなあ」

だが彰子の返事はほんわかしたもので実感のあまりないものであった。彰子らしいと言えば彰子らしいのであるが。
「私やっぱり和菓子屋さんがいいかなあ」
「和菓子屋さん？」
「うん」
彰子はこくりと頷いた。
「やっぱりそれ」
「わかったわ、じゃあそれでいきましょ」
「そうね」
「和菓子だったらさ」
ペリーヌがまた言ってきた。
「何？」
「茜がいいわよ」
「ああ、あのお店ね」
二人もよく知っている店であった。学校の側にあり中々繁盛している。奇麗で和風の店の中が人気である。味も上品でそれでいて安いので評判であった。
「じゃあそこにしましょ」
「茜ね。何か馴染みなのよ」
「そうなの」
「お客様が来られる時はよくそこでお茶菓子買うの」
「へえ、それはまた」
「そこなら私よく知ってるし」
「悪くないわね」
「うん」
彰子は頷いた。こうして彰子とパレアナは茜にバイトに入ることになったのであった。
「八条学園の娘ね」
「はい」
「宜しくお願いします」

二人は面接でそれぞれ挨拶をした。和服を着た四十位のおばさんが二人の面接をしていた。
「小式さんのところのお嬢さんじゃないですか」
「どうも」
彰子はにこにこと彼女に挨拶をした。
「ちょっとアルバイトをしてみようと思いまして」
「お金は？」
「勿論それも。働いてお金を手に入れることの大切さも勉強しようと思いまして」
「いい考えね」
お店のおばさんはそれに頷いた。
「それじゃあカウンターお願いするわ」
「わかりました」
こうして二人は正式に採用された。ユニフォームの鶯色の和服を着て店に出る。
「やっぱり似合うわね、彰子ちゃんは」
「そうかなあ」
「私よりずっとね」
パレアナは自分の着物姿を見て少し苦笑いを浮かべてこう述べた。
「やっぱりこういうのは民族衣装だからかなあ。私はちょっと」
「パレアナちゃん凄く似合ってるよ」
彰子は苦笑いのパレアナに対してそう返した。
「スタイルいいしさ」
「そう言ってくれるの、有り難う」
「いや、本当に」
実際のところ二人共スタイルのよさもあり着物姿がかなり似合っていた。そのままコンパニオンをやれそうな程である。だが彰子のそれはもう犯罪的とまで言える程似合っているのであるが。
「それじゃあ二人はね」
「はい」

おばさんの言葉に応える。
「カウンターで受付してね。大丈夫よね」
「任せて下さい」
パレアナが返事をした。
「それじゃあお願いね」
「わかりました」
二人は早速受付になった。カウンターでお客さんの相手をする。
「それじゃ彰子ちゃん」
「うん」
パレアナが彰子に教える。
「大事なのは笑顔。後は計算間違えね」
「その二つだけ？」
「計算は私がやるから彰子ちゃんはスマイルメインでやって」
「わかったわ。じゃあそれで」
「ええ。頑張っていきましょう」
だがここで問題点が起こった。彰子自身である。急に可愛い娘が入ったと聞いて客が殺到してきたのである。それも八条学園の生徒達がである。

第十五話　いつも前向きにその三

「高等部の二年の娘らしいぜ」
「S1組のか」
「ああ、小式彰子ちゃんがバイトはじめたらしいぜ」
「すげえな。じゃあ行くか」
「って、何で急に話が伝わるのよ」
三日後にはもうお店には行列ができていた。パレアナはその応対にてんやあわやであった。
「おかげで忙しくて大変だわ」
「いらっしゃいませ」
その横では彰子がにこやかにスマイルをしている。計算の方は元々頭のいい彰子なのでもうできている。だが忙しさはかなりのものになっていた。
「ねえパレアナちゃん」
「何？」
計算をしながらパレアナは彰子に応えた。
「お仕事って人が一杯来るのね」
「こんなに来るとは思わなかったわ」
パレアナは計算間違いがないか厳しくチェックしていた。
「これって例外よ」
「そうなんだ」
「そうなんだって行列とかで並んだことないの？」
「そういうお店って言ったことないから」
「えっ！？」
パレアナは彰子のその言葉に思わず口を開けてしまった。
「どういうこと、それって」
「だって予約で行くお店が多いから」
「ああ、だからね」

それでやっと彼女の言いたいことがわかった。
「それでなのね」
「うん」
「いいなあ、それって」
といっても羨ましいわけではない。パレアナはあまり人を羨むことがないのだ。
「けれどね」
「何？」
「美味しいものって並んでも食べたくなるものだからね」
「ふうん」
彰子はそれを聞いて頷く。
「だったらここのお菓子もそうなのね」
「ここはまた違う理由ね」
だがパレアナはそう答えた。
「並ぶのにはもう一つ理由があるのよ」
「それって何？」
「お目当てがあるかどうかってことよ」
「お目当て？」
それが自分であるとは露にも思わない。こうしたところはとことんまでに鈍感な彰子であった。
「まあいいわ。それでね」
「こっちの計算は終わったわよ」
「あっ、早いわね」
そういうのは早い。
「しかも合ってるし。彰子ちゃんって理系強いからね」
「まあ計算とかは子供の頃からやってるし」
「継続は力なりね」
「そうだと思うよ」
「まあ中には訳わからない方向に精進して前進してる人達もいるけれど」

テンボとジャッキーの迷探偵コンビやフランツのことである。クラスどころか学年きっての大馬鹿者で学園でも有名人になっている三人である。

「やっていくことって凄く大事だからね」

「私もそう思うよ」

「ペリーヌなんかはすぐに一攫千金に走るけれどね」

「私はコツコツとやっていきたいな」

「そうそう、それが一番だよ」

ここで新たな登場人物であった。

「あれ、あんたも来たの」

彰子とパレアナの目の前に奇麗な茶色の髪と素朴な黒い目を持つ朗らかな少年がいた。動きやすいラフな服を着て黒い肌はツヤがある。彼女達のクラスメイトでロミオ＝ロピカーナである。

第十五話　いつも前向きにその四

「うん、何か君達が来てるって聞いてね」
「それでやって来たの？」
「うん、他にも一緒だよ」
「ていうと」
「やあ」
ジョルジュが出て来た。
「いやあ、彰子ちゃんの着物姿最高だね」
「何かインタビューしたくなってきたわ」
ナンシーもいた。
「やっぱりあんた達が」
「何だよ、クラスメイトが折角来たのに」
「随分水臭いわね」
「呼んだ覚えはないけれど」
「まあそう硬いことは言わずにさ」
ナンシーはすすす、と二人に近寄ってきた。その手にはペンとメモ帳が既に用意されている。
「どうなの、アルバイトの調子は」
「かなり忙しいわ」
「そうなの。それでさ」
「それで新聞のグラビアでも出ろっていうの？」
「まあ何となく」
「先輩、遅れてすいません」
ここでもう一人やって来た。
「ちょっとカメラの用意に手間取って」
「そんなのいいのよ。それより取材よ取材」
「はい」
「あれっ」

そのカメラを持っている下級生を見て彰子がふと気付いた。
「ナンシーちゃん、その子とこの前一緒にいなかった？」
「えっ！？」
それを言われて何か知られたくなかったことが発覚したかの様に壊れた顔になった。
「な、ななな、何を言ってるのかしら」
「先輩！？」
「わ、私は別にね」
素早くその場を取り繕う。務めて平静を装う。
「そんな。別によ、あの、その」
「どうしたんだよ、ナンシー」
ジョルジュは急変したナンシーの様子に目をパチクリとさせていた。
「何でもないわよ」
「何でもないって」
だがジョルジュにはとてもそうは見えなかった。
「そうなのか？何か急に様子が変わったけれど」
「気にしないで」
「そうか」
「そうよ、だからね」
「ああ」
強引に話を持ってきた。
「とりあえずね」
取材に話を戻してきた。
「このお店が人気なのは事実よ、前からね」
「それはね」
パレアナがそれに頷いた。
（けれど今のナンシー）
応えながらナンシーのことを見ていた。
（何か怪しいわね）

だがそれは隠して話を続ける。ナンシーも務めて冷静を装っている。
「けれど最近さらに人気が急上昇して。それで取材に来たのよ」
「そうだったの」
「それが貴女達だったなんてね。何か納得」
「ふうん」
「やっぱり看板は貴女達みたいね」
「まあ私はそんなにだけれど」
ここでちらりと彰子に目をやる。
「やっぱりね」
「ええ」
ナンシーにもパレアナが何を言いたいのかはわかっていた。それに応える。
「そうね、やっぱり繁盛の原因は小式さんね」
「私？」
「そうよ。自覚ないの？」
「全然」
彰子の返事は実にマイペースなものであった。
「何で私なの？」
「って彰子ちゃん」
ナンシーも彼女のおっとりさにはかなり参ってしまった。
「自分でわからないかしら」
「？」
「？って」
首を傾げた様子にもう何を言っていいのかわかりかねてきた。
「だからね。看板娘になってるの、貴女が」
「私が」
「そうよ」
とにかく鈍感な彼女に呆れてしまっていた。そんな彼女を見てロミオとジョルジュが話をしていた。

「やっぱり彰子ちゃんってさ」
「ああ」
ジョルジュがロミオの言葉に頷く。
「こうしたことにはかなり鈍いみたいだね」
「鈍いってものじゃないな」
ジョルジュが言う。
「あまりそういった恋愛とかそういったことにはな。相当なものだな」
「そうみたいだね。何かここまで凄い娘ははじめて見たよ」
「僕もさ、ここまではね」
「ついでに言うとさ」
パレアナも話に入ってきた。
「おっ、何だ」
「ナンシーの様子おかしくない？」
「ナンシーが？」
「そうよ。あの後輩の子ってあれでしょ」
パレアナはナンシーに聞こえないように囁く。
「新聞部の一年よね」
「ああ」
ジョルジュがそれに頷く。
「そうだけれどよ」
「そうよね。それにしては」
「何かあるのか？」
「おかしくない？」
パレアナはナンシーとその後輩をじっと見ていた。
「先輩と後輩にしては」
「そうかなあ」
だがロミオはそれには疑問的だった。
「普通に見えるけれど」
「そうだよな」

ジョルジュも言う。
「特におかしなところはな」
「だといいけれどね」
だがパレアナはまだナンシーを見ていた。
「けれどね。引っ掛かるわね」
「考え過ぎじゃないかな」
ロミオがまた言う。
「ところでさ、パレアナ」
「何?」
ロミオが話を変えてきた。

第十五話　いつも前向きにその五

「ここのアルバイトっていいの？」
「お金のこと？」
「いや、お金じゃなくて楽しいかなって思って。どう？」
「中々いいわよ」
その質問にはにこりと笑ってきた。
「やりがいのある仕事よ」
「そう、それなら」
ロミオはそれを聞いてにこやかに笑った。
「僕もね」
「それじゃあお店の人に聞いてみて」
「うん、じゃあそうするよ」
「そうしたらいいわ。それにしても」
「何？」
「あんたバイト好きよね」
「うん」
パレアナのその言葉ににこやかに微笑んで答えた。
「僕の生きがいだね」
「いいことだけれど。ただ」
「ただ？」
「あんたってお金困ってるわけじゃないよね」
「別にそれには困ってはいないよ」
彼の家は金持ちではないが貧しくもない。ごく普通の家である。
「それでもアルバイトするのね」
「だって楽しいから」
「楽しいから」
「そうだよ。それで充分じゃないかな、アルバイトする理由は」
「うん、そうだよね」

パレアナより先に彰子がその言葉に答えた。これはパレアナにとっては少し意外なことで戸惑った顔をしていた。
「アルバイトって楽しいよね」
「そうそう。彰子ちゃんもわかったみたいだね、アルバイトの素晴らしさが」
「わかったわ。だから」
「これからも頑張ろうね」
「ええ」
「まあ私もアルバイトは好きだけれど」
彰子の無邪気さと天真爛漫さにはついつい苦笑いしてしまう。そしてその横では。
「それでね。ここは」
「はい」
ナンシーがその後輩にぴったりと寄り添って何かを教えていた。
「こうするの。わかったかしら」
「わかりました」
「いいわ。そうすれば上手くいくからね」
「そうなんですか。これで」
「そうよ、安心してね。落ち着いてやれば心配はいらないから」
「はい、それじゃあ」
「しっかりね。いいわね」
「ええ」
「何か妙ね」
彼女も勘は鋭い。だから妙なものを察していたのだ。
「若しかすると」
「あっ、パレアナ」
だがここでジョルジュが声をかけてきた。
「何？」
「撮影していいかな」
「って勝手にやってるんじゃないの？」

少し意地悪な言葉で返した。
「また盗撮とかで」
「嫌だな、そんなのしないよ」
敵もさるもの。この質問にはしらばっくれた。
「安心していいよ」
「そう？だったらいいけれど」
「そうだよ、安心してよ」
「わかったわ。じゃあ信じてあげる」
「人を信用するっていうのは美徳だよ」
「人によるわよ」
「困ったなあ。僕みたいな人間を捕まえて」
「あんただからよ」
（それにしてもね）
またナンシーを見る。
（やっぱり何かあるかもね）
そんなことを思いながらナンシーを見続ける。彼女も彼女でそれを察してそっと後輩から離れる。二人の静かな攻防が行われていたがこれは他の面々には気付かれなかった。
ロミオはこの店のアルバイトに雇われた。彼は菓子作りになりそれで思う存分腕を振るうことになるのであった。

いつも前向きに　　完

２００６・１１・１０

第十六話　物持ちはいいけれどその一

物持ちはいいけれど

クラスの保健委員はアンジェレッタである。やはり彼女が適役であった。

「やっぱり疲れてる時はこれよね」

クラスメイト達と話をしながら懐から何かを出してきた。

「蝮だよね」

「ちょい待ち」

だがその蝮酒を出した時点でナンがクレームをつけてきた。

「何？」

「あんた今どっから出したのよ」

「ポケットの中からだよ」

それに対するアンジェレッタの返事はあっけらかんとしたものであった。

「驚くことないじゃない」

「充分驚くわよ。服のポケットに一升瓶がどうして入っているのよ」

「ちょっとしたコツよ」

それでもアンジェレッタの態度は相変わらずであった。

「ちゃんと入れられるから」

「とてもそうは思えないんだけれど。また変なことを」

「だからできるのよ」

アンジェレッタは信じようとしないアンにそう説明する。

「だって。他にも持ってるし」

今度は朝鮮人参の瓶を出してきた。

「これも」

スッポンのエキスも。

「これだって」

そして様々な漢方薬を。何でも持っているようである。

「全部簡単に入られるわよ」
「あのね、あんた」
ナンはまた言った。
「簡単にあんたよりも重いものが入られるわけないでしょ。どうやったらこんなに一杯入るのよ」
「だからコツだって」
「どんなコツよ。ボルツより凄いじゃない」
モンゴルに古くから伝わる保存食である。肉を凍らせたものであり増やすとかなりの量になる。モンゴルでは昔から貴重な保存食なのである。
「コツとはとても思えないわよ」
「まあまあ」
信じようとしない彼をロザリーが宥める。
「細かいことはいいじゃないか」
「細かいことじゃないと思うけれど」
「あんただって色々あるだろ」
「まあそうだけれど」
実は彼女は彼女で変なことが多いのだ。このクラスの面々は誰もが奇人変人である。
「けれどさ」
「それによ、アンジェレッタの薬って結構役立ってるじゃないか」
「まあね」
それは頷ける。確かに事実である。
「けれど」
だがそこにしかし、とつくのである。
「その薬さ」
「漢方薬よ」
この時代でも漢方薬は健在である。医学の一つの分野にもなっている。
「それはわかるわよ」

「じゃあ驚くことないわ」
「驚くわよ」
だがナンは言う。
「何で蝮酒なのよ」
「一発で元気が出るわよ」
「そういう問題じゃなくてね」
「じゃあ何なんだよ」
ロザリーも問う。
「細かいな、そこんところは」
「草原じゃ一瞬の油断が死につながるのよ」
「何時の時代の話だよ、それ」
「チンギス＝ハーンの時代よ」
「・・・・・二千年も前だろうが」
ロザリーはそう突っ込みを入れる。
「そんな昔のことなんて流石にどうでもいいだろ」
「と思うでしょ」
「ああ」
今度はロザリーが聞き役になっていた。
「ところがモンゴルじゃ違うの。モンゴルといえばやっぱり」
「チンギス＝ハーンだってか？」
「そういうこと。モンゴル人の偉大なる太祖なのよ」
「まあそれは教科書でならったけれどよ」
「だったら余計にお薬を」
「だから何でそうなるのよ」
アンジェレッタにまた言い返す。
「身体が第一よね、草原だと。だから」
「昔はモンゴル人は何日も飲まず食わずでも平気だったのよ」
「それ本当？」
「らしいな」
ロザリーがアンジェレッタに囁く。

「何せ草原の覇者だからな」
「そりゃまた凄いわね」
「流石に今はそうじゃないけれど。それでも丈夫さには自信があるわ」
「だったらそれをパワーアップさせる為にも」
「いいわよ」
ナンはそれを断る。
「そんなの。私今で満足してるし」
「馬鹿なことを言うな！」
「って何処から出て来たのよ」
どっからともなくフランツが沸いて出て来た。
「現状で満足しているだと!?ナン、御前は馬鹿だ！」
「ってあんた」
何故か馬鹿に馬鹿と言われると腹が立つもので。今のナンがそうであった。
「いきなり出て来て人を馬鹿って言うなんていい度胸してるじゃない」
「今のままに満足していてはそこから一歩も先には進めないんだ！」
「何かいっつもフランツが出て来るとスポ根になるわよね」
「また何でかねえ」
アンジェレッタもロザリーもこれには呆れ顔であった。

第十六話　物持ちはいいけれどその二

「いいか！」
「はいはい」
三人はフランツの話を聞く。何時の間にかアンジェレッタとロザリーも巻き込まれている。
「人生は気合！そして努力だ！」
この言葉自体はまあ正論である。よく言われる。
「だがそこには常に前に進む気持ちがなくてはならないんだ！現状に満足せずにだ！」
「それでどうしろっていうのよ」
ナンが問う。
「決まっている。この場合は」
「この場合は？」
「アンジェレッタの薬を全部飲む！そして！」
彼はいきなり全ての薬をその手に取った。
「あっ、私の薬」
「飲む！！」
そのままおもむろに口の中に流し込んだ。朝鮮人参はバリバリと噛み砕く。
すると暫く経ってからフランツの全身が急に膨張した。そのまま上着を破き上半身裸になる。
「うおおおおおおおっ！」
「ううん、何て漫画的なんだろ」
ロザリーがそれを見て言う。目は苦笑いで額に汗をかいている。
「前から思ってたけれど上着は破れてもズボンは破れないんだよね、この場合」
「何でだろうな、それ」
アンジェレッタに返答をしながらフランツを見守っている。

フランツの身体に異変が起こっていた。何か全身が赤く染まっていく。
「みなぎる、みなぎるぞ」
彼は言う。
「燃える！これならいける！」
「何かありそうね」
「っているか起こってるわよ」
アンジェレッタに今度はナンが突っ込みを入れた。
「どういう薬なのよ」
「唯の漢方薬だったよ、どれも」
「それであれ？」
「まあ全部飲んだからね、あれだけ」
「だからかな」
「多分」
アンジェレッタは言う。
「そうだと思うけれど」
「ううん」
「にしてもよ」
ナンとロザリーがまた言葉を返す。
「訳のわからない薬持ち過ぎ」
「ちったあまともな薬ないのかよ」
「あるわよ」
「あるの」
「風邪薬だって消毒薬だって。結構あるわよ」
「ふうん」
「包帯だってね」
また懐から出してきた。それも何本も。
「持ってるわよ」
「ってまたそれだけもかよ」
「本当にどういう懐なのかしら」

「冗談抜きで四次元につながってるんじゃないのか？」
「そうよね。何か」
「それでさ」
ナンは話題を変えてきた。
「何？」
「あれ、どうするの？」
フランツを指差して問う。
「あのままにしておくつもり？」
「洒落にならない位厄介だぞ、あれ」
「うおおおおおおおおおっ！みなぎるぞコスモが！」
「早速訳のわからないこと喚いてるし」
「どうするよ、あれ」
「ああ、それは心配ない」
タムタムがすっと出て来た。
「あれはあれで使い様がある」
「あるのかよ」
「そうだ。俺に任せてくれ」
ロザリーに冷静な声で答える。
「じゃあな。おいフランツ」
「タムタム、どうしたんだ？」
「一緒に走らないか？」
「ランニングか！？」
「そうだ」
彼は穏やかにフランツにそう応える。
「わかったな、今から全速力でだ」
「よし！何処までだ！」
「飽きるまでグラウンドをだ。いいな」
「よし！」
「じゃあ行くぞ」
「おおっ！それが終わったら！」

フランツは一人勝手に叫ぶ。
「魔球の開発だ！やるぜ俺は！」
「よし、何時までも付き合うぞ！」
「言ったな！じゃあ開発までいくぞ！ライジングボールの完成だ！」
「わかった！」
二人は教室を出た。そしてそのままグランドを全速力で走りはじめた。

第十六話　物持ちはいいけれどその三

「いっちゃったよ、あいつ等」
ロザリーはそれを見送って呟く。
「タムタムも大変だな、何かと」
「まあバッテリーだからね。扱いには慣れてるみたいね」
「そうだな。にしても」
ナンに言葉を返してもまだ呆れ顔であった。
「熱血馬鹿もあそこまでいくともう尊敬に値するな」
「馬鹿は馬鹿なりにね」
「ああ」
とんでもない速さで走り続けるフランツを見ながらの言葉であった。
それでアンジェレッタに顔を戻す。するとそこにもう一人いた。
「あれ、あんたもか」
「ええ」
クラスメイトの一人がロザリーに返事をした。
「何かアンジェレッタのお薬が気になってね」
そこにいたのはジュディ＝ハイマーであった。カルタゴ人だ。
黒がかった明るいブラウンの髪にダークブラウンの瞳。面長で明るい顔をしている。滅茶苦茶美人というわけではないが人好きのする顔だ。背は高く結構痩せてスリムな身体をしている。その痩せたスタイルがやっきりとわかるぴっしりとしたズボンにトレーナーという格好である。
「それで来たんだけれど」
「そうか」
「ええ。それにしても色々持ってるわね」
「実家薬局だからね」
アンジェレッタはにこりと笑って述べる。

「それでなの」
「ふうん。あっ、これ」
多くの薬の中の一つを手に取ってジュディは声をあげた。
「どうしたんだ？」
「私持ってるわよ」
「あんたもかよ」
「ええ、そうなの」
ロザリーに返事をした。
「これもでしょ」
別の薬を手に取って言う。
「そしてこれも。これもよ」
「っておい」
話を聞いていたロザリーが突っ込みを入れる。
「一体どれだけ持ってるんだ」
「だってうち雑貨屋だから」
ジュディは言う。
「結構色々持ってるのよ」
「雑貨屋でこんなの扱ってるの？」
「まあ色々とね」
アンジェレッタにも答える。
「他にも一杯あるけれど」
「そうなんだ」
「そうよ。他にもマンモスの化石とか」
「うわ、それって凄い」
「うちのお店の看板なのよ」
「それの骨って漢方薬に使えるのよね」
「あっ、そうだったの」
「そうよ。恐竜の骨だって」
「へえ、それはまた」
ジュディにとっては意外な言葉だった。

「骨を薬に」
「他にも色々なの使うけれどね。そういうのもあるの」
「漢方って不思議ね」
「まあね。何でわからないけれど蝉玉はこういうの知らないのよね」
「だってさあ」
蝉玉はアンジェレッタの言葉に応えるかのように憮然とした顔になっていた。
「専門じゃないからさ。そっちの方は」
「中国人なのに？」
「中国生まれでもよ。家系には漢方医いないし」
「ふうん」
「お爺ちゃんは軍人だしさ」
「ああ、参謀総長さんね」
彼女の祖父は連合軍参謀総長である。ちなみにスターリングの祖父が宇宙艦隊司令長官である。これがエウロパなら大きな話になるが軍人の地位がそれ程高くない連合軍ではさして話にはならない。
「そういうのは知らないのよ」
「拳法とかお料理は得意なのに？」
「うん」
「それにそっちのお料理って確か」
アンジェレッタの言葉は続く。
「あれでしょ？医食同源だって」
「言うけれどそんなには詳しくないわよ」
「あら」
「あんたみたいに詳しくはないわよ。やっぱり得手不得手もあるし」
「そうなんだ」
「そうよ。悪いけれどね」
「謝る必要はないけれどね」
「まあとにかくだ」
ロザリーが話を進めてきた。

「何かあんたの家も結構な物持ちなんだな」
「他にもあったりするけれどね」
ジュディは今度はロザリーに答えた。
「タレントの生写真もあるし」
「へえ、そんなのもあるのか」
「神崎亜矢とかね。うちの理事長のもあったりするけれど」
「ああ、理事長のも」
「あれで人気あるから」
「確かにな」
「男前だものね、うちの理事長」
ロザリーもアンジェレッタも彼の話は結構進む。八条は女子高生からも好かれる顔立ちなのである。長身でスラリとしたスタイルも評判である。
「ホモだって噂もあるけれどな」
「あれって噂じゃないの？」
「さてな。けれど変な話一つないってのはかえって不自然だろ」
「まあね」
「だから余計にな。引っ掛かるんだよ」
ロザリーは言う。
「そこんところがな」
「意外と誰かの足長おじさんになっていたりしてね」
ジュディが笑いながら冗談を述べた。
「そうだったら面白いね」
「何かありそうねないね、そんな話」
「千年前ならまだありそうだったけれどね」
「全く」
「あれっ、これって」
ここでもう一人来た。
「おう、あんたもか」
「ああ、何か気になってな」

次に来たのはジミー＝ゴンザレスであった。ジャマイカ出身で銀髪が奇麗な黒人の少年である。愛嬌のある顔をしている。黒い目も印象的だ。黄色と赤の明るい服を着ている。

第十六話　物持ちはいいけれどその四

「これ全部アンジェレッタのだよな」
「そうよ」
「拳法薬か」
「ちょい待ち」
ジミーの何気ない言葉にロザリーが突っ込みを入れてきた。
「どうした？」
「あんた今何て言ったのよ」
「だから拳法薬なんだろ、これ」
「何か勘違いに気付かない？」
「勘違い！？何処がだよ」
彼はまだその間違いには気付いていない。
「だから憲法薬なんだろ」
「わざとはやってないわよね」
「馬鹿言え、大真面目だ」
彼は真剣に主張する。
「だから剣法薬なんだろ」
「ああ、もういい」
「どういう耳してんのよ」
ロザリーもジュディもいい加減呆れてきた。
「とにかくいい薬だな」
「それはね」
アンジェレッタはジミーのその言葉には機嫌をよくさせた。
「うちのお薬はどれも最高のばかりだよ」
「それで建保薬だけなのか？」
「勿論他にも一杯あるよ」
ジミーに答える。
「抗生物質も。ほら」

「これ何だ？」
飴玉に見えるものが出て来た。これは正直何かわからなかった。
ジミーも目をパチクリさせていたしロザリーやジュディも同じである。
「性病のお薬ね」
「ちょい待ち」
またロザリーが突っ込みを入れる。
「幾ら何でもそりゃ学校に持って来たらまずいでしょ」
「そうかなあ」
「そうかなあって」
「不味いに決まってるじゃない」
ジュディも言う。
「幾ら何でも」
「他にはコンドームだって」
「ああ、出したら駄目よ」
「ミンチンにでも見つかったらことよ。あとラビニアにもね」
「あいつ等そっから何してくるかわからないから」
「そうよ。何時か抹殺してやるけれどね」
「そうね。そっちはね」
二人の目が光った。実は二人だけではなくこのクラスのかなりの数がミンチンとラビニアには敵意を抱いている。言うならば二年S1組の公敵であるのだ。
「やってやるわよ」
「とびきりの復讐でね」
「そういうお薬もあるよ」
アンジェレッタはそこも抜かりがない。
「一錠で百人は死ぬっていう猛毒が」
「ああ、それね」
ジュディがそれを聞いて頷く。
「農薬よね」

「うん」
「私も持ってるわよ、それ。それを何時かあの二人に」
「証拠が残らないもっといいのがあるんだけれど」
「そうなの。じゃあ今度ミンチンの糞婆のお茶にどっと入れて」
「地獄行きね」
「それって持ってるだけでやばいんじゃないのか」
ロザリーは二人の剣呑な会話に目で苦笑いして額に汗を書きながら問うた。
「殆ど薬局じゃなくて軍の特殊な研究施設の持ち物だろ」
「気にしない気にしない」
「出来るだけ苦しむのがいいね」
「そうそう。とびきりの劇薬がね」
「まあ毒薬なんかどうでもいいよ」
ジミーがここで言った。
「いいか？」
「あの二人を懲らしめるんならな。いいじゃないか」
彼もまたあの二人が嫌いであった。
「俺もこの前ラビニアにはえらい目に遭ったから」
「そうなの」
「あの糞女だけは許しておけないんだよ。絶対にね」
「あんたも色々あるんだね」
「それでさっきのだけれど」
「ああ、これ」
アンジェレッタが出してきたのはコンドームであった。
「これよね」
「そう、それ」
「それ早くしまいなって」
「本当にやばいわよ」
ロザリーとジュディが横で囁くが話は続く。
「それどうやって使うんだ？」

「えっ！？」
「へっ！？」
三人の少女達はその言葉に思わず眉を顰めさせてきた。

第十六話　物持ちはいいけれどその五

「あんた今何て言ったんだい？」
「これの使い方知らないの？」
「嘘でしょ、それって」
「いや、本当に」
ジミーは答える。
「その、あれの時に使うのは知ってるよ」
それを言うと顔が少し赤くなった。
「けれどさ。細かい使い方は」
「そ、それはね」
「ちょっとね」
ロザリーとジュディはその言葉に彼女達も顔を赤らめさせて互いに見合わせた。実は二人も細かい使い方は知らないのである。
「知らないの？」
「だ、だから」
「それは」
「実は私も」
アンジェレッタはあっけらかんとして述べた。
「知らないんだけれど」
「何だ、三人共知らないのか」
ジミーはそれを聞いて少し残念そうであった。
「そりゃあさ」
ロザリーはバツの悪そうな顔を作ってきた。
「だってねえ」
「私達まだ高校生だしさ」
ジュディも言う。
「知ってる子は知ってると思うよ。けど」
アンジェレッタも同じであった。実は三人はまだそこまでいって

いないのである。
「けれどあんただってそうだろ」
ロザリーは質問をジミーに返した。
「そんなこと言うんだからな」
「悪いかよ」
ジミーも渋々それを認めた。
「俺だってそんなの知らねえよ」
「そうよね」
「逆に知ってたら怖いわよ」
「そう思わない？」
「って言いながらどうしてこっち見るのよ」
ダイアナが四人の視線に気付いた。
「だってダイアナと」
「あとフックは」
「俺もかよ」
フックにまで視線は向けられていた。ダイアナもフックも苦い顔をしている。
「知ってるわよね」
「知ってると思ってるの？」
「うん」
「違うの？」
「残念でした」
だがダイアナの返事は意外なものであった。
「知らないわよ。それで勿論」
処女だというのである。非常に意外であった。
「嘘・・・・・」
「本当よ」
ダイアナは少しムキになっていた。
「キスまでよ。知ってるのは」
「俺それも知らない」

意外ともてないフックであった。プレイボーイだからといって経験があったり豊富であるとは限らないようである。そういうものなのかも知れない。
「キスの味ってどんなのか。知りたいんだけれどね」
「何とまあ」
「あんた達も知らないなんて」
「そういうことよ。これでも遊ぶ相手は選んでるんだから」
「俺は誰でもいいけれどね」
「ふうん」
「ところでよ」
ふとジミーが言った。
「ダイアナ、御前今キスはしたって言ったよな」
「あっ」
それを言われて自分でも気付く。
「し、しまった」
ギクリとした顔で目を驚かせていた。何か目の中に大きな星が見える。
「キスはあるんだよな」
「言われてみれば」
「そうよね」
ジュディとアンジェレッタもそれに気付く。
「相手誰だ?」
「何だ、やっぱりそういうこと知ってるじゃない」
「隠すなんてずるいわよ」
「そ、それはその」
急に元気がなくなりあたふたとしだした。
「誰なの?」
「どうやって知り合ったの?」
ロザリーや蝉玉まで参戦してきた。皆興味津々である。
「教えて欲しいわね」

「そうよね、どういう経緯かね」
「何回かも」
「いや、それはね。その、あのさ」
ダイアナもこうなっては容易に逃げられない。それがわかっていても必死に逃げようとする。
「まあプライベートだし」
「言えないっていうの？」
「ずるいんじゃない、それって」
「そのさ、いいじゃない。まあ」
「よくないわよ」
「ねえ」
「さあ、聞こうか」
「うん」
何時の間にかダンやトムまで来ていた。
「詳しいことを」
「是非」
「参っちゃったなあ、こりゃ」
一人教室の中で苦い顔を浮かべるしかなかった。その頃グラウンドではフランツが相変わらずタムタムと共にランニングに専念していた。
「男だったら！」
いきなり訳のわからないことを叫んでいる。
「一つに賭ける！」
「それは歌か？」
タムタムがその横で走りながら問う。
「そうだ！」
フランツは大声でそれに答える。
「いい歌だろう」
「何か勘違いしているような気がするがな」
「そうか？」

この男にとってはクラスの喧騒も他のことであった。相も変わらず一人の世界を進むだけであった。それがいいか悪いかは別にして。

物持ちはいいけれど　　完

２００６・１１・１６

第十七話　影の実力者その一

影の実力者

こんなクラスでも纏め役がいたりする。このクラスではそれが二人いる。

奇しくもそれは双子だ。アッシリア人のミオ兄妹、アルフレドとビアンカの二人である。

二人共青い瞳に金髪である。だが背は兄の方が高く妹は低い。ただし顔つきは違えど二人共凛々しい顔立ちをしている。それが実に魅力的な二人である。

アルフレドもビアンカも冷静沈着である。だがビアンカには問題が一つあった。それは。

「やっぱりこの娘がいいわよね」

女の子の写真を見てうっとりしている。実は彼女はレズなのだ。

「別に悪いことじゃないでしょ」

それを言われても平気である。この時代の連合やエウロパである。だからそれはいい。ただしだ。

「私そういうの書くのは好きだけれど」

アンはとりわけ拒否反応を示している。

「あの、わかるわよね」

怯える目でビアンカを見て言う。

「ユダヤ教だからさ」

「ああ、そうね」

ビアンカはそれを言われて気付く。

「ユダヤ教はね」

「そうよ。同性愛は駄目なのよ」

何か身震いしているようにすら見える。

「何があっても」

「じゃあいいわ」

「そうよ。けれど同性愛は駄目ってだけで」
友達付き合いは続けている。それは変わりはしない。
「けれど男の子でもいいのよ、私は」
実はバイセクシャルであるらしい。
「どちらでもね」
「けれどあんた処女でしょ」
レミがそれに問う。
「確かどっちとも付き合ったことないじゃない」
「それでもよ」
ビアンカは言う。
「どっちでもいいの。わかる?」
「わかったようなわからないような」
「けれど漫画の話にはなるわよね」
ルビーはせっせと自分の机でネームを書きながら述べた。
「そういうのって」
「ああ、ネタにしてもいいからね」
ビアンカも自分でそれを言う。
「私の方はね。好きにやって」
「それじゃ御言葉に甘えて」
「どんどん書いてくれていいから」
「それでさ」
レミがまた問う。
「どんなのがタイプなわけ?」
「男の子?女の子?」
「ああ、両方。どっちがいいの?」
「そうね」
その質問に考える顔と目をしながら答える。黒いセーターにズボンが大人びた、それでいて引き締まった身体によく似合っている。
「まず男の子だけれどね」
「ええ」

「元気のいい子がいいわね」
「あれっ、年下好き？」
それをクラスの端で聞いているナンシーが青い顔をしている。だがそれに気付いている者はいなかったのが彼女にとって幸いであった。
「そういうわけじゃないの」
ビアンカのこの言葉が発せられるとナンシーの顔色が元に戻っていく。
「どっちかというと同じ歳の方がいいわね、男の子は」
「そういうものなんだ」
「まあ付き合ったことはないけれどね」
それが弱点と言えば弱点か。それでは結局夢見ているのと同じだからである。
「やっぱり一緒にいるのならね」
「成程ね。それじゃあ女の子は」
「言っておくけれど私は絶対に駄目よ」
またアンが言う。
「それだけはね。付き合っていいのはやっぱりギ・・・・・」
「ギ！？」
クラスのうちの何人かがその言葉に反応してきた。

第十七話　影の実力者その二

「アン、今何て！？」
「何て言うつもりだったんだ？」
「あっ、これはその」
また失言であった。
「何でもないわよ、何でもね」
顔を真っ赤にしてそれを否定する。
「ギギの腕輪持ってるみたいなワイルドなのがいいかなあって」
「ちょっとアン、それ強引過ぎるわよ」
ルビーがそれに突っ込みを入れる。
「千年以上も前の日本の特撮なんか出して」
「仕方ないじゃない。ばれるよりましでしょ」
「まあね」
「ガガの腕輪と一緒になると凄かったんだよな」
「そうそう」
それを聞いたベンとトムが無邪気に話をする。
「元々凄い強かったけれどね」
「ケケーーーッとか叫んでね」
「何かそれ漫画にするとよさそうね」
アンは我に返ってその話を聞いていた。
「主役にして」
「っていうか主役だよ」
ベンがアンに対して述べる。
「あれっ、そうなの」
「そうだよ。そうは思えないかな」
「何か悪役っぽくって」
「まあ確かに物凄い戦い方するしね」
トムが言う。

「獣人食べちゃうし」
「真っ二つとかね」
「何か凄い仮面ライダーなのね」
アンはベンとトムのその話を聞いてかなり驚いていた。
「最近の仮面ライダーとはかなり違うみたい」
「今のライダーって結構二枚目ばかりだしね」
レミが応える。
「千年前でも顔つきはそんなに変わってないと思うけれど」
アンがそんなレミに声をかける。
「どうかしら」
「っていうかあの時の日本人って今よりずっとワイルドなような」
「それを言ったら当時の人達皆そうよ」
アンはそれに対して述べる。
「私の国なんか千年前の人は皆凄い怖い顔してたわよ」
これは常に戦争状態にあったからである。そうなればどうしても険しい顔になってしまうのだ。今はイスラエルは武力を使う国ではなくなっている。あくまで影の調停役となっているのである。
「あの顔見ていたらね」
「そう？」
だがウェンディがそれに異議を唱える。
「あの頃からイスラエルの女の人って奇麗な人多いじゃない」
「ううん」
この時代ではイスラエルは非常に美人が多いとされている。アンも実際容姿でとかく言われたことはない。このクラスは美人揃いなので目立たないがかなりいい線はいっている。だが宗教の関係で結婚出来る者が少ないのでイスラエルの美人は手に入れられないものの代名詞ともなっている。
「それもかなり」
「まあ女優でもいたりするけれど」
アンは今一つ歯切れの悪い言葉を出す。

「ああした美人っていいわね」
ビアンカがここで述べた。するとまたアンの顔色が暗くなった。
「私やっぱり女の子の方がいいかしら」
「それでどんなタイプがいいの？」
ルビーがまたそれに問う。
「やっぱりああした華やかな感じ？」
「というわけでもないのよ」
だがビアンカの言葉もまた今一つ歯切れが悪い。
「タイプの一つよ、確かに」
「ええ」
「けれどそれだけじゃないから。女の子の許容範囲は広いのよ」
「そうなの」
「正直年上の女の人も好き」
ビアンカは述べる。
「大人な人もね。色々と教えてくれそうだし」
かなり際どい言葉である。
「そういうのっていいわよね」
「私はそういう好みはないけれど」
ルビーは首を傾げながら応えた。
「悪くはないかもね」
「そうよね。だから」
「けれどそれだけじゃないのよね」
ウェンディが問うてきた。
「タイプの一つなのでしょ？あくまで」
「ええ。他には」
彼女はウェンディにも応えて述べる。
「年下の可愛い娘とか」
「年下も」
「いいわね。そちらも」
「結局何でもいいんじゃないの？」

レミが結論付けるかのように突っ込みを入れてきた。

第十七話　影の実力者その三

「女の子に関しては」
「否定できないかしら」
ビアンカもそれを認めるしかなかった。
「そういうつもりはないんだけれど」
「それでもね」
女の子達は言う。
「そう聞こえるわ」
「言っておくけれど私は本当に駄目よ」
アンはしつこいまでに念を押す。
「とにかくイスラエルでは絶対の御法度なんだから」
「わかってるわよ。アンも嫌いじゃないけれど」
「友達としてよね」
思わず引く。本気であった。
「そうじゃなかったら？」
「止めてよ、本当に」
またムキになっていた。本当に嫌なのがわかる。
「恋愛対象にはちょっと」
「わかってるわよ。安心してよ」
ビアンカは笑って述べる。
「それはないから」
「だといいけれどね」
「友達としてね。あらためて宜しくね」
「ええ、こちらこそ」
挨拶をしてもどうにもアンは怖がっていた。
「私だって相手が嫌だって言ってるのに付き合ったりしないわよ」
その辺りはあっさりとしていた。
「だから安心して」

「そうね。それじゃあ」
アンもやっと落ち着いてきた。どうにも宗教的な戒律よりも個人的な感情が大きいようである。それは見ていると何処かわかるものであった。
「こちらも」
「ええ」
「それはそうとしてよ」
ルビーがまた言う。
「ビアンカの好みはわかったけれど」
「うん」
「問題はアルフレドよね」
「俺か」
そこにはアルフレドもいた。結構寡黙なのでこうした場合あまり目立ったりしないのである。目立つ面々ばかりのクラスの中でキャラクターではあまり目立たない男であった。
「アルフレドはどんなの娘が好みなの？」
「いきなりそう言われてもな」
話を振られるとどうにも困った顔になってしまった。
「俺もそりゃ好きなタイプはあるよ」
「男の子とかは？」
「ああ、それはない」
同性愛の方は否定した。
「そういうのは好みじゃないんだ」
「そうなの。よかった」
アンがそれを聞いて胸をほっと撫で下ろした。
「それでね」
「ああ」
「どんな娘は好きなの？」
「そうだなあ」
言われてもどうもこれだということが言えないらしい。真剣に考

える顔になっていた。
「言われてみると」
「言うの難しい？」
「いや、そうでもない」
それは否定した。
「ただ、ちょっとな」
それでも何か言いにくそうであった。困った顔になっていた。
「何て言うか」
「別にこのクラスの娘じゃないんでしょ？」
「ああ」
ウェンディに答える。
「いいか悪いかは別にしてそれはない」
「じゃあ言えるじゃない。誰よ」
レミが問う。
「神崎亜矢」
アルフレドは一言そう答えた。
「あれっ、そうなの」
皆それを聞いて目をパチクリとさせた。
「あんた亜矢ちゃんが好きだったの」
「ああ」
少し戸惑いながらもそれに答えた。
「変か。実は言おうかどうか迷っていたんだ」
「別に」
「いいんじゃない？亜矢ちゃん可愛いし」
「そうよね」
今人気のアイドルである。小柄ながら可愛らしいルックスと如何にもといった感じのアイドルめいた顔立ちで人気の女の子だ。日本の歴史上最強のアイドルとさえ言われている。抜群のスター性を持っている。
「けれど意外って言えば意外だよな」

「そうだとな」
ベンとトムが話を聞いたうえでそう言う。
「アルフレドって固いかと思ったけれど」
「アイドル好きだったんだ」
「歌もいいだろ？」
アルフレドは戸惑いながら述べる。

第十七話　影の実力者その四

「曲だっていいし歌唱力も」
「そうだけれどね」
「それでも」
「アイドル好きだったの」
「じゃあ何が好きそうだったんだ？俺は」
「柔道家とか」
「おい」
ウェンディの言葉に思わず突っ込みを入れる。
「それか悪役の女子プロレスラーとか」
「待て」
今度はルビーに突っ込みを入れる。
「何なんだ、それは」
「いや、別に」
「何かイメージで」
「俺のイメージってどんなのなんだ」
何か急に不愉快になってきた。
「いや、それは別に」
「まあねえ」
「引っ掛かるな」
皆の歯切れの悪い様子にどうにも顔を曇らせる。
「まあまあ」
「そこは抑えて」
「わかったよ」
憮然としながらもそれに応えることにした。そのうえで話を元に戻してきた。
「それでアイドルだけれどな」
「うんうん」

女の子達は何か思わせぶりな様子で彼の相手をしている。
「やっぱり女の子でも神崎亜矢ちゃん人気なのかな」
「悪くはないわよね」
「そうよね」
ルビーとダイアナが答える。
「可愛いし歌上手いしね」
「けれどね」
ここでダイアナは何かを探る目をしてきた。
「彼女、結構あれよ」
そしてこう言う。
「かなり食わせものっぽいわよ」
「食わせものって？」
「目よ」
そしてこう述べる。
「目を見てるとね。そう思えるのよ」
「目で！？」
「ええ、目。それを見ているとね」
さらに述べる。
「そんな気がするのよ。何か凄い上に上にあがろうとしてるわね」
「そうなのか？」
だがアルフレトにはそこまではわからない。むしろそれがわかるダイアナがかなりのものなのである。
「そうなのよ。まあ注意しなさい」
にこりと笑みを作って彼にも述べてきた。
「奇麗な花にはね。何かあるのよ」
「棘じゃなくて？」
「甘いわね」
今度は本気で笑ってきた。
「花にあるのは棘ばかりとは限らないわよ」
実に意味深い言葉であった。

「それだけじゃないのよ」
「他にもあるの」
「そうよ。毒だってね。食虫花だってあるし」
「何か怖い話になってきたわね」
ビアンカがそれを聞いて言う。
「女の子って皆そうなの？」
「さあ、どうかしら」
すっとクールな笑みに変わっていた。
「けれどあの目は本物ね」
また神埼亜矢について述べる。
「あの娘は。かなり手強いわよ。覚悟しておくことね」
「ううん」
それでもまだアルフレドにはわかりかねていた。
「そうなのか、何か」
「恋はね。そう簡単にはいかないもの」
またしても思わせぶりに語る。
「覚えておいて。花には何かあるのよ。それでその何かは決して見せはしないのよ」
「隠してるってわけか」
「ええ」
クラスの影のまとめ役といってもわからないことはあった。アルフレドは少なくともこうしたことには疎いようである。誰にも得手不得手があるということであろうか。そして彼にしろ完璧ではなかった。こうしたところで結局はこのクラスの一員であったのであった。

影の実力者　　完

2006・11・18

第十八話　犬とアザラシその一

犬とアザラシ

連合ではペットを飼うことが昔から人気である。ペットを守る法律もあり捨てたり虐待といったことに関する処罰まであったりする。それ程までにペットを大切にしているのだ。なお犬や猫を食べたりもするが。

「最近俺の妹な」

フランツがクラスメイト達に語っている。

「ああ、フローネちゃんね」

彰子がそれに応える。

「ああ、そっちの方な。最近ウォンバットとクスクス飼ってるんだ」

「へえ、面白いね」

「ああ、だが俺はな」

「クスクスとかもいいがもっとトレーニングの役に立つものを飼いたい」

「どんなの？それって」

彰子は何気なくそれに尋ねる。

「そうだな。例えばだ」

「うん」

「虎なんかがいい」

「虎？」

「そうだ、そして特訓に使う！」

彼は豪語する。

「虎よりも速く走りそしてその中から何かを掴む！そして！」

彼は叫ぶ。

「燃える！燃えてやるんだ！」

「それでどうするの？」

「極める！野球を極めてやるのだ！」

「全くこのアンポンタンは」
蝉玉はそれを聞いて呆れた顔になっていた。彰子とは反応が全く違う。
「野球に何で虎なのよ。そりゃまあタイガースってあるけれどさ」
同じ名前のプロチームが連合には無数にあったりする。
「幾ら何でも虎と一緒に練習しても何の意味もないでしょ。下手したら虎の御飯よ」
「そうだよね。やっぱり虎はね」
スターリングもそれに頷く。
「やっぱりペットはアライグマがいいんじゃないかな」
彼はそう主張してきた。
「うちのラスカルなんかは賢いしさ」
「ああ、あの子ね」
蝉玉も彼のペットのことは知っていた。
「可愛いわよね」
「そうだろ。昨日だってね」
にこやかな顔でペット自慢に入る。
「僕が御飯あげたら喜んでくれてさ。やっぱりペットっていいよね」
「そうそう。私の風太だってね」
実は蝉玉もペットを飼っていたりする。彼女のペットはレッサーパンダなのである。流石にジャイアントパンダを飼うのはアパートでは無理であった。
「最近後ろ足で立っちゃってね」
「あっ、お腹黒いんだよね」
「そうなのよ。それが凄く可愛くて」
「うんうん、そうなんだよね」
スターリングはその言葉に頷く。
「それがよくて」
「そうなのよ。それでお兄ちゃんと取り合いなのよ」
「あの兄さんと？」

「そうよ。あれでも動物好きでね」
「ふうん」
少し意外な言葉であった。あのキザにも見える人がそんなに動物好きとは思わなかったのだ。蝉玉が動物好きというのは納得出来ることであったが。
「そうだったんだ」
「そうなのよ」
「何か結構動物好きな人が多いんだね」
「そうね。あの二人だって動物好きだし」
「あの二人もなの」
蝉玉が指差したのはテンボとジャッキーの馬鹿コンビであった。クラスでも推理研究会でも馬鹿で有名である。学校ではフランツに匹敵する馬鹿とまで言われている。要するにこのクラスは一万の中でもとりわけ目立つレベルの馬鹿を三人も擁しているのである。これもかなり凄いことであった。
「オオウミガラスのマーフィね」
「オオウミガラスなの」
スターリングがそれを聞いて以外といったような顔をした。
「そうよ。何でもそれを飼いだしてから二人の事件解決能力が飛躍的に上昇したんですって」
「何でだろ」
「さあ。若しかしたらそのオオウミガラスが事件を解決してるかもね」
「まさか」
「けれど有り得るわよ」
蝉玉は言う。
「ひょっとしたらね」
「そんなものかな」
「そんなものよ」
「ねえ、何の話してるの？」

そこに一人の少年がやって来た。このクラスの一員でジョン＝マッケンジーという。黒い髪と目の童顔で小柄な少年である。彼を見て蝉玉はくすりと笑った。

「真打ちその一が登場ね」

「その一！？」

ジョンはそれを言われて首を傾げさせた。

「それってどういう意味？」

「ほら、ラッシーのことよ」

そのジョンの愛犬である。いつも一緒にいるのだ。利口なコリーである。

第十八話　犬とアザラシその二

「ラッシーがどうかしたの？」
「やっぱりジョンにとっては親友よね」
「勿論じゃないか」
ジョンは何を今更といったふうに答える。
「僕にとっては永遠の友達だよ」
「そうよね。丁度ペットの話してたのよ」
「ああ、そうだったんだ」
それを言われてようやく納得したように応える。
「それであんたにとってはラッシーってペット以上よね」
「友達だよ」
それをまた言った。
「それ以上かも知れないね」
「そう。じゃあやっぱり一緒ね」
「！？」
「彼と」
「ああ、彼だね」
スターリングには蝉玉が誰のことを言いたいのかすぐにわかった。
それで笑顔で応える。
「彼もね」
「彼！？一体何のことなんだ」
フランツにはわからない。
「わかるか、彰子ちゃん」
「うん、まあ」
彰子に顔を向けるとすぐに答えが帰ってきた。
「ネロ君よね」
「御名答」
蝉玉は彰子の言葉に笑顔で答える。

「その通りよ」
「ああ、成程」
ジョンはこれでようやく納得した。
「ネロとパトラッシュだね。あれはね」
「あそこも凄く仲いいでしょ」
「確かに。ひょっとすると僕のとこ以上かも」
トップブリーダーと謳われるジョンもそれを認める程であった。
実はネロと愛犬パトラッシュの友情もまたかなりのものであるのだ。
「犬飼ってる人ってやっぱり多いからね」
蝉玉は言う。
「確かカトリだってそうだし」
「うん」
「猫も多そうだけれどね。ただ変わったので言えば」
「私のところは違うわよ」
今度はナンが話に入って来た。
「あれでしょ？ペットの話」
「ええ」
「私とスーホーはもっと別の関係よ。ペットでも友人でもないわよ」
「じゃあ何なんだい？」
スターリングがそれに問う。
「一心同体よ」
ナンは胸を張ってそう述べた。
「一心同体」
「そうよ、昔からモンゴル人の足は四足って言われてるのよ」
「それどういう意味なの？」
彰子が尋ねる。
「ほら、いつも馬に乗ってるわよね」
「ええ」
「だからよ。それで足が四本って言われるのよ」
「そうなの」

「これでわかったかしら。私達にとって馬はもう分身っていうことなのよ」
「成程ね」
皆その言葉を聞いて納得して頷く。
「そういう考え方もあるわね」
「スーホーの考えは私の考え」
こうまで言う。
「何があっても離れないわよ」
「ううん、流石はモンゴル民族」
「そこは立派ね」
「混血しても宇宙に出ても私達は草原の民だからね」
その誇りは決して忘れないというわけである。
「そこんとこ宜しく」
「了解」
「それ考えると何か一概にペットとは言えないのね」
蝉玉はナンの話を聞いてそれをあらためて認識した。
「一心同体って考えまであるなんて」
「私もそうよ」
次に名乗り出てきたのはこのクラスでは非常に少数派の日本人の女の子であった。和泉七美その人である。
「私最近水族館でバイトしてるんだけれどね」
「また面白いとこでバイトしてるわね」
「何か空気があってね。それでね」
「ええ」
「シャチとかアシカとかスナメリの考えてることがわかるのよ」
「それはまた凄いね」
スターリングはそれを聞いて素直に驚きの言葉を述べた。

第十八話　犬とアザラシその三

「僕はまだラスカルの考えてることが完全にはわからないからね」
「まあそこんところはね」
笑って答える。
「何か感性かしら」
「そういえばあんたあれだったわね」
蝉玉が彼女に対して言う。
「水泳部だし元々」
「うん、海の生まれよ」
にこりと笑って答える。
「今でもね。海は大好きよ」
「それでなのね」
それを聞いてまた納得したように頷いた。
「シャチやアシカのことがわかるのは」
「他にもステラーカイギュウの考えてることもわかるわよ」
「あの大きなのね」
彰子がそれに問う。
「わかるの」
「うん、かなり優しい動物なんだよ」
七美はステラーカイギュウについてそう語った。
「のどかでね。見てるだけで落ち着くのよ」
「そうだよね、あれはね」
どうやらジョンもステラーカイギュウが好きなようである。話をしているその顔が明るいものになっていた。
「大人しいしね」
「そうなのよ。一見すると驚くけれどね」
「そうそう。私もあれ好きなのよ」
「僕もだよ」

蝉玉とスターリングもそれに賛同する。どうやら皆あの地球ではいなくなってしまった巨大な海牛が大好きなようである。少なくとも嫌われる生き物ではない。

「皆何の話をしてるんだ？」

ここで意外な男がやって来た。クラスの不良であるダンであった。

「ああ、ちょっとペットの話をね」

ジョンがそれに説明する。

「ペットか」

「他にも馬とかステラーカイギュウとか。ダンはどんな動物が好きなの？」

ナンが彼にそう尋ねてきた。

「虎だよな、やっぱり」

フランツが余計なことを言って皆から口を塞がれてしまった。

「虎か、悪くないな」

だがダンはそれを聞いて意外にも賛成してきた。

「虎はいい。雄々しくて奇麗だ」

「ほら見ろ」

彼がそう言ったのを見てフランツが言う。

「やっぱり虎はいいじゃないか」

「だけれどな」

しかしダンはさらに言う。

「俺はステラーカイギュウも好きだな」

「そうなの」

「ああ、あの優しさがいい」

これは本当に意外な言葉だった。皆それを聞いて何か狐に摘まれた様な顔をしていた。

「俺は優しい動物は好きだ。というか動物は全部好きだな」

「へえ、それはまた」

蝉玉はそれを聞いて目をパチクリとさせていた。

「あんた意外とそういうところあるのね」

「そんなに驚くことか？」
「当たり前よ。空手部のエースでクラスのアウトローが」
「何もアウトローになったつもりはないけれどよ」
蝉玉のその言葉に少し憮然としたが話を続けた。
「動物愛護の人だったなんて」
「子供の頃からいつも一緒だったからな」
彼はそう答えた。
「実は俺の家な」
「ええ」
「動物園やってるんだよ。代々な」
「えっ」
皆この言葉を聞いて今度はその目を丸くさせた。
「そうだったの」
「ああ。ってこのクラスになった時最初の自己紹介で言わなかったか？」
「そうだったっけ」
「さあ」
「覚えてないのか」
「だってねえ」
「ダンって言ったら」
皆とても動物好きとかそういうイメージがないのである。こういう時に不良とはいささか損な役回りである。
「バイクとかねえ」
「そういうイメージだから」
「まあいい」
だがそれを受け止めてしまうところが彼の器の大きいところであった。彼はこれでも中々器の大きな男なのである。不良だが人としてはいい奴なのだ。
「まあ動物園の息子だからな」
「うん」

「昔から動物は好きだった。今だってな」
「一番好きな動物は？」
「動物は何でも好きなんだがな」
「それでもその中で特に好きなのは」
「そんなのは決められないな」
蝉玉にそう答える。
「皆好きだからな」
「本物ね」
「そうね」
蝉玉とナンがそれを聞いて頷き合う。
「そういうことだ。ついでに言えば動物園と水族館が一緒でな」
「うん」
「ヒョウアザラシには注意していた」
「ヒョウアザラシ？」
「何、それ」
クラスの面々はそんなアザラシは知らないようである。それを聞いてキョトンとした顔になっていた。

第十八話　犬とアザラシその四

「知らないのか？」
「知ってるも何も初耳だよ」
スターリングがそれに答える。
「それ、どんなアザラシなの？」
「一言で言うと黒っぽい色で斑がある」
「普通のアザラシじゃないの、それって」
「そうだよね」
七美とジョンはまずはそう思った。だがダンは言う。
「本当にそう思うか」
「どう聞いても普通のアザラシに思えるわよ」
「御前水族館でバイトしてるんだよな」
「ええ」
今更何をと言いだけな顔で答える。
「それがどうかしたの？」
「じゃあ知らないのか？そのアザラシ」
「アザラシも結構いるけれどそんなアザラシは知らないわよ」
七美は言う。
「それで一体どんなアザラシなのよ。教えてよ」
「猛獣だ」
ダンは言った。
「えっ！？」
「聞こえなかったのか？猛獣なんだ」
「またまた」
皆それを聞いてまさかという顔でそう返した。
「冗談きついわよ、ダン」
「そうだよ。アザラシが猛獣なんて」
蝉玉とスターリングは笑ってそう述べる。

「そんなの有り得ないって」
「そうよね」
ナンの言葉に彰子が応える。
「何かの間違いじゃないの？アザラシは皆大人しいわよ」
「そうそう」
七美も何を言い出すのやら、と顔に書いてあるしジョンもそういった顔だ。誰一人としてダンの話を信じようとはしていない。それも当然で皆アザラシと言えば大人しい、可愛いというイメージがあるのだ。
「信じられないか」
「熊か何かじゃないの？」
「それかシャチか。海だったら」
「そんなに言うんなら見せてやるよ」
皆の言葉に応える形でズボンの裾をめくった。すると左足のふくらはぎに噛み傷があった。
「それは？」
「これがその証拠だ」
「鮫じゃなくて？」
「何なら調べてみるか」
ダンは皆を見てこう言ってきた。
「正式にな」
「じゃあ間違いなくそれなのね」
「そうだ」
「アザラシが」
七美には何か悪夢のような話だった。彼女は海の動物と親しめることが何よりの楽しみなのだ。その中でもイルカやアザラシはとりわけ好きな生き物だ。それがどうしてもさえ思っていた。
「だからヒョウアザラシは特別なアザラシなんだ」
彼はまた言う。
「これでわかったな」

「ええ」
「そんなアザラシがいたなんて」
皆何か狐につままれたような顔になっていた。それまでのまるで信じていなかった顔とは大違いであった。
「下手に放っておくと他の生き物も襲うしな。大変なんだ」
「それで油断したら」
「人間もこうなる。歯が鋭くてな」
「うわっ」
「それは酷い」
「ペンギンだってやられるんだ」
ダンはさらに言う。
「実際に野生じゃペンギンを襲う。他のアザラシだってだ」
「それ本当にアザラシなの？」
何か話を聞いているだけではとてもそうは思えない程である。何なのかと思ってしまう。
「ああ、残念だがな」
「で、それに噛まれたのね」
「そういうことだ」
「またそれは災難ね」
蝉玉があらためてそれを言う。
「何、大したことはないさ。他にも色々あったしな」
すっと笑って述べる。意外とクールだ。
「フランツの特訓に比べれば命の危険は少なかったさ」
「いや、あれは非常識だし」
ナンがそれに対して言う。
「あんなの普通はしないし」
「そうそう」
「まあな。そういえばフランツは何処だ」
ダンが言う。
「姿が見えないが」

「あれっ、そういえば」
「何処かしら」
他の面々もダンに言われてそれに気付く。
「どうせまた馬鹿やりに行ってるんでしょうけれど」
「まあそうだろうね」
七美とジョンの言葉も身も蓋もない言葉であった。かなり手厳しい。
「けれどそんなの気にすることないんじゃないかな。そんなに」
スターリングは特に慌てることなく皆に述べた。
「いつものことだし」
「御前も穏やかな顔して言うことときついな」
「あれっ、そうかな」
ダンの突っ込みにも今一つ自覚がないようである。スターリングらしいと言えばらしかった。
「まあ確かにな。そのうち戻ってくる」
何だかんだでダンも同じような考えだった。皆彼に関してはかなり達観していた。
「どうせ大騒ぎになるだろうしな」
「騒ぎって作るものなんだ」
彰子はそれを聞いてぽつりと呟く。
「あいつの場合はそうなのよ。どうせ今だって」
「うおおおおおおおおおっ！」
七美が言った側から外で叫び声が聞こえてくる。
「俺はやる、俺はやるぞ！」
「また何してんだか」
「うちのラッシーよりあれなんだけど」
皆その声を聞いただけで呆れてしまっていた。もう誰も彼を止めるつもりはなかった。そのまま生徒指導室に強制連行されてしまったとしてもだ。

犬とアザラシ　　完

2006.11.24

第十九話　もてない苦しみその一

もてない苦しみ

結構色々なカップルがいたりするこのクラス。だが例外も当然ながらいる。

「あのね」

彰子が親友の七美と校内の喫茶店でお茶を飲んでいた。ウィンナーティーを飲みながら話をしている。喫茶店の中はライトブルーを基調とした穏やかで奇麗なものであった。何処か海の中を思わせる。赤い装飾が珊瑚のようである。

「最近皆彼氏とかいるのかな」

「また突拍子もない言葉ね」

それを聞いた七美がそれに応える。彼女は緑茶を飲んでいる。

「だってね」

彰子はおっとりとした声で述べる。

「最近ネロ君とかアロアちゃんとか」

「あの二人は有名じゃない」

「うん。他にはベッカ君とペリーヌちゃんとか」

「あの二人は上手くいってるわね」

「そうよね。けれど私思うんだけれど」

「ええ」

「ナンシーちゃんも誰かと付き合ってるかも」

その言葉が発せられた瞬間喫茶店から遠く離れた新聞部の部室にいたナンシーが思わずギクッ、と何か得体の知れぬ悪寒を感じていた。凄い能力である。

「まさか」

だが七美はそれを一笑に伏す。

「あのナンシーに限ってそんなことないわよ」

「そっか」

「そうよ。幾ら何でもそれはね。あの娘もレズなのかもね」
「それはないと思うけれど」
彰子は首を傾げながらそう述べた。
「そういう彰子はどうなの？」
「私？」
「そう、あんた自身は。好きな子とかいるの？」
「ううんと」
首を傾げさせたまま考えながら述べてきた。
「これといっては」
「ないのね」
「何かなあ。何かね」
「まあこういうのはね。出会いだからね」
七美は笑いながらお茶を飲む。それからまた述べた。
「何処の誰かとそうなるかってのはかなり運よ」
「そうなの」
「そうそう。まあ焦らない」
笑って言う。
「そのうちあんたにも誰かできるって」
「だといいかなあ」
「いいかなあって」
無意識のうちに彼女の動きに合わせて首を傾げてしまっていた。
「何かそういうのってどんなのかわかってないの」
「七美ちゃんはわかるの？」
「そりゃあね」
と言ったところで止まってしまった。
「うっ・・・・・・」
実はないのである。だから止まってしまったのだ。
「ええとね」
何故か額から汗が出てしまう。それを止めることができないでいる。

「あの、その」
「何かあるの？」
「いえ、別にないけれど」
そうは言いながらも戸惑いは続く。
「けれど」
「それでもさ」
「何？」
「洪童君の妹さんとかうちの明香なんかは可愛くてもあまりもてないような」
「あの二人はまた別よ」
七美は言う。
「別なの？」
「高嶺の花よ」
「そうなの」
「そうよ。あんまり奇麗だとついついね。皆諦めてしまうから」
「ふうん」
「競争とかになるしさ。それに自分が釣り合うかどうか考えて」
「そんなの考えるの」
「考えるわよ」
そう教える。
「そんなものだから」
「何かよくわからないなあ」
「春香ちゃんも明香ちゃんも奇麗過ぎるのよ。だからね」
「ううん、奇麗なのはわかるけれど」
「うちのクラスもまあ」
ここでざっとクラスを見渡す。
「奇麗な娘多いけれどね」
「それはね」
「ただ変人が多いけれど」
「あはは」

それは事実である。このクラスこそは学園きっての奇人変人の宝庫なのである。それは誰もが認めるものであった。彰子もそれは否定しなかった。

「それはね」

「わかるわよね」

「うん、凄く」

「例えば」

ここでたまたま側を通りがかった髪を青く染めた痩せ気味の長身の少年を見る。目はライトグリーンで肌は白い。耳のピアスとダークグリーンのシャツにダークブルーのジャケット、そして黒のジーンズで決めている。一見すると何かもてそうな外見に見えなくはない。

第十九話　もてない苦しみその二

「ほら、これ」
「おい、待て」
七美に声をかけられた彼はムッとした顔を彼女に向けた。
「これって何なんだよ」
「だからこれよ」
「俺はこれか」
「何か悪い？」
「もっとましな言い方があるだろうが」
彼は抗議する。彼の名はカムイ＝サシン。アイヌ連邦出身である。何でも白い肌でアジア系の顔立ちなのはアイヌの血のせいらしい。アイヌは白人説があるのだ。もっとも今では既に混血しているが。
「これって何なんだよ」
「いや、クラスの変わり者の話してさ」
七美はしれっとして述べる。
「それでサンプルにと」
「俺はサンプルかよ」
不機嫌そのものの声で返す。
「ったくよお。俺は常識人だね」
「そうかしら」
だが七美の声は冷たい。
「知ってるわよ、この前」
「何だよ」
「ネロやアロアと飲んで騒いでたそうね」
「それがどうかしたかよ」
未成年だが何故か飲んでいる。連合では意外と未成年、高校生の飲酒はいい加減でわりかし問題にもなっている。煙草もまた然りだがこのクラスでは喫煙者はいないようだ。

「彼女欲しいって」
「それがどうしたよ」
ふてくされて開き直ってきた。
「別に御前にはよ」
「まあ私には関係ないけれどね」
「それが奇人変人のサンプルになるのかよ」
「それでもてない男委員会とか作ってるそうね」
「何、それ」
彰子はそれを聞いてキョトンとした顔になる。
「変な組織みたいだけれど」
「学園の裏に救う影の組織よ」
「俺は悪の大ボスかよ」
流石にこれにも抗議する。
「誤解招くようなこと言うな」
「けれど本当でしょ」
「まあな」
やはり憮然とした顔のままであったがそれは認めた。
「本当だったの」
これには彰子も驚きであった。
「うちの学校にそんなのがあったんだ」
「他には闇の嫉妬団とか悪の恋愛撲滅教とかあるのよ」
「何か漫画みたいね」
「まあ何かと広い学校だしね」
そういう問題ではないと思うが七美はそう説明した。
「色々な組織があるのよ。あんた嫉妬団でもあったわね」
「まあな」
「バレンタイン撲滅親衛隊とか」
最早何の組織なのかさえわからない。だがそういうものもあるらしい。
「他にも一杯」

「もてない男の子の組織なの？」
「ええ、そうよ」
七美は彰子にそう述べた。
「女バージョンもあるわよ」
「ふうん」
「そっちはそっちでややこしいけれど」
「あいつ等は敵だ」
カムイはそう主張する。
「もてない男のマイナスパワーをわかっちゃいない。それでどうしてもてない女なんて言えるんだ」
何か勝手な主張であるが本人は本気である。
「ふざけやがって。何時か殲滅してやる」
「あの、七美ちゃん」
彰子はその横で七美に囁く。
「何かよくわからないけれど言ってることとやってることって同じじゃないの？」
「あっ、あんたもそう思う？」
実は七美も同じであった。
「うん、何か聞いてると」
「まあ本人達は大真面目だけれどね。実はそうなのよ」
「やっぱり」
彰子はそれを聞いて頷く。そのうえでまた囁く。
「けれどさ」
「今度は何？」
「もてないからそんな組織をお互いに作ってるのよね」
「ええ」
「じゃあ何でお互い付き合わないの？何か変よ」
「さて」
返事になってない。
「何でででしょうね」

肩をすかしてそう述べてきた。
「何でって」
「それがあたしにもわからないのよ」
彼女の答えはこれであった。
「あたしも思うのよ。お互いで付き合えばいいって」
「そうよね」
「そうそう。それで付き合わないのがわけわからないのよ。それどころかお互い敵視し合って」
「余計に変よね」
「ええ。何でかなあ」
「あいつ等だけは許せねえ」
カムイは一人勝手に燃えていた。
「もてない男のマイナスパワー、何時か爆発させてやるぜ」
後ろを青い、冷たい炎が覆っていた。それこそが彼のマイナスパワーの表れであった。まさしく負のオーラそのものであった。かなり暗い。
そんなカムイを端目に彰子と七美はお茶に戻った。それぞれのお茶を飲みながら話をする。

第十九話　もてない苦しみその三

「それでね」
「ええ」
「何かうちの学校って色々な集まりがあるのね」
「まあ大きいからね」
七美は彰子の言葉にそう返した。
「訳のわからない組織もあるわよ」
「そうなんだ」
「訳のわからない場所もあるしね」
「訳のわからない場所」
「ええ、例えばね」
七美はそのうちの一つを説明しだした。
「誰もいないのに勝手に曲を奏でるピアノとか」
「ふうん」
「勝手に踊りだす標本の骸骨とかね。そういう話もあるわよ」
何処の学校にも定番である。こうした話は他にも一杯ある。
「何か怖いわね」
「まあね。とにかくこの学校色々あるから」
「他にはあるかしら」
「嫉妬団もそうだし」
「今度こそあいつ等を倒す！」
カムイは勝手に暗い炎を燃やし続けていた。
「何があっても不思議じゃないわよ」
「面白そうね」
彰子はそれを聞いてまた言う。
「実際にどっか行ってみない？」
「骸骨見に？」
「ううんと、何処でもいいから」

首を少し傾げてから述べる。
「楽しそうなところ」
「わかったわ。それじゃあ」
七美はそれに応えて言った。
「今日の夜ね。行きましょう」
「うん」
隣でカムイが燃えているのを無視して話をはじめた。こうして彰子と七美は夜の学校に二人で向かうのであった。
その途中で褐色の肌の金髪の少女に出会った。目は青く少女めいた可愛らしい小柄な女の子である。フリフリのピンクの上着に青いズボンを穿いている。
「あら、彰子に七美じゃない」
「コゼットちゃん」
彰子が最初に彼女に気付いた。続いて七美が。彼女の名はコゼット＝ミナワサ。インドネシア人で彰子達のクラスメイトである。今のところは取り立てて変人という話はない。
「何処行くの？」
「今から学校にね。訳のわからない場所を見に」
「訳のわからない場所ね」
コゼットはそれを聞いて考える顔をした。
「じゃあいい場所知ってるわよ」
「何処なの？」
「ええ、こっち」
そう言って裏手の一つを指し示した。この学校はあまりにも広い為校門も複数存在するのである。
コゼットが指し示したのはそのうちの一つであった。みればその門は厳重に閉ざされてしまっていた。
「閉まってるよ」
「そうね」
コゼットは彰子の言葉に返した。

「どうしよう」
「じゃあ方法は一つしかないわね」
「そういうこと」
コゼットは七美に対しては別の返事であった。どうやら何かと考えがあるらしい。
「それじゃあ彰子、行きましょう」
「行くって」
彰子は七美の言葉にきょとんとした顔を見せてきた。
「どうやって？」
「どうやってって決まってるじゃない」
七美は述べる。
「乗り越えるのよ」
「乗り越えるの」
「そういうこと、この校門をね」
「閉まっていれば乗り越えればいいのよ」
七美とコゼットの答えは単純明快であった。実にわかりやすい。
「いい？」
「勿論」
「うん、まあ」
七美と彰子の返事はそれぞれ異なっていた。そこに二人の心境の違いがあった。
何はともあれ三人は壁を越えて学校の中に入った。昼はあんなに賑やかだった学校が見る影もなくしんと静まり返っている有様はえも言われぬものであった。
「それでさ」
七美はその中でコゼットに問う。
「何処なの？」
「こっちよ」
指差したのは体育館の方であった。体育館といっても幾つもあるがコゼットが指差したのは最も大きい第一体育館であった。

第十九話　もてない苦しみその四

「ああ、その体育館なの」
「そうよ。来て」
二人に対して言う。彰子と七美はそれを受けてコゼットについて行った。
ついて行くと何か詠唱のようなものが聞こえてきた。それだkで不気味さが増していく。
「何よ、これ」
「いや、私もこれは聞いたことがなかったわ」
コゼットは七美の問いに顔を顰めさせていた。
「何だろう、一体」
「最初は何だったのよ」
七美はコゼットに問うた。夜の学校の中は草花ですら化け物のように見える。
「体育館の中で一人バスケットしてる幽霊だったのよ」
「まあ定番って言えば定番ね」
「けれどこれって」
コゼットはその詠唱に顔を顰めざるを得なかった。
「何なんだろう」
「まあ碌でもないことやってるのは確かね」
七美は直感でそう述べた。
「悪魔崇拝者か何かでしょうね」
「それって大変なことじゃないの？」
彰子がそれに怪訝な顔をして問う。
「生贄とかやってたら」
「それよね。動物虐待よね」
この時代では悪魔崇拝は問題にはならない。悪魔というものを調べていけばキリスト教のそれとはまた違う神であることがすぐにわ

かるからだ。実際には彼等は悪ではないのだ。もう一つの善であると言ってもいい。少なくともミルトンの失楽園にある悪魔達はどう見ても悪ではない。

彼等がこの時代で問題になるのは生贄というものである。大抵の悪魔崇拝者達は単なる古代宗教の復活やキリスト教へのアンチテーゼとして信仰しているが原理主義者は何処にでもいるもので生贄にこだわる者達もいることはいるのである。それが問題なのだ。

「そうよね。まあそれをやってなくても」

「不気味そのものよ」

七美もコゼットも述べる。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか」

「もっととんでもないのが出るか」

「言うわね、コゼット」

七美はここでコゼットの言葉に突っ込みを入れた。もう体育館に忍び込んでいる。

「よくぞここで」

「リラックスしないと」

それに対するコゼットの返答もいい。

「いざって時に硬くなってたら困るでしょ」

「まあね」

「それでよ」

コゼットはそっと中を覗き込む。

「何がいるのかしら」

「何かこの詠唱って」

「変じゃない？」

七美と彰子はその詠唱を聞いて呟いた。それは確かに異様なものであった。

「エロイムエッサイムエロイムエッサイム」

まずは普通の詠唱である。

「エコエコアザラクエコエコアザラク」

これもまた普通であった。
「ジュゲムジュゲムゴコウノスリキレ」
よく聞けば普通ではない。
「ゴマフアザラシモンクアザラシ」
いきなり訳がわからなくなった。
「クロネコヤマトノタッキュウビン」
「何て言ってるかわからないわよね」
七美は中を覗きながら呟く。奥では灯りが灯り変な集団が見えていた。
「そうね。何よこの呪文」
コゼットにも何が何だかわからない。
「滅茶苦茶じゃない」
「昔の日本語かしら」
彰子が首を傾げて呟いた。
「これって」
「そうなの？これ」
「ううん、自信ない」
といっても一千年も前の言葉なのではっきりしたことは言えない。
それどころか日本語ではなさそうなものまで混じっていた。
「アブラカタビラアラビレチャブレ」
「・・・・・とにかくさ」
コゼットは言った。
「見てみましょう、何がいるのか」
「そうね。絶対に何かいるわよね」
七美がそれに頷く。
「それじゃあ」
「一体何が」
そっと除いてみる。するとそこには訳のわからない異形の集まりがいた。
「・・・・・何あれ」

七美は最初自分が見ているものが何なのかわからなかった。見ればそこには全身を法衣で包み頭を三角形のフードで覆った者達がいたのだ。色は赤であった。

「今こそ我等の悲願を達成する時ぞ！」

「もてる者、幸せなカップルに制裁を！」

「・・・・・ああ、奴等ね」

コゼットはそれを見て彼等が何者なのかを悟った。

「本当にいるとは思わなかったけれど」

「嫉妬団よね」

「そうね」

コゼットは冷めた目で七美の言葉に答えた。

「間違いないわね、あれは」

「噂じゃなかったんだ」

見れば七美の目も冷めていた。二人の目はこれ以上になく冷めたものである。

「で、あの中にあいついると思う？」

「あいつって？」

コゼットは七美に問う。

「決まってるじゃない。カムイよ」

「ああ、あれね」

冷めた言葉が続く。

「絶対いるわね」

「そうよね、間違いなくね」

「あの」

彰子が二人に囁いてきた。

「何？」

「何か変なことしだしたんだけれど」

「変なこと！？」

「うん、ほら」

そっと指差す。すると嫉妬団の者達は呪文の詠唱を終え何か変な

ことをはじめた。

第十九話　もてない苦しみその五

「まずは猫の毛」
「うん」
巨大な鍋の中に毛を数本入れた。
「プテラノドンの爪」
「よし」
次に爪を。
「ゼウグロドンの皮」
「美味かったな」
「ああ、ベーコンが特にな」
やけに分厚い皮を。ちなみにこの時代鯨はどの国でも食べられるがゼウグロドンのような昔鯨類も普通に食べられるのである。他にはイルカも食べたりする。
「ウシガエルの骨」
「何かさ」
彰子は彼等の不気味な儀式を見ながら述べる。
「魔女のあれみたいね」
「あれで何作るつもりかしら」
「さあ。闇鍋みたいよ」
コゼットが七美に言う。
「闇鍋！？」
「ほら、他にも色々と入れだしたじゃない」
「あっ、本当」
見ればその通りだった。何か次から次に食べ物を入れていく。虫や雑草まで入れているからとてもまともな鍋には見えはしないが。
「糞っ、何でこんなにまともなものが揃わねえんだ」
「あいつやっぱり」
中からカムイの声が聞こえてきた。七美はそれを聞いて呟く。

「いたんだ」
「予想通りね」
「そうね」
「どうなってるんだよ、本当によ」
三人のクラスメイトに見られているとも知らず馬鹿話をしていた。
「おかしいだろ」
「おかしいも何もよ」
中の一人が彼と思われるフードの男に語っていた。
「これしかないから仕方ないだろ」
「この特製闇鍋を食えば俺達は」
彼等は言う。
「あのバカップル共を懲らしめる無限の力を手に入れられる」
「そうだぞ、その為には仕方ないだろう」
「本当にこれで力が手に入るんだな」
「ああ」
誰かがカムイの声に応えた。
「間違いない」
「わかった。それじゃあ食うか」
「よし、皆入れたしな」
「食うとしようぜ」
「よし」
その不気味な闇鍋を食べはじめた。何やら見ているだけで不気味なものがある。
「食べはじめたね」
「ええ」
七美は彰子の言葉に応えた。
「何なんだろ、あの闇鍋」
「さあ。どちらにしろ碌なものじゃないわよ」
コゼットが言う。彼女もそれだけは察しがついたのだ。
「まあこれ以上見ても何の利益もないみたいね」

「そうね」
七美はコゼットの言葉に頷いた。それから彰子にも言った。
「帰る？」
「帰るの？」
「だってこれ以上見ても何もなさそうだし」
とりあえず何のメリットもないであろうことは彰子も薄々わかったような気がしてはいる。
「帰ろう。それでさ」
「うん」
彰子は七美の言葉に頷く。
「とりあえず何か食べる？」
「何かって？」
「ラーメンでも」
「ラーメンなの」
コゼットはそれを聞いて何か考えるような顔を見せてきた。
「嫌なの？」
「ううん、そうね」
ここで彼女は少し考える顔を見せてきた。
「ラーメンもいいけれどさ」
「あんた宗教的にはそんなに五月蝿くはなかったんじゃ？」
「まあね」
ラーメンのスープにはよく豚骨が使われる。コゼットはイスラム教徒なのだ。連合ではかなり寛容とはいえやはり豚肉やその関連を口にするのはイスラム教徒としてはまずいのである。
「だったらいいじゃない」
「だからさ」
それでも彼女は言う。

第十九話　もてない苦しみその六

「ラーメンは嫌いじゃないのよ。豚骨でもね」
「じゃあ何が不満なのよ」
「他のもどうかなあって」
「他の？」
「そうよ。うどんとか」
「あっ、それもいいわね」
七美はそれを言われて納得したかのように頷いてきた。
「おうどんいいわよね」
「そうでしょ。今夜結構冷えるし」
「それじゃあさ。私のお家で食べようよ」
「あんたん家で？」
二人は彰子の申し出に顔を向けてきた。
「うん。私おうどん作るの得意だしさ。明香も好きだし」
「ああ、妹さんね」
「そうだよ。だから四人でどう？」
「まあ誘ってくれるなら」
「ねえ」
七美もコゼットもそれに異論はなかった。むしろ思わぬ嬉しい誤算であった。
「じゃあさ。行こう」
「ああ」
「じゃあそれで」
「天麩羅うどんでいい？」
「えっ」
それを聞いた七美の目の色が忽ち変わった。
「天麩羅うどんって！？」
「どうかな、それで」

「それでってあんた」
何かさらに態度が変わっていく。
「いいの、それで」
「うん。コンビニで天麩羅買って」
「最高じゃない。天麩羅うどんが食べられるなんて」
「ちょっと七美」
コゼットは何か急に様子が変わった七美に声をかけた。
「どうしたのよ、急に」
「いや、あたしね」
七美はそれに応えて言う。
「これでも天麩羅は大好きでさ。それにうどんもね」
「そうだったの」
これはまた意外な好みであった。それにしても本当に好きそうである。
「他には天ざるも好きなんだよ。あれは最高の組み合わせだね」
「何かジャパネスクね」
「そうさ、和食の醍醐味ってやつだよ」
七美は左目を閉じて会心の笑みで言う。
「じゃあコゼットちゃん、行こう」
「そうね。それじゃあ」天麩羅うどんへ」
「いざ出発進行」
こうして怪しげな闇鍋から離れて天麩羅うどんへと向かって行った。その後ろで行われているその闇鍋からは記憶から完全に消え去ってしまっていた。

翌日。天麩羅うどんを心ゆくまで堪能した三人は教室でカムイに出会った。
「よお」
何か彼は異様にげっそりと痩せてきた。
「・・・・・どうしたのよ、また」

七美は怪訝な目で彼に声をかける。
「いや、別によ」
「別によって」
言おうとしない彼に突っ込みを入れる。
「何もなくて一日でそんなに痩せないでしょ。何があったのよ」
「だから何もねえって言ってるだろ」
カムイはムキになって言い返す。
「放っておいてくれよ」
「まあいいけど」
七美もそれ以上は聞こうとはしなかった。
「身体には気をつけなさいよ」
「ああ」
それで彼との話は終わった。だがコゼットとはこっそりと話した。
「絶対にあの闇鍋よね」
「そうよね」
二人は言い合う。
「あれで何するつもりだったのかしら」
「さあ」
コゼットは首を傾げてそう述べる。
「わからないわよね」
「そうね。けれどまあ」
ここで七美は言う。
「どうせ馬鹿なことでしょうね」
「そうよね。カップルを不幸に陥れる魔力を手に入れるとかでしょうね」
「丸っきり馬鹿ね、それって」
「けれど実際に馬鹿だから」
コゼットは言う。
「あんなことしてるんでしょ」
「それもそうか」

「そうよ。とはいっても」
ここで彼女ははたと気付く。
「私も今フリーなのよね」
「あっ、私も」
七美もその話題になってようやく気付く。
「彼氏、いないかしら」
「とりあえずスポーツマンなら誰でもいいけれど」
何だかんだ言って自分達も結構寒い二人であった。

もてない苦しみ　　完

２００６・１１・３０

第二十話　転校生は美少女だけれどその一

転校生は美少女だけれど

朝学校に来るとジュディが皆に対していきなり話をしてきた。
「一体何？」
それにセドリックが尋ねる。
「このクラスにね」
「うん」
「転校生が来るのよ」
「転校生！？」
皆それを聞いて驚きの声をあげる。
「そうよ。それもね」
「ええ」
「とっても可愛い娘なんだって」
「へえ」
「それはまた」
「こら、そこ」
ジュディはニヤリと笑ったフックとジョルジュに突っ込みを入れる。
「あんた達は大人しくしていなさいよ」
「何かいきなり失礼なことを言うな」
フックはそれに不満な様子を見せる。
「可愛い女の子なら声をかけるのが礼儀じゃない」
「そうだよな。そして記念撮影に」
「あんた達ねえ」
ジュディはそんな二人に対して呆れ顔を見せる。
「そんなのだから写真部の汚れたエースとかタイの変態とか言われるんでしょ」
「ねえねえ、聞いた？」

「汚れたエースって」
ジョルジュはそう言われて何と言い返していいかわかりかねた。
「そりゃ幾ら何でも」
「いつも女の子の写真ばかり撮ってるからだよ」
セドリックがにこりとあどけない笑みを浮かべて容赦ない突込みを入れる。
「ジョルジュ君も気を着けた方がいいよ」
「あ、ああ」
にこりとした笑みでストレートに言われてさしものジョルジュも沈黙してしまった。
「ううむ」
ジュディはその容赦の無い突込みを見て心の中で唸った。
「やっぱりセドリックは容赦ないわね」
「そうだな」
それにロザリーが頷く。流石に突っ込みの厳しさではセドリックに勝てる者はいなかった。
「それでさ」
ロザリーはあらためてジュディに問う。
「どんな娘なんだ？」
「ちょっとどんな娘までは」
ジュディは首を傾げて応える。
「わからないのよ」
「そうなのか」
「とりあえずマウリアから来た娘らしいわ」
「マウリアから！？」
皆それを聞いて顔を顰めさせた。顰めさせていないのは彰子だけである。
「そう、マウリアから」
「何かなあ」
「ああ」

皆急に難しい顔をしだした。フックもジョルジュもそれまでの明るさや期待感が消えていた。
「大丈夫かな」
「どんな娘が来るやら」
「何か皆急に様子が変わったけれど」
「そりゃまあそうでしょ」
ジュディは彰子に対して言った。
「マウリアからよ」
「うん」
「それだけで充分でしょ」
「そうなの」
「そうなのって」
ジュディの方が驚く。
「マウリアなのよ」
連合ではマウリアは異世界扱いとなっている。異次元のような認識なのだ。
これは単に住んでいる世界が違うというだけではない。文明が違うということである。その為連合ではそうした認識になっているのである。
「あの恐ろしい映画」
マウリア映画のことである。異常に長くストーリーの脈絡がない。何でも入っていていきなり何処からともなく現われた人達と一緒に踊りだす。その異様さは麻薬とも謳われる。
「それに独特の考え。絶対に何かあるわよ」
「それ偏見じゃないかなあ」
彰子はそれに対してポツリと述べた。
「幾ら何でも」
「そう言われたらね」
ジュディもそれは認めた。
「そうかも知れないわね」

「折角クラスメイトになるんだしさ」
彰子は純粋そのものの声で述べる。
「そんな偏見持たずに仲良くやろうよ」
「そうか」
「そうよ」
何か場が急に和んできた。
「だからね。ここはリラックスして」
「じゃあ」
それを受けてクラスメイト達はリラックスしだした。
「何も妖怪変化が来るわけじゃないんだし」
「気楽に行くとするか」
そう言って朝のホームルームを待つことにした。暫くすると金髪碧眼の若い奇麗な先生がやって来た。マリア＝ヴェルテンフルスという。ケベック人でこのクラスの担任でもある。

第二十話　転校生は美少女だけれどその二

まだ新任の先生であるが物の弾みでこのクラスの担任であった。例え側に特撮ものの悪役が出ても動じないような人物である。かなりの傑物なのか変人なのかは意見が分かれるところだ。

「皆さん」

「あっ、先生だ」

「諸君、席に着こう」

学級委員のギルバートが声をかける。それを受けて皆席に着いた。

挨拶の後で先生はこう話を出してきた。

「まずは皆さんにお知らせしたいことがあります」

「おっ」

「じゃあ」

「転校生を紹介します」

「やっぱりね」

「話は本当だったんだ」

クラスの面々は先生の話を聞いてにこにこと笑っていた。どんな娘が来るのか楽しみにしているのである。

「それじゃあどうぞ」

先生が教室に入るように言う。そして黒く長い髪に森の様に澄んだ緑の瞳を持つ奇麗な少女が入ってきた。その褐色の肌も細かく実に美しかった。青緑のドレスに白いソックスも実に似合っている。

「おおっ」

「これはかなり」

男達は彼女を見てまずは唸った。

「予想以上だよな」

「ああ」

口々にそう囁き合う。

「こんな奇麗な娘だったなんてね」

「流石にねえ」
女組も同じだ。誰もが予想以上の事態に驚きを隠せなかった。
だが。予想以上の事態はこれで終わりではなかった。
「なぬっ！？」
「何、この人達」
しずしずと歩く少女の後ろから屈強な大男とメイドがついて来たのである。その二人を見てクラスの面々は目が点になってしまったのだ。
「はじめまして」
少女は教壇の中央に着くと合掌の礼をしてから挨拶をした。マウリア式の礼である。
「セーラ＝シヴァです。マウリアから来ました」
「セーラさんよ」
先生も説明する。
「皆さん、宜しくお願いします」
「え、ええ」
「こちらこそ」
クラスの面々はとりあえずは挨拶を返した。
「セーラさんはこちらに留学することになったから。皆宜しくね」
「あの」
ダイアナが戸惑いながらも手をあげてきた。
「ちょっと聞きたいことがあるんだけれど」
「どうしたの、ダイアナさん」
先生がそれに尋ねる。
「セーラさんだけよね、転校生って」
「はい」
「それじゃあさ。その」
実に言いにくいが言わざるを得なかった。
「その、後ろにいる人達は何なのかなあって」
「従者兼お庭番です」

「メイド兼妖術使いです」
その二人が名乗ってきた。
「お庭番!?妖術使い!?」
皆その異様な単語に目を顰めさせた。
「あの、それって」
「映画とかじゃないよね」
誰もが今聞いた単語を信じようとしない。平気な顔をしているのは彰子と正孝だけです。皆それがジョークであることを願った。しかしそれは儚い夢であった。
「いいえ」
セーラはにこりと笑ってそれを否定した。
「その通りです」
「その通りって」
「じゃあ」
「はい」
まずは屈強な大男が名乗り出てきた。

第二十話　転校生は美少女だけれどその三

「私の名はラムダス＝アグニ」
流暢な銀河語で聞かれもしないのに名乗る。
「シヴァ家に代々お仕えするお庭番です」
「代々って」
マウリアにはまだカーストの名残りが残っている。そのせいでこうした代々仕えている者もいるのである。
「そしてガードマンでもあります」
「そうなんですか」
「はい」
彼は答えた。
「そして私は」
今度はメイド服の少女が名乗ってきた。黒い肌にそのメイド服が似合って可愛い。外見だけは。
「ベッキー＝スーリア。セーラ様専属のメイドです」
「専属、ねえ」
「それだけはいい話だよな」
「そうだな」
男達の中にはそれには頷く者もいた。もっとも他の部分に関しては別だが。
「そして妖術使いです」
これである。耳から消し去りたい言葉であった。
「例えばですね」
「あの、ベッキーさん」
先生が慌てて彼女に声をかける。
「若しかしてここで妖術を？」
「ええ、そうですけれど」
ベッキーはしれっとした顔でそれに返す。

「それが何か」
「いえ、それはね」
先生は引き攣った顔でそれに応える。
「幾ら何でも、その」
「大丈夫です、穏やかな術ですから」
ベッキーはにこりと笑ってそんな先生に対して言う。
「死者を蘇らせて踊ってもらうだけですから」
「おい、それって」
クラスの面々はそれを聞いて不吉な顔で囁き合う。
「あれだよなあ」
「ああ、ブードー教」
この時代にもある宗教だ。ハイチを中心としてありキリスト教とアフリカ古来の宗教が混ざり合った独特の教義と儀式を持っている。その中に死者を使役するゾンビというのがある。これはまりにも有名である。
「それに踊ってもらうだけですから」
「ちょっと待って下さい」
ここで彰子が突っ込む。
「はい」
「火葬なんですけれど、連合は」
「あら」
「いや、彰子ちゃんそういう問題じゃないぞ」
「そうだよ」
クラスメイト達はそのぼけた突っ込みに内心突っ込み返した。
「それじゃあ死体さん達は」
「御安心下さい」
だがベッキーは負けてはいなかった。
「骸骨になってもできますから」
「骸骨って・・・・・・」
「まさか」

「それでは」
ベッキーの目が不気味な光を放って来た。そして何やらよくわからない言葉で呪文の詠唱をはじめる。
「・・・・・・・・・・」
「さあ出でよ冥府の者達と申しております」
セーラが通訳をする。
「・・・・・・・・・・」
「我が元に集え。そして再び動き出さんと」
「いや、それはいいから」
皆説明を続けるセーラに対して言う。
「その呪文と妖術止めさせて」
「今はいいから」
「あら、そうなのですか」
セーラはそれを受けて目をぱちくりとさせた。
「それでは。ベッキー」
「はい」
ベッキーは呪文の詠唱を止めてそれに応える。
「ストップです」
「わかりました。では」
ベッキーはそれを受けて妖術を完全に止めた。教室を何時の間にか覆っていた暗雲も消え平和が戻った。
「やれやれ」
「一体どうなることかと」
「それではあらためて」
セーラはそんな皆をよそにまた挨拶をはじめた。
「宜しくお願いしますね」
「ああ、こちらこそ」
「宜しくね」
「はい」
やっとまともなにこやかな挨拶になった。だが問題はまだ残って

いた。
「あの、シヴァさん」
先生がセーラに尋ねてきたのだ。
「はい」
セーラは澄んだ緑の目を先生に向けた。本当に森の木々の様に奇麗な目である。
「一つ聞きたいことがあるのだけれど」
「何でしょうか」
「転校生は一人になっているのだけれど」
「はい」
セーラはやはりここでもにこりと笑った。
「そうです」
「けれど三人いるのだけれど」
「はい、二人は従者ですから」
「あの、だからね」
話が噛み合わない。
「どうしてその二人がここにいるのか」
「御安心下さい、理事長に許可は取っています」
「ええと理事長っていうと」
「国防長官のあの人？」
「確か」
皆記憶を辿る。この学園は八条家が理事を務め八条義統が理事長をしているのである。数多い彼の肩書きの中の一つでもある。
「はい、そうです」
セーラは答えた。

第二十話　転校生は美少女だけれどその四

「私の従者ですので。非常に心優しい者達です」
「いや、そういう問題じゃないような」
「そうよねえ」
皆そうは言うが何と言っていいのかわからないのだ。そもそも学校の中に従者を連れて来る人間なぞ今までいなかったのだ。そこも破天荒な話であった。セーラは気付いてはいないが。
「何か」
「けれど」
だが口ではどうしても説明できない。結局そのまま話は進みセーラはクラスの一員になった。だがその後ろには常にラムダスとベッキーが控えていてかなり異様であった。
セーラはかなり優しくて穏やかな性格であった。それだけではなく勉強もできたしスポーツもよかった。まずは非の打ち所の無い性格であった。しかし」
「ううん」
クラスメイト達の戸惑いはまだあった。
「噂には聞いていたけれど」
「あれがマウリアなのね」
皆お昼に唸ってしまっていた。
見ればセーラは従者を後ろにして楽しく食事を採っている。その食事は豪勢なフルコースであった。
わざわざシェフが学校にまで来てセーラがそれを食べているのだ。学校の中にあるとは思えない異様な光景であった。
「ここ、学校なのよね」
ダイアナが首を傾げて言った。
「レストランじゃなくて」
「そうよ」

それに蝉玉が答える。
「言うまでもないじゃない」
「そうよね。じゃあ」
「私も目の前のことが信じられないのよ」
蝉玉はコメントを断った。
「そもそもどっから出て来たのよあの人達」
「さっきベッキーさんが何か得体の知れない言葉囁いていたけれど」
スターリングがそれに注釈を入れる。
「それじゃないかな」
「妖術で呼び寄せたのね」
「もう何が何だか」
「如何でしょうか、お嬢様」
これまた何処からか現われたｈ執事がセーラに尋ねてきていた。
「今回の食事は」
「非常によろしくてよ」
セーラはそれににこりと笑って返す。
「特にこの鶏肉の煮込み具合が」
「はい、昨夜から仕込んでいたそうです」
「そう、それでなのね」
「昨夜から!?」
「ちょっと待てよ、おい」
クラスの面々はそれを聞いてまた顔を顰めさせる。
「一体どういう時間になってるんだ!?」
「確かセーラさん転校してきたのって今日だし」
「いや、昨日から用意していたんだろ」
「けれどよ」
「それではお嬢様」
皆のそんな話をよそにセーラと執事は食事でのやり取りを続ける。
「デザートは何を」
「アイスクリームがいいわね」

最後はデザートであった。
「そうね。バニラがいいわ」
「畏まりました。それでは」
「どっからアイスクリーム出て来ると思う？」
「さあ」
もう皆どうでもよくなってきていた。
話しているうちに急にアイスクリームが出て来ていた。銀の皿に乗って奇麗なデコレーションまで為されている。急に出て来たのだ。
「こちらですね」
「ええ」
相変わらずセーラと執事のやり取りは続く。

第二十話　転校生は美少女だけれどその五

「それでは」
「奇麗に飾ってあるわね」
セーラはそのアイスクリームを見てうっとりとなっていた。
「まずは目で楽しんで頂きたいと思いまして」
シェフが述べた。
「そうだったの」
「如何でしょうか」
「素晴らしいわ」
セーラはうっとりとした目でそのアイスクリームを見続けている。
本当に目でそれを楽しんでいた。
「ここまでのアイスクリームはあまり見たことがないわ」
「お褒めに預かり光栄です」
「ところでさ」
そんなやり取りを見ながら蝉玉がスターリングに声をかけてきた。
「何？」
「調理室って随分遠くよね」
「うん」
別の校舎にある。とてもではないがかなり離れている。
「それでさ。どうして普通にああしてできたての溶けてもいないアイスクリームが出て来るの？」
「何でだろうね」
それが最大の謎であった。
「しかもね」
蝉玉はさらに言う。
「あったかい鶏とかも出たし。しかも随分手間がかかりそうなの」
「そもそもだよ」
スターリングはそこに付け加えてきた。

「あの調理室にあそこまでのフルコース作れるものあったっけ」
「初耳よ」
蝉玉はそれをすぐに否定した。
「そんなのある学校ってそうはないわよ」
「うちの学校って設備はかなりのものだよね」
「それでもよ」
彼女の声は少しムキになっていた。
「フルコースよ。しかも急にホイホイと出て来るなんて」
「やっぱり有り得ない」
「有り得ないどころじゃないわよ。絶対に何か変よ」
「そもそもさ」
スターリングはセーラの食事を見守りながら言う。
「うちの学校の調理室を使っているのかな、あの人達」
それも大きな疑問であった。
「どっからともなく出してるんじゃないかな」
「ううん」
言われてみるとそんな気もする。
「そうかもね」
「そうだよね、何かさ」
「どっか別の場所で調理しているみたいよね」
「それでそのどっかから出て来て」
何か嫌な考えになってきているのが自分達でもわかる。それが凄く嫌だった。
「あのさ」
「だよね」
二人は言い合う。
「これがあのベッキーさんの」
「妖術じゃないかしら」
「うふふ」
ベッキーはそんな二人の話を聞きながら謎めいた微笑みを浮かべ

ていた。
「果たして真実は如何に」
セーラはそんな彼等をよそに楽しい食事を続けていた。しかしそれはある意味非常に謎の多い恐ろしい食事であった。だが彼女はそんなことはお構いなしであった。

転校生は美少女だけれど　　完

２００６・１２・４

第二十一話　想い人は誰！？その一

想い人は誰！？

彰子は本当におっとりした女の子である。個性派しかいないこのクラスの中ではそのおっとりさで個性を発揮していると言っていい。

「やっぱり彰子ちゃんはさ」

クラスでは遊び人とされているダイアナが述べる。

「お嬢様なのよね」

「そうそう」

それにジュリアが頷く。彼女も結構遊ぶ系列だ。

「お嬢様はやっぱりおっとりで」

「例外もいるにはいるけれど」

「って私？」

ペリーヌが二人の話を聞いて自分を指差してきた。

「若しかして」

「ええ、そうだけれど」

「わかった？」

「随分失礼なこと言ってくれるわね」

ペリーヌはその話を聞いて不機嫌な顔を見せてきた。

「失礼しちゃうわ」

「けれどさ」

「同じおっとりでも」

ここで彼女達の目は別のお嬢様に向けられた。

「訳わからない世界の人もいるし」

「あんたはまだわかるからいいわよ」

その視線の先にはセーラがいた。彼女は従者二人を連れて何か得体の知れないオーラをその全身に纏っていた。

「何してるんだろね」

「さあ」

何かわかったら怖い気もするので言葉もかけられない。最早セーラはクラスでも最高級の変人としてその地位を築いてしまっていた。
「それでよ」
ジュリアが話を戻してきた。
「彰子って何か遊んだような話がないわよね」
「そういえばそうよね」
ダイアナもそれに頷く。
「そういう話は本当にないわよね」
「ああした性格だからかしらね」
ペリーヌも言う。
「けれどさ」
彼女はそのうえでまた述べた。
「誰にも興味ないなんてことはねえ」
「幾ら何でもね」
ジュリアとダイアナは言い合う。
「有り得ないわよね」
「けれどさ、ひょっとしたら」
ここでダイアナはくすりと笑ってきた。
「何？」
「レズなのかも、彼女」
「えっ！？」
ダイアナのその言葉にジュリアとペリーヌは一瞬言葉を止めた。
それから少し時間を置いて言い返した。
「まっさかあ」
「有り得ないわよ」
「そうかしら」
だがそれでもダイアナは言う。
「うちにだってビアンカがいるしさ、同性愛者」
連合では至って普通なのである。だから有り得ないというわけでもない。ちなみに同性愛に関してはエウロパでも同じである。同性

愛者の総統補佐官までいる位である。
「ひょっとしたらよ」
「ひょっとしたら」
「それじゃあさ」
ここでペリーヌはとんでもないことをイメージしてきた。
「明香ちゃんとの姉妹なんてどう」
「ああ、何かそれって」
それを聞いたジュリアが面白そうに応えてきた。
「何か絵柄的にはいいわよね」
「美人姉妹のレズビアン。これって中々」
「とんでもない背徳ね」
しかしそれはアンによって全否定された。
「何、それ。近親相姦のうえに同性愛!?とんでもないじゃない」
「ま、まあそうだけれど」
「ほんのジョークよ、ジョーク」
「言っていいことと悪いことがあるわよ」
アンは腕を組んで怒りに満ちた顔で二人に言った。かなり本気であった。

第二十一話　想い人は誰！？その二

「そんな背徳はね、イスラエルじゃ即刻裁判よ」
「そうなの」
「そうなのって。決まってるでしょ」
えらく感情的になってきていた。
「近親相姦も同性愛も。物凄く悪いことじゃない」
普通になっているとはいえやはり例外もある。イスラエルはその例外に当てはまるのである。これはイスラエルだけでなくユダヤ人全体に言えることである。
「死刑になってもおかしくないわ」
「じゃあさ」
ダイアナがそのおかんむりの彼女に問う。
「それを漫画に描いたら？」
「間違いなく刑務所行きね」
「やっぱり」
イスラエルでは当然のことであるようだ。
「とにかくね。そんな嫌らしい妄想は私の漫画では絶対に描かないからね」
「あくまで清純に？」
「そういうこと」
これまたきっぱりと言い切った。
「私が描くのは男の子と女の子だけよ」
「それじゃあさ」
ダイアナはそれを受けて話を変えてきた。
「彰子ちゃんの彼氏って誰か思いつく？」
「彰子ちゃんの！？」
問われたアンは急に怪訝な顔になった。
「そう。誰か思いつく？」

「また難しいこと言うわね」
アンはそう言葉を返した。
「彰子ちゃんよね」
「ええ」
「ええとねえ、誰か候補になりそうなのって」
「カムイとか洪童とかは？」
「あの二人は問題外」
アンはジュリアがあげたその二人をあっさりと切り捨てた。
「如何にもって感じのもてない君じゃない」
「またえらくきついわね」
ペリーヌがそれに突っ込みを入れる。
「キャラクターとしては面白いけれどね」
「じゃあフックとかジョルジュは？」
「軽いタイプも似合いそうになりわね」
アンはダイアナにそう返す。
「確かに」
「かといって彼女いるタイプはねえ。やっぱり」
アンはやはりお固い。そういうのは不許可であった。
「何か急に減ったわね」
「そうね。あっ」
ここでペリーヌが気付いた。
「そうだ。ギルバート」
「却下」
だがこれはアンが即答した。
「あらっ」
「絶対に合わないわ」
「そうかしら」
だがペリーヌは自分ではそうは思わなかった。
「意外と似合うかも」
「いいえ、絶対に似合わないわ」

だがアンはムキになってそう言い返す。
「絶対にね」
「それはいいけれど」
そんなアンを見てダイアナが言う。
「何でそんなにムキになってるの？」
「そうよね」
ジュリアもそれに応える。
「何かさ。急に」
「おかしいわよね」
ペリーヌも言ってきた。
「どうしたのよ、急に」
「そうよ、ギルバートとあんたは」
二人の仲の悪さというかアンが彼を嫌っているというのは傍目ではよくわかることであった。
「それなのに」
「何でそんなにムキになるのよ」
「そ、それはね」
顔が少し赤くなって横を見ていた。
「あんな暑苦しい性格でしょ。だからそうはもてないかなって」
「結構ルックスはいいけれどね」
「そうよね」
だがこういうことにかけてはダイアナやジュリアの方が上であった。さしものアンも劣勢である。
「別にもてないってわけじゃね」
「そうそう。あの性格だって慣れたらもしかしてね」
「いや、それはないわよ」
けれどアンはどうしてもそれを否定する。
「何があっても」
「やっぱりおかしいわよね」
ペリーヌもアンの言葉を妙に感じだしていた。

「今のあんたの様子」
「同感」
「もしかして何かかくしてる？」
「いえ、いえ別に」
ジュリアにもダイアナにも言われて劣勢に陥る。しかも見ればアンは三人に比べて小柄なので余計に苦しい立場に追い込まれてしまっている。

第二十一話　想い人は誰！？その三

「何もないわよ」
「そう、まあいいわ」
「それでさ」
話が戻ってきた。
「とにかく彰子ちゃんよ」
ペリーヌが仕切りなおしてきた。
「あの娘の好きな人って誰か」
「いるのかどうかっていう時点から問題よね」
「そうなのよねえ」
ペリーヌはジュリアにそう述べた。
「相手は誰か」
「ここはオーソドックスに男の子に絞っていく？」
ダイアナが提案してきた。
「どう？」
「それが妥当ね」
アンがそれに頷く。
「普通に考えて」
「それでよ」
ペリーヌがまた言ってきた。
「彼女の趣味、わかる？」
「いえ、全然」
「私も」
「考えたこともないわ」
だがそれは誰も知りはしなかった。だからこそ話題になっているのでもある。
「そもそも興味があるかどうかって話だったし」
「そうよねえ」

ジュリアとダイアナはまた言い合う。
「とりあえずさ」
ここでアンが提案してきた。
「彼女を見ていこうよ」
「そうね」
三人はアンの言葉に頷いた。とりあえずはそれでいくしかないと思ったからだ。
「それが一番ね」
「じゃあ」
こうして四人の女の子達が彰子をじっと見ることになった。その結果面白いことが結構わかった。
「やっぱりおっとりしているわね」
「そうね」
調べた結果をそれぞれメモ帳に書いていく。教室の隅で四人固まって何かと話をしている。
「それで勉強はできる」
「スポーツもそこそこ」
「持ってるものはいい」
「やっぱりお嬢様ね」
「そうね」
彰子の細かいところまで調べていた。半分ストーカーである。
「妹思いで」
これは事実である。彰子と明香は仲がいいことで知られている。姉も妹もお互いのことを常に気にかけている。そうした姉妹なのである。
「家事は料理が得意」
「お裁縫もね」
意外と万能タイプな彰子であった。しかし。
「背は低いわね」
「そうね。アンジェレッタ程じゃないけれど」

アンジェレッタはクラスで一番の小柄であるとされている。その小ささは最早学校中に知れ渡っている。小学生とまで言われてしまう程だ。

「小さいっと」

「胸もね」

実は彰子は所謂貧乳である。

「ないわよね」

「ええ、全然ね」

「これは私の方が勝ってるかしら」

ダイアナはここで自分の豊かな胸を見下ろす。

「それも圧勝ね」

「あたしだってそうよ」

「私だってね」

ジュリアもペリーヌもそうであった。だがアンはそうではなかった。

「くっ・・・・・・」

しかし彰子よりは大きかったのでまずはそれに満足することにした。それから安心したように言った。

「とにかくさ」

「ええ」

三人はアンに応える。

「まずは調べてみましょうよ、もっと」

「もっと？」

「そうよ、結局わかったのはプロフィールだけだし」

アンはさらに言う。

「もっとね。どうかしら」

「そうね、それじゃあ」

「調べてみましょう」

こうして四人の彰子に対する調査がはじまった。果たして彼女は誰を好きなのか、そもそも好きな人がいるのか、今それについても

謎が明かされることとなった。

想い人は誰！？　　完

2006・12・7

第二十二話　彰子の秘密その一

彰子の秘密

四人の彰子への追跡調査がはじまった。それは彼女に知られないようにこっそりとであった。

筈だったが案外そうでもなかった。四人は結構おおっぴらにやっていた。

「彼でもないわね」

「そうね」

「一体何やってんだ、あいつ等」

クラスメイト達はクラスの端で何かと話をしている四人を見て呟く。

「漫画でも音楽でもねえな」

「じゃあ何だ？」

「何やってんのよ、あんた達」

皆を代表するかの様にジャッキーが四人のところにやって来た。

「誰かのこと調べてるの？」

「別に何も」

「あんたには関係ないでしょ」

だが四人はそう言ってジャッキーを遠ざけようとする。

「そういうことならさ」

だがジャッキーは話を聞いてはいない。

「あたしも協力するよ」

「へっ！？」

「あんたが！？」

四人の声が急に変わった。何か思い切り疑う声であった。

「そうよ。この現代のミニー＝ウェストがね」

「何処がよ」

「しかもまた名前間違えてるし」

彼女にとって何かを覚えるというのは駱駝が針の穴を通るよりも難しい。
「とにかくあたしがいれば百人力」
全く話を聞いていない。
「任せておいてよ」
「俺もいるしな」
そこにテンボもやって来た。
「こういうのはやっぱりプロの仕事だぜ」
「推理研究会きってのエース二人がね」
「・・・・・・間に合ってるからいいわ」
アンがつれなく返す。
「別に」
「何だよ、それ」
テンボはそれを聞いて口を尖らせてきた。
「水臭いぜ、おい」
「折角あたし達が助太刀するっていうのに」
「ああ、それじゃあさ」
ダイアナはがんとして断るよりは婉曲的にいくことにした。
「あんた達にもお願い。じゃあね」
「よし！」
「行きましょう、テンボ！」
二人はそれを受けて気合を入れる。そしてすぐに教室を後にするのであった。
「これでよし」
ダイアナは教室を駆け去っていく二人の背を見送りながら呟いた。
「邪魔者はいなくなったわね」
「けれどさ」
それにジュリアが突っ込みを入れる。
「大丈夫なの、あの二人で」
「ああ、厄介払いだから」

彼女はそう返した。
「気にしなくていいわ」
「そうなの」
「そういうこと。断ったって引き下がるような連中じゃないでしょ」
「まあね」
言われてみればそうである。
「だからああやってね。やってみたのよ」
「そういうやり方もあるのね」
「けれどさ、ジュリア」
ペリーヌが彼女に声をかけてきた。四人はアンの机にそれぞれの椅子を持って来て囲んで話をしているのだ。
「何？」
「あんたの勘は今回どうなの？」
ジュリアの勘の鋭さを頼ってきたのだ」
「今のところないみたいだけれど」
「感じるところは感じるのよ」
左手の人差し指を唇に当てて述べた。
「それで？」
「いるわね」
目の光が鋭くなった。
「これは間違いないわ」
「そうなの」
「ええ、やっと勘が働いてきたのよ」
ジュリアは言う。
「その勘が教えてるのよ。彼女好きな人いるわ」
「そうなの」
アンがそれを聞いて真剣な顔で頷く。他の二人も同じ顔になっていた。
「それじゃあ問題は」
そのうえで話は続く。

「誰かってことね」
「そうね。けれど」
ジュリアはまた探る目をしてきた。
「ちょっと待ってね。また勘を使うわ」
そして目を閉じた。どうやら今日はかなり調子がいいようだ。
その勘が教えた。今彼女はそれを三人に伝えた。
「このクラスね」
「そう、このクラス」
「それじゃあ」
三人はそれを受けてクラスの中を見回した。当然ながら男組を見ているのである。
「ううん」
「数はいれど」
それでもどうにもピンとは来ないのだ。
「このクラスよね」
「ええ」
ジュリアは三人に答える。
「そうよ、あたしの勘ではね」
「そう」
「じゃあ間違いないわね」
ジュリアの勘は神懸り的である。だから三人もそれを信じて見回しているのだ。

第二十二話　彰子の秘密その二

だがどうにもぴんとこない。考えが煮詰まってきた四人は一旦教室を出て屋上で話をすることにした。

屋上には青い空が見える。四人はその下で校庭を見下ろしながら話をしていた。景色がかなりいい。

「それでさ」

まずはアンが口を開いた。

「誰か心当たりいる？」

「心当たりねえ」

ダイアナがその言葉に首を傾げさせた。

「そう言われても」

「あたしもそこまではね」

ジュリアの勘でもどうにも掴めないようであった。

「どうにも」

「たださ」

しかしここでペリーヌが言ってきた。

「彰子ちゃんの好みよね」

「そうよ」

アンがそれに頷く。

「だいじなのはそこよ。それさえわかれば」

「だったらさ」

ペリーヌはそれを聞いたうえでさらに言う。

「意外と絞れるんじゃない？あの娘の好みを知れば」

「そうね」

それにダイアナが頷く。

「だったらちょっと心当たりがあるわ」

「何、それは」

「妹さんよ」

ダイアナはアンにそう返した。
「ほら、彼女妹さんいるじゃない」
「あっ」
他の三人はダイアナの言葉を聞いて声をあげた。
「そうよ」
「妹さんがいたのよ」
やっとそれに気付いた。まさに灯台下暗しであった。
「妹さんに聞けばね」
「凄い手懸かりになるわね」
「そうよね」
言いだしっぺのダイアナもそれに頷いていた。
「それじゃあ」
「ええ、決まりね」
四人は互いに頷き合う。何時の間にかその位置が円になっていた。
「将を射るにはまず馬から」
「全てはそれからね」
「そうね」
「それじゃあそういうことで」
四人の次の動きは決まった。彰子の妹明香の下へ向かうことにした。その頃テンボとジャッキーは訳のわからない捜査をしていた。
「手懸かりはこの仏像の下だ！」
「あんたが知ってるわね！」
そこいらのお寺の仏像や通行人を指差して勝手なことを言っている。もう二人には誰も何も言いはしていなかった。完全に話から置いてかれていた。

四人はすぐに明香のクラスへ向かった。そこで彼女に会った。
「私にですか？」
「ええ」
「ちょっと聞きたいことがあってね」

四人は明香に対して言う。
「聞きたいことですか」
「そうよ」
「ちょっといいかしら」
「はい」
飛香は四人の言葉に頷く。そして校内の喫茶店で話をするのであった。
「別にね」
白いテーブルを囲んで話をしている。飲んでいるのはアンとジュリアが紅茶、ダイアナはコーヒー、ペリーヌはサイダー、明香は緑茶であった。銘々好きなものを頼んでいた。
「あんたに何かするってわけじゃないのよ」
アンが言った。
「はあ」
「それでね」
今度はダイアナが声をかけてきた。
「あんたのお姉さんのことで」
「姉さんですか？」
「そう」
ジュリアが言ってきた。
「ちょっと聞きたいことがあってね」
「それでこうやってね」
ペリーヌも言う。
「妹の貴女に聞きたいことがあって」
「何をですか？」
どういうわけか明香は身構えているようであった。
「その。聞きたいことって」
「実はさ」
アンが尋ねる。
「お姉さんって誰かと付き合ってるとか知らない？」

「そう、よかったら教えて」
「ちょっと」
アンとダイアナのストレートさにペリーヌが注意してきた。
「幾ら何でもストレート過ぎるわよ」
「あっ」
「しまった」
失敗に気付いたがもう遅い。このまま行くしかなかった。
「それでさ」
ペリーヌが作戦を決定してきた。開き直って尋ねる。
「よかったら教えてくれないかしら。タイプを」
「わかると思います」
「!?」
四人は明香の言葉に首を捻るだけであった。

第二十二話　彰子の秘密その三

「それだけです。私が言えることは」
「ええと」
「どういうことかしら」
四人は明香の言葉に訳がわからず顔を見合わせてしまった。それで考える顔を見せ合う。
「それだけです」
「ううん」
「あの」
訳がわからずまた問い直そうとする。
「それだけじゃさ」
「私が言えるのはここまでです」
だが明香はこれ以上話そうとはしなかった。
「姉さんのトラブルになりかねないから」
「いや、別にさ」
アンがその言葉に困った顔になる。
「私達は別にさ」
「ねえ」
ペリーヌもそれに応える。
「お姉さんに何かするつもりは」
「別に」
「それでもです」
だが妹としての言葉は強いものであった。
「私が言えるのは。もうこれ以上は言いませんので」
「そう」
「じゃあいいわ」
最後は明香の言葉に負けた。彰子も妹思いだが明香は明香で姉思いであった。だから姉にとって不利になるようなことは決して言い

はしない。四人は彼女のその固いガードの前に負けてしまったのであった。

しかしそれでも。ヒントらしいことは見つかった。

「見ればわかる、か」

クラスへの帰り道ダイアナは右手を自分の口に当てて考えていた。当然他の三人も一緒である。

「そこね、どうやら」

「そうね」

それにペリーヌが頷く。

「要は彼女を見ていくこと」

「そこにヒントがあると」

アンも応えた。四人の次の行動はかなり決まってきた。

「けれどさ」

ここでジュリアが目を光らせてきた。

「何か感じるのよね」

「来たのね」

ダイアナがその言葉を聞いて目を光らせてきた。

「その勘が」

「ええ」

ジュリア本人もそれに頷いてきた。

「感じたわ。クラスにいるって言ったわよね」

「そうだったわね」

「それでよ」

目の色がまるで虹の様にめまぐるしい。ジュリアの勘が何かを告げている証拠であった。

「彰子ちゃんの視線の先ね」

「視線の先」

「そう、そこ」

三人に対して答えた。

「そこにいるわね、その想い人は」

「じゃあ」
「ええ、まずは帰りましょう」
ジュリアは言う。
「クラスにね」
「わかったわ」
「じゃあまずは帰って」
「そう、話はそれからよ」
こうして四人はクラスに帰った。そして中に入るとすぐに彰子に視線を集中させた。当の本人はそれに一切気付いてはいない。相変わらずのほほんとした様子であった。
「さて、と」
アンが彼女を見ていた。他の三人も。
「それじゃあはじめようかしら」
「といっても見るだけだけれどね」
「それでわかるかしらね、本当に」
ダイアナとジュリアは何か不安げであった。
「さあ？けれど妹さんが言うんだしさ」
「ここはいっちょやってみるってことね」
「そういうこと」
アンがペリーヌに答える。
「まあ見てみましょうよ」
「視線の先ねえ」
「果たして誰なのやら」
四人は本当に騙されてみるといった感じで彰子を見てみた。ぼんやりとした様子にまず気付いた。
だが暫くしてアンが気付いた。
「むっ」
「どうしたの？」
「気付いたの？」
「多分ね」

ダイアナとジュリアにそう答える。
「成程ね」
その後で納得したように頷く。
「こういうわけだったのね」
「何か思わせぶりね」
「どうしたのよ」
「わかったわよ」
そして三人に対して言う。
「今の彼女見てみたらいいわ」
「今の彰子ちゃんを？」
ペリーヌが三人の中で最初に反応してきた。
「見ても・・・・・あっ」
ペリーヌも気付いた。
「そういうことだったのね」
「そうそう」
「すぐにわかることなの？」
ジュリアがそんな二人を見て尋ねてきた。

第二十二話　彰子の秘密その四

「何かあっという間に立て続けだったけれど」
「あんたならすぐにわかるんじゃないの？」
「そうね」
アンとペリーヌはジュリアにそう返した。
「その勘ならね」
「すぐにも。っていうか最初にわかるかな、って思ったんだけれど」
「そんなこと言われても」
その言葉にはバツの悪い顔をしてみせた。
「感じないものは感じないから」
「まあそう言わずに」
「見てみればいいわ」
だが二人はジュリアにそう言ってきた。
「すぐにわかるわ」
「すぐに、ねえ」
ジュリアにはそうは思えなかったがとりあえず自分の勘を信じて見てみることにした。するとすぐに彼女にもわかったのであった。
「ふうん」
「わかった？」
「ええ」
ペリーヌに答える。満足したような笑みを浮かべていた。
「そういうことだったのね」
「そういうことよ」
「勘でわかったみたいね」
「まあね」
にこにこと笑いながら述べる。
「ふうん、合っているって言えば合ってるかしら」
「合ってる、ねえ」

ダイアナはそれを聞いて怪訝な顔をしてみせた。
「どういうことなのかしら」
「今見たらいいわ」
今度はジュリアがダイアナに声をかけてきた。
「それで一発よ」
「一発？」
「そう、今」
そのうえで言う。
「見て」
「ええ」
ダイアナはそれに頷く。そして彰子を見てみるとすぐにわかった。
「ふうん」
ダイアナはそれを見て考える顔になった。納得したような、していないような顔であった。
「そうなるのね」
「意外？」
「私は別にそう思わないわね」
どうやらこれに関しては彼女にとっては想定の範囲内であるようであった。
「こんなものじゃないの？」
「あら、あんたはそうなの」
「まあね」
アンにそう返した。
「けれどさ」
ここでダイアナは他の三人が気付いていないことに言及してきた。
「どうしたの？」
「うん、肝心の彰子ちゃんだけれど」
彼女は言う。
「本人は気付いていないわね」
「あれっ」

「そうなの」
三人はダイアナからそれを聞いて目をパチクリとさせた。
「ええ、そうよ」
ダイアナは彰子を見たまま述べる。
「それはよくわかるわ」
「そうかしら」
三人はそれを言われてもどうにもわからず首を傾げさせていた。
ダイアナがどうしてそれがわかったかも考えが及ばないでいた。
「何でそれがわかるの？」
「目よ」
ペリーヌに返す。
「目！？」
「そう、目よ」
「ええと」
ペリーヌはダイアナにそう言われてもどうしても納得いかなかった。
「そうは見えないけれど」
「まあこれはね」
ダイアナはそれに答えて述べる。
「慣れないとわからないわ」
「あのさ」
たまりかねたジュリアが次に尋ねてきた。
「どうしてそれがわかるの？」
そう問う。
「それも目でなんて。見たけれどさ」
「目の光でよ」
ダイアナはそう答えた。
「それでわかったのよ」
「そうなの」
「ええ」

じっと彰子を見たまま答える。どうやらこれは彼女でなければわからないようなことである。

第二十二話　彰子の秘密その五

「まあ彰子ちゃんらしいって言えばらしいわね」
ダイアナはそう言ってにこりと笑う。
「自分では気付かない辺りが」
「けれどさ」
アンがここで言ってきた。
「相手もわかってると思う？」
そう他の三人に問う。
「彼が」
「いや、それは」
「ちょっとねえ」
ジュリアもペリーヌもそれには難しい顔をする。
「そもそもそういう感情があるかどうか」
「ミステリアスっていうの？」
ペリーヌが考え込みながら言う。
「ああいうのを」
「ううん」
アンも腕を組んでしきりに考え込んでいた。
「違うかも」
「そうよね」
「また違うわよね、あれは」
ジュリアとペリーヌはそれに応えて述べる。
「何て言うか」
「やっぱりうちのクラスにいるべくしているっていうかね」
「まあ気付いていないのは確かね」
ダイアナは笑って言ってきた。その笑みは何処か大人びて達観したものさえあった。
「けれどそれはそれでいいじゃない」

「いいの？」
「こういうのはね、わかっていたら面白くないのよ」
そう三人に返す。
「アンだってそうでしょ？」
「あれっ、私？」
「ええ、漫画でもさ」
話を振られてキョトンとするアンに対して言う。
「あらすじ決まっていたら面白くないでしょ」
「ああ、そういうことね」
アンはそう言われると納得したように頷いてから微笑んだ。
「それはね。読まれたらちょっと悲しいわね」
「それよ。だからこういうことは」
「読めないからこそいいのね」
「そういうこと」
ダイアナはアンのその言葉を聞いて満足したように頷いた。
「だからね。あの二人も」
「これからが楽しみってわけね」
「ええ」
今度はペリーヌに答えた。
「けれどさ」
だがここでジュリアが言った。
「私の勘だけれどさ」
「何！？」
「あの二人中々気付かないわね」
これは四人にとっては勘でなくとも何となくすぐにわかることであった。
「かなり遅い話になるわよ」
「でしょうね」
ダイアナがそれに答えてきた。
「けれどそれも恋」

「恋せよ乙女ってことね」
「そう、自分で気付かなくてもね」
ジュリアに返す言葉は何処か哲学的なものになっていた。
「それが女の子を奇麗にしているのよ」
「成程」
最後は実に奇麗に決まった。だがその頃相変わらず訳のわからないことに明け暮れている二人がいた。
「よし、わかったぞ！」
テンボが部室で何か読んで叫んでいた。ドルーリ＝レーンの話であった。耳の聞こえない舞台俳優出身の探偵の話である。古典的名作であると言っていい。
「犯人は耳の聞こえない男だ！」
話は何時の間にか事件ものになっていた。それまでの経緯は他の者にはあまりにも奇想天外過ぎておよそ理解不能なものになってしまっていた。
「そうなの！？」
「そうだ！じゃあすぐに病院に行くぞ！」
「了解！」
そしてそのまま病院で袋叩きにされる。だがそんな二人のことは皆もう忘れてしまっていた。薄情と言えば実に薄情な話であった。

彰子の秘密　　完

２００６・１２・１２

第二十三話　想い人はその一

想い人は

「姉さん」

明香が自宅で彰子に声をかけてきた。家は和風で二人は今畳みの部屋でくつろいでいる。座布団に正座してテレビを見ているのである。

この正座というのはかなり廃れている風習だ。今では日本でもするのは僅かだ。だがそれでも育ちのいいこの二人は普通にしている。そうしてテレビを見ていたのだ。

「どうしたの、明香」

彰子は声に応えて妹を見てきた。

「最近何かおかしいことない？」

「おかしいこと？」

姉は妹の言葉に首を傾げてきた。

「そう。何かあったとか」

「別に」

彰子は首を傾げたまま答えてきた。

「別にないわよ」

「そう」

明香はそれを聞いてこくりと頷いた。

「だといいけれど」

「どうしたの？」

「いえ、別に」

明香はアン達のことはあえて伏せていた。

「だったらいいわ」

「ただね」

「ただ？」

「隣の席がかわっちゃって」

「隣の席が」
「ええ」
彰子はそう答えてきた。
「かわったのよ。転校生が来たから」
「誰になったの？」
「管君」
彰子は答えた。
「管家持君よ。知ってる？」
「管家持さん」
明香はその名を復唱した。何故か姉に聞こえるように呟くのであった。
「その人なのね」
「知らない？」
「え、ええ」
何故かここで僅かに戸惑いを見せてきた。
「御免なさい」
「別に知らなくてもいいのよ」
彰子は謝った妹に対してそう述べた。
「だって。明香が私のクラスのこと色々と知ってる方が変だもの」
「そうなの」
「そうよ。だから知らなくて当然」
優しい姉の顔で言ってきた。
「気にしなくていいわ」
「ええ」
また頷いてきた。
「それで姉さん」
「何？」
妹はまた姉に尋ねてきた。姉もそれに応える。何かテレビはあまり見ていない。だがそこでは時代劇がやっていた。
「おうおう！」

テレビの中の中年男が威勢のいい声をあげていた。
「この遠山桜夜桜」
恒例のドラマである。この後お白洲で裁きが言い渡されて悪人達が獄門台に行くことになる。千年前から変わらない黄金のパターンである。江戸時代は殆ど死刑がなかったらしいがこの時代劇では毎週二人か三人は死んでいる。当時の江戸は時代劇の中では極めて治安の悪い街だったのである。
「散らせるもんなら散らしてみやがれ！」
「その管さんって人だけれど」
「うん」
二人はテレビをよそに話を続けている。
「どんな人なの？」
「えっ」
ここで一瞬間ができた。彰子の顔がほんの微かに赤らんだ。しかしそれは明香だから気付けるものであり他の人間、彰子自身も気付かなかった。
「一言で言うと物静かな人」
「そうなの」
「紳士って言うのかな。そんな感じ」
「隣にいて何もないの？」
「ううん」
また顔が赤くなったがそれはやはり一瞬であった。
「別に」
「そう」
明香はそれを聞いて頷いた。
「いい人だし」
「いい人」
明香はその言葉にちらりと反応した。
「性格が？」
「そうよ。他に何があるの？」

「いえ」
明香は気付かれないように話を聞き出していた。彰子はそれに気付いてはいなかった。
「ないわ」
「そう。じゃあ」
彰子はそれを聞いて興味をテレビに戻してきていた。
「あっ、もう終わりね」
彰子は最後の曲を聞いて少し残念そうであった。
「早いわよね、何か」
「別にそれは」
姉のぼけた言葉に何と言っていいかわからなかった。
「まあいいわ。それでね」
「ええ」
話は元に戻った。
「管君だけれど」
「どんな人なの？」
「何て言うかな」
彰子は首を少し右に傾げて考える様子を見せてきた。
「変わった人でもあるわね」
「変わった人」
「何考えてるのかわからないところがあるのよ」
「そうなの」
「そうよ。けれど細かいところにも気が利くし」
何か掴み所のない人のようだと明香は聞いて思った。
「一言じゃ言い表せない感じ」
「ふうん」
「それでいい？何か私もあまりよくわからないのよ」
彰子の笑みが少し苦笑いになった。
「御免ね。隣になったばかりだし」
「いえ、それは」

別にいいと答えた。
「別に」
「そう。じゃあ」
彰子はここで話を終わらせて述べた。
「そろそろ私部屋に戻るからね」
「ええ、じゃあ」
「お休み」
「お休みなさい」
二人は挨拶を交あわせた。そしてそれぞれ別れるのであった。
明香はまだ部屋にいた。そこで色々と考えていたのである。
「やっぱり」
結論は出た。姉はやはり。だがそれは決して口にはしなかった。
あくまで自分の心の中にしまっておくだけであったのである。

第二十三話　想い人はその二

翌日の朝。彰子と明香は二人並んで学校に向かっていた。
「お早う」
そこに黒い髪で奇麗な目をした女の子がやって来た。奇麗というよりは清楚で可愛らしい感じの女の子であった。見たところ明香と同じ歳のようである。
「お早う」
明香が彼女に挨拶を返した。
「今日もお姉さんと一緒なのね」
「ええ」
明香は彼女に答えた。挨拶をしながら明香の隣にやって来た。
「いいわね、何か似合ってて」
「似合ってるのかしら」
明香はそれを聞いて少し目を動かした。
「絵にはなってるわよ」
「そうなの」
「何かそう言ってもらえると嬉しいな」
彰子はそれを聞いて目を細くさせていた。
「仲がいいんですね、お二人は」
少女は今度は彰子に声をかけてきた。
「先輩も明香さんも」
「そうね」
彰子はにこりと笑ってそれに答えてきた。
「仲はいいわ。だって二人きりの姉妹なんだし」
「姉さん・・・・・」
「いいなあ、それって」
少女はそんな二人を見て少し羨ましそうであった。
「うちなんか。兄さんがあれだから」

「兄さんって」
「洪童君よね、確か」
「はい、そうです」
ここで後ろからその洪童の声がしてきた。
「ちょっと待て春香！」
「あっ、来た」
後ろからその洪童が恐ろしいスピードで駆けてきた。
「いつも一人で行くなって言ってるだろう！危ないだろうが！」
「危ないって兄さん」
春香は自分に向かって突進してきた兄に対して言う。
「学校の通学路よ。別に危なくなんか」
「その油断が間違いの元なんだよ！」
兄はハリセンを振り回して叫ぶ。朝から異様にテンションが高い。
「いいか！」
「ええ」
諦めて兄の話を聞くことにした。
「街の中は危険で一杯なんだ。何時何処に悪い奴がいるかわからない」
「その言葉毎日聞いてるわよ」
「毎日でも何でも言ってやる！」
口ごたえは全く聞かない。
「ましてや御前のその可愛さだ！絶対に悪い奴に狙われている！」
「絶対なの？」
「そうだ！」
根拠も何も判ったものではない言葉だ。実に短絡的である。
「そんな中でウロウロと！無用心過ぎる！」
「別にそんな人なんか」
それでも春香は言う。困った顔になっていた。
丁度そこに厄介な奴が来た。ジョルジュであった。
「おっ、美人三人の登校風景」

それを見てすぐにカメラを出してきた。
「これはシャッターチャンス！」
「待て！」
だがここに洪童が尋常ではないスピードで反応してきた。
「ジョルジュ！御前何のつもりだ！」
「何だよ、御前もいたのか」
ジョルジュは彼の姿を見て嫌な顔を露骨なまでに見せていた。
「いいじゃないか、減るもんでもなし」
「そう言って俺の妹に何をするつもりだ！」
「別に変な写真撮るわけじゃないだろ」
彼はそう反論する。
「だから別にいいじゃないか」
「そういう問題じゃない！そもそも春香に何かあったら」
「別に写真位は」
「ねえ」
春香の言葉に彰子が頷く。
「洪童君、気にし過ぎじゃ」
「春香につく悪い虫は俺が許さん！」
「俺って悪い虫だったのか」
「痴漢だ！盗撮魔だ！」
「そりゃ何でも言い過ぎだろ」
流石にジョルジュも反論してきた。
「俺だってよ。可愛い女の子が並んでいるからここで」
「だからといって春香に近付くことは駄目に決まってるだろ！」
「いつもこんな調子なの」
「困ったお兄さんなのね」
彰子は春香に少し同情した。
「小さい頃から。私が虐められたりしてたらすぐに飛んで来て犬でも何でも向かって行って」
「凄いね、何か」

「こんな感じなの。それで今も」
「ふうん」
彰子はそれを聞いて考える顔をしてきた。
「そうなんだ」
「そうなんですよ。それで困ってます」
本当に弱った顔を見せてきた。
「私のこと心配なのはわかるんですが」
「とにかくだ！」
洪童はまだ言っていた。

第二十三話　想い人はその三

「春香に近寄るならば死あるのみだ！」
「おい、そこまで言うのかよ」
流石にジョルジュも言葉もなかった。
「じゃあ春香ちゃんに近寄る奴は」
「全員俺が倒す！」
「ううん」
「こんな調子です」
「大変ね、何か」
「はあ」
「けれど」
だがここで明香は二人に聞かれないようにポツリと呟いた。
「私、わかる」
「！？」
最初にそれに気付いたのは彰子であった。
「何か言った？」
「いえ」
だが明香はそれを否定した。
「何も」
「そうよね。気のせいよね」
「もう兄さん」
春香がいい加減困った顔で兄に対して言う。
「私はいいから。もう止めてよ」
「んっ、いいのか」
「別にジョルジュさんだって悪気があってやったわけじゃないんだし」
「そもそもまだ何もしていないよ」
「やる気はあっただろ！？」

「まあ確かに」
洪童のこの言葉には答える。
「それはそれで」
「やっぱり許さん！」
「だからいいから」
結局怒る兄を必死に止める。
「学校行きましょう。ここで騒いでいたら遅刻しちゃうわ」
「ああ、わかった」
妹に言われては流石に弱いらしい。テンションが徐々に静かになってきていた。
「じゃあ行くか。ジョルジュ」
しかしジョルジュにまた顔を向けてきた。
「一応釘を差しておくがな」
「おいおい、俺って信用ないんだな」
「誰だろうが春香に近寄る男は死あるのみ！」
「けれどさ」
ここでジョルジュはふと言った。
「女の子だったらいいのかい？」
「ビアンカとかは駄目だぞ」
「やっぱり」
明香はそれを聞いて呟く。
「そうなるのね」
「春香にはそのままで奇麗なままで御嫁さんになってもらいたいんだ」
「そう言ってもいつも何かどっかの漫画の主人公みたいなお婿さんの話ばっかりなんですよ」
春香がまた困った顔を見せてきた。
「そんな人実際にはいないのに」
「所謂無敵主人公みたいな人？」
「そのままです」

春香はさらに困った顔になっていた。
「そんな人有り得ないのに」
「そうよねえ」
彰子もその言葉に頷く。
「やっぱり人って色々と欠点があるものだから」
「それに兄さん自分に勝たないと付き合いを認めないって言うのに」
「それで勝ったら？」
「絶対勝つまで交際を認めないって言います」
「どうしようもないのね」
「はい。兄さん喧嘩は大したことないのに生命力は異常に強いから」
要するに最悪のパターンである。洪童は体格のせいもありあまり喧嘩は強くないのだがそれでも妹が関わるとなるとどんな相手に対しても立ち向かうのである。
「だから」
「ううん」
「わかるわ」
明香はそれを聞いてまた誰にも聞かれることなく呟いた。
「その気持ち」
「それで結局私の彼氏は」
「困ったわねえ」
「春香に近付く奴は何人たりとも俺が許さん！」
洪童は相変わらず叫んでいた。
「若し交際を認めて欲しかったら俺を倒せ！」
「誰もそんなこと言ってねえよ！」
いい加減うんざりしてきたジョルジュがたまりかねて言い返す。
「いい加減にしろ！」
「その目は狙っている目だ！」
「何処ぞの格闘漫画みたいな台詞言ってんじゃねえ！」
「けれど。その通りよ」
何故か明香はこっそり洪童の言葉に賛同していた。

「私だって。姉さんには」
「!?」
そんな妹の強い決意ものんびりした姉には。何も届きはしないのであった。

想い人は　　完

２００６・１２・１５

第二十四話　妹達その一

妹達

蝉玉は教室で彰子の話を聞いていた。春香の話であることは言うまでもない。

「一言で言うと春香ちゃんも大変ね」

「そうだね」

スターリングが彼女の言葉に頷く。

「洪童は妹思いだからね」

「あれはもう妹思いってレベルじゃないわよ」

蝉玉は苦虫を口に含んだような顔で言う。

「妹馬鹿ね」

「妹馬鹿」

「ええ。シスコンっていうのともまた違うし」

「そうなの」

彰子がそれに目をパチクリとさせる。

「彰子ちゃんとこだと仲のいい姉妹になるのよ」

「うん」

「けれどあいつはね。馬鹿になっちゃってるのよ」

「そうなの」

「結局は程度の問題なのよ」

蝉玉はこう述べる。

「あんまりにも熱中し過ぎたらやっぱり馬鹿よ」

「ふうん」

「フランツみたいにね」

「これだ！この魔球だ！」

そのフランツが後ろで漫画を読んで一人騒いでいた。

「ゴッドスラシュタイフーン！これだ！」

「ああなったらつける薬はないわよ」
「フランツ君って馬鹿なの」
「あいつとテンボ、ジャッキーを馬鹿って言わなかったら誰を馬鹿って言うのよ」
　このクラスの三馬鹿と言えばこの三人である。なお成績も三人がぶっちぎって悪かったりもする。ちなみに洪童は成績に関しては案外まともであったりもする。
「ああいうのこそを馬鹿って言うのよ」
「ふうん」
「まあそれはいいとしてさ」
　スターリングが話を変えてきた。
「このクラスって結構妹いる人が多いよね」
「そういえばそうね」
　蝉玉もそれに頷く。
「私自身妹で実際に妹三人いるし」
「僕もアリスがいるし」
　スターリングにも妹がいる。
「ベンも三人いるよね」
「ああ、何でかわからないけれど僕が面倒見ているよ」
　そこにベンがひょっこりとやって来た。
「同居してるしね」
「何かそれって大変みたいね」
「選択とか掃除は妹達がしてるけれどね」
「じゃあかなりましなんじゃないの？」
　蝉玉は言う。
「いやあ、そうでもないよ」
　だがベンの言葉は今一つ歯切れが悪い。
「どうしてもね」
「そうなの」
　スターリングがそれを聞いてベンに顔を向けてきた。

「うん、結構手がかかるよ」
「ベン君の妹さんって小さかったっけ」
「まだ中学生だしね」
彰子に対して困った顔で返す。
「特に料理なんかはまだ」
「まだまだなのね」
「うん」
ベンの答えが苦い。
「それで僕が作ってるんだよ」
「あんた料理できたんだ」
蝉玉はそれを聞いて目をパチクリとさせてきた。
「意外!?」
「ええ」
そして素直にそう述べてきた。
「てっきり妹さん達がしてるんだと思ってたわ」
「それだけは別なんだよ」
彼は答える。
「どうしてもね」
「こだわりってやつ?」
「そう言うんならそうだろうね」
「何か意外だね」
スターリングがそれを聞いて述べた。
「ベンが料理に五月蝿いって」
「別に五月蝿いつもりはないけれどね」
そう前置きはした。
「けれどね」
「それでもってやつね」
「そういうこと」
また蝉玉に答えた。
「そこが案外難しいんだよ」

「それわかるわ」
蝉玉は彼の言葉に腕を組んで頷いてきた。
「料理はこだわりよねえ」
「わかってるね、蝉玉ちゃん」
「私は中国人よ」
それだけで充分な言葉であった。
「料理にはこだわりがあるのよ」
「成程」
「蝉玉の作った料理って凄く美味しいんだよ」
スターリングも述べてきた。
「一度食べるとね。忘れられなくなるんだ」
「そうなんだ」
「ちょっと待って」
しかしそれにメイミーが突っ込みを入れてきた。
「あんた蝉玉の料理食べたの」
「そうだよ」
スターリングは屈託なく返した。
「それがどうかしたの？」
「ふうん」
メイミーはそれを聞いて思案げに頷いてきた。
「成程ね。もうそこまでいったんだ」
「何がだよ」
おっとりしたスターリングには事情が完全に飲み込めてはいなかった。完全にというよりは全くである。
「彼女の手料理をねえ」
メイミーはわざと意地悪い笑みを浮かべてスターリングと蝉玉を見てきた。
「案外隅に置けないわね」
「？」
「ちょい待った」

何が何なのかわかりかねているスターリングに対して蝉玉の返事は素早かった。

第二十四話　妹達その二

「何か誤解してるでしょ、あんた」
「別に誤解はしていないわよ」
それでも今のエイミーは意地悪であった。
「別にね」
「あのね」
そんなエイミーにあえて言い返す。
「これってお互いの兄妹で作り合ったのよ」
「お互い！？」
「そうよ」
エイミーに対してまた言う。
「当たり前じゃない。何想像してんのよ」
「そうだったの」
それを聞いたエイミーの顔が急に拍子抜けしたものになってしまった。
「何だ」
「何だってね、あんた」
今度は蝉玉がエイミーに言う番であった。
「また変なこと想像してたんでしょ」
「ご想像にお任せするわ」
「全く」
蝉玉はそんな彼女を見て溜息を吐き出した。
「そういやあんたは妹だったわね」
「バリバリの妹よ」
エイミーはそう返した。
「末っ子だからね。四人姉妹の」
「大変？」
彰子が尋ねてきた。

「別に大変でもないわよ」
エイミーの姉達は美人でしっかりしていると評判なのだ。大学では有名な美人姉妹である。
「一つだけ例外があるけれどね」
「例外？」
「何、それ」
その言葉に彰子とベンが尋ねる。
「あっ、まあ秘密」
「秘密ってあんた」
それに蝉玉が突っ込む。
「何かずるいような」
「そのうちわかるからさ」
スターリングに対しても妙な返しであった。
「そのうちね」
「何か気になるわね」
蝉玉はそんなエイミーの言葉にどうにもいぶかしがっていた。
「何なのかしら」
「けれど蝉玉ちゃん」
だがここで彰子が話を振ってきた。
「何？」
「あの、彰子ちゃんもお姉さんだったのね」
「まあね」
その言葉に答える。
「三人ね」
「そうだったの」
「一番上のお兄ちゃん以外は全員女なのよ、うち」
「何か僕のところと同じだね」
ベンはそれを聞いて言った。
「それだとさ」
「まあ一人多いんだけれどね」

「四人姉妹だと私のところと同じじゃない」
エイミーがそう言ってきた。
「あっ、そういえばそうね」
蝉玉の方もそれを言われて気付く。
「何か面白いような」
「結構妹がいる人ってこのクラス多いね」
「っていうかさ」
蝉玉はスターリングの言葉に応えた。
「何かお姉ちゃんいるっていう方がないわね」
「そういえばね」
皆それを言われて気付く。
「あのフランツだってお兄ちゃんだし」
「あのなのね」
皆エイミーの容赦のない言葉に突っ込みを入れる。
「これイメージなんだけれどさ」
エイミーは彼等の言葉に応えるようにして述べた。
「フランツってどういうわけかお姉ちゃんいるっていうイメージなのよ」
「それはまたどうして」
ベンがそれに問う。
「何かよくわからない理屈みたいだけれど」
「ほら、あれよ」
エイミーはその質問に答えてきた。
「ああしたスポコン路線ってさ、馬鹿親父にライバルと」
「それを物陰から見るお姉さんね」
「そう、そういうこと」
蝉玉の言葉に我が意を得たと言わんばかりに頷く。
「そうでしょ。だからよ」
「成程、そういうイメージね」
「それなら」

「トムはあれは従姉だしね」
蝉玉はふとトムに気付いた。
「違うしね」
「そうだね。それはね」
スターリングがそれに頷く。
「違うね」
「そうそう」
皆それに頷く。
「ウェンディはお姉さんだったし」
「後結構一人っ子が多いような」
「何でしら」
「あと」
皆ここで最後の大物を見る。
「彼女は」
「親戚とかいるのかしら」
「はい」
急に後ろから返事が返って来た。
「おります」
「えっ！？」
皆驚いて振り向くとそこにセーラがにこりと笑って立っていた。
「何時の間に」
「どういうこと！？」
見ればさっきまで座っていた席には確かにいない。何時の間にかセーラに後ろを取られていたのであった。
「ちょっと動いただけですよ」
にこりとした笑みのまま述べてきた。
「だから御気になさらずに」
「いや、今のは」
「ワープしてない？」
皆セーラのその動きに常人とは思えないものを感じていたのであ

る。彰子以外は。
「セーラちゃん」
その彰子がおっとりした声でセーラに問う。
「はい」
セーラもそれに穏やかに応える。どういうわけか彰子は彼女に対して全く平気であるようであった。

第二十四話　妹達その三

「セーラちゃんには兄弟いるの？」
「はい、おります」
セーラはそう答えてきた。
「二十人程」
「って」
「どういう家族なのよ」
蝉玉とエイミーはそれを聞いて今聞いていることが本当なのかと思った。
「お母様が同じ兄弟はいないのが残念ですが」
セーラの家はマウリアで有名なマハラジャである。中には一夫多妻の家もあるのがマウリアなのである。連合とは完全に別世界なのだ。
「跡継ぎのお兄様もちゃんとおられますよ」
「そうだったの」
「はい、ですから寂しいことはありません」
その緑の目が優しげに光っていた。
「家族は何人いても素晴らしいものだと思います」
「そうよね」
彰子はその言葉に満面の笑顔で頷いてきた。
「私妹は明香しかいないけれど」
「いや、彰子ちゃんの兄弟って明香ちゃんだけじゃない」
それにエイミーが突っ込みを入れる。
「それはちょっと違うんじゃ」
「あっ、そうね」
「何かねえ」
エイミーだけでなく他の面々もちょっと呆れた様子であった。
「彰子ちゃんらしいけれど」

「何かね」
「私も兄と弟と姉と妹しかいませんよ」
「いや、それ普通だから」
セーラの言葉にはまた違う突っ込みを彰子以外が入れた。
「別に何か特撮ものに出て来るみたいな特別な存在出て来るわけじゃないし」
「人間が出て来るから」
皆言う。
「いえ、そうとは限らないですよ」
だがセーラは一同に対してにこりと笑ってこう述べてきた。
「ってどういうこと？」
「神様でも生まれるの？」
「はい」
穏やかな笑みでかなりとんでもないことを言ってきた。
「その通りです。前世の因縁によってそうなります」
「ええと」
蝉玉がそれを聞いてまた腕を組んで考え込んだ。
「これってつまりさ」
「輪廻転生だね」
スターリングがそれに答えた。
「そうよね。けれど」
「神様が生まれ変わるの？マウリアじゃ」
エイミーも流石に何と言っていいのかわかりかねていた。
「確かさ」
ベンも考えながら述べてきた。
「あれだった筈だよ、マウリアの神話じゃ」
「知っているか！」
またここで突然誰かが出て来た。アルフレドであった。
「どうしたのよ、いきなり」
「いや、ちょっとな」

アルフレドは穏やかな笑みに戻って一同の中に入って来た。
「マウリアの神話では神様が人に転生するのはよくあることなんだ」
「そうだったの」
「そうだ。クリシュナとかブッダとかな」
「ちょっと待って」
彰子がふと気付いた。
「お釈迦様って？」
「お釈迦様はヴィシュヌ神の転生の一つとされているんだ」
アルフレドは彰子にそう説明してきた。
「さっき一緒に出したクリシュナもな。そうなっている」
「そうだったんだ」
「マウリアでは神様が人間に生まれたりすることはよくあること。
そうだったよな」
「はい、そうです」
セーラはアルフレドの言葉ににこりと笑って述べてきた。
「ですから神様が生まれることもありますよ」
「そうだったんだ」
「何か凄い話」
皆何と言っていいかわからなかった。

第二十四話　妹達その四

「ところでお釈迦様ですけれど」
「あっ、はい」
「お釈迦様ね」
セーラのペースで話がそちらに向かった。
「仏教でしたよね」
「ええ、まあ」
「今見掛けないけれどフックの国とかでかなりメジャーな宗教よ」
蝉玉とエイミーが答えた。連合では仏教はかなりメジャーな宗教になっている。宗教人口にして一兆はいると言われている程の宗教を持っている。
「ヒンズー教が連合でも信仰されているんですね。何かとても感慨深いです」
「ちょっと待った」
皆ここであることに気付いた。
「あの、セーラちゃん」
「今何て」
そのうえでセーラに尋ねてきた
「確か今ヒンズーがどうとかって」
「どういうこと？」
「えっ、それは」
セーラがそれに関して答えてきた。少し戸惑っているのがわかる。
「仏教はヒンズー教の一派ではないですか」
「へっ！？」
「今何て」
さしもの彰子とアルフレドも今のセーラの言葉は意味がわからなかった。二人はそれぞれの反応を見せてきた。
「ですから。仏教はヒンズーの一派なのですよ」

セーラはまた述べた。一点の曇りもない顔で。
「ええと」
「言っている意味がちょっとどころじゃ」
「お釈迦様はヴィシュヌ神の転生の一つです」
セーラはまたそれを言ってきた。
「だからですよ」
「あの、だからなの」
「はい」
皆の質問に笑顔で答える。
「その通りです」
「ううん」
皆それを聞いて何と言っていいかわかりかねていた。正直これは予想外であった。
これがマウリア人の圧倒的な独自の論理なのであろうか。そう思っていたところにセーラが言ってくるのであった。
「ですから気にすることはありません」
「いや、その」
「それは」
何か話が強引に終わりに向けられてきているのを感じずにはいられなかった。そしてそれを止めることは誰にも出来ないのではないかと思われた。
だがそこに一人だけいた。連合で唯一マウリアに対抗できると言われている国の人間、そう彰子であった。
「ねえ彰子ちゃん」
エイミーが話を振ってきた。
「何？」
「彰子ちゃんはこれについてどう思うかしら」
「お釈迦様のこと？」
「そう。何か違うと思わない？」
「そう言われてもねえ」

だが彰子はそれに対して微妙な返事を返してきた。
「やっぱりお釈迦様ってマウリアの人だから」
これは誰もが否定できない事実であった。
「そうなるんじゃないのかな。どうかしら」
「そうですね」
間の悪いことにセーラがそれに頷いてきた。
「お釈迦様もまたヴィシュヌ神の転生の一つですから。そうなるのですよ」
「ううん」
「とりあえず納得できないものが」
ほんわかとした彰子以外は結局誰も理解も納得もできなかった。
あれこれ言っている間に話は強引に終わり何かうらむやのうちに終わっていたのであった。

妹達　　完

２００６・１２・１９

第二十五話　手綱は誰の手にその一

手綱は誰の手に

トムは従妹のメアリー、弟のシッドの三人で暮らしている。アパートに三人暮らしというわけである。

「じゃあ行って来るね」

「行ってらっしゃい」

大抵登校はトムとシッドが先である。メアリーは二人を送り出した後でゆっくりと学校に向かうのが常である。

赤茶色の髪にブラウンの目をした奇麗な顔立ちをしている。実はトムは彼女が好きだったりする。

「意外って言えば意外だよな」

そんな彼に対してルシエンが述べる。

「御前が年上の女の人好きだなんて」

「意外かい？」

「ああ」

ルシエンは答える。

「もっと元気のいい娘が好きなんだって思ってたよ」

「レミみたいな？」

「まあそんなところだな」

ルシエンはトムの言葉にそう返した。

「そういう女の人ってどっちかというとマチアが好みっぽいんだけれどな」

「どうして？」

「ああいう性格だろ？」

彼は言う。

「どっかで甘えん坊じゃないかって思ってな」

「成程」

「何かえらい言われようだな」

それを聞いてそのマチアが二人のところにやって来た。
「俺ってそんなに甘えん坊に見えるか？」
「何となくな」
ルシエンはそう返した。
「違ってたら悪いな」
「まあ実は嫌いじゃない」
「予想通りか」
「エイミーのお姉さん達は結構気になるしな」
「へえ」
トムはマチアの告白に目をパチクリとさせてきた。
「それはまた」
「けれどな」
だがマチアはここで少し苦い顔を見せてきた。
「俺何か言うのが怖いんだよな。そういうのって」
「そんなのは度胸だな」
ルシアンはそんな彼に対して言い切ってきた。
「俺はアンネットにだな」
「御前はまた度胸があり過ぎるんだよ」
マチアは彼にこう言い返した。
「玉砕上等で向かって行ってるじゃないか」
「アンネットは俺のものだ」
強い声できっぱりと述べてきた。
「何があってもな」
「また強いねえ」
そんな彼を見てあらためて感嘆の声を漏らす。
「まあそんなんだからアンネットも相手をしてくれてるんだろうな」
「男は振り向かせるもんだ」
「そうなのかなあ」
だがトムはそれを聞いて懐疑的な様子を見せてきた。
「ルシエンのは違うと思うけれど」

「そうだな」
それにマチアも頷く。
「御前のはかなり違うと思うぞ」
「俺はそうは思わないがな」
「まあ思うのは勝手だし」
「そうだな」
「何だ、二人共随分言ってくれるな」
ルシエンはトムとマチアにそう言い返した。
「折角話に乗ってやってるというのに」
「それじゃあさ」
それを受けてトムはルシエンに言ってきた。
「何かいい方法知ってるの？ルシエンは」
「そんなのは決まってるだろう」
ルシエンはトムの問いに傲然と胸を張ってまで述べてきた。
「あるんだ」
「じゃあ何だ、それは」
マチアもそれに問うてきた。二人共興味津々である。
「将を射るにはまず馬だって言うだろ」
ルシエンはそう誇らしげに言ってきた。
「馬か」
「ああ、この場合はだ」
トムに答える。マチアはそれを聞いてふと言った。
「じゃああれだな」
「どうした？」
「メイミーか、鍵か」
二人に返した言葉はこれであった。
「そういうことだな」
「まあそうなるな」
ルシエンもそれは認めてきた。
「よし、じゃあ」

「けれどな」
「何だよ」
ルシエンの止めるような言葉に動きを止めてきた。
「その馬をまず見ろよ」
「どういう意味だよ」
「そのままさ、いいか」
「ああ」
ルシエンの顔が急に真剣になったのでそれを真面目に聞くことにした。それも恋路のうちである。この道は一筋縄ではいかないのである。
「馬だって色々だ」
「それ位俺にだってわかるぞ」
「話は聞けよ。それでだ」
そうマチアに念を押す。彼もかなり真面目に話をしていた。かなり乗っていたのである。

第二十五話　手綱は誰の手にその二

「馬を射てどうなるかだ」
「メイミーか」
「あそこのお姉さん達は人気が高いだろ。メイミーはそれをいつも気にしている」
「そういやそうだな」
それも言われてやっと気付く。
「だったら下手に矢を射たら」
「かえって藪蛇か」
「そうだ。若し狙うのなら慎重に行けよ」
「直接行った方がいいんじゃないの、それじゃあ」
トムは話を聞いてふと思ったことを口にした。
「メイミーは手強いよ、そう簡単には」
「直接行って陥落させる自信があるならいいぜ」
ルシエンはまた笑みを浮かべてこう言ってきた。
「それでできるんならな」
「随分意地悪い言い方だね」
「そうかな。けれどメイミーは確かに手強いな」
「ああ」
「どうこうすることも出来ないかも知れない」
「何だよ、それって」
マチアはあらためて口を尖らせてきた。
「結局駄目って言ってるのと同じじゃないか」
「だからよく見ろって言ってるんだ」
ルシエンは口を尖らすルシエンにまた言った。
「その馬にしろだ。絶対に射抜く方法があるんだからな」
「そうか」
「そうさ。急げば回れ」

また諺が出された。
「慎重に行くのも大事だぜ」
「わかったよ。じゃあここは落ち着いてか」
「そういうことだ。まあ頑張りな」
「けれどさ、ルシエン」
ここでトムがルシエンに声をかけてきた。
「何だ？」
「何か凄いしっかりしたこと言うけれどさ。今」
「ああ、そうだろ」
その言葉に不敵に笑って返してきた。
「ルシエン自身はそうじゃないよね」
「むっ」
「あっ」
その言葉を聞いてマチアも気付いてきた。二人は同時にルシエンを見やってきた。
「そういえばそうだな」
「そうだろ？いつもアンネットに突撃して」
「将を射るには、って言ったらこの場合はやっぱり」
「おいおい、俺の言葉を聞いていなかったのか」
しかしルシエンはまたしても不敵に笑って言葉を返してきた。
「さっき自信があればって言ったよな」
「うん」
「そういえばそんなことも言ったな」
二人の返答はそれぞれであった。これが個性というものであろうか。
「俺は自信があるんだよ」
ルシエンは遂にと言うべきかやはりと言うべきか堂々と胸を張り腕を組んでこう豪語してきた。
「アンネットを彼女にする絶対の自信がな。だからダニーにアプローチしたりとか策は用いないんだよ」

「じゃあ絶対にアンネットの彼氏になるってこと？」
「そうだ」
トムの問いにも絶対の自信が見られた。
「何があってもな」
「そうなんだ」
「しかしな」
マチアはそんな彼に対していささか冷めた言葉を投げ掛けてきた。
「そう上手くいくかな」
「いく」
その返答もこれまた絶対の自信に満ち溢れていた。
「何があってもな」
「ふうん」
「そうなのかな」
しかし二人の言葉はどうにも懐疑的なものであった。それでもルシエンの態度は不変であるのがかえって物凄い。
「とにかくだ！」
彼はまたしても力説する。
「アンネットは俺のものだ！俺以外の誰にも渡さない！」
「何かそこまで言われるアンネットって」
「かえって幸せかもな」
「まあここで俺に愛されてるから幸せだって言えば傲慢かな」
「誰だよ御前ってなるよ、それ」
「同感」
トムとマチアはそれぞれそう突っ込む。
「ただでさえ暴走する傾向があるのに」
「さらにそんなこと言ったらよ。何者だって思われるぞ」
「何か俺って誤解受け易い方か？」
「自分でわからない？」
トムがまた言う。
「わからないからそうなんだと思うけれど」

「これはいけませんね」
「っておい」
ルシエンは今聞こえた言葉に突っ込みを入れる。
「いきなり声色使って言うなよ」
「いや、僕何も言ってないよ」
「俺もだ」
二人はそれを否定する。
「けれどよ、今」
だがルシエンはそんな二人に対して言い返す。
「今聞こえたからよ」
「だから何も言ってないって」
「俺もだ。気のせいだろ」
「そうかな」
とりあえずその言葉に納得しようとした。だがそこでまた聞こえてきたのであった。

第二十五話　手綱は誰の手にその三

「不吉な影が見えます」
「またかよ」
ルシエンはその言葉に顔を顰めさせた。
「一体誰がさっきから」
「私です」
「私ですって一体・・・・・・んっ！？」
その場に急に姿を現わしたのは。何とセーラの従者の一人ベッキーであった。三人が話している席にまるで霧の様に姿を現わしたのである。
「なっ、ベッキー」
「何時の間に」
ルシエンだけでなく他の二人も彼女が姿を現わしたのを見て驚きの声をあげた。
「私に聞こえないものはありません」
「いや、それ答えになってないから」
「それでいて妙に納得できるがな」
トムとマチアはそれぞれ言う。
「ルシエンさん」
「俺かよ」
「はい、貴方に不吉なものが見えます」
ベッキーは何か怪しげな水晶球を出してきて述べる。
「これはまるで。この世の終わりのような」
「あんた、占い師だったのかよ」
「はい」
ベッキーは彼の言葉に頷く。
「これもまた魔術の一貫なのです」
「魔術ねえ」

何か話が急に妙な方向にいっている気がしたがそれでもその話を聞くことにした。というよりは妙に気になって離れられないのである。

「今日の夕方ダンプに撥ねられます」

「っておい」

あまりにもダイレクトな占いなので思わず突っ込みを入れた。

「滅茶苦茶不吉じゃねえか。洒落になってねえぞ」

「だから申し上げたのです」

ベッキーは言う。

「このままですと貴方は全治半年の大怪我です」

「生きてるのかよ」

「サイボーグになって」

「・・・・・どっちにしろ碌なもんじゃねえな」

本当に不吉な内容なので言い返す言葉もない。

「ですがそれから逃れる方法もあります」

「あるのか」

「はい、あります」

ベッキーはその言葉に返してきた。

「それはですね」

「ああ」

固唾を飲んで彼女の話を聞く。とりあえず難を避ける為にはどんなことでもするつもりであった。

「今日のお昼に食堂でカレーを食べるのです」

「おい」

それを聞いて思わず聞き返した。

「何だそりゃ」

「ですからカレーを食べるのです。それも超激辛カレーを」

ベッキーは言う。

「三杯食べるのです。そうすれば貴方は難を逃れられます」

「どういった原理でそうなるんだよ」

あまりにも訳がわからないのでまた聞き返した。
「カレー食って交通事故を避けられるのかよ」
「その通りです」
ベッキーはそれでも言う。
「わかりましたね。ダンプに撥ねられなくなければ」
「何かな」
「とりあえずさ」
それを聞いてトムが言ってきた。
「お昼になったら食堂行こう」
「そうだよな。まずはそれだ」
マチアもトムの言葉に頷いてきた。
「食べて難を避けよう」
「ああ。しかしよ」
ルシエンはそれでも腑に落ちないものを感じずにはいられなかった。それでまたベッキーに対して言ってきた。
「カレーを食うんだよな」
「そうです」
返事は変わらない。
「それも超激辛カレーを」
「何かわからないけれどわかったよ」
その言葉にまた頷く。
「じゃあお昼な」
「はい」
「それでさ」
「何か」
ルシエンはまだ引っ掛かるものがあったのでまたベッキーに尋ねた。
「それって日本のカレーなのか？」
「いえ」
その言葉には首を横に振るベッキー。そして言う。

「カレーといえばカレーです」
「ああ、そういうことか」
マウリア人が言うカレーとはマウリアのカレーである。連合各国のカレーはカレーではないと主張する。それがマウリア人のこだわりであった。
「わかったよ。じゃあ昼にな」
「わかりました」
こうしてルシエンはカレーを食べることになった。話は何か訳のわからない方へと流れていく。そしてそれを誰も止めようとはしない。
お昼である。ルシエンは食堂にいた。
「超激辛カレー下さい」
「あいよ。日本風かい？」
「いえ、マウリアの」
やたらと巨大で洒落た内装の食堂であった。床は木でありそれが木製の椅子やテーブルと実によく合っていた。
ルシエンは今その食堂の中にいた。他のクラスメイト達も一緒である。
「じゃあよ」
彼はテーブルにそのカレーを持って来て座ってから言った。
「食べるか」
「はい」
それにベッキーが最初に答えた。
「それでですね」
「まだあるのか」
「はい。これをカレーにかけて下さい」
「タバスコかよ」
ルシエンはベッキーが手に持っているものを見て顔を顰めさせてきた。
「これとですね」

「ああ」
嫌な予感をそのままに話を聞く。
「これと」
「コチュジャンに」
「これです」
次は唐辛子そのものであった。
「これを全部かけて下さい」
「・・・・・・ちょっと待て」
いきなりカレーに思いきり入れてきたので思わず声をかけた。

第二十五話　手綱は誰の手にその四

「唯でさえ辛いのにそんなに入れるのかよ」
「これも全て難を避ける為」
ベッキーはそんなルシエンに対して合掌して述べてきた。
「それを全て食べれば難を避けられます」
「・・・・・どんなんなんだよ、全く」
「あのさ、ベッキー」
トムがベッキーに対して声をかけてきた。彼等もまたルシエンの周りに座っているのである。食べているものは銘々であり彼はラーメンと炒飯、それに焼き餃子であった。
「ここの超激辛カレーって食べたことある？」
「これですよね」
「うん、それって」
見れば彼女の前にもルシエンの前にあるものと同じものがある。
「ベッキーも食べるの」
「はい」
ベッキーはにこりと笑って答えてきた。
「大好物です」
「そうなんだ」
「しかしな」
マチアは涼しい顔の彼女ともう顔中から汗を垂れ流しているルシエンを見比べて言った。
「あれだけ辛いのなんてそうは食べられないだろ」
「そうでしょうか」
「いや、そうでしょうかって」
皆その言葉には突っ込みを入れる。
「そういう問題じゃなくて」
「あんなに辛いのは」

「大丈夫です」
どうしても根拠のない言葉に聞こえる。
「神は人に対して越えられる苦難しか与えません」
「そうかなあ」
トムはその言葉にはどうにも懐疑的であった。思わず言う。
「そうは思えないけれど」
「とにかくな」
ルシエン本人がここで言ってきた。
「これ、食べればいいんだろ」
「そうです」
ベッキーはそれに答える。
「それでは早速」
「食べるのかよ、これを」
「はい」
見れば彼女も全く同じ食べ方であった。しかもそれを平然と口にしている。
「おい」
それを見て洪童が青い顔をしていた。
「あんなの俺でも無理だぞ」
「御前でもかよ」
「限界越えてるぞ、あれは」
韓国人の彼が言うのである。韓国料理と言えばやはり辛いというのが評判である。実際に洪童もかなりの辛党である。クラスでもそれは有名だ。
「そうか、やっぱりな」
「それを平気で食べてるよな」
「ああ」
クラスメイト達はその言葉に頷く。
「どうなってるんだ」
「じゃあよ」

ルシエンは顔中から汗を噴き出しながら皆に問うてきた。だがまだ一口も食べてはいない。
「俺は今から限界を越えるんだな」
「まあ頑張れ」
マチアが声をかけてきた。
「何とかな」
「サイボーグになりたくないだろ」
「そんなのは絶対に御免だ」
クラスメイト達にも言う。
「だったら」
「ああ。覚悟を決めて」
スプーンを動かす。そして遂にそれを口に入れた。
「！！」
入れた瞬間に顔に稲妻が走る。かなりの衝撃であるのがわかる。
「やっぱり辛いのか」
「・・・・・・・・・」
ルシエンは答えはしない。答えるかわりに表情が強張っている。
「じゃあまあそれを食べ終えてくれ」
「そうしたら助かるそうだ」
「そうです」
ベッキーは平気な顔で同じカレーを食べながら言ってきた。
「けれど思ったより辛くないですね」
「それでかよ」
「一体どうなってるんだ」
「じゃあよ」
やっと一口食べ終えたルシエンが言ってきた。
「食べるぜ。それでいいんだな」
「そうらしいからよ」
「まあ頑張ってくれ」
「わかった」

彼は力なくそれに答えた。そのうえでまたスプーンを動かす。
「じゃあまた」
カレは食べはじめた。顔どころか身体中から汗を噴き出しながら。舌は麻痺し燃え上がっている。その中でただひたすら食べ続けている。
「御馳走様」
ベッキーはもう食べ終えていた。早い、あまりにも早かった。

だが彼はまだであった。悪戦はまだ続いていた。
ただひたすら食べ続ける。しかしそれも限界に達しようとしていた。
スプーンの動きが止まった。皆それを見て終わった。
「駄目か」
「限界か」
皆それを見て思った。既にルシエンは何も見ていない。誰もがそこから彼の限界を悟っていた。
しかしここで。思わぬ女神が現われた。
「ルシエン」
アンネットが彼にそっと声をかけてきたのだ。動きを止めている彼に。
「食べ終えたらデートしましょう」
「デート!?」
ルシエンはその言葉を聞いて声を出した。
「そうよ、デートよ」
彼女はまたそれを言った。
「そのカレーを食べ終わったらね。いいでしょ?」
「デート・・・・・」
ルシエンはまたその言葉を呟いた。
「アンネットとデート」
「そうよ」

声でにこりと笑ってきた。
「わかったわね。そのカレーを食べ終えたらね」
「ああ」
彼はそれに応える。今意識が戻ってきていた。
「わかった」
そして今はっきりと答えた。
「このカレーを食べる」
「そう、食べて」
アンネットは囁く。
「食べて私とね」
「よし！」
今彼は完全に目覚めた。
「食べるぞ今、そして」
スプーンがまた動きはじめた。同時に目の光も戻った。
「アンネットとデートだ！俺はやる！」
「おおっ！」
皆彼の復活を見て思わず声をあげた。あげずにはいられなかった。
「復活か！」
「しかしアンネットの言葉で簡単に」
「どういうことなんだ、これは」
「だからルシエンだからだよ」
フックが言う。
「ルシエンだからって！？」
「答えになってないんじゃ、それって」
「いえ、なってるわ」
それにプリシラが言ってきた。

第二十五話　手綱は誰の手にその五

「プリシラ」
「一言で説明がつくわ」
「そうなのか」
「ええ」
プリシラはクラスメイト達に頷く。
「そうなのよ」
「じゃあその答えは」
皆二人に尋ねる。
「愛よ」
プリシラが答えた。
「愛！？」
「何か急に雰囲気が恥ずかしくなってきたような」
皆はプリシラのその言葉で場面が急に変わりだしたのを察していた。しかし彼女は大真面目である。
「そういうことよ」
「つまりだな」
フックが彼女にかわり説明する。
「お気に入りのアイドルに食べてって差し出されたものならどうだ？」
「ああ、それならわかる」
洪童が納得したように言ってきた。
「俺だって春香の出したものなら何だって食べるしな」
「そういうことだ」
春香は洪童にとって妹なので事情が少し違うがまあその通りであった。そうした意味でフックとプリシラの言っていることは実にわかりやすいものであった。
「成程」

「じゃあルシエンは」
「やるわ」
プリシラはクールに述べた。
「絶対にね」
「そうか」
「じゃあ本当に」
「アンネット、見てろよ！」
彼は今必死にカレーを口の中に叩き込んでいた。最早それは修羅であった。
「御前とのデートの為に俺は1」
もう当初の目的を完全に忘れてしまっている。そして今遂に終わった。
「おお！」
「見事！」
「どうだ、食ったぞ！」
顔中から汗を流してアンネットに言ってきた。
「これでいいな！デートだ！」
「ええ、いいわ」
アンネットはにこりと笑ってそれに応える。
「じゃあ今日の放課後ね」
「よし！」
彼はその言葉に頷く。
「放課後だな！楽しみに待ってるぞ！」
話はすぐに決まった。彼は恐るべきカレーを完食してデートを勝ち取ったのであった。しかし当初の話は完全に忘れてしまっていた。
「ただ、ちょっと待ってよ」
ルシエンは喜び勇んで食堂を後にする。彼がいなくなった後でトムがふと皆に言ってきた。
「今日の放課後だよね、デートって」
「今アンネット言ったわよね」

それにパレアナが頷く。
「確かに」
「占いじゃ今日交通事故に遭うんだろ？じゃあまずいんじゃないかな」
「それを避ける為のカレーだったんじゃ？」
「そうだけれどさ」
トムはそうパレアナに返す。
「けれど何かさあ。引っ掛からない？」
腕を頭の後ろに組んでいぶかしがる顔をしてこう述べてきた。
「そもそも難を避けるのにどうしてカレーなの？大体アンネットがデートって言ったし」
「そういえば」
クラスメイト達はトムのその言葉に気付いた。
「そうだよな」
「何かおかしいな」
「そうだな」
マチアも頷いてきた。
「まさかこれは」
「アンネットが」
だがその場にアンネットはいなかった。彼女は既に屋上にいてベッキーと話をしていた。何故か二人でそこにいたのである。皆に見つからないように。
「上手くいったわね」
「はい」
ベッキーはアンネットの言葉に笑みを浮かべて笑って返していた。アンネットも得意げな顔でそれを受ける。
「しかしですね」
だがここでベッキーはアンネットに言ってきた。
「何か回りくどいような」
「いいのよ、それで」

しかしアンネットはその指摘に笑って返す。
「こういうのはね。遠回りだから面白いのよ」
「そうなのですか」
「だからあえてお願いしたのよ」
「はあ」
「ルシエンのことはね。わかってるのよ」
彼女は言う。
「ああ言えば乗るし」
「そしてアンネットさんの言葉で確実に、ですか」
「そういうことよ。何か利用して御免ね」
「いえ、それはいいです」
ベッキーはそれはいいとした。しかしそれとはまた別に言いたいことがあった。
「ただ」
「ただ。何？」
「やはり回りくどいですね」
「だからそれがいいのよ。こういうのは楽しんだ者勝ち」
「ですか」
「そうよ。じゃあ今からデートの用意をしないと」
「楽しそうですね」
「勿論よ」
また笑ってみせる。心からの笑顔であった。
「最高に楽しい気持ちよ」
そう言って屋上から消える。何だかんだ言って彼女も楽しんでいたのであった。

手綱は誰の手に　　完

2006.12.26

第二十六話　ナンのお家その一

ナンのお家

ナンはモンゴル人である。だから登下校はいつも馬である。
「ハイヨーーーー、スーホー！」
颯爽と馬を駆って学校に向かう。そしてそのまま校門に入る。
他の学生達はそんな彼女に見慣れている。モンゴルから来ている生徒は皆馬で来ているからだ。馬を停める厩までである程である。
「しかしあれだな」
ダンはバイク通学だ。バイクを置いてから側に来たナンに対して言う。
「いつもながら派手な登校だな」
「そうかしら」
だが本人は別にそうとは思っていない。モンゴル独特の民族服を着こなし額にうっすらと汗をかいている様が実に綺麗ではあるが。
「モンゴルじゃ誰だってこうだけれど」
「そうか」
ダンはそれを聞いて何も言わずに頷く。
「それもいいかもな」
「琉球じゃ馬は乗らないの？」
「そうだな」
彼はその言葉に答える。
「乗らないな、それは」
「そうなんだ」
「琉球は元々海洋国家でな」
彼はそうナンに説明する。
「船に乗ることはあっても馬に乗ることはまずなかった」
「私達と逆ね」
「そうだな。ぜんぜん逆だ」

「食べ物も全然違うのよね」
「山羊を食べるぞ」
ダンはこう答えてきた。二人は並んで学校の中を進んでいる。意外とさまになっているカップリングに見えるのが面白い。
「他には豚とかは」
「羊は？」
「あまり食べないな」
それは素直に答えてきた。
「他には海の幸とかだな」
「蛇食べるんだよね」
「ああ、よく知ってるな」
何故かそれを言われて顔を綻ばせてきた。
「あれが意外と美味いんだ」
「そうなんだ」
「他にも色々あるけれどな。ゴーヤとか」
「イボが一杯ある瓜だよね」
「そうだ。そーきそばに足てびち」
料理にも話がいく。どちらも琉球の名物料理だ。日本でもよく食べられている。当然ダンもよく食べている。ちなみに彼は意外と料理上手でクラスメイト達にも振舞っていたりする。不良だが何かと気のきく繊細なところのある男なのだ。
「ミミガーにな」
「いいわね、話を聞くだけでもう」
「おいおい、朝食べてきただろうが」
涎を垂らさんばかりのナンを見て思わず苦笑いを浮かべた。
「まあね。けれど」
「馬に乗るとお腹が空くか」
「今のお家は結構学校から離れているしね」
「ちょっと待て」
ダンはその言葉にふと気付いた。

「今の家って言ったよな」
「ええ」
ナンはしれっとしてそれに返す。
「言ったわよ、はっきりと」
「どういうことだ?」
「だからさ、私モンゴル人よ」
ナンはしれっとしたままま言う。
「だから」
「ということはだ」
ダンもここまで聞いて何が言いたいのかわかった。それで言った。
「御前まさか」
「ええ。パオで暮らしてるわよ」
パオとはモンゴル伝統の家だ。簡単に言うならばモンゴル民族伝統のテントでありかつてはモンゴル人は皆このテントの中で暮らし遊牧生活を営んでいた。今もこれで暮らすモンゴル人は多い。
「それがどうかしたの?」
「いや」
ダンはそれを聞いてかなり難しい顔になっていた。それからまた彼女に声をかける。
「そうだったのか」
「まさか私がアパートにいるって思ってたの?」
「まあな」
そう返す。
「普通はそうだからな」
「それは日本とか琉球の常識よね」
「殆どの国でそうだろ?」
「モンゴルは特別よ」
傲然としてまで言う。その言葉には何の揺るぎもない。
「モンゴルにはモンゴルの常識があるのよ」
「それがパオか」

「そういうこと。他にも面白い常識が一杯あるわよ」
「そうなのか」
ダンは何か別次元の話を聞いているような気になった。少なくとも彼の国の琉球や日本での話には思えない。
「琉球は日本の兄弟国だったっけ」
「まあな」
その質問には答える。

第二十六話　ナンのお家その二

「陛下と日本の天皇陛下は縁戚関係でもあるしな」
「そうだったわよね」
これは本当の話である。琉球王室と日本の皇室は縁戚関係にある。十九世紀に琉球王家が宮家になった時にはじまったものであるが今でもそうなのである。
「関係は深いぞ」
「日本だった時もあるしね」
「ああ」
その言葉にも答える。
「一応民族は違うが結構混血はしてるな」
「そうよね。ぱっと見ただけじゃ日本人と琉球人ってわからないから」
「御前の視力でもか」
ここでダンは冗談を言ってきた。
「見分けられないんだな」
「あのね」
ダンのその言葉にまずは憮然とした顔を見せてきた。
「幾ら目がよくてもそんなのは見分けられないわよ」
「そうか」
「当たり前でしょ。目がいいのは草原で生きているからよ」
ナンはそれを説明してきた。
「それとこれとは関係ないわよ」
「まあそうだよな」
「モンゴル人を何だと思ってるのよ」
「とりあえず何か俺達とは全然違う世界に生きてるとは思ってる」
ダンはそう返した。
「それもかなりな」

「そんなに違うかしら」
「だったらな」
ダンは一つ提案してきた。
「たまにはクラスの皆でも呼んだらどうだ？面白いぞ」
「そうね」
ナンもその言葉を頭に入れてみた。考えてみると結構面白そうである。
「じゃあそれやってみるわ」
「そうだな。じゃあこれからな」
「ええ。今日ね」
「今日かよ」
ナンの即断にかなり引いた。
「せめて明日とか言わないか？」
「決めたことはすぐにやる」
ナンはやけに教訓めいた言葉を出してきた。
「それがモンゴル人の生き方なのよ。そうじゃないとね」
さらに言う。
「とんでもないことになるのよ。草原じゃね」
「そうなのか」
「草原には草原の掟があるのよ」
ナンの言葉が真剣なものになってきていた。
「まず決めたことはすぐにやる」
「だからか」
「それじゃあ今日ね」
「わかったよ」
「あれ、わかったよってことは」
ナンはダンのその言葉を受けてふと彼の横顔を見てきた。
「あんたも来るの？」
「駄目か？」
「いえ、別に」

だがそれを断るつもりはナンにもなかった。
「あのね、一つ言っておくけれどね」
「ああ」
何か話が妙な方向に転がってきているようだとダンは思いはじめていた。
「女の子が一人でいるパオに入るってことは」
「何なんだよ」
目を顰めさせてそれに問う。
「あれよ。結婚するってことよ」
「おい、ちょっと待て」
憮然とした顔でナンに言い返す。
「俺は誰も一人で来るとは言ってないぞ」
「わかってるわよ。けれどね」
「何だよ、けれどねって」
何か売り言葉に買い言葉になってきていた。ダンも普段のクールさは消えて少し焦ったようになっていた。
「一人で来るのなら覚悟してよね」
「馬鹿言え」
彼は言う。
「俺はそんなことは」
ナンからプイと顔を背けての言葉であった。
「別にする気は」
「何だ、そうなの」
「そうなのって御前」
また話がややこしくなってくる。
「何言ってるんだよ」
「そうよね」
「そうだよ」
ダンはその口を少し尖らせて言ってきた。
「何でそうなるんだか」

「あのさ」
ナンがさらに言ってくる。
「私は別にいいんだけれどさ」
「おい」
ダンはその言葉にまた突っ込みを入れてきた。
「そりゃどういう意味だ」
「だから言ったままよ」
ナンの言葉の調子は少し売り言葉に買い言葉といった感じになってきていた。ダンもそれは同じである。
「まあこっちはそれでさ」
「言っておくけれどな」
ダンはそれにまた返す。言葉の応酬は少し洒落にならない域にまで達してきていた。
「それ本当にやったらどうなるかわかってるんだろな」
「わかってないで言うと思う？」
「馬鹿馬鹿しい」
ダンは思わずこう言った。
「そんな冗談で」
「冗談で済ませるならそれでいいがな」
無理矢理冗談で話を収めることにした。ナンが乗るかどうかは別にして。
「本気だったらよ」
「どうするつもりよ」
「決まってるだろ」
彼はナンを横目で見据えて言う。
「そちらのしきたりに従うぞ」
「そうなの」
「ああ」
彼は鋭い声で答えた。
「シャワーを浴びてからな」

「モンゴルにシャワーなんてないわよ」
「何っ！？」
この言葉にダンは一瞬言葉を詰まらせた。
「そりゃどういうことだ」
「だって草原よ」
ナンはその言葉に答える。

第二十六話　ナンのお家その三

「そんなのある筈ないじゃない」
「じゃあどうやって」
「川よ。それか温泉」
ナンは平気な顔で答える。
「昔みたいにお風呂に入らないってことはないけれどね。今だってそれよ」
「そうだったのか」
ダンにはこれもまたカルチャーショックであった。琉球は全体的に熱い星が多く皆シャワーを盛んに浴びるからだ。当然彼も結構綺麗好きである。
「こっちじゃ銭湯ね」
「ふうん」
「それか学校のシャワーを使ってるし」
「そうだったのか」
「意外だった？」
そう話してからまたダンに尋ねる。
「シャワーがないって」
「いや、考えてみれば当然か」
ダンは顎に手を当ててこう述べてきた。
「草原だからな」
「そういうことよ」
「じゃあ毎日綺麗にはしているんだな」
「勿論よ」
それは保障してきた。
「私だって女の子よ。それは当然じゃない」
「そうだよな」
「そうよ。何だと思ってるのよ」

「いや、別に悪いことは」
「そう？まあいいわ」
とりあえずはその言葉に納得することにした。それは話は続く。
「それでさ」
「ああ」
またさっきの続きかとダンは嫌に思ったがその予想は外れた。ナンは話を最初に戻してきたのだ。
「皆を呼ぶにしても」
（ん！？）
ダンはその言葉を聞いて意外に思ったがそれは口には出しはしなかった。黙って話を聞いていた。
「何を出したらいいかな」
「そうだな」
（さっきの話は忘れたか）
それを確かめながら話を続ける。
「モンゴルの料理でいいんじゃないのか」
「モンゴルの料理」
「羊とか乳製品なんだろ？確か」
それを尋ねてきた。やはりモンゴル民族といえばそれである。馬の乳と羊の肉が彼等のソウルフードなのだ。
「それを出したらどうだ」
「そうか」
ナンは少し俯いてからそれに答えた。
「それがあったわよね」
「そうだろ？」
ダンはそれに対してまた言う。
「それでいったらどうだ？」
「そうね」
ナンはそれに頷いてきた。
「じゃあそれで」

「そうしたらいいさ」
彼はそれを勧める。妥当だと思った。ナンもそれは同じだった。
「皆を呼んでな」
「わかったわ」
こうして何とかといった形でナンの家に皆が呼ばれることになった。しかし皆はそれを聞いてどうにも困った顔になってしまっていた。これには理由があった。
「ナンの家ねえ」
「どうにも」
「何かあるのか？」
それに最初にそれを皆に言ったダンが問うた。皆の反応が気になったからである。8
「別に嫌だとかそういうのじゃないだろう？」
「ああ、それはないわ」
パレアナがそれに答えてきた。
「オールオッケーよ」
「ここで使う言葉だったか？」
「そんなのはいいじゃない。たださ」
「ただ。何だ？」
ダンはパレアナに問う。話を聞いているうちに少し不安になってきたがそれは顔には出さなかった。
「ナンのお家って今何処？」
「えっ」
この問いにダンは思わず固まってしまった。
「今何て」
「だから。ナンのお家って今何処にあるの？」
そうなのだ。ナンの家はパオなのだ。だから何時何処にあるのか非常にわかりにくいのである。これは草原の民の特徴である。ダンもそれはナンとの話でわかっていたが急にそれを問われて固まってしまったのであった。

「それは」
「それわからないと行けないわよ」
パレアナはダンに対してこう述べる。
「幾ら行くことになったって言っても」
「そうよね」
それにジュディが頷く。
「居場所がわからないんじゃ」
「どうしようもないじゃない」
パレアナはまた言う。
「でしょ？」
「そういえばそうだった」
ダンはそれを言われてようやく気付いた。
「何処にいるかだよな、今」
「そういうこと」
パレアナとジュディだけでなく他の皆も言う。
「他の皆は住所はっきりしてるけど」
「ナンはね。モンゴル人だから」
「ううん」
ダンはそれを聞いて腕を組んで考え込んだ。
「そうだった。それじゃあ」
「何か考えがあるの？」
ジョンがそれに問う。
「うちのラッシーでナンの匂いを調べてもらって追跡するとか？」
「それもあれだよ」
ロザリーがそれに突っ込みを入れる。
「何か物々しいよ。別に捜査するわけじゃないんだから」
「勘で調べていくのはどう？」
ローリーの意見はまた実に独創的なものであった。
「それで適当に見つけていく」
「そんなので見つかったら奇跡よ」

パレアナがすぐにそれを却下した。
「見つかるまでに下手したら何日もかかわるわよ」
「それもそうか」
「全く。駄目に決まってるじゃない」
「じゃあさ」
次に出て来たのはアンジェレッタであった。チョコンと登場してきた。
「ナンにお薬飲んでもらって自分で言ってもらうってのはどう？」
「ちょい待ち」
皆その言葉にはすぐに突っ込みを入れた。

第二十六話　ナンのお家その四

「それ自白剤よね」
「そうなんだ」
「そうなんだな、じゃなくて何であんたが持ってるのよ」
話が訳のわからない方向に転がってしまった。
「そんなのを」
「実家から送られてきたものだけれど？」
アンジェレッタは別に驚くことなく答える。あどけない言葉で。
「それがどうかしたの？」
「いや、ちょっとそれは」
「あんたの実家って本当に只の薬屋さん？」
「そうだけれど」
この場合見事なまでに説得力のない言葉である。
「何かおかしい？」
「いや、いいわ」
「凄い気になるけど」
「何でかな」
やはりアンジェレッタにはそれがわからない。
「どっか変なのかな」
「もうそれはいいから」
皆話を強引に終わらせる。やばい方向にいってそのまま収納がつかなくなってしまいそうだったからだ。
「とにかくこのままじゃ行けないわよ」
パレアナがそう言う。
「住所がわからないとさ」
「そうだな」
「とりあえずナンはいるかしら」
ジュディが教室の中を探しはじめた。

「話はそれからね」
「そういうことね」
話を一旦は終わらせようとした。しかし実にタイミングのいいことにそこに当のナンがやって来たのであった。本当に絶妙のタイミングであった。
「あらっ」
「噂をすれば」
皆ナンが姿を現わしたのを見て思わず声をあげてしまった。そのうえでナン自身に問う。
「ねえナン」
「ダンから聞いたんだけれど」
「ええ、わかってるわ」
ナンの方もそれに答える。それから述べてきた。
「私のお家のことでしょ」
「そう、それ」
「今何処にいるの？」
「実は昨日場所を変えててね」
ナンはこう説明してきた。皆の危惧は当たった形になった。
「ちょっと面白い場所にね」
「面白い場所！？」
「ええ、そうよ」
皆にこう述べる。
「そこに」
「何処なの、そこ」
パレアナが最初に尋ねた。
「よかったら教えて。皆で行くから」
「うん、それじゃあね、ええと」
ここで紙とペンを探した。すぐにジュディがその二つを渡してきた。
「これでしょ」

「うん、それ。有り難うね」
「ええ。じゃあそこに書いてよ」
「わかったわ。じゃあ」
それを受けて地図を描きはじめる。だがそこに描かれた地図とは。
「・・・・・何これ」
「何処なのよ」
皆それを見て絶句してしまう。そこにあったのは想像を絶する地図であったのだ。
まず学校が描かれている。そこから一直線に斜めにかなり歪な形の道があってその先にナンの家と思われるパオが描かれていた。それだけであった。
「目印は？」
「目印って？」
ナンはパレアナの質問にキョトンとした顔を見せてきた。
「そんなのいるの？」
「いるに決まってるでしょ」
パレアナはそう返す。
「何言ってるのよ」
「だって草原じゃそんなの一切ないから」
ナンは答えてきた。やはりここでもモンゴル民族の草原のやり方が出て来た。
「普通に見えるし」
「見えないわよ」
「何処なのよ、本当に」
パレアナだけでなくジュディも問うてきた。
「だからそこよ」
「そこって」
「何処にあるんだか」
「とにかくね」
ナンは話を聞かずに強引に話を収めてきた。天然である。

「待ってるから。宜しく」
そう言ってその場を去る。後には呆然とする皆だけが残った。
「これが地図か」
ダンもその地図を見て何と言っていいかわからないといった様子であった。首を捻ってばかりである。
「どうにもな。何が何なのか」
「とりあえず本人は呼ぶ気満々みたいね」
ジュディがその中で言う。
「行くしかないわね」
「やっぱりラッシー呼ぶ？」
ジョンがまた提案してきた。
「ナンの匂いを嗅いでもらってさ。これだとすぐだよ」
「そうねえ」
パレアナは今度ばかりはそれを真剣に検討しだした。
「このままじゃそれどころじゃないしね」
「っていうかモンゴル人ってこれでいつもお家に辿り着いてるの？凄いわね」
ジュディはそちらにも感心していた。
「いや、それナンだからでしょ」
「そうか。何か本当に野生児なのね」
「草原の民だからね」
パレアナが言ってきた。
「やっぱり独特の感性があるわよ」
「この地図ってそれ以前じゃないの？」
「そう言うかも」
パレアナは少しは前向きに肯定しようと思ったがこの地図はそれすらも許さないものがあった。そこまでのスケールがあるものであった。
「とにかくどうするの？」
ジョンが皆に対して言う。

「ナンのお家に行くんだったら」
「そうね。やっぱりラッシー呼んでくれる？」
「うん、じゃあ」
「いえ、皆さんここは待って下さい」
「！？」
誰かが言ってきた。皆そこに顔を向ける。
「えっ」
「あんたが！？」
「はい、ここはお任せ下さい」
誰かが名乗り出て来た。
「ううん」
「貴女なの」
「はい」
出て来たのはセーラであった。後ろにラムダス、ベッキーの二人の従者を連れてにこりと微笑んでいる。何故かその微笑が結構底知れぬ恐ろしいものに見える。
「私がすぐにナンさんのお家を見つけますので」
「そうやってなのよ」
まずはそれが引っ掛かる。しかし話は何時の間にか彼女のペースになっていく。こうして話は思わぬ方向に流れてしまうのであった。

ナンのお家　　完

２００６・１２・３０

第二十七話　草原の料理その一

草原の料理

「それではですね」
「どうするの？」
皆あらためてセーラに問う。彼女が何をするのか気になって仕方がないのだ。
「まずはですね」
セーラは皆の声を受けて応える。相変わらずその後ろにはラムダスとベッキーが控えて不気味な沈黙を守っている。何かそれを見ているだけでよからぬことが起こりそうであった。
「取り出したるこれを」
「お嬢様」
ラムダスがさっと動いた。そして何かを出してきた。
「それ、何？」
「魔法です」
セーラはすぐに答えた。
「魔法って！？」
だが皆その単語を聞いて一斉に不審な目を向けてきた。何をやらかすのかと見ているのだ。
「何、それ」
「話が読めないんだけれど」
「ですから魔法です」
セーラはそんな彼等に対してのこやかに述べる。
「それさえ使えば簡単にナンさんのお家まで辿り着けます」
「あの」
「幾ら何でもそれは」
皆にこやかに笑うセーラに対して述べる。
「無茶苦茶じゃないかしら」

「そうよねえ」
「そうでしょうか」
だがセーラはそう言われて今ひとつどころか全くわかっていないようであった。キョトンとした顔を見せてきている。
「そもそも魔法なんて本当に使えるの？」
「そうよね、そういう問題もあるし」
パレアナにジュディが応える。
「魔法はマウリアにはちゃんと学問になっていますが」
「へっ！？」
これまたとんでもない事実が明らかになった。最早何が何なのかわからなくなってきていた。
「ですから魔法もまたマウリアでは存在しているのです」
「そうだったの」
「マウリアの歴史は悠久」
この時代はこういうことになっている。あまりにも資料が少ないのと神話とミックスされているのでこういうことになってしまっているのである。それがマウリアであった。
「その中では魔法もまた」
「そうだったの」
「もう何でもいいや」
皆話がわからなくなってきた。マウリアならば何を言っても許される雰囲気があるからだ。それは何故か、やはりマウリアだからであった。
「それでは魔法で」
「ちょっと待って」
しかしここで名乗り出る者がいた。それは何と彰子であった。
「小式さん？」
「そんなの使わなくてもわかるよ。ナンちゃんのお家だよね」
「ええ」
「それさっきから言ってるじゃない」

ジュディがそれに突っ込みを入れる。こうした時に彼女はどうにも反応が鈍いのである。
「それじゃあわかるわ。ナンちゃんのお家の場所」
「!?どうしてわかるの、それ」
皆彰子の突然の言葉に一斉に顔を向けてきた。いきなりそう言われては顔を向けてしまうのが常である。
「だって。この街にパオを置けるような場所って限られてるから」
彰子は言う。これは彼女が地元の人間だからわかることであった。
「それにこの方角だと。場所は一つしかないわ」
「そうだったんだ」
「駅前の公園ね」
彰子は言う。
「多分そこよ」
「ああ、あそこか」
ダンがそれを聞いて顎に手を当てて呟いた。
「あそこだったのか」
「ダン、そこ知ってるの」
「ああ」
パレアナにも答える。
「そこならな。もう場所はわかった」
「そう。じゃあ」
「後は皆で行くだけね」
「むっ」
ここでセーラが何か妖しい術を使い出した。その緑の目が何故か青くなっていた。
「これってどういう現象?」
「まさかこれが」
「千里眼の魔法です」
セーラは答える。
「我がマウリアに伝わる魔法では初歩の初歩ですが。非常に役立ち

ます」
「本当に魔法使えたんだ」
「もう何が何だか」
本当にわからなくなってきた。セーラはやはり只者ではなかった。皆本当に人間なのだろうかとさえ思いだしている程である。
「確かにそこですね。ありました」
「やっぱり」
彰子はそれを聞いて満足そうに頷く。
「パオが見えます。あそこがナンさんのお家ですね」
「そこなのね」
「ええ。ではあそこに行けばいいのですね」
「場所は俺がわかってるから」
「私も」
ダンと彰子が述べてきた。

第二十七話　草原の料理その二

「道案内するよ。何はともあれ場所がわかってよかったな」
「そうだよね、やっぱり」
「何か凄いとんでもないのを見たけれど」
「まあいいか」
皆とりあえずはセーラの魔法から考えを離した。そしてナンの家へと向かうのであった。

道がわかるまでは大騒ぎであったがわかってからは何ということはなかった。皆すんなりとナンのパオへ辿り着くことができた。見れば彼女はもう食事の支度にかかっていた。
「いらっしゃい、早かったわね」
「ええ、まあ」
「道はわかったからね」
「すぐわかったでしょ」
ナンはにこりと笑ってきて皆に言ってきた。
「あの地図で」
「何でそう思えるんだよ」
ジョンがその言葉に突っ込みを入れた。
「あれじゃあわからないよ」
「そうかしら」
「そうかしらねってあんた」
パレアナもジョンに続く。彼女も大概にしろとさえ思った。
「あれが地図なの？そもそも」
「地図じゃない」
しかしナンは相変わらずである。
「立派な」
「あっきれた」

遂にはこの言葉を出す。
「よくもまあそれで地理クリアーしてるわね」
「まあ地図は描いたりしないけれど」
ジュディも言うが彼女も感情的にはパレアナと同じであった。
「あれはちょっと」
「そんなに変だったかな」
「かなりな」
ダンは彼らしくクールだがそれでも言っていることはきつかった。
「わかるわけがない」
「ちぇっ」
ナンはそう言われてかなりむくれてみせた。
「何かショック」
「私も魔法を使おうと思っていたのですが」
「魔法って？」
今度はナンが首を傾げる番であった。実際に首を傾げていた。
「何言ってるの、彼女」
「ああ、それ言うと話大きくなるから」
「それはまたね」
そう言って今度は皆で話を強引に進めてきた。
「とにかくだ」
ダンがきりよく言ってきた。
「皆来たぜ。宜しくな」
「うん、こちらこそ」
ナンもそれに答える。
「もう準備できてるわよ」
「ヒヒーーーーーン」
後ろからナンの乗る馬達のいななきが聞こえる。ナンと完全に息が合っているといった感じであった。
「そうなの」
「やっぱり羊？」

「まあね」
そう皆に答える。
「やっぱりモンゴルだからね」
そのうえでにこりと笑ってきた。屈託のない笑顔である。
「それと馬のお乳よ」
「やっぱり」
「定番ね」
「といってもね」
だがナンはここで思わせぶりに笑ってきた。
「皆が思っているような料理じゃないわよ」
「?どういうこと?」
パレアナがその言葉に目を丸くしてきた。何のことかわかりかねた。
「それって」
「モンゴルっていったらあれじゃないの?」
ジョンもその顔をキョトンとさせていた。とりあえずここは彼のイメージを優先させていた。
「ジンギスカン鍋」
「それよね」
ジュディもそれを聞いて述べてきた。
「やっぱり」
「残念でした」
しかしナンはその言葉に右の人差し指をチッチッ、と切って断りを入れてきた。
「モンゴルには元々焼く料理はないのよ」
「あれ、そうだったの」
「そうよ」
そう答える。それを聞くと彰子が言ってきた。
「煮るんだよね」
「知ってたの?やっぱり」

「うん、本で読んだから」
彰子は答える。
「それで」
「流石ね」
ナンは彰子のその言葉を聞いて感心至極といった様子であった。
「その通りよ」
「てっきり生で食べるのかと思ったわ」
「私も」
二人の後ろでパレアナとジュディが囁き合っていた。だがこれも合っていた。
「そういう場合もあるわね」
ナンは答えてきた。
「そうなの」
「元々草原って燃料ないじゃない」
そうである。草原にあるのは草だけだ。木のように燃料になるものはないのである。そうしたことを考えると実に暮らしにくい場所なのである。
「それでね。煮るの」
「どうしてそこで煮るの？」
今度はジョンが問うた。
「そっちの方が燃料使わなくて済むから」
「ふうん」
「それでだ」
ダンは一つ気になることがあった。
「その燃料は何だったんだ？あまりないっていうそれは」
「ああ、それ」
ナンもそれに応える。

第二十七話　草原の料理その三

「あるじゃない」
「あるじゃないって何だ？」
ダンはそれに問う。
「何もないんじゃ」
「羊がいるじゃない」
ナンはにこにこと笑って述べる。
「羊毛か？そんな訳ないよな」
「羊の毛は服にするのよ。皮もね」
「そうだよな」
羊はただ食べるだけではない。羊毛は実に貴重な資源なのである。今でも羊の放牧はそうやって利益を得ているのである。それは誰もが知っている。
「それで羊？」
「だから糞よ」
ナンは述べてきた。
「糞！？」
「そう、それを燃料にするのよ」
彼女は言う。
「わかったかしら」
「ああ、成程ね」
それを聞いてジュディが頷く。
「羊のうんこを燃やしたらね。そうなるわね」
「流石に今はしていないわよ」
笑ってこう言う。
「もっといい固形燃料が一杯手に入るしね。羊のうんこは肥料に売るのよ」
「そういうわけね、わかったわ」

パレアナもそれで納得した。
「そういうのならね」
「そういうことなのよ」
「草原の生活って中々凄いんだね」
ジョンも他の皆もそれを聞いて頷くことしきりであった。
「そういうわけでもないわよ。今じゃノートパソコンや携帯テレビもあるしね」
意外と贅沢ではある。
「別にね」
「それでナンちゃん」
話が一段落したところで彰子が声をかけてきた。
「何？」
「料理のことだけれど。何なの？」
「まあ中に入って」
ここで彼女は皆に声をかけてきた。
「まずはね。それで話をしましょう」
「そうね。何か結構寒いし」
パレアナが言ってきた。
「中でね」
「そう。すぐに食べ物出すから」
ナンも言う。
「食べながら話しましょう」
「了解」
こうしてパオの中で話をすることになった。パオの中はかなり広く皆が入られた。中は簡素なもので部屋の端に携帯用のパソコンにテレビ、電話の他はさしてない。折畳み用の椅子や机、そして寝袋といった程度である。やはり簡素だ。ナンはそこで一匹の犬と一緒にいたのであった。
「テムジンっていうのよ」
ナンはその大きく何処か狼に似た犬の頭を撫でて言った。

「狼犬なのよ」
「へえ」
皆それを聞いて声をあげた。
「狼の血を引いてるの」
「そうよ。モンゴルだからね」
片目を瞑って述べてきた。
「狼なのよ」
モンゴルでは狼は神聖な生き物であるとされている。モンゴル帝国のことを書き記した元朝秘史では蒼き狼と白き牝鹿こそがモンゴル人の祖先であるとしている。なおナンの犬のテムジンは言うまでもなくモンゴル帝国の開祖チンギス＝ハーンの若き日の名前である。
「賢いんだから」
「その名前でわかるよ」
ジョンが笑顔で言ってきた。
「いい名前だよね」
「そうでしょ。太祖の名前だからね」
ナンは胸を張って言ってきた。
「賢くならないわけがないわ」
「そうだね」
どうやらナンもトップブリーダーのようである。遊牧民の生活に犬は欠かせない。だから彼女も犬を大切にしているのであろう。
「それでさ」
またパレアナが言ってきた。
「食べ物は？」
「うん、これね」
パオの中央にある鍋を指差してきた。かなり巨大な鍋である。その中には羊の骨付き肉がかなり入れられていた。
「これがメインよ」
「やっぱりそれね」
「そういうこと。どう？」

「かなりいいわ」
ジュディが合格を出してきた。他の皆も何も言わないところを見ると合格なのだろう。
「けれど煮えるまでには時間がかかるみたいね」
だがここでパレアナが言ってきた。
「その間どうするの？」
「これ食べて」
ナンはその言葉に応えるとすぐにあるものを出してきた。どれも白い食べ物であった。
「チーズ？」
「まあそうよ」
皆にそれを手渡して述べる。
「ホロートっていうの」
「ホロート？」
「簡単に言うと乾燥チーズよ」
ナンはそう説明してきた。
「そう言えばわかるかしら」
「ああ、そう言えばそうだね」
ジョンがそれに応える。
「そんな感じで」
「そうでしょ。美味しいから」
「うん」
食べてみる。それは独特の味がして確かに美味かった。だがふと気付くことがあった。

第二十七話　草原の料理その四

「これは牛乳じゃないな」
ダンが言ってきた。
「この味は」
「馬乳よ」
ナンは彼に答えた。
「だって牛はモンゴルじゃいないから」
「ああ、そうだったわね」
ジュディはそれを聞いてすぐにわかった。
「モンゴルでの放牧は羊だからね」
「そういうこと」
「そうなの」
それを聞いたパレアナがジュディに問うてきた。
「モンゴルって」
「牛って農業に使ってたじゃない」
「ええ」
今でもかなり使う。この時代の農法はかつての農法も取り入れた機械と生物両方を使ったものなのである。だから牛も使われるのである。他には水田に魚や鴨を放してそれに寄生虫を食べさせたりする。農薬も使うがそうした生物を使う方が遥かに多くなっている。
「モンゴルじゃ農業ないから」
「そうか」
「そうよ」
ジュディが応える。これでわかった。
「馬のお乳もいいものでしょ」
ナンは笑って皆に言う。
「他にもあるし」
「他にもあるの」

「そうよ、ビャスラグとか」
「今度は何なの？」
「チーズよ」
ナンはその質問にも答える。
「他にもバターとかヨーグルトもあるし。モンゴルじゃ乳製品が主体なのよ」
「へえ」
「だからか」
ジョンが納得したように頷く。ナンはそれを見て問うてきた。
「何か納得するものでもあったの？」
「いやさ」
ジョンはナンに応えて述べる。
「ナンの身体の強さだよ。乳製品を食べているからなのか」
「勿論今はそれだけじゃないけれどね」
彼女はにこりと朗らかな笑みを浮かべて述べた。
「お肉もそうだし野菜や果物も食べるし」
「食生活は変わらないのね、私達と」
「今はね。やっぱり遊牧民でもね」
笑いながら述べる。
「それでもやっぱり乳製品とお肉が多いけれど」
「成程」
「あと血も飲むし」
「血をか。そうだったな」
ギルバートはそれを聞いて少し嫌そうな顔をした。イスラムの戒律では血を飲んだりはしない。連合ではそこはかなりアバウトになっているがどうやら彼は動物の血は好みではないらしい。しかし連合では動物の血を飲んだりするのもわりかしポピュラーである。
「モンゴルでは飲むのだったな」
「飲むだけじゃなくて料理にもするし」
「ふうん、そうなんだ」

彰子はそれを聞いてやけに納得していた。
「それも元気が出るよ。美味しいし」
「そうなのか。それでだ」
「うん、いい頃ね」
ダンに応える。見ればもう肉が煮えてきていた。
「食べて。モンゴルの郷土料理チャンスンマハッよ」
「骨付き羊肉の塩茹でね」
「そうよ。そのまま食べていいから」
パレアナに応えながら今度はペットボトルをどんどん出してきた。
「それでこれと一緒にね」
何か白く濁った飲み物であった。一見すると濁酒に見える。
「それ何?」
「馬乳酒」
そう答える。
「モンゴルっていったらこれでしょ。皆どんどんやって」
「いいな、それは」
ダンはその酒を見て目を細めてきた。
「肉に酒か」
「そういうこと」
「ううん」
しかしアンはそれを見て困った顔を見せてきた。
「じゃあ私はお肉はいいわ」
「あれっ、嫌いだった?」
「違うわよ。戒律よ」
彼女は言う。ユダヤ教では肉と乳を一緒に食べることは禁じられているのである。こうしたところがかなり厳しいのがユダヤ教なのである。だからイスラエルではチーズバーガーは食べられないのである。
「チーズとお酒だけもらうわ」
「わかったわ」

それににこやかに応えてアンにもお酒を渡す。そしてチーズも。
「じゃあまあお肉だけれど」
「意外とあっさりしてるな」
ダンは骨のところを掴んで手に取る。それを口にしてから述べた。
「塩味だけで」
「そうでしょ。これが本来の味なのよ」
ナンは彼に応えて言う。
「それはそれで美味しいでしょ」
「ああ」
彼はその言葉に頷く。
「ただ、胡椒はしてあるな」
「それはね。本当はしないんだけれど」
「じゃああれ？」
ジョンも肉を食べている。肉と酒を楽しみながら言ってきた。
「本当に塩だけだったの」
「昔はね。塩もない場合があったと思うわよ」
「うわ」
皆それを聞いてかなり引いた。そんな料理なぞ考えられなかったからだ。
「それはかなり」
「お醤油もそうなの？」
彰子は日本人らしく醤油を出してきた。和食は醤油だけでもいけるのである。刺身はそれに山葵で充分だ。しかしモンゴル料理に果たしてそんなものがあるのだろうか。ナンはその言葉にも答えた。

第二十七話　草原の料理その五

「ないわよ、それも」
「うわ」
「それはかなり」
「シンプルだったのよ」
ナンは少し楽しそうで、それで寂しそうな笑みを浮かべて言ってきた。
「草原の生活は」
「そうだったのか」
「あれだけの大帝国を築いたから凄い贅沢してるかと思ったけれど」
「確かにそういう時もあったかも知れないわね」
遠い昔の話であるように感じられる。実際にそうなのであるがどうにもやりきれなさも感じさせるものであった。それが草原らしいと言えばらしかった。
「けれどね」
彼女は言葉を続ける。
「ずっと素朴な生活をしていたのよ、私達モンゴルの御先祖様って」
「ふうん」
「草原でね。その血が私にも流れているのよ」
「何か急に街中にいるような気分じゃなくなってきたな」
ダンはそこまで聞いて言ってきた。
「草原にいるみたいだ」
「そうだね」
ジョンがそれに頷く。
「何かね」
「ううん、私はそうじゃないけれどね」
ナンは二人の言葉には苦笑いで返した。彼女の感性は違うらしい。
「やっぱり草原は違うのよ」

「そうか」
「うん。広くてね。何もなくて」
言いながら上を見上げる。まるでパオの天井の上にあるものを見ているかのように。
「青い空と緑の草原が何処までも広がっていてね。夜は星空が」
「綺麗ね」
「綺麗よ。本当に広くて」
ナンの目は今その空と草原を見ていた。見ているだけで優しい気持ちになるようであった。
「凄いんだから」
「この星にはそうした場所ないのよね」
彰子がぽつりと述べた。
「残念だけれど」
「そうね。けれど」
ナンはそれを聞いたうえでまた言う。
「それでもいいよ。だって」
「だって？」
「草原はいつも一緒だから」
声が懐かしむものになった。
「私とね。いつも一緒なのよ」
「心にか」
「うん」
今度はダンに答える。
「そうよ。いつも一緒」
笑顔になっていた。その顔が実に明るい。まるで大空の太陽のように。
「心にね」
「そうか」
「いいわね、そういうのって」
パレアナはその話を聞いてにこにこと笑っていた。

「魂の故郷ってわけね」
「いいこと言うわね」
これにはナンやジュディだけでなくクラスの皆も感心する言葉であった。
「それって」
「だってね」
パレアナは顔を赤くっせていた。結構酔っているらしい。しかしいい酔い方であった。
「ナンの顔見てたら」
「そうなの」
「そうよ。そう思えるわ」
「有り難う」
ナンはあらためて彼女に礼を述べた。
「そう言ってもらえると有り難いわ」
「いいわよ、それは」
だがパレアナはそれには笑って返す。
「別に。思っただけだし」
「けれどね」
「それより飲みましょうよ」
しんみりとしたところでジュディが言う。いいフォローであった。
「細かいことは忘れてね」
「そうね、皆で」
「パーーーーッとね」
後は皆にで華やかにであった。馬乳酒は皆の心をも楽しくさせる魔法の飲み物となったのであった。

草原の料理　　完

2007・1・5

第二十八話　素直じゃないのかそれともその一

　アンとギルバートは仲が悪いことになっている。少なくとも表向きはそうである。
「それが僕にはわからないんだ」
　ギルバートにはその理由がわからなかった。
「僕が何をしたんだ？」
　クラスの男組に対して相談していた。聞いているのはセドリックやマルコといった明るい面々であった。
「僕に思い当たるふしはないんだが」
「そうだよね」
　いつもはにこやかにきついことを言うセドリックもこれには同意であった。
「アンのあれは。ちょっと」
「そうだよな」
　ギルバートにはわからない。
「僕は普通にしているだけだが」
「暑苦しいんじゃないかな」
「おい、セドリック」
　マルコは彼の容赦ない言葉に思わず引いた。
「暑苦しい？僕が」
「うん、凄く」
　屈託のない笑みで述べる。
「それだけだね。本当に」
「けれどさ」
　マルコはセドリックの容赦のない言葉にかなり引きながらもギルバートに対して言ってきた。ギルバートは彼に対しても顔を向けてきていた。

「それだけでアンのあの態度はないからね」
「それはね」
セドリックはマルコの言葉に頷く。
「ないよね、やっぱり」
「そうだよ。他にギルバートの悪いところってさ」
「ないんだよね」
二人もそんなにギルバートが嫌いではない。かなり暑苦しいが彼は真面目でいいクラス委員だからだ。それで嫌う理由もなかった。
「では何故アン君はあんな態度を」
「ううん」
「どうしてだろ」
聞かれた二人の方が頭を抱え込む。
「それはちょっと」
「何でかなあ」
「やはりわからないか」
ギルバートはそれを聞いて難しい顔を見せてきた。しかしそれでも溜息をついたりはしない。それが彼の性格であった。意地が強いのである。
「御免ね」
セドリックは謝ってきた。
「やっぱり」
「いや、頼んだのは僕だ」
そう言ってそれはいいとする。
「しかし・・・・・どうしてだ」
「僕達じゃちょっとわからないしね」
マルコは述べる。
「ここは女の子にでも聞いたら？」
「そうだよね。それがいいかも」
セドリックもマルコの言葉に頷く。
「ひょっとしたらそれで解決するかも」

「そうか」
ギルバートはそれを聞いて顔を上げた。
「なら」
「誰に相談するの？」
「ビアンカ君にな」
ギルバートは答えた。二人はそれを聞いて少し考える目を見せてきた。それからまたギルバートに述べてきた。
「悪くないかも」
「けれどさ、ビアンカって」
ここでセドリックが言う。
「同性愛者だったよね。わかるかな」
「だからわかるんじゃないかな」
マルコは彼にこう返す。
「女の子が好きなら女の子のことが」
「そうかな」
「いや、そこまでは考えていなかったが」
ギルバートは述べる。
「彼女はしっかりしているからな。それで」
「それでなんだ」
「まあ妥当だね」
二人はまたそれに頷く。

第二十八話　素直じゃないのかそれともその二

「じゃあ話してみたらいいよ」
「そうだね。思い立ったが吉日だし」
「そうだな。しかし」
「どうしたの？」
セドリックがまた彼に問う。すると彼はそれに答えてきた。
「いや、ビアンカの他にも話してみようかなと思ったクラスメイトがいないわけじゃなかったが」
「それでもさ」
ここでマルコは言ってきた。
「間違ってもテンボやジャッキーに相談したら駄目だよ」
「同感」
セドリックも同じ考えであった。この二人は何でも推理に結び付ける頭脳を持っている。そのうえ導き出す推理は完全に的外れなのである。そうした意味で天才探偵二人であった。天災と書くべきかも知れないが。
「あとカムイとか洪童にも」
「その二人は駄目なのか」
ギルバートはセドリックの言葉に顔を上げる。
「どうしてまた」
「どうしてって」
マルコはその言葉にかえって顔を顰めさせた。
「ギルバート、わからない？」
「わからない。どういうことなんだ」
本当にわからないようであった。マルコもセドリックもそんな彼を見て心から驚くしかなかった。驚きをそのままに言うのであった。
「だからさ、もてないからだよ」
セドリックは言う。

「あの二人は」
「そうなのか」
「そうなのかって、ギルバート」
マルコはまた述べる。
「見てわからない？」
「あの二人は」
「いや、全然」
これは彼の観察不足かそれともそうしたことに興味がないのか。とにかく彼は洪童やカムイのことに全然気付いていなかったのである。どうやら他のことには気付くがそうした男女関係等にはかなり鈍感な人間であるようである。
「そう。じゃあ言うね」
マルコが言うことになった。
「もてないからだよ、あの二人は」
「そうだったのか」
「そういうこと。カムイなんかそれで怪しげなことばかりしてるし」
彼は述べる。
「だからだよ。そういう話はあの二人には絶対駄目なんだよ」
「わかった？」
「ああ、何となくだが」
セドリックにも述べる。
「そういうことならな」
「とにかく気をつけて」
セドリックはそうギルバートに忠告する。
「あの二人はそのことになるとやけにナイーブになるから」
「わかった。じゃあそうする」
「うん。それでさ」
セドリックは話を戻してきた。
「ビアンカに相談してみるんだね」
「そうしようと思う」

ギルバートはまた答えた。その考えにぶれはなかった。
「どう思う?」
「いいと思うよ」
「結論から言えばね」
セドリックもマルコも一応は太鼓判を押してきた。何かマルコの言い方は引っ掛かるものがあったが。
「じゃあそういうことだね」
「うん、まずはな」
ギルバートは頷く。
「それで行く。じゃあ今日は有り難う」
「うん。けれどさ」
「何だ?」
また二人に顔を向ける。
「アンのこと、本当にわからないの?」
「一応聞くけれど」
「こちらが知りたい位だ」
また二人に答えた。
「どうしてなのか」
「そう。だったらいいけれど」
実は二人はわかっているようである。しかし言わなかった。
「じゃあビアンカと話してみて」
「わかった」
「けれどさ」
しかしまた二人は言う。やはり思わせぶりな様子であった。
「僕達と同じこと言うかも知れないけれど」
「そうなのか」
「まあね。ひょっとしたら」
「ひょっとしたらだけれど」
二人はまたしても思わせぶりに言う。その様子が引っ掛からないわけではないがギルバートにはどうしてもわからないことだった。

やはり彼は鈍感なところがあった。
そんなこんなでギルバートはビアンカのところに向かう。そんな彼を見送ってマルコとセドリックは今度は二人で話をしていた。

第二十八話　素直じゃないのかそれともその三

「普通は気付くよな」
「絶対にね」
セドリックはマルコに答える。
「誰が見たってわかると思うけれど」
「わからないのはあいつだけだな」
「そうみたいだね」
セドリックの声は呆れたものになっていた。もうギルバートは教室から出てしまっている。
「あんなに鈍感だったなんてな」
「アンも大変だね」
「しつもあいつで問題があるんだけれどな」
マルコは腕を組んで難しい顔で首を傾げていた。
「素直に言わないから」
「そうだね、本当に素直じゃないよね」
「全く。どっちもどっちだよ」
マルコはあらためて述べた。
「ややこしいことこの上ないっていうか」
「どうしたものかね」
「そのうちどうにかなるだろうね。なるんだったら」
マルコの言葉はかなり投げやりなものであった。
「見ている方が疲れるけれど」
「けれど楽しいね」
「まあそれはな」
セドリックのこの容赦のない言葉には思わず笑ってしまった。
「見ているぶんには」
「本人は必死だけれどね」
「しかしあれだけ必死でも」

腕を組んで首を右に捻る。
「わからないんだね。それで気付かない」
「そういう場合は立ち止まればいいんだけれどね」
セドリックは言う。
「そうすれば周りが見えるようになるから」
「そうか」
「そうだよ」
彼はマルコにもそう述べる。
「サッカーだってそうでしょ？ピンチの時こそ落ち着いて周りを見ろって言われない？」
「確かに」
その言葉に頷く。
「コーチにな。いつも言われるよ」
「そういうことだよ。スポーツだってそうだし」
「フランツは別だけれどな」
「彼はまたね」
またしても辛口の言葉が出て来た。
「言ってもわからないんじゃなくて頭の中に入らないから」
「難儀だよな、本当に」
フランツがかなりあれなのもまたクラスでは常識である。考えるという機能が元々インプットされていないのではないかとさえ言われている。そうした男なのである。
「あいつもまた」
「まあ彼にはタムタムがいるけれど」
名キャッチャーである。野球はピッチャーだけでするものではない。キャッチャーも重要なのだ。バッテリーの相性でそのピッチャーの能力や成績が大きく変わることもあるのである。
「あいつも大変だな」
「何とかなってるみたいだよ。ピッチャーとしての能力は高いから」
「僕だったらあいつのリードは嫌だな」

マルコは言う。
「サイン覚えそうにないから」
「そうだよね、絶対に」
「どうやってリードしているんだろうな」
「それも謎だね」
謎がまた一つ出たがそれは解決されない。ギルバートはそのまま一直線にビアンカのいる屋上へと突き進んでいったのであった。まるで疾風のように。
「何の用？」
彼女はそこの日の当たりのいいところに座って昼食を食べていた。各種のパンと牛乳といったよくある組み合わせのメニューであった。
「相談したいことがある」
ギルバートは彼に述べてきた。
「いいか？」
「何？言っておくけれど」
彼女はパックの牛乳をストローで飲みながら話を聞いていた。何か飲む早さが尋常でないように見えるのは気のせいであろうか。
「告白とかなら受け付けないわよ。他を当たって」
「いや、それはない」
ギルバートはそれはきっぱりと断ってきた。
「安心してくれ」
「そう、面白くないわね」
「今何て言った？」
「ああ、気にしないで。それでね」
「うん」
「何について相談してきたの？」
「うん、実は」
「まあ座って」
ここでビアンカはこう声をかけてきた。
「どっちにしろ落ち着いて話しましょう」

「あ、ああ」
「まあ好きなところにね」
「わかった。じゃあ」
彼女の前に腰を下ろした。そのうえで向かい合ったまま話をはじめた。
「実は人間関係のことで悩んでいる」
「その暑苦しさのせいで？」
「君もきついな」
ビアンカの言葉に顔を顰めてみせる。
「セドリックと同じことを言うな」
「だって本当じゃない。少しは涼しくしたら？」
「・・・・・まあいい。それでだ」
「ええ」
それは有耶無耶になって話が続けられた。かなりギルバートの思うように話を進めようとしているのがわかる。
「アン君のことでな」
「アンのことで」
それを聞いたビアンカの目の動きが止まった。そしてギルバートの目を見た。牛乳を飲む動きまで止まっていた。それから見るにビアンカはそこにかなり重要なものを見ているかのようであった。

第二十八話　素直じゃないのかそれともその四

「それで？」
「うん、実はな」
「彼女から何か言ってきたの？」
「そんなのはいつもだ」
「いつも」
ビアンカの動きがさらに止まる。かなり真剣なものになっていた。
「いつもなのね」
「ああ、あれだこれだと言われている」
「そうなの」
「知っていると思うが」
「まあね」
真剣な顔で頷く。その表情は変わりはしない。
「一応は」
「それがどうしてかわからないのだ」
彼は言う。
「僕が何かしたのか？彼女に」
「それははっきり言うけれど」
「うむ」
ビアンカの言葉を待つ。
「何もしていないわ」
「そうだな。やはり身に覚えがない」
「そこなのよ」
「！？」
ビアンカの言葉に目を向けてきた。
「そこなの。わからない？」
「どういうことなのだ、一体」
「だからね、身に覚えがないんでしょ」

「うむ」
その言葉に再び頷く。
「そこなのよ。わからないかしら」
「言っている意味がわからないのだが」
彼は戸惑いながら述べる。
「どういうことなんだ、一体」
「だからね、ギルバート」
ビアンカは汲んで聞かせるようにしてギルバートに対して語る。
顔も真剣なものになっていた。
「何もしていないのよね、アンに」
「意地悪も何もしない。僕はそういうのは嫌いだ」
生真面目な彼らしいと言えばらしい。
「わからないかしら」
「わからないとは」
余計に話が見えなくなってきているといった顔になっていた。ビアンカはそれを見てこれはまだ駄目だと思った。
しかしそれは顔には出さない。あくまでその顔を崩すことなく話を進めるのであった。
「いい？」
「うむ」
またビアンカの言葉に頷く。
「アンの様子をよく見ることよ」
「アン君の」
「そう。そうしたらわかると思うから」
言いながらどうせ駄目だろうとは思っていた。だがそれでも言ったのである。
「いいわね？」
「やってみる」
ギルバートはそれに頷く。彼はわかったつもりであった。
「アン君の様子をだな。わかった」

「ただし」
ここで付け加えてきた。
「彼女鋭いから気をつけてね。見破られたら終わりよ」
「わかっている。それは気を着ける」
「本当によ」
くどいまでに念を押す。
「本当に気を着けてよね」
「うん。よくわかった」
そこで頷いて顔をあげ立ち上がってきた。
「邪魔をした。それじゃあ」
「まあアンもさ」
「むっ!?」
その言葉にまた動きを止めてきた。そのうえで問う。
「どうしたというんだ!?それで」
「見ていればわかるよ」
ビアンカは述べる。
「よくね。じっくりと時間をかけてね」
「じっくりとか」
「焦ったらね。かえって駄目になるから」
語るその口元が笑ってきていた。
「いい?」
「余計にわからなくなった」
ギルバートはまた言った。
「何が何なのか」
「だからよく見ていけばいいから」
リラックスしてきたのかまた牛乳を飲みはじめた。やはり凄い吸引であった。
「いいわね」
「わからなくなったがやってみる」
そう言うしかなかった。今のところは。

「それでいいんだな」
「そういうこと。じゃあね」
「うん」
ギルバートは屋上を後にする。こうしてビアンカは一人になった。
「やれやれ」
一人になるとふう、と息を吐き出してから言った。
「アンも大変ね。これは」
ギルバートではなくアンを気遣う。これはどういうことだろうか。不思議と言えば不思議であった。
「あんなに鈍感だとね。まあ男って鈍感だけれど」
ビアンカが言うと意味深な言葉になる。それが持ち味だった。
「どうにもね」
食事を終え教室へ向かう。そこへマルコとセドリックがやって来た。
「あのさ」
「委員長のことよね」
「あっ、わかる？」
「顔に書いてあるわ」
楽しそうに笑って二人に返した。
「どう？ギルバートのことだからもうじっと見出したりしてるんでしょ」
「その通り」
「流石にわかってるね」
「あれでかなり単純だからね」
彼女はもう全部お見通しなのであった。だから笑っているのだ。
「それでよ」
「うん」
そのうえで話は続く。
「どうなるかな」
「さてね」

ビアンカはマルコの言葉に楽しそうに首を傾げる。
「とんでもないことになるかもね」
「どうかな。アンも素直じゃないし」
「これからってことね、本当に」
「そうだね」
またビアンカの言葉に頷く。それからまた言うのであった。
「さてさてあの二人」
「これから面白くなりそうね」
種は撒かれた。後はそれがどうなるかであった。話はこれからであった。

素直じゃないのかそれとも　　完

２００７・１・９

第二十九話　どちらが先にその一

どちらが先に

ギルバートはアンへの注視を開始した。それは実にわかり易いものであった。

いつも彼女を見ているのだ。気付かない方がどうかしていた。

「やっぱりなあ」

マルコはその予想通りの反応にかなり呆れていた。じっとアンを見続けている彼を見ながら呟く。

「あれでわからないと思っているのかな」

「みたいよ」

それにビアンカが答える。

「本人はね」

「どうかしてるよ」

マルコはそれを聞いてあらためて述べた。

「あれでわからないなんて」

「どうなるかな」

セドリックがそれを見て呟く。

「あの二人これから」

「後はアン次第ね」

ビアンカはそう述べた。

「彼女がどう動くかよ」

「アンが」

「一方だけ動いてどうにかなるものじゃないじゃない」

彼女の言葉は実に的を得ていた。そういうこともわかっているのである。

「そうでしょ？二人のことなんだから」

「そうだね」

セドリックはその言葉に頷いた。

「確かに。だから何が起こるかわからないんだけれど」
「それが面白いんだけれどね」
見方がかなり意地悪ではある。ビアンカ自身もそれはわかっている。
「けれどね」
彼女はまた言う。
「本当にあれで。わからないって思ってるのかしら」
「みたいだよ」
「本人は」
二人はまたビアンカに対して述べる。
「やれやれ。全く」
ビアンカはそれを受けて困った顔でふう、と溜息をつく。それからまた述べた。
「何かと大変ね、アンも」
そのアンは今も普通に漫画を描いている。やはりそこにはルビーも一緒にいてアシスタントを務めている。そのルビーが彼女に声をかけてきた。
「ねえアン」
「わかってるわ」
アンは彼女に答える。漫画のプロットを見ながら。
「見えてるから」
「そう。だったらいいけれど」
「急にどうしたのかしら」
「さあ？」
ルビーはその言葉に首を傾げさせる。
「何かあったんじゃないかしら」
「その何かが問題ね」
アンは述べる。
「急にチラチラと」
「チラチラどころじゃないわよ」

ルビーはこう訂正を入れてきた。
「堂々と見てるじゃない。ずっと」
「そうね」
その訂正に対して頷いた。
「言われてみればまさにそれね」
「心当たりないわよね」
ルビーは彼女に問う。彼女もプロットを見ながら話をする。
「やっぱり」
「やっぱりもきっぱりもそうよ」
アンはいささか変わった表現を使ってきた。
「そうじゃないとどうしたのかなんて思わないじゃない」
「そうね」
「そうよ。しかしまあ」
ここで彼女はうっすらと笑ってきた。
「悪い気はしないわ」
「そうなの」
「ええ。だって」
その笑みが楽しげなものになっていく。本当に楽しそうだ。
「見られてるんだし」
「そういうことね」
「そういうこと」
声も実に上機嫌なものになっていた。
「何かプロットも進むわ」
「しかしいきなりどうしたのかしらね」
ルビーはチラリとギルバートの方を見て述べた。
「それまで何もなかったのに」
「まあ見ているだけだったらいいけれど。いえ」
ここで言葉を変えてきた。
「もっと積極的だったらね。私だって」
「じゃあそうすれば？」

ルビーは呆れも入った突き放した調子で言葉を返した。
「そうしたら楽なのに？」
「だって」
急にアンはしおらしくなった。いつもの勝気でクールな様子は何処へやらである。
「あれよ。素直に言えたらさ」
「こんなことしてないってこと？」
「漫画は描いているでしょうけれどね」
彼女は述べる。
「それでもよ。やっぱり」
「勇気出してみたら？」
ルビーはアドバイスしてみる。
「いっそのこと」
「無理なのよ」
今度は俯いてしまった。
「そういうのって私。ほら、今までだって色々とつっかかってるし」
「皆気付いてると思うけれどね」
「えっ」
それを言われると顔が真っ赤になった。髪の毛も赤い為かなり目立ってしまっている。
「そうだったの！？」
「って貴女」
ルビーは今度は本格的に呆れてしまった。
「普通わかるわよ。私だって知ってるし」
「ルビーにはいつも言ってるから」
親友同士である。だから心置きなく言っているのである。そうした気さくな一面もアンにはあるのである。
「だから」
「だからってね。私やウエンディだけじゃないわよ、知ってるのは」
「困ったわね」

「何を今更」

言葉に更に容赦がなくなる。ルビーもきつい時はきついようである。

第二十九話　どちらが先にその二

「気付いていないのって多分少ないわよ」
「私の予想だけれどね」
「ええ」
自分でそれを予想してきた。
「気付いていないのってフランツにテンボ、ジャッキー、カムイ、洪童ってとこかしら」
見事におつむが少々どころかかなり足りない面々とそうした話には縁のない面々である。予想というかこのクラスにいれば誰にもわかることであった。
「あと彰子ちゃんと管君？」
「彰子ちゃんもでしょうね」
ルビーは彼女のその言葉に頷いた。
「管君はそもそも何考えてるかわからないし」
「そうよね。そんなところかしら」
「あと本人」
ちらりとギルバートを見やる。やはりこちらの話には気付いていないようである。ルビーはそれをいいことにして話をさらに進めていく。
「ってとこね」
「彰子ちゃんってそういうところ疎いのよね」
「そうね。鉄壁なまでに鈍いわね」
それが彰子なのである。恋愛にはかなり疎い。そして本人はそれに一切気付いていないのだから余計に始末が悪いのである。顔がよくてもそうしたことに鋭いとは限らないのである。
「じゃあクラスの殆どが知ってるの」
「言わないだけでね」
「困ったわね」

「何を今更言ってるのよ」
ベッキーはまた突き放してみせた。
「だから言ったら？どうせだし」
「だからそれは」
顔は赤くなったままであった。それもギルバートに見えているが彼はどうして顔が赤いのか気付いてはいない。というよりはわかってもいない。
「無理だって言ってるじゃない」
「声のトーン抑えて」
ルビーはそれに注意する。
「聞こえるわよ」
「あっ、つい」
「気をつけてね」
「ええ。とにかくね」
彼女は言う。
「貴女が言えばすぐ終わるわよ」
「ううう・・・・・」
苦い顔をして沈黙してしまった。どうやら本当に出来ないらしい。
「だからそれはちょっとどころか大いに」
「仕方ないわね」
それを聞いてふう、と溜息をつくルビーであった。しかしそれでも言うのは友情であろうか。
「まあ普通は今までのであっちも気付いているんだけれど」
「気付いていないわよね」
「それもう答え出てるし」
「ううう・・・・・」
弱ってしまった。弱るしかなかった。
「そのままツンデレに専念してみたら？」
「勝手なこと言うわね」
口が尖りぶすっとしてしまった。

「確かに私素直じゃないけれど」
「まあ何処となく伝える方法だってあるし」
ルビーはアドバイスに移ってきた。
「さりげなくね」
「さりげなく！？」
何時の間にか止まっていたプロットの手が動きだした。
「そう、さりげなく」
ベッキーはまた述べる。
「方法は幾らでもあるじゃない。そうでしょ？」
「そうなのって、アン」
本当に普段とは様子が違うので何かルビーも調子が狂ってきていた。
「何言ってるのよ」
「だって」
それでもアンの様子は相変わらずであった。
「私だってそんなに」
「シャイね、そんなところは」
「悪い？」
「別に悪くはないわ。けれどね」
意外と言えば意外なのである。ルビーはそれを言っているのだ。
「とにかくさ。場所変える？」
「うん」
その申し出にこくりと頷いた。二人はプロットを書いているノートとペンを持って席を立った。

第二十九話　どちらが先にその三

「むっ」
ギルバートがそれに反応する。しかしそれより早くスターリングと蝉玉がやって来た。
「ねえギルバート」
「ちょっと教えて欲しいところがあるんだけれど」
「むっ、何だ？」
ギルバートは条件反射的に二人に顔を向ける。見れば二人はその手に教科書を持って来ている。
「ここなんだけれど」
「僕はここ」
二人は彼に勉強を聞きに来たのだ。頼まれれば嫌とは言えないギルバートはそれに応えるしかなかった。
「そこはだな」
「へえ、そうだったの」
「そうなんだ。それでそこは」
「そうなるんだね」
「そうだ。要は」
「上手いわね」
ビアンカは二人の動きを見て思わず唸った。
「ナイスフォローよ」
「あれわかってやってるんだね」
マルコがそれに問う。
「やっぱり」
「見ればわかるじゃない」
ビアンカは彼にこう答えた。
「タイミングよ過ぎでしょ？しかも科目は」
「ああ、成程ね」

スターリングは生物、蝉玉は歴史である。どちらも二人の得意な科目である。聞くまでもない筈なのだ。しかし二人はそれをあえて聞いているのである。そうしたことも見れば一目瞭然であった。

「わかったわね」

「うん。あの二人もわかってるんだね」

「言い出したのは蝉玉ね」

ビアンカはそう分析する。そしてこれは当たっているのだ。

「どちらにしろナイスよ。アンはルビーと一緒に彼をまけたし」

「気付いてないのは彼だけだね」

セドリックが言ってきた。

「どう見ても」

「そうね」

ビアンカはその言葉に頷く。

「まあ彼が気付くまでね」

「何時になるかな」

「さて」

マルコの言葉へ返す言葉はあてもないものであった。

「ずっとかも」

「アンも大変だね」

「同情するわ、彼女に」

皆も大体同じ考えである。実はアンの気持ちはクラスの大部分がわかっているのである。だが相手が気付いていないのでどうしようもないのであった。

アンは屋上に来ていた。当然ルビーも一緒である。屋上の端に座って話をはじめた。

「全くねえ」

ルビーが口を開いてきた。

「恋愛ものとかでも描いたら?」

「私をモデルにして?」

「ええ」

彼女は言ってきた。
「どう、そこんとこ」
「何か怖いわ」
俯いて述べてきた。
「そういうのって」
「怖いの」
「だってそうじゃない」
眉を顰めさせて述べる。やはり俯いたままであった。
「ふられたりするじゃない。そんなこと思ったら」
「描けないの？そういうのも」
「何で言えないのかわかる？」
アンは今その理由を言ってきた。
「どうしてか」
「どうしてなの？」
ルビーはそれを聞くことにした。それで彼女に問い返してきた。
「言ってみて」
「若し私が言うわよ、好きだって」
「うん」
まずはその言葉に頷いてみせる。
「それでギルバートが嫌だって言えばどうなるのよ。全部終わりじゃない」
「それが怖いの」
「そうよ、怖いの」
彼女は言う。
「だから」
「それはわかるわ」
ベッキーは彼女の言葉を聞いたうえで頷いてきた。
「それでもよ」
「できないわよ。だから」
アンは俯いたままであった。ロングスカートの中に顔を沈める。

今彼女は体育座りをしてそこにいるのである。ルビーが向かい合っている。

第二十九話　どちらが先にその四

「困ってるんじゃない」
「仕方ないわね」
何か優しい気持ちになってきたのをルビーは感じた。
「本当に変なところで気が弱いんだから」
「だって」
「今はそれでもいいわ」
「いいの？」
「何時か言う時が来るでしょうしね」
「そうかしら」
「そうよ。まあルシエンみたいにはいかないでしょうね」
「正直羨ましいわ」
アンの本音だった。
「あんなに積極的なのは」
「アンネットはそれ考えると幸せよねえ」
ルビーはふとこう思った。
「あれだけ積極的に好かれてるんだから」
「だから本人まんざらじゃないじゃない」
「確かにね」
「勇気があればね」
アンはまた言う。
「それが欲しいわ、本当に」
「頑張りなさいよ」
ルビーの声が何時になく優しかった。
「いいわね」
「うん」
こくりと頷く。今はそれでもよかった。だが何時かは。ルビーはその時は彼女の後ろにいてあげようと一人思ったのであった。だが

それはあえて口には出さないのであった。これもまた彼女のアンに対する気遣いであった。

その頃教室ではくどいまでにギルバートへの足止めが行われていた。

「ねえギルバート」

「今度は君か」

スターリングと蝉玉の次に来たのはコゼットであった。

「実はね」

「何だ？」

「聞きたいことがあるのよ」

「しかし僕は」

「いいからさ」

彼女は言う。

「まあまあ」

「まあまあって一体何なんだ？」

不平を言いながらも話を聞くのが彼であった。何故かそこにジミーもやって来た。

「実は僕達わからないところがあるんだ」

「君達もか」

「ええ、私は数学」

「僕は現国」

やはり彼等の大得意とする科目ばかりであった。何かが明らかにおかしい。というよりは殆どの人間にとっては一目瞭然であった。わかっていない面々は限られていた。

「何か皆ギルバート君に頼りきりね。たまには自分でやらないと」

「あのさ、彰子ちゃん」

七美が全くわかってない彰子に対して呆れた声をかける。

「本当にわからないの？」

「何が？」

ほわんとした返事が返ってきた。

「いや、本当に」
「やっぱり自分でちゃんとやってからじゃないと駄目だよね」
「・・・・・わからないならいいわ」
もうこう言うしかなかった。なおその頃フランツは投げ込みの練習を廊下でやっていた。所謂シャドーピッチングというやつである。タオルを持ってやっていた。
「うおおおおおおおおおっ！」
廊下から叫び声が聞こえる。
「よおおおおーーーーーーーし！」
そしてテンボとジャッキーは二人で推理漫画に熱中していた。
「よし！謎は解けた！」
「犯人はこいつよ！」
当然外れている。本当に勉強ができないのは一切ギルバートに聞いていない。そこが重要なのに何故か彰子はそれに気付かないのである。
「とにかくさ」
七美は彰子に言った。
「アンは応援しようよ」
「アンちゃんを？」
「そうだよ。あれでね、結構可愛いところあるし」
「アンちゃん気がつくしね。私も漫画に描いてくれたし」
意外とアンはクラスで人気があるのだ。このクラスは特に嫌われ者はいない。飛び抜けて訳のわからない人間ばかりではあるが。なお今のところ変人ナンバーワンはセーラであるとされている。
「大切なクラスメイトよね」
「そうそう」
彼女に細かいことを話す気はもうなかった。
「だからね」
「どうね。けれど」
「けれど？」

「ギルバート君もそうだよ」
「えっ!?」
この言葉にははっとした。まさか気付いているのではと思ったのだ。
だがそれは違っていた。やはり彼女は気付いていなかった。そこが彰子ならではであった。
「だから皆自分でもやらないと」
「何かねえ」
そんな彼女を見て困った顔になってしまった。
「この娘はこの娘で大変ね」
「何が?」
「何でもないわ」
そんな彰子に声を返す。目の前では相変わらずギルバートが質問責めに遭っていた。

どちらが先に　　完

２００７・１・１３

第三十話　秘密の花園その一

秘密の花園

ナンシーは素直ではない。クラスではアンと並ぶ臍曲がりである。
「困ったものだよ」
そんな彼を評してマルティが呟く。
「やりにくいったらありゃしない」
「何がよ」
当人がそれに聞き返す。
「何がやりにくいの？言ってみなさいよ」
「エロ談義」
「・・・・・結局それなのね、全く」
呆れた声を彼に送る。
「それしかないの？本当に」
「他にも色々と興味があるよ」
「何？」
「柔道にサンボ」
「いいじゃない」
彼は柔道部にいる。他にはサンボもやっている。どちらもかなり強い。
「他は？」
「ビデオにアニメに写真」
「どっちもどうせ怪しいのでしょ」
「聞き捨て悪いなあ」
「全く。そんなのだからカトリも困ってるのよ」
やれやれと溜息をついてみせる。
「彼女がいるだけでも奇跡ね、本当に」
「そういうナンシーは」
マルティはここで反撃に出た。

「あの一年生と」
「なっ」
それを聞いて顔を急に真っ赤にさせた。いきなり真っ赤になったのださながら瞬間湯沸かし器である。クールな表情も一変してしまっていた。
「な、何言い出すのよ急に」
「あれを皆が知れば」
「わ、わかったわよ」
必死の顔でそれに応える。
「言わないわよ。それでいいんでしょ！？」
「うん」
彼女に対してこくりと頷く。
「そういうことで」
「全く。何でこんなことに」
とほほと肩を落とす。
「大体ね。私はよ」
「どうしたの？」
「どうしたもこうしたもってないわって」
気付けばカトリまで来ていた。
「来たの」
「マルティと待ち合わせしていたから」
「そうだったの。何だ」
言われてそれに頷いた。肩は落としたままである。
「何でいるのかと思ったら」
「何でってナンシー」
カトリはそんな彼女に声をかける。
「ここ廊下の端よ。普通はいないじゃない」
「まあね」
見ればその通りであった。三人は誰もいない廊下の端にいたのであった。丁度暗がりになっていて目立たない場所になっているので

ある。
「ここで待ち合わせって何するつもりだったのよ」
「ちょっとね」
カトリはそれに応えて述べる。
「打ち合わせに」
「打ち合わせ？」
「今度のデートのことよ」
「ああ、そっちね」
言われてそれに頷く。
「いいわね、そういうのって」
「ナンシーも打ち合わせとかしないの？デートの」
「だって」
カトリのその言葉に口を尖らせてきた。
「そんなことできるような仲じゃないし」
「内緒だから？」
「そうよ」
彼女は答える。
「だって。恥ずかしいじゃない」
「恥ずかしい？」
マルティは彼女のその言葉を聞いて首を傾げさせてきた。
「そうかな」
「私はそうなのよ」
彼女は答える。
「ちょっとね。いえ、ちょっと以上に」
「気にし過ぎよ」
カトリはそう彼女に注意する。
「先輩や後輩と付き合ってる子なんて普通にいるじゃない。中には大学生や中学生と」
「ううん」
「小学生と」

「いや、それは犯罪でしょ」
マルティの言葉にはすぐに突っ込みを入れた。
「まずいわよ、やっぱり」
「そうなるか」
「なるわよ。まあ小学生同士なら問題ないでしょうけれど」
「ふんふん」
「・・・・・言っておくけれどその年齢のスケベは犯罪よ」
「あっ、それはないから」
マルティはすぐに言葉を返した。それはわきまえていた。
「流石に」
「そう?だったらいいけれど」
「うん。安心して」
「よかった。まあとにかく私はこれで」
「そういえば何で貴女ここにいるのかしら」
「気にしないで」
強引に話を終わらせてきた。
「たまたまだから」
「たまたまって」
それを聞いてカトリはかなり釈然としないものを感じた。
「幾ら何でもそれは」
「いいじゃない、だから」
バツが悪い顔で返す。
「その、とにかくお邪魔だったわね。それじゃあ」
「え、ええ」
ナンシーは強引に姿を消した。後には二人だけが残った。
「ねえ、まさかナンシーって」
カトリは彼女の去って行く後姿を眺めながらマルティに声をかけてきた。
「ひょっとして」
「多分そうだろうね」

彼もそれに答える。
「それしかないよ」
「そうよね」
それは自分でもわかった。だから頷くことができた。
「待ち合わせしていたんでしょうね」
「だからさ、ほら」
マルティはもう小さくなっているナンシーの後姿を指差した。見れば背中を小さくして何かゴソゴソとやっているようである。そんな彼女を指差していた。

第三十話　秘密の花園その二

「携帯でメール打ってるよ」
「そうなの。何かねえ」
「彼氏にだね」
彼は言った。
「これは予想だけれど」
「待ち合わせね」
カトリは自分達もそうなので言う。
「それの変更ってところね」
「多分」
「じゃあさ、マルティ」
カトリはそこまで話したところで彼氏に声をかけてきた。
「何？」
「私達もここから消えない？」
「何でまた」
問い返す。
「だってよ。彼女に気を使わせてるじゃない」
「そうか」
「そうよ。それじゃ気分が悪いわ」
「そうだけ。けれど」
しかしマルティはここで意外なことを言うのであった。カトリはそれに顔を向ける。
「どうしたの？」
「僕達のことも別に秘密じゃないけれど」
「そうね」
カトリは少し苦笑いを浮かべてきた。それから述べた。
「それでも少し秘密になってるわね」
「どうしてかな」

「やっぱり恥ずかしいわよ」５４
苦笑いを浮かべたままこう述べてきた。照れ臭さもそこには混ざっていた。
「皆に堂々と言うのは」
「そうか」
「私はね。だから」
「少しずつわかればいいか」
「そう思うけれどね」
「そうだね、それでいいね」
マルティもそれに頷いてきた。
「けれど」
「けれど？」
「ナンシーはそうは思っていないみたいだよ」
相変わらず必死でメールを打っているようであるナンシーをまた指差した。
「ほら」
「ううん、意外と言えば意外ね」
カトリは言う。
「あの娘がそうしたところあるなんて」
「結構アンに似てるかな」
マルティは考えながら述べた。
「そういうところって」
「どうかしら」
それを聞いてカトリも考える顔になってきた。
「その辺りは」
「ツンデレって言うのなら似てると思うけれど」
「タイプは違うけれどね」
ツンデレと言ってもそれぞれタイプがある。アンのそれは素直ではなくナンシーのそれは二人きりになると態度が変わるというものである。それぞれ全く違うのだ。

「言われてみればそうかも」
「そうだろう？けれどあれだと」
彼はさらに言ってきた。
「ばれるよ、すぐに」
「ばれる？」
「うん、だってあんなにわかりやすいから」
彼は述べる。
「すぐにさ」
「ううん」
カトリはそれを聞いてまた考える顔を見せてきた。
「意外と不器用なのよねえ」
「そうそう」
マルティはその言葉に頷く。
「本人が思っている以上に」
「わからないのかしら」
それでもカトリはそれを不思議に思う。
「あれでわからないって」
「本人がそれを認めないだろうね」
「困ったものね」
ふう、と溜息を出す。
「自分でわからないと。周りはすぐわかるのに」
「自分では案外わからないものなんだよ」
マルティの言葉はかなり哲学的であった。そこが実に意外で面白いものであった。
「ナンシーだってそうだよ」
「そうなの」
「そうさ」
彼は言う。
「それにしても」
マルティはもう一つ思うところがあった。

「ベッキー今度は何処にデートに行くつもりなんだろう」
「どちらにしろ私達がいないような場所でしょうね」
それだけははっきりとわかった。
「けれどそこにもね」
「だろうね。僕達もそうだったし」
「本人がそれに気付かないのが」
「困ったものだよ」
ナンシーは後輩の彼氏とメールで必死にコンタクトを取った。その後のこっそりとした打ち合わせの後で二人だけでデートに出るのであった。表向きは新聞部の取材である。二人は一応表向きはコンビを組んでいるのだ。ナンシーが彼の指導役ということであり厳しく教育している、ということになっている。皆そう思っているが実際は違うのである。
「はい」
今日の取材の途中でナンシーは彼氏にあるものを差し出してきた。それはソフトクリームであった。コバルトブルーのアッカド原産の青梨を使ったソフトクリームである。
「駆って来たわ」
「あ、すいません」
「私のおごりよ」
ナンシーは彼氏を見上げて言ってきた。
「どうぞ」
「何かいつも悪いですね」
「いいのよ、それは」
そっと彼氏の右手に自分の左手を絡ませて言ってきた。
「だって先輩だから。それはいいのよ」
「そうなんですか」
「それよりね」
ナンシーは身体をそっと寄せてきて言う。
「今日のデートだけれど」

「はい」
彼氏はそれに頷く。
「公園なのよ」
「公園ですか」
「お花畑が凄く綺麗でね」
彼女は言う。
「それを取材しに行くのよ。それでね」
「写真部の人にも来てもらえばよかったですね」
「駄目よ」
何故かそれはすぐに断ってきた。

第三十話　秘密の花園その三

「部長にもそれ言われたけれどお断りしたわ」
「何でですか？」
言われて不思議に思った。それで彼女に尋ねる。青いソフトクリームを食べながらだ。梨の味とソフトクリームの味が絶妙に絡み合って実に美味い。
「わからない？」
そう問うて泣きそうな目をしてきた。
「えっ！？」
「だから。デートよ」
ナンシーは言う。
「二人きりになりたいから。だからよ」
「そうだったんですか」
「そうよ。わからないの？」
「すいません」
彼氏はナンシーの泣きそうな目に何と言っていかわからずとりあえずは謝った。
「そこまでは」
「わかったらいいわ。けれどね」
「はい」
「写真お願いね」
ナンシーはこう言ってきた。
「その為に来てもらったってことになってるから。いいわね」
「わかりました。それじゃあ」
「ええ。それでね」
ナンシーは機嫌を戻して生き生きとした顔になってきていた。そのうえで述べる。
「そのお花畑だけれど」

「はい」
「チューリップで有名なのよ」
「チューリップですか」
「そうよ。ほら」
ここで懐から取り出した一枚の写真を彼に見せる。
「どう、これ」
「凄いですね」
そこには様々な色のチューリップが満開であった。他の花も咲き誇り実に美しいものであった。彼もそれを見て心奪われていた。
「これは」
「そこの取材だから。文章は私だからね」
「じゃあ僕は写真ですね」
「そうよ。お願いね」
「わかりました」
元気のいい様子で頷く。
「じゃあ」
「それでね」
ここでこっそりといった感じで囁いてきた。
「お願いがあるんだけれど」
「何ですか？」
「写真をね。撮って欲しいのよ」
本当にそっとした感じで囁く。
「いいかしら」
「いいですけれど。また何で」
頼み込んできたのかわからない。彼はつい首を傾げてしまった。
「いいわよね」
「ええ、まあ別に」
理由はわからないがそれに頷くことにした。
「それでしたら」
「よかった。それじゃあまずはお仕事済ませちゃいましょう」

ナンシーはにこりと笑って述べてきた。
「それで後は二人でゆっくりとね」
「ええ。それにしても」
「何？」
「このソフトクリーム美味しいですね」
彼はソフトクリームに話を移してきた。
「それもかなり」
「そうでしょ？だから買ったのよ」
彼女はまたにこりと笑ってそれに応えてきた。
「一緒に食べたいから」
「先輩・・・・・・」
「ちょっと、二人の時は違うでしょ」
本当に普段とは全然態度が違う。そんな彼女を見てつい彼は言うのであった。
「あっ、そうでしたね」
「そうよ。二人きりの時は」
「ナンシーさん」
「ええ。名前で呼んでね」
デレデレとした感じで述べる。
「周りに誰もいない時は」
「わかりました」
「じゃあ。もうすぐよ」
ナンシーは少しそのデレデレした感じから抜け出て言ってきた。

第三十話　秘密の花園その四

「いい？お花畑」
「はい。チューリップの」
「それを写真にして文章は」
実は彼女はかなり描くのが速い。それで新聞部ではホープとさえされている程である。外面は良識ある敏腕記者なのだ。素顔では決してないが。
「私が書くからね。いいわね」
「はい、それで」
「そういうことね」
打ち合わせをした後でその取材現場に向かう。行くとそこは一面のお花畑であった。
「うわっ」
彼氏はそのお花畑を見て思わず声をあげた。
「これはまた」
「凄いわね」
「はい、何て言うか」
彼は少し呆然とした声で述べた。
「凄いですね。綺麗だし」
「壮観って言うべきね」
ナンシーはこう表現していた。そこは見渡す限り一面のお花畑で赤い花も白い花も整然と並び綺麗な幾何学模様を描いていたのである。
とりわけチューリップが目立つ。赤いものもあれば白いものもある。他にも様々な色がある。それを見ているとそれだけで幸せになれるかのようであった。
「じゃあ早速」
「あっ、はい」

ナンシーに言われて我に返る。そして写真を撮りはじめた。
それ自体はすぐに終わった。あちこちを回って写真を撮っていく。
ナンシーのところに戻ってみると彼女も記事を恐ろしいまでの速さで書いていた。
「いつもながら凄い速さですね」
「慣れよ」
彼女はそれに応えて言う。
「書くのも慣れなのよ。わかる？」
「そうなんですか」
「ええ」
そして彼に答える。
「だからね。君も書いていけば」
「ナンシーさんみたいに」
「そうよ。だから頑張ってね」
「はい」
「写真は凄くいいし」
一見職権乱用に見えてそうでないと周りに思わせられるのはここであった。彼は写真部にも引けを取らない程写真撮影が上手かったのである。それで写真部からスカウトされたこともある程である。
「後は記事ね」
「わかりました」
ナンシーの言葉に頷く。
「それじゃあ」
「ええ。けれどね」
彼女はここで言う。
「今日は肝心なのは終わってからよ」
「そうですね」
「そうよ。だから今急いで書いてるから」
「それが終わったら」
「わかってるわね」

言いながら顔を上げて彼の顔を見る。そして言う。
「二人だから」
「はい」
「綺麗でしょ？」
次にお花畑を見回す。
「ここ」
「はい。それでここで」
「デートもね」
ナンシーはうきうきしながら言葉を返すのであった。
「けれどね」
しかし辺りを慎重に見回す。
「いい？うちの学校の生徒には見つからないようにね」
「って言いましても」
彼氏は不安げな顔で不安げな言葉を返してきた。
「大丈夫なんですか？うちの生徒って一万人はいるんですよ」
「それでもよ」
彼女の言うことはかなり滅茶苦茶になっていたが本人は気付いてはいない。それが実に奇怪ではある。
「いい？見つかったらことよ」
「この前先輩のクラスの人に」
「ちょ、ちょっと」
彼がそれを言い出すと顔を真っ赤にしてその口を塞ぎはじめた。
「それは言ったら駄目よ。カトリとマルティにも口止めしてるんだから」
「はあ」
「いい？間違ってもジョルジュなんかに知られたらスクープされるのは私達なのよ」
「そうなります？」
「あいつを甘く見ないことよ」
クラスメイトに対しても何ら遠慮はしない。実に辛辣な言葉であ

った。
「黒豹みたいに素早いだから」
「自分で宇宙忍者だって言ってますね」
「そうなのよ」
ジョルジュの身のこなしはそれだけ見事なのである。その鋭さもだ。ジャーナリストの他にはスパイに向いているとさえ言われている。そうした男なのだ。
「とにかく油断禁物よ、いいわね」
「はあ」
ナンシーの言葉に応える。

第三十話　秘密の花園その五

「壁に耳あり障子に目あり」
「何処に誰がいるのかわからない、ですか」
「そういうことよ。とにかく仕事を終わらせたら」
「ここでデートですね」
「ええ、いいわね」
あれこれ言っている間にも書いている。その速さはやはり尋常ではない。
「よし」
そして遂に声をあげた。
「終わったわ」
「相変わらずの速さですね」
「文章が自然と頭の中に浮かんでくるのよ」
ナンシーは彼氏にこう述べた。
「自然にね」
「凄いですね。僕はとてもそんなには」
「まあ馴れよ」
またこう述べてきた。
「そういうこと。いいわね」
「馴れですか」
「とにかくこれも経験だから」
そしてこうも言う。とにかく彼女にとっては造作もないことなのである。
「書いていけばいいわ。そうすれば普通に書けるようになるから」
「ですか」
「それでね」
話は続く。
「書けたわ。それでわかるわね」

「ええ」
彼はその言葉に頷く。
「それじゃあ」
「ええ、デートよ」
ナンシーは立ち上がって言ってきた。
「いいわね」
「はい。じゃあまずは」
「あっち行きましょう」
すぐに彼と手を絡み合わせて声をかけてきた。その間の時間が全くない。見事なまでの速さであった。
「あのお花畑のところ」
「チューリップのところですね」
「そうよ」
彼氏の言葉にこくりと頷く。
「そこで二人ね。並んで」
「はい」
妻唱夫随と言うべきであおるか。完全にナンシーのリードであった。けれどナンシーは彼にべったりと寄り添っている。そこが普通の妻唱夫随とは違っていた。もっとも実際にこうしたカップルは多いのかも知れない。特に男の場合は口では色々なことを言っても実際は妻や彼女に頼りきりというのが多いのである。
「行きましょう。いいわね」
「わかりました」
ナンシーの言葉に従う。こうしてチューリップのところに向かう。様々な色のチューリップが咲き誇っていた。二人はその中を進んでいく。
「どう?」
その中でナンシーは彼氏にそっと囁いてきた。
「いいでしょ」
「ええ」

彼氏はその言葉に頷く。丁度横に白いチューリップがあった。
「白ですね」
「白だけじゃないわ」
ナンシーは言ってきた。
「赤だってあるし黄色だって」
「色々あるんですね」
「オレンジも。青も」
青いチューリップは品種改良の結果である。これが完成するまでに実に多くの労力と技術が消費されているのである。これは青い薔薇と同じだ。実は青い花というのは少なく人工で造られたものも多いのである。元々チューリップや薔薇には青い色素を抑える要素がありその辺りが厄介なのである。
「紫だってあるわよ」
「そうですね。あっ」
ここで彼はふと思った。それでナンシーに対して言ってきた。
「そうだ先輩」
「どうしたの？」
「お花の中ですよね」
「ええ。だから来たんだけれど」
言うまでもないことだ。しかしそれでも彼は言う。そんな彼を見て彼女はキョトンとしてしまった。それでついつい言うのであった。

第三十話　秘密の花園その六

「あの、わかってるわよね」
「わかってますよ」
「本当!?」
疑いの眼差しを彼に向ける。
「そうは思えないけれど」
「わかってるからですね」
しかし彼はここで言う。
「写真撮りましょうよ」
「写真?」
「そうですよ、ほら」
何か必死になってナンシーに語り掛ける。その様子に彼女は珍しく引っ張られる形になっていた。それが何か妙に滑稽な姿であった。
「先輩とお花ですよ」
「あっ」
言われてようやく気付いた。
「そうね、それね」
「そうですよ、それで写真を撮れば」
「撮ってくれるの?」
「勿論ですよ」
彼は元気よく答える。
「だから先輩、早く」
「え、ええ」
彼に急かされてお花畑の中に入る。異様なまでに照れている。
「こんなことになるなんて」
「けれどこれがいいですよね」
「まあね」
その言葉にこくりと頷く。

「撮ってもらえるのなら」
「そうですよ。じゃあ」
彼もかなり乗り気になっていた。それでカメラを構える。
「いきますよ」
「あっ、待って」
しかし彼女はそこで彼を止める。
「私を撮ってくれるのよね。じゃあ」
「何か？」
「あの、そのね」
少しもじもじとしだした。顔も真っ赤になっている。
「一人じゃあれじゃない」
彼女はこう述べてきた。
「寂しいわ」
「けれど」
ナンシーの言葉を聞いてカメラを持ったまま困った顔を見せてきた。
「写真撮るのは」
「ほら、これがあるじゃない」
ここで携帯電話を出してきた。
「これで写メールでどう？」
「いえ」
しかし彼はあくまで首を横に振る。
「それは駄目です」
「どうしてよ」
二人一緒で撮ることを拒まれて急に泣きそうな顔になってきた。
どうやら彼に断られたりすると困り果ててしまうようだ。それだけ依存しているということなのであろう。
「折角いい考えだと思ったのに」
「後でです」
しかし彼はきっぱりとした口調で言ってきた。

「それは後です」
「後で！？」
「はい」
彼は言う。
「それは後で。僕はまずですね」
「ええ」
「先輩、いえナンシーさんを撮りたいんです」
「私を！？」
「そうです」
またしてもきっぱりと述べてきた。
「いいですよね、それで」
「私を撮ってくれるのね」
「は、まずは」
「それでその後で二人一緒になのね」
「それでいいですよね」
「ええ、いいわ」
顔が急激に明るくなってきた。
「それなら。喜んで」
「はい。じゃあいきますよ」
「ええ、いいわよ」
先程までの泣きそうな顔が立ち消えて微笑みに変わっていた。その顔が彼にとっては非常に綺麗で可愛いものに見えた。実際にそれは澄ました感じの彼女が普段は絶対に見せないような顔であった。少なくともクラスメイト達は見たことがないような顔である。
「撮ってね」
「ええ、今」
こうして写真が次々と撮られていく。それが終わってから彼はナンシーの側にやって来た。ナンシーの方が彼に声をかけてきた。
「じゃあ今度は」
「二人で」

そして今度は携帯で二人並んだ写真を撮る。二人だけの秘密の、しかし楽しい時間を過ごすのであった。彼女達だけのささやかな幸せであった。

秘密の花園　　完

２００７・１・２０

第三十一話　破天荒な兄その一

破天荒な兄

「おおおおおおおおおおおおっ！」

今日もクラスでフランツの無意味な咆哮が響き渡る。

「面白い、面白いぞ！」

「そうか」

相棒であるタムタムが冷静な様子でそれに返す。

「それはよかったな」

「訳聞かないの？」

パレアナが彼に突っ込みを入れる。

「いきなり吼えられても何が何かわからないんだけれど」

「漫画だ」

タムタムは冷静に彼女に返した。

「漫画！？それであんなに吼えるの？」

「少女漫画だ」

「それで何で吼えるのよ」

少女漫画で教室全体に響き渡る程吼えるものなのかと。パレアナはそれを聞きたかったのである。

「あいつは吼える」

「そうなんだ」

「そうだ」

それに対するタムタムの返事もパレアナの納得も実に呆気ないものであった。まるで予定事項をいつも通り聞いているような感じであった。

「わかりやすいわね」

「いつものことだからな」

全く以っていつも通りである。しかしどうしてもパレアナが聞きたい問題が残っていた。それは今の話題において全く解決されてい

ないことである。
「それでさ」
「今度は何だ？」
「彼、何の少女漫画読んでるの？」
「テニス漫画だ」
「テニスの」
「そうだ。一人の少女が余命幾許もないコーチの下で成長し遂には世界に羽ばたく。そんな漫画だ」
何処かで聞いたような漫画であるがそもそもストーリーや形式のパターンには限度があると言われている。それで似たような漫画もあるものなのだ。
「それであんなに吼えるの」
「感動している証拠だ」
「全く」
パレアナはそれを聞いてあらためて溜息を漏らす。
「何でもかんでも感動するのね、いつもいつも」
「馬鹿な！」
「誰が馬鹿ですって！？」
ここでいきなり出て来たフランツの言葉に神懸り的な素早さで反応を示す。
「ああ、漫画の話だ」
「そう」
熱中しているフランツにかわってタムタムが彼女に説明する。
「どうしてだ！何故死ぬ！」
「コーチが死んだ場面だ」
「それでなのね」
「生きろ！生きるんだ！」
フランツは単行本に向かって絶叫する。
「ここで死んで何になるんだ！生きないと何にもならないだろ！」
「といっても死ぬ運命なのよね、確か」

「この漫画では人は死なないぞ」
生き返る漫画もある。死んだ人間が生き返るならば本当に有り難い話だ。漫画や小説によっては生き返った人間がゾンビやバンパイアになっていたりするがそれはそういう話だから仕方がない。
「生き返ってまた教えろ！何故だ！」
「熱いわねえ」
いい加減その叫びにパレアナもうんざりしてきた。
「毎度毎度よくもまあこんなに熱くなれるわね」
「それがこいつのいいところだ」
バッテリーならではの言葉であった。やはりフランツの一番の理解者はタムタムであった。
「だから俺はこいつのボールを受ける」
「そうなの」
「そういうことだ」
中々傍目ではわからない友情である。二人にしかわからない友情である。
そうこうしている間に非常に五月蠅い読書は終わった。フランツは全身から汗を流していた。
「面白かった・・・・・」
「漫画一冊読むのにどれだけカロリー消費してんのよ」
パレアナはそんな彼に対して呆れ果てた言葉をかける。
「ああ、パレアナ」
フランツはここでようやく彼女に気付いた。
「いたのか」
「さっきからね」
「タムタムも」
「俺は最初からいたぞ」
「おっと、そうか」
ついつい親友の存在まで忘れていた。そこまで熱くなっていたのだ。

「悪い悪い」
「ところでさ」
ここでパレアナがフランツに声をかけてきた。
「何だ？」
「その漫画だけれどさ」
彼女はそちらに話を振ってきた。
「ああ」
「何処で買ったの？商店街の本屋さん？」
「いや」
しかしフランツはその言葉には首を横に振ってきた。
「家にあるのを持って来たんだ」
「家に」
パレアナはその言葉を聞いて顔を急激に顰めさせて首を傾げさせてきた。
「あんたって少女漫画買ってたっけ」
「いや、妹のだ」
「ああ、そうだったわね」
パレアナはその言葉を聞いてあることを思い出した。

第三十一話　破天荒な兄その二

「あんた妹いたのよね、確か」
「フローネだ」
「知ってるわよ。何であんたみたいなのにああした妹さんがいるのよ」
「何だ、その言い方は」
フランツはその言い方にむっとした顔を見せてきた。
「俺にフローネがいて悪いか」
「悪くはないわよ。けれどね」
パレアナは言う。
「フローネちゃんが大変そう」
「俺みたいに凄い兄貴がいてか」
「まあ確かに凄いわね」
凄いことは凄い。それは認める。凄いの意味もニュアンスも通常のそれとは全く異なるものではあるがそれでも凄いことは事実であった。
「あとジャック君だったわね。弟さん」
「ああ」
フランツはその言葉に答える。
「そうだ。俺の可愛い妹と弟達だ」
「似てなくて何よりだったわ」
「おい、さっきから何だ」
いい加減腹に据えかねたので抗議する。
「俺が何かしたのか」
「まあ落ち着け」
タムタムが間に入る。
「そう熱くなるな」
「ううむ」

相棒に言われては仕方がない。どうもタムタムの言葉には何でも素直に従うようである。
「わかった。それでパレアナ」
「ええ」
「フローネに何かあったのか？」
「いや、そのフローネちゃんね」
その言葉に応える。
「どうしたんだ？」
「うちの部活にいるじゃない」
「部活というと」
「バスケ部よ」
そうフランツに言う。
「自分の妹の部活位覚えておきなさいよ」
「自分のことで頭が一杯だからな、俺は」
「だから駄目なのよ。そうかあ、それフローネちゃんのだったのね」
「そうだ。読んでみたがかなり面白いな」
そう言ってまた漫画を開く。
「これからあらすじはどうなっていくんだろうな」
「最初どうなったか覚えてるの？」
「いきなりホームランボールをジャンプして受け取ったんだったな」
「・・・・・ちょっとあんた」
その言葉に思わず呆れた。
「それは野球でしょ」
「おっと、そうか」
言われてそれに気付く。
「悪い、忘れていた。どうも他の漫画と一緒になっていた」
「何処をどうやったら野球とテニスが一緒になるのよ」
相変わらず記憶力は全くあてにならないフランツの頭脳であった。勿論他のことも見事に忘れたり勘違いしてしまう。彼の脳細胞は灰色ではないのだ。燃え上がっていて酸化しているのかも知れない。

「コーチの病気は？」
「ペストか」
「・・・・・本気！？ネタ！？」
流石にその病名は予想していなかった。完全に何を言っているのかわからなくなってきた。
「今のって」
「違ったか？」
「今時そんな病気ないでしょ。大体ペストだったらそこいら歩けないわよ」
「そうか」
「そうかじゃないわよ」
こう言い返す。６６
「全く。どんな記憶しているんだか」
「俺の記憶は気にするな」
自分でもそれを言う。
「ちょっと普通とは違うだけだ」
「全然違うじゃない」
それにまた突っ込みを入れる。
「どうなってるのよ、全く」
「とにかくこの漫画は面白いな」
「ストーリーを完全に覚えていたらね」
「まあそうかもな。しかしこのまま読んでも確かに面白い」
「ええ」
それはパレアナも知っている。だから頷く。
「これを野球に活用できればな」
「フットワークはな」
ここでタムタムが言ってきた。
「かなり大事なのは事実だな」
「そうだな。打たれた後だ」
フランツもそれに応える。

「バントとかされた時にだな」
「そうだ。その時は」
「ああ」
二人は真剣な野球の話に入った。こうなると彼はさらに活き活きとしてくる。その輝くどころか燃え上がる目がまた凄い。そうして野球の話に熱中していると。
「ちょっとお兄ちゃん」
不意に声がしてきた。
「んっ!?」
「何だ!?」
パレアナとフランツは同時に声がしたほうを見た。するとそこには赤金色の髪に団子鼻の女の子がいた。彼女がフランツの妹のフローネである。日に焼けた顔に白いブラウスとクリーム色のズボンという格好であった。

第三十一話　破天荒な兄その三

「フローネ」
「あら、フローネちゃん」
「パレアナ先輩も」
「ちょっとね。この馬鹿と話してたのよ」
パレアナはフランツを指差して言ってきた。
「フローネちゃんの漫画のあれでね」
「そうだったんですか。それで」
「ええ」
パレアナはフローネに応えた。
「どうしたの？」
「お兄ちゃんに用があって来ました」
「俺にか」
「そうよ。お弁当」
先輩にはにこやかな顔だったのに実の兄にはむっとした顔である。
その対比が実に鮮やかであった。
「忘れてたでしょ」
「そうだったのか」
「そうだったのかって」
フローネはフランツのしれっとした様子に抗議する。
「いっつも忘れてるじゃない。しっかりしてよ」
「覚えていないぞ」
「そりゃあんたの記憶力に問題があるんでしょ」
横からパレアナが容赦の無い突っ込みを入れる。横目で彼を見ながらの言葉であった。
「どう考えても」
「また俺か」
「実際忘れてるじゃない」

パレアナはさらに突っ込みを入れてきた。
「そうでしょ？」
「ううむ」
こう言われては反撃は無理であった。さしものフランツも沈黙した。もっとも彼は口喧嘩は苦手であるが。そうしたことはからっきしである。ただし騒ぐことにかけては誰にも負けない。
「それでね」
フローネがまた言う。
「お弁当、持って来たわよ」
「済まない」
妹に対して礼を述べる。
「そういえばそろそろお昼か」
「そうね。いい時間ね」
「そうだな」
パレアナとタムタムがそれに頷く。
「しっかりしてよ。只でさえ食べるのに」
また兄に言ってきた。
「しょっちゅう忘れられたらそれを持って来るだけでも大変なんだから」
「大変、ねえ」
パレアナはその言葉を聞いて顔を顰めさせてきた。
「お弁当を持って来るだけで」
「そうなんですよ。そのお弁当ですけれどね」
「ええ。どんなの？」
「こんなのです」
出て来たのは机程もある巨大な弁当箱であった。
「うわ、これはまた」
「お兄ちゃん専用です。食べないと身体が持たないからって」
「まずは食うことだ」
フランツはその言葉を受けて言う。

「だから俺は食べる。何があってもな」
「何があってもってあんたねえ」
パレアナはまた彼に抗議めいた言葉をかけてきた。
「幾ら何でもこれは食べ過ぎでしょうが」
「そうか？」
「そうよ。しかもよく見たら」
パレアナが持っている弁当箱を見る。それは一段ではなかった。
「三段って。よくもまあこんなに」
「普通じゃないですよね」
「普通は一段よ」
パレアナは呆れ果てたといった感じの声で述べた。
「幾ら何でも」
「じゃあ俺は普通じゃないのか」
「自覚ないの？」
パレアナはまたフランツを横目で見てきた。
「だとしたらおかしいわよ」
「ううむ」
「いや」
しかしタムタムがここで言ってきた。
「俺もこれだけ食うな」
「嘘」
「食べないと持たない」
彼はこう主張する。
「そうだろう？やっぱり俺達は運動しているからな」
「そうだそうだ」
フランツはそれに勢いを得て述べる。
「やはり食べないと駄目だ。だから俺はおかしくはない」
「ううん」
「そういえばパレアナも」
「私も？」

タムタムによって自分に話を振られてキョトンとした顔を見せる。
これは彼女にとっては意外な流れであった。
「かなり食べているんじゃないか？」
「言われてみれば」
その通りなのでついつい納得の言葉を述べる。
「一段ならこのお弁当でもいけるし」
「御前はそこにお菓子もあるな」
「まあね」
タムタムの言葉に答える。
「それを考えるとかなりじゃないか」
「そうね」
頷いてしまう。頷くしかない。
「けれど三段はやっぱり凄いわよ」
「昼はこれでも軽くしているんだ」
「ちょい待ち」
フランツの今の言葉は聞き捨てならなかった。すぐに言葉を止めてきた。
「今何て言ったのよ」
「だから軽くしていると」
「これの何処が軽くなのよ」
その三段の弁当箱を指差して彼に言う。
「じゃああんらの重くはどんな感じなのよ、一体」
「お兄ちゃん晩はもっと凄いですよ」
ここでフローネが言ってきた。
「嘘・・・・・」
「いや、嘘じゃない」
タムタムも言ってきた。
「俺は時々フランツの家に行くがな」
「ええ」
「確かにかなり食べる。これの倍はな」

「そんなに食べてるの」
「身体を動かした後は腹が減る」
フランツはこう言ってきた。
「それにな」
「それに？」
「しっかり食べて身体を作らないといけない。だから食べるんだ」
「そうだったんだ」
「スポーツをするとあれだろ？」
珍しく科学的なことを言うフランツであった。

第三十一話　破天荒な兄その四

「色々疲労も蓄積されるし必要な部分を補強しなけりゃいけない」
「ええ」
「だからさ。それを補う為に食べるんだ」
そう主張してきた。
「それも運動してすぐ後に。これが一番なんだ」
「確かにね。それは知ってるわ」
パレアナもそれは知っていた。成程、と感心していた。
「それが一番いいのもね」
「だからだ」
フランツの主張はその通りであった。パレアナでさえ納得するまでに、しかしだ。
「それでもさ」
それでも彼女は言う。
「このお昼は一体何なの？」
「エネルギー補給だ」
フランツは弁当に関してはこう述べた。
「運動の為のな」
「そうだったんだ。それにしても凄い補給量ね」
「これでもセーブしているつもりだ」
「何処がよ」
それはすぐに嘘だと思った。実際に口に出した。
「昼食べ過ぎたら身体の動きが鈍くなるからな」
「これが少しって言うの」
「少しじゃないか」
「全く」
いい加減呆れてきた。
「身体に全部エネルギーがいってるのね、あんたは」

「そうなんですよ」
フローネはまた言う。
「けれどお兄ちゃん頭の方は」
「おい、フローネ」
フランツは悲しい顔になってきた妹に対して言う。
「昔から言っているだろう。俺は勉強よりもスポーツに命をかけていると」
「そのレベルで済んでいないわね」
パレアナはまたしても心に思ったことをそのまま口に出した。
「無茶苦茶やってるから、いつも」
「言っているだろう。だからいいんだ」
「普段の生活にも頭を回してよ」
フローネはそう抗議する。
「少なくともゲームやってて絶叫して身体動かし回るのだけはどうにかしてよ」
「ああ、それはなおらないわよ」
パレアナが突っ込みを入れる。
「絶対に」
「やっぱりそうですか」
フローネはパレアナのその言葉を聞いてふう、と溜息を吐き出した。
「ずっとこうだったんで。考えるのは野球のことだけで」
「その野球にしろ」
「そうなんですよ。ずっとチームでもあんまりにも頭があれだから」
「やっぱりねえ」
「タムタムさんには感謝してるんですよ」
「俺にか」
話を振られたタムタムはフローネに応えた。
「そうなんですよ。だって今までお兄ちゃんをリードできるキャッチャーなんていませんでしたから」

「そうだったのか」
「ええ」
「まあそうでしょうね」
パレアナはその話にうんうん、と首を頷かせていた。
「こんな破天荒なピッチャーはね」
「こんなお兄ちゃんも」
「随分な言いようだな」
フランツはそれに抗議めいた言葉を返す。
「こんな天才ピッチャーを捕まえて」
「身体能力と頑丈さだけはね。人間のレベル超えてるし」
「頭も人間のレベルをある意味超えているし」
「俺は凡人の器ではない！」
勝手にそうとらえる。
「そういうことだ！俺は野球においてはあらゆることで頂点に立つ！」
「じゃあサイン覚えなさいよ」
タムタムではなくパレアナが突っ込むのがみそであった。
「いい加減にさ」
「家事も覚えないし」
「困ったものよね」
「はい」
パレアナとフローネは完全に同盟を結んでいる。だからといってへこたれるようなフランツでもないのであるが。
「タムタムとしてはどうなの？」
パレアナは相棒に話を振ってきた。
「俺か？」
「ええ。どうなの？」
話を振ったうえで問う。
「最近のエースの具合は」
「サイン覚えませんよね」

「そんなことはどうでもいいさ」
「えっ！？」
ここで出たのはタムタムの意外な言葉であった。彼はフランツがサインを覚えないのもいいと言っているのである。

第三十一話　破天荒な兄その五

「だったらどうやって投げているのよ」
「目で合図するんだ」
「目で」
「ああ。俺が目で次のボールを言う」
「ふんふん」
パレアナとフローネはその話を聞いて頷く。何か話が一段上になってきていた。
「それでフランツは目で返事をするんだ。これでいいんだ」
「いいんだ」
「何か凄いですね」
「俺も実際にこんなことができるとは思わなかった」
タムタム自身もそれを言う。
「サインを出すのが普通だからな。しかしこいつとならできる」
「俺もだ」
フランツも言ってきた。
「俺達の間には何も要らない。サインなんてのはな」
「目と目でというわけだ」
「成程」
「そういうわけだったんですか」
「そうだ！」
フランツはまたしても大声で力説してきた。
「この俺のボールを受けられるのはタムタムだけだ！」
「確かに俺以外には無理だな」
それにタムタムも頷く。
「実際に俺もここまでのピッチャーは見たことも会ったこともない」
「俺達は何処までも！」
またしても力説する。かなりうざくもある。

「投げ続ける！」
「ということだ」
「だったらさフローネちゃん」
パレアナはここまで聞いてフローネに声をかけてきた。
「はい」
「一回やってみる？こいつに目で語り掛けるの」
「何か話がエスパーみたいですね」
「若しかしたらできるかもよ」
結構投げやりな感じである。そんなことができる人間はごく一部しかいないのがわかっているからだ。タムタムはキャッチャーとしては高校の中でもトップクラスとされている。そんな彼だからこそできることなのだ。
「諦めます」
フローネはあっさりとそれを断った。
「無理っぽいですから」
「そうなの」
「けれど」
しかし彼女は言う。
「何か負けたくなくなりました」
「馬鹿兄貴に？」
「いえ、タムタムさんにです」
「俺にか」
「はい。やっぱりお兄ちゃんのことよくわかっているんですよね」
「まあな」
彼はその質問にも答えてきた。
「バッテリー組んでるしな」
「私ずっと一緒にいてそれですから。やっぱり」
「まあ息合わせるのが大変な男だけれどね」
パレアナはまたしても横目でフランツを見てきた。
「家族でも難しいのはわかるわ」

「はい。けれど」
それでもフローネは決心したのであった。
「タムタムさんみたいに上手くやれるようになりたいです」
「物凄い暴れ馬を馴らす感じね」
パレアナはフランツを馬に例えてきた。しかも暴れ馬に。
「難しいわよ」
「わかってます、今までで」
これまでの生活はやはり伊達ではない。フランツの破天荒さはもう彼女も身に沁みてわかっている。だがそれでもあえてしようというのである。
「それでも。やってみます」
「やるのね」
「はい、タムタムさんに負けられません」
「俺か」
タムタムは妙な感じに思わざるを得なかった。
「何かな」
「まあいいじゃない。目標にされてるんだから」
「そう考えるといいか」
「そういうこと」
結局話はフローネの家族としての意識になった。それにしてもどうにも扱いの困る兄であった。フランツ本人には自覚がないのであるが。

破天荒な兄　　完

２００７・１・２５

第三十二話　薬は恐ろしいその一

薬は恐ろしい

ジミーはこの時何気なくおやつを食べていた。食べているのは草餅である。

「それ何処で買ってきたんだい？」

「拾った」

ロザリーにそう答える。

「ちょっと待ちなよ」

彼女はその言葉を聞いてすぐに突っ込みを入れてきた。

「何考えてるんだい。そんなもの食べたら」

「大丈夫だって」

しかし彼はそれに取り合わない。

「とりあえず匂いはしないからさ」

「後でどうなっても知らないよ」

「俺腹壊したことないから」

「やれやれ」

そんなふうにごく普通に何処かで拾った草餅を食べた。翌日ジミーは学校に来なかった。

「やっぱりね」

ロザリーは空いたままのジミーの席を見て呟いた。

「拾い食いなんてするから」

「というかあいつ何考えて生きてるのよ」

コゼットも言う。

「拾い食いなんて。他に食べ物なかったのかしら」

「ああ、あいつ甘いものには目がないんだ」

ロザリーがコゼットにそう説明する。

「それでなんだよ」

「どっちにしろ馬鹿ね」

「まあな」
それは否定できない。そもそもロザリーにも否定するつもりはない。
「しかしよくもまあこんなお約束をやってくれるよ」
ある意味感心していた。
「食中毒なんてな」
「それはそうとしてよ」
アンジェレッタの声がした。しかし二人は彼女の姿が目に入らない。
「あれ？アンジェレッタ」
「何処にいるの？」
ロザリーもコゼットも背が高い。左右を見回してもアンジェレッタの頭は視界には入らない。だから気付かないのだ。
「ここよ、ここ」
下から声がした。
「ここよ」
「ああ、いた」
「御免御免」
「何かこれもお約束じゃない？」
小柄なアンジェレッタは二人を見上げて言ってきた。
「私の背のことも」
「まあこれもね」
「多分ここからも予想通りだけれど」
「ああ、わかる？」
アンジェレッタも笑って言葉を返してきた。
「わかるよ」
ロザリーは微笑んでアンジェレッタを見下ろして言う。
「薬だろ？」
「うん、それ」
流石は薬屋の娘であった。アンジェレッタもわかっていた。

「ジミーがお腹壊したのは事実だし」
「それはね」
コゼットも言う。
「間違いないでしょうに」
「ここであの二人がいれば全然別のこと言うんだろうけれどね」
ロザリーが教室の中を見回していた。二人というのはテンボとジャッキーのことであるのは言うまでもない。だが二人は今ここにはいなかった。
「いないね」
「何処に行ったのかしらね」
コゼットも教室の中を見回している。やはりそこには二人はいなかった。
「いたら一発で飛びつくのに」
「ああ、あの二人また謎解きに行ってるわよ」
アンジェレッタが言った。
「またか」
「そういうこと」
ロザリーにも答える。
「どうせまたとんでもないこと起こすと思うよ」
「あの二人も大概よね」
コゼットは苦い顔で述べてきた。
「毎回毎回何するかわからないから」
「馬鹿やるのはわかるけれどね」
ロザリーの言葉は実に辛辣であった。
「それだけはなね」
「まあね」
それにコゼットもアンジェレッタも頷く。
「流石は推理研究会の核兵器」
「碌なことしないから」
「まああの二人がいてもいなくてもいいよ、今回は」

アンジェレッタはあらためて述べる。
「というかいない方が」
「そうね」
「話がはかどるよ」
コゼットもロザリーも容赦がないがそもそもあの二人が推理を当てたことはない。だからこう言われるのだ。また言われても仕方のないことであった。
「それでさ」
ロザリーが話題を戻す。
「どうする？見舞い行くか？」
「いいと思うわ」
アンジェレッタはそれに賛成であった。
「お薬持って行くから」
「そうね。それにしても本当に馬鹿よね」
コゼットの声は呆れたものになっていた。
「拾い食いしてお腹壊すなんて」
「全くよ」
そうは言ってもお見舞いには行くことになった。クラスメイトでとりあえず手の空いているのが集まって見舞いに行くことになったのであった。

第三十二話　薬は恐ろしいその二

参加者はほぼ全員であった。テンボとジャッキーだけがいない。
「あの馬鹿二人何処だよ」
ロザリーが最後まで見つからなかった二人に対して言う。
「そのままどっか行ったらしいわ」
コゼットがそれに答えて言う。
「犯人を探し出すって」
「またそんなこと言ってまともな推理なんてしない癖にな」
ロザリーの言葉はまたしても辛辣であった。
「やれやれだよ。あの二人にも」
「まあいないんなら仕方ないよな」
いないのはどうしようもなかった。携帯も勝手に切っている。二人は携帯が切れたのも気付かないことが多い。今回もどうやらそのようであった。
二人は置いてジミーの家に向かうことになった。彼のアパートに着いた。
「ここね」
「外見はまともな家ね」
ごく普通のアパートにごく普通の扉であった。特におかしなところは見当たらない。
「拾い食いするような馬鹿の家だからどんなのかと思ったけれど」
今度はコゼットが言う。
「一応はまともね」
「外はね」
ロザリーは一歩踏み込んだ発言をしていた。扉はごく普通の赤い扉である。
チャイムを押す。すると疲れ果てたジミーの声が聞こえてきた。
「はい」

「ああ、ジミー？」
アンジェレッタが彼に応える。
「お見舞いに来たわよ」
「お見舞い？」
「そうよ」
彼女は彼の言葉に答える。
「何でも拾い食いしてお腹壊したそうじゃない」
「えっ！？」
ジミーはそれを聞いて驚いた声をあげた。
「僕が！？」
「そうよ。だから皆で来たのに」
「皆で来たんだ」
ジミーはおちらの方に驚いているようであった。
「悪いね、何か」
「それはいいさ。とにかくさ」
ロザリーが彼に言う。
「開けてくれよ」
「わかったよ。じゃあ」
ジミーはそれを受けて扉を開ける。するとそこから赤いパジャマのジミーが姿を現わした。
「悪いね、皆来てくれて」
ナイトキャップを被ったジミーが皆に挨拶をする。皆彼に案内されて彼の部屋に入った。
部屋の中は意外と片付いていた。綺麗なものである。
「あれ、拾い食いしたっていうからどれだけ散らかってるかって思ったけれど」
「意外と綺麗じゃない」
ロザリーとコゼットは部屋の中を見回して言う。白と青のカラーリングで家具も質素な感じであった。よく掃除もされている。
「ところでさ」

ジミーは皆に対して言う。
「何で僕が拾い食いしたってなってるの？」
「あれ、そうじゃないのか？」
ロザリーはそれを聞いて目をパチクリさせる。
「だから来たんだぞ」
「拾い食いしたのは事実だけれどね」
それは認める。
「けれどお腹は壊してないよ」
「じゃあ何で学校休んだの？」
コゼットがそれに問う。
「風邪だよ」
ジミーは答えた。
「風邪引いてね。それで」
「風邪！？」
「うん、昨日寒かったじゃない」
彼は困った顔をして述べる。
「それでさ、つい。心配かけて御免ね」
「風邪だったのか。何かと思ったら」
「まあどっちにしろ学校を休んだのは本当ね」
ロザリーとコゼットはあらためて述べる。結局は同じだったからだ。
「お薬は間に合わなかったけれど」
「ううん」
しかしアンジェレッタはその言葉に首を横に振る。
「風邪薬も持ってるよ」
「持ってたんだ」
皆それを聞いて言う。
「風邪薬とバンドエイドは基本よ」
アンジェレッタはそれに応えて懐から薬を出す。
「常に持ってるわよ」

「それはいいけれど」
コゼットはアンジェレッタが薬を出したのを見ながら述べる。
「いつもいつも何でも出て来るポケットね」
「だからいつも持っていないと危ないから」
「いや、そういう問題じゃなくてね」
コゼットはさらに突っ込みを入れる。
「いつもいつも色々なものが出て来るなあって」
「そういえばそうだよな」
「どうやっていつもあれだけのものが入っているんだ？」
皆それを見てまた述べる。

第三十二話　薬は恐ろしいその三

「思えば不思議だ」
「何が何だか」
「まあ気にしないで」
それでもアンジェレッタだけは平気な顔をしていた。本人だけはである。
「大したことじゃないから」
「いや、充分凄いよな」
「全く」
皆は納得しない。だからこそ言葉を続ける。
「ある意味セーラ以上に謎だよな」
「あれっ、そういえばセーラは」
気付けば彼女もいない。そのことに皆気付いた。
「何処なのかしら」
「セーラならお寺に行ったぞ」
ロザリーが説明する。
「ヒンズー教のな。何でも今日は外せないらしい」
「そうなんだ」
「はい。ですから分身を送ってきました」
突然ここでセーラの声が聞こえてきた。
「えっ！？」
皆その声に思わず声がした方を見る。するとそこに確かにセーラがいた。
「たった今到着しました」
セーラの分身はにこりと笑って述べる。外見は全く同じだ。
「たった今って」
「勿論私はわかっていますので」
「いや、それよりもさ」

「どうして分身したのか」
皆はそもそも分身をしていること自体が理解不能だった。ジミーの風邪よりもこっちの方が問題であるとも言えた。少なくとも普通ではない。
「簡単なことです」
セーラは平気な顔で言う。
「薬で分身しました」
「どんな薬、それって」
「絶対にまともな薬じゃないよな」
「ベッキーの妖術です」
セーラの分身は答える。
「それでできた薬です」
「妖術って」
「何なんだよ、それ」
さらに謎は深まる。少なくともここでも連合の常識とはかけ離れていた。マウリアの常識でもなさそうであった。
「ですから御気になさらずに」
「そうか」
「じゃあまあいいや」
無理矢理納得することにした。いい加減考えても無駄だと思いだしたのだ。
それで話はジミーの方に戻った。アンジェレッタもアンジェレッタで色々と風邪薬を出してきていた。そして不可思議な調合をはじめていた。
「これを混ぜていくとね」
何か緑色の煙が出て来た。それも澱んだ緑だ。かなり嫌な色だ。
「そいじょそこいらの風邪なんか一発なんてなおるから」
「本当に？」
ジミーはその不気味な煙を見ながら問う。
「何か」

「安心して」
根拠のない言葉に聞こえた。
「明日から学校に行けるから」
「そうなの」
「なあ」
薬の調合を見てロザリーがコゼットに囁いてきた。
「あれ、どう思う？」
「アンジェレッタの薬のこと？」
「ああ。かなりやばいだろ、あれ」
彼女はそう見ていた。
「飲んだらそのまま昇天しそうだよな」
「確かにね」
それにコゼットも頷く。
「あれはちょっと」
「だよな」
ロザリーも真剣な顔で応える。
「あの煙は」
「煙だけじゃないわ」
「うっ」
ロザリーだけでなく他の皆も声をあげた。異臭までしてきたからだ。
「こ、これは」
「本当にやばいんじゃないのか」
皆その匂いを嗅ぎながら言う。
「だから安心してって」
それでもアンジェレッタの言葉は変わらない。
「良薬口に苦しっていうし。私は薬のことなら何でもわかってるし」
「ううん」
「本当かな」
それすらも信じられなくなってきた。

「緑色の薬ってなあ」
「それもあああした緑は」
草木の清々しい緑ではないのだ。ドロリとした、ヘドロを思わせる緑である。とてもいい緑には見えない。魔女の薬と言った方が近い感じであった。
「大船に乗ったつもりでね」
「泥船じゃなくて？」
ジミーはアンジェレッタにそう返す。
「本当に大船？」
「信用してない？ひょっとして」
「いや、そうじゃないけれど」
実はそうなのは内緒である。
「とにかく飲んで」
「何でしたら」
何故かここでセーラの分身までやって来た。呼ばれもしないのに出て来たのだ。

第三十二話　薬は恐ろしいその四

「私のお薬ではどうですか」
「君のお薬って」
ジミーは今度は彼女に顔を向けることになった。
「まさか。それ？」
「はい、これです」
にこりと笑った彼女が持っているのは何と毒々しい紫色の薬である。何故かそれはトリカブトを思わせる感じであった。不思議なまでに怪しいイメージを放っていた。
「ベッキーがいつも作ってくれるお薬です」
「ベッキーって」
「はい」
にこりと笑う。
「妖術で作ってくれたんです」
「妖術、ねえ」
「あからさまに怪しいよね」
ロザリーがまた述べる。彼女もコゼットも同じ考えであった。
「そうね。何か得体の知れない薬ばかりで」
「どうしたもんかね。っていうか」
「ジミーの風邪、なおるのかしら」
それが問題点の筈であるが何故かそれはかなりどうでもよくなってきている。何かアンジェレッタとセーラの薬の話になっていた。しかもどう見ても風邪薬に思えないのが話をさらにややこしくさせていたのであった。
「ううん、こうなったら」
「はい」
アンジェレッタとセーラは実は好戦的な性格ではない。だから張り合うということはあまり好きではないのだ。それはこの場合でも

そうであった。
「両方飲んで」
「どうぞ」
二人はそれぞれ持っている薬を差し出してきた。ジミーはそれを見て青い顔をしていた。緑に紫に青と色が揃ったのであった。
だがそれはジミーにとってはいいことではなかった。むしろかなり悪いことである。
それでも彼は決めるしかなかった。覚悟をである。今意を決した。
「よし、じゃあ」
二人に対して言う。
「頂戴」
「おい、そうするのか」
「死ぬ気!?ジミー」
ロザリーとコゼットはジミーのその決断に驚きを隠せなかった。
「片方だけでもやばいってのに」
「両方だなんて」
二人は息を飲む。ゴクリ、と音がする。その音こそが地獄のはじまりであった。
「じゃあ」
ジミーはその薬を受け取った。そして一気に飲んだ。
「死ぬか!?」
「化け物になるか!?」
皆ジミーを注目する。しかしジミーは運がよかった。
何と生き残った。化け物にもなりはしない。だが。
「うう・・・・・」
「大丈夫かい?」
声をあげたジミーにロザリーが問う。
「ああ。けれど」
「けれど!?」
「何か異様に目が冴えてきたんだけれど」

「風邪は元気がつけば吹っ飛ぶよ」
アンジェレッタがにこりと笑って述べてきた。
「だからね。元気がつくようにしたのよ」
「病は気からと申します」
セーラはセーラで言う。
「ですからベッキーはいつも精神を高ぶらせるお薬を用意してくれるのです」
「それでか」
ジミーはそれを聞いて納得した。
「それで今こうして」
「元気になったよね」
「どうですか？」
「まあそれはね」
二人に答えはする。
「けれどさ。これって」
それでも言わずにはいられなかった。そして言う。
「効き過ぎなんだけれど」
「だからいいのよ」
「病は完全に消さなければなりませんから」
やはり二人はそんなことを気にはしない。わかってはいるがやはり納得はできない。
「これで明日から学校行けるよね」
「けれどさ」
ジミーの言葉は続く。釈然としない気持ちがこみ上げてくる。
「当分寝れそうにもないんだけれど」
「やっぱり変なことになっちまったね」
ロザリーはそんな彼を見てまた呟いた。呆れた声になっている。
「予想通りっていうか」
「まあ化け物にならないだけましかもよ」
コゼットの言葉は実に惨いことを平気で言っていた。

「あの二人のお薬一緒に飲んでだから」
「かも知れないね」
それから一週間ジミーは眠れない日々を過ごした。どうにも薬というものは時として非常に厄介な事態を引き起こすものであるようだ。

薬は恐ろしい　　完

２００７・１・２９

第三十三話　動物以下その一

動物以下

クラスの三馬鹿の二つを占めるテンボとジャッキー。二人は今日も滅茶苦茶な推理をしている。

「よし、謎は全て解けた！」

ジュディの持って来ている推理小説を借りて二人で読んでいる。読みながら叫んでいた。

「ええ、わかったわ！」

ジャッキーが叫ぶ。

「犯人はこの配達の兄ちゃんだ！」

「ええ、絶対そうよ！」

「当たり？」

「わかるでしょ？」

ジュディはそうロミオに返す。

「大外れよ」

「やっぱり」

「それもそのキャラクター単なる端役だから。最初の場面で主人公に牛乳渡すだけで」

「それでどうして犯人だって言えるの？」

「さあ」

ジュディの方が知りたい程である。彼女も言いたげな顔であった。

「密室連続猟奇殺人事件なんだけれど」

「また凄いジャンルだね」

何か話を聞くだけでややこしそうな話だと思った。

「そうでしょ。それで犯人はね」

「何ィッ！？」

「どういうこと！？」

二人が喚きだした。

「何でこいつが犯人なんだ！」
「絶対に有り得ないわよ！」
「誰なの、犯人」
ロミオがそんな二人の叫びを聞きながらジュディに問う。
「最初に斧で頭を割られた人がダイニングメッセージで書いていたイニシャルの人。すぐわかると思うわ」
「そうなんだ」
「間違っても配達の兄ちゃんじゃないから。以後影も形も出て来ないから」
「で、あの二人がそう思い込んだと」
「そういうこと」
ジュディは言う。
「何でそうなったのかわからないけれどね」
二人の思考回路は理解不能であった。彼等は今も叫んでいる。
「何てオチだ」
「あたし達の推理をかわすなんて。この作者は天才ね」
「だそうだけれど」
「あんなのすぐわかるわよ」
勘のいいジュディの言葉であった。
「普通はね。ダイニングメッセージそれからも多いし」
「それで何でわからないの？二人は」
「頭が悪いんじゃないの？」
かなり手酷い言葉だがそう言うしかなかった。
「どう考えてもさ」
「ううん」
「まあいい」
テンボはもう復活していた。
「失敗は誰にだってある」
「そうね」
ジャッキーもそれに頷く。

「そうよ。だから次の推理に挑むわ」
「困ったわ」
そこでクラスで困っている声がした。彰子が困った顔をしていたのだ。
「あれっ、彰子ちゃん」
「どうしたの？」
クラスメイト達がそれを聞いて彼女に声をかける。
「うん。実は明香にプレゼントを買ったのよ。アルバイトで貯めたお金で」
「へえ、彰子ちゃんって妹思いなんだ」
まずは皆それに感心した。
「明香にはこの前買ってもらったから。それで御礼にペンダントを買ったんだけれど」
「それを失くしたの？」
「ええ」
困った顔で皆に頷く。
「折角学校で明香にプレゼントしようと思ったのに。困ったわ」
「おっと、お困りのようですねお嬢様」
「ここは私達にお任せを」
それを聞いてテンボとジャッキーが呼ばれもしないのに彰子の席にやって来た。
「テンボ君、ジャッキーちゃん」
「ここは僕達に任せてくれよ」
「必ずそのペンダントを見つけてあげるわ」
「本当！？」
「本当さ」
彼等は言う。
「だから大船に乗ったつもりでいてよ」
「わかった？」
「ええ、じゃあ」

「それで受けるんだ」
皆二人の申し出を笑顔で受けた彰子にまず驚いた。
「よくまあ」
「勇気あるっていうか」
「お願いしていい？」
「勿論」
テンボが満面に笑みをたたえて頷く。
「待ってよ、今から推理するから」
そう言うと何処からか姿を現わした安楽椅子に座り込む。そして目を閉じて考え込むのであった。まるで何処かのエルキュール＝ポワロである。

第三十三話　動物以下その二

「答えは既にあるんだよ」
彼は目を閉じたまま述べる。
「いいかな、後はそれを推理していくだけ。それだけなんだ」
「またいつもの言葉ね」
ジュディはそれを見て呆れた調子で述べる。
「それで当てたことないのに」
「それでもう一人は」
「あたしも動くわ」
ジャッキーは行動型である。どちらにしろ出鱈目な推理をするということではテンボと同じなのであるが一応は行動型なのである。傍迷惑なことにである。
「じゃあちょっと行って来るわね」
「あっ、ジャッキーちゃん待って」
肝心の彰子が呼び止めるがそれも耳に入らない。そのまま教室を駆け出していくのであった。まるで疾風のような動きであった。速さだけは。
「行っちゃった」
「絶対推理とかしていないよね」
それを見てロミオが言う。
「間違いなくね」
ジュディがそれに頷く。それはもうわかりきっていたことだ。
「さて、と」
ジュディは次に安楽椅子の上のテンボを見た。彼は寝ていた。
「・・・・・この男、マジで探偵？」
「らしいね」
ロミオがそれに応える。
「そのまま寝てるじゃない、何よ」

「ここから推理するのかな。どうかな」
「さてね。起きてから様子を見ましょう」
暫くして目を開けてきた。それから述べる。
「よし、全てはわかったよ」
「鼾かいていたのに？」
ジュディが後ろでそれに突っ込みを入れるがテンボの耳には入りはしない。
「彰子ちゃん、ペンダントはね」
「ええ」
「学校の体育館の裏だよ」
「何で？」
「ねえジュディ」
ロミオがその驚くべき推理を聞いてジュディに問うてきた。
「何でそんな結論になったと思う？」
「さあ」
ジュディもそれはわかりかねる。ついつい首を傾げてしまう。
「どうしてかしらね。こればっかりはわからないわ」
「そうだよね。僕もちょっと」
むしろ彼がどうしてそうした推理に至ったかの方が謎であった。
テンボの恐るべき推理とは、ロミオとジュディはその結末を見て息を呑むのであった。
「犬のせいだよ」
「犬の？」
「そうだよ。犬が拾ってね、そこへやったんだ」
彼はそう推理する。ロミオもジュディもそれを聞いて目が点になっていた。その中でぽつりと述べるのであった。
「これは流石に想像しなかったわ」
「そうだね、予想外だよ」
二人はこう言う。呆気に取られていた。
「今から行って来る、じゃあね」

そう言って去って行った。迷探偵二人は教室から姿を消した。後に残るのは彰子だけであった。依頼人を放置して勝手に行く始末であった。

「まあ何て言うかな」

ジュディが彰子の前にやって来た。そして彰子に言う。

「絶対に外れてるから。安心してね」

「そうなの」

「あの二人の推理が当たったことってある？」

ジュディは逆に彰子にこう問うた。

「ないでしょ？絶対に当たってないから」

「そうなんだ」

「けれどさ、ジュディ」

ロミオが怪訝な顔でやって来て言う。

「それでも見つけないといけないのは変わらないよ。彰子ちゃんが妹さんの為に買ったものなんだから。そうでしょ？」

「それはわかってるわよ」

ジュディもそれはわかっている。だから頷く。

「そうね。これは私の勘よ」

「うん」

ジュディが得意の勘を出してきた。むしろこちらの方がずっと頼りになると言っていい。彼女はそれを働かせて言うのであった。

「プレゼントは交番かあんたのお家よ」

「私のお家？」

「そう、どっちかにあるわ。何なら確かめてみて」

「わかったわ。じゃあまずは」

携帯を取り出す。それでメールを入れる。

「誰に宛ててるの？」

「お母さんに」

彰子は答える。

「今日お家にいるから。それで尋ねてみるわ」

「そこじゃなきゃ交番よ」
ジュディは言う。
「安心して。これは話は終わるから」
「ええ」
暫く経った。彰子の携帯にメールが返ってきた。そこにはジュディの予想通りの返事が書かれていたのであった。
「私の机の上にあるって。よかった」
「これで一件落着ね」
「そうね。ジュディちゃん、有り難う」
「どういたしまして」
ジュディは笑って礼を返す。
「これで明香にプレゼントあげられるわ」
「そうね。ところで」
もう一つ問題が出来ていたのだ。ジュディは今それを言う。
「あの二人は？」
「もうどっか行ったよ」
「何考えてるんだか」
ジュディはロミオの言葉を聞いてまた呆れた声を出した。
「って学校飛び出たの」
「多分ね」
「また生活主導のロシュフォール先生にどやされるわよ」
ジュディはそうぼやく。二人はあまりにも滅茶苦茶な行動により生活指導に睨まれているのである。本人達はそれに一向に気付いていないが。
「ミンチンの婆あならもっとあれだね」
「そうね。やれやれ」
また溜息を吐き出す。
「本当に何を考えているのやら」
「間違った方向には色々考えているよ」
「そうみたいね。全く」

ジュディが溜息をついていた頃二人は一緒に行動していた。そしてまた新しい謎を見つけてそれに推理を巡らせているのであった。

「このスープのダシは！」

「あれよ、あれ！」

たまたま立ち寄ったラーメン屋でラーメンを食べながら騒いでいる。

第三十三話　動物以下その三

「豚骨だ！そうだな！」
「ええ、間違いないわ！」
「二人共それネタかい？」
店長がラーメンを捌きながら呆れた顔でカウンターで騒ぐ二人を見ている。
「これトリガラだよ」
「何っ！」
「嘘よ！」
テンボとジャッキーはそれを否定する。しかし店長はそんな二人に対して言う。
「スープの色見てみなよ」
「スープの色」
「そうさ。黒っぽいだろ？それ見てわからないか？」
「いや、全然」
「あたし達は味で確かめているから」
二人は平気な顔をしてそう述べてきた。店長は味と言われてさらに呆れてしまった。
「これの何処が豚骨なんだい。あんた達本当に冗談でやってないかい？」
「いや、全然」
「トリガラなの、これ」
「そもそもスープが白いでしょ、豚骨は」
店長は言う。周りの客達も呆れ果てている。二人は何とスープの色で区別がつけられないのだ。今まで白いスープをトリガラと言ったこともあればその逆もあったのだ。非常に困ったことに。
「わからないの？」
「そうだったのか」

「そうだよ」
店長はテンボに対して述べる。
「全く。味も全然違うし」
「ううむ」
「まあいいや。で、味の方はどうだい？」
「美味しいわ」
ジャッキーが答えてきた。
「すっごく」
「ならいいけれどね」
「美味かったから今度は豚骨をくれ」
テンボは言う。
「俺の灰色の脳細胞に刺激を与える。だからこそ」
「あたしも」
ジャッキーも豚骨ラーメンを頼んだ。
「大盛りね」
「じゃあ俺も大盛りだ」
二人は同じものを頼む。
「すぐにくれ」
「いいかしら」
「おうよ。じゃあ待ってな」
暫くしてとんでもない大きさの丼に入れられた豚骨ラーメンが前に置かれた二人はそれに胡椒をかけて凄まじい速さで食べていく。
それが終わってからお金を払って店を出るのであった。店を出た時には、いや店に入る時には彰子の頼みは完全に忘れてしまっていた。
彰子のことすら忘れている。
「美味かったな」
「そうね」
二人は店の出口でそう話をする。
「店長さんもいい人だったし」
「あれが豚骨ラーメンか」

テンボはすぐに忘れるに決まっていることを呟く。
「美味かったな」
「そうね」
ジャッキーもそれに頷く。それで綺麗さっぱり忘れてしまった。
「じゃあ学校に帰るか」
「ええ。それにしても」
「何だ？」
「また刺激が欲しくなってきたわね」
ジャッキーはにこりと笑って言った。
「一旦部室に戻りましょう。話はそれからよ」
「ああ、わかった」
二人は部室に戻る。推理小説やＤＶＤが山のように置かれている。テレビもある。そうした映画研究会の部室と言っても通用する場所に一匹のオオウミガラスがいた。
「やあマーフィ」
「カァ」
マーフィと呼ばれたオオウミガラスはテンボに挨拶をしてきた。
「留守番してくれているのか。悪いな」
「カァ」
「うんうん、流石は推理研究会の名誉部員」
どうやら部員でもあるらしい。
「頼りにしてるわよ」
「それでさ、ジャッキー」
テンボはふと思い出したように言った。
「そろそろ午後の授業だぞ」
「あっ、もう」
「ああ。そろそろ教室に戻るか」
「そうね。ねえマーフィ」
ジャッキーはマーフィにも声をかけてきた。
「来る？あたし達の教室に」

「カァカァ」
その言葉に頷く。彼は二人の後についてＳ１組の教室に向かったのであった。

第三十三話　動物以下その四

教室に入ると午後の授業がはじまる寸前であった。しかし何か事故が起こっていた。
「どうしたんだ？」
「ああ、帰って来たんだ」
ロミオが二人に顔を向けて言った。
「実はさ、大変なことになったんだ」
「大変なこと？」
「うん、ほら見てあれ」
見ると教室の窓が割れていた。そこからバスケットボールが入り込んできていた。
「何、あれ」
「急にさ。ボールが飛び込んできて」
ロミオはジャッキーにも言う。
「それでね。窓ガラスが割れてさらに悪いことにその側にいたカムイの頭に当たって」
その側にカムイが前のめりに倒れていた。後頭部に大きなたんこぶを作って倒れている。
「この有様なんだ」
「犯人がいるな」
テンボはそれを見て言った。
「これは計画犯罪だ、一見事故に見せかけた」
「そうだったんだ？」
「そうよ、そうに決まってるわ」
ジャッキーも力説する。懐疑的な顔をするロミオはもう目に入っていない。
「カムイは嫌われる理由だが」
テンボの迷推理が早速はじまった。バスケットボールを見て言う。

「部活だな、カムイはバスケ部だ」
「そうね、それが重要よ」
ジャッキーも相槌を打つ。そのうえで二人は推理を続ける。
「カムイにレギュラーを奪われるか何かで嫉妬を覚えた奴がやったんだ」
「そいつが犯人よ」
「そう、犯人は」
奇想天外な推理がここで炸裂した。
「御前だ！」
「はぁ！？」
フックが指差されて思わず声をあげた。
「俺バスケ部じゃないんだけれよ。何でそうなるんだ？」
「犯人は意外なところにいるからだ」
「意外も何もそれまでの推理と全然関係ねえだろうが」
「何処をどうやったらフックが犯人になるのかしら」
「全然読めないね」
ジュディもロミオもこれには呆れ果てていた。
「だからだ。犯人は人の裏をかく」
「だからあんたなのよ」
「俺ずっと教室にいたんだけれどよ」
フックは自分のアリバイを言う。
「で、外から飛び込んできたこのボールはどうやって投げ込んだんだ？超能力か仕掛けでもしてかよ」
「そうだ！」
テンボはその通りだと断言してきた。
「フック、御前この前オカルト雑誌読んでいたな」
「まあな」
それは認めた。
「アトランティスな。読んでたぜ」
「それだ。御前はそれで超能力を身に着けてそれで外からカムイを

狙った」
「間違いないわね、それで」
「あのな、御前等」
呆れ果てた声で二人に対して言う。
「そんなもんできたら今こうしてここにいるかよ」
「それがカモフラージュだ」
テンボの奇天烈な推理は続く。
「違うか？それで」
「その推理が当たっていたら凄えよ、かえって」
フックはそう反論する。
「シラを切るか」
「いい度胸ね」
皆何と言っていいかわからない。完全に呆れていた。
「犯人誰だと思う？」
「少なくともフックじゃないのは確かに」
ジュディはロミオにそう囁いた。
「間違いなく」
「そうだね」
それだけは確実にわかる。誰もテンボとジャッキーの推理が当たっているとは思ってはいないのがミソである。
「さて、ネタはあがった」
「あたし達を甘く見ない方がいいわよ」
「・・・・・御前等ネタじゃねえよな」
フックは二人が酔っているのではなかろうかとさえ思った。しかしそうではなかった。
「一応聞くけれどよ」
その間にマーフィはこっそり教室を出ていた。そのままグラウンドへ行く。
「何言っているんだ、フック」
「あたし達は何時だって大真面目よ」

本気であった。恐ろしいことに。
「わかってないようね」
「ああ、大真面目だったのかよ」
フックも最早何と言っていいのか困ってしまった。

第三十三話　動物以下その五

「じゃあ取り調べでも何でもしてくれ」
「よし、いい覚悟だ」
「あたし達はね、吐かせるのでも天才なのよ」
「絶対字が違うよね」
ロミオはまたジュディに言った。
「まああいつ等だからね」
これがジュディの言葉だった。勿論二人もフックが犯人だとは全く思ってはいない。そもそも有り得ない話なのだ。彼が犯人だと言う方がおかしい。
「さて、じゃあ」
「吐いてもらうぞ」
「拷問でもするのかい？」
「拷問ですって！？」
何故かそれを言われたジャッキーは急に不機嫌な顔になってきた。
「馬鹿なこと言わないでよ」
「そうだそうだ」
テンボもそれに抗議する。
「あたし達は真っ当な探偵よ」
「拷問なぞするか」
「何処が真っ当なんだよ」
「笑うところか？」
皆は二人の今の言葉に突っ込みを入れる。しかし二人の耳には入らないので二人にとっては何の問題もない。実に見事なことに。
「そんなことはしないわ」
「そうだ、これで」
テンボは真ん中に穴の開いたコインのようなものを出してきた。
そこに糸をかけている。

「さあ、覚悟はいいな」
不敵な笑みを浮かべてフックに問う。
「この俺の催眠術で」
「今度は催眠術かよ」
「何の苦しみもなく吐かせてあげるわ」
ジャッキーまで何故か得意げになっている。二人はゆっくりと二人に近付く。そして催眠術をかけてきた。
「貴方は段々眠くなる」
テンボはコインをゆっくりと振り子に動かしながら言う。
「さあ、もう瞼を開けていられなくなる」
「眠くな～る眠くな～る」
ジャッキーも一緒になっていた。寝たのは二人であった。床の上に崩れ落ちていく。
「何かねえ」
ジュディはそんな二人を見て呆れた声を出す。
「お約束ね」
「これは絶対に起きないよね」
「そうね」
ロミオの言葉に頷く。
「それでさ、フック」
ジュディは今度はフックに声をかけた。
「犯人は誰だと思う？あんたは」
「犯人か！？」
彼は一旦窓の方を見てからそれに応える。
「あれだろ。校庭で遊んでいた誰かが間違えて投げ込んだんだろ」
「でしょうね」
ジュディも同じことを考えていた。普通はそう考える。
そこに来客だった。一年生が数人教室にやって来た。
「あの、すいません」
「あら」

ジュディは彼等に顔を向けた。見ればマーフィが一緒だ。
「僕達がやりました」
「どうしようかと思ったらこのオオウミガラスが来て案内されました」
彼等はそう述べる。
「あの、誰か怪我しませんでしたか？」
「ああ、俺」
いいタイミングでカムイがひょっこりと起き上がってきた。
「怪我はねえから。安心しな」
「すいません」
「いや、いいってことさ」
一旦はにこりと笑って許す。しかし。
「そのかわりな」
「はあ」
「誰か彼女紹介しろ」
彼は後輩達にこう声をかけてきた。
「えっ！？」
「タンコブのお詫びはそれでいいぜ。だからよ」
「はあ」
何時の間にかそんな話に持ってきていた。だがそれは背景になり話は解決の方に向かっていた。
「あんたが犯人を見つけたの」
「カァ」
マーフィはジュディの言葉に応える。
「お手柄ね。一件落着」
「後は窓ガラスが入れば終わりだね」
ロミオは割れた窓を見て言う。
「そうね。けれどねえ」
呆れた顔で寝ているテンボとジャッキーを見る。
「まさかとは思ったけれど」

「やっぱり動物以下だったか」
疑われた本人はかなり辛辣であった。フックは二人をかなり酷評してきた。
「ったくよお」
「で、これどうするの？」
ジュディが皆に言う。
「さあ。机に寝かせとけばいいんじゃないの？」
ビアンカがそれに応えて言う。
「どっちみにいつも授業中は訳わからない推理小説読んでるだけだし」
「そうね。じゃあそうして」
「決まりね」
話は何時の間にか二人不在で終わった。だが話は話を呼ぶ。何とカムイが騒ぎを起こるのであった。彼もまたトラブルメーカーであった。

動物以下　　完

２００７・２・３

第三十四話　彼女ゲット！その一

彼女ゲット！

「おらおら！」
何故かカムイがいい気になっている。
「俺もこれで無敵だぜ！」
「あいつ何があったんだ？」
騒ぐ彼を見てマチアがネロに問う。
「彼女がいなくて遂にいかれたか？」
「ううん、その逆みたい」
「逆！？というとだ」
マチアはその話を聞いて何か自分の想像の外の世界のことが起こるのを感じていた。
「彼女ができたのか？あいつに」
「ううん、彼女を紹介してもらえるらしいよ」
「そうなのか」
「そうなんだ。後輩にね」
ネロは言う。
「それでなんだ」
「ああ、前あの馬鹿二人が滅茶苦茶な推理した時か」
記憶を辿って述べる。
「何か何時の間にかフックが犯人になってそっからペンギンが事件解決したんだったな」
「オオウミガラスだよ」
「ああ、そうか」
言われて思い出す。そういえばそうだったと気付く。
「違うんだったな、ペンギンとオオウミガラスは」
「味が全然違うよ」
ネロはオオウミガラスもペンギンも食べているらしい。両方の味

も知っているようだ。
「オオウミガラスは美味しいけれどね。ペンギンは」
「まずいのか」
「うん、美味しくないね」
きっぱりとして言う。
「油ばかり多くて」
「そうなのか。それでだ」
マチアは話を戻してきた。
「あいつが彼女か」
「そんなに不思議？」
「御前はどう思うんだ？」
マチアは逆にネロに問い返す。
「あいつに彼氏って」
「想像つかないね」
ネロは正直だった。嘘はつかない。
「そんなこと。夢を見ているみたいだよ」
「そうだよな」
マチアはその言葉を聞いて頷く。
「あいつがねえ。彼女だなんて」
「何はともあれ明日合コンらしいよ」
「失敗する方に一〇〇〇テラだ」
マチアは言った。
「俺はそっちにかける」
「皆失敗にかけてるから倍率ないよ」
「そうか」
「浮かれてるのカムイだけだし」
実にわかりやすい話である。
「あっ、そうそう」
ネロは言ったところで思い出した。
「洪童はまた別の反応示しているけれど」

「もてない団の片割れがか？」
「うん。何でもね」
「ああ」
洪童は洪童でおかしなことになっていた。彼は今自室でヒステリックに何やら呪文を唱えていた。
「オンドゥルウラギッタンディスカーーーーーーーッ！」
部屋の中は真っ暗で何か床に魔法陣を描いている。その周囲に銅像やら蝋燭やらを置いて中央で踊り狂って呪文を唱えている。何をしているのか訳がわからない。
「クサム！」
「あの、兄さん」
そんな彼に春香が引きながら問う。
「何しているの？」
「何？わかっているだろう」
顔に妙な紋章を描いて両手に三叉のキャンドルを持っている。それでさらに叫んでいる。
「カムイを！カムイを！」
「話は聞いているけれど」
春香は呆れた顔で彼に言う。
「そんなに頭にきているの？」
「当然だ！」
彼はまた叫ぶ。
「もてない団の同志として！俺は！」
飛び跳ねる。さらに叫ぶ。
「あいつは許せん！失敗しろ！」
「またそんな」
また呆れた声で兄に言う。
「祝福してあげた方がいいわよ」
「そんなことできるか！」
最早嫉妬に身を焦がす彼にはそんな言葉は耳に入りはしない。

「今こうして！呪ってやる！」
「困ったわね」
しかし彼女はそんな兄をどうしても止められない。どうにも呆れるだけでしかなかった。困った顔をしながら。

第三十四話　彼女ゲット！その二

春香のそんな心配をよそに浮かれるカムイと嫉妬の炎に燃える洪童。傍目には誰にもわかる喜劇であった。だがこれは唯の喜劇ではなかった。

その合コン当日になった。カムイは授業が終わるといそいそと教室を後にする。

「じゃあな」

やけにめかしこんで一張羅を着ている。それで学校を後にする。

「いよいよだな」

「ああ」

クラスメイト達はこれから壮大な失敗がはじまると見ていた。しかしカムイだけはそうは思っていなかった。洪童もそれは同じであった。

「コックリさんコックリさん」

今度は教室で一人コックリさんをしている。何かを全く別のものを見ていた。顔はやつれて目の下にはクマができている。それがかなり不気味であった。

「あいつはあいつで」

「妙なことになってるなあ」

「我が望み適え給え」

「コックリさんってそんなのだったっけ」

「さあ」

とりあえずそうではないだろうとは思っている。だが洪童には誰も言うことなく話はそのまま進むのであった。

カムイは後輩達と待ち合わせていた。喫茶店で紅茶を飲んでいる。暫くして彼等が来た。すると明るい声をかける。

「よお」

「はい、早いですね」

「もういたんですか」
「おっ、早いか」
時計を見れば二十分も早い。彼はあまりにも急いで来たので時間すらわからなかったのだ。
「そうだな、早いな」
「そうですよ」
「まあいいだろうが」
しかしカムイはそんなことは気にはしなかった。だから言う。
「行こうぜ、いいな」
「わかりました」
「じゃあカラオケボックスに」
カムイと後輩達は店を出る。カムイは歩きながら彼等に問うのであった。
「それでよ」
「はい」
後輩達が彼の言葉に応える。
「その女の子ってどんな娘なんだ?」
「留学生です」
「留学生か」
カムイはそれを聞いてふと考える顔になった。それで問う。
「じゃああれか?ハサンかどっかか?」
「マウリアですけれど」
「ふうん、マウリアねえ」
「ええ」
彼等は答える。
「別にいいですよね」
「ああ、構いやしねえ」
楽しそうに笑ってそう述べた。
「可愛ければ誰でもな、いいんだよ」
「それを聞いて安心しました」

「これで駄目だって言われたらどうしようって思ってましたから」
「安心しろ、俺は寛大なんだよ」
得意満面で語る。
「誰に対してもな。仏のカムイさんって呼ばれてるんだよ」
これは限りなく嘘である。彼は常にカップルに嫉妬して洪童と二人であれこれと訳のわからないことをしている。二年S1組のもてない同盟として悪名高かったのである。
「言っておくがな」
「何ですか？」
「俺は歌うぞ」
ニヤリと笑ってきた。
「これでも歌には自信がある」
「そうだったんですか」
これは本当だ。いつも一人で怨みの歌を歌っているからだ。洪童は怪しげな儀式を行う。二人でそれぞれ芸風が違っていたりする。
「女の子にも思いきり聴かせてやるぜ」
「じゃあ楽しみにしてます」
「ここです」
話しているうちに目の前に七階建ての大きな建物が現われた。
「ここの三階に部屋取っていますんで」
「先に入りましょう」
「おう。それでな」
カムイは上機嫌で後輩達にまた聞いてきた。
「その女の子はどうやって知り合ったんだ？」
「委員会で」
「って御前等何いいんだ？」
「厚生委員会です」
そうカムイに言う。
「新しく委員になった先輩が合コンに参加したいって言っていて」
「それでだったんですよ」

「成程。そういう理由か」
そこまで聞いて腕を組んで頷く。
「それでもいいですよね」
「ああ、いいぜ」
彼も別に断る理由はない。
「じゃあ入るぞ」
「わかりました」
こうして彼等は店に入った。そしてあれこれと飲み物や食べ物を頼んでいたところで女の子達がやって来たのであった。

第三十四話　彼女ゲット！その三

やって来たのは三人だった。二人は普通の連合の服だったが最後の一人は明らかに違っていた。マウリアの服だったのである。
「よし、話通りだな」
「はい。先輩」
後輩達はその女の子に声をかけてきた。
「この人が前お話していた」
「カムイさんですね」
「はい、そうです」
彼等は答える。
「カムイ先輩です」
「はじめましてカムイさん」
「は、はい」
カムイはその言葉を聞いて直立不動になって席を立ってきた。
「はじめまして」
カチコチになって挨拶をする。
「カムイ＝サシンです。どうぞ宜しくお願いします」
「アーメンガードと申します」
そのマウリアの女の子はにこりと笑ってきた。褐色の肌に黒い目と髪が実によく合っている。マウリア風の美少女と言ってよかった。
「アーメンガードさんですか」
「はい、八条学園の二年です」
「っていうと」
「カムイさんの同級生です」
「そうですね」
そう彼女に返す。
「何分大きな学校ですから」
「御存知なかったですか」

「ええ、すいません」
そうアーメンガードに謝罪する。だがふと思った。
(待てよ)
心の中で呟く。
(この俺がノーマークの女の子だと。しかも留学生でこれだけ目立つ女の子が)
そこがまず不思議であった。
(何かおかしいな)
そう思って後輩達に囁くのであった。
「おい」
「はい」
「この人何時厚生委員会に入ったんだ?」
「ずっと最初からいましたけれど」
「ずっとか」
「ええ」
後輩達は答える。
「そうですけれど」
「そうだったのか」
しかし話を聞いて余計にわからなくなった。かなり長い間学校にいたのにやはり彼が知らない。そこに何かあるのではと思ったのである。
「御存知なかったんですか」
「ああ、本当にな」
そう後輩達に返す。
「誰なんだ、一体」
「ところで」
「あっ、はい」
アーメンガードの言葉に顔を向ける。
「カレーを注文して下さったんですね」
「はい」

そう彼女に応える。
「ここの店本格的なカレーいけるんで」
「そうだったのですか」
「どうですか、お味は」
アーメンガードに尋ねる。
「いいですか？」
「はい、すごく」
彼女はにこりと笑って答えてきた。
「このスパイスの加減が絶妙です」
「そうなんですか」
「はい。それで音楽ですが」
「結構色々な曲がありますよ」
カムイは意外と仕切り上手なところを見せてきた。てきぱきとした動きで彼女に応える。かなり場慣れした雰囲気がそこにあった。

第三十四話　彼女ゲット！その四

「マウリアの曲も」
「マウリアの曲もあるんですか」
「連合のカラオケは特別でして」
連合の者達の間では老いも若きもカラオケを楽しんでいる。だから色々な曲が入っている。三百国の曲だけでなくマウリアやサハラの曲もあるのである。無論原国の言葉でである。
「色々な曲があるんですよ」
「本当ですね」
アーメンガードは曲名が書かれた本を見て言う。ボックスに必ず一冊は置かれているものをである。それを今読んでいた。
「こんな曲まで」
「揃ってるでしょ」
「はい、私の好きな曲は全部あります」
「それは何より」
「それでですね」
彼女は言ってきた。
「私も歌っていいですか？」
「ええ、勿論」
彼はにこりと笑って述べてきた。そしてマイクを差し出す。
「ささ、どうぞ」
「はい」
マイクを受け取って歌いはじめす。歌はかなり上手かった。マウリア語はわからないがそれでも歌唱力はわかった、しかしここで彼は気付いた。
そのマウリア語の発音が誰かのそれに似ているのである。それに気付いた彼はふと胸騒ぎを感じたのであった。それは急に大きくなってきた。

（何だ？）
その違和感に気付き内心眉を顰めさせた。
（これは）
「どうしたんですか？」
ここでまた後輩達が彼に声をかけてきた。
「食べ過ぎですか？」
「いや、別に」
そう彼等に返す。しかしその違和感が抑えられなくなってきていた。
「何でもねえよ」
「そうですか」
「ならいいですけれど」
「ところでな」
彼はここで後輩達に問うてきた。
「ええ。何でしょうか」
「アーメンガードさんな」
彼は彼女について問うてきた。
「姓は何ていうんだい？」
「スーリアと申します」
「へえ、スーリアさんっていうんだ」
「はい」
にこりと笑ってきた。
「宜しくお願いします」
「ええと。スーリアさんっていうと」
カムイは脳裏に何か思い出したくはないものを思い出してきた。
脳裏にあの妖術使いの顔が思い浮かぶ。そういえば。彼は今ようやく自分が何を思い出そうとしているのかわかった。わかったうえで後悔した。
「じゃあさ」
それでも一抹の望みをかけて彼女に問う。

「この学校に知り合いとかは？」
「双子の妹が」
「ふうん、双子の」
また脳裏で一つつながった。
「確かその人って」
「二年Ｓ１組です」
「やっぱりな」
カムイはそれを聞いて遂に落胆しきった。肩がガクリと落ちてその場に崩れ落ちてしまった。まるでサヨナラホームランを食らったピッチャーのようであった。
「その双子さんの名前は」
「ベッキーといいます」
アーメンガードは答える。
「それが何か」
「そうですか、やっぱり」
カムイはそれを聞いてさらに落ち込んでしまった。
「私もシヴァ家にお仕えしています」
「あれ、言いませんでしたっけ」
「先輩にも言いましたけれど」
ここで後輩達が述べてきた。
「聞いてねえよ」
カムイはそう後輩達に返した。
「そんなこと何時言ったよ」
「あれっ、言ったよなあ」
「なあ」
後輩達は顔を見合わせて言う。
「俺言いましたよ」
「俺だって」
「だから聞いてねえよ」
カムイはまた言い返す。

「何時の間にそうなったんだよ」
「けれどどうですか？」
「・・・・・まあな」
しかしカムイもここまで来て引き下がれない。何とか気を取り直してアーメンガードに対して果敢に突撃を試みるのであった。それはマシンガンに棍棒で向かう突撃であった。
「それでですねアーメンガードさん」
「はい」
アーメンガードは清らかな笑みで彼に応える。その笑みは変わらない。
「趣味なんかあります？」
何処か見合いめいていたがそれでも構わなかった。とにかく今の事態を何とかしたいと思っていたのである。絶望的な中で。
「はい、あります」
にこりと笑って答えてきた。
「それは一体」
「黒魔術です」
その言葉を聞いてカムイの顎が外れた。呆れる程口が大きく開いてしまった。

第三十四話　彼女ゲット！その五

「あの、先輩」
「大丈夫ですか？」
「あ、あがががががが・・・・・」
顎が外れているので何も言えない。とりあえず顎を入れてから話を再会した。
「そうですか、黒魔術ですか」
「そうです」
「なあ」
元に戻ったカムイを見て後輩達はまた囁き合う。
「先輩もかなりタフだよな」
「そうだよな」
そのまま話に戻ったカムイを見ながら囁いている。
「それでですね」
彼はなおも話を続ける。アーメンガードもそれを受けている。
「マウリアは様々な神がいますね」
「ええ。私はカーリー様を信仰しています」
「左様ですか」
それを聞いて額に汗が流れる。シヴァ神の妃であり殺戮と破壊をこよなく愛する女神である。パールヴァティーの化身の一つであるとされるがその姿は全く異なったものになっている。黒い肌に四本の腕と長い舌を持ち髑髏と死体で身体を飾っている。血生臭く残忍な女神として知られている。連合では邪神ではないのかとさえ言われている。マウリアでは善き神の一人である。
「はい。カーリー様は素晴らしい神様です」
「では生贄は」
「人や牛はありません」
「ははは、そうですか」

（当たり前だろうが）
内心そう呟く。人を生贄にしては犯罪である。連合では悪魔崇拝も宗教であるが彼等も人間への生贄はしないのである。殺した動物は食べる慣わしもある。
「血を飲んでカーリー様への信仰を誓って」
「そうしているのですか」
「はい。美容にもいいですよ」
「成程」
頷いたが肯定したわけではない。それはとてもできない。
「母もそれで今でも若々しくて」
「そうでしたか。それでですね」
話を変えてきた。今の時点でかなりカムイも参っているがそれでも彼はくじけなかった。根性である。
「好きな食べ物は」
「鶏肉のカレーです」
「あっ、いいですね」
ようやく話がまともになったと感じた内心ほっとする。だがそれはほんの一瞬でしかなかった。そんな甘い相手ではなかった。カムイも迂闊と言えば迂闊であった。
「俺もカレー好きですし」
「あっ、そうなんですか」
「はい、そうなんでよ」
（ここからだ）
内心呟く。突破口を見つけたと思った。
（よし、じゃあ）
さらに突っ込みを入れる。言葉は続く。
「お時間ありますか？」
カムイは何度も本で読んだ常套句で攻略にかかった。これでいける、間違いないとさえ思った。それは確信であった。
「どうでしょうか」

「おい、先輩やるな」
「ああ、このまま」
後輩達はまさかと思ったがそれでも彼の成功を確信していた。彼は間違いなくアーメンガードを彼女にすると思った。普通はそうなれる雰囲気であった。
「いけそうだよな」
二人はそう思った。カムイはさらに攻撃を続ける。
「今日この後で」
「今日ですか」
「はい、どうでしょうか」
「はい」
アーメンガードはその言葉ににこりと頷いてきた。多くの本ではこれで確実に彼女をゲットしている、そう書かれるべきものであった。カムイも後輩達もそう思った。
「私で宜しければ」
「それじゃあ」
カムイは希望に満ちた声で応える。今目が希望に燃えていた。
「カラオケの後で」
（やった！）
心の中でガッツポーズをする。カラオケが終わってそのまま二人でアーメンガードが紹介するカレー屋へ向かう。それを見守る後輩達はこれでカムイに彼女ができたと思った。この流れは確実であった。
「一時はどうなるかと思ったがな」
「上手くいきそうだよな」
彼等は言い合う。
「意外と」
「そうだな」
カムイが至福の気持ちで暗くなってしまった街を歩いているとその上に洪童がいた。何を考えているのかわからないが彼はビルの屋

上でマントを羽織って何かを叫んでいた。
「死ね！死ぬがいいカムイ！」
彼は今眼下をアーメンガードと一緒ににこやかに歩くカムイを見て叫んでいた。

第三十四話　彼女ゲット！その六

「地獄に落ちろ！この洪童が地獄に落としてやる！」
「なあ」
そんな彼を後ろから見るクラスメイト達は完全に呆れていた。そのうえで話をしている。
「あいつ、大丈夫か？」
「大丈夫じゃねえよな」
皆それはわかっていた。
「どう見てもな」
「春香ちゃんも大変ね」
「全く」
彼の心配はされずに妹の心配がされる。とはいってもクラスメイト達は彼のことも見ているのであった。考えてみれば幸せな男ではある。
カムイはアーメンガードと二人でそのままカレー屋に入る。そこで二人して同じメニューを注文したのであった。
「チキンカレーを」
「私も同じものを」
二人は言う。マウリア人のウェイターが注文を受ける。彼が去ってから二人はこれまたマウリア風の店の中で話をはじめた。ＢＧＭまでマウリアのものであった。
「マウリア風ですか」
「はい」
アーメンガードはにこやかに笑って返した。
「ここはセーラ様のお店の一つでして」
「セーラの」
彼女の家がマハラジャとは聞いていたが店を持っているとは聞いてはいない。その言葉に少し面食らってしまったのである。

「そうです。セーラ様のお店なのです」
「あいつ、店まで持っていたのか」
「御存知ありませんでした？」
「いや、全然」
カムイは答える。
「そんなことは」
「セーラ様の御父様がご留学の際にセーラ様にお渡しされたもので」
「そうだったんですか」
衝撃の事実だった。プレゼントの範疇ではないのはカムイもわかった。
「そうなんです。他にはですね」
「他にも」
あると聞いて我が耳を疑うカムイであった。レストランだけでもかなりのものだというのに。
「百貨店にホテルなんかも」
「何と」
衝撃の事実がまた明かされた。
「そしてセーラ様のお屋敷です。どうでしょうか」
「有り得ないね、何か」
呆然としてそれに答える。
「それだけの贈り物って」
「シヴァ家からすれば些細なことなのです」
アーメンガードは彼にそう答えた。
「ですから御気になさらずに」
「はあ」
といっても気にならないレベルではない。カムイは何と言っていいかわからなかった。
そこにカレーが来た。二人はそちらに顔を向ける。
「チキンカレーです」
「どうも」

「ここのカレーは本格的でして」
アーメンガードはそうカムイに語る。
「マウリアの味そのままなのですよ」
「そういえば」
ここで見せの中の客に気付いた。見ればマウリアの者が多い。ここはマウリアの者の為にある店なのだと今気付いたのであった。
「お店の中もマウリアにいる感じですね」
「はい。そこも考えています」
アーメンガードが答える。
「マウリアの雰囲気をそのまま出してきましたので」
「成程」
「連合の中にあってマウリアがあるのですよ」
「それも日本の中で」
「しかもアイヌ人の貴方が」
そう言われるとどうも神秘的な感じがするから不思議であった。
アーメンガードの話術は独特のものがあった。今カムイはその中に落ちていた。
「これは運命なのですよ」
「運命ですか」
「そうです。カレーに巡り合えたのも」
「カレーですか」
「はい」
アーメンガードの話を聞いて内心舌打ちした。自分ではなくカレーに話を持って行かれたからである。しかしそれは言葉には出さない。
「カレーです。このカレーはですね」
「何かあります？」
「三十種類のスパイスが調合されていまして」
「スパイスですか」
つまり香辛料である。マウリア料理と言えばスパイスである。こ

れは昔から変わらない。インドであった頃からスパイスには事欠かないしそれをふんだんに使うことがマウリア料理の基本なのである。それを今アーメンガードに教えられていた。

「そうなのです。それをお楽しみ下さい」

「じゃあ」

スプーンを手に取る。それを口に入れると。

第三十四話　彼女ゲット！その七

翌日カムイは唇をタラコのようにさせて学校にやって来た。皆それを見て今度は何が起こったのかと思った。
「どうしたんだ？今日は」
皆そのカムイに問う。カムイは重い口を開いてきた。
「カレーだ」
「カレーって」
「何がどうなったんだよ」
話が読めなくなった。何が何かわからなくなった。
「だからカレーを食ったんだよ」
彼はその唇のまま言う。
「昨日さ。アーメンガードさんと」
「らしいな」
覗き見していたことは皆言いはしない。それをかくして話を続ける。
「で、チキンカレーを食べたんだよ」
「それだけだろ？」
「いや、待てよ」
ここでフックが気付いた。彼はタイ人である。そう、タイ人なのだ。
「ひょっとしてそれは辛かったせいか」
辛いことで知られるタイ料理だからわかることであった。
「それで御前」
「いや、待ってよ」
タバスコのメキシコ人であるマルコがそこで話に入る。
「カムイだって結構辛いものには強い筈だよ。それでこれは」
「そうか」
「図星だよ」

カムイは憮然としてそれに答えた。
「その通りさ」
「そんなに辛かったのかよ」
「ああ」
憮然としたままで言う。
「とんでもねえ辛さだった」
「そんなにかよ」
フックは述べる。
「三十種類のスパイスだって言われたんだよ」
「三十種類じゃ普通じゃねえのか？」
フックはそれを聞いて呟く。
「そうだよね」
それにマルコも同意する。
「それ位だと」
「数はな。そうだな」
カムイはそれを聞いて述べる。
「普通だった」
「じゃあ何が悪かったんだよ」
「そうだよ。三十種類じゃ」
「質だ」
ここで数とはもう一つの要素が出た。質なのだ。この場合はスパイスの辛さの質だ。それは桁外れであったのだ。彼が言っているのはそれであった。
「一つ一つの質が半端じゃなかったんだよ」
「そうだったのか」
「ああ。そのせいでこうなっちまった」
「それでデートはどうなったんだ？」
フックは話をそちらに向けてきた。
「肝心のそれは」
「勘弁してくれ」

カムイは項垂れてそう言う。あのカムイがだ。
「あんなカレーをいつも食べさせられるなんてよ。俺にはマウリアは無理だ」
「そうなの」
マルコがそれを聞いて目をしばたかせる。
「残念だけれどよ」
結果は皆の予想通りとなった。そしてこれに狂喜する者がいるのも想定の範囲内であった。
「やった！やったぞ！」
洪童は自分の部屋で叫んでいた。
「これでいい！もてないのは俺だけじゃない！」
「・・・・・兄さん」
暗い部屋で一人喚く兄を見て春香は呟く。
「人を呪えば穴二つよ」
奇しくもこの言葉は当たることになった。洪童をとてつもない災厄が待ち受けていた。彼はそれから逃れることはできず恐ろしい目に遭うのであった。

彼女ゲット！　　完

２００７・２・９

第三十五話　十三日の月曜日その一

十三日の月曜日

「これはいけません」
セーラは登校してきた洪童の顔を見るなりいきなり言ってきた。
「今日貴方の運勢は最悪です」
「最悪なのか」
「はい、百年に一度、一兆人に一人がなる確率の大凶です」
「・・・・・・何だよそれ」
洪童はそれを聞いて思わず呟いた。
「滅茶苦茶な確率じゃねえかよ」
「私も見たのははじめてです」
セーラも彼の顔をまじまじと眺めて述べる。
「これは酷い」
「酷いのかよ」
「はい」
しかもそれを肯定する。
「これから貴方を恐ろしい災厄が襲い続けるでしょう、今日一日」
「一日中か」
「そうです。そしてそれは決して逃れられません」
止めであった。かなりの運勢であるらしいことがそれでわかる。
「命に別状はありませんが」
「そうか、よかった」
「おい、洪童！」
ここでフランツの声がした。
「んっ！？」
「よけろ、危ないぞ！」
「一体何なんだ・・・・・・ぐわっ！」
こめかみに豪速球が直撃した。しかも硬球である。

「だから言ったのに」
「御前・・・・・教室の中でボール投げるんじゃねえよ」
洪童は床に倒れこみながらフランツに文句を言う。目を回して鼻血を流している。
「いや、急にボールがすっぽ抜けてな」
彼はそう説明する。
「それだけだったんだが」
「一六〇キロ出てたな」
横にいたタムタムがそう述べる。
「高校生でここまで出せるのはいないな。それにノビも凄かった」
「よし、プロへの道がまた開けたか」
「何でいきなりすっぽ抜けが超高校生級のボールになるんだ?」
洪童は立ち上がりながら述べる。何とか生きていた。
「不運です」
それへのセーラの答えであった。
「そしてこれだけではありません」
「今の俺じゃなかったら死んでたぞ」
「はい。例えばですね」
「ああ」
「ねえねえ洪童」
そこへアンジェレッタがやって来た。
「ん!?」
「高麗人参あるけれどどう?」
そう言っていきなり瓶に入っている高麗人参を差し出してきた。かなり立派なものである。
「これ」
「くれるのか?」
「うん。ただでね」
「ただでかよ」
洪童は韓国人である。言うまでもなく高麗人参は彼の国のものだ。

だからこそ目の前のそれがどれだけいいものかがわかる。不運を跳ね飛ばす為にここは精をつけておこうとも思った。
「じゃあくれ」
「どうぞ」
それを譲り受けてそのままかじっていく。ところが。
「ちょっと古いけれどね」
「古い？」
全部食べたところでピタリと動きを止める。
「そうなの。それで熱してからって言おうと思ってたんだけれど」
「じゃあ」
「お腹に悪いわよ、そのままだと」
「つうとだ」
洪童は今自分のこれからの未来がわかった。
「俺は今から」
「下痢用の薬どう？」
「・・・・・・くれ」
そうアンジェレッタに言う。
「すぐにな。強いのを」
「わかったわ」
薬をもらってそのままトイレへ向かう。暫くして戻ってきた時にはげっそりと痩せ衰えていた。その顔でセーラの前にやって来た。

第三十五話　十三日の月曜日その二

「神懸かり的な不幸にあってんだがよお」
「はい、だからです」
「百年に一度一兆人に一人がなるっていう不幸か」
「まだまだこれからです」
セーラは彼に語る。
「一日ははじまったばかりですので」
「きついな、おい」
「御安心下さい」
しかしセーラはそんな彼に対して言う。
「安心していいのかよ」
「そうです。一日だけですから」
「どっちにしろ逃げられないのかよ」
「いえ、それは違います」
ここからがセーラの本領発揮であった。彼女は述べる。
「一日はブラフマーの一日のほんの切れ端の切れ端に過ぎないのです」
「そりゃどういう意味だ?」
洪童には彼女の言葉がさっぱりわからない。だがマウリア哲学とは実に奥が深い。仏教を忘れ去ったと言われているがそれは違うのだ。マウリアにおいては仏教はヒンズー教の一派なのである。従って仏教も忘れてはいないのだ。なこれを聞いて即座に理解できる連合の者はあまりいない。何を言っているのかわからなくなるからだ。話が読めなくなってしまうのである。これがマウリアなのだ。
「それこそブラフマーが瞬きする間の動いた瞬間です」
「それだけか」
「はい、それだけのことです。いえ、もっと少ないかもしれません」
話が途方もなく大きくなっていく。マウリアの時間の概念は特別

だ。
「そもそもブラフマーの一日は宇宙の目覚めから終わりまででして」
「どんなスケールなんだよ」
ここまでくると想像がつかない。
「ブラフマーはそれを途方もなく繰り返すのです。私達はその中にいます」
「じゃあれか」
洪童はそこまで聞いて述べる。
「俺の今日っていう馬鹿げた不幸もブラフマーの一日の欠片程もないものなのか」
「その欠片の欠片の欠片よりも小さいものでしょう」
大きいのか小さいのかわからない。
「ですから御気になさらずに。それに」
ここからもマウリア哲学の真髄だ。
「前世の巡り合わせのせいです。心配することはありません」
「前世か」
「人はあらゆる世界で輪廻転生しています」
マウリア哲学の特徴である輪廻転生だ。人々はその中で幾度も生まれ変わりを続けているという。仏教にもこの思想はある。これもまたヒンズー教の一派であるから当然というのがマウリア人の考えだ。日本の仏教学者はマウリア人のその話を聞いて中々理解しにくくて困っていたりする。
「ですから」
「ああ、もうわからねえけれど気にするなってことだな」
「そうです」
一言で言うとこうなる。
「何が起こっても。心配することはありません」
「わかったよ」
無理矢理納得することにした。しかし。不幸は納得できなかった。
一時間目は体育だ。グラウンドでラグビーをやる。雲一つない。

ところが。
落雷が彼を襲う。それも直撃だ。
「晴天の霹靂って本当にあるんだ」
スターリングがそれを見て呟く。
「まさかとは思ったけれど」
「何処に雷雲があったんだ？」
皆まずはそれを探した。
「何処にもねえよな」
「何で雷が」
「俺の運がないせいらしい」
洪童は皆にそう答えた。
「それだけだ」
「そうか」
「納得できないがな」
「安心してくれ」
洪童は皆に対して述べる。
「俺も納得なんかしていない」
「そうか」
「ああ」
答える。真っ黒になったまま憮然としてそのまま授業を受けた。
二時間目は化学だ。しかも実験だ。
「実験、か」
それを聞いて嫌な予感がした。
「またどうせ」
実験はマグネシウムを燃やす実験だ。ところがここで予想通りの事態になった。
火を点けたところで何故かガス漏れがあって引火した。洪童だけが爆発した。
「今度は火かよ」
またしても真っ黒になり呟く。

「立て続けによくよ」
「御前よく生きてるな」
皆が呆れながら彼に言う。
「雷が落ちて爆発が起こって」
「俺もそう思う」
洪童も述べる。
「何が何なのかな」
それでも授業は受ける。しかし実験室から教室に戻る前で思いきり滑った。そのまま窓を突き破ってまっさかさまに落ちる。落ちたのは野外プールであった。そこの床に頭をぶつける。それでも生きていた。

第三十五話　十三日の月曜日その三

教室に復帰すれば懐中電灯が落ちてきた。弁当のキムチは腐っていてまた当たった。まさに不幸続きであった。

「マジですげえの取り憑いてるんじゃねえのか？」

「幾ら何でも異常だろ」

昼休みは暴れ馬に蹴られて顔に馬の足跡がついている彼に皆言う。

「これがその不幸か」

「あと半日あります」

セーラは彼に述べる。

「あと半分です」

「半分もあるのか」

他人は半分しかないと思うが当事者は半分もあると思う。不幸とはそういうものである。

「頑張って下さい」

「わかったよ。もう何があってもな」

「その心意気です」

「フォローしねえんだな」

「フォローといいますと？」

セーラは逆に彼のその言葉に問う。

「何か」

「いや、わからねえならいい」

もうこれ以上言う気もなかった。

「とにかくまだ半日か」

「はい、後は夜の世界です」

「今度は何がどうなるやら」

それが不安で不安で仕方がないだが碌なことにならないのだけはよくわかった。それはもうわかっていた。今までのことで。

「まあいい」

彼は言う。
「何があってもな」
ここで窓から火の玉が飛んできた。それが顔を直撃して頭を燃やす。
「今度は何なんだよ」
「妖術ですね」
セーラが答える。
「これは」
「ベッキーか？」
頭から水を被りながら言う。
「妖術っていうと」
「はい、これはそうですね」
セーラはそれに応えて述べる。
「大丈夫ですか？」
「火も剛速球もさっきかったからな」
彼はもう平気であった。
「これ位はな」
「そうですか」
「すいません」
ベッキーが謝るが彼は別に平気であった。
「いや、いいさ。まだこの位はな」
「そうですか」
「そういやベッキーさん」
彼はここでふと気付いた。
「あんたとラムダスさんってあれだよな。確かここの生徒じゃないんだよな」
「ええ、そうです」
ベッキーはそのことに何の迷いも淀みもなくそれに答えた。
「それがどうかしましたか」
少し見れば彼等が学校に通う年頃ではないのはわかる。二人共ど

う見ても二十はゆうに越えているからだ。幾つなのか詳しいことは誰にもわからない。

「いや、いいよ」

そんなことは今の洪童にとっては実に些細なことであった。そうとしか思えない程今の彼はとんでもない状況にあったからだ。そもそも教室にいきなり妖術の火の玉が来るということ自体がとんでもないことであるしだ。

「それはさ。気をつけてくれれば」

「わかりました」

ベッキーはその言葉に頷く。まだ凶事はある。それを思うと身構えずにはいられなかった。

授業中にも不幸はある。何とシャーペンがいきなり折れてそれが額に刺さるわ居眠りをしようとすれば先生のチョークが直撃するわであった。最後は自業自得だがそれでも彼にとっては不幸であった。

教室に復帰すれば懐中電灯が落ちてきた。弁当のキムチは腐っていてまた当たった。まさに不幸続きであった。

「マジですげえの取り憑いてるんじゃねえのか？」

「幾ら何でも異常だろ」

昼休みは暴れ馬に蹴られて顔に馬の足跡がついている彼に皆言う。

「これがその不幸か」

「あと半日あります」

セーラは彼に述べる。

「あと半分です」

「半分もあるのか」

他人は半分しかないと思うが当事者は半分もあると思う。不幸とはそういうものである。

「頑張って下さい」

「わかったよ。もう何があってもな」

「その心意気です」

「フォローしねえんだな」

「フォローといいますと？」
セーラは逆に彼のその言葉に問う。

第三十五話　十三日の月曜日その四

「何か」
「いや、わからねえならいい」
もうこれ以上言う気もなかった。
「とにかくまだ半日か」
「はい、後は夜の世界です」
「今度は何がどうなるやら」
それが不安で不安で仕方がないだが碌なことにならないのだけはよくわかった。それはもうわかっていた。今までのことで。
「まあいい」
彼は言う。
「何があってもな」
ここで窓から火の玉が飛んできた。それが顔を直撃して頭を燃やす。
「今度は何なんだよ」
「妖術ですね」
セーラが答える。
「これは」
「ベッキーか？」
頭から水を被りながら言う。
「妖術っていうと」
「はい、これはそうですね」
セーラはそれに応えて述べる。
「大丈夫ですか？」
「火も剛速球もさっきかったからな」
彼はもう平気であった。
「これ位はな」
「そうですか」

「すいません」
ベッキーが謝るが彼は別に平気であった。
「いや、いいさ。まだこの位はな」
「そうですか」
「そういやベッキーさん」
彼はここでふと気付いた。
「あんたとラムダスさんってあれだよな。確かここの生徒じゃないんだよな」
「ええ、そうです」
ベッキーはそのことに何の迷いも淀みもなくそれに答えた。
「それがどうかしましたか」
少し見れば彼等が学校に通う年頃ではないのはわかる。二人共どう見ても二十はゆうに越えているからだ。幾つなのか詳しいことは誰にもわからない。
「いや、いいよ」
そんなことは今の洪童にとっては実に些細なことであった。そうとしか思えない程今の彼はとんでもない状況にあったからだ。そもそも教室にいきなり妖術の火の玉が来るということ自体がとんでもないことであるしだ。
「それはさ。気をつけてくれれば」
「わかりました」
ベッキーはその言葉に頷く。まだ凶事はある。それを思うと身構えずにはいられなかった。
授業中にも不幸はある。何とシャーペンがいきなり折れてそれが額に刺さるわ居眠りをしようとすれば先生のチョークが直撃するわであった。最後は自業自得だがそれでも彼にとっては不幸であった。
「やってくれるんじゃないかって」
「冗談でも言っていいことと悪いことがあるぞ」
そう妹に言い返す。
「俺に死ねってことか」

「やっぱり無理なの」
「当たり前だ。何か御前今日変だぞ」
「そうかしら」
「全く。いつもボケは俺が担当だっていうのにな」
「それはそうと兄さん」
春香は洪童に声をかける。
「早く警察呼ばないと」
「おっと、そうだ」
言われてそれを思い出す。慌てて携帯をかける。
「もしもし」
「はい、こちら連合軍第三艦隊」
「ちょっと兄さん」
いきなりミスをしてかした兄に対して声をかける。
「何で連合軍に電話がかかるのよ」
「応募はなら地連へどうぞ」
「あれっ」
洪童はその声を聞いて目を丸くさせる。そのうえで自分の携帯を見る。
「連合軍が？」
「警察でしょ、兄さん」
「そうだよな、何で間違えたんだろ」
「早く警察に電話して」
「ああ・・・・・・っておい」
「ひひひひひひひひ！」
そこにまた通り魔が来た。そのナイフを必死にかわしながら電話をする。切り付けられながらも何とか避けて電話をするのであった。
ようやく難を逃れた。通り魔は洪童のズボンのベルトを切って下をトランクス一枚にして捕まった。彼はズボンが落ちトランクスを露わにした格好で警察と話をする。ついでに道行く人にトランクス姿を見られたしまった。

「これも不幸のうちか」
「命は助かったからよかったじゃない」
「まあな」
ようやく話を収めて家に入りながら妹と話をする。ズボンを左手で押さえている。
「死ぬところだったけれどな」
「ズボンのベルトだけだったからよかったじゃない」
「馬鹿、トランクスをまともに見られたんだぞ」
そう妹に抗議する。
「恥ずかしいぞ、これは」
「トランクスだからまだましじゃない？」
あまり見当の合っていない言葉を述べる。
「ショーツ穿いているより」
「ショーツだと完全な変態だろうが」
妹に抗議する。
「違うか？」
「まあそうね」
妹はそれに頷く。
「それはそうだけれど」
「家の中にも何かあるのか？」
洪童は憮然として述べる。
「まさかとは思うが」
「それはないんじゃないかしら」
春香はこれといって洪童の不幸を信じてはいないのか楽観視した言葉を述べた。
「流石にお家の中だと」
「あるに決まってんだろ」
しかし洪童はそう述べて妹の言葉を退ける。
「御前いきなり青空で落雷受けたり隕石受けたりしたことあるか？」
「またそれは凄いわね」

これを聞くとやはり凄いものがある。春香も呆れる。

第三十五話　十三日の月曜日その五

「どうなってるのよ、一体」
「だから厄日なんだよ」
彼は言う。
「わかったか？」
「ええ。そういうことなら」
妹もそれを聞くと納得した。
「それにしても落雷に隕石？」
「他にもプールに落ちたり妖術の火の玉受けたり一六〇キロの剛速球まともに受けたりもしたぞ」
「兄さんでも流石にそれはまずかったでしょ」
「よく生きてるなとは自分でも思う」
彼は玄関に入ったところでそう述べた。家の中はあまり変わりがない。ごく普通のアパートになっている。普段の彼等の生活の場所そのままであった。
玄関から家に入る。そこで二人はふと気付いた。
「あれっ、まさか」
「ああ、何かな」
何かが違う。二人は家の中の雰囲気を察して言い合う。
「どうしたの？」
「おおいチャン」
誰かの名前を呼ぶ。
「いるか？」
「グム、いるの？」
春香も呼ぶ。やはり返答はない。
「おかしいわね」
「ああ」
洪童は妹の言葉に頷く。

「何かありそうだな」
「何かしら」
「さあな。まさかとは思うけれどな」
ここで強烈に嫌な予感がした。
「ニシキヘビとかが入り込んできたとかな」
「まさか」
「そのまさかだよ。それどころかな」
嫌な予感はさらに膨らむ。
「ジャイアントアナコンダとかな」
連合のあちこちの星系にいるアナコンダのさらに巨大なものだ。その大きさは二〇メートルを優に越え半分水棲である。性質は大人しいがそれでも食べる量はかなりのものである。動物園にもいるが人気の動物でもある。
「そんなの出たら大騒ぎよ」
「落雷に爆発に隕石に通り魔だぞ」
ここまでの不幸はそうはない。有り得ない。
「また何があるのか」
「ないでしょ」
春香も幾ら何でもそれは信じなかった。といよりは信じたくなかった。
「そんなことは」
「とりあえず行ってみよう」
彼は言った。
「どうなったのかな」
「そうね、まずはそれが大事ね」
妹は兄の言葉に頷いた。
「一体何があるのか」
部屋に入る。そこで二人が見たのは部屋中に転がる兎の糞であった。
「何だ、こりゃ」

洪童はそれを見て思わず目が点になった。
「兎のうんこかよ」
「そうみたいね。ちょっと」
春香も部屋の中を見回す。すると兎達は無事だった。しかしそこにいた兎達の数がかなり違っていた。倍位にまで増えてしまっていた。
「どういうことだ、これ」
「私に聞かれても」
春香も何が何なのかわからない。
「子供が生まれたのか？」
「まさか」
春香はそれを否定する。
「そんな筈が」
「いや、待て」
ここで洪童は気付いた。
「あれ」
「あれって！？」
見れば何故か壁に穴が開いていた。そこから野兎達が入ってきたのだ。それが兎が増えた理由であったのだ。
「なあ」
洪童は春香に問う。
「何で野兎が街の中にいるんだ？」
「いや、私に聞かれても」
彼女もその理由はわからない。
「何が何なのか」
「そうだよな」
その言葉に兄も頷く。
「これも不幸か」
「とにかく掃除しましょう」
春香は気を取り直して言ってきた。

「それから壁をなおして」
「ああ、じゃあ業者さん呼ぶか」
「その間に私が掃除しとくから」
「いや、その前にだ」
洪童は兎達を見る。
「こいつ等何とかしないとな」
「どうするの？野兎もいるけれど」
「そうだな。何かチャンやグムとも仲良くやってるし」
それ自体は構うところがなかった。
「一応病院でワクチンとか打ってもらうか。一緒に買うぞ」
「わかったわ。それにしてもね」
「何だ？」
「このうんこの山。何かすっごい大変よ」
「壁もだな。ったく、碌なことにならねえな」
洪童はそれを見てぼやく。これもまた不幸のうちであった。二人はそれから真夜中まであれこれとして眠れないのであった。

第三十五話　十三日の月曜日その六

「というわけだったんだよ」
次の日洪童は憮然としてクラスの皆に昨日のことを言っていた。
「壁もなおってうんこも何とか処分したけれどな」
「大変だったな」
「野兎達にもワクチン打ったしな」
「ふうん」
「それでその兎達どうするんだ？」
ジョルジュがそれに問うてきた。
「飼うのか？」
「ああ」
洪童は答えた。
「別にな。お金とかは困ってないしな」
「そう」
「それに春香が兎好きなんだよ」
これが最大の理由だった。彼は妹に対してはこの上なく甘い。それが彼なのだ。
「だからそれはいいんだよ」
「そうか。それでその兎は何匹だ？」
「最初は十二匹だったんだ」
「多いな」
「それが二十に増えたんだ」
そうジョルジュと皆に述べる。
「八匹もかよ」
「しかもだ」
ここで洪童はいつものお笑い体質を出してきた。
「さらに悪いことがあった」
「あっ、洪童君それって」

それを聞いた彰子はすぐに何が元ネタか気付いた。それで言う。
「助六のあれね」
「ああ。決まったかな」
歌舞伎の有名な演目である。江戸時代の江戸を舞台にしているが演目の中では鎌倉時代になっている。歌舞伎における時代設定はかなり強引である。他の特徴として世界が異様に狭いことと人が中々死なないことである。死に掛けて舞を舞う御仁までいる。そうしたリアリズムは無視していい世界だ。洪童はそうしたのをあえて無視しているのである。
「外してると思うわ」
「ああ、そう」
おっとりしているが容赦のない突っ込みであった。しかし洪童はそんなものでめげはしない。クラスメイト達に話を続ける。
「一匹身重だったんだ」
「それはまた」
「増える予定か」
「また増えた」
こう来た。
「産まれてな。七匹だ」
「二十九匹になったのか」
「ああ、家にいたのが四匹で野兎のが五匹な」
「元々のが十六で野兎が十三！？」
アンジェレッタがそれを聞いて頭の中で勘定する。
「そうなると」
「ああ、一気に増えた。それでだ」
洪童はさらに言う。
「春香が今世話してる」
「そういえば」
アンジェレッタはまた気付いた。
「家の兎と野兎じゃ生まれた時全然違うわよね」

「そう、それでな」
ふと見れば洪童の目にクマがある。それもかなり深い。
「両方の世話もあってな」
具体的に言えば元々飼われている愛玩用の兎はアナウサギなのである。穴で過ごしているから子供は毛も生えていなく歩けもしない。それに対して野兎は目も開いていて毛も生えている。しかもすぐに歩けるのだ。
「大変だったんだよ、特に元からいる方な」
「そうだったの」
「ああ」
またアンジェレッタに応える。
「一気に十九も増えるなんてな」
「思いも寄らなかった？」
「ただしだ」
洪童はさらに言う。
「一匹もやらんことになっている」
「一匹もか」
「ああ」
クラスメイト達に答える。
「春香がな。兎好きでな」
「そうか。しかしなあ」
クラスメイト達はここで述べる。
「そんだけ兎いたら大変だろ」
「大変なんてものじゃねえ」
洪童は呟く。
「洒落にならねえ。だから寝れなかった」
「それでも減らさないんだな」
「言っただろ。春香が好きだってな」
またそれを言う。
「だからな」

「けれどさ」
アンジェレッタはここで洪童の顔を見てふと気付いたことを彼に言う。
「洪童も兎好きでしょ」
「まあな」
それは認めた。
「餌は意外と安く済むしな」
オカラにキャベツや大根の切れ端である。いつも豆腐屋や八百屋で貰ってきたものをそのまま出している。ただがただ同然で手に入るのがいい。しかもこういったものは自分でも食べることができるというメリットがある。といってもオカラなぞは和食に使うものであり韓国料理に使うのは少し工夫がいるが。
「いいものだ。可愛いしな」
「じゃあよかったのね」
アンジェレッタはまた彼に問う。
「その顔見ても」
「ちぇっ」
「不幸の後には幸運が舞い降ります」
セーラは運命論的な言葉を述べてきた。
「ですから貴方にもまた」
「そうだな。家族も増えたしこれからもお笑いに精進していくか」
「ああ、そういえば」
ジョンがふと気付いた。
「昨日ラッシーと散歩してたんだ」
「何かあったのか？散歩で」
洪童は彼に問う。
「うん、実はね」
「ああ」
何時の間にかクラスメイト達が彼の周りに集まっている。皆で注目してきていた。

「春香ちゃんに出会ったんだけれど」
「春香に」
洪童の目が光った。
「あいつがどうしたんだ!?一体」
「男の人と一緒にいたよ」
「ぬぁにぃ!?」
それを聞いた洪童の顔が一変した。まるで怪物のようになる。
「それは本当か、おい」
「ああ、そうだけれど」
「何処のどいつだ、それ」
「ええと、それは」
騒ぎは別の方向に向かう。春香はそんな喧騒をよそに楽しい学園生活を送っていた。しかしそれは忽ちのうちに壊れるのであった。

十三日の月曜日　　完

２００７・２・１６

第三十六話　馬鹿兄貴は永遠にその一

馬鹿兄貴は永遠に

春香が男と出会っていると聞いた洪童はまたしても狂った。またしても訳のわからない呪術に凝るのであった。

「ワイルドジョーカーナンテアトデワカルナンテアリカ！」

訳のわからない呪文をよりによってクラスで唱えている。

「クサカガイキテイテカブトデデルナンテサクヒンチュウデカタリヤガレ！」

「何かすげえ訳わかんねえ言葉だな」

「一体何言ってるんだ？」

クラスメイト達は彼の呪文を聞いて首を傾げさせている。

「変な呪文だな」

「それでも呪詛しているのはわかるな」

「ああ」

それだけはわかる。しかしそれ以上に訳がわからない。

「ファイズトブレイドハツナガッテイテテンノウジハオルフェノクノテサキダッタ！」

「とにかくまた馬鹿なことになるな」

「そうだな、それはわかる」

彼等は言う。とりあえず洪童は今度もまた狂っていたのであった。

春香はそれを全く知らない。家でも兄が馬鹿なことを喚いていることだけはわかっていた。

「ケンザキハニンゲンニモドッテヨカッタ！」

「兄さん」

「何だ！？」

洪童はまたしても訳のわからない兄の儀式を見て首を傾げている。

その兄に対して声をかける。

「今度はどうしたの？」

「何でもない」
憮然として妹に返す。
「気にするな」
「気にするわよ」
春香も気にしないわけにはいかない。
「何が何なのか」
「そうか」
「そうかじゃないわよ。全く」
また兄に対して言う。
「明らかに変なんだけれど」
「だから気にするな」
相変わらずの調子であった。
「じゃあな」
「兎に迷惑だから静かにね」
「わかったよ」
だがその言葉は聞いていない。春香が去るとまた訳のわからない呪文の詠唱をはじめる。
「ゲンバカントクハオルフェノクヨリツヨイ！」
騒ぎはとりあえずその日は洪童の儀式だけだった。しかし次の日から話がとんでもない方向に動くのであった。
洪童は登校するといきなり喚き出した。
「わかったぞ！犯人が！」
「何だ！？」
「あたし達の出番！？」
テンボとジャッキーがそれを聞いて席を立ってきた。ところが洪童はその二人に対して実に素っ気無く嘘の話で返したのであった。
「ああ、御前等に頼みたい人がいるんだ」
「何、誰だ」
「それは一体」
「生活指導のロシュフォール先生さ」

通称鬼のロシュフォール。逆らう人間がいない程の怖い先生である。連合軍の連合軍付最上級曹長に匹敵する程恐ろしいと呼ばれている。

「あの先生がか」

「よっし、あたしの名推理見せてやるわ」

二人は喜び勇んでそのロシュフォール先生のところに向かう。そのまま生きて帰っては来なかった。

「これでよし」

洪童は教室を出て行く二人を見て言う。

「邪魔者はいなくなった」

「あいつ等は邪魔者か」

「まあそうだな」

クラスメイト達もそれに頷く。とりあえずその二人がいなくなって厄介事が一つ消えた気分になったからだ。洪童もそれを考える変な冷静さは残っていた。

「とにかく。犯人がわかった」

「犯人!?」

「そもそも何が何だか」

皆話が読めない。洪童が何を言いたいのかわからない。頭がおかしくなったのではなかろうかと本気で思っていた。その予想はかなり当たっていた。

「春香に言い寄っていた間男!」

彼はクラスの中で滅茶苦茶なことを滅茶苦茶な声で叫ぶ。

「そいつの正体がわかった!」

「何か話が滅茶苦茶になってるな」

「ジョンの話が滅茶苦茶になってないか?」

「というか訳がわからないんだけれど」

ジョンも何が何なのかわからなかった。洪童は完全に頭をクラッシュさせていたからだ。

「何でこうなるのか」

「こいつなあ」
「どうして女の話と妹の話になると」
ジョンだけでなくクラスメイト達も首を傾げさせていた。洪童はいつも彼女の話や春香の話になると異常なまでに狂うのだ。
それが今だった。かなりどうにもならない。
「どうしよう」
ジョンが皆に問う。

第三十六話　馬鹿兄貴は永遠にその二

「困ったことになっちゃってるけれど」
「ここは暫く様子を見よう」
アルフレドが言ってきた。
「まだ何もわかっていないからな」
「そうだね」
ジョンがそれに頷く。
「下手に動いたらそれが大変なことになっちゃうし」
「そうね」
ビアンカもそれに同意する。アルフレドを上手くフォローしている感じであった。こうしたところは流石に双子であるがビアンカのそれはそうしたことを考慮に入れてもかなりのものであった。
「ここはね。じっくりと見ましょう」
「あいつは？」
「どうする？」
「彼もね」
アルフレドは鋭い声で洪童についても言及してきた。
「ここは放っておこう」
「いいのか？」
「あいつ馬鹿やらないか？」
クラスメイト達はそれが不安で仕方がなかった。こうした時はいつも暴走して碌でもないことをしでかしてしまうというのがいつものパターンだからだ。
それを心配しての言葉である。しかしアルフレドはそんな彼を放っておくと言うのである。
「いいさ、今は」
「大丈夫なの？」
ジョンもそれを聞いて不安そうな顔を見せる。

「暴走したら」
「それも計算のうちさ」
彼は言う。
「というかするだろうね」
「じゃあ余計に」
「放っておいたら」
「いや、それでも」
しかしアルフレドはそれでも考えを変えようとはしない。クラスメイトの言葉にも首を縦に振りはしない。
「いいんだ、ここはね」
「兄さん」
ビアンカが兄に声をかける。
「いいのね、それで」
「ああ、いい」
答えは決まっていた。強い言葉だった。
「だからいいね皆」
そしてクラスメイト達にまた言う。
「ここは動かないで」
「わかったよ」
クラスメイト達もそれに頷く。
「じゃあそういうことで」
「それで」
方針は決まった洪童も春香も今は放置される。そうして様子を見ることになったのであった。二人だけが気付いていないという状況であったのだ。
「ガッツナックルテンペラーザラブ！」
またしても洪童は訳のわからない呪文を唱えている。
「春香にまとわりつく奴等は俺がこの手で！」
始末に悪いことに教室で喚いている。皆呆れているがそれでも見ないことにしている。

春香もまた。見られているだけである。
「ううん」
彼女は自分の教室で何かの気配を感じていた。
「どうしたの？」
「うん、何かね」
彼女のクラスメイトの言葉に応える。
「気配を感じるの」
「気配？」
「ええ」
辺りを見回りながら答える。
「何かね」
「そうかしら」
だがクラスメイト達はそれに気付きはしない。気配も感じない。
「気のせいじゃないの？」
「兄さんが何か言っているしね」
それはわかっている。
「それも気になるし」
「まあさ。あまり気にしても」
クラスメイト達は不安げな彼女に対して言う。
「落ち着かないだけだから」
「気にしない方がいいわよ」
「そうね」
「そうよ。じゃあ気晴らしにさ、今日は」
「皆でカラオケでも」
「うん」
クラスメイト達の言葉ににこりと笑って頷く。こうして彼女は気晴らしにその日の放課後はカラオケボックスへ向かった。その情報は洪童のクラスにも伝わった。

第三十六話　馬鹿兄貴は永遠にその三

「そうか」
話はアルフレドがまとめて聞いていた。腕を組んで話を聞いていた。
「じゃああいつが動くな」
「そうだろうね」
ジョンがその言葉に頷く。
「間違いなく」
「そうだな。よし」
ここでアルフレドは遂に顔を上げた。
「今がチャンスだ、皆」
「動くんだな」
「そうだ」
皆に対して述べる。
「じゃあジョン」
「うん」
「ビアンカ」
「ええ」
二人が応える。
「そういうことで」
「じゃあまずは僕がね」
ジョンはすっと姿を消した。続いてビアンカも。
「先回りしておくわね」
「うん、頼むよ」
ビアンカも姿を消した。こうして主なアクター、アクトレスはそれぞれの役の準備に入った。その次にアルフレドもすっと席を立つ。クラスメイト達がそれに続く。
こうして彼等も準備に入る。洪童は洪童で訳のわからないことに

熱中している。それが何なのかはおそらく彼にもよくわかってはいない。

洪童は一人教室を出て家に帰ろうとする。しかしここで前を歩く生徒達の話をちらりと聞いたのであった。

「春香ちゃんどうしたの？」

「ええ、彼女ならカラオケボックスに行ったわよ」

「何処？」

「学校の近くのレッドバファロー」

「レッドバファロー？」

洪童もその場所が何処かは知っている。それを聞いてふと考える目になった。

「ええ、そこにね。二人で行ったわよ」

「二人！？まさか」

「そうなんだ。彼女最近遊んでるわね」

「そうね、何か」

そんな話をしていた。それを聞いた洪童の目の色が変わった。目だけでなく顔が見る見るうちに羅刹のようになっていく。

「春香に言い寄る男は！」

彼は廊下の真ん中で一人叫ぶ。

「俺が殺してやる！」

そのまま全速力でレッドバファローに向かう。話していたのは何とパレアナとコゼットであった。二人はすぐにアルフレドに携帯で連絡を入れた。

「こっちは上手くいったわよ」

「レッドバファローに向かったわ」

「よし」

アルフレドは携帯でそれを聞いて満足して頷いた。

「これで第一段階はいい。次は」

すぐに彼は他のメンバーに携帯で連絡を入れる。彼は着々と手を打っていた。全ては彼の思い通りにいっていた。

洪童はそんなことなぞ知らずカラオケボックスに突き進む。そこには何の迷いも躊躇いもない。というよりは春香のこと以外は何も考えてはいなかった。

「春香ーーーーーーっ！」

「お待ちなさい」

だがそこで占い師が彼を呼び止めた。犬を連れてフードで顔を覆っている。

「そこの頭のよさそうな若者」

「それは俺のことか？」

洪童はすぐに彼に顔を向けてきた。足を無意識のうちに止める。

「左様。君のことだ」

占い師は言う。

「君は今何かを解決しようとしているな」

「当然だ！」

彼は叫ぶ。

「俺は何があっても春香を！」

「待ちなされ」

占い師は俯いた述べる。黒い布をかけ水晶玉を置いている。それを見ていると如何にもといった感じの占い師であるが声が妙に若い。しかし洪童にはそんなことはどうでもいいようなことであった。彼にとってはそんなことはどうでもよかった。

「待てって言うけれど」

「左様。御主このまま行くとな」

「何があるんだ？」

「大怪我するぞ」

占い師は言う。

「このまま突き進むと」

「そんなことは構うものか！」

当然のように話を聞かない。そんなものが耳に入る状況ではなかった。

「ここは俺が！行かないとな！」
「まあ待て」
「しつこいな、あんた」
洪童はイライラして言い返す。
「そんなこと言ってる間にも春香は」
「これを飲んでいけ」
占い師はここで黒い丸薬を取り出してきた。
「これは？」
「身体能力を飛躍的にあげる丸薬じゃ」
「何？漢方薬か？」
その黒い丸薬を見て問う。見る限りでは何の変哲もない。もっともクラスにアンジェレッタのような者がいるから警戒はしている。

第三十六話　馬鹿兄貴は永遠にその四

「うむ。では毒見に」
「何かラッシーに似た犬だな」
「ワン」
そのものだが犬の顔なぞ覚えてはいない。
「まあいいか。同じコリーなだけだしな」
「ははは、犬の顔はわかりにくいからのう」
占い師は笑ってそう答える。
「まあよい。ではこの犬に味見をさせる」
その丸薬を犬の口に入れる。それでも犬は平気であった。
「どうじゃ？信じたか？」
「ああ」
洪童はそれに答える。
「とりあえずは死なないな」
「毒はない。さあ飲むがいい」
「よし、わかった」
こくりと頷く薬を飲む。占い師に礼を述べてまたレッドバファローまで突き進むのであった。
占い師はそれを見送っていた。彼の姿が見えなくなるとフードを取った。見ればそれはジョンであった。犬も当然ながらラッシーである。
「ああ、アルフレド」
彼はアルフレドに連絡を入れる。
「こっちはいいよ」
「よし」
アルフレドは電話の向こうでその言葉に頷く。
「第二段階もよしだ」
「後はどうするの？」

「既に手は打ってある」
彼はそうジョンに返す。
「だから安心してくれ」
「そう。じゃあこれで僕はいいんだね」
「これからどうするんだい？」
「ラッシーの散歩をしようと考えているんだけれど」
彼はそう答える。
「それじゃあ」
「最後まで観ないのか」
「ううん、何となくね」
そう言葉を返す。
「最後滅茶苦茶になりそうだし」
「滅茶苦茶か」
「だってさ。状況が状況だし」
ジョンはまた述べる。
「だから」
「そうか。じゃあ気が向いたら来てくれ」
彼はそう述べるだけであった。アルフレドは冷静に話を第三段階に移行させるのであった。彼は既に手を打っていた。その一手とは。
「よし」
彼はまた携帯に連絡を入れる。その相手は。
「ビアンカ」
「ええ、兄さん」
ビアンカは兄の言葉に応える。彼女は何故かトイレで着替えていた。何かえらく格好のいい服に着替えようとしている。何処か女の子のものとは思えないものであった。
「用意はいいか」
「今しているところ」
「そうか。よし」
彼はそれを聞いて頷く。

「ならそちらはいいな」
「任せて」
ビアンカは電話の向こうで頷く。スカートからズボンに穿き替え端整な容姿になるのであった。まるで男の子のようにだ。
アルフレドはその間に別の相手に連絡を入れる。相手はダイアナとペリーヌであった。二人はカラオケボックスにいた。
「そちらはいいか」
「ええ、何時でも」
「すぐにでもね」
ダイアナとペリーヌは彼にそう返す。
「そうか。じゃあ彼女が来たら」
ここで彼女と言った。彼とは言わない。そこにも謎があるようであった。
「いいね」
「了解」
「じゃあ」
二人も応える。第三段階も手筈が整った。後は洪童が来るだけであった。
その洪童が遂にレッドバファローに到着した。するとすぐに部屋を虱潰しに覗いていった。
「ここか！」
違った。
「それともここか！」
そこでもなかった。かなり迷惑な行動をとって妹を探している。
そして遂に妹のいそうな部屋を見つけた。そこへ春香と黒いスーツに赤いネクタイのスラリとした男が入っていくのを見たからだ。
「あそこか」
それを確認して呟く。もう迷いはしなかった。
すぐに部屋の中へ飛び込む。そして叫ぶ。
「春香に言い寄る男は俺が許さん！」

「えっ！？」
しかしそこにいたのは春香のクラスメイト達とペリーヌにダイアナ、そして黒いスーツを着たビアンカであった。
「あれっ、男は」
「いないわよ、男の子なんて」
黒いスーツに赤いネクタイのビアンカが彼に笑って返す。
「どうしたのよ、一体」
「春香、まさか御前」
「折角皆で楽しく歌っていたのに」
春香は憮然とした顔を兄に向けて述べる。
「どうしてここに？」
「御前が悪い男に言い寄られていたからだ」
兄として言う。
「だから・・・・・ってビアンカだったのか」
「似合う？」
くすりと笑って洪童に声をかけてきた。
「この格好」
「いや、確か御前」
彼もビアンカの好みは知っている。そう、彼女は。
「レズだったよな」
「ええ」
今度はにこりと笑って述べてきた。
「そうだけれど」
「じゃあやっぱり御前か！春香に言い寄っていたのは！」
「ああ、それ違うわよ」
ペリーヌが言ってきた。
「ビアンカは今はじめて春香ちゃんと一緒になったんだから」
「そうなのか！？」
「それは私も保証するわ」
ダイアナも言う。これは本当のことである。

「私達もずっと一緒だったし」
「そうか」
「私達もですよ」
春香のクラスメイト達も述べる。
「そうですよね」
「ええ」
ペリーヌとダイアナは彼女達に笑顔で応える。本当だというのである。
「そうだったのか。じゃああの噂は」
ここで洪童の身体に異変が起こった。
「!?」
急にお腹が緩くなったのだ。恐怖の突発性の下痢だ。彼もこれには適わない。

第三十六話　馬鹿兄貴は永遠にその五

「ま、まずい」
「!?どうしたの?」
春香が兄に問う。
「急に静かになって」
「な、何でもない」
額に脂汗を流しながら答える。
「何でもない、けれどな」
「けれど?」
「トイレ行って来る、じゃあな」
慌てて姿を消す。彼は慌しい音と共に妹の前から姿を消したのであった。
後には女の子達だけが残っている。洪童がいなくなったのを確かめて満面に笑みを浮かべて顔を見合わせていた。
「上手くいったわね」
「はい」
春香はにこりと笑ってビアンカに答える。
「そうですね。まさかとは思いましたけれど」
「全部兄さんが考えていたことなのよ」
ビアンカは春香の隣でそう答える。
「アルフレドさんがですか?」
「ええ。あの下痢は占い師に化けたジョンが飲ませたものだし」
洪童の下痢はそれが原因だったのだ。衝撃の事実であった。
「その前に彼をここに来るように仕向けたのだってそうだったのよ」
「それでここも」
「そういうこと。協力有り難うね」
「いえいえ」
春香のクラスメイト達はビアンカに応えて笑う。

「春香ちゃんの為だもの」
「これ位はね」
「皆有り難う」
春香は友人達に対して礼を述べる。
「そんなことまで」
「いいっていいって」
「楽しかったし」
しかし彼女達はその御礼をよしとする。どうやら彼女は友人達に好かれているらしい。
「それにしても」
ペリーヌはここでふと気付いたことがった。
「どうしたの？」
「いや、ジョンの言葉だけれどね」
ダイアナに応えて述べる。
「春香ちゃんが男の子と一緒に歩いてたって。あれ何だったのかしら」
「ああ、そういえばそうね」
話の発端である。そもそもこんな大騒ぎになったのはジョンの話を聞いた洪童が暴走したからだ。皆ここでそれを思い出したのである。
「それはどうだったの？」
「えっ」
ところが二人に問われた春香はここで顔をキョトンとさせてきた。
「私がですか！？」
逆に彼女の方が驚いていた。
「男の人と一緒に」
「違うの？」
「違いますよ」
慌ててそれを否定してきた。
「そんなこと。全然」

「あれ！？」
「じゃああの話は一体」
「それに二人で歩いていたことなんて」
いぶかしむ二人に春香はさらに述べてきた。これが答えであった。
「ジョー先生とだけですよ」
「えっ！？」
「ジョー先生っていうと」
ペリーヌとダイアナはここで気付いた。
「エイミーの二番目のお姉さんの」
「はい、家庭教師してもらっていて」
男勝りで有名なエイミーの二番目の姉である。そう、男勝りなのだ。
「その人だけですよ」
「ああ、わかったわ」
ビアンカはそれを聞いて納得して頷いてきた。
「それよ。洪童が誤解したのよ」
「そうだったの」
「何だ」
ペリーヌとビアンカはそれを聞いて拍子抜けしたようにして述べる。
「あの人男ものも格好することも多いし」
「それでか」
「あの」
話が読めないのは春香と彼女のクラスメイト達であった。キョトンとした顔で三人の先輩達を見ていた。
それで問う。そのキョトンとした顔のままで。
「どういうことなんですか？」
「誤解って」
「ああ、その話は長くなるから」
ダイアナがくすくすと笑いながら応えてきた。

「また今度ね」
「はあ」
「それで春香ちゃん」
ビアンカが彼女に声をかけてきた。
「お兄さんを迎えに行ってあげなさい」
「兄さんをですか」
「そうよ。折角心配して来たんだし」
「はあ」
「それはわかるわよね」
優しい声で彼女に問う。春香もそれはわかっていると知ってのうえでの言葉である。それはちゃんとわかっていたのである。見抜いたうえで彼女に言うのだ。
「いいわね」
「わかりました」
春香は素直にその言葉に頷く。
「それじゃあ」
「それにしても」
ビアンカはすっと苦笑いを浮かべてきた。そのうえで述べる。
「私にもアルフレド兄さんがいるけれど彼はまた」
「そうなのよね」
「全く」
ペリーヌとダイアナも言う。
「直情的って言うか暴走してるって言うか」
「困ったことだわ」
「あれさえなければね」
ビアンカはまた述べる。
「普通人なんだけれど」
「まあもてないことで滅茶苦茶やってるけれど」
「悪い奴ではないわね」
クラスメイトなのでそれはわかる。いいところも悪いところもだ。

とりあえず洪童が悪い人間ではないのはわかっているのだ。それでも彼の暴走には手を焼く。
「じゃあすいません」
春香は席を立って皆に言う。
「私これで。兄さんのところへ」
「ええ、どうぞ」
ビアンカがそれに応える。
「行ってらっしゃい」
「はい」
こうして妹は兄のところへ行く。どうにも困り果てた兄だがそれでも自分のことを真剣に気遣ってくれる優しい兄であるとわかっているから。彼女も行くのであった。

馬鹿兄貴は永遠に　　完

２００７・２・２１

第三十七話　華の四姉妹その一

華の四姉妹

春香の騒動の元の一つになったジョーは言うまでもなくエイミーの姉である。これはもうクラスの誰もがよく知っていることである。それと同時に彼女の他に姉が三人いることも知られている。ジョーが二番目で一番上がメグ、三番目がベスとなっている。それぞれ凄い美人で有名である。

「俺がメグさんが好き」

フックが言う。

「ああした大人のおしとやかさがいいな」

「俺はベスさんだな」

もてない男カムイの好みはベスであった。

「あの大人しくて音楽を愛するところが」

「ジョーさんもいいんじゃないのか？」

ジョルジュが言ってきた。

「健康的でさ」

「誰が誰か言い難いな」

トムは言う。

「本当に」

「全くだよ」

「三人が三人共美人でな」

「私は入ってないのね」

四人にエイミーが言ってきた。

「失礼しちゃうわ」

「いやいや、エイミーだって」

四人は慌てて彼女に言う。

「絵が上手だしさ」

「活発だし」

「調子いいんだから」
四人の言葉を聞いてその顔をむくれさせてみせる。
「全く」
「まあまあ」
「それにしてもだ」
ギルバートがここで出て来て述べる。
「皆が皆それぞれ個性が違うな」
「ああ、わかる？」
エイミーはギルバートの言葉に応えて彼に顔を向けてきた。
「うん、エイミー君が絵だな」
「描くのは好きよ。何でもね」
「漫画はしないな」
「私は美術系統なのよ。アンは漫画系統でね」
「そうか」
「そういうこと」
そうギルバート達に述べる。述べながら姉達に話を移してきた。
「メグ姉さんは御裁縫が好きでジョー姉さんは本、それでベス姉さんは音楽ね」
「何かそれぞれってやつだな」
「あんたの写真にも負けないわよ」
くすりと笑ってジョルジュに返してきた。
「凄いんだから、私よりもずっとね」
「いやいや、エイミーだって凄いじゃねえか」
カムイが彼女に述べてきた。
「この前コンクールで大賞取ったじゃねえか」
「有り難う」
その言葉にくすりと笑みを浮かべてみせてきた。
「そう言って貰えると嬉しいわ」
「フランツもそうだけれど才能ってやつだな」
「いや、フランツの才能は」

エイミーはフックの言葉には首を傾げて苦笑いになっていた。
「かなり変な方向に暴走してるから」
「けれど才能はあるだろ」
「それはね」
これは大いに認めるところである。確かにフランツは天才だ。一字変えることのできる天才だ。
「あることはあるけれど」
「まあな」
「あれで頭がまともだったらな」
彼等はそのフランツを見る。また教室で漫画を読んで勝手に感動している。
「おおお！その通りだ！」
格闘漫画を読んで喚いている。
「俺は感動した！燃えろ俺のコスモよ！」
「・・・・・コスモって何だよ」
「また訳わかんねえこと言ってるよ」
「とにかくね」
エイミーは彼を放置して話を続ける。
「お姉ちゃん達はね。そういうのもあって人気なのよ」
「うんうん」
「俺達も好きだしね」
「けれどね。どういうわけか」
ここで彼女は腕を組んで考えはじめる。
「彼氏の噂ってないのよね。どうしてなのかしら」
「おい、そうなのか」
フックがその言葉に驚く。
「あの顔で」
「嘘を言っても仕方ないじゃない」
そう彼に言葉を返す。
「そうでしょ？」

「まあな」
「おい待て、それじゃあ」
カムイが身を乗り出してエイミーに問うてきた。
「今フリーってことかよ」
「今だけじゃなくて今までもね」
エイミーはこう返事を返す。
「下手したらこれからも」
「それは意外だな」
ギルバートはそれを聞いて呟く。
「あの人達がそうだとは」
「そうでしょ。何でかしらね」
「何かあるのかも知れないよ」
トムも腕を組んでいる。考えながら彼も述べる。
「それだと」
「私もそう思うのよ。けれど理由がわからなくて」
「性格はいいよな」
「ええ」
フックに答える。
「それは私が保証するわ。お姉ちゃん達の性格はね」
姉三人は性格もいいことで知られている。メグは穏やかで包容力がありジョーは明朗で面倒見がいい。ベスは物静かで親切だ。彼女達はその性格のよさでも知られているのだ。

第三十七話　華の四姉妹その二

「だから余計に」
「よし」
ここでジョルジュが言う。
「俺がその秘密を解こう」
「あんたは駄目よ」
しかしエイミーはすぐに彼女を止める。
「何でだよ」
「フォーカスするつもりでしょ」
「さて」
目を横にやってとぼける。当然ながら図星である。
「何のことやら」
「それは絶対に許さないからね」
釘を刺してきた。
「わかったわね」
「ちぇっ、じゃあどうするんだよ」
「居直ったわね。まあいいわ」
「いいのかよ」
エイミーにフックが突っ込みを入れる。
「本題じゃないから。それにしてもよ」
話をその本題に少しばかり強引に戻してきた。
「とにかくどうしてなのか。私も心配なのよ」
「それじゃあいい考えがあるわよ」
「蝉玉」
ここで蝉玉が一同のところにやって来た。
「人間ってのはそう簡単には素顔はわからないものなのよ」
「そうなんだ」
「ええ、そうよ」

隣にやって来たスターリングにそう返す。
「そうですね。ですから妖術で無意識から」
「それは置いておいて」
セーラのとんでもない言葉はまず置く。ここから話が大変な方向に全速力で向かっていくのが目に見えているからである。今は妖術は不要であった。
「その素顔を出すには」
「素顔を出すには」
エイミーは蝉玉と顔を見合わせてその言葉を繰り返す。
「お酒よ」
蝉玉はここで不敵に笑ってきた。
「いいわね、お酒を使うのよ」
「成程」
エイミーはその言葉にニヤリと笑って返す。
「その手があったわね」
「わかったわね」
「ええ。それならね」
そのうえでまた応える。
「やってみるわ。それじゃあ」
「よし」
ここで皆名乗り出て来た。酒とくれば、である。
「おい、酒だ酒」
「とりあえず安い酒目一杯買おうぜ」
「つまみもな」
彼等は絶妙のチームワークで次々に言う。見ればその目が輝いている。
こうして準備は瞬く間に整えられエイミーのアパートに向かうことになった。事前にエイミーが姉達に声をかけるのであった。
「あっ、お姉ちゃん?うん、私」
姉達にそれぞれ述べる。

「今日アパートで皆でパーティーやるから。うん、お姉ちゃん達も」
「決まりね」
三人へのそれぞれの電話が終わったところで蝉玉が彼女に声をかけてきた。
「これで」
「ええ」
エイミーはにこりと笑って彼女に応える。
「そういえば」
「何？」
今度は蝉玉がふと気付いたように声をあげるエイミーに問うた。
「いや、お姉ちゃん達だけれどね」
「ええ」
「実はコンパとかで一緒に飲んだ男の人多いんだ」
「そうなの」
「けれど皆そんなお姉ちゃん達に何もしないしお付き合いもそれだけ。何でだろ」
「何か気になるわね、それって」
蝉玉もそれについて述べる。
「何でかしら」
「考えてみれば不思議ね」
エイミーも言う。
「どうしてか」
「まあそんなことはどうでもいいじゃない」
スターリングが横から二人に言う。
「今日は皆で楽しく」
「あんたは何持って来るの？」
「僕はバーボン」
そう二人に語る。
「それとビーフジャーキーだね」
「中々いいわね」

「そう言ってもらえると有り難いよ。蝉玉は？」
「私は桂花陳酒」
蝉玉はこう述べてきた。
「それとお饅頭ね」
「いいね、それも」
「そうでしょ。まあお姉さん達と飲みましょう」
「そうだね。楽しくね」
「スターリングも蝉玉もいいわね」
エイミーはそんな二人を見てすっと笑みを浮かべてきた。
「どうして？」
「だって」
スターリングに応えて述べる。
「カップルでさ。そういうのってやっぱりいいわ」
「蝉玉も彼氏作ったら？」
「何かね」
笑みが少し寂しげなものになった。
「ちょっと相手がいなくてね」
「そうなの」
「自分でも残念だけれどね。まあいつかはね」
そう言って首を傾げる。それからまた述べた。
「それはいいとして。ほら」
二人に対して話題を変えてきた。
「あれよ、ここぞとばかりに浮かれてる奴等もいるし」
「カムイとか洪童とかね」
あのもてないコンビである。あまりにものもてなさとそれに対する破天荒な行動から最近は二人並んで馬鹿兄弟呼ばわりされている。
「あいつ等もチェックね」
「あとテンボとジャッキーが来られないってさ」
スターリングが述べてきた。

第三十七話　華の四姉妹その三

「何かあったのかしら」
「ほら、この前の」
彼はそれに応えて述べる。
「ロシュフォール先生にやったあれで」
「ああ、あれね」
エイミーはその言葉を聞いて納得したように頷く。
「それで罰ゲーム喰らってるのね」
「そういうこと。だから来られないんだ」
「全くあの二人は」
エイミーはそれを聞いたうえでふう、と溜息をつく。
「困ったことね」
「その二人以外は全員参加よ」
「全員なのね」
蝉玉の言葉に応える。
「そう、全員」
「それにしても不思議って言えば不思議ね」
ここでエイミーはまた言う。
「何が？」
「いえね」
そして言葉を続けさせる。
「いつも皆アパートに簡単に入ってるけれど」
「細かいことは気にしなくてもいいよ」
しかしそれはスターリングのこの言葉で終わった。
「そうかしら」
「そうだよ。だってさ」
彼は言う。
「限られた人間しか入られないって面白くないじゃない」

「そうね」
エイミーもそれに頷く。
「確かに」
「皆いてのクラスだしね」
蝉玉も言う。彼女も同じ意見であった。
「馬鹿二人は仕方ないか」
「そうそう」
蝉玉は今度はエイミーの言葉に頷く。
「全く。何考えてるのやら」
そんなことを言いながらエイミーの家に酒とつまみを持って集まる。非常に奇怪なことだが全員四人暮らしの家の中に入ったのであった。
皆そこであれこれ話をはじめる。暫くしてエイミーの姉達、今回の話の主役が戻ってきたのであった。
「あら」
最初に戻って来たのはベスであった。ライトブラウンの髪の優雅でおしとやかな感じの美人であった。八条大学では音楽部に所属している。ピアノのコンクールで何度も入賞している期待の華である。
「エイミー、皆来てたの」
「別にいいよね」
そう姉に問い返す。
「皆いても」
「ええ、私はいいけれど」
「どうもお姉さん」
「お邪魔してます」
クラスメイト達はそう彼女に挨拶をする。
「ええ。はじめまして」
ベスは彼等にこりと挨拶をする。その顔も実に気品がある。
「ベスです。エイミーの三番目の姉です」
「はいっ」

「ねえエイミー」
蝉玉がここでエイミーに囁きかける。
「凄い美人さんよね、やっぱり」
「ええ。そうでしょ」
にこりと笑ってその言葉に応える。
「けれど。やっぱりねえ」
「彼氏の話がないのが？」
「何でかしら」
「じゃあ私はこれで」
ベスは気品ある姿でそっとエイミー達の前から姿を消す。
「ピアノの練習がありますので」
「やっぱり凄いわね」
アンネットがその言葉を聞いて述べる。
「ピアノの練習って。やっぱり天才はさらに能力を磨くってやつね」
「そうだな」
マチアがそれに同意して頷く。
「八条大学音楽部きってのピアノ。一日や二日でできはしないか」
「そうよね。やっぱり凄いわ」
「ピアノか」
ルシエンがそれを聞いて妙な反応を見せてきた。
「じゃあ俺も」
「ちょっと待って」
アンネットは彼のその妙な反応に気付いて声をかける。
「貴方若しかして」
「アンネット、ピアノは好きか？」
真顔で彼女に問う。
「立ったら俺は」
「ちょっと、そこまでしなくていいわよ」
慌ててルシエンに声をかける。結構焦っている様子である。
「いいわね。だから」

「あ、ああ」
何かよくわからないがそれに頷くことにした。
「わかった。それじゃあ」
「ええ。それは本当にいいからね」
くどいまでに念を押してきた。やはり焦りがある。
「本当に」
「おい、アンネット」
そんな彼女を見てマチアが彼女に声を囁く。
「何でまたそんなに必死に止めるんだ?」
「いえ、実はね」
アンネットは困った顔でそれに応える。それには理由があった。
「彼、音楽の方は」
「下手なのか?」
「下手っていうか何かね」
困った顔で述べる。その顔は変わりはしない。それだけでおおよそこのことがわかるというのが人の顔というものは実に不思議である。
「音楽になると人が変わるのよ」
「そんなにか」
「ええ。だからね」
彼女は述べる。
「ルシエンにはあんまり」
「そうか」
「そういうこと」
そんな話をしていると二人目がやって来た。今度帰って来たのは二番目のジョーであった。
「おっ」
彼女は皆が家にいるのを見て元気のいい声をかけてきた。
「何か今日は賑やかだな」
「皆来てるのよ」

「ベスもいるな」
ここでピアノの音を聞いて呟く。顔を上げて元気な様子である。
「いい感じだな」
「そうでしょ？だからね」
「ちょっと待ってね」
にこりと笑って末の妹に返す。
「まずはレポート済ませないといけないから」
「あっ、それあったのね」
ジョーは文学部の学生だ。将来は学校の先生か作家になりたいと考えているのだ。だからこうしたレポートをしない筈がない。実際に今かなり乗り気なようであった。
「そうよ。だから」
「わかったわ。それじゃあ」
「それが終わってからね」
ジョーはそのまま自分の部屋に閉じこもる。男達、とりわけジョルジュやフックといった面々はそれを見て非常に詰まらなそうにしていた。
「何だよ、レポートって」
「酒でも飲みながら書けないか？」
「あんた達いつもそんなのやってるの」
エイミーがそれを聞いて顔を顰めさせる。
「いや、たまに」
「いつもじゃないぞ」
「やってるのね」
それを聞いてかなり呆れ顔になっている。エイミーはそんな彼等の態度に納得していないようであった。それは態度でわかる。

第三十七話　華の四姉妹その四

「そんなので絵が描けるの？」
「描けない？」
「描けないわよ」
そう二人に反論する。
「滅茶苦茶な絵になるわよ」
「酔えば酔う程ってわけにはいかないか」
フックはそれを聞いて言った。
「まあ俺もガールハントは酔ってちゃできないしな」
「というか今更だけれどね」
蝉玉がそんな彼等の話を聞きながら呟く。
「未成年は結構お酒制限されていたような」
「そうだったっけ」
彼女の横でバーボンを飲むスターリングがそれに応えて言う。
「初耳だよ」
「まあ国によって違うけれど」
「少なくとも俺の国じゃそれはなかったな」
ルシエンは蝉玉に答える。彼は缶のカクテルを飲んでいる。カロリーは少なめだ。
「トルコってムスリムでしょ？確か」
「あまり関係ないな」
そう蝉玉に返す。
「ケマル＝アタチュルクの頃からな」
トルコ建国の父と言われている。群を抜いた指導力とカリスマ、政治力により第一次世界大戦で敗北し解体の危機にあったトルコを救いその指導者となった男だ。トルコを建て直し近代化を達成した。彼なくしてこの時代のトルコもなかったと言われている。この時代のトルコにおいても国父として敬愛を集めている。

「そうなの」
「そうなんだ。だからな」
スクリュードライバーを飲む。飲みながら話をする。
「特に問題はないんだ」
「あんたはムスリムだったっけ」
「そういえばそうだな」
返答にも真剣味がない。サハラでこんな姿を見られれば怒鳴りつけられるどころでは済まないがここは連合だから平気である。
「まあ気にするな」
「やれやれ」
呆れながらも一緒に飲む。そうして飲んでいると遂に最後の一人が戻って来たのである。
「只今」
「あっ」
エイミーはその声を聞いて声をあげる。遂に最後の一人メグが帰って来た。気品のある顔立ちで金色がかった茶色の髪の大人の美女であった。
「メグお姉ちゃんよ」
「遂に最後の一人か！」
カムイはそれを聞いて喜びの声をあげる。
「遂にか！」
「あの、カムイ」
アンネットが彼に突っ込みを入れる。
「何でそんなに熱中しているのよ」
「酔ってるな」
マチアが彼を見て言う。既に彼の足元には缶ビールが数個転がっている。他にも色々と飲んでいる。顔はもう真っ赤になっていた。
「なあ、御前の一番上の姉さんってな」
その酔った顔でエイミーに問う。
「凄いよな、気品があって」

「それはわかったから」
迷惑な顔で彼に答える。
「酔いを醒ましてね、早く」
「俺は酔ってないぞ」
酔っ払いの定番の言葉が出て来た。
「だから安心しろ」
「その台詞は何があっても信用できないわよ」
「何っ!?」
エイミーのその言葉に抗議を向けてきた。
「俺の何処が酔ってるんだ」
「わかったから。少し水でも飲んでよ」
「水か」
「ええ」
そう彼に言う。
「わかったわね」
「わからん」
「駄目だこりゃ」
カムイのその言葉を聞いて思わず言う。
「どうしたものだか」
「じゃあこれ飲んで」
アンネットが横から言ってきた。その手にはボトルがある。
「これ何だ?」
「お水よ」
凄まじい大嘘を平気で言う。
「それ飲んだら楽になるから」
「そうか。それじゃあ」
それを受け取って一気にラッパ飲みする。するとそこに崩れ落ちた。
「何飲ませたんだ?」
「ウォッカ」

そうマチアに答える。
「流石に効くわね」
「ええよ、アルコール度九六パーセント！？」
マチアがボトルに書かれているアルコール度を見て声をあげる。
「何だ、こりゃ」
「凄いでしょ、我が国の切り札よ」
「ウォッカか」
「火が点くから」
アンネットはそのウォッカを平気な顔で飲みながらマチアに語る。
「ちょっとやそっとじゃ飲んで倒れないのはいないわ」
「凄い酒だな、全く」
マルティもそれを見て驚きを隠せない。
「まあこっちの酒も結構だがな」
彼はそう言いながらウォッカと同じような無色透明の酒を飲んでいる。それをアンネットにも勧めてきた。
「どうだい、これも」
「何、それ」
「ラクさ」
そう答えてきた。
「ウォッカ程じゃないがこれもかなりな」
「凄いの」
「凄いぜ。飲むかい？」
「ええ。ストレートでね」
流石にアンネットは強い。それを飲んでも平気な様子であった。
「あら、いけるわね」
「やっぱりストレートだよな」
マルティも明るい顔で凶悪な酒を飲んでいる。ラクのアルコール度は四五度である。ウォッカが桁外れなだけでやはり相当なアルコール度である。
「酒はな」

「そうよね、やっぱり」
「皆楽しそうね」
メグはそんな彼等を見て言ってきた。
「ねえエイミー」
そして妹に声をかける。
「私も後でいいかしら」
「ええ、他のお姉ちゃん達も呼んで」
「わかったわ。二人共自分達の部屋ね」
ベスの部屋からピアノの音が聞こえるのを確かめてから答える。
それを聞いてすぐにわかることであった。

第三十七話　華の四姉妹その五

「だったら」
「お姉ちゃんも何かあるの？」
「私もね。今度のサークルの発表会で出さなくちゃいけない刺繍があるから」
「そうなの」
「それを終わらせてから。それでいいわよね」
「うん。それじゃあ」
エイミーはにこりと笑ってそれに応える。
「後でね」
「ええ。お酒残しておいてね」
こう言い残してメグも一旦自分の部屋に入った。皆それを見送った後で顔を見合わせて話に入るのであった。
「よし、俺にいい考えがあるぜ」
フックが言ってきた。
「いい考え？」
「とにかく強い酒を出すんだ」
皆それを受けて銘々の酒を出す。ウイスキーにブランデー、バーボン、ラオチュー、ウォッカ、焼酎、そしてラクといったものが次々に出される。
「よし、これをな」
「どうするんだ？」
ジョルジュがそれに問う。
「勿論お姉さん達に飲んでもらうんだ。しかもな」
「しかも」
「普通には飲んでもらわない」
こう言ってきた。
「まずは全部入れて」

それぞれ何処からか出してきた巨大な鍋に入れていく。全部入れ終わった後でフックはそれを頭の上で激しく回転させてきた。
「おっ！？」
「何してんの、フック」
「これで掻き混ぜてるんだよ」
そう皆に答える。
「要するにカクテルさ」
「ふうん、カクテル」
「そう、それも俺のオリジナルカクテル。名付けて」
何か得体の知れないカクテルの名称を言ってきた。
「ギャラクティカ＝ファントムだ」
「また一発で昇天しそうな名前だな」
ジョルジュがそれを聞いて述べる。
「本来は左手で作るみたいな」
「まあ名前は思いつきだ」
一応はそう誤魔化す。
「けれどな。これを飲んだら誰でも潰れるぜ」
「いいわね、それって」
蝉玉がその話に笑って賛成してきた。彼女ももう真っ赤である。
「じゃあそれをお姉さん達に」
「いい、エイミー」
スターリングが責任者になっているエイミーに問うてきた。
「それで」
「ええ、私はね」
彼女はそれで特に構わない。だから気にする素振りもなかった。
「ただ」
「ただ？」
「後のこと考えてる？」
フックだけでなく皆にそう問うてきた。
「後のことって」

「だからお姉ちゃん達が酔い潰れた後よ」
エイミーはそれを述べるのであった。
「どうなっても知らないわよ」
「まあ大丈夫だろ」
ジョルジュが根拠のないことを言ってきた。
「何かよくわからないけれど。そんなに酒癖悪くはないだろ」
「そういえばエイミーはあまり酔ってないね」
トムがエイミーに声をかける。
「見たところ」
「ああ、私結構強い方なの」
彼女はそう答えてきた。
「お酒とかはね」
「そうなんだ」
「ええ。そういえばお姉ちゃん達も強かったわ」
「じゃあ安心だな」
フックはそのギャラクティカ＝ファントムをボトルに入れながら言う。あまりにも色々な酒を入れたので不気味な色をしている。洪童がそれを見て言った。
「爆弾酒よりも効きそうだな、これ」
「爆弾酒って？」
「ああ、韓国の酒なんだ」
アンネットにそう答える。
「ジョッキにビールを入れるんだ」
「ええ」
「そこにウイスキーをコップ一杯入れてそれをそのままジョッキに入れる。つまりビールとウイスキーのミックスなんだ」
「悪酔いしそうね」
「効くぜ」
彼は言う。
「半端な悪酔いはしない」

「おっ、そりゃ面白そうだな」
ジョルジュがそれを聞いて声をあげた。
「じゃあ今度は」
「春香に飲ませたら殺すからな」
洪童は目を座らせて言ってきた。
「いいな」
「おい、マジかよ」
「当たり前だろうが。誰がそんなこと許すか」
酔っていても彼は彼であった。やはり妹のことになると話は別だった。

第三十七話　華の四姉妹その六

あれこれ話している間にギャラクティカ＝ファントムの用意は出来てきていた。ボトルにそれぞれ流し込む一応は普通の酒に見えるようにした。ここで遂にメインゲストがやって来た。

「おっ、まだいたの」

最初にやって来たのはジョーであった。

「美味しそうね、これはまた」

「楽しんでるのかしら」

続いてピアノが止まり暫くしてベスがやって来た。

「お酒を」

「よかったら私達も入っていいかしら」

にこやかにメグも入って来る。

「どう？」

「ええ、どうぞどうぞ」

トムが皆を代表して述べる。

「その為に特別のお酒を用意しましたから」

「特別の？」

「はい、これです」

三人並んでソファーに座った三人にギャラクティカ＝ファントムを入れたボトルを差し出した。

「どうぞ」

「特別のお酒です」

確かに特別なお酒であった。飲んだらそのまま意識が吹っ飛んでしまいかねないようなとんでもないものであるが特別なことは特別であった。

「ですから」

「私達にくれるんだね」

ジョーはそのボトルを見て目を輝かせてきた。

「このお酒」
「その為に用意しましたからね」
フックが上機嫌で答える。
「ささ、どうぞ」
「何か悪いわ」
メグは右手を頬に当てて述べた。
「いきなりそんなものを頂いて」
「いやあ、俺達お邪魔させてもらってますし」
「酔い潰れてる馬鹿もいますし」
カムイのことである。見れば床の上で死体のように転がっている。
本当に半分以上死んでいるようである。
「ですからそれはお気遣いなく」
「ささ、だから」
「それじゃあ」
ベスが応えてきた。
「頂いていいかしら」
「ささ、どうぞ」
「まずはぐいっと」
皆三人にしきりに酒を勧める。彼等はそれを受けて飲む。これが史上最悪の悪夢のはじまりであった。
暫くして。エイミーの家は地獄絵図になっていた。
「もうないの!?」
ドスの聞いた声であった。その声の主ベスはしきりに皆に絡んで酒をせがんでいた。
「は、はいこちらに」
「どうぞ」
「ビールね」
「そうです」
ジョルジュがそれに答える。
「宜しければどうぞ・・・・・って」

言う前に瓶をひったくられる。ベスはそのままビールをラッパ飲みしだした。
それからまた飲む。最早無差別であった。
「ふう」
服の袖で口を拭う。それまでのお嬢様の姿は何処にもなかった。
「おかわり」
「へっ！？」
「おかわりつってんのよ」
横にいるジョルジュに対して言う。酒を持って来させまたラッパ飲みする。今度はワインであったがその調子は全く変わってはいなかった。
「いいわね」
「はい、畏まりました」
それに頷いて今度はウイスキーを持って来た。しかしそれもすぐに飲み干してしまう。どうにも無茶苦茶な有様であった。そしてそれはベスだけではなかった。
「うふふ、そうなのよ」
メグは左右に女の子達をはべらせて上機嫌で笑っていた。

第三十七話　華の四姉妹その七

「その時ね、私と飲み比べしようなんて言うから」
「それでどうしたんですか？」
「飲み勝ってやったのよ、ふふふ」
そう蝉玉に答える。
「酔い潰れた時の顔ってなかったわ。相手を選べってことよ」
「はあ」
「そうですか」
「ふふふ、いいわね」
ここで彼女は言う。
「私に勝とうと思ったらウワバミでも連れて来ることね」
「ですか」
「さあ、こんなのじゃ飲んだ気がしないわ」
ここでボトルを妹と同じようにラッパ飲みして述べる。
「一本や二本じゃ駄目よ。もっと頂戴」
そう言ってバケツみたいな杯を持って来させる。それを両手に持ってゴクゴクと飲みだす。その姿もベスのそれに負けず劣らず異様であった。
「ねえ、聞いてよ」
ジョーはジョーであちこちに絡んでいる。
「その時私言ったんだけれどね」
「それで」
「どうなったんですか？」
辟易する皆がそれに問う。彼等も無理矢理つき合わさせられている。
「駄目なのよ。言うこと聞いてくれないのよ」
彼女は泣きながら述べる。
「私の言うこと。折角言ったのに」

「そうだったんですか」
「私だって皆のこと思ってたのに」
左手にウォッカのボトルを持って泣いている。
「それなのに。酷いでしょ？」
「ええ、まあ」
「そうですね」
「どうせ私なんか」
急に涙をボロボロと流す。
「私なんかどうでもいいのよ。だから」
三者三様で悪酔いしている。そんな姿を見て皆こっそりとエイミーに問うのであった。
「ちょっと待ってよ」
「これどういうことよ」
「どういうことって言われても」
エイミーも困った顔でそれに答える。
「私も驚いてるのよ。こんなに悪酔いするなんて」
「そうなの」
「それも三人共だなんて。これはちょっと」
困った顔のままだった。その目の前で三人は相変わらず絡んで笑って泣いて酒を飲み続けている。
「困ったわね」
「ギャラクティカ＝ファントムのせいね」
アンネットが言った。
「それもこれも」
「本人は何処なんだよ」
トムがムッとしてフックを探す。見ればベスの下で四天王像の鬼のように踏まれている。
「・・・・・自業自得ね」
「というかね」
エイミーは言う。

「お姉ちゃん達がこんなにお酒強いなんて」
「しかも酒癖悪いわね」
アンネットがまた言う。
「滅茶苦茶に」
「ええ。どうしようかしら」
首を傾げて述べる。
「これから」
「なるようにしかならないんじゃないの？」
アンネットの言葉は結構以上に無責任なものであった。
「台風が相手だからね」
「台風なの」
「そっ、台風」
見れば将に台風だ。酒を飲んで好き放題している。
「だから。ここは見ないことにして」
「来たら逃げると」
「いいわね、それで」
「ううん」
考えてみたがそれしかなかった。エイミーも腹を括った。
「じゃあ飲みましょう」
「そうこなくっちゃ」
なかったことにして飲みはじめた。その後ろでは三つの台風が吹き荒んでいたがそれに構うことは一切なかった。エイミーは開き直ることにしたのであった。
そのまま絡まれているのは放ったらかしにした。朝には何も覚えていない三姉妹と二日酔いで唸っている面々がいるだけであった。

華の四姉妹　　完

2007・3・1

第三十八話　恐怖の生活指導その一

恐怖の生活指導

テンボとジャッキーは洪童の言葉に引っ掛かり生活指導のロシュフォール先生のところに向かっていた。この先生は髭を綺麗に切り揃えた一見ダンディな紳士だがその素顔は鬼である。

日本軍仕込みという根も葉もない噂がある。彼はシュメール人でありそもそも軍にいたことはない。それでも奇妙な噂がまかり通っていたのである。

その彼のところに向かう二人であったがかなり意気揚々としていた。

「さて、ジャッキー」

「ええ、テンボ」

彼等は学校の廊下を凱旋気分で歩きながら話をしていた。

「いよいよだな」

「そうね、いよいよね」

二人は笑顔で言い合う。

「俺達の推理でロシュフォール先生の悩みを解決だ」

「何だかわからないけれどやるわよ」

何も考えずにロシュフォール先生のいる数学の職員室に向かう。

そこに入ると先生が厳しい顔で生徒に恐ろしい生活指導を行っていた。

「喝！」

生徒を座禅させその肩を精神注入棒で叩いている。

「気合が入っておらんぞ！」

「はっ！」

その生徒は何故かそれに応えている。それでしごきを受けていた。

「学校にボトルを持って来るとは何事か！恥を知れ！」

バイクで来ようが馬で来ようが構わずどんな服装でも構わない。

あげくには大暴れしても平気な学校であるがそれでも校則はある。
幾ら何でも校内での飲酒は御法度なのである。
「罰として座禅の後で反省文だ！よいな！」
「申し訳ありませんでした！」
悪事を働いた生徒はそう応える。何か色々と混じった生徒指導であった。
「あっ、先生」
よお、といった感じでテンボが彼に声をかけた。
「どうもです」
「何だ、御前等」
先生はジロリとした顔で二人を見てきた。
「呼んだ覚えはないぞ」
「何言ってるんですか」
「あたし達を呼んだって聞いて」
「御前等をか」
先生は二人の言葉を聞いて目を顰めさせた。そのうえでまた述べた。
「ええ、何なんですか？」
「事件の解決ですか？」
「事件の解決、か」
先生はその言葉に何かを思い出したようであった。
「そういえば」
「はい、そういえば」
「何ですか？」
「御前等ちょっと座れ」
先生は二人にこう声をかけてきた。
「！？そこにですか？」
「そうだ」
先生は答える。
「事件の解決だ、いいな」

「わかりました」
「それじゃあ」
二人は何も言わずにそこに座る。するとここで先生は指をパチン、と鳴らしてきた。すると何処からともなく白い詰襟の超長ランとズボンの一団が姿を現わしてきた。
「御呼びですか、先生」
「遂に捕まった」
先生は後ろに控える男達にそう言ってきた。
「大物二人がな」
「おおっ」
「確かに」
白い制服の男達はテンボとジャッキーの姿を認めて思わず声をあげた。
「遂にですか」
「そうだ、連れて行け」
先生は彼等に命令を下す。
「いいな」
「了解」
「畏まりました。それでは」
彼等はすぐに二人を捕らえる。両手を後ろから羽交い絞めにして連行して行く。
「こっちだ」
「大人しくついて来い」
「おい、ちょっと待てよ」
アシスタントが来たと思っていた二人は羽交い絞めにされてようやく声をあげた。
「風紀部が何の用だよ！」
「あたし達が何をしたっていうのよ！」
実は彼等は八条学園高等部第十三風紀部である。ロシュフォール先生に率いられた彼等はその恐ろしい隠密行動と恐怖の制裁により

学園の白い鬼神と恐れられているのである。なお先生は彼等を率いていることから超鬼神という何の捻りもセンスもない通り名を貰っている。

「何をしただと」

「どの口が言うか」

しかし彼等は二人に対して言う。

「御前等を捕らえる時を待っていたのだ」

「推理研究会の人間最終兵器」

それが二人の仇名の一つである。いい仇名ではない。

「遂に年貢の納め時だ」

「観念するんだな」

「ちょっと先生」

ジャッキーが先生に対して言う。

「これどういうことなんですか。一体」

「詳しい話は生徒指導室だ」

それが先生の返事であった。

「いいな」

「はっ」

「了解しました」

制服の学生達はそれに頷く。こうして彼等は二人を連行したのであった。

第三十八話　恐怖の生活指導その二

生徒指導室。またの名を拷問部屋と言われている。二人はそこで正座させられていた。

部屋の中自体は何の変哲もない。ごく有り触れた何もない伽藍とした感じであった。そこで二人は正座させられて先生と白服の男達に囲まれていたのであった。

「さて」

先生は竹刀を手に正座している二人に問うてきた。今彼は二人の前に立っている。

周りの生徒達はよく見れば男も女もいる。人種が様々なのは連合らしい。しかしその雰囲気は二十世紀の独裁国家というよりは特撮のそれであった。

「何故ここに連れて来られたかわかっているな」

「いいえ」

ジャッキーは答える。

「何が何なのか」

「そうだよな」

テンボもそれで応えて言う。

「何が何なのか」

「そうよねえ」

ジャッキーはその言葉に頷き返す。

「一体どうして」

「全くだ」

「今までのことを思い出すといい」

先生は何が何なのかわかっていない二人に対して述べた。

「君達の今までをな」

「だから先生」

ジャッキーはまた先生に対して言う。

「あたし達何もしていないですよ」
「なあ」
テンボはまたジャッキーの言葉に頷く。
「俺達品行方正な名探偵だよな」
「そうよ。それがどうして」
「いつも平気でエスケープしていないか？」
先生はそれを指摘してきた。
「どうかな」
「どういえばそうだったかな」
テンボは言われてそうかも知れないといった無責任な言葉で応えてきた。
「どうだった？」
「大したことないじゃない」
ジャッキーも言う。
「エスケープ位ねえ」
「捜査に比べれば」
「どうやら全然わかっていないようだな」
先生はそんな二人の言葉を聞いて述べた。
「やはりと思っていたが」
「やはりも何も」
ジャッキーはそれを聞いて言う。
「エスケープなんて」
「校則違反なのは知っているな」
「全然平気ですよ」
テンボが返す。
「そんなの。なあ」
「そうそう。捜査の為だもの」
「やはり反省していないな」
先生も二人の無自覚な態度にこめかみを震わせていた。そうしながら述べる。

「ならば。最後の手段だ」
「はっ」
「それでは」
風紀委員達が述べる。
「何しようっての？」
「名探偵は国家権力には屈しないぞ」
「一体何時から我が学園が国家権力になったのか」
先生は二人の誇大妄想を通り越してそのまま特撮の世界の言葉にかなり呆れていたがそれでも言うのであった。言わずにはいられない。
「安心しろ。体罰をする気はない」
「そういやさっきのは」
「何だったんだ」
「座禅は体罰のうちに入りはせん」
先生はかなり強引に主張してきた。
「気にするな」
「だったらいいけれど」
「何かなあ」
「とにかくだ」
先生は言う。
「風紀委員達よ、やるのだ」
「はっ、先生同志」
またしても訳のわからない単語を出す。同志という言葉もやはり特撮めいている。実際にこの先生は特撮研究会の顧問でもあったりする。
「それでは」
彼等は二人を縛り上げた。それから山羊を一匹連れて来た。
「山羊？」
「虎じゃなくて？」
「恐怖のはじまりだ」

風紀委員の一人が述べた。
「この山羊がな」
「山羊が恐怖！？」
「どういうことかしら」
「それはこれからわかる」
先生は述べる。すると風紀委員達は二人の靴と靴下を脱がせた。
それから足の裏に塩を塗る。そこに山羊を近付けさせたのであった。
「何かダンが見たら喜びそうね」
ジャッキーは身体全体を縛られて裸足にされながらも余裕であった。
「そうだな、山羊の刺身でな」
「何かあたしも食べてみたくなったわ」
「残念だな、刺身ではないのだ」
先生はまた彼等に述べる。
「この山羊は食べるものではない」
「じゃあ何なの？」
「紙を食べるの？」
「まさか」
先生はそれを否定する。有り得ないということだった。

第三十八話　恐怖の生活指導その三

「ここに紙があるか？」
「それもそうか」
「じゃあ何なんだろう」
「これこそが我が風紀部の恐怖の切り札なのだ」
白服の部員の一人は述べる。
「この山羊こそがな」
「まさか」
「そんなことが」
「山羊の怖さがわかっていないのか」
彼等は得意げに言う。
「この山羊こそは」
「では諸君」
先生は生徒達に声をかける。
「いいな」
「それでは」
「同志よ」
彼等は仲間達で言い合う。
「塩だ」
「わかった」
「予定通りだな」
「塩って何なんだろうね」
「さてな」
ジャッキーとテンボは言い合う。何が何なのかわかりはしない。
「何が出るかお楽しみだが」
「何なんだろう」
すると彼等は二人の足の裏に塩を塗ってきたのだ。
「美容かしら」

「それはない」
先生がジャッキーに答える。
「ここは生徒指導室だ。それでは」
「わかったぞ」
テンボは直感で何かを悟った。
「この塩は先生が舐める為だ。先生」
きっとして先生を見てきて言う。
「あんた、変態だったんだな」
「そうだったの」
ジャッキーもそれを言われてきっと先生を見やる。
「何て趣味なのよ」
「人の足の裏を舐めて塩分を取るなんて」
「あのな」
流石にその言葉には先生も呆れ顔であった。
「何処の世界にそんな趣味の変態さんがいるのだ？こっちが聞いてみたいぞ」
「あれっ、違うんですか？」
「違う」
はっきりと言い切ってきた。
「そんな訳がない。そもそも塩なぞ普通に舐めればいい」
「そうですか」
「こいつ等本当に推理研究会か？」
「馬鹿っ」
風紀部員達はここで口々に述べ合う。
「推理研究会の最終隔離対象なんだぞ、こいつ等は」
「最終隔離対象か」
「そうだ。とにかく滅茶苦茶なことで有名なんだからな」
二年Ｓ１組ではフランツと並んでクラスの三馬鹿である。その脳細胞のあれっぷりでは勝てる者はいないとさえ言われているのである。

「そうか。じゃあ」
「当たった試しがない」
当たるどころか何処をどうやったらそうなるのか不思議な推理が次々と行われていくのあ。おかげであの洪童すら彼等を意図的に遠ざけている程である。
「だからここにいるのか」
「そういうことだ」
彼等は囁き合う。
「だから。連中の言うことは聞き流せ。わかったな」
「ああ」
「さて」
先生はまた二人に顔を向けてきた。
「覚悟はいいな、二人共」
「といってもなあ」
「一体塩なんか塗って」
「何か忘れていないか？」
先生は二人に問う。
「大切なものをな」
「大切な、なあ」
「白い服から妖しげなオーラを放ってエナジーを奪うとか？」
「風紀部は何処の特撮の悪役だ？」
「何なんだよ、そりゃ」
その白服の男達をそれを聞いて言い合う。そんな訳がないのである。
「山羊だ」
先生は言う。
「この山羊を使う」
「ああ、これね」
ジャッキーはここでやっと山羊に気付く。
「この山羊に秘密があったのね」

「何だと思っていたんだ」
「わざわざ山羊を連れて来たのは」
委員達は述べる。
「恐怖の仕置きの為だ」
「恐怖の仕置きって」
「一体」
「さあ山羊よ」
先生がここで山羊を二人の足にやって来た。

第三十八話　恐怖の生活指導その四

「舐めろ」
「何だ、舐めるだけか」
「それの何処が怖いのよ」
「わかっていないな」
先生はそんな彼等に対して言う。酷薄な笑みを漂わせていた。この山羊こそがその恐怖であったのだ。だが彼はまだそれを隠している。
「ならばそれでいい」
「それでって」
「一体何が・・・・・・うっ」
ジャッキーの方が先に舐められた。
「どうだい？」
「くすぐったい」
そうテンボに答える。
「それだけか？」
「ええ、それだけ」
「何だ」
「けれど何か呼吸が」
舐められてくすぐったい。すると次第にそれが苦しくなってくる。
「笑ってるばかちだからこれって」
「その通りだ」
ここで先生は言う。
「舐められているうちに苦しくなる。そして」
「そして」
先生の言葉に応える。
「そのうち足の皮がめくれて血が出る。山羊はその血の鉄分も舐めていく」

「ちょ、ちょっと何よそれ」
ジャッキーはそれを聞いて思わず声をあげる。
「滅茶苦茶怖いじゃない」
「元はエウロパの拷問だ」
「あいつ等ね」
エウロパという名前を聞いて顔を顰めさせる。テンボも同じだ。
「これで何があっても吐かせるのだ」
「何でそんな恐ろしい体罰を」
「他にもあるぞ」
風紀部員達はジャッキーに答える。
「他にもって」
「鼠を腹の上に置いて蓋をする。それから上から熱する」
「それでどうなるんだ？」
「鼠が熱さから逃れる為に腹を食い破り」
「うちの学校は何処の秘密警察だ？」
「勿論そこまではしない」
先生は述べる。
「安心しろ」
「実際にそこまでやったら怖いわよ！」
ジャッキーがそう返す。
「何よそれ、まんま悪の組織じゃない！」
「そういう設定だ、当然だ」
先生の言葉は教師のものではなかった。
「わかるな」
「わからないわよ！」
「おい、このままどうなるんだよ！」
テンボも叫ぶ。
「だから足の皮がめくれてな。そのまま」
「そうなったら探偵できないだろうが！」
彼はそれを聞いていよいよ焦りだした。

「歩けなかったら探偵稼業もよ」
「では反省するか？」
先生は彼等に問うてきた。
「いいな」
「わ、わかった」
テンボがそれに頷く。
「何でも言うこと聞くから」
「あたしも」
実際に今舐められているジャッキーにとっては死活問題である。彼女はそれに必死で応える。そろそろ足の裏が痛くなりだしてきたからだ。山羊の舌は結構ザラザラしているのだ。
「だから山羊は」
「よし、わかった」
先生は二人の言葉を聞いて頷く。
「では止めさせろ」
「はい」
こうして山羊は離された、それから先生に言われるのであった。
「掃除だ」
「はあ」
罰則であった。どうやらこれを吐き出させるつもりであったようである。
「いいな」
「わかりました。それじゃあ」
こうして二人は罰則の掃除をやらされることになった。その範囲はかなり広くやたらと大変なものであった。二人はぶつくさ言いながらそれをやっている。
「やれやれだぜ」
テンボは箒で庭を掃除している。

第三十八話　恐怖の生活指導その五

「全くよお」
「あたし達こんなのやらされるようなこととしたのかしら」
「した」
監督役の風紀部員の一人が言う。
「だからエスケープは重罪だ」
「ちぇっ」
「やっぱり逃げられないのね」
二人はその言葉を聞いてつい舌打ちする。その間も手は止めてはいない。
「この掃除が終わったらそれで許されるからな」
「はいはい」
ジャッキーがその言葉に応える。
「つまりやれってことね」
「そういうことだ。わかってるじゃないか」
「わかってもやるのは気が進まないわ」
こうした時にすぐに出て来るのはジャッキーならではであった。
「全く」
「それにだ」
風紀部員はここで一言述べてきた。
「何？」
「気分がいいものだろう」
「どうしてだよ」
「掃除をして何かが綺麗になるというのは」
「いいや」
その言葉をテンボが否定する。彼は首をゆっくりと横に振る。
「それはないね」
「何だ、詰まらん」

「俺は散らかってる部屋の方が頭の回転が早まるんだ」
そのうえでこう言う。
「そっちの方がな。綺麗だと落ち着かない」
「あたしも」
ジャッキーもであった。
「散らかって何があるのかわからないところを走り回るのがいいんじゃない」
「それでいいのか」
「それがいいのよ」
彼女もおおむねテンボと同じであった。
「わかってないわね。全く」
「君達が風紀委員にならなくて何よりだ」
「おっ、そういえば」
テンボはここであることを思い出してきた。それで風紀部員に問う。
「あんた達風紀部員だよな」
「何を今更」
テンボの言葉に思わず突っ込みを入れる。流石にこれは話が今更であった。
「うちの風紀部員のローリーだけれどよ」
「ローリー＝ハイデルか」
「そう、そいつ」
「姿が見えないけれどどうしたの？」
「系列が違う」
風紀部員は二人にそう述べてきた。
「系列！？」
「うちの学校って風紀部にも系列があったんだ」
「広いからな」
それが答えであった。八条学園はあまりにも広い。だから同じ競技でも部活が幾つもあったりするし風紀部にしろ系列があったりす

るのである。
「分かれている」
「じゃあローリーはあんた達とは関係ないのか」
「あいつは好きになれない」
風紀部員は憮然として述べてきた。
「どうしてもな」
「またそれはどうして」
テンボは掃除を続けながら彼に問う。
「同じ風紀部員だろうに」
「同じ風紀部員だからだ」
これが答えであった。
「ああした浮ついた男は嫌いだ」
「まあ確かに浮ついてはいるわね」
ジャッキーはその言葉に反対することなく頷いた。
「あんな風紀部員いないし」
「そもそもあんた達白ランだしな」
「いいだろう」
彼は自分の服を自慢してきた。
「身も心も引き締まるぞ」
「そんなものかね」
「そんなものだ」
そうテンボも答える。
「下着も透けない優れものだ」
「ああ、それね」
ジャッキーはその言葉に頷く。
「白だと下手したら透けるからね」
「特に赤とか黒のトランクスだとやばいよな」
「そうよね。それ女もだし」
どちらかというと女の方が深刻な話であるかも知れない。白いズボンやスカートを穿くことも多いからだ。こうしたことには男より

も気を使う。
「第一ズボン上から隠してるわね」
ジャッキーはそれも指摘してきた。
「その長い上着で」
「待てよ」
ここでテンボは気付いた。
「その制服は」
「どうした？」
「風魔の川太郎とかいう漫画の真似か？」
「小次郎だろう？」
風紀部員は憮然としてそれに返す。
「確か」
「あっ、それか」
「変な間違いだな、また」
「まあいいってことさ。それでな」
テンボはそれを気にも留めずに言う。
「ローリーとは仲が悪いんだ」
「白服は潔白の証」
まずはこう前置きをしてきた。
「嘘は言わない。その俺が言うぞ」
「ああ」
「悪い」
一言であった。その一言で嫌になる程見事に伝わる。
「わかったな」
「風紀部も色々あるものだな」
あらためてこの学園の広さがわかる。テンボとジャッキーはその広さを噛み締めながら掃除を続けるのであった。

恐怖の生活指導　　完

2007・3・6

第三十九話　鬼の風紀部その一

鬼の風紀部

白服の男から駄目出しをされたローリーであるが本人はそんなことは全く気にしてはいない。いつものようにいい加減な日常を送っていた。

「おっ、これいいな」

教室でファッション雑誌を読みながらチェックを入れている。

「これは買い、だな。あとこれも」

「ちょっと待った」

そこにギルバートがやって来て彼に声をかける。

「学校でファッション雑誌はまずくはないか？」

「いや、全然」

しかし彼はギルバートのその突込みを否定する。

「それはないから」

「校則にはなかったか」

「別にこんなのどうってことないさ」

彼は雑誌を左手でヒラヒラと持ってこう述べた。

「別にヌードとかそうしたものじゃないだろ？」

「まあ確かにな」

「だったらいいさ。僕だって校則はチェックしてるしね」

「本当か？」

ギルバートは今のローリーの言葉には懐疑的な様子を見せてきた。

「そうは思えないが」

「気のせい気のせい」

しかしそれはあっさりと否定された。

「成人向けじゃないならいいって書いてあるよ」

「そうだったか」

「そういうこと。だからいいんだよ」

「それならいいのだがな」
学級委員としてそれが気になったらしい。だからこそ言ったのだ。
「これでも風紀委員だしな」
「そういえばそうか」
ギルバートも本人から言われてそのことを思い出した。
「君は風紀委員だったな」
「富貴委員になりたいな」
ここで言葉遊びを仕掛けてきた。
「実際は」
「馬鹿を言え。そんな委員があるか」
だがそれは冗談の通じないギルバートによってあっさりと否定されてしまった。
「あったら凄いぞ」
「それもそうか」
「そうだ」
ギルバートはまた言う。
「そもそも質実剛健とかそういう考えはないのか？」
「ないね」
一言でそれを完全否定する。
「生活を楽しもうとは思うけれど」
「風紀部なのにか」
「そんなのは関係ないさ。僕はあれこれと堅苦しいのは嫌いなんだよ」
彼の考えを口に出してきた。話しながらまた雑誌のチェックに入っている。
「あんまりあれだこれだって決めても仕方ないんじゃないかな」
「僕はそうは思わないがな」
「それは君の考えだね。僕の考えは違うから」
それも否定する。やはり風紀委員の考えとしてはかなり型破りである。

「わかってくれるかな」
「しかし」
ギルバートは納得しながらもまた述べてきた。
「あの連中は別なようだな」
「ああ、彼等ね」
ローリーはギルバートが誰のことを言いたいのかすぐにわかった。
「彼等はまた別なんだよ」
「別なのか」
「少なくとも僕の考えとは合わないね」
少しにこやかに笑っているが口調はきっぱりとしていた。
「ああした考えはね。どうにも」
「そうなのか」
「そうだよ。だってさ」
彼は言う。
「彼等のやってることは強引過ぎるんだよ。押し付けがましいし」
「ううむ」
同じように押し付けがましいギルバートに対しての言葉だ。しかしどういうわけかローリーはギルバートに対してはやけに好意的であった。

第三十九話　鬼の風紀部その二

「おまけにすぐにあれこれと暗躍めいているし。僕はそういうのじゃないんだ」
「じゃあどういうのだ？」
「ソフトなんだ」
今度はにこりと笑ってきた。
「ソフト。それで最低限」
「最低限か」
「そういうこと。それでいいじゃない」
そう述べる。
「大体説教とか好きじゃないしね」
彼はそういう考えなのである。往々にして説教が好きな者程大した人間ではない場合が多い。人のことを見るが自分のことは見ないという輩である。論語、いやそれ以前から往々にしてそうした者はいるものである。
「最低限を守っていればそれでいいじゃない」
「寛容なのだな、君は」
「そう思ったこともないよ」
それにも返す。
「僕は僕だよ」
「そうか」
「そうだよ。まああの白服とは少なくとも違うから」
むしろ嫌っているような言葉であった。どうやらああしたことは好きではないらしい。
「そういうこと、わかってくれた？」
「ああ、よくわかった」
ギルバートもそれに頷く。
「賛同できない部分もあるがな」

「賛同してもらわなくてもそれはいいんだ」
そこまでは言わない。そこがローリーであった。
「わかってくれるだけでね」
「だが気をつけた方がいいな」
ギルバートはそう彼に忠告してきた。
「あれだ。君はおそらく狙われている」
「白服にだね」
「そうだ。何度かやり合ったことはあるかい？」
「どう思う？」
その問いに不敵に笑って返す。
「そこは」
「そういうことか。よくわかった」
彼がどういった状況にあるのかギルバートもわかった。わかったうえで頷いていた。彼も全く聞く耳を持たないというわけではないのであった。
その日の放課後。学園の一室で白服の男達が集まっていた。
会議室である。そこを占拠して話をしている。
「さて」
中の一人が声をあげてきた。
「今日同志諸君に集まってもらったのは他でもない」
「あれか」
「そう、あれだ」
議長役の男がその言葉に応えて頷く。
「あの男だ。最早野放しにはできん」
「そうか」
「それでは」
男達は議長の言葉に応えて声をあげる。
「手を打つか」
「うむ」
議長は同志達の言葉に応える。

「しかしだ」
「あの男はな。中々手強い」
「容易な相手ではない」
「それでもやらなければならない」
議長はまた同志達に語る。
「そうだな」
「それはわかっている」
「だがどうするのだ」
それでも解決案があるわけではない。彼等はその顔にシルエットをかけながら話を進める。まさに何か得体の知れない秘密会議であった。
「これまで何度か刺客を放ったが」
この風紀部はこんなこともしている。
「彼等はいずれも」
「生半可な相手では駄目だぞ」
「そうだ」
議長もその言葉に頷く。
「いっそのこと我等全員で倒すか」
「いや、待て」
ここで誰かが声をあげた。
「どうしたのだ?」
「遅れてすまん」
会議室に一人の男が入って来た。やはり白服である。
「俺に任せてもらおう」
彼は同志達にそう告げてきた。
「御前がか」
「駄目か?」
男は議長に問う。
「俺では」
「いや」

しかし議長は彼の言葉に首を横に振ってきた。
「構わない。しかしあの男は強いぞ」
「心配は無用な」
男の顔もシルエットになっていて見えはしない。だがそのシルエットの中で不敵に笑っているのはその声でわかる。それを隠そうともしていないのもだ。
「確かにあの男は強いな」
それを自分でも言う。
「だが俺はもっと強い」
壁に背中をもたれかけさせ腕を組んでの言葉であった。その言葉には絶対の自信が見られた。
「それだけだ」
「倒してくるというのだな？」
「我が白服風紀部に逆らう者には容赦するな」
男は語る。

第三十九話　鬼の風紀部その三

「そうだったな」
「そうだ」
議長は彼の言葉に頷いてきた。
「その通りだ。では頼むぞ」
「首塚を用意しておけ」
不敵に笑いつつ述べてきた。
「あの男のか」
「本気にしていいのか？」
「勿論冗談だ」
急に話をリアルに戻してきた。
「ただし、始末はつける」
「そうか。期待しているぞ」
「うむ」
男はすっと姿を消した。後には影一つ残ってはいなかった。
後に残った議長は不敵に笑っている。笑いながら言うのであった。
「これでよしだな」
「よし、ですか」
「そうだ」
同志達に述べる。
「あの男ならばやってくれる」
「確かに」
「彼ならば」
「さて」
話が一段落したところでまた言う。
「我々は今後について話をしよう」
「今後か」
「我々の敵はあの男だけではない」

実はかなり敵の多い白服風紀部であった。それもその筈でやっていることがどう見ても千年前のテレビの世界征服を企む悪の秘密結社だからである。

「我々の理想である秩序ある学園を目指す為には」

「そう、全ては」

彼等は一斉に立ち上がって言い合う。

「偉大なる」

「グレート＝ハズバントの為に！」

グレート＝ハズバントが何者なのかは実は誰も知らない。学園内でそんなものがあるのか誰がそれなのか知っている者は彼等だけでありその彼等もそのグレート＝ハズバントとやらには会ったことがないのだ。言うならば全く謎の存在である。一説には超高性能コンピューターだとも言われている。

彼等がそのグレート＝ハズバントに誓った時窓もない部屋に雷が走った。彼等はその雷を背にしてそれぞれの理想を確かめ合うのであった。

その頃ローリーはいい加減に学園内の本屋にいた。そこで本屋のおばちゃんに話をしていた。

「おばちゃん、いつものある？」

「こらっ」

そのおばちゃんからいきなり拳が飛んできた。ローリーはそれを慌てて返す。

「私はまだ四十五歳、おばちゃんというには早いよ」

結構濃い化粧をしていて髪をウェーブにさせて伸ばしている。スタイルのいい身体を紺色のセーターとクリーム色のズボンで覆いその上に赤いエプロンをしている。エプロンがやけに浮いている。

「だってさ、もうパラオの子供さん中学生なんだろ？」

「それがどうした」

おばちゃんは平然として返す。どうやらパラオ人らしい。

「私はまだ四十五っていうのは変わらないよ」

「そうなんだ」
「そうよ」
おばちゃんは胸を張って述べる。
「言い返しなさい。美人で気品のある太陽みたいなお姉さんってね」
「いや、一度聞いてもそんな長ったらしい前置き覚えてられないから」
「無理にでも覚えるんだね」
おばちゃんも無茶を述べる。
「だったらもっといいのがあるよ」
「どんなの？」
「絶世の美女にして八条学園の永遠のヒロイン、日の本の国に舞い降りた最高の名花、偉大なる女優であり麗しの詩人であるバレー＝ハルカ」
「もう一回言って」
「二度と言えないわよ」
おばちゃんの返事は非常に無責任なものであった。
「無理矢理覚えない」
「じゃあお姉さん」
「何、ローリー君」
急に態度が変わった。
「いつものあれ頂戴」
「ああ、今日は水曜日だったね」
「そうだろ。だからさ」
「はい、週刊ウェンズデー」
漫画雑誌を出してきた。
「これよね」
「そうそう、これこれ」
ローリーはその雑誌を受け取りながら応える。
「これ最近面白くてね」
「それ昨日も聞いたよ」

おばちゃんはそうローリーに返す。
「ファッション雑誌でね」
「ああ、あれね」
ローリーも言われてそれに気付く。
「あれも面白いからね、実際に」
「何でもいいって聞こえるわよ」
「それでもいいさ」
平気な顔でそう述べる。

第三十九話　鬼の風紀部その四

「面白いのは事実なんだから」
「面白くなかったらどうするんだい？」
「その時はあれさ」
そうおばちゃんに言う。
「読むの止める。それだけ」
「それだけなのね」
「そう、それだけ」
やはりあっけらかんとして何の迷いもない言葉であった。彼にとっては本当にそれだけであった。
「だってさ、面白いから読むんじゃない」
「まあそうだね」
おばちゃんもこの言葉には納得して頷く。
「いいこと言うじゃないか」
「当たり前だよ」
ここで調子に乗るのがローリーであった。
「そうじゃなきゃね、やっぱり」
「じゃあ明後日も来るんだね」
おばちゃんはまたローリーに問う。
「明後日は確か」
「週刊チャンプの誕生日だからね」
「そうだったね。じゃあまた明後日ね」
「うん、じゃあ」
そんな話をしながら本屋を後にする。上機嫌で雑誌を読みながら道を歩いている。
しかしそこで。後ろから気配がした。
「誰かな」
彼は漫画を読みながら気配に問う。

「また君達かな」
「わかるのか」
あの白服の男だった。木の影からすっと姿を現わしてきた。
「わかるよ。だってさ」
ローリーはまだ漫画を読んでいる。決して後ろを振り向こうとはしない。
「それだけ殺気を出していればね」
「殺気か」
「うん」
やはり漫画を読みながら答える。後ろを振り向きもしない。
「わかるよ。それで何？」
「殺気がわかるのなら話は早いだろう」
男はそうローリーに言ってきた。
「ローリー＝ハイデル」
彼の名を呼ぶ。
「覚悟しろ。いいな」
「悪いけれどさ」
相変わらず後ろを振り向くことなく言葉を返す。
「今漫画読んでるから。それじゃあ」
「漫画を読んでいようと何であろうと」
そんなことで仕事を止める筈もない。男の行動は決まっていた。
「覚悟するのだ」
棒を手に襲い掛かる。だが。
ローリーは振り向いた。一瞬だがその目に鋭い殺気が見えた、
「むっ！？」
男がその目を見た時にはもう遅かった。雑誌の背で急所を叩かれていた。
空中で動きを止める。それは一瞬のことで地面に崩れ落ちる。それで終わりであった。
「安心していいよ」

気を失い倒れている男に対して言う。
「威力は抑えてあるから。気を失うだけだからね」
そう言って踵を返す。そのまま何処かへと去っていく。
こうしてローリーは刺客を退けた。このことはすぐに白服風紀部にも伝わった。
「おのれ、おのれ」
彼等は会議室で呻いていた。
「ローリー＝ハイデル、またしても」
「彼まで倒すとは」
そう言い合い憤慨していた。かなり怒っている感じであった。
「また腕をあげたというのか」
「小癪な」
まずは悪口を言い合った後で本題に入る。
「それでだ」
「うむ」
風紀委員らしく姿勢を正して会議に入る。中々切り替えが早い。
「どうする、次の一手は」
「そうだな、嘆いてばかりもいられない」
本当に実に切り替えが早い。まるで悩んでもいないようである。
「どうするかだ」
「同志達よ、考えはあるか」
「ある」
議長の言葉に応えて委員の一人が名乗りをあげてきた。
「ほう、どのような考えだ？」
「私が行く」
やることは同じだった。
「私ならば奴を倒せる。今度こそな」
「やってみせるか」
「祝いを用意しておけ」
彼は立ち上がり会議室を後にする。その中で同志達に述べた。

「最高級のシャンパンをな」
「ふふふ、優雅なことだ」
議長はその言葉を聞いて満面に笑みを浮かべる。
「いいだろう。君ならば必ずやり遂げる」
「それでは我等は見守るだけ」
「今度こそローリー＝ハイデルを」
彼等は口々にまるで自分達の言葉がシナリオになっているかのように進めていく。これぞ様式美といった感じの話の進み具合であった。
「討つ！」
「ではその時の為に」
「そう、我が偉大なる」
「グレート＝ハズバンドの為に」
結局そのグレート＝ハズバンドが何者かというと誰にもわからないのである。彼等でさえわからない。だが二つだけ確かなことがあった。そのグレート＝ハズバンドとやらが実在するならばお世辞にもセンスと人を見る目がないということだ。その二つだけは確かなことであった。
その明後日の帰り道。ローリーの後ろに白服の男が一人転がっている。だがローリーはそれを一切気にすることなく前を進んでいた。
「あれっ」
その白服の男を見て彰子が声をあげる。彼女はたまたまこの道を歩いていたのである。
「何だろうこのお花」
しかし彼女が見たのは男ではなかった。花だった。道に咲く一輪の花。それが彼女の目に入り胸に止まったのであった。一輪の花は男の戦いよりも尊い時もある。
「綺麗ね」
その花を見てにこりと笑う。そこからまた話が動くのであった。

鬼の風紀部　完

2007・3・10

第四十話　一輪の花その一

一輪の花

あの白い花、それを見たことは彰子にとっては忘れられないものになった。ふと気がつくとその花のことを考えてしまう、そんな花であった。

「困ってるのよ」

困っているとはいっても楽しげな様子で明香に語る。

「どうしたものかしら」

「姉さん」

二人は今放課後に学校の喫茶店にいた。そこでコーヒーを楽しんでいる。

「白い花よね」

「うん」

明香に答える。

「そうだけれど」

「何処にあったの？」

明香はあらためてその花の場所を問う。

「よかったら教えて」

「道に咲いていたの」

「道に」

「うん。白くてね。一輪だけね」

そう妹に語る。語りながらもその花を心の中で見ていた。

「綺麗だったわよ」

「そうなの」

「また、見たいわ」

彰子は思い浮かべる顔で述べる。

「あの花が」

「見てどうするの？」

「どうするって言われると」
彰子は妹のその言葉には首を傾げてわからないといった顔を見せてきた。
「特に考えはないの」
「そう」
「ええ、その花もね」
そのうえでまた明香に述べる。
「どの花かわからないし」
「わからないの」
彰子の返事は今一つ要領を得ないものであった。結局わかっているのは白い花で道に咲くようなものであるということだけであった。
「うん。道に咲くっていうのが」
「それでどうするの？」
明香は姉に問うた。問いながらコーヒーを一口含む。
「探すの？」
「探そうかな」
首を左に傾げて言う。
「そのお花」
「そう、まずは探すのね」
「うん」
また妹に答える。
「そのつもり」
「わかったわ」
姉の言葉を聞いて何かを決めたような顔になった。
「それじゃあ姉さん」
「何？」
「私決めたわ」
彰子の顔を見て言う。
「一緒に探そう。その花を」
「いいの？」

「ええ、それでいいわ」
姉の顔を見ての言葉であった。いつもの表情が見えない顔であるがそれでも姉のことを想っているのは事実であった。それがわかる顔であった。
「それに一人より二人の方がいいわよね」
明香はまた言う。
「探すとなると」
「有り難う」
明香のその言葉ににこりとした笑みを浮かべる。その顔で妹を見ていた。
「それじゃあね。明香」
その顔で明香を見て述べる。
「そのお花を見たのは」
「ええ」
早速捜索がはじまった。と言っても道はわかっているのですぐにその白い花の前にやって来たのであった。
「この花よ」
白い花を指差して明香に言う。
「この白い花」
「これなのね」
明香はその花を見て述べる。
「これはオカザクラね」
「オカザクラ？」
「ええ、オカザクラよ」
そう姉に告げる。
「けれど。珍しいわ」
「珍しい？」
「ええ。オカザクラって普通は淡いピンクだから」
だからサクラと言われているのである。宇宙に出てから日本人が出会ったサクラの一つである。二人は今その花を見ていたのだ。

「白はあったかしら」
「白いオカザクラ」
「そんなのがあったなんて」
明香はまた言った。
「思わなかったわ」
「そうだったの」
「ええ。まさか本当にあるなんて」
「何か見つけられただけでもラッキーだったのね」
彰子はそれを聞いてあらためて述べる。

第四十話　一輪の花その二

「この白いお花って」
「そうね」
彼女は姉の言葉にこくりと頷いてきた。
「花言葉はよくわからないけれど」
「ねえ明香」
彰子はあらためて妹に声をかけてきた。
「何？姉さん」
「このお花もっとないかしら」
妹の方を振り向いて声をかけてきた。
「白いオカザクラが？」
「ええ、もっとね」
今度はにこりと笑っての言葉であった。
「もっとあったらいいんだけれど」
「それはちょっと」
しかし明香はそれには難しい色を微かではあるが姉に見せてみた。
「何かあるの？」
「だからオカザクラは普通は淡いピンクだから」
「ないの」
「ええ。こうしてある方が不思議なの」
「そう」
彰子はそれを聞いて残念な顔になった。
「そうなんだ」
「このお花はどうするの？」
明香はまた姉に問うてきた。
「どうって？」
「摘むの？それとも」
「いいえ」

だがそれには首を横に振る彰子であった。
「摘み取ったらそれで枯れるでしょ。お花が枯れるのって嫌だから」
「そうなの」
「それに」
彰子はさらに言葉を続ける。
「それに？」
「皆が見られないじゃない」
「皆が」
明香は姉のその言葉に目をはっとさせた。
「そうでしょ？私だけがこのお花を見るのって」
「ええ、その通りね」
次の言葉でにこりと笑った。笑いながら頷く。
「わかったわ。それじゃあこのお花はこのままにしておきましょう」
「ええ」
彰子はまた頷く。これで話は決まった。
だがそれでも彰子はまだ残念そうであった。明香もそれに気付いていた。
それで姉に声をかける。俯き気味の彼女にそっと囁いてきた。
「姉さん」
「何？」
「お花屋さん行かない？」
そう姉に声をかける。
「お花屋さんで白いお花買わない」
「お花を？」
「ええ。どうかしら」
そう姉に問い掛ける。
「ううん」
彰子はその言葉に顔を上げる。そのうえで考える顔を見せてきた。
「いいわね、それって」
「そうよね。だから」

明香はまた姉に述べる。またここで囁く。
「行きましょう」
「ええ、わかったわ」
彰子はあらためて頷く。そしてそのまま二人で花屋に向かうのであった。
商店街の花屋だ。そこに行くと何故かロミオがいた。
「いらっしゃいって・・・・・・あれ」
「ロミオ君」
彰子が彼に気付く。それで声をかける。
「どうしてここに」
「ああ、アルバイトなんだ」
彼はそう述べてきた。
「今度はここでね」
「そうだったの」
「これでかなり楽しいよ」
屈託のない顔でこう述べてきた。
「綺麗なお花がいつも見られるしね」
「何かそれっていいわね」
彰子もその言葉を聞いてにこりと笑ってきた。
「お花が一杯って」
「うん。それでさ」
ロミオはあらためて彰子に問う。
「何を買いに来たのかな」
「あっ、そうそう」
言われてそれを思い出す。
「白いお花あるかしら」
「白いお花？」
「ええ、そうなのよ」
ロミオに対してにこりと笑って言う。彰子のその顔も実に明るいものであった。

第四十話　一輪の花その三

「あるかしら」
「かなりあるよ」
そう言いながら店の中を指差す。
「ほら、例えばさ。これなんか」
「うわあ」
見ればスズランである。
「これだって」
今度出されたのはチューリップ。どれも春の花である。
「これだってそうだし」
「何か一杯あるのね」
「白い花って多いからね」
ロミオはそう彰子に語る。その横にいる明香もまたお店の中の花々を見ている。やはり彼女も白い花に注目しているのは彰子と同じであった。
「だから色々あるけれど」
「どれにしよう」
「ロミオさん」
「あっ、明香ちゃん」
ふと気付いたように明香に声をかける。
「何かな」
「花言葉ですけれど」
「いや、ちょっと待った」
だがロミオは花言葉というものが出ると一旦彼女を制止してきた。
何かあるようであった。
「花言葉を言うと意味が違ってくるよ」
「えっ」
「あっ、そうね」

明香が表情こそ変えはしないが少し戸惑ったような声をあげるとその横で彰子が納得したように声をあげてきた。どうやら彼女はわかっているようだ。
「花言葉ってお国によって違うからね」
「そういうこと。僕の国とここ日本でも意味が全然違っていたりするよ」
ロミオはベネズエラ人である。だから日本人である彰子や明香とでは同じ花を見てもそれを意味する花言葉は全く違っていたりするのである。
「だからさ。それを言うとややこしくなるよ」
「そうだったんですか」
明香はそれを言われてようやく気付いた。
「それじゃあ」
「明香」
ここで彰子は妹に声をかけてきた。
「何、姉さん」
「難しく考える必要はないわ」
彼女はにこりと笑って妹に述べてきた。
「どうしてなの?」
「だって。私も明香も日本人じゃない」
彼女が言う根拠はここであった。そのことをはっきりと言ってきた。
「だから。日本の花言葉でいいのよ」
「あれっ、それじゃあ」
ロミオは彰子のその言葉を聞いてふと述べてきた。
「彰子ちゃんが明香ちゃんにプレゼントするっていうこと?」
「そうなの」
彰子はロミオにもにこりとした笑みで答えてきた。
「その通りよ。だからね」
「日本の花言葉でいいんだね」

「ええ。それじゃあ」
「あの、姉さん」
明香は戸惑いを続けながら彰子に問うてきた。
「私にって」
「いいのよ。だってね」
声に戸惑いを見せる妹に対して言う。それは姉の顔であった。
「明香が教えてくれたから。オカザクラのこと」
「けれど」
「いいの。私からのささやかな御礼よ」
にこりとした笑みで妹に声をかける。
「だからね。いいでしょ」
「いいの？本当に」
やはり表情は変わらないが声は戸惑わせたまま姉に問う。
「本当に私に」
「妹なのに何言ってるのよ」
そう言って彼女を安心させる。
「お姉ちゃんからの贈り物よ。遠慮なく受け取って」
「じゃあ」
やっと受け取る気になった。彰子としてもこれで一安心であった。
ロミオに顔を向ける。そうして注文に入った。
「じゃあロミオ君」
「うん」
ロミオもにこやかに返す。営業スマイルであるがそれは営業スマイル以上のものがあった。彼の人柄が出た笑みであった。こうしたところがロミオらしかった。
「どれがいいかな」
「明香ちゃんへのプレゼントだよね」
「そうなの。どれがいいと思うかしら」
「それじゃあ。そうだね」
一旦店の中を見回した後で彰子に答える。

「スズランなんかどうかな」
「スズランね」
「うん。外見も明香ちゃんに似合うし。それに」
「それに？」
「花言葉がいいんだよ」
彼は語る。
「スズランって確か」
彰子はスズランの花言葉を頭の中で探る。そうして出て来たのは。
「純潔だったっけ」
「それと繊細だね」
「あと幸せね」
「幸せ」
明香はその言葉を自分でも呟く。
「姉さんが私に幸せを」
「当たり前じゃない。妹だから」
「有り難う」
それを聞いてまた御礼を言う明香であった。今度は表情が微かに綻んでいた。
「いいわね、それで」
「ええ」
姉の言葉にこくりと頷く。
「じゃあロミオ君」
彰子はあらためてロミオに対して言う。
「スズラン頂戴。白いのをね」
「うん、わかったよ」
ロミオも快くそれに頷く。そして。
「はい、これ」
「ええ」
スズランを受け取る。彰子がそれを明香に手渡す。それで贈り物としたのであった。

二人は並んで歩いて家に帰る。明香はそのスズランを手に抱いている。

「姉さん」

「何？」

「姉さんはいつも私と一緒よね」

「当たり前じゃない」

自分よりも背が高い妹の方を向いて答える。その顔はにこりと笑っている。

第四十話　一輪の花その四

「私は明香のお姉ちゃんよ。だから」
「そうね」
「そうよ」
そう言ってから妹に頷く。
「水臭いことはなしよ。この世で二人きりの姉妹なんだし」
「ねえ姉さん」
明香はその言葉を受けて姉にまた言う。
「何？」
「何時までも一緒じゃ駄目かしら」
「何時までもって？」
「いつも一緒で何時までも一緒」
こう姉に語り掛ける。
「駄目？私達」
「何言ってるのよ」
妹のそんな言葉にも優しい笑みで返す。
「当たり前でしょ。それは」
「当たり前なのね」
「そうよ。だから姉妹なんだから」
またそれを言う。
「言うまでもないじゃない」
「うん」
その言葉にもこくりと頷く。
「それでね」
彰子は話題を変えてきた。
「今夜だけれど」
「あっ」
明香はその言葉にふと何かを思い出してきた。

「どうしたの？」
「晩御飯の買い物がまだ」
「まだだったの」
「ええ。だから」
「わかったわ。今からね」
妹の言葉に応えて言う。
「お買い物行きましょう」
「ええ。何がいいかしら」
ふと思い出したように言葉を続けていく。二人並んで。
「今日は」
「今日の当番は私だったわね」
「そうだったの」
「そうよ。だから」
考えながら言葉を続ける。
「お魚でいいかしら」
「お魚」
「そうね。今日はちょっと寒いし」
少し首を傾げさせて述べる。それからまた口を開いてきた。
「お鍋なんかどうかしら」
「お鍋」
「そうよ。お魚は安いので。寄せ鍋みたいで」
「いいわね、それ」
明香は姉のその言葉に頷いてきた。まんざらではないといった様子であった。
「それじゃあそれでいいわね」
「ええ」
姉の言葉にこくりと頷く。これで決まりであった。
「それでいいわ」
「お野菜もたっぷりと買って」
「姉さん、卵も」

「雑炊ね」
「それが最後にないと」
「そうよね。やっぱり」
「ええ。最後は」
二人は鍋の最後は雑炊といったグループであった。といっても餅やうどんを入れるのも決して嫌いではない。だがやはり最後は雑炊なのであった。
「卵と」
「お魚がなかったらどうしようかしら」
「その時はあれよ」
それにもにこりと返す。
「鶏肉があるじゃない」
「そうよね」
「そういうこと。だから安心して」
「わかったわ。じゃあ」
そんな話をしながらスーパーに向かう。夕暮れの空気が二人を包み込む。彼女達はその中に姉妹水いらずの時間を過ごしていた。
ロミオはその時も花屋で働いていた。真面目にせっせせっせと働いている。
「よおロミオ君」
店長が彼に声をかける。
「はい」
ロミオはそれに応えて顔を向ける。そうして店長に応える。
「何ですか？」
「今日はもうすぐしたら終わりだから」
「ちょっと早いですね」
「いや、それがね」
店長は太った大柄な男だった。口髭がやけに似合っている。その口髭を綻ばせて言うのである。
「生まれたんだよ」

「お子さんがですか」
「これで三人目な。いや、それで」
左手を頭の後ろに回してにやけながらの言葉だった。嬉しく嬉しくて仕方ないのがよくわかる。彼もそれを隠そうともしていない。
「今日はね。わかるよね」
「はい、それじゃあ」
彼はそれに頷く。そういう事情だったのだ。
「バイト代はそのまま支払うからさ」
「けれどそれって」
「いや、いいんだよ」
しかし店長は言う。
「俺からの気持ちさ。だからさ」
「いいんですか」
「ああ。楽しくやってくれよ、その分でさ」
と言いながら言葉を付け加える。
「といっても二時間がそこらの分だからあんまり多くはないけれどね」
「いや、それは」
口ごもって彼の言葉を言おうとするが店長の言葉はそれよりも早かった。
「いいからいいから。わかったね」
「じゃあ」
「今日はこれでね」
「はい」
こうしてロミオはその日のアルバイトを終えた。意気揚々と家に帰る。しかしその彼に今トラブルが迫ろうとしていたのであった。これは彼にとって思いも寄らぬことであると共に騒動のはじまりであった。

一輪の花　　完

2007・3・15

第四十一話　御前が犯人だその一

御前が犯人だ

ロミオは家への帰り道を歩いていた。そこでセドリックに出会った。

「ああ、君もこっちだったね」

「ああ」

ロミオはにこりと笑って彼に応える。

「君もだったね」

「うん。バイト？」

「花屋のね」

そうセドリックに答える。

「君は？」

「僕は別に何もないよ」

セドリックは笑顔でそうロミオに述べる。

「あちこちをネロと歩いていただけ」

「歩いていたの？本当に」

「そう言われるとね」

苦笑いでそれに応えてきた。同時に首を傾げているのでそうではないということがよくわかる。

「何か寝ている時間の方が多かったね」

「やっぱりね。ネロだから」

「けれどあれだよ」

ここでセドリックはネロのフォローに出てきた。何かと天然でグサリとする突込みを入れることも多いが同じく天然でフォローを入れることも多いのである。

「おかげでよく休めたよ」

「パトラッシュと一緒にだよね」

「うん。アロアも一緒だったよ」

「のどかだよね、それって」
ロミオは彼のその話に顔を綻ばせてきた。
「いい感じに」
「ずっと川辺の土手でね。横になって」
「いいねえ」
ロミオはその話を聞いて何かを懐かしむような顔を見せた。
「そういうのもね」
「今度は君も一緒に寝てみる?」
「うん、時間があったらね」
悪い話ではない。それに応える。
「僕も入れてよ」
「うん」
そんな話をしているうちに夕暮れとなった。辺りが暗くなってきて道行く人の顔もあまり見えなくなってきていた。事件はその時間に起こったのであった。
「ねえセドリック」
ロミオはその暗がりの中でセドリックに声をかけてきた。
「何?」
「何かさ、怪しい気配しないかな」
怪訝な顔で辺りを探りながら彼に囁いてきた。
「怪しい気配?」
「うん、何かね」
そう彼に告げる。
「しない?どう?」
「気のせいじゃないかな」
しかし彼はそうしたものを感じていないのか穏やかな返事であった。
「そうなんだ」
「うん、僕は別に」
「いや、これは」

しかしセドリックは感じていた。明らかに何か空気が違っていたのだ。

辺りを探る。すると暗がりから何かが出て来た。

「なっ！？」

「何、これ」

二人はそれを見て思わず声をあげた。それは得体の知れない怪物だったのだ。

怪物はすぐに二人に襲い掛かってきた。彼等は何とかそれを振り払って逃げ出したのであった。

「セドリック、こっちだよ！」

「う、うん！」

セドリックはロミオに案内されて何とかその場を逃げ出す。ほうほうのていで逃げ出した二人はある場所でやっと落ち着いた。肩で息をしていたが何とか逃げ延びたのであった。

「何だったんだろう、今の」

セドリックは汗を拭きながらロミオに問う。

「さっぱり訳がわからないんだけれど」

「怪物・・・・・だよね」

ロミオは両膝に手の平をそれぞれ置いてふうふう言っている。そのまま呼吸を整えながらセドリックに答えるのだった。

「何かわからないけれど」

「そうだね」

セドリックもそれに頷く。

「逃げた恐竜かな」

「そうかも」

連合においては恐竜もまたペットの中に含まれる。実際に小型のブロントザウルスを飼っている人間もいる。中にはそのままのブロントザウルスを飼っている人間もいる。他には翼竜やカモノハシ竜、剣竜等がある。大型だが案外食事は少なくしかも大人しいので買い易いのである。中にはティラノザウルスを買う物好きもいる。

「まさかティラノサウルスとか？」
セドリックもそえに考えを至らせた。
「若しかして」
「その可能性はあるね」
ロミオもそれに頷く。
「ひょっとしたらだけれど」
「じゃあさ、何とかしないと大変だよ」
セドリックはいよいよ狼狽を見せてきていた。
「さもないと食べられちゃう人が出るかも」
「そうだね」
ロミオはセドリックのその言葉に同意してきた。
「とりあえずさ、僕達は助かったし」
「うん」
「明日から捜索はじめよう、それでいいよね」
「僕はそれでいいよ」
そもそもセドリックが言い出したことである。反対なぞあろう筈がなかった。ロミオの言葉にこくりと頷くのであった。

第四十一話　御前が犯人だその二

「じゃあ今から打ち合わせしよう」
「よし、思い立ったが吉日」
ロミオは顔を上げて言う。
「それでいいよね」
「僕の部屋でね」
「よし」
こうして彼等は一旦セドリックのアパートに入った。そこで怪物対策について細かい打ち合わせに入った。次の日には彼等は早速捜索班を結成していたのであった。
「恐竜、ねえ」
「そうだよ、どうやら逃げ出したらしいんだ」
二人は教室でもヘルメットやら様々な道具を持って捜索隊結成を謳って皆に対して情報収集を呼び掛けていた。その二人を前にしてルビーが呆れ顔で見ていたのである。
「それでなんだよ」
「本当に危ないんだ」
「けれどね。待ってよ」
しかしルビーは必死な二人に冷静な声で述べてきた。
「恐竜よね」
「そうだよ」
「暗がりでよく見えなかったけれど」
「暗がりって」
そこにまず突っ込みどころを見つけたがあえて言わなかった。
「あれは間違いないよ」
「ティラノザウルスだよ、まだ若いみたいだけれど」
ロミオもセドリックももう完全に自分の見たものを恐竜だと信じ込んでしまっていた。人は己の信じたいものを信じる。彼等もまた

それは同じであった。
「そんなの放っておけないじゃないか」
「そうだろう？ルビー」
「確かにね」
ルビーもそれには頷く。しかし納得したわけではない。
「けれどね」
「けれど。じゃないよ」
ロミオがそこに突っ込みを入れる。
「本当に大変なことだから」
「わかって欲しいんだよ」
「わかったわよ」
仕方なくそう返した。
「じゃあ協力させてもらうわ」
少し考える顔をしてから言うのであった。
「それでいいわよね」
「うん、是非」
ロミオが明るい顔で応える。
「これで三人だね」
「頼むよ、ルビー」
セドリックも笑顔でルビーの手を握る。手を握られた彼女は顔を少し赤くさせた。
「あの、ちょっと」
「あっ、御免」
「悪いけれど気をつけてね」
顔を赤らめさせたまま述べる。
「それでね。私の考えだけれど」
「うん」
「どんな考え？」
「いい？ここはね」
ずい、と二人の方に顔を突き出して述べる。

「罠を張るのよ」
「罠！？」
「そうよ」
彼女は今度は胸を張って述べてきた。
「まあ任せて。悪いようにはしないから」
「そんなに言うんだったら」
ロミオとしては反対する理由はなかった。素直に頷いてきた。
「僕は別にいいけれど」
「テンボとジャッキーは呼ばないんだね」
「何であの二人呼ぶのよ」
セドリックの何気ない爆弾発言に思わず顔を顰めさせた。
「話が滅茶苦茶になるし解決しないでしょ」
「いや、罠にさ」
またしてもさりげなく酷いことを言う。
「使うのかなって思って」
「私は鬼じゃないから」
流石にそれは否定する。
「そんなことはしないわよ」
「そうなんだ」
「そうよ」
はっきりと答える。
「だからオーソドックスな罠だから」
「けれどあれだよ」
セドリックはまた言ってきた。結構しつこい感じである。
「やっぱり生身の餌ってさ」
「あんたは鬼かい」
ルビーはセドリックの素朴な毒のある言葉に引いた。額から冷や汗が出て仕方がない。
「それにあの二人今風紀部の監視下だから」
「何だ」

「何だってね」
ルビーも言葉がない。
「とにかく。放課後よ」
「今日のだね」
「ええ。それでいいわね」
そうロミオに問う。それからセドリックにも顔を向ける。
「普通にやるから」
「それじゃあ」
「全く。何をするつもりだったのやら」
「いや、だから生餌で」
「それから離れなさい。それにね」
ここで彼女は二人に告げてきた。
「多分恐竜とかそういうのじゃないから」
「どうかな、それは」
セドリックは今度は善人面になっていた。その顔でルビーに述べるのであった。
「わからないよ」
「そう、わからないわよね」
ルビーもそこを指摘してきた。実は彼女は同じものを見ていたのだ。だがそれへの考え方が違っていたのだ。そういうことであった。二人はやや過剰だったのだ。
「だからよ」
「ううん、どうかなあ」
しかしロミオはそれを聞いてもまだ懐疑的な様子であった。
「上手くいけばいいけれど」
「いくわよ」
ルビーはにこりと微笑んで二人に答える。
「絶対にね」
「一応さ」
ロミオはそれでも不安なのかルビーに対して言う。

「安全は確保しておかないと」
「警棒とかバットは必要だよね」
「まあそれ位はね」
セドリックの提案だがこれにはルビーも同意してきた。考える目で頷いてきた。

第四十一話　御前が犯人だその三

「別にいいわね」
「じゃあ強化スタンガンとか護衛用の武装ロボットとかも」
「・・・・・あんた、そんなの持ってるの」
またしてもセドリックの無邪気な笑顔の下のドス黒さに引く。
「何処でどうやって」
「何でもないよ」
しかし当の本人に自覚はない。勿論自分の黒さにも。
「些細な護身用のね」
「まあいいわ」
怖くなったのでこれ以上は聞かなかった。ビームガン程度は出そうだったからだ。
「とにかく各自警棒とかは持っていてね」
「うん」
「わかったよ」
セドリックはまた善人面に戻った。
「それじゃあ五時半に学校の正門ね」
「了解」
ルビーの言葉に頷く。こうしておおよそのことは決まったのであった。
五時半になった。三人はそれぞれ集まっていた。
皆その手にバットや警棒を持っている。武装して頭にはヘルメットを被っている。もう夕刻で世界が赤くなってきていた。その中で集まったのであった。
「まあこれ位ならね」
ルビーは二人、とりわけセドリックの武装を見てまずは安心であった。
「別にいいわね」

「それでさ、ルビー」
ロミオがルビーに問うてきた。
「罠の用意は何処に？」
「もうお店に頼んでるわ」
「お店に？」
「ええ」
ルビーはにこりと笑って二人に答えてきた。
「お店にね」
「そんなので足りるの？」
セドリックはいぶかしみながらルビーに問うた。
「相手は恐竜だよ。それでお店で買えるものって」
「普通にあるじゃない」
しかしルビーの問いは相変わらずだった。
「だからよ。別に構わないじゃない」
「言われてみればそうだけれど」
それでも腑に落ちないのだ。彼にとっては相手が恐竜、しかも凶暴な肉食恐竜と考えているからかなり警戒しているのだ。そういうことであった。
「それでも」
「気楽そうだっていうのかしら」
「そうだよ」
セドリックは言う。
「相手が相手だから」
「まあ見ていてって」
それでも彼女の態度は相変わらずだ。そのせいでどうにも困ってしまう。
「悪いことにはならないから」
「そう。じゃあ」
ロミオがそれに頷いてみせてきた。
「君に任せるよ。いいね」

「是非お任せあれ」
二人に笑ってこう返す。
「ハッピーエンドはすぐそこよ」
こうしてルビーと二人は穏やかな罠と鶏肉を買ってセドリックのアパートに向かう。そうして程よいところで三人で罠を仕掛けたのであった。
「さて、と」
ロミオは罠を仕掛け終わったところでセドリックとルビーに声をかける。外は完全に真っ暗になっていた。懐中電灯を頼りにした簡単な仕事だった。
「これでいいよね」
「ええ、これで充分よ」
ラフなものだがそれでもルビーは気にも止めない。
「これでね」
「あのさ」
ロミオは罠にとても自信がなかった。だから彼女に問うのだった。
「これで本当にいいんだよね」
「だからいいのよ」
しかしルビーの答えは変わらない。

第四十一話　御前が犯人だその四

「全然平気よ」
「平気なんだ」
「そういうことよ。だから」
「そこまで言うんなら」
その言葉に頷いてみせた。
「任せるって言ったしね」
「そうだね」
セドリックもそれに同意する。
「そう言ったし」
「だから絶対に大丈夫だから」
ルビーの言葉は変わりはしない。
「後は。そうね」
周りを見回した後で述べる。
「あそこがいいわね」
「あそこって？」
「隠れる場所よ」
にこりと笑って二人に答える。
「隠れる場所！？そうか」
セドリックはその言葉にこくりと頷いた。
「罠の前に堂々といても仕方ないしね」
「そういうこと」
これは常識であった。今更言うまでもない程の。
「だから。わかったわね」
「うん」
その言葉にこくりと頷く。
「それじゃあ」
「隠れましょう。いいわね」

「わかったよ」
二人はルビーの言葉に頷き物陰に隠れた。そこからその何物かが出て来て罠にかかるのを待っていたのだ。
「もうすぐだよ」
セドリックは自分の右手の腕時計を見て言ってきた。
「昨日襲われた時間は」
「そうだね」
ロミオも彼に言葉に頷く。
「そろそろだよね。もう暗いし」
「うん。何か昨日よりも日が落ちるのが早いね」
「男心と秋の空」
ルビーは楽しげに呟いてきた。
「秋じゃないけれどそういうことね」
「女心じゃなかったっけ」
「風の中の羽根のの様にいつも変わる男心」
「それも女心だし」
ロミオとセドリックはそれぞれ突っ込みを入れる。
「ちょっと違うよ」
「っていうか正反対」
「女の子も苦労してるの」
アンのアシスタントも務めるからこその言葉であった。
「アンだってね」
「アンはねえ」
「あれはね」
二人もアンのことはわかっている。わかっているからこそ御愁傷様といった感じであった。
「辛いね、どうにも」
「どうにかならないの？ギルバートは」
「どうでしょうね」
ルビーは難しい顔でセドリックに答える。おっとりしたところの

ある彼ですらそうなのだからギルバートがどれだけ鈍いかである。
「気付かないんじゃ」
「気付いていないの彼だけだよね」
ロミオが呆れた顔で述べる。
「やっぱり」
「いえ、多分」
ここでルビーは考える目をしながら言うのだった。
「テンボとジャッキー、フランツは」
「あの三人は別だよ」
ロミオははっきりと言い切った。
「まともなものが見えないし」
「見えない、ね」
「結局あれだね」
三人のことを語ったうえでまた述べる。
「わかっていないのはギルバートだけってことだね」
「バレンタインだけれどね、そろそろ」
実はそんな季節でもある。気が着けばその日になっているのがバレンタインとホワイトデーというものである。これは一大イベントであるが中にはこれの撲滅を叫ぶ男達もいる。誰とは言わないが彼等のクラスではカムイと洪童である。この二人のマイナスの黒いオーラは何処までも強い。
「アンも決められるかしら」
「無理だと思うよ」
セドリックがここで天然の毒を吐いてきた。
「ギルバートが相手だから」
「やれやれね」
ルビーはその言葉を聞いてぼやく。
「困ったわね、これまた」
「それよりもさ」
ロミオが話を戻してきた。

「そろそろじゃないかな」
「んっ！？」
ルビーはそれを受けて罠の方を見る。見れば何か黒くて大きいものが罠の方にやって来ていた。
「来たよ」
セドリックが一転して真剣な声でロミオとルビーに語る。
「遂にだね」
「そうだね」
ロミオもセドリックと同じ顔になっていた。
「いよいよ」
「そうね」
しかしルビーは暢気なものだった。平気な顔でその黒いものを見ていた。
「さて、何かしら」
「だから恐竜だって」
ロミオが彼女に対して言う。
「さっきから言ってるじゃないか」
「しかもティラノザウルスだよ」
実はそう断定はしていない。二人が勝手に思っているだけだったりするのだ。
「全く。さっきから言ってるのに」
「だと面白いわね」
しかしルビーの言葉も調子も変わらない。楽しそうに笑っているだけである。
「鬼が出るか蛇が出るかね」
「まあいいさ」
「とにかくこれで」
罠の中に鶏肉が置かれている。恐竜なら間違いなくかかるレベルである。そう、恐竜ならだ。ルビーは余裕のある顔で罠を見ながらことの成り行きを見守っていたのであった。

第四十一話　御前が犯人だその五

黒いものが近付いてきた。そして。
何とまずは前足で罠を横にやった。慎重に見回してトラップが作動しないところを触ってしてきたのだ。
「えっ」
「そんな・・・・・・」
ロミオとセドリックはそれを見て思わず驚きの声をあげた。
「そうするなんて」
「まさか」
「ふん、やるわね」
驚きを隠せない二人に対してルビーはあくまで冷静であった。どうやらこうなることはある程度見越してのことであるようであった。
「そうするなんて」
「いや、けれどまだ」
「そうだよ」
しかし二人はまだ諦めてはいない。実は鶏肉には眠り薬が仕込んであるのだ。
「あの鶏肉を食べたら」
「それで終わりさ」
「恐竜ならね」
ここでもルビーは何かを見越していたようであった。普通に落ち着いていた。
「そうなるだろうけれど」
「なるって、絶対に」
「そうだよ」
ロミオもセドリックもかなりムキになっていた。しかし彼等自身では気付かないのもまた真実であった。
「恐竜の鼻は確かにいいけれど」

「それでもあの薬は」
見ればその黒いものは鶏肉をクンクンと嗅いでいた。完全に警戒していた。
「無味無臭だからね」
セドリックはそう言った。
「絶対に引っ掛かるよ」
「そうそう、これで終わりだよ」
ロミオもそれに続く。
「これでね」
「あっ」
ルビーは彼等の話を耳に入れはいなかった。相変わらずその黒いものを見ながら声をあげたのであった。
「駄目だったみたいね」
「嘘だよ、そんなの」
ロミオは黒いものが食べなかったのを見てまた驚きを見せてきた。
「そんなのって」
「けれどこれでわかったわ」
「わかったって!?」
「あれ、恐竜じゃないわね」
ルビーはにこりとして二人に言った。
「そうだと思っていたけれどやっぱりね」
「じゃああれは一体」
「あの大きさだと犬ね」
「犬!?」
「ええ」
そう二人に答える。
「間違いないわね。動きから見ても」
「言われてみれば」
「そういえばそうかな」
二人もその言葉に頷く。言われてみればそうした動きであった。

二人の思い込みがやっと解けてきたのであった。実に深い思い込みであった。

「あれは」

「そうでしょ？問題はどんな犬かだけれど」

流石にルビーもそこまではわからない。なお連合の法律では野良犬や野良猫を作ることは法律違反でありこれは中央政府の法律で定められている。理由は動物の生命の尊重と病気を防ぐ為である。野良犬や野良猫が狂犬病のもとになるからである。だから動物を捨てることはご法度となっているのである。

「野良犬でもないし」

「放し飼い！？」

「迷惑だなあ」

三人はそんな話をしながら犬らしきものを見ている。見ればその犬は三人のところにやって来る。

「まずいかしら」

「うん」

「そうみたいだね」

ロミオとセドリックはルビーの言葉に答える。半ば無意識のうちのバットを構える。

「じゃあ」

ルビーもバットを構える。そうして身構えたところで声がした。

「パトラッシュ」

「えっ」

「パトラッシュ！？」

言わずと知れた名前である。二年Ｓ１組のメンバーならばこの名前を知らない者はいない。

「パトラッシュっていうと」

「ネロ！？」

「あれ、君達」

そのネロの声だった。彼は懐中電灯を手に三人のところにやって

来たのであった。
「どうしてここに!?」
「ああ、朝のでね」
ロミオが彼の前に来て説明する。
「朝の?ああ、怪獣がどうしたとか」
「それで罠を張っていたんだよ」
「けれどそんなのいなくて」
セドリックも述べる。

第四十一話　御前が犯人だその六

「いたのは君だったってわけ。それとパトラッシュ」
「そうだったの。怪獣って」
「これでわかったわね」
ルビーもひょっこりと前に出て来た。そのうえで二人とネロに対して語る。
「怪獣の正体はパトラッシュだったのよ」
「そうだね」
「昨日襲われたのもそれだろうね」
「ちょっと待ってよ」
襲われたという言葉を聞いてネロがムッとして反論してきた。
「パトラッシュは人を襲ったりはしないよ。まして僕の友達は」
「それはわかってるわ」
ルビーが彼に答える。
「だからじゃれついたのよね」
「うん」
「パトラッシュだからね」
二人はこれで納得した。実際に今目の前でパトラッシュはネロにじゃれついていた。大きいが実に愛嬌のある姿であった。
「何かよくわからないけれどさ」
ネロは少し拍子抜け気味の二人に対して言った。
「話は終わったってことかな」
「ええ」
ネロにルビーが答える。
「何はともあれ一件落着よ」
「そう。それはよかったね」
「ところでさ、ネロ」
ロミオは話が終わったところでネロにあらためて声をかけてきた。

もう気持ちは幾分切り替えてきている。
「何？」
「その手に持っているのは何？」
見れば彼は両手で紙袋を抱えていた。
「何かの買い物？」
「ああ、これプレゼントなんだ」
彼はこう答えてきた。
「プレゼントっていうと」
ルビーはその言葉を聞いてふと気付いた。
「あれ！？やっぱりバレンタインの」
「そう、それ」
ネロは笑顔で彼に答えてきた。
「それなんだ。相手は」
「アロアだね」
セドリックが笑顔で突っ込みを入れてきた。
「そうだよね」
「やっぱりわかるんだ」
「わかるわよ」
ルビーはネロにそう言ってくすりと笑ってきた。
「簡単にね」
「何か今度のバレンタインも楽しみになってきたね」
「そうだね」
怪獣のことも忘れてセドリックとロミオは楽しく話をする。
「何個貰えるか」
「僕はフィアンセがいるけれどね」
セドリックは楽しくそう述べる。
「彼女からも一個」
「いいなあ」
ロミオはそれを聞いて少し複雑な顔を見せてきた。
「本命がいてさ、君は」

「ロミオだっているじゃない」
しかしここでルビーが彼にそう突っ込みを入れてきた。
「ビアンカがさ」
「それはそうだけれど」
それでも彼の複雑な顔は変わらない。
「どうにもね。ちょっと」
「まあビアンカはね」
ルビーは彼の言葉を聞いて言う。
「両方だから」
「そうなんだよな。男は僕一人だっていうけれど」
女の子は別だというわけだ。彼女は実際には男も女も深くは経験を持っていないがそれでも好きなことは事実なのである、
「どうにもね」
「まあそれはそれこれはこれでさ」
ネロがそう言って慰める。
「割り切っていこうよ」
「君はアロアがいるから」
それでもロミオの割り切れなさは変わらない。言葉にもそれが出ている。
「まあ言っても仕方ないか」
「そういうことよ」
ルビーがいいところで彼女にそう告げる。
「だって。あれよ」
また言う。
「もらえない人も渡せない人もいるんだし」
「ああ、あの二人だね」
セドリックにはそれが誰なのかすぐにわかった。
「洪童とカムイだよね」
「ええ」
セドリックのその突っ込みに大して頷く。

「あの二人よ。さて、何をするかしら」
「それは僕にもわかるよ」
ネロはじゃれてくるパトラッシュをあしらいながら述べてきた。
「また変な組織を作って抗議活動とかしてるよ」
「そうね。またね」
ルビーがそれに返した笑みは困ったようなものではあるが同時に認めて包み込むような笑みであった。少し大人の笑みになっていた。
「困ったことに」
「さて、今度は何をするやら」
「見ものって言えば見ものね」
「そうだね」
ネロとやり取りをしながらその笑みを続ける。何はともあれバレンタインがすぐに迫っていた。即ち新たな騒動の幕開けであった。

御前が犯人だ　　完

２００７・３・２１

第四十二話　チョコレート爆弾その一

チョコレート爆弾

「いいか、諸君！」

バレンタイン前。学園の正門前で拡声機を持って演説をしている男達がいた。

「バレンタインは悪魔の仕業である！」

「聖書にも書いている！」

書いてはいない。誰もそんなことは言っていない。

「よってこの日は何もしないことだ！」

「忌まわしきバレンタインを連合からなくせ！」

演説をしているのは洪童とカムイだ。彼等はムキになって演説をしている。

「悪は滅ぼせ！」

「悪魔よ消え去れ！」

「何やってんだあいつ等」

「何の宗教だ、ありゃ」

生徒達はそんな二人を呆れ顔で見ている。しかしバレンタインという言葉を聞いて今彼等が演説をしている理由がすぐにわかったのであった。

「ああ、それでか」

「もうそんな季節か」

気付いてみればそんな季節だ。バレンタインデーである。元々は日本からはじまったことであるが今では連合全てに広がっている。女の子が男の子にチョコレートを渡す日だ。

「チョコレートを憎め！」

「あれはヒトラーの好物だった！」

ちなみにこれは事実である。ヒトラーは菜食主義者で酒も煙草もやらなかったが甘いものは好きだったのである。

「一悪一滅！」
「恨ミ晴ラサデ置クベキカ！」
「何か予想通りだね」
ロミオは登校して校庭で彼等を見ながら言った。
「かなり荒れて」
「まあいつものことだね」
セドリックがそれを見て彼に応える。
「この時期になるとね」
「そうだね。けれどよく飽きないね」
「だってあれが習性だから」
まるで動物のように言う。
「そう簡単にはなおらないよ」
「困ったなあ」
「いや、別に困りはしないよ」
しかしセドリックはそう述べる。
「どうして？」
「だってさ。放っておけばいいから」
実に身も蓋もない解決方法であった。
「あの二人に関してはね」
「離れていれば何もしないか」
「むしろ近寄った方がね。やばいね」
「やれやれだね」
ロミオはそれを聞いて溜息をつく。
「この時期になるといつもとはいっても」
「風物詩だと思えばいいから」
セドリックはまた述べる。
「結局はそうじゃない。いつものことだって」
「そうか。それじゃあ」
「うん」
二人は洪童とカムイを無視することにした。そのまま通り過ぎて

いったが彼等はそのことに気付くこともなく相変わらずの調子で吼えていたのであった。
「エロイムエッサイムエロイムエッサイム！」
「我は求め訴えたり！」
演説から呪文の提唱になっていた。
「い出よ我が僕よ！」
「邪悪なるバレンタインデーの粉砕を今！」
「何やってるんだ、あいつ等」
そんな二人をクラスメイトたちは呆れ顔で見ていた。
「魔法使いにでもなったのか？」
「というよりあれは」
首を傾げながら話をする。
「何の漫画何だか」
「何はともあれあの二人は相変わらずね」
そんな話をしながら二人を見ている。とりあえず彼等に関しては最早何を言っても無駄といった感じであった。放置するだけであった。

第四十二話　チョコレート爆弾その二

しかし二人はそれに気付くことはない。相変わらず訳のわからないことを続けバレンタインに向けて二人だけで無意味に意気込んでいたのであった。

それは家でも同じだった。洪童の家に集まって二人で不思議な踊りを踊っていた。

「アラビラチャビレ！」

「ドグウヲアガメタテマツレ！」

「兄さん」

そんな二人に対して春香は呆れながらも声をかけてきた。

「今度は何があったのよ」

「わかっていることだ、春香」

洪童が妹に対して述べる。

「一悪一滅」

「バレンタインを征伐するのだ」

「ああ、そういえばもうそんな季節ね」

兄に言われてそのことに気付く。

「早いものね」

「そうだ、だからこそだ」

「俺達は憎むべきバレンタインを滅ぼす為に今儀式を行っているのだ」

（またなのね）

春香は二人の話を聞いて内心こう思った。

（この季節になったら。兄さんたら）

「それで我が愛すべき妹よ」

春香に顔を向けて言う。

「わかっているとは思うが他の男に本命のチョコをやる場合は」

妹の異性関係にはこの上なく厳しい。噂を聞いただけでその男を

徹夜で探し回り追い回したこともある。何処までも極端な兄であった。
「いいな」
「わかってるわ。今年は別に」
いてもこの兄がいる限り渡せはしない。思えば難儀なことである。
「そうか。ならいい」
「同志よ」
カムイが彼に声をかけてきた。
「まだバレンタインを滅ぼすには力が足りないぞ」
「そうだな。それでは」
「あれをやろう」
「あれって!?」
「とっておきの儀式だよ、春香ちゃん」
カムイは春香にこう答える。
「その力を使って今度こそバレンタインを」
「滅亡させてやる」
「ゲームの国じゃないんだから」
春香は二人の言葉を聞いてそう呟いたが二人の耳には入らなかった。
「そんなこと言ってもねえ」
「同志、今こそ我等の力を一つに!」
「おう!二つの一千万パワーが一つになり!」
何処かの古典的名作漫画の影響を受けて叫ぶ。
「一億パワーになる!」
「その力で今度こそ!」
「あれっ」
春香は二人の話を聞いてふと気付いた。
「一千万が二つじゃ二千万なんじゃ」
「気合を入れて二億だ!」
「よし!」

「しかもまた倍になってるし」
さらに話がわからない。しかし彼等はそんなことはお構いなしであった。
「邪悪征伐！」
「正義を再びこの手に！」
そんなことを言い合いながら不思議な踊りと奇怪な呪文を続ける。
彼等はこうして訳のわからないことをしながらバレンタインを阻止せんとしていたのだった。
二月十三日。この日クラスに入ると二人はいきなり叫びだした。
「明日は来ない！」
「絶対にだ！」
黒板の前で宣言してきた。
「今度こそ我等の勝利！」
「正義は守られたのだ！」
「守られたってあんた達」
訳のわからないことを言う二人に蝉玉が突っ込みを入れてきた。
「滅茶苦茶言ってるじゃない」
「俺達は正気だ」
「そうだぞ」
「何処がよ」
蝉玉の突っ込みは容赦がない。その顔を憮然とさせながら二人に言う。
「いっつもこの季節になったら騒ぎだして。何が不満なのよ」
「不満！？大いにあるぞ」
「そうだそうだ」
カムイも洪童も向きになって反論する。
「俺達はバレンタインというおぞましい悪習を根絶する為に動いているんだ」
「名付けてバレンタイン撲滅粉砕壊滅掃討抹殺根絶特別高等常任理事完璧委員会だ！」

「・・・・・何、それ」
スターリングは一度聞いただけではわからなかった。他の皆もである。
「悪いけれどさ、もう一回言って、洪童」
「二度と言えるか」
凄い返事もあったものである。
「つまりだ、俺達はバレンタインを抹殺する為に今ここに委員会を立ち上げたんだ」
「バレンタイン抹殺！」
「それでさ」
蝉玉は呆れ果てながらも二人に質問を続ける。

第四十二話　チョコレート爆弾その三

「ああ、何だ」
「その委員会って何人いるの？」
「俺と！」
「俺だ！」
堂々と名乗ったのは二人だけであった。クラスの誰も名乗ろうとはしない。
「どうだ、恐れ入ったか！」
「控えい控えい！」
「・・・・・よくわかったわ」
蝉玉は呆れ果てるのも通り越して呆然となる。その中で二人に応える。
「どっちにしろバレンタインはなくすのね」
「その通り！」
「バレンタインの圧政に途端の苦しみを味わう民衆の力を今見せてやる！」
完全にかつての独裁国家のように見ている。無論そう思っているのはこの二人だけでだからこそ彼等の異常性が際立つ結果となっている。そういうものを見ながら皆この二人の暴走を眺めていたがそこでセーラが蝉玉とスターリングに対して問うてきたのであった。
「あの」
「どうしたの、セーラ」
スターリングが彼に顔を向けてきた。
「バレンタインというのはどんな邪神なのでしょうか」
考える目で二人に問うてきた。
「カムイさんと洪童さんのお話を聞いていると何か恐ろしい力を持っているようなのですが」
「ああ、あれ単なる馬鹿だから」

蝉玉がまずこう述べてきた。
「考えなくていいから」
「はあ」
「バレンタインっていうのはね」
スターリングが説明する。
「あれなんだ。女の子が好きな男の子にチョコレートをあげる日なんだ」
「チョコレートをですか」
「マウリアにもチョコレートはあるよね」
スターリングは少し不安を感じながらセーラに問うた。連合ではお菓子の代表の一つであるがひょっとするとマウリアにはないのかも知れないと思ったからだ。
「はい、あります」
しかしそれは杞憂だった。セーラの返事はこうであった。
「それをプレゼントするんですか」
「うん、男の子はそれにお返しする」
「キャンデーとかマシュマロとかね」
蝉玉がにこりと笑いながら述べてきた。
「それがまた楽しみなのよ」
「マウリアにはそういうのはないんだね」
「そうですね、少なくとも私の星ではありません」
セーラはこう答えてきた。
「それでも面白いですね。好きな方にチョコレートをプレゼントするなんて」
「義理も多いけれどね」
実際はそっちの方が遥かに多いのはこの時代でも同じである。
「けれど実際にプレゼントする場合もあるわよ」
「蝉玉さんもですか？」
「私！？」
「はい。だってスターリングさんは」

「まあね」
図星であった。それを言われて少し苦笑いになる。
「一応そのつもりだけれど」
「お返しはキャンデーでいいよね」
スターリングも蝉玉に顔を向けて問うてきた。
「それで」
「ええ、いいわ」
実は彼女はキャンデーが好きだったりする。願ってもないプレゼントであった。
「お願いね」
「うん」
「わかりました。好きな人にですね」
セーラはそれを聞いて何かを考えたようであった。少し知的で優雅な笑みを浮かべてきた。
「それでは」
「それではってセーラ」
蝉玉は彼女に顔を向けて問うてきた。
「一体何を考えてるの？」
「ですから好きな方にですので」
女神の如き済んだ笑みだが何かがありそうであった。
「ですから」
「ううん」
「それはそうだけれど」
二人はその笑みを見て何故か悪寒を感じた。

第四十二話　チョコレート爆弾その四

「何かねえ」
「わかったよね、バレンタイン」
「はい」
二人の不安げな顔に対してセーラは微笑んだままであった。その気品のあるにこやかな笑みを見ても二人の不安は消えない。むしろ増す一方であった。
二人の不安は的中することになる。遂にバレンタイン当日となった。
「お、おのれ！」
「これはどういうことだ！」
カムイと洪童が叫んでいた。
「バレンタインが来た！」
「何故だ！」
「当たり前でしょーーーーが」
そんな二人に蝉玉が冷ややかな声をかける。
「何でバレンタインを壊せるのよ。できるわけないでしょ」
「おのれ、憎むべきバレンタイン」
「来年こそは」
「はいはい、頑張りましょうね」
蝉玉はそんな彼等に対してあまりにもぞんざいな言葉をかける。
「義理チョコあげるから」
「所詮義理だ」
「俺達には光なぞない」
「ホワイトチョコだから」
あまり的を得ているような、それでいて全然得ていないような言葉だった。それを二人にかけながら鞄から何かを取り出してきた。
二枚の板チョコであった。

「はい、これあげるから落ち着きなさい」
「ううむ」
「まあいいか」
二人はそれで納得することにした。そのホワイトチョコを食べていると他の女の子達も彼等にチョコレートを渡していく。何だかんだで嫌われていない二人であった。
その二人だけがバレンタインではなかった。当然それぞれのバレンタインがあった。
「はい」
蝉玉は今度はスターリングにチョコレートを渡していた。とりわけ大きく豪華なチョコレートであった。彼の席の前に座って差し出してきたのだ。
「今年のチョコよ」
「有り難う」
スターリングはにこやかに笑ってそのチョコレートを受け取る。見ればハート型の大きなチョコレートであった。ホワイトチョコで丁寧に文字まで書いてある」
「スターリング大好きって」
「駄目かしら」
その文字を見せてスターリングに問う。
「これといった言葉が思い付かなくて書いたんだけれど」
「いや、凄くいいよ」
彼の心の琴線に触れる言葉だった。
「有り難う、こんなのくれて」
「気に入ってくれたのね」
「だってさ。好きって言われたらやっぱり」
スターリングはにこやかに笑ってそう述べる。
「悪い気はしないよ。そうじゃない？」
「そうね」
蝉玉はそれは同じだ。

「じゃあ私も。わかるわよね」
「うん」
スターリングはにこりと笑ってまた言う。
「はい、これ」
今度は彼が出してきた。それはやはりキャンデーだった。
「見て、これ」
「透明な中に赤い文字が書かれてるの」
「そこに秘密があるんだ」
蝉玉に渡しながら述べる。
「読んでみて」
「ええと」
トッピングされた袋の中にあるそれは一見だけでは少しわからない。しかし慎重に読んでいくと何が書かれてあるのかわかった。
「親愛なる蝉玉へ、ね」
「そうだよ」
その笑みを蝉玉に向けてきた。
「それでいいよね」
「有り難う」
蝉玉はにこりと笑ってそれに返す。
「喜んで食べさせてもらうわ」
「うん。それじゃあ僕も」
二人の中はかなりよかった。その横ではルシエンがアンネットからチョコレートを受けて上機嫌でいた。
「嬉しい？」
「嬉しくないわけあるかよ」
彼は真剣な顔で述べてきた。
「御前のチョコレート、喜んで食べさせてもらうぞ」
「それはいいけれど」
しかしアンネットは少し不満なようであった。
「ちょっとこれは」

「どうしたんだ？」
「これはちょっと」
自分の手の中にあるものを見せてきた。それは巨大なケーキであった。
「お返しよね」
「ああ」
ルシエンは彼女に顔を向けて答える。
「そうだ、是非受け取ってくれ」
「ちょっと大き過ぎない？」
そう彼に問う。
「これはちょっと」
「駄目か？」
しかし彼はわかってはいない。逆に問う顔を見せてきた。

第四十二話　チョコレート爆弾その五

「俺の誠意なんだが」
「私に、なのよね」
「不服だっていうのならまた作るが」
「いえ、いいわ」
それは止めた。流石に食べきれないと思ったのだ。それ以前に持ち帰られない。
「これで充分だから」
「そうか。それじゃあ」
「ええ。けれどルシエン」
ここでアンネットは何とか落ち着きを取り戻してルシエンに述べてきた。
「これ私一人で食べるんじゃなくてね」
「ああ」
「ルシエンと二人で食べたいけれど」
こう提案してきた。実は戸惑いながらも嬉しかったりするのだ。彼の心が伝わったのは確かだからだ。そのことは素直に嬉しかったのだ。
「いいかしら」
「いいのか？それで」
「ええ。それでいいわよね」
また彼に問う。実は結構真剣だったりする。
「二人で」
「わかったよ。それじゃあ」
「うん」
二人は仲良くチョコレートとケーキを食べはじめた。何だかんだでルシエンはかなりいい雰囲気を作っていた。当然ながらカムイと洪童はそれを見て拒絶反応を見せてきていた。

「おのれ、どいつもこいつも」
「何という破廉恥な」
義理チョコをバリバリと噛み砕きながらクラスメイト達がいちゃつくのを見ている。実に人間的であると同時にエキセントリックな光景であった。
「こうなればやはり我等が」
「今こそブードゥーの秘術を」
「どうされたのですか？」
そんな二人にセーラが声をかけてきた。
「ブードゥーがどうとか」
「あっ、別に」
「何もないから」
二人はセーラの姿を見ると急に大人しくなった。彼女の異次元的な術は二人もよく知っていた。だからすぐに暴発しような激怒を引っ込めたのであった。
「気にしないでいいよ」
「なあ」
「そうですか。それでは」
セーラはそれを聞いてにこやかに笑う。それから懐から何かを取り出してきたのであった。
「はい」
「！？何これ」
「ええと。やたら丸くて大きいけれど」
ルネサンス期の砲弾のような巨大な黒く丸いものであった。二人はそれを見て目を丸くさせていた。何が何なのかわからなかった。とりあえずまともなものではないのがわかるがそれは口には出せなかった。出してはいけないのは嫌でもわかっていた。
「何なのかな」
「よかったら教えて」
「チョコレートです」

セーラの答えはバレンタインでは普通のものだったがその巨大なものの前では無茶苦茶なものだった。事実二人は最初の言葉を信じてはいなかった。

「ベッキーが術で作ってくれたものです」

「丹精込めて作りました」

「はあ」

「さよですか」

ベッキーのにこりとした微笑みの裏には何があるのかわからない。直感がそう告げていた。しかし貰ったチョコレートは食べなくてはならない。その鉄の戒律には従わなくてはならなかったのだ。

「どうぞ召し上がって下さい」

セーラはにこりと笑って二人に言う。

「ささ、遠慮なさらずに」

「わかりました」

「それじゃあ」

二人はいささか力なくそれに頷く。そうしてそのチョコレートを食べはじめた。

「ぐ、ぐわあああああああああっ！」

「な、何じゃこりゃあああああああああああっ！」

食べた途端に絶叫をあげて倒れ込む。恐ろしい光景であった。

しかしその光景はセーラ達には見えない。彼女達はそのままその巨大な爆弾か砲弾の如きチョコレートを皆に渡していく。そうしてそのままクラス中を屍の山に変えていったのであった。バレンタインは瞬く間に屍の山となり倒れこむ死体で満ちる惨状となってしまったのだ。だがそれもセーラ達には見えはしない。

「何か急に静かになったけれど」

その光景を見て管はふと呟いた。

「どうしたの？」

「あら、管さん」

セーラは管にも顔を向けてきた。

「貴方にもお渡ししたいものがあります」
「それは何かな」
「これです」
にこりと笑って懐からあの巨大なチョコレートを手渡してきた。
「バレンタインのチョコレートです」
「これだね」
「はい、どうぞ」
「うん」
表情を変えずにその言葉に応える。カムイや洪童とは対応が全く違っていた。
「面白い形のチョコレートだね」
「御気に召されましたか？」
「そうだね」
感情があるのかどうかわからない声で応える。だがセーラも動じてはいない。二人共半端ではないレベルで大物なのがその応対でわかる。違う意味でだが。

第四十二話　チョコレート爆弾その六

「美味しそうだね」
「勿論です」
セーラはその言葉ににこりと返す。
「私も味見をしましたがこれはかなり」
「美味しいんだ」
「ベッキーの作ったものです」
後ろに控えるベッキーの方を振り向いてにこりと笑う。
「どうぞ召し上がって下さい」
「うん」
それに答えてその爆弾のようなチョコレートを受け取る。そのまま食べだした。
かなり固そうだが彼は気にはしていない。いつもの無表情のまま食べだす。ガリゴリと音を立てた後でセーラ達に向き直るのであった。
「如何ですか？」
「美味しいよ」
やはり表情を変えずに答える。
「甘いね」
「マウリアの甘さです」
セーラはにこりと笑って管に答える。
「御気に召されたようで何よりです」
「そう。これがマウリアの」
セーラの言葉を聞いて呟く。
「そうだったんだ」
「そうです。砂糖も特別で」
マウリアの砂糖のようだ。相当なものらしいというのがわかる。
実際にカムイや洪童が倒れて動かなくなったことからだ。どんな砂

糖なのか想像もつかない。
「他にはミルクに蜂蜜も」
「バランスよく作り上げてみました」
ベッキーの言葉はマウリアの基準である。
「如何でしょうか」
「美味しいね。幾らでも食べられるよ」
「そんなにですか」
言われてかなり嬉しいようである。
「そこまで言って頂けると励みになります」
「バレンタインの話を聞いて思い立ちましたの」
セーラがまた述べてきた。
「マウリアのとっておきのチョコレートと思いまして」
「成程」
「では女の方々にもお配りして」
「女の子にもなんだ」
これは少し違うと思ったが言わなかった。マウリアではそうではないのかと思ったからだ。しかしそれは違っていたりする。そのことにセーラは気付いてはいなかった。
「そうです。ですから」
これが阿鼻叫喚のはじまりであった。皆そのチョコレートを食べてあまりもの甘さに卒倒した。皆それから生き返るのに随分時間がかかった。
「え、えらい目にあったわね」
ナンシーもその犠牲者の中にいた。その暴力の如き甘さのチョコレートを食べて自分の机の上で倒れていたが何とか復活した。そのうえでの言葉だった。
「とにかく」
呟きながら席を立つ。するとそこにマルティがやって来た。
「生き返ったみたいだな」
「何とかね」

そう彼に返す。
「貴方はどうなの？」
「今復活した」
マルティはそう彼女に答えた。
「苦労した」
「マウリアじゃあれが普通なのかしら」
「そうらしいわね」
マルティに答える。
「信じられないけれど」
「まあその国それぞれ」
それがマルティの言葉だった。
「だから気にしない気にしない」
「わかったわ。それじゃあ」
「待った」
行こうとするナンシーを呼び止める。
「何処へ行くんだい？」
「何処だっていいじゃない」
何か必死に隠し事をしているようだった。だがあまりにも演技が下手なので彼にはすぐにわかった。そもそも彼女のことは知っているのだ。
「別に。そうでしょ」
「それはそうだけれど」
「それとも何？」
つっかからなくてもいいのにつっかかる。
「私が何か隠し事をしているっていうの？」
「いや、今自分で言ったよ」
「うっ・・・・・」
見事な自爆だった。
「それはその。あのね」
「行くんなら行けばいいよ」

彼は言う。
「早くさ」
「わかったわ。それじゃあ」
マルティは止めない。止めるどころか行くように言ってきた。
「今から行くから」
「それにしてもさ」
「今度は何よ」
またマルティの言葉に顔を向ける。やはり演技はかなり下手だった。そもそも隠し事そのものが信じられない程下手であった。これも一種の才能ではないかと思える程に。
「隠した方がいいよ」
そう言うのだった。
「丸わかりだから」
「ううっ、けれど」
これには反論できなかった。実に辛い。
「まあ頑張ってね」
しかし彼はそれ以上は言わなかった。
「それじゃあ」
「わかったわ。有り難う」
「うん」
これで彼はナンシーから離れた。ナンシーは彼を見送ってから意を決した顔でその場を後にした。
「これでやっと」
一人小さな声で呟く。呟きながら何処かへと向かうのであった。

チョコレート爆弾　　完

2007・3・27

第四十三話　ナンシーのプレゼントその一

ナンシーのプレゼント

ナンシーが教室を後にしていく。しかしそれはフランツによって見られていた。彼はあまりにも頑丈な為セーラのチョコレートにも平気であったのだ。

「どうしたんだ、あれは」

「どうしたのはあんたよ」

すぐにパレアナから突っ込みが入る。

「何で平気なのよ」

「平気!?何がだ」

しかし彼はわからない。全く平気な顔のままであった。

「何がってチョコレートよ」

「美味いな」

皆からの義理チョコを食べながら応える。よく見れば幾つも食べているがそれに対しても全く平気といった感じのままであった。

「それがどうかしたのか？」

「あんたのお腹はどうなってるのよ」

「何が何なのか」

わからないといった顔を見せてきた。

「俺には全く訳がわからないぞ」

「セーラのチョコレート食べたわよね」

業を煮やしたのか直接出してきた。

「それでどうして平気なのよ」

「美味しかったぞ」

セーラのチョコレートに対しても述べる。

「甘くてな」

「そう、甘かったの」

「ああ。辛くもすっぱくもなかった」

そうしたチョコレートがあればかえって凄いがフランツは言うのだった。
「苦くもなかったじゃないか」
「そうなの」
「そうえば皆あれだな」
ここでやっとクラスの惨状に気付く。
「昼寝をして。一時休息か」
「あんたには昼寝に見えるのね」
「違うのか？じゃあ一体」
「ああ、もうそういうことでいいから」
話しても無駄だとわかったのでこれ以上は言わなかった。
「わかったから。そういえばさ」
「ああ。どうした」
パレアナは話を変える。フランツもそれに応える。
「また随分と貰ってるわね」
見れば机の上に山盛りになっている。彼はそれを黙々と食べているのだ。
「やっぱりあれ？野球部のエースだからかしら」
「いや、これは二人分だ」
「二人分？」
「タムタムとな。二人の分だ」
「そうだったの」
だから多かったのだ。パレアナはそれを聞いてまずは量に関しては納得した。だがそれでも納得できない部分もある。今度はそれを問うてきた。
「それでもさ」
「ああ」
「何であいつのもあるわけよ」
「それは簡単なことだ」
彼はその質問にも答えてきた。

「俺達はバッテリーだ」
「そんなこと言わなくても誰も知ってるわよ」
何を今更といった感じだった。実際にそんなことは誰でも知っていることだ。パレアナは目を剣呑にさせて言葉を返してきたのであった。
「それがどうかしたの？」
「だからだ」
しかし彼は言う。
「俺達は一心同体、ならば食べるものも同じなのだ」
「意味がわからないわよ」
本当に意味がわからない。パレアナはさらに文句をつける。
「何が何なのか」
「俺のものはタムタムのもの、タムタムのものは俺のもの」
今度はこう言ってきた。
「それでわかるか」
「ああ、そうなのね」
そう言われてやっとわかった。フランツの訳のわからない力の篭った言葉のせいである。流石はクラスどころか学校きっての無意味な熱血であった。
「わかったわ」
「わかってくれたか」
それを聞いて満足そうに頷く。
「それじゃあ食べるぞ」
「言わなくていいから。そんなのは」
「そうか」
「それでさ」
また話を変えてきた。
「何だ？今度は」
「さっきナンシーがどうとか言ってたけれど」
「ああ、それか」

その言葉を聞いて思い出す。実は今まで完全に忘れていた。
「彼女がどうしたの？」
「いや、実はだ」
フランツはパレアナに対して言う。
「教室を出た」
「それだけ！？」
「ああ、それだけだが」
「何だ」
話を聞いて拍子抜けしてしまった。何かと思えばそんなことだった。
「何でもないじゃない、それって」
「それを言おうとしたんだが」
「じゃあさっさと言いなさい」
「御前それは滅茶苦茶じゃないのか？」
「まあそれはね」
何か彼女の方が分が悪くなっていた。それも当然であった。言っていることが半ば逆キレであったからだ。フランツでなくともそう言う。
「悪いけれど」
「だがナンシーだ。何もないぞ」
少なくとも彼はそう見ている。
「そうだろう？彼女に限って」
「そうね」
そしてパレアナもそう見ていた。二人共ナンシーの秘密の彼氏には気付いていなかったのだ。それだけナンシーが今のところ目立ってはいなかったのだ。
「とりあえずだ」
「何？」
フランツは話を変えてきた。パレアナはそれに心を向ける。
「御前本命いるのか？」

かなりダイレクトに問うてきた。
「いたら別にいいが」
「今のところはいないわ」
パレアナはそう返してきた。
「別にね。これといって」
「そうか」
「そうよ。そう言うあんたはどうなのよ」
「俺の恋人か？」
（しまった）
その質問をしてしまったことを後悔した。彼が何を言うのかわかっていたからだ。だがもうこうなっては止まらなかった。暴走機関車だった。

第四十三話　ナンシーのプレゼントその二

「それは決まっている」
胸を誇らしげに反らして言ってきた。
「俺の恋人は野球だ！」
（やっぱりね）
心の中で溜息と共に呟く。
「それ以外にない！俺は何処までも投げ続けるぞ！」
「聞きたいけれどさ」
かなりうんざりしていたがそれでも聞いた。
「野球がチョコレートをくれる？」
かなりぶしつけな質問だった。
「チョコレートをか」
「あんた人間の女の子には興味ないの」
「ある」
一応はそう答えてきた。
「しかしだ。俺はそれよりも野球だ」
彼は断言する。
「野球は俺に夢を与えてくれる。果てしない夢をな」
「そうなの」
「そうだ、白球は永遠の夢だ」
彼の演説は続く。
「俺は何処までも投げる。永遠の夢をその手にしてな」
「それで何処まで投げるの？」
（あちゃ～～～）
またいらんことを言ってしまったと思った。彼の暴走に火を点けるだけだった。
「球汚れなく道険し！」
こうも言う。

「俺は投げ続ける！何処までも！」
「ああ、そうなの」
「そうだ！だからこそ俺は！」
またチョコレートをかじりだす。
「何があってもだ！いいな！」
「そのまま一人でいくつもり？」
「いや」
それは否定する。彼も野球はわかっていた。
「九人だ。そうだ、九人のボールの痣を持つ男がだ！」
「それ何て漫画？」
思わずそう突っ込んだ。
「よくわからないけれど」
「わからないのか。なら」
「ああ、もういいから」
いい加減話を打ち切ってきた。キリがないからだ。
「話はそれ位にしてね」
「何だ、これからだというのに」
フランツはパレアナの話を聞いて急に詰まらない顔をした。
「いいのか」
「いいわよ。それよりもね」
パレアナは言う。
「あんたへの義理チョコだけれど」
「ああ、くれるのか」
「それが決まりでしょ」
そうフランツに返す。
「だからよ。いいわね」
「わかった。じゃあ是非」
さっと手を差し出してきた。もらうつもりだった。
「一枚な」
「わかったわ。はい」

パレアナもチョコレートを出してきた。それは一枚の板チョコであった。
「義理チョコね」
「ああ、有り難う」
「青チョコよ」
青いカカオから作られたチョコレートである。ブラジルのサンロヨラ星系等でよく採れる青カカオがとりわけ有名である。味は白チョコよりも爽やかな味だ。
「青チョコか」
「嫌い？」
「いや、大好きだ」
フランツはにこりと笑って述べた。
「悪いな。青チョコは身体にいいからな」
「甘さ控えめよ」
「なおいいな」
フランツはにこりと笑ってきた。彼の好みというだけでなく実際にチョコレートのカカオは身体にいい。それが彼の機嫌をよくさせていたのだ。
「それは」
「そうでしょ。それにしても」
パレアナはふと思い出したことがあった。首を少し右に傾げさせている。
「ナンシーのチョコレートは何だったの？」
「んっ！？ナンシーか」
「そう。どのチョコレートだった？」
「これだ」
出してきたのは赤いチョコレートであった。パレアナはそれを見て言うのだった。
「これがナンシーの」
「やっぱり義理だぞ」

「そうでしょうね」
その言葉に頷く。見れば普通に店に売られている感じのチョコレートであった。パレアナはそれを見てまた思うことがあったのであった。

第四十三話　ナンシーのプレゼントその三

「けれど」
「何かあるのか？」
「ええ。何かなおざりでしょ？」
「義理だとそうだよ」
「いえ、ただよ」
女の勘が少しずつであるが動き出していた。パレアナ本人もそれを自覚しだしていた。
「あんたの話聞いてるとね」
「何かあるのか？」
「うん、ナンシーって妙にいそいそしてる感じもするのよ」
そう述べる。だがフランツにはその自覚は今一つない感じだった。
「そうか？そうは思わないが」
「私の気のせいかしら」
「きっとそうだ。ほら」
今パレアナから貰ったチョコを早速食べだしていた。そのうちの一片を彼女に渡してきたのだ。
「御前も食べろよ」
「悪いわね」
「悪いわねって元々御前のだろう？」
笑って言葉を返す。
「俺はそれを少し返しただけだ」
「何だ、意外とわかってるじゃない」
そんな彼のチョコレートを受け取って言う。
「女心ってやつが。只の野球馬鹿かって思ってたけど」
「野球馬鹿か。いい言葉だな」
「あら、そうだったの」
その返事にまた笑ってみせた。

「悪口で言ったのに」
「俺に悪口は通用しない！」
これは本当のことだ。悪口や野次程度で崩れる男ではない。だからこそ天才ピッチャーと言われているのである。ピッチャーとして必要な要素は肝っ玉もあるのだ。
「それに俺は野球に命を賭けている！」
またそこに話がいく。
「だからこそ！野球馬鹿は最高の褒め言葉だ！」
「やれやれ」
結局最後のフランツに戻った。パレアナはそんな彼の姿を見て呆れたように苦笑いを浮かべて溜息をつくのであった。やはりフランツはフランツであった。
こっそりとクラスを出たナンシーは辺りを必死に探っていた。まるで何かを怯えて警戒しているかのようであった。
きょろきょろと探っている。そのうえで慎重に先を進む。かなり不審な様子であった。
その不審な様子で道の端に来た。そのまま学校の体育館裏に辿り着くとそこにあの後輩がいた。彼の姿を認めて顔を急に明るくさせる。
「お待たせ」
「はい」
後輩は緊張した面持ちで彼に応える。
「御免なさいね、こんな場所で」
ナンシーはまず彼に謝罪してきた。
「こっそりだなんて。やっぱり人目がね」
「いえ、いいです」
しかし彼は強張った顔に笑みを作って述べる。
「先輩は僕のことを心配してですから」
「いえ、それは違うわ」
だがナンシーはそうではないと言う。視線を下に落としていた。

「だって。私」
彼の前ではクラスでは決して見せない顔になる。かなり女らしい。
「人に見られるの恥ずかしいから」
彼から顔を背ける。本気である。
「だから」
「そうだったんですか」
「ええ。御免なさい、私の我が儘のせいで」
「いえ、いいです」
しかし彼はそんなナンシーを受け止めるのだった。
「だって僕が告白したんだし」
馴れ初めのことを言い出してきた。
「あの時先輩に声をかけて」
「それはそうだけれど」
そうはいってもナンシーの表情は変わらない。憂いの強い顔である。
「私も。その」
恥ずかしげに言う。
「貴方だからなのよ。だって」
「好きなんですか」
「ええ」
自分でそれを告白する。
「私。告白されたのはじめてだったし。それに、その」
「その？」
「最初見た時からだったし。貴方のこと」
「そうだったんですか」
「そうよ」
こくりと頷いてきた。顔がかなり赤い。
「だから。ね」
そしてまた彼に声をかけてきた。
「いいかしら」

「今日はバレンタインですよね」
「そうよ。それで」
何か言葉が堂々巡りになろうとしていた。それでも言うのだった。
「いいかしら」
「チョコレートですか」
「ええ。貴方の為に作ったの」
俯いて述べてきた、
「いいかしら」
「そのチョコレートは」
「はい」
それに応えて出してきたのはかなり大きなハート型のチョコだった。豪華な装飾までされている。絹のリボンまでされている。赤とピンクの装飾だった。
「これ」
「これですね」
「そうなの。ずっと徹夜で作ったの」
顔を真っ赤にして俯いて言うのだった。
「よかったら。一口だけでも」
「一口だけなんて」
しかし彼はそんなナンシーに言葉を返してきた。
「とんでもないですよ。先輩が僕の為に作ってくれたんですよね」
「そうよ」
顔は俯いているが恥ずかしがっているのはわかる。手まで真っ赤になっていたからだ。

第四十三話　ナンシーのプレゼントその四

「貴方の為だけに。だから」
「わかりました」
後輩はその言葉ににこりと笑って応えてきた。
「それじゃあ」
「有り難う」
受け取ってもらった。ナンシーは自分の手からチョコレートが離れたのを見てその顔をさらに緩めるのだった。心から嬉しそうな顔で。
「よかった。受け取ってもらって」
「受け取らない筈がないですよ」
彼も笑顔のまま言う。
「だって。先輩の気持ちが僕だけに」
「貴方以外見ないわ」
こうまで言ってきた。
「だって。だから」
「食べて欲しいんですね」
「よかったらよ。多分味かなり酷いし」
「そんなことないと思いますよ」
彼はまた言った。
「どうしてそう言えるの？」
「先輩の気持ちの味がしますから」
「私のって・・・・・そんなこと言っても」
「食べるんですよね」
またナンシーに問う。
「いえ、食べていいんですよね」
「お願い」
真っ赤な顔のままで応えてきた。

「だから。本当にね、一口で」
「はい」
その言葉に応えてラッピングを外す。赤とピンクの紙の装飾からダークブラウンのチョコレートが姿を現わしてきた。それを見てナンシーの方が息を飲んでいた。
「いよいよなのね」
「ええ」
「本当にまずかったら止めていいから」
念を押してきた。
「ね。本当に」
「ですから大丈夫ですって」
念を押してきた。
「ほら」
一切れ割って口の中に入れた。
「美味しいですよ」
「本当!?」
その言葉に顔を晴れやかにさせた。
「美味しいの!?本当に」
「はい」
満面の笑顔であった。その笑顔が何よりの証拠であった。
「とても。甘くて牛乳の味がして」
「それね。苦労したの」
また顔を赤くさせて述べてきた。
「チョコレートの中に牛乳入れるの。加減が難しくて」
「そうなんですか」
「けれどよかった。上手くいったみたいね」
そのことにまずはほっとしていた。
「美味しかったみたいでよかったわ」
「はい、美味しいです」
「クラスの皆にもあげたけど」

「えっ」
彼はこの言葉にはかなり慌てた。
「皆って」
「馬鹿ね、義理チョコよ」
それはちゃんと断る。
「安心して。いいわね」
「そうだったんですか、よかった」
「貴方以外にこんなに凝ったチョコレート渡さないわよ」
照れながら答える。顔がお酒を飲んだ時より赤くなっていた。
「わかるでしょ、もうそれは」
「はい」
その言葉にこくりと頷く。
「本当によく」
「だかだよ。それは安心して」
「わかりました。それにしても」
「何？」
ナンシーは彼の言葉にまた顔を上げてきた。
「先輩料理の才能ありますね」
「そ、そうかしら」
その言葉にまた頬を赤らめさせてきた。
「それだったらいいけれど」
「ええ、他にもお菓子作れます？」
「ええ」
その言葉にこくりと頷く。実はお菓子を作るのも食べるのも結構好きなのだ。けれど誰かの為に作ったのははじめてだったのだ。
「よかったら」
「はい、お願いします」
にこりとしてナンシーに述べる。
「先輩のチョコレートだけでなく」
「いいの？私のなんかで」

「先輩のだからですよ」
戸惑うナンシーに笑顔で言う。
「だから」
「わかったわ。それじゃあ今度はね」
「今度は」
ナンシーの言葉を待つ。とても恥ずかしくてたまらないナンシーがたまらなくいとおしい。そのいとおしさを隠せないまま彼女は答えるのであった。
「ケーキでどうかしら」
「ケーキ!?」
「そうよ」
彼女は答えた。
「クリームをたっぷり使ったフルーツケーキ。どうかしら」
「いいですね、それ」
フルーツケーキという言葉に顔を晴れやかにさせた。
「それじゃあそれお願いします」
「わかったわ。じゃあ今度はそれね」
「はい」
にこりとした笑みをナンシーに返す。
「それでお願いしますね」
「ええ。じゃあ」
真っ赤な顔で言うナンシーであった。約束をした後でそっとそこから立ち去る。残念ながら二人別々であった。ナンシーも彼もそっそりとその場を後にしたのであった。
「ふう」
一人になったナンシーはほっと息を吐き出す。緊張を解くことがやっとできたという感じであった。やはり密会にかなり緊張していたのだ。
「何処行ってたの?」
「えっ!?」

何とそこに彰子がいた。きょとんとした顔でナンシーを見ていた。

第四十三話　ナンシーのプレゼントその五

「な、何でここに」
「お散歩してたんだけれど」
「そ、そうだったの」
そのおっとりとした顔を見てもまだ驚きを隠せない。確かに彼女はかなりのおっとりである。しかしそれでも狙ったかのようにここにいるのが信じられなかったのだ。
「お散歩、ね」
「ナンシーちゃんも？」
「えっ」
この言葉にまた戸惑いを見せる。
「私も！？」
「あれ、そうじゃないの」
彰子はその言葉にかえってキョトンとしていた。
「だからここに」
「あっ、そうなのよ」
普通の人が聞けば呆れる程下手な演技で返してきた。
「そうなの。ちょっとお散歩にね」
「そうよね。ここ凄く雰囲気がいいから」
「まあね」
よく見ればお花畑もありかなり奇麗だ。その奇麗な花を見ての彰子の言葉だった。
「いえ、そうね」
また慌てて言葉を訂正する。今のは明らかにおかしな言葉だった。
「そうね。本当に」
「ナンシーちゃんもお花好きなのね」
「ええ、大好き」
ナンシーはにこりと笑って彰子に答えた。ここでさりげなく彼女

に問うた。
「それでね」
「何？」
「彰子ちゃんはどうなの？」
「私がどうかしたの？」
「いやね、バレンタインじゃない」
今の彰子の言葉には正直焦った。幾らおっとりしているとはいえあまりにもあれな言葉だったからだ。これにはナンシーでなくとも驚いたであろう。
「あっ、そうだったわね」
彰子も言われてやっと思い出したようであった。
「そういえば」
「そうよ。勿論買ってるわよね」
不安げな様子で彰子に問う。
「ちゃんと皆に」
「うん」
その言葉にこくりと頷いてきた。一応は用意はしているようであった。
「そういえば皆に配ったわ」
「そういえばなのね」
何かその言葉に釈然としないものがある。しかし今はそれはよしとしたさらに問うのだった。
「まあいいわ。それで」
切込みを本題に入れてきた。
「誰に本命あげたの？」
「えっ」
その言葉に驚いた顔で応える。
「誰って」
「私だって・・・・・・あっ、いや」
慌てて自分の言葉を止める。また危うく言ってしまうところであ

った。
「何でもないわ、何でも」
「そうなの」
「そうよ。何でもないから。独り言よ」
またしてもかなり下手な演技だったがそれでも彰子にはわからなかった。こうした時に彼女のかなりの天然が役に立つのであった。それはナンシーにとって幸運であった。
「独り言だから」
「わかったわ。それじゃあ」
彰子は頷いた。やはり気付いてはいなかった。
「また」
「またって」
ナンシーはまた彰子に顔を向けてきた。
「本命の人いないの？」
「全然」
いても気付いていなさそうな顔であった。
「何となくだけれど」
「そう、何となく」
何かよくわからない言葉であった。実際に言っている本人もわからないといった様子であった。それにも気付いていなさそうであった。
「何となくなのね」
「うん」
「まあいいわ。多分よくあることだから」
「そうなの」
「多分だけれどね。それでどうするの？」
「ううん、今のところあまり興味ないかも」
いつものおっとりした調子で述べる。
「とりあえずは」
「そうなの」

「うん。とにかく今はお散歩しない？」
逆にナンシーに言ってきた。
「時間もあるし」
「別にいいけど」
特に困ったことはない。それで応えてきた。
「それじゃあ」
「わかったわ。一緒にね」
にこりと笑って彰子に頷く。そのまま彰子と二人散歩をはじめるのであった。
とりあえずナンシーのことは彰子にはわからなかった。それは一安心であった。しかし彰子のことはわかってはいなかった。それは他ならぬ彰子自身も同じであった。

ナンシーのプレゼント　　完

２００７・４・１

第四十四話　誰にもわからないその一

誰にもわからない

話は前の日に遡る。彰子は自分の家で買ってきたチョコレートをチェックしていた。

「うん、皆の数があるわ」

「それ姉さんのクラスの人にあげるぶん？」

「ええ」

明香の問いににこりと笑って返す。二人は今家のリビングにいた。

「お父さんやお母さんのぶんもあるわよ」

その後でこう答える。

「明香のぶんもね」

「有り難う」

口の両端に微かな笑みを浮かべてそれに応えてみせた。

「毎年姉さんのチョコレート貰ってるわね」

「それは私もよ」

彰子はにこりと笑って妹に返した。

「だから。お互い様よ」

「そうなの」

「そうよ。だから気にしないで」

やはり笑顔でそう返した。

「わかったわね」

「ええ」

明香もその笑みのままで応えてきた。

「貴女達のぶんもね。いいわね」

「わかったわ。それで」

「何？」

「その一番大きなチョコレートは何かしら」

「！？」

妹のその言葉に首を傾げさせてきた。
「これのこと？」
「そう、それ」
彰子が最も大きなチョコレートを見て頷いてきた。見れば星型のかなり大きなチョコレートである。何か巨大手裏剣にも見えるものであった。
「それだけれど。誰の？」
「管君の」
彰子はそう答えてきた。
「買ってみたけれど」
「そうなの」
「うん」
また妹の言葉に頷く。
「駄目かな、これで」
「いえ、別に」
その言葉にはあまりはっきりとしない返事を送る明香であった。実はここで姉の気持ちがわかったのだがあえて言わなかったのである。
「いいと思うわ」
「そう、それじゃあ」
「ええ、いいと思うわ」
そう姉に告げた。
「それじゃあそれでね」
「有り難う。じゃあ明日管君にプレゼントするから」
こうして彼女は管にチョコレートを手渡すことになった。しかし話はそう簡単には進まないのであった。神様というのは何かと意地悪な存在でもあるからだ。
次の日。バレンタインになった。まずは洪童とカムイの叫びがあった。
「俺にチョコを食わせろ！」

「さもないと暴動を起こすぞ！」
「はいはい」
「これあるから黙って」
クラスの女の子達が宥めてチョコレートを手渡す。それで二人に関しては終わりだった。
とりあえずこれで終わりかと思ったら違っていた。二人は相変わらず暴動を起こすぞと騒ぎチョコレートを要求するのであった。無茶苦茶であった。
「今度は抹茶味だ！」
「イチゴもいいな！」
「ほい、これ」
「義理チョコなのによくもまあそんなに」
「別にいいだろ」
二人は開き直って女の子達に言う。
「俺達は彼女がいないんだ」
「この位何だってんだ」
「あっきれた」
「じゃあ彼女の一人でも作れば？」
「無理言うな」
二人は同時に言った。最早開き直って有無を言わせない様子である。
「そんなに彼女ができるか」
「俺達は日向を歩けないんだよ」
「まぁた訳わからないこと言って」
女の子達はそんな彼等に呆れた声をかける。
「笑えよ」
「ぶっ潰してやる、太陽なんてよ」
「わかったから。はい」
女の子達はチョコレートを出してきた。二人のリクエスト通りの抹茶味とイチゴ味のチョコレートを出した。二人は笑顔でそれを受

け取るのであった。

第四十四話　誰にもわからないその二

「有り難う」
「喜んで」
笑顔で受け取る。そしてまたそのチョコレートを食べた。
「美味いな、これ」
カムイは抹茶チョコを食べながら言った。
「このイチゴもな。いい感じだよ」
洪童も同じだった。二人はそのチョコレートを食べて笑顔になっていた。
「しかしこれ誰のだ？」
「そうだな、これ誰のだ？」
だがここで疑問が一つ出て来た。この義理チョコが誰のものかということだ。
「ああ、それ彰子ちゃんの」
パレアナが二人に言ってきた。
「おっ、彰子ちゃんのか」
「道理で美味いわけだ」
「って市販のチョコなのに味が変わるの？」
「気分の問題なんだよ」
「そうそう」
二人はそうパレアナに返す。
「彰子ちゃんやっぱり可愛いからな」
「味だってな」
「じゃあ私のチョコはどうなのよ」
むっとした顔で二人に問う。
「まずいっていうの？」
「いやいやパレアナのチョコもよ」
「これだってかなり」

何だかんだで食べていた。単に意地汚いだけかも知れない様子だった。少なくともパレアナのチョコレートも笑顔で美味い美味いと食べていた。

「美味いぜ」

「もう一つくれよ」

「義理チョコなのに二つあげるわけないでしょ」

パレアナは憮然としてこう言ってきた。

「一体何考えてるのよ」

「ちぇっ」

「ケチだな、何か」

「ふざけたこと言わない」

腰の両手の拳を当てて言葉を返す。

「一つ貰えるだけでも有り難く思いなさい。それに」

「それに？」

「お返しだってあるんだからね。わかってるわよね」

「ほい」

「これ」

二人はここでそれぞれマシュマロとキャンデーを出してきた。それをパレアナに手渡す。

「これでいいよな」

「忘れるわけないだろ」

「忘れるわけないだろって」

何か矛盾したものを感じながら二人に対して言った。

「確かあんた達バレンタイン撲滅とか抹殺とか言ってたわよね。それでどうしてそんなの用意しているのよ。訳わからないわよ」

「別にいいじゃねえかよ」

「なあ」

しかし二人は悪びれずにこう返す。

「貰えればいいんだよ」

「カムイに同じ」

「そこまで素直だとかえって感心するわ」
パレアナも呆れながら述べた。
「いや、本当に」
「まあ食ってくれ」
カムイはそんな彼女に手渡したマシュマロを勧める。
「美味いからさ」
「俺のも」
「それじゃあ遠慮なくね」
パレアナも笑って応える。とりあえず彼等は平穏であった。ところがその抹茶とイチゴを手渡した証拠はそうではなかった。
「ねえねえ」
彼女はこの時誰かを探していた。あちこちを歩き回って尋ねている。
「管君知らない？」
「管君って？」
「普通科の二年Ｓ１組の。知らないかしら」
「いや、ちょっと」
廊下で彼女に声をかけられた生徒の一人は怪訝な顔をしていた。いきなり声をかけられても何が何なのかわかりはしないからだ。
「そんなこと言われてもさ」
「なあ」
隣にいる彼の友達も首を傾げる。彼もわからないといった顔であった。
「そうなの。やっぱりわからないわよね」
「悪いね」
「ちょっと。僕達も」
「じゃあ御免なさい。それじゃあ」
そう言ってその場を後にする。彼女はそうして管を探して回っていた。しかし彼は中々見つからない。それでも焦りはしなかったが。

第四十四話　誰にもわからないその三

学校のあちこちを見回している。その中でふとナンシーに出会ったのであった。

そうして二人で仲良く散歩していたのだ。その中でお喋りをしていた。

「そうだったの。彰子ちゃんって」

「うん、そうなの」

その言葉にこくりと頷く彰子であった。

「お裁縫とかお料理は得意なの」

「いいわね、そういうのって」

ナンシーはそれを聞いて羨ましそうに応えた。

「女の子らしくて」

「有り難う」

ナンシーのその言葉ににこりと笑って返してきた。

「そう言ってもらえると嬉しいわ」

「私はどっちもあまり得意じゃないしね」

そう述べて晴れない苦笑いを浮かべてきた。

「どうしてもね。羨ましいわ」

そしてまた言わなくていいことも言った。

「今度だってもっと美味く作られたのに」

「今度って！？」

「あっ、いや」

自分のまたしての失言を慌てて打ち消す。かなり狼狽している。

「昨日、いや一昨日のシチューのことよ。ただそれだけ」

「あれ、ナンシーちゃんって昨日カレーだったんじゃ」

「えっ」

この指摘に思わず身体が硬直してしまった。その通りである。

「それで一昨日は焼き魚だったよね。確か自分で言ってたけれど」

「ま、まあね」
慌ててそれを下手な演技で取り繕おうとする。
「それはね。ちょっとした間違い」
「間違いなの」
「一昨日のお味噌汁のことだったわ。御免なさい」
そう誤魔化すのであった。もっともこれは彰子以外が見れば一発で嘘かどうかすぐにわかるものであった。彼女は嘘が下手であったのだ。
「まあ似たようなものよね」
「似てるかしら」
彰子の今の言葉には首を捻る。お世辞にも味噌汁とシチューが似ているとは思えない。味噌汁と似ているのはスープではないかと内心思った。
「私はそう思うけれど」
しかし彰子はそういう考えであった。
「どうかしら」
「難しいわね」
ナンシーは首を傾げつつそう述べた。
「どうにも」
「そうかしら」
「ううん、何かね」
ナンシーは話しているうちに困った笑顔になっていた。少し笑みがひきつっている。
「少し違うような」
「そうなの」
「あくまで私が思うだけよ」
そう前置きして断る。
「気にしなくてもいいけれど」
「それじゃあ」
「ところでね」

ナンシーはここで話題を変えてきた。
「これからどうするの？」
「どうするのって？」
ナンシーは彰子に顔を向けてきた。
「いや、これから。全員にチョコレートあげた？」
「あっ」
その言葉を受けてふと思い出した。
「そういえば忘れていたわ」
「忘れていたって」
ナンシーは彰子のその言葉に目をしばたかせる。どうにも彰子に振り回されている感じであった。それは自分でも何となく感じていた。
「普通忘れたりしないでしょ」
「ちょっとね」
困ったように笑ってから答えてきた。
「けれど。一枚渡し損ねていて」
「チョコレートを？」
「ええ、これ」
そう言って管に渡す予定の大きなチョコレートを出してきた。それはナンシーが彼氏に渡したものよりもまだ大きい。彼女はそれを見て眼鏡に手をやった。
「大きいわね」
「そうかしら」
だが彰子の返事は相変わらずであった。きょとんとしたものである。表情も同じだ。
「私は別にそうは。普通じゃないの？」
「いや、普通じゃないから」
すぐにそう突っ込みを入れた。
「こんなに大きいのって滅多にないわよ」
「そうかなあ」

「何かそれ見てると」
本命のチョコにしか見えないと言いそうになったがそれは止めた。言ったら話が余計に混乱するような気がしたからである。これはナンシーの気配りであった。
「いえ、何でもないわ」
その言葉を打ち消した。
「何でも」
「そうなの」
「ええ。それでだれにあげるの？」
「管君」
「えっ！？」
ナンシーはそれを聞いて思わず声をあげた。眼鏡の奥の目が丸くなる。

第四十四話　誰にもわからないその四

「管君って」
「それで探してるんだけれど」
「管君ならあそこにいるわよ」
そう声をかけてきた。
「あそこって？」
「茶道部の部室よ」
「ああ、あそこに」
管は茶道部員なのである。どういうわけか何時までも皆二年生であるので三年生がずっと残っている。だから彼は今はただの部員である。ただし将来の部長候補筆頭であるとされている。永遠の部長候補であるというわけなのである。
「いるけれど」
「そうなんだ」
「ええ。さっき見掛けたの」
彼氏と出会う為に移動している時に見掛けたのだ。実は内緒にしておこうと思ったがそれでも言ったのである。ばれないだろうと思ったからだ。
「それでね」
「そうだったの。じゃあ茶道部に行けばいいのね」
「そうね。まだいると思うわ」
そう彰子に告げる。
「行くのなら今のうちよ」
「わかったわ。それじゃあ」
行こうとする。だがここで気付いた。
「あっ、そうだ」
いきかけたところでナンシーに顔を向けてきた。
「ナンシーちゃんどうしてそこにいるの？」

「えっ！？」
思いも寄らない突っ込みに思わず言葉を止めた。
「何が？」
「どうして管君がいるのかわかったの？そういえば」
「あっ、それはね」
目を丸くさせたまま下手な演技を再会させる。顔中に脂汗を流しながら述べるのであった。
「それはその。あれなのよ」
「あれって！？」
「つまりあれよ」
説明になっていない説明を繰り返す。やはり演技が下手である。彰子でなければ絶対に何かがあると確信するものであった。ここに彼女しかいないのはナンシーにとっては幸運なことであった。
「ええとね、そのつまり」
（まずい）
言葉が出ないのに内心かなり焦る。
「あれなのよ。それはね」
「それは？」
「たまたまなのよ」
苦し紛れの言葉だった。およそ誰でもわかる言葉だった。
「たまたま。見掛けてね」
「そうだったの」
「そういうこと。わかってくれたかしら」
苦しい嘘をつき続ける。
「それで」
「ええ、まあ」
その言葉にこくりと頷く。相変わらず顔から汗を流している。
「わかってくれたかしら」
「うん」
彰子は何の迷いもなく頷く。これで何とか終わったのだった。

「そういうことだったのね」
「そういうこと。いいわね」
彰子に顔を向けて問う。
「そういうことだから」
よせばいいのに無理に念を押す。つくづく演技には向いていないナンシーであった。
だが彰子はそんな彼女と別れて茶道部の部室に向かう。お邪魔するとそこには管が一人お茶を飲んでいた。何か泰然自若としていた。
「あれ、小式さん」
彰子の姿に気付いて声をかける。
「どうしたの、ここまで」
「ええ、実はね」
彰子は彼に言葉を返す。
「バレンタインだから。チョコレートを」
「そういえばそうだったね」
その言葉を聞いて頷く。
「今日は」
「ええ。だから来たの」
部屋に入りながら答える。
「いいかな。チョコレート」
「うん」
管は静かに彰子に対して頷いてきた。二人は茶室の中で正対していた。茶室の中なので当然正座である。なお正座はこの時代は日本でもこうした茶道や武道以外では完全に廃れてしまっている。
「これだよね」
彰子が手に持っている大きなチョコレートを見て問う。
「そのチョコレートだよな」
「そうよ」
彰子はにこりと笑って管に応える。
「チョコレート、嫌いじゃないよね」8

「好きだけれど」
管はそう彰子に答えてきた。動作はない。しかも表情も声の色もない。その声で言うのだった、その無表情さのままで彰子に応えていた。
「チョコレート」
「本当!?」
彼女は管のその言葉に顔を上げてきた。
「いいの?あの、よく見たら」
ここで茶室であることに気付いた。明らかに場違いな場所である。
「茶室だし。やっぱり」
「いいよ」
しかし管の言葉は動じない。相変わらずであった。
「それで」
「本当に!?けれどお抹茶だし」
茶道での茶は抹茶である。これは千利休が茶道というものを確立させてから変わりがない。その変わりがないものを見ながら述べるのだった。

第四十四話　誰にもわからないその五

「チョコレートには合わないと思うけれど」
「合うよ」
しかし管の言葉は全く動じてはいない。相変わらず声にも表情がない。
「ちゃんと」
「そうなのかしら」
だがそれを聞いても疑問に思う。チョコレートは洋菓子であり抹茶は日本のものだ。味が本質的に違うのだ。この差はどうしようもない、そう思った。
ところが管は違うという。それがどうしてか彰子にはわからない。きょとんとした顔で目を時折パチクリさせながら管を見ていると彼が言ってきた。
「それでね」
彼は言う。
「抹茶にも種類があるんだ」
「種類が！？」
「うん。だから中にはチョコレートと合うものだってあるんだ」
そう彰子に述べる。彰子にとっては意外な言葉であった。
「それがこれ」
お茶を出してきた。
「今から入れるけれどいいよね」
「ええ、御願いしていいかしら」
まだ少し戸惑っていたが彼に応えた。
「そのお茶ね」
「わかったよ。それじゃあ」
彰子の言葉を受けてお茶を入れだした。そのうえで二人は話をしていた。話の内容は差し障りのないもので最初はいささかぎこちな

かった。
「そうだったの」
「うん」
彰子は管の言葉を聞いて頷いていた。彼に関する話を聞いていたのだ。
「茶道をはじめたのはそういうわけだったんだ」
「うん。あの本を読んでいたらね。茶道に興味を持って」
「千利休の本を」
所謂伝記である。千利休はこの時代では茶道を作り上げた人物であると共に求道者、政治家としても注目されている。彼への研究が進んだ結果である。
「それではじめたんだ」
管はそう述べる。手は茶を入れているが言葉は彼女に向けている。
「ふうん」
「子供の頃にはじめてもう十年かな」
そう述べてきた。
「十年？もうそんなになるの」
「うん。それだけにはなるね」
彼は静かにそう述べてきた。
「正座も慣れてきたし」
「これね」
「うん。小式さんは平気なの？」
「剣道とか弓道でいつもしてるから」
そう答えてきた。意外と色々やっている彰子である。
「別にね」
「そう。だったらいいけれど」
それを聞いて一旦は頷く。
「皆かなり辛いからね。これは」
「そうね。日本人でも」
正座というものがあること自体が奇跡のようなものなのだ。だか

ら彼等が今こうしてここで普通に話をしていることもかなり凄いことだったりする。
「七海ちゃんは全然駄目だし」
「うん」
管は彰子の言葉に頷いた。
「やっぱりこういうのって珍しいのね」
「茶道もそうだしね」
管は述べてきた。
「今こうして残っているのが」
「けれど驚いたわ」
ここで彰子は話をチョコレートに戻してきた。
「チョコと合うお抹茶があるなんて」
「お抹茶と一口に言っても色々あるから」
彼はまた答えてきた。
「同じ色でもね。味が違ってるし」
「ふうん」
「だからなんだ。中にはそういうのもあるんだ」
「じゃあ普通にここでチョコレート食べたりもするの？」
「そうだよ」
また彰子に答える。
「和菓子と一緒にね」
「何か凄く意外」
彰子は呆気に取られた声で言う。茶室で洋菓子はかなり驚くことだった。

第四十四話　誰にもわからないその六

「それも美味しいなんて」
「はい」
管はここでその茶を出してきた。見たところはごく普通の抹茶である。彰子はそれを受け取っても特にこれといったおかしなところはないので少し拍子抜けしていた。
「これよね」
「うん」
管はまた答える。それにしても表情が変わらない。
「飲んでみて」
「わかったわ」
言われるままその茶を飲む。すると味もごく普通の抹茶であった。紅茶みたいなものかと思ったのだがそれは違っていた。
「味は同じね」
「けれどチョコレートを食べてみて」
ここで言ってきた。
「美味しいから」
「わかったわ。それじゃあ」
言われるままそのチョコを食べる。すると確かに合っていて美味しかった。
「けれどこれって」
「美味しいよね」
管が彰子に問うてきた。
「合うでしょ。それもよく」
「ええ、とても」
本当に合っていた。それがとても意外だった。言葉で聞くのと実際に感じてみるのとでは全然違う。特に食べてみることではそうである。食べないとわからないのだ。

「美味しいわ。どっちも」
チョコレートを食べた後でまた抹茶を飲んでみる。やはりよく合う。それがまた非常に不思議であった。彰子は何か病みつきになりそうだった。
「小式さん」
管はそのお茶とチョコレートを食べながら彰子に声をかけてきた。
「何？」
「チョコレート有り難う」
礼を述べる。表情は変わらないが穏やかな声であった。
「お返しをしないといけないね」
「お返ししってそんな」
そう言われると何故か顔を急に赤らめさせてきた。
「別に。そんなの」
「はい」
だが彰子の言葉よりも前に彼はそのお返しを出してきた。それはクッキーであった。
「お茶だから」
「ええっ、けど」
「いいから」
断ろうとする彰子に結構無理に勧める。密かに強引である。
「受け取ってよ」
「いいの？」
「いいよ」
こくりと頷いて言う。
「よかったらね」
「わかったわ。それじゃあ」
そのクッキーを受け取る。包みを開けて一口食べてみる。
「頂きます」
そう述べて食べる。それは普通のクッキーより美味しい感じがした。

「あれ、これって何か」
「美味しい？」
「うん、お店で買ったのじゃないよね」
「僕が作ったんだ」
淡々とだが意外と驚くことを述べる。
「管君が！？」
「そうだよ」
また彰子に述べる。意外と器用なタイプのようである。
「お茶菓子はいつも自分で作るんだ」
「いつもって。それじゃあ」
「和菓子も」
「うわ・・・・・・」
和菓子まで作る。これはさらに驚くべきことであった。和菓子はそうそう簡単には作られない。彰子はあらためてこのことにも驚くのであった。
「管君って本当に凄いのね」
「お婆ちゃんが和菓子屋さんでお爺ちゃんが駄菓子屋さんだから」
また何かしら衝撃の事実である。さりげなく管という男は謎が多いようだ。
「それで教えてもらったんだ」
「駄菓子屋さんもなんだ」
「それでお母さんが洋菓子のシェフだから」
「それでクッキーも」
「そうなんだ」
衝撃の事実が実に多い。彰子はそれに気付かないがやはり管という男には謎が多いようだ。しかし今はそれについてはどうでもよかった。少なくとも彰子はそうだった。
「クッキーの他も作られるけれど」
「どんなのを？」
「ケーキも得意だよ」

「ケーキも」
話を聞いているうちに彰子の目がキラキラと輝いていく。
「他には？」
「パフェなんかも。好きかな」
「好きなんてものじゃないわ」
彰子はその輝く目のまま管に答える。
「大好きなの、実は」
「そう、それだったら今度作ってみるよ」
表情を変えないまま彰子に述べる。
「その時はね」
「またここで？」
「そうだけれど。駄目かな」
「ううん」
その言葉ににこりと笑って言葉を返す。澄んだ笑みを。
「御願いね」
「うん、それじゃあ」
二人は楽しいバレンタインを過ごした。しかし自分自身の本当の気持ちにはまだ気付いてはいない鈍感な二人であった。茶室で一緒に過ごしながらも。

誰にもわからない　　完

２００７・４・７

第四十五話　終幕は穏やかにその一

終幕は穏やかに

それぞれのバレンタインの時間を過ごすクラスの面々。あの二人もそれは同じだった。

「ふう」

洪童とカムイは女の子達から貰ったチョコを無事全部食べ終えクラスで笑顔でいた。何はともあれ彼等にとっては実にいいバレンタインになったのであった。

「食った食った」

「やっぱりこの季節はチョコだな」

「昨日までと言ってることが全然違うわね」

それに蝉玉が突っ込みを入れる。彼女も二人に義理チョコを手渡している。そうしないととにかく五月蝿くて仕方がないからだ。嫉妬団の名は伊達ではない。

「現金なんだから、全く」

「現金結構」

「食えればいいんだ」

しかし二人はその言葉にも平気である。相変わらず満足した顔でそれぞれの席にいる。

「バレンタインはチョコを食う為にあるからな」

「なあ」

「じゃあ聞くけれどね」

蝉玉はそんな二人に問う。

「若し一枚も食べられなかったらどうするつもりだったの？」

「銀河を壊す！」

二人は同時に入った。

「そんなことは許されはしない！」

「バレンタインは俺達にチョコを食わせる為にある！」

完全に問題を忘れたうえで取り違えている。
「だからだ！そんな銀河なぞ必要ない！」
「俺達の口にチョコを！」
「やれやれ」
「全く、こういう話になるといつもこうなんだから」
パレアナもそんな二人に呆れ顔である。最早何も言う言葉はない。普段はそれ程馬鹿ではない二人だがこうした話に関しては急にそうなる。クラスメイト達にとっては実に頭の痛い問題である。頭を痛めたところでどうにもなるものではないがそれでも頭は痛むものである。丁度二日酔いで頭が痛まない筈がないのと同じように。
「困ったことね」
「本当。こりゃ大変だわ」
蝉玉はパレアナに応えて言う。
「春香ちゃんも」
「そうだ、春香」
洪童はふと妹のことを思い出す。
「あいつだ、あいつはどうなんだ」
「春香ちゃん彼氏いないでしょ」
「あんなに可愛いのに」
蝉玉とパレアナは即座に彼に突っ込みを入れる。その原因は言うまでもなくこの兄にある。彼が妹に言い寄るような男に片っ端から無差別攻撃を仕掛けているからである。
「残念ね」
「残念じゃない！」
洪童は即座に二人に反論する。
「いいことだ。そもそも女の子はあれだ、結婚するまで純潔を守ってだな」
「何時の時代の話よ」
「宇宙に出てからの連合のお話じゃないでしょ」
また彼に突っ込みを入れる。

「そんなことはどうでもいい！落語にもある！」
「いや、ないない」
「勝手にそこで自分の持ちネタに走らない」
即座にまた突込みが入る。だが洪童はやはりお笑いの天才である。
二人のその突っ込みに対して今回は素早く切り返してきたのである。
「いや、ある」
「あるの」
「ちょっと意外」
そうは言っても特に驚いたふうでもなく述べる二人であった。洪童はそんな彼女に対してまた言う。彼もかなり粘り強いというかタフであった。
「ちゃんとな。落語は真面目な話もあるんだ」
「けれど日本の昔のやつよね」
「まあな」
それは認める。少し憮然として。
「そうだが。とにかく」
「とにかく？」
「俺は少なくとも春香と付き合おうという奴は許さん！絶対にだ！」
「何があっても？」
「そう、何があっても！」
また無茶苦茶に力説をはじめた。
「俺の屍を越えていかなければな！」
「一体何処の拳法漫画なのよ」
蝉玉はそんな彼にまた突っ込みを入れた。
「無茶苦茶じゃないの」
「無茶苦茶で結構」
しかも開き直ってきた。
「全ては春香の為！何があっても！」
「ああ、洪童」
そこにやって来たスターリングが彼に声をかける。今やって来た

ところで話には詳しくはない。何か騒いでいるとは思っているがそれだけである。
「何だ？」
「春香ちゃん呼んでるの？」
「いや」
それは首を横に振って否定する。
「そんなことはないが」
「そう。けれどね」
その言葉を受けてまた話を洪童に向けてきた。
「春香ちゃんあれよ」
「あれ！？」
「クラスの男の子と何か仲良く話してたわよ」
「何ィ！？」
それを聞いた洪童の顔が一変してきた。
「それは本当か！？」
「ええ、そうだけれど」
蝉玉はそう洪童に語る。
「ひょっとしたら本命かも」
「殺す！」
洪童の決断は迅速だった。
「問答無用だ！始末する！」
「またあんたは」
パレアナは彼のその言葉を聞いて呆れた声を出す。
「ちょっとは落ち着いて考えなさい」
「そうよ」
言いだしっぺの蝉玉も言う。
「詳しいことを確かめてからね」
「全く。何でそれがわからないのかしら」
「確かめる前に春香が毒牙にかかったならば全ては終わる！」
それが洪童の理屈であった。かなり滅茶苦茶で他人からは理屈に

も何も見えるものでも聞こえるものでもないが彼にとってみればそうなのである。

「その前に！先んずれば人を制す！」

「ちょっと待って」

「待てと言われて待つ奴はいない！」

スターリングの言葉も受け付けない。完全に暴走していた。

第四十五話　終幕は穏やかにその二

「言って来るぞ！国賊殲滅！」
「意味が違うんじゃ」
「では奸賊殲滅だ！」
どっちにしろ滅茶苦茶な言葉である。その言葉を受けても変えない。クラスをとんでもない速さで出て春香のクラスへと突き進むのであった。
「やれやれだな」
相棒の筈のカムイも彼の暴走の前に言葉もない。
「あいつにも困ったもんだな」
「私達はまだいいわよ」
蝉玉はそうカムイに返す。
「まだね。当事者じゃないし」
「そうね。当事者の春香ちゃんは大変よ」
パレアナも言う。
「実の妹だしね」
「けれどこのまま放ってはおけないよ」
スターリングが静かに述べてきた。
「このままだと彼またとんでもないことするから」
「わかってるわよ」
蝉玉も苦い顔でそれに頷く。
「このままだとね。大事しでかすから」
「じゃあ行きましょう」
パレアナが皆に対して言う。
「あの馬鹿を何とかする為に」
「やれやれだな、ったくよお」
チョコレートに埋もれていたフックがそれを聞いて渋い声をあげた。

「毎度毎度。騒動になりやがる」
「仕方ないと言えば仕方がない」
ギルバートも話に乗ってきた。仕方ないと言いながらも話に乗ってきたような口振りだが表情はそうではなかった。心配する顔であった。
「クラスメイトだしな」
「全く」
「困ったことだ」
皆そうは言いながらも話に乗る。そうして洪童の暴走を止めに向かうのであった。
その時春香はクラスの誰かと話していた。にこやかな顔だった。
「そうそう、それでね」
「ええ」
にこやかな顔になっている。だが急にその顔を一変させた。
「!?」
「どうしたの?」
「兄さんが来るわ」
怪訝な顔でそのクラスメイトに述べてきた。
「どうしてわかるの?」
「どうしてって」
「わかるの。何かね」
そうクラスメイトに告げる。
「直感で」
「直感で!?」
「ええ。来るわ」
顔が真剣なものになる。どんどん強張ってくる。
「逃げましょう、速く」
「逃げるって何処に」
「とりあえず教室から出て」
慌てて立ち上がる。そうしてクラスメイトにも述べる。

「一緒に。いいわね」
「ちょっと、訳わからないんだけれど」
クラスメイトは立ち上がりながらも首を傾げさせる。しかしまた言うのだった。
「何が何だか」
「いいから。兄さん怒った時大変だから」
「大変なんてものじゃないわよね」
それはわかる。洪童の春香のことに関する破天荒さは学園ではかなり有名だ。だからこのクラスメイトもこの言葉には頷いたのである。
「それじゃあ」
「ええ、来て」
クラスメイトの手を取る。そうして逃げ去るのであった。
洪童は一直線に春香のクラスに向かう。それを阻む者は何もない。
「春香ーーーーーーーーーーっ！」
そのまま春香のクラスに殴り込んだ。凄まじい衝撃がクラスを襲った。
「な、何だ！？」
「鬼でも来たか！？」
「いや、違うぞ！」
それは違った。殴り込んできた洪童だったのだ。彼のことは春香のクラスの者達も実によく知っている。知りたくて知ったものではないのが残念である。
「春香ちゃんのお兄さんだ」
「やれやれ、またかよ」
彼の殴り込みは今にはじまったことではない。それで呆れた声を出したのである。
「懲りない人だよな、全く」
「どうしたものか」
そんなことを言いながら洪童のところにやって来た。そのうえで

声をかける。
「あの、それでどうしたんですか?」
「今度は一体」
「話は聞いた。春香が誰かと付き合ってるそうだな」
「誰かって!?」
「誰なんだ、それは」
「とぼけるな!」
また洪童が暴れだした。台風そのものである。誰のも手が付けられない程滅茶苦茶に暴れ回るのであった。見れば机は投げ椅子でお手玉をしている。人間とは思えない。

第四十五話　終幕は穏やかにその三

「ちょ、ちょっと待って下さいよ」
「とにかくお話を」
「ん！？何だ？」
その言葉に気付いて顔を春香のクラスメイトに向けてきた。
「それで春香は」
「春香ちゃんですよね」
「そうだ」
とりあえずまともになった。
「それで何処のどいつと付き合っているんだ？いるならばこの俺が直々に」
「そんな人いませんよ」
「なあ」
クラスメイト達も顔を見合わせて言い合う。話が全く読めないのだ。
「何が何だか」
「初耳ですよ、本当に」
「嘘じゃないな」
洪童は最初から疑っている様子を露わにさせてきていた。実に素直である。
「それは」
（嘘なんかついたらそりゃもう）
（困った人だよ、全く）
心の中の言葉はそれで終わらせる。そのうえで話を続ける。
「嘘じゃないですって」
「本当に初耳で」
「何だ、本当に知らないのか」
その言葉に一旦立ち止まりまずは辺りを見回す感じで周囲を探っ

た。
「そういえば春香に付き合うに足る奴はいないな」
「いたらどうします？」
「殺す！」
一言であった。
「悪い虫は近付けてはいけないからな。当然だ」
「当然ですか」
「誰であろうが春香に言い寄る奴、虐める奴、意地悪する奴は俺が許さん！」
かなり破天荒だが妹思いなのは間違いない。
「俺が見込んだ男でない限りはな！」
「女でもですか」
「別に友達はいい」
こうは言うが春香の友達にも常に警戒を向けているのが洪童だったりする。その度にこのクラスに殴り込み派手に大暴れしているのである。
「男であろうとな」
「つまり交際相手は駄目なんですね」
「結婚するまで純潔は守らせる」
本当にこの時代では有り得ない考えである。
「何があろうと！」
「はあ、そうですか」
「それはまた」
春香のクラスメイト達もそれは何度も聞いているが納得しているものではない。納得するには相当の異常性が必要だからである。妹が絡んだ洪童は異常なのだ。
「それで何処だ、春香は」
「どっかに行っちゃいましたよ」
「あれ、そういえば」
クラスメイト達はここであることに気付いた。

「明香ちゃんいないわよね」
「あっ、本当だ」
「明香だと」
ここで彼はとんでもない勘違いをしでかしたのだった。
「そいつか」
「えっ！？」
「ちょっと洪童先輩」
見る見るうちに様子がまたおかしくなる。それを見て異変が近いのを感じていた。
「おのれ、間男！」
髪が逆立ち覚醒してしまった。
「我が妹を毒牙にかけんとするは不埒千万！必ずや見つけ出して抹殺してくれる！」
「あ、あの先輩」
「明香ちゃんは」
「何処だ・・・・・むっ！？」
何かを感じた。あらぬ方を睨みだした。
「そこか、そこなんだな」
「何かに目覚めたみたいだね」
「まともなのじゃないのは間違いないな」
何故か彼等の囁きは耳に入らない。洪童はすぐにその場に向かうことにした。
「こうしてはいられん」
直感のまま何処かへと向かう。その彼の動きは蝉玉達も完全に掴んでいた。
「教室を出たよ」
彼等は屋上にいた。スターリングは携帯を覗きながら皆に述べる。
そこに洪童に授けた発信機を付けているのだ。バレンタイン前に警戒して着けたのが功を為したのである。
「そう、遂にね」

蝉玉がそれに応える。パレアナ達もそこにいる。
「じゃあ行きましょう」
「よし」
「じゃあ行くか」
皆それに頷く。こうして屋上を後にして洪童の追撃にかかった。

第四十五話　終幕は穏やかにその四

しかし彼の動きはあまりにも速い。まるで台風のようである。
「な、何よこれ」
彼を追うメンバーの中の一人パレアナは思わず声をあげた。
「陸上の短距離選手並の速さよ」
「それだけじゃないわね」
蝉玉も言う。
「この速さはちょっと有り得ないわ」
「そうだな」
マチアがそれに頷く。
「この速さはちょっとな」
「追うのが大変だね」
スターリングはその中でも少し呑気であった。
「これは」
「ええ、先回りする？」
「先回り？」
一同も廊下を駆けている。その中で蝉玉はふと提案してきたのである。
「そう、先回りよ」
「けれどあいつの行く先わかるのか？」
「そうよ、問題はそれよ」
マチアとパレアナがそれを指摘する。
「何処に行くかわからないと」
「とりあえず春香ちゃんのところだっていうのはわかってるけれど」
問題は彼女が何処にいる加太。それがわからないとどうしようもない。言うまでもなく彼女達の誰もがそれをわかていない。それどころか洪童でさえそれがわかってはいないのだ。彼はただ勘に頼って暴走しているだけである。かなり滅茶苦茶である。

「彼女何処にいるのやら」
「部室ね」
蝉玉はそう答えてきた。
「今放課後でしょ？」
「うん」
スターリングが彼女に答える。
「そうだけれど」
「だからよ、間違いないわ」
彼女は強い自信と共にスターリングだけでなく皆にも言う。
「あの娘真面目だから。放課後特に何もなければすぐに部室に向かうの」
「その部活は？」
それがわかれば話は早い。だが問題はまだあった。
部活が何処かである。それがわからないとどうしようもない。
「オペラ部よ」
蝉玉は答えた。
「彼女そこのプリマドンナなの」
「そうだったのか」
バイオリニストのマチアはそれを聞いて言ってきた。
「何か知らなかったな」
「何であんたが知らないのよ」
蝉玉は呆れた顔で彼に問う。
「オペラ部とはオーケストラで関係深い筈なのに」
「いや、俺ソリストだから」
マチアは功答えてきた。
「だからオペラ部とは組まないんだ。それでなんだ」
「そう。クラシックの世界も奥が深いのね」
「ああ、深いぜ」
ニヤリと笑って彼女に答えてきた。
「それもかなりな」

「成程ね。とにかくオペラ部よ」
蝉玉は再度場所を言ってきた。
「場所は歌劇場、間違いないわ」
「歌劇場」
「あそこか」
皆そこがどこなのかすぐにわかった。あまりにも巨大な八条学園には劇場も複数ある。歌劇場はその中の一つであり八条学園歌劇場という。オペラの他にミュージカルや歌舞伎、京劇も行われたりする。なお歌劇場は他にも第二歌劇場や小劇場もある。
八条学園歌劇場は巨大である。かつて地球のアメリカにあったメトロポリタン歌劇場にも匹敵する。それだけの巨大な歌劇場を学園内に置いておけるのはひとえに八条家の資産が莫大だからである。オペラ部はそこを拠点として活動しているのである。
一同はその歌劇場に着いた。そしてまずは春香を探し出す。
「ちょっと、何よこの広さ」
パレアナは歌劇場に入ってまずはこう言った。
「滅茶苦茶広いじゃない」
「席だけで何千席あるんだ」
「凄いだろ」
それに応えてマチアが言ってきた。
「これだけの歌劇場があるのがこの学校なんだ」
「あらためて驚き」
驚く他なかった。見れば皆かなり驚いている。
「学校の中にこんなのあるなんて」
「うちの学校ってつくづくスケールが大きいわね」
「とにかくここにいるわ」
蝉玉はあらためて皆に言う。
「春香ちゃん、早く探しましょう」
「よし！」
ここで同行していたギルバートが声をあげてきた。

「ならば主力は出入り口付近に展開」
いきなり作戦指揮をはじめる。
「春香ちゃんは残るメンバーで保護しろ」
「残るメンバーは誰だ？」
「彰子君とビアンカ君だ」
ギルバートはそう判断を下した。しかしその決定にはアルフレドが異議を申し出してきた。

第四十五話　終幕は穏やかにその五

「それはまずいな」
「何故だ？」
「ビアンカは出入り口に回した方がいい」
実はレズビアンでもあるビアンカについて洪童がいらない邪推をするのを避けてのことであるがそれはあえて隠してこう言ったのである。
「だからな」
「そうか、わかった」
こうしたことに鈍いギルバートは何も疑わずにそれに応えた。
「では彰子君一人でいいか」
「ああ、彼女だけで充分だな」
アルフレドはそう提案してきた。これには特に考えはない。
「それで行こう」
「よし」
こうして作戦は決まった。彰子は春香と二人だけで歌劇場の控え室に詰めるのであった。
「何か大変なことになったわね」
「はい」
春香はそれに応えて頷いた。
「すいません、兄さんのせいで」
「いいのよ、それは」
にこりと笑って彼女に応える。春香は奇麗な赤いドレスを着ていた。どうやら本番直前のリハーサルだったようである。かなり重要な時である。二人はそこで並んで椅子に座っているのである。春香は緊張した顔になっているが彰子は穏やかな顔をしている。
「それはね」
「すいません」

「ところで春香ちゃん」
彰子はここで春香に声をかけてきた。
「何ですか？」
「今度の役は何なの？」
そう彼女に問う。
「お姫様の役かしら」
「ええ、まあ」
おずおずとした様子で彰子に答える。少し俯いていた。
「ジュリエットの役でして」
「ロミオとジュリエットのよね」
「いえ、それは違います」
しかし春香はそれは否定する。
「あら、でもジュリエットと言えば」
「ジュリエットはジュリエットでも題名が違うんです」
彰子に相変わらずのおずおずとした声で述べる。何か本当にそうした態度であるのが彼女らしかった。学校でも控えめな性格で知られているのだ。
「題名が？」
「はい、カプレーティとモンテッキィっていうんです」
「何かしら、それって」
「ロミオとジュリエットなんですけれど少し違うんです」
説明はこうであった。
「けれどストーリーは同じよね」
「大体は」
「それで何が違うの？」
「これベルリーニのオペラでして」
十九世紀前半の偉大な作曲家の一人である。ベルリーニを愛さない者は音楽を愛さない者だとさえ言われることがある。美しい高度な曲と勇壮な合唱曲で知られている。
「ベルリーニの！？」

「はい、それでロミオは普通男の人ですよね」
「ええ、まあ」
それは当然である。だからオペラではロミオは大抵テノールである。
「けれどそれだとロミオは女の子がやるんです」
「女の子が！？」
「あの、先輩」
ここで春香は彰子に声をかけてきた。
「先輩の妹さんの、あのその」
「明香がどうかしたのかしら」
「御存知ですよね」
何か尋ねるような声で彼女に問う。
「オペラ部に所属しているのは」
「そういえばそうだったかしら」
またおっとりとした返事が返ってきた。実は彰子はそんなことは忘れていたのだ。
「覚えてなかったわ」
「はあ」
彰子はこうしたことが多い。それが彼女ならではでもある。
「御免なさい」
「あの、それでですね」
春香はさらに述べる。
「妹さんが。その」
「明香がどうかしたの？」
「その。ロミオで」
「へえ、明香も凄いんだ」
やはり要領を得ていない返事であった。春香にはどうしてももどかしさのある話であった。
「そんなことまで」
「それでですね」

「ええ」
「妹さんが。その」
ここで話が確信に入る。彼女と一緒にいたのは。
「ここ暫くずっと一緒にお話していたんです」
「オペラのことでなのね」
「はい、ずっとです」
「凄いわね、それって」
やはりわかっていない。しかしわかる人間が幸運にもそこにいた。
「やはりそういうことだったか」
「誰！？」
「誰ですか！？」
彰子と春香が同時に声をあげる。するとそこにはアルフレドがいた。
「アルフレド君」
「どうしてここに」
「いや、色々と考えていたんだ」
彼は控え室に入りながら応えてきた。
「春香ちゃんが誰と合っていたかね。問題のもとをね」
「問題の？」
「うん」
こくりと笑って述べる。
「そういうことだったのか。成程」
「じゃあ洪童君って」
彰子はその言葉で気付いた。
「やっぱり」
「そうだね」
それにアルフレドが頷く。
「彼の勘違いだったんだよ」
「そうだったの」
「兄さん、また」

「けれどまだ話は終わりじゃない」
彼は深刻な声でそう述べる。

第四十五話　終幕は穏やかにその六

「どういうことなの、アルフレド君」
「洪童だよ」
そう彰子に応えてきた。
「相手が女の子であってもね」
「そうよね、洪童君春香ちゃんのことになると凄いから」
「そういうこと、わかったわね」
「わかりたくないけれど」
「わかったわ」
二人はアルフレドの言葉にこくりと頷いてきた。
「さて、それじゃあ何とかしようか」
「何とかって」
「どうするの？」
「春香ちゃん」
アルフレドは彼に声をかけてきた。
「はい」
「ちょっと来て欲しいんだけれど」
「私がですか」
「いいかな」
そう彼女に問う。
「お兄さんのところに」
「わかりました。それじゃあ」
アルフレドの言葉に頷く。
「一緒に」
「うん、頼むよ」
「わかりました。それじゃあ」
こくりと頷いて立ち上がる。そこに彰子が声をかける。
「大丈夫なの、アルフレド君、春香ちゃん」

「というか彼女しかいないんだよ」
アルフレドはそう彰子に述べる。
「ここはね」
「洪童君を説得できる人ってこと？」
「そういうこと」
それを彰子にも言う。
「だからだよ。それじゃあ」
彼は春香と共に歌劇場の入り口に向かった。既にそこでは大騒動になっていた。
「うおおおおおおおおおっ！通せ！」
洪童が入り口にバイクで突っ込もうとしていた。
「通さないならばここで！」
「えええい、ここにはいないって言ってるでしょ！」
入り口は既にバリケードになっている。そこに二年Ｓ１組の面々が集まっていた。その中にいる蝉玉が洪童に対して叫んでいた。
「さっさと帰りなさい！」
「俺にはわかる！」
相変わらず妹のことになると見境がない。
「だからだ！そこをどけ！どかないと！」
「さっさと帰りなさいって言ってるでしょ！」
「誰が帰るか！」
バリケードにバイクで突っ込んだ。しかしバイクはバリケードの前で止まった。
しかし彼は止まらない。そのままバイクから降りて突入しようとする。
「どけ！どけ！」
「だから落ち着けって言ってるでしょ！」
「春香ちゃんはここにはいないわよ！」
パレアナも参戦する。クラスメイト達はバリケードの中に雪崩れ込んできた洪童を何とか取り囲み取り押さえにかかりながら言って

いた。
「だからさっさと帰りなさい！」
「人の話は聞きなさい！」
「俺に嘘は通用しないぞ！」
やはり彼は聞き入れない。
「だからだ！ここをどけ！」
「どけと言われてどくのはいないわよ！」
「とにかく大人しくしなさい！」
やはり暴れ回る。しかしここでアルフレドが現われた。

第四十五話　終幕は穏やかにその七

「幾ら何でもバイクで突っ込むのはないだろうに」
「あれ、アルフレド」
「しかも春香ちゃんも」
見ればそこにはアルフレドと春香がいた。そうして洪童の前に来ていた。
「まさか相手は御前かアルフレド！」
「どっからそんな考えになるんだ？」
アルフレドは呆れた顔で洪童に言い返す。
「言っておくが違う」
「じゃあ誰なんだ？」
「明香ちゃんだ」
「何！？レズか！」
「だからそれも違う」
何か結構嫌な気分になってきた。
「どっちでもない。春香ちゃんの今度の舞台はわかっているな」
「カプレーティとモンテッキィだな」
「知ってるじゃないか」
流石にこれは妹思いの彼なら知っていた。そこは抜かりがないようである。
「それの打ち合わせだったんだ」
「何ィ！？じゃあ俺の行動はまさか」
「まさかじゃなくてその通りよ」
「全く」
蝉玉とパレアナがそんな彼にうんざりして述べる。
「大体考えてもみなさいよ」
「あんたみたいな兄貴がいて言い寄るっていうのも」
「そういえばそうか」

自分で納得する。何故かここではやけに客観的に自分を見ていた。
「ジュリエットをやる為に」
「そういうこと」
「わかった！？」
「ああ、全く俺ときたら」
「わかったらいい」
アルフレドは反省しだした洪童に対して声をかけた。
「わかればな」
「悪いな。じゃあここは大人しく帰るとしよう」
「何だ、帰るのか」
やけに大人しくなった彼にギルバートが声をかける。
「折角だから妹さんにエールを送ったりはしないのか？」
「そうよね、折角ここまで来たんだし」
「妹さんいるよ。どうなの？」
「いや、いい」
蝉玉とスターリングにも声をかけられたがそれでも首を横に振ってきた。
「春香の邪魔になる」
「邪魔になるって」
「また急にそんなこと言って」
皆急に物分りのいい兄になった洪童に呆気に取られながらも話を聞いていた。
「どういう風の吹き回しよ」
「俺は確かに春香が大事だ」
パレアナにそう言葉を返す。
「だからだ。あいつの舞台が成功するにはかえって俺は邪魔だ」
「じゃあ今までの殴り込みは何だったんだよ」
「無茶苦茶暴れ周りやがって」
クラスメイト達は彼の豹変に対してそう突っ込みを入れる。入れたくもなるものであった。さながら台風であったから無理もないこ

とであった。
「舞台は見に行く。それだけだ」
「それでいいんだな？」
「ああ。春香に伝えてくれ」
完全にシリアスになってギルバートに言う。
「練習も本番も頑張ってくれとな。それじゃあ」
皆に背を向けて去っていく。何故か格好よくさえある去り際であった。それはさながら千年前の日本の映画の葛飾の男のようであった。
「何か知らないけれど」
「これで騒動は終わりか」
「そうだな」
皆に対しギルバートが腕を組んで答えてきた。
「一件落着だ」
「何か大騒動だったわりには」
「呆気ない終わりだったこと」
蝉玉もパレアナも何か急に力が抜けていくのを感じた。見れば皆同じような顔で大きく息を吐き出していた。騒動が終わってほっとすると共に拍子抜けもしていた。
「まあいいじゃないか」
そんな彼等にアルフレドが声をかける。
「騒ぎは終わった」
「今年のバレンタインもね」
ビアンカも言ってきた。
「終わったわよ、これで」
「そうだな。これで」
双子の妹の言葉に頷く。確かに今終わった。
「終わってみると何か楽しかったな」
カムイは遠くを見る目で述べてきた。
「案外色々あったしな」

「そうね」
それにナンシーが頷く。
「楽しかったわ」
「楽しかったってナンシー」
彼女のことを知らない蝉玉が彼女の声にふと顔を向ける。
「何であんたがそこで頷くの？」
「確か君は義理チョコだけだったんじゃ」
スターリングも突っ込みを入れる。するとナンシーは急にその顔を慌てさせ仕草もあたふたとなってきたのであった。完全に狼狽しだしていた。
「あっ、何でもないわ」
咄嗟に誤魔化す。
「何でもないの。気にしないで」
「そうなの」
「え、ええ」
蝉玉の問いに対して頷く。
「そうなのよ、本当に」
「だといいけれど」
「まあ気にしないで。何はともあれ」
「ええ、一見落着ね」
話は無事終わった。謎は謎として解決されないままであったがそれに気付く者もいなかった。少なくともナンシーにとってはいいことであった。

第四十五話　終幕は穏やかにその八

春香は家に帰って兄と話す。洪童は憮然とした顔で彼女と話をしていた。

「早く言えばよかったんだ」

「言っても信じた？」

そう兄に問う。二人は兎達の世話をしながら話をしている。

「それで」

「俺だって馬鹿じゃない」

馬鹿兄貴なのにこう言うところが流石である。

「そうしたものを見抜く目だってある」

「そうなの」

「そうだ。御前が嘘をつくような奴じゃないのもな」

それははっきりわかっていた。妹のことはよくわかっていた。わかっていないのは自分の暴走だけである。その暴走が問題なだけでだ。

「別に女の子と付き合ってもいい」

こう前置きする。

「俺が認めたらな」

「認めたらなのね」

「そうだ、認めたらな」

かなり望み薄ということである。男でも女でも妹に言い寄る男は滅多なことでは許されないのが春香の交際相手の不幸なのである。不幸の元凶はこの兄であるのは言うまでもない。

「許してやる」

「そうなの」

「そうだ、それで話は」

「明香ちゃんのこと？」

「そっちはどうなんだ？」

実際に彼女に問う。
「彼女の声はソプラノだったよな」
「ええ、そうだけれど」
案外教養もある洪童であった。色々と落語や漫才といった様々なお笑いを極めんとしているわけではない。オペラについてもそれなりの知識があるのだ。
「ソプラノとソプラノか」
「何かまずいの？結構あると思うけれど」
「それはわかっている」
洪童もそれに頷く。
「わかっているがな。しかし」
「しかし？何？」
目をパチクリさせて兄に問う。
「どうしたの、それで」
「明香ちゃんはかなりの実力者だよな」
「うん」
明香はオペラ部のプリマドンナの一人である。多くの作品で主役を演じ人気もかなりある。声はどちらかというと硬質でソプラノの中では低い部類にある、所謂リリコ＝スピントという声域だ。それに対して春香の声域はリリコ＝レジェーロである。軽いソプラノなのである。
「御前、上手くやれるか？」
「やれるかって？」
「負けないよな」
じっと妹の顔を見て問う。
「明香ちゃんに」
「勝ち負けの問題じゃないと思うけど？」
妹は正論で返した。
「それって」
「まあそうだけれどな」

兄も妹の言葉に頷く。
「それで明香ちゃんとはずっと打ち合わせか」
「主役だからね、お互い」
そう兄に述べる。
「仲が悪いと駄目なんじゃないかしら」
「ああ」
妹の言葉に再び頷く。頷きながらも彼女の顔を見ている。
「それはそうだよな。恋人同士の役だしな」
「言っておくけれど嫌らしい意味じゃないから」
「わかってるよ」
憮然として妹に言う。
「それはな」
「じゃあいいけれど。純粋に役のうえで打ち合わせしているのよ」
「ベルリーニか」
洪童は今度はそこに目を向ける。腕を組んで考える顔になってきた。
「難しいな」
「ええ」
春香もその言葉には素直に頷く。ベルリーニは歌手、とりわけソプラノに対してかなりの技量を要求するのである。あまりにも難しい為一時は上演の機会が減っていた程なのだ。
「だからこそやりがいがあるけれど」
「いい言葉だ」
妹のその言葉に感心して頷く。
「その言葉があれば充分だ、今度の舞台頑張れよ」
「有り難う」
兄の言葉に礼を述べる。
「それじゃあ。頑張っていい舞台にするわね」
「ああ。それにしても」
洪童はここで思い切り疲れた顔を妹に見せてきた。

「色々あったな、今日は」
「兄さんのせいでしょ、それは」
最後に口を尖らせる。けれど決して悪い顔ではなかった。

終幕は穏やかに　　完

２００７・４・１４

第四十六話　妹への御馳走その一

妹への御馳走

春香と明香の舞台の上演は近付いていた。二人の打ち合わせも真剣なものになる。

「それでここはこうよね」

「そう、それで」

教室でも部室でも時間があれば打ち合わせをする。練習も真剣そのものであった。

「ここはこうやって」

「それでだとここは」

楽譜や台本を広げていつも話をしている。実に熱心な姿であった。春香の家でも明香の家でも打ち合わせをしている。洪童はそれを見ていたく感動して二人に手作りのサムゲタンまで御馳走する程であった。

「ほら、食え」

鶏一匹丸ごと出て来る。見れば大蒜に生姜に高麗人参と精がつきそうなのばかりである。それが二つ、一人に一つずつドンと出て来たのだ。

「食って栄養をつけろ、いいな」

「兄さん、まさかこれは」

「俺の手作りだ」

彼は言う。

「高麗人参まで入れた高かったんだぞ」

「高かったって。これは」

春香はその高麗人参を見て言葉もない。かなり立派なものだったからだ。

「凄かったでしょ」

「何、気にするな」

しかし洪童はそんな妹の気遣いに余裕を以って返した。
「俺のバイト代の残りだったからな」
「有り難う、兄さん」
「礼には及ばん」
こうまで言い切る。
「礼を言いたければ食え。そして舞台を成功させろ、いいな」
「ええ、わかったわ」
そんな兄の気遣いを受けてサムゲタンを食べる。それを聞いた彰子もクラスメイト達も深い感銘を受けたのであった。
「やるね、洪童も」
「妹馬鹿じゃなかったんだ」
口々にそう述べて彼を褒める。また彰子ももう一方の当事者の姉として彼のことを意識せざるを得なかった。少なくともその筈だった。
「凄いね、洪童君って」
平気な顔でこう言うだけである。相変わらずおっとりとしていた。
「妹さんの為にそんなことまで」
「ちょっと彰子ちゃん」
あまりのおっとりさに見るに見かねた七海が声をかけてきた。
「それだけ？」
「それだけって？」
「いや、だからね」
彰子のあまりものおっとりさに内心かなり呆れながらも言う。
「それだけじゃなくてね。つまり」
「そうだ、今日春香ちゃん来るんだ」
ふと思い出して言ってきた。思い出したようにではなくて思い出したのである。ここが全然違うところであった。やはり彰子は何かが違っていた。
「用意しておかなくちゃね」
「そうそう」

何はともあれその言葉に応えて頷く。
「御馳走してあげるといいわ。協力するから」
「いいの？」
きょとんとした小動物めいた顔で七海を見て問う。
「何か悪いわね、それって」
「いいのよ、友達じゃない」
そう彰子に返す。
「だからね。いいわね」
「ええ。それじゃあ今日の放課後ね」
「わかったわ。それで何作るの？」
「まだ決めてないけれど」
返事は今一つ要領を得ないものであった。彰子らしいと言えばらしいが。
「それでもスーパーに行ってね」
「了解、スーパーね」
「うん」
それでも話はまとまった。二人は放課後明香と春香の為に食材を買いに行くことになったのであった。スーパーに行くと彰子はまず野菜コーナーに向かった。
「まずはこれとこれ」
葱に白菜、しらたき等を買う。
「それとこれ」
続いて豆腐である。思いだしてシメジも買っている。
「それでこれも」
「あれっ、彰子ちゃん」
ここで七海はあることに気付いた。
「それ、豚じゃないわよね」
「うん」
今彰子が手に持っている肉を見て問う。それは豚に似ていて豚ではないものであった。

「猪よ」
「猪！？また随分ワイルドね」
「牡丹鍋するつもりなの」
そう七海に述べる。所謂猪鍋である。
「どうかな、それで」
「また随分ワイルドね」
これは七海も予想していなかった。何となく精のつきそうなものを作るだろうとは思っていたがまさか牡丹鍋とは。流石に驚きを隠せなかった。
「牡丹鍋って」
「そうかしら」
「そうかしら、じゃなくてそうよ」
七海はそう言葉を返す。
「彰子ちゃんが作るのよね」
「そうだけれど」
彰子の返事はさも当然であるようなものだった。牡丹鍋をである。お世辞にも女の子が作るものとは言えない。しかし彼女はそれをあえて作るというのだ。これも七海にとっては驚くべきことであった。

第四十六話　妹への御馳走その二

「作れるんだ」
「お肉も好きだから」
「いや、猪は普通のお肉とは」
「そうかなあ」
しかし彰子はいつものおっとりした返事であった。何も動じるところはないといった感じの返事である。これが実に彼女らしくもあるが。
「お肉はお肉じゃない」
「まあね」
それは七海も頷くしかなかった。
「豚肉と味は変わらないし」6
「匂いと硬さがね。あれだけれど」
「けれどそれがいいのよ」
穏やかな笑みで結構ワイルドなことを言う。
「その硬さと匂いが。元気がつくから」
「まあ匂いは」
ここで野菜コーナーに目をやる。ふとあるものが目に入った。
「生姜で消さない？」
「生姜で？」
「ええ。丁度いい香辛料になるし」
こう彰子に提案してきた。実に和風の味付けになることを考えての言葉であった。実際に生姜は豚料理でもよく使う。和食ではよく使う匂い消しでもあるのだ。
「どうかしら」
「うん、それじゃあ」
彰子もその言葉に頷く。
「買うわ。それもたっぷりと」

「たっぷりとなのね」
「生姜も身体にいいし」
これは本当のことである。風邪にいいだけでなくやはり精がつくのだ。洪童がサムゲタンの中に入れていたのもそれが理由である。所謂薬膳料理にもよく使われる。
「ここはたっぷりとね。それで」
「それで？今度は？」
「卵も買っておかないと」
「そうね」
何に使うのか、七海にはすぐにわかった。彰子の言葉を聞いてにこりと笑う。
「それは忘れたら駄目よね」
「うん。後は」
そんな話をしながら楽しく買い物をしていく。暫くして山のような食材を持って家に帰る。二人はすぐに料理に取り掛かる。包丁捌きは彰子の方がかなり美味かった。七海も決して下手ではないがかなり大雑把である。
「美味いわね、包丁」
七海は彰子のその包丁を見て言う。
「手早いし的確だし」
「料理部だし」
彰子はそう答える。
「こういうの昔からやってたしね」
「そうだったんだ」
「うん。お魚だって捌けるよ」
「あっ、それは私も」
七海はその言葉には機嫌よく応える。
「海によく行くしね。それで」
「そういえば七海ちゃんって海のものなら何でも好きよね」
「ええ、大好きよ」

にこりと笑ってその言葉に答える。
「落ち着くし。食べ物は美味しいし」
「うん」
彰子は七海のその話をにこにことして聞いている。
「やっぱり海が一番いいわね」
「七海ちゃんそれで水泳部に入ったの？」
「それはあるわ」
自分でもそれを認める。
「やっぱりね。泳ぎたいから」
「そうだったんだ」
「けれど山も好きよ」
結構な自然児である。見れば彰子よりも頭一つ背が高い。スタイルも結構筋肉質なところがある。それを見ていると今の言葉も似合うものであった。
「川で泳ぐのも」
「川で泳ぐのも気持ちいいよね」
「そうそう、解放感があって」
にこにことして述べる。
「だから山のものを食べるのも好きなのよね、実は」
「けれど猪は嫌いなの？」
「嫌いじゃないわ」
それは言う。実は猪も食べたことがないわけではないし味もちゃんと知っている。しかし彼女はあえて異議を呈していたのである。やはり女の子の食べ物としてはどうかと思ったからだ。

第四十六話　妹への御馳走その三

「けれどね」
「けれど？」
「やっぱり。女の子が料理するものじゃないような」
「そんなこと言ったら何も食べられないんじゃ？」
しかし彰子はここでこう言ってきた。彼女も負けてはいない。
「やっぱりそれだと」
「うっ」
彰子の今の言葉には声を詰まらせる。その通りなのだ。
「お刺身だって何だって」
「ま、まあね」
苦しい顔でそれに返す。
「お菓子だって男の人が作ったりするし」
「そういえばダンってあれで結構お菓子とか上手いわよね」
悪ぶっているようで意外と繊細なクラスメイトであった。ダンは外見は怖いがそのよく気がつく性格と面倒見のよさ、繊細さが意外と人気なのである。
「ダン君だってそうだし」
彰子はさらに言う。
「他の皆だって」
「そういえばそうね」
七海も遂にその言葉に頷いた。
「そうやって区別するとかえって駄目ね」
「私はそう思うよ」
にこりと笑って七海に述べてきた。
「やっぱり」
「何か今日はあれね」
七海はその言葉を聞いて彰子に返す。

「彰子ちゃんに教えてもらうことが多いわ」
「そうなの？」
「ええ」
にこりと笑って言う。
「とてもね」
「ふうん。そうなんだ」
「それで七海ちゃん」
話題を料理にやってきた。
「猪随分薄く切るのね」
見れば七海は猪の肉をかなり薄く切っていっていた。塊だったのが見る見るうちにスライスされていく。その速さも的確さもかなりのものであった。やはり見事である。
「食べ易いようにね」
その肉を切りながら答えてきた。
「切ってるの」
「成程。それにしても美味いわね」
「ううん、やっぱりこういうのって馴れだから」
少し首を傾げて笑って述べる。
「自然と身に着いたのよ」
「自然に、なのね」
「そうなの。子供の頃からずっとお料理していたし」
「幾つから？」
「小学校一年の時かしら」
ふと視線を上にやって考えながら述べてきた。
「多分。あまり記憶にないけれど」
「一年の時からなの」
「多分よ。あまり覚えていないから」
そう答えるがそれでも七海にとっては驚くべきことであった。
「私は小学校五年の時だったかしら」
彼女はそう答えてきた。

「そんなに長くはやってないわ」
「そうなんだ」
「だからかしら。彰子ちゃんの料理が上手いのって」
「最初はね、あれだったの」
ここで少し苦笑いになる。顔は七海に向けているが手は止まらない。ごく自然に手を動かして肉を切っていく。瞬く間に肉は奇麗な牡丹となって皿の上に飾られていく。
「私も下手だったの」
「最初は誰だってそうよ」
七海はにこりと笑って彰子に言う。
「最初からできるのってやっぱり天才よ」
「御粥作ったのよ」
「御粥！？」
「うん。明香が風邪ひいちゃって。それでね」
思い出を語る顔になる。その顔がやけに優しい。まるで菩薩のように。
「作ってあげたんだけれど。明香泣いちゃって」
「泣いたの？」
「うん。やっぱり美味しくなかったからだと思うの。そのせいで」
「そうかしら」
だが七海はそれは少し違うのではないかと思った。そう言いながら鍋に水を入れる。ここで彰子が言ってきた。
「調味料は私に任せて」
「いいの？」
「ええ。今切るの全部終わったから」
見ればその通りであった。肉も野菜もキノコも皿の上に奇麗に並べられている。その並べ方もまた実に奇麗なものである。切るだけではなかったのだ。
「ほら、だから」
手を洗いながら七海に言う。

「いいわよね。それで」
「わかったわ。それじゃあ」
七海はにこりと笑って彰子に応える。
「御願いしていいわね」
「うん。ところで七海ちゃん」
彰子は鍋に向かいながら七海に尋ねてきた。
「何？」
「やっぱり明香が泣いたのってあれよね」
そちらに話を戻してきたのであった。ここで火を点ける。
「私の御粥が美味しくなかったから。それで」
「ううん。どうかしら」
しかし七海はその言葉には首を傾げる。右の人差し指を頬にやって傾げる動作が実に可愛らしい。よく見ればポニーテールにエプロンも似合っている。彰子はその長い髪を上にまとめている。やはり彼女もエプロンを身に着けている。前にフェレットのアップリケがある可愛らしいエプロンである。
「それは違うかも」
「違うの？」
「うん。それはね」
「ただいま」
言おうとしたところで玄関が開く音がした。そして明香の声が聞こえてきた。

第四十六話　妹への御馳走その四

「あっ、帰って来た」
「うっ、ナイスタイミング」
言おうとしたところで帰ってきたので言いそびれてしまった。七海はそのことに彰子に見えないようについつい苦笑いを浮かべていた。
「いいところに」
「お邪魔します」
そうして春香の声も聞こえてきた。やはり二人一緒であった。
「只今、姉さん」
「おかえり、明香」
明香は微笑みで、彰子はにこりと笑って挨拶を交える。彰子は続いて春香にも笑顔を向けてきた。
「今日もお疲れ様」
「すいません、お邪魔して」
春香はおずおずとした仕草で彰子に挨拶をする。両手で前に持っている鞄が可愛い感じだ。
「今日も」
「いいのよ」
彰子はにこりとした笑みを春香にも向けて言う。
「明香のお友達だし。ねえ」
「ええ」
明香は姉のその言葉にこくりと頷く。
「けれど姉さん、有り難う」
「いいのいいの。それじゃあ」
あらためて妹達に対して言う。
「もう御飯できてるから。食べて」
「お鍋ですか？」

春香がテーブルの方を見て問う。
「若しかして」
「そう、その若しかして」
彰子はまたにこりと笑って彼女に答える。
「牡丹鍋よ」
「というと猪のですか」
「あら、知ってるのね」
七海がそれを聞いて春香に声をかけてきた。
「猪のお肉のお鍋だけれど知ってるみたいね」
「はい」
七海の言葉にこくりと頷いてからまた述べる。
「韓国じゃ和食凄い人気がありますから」
「ああ、そうみたいね」
七海もそれは知っていた。千年以上昔から韓国では何だかんだと言っては日本のものが人気があるのである。日本の流行や芸能界もそうだし服も料理もだ。あげくの果てには韓国で何か困ったおとがあると日本ではどうなのか、と日本を比較対象にして検証したりする。それ程までに日本を見ているのである。連合ではこのことはあまりにも有名である。男女関係になるともっと凄まじく日本人の彼氏や彼女がいると自慢する者までいたりする。こうしたことは連合広しと言えど日韓関係にしか見られないことである。
「それで牡丹鍋も」
「猪は韓国でも食べますけれど」
「焼いたり煮たりしてよね」
「はい、そうです」
彰子に答える。
「韓国だとやっぱり大蒜と唐辛子ですけれど」
「やっぱりね。じゃあ日本の料理はわかってるわね」
「はい。お醤油ですね」
「それとだしも取ってあるから」

「だしもですか」
「うん、事前にね」
「あれ、何時の間に」
七海はそれを聞いてふと言った。
「もうお鍋の中に昆布入れておいたの。鰹節も」
彰子はそう七海に述べてきた。
「学校に行く前にね」
「用意がいいわね」
「だって用意が基本だから」
また七海に言う。
「だからよ」
「成程ね。じゃああとは少し味付けして具を入れていくだけね」
「そういうこと。じゃあ春香ちゃん、明香」
妹達の方を向いて声をかける。
「食べて。どんどんね」
「ええ」
「それじゃあ御言葉に甘えまして」
「私も？」
「勿論」
七海にも答える。
「たっぷりあるから。皆でね」
「わかったわ。それじゃあ」
「うん、四人でね」
こうして四人で牡丹鍋を食べることになった。味は最高だった。
食材は程よい大きさでだしもよかった。気付けばもう鍋の中には何もなくなっていた。あっという間の出来事であった。
「あれだけあったのに」
七海もあっという間になくなったので目を少し丸くさせていた。
「もう全部食べちゃったなんて」
「美味しかったわね」

彰子はその鍋の前でニコニコとして笑っていた。それからまた述べてきた。
「それじゃあ次は」
「次って!?」
「嫌よ七海ちゃん、お鍋の最後っていえば」
「ああ、それね」
それを言われて七海にも彼女が何を言いたいのかわかった。
「そっちね。雑炊」
「そう、それがなければお鍋じゃないわよ」
彰子も笑って述べる。
「折角卵も買ったんだし」
「そうね。それじゃあ」
こうして最後の雑炊も食べることになった。これもまた瞬く間になくなり四人は満足した顔でいることになった。後片付けは七海が名乗り出てきた。

第四十六話　妹への御馳走その五

「じゃあ後片付けが私がしておくから」
「えっ、別にいいよ」
しかし彰子はこう言って自分がしようとする。
「私がするから七海ちゃんはゆっくりとしていてよ」
「何言ってるのよ、これは御礼よ」
右目でウィンクしてこう返す。
「美味しいお鍋のフルコースのね」
「御礼ってそんな」
「いいからいいから」
しかし彰子はまだ自分がしようとする。七海はそんな彼女に言うのだった。
「折角だから彰子ちゃんは二人の練習でも見てあげてよ」
「それじゃあ。いい？」
「ええ、任せて」
こうして彰子は二人の練習の見学をすることになり七海が後片付けに回った。暫く鍋等を洗っているとそこに明香がやって来た。
「あら、練習は？」
「ちょっと喉が渇いたので」
遠慮がちな声で言ってきた。
「それで」
「来たのね」
「はい。今日はすいません」
その遠慮がちな声でまた言う。
「来て頂いてそれに」
「いいのよ。食べた御礼にね」
彰子に対して言った言葉を彼女にも述べる。
「気にしないでいいわ。それよりね」

「何でしょうか」
「彰子ちゃんから聞いたけれど。貴女達って昔から仲よかったのね」
「姉さんとですか」
「そうよ。何か羨ましいわ」
にっこりと笑って明香に言う。
「仲のいい姉妹ってね。うちは賑やかだったから少し違うのよ」
「はあ」
「御粥作ってもらったんだって？」
「ええ、まあ」
お茶をコップに入れながら答える。麦茶である。
「子供の頃ですけれど」
「そう、いいわね」
「あの時泣いて。姉さんとても驚いて」
「それね。彰子ちゃんにも聞いたわ」
それを明香にも問う。問いながら彼女に対して顔を向ける。鍋を洗う手は止めてはいない。見ればかなり手際がいい。慣れている感じであった。
「どうしたの？一体」
「悪い意味じゃないんです」
コップを両手に持って述べる。
「嬉しくて」
「彰子ちゃんの気持ちがなのね」
「姉さん、いつも私のことを心配してくれてるんです」
そう七海に語る。静かな声だが感情がはっきりと伝わる声でもあった。
「それで。あの時もはじめてだったのに必死に作ってくれて」
「美味しかった？彰子ちゃんは泣いちゃったって言って失敗したって言ってるけれど」
「美味しかったです。けれど」
「けれど？」

「それ以上に温かかったです」
ほんの少しにこりとした笑みになる。普段の表情のない彼女にとっては滅多にない温かい笑みであった。
「そうなの」
「はい。姉さんがこんなに私を大切に思ってくれてるんだってわかって。それで」
「いいお姉ちゃんなのね、彰子ちゃんって」
「私にとってはそうです」
正直に七海に語る。
「いつも私のことを心配してくれて何でもできて」
「そうね、いい娘よ」
七海もその言葉に頷く。
「ちょっとね。いえ、かなりおっとりしてるけれど」
「それでもあれなんですよ」
お茶を飲みながら言う。そのお茶もほんのりと温かい。
「いざとなればすごくしっかりとしてくれるから」
「頼りになるのね」
「私、姉さんがいないと駄目なんです」
世間では逆だと思われている。おっとりした彰子をいつもフォローするしっかり者の妹だと。だがそれは全然違うようである。七海は今の明香の言葉を聞いてそう思った。
「全然何もできなくて」
「そうなの」
「はい、だから余計に」
顔も声も温かいものになっていく。
「姉さんが好きなんです」
「彰子ちゃんもそうよ」
そう答えてきた。
「彰子ちゃんもね、明香ちゃんが好きなの」
「はい」

その言葉ににこりと笑う。やはり微かな笑いであるがはっきりと心が伝わる笑みであった。
「よくわかります。だから」
「何時までも仲良くね」
また声をかける。
「お互い身体寄せ合って」
「わかりました」
「じゃあコップ頂戴」
飲み終えたコップを渡すように言う。
「洗っておくから」
「すいません」
「それでね。そのお姉さんが作ってくれた鍋を一杯食べたんだし」
今度はそれについて言及してきた。
「頑張ってね。今度の舞台」
「はいっ」
素直で澄んだ返事が返ってきた。
「絶対成功させます、春香ちゃんと一緒に」
「その意気よ。それじゃあ」
「また練習に戻ります」
「じゃあね。応援してるわよ」
「わかりました」
こうして明香は練習に戻る。七海はその後姿を見送ってまた呟く。
「何か。仲のいい姉妹っていうのも。妬けるわね」
にこりと笑って言う。けれど悪い気はしてはいなかった。

妹への御馳走　　完

2007・4・21

第四十七話　本番になってその一

本番になって

洪童や彰子の熱い応援もあり二人の練習は順調に続いた。こうして遂に本番となったのであった。

初演の日。二人は楽屋で緊張した面持ちになっていた。もう舞台衣装は着ている。明香はロミオの少年の服を、春香はジュリエットのドレスを。それぞれ着て用意していた。

「いよいよね」

「ええ」

明香は春香の言葉に頷く。

「用意はいい？」

「うん」

また頷く。顔が強張っているのがわかる。

「ベルリーニははじめてだし」

「私も」

春香もまた緊張していた。その面持ちで答える。

「とても難しいからね。やっぱり」

「緊張するわ」

ベルリーニの歌は難易度が高いのでは定評がある。伝説的ソプラノジュディッタ＝パスタを参考にして作られた多くの曲は長い間マリア＝カラスが復演するまで歌われなかった程だ。この時代においても極めて難易度の高い歌が多いことでも知られている。このカプレーティとモンテッキィにしても同じである。ロミオとジュリエットのオペラは他にもあるがこの作品はとりあけ難しいことで知られているのだ。

「そうね。けれど」

「練習したし」

春香はにこりと笑って言ってきた。

「きっと大丈夫よ。そうよね」
「そうね。それじゃあ」
「来て、ロミオ様」
そのにこりとした笑みで明香に声をかける。
「一緒に舞台へ」
「ええ、ジュリエット」
明香もにこりと笑みを返して彼女に応えてきた。
「頑張りましょう」
「ええ」
二人はそのまま舞台へ向かう。いよいよ本番であった。
観客席。ここに二年Ｓ１組の面々も集まっていた。開演を今か今かと待っている。
「もうすぐか」
ギルバートが言ってきた。
「間も無く開演だな」
「そうね」
アンが真剣な顔でそれに頷く。何時の間にかギルバートの隣にいる。
「ロミオとジュリエットよね、確か」
「うん」
ギルバートはアンの言葉に頷く。
「題名は違うが中身は同じだ」
「そう。ジュリエットかあ」
ここでちらりとギルバートを見る。それからこそりとギルバートに囁いてきた。
「ねえギルバート」
「何だ？」
「今度ね、私ロミオとジュリエットを描こうと思ってるんだけれど」
「いいんじゃないのか？」
全然気付くものに気付かずにアンに言葉を返す。

「名作だしな。オーソドックスにやってもいいし趣向を変えてもいいし。そうしたところは腕の見せ所だろう」
「そうよね。それでね」
ギルバートの心を探るようにして言葉を続ける。
「ギルバートも。モデルにしていいかな」
「ジュリエットの父親役でか？」
「ちょ、ちょっと違うわよ」
髪の毛の色と同じ位顔を赤くさせてそれを否定する。
「よかったらね、ロミオなんてどうかなって言ってるのよ。あのね、嫌ならいいのだけれど」
「またアンは」
「どうしてこうなんだか」
クラスメイト達はアンがまた自爆したのを見て呆れていた。しかしギルバートはその自爆にすら全く気付いてはいない顔であった。
「それでも。どうかなって。どうかのよ」
「描きたいなら描いてもいいが」
「馬鹿っ、言ってる意味が違うわよ」
またムキになって言う。
「私はね、そういうのじゃなくて」
「ちょっとアン」
見るに見かねたルビーが横から言ってきた。
「もうすぐ開演よ」
「あっ、そうね」
「全く。静かにしてくれ」
ギルバートも全くわからずに言わなくていいことを述べる。
「もうすぐだからな」
「あんたもねえ」
ルビーは彼に顔を向けてふう、と溜息をつく。

第四十七話　本番になってその二

「もうちょっと周りを見なさいよ」
「周り！？何を打」
「ああ、わからないのだったらいいわ」
また溜息をついて述べる。
「わからなかったらね」
「そうなのか」
「けれど一つ言っておくわ」
それでも言うべきことは言うつもりだった。実際にギルバートに対して述べる。
「あまりね。人の気持ちとかにも目がいくようにね」
「わかってはいるが」
「どうだか」
わかっていないでしょ、とあからさまに言いたげな顔だったがそれでもギルバートにはわからない。どうにも鈍感にも程があるがそれでも彼にはわからない。
「まあいいわ。本当に開演だから」
「そうだな。いよいよだ」
ギルバートだけでなく皆の顔色が変わってきた。
「これからだ」
「御前等黙って聴けよ」
洪童が皆に言う。
「騒いだ奴は春香にかわって俺が」
「ああ、わかったから」
ベッキーは彼もいなして言う。
「あんたも静かにしてなさい。いいわね」
「俺が騒ぐって言うのか」
「その可能性は高いでしょ？」

ジロリと彼を見て問うてきた。
「今までのパターンだと」
「心外だな、俺は滅茶苦茶に悲しいぞ」
「それマジで言ってるの！？」
目を顰めさせて彼に問う。
「ひょっとして」
「ひょっとしても何も俺はお笑いも真面目にやる」
これは事実だ。彼はお笑いの天才を辞任している。だからそういうことにかけても本当に真面目にやっているのである。なおバレンタインの一連の騒ぎも本人は大真面目だったのだ。とにかくそれは確かだった。
「今日もだ」
「ボケでも何でもないわよね、それって」
「だから俺は」
「わかったから。けれどね」
ジロリと洪童を見据えてまた言ってきた。声も厳しいものになっている。
「自分で騒いだら元も子もないから。いいわね」
「当然だっ」
わかっていない人間の言葉に他ならなかった。
「俺は何があっても静かにしているぞ。ブラボーの言葉以外はな」
これはオペラでの礼儀であった。素晴らしい歌だったならば拍手と歓声を送る。オペラの醍醐味の一つである。これもまた楽しいものなのである。
「だからだ」
「そう。それじゃあそうしなさいね」
「わかった。それじゃあな」
彼は腕を組んで豪語していた。彰子もそこにいて開演を舞っていた。
「彰子ちゃんは静かなのね」

「うん」
アンの問いににこりと笑って返す。
「洪童はあれなのに」
「だって。大丈夫だから」
「信頼してるのね、妹さんを」
「明香だけでなくて春香ちゃんもね」
彰子はそのにこりとした笑みで述べてきた。
「大丈夫よ、絶対に」
「練習したから？」
「うん。努力するって重要じゃない」
「確かにね」
その言葉にはアンも頷く。その通りだ。彼女も漫画を描く身として日々精進しているからこそそれはわかる。努力なくしては決して先には進めないものだ。
「それはわかるわ」
「二人共物凄く頑張ってたし。絶対に凄い舞台になるわ」
「そう。それじゃあその舞台を見せてもらうわ」
「うん」
こうして彼女達は開演を待つ。しかし騒いでいる者がそこにいた。
「うおおおおっ、いよいよだ！」
フランツである。席を立って一人絶叫している。
「素晴らしい舞台になるのがわかるぞ。俺は今猛烈に感動している！」
「ああ、わかったからそれはね」
他のクラスメイト達は呆れながら彼の相手をする。

第四十七話　本番になってその三

「静かにしてろって」
「皆静かにしてるんだから」
「何を言う！」
彼は言ってもわからない。そこが洪童と違う。
「ここは全力で聴く！それが楽しみ方だ！」
「わかったからここは落ち着け」
タムタムが言ってきた。
「いいな、ここは我慢だ」
「我慢か」
「そうだ、我慢も大事だ」
そう相方に言う。微妙に誘導していっているのがわかる。
「今がその時だ」
「そうか、わかった」
実に単純であった。何かしら誘導する言葉に弱いのは相変わらずだった。
「それではここはな」
「じっくりと見ることにするか」
「うむ」
タムタムはここで頷いてみせる。これで完璧であった。
「ではいいな」
「よしっ」
こうして彼は静かに聴きだした。憂いは去った。こうして開幕を迎えることになった。
幕が開いた。するとはじまったのは春香と明香の妖しいまでに美しい息の合った名演技であった。それだけで皆息を呑んでしまった。
「うわっ・・・・・・」
「これは」

皆言葉を失う。その美しさにだ。
「凄いなんてものじゃ」
「女の子だけってやっぱり」
「凄い、凄いぞ春香」
洪童はその中で感涙して言っていた。
「ここまでとは」
「ちょっと、感動するのはいいけれど」
またたまりかねてベッキーが横から言ってきた。
「幾ら何でも涙が流れ過ぎよ」
「ん!?そうか?」
「そうよ」
見ればその通りだった。涙が滝のようである。
「漫画みたいに」
「これが感動せずにいられるか」
しかし洪童はそれに反論する。
「春香。見事だ、見事だぞ」
「やれやれ」
そんな彼に呆れながらも感心した。
「本当に妹思いなんだから」
「ブラボーーーーッ!」
観客席から歓声が起こる。それはアリア、二重唱が終わる度に聞かれる。二人が死ぬ場面になるともう観客席は完全に静まりかえっていた。
ロミオとジュリエットが死に二人の亡骸が並べられている。その場面だった。
「一体誰が殺したんだ」
「冷酷な貴方が」
最後の幕切れとなった。幕が降ろされると一斉に歓声が起こる。
「さて、ここからも本番ね」
アンは幕が降りたところで言った。

「カーテンコールよ」
「そうね」
ベッキーがその言葉に頷く。楽しそうに笑っていた。
「オペラは終わってからもこれがあるからね」
「そういうこと。ほら」
まずは歌手達が手をつないで幕の間から出て来る。そこで観客達に一礼する。
「ブラボーーーーーッ！」
「よかったぞ！」
次々にそう皆が声をかける。花吹雪に花が歌手達に投げられる。
一旦退いてそれからはメイン歌手達が一人ずつ。こうしたところもかつてのメトロポリタン歌劇場の方式だった。
明香が出る。足元には花束がある。
「ブラボーーーーッ！」
明香にも歓声が送られる。
「よかったよ明香ちゃん！」
「今度はジュリエットやってくれよ！」
観客達のその言葉に花束を手に取りながら一礼する。そうして彼女は引っ込み春香の番となる。
慎ましやかに出ると彼女の前にも花束があった。やはり彼女にも歓声が送られる。
「あら」
ここでベッキーは洪童を見て意外だと思った。彼は静かな顔をしていたからだ。
「騒がないの？ここでは」
「うう、見事」
騒がないかわりに相変わらず涙を流し続けている。それが止まる気配はなかった。
「見事春香、最高だよ」
「やれやれ」

苦笑いを浮かべてここは彼をそっとすることにした。
「仕方ないわね、これは」
「全く、今まで自分が一番騒いでいたのにね」
アンもしょうがないわね、といった顔で彼を見ていた。
「困ったこと。けれどいいわ」
「そうね」
ベッキーはアンのその言葉に頷く。
「こんなに妹思いのお兄さんって」
「他にいないし」
「ほら、二人共」
ここでギルバートが言ってきた。
「次は二人揃ってだぞ」
「あっ、本当」
「何か二人並ぶとね」
「ええ」
舞台姿のままの二人を見てまた笑みを浮かべ合う。
「何か凄く奇麗」
「女の子同士なのに」
「相手が春香ちゃんだといいかな」
彰子はここで爆弾発言をしてきた。
「明香の彼女も」
「ってそれじゃレズじゃない」
アンが苦笑いを浮かべてそれに突っ込みを入れる。

第四十七話　本番になってその四

「日本じゃそれでもいいでしょうけれど」
「それでもやっぱり」
彰子はにこやかに笑ってまた言う。
「明香と付き合える子っていないし」
「何か彰子ちゃんも結構ね」
「そうね」
アンはまた横から言ってきたベッキーの言葉に応えて頷く。
「洪童と似てるっていうか」
「馬鹿姉だったのね」
「写真撮りたいなあ」
彰子はその横でさらに言う。
「あの二人の姿そのままで」
「それだ！」
ここでフランツが熱血モードに戻った。
「彰子ちゃん、それは素晴らしい考えだ！」
「フランツ君、そう思う？」
「ああ！思い込んだら試練の道を行くが女のど根性！！」
「・・・・・それ女でしょ」
「また変なこと言って」
クラスメイト達はそんなフランツにまた呆れるが彼はもうスイッチが入っていた。何時の間にかその目の中には紅蓮の炎が燃え盛っていた。
「真っ赤に燃える王者のしるし！それを手に入れる為に！」
「どうするのよ」
アンがそれに突っ込みを入れる。
「特訓でもするの？またいきなり」
「違う」

だがフランツはそれは否定する。
「楽屋に行けばいいだけだ」
「ああ、そうなの」
アンはそれを聞いてまずは頷く。
「そのわりに随分また派手に言うわね」
「何を言う、楽屋だぞ」
また無意味に熱いことを言う。
「楽屋は役者の聖域だ。そこに入るとなればかなりの覚悟が必要なのは言うまでもない。だからこそ真っ赤に燃える王者のしるしもまた必要なのだ」
「そうかしら」
「さあ」
皆それを聞いても思いきり懐疑的だった。とてもそうは思えない。
「まあとにかく彰子ちゃん」
アンは自分の口でも彰子に声をかけてきた。
「楽屋に行って妹さんに褒め言葉かけてあげればいいから」
「うん」
アンの言葉にこくりと頷いてくる。彼女もそれは賛成のようであった。
「わかったわ。それじゃあ」
「あんたも。と言っても」
「最初から行くつもりよね」
アンとベッキーはそう洪童に声をかける。彼に関しては言うまでもないと思っていたがそれでも一応声をかけるのだった。
「楽屋に」
「ああ、勿論だ」
やはり返事は決まっていた。彼は力強い声で応える。
「すぐにな」
「そう、じゃあ行きなさい」
アンは彼にも行くように進める。

「妹さん喜ぶから。いいわね」
「わかった。じゃあな」
「ええ」
洪童はすぐに立ち上がって楽屋に向かう。彰子もそれに続く形で楽屋に向かう。アンはそれを見送って温かい微笑みを浮かべて言うのだった。
「いいものね、やっぱり」
「そうね」
ベッキーもそれは同じだった。彼女も優しい笑みになっていた。

第四十七話　本番になってその五

「兄弟っていうのはね」
「私そうした存在いないから」
アンの顔が寂しいものになった。
「羨ましいわ、正直」
「そうだったんだ」
「ええ。せめて、ねえ」
ここでちらりとギルバートを見る。
「気付いてくれればいいんだけれどね」
「ちょっと」
べっきーがここで彼女に注意する。
「そんなこと言ったらスキャンダルを」
「いっそなればいいのに」
悲しい苦笑いになって述べる。
「そうなれば気付くでしょうし」
「それで致命的な台詞言ったらどうするのよ」
ベッキーはそうアンに注意してきた。
「そういうのも有り得るわよ」
「確かに」
否定できなかった。彼女の言葉にまた溜息をつく。
「有り得るわね、充分に」
「だからよ。歌劇場ってゴシップ狙いも多いから注意してね」
「八条スポーツだったかしら」
ふと八条学園内のでまかせばかり書くスポーツ新聞紙を思い出した。宇宙人や怪獣が出たり折込の逆には全然違うことを書いていたりと何かと笑わせてくれる新聞紙であるがゴシップも扱っているのである。もっともそれの殆ど全てがでまかせであるが。
「それって確か」

「もっと悪質なのもあるわよ」
ベッキーは顔を顰めさせて言う。
「ほら、ラビニアとミンチンがやってる」
「日刊キムダイだったっけ」
「それと夕刊キム」
ベッキーは嫌悪感を露わにしてアンに答える。
「あの連中は本当に人間の屑だから。注意して」
「そうだったわね。あいつ等だけはね」
「そういうこと。絶対ここにもいるわよ」
「あいつ等だけは許してはおけないわね」
アンの顔が剣呑なものになる。普段見せないような顔であった。
「何時か何とかしたいけれど」
「またそれはね。何時か」
「ええ、何時かね」
二人は言い合う。とかく評判の悪いラビニアとミンチンであった。
この二人を好きな者は学園にもいないと言われる程である。とかく評判の悪い連中なのだった。
「まあそれは置いておいて」
ベッキーは話題を明るい方に変えてきた。
「あの二人今頃はね」
「そうね」
アンの顔もにこやかなものになった。
「妹さん達と仲良くやってるわね」
「それじゃあお邪魔虫は大人しくするってことで」
「そういうことね。それじゃあ」
「ええ。帰りましょう」
こう言って帰路につく。その頃彰子は妹と仲良く楽屋で楽しい時間を過ごしていた。
「凄くよかったわよ」
姉はにこりとした笑みを妹に向ける。明香はまだ舞台の衣装のま

まだった。
「ロミオの役」
「有り難う」
姉の言葉ににこりと笑って微笑む。何時になくはっきりとした笑みであった。
「姉さんに言われたら」
「嬉しい？」
「ええ」
その笑みのままこくりと頷く。心からの言葉であった。
「そう言ってもらえたらまた」
「頑張れるかしら」
「うん。それに」
「それに？」
「やっぱり。やってよかったって思えるの」
また述べる。本当に心からの笑みと共に。
「やってよかったって」
「何でまた？」
彰子は自分ではそれがどうしてかわからずに首を傾げる。やはりわかっていない顔だった。こうした鈍感さは彼女にはあって明香にはないものであった。

第四十七話　本番になってその六

「誰だって同じだと思うけれど」
「ううん、違うの」
首を横に振ってそれを否定する。
「姉さんに褒めてもらえるのが一番嬉しいの、私にとっては」
「そうなの」
「ええ。だから」
姉に顔を向けてまた言う。
「また次の舞台も頑張るわ。きっと」
「そう。それじゃあ次の舞台もね」
彰子はまだよくわかっていないところがあったがそれに頷いた。
「頑張りましょうね」
「ええ。私頑張るわ」
明香もその言葉に頷く。
「これからも」
「そうよ。じゃあ明香が頑張るのなら私も」
またにこりと笑って妹に言ってきた。
「頑張るわ。今日の夕食はね」
「何なの？」
「チキンバーグにズッキーニのポトフよ」
「ズッキーニ！？」
それを聞いて明香の顔がぱっと明るくなる。実はズッキーニは彼女の大好物の一つなのだ。しかもそれだけではなかった。
「それとデザートはシュークリームよ」
「有り難う、それって」
「全部明香の好きなものよ。どうかしら」
どれも彼女の好きなものであった。チキンバーグもシュークリームもそうなのだ。そもそもポトフもそうだ。彼女の好きなものは全

部わかっている彰子であった。
「舞台大成功だったからね。御祝いに」
「有り難うっ」
そう言って抱きついてきた。姉に対して。
「何か余計に力が」
「ちょっと、明香」
妹に抱き付かれて少し恥ずかしそうに言う。何だかんだ言っても
そんな彼女を抱き止めたりもしている。
「誰かは入って来たらあれよ」
笑ってそう妹に言う。
「恥ずかしいわ」
「恥ずかしくてもいいの」
それでも明香は言う。抱き付いたまま。
「だって。本当に嬉しいから」
「もう、甘えん坊なんだから」
そんな妹を自分も抱き締めたまま言う。
「何時まで経っても」
「何時まで経っても姉さんの妹だから」
「そうね。それはね」
その言葉も受け止めてくすりと笑う。悪い気はしなかった。
「じゃあ。落ち着くまでね」
「うん。それで一緒に」
「帰りましょう」
二人はこうしてずっと仲のいい姉妹であった。しかしもう一方は
そうではなかった。
「よくやった！」
洪童は幕の前で妹に対してオーケストラのボックスから叫んでい
た。歌劇場では舞台のすぐ下にオーケストラが入るのだ。そこから
演奏をするのである。
「最高の舞台だった。流石は俺の妹だ」

「それは嬉しいけれど」
しかし春香はそこで難しい顔をしていた。困っているようである。
「あの、兄さん」
「何だ？」
「何時までこうしているの？」
舞台からボックスにわざわざ入っている兄に対して問う。
「もう皆帰ったけれど」
「だからカーテンコールの練習だ」
彼は訳のわからないことを妹に対して言っていた。
「カーテンコールも大事なのだ。何度も呼ばれるからな」
「調子が悪いとそうはならないわよ」
「何を言う」
ここでまた妹馬鹿ぶりを発揮してきた。
「御前が不調になる訳がない。御前は百年に一度の逸材だぞ」
「そこまではいかないわよ」
流石に呆れてこう返した。
「だからね。それは」
「いや」
妹の言葉を全く聞かずに言い返す。こうしたところはやはり洪童であった。
「御前に限ってそれはない」
「いえ、それがあるのよ」
言っても聞かない。妹の言葉でも。
「誰にでも。機械にだってあるし」
「戯言を！」
やはり聞き入れたりはしない。
「御前に限ってそれはない！だから！」
「カーテンコールの練習もしろっていうの？」
「そうだ。わかったらさあ」
「わかったわ。それじゃあ」

「よし、それでいい」
春香は溜息をつきながらもカーテンコールの練習をする。それを何回もした後で帰ることになった。兄の愛情というものも時には考えものであった。

本番になって　　完

２００７・４・２６

第四十八話　誰も寝てはならぬその一

誰も寝てはならぬ

オペラが終わった後で真っ先に影響を受けていたのはアンだった。早速漫画のネタにして描きはじめたのである。そうした動きの早さは流石であった。

部室で一生懸命プロットを書いている。その中でベッキーが彼女に問う。彼女の席の向かい側にいつものように座ってそれを覗き込んでいた。

「何かすぐに影響を受けるのね、あんたって」

「別にいいじゃない」

必死にネームを書きながらベッキーに応える。

「面白い漫画を描くんだから」

「面白いのはいいけれど何を描くの？」

そうアンに問う。

「それが問題よ」

「何気にあんたも影響受けてるわね」

さりげなくハムレットの言葉を出してきたベッキーに対して突っ込みを入れる。その間にもせっせとノートに設定を書き込んでいる。

「シェークスピアの言葉を言うなんて」

「まあね。それはそうとして」

アンを見て言う。

「何を書くつもりなの？まさかそのままロミオとジュリエットじゃないでしょうね」

「それだとあんまりにも単純でしょ」

そうベッキーに言い返す。

「それはないから。安心して」

「わかったわ。じゃあ何なの？」

あらためて彼女に問う。

「何を描くのよ」
「シェークスピアじゃないわよ」
意外な言葉がここで出て来た。
「残念だけれど」
「あら、そうなの」
ベッキーはアンのその言葉を聞いて目を丸くさせる。
「じゃあオペラなのね？」
「そう、そっちよ」
アンに顔を向けてにこりと笑う。
「プッチーニのオペラを考えているのよ」
「プッチーニ、ねえ」
それを聞いてベッキーはふと思った。
「じゃあれ？スターリングと蝉玉の西部の娘とか」
「違うわ」
それは否定する。
「西部劇はこの前描いたし。当分描かないわ」
「じゃああれ？ラ＝ボエーム」
代表作の一つだ。この時代でちょっとしたら上演されるオペラの代表的作品だ。上演回数ではビゼーのカルメンに匹敵する。これを見て感動しない者はまずいない名作だ。
「あざとくない？あれは」
「確かに感動しない方がおかしい作品だけれどね」
アンも言う。結核の少女ミミと詩人ロドルフォのパリを舞台とする悲恋はその設定だけで泣かせるものがある。最後まで観ればもう何も言うことはない。
「あれでもないのよ」
「蝶々夫人！？」
これまた代表作だ。日本を舞台とした蝶々さんの悲劇だ。アリア『ある晴れた日に』はあまりにも有名な名曲である。やはりこれも涙なくしては観られない。

「それはまた今度」
それでもないと言う。
「あれよ、トゥーランドットよ」
にこりと笑って言ってきた。
「それを描くつもりなのよ」
「トゥーランドットね」
「中々いいでしょ」
伝説の中国を舞台とした作品だ。謎を出し答えられぬ者に対して死を与える冷酷な姫トゥーランドット。その姫を愛する王子カラフの恋の話だ。カラフを恋い慕う侍女リューがかなり人気がある。見ればアンはそのリューのプロットをかなり描いていた。
「それを描くのよ」
楽しげに笑って言う。
「今からね」
「そうなの」
ベッキーはその書き込みを見ながら述べる。
「それじゃあ聞きたいことがあるんだけれど」
「何?」
「何でそうリューにばかり書き込むの?あとカラフ」
そうアンに突っ込む。
「何でなの?よかったら教えて」
「そ、それはね」
また急に顔が赤くなる。
「まあ色々と」
「色々とって。まさかまた」
「べ、別にいいじゃない」
その真っ赤な顔で言葉を返す。視線をベッキーから逸らしている。

第四十八話　誰も寝てはならぬその二

「漫画のモデルにするだけだし。それ位は別にいいじゃない」
「まあそれはね」
ベッキーはそれはよしとしてきた。
「けれどさ」
しかしまだ突っ込む。いぶかしむ顔で。
「ばれるわよ、幾ら何でも」
「うっ・・・・・・」
アンは言葉を詰まらせる。ベッキーはそこにまた言う。
「しかもよく見たらお姫様と二役じゃない。欲張ってない？」
「いいじゃない、だって」
ノートに描かれているラフ画にはトゥーランドット役とリュー役のアンが描かれている。既にそれは言われている。問題はカラフであった。
「王子様はやっぱり彼なの」
「だって。私にとってはやっぱり」
顔を真っ赤にして言う。
「彼しかいないし。だって」
「ああ、言わなくてもわかるわ」
親友が泣きそうな顔になったのを見てそれ以上言うのを制止した。
「けれど。流石にこれはまずいわよ」
「そう。やっぱり」
「やっぱりも何も。やるのならやるでいいけれどもっとオブラートに包んだ方がいいわ」
そうアドバイスする。
「穏やかにね」
「穏やかに」
「そう。幾ら何でもあからさまだし」

またアドバイスを入れる。
「ここは穏やかにね。いいわね」
「そうね。それじゃあ」
ここでまたラフ画を描く。何と主人公達の顔をガラリと変えてきた。
「えっ!?」
流石にこれにはベッキーも驚いた。てっきり少し変えるだけかと思ったからだ。しかし予想に反して彼女は完全に変えてきたのである。
「全然違うじゃない」
「変えるのなら徹底的に変えたいから」
そう答えてきた。
「それでね」
「そう。また随分思い切ったことをしたのね」
「うん。それでね」
ここで昔の中国の庶民の服を着た若い男女を描いてきた。何気に描くのがかなり速い。それはアンのいいところでもある。彼女は速筆なのだ。
「これオリジナルキャラで」
「脇役かしら」
「コマとかの端にちょこちょこって出すつもりなの」
描きながら述べる。
「これだとどうかしら」
「そうね、これならいいかも」
ベッキーもそれには同意する。しかし顔は。
「けれどね。それでも」
「何?やっぱりまずいかしら」
「アップだとばれるわよ」
こう言ってきた。
「これは」

「けれど」
また悲しい顔を見せてきた。
「これ位はいいじゃない」
「まあ。相手はわからないだろうしね」
ベッキーは一旦突き放してきた。
「けれど他の人はわかるわよ。それでもいいの？」
「ううー・・・・・」
それを言われてまた困った顔になる。
「それは」
「嫌でしょ。まあもう皆知ってるけれどね」
「うん、それはそうだけれど」
「全くねえ」
ベッキーはここで腕を組んで大きく溜息をついてきた。
「彼にも困ったものね、全く」
「これでもバレンタイン頑張ったのよ」
アンは小さくなってまたしても泣きそうな顔になる。実は意外と繊細で純真だったりする。
「それでも気付かないし」
「あんなに鈍いのもそうはいないわね」
実は彰子や菅といったもっと強烈なのもいるがとりあえず彼女達は放っておかれた。話の本題ではないからだ。
「参ったことに」
「参ったってものじゃないわよ。どうすればいいのよ」
背を屈めてさらに小さくなる。
「何やっても彼だけは気付かないのよ」
「本当にね」
ベッキーは顎に右手をついてまた溜息をついてきた。
「どうしたものやら」
「これもやっぱり気付かないのかしら」
アンは自分が描いたラフ画を見ながらまた言った。

第四十八話　誰も寝てはならぬその三

「私はもうすぐにわかるわよ」
ベッキーは言う。
「普通の人はね」
「そうよね。じゃあやっぱり彼が鈍いだけなのね」
それが問題なのであった。しかもどうしようもないレベルの。
「けれど。私はっきり言えないし」
「そうね」
それはわかる。はっきり言えるような強気ならばここまで悩んだりはしない。複雑なジレンマだったのだ。アンを苦しめるジレンマであった。
「はっきり言わないとわからないでしょうね」
「ううん」
ベッキーはまた腕を組んで考える顔になってきた。一緒に悩んでいた。
「そうねえ。ちょっとね」
「これも危ないってわかってるわよ」
またラフ画を見て悲しい顔になってきた。
「けれど。やっぱり」
「わかって欲しいの？」
「それはさ、私だって直接言うのが一番いいってわかってるわよ」
その泣きそうな顔で述べる。
「けれど。できないから」
「全く。肝心な時で勇気がないんだから」
「ある娘が羨ましいわよ」６
言葉が少しムキになってきていた。
「告白って。一番怖いわよ」
「ううん、私はそうじゃないけれど」

「随分経験豊富なのね、また」
「だって。キューバだから」
ここで自分の祖国を口に出してきた。
「告白なんか男でもおんなでもしょっちゅうよ。私だって受けたことも自分から仕掛けたこともあるし」
「自分からもなのね」
「当然よ。言っておくけれど振られても次の相手があるわ」
意外とそうしたことに経験豊富なベッキーであった。キューバは昔から情熱的で陽気な国として有名である。主な産業は観光で様々な美しい惑星を持っている。ベッキーもそうした星の生まれで陽気で情熱的な空気を愛しているのである。生粋のキューバ人というわけだ。
「だからねえ。本当に」
「だから。できないから」
アンはまたしょげかえって泣きそうな顔になる。
「できたらこんなに悩まないわよ」
「はいはい。わかったから」
仕方ないなといった顔で彼女に応える。
「気付いてもらえなくてもね。気合を入れて」
「ええ」
「描いていくわよ」
頼りなげな雰囲気のアンに対してまた言う。しかし言葉がどうも晴れない。
「それにしても。あんたも女の子らしいっていうか」
「そうかしら」
「そうよ」
またアンに言う。
「最初見た時はそうは思っていなかったのよ。随分気の強い娘だなって思っていたけれど」
「自分でもそのつもりだったわよ」

アンはまたベッキーに答える。
「けれど。何かそれが変わって」
「彼も罪な男だこと」
「私のことはやっぱり有名なのよね」
それを問い返す。おずおずとした様子だ。
「やっぱり」
「知らないのは当人だけよ」
またそう言う。
「あの鈍感男だけ」
「ふう」
そこまで聞いてまたしても溜息をつく。
「困ったなあ」
「最初あんたもうちょっと余裕なかった?」
ベッキーはここでふと思い出したように言ってきた。
「何かフックとかと交渉したりしていたわよね」
「あの時はまだあったのよ」
自分でもそれは認める。
「あの時はね。今は」
「困ったわね。それは」
「困っているのは私よ。といってもこんな姿本人には見せられないし」
「彼以外には見せているわよ」
身も蓋もない言葉がまた出る。どうしても出られない。
「見せたくなくても」
「はい、じゃあお喋りはここまで」
話を打ち切ってきた。これ以上話をしても何にもならないと判断したからだ。そうして漫画に話を移したのだった。
「描いて、いいわね」
「うん」
その言葉にこくりと頷く。

「それじゃあ」
「わかったわ。じゃあ」
アンは描きはじめる。そのままどんどん描いていく。こうしてトゥーランドットは目出度く完成した。今回も評判は上々であった。

第四十八話　誰も寝てはならぬその四

「中々いいじゃないか」
「そうだな」
皆その新作を見て言い合う。それを聞いてアンはまずは上機嫌であった。
「けれどさ」
ここでクラスメイト達に言われる。
「何？」
「ここのコマのさ」
フックがあるページの一コマを指差して言ってきた。
「平民の男女って他のコマにも色々言われているけれど」
「え、ええ」
その言葉に顔を強張らせる。ついでに顔が青くなっていく。
「何かしら」
「アンとギルバートだよな」
「さあ」
一旦はとぼけてみせる。白々しいが。
「そうかしら。気のせいじゃないの？」
「いや、違うだろ絶対に」
フックはその言葉を否定してきた。彼もわかっているのだ。
「幾ら何でも苦しいぞ」
「ううう・・・・・・」
アンの顔まで苦しくなる。見ればクラスメイト達も彼女に顔を向けている。
「けれどまあ。予想通りだしな」
しかしフックはここでこう言ってきた。
「別に驚きはしないさ」
「そうなの」

「だっていつもじゃないか」
こうも言う。
「御前とあいつが漫画に出るのは」
「まあね」
アンはフックのその言葉にあからさまに不機嫌な顔を見せてきた。痛いところを衝かれた顔である。ギルバートのことになると実に表情豊かだ。
「それはそうだけれど」
「って自分で認めるのかよ」
「開き直ったのよ」
そう言って本当に開き直る。
「今更何を言っても無駄なんでしょ、それなら」
「やれやれ。そうか」
フックは開き直られてかえって拍子抜けした。しかしそれでも言う。
「それでもな」
「今度は何よ」
「あいつは気付いていないんだろ?」
「まあね」
その言葉に頷く。
「気付いていたらそれは」
「気付いて欲しいのか?」
「ええと、それは」
その言葉には返答に窮する。困った顔になる。
「何て言うかね」
「ああ、アン」
ここでベッキーがまた出て来た。そして言う。
「皆それもわかってるから」
「また開き直れっていうの?」
「わかってるじゃない」

ベッキーは突き放したように言う。
「人間開き直るのも肝心よ」
「それでもね」
困った顔の色をさらに深くさせる。何と言っていいかわからないといった顔である。
「何て言うか。その」
「歯切れ悪いわね。そんなのだからあんたは」
「私だってわかってるわよ」
違う方向に開き直ってきた。
「けれどこういうのってあれじゃない。相手がその」
「当たって砕けろでいけよ」
フックが言う。
「どうせあいつ以外皆知ってるんだしさ」
「随分好き勝手言うわね、あんた」
「だって他人事だし」
「何ですってぇ！」
流石にこの言葉には激昂する。しかしフックは相変わらずの気軽な様子で言葉を返す。
「言うに事欠いてあんたは！」
「安心しろ、冗談だ」
フックはすぐにこう返す。
「だからな、そういうのが駄目なんだよ」
「くっ・・・・・・」
あっさりと返されて言葉を詰まらせる。完全にアンの負けだった。
「やっぱり思い詰めてるよな、今」
「ええ」
嫌々ながらもそれを認める。事実だから認めるしかなかった。
「その通りよ。それも悪いっていうの？」
「だから悪いことじゃなくてな。やっぱり言えないんだろ自分から」
「それはね。どうしても」

その項垂れた顔でまた認める。どうにも言葉も弱い。
「その通りよ」
「あいつに気付かせるのが一番だけれどな、それだと」
「だから気付かないのよ」
アンはそれをまた言う。話が堂々巡り気味になってきていた。
「何をしても。この作品だって結構出しているのに」
「困ったもんだな、こりゃ」
フックもこれには流石に言葉もない。
「あいつってこういうことにはこんなに鈍いなんてな」
「鈍いってレベル超えているわよね」
ベッキーも言う。
「この作品のプロットの時アンにも言ったのよ。今貴方が話してるのと同じ内容を」
「それでこの作品が生まれたのか」
「そういうこと。これなら」
また言う。
「主役の王子様とヒロイン二人の顔あんたとギルバートにすればよかったかもね」
「ううん、そうかも」
アンはまた弱った顔になる。
「やっぱり今回も気付かなかったし」
「困ったものだ」
フックも言う。そこへ当の本人がやって来た。

第四十八話　誰も寝てはならぬその五

「おい、アン君」
何も知らない顔で。能天気なまでに生真面目な顔でやって来た。
「今回もよかったぞ、感動した」
「感動してくれた？」
アンは表情を完全に消した。そしてギルバートに顔を向けて問う。
「うん、氷の心を持つ姫が王子の愛にその氷を溶かされる。それがいいな」
「そう。それでね」
「何だ？」
「言うの？」
そっとベッキーが囁いてきた。
「ひょっとして」
「じゃあ行けよ」
フックも言う。
「ここでな」
「えっと、それは」
何か雰囲気がガラリと変わってアンは思いきり戸惑う。
「今ここで！？」
「いい機会じゃない」
「絶好のチャンスだぞ」
戸惑いを見せるアンに対して二人はさらに積極的に言う。
「ここで言えば」
「上手くいくぞ」
「けれど私」
その戸惑いを強張りに変えて二人に囁き返す。
「今はちょっと。幾ら何でも」
「今言わないでどうするのよ」

ベッキーはあれこれ理由をつけて逃げようとするアンにハッパをかけてきた。
「そんなのだからあんたはね」
「けれど」
「大丈夫だよ、成功する」
フックもまたアンを急かす。二人してプレッシャーをかける形になっていた。
「あいつも断るような奴じゃないだろ？」
「それはそうだけれど」
頭ではわかっている。しかし心ではそうはいかない。わかってはいてもいざやるとなればどうしても勇気がいるものだ。それが今のアンに他ならなかった。
「どうしても。勇気が」
「ああ、じれったいわね」
ベッキーの声が少し大きくなった。
「そんなのだからあんたはね」
「それでも。どうしても」
「どうしたんだ、一体」
三人があれこれと囁き合っているのを見てギルバートは声をかけてきた。
「何かあったのか？漫画のことか」
「ええ、それはね」
ベッキーはギルバートに顔を向けて言ってきた。
「実はね、アンが」
「アン君が？」
「ほら」
ここで本人をとん、と肘で突く。
「今よ」
「今って。別に私は」
「言えばすっきりするんだよ」

横からまたフックが言う。
「だからな」
「だからって言われても別に」
「何がどうしたんだ？」
やはり何もわかっていないギルバートは首を傾げるばかりだった。
この鈍感がアンを苦しめているのだが本人は気付くわけがなかった。
「一体。それにアン君」
ここでアンの顔を見る。
「顔が赤いぞ」
実際に顔を真っ赤にして俯いてた。
「どうしたというんだ、風邪か？」
「なあ」
今の言葉を聞いてフックがベッキーに囁いた。
「こいつも大真面目なんだよな」
「見ればわかるじゃない」
ベッキーもまた彼に囁き返す。
「大真面目よ、間違いなく」
「流石に今はボケかと思ったぞ」
半分はそう思った。思われても仕方ないものが今のギルバートにはあった。
「いや、本当に」
「ほら、わかったでしょ」
ベッキーはすかさずアンに囁く。
「ダイレクトに言わないとわからないわよ。さあ」
「言わなければいけないの？」
「気持ちを伝えたければね」
少し突き放してきた。
「自分から言うのね」
「そう、さあ」
「言うんだよ、当たって実らせろ」

「ええと、それじゃあ」
「やっぱりおかしいな」
何もわかっていないギルバートは相変わらずの調子でアンを見て言う。
「アン君、風邪なら保健室に言って」
「これが風邪じゃないんだ」
フックはここでフォローを入れてきた。
「生憎な」
「生憎!?じゃあ脚気か」
「ちょい待った」
今のボケには流石にベッキーも突っ込みを入れた。
「今時そんな病気ないでしょ」
「それもそうか」
ビタミンＢ１不足により起こる病気である。手足がむきみ全身疲労に襲われる。酷い場合にはそのまま死んでしまう。実際にこれで日露戦争で日本軍は多くの将兵を失っている。今ギルバートがこのなくなった病気を出したのは真剣にぼけた故である。これにはベッキーもフックも呆れてしまったがアンはそれどころではなかった。
「それでは何だ?インフルエンザか?」
「それでもないわ」
ベッキーはそれも否定する。
「そういうのじゃないから」
「じゃあ何だ。病気は他には」
「だから病気じゃないのよ」
そう付け加える。

第四十八話　誰も寝てはならぬその六

「そうじゃなくてね」
「じゃあ何なんだ」
いよいよ訳がわからなくなった。ついつい首を傾げる。
「病気でなくてそんなに赤い顔なのは」
「それは今からわかるわ」
ベッキーがまた言う。
「ほら、アン」
フックも急かす。
「言えよ」
「え、ええと」
しかしアンはここで顔を強張らせる。動きもガタガタしてきた。
「あのね、ギルバート」
「うん」
ギルバートはあらためてアンに顔を向ける。
「何かな」
「私ね、あの」
「ほら、もう少し」
「勇気出せよ」
二人がまたアンに囁く。
「言えばそれで実るのよ」
「だから。な」
「それで・・・・・・あのね」
アンは何とか言おうとする。しかし。
「あのね・・・・・・あのね」
「あのね・・・・・・それで」
ギルバートはアンがあまりにも言葉を詰まらせているので彼女に問うた。

「何かな」
「私・・・・・その・・・・・・」
言おうとする。しかしそれ以上は何も言えなかった。
「ううん・・・・・・」
倒れてしまった。緊張のあまりそれに押し潰されてしまったのであった。
「あっ、しまった」
「まさかこうなるなんてな」
ベッキーもフックもこれは予想していなかった。倒れてしまったアンを慌てて助け起こす。
「あのね、ギルバート」
ベッキーは何とかアンを助け起こしてギルバートに対して言う。
「また今度ね、今度」
「今度って。何がだ?」
「ああ、それはまたわかるから」
フックも言う。
「またな」
「何かわからないがわかった」
ギルバートもそれに頷く。
「とりあえずアン君は大丈夫なんだな」
「ええ、それは安心して」
ベッキーがそれはフォローする。
「ちょっとプレッシャーに弱いだけだから」
「プレッシャー!?」
「あっ、それは何でもないから」
フックが慌ててアンをフォローしたベッキーをフォローする。
「別に気にするな」
「そうか。それじゃあな」
ギルバートはこの場を二人に任せて別れる。しかし話はこれで終わりではなかった。ベッキーとフックは倒れてしまったアンを彼女

の席にやってから言うのだった。
「ほんっとうにねえ」
ベッキーはふう、と溜息をつく。
「こんなに繊細だなんてね。参ったわね」
「これは無理かな」
フックも言う。
「これは」
「追い込み過ぎた？」
ベッキーはここで首を傾げさせる。
「ひょっとして」
「いや、これは普通だろ？」
フックはそれにもフォローを入れる。
「これ位は」
「そうよね。けれどアンが」
「こうまでなあ。内気だとわ」
「まさかこんなのだとは思わなかったのよ」
またベッキーは言う。
「最初会った時なんてさ。気が強くて」
「そうだよな。俺だってな」
フックもそれに返す。
「こんなのだろ？いつもアンに何言われるのかってビクビクしていたんだよ」
「そうだったの」
「そうさ、厳しい感じだったしな」
「ところが違ったと」
「ああ」
また答える。
「最初はそうだったけれどな。かなり性格変わってきていないか？」
「それはあるわね」
ベッキーもその言葉に同意して頷く。

「やっぱりあれかしら」
そうしてふとここで気付く。
「ギルバートに会ってからね」
「変わったってわけか」
「変わったっていうかこれが地なのよ、多分」
首を捻りながらまた言う。
「自分でも気付いていなかったでしょうけれど」
「そうか。けれどよ。それだと」
フックも首を傾げて言ってきた。
「これから大変だぞ、それもかなり」
「予想以上だからね」
「どうするよ」
そのうえでベッキーに問う。
「これから」
「とりあえず一から練り直しね」
そうフックに答える。
「ここはね」
「そうか。上手くいけばいいがな」
気を失ったままのアンを見て言う。そうこうしている間にフックは思わぬトラブルに巻き込まれるのであった。

誰も寝てはならぬ　　完

２００７・５・２

第四十九話　スキャンダル学園その一

スキャンダル学園

フックは言わずと知れた女好きである。マルティの親友でもありその道にかけてはクラスはおろか学園でも随一の人物であるとされている。

「たまには俺にも一人紹介しろ」

ある日カムイにそう言われた。もっともこれはいつも言われていることである。

「って御前にこの前紹介しなかったか？」

「ふられたんだよ」

教室でそんな話をしている。カムイは憮然とした顔になっている。

「残念なことにな」

「ああ、そうか」

フックはそれを聞いて納得して頷く。

「それでか。つってもこれで何回目だ？」

「六回目だったと思う」

カムイは答える。あまりはっきりしない返答であった。

「一応はな」

「そうか。じゃあ次で七回目だな。慣れたか？」

「おい」

すぐにフックに突っ込みを入れる。目をむっとさせていた。

「何か俺がまた振られるみたいじゃないか。何だよ、それは」

「ああ、悪い悪い」

笑ってフックに言葉を返す。

「悪気はないんだけれどな」

「悪気がなければ何でも許されるわけじゃないぞ」

「まあいいじゃないな」

怒るカムイを軽くあしらって話を続ける。

「それでな。まあ紹介して欲しいんだよな」
「そうだよ」
ここで話は最初に戻った。カムイはそれを聞いて考える目になる。
「悪いがちょっと待ってくれ」
「どうしたんだ?」
「今これといってフリーな女の子知らないんだ」
こうカムイに述べてきた。
「探すまでちょっと待ってくれないか?」
「ああ、そういうことならな」
カムイもそれに納得する。これで話はおおよそ決まった。
「楽しみに待っているからな。それじゃあな」
「ああ、吉報を待ってな」
話は終わった。その日の放課後彼は早速ガールハントを開始した。
ガールハントは彼の生きがいでありライフワークでもある。可愛い、あるいはそうでもない女の子でもすぐに声をかけていく。それが彼のやり方であった。俗に男版ダイアナと言われている。
彼はガールハントするとすぐに女の子を捕まえてしまう。今回もそれは同じであった。
中等部にいた。そこで一人の可愛い少女と出会ったのだ。
「おっ、あれはいいな」
カムイの彼女にはいいかも知れない。小柄で黒く長い髪と大きな黒い目を持つ少女だった。外見からかなりアジア系の血が強いことが窺える。
「ねえねえ君」
フックは早速彼女に声をかける。
「はい?」
着物に似た白い服に同じ色のズボンという格好であった。その格好を見ているとやはりアジア系の女の子だというのがわかる。右手に持っている鞄も何処か昔の日本の籠を思わせるものであった。
「時間あるかな」

「ええ、まあ」
「よかった。それじゃあね」
笑顔で彼女と話をする。ところがこれが。フォーカスされたのである。
三日後の八条スポーツにとんでもない記事が乗っていた。
「フック、またしても熱愛!?」
「相手は何と中等部の教師!今度は許されざる愛!?」
「・・・・・何だこりゃ」
フックは学校に来て八条スポーツを見て呆れた声を出した。
「何で俺が一面なんだよ」
「それは私が聞きたいわよ」
「そうそう」
ベッキーとダイアナが彼に問う。見ればナンシー以外のクラスメイトが彼の側に寄ってきていた。
「幾ら何でも先生はまずいでしょ。中等部でも」
「風紀部、怒るわよ」
「まあ僕は別にどうでもいいけれどね」
当然ながらそこにはローリーもいる。それで彼に対して言う。

第四十九話　スキャンダル学園その二

「けれどさ、やっぱり先生はね」
「洒落にならないわよ」
「こっちが驚いてるよ」
フックはそう皆に言い返す。
「俺だってな、事前に誰が先生かなんてチェックしてるさ。あんな先生いなかったぞ」
「それ本当!?」
「ああ」
そうダイアナに答える。顔をむっとさせている。
「ましてや。かなり血の濃いアジア系の顔だったしな。目立たないわけがないだろ」
「アジア系の血の濃い先生ねえ」
「しかもかなり小柄だったな」
フックはそう付け加える。
「そんな先生中等部にいたか？いたらかなり目立つだろう」
「ねえフック」
ベッキーがここで言ってきた。
「何だ？」
「その先生のイラスト描いてみてよ」
こう提案してきた。
「それで調べたいから」
「ああ、それならな」
言われるがままにスラスラと描く。出て来たのは見事なまでに清楚な外見のアジア系の美少女であった。彰子に匹敵する可愛らしさである。
「こんなのだ」
「あれっ！？」

ベッキーはその先生を見てふと気付いた。
「この人が先生!?」
「らしいんだよ。八条スポーツじゃな」
「違うわよ」
ベッキーはすぐにこう述べてきた。
「それも全然」
「全然っておい」
思わずベッキーの言葉に突っ込みを入れる。
「じゃあ何なんだよ、今までの騒ぎは」
「八条スポーツよね」
今度はそこに注目してきた。
「ああ、そうだけれどよ」
フックは今度はその八条スポーツを出す。そこには確かにフックが先生をナンパ、とはっきり書かれている。折り返しの表の方にだ。
「折り返しの裏見てみて」
ここでベッキーはこう言ってきた。
「よかったらさ」
「裏面か」
「ええ。多分そこに謎があるから」
「それじゃあよ」
言われるがまま裏面を見る。するとそこにはこう書かれていたのであった。
『になれそうな人と』
「何だこりゃ」
フックはその裏面を見てまずはこう言った。
「表と裏で全然違うじゃねえかよ」
「八条スポーツよ」
ベッキーが今度言うのはそこであった。
「おかしいと思ったら。やっぱりね」
「やっぱりねっておい」

フックは思わず抗議の言葉を出してきていた。
「じゃあ何か？俺は見事に八条スポーツに踊らされたってか」
「そもそも信じてたの？」
ダイアナが怪訝な顔で彼に問う。
「まさかと思うけれど」
「だってよ、あれだぜ」
フックは自分のことで焦って冷静さを失っていたのだった。そのことに今時分でも気付いてあたふたとしだした。と同時に声をかけたのが誰かも気になってきた。
「やっぱりよ、何か」
「普通変だって思うでしょ？」
ダイアナはまた怪訝な顔で言ってきた。
「相手が相手なのに。騙されるなんて」
「じゃあ皆信じていないのか」
「誰が信じるんだよ」
「八条スポーツはネタだろうが」
「いや、そうだけれどよ」
皆に言い返されて困った顔になる。そのうえで言い訳じみて言う。
「じゃあこれ。誰なんだよ」
「その人大学の文学部の人よ」
「ってこれで年上かよ」
ベッキーの言葉に目を丸くさせる。
「何かそれも意外だな」
「まあね。けれどこの人漫画も描いてるし写真とその絵見てやっぱりって思ったのよ」
「そうか。何かな」
フックはそれを聞いてあらためて考える顔になった。ここでクラスの中を見回すとカムイがいた。言うまでもなく話の元である。その彼に声をかける。
「どうよ、年上の人だけれどよ」

「あっ、いや」
ところがカムイはここで困った顔を見せてきたのだった。
「俺実は年上はちょっと」
「駄目なのかよ」
「ああ、何かな。甘えるっていうよりは甘えられる方がな」
そう述べる。意外な彼の好みであった。
「この人が年下だったらなあ。それかタメ年だったら」
「そうやって選ぶからよくないんじゃないの？」
横からダイアナが言ってきた。
「選ばないと誰かいそうなものだけれど」
「いや、それはそうかも知れないけれどな」
困った顔のままでダイアナにも言う。
「それでもな。やっぱり」
「そう。好みね」
「あれだよ。タイプじゃない人と一緒にいてもお互い不幸になるじゃないか」
意外な程の正論を述べてきた。どうやらもてないのを悔やみ騒いではいても誰でもいいというわけでも相手のことを考えないというのでもないようである。
「だからな」
困った顔を普通に戻して言う。

第四十九話　スキャンダル学園その三

「ここはいい。俺はな」
「そうか。じゃあいいんだな」
フックがあらためて彼に問う。
「紹介しないぞ」
「ああ、それでいい」
カムイもそれに頷く。
「そういうことでな。色々と頼んで悪いな」
「いや、俺も事前に調べておくべきだったな」
フックもあらためて反省の弁を述べる。
「何か今回はな」
「それはそれとして」
ここでダイアナは話を変えてきた。
「また奇麗な人よね」
「そうね。何か悪くないっていうか美少女って感じね」
ルビーも言う。
「大学生っていうのが信じられないけれど」
「俺がそのまま彼女にしたいな」
フックはここで本音を出す。かなり乗り気であった。
「これだけ可愛いと」
「あんた年上はいいの」
「全然オッケー」
そうダイアナに答える。
「全然な。いいぜ」
「そう。それじゃああんたまた声かけたらいいわ」
ルビーもそれを薦める。
「優しそうな人だしね」
「ああ。それじゃあ」

「ちょっと待って」
ところが。ここで彼とは別に乗り気で名乗り出て来た者が現われたのであった。
「奇麗、っていうか可愛い人よね」
同性愛の気があるので知られているビアンカであった。皆彼女が出て来たのを見て何か不吉なものを感じずにはいられなかった。
「何か見てると」
「ってビアンカ」
ダイアナが彼女に声をかける。
「あんたひょっとして」
「ええ、いいかも」
にこりと笑ってそう答える。
「これだけの美人やっぱりそうはいないわね」
「っておい」
フックがそれに反論してきた。
「俺が彼女にするって決めたのに」
「別にいいじゃない」
しかしビアンカもビアンカで言い返す。
「男と女、女と女で付き合えるし」
「いや、それはないだろ」
フックはそう突っ込みを入れる。表情が真剣なものになっていた。
「何でそうなるんだよ、おい」
「それじゃあ競争ね」
ビアンカは話を聞かない。強引にでもこの大学生を自分のものにするつもりになっていた。こうなるとビアンカは強い、それはフックも皆もわかっていた。だからこそ警戒していた。
「どっちが彼氏、彼女に相応しいかね」
「何かねえ」
ルビーはそれを聞いてふう、と溜息をつく。
「変なふうになってきたわね」

「そうね」
ダイアナもそれに頷く。ルビーと二人で頷き合う。
「これはちょっとねえ」
「どうなるか」
「じゃあ負けないぞ」
フックも乗り気になってビアンカに言ってきた。
「この人は俺が彼女にする」
「あら。なら私だって」
ビアンカも笑って言い返す。
「彼女にしてみせるわ。いいわね」
「望むところだ」
フックは今挑戦を受けて立った。
「こっちだってな」
「それじゃあさ」
ルビーがフックのところに来て言う。
「私がサポートするわね」
「えっ、ルビーがか」
「別にいいわよね」
そうフックにも言う。何だかんだで何時の間にかルビーはフックの方に来ていた。
「それでも」
「ああ。じゃあ宜しくな」
「ええ、そういうことでね」
「それじゃあ私は」
ダイアナはビアンカの方に来た。そうして言う。
「あんたのサポートに回るわ」
「じゃあ御願いね」
ビアンカはにこりと笑ってダイアナに応える。
「絶対に彼女にしてみせるから」
「やれやれ。女の子同士でも燃えているわね」

「ええ。燃えてるわ」
不敵に笑ってダイアナに返す。
「こんな可愛い人いないから」
「それは俺の台詞だ。けれどこうなったら」
「お互い。悔いがないように」
また笑みを浮かべ合って言い合う。

第四十九話　スキャンダル学園その四

「行くぜ」
「了解」
こうして恋の鞘当てがはじまった。一方は同性愛であるがこの時代の連合ではよくあることであった。なお日本ではかつては同性愛の愛情のもつれから政権争いになったこともある。これは平安時代の話だがそれ以後も同性愛のもつれからの事件はままあった。この時代ではそうしたことは各国で起こっている。
「どっちが負けても恨みっこなし」
「相手をたたえるってことでね」
「そういうことだな。それじゃあな」
「はじまりね」
こうして恋愛争奪戦がはじまった。クラスはにわかに活気だつ。ところがここで一人話から取り残されてしまった男がいたのであった。
「そういえばよ」
カムイであった。彼はふと気付く。
「俺の彼女の話はどうなるんだ？」
「ああ、そういえば」
クラスメイト達もここで思い出す。
「どうなったんだろうな」
「そういえば」
「なかったことになったか？」
フック自身がこう言ってきた。
「ひょっとしたら」
いや、ひょっとしないな」
「これは」
「やれやれだな」

クラスメイト達のその言葉にたまらず呻く。しかし悪い顔はしてはいなかった。

「まあいいか。いつものことだ」

何か何処かで達観していた。その達観のまま彼はフック達を見守りにかかった。

ここで八条スポーツ。でまかせ記事を書いた元凶であるナンシーは本日の八条スポーツの売り上げに裏新聞部の部室で上機嫌でいた。裏新聞部とは八条スポーツ編集部のことで新聞部から謎の階段、地下室を潜って行く場所である。一応新聞部とは関係ないことになっている。

彼女はここで例の後輩君と一緒だった。一緒にコンピューターで売り上げを見て大喜びでサイダーやお菓子をつまんでいたのである。

「凄い売れたわね」

「はい」

後輩君は彼女のその言葉に頷く。

「今月最高ですね」

「そうね。貴方のおかげよ」

ナンシーは後輩君の顔を見て言う。

「貴方が私にあの時コーヒーを入れてくれたから」

「そうなんですか？」

実はこの後輩君は八条新聞には携わってはいない。純真に表の八条新聞の芸能欄やスポーツ欄を書いているだけである。真面目であるのだ。

「そうよ。おかげで」

ここでじっと後輩君を見る。

「ここだけの売り上げがね。できたのよ」

「それも全部先輩の頑張りですよ」

「だからそれは違うのよ」

ナンシーは完全におのろけモードになっていた。二人きりになるといつもこうであった。

「貴方があの時私にそっとコーヒーを差し出してくれて私がそれを飲んだから。それで」
「それでですか」
「そうよ。目が覚めて」
かなり強引な論理を展開して彼に言い寄っている。
「書けたのよ。その御礼だけれど」
「はい」
「あのね」
頬を赤らめさせる。眼鏡の奥の顔が少女のそれになっていた。
「今日これからね」
「どうするんですか？」
「時間、あるわよね」
彼に尋ねてきた。
「え、ええ」
「だったら一緒に新しいお店行きましょう。一つついいお店見つけたのよ」
「どんなお店ですか？」
「喫茶店よ」
そう彼に告げる。
「喫茶店ですか」
「ええ。凄く美味しいホットケーキなのよ。クリームとフルーツがたっぷり上に乗った」
如何にもかなり甘そうであるがその前に彼女自身が自分で甘いムードに浸りきっているのでそこはあまり意味がない。まるでシロップの風呂に入っているようである。
「凄く美味しいホットケーキの」
「そこを僕と一緒にですね」
「そう。どうかしら」
後輩君を見て問う。
「そのホットケーキを二人でね」

「ええ、いいですよ」
後輩君もそれに素直に頷く。
「先輩が奢って下さるのなら」
「そう。それじゃあね」
「はい」
二人は甘いムードのまま話を決めた。ところがここでナンシーはふと思い出したように彼に言うのだった。
「ただね」
「あっ、何ですか？」
「二人きりでしょ。二人きりの時は」
「あっ、そうですね」
後輩君もそれを言われて思い出す。それで応えるのだった。

第四十九話　スキャンダル学園その五

「名前で呼ぶんでしたね」
「そうよ。さあ」
また彼を見て言う。
「名前で呼んで。ねえ」
「ナンシー・・・・・・さん」
とても恥ずかしげに言う。慣れていないのがすぐにわかる。
「これでいいですよね」
「ええ。とてもいいわ」
完全にムードに浸りきって答える。
「これからも二人きりの時はね。いいわね」
「はい。それじゃあ」
そっと手を差し出す。ナンシーは彼のその手を見てもうっとりとしていた。
「行きましょう」
「ええ」
二人はそっと立ち上がる。そうしてその店に向かう。
その途中二人は腕を絡み合わせていた。というよりはナンシーがうっとりした顔で自分の右腕を彼の左腕に絡ませてそこに自分の左手を添えていた。完全におのろけだった。
「あの」
その中で後輩君は彼女に声をかけてきた。
「何？」
「そのお店誰もいないですよね」
「ええ、大丈夫よ」
うっとりした顔のままで言う。歩いている道も誰もいない静かな並木道だ。この道もわざわざ彼女が選んだムードのある道なのである。

「そこ。穴場なのよ」
「穴場ですか」
「ええ。だから誰もいないわ」
そう彼に告げる。
「学校の誰もね。生徒も先生だって」
「ならいいですけれど」
「そんなヘマしないから」
やはりデレデレの顔で言う。この顔も知っている人間は殆どいない。あくまで二人だけの笑顔なのだ。ナンシーの素顔は誰も知らない。ということになっている。
「安心して。いいわね」
「はい。それじゃあ」
彼もそれに頷く。そうして道を進む。
やがて小奇麗な店の前に来た。店の名はミミといった。
「可愛い名前ですね」
「オペラのヒロインの名前らしいわ」
「オペラのですか」
「そうよ。確かプッチーニだったかしら」
ラ＝ボエームのヒロインである。これを観て泣かない者はいない名作である。なおそれはナンシーも同じで何時か彼と一緒に観に行きたいと思っていたりする。
「そのヒロインなの」
「そうですか」
「ええ。さあ」
ここで彼の手に自分の手を絡ませたまま前に出た。
「行きましょう」
「わかりました。それじゃあ」
熱々ムードで店の中に入る。するとその瞬間にナンシーは凍り付いてしまった。
「な、何でよ」

「あら、奇遇ね」
外観と同じく小奇麗な店の中にはカトリがいた。同じ席にマルティもいる。
「貴女もこの店知っていたのね」
「それはこっちの台詞よ」
慌てて後輩君から離れて彼女に言う。
「どうしてここに、ここは」
「穴場だって言いたいのよね」
「そうよ」
困惑しきった顔でカトリに答える。
「それなのにどうしてここに」
「だから。穴場だからよ」
それが彼女の返事であった。
「穴場だから!?」
「そうよ。いい?」
そのうえで言ってきた。
「穴場よね。誰もいないいい場所なら」
「皆行きたがる」
「そういうこと。だから私達も来たのよ」
「そうだったの」
「そうよ。意外だった?」
「意外っていうか」
ナンシーは苦りきった顔で応えてきた。
「まさかこんなところでも」
「そうかな」
しかしマルティはここで言う。
「僕は誰か来てもおかしくはないって思っていたけれど」
「私は違うわよ」
ナンシーはムキになって反論する。何時の間にか顔が真っ赤になっている。

「何でこんなところまで貴方達が」
「だから言ってるでしょ？」
カトリは少し困った顔でナンシーにまた言う。
「穴場を探す人間は他にいるって」
「うう・・・・・」
「けれど安心して」
しかしここでカトリは彼女を安心させてきた。
「誰にも言わないから。貴女達のこともこのお店のことも」
「当たり前よ」
必死な顔で言い返す。
「そんなの言われたら私・・・・・死ぬわよ」
「死ぬって貴女」
この極端な言葉にはカトリはまた呆れるしかなかった。
「また極端ね」
「極端でもそれでもよ」
ナンシーはそれでも言う。
「誰にだって秘密なんだから。知られたら」
「何かそういうところアンと似てるわね」
顔を真っ赤にさせて必死になっているナンシーを見て言ってきた。

第四十九話　スキャンダル学園その六

「うう、自分でもそう思うわ」
そしてナンシーの方でもそれは自覚していた。
「けれどね」
「まあ彼女は全然報われないけれどね」
「そうね。それでも私はね」
相変わらずの調子で言い返す。
「やっぱり。その」
「本当にね。皆の前じゃその姿は見せられないわね」
「見せたら死んじゃうわよ」
こうまで言う。
「絶対に」
「彼氏とは？」
「絶対に離れたくない」
ここで実際に彼の左腕に両手でしがみつく。
「何があっても」
「どっちかって言われたら？」
カトリは少し意地の悪い質問を仕掛けてきた。
「どっちなの？」
「それは決まってるわよ」
しがみついたままで言う。
「やっぱり。一緒にいたいのが絶対よ」
「やれやれ」
「まあ話はそれ位にしてさ」
マルティがようやく助け舟を出してきた。ナンシーの様子を見て楽しんでいたかというと実はそうである。ここはカトリと同じであった。
「食べない？」

「え、ええ」
ナンシーもその言葉にはっとして頷く。
「そうね。ホットケーキ」
「ああ、やっぱり知ってたのね」
カトリもそれを聞いて言う。
「ここのお店の名物料理」
「だから来たのよ」
ナンシーもそう答える。
「フルーツと生クリームがたっぷりのったホットケーキ」
「そう、それ」
カトリもその言葉に頷く。
「それ二人で食べる為にね。ねえ」
後輩君に顔を向けてにこりと笑う。
「二人でね」
「はい」
後輩君も笑顔で彼女に頷く。
「それで御願いします」
「そういうことで。席は」
「そこ、空いてるわよ」
カトリは自分達が座っている席の隣を手で指し示してきた。
「そこでいいわよね」
「ええ、席は何処でも」
彼女もそれに頷く。その後でまた後輩君に顔を向けて尋ねる。
「どうなの？私は何処でもいいけれど」
「先輩の好きな場所でいいですよ」
後輩君はにこりと笑って答える。
「何処でも」
「そうなの。それじゃあそこでね」
「はい」
そのまま二人でそこに座る。向かい側に座ってもやはりデレデレ

としているナンシーであった。そんな彼女を見てマルティはまた言った。
「本当に楽しそうだね」
「最高よ」
今度はにこにことして答えてきた。
「二人でいるだけでね」
「全く」
カトリはその言葉を聞いて呆れたように溜息をつく。
「鼻の下伸びきってるわよ」
「えっ、嘘」
その言葉に慌てて我に返る。
「そんな筈は」
「嘘よ」
慌てふためくナンシーに対してくすりと笑って言うのだった。
「安心して。顔はしっかりとしてるから」
「もう、からかわないでよ」
「だって。あんまりデレデレしてるから」
そうナンシーに言い返す。
「意地悪したくもなるわよ」
「何でよ、それ」
「妬けるのよ」
くすりと笑って本音を出してきた。
「あんまり熱々だからね」
「それは私も。まあ」
また顔を真っ赤にして答える。眼鏡の奥の顔が普段とは全く違った女の子らしいものになっていて実に可愛らしい。
「それはわかっているけれど」
「けれどどうして一緒になったの？」
「それは秘密」
だがそれは言おうとはしない。

「秘密よ。いいわね」
必死な顔をして後輩君にも言う。
「絶対に」
「けれど先輩」
後輩君は不安げな顔で彼女に応えてきた。
「言わないと余計にからかわれますよ」
「そ、それでもよ」
また必死な顔になっていた。こうしてみれば実に表情豊かである。
「言わなきゃばれないから。いいわね」
「いいわねって相手の前で」
「それでもよ」
もうボロボロになっているがそれでも言い繕う。
「とにかく。内緒にしないと私困るから」
「わかったわよ。言わないから」
「ええ、御願い。それじゃあ」
にこやかな顔を後輩君に戻して言う。
「楽しみましょう」
「はい」
「しかしまあ」
カトリはそんな二人を見て今度は仕方ないな、といった微笑みを見せていた。
「私には無理だけれど。こんなのもいいわよね」
「そう思うよ」
マルティモ彼女の言葉に頷く。その横ではやはりナンシーが後輩君を相手にでれでれとした甘いムードの中に漂っていたのであった。

スキャンダル学園　　完

2007・5・8

第五十話　アトリエの中はその一

アトリエの中は

「さて」

「いいわね」

フックとビアンカは教室の中で向かい合っていた。互いに不敵な笑みを浮かべている。

「どちらがあの人を先にゲットするか」

「勝負よ」

その勝負がはじまるということであった。今その開戦の合図が行われる。

「レディーーーーーーーー・・・・・・」

「ゴーーーーーーーーーーッ！！」

掛け声と共に二人は教室を出る。そんな彼等を見てクラスメイト達はやれやれといった顔をするばかりだ。よく見ればサポートを買って出ている筈のルビーとダイアナもいた。

「あれ、あんた達」

「行かないの？」

「ええ、行くけれど」

「けど」

何故か彼等はここで微妙な顔を見せてきた。それには訳があった。

「何か私達置いていかれたし」

「どうしようかしら」

「とにかく追いかけた方がいいわよ」

「あの二人今暴走してるし」

「そうね」

言われたその通りである。二人はそれに頷き教室を出てそのまま二人を追い掛けていく。その後にクラスメイト達もすいて行く。

それは当然ながら二人の目にも入っていた。ルビーは彼等に対し

て問う。
「あんた達も来るの？」
「ええ」
「だって気になるし」
そうルビーに答える。
「気になるっていうか楽しそうだからじゃないの？」
ダイアナはここで実にダイレクトな質問をしてきた。
「実際のところは」
「それは言わない約束で」
「まあまあ」
「まあいいけれど」
実際にはそこで言葉を止めた。そうしてとりあえずは二人を探すことになったのであった。
といっても足の速い二人のことである。もう何処にいるかわからなかった。
「あれ！？」
「何処に！？」
皆まずは二人の居場所を探すことからはじめることになった。しかし見つかりはしない。
学校中をくまなく探す。巨大な学園の中を彼等は必死に探し回った。そうしてやっとフックが見つかったのであった。
「いたわよ」
サポート役であるルビーが携帯のメールで皆に連絡する。
「中等部の校庭」
「そこね」
「わかったわ」
皆そこに向かう。そうしてここでビアンカのサポート役のダイアナからもビアンカが見つかったというメールが入ったのであった。
「ビアンカもいたわよ」
「何処？」

「大学の喫茶店」
「また全然違うところだな」
「どうする？」
「手分けしましょう」
ここでルビーがメールで皆に連絡してきた。皆に対して一度にメールを送っているのである。
「半分がフックで半分がビアンカ」
「具体的にはクラスの出席番号の偶数か奇数でね」
ビアンカもこう提案してきた。
「それでどう？」
「いいわね、それ」
ルビーがそれに賛成してきた。
「じゃあそれでね」
「ええ」
こうして彼等は二手に別れてそれぞれ中等部と大学に向かった。高等部とかなり離れているがそれでも彼等自身もかなりの速さで現場に向かうのであった。
中等部。奇数組はここでルビーと合流した。
「今何処にいるの？」
「あそこ」
ルビーは指差す。するとそこにはとんでもない速さで中等部を駆け回るフックがいた。
「ほら、分身の術みたいに動き回ってるでしょ」
「確かに」
皆その言葉に頷く。
「相変わらずこういうことになったら動きが特に速くなるわね」
「ある意味超能力ね」
「さて」
ルビーはここで言ってきた。

第五十話　アトリエの中はその二

「彼と合流するから」
「やっとなのね」
「ええ。サポートするって約束したしね」
こうしたところは案外律儀なルビーであった。しかしここで問題が転がっていた。
「けれどどうする？」
マチアが彼女に尋ねてきた。
「あいつ捕まえること自体大変そうだぞ」
「大丈夫、安心して」
しかしルビーはにこりと笑って述べてきた。完全に自信に満ちた顔であった。
「切り札があるから」
「切り札！？ええ。フック」
いきなりフックを呼んできた。
「神崎亜矢ちゃんの最新写真集あるけれど」
「むっ！？」
「何だと！？」
分身していた無数のフック達がそれに応えてきた。実に早い。
「そこか！」
「ならば！」
フックの分身が消えた。そうしてルビーの前に一人のフックが姿を現わしたのであった。その間全くと言っていい程時間ロスがなかった。
「ルビーか。それで神崎亜矢ちゃんの写真集は何処だ？」
目の前にいるルビーに尋ねてきた。
「早く、早く出してくれ。金は出すから」
「御免なさい、間違えたのよ」

「間違えた！？」
「ええ。これだったの」
出してきたのは全然違う動物の写真集であった。見ればアザラシやらカワイルカだのマスコット的な水棲生物ばかりであった。マナティーも映っている。
「何だ、それは」
「勘違いしちゃった」
「本当に勘違いか！？」
幾ら何でもこれはない。フックも怪訝な目をルビーに向けてきた。
「それが神埼亜矢ちゃんだというのは」
「まあいいじゃない。これあげるから」
さりげなくフックにその写真集を手渡してきた。
「好きでしょ？こうした動物」
「あ、ああ。まあな」
フックもそれに応える。実はこうした動物の写真集は嫌いではない。だから実はその写真集を貰うのもまんざらではなかったのである。
「じゃあ貰っておくな。有り難う」
「ええ。それでね」
写真集を渡したところで話を本題にやってきた。
「それでフック。あの人のことだけれど」
「ああ、それだよ」
フックはルビーに話を振られてそれに応えてきた。
「何処にいるのかわからないんだよな。何処だよ」
「それだったらあれよ」
ルビーはそのフックに対して言った。
「ここ中等部でしょ？あまりいる可能性はないわよ」
「しかし俺があの人を見つけたのはここだったしな」
眉を顰めさせて応える。
「ここだと思ったんだが」

「大学にいる方がずっと確率は高いわ」
こう言ってきた。これは彼女が大学生だから当然と言えば当然であった。何故かフックはそのことを見事に頭から抜け落としていたのである。
「だから。そっちに行きましょう」
「ああ、わかった」
フックもそれに頷く。そうしてルビーと共に大学へ向かうのであった。
既に大学ではビアンカがいた。彼女は今ダイアナに捕まっていた。
「やっと捕まえたわよ」
「ああ、そうだったわね」
彼女に捕まって今ようやくパートナーだったのを思い出す。
「あんた私のパートナーだったわね」
「そうよ。探したわよ」
「御免なさい。それはそうとね」
ビアンかはここでダイアナに顔を向けて言ってきた。
「あんた見つけた？彼女」
「そんなわけないでしょ」
ダイアナは顔を顰めさせて言葉を返してきた。二人は今大学の講義室の中の一つにいるのであった。ビアンカがそこに忍び込んだ結果である。
「大体あんな幾ら何でも教室とかまでね」
「だって何処にいるかわからないじゃない」
それがビアンカの返答であった。
「だからよ」
「やり過ぎよ」
ダイアナはまた彼女に言い返す。
「迷惑でしょ、そんなことしたら」
「迷惑はかけてないわよ」
自覚はない。それが一番悪質なのであるが。

「別にね」
「まあ自覚がないのならいいわ」
ダイアナもそれを言うのは止めることにした。そうしてビアンカの服の袖を引っ張ってきた。
「とにかく。パートナーだから」
「ええ」
「付き合うわよ。いいわね」
「参謀してくれる？」
ビアンカは彼女にこう提案してきた。
「よかったら」
「参謀！？」
ダイアナはその提案に目を少し丸くさせてきた。
「私があんたの？」
「ええ。やっぱり私一人じゃ色々と限界があるし」
この場合は他人への迷惑の方が問題だがそれはなかったことになっている。
「だからね」
「別に。いいけど」
実はそれもいいかと思ったダイアナであった。頷いてきた。

第五十話　アトリエの中はその三

「それじゃあそれで決まりってことで」
「ええ。じゃあ早速」
ダイアナは献策をしてきた。
「むやみやたらに何動いても駄目よ」
「じゃあどうすればいいの？」
「いい？まずは彼女が何処にいるかよ」
そう述べてきた。
「肝心なのは」
「それがわかったら苦労はしないわ」
ビアンカはその言葉に顔を顰めさせてきた。なお授業中であるがそれは一向に気に介してはいない。平気な顔で講義室の中で話をしているのだ。
「だから探してるのよ」
「敵を知り己を知らば百戦危うからず」
ダイアナはここでこう述べてきた。
「それはわかってるわよね」
「ええ」
その言葉には頷く。
「わかってるわよ。けれど」
「けれども何もなくてね」
ダイアナはさらに言う。
「要はあの人が何処の誰かなのよ」
「だからここの学生さんでしょ？」
ビアンカはそう返す。かなり大雑把な言葉であった。
「そうなんでしょ？」
「だからね、それだけじゃないのよ」
ダイアナはまた言葉を付け足してきた。

「いい？八条大学よ」
言わずと知れたマンモス大学である。その巨大さたるや八条学園高等部でさえ遥かに凌駕しているのだ。とにかく大きいのである。
「学部だって無数にあるし」
「そういえばそうね」
言われてようやくそれに気付いたようであった。
「学科まで入れたらもうかなり」
「だからよ」
そこに話を入れてきた。
「まずはそれを確かめてから。いいわね」
「そうね。それでどうやって確かめるの？」
「それは簡単よ。名前はわかってるじゃない」
そこを指摘してきた。
「後は人事課かどっかで名前をチェックしてね。そうして」
「ああ、それでいいの」
ビアンカはその言葉に頷く。
「それだけで」
「そういうこと。どう？これだと身元もすぐにわかるわよね」
「ええ、そうね」
「ああ、わかったら」
「君達」
ここで二人に対して言葉がかけられてきた。
「はい」
「何でしょうか」
「話は終わったかね」
声をかけてきたのは講義室で最初から講義をしていた先生であった。あまり機嫌のいい顔ではなかった。その顔で二人に声をかけてきたのだ。
「ええ、まあ」
「それが何か」

「終わったら出て行ってくれ」
ぶしつけにこう言われた。
「いいね。講義中なんだ」
「あっ、そうだった」
「すいません」
先生の言葉に思わず恐縮する。言われてようやく気付いたのであった。
フックはその頃ルビーに案内されて大学に来ていた。既にベッキーは彼女が大学の何処にいるのか完全に掴んでいた。それを彼にも言う。
「あの人の居場所はね」
「ああ、何処なんだ？」
「美術学部なのよ」
まずは学部を言ってきた。
「美術学部か」
「学科は油絵科」
次にそう述べる。
「それで普段から絵ばかり描いているそうよ」
「そうか。それじゃあ居場所は」
勘のいいフックにはすぐに彼女の居場所がわかった。
「アトリエだな」
「ええ、そこよ」
ルビーはフックの横から彼に言う。
「この時間はね。それでどうするの？」
「じゃあアトリエに行く」
「そう」
「それで彼女を」
「ええ、わかったわ」
その言葉を聞いて一瞬だが寂しげな顔を見せた。しかしそれはほんの一瞬のことであった。だからフックにも気付かれはしなかった。

第五十話　アトリエの中はその四

「それじゃあアトリエをね。集中的に」
「油絵だよな」
フックはさらに推理力を働かせてきた。それはテンボやジャッキーのそれと比べると比較にならないものがあった。もっともあの二人が異様なだけであるが。
「ならそこだ」
彼は言った。
「そこに行けば」
「そうよ。それじゃあね」
「よしっ」
二人はそのままアトリエを捜していく。そうして最後の一室というところで。扉の前でバッタリとビアンカ、ダイアナのコンビと出会ったのであった。
「奇遇ね」
「そうだな」
ビアンカとフックは互いを見て笑い合う。
「けれどここで決着の時か」
「そうね。果たしてお花を手に入れるのは」
「俺か御前か」
いささかやり取りが決闘めいてきた。といっても決して悪い雰囲気ではなく楽しんでいる雰囲気だ。彼等はいがみ合っているわけではないのである。
「どちらが勝つか」
「勝負っ」
ここでジャンケンをはじめる。勝った方が先に攻略にかかるというわけである。
「グー」

「グー」
まずは引き分けであった。もう一回。
「パー」
「パー」
またしてもであった。それが延々と繰り返される。ルビーとダイアナはそれが容易には終わりそうにないのでその間二人であれこれと話をしていた。
「ところでさ」
「中よね」
アトリエの中について話をする。
「いると思う？」
「絶対にいるわよ」
ルビーはそうダイアナに答える。
「だってさ。ここが最後の一室だし」
「そうよね。それじゃあ間違いないわね」
ダイアナもルビーの言葉に頷く。
「それでもさ」
しかしここで彼女は言う。
「何となく中身見てみたかったりして」
「アトリエの中？」
「何描いてるか気にならない？」
「まあ一応は」
ルビーもそれに応える。実は彼女も考えていることは同じなのだ。
「じゃあ。覗いてみる？」
「ええ、少しだけね」
そう言ってそっと扉に向かう。その間もフックとビアンカはジャンケンを続けている。どういうわけか勝負は一向に決着がつかない。
「あれ、何でだ？」
「またあいこ。どうなってるのよ」
そんなことを言いながらもジャンケンを続ける。その間にルビー

とダイアナはそっと扉を開ける。そうして二人でアトリエの中を覗いたのであった。

「あらら」

「これはまた」

そのアトリエの中を覗いた二人の最初の言葉であった。

「こりゃ駄目ね」

「そうね、残念だけれど」

「おい、残念って」

「どうしたのよ」

それを聞いたフックとビアンカがジャンケンの勝負を中断して二人に顔を向けてきた。やはり決着はついてはいない。

第五十話　アトリエの中はその五

「ほら、見てよ」
「こりゃあんた達諦めた方がいいわよ」
「諦めた方がいいって」
「まさか」
勘の鋭い二人には何があるのかすぐにわかった。
「あれか」
フックが言ってきた。
「あの人が彼氏と一緒なのか」
「そういうこと」
ルビーが答えた。
「カップルで仲良く絵を描いてるわ」
「もうそれだけでわかるわよね」
ダイアナも言う。
「充分過ぎる程」
「ああ」
フックは苦笑いと共に答えてきた。
「よくな。そういうことか」
「何だ」
ビアンカもそれを聞いて残念そうな溜息をつく。
「何かありきたりなオチだこと」
「全くだな」
二人は急にしおらしくなった。ジャンケンもお流れになってしまった。
「それで。どうするの？」
ルビーが二人に尋ねてきた。
「中、一応確かめてみる？」
「いや、それはいいさ」

「別にいいわ」
二人はそれを断ってきた。全く迷ってはいなかった。
「人の恋愛を覗き見する趣味はないからな」
「私も」
「そうなの」
ダイアナは二人の言葉を聞いて言ってきた。
「私はこれでね」
ビアンカはすぐに帰ろうとする。
「話は終わったから」
「そう。それじゃあ私も」
ダイアナも帰ることにした。
「帰って作曲にかかるわ。新曲考えてるのよ」
「そうなの。それじゃあ」
「ええ、これで」
「またね」
ルビーとフックに声をかけ去る。後にはその二人だけが残る形となった。
「あのよ」
先に声をかけたのはフックだった。
「何？」
「もう何もすることなくなったしよ」
彼は言ってきた。
「帰るか」
「そうね。あっ」
しかしここでルビーは言ってきた。不意に何かを思い出したように。
「そうだ、フック」
「何だよ」
「これから何かすることある？」
不意に彼に尋ねてきたのだった。

「何かって？」
「だから。何かすることあるの？」
彼女はまたフックに尋ねる。まるで何かを確かめるかのように。
「今日これから。ある？」
「いや、別に」
しかし彼はそれには首を横に振ってきた。
「何もないけれどさ」
「何もないの」
それを聞いたルビーの顔が急に明るくなった。まるで何かを知ったかのように。しかも急に明るくなったのは表情だけではなかったのだ。

第五十話　アトリエの中はその六

「それじゃあさ」
「何だよ」
「ほら、あの人デートに誘おうとしていたのよね」
「ん！？まあそうだけれどよ」
フックもそれに頷く。まだ彼女が何を言いたいのかよくわからない。どういうわけか急に彼の勘が鈍くなったような感じであった。
「やっぱりな。声をかけるからには」
「そう。それじゃあね」
またフックに声をかける。
「暇よね、これから」
「ああ」
またルビーに答える。
「何しようかって思ってるところだよ」
「それでよ」
ルビーはふと言ってきた。少なくとも表面上はそう見える。
「暇だったら暇潰しに」
「どうするんだよ」
不意にルビーに問う。
「デ・・・・・あ、いや」
「！？」
ベッキーは慌てて言葉を消した。そのうえで言ってきた。
「本屋さん、行かない？」
「本屋にか！？」
「ええ、どうかしら」
「つまりだ」
フックはここで普段の軽い調子で言ってきた。そこには別にこれといって他意はない。少なくとも彼はそうであった。ルビーは別で

あるが。
「デートってわけか？」
「そう捉えてもいいわよ」
ルビーも言ってきた。密かに覚悟を決めているかのように。
「どうかしら」
「いいんだよな、別に」
何故かここでは謙虚になった。それでルビーに問う。
「そのな、デートでも」
「だからいいのよ」
ルビーはにこりと笑って言うのだった。
「お互い暇だしね。たまにはいいじゃない」
「ああ、わかったよ」
フックもそれに頷く。そして。
「じゃあ行くか」
「ええ」
こうして二人は学校の中の本屋に向かった。彼等にしては平和な流れだった。
しかしこの平和な流れも。皆に見られていた。
「おいおい」
皆は大学の屋上から本屋に向かうフックとルビーを見て言い合う。何時の間にかそこに移動していたのだ。
「これはまた」
「意外なカップリングってわけか？」
「けれど案外似合ってるかも」
皆の中に戻っていたビアンカが言ってきた。ダイアナも一緒である。
「あの組み合わせは」
「似合ってるかな」
「ええ、案外ね」
ビアンカはそう言う。

「けれど。まだ付き合うってところまではいかないわね」
「そうね」
それにダイアナが同意して頷く。
「あの感じはね。まだよ」
「何だ、まだか」
「やれやれ」
皆それを聞いて残念そうな顔になる。
「けれどこれからはわからないわよ」
ビアンカはここで言った。
「こうしたことって本当に成り行きだし」
「成り行きか」
「そういうこと。どう転ぶかしら」
楽しそうに笑って言う。
「あの二人も」
「これから見ものね」
ダイアナがそれに応える。
「何かと」
「そうね」
二人のデートを見下ろしながら楽しそうに話をしている。何だかんだで恋の鞘当ては一部のメンバーを変えて続いていくのであった。

アトリエの中は　　完

２００７・５・１３

第五十一話　軟派男の戸惑いその一

軟派男の戸惑い

突然ルビーとのデートを行うことになったフックだがそれはまずは大過なく終わった。しかし騒動はそれからであった。しかも突然に起こった。

「昨日のことだけれどね」

「ああ」

そのルビーと教室で話をしていた。

「あの本読んでくれたかしら」

「あの本って？」

「ほら、だから私が紹介した本よ」

そうフックに言い返す。教室の窓辺で立って話をしている。

「あの詩集。読んでくれた？」

「あっ、いや」

しかし彼はその言葉には目を丸くさせて首を横に振る。

「まだだけれどよ」

「早く読んでよ」

フックのその言葉を聞くと眼鏡の奥の顔を顰めさせてきた。

「いい本だからね」

「けれどな」

だがフックはここで難しい顔を見せてきた。

「俺ハイネは」

「読まないの？」

「あっ、いや」

ところがそれには言葉を濁す。何かいつもの歯切れがなかった。

「読むけれどさ。そりゃ」

「じゃあ御願いね」

ルビーはその言葉を聞くとにこりと笑ってきた。

「フックはあれなのよ」
「俺が!?あれ!?」
「そう、詰めが甘いのよ。何事もね」
「そうか？」
しかしその言葉にはどうも違和感を覚えているようであった。それがはっきりとわかる顔であった。褐色の明るい顔が今は曇っていた。
「俺はそんな気は無いと思うが」
「そうよ。ほら、女の子とのことだって」
いきなりフックの核心に言及してきた。今日のルビーは実にストレートであった。
「今一つ成功しきれてないでしょ」
「うっ」
その通りである。これにはさしものフックも返す言葉もない。
「それはまあ。そういえば最近声をかけても」
「引っ掛からない？」
「まあな」
認めたくはないがそれを認めた。実は彼もまた軟派男の割りには奥手なところがありダイアナと同じく実際のところは経験不足もいいところなのだ。
「俺にとっては残念だけれどな」
「だからよ。ハイネは愛の詩人よ」
にこりと笑って言ってきた。
「読んだらいい経験になるわよ」
「ハイネというと」
ここでちらりとアンを見た。
「あいつの国の人間だったよな」
「ああ、それ違うの」
ハイネはユダヤ系である。ユダヤ人の知識人は当時の欧州では実に多かった。歴史の皮肉かユダヤ人弾圧のナチスを生み出したドイ

ツは比較的ユダヤ人には寛容だった過去がある。森鴎外の舞姫でものどかな雰囲気の中で過ごしているユダヤ人の老人が出ている。
「あの時イスラエルなかったじゃない」
「そうか」
「まあハイネはアンよりは素直だったけれどね」
「ほっといてよ」
その言葉を聞いたアンはムッとした顔で返す。
「あんた達には関係ないでしょ」
「あら、聞こえてたの」
「聞こえてるわよ」
顔を顰めさせてルビーに言う。
「全く。何を言っているのかと思ったら」
「よく聞こえるわね」
「ユダヤ人の耳は地獄耳よ」
自分の耳を指し示しての言葉である。
「覚えておいて」
「確かに」
「それは凄いわね」
「それはそうとね」
何だかんだで二人の話に入ってきた。アンも最近は人付き合いがいい。
「あんた達最近仲いいわね」
「ええ、まあね」
ルビーがそれに答えてきた。自分からそれを認めた。
「ちょっとね。思うところあって」
「思うところ？」
「つってもよ」
火消しはフックが回ってきた。
「あれだぜ、別に付き合ってるわけじゃないからな」
「自分で言ったら余計に誤解されるわよ」

「おっと」
アンのその突込みには思わず口を手で塞いだ。だがここでかなり怪しいのはその手はルビーの手であるということだった。少なくとも誤解は受ける動きだった。
「気をつけてね」
「え、ええ」
そして何故かルビーが答えるのだった。
「わかったわ」
「わかったのはいいけれど」
アンもそこに突っ込みを入れる。
「あんたが答えるのはどうして？」
「あっ、何となく」
慌ててフックから離れてそれに応える。
「気にしないでいいから」
「いや、それは無理よ」
しかしアンはさらに突っ込んできた。中々容赦がない。

第五十一話　軟派男の戸惑いその二

「流石に」
「うう・・・・・」
「それでもさ。あえて聞くわよ」
「あえてって？」
フックはそれ程でもないがルビーは身構えていた。そのうえでアンに対する。
「あんた達仲悪くないわよね、特に」
「ま、まあね」
言葉を選びながらそれに応える。
「別にそれは」
「ないな」
フックもそれに答える。ルビーは彼の言葉にビクットした顔になっている。
「ちょっとフック、それは」
「まあいいじゃないかよ」
困った顔のルビーに対して言う。彼は比較的落ち着いていた。
「言われることもわかってるんだしよ。そうだよ？」
「それはそうだけれど」
わかっていても困るものは困る。ルビーは案外そういうタイプだ。
フックはそうではないが。
「じゃあいいじゃねえか。それでな」
アンに対しても言う。
「あれだろ？俺達のことだよな」
「ええ、その通りよ」
アンは落ち着いた顔でフックに対しても答える。
「仲悪くないんだし付き合ってみたら？」
「ルビーとか」

ルビーに顔を向けて言う。
「そうだな」
「そうだなってフック」
フックの声にさらに困った顔を見せる。その顔が実に弱々しい。
「そんなこと言ったら」
「何だよ、デートに誘ったのはそっちだろ？」
「それはそうだけれど」
言葉も今一つ歯切れが悪い。
「それでも。何か」
「俺はいいぜ」
フックは困った顔のルビーに対して言うのだった。
「えっ、いいって」
「だから付き合うのだろ？俺は誰でも断るつもりはないしな」
「ないってそれじゃあ」
「ああ、またデートしようぜ」
爽やかな顔になって言うのだった。
「いいよな、それで」
「フックがいいっていうんなら」
ここで妙にしおらしくなる。それがどうにも女の子らしい。漫画
少女は現実には案外弱いようであるのがここでフックにもわかった。
「ちょっとルビー」
今度はアンがルビーに言ってきた。
「何よ」
「今のはちょっとずるいわよ」
「ずるいって？」
「だってそうでしょ」
少し意地悪な笑みを浮かべて述べるのだった。
「あんたからデートに誘ったじゃない」
「ええ。けれど」
「けれどもそうじゃないわよ。それならあんたが言うのが筋でしょ」

「私がフックに」
ここでチラリとフックを見る。彼女は眉を顰めさせて困った顔をしているがフックはこれまで通り涼しい顔をしている。この差が実に対象的であった。
「そうよ。さあ」
「さあって。じゃあフック」
「ああ」
「私でいいかしら」
そうフックに尋ねてきた。
「あの、またデートしてくれる？」
「ああ、いいぜ」
何やらそれまでの話をなぞっている感じであるがそれでもルビーは恥ずかしくて仕方がなかった。自分で言うのと言わないのとでは全然違うものだ。
「またな」
「ええ、有り難う」
「全く。世話がやけるんだから」
アンはそんな二人を見て苦笑いを浮かべて言った。
「やれやれよ」
「けれどさ」
ルビーは自分の話が終わるとすぐに反撃に出た。目を顰めさせて彼女に問うた。
「よく考えたらさ」
「何？」
「アンも結構人のこと言えないわよね」
「悪い！？」
アンの方も何を言われるのかわかっているので顔を顰めさせてきた。
「それで」
「あんたもさっさと言えばいいのに。クラスの皆が知ってるんだし」

「それはわかってるわよ」
あからさまに嫌そうな顔でルビーに返す。
「わかっていてもね。相手が」
「ギルバートが？」
「あれだから」
バツの悪い顔で述べるのだった。

第五十一話　軟派男の戸惑いその三

「どうしようもないのよ、実際のところ」
「もう言えばいいんじゃねえのか？」
フックは何気なく述べてきた。
「クラスの皆が知ってるしよ」
「ああ、そうでもないのよ」
「あれっ、そうか」
フックはルビーのその言葉に顔を向けた。
「ていうか知らない奴っているのかよ」
「少なくとも彰子ちゃんは知らないわよ」
「ああ、彰子ちゃんはな」
これはわかった。彼女の鈍感さはもう言うまでもない。それがわかっているからこそ言うのだった。それと共に納得できるものでもあった。
「そりゃ気付かないだろ」
「あと管君」
「あいつもかよ。わかんねえ奴だな」
その言葉にも頷く。そもそも彼がどういった人間なのか知っているのはクラスでもいないのだ。謎の人物そのものであるのだ。
「彼に関しては多分だけれどね」
「多分か」
「そうなのよ。だって管君自分では何も言わないし」
「っていうかあいつ何者だ？」
かなり洒落にならない核心について述べられた。
「そもそもよ」
「さあ」
ルビーの返事も要領を得ないものであった。
「それはね。何なのかしら」

「何なのかって言われるとよ」
フックも困った顔になる。
「俺もあいつに関しては正体不明だしな」
「そうよねえ」
「あいつもだってことか」
「あとテンボとジャッキー」
ルビーは今度はその二人の名前を出した。
「あの二人も全然知らないと思うわ」
「ああ、あいつ等もか」
そのことに関してはこれまで以上に大いに納得できた。
「まああいつ等に何ができるかどうかわからないからな」
「わかるっていうかあれは」
ルビーは言う。
「勘違いばっかりだし」
「風紀部の罰ゲームどうなったんだ？」
「あれ終わったらしいわ」
そうフックに答える。
「一応はね」
「一応はか」
「全然懲りずにまた馬鹿やってるけれど」
「やれやれ、あいつ等がいたんだ」
またそのことについて述べる。
「何か最初から当然だなって思える奴等だな」
「それもそうね。けれど」
「けれど？」
ルビーの言葉に顔を向ける。
「いやさ、それだけ皆知ってるんだったらよ」
「あんたも言えばいいのよ」
ルビーも言うのだった。
「あいつが断るとは思えないしよ」

「断ったらクラスの皆が何とかするし」
「けれど」
アンは煮え切らない顔で二人に言葉を返した。
「言えたら最初から苦労しないし」
「だったらよ」
フックが言う。
「俺にいい考えがあるんだけれどよ」
「いい考え？」
「ああ、ここはつまりあれだ」
また言ってきた。
「度胸だよ、いや」
「ここはマインドコントロールです」
突然として何者かの声がした。
「んっ！？」
「誰だ！？」
「私です」
フックとルビーの間から得体の知れない影が現われた。それは。
「えっ・・・・・・」
「まさか」
「話は聞いています」
それはセーラであった。いきなり姿を現わしてにこりと笑うのであった。

第五十一話　軟派男の戸惑いその四

「アンさん」
「え、ええ」
話を振られたアンはセーラに対して戸惑いの顔を見せる。
「お困りですね」
「知ってるのよね」
「勿論です。この学園で私の知らないことはありません」
「マウリア人のはったり？」
ルビーはそれを聞いてフックに問うた。
「今のって」
マウリア人の言葉の特徴として知らないことを知っていると言い、しゃべりだしたら止まらず、強引にでも自分の興味のある方向に話を持っていき、大袈裟に言うところである。当然はったりもその中にある。こうしたことに関してはインド時代から変わりはしない。
「いえ、本当です」
その自信の根拠もかなりふあんである。
「ですから」
「信じていいってことか？」
「信じる者は救われます」
にこりと笑ってフックに答える。
「ですからここはお任せ下さい」
「任せるって言ってもね」
当人であるアンは不安そのものの顔をセーラに向けていた。
「一体何をするのよ」
「そうよね」
「それが一番の問題だよな」
ルビーもフックも言う。
「どうするの、それで」

「神に祈りを捧げます」
「神ってまさか」
神の名を聞いたルビーは顔に不吉なものを漂わせた。それは何故かというとマウリアの神には結構連合から見ればとんでもない神もいるからである。
「カーリーとかじゃないわよね」
破壊神シヴァの妃であり戦いと殺戮の神だ。真っ黒い肌に長く赤い舌を持つ四本腕の女神であり全身を髑髏や人の腕で飾っている。言うまでもなく荒ぶる神である。
「御安心下さい」
セーラはまた言う。
「カーリー神は心正しき神ですから」
「ってちょっと待ちなさいよ」
今の言葉で不吉を確信に変えた。
「その神様ってまさか」
「何だ、一体」
そこにマチアもやって来た。不意に彼等に気付いたのだ。
「何を話してるんだよ」
「いいところに来られました」
セーラは彼の姿を見てにこりと笑ってきた。
「えっ、俺!?」
「はい、協力して頂けるでしょうか」
「何で俺が？」
「ちょっとね。アンのことで」
ルビーがそう彼に説明する。
「ほら、ギルバートのころで」
「ああ、あいつ絡みかよ」
当然彼もアンとギルバートのことは知っている。知らないのは鈍感か馬鹿か本人のギルバートだけというのが実情なのである。
「あいつに告白でもするのか？」

「まあ流れはね」
マチアの言葉に頷いてみせる。
「そんな感じで、大体合ってるわ」
「そうか、アンも遂にか」
マチアはルビーから話を聞いてアンをちらりと見てきた。
「成程な、話はわかったよ」
「わかったのならさ」
アンはマチアに対して述べる。俯き気味で警戒する顔になっていた。
「できればどうにかして欲しいけれど」
「けれど俺その為にいいところでって言われたんだろ？」
今のセーラの言葉について述べる。

第五十一話　軟派男の戸惑いその五

「だからよ」
「はい、その通りです」
セーラはやはり聖女の微笑で彼に答える。
「ですからこそ。頼みます」
「まあ頼まれたらやるぜ」
マチアとしても断る理由はない。それに頷いてみせる。
「いや、俺もな」
そのうえで言ってきた。
「こいつの様子見ていたら煮え切らなくてな」
「何よ、悪いの？」
ジロリとマチアに顔を向けて問う。
「人それぞれよ。だって」
「ああ、それは別にいいんだよ」
しかし今回はマチアの方が上だった。アンの攻撃を軽くあしらってしまう。アンはどうにもこういうことになってしまうとどうにも歯切れが悪いのであった。
「御前のこともわかってるしな」
「うう・・・・・」
「それでだ、セーラ」
アンが言葉を詰まらせたところでまたセーラに顔を向ける。
「俺は何をすればいいんだ？」
「貴方の音楽の力をお借りしたいのです」
その笑みのままでマチアに言う。
「ここは是非」
「俺の音楽の力か」
マチアはその言葉を聞いて真顔になった。音楽となるとこれまでになく冷静になる。

「そうか。なら」
「額じゃねえんだな」
「おい、フック」
今のフックの言葉にはまるで超人のような速さで反応してきた。
「俺は禿じゃねえ、それはだな」
「ああ、わかってるよ」
からかっただけなので軽くあしらわれる。
「だから気にするな」
「ふん、まあいい。それでだ」
また話をセーラに向ける。
「俺のバイオリンを使うんだよな」
「ムードの為に」
そうセーラが答えてきた。
「宜しいでしょうか」
「また随分凝ってるな」
「こういうことは凝ってこそです」
またあの聖女の微笑みで言う。その微笑みの前には誰も逆らえない。
「だからこそ」
「わかったよ、それじゃあな」
マチアも決心してきた。それで決まりであった。
「やらせてもらうぜ」
「有り難うございます。それでは」
アンに顔を戻してきた。聖女の顔のままで。
「お任せ下さい。これで望みは成就されますよ」
「え、ええ」
アンは戸惑いながらセーラのその微笑みに答えた。
「わかったわ。それじゃあ」
「はい、それでは」
そこにあの二人の従者が現われた。ラムダスとベッキーである。

「お任せ下さい」
「わかったわ。じゃあ」
アンも何が何かわからない顔で彼女に答えた。
「御願いするわね」
「はい。愛こそ全て」
セーラは両手を大きく広げて語った。まるでお花畑にいるかのように。
「だからこそ」
「お嬢様、それでは」
「私達も」
ラムダスとベッキーも答える。今まさに恐怖のマウリア三位一体が恐怖を引き起こそうとしていた。それに気付いていないのは当人達だけであった。

軟派男の戸惑い　　完

２００７・５・１７

第五十二話　セーラの魔術その一

セーラの魔術

セーラがアンの為に人肌脱ぐ、このことはすぐにクラスの皆に伝わった。それに最初から気付いていない面々だけを除いてではあるが。

「ねえ明香」

彰子は何も気付いていない顔で妹に話をしていた。二人は今学校の喫茶店で話をしていた。

「最近クラスの雰囲気がおかしいの」

「おかしいって？」

「何かセーラちゃんが意気込んでて」

「意気込んでいて？」

「うん、そうなの」

そう妹に話している。やはり何も気付いてはいない。

「何かおかしいのよ」

「どういうふうに？」

明香はそう姉に尋ねてきた。

「おかしいの？」

「ええ。それなのだけれど」

姉もそれに応えて述べる。

「アンちゃんがどうとかって。何なんだろうね」

「アンさんが」

明香はこれですぐにわかった。

「そうなの」

「何かな、本当に」

「姉さん」

明香は姉の首を傾げている様子を見て問うのだった。

「それはね。多分」

「多分？」
「いえ、やっぱりいいわ」
言おうとしたところで止めた。気付いていないのならそれでいいと判断したからだ。
「別に」
「何もないの？」
「ええ」
そう姉に答える。
「けれど。悪いようにはならないわね」
「！？」
妹の今の言葉にまた首を傾げさせる。
「何が？そんなに悪くならないって」
「セーラさんだから」
「セーラちゃん頭いいからね」
やはり彼女はずれていた。しかも自分ではそれに気付かない。
「やっぱりこういう時は頼れるわよね」
「けれど姉さん」
ここでまた明香は姉に言う。
「やっぱり。よく見た方がいいかも」
「何を？」
「いいえ、別に」
言おうと思ったがやはり止めた。どうにも言えない。
「何でもないから」
「そう。じゃあ約束のことだけれど」
「歴史の参考書のこと？」
「ええ、これ」
参考書を一冊すっと彼女に差し出す。見ればかなり分厚くて細かいものである。
「借りたいって言ってたわよね」
「ええ」

実は明香は姉に参考書を貸して欲しいと言っていたのである。彰子は成績優秀でありとりわけ歴史には強い。明香も成績はいいがどちらかというと理系なのである。だから文系の姉に参考書を貸してくれるように頼んだのである。そういうことであった。

「それがこれよ」

「これだったの」

「思う存分使ってね」

にこりと笑って妹に述べる。

「それでいい成績取ってくれたらいいから」

「有り難う」

「何かあったら任せて」

にこりと笑って妹に述べる。

「私は明香のお姉ちゃんなんだからね」

「うん」

明香もにこりと笑って姉に言葉を返した。

「それじゃあ」

「御礼はいつものでいいから」

また笑って妹に述べる。

「いい成績でね」

「姉さんもね」

「そうなのよね」

妹の言葉に少し寂しい笑顔になる。

「私理系は弱いのよね」

弱いといっても程度の問題である。これは明香も同じであるが彼女は実際のところは数学や物理もかなり成績がいいのである。だが文系が抜群によかったのだ。

「どうしても」

「私が文系が」

「姉妹で全然逆よね」

そう妹に笑う。

「変なものよね。何から何まで姉妹で全然違うし」
「そうね」
明香も姉のその言葉に微笑んで頷く。
「不思議なことね」
「けれどそれがいいのよね」
しかし彰子は妹にそう述べてきた。
「お互い全然違うから」
「上手くやっていけるのかしら」
「きっとそうよ」
彰子は言う。
「私がもう一人いたら怖いもの」
「それは私もかしら」
ここでは考えが一致した。そうしたところは同じなのであった。
「やっぱり」
「そうよ。けれどそれでいいじゃない」
それをいいとしてきた。
「だから二人でずっといたくなるし」
「そうかも」
「ねえ明香」
また優しい声を妹にかける。
「また何かあったら言ってね」
「ええ」
姉の言葉にこくりと頷く。そうして姉の参考書を受け取って勉強に向かうのであった。姉妹は二人で一人、そうした関係になっていたのである。

第五十二話　セーラの魔術その二

話は変わってセーラは。自分の屋敷にいた。
かなり巨大な屋敷である。タージ＝マハールそっくりの壮厳な宮殿である。彼女はそこで多くの使用人達に囲まれていた。まさに女王であった。
この宮殿に近付く者はあまりいない。理由は一つであった。
「おい、あれ見ろ」
「ああ、間違いないな」
道行く人々は壁の向こうの宮殿の庭を見て囁き合う。そこには恐竜が徘徊していた。
しかも悪名高い暴君竜ティラノザウルスである。暴君はその禍々しい姿と血に餓えた目を道行く人々に見せつけていたのである。怖くない筈がない。
「あんなもの飼ってるのかよ」
「こりゃ盗みに入ったらえらいことだぞ」
壁から出そうであるのが余計に怖い。だから皆近寄らないのである。
「パンジャブ」
セーラはそんな暴君に親しげに声をかける。
「元気にしていますか？何事も元気が大事なのですよ」
実はこの恐竜は大人しい。しかしティラノザウルスなので誰も近付かないのであった。従ってこの屋敷の防犯体制は完璧であった。他にも動く石像や魔術によりガードされている。ある意味鉄壁の要塞であると言えた。
「お嬢様」
恐竜に優しい声をかける彼女に執事が声をかけてきた。見れば白いマウリアの服を着た気品ある壮年の男である。
「準備が整いました」

「はい」
セーラもそれに応える。
「それでは」
「何時でもできます」
執事はこうも言う。
「お嬢様の望まれるままに」
「わかりました。では早速」
その言葉に頷いて宮殿の中に入る。そうしてマウリアの正装に着替え祭壇に向かう。そこで何か連合の人間には全くわからない儀式に入るのであった。
朝になった。セーラは二人の従者と共に空飛ぶ絨毯で学校に向かう。学校の皆はその絨毯を見てこう思わずにはとてもいられなかった。
「あれ、機械で飛んでるんだよな」
「ああ、確かな」
彼等はそんな話をしている。そうでないと魔術になるからだ。
「リアカーを遥かに凌くしたものらしいぜ」
「そうか、よかった」
「呪術かと思ったぜ」
「その可能性もあるな」
その可能性もあるのがマウリアなのであった。とにかく連合の常識が一切通用しない国、それがマウリアなのであるから。セーラにしろあらゆる常識を超越している。
「まあ深く考えないでおこうぜ」
「そうだな」
こうした結論に入った。
「ここはな」
「ああ」
時として見えているころを見えていないことにする。それもまた精神安定上いいことであった。彼等はそれを選んだのであった。

クラスに入る。そしてまずはマチアに声をかける。
「宜しいですね」
「勿論」
不敵に笑ってセーラに応える。その背にはバイオリンケースがちゃんとある。彼にとっては最早これは身体の一部とさえなっていた。
「何時でもいいぜ」
マチアもそう返す。
「じゃあやるんだな」
「いえ」
ところがそうではないと。セーラは言うのであった。
「それはまだです」
「あれ、じゃあ今から何をするんだ?」
「儀式です」
にこりと笑って言うのであった。
「儀式ってここでか?」
「悪いようにはなりません。まずは」
「はい」
ラムダスが彼女に応える。そうして懐から巨大なマウリアの神様の像を出してきたのだった。見れば四本腕の美しい女神の像であった。

第五十二話　セーラの魔術その三

「この神様は一体」
「ラクシュミーです」
セーラはマチアに答える。
「我がマウリアの愛の女神の一人です」
「一人、ねえ」
そこが微妙に気になる。連合の世界では何かを司る神は普通は一つの神話に一人であるからだ。これはエウロパでも同じである。ところがこのマウリアだけはどうやら違うらしい。実際に愛の女神や戦いの女神は何人でもいるし化身して名前や姿が変わることもある。
「はい、今から偉大なるラクシュミー女神の力をお借りするのです」
「俺がか？」
「正確に言うならば貴方のバイオリンにです」
「ああ、そうか」
マチアはそこまで聞いて彼女が何をするのかわかった。
「俺のバイオリンに愛のムードを漂わせるんだな」
「その通りです」
にこりと笑って彼女に答える。
「ですから。今から」
「ああ、わかったぜ」
マチアも満面に笑みを浮かべてそれに応える。
「それならな」
「はい、それでは」
女神の像を置いて儀式をはじめる。マウリア語のようだが何かが違う。セーラだけでなくラメ出すもベッキーも詠唱する。そうして他にも色々と儀式を行った後でマチアは一旦はお別れとなったのであった。次は他ならぬアンにであった。
「私なので」

「そうです」
彼女にも言う。
「用意は宜しいですか？」
「ええ」
セーラの言葉にこくりと頷く。覚悟を決めた顔であった。
「私は何時でもね」
「わかりました。それでは」
アンのその言葉に応える。
「早速女神の力をお借りして」
「マチアにはラクシュミー神だったわよね」
アンはそう彼女に尋ねた。
「確か」
「はい、その通りです」
セーラはいつもの汚れのない清らかな笑みで応えてきた。
「愛の力を」
「じゃあ私にもそのラクシュミー神を？」
特に考えることなくそう尋ねた。
「やっぱり」
「いえ」
だがセーラはそうではないと言うのだった。
「貴女に必要なのは愛の力ではありません」
「というと？」
「勇気です」
静かにそう伝えた。
「それさえあれば問題はいりません」
「勇気、ねえ」
アンはそれを聞いて不吉なものを感じた。それで彼女に尋ねた。
「まさかと思うけれど」
「はい」
「カーリー神とか。シヴァ神の化身の一つじゃないわよね」

シヴァ神の化身の中にはとんでもないものも存在する。まさしく破壊の欲望そのものが出て来たような。それもまた神の性格の一つだとするのがマウリアの凄いところである。

「まさかとは思うけれど」

「いえ、カーリー神でもシヴァ神でもありません」

セーラはそれは否定したのであった。

第五十二話　セーラの魔術その四

「そうした極端な存在ではなく」
「じゃあ穏やかな存在なのね」
「そうです。その神とは」
「・・・・・ってちょっと」
アンだけでなく周りにいるクラスメイト達までもが声を出した。
ラメダスがまたしても懐から出してきた三メートル程の像の女神は十本の腕を持つ女神であったからだ。
「それ！？ひょっとして」
「そうですが」
そうアンに返す。
「それが何か」
「穏やかな存在なのよね」
アンはまたセーラに問う。
「確か」
「ですから。穏やかな神ですが」
「そうかしら」
首を捻ったのはアンだけではなかった。他の皆もである。
「これはちょっと」
「だよなあ」
「ドゥルガーは偉大な神です」
それでもセーラはこう主張する。
「ですからその力をお借りすれば」
「いいのね？」
「その通りです」
アンにも言う。
「それではアンさん、宜しいですね」
「ううん、ここまで来たら」

アンも覚悟を決めるのであった。
「御願い」
「はい」
セーラは彼女の言葉ににこりと笑う。
「それでは偉大なるドゥルガー神よ」
「偉大なる戦いの女神よ」
「殺戮の女神よ」
ダメダスとベッキーも続く。殺戮の女神という言葉がやけに剣呑でクラスメイト達もそこに思わず突っ込みを入れてしまうのであった。
「だからそれだろ」
「殺戮の女神って何なのよ」
「アンさんに御力を」
「勇気を」
「気迫を」
「気迫、ねえ」
アンもそこに妙なものを感じる。
「本当に大丈夫かしら」
だが何はともあれ儀式は終わった。後は告白だけであった。
まずは何気ないのを装って。クラスメイト達がギルバートに声をかける。
「おいギルバート」
「ん、どうしたんだ？」
「呼び出しだぜ」
「呼び出し！？」
彼等の言葉にふと考える顔を見せてきた。
「僕には思い当たるものはないが」
「さあ、そこまではわからないよな」
「なあ」
皆白々しい演技を見せる。しかしギルバートはそれに気付きはし

ない。
「それでもあれなんだよ。誰かが呼んでるからよ」
「早く行った方がいいぜ」
「何かよくわからないがわかった」
ギルバートはそう言って答えた。
「それで場所は」
「えっ！？」
皆こう言われると目を丸くさせてしまった。
「場所って！？」
「だから呼び出した相手のいる場所だ」
それを皆に尋ねる。
「何処の誰か知らないが何処にいるんだ？そうじゃないと僕も行けないが」
「あ、ああそうだよな」
「そういえばそうね」
皆それを聞いて大変なことを思い出した。実はアンに何処で待っているかまでは聞いてはいなかったのだ。実に迂闊なことに。
「それで何処なんだ？」
「そ、それは」
「ええと」
「第一劇場の中です」
だがここでセーラが出て来た。そうしてそうギルバートに教える。

第五十二話　セーラの魔術その五

「第一劇場のか」
「はい、そこで待っておられるそうですよ」
「別に果し合いというわけではないんだな」
ギルバートはそれを聞いてこう呟いた。
「劇場の中というと」
「まあと草津じゃないし」
「それはね」
皆もそれには頷く。
「何はともあれわかった」
セーラに顔を向けて述べる。
「ではすぐにそこに向かおう」
「はい、そうして下さい」
セーラは彼を急かしてきた。
「きっといいことがありますから」
「いいこと!?」
「そうです、いいことが」
思わせぶりに彼に述べるのであった。
「御期待あれ」
「一体何なんだ」
彼女の思わせぶりな言葉と神秘的な笑みに思わず首を傾げる。やはりそこには何かあるのではないかと考えるのが普通であった。
「僕にいいこととは」
「まあそれはな」
「行ってみればわかるわよ」
クラスメイト達もそう述べる。
「だから早く行けよ」
「さあさあ」

「・・・・・わかった」
彼等のその態度に違和感を覚えながらも応えた。
「それでは」
こうしてギルバートは劇場に向かった。皆それを見送ってからこっそりと顔を見合わせる。そうして言い合うのだった。
「じゃあ僕達も」
「そうね」
男女共同じ顔で頷き合う。
「ここは皆で様子を見守らないとね」
「ええ」
と言っても何だかんだで見たいのである。アンがどうなるのか、ギルバートがどうなるのか。結局はそういうことなのであった。野次馬と言うべきである。
「それじゃあ」
「行きましょう」
クラスには誰もいなくなった。しかしそこには一人だけ残っていた。管が一人窓辺にいるだけであった。見事に彼だけになってしまっていた。
そこに彰子が戻る。彼女は一人しかいないクラスを見てまずは目を丸くさせた。そのうえで管に尋ねる。
「皆は？」
「何処かへ行ったけれど」
彼にとってはどうでもいい話だったので聞いてはいないようである。もっとも聞いていても動かないだけかも知れないが。何処までも謎の人物である。
「そうなの、どうしたのかしら」
「小式さんは何処に行ってたの？」
「明香に勉強を教えてたの」
そう彼に答える。
「それで」

「そうだったんだ」
「ええ。けれど皆いないなんて本当にどうしたのかしら」
「けれど気にすることはないよ」
いぶかしむ彰子に対して管は相変わらずの様子であった。
「皆何時か戻るから」
「そうね」
呑気に笑顔で頷く彰子であった。
「じゃあここで待っていればいいね」
「うん。じゃあ僕はこれで」
「あれ、何処に」
クラスを出ようとする管に尋ねた。
「うん、図書館に用があって」
「図書館に？」
「本を借りているから」
何かを思えば簡単な理由であった。そう言われると何だということで済む話だった。
「読み終わったから返すんだ」
「そうなの」
「うん」
何気ない言葉のやり取りであった。

第五十二話　セーラの魔術その六

「それだけ」
「その本何なの？」
彰子はそれを尋ねるのであった。無意識のうちに。
「よかったら教えて」
「徒然草」
日本の古典である。今では銀河語に訳されて読まれている。
「あれ。面白いから」
「ああ、あれね」
それを言われると笑顔になる。
「あの本面白いよね」
「うん。もう全部読んだよ」
管は何か感情がないのではと思える程素っ気無い様子で言うのだった。これが彼の離し方なのだが感情がないのが特徴になるのは男も女も同じであった。
「よかったら次読む？」
「ええ」
彰子は笑顔で彼に応える。
「よかったら」
「じゃあ。図書館に行こう」
本当に何気なく誘う。
「帰ったらきっと皆いるだろうし」
「そうね。それじゃあ」
「それまで図書館で時間を潰していればいいから」
これはデートにあたるが彼等はそうは思ってはいない。こちらもどうにももどかしい様子であった。本人達のどちらも気付いていないのだから。
その頃ギルバートは劇場に入った。既に劇場の中には皆が隠れて

いる。
「いよいよね」
ダイアナが言う。
「告白タイムは」
「ええ、やっとね」
彼女に蝉玉が応える。
「何か随分かかったけれど」
「結局ギルバートがああだからだよね」
スターリングが言ってきた。皆二階のボックス席のところに隠れている。
「鈍感だから」
「普通気付くわよ」
蝉玉はそう言って顔を苦くさせる。
「アンの様子を見てたら」
「あの鈍感さはまさに神の領域ね」
ダイアナはさりげなく酷いことを口にした。
「全く以ってね」
「その神の領域の男が来たよ」
トムがダイアナに告げた。
「何が起こるか考えもしないでね」
「まさかとは思うけれどね」
ここで蝉玉は心中の不安を口にする。
「言われても気付かないなんてことはないわよね」
「まさか」
スターリングはすぐにそれを否定した。
「それはないよ、幾ら何でも」
「けれどあれよ」
しかし彼女は言う。
「ギルバートだから」
「ううん」

それを言われるとスターリングも困ってしまう。恋愛に疎いというより最初から頭の中にインプットされていないのではとすら思えるのが彼なのだから。

「どうなるかわからないわよ」

「何か否定できないね」

スターリングは蝉玉のその言葉に頷くしかなかった。

「どうにも」

「そうでしょ？さあ、どうなるか」

「ところでアンは？」

トムは劇場の中を覗き込みながらダイアナに尋ねた。

「見えないけれど」

「あれ、そういえば」

ダイアナもそれを言われて気付いた。

「いないわね。何処かしら」

「何でも隠れてるらしいわよ」

蝉玉が二人に説明する。

「何でまた」

「演出なんだって、それがセーラの」

そう説明する。

「だかららしいわよ」

「演出、ねえ」

トムはそれを聞いて首を傾げさせる。

「何か細かいところでやけに凝ってるよね、セーラって」

「そうね」

「確かに」

蝉玉だけでなくスターリングもトムのその言葉に頷く。実際にセーラは何かと細かいところにこだわりを見せてくるのだ。案外細かい少女なのである。

「言われてみればね」

「じゃあ今回もなのね」

「けれど。どうなるかしら」
ダイアナはスターリングと蝉玉に応えるようにして呟いた。
「何か凄く不安なんだけれど」
「そうよね」
蝉玉は彼女のその言葉を否定せずに頷いてきた。実際のところアンがこうしたことに極端に弱いのはわかっている。だから成功するかどうか見ている方も不安なのだ。
「成功するよね」
トムが三人に問うた。
「ここは」
「さあ」
しかしそれに対するダイアナの返事はつれないものであった。
「しないかも知れないわよ」
「しないかもって」
「結局はあれよ」
そしてまた言う。
「アン次第だけれど」
「弱いからねえ、こういうのに」
蝉玉もまた言う。
「異常な程にね」
「それが不思議なんだよね」
スターリングはここで首を傾げてみせた。

第五十二話　セーラの魔術その七

「どうにも」
「不思議って！？」
「ほら、アンってあれじゃない」
蝉玉に応えて述べる。
「恋愛漫画描いてるし。それだと結構気の強い自分から言う女の子出るじゃない」
「そういえばそうね」
蝉玉も彼の言葉を聞いて納得したように声をあげる。
「アンの漫画って。そうよね」
「あれ裏返しなのよ」
首を傾げる二人にダイアナが言うのだった。
「裏返し！？」
「そういうこと。ほら、こうしたいって思うとね」
「ええ」
三人はダイアナの言葉に顔を向けて聞く。
「何かそれを反映させたり。そういうことなのよ」
「じゃああれってアンが実際にしたいことだったんだ」
トムはダイアナの言葉でそれがわかった。顔がぱっと灯りがついたようになる。
「だからだったんだ」
「そういうことになるわね」
ダイアナはまた言った。
「アンははっきり言いたかったのよ、いつも」
「成程ね」
「だからだったの」
スターリングも蝉玉もそれを聞いて納得して頷いた。
「あの気の強い感じは」

「それでなのね」
「さて、今の本人はどうかしら」
ダイアナはそう述べてあらためて下を見やる。
「上手くやるかしらね」
「御安心下さい」
ここで後ろからセーラが出て来た。
「あっ、セーラ」
「偉大なるドゥルガー神の加護がありますから」
にこりと聖女の笑みを浮かべて述べる。
「必ず上手くいきます」
「そう。それじゃあ」
「見ていても大丈夫だね」
「そうです」
また四人に述べたのだった。
「さあ、舞台のはじまりです」
見ればギルバートは劇場の舞台の前にまで来ていた。
「いよいよ」
皆それを見守り固唾を飲む。遂に運命の瞬間が来ようとしていた。
ギルバートは舞台の上に上がった。そうしてアンを呼ぶ。
「アン君、何処だ」
周りを見回しながらの言葉であった。
「何処にいるんだ？一体」
「いい感じですね」
セーラはそんな彼をボックスから見下ろして笑っていた。
「探していますね。真面目に」
「ええ、確かにね」
蝉玉が彼女のその言葉に頷く。
「ギルバートらしいって言えばらしいけれど」
「はい」
その蝉玉の言葉に彼女も応える。

「ギルバートさんがそうされるのはわかっていました」
「そうなんだ」
スターリングはそれを聞いて言ってきた。
「わかっていたんだ、セーラさんは」
「はい、何もかも」
悠然とした笑みであった。まるで女神のように。
「わかっています。そして」
「そして？」
「これからのことも。さあ」
下を己の右手で指し示して言う。
「いよいよです。運命の時です」
ギルバートは舞台の前にまで来た。いよいよであった。
彼は舞台のすぐ前まで来ていた。そこでもまたアンを呼ぶ。
「アン君、ここなのか？」
「ええ」
そしてここでアンの声が返ってきた。
「ここよ」
「そうか。しかし姿が」
「私はここにいるわ」
そう言うと舞台の右手からアンがすっと出て来た。まるで彼を待っていたかのように。
「アン君」
「ギルバート、来てくれたのね」
ここで不意に音楽がはじまった。ギルバートは知らず知らずのうちにそれに飲み込まれる。それを奏でているのは誰か、これはもう言うまでもなかった。
「いい感じだね」
トムがその曲を聴きながら言った。
「このバイオリンの音が」
「そうね」

それにダイアナが頷く。
「絶妙よ。流石はマチア」
「正解ですね」
セーラはまたそう述べて悠然と笑うのであった。
「マチアさんにお願いしてそのうえで神の御力をお借りしたのは」
「そうね」
ダイアナが彼女の言葉に頷く。
「いいわ。何か私までムードに乗ってきたわ」
「あれ、ダイアナってムード重視だったんだ」
「悪い？」
トムの言葉に顔を顰めさせる。
「私だって女の子よ。やっぱりムードよ」
「成程ね」
トムはそれを聞いて納得したように頷いてみせた。そうしてまた言う。
「そうだったんだ」
「ええ。けれどアンはそれ以上かも」
「むっ」
トムはそれを受けてまた舞台を見る。無論他のクラスの面々も。
見ればアンは音楽と劇場の醸し出すムードの中で完全にその気になっていた。

第五十二話　セーラの魔術その八

「ねえギルバート」
「うん」
ギルバートはそんな彼女に対して冷静に返す。
「僕に用があるんだったな」
「そうよ」
その言葉にこくりと頷く。
「だからここに来てもらったの」
いつもの引っ込み思案な様子はなかった。毅然としていた。
「それで何の用なんだ？」
ギルバートはそれを聞いたうえでまた彼女に問うた。
「見たところここには誰もいないが」
「だからよ」
二人は皆が見ていることは知らない。
「だからここにしたの」
「！？どういうことなんだそれは」
ギルバートはそれを聞いて目を顰めさせる。眼鏡の奥を。
「誰もいないから。何かの相談なのか！？」
「いえ、相談じゃないわ」
アンはそれは否定した。
「そうじゃないの」
「じゃあ一体何が」
「ギルバート」
答えはせずに彼の名前だけを呼んだのだった。
「ああ」
ギルバートはそれに応えてアンを見た。舞台の上、自分の正面に立つ彼女を。
「私ね、ずっと好きだったのよ」

「好き！？」
ここで音楽のムードが一気にあがった。マチアもわかっていた。
「そう、貴方が」
アンは遂に言った。
「君が僕を」
「そう。だから」
アンはさらに言葉を続ける。
「あのさ、よかったらよ」
顔を赤くして言う。だがそれは普段よりは幾分かましであった。
それは魔術故であろうか。少なくとも普段よりは赤くはなかった。
「貴方がよかったら」
「あ、ああ」
「付き合って」
はっきりと自分の口で言った。
「私と。駄目かしら」
「君と。僕が」
「ええ」
またアンは答える。
「いいかしら。私は、その」
また顔の赤さが増す。その顔で述べる。
「ギルバートさえよければいいんだけれど」
「僕さえよければ」
「そうよ。どうかしら」
ギルバートの方を見て問うた。
「私と付き合ってもいい？」
「ああ」
ギルバートはその言葉にこくりと頷いてきた。
「いいぞ。僕は」
「いいの」
「君は僕のことが好きなんだよな」

ギルバートはあらためて彼女に問うたのだった。
「それで今こうして」
「ええ。それで呼んだの」
それをまた言う。
「貴方に。ここで告白したいと思って」
「よし、それじゃあ」
ギルバートはアンを見上げる。そうして彼女をじっと見上げて言うのだった。
「君と付き合わせてくれ」
「ええ。貴方がいいんなら」
アンはそっと右手を前に出した。舞台の上から。
「私も」
「アン」
「ギルバート」
二人は舞台の上と下に別れて見詰めあい手を前に差し出しあうのであった。これで二人の交際がはじまることになった。彼等の姿はそのまま皆にも見られていた。
「何ていうかさ」
蝉玉がそれを見下ろしながら皆に言う。
「ハッピーエンドって感じ？これって」
「そうね」
その言葉にダイアナが頷く。
「それも最高の」
「最初はどうなるかって思ったけれど」
「案外素直にいったよね」
スターリングとトムも言った。
「アンとギルバート」
「意外な組み合わせかなって最初思ったけれどそうでもないね」
トムは捻った首をすぐに元に戻して述べた。
「何かお似合いだね」

「そうね。そのお似合いの二人が一緒になれたのは」
ダイアナはまだ二人を見ている。見ながら笑顔になっていた。
「よかったわよ、本当に」
「そうね。最高のハッピーエンドね」
蝉玉もそう言って笑う。
「よかったよかった」
「いえ」
ところがここでセーラが出て来た。というよりは前からいたのだが。
「これはハッピーエンドではありませんよ」
「ていうと？」
「一体何なのよ」
「これははじまりなのです」
セーラはそのにこやかな笑みで皆に述べた。
「はじまりに過ぎません」
「はじまりって」
「これが！？」
「はい」
そしてまた言うのだった。
「恋のはじまりに過ぎないのです」
「そうか」
「告白したばかりだもんね」
蝉玉とダイアナはそれを聞いて納得した。皆もそれは同じであった。
「恋とは二人が抱き合ってからがはじまりです」
セーラはまた述べた。
「アンさんとギルバートさんもまた然り」
「そっかあ」
「じゃあ二人はこれからが本当に大切なのね」
「そうです。ですからこれからも」

「わかってるわよ」
皆がセーラの言葉に頷く。しかも笑顔で。
「あの二人も大切なクラスメートだし」
「ここはね。大切に見守って」
「その通りです」
またセーラの微笑みが聖女のものになった。
「さあ、皆さんそれでは」
「それでは？」
「これからの御二人の幸せを願いここはパーティーにしましょう」
そう提案してきた。
「私の屋敷で。如何でしょうか」
「あっ、いいね」
「それじゃあ」
他の面々もそれに頷く。
「そういうことでね」
「じゃあセーラ」
「はい」
皆に対してにこりと頷く。こうして皆はセーラの屋敷に行くことになった。ところがここで皆はふと絶対に呼ばないといけない二人に目をやった。
「あの二人は絶対にね」
「そうね」
言うまでもなくアンとギルバートだ。二人はじっと見詰め合っている。その姿はもう完全に恋人のものであった。これまでの素直じゃない空気はもうなくなっていた。

セーラの魔術　　完

2007・5・25

第五十三話　セーラの屋敷その一

セーラの屋敷

セーラの屋敷でパーティーをすることになった二年Ｓ一組の面々。ところがここで一つ大きな、しかもとてつもなく大きな問題が転がっていたのだ。

「セーラの屋敷、だよなあ」

「ああ」

皆深刻な顔で相談していた。教室で。

「確かあの屋敷って」

「恐竜野放しだったわよね」

「しかも肉食恐竜」

それだけではない。まだあるのだ。

「濠に何いたっけ」

「ワニ」

そう話される。

「確か」

「メガロドンじゃなかったっけ」

四十メートルはある巨大な鮫である。外見はそのままホオジロザメであり性格は言うまでもなく非常に凶暴なことで知られている。

「それがウヨウヨ」

「ウヨウヨって」

皆まずそれに暗澹となる。

「橋使って行くだろ、普通は」

「橋には動く神様の銅像があるらしいぜ」

クラスの中の誰かが言う。

「動く像か」

「不審者はそれで撲殺するそうだ」

「撲殺、かあ」

「洒落にならないわね」
不審者でなくともそんなことを聞いて心穏やかでおられる筈がない。彼等はどんどん気持ちを暗くさせていく。
「しかもな」
「まだあるのかよ」
「訳のわからない武装した護衛が一杯いるらしいし」
「それもかよ」
これは当然と言えば当然であった。富豪の屋敷のボディーガードはこの時代でも存在しているのである。
「あと魔術」
「何か完璧だな」
「正直行くのが怖いな」
「ああ」
暗い顔でそんな話をしていた。普通の人間の家に行くわけではないので皆暗澹たる顔になっていた。しかしもう決まったことである。だからこそさらに困っているのだ。
「けれど行くしかないんだよね」
ロミオが言う。
「折角セーラが招待してくれるんだし」
「そうだな」
「よく考えれば私達お客さんだし」
何も侵入するわけではないのだ。それがまず安心だった。
「それはないわね」
「そうだな」
その言葉に頷く。何はともあれ行くことになったのである。
そうしてセーラの屋敷に行く日が迫ろうとしていた。うきうきとしているのはクラスでは新婚ホヤホヤのアンとギルバート、何もわかっていないテンボとジャッキー、あとは何を考えているかわからない彰子と管、それだけであった。最初の二人以外はかなりな面子ばかりである。

「特訓だ！」
フランツはそう主張する。
「恐竜と戦い勝つのも特訓だ！ならば！」
「あのな、フランツ」
ロザリーが呆れた顔でそう主張するフランツに言う。
「それの何処が特訓なんだよ」
「そういう特訓もある」
だがフランツは言う。
「だから俺は」
「死ぬぞ、相手を考えろよ」
「そうか」
「そうかって。相手は肉食恐竜だぞ」
そこを念を押す。
「それこそ頭からバリバリと」
「ううむ」
そこまで言われてやっとわかるフランツだった。どうにも頭の回転が妙なのは相変わらずであった。
「それもそうだな」
「ああ、だから止めておけ」
ロザリーはまた念を押す。
「いいな」
「わかった。それにしてもマウリアの屋敷か」
「ああ」
ロザリーは今度は素直に頷いた。
「そうだな。というと出て来るのは」
「カレーだな」
フランツはそれを出してきた。
「やはりここは」
「まあそうだろうな」
皆彼のその言葉に頷く。これはすぐに予想がいった。マウリアと

いえばやはりそれしかない。カレーなくしてマウリアではないとさえ言えるものがそこにはあった。

「カレーか」

「それもあれだろ？」

マウリアのカレーについてさらに言及される。

第五十三話　セーラの屋敷その二

「牛肉のない」
「ああ、そういえばね」
ロザリーはここであることに気付いた。
「セーラはヒンズー教徒だったな」
「じゃあ決まりか」
「鶏肉か何かのカレーだな」
「鶏肉ね。ならいいわ」
コゼットはそれを聞いてまずは一安心といった顔を見せてきた。
「豚肉でないのなら。それでいいわ」
「いや、ちょっと待てよ」
しかしロザリーはコゼットのその言葉にふと気付くものがあった。
「あんたこの前カツ丼食べてたよな」
「ええ」
ロザリーのその言葉に頷く。ここで言われているカツ丼とは豚肉のそれである。牛肉や鶏肉のものもあるが大抵は豚肉を使ったものになるのである。
「じゃあ関係ないだろ？」
「それがね、違うのよ」
イスラム教徒として言う。ここに問題があった。
「確かにあれよ。豚肉にしろお酒にしろいいけれど」
「ああ」
連合においては宗教的なタブーは殆ど無視される。それだけ世俗的になっているということである。ここがマウリアやサハラとは大きく違う点なのである。
「食べたり飲んだりする前にアッラーにお許しを言わなくちゃいけないから」
「だからか」

「そういうこと。わかってくれたかしら」
「ああ。何かと大変なんだな」
「俺だってそうだぜ」
コゼットと同じくムスリムであるルシエンが話に入ってきた。彼はムスリムの多いトルコ人なのだ。だから彼もムスリムなのである。
「豚肉とか食べる前にはな」
「この前のポークチョップ美味しかったわね」
アンネットが彼ににこりと笑って囁いてきた。
「二人で食べたの」
「あ、ああ」
アンネットに言われて顔が急にでれっとしたものになる。
「そうだな。アンネットって料理上手いんだな」
「これでも努力してるのよ」
話がおのろけになっていた。二人の仲は結構進んでいるようである。
「何かとね」
「また今度頼むな」
「ええ、わかったわ」
「まあ鶏肉だろうしな」
今のところフリーのロザリーはおのろけを何とか耐えながら話をする。
「別に完全なベジタリアンでもない限り問題はないか」
「羊だったらなおいいんだけれど」
モンゴル人のナンの言葉である。
「それはやっぱり無理かしら」
「羊のカレー！？」
ダンがそれを聞いて首を少し傾げさせる。
「中々珍しくないか、それは」
「あら、そうかしら」
しかしナンにとってはそうではないようである。別におかしいと

いう顔は見せない。
「私は別に。そうは思わないけれど」
「ううむ」
だがダンはまだ難しい顔を見せていた。少なくとも彼には馴染みのものではないらしい。
「お店でも普通にあるじゃない」
「そういえばそうか」
「ダンはカレーは何食べるの？」
「シーフードだ」
そうナンに答える。琉球人の彼らしい好みであると言えた。
「魚や鯨のな」
「鯨の、ねえ」
「これが意外といいんだ」
そうナンに説明する。
「マナティーもいいな。ステラーカイギュウも」
「そういえばそれもお店にあるわね」
「他にはオオウミガラスとかもな。いい」
この時代ではそうしたものも普通に食べられる。地球ではいなくなって久しい生物が他の星にはいた。人類にとっては涙すべき再会であると言えるものである。
「脂が乗っているしな」
「海、ねえ」
ナンはここで微妙な顔を見せて言ってきた。
「私馴染みがないのよ」
「そうか」
「だって。草原の生まれだし」
腕を組んでダンにそう述べる。
「泳ぐのはいつも川だったしね。ここじゃプールだし」
「そういえばセーラの家はかなり大きなプールがあるらしいぞ」
フランツが言ってきた。

「まるで湖みたいなな」
「湖か」
「それはまた」
皆このことにも唸ってしまった。流石はといった感じで。
「まあ今は泳ぐわけじゃないみたいだけれどな」
「食べるってわけだな」
「そうだ」
やはり話はそこであった。

第五十三話　セーラの屋敷その三

「食べるんだよ、やっぱり」
「さあ、何が出るかしら」
「やっぱりカレーだろうな」
ダンがそう皆に言う。
「マウリアだから」
「まあそれだろうね」
「けれどそれもよし」
皆笑顔でダンのその言葉に応える。
「カレー食べてお菓子食べて」
「それもマウリアのお菓子をね」
「マウリアのお菓子？」
皆の言葉を聞いて彰子がふと声をあげてきた。
「それってどんなのかしら」
「あれ、知らないの？」
彰子のその言葉を聞いてパレアナが声をかけてきた。
「ひょっとして」
「だって食べたことないから」
「あっ、そういえば」
パレアナも言われてそれに気付いた。言われてみればそうだった。
「私も食べたことないわ」
「俺もだな」
ダンもそれを聞いて言う。
「マウリアのお菓子か。どんなのかな」
「ケーキとかそういうもの・・・・・・かしら」
アンネットが首を傾げて述べる。
「違うかしら」
「ヨーグルトあるわよね」

ナンはそう尋ねてきた。
「確かマウリアって乳製品食べるし」
「確か、な」
フランツがそれに応えて述べる。
「あった筈だ」
「じゃあそれはまずあると」
ナンはそれを聞いてまずは安心した笑顔になった。
「よかったよかった」
「やっぱり乳製品なのね。あんたは」
ロザリーはそれを聞いてナンに声をかけてきた。
「モンゴルは」
「そうね、やっぱりそれね」
ナンもその彼女に言葉を返す。
「それと羊、やっぱりこれよ」
「そうなの」
彰子は楽しそうなナンのその言葉を聞いて声をあげる、
「ナンちゃんは」
「そういうこと。彰子ちゃんは？」
「私！？」
「そう、彰子ちゃんはどうなの？」
ナンはそう彰子に尋ねる。何気に面白そうな話を聞く顔と目になっている。
「何があればいいのかしら」
「ううん、そうね」
彰子はそのナンの言葉を聞いて考える顔になる。そうして首を少し傾げさせながら答えるのであった。その顔が実に可愛らしい。しかし彼女は自覚していない。
「やっぱりお米とか小豆かしら」
「あれ？おはぎ」
「それもあるわ」

そうナンに答える。
「けれどそれだけじゃないし」
「お砂糖とか葛とか」
意外と何でもあるのが日本の菓子である。メインはやはり主食である米を使うのであるがそこにその砂糖や葛を使ってさらによくしている。和菓子はそういうものである。
「そういうのよね」
「うん。それならいいんだけれど」
彰子はこう答えるのだった。
「そこのところはどうかしら」
「まあそれはないでしょうね」
パレアナが彰子に述べる。
「葛はね。絶対に」
「やっぱり」
「だって。マウリアよ」
それだけで済む言葉であった。
「葛は。やっぱり」
「じゃあお饅頭は」
「それもね。やっぱり」
ないのである。饅頭は元々中国のものである。中国文明とは全く違うマウリアでそれがあろう筈もない。それは言うまでもないことであったが。
「ないでしょうね」
「じゃあ何が出るのかしら」
彰子はまた首を傾げて言う。
「一体何が」
「少なくとも何かは出て来る」
ダンは妙にピントがあっているようなそうでないような答えを彰子に対して言った。
「期待はしていいな」

「そうね」
素直な彰子はそれにすぐ頷く。ここは彼女の長所であった。
「それなら」
「さて、幾ら何でもカレー味のお菓子はないでしょ」
パレアナが笑顔で述べる。
「楽しみに。行くわよ」
一同家の門のところまで来た。そこはいきなり異次元のような場所であった。見たことも聞いたこともない壮齢なものであったのだった。
ムガール帝国の宮殿を思わせる巨大な門がまるで城のようにそびえ立っている。一同はその前に顔を思い切り見上げさせて立っていた。
「さて、と」
皆意を決して中に入る。いよいよはじまりであった。

セーラの屋敷　完

２００７・８・２８

第五十四話　門が開いてその一

門が開いて

門が開かれた。そうして。
「いよいよね」
「ああ」
皆言葉を交あわせる。そのうえで開かれた門の中を見る。
「何か見える？」
「そうねえ」
皆にナンが問う。彼女の抜群の視力を頼んでのことである。
「何か宮殿が見えるだけで」
そのタージ＝マハールそっくりの宮殿だ。見れば異様に大きい。
「他は」
「見えないの？」
「そのかわり音が聞こえるわ」
ナンはここで優れた聴覚も発揮してきた。
「音が」
「音？」
「ええ。これは」
ナンの顔色が曇る。
「・・・・・まずいわね」
「まずい？」
「ええ、大いに」
顔がさらに曇った。
「やばいわよ、それもかなり」
「かなりって。何が来るのよ」
皆門の前で不安な顔になる。前をじっと見ている。
「恐竜でも来るの？」
「ううん、これは」

見れば前から本当に何かが来た。
「あれは」
「・・・・・何よあれ」
巨人が来た。本当に巨人だ。
だがただの巨人ではない。十の顔に二十の手を持つ異様な巨人だった。その姿はそのままインド神話に出て来るラークシャサの王そのものであった。
「本物！？」
「なわけないでしょ」
パレアナが彰子に突っ込みを入れる。
「幾ら何でも」
「いや、しかし」
その横でダンが言う。
「動いてるぞ」
「ロボットでしょ」
パレアナはダンのその言葉に対しても返す。
「きっとそうよ。きっと」
「でしょうけれどね」
今度はアンは口を開いてきた。
「けれど。まともなロボットかしら」
「そんなの見たらわかるじゃない」
コゼットがそのアンに突っ込みを入れた。
「あれは。どう見ても」
「そうよね。やっぱり」
「まともじゃない」
当然の結論が導き出されてきた。
「逃げる？」
誰かが言った。
「明らかに危ないし」
見れば二十の手にはそれぞれ様々な武器を持っている。口からは

紅蓮の炎を出している。見れば大きさは五十メートル程だ。映画にでも出てきそうな姿だった。
「今のうちに」
「そうね」
パレアナが友人の言葉に応える。
「今だったら逃げられるし」
「門を閉じて」
皆本当に逃げようとする。だがここですっと管が前に出た。
「菅君!?」
「大丈夫だよ」
そう彰子に返す。見れば彰子も逃げようとしてはいない。
「彼は。優しいから」
「へっ!?」
菅の今の言葉に皆思わず声をあげた。
「優しいって。あの化け物がかよ」
「うん」
フックの問いに答える。
「だって。怖いのは姿だけだから」
「性格・・・・・わかるのかよ」
「充分ね」
今度はロザリーに答えた。
「ほら、その証拠に」
「証拠に!?」
皆管の言葉に耳を傾ける。まるで魅入られたかのように。
「守ってくれているよ」
「私達を!?」
「うん」
皆の言葉にこくりと頷く。
「あの恐ろしい姿でね。周りの恐竜達が逃げていっているし」
「そういえば」

見ればその通りだった。庭に放し飼いにされている巨大な肉食恐竜達が巨人に怖れを抱いていて近寄って来ない。武器と火の輝きが明らかに恐竜達を退けていたのだ。
「そうね」
「どうやら」
「だから。彼は大丈夫だよ」
管はまた言う。
「それに。人を外見で判断したら駄目だよ」
「そうよね」
彰子は彼の今の言葉ににこりと笑った。顔でその通りと言っている。
「じゃあ私も」
彼女も前に出る。しかしここで一同はふと気付いたことがあった。それは。
「ただ、ねえ」
「ええ」
パレアナとナンが話をする。少し苦笑いを浮かべて。
「あれ、ロボットよね」
「そうよね。人じゃないし」
ちょっとした突込みであった。だがそれは二人の耳には入らない。何はともあれ一同はそのロボットの巨人に案内されて宮殿に向かったのである。

第五十四話　門が開いてその二

宮殿の門まで来る。宮殿の門もまた巨大である。一同がそこまで来ると門が自然に開いた。それはまるで門自体が生き物であるかのようであった。

「門も機会なのね」

アンは自然に開いた門を見て言った。

「何事かと思ったけれど」

「てっきり妖術かと思ったよ」

これはロザリーの言葉である。

「セーラだしさ」

「御安心下さい」

ここでそのセーラの声がした。

「セーラちゃん!?」

まず彰子が声をあげた。

「何処に」

「はい、こちらです」

また声がする。しかしそれでも姿は見えない。

「姿は見えない」

「一体何処に」

「私はここです」

また声がした。声は上の方から聞こえてくる。

「上!?」

「じゃあ一体何処に」

「ここです」

「そこは」

見ればそこはあの巨人の頭の方であった。何とそこに空飛ぶ絨毯に乗って宙に浮かんでいたのである。まるでアラビアンナイトのように。

「空飛ぶ絨毯」
「まさかあれは」
「はい、魔法です」
セーラは上からにこりと笑って一同に答える。マウリアの民族衣装を着ている。
「私の魔法です。如何でしょうか」
「如何でしょうって」
皆何を言っていいかわからない。ナンも言葉もない。
「魔法、使えたの」
「ごく初歩ですけれど」
セーラはにこりと笑って告げる。何気ないといった顔であった。
「使えます」
「そうか。それはまずは置いておいてだな」
ダンは自分の言いたいこと、聞きたいことをまずは引っ込めて上に浮かんでいるセーラに尋ねた。見れば顔がいささか強張っていた。
「パーティーをするんだよな」
「ええ」
また上からにこりと笑って答える。
「ようこそいらっしゃいました」
「それで場所は何処なんだ?」
フックが問うた。彼も魔法というものにかなり戸惑っている。それは彼が今まで見たことのないものだったからだ。連合には魔法はない。
「中か。外か?」
「中です」
宮殿の中で宴をするというのだ。答えは簡潔であった。
「どうぞ。お入り下さい」
下に降りながら告げる。
「私の家の中に。さあ」
「ああ、家だったな」

ジミーはそのことをやっと思い出した。ふと気付いたような顔と声である。
「そういえば」
「はい。では皆さん」
絨毯から降りて一同のところに来た。そうして彼等に声をかける。
「どうぞ。中に」
「お邪魔します」
皆にこりと笑う。ようやく宮殿の中に入ることになったのであった。
宮殿の中もまた広大であった。廊下は一同が全員横に並んでも充分余る程広くしかも何処までも続いている感じであった。
「何処まであるんだろうな」
ジミーは赤絨毯の上を歩きながら言った。
「この廊下は」
「何かねえ」
ナンが彼に答えて言う。
「先が見えないんだけれど。この廊下」
「見えないって御前がか」
「ええ。こんな広い宮殿なんて聞いたことないわよ」
「だよなあ」
ジミーはナンのその言葉に納得したように頷く。
「一体どうなってるんだよ、ここ」
「マウリアだからなあ」
フックの言葉は実に的を得ていた。
「マジでこりゃ何があるかわからないぜ」
「事件もか」
何があるかわからないと聞いて不思議な化学反応を示したのはいつものテンボとジャッキーであった。この二人も来ていたのである。
「それは楽しみよね」
「ああ、宮殿殺人事件」

勝手に事件までででっちあげる。完全に何か勘違いをしていた。
「それを解決する美男美女の名探偵二人」
「絵になるわよね」
「何か暫く見なかったけれど相変わらずね」
アンは勝手に盛り上がっている二人を横目で見ながら皆に言った。
「どうしたものかしら、全く」
「ってどうしようもないじゃない」
それに対するコゼットのコメントはこれまた醒めたクールなものだった。
「今更。つける薬もないし」
「何気に酷いこと言うわね、あんた」
意外ときついコゼットにアンの方がいささか驚いていた。
「だって。いつもこうだし」
「まあそうだけれど。それにしてもね」
コゼットの言葉は続く。
「また騒ぎ起こしそうだし。このままだと」
「ああ。それなら心配なさそうだぞ」
コゼットにダンがクールに言葉を入れてきた。

第五十四話　門が開いてその三

「どうやら」
「何かあったの？」
「ほら見ろ」
そう言って二人の方を指差した。見ればとんでもないことになっていた。
「・・・・・・ってちょっと」
「ほら、大丈夫だろ」
「・・・・・・まあね」
コメントがかなり引いている。何故ならテンボとジャッキーはいきなり出て来たキングコブラに見事に噛まれてしまっていたからだ。
「うわーーーーっ、えらいのに噛まれたじゃねか！」
「ちょっと、何でこんなところにこんなのが！」
噛まれても元気なままだ。しかし顔は真っ青になっている。流石にコブラなぞに噛まれては落ち着きたくても落ち着けない。とりわけいつも騒がしい二人なら尚更である。
「ほらな」
ダンは騒ぐ二人を指差して冷静に述べる。
「少なくとも騒ぎは起こさなくなった」
「そうね。とりあえずは」
「けれどこれはこれで問題よ」
アンがコブラに巻きつかれだした二人を見ながらコメントする。
「これはこれでか」
「幾らあの二人でもキングコブラに噛まれたら危ないわよ」
キングコブラの毒は強いだけではないのだ。その巨大な姿からもわかるように毒の量もかなりのものなのだ。伊達に王者の名を冠しているわけではないのだ。
「どうするのよ」

「その時はあれだな」
別の役者の出番であった。
「アンジェレッタ」
「呼んだ？」
当然ながらアンジェレッタもいる。その小さな顔をダンに向けてきた。
「血清あるか？コブラの」
毒に対する薬である。毒を弱めたものを馬に打ちその抗体から作るのだ。この時代の血清はありとあらゆる生物のものがありその効果もかなりのものになっている。
「コブラの？」
「そうだ。キングコブラな。二人分欲しい」
「うん、あるよ」
返事はすぐに望まれるものが返ってきた。まるで魔法のように。
「はい、これ」
ズボンのポケットから四リットルはありそうな巨大なボトルが出て来た。見ればそこにもう血清がたっぷりと入れられていた。
「これでいいわよね」
「ああ、悪いな」
「いざという時に備えはしておくものよ」
相変わらずどうやって入れていたのか不明だが何はともあれテンボとジャッキーは一命を取り留めた。あれこれそんなことをしている間にセーラの待っている部屋に到着した。
「こちらです」
「どうぞ」
先導をしていたラムダスとベッキーが止まった部屋の扉は漆黒のマウリア調の扉だった。皆その扉の前で姿勢や服装を正す。
「さて、と」
いち早く身だしなみを整えたパレアナが声をあげた。
「いよいよね」

「そうだな」
皆彼女の言葉を耳にして緊張を高める。既に全員身だしなみは整えている。
「いざ戦場へ」
「鬼が出るか蛇が出るか」
「さあ」
ラムダスが扉を開いた。気付けばセーラはもういない。実は彼女は先にこの部屋にいるのだ。
白い部屋だった。しかも広い。その広い部屋の中央に彼女はいた。
「お待ちしていました」
マウリアの正装だった。褐色の肌に彫の深いマウリア人の特徴がその白い正装とよく合っている。その姿で一同を出迎えてきたのだった。
「ようこそ宴の場へ」
「お招き頂き感謝します」
ギルバートが一同を代表して堅苦しい挨拶をする。
「八条学園二年Ｓ１組」
「只今参上しました」
「はい」
セーラはにこりと笑って挨拶を受けた。見ればもう多くのテーブルの上に様々な料理が置かれていた。マウリアのものだけでなく連合各国の料理がそこにある。
「うわっ」
「これはまた」
酒も当然ある。皆その料理の種類と量にまずは驚かされた。
「すげえな」
「流石って言うべきかな」
そう言い合いながらそれぞれテーブルに向かう。そのままバイキングに入る。
食べてみると味も最高だった。見事なまでの。

「美味いな」
「ああ」
「有り難うございます」
セーラは彼等の言葉を聞いてまたにこりと微笑んだ。
「そう言って頂けるとシェフも喜びます」
「いやいや」
「だって本当に」
「これでメインディッシュは成功ですね」
「メインディッシュ！？」
「ええ」
そのにこりとした笑みのまま答える。
「これはこれからのオードブルなのです」
「嘘っ」
蝉玉はその言葉を聞いて思わず目を丸くさせた。
「だって豚の丸焼きまであるし」
「はい。それもオードブルです」
何かとんでもない言葉が返ってきた。
「そこにある七面鳥の丸焼きも」
「むっ！？」
丁度それを食べているスターリングがセーラのその言葉に顔を向ける。

第五十四話　門が開いてその四

「オードブルですよ」
「じゃあメインディッシュは何なの？」
蝉玉は話がわからなくなりついセーラに尋ねた。
「まさか恐竜とは」
「それもあります」
「それもって」
皆またしてもこの世のものとは思えない言葉を聞いてしまった。
「恐竜をどうしたんだろう」
「丸ごと煮てみました」
よりによってとんでもない言葉であった。
「他にはステラーカイギュウの丸焼き」
「ステラーカイギュウ・・・・・」
地球ではもういなくなってしまったが他の多くの惑星には生息している。肉は柔らかく美味でかなりの人気の食材の一つである。
「それまで」
「あと鯨の活け造り」
「凄いんだ」
彰子はそれを聞いても態度を変えない。おっとりしたままである。
「鯨まで」
「ゼウグロドンです」
所謂昔鯨である。進化した鯨達よりも身体が細長いのが特徴である。
「それを特別に」
「美味しそう」
「いや、そういう問題じゃないよな」
「なあ」
皆話を聞いているうちに何か途方もないことになっているのに気

付きだした。
「何処で調理したんだろうな」
「それも誰が」
そうした問題が出て来た。だがセーラはそんなことは全く気にはしていないようである。相変わらず優美な笑みを浮かべながら話を進めるのであった。
「さあ。まずはオードブルをどうぞ」
バイキングを食べるように勧める。
「全てはそれからです」
「了解」
「それじゃあ」
皆それに頷き食べることと飲むことを再開させた。まずは全て食べてしまった。
それが終わるとそのメインディッシュであった。本当に来た。
「ううむ」
「圧巻だな」
ブロントサウルスの丸蒸しにステラーカイギュウの丸焼き、ゼウグロドンの活け造りが。今運ばれてきたのであった。しかも一つの皿にだ。
「さあどうぞ」
セーラはその優美な笑みで皆に勧める。
「我が家の自慢の料理です。さあ」
「本当に出て来たよ」
「マジでマウリアってすげえな」
皆本当に出て来た料理を前に色を失っている。豪快と言うにはあまりにも壮絶なメニューであった。
だがあれこれ言ってもはじまらない。食べてみないことには。それで実際に食べてみた。
「おや」
「これは」

まずはゼウグロドンの刺身だ。生姜醤油である。
「いけるな」
「ああ」
「これは和食でしたね」
セーラはにこりと笑って一同に問うてきた。
「お刺身ですから」
「ええ、まあ」
彰子が彼女に答える。
「元々は中国の料理だったらしいけれどね」
「そうなのですか。中国の」
「けれど和食って考えていいわよ」
横から蝉玉が答えてきた。
「大体はね」
「わかりました」
蝉玉のその言葉にこくりと頷いてみせる。
「それではそのように」
「あとステーキはうちだよね」
今度はアメリカ人のスターリングが尋ねてきた。
「やっぱり」
「はい、その通りです」
やはり落ち着いてそのうえでしっかりした声で答えてきた。
「それを意識してみましたけれど」
「うん、いいよこのステーキ」
スターリングは上機嫌でステラーカイギュウのステーキを食べていた。
「焼き加減もソースも。よく合っていて」
「そうね」
蝉玉も恐竜を食べながら言う。
「タレの具合も。中華料理がわかってるじゃない」
「我が家のシェフはどちらもかなり修行してきましたので」

そう二人に答える。
「どちらも十年ずつ」
「そりゃ凄い」
「本格的ね」
「あとタイとベトナムとロシアも十年ずつ」
ここから話がおかしくなってきた。
「トルコもそうですね。メキシコも」
「何かまた話が妙になってきていないか？」
「なあ」
クラスメイト達はセーラの話を聞くにつれ目を顰めさせてきた。
理由はその歳月である。
「ブラジルには何年でしたっけ。あとパスタに和食にお寿司にデザートに」
「ちょっと待ってくれ」
ここでギルバートが彼女に突っ込みを入れてきた。
「はい？」
「君の家のシェフは一体何年修行をしていたんだ？」
「そうよねえ」
「もう百年は越えてるんじゃ」
ジュディとパレアナが彼の後ろで言う。聞いていれば滅茶苦茶な時間なのだ。なおこの時代の平均寿命は百歳を越えてはいる。
「よかったら教えてくれ。どれだけなんだ」
「確か三千年です」
「へっ！？」
皆その数字にまずは言葉を失った。
「三千年！？」
「セーラの家のシェフは仙人か！」
なおマウリアでは本当に仙人がいるという噂があり宇宙空間を人が歩いていただの何千年も生きている人間だのいう話が本当にある。少なくともそれは連合においては有り得ない話である。だがマウリ

アではあるのだ。

第五十四話　門が開いてその五

「はい。何度も生まれ変わりまして」
「輪廻転生か」
ギルバートはそれを聞いてすぐにそれを出してきた。
「そういうことなのか」
「そうです。何度も生まれ変わり修業しているのです」
「ううむ」
「何か凄い話」
皆それを聞いて何と言っていいかわからない。それで差し障りない言葉を出すのだった。
「そういうカルマらしくて。今はイギリス料理を修業中です」
「イギリスって」
「あそこは」
エウロパにある国だがそれでもイギリス料理とは何なのかは連合においてもよく知られている。つまり猛烈にまずいということが。
「イギリス料理もいいそうです」
それでもセーラはそのにこりとした笑みを崩しはしない。
「フィッシュアンドチップスと紅茶が」
「それだけらしいよな」
「なあ」
誰もエウロパには行ったことがないから詳しくは知らないがそれでもサハラ、マウリア経由で話は聞いている。そのどうしようもないまずさを。
「凄くいいそうでそれで修業しているそうです」
「それで何年位なの？」
彰子がセーラに尋ねる。
「イギリス料理の修業は」
「もう九年です」

そう彰子に答える。
「あと一年だそうです」
「ふうん。そうなんだ」
「特に紅茶が素晴らしいそうです」
「だからそれだけなんじゃ」
「イギリスって」
クラスメイト達は密かにそう突っ込みを入れる。やはりイギリスといえば紅茶だ。というよりはそれしかないのであるが。他は壮絶である。
「その後はまた和食だそうです」
「うちの？」
「はい。おそばを」
これもポピュラーな料理だ。連合全土で知られている和食の代表格だ。とりわけ天麩羅と一緒に食べると美味しいと評判である。
「修業したいと言っていますが」
「そういえばおそばもあったわよね」
先程のオードブルにそばもあったのだ。ざるそばが。
「あれかなりよかったわよ」
「まだはじめたそうです」
彰子に対して述べる。
「まだまだ修業が足りないそうで」
「そうなんだ」
「何でも最初に知ったのが二千年前だそうで」
「その時代蕎麦あったかしら」
アンネットがそれを聞いて首を捻る。
「なかったような」
「とりあえず百年程度の時間の誤差はどうでもいい国だけれど」
カトリが言う。
「それでも千年ってねえ」
「まあその程度もねえ」

アンネットが何かを達観して言う。
「マウリアだし」
「それ言ったら御仕舞でしょ」
もっとも本当にセーラにとってはそんなことはどうでもよかった。何はともあれセーラは彰子に蕎麦についての話をしていた。
「どうでしょうか。我が家の蕎麦は」
「美味しいっ」
この一言で充分だった。
「コシもあるし風味もいいし。それに」
「それに？」
「おつゆもいいわ」
最高だというのである。彰子は満面に笑みを浮かべていた。
「これは昆布に椎茸に鰹節に」
「はい」
セーラは笑って彼女に応える。
「薬味はお葱に生姜。最高の組み合わせね」
「おつゆは上方風にしました」
「そこまで知ってるんだ」
「詳しいな、やけに」
ベッカーもローリーもセーラの詳しさに流石に驚いている。上方とはかつての日本の大阪や京都のことである。昔は首都はそこにあったのでそちらを上方と呼んだのである。
「如何でしょうか」
「うん、それがいいの」
彰子はにこにこと笑って彼女に答える。
「ほら、やっぱりあれよ」
「あれですね」
話が通じている。あれというだけで。
「お醤油と大根卸しだけじゃ寂しいから」
「お蕎麦もやっぱり上方ですよね」

「天麩羅もね」
上機嫌で天麩羅も食べる。海老やキス、烏賊とこちらもかなり豪華である。
「いいわ。やっぱりお蕎麦には天麩羅だし」
「御気に召されて何よりです。それで」
「それで？」
「皆さんメインディッシュも召し上がられたようですし」
「食った食った」
誰かが言った。見れば恐竜もステラーカイギュウも鯨も全部食べられていた。怖るべきは彼等の食欲であった。まさに底無しである。
「それでは次は」
「次は」
「まさか」
オードブル、メインディッシュと来れば次は決まっている。一つしかない。
「デザートです」
「よしっ」
「それは別腹だよな」
皆デザートと聞いて意気上がる。最後のデザートなくして御馳走とは言えないのはこの時代においても同じことなのだ。
「それでは皆さん」
セーラはまた一同に告げる。
「どうぞ。デザートを」
「さて今度は」
「何が出るか」
期待と不安が入り混じる。彼等はその二つの感情をまるで絵の具の二つの色が混じるようにして待っていたのであった。

門が開いて　　完

2007・9・3

第五十五話　とっておきのデザートその一

とっておきのデザート

「さあ」
セーラは皆に告げる。
「召し上がって下さい。我がシヴァ家のデザート」
「シヴァ家の」
「何かそこまで言われると」
皆食べ物に対するのとはまた違う感情を抱かざるを得なかった。
何か戦場に向かうだの強敵を相手にするだのそういった感情を。
「妙な気分になるよな」
「全くだぜ」
「それでセーラちゃん」
その中でも彰子は相変わらずマイペースであった。いつものおっとりとした様子でセーラに対して問い掛けるのであった。
「どんなデザートなの？」
「どんな？」
「うん。連合の？それとも」
「それは内緒です」
セーラはミステリアスに笑って彰子に答えた。
「ですが。きっと驚かれるべきだと思います」
「きっとって」
「今度は何が出るやら」
一同は何か怖くなってきた。何しろセーラのすることだからだ。
「それでは」
セーラの右手がさっとあがった。
「出でよ、デザートよ」
「はっ」
誰かの声がした。すると部屋が急に光に覆われた。

「何だ！？」
「今度は何が起こるんだ」
最早何が何だかわからない。皆戸惑っているところに何かが来た。
光が消えた。するとそこには。
皆それぞれ船の上にいた。何処かに浮かんでいた。
「船の上って」
「何でこんなところに」
「皆さん」
ここでまたセーラの声がした。
「ようこそ最後の宴に」
「最後って」
「あのさ、セーラ」
クラスメイト達は船の上でセーラに対して問う。見れば彼女もまた船の上にいる。そもそも何故船に乗っているのかという疑問も彼等にはあった。
「はい」
「ここ何処なの？」
「それと。何で船に乗っているのかな」
彼等は口々にセーラに対して問うた。
「それですか」
「何か変なお池だし」
次に気付いたのはそれであった。
「色、色々あるよね」
「赤に青に」
「これはゼリーです」
セーラはにこりと笑って彼等に答えた。
「ゼリー！？」
「はい。宜しければ一度味わって下さい」
「それじゃあ」
「ちょっと」

彼等はそれを受けて実際にゼリーを食べてみる。それはゼラチン質のものでかなり弾力がある。それでいて妙な柔らかさがあった。そこが生き物めいてもいた。

「美味しいっ」

「甘くて弾力もあるし。それでいて」

かなり蓄めいていた。彼等はもうゼリーを楽しんでいた。

「柔らかい。まるで水みたいに」

「不思議な感じ」

「ゼリーだけではありません」

セーラはゼリーを楽しむ彼等に対してまた言った。

「ゼリーの中には」

「あれっ」

言われて何かに気付いた。ゼリーの池の中に何かが多量に浮かんでいた。

「ケーキ!?」

コゼットがまずケーキに気付いた。

「これは」

「チョコレートも」

マルティはチョコレートを見た。

「クッキーもあるし」

「プリンまで。キャンディーも」

「これがデザートなのです」

セーラはその中の一つのケーキを手に取ってクラスメイト達に述べる。

「我がシヴァ家のとっておきのデザート」

「これがだったのね」

「何とまあ」

「大切なお客様の為のものです」

ケーキを食べながら言葉を続ける。

「ですから。どうぞ」

「食べていいの？」
皆大切なお客様と聞いてかなり気恥ずかしい顔をしていた。中には赤くなっているクラスメイトまでいる。かなり照れているのがそれでわかる。
「何故ですか？」
「あの、だってさ」
「ねえ」
皆気恥ずかしそうに顔を見合わせながら言う。
「大切だなんて言われたら」
「そこまで言われたら」
「本当のことですから」
セーラは恥ずかしそうな彼等に対してまた言うのだった。
「本当のこと！？」
「皆さんは私のお友達ですね」
「ええ、まあ」
「それはね」
それは本当のことだ。否定することは誰にもできない。
「やっぱり。ねえ」
「皆セーラが好きだし」
「友人はこの世で最も貴い宝」
セーラはふとしたようにそのことを呟いた。
「ですから。私は貴方達に対してこのお菓子達を捧げたいのです」
「貴い宝」
「そうですから」
また言う。言葉はまるで珠玉のように聞こえた。セーラの澄んだ声はその外にあるものから出るのではなく中から出るものなのだと皆気付いた。

第五十五話　とっておきのデザートその二

「どうぞ」
「じゃあ」
「いただくわね」
皆セーラの好意を受けてデザートを食べはじめた。それは今までよりも遥かに美味しかった。同じものを食べているというのにだ。不思議なことに。
「何かさあ」
蝉玉がクッキーを食べながら言った。
「美味し過ぎて」
「うん」
彼女の言葉にスターリングが応える。
「涙が出て来る」
「どうしてだろうね」
見れば二人は涙を零していた。他の皆も。
「どうされたのですか？」
セーラはその彼等に対して声をかけた。
「皆さんそんなに泣かれて」
「だって。あんまり美味しいから」
「そうよ」
ボロボロ泣きながらまた食べる。
「けれど何でよ」
「甘くないよ」
皆食べながら言う。
「塩の味がして」
「どうしてよ」
「皆さん」
セーラはその皆に対して声をかけた。そのにこやかな顔で。

「また。いらして下さいね」
「ええ」
「絶対ね」
皆その言葉に頷く。彼等とセーラの絆はこうしてより深まったのであった。
パーティーの後。皆は遊んでいた。もう涙も止まり楽しい感じである。
「何かよ」
フックがポーカーをしながら皆に言う。彼は今ラメダスを相手にしていた。
「俺さっきから負けっぱなしじゃね？」
「そういえばそうだよな」
「勝ってねえじゃねえか」
覗き込む皆はそれに応える。見れば本当に彼は負けまくっていた。コインはラメダスの方に集まっている。これは単なるゲームなので金もかけていなければこのコインもおもちゃだ。だがそれでも負けていて気持ちのいいものではないのである。それはフックも同じだ。
「おかしいな」
フックは呟いた。
「この俺が負け続けるなんてよ」
「何言ってるのよ」
その横からエイミーが突っ込みを入れてきた。
「あんたポーカーあまり強くないじゃない」
「そっか？」
「顔にすぐ出るから」
「まあそうかもな」
それは嫌々認めた。
「確かに表情豊かだしな、俺は」
「そういうこと。すぐにわかるわ」
「ううむ」

首を捻りながらカードを切る。見れば表情がすぐに変わる。
「いいカードみたいね」
「そうね」
皆そんなフックの顔を見て囁き合う。
「さて、勝てるかな」
「どうかな」
「ストップ」
ここでフックはストップをかけてきた。
「俺はもういい。これで勝ちだ」
「勝ちですか」
「ああ、絶対にな」
ラメダスに対して不敵な笑みで答える。
「ヒーローはどんなにボロボロになっても最後は勝つものさ」
「何時ヒーローになったんだか」
「まあた調子に乗って」
「ヒーローってのはファンも多いものさ」
かなり勝手な解釈もする。こうしたところは流石にフックであった。
「その証拠がこれさ」
フックが自信に満ちた顔で出してきたのは。
「これは」
「確かに」
「ストレートフラッシュ」
声もまた自信に満ちたものだった。その顔と声もラメダスに向ける。
「これで俺の勝ちは確実だ」
「さて、それはどうでしょうか」
自信に満ちたフックに対してラメダスは落ち着いて返してきた。
「どういうことだ？」
「これです」

そう言って出してきたのは。
「ロイヤルストレートフラッシュ・・・・・・」
「嘘・・・・・」
皆これには絶句した。まさかと思ったからだ。
「な、何でだ!?」
まさかの敗北を喫したフックは我を忘れて言う。
「こんなに勝ち方。有り得ねえだろうがよ」
「私にはわかるのです」
ラメダスは表情を変えずに述べてきた。
「わかる?」
「はい。カードが」
そう言うのだった。
「次にどんなカードが出るのか。そういうことです」
「そ、そうだったのかよ」
フックもこれには絶句した。だが同時に納得できるものがあった。

第五十五話　とっておきのデザートその三

「流石はマウリア人」
「確かに」
「これは」
皆も同じだった。フックと同じように絶句すると共に納得していたのである。
「大したことではありません」
ラメダスはこうも言う。
「普通にわかることです」
「いや、それはないから」
「わからないって」
皆彼の言葉に突っ込みを入れる。
「カードに触れれば」
皆の言葉をよそに答える。かなり強引に。
「カードが何を言っているのかがわかりますので」
「ううむ」
「何という」
この言葉は予想通りだがそれでも唸らずにはいられないものがあった。
「そんなことまでわかるのか」
「マウリア恐るべし」
「けれどそれだったらよ」
その彼の相手をしているフックが言う。
「はい」
「勝負にならねえよ」
「そうだよな」
「やっぱり。反則だよな」
「いえ」

しかしラメダスはその言葉に穏やかな笑顔で返す。
「決してそうはならないのです。御安心下さい」
「何で？」
「相手も切り札がありますので」
「切り札！？」
「それは一体」
「マインドコントロールです」
またしても常人の想像を遥かに越える言葉が出て来た。
「マインドコントロール！？」
「はい、相手の目を見ますね」
「あ、ああ」
「何か物凄いことになってるな」
皆それはわかる。話が段々普通のポーカーから得体の知れない世界に入ってゆく。それを嫌になる程実感せざるを得なかったのだ。
「まあとにかく話して」
アンは必死に自分の言いたい言葉を消してラメダスに言うのだった。
「それでどうするのか」
「はい。相手の心の目を遮断するのです」
やはり話はとんでもないものであった。
「そうして相手を抑えてその間に相手の心を読んで」
「はあ」
「そうして」
「自分がカードを引きます。そうした勝負になるのです」
彼は穏やかな笑みをそのままにしていた。周りの人間がどういった顔になっているのかは全く見てはいない。至極当然であるかのように言うだけだった。
「それが私達のポーカーです」
「ありえねえ」
話を全部聞いたフックの言葉がこれであった。

「何なんだよ、それ」
「だよなあ」
「それはやっぱり」
「おや？」
話を聞いていたセーラが変わった言葉を聞いたように声をあげて首を傾げさせた。
「それは違うのではないですか？」
「違うって何が？」
皆嫌な予感を感じながらそのセーラに尋ねる。
「違わないと思うけれど」
「俺達は」
「ですから。それがポーカーの勝負の仕方ではないかと」
「そうですよね」
ラメダスも彼女に顔を向けて言う。彼等が何故皆がそう言うのかわからないといった顔をあからさまに見せていた。どうにもこうにも。
「それがどうして」
「皆さん不思議な顔をしておられるのか」
「まあわからなかったらいいさ」
フックはそれ以上の言葉を打ち切ってそう述べた。
「もうさ」
「はあ」
「それにしても。あれね」
パレアナはここで面白いことを考えたのであった。
「これは使えるわよ」
「使える！？」
「ええ」
皆に悪魔的な笑みを見せた。あからさまに何かを企んでいる顔であった。
「ほら、ラビニアの奴ポーカー好きじゃない」

「あっ」
「そうね」
クラス共通の敵の名前をここで出してきた。学園一の嫌われ者であるラビニアはこのクラスの面々と激しい対立関係にあるのだ、なおこのクラスは他にもミンチン先生とも対立関係にある。このミンチンという女も根性が腐っている。
「あいつからお金巻き上げてそれで私達が」
「いいわね、それ」
「あいつが困る顔が見られるし」
皆パレアナの言葉に笑顔で応える。
「でしょ！？だからさあ」
「仕掛けると」
「セーラ、それでいいかしら」
パレアナの提案を聞いたうえでセーラに顔を向けて問う。皆の考えはもう決まっていた。嫌いな人間に対して一泡吹かせるという行為が実に楽しいというのはこの時代でも同じだ。
「あいつからお金を巻き上げて」
「私達が剛勇」
「いえ、それは駄目です」
しかしそれは当のセーラが首を横に振ることで消えてしまった。
「駄目なの！？」
「どうして」
「例え誰であってでもです」
ここで彼女は言うのだった。
「そうしたことをするのは。人の道に反します」
「だから駄目なの」
「そうです」
答えるセーラの声が強くなっていた。
「そういうことは。いいでしょうか」
「そう言うんなら」

「じゃあ」
「けれどあれよ」
皆はセーラの言葉を受けた後でも言うのだった。

第五十五話　とっておきのデザートその四

「あいつには一泡吹かせたいわよね」
「そうね」
その気持ちは変わらない。それでまだ話を続けるのだった。
「どうする？」
「ポーカーよね」
残り物を食べながら話をする。話が乗ってきた。
「ここは」
「だってあいつが一番得意なやつじゃない」
ジュディが言う。一番得意なもので一泡吹かせるとうのは確かに効果的だ。皆それをわかって狙っているのである。中々意地が悪い。
「それにあれじゃないと絶対に乗ってこないし」
「そうね。じゃあどうしようかしら」
「俺がやるか」
今しがたラメダスに全敗したフックが名乗りをあげた。
「ここは俺がポーカーの妙技をな」
「あんたが！？」
彼の名乗りには皆目をしばたかせて口を歪ませてきた。
「ネタでしょ？」
「幾ら何でも」
「おいおい、何だよその態度は」
フックは皆の態度が一変したのを見て口を尖らせた。
「俺じゃ駄目なのかよ」
「だって御前今負けたじゃねえか」
「そうだよ」
ジョンとジョルジュが言う。
「それ考えると不安だよ」
「タムタムならともかく」

「いや、俺はいい」
しかしタムタムはその申し出を断ってきた。
「折角だが。それに」
「それに？」
「やはりポーカーならフックが一番だ。ここはフックに任せたい」
「フックに」
「大丈夫かな」
「大丈夫だ」
タムタムは皆にそう述べてからフックに顔を向ける。フランツを見る時と同じように。
「フックならばな」
「ほらな、タムタムもこう言ってるじゃないか」
クラスきっての頭脳派であるタムタムに言われて上機嫌になる。やはり彼も認められると悪い気はしないということである。
「ここはやっぱり俺がな」
「俺が参謀になる」
タムタムはこう名乗りをあげてきた。
「えっ！？」
「それなら問題はないな」
皆にそう念を押してきた。
「俺がサポートにつくなら」
「ああ、それならな」
「何の心配もないぜ。何しろ再考の頭脳だからな」
「何だよ、それって」
フックは皆が自分よりタムタムに信頼を置いているのを見てまた口を尖らせる。どうにも腑に落ちないものを感じていたのだ。
「タムタムかよ、やっぱり」
「仕方ねえだろ」
「学年きっての頭脳だぜ」
彼の評判はただ単に成績がいいだけではないのだ。部活でのリー

ドや普段の生活からもそれがわかる。本当の意味での頭脳派ということなのである。
「それと比べたらな。やっぱり」
「まあ気を悪くしないでね」
「手遅れだよ」
憮然としたまま皆に答える。
「ちぇっ、俺はそんなのかよ」
「いや、御前じゃないと駄目だ」
そのタムタムがフックに言ってきた。
「俺じゃなきゃかよ」
「そうだ。だから頼むぞ」
彼から頼むと言ってきたのだった。
「俺は単なる参謀だしな。メインは御前なんだ」
「俺がメインか」
「わかったらやるぞ」
フックの肩を叩いてきた。
「今回だけは御前が相棒だ」
「わかったぜ」
相棒と言われたら悪い気はしない。フックも乗り気になった。
「じゃあやるぜ」
「ああ」
フックはすっくと立ち上がった。そうしてタムタムと頷き合う。
「ポーカー勝負をな」
「ラビニアに一泡吹かせよう」
彼等のコンビネーションがはじまった。だがそれがどういった結果になるのかはまだ誰も知らないのであった。時を司る神以外は。

とっておきのデザート　　完

2007・9・6

第五十六話　スペードの女王その一

スペードの女王

ラビニアをポーカーで一泡吹かせることにした。フックはそのことでタムタムと打ち合わせに入るのだった。というよりはクラスメイト達に無理矢理それをさせられていた。

「ちぇっ、何だよ」

ハンバーガーショップに拉致監禁されてふてくされていた。

「そんなのしなくてもいいじゃねえかよ」

「馬鹿言え」

すぐにクラスメイト達から駄目だしが入る。

「ラビニアはあれよ」

「ポーカーの名人なんだぞ」

そう彼に告げる。顔に少し険が入っていた。

「それで何もしないで勝つなんて」

「甘いぞ、おい」

「勝負は時の運だぜ」

それに対するフックの言葉はそれだけで何もわかっていないことがわかるものだった。

「だからよ。そんなのはいいじゃねえかよ」

「よかねえって」

「そうよ」

彼等はまた言う。

「それで負けたらどうするのよ」

「御前その時はどうなるかわかってるな」

「大丈夫だって言ってるだろ」

それでもフックはわからない。

「俺がやるんだぜ」

「駄目だこりゃ」

「やっぱり連れて来てよかったわね」
皆フックの暢気な様子を見てあらためて思った。
「じゃあタムタムいい？」
「用意できてるわよね」
「ああ」
タムタムは静かにそこにいた。彼は何かノートを開いていた。
「もうな。ラビニアに関するデータも揃っている」
「あれ、早いわね」
皆タムタムがノートを見ているのを見てそう言う。何かもうノートにはかなりのことを書き込んでいる。それも相当細かい内容であった。
「もう揃ったの」
「ああ」
タムタムはまた答える。
「あいつのクラスメイトが教えてくれた」
「クラスメイトが。まあ妥当ね」
皆これには納得出来た。ラビニアは非常に底意地の悪い性格でありクラスメイト達からもかなり嫌われているのだ。だから情報が用意に集まったのである。
「簡単に教えてくれた」
「簡単になのね」
「コーヒー一杯だった。自動販売機のな」
「安っ」
ラビニアの人気のなさがわかろうというものだった。しかしそれにしてもあまりにも安過ぎたので皆言葉を失ったのである。
「それで手に入った情報だ。そこに俺の独自の調査も入れた」
「そこらへんは流石ね」
「そうだな」
タムタムの情報収集能力にあらためて感心する。流石は野球部の頭脳である。

「見たところあの女はかなり卑劣なポーカーをする」
「卑劣!?」
「どんなの？」
「一言で言うとイカサマだ」
実にわかり易い言葉だった。
「カードを仕込んでおいてそれを出す。それが得意技だな」
「そう。あいつらしいわね」
「そうだな」
皆その言葉に頷く。
「それでだ」
タムタムはさらに話を続ける。
「そのイカサマを封じる為には」
「どうするの？」
「俺に策がある」
タムタムは冷徹な声でそう述べた。
「ちゃんとな」
「それはどんなのなの？」
アンがタムタムに問う。
「私もあいつ嫌いだし。よかったら聞かせて」
「今は内緒だ」
しかし彼はそれを言おうとしなかった。
「フックだけには話しておくが」
「秘密ってことね」
「秘策か」
「そう、秘策だ」
また答えた。冷静な顔で。
「悪いがな。今は内緒だ」
「わかったぜ。それじゃあ」
「そこは任せるわね」
「済まない。それでだフック」

タムタムはあらためてフックに顔を向けてきた。
「次に御前の癖だが」
「今度は俺か」
「そうだ。御前は確かにポーカーは上手い」
まずはそれを認める。これはお世辞だけでなく彼の腕を公平に評価してのことだ。
「それだけだとラビニアにも対抗できる。だが」
「それだけではないっていうんだな」
「わかるな。あいつはイカサマの達人だからな」
またそれを言う。
「普通にやれば負ける可能性が高い。それをよく覚えておけ」
「俺だってイカサマはできるぜ」
フックは不敵に笑ってそう彼に返した。
「そっちの方もな」
「いや、それでも限度がある」
それに関してはフックを褒めはしなかった。
「御前とあの女とではイカサマの腕が違い過ぎる」
「そんなにかよ」
「そんなにだな」
あえてそうフックに言うのだった。
「あれはな」
「あいつが下衆なのは俺だって知ってるぜ」
フックもラビニアが嫌いである。それもかなり。

第五十六話　スペードの女王その二

「あいつには散々煮え湯を飲まされてるしな」
「ではわかっている筈だ」
タムタムはまた述べる。
「あの女がそうしたことが得意なのをな」
「そうだな。そう言われるとわかりやすいぜ」
これでようやく納得した。
「じゃああれか。真剣にやらねえと」
「困るのは御前だ」
言葉が一旦冷徹なものになる。
「いいな」
「ああ、よくわかったぜ」
ようやくタムタムの言葉に乗ってきた。
「じゃあ。どうするかだよな」
「とりあえずあいつのイカサマは俺に策がある」
「そっちは任せていいんだな」
「そうだ。御前はポーカーに専念しろ」
そう言う。
「わかったな。それで」
「ああ、じゃあ俺はポーカー専門だな」
「それでだ。今度は」
続いて話をまた出す。
「あの女のパターンがこれだ」
「それか」
今まで手に持っていたノートを出してきた。見ればそこにはかなり細かいデータが書き込まれていたのだった。まるで野球のそれのように。
「これはまた」

「わかるな」
タムタムはフックに問うた。
「かなり細かくて申し訳ないが」
「いや、それはいいさ」
フックもそれはよしとした。
「ただ。かなり細かいな」
それに驚いているのである。これは彼の予想を越えていたのだ。
「あいつの小さな癖まで。ふんふん」
「これはすぐに気付いた」
カードが悪い時には二度瞬きをする。そんなところまで書かれていたのだ。
「あの女の癖はかなり多い」
「成程ねえ」
「イカサマをする時にはだ」
そこも突っ込まれていた。
「こうする」
「そうするのか」
「そうだ。その時は俺が動くからな」
「ああ、じゃあそっちは頼むぜ」
「御前の癖を合わせると」
同時にフックのことについても細かく書かれていた。それはさながら徹底解剖であった。こうしたところは流石にタムタムであった。
「御前はどんどん勝負に出ていい」
「いつも通りだな」
「そういうことだ。御前の普通の実力でいけばかなりいける」
「イカサマを封じたらか」
「わかったな」
「何かな。思ったより簡単だな」
次にこう述べた。
「俺はもっと言われると思ったんだけれどな」

「それは実力次第だ」
タムタムはこう返した。
「御前の実力が高かったからだ。あの女よりもな」
「ふうん」
「後はノートをコピーしておくからよく見ておいてくれ。いいな」
「じゃあそういうことで終わりだな」
「ただ。当分酒とナンパは慎んだ方がいい」
「なっ！？」
この言葉がフックにとって一番の恐怖だった。それをいきなり言いつけられて彼は顔だけでなく身体全体も凍りつかせたのであった。
「今何つったよ」
「だから酒とナンパは止めておけ」
彼はまた言った。
「いいな」
「よ、よかねえよそんなの」
彼はすぐに反論した。
「何で俺がそんなことを」
「全ては勝つ為だ」
やはり冷徹な言葉だった。
「あの女にな」
「それとこれとは関係ねえだろ！？」
狼狽しきった顔になって反論する。
「何で酒と女の子までよ」
「情報が漏れる」
タムタムはやはり冷徹に述べてきた、
「そうなれば終わりだ」
「それかよ」
「わかったな。せめて酒は家の中でやれ」
「ちぇっ」
それを言われて口を尖らせる。

「それはよく踏まえてくれ」
「じゃあ家でやるか？」
フックはそこまで聞いてこう提案してきた。タムタムは目の光を少し変えてそれに応える。

第五十六話　スペードの女王その三

「家だと！？」
「そうさ、俺の家でな」
ここで楽しげに笑ってみせる。
「どうだい？酒でも飲みながら」
「残念だがそれは却下だ」
すぐにそう言葉がタムタム自身から返ってきた。
「酒が入ると何にもならない」
「ちぇっ」
「判断力が鈍る」
それが彼の意見であった。
「だからだ。駄目だ」
「そうか。じゃあマンツーマンでストイックにやっていくってか？」
「そういうのもいいものだぞ」
顔をにこりともさせずに言ってもあまり説得力がなかった。
「真剣にやるのもな」
「面白くねえなあ」
フックは思いきり本音を出してきた。
「そういうのは」
「おいっ」
「冗談だよ」
一応はそう返す。
「気にすんなよ。だからよ」
「そうなのか？」
タムタムはそれが冗談に聞こえずすぐに問い返す。
「それならいいんだが」
「俺が何時嘘を言ったよ」
「いつもよね」

「なあ」
皆顔を見合わせて言い合う。何処までも信用のないフックであった。
「毎度のことだけれど」
「いい加減なんだから」
「ちぇっ、まあいいさ」
ふてくされたが自覚があるのでそんなに反論はしない。
「じゃあ場所はどうするんだよ」
「俺の部屋でどうだ？」
タムタムは今度はこう提案してきた。
「それで」
「そうだな。じゃあそれでいい」
フックもそれに頷くことにした。これ以上馬鹿を言っても何にもならないと判断したからだ。
「二人でな」
「ああ」
こうして彼等はタムタムの部屋で打ち合わせをすることになった。何しろタムタムがメインでやっているのでその打ち合わせはかなりのものになっていた。
「それでだ」
「今度は何だよ」
その細かさに流石にフックも困惑の顔を見せだしていた。
「まだあるのかよ」
「そうだ、まだある」
タムタムもそれに応えて述べる。
「あいつの癖はだ。もう一つは」
「もう一つは？」
「左手を上に動かすな」
「それで？」
うんざりしかけの顔で彼に応える。

「そうすると左からイカサマを出す」
「今度は左からかよ」
「そうだ、そう来る」
また述べる。
「だからだ。そこは俺が封じる」
「わかった。じゃあ頼むぜ」
フックは彼の言葉に頷く。イカサマ封じはタムタムの担当だ。フックにはフックの担当がありそちらにも意見交換が為されていた。
「それで最後だ」
「やっと最後か」
話は最後に移っていた。タムタムは言う。
「長かったな」
「そうか？」
タムタムは今のフックには怪訝な顔を見せる。
「早い位だが」
「そうなのかよ」
「フランツとはもっとやる」
真顔で述べてきた。
「細かいところまでな」
「あいつ。理解するのかよ」
当然ながらフランツの知力を認識しての言葉である。彼の図抜けた忘却力や物覚えの超絶的な悪さは有名過ぎる程であるのだ。
「マジで」
「フランツはいいピッチャーだ」
また言った。
「だからそんなことはな。すぐだ」
「本当かね」
完全に信じてはいなかった。それが顔にも出ていた。
「あいつがねえ」
「信じていないのか」

「どういうふうに見える？」
「あいつを誤解しているように見えるな」
やはりフックの予想を越えるコメントであった。
「あいつはいいピッチャーだ」
「けれど頭はあれだろ？」
皆が思っていることを実際に口に出した。だがそれでもタムタムは動じない。
「どう見てもよ」
「あいつは野球は別なんだ」
しかしタムタムはそう反論した。
「そこはな」
「本当かね」
かなり懐疑的な目を向けるのであった。それはタムタムにも伝わった。
「疑っているんだな」
「いや、信じていない」
ものは言いようと言うべきか。
「だってよ。普段のあいつ見ていたらな」
「サインとかも真面目にやる」
「真面目は真面目さ」
それは言うまでもない。フランツはあくまで大真面目な人間なのだ。そうだからこそ徹底的におかしいということもあるのだが。
「けれどよ。本当だよな」
「あいつ程のピッチャーはいない。それは俺が保障する」
「へえ」
「リードのしがいもあるしな」
「リードできるんだ。あいつを」
これもかなり驚きであった。制御不可能な人間にしか思えないからである。
「それって多分御前だけだぜ」

「そうか？」
「絶対そうだよ。御前だからできるんだ」
そう言うのだった。
「まあ頑張ればいいさ」
「わかった」
フックのその言葉に頷くのだった。

第五十六話　スペードの女王その四

「しかし。引っ掛かるな」
そのうえでまた言う。
「あいつがおかしいみたいだ」
「だってそうだろ？」
それにまた応えるフックだった。
「どう見てもよ。やっぱり」
「あいつはおかしいのか」
「サインとか覚えるんだよな、本当に」
そこがまず問題であった。フランツという男は。
「どうなんだ、そこは」
「コツがある」
タムタムの言葉が実に硬い響きを持っていた。
「簡単なコツがな」
「コツ、ねえ」
「これと同じだ」
さりげなくポーカーに話を戻してきた。
「あの女に勝つのもコツだ」
「そうそう、それだよ」
フックもそこに話を戻してきた。
「どうするんだ、それで」
「賭け方がある」
「賭け方かよ」
「そうだ。まずはだ」
タムタムは真面目な顔で言う。
「ストレートフラッシュを狙え」
「おいっ」
いきなりとんでもないことを言われて声をあげる。流石にこれは

大胆な勝負を好む傾向にあるフックでも声をあげずにはいられなかった。
「それはないだろ、幾ら何でも」
「だが勝てる」
今回ばかりは根拠のない言葉に聞こえた。
「だから賭け方があるんだ」
「どうするんだよ」
「俺があいつのイカサマは封じていくな」
「ああ」
「御前はカードを選ぶのに専念しろ。そして選ぶ順番は」
「順番は」
フックは何だかんだで話を真剣に聞く。タムタムもまた真剣に話しているからだ。
「まずは一だ」
「一か」
「そうだ。そして」
タムタムはさらに言う。
「もうあればいいがな。次は十一だ」
「十一か」
「これもあればいい。そして一番大事なのは最後だが」
「最後は」
「スペードの女王だ」
顔がさらに真面目なものになった。まるでフランツをリードしているときの様に。
「最後はそれを狙え。いいな」
「わかった」
フックの表情がフランツのそれと同じになっていた。まるで投げる時の彼のように。
「スペードの女王か」
「わかったな」

タムタムはまた念を押してきた。
「それを狙うんだ」
「何か意味があるのか？」
フックはそれについて問うてきた。
「そのスペードの女王に」
「カードも選ぶ順番がある」
彼はそうフックに答える。
「順番か」
「幾分呪術的だがな」
「しかしだからこそいい」
フックはあえてにやりと笑った。言葉の流れはもう決まっていた。
「そういうことだよな」
「わかるか。勝負はデータだけじゃない」
タムタムにしては意外な言葉だった。だがこれは素直に真実であった。勝負というものはデータだけでは勝てはしないのだ。そこにはあらゆるものが内外に存在している。その中にこうした呪術的なものもあるのである。
「だからこそだ」
「スペードの女王ねえ」
フックはその名を呟いた。
「不気味な名前だな、どうにも」
「それは感じるか」
「まあな。何せ女の子のことには何時でも興味があるからな」
複雑な笑みになっていた。彼のいつもの軽い笑みだけではなく何か不気味なものを見てそれに怖れを抱くものもそこには存在していた。そうした意味で実に複雑なものになっていた。
「怖い娘でもな」
「なら頼むぞ」
「ああ、わかった」
そんな話をしながら打ち合わせを続ける。話は確実に動いていた。

そうしてそれが表に出る時もまた迫っていたのであった。すぐに。

スペードの女王　　完

２００７・９・１２

第五十七話　戦いの時迫るその一

戦いの時迫る

「おい聞いたか」
「ああ、ラビニアとフックがポーカーでやり合うってな」
勝負のことはもう学校中に知れ渡っていた。皆そのことで話題が持ちきりだった。
「どうなるかな」
「正直あれだよな」
皆あちこちで御茶やジュースを手に話に興じている。実に楽しそうな顔で。
「ラビニアには負けて欲しいな」
「ああ」
このことについては皆が一致した考えであった。
「あいつだけはな」
「というか負けろ」
この言葉もまた一致していた。
「あんな奴、本当に痛い目に遭えばいいんだ」
「そうだよ。それも何度もな」
こうした言葉こそラビニアの人望を物語るものであった。彼女は何も二年Ｓ１組だけで嫌われているわけではないのである。学園全体でそうであったのだ。
「じゃあ俺フックにかけるな」
「俺も」
自然にフックに人気が集まる。だが。
「ラビニアが勝つよりずっといいからな」
「全くだぜ」
つまり彼に人気があるわけではなかったのである。むしろラビニアのあまりもの人気のなさがそうさせていたのである。このことは

フックの耳にも届いていた。
「何か複雑な気分だな」
教室でパックの豆乳を飲みながら苦笑いを浮かべる。
「俺が勝って欲しいんじゃなくてあいつが負けて欲しいのかよ」
「同じことだ」
向かいに座るタムタムが答える。
「どちらにしろ御前が勝つことが望まれている」
「そうなるのかね？」
言葉が懐疑的な響きを含ませていた。
「この場合は」
「あいつが負ける」
タムタムはその懐疑的な声に応えてきた。
「それはつまり御前が勝つ。同じじゃないか」
「そうなるか」
タムタムに言われて何となく納得した。納得すると豆乳がさっきより美味く感じられた。
「複雑に考えることあないか」
「全然ないな」
タムタムはいつものようにはっきりと述べてみせた。
「皆御前が勝つことを期待している。結局は同じだ」
「俺って人気者になったんだな」
「そうとも考えてもいい」
またしても言う。さりげなくだが彼を持ち上げていた。
「だから。わかるな」
「ああ、勝つぜ」
フックもそれに乗った。不敵な顔で応える。
「絶対にな」
「全部今まで言った通りだ」
タムタムの目がさらに鋭くなる。
「俺が絶対にイカサマを封じる」

「そっちは本当に頼むな」
「あいつは絶対にやる」
彼には確信があった。
「ならばそれを絶対に封じるまでだ」
「相手のランナーのスチールと同じか」
「スチールを封じるのに確かに肩の強さは必要だ」
これはこの時代の野球でも変わりはしない。だがその他にも必要なものがあるのもまたこの時代においても変わりはしないのである。
「しかし。癖もまた知る必要がある」
「流石だな」
「ずっと俺が言っているようにな。だからこそ」
目が光る。
「イカサマは絶対に封じ込める。任せろ」
「ああ、そっちは頼む」
「それで御前は」
「スペードの女王だったな」
フックの目も光った。タムタムのそれと同じように。
「最後にそれを選ぶ」
「絶対に間違えたら駄目だ」
念が押された。
「絶対にか」
「いいか？」
タムタムは真剣な顔をさらに真剣にさせてきた。そうしてまた言うのだった。
「若し間違えると」
「どうなるんだ？」
「御前は死ぬ」
一言だった。あまりにも怖ろしい一言だった。
「わかったな」
「わかったけれどよ」

かなり引きながらタムタムに問うた。
「何だ？」
「何で俺が死ぬんだ？」
素朴にそれを尋ねた。
「呪いか？ひょっとして」
「その通りだ」
タムタムは真顔のまま真剣に答える。

第五十七話　戦いの時迫るその二

「わかったな」
「いや、流石にわからねえんだが」
フックは引きながらまた述べる。
「呪いって。一体何が何なのか」
「つまりだ。スペードの女王の力を借りる」
「ああ」
またそのことに頷く。何気にそのスペードの女王という言葉がやけに不吉なものに感じられてきた。それもまた実に不思議なことであった。
「それで勝つのだからな」
「そうか。それで間違えたら女王が怒るのか？」
「その通りだ。わかったな」
「わかりたくはないけれどわかったぜ」
嫌な顔で頷く。これが彼の本音だった。
「呪いか。話が洒落にならないな」
「しかしこれなら絶対に勝てる」
タムタムは念を押してきた。
「だからだ。わかったな」
「それにしても。スペードの女王って何者なんだか」
次にはこうした疑問が沸いてきた。
「妖怪か？悪霊か？」
「怨霊だ」
悪霊と同じようだがさらに怖ろしいものだった。少なくとも今のフックにはそうした響きに聞こえる単語であった。
「わかったな」
「怨霊、ねえ」
「かつてはモスクワのビーナスと呼ばれていた」

「モスクワ？」
「地球にあった頃のロシアの首都だ」
そう言葉が付け加えられた。
「っていうとあれか。アンネットの」
「そうだな。そこで知られていた美人だったがるカード勝負でそれを知り」
「そのスペードの女王の賭け方をかい」
「ああ」
タムタムはフックの言葉にこくりと頷いた。
「一文無しになったところを救われた。だがその時予言されたらしい」
「おっと、話はわかったぜ」
勘のいいフックには話のあらすじがすぐに読めた。
「あれだろ？誰かに会うか何かしたら死ぬっていうんだな」
「そうだ。思い詰めた顔の若い将校にだ」
タムタムは語る。語るその顔がやけに不気味だ。暗い中ではない筈なのにその顔が異様に暗く見えることが実に不思議であった。
「会うと死ぬ。そう言われ」
「で、その将校に出会ったと」
「そうだ。その将校は金と恋人と同時に欲していた」
「欲張りだねえ」
フックはその話を笑った。だが心の中ではそれに同意もしていた。どちらも欲しいと願う気持ちは多くの者が持っているものであるからだ。
「その将校も」
「彼は思い詰めていた」
ここでも話の流れはフックの予想通りであった。
「愛しい人を手に入れたい。その為に金も欲しい」
「ふん」
その話を聞いて頷く。

「それであれか。金を手に入れる手段を求めてスペードの女王に会って」
「女王は死んだ。心臓が急に止まり」
「運命だな。で、あれだろ？」
後はフックが言う。
「カードを間違えて。その将校は死んだんだな」
「そういうことだ。恋人も彼が恋と金を完全に混同させて恋人自身すら見えなくなっているのを見て」
「自殺でもしたか」
「よくわかるな」
「わかるさ、それ位」
フックは軽い笑みをできるだけ作ってそう述べた。
「話の流れでな」
「そうか」
「しかし。かなりやばい賭け方だな」
フックはあらためて言う。
「だとすると。絶対に間違えられない」
「間違えたらスペードの女王の亡霊がその場に出て来る」
「っておい」
流石にこれは驚かざるを得なかった。洒落は済まない。
「出て来るのかよ、怨霊本人が」
「間違えた者を冥界に導きにな。だからこそだ」
「おいおい、洒落になってねえぞ」
さしものフックも女王自身が出て来るとなれば顔が一変した。真っ青になってしまっていた。
「本人が出たら俺確実に死ぬじゃねえかよ」
「そうだ」
タムタムは簡単に述べる。
「連れて行かれるのは何処なのかな」
「地獄だろ？」

フックにはそうとしか思えなかった。
「そんなおっかないのが連れて行く世界ってよ」
「まあ気にするな」
「気にする！」
激昂して思わず叫んだ。豆乳が飛ぶ。
「誰がそんなとこに行きたいんだよ！」
「物見遊山では済まないな」
「・・・・・マウリア人みたいなこと言ってるんじゃねえよ」
さしものフックもあからさまに嫌がっている。彼の祖国タイは仏教の国で生まれ変わりや死後の世界には抵抗はないのだが流石に相手や行く場所は選ぶのだ。

第五十七話　戦いの時迫るその三

「全く。とにかく間違えたら駄目だよな」
「そういうことだ」
「わかったぜ。じゃあ一、十一、スペードの女王で」
「わかったな」
「嫌でも覚えたぜ」
真っ青な顔で述べるのだった。
「そんなのに出て欲しくないからな」
「その意気だ。覚えてくれよ」
「しかし。何でもあるもんだな」
フックは豆乳を飲み終え腕を組んで言うのだった。
「そうしたことも」
「何も普通にやるだけじゃない」
タムタムは冷静に言葉を出す。
「呪術も大事だ」
「そういうものか。けれどあれだな」
「あれとは？」
「本当に諸刃の剣だな」
腕を組んで思慮する顔での言葉だがそれがどうにも似合っていた。
あまり考えるイメージのないフックからしてみれば実に意外なものであった。
「こうしたことってのは」
「少なくとも甘くは使えないな」
「毒蛇飼うようなもんだな」
今度はそう評してきた。
「結局は」
「そうかも知れない。だが確実に勝てる」
「勝ったら。楽しもうぜ」

フックはカードを出してきた。それをぱらぱらとして遊びながら言った。
「皆でな。盛大に」
「飲むんだな」
「勿論だぜ」
不敵な言葉になっていた。不敵だがそれと共に明るく軽い。それが如何にもフックらしくていい感じだった。かなりさまになっている。
「派手にな」
「じゃあそちらも手配しておくか」
タムタムはまた冷静に述べた。
「今のうちにな」
「おいおい、勝利は確実だってか」
「俺は確信している」
一言であった。
「勝つのをな」
「いつもそうやって乗せてるんだな」
フックはその独特の笑みをそのままにタムタムに言うのだった。
「あいつを」
「否定はしない」
自身でもそれを認める。
「あいつは乗せるに限る」
「わかるぜ。あいつに関してはな」
「乗せていい球を引き出させる」
リードとは単にデータだけではないのだ。そうした気配りもまた重要なのである。タムタムはそうしたことにも極めて細かいのである。
「それがあいつへのリードだ」
「まああれだろ？」
フックはまた言う。

「あいつは普段から異様にハイテンションだろ」
「その通りだ」
それもまた否定しない。そもそもフランツに関しては全く否定しないようだ。それだけ皆が彼のはっきりとした個性を知っているからである。
「そのままでいいんじゃねえのか？」
「だが意外に繊細だ」
「繊細ねえ」
これは少し違うのではとも思うのだった。
「というか勝手に変な妄想に入るだけだろ？」
「妄想か」
「あいつの視界って常に相手が巨人になったり虎になったり鯨になったりするんだろ？」
ある意味凄いことである。だがそれがフランツという男なのである。かなり破天荒で滅茶苦茶な人間性はそうしたところにも出ているのである。
「それで繊細って言われてもな」
「問題はそこなのだ」
タムタムはそこを指摘した。
「そうして勝手に相手を脅威に感じるからこそ」
「乗せる必要があるのか」
「具体的に言うと相手をちっぽけに思わせる」
所謂精神的誘導である。
「そうしていく。そうすれば」
「あいつはいい球を投げるってわけか」
「速球も変化球もいい」
具体的なデータにも話を行かせる。
「それなら後は精神だけだからな」
「精神か」
「あいつは精神も強い」

「少なくとも気は強いな」
ただしそこに何かがあるのが彼ですが。フックもそれについて言及する。

第五十七話　戦いの時迫るその四

「ただな」
「言いたいことはわかる」
タムタムもそれについて言う。
「妄想癖だな」
「どうにかならないのか、あれは」
「だからそれを抑える為にだ」
タムタムは語る。
「俺がいるわけだ」
「そういうことか。あいつも言ってるぜ」
「何とだ？」
「御前しかいないってな」
それまで強張ったままだったフックの顔が綻ぶ。
「自分のボールを受けられるのはな」
「キャッチャー冥利に尽きるな」
タムタムにとってこれ以上はない程有り難い言葉であった。それはキャッチャーとしてはこの上ない褒め言葉でもある。彼はそれがよくわかっていた。
「そんなことを言ってもらえるとはな」
「そんなに嬉しいのか」
「最高の気分だ」
笑ってまた言うのだった。
「どうやら俺は。最高のピッチャーとバッテリーを組んでいるな」
「そうかもな」
フックもその言葉に頷く。
「女房役だな」
「そうだな。キャッチャーは女房だ」
昔からよく言われていることである。そして女房がいいと全ては

上手くいくのである。強いチームには必ず名キャッチャーがいるものでもある。
「俺はいい女房になる」
「もうなってるんじゃないのか？」
「いや、まだまだだ」
顔を綻ばせての言葉だった。
「俺はあいつにまだ相応しくはないな」
「そんなものかね」
「だから努力したい」
そう誓うのだった。
「これまで以上にな」
「頑張れよ」
「ああ。まずは」
「わかってるさ。ポーカーだな」
「こっちでも女房をやらせてもらう」
タムタムは言う。
「頼むぞ」
「ああ、宜しくな」
二人は笑顔で言い合うのだった。そこには一つの絆がある。
「で、今日はまだあるか？」
「いや」
フックの言葉に首を横に振る。
「今日はここまでだ」
「そうか。じゃあ何か食べに行くか？」
「そうだな。この辺りだと」
頭の中にあるアパートの周りをチェックする。そうして出て来た答えは。
「ラーメン屋でいいのがある」
「ラーメンか」
「それでどうだ？」

フックに対して問う。
「御前も結構好きだったな」
「辛いのがいいな」
これはタイ生まれのフックらしい言葉であった。タイ料理といえば唐辛子を効果的に使っておりかなり辛い。彼はその辛さが好きなのだ。
「それはあるか？」
「ああ、種類は多い」
またフックに述べる。
「タイラーメンもあったな」
「よし、じゃあ乗った」
これで拒む理由はもうなかった。満面に笑みを浮かべて答える。
「ラーメン、食いに行こうぜ」
「その店の売りはスープだ」
「そうだな、まずはそれだ」
そして次は。ラーメンはそれだけではない。
「麺のコシも味もいい」
「よしっ」
スープと麺。その二つが見事なハーモニーを作り上げてこそのラーメンなのである。ありふれた食べ物であるがそうだからこそ難しいのである。
「さらにいいな。楽しみになってきたぜ」
「看板料理は和風ラーメンだ。これがいける」
「和風ラーメンねえ」
フックはこの言葉には目を少ししばたかせた。あまり好みではないようである。
「それはな。ちょっと」
「嫌か」
「そういうわけじゃねえけれどよ」
それでも興味はないといった感じであった。これは嗜好によるも

のであるのがわかる。
「ちょっとな。今は」
「わかった。じゃあ御前はタイラーメンか」
「ああ、それでいい」
きっぱりと答える。
「それで御前はそれか？」
「和風ラーメンにする。さっぱりしていていい」
「そっちか」
「あっさりとした味もいいものだぞ」
「いや、俺もな」
フックもそれに応える形で述べる。
「あっさりしたのは嫌いじゃないけれどな。ただな」
「今はタイか」
「ああ。辛いのがいい」
にやりと笑っての言葉だった。その時の好みだけはどうしようもないものだ。特にこうした麺類においてはである。麺には魔力があるからだ。

第五十七話　戦いの時迫るその五

「ピリリとしたのがな」
「わかった。では本当に行くぞ」
「よしっ」
二人はそのままアパートを出てラーメン屋に向かう。暫くタムタムが先導して歩くと商店街の中に少し古い造りのラーメン屋が姿を現わした。
「ここか」
「ああ」
タムタムは店の前でフックに答える。
「ここでいいよな」
「店は入らないとわからないってな」
フックは楽しそうに笑って言う。
「特にこうしたラーメン屋ってのはな」
「ラーメンにかなり詳しいな」
「否定はしないぜ」
その不敵な笑みをまた見せてきた。どうも彼は女の子だけでなく女性に対しても一家言あるようである。中々面白い性格の持ち主だ。
「ラーメン好きだからな」
「それは少し意外だったな」
「そうか？」
そう言われる方がフックにとって意外だった。
「俺結構ラーメン食べてるけれどな」
「いや、こうした店のラーメンも好きだってことがな」
店ののれんをくぐりながら言う。店の中からあの豚骨やトリガラの暴力的なまでに食欲をそそる匂いがしてきた。これにあがらうことはまず不可能である。
「御前は屋台派だと思っていた」

「確かに屋台も好きだぜ」
フックもまたのれんをくぐりながら答える。
「何せ俺はタイ人だからな」
「そうだな」
東南アジアの諸国家は屋台が多いことで有名である。特にタイではそうでフックもまた幼い頃から屋台の料理を食べてきているのである。
「屋台のラーメンってのも最高だぜ」
「その通りだ」
タムタムもその言葉に乗る。彼もまんざらではないようだ。
「あの雰囲気がいい。外で食べるのがな」
「特に寒い時にな。まあタイは暑い星が多いけれどな」
そんな話をしながら店に入った。するとそこに。
「おう」
「ああ」
何ともうフランツがいた。カウンターに一人座って漫画雑誌を読んでいた。
「何だ、今日はフックと一緒なのかよ」
「ポーカーの打ち合わせでな」
タムタムはそうフックに告げた。
「それでだ」
「ああ、あれか」
フランツもその言葉を聞いて頷く。
「そういえば御前等がラビニアとやるんだったな」
「ああ、そうさ」
フックが彼に答える。
「見ときなよ、ギッタンギッタンにするからな」
「それはいい。それでだ」
「ああ。何だ？」
「御前等は何食べるんだ？」

話題はそこに行っていた。やはりラーメン屋での話題と言えばまずはこれだった。
「ラーメンか？」
「ああ。何注文するんだ？」
「俺はタイラーメンだ」
フックはニヤリと笑って答えた。
「故郷の味を楽しむぜ」
「そうか。それでタムタムは何だ？」
「和風ラーメンだが」
「おおっ！」
フランツはパートナーが和風ラーメンと聞いていきなり叫びだした。
「それか！それなのか！」
「そうだが」
「っておい」
その横でフックが突っ込みを入れる。
「こんなところでいきなり熱血モードかよ」
「気にするな」
しかしタムタムは動じない。こうしたところは流石だった。
「それでだ」
「ああ！」
フランツは熱血のまま彼に応える。
「御前は何なんだ？」
「御前と同じだ！」
そうタムタムに対して絶叫する。
「和風ラーメンだ！どうだ！」
「どうだっておい」
また横からフックが突っ込みを入れる。
「そういう問題でもないだろうに」
「俺達の心は今一つになった！」

フランツはさらに叫ぶ。

第五十七話　戦いの時迫るその六

「まさにだ！」
「また無駄に暑いな」
フックはその暑さに辟易する。しかしタムタムはそうでもないようであった。かなり穏やかな顔でフランツを見ていてそのうえで言うのだった。
「そうだな」
「そうなのかよ」
フックもこれは予想外だった。
「一つになっていいのか？」
「別に同性愛じゃなければな」
それがタムタムの返事だった。
「俺はそれでいいさ」
「心が一つにか」
「バッテリーにはそれこそが肝心なんだ」
タムタムの言葉は真剣だった。その真剣な言葉のままフランツの横に座った。
「横、いいな」
「ああ、勿論だ」
断る筈もなかった。フランツはその熱さのまま応える。
「黄金バッテリーとしてな」
「黄金か」
フックもこの言葉にはいい印象を受けた。少なくとも悪い響きは感じなかった。
「そうなるには色々とあるんだな」
「まあな」
タムタムが言う。フックはその彼の横に座った。
「最初はどんな奴かわからなかったさ」

「まあそうだろうな」
その言葉に頷く。
「やっぱりな。最初からわかったら凄いこった」
「俺はわかった」
フランツは特別であった。
「こいつならってな」
「御前そりゃ妄想じゃねえのか？」
フックは彼にそう突っ込みを入れた。
「勝手に思い込んでな。それで」
「そうか？俺はそうじゃないと思うがな」
「いや、絶対そうだって」
おしぼりで手を拭きながら言う。これは日本からはじまった習慣で連合ではよく見られる。ナプキンで拭く場合もある。それはその店や国それぞれでフィンガーボールの場合もある。
「いつものよ」
「俺は妄想癖があるのか」
「自覚ねえのかよ」
「自覚！？何がだ？」
やはりわかっていなかった。的外れな答えがそれをよく表わしていた。
「何で俺が妄想なんかするんだ」
「やれやれ」
話が全然わかっていないのがわかって溜息をつく。
「こりゃまた大変だ」
「それでタムタム」
フランツは今度はタムタムに声をかけてきた。妄想のことはもう忘れている。
「御前がいるなら大丈夫だな」
「いや、やるのはフックだ」
タムタムはさりげなくフックを立てた。

「俺はあくまでサポートだ」
「それだよ」
だがフランツはそれでもそこを指摘するのだった。
「誰かがサポートにいないとな。やっぱり」
「何だ、わかってるんだな」
フックはそれを聞いて言う。
「一人じゃないって」
「野球は何人でやるんだよ」
そんなフックに対してフランツは述べてきた。
「九人だろ？」
「ああ」
「だったら一人でできるものじゃない」
それを今かれも言う。
「そういうことさ。おっ」
ここで遂にラーメンが来た。フランツが頼んでいた和風ラーメンだ。直径五〇センチはありそうな巨大な丼の中に多量の麺がある。
「来たな」
「凄い量だな。大盛りか？」
「いや、この店ではこれが普通だ」
タムタムが説明する。
「大盛りはこれの倍だ」
「これのねえ」
流石にこれにはフックも言葉がなかった。しかし興味は沸いた。
「俺それできっかな」
「あいよ」
カウンターから店のおじさんが応えてきた。
「今なら間に合うよ」
「んじゃあそれで」
フックはすかさずそれに応えた。
「御願いするな」

「うちのは凄いよ」
おじさんはまた言う。
「一杯で満腹だから」
「いいねえ」
願ってもない言葉だった。まさにラーメン屋に来たかいのある言葉だ。
「そうこなくっしゃ」
「ではこれで栄養はいいな」
タムタムのところにもラーメンが来た。やはり和風ラーメンである。
「戦いに向けては」
「ああ」
二人とフランツは強く頷き合う。彼等は戦いを見据えていた。そしてその先にある勝利をも見据えていたのである。絶対的な自信と共に。

戦いの時迫る　　完

２００７・９・１８

第五十八話　切り札は女王その一

切り札は女王

遂にラビニアと勝負の時になった。フックとタムタムは自分達の教室で最後の打ち合わせを行っていた。共に張り詰めた顔を見せている。

「いよいよだな」

「ああ」

タムタムがフックの言葉に頷く。

「わかっているな」

「勿論だ」

フックは真剣な顔で応える。

「ちゃんと覚えてるぜ。そっちはどうだ？」

「こっちもだ」

既に教室の中には張り詰めた空気が漂っている。盗聴等はクラスメイト全員でチェックしたうえで皆で厳重にガードしていた。何しろラビニアといえばミンチン先生と並ぶ二年Ｓ１組の宿敵だからだ。それも当然であった。

「完全に癖は頭に入れた」

「準備万端ってわけか」

「お互いにな」

「じゃあいいな」

フックが言った。

「行くぜ」

「よし」

「いいのね、もう」

皆を代表してビアンカが二人に声をかけてきた。

「戦場に行く準備は」

「ないのは盃だけだな」

フックは不敵に笑って余裕を見せてきた。
「出撃前の一杯が欲しいんだがな」
「それは後だ」
タムタムがフックに告げる。
「勝った後だ。それでいいな」
「勝った後か」
それを言われてフックの顔が引き締まる。
「絶対に勝つってことか」
「そういうことだ。わかるな」
「俺は負けないぜ」
自信ではなかった。そこにあるのは己への暗示であった。絶対的な暗示、それを今自分自身に対してかけていたのである。フック自身が。
「何があってもな」
「その意気だ。では」
「おう」
遂に立ち上がった。二人同時に。
「出陣だな」
「後には退けない」
まるで睨み合うように見合う。それは気合故であった。
「勝つまでは」
「よしっ」
頷き合う。そうして教室の扉を開けラビニアのクラスに乗り込む。後にはクラスメイト達が続く。
ラビニアのクラスではもう彼女のクラスメイト達が待っていた。フックとタムタム、そして二年Ｓ１組の面々の姿が見えるとその顔を一変させたのであった。
「時間丁度か」
「来たな」
「時間は守る主義だ」

タムタムが彼等に対して言う。既に睨み合っている。廊下で既に一触即発の状況だった。
「俺はな」
「俺は違うがな」
フックは大胆不敵といった有様をその顔にも見せていた。
「けれど今回は特別さ」
「負けに来たってわけじゃないな」
「俺は勝つ勝負しかしないさ」
フックはまたしても不敵に笑って述べた。
「女の子に対してはな」
「よし、じゃあやってみせろ」
「その勝つ勝負ってやつをな」
彼等はあえてフックをけなさなかった。そうして無闇に刺激することを避けたのだ。彼とフックの後ろには二年S1組の面々が揃っている。彼等も強張った顔でそこにいたからだ。
タムタムとフックを先頭に教室に入る。そこにはもうラビニアが机を用意して待っていた。もうカードも置かれ彼女自身も不貞な笑みを浮かべてそこにいた。波打つ金髪に好戦的な黒い目をしている。生まれは南アフリカだ。何でも祖先はアパルトヘイトを施行して暴利を貪っていたという。今でもとかく噂の絶えない悪徳企業の娘である。彼女自身最悪の性格として知られ学園一の嫌われ者である。その彼女が膝までの青地のチェックのブリーツスカートと赤いネクタイ、白いカッターと紺のベストに身を包んで立っていた。その姿でフックを見据えている。
フックも彼女を見た。まずは不敵な笑みを彼女にも向けた。
「キザな格好してるな、相変わらず」
最初に口を開いたのはフックであった。
「イギリス人か？それとも立派なご先祖様の格好かい？それは」
「どちらでもないわ」
ラビニアもまた不敵な笑みをそのままにフックに言葉を返した。

「私自身のセンスよ」
「そりゃ立派なセンスだ」
フックは心にもないことを出した。
「おかげで何処の美女かと思ったぜ」
「有り難うと言うべきかしら」
「そうだな」
社交辞令だが既にそれは開戦の言葉になっていた。
「中身まではわからないがな」
「あら、言うわね」
二人は殺気さえ漂わせ合いながら言葉を続ける。
「私も今目の前にいる人が気になって」
「あんたに気になってもらえるってことはそいつは相当な美男子なんだな」
「顔はいいかもね」
それは認めた。
「中身はどうしようもない屑だけれど」
「どんな屑だか」
フックは冷笑を以って今のラビニアに応える。
「俺にはわからないがね」
「軽薄でね」
ラビニアはそれを受けてフックに言う。その不敵な笑みのままで。
「女好きで単純な男よ」
「それはまた最悪だな」
またしてもあえて笑ってみせる。挑発とわかっていて。
「とんでもないロクデナシだ」
「そのロクデナシが今から血反吐を吐くのよ」
ラビニアはまたしても言葉を出す。今度はその笑みを余裕を感じさせるものにして。この笑みもまたあえて作っているのだ。駆け引きによるもので。
「ここでね」

「同じ話なら俺も知ってるぜ」
売り言葉に買い言葉とはまさにこのことだった。フックはまたしても言葉を出す。
「今からここでな。一人の高慢な女が地獄を見る」
「地獄を？」
「そいつに一言言っておくさ」
ラビニアを見据えていた。好戦的な目で。

第五十八話　切り札は女王その二

「確かこれはダンテだったかな」
「ひょっとして神曲かしら」
言わずと知れたルネサンス期の名作である。トスカナ方言で書かれており地獄、煉獄、天界の三部からなる。中でも地獄篇は当時の人々の地獄観や宗教観が非常にわかり易くそうした意味でも傑作と言える作品である。
「そうだったかな。そこにある言葉だけれどよ」
「予想がつくわね」
ラビニアは言葉を返した。
「どうせその言葉は」
「まあ聞けって」
フックはラビニアの言葉を遮ってみせた。
「それも礼儀だろ？人の話を聞くのもな」
「まあそうね」
その言葉はあえて受けた。駆け引きの中で。
「一応は聞いてあげるわ。さあ」
「この門をくぐる者一切の希望を捨てよ、か」
あまりにも有名な一文である。地獄門にある言葉だ。ここから八つの地獄がはじまるのである。その中に巣食う無数の異形の怪物達の咆哮と共に。
「これを変えてな。この戦いに挑む女は一切の希望を捨てよってな」
「全然違うわね」
ラビニアはそこまで聞いたうえで一笑に伏してみせた。
「随分強引な変更だこと」
「それはいいさ。意味は伝わったからな」
フックもそれはどうでもよかった。何故ならこれは単なる挑発だからだ。

「相手にな」
「じゃあその相手が勝つつもりならその言葉は意味がなくなるわね」
「いや、あるな」
またしても丁々発止のやり取りが行われる。既に緊張は頂点に達している。
「勝つのは俺しかいないからな」
「御言葉ね。じゃあどちらが勝つか」
「勝負だな」
二人は同時に机に座った。フックの後ろにはタムタムと二人のクラスメイト達が、ラビニアの後ろには彼女のクラスメイト達がそれぞれ立っている。彼等もまた互いに睨み合い教室は完全に戦場になっていたのであった。
カードが切られる。その時だった。
ラビニアの目が光った。タムタムはそれを見逃さなかった。
（いきなり来たか）
今切られているカードに自分の持っているカードを入れようとする。それを見てタムタムは防ぎにかかる。それには何をするのか。
さりげなく、誰にも気付かれないモーションで小石を投げた。それも指だけでだ。それは恐るべきコントロールでラビニアのカードを弾いたのであった。
「!?」
「何かあったか!?」
ラビニアのクラスメイト達は誰も気付かない。ラビニアだけが落ちたカードを誰にも気付かれないうちに拾うだけだった。彼女も何処から何が飛んできたのか把握できてはいなかった。
だが二年S1組の面々は違っていた。何が起こったのかわかっていたのだ。
「やっぱりな」
「そう来たわね」
小声でそっと言い合う。

「いきなり仕掛けるなんて」
「何処までも卑怯な奴だ」
「まず最初は封じた」
タムタムは密かに呟く。
「だが。まだあるな」
「さて、と」
カードが前に配られる。フックはそのカードを見る。
いい感じだった。既に一と十、十三はある。残りは二枚だけだった。
（ここはあれだな）
自分のカードを見て心の中で言う。
（十一と。これは予定通りで）
そして。
（切り札だ。女王様は最後だ）
「いいかしら」
向かいの席に座るラビニアが問うてきた。顔からは何も読み取れない。彼女とてポーカーの経験は深い。表情なぞ見せないことは常識であった。
「こちらから引いて」
「ああ、いいぜ」
（また来るか）
フックは応えながら彼女がまた仕掛けてくると見ていた。そしてその予想は見事に当たったのだった。
今度は服の裾からそっとカードを出す。カードを引くふりをしてそのカードを自分の五枚の中に入れるつもりなのだ。だがそれもまたタムタムに見られていた。
（またか）
タムタムはそれを見てまた小石を指で投げた。そうしてまたしても彼女が出そうとしたカードを弾いたのだった。ラビニアの目論みはまたしても失敗した。

（誰が！？）
やはりラビニアは気付かない。だが邪魔されているのはわかる。
（私を邪魔しているのかしら。まさか）
ここでふとタムタムを見た。それでふと思った。
（まさか）
だがタムタムは目に表情すら見せない。そこが巧妙だった。
ラビニアもまたそれ以上は見なかった。それならばそれはそれでやり方があるからだ。何もイカサマばかりで勝てるわけではないのだ。実力も必要なのだ。
「よしっ」
フックはふと呟いた。

第五十八話　切り札は女王その三

「ラビニアさんよ」
「何かしら」
「あんたの番だぜ」
不敵な笑みをまた浮かべて彼女に告げる。既に彼はカードを引いていた。上手く十一を引いてまずは満足していた。残るはあと一枚というわけである。
「早く引けよ」
「あら、急かすの」
そのフックに対して余裕の笑みで笑って返す。
「この私を」
「焦ってるように見えたからな」
フックはあえてラビニアを挑発する。彼女を怒らせて冷静さを失わせるつもりであったがそれが殆ど無理なのも実はわかっていた。それでもだ。
「違うのか」
「甘いわね」
予想通りだった。ラビニアはその言葉を笑って否定してきた。
「そんな筈はないわ」
「どうだか」
タムタムにいかさまを封じられて少し気分を悪くしているのを見越しての言葉であった。
「実際は違うんじゃないのか？」
「いえ、全然よ」
確かに気分を害してはいたがそれはあえて隠した。ポーカーをしているのだ。だからポーカーフェイスは守り続けているというわけである。
「安心していいわ。お気遣いは無用よ」

「お気遣いじゃねえけれどな」
それでもラビニアを挑発する。
「喧嘩売ってるんだよ」
「高く買いたいわね、それは」
その挑発をあえて受けて軽く返してきた。
「若しそうなら。幾らかしら」
「デートじゃねえから安心しな」
フックがデートに誘わないのはラビニア位である。それだけ彼女を嫌い抜いているということである。それもまたはっきりと態度に出ていた。
「御前だけにはそれはねえから」
「私に近寄れないのかしら」
「その通りさ」
カードを引くラビニアに対して告げる。
「とてもな」
「嬉しいわ。私があまりにも美しくて気高いから」
「さてな」
その言葉にはあえて答えない。含み笑いを浮かべるだけだ。
「それはどうだか」
「まあここはいいふうにとってあげるわ」
ラビニアもあえてこう言うのだ。言葉に棘を含んで。
「感謝しなさい」
「じゃあ感謝されておくか」
フックもそれをあえて受ける。受けてはいるがそれを認めるというわけではない。ここが重要であった。彼等は相変わらず火花を散らし合っていたからだ。
「ここはな」
「レディーの言葉には何でも感謝するものよ」
これは昔から言われる言葉だ。この世で最も貴いものはレディーであるからだ。

「いいわね」
「俺は少し違う言葉を聞いたぜ」
「何かしらそれは」
また丁々発止のやり取りになる。ポーカーと共に言葉での衝突が激しくなっていた。
「確かにレディーの言葉には何でも感謝する」
「同じじゃない」
「だが問題はそのレディーだってな」
シニカルな笑いをラビニアに対して向けてきた。
「聞いたんだがよ」
「どんなレディーなのかしら」
ラビニアはフックが次に何を言うのかをある程度予想しながらも問うた。やはり言葉には殺気がこもっている。これは双方同じであるが。
「心清らかなレディーさ」
ラビニアの評判を知っての言葉である。その証拠に言葉に含まれているフックの毒気が増していた。その毒気こそが彼の本音である。
「心が奇麗なな」
「そんな言葉は聞いたことがないわね」
ラビニアも自分のことがわかったうえで答える。

第五十八話　切り札は女王その四

「生憎だけれど」
「じゃあ覚えておくんだな」
フックは自分のカードを一枚置きながら言った。
「今から」
「できればね」
ラビニアはその言葉を受け流す。
「そうしておくわ」
「そうかい。じゃあよ」
フックはポーカーに勝負を戻してきた。
「今度は俺が引く番だ。いいよな」
「ええ、どうぞ」
毒のある笑みでそれに応える。
「御自由に」
「わかったぜ。じゃあ引かせてもらうぜ」
（いよいよだな）
フックは表では余裕の笑みだったが心の中では違っていた。極限まで緊張してカードに手を向けたのだった。一瞬の筈の動きが永遠に感じる。
（このカードで全てが決まる）
目の奥に鋭いものを隠して心の中で呟く。
（女王だ）
今それを願った。
（スペードの女王。俺のところに来てくれ）
恐ろしい女王の名を心の中で呼ぶ。恐怖と戦いながら。そうして今カードを一枚引いた。
そのカードを手元に寄せる。見るのが恐ろしい。何があるのか見るのが恐ろしいのだ。女王であってもそうでなくても。だが水には

いられない。それは心がそう彼に告げていたのだ。他ならぬ彼自身の心が。

カードを見た。それは。

女王だった。スペードの女王。カードにある女王の顔は彼に対して微笑んでいるように見えた。

（よしっ）

その女王の顔を見て心の中で会心の笑みを浮かべた。

（どうやら勝ったな）

「こっちは引いたわ」

ここでラビニアの声がした。彼女はもう引いたようであった。

「もうか」

「ええ。手は早いから」

それで手段を選ばないのよ、という意味もそこには含んでいるのがわかる。やはり陰険な女であった。

「それでね」

「終わりか？」

「こっちはね」

余裕に満ちた笑みで述べてきた。

「貴方はどうかしら。といってももうストップはかけたけれど」

「俺もいいぜ」

フックは女王をちらりと見た後で余裕の笑みをラビニアに見せた。

「満足だ」

「そう。悔いはないのね」

「ああ、全くな」

そう言葉を返す。やはり余裕を含んでいた。

「そっちもそうみたいだがな」

「否定はしないわ。それじゃあそういうことで」

「ああ」

二人はお互いにカードを見せることになった。まずはラビニアが勝ち誇った顔で己のカードを見せてきた。

「ストレートフラッシュよ」
ハートが五枚あった。二から六までである。彼女は己のそのカードを見て勝利を確信していた。
「これで決まりね」
「そうだよな」
「これは」
二年S1組の面々もストレートフラッシュを見れば覚悟を決めるしかなかった。これに勝つのは困難であるのは言うまでもないことだったからだ。
「フック、これは」
「残念だったな」
「おいおい、御前等までそう言うのかよ」
クラスメイト達のつれない言葉に思わず苦笑いを浮かべるフックであった。
「御前等だけはそう言わないでくれよ」
「ってことはよ」
「あんたまさか」
「見なって」
楽しそうに笑ってそう告げた。
「俺のカードをな。見てから言ってくれよ」
「自信があるのね」
ラビニアはそんなフックを見てはじめて感情を露わにしてきた。きっと彼を睨んで不機嫌な顔をしていた。

第五十八話　切り札は女王その五

「どうやら」
「その通り」
フックは楽しげな笑みで彼女に言うのだった。
「充分過ぎる程な。じゃあ見せようか？」
「見たくないと言っても見せるつもりね」
「それがルールだしな」
あえてルールを出してラビニアを刺激する。
「出させてもらうぜ、それでもいいな」
「悔しいけれどいいわ」
これが彼女の偽らざる本音であった。
「どうぞ」
「では御言葉に甘えて」
鼻歌さえ出しながらカードを出す。出してきたのは。
「これは・・・・・・・」
「まさか・・・・・・・」
皆そのカードを見て唸った。タムタム以外は。そこにあったのは。
スペードのロイヤルストレートフラッシュであった。これに勝てる筈がなかった。ラビニアはそのカードを見て歯噛みする。その時不意に一枚のカードが目に入った。
「これは」
女王だった。女王は彼女を見て恐ろしい笑みを浮かべていた。というふうに彼女には見えた。あくまで彼女だけにではあるが。
「女王ね」
「ああ、女王さ」
フックはまた不敵な笑みでラビニアに言った。
「俺は女王様にも好かれるんでね」
「ちょっとそれは違うわよ」

後ろからルビーが苦笑いを浮かべて話に突っ込みを入れてきた。
「それじゃああれじゃない。ＳＭ」
「おっとそうか」
「そうよ。誤解招く言葉は止めなさい」
「あいよ」
ルビーの言葉に応える。それからまたラビニアに顔を戻して言うのだった。
「わかってると思うけれどよ」
「ええ」
ラビニアは顔を強張らせていたが毅然として応えてきた。
「わかってるわ。お金ね」
「そうさ。言いにくいけれどな」
「何処がかしら」
フックに対して冷笑を浴びせる。まだそんな余裕はあるようだった。
「その割にはすぐに言葉に出してきたじゃない」
「義務ってやつさ」
あえて笑って嘯いてみせた。
「勝った人間のな」
「じゃあ私は負けた人間の義務を遂行するのね」
「そういうことさ」
今度はフックがラビニアに冷笑を向けた。
「賭け事だしな。それがルールだろ」
「勿論わかってるわ」
まだ態度は毅然としていた。少なくともその表情は。
「じゃあ。これね」
「ああ」
何と財布を丸ごと出してきた。フックはまずはそれを受け取った。
受け取ってから言うのであった。
「財布丸ごとかよ」

「そこにお札が山みたいに入っているから」
ラビニアはそう告げる。
「好きなだけ使いなさい。私が許すわ」
「じゃあ有り難く受け取っておくぜ」
フックも悪びれずそれを受け取る。彼も度胸が座っていた。
「これで今日はパーティーだ」
「好きにしたら？ただ」
ラビニアのその目が座ってきた。悪女ながらその肝は見事なまでに座っていると言えた。
「今度はこうはいかないわよ」
「どうだか」
フックは口の左端を歪めて笑ってそれに応える。
「また負けると思うがね、俺は」
「私が予想するのはその逆よ」
だがラビニアもこう返す。負けじと。
「あまり甘く見ないことね、相手を」
「そうかい。じゃあ次の勝負を楽しみにしてるぜ」
「こちらもね」
しれっとして言葉を返す。

第五十八話　切り札は女王その六

「精々首を洗って待っていることね」
「首、ねえ」
その言葉がまたフックのシニカルな部分を刺激するのだった。彼もそれを受ける。
「首は差し出してもいいが血は出させるなよ」
ベニスの商人か北欧神話のロキになっていた。
「それだけは守って欲しいな。俺の血は献血用にしかないからさ」
「じゃあ凍らせてからにするわ」
ラビニアも冷たい笑みでそう返す。
「そうしたら血は出ないわね」
「凍らすって何でだよ」
またフックは言葉を返す。
「興味があるな、そこんとこも」
「私の視線よ」
目を笑わせることなく出した言葉でもう普通の人間なら凍りつくものであった。
「それで凍らせてあげるから」
「ぞっとしねえな。まあそれはこの次だな」
「楽しみにしてなさい」
敗者とは思えない傲然とした態度をまた見せた。
「その時をね」
「まあその時になってから見せてもらうぜ」
フックは陽気でいい加減なフックに戻ってみせて言葉を出した。
「その時にな。まあ今は」
「何をするのかしら」
「楽しく遊ばせてもらうからな、これで」
ラビニア自身の財布を見せる。

「じゃあな。あとだ」
「何？」
「中身はもらうとしてだ」
財布のことに関する話であった。
「外はどうするんだ？俺は別に」
「あげるわ」
ラビニアは一言で返してきた。
「財布丸ごとね。だから出したのよ」
「おいおい、財布自身もかよ」
この言葉にはまたついつい笑ってしまった。今度は意識せずにだ。
「またそりゃ気前がいいな」
「女に出させるの程高いものはないわよ」
左手で髪を掻き分けての言葉であった。
「後が怖いから」
「いや、そりゃ俺の幸せだな」
「幸せ？」
ラビニアにしては意外な顔になった。フックの言葉に目を少し丸くさせたのだ。
「それはどういうこと？」
「俺にとっては女の子に何かを貰うこと」
屈託のない自然な笑みになっていた。
「それがそうさ。今みたいにな」
「そういうことなのね」
「ああ。だから今は有り難く貰っておくぜ」
「有り難くあげるわ」
笑って言うラビニアだった。
「けれど。高くつくからね」
「そこは踏み倒すから安心しな」
こういうところは流石にフックであった。しかしラビニアも負けてはいない。これもまたラビニアであった。

「じゃあ一生追い掛けて払わせてやるから」
「それなら俺は」
そしてフックもまたフックであった。
「一生振ってやるさ」
これが最後の言葉であった。ラビニアもフックもお互いから別れてそれぞれのクラスに帰る。そうしてフックはクラスでまず言うのであった。
「緊張したぜ」
「お疲れさんだったな」
その彼にタムタムが声をかける。
「白熱した勝負だったな」
「ああ」
フックは真剣な顔で笑って彼に答えた。
「本当にな。御前のイカサマ封じも効いたぜ」
「そうか。しかしだ」
ここで彼は言う。
「ラビニアも。思ったより潔かったな」
「そうだな」
それにはフックも同意であった。こくりと頷く。
「思ったよりずっとな」
「もっと陰険で執念深いと思っていた」
タムタムは彼女をそう思っていた。だがそれはフックもそうだったし他のクラスメイト達も同じであった。だから意外といった顔になっているのだ。
「それがな。どうして」
「気紛れかもな」
フックはあえてこう仮定してきた。
「気紛れ、かな」
「少なくともそう思っておこうぜ」
フックはまた言った。

「そっちの方が敵として見れるだろうしな」
「つまりあれね」
ロザリーがここで彼に対して言う。
「ライバルとしてでなく敵として見ろってことね」
「俺にはライバルなんていらないしな」
またしても不敵な笑みになっていた。案外こうした笑みが似合う男であった。

第五十八話　切り札は女王その七

「いるのは」
「いるのは？」
「彼女かダチか敵だけさ」
「またまた」
この言葉には皆、特にパレアナが苦笑いを浮かべた。
「気障はあんたには似合わないわよ」
「全くだ」
ロザリーも皆と同じ顔でフックに告げる。
「あんたはいつも軽くだろ」
「そうそう。風の中の羽根の様に」
古いオペラのアリアの一節だった。リゴレットである。
「それでどうしてそんなダークヒーローな」
「軟派男らしくしなさいって」
「そうか。じゃあ言い直すか」
フックも普段の顔に戻っていた。それでその普段の調子で言うのだった。
「俺に必要なのは」
「必要なのは！？」
「美人の彼女と困った時に金を貸してくれる友達だけさ」
「そうそう」
「ただな」
タムタムがここで突っ込みを入れる。
「美人はわかるが」
「ああ」
「何だ、最後のは」
「おかしいか？」
フックは平気な顔でタムタムに問う。

「今ので」
「困った時に金を貸してくれる、だ」
やはり指摘するのはそこであった。そこ以外にはなかった。
「これは一体どういうことだ？」
「だからそのままだよ」
平気な顔のまま言葉を返す。
「女の子と遊ぶのは金がかかるからな、やっぱり」
「ううむ」
これに関しては何時の時代のどの場所でも同じであった。女の子と遊ぶにはやはり金が必要なのだ。これは言うまでもないことであるが。
「それでだよ」
「わかった。それでだ」
「で。今度は何だ？」
タムタムの問いは続く。
「その友達というのは誰だ？」
「俺の目の前にいる奴」
しれっとして答える。
「そいつだよ」
「！？誰だそいつは」
タムタムは真顔でこう返した。
「俺にはわからないな」
「ってこい」
今度はフックが突っ込む番であった。
「自分でわからねえのかよ、おい」
「俺は誰にも金は貸さない」
意外とそういうところにはシビアなフックであった。
「後でトラブルの元だからな」
「何だよ、それ」
いい加減なフックには効かない言葉であった。

「水臭いだろ。やっぱりこういうこともだな」
「金は別だ」
だがタムタムも譲らない。
「それに関してはな」
「ちっ、じゃあいいさ」
あくまで固執するフックでもなかった。話を打ち切ってしまった。
「それでな。とにかくだ」
「ええ」
「わかってるわよ」
皆フックの今の言葉にニヤリと笑った。何故なら。
「パーティーだな」
「さあ、何処に行く？」
「いい店知ってるぜ」
フックはウィンクして笑ってみせて皆に言う。
「俺についてきてくれよ」
「よしっ」
「じゃあ行きますか」
こうして皆でフックの勧める店に行くのだった。ところがここでまた騒動が起こる。世の中は実に奇妙なまでに騒動に満ちているのであった。

切り札は女王　　完

２００７・９・２４

第五十九話　兄その一

兄

皆フックが勧めるその店の前に来ていた。そこはよくある居酒屋であった。外見だけでそれがわかるような見事な店の前であった。

「さて、と」

「ええ」

「ここだけれどよ」

「少なくともステーキハウスとかには見えないな」

ロザリーがその真っ赤な看板を見上げて言う。

「居酒屋か」

「見ればわかるよな」

フックは軽い調子でそう返すのだった。

「ここな。安くて美味いんだ」

「へえ」

「そんなに」

「料理も何でもあるしな」

密かにそれがかなりの高ポイントであった。

「いい店だぜ。だからここにしたんだ」

「ふうん」

「そうだったの」

「他にも店は知ってるんだけれどな」

顔の広いフックである。店は幾つでも知っているのだ。

「でもあえてここにしたんだよ。騒げるしな」

「成程な」

「御前らしいな」

皆それを聞いて納得する。実にフックらしいからだ。

「じゃあ入るか」

「んっ、ちょっと待って」

ここで意外な人物が声をあげた。見ればそれは彰子であった。
「どうしたの、彰子ちゃん」
「このお店だけれど」
彰子は今いう店の外を見ながら言うのだった。
「何処かで見たような記憶が」
「そりゃそうじゃね？」
フックは特に考えることなく彰子の言葉に応えた。
「彰子ちゃんずっとこの街に住んでるんだよな」
「うん」
実はそれは小式姉妹だけだったりする。他の殆どの人間は他の国から来ているのでそれぞれアパートに住んでいる。だから彰子がこの街にいて一番長いのである。
「だったら何回か店の前を通ったことだってあるだろうしさ」
「そういうのじゃなくて」
しかしそうではないと彰子は言うのだった。
「何か」
「何か？」
「気のせいかなあ。入ったこともあるような」
「そりゃあるだろ」
ロザリーが彰子に突っ込みを入れる。
「あんただって飲むだろ？」
「うん」
実は彰子もかなり飲む。しかも酒豪だったりする。儚げな外見からは想像もできないが彼女は飲む時はかなり飲むのである。しかも食べる。
「だったら一回位はさ」
「そうかなあ」
「そうだよ。じゃあ皆」
ロザリーはここで皆にも話を振る。
「入るか」

「よしっ」
「じゃあ行こうぜ」
皆どかどかと店に入る。店の中は何処か和風で座敷まである。しかもかなり広かった。
「いらっしゃいませ」
アジア系の若い男が挨拶をしてきた。
「何人様ですか？」
「五十人」
フックが応える。さりげなくとんでもない数を言う。
「いけるかな」
「はい」
しかもいいと言う。どうやらかなり広い店のようだ。
「勿論です」
「いいらしいぜ」
フックは店員さんの言葉を受けて皆にも言う。
「じゃあやるか」
「おう」
「まずはビールな、ビール」
これはどの店にもある。飲む時の定番であった。
「焼き鳥に焼売」
「あとフライドチキンもだ」
「生春巻きも頼もうぜ」
皆次々と食べ物も注文しだす。三十分もすれば完全に出来上がってしまっていた。
「ウゾダドンドコドーーーーーーーン！」
いきなりフランツが奇声をあげだした。皆それに注目する。

第五十九話　兄その二

「何だありゃ」
「戦いの前の踊りだ」
タムタムが素っ気無く皆に答える。彼は飲み食いに専念している。
「戦いの前の！？」
「そうだ。色々叫びながら踊る」
「へえ」
「アンナアルンゲンナデカャーーール！」
また叫ぶ。そうしてポリネシア系の踊りをはじめる。
「何かラグビーみたいだな」
「そうだよな」
皆その踊りを見て言う。
「どっちかっていうとな」
「少なくとも野球って感じじゃないな」
「まあそうか」
タムタムもそれは認める。
「俺は別に何も感じないがな、フランツも」
「そりゃあれだろ？」
「あんた達の国が」
フランツはニュージーランド人、タムタムはパラオ人である。ポリネシアに近いのだ。だから彼等にしてみれば普通なのだ。とりわけフランツのいるニュージーランドではラグビーが盛んであるが常に試合の前には戦いの舞を踊っているのである。だから普通なのだ。
「まあそれもそうか」
タムタムはそれも認める。
「だからまあ気にしないでくれ」
「ああわかったよ」
「けれどねえ」

それでもロザリーはまだフランツを横目で見ていた。
「あの言葉は何処の言葉よ」
「オラァクサムヲムッコロス！」
いきなり顔を憤怒の凄まじい形相にして叫んでいた。
「さっきから妙に濁音だし」
「あれか」
「ええ、あれ」
皆も実は気になっていた。それをタムタムに聞く。
「そっちの現地の言葉なの？ニュージーランドの」
「そんなのあったっけ、ニュージーランドに」
皆で話をする。どうにも思い浮かばないのだ。ニュージーランドといえば英語である。後はマオリ族の言葉が残っている。連合公用語の銀河語と一緒に学んでいるのだ。
「あれはオンドゥル語だ」
「オンドゥル語！？」
「何それ」
「俺もその言葉のルーツはわからない」
それについてはタムタムも知らなかった。まずは首を横に振る。
「悪いがな」
「そうなの」
「一説にはルーツは日本らしい」
意外な国の名前が出て来た。
「日本に！？」
「あれ日本語！？」
「多分違う」
またしても変な返答になっていた。しかしこれはタムタムもわかっている。
「異星人の言葉だとも言われているが」
「余計わからないぞ」
ロザリーは困ったような顔でタムタムに突っ込みを入れる。

「遥か彼方からどうやって伝わったんだ」
「だから謎とされている。だが」
「だが？」
「翻訳は日本語がもっとも簡単だ」
またしても妙な話になる。
「実はな」
「そうなの。じゃあ日本語ルーツ！？」
「あまりそうは思えないよね」
「ねえ」
皆口々に言う。
「あんな濁音日本にはないし」
「昔の日本の東北の言葉かしら」
日本人の七海が言う。首を傾げながら。
「けれどあんなのだったかしら」
「違う？」
「多分」
「他にも説がある」
タムタムはまた述べる。
「ある特撮番組の俳優達の言葉だともな」
「そうなの」
「だったらあれだな」
ロザリーはそれを聞いて言わずにはいられなかった。
「その役者さん達はよっぽど滑舌が悪かったんだな」
「おそらくな」
タムタムもそれは否定しない。むしろ肯定している。
「だがこうして言葉として残っている」
「言語学にはない言葉だけれどね」
「どんなものなんだか」
「とにかくフランツは別に奇声を発しているわけじゃない」
そうしてようやくといった感じで相方をフォローするのだった。

「それはわかってくれ」
「ええ、それじゃあ」
「わかったわ」
皆それに頷く。そうしてまた飲み食いに戻った。
多くはビールを飲んでいる。樽単位で飲まれるがそれでも次々と消えていく。彰子はその中で店の中を時々だが見回していたのであった。
「何かあるの？」
それに七海が問う。
「このお店に」
「やっぱりちょっと」
見ればその顔は怪訝な顔であった。
「何処かで見たなあって」
「来たことあるのよ、それは」
七海は軽くそう述べた。
「それでね。今思い出して」
「そうかなあ、やっぱり」
「そうよ」
明るい声で彰子に答える。
「覚えてないだけで」
「ううん」
彰子にはよくあることだった。彼女は頭はいいのだがかなり天然なのだ。おっとりしているとも言う。おっとりにしても相当なものであるが。
「だといいけれど」
「思い出すにはこれよ」
七海はいきなり料理を出してきた。それは焼き鳥だった。

第五十九話　兄その三

「はいっ」
「焼き鳥？」
「味は忘れないでしょ」
右目でウィンクして彰子に問う。
「だからよ。ほら」
「そうね」
そしてこれは正解だった。彰子は鋭い味覚を持っている。また味を忘れない女の子だったのだ。だから料理もかなり上手であったりする。
「それじゃあ」
「はい、どんどん」
わんこそばのような掛け声で彰子に食べさせる。彰子はそれに従いまずは一本口に入れる。そうして食べだすとすぐに何かを思い出したのだった。
「あれっ！？」
「思い出した！？」
「うん、これって」
焼き鳥を食べながら答える。
「兄さんの味」
「えっ！？」
「兄さん！？」
皆彰子の言葉を聞いて思わず声をあげた。
「彰子ちゃんお兄さんいたの」
「初耳だけれど」
「私もよ」
親友である七海も驚いた顔をしている。本当に初耳なのがそれでわかる。

「妹さんいたのは知っていたけれど」
「実はいるの」
今はじめて本人から明かされる衝撃の事実であった。そもそもそんなものが衝撃になってしまうのが実に彰子らしかったがそれはそれであった。
「一人」
「そうか、一人か」
「で、どなたなんだ?」
ロザリーがまた焼き鳥をモグモグと食べている彰子に対して問う。
「そのお兄さんは」
「髪が黒くて」
「ふんふん」
これはよくある。黒い髪は。
「目が黒くて」
「成程」
これまたよくある。色々な目の色が連合には存在するが黒い目は一番多い色の目の一つであることは間違いない。ついでに言えば黒い髪もそうである。
「肌は黄色」
「アジア系の血が強いんだね」
「まあ当然か」
彰子はかなり血の濃い日本人である。だから彼女の兄もそうであって当然であった。これも少し考えてみれば当然のことであった。
「そして次は」
「背が高くて」
「長身ね」
「すらりとしてて」
「スタイルいいんだ」
「ってちょっと待て」
ここまで聞いたところでロザリーが言う。

「どうしたの？」
「髪と目が黒くてすらりとした長身のアジア系の人か」
「うん」
彰子はロザリーのその言葉に頷く。やはり焼き鳥はそのまま食べ続けている。見れば既に何本か食べ終えて木串が転がっている。どうして彼女も中々食いしん坊であった。
「そうだけれど」
「それはひょっとして」
ロザリーは記憶を辿りながら彰子に対して言う。
「あの人か！？」
「あの人！？」
皆ロザリーの指の先を見る。見ればそこには今さっき彰子が言ったままの容姿の店員さんが立っていたのであった。中々の美男子だ。中性的な顔立ちは彰子よりも明香のそれに近いと言えた。
「あの人だよな」
「あれ、兄さん」
「ひょっとして彰子か」
向こうもようやく彰子に気付いた。
「どうしてここに」
「皆とパーティーなの」
何か今一つピントの外れた会話が兄妹の間で交あわされる。
「それで」
「そうだったのか。それでか」
「うん」
こくりと頷く。皆周りでそんな二人を見て囁き合うのだった。
「やっぱり兄妹ね」
「そうだな」
真剣な顔で。二人から目を離さずに。
「というかそっくり」
「お兄さんの顔は妹さんに似てるかしら」

「それを言うなら逆よ」
これにはすぐに突込みが入る。
「妹さんがお兄さんに似てるの」
「あっ、そうか」
そうなる。これは勘違いであった。
「じゃあ明香ちゃんはお兄さん似だったのね」
「道理で姉妹で顔が似てないわけよね」
彰子と明香は全然似ていない姉妹で学校では有名なのだ。だがどちらもタイプこそ違えど容姿はかなり整っているので美人姉妹として有名である。
「それで兄さん」
「何かな」
彰子は兄に対してまた言うのだった。

第五十九話　兄その四

「どうしてこのお店に？」
「アルバイトで」
言葉は簡潔だった。だがそれ以上に何か天然めいたものも感じさせる言葉であった。
「来ているんだ」
「そうだったの」
「言わなかったか？」
「そうだったかしら」
彰子のいつもの天然が発動したようであった。彼女は覚えていなかったのだ。
「あまり。覚えてないけれど」
「忘れてたみたいだな」
「そうね」
皆それを聞いて囁き合う。彼等も彰子の天然はよく知っているのだ。とにかくおっとりとしているし天然なのだ。それがいいという意見もあるようだが。
「とにかくここのお店だったんだ」
「うん」
兄はあらためて妹に頷く。
「よかったら覚えておいてくれ」
「わかったわ。お店の名前は」
「シャムスンだ」
結構洒落た名前であった。居酒屋らしいと言えばらしい。
「わかったかな」
「とりあえず」
多分忘れるだろう、皆彰子の返事を聞いて心の中で思ったがあえて口には出さないのだった。

「覚えたわ」
「頼むぞ。それでだ」
「何？」
「皆さん来られてるんだな」
兄はここであらためて店の中を見回す。見渡す限り二年Ｓ１組の生徒でごった返している。中には他の客もいるが完全に彼等と同化してしまっていた。
「うん、皆いるけれど」
「それではいい機会だな」
妹からそこまで聞いてクールに言うのだった。
「挨拶をするか」
「はあ」
「宜しく御願いします」
二年Ｓ１組の方から言った。彼等の方が年下なので必然的にこうした態度になった。だがまだいささかの戸惑いもそこには見られていた。
「はじめまして」
兄はまず彼等に対して一礼した。
「小式貫之です」
こう名乗った。
「八条大学に在籍しています。どうぞ宜しく御願いします」
「こちらこそはじめまして」
「妹さんにはお世話になっています」
皆もその彰子の兄貫之に言葉を返す。かなり礼儀正しいやり取りになっていた。
「どうも。妹が迷惑をかけていませんか？」
「いや、全然」
「優しいし温厚ですし」
これは事実だ。もっともその中に彰子の天然をオブラートに包んではいるが。

「僕達助かってるんですよ」
「勉強もスポーツもできますしね」
「そうですか」
貫之は妹の様子を聞いて顔を綻ばせる。兄らしい顔であった。
「それは何よりです」
「いえいえ」
「本当のことですし」
天然も本当のことである。誰もあえては言わないが。
「それでは」
ここで貫之はまた言う。
「はい？」
「今日は皆さん是非心ゆくまで楽しまれて下さい」
そう一同に対して告げた。
「私も腕を振るわせて頂きますので」
「兄さんの料理なのね」
「そうだよ」
妹に対して優しい声で応える。どうやら兄妹仲はいいらしい。
「作らせてもらうから」
「そう、よかった」
「あれ、よかったって」
「彰子ちゃん、何かあるの？」
「兄さんはね」
彰子は楽しそうに皆に対して言うのだった。
「私と明香に料理を教えてくれた人なのよ」
「へっ！？」
「御二人に」
「大したことではありません」
驚く皆に謙虚に述べる貫之だった。
「二人共私なぞよりずっと」
「凄くお料理上手いの」

だが妹がその兄の横で言うのだった。
「だから皆期待して」
「そういえば」
ここで皆気付いた。
「このお店の料理は」
「はい」
貫之は彼等の言葉に応えてきた。
「私が作らせて頂いています」
「そうだったんですか」
「成程」
皆それを聞いてしきりに頷くのだった。それには理由があった。
「お兄さんがだったんですか」
「これはかなり」
「御気に召されたでしょうか」
貫之はそう皆に対して問うた。
「はい、それもかなり」
「美味しいわよね」
「有り難い御言葉です。それでは」
彼は皆の言葉を聞いてさらに機嫌をよくさせた。そうしてまた言うのだった。
「次は私が特別に無料で作らせて頂きましょう」
「おい小式君」
貫之の今の言葉を聞いて店の奥から声がしてきた。
「それはちょっと困るよ」
「あっ、店長」
やたらとガタイのいい顎鬚を生やした男がやって来た。エプロンが実によく似合っている。彼がその店長であるようだ。
「そんなこといきなり言われても困るよ」
「申し訳ありません」
「そういうことはわしに許可をもらってくれよ」

そのうえでこう言うのだった。
「いいね」
「許可ってことは」
「まさか」
「いいぞ」
笑って述べてくる店長であった。
「今日はかなり儲かっているしな。どうぞどうぞだ」
「わかりました。それでは」
貫之は一礼してからまた述べた。

第五十九話　兄その五

「作らせて頂きます」
「うん。好きなのを作っていいからな」
「有り難うございます」
貫之はそれを受けてすぐに店の奥に消えた。この時に皆に対して言うのだった。
「では京風料理を作らせて頂きます」
「京風料理！？」
「はい」
皆の言葉に応える。
「そうです、京風料理です」
「それってどんなのかしら」
「お楽しみを」
最後まで応えようとはしなかった。あえて秘密にしているのがわかる。
貫之は姿を消した。そうして残された一同はあれやこれやとヒソヒソと話をするのだった。
「何が出るのかな」
「それが問題よね」
話題は当然ながらその京風料理についてであった。何が出るのか予想がつかなかったのだ。彼等は和食は知っていたがそこまでで京風というものは知らなかったのだ。
それは七海も同じだった。彼女もそこまでは知らなかった。
それで彰子に問う。それは何なのかと。
「ねえ」
「うん」
彰子はすぐに七海に顔を向けて応える。
「京風料理って何？」

「大阪料理って知ってるわね」
「ああ、お好み焼きとかきつねうどんとかたこ焼きとか」
こうした料理はこの時代にもある。日本ではかなりポピュラーな料理であり八条学園の食堂にもメニューとしてちゃんと存在している。
「ああいうのね」
「それと同じ感じなの」
「じゃあ味が濃いのね」
大阪風は味が濃い。これは七海も知っている。
「それじゃあ私に合ってるかも」
「それが違うの」
だが彰子はここでこう言うのだった。
「京風は薄味よ」
「薄味なの」
「そうなの」
また答えた。
「そうなんだ」
七海は薄味と聞いて落胆した感じになる。
「何か」
「嫌なのか」
その彼女にダンが問う。
「薄味は」
「ううん、好みだけれどね」
ダンにバツの悪い顔で答える。ダンはそーきそばを食べていた。
「あまり。ねえ」
「薄味もいいと思うがな」
そう言いつつかなり濃い味で有名な足てびちを食べるダンであった。これも貫之が作ったものだ。この足てびちはかなり味が濃かった。
「俺は」

「じゃあその足てびちは何よ」
七海もそこを突っ込む。
「かなり濃い味じゃない」
「それはそれ、これはこれだ」
ダンはクールにきっぱりと言い切る。
「濃い味は濃い味で、薄い味は薄い味でいい」
「そうなの」
「少なくとも俺はそう思う」
こう述べたのであった。
「それぞれの味だな」
「相変わらずそういうところの度量は広いのね」
「そうか？」
実はダンにはそんな自覚はない。というよりは気にはしていない。
「自分ではそうは思わないがな」
「少なくともカムイよりはね」
「それもそれぞれだしな」
こうも言うのだった。
「あいつはあいつで。あれでいい」
「そっちもそれぞれってことね」
「ついでに言うと俺は俺だ」
結局はこういう考えになる。こうした考えが実にダンらしいのだ。
彼はまず自分自身がしっかりしていてそこから他のものを認めているのだ。だから強いのだ。
「このそーきそばも足てびちもな」
「ついでに言うとそこのゴーヤチャンプルも」
「美味いぞ」
顔がにこりと笑った。
「それもかなりな」
「それはもうわかってるわ」
七海もにこりと笑ってみせるのだった。

「私もそれ好きだし」
「じゃあミミガーはどうだ?」
豚の耳だ。連合各国ではかなりポピュラーな食べ物である。当然琉球でも。豚というのは素晴らしい生き物でまさに捨てるところがない。皮も内臓も足のつま先も食べられる。それどころか骨もスープにすると絶品である。こんないい肉はそうはない。なお連合では何だかんだでムスリム達も食べたりする。そうした食事のタブーはユダヤ教徒以外はあってないが如しなのが連合であった。それがいいか悪いかは別にしてだ。

第五十九話　兄その六

「これもいけるが」
「それも好きよ」
七海はまたにこりとして述べた。
「お酒に合うわよね」
「琉球の酒にな」
やはりダンはそれであった。
「かなり合う」
「焼酎にも？」
「勿論だ。やるか？」
「ええ、もらうわ」
ダンの向かいの席が空いていたのでそこに座る。そうしてから盃を手に取ってダンの酌を受ける。それだけでもう雰囲気は出来上がっていた。
「まずは一杯ね」
「焼酎もいいものだな」
「そうでしょ」
七海はにこりと笑ってダンに応える。
「程よい強さでね」
「俺はこれなら幾らでもいける」
ダンも意外と酒豪であった。
「それこそな。何処までも」
「強いのね、あんたも」
「御前もな」
またニヤリと笑って七海に告げる。
「かなりのものらしいな」
「泳いでいるとお腹が減るのよ」
水泳部である。そこを言ってきた。

「だからよ。幾ら飲んでも食べても」
「足りないか」
「そういうこと。これは本当よ」
それを態度でも示す。次から次にとミミガーだの足てびちだのを食べていきそれから酒をぐいぐいと飲む。どうやら彼女もかなりいけるくちのようだ。
「だから今だって」
「しかしだ」
ここでダンは注意するような口調になった。
「何？」
「まだ次があるんだぞ」
こう忠告してきたのだった。
「次がな。わかっていると思うが」
「ええ、勿論よ」
当然と言わんばかりに言葉を返す。焼酎をぐい、と一口で飲んだ後に。
「彰子ちゃんのお兄さんのお料理よね」
「さて、何が出るか」
ダンは楽しげな笑みを浮かべるのだった。
「京風だ。果たして何か」
「京都っていると何だったっけ」
そういうのには疎い七海はダンに尋ねた。
「私ちょっと知らないんだけれど」
「多いのは豆腐だな」
「豆腐なの」
「あとは鱧だ」
これも欠かせない。京都で夏といえば鱧であった。祇園祭は鱧が食べられるという理由から鱧祭とも言われているのである。京都人にとって鱧とは特別な存在なのだ。
「吸い物に刺身に揚げ物にな」

「お吸い物」
それを聞いた七海の言葉が止まった。
「何か美味しそう」
「お吸い物好きか？」
「大好き」
今にも喉を鳴らさんばかりの言葉であった。
「それもかなりね」
「そうか、それは意外だな」
「そうなの」
「いや、そう思っただけだ」
これは単にダンのイメージだけの言葉であった。七海に対する。
「単にな」
「ふうん」
「それで何が好きなんだ？」
ダンはそこも七海に尋ねるのだった。
「吸い物が好きとしてもだ」
「鯛ね」
好みとしてはオーソドックスであった。実にいい。
「やっぱりあれが一番じゃないかしら」
「そうだな。あれはいい」
ダンもそれに同意して頷く。

第五十九話　兄その七

「あっさりしていてな」
「それで鱧のお吸い物でいいのってどんなの？」
七海はそこも聞く。それこそが肝心であった。
「美味しいの？京風だと」
「少し違うらしい」
どうやらダンも実際には食べたことがないようであった。
「違うの」
「ああ、全然な。何かが違うそうだ」
「ふうん、そうなんだ」
そう言われても今一つ実感が湧かない。七海はついつい首を傾げる。
「京都ってあまり知らないけれど」
「多分それは彰子ちゃんもだな」
ダンは次に彰子に顔を向けた。
「知らないと思う」
「彰子ちゃんの料理はどっちかっていうと薄味系ね」
「ああ、それはそうだな」
ダンは七海の今の言葉にはたと気付いた。
「そういえば薄味だよな、彰子ちゃんの料理は」
「明香ちゃんもね」
実はこの姉妹の料理はどちらかというと薄味系である。和食らしいと言えば和食らしい。連合の中では和食は薄味で素材を大事にすると言われている。
「そういう感じよね」
「このクラスは皆濃い味の料理ばかりだしな」
「特にあいつね」
ここで洪童を見る。

「すっごい味が濃いのよねえ、美味しいことは美味しいけれど」
「というよりはだ」
ダンもその洪童を見ていた。本人は酒と韓国料理で泥酔寸前である。
「あいつの料理は全部辛いんだが」
「韓国人だしね」
全てはこれに尽きた。
「大酒飲みだし」
「それも韓国人だな」
この時代においても韓国人といえば大食で大酒飲みである。酒の量では今やロシア人に匹敵するとまで言われている。とにかく飲むのである。
「辛さも凄いしね」
「全くだ」
ダンは七海の言葉に頷く。
「激辛どころじゃない」
「そうなのよねえ。まあそれがいいんだけれど」
「本人もそれが好きだしな」
「ええ」
洪童は大の辛党である。ついでに言えば甘いのも大好きだ。彼の舌はとにかくはっきりしていてどれも極端な味が好みなのである。
「和食とはそこが違うわよね」
「そうだな、それでだ」
話が戻った。
「その京風料理だが」
「何が出るかしら」
「そろそろだな」
ダンは口元に微かに笑みを浮かべる。期待の笑みであった。
「来るぞ」
「豆腐よね」

七海は目をキラキラと輝かせていた。
「豆腐が来るのよね」
「好きみたいだな、豆腐が」
「大好きよ」
目を輝かせたまま答える。
「あっさりしているし」
「そうだな」
豆腐はそれがいい。実に食べやすい。
「健康にもいいし」
「全くだ」
実はダンも豆腐は好きだ。この時代は豆腐は連合中で食べられる料理になっている。とにかく健康にもいいので大人気の料理の一つだ。
「お酒にも合うし」
「日本酒か白ワインか」
ダンはそこも外さない。
「どちらかでな」
「わかってるわね、あんたも」
「琉球でも豆腐はよく食べられる」
笑いながら七海に答える。何時の間にかその手には日本酒がある。もうそちらの準備は完全にできていた。実に用意がいい。
「いいものだ」
「さて、そろそろよ」
七海は店の奥の気配を察して言う。
「来るわ」
「何が出ると思う？」
ダンは問う。
「一体どんな料理が」
「それは出てからのお楽しみね」
既にかなり食べているのにまだ食べたい七海であった。顔にはっ

きりと出ている。
「とにかくあっさりしたのなら」
「おい皆」
ダンが皆に声をかける。
「あっさりした酒でいくか」
「そうだな」
それに最初に応えたのはアルフレドだった。
「じゃあ白ワインと」
「日本酒を」
ビアンカも酒を選ぶ。流石は双子と言うべき見事な連携であった。
「用意して、と」
「じゃあそろそろかな」
「来たわよ」
七海が皆に告げる。
「いよいよよ」
「よしっ」
「来たか」
「お待たせしました」
貫之の声が聞こえてきた。
「只今持って来ます」
こうしてその京風料理が来た。それは何か。皆固唾を飲んで見守るのであった。

兄　　完

２００７・１０・１

第六十話　京風料理その一

京風料理

貫之が料理を運んで来た。見ればそれは三つあった。

「ええと」

「まずは」

皆まずその三つの料理を見る。最初は変わった紙のような料理であった。

「これは湯葉か」

ギルバートがそれを見て言う。

「確か。そうですね」

「はい、そうです」

貫之がそう彼に答えた。

「大豆を使った料理で。豆腐から作ります」

「そうなんだ」

「豆腐がこんなに」

これは皆にとっては意外なことであった。豆腐といえば四角いイメージがある。だがこの紙のような料理を見てその認識が大きく変わったのであった。

「何かそれでもね」

「ああ」

そのうえでそれぞれ話をする。

「美味しそう」

「あっさりしていて」

「はい、これはあっさりした料理です」

貫之は皆にまた告げた。

「お刺身のように召し上がられるといいでしょう」

「お刺身ねえ」

「成程ね」

皆それを聞いて納得して頷く。続いて見たのは鍋であった。
「あっ、これはわかるわ」
「湯豆腐ね」
「そうです」
また皆の質問に答えてきた。
「昆布でダシを取りました。京風のお豆腐です」
「お豆腐にも京風ってあるんだ」
七海はそれを聞いて意外といった顔になった。
「豆腐っていえば豆腐だけかと思ってたけれど」
「御前それはまた大雑把過ぎないか？」
ダンがそれを聞いて彼女に突っ込みを入れた。
「木綿豆腐とか絹ごし豆腐とか色々あるだろうに」
「そういえばそうだっけ」
七海の言葉は日本人としてどうかという言葉であった。少なくとも豆腐に関してはかなり無知であるのがこのことからわかる。どうにもこうにも。
「じゃあ京風のお豆腐も」
「絹ごし豆腐を使ってみました」
貫之はそう七海に説明してきた。
「そして中身は直接味わって下さい」
「中身なのね」
七海はそれを聞いて妙に納得した感じであった。
「要は」
「京風の豆腐はかなり違うらしい」
ダンはまた七海に告げる。
「それを食べられるとはな」
「ラッキーってことかしら」
「そう思う。そしてだ」
最後の一品だ。それは。
「鱧です」

これは予想通りであった。
「鱧のお吸い物です」
「やったわね」
七海はそれを聞いて笑顔になる。希望通りだったからだ。
「鱧よ、鱧」
「ああ、そうだな」
応えるダンの顔も心なしか笑っている感じであった。
「鱧か。さて」
「嬉しいんでしょ、これから食べられるのが」
「その通りだ」
その笑みのまま七海に答える。
「だがそれは最後だな」
「最後なの」
「酔い覚ましに飲みたい」
これはダンの好みだったがそれでも理に適っていた。
「鱧の味を最後にな」
「そうね。それじゃあ私もそうしようかしら」
七海もそれに賛成する。そうしてそのままテーブルで京風料理を食べはじめるのであった。まずは湯葉であった。皆山葵と醤油で食べはじめた。
食べてみると。豆腐とはまた全然違う味であった。
「あっ、これって」
「かなり」
皆食べてみてまずは驚きであった。
「あっさりしてるし」
「それに歯ざわりも」
「如何でしょうか」
貫之は舌鼓を打つ皆に尋ねてきた。

第六十話　京風料理その二

「湯葉は」
「美味しいっていうか」
「これは」
「御気に召されたようですね」
彼は皆の顔を見てわかった。最高の評価だと。
「ええ、こんな食べ物があったなんて」
「思いも寄らなかった」
七海とダンが言う。
「ていうかあれだよ」
続いてカムイも。
「やっぱり和食って感じするよな、こういうの」
「和食ですか」
「ああ。彰子ちゃんのお兄さんさ」
彼の態度はかなり馴れ馴れしいように見える。だがそれと共に結構人見知りする感じも見られる。どちらかというとその人見知りをあえて隠してそんな態度を取っている感じであった。
「これかなり作るのに手間かかるだろ」
「お豆腐屋さんにとってはかなりのようですね」
「そうだよな。見ればわかるし」
カムイはその湯葉を食べながら言う。
「こんだけ薄いと。切るのも大変じゃね？」
「それは馴れというものです」
その質問に対しては謙虚に言葉を返す貫之であった。
「包丁も毎日握ってると」
「そんなもんか」
彼はそれを聞いてあることを思いついた。
「それじゃあ俺も」

「何よ、あんたが」
七海が彼に突っ込みを入れる。
「何かするの？」
「ああ、毎日女の子に声をかけたらよ」
かなり強引にそっちに話をやるのだった。
「彼女できるんだろうな」
「やってみたら？」
かなり素っ気無い言葉を返す七海であった。
「そうしたいんだったら」
「随分冷たいな、おい」
「付き合ってられないだけよ」
本当に冷たい言葉であった。何の容赦もない。
「いちいちね」
「やれやれ。じゃあまあやってみるか」
それではいそうですかと諦めるカムイでもなかった。少なくとも女の子のことに関してはそうである。そのせいでもてないのかどうかは考えてはいない。
「それで」
「まあ頑張ってね。それはそうとよ」
七海は話を料理に戻すのであった。
「今度は湯豆腐だけれど」
「ああ、ポン酢だろ」
カムイは七海にそのポン酢を渡してきた。
「ほら」
「あれっ、ポン酢なの」
だが七海はそのポン酢を見て目をパチクリとさせるだけであった。
「湯豆腐に」
「あれ、そうじゃないのか？」
「湯豆腐といえばあれでしょ。お味噌」
彼女はそちらであった。

「それで食べないと」
「いや、醤油だ」
ダンは醤油派であった。
「やはり豆腐には」
「御前等全然わかってねえな」
カムイはそんな二人に対して言うのであった。
「やっぱりあれだろ。湯豆腐にはポン酢だ」
「だから駄目よ。お味噌は身体にもいいし」
「醤油であっさりとな」
湯豆腐の食べ方を巡って三人で言い争いになる。皆はそんな彼等を見て言うのだった。
「日本系の連中ってのはあれか？」
「湯豆腐の食べ方で派閥があるのかしら」
「妙な話だな」
ここでカムイが言う。
「こんなの一つしか食べ方がないっていうのにな」
「そういうあんたも凄いな」
ロザリーが少し引きながら彼に告げる。
「コチュジャンか、湯豆腐に」
「これが一番なんだよ」
少なくとも彼にとってはそうであった。
「豆腐はあっさりしてるしな」
「辛過ぎないか？」
ロザリーはそう突っ込みを入れた。
「それだと」
「その辛いのがいいんじゃないのか？」
洪童はこう返した。
「だから美味いんだよ」
「そんなものかね。まあいいさ」
彼女は彼女で湯豆腐にポン酢をかけた。

「あたしはやっぱりこれだね」
「あっさりしてるんだな」
「だからお豆腐はこれだろ？」
ロザリーも豆腐については七海と同じ趣味であるようだった。

第六十話　京風料理その三

「あっさりと行こうぜ」
「あっさりかよ。何かな」
だが洪童はここで妙なこだわりを見せるのだった。
「辛くないっていうのは」
「韓国料理でも辛くないのあるだろ？」
ロザリーは洪童があまりにも辛いのにこだわるのを見てこう言った。
「それはどうなんだよ」
「それは妹がよく作るけれどな」
彼は言う。彼の妹の春香のことだ。
「かなり美味しい」
「じゃあ好きなんだな」
「好きなことは好きだぜ」
彼もそれは認める。しかしそれだけではないのはその微妙な顔でわかる。どうにも認めながら釈然としないものをその顔に見せていたのだ。
「けれどな」
「完全に好きじゃないのか」
「やっぱり俺は辛いのがいい」
そういうことであった。
「とびきり辛いのを食べた後でな。思いきり甘い酒を飲んでな」
「韓国的だな、また」
韓国料理の特徴だ。韓国では料理は辛いのだが酒はかなり甘いのだ。マッコリという酒である。その甘さはさながらカルピスチューハイのようである。なお洪童は今はマッコリではなくそのカルピスチューハイを飲んでいる。彼の好物でもある。
「この湯豆腐だってそうなんだよ」

彼はまた湯豆腐を食べて言う。
「やっぱり辛くしてな」
「そうか。ところでだ」
「何だ？」
ロザリーの言葉に顔を向ける。
「このお豆腐何か違うな」
「違うか？」
「幾らでも食べられないか？」
そう洪童に言う。
「このお豆腐」
「あっ、そういえばそうだな」
洪童も言われてそれに気付いた。
「何か幾らでもいけるな」
「そうだよな。お豆腐ってあれだろ？」
ロザリーはまた彼に述べる。
「食べ過ぎたら後味残るよな」
「ああ、エグ味があるな」
豆腐独特のものだ。豆腐は確かに淡白で非常に食べやすいものであるがそれでも食べ過ぎるとエグ味が残るのだ。二人は今それがないのに気付いたのだ。
「けれど今はそれがないね」
「全然ないな」
「それかね」
ロザリーはそこを言う。
「このお豆腐が違うのは」
「そうかもな。どんどんいけるぜ」
洪童はまた豆腐を食べるのだった。それとカルピスチューハイも。
「幾らでもな」
「ちょっとあんた」
本当に幾らでも食べそうな洪童に対して言う。

「あたしもいるんだぞ。それを忘れるな」
「だってまだまだあるぜ」
しかし彼は豆腐の数をたてにそれを拒む。
「いいじゃねえかよ」
「それもそうか」
見れば豆腐が側に置かれていた。これを鍋に入れればいいだけだ。何時の間にか出て来たその豆腐に妙なものを感じながらも頷くのであった。
「じゃあそれでな」
「ああ、わかったよ」
こうして二人はまた豆腐を食べだした。だがこの豆腐のことに気付いたのは彼等だけではなかった。他の面々もそれは同じだったのだ。

第六十話　京風料理その四

「凄いわよね。このお豆腐」
「ああ」
七海とダンはとりあえず何をつけるかは置いておいて豆腐を食べていた。それでもつけるものは誰も譲ってはいないのだが。
「幾らでもね」
「いけるな」
ダンは焼酎を飲みながら七海に応えた。
「もうかなり食べているのに」
「それでもまだいける」
「これが京都のお豆腐です」
その横で貫之が言うのだった。
「これが？」
「はい」
表情は変わらないが声は穏やかなままであった。
「普通のお豆腐とは違いまして。エグ味等がないのです」
「そうだったの」
「それで」
「そして」
しかもまだあるようだった。
「他にもありますが」
「他にも？」
「これは湯葉や鱧にもありますが」
他の料理についても言及する。
「それは後でおわかりになられます」
「後でねえ」
「今じゃないんですか？」
「はい、今ではないです」

こうダンに答えた。
「後で」
「今でも充分わかってるけど」
七海は湯豆腐を食べながら言う。
「美味しいって」
「美味しさだけではないのです」
しかし貫之はここでまた述べた。それは七海に対してだけではなく皆にも言っていた。それだけ深い意味があるということであった。
「おわかりでしょうか」
「美味しさだけじゃない」
ダンはその言葉を聞いて考え込んだ。
「じゃあ一体。何なんだ」
ダンはそれを聞いて真剣な顔で考え込む。
「美味しさだけじゃないとすると。むっ」
ここでふとあることに気付いた。
「まさか」
「おっと」
貫之はすぐにダンに注意するのであった。
「ここで話されるのは」
「あっ、そうですか」
「はい。謹んで頂けると有り難いです」
穏やかで丁寧な言葉であるがそれだけに何も言わせないものがそこにあった。貫之もかなり手強い人間なのだとダンは認識した。
「宜しいでしょうか」
「わかりました。それでは」
「それにしてもよ」
七海は湯豆腐から鱧の吸い物に移りながら述べた。鱧のあっさりとした味が口の中を支配する。これは一度食べたら離れられないものであった。
「この鱧って凄い顔してるわね」

彼女のお椀にはその鱧の頭があった。歯がやけに鋭く怖い顔を見せている。
「それでこの味だなんて」
「鱧は顔だけじゃないしな」
ダンも吸い物を口にしていた。彼のところにはアラが入っている。
「顔だけじゃないって？」
「小骨も多いんだ」
そう七海に説明する。
「小骨もなんだ」
「ああ。それで切るのはかなり大変だ」
そうであった。鱧は確かに美味いが小骨が実に多い。それが食べにくくさせているのだ。奇麗な薔薇には棘があり美味い魚には小骨があるということであろうか。
「だから。注意しろよ」
「厄介な魚ね」
「けれど。あれだよな」
ロザリーも鱧を食べながら話に入ってきた。
「美味いな、確かに」
「そうね。それはね」
これは七海も素直に認める。
「かなりね」
「御気に召されたのですね」
「勿論ですよ」
貫之にも笑顔で言葉を返す。
「ここまで美味しい魚ってそうはないですよ」
「味もあっさりしているしな」
ダンも言う。
「確かに。いい魚だ」
「鱧は京料理においては特別な魚ですから」
貫之は彼等の言葉を受けてこう言うのだった。

「特別な魚？」
「はい」
そして頷く。
「これが美味くできなくては締まらないのです」
「へえ」
「メインディッシュみたいなもんかな」
ロザリーはそれを聞いてこう思うのだった。
「だったら」
「いや、そうれもないかもな」
それにはダンが言う。
「違うのか」
「京料理は全てこうなんだろう」
彼は持ち前の洞察力において言うのだった。

第六十話　京風料理その五

「多分な。豆腐にしろ湯葉にしろ」
「そうなのか」
「そうですね。確かにそう言えます」
貫之はまたダンの言葉に頷くのだった。
「どの料理も気を抜けません」
「そうなんですか」
ロザリーは彼のその言葉を聞いて考える顔になった。
「じゃあ。かなり難しいですね」
「少なくとも気は抜けません」
そう述べてきた。
「お豆腐も湯葉もそうでしたし」
「成程ねえ」
ロザリーはまた鱧を食べて考える顔になる。彼女にしては珍しく哲学的な顔になっていた。
「だからか。この味は」
「どの料理でもそうだがな」
ダンもまた同じ顔になっていた。
「それだけじゃないしな」
「それだけじゃない？」
「おっと」
また貫之がここで入る。
「ですからそれ以上は」
「すいません、それでは」
「はい。後のお楽しみで」
「？何か怪しいわね」
七海だけでなく皆そう思った。
「隠すのはよくないわよ」

「隠すのがいいんだよ」
しかしダンはあえてこう言うのだった。
「それがな」
「まあお楽しみは後でねって」
ロザリーは事情はわからないにしろそれに乗ることにした。
「あたしはそういうことならいいよ」
「そう。それじゃあ今はまあ」
さばさばした性格の七海である。彼女もそれ以上言うことはなかった。
「お吸い物を飲んでね」
「鱧美味しいね」
彰子は話に全然入らずに食べているだけであった。彼女らしいと言えばらしいがやはり大きくずれていた。もっとも貫之もそんな感じがしているが。
「一度食べたら本当に病みつきになるから」
「昔は夏だけだったんだよな、これ」
ダンが言う。
「いつも食べられるっていうのはやっぱりいいな」
「その中でもやはり日本の鱧が一番です」
貫之が言ってきた。
「味が全然違うのです」
「そうなんですか」
「はい」
ダンだけでなく皆に述べる。
「八幡のものも津軽のも。他の国のものとは違います」
どちらも日本の星系である。日本が領有している星系は風光明媚でかる気候温暖な星系がかなり多い。そうしたところもかなり恵まれているのだ。
「他の国の鱧はどうも味が違いまして」
「気のせいじゃなくて」

「はい、気のせいではありません」
彼はきっぱりと言うのだった。
「料理してみて実際にわかりましたから」
「成程」
「この鱧もそれじゃあ」
「播磨のものです」
播磨星系も当然ながら日本の星系である。やはり風光明媚であり農業と漁業が盛んである。日本では観光地としても有名な場所だ。名物は海産料理と日本酒、白ワインである。そういったものが好きな者にはたまらない星系である。
「やっぱり」
「美味しいわけよね」
皆鱧に舌鼓を打った。その後で酒を飲んでデザートを食べた。かなり満足した宴であった。
「さて、と」
七海は全部食べ終えお勘定も終えてここであらためて言葉を出した。
「何が起こるかね、これから」
「そうだ」
ダンがそれに応える。
「まずはお店を出るぞ」
「あれっ、出るの」
まだ何かあるとばかり思っていたからこの言葉は意外であった。

第六十話　京風料理その六

「残るんじゃなくて」
「いや、出る」
しかしそれでも彼は言う。
「わかったな」
「ええ。それじゃあ」
何が何なのかわからないままそれに頷いた。
「有り難うございました」
「はい」
貫之が挨拶する。一向は店を出る。暫くは何もなかった。ところが。
「あれっ」
「これって」
皆が異変に包まれた。その異変は。
「おかしいな」
まず言ったのはロザリーだった。
「あれだけ食ったのにな」
「そうよね」
それに七海が応える。
「あと同じ位食べられそう」
「湯豆腐随分食ったのにな」
そうであった。皆湯豆腐を飽きる位食べていたのだ。それでもまだ同じ位を食べられるというのは有り得ないことであった。彼等はそれに驚いていた。
「しかも」
「これは」
そして他にもあった。
「この香りって」

「残ってる？」
もう一つの異変は香りであった。口の中を香りが漂っていたのだ。
それが絶妙なハーモニーを醸し出し彼等を魅了していたのである。
「鱧だけじゃないし」
「他にも」
「これなんだ」
ダンが皆に告げた。
「京料理ってのはな。味は薄いだろ」
「味がなかった」
洪童の言葉である。
「それも全然な」
「それは極端じゃないのか？」
タムタムが彼に突っ込みを入れる。
「幾ら何でも」
「けれど本当に何も感じなかったぞ」
それでも彼は言う。
「何にもな」
「そりゃあんたあれだよ」
そんな彼にロザリーが突っ込みを入れる。
「毎日辛いのばかり食べてるからだろ。だから繊細な味が」
「俺はわかったけれどな」
同じく辛口嗜好のフックが言う。
「あの繊細な味がな」
「あんた味覚鋭いしな」
ロザリーは彼にはそう告げた。
「だからだよ」
「そうか」
「それでな、洪童」
ロザリーはあらためて洪童に言葉をかける。
「本当に何も味がなかったのか」

「ああ、全くだぜ」
彼は素直に答えてきた。
「それがどうかしたんだ？」
「どうしたもこうしたも」
そこまで聞いてあらためて呆れるロザリーであった。
「韓国人っていうのは。昔から」
「その辛いのがいいんだよ」
その韓国人の言い分である。
「辛さに馴れるとな。やっぱり違うんだ」
「そんなもんかね」
「そうだ。といっても俺はかなり甘いのも好きだけどな」
「ああ、それはわかるよ」
ロザリーはその言葉に頷いた。
「わかるのか」
「だってさ」
それであらためて言う。
「金内相だってそうじゃないか」
連合きっての無類の甘物党の名前が出て来た。彼女のその甘さへのこだわりは誰もが知っている。それで成人病にもならず太りもしないのがまた凄いと言われている。
「それもそうか」
「韓国料理ってのは辛いのか甘いのかしかないのか？」
「他にもあるぞ」
洪童は胸を張って堂々と反論してきた。
「あるのか」
「すっぱいのと苦いのと苦いのがな」
「どれもはっきりしてるんだな」
「それが韓国料理だよ」
かなりぶしつけな言葉であった。
「強烈な個性がな」

「何となくわかるな、それは」
ダンはそこまで聞いてポツリと呟いた。

第六十話　京風料理その七

「韓国という国を見ているな」
「そうか」
「ああ」
韓国は連合においてもかなり強烈な個性を持つ国として知られている。しかも強烈なだけではなく自己主張も極めて激しい国でもある。
「よくな」
「そうか。とにかくあの料理味はしなかったな」
「結局それかよ」
ロザリーはあらためて呆れた。
「全くあんたは」
「しかし。あれだな」
だが彼はここで言うのだった。
「今口元からな」
「感じるか」
「よく感じるさ」
今度はダンに答えた。
「香りだよな」
「そうだ。いい香りだ」
ダンは満足そうな声で述べた。
「今までに食べた食材が。見事なハーモニーを醸し出してな」
「これがか」
京料理の秘訣であった。ここにあったのだ。
「どうだ？いい感じだろ」
「今までこんなことはなかったよ」
「そうだね」
ロザリーも頷く。

「これが京料理なんだね」
「よく言われていたことだが」
ダンは少し蘊蓄になった。
「京料理は味だけじゃない」
「味だけじゃないのか」
「風味も楽しむものだってな。言われていたんだ」
「成程ねえ」
ロザリーはそれを聞いてしきりに納得した顔になっていた。
「そんなもんなのか」
「今までは違っただろ」
ダンはロザリーと洪童だけでなく皆に告げてきた。
「やっぱり。味だけで」
「そうだな」
アルフレドがそれに頷く。
「香りも楽しんでいたがここまではな」
「そういうことだ。それが京料理と言うものらしい。俺も今日やっと思い出した」
「それ考えると凄いわね」
七海があらためて言う。
「彰子ちゃんのお兄さんって」
「そうかなあ」
ところがその彰子はいつもの様子であった。
「そうは思わないけれど」
「いつも側にいたら案外わからないものだ」
ダンは哲学的な言葉を述べてきた。
「案外な」
「そうなの」
「そんなものだ。近くだとわからないが遠くからだとわかる」
そしてまた言う。
「その凄さがな」

「兄さんって凄いんだ」
またしてもとぼけた言葉であった。
「それじゃあ」
「そうだよな。今回は何かと勉強になったぜ」
どうやらカムイが一番何かを掴んだようであった。
「よし、俺は決めた」
「何を決めたのよ」
「それは明日からわかることさ」
根拠がないのではないかと思える程底抜けに能天気な言葉であった。
「明日からな。じゃあ今日はこれでな」
「おい、二次会はいいのかよ」
「いや、それは参加して」
ロザリーの言葉にすぐに戻って来た。
「それから明日に」
「そういうところはやっぱりあんただな」
そんなカムイに対して突っ込むロザリーであった。
「二次会って聞いて戻って来るのが」
「気にしない気にしない。とにかくな」
「明日からのあんたに期待だね」
「そうさ。俺はやるぜ」
一人燃えていた。まるでフランツの様に。
「何があってもな」
「何に燃えてるかわからないけれどさ」
ロザリーが燃えている彼にまた突っ込みを入れた。
「皆に迷惑はかけないようにな」
難しい注文を出した。そしてそれが裏切られることも大騒動になることもわかっていた。それは既に予定されたことであったからだ。

京風料理　　完

2007・10・7

第六十一話　非常識一直線その一

非常識一直線

飲み会から一夜明け。二年Ｓ１組の面々は無事登下校を済ませ教室にいた。そうしてホームルーム前ののどかな一時を過ごしていた。

「よお、お早う」

「お早う」

「昨日は楽しかったね」

「そうね」

取り留めのない話ばかりしている。その中で誰かがふと気付いた。

「あれ、いないな」

「誰が？」

「いや、カムイがさ」

「そういえば」

見ればカムイがいない。彼は休み知らず遅刻知らずが取り柄なのにだ。その彼がいないというのはかなりの事件であると言えた。

「死んだか？」

「まさか」

それはすぐに否定された。殺しても死ぬような男ではないからだ。

「遅刻でもないよな」

「それもないでしょ」

それも否定された。遅刻するような男でもないからだ。

「じゃあ何かだよな」

「交通事故か？」

「ちょっと」

ビアンカが双子の言葉に顔を顰めさせる。

「不吉なこと言わないでよ」

「しかし。可能性はゼロではない」

それでもアルフレドは言うのだった。

「あいつはかなりそそっかしいからな」
「まあそうだけれど」
これはビアンカも認める。
「おまけに信号見ないし」
「そうだ。だからだ」
「本当に何処行ったんだろうな」
「まだ来ていないなんてな」
「そんなに気になるんだったら」
ここでウェンディが提案してきた。
「携帯かけてみたら？」
「それがあったな」
アルフレドは言われてやっと思い出した顔になっていた。
「ではそれで行こう」
「わかったわ。それじゃあ」
ウェンディはそれを受けて携帯のメールを入れた。メール先はもう決まっていた。
「いるわ」
すぐにそれがわかった。
「返信も返ってきたし」
「それでどう言っている？」
「今何処にいるの？」
アルフレドとビアンカはウェンディに問う。
「ええと。校門みたい」
ウェンディはそのメールの返信を見ながら告げた。
「何でもそこでナンパしてるんだってさ」
「ナンパ！？」
皆それを聞いて思わず声をあげた。
「ナンパってちょっと」
「フックじゃあるまいし」
「何がどうなってるんでしょうね」

メールを受け取ったウェンディ本人もそれを言う。
「これってさ」
「何がどうってねえ」
ビアンカも困惑した顔になっていた。
「訳がわからないわよ」
「そうよね、あのカムイが」
ウェンディはまた言う。彼女だけでなく皆首を傾げるしかなかった。
「それでだ」
その中でアルフレドが問う。
「遅刻はしないんだろうな」
「ああ、ちょっと待って」
ウェンディは今度は直接電話をかけた。それで話を聞くつもりなのだ。
「あのさ」
「おお、今度は何だ？」
カムイの声が聞こえてくる。やたら明るい。
「何だじゃないわよ。あんた遅刻とかしないわよね」
「おっと」
とぼけた返事が返ってきた。
「そうだったよな」
「そうだったのよってあんた」
ウェンディはこの言葉にまた驚いた。
「無遅刻無欠席が自慢でしょ。何してるのよ」
「わかったよ。じゃああと一人声をかけてから」
「あと一人って」
また信じられない言葉であった。少なくともカムイの言葉には思えないものであった。これがフックならば大いに納得できるものであったが。
「とにかく。遅刻はしないようにね」

「ああ、わかってるさ」
明るい声であった。そこまで言うと向こうから電話を切るのであった。

第六十一話　非常識一直線その二

「そういうことだから」
「信じられないわね」
ビアンカはその奇麗な眉を顰めさせてコメントした。
「あのカムイが」
「そうだよな」
皆も同じ意見であった。
「急に女の子をナンパするなんて」
「確かにあいつ彼女いないけれどさ」
これであまりにも有名である。これによりクラスでは洪童と並んでバレンタインやクリスマスでは危険人物と認定されている程である。洪童は何だかんだで妹や兎が一緒にいてくれるが彼に関してはそうしたことは全くないのが現実である。
「それでもねえ」
「やけになったのかな」
「だとしたらまずいわよ」
ウェンディは深刻な表情で皆に述べた。
「遂に狂った」
「あんまり彼女がいないんで」
「それでいよいよ」
皆もかなり滅茶苦茶言う。全く容赦がない。
「何とかしないといけないわ」
アルフレドは事態を深刻に受け止めていた。
「このままでは大変なことになるぞ」
「ええ」
それに双子の妹が頷く。彼女も腕を組んで考える顔になっていた。
「悪い芽は悪いうちに摘み取っておかないと」
「そうだ。それでだ」

妹の言葉に頷いたうえでまた言う。
「僕に考えがある」
「どうするの？」
「彼の目を醒まさせる」
そう述べるのであった。
「ここはある人の協力を頼んでな」
「ある人って？」
「この街の外れに研究所があるな」
ふと急にといった感じで研究所の名前を出してきた。
「あそこに」
「あそこ！？」
だが皆は研究所と聞いて顔を急激に曇らせていくのであった。
「あそこって確か」
「ねえ」
そのうえでヒソヒソと話をする。まるで地獄か悪魔を語るかのように。
「頭のおかしい博士がいるんでしょ？」
「何か得体の知れない」
「そうだ」
しかもアルフレドもそれを知っている。
「その通りだが」
「じゃあ尚更よ」
「何でそんなおっそろしい人のところに」
「こういう言葉を知らないか？」
アルフレドはムキになって止めようとする皆に対して言うのだった。
「何だよ」
「毒を以って毒を制す」
昔からよく使われる言葉である。多くの場合弱い毒を消そうとしてより強い毒を使ってさらに大変なことになってしまうのであるが。

「そういうことだ」
「兄さん」
ビアンカが兄を注意してきた。
「あの博士だけは駄目でしょ」
「そうか」
「そうよ。この前何か惑星を巨大ロボットにしようとしていたらしいじゃない」
そうしたことが続いて日本政府どころか中央政府にまでマークされている人物である。連合においてはあのシャバキと並ぶ奇人とされている。
「下手したら学校が消し飛ぶわよ」
「まさか」
「そのまさかよ」
妹として必死に忠告する。

第六十一話　非常識一直線その三

「あの博士はマッドサイエンティストだから当然よ」
「だからなんだが」
「毒を以ってどころか猛毒なんだけれど」
どうやらその博士というのはとことんまで危険な人物だと思われているようだ。少なくとも連合では何かあれば宇宙人の人類征服の序曲だの人類滅亡の序曲だのと騒ぎ遂には精神病院に隔離された御仁と同じレベルで言われているのだからまともである筈がないが。
「だから絶対に駄目よ」
「そうか」
「そうよ。他の方法じゃないと」
「そうは言われてもだ」
どうやらアルフレドは他に案がないようであった。
「これといって」
「何でよ」
ビアンカはそれを聞いてまた突っ込みを入れた。
「他に幾らでもあるじゃない」
「何かあるかな」
本当にないようであった。
「その何かが」
「例えばカムイに彼女を見つけてあげるとか」
「おいおい、またそりゃ随分と」
洪童がここで出て来た。
「カムイにだけ寛大だな」
「っていたの」
ビアンカは今やっとその洪童に気付いた感じであった。
「見ないと思ったら」
「最初からいたぜ」

洪童はそう彼女に突っ込みを返した。
「全く。俺を忘れちゃ困るな」
「忘れていたけれど言いたいことはわかるわ」
嫌でもわかることであった。
「あれでしょ？彼女が欲しい」
「その通りだ」
そういうことであった。
「カムイに彼女を紹介するんならな。俺だって」
「あんたも。諦めてなかったの」
「誰が諦めるんだよっ」
ムキになって言い返してきた。
「俺だってな、彼女が欲しいんだ」
「ふんふん」
ビアンカはそんな彼の言葉を腕を組んだまま頷いて聞く。とりあえず話は真面目に聞いているのはわかる。とりあえずは、であるが。
「だからだ。あいつに紹介するなら俺にだって」
「ちょっとあんたはねえ」
そこでウェンディが言う。
「諦めなさい」
「おい、ウェンディ」
「何てきつい」
皆今の彼女の言葉には思わず引いた。これも当然であった。
「何っ、それはどういう意味なんだ」
「今はカムイの話してるんだから」
呆れた調子で彼に述べるのだった。
「あんたは今度。いいわね」
「今度か」
「そう、今度ね」
話を上手く進ませて洪童を話の外へやっていた。
「今度があるから。今はね」

「仕方ないな」
彼もそれに納得する。上手いこと誘導されているとは気付いていない。ここはウェンディの方がずっと上手であった。
「じゃあ今度な」
「ええ。それでね」
ウェンディは洪童を退けて無事カムイの話に入った。
「カムイよね、問題は」
「ええ」
「どうするか」
それであった。話はそこなのだ。
「彼女っていってもねえ」
「知ってる娘いるの？」
「全然」
ビアンカへの返答はあまりにも素っ気無いものであった。
「私の知り合い皆彼氏持ちよ。結婚してるのもいるし」
「結婚って」
高校生で結婚なのかと。法律的にはいいが流石にこれには皆引いた。

第六十一話　非常識一直線その四

「ああ、大学生だからその知り合い」
すかさずそうフォローを入れた。
「安心して。従姉なのよ」
「何だ、そうだったんだ」
「まあそれでも結構びっくりだけれど」
大学生で結婚はあるが。それでもやはり驚くべきものがある。
「だから駄目なのよ」
ウェンディはまた言う。
「私もねえ。実は」
「いるんだ、彼氏」
「一応は」
さりげなく爆弾的な告白であった。衝撃の事実とも言える。
「いるわよ」
「じゃあ無理ね」
「残念だけれど」
「ええ。誰か探すしかないけれど」
ウェンディはまた言う。
「誰かいないのかしらねえ」
「一人位はいるんじゃ？」
不意に蝉玉がこう言ってきた。
「探せば」
「探せばねえ」
「ほら、この学園って女の子も多いし」
そうウェンディに言う。実際に八条学園は女の子もかなり多い。
男と比べて半々といったところだ。そのうえ生徒数が洒落にならないといったレベルではないのでその数は必然的に多いのである。
「一人はいるでしょ」

「そうだよね」
蝉玉の言葉にスターリングも頷く。
「探せばね。やっぱり」
「そうね。それじゃあ」
ウェンディはそれを聴いて決断を下すのであった。
「じゃあ蝉玉とスターリング」
「ええ」
「何かな」
二人も彼女の言葉に顔を向ける。
「御願いね」
「えっ」
「何を!?」
「だから。カムイの恋人候補を探してきて」
にこりと笑って二人に告げる。
「それを御願いするわ」
「えっ、私が!?」
「僕が!?」
話を振られた二人は思わず目を点にさせた。
「だって。言いだしっぺじゃない」
「そういえばそうよね」
ビアンカはウェンディの言葉に頷く。先程のスターリングと全く同じ流れであった。
「じゃあやっぱり二人が」
「御願いするわよ」
「そう言われても」
話を振られた蝉玉はかなり露骨に困った顔を見せるのだった。
「私もねえ。知り合いは皆彼氏いるし」
「僕も」
それはスターリングも同じであった。
「皆付き合ってる女の子いるよ」

「いるんだ」
「うん」
ビアンカの問いにこくりと頷く。
「何か羨ましいわね」
ビアンカはここで何故か嫉妬を見せるのであった。
「それって」
「ちょっと待って」
そのビアンカの言葉でウェンディはふと気付いた。
「あんた彼氏とかいないの」
「中学校の時はいたけれど」
またしても衝撃の事実がわかった。ビアンカも彼氏がいたことがあったのだ。
「卒業で学校が離れてそのままよ」
「そうだったの」
「だから今はいないの」
とても言いにくいことだったがあえて言うのだった。
「悪いわね」
「別に悪くないわよ。相手は同級生だったのね」
「ええ」
それもまた認めた。
「今どうしているかしら」
「元気にしていればいいけれどね」
「あの」
ビアンカの話になっていたがスターリングがここでまた言ってきた。
「それでさ」
「私達だけれど」
「あっ、いけない」
ウェンディは話を振られてやっと思い出した。
「そうそう、探すのよね」

「そう、それよ」
「僕達もこれといってあてがないんだけれど」
「それでも御願いできるかしら」
ウェンディもかなり無茶を言う。

第六十一話　非常識一直線その五

「ここは是非共」
「どうしよう」
「そりゃ頼まれたんだし」
スターリングと蝉玉は二人で話し合いをはじめた。そもそも婦唱夫随タイプのカップルでありしかも蝉玉がこうした頼み事は断れない性格だったので話はウェンディの望む方向に行っていた。
「受けるしかないでしょ」
「やっぱりそうだね」
スターリングもそれに頷く。これで決まりであった。
「いいわ」
蝉玉は言った。
「探してみるわ。それでいいわよね」
「ええ、御願い」
ウェンディはにこりと笑って答えた。
「私とピーターも協力するから」
「ピーターって？」
「私の彼氏」
どうやらそんな名前らしい。
「色々と顔が広いから。頼りになるわよ」
「そうなの」
蝉玉はウェンディの彼氏の名前をはじめて聞いたのだった。それは皆も同じであった。本当に今日は何気なく衝撃の事実が次々とわかる日であった。
「だから私も一緒ね」
「御願いできる？」
蝉玉はウェンディに頼む。
「それで」

「勿論よ。言い出しっぺだしな」
こういうところはしっかりしている彼女であった。左目でウィンクして答えてみせてきた。
「任せておいてよ」
「じゃあこれで三人？」
スターリングはメンバーを見てふと言った。
「僕と蝉玉とウェンディで」
「いえ、四人よ」
しかしウェンディはこう言うのだった。
「四人って？」
「だってあれじゃない」
彼女はスターリングに応えて述べる。
「私の彼氏もいるし」
「あっ、そうだったね」
スターリングは言われてやっと気付いた。
「ピーター君だったっけ」
「そうよ、彼が主力になるから」
「そうなんだ」
けれどスターリングは今一つ不安であった。それはピーターというのがどんな人間なのかわからなかったからだ。わからないと不安になるのは当然だ。
「安心していいわよ」
「じゃあさ」
今度は蝉玉がウェンディに問うた。
「はい。何かしら」
「あんた達二人がメインになるの？」
「まあ半々かしら」
ウェンディは首を少し傾げさせて述べてきた。
「そこのところは」
「半々なの」

「資料を調べるのも探すのも一緒にやりましょう」
彼女はそう提案してきた。
「それでいいわよね」
「まあ別にね」
蝉玉としても断る理由はない。
「わかったわ」
「それじゃあ早速打ち合わせね」
話が決まると動くのは早かった。
「ペーターも呼んで」
「わかったわ」
蝉玉はその申し出ににこりと笑ってみせた。
「そういうことでね」
「場所は」
「あっ、待って」
ところがここでスターリングが言ってきた。
「どうしたの？」
「ひょっとして今すぐはじめるつもりなのかな」
「そうだけれど」
ウェンディはそりゃそうでしょと顔で言って彼に応えた。
「何か不都合でもあるの？」
「時間が」
彼はそう言ってきたのだった。
「時間がないけれど」
「あれ、そうなの」
「だってさ」
ビアンカも話に入ってきた。
「もうすぐホームルームよ」
「あっ、そうね」
言われてそれを思い出した。ウェンディもうっかりしていた。
「そういえば」

「今回はこれでお開きだな」
アルフレドも言う。
「あいつも戻って来ているだろうし」
他ならぬそのカムイである。
「先生も来られるしな。だから」
「わかったわ」
ウェンディは少し残念な顔をするが頷くしかなかった。
「それじゃあ詳しい話は後でね」
「了解」
「わかったわ」
スターリングと蝉玉がそれに頷く。
「放課後にでも話しましょう」
「じゃあこれで話はとりあえず終わりね」
ビアンカが締めに入った。
「席に着きましょう」
「そうだな」
「やあやあ皆」
アルフレドが双子の妹の言葉に答えたところで。肝心の主役がクラスに入ってきた。
「元気かな」
「来たわね」
ビアンカはその彼を横目で見て呟いた。
「相変わらず能天気ね」
「その方がいいわよ」
だがウェンディはそれを問題にはしなかった。
「気付かないでくれるから」
「それもそうか」
「そういうこと。じゃあ」
自分の席に向かう。
「続きは放課後ね」

「ええ。それにしても」
蝉玉は自分の席に向かいながらふと考える。
「ウェンディの彼氏かあ」
「どんな人だろうね」
スターリングもそれが気になっていた。一体どんな人間なのかと。
謎は何気に転がっていた。二人はその謎についてまずは思うのであった。

非常識一直線　　完

２００７・１０・１２

第六十二話　爽やかな若者その一

爽やかな若者

放課後になった。蝉玉とスターリングはウェンディ、それとその彼氏とカムイの彼女を探すことで打ち合わせをすることになっていた。その時間になったのだ。

「さてと」

「どんな人なのかな」

クラスではかなり常識派の二人はいささか不安であった。まともな人間かどうかが問題であったのだ。

「ウェンディもねえ」

「あれで結構凄いところあるし」

個性派揃いのクラスだ。これも当然であった。

「どうなのかな、そこのところは」

「そんなに心配？」

そこにビアンカがやって来て二人に声をかける。

「ウェンディの彼氏に会うのが」

「心配じゃないって言ったら嘘になるわよね」

蝉玉は素直に彼女にそう告げた。

「やっぱり」

「僕も」

スターリングも素直に告げた。

「何となくだけれど」

「じゃあ私も一緒に行くわ」

世話好きの彼女はそれに乗ってきた。

「それでいいわよね」

「いいの？」

「いいわよ。乗りかかった船だし」

にこりと笑って二人に告げた。

「ついでに最後まで手伝わさせてもらうわ」
「有り難う」
「恩に着るわ」
「いいわよ。これで五人ね」
「いや」
だがここで。もう一人名乗りを挙げてきた。
「六人に予定変更だ」
「兄さん」
ビアンカが後ろを振り向くと彼がいた。アルフレドが。
「僕もいいかな」
「アルフレド」
蝉玉とスターリングはアルフレドの姿を見て声をあげる。彼まで来るとは流石に思いもしなかったのだ。
「いいの？あんたも」
「ビアンカも一緒だしな」
アルフレドはにこりと笑って蝉玉に告げた。
「僕でも何かの役に立てればいい」
「悪いね」
スターリングが彼に礼を述べた。
「君まで出てもらって」
「いいさ。困った時はお互い様だ」
「そういうこと。それにね」
ビアンカはまた笑って二人に告げる。
「私もウェンディの彼氏には興味があるし」
「僕もだ」
「興味、あるんだ」
蝉玉にはこれがわからなかった。スターリングも。
「私それはかなり不安なんだけれど」
「僕も」
二人で言う。

「何が起こるかって考えたら」
「今までこうしたことで普通の人が出たことないしね」
「それがいいんじゃない」
「そうだな。それがいい」
だが双子は。それがいいと言う。二人とは考えもスタンスも完全に違っていた。
「気楽にいきましょうよ」
「楽しんで」
「楽しんで、ね」
蝉玉はその言葉にふと考えが変わったのを感じた。
「それもそうね」
「そうだね」
スターリングもそんな気になっていた。
「心配しても何もならないし」
「それならいっそのこと」
二人もこのクラスの一員であった。それならば。
「楽しむとするわ」
「それでいいんだよね」
「ええ。そういうことよ」
ビアンカがにこりと笑って二人に告げた。
「わかったらじゃあ」
「行こうか」
アルフレドが誘う。
「いざ約束の場所へ」
「敵は強いかも知れないけれど」
「それはちょっと大袈裟なんじゃないかなあ」
流石にスターリングもそこまでは考えていなかった。
「やっぱり」
「ねえ」
蝉玉もそこを言う。

「まあまあ」
「気にせずに」
けれど双子がそれをフォローして。そうしてその戦場へと向かうのであった。

第六十二話　爽やかな若者その二

学校の中の喫茶店の一つ。高等部の二年S系列の校舎のところにそれはある。そこに入るともう相手はいた。しかも二人共。

「こっちよ」

ウェンディが声をかけてきた。もうテーブルにいる。店の中は中華風で赤と黒の妖艶な色彩の中でレトロな音楽が流れている。ミスマッチなようでいて決してそうではないのが不思議だ。

「何かねえ」

蝉玉は店の中を見回して言う。

「このお店来るのは久し振りだけれど」

「どうなの？」

「変わらないわね」

それが彼女の言葉であった。

「相変わらずっていうのかしら」

「けれど蝉玉このお店好きでしょ」

「嫌いじゃないわ」

そうビアンカに述べる。

「この雰囲気ってね」

「やっぱり中国人だから？」

「ええ」

そういうことであった。こくりと頷いてみせる。

「中国にこうした喫茶店多いの。だから余計にね」

「懐かしいと」

「そういうこと。今度来る時は」

ここでスターリングをちらりと見てそれから言う。

「二人だけでしっとりとね」

「わかったよ」

スターリングも穏やかな笑みでそれに頷いてみせる。

「また近いうちにね」
「他のお店もいいのだけれど」
最近彼等は学校の中の他の喫茶店を回っていたのだ。それでこの店には中々来てはいなかったのである。そういうことであった。
「やっぱりここが一番かしら」
「そうね、悪くはないわね」
それにビアンカも頷く。
「ここのコーヒー味もいいし」
「そういうこと。じゃあウェンディも呼んでるし」
「行きますか」
ウェンディのいる席まで行く。そうするとそこには赤髪の中性的な顔立ちの男の子がいた。
背はあまり高くない。痩せ身ですらりとしている。その顔を見ていると何かこちらまで穏やかで楽しい気持ちになれる、そうした顔をしていた。
「やあ」
その少年が席を立って四人に挨拶をしてきた。
「はじめまして。ピーターだよ」
そうして名乗る。
「ピーター＝ライネック。宜しくね」
「ライネック、ねえ」
蝉玉はそれを聞いて微妙な顔をするのだった。
「まずははじめまして」
「はじめまして」
そして挨拶をしてからまた述べる。
「悪いけれど何処の人かしら」
「クロアチア人だよ」
ペーターはそう名乗る。
「何かおかしいかな」
「いえね」

蝉玉は首を傾げながら述べる。
「何かクロアチア系の名前じゃないかなって思えて」
「ああ、これね」
それに応えて述べてきた。
「僕元々ケルト系なんだ」
「そうよねえ」
そうなのだ。ライネックというのは妖精の名前である。姓にするのはやはりケルトなのだ。それでクロアチア人というのが違和感があるのだ。クロアチアはスラブであるからそちらの名前になるのが普通だからだ。
「移住してね。それで」
「ああ、それでね」
蝉玉はそれを聞いて納得して頷くのだった。

第六十二話　爽やかな若者その三

「そのせいだったのね。変な顔をして御免ね」
「いいよ、それは」
笑って彼女に言葉を返す。気さくな笑みだった。
「それよりさ。皆ウェンディの友達だよね」
「うん」
「そうだけれど」
スターリングとアルフレドがそれに答える。
「話は聞いているわよね」
「うん」
今度はビアンカの言葉に応えてきた。
「クラスメイトの彼女を探して紹介するんだよね」
「そういうこと。じゃあ話をはじめましょう」
そのウェンディが音頭を取って話をはじめる。皆それぞれテーブルに着いて話に入るのであった。
それぞれコーヒーを飲みながら話に入る。蝉玉はまずはコーヒーに目を細めさせた。
「相変わらずいい味してるわね」
「そうね」
それにウェンディが頷く。
「中々ね」
「やっぱりコーヒーはこうじゃないと」
蝉玉はクリープを入れたコーヒーを飲みながらまた述べる。
「飲んだ気がしないわ」
「そうだよね」
それにピーターが頷いてきた。
「僕もここのコーヒーは好きだよ」
「へえ」

スターリングは彼のその言葉を聞いて声をあげた。
「そうなんだ」
「ここにはよく来るし」
そしてまた述べる。
「贔屓にさせてもらってるわよ」
「それも二人でね」
ウェンディも述べてきた。
「この席で飲んでるのよ」
「そうだったの」
ビアンカはそれを聞いて少し意外だと顔で言っていた。
「それはまた」
「衝撃の事実ね」
「そうかしら」
だがウェンディはそれには実感がないようであった。首を傾げる動作もいぶかしむ顔もそれをはっきりと見せているのが何よりの証拠であった。
「私は別にそれは」
「そうだよね」
ピーターもそれに相槌を打つ。
「普通だし」
「まあ確かに普通よ」
蝉玉もそれは認める。
「けれどあんたがここでコーヒーをってのはイメージじゃないし」
「イメージなのね」
「わかったわ」
「ええ。だからそれが意外っていうのよ」
いぶかしむ顔を消して答える。
「まあそれはそれでね」
「そうそう、それでね」
スターリングが話を進めさせようと切り出してきた。

「まずは皆で席に着こうよ」
「ああ、そうだな」
アルフレドもその言葉に頷く。
「落ち着いて話でもするか」
「ええ。それじゃあ」
ビアンカが応える。こうして彼等はテーブルを囲みそうして話に入るのであった。
話は順序よく決められていった。まずはカムイのことである。
「悪い人じゃないんだよね」
「ええ」
ウェンディが恋人に答える。いつもより三割増しにこやかな顔で。
「そうよ。明るくてきさくだしね」
「ただね。これが珠に疵で」
蝉玉はここぞとばかりに残念そうな笑みを浮かべた。
「彼女がいないのをやたら気にしていて」
「そうなんだ」
スターリングは困った顔を見せている。彼はどちらかというと深刻に受け止めていた。
「そんなに気にすることないと思うのね」
「そうなのよねえ」
ウェンディも彼の言葉を完全に認めていた。
「何であんなに狂うのかしら。洪童といい」
「まあそれは彼氏や彼女いる人にはわからないわよ」
ビアンカはそれはちゃんとわかっていた。
「そうよね、兄さん」
「その通りだな」
アルフレドも妹と同じ考えであった。
「彼は彼で悩んでいるんだ」
「悩んでいるっていうかあれって」
蝉玉はまた突っ込みを入れる。

第六十二話　爽やかな若者その四

「発狂っていうか覚醒っていうか。そんなのよ」
「それをどうするかが今の話だけれど」
ウェンディもまた話に突っ込みを入れる。
「とりあえずカムイのことは完全にわかったわよね」
「うん」
ピーターはにこりと笑って頷いた。
「これでね。別に問題に思えるものじゃないね」
「馬鹿なだけよ」
ウェンディの言葉には微塵の容赦もない。彼女にしてみれば彼の悪いところはそれなのだ。ひとえに馬鹿なだけなのだと。そこが問題なのだ。
「馬鹿だから今の話だし」
「彼女ねえ」
ウェンディは腕を組んで思案の顔に入った。
「あれで顔も悪くはないしね。そこもクリアーされてるわね」
「そうね」
皆その言葉に頷く。だが実際のところ交際というものは実際のところは顔はあまり関係ないのだ。性格もかなり悪くても普通にいたりもする。あくまできっかけということなのだ。きっかげがあってこそ恋愛ができるということなのだ。なければどうしようもないものだ。
「けれど」
「とにかく馬鹿なのは抑えさせて」
皆そこもマークする。徹底させてきていた。
「話を進めよう」
「そうしてあれね」
ビアンカは兄の言葉に続けてきた。

「その彼女候補は」
「僕の妹なんかどうかな」
不意にピーターが提案してきた。
「妹って？」
「いたんだ」
「あれっ、言ってなかったっけ」
ピーターは目をパチクリさせてウェンディに問うた。
「前に」
「いいえ」
今度もまたわかる衝撃の事実であった。あまりにも衝撃の事実ばかりわかるので皆流石にいささか辟易も感じていた。だがそれはあえて顔には出さないのであった。
「初耳だけれど」
「そうだったんだ。けれどこれでわかったよね」
「まあね」
ウェンディは答える。
「かなりね」
「そう、よかった」
これに対して素直によかったと答えられるピーターであった。
「それなら話は決まりだね」
「決まりって？」
「だからさ」
そしてまた言う。
「僕の妹をカムイの彼女に」
「いけるかしら」
「さあ」
ウェンディは蝉玉の問いに首を傾げさせる。
「カムイって年下オッケー？」
「そこまではわからないわよね」
首を傾げるしかなかった。実はそこまでは知らないのだ。

「何か話を聞いていたら」
「誰でもいい感じだけれど」
彼女がいない、彼氏がいない相手というのは必然的にそうなってしまうのだ。とにかく誰でもいいから欲しいとなるのだ。けれどそれでも見つからない時は見つからないものである。
「どうかな、そこのところ」
「まず調べてみないと駄目かしら」
「ああ、それは大丈夫だよ」
ここでスターリングが女の子二人に言ってきた。
「大丈夫なの」
「彼誰でもいけるから」
予想通りの答えであった。
「可愛かったらね」
「好きなタイプとかないの？」
ビアンカはスターリングにそこを尋ねた。
「アイドルだと誰が好きだとか」
「神崎亜矢ちゃんが好きだね」
連合のトップアイドルである。かなりの実力と人気を誇っている。水着の写真集を出してそれが飛ぶように売れたという実績も持っている。
「亜矢ちゃんねえ」
「けれど彼女好きな子は多いし」
八条学園でも人気がある。理事長である八条義統が自分が務めている中央政府国防省のイメージガールにしたことも大きい。なおこれで八条とトップアイドルの噂が出掛けたが八条のあまりもの朴念仁さがそれを見事に消してしまった話もある。
「あまり参考にならないわね」
「そうね」
蝉玉がビアンカのその言葉に頷いた。
「残念だけれど」

「じゃあアイドルは参考から外すね」
「そうね。残念だけれど」
ビアンカはスターリングのその言葉に頷くのであった。

第六十二話　爽やかな若者その五

「そういえばカムイの好みってわからないわよね」
蝉玉はあらためてそこに言及するのであった。
「何か誰でもいいって感じだけれどね」
「それは確かだよ」
アルフレドはそれに頷いてみせた。
「彼はかなりね。守備範囲が広いから」
「ふうん」
「まあ大抵の女の子ならいけるから」
「年上も年下も？」
「いいみたいだよ」
また蝉玉に答えるアルフレドであった。
「そこのところもね」
「じゃあそれでいいんじゃないかな」
ピーターはそこまで話を聞いて皆に述べた。
「僕の妹で」
「本当にいいの？」
ウェンディは彼氏にそこを念を押した。
「カムイで」
「うん」
ピーターは明るく頷いてみせた。
「物は試しだよ、何事も」
「それはそうだけれど」
ウェンディはあらためて深刻な顔を見せる。そうして彼氏にまた念を押す。
「相手は。馬鹿よ」
「ちょっとウェンディ」
ビアンカが困った笑いでウェンディに言う。

「オブラートにも包まないの？」
「ああ、御免なさい」
言われてそれに気付く。
「それはそうだけれどね」
「けれどまあ。確かにねえ」
何だかんだでビアンカも同じことを考えているのであった。
「カムイはねえ。本当に」
「まあフランツとかあの探偵コンビよりずっとましだけれど」
「彼等はまた特別だが」
アルフレドがすかさず突っ込みを入れる。
「無茶苦茶だし」
「まあそうね」
「洒落にならないし」
「ああ、野球部のエースと推理研究会の」
ピーターもそれは知っていた。何しろあまりにも有名な彼等だからだ。
「話は僕も聞いてるけれどね」
「知らない人いないんじゃ？」
「ねえ」
蝉玉とビアンカが顔を見合わせて言い合う。
「あの三人だけは」
「歩く非常識だから」
「カムイも女の子のことになると非常識なのよね」
ウェンディの言うのはそこであった。
「困ったことになるかもよ」
「それは匙加減ってことで」
だがピーターはあくまで楽天的であった。
「気にしない気にしない」
「そうなの」
「とにかくこれでいけるね」

ピーターの中ではそれで完結していたのであった。にこりとした笑みがそれを告げていた。
「そういうことでね」
「じゃあ後はあれ？」
スターリングがその彼に問う。
「妹さんとカムイを会わせるだけなんだ」
「そうだね」
ピーターはにこりと笑って答える。
「それだけでいいと思うよ」
「何か思ったより簡単？」
蝉玉はそう思った。ふと、であるが。
「この流れて」
「甘いと思うわよ」
しかしそれにウェンディが突っ込みを入れる。
「そう考えるのって」
「そうかしら」
「当たり前でしょ」
ウェンディは今度は顔を顰めさせてきたのであった。そして言うのは。
「カムイよ」
「カムイだったわね」
しかも蝉玉も彼女の言葉に頷くのであった。
「あのカムイだったわね」
「そう、本当にねえ」
腕を組んで困った顔を見せるのであった。見ればビアンカも同じような顔をしている。
「何であそこまで女の子のことになると暴走するんだか」
「しかもこれが凄い不思議なんだけれど」
ビアンカはあることに気付いた。
「何？」

「カムイってさ、うちのクラスの女の子には全然何も言わないわよね」

「あっ」

皆そのことに気付いた。はっとした顔になって声をあげるのであった。

第六十二話　爽やかな若者その六

「そういえばそうよね」
「どうしてかしら」
「たまたま？」
蝉玉はそう考えた。
「ひょっとして」
「いや、それは違うな」
だがそれはアルフレドが否定してしまった。
「彼はそんなのじゃない。あれだけ誰でもいいと言っている人間が」
「そうよねえ」
「じゃあ何でかしら」
蝉玉もウェンディもこれには答えが出ない。あれこれ考えてもどうしてなのか全くわからないのであった。しかもわからないとかなりイライラしてきた。
「まあここはね」
それを見てビアンカが二人に声をかけてきた。
「それはそれでいいんじゃないかしら」
「いいの」
「だって。考えても仕方ないじゃない」
うっすらと笑って述べるのだった。
「そうでしょ？」
「まあそうね」
「それじゃあ」
二人もそれに頷く。そこでスターリングが動いた。
「すいません」
「はい」
店員さんに声をかけていた。見れば洒落た黒いスーツの店員さんだ。何処か執事めいていてそれが店の雰囲気と妙に合っていた。

「パンケーキ下さい」
「幾つですか？」
「六つです」
そう注文するのであった。
「シロップたっぷりと」
「あっ、いいね」
ピーターはシロップたっぷりのパンケーキと聞いて嬉しそうな声をあげた。
「それって」
「パンケーキ好きなんだ」
「うん、それもかなり」
そうスターリングに答えるがやはりにこにこしている。
「やっぱりパンケーキだよね」
「私も」
ウェンディもそれは同じであった。
「やっぱりあれが一番よね」
「ああ、二人共なのね」
蝉玉はそれを聞いて少し意外といった顔であった。
「何か面白いわね」
「そうだね」
それにスターリングも頷く。
「僕と蝉玉って大好きなものは結構分かれてる感じだから」
「肉まんとハンバーガーとかね」
二人共両方食べるがそれでも大好物というとどちらかなのである。その辺りが結構難しいのである。食べ物の好みは一番複雑な問題の一つである。
「他にもあるわよね」
「そうだね」
「けれどパンケーキは？」
「大好きだよ」

「大好きよ」
にこりとしてピーターの言葉に応える。
「あれはやっぱりね」
「シロップたっぷりで」
そこも同じであった。お互い好きなものがここにあった。
「それでいくのが一番いいよね」
「そうそう」
「たっぷりと甘く」
ウェンディもかなりの甘党のようである。それがわかる言葉であった。
「それこそパンケーキの色が変わる位にね」
「何かそれってあれよね」
蝉玉がそれを聞いて言う。
「金内相みたいね」
「あの人はもっと凄いでしょうけれどね」
そこにそのパンケーキが来た。それも人数分。六人は笑顔でそれぞれの前にそのパンケーキが並べられるのを見ていた。この瞬間もまた実にいいものである。
「どんなのかちょっと想像がつかないけれど」
「まあいいんじゃないの？」
ビアンカはまずシロップをたっぷりとかけた。黄色いパンケーキの生地が忽ちのうちに紅茶色になっていく。それを楽しげに眺めてもいた。
「それでも美味しければ」
「まあそうね」
蝉玉も楽しげにシロップをかけながら応える。
「とにかく美味しくね」
「これで飲むのは」
「紅茶ね」
ウェンディはにこりと笑って述べた。

「やっぱりそれでしょ」
「そうよね。紅茶」
ビアンカもそれに頷く。
「しかもレモンティー」
「そうそう」
「やっぱりそれだよね」
それに賛成したのは蝉玉とスターリングのカップルであった。お茶の好みは同じであるらしい。

第六十二話　爽やかな若者その七

「レモンティーじゃなきゃ駄目よ」
「そうかしら」
だがウェンディはその言葉には懐疑的な顔を見せるのであった。
「私はそうは思わないけれど」
「じゃあ何なの？」
「ミルクティーでしょ」
それが彼女の意見であった。
「パンケーキといえば」
「そうだよね」
ピーターもそれに頷く。ビアンカはそれを聞いて言うのだった。
「それってあんた達の名前のせいなの？」
「名前って？」
「だって。ピーターとウェンディでしょ」
ビアンカはそこを指摘するのだった。中々的を得た指摘と言うべきであろうか。もっともそれを言えばビアンカもアルフレドも何かあるのであるが。無論一緒にいる蝉玉とスターリングもそれは同じである。
「その名前だとやっぱりミルクティーかしらと思って」
「あっ、そうか」
アルフレドもここで思い出した。
「ピーターパンはイギリスだったな」
「そう、それなのよ」
「あの、私イギリス嫌いなんだけれど」
「僕も」
ウェンディは不機嫌な顔を、ピーターは苦笑いをそれぞれ作ってみせてビアンカに答えるのだった。
「何であんな化石貴族の真似なんか」

「あくまで好みだよ。それも連合のね」
「そうだったの」
「当たり前でしょ。ここは連合よ、しかも日本」
少なくともエウロパのイギリスではない。ここが非常に大きい。
「何であんな海賊貴族の物真似なんかしないといけないのよ」
「幾ら僕でもそれはしないよ」
「それもそうね」
言った本人がそれに納得するのだった。
「御免ね。変なこと言って」
「気にしない気にしない」
ウェンディはもうにこやかな顔になってそのミルクティーを飲んでいた。
「細かいことだしね、よく考えたら」
「有り難う」
「それはそうとね」
ウェンディはあらためてビアンカに問う。
「あんた達は何飲むの？」
「コーヒー」
「僕も」
アルフレドも答えてきた。
「どうかしら」
「まあ別にいいんじゃないの？」
ウェンディは特にこだわることなくそう言葉を返した。
「それはね」
「そう。じゃあよかったわ」
「やっぱりコーヒーはあれだね」
アルフレドはにこりと笑ってここで言った。
「ウィンナーコーヒーが一番だね」
「何かそれが一番エウロパ的だね」
ピーターはそこを突っ込んで笑った。ウィンナーという言葉が示

すようにこの飲み方はかなりエウロパ的だと見なされてもいる。しかも貴族的だと。だからといって否定されているわけではないが。美味いものは美味い、そのことだけは誰も否定はできないからだ。

「そうだね。それでも美味しいから」

アルフレドはそのウィンナーコーヒーを飲みながらピーターに応える。

「それでいいよ」

「そういうこと。じゃあこれ食べて飲んだら」

ウェンディがまた言う。既にそのシロップたっぷりのパンケーキを半分以上食べてしまっている。

「ピーターの妹さんに会いに行きましょう」

「了解」

「わかったわ」

皆彼女のその言葉に頷く。

「そういうことでね」

「了解」

こうして話はあらたな局面に入るのであった。今度はピーターの妹であった。果たして何が起こり誰が出て来るのか、余談は許さなかった。

爽やかな若者　　完

２００７・１０・１９

第六十三話　ピーターの妹その一

ピーターの妹

喫茶店でパンケーキを食べ終えた六人は今度はピーターの家に向かった。そこは一軒のアパートであった。そこで妹と二人で住んでいるという。

「そういえばさ」

蝉玉がふとした感じで道中で言った。

「うちの学校って兄弟で同じアパートに住んでるの多いよね」

「そういえばそうだよね」

スターリングも彼女の言葉に同意して頷く。

「僕も蝉玉もそうだしね」

「やっぱりお金かからないしね。家事も分担できるし」

蝉玉の理由はそれであった。

「スターリングもそうじゃないの？」

「うん、そうだよ」

その通りだった。スターリングは彼女の言葉にまた頷いた。

「色々と楽だから、やっぱり」

「そうよね。一人って案外辛いのよ」

蝉玉は納得した顔で述べる。

「だから兄弟と一緒にいるとね」

「そうなのよね」

今度はビアンカが同意してきた。

「私最初一人暮らしだったのよ」

「そうだったの」

「ええ、寮でね」

一応この学校にも寮はある。だがそれよりもアパートの方が人気があるのである。やはりそちらの方が気楽だというのが理由である。

「寮は食べ物とかも出て一人部屋だけれどね。家事はやっぱり全部

一人じゃない」
「ええ」
「その分の手間もあるし。お金も余計にかかるし」
「ああ、そうだね」
スターリングはそこに突っ込みを入れた。
「一人で家事するにしても全部いるから」
「そうなのよ。それでしんどいから兄さんと一緒に暮らすことにしたの」
「僕も寮にいたけれどな、最初は」
アルフレドがここで述べた。
「だが。そうした事情で妹と二人になった」
「そうしたらお金が随分浮いたわ」
ビアンカは明るい笑顔で言う。
「それに兄弟だから気が知れてるしいいルームメイトだしね」
「そうよね」
ウェンディは皆の言葉に明るい顔で応える。彼女も兄弟がいるからわかるのだ。連合は子供の多い家がかなりある。それは中央政府も各国政府も子供の多い家に優先的な保護をしているからだ。育児休暇もかなり充実している。そのせいで人口も増え続けている。
「まあ兄弟によるけれど」
「フランツみたいのだったらねえ」
「妹さん大変みたいよ」
蝉玉、ビアンカ、ウェンディはまるでおばさんの井戸端会議みたいに話をしている。
「家事とか滅茶苦茶らしいから」
「そうでしょうね」
蝉玉はウェンディの言葉にそうでしょうね、という言葉そのままの顔で頷く。
「あんなのだと」
「それ考えたらうちは随分恵まれているわね」

ビアンカはここでアルフレドを見た。
「兄さんで」
「僕はそんなに」
「何言ってるの、随分助けられてるわ」
だがビアンカは優しい笑みで兄に言うのだった。
「お料理も上手いし」
「そうか。ならいいが」
「お料理が上手な男の子っていいわよね」
蝉玉は言葉が完全におばさんになっていた。
「最高に憧れるわ」
「そうそう」
ウェンディもその言葉に頷く。女の子の見るところは同じだった。
「それが一番もてる条件よね」
「そうなんだ」
スターリングは三人の話を黙って聞いていた。そのうえで述べた。
「料理が上手いといいんだ」
「そうよ」
蝉玉は今度は彼氏に顔を向けて笑ってみせた。
「その点スターリングは合格ね」
「有り難う」
「女の子もそうだよね」
ピーターも話に入ってきた。
「料理が上手いとね。やっぱり」
「言うわね」
ウェンディは不敵な笑みを彼氏に向けてみせた。
「その通りだけれどね」
「そうだよね。料理が上手いにこしたことはないよ」
そういうことであった。結局は男も女も料理ができて上手なのにこしたことはないのである。この時代流石に男子厨房に入らずなどとは誰も言わない。

「兄さんが得意なのはメキシコ料理なのよ」
ビアンカは誇らしげに言う。
「メキシコ料理？マルコと被るわね」
「まあそうね」
ビアンカはウェンディの言葉をあえて否定しなかった。
「実際に彼と一緒に作るし」
「へえ」
マルコも料理は上手い。何だかんだで料理上手の多いクラスである。

第六十三話　ピーターの妹その二

「あとアッシリア料理かしら」
「アッシリア料理ねえ」
ウェンディはビアンカの顔に難しい顔になった。
「どんなのかしら」
「一度食べてみたらいいわ」
ビアンカは難しい顔をするウェンディにそう告げた。
「一度ね」
「そうね、今度」
まだわからないといった顔で答える。
「御願いするわ」
「僕の妹も料理は好きだよ」
ピーターがまた言ってきた。
「お菓子が特にね」
「ああ、それいいわね」
蝉玉はそれに合格サインを出してきた。
「お菓子作りが得意な女の子って」
「そう思う？」
「ええ、とても」
そうしてまた述べる蝉玉だった。
「女の子はやっぱりお菓子よね」
「そうそう」
ウェンディも今度は笑顔になって同意して頷く。
「やっぱりお菓子が一番よ、女の子は」
「お茶があればね。もっと」
蝉玉は話を微妙に喫茶店でのことに戻していた。
「いいわよね」
「そうね。とびきり甘いお菓子に」

「あんたも。好きね」
蝉玉は乗り気のウェンディに対して笑顔で言うのだった。
「そういうのが」
「隠しはしないわ」
とろけそうな笑みで答えるウェンディだった。
「甘いのが一番よ。お菓子も世の中もね」
「その甘いのが得意なんだ、うちの妹は」
ピーターは笑顔で述べてみせる。
「それじゃあ。着いたよ」
「あっ、もう」
「早いわね」
皆気付けばピーターの部屋の前にいた。何か心無しファンタジーな装飾がほどこされた扉である。色とりどりの花の飾りで覆われていた。
「これってさ」
スターリングがその装飾についてピーターに尋ねた。
「ひょっとして」
「そうだよ、妹がしたんだ」
ピーターはにこりと笑ってスターリングに答えた。
「どうかな」
「まあ。びっくりはしたわね」
ビアンカが答える。
「何て言うか」
「中はもっと凄いわよ」
ウェンディはくすくすと笑って皆に言うのだった。
「もっとね」
「扉は序章に過ぎないのね」
蝉玉はそのやけに目立つ扉を見て呟く。
「これ以上って」
「では悪いけれど」

アルフレドがピーターに声をかける。
「中に入れてもらえるかな」
「うん、どうぞ」
ピーターは曇りのない笑顔で応えた。そうして皆は彼の家に入るのであった。
ウェンディの言葉通りだった。中もかなりのものであった。
「うわっ」
「これはまた」
ぬいぐるみや花の飾り、ボトルの船であちこちが飾られている。赤だの青だの白だのピンクだので。これはまた何かのファンシーグッズの店のようであった。
「凄いわね」
「ねっ、言った通りでしょ」
ウェンディはにこにこと笑いながら皆に言うのだった。
「これがピーターの家なのよ」
「あらためて絶句」
蝉玉は言う。
「ううむ、これはまたって感じね」
「悪い感じ？」
「あっ、それはないわ」
蝉玉は素直に答える。確かに一見して引くものがあるが決して悪い印象は受けていなかった。これは本当のことであった。
「何か楽しい感じね」
「そうだろ？僕も最初は驚いたよ」
兄である彼も言うのだった。
「けれどね。馴れると特にね」
「そうなの」
「うん。いい感じに思えるね」
彼は楽しそうに述べた。
「今じゃこれを見てああ、帰ったんだなって思えるし」

「不思議と落ち着く感じだね」
スターリングも家の中を見回している。彼は特にボトルシップを見ていた。
「特にこれなんてね。いいね」
「そうね」
蝉玉も彼氏の言葉に頷く。
「私は花飾りもいいけれど」
「そうなんだ」
アルフレドがその言葉に応える。
「お花好きだしね」
「ああ、そういえばそうね」
ビアンカは今の蝉玉の言葉に笑顔で頷く。
「あんたお花大好きよね」
「だって中国人だから」
蝉玉は笑顔で答える。中国人は昔から花を愛する。花を愛さない人はいないが中国人の花好きは昔からつとに知られている。

第六十三話　ピーターの妹その三

「お花なら何でも好きよ」
「特に梅だよね」
スターリングが笑顔で彼女に言ってきた。
「やっぱり」
「そうね。一番好きなのはそれね」
彼女も自分でそれを認める。しかも笑顔で。
「見ていて飽きないわ」
「じゃあ今度は皆で見ようよ」
ピーターが笑顔で提案する。
「皆で。それでどうかな」
「そうね。お酒でも飲みながらね」
ウェンディはお酒を入れるのを忘れてはいなかった。なお連合ではごく一部を除き酒は十歳から飲める。それでかなりの飲んべもこの学園にいる。
「楽しくね」
「そうそう」
「お兄ちゃん？」
ここで家の奥から女の子の可愛らしい声が聞こえてきた。
「帰って来たの？」
「ああ、そうさ」
ピーターはその声に笑顔で応えた。
「御前も帰って来ていたんだな」
「ちょっと前にね」
そう言いながら立ち上がる雰囲気を感じる。どうやらこちらに来ているようである。
「ウェンディさんも一緒なの？」
「ええ、そうよ」

ウェンディは笑顔でその声に応える。
「お邪魔させてもらうわ、ティンちゃん」
「はい。けれど何か」
ここで赤髪の小柄な少女がやって来た。白くふわふわの膝までのワンピースを着た美少女である。幼い顔立ちだが容姿はかなり整っていた。兄と同じ目の色でその目はかなり大きく丸い目である。まるで牡牛の目のようである。
「あれ、どなたですか？」
彼女は蝉玉達を見て尋ねてきた。
「お兄ちゃんのお友達ですか？」
「お友達っていうかね」
蝉玉が少し笑って彼女に応えた。
「ウェンディのクラスメイトなのよ」
「ウェンディさんのですか」
「そうさ。これからお友達になるんだ」
ピーターは笑いながら妹に述べる。
「それでいいよな」
「私は別にいいけれど」
この時までは彼女は自分には全く関係のない話だと思っていた。少なくともこの時までは、である。
「お兄ちゃんさえよかったら」
「だってさ」
ピーターは笑顔を皆に向けて述べた。
「よかったね」
「そうね」
ウェンディも皆も笑顔で彼に応える。
「これで第一関門はクリアーっと」
「第一関門！？」
ティンは彼等のやり取りに言葉にクェスチョンマークを入れた。
「何かあるの？」

「まあちょっとね」
ウェンディはすぐには答えずにまずは笑顔を彼女に向けた。それから言うのだった。
「とりあえずはお茶でも飲みながらね」
「紅茶がいいね」
ピーターが笑って妹に言う。
「あるかな、今」
「アイスティーがあるけれど」
ティンは兄に答えて述べる。
「それでいいかしら」
「うん、僕は別に」
「お構いなく」
「それだったらそれでいいですね」
ティンは他の面々の言葉を聞いて述べた。
「じゃあすぐに持って来るから」
「皆は座ってて」
ピーターも一緒に台所に向かい皆に言う。
「すぐに持って来るから」
「有り難う」
こうして皆は家のリビングの中に入り話をすることになった。やはりリビングの中もぬいぐるみや飾りもので彩られていた。彼等はその中のピンクのソファーに座ってそこで円を囲んで話をするのであった。
「それでね」
ウェンディがストローで紅茶を飲みながらティンに話し掛けてきた。
「ピーターから聞いたんだけれど」
「お兄ちゃんからですか」
「そうよ。あんた今かなり時間あるのよね」
「ええ、まあ」

ティンも彼女のその言葉に頷く。
「お料理ばかりしていますけれど。あとは」
「言わなくてもわかるわ」
そこから先の言葉にはあらかじめ笑って返した。
「ぬいぐるみに飾りでしょ」
「はい」
ティンは今度はビアンカの言葉に頷いた。
「そうです。そういうのばかり作っています」
「それは別に悪いことじゃないわ」
ビアンカはそれはいいとした。にこりと笑って。

第六十三話　ピーターの妹その四

「けれどそればかりしていたら飽きない？」
「飽きるですか」
「ええ。そこはどうかしら」
そう彼女に問うのだった。
「飽きていなければ別にいいけれど」
（おい）
今の言葉にはアルフレドが耳元で突っ込みを入れた。
（そう言ったら終わりかねないだろ）
（大丈夫よ、兄さん）
しかしビアンカはそう彼女に囁き返す。
（まあ見ていてって。これでいいんだから）
（そうなのか？）
アルフレドにはとてもそうは見えない。
（大丈夫には思えないが）
（何言ってるのよ、アルフレド）
だがその彼に今度は蝉玉が囁くのだった。
（今のはビアンカのファインプレーよ）
（まさか）
彼女に言われてもまだ信じていない顔であった。
（とてもそうは）
（まあ見ているといいわ）
蝉玉はくすりと笑って彼に告げた。
（ゆっくりとね）
（君までそこまで言うのなら）
アルフレドも信じることにした。
（わかった。それでいいんだな）
（ええ。スターリングもよ）

蝉玉は自分の彼氏にも言うのであった。
（それでいいわよね）
（うん、わかったよ）
スターリングも今の言葉は大丈夫かと思ったがそれでもここは自分の彼女とビアンカを信じることにしたのであった。彼は結構蝉玉に頼りきりである。
（それじゃあ）
（これでよしと。じゃあビアンカ）
蝉玉は彼氏からも言葉を受けてビアンカに囁く。
（いいわ。続けて）
（わかったわ）
こうして話が再開される。その前でティンは興味深そうに目をパチクリとさせていた。
「あの、何のお話を」
「ああ、気にしないで」
今度はかなり強引に誤魔化すビアンカであった。
「私達だけの話だから」
「そうなんですか。それじゃあ」
「それでね」
彼女はまたティンに言う。
「こうしたものはお部屋に飾ってばかりよね」
「はい」
「飽きてもくるし。それでね」
そうして述べる次の言葉は。
「他のこともしてみたらどうかしら」
「他のことですか」
「そうよ、他のこと」
にこりと笑って彼女に告げる。
「それに飾りものやぬいぐるみもそのうち家に溢れ返っちゃうし」
「そうですよね」

実はそれは彼女も心配していたことなのである。
「それでどうしようかしらって考えているんですけれど」
「誰かにプレゼントするといいわ」
ビアンカは次にこう述べた。
「誰かにね。それに」
「それに？」
「それだとただ作るよりずっと楽しいわよね」
「あっ、そうですね」
ティンはそれを言われてはたと気付いた顔になったのであった。
「そういえば」
「そうよ。じゃあ答えは出てるじゃない」
また笑ってそのティンに告げる。
「誰かにあげていけばいいのよ」
「けれど相手が」
「いるわ」
ビアンカの思い通りの展開であった。それが自分でもわかってついつい笑みがこぼれた。
「ちゃんとね。よかったら紹介してあげるわよ」
「あの。それって」
ここでティンも遂に気付いたのだった。
「まさか。私に」
「ああ、わかったのね」
相手がわかっても動じた様子はなかった。だがここでウェンディに選手交代となったのであった。見事なタイミングであった。
「ねえティンちゃん」
ウェンディがにこにことしながら彼女に声をかける。
「はい」
「この前言っていたじゃない。彼氏が欲しいって」
「それは」
「だからよ。私達ね」

優しく彼女に言う。
「貴方に彼氏を紹介しようと思って」
「そうだったんですか」
「そうだったんですかって」
蝉玉はあっけらかんとしたティンの様子に思わず突っ込みを入れた。
「いいの、別に」
「ええ、まあ」
ここまで来ると他人事のように思える。少なくとも彼女は自分のことではあっても深刻には考えてはいないのがはっきりとわかった。

第六十三話　ピーターの妹その五

「紹介して頂けるのでしたら」
「いいんだ」
「はい。私も彼氏が欲しいと思っていましたし」
相変わらずあっけらかんとした様子で言うティンであった。
「紹介して頂けるのでしたら」
「そうなんだ」
「はい。それでお兄ちゃん」
ティンは今度は兄に顔を向けて声をかけた。
「その人って誰なの？」
「僕とは違うクラスの人だけれど」
「私達の同じクラスなんだけれどね」
彼にかわってウェンディが言ってきた。ティンはそれを受けて彼女に顔を向けるのであった。
「知っているかしら。カムイっていうの」
「カムイさんですか」
「知ってるのかしら」
「いえ」
ウェンディのその言葉には首を横に振った。
「どんな人ですか？」
「馬鹿ね」
ウェンディの言葉は一言であった。
「一言で言うと馬鹿ね」
「そうなんですか。馬鹿ですか」
「おい、ウェンディ」
アルフレドが今のウェンディの言葉に突っ込みを入れる。
「幾ら何でもいきなりそれはないだろう」
「そうは言っても本当のことじゃない」

しかしそれでもウェンディは言うのであった。しかも平気な顔で。
「カムイが馬鹿なのは」
「それはそうだが」
「いいから任せておいて」
右目でウィンクしてアルフレドに告げる。
「いいわね」
「自信があるんだな」
「勿論」
やはり言葉に曇りはない。見事なまでに。
「だから安心していていいわよ」
「わかった。それじゃあ」
「ええ。それでね」
あらためてティンに向き直り話を続けるのであった。
「馬鹿でまあかなり勘違いな行動もしょっちゅうだけれど」
「はい」
「一途よ」
ここでにこりと笑ってみせる。その笑顔は少なくとも百万テラの価値があるものだった。ピーターも大好きな笑顔であるが今はそれはティンに向けられていた。
「一人に決めたらもう他には目がいかないから」
「浮気はしないんですか」
「それも絶対にね」
念を押してみせる。これもまた彼女の話術であった。
「絶対ですか」
「そう、絶対」
さらに念を押す。
「多情だけれど一人に決めたらその娘だけだから」
「わかりました」
ティンも笑顔でその言葉に頷いた。
「いい人なんですね」

「悪い奴じゃないのは確かよ」
ウェンディはそれも保障する。
「むしろいい奴ね」
「あれで結構クラスメイト思いだしね」
「そうそう」
蝉玉とビアンカも言う。彼女達でティンを乗せていた。
「どうかしら、彼は」
ウェンディはここでカムイを薦めてきた。
「悪い話じゃないと思うけれど」
「そうですね」
ティンはおっとりとした調子で彼女に言葉を返してきた。
「一度御会いしたいですね」
「会うのね」
「はい」
にこりと笑ってウェンディに告げた。
「それで御願いできますか？」
「ええ、わかったわ」
ウェンディもまたにこりと笑って彼女に答える。
「それでね。いいわ」
「御願いします」
ティンはあらためて一礼する。
「そういうことで」
「じゃあ決まりね」
ウェンディは話が決まったことを確信して笑った。

第六十三話　ピーターの妹その六

「これでね」
「そうね。何か思ったより簡単に話が決まったわね」
蝉玉にとってはそうであった。彼女の予想以上に。
「それじゃあ後はその期日だけれど」
「それは私がセッティングするわ」
ビアンカが提案してきた。
「そっちは任せて」
「御願いしていいですか？」
「そこは得意だからね」
ビアンカはにこりと笑って述べる。
「演出とかは」
「そうなんですか」
「ええ、そうなのよ」
蝉玉も笑ってティンに述べる。
「ビアンカは仲人の達人なのよ。舞台設定も演出も抜群に上手いんだから」
「凄い才能ですね」
ティンもこれには目を丸くさせる。まさか彼女にこんな才能があるとは思わなかったのだ。
「私達だってそうだったし」
「そうだったね」
スターリングもそれに頷く。実はこの二人を結びつけたのはビアンカだったのだ。この二人のなりそめもまた実に凄いいきさつがあったのであるが。
「あの時は結構色々あったけれどね」
「スターリングが奥手だったから」
蝉玉は口を少し尖らせていた。

「仕方なかったのよ」
「蝉玉が積極的過ぎるんだよ」
その蝉玉に対して反論する。
「何するかわからなかったし」
「女は一に押して二に押して」
実に蝉玉らしい言葉が出て来た。
「三に押して四に押して五に押すのよ」
「そうなんだ」
「それが中国娘なのよ。覚えておきなさい」
「何か僕の国と同じ」
アメリカン＝ガールはこの時代においても健在である。連合においては気の強い女といえばこのアメリカン＝ガールと中国娘が双璧であるとされている。逆に親切で温厚なのはロシア女だとされている。しかもロシア女は美人である。しかしロシア女は歳を取ると太りしかも髭が生えるのでそれがジョークのネタにもされている。それが問題なのであるがあまりにも気の強い先の二種類に比べれば遥かに人気がある。なお大和撫子はこの時代でも幻の動物であるとされている。日本の女も優しくて可愛いと大人気であるが抜けている部分が多いとも言われている。各国の女の子の評価も実に様々である。
「それって」
「別にいいじゃない」
蝉玉も言われ慣れているので別に表情を変えたりはしない。
「それ位。そうでしょ？」
「まあそうだけれど」
彼にしても別に何も言うことはない。その通りだからだ。
「それはそうとよ」
「はい」
ティンに顔を向けると彼女は応えてきた。
「あんたはそれでいいわよね」

「ええ、まあ」
話は決まっていたがそれに頷くのであった。
「私はそれで」
「わかったわ。じゃあ決まりね」
「それじゃあさ」
ウェンディが楽しそうに声をあげる。

第六十三話　ピーターの妹その七

「これから色々と忙しくなるわね」
「そうね」
蝉玉もそれに頷く。
「何かとね。あんた達もよ」
「うん」
「わかってるさ」
スターリングとアルフレドが蝉玉の言葉に頷く。
「色々とやらせてもらうよ」
「僕達だけじゃないかもな」
アルフレドはこう考えを及ばせてきた。
「多分クラスの皆も」
「ああ、それはもう規定事項だから」
ビアンカは笑顔で応える。
「ギルバートとアンの時と同じでね」
「ああ、あの時と一緒なんだ」
スターリングはそれを聞いて納得した顔になる。
「だったらわかるよ」
「わかれば宜しい」
ウェンディはふざけて言う。その次に彼氏に顔を向ける。
「あんたもね」
「喜んで」
ピーターもにこやかに言葉を返す。
「可愛い妹の為なら」
「そういうこと」
「それでね」
ピーターはここで言う。
「肝心のカムイ君に気付かれないことが肝心かもね」

「ああ、それは大丈夫だから」
ビアンカが彼に答える。
「そうなの？」
「だって。馬鹿だから」
やはり答えはそこにあった。
「それは安心していいわ」
「そうなんだ。だったらいいね」
「いいのね、それで」
ウェンディが横から彼氏に突っ込みを入れる。
「滅多なことじゃ気付かないわ。まあ何するかわからないところがあるけれど」
「何かをねえ」
「結局は馬鹿だから」
今度は蝉玉が言う。かなり散々なカムイの評価である。
「突拍子もないところがあるのよ」
「それが問題かな」
ピーターは腕を組んで思索に入った。
「強いてあげるとすると」
「そうね。不確定要素があるのがねえ」
「けれど。それはまあ想定の範囲内だね」
そうウェンディに告げる。
「何とでもなるね」
「何とかなるかしら」
「大丈夫だよ」
笑顔でまた言うピーターであった。
「大体は予想がつくから」
「あまり甘く見ない方がいいわよ」
蝉玉が彼に突っ込みを入れた。
「あいつも結構破天荒だから」
「うちのクラスは特別だって知ってる？」

ビアンカの忠告はまた別格であった。かなり現実味のあるものであった。

「凄い面々が一杯いるんだから」

「フランツとかテンボとかジャッキーとかねえ」

ウェンディが挙げた面々は少なくとも学園内でも有数のあれな顔触れであった。一度動けば何かを引き起こす、そんな連中である。

「まあカムイはそれ程じゃないけれど」

「それでもね。彼女が絡むと」

相当なものになるというのだ。彼女達の言葉は実に深刻なものがあった。

「洒落にならないし」

「困ったことにねえ」

「何か面白い方みたいですね」

そこまで話を聞いたティンの言葉であった。

「何か御会いしたくなりました」

「こう言ってるわよ」

ビアンカは蝉玉とウェンディに告げた。

「何か乗り気になってるけれど」

「じゃあいいんじゃない？」

蝉玉はそれで納得するのだった。

「本人がいいって言ってるんなら」

「それもそうね」

ウェンディも同じ考えになっていた。

「考えたらこれも最大の問題の一つだったけれどね」

「それがクリアーされたし」

「まずはめでたしね」

こうした話は一方だけで進むものではない。両方があってはじめてなるものだ。だが今その一方であるティンが笑顔で言う。これで一つの関門を越えたのである。彼等にしてはまずは喜ぶべきことであった。

「じゃあ後はセッティングだね」
「そうだな」
アルフレドはスターリングの言葉に頷いた。
「何時何処でするか」
「それが問題だね」
男二人はそれについて話し合う。ピーターもそれに乗るのであった。
「だったらさ」
「いい考えがあるんだね」
「うん。ここはある程度任せて」
笑顔で二人に告げる。
「いいかな」
「何か策があるんだな」
「秘策がね」
笑ってアルフレドに言葉を返す。
「そういうことだから」
その笑みには秘めたものがあった。話は彼を軸として進もうとしていた。だがそれがどうなっていくかは。ピーターにすらわからなかった。

ピーターの妹　　完

２００７・１０・２５

第六十四話　円卓会議その一

円卓会議

クラスの面々はピーターを交えての話し合いとなった。皆である店に集まって話をする。

そこは喫茶店であった。だが学校からは離れている。そこで巨大な円卓を囲んで話をするのであった。

「でかいテーブルだな、また」

マルコがその円卓を見て言う。

「よくこんなものがあったな」

「何でも掘り出し物らしいわよ」

ダイアナがそう彼に告げる。

「骨董品屋からね」

「骨董品ねえ」

だがマルコは彼女のその言葉に首を傾げさせる。

「こんなでかいのある骨董品屋ってどんなんだ？」

「さあ」

ダイアナもそこまでは知らない。というよりは無関心である。

「私もそこまではね」

「そうなのか」

「そうよ。けれどまあ便利でいいじゃない」

とりあえずはそう話をすることにした。

「何かどっかの騎士物語に出そうなテーブルだけれど」

「あれがあるのはエウロパだろ？」

マルコはダイアナに突っ込みを入れた。

「何で日本にあるんだよ。若しこれがあれだったら」

「そういえばそうね。何でだろ」

「すっごい不思議なルート持ってる骨董品屋じゃないのか、それって」

「さあ？」
やはりダイアナもそこまでは知らないのであった。どうにも不確かな情報屋であった。
「そういえば何か得体の知れないフードの男が売ってきたそうだけれど」
「誰なんだ、それ」
思えば謎だらけであった。世の中実に奇妙な話が多い。
「フードって」
「お爺さんらしいけれど」
「ただの爺さんがこんなでかいテーブル持っていたのか？」
またしても謎が出る。考えれば有り得ない話だ。
「どんな爺さんなんだ、それって」
「何なんでしょうね、本当に」
言われてみればそうだ。ダイアナも少し変に思った。
「まさかとは思うけれど」
「誰だと思う？」
「まさかとは思うけれどね」
ダイアナはそう前置きを置いたうえで述べた。
「あの人。キャメロットにるっていう」
「あの人か？」
とはいっても王様ではない。魔術師の方である。
「あの人なんじゃないの。御爺さんだし」
「けれどよ、あの人は」
マルコはそれに突っ込みを入れる。彼もその話は知っていたからだ。
「あれじゃないか。妖精の世界に隔離されていて」
「出て来れないっていうのね」
「そうだよ。それはないだろ」
「どうだか。何しろ魔術師よ」
魔術師ならば何でも出来るというものではないがそれでも言われ

るのであった。マルコもダイアナもそうした意味で魔術師を誤解していた。
「脱出ってことも」
「有り得るってか」
「どちらにしろこのテーブルについて詳しいことが知りたいわね」
それは動かなかった。
「一体どうやって造られたのか」
「二千年位のだったら本当にやばいな」
「やばいっていうか有り得ないんだけれどね、本当は」
そもそも木で造られたものはそこまでもちはしない。だからこそ魔法なのである。それにしても見れば見る程大きな円卓であった。何しろ二年S1組の面々の殆どが楽に座っているのだ。その大きさは半端なものではなかった。
「まあそれは置いておいてね」
「ああ」
マルコは彼女の言葉に頷く。
「話をしましょう。テーマは」
「ええ、わかってると思うけれど」
ビアンカが二人だけでなく皆に対して言う。
「カムイに彼女をプレゼントすること」
「了解」
「それはいいとして」
ここで蝉玉は席に着いている面々を見回した。それから言うのだった。
「洪童はいないみたいね」
「あいつに関しては真っ先に手を打ったわ」
ウェンディが答えた。
「妹さんに協力してもらってね」
「早いわね」
「ええ。ちょっと妹さんがデートに行くって言ったらそっちにかか

りきり」
実はとことんまで妹思いの洪童であった。妹に言い寄る者は誰でも抹殺すると公言している程である。これも危険と言えばかなり危険である。
「だから。安心していいわ」
「わかったわ」
蝉玉はその言葉に満足した笑みを浮かべた。
「じゃあまずは一番の不確定要素は消えたね」
「そうね。まずはね」
ウェンディも満足した笑みを見せる。その笑みのまま紅茶を口に含む。

第六十四話　円卓会議その二

「これで一つ」
「さて。それじゃあ次は」
蝉玉はまた言う。
「セッティングね」
「そうそう、それそれ」
マルコがそこに突っ込みを入れる。
「それでどうするんだ？やっぱりムードだよな」
「ムードねえ」
アンがそれを聞いて言う。腕を組みながら。
「それならいい場所があるわよ」
「いい場所？」
「そう、歌劇場」
ここでさりげなくでもなく彼女の思い出の場所が紹介された。
「あそこならどうかしら」
「それはちょっと」
「駄目かしら」
スターリングの言葉に目を少しいぶかしめさせる。
「ムードは最高じゃない。演出も」
「それは前やったじゃない」
スターリングが言うのはそこであった。
「アンとギルバートの時にさ」
「だからよ」
アンはそこをあえて指摘するのであった。
「だから。ほら、やっぱり私達みたいにね」
「なればいいって？」
「そうよ。そう思わない？」
鬼の様に鈍感なギルバートと何処までも素直ではないアンが一緒

になれた場所だ。だから彼女がそこを推すのは理由があった。しかしそれはあくまで彼女だけのことであった。
「だからね。やっぱり」
「僕もそれはちょっと」
もう一方のギルバートが言ってきた。
「ギルバート」
「恥ずかしいな」
「恥ずかしいの？」
「あの時のことを思い出してな」
それを語るギルバートの顔は少し赤くなっていた。
「だから。止めて欲しい」
「そうなの」
「だからだ。他の場所でどうかな」
ギルバートはアンにそう話したうえで皆に提案してきた。
「歌劇場以外で」
「そうだとすると」
「何処がいいかな」
皆それを言い合う。しかし最初はどうにも答えが出ないのであった。
「オーソドックスでもいいんじゃないの？」
ダイアナがその中で言ってきた。
「ムードは何処にでも出せるし」
「まあそうだな」
マルコがそれに頷く。
「それはそうだな」
「それだよね」
ピーターはマルコのその言葉に突っ込みを入れた。
「場所も大事だけれどやっぱりムードが」
「そうそう、それそれ」
マルコはムード重視であるらしい。やけにそこにこだわるのであ

った。
「まずはそこだよ。ムードがないとね」
「けれどそれってさ」
ダイアナはそこに注釈を入れるのであった。
「場所選ぶわよ、やっぱり」
「ムードもか？」
「そうよ。例えば秋の木の葉が落ちる道とか」
「あっ、それもいいね」
ピーターはダイアナのその言葉に賛同した。
「そういう場所も」
「でしょ？そうした場所って歌にもなるし」
ダイアナは歌手である自分のことを参考にしていたのであった。
目が少しうっとりとなっているところを見ると彼女もまんざらではないようだ。
「いいのよ、やっぱり」
「じゃあそこが候補だね」
ピーターはメモを取っていた。そうして書き留めておくのであった。
「まずはそこ、と」
「けれどまだよ」
しかしビアンカはそれで終わりにはさせないのであった。
「そこだけじゃあれだし」
「他の場所もか」
「何処があるかしら」
皆また考えに入る。その中でまたマルコが言うのであった。
「ラテン系のカフェなんかどうかな」
「カフェ？」
「うん。夜のカフェでね」
彼はそこを提案してきたのだった。
「そこだとムードあるじゃない。いい店知ってるしさ」

「カフェねえ」
「悪くないかも」
皆それに賛同しだした。まんざらではないといった顔であった。
「けれど。ここで問題があるわ」
「問題？」
皆ウェンディの言葉に顔を向けた。ウェンディはそれを受けながら話を出してきたマルコに対して顔を向けるのであった。
「そうよ。ラテンよね」
「ああ」
マルコも彼女の言葉に頷く。

第六十四話　円卓会議その三

「それがどうかしたか？」
「音楽選ぶわよ」
彼女は音楽について指摘するのであった。そこが問題であるというのだ。
「音楽か」
「ラテンだからね。明る過ぎる曲だと」
そこが問題だというのだ。彼女の指摘は中々鋭かった。
「かえってムードも。崩れるわよ」
「アルゼンチンタンゴとかならどうかな」
ウェンディの言葉に対してマルコはそう言ってきた。
「あれとかだとムードもよくなるよ」
「ああ、それはいいな」
アルゼンチン人のマチアがその言葉に笑顔になる。見ればラテン系のメンバーは皆マルコの言葉にしきりに頷いていた。賛成らしい。
「やっぱりあれはな。そうした場面のムードにいい」
「そうだろ？だから」
「じゃあそれも候補だね」
ピーターはまたメモを取った。
「これで二つか」
「もっと保険が欲しいな」
「そうね」
皆また話をする。かなり真剣になっていた。
「それにしてもマチアもセンスがいいわね」
ダイアナは満面に笑みを浮かべていた。彼女もチリ人でラテン系である。だから同じラテンのマチアの言葉に賛成しているのであった。
「中々いい感じじゃない」

「そうさ。それだから」
マチアも笑顔になって述べる。
「提案してみたんだが。よかったな」
「そうね。それで」
ダイアナは彼の話に頷いたうえでまた言うのだった。
「他に候補は」
「もう一つ提案してみようか」
ここでまたマルコが言う。
「もう一つ？何かあるの？」
「ああ。しっとりとしたのが続いているしな」
彼は考える顔で述べる。
「そのうえでだ。もう一つ決め手に」
「しっとりとね」
「しっとりで極めていきたいんだよな。何か」
マルコは笑いながらこう述べた。
「こういう場面ってな」
「あんたって意外とロマンチストなのね」
ダイアナは今彼女の意外な側面に気付いたのだった。
「少し驚いたわ」
「驚いたのかよ」
「だってねえ。いつも陽気だし」
マルコは明るい少年で知られている。だから皆こう思っていたのだ。それはダイアナも同じだったのである。
「しっとりって感じじゃなかったから」
「否定してえけれど否定できねえ」
マルコは本音をそのまま出した。
「苦しいな。こういうのって」
「まあそれでもいいじゃない」
だがダイアナは彼のそんな一面を笑って認めたのであった。
「それで誰かに迷惑かけているわけじゃないし」

「それもそうか」
「そうよ。それでよ」
話を戻しにかかってきた。
「どうするの？これから」
「これからか」
「何か考えてる？次の候補地」
「それだよなあ」
彼はあらためて思索に入る。腕を組んで真剣な顔になるのだった。
「並木道にカフェに」
「もう一押しが欲しいわ」
「公園なんてどうだ？」
彼はふと言ってきた。
「公園！？」
「あの駅前のな。あそこならムードがいいだろ？だから」
「ああ、あそこね」
ここで急にナンシーが話に参加してきた。
「あそこはいいわよ。ムードならもう最高よ」
「なっ、推薦もあったぜ」
マルコはそんなナンシーを手で指し示して述べる。
「じゃあこれで決まりだな、もう一つの候補地がな」
「ええ。けれど」
だがダイアナはここであることに気付いたのだった。
「一つ気になることがあるんだけれど」
「何だ？」
「あんたじゃないわ」
そうマルコに述べる。そして視線を向けるのは。

第六十四話　円卓会議その四

「ナンシー」
「何？」
「何であんたあの公園のこと知ってるの？」
気付いたのはそれであった。どうして彼女が知っているのかが不思議だったのだ。
「えっ！？」
「今ちょっと気付いたんだけれど」
そう述べてまた問う。
「あんた。あの公園に行ったことあったの？」
「え、ええちょっとね」
ナンシーは内心の戸惑いを必死に隠しながら答えた。
「実はね。ちょっと、その」
「ちょっと？その？」
「取材でなのよ」
嘘ではなかったのでこう答えることにしたのだった。
「取材で。奇麗な公園があるって聞いてね、それで」
「ああ、そうだったの」
何も知らないダイアナはそれで納得しだした。
「それで知っていたのね」
「そうなのよ、別に変な意味じゃないわよ」
「変な意味！？」
（しまった）
勘の鋭いダイアナが今の言葉に顔を向けてきたので内心舌打ちした。
「何、それって」
「あっ、だから寄り道とか」
ナンシーは知っている者から聞けば実に苦しい言い訳をするので

あった。
「そういうのよ。やっぱりそういうのって駄目じゃない」
「また随分真面目ね」
どちらかというと不真面目な部類の生徒であるダイアナから見ればそう思えるものであった。ナンシーは真面目な生徒で通っているのもここでは幸運だった。
「ま、まあこういうのはね」
焦りを残しながら言葉を続ける。
「守らないといけないかなあ、なんて思ったりなんかしてるから」
「わかったわ。けれど」
「まだ何か？」
年下の彼氏のことは必死に隠しながら話のやり取りを続ける。
「いや、今時珍しい真面目さだから。やっぱりナンシーだなあって思って」
「そうだったんだ」
「ええ。御免なさいね、変なこと聞いて」
「べ、別に気にしてないから」
下手なコメントを続ける。
「そんなのいいわよ」
「そうなの。それじゃあ」
「ええ。とにかくね」
話を何とか誤魔化しきりその中に入る。そんな彼女をカトリとマルティが呆れた目で見ているがそれもとりあえずはスルーしながら。
「そこの公園もムードじゃいいから」
「了解」
ピーターは彼女のその言葉にも頷く。
「じゃあここも候補地ね」
「これで三つね」
ダイアナは三つ出たところで述べた。
「後は。そうね」

「他に何かある？」
「いや、これ位でいいんじゃ？」
ダイアナは少し考えてからそう皆に述べた。
「三つあったら。これ以上あっても何にもならないし」
「そうだね」
ピーターが彼女の言葉に同意して頷いた。
「これ以上あっても。それじゃあこれでいいよね」
「ええ」
「ピーターがそう言うんなら」
二年Ｓ１組の面々はこれで納得した。後は何処にするかの問題であった。
「それで何処にするんだ？」
マチアが尋ねた。
「何処もかなりいいと思うが」
「並木道にカフェに公園だったね」
ピーターはそれをまた確認する。
「確か」
「そう、その三つ」
ウェンディがそれに頷く。
「その三つのうちの一つ。どうするの？」
「そうだなあ」
ピーターは彼女の言葉に少し考える顔になるのであった。
「いざ選ぶとなるとこれは」
「困るの？」
「うん。どれもいいから」
首を傾げて述べる。
「一つにするってなると。どうにも」
「それもそうね」
ウェンディもどうにも選びかねるようであった。彼女もまた困った顔を見せていた。

第六十四話　円卓会議その五

「一つにするにしてもねえ。これは」
「どれがいいかな」
彼はまた言う。
「どれも捨て難いし」
「じゃあ簡単じゃないか」
ここでマルコが言ってきた。
「簡単って？」
「皆選べばいいんだよ」
彼はあっさりとこう提案するのだった。
「どれか一つに迷うんならな」
「ちょっとあんた」
そんな彼にダイアナが突っ込みを入れた。
「幾ら何でもそれは無茶でしょ」
「そうか。ムードがあるのなら一つに絞らずに」
「全部回った方がそれが高まるって言いたいのかしら」
「ああ。そうじゃないか？」
そうダイアナに問う。
「やっぱりな。ここは」
「無理でしょ」
ダイアナはそれを否定する。
「三つの場所で告白シーンなんて。映画でも無理よ」
「そうか？」
「そうよ。デートならともかく」
「あっ」
ピーターはダイアナの今のデートという言葉にはっとした顔になる。そうしてそこでえらく納得した顔で頷くのであった。
「それだよ、それ」

「それって？」
「だからさ、デートだよ」
こう皆に言葉を返す。
「デートにすればいいじゃない。違う？」
「告白だけじゃなくて？」
「ただ告白するよりそちらの方がずっといいよ」
彼はそう主張しだした。
「だからさ。ここはそれで行かない？」
「デートで？」
「そう、そっちの方がよくない？」
彼はまた言う。
「それで。どうかな」
「そうねえ」
ウェンディは腕を組んで考えに入った。
「それ、いいかも」
「そうだろ？そっちの方がよくない？」
フックはまた言う。
「デートで行けば。成功する確率もずっと上がるし」
「そうよね。普通にばったり会うよりもそっちの方が」
ダイアナも頷く。見れば皆同じ顔をしてピーターの話を聞いている。
「いいかも」
「じゃあデートで決める？」
「そうだよな」
皆ピーターの案に賛成を示だした。言われて見ればそうなのだと考えてもいた。
「じゃあそれで行く？」
「ああ。ただし」
ここでマチアが注釈を入れてきた。
「順番だよな、問題は」

「それだったらまずは公園ね」
またナンシーが言った。
「あそこでムードを作って」
「ふんふん」
皆彼女の話を聞く。実に興味深いといった感じで。
「それから並木道を二人で歩いてね。それで」
「それで」
「やっぱりラストでカフェよね」
ナンシーはうっとりとした声で語る。普段の彼女とは完全に別人の顔になっていた。
「そしてそこで告白。どう?」
「いいよ、いい」
ピーターは彼女の提案に笑顔で太鼓判を押してきた。
「それで決まりだね」
「何か話が変わったわね」
ビアンカはこれまでの展開も思い出しながらこう述べた。
「告白だけだったのに」
「けれどいいじゃない」
蝉玉は笑顔でその展開を受け入れていた。そこがかなりおおらかであった。
「かえって面白くなりそうよ。それに」
「それに?」
「その方が告白の成功率もあがるわよ」
にこりと笑って言うのだった。
「そうでしょ?だってムードがその分だけ出来上がるから」
「そうか。そうね」
「そういうこと。だからね」
また笑顔で言う蝉玉であった。

第六十四話　円卓会議その六

「こっちも裏方頑張りましょうよ」
「何か私の時もこんなのだったのかしら」
アンは蝉玉の言葉を聞いてふと思った。
「自分色々あった感じだけれど」
「それ今気付いたの？」
ダイアナが彼女に言ってきた。
「ひょっとして」
「ひょっとしてってちょっと」
今の言葉で完全にわかったのだった。あの時のからくりが。そうした意味でダイアナの言葉は見事なキレがあった。
「じゃあ私も」
「苦労したわよ」
ダイアナは両手を自分の頭の後ろで組んで苦笑いを浮かべてみせたのだった。
「あんただけじゃなくてギルバートもだったから」
「何っ」
これはギルバートにとっても衝撃の事実であった。ましてやあの時はセッティングされることを知っていたアンでもそうなのだからギルバートは尚更である。
「僕達は。完全に」
「そうなるようにしたの」
「そうだったのよ」
アンは少し顔を赤らめさせてそのうえ俯いていた。
「私・・・・・知っていたけれど」
「そうだったのか」
「それでもここまで完全にシナリオが決められていたなんて思わなかったわ」

「細かいところまであらかじめ決めていないよね」
ダイアナは今度は素直な笑みを浮かべていた。
「それも複数のパターンをね」
「何があるからわからないからなのね」
「そういうこと」
その笑顔でアンに答える。
「恋路を実らせるのも難しいのよ」
「それはわかるけれど」
「特にねえ」
ダイアナはここでギルバートに顔を向けてまた苦笑いを浮かべてみせてきた。
「一方か両方に問題があればねえ。特に」
「僕か」
「だってあんた鈍いし」
ギルバートがあの時まで気付いていなかったことをあえて言うのだった。
「ずっと気付かなかったじゃない、アンのこと」
「それは」
「皆わかってたのよ」
ここで目をヤブにさせて溜息を少しだけ出してみせる。
「アンも露骨だったし」
「そりゃ私も言えなかったけれど」
意外とこういうことには内気なアンであった。
「それでも。わからないようにはしていたのよ」
「ギルバートには、ね」
ダイアナはそう注釈を入れてみせた。
「普通の人間なら誰だって気付くわよ」
「じゃあ僕は」
「その点に関しては普通じゃないわね」
ダイアナはまたしてもきっぱりと告げる。

「鈍過ぎるのよ」
「ううむ」
「まあ実った話だし今気付いたからいいけれど」
「この場合は気付かせたんじゃないの？」
アンはダイアナにそう突っ込みを入れたのだった。
「それって」
「そう言うかもね」
「かもねって」
その言葉にも何か嵌められたものを感じていた。
「そういうことだったの」
「けれど悪い気はしないでしょ」
ダイアナはしれっとした感じでアンに問うた。
「幸せになれたんだし」
「まあそうだけれど」
そしてアンもそれを認めるしかなかった。
「それでも。何か」
「まああんたも入ってるし、今は」
ここでアンに共犯だということを述べるのだった。
「カムイのことはね」
「お互い様だっていうこと？」
「そういうことよ。これでおあいこでしょ」
「そうなのか？」
ギルバートはそのことにどうにも納得しかねている感じであった。
それも無理もないことであった。
「それは思えないが」
「気のせいよ、気のせい」
ダイアナが誤魔化す。

第六十四話　円卓会議その七

「気にしない気にしない」
「ううむ」
「何はともあれこれで決まったね」
ピーターが話をまとめにかかってきた。
「デートにするってことでね」
「後はコースね」
ビアンカはそこも決めにかかった。
「ナンシーの提案でいいんじゃないかしら」
「ナンシーっていうと」
このクラスではないピーターはその言葉に少し戸惑いを見せた。
「ええと」
「私よ」
本人が早速名乗り出て来た。
「覚えておいてね」
「うん、今覚えたよ」
「本当かしら」
ピーターのいきなりの言葉にウェンディは懐疑的な目を向ける。
「もうって」
「少なくとも覚えるようには努力するよ」
笑ってこう言葉を返すピーターであった。
「それでいいよね」
「まあね」
ウェンディも釈然としないながらもそれに頷くのであった。
「それじゃあそれで」
「人間努力が肝心だし」
ピーター本人の言葉である。
「それでいいじゃない」

「自分で言わなければね」
ウェンディはそう彼に言うのだった。
「どれだけいいか」
「まあまあ」
「ともかくよ」
ウェンディはまた言う。
「コースも決まったし。後は」
「後は？」
「何処かに繰り出さない？」
彼女はこう提案してきたのだった。
「飲みにでも」
「ああ、それいいな」
マルコは笑顔でその提案に乗ってきた。
「丁度いい時間だしな」
「何がいいかしら」
ダイアナはもう遊ぶ場所を選びにかかっていた。
「今日行くとしたら」
「たまには野外なんてどうかしら」
ナンが提案してきた。
「オープンにね。どう？」
「バーベキュー？」
「そこまでは考えていないけれど」
ナンは皆の問いにそう返した。
「外で食べるのもいいものだから」
「それもそうか」
「そうだよな」
皆彼女のその言葉に頷くのであった言われてみればそうである。
「それじゃあ今日は」
「それで行くか」
「だったらいい店知ってるわよ」

ナンはまた言ってきた。
「モンゴル料理のお店がね」
「モンゴル料理」
皆はその単語を聞いて動きを止めた。少し聞き慣れない言葉だったからだ。
「そんなのがあるのか」
「あるわよ」
皆の問いに苦笑いになるナンであった。結構可愛い笑顔になっている。
「当然でしょ。モンゴル人だって食べるんだし」
「それはそうだけれど」
「どんなのかしら」
そこが問題であった。彼等もモンゴル料理と言っても具体的にどんなものがあるのか知らなかったのだ。これは当然と言えば当然であった。モンゴル人の数自体が少ないからだ。この学園においても。しかしイメージはちゃんと存在していた。

第六十四話　円卓会議その八

「やっぱりあれ？」
ダイアナが最初に問うた。
「草原の食べ物なの？」
「一言で言えばね」
ナンもそれに合わせて述べる。
「この前私のお家に来てくれたじゃない」
「ええ、あの時」
「ああした料理だから」
穏やかな笑みを浮かべて述べる。
「そう言うとわかってくれるかしら」
「ああ、あんなの」
「羊に乳製品ね」
「そうよ。どうかしら」
「いいんじゃないの？」
ダイアナがそれに乗ってきた。
「それで」
「私はどっちかだけだけれどね」
ユダヤ教徒のアンは少し困った顔になっていた。ユダヤ教においては乳製品と肉は一緒に食べることができないのである。そこが問題なのだ。
「けれどそれでいいわ」
「いいの」
「お肉だけ食べればいいし」
そういうところは割り切っているアンであった。意外と社交性もあるのである。
「それでね」
「じゃあお酒どうするの？」

ナンはそこも問う。
「モンゴルのお酒っていったらあの馬乳酒だけれど」
「うっ」
これにはアンも参った。これでは同じことになってしまうからだ。
彼女も酒好きで何かあるとルビー達と楽しくやっている程である。
「どうするのよ、それは」
「じゃあ乳製品をもらうわ」
残念な顔で述べるアンであった。
「それでいいわよね」
「ユダヤ教も何かと難しいのね」
「仕方ないわよ」
この指摘については困った顔で返すのだった。
「そうして四千年生きてきたんだし、私達」
「そうよねえ」
「頑固だよなあ」
皆アンのその話を聞いて言う。
「四千年それって」
「ある意味凄いよ」
「そのかわりあれよ」
アンはここで皆に反撃に転じるのだった。不敵に笑った後で。
「美人は多いから、イスラエルは」
「そういえばそうね」
「意外にも」
実は連合においてはイスラエルは美人国で知られている。ただしユダヤ教のその戒律のせいでどうにもイスラエル女性は人気がないのであるが。あるイスラエル美女を強引にデートに誘うとその美女の一族が来て男は暫く行方不明になり発見された時はノイローゼに陥っていたという都市伝説もある。そのせいでイスラエル女性はかなりの確率でイスラエルの男が独占している。実はギルバートは例外である。

「食べ物に関係あるのかしら」
「それはないだろ」
それについても話が為される。
「多分」
「とにかく。私はそれでいいから」
アンは自分のことはいいとした。
「行きましょう。早く」
「そうだね」
「それじゃあ話も終わったし」
彼等は景気よくモンゴル料理店に向かった。そうしてそこで楽しく宴に興じるのだった。次の宴にもう想いを馳せながらであるが。

円卓会議　　完

２００７・１１・１

第六十五話　セッティングその一

セッティング

ピーターと二年Ｓ１組の面々はデートの準備にかかった。ティンに対しては兄であるピーターが色々と話をしていたから問題はなかった。

「その通りでいけばいいのね」

「うん」

妹に対して優しく頷く。

「御前がそれでいいんならな」

「私はいいわ」

ティンは天使の笑みで彼に答えるのだった。

「あの人で」

「そうか。ならいい」

少なくとも彼女に関しては問題はなかった。残る問題は三つであった。

「洪童だけれどさ」

ダイアナが皆に言う。

「あの馬鹿については根回しは済んだわ」

「根回し？」

「妹さんよ」

洪童最大の弱点である妹の春香が出された。

「春香ちゃんに事情を話しておいたから」

「じゃあ安心ね」

「これであいつもなしよ」

「ふうん」

「けれど何をするのかな」

それが少し気になるところであった。洪童の彼女とかそういったものに対する異常というか漫画チックな反応は普通にやったのでは

絶対に止まらないものだからだ。皆もうそれはわかっていた。
「妹さんが遊園地に行くんだって」
「遊園地に！？」
「それもクラスの子と」
ここが重要であった。
「一緒に行くらしいわ。男装した子とね」
「それはいいわね」
完璧であった。これならば洪童は確実に妹の方に行く。何しろ妹につく悪い虫は一匹残らず抹殺すると宣言している男なのだから。
「だからそっちも安心よ」
「よしっ」
「じゃあ私達は」
デートの舞台に専念するだけだった。かなり肩の荷が降りた。
「デートよねえ」
「とびきりのムードにしてね」
そう言いながら色々とする。何かと配慮を行き届かせる。
「それでさ」
ここでダイアナがまた言う。
「何？」
「カムイだけれど」
今回のもう一人の主役について言及するのだった。
「どうなの、あっちは」
「何かあっちも順調みたいよ」
「そうなの」
「順調に乗ってるみたい」
「乗ってるねえ」
ダイアナは蝉玉のその言葉に微妙な顔になるのだった。
「それって何か」
「おかしいかしら」
「おかしいっていうか何ていうか」

そう蝉玉に述べるのだった。
「カムイも時々いきなり突拍子もないことするからね」
「まあそうだけれど」
それが問題なのだ。何しろ今回の騒動も元はといえばカムイの暴走が原因だからだ。ダイアナがふと不安を抱くのも無理はないことであった。
「大丈夫でしょ」
「だといいけれど」
ダイアナには蝉玉の言葉が今一つ不安なものに聞こえた。
「果たしてどうなるか」
「いざとなったらどうにかするのよ」
蝉玉もまた実に強引であった。
「何があってもね」
「またえらく強引ね」
ダイアナは今度は彼女の言葉に呆れた。
「あんたも」
「女は強引にいかないと」
実に強い言葉であった。元気のいい蝉玉らしく。
「よくないのよ。私の国では女は皆そうよ」
「みたいね」
これはかなり有名なことである。アメリカンガールと中国娘は連合で最も気の強い女達であると言われているのだ。どちらも男もあれだからだという説が巷には流布している。少なくとも蝉玉が典型的な中国娘であることはクラスの皆が知っていることである。
「だから。いざという時はね」
「その時は任せるわ」
意外と大人しいダイアナであった。

第六十五話　セッティングその二

「あんたにね」
「あんたは何もしないの」
「何もしないわけじゃないけれど」
そこまで薄情ではないダイアナであった。
「それでもね。何も起こらないことを祈るわ」
「私もそうよ」
意外にもそれは同じであった。
「下手なことにならないといいけれど」
「カムイだからねえ」
ダイアナは腕を組んで溜息をついた。それが問題なのだ。
「何が起こるやら」
「何を起こすやらかも」
言い得て妙だった。本当にそんな男なのが問題なのだ。
「何だったっけ。前」
「聖帝親衛隊だったっけ」
かつて勝手にそう自称して洪童と組んでカップルの邪魔をしまくっていたことがある。人間としてかなりな行為であるのは言うまでもない。
「訳のわからないこととしていたわよね」
「あの時本気で気孔やってやろうかって思ったわよ」
蝉玉も容赦がない。
「馬鹿やるんだから。何の漫画なんだか」
「変な服だったしね」
その聖帝親衛隊の服のことである。
「核戦争後の世界みたいな」
「そうそう、それか地震の後の世界みたいな」
ダイアナも蝉玉もそれぞれ言うがこうした世界観の漫画やアニメ、

小説はこの時代にも存在している。日本から定着したと言われているが連合ではかなりポピュラーな設定と言える。これ程実際に住むとなると嫌だが作品として読むと面白い設定はない。
「服着て暴れたしねえ」
「今回も失敗したらそうなるかも」
二人はそれを危惧していた。
「あいつ馬鹿だから」
「そうよね」
ダイアナはまた蝉玉の言葉に頷くのだった。頷きながらカフェの中の照明や椅子を動かす。そうして舞台を設定しているのだった。
「そこが最大の問題だけれど何とかなるんなら」
「何とかしましょう」
「ええ」
二人はそう話して舞台を設定していくのだった。それは公園でも並木道でも同じだった。とにかく慎重に丹念に話を進めていくのであった。
そうしてデートになる。待ち合わせ場所はもう決まっていた。
「ラブレターには何て書いたんだい？」
ピーターが妹に問う。
「最初は駅前の噴水のところで待ち合わせだけれど」
「うん、いいね」
ピーターは彼女からその言葉を聞いて満足して頷くのだった。
「それで問題はないよ」
「あそこは待ち合わせ場所に問題ないわよね」
「それだけじゃないんだ」
彼はここで妹にこう告げた。
「ここだけじゃないって？」
「そこでコインを後ろ向きに噴水に投げる」
所謂トレビの泉である。この時代そんな場所は幾らでもある。
「そうすれば恋が実るって言われているんだ」

「そうなの」
「問題はそれをカムイ君が知っているかどうかだけれど」
「あいつそんなの知らないわよ」
横からウェンディが言ってきた。
「意外とそういうところは見逃すから。安心して」
「そう。じゃあそれは安心だね」
「ええ」
かなり酷い言葉であった。
「まあ最初にはいいわね」
ウェンディはそこには太鼓判を押したのだった。
「目印になり易いし」
「肝心なのはやっぱりこそこだね」
ピーターもそこを指摘するのだった。

第六十五話　セッティングその三

「はっきりわからないとね、最初は」
「そういうこと。まああいつかなり目立つけれど」
これについても問題ないのであった。何しろこのクラスの一員である。目立たない方が不思議である。なおカムイはその中でも目立つ方である。
「ここは安全牌、と」
「それからかな、問題は」
ピーターは腕を組んで考えながら述べた。
「どうなるかな」
「最初は公園よね」
次に三つの場所について言及するのだった。
「確か」
「そこでまずはじっくりとムードを作るのが基本よ」
ナンシーがそう力説してきた。
「わかるかしら、最初が肝心なのよ」
「それはね」
ウェンディもピーターと何回もデートしている。だからそれはよくわかった。
「わかるわ、よくね」
「そう、ムードを作れば勢いっていうのが出来るから」
ナンシーはさらに力説する。
「そこが肝心。その点あの公園は最高よ、何しろ」
「何しろ？」
「コスモスがあるから」
急にうっとりとした口調と顔になるナンシーであった。
「あそこで二人並んで歩くのが最高なのよ。それだけでもう完璧ね」
「そうなんだ」

「そう、完璧よ」
そのうっとりとした口調でまた言うのだった。
「これだけでいいかもってレベルね、あのコスモスの中は」
「わかったわ。それにして」
「何かしら」
ここでナンシーはウェンディの言葉に応えるのだった。
「本当に随分よく知ってるわね」
「そうだね」
彼女の言葉にピーターも頷く。
「コスモスがあるなんて。よくもそこまで」
「しかもムードまで」
ピーターはそこも指摘するのだった。
「細かいところまで。よくそこまで」
「知っているね、本当に」
「ま、まあね」
右頬を右の人差し指でかきながら答える。内心しまったとも思っているのは内緒である。もっともそれも知っている人間からすればモロバレであるが。
「ちょっと勉強したから」
「ちょっと!?」
ウェンディはそこにも疑念を覚えるのであった。
「何処でよ」
「あっ、それは」
また失言だった。ナンシーはそれに対しても慌てて取り繕う羽目になった。
「本で。ほら、この話が出てね」
「そうなの」
「そうなのよ、何かと勉強になったわ」
「成程ね。恋路もそれで勉強できるんだ」
ウェンディはそのことにあらためて納得したのだった。彼女は少

なくともナンシーのことには詳しくはなかったから彼女と後輩のことには気付かなかったのだ。
「わかったわ」
「そういうことよ」
ナンシーはこれ以上は前で出ようとしなかった。墓穴を掘るだけだと思ったからだ。
「だからね。そこは最初なの」
「わかったわ。それで次は」
「並木道だけれど」
ダイアナが言う。
「ここは二人歩けばそれでいいわよね」
「そうね」
ウェンディは彼女の言葉に頷いた。
「枯れ葉がムードを作ってくれるから」
「そうそう」
「銀杏じゃないし」
ここも重要であった。
「銀杏は雰囲気あるけれど匂いがねえ」
「それが困るのよ」
ダイアナもウェンディのその言葉に一緒に困った顔になるのだった。
「どうしようもないから」
「しつこいしね」
銀杏の香りは存外しつこい。彼女達もそれはよく知っていた。
「どうしたものやら」
「けれどそれがないのは助かるわ」
そのうえで言い合うのだった。まずはそれが助かっていた。

第六十五話　セッティングその四

「並木道はセットも少しで」
「そういうことで」
ダイアナがウェンディの言葉に頷く。
「さて、それでいいよいよだね」
ピーターがまた言う。
「最後のカフェは」
「ここよ」
ウェンディはそこを指摘するのだった。
「ここが問題。皆わかるわね」
「ええ」
「はっきりとね」
皆も彼女の言葉に答える。
「ここで決めるんだから」
「そういうふうに持って行くのね」
「そういうこと」
ウェンディはまた言う。
「あいつをそうした方向に持って行かないとね」
「いけるかな、そういうふうに」
マルコが腕を組んで述べる。
「あいつはわからないからな」
「そう、それが一番の問題」
ウェンディはまたそれを指摘する。
「あいつをそこまで止めるのとそこで言わせるのがね」
「コントロールするってことか」
マルコがまた言う。
「あいつを」
「一言で済むけれど実際にやるのは」

ウェンディも顔を顰めさせる。彼女もまた彼の突拍子もなさはよくわかっている。だからこそ頭を悩ませるのであった。ここで一言出たのだった。

「馬鹿と鋏は使いようだけれど」

「馬鹿にもよるよな」

「そういうこと」

またウェンディは言った。

「あいつはそういう馬鹿じゃないから」

「うちのクラスってそんな馬鹿ばかりだな」

マルコはあらためてそう思った。

「あいつといい洪童といい」

「それに」

ウェンディはちらりとある三人を見た。しかし彼等にはその自覚はない。完全に。

「燃えてきたぞ！」

フランツは勝手に騒いでいる。

「この俺が！あいつの恋を実らせてやる！」

「そうか」

タムタムがその彼に応える。

「ああ。父ちゃん、俺はやるぜ！」

「あいつもいる」

マルコは勝手に叫ぶそのフランツを指差して指摘した。

「そもそも何であそこで父ちゃんなんだ？」

「気にしなくていい」

それにタムタムが答える。

「いつものことだ」

「そうか。そうして」

後二人。子の二人も問題であった。

「あいつ等も」

「俺の灰色の頭脳の推理だとこの恋は」

「上手く行かない筈がないわね」
テンボとジャッキーもそこにいた。当然フランツと同じく数には入れられていない。
「そうだ。俺は予想する」
「あたしもよ」
「あの二人は放置してあるんでしょうね」
ダイアナがその二人を横目で見ながらウェンディに問う。
「してないと大変よ」
「わかってるわよ」
ウェンディも当たり前でしょ、と自分の顔に書いて答えた。
「真っ先に外したわよ」
「それはいいことね」
それを聞いて安心するダイアナであった。
「じゃあ邪魔者はもういないし」
「ええ。セッティングも事前のは全部済ませたし」
「後はその日になるだけ」
「じゃあそういうことで」
ピーターはここで話をまとめにかかってきた。
「話は決まりだね」
「ええ、それじゃあ」
「今日はこれまでで」
話が終わろうとしていた。
「解散でいいかな」
「ああ、こっちはな」
マルコが最初に彼に答えた。

第六十五話　セッティングその五

「話が終わったら後は」
「まあこれも本題だけれど」
ダイアナは楽しそうに言うのだった。
「飲みますか」
「お肉よお肉」
ナンが待ってましたとばかりに声をあげる。
「モンゴル料理はやっぱりこれ」
「馬乳酒が来たわよ」
酒も来た。皆すぐにそれを手に取る。見れば白い酒であった。
「やっぱり白か」
「お乳だからね」
ナンが皆に答える。
「前飲んだからわかってると思うけれど」
「まあな」
マルコがそれに言葉を返す。
「しかし。最初見た時は別の酒かと思ったよ」
「カルピスシェーキとか？」
「そっくりだよな」
彼は言う。
「色なんかもう完全に」
「そうね。けれど味は違うじゃない」
「それでまた驚いたわよ」
ダイアナもナンに告げる。
「全然違う味だから」
「けれど美味しいでしょ」
「ええ」
それは確かだった。確かに美味い。

「何ていうか。不思議な味ね」
「これが馴れると美味しいになるのよ」
ナンは笑いながら述べる。彼女はその馬乳酒をどんどん飲んでいく。さながら水の様に。
「あまり強くないのね」
ダイアナもそれは同じである。飲みながら今度はアルコールの濃さについて言うのだった。
「これって」
「蒸留したのもあるけれど元々はそうなの」
ナンはそう答える。
「だから。量を飲むのよ」
「そういうお酒なのね」
「そうよ。だからほら」
ここで酒を勧める。
「どんどんね。飲みましょうよ」
「それは安心して」
ダイアナはにこりと笑ってナンに言葉を返す。もう顔は赤くなってきていた。
「言われなくても飲んでるから」
「そう。それはいいことよ」
「それも皆ね」
ダイアナはここで皆を指し示す。見れば皆羊と乳製品で楽しく飲んでいた。
「いや、これって」
「チーズとかも美味しいし」
「馬のチーズよ」
そうマチアに言うのだった。
「これも馬か」
「モンゴル人にとっては馬は永遠のパートナー」
単なる家畜ではない。そう述べてみせた。

「足であるだけでなく栄養も与えてくれる存在なのよ」
「何でも馬なんだな」
「そうよ。これはペガサスのお乳から作ったチーズね」
その中の一つを摘んで答える。
「それもカサ星系のね」
「そんなのもわかるんだ」
「わかるわよ。モンゴル人の五感を甘く見てもらったら困るわ」
こうも言う。言うまでもなくモンゴル人は草原の民だ。草原では五感が研ぎ澄まされる。従って彼女の五感もまた研ぎ澄まされているというわけであった。
「これ位わかるわよ」
「へえ」
「ナンもグルメなんだ」
「驚いたかしら」
ナンは少し得意げになっている感じであった。
「いや、中々」
「隅に置けないね」
「ふふふ、特に目と耳と舌は自信があるのよ」
本人曰くそうである。
「それで。美味しいでしょ」
そのうえで皆に問うのだった。
「たまにはこうした飲み方も」
「ええ」
今度はアンが答えた。彼女は律儀に乳製品だけを食べていて決して肉には手をつけない。何処までも戒律に厳しいのがそれでわかる。
「いい感じよ」
「それじゃあこれを食べて英気を養って」
「やりますか」
皆で言い合うのだった。いよいよカムイとティンのお笑いデートが幕を開けるのであった。

セッティング　完

2007・11・5

第六十六話　デートの周りその一

デートの周り

「こちら噴水前、こちら噴水前」
駅前の物陰からマチアが携帯で誰かに連絡をしていた。
「こちらは今のところ異常なし」
「了解」
カフェに置かれた司令部から返事が返る。そこにはウェンディがいた。
「そのまま警戒に当たって。いいわね」
「わかった」
マチアはその言葉に頷く。そうして一旦電話を切るのだった。
ウェンディもまた電話を切って自分の持ち場に戻る。そこにはピーター達が詰めていた。
「二人共まだ来ていないんだね」
「まだ時間じゃないしね」
ウェンディはそうピーターに答えた。見れば店の二階は皆貸し切られている状態であった。そこでは結構な数のメンバーがお茶やお菓子を楽しみながら詰めていた。店の中身はやはりラテン風で明るい感じである。彼等はその中で明るい音楽を聞きながらそこにいるのだった。
「これは当然ね」
「そうね。かえって早く来られてもね」
ピーターはそれに応えて言う。
「困るだけだし」
「妹さんはどうなの？」
ウェンディはここでピーターに彼の妹のことを尋ねた。
「もう家は出ているわよね」
「うん、ちょっと待って」

彼はここで待つように言った。そうして携帯でメールを入れる。
「ええと」
「どうなの？」
「今電車の中だってさ」
そうウェンディに告げた。
「それももうすぐ着くらしいよ」
「少し早くないかしら」
ウェンディはそれを聞いて述べた。
「この調子だと」
「そうだね。何処かで時間を潰すように言うよ」
「ええ、御願い」
そうピーターに頼む。
「そちらの調整も大事だからね」
「そうなんだよね。まずは二人がいいタイミングで出会うこと」
ピーターは腕を組んで述べる。
「最初が肝心だからね。最初が上手くいけば」
「そのまま波に乗れるからね」
「そういうこと。だからね」
彼は笑顔で言う。
「そこの調整はしっかりしないと。それで」
ここで彼は二年Ｓ１組の面々に尋ねた。
「彼はどうなのかな」
「まだ来てないみたい」
そこにいるアロアが答えた。
「丁度こっちに向かっている頃みたいよ」
「そうなの。けれどそろそろかな」
ピーターは店の壁にかけてある時計を見た。そうして述べる。
「彼が来るのも。時間にはどうなの、彼」
「女の子が絡むと異常に性格よ」
ウェンディが言う。

「普段はそれ程でもない癖にね」
「じゃあ大丈夫だね」
ピーターはそれを聞いてまずは安心して笑みを浮かべるのだった。
「それだと」
「そういうこと。後は」
しかし問題はまだ残っている。ウェンディが次に気にしているのは気象であった。
「雨とか大丈夫よね」
「天気予報では晴れよ」
またアロアが答える。今度はウェンディに。
「降水確率ゼロパーセントだって」
「そうなの。じゃあそっちも安心ね」
「そういうこと。後は主役が来るだけ」
「それはもうすぐ」
「どうなるかな」
彼等はその主役が来るのを心待ちにしていた。そうしてじっくりとそこで様子を見ていた。やがて駅前のマチアから報告が届いた。それは待ちに待った一報であった。
「来たぜ」
「遂になのね」
「ああ、遂に来た」
彼は携帯からウェンディに報告してきていた。そこにいる皆がそれを聞いている。
「奴がな」
「時間通りね」
ウェンディはまた壁の時計を見て述べた。
「やっぱり女の子が絡むと時間に厳格になるわね」
「ああ。とりあえずここまでだ」
マチアは連絡を中断にかかった。
「また何かあったら連絡する。いいな」

「ええ、御願い」

こうしてまた報告が終わった。今カムイが噴水の前に現われたのだった。

第六十六話　デートの周りその二

彼は噴水の前で真剣な顔をしていた。見れば普段より三割増しでお洒落をしている。
「中々凄い格好ね」
「そうだな」
マチアは一緒にいるレミの言葉に頷いていた。見れば今のカムイの服は赤と黄色である。目立たない筈がなかった。まるでカナリアである。
「あいつあんなにファッションセンス悪かったか？」
「勘違いしてるんじゃないの？」
レミはその翡翠色の目でカムイを見ながら述べる。
「何か決定的に」
「勘違いか」
「ほら、ファッション雑誌あるじゃない」
ここで彼女はそれを出してきた。
「それで色々やって失敗したらああなるのよね」
「あれは失敗なのか」
「それも大失敗ね」
こうまで言う。
「センスが悪いとかいうかそれ以前の問題よ。何考えてるんだか」
「考え過ぎてあの結果なんだろうな」
マチアもマチアで随分きついことを言う。しかし当然ながら当のカムイはそれに気付いていない。見ればかなり誇らしげな顔をしてそこに立っている。
「かえって何も考えない方がいいからな」
「そうね、案外ね」
レミもそれはわかっている。だからこそ今のカムイの服装に顔を顰めさせているのだ。

「それがわかっていないから」
「ああなる。成功するかな、果たして」
「さあ」
レミはそんなことは特に考えていない。だからこそこう言うのだった。
「するんじゃないの？よくわからないけれど」
「わからないのか」
「それについてはあまり興味ないのよ」
自分でもそれを言う。
「問題はこれからどうなるかで」
「滅茶苦茶になるだろ、普通に」
マチアはクールにこれからの事態を予想していた。
「実る実らないは別にして」
「カムイだからね」
問題点はそこであった、結局は。
「何するかわからないから」
「ただ。あれであいつは女には奥手だがな」
「そうなの」
「ああ、考えてもみろ」
ここでレミに言う。
「あいつが積極的だったらどうなってた？」
「そりゃ今頃フックみたいになっていたでしょうね」
レミはすぐにそう答えたのだった。
「案外顔も悪くないし」
「そうだな。本当の意味で積極的だったらな」
マチアは微妙な顔で微妙な言葉を述べた。
「そうだったろうな」
「本当の意味で積極的じゃないのよ、あいつは」
レミはカムイをこう評した。
「変に暴れるけれどそれだけで」

「本当にそれだけだな。
「そう。だから駄目なのよ」
「彼女ができない」
「今回も。どうかしらね」
そこまで語ったうえで今回のデートについて考えるのだった。
「上手くいけばいいけれど」
「妹さんは乗り気なんだろ？」
マチアはここでティンについて述べた。
「だったら上手くいくんじゃないのか」
「普通に考えればね」
この言葉はカムイが普通でないという前提があっての言葉であった。
「女の子がよかったら。大抵は上手くいくものよ」
「男は関係ないのか」
「だって。女の武器の効果は絶大よ」
レミは不意に思わせぶりに笑って言うのであった。

第六十六話　デートの周りその三

「それがわからないようじゃ。あんたもまだまだだよ」
「まだわかりたくもないな」
だがマチアはすっと身をかわしてレミの今の言葉をスルーしたのだった。
「今のところはな」
「あら、用心深いのね」
レミはマチアの今の言葉を聞いてくすりと笑う。
「私が誘うとでも？」
「いや、それは思っていない」
これもまた切り返した。
「悪いがな」
「それはまた機会があればね」
レミも意外としたたかな様子で話を収める。そうして話を変えるのであった。
「とにかくよ。もうすぐね」
「ああ」
あらためてレミの言葉に頷く。
「来るな、あの娘も」
「あの娘は結構フックのこと気に入ってるみたいよ」
レミはそうマチアに語る。
「それについてはどう思うの？」
「いいんじゃないのか？」
マチアはその問いに何でもないといった様子で言葉を返すのだった。何処となく素っ気無いものであったがそれでもカムイをちゃんと見ている言葉であった。
「あいつは少なくとも女の子を粗末にはしない」
「そうね」

それは確かだった。レミもそれはわかっている。
「そういうところはいいのよ」
「それに悪い奴じゃない」
マチアはそれも知っていた。
「むしろいい奴だ」
「意外とカムイを高く買ってるのね」
「嫌いじゃないしな」
マチアは相変わらずの落ち着いた口調で述べた。
「だからだ」
「そうなの」
「ああ。それで彼女は今何処だ？」
「ええと」
レミはそれに応えて携帯でウェンディにメールを送る。そうして今の状況を伝えるとすぐにメールが返って来た。そこに書いてあったことを見てマチアに告げる。
「今時間を潰していた駅の中の本屋から出たそうよ」
「じゃあすぐか」
「そうね」
マチアの言葉に頷く。
「もうすぐここに来るわね」
「あいつはあんな訳のわからない格好だが」
マチアはまたカムイを見た。あらためて見てもやはり妙にバランスの悪い格好であった。
「ティンちゃんはどうかな」
「そういえばあの娘のファッションセンスまで考えてなかったわね」
レミはここでふと気付いた。
「よく考えたら」
「それを言えばあいつのもだな」
マチアはまたカムイを指し示して言った。
「まさかあんなにバランスが悪いとは」

「まあそれもあいつらしいけれど」
カムイらしいと言えばカムイらしい、今のレミの言葉にマチアは何故か完全に頷くことができた。
「そうだな」
「お兄さんの服装もあれじゃない？」
レミはここでティンの兄であるピーターについて言及した。
「熱帯の鳥みたいな格好よね」
「つまり派手ってことか」
「それも上に『ド』がつく」
レミもレミで言葉に容赦がない。
「そんな感じじゃない？あれは」
「そうだな」
マチアもそれを否定できないのであった。またしても頷く。

第六十六話　デートの周りその四

「あれは。俺にはできない」
「私達ラテンもかなり派手だけれど」
彼等は中南米出身なのでラテンとされている。実際はかなり混血していて純粋なラテンではなくなっているのだが人種の分類としてはそうなのである。
「あいつはまた特別ね」
「確かあれだったな」
マチアはまた言う。
「アイヌ人は」
「慎ましやかだったわよね」
俗にそう言われている。アイヌ人はそもそも狩猟民族であるがその性格は穏やかで自然を愛し慎み深いと言われているのである。連合においては。
「確か」
「それであれか」
あらためてカムイの格好を見て言う。
「どういうことなんだ？」
「例外じゃないの？」
レミはそう結論付ける。
「何だって例外はあるしね」
「それはそうだが。そういえばだ」
ここでカムイはあることに気付いた。
「何？」
「アイヌ人は刺青する風習があったな」
「大昔じゃないの？それって」
確かに大昔の話だ。少なくとも今はそんな風習はない。あるのはその筋の人間や独特のセンスの持ち主だけである。この時代にも刺

青はあるがそんなものである。
「それはそうだがな」
「今殆どの人がしていないわよ、アイヌでも」
「それもそうか」
「そうよ。やっぱりあいつが変なだけよ」
出て来た結論はやっぱりそれだった。
「ティンちゃんも何だか不安になって来たわ」
「そうだな。むっ」
ここでマチアが駅の方を見て声をあげた。
「来たぞ」
「来たのね、遂に」
「ああ、見ろ」
見ればティンはエメラルドグリーンの上着とスカートであった。どちらも何故か薄い布質でスカートは浮き上がってふわふわした感じである。上から白いカーディガンを纏い足は白いストキングである。靴も白い可愛らしいものであった。
「何かさあ」
レミは彼女のその服を見てマチアに言った。
「あれよね」
「そうだな」
マチアもマチアで彼女のその言葉に頷く。
「予想していたがかなりな」
「妖精？」
レミはイメージそのままに言った。
「あれって」
「そうかも知れん」
またレミに答える。
「よくわからないが」
「あれが彼女の勝負服なのね」
それはわかるがセンスはわからないのであった。

「どうしたものかしら」
「まあそれも人それぞれだ」
マチアはそう結論付けることにした。
「俺達がああだこうだと言う問題でもない」
「じゃあこのまま見ていればいいのかしら」
「それだけだ」
彼の結論であった。
「だから今は」
「ウェンディ達に伝えるだけね」
「そうだ。俺から伝える」
そう言ってすぐに携帯にメールを入れるのだった。その動きが早い。
「これでよし」
「そう。じゃあこれで私達の仕事は終わりね」
「後は他のメンバーだな」
彼等の受け持ちはあくまでここだけだ。他の場所は他のメンバーが引き受けることになっている。だからこれでお役御免というわけなのだ。
「じゃあどっか行く？」
「何処にだ？」
マチアはそうレミに問う。
「そうね。駅前だし」
彼女は駅前を見回して。また彼に述べた。

第六十六話　デートの周りその五

「デパートでも」
「買い物か」
「何か食べてもいいし」
色々とできることはある。そうした意味で駅前には何でもあった。
「どうしようかしら」
「その前に最後の仕事だ」
しかしマチアはここでこう言うのだった。
「最後の？」
「見ろ」
そう言ってカムイとティンを指し示す。見れば二人は噴水前で会っていた。
「会っているぞ」
「最初の関門ね」
「ああ、どうなるかな」
二人は彼等の出会いを注視する。ここで終わってはまずどうしようもない。
「あの」
最初に口を開いてきたのはティンであった。じっとカムイを見上げている。
「カムイさんですよね」
「ああ、そうだよ」
カムイの返事はまずは普通であった。
「ティンさんだよね」
「はい。紹介されまして」
「俺も。じゃあさ」
「ええ。宜しければ」
「俺は是非共」

今のカムイの言葉に二人は顔を曇らせた。
「今のは駄目だろ」
「駄目よ」
これはないと思った。しかしティンはそれに平気であった。
「わかりました」
「えっ！？」
「わかりました！？」
マチアとレミは今のティンの言葉に思わず声をあげてしまった。
結構大きな声だったのでティンがこちらの方に振り向いた程だ。だが幸い見つからなかったようだった。目をぱちくりとさせて首を傾げただけだったからそれがわかった。運がよかった。
「よかった」
「見つからなかったわね」
二人はそのことにまず胸を撫で下ろした。それから言い合う。
「お互いな」
「気をつけましょう」
「ああ」
互いに頷き合う。そうしてまた二人を見るのだった。
「それでは最初は」
「何処に行くんだ？」
「公園なんてどうでしょうか」
ティンは事情を知っているのでこう提案してきた。
「最初はあそこで」
「さて」
「次の関門だな」
レミとマチアはまた二人を見守る。ここでもカムイの返答次第で動く。彼がそこは嫌だと言えば餌を出すなりして誘い込むつもりである。そこはもう考えている。
「どうなるかしらね」
「はいって言えよ」

二人はそう思いながらカムイの様子を見守っている。固唾を飲んで見守っている。
「さあ早く」
「言うんだよ」
「ああ、いいよ」
これこそ二人の待っていた返事であった。
「じゃあそこでな」
「よしっ」
「やったな」
今度は流石に小声であった。二人も用心しているのだ。
「公園に。行こうぜ」
「わかりました。それじゃあ」
そっとカムイの横に来る。そうした細かい動作も完璧であった。
レミはそこにも気付いた。それでそっとマチアに囁くのであった。
「やるわね、あの娘」
「そうなのか？」
「ええ、見て」
またティンを見て述べる。
「そっとカムイの横に来たわね」
「ああ」
言われてやっと気付いた。間違いなくレミの方がこうしたことには鋭い。これもまた勘であった。女の勘というものであろうか。少なくともマチアには今わかったのだ。

第六十六話　デートの周りその六

「あれは。見事よ」
「見事か」
「どうやら。私の予想以上ね」
こうまで言う。
「あの娘。どうやら」
「任せてもいいか」
「それもかなりね。私達がいなくても大丈夫かも」
「そこまでか」
「ひょっとしたら。けれどもう皆配置に着いてるし」
これはもう決まっていた。だからどうこうすることはもうできない。だからレミは今連絡を入れるのであった。
「こちらレミ」
「どう？様子は」
「予想以上よ」
そうウェンディに告げる。
「あの娘、やるわね」
「そうなの」
「ええ。けれどここはね」
「わかってるわ」
ウェンディも全てわかっている。携帯の向こうで頷いているのがレミにもわかる。レミはそれを感じながら彼女に対して言葉を続けるのであった。
「後は御願い」
「あんた達はこれで終わりよね」
「そうよ」
答えるレミの声が明るくなった。
「何かあったらまた呼んで」

「わかったわ。何処にいるつもり？一応聞いておきたいのだけれど」
「デパートよ」
レミは楽しそうに笑ってそう答えた。
「駅前のね。そこにいるから」
「じゃあ何かあったらすぐに来れるわね。マチアも一緒？」
「ええ、一緒よ」
「おい」
マチアが今のレミの言葉にクレームをつける。しかしレミはそれに構わずさらに言うのだった。
「デートしておくから」
「楽しんでね」
「だから待てって」
またマチアがクレームをつける。
「どうしてそうなるんだ」
「デートのこと？」
「そうだよ」
顔を顰めさせて言うのだった。
「どうしてそうなるんだよ」
「本当のことじゃない」
レミはしれっとした調子で彼に答える。
「二人でデパートに行くんだから」
「あのな」
マチアは顔をさらに顰めさせて彼女にまた言う。
「それをわざわざ言うか？」
「別にいいじゃない」
レミはしれっとした様子であった。
「本当のことだし」
「それだからだ」
これはマチアの失言であった。
「若しこれが噂になったら」

「あら、困るのかしら」
これはウェンディのこ絵であった。かなり楽しそうな感じである。
「ひょっとして」
「何が言いたい」
「わかってるんじゃないの？」
ウェンディは意地悪い調子で彼に言葉を返してきたのだった。
「電話の向こうの私もわかってるんだし」
「別に俺はな」
「そうそう、彼氏じゃないわよね」
横からレミがまた言う。
「別にそれはね」
「わかっているじゃないか」
「わかっているけれどデートはできるわ」
しかしあえてこう言うのだった。
「違うかしら」
「ふん」
「じゃあ決まりね」
今のマチアの言葉は肯定でも否定でもないのを見て取ってまた言う。
「これで」
「ただ一緒に行くだけだからな」
マチアはそれでもまだガードを解いてはいなかった。
「いいな」
「別にいいわ。それじゃあそれでね」
「ああ。それじゃあ」
二人はそのまま持ち場を離れてデートに入る。携帯を切って。
「ひょっとしたら」
「何だ？」
マチアは横にいるレミに顔を向けて言葉を返した。
「カムイより先に彼女ができる人がいたりしてね」

「俺じゃないことを祈るな、それは」
そんな話をしながらも二人並んで歩くのだった。もう一つのデートがはじまるがこれはまた別の話で。カムイ達のデートは公園に移るのだった。

デートの周り　　完

２００７・１１・１０

第六十七話　公園ではその一

公園では

カムイとティンは公園に向かう。それはもうはっきり見られていた。

「こちらポイントB」

そこまでの道にはアンネットとルシエンがいる。そうしてウェンディ達に連絡をかけていた。

「今二人が来たわ」

「そう、今なのね」

「ええ」

報告してからウェンディに答えるアンネットであった。

「今ね」

「変わったところはない？」

「変わったところ？」

「何か馬鹿やってるとか。そういうのは」

「今のところはないな」

ルシエンがそうウェンディに述べた。二人を見ながら。

「とりあえずはな」

「そうなの」

「ああ、大人しい」

彼はこうも述べる。

「とりあえずは、だけれどな」

「何か不安そうね」

「何だ、あいつの格好」

彼もまたマチアやレミと同じことを指摘するのだった。

「何の本を見たらああなるんだ」

「そんなに凄い格好なの」

「それは見てのお楽しみよ」

横からアンネットが言う。見れば彼女も呆れた顔であった。
「凄いから」
「ふうん、じゃあ楽しみにしておくわ」
「ティンちゃんもな」
ルシエンは彼女の名前も出すのだった。
「かなりのものだな」
「あれ、何？」
アンネットはまた言う。どういうわけか二人の意見は完全に一致していた。それもマチアやレミともである。言い換えれば二人のセンスがそこまで悪いということであるが。
「妙に変だし」
「妹のセンスは少し変わっているんだ」
電話でピーターが答えた。
「妖精みたいな感じでしょ」
「そうだな」
彼の言葉にルシエンが頷いた。
「そんな感じだな」
「そうだろうね。決めたい時はいつもそうなんだ」
ピーターはこうも彼等に述べた。
「だから。気にしなくていいよ」
「気にしなくていいって」
アンネットはその言葉に難しい顔になった。
「それはちょっと」
「無理だぞ」
ルシエンも言う。見れば彼も難しい顔をしている。
「かなりな」
「だったらそれはそれでいいよ」
ピーターもそれにこだわらないのであった。明るい声で言ってきたのが何よりの証拠である。
「別にね」

「そうなの！？」
「そうなのか！？」
二人はその言葉に一斉に疑問符を投げ掛けてきたのであった。
「そうは思わないわよ」
「なあ」
「そこは人それぞれだよ」
しかしピーターはそこに全く動じた様子は見せないのであった。
「ちっともね」
「そうかしら」
「流石にそうは思えないよな」
二人の疑問符は消えない。だがそれでもピーターの調子は一向に変わらない。
「だから平気だって。そういうのは」
「信じていいんだな」
「うん」
ルシエンの問いに明るく答える。
「是非共ね」
「どうする？」
「お兄さんが言っているんだからいいんじゃないの？」
流石のアンネットも彼の明るい言葉にこう言うしかなかった。
「やっぱり」
「いいのかね」
「いいでしょ」
投げやりともとらえられる言葉であった。
「お兄さんなんだし」
「御前お姉さんだよな」
ルシエンは不意に彼女の家庭を出してきた。彼女の弟への愛情はかなりのものである。ルシエンはこれを利用しようとしたことがあるから余計にそれを知っていた。
「知ってると思っていたけれど？」

「だからだ」
彼はそこをまた言う。
「いいのか、弟があんなのだと」
「そう言われても」
首を傾げる。どうやら想像力がそこまで回らないらしい。
「どうなのかしら」
「まあいい。何か俺までわからなくなってきた」
彼は言葉を打ち切ることにした。
「とにかく。いいんだな」
「一応はね」
そう答えるのであった。
「私としては。考えたら」
「何か一人っ子にはわからない言葉だ」
「そうだったの!?」
「凄いびっくり」
アンネットだけでなくウェンディも今の言葉に驚く。実は連合においては一人っ子というものは非常に珍しいのだ。殆どいないと言っても過言ではない。

第六十七話　公園ではその二

「一人っ子だったんだ、あんたって」
「知らなかったのか！？」
今度はルシエンが皆に問う番であった。
「それは」
「ええ、全然」
「今はじめて知ったわ」
「どういうことなんだ」
ルシエンはそのことにあらためて唖然とする。表情は唖然というよりも憮然といったものであった。
「俺は影が薄いのか」
「別にそうじゃないけれど」
「ねえ」
これは否定される。このクラスにおいて影の薄いメンバーというものは存在しないと言って過言ではない。何処までも個性的な面々が揃っている。
「それはないわ」
「全くね」
「じゃあどうしてこれが知られていないんだ」
ルシエンはそこにクレームをつけるのだった。
「俺が一人っ子だってことに」
「だって普通はねえ」
「兄弟でアパート借りるじゃない」
この学園ではそうである。誰もが兄弟全員で同じアパートに住んでいるのである。これは居住費節約の理由がかなり大きかったりする。
「それが一人だから」
「大変じゃない？」

「従兄弟が大勢いるからな」
どうやらこの学園には彼の従兄弟が大勢いるらしい。彼にとって幸運なことに。
「それはないな」
「何だ、じゃあ従兄弟同士でも」
「一人っ子はあんただけなんだ」
「ああ」
それも認める。皆はここで彼を余計に奇異に見るのであった。
「やっぱりねえ」
「珍しいわね」
「こんなことで珍しいのか」
ルシエンは今度は開き直ってきた。遂に。
「どういうわけなんだ、これは」
「どういうわけって言われても」
「やっぱり珍しいから」
それでも彼女達の言葉は変わらない。相変わらずであった。
「ねえ」
「そう言われてもよ」
やはり開き直る。
「俺に兄弟は今のところいないし。だからといって」
「あんたには関係ないわよ」
「それはね」
彼女達もそれはわかっているのであった。
「とにかく一人っ子って」
「珍しいのよ」
「そりゃ御前等弟いるしな」
ルシエンはふてくされながらアンネットとウェンディに対して言う。
「正直羨ましいよ」
「まあまあ」

ここでやっとピーターが入って話を収めるのであった。それから彼が言った。
「ところでそっちはどうなの？」
「ああ、あの二人ね」
アンネットはそこにふと気をやる。
「どうなったかよね」
「うん。そっちに来ているかな」
「今来たわ」
公園の中を二人並んで歩いている。うきうきした様子である。
「何かもう」
「そうだな」
アンネットとルシエンはそんな二人を見て述べた。
「ムードできてるわよね」
「いい感じだな」
「あれっ、もうなんだ」
ピーターはそれを聞いて意外といった声を出すのであった。
「早いね、また」
「そうよね。もうなんて」
「そうだな。しかし」
だがここでルシエンは二人をさらに見て。そのうえで言うのだった。
「何かまだ硬いな」
「硬い！？」
「ああ、見てみろよ」
アンネットにも見るように言う。見てみればティンはともかくカムイの様子がぎこちない。視線が泳いでいて手が自分でもどうしていいのかとふらふらしていた。ルシエンはそこを指摘しているのである。
「わかるな」
「そうね」

アンネットもそれに頷く。気付いたからだ。
「どうしていいかわかっていない感じかしら」
「そういえばあいつはじめてだったよな」
ルシエンはカムイについてまた述べた。

第六十七話　公園ではその三

「こうしたデートは」
「確かそうよ」
アンネットは自分の記憶を辿りながら述べた。実はそうなのだ。
カムイはもてないから必然的にそうした経験はないのである。これは自明の理であった。
「そのせいね」
「そうか。しかし」
ここでルシエンは視線を移す。その対象は。
「ティンちゃんは慣れている感じだな」
「ええ」
これもわかる。にこにこと笑ってカムイをリードしていた。
「このお花奇麗ですよね」
「そうだね」
池の端にある蓮を指差してカムイに声をかけてカムイに頷かせる。
実はカムイが蓮が好きなのをわかっているのが二人にもわかった。
「知ってるわよ、彼女」
「明らかにな」
ルシエンはアンネットの言葉に真剣な顔で頷くのであった。
「カムイが蓮好きだってことをね」
「しかも見てみろ」
そのうえその蓮の花にも秘密があるのであった。
「赤い蓮だ」
「そうね」
そこも重要であった。実はカムイは蓮の中でも赤い蓮が最も好きなのだ。それがわかっているということが彼等にとってｈ注目すべきことであった。
「そういうことも含めて」

「ああ」
ルシエンはアンネットの言葉に頷く。
「手馴れてるわね」
「そんな感じだな」
「いや、それ違うよ」
しかしそれは携帯の向こうのピーターにすぐに否定されたのであった。
「違うのか！？」
「ティンもはじめてだよ」
ピーターもこう言うのであった。
「こうしたデートはね」
「嘘でしょ」
アンネットがそれをすぐに否定した。
「それって」
「いや、本当」
しかし彼はこう述べるのであった。
「まだ十六だしさ。そういう経験はないんだよ」
「そうだったの」
「それでもあれは」
「まあ才能だろうね」
ピーターの言葉はいささか適当な響きを含んでいる。しかしそれでも説得力のあるものであった。
「ティンのね」
「そうなのか」
ルシエンは今の言葉を聞いてあらためてティンを見るのであった。見れば今も的確にカムイをリードしている。主導権は完全に彼女が握っていた。
「だとすれば凄いな」
「そうね」
アンネットも彼と同じ意見であった。

「あそこまでできるのって」
「じゃあ上手くいってるのね」
今度はウェンディが二人に声をかけてきた。
「それだと」
「そう思うわ」
アンネットがウェンディのその言葉に答える。
「私はそう思うけれどね」
「そう、じゃあ今のところは安心ね」
ウェンディはそう判断した。
「無難ってところで」
「これからはまだわからないんだな」
ルシエンはその言葉の逆の意味を捉えてこう述べてきた。
「そうなると」
「そうよ」
それはウェンディも認めた。
「何時変わるかわからないわよ。女心と秋の空ってね」
「この場合は男心かしら」
アンネットはここでちらりとルシエンを見て述べた。

第六十七話　公園ではその四

「まあ例外も中にはいるけれど」
「それは誰のことだ？」
「さあ」
これは笑って誤魔化したのだった。
「誰のことかしらね」
「ちぇっ」
本当は誰のことなのかルシエンにもわかる。だからついつい口を尖らせて抗議めいた姿勢を見せるのであった。
「好き勝手言ってくれるよ、全く」
「それはいいとしてね」
またウェンディが二人に対して言ってきた。
「また何かあったら教えて。いいわね」
「ああ、わかった」
「そういうことでね」
ルシエンとアンネットが応える。それが終わってから携帯を切ってまたカムイとティンを見る。見れば二人はそのままティンのリードのままデートを続けていた。
「やっぱりいい感じかしら」
「俺にはそう見える」
ルシエンはそうアンネットに答えた。
「女の子がリードするのがいいのかね」
「そういうやり方もあるわね」
アンネットはそう彼に答えた。
「実際のところは」
「俺のやり方じゃないけれどな」
ここでルシエンは自分に重ねたのであった。
「やっぱり男が引っ張らないとな」

「そう思っているのかしら」
不意にアンネットが秘密めいた笑みをここで浮かべるのであった。
「果たして」
「！？」
ルシエンは今の言葉に眉を顰めさせた。そうして彼女に問うた。
「どういう意味だ、それは」
「言ったことそのままよ」
そう答えるだけのアンネットであった。しかしそこにはまだ秘密めいた笑みがある。
「そのまま。何も隠していないわよ」
「隠しているだろ」
だがルシエンにはそうとしか思えなかった。その秘密めいた笑みを見てはそう考えるしかなかったのである。
「何か」
「だから。男が引っ張るよね」
「ああ」
流石に今言ったことは完璧に覚えている。それは否定しない。
「それはどうなのかしらってね」
「！？さらにわからないぞ」
ルシエンはアンネットの言葉がさらにわからなくなった。それでまた首を捻るのであった。
「どういうことなんだ」
「だから。言ったことそのまま」
しかしアンネットはこう言うだけであった。
「わかるわからないはルシエン次第よ」
「ううむ」
実はアンネットはルシエンが引っ張っているように思わせているだけなのだ。実際は彼女がリードしているのだがそれを言っているのだ。しかしルシエンにはそれがわからないのである。
「よくわからないがティンちゃんみたいなやり方もあるのか」

「まあそうね」
わかっていなかったがそれに頷いてあげることにしたアンネットであった。
「そういうことね」
「まだ何か引っ掛かるな」
ルシエンも馬鹿ではないのでそれに気付いている。しかしそれでもその引っ掛かるものが何なのかはわかりかねているのであった。
「一体全体」
「あっ、見て」
だがここでアンネットが二人を指差して言った。
「カムイが」
「むっ」
見ればカムイが動きだした。それまでふらふらさせていた手をそっと動かしてきたのだ。そうしてティンの肩に手を回そうとしだしたのである。
「まさかいきなり」
「大胆だな」
二人はそれを見て言い合う。
「まずいわ」
アンネットが顔を顰めさせた。
「これは」
「失敗するっていうのか！？」
「ええ」
ルシエンにも答える。
「まだ早いわ。幾らムードができていても」
「カムイ、早まったか」
「ここでは男の子は動いては駄目なのよ」
「駄目なのか」
「そうよ」
それをルシエンにも言う。

第六十七話　公園ではその五

「覚えておいてね。待ちなのよ」
「待つのか」
実はそれはルシエンにとっては全く考えられないことである。だから密かに首を捻った。
「ううむ」
「とにかくよ」
アンネットはそれに構わずにまた言う。
「ここで下手をしたら終わりよ。どうしようかしら」
「手を弾くか？」
ルシエンは不意にパチンコを出してきた。
「これで」
「狙いには自信があるの？」
「ああ、外したことはない」
ルシエンの意外な特技であった。
「これであいつの手を弾いてな」
「そう。じゃあ任せるわ」
それを聞いて彼に任せることにしたアンネットであった。そうしてまたじっくりと様子を見る。
「確実にね。いいわね」
「ああ。ティンちゃんの顔に当てたら大事だからな」
それは彼もわかっていた。だから慎重に狙いを定める。
「ここで。決めるぜ」
「決めて・・・・・・いえ」
だがここで。アンネットの声の色が変わった。
「ちょっと待って」
「どうした！？」
「ほら、あれ」

そう言ってカムイを指差すのだった。
「動きが止まったわ」
「本当だ」
見ればその通りであった。カムイは手を引っ込めた。そうしてその手を自分の服のポケットの中に入れてしまったのであった。それでその場は終わりであった。
「何もなしみたいね」
「そうみたいだな」
「取り越し苦労だったのね」
アンネットはそう思いまずはほっと胸を撫で下ろした。
「よかった」
「そうだな。あいつも案外慎重なんだな」
「そうみたいね」
アンネットは安心した顔で彼に答えた。
「とりあえずはね」
「けれどだ。まだ警戒が必要だな」
しかしだからといってルシエンは警戒を緩めるつもりはなかった。
「また変な気を起こしてそれがそのままってことになりかねないからな」
「そうよね、暴走して」
ここでルシエンをちらりと見る。
「コントロールしにくくなったら困るしね」
「!?何で俺を見るんだ?」
「さあ」
彼の問いにはとぼけてみせる。
「どうしてかしらね」
「何か引っ掛かるな」
ある程度は気付くルシエンであった。
「今のは」
「まあ気にしないで」

しかしアンネットは彼にそう言葉を返してスルーするのだった。
「とにかくよ」
「おい」
ルシエンはまだ言おうとする。しかしアンネットの方が二枚も三枚も上手であった。
「今のは」
「また動いたわ」
アンネットは何気なく話を動かしてしまった。
「見て」
「んっ！？」
「今度はティンちゃんが」
見れば本当だった。ティンがカムイに声をかけていたのだ。
「ええと、何て言ってるのかしら」
「お花畑に行きましょう、だな」
ルシエンは耳を利かせた。そうして彼女の話を聞いたのだった。
「この公園のだな」
「そっちに行く？」
「当然だ。けれどあそこに行ったら」
「あそこに行ったら？」
「わかりにくくならないか？」
そうアンネットに言うのだった。
「ただでさえカップルが多いし」
実はこの公園はデートスポットである。特にお花畑は有名だ。それでそこには多くの恋人が二人で集まって来るのである。それで二人を見にくいというのだ。
「大丈夫か、それは」
「大丈夫よ」
しかしアンネットはルシエンにこう言うのだった。
「それはね」
「またどうしてだ？」

「あの格好よ」
ここでその二人を指差すのだった。言うまでもなく目立つ。
「わからない筈ないじゃない」
「それもそうか」
「そういうこと。わかったわね」
「ああ」
ルシエンはあらためて頷いた。
「そういうことならな」
「さて、場所を変える？」
「俺達も行くのか」
ルシエンは不思議な顔を向けた。それには理由があった。
「あそこに」
「あれ、行かないの？」
アンネットは彼のその言葉を聞いて不思議そうな顔になった。
「折角なのに」
「行くにしてもだ」
しかしルシエンはどうにも浮かない顔のままであった。

第六十七話　公園ではその六

「向こうにはもう担当がいるぞ」
「カトリとマルティね」
「あの二人に任せていいと思うが」
それが彼の考えだった。
「どうだ、そこは」
「それはちょっと」
それでもアンネットは行くと言う。それにははっきりとした理由があった。彼女なりに。
「やっぱり最後まで見たいじゃない」
「それか」
「それよ」
アンネットはにこりと笑って述べてきた。
「せめてこの公園にいる間はね。どうなるか見ておきたいわ」
「何かそれは」
「嫌なの？」
「嫌っていうかだ」
彼はここで不機嫌な顔になった。その理由も今言う。
「覗き見みたいだ」
「それは違うわ。見守るのよ」
「見守るのか？」
「じゃああのカムイを放っておける？」
微妙なところだったがそれがアンネットがまだ残ろうとする理由だったのだ。
「あいつを放っておいたらそれこそ」
「何をするかわからないか」
「ティンちゃんもやり手だけれどね」
それでも不安があるということだった。

「だから。わかるわね」
「わかったよ。じゃあもう少し残るか」
「一緒にいたら後でデートしてあげるから」
「むっ」
思い切って賄賂を出してきた。アンネットならではの策であった。
「わかったわね。それで」
「ああ、充分にな」
それに乗らないルシエンでもなかった。本来賄賂などというものには全く興味のない彼であったがそれでもアンネット絡みのものに関しては違っていたのだ。
「じゃあ行くぞ」
「行くぞってちょっと」
引っ張られたアンネットの方が驚く番であった。
「さっきと全然態度違うじゃない」
「そうか？」
「そうよ」
アンネットは戸惑いながらまた言う。
「それって」
「まあいいじゃないか」
「いいのかしら」
「俺がいいと言えばいい」
デートと聞いて全然性格が違ってきていた。ほぼ別人である。
「わかったら行くぞ」
「わかったわよ。けれどね」
「けれど？」
「見つからないようにね」
そこは念を押す。
「いいわね」
「ああ、そうだったな」
しかもそれを忘れていた。

「それは気をつけないとな」
「そうよ、用心してね」
あらためて釘を押すアンネットであった。
「元も子もないから」
「カムイに見つかったらだな」
「そういうこと」
ティンはもう知っている。だから問題はなかった。
「いいわね、そこだけはね」
「ああ。それにしても」
二人はもう歩いている。既に花園にいる二人を追っていた。
「カップルが増えてきたな」
「だから。デートスポットだから」
アンネットはそこをまた指摘してみせた。
「多いのよ。それはわかるわよね」
「そうだった。それじゃあ」
「それじゃあ？」
「デートはここでいいな」
いきなりかなり勝手にそれを決めてしまった。

第六十七話　公園ではその七

「デートしながら二人を見よう」
「えっ、幾ら何でもそれは」
大胆どころの話じゃないと。アンネットは抗議しようとした。ところが。
「いや、いい」
ルシエンが押し切ってしまったのであった。
「それでな」
「見つかったらどうするのよ」
「要は見つからなければいい」
しかしルシエンは聞き入れない。
「要はな」
「それはそうだけれど」
それでもまだ釈然としないアンネットだった。だからこそ言うのだった。
「あんた、全然別人になってるじゃない」
「そうかな」
「そうよ」
それを本人にもはっきりと言う。
「全く。賄賂が強過ぎたかしら」
「賄賂！？」
「何でもないわよ」
それは誤魔化した。
「何でもないわよ。とにかくデートをしながらなのよね」
「ああ、行こうか」
「焦らないで。とにかくわかったから」
焦るルシエンを何とか宥めて二人は。そのまま花園へ向かうのだった。

「ちょっとね。その前に」
アンネットはここで携帯を入れるのだった。
「ああ、カトリ？」
カトリに連絡を入れる。
「そっちに二人行ったから」
「わかったわ」
すぐにそのカトリから返事が来た。
「私達も行くからね」
「あんた達も？」
「ええ、事情が変わってね」
そう述べる。
「まあ行くことになったから。宜しくね」
「わかったわ。それじゃあね」
「ええ、またね」
ここまで言って電話を切る。それからウェンディにも電話を入れて同じことを伝えるのであった。伝え終わってから満足した顔で述べるのであった。
「これでいいわ」
「随分と用意周到だな」
「女の子はそうでないと駄目なのよ」
そう気楽なルシエンに述べる。
「色々とあるんだから」
「そうなのか？俺は男の方が」
「はいはい、男も大変よ」
それはわかっている。だがどうしても今回の強引なデートには呆れるものがあるので受け答えがぞんざいなものになってしまっているのも事実であった。
「それはわかっているから」
「わかっていたら早く」
「何回も言ってるでしょ。だから焦らないでって」

一刻も早く花園に行こうとするルシエンをまた止めた。
「行くのは行くから。いいわね」
「ああ」
何だかんだでルシエンをエスコートして一緒に行くアンネットであった。このカップルも男がリードしているようで実は女がリードしているのであった。

公園では　　完

２００７・１１・１６

第六十八話　花園での騒動その一

花園での騒動

カムイとティンが花園に行く。そこを担当しているのはカトリとマルティであった。二人は花園の中にあるベンチの上に変装をして座って二人を待っているのだった。

「ねえ」

カトリが横にいるマルティに声をかけてきた。

「何かな」

マルティはそのカトリに暢気な調子で言葉を返してきた。見れば彼はサンドイッチを食べている。

「美味しい？そのサンドイッチ」

「とても」

特に表情を変えずにカトリに答える。二人共サングラスに帽子を深く被りやたら厚着であからさまに怪しい外見であるがそれでも誰かはわからない姿であった。

「美味しいけれど」

「よかった。私料理は上手じゃないってイメージ持たれてるから」

カトリはその言葉を聞いてサングラスの奥で笑った。

「そう言ってもらえると助かるわ」

「そんなイメージがある？」

「そうなのよ」

そうマルティに答える。

「国が。ほら、フィンランドだから」

何気に料理がまずい国だと連合では評判になっている。カナダと並んで連合三百国の中でトップクラスの料理のまずさであるとされている。

「そのせいで」

「別にそうは思わないけれど」

だがマルティはそんなことは全然気にしてはいない感じであった。
「僕はね」
「そうなの。そう言ってもらえると助かるわ」
「ハンバーグサンドにカツサンド」
カトリが作ったサンドイッチである。どれも。
「ソーセージに野菜にツナ。種類も多いしね」
「気に入ってもらえてるみたいね」
「とてもね」
カトリにこうも答える。
「特にこのハンバーグサンド。とても美味しいよ」
「それ自信作なのよ」
顔を明るくさせて大柄なマルティに顔を向けてきた。
「一番のね。この中でも」
「ふうん」
「あとフルーツサンドも」
それはデザートであった。
「自信作なのよ。それもね」
「これは後でだよね」
「デザートだから」
それはもう決まっていた。フルーツはこの時代においてもデザートなのだ。
「それで最後よ」
「そうなんだ、少し残念」
「また作ってあげるから」
カトリは悲しい顔になったマルティをそう言って宥める。
「安心して」
「わかったよ。じゃあ次にね」
「ええ」
二人はそんなふうに自分達も楽しみながらカムイとティンを待っていた。そうして程なくしてその二人が花園にやって来たのであっ

た。
「来たよ」
最初に気付いたのはマルティであった。
「ええ」
カトリもそれはわかっている。サングラスの奥で頷く。
「来たわね」
「このままでいいんだよね」
「ええ、見ているだけでね」
カトリはそうマルティに述べる。
「このままでね」
「そうなんだ。けれど連絡は？」
「メールがあるから」
カトリはすっと携帯を出してきた。そうして早速そこにメールを打つのであった。
「これで連絡するわ」
「そう。じゃあ何の心配も要らないね」
「ええ。まずは」
早速ウェンディにメールを打つ。返事がすぐに返って来た。
「このままでいいそうよ」
「そう。じゃあこのままここで」
「いればいいわ。さて」
そこまで言うとあらためてマルティに顔を向けて言ってきた。
「続き。しましょう」
「デートの続きをね」
マルティも笑顔で返す。二人は楽しく花園のベンチに座ってデートを続ける。それはティンからもはっきり見えていた。そうして笑みを浮かべるのであった。

第六十八話　花園での騒動その二

「お二人も楽しんでいるのね」
「お二人!?」
それを聞いたカムイがふと声をあげる。
「カップルなんてここには何処にもいるけれど」
「あっ、そうですね」
ティンはここで芝居をした。そうして話に入るのだった。
「すいません、見落としていました」
「参ったなあ、しっかりしてくれないと困るぜ」
当然ながらカムイはそれには気付いていない。ティンがうっかり屋さんなのだと思って苦笑いを浮かべてこう言うだけであった。
「そんなのだとこれから大変だよ」
「そうですね」
彼女もカムイのその言葉に頷く。これも芝居だ。
「すいませんでした」
「いや、謝ることはないよ」
そういうことまで望むカムイではない。色々問題はあるが気は優しいのだ。
「それはな」
「そうなんですか」
「過ぎたことはどうでもいいさ」
こうも言う。
「それはな。それより」
「はい」
「奇麗だよなあ、ここ」
ティンより先に花園の中の花達にうっとりとしていた。そうして恍惚として言うのであった。
「何か一人で来るよりも二人で来る方が」

「そうですね」
ティンもそれに頷く。今度は芝居ではない。
「どうしてなんでしょう。一人で来るより二人で来る方が奇麗だなんて」
「ムードってやつじゃないかな」
カムイはほんの少し考えてから述べた。
「やっぱりそれは」
「そうですかね」
「多分そうさ」
彼はそう思い込むことにした。
「ティンちゃんだってそう言うんだし。二人の方がいいって」
「ですね。一人だと正直寂しいです」
ティンも言う。
「やっぱり二人の方が」
「そうそう、俺ずっと一人だったんだよ」
カムイが必死な顔で言いはじめた。
「寂しかったよ、ずっと」
「そうだったんですか」
「誰かと一緒に歩きたかったんだ」
今度はしみじみと感慨を込めて述べる。
「ずっとな。それが」
「今はどうですか？」
「寂しくないよ」
それが彼の言葉であった。
「全然な」
「そうですか。嬉しいんですね」
「ああ」
笑顔でティンに言った。屈託のない笑顔で。
「その通りさ。だってティンちゃんと一緒だから」
「そんな。私と一緒だからって」

流石にこう言われてはティンも笑顔になる。笑顔にならざるを得なかった。
「そこまで仰るなんて」
「けれど本当さ」
カムイはまた笑顔でティンに言った。
「それはね」
「そこまで言って頂けると」
「ほら、見てよ」
彼は完全にティンにメロメロになっていた。それは声にも物腰にも出ている。
「あの花」
「チューリップですね」
ティンがその花を見て言う。見ればそれは紅のチューリップであった。
「何か普通じゃない赤さのチューリップ」
「奇麗だよね」
カムイはそれをまた述べる。
「あの赤さが」
「はい、とても」
ティンも笑顔で応える。応えるだけでなくまじまじとチューリップを見ている。
「これは何処のチューリップなんでしょう」
「俺の国のだな」
それを言っているのはルシエンであった。彼の国のトルコの花だったのだ。

第六十八話　花園での騒動その三

「あれはな」
「そうなの」
それを聞いてアンネットが言うのだった。二人はもう花園にいてデートを楽しんでいた。その中で彼がチューリップを見て話しているのだ。
「俺の国ではあの花が人気があるんだ」
「人気なの」
「チューリップは昔からさ」
トルコはオスマン＝トルコの頃チューリップが流行した。今もずっとチューリップが人気なのだ。そしてルシエンもチューリップが大好きなのである。
「人気なのはな」
「ふうん。意外ね」
アンネットはそれを聞いて目をしばたかせながらそのチューリップを見やる。
「それは」
「意外か？」
「トルコでチューリップが人気だってことと」
かのじょはまずそこを指摘する。
「それにルシエンも」
「俺がチューリップが好きだってことか？」
「もっと別の花が好きだと思っていたの」
アンネットはそう彼に語る。
「実はね」
「何かそこまで言われるとはな」
ルシエンにとってここまで言われるのはかなり意外なことであった。だがアンネットはここで彼に対してフォローを入れてきた。そ

のタイミングの計りが見事だった。
「悪い意味じゃないわよ」
「そうなのか」
「そうよ。花が好きなのはいいことよ」
彼女はそう言うのだった。
「チューリップが好きなのもいいことよ」
「そうか」
「そうよ。実はルシエンはヒヤシンスとか好きだって思っていたけれど」
「ああ、それも好きだ」
ルシエンはその言葉に頷く。
「実はな」
「そうなの。じゃあその予想は当たったわね」
それを聞いて満足そうに頷くアンネットだった。
「よかった」
「それもわかるのか」
「花の好みは色々あるのよ」
アンネットはそこもまた指摘する。
「その中の一つなのね」
「そうなるのか。そういえばここには確か」
ルシエンは辺りを見回す。そうしてそこに池を見つけた。
「ああ、あった」
「池ね」
「見ろよ、あれ」
彼が指差したのは池の側に咲く紫色のヒヤシンスであった。静かにだが美しくそこに咲いていた。
「奇麗だよな」
「好きなものはすぐに見つけられるのね」
「ああ」
その言葉にこくりと頷く。

「その通りさ」
「それは花だけ？」
「いや」
これはアンネットの話術だった。ルシエンはそれに乗ってしまった。
「違うさ。やっぱりな」
「ええ。他に見つけられるのは？」
「アンネットだよ」
これが彼の言葉であった。
「御前だけは何があってもな。見つけられるさ」
「信じていいのかしら、その言葉は」
「俺が嘘を言ったことがあるか？」
この言葉は決して見栄ではなかった。

第六十八話　花園での騒動その四

「ないよな。絶対に」
「ないわ」
そしてそれについてはアンネットも認めるところであった。くすりと笑って彼に対して頷いて応えたのが何よりの証拠であった。
「確かにね」
「だからだよ」
彼はまた言う。
「俺もここまで追いすがったんだ」
「そうなの」
「そうさ。だから今も」
そうして言う言葉は。
「見つけるんだよ」
「それもある意味凄いわね」
そうは言っても悪い気はしていないアンネットであった。その証拠に顔が笑っている。にこやかに。その顔でルシエンを見ているのも証拠であった。
「全く」
「それでアンネット」
ルシエンはまた彼女に声をかけてきた。
「ええ。何かしら」
アンネットも完全にムードに乗って彼に応える。まんざらではない。
「またここに来ような」
「ええ」
アンネットもその言葉を受けて微笑む。
「勿論よ。私もそれ言おうと思っていたのよ」
「そうなのか」

「そうよ。それでね」
今度は彼女が言う。実は彼女がリードしているカップルであるのだがそれに気付かせないのがアンネットの凄いところである。ルシエンも鈍感と言えば鈍感であろうか。
「あの花。どう思うかしら」
「百合か」
彼女が指差したのは百合であった。淡い赤でやはり水辺に静かに咲いている。そこはヒヤシンスと同じだが趣はそれぞれ異なるものであった。
「どう、あの百合は」
「嫌いじゃない。いや」
彼は言葉を訂正する。
「いいな。百合も」
「私百合が好きなのよ」
アンネットの好きな花はそれであったのだ。
「実はね」
「いいな、それは」
ルシエンは笑顔でその言葉に頷く。
「百合が好きなのは」
「いいって言ってくれるのね」
それを聞いてアンネットはその笑顔をさらに明るいものにさせた。
「そう言ってもらえると。何かこればっかり言ってるけれど」
「俺もな。何か言葉が上手く出ない」
二人は完全に花園のムードの中に入り込んでいた。それから抜け出すことはもうできなかった。それに抜け出すつもりもないのであった。
「いいよな」
「ええ」
そう言い合って花園の花達を二人で見る。二人はカムイとティンには殆どというか全く目をやっていない。だがカトリとマルティは

別であった。
「いい感じみたいね」
「そうだね」
マルティはカトリの言葉に頷いていた。やはり二人はベンチの上で並んで座っている。
「カムイも静かになったし」
「ティンちゃんがリードしているわね」
「うん」
見ればその通りであった。ティンが道を案内して花も指し示している。カムイはそれを見ているだけである。二人はそれを見て話をしているのだ。
「上手くね」
「あの娘、賢いわね」
カトリはそれを見抜いた。
「それもかなり」
「そうかな」
「ええ。格好は引くものがあるけれどね」
シックな服を好むカトリから見ればそうである。
「それでもね」
「知恵者なんだ、ティンちゃんは」
マルティはカトリの言葉を聞いてそう呟いた。
「そうだとすると」
「というか頭の回転が早いわ」
カトリはそう評する。
「それもかなりね」
「かなりなんだ」
「ペリーヌやルビーと同じ位かも」
二人共クラスで結構頭の回転が早い方である。このクラスの女の子は大体がかなり頭の回転が早いがこの二人やビアンカはその中でもかなりである。

第六十八話　花園での騒動その五

「これはひょっとして」
「やり手なんだ」
「そうは見えないけれどね。けれど」
ここで彼女はある諺を口にするのであった。
「見事ね。本当に」
「そんなに」
「リードの上手さで言ったらタムタム並ね」
今度はタムタムまで出す。
「まあカムイはフランツ程あれじゃないけれどね」
「それは言ったら駄目だよ」
「了解」
フランツについてはクラスどころか学園全体を見回しても極端に頭があれだと言われている。同じようにテンボとジャッキーもそうである。
「それ並ね。いや、彼女は」
「カムイは気付いていないみたいだね」
「ええ、間違いなくね」
マルティのその言葉に頷く。
「それは確かね」
「カムイは自分が引っ張っているように思っているのかな」
マルティはここでカムイを見た。
「それはどうかな」
「そうね」
カトリは彼のその言葉に頷いた。
「そうなんでしょうね」
「やっぱりそうなんだ」
「本人は全く気付いていないけれどね」

これが非常に大きいのであった。
「実際のところは」
「というより気付かせない？」
マルティはこう表現してきた。
「ティンちゃんが」
「そうなんでしょうね。何かそれを考えると」
カトリはここまで話してあらためて思うのだった。ティンの凄さというものを。
「凄いわね。あの娘は」
「あんな可愛い顔をしてね」
「そうね。ってちょっと」
ここでカトリは少し踏み止まるようにしてマルティに声をかけてきた。
「何かな」
「今の言葉だけれど」
そこを彼に対して問うのであった。
「今の言葉って？」
「ティンちゃんが可愛いって言ったわよね」
「うん」
それは事実だ。彼も否定するつもりも取り消すつもりもない。それに嘘をついているつもりもなかった。彼もそれははっきりと自覚していた。
「そうだけれど」
「それは世界で何番目？」
カトリはそれでもそこを尋ねる。この場合世界とは宇宙全体を差す。地球にあった頃は地球全体を世界と呼んでいたがこの時代は宇宙全体になっているのである。
「何番目って？」
「ティンちゃんが可愛いってことよ」
彼女が気にしているのはそこであった。

「何番目？それは」
「限界で二番だね」
マルティはそう彼女に答えた。
「やっぱりね」
「そう、二番なの」
カトリはその言葉を聞いて納得したように微笑んだ。
「じゃあいいわ」
「言いたいことはわかってるよ」
マルティもにこりと笑ってカトリに言うのだった。
「カトリが一番だよ」
「お世辞でもそう言って欲しいのよ」
やはりにこりと笑って告げる。女の子の一番聞きたい言葉でありそれを彼氏に言われる。それだけで充分過ぎる程幸せなのであった。

第六十八話　花園での騒動その六

「有り難うね」
「うん」
マルティもその言葉に頷く。そうして話はさらに続く。
「ところで気付いてる？」
「あの二人も来てるね」
「ええ」
彼等はアンネットとルシエンに気付いていた。二人で花に魅入っているのに気付いている。
「二人共完全にデートみたいね」
「そうみたいだね。カムイ達は殆ど見ていないよ」
それは二人から見てもはっきりわかる。現に二人はカムイもティンも全く見てはいない。花園の中の花を見てデートを楽しんでいるだけであった。
「僕達も人のこと言えないけれどね」
「けれど実際にこれといった動きはないわね」
カトリは今度はティン達を見て述べた。
「ティンちゃんがしっかりしているから」
「ここでは問題なしかな」
「そうみたいね」
マルティにも答える。
「見張りの意味なかったかも」
「じゃあ僕達はサンドイッチ食べただけなんだ」
結局のところはそうなる。
「だとすると」
「そうかも」
言われてみればそうだ。結局はそれだけになるかも知れない、カトリはそう思いかけたがここでふと気付いた。そしてその気付いた

ことをマルティにも言うのだった。
「いえ、違うわ」
「違うかな」
「だって。私達もここにいるじゃない」
彼女はそうマルティに言ってきた。
「それはね。やっぱり」
「デートだってこと？」
「最初からわかってることだけれどね」
またにこりと笑ってマルティに言うのであった。
「これは」
「それはそうだね。けれど」
マルティも言うのだった。
「あらためて気付くとね。何か」
「別の気持ちになるわよね」
「うん」
マルティもにこやかに笑って頷く。
「変装して顔ははっきり見えないけれど」
「それでもそれはそれで」
いいのだと。彼女は言う。
「いいわよね」
「そうだね。ところでさ」
「何？」
いい雰囲気の中でマルティの言葉に顔を向ける。
「この後どうしよう」
「この後ね」
「何か食べに行く？」
そうカトリに提案してきたのであった。
「スパゲティでも」
「いいわね。それだといいお店知っているわ」
カトリから店を言ってきた。

「とても美味しいパスタのお店をね」
「へえ、そうなんだ」
「そこで食べましょう」
「そうだね、パスタ好きだし」
このクラスにはパスタ好きが多い。それもかなり。マルティもその一人なのだ。
「それじゃあ」
「ええ。それにしてもあれね」
ここでカトリはまたあの二人を見た。
「そろそろ場所を移るみたいね」
「もうなんだ」
見ればそうした動きであった。やはりティンがさりげなくリードしてカムイを連れて行っている。二人はその様子を見守っているのである。
「じゃあ僕達の仕事もそろそろ終わりだね」
「何か思ったより楽ね」
それがカトリの感想であった。
「今回の仕事は」
「まあ見張りだけだし」
マルティは彼女に応える。
「それも当然かな」
「見つからなければいいしね」
カトリの今の言葉は今回の話の本質を突いていた。
「それを考えればね。楽だったわね」
「うん。ただ さ」
ここでマルティは言う。
「カムイはともかくとしてティンちゃんは」
「気付いていたかしら」
カトリもふとそれを口にする。
「ひょっとして」

「そうなんじゃないの？やっぱり」
マルティはまた言う。
「だって僕達変装してるって言っても」
「結構大きな声で話していたわね」
振り返って考えればその通りであった。幾ら変装しているといっても限度がある。少し鋭い人間ならば容易に気付くレベルであったのだ。

第六十八話　花園での騒動その七

「ちょっと反省」
「まあいいんじゃない？カムイは気付いていないし」
ここが肝心であった。
「それなら全く問題ないじゃない」
「それもそうね。けれど」
ここでカトリはまた言うのだった。
「カムイって鈍くない？」
「いや、鈍いよ」
マルティの返答は身も蓋もないものであった。
「どう見てもね」
「そうよね。幾ら何でも普通気付くわよ」
カトリも頷く。言われてみればその通りである。
「私達だけじゃなくてアンネットとルシエンもいるんだし」
「気付かない方がどうかしてるよ」
「カムイのそこがわからないのよ」
カトリはそこを指摘する。
「他のことにはあれこれ気付くのに自分のこうしたことって全然気付かないじゃない。この話多分知っていると思うけれど」
「あれだね」
これからカトリが何を言うのかマルティもわかっていた。それで応えた。
「あいつ好きな娘って結構いるんだよね」
「本当はもてないわけじゃないのよ」
実はそうなのであった。これは多くの者が知っている。
「あいつが気付かないだけで」
「周りは結構知ってるんだけれどね」
こうしたことは案外多い。何故か自分だけがそのことに気付かな

い。周りは皆知っている。しかしあえて言わないから気付かない。これは本人の鈍さもあるのだ。
「気付けばねえ。すぐに今みたいになったのに」
「案外もてないってことにしたいのかもね」
「そうなのかしらね」
カトリは首を少し捻った。
「やっぱり」
「心の中ではそう思ってるじゃないかな」
マルティはまた言う。
「自分をそういう人間だって思いたいって。誰だってそうじゃない」
「誰だって？」
「うん。それがいいふうか悪いふうか別にして」
そう述べる。
「自分はこういう人間だって思いたいじゃない。誰だって」
「そういえばそうね」
ここまで言われて何となくわかったカトリであった。
「私だって多分そうだし」
「僕だってそうだろうしね」
マルティの言葉はいささか哲学的であった。不思議とそうした言葉が似合っていた。
「多分」
「皆同じなのかしら」
カトリはまた言う。
「そういうところは」
「カムイだってそうなんだよ」
またカムイに話を戻す。
「だからそうしてね。自分をそうしたふうに」
「だからなのね。今まであだったのは」
それがわかった感じであった。
「けれど。それにしても」

「それにしても？」
「あの馬鹿っぷりはね」
そこには苦笑いになる。それとこれとは全くかけ離れているように思えたからだ。
「行き過ぎでしょ」
「あれは天然だね」
マルティの今度の言葉は容赦がない。
「どうしようもないよ」
「やっぱり」
「うん。それはそれこれはこれ」
こうも言う。
「片目を瞑って見てあげようよ」
「優しいのね、また」
「カムイはね、やっぱり」
マルティはそれを肯定したうえでまた述べる。
「憎めないじゃない。いい奴だし」
「まあそれはね」
カトリもその言葉には微笑む。同意である何よりの証拠であった。
「確かにね。私も嫌いじゃないわ」
「性格は悪くないよね」
「ええ」
これもまた事実である。実は彼は性格自体は気さくで親切なところもあるのである。だからクラスで彼を嫌う人間はいない。これはあの洪童にしろ同じである。確かにかなり破天荒なところもあるのであるがそれでも何処か憎めない得な性格をしているのである。
「だからそれでいいじゃない」
「じゃあやっぱり今回も」
「うん、成功するといいね」
マルティはこれに関しても素直に述べた。
「やっぱりね」

「そうね。成功するにこしたことはないわ」
カトリもその言葉に頷く。

第六十八話　花園での騒動その八

「けれど。どうなるかしら」
「残念だけれど僕達は後の報告待ちだよ」
マルティは穏やかに言う。
「僕達はね」
「次は並木道だったわね」
「ええと、あそこの担当は」
マルティはその言葉を受けて自分の記憶を辿る。
「誰だったかな」
「確かネロとアロアよ」
カトリが答えた。
「パトラッシュも一緒だった筈よ」
「それって結構目立つんじゃ」
幾ら何でも犬が一緒だとまずいのではないか、マルティはそう思った。だが意外にもカトリの返事はそうではなかったのであった。
「いる方がいいじゃない」
「またどうして」
「パトラッシュよ」
どうやらここに秘密があるようであった。
「パトラッシュがいるなら間違いないわ」
「賢い犬だから？」
「そうじゃない。あんな賢い犬はラッシーだけよ」
ちなみにラッシーはジョンの飼っている犬である。何気にペットも人気の連合であるがそれはこの学園においても同じなのである。
「だから。大丈夫よ」
「パトラッシュがいればなんだね」
「そうよ。だから私達は」
カトリは笑顔になった。その笑顔でマルティに言う。

「これから。デートにしない？」
「あの二人みたいにだね」
「そういうこと」
ここで二人と呼んだのはアンネットとルシエンである。気付いていないのは彼等だけで二人はもうとっくの昔に気付いているのだ。
「何かあの二人もねえ」
「ルシエン凄く幸せそうだよね」
「いえ、アンネットの方がじゃない？」
ところがカトリはこう言うのであった。
「よく見たら」
「そうかな」
「ええ、よく見てみて」
またマルティによく見るように言う。
「ほら、アンネットを」
「ううん、そういえば」
言われてもう一回よく見てみる。そうして気付いたのは。
「何か笑顔が」
「溢れんばかりでしょ」
「うん」
見ればその通りであった。アンネットはルシエンの横で本当に楽しそうな顔をしている。それはマルティからもよくわかるものであった。
「そういえばね」
「そういうことよ。アンネットも好きなのよ」
「ルシエンが？」
「当たり前でよ。そうじゃなければデートなんてしないわ」
密かに自分達のことも言っていた。
「そういうことよ」
「そうだよね、そういえば」
「ええ。あのカップルはルシエンがよく動くけれど」

熱いルシエンが何かと動いて何かと仕掛ける。アンネットはそれを受けるだけのように見えるが実は違う。ここまでは皆わかっているがもう一つあるのであった。

「アンネットはそれを受けるのを楽しんでいるのよ」

「そういうことなんだね」

「彼女あれで計算してるのよ」

カトリはこうも言う。

「ルシエンがどうしてきてそうしたらどうするべきかってね」

「そこまで」

「あら、それ位常識よ」

ここでカトリの言葉は変わった。

「女の子はね。覚えておいてね」

「じゃああれ？」

マルティはそれを聞いて言う。

「皆ティンちゃんやアンネットと同じなんだ、女の子は」

「例外はいるけれどね」

そしてカトリもそれを認める。

「大体そうよ」

「女の子って凄いんだ」

「それは別にね」

今の言葉は笑って否定する。

「凄いってわけじゃないけれど」

「そうかなあ」

「まあそれは置いておいて。それじゃあ」

「うん」

話が本題に入る。

「行きましょう、そろそろね」

「そうだね。それじゃあ」

ここでも女の子がリードする。案外女の子が強いのはこの二人についても同じなようである。

花園での騒動　　完

2007・11・25

第六十九話　並木道の二人その一

並木道の二人

カムイとティンのデートは並木道に移る。それもまた皆によって見られているのであった。

「これで三段階目ね」

「そうだね」

喫茶店でピーターがウェンディの言葉に頷いていた。

「いよいよかな」

「何か花園が盛り上がったみたいだけれど」

ウェンディはそうピーターに言葉を返す。

「それもかなり」

「そういえばそっちのメンバーはどうなったの？」

「もう解散しているわ」

ピーターにこう答えた。答えながらコーヒーを飲む。コーヒーの横にはフルーツをたっぷりと横に置いたパンケーキがある。見ればシロップをかなりかけている。

「それで自分達のデートを楽しんでいるわよ」

「そうなんだ」

「ええ、もういいわよね」

「別にいいんじゃないかな」

ピーターは特に思うところもなくそう答えた。

「それで。仕事は終わったんだし」

「そうよね。とりあえず並木道にいるのは」

「ネロとアロアだったわよ」

ダイアナが横から言ってきた。

「それにパトラッシュも」

「パトラッシュもいるのね」

「ええ。だから大丈夫よ」

ダイアナは奇しくもカトリと同じことを言うがこれは彼女もわかっているからであった。彼女もそれがわかるだけの頭があるのである。

「ここもね」

「とりあえずカムイに見つからなければいい」

ウェンディはこう呟いた。

「だからなのね」

「そういうことでしょ。だったらパトラッシュいれば充分よ」

「わかったわ。まあ一応は連絡取って」

ここでウェンディはネロに携帯を入れた。

「ああ、私だけれど」

こう前置きして話をはじめる。

「そっちはどうかしら」

「まだ来ていないよ」

ネロのおっとりした声が返って来た。その言葉は如何にも並木道にいるといった感じであった。

「もうそろそろだと思うけれどね」

「そろそろなのね」

「うん」

ネロはそうウェンディに答えた。

「多分ね」

「アロアもそこにいるのよね」

「隣にいるよ」

「呼んだ？」

それを受けてアロアが携帯に声をかけた。この二人も変装をしている。そうして通行人を装ってカムイとティンを待っているのであった。

「私もいるけれど」

「いてくれたらいいのよ」

ウェンディは声を笑わせて彼女に答えた。

「それでね。じゃあそこは御願いね」
「ええ、わかったわ」
アロアも笑顔でウェンディに答える。
「それじゃあね。任せて」
「御願いね。ネロも」
「わかってるよ。パトラッシュにも伝えておくよ」
「そのパトラッシュは何処にいるの？」
この話の真打ちである。何処にいるのか聞かないわけにはいかなかった。
「一緒にいるの？」
「ううん、ちょっと違うんだ」
だがネロはここでこう答えてきたのだった。
「実はね」
「あれ、いないの」
「いつもそうじゃない」
ネロは声でにこりと笑ってウェンディに言ってきた。
「紐で持っていないからさ」
「そうだったわね」
パトラッシュは放し飼いなのである。決して人を襲ったりはしない賢い犬だからである。流石は名犬と謳われるだけはあるといつも言われている。
「けれど今は何処に？」
「あの二人を探しているところよ」
アロアが答えてきた。
「今はね」
「ふうん、そうなの」
ウェンディはそれを聞いて納得した。
「流石ね、名犬って言われるだけはあるわ」
「何か僕のやることがないけれどね」
ネロの返事は苦笑いであった。

「それだと」
「それならそれでいいじゃない」
しかしそれに対するアロアの返事はあっけらかんとしたものであった。

第六十九話　並木道の二人その二

「私達の負担も減るしね」
「負担って言われても」
ネロはその負担という言葉につい首を傾げさせた。
「別にこれといってないけれど」
「そうね。見張るだけだし」
これはアロアもわかっている。わかっているがそれでもである。
「要はカムイに見つからなければいいけれど」
「じゃあやっぱり楽かな」
「ええ。パトラッシュが戻ってきたわよ」
そんな話をしている間にそのパトラッシュが戻って来た。見れば尻尾を振って機嫌のいい顔をしている。ネロはそれを見てすぐにわかった。
「来たみたいだね」
「やっとって感じかしら」
アロアはネロの声を聞いてから述べた。
「待ったと思う？」
「いや、別に」
ネロはそれには異議を呈する。
「そうは思わないけれど」
「そうかしら。私の気のせいね」
「うん。それでどうやってカモフラージュするんだい？」
ネロが次に聞いたのはそれであった。まさか堂々と二人を見るわけにはいかない。幾らカムイでもそれではすぐにわかってしまうというものだ。
「隠れる？それとも変装して」
「まずは変装ね」
アロアはすぐにネロに答えた。

「はい、これ」
「あっ、有り難う」
アロアの差し出したサングラスを受け取る。それをすぐにかけた。
アロアはウィッグを取り出していた。黒いロングヘアーのウィッグである。
「私はこれを被ってね」
「じゃあ僕はこれを」
ネロも自分が持っていた野球帽子を取り出した。バイソンズのものである。
「被ればいいね」
「ええ。これでまあそう簡単には見つからないわ」
アロアはウィッグを被った後でネロに述べる。既に二人は変装を済ませてしまっていた。ぱっと見ただけではもう二人とはわからない。
「あとは。そうね」
「まだあるの？」
「用心には用心を重ねないと」
アロアはネロに述べる。そうして近くにある屋台に顔を向けた。
「あそこ。行きましょう」
「あそこだね」
「ええ、あそこよ」
見ればそこはクレープの屋台だった。人目見ただけで涎が出そうな美味しそうなクレープが見えている。
「あそこの前でね」
「クレープを食べながらだね」
「ええ。けれどパトラッシュは駄目よね」
アロアはふとこう述べてパトラッシュを見た。彼はもうネロの側にまで戻っていて彼の足元に座りはっはっ、と息を立てていた。
「甘いものは」
「そうだね。お菓子はあまりね」

ネロもそれに応えて言う。
「止めた方がいいね。虫歯になり易いから」
「わかったわ。じゃあどうしようかしら」
「ああ、それについては問題ないよ」
しかしネロはにこりと笑ってこう言ってきた。
「これがあるから」
「それね」
彼が手に持っている鞄から取り出したのは豚足であった。中華風に赤く煮た豚足でこれもこれで見ただけで食欲を刺激させずにはいられないものであった。
「いつも用意しているんだ」
「豚足を？」
「別に豚足とは限らないけれど」
そう応えながら豚足をパトラッシュの前に出す。パトラッシュはその豚足を見るとすぐに嬉しそうにかぶりつき食べはじめたのであった。
「おやつはいつも持っているよ、パトラッシュの為にね」
「優しいのね」
「優しいんじゃないよ。だって当然のことだし」
ネロにとってみればそうである。

第六十九話　並木道の二人その三

「パトラッシュは僕にとって親友だしね」
「ずっと一緒だったのね」
「うん」
屈託のない笑顔でアロアに答える。
「それこそずっとね。僕が小学生の頃から」
「じゃあパトラッシュって結構年取ってるの？」
「そうだよ。それも結構」
この時代犬の平均寿命は大体二十年を越える。猫もそんなところである。医療技術の革新は犬や猫の寿命も延ばしているのだ。
「意外かな」
「犬の歳はわからないから」
アロアはそう答えて少し首を傾げさせた。
「それでももっと若いかと思っていたわ」
「そうなの」
「ええ。それよりもね」
アロアの表情がにこりとしたものになった。
「私達も。いいわよね」
「うん、いいよ」
ネロの笑顔がさらに明るくなった。
「それでね。クレープかあ」
「嫌いじゃないわよね」
アロアは一応それを確かめた。連合においてもクレープはかなり人気のある菓子である。彼女も大好物である。それをネロに確かめてきたのだ。
「うん、好きだよ」
「だったらいいわ」
ネロのその言葉を聞いて微笑む。

「それじゃあ。何がいいかしら」
「苺と生クリームかな」
ネロの好みはそれであった。
「アロアはどうするの？」
「私はバナナとチョコレートね」
これまた話を聞くだけで涎が出そうな組み合わせであった。どちらもクレープとしては絶品の味を誇る組み合わせである。
「それでいいわ」
「わかったよ。じゃあ食べよう」
「ええ」
こうして二人は屋台の前に行きクレープを注文した。二人はクレープの生地の色を見てまずは驚いた。
「えっ！？」
「青い！？」
何とクレープの生地が青いのだ。見れば生クリームとバナナまでそうである。鮮やかなまでのコバルトブルーが店の中で映えていたのだ。
「おじさん、これって」
「どうしたの！？」
「ははは、これがうちの店のクレープなんだよ」
おじさんは顔を崩して笑って二人に言ってきたのであった。
「これがね」
「どういうことなの、これって」
「ねえ」
ネロもアロアも顔を見合わせる。流石に青いクレープは想像していなかったのだ。普通は黄色いものである。これは常識であったからだ。
「マンチキンのを使っているんだ」
「マンチキンっていうと」
「何処かしら」

二人は記憶を手繰る。一体何処のことかと必死に手繰る。しかしどうしてもわからなかった。
「あの、それって」
アロアが困惑した顔でおじさんに尋ねる。
「何処の星系なんでしょうか」
「オズ王国さ」
おじさんは笑顔で二人に告げてきた。
「そこにあるものは何でも青くてね。それでクレープも青なんだよ」
「そうだったんですか」
「味は絶品だよ」
おじさんはまた笑顔で言う。
「何せこれは本格的に蕎麦粉を使ったものだからな」
「蕎麦をですか」
「ああ、本当はこうやるんだ」
おじさんの言葉は本当のことである。クレープは普通は小麦粉だが本来は蕎麦を使ってするものである。蕎麦もまた菓子になるのは麦や米と同じである。

第六十九話　並木道の二人その四

「だからさ。食べてみてくれよ」
「わかりました」
「それじゃあ」
二人はそれぞれ注文したいと思っていたものをそれぞれ注文した。
そうして実際に食べてみると。
「あっ」
「これはかなり」
「どうだい、上手いだろう」
おじさんはまた笑顔で二人に尋ねてきた。
「これがマンチキン＝クレープさ。一度見て驚いて」
「食べてみてもう一回驚くんですね」
「そういうことさ、俺も最初は驚いたんだ」
こうネロに語る。
「青いクレープだからな。大丈夫かと思ったぜ」
「青いワインとかはありますけれどね。ジャガイモとかも」
アロアはここで言う。
「それでも青いクレープは」
「マンチキン特産さ。他にもオズには色々あるんだ」
「色々ですか」
「マンチキンは青だろ？」
「ええ」
これは今さっき話した通りである。
「他には赤と黄色、紫、緑があるんだ」
「そうなんですか」
「何かカラフルってものじゃないわね」
アロアはそこまで聞いてふと呟いた。
「戦隊ものみたい」

「ははは、戦隊ものか」
おじさんはアロアの今の言葉にまた顔を崩して笑った。
「そうかもな。近いものがあるよな」
「緑とか紫のクレープもあるんですか」
「ああ、そうだよ」
ネロにも答える。
「それぞれの星系の名産なのさ。面白いだろ」
「オズって面白い国みたいね」
アロアはそこまで聞いてあらためて言う。
「そんなに色々な色が星系ごとにあるなんて」
「青いプリンもあったな」
また随分と面白いものが出て来た。
「他にも色々と青いものばっかりなんだ」
「そうなんですか」
「そうさ、それで俺は青いクレープにしたんだ」
笑って述べる。
「どうだい、面白いだろ」
「というかびっくりしましたよ」
「そうですよ」
ネロとアロアはおじさんに応えて言うのだった。
「まさかこんな色のクレープがあるなんて」
「味はどうなのなんだろ」
「折り紙つきさ」
自信満々でアロアの言葉に応えるおじさんであった。
「そんなの言うまでもないだろ」
「そうなんですか。それじゃあ」
「ああ、安くしとくぜ」
しかも中々気前もいい。
「一割引きだぜ」
「あっ、いいですね」

「それじゃあ是非」
元々買うつもりだったがそれでさらに機嫌をよくさせた二人はもう一つずつ買うことにした。もう一つはお互いが最初に買ったものを注文し合ったのである。
そうしてそのクレープを食べはじめる。味は。
「あっ」
「これっ」
「どうだい、美味いだろう」
おじさんの自信に満ちた声が聞こえる。
「これが青いクレープの味さ」
「これって中々」
「美味しいわよね」
「うん」
ネロとアロアは食べながら話をする。クレープに頬が落ちんばかりになっている。
「甘いだけじゃなくて」
「味も」
「菓子ってのは甘いだけじゃないんだ」
おじさんはここで言うのだった。
「そこに味も大事なんだ。本格的な味がな」
「そうなんですか」
「そうさ、このクレープにはそれがある」
おじさんは高らかに言う。
「それがあるかないかで菓子ってのは大きく変わるんだ。覚えておきな」
「わかりました」
「そうだったんですね」
二人はまたおじさんの言葉に応えて頷く。
「何か食べれば食べる程」
「美味しいし」

「ただしだ、いいか？」
ここでおじさんは言うのだった。
「太り過ぎには注意しろよ」
「あっ」
アロアがそれを聞いて声をあげる。
「そうだったわ。あまり食べ過ぎると」
「二つだったら大丈夫じゃないの？」
ネロは太り過ぎを気にしだしたアロアに対してフォローを入れた。

第六十九話　並木道の二人その五

「それに今日だけだし」
「それはそうだけれど」
だがそれでも不安にならざるを得ない理由がアロアにはできてしまっていた。その理由とは。
「何かあんまりにも美味しくて」
「ひょっとして毎日食べたくなったとか？」
「そうなのよ」
照れ臭そうにネロに告げる。
「あんまり美味しいから」
「ははは、そう言うと思ったよ」
アロアの今の言葉にさらに笑う。
「俺のこの青いクレープは麻薬みたいなものさ。病み付きになるんだよ」
「確かにかなり美味しいですね」
ネロもその言葉には素直に頷く。
「僕も下手したら」
「ただし、太るなよ」
おじさんは得意げなまま言う。
「太ったら後は大変だぜ」
「それはわかっていますけれど」
アロアはそれに応えながらまた言う。
「けれどこれはちょっと」
「無理かい？」
「努力が必要です」
彼女の返事はこうであった。
「ここまで美味しいと」
「アロア元々クレープ大好きだしね」

「そうなのよ。本当に癖になりそうよ」
「麻薬じゃないが麻薬並に癖になる」
おじさんはまた豪語する。
「それが俺のクレープってわけさ」
「それだけのものはありますね」
「おうよ」
三人でそんな話をしていた。そこにまた客がやって来た。
「ここのクレープ凄く美味しいんですよ」
「そうなんだ」
「むっ」
「この声は」
ネロとアロアは今来た二人の声を聞いて身構えた。
「一度見てびっくり、二度食べて」
「どうなるのかな」
「頬っぺたが落ちます」
ティンの声であった。楽しそうにカムイに告げているのがわかる。
「本当にですよ」
「そんなに美味いのか」
「はい」
ティンは自信たっぷりにそう言い切る。
「凄い美味しいんですから」
「そんなにか。しかしなあ」
ここでカムイは顔を曇らせる。
「青いクレープっていうのがな」
「それがいいんですよ」
ティンはそれがいいと言うのだった。これがカムイには少しわからなかった。
「そうなのか？クレープっていえば」
「まあそれは食べてからです」
それでもティンはカムイに勧める。

「食べれば病みつきになりますから」
「そうなのか。それじゃあ」
カムイもそれに頷くことにした。そうしてクレープを注文する。
「俺はアイスクリームのクレープだな」
「あいよ」
おじさんが威勢よく答える。
「それでそこのお嬢ちゃんは？」
「私も同じのを御願いします」
「あっ、ペアか」
「はいっ」
ティンは明るい笑顔で答える。ネロとアロアはそれを見て囁き合う。
「これってやっぱりあれ？」
「そう、あれよ」
アロアがネロに対して答える。
「合わせてるのよ」
「そっちの方がカムイの気持ちがいいからね」
「そういうことよ。それはわかるみたいね」
「うん」
おっとりしたネロにもそれはわかった。
「流石に今のはね」
「わかりやすいけれどカムイは気付いていないみたいね」
アロアはここでカムイをちらりと見た。見れば彼はにやけているだけであった。能天気なその顔を見ているとわかっていないのは一目瞭然であった。

第六十九話　並木道の二人その六

「鈍いのよね、こういうところには」
「そうだね。僕達にも気付いていないみたいだね」
すぐ横にいるのにである。見ればティンばかり見ている。
「それも全然」
「そこがカムイらしいけれどね。ほら見て」
またカムイを見るように言う。
「あの青いクレープも」
「ティンちゃんに勧められてだね」
「ええ」
何だかんだであの青いクレープも食べている。カムイは最初の一口で表情を一変させてしまった。これはネロやアロアと同じであった。
「うわっ、これって」
「どうですか？」
「滅茶苦茶美味い」
それがカムイの感想であった。
「何これ、外見はかなり引くけれど」
「美味しいですよね、凄く」
「ああ、それもかなり」
カムイは驚いた顔のままでティンに答える。
「こんなに美味いクレープはじめてだよ」
「そうなんですよ、私も最初は本当に驚きました」
またカムイに対して述べる。
「けれどとても美味しくて。一度食べたらもう忘れられません」
「そうだよな、この味って」
「僕達と同じことを言ってるね」
「そうね」

ネロとアロアはカムイの言葉を聞いてそう話し合う。
「この味はね。やっぱり」
「ええ」
「あれ、あんた達もなの」
カムイはネロとアロアに顔を向けて声をかけてきた。今の話でやっと二人の存在に気付いたのだ。しかし最後までは気付いていないのがカムイであった。
「見たところ知り合いに似てるけれど」
「そうなの？」
「そうかしら」
しかも二人は居直りのように芝居を続けるのであった。ティンはあえて何も言わない。
「気のせいだよ」
「そうそう」
「そうだよな」
しかもカムイもそれで納得する。
「世の中似てる人も多しな。ところでさ」
カムイはここで話を変えた。
「あんた達もあれかい？ここのクレープに」
「ええ、気に入ったわ」
「凄く美味しいのね」
「ああ、こんなに美味いクレープははじめてだ」
彼は笑顔で二人に答える。二人が誰かまでは気付かずに。
「病み付きになるよな、これって」
「だからお勧めしたんですよ」
ティンはにこやかな顔でまたカムイに述べた。
「じゃあまた一緒に」
「ああ、一緒にな」
「決まりだね」
「ええ」

今の会話が何を意味するのか。ネロとアロアにははっきりとわかった。だがそれでも当のカムイはそのことに全く気付いてはいないのであった。

「どうやらティンの勝ちだね」

「そうね、ここで決まるのは早いけれど」

「ティン！？」

カムイは二人の言葉の中の単語にふと気付いて声をかけた。

「今ティンって言わなかった！？あんた達」

「ううん、別に」

「気のせいよ」

「そうなのか」

カムイは二人がそれを否定したのでそれに納得した。二人がネロとアロアだとは夢にも思っていない。変装を見抜くのが不得手であるのは確かだ。

「だったらいいけれど」

「ねえカムイさん」

クレープを食べ終えたティンが彼に声をかけてきた。

「あっ、何だい？」

「クレープも食べ終わりましたし他の場所に行きませんか」

「ああ、そうだね」

カムイは特に考えることなく彼女の言葉に頷いた。

第六十九話　並木道の二人その七

「それじゃあ次は」
「いい喫茶店知っています」
ティンはここで最後の場所をカムイに気付かれることなく指定してきた。
「そこでいいですか？」
「喫茶店かあ」
それを聞いたカムイの顔が少し考えたものになる。視線を上にやっていた。
「そうだね。それがいいね」
「はい、喉も渇いてきましたし」
それを理由にする。
「それじゃあそういうことで」
「うん。ところでさ」
ここでカムイはまた言う。
「その店って何処にあるの？」
「ここから少しの場所です」
そう彼に答えた。
「並木道を真っ直ぐに歩けば右手ね」
「ああ、じゃあ簡単に行けるね」
「はい、ですから」
勧める。カムイだけがそれがどうしてなのかわからない。
「行きますね」
「いいよ。それで」
カムイの返事はもう決まっていた。にこりと笑って答えた。
「それじゃあね」
「はい」
こうして二人はクレープを食べ終えて喫茶店に向かう。ネロとア

ロアは最後までカムイに気付かれないままその様子を見守るのだった。

とりあえず二人がそのまま行ってから。ネロがアロアに声をかけてきた。

「ここまでは完璧だね」

「ええ、もう決まったようなものだし」

アロアがネロに答えた。

「後はカムイがティンちゃんに言うだけだけれど」

「それはどうなるかな」

「あの調子だと問題ないわね」

アロアはそう見ていた。

「でしょ？」

「うん」

そしてネロも。彼もそれで間違いないと思っていた。

「そうだね。これは確実にね」

「そういうこと。それじゃあ」

ここまで話したうえで携帯を取り出した。

「アロアよ」

「ああ、どうなったの？」

ピーターが出て来た。どうやら連絡を待っていたようである。

「今そっちに向かっているところよ」

「そうか、いよいよだね」

ピーターはそれを聞いて呟いた。

「こっちに来るのか」

「そっちの用意はできてるわよね」

「勿論」

明るい声で答えてきた。

「もうできてるよ」

「そう、それじゃあ御願いね」

アロアはにこりと笑って彼に答えた。

「最後はね」
「うん。ところでさ」
ピーターはここで二人に対して問うてきた。
「どういう感じだったの、そっちでは」
「もう決まったようなものかな」
この問いにはネロが答えた。
「ティンちゃんのリードでね」
「そうなの。あいつ頑張ってるんだ」
「見事なものだったわよ」
アロアもそうピーターに言う。
「殆ど完璧にカムイをリードしていたわ」
「じゃあカムイ君は全然気付いていないんだ」
「うん、それははっきりわかったよ」
ネロがそれについて言う。
「彼は全然気付いていないね。完全にティンちゃんのペースだよ」
「そうなの」
電話にウェンディが出て来た。何か探るような声であった。
「それはかなり凄いわね」
「そうだね。彼女、かなり頭がいいよ」
ネロにもそれはわかる。それをウェンディにも言うのであった。
「もう完全に流れを掴んでいるしね」
「流れをね」
「後は告白させるだけだね」
ネロはこうまで言う。
「カムイにね。それだけ」
「そう。何か話の動きが早いわね」
ウェンディにとってもこれは予想外であった。電話の向こうで少し驚いた様子であった。
「喫茶店で決まると思ったんだけれど」
「もうあらかた決まってるよ」

ネロはまた言う。
「だからさ。特に僕達がすることはなかったよ」
「そんなにだったの」
「うん。じゃあ僕達はこれから」
「ええ、終わりよ」
ウェンディは電話の向こうでにこやかに笑っていた。
「お疲れ様、後は自由にして」
「じゃあさ、ウェンディ」
今度はアロアがウェンディに言ってきた。
「何かしら」
「これからは私達がデートしてもいいのよね」
「ええ、全然構わないわ」
ウェンディはそのにこやかな声でアロアだけでなくネロにも応える。
「どんどんやって。こっちはむしろ人手が余ってる位だから」
「そんなになの」
「元々人いらなかったかしら」
電話の向こうで苦笑いになっているのがわかる。
「ちょっと多過ぎて。二階占領しちゃってるのよ」
「そんなにいるの、皆」
「結構大騒ぎよ」
また苦笑いが聞こえてきた。
「これでばれないとなるとね。それは」
「ああ、それは大丈夫だよ」
ネロが笑顔で応えてきた。ネロが笑顔なのはウェンディもわかったようだ。

第六十九話　並木道の二人その八

「大丈夫って？」
「だってカムイそういうのには鈍感だから」
クレープ屋の前の話でそれがよくわかったのだ。
「絶対に気付かないよ。ティンちゃんは違うけれど」
「彼女はわかっても別にいいのよ」
ウェンディはそれは構わなかった。元々彼女を抱き込んでいるというか首謀者の一人である話である。それで彼女が何を知っても構わなかったのだ。
「全然構わないわ」
「そうだよね。だからさ」
「ええ、安心していいのね」
「うん、二階貸切だったよね」
「そうよ」
その問いにも答える。
「全然大丈夫じゃない。後は」
「ことの成り行きを見守るだけね」
「そういうことでいいと思うよ。それじゃあ」
「あっ、待って」
ここでピーターが電話にまた出て来た。
「何かな」
「そこの並木道だよね」
「そうだけれど」
「だったらさ、お奨めの店があるんだ」
彼は楽しげに電話の向こうから言ってきた。
「お奨めって？」
「そこにクレープ屋があるよね」
「ああ、あそこね」

アロアが笑いながら応える。
「あの店ね」
「そこ凄く美味しいから」
そう二人に対して述べてきた。
「是非行ってみるといいよ。最初は驚くけれどね」
「青いクレープに？」
「あっ、もう食べたんだ」
それを聞いた電話の向こうのピーターが笑ったのがわかる。
「早いね」
「美味しかったわよ」
アロアは笑いながら述べる。
「青い蕎麦粉を使ったクレープ、病みつきになりそうよ」
「そうなんだよ、あそこはね」
「凄くいいわよね」
またウェンディの声が聞こえてきた。彼女も知っているようである。
「あの青いのが馴れるとね。余計にいいのよ」
「食べたんだ、ウェンディも」
「もちのろんよ」
そうネロに言葉を返す。
「私だって最初は驚いたけれどね。一度食べたらもう」
「僕はティンに勧められたんだ」
ピーターはこう述べる。
「美味しいクレープのお店があるから行ってみたらいいって。それでね」
「そうだったんだ」
「もう知ってるのならいいよ」
ピーターはここまで話したうえでこう言うのだった。
「じゃあ。二人で楽しんで」
「ええ。それじゃあネロ」

アロアはあらためてその明るい笑顔をネロに向けてきた。
「これから何処行くの？」
「そうだね」
ネロはそれに応えて述べる。
「この並木道を歩くのもいいかな」
「ここを？」
「だってさ。ほら」
ここでその並木道を指し示す。黄金色の落葉と少し寒くなっている木々があった。道はその落葉で黄金色になりまるで絨毯が敷かれているようである。彼が指し示したのはそういったものであった。
「ここを見るだけでも悪くないじゃない」
「そうね」
アロアもその風景を見て頷いた。
「確かにね。ここを二人で歩くのも」
「パトラッシュもいるし」
ここでパトラッシュを話に出す。ずっとネロの足元にいたのだがカムイはその存在に気付かなかったのだ。あまりにも迂闊であるがそれだけティンに夢中になっているということであった。
「それでどうかな」
「ええ、いいわよ」
アロアはネロの申し出を笑顔で受けるのだった。そうして。
「それじゃあネロ」
「すぐに歩きだす？」
「それはいいけれどその前に」
ここで言うのだった。
「あのクレープ買いましょう」
「クレープを？」
「ええ」
そう彼に提案してきた。
「いいわよね。やっぱりあれ美味しいから」

「本当に病みつきになったんだ」
「太るのが怖いけれどね」
ここでは少し苦笑いになる。
「それでもね。美味しいものには勝てなくて」
「わかったよ。それじゃあ」
ネロもその言葉を受ける。ついつい笑顔になっていた。
「まずはね。その店で買って」
「二人並んで食べながら」
アロアは二人のそんな姿を見てまたうっとりとする。ここでは彼女が恋する乙女になっていた。アロアもアロアで案外純情であるようだ。
「それでいいわよね」
「いいよ、それじゃあ」
「ええ、御願いね」
こうして二人はまたあのクレープ屋に入る。そうしてクレープを頼んで二人並んでそれを食べながら並木道をデートするのだった。
二人にとっても実に心地よいデートになっていた。

並木道の二人　　完

２００７・１２・２

第七十話　喫茶店においてその一

喫茶店において

並木道まで話は終わった。次はいよいよ最終場面であった。

「遂にここまで来たわね」

「そうだね」

店の二階でピーターがウェンディの言葉に応えていた。

「早いっていうか何ていうか」

「まさかここまで来るなんてね」

ウェンディは自分の言葉に少し感慨を込めて言う。

「それも何事もなく」

「トラブルがあると思っていたの？」

「ええ、絶対何かしらの」

そうピーターに答えるのだった。

「だってそれがいつものパターンだし、うちのクラスの」

「二年Ｓ１組ってそんなにトラブルが多いんだ」

「多いのよ」

真顔でピーターに答える。真顔だけにかなり説得力のある言葉であった。

「それもかなりね」

「それはまたどうしてなの？」

話を聞いてもピーターにはそれが少し不思議であった。だからまた問うた。

「面子が凄いからね、やっぱり」

「個性的なのは知っているけれど」

学園きっての個性派軍団、それが二年Ｓ１組の周りからの評価である。ピーターもやはりそれは知っているがそれでも問うたのである。

「またそんなに多いんだ」

「一日一回は騒動よ」
ウェンディはそう彼氏に述べる。
「一日一回。凄いでしょ」
「一回だけ？」
「多い時は何回も」
まるで戦場である。
「教室が爆発したこともあるしね」
「何でまたそうなったの？」
流石にこれは問わずにはいられなかった。
「ちょっと実験で失敗して」
「教室で実験って」
かなりとんでもない話であった。やった人間は確実に頭がおかしい、そう思わざるを得ない話であった。
「誰がやったの、それ」
「テンボとジャッキーよ」
ウェンディはむすっとした顔で述べた。
「壮大にね。馬鹿やって」
「馬鹿をって。何を」
「犯罪の検証をしていたのよ」
二人は推理研究会にいる。だからそうした実験をすることもあるのである。
「それでね。ニトログリセリンだの硫黄だのを失敗して」
「爆発したんだ」
「おかげで皆真っ黒よ」
真っ黒になっただけで済んだだけでも驚きである。
「あの二人のせいで。酷い目に遭ったわ」
「酷い目で済む話じゃないと思うけれど」
ピーターは呆然とした様子で述べる。
「それって」
「そうかしら」

「そうだよ」
そしてまたウェンディに言う。
「普通死んでるよ、皆」
「爆発が軽かったから」
「それでもだよ」
ピーターにとっては思いきり引く話であった。
「そんなことになったら普通はね」
「まあいいじゃない」
それをいいと言う。ウェンディもかなり凄い。
「皆生きているんだし。そうでしょ」
「そういう問題かな」
腕を組んで首を捻って異議を表わすピーターであった。
「そういうのって」
「気にしない気にしない。それでね」
「うん」
話は変わった。

第七十話　喫茶店においてその二

「いよいよここにあの二人が来るんだけれど」
「そうだね」
ピーターも彼女のその言葉に真顔で応える。
「いよいよだよね、本当に」
「さて、どうなるかしら」
二人だけではない。皆の関心はそこにあった。ここにいる皆の関心は。
「ネロとアロアの話じゃもう決まってるって言うけれど」
「いや、安心はできないよ」
ここでピーターは釘を刺してきた。
「それでもね。やっぱり何が起こるかわからないから」
「最後の最後までね」
「そう、告白してそれではいが出るまで」
そもそも今回のデートがそうなることが目的なのである。カムイに彼女を作らせるということが。その為にこうした話になると狂ったかのように騒ぎだす洪童を遠くへやったのである。そうした周到さも全ては彼の為なのである。
「終わりじゃないから」
「わかってるわ。だからよ」
ウェンディも真剣な顔になった。
「私達が皆でここにスタンバっているんじゃない」
「そうだよ。だから最後まで気を抜かない」
ピーターは念を押してきた。
「それでいいね」
「ええ。けれど遅いわね」
ウェンディは店の壁にかけてある時計を見て言う。大きな古時計であった。それこそ百年は動いているような時計である。

「そろそろだと思うけれど」
「確か並木道にいたのが」
ペリーヌも時計を見て言う。
「あの時間だったらそろそろだと思うけれど」
「事故とかに遭ったとかじゃないよね」
ジミーはふと不安を覚えた。
「だったら」
「それを考えるのはまだ早いわ」
それはプリシラが打ち消す。
「まだね」
「何かあったら私もいるし」
アンジェレッタもここにいた。
「大丈夫よ。死んでもいない限り治るから、私の薬でね」
「また薬持って来てるの」
ペリーヌはアンジェレッタの言葉を聞いて少し呆れた顔になった。
「私はいつも持ってるじゃない」
「いや、それでも」
ペリーヌは言うのだった。
「薬局みたいに持ってるから。しかもいつもバッグやポケットからわんさか出て来るし」
「そんなに持ってる気はしないけれど」
「持ってるわよ」
アンジェレッタに対して突っ込みを入れる。
「それもかなりね」
「そうかしら」
「まあ。それで何かあれば本当に頼りになるからいいけれど」
それは事実なので受け入れた。
「それにしても。やっぱり遅いわね」
ペリーヌも時計を見て思う。
「何かあったのかしら」

「さあ。あっ」
ここで下を見ていたベッカが声をあげた。そして皆に顔を向けて言う。
「来たよ」
「あの二人が！？」
「うん、何ともないよ」
こうも言う。
「全然。けれどそれにしては遅かったよね」
「少し様子を見ましょう」
ウェンディはこう提案してきた。
「まずはね。それで何があったのかわかるわ」
「そうだね」
ピーターも今度は普通に頷くのであった。
「ここはね。それが一番だよね」
「そういうこと。見れば二人共元気そうだし」
ウェンディも下を見た。そうして二人の無事を確かめてまずは安心した。
「まずは安心してね。今席に着いたわ」
「よし、いよいよか」
「さて、何を話すから」
皆身を乗り出して一階を覗く。そうして二人の様子を見守るのであった。
見れば二人は一階の中央にあるテーブルに向かい合って座っている。そうして赤いコーヒーをそれぞれの前に置いて話をしていた。苺のケーキも一緒だ。

第七十話　喫茶店においてその三

「何かあれですよね」
まず口を開いたのはティンであった。
「クレープもそうですけれど甘いものばかり食べていますよね」
「そうだね」
カムイも笑顔で彼女に応える。
「太るかな」
「これ位じゃ大丈夫ですよ」
随分甘い会話をしていた。あらゆる意味で。
「今日だけじゃ全然ですよ」
「そうなんだ。だったらいいけれどね」
「はい」
そんな何気なくだがムードはもう充分だった。皆上からそれを覗いているのであった。
「いい感じね」
「そうね」
ウェンディはペリーヌの言葉に応えた。
「上手くいきそうね」
「ネロとアロアの話じゃ並木道にはもう出来上がっていたみたいじゃない」
ペリーヌはここで並木道の話を出してきた。
「だったら今はもう」
「駄目よ、まだ安心できないわよ」
ウェンディはそうペリーヌに対して言う。警戒する声であった。
「まだね。安心はできないから」
「そんなにかしら」
「そうよ。ハプニングってのはいつも思わぬところからやって来るじゃない」

このクラスにいるからこその言葉であった。
「今だって。あいつがいきなり何しでかすか」
「カムイね」
「あいつといったらあいつしかないわ」
いささか銀河語になっていなかったがそれでも説得力のある言葉であった。そこには言語を越えた何かがあった。言うならばウェンディの心が。
「そうでしょ。カムイよ」
「何しでかすかわからないっていうのね」
「あいつ、本当に大丈夫よね」
ウェンディはさらに下に身を乗り出して言う。
「ここで馬鹿やったら何もかもぶち壊しなんだから」
彼女はそれを心配していた。だがその心配をよそにカムイはかなり能天気な顔をしていた。そうしてその能天気な顔でウェイトレスの女の子にお菓子と飲み物を注文するのであった。
「何になさいますか？」
「ホットケーキ二つ」
奇しくも皆が二階で食べていたものだ。
「それとロシアンティー御願いします」
「わかりました」
ウェイトレスの女の子はカムイの注文ににこりと笑う。そのにこりとした笑顔を彼が見た瞬間に。皆、とりわけウェンディは危惧を覚えたのである。
「あいつっ」
「まさかっ」
一瞬だが鼻の下が伸びたように見えた。ここでそれは絶対に駄目だ。ウェンディなぞは無意識のうちに声をあげそうになりピーターにその口を押さえられる程であった。
「ここでそれは駄目だろっ」
「あの馬鹿っ」

皆は声にならない声で言う。だがそれは彼等の気のせいでただの杞憂であった。

「それではそれで」

「はい、御願いします」

カムイは紳士的に言葉を返した。表情を変えずに。それは目の錯覚であったのだ。少なくともそれで終わるような話であった。

カムイは注文を終えるとティンに顔を戻す。そうして彼女に言うのだった。

「ここのお店ってパンケーキが美味しいんだ」

「よく行かれるのですね」

「うん、時々ね」

いい雰囲気でにこりと笑って答える。カムイには少し似合わない様子で。

「そうだよ、時々ここに来るんだ」

「そうなんですか。いいお店ですよね」

「そうだよね、結構気に入ってるんだ」

カムイは顔を回さないがティンは回していた。それでウェンディ達にも気付いたのだがあえてそれは言葉には出さないのであった。最初からわかっていたこともあるが。

「ここのお店がね。内装もいいし」

「趣味がいいですよね」

「そうだろ?うちのクラスの皆も時々ここに来ているよ」

「今はおられませんね」

「そうだね」

彼だけが気付いていないのは内緒であった。

「けれどあれですよね」

「何かな」

ここでティンは言うのだった。

「今さっき赤いコーヒーと苺のケーキも食べて」

「あっ、そうだった」

言われてやっとそれを思い出した。この店に入ってすぐにその二つを注文していたのだ。そうして今はパンケーキとロシアンティーである。かなり食べている。

第七十話　喫茶店においてその四

「そうだったね」
「けれど幾らでも入る感じです」
「だよね。どうしてかな」
笑ってティンの言葉に応える。
「こんなのはじめてだよ、そりゃ俺ってかなり食べる方だけれどさ」
「私もです。何だか」
ティンも笑顔で言う。甘い、ケーキよりも甘い笑顔で。
「こんなことはじめてです」
「そうだよね」
このまま話をする。皆それを上から眺めながらまた話をするのであった。だが今度は二人とは直接関係ない話であった。
「そういえばさ」
ペリーヌが最初にそれを言う。
「私達ここでかなり食べてるわよね」
「だよな」
それにジミーが頷く。
「俺ケーキ五つは食べてるぞ」
「もっとじゃないの？」
それにセドリックが突っ込みを入れる。
「確か僕と同じだから八個は」
「そんなに食べていたのか」
「気付かなかった？」
「ああ、全然」
首を横に振ってセドリックに答える。
「そうか、そんなに食べていたのか」
「そうだよ。あの二人もそうみたいだけれど」
ここでまたカムイとティンについて話を戻した。

「何かさ、あの二人食べるのかなり早くない？」
「そうね」
アンジェレッタがセドリックの言葉に頷く。
「見ていたらね。もうパンケーキあらかた食べちゃってるし」
「ここのパンケーキ美味しいしね」
ピーターが言うのはそこであった。
「ついつい進むけれどそれでもね」
「早いわね」
アンジェレッタはまたそれを言う。
「まあ食べるのが早いのはいいけれどね」
「そっから先は言うと危ないわよ」
ペリーヌがアンジェレッタに注意する。
「いいわね」
「わかってるわよ。まあお薬で遅くすることもできるけれど」
しかしアンジェレッタはまだ言うのであった。
「それも何回でもできるように」
「あんたの彼氏ってどんな目に遭うのか怖くなってきたわ」
ペリーヌは今のアンジェレッタの言葉に今度は引いた。
「何なのよ、それって」
「声が大きいわよ」
ここでウェンディが二人を注意する。
「下手したら気付かれるから。気をつけて」
「え、ええ」
「御免なさい」
二人はそう言われてすぐに謝る。そうして下を見ることに専念するのであった。
下は今のところは平穏であった。しかしそれが遂に破られようとしていた。
「あのですね」
仕掛けてきたのはティンであった。

「何？」
「カムイさんって私のことどう思っていますか？」
じっとカムイを見詰めて問う。もう雰囲気は完全にできていた。
「私のことを。どう思っておられるんでしょうか」
「いきなりストレートね」
「ここはストレートがいい」
プリシラにタムタムが述べる。
「そうじゃないとぶれる。だからここはストレートだ」
「そうなの」
名キャッチャーであるタムタムの言葉だけに説得力があった。
「じゃあそれでいいのね」
「いい。これでバッターは勢いに飲まれる」
タムタムのリードではそうであった。伊達に超人的な能力を持ちながらも頭脳は全く逆の意味で超人的なフランツのキャッチャーをしているわけではなかった。
「それで勝ちだ。さてカムイは」
「どうなるかね」
皆はカムイの動きを見守る。それに対するカムイは。
「好きだけれど」
素っ気無く答えるのだった。

第七十話　喫茶店においてその五

「ひょっとしてさ、それって」
そのうえでまた言う。
「俺とあれ？付き合っていいってこと？」
「御願いできます？」
またじっと見詰めてカムイに問うのであった。
「私と。宜しければ」
「うん、俺だってさ」
心から喜んでいるのがわかる。カムイの顔が満面の笑みになって真っ赤になっていたからだ。
「ティンちゃんみたいな娘が彼女だったらなあって思っていたし。是非共だよ」
「いいんですね」
「俺の方がそう尋ねたいよ」
これは夢か真かと言いたい感じであった。
「本当にそれでって。だったら」
「はい、御願いします」
ティンは止めの切り札を出してきた。それは満面の純粋な笑みであった。
「これからも。こうして二人で」
「うん、一緒にね」
カムイは幸せの絶頂にいる顔で応える。
「デートしたり遊んだりしようよ」
「はい、それじゃあ」
「あの、ウェイトレスさん」
カムイはまたウェイトレスを呼ぶ。そうしてすることは。
「御祝いだけれど。ここは」
「皆さんに」

ここで不意にティンが言った。
「皆さんって！？」
「はい」
その満面の笑顔のままで応えたその瞬間だった。
クラッカーが鳴った。派手な鳴り物が響く。それは二階からであった。
「えっ、どうしてだよ」
「おめでとうカムイ！」
「やったわね！」
ウェンディ達が叫ぶ。花吹雪や紙吹雪まで舞い降りる。
「何で皆ここに」
「皆さんカムイさんを御祝いしてくれているんですよ」
ティンはまたにこりと笑ってカムイに言うのであった。
「ですからここに」
「何時の間に」
まさかずっとここにいたとは思わない。思わせないだけの派手な演出でもあった。
「よかったわね」
「カムイ、おめでとう」
そして彼等もそれをあえて言わず。カムイを祝福するのであった。
「これであんたにも彼女が出来たし」
「ティンちゃんも彼氏が出来たしね」
「はい、有り難うございます」
テインもまた彼等に対して礼を述べる。やはりカムイには何も考えさせはせず言わせはしないのであった。この辺りの演出が見事であった。
「じゃあ今からさ」
「御祝い！？」
カムイは彼等の言葉に問う。ここで実に都合よく今まで駅や公園や並木道で連絡役をしていた面々もやって来た。そうして店の前で

派手にクラッカーを鳴らすのだった。
「何かと思えばな！」
「いい話よね」
「そ、そうなのか」
カムイは彼等がどうしてここにいるのかさえ考えさせられなかった。ただその派手なクラッカーの音に心を奪われるだけであった。やはりここでも気付かない。
「俺って運がいいんだな」
「そうよ、幸せ者」
上からウェンディが笑顔で声をかける。
「可愛い彼女貰って」
「そうだよな、ティンちゃんだし」
カムイもティンを見て言う。確かに可愛い。
「俺にもやっと彼女が出来たんだ」
「皆で祝おうよ」
ピーターが言う。
「皆でね」
「そうよ、二人を御祝いにね」
ウェンディも応える。そうして皆一階に集まる。
「ウェイトレスさん」
「色々なお菓子と飲み物をどんどん持って来て下さい」
「はい」
ウェイトレスさんも笑顔で彼等の声に応える。これでもう決まりだった。
宴がはじまった。皆でカムイとティンを祝う。こうして二人はその中で笑顔を見え合うのだった。これまでで最高の笑顔を見せ合うのであった。

喫茶店において　　完

2007·12·6

第七十一話　マルコの青春その一

マルコの青春

マルコはサッカーをしている。それに青春をかけている。
「まあ簡単に言うとあれだよな」
彼はいつもこう言うのだった。
「ボールは友達ってな」
「じゃあその友達をいつも蹴ってるのね」
「とんでもない奴だな」
そう言うとお決まりの突込みが入る。それに対するマルコの返事もまたいつものパターンがある。マルコはそれをあえて言うのであった。
「友達は痛いも痒いも知り合った仲だからさ」
「そうなのかよ」
「そうさ、俺だってボールにはいつもやられている」
彼は言う。
「けれどそうしたものを越えたものがあるのさ。だから俺達は友達なんだ」
「けれどよ、御前ってさ」
ここでまた皆に突っ込みを入れられる。
「野球もするよな」
「ああ」
部活には入っていないが野球も好きである。
「水球もバスケも」
「どれも好きだぜ」
爽やかな笑顔で答える。本音であるのがそれでわかる。
「ラグビーとかアメフトは体格が合わないんであまりしないけれどな」
「まあそうだな」

それに皆が頷く。
「御前細いしな。背もまあ高いけれど」
「細いとああしたのは駄目なんだよ」
それがマルコの意見であった。何でもできるだけあってかなりわかっていた。彼はスポーツならば何でもできる男であるのだ。それが彼の生きがいであった。
「だから俺はサッカーや野球でいいさ」
「そうか」
「後は体操な」
体操も好きである。
「鉄棒とかも何でも出来るぜ」
「だよなあ」
「はっきり言って羨ましいよ」
運動神経ではフランツにも匹敵する。ただし体力では流石に劣る。フランツの体力は底なしだからである。幾ら何でもそれとは比べられなかった。
そんな彼である。ある日トムに声をかけられた。
「ちょっと時間あるかな」
「時間？」
「うん、実はね」
トムはマルコに対して話しはじめた。その話はお願い事であった。
「助っ人頼まれて欲しいんだ」
「助っ人！？」
「そうなんだよ。メアリーが探していて」
彼はこう言う。
「頼めるかな」
「メアリーって確か」
マルコはトムの話を聞きながら自分の記憶を辿る。彼女はトムの従姉で八条大学の学生である。彼が知っているのはここまでであった。

「御前の」
「うん、助っ人を探しているんだよ」
「何の助っ人だ？」
彼は次にそこを尋ねた。それ次第で受けようか受けないか考えるつもりだったのだ。
「スポーツか？それだったら」
「そうなんだ、マラソン」
「マラソンか」
マルコはそれを聞いて考える顔になった。だがここでトムはまた言うのだった。
「陸上も得意だったよね」
「まあな」
それは認める。実際に本当のことだ。彼は陸上競技も得意なのだ。
「それじゃあ頼めるかな」
「別にいいけれどな」
マルコはよしと言った。トムはそれを受けて今度は笑顔を作って彼に言ってきた。

第七十一話　マルコの青春その二

「優勝したらいいことがあるよ」
「いいこと？」
「それはその時のお楽しみだけれどね」
「何か御馳走してくれるのか？」
彼はこの時は特に何も考えることなく問うた。一体何をするのか全く見当がつかなかった。というよりはそういうことはまずはどうでもよかったのである。
「だったら一応言うぜ」
「うん」
「タコスがいいな」
母国の代表的な料理を出してきた。
「メキシコ料理だ。それでいいよな」
「別にいいよ」
やはりトムはここでもにこりと笑うのであった。
「それじゃあ食べ物はそれでだよね」
「食べ物は？」
何かそれが妙に引っ掛かった。それでマルコはいぶかしむ顔を作ったのだった。
「他にもあるのか」
「だからそれは後のお楽しみ」
また笑って言葉を返す。
「それでいいよね」
「ああ。それでそのマラソンは何時なんだ？」
問題は何時行われるかということだった。それによって体調を調整する必要がある。だから彼はそこを聞くのであった。これは当然のことであった。
「何時やるんだ、それは」

「再来週の日曜だよ」
「そうか、再来週か」
それを聞いて考える顔になる。そのうえでまたトムに対して述べた。
「わかった、その頃までに万全の調子にしておく」
「頼むよ」
「優勝していいんだな」
「そのつもりで頼んだんだよ」
トムはまたマルコに対して言う。それは嘘をついている顔ではなかった。少なくとも彼は嘘をついているということではないのがわかった。
「マルコにね」
「どうせ出るのなら優勝しないとな」
マルコは気合を入れた顔でまた述べた。
「だからだ。やってやるぜ」
「頼むよ」
そんな話をしてトムの願いを受けた。再来週の日曜。学園全体を使ったマラソンコースのスタート地点に赤いジャージ姿のマルコがいた。その横にはトムがいる。
「いよいよだね」
「ああ」
マルコは生真面目な勝負をする顔になっていた。その顔でトムに応える。
「身体が引き締まっているけれど」
「マラソンの為にな。整えてきたからな」
彼の言葉に応えながらそのジャージを脱ぐ。その下はシャツと短パンであった。マラソンをする格好であった。シューズもそれであった。
「ずっと走って食べ物も減らしてきた」
「凄いね」

「優勝するからにはそこまでしないとな」
ここでもその考えであったのだ。
「だからだ。整えてきた」
「それで自信は？」
「俺のやれるだけはやった」
それが答えであった。
「これで駄目だったら」
「駄目だったら？」
「運がなかっただけだ。しかしな」
その運についても言及してみせてきた。
「俺は運がいい」
「つまりそっちの自信もあるんだね」
「ああ。後は走るだけだ」
厳しい顔だが声ははっきりとしていた。
「ゴールまでな。ところでだ」
「何？」
ここでマルコの問いに顔を向けるトムだった。
「御前の従姉の姉さんは来ていないのか？」
「うん、ちょっとね」
ほんの少しだけ目を泳がせてから彼の問いに答えてきた。
「用事があるとかでね。ここには来ていないんだ」
「そうか。確か御前の姉さんの御願いだったよな」
「そうだよ」
それは本当のことだ。だから隠しはしない。
「それがどうかしたの？」
「その人も来るものだと思ったんだがな」
フックのように極端な女好きでもカムイや洪童のようにそうしたことになると暴走するのでもないがそれでも気になるようであった。
フックも男なのだ。
「来ていないのか」

「まあそれはね」
また目を泳がせたがそれを何とか止めてマルコに応えるトムであった。

第七十一話　マルコの青春その三

「気にしないで。それでいいよね」
「気にするなか」
「そういうことで。だから今は」
「ゴールまでだな」
「うん」
笑顔で頷いてみせる。
「そこまで行けばいいだけだからね」
「それだけでいいのか？」
マルコはそれだけでは満足しないようであった。それが彼自身の言葉からはっきりとわかる。彼はかなり感情が表に出易い性格でもあるのだ。
「どうなんだ、そこは」
「じゃあやっぱり優勝狙うの？」
「それ以外に何があるんだよ」
マルコはまたトムに問うた。
「出るからには優勝しないとな」
「わかったよ。随分と気合入ってるんだね」
「最初からそれは言ってるけれどな」
マルコはトムに対して少し呆れたような感じになった。
「優勝するぞってな」
「いいね、そのやる気って」
トムはどういった心変わりか今度はマルコの言葉に感心したようであった。
「じゃあ時間は短くて済むね」
「短く？」
「ああ、何でもないから」
トムは笑って今の言葉は打ち消した。

「気にしないでいいよ」
「いいのか」
「ゴールで待ってるからさ。それじゃあ」
トムはここまで言うとそそくさとその場所を後にした。こうしてスタート地点に残っているのはマルコだけとなった。程なくしてスタートとなった。マルコは自分のペースで走りはじめた。
「何だ、思ったより皆速いな」
彼としてもかなり速い。しかし周りには彼に匹敵する速さの者が結構いた。そしてその中には。知った顔もいるのであった。
「やあ、マルコ」
「御前も参加していたのか」
そこにいたのはセドリックであった。にこりと笑ってマルコに顔を向けてきていた。
「うん、参加することに意義があるからね」
彼はそうした考えでこの大会に参加しているのであった。
「だからね」
「確かにそうだけれどな」
この考えはマルコにもわかる。スポーツマンとしては当然のことであった。
「それでも。驚いたな」
「そうなの？」
「そうだよ。御前がいるなんてな」
そこが問題なのだ。マルコにとってはセドリックが参加していることよりも彼がここにいることの方が驚きだったのだ。意外な再会というわけである。
「全く。誰がいるかわからないな」
「そういうマルコはどうなの？」
ここでセドリックはマルコに問い返してきた。
「俺！？」
「うん、どうしてこの大会に参加しているのかな」

「トムに頼まれてな」
正直にそう述べる。
「それで参加しているんだ」
「そうだったんだ」
「ああ、それだけだ。けれどな」
ここでマルコの顔が真剣なものになる。
「参加するからには。優勝だ」
「随分気合が入ってるんだね」
「当たり前だ、俺にとってはな」
自分にとってはと断言する。
「やるからには優勝しないと気が済まない」
「僕は完走かな」
それに対してセドリックの目指すものは穏やかなものであった。
「それじゃあ。僕は僕のペースで走るよ」
「御前はそれか」
「うん、優勝しようとかは別に考えていないんだ」
そこはマイペースなセドリックらしいと言えた。
「それよりも最後までね。走りたいから」
「そうだな」
これにはマルコも同意して頷くことができた。
「最後まで走ってこそだな、本当に」
「じゃあさ。最後まで頑張ってね」
セドリックはまたにこりと笑ってマルコに言う。

第七十一話　マルコの青春その四

「僕はこのまま自分のペースで行くから」
「ああ、それじゃあな」
「うん」
二人は別れた。そうしてそれぞれのペースで走る。マルコはさらにスピードを速める。その速さはかなりのものでコースの半ばに達した頃にはトップ集団の中にいた。
「まだこんなにいるのか」
マルコは周りを見て呟く。
「こんなにレベルが高いとはな。それに」
側で走っている面々を見てまた呟く。
「大学生とか社会人も多いな。プロは流石にいないか」
いてもおかしくはないが今回はいなかった。まずはそれには安心した。流石に彼でもプロが相手では分が悪いどころではないからだ。しかし大学生や社会人なら負ける気はしなかった。そう思うと気合がさらに入った。
「よしっ」
ペースをあげる。そのままトップ集団のさらに前に躍り出ようとする。
だがその横にまた誰か出て来た。今度は顔がはっきり見えない。
「誰だ！？」
しかし今はそこに構ってはいられない。走ることに集中しなければならないからだ。
「くっ」
顔を見るのは諦めた。そのまま前に進む。
「顔を見るのは後だ、それよりも」
心の中で言う。
「優勝だ、それが先だ」

そう誓って走る。足にも力が入る。そうして走って走ってその果てには。ゴールが見えてきた。

その前には誰もいない。彼の後ろにいるらしい。歓声も聞こえはしない。ただ走るだけであった。

そのまま走りテープを切った。完走だけではなかった。彼は自分で言った通り見事優勝を果たしたのであった。

「やったね、マルコ！」

ゴールを通り過ぎたマルコに近寄ってきたのはトムであった。そして彼だけではなかった。

「おめでとう、マルコ君」

「マルコ君！？」

マルコは大人の女性の声にふと顔をあげた。

「今の声は」

「よくやったわね」

そこにいたのはメアリーであった。トムの従姉の。彼女がトムの側に来ていたのである。

「メアリーさん！？」

「そうだよ、メアリーだよ」

トムがにこりと笑ってまたマルコに言う。

「ここに一緒にいたんだ」

「そんなの初耳だぞ」

マルコは目を丸くさせてトムに問うた。

「何時の間に」

「だってあえて言わなかったし」

トムは笑顔でマルコに対して言うのであった。

「驚かせようと思ってね」

「驚かせよう！？」

マルコはその言葉に余計に目を丸くさせる。目だけでなく首も傾げる。そうしてトムにまた問うのであった。

「どういうことだ。話がわからないんだけれどよ」

「うん。マルコも彼女が欲しいって言っていたじゃない」
「そういえばそうか？」
記憶にない。そんなこと言ったのかと自分の記憶を探る程であった。
「覚えていないけれどな」
「そうだったっけ。けれど」
「ああ、じゃああれか」
ここまで話をしてやっとわかった。つまりは。
「メアリーさんを俺に紹介しようってわけだな」
「駄目かな」
「駄目だって言われるとな」
マルコもどう答えていいかわからない。それを言われると弱い。
「俺も何て言えばいいのか」
「私じゃ駄目かな」
ここでそのメアリーもマルコに尋ねてきた。
「マルコ君さえよかったら」
「言っておくけれどあれだよ」
ここでトムがまたマルコに対して言う。
「メアリー今フリーだから」
「そうじゃなきゃ俺に紹介しないよな」
マルコはそうトムに問うた。
「そもそも」
「まあそれはね。わかる？」
「わからない筈ないだろうが」
マルコはまたすぐに言い返した。
「彼氏いて他の男に紹介する奴なんか最低だろ。御前は最低な奴じゃない」
「有り難う」
「褒めているわけじゃないぞ」
一応そう断る。

「ただな。どうしても言わずにはいられなかっただけだ」
「けれど。最低じゃないっていうのはいいことだよね」
「むしろいい奴だな」
実際にトムは悪人ではない。だから彼がそんなことをする訳がないのはわかっている。そのうえで話をしているのである。
「御前は」
「重ね重ね有り難う。それでね」
トムはまた言葉を続ける。
「どうかな、メアリーは」
「いきなりそう言われてもな」
マルコは困った顔になる。その後ろでは。

第七十一話　マルコの青春その五

「ふざけるな！」
「殺せ！」
殺気に満ちた罵倒が飛び交っていた。
「御前は二度と息するんじゃねえ！」
「足切り落とせ！」
「何だ、あれは」
マルコはその罵声の方を振り向いた。見ればみすぼらしく陰気な顔をした卑しい男が皆から袋叩きにされていた。しかも誰もがそれを止めない。
「皆随分と殺気立っているな」
「ああ、あれはビクトリー＝ムラナーカだね」
「ビクトリー＝ムラナーカ？」
「有名な痴漢だよ」
トムをあからさまに蔑む顔をそのムラナーカに向けて言うのだった。
「何でも観戦していた女の子のスカートの中を盗撮しようとしていたんだって」
「そうか」
「それが見つかって袋叩きに遭っているんだ」
「まあ当然だな」
マルコもそれを聞いて当然だと言い切った。そんなことをすれば袋叩きに遭うのも当然であった。皆ムラナーカを容赦なく制裁している。
「急所潰せ！」
「二度と立てないようにしてやれ！」
最後には動物園の虎の檻の中に放り込まれることとなった。
「貴様は虎の餌になってろ！」

「地獄に落ちろ！」
そう罵倒を浴びせられて学園の中の虎の檻に入れられるのであった。そうしてその虎にさらにズタズタに正義の裁きを浴びるのであった。
「まああんな奴はどうでもいい」
マルコにとってはムラナーカなぞそんな存在でしかなかった。所詮は小者である。
「どうなってもな」
「そうなんだ」
「ああ。それよりな」
話を戻してきた。そうしてまたトムに対して問う。
「何が言いたいんだ、それで」
「だから。メアリーが彼氏を探しているんだって」
トムはまたそれを言うのだった。
「だから。それでね」
「それと俺がマラソン大会に出たことが関係あるんだな」
「そういうこと。察しがいいね」
「察しがいいも何もな」
顔を少しムッとさせて彼に言う。
「普通はわかるさ。ここまで来ればな」
「メアリーってスポーツマンが好きなんだよ」
「やっぱり男の人は体力がないと」
メアリーも横から言ってきた。
「だからね。それでなのよ」
「それでなんですか」
「優勝しなくても完走できる人ならって思っていました」
メアリーはまた言ってきた。
「そうしたら。優勝までしてくれて」
「体力がないと駄目なのか、御前の従姉さんは」
「なければつけて欲しいって考えだけれどね。それでも」

「やっぱり元からある方がいいってわけか」
「それでどう？」
トムはまたマルコに問うてきた。
「メアリーのこと。駄目かな」
「駄目っていうかな」
マルコはその問いに少し困った顔になっていた。そうしてその顔でトムに対して言うのだった。これはメアリーに対しても言う言葉であった。
「即答はできないさ」
「今ここじゃ駄目なんだ」
「今マラソンを完走した後だろ」
まずはこれについて言及してきた。
「うん」
「だからな。それで疲れているんだ」
それを前置きにしてきた。
「考えもまとまらない。それで答えても」
「駄目だってことだね」
「ああ、そういうことさ。それに」
「それに？」
「どうして俺なんだ？」
次に尋ねたのはこれであった。
「スポーツが得意で体力があるからかい？」
「それだけでここまではしないよ」
トムはにこりと笑ってマルコに答えてきた。

第七十一話　マルコの青春その六

「マルコがメアリーに相応しいと思ったから紹介したんだよ」
「俺にか」
「うん。メアリーにも相応しいと思ったからね」
トムはこうも言うのだった。
「だからだよ。僕だってそこは考えているさ」
「俺にか」
「私も最初に言われた時は驚きました」
メアリーもおずおずとした調子でマルコに対して口を開いてきた。
何かトムとは全然似てはいない。しかしその奇麗さにマルコはもう心を奪われてしまっていた。
「彼氏を紹介してくれるって言われて。それで写真を見せられて」
「そこまでしていたのか」
マルコはメアリーの言葉を聞いてあらためて驚いた。
「御前って意外と用意周到だったんだな」
「こうしたことは仕込が大事だからね」
トムはマルコのその言葉にここでもにこりとした笑みで答えてきた。
「だから色々とやっておいたんだ」
「そうだったのか。しかし」
それを聞いてもまだ言うマルコであった。
「俺は何か罠に入ってしまったって感じだな」
「男は狩人じゃなくて獲物だよ」
今の言葉にはトムのこの言葉が来た。
「だからそれでいいんだよ」
「御前の言葉じゃないな、今のは」
マルコはトムの獲物という言葉にすぐに反応してみせた。
「とにかくだ。少し待っていて欲しいんだ」

「どれ位？」
「二日程度だな」
そうトムに答える。
「それ位待っていてくれれば答えを出すから」
「そうなんだ。じゃあ二日後だね」
「ああ」
またトムに答える。
「それで言葉を伝える場所は？」
「ここでいいだろ」
マルコはそうトムに述べた。
「話がはじまったのはここだしな。なら丁度いいだろ」
「それもそうだね。メアリー」
トムはそこまで話したうえでメアリーに顔を向けて問うのであった。
「それでいいかな」
「ええ、私はそれでいいわ」
メアリーはにこりと笑って従弟に答えるのであった。
「二日後ね」
「はい」
マルコはメアリーには真剣な顔で答えて頷くのであった。
「それで御願いします」
「それじゃあ二日後に」
マルコは礼儀正しくメアリーに告げてその場を後にする。その後ろからトムが来る。何時の間にかセドリックもやって来ていた。
「御前も来たのか」
「悪いけれど途中から見ていたよ」
セドリックはそうマルコに答える。
「二日後だよね」
「ああ」
マルコは彼にも答える。

「それでどうするの？」
「ここでそれを言っても仕方ないだろう？」
今の返事はこうであった。あえて表情を消している感じであった。
「だから言わないでおくさ。悪いけれどな」
「まあそれはいいけれどね」
セドリックもそれは悪いとはしなかった。
「それでも何かいい雰囲気かな」
トムは言う。
「今の雰囲気って」
「そうだね」
セドリックもそれに頷くのだった。
「このままだとね。随分といい感じだね」
「だから僕は安心しているんだけれど」
「安心しているのか」
「だってマルコもそうだろ？」
マルコ本人にもそう問う。
「断る感じじゃないし」
「まあな」
マルコもトムのその言葉に素直に頷くのだった。
「今のところはな」
「今のところは？」
「何が起こるかわからないだろ」
マルコが言うのはそこであった。
「うちのクラスでこうした話になると毎度毎度規格外に揉めるだろ」
「カムイの時もそうだったね」
セドリックもそれは知っている。告白になると大騒動になるのはこのクラスの定番である。彼もそれは嫌になる程わかっているのだった。
「だから俺だけで行きたい」
「マルコだけで？」

「洪童は間違っても呼ぶなよ」
これは念を押す。

第七十一話　マルコの青春その七

「あいつだけはな」
「まあ彼はね」
「流石に駄目だよね」
トムもセドリックもこれには全面的に賛成した。というよりかは常識であった。
「わかっていたらいい。というよりかは皆が来たら困る」
「困るんだ」
「こうしたことは一人の方がいい」
マルコはまた言う。
「真剣勝負なんだからな」
「真剣勝負ね、確かに」
「それは」
これには二人も頷く。この考えはよくわかるものだった。マルコは勝負事に対しては真剣だ。それがわかっているからこその言葉だった。
「それじゃあ二日後ね」
「あそこでだね」
「ああ、それは絶対にな」
マルコも真剣だった。それも二人に伝わる。
「しかし。何かどうなるかだな」
「どうなるかって？」
「メアリーさんがどう言うかだな」
マルコはそれについても考えていた。
「どうなのかな。本当に俺を」
「俺をって？」
「どういうこと？」
「メアリーさんから言ってきたんだったよな」

マルコが気にしているのはそこであった。
「それは本当だよ」
トムはそれはちゃんと保障する。
「ちゃんとね。メアリーから言っているから」
「だったらいいけれどな。それにしても」
「それにしても？」
「今から緊張するな」
マルコはさらに神経を昂ぶらせている感じであった。その緊張が止まることはなかった。
「何が起こるのかな」
「ひょっとしてマルコって」
「うん、ひょっとして」
トムとセドリックはそんなマルコを見て囁き合う。彼についてわかったことがあったのだ。
「こういうことには心配性？」
「そうかも」
そこであった。
「スポーツの時にはあんなに勇敢なのに」
「こういうことには」
「悪いかよ」
本人は本人でそれに居直ってきた。
「はじめてだしな」
「ふうん、そうだったんだ」
「はじめてだったんだ」
「今度は何だよ」
半分照れ隠しで二人に言い返す。
「俺がそんなので悪いのかよ」
「悪いんじゃなくてさ」
「何というかね」
二人はまたマルコに言う。

「意外っていうかそれでいて」
「マルコらしい？」
二人の言葉は矛盾していた。それでもそう言うしかなかったのであった。
「そんな感じだからね」
「だから」
「そうか。まあ俺らしいって捉えさせてもらうよ」
マルコはこう答えることにした。
「それでいいな」
「うん、じゃあ二日後だね」
「ああ、二日後だ」
マルコはまたこう答えた。
「その時にはっきりさせるさ」
「わかったよ。それじゃあ」
「その時にね」
「ああ」
そう言葉のやり取りをして今はマラソンでの疲れを癒す為にその場を後にするのであった。二日後に控えた大勝負の為にであった。

マルコの青春　　完

２００７・１２・１２

第七十二話　大勝負その一

大勝負

運命の二日後。その日はもうやって来た。
「早いものだな」
マルコはその日学校の教室でトムに対してこう言っていた。
「もうこの日か」
「そうだね」
それにトムも頷く。
「僕もそう思うよ」
「それで行くんだよね」
「ああ」
マルコは二人のとこころにやって来たセドリックの言葉にも頷いた。
「最初からそれは決めているさ」
「そうなんだ。何かはっきりしているっていうか」
「こういうのって逃げたら駄目なんだろ」
マルコはこうセドリックに言ってきた。
「子供の頃お袋から言われたんだよ。男と女のことは絶対に逃げるなってな」
「そうだったんだ」
「親父にも兄貴にも言われたさ」
マルコはこう二人に言うのだった。
「こうしたことはケリをつけるのがメキシコの男だってな」
「メキシコねえ」
「そうさ、メキシコさ」
マルコは自分の祖国を出して不敵に笑った。
「タコスとタバスコとテキーラのな」
「それを出したらちょっとね」

トムはそれには苦笑いになった。
「お笑いになるんじゃないかな」
「何か子供の頃からいつもこれは食べていたからな」
マルコはタコスについてこだわりを見せてきた。
「他にも色々とあるんだけれどな」
「まあメキシコっていったらそれだよね」
セドリックもタコスには笑顔で頷くのだった。
「僕の国は果物かなあ。それの輸出で有名だし」
「いいね、それって」
ここでトムだけが寂しい顔になるのだった。
「そうして食べ物が自慢になるのって」
「ああ、それはな」
マルコは彼が何を言いたいのかわかった。それで気配りを向けるのであった。
「まあ。そうだけれどそんなに気を落とすことは」
「そうだよ」
セドリックもトムに対して言う。
「味覚って人それぞれだし」
「じゃああれかな」
セドリックの言葉が何故か余計に堪えるのであった。
「僕の国の人は皆味覚が駄目なのかな」
「それはな」
「ちょっとね」
二人は返答に窮してしまった。カナダといえば連合においてはフィンランドと双璧を為す食べ物や料理が駄目な国なのだ。それで連合中に知られている程である。
「まあ気にするな」
「そうだよ」
二人は今度は慰めにかかった。
「嫌なことは考えるな」

「それが一番だよ」
「そうだけ。けれど」
ここでトムは気を少し取り直してマルコに言ってきた。
「メアリーもカナダ人だからね」
「何かそれは脅迫に聞こえるんだがな」
マルコも今の言葉には苦笑いになった。
「ちょっとな」
「それでも料理は得意だから」
一応はそう断る。
「カナダ人としてはだけれど」
「それっていいことなのかな」
「さあな」
マルコは今度はセドリックの言葉に首を傾げさせた。
「俺からは何とも言えないな」
「僕も。何て言えばいいかな」
「どうも僕の国ってあまり目立たないし」
カナダはそういう国であった。それこそ地球にあった頃から。アメリカという極めて目立つ国に隠れてしまいどうしてもそうなっていたのである。
「料理だってねえ。文化とかも」
「そういえばな」
「あまりあれだよね」
「どうしたものなんだろうね」
トムはひたすらそんな祖国を嘆く。
「何で我が国はこんなに」
「まあそう嘆くな」
マルコがこう言って慰める。

第七十二話　大勝負その二

「御前自身は別に困ってないんだろう？」
「メアリーが料理上手だからね」
これで助かっているのだ。側に料理上手な女の子がいれば人生はそれだけで楽しく幸せなものになる。これが女の子になれば男の子になるのである。
「だったらいいじゃないか」
「そうかな」
「そうだ。だから安心していいと思うぞ」
「そう考えさせてもらうよ」
「そういえばカナダってさ」
セドリックもここでフォローに入った。
「海の幸が美味しいんだってね」
「そうだったっけ」
トムの記憶にはない。彼にとっては初耳であった。
「僕そんなの知らないよ」
「あれっ、そうなの」
「うん。誰から聞いたの、それって」
「日本の雑誌だけれど」
セドリックはトムにこう答える。
「日本の雑誌かあ」
「何かあるの？日本の雑誌に」
「っていうか日本人にかな」
トムは微妙な顔になるのであった。そのうえで語る。
「ほら、日本人って生もの異常に好きだから」
「それはね」
「確かにな」
セドリックだけでなくマルコもトムの今の言葉に頷く。

「カナダじゃあまり食べないんだ。だからそう言われても」
「カナダじゃお刺身とかはないんだ」
「食べないね」
こう答えるトムだった。
「燻製にはするけれど」
「日本人はそれも好きだよな」
「そうだね」
セドリックは今度はマルコの言葉に頷いた。
「日本人は魚介類なら何でも」
「それなんだよ」
トムは困った顔で二人に述べる。
「こっちじゃあまり魚介類食べないんだよ」
「そうだったんだ」
「そうなんだよ。それで魚介類が美味しいって言われても」
困るというのである。中々複雑な問題であった。
「何が何だか。ましてやお刺身なんて」
「美味しいよね」
「ああ」
マルコはまたセドリックの言葉に頷く。二人は生ものは大丈夫であった。
「お刺身なんて今じゃ連合の何処でも食べられるじゃない」
「寿司もだな」
刺身も寿司も和食の定番となっている。連合においては最早日本はおろか連合の何処にでもある食べ物となっているのである。これはそれこそ千年も前からだ。
「それでどうこう言うのって」
「何かおかしいな」
「美味しいことは認めるよ」
トムもそれは否定しない。
「けれど食べるのにはどうしても抵抗があるんだよ」

「魚介類自体が？」
「何となくね」
困った顔でセドリックの言葉に答える。
「抵抗があるんだよ」
「そうだったんだ」
「カナダじゃお肉をよく食べるんだ」
そのうえでこう言うのだった。
「それもかなりね。あと卵」
「ふうん。そうだったんだ」
「俺達はどっちもかなり食べるな」
マルコはそれを聞いて呟く。
「アメリカ人はそれこそ何でも」
「彼等はまた特別だよ」
トムはアメリカ人に対しては少し憮然とした顔になる。この時代でもカナダはアメリカに対して複雑な感情を持っていると言われているのだがそのせいであろうか。

第七十二話　大勝負その三

「連合自体が色々食べるけれど」
「カナダは例外かな」
「そうみたいだな」
セドリックとマルコはまた言い合う。
「だから料理もあれなのかな」
「素材を自分から限定していてはな」
「そうかも知れないね」
トムもそれは認める。
「けれどね。メアリーは何でも作られるよ」
「そうなのか」
「うん。だからそれは安心していいよ」
こうマルコに語る。
「絶対にね」
「わかった」
トムのその言葉に頷くのであった。
「それじゃあそれはな。期待させてもらおう」
「うん、そうして」
「期待ってマルコ」
セドリックは今のマルコの言葉に気付いた。
「ひょっとしてもう」
「だからだ。会ってからだ」
一応はそう断りを入れるが。
「いいよな、それで」
「まあ僕は別にいいけれど」
セドリックは結局のところ自分のことではないのでそれはいいとした。
「けれどね。それでも大体はわかったよ」

「向こうもわかっているかな」
「多分ね」
今度はトムがマルコに答えた。
「わかっていると思うよ、多分だけれどね」
「そうか」
「けれど。緊張しているみたいだね」
「ああ」
それは否定しない。こくりと頷いてみせてきた。
「それはな。何か今からな」
「結果はまあ大体わかっているのにそうなんだ」
「それでもだ。はじめてだしな」
マルコの顔が少しずつ強張っていく。まるで戦いの場に赴くような顔になって二人に対して答えるのであった。その顔は真剣そのものであった。
「何か今から」
「それでもリラックスするといいよ」
セドリックはにこりと笑ってマルコに告げた。
「あえてね。深呼吸して」
「そうじゃないとかえって駄目か」
「これがゴールじゃないんだし」
セドリックはこうも言うのだった。
「というよりははじまりだよ」
「はじまり・・・・・そうなのか」
「って何言っているんだよ」
はじまりという言葉に驚いた顔になるマルコに対してあえて明るい笑顔を作って声をかける。
「告白してから付き合うんだよ」
「それはわかっているが」
「だったらそれははじまりに過ぎないじゃない。最初からそんなに緊張していたら何にもならないよ」

「そうかのか」
「言われてみればそうだよね」
セドリックの言葉にトムも同意して頷いてきた。
「僕もこうした経験ないからよくわからないけれど」
「ないのか」
「地味な性格だから」
こうマルコに断りを入れてからまた答える。
「ないんだ。それでもいいかな」
「ああ、別にな」
マルコもそれにこだわらない。そうしてトムの話を聞くのであった。
「それでやっぱり御前も」
「結局はじまりに過ぎないんだと思うよ、やっぱり」
彼もまたマルコに対してこう言うのであった。
「スタートするだけなんだろうね、告白って」
「スタートするだけか」
「皆その時点でかなり戸惑うみたいだけれど」
「戸惑っているというよりは怖いな」
それが彼の偽らざる心境であった。それを否定しないのであった。

第七十二話　大勝負その四

「今は。かなりな」
「そんなに怖いんだ」
「怖いといってもそれ程じゃない」
一応はこう前置きする。
「しかし。それでも」
「怖いことは怖いんだね」
「結果は俺も大体わかっているさ」
それは彼も認める。成功すると思っている。それでもあえて二日時間をもらったのは実はここに理由があった。やはり怖かったのである。
「それでもな。どうにも」
「スタートラインに立つだけでも」
「マラソンでもそうだ」
そうして今度はマラソンに例えてきた。
「サッカーでも。最初が一番怖いんだ」
「最初がなんだ」
「ああ。それに思いきり力が入る」
こうも言う。
「最初が一番な」
「そういうものだね。やっぱり」
「それを考えると最初が一番肝心なんだけれどな」
「けれどそれからもあるから」
セドリックはまたそこを指摘する。
「気をつけてね。はじまりに過ぎないってね」
「結局はそうなんだよな。それにまだスタートもしていないし」
「位置についたってところだね」
トムは今度はこう表現した。

「今のところはね」
「ああ。それじゃあ」
前を見据えて呟く。
「いざ、ってところだな」
「そろそろかな」
トムは今度は腕時計を出した。それで時間を見てマルコに告げた。
「メアリーが来るのは」
「何処から来るんだ？それで」
半分決闘に対するような言葉になっていた。
「そりゃ前からだろう？」
トムは今の彼の言葉を聞いて何を言っているんだという顔を見せてきた。
「他に何処から来るんだよ」
「いや、少しな」
それでも彼は何か言いたそうであった。
「ひょっとしたら」
「ひょっとしたらって」
「果し合いとか決闘にもあるだろ」
トムは今度はそれに例えてきた。
「不意に後ろからって」
「そうかな？」
「そんなのはないんじゃないかな」
トムとセドリックは今のマルコの言葉に怪訝な顔を見合わせた。
「普通はね」
「そうだよね。考えすぎだよマルコ」
トムはセドリックの言葉を受けたうえでマルコに話した。
「幾ら何でもね」
「だといいんだがな」
「それより本当にもうすぐだよ」
トムはまた腕時計を見て言う。

「メアリーが来るのは」
「よし、それじゃあ」
普段より三割増しでお洒落している服をさらにチェックするマルコだった。
「服はこれでいいよな」
「いいと思うよ」
セドリックが答える。
「似合っているし靴までいいし」
「靴こそ大事だって言われてるんだ」
マルコはセドリックに靴のことを言われてこう答えた。見ればカジュアルながら決めている服に相応しく活動的でお洒落な赤いスポーツシューズであった。しかも新品だ。
「お洒落はこれで決まるってな」
「そうだったんだ」
「軍でもそうらしいぞ」
ここで連合軍のことが話に出た。
「靴を丹念に磨くらしいな」
「そんなになんだ」
「連合軍はそれだけじゃないけれどな」
マルコはこうも言い加える。
「服にいつもアイロンかけるらしいしな」
「それって凄いね」
トムはそれを聞いて素直に驚いていた。
「そんなの女の子でもしないよ」
「そうだよな。髭も毎日剃って身だしなみを整えているらしい」
「花婿修行？それって」
「そうかも知れないな」
マルコもそれは否定しない。少しできなかった。
「少なくとも俺達の世界の話じゃないな」
「そうだよ、それって異次元だよ」

トムは異次元だとすら言う。

第七十二話　大勝負その五

「毎日アイロンに靴磨きだなんて」
「けれどかなりお洒落になるらしいな」
マルコが言いたいのはそこであったのだ。
「そのおかげでな」
「ふうん」
「何かそれよりも強くなって欲しいような気もするけれど」
セドリックの突っ込みはここでも容赦がなかった。実際に連合軍は身だしなみや規律には極めて厳しいが戦闘には大したものがないと言われているのだ。連合の中にはそんな彼等をお坊ちゃん軍隊とまで酷評する者もいる。身だしなみや規律ばかりで訓練も日常生活も厳しくはないからだ。
「まあそれを言ってもね」
「仕方がない」
トムとマルコがそれを宥める。
「あと髪は」
「ムース使う？」
「そうだな」
トムの言葉に応えて自分の鞄からムースを出した。
「これでな」
「スーパーハードなんだ」
「これじゃないと効かないんだよ」
マルコは困ったような顔で答えた。
「それも全然な」
「ハードでも駄目なんだ」
「それでもすぐ崩れる」
彼はその困った顔のままでまた答えた。
「朝にセットしても夕方にはな」

「癖強いんだね」
「そうなんだよ」
今度はセドリックに答えた。
「俺はストレートが好きなのにな」
「ラテン系だからね」
セドリックはマルコの癖毛は血のせいだと言うのだった。
「それはどうしてもね」
「そうなんだよな。俺の家族は皆癖毛なんだ」
マルコはそれを否定しなかった。それどころかこうも話す。
「それで俺もだ。困ったことに」
「ストレートにこだわらなくてもいいんじゃないかな」
「そうかな」
「だってその方が似合うし」
「ねえ」
トムとセドリックがマルコに提案してきた。
「ドイツ人みたいにオールバックじゃなければ駄目っていうんじゃないし」
「髪型は似合うので」
「それもそうか」
マルコも二人の言葉に見るべきものを見たようであった。納得した顔になっていた。なおドイツ人がオールバックでなければ駄目だというのは連合の中での偏見の一つである。
「じゃあそれでな」
「うん、髪型はそれでね」
「問題ないから」
「後は問題ないか」
マルコはここまで話したうえでまた自己チェックに入った。
「埃とかついていないよな」
「別に」
「ついていないよ」

「よしっ」
最後の最後まで確認してようやく納得した顔になるのであった。
「じゃあいい。後は相手が来るだけだ」
「もうすぐだね」
トムはまた時計を見て答える。
「だと思うけれど。遅いかな」
「別に遅いのは今は困らないさ」
マルコにとってはそうであった。
「そのおかげで身だしなみのチェックもできたんだしな」
「そうだね」
セドリックがマルコのその言葉に頷いた。

第七十二話　大勝負その六

「おかげでね」
「ああ。さて」
マルコはあらためて前を見据える。
「何時でも来い。何処でもな」
「お待たせ」
「あっ、来たよ」
メアリーの声がした。トムは聞き慣れたその声を聞いて笑顔になる。
「何処かな」
「あれ、いないよ」
セドリックは前を見て言った。
「何処にも」
「あれ、声ははっきりと聞こえたのに」
トムも前を見る。それでも彼女の姿が見えなくて焦りはじめた。
「何処にいるのかな」
「声は聞こえたよね」
「うん、確かにね」
トムは今度はセドリックのその言葉に頷いた。そうしてしきりに周りを見回すがそれでも見つからない。それで焦りだしているところであったが何故かマルコだけは冷静なままであった。
「マルコは探さないの？」
「確かに側にいるのに」
「ああ、別にな」
焦っているセドリックとトムに対して平然とした顔で答えるだけであった。
「探すこともないさ」
「そりゃいるのは確かだけれど」

「何処にいるのかわからないのに」
「俺の予想なら」
マルコは平然とした顔のままでまた言う。
「もうそろそろまた声がな」
「声がかい」
「ねえ」
ここでまたメアリーのその声がした。
「ここにいるのだけれど」
そう言ってポン、とトムの肩を叩いた。見ればそれが。
「えっ」
「そこにいたんだ」
「ええ、そうよ」
何とメアリーはマルコ達の後ろにいたのであった。そこでにこにこと笑っていた。セドリックとトムは彼女の姿をそこに見て驚くことしきりであった。
「後ろからって」
「まさかそんな」
「言っただろう？」
一人冷静なままだったマルコは驚くことなく二人に対して言うのだった。見れば三人はもうメアリーに向かい合っているのであった。
「何処から来るかわからないってな」
「それはそうだけれど」
「何でまたこんなところで」
「何でも相手の意表を衝くといいんだ」
マルコは言う。
「スポーツでもな。特に勝負事はな」
「勝負事？ああ、そうか」
セドリックはこの言葉で気付いた。
「そういうことだね」
「そうだ。わかったみたいだな」

「うん」
セドリックは理解して頷いた。ところがトムは。
「何かねえ。こんなことでも」
釈然としない顔でいるのであった。
「しなくてもいいのに、そんなこと」
「まあまあ」
当人に他ならないメアリーがそんな彼を宥める。
「そんなに考え込まなくてもいいから」
「そうなんだ」
「ああ。とにかくだ」
マルコは真剣だった。その顔で言う。
「はじまりだな」
「そうね」
メアリーが彼の言葉に笑顔で頷く。そうしてすっとマルコの前に出るのであった。
「マルコ君」
「はい」
メアリーの言葉に応える。
「返事を聞かせて欲しいのだけれど」
「二日前のあれですね」
「そうよ」
彼の言葉にこくりと頷いてみせる。
「返事、聞きたいのだけれど」
「ですね」
マルコはあらためてメアリーの言葉に頷くのだった。
「それで。どうかしら」
にこりと笑ってマルコに対して問うてきた。
「私と。駄目？」
「いえ」
彼はすぐに答えてきた。

第七十二話　大勝負その七

「それどこか俺が聞きたいです」
マルコはメアリーの顔をじっと見ていた。そうして彼女に問い返すのであった。
「俺でいいんですよ」
「ええ」
メアリーはそのにこりとした笑みのままでマルコに対して答えるのであった。
「逆に言えば貴方でなければ駄目よ」
「俺もです」
マルコもまた答えた。はっきりとした声で。
「メアリーさんでなければ駄目です」
「有り難う」
メアリーはマルコのその言葉を受けて微笑んでみせた。
「その言葉、二日間ずっと楽しみにしていたのよ」
「俺もです」
それはマルコも同じであった。
「これを言うことをずっと考えていました」
「同じなのね、私達は」
「そうですね」
マルコはまたメアリーの言葉に頷いた。
「俺達って。何か」
「年上だけれどいいわよね」
「年下ですけれどいいですね」
二人は互いに聞き合う。
「それで」
「いいのよ。だってマルコ君が好きだから」
「俺もです」

そしてマルコもまたメアリーの言葉に己の言葉を返す。
「メアリーさんだからです」
「わかったわ。じゃあこれから宜しくね」
「こちらこそ」
こうして二人は目出度くカップルとなったのであった。二日の間がかえって二人の仲を親密なものにしていたのだった。会わずともであった。
それをトムとセドリックは横で見ていた。しかし二人がカップルになったのを確かめるとセドリックがトムに対して囁いたのであった。
「ねえ。僕達は」
「どっかに消えようってこと？」
「そういうこと」
こうトムに提案するのだった。
「お邪魔虫だからね」
「そうだね」
そしてトムもセドリックのその言葉に応えて頷く。
「後はもう二人だけの世界だしね」
「そうだよ。だから」
そこをまた言うセドリックだった。
「消えよう。いいよね」
「うん。わかったよ」
セドリックの言葉に対してにこりと笑ってみせた。
「それじゃあね」
「こっそりとね」
二人は笑顔で見詰め合っているその横をそっと過ぎ去る。そうして二人で並んで話をするのであった。
「予想通りだったね」
「そうだね」
トムはまたセドリックの言葉に頷いていた。

「けれど何かほっとするね」
「終わりはわかっていてもね」
今度はセドリックが応えた。にこやかな顔でトムの言葉を聞いていた。
「やっぱりいい終わりになると嬉しいよね」
「うん」
トムはまた頷く。
「やっぱりハッピーエンドが一番だよ」
「その通りだよ」
二人はこう言い合う。
「若しだよ」
セドリックはハッピーエンドが一番であると確認し合ったところであらためてトムに対して問うた。
「マルコがメアリーを受け入れなかったらどうしていたの？トムは」
「付き合わないって言った場合のこと？」
「うん。その逆も」
セドリックはそこが気になったのであった。それでトムに問うたのだ。
「どうしていたの、その場合は」
「考えてなかったよ」
トムは首を少し傾げさせてセドリックに答えた。
「絶対に大丈夫だって思っていたから」
「それは何で？」
「メアリーがね」
まずはメアリーに対して言及した。
「マルコのこと僕に前から結構聞いていたんだ」
「最初からまんざらじゃなかったんだね」
「それにマルコもね」
今度はマルコについて言う。
「僕の家に来たらメアリーをチラチラと見ていたから」

「気付いていたんだ」
「多分二人は気付いていないよ」
二人を合わせてこう分析するのだった。

第七十二話　大勝負その八

「そのことにはね」
「最初からまんざらじゃなかったってことに」
「マラソンの前からそうだったんだ」
「僕も今気付いたんだ」
トムは照れ臭そうに笑ってセドリックに告げる。
「実のところはね」
「それだけ微妙だったってことだね」
「微妙だったけれど伏線はあったんだよ」
トムの言葉はこうであった。
「だから上手くいったんだ。マラソンは結局きっかけだったんだよ」
「何かそれを考えると面白い話だね」
セドリックは歩きながら言う。それを今実感しているのだった。
「ハッピーエンドに終わったしね」
「それが一番だしね」
トムもそれは歓迎するのだった。
「よし、じゃあ僕も頑張るか」
「彼女見つけるってこと？」
「何かあの二人見ていたら羨ましくなってね」
そうセドリックに言う。
「誰かいないかな」
「そのうち見つかるんじゃないの？」
セドリックはここでは何故か他人事であった。
「これって結局縁だからね」
「それはわかっているよ。ところで」
「何？」
自分に顔を向けてきたトムに対して問う。
「いや、セドリック随分落ち着いているなって思ってね」

トムが言うのはそこであった。
「どうしてなの?彼女いるとか?」
「実は許婚がいるんだ」
「許婚・・・・・・いるんだ」
「子供の頃に決められてね」
ここで明るい笑みをトムに見せてきた。
「実は八条学園にもいるし」
「そうだったんだ。意外だね」
「別に隠していたわけじゃないけれどね」
それは否定するのであった。
「実はそうだったんだ」
「セドリックの許婚かあ」
「よかったら紹介するけれど」
「別にいいけれど」
それにはあまり乗り気ではないトムであった。
「別に僕が彼女紹介してもらえるわけでもないし」
「まあまあ」
少し苦い顔になったトムをまた宥める。
「そんなこと言わないでね。ここは是非共」
「紹介させて欲しいってこと?」
「そうだよ。駄目かな」
「そこまで言うのなら別にいいけれど」
彼も強く拒むわけではない。だからここでは頷くのであった。
「じゃあ御願いさせてもらうよ」
「うん、それじゃあ今度の土曜ね」
またにこりと笑ってトムに告げてきた。
「楽しみにしておいて」
「どんな娘なのかな」
トムは次にそれについて考えだした。
「それも楽しみにしておくね」

「是非ね。とても可愛いから」
「可愛い娘なんだ」
それを聞いて期待もする。今度はセドリックの話になった。トムはマルコとメアリーのことはもう忘れてセドリックの許婚のことについて考えるのであった。

大勝負　　完

２００７・１２・１８

第七十三話　セドリックの許婚その一

セドリックの許婚

「えっ、セドリックの許婚!?」
「そうなんだよ」
トムはセドリックの許婚の存在をクラスで皆に話していた。本人が隠していることではないというのでそれで皆に話しているのである。
「いるらしいんだよ、これが」
「許婚ねえ」
「あのセドリックが」
皆それを聞いて唸るばかりであった。流石にこれは考えられないことであったからだ。
「それ本当なのよね」
「本人が言っているよ」
トムはそうダイアナに答える。
「セドリックは嘘を言ったりしないから間違いなくね」
「そうなの。それじゃあ事実ね」
「絶対にね」
「ううむ」
「これはまた」
皆トムの言葉を受けてまた唸るのであった。流石に唸るしかできなかった。
「随分と意外な駒が出たっていうか」
「どういったものかしらね」
「今度の土曜日に紹介してくれるらしいよ」
トムはそのことも皆に伝えるのであった。
「土曜日に。いいかな」
「僕達は別にね」

「セドリックが紹介してくれるのならそれはそれで」
彼等には特に反対する理由はなかった。
「是非にってわけじゃないけれど」
「まあ興味は」
「何か皆歯切れが悪いね」
トムは皆の言葉と顔を見てそれに気付いた。
「やっぱり意外だったから？」
「ええ、まあ」
「それはね」
そしてトムのその言葉に頷くのであった。
「何ていうか予期せぬ出来事っていうか」
「セドリックになんて」
「それでもとにかく事実だから」
トムはそこを何故か異常に皆に強調するのであった。セドリックが嘘を言うような人間ではないのはそれこそ皆が知っていることなのにだ。
「とにかくね今度の土曜だから」
「土曜か」
「そう、皆行く？」
そのうえで皆に対して問う。
「場所は」
「ああ、そういえば場所は何処なんだ？」
それも問題であった。実はまだ誰も聞いてはいないのだ。
「この街だよな」
「ああ、それは公園」
トムはそれを聞いて皆に対して告げる。
「公園の花園で紹介してくれるそうだよ」
「ああ、公園なんだ」
「そこの花園なのね」
皆それを聞いて頷き合う。場所的には問題がなかった。

「場所的にはいいわね」
「そうだよな」
皆言い合う。こうしてセドリックの許婚と会うことになったのであった。
「どんな人かな」
「それよね」
皆トムから話を聞いた後で教室で話をはじめた。トムは皆に話した後で図書館に一旦消えてしまった。それで皆で話をするのであった。
「大学生かしら」
「中学生じゃないかな」
皆それぞれ予想する。その中でセーラがふと言ってきた。
「小学生の方かも知れないですね」
「いや、それは流石に」
「ないわよ、絶対」
「そうでしょうか」
しかし皆に言われてもセーラは可能性があるような顔になっていた。
「マウリアでは普通ですけれど」
「普通って？」
「マウリアでは小学生で結婚することもあります」
「へっ！？」
「嘘だろ、それって」
流石に皆今の言葉には面食らう。そうして驚きの顔でセーラに対して問うのであった。

第七十三話　セドリックの許婚その二

「小学生で結婚って」
「幾ら何でも」
「マウリアでは早婚は普通ですよ」
しかしセーラはそれを本当だと主張するのであった。にこりとした顔で皆に対して告げる。どう見ても嘘ではないのは明らかである。
「小学生の時にもうお互い結婚することはごく普通です」
「そうなんだ」
「連合ではそうではないのですね」
「まあそれはね」
「やっぱりねえ」
皆セーラの言葉に顔を見合わせる。連合では国によってそれぞれ違いがあるが大体男も女も十八歳で結婚できるのである。幾ら何でも小学生や中学生で結婚はできない。これは連合では常識の話である。ただし連合とマウリアは全然違う世界なのであるが。
「っていうことは？」
ペリーヌはふと気付いた。
「セーラさんもひょっとして」
「私はまだです」
彼女はペリーヌの問いににこりと笑って答えるのであった。
「我がシヴァ家ではそうした慣習ではありませんので」
「そうなの」
「結婚は大学を卒業してからになっています」
「まあそれはね」
「普通だね」
皆セーラの言葉に頷く。これなら連合でも常識であった。連合では大学生ならばどの国でも結婚できる。年齢的には今のクラスの面々もあと一年であるが皆それについては全然考えてはいない。全く

の夢物語でしかない。結婚はティーンネイジャーにとってはそんなものでしかないのだ。

「けれどよく考えたら」

ここでペリーヌがまた言う。

「セドリックの許婚が小学生って可能性もあるわね」

「そういえばそうだよね」

「考えてみれば」

皆ペリーヌの言葉に頷くようになっていた。セドリックは皆と同じ十七歳である。その彼が大人になればそれに釣り合う年齢となると今は小学生でも有り得るのだ。

「大人の可能性もあるし」

「大体プラスマイナス十歳ってところ？」

蝉玉が首を捻って言う。

「相手の年齢は」

「じゃあ社会人の可能性もあるの？」

スターリングはそれを聞いてその可能性も考えた。

「いえ、それはないわね」

しかし蝉玉はそれは否定した。

「この学校にいる人らしいから」

「ああ、そうだったね」

スターリングは蝉玉の言葉でトムの話を思い出したのだった。

「トムがそんなこと言っていたよね」

「最高年齢で大学院生ね」

蝉玉はそう予想を立てる。

「それで最低は」

「小学生」

「幾ら何でも幼稚園はないわよね」

「多分ね」

皆流石にこれはないと考えた。

「流石にそこまで離れていたら」

「ないでしょうね」
「まあある程度の覚悟は必要ね」
ペリーヌは少し真剣な顔になっていた。
「どんな相手が出て来ても」
「少なくとも人間が出て来るのは間違いないけれどね」
ロミオの言葉はここでは少し笑えないものがあった。
「それでも一応は」
「奇麗な娘かしら」
「それどころか奇麗な人なのかしら」
ペリーヌとダイアナの言葉が食い違っているのはそもそもその許婚の年齢すらわかっていないからである。それすらも全くなのである。
「どうなのかしらね」
「とにかくそれがわかるのは」
彼等は不安と期待に満ちた言葉を終わらせようとしていた。
「今度の土曜」
「それまでは大人しくね」
「そういうことね」
彼等は土曜日を楽しみにすることにした。そうして時間が過ぎるのを待つ。その時セドリックはある遊園地のブランコにいた。それをこぎながら隣にいる女性と話をするのであった。
「今度の土曜でいいよね」
「ええ」
その女性は彼の言葉にこくりと頷く。闇が近付いてきている夕暮れの中で二人はブランコをこぎながら話をしているのである。それがやけに絵になっていた。
「私はいいわ」
「そう言ってもらえると有り難いよ」
セドリックは彼女の今の言葉に笑顔になった。
「僕もね。君を皆に会わせたいし」

「そうなの」
「だって。君があまりにも奇麗だから」
言葉に少しのろけが入っていた。セドリックには珍しいことであった。

第七十三話　セドリックの許婚その三

「だからだよ。そう言ってくれると嬉しいよ」
「よかったわ」
彼女の声が笑った。
「私なんかを皆さんに紹介してくれてそのうえそこまで喜んでくれるなんて」
「だってね」
セドリックはまた言う。
「君があんまり奇麗だから」
「嘘よ」
「嘘じゃないさ」
ここでものろけが入っていた。
「僕は嘘なんかつかないよ。それは君が一番よく知っていることじゃない」
「それはそうだけれど」
「だから。今度の土曜楽しみにしていて」
「私もなのね」
「そう、君も」
はっきりと彼女に言う。
「うんと奇麗にしてね。いや」
「いや？」
「君はそのままでもう充分に奇麗だけれど」
「そんな」
「本当だよ」
嘘はついていないがのろけが凄いのは確かであった。やはり普段は天然で冷酷な突込みを入れる彼にしては珍しい様子になってしまっていた。
「君と許婚でどれだけ嬉しいか」

「私も」
そして彼女ものろけていた。
「貴方と一緒になれるのね」
「その歳になればね」
セドリックは言う。
「なれるよ。もう決まっていることだから」
「お父さんとお母さんに感謝するわ」
「僕も」
そうして今度はそれぞれの両親に感謝するのだった。
「こんなことを決めてくれて」
「一緒の学校まで行かせてくれてね」
「そうよね。この八条学園に」
「いい学校だよね」
二人は心からそう思っていた。八条学園は極めて過ごし易い学校として評判なのだ。確かに様々な騒動が起こるがそれもまた楽しいものなのだ。生徒達にとっても教師達にとっても。
「この学校生活がずっと続けばって思うのよ」
「楽しいから？」
「ええ」
セドリックの言葉に応える。
「その通りよ」
「僕もだよ」
そしてそれはセドリックも同じであった。
「ずっとね。この学校生活が続けばなって」
「思うのね」
「特に今のクラスはね」
彼もまた二年Ｓ１組の一員である。そのことが嬉しいのだ。
「ずっと一緒に皆といたいよ。ただ」
「ただ。どうしたの？」
「それだと何時までも君と一緒にいられないよね」

彼女の方を見て言う。
「だよね。ずっとだと」
「そうね」
彼女もセドリックの今の言葉を受けてくすりと笑った。
「そうなるわよね、ずっとだとね」
「うん、だからね」
そうしてまた言うセドリックだった。
「時間を過ごすのも一緒でいようよ」
「わかったわ」
にこりと笑ってセドリックの言葉に頷くのであった。
「じゃあ今度の土曜ね」
「わかったよ。皆に紹介するよ」
「御願い」
そう六人に対して頷く。二人も土曜に対して心積もりをしていた。
彼等もかなり真剣な顔になっていた。だが二人は楽しみの中にあった。
皆は違っていた。どう違うかというと。
「やっぱり小学生かしら」
「中学生じゃねえの？」
その許婚が何が何なのかわからなかったのだ。
「大学生はないわよね」
「どうかな」
彼等は許婚の年齢がわからなかったのだ。それを今でも話をしていた。

第七十三話　セドリックの許婚その四

「本当に幼稚園児かも」
「だからそれはないでしょ」
ペリーヌはすぐにスターリングの言葉を否定した。
「幾ら何でも」
「いえ、わからないわよ」
しかしそれは蝉玉が否定する。
「考えれば。年齢的にも」
「セドリックは十七よ」
ペリーヌはここでセドリックの年齢を出す。
「それに釣り合うっていったらプラスマイナスで十歳よ」
「だからそれよ」
蝉玉はそこを指摘するのだった。
「十歳以上歳の離れたカップルって実際にあるじゃない」
「それはそうだけれど」
「だからよ」
蝉玉は言う。
「幼稚園児って可能性もあるわよ」
「いや、それどころかよ」
ダンも話に参加してきた。
「それだと年上の可能性もあるぞ」
「年上・・・・・」
「今までそれはあまり考えてなかったな」
「ええ、それはね」
「一応大学院生までだけれど」
皆もそれを認めて頷く。何故か皆年上は考えていなかったのだ。
「ひょっとしたらそれより上かも知れないぞ」
「大学院生より上っていうと」

「学校にいるんだったらまさか」
皆ダンの言葉で怖い考えになってきていた。それもかなり。
「先生とか！？」
「まさかそれは」
皆必死にそれを否定しようとする。しかしそれがしきれない。
「それって流石にやばいでしょ、先生が相手って」
「いや、それでもよ」
彼等は自分達の話を必死に打ち消しながら話を続ける。そこには願望が非常に強く出ていた。彼等の願望がその予測を必死に拒んでいたのだ。
「許婚だったらやっぱり」
「それでもやばいでしょ」
またそう話をする。
「けれど十歳以上年上の可能性もやっぱり」
「あるのかな」
「ゼロではないな」
ダンがまた言う。
「ちょっとクラスに年下の彼氏を持っている奴がいないんでわからないがな」
「そ、そうね」
何故かダンのその言葉にナンシーが急に慌てだす。
「いないから仕方がないわよね」
「ああ。しかし」
ダンはその彼女を不思議に思い問うた。
「どうしたんだ、ナンシー」
「な、何が！？」
慌てながら彼に言葉を返すナンシーだった。
「いや、急に焦りだしたからな」
「気のせいよ」
下手な言い繕いをはじめた。

「気のせい。いいわね」
「そうなのか。だったらいいけれどな」
「ええ」
「財布を落としたとかじゃないよな」
ベッカが彼女を気遣って問う。
「落としたんなら協力するぜ。ただし報酬は一割五分だ」
「普通より高いじゃない、それって」
すぐにベッカに言葉を返す。顔は普通に戻っていた。
「何よ、それ」
「一割は正規の報酬」
一応落とし主から一割もらうのが決まりになっている。
「あとの五分は俺が絶対に見つけるからそれへの謝礼な」
「絶対に見つけられるって？」
「俺は金を発見する特殊能力がある」
胸を張って何気に無茶苦茶な能力があることを告白するベッカであった。
「それだけだ」
「どうやったらそんな能力が身に着くのよ」
「普通に身に着くわよ」
ペリーヌも平気な顔で言ってきた。
「お金が好きならね」
「そんなものなのか？」
「さあ」
皆首を傾げるがだからといって納得できるものではなかった。

第七十三話　セドリックの許婚その五

「お金に関してはベックとペリーヌは特別だから」
「それが絡むと急にニュータイプになるんだから」
思えば二人もかなり変わっている。
「まあそれは置いておいてね」
「とりあえずは」
ここで話を戻すことにした。
「とにかくあれだ。セドリックだ」
「正確に言えば許婚ね」
「そうそう、それそれ」
話がそこに戻る。戻りはするがそれでも解決するわけではなかった。
「とにかく今度の土曜にね」
「全てがわかるわね」
皆これからどうなるかわかりかねていた。まさに鬼が出るか蛇が出るかであった。そうした不安の中で次の土曜日を待つのであった。
その土曜日。皆は約束の公園の花園に集まっていた。トムがその中心である。
「なあ」
ベッカはその中でトムに声をかける。その周りには赤や青。黄色の花々が咲き誇っている。皆その中で不安げな顔を見せているのであった。
「ここに来るんだよな」
「そうだよ」
トムがそのベッカに対して答える。
「もうすぐだけれど」
「じゃあいよいよか」
「うん。それでもまだ不安みたいだね」

「それはな」
ベッカもそれを認めて頷くのだった。
「誰が出て来るかわからないから」
「何なら賭ける？」
その中でダイアナがこう提案してきた。
「誰が出て来るのか」
「賭け、ねえ」
「年上が出るか年下が出るか」
もっぱら相手の年齢を問題にしていた。
「最低年齢は幼稚園児、最高年齢は妙齢のキャリアウーマンで」
「また随分と離れているね」
トムはダイアナの言葉を聞いて呟く。
「三〇歳位離れていない？」
「二十五歳程度よ」
ダイアナはトムの突っ込みにこう返した。
「多分ね」
「そうなの」
「少なくとも三十五歳以上はないわよ」
これは多分にダイアナの主観であった。
「相手の年齢は。ただ下はね」
「赤ちゃんの可能性もあるか？」
「それはないよ」
トムはベッカの言葉を否定した。すぐに。
「だってこの学園にいるんだし」
「そうか」
「本当に誰なんだろうな」
話せば話す程謎は深まっていた。
「誰が誰なのやら」
「一切謎だよな」
「その謎もね」

トムがまた皆に対して言う。
「もうすぐわかるから。落ち着けばいいよ」
「それもそうか」
「そうよね」
皆はとりあえずトムの言葉を受けて落ち着くことにした。
「とりあえずは」
「とにかく相手は絶対に来るんだし」
ある程度居直りも入ってきた。
「ここは腹を括って」
「待ちましょう」
「そうだね。あっ」
ここでトムの携帯が鳴った。メールが届いたのだ。
「セドリックからだ」
「何て言ってるの？」
「もうすぐ来るって」
メールを見ながら皆に答える。
「ここに」
「そう、もうすぐなのね」
「そうだね」
そう皆に告げる。
「心積もりはいいよね」
「落ち着いたしな」
「何時でも誰でもいいわよ」
皆は笑って言ってきた。
「まだ不安だけれど」
「それでもね」
皆は誰が出て来てもいいと腹を括った。するとそこにセドリックが遂に到着したのであった。皆それを見てはじまったのを感じた。

第七十三話　セドリックの許婚その六

「やあ皆」
「やっと来たのね」
「待っていたぜ」
皆でそのセドリックに声をかける。見れば彼だけであった。
「それで許婚だけれど」
「何処にいるんだい？」
「うん。今用意してきているから」
「用意！？何の？」
「最後のお化粧をね。しているんだ」
この時代でも女の子は普通に化粧をしている。中学生から大体している。肌荒れの心配は全くない化粧品が開発されて久しい。だから皆安心して化粧をしているのである。
「だからもう少しね」
「わかったわ」
「それじゃあな」
皆もセドリックのその言葉を受けて待つことにした。そうしてその間はセドリックとあれこれと話をすることにした。話すことはもう決まっていた。
「それでさ」
「うん」
セドリックもそれに応える。
「どんな人なの？」
「年上？年下？」
皆の関心はまずはそこであった。それについてはセドリックがいない間に散々話をしているがそれでも答えの出ていない話なのであるからだ。
「どちらかな」

「よかったら教えて欲しいんだけれど」
「同じ歳だよ」
それに対するセドリックの返答はこうであった。
「それがどうかしたの？」
「同じ歳だったのか」
「意外ね」
何故か皆その可能性は考えていないのであった。迂闊と言えば迂闊であった。自分達が付き合っていたりする相手については考えていなかったのだ。
「意外？」
「だってなあ」
「ねえ」
皆はセドリックの言葉に応えてまた述べる。
「結婚するのよね、将来」
「やっぱり許婚だからな」
「そうだよ」
そしてセドリックはまたその質問に答えた。
「大学を卒業したらすぐにね」
「そうよね。けれど普通はね」
「なあ」
皆それでもまだ言うのだった。
「結婚する相手って大抵歳の差があるものだから」
「同じ歳っていうのは」
考えていなかったのである。ここで彼等はあくまで結婚という話に捉われ過ぎていた。それが結果として彼等の考えを狭めさせていたのである。
「僕達のお父さんとお母さんが決めたんだ」
「そうなのか」
「そうだよ。僕達が生まれるとすぐにね」
セドリックはそれも皆に対して言う。

「決めてくれたんだ。生まれる時も死ぬ時も一緒にってね」
「あれっ、だとすると」
「まさかセドリックとその許婚の人って」
「誕生日も同じだよ」
セドリックは今それも言うのであった。
「それでずっと一緒にって。それもあって許婚になったんだ」
「ううん、それを聞くと」
「桃園の誓い？」
三国志演義での最初の名場面だ。劉備と関羽、張飛の三人が義兄弟の契りを交あわせる場面だ。この時に彼等は死ぬ時は同じだと誓い合うのである。
「それか円卓か」
「それに近いよな」
円卓はアーサー王である。彼等の絆も主君と騎士の関係を越えてそこには友情すらある。その絆は極めて強いものなのである。
「そんな感じね」
「そうだよな」
「それでずっと一緒だったんだ」
セドリックはまた言う。
「子供の頃から同じ学校でね」
「キリバスでもそうだったのね」
「うん、この学校でも」
彼は八条学園でも一緒であると告げた。

第七十三話　セドリックの許婚その七

「一緒だよ。ずっとね」
「けれど何処のクラスなの？」
「それわからないわよね」
「商業科なんだ」
「商業科だったの」
「そうだよ」
八条学園にあるのは普通科だけではないのだ。商業科もあれば工業科も農業科も水産科も看護科もある。他にも色々とある。大きいだけはあるのだ。
「彼女は商業科なんだ」
「二年よね」
「うん」
もう聞くまでもない質問であったがそれでもダイアナは聞いた。
「同じ歳だからね」
「そうよね、義務教育だし」
連合では義務教育は高校までになっている。これは教育の高度化に合わせたものである。大学や大学院になって義務教育でなくなるのだ。
「やっぱりそれはね。当たり前よね」
「ちょっとダイアナ」
そんな彼女にペリーヌが囁く。
「あんたちょっと焦っていない？」
「そうかも」
そしてダイアナ自身もそれを認めるのであった。少し頷く。
「実際のところ」
「もうすぐだから」
セドリックはまたそれを皆に告げる。

「待ってね、少しだけ」
「あと何分かな」
「三分かな」
ふとした感じで言うセドリックであった。
「それ位だと思うよ」
「三分か」
「インスタントラーメンだね」
ふと誰かがこう言った。
「それだと」
「まあそうよね」
「といっても今ここにはないけれど」
それが残念至極であったがとにかく三分待つことにした。そうして三分経つと赤髪を後ろで束ねた童顔の美人がやって来た。小柄で大きな青い目が印象的である。
「何かね」
アンがその彼女を見て言った。
「私に似てるような気が」
「気のせいよ」
その彼女にルビーが答える。
「髪の色だけじゃない。違うかしら」
「っていうかあれかしら」
アンはルビーの言葉を受けてもまだ言うのだった。
「何か私の妹みたいな感じなんだけれど」
「妹って？」
「童顔だからかしら。彼女とセドリックには悪いけれど」
「髪の色が同じだからそう見えるだけだよ」
セドリックがアンに言ってきた。
「気のせいだと思うよ」
「そうかしら」
「そうだよ。それにイスラエルとキリバスだと」

かなり離れている。しかもアンはれっきとしたユダヤ人である。これがかなり大きい。

「生き別れとかそういうのって絶対にないよ」

「そうね。ただそれにしても」

「何？」

「赤毛の女の子って多いわね」

アンは自分もそうだからそれを言うのであった。

「この学校って」

「まあそれはね」

それにはルビーも頷く。

「黒と茶色と金髪がね。多いわね」

「染めてもいいし」

それで青だの緑だのといった髪の色もある。この時代は別に髪を傷めるわけではないそうした染毛剤もあるのである。これもまた時代の進化であった。

第七十三話　セドリックの許婚その八

「それはね。別に」
「気にすることはないわね」
アンはベッキーの言葉に納得した。そうしてセドリックの許婚を見るのであった。
「はじめまして」
彼女は明るい声で皆に挨拶をしてきた。
「セドリックの許婚のコッキーよ」
「コッキーっていうの」
「ええ、コッキー＝カタロニア」
それが彼女の名前であった。
「宜しくね。商業科の二年よ」
「そうらしいわね」
ペリーヌがにこりと笑ってコッキーに応えてきた。
「宜しくね。私達はセドリックのクラスメイトよ」
「二年Ｓ１組よね」
「ええ、やっぱり知ってるのね」
「セドリックのクラスだから」
だからであった。許婚と同じクラスならば知っていて当然というところであろうか。
「話はよくセドリックから聞いていたわ」
「悪いけれど皆の話も彼女にしていたんだ」
セドリックがここで皆に笑いながら述べる。
「楽しい話やそうでない話もね」
「そうでない話が凄い気になるんだけれど」
「同感」
皆この言葉は聞き捨てならなかった。
「何を話していたのよ」

「とんでもない話みたいだけれど」
「例えばフランツとか」
「何っ!?俺だと!!」
フランツはそれを聞いて場違いに大袈裟な声をあげた。
「俺の何を話したっていうんだ!?」
「その激情的なところだよ」
「そうか、ならいい」
しかもそれに納得するフランツであった。
「俺の熱さ、皆に知ってもらいたいからな、是非」
「熱いっていうかねえ」
「熱過ぎるっていうか」
皆それには突っ込みどころ満載であった。
「あんたは極端なのよ、極端」
「中庸って言葉知ってるか?」
「中庸!?」
フランツがそんな難しい言葉を知っている筈もなかった。
「何だその言葉は」
「何だってねえ」
「あんたそれはないでしょ」
知っているとは思っていなかったがそれでも今の言葉にははっきりと呆れた。呆れるべくして呆れたと言っていいものであった。
「とにかく激しいか静かの中間だよ」
「あんたはいつも激しいだけじゃない」
「激しくなければ俺じゃない!」
しかもその他は見事なまでに全く知らないフランツであった。
「違うか!?俺のこの暑さこそが!」
「多分言葉変わってるけれど」
「まあいいわ」
もうそれにはこだわらない一同であった。言ってもせんないことだからだ。

「とにかくね」
「話を戻そうか」
皆はフランツからコッキーに話を戻すのであった。
「それでクッキー君」
「コッキーです」
ギルバートの言葉に本人が速攻で突っ込み返してきた。
「間違えないで下さいね」
「あ、ああ」
本人に言われて恐縮するギルバートであった。
「済まない」
「よく間違えられるんですよ」
「その理由はわかっているんだよね」
セドリックはここでもにこやかに笑って皆とコッキーに対して言うのであった。
「何でなの？」
「それは」
「それはコッキーがあまり可愛いからなんだよ」
いきなりおのろけであった。
「やっぱりコッキーってね。可愛いから」
「そうよね。それってやっぱり大きいわよね」
「けれどねえ」
アンは眉を丸にさせて困った顔で苦笑いを浮かべていた。

第七十三話　セドリックの許婚その九

「何か今のセドリックって」
「それは言わない約束よ」
それはペリーヌが止める。
「あんただってかなりなんだし」
「それは言わないでよ」
アンは今度は困った顔になるのであった。
「それはね。どうにも」
「だからよ。言わないの」
今度は困った顔になるアンにペリーヌが言う。
「お互い様なんだから」
「そうなるの。誰だって同じなのよ」
ペリーヌはあえてクールにアンに告げる。
「だから気にしないの。いいわね」
「わかったわ。それじゃあ」
「おのろけは素直に受け止める」
ペリーヌはこうしたところではおおらかであった。お金が絡まないからだ。
「そういうものよ」
「わかったわ。じゃあ」
「セドリックの幸せを見てあげましょう」
にこりと笑ってセドリックとコッキーを見る。
「それでいいわね」
「わかったわ。それにしても」
アンは困った顔から苦笑いになって呟く。
「コッキーって名前はね。やっぱり」
「間違えるわよね。クッキーと」
「そうなるわよね」

そんな話をしながらやり取りを見ている。セドリックはのろけたままであった。
「運命、いや宿命だったんだ」
「そうなのよ」
二人はのろけまくったまま皆に対して言っている。
「僕達が一緒になるのは」
「生まれた時からだったし」
「生まれた時から？」
「そうなのよ」
彼等は皆に対して答える。
「だって生まれた時から一緒だったし」
「しかも。それだけじゃないんだ」
「それだけじゃないって」
「何かな」
二人のおのろけに皆がぽつりと呟く。かなり引いていた。
「どんどんのろけていっていないか？」
「セドリックってこんなキャラだったんだ」
皆それを言い合うのであった。
「意外？っていうか」
「見てはいけないものを見てしまったような」
「だってコッキーと一緒だから」
「私だってそうよ」
しかし二人はこれで平然としていた。のろけたまま。
「コッキーがいないとね」
「セドリックがいないと」
「生きていられないよ」
「駄目よね」
二人は言い合う。しかしここでまだ話はあった。
「何度生まれても一緒だよね」
「このままね」

二人はまたおのろけであった。
「何度生まれ変わってもずっと死ぬまで一緒よ」
「何時までもね」
「何かなあ」
「純愛なのはわかるけれど」
皆はかなり引きながらも話を聞いていた。だがそれでも限界があった。
「このままずっとこれっていうのは」
「幾ら何でもな」
「幾ら何でもっていうかな」
彼等は言い合う。
「見ている方が熱くなるな」
「服を着ているだけで暑くなるよ」
「そうよね」
何時しか苦笑いになっている一同であった。
「ここまで目の前でのろけられると」
「どうしたものやら」
「だってねえ」
「それはね」
セドリックもコッキーも二人の話は聞いている。しかしそれでも止められないのであった。これればかりはというやつであった。
「皆には悪いけれど」
「まあわかっているのならいいけれど」
「いいんだ」
蝉玉にスターリングが突っ込みを入れた。

第七十三話　セドリックの許婚その十

「別にね、それは」
「はあ」
「ただ。一つ気になることがあるのよ」
蝉玉はここでセドリックに問うのであった。
「生まれる前に決めてあったのよね」
「うん」
「そうよ」
セドリックだけでなくコッキーもそれに答える。
「さっき僕が話したよね」
「私達のお父さんとお母さん達がそれを決めてくれたのよ」
「それじゃあ一つ気になるのよ」
蝉玉はまた言うのであった。
「女の子じゃなかったらどうするのよ」
「そういえばそうだよね」
スターリングもそれにふと気付いた。
「人口受精で選んだんじゃないよね」
「それはなかったと思うよ」
「よくわからないけれど」
セドリックもコッキーもそれは言うのだった。
「多分ね」
「お父さんもお母さんもそんなことしないと思うわ」
「じゃあ余計に気になるわよね」
「そうだよね」
スターリングは蝉玉の言葉に頷いた。
「男の子だったらどうなるんだろう」
「一応はできるけれどね」
連合では宗教的戒律の厳しいイスラエル以外では同性であっても

婚姻が可能なのである。しかしこの場合は事情が違っていた。
「それでも男同士だったら」
「若しくはどちらも女の子だったら」
「どうなっていただろうね」
「考えたことなかったわね」
セドリックとコッキーは顔を見合わせてそれぞれ言うのだった。
「僕が女の子の可能性もあったし」
「私が男の子だったかも」
「何かそれでもあまり変わらないような」
「そうだな」
それを聞いてアンとギルバートが呟く。
「多分それぞれのお父さんとお母さんが違うだけで」
「しかもよく見れば」
二人はセドリックとコッキーの顔をそれぞれ見た。そうしてそれぞれの言葉で述べる言葉は皆今気付きだしていたことであった。
「セドリックとコッキーって似ているよね」
「顔がね」
そうなのであった。二人の顔はかなり似ていたのだ。
「親戚同士とか？」
「ひょっとしてそうなの？」
「ううん、違うよ」
しかしセドリックはにこりと笑ってそれを否定してみせた。
「それはね」
「そうなんだ」
「それにしても随分と顔が」
「だってずっと一緒にいるからね」
「そうよね」
また二人は顔を見合わせてにこりと笑い合うのであった。
「顔も似てくるんだよ」
「そうした意味じゃもう夫婦かしら」

「あらあら、また」
「おのろけか」
皆呆れて苦笑いになるがそれでも見るのであった。
「どうしたものやら」
「しかしまあいいか」
段々とそれにも慣れてきたのであった。
「それはそれで」
「まあとにかくセドリックの許婚もわかったし」
それで皆満足しだしていた。
「これでよしとしますか」
「そうね」
というわけで話は円満に終わった。セドリックとコッキーは何時までも笑顔でお互いの顔を見合うのであった。何時までも二人だけで。

セドリックの許婚　　完

２００７・１２・２６

第七十四話　クレープ屋その一

クレープ屋

カムイとティンがデートで立ち寄ったクレープ屋であるが。実はこの店は八条学園の生徒達の間ではちょっとした人気のお店であったのだ。

その理由はまずはその見た目の奇抜さと味である。そして店の親父の気さくな人柄であった。そうした様々な要因から人気のお店であったのだ。

「美味しいだけじゃないのよね」

「そうよね」

とりわけ女学生達の間で人気であった。

「サービスもいいし」

「大きいし」

そうしたことも人気の理由の一つになる。人気になれるのには一つだけでは足りない場合もあるのだ。

「最高よね」

「最初はびっくりしたけれどね」

「それにある噂があるのよ」

「噂って！？」

そして何故かあらぬ方向に噂が出るのもよくあることであった。

「あの青いクレープを二人で食べるとね」

「どうなるの？」

「幸せになるらしいわ」

そういう噂である。まあ何処でもよくある話だ。

「幸せになれるの」

「そう。それは様々らしいけれどね」

そもそも根拠すらもわからない話だから当然だった。さらにこうした噂には常にさらに訳のわからない尾ひれがつくものである。こ

ういった。
「特にカップルで同じ種類のクレープを食べると」
「どうなるの！？」
「一生一緒になれるんだって」
そういうことであった。
「一生ね」
「一生一緒に」
「しかも幸せにね」
話はこういう方向に向かっていた。そして噂というものは光よりも速く原子よりも小さくどんな要塞も防げはしないものである。従って八条学園全体に広まるのもすぐであった。
「許さないぞ俺は！」
洪童が食堂で吼えていた。向かいの席にいるのは妹の春香だ。いつも悪い虫が彼女につかないように強引に一緒に昼食を採っているのである。
「行くなら一人で行け！」
「一人でならいいの？」
「それか三人だ」
そう妹に対して告げる。
「わかったな」
「二人では絶対駄目なのね」
「男でも女でもだ」
お昼の焼肉定食を食べながら妹に熱く語っている。
「二人ではあのクレープを食べるな。絶対にだ」
「どうしてよ」
「御前に悪い虫がつくからだ」
彼は何故かこう考えていたのだ。
「男でも女でも。悪い虫は俺が抹殺する」
「抹殺って兄さん」
これには春香も呆れた。

「私の友達を抹殺するつもりなの！？」
「悪い虫は友達ではない！」
一応は筋が通っている言葉である。ただしそれは時と場合による
し言っている人間に全く筋が通っていなければそもそも意味のない
ものであるが。
「違うか」
「それはそうだけれど」
「わかったら一人か三人以上で行け」
「青いクレープ屋に？」
「そうだ、いいな」
妹に対して告げる。ラムチョップ定食を食べる妹に対して。
「絶対にだぞ。それならいい」
「クレープ自体はいいのね」
「それは構わない」
そういうところは甘い兄であった。
「御前の可愛さが肥満で損なわれない限りはな」
「可愛いっていうのはちょっと」
兄の身内贔屓に少し困った顔になる。
「言い過ぎよ」
「いや、御前は宇宙で一番だ」
ここでも馬鹿兄ぶりを発揮する。
「自身を持て。だからだ」
「だからって。じゃあ二人連れだと」
「俺以外は駄目だ」
こう言うのであった。
「わかったな」
「兄さんだといいのね」
「兄妹で間違いがあるものか」
彼の頭の中ではこうである。なお彼の頭の中には兄と妹の禁断の
愛などというものはインプットされていない。そうした意味では実

に健全な男である。
「そうだろう？」
「そんなの実際にあったら怖いけれど」
「ならいい。しかしあの店のクレープは美味いぞ」
「美味しいの」
「それは俺が保障する」
胸を張って妹に告げる。
「それも抜群だ」
「兄さんはもう食べたのね」
「そうだ」
それをはっきりと言ってきた。
「美味かったぞ」
「それで兄さん」
兄のその言葉を聞いて春香はふと気付いた。

第七十四話　クレープ屋その二

「それで聞きたいのだけれど」
「何だ？」
「一人で食べたの？」
聞くところはそれであった。周りの皆も洪童の言葉に注目する。何気にその女となると破天荒になる彼のことは学園内でも有名であるのだ。
「どうなの、そこは」
「二人ならどれだけよかったか」
これこそが答えであった。
「俺は悲しい」
「そうなの」
これだけでもう充分であった。
「そうだったのね」
春香にも兄の事情はわかった。それも嫌になる程。
「兄さん、まだ彼女が」
「俺には彼女はできるのか」
「どうかしら」
「何故そこで頷かないんだ！？」
目に入れても痛くない程可愛がっている妹の言葉だからこそ堪えるものであった。
「俺が困っているっていうのに」
「兄さんいつも言っているじゃない」
「俺が！？」
「嘘をついてはいけないって」
洪童は少なくとも嘘をつくことはない。というよりかはかなり不器用というか破天荒な性格なのでそれができないだけであるのだが。
「だからよ。私も」

「嘘と慰めは違うぞ」
「本当のことを言わないと」
妹も容赦がない。
「何の意味もないわよ」
「俺は実に悲しい」
洪童は焼肉を食べながら泣く。
「その言葉。滲みるぞ」
「滲みているなら早く食べましょう」
春香は現実的なことを兄に対して述べてきた。
「食堂が混むから。いいわね」
「混むからか」
「そうしたら他の人に迷惑じゃない」
落ち着いた声で兄に言葉を続ける。
「そうでしょ。だからよ」
「わかったよ。ぞれじゃあ」
洪童はそれに応えて食事を再開する。彼は凄まじい勢いで焼肉定食を食べていく。妹はその兄に対してまた言うのであった。
「それで今日の夕食だけれど」
「ああ」
所帯の話になった。
「何がいいの？」
「魚がいいかな」
洪童はふとした感じで答えた。
「今俺も御前も肉だしな」
「そうね。お魚ね」
春香は兄の言葉を受けて静かに頷いた。
「それじゃあお刺身なんてどうかしら
「天麩羅がいいな」
意外と和食も好きな洪童であった。
「キスとかな」

「キスなのね」
「他には海老とか貝とか烏賊もな」
彼の好みのものばかりであった。
「魚とは外れるけれどな」
「それじゃあ帰りスーパーに寄ってみるわ」
「自分で作らないのか」
「種類が多いとかえって高くつくのよ」
そう兄に答える。
「天麩羅って。それよりスーパーでセットを纏めて買った方がいいのよ」
「ああ、特価か」
「そういうこと。わかったわね」
「何か凄い所帯じみた話だな」
洪童は春香の言葉を聞いて思わず呟いた。
「どうにもこうにも」
「当たり前よ。食べないといけないから」
理由は簡単で実に切実なものであった。何時の時代でも全く変わらないことだ。
「そうでしょ？」
「まあそうだけれどな」
「お野菜は私が料理するから」
それは自分でやるというのだった。
「それでいいわよね」
「野菜はどうするんだ？」
「水菜を炊くわ」
そう兄に答える。
「薄揚を入れてね」
「そっちも和食なんだな」
「メインが天麩羅だからね」
和食で統一するというのだった。国籍は韓国でも日本にいるから

合っていると言えば合っている話であった。

第七十四話　クレープ屋その三

「それで統一したいのよ」
「わかったよ、じゃあ御前に任せるな」
妹の料理にはあまり口を出さない洪童であった。
「それじゃあそれでな」
「わかったわ。それでお米よね」
「和食ならそれだろ」
連合では米だけでなくパンやジャガイモも主食に入る。実に様々なものを食べているのだ。主に食べられているのは米だが他にも色々とあるのである。
「やっぱりな」
「白米？」
「それだろ」
この時代の白米は品種改良で白米であっても玄米と同じだけの栄養素がある。また麦にしろ水麦といって水田と同じ要領で栽培されているのである。
「やっぱりな」
「麦とかは入れないのね」
「それはいい」
実は麦飯は洪童の好物でもあるのだ。
「今日はな」
「わかったわ。じゃあそれでね」
二人はそんな話をしていた。クレープの話題は二人も知っていた。そしてそれはその二人以外にも多くの者が知っていた。ところが例外もいた。
「青いクレープって？」
「知っているわよね」
教室で七海が彰子に尋ねていた。

「最近有名なんだけれど」
「そうなの」
「そうなのって」
明らかに知らない素振りの彰子にまずは呆れた。
「知らなかったの？有名なのに」
「そんなお店もあったの」
「あったのって前のカムイとティンちゃんの話に出たじゃない」
「そういえばそうね」
何故かそれを忘れている彰子であった。こういうところが実に彼女らしい。
「あの時喫茶店で紅茶が美味しかったからそればっかり考えていたから」
「確かにあの紅茶は美味しかったけれど」
七海もそれは認める。
「それでもあのお店知らないのはちょっと」
「クレープよね」
それをまた問う彰子であった。
「確か」
「そうよ。青いクレープ」
七海は呆れる顔を消してまた彰子にそれを教えた。
「滅茶苦茶美味しいのよ」
「そうなの。それでどんな青い色なの？」
「コバルトブルーよ」
青といっても色々ある。この店のクレープはコバルトブルーなのである。少なくともよくある小麦の黄色いクレープや普通の蕎麦粉の黒っぽい色のクレープではない。
「どうかしら」
「美味しそうな色ね」
「そうかしら」
それには少し首を捻る七海であった。

「皆最初見た時はびっくりするものだけれど」
「そう?美味しそうよ」
しかし彰子の感覚ではそうなのであった。こうした独特の感覚こそが証拠であると言えた。
「とても」
「とてもねえ」
七海は彰子のその言葉にまた首を捻るのであった。
「そうは思えないけれど」
「とにかく美味しいのね」
「ええ」
それは太鼓判を押すのであった。
「私もちょっと食べてみたけれどかなりのものよ」
「ふうん。そんなに」
「ちょっと部活の男の子と一緒に食べたけれどね」
内緒だが彼氏だ。彼女にもそうした存在がいるのである。

第七十四話　クレープ屋その四

「一回食べたら病みつきになるわよ」
「そんなに。それじゃあ」
彰子はそれを聞いて乗り気になったようであった。
「一回食べてみるわ」
「それも二人で食べるといいのよ」
七海はにこりと笑って彰子に告げてきた。
「いいわね、二人で」
「二人でなの」
「これは噂話だけれど」
ここであの噂話を彼女に言う。
「二人で食べると幸せになれるらしいわ」
「その青いクレープをね」
「ふうん、そうなんだ」
それを聞いて考える顔になる彰子であった。
「わかったわ。それじゃあ」
「行く時は絶対に誰かと一緒でね」
そこを念押しする七海であった。
「そこはいいわね」
「どうしてもなの？それって」
「どうしてもって言われると」
そう言われると弱い七海であった。
「ちょっと難しいわね」
「別に一人でも皆でもいいのよね」
「けれど二人で行くのがいいのよ」
七海は少し強引に言ってきた。
「そうするとお互いに幸せになれるらしいわよ」
「幸せに？」

「そうよ」
そう彰子に教える。
「わかったね。だから食べに行く時は二人ね」
「何かよくわからないけれど」
どう見てもわかってはいない顔の彰子であった。
「じゃあとりあえずは」
「それでね、彰子」
七海はすかさず彰子に言ってきた。
「誰と行くの？」
「誰とって？」
「だから。二人で行くのよ」
問題はそこであった。
「まさかとは思うけれど一人で行くのは問題外だからね」
「うん。絶対に二人なのよ」
「相手は選ぶのよ」
あえて言葉には直接出さないで話をする。
「そこはいいわね」
「相手を選ぶのね」
「それは絶対よ」
念を押してきた。
「わかっているわよね、そこは」
「ええ」
そして彰子もそれに答えるのだった。
「わかったわ、それは」
「相手はそれでどうするの？」
「これから考えるわ」
つまりまだ決まっていないということであった。
「それでもいいかしら」
「まあそれはね」
今話したばかりなのでそれはよしとした。心中不安でもあったが。

「いいけれど」
「じゃあこれから誰にするか考えるから」
「一応だけれど」
また七海の顔が真剣になってきた。
「何？」
「相談とかしてくれると。嬉しいんだけれど」
七海はそれを希望してきたのであった。
「どうかしら」
「どうって言われても」
まだわかっていない感じの彰子であった。
「一人で考えたいような」
「そうなの」
「御免なさい。折角なのに」
「いえ、いいわよ」
それはいいとしたのだった。七海も強引ではない。
「それはね。とにかく二人でよ」
「うん」
それだけはわかってくれていた。
「わかっているわ」
「だといいのよ。あの青いクレープはね」
「とにかく美味しいのね」
「そう、それは絶対に保障するから」
食べた人間だからこそ言える言葉であった。

第七十四話　クレープ屋その五

「味はね」
「それじゃあまずは行ってみるわ」
「それは絶対よ」
今までより強く念を押してきたのであった。
「いいわね」
「ええ、それじゃあ」
こうして彰子は青いクレープを食べに行くことになった。その相手とは。
「姉さん」
「何？」
それは妹の明香であった。彰子が選んだ一緒に行く相手は他ならぬ妹なのであった。これは誰も思わないことであった。
「青いクレープよね」
「そうよ」
二人並んで並木道を歩いている。その中での話であった。
「それ、私知っているわ」
「そうなの。前に食べたことがあるの？」
「ないわ、それは」
彼女もまだのようである。
「はじめてだけれど。噂は聞いていたの」
「美味しいって話ね」
「ええ」
姉の言葉に対してこくりと頷いた。
「そうなの」
「私もなのよ。何か凄く美味しいって」
黄金色の枯れ葉が舞い落ちる並木道を二人並んで歩きながら話をしている。その中で妹は自分より小さい姉を見ながら話すのであっ

た。
「甘くてそれでいて上品で」
「明香が作るクレープより美味しいかしら」
「それは」
彰子の今の言葉には少し返事に困った。
「お店の人はプロだし。やっぱり」
「美味しいってことなのね」
「そう思うわ」
こう姉に答えた。
「プロの人は全然違うから」
「明香もプロになればいいのに」
妹の言葉に不意に言う彰子であった。
「そうしたら絶対繁盛するわよ」
「私は駄目よ」
しかし明香はそれを否定するのだった。
「だって。趣味でしかないし」
「趣味から仕事になることだってあるじゃない」
だが姉の言葉はここでは引かなかった。
「それでもいいんじゃないの？」
「そうかしら」
「そうよ。私だってお菓子作りできるし」
「姉さんも上手いわよね」
これは明香も知っていた。彰子は特に菓子作りが得意なのだ。
「じゃあ将来は」
「姉妹でお菓子屋さんなんてどうかしら」
不意に妹に対して言ってきた。
「私と明香で」
「姉さんと」
「駄目かな」
そう問う彰子であった。

「二人でって。ずっと二人で」
「それでいいの？」
今度は妹が問うてきた。不思議と今は二人を包むものは似ていた。
「私で」
「明香だからよ」
妹のその問いにまたにこりと笑って答える姉であった。
「兄さんもいるけれどね。けれど兄さんじゃなくて」
「私なの」
「ずっと二人一緒だったじゃない」
この二人の仲のよさはかなり有名である。学校でも仲睦まじい美人姉妹として知られている。彰子もその仲のよさを自覚しているのであった。
「だから。今だってこれからだって」
「二人でなのね」
「これからも色々とあるだろうけれど」
それは彰子も薄々わかっていた。
「それでも二人一緒に。駄目かしら」
「いえ」
明香は姉のその言葉にゆっくりと、小さく首を横に振るのだった。
そうして言う。
「私も。よかったら」
「一緒にいてくれるのね」
「姉さんこそ一緒にいて」
姉の今の言葉をそのまま返してきた。
「私と。駄目かしら」
「駄目なわけがないわ」
姉の返事ももう決まっていた。
「明香じゃないと私だって」
「有り難う」
「だからね」

ここまで話したうえでまた言ってきた。
「明香が幸せになれますようにって」
「私がなの」
姉の言葉にまた応える。
「ええ。あのクレープを二人で食べるとね、幸せになれるっていうから」
「噂話よね」
「例え噂でもね」
また彰子の顔がにこやかな笑みになった。

第七十四話　クレープ屋その六

「信じていれば。現実になるわよ」
「そうなの」
「そうよ」
無邪気な感じの言葉だったがそれでも今の彰子はそれを本気で信じていた。だからこそ言う言葉であった。それが明香にもわかった。
「二人一緒で何時までも幸せにね」
「そうよね」
明香も姉のその言葉に微笑んだ。
「じゃあ。私も願うわ」
「何を？」
「姉さんが幸せになれますように」
微笑んでの言葉であった。
「そうして二人何時までも一緒にって」
「私と同じことよね」
「それでいいわよね」
姉に対して問い返してきた。
「姉さんと同じで」
「いいわ。それじゃあ」
「ええ」
二人で話をしながら先を歩いていく。そうしてその店の前に来たのであった。
「ここよね」
「そうよ」
彰子が明香の言葉に応えた。
「ここよ」
「それで姉さんは何を頼むの？」
明香はそれを妹に尋ねてきた。

「私はチョコバナナクレープにするつもりだけれど」
「そうね。じゃあ私も」
彰子も妹と同じものにするのであった。
「それにするわ。一緒のものを食べるといいっていうし」
「そうなの」
「これも噂話だけれど」
くすりと笑って言うのだった。
「そうらしいから」
「そう。それじゃあ二人で一緒にね」
「ええ」
話が進む。
「同じものを頼んで」
「食べましょう」
そう言い合ってから注文する。すると店の親父さんが笑顔で言ってきた。
「おや、姉妹かい？」
「あれ、わかります？」
「わかるよ、感じでね」
にこりと笑って彰子に応える親父さんであった。
「顔は全然違うけれど雰囲気でね」
「そうなんですか」
「そうだよ。いい雰囲気だね」
そのにこりとした笑みでまた言う。
「幸せになれるよ、そのままだと」
「有り難うございます。それじゃあ」
「あいよ、何を注文するんだい？」
話がそこに向かった。
「クレープなら何でもあるよ」
「チョコバナナ御願いします」
さっき明香と話したものである。

「それで」
「あいよ、チョコバナナだね」
「はい」
彰子は親父さんの言葉に応える。
「それで御願いします」
「わかったよ。けれどうちのチョコバナナはね」
「何かあるんですか？」
「特別なんだよ」
不敵な笑みを浮かべて言ってきたのであった。
「これもまた、ってやつでね」
「そうなんですか」
彰子は親父さんのその不敵な笑みにまずは少しだけきょとんとした顔になった。
「そんなに美味しいんですか」
「味は折り紙つきさ」
絶対の自信があるようである。
「しかしそれだけじゃなくてな」
「それだけじゃない。香りもですか」
「それもだよ」
自信は味だけではなかった。
「しかも栄養までばっちりだ」
「完璧なんですね」
「そうさ。食べたくなっただろう」
「はいっ」
爽やかで明るい笑顔で応える。
「お話を聞いただけで」
「そうですね」
明香もそれに同意するのだった。
「何か。私も」
「おっ、そういえば」

親父さんは二人の顔を見比べてふと気づくものがあった。

第七十四話　クレープ屋その七

「あんた達かなりアジア系の血が濃いね」
「そうでしょうか」
「私達は別にそうは」
二人にはあまり自覚がない。二人には、である。
「いや、結構強いと思うよ。髪の色も目の色もね」
「はあ」
「それに肌の色も」
連合では混血がかなり進んでいて純粋に白人や黒人や黄色人といったものは殆どないと言っていい。アボリジニーの血も入っている。それぞれの特徴が入り混じっているのである。これは彰子達の周りや八条学園全体でもそれは同じである。日本でもそうなのだ。
「かなり濃いね」
「ですか」
「アジアンビューティーってやつかね」
連合ではかなり死語になっている言葉である。
「いいねえ、そういう奇麗さも」
「そうなんですか」
「ほら、そっちの学校の理事長さんも」
言うまでもなく連合中央政府国防長官でもある八条義統である。彼もまたその整った気品のある美貌で広く知られている人物である。
「アジア系の奇麗さってやつだね」
「うちの理事長さんも」
「そう言えますか」
二人もこれにはふと気付いた感じであった。実は二人の中では八条はハンサムといった感じで奇麗という印象ではないのである。
「だよね。じゃあサービスで」
「サービスで？」

「クレープ大きめにしておいてあげるよ」
にこりと笑って二人に言ってきた。
「美人さん二人にね」
「有り難うございます」
「何かそこまでして頂いて」
「いいさいいさ」
親父さんは二人の言葉に笑って応える。
「女の子にサービスするのは俺の趣味だしね」
「はあ」
「あと男前にサービスするのもな」
どうやら中々公平な親父さんのようである。ここで女の子対してだけだとかなり悪い印象を受けかねないのだが男の子もとなるとそうにはならない。
「趣味なのさ」
「そうですか」
「さあ、それじゃあ」
クレープが出て来た。
「特別サービスで大きくしたチョコバナナクレープだよ」
「あっ、このクレープって」
見ればチョコレートもバナナも青である。彰子も明香もこれまた驚くことになった。
「全部青いんですね」
「そう、これがこのクレープの秘密なのさ」
そういうことであった。
「全部青になってりうんだよ。マンチキンから輸入しているからさ」
「マンチキンから、ですか」
「さあ、そのマンチキンクレープ」
親父さんが名付けるのはこうであった。
「是非味わってくれよ。いいな」
「わかりました」

「それじゃあ」
二人は親父さんに応えてからその青いクレープを食べはじめる。
一口食べ終えたところで親父さんはまた二人に対して問うてきたのであった。
「どうだい？」
「はい」
「これって」
二人はまた親父さんの言葉に応える。
「凄く。美味しいです」
「普通の黄色いクレープとはまた違って」
「違うのは色だけじゃないってね」
また得意げな顔で二人に告げるのだった。
「これでわかったかい」
「はい、とても」
「こんなクレープはじめてです」
二人はうっとりとさえしていた。甘いお菓子を食べる時の女の子の顔程美しいものはないがそれがはっきりとわかる顔になっていた。

第七十四話　クレープ屋その八

「噂以上っていうか」
「こんな味って」
「黄色いクレープとはまた違うんだよ」
そういうことであった。
「ただ、ギリキンは知ってるかな」
「はい」
明香がそれに答えてきた。
「確かマンチキンとの兄弟星系ですね」
「そうさ」
他には五つある。それぞれの色で統一されているのだ。青、緑、赤、黄色、紫とそれぞれの色になっているのである。それでも知られているのだ。ギリキンは黄色なのだ。
「あの黄色い星のも美味いぜ」
「美味しいんですか」
「土地がいいんだろうな」
親父さんは言う。
「どの星も。エメラルドなんかな」
「緑の星よね、確か」
「そうよ」
明香は彰子の問いに答えた。
「じゃあそこのクレープはやっぱり」
「そうさ、その通りさ」
笑顔でその言葉に応える親父さんであった。
「よくわかったね。ギリキンの黄色もさ」
「やっぱり美味しいんですか」
「緑もなんだよな。美味いことこの上なし」
「ねえ明香」

彰子はここまで聞いて妹に顔を向けるのだった。そうして言う。
「私達が大人になったらその色々な色のお菓子を作らない？」
「そうね」
明香もそれに応える。
「それはいいわね」
「何かお菓子に夢が膨らむわね」
彰子の顔が満面の笑顔になる。
「どんどんと」
「おいおい、そりゃ困るな」
しかし親父さんは二人のそのやり取りを聞いていて苦笑いになるのだった。
「商売仇じゃねえか、それって」
「あっ、すいません」
「それは」
「ははは、冗談さ」
しかし親父さんは二人が困った顔になるのを見て今度は笑顔になった。
「こっちだってそういうのは考えてるさ」
「考えてるって」
「どういうことですか？」
「この辺りにクレープ屋はないだろ」
並木道を指し示して言う。
「屋台はあっても」
「そういえばそうですか」
「焼き栗屋さんや鯛焼き屋さんはあっても」
どちらもメジャーなお菓子である。特に鯛焼きは日本においては非常に人気のあるお菓子の一つだ。女の子達、勿論彰子達も好物である。
「クレープ屋さんはないわよね」
「そうね」

「そこさ」
親父さんはそこだと言ってみせた。
「だからここにしたんだよ」
「つまり競争がないようにですか」
「棲み分けも大事なんだよ」
また言うのだった。
「商売にはな。覚えておきな」
「はい」
「わかりました」
二人もそれに頷くのであった。
「けれど。味は負けないぜ」
「味は、ですか」
「当たり前だろ。これは俺の生きがいなんだよ」
自信に満ちた笑顔をまた見せてきた。
「他のはともかくクレープなら負けないぜ」
「明香・・・・・」
「安心していいわ、姉さん」
しかし明香はここで姉に対して穏やかに言ってみせた。
「他のお菓子もあるし。それに」
「それに？」
「姉さんだから」
こう姉に告げた。
「クレープでも。お菓子では負けないわよ」
「そうね」
そして彰子も妹の言葉に何とか頷くことができた。

第七十四話　クレープ屋その九

「きっとね」
「そうよ」
「何か凄い姉妹のライバルみたいだな」
親父さんも思わぬライバルが目の前にいることに気付いた。
「まあ屋台のクレープとお店でのクレープは違うからな。それは助かるか」
「違うんですか」
「お菓子はお店と屋台で変わるもんさ」
親父さんは言うのだった。
「それもかなりな」
「そうですね」
それに明香が応える。
「確かに。屋台のクレープはこうして持って食べますけれど」
焼いて巻いたクレープを紙で覆って食べている。そうして立って食べるのが普通だ。つまり完全なファーストフードというわけである。
「お店のクレープは」
「皿に出すよな」
「はい」
そこに大きな違いがあるのだ。
「それでフォークとナイフで食べてな」
「そうですね」
「中に入ってるのも違うしな」
「お店だとアイスクリーム入れたりするわよね」
「そうね」
明香は今度は彰子に対して答えた。
「屋台じゃアイスクリームはあまり使わないからな。溶ける危険も

あるしな」
「そういうことですね。だからですか」
「だからクレープっていってもかなり違うんだよ」
親父さんはそこを指摘しているのだった。
「まあそれでも。味では負けないぜ」
「私達だって」
「それは」
しかし二人にも自信はあるのだった。
「負けませんよ」
「そうです」
二人は親父さんに対して言う。
「これで決まりました」
「何がだい？」
「私の願いが」
彰子はほんの少しだけ強い顔になっていた。
「ああ、その噂は聞いてるさ」
「そうなんですか」
「あれだろ？」
二人に対して声をかける。
「うちのクレープを二人で食べると何でも願いが適うんだって話だよな」
「そうです」
「御存知だったんですか」
「まあそれはな」
親父さんは誇らしげな笑みになっている。
「うちの店のことだしな」
「それです」
彰子はここでまた言ってみせてきた。
「私の願いはですね」
「俺より美味いクレープを作るってことかな」

「いえ」
だがその問いには首を横に振るのだった。
「宇宙で一番美味しいお菓子を作ることです」
「宇宙でかい」
「姉さん」
これには親父さんも明香もかなり驚いた。
「明香と二人で。明香、いいわよね」
「え、ええ」
明香はそれに応えて頷く。引きながらであるが。
「わかったわ」
「何か一本取られたな」
親父さんは別に悔しがるわけでもなく彰子に応えるのだった。
「まさか宇宙一なんてな」
「駄目ですか？」
「いやいや、それでいいんだよ」
彰子に応えてまた言う。
「夢はでっかく。俺は日本一を目指していたんだがな」
「そうだったんですか」
しかし彰子はそれどころではなかった。彼女はあえて宇宙一というのだ。その夢の大きさを普通に願うところが彰子の凄いところであると言えた。
「それより大きいのか。凄いことだよ」
「私、本気ですけれど」
「本気でいいのさ」
その言葉にも頷いてみせるのだった。
「そうじゃないと面白くとも何ともないしな。気に入ったぜ」
そこまで言うと。もう二つクレープを出してきた。今度は青い生クリームと苺のものであった。
「ほい、これはサービスだ」
「有り難うございます」

「頑張りな」
親父さんは笑顔で二人に告げる。二人はそのクレープも食べてあらためて願うのであった。二人の、それぞれの願いをである。

クレープ屋　　完

２００８・１・３

第七十五話　明香の願いその一

明香の願い

二人は笑顔でクレープを食べた。そうして親父さんと別れて二人で並木道を歩いて帰路についていた。その途中で彰子は明香に声をかけてきた。

「ねえ明香」

「何、姉さん」

自分よりずっと小柄な姉を見下ろして尋ねる。その妹に対して姉はここでは少しというかかなり微妙な笑顔をして彼女に対して言うのだった。

「大きいわね」

「御免なさい」

「謝ることはないわよ」

それはいいとした。

「けれど。同じ姉妹なのにね」

「そうね」

「同じお父さんとお母さんなのに」

よく言われるがこれは間違いのないことだ。

「兄さんは大きいのに」

「そうよね」

二人の兄である貫之もそうなのだ。結局小柄なのは彰子だけなのである。

「何で私だけ」

「姉さんはお婆ちゃんに似たのよ」

二人の母方の祖母である。彼女は小柄なのだ。

「それでよ」

「そういえばそうよね。私とお婆ちゃんって顔も同じだし」

「ええ」

そういうことであった。彼女はお婆ちゃん似であったのだ。
「私はその遺伝でそうだったのね」
「けれどあれね」
明香はまた言う。
「私はお母さん似だし」
「私はお婆ちゃんで」
「そうよね。何か分け合ってる感じね」
「ええ。そういえば」
ここで明香はまた言うのだった。
「姉さんのお料理が上手いのは」
「これもお婆ちゃんよね」
二人の祖母は料理上手でもある。これは二人の母も同じである。
「それとお母さんと」
「これは一緒よね」
「そうね。二人のいいところが一緒に似たのね」
二人でそれを言い合う。
「それを考えると私達って」
「姉妹なのね」
二人はにこりと笑って話を交えるのであった。
「二人いつも一緒だったしね」
「そうそう」
彰子は妹の言葉にそのにこりとした笑顔のままで頷くのだった。
「明香が生まれた時ね」
「ええ」
その時の話を今妹に対してするのだった。
「その時私にこりって笑ったんだって」
「姉さんが？」
「まだ赤ん坊だったのにね」
それを言う。
「不思議よね。明香が生まれたその時に笑っていたって」

「それからずっと一緒なの。私達は」
「そうよ。それで今だって」
「今だって？」
明香は姉の言葉に顔を向けた。
「一緒よね。学校もずっと同じ八条学園だし」
「幼稚園からそうだったわね」
「学校での生活はどう？」
姉らしい質問であった。
「楽しい？明るい？」
「楽しくて明るいわ」
爽やかな笑顔で姉の言葉に答える。
「姉さんもいてくれるし」
「学年も一緒だったらよかったのにね」
これは彰子の心からの言葉だった。そしてそれは明香も同じだった。二人は今まで何度もそう思っていたのである。それこそいつも。
「そうね。そうしたら姉さんと」
「同じクラスになれたかも知れないわね」
「双子だったらもっとよかったのに」
彰子はまた言う。
「そうしたらもっといつも一緒だったのにね」
「そうね。ところで姉さん」
明香はここで姉に対して話を変えてきた。

第七十五話　明香の願いその二

「どうしたの？」
「さっきのことだけれど」
「クレープのことね」
「ええ」
まずは姉のその言葉にこくりと頷いた。
「美味しかったわよね」
「そうね」
そこから話ははじまる。
「とても。食べてよかったわね」
「満足したわよね」
「それでね。姉さん」
その話の後でまた姉に問う。
「御願いだけれど」
「御願い？ああ、あれね」
少しぼけたような言葉になっていた。おっとりしている彰子らしいと言えた。
「それがどうかしたの？」
「何を御願いしたのかしら」
妹が姉に問うのはそれであった。
「よかったら教えてくれるかしら」
「ええ、いいわよ」
またにこりとした笑みになった妹に頷くのであった。
「実はね」
「ええ。何を御願いしたの？」
「明香のことよ」
そう妹に告げてきた。
「私のこと？」

「そうよ」
その笑みのままま言う。
「明香が幸せになれますようにって」
「私が」
「他に何を御願いするの？」
その笑みをまだ続けての言葉だった。
「ないわよね」
「姉さん・・・・・・」
「明香は私のたった一人の妹なんだから」
「私が。たった一人の」
「それ以外の何だっていうの？」
彰子の言葉は明香の心の中に直接響くものであった。彼女もそれを受けて次第にその驚いていた顔を穏やかな笑みに変えていったのであった。
「ずっと一緒だったんだし」
「有り難う」
その穏やかな笑みで微笑んでみせてきた。
「そう言ってもらえると嬉しいわ」
「言ったんじゃないわよ」
彰子はそれは否定した。
「御願いしたのよ」
「そうね」
「そうよ。だから違うのよ」
こう言うのであった。
「言うのと御願いするのは」
「そうね。そうよね」
「そういうこと。ところでね」
彰子はまた明香に言ってきた。
「明香は何を御願いしたの？」
「私？」

「そう。何を御願いしたの？」
それを妹に対して聞くのだった。自分が話したから次はそれであったのだ。
「明香は」
「私も同じよ」
明香はその穏やかな笑みのままで彰子に対して言うのであった。
「それじゃあ」
「ええ。姉さんのこと」
それを言うのだった。
「姉さんが何時までも幸せになれますようにって」
「私と全部一緒なんだ」
「不思議ね」
今度の彰子の言葉はそれであった。
「同じなんて」
「そうね。ひょっとしたら私達」
明香は言う。
「双子じゃなくてももう双子と同じなのね」
「そうね。同じなのね」
彰子もそれに頷く。
「私達って。顔もスタイルも全然違っても」
「姉妹だからね」
結論はそれであった。
「そうなるのね」
「そうね。姉さん」
そうしてまた姉に声をかけてきた。
「これからだけれど」
「どうするの？これから」
「お菓子。作らない？」
それを姉に提案してきた。

第七十五話　明香の願いその三

「お家に帰ったら。どうかしら」
「いいわね、それって」
妹のその提案ににこりと笑ってみせてきた。
「ムースがいいかしら。それともプリン？」
「そうね。ムースなんてどうかしら」
明香はムースを提案してきた。ムースもまた二人の得意料理の一つである。これはいつも二人で作って楽しんで食べているものである。
「今日は」
「それで何のムースにするの？」
「苺のムースはどうかしら」
明香はそれを提案してきた。
「それで」
「いいわね、苺ね」
彰子の顔が綻ぶ。
「私苺大好きだし」
「私もよ」
明香も同じであった。彼女も彰子も苺が大好きなのだ。これも幼い頃から同じだ。よく二人で苺を食べてそのお菓子を作ってきているのである。
「苺は」
「じゃあそれでいいわね」
姉の言葉を受けて応えてきた。
「苺のムースで」
「家に苺あったかしら」
「確かなかったわ」
そう姉に答える。

「苺は」
「じゃあ買いに行こう、今から」
彰子は妹のその言葉を受けてすぐに提案してきた。
「今から行けば間に合うわよ」
「スーパーね」
「ええ」
そこでいつも買うのであった。
「それか商店街で。どうかしら」
「商店街だと黄色い苺があるわよ」
そうした種類の苺もあるのだ。他には紫もある。
「色はどうしようかしら」
「今日は赤がいいわ」
彰子はその時の気分に従ってこう述べるのだった。
「赤い苺が。それでどうかしら」
「わかったわ。それじゃあそれでね」
「赤いムースね」
結果としてそうなる。使う苺が赤ければ。当然ながら黄色い苺だと苺のムースでも黄色くなるのだ。紫だと紫に。実にわかりやすいものがある。
「わかったわ。赤で」
「明香は青が好きなんだったっけ」
妹の好きな色は知っている。それでこう尋ねてきたのだ。
「確か」
「いいえ」
その通りだが何故か明香はここではそれを否定する。そうしてそれから言うのだった。
「それは違うわ」
「あれ、そうじゃなかったの」
「私の好きな色は姉さんの色よ」
穏やかで清らかな笑みを浮かべての言葉であった。

「それは」
「私の色って」
「姉さんが青い時は青が好きで」
そう語る。
「赤い時は赤が好きなの。そうなのよ」
「私の色って」
「だって。姉さんと一緒にいられるから私があるんだし」
こうも言うのだった。
「だからなのよ」
「じゃあ。私もそうなのね」
妹の自分への想いを受けて彼女自身も言うのだった。
「明香の色が私の色なのね」
「多分。それじゃあ今は」
「赤は私達の色ね」
「そうね。赤いムース」
にこりと笑って妹に告げる。
「二人で作りましょう」
「わかったわ。食べるのは明日ね」
「そうね。今日作って」
段取りはもう頭の中にある。いつもお菓子を作っているからそうしたことは既に頭の中にあってそれに基いて動いているのである。

第七十五話　明香の願いその四

「明日二人でね」
「もっと多めに買わない？」
明香は言ってきた。
「多めに？」
「お父さんやお母さんの分も」
家族のことも忘れないしっかり者の明香であった。
「それに」
「兄さんの分もね」
彰子もそれに気付く。彼女達にとっては家族はかけがえのないものだからだ。
「御免なさい、忘れていたわ」
「買う前に思い出してよかったわよね」
「そうね」
考えればそうである。買う前に思い出して何よりだった。二人はそのことに笑顔を浮かべ合うのだった。ここでの動きは完全に合わさっていた。
「それは」
「じゃあ行きましょう」
明香はここまで話したうえで姉にまた声をかけた。
「スーパーに」
「ええ。御飯も一緒に買わない？」
ここで彰子はこれも提案してきた。
「明日の分。そうしたらお母さんが楽できるし」
「そうね」
その通りだった。何気に細かいところに偶然的に気がつく彰子であった。そうしたところが何気に彰子らしいと言えば言えるものであった。

「一応何を作るのか考えてね」
「この前お魚だったわね」
「ええ」
話が少し所帯じみたものになってきた。やはりお菓子と夕食では話す内容も違ってくる。砂糖だけではなくそこに醤油や胡椒も入るからである。
「じゃあ今日は鶏肉かしら」
「だと思うわ」
二人の家の料理のメインはある程度ローテーションである。二人はそれに基いて明日の料理、今日買うものを考えているのである。これもまた女の子であった。
「じゃあ明日は」
「お肉ね」
明香はそう考えた。
「何がいいかしら」
「羊かしら」
彰子はふと言った。
「それとも鯨。あっ、これは」
これはすぐに引っ込めた。
「お魚に入れてもいいわね」
「海や川にいるから」
星によっては川にいる鯨もいるのである。何十メートルもの鯨が川にいたりする星もあるのだ。
「じゃあジュゴンとかマナティーもそうね」
「ステラーカイギュウも」
どれも連合でよく食べられているものである。なお連合では一千年前と違い鯨も普通に食べられている。オーストラリアの鯨料理は名物の一つでもある。
「それじゃあ鳥は」
「ダチョウとかドードーとかもよ」

地球で絶滅した鳥も他の星にはいるのだ。ドードーは養殖されて貴重ではあるにしろ愛玩用にも食用にもなっている。その卵を食べたりするので太った鶏のようなものになっている。

「だからここは」

「恐竜？」

彰子はふと恐竜を出してきた。

「それだとどうかしら」

「味は鶏肉に似てるし」

しかし明香はそれに難色を示す。

「それもどうかしら」

「じゃあ鰐とか蛙も」

どちらも味は鶏肉に似ている。

「駄目なのね」

「そうなるわね」

「じゃあやっぱり羊かしら」

「それでどう？」

こう姉に問い返すのであった。

第七十五話　明香の願いその五

「羊で。最近食べていなかったし」
「そうね」
彰子は妹の提案に対してあらためて考える顔になるのであった。6
「それじゃあやっぱりそれかしら」
「ええ。それで次は」
話はさらに進む。素材を買って終わりというわけにはいかないのである。
「ラムにするかマトンにするかだけれど」
「私はどちらでもいいわ」
彰子はこう答えてきた。
「羊の匂いも気にはならないし」
「そうなの」
「あれいい匂いじゃない」
彰子にとってみればそうなのであった。そのにこりとした満面の笑みがそれを明香にもはっきりと教えているのであった。明香にもそれがわかる。
「特に焼けた時なんかね」
「そうね」
そして明香も姉のその言葉にまた微笑んで頷いてみせる。
「確かに。あの匂いはね」
「明香も好きなんだ、やっぱり」
「ええ、好きよ」
その微笑みのままそれを認めてみせる。
「だって。本当に美味しそうな匂いだから」
「そうよね。特に焼いたら」
話がさらに進む。
「いい匂いがさらに」

「煮てもいいわよ」
話は調理法にも及ぶ。何でも料理できるのが羊のいいところである。かつて羊は古代中国では最高級の肉とされてきた。『美』という言葉が羊からきていることはあまりにも有名である。
「私はどちらというと焼いた方がいいかな」
「そうなの」
「どっちかというとだけれどね」
これは彰子だけでなくこの時代の日本人の羊に対するオーソドックスな嗜好であった。この時代は日本人も羊をかなり普通に食べるようになっている。肉食が完全に普及している証拠である。
「やっぱり焼いた方が」
「そうなの」
「その中でもジンギスカン鍋」
この時代でも人気メニューの一つである。
「やっぱりあれじゃないかしら」
「あれね」
明香もまんざらではないようであった。
「それじゃあ」
「明日はそれにしようかしら」
「そうね。けれど一応その前に」
明香はここで自分の鞄から携帯を出すのであった。そうしてすぐにメールを打つ。
「お母さんにメール？」
「ええ」
そう姉に答える。
「ジンギスカン鍋でいいかって」
「そうね。一応断った方がいいわね」
妹の行動に賛成してまた微笑んでみせる姉であった。
「やっぱり」
「そうね。だから」

メールしているのであった。それからすぐに返事が返って来た。
「それでどうなの？」
「それでいいみたい」
母から返って来たメールを見ながら姉に対して答える。
「マトンで」
「マトンなのね」
「それにお野菜も」
注文が何気に増えていた。
「モヤシに人参に」
「何に使うのかしら」
彰子はモヤシに人参と聞いて少し考える顔になるのであった。
「スープかしら」
「多分そうだと思うわ」
携帯を折って元に戻しながら姉に答えた。
「やっぱりその内容だと」
「生姜はお家にあったわよね」
「ええ」
それはあるのは二人共わかっていた。何気に欠かせない香辛料である。
「それと卵も」
「じゃあスープはあれかしら」
ここで彰子は少し考える。
「中華風のトリガラで」
「多分そうだと思うわ」
妹も姉と同じ予想になっていた。

第七十五話　明香の願いその六

「トリガラもお家にあったから」
「そうよね。じゃあ決まりね」
「ええ、そうね」
スープとしてのメニューは完璧であった。だがそこにもう一つ入るのであった。
「あっ、一つ欠かせないものがあったわ」
「大蒜ね」
「そう、それよ」
彰子は明香の言葉に答える。
「それもないとね」
「ジンギスカン鍋にも使えるし」
明香はここで大蒜のもう一つの使い方についても述べるのだった。
「やっぱり必要ね」
「けれどあれよ」
しかしここで彰子は妹に対して言うことがあった。
「大蒜は間違っても」
「ええ、わかってるわ」
明香も姉の言いたいことはわかっていた。
「絶対にお菓子に入れては駄目ね」
「最初にムースを作りましょう」
それを言うのも忘れなかった。
「さもないと大蒜の匂いがムースにつくから」
「そうなのよね」
とにかく大蒜の匂いはきつい。それで吸血鬼でさえ退くと言われている程だ。連合ではよく使われる香辛料だがそれだけに気をつけて使われているのである。
「だから。それはいいわね」

「わかったわ」
姉の言葉にこくりと頷く。
「それじゃあまずはお菓子をさっと作ってね」
「ええ。よく考えたら」
姉はふと気付いた。
「明日だし。ジンギスカンは」
「それじゃあムースは明日の夕食のデザートになるわね」
妹が気付いたのはそこであった。
「それもいいわよね」
「ええ。家族皆でね」
彰子の顔がここでも綻んだ。
「食べればいいわね」
「羊の後での苺ね」
中々面白い組み合わせであった。
「それ、いいわよね」
「そうよね。私どちらも大好きだし」
彰子は自分の頬に両手を添えてきた。そうするとその顔が至福の笑みになるのであった。笑顔がまるで天使のそれのようになっていた。
「最高の夕食になりそうね」
「私もそう思うわ」
明香も同じ考えであった。
「これからね」
「じゃあ明香」
姉の言葉が眩いものになっていた。
「早くスーパーに行きましょう」
「あっ、待って姉さん」
駆け出した姉に声をかける。
「焦っても苺もお肉も逃げないわよ」
「わかってるわ。けれどね」

何かどちらが姉でどちらが妹なのかわからないやり取りになっていた。
「それでもね。早く行かないと」
「落ち着かないのね」
「だから。いいわよね」
こう妹に対して問う。
「早く行っても」
「ええ、いいわ」
妹もその言葉を結局は受ける。やはりそのやり取りは穏やかでありそれと共に仲のよさを感じさせるものであった。そうした姉妹であった。
「じゃあ私も」
「早く行きましょう」
「わかったわ」
こうして二人はスーパーへ駆けていくのであった。そうして買うのは苺とマトン、大蒜等であった。二人の料理はいつもこうして作られているのであった。

明香の願い　　完

２００８・１・８

第七十六話　二人への頼みごとその一

二人への頼みごと

パレアナは女子バスケ部に所属している。部では主力選手となっている。

その為か運動神経はかなりいい。学校の授業でもいつもいい動きを見せている。

「相変わらずいい動き見せるわね」

「有り難う」

今日はソフトボールであった。ショートの守備で見事なダイレクトキャッチをしてみせた彼女に対してセカンドを守っていたコゼットが声をかけるのであった。

「そういうあんたもね」

「私は野球とかが得意だからね」

コゼットも不敵に笑って彼女に応えてきた。

「だから。それだけよ」

「あら、そうかしら」

だがパレアナはそんな彼女に笑って言葉を返すのであった。

「他のもかなり得意に見えるけれど」

「買い被りよ」

コゼットは不敵な笑みのまま言葉を返す。見れば二人共半ズボンの体操服が実によく似合っている。それを見れば如何にも抜群の運動神経を持っているのがわかる。

「私はそれ程じゃないわ」

「その割には」

パレアナはまだ言うのだった。

「さっきの走塁はよかったわよ」

「そうだったかしら」

「二塁から一気にホームを突いたわよね」

浅いセンター前ヒットからだ。素早いベースランニングによりそれを果たしたのだ。パレアナが彼女に言っているのはそのプレイのことなのだ。

「あれはとてもできないわよ」

「まぐれよ」

しかしコゼットはその態度を変えない。

「たまたまだから」

「それじゃあそのたまたまをまた見たいのだけれど」

それに応えてこう言ってみせた。

「それでは駄目かしら」

「そうね」

また不敵な笑みを見せる。

「何時出るかわからないけれどそれでもいいかしら」

「大いに結構よ」

パレアナも笑ってそれに応える。

「そのたまたまが見たいから」

「また言うわね」

コゼットもその言葉にまんざらでもいないようであった。笑みがさらに不敵なものになってきているのがそれの明らかな証拠であった。

「けれど。悪い気はしないわ」

「そうでしょうね。こっちもそれを狙ってるから」

パレアナもパレアナでその笑みをさらに深いものにさせていた。以心伝心に近いものがもう二人の中にはちゃんとあるようである。

「あえて言っているのよ」

「乗るわ」

コゼットはそう言葉を返した。

「その誘い。それで何をするの？」

「話は七海から聞いて」

「七海から？」

てっきりパレアナ本人から聞くと思っていたのでこれは意外であった。思わず目を丸くさせてまた彼女に問い返すのであった。
「どうしてまた七海なのよ」
そしてまたパレアナに対して言った。
「確か彼女の水泳部って部員も充分だしそこそこ強いし」
「それでもよ」
パレアナはここでそれでも、と言ってきた。
「何かあるらしいから。とりあえず彼女から話を聞きましょう」
「よくわからないけれどわかったわ」
そう答えた。
「乗りかかった船だし」
「ええ。それじゃあ」
ここで彼女達の守備が終わった。
「またベンチで話すわね」
「ええ。それにしても」
ふとプレイに心がいった。
「今ボールが来なくてよかったわね」
「それはね」
パレアナも同感であった。幾ら何でもお喋りをしている間にボールが来ては洒落にならない。二人はそのことにまずは感謝するのであった。
「ラッキーだったわね」
「そのラッキーが七海との話でも続くことを祈るわ」
「まあ悪いようにはならないわよ」
パレアナも一応はこう答える。
「多分だけれどね」
「多分なのね」
「私もどんな話なのかわからないのよ」
思えば結構無責任な話ではある。何しろ話を持って来た人間が詳しいことを知らないのだから。だが本当に知らないのだからこれは

どうしようもないことであった。

第七十六話　二人への頼みごとその二

「とりあえず。話は七海からね」
「わかったわ。それじゃあそういうことでね」
「ええ」
こうして二人はまずは七海の話を聞くことにした。三人は教室でそれぞれのお弁当を食べながらその話に入るのであった。
「コゼットも来てくれたのね」
「用件を聞こう」
コゼットは何故かここではおもちゃの葉巻を出して歪に太い眉に鋭い目の変装をしてみせていた。だがそれは完全に滑っていた。
「そのネタやったら悲惨な目に遭うわよ」
「そうなの」
七海の突っ込みに応える。
「大抵そのキャラクターや人が後ろに立つと殴る癖を逆手に取られて虐められてるじゃない」
「それもそうね」
コゼットもそれは知っていた。そういうキャラなのだ。とりあえずその世界では無敵でも他の世界ではそれを逆手に取られるのである。そうしたものなのだ。
「だから。止めておいた方がいいわ」
「わかったわ。それじゃあ」
すぐにそのメイクを外す。おもちゃの葉巻もなおしてそれから話に入るのであった。
「それで何なの？」
「私達に用があるのよね」
コゼットとパレアナはそれぞれ七海に尋ねてきた。
「水泳部のこと？」
「それならそれでいいけれど」

「そうじゃないのよ」
しかし七海は水泳部の関連は否定するのだった。
「そっちじゃなくてね」
「泳がないの」
「まあ水着も覚悟していたけれど」
「水着っていうかね」
ここで七海は言ってきた。
「二人共波は好き？」
「波？」
「そう、波」
こう二人に言うのであった。
「波は好きかしら」
「まあ泳ぐのもね」
「ええ、嫌いじゃないわよ」
二人は七海の問いにこう言葉を返した。実際に二人は海も嫌いではないのでこう答えることができたのである。別に深い考えもなくではあったが。
「けれどそれがどうしたの？」
「波に何か関係が？」
「それがあるのよ」
七海は少し真剣な顔になってきた。
「それでね」
「ええ」
「どうしたのよ」
二人は七海の言葉に問う。
「そもそも何をするのかさえわかっていないし」
「そうよね。一体何をするのやら」
「波乗りよ」
七海は二人に言ってきた。
「波乗り！？」

「つまりそれって」
「そうよ、サーフィン」
こう言い換えてきた。言い換えると話がすぐにわかった。
「それを二人に御願いしたいのだけれど」
「サーフィンねえ」
「それって」
二人は顔を見合わせて話をするのだった。
「そういえばそっちの経験はないわよね」
「そうよね」
「経験って言うと危ないからその表現は止めてね」
七海はそれについてはクレームをつけた。
「それに二人共そっちの経験はまだだったわよね」
「自分が言ってどうするのよ」
「ねえ」
その七海に二人で突っ込みを入れ返す。
「そうしたら元も子もないじゃない」
「それにそれは七海も同じでしょ？」
「まあね」
ここで微妙に顔を顰めさせる七海であった。

第七十六話　二人への頼みごとその三

「それはそうだけれど」
「だったらお互い様じゃない」
「そのうち私達にも彼氏ができるわよ」
パレアナが一番楽観的であった。それはコゼットも同じだったが。
「とにかくね」
七海は話を元に戻してきた。
「どう？サーフィンは」
「私は別にいいわよ」
まずはコゼットが言ってきた。
「初心者だけれどね」
「あんたはそれでいいのね」
「ええ、全然オッケーよ」
こうまで言うのだった。
「ぶっつけ本番は流石に困るけれどね」
「わかったわ。それじゃあ」
「私もいいわよ」
パレアナもそれは同じであった。彼女も穏やかな顔で頷いてきたのであった。
「前から少しやってみたいかなって思っていたしね」
「じゃあそれで決まりね」
七海はその二人の言葉を受けて納得した感じの顔で頷いた。それからまた言う。
「それじゃあ。早速で悪いけれど」
「練習？」
「トレーニング？」
「意味は同じよ」
銀河語で話をするのであった。銀河語は同じ意味でも複数の言葉

があったりするのである。これは様々な言葉が合わさってできた言葉だからである。
「とにかく。それじゃあ」
「プールでするのよね、やっぱり」
今度はパレアナが七海に問うのであった。
「シーサイドプールで」
「ええ、それにね」
七海はまた言う。
「水着は」
「水着はそのままじゃないの？」
コゼットはそう考えていた。
「私ビキニ持ってるわよ、白の凄いの」
「あら、それいいわね」
それを聞いてパレアナが笑顔になった。
「私もビキニ買おうかしら」
「パレアナだったらワンピースの方がいいわよ。あれスタイルがはっきり出るし」
「ビキニは胸よね」
「そうそう、パレアナはどんなワンピース持ってるの？」
「赤と青持ってるわよ」
にこりと笑ってコゼットに告げる。
「他にも色々とあるけれど」
「私はワンピースは黒しかないのよね」
コゼットはどうやらビキニ主体であるらしい。胸の大きな彼女には似合っているといえた。
「他も買おうかしら」
「いいんじゃない、それって」
二人でそんな話をしていた。だがここで七海がまた言うのである。
「悪いけれどそうした水着は使えないわよ」
「あら、そうなの」

「それじゃあやっぱり」
「そう、サーフィン用のあれよ」
それはしっかりと言うのであった。
「そうじゃないとやっぱり危ないわよ」
「脱げたりするのね、他のだと」
そういうことであった。問題はそれであった。
「そういうこと、特にビキニはね」
「何だ、つまらないの」
コゼットはあっけらかんと本音を出した。
「折角どんな水着にしようか考えていたのに」
「じゃああんた水着脱げたいの？」
七海のその彼女に対する突っ込みは実に鋭いものであった。
「そうしたらある意味で注目の的になれるけれど」
「冗談ポイよ」
コゼットの返事は古い言葉によるものであった。
「私の裸見ていいのは彼氏だけよ」
「そうでしょ。じゃあわかるわよね」
「何かサーフィンって面白くないかも」
何気に自分の自慢のプロポーションを見せたいコゼットであった。
「どうにもこうにも」
「それがやってみると面白いから」
だが七海はそう言って彼女を安心させるのであった。
「こうして御願いしてるし。だからね」
「わかってるわよ。乗りかかった船」
それを降りるコゼットではなかった。そして。
「パレアナもそれでいいかしら」
「勿の論」
彼女も少し古い言葉を使ってきた。
「最初から乗るって決めたら乗るのが私だからね」
「有り難う。じゃあ悪いけれど御願いね」

「ところでさ」
ここでパレアナがふとした感じで言ってきた。
「何？」
「どうしてまた急にサーフィンをしてくれってなったの？」
彼女が気になるのはそこであった。
「急にって感じだけれど。またどうして」
「実はね。サーフィン部が立ち上がるのよ」
八条学園には実に多くの部活がありないジャンルの方が少ない。
しかしその中にはないものもあるのである。サーフィン部がそうなのである。

第七十六話　二人への頼みごとその四

「女子サーフィン部かね」
「ああ、なかったんだ」
パレアナもそれを聞いてふと気付いた程である。
「女子サーフィン部って」
「それで私が友達に頼まれたのよ」
七海は真相を二人に対して話す。
「立ち上げで部員を募集したいからって」
「掛け持ちしろってこと？」
パレアナはそれを聞いてふとした感じでまた言ってきた。
「知ってると思うけれど私女子バスケ部よ」
「私は陸上部よ」
コゼットも言ってきた。部活に熱心な二人である。なおこれは七海も同じである。活発な三人なのだ。
「それならそれでいいけれど」
「友達もそこまでは言っていないけれどね」
七海は二人に応えて言う。
「一応人寄せとかしたいから運動神経のいい娘呼んで欲しいって頼まれただけだし」
「そうだったんだ」
「つまりパフォーマンスしろってことなのね」
「ええ、結局のところそうなるわ」
ここまで話したうえでまた二人に説明した。
「それでもいいかしら」
「だから。一度はいって言ったら」
「変えないわよ」
そうしたところはしっかりしている二人であった。
「やるわよ」

「それじゃあね」
二人はまた同時に七海に言ってきた。
「早速水着の用意ね」
「サーフィン用の」
「よかった。乗ってくれて」
「ええ、乗るわよ」
コゼットは七海の言葉ににこりと笑ってみせてきた。
「波にね」
「よく考えたら面白いかも」
パレアナもそれに続く。
「体育館の中でやるのもいいけれどプールでやるのもね」
「本当は海でやるんだけれどね」
七海はそこは少し苦笑いになった。
「けれどまあ。この学校にはそうしたプールもあるってことで」
「そうね。あっ、そうそう」
「何？」
話は不意にまた変わった。
「七海って水泳部じゃない」
「ええ」
話は七海に移るのだった。パレアナが尋ねてきた。
「やっぱり持っている水着はあれ？競泳の」
「ええ、そうだけれど」
七海にとっては当然のことなので何を言っているのかしら、という顔を見せた。
「それがどうかしたの？」
「やっぱりあれ？体型とかはっきり見えるの？」
「まあかなりね」
競泳用の水着はそうなのだ。彼女はそれも素直に述べた。
「それがどうかしたの？」
「そう。それじゃあ」

「それもいいかもね」
コゼットも考える顔になって言ってきた。
「何もビキニにこだわらなくてもね」
「考えればワンピースもいいんだし」
「？何が言いたいのよ」
七海はそんな二人の会話を読みかねていた。それで顔にクエスチョンマークを浮かべている。
「体型がどうとかって。さっきの話みたいに」
「だからさっきの話の続きなのよ」
「ねえ」
二人が言うのあそこであった。
「成程ね。考えてみる必要はあるわね」
「そうね」
「何だ、結局はそれなのね」
それに気付いて少し呆れ顔になる七海であった。しかし悪い気はしてはいないのであった。

二人への頼みごと　　完

２００８・１・１１

第七十七話　はじめてのサーフィンその一

はじめてのサーフィン

七海に頼まれてサーフィンをすることになった二人。まずは水着を選ぶのであった。

「サーフィンの水着ってねえ」

「あれよね」

スポーツウェアの店の水着コーナーに来た二人は七海と共に話をするのであった。

「地味っていうか」

「機能性重視よね」

「そうじゃなきゃ危ないじゃない」

それが七海の二人へのコメントであった。

「下手に動きにくかったら死ぬわよ」

「死ぬの」

「死ぬわよ」

七海の言葉は少し剣呑な響きを持っていた。

「波が相手なのよ。海よ」

「海かあ」

「そういえば」

「ダンがよく言ってるじゃない」

ダンの家は水族館である。生まれた頃からの波育ちなのだ。少し不良でも彼が面倒見がよく頼りがいがあるのは波育ちのその性格故なのかも知れない。

「海は生き物だって」

「それは聞いてるわ」

「何があるかわからないのよね」

「そういうことよ。だからね」

またコゼットとパレアナに対して言うのだった。

「しっかりした水着を選んでね」
「この黒ビキニとか」
「白いワンピースとか」
コゼットもパレアナもついついそちらに目がいくのであった。
「本当はこういうのがいいんだけれどねえ」
「仕方ないわよね」
「だからそれは前に言ったじゃない」
眉を顰めさせて何故かつなげて丸を描かせたうえでまた言う七海であった。
「脱げるわよって」
「ワンピースもなのね」
「下手したら脱げるわよ」
また七海が注意するのであった。
「ワンピースだから。それこそ脱げたら」
「全裸・・・・・」
「全校生徒の前でヘアヌードになれるの？」
あまりにも酷烈な問い掛けであった。
「その覚悟があれば別だけれど」
「そんなわけないでしょ」
パレアナは顔を憮然とさせて応えるのであった。
「私が裸を見せるのは彼氏だけよ。それ以外は水着だけよ」
「そうよね。普通はそうよね」
七海も同じ考えだ。だからこそ言えるのであった。
「じゃあわかるわよね」
「それにしても胸どころか脚や肩まで完全に隠れて」
「サーフィンの水着って露出がねえ」
「見せるのなら他の場合でしてね」
七海はまだ不満な調子の二人にまた言うのだった。
「まあ試しに何か着てみて」
「わかったわ」

「とりあえずはね」
二人はそれに応えて水着を選ぶ。そうして試着してみるのであった。
試着を終えて。試着室のカーテンをどけて七海に見せて問う。
「どうかしら」
「これで」
「似合ってるじゃない」
七海は二人のサーフィンの水着を見て言う。見ればコゼットは白、パレアナは黒の水着をそれぞれ着ている。かなり似合っているのは確かであった。
「いい感じよ」
「そう」
「それだったら」
「それにね」
七海はここでまた二人に対して言う。
「まだ何かあるの？」
「何処か悪いところでも？」
「悪い場所はないわよ」
七海はそれは二人に保障する。
「それどころかねえ」
「何よ」
「言いたいことがあるのなら是非」
溜息さえつく七海に対して問う二人であった。
「どうぞ」
「言ってみせて」
「言うわ。二人共凄いプロポーションね」
「そうでしょ」
「だから言っていたのよ」
二人はここぞとばかりにポーズを取って言ってみせるのであった。
「水着は目立つものがいいって」

「まあこれでも似合うようにさせる自信はあるわよ」
「やっぱりいつも動いているからね」
七海はそれを二人のプロポーションの秘密と見ていた。そしてそれは当たっていた。

第七十七話　はじめてのサーフィンその二

「まあそうでしょうね」
「それもあって身体を動かしているし」
「私もだけれど。けれど何か私は」
ここでちらりと自分の両肩を見る。
「何か水泳って筋肉質になっちゃうのよね。特に肩が」
「それはあるわよね」
「けれど七海も」
今度は二人が七海に対して言うのであった。
「スタイルいいじゃない」
「ねえ」
「そう？」
だが七海は二人の言葉にあまり自信のない顔を見せるのであった。
「私は自分ではそうは思っていないけれど」
「全体のスタイルがいいのよ」
「引き締まっていてね」
二人はそう彼女に告げた。
「だから自信持ちなさいって」
「大丈夫よ」
「そうかしら。だといいけれど」
それでも自信に乏しそうな七海の顔であった。
「とにかくね」
「ええ」
「練習？」
二人は彼女の次の言葉をある程度読んでいた。
「場所はプール？」
「それとも海？」
「プールよ」

七海はそう二人に対して答えるのであった。
「そのイベントが行われる場所でね。どうかしら」
「わかったわ。じゃあそこで」
「いいと思うわ」
「そう言ってくれて何よりよ」
二人の言葉に今度は微笑むのであった。
「じゃあ早速ね。明日から」
「部活の掛け持ちでいいのよね」
「ええ」
特に反対することもなくパレアナに答えた。
「無理はしないでね」
「わかったわ。けれどそれじゃあ」
ここでパレアナは考える顔になった。左手の指を曲げて自分の口にあてて考えるポーズになっていた。意外と似合っている姿勢であった。
「朝練習しない？」
「朝？」
「ええ。バスケ部練習試合近くて」
まずはそこであった。
「それでね。夕方時間取れるかどうかわからなくて」
「朝もそうじゃないの？」
コゼットは朝にも突っ込んだ。
「それじゃあ。朝も大変でしょ」
「朝っていっても色々よ」
だがパレアナはコゼットにこう反論するのであった。
「色々って？」
「朝早く起きて波乗りの練習するとか」
こう言うのであった。
「それを考えているんだけれど」
「それ、多分無理よ」

だが七海がここで彼女に言うのであった。
「無理なの」
「朝プール空いていないのよ」
それが問題なのであった。七海自身困った顔をしている。
「だから水泳部も朝は」
「ランニングとか陸上競技なの？」
「そういうこと。悪いけれどね」
「困ったわね」
パレアナはそれを聞いて今度は腕を組んで困った顔になった。これでは夕方しか練習時間がない、そうなってしまうからだ。そこを気にしているのだ。

第七十七話　はじめてのサーフィンその三

「どうしたものかしら」
「なるようになるっていうけれど」
コゼットはそのお気楽ぶりをここで言う。
「今回はどうかしらねえ」
「なるかしら」
パレアナはそれには懐疑的であった。
「今度は」
「二人共何だかんだでサーフィンは初心者よねえ」
七海はそこをまた問うた。
「それじゃあそれは」
「まずいわよね」
「やっぱり」
「だからよ。ここは私考えてるんだけれど」
少し首を捻りながら二人に言うのであった。
「やっぱり練習するのは朝が一番いいわよね」
「私はね」
「実は私も」
何とコゼットもそれは同じであった。
「あれ、あんたもなの」
「実はテニス部で」
彼女はテニス部であった。
「後輩とコンビ組んでるんだけれど今彼女がえらくやる気で。こっちも付き合ってるのよ」
「そうだったの」
「だからね。私もできれば朝」
そう七海に告げた。
「御願いできるかしら」

「わかったわ。やっぱり朝よね」
七海はコゼットの言葉も受けて頷くのであった。
「プールの管理の先生に頼んでみるわ」
「悪いわね。手間かけて」
「いいのよ」
穏やかに笑って二人に言葉を返す。
「こっちもスカウトした身だしね。だから」
「何はともあれ練習しないとね」
「そうそう」
これは三人共同じ考えであった。
「そうじゃないと恥かくわよ」
「さもないとね」
「だからよ。まずは任せて」
七海はまた真面目な顔を二人に見せるのであった。そうしての言葉であった。
「プールのことは」
「わかったわ。それで何時行けばいいの？」
「また連絡するわ」
そこまではわからない。しかし何としても利用時間を手に入れるつもりであった。
「それでいいわよね」
「うん、まあそれでね」
「じゃあその時によろしくね」
二人はそう七海に応えてその場は別れた。それから二日後であった。
「ねえ」
「ああ、七海」
コゼットはこの時学校の帰りでハンバーガーショップにいた。そこでオオウミガラスのナゲットを食べていたのである。コーラも横にある。

「どうしたの？あのこと？」
「ええ、上手くいったわ」
七海の声は明るく笑っていた。
「明日から使わせてもらうわ」
「へえ、よかったわね」
コゼットはそれを聞いて笑顔になる。彼女もそろそろ練習がしたいと思っていたところだったのだ。だからそれを聴いて笑顔になったのである。
「じゃあ明日の朝から早速ね」
「ええ、御願いね」
「持って行くのは何？」
ここでコゼットはそれを尋ねた。
「水着だけじゃないわよね、やっぱり」
「水着だけでいいわ」
けれど七海はこう言ってきたのであった。
「水着だけでいいの？」
「ええ、それだけでいいのよ」
七海はそれだけでいいというのであった。
「他には何もいらないから」
「ボードはいいの？」
コゼットはそれを聞いたのであった。サーフィンは服だけでできるものではない。だからこれを聞くのであった。やはりこれがないと話にならない。
「それがないとやっぱり駄目よね」
「ええ、それはこっちにあるから」
七海はそうコゼットに答えた。
「だから安心して、そこはね」
「じゃあ。本当に何も持って来ないわよ」
コゼットはあえてここで念を押してきた。

第七十七話　はじめてのサーフィンその四

「水着以外は。それでいいっていうから」
「勿論よ。じゃあ明日待ってるからね」
「朝からね」
「パレアナにも話しておくわ」
七海はそれも忘れないのであった。
「だから明日来てくれるだけでいいから」
「わかったわ。朝からプールかあ」
コゼットは心なし嬉しそうであった。見れば顔がにこにことしている。
「それも悪くないわね」
「そうでしょ？実は私もね」
コゼットの声も機嫌のいいものであった。
「朝に泳ぐのも好きなのよ。特に」
「特に？」
「かなり飲んだ時なんか」
連合各国ではアルコールの制限年齢はかなり低い。だから皆もこうしておおっぴらに酒を飲んでいるのである。ただし酒を飲んで馬に乗るのは禁止されている。
「泳いでお酒を抜いているのよ」
「それってかなり危ないわよ」
コゼットはそれには賛成しない顔になった。
「お酒の抜き方としてはかなり」
「そうだったの」
「お酒を抜くのはスープよ」
コゼットはいつもそうしているようである。
「それを飲んでからゆっくりよ」
「それも知っているけれどね。私はやっぱり」

「冷たい水の中で泳ぐのね」
「ええ、効くわよ」
確かに効果があるのは間違いない。しかしどうにも賛成できないコゼットであった。
「お勧めはしないけれどね」
「当たり前よ。ひょっとしてあんた」
ここでコゼットはふと思うのであった。その思ったことを実際に口にする。
「これから飲むつもり？」
「駄目かしら」
「・・・・・駄目でしょ、普通に」
そう突っ込まずにはいられなかった。
「明日が初日なのに。流石にそれは」
「初日じゃなかったらいいの？」
「最初と最後が何でも肝心じゃない」
何故かお酒のことになると真面目になるコゼットと真面目にならない七海であった。
「やっぱりそこは」
「案外コゼットも厳しいのね」
「今日はとにかく謹んで」
念を押してきた。
「いいわね、それで」
「わかったわよ。じゃあとにかく明日の朝ね」
「ええ、それはわかったわ」
あらためて七海の言葉に頷くのであった。
「早速ね。はじめましょう」
「そういうことでね。それじゃあ」
「ちょっと待って」
コゼットは電話を切ろうとした七海を呼び止めるのであった。
「どうしたの？」

「一応言っておくけれど」
その言葉が少し剣呑な響きを持っていた。
「あまり飲み過ぎないようにね」
「何よ、信用していないっていうの？」
「あんたも二年Ｓ１組のメンバーでしょ」
信用していない理由はそこにあった。
「それでどうやって信用できるっていうのよ」
「厳しいわね、それはまた」
「厳しいも何もわかってるのよ」
彼女がこれからどうするのか。コゼットにははっきりとわかっているのであった。
「あんたのことが。だからよ」
「あら。言うわね」
「言うわよ」
ここでは何故か不敵な笑みになった。
「わかってるから」
「まあ飲むことは飲むわ」
結局のところそのつもりであった。今それを正直に答える七海であった。
「それでもね」
「大丈夫だっていうの？」
「そうよ。まあ任せておいて」
何故か異様に自信に満ちた様子であった。コゼットはその自信の根拠が一体何であるかわかりかねた。それでそれを問わずにはいられなかった。
「どうしてそう自信たっぷりなのよ」
「酔ったら次の日残らない方法があるからよ」
そうコゼットに答えてきた。
「ちゃんとね」
「お薬とか？」

「まあそれもあるけれど」
だが他の方法であるらしい。それも話していることからわかるのであった。
「他のやり方を知ってるからね」
「何かよくわからないけれど」
コゼットは話が見えなくなってきていた。電話の向こうで首を傾げるのであった。

第七十七話　はじめてのサーフィンその五

「とりあえず明日の朝は安心していていいのね」
「ええ、絶対にね」
また言う七海であった。
「それじゃあ。明日の朝ね」
「わかったわ。じゃあね」
こうして電話は切られた。だがコゼットはその電話を服のポケットに収めながら不安な顔になっていた。実際のところ七海の言ったことに安心できていなかったからだ。
「本当に大丈夫なのかしら」
そう思っていた。だがここではあえて七海の言ったことを信じるしかなかった。何しろ彼女が今回の言いだしっぺであったからだ。その彼女の言葉を受けるしかなかったのであった。
その次の日の朝。朝早く学校に来たコゼットとパレアナ。コゼットは昨日の七海との話をパレアナにも話しているのであった。
「それで。私不安なんだけれどね」
「飲んでるの、昨日」
「多分かなりよ」
こうも話す。
「七海も飲む時は相当飲むしね」
「そうね。彼女それでいて酔い残るタイプだし」
実はそうなのであった。だからパレアナも不安な顔になっていたのだ。
「本当に大丈夫かしら」
「一応本人の言葉では大丈夫らしいわ」
「何、その全然あてにならない言葉は」
どう見てもそうであった。パレアナは呆れた顔になった。
「今日プールに行って鍵空いていなかったら私怒るわよ」

「それは私もよ」
二人の考えはここでは同じであった。
「あんなタンカ切ったんだし」
「タンカを切るのはただなのよ」
パレアナの言葉は実に素っ気無いものであった。
「それで切っても切ったで何もしなくていいのよ」
「そうなの」
「そうよ。だから幾らでも切れるものなのよ」
実際のところそうであった。それで平気な顔で何度も切ってその度にそれとは全く異なる行動を取り続ける破廉恥な輩もいるのである。
「だからよ。それはあてにしないわ」
「そういうことなのね」
「そういうこと。さて」
そのプールが見えてきた。学校の森の中に。
「果たして空いているかどうか」
「それが問題ね」
「ここで聞くけど」
パレアナはプールの建物をを見ながらコゼットに尋ねてきた。ダークブラウンのその建物を。
「何？」
「空いていなかったらどうするの？」
「部活に行くわ」
まずはそれであった。
「それで教室に帰ってからね」
「ええ」
「七海に嫌味言ってお好み焼きでもおごってもらうわ」
「いいわね、それって」
パレアナもそれに乗ってきた。
「あのお好みさっちゃんでね。座布団ミックスをね」

「二枚ね」
かなり食べるコゼットであった。
「それとビール飲み放題プラスしてね」
「いいわね、やっぱりお好み焼きにはビールよね」
「そういうこと」
話は弾んできていた。やはり食べ物のことになると話は別なのであった。二人の上機嫌はさらに続き話を進めていくのであった。

第七十七話　はじめてのサーフィンその六

「まあ開いていなかったらだけれど」
「どうかしら」
「七海は真面目だけれどね」
クラスでもかなり真面目な方である。だからまあ開いているだろうとは思っているがそれでも食べ物のことなので話をしていたのである。どうしても食べ物の話になると勢いがついてしまう。これは彼女達も同じであり最早無意識のうちに進んでいるのだった。そしてそれを止めることが困難であるのもまた同じであったがそれも止まってしまい自然と話は本来進むべき方向へと進んでいた。この辺りも実にこのクラスの面々らしいことであった。いいか悪いかは別にしてこれがこのクラスであり彼女達もその中にいる。これは紛れもない事実であった。
「どうかしら」
「ほら、着いたわよ」
ここで二人はプールの玄関に辿り着いた。
「さあ、開いているかどうか」
「開いていなかったら」
「あら、遅かったわね」
ここで七海の声が聞こえてきた。
「もう着替えたわよ」
「ちぇっ、いたのね」
「これは残念」
「いたのねってちょっと」
七海が二人の前に出て来た。見ればもうサーフィン用の水着に着替えていた。こうした格好も実によく似合っていた。しかもやはり。
「どういうことよ」
「うっ、七海って」

「やっぱり」
二人はあらためて七海の胸に足を見ていた。大きい胸に奇麗な足であった。スタイルはかなりいい、しかも健康的である。サーフィン用の水着なのが勿体ないのではと思える位であった。体型が見事なまでにはっきりと出てしまう競泳水着や露出が多いビキニならそれこそ男が集まってきて大変だったであろう、そうしたことさえ思わせてしまうような見事なスタイルなのであった。女である彼女達から見てもそれは変わらなかった。
「スタイルいいわよねえ」
「そうよね。胸が特に」
二人はまじまじと七海の胸を見て言い合う。それは確かにかなりのものであった。
「私も自信はあるけれど」
「私も」
案外スタイルには自信のある二人であった。
「それでも七海の見たら」
「自信なくすわよね」
「何話してるのよ」
だが当人はそれには一切構わないのであった。
「さっきから」
「ああ、別に」
「何でもないわ」
「とにかくね。プールは開いているわよ」
七海はそれをまた二人に言うのであった。
「着替えて準備体操してね。すぐにかかって」
「わかったわよ。ところで」
「何よ」
プールの中に入ろうとするコゼットに応えるのであった。
「昨日飲んだのよね」
「ええ」

コゼットの言葉に応える。話は昨日の続きになっていた。
「まあそれなりにね」
「それなりってどれ位？」
「缶にして一ダースかしら」
少し首を捻って考えながら答えてきた。
「いえ、もうちょっとかしら」
「随分飲んだわね」
「まあそうね」
七海の方でもそれは否定しないのであった。

第七十七話　はじめてのサーフィンその七

「言われてみれば」
「それでお酒は全然残っていないの？」
コゼットは怪訝な顔で七海に問うのであった。
「ええ、全然」
「何やったのよ」
その怪訝な顔でまた七海に問うた。
「それだけ飲んで全然残っていないって」
「コツがあるのよ」
七海は明るく笑ってコゼットに答えてきた。
「コツ？」
「そうよ。飲んだ後でね」
明るく笑いながらまた言う。
「お風呂に入るのよ」
「お風呂に。じゃあ」
「ええ。そこでアルコールを抜くのよ」
秘密はそこであった。かなり危険なやり方であると言えた。コゼットもそれがわかっているから思わず顔を顰めるのであった。
「わかったかしら」
「そんなことして大丈夫なの？」
その顔で七海に問う。
「大変なことになるわよ、そんなことしたら」
「だから。それもコツがあるのよ」
また七海は答えた。
「要はタイミングよ」
「タイミングねえ」
「当然すぐに入ったら駄目よ」
またコゼットに答える。

「朝起きてから入るのよ」
「ああ、それだといいわね」
それにコゼットも頷くのであった。
「それだったら二日酔いのところでね。それが抜けていい感じになるわよね」
「そういうこと。わかったわね」
「ええ。今度私もやってみるわ」
「やってみるってあんたも」
七海はコゼットのその言葉に思わず苦笑いを浮かべた。
「ムスリムなのに」
「アッラーよ赦し給え」
ここで少しおとけて言ってみせる。
「これで飲めるから」
「豚肉も他のもそれでいいのよね」
「ギドニーパイも及第粥も大好きよ」
ギドニーパイは元々はドイツの料理で豚の内臓を使ったパイである。及第粥は豚の内臓を入れた中国の粥だ。何故及第かというとそれはこの粥が科挙の試験に合格する為に栄養をつけるようにと食べていたからである。内臓はかなり栄養があるのは昔から知られていたことなのだ。
「だからね」
「それ考えると意外とイスラムって柔軟なのね」
「少なくとも連合じゃそうよ」
はっきりとこう言う。
「サハラじゃ違うけれどね」
「サハラはまた別よね」
「そういうこと。まあ話はこれ位にして」
三人でプールに入るのであった。
「早速練習しましょう。ボードはあるのよね」
「一式全部揃ってるわよ」

七海はにこりと笑って二人に告げてきた。
「言った通りね」
「そこもしっかりしてるのね」
「当たり前よ。忘れるわけないじゃない」
七海はにこりと笑ってまた二人に告げた。
「わかったら。準備体操してはじめるわよ」
「ええ。サーフィンははじめてだけれど」
それでもだ。二人はやる気充分であった。
「楽しくやりましょう」
「三人でね」
「ええ、楽しくね」
そう言い合ってサーフィンの練習をはじめるのであった。練習は無事進み顔見せの日になるのであった。三人は好調のまま練習を行っていたのであった。

はじめてのサーフィン　　完

２００８・１・１８

第七十八話　カレー蘊蓄その一

カレー蘊蓄

サーフィンの練習は無事進み顔見せの前日まで行われた。そのいつもの朝の練習が終わり私服に着替えて教室に向かう三人であった。
彼女達は並んで歩いている。そこでふと七海が二人に言ってきた。
「明日ね」
「そうね」
最初に応えたのはパレアナであった。
「何かあっという間だったわね」
「そうね。けれど二人共」
今度は話にコゼットも入れてきた。
「随分上手いわね」
「上手くなったじゃないの」
「ええ、上手いじゃない」
彼女が言うのはこうであった。
「私の予想以上だったわよ」
「嫌ね、褒め過ぎよ」
パレアナは彼女のその言葉に思わず苦笑いになる。顔も真っ赤だ。
「そんなこと言われたら恥ずかしいわよ」
「そうなの？」
だがコゼットはまんざらではないといった顔であった。
「私は別にいいけれど」
「いいってあんた」
パレアナはコゼットのそのまんざらでもないといった顔を見て言うのであった。
「能天気っていうか。何ていうか」
「褒められたら乗るタイプだから」
実はそうなのであった。

「どんどん褒めてもらいたい位よ」
「全く。単純っていうか」
パレアナは少し呆れたままコゼットに言葉を続ける。
「あんたクール系なのにそうなのね」
「駄目？」
「案外複雑なのね」
パレアナはまた言う。
「あんたも」
「そう？私は私よ」
だがコゼットは平気な顔のままであった。
「何もおかしなところはないわよ」
「まあそうだけれど。ただね」
「ただ？」
「やっぱりうちのクラスの一員よねえ」
パレアナもそうだが何故かその通りだと言える言葉であった。
「個性が際立ってるっていうか」
「個性の二年Ｓ１組じゃない」
コゼットのあっさりとした様子は変わらない。
「そういうパレアナだって結構」
「そうかしら」
「自分では自覚がないものよ」
コゼットはこうパレアナに言葉を返してみせた。
「案外ね」
「よくそう言うけれどね」
「パレアナだってそうよ。ところで」
「ええ。何？」
「お腹空かない？」
コゼットは今度はこうパレアナに尋ねてきたのであった。
「何か」
「あっ、そういえば」

言われてみればそうである。パレアナも自身の空腹を感じていた。
「朝御飯食べたばっかりなのに」
「動いたからね」
七海が言ってきた。
「今日は特にね」
「それでかしら」
「そうだと思うわ。それじゃあ」
ここでコゼットは自分の鞄から白い何かを出してきたのであった。
「何、それ」
「サンドイッチよ」
見れば卵とハンバーグのサンドイッチである。
「いつも二時間目の後に食べているんだけれどね」
「今日は特別ってわけね」
「ええ。腹が減っては戦ができぬ」
昔から言われている言葉だ。何しろ人間は食べないと生きてはいけないのだから。これは何時になろうと変わらない絶対普遍なものである。
「だからいつも持って来ているのよ」
「そうだったの」
「また買えばいいしね」
「そうね。じゃあ私も」
パレアナも周りを見回して言う。
「何か買おうかしら」
「あれなんかどう？」
七海がここで近くにあった自動販売機コーナーを指差す。見ればそこにはジュース以外にも色々なものが置かれていた。

第七十八話　カレー蓄積その二

「ホットドックかハンバーガーでも」
「そうね。じゃあそれで」
「私はカップヌードルにしておくわ」
「カップヌードルにするの」
「ええ、カレーね」
七海はにこりと笑っていた。
「それにしておくわ」
「そういえば七海ってさ」
コゼットが自分のハンバーグサンドを食べながら七海に声をかけてきた。
「何？」
「カレー好きよね」
言うのはそこであった。
「前から見ていたら結構食べてるよね」
「ええ、好きよ」
七海自身もそれを認めてきた。
「だってね。子供の頃からずっと食べてきたし」
「日本人らしいわね」
「日本人らしい？」
「ええ。だってそうじゃない」
コゼットはここで七海にあえて日本人らしいと言ったがそれにはれっきとした根拠があった。それは日本人にとっては意外なものであった。
「日本人って何かあればカレー食べるし」
「それってマウリア人じゃないの？」
七海だけでなく日本人にとってはこう感じるものである。彼等にしてみればカレーはあくまでマウリアの料理でありまたそんなに食

べているという意識もあまりない。
「カレーっていえば」
「何言ってるのよ」
今度はパレアナがコゼットに言ってきた。
「日本人が一番カレーを食べてるわよ」
「そうよね」
コゼットもそれに応えて頷く。
「何だかんだで」
「まあ私達も結構食べるけれど」
実際のところカレーは連合全体に広まっている料理だ。しかしそれは実を言えばマウリア人、かつてはインド人と呼ばれていた彼等が広めたものではなく日本人が広めたものなのである。しかし彼等はこれに関しても自覚がないのである。どうしても持てないでいるのだ。
「それでも日本人程じゃないわよね」
「そうよね」
二人はまた言い合うのだった。
「一週間に一回は絶対にカレーを食べてるし」
「そうよね」
「そんなに食べてるかしら」
ここでも七海には自覚がないのであった。
「私も」
「カレーライス一週間に一回は絶対に食べてるわよ」
「そうよ」
そんな彼女にまた二人が突っ込みを入れる。
「下手したら二回よ」
「少なくともカレーうどんとかそのカレーヌードル、あとカレーパンを入れたら」
「絶対に二回はいってるわよね」
「ううん」

そこまで言われて首を捻る七海であった。
「どうもそこまでは」
「彰子ちゃんも結構カレー食べるし」
「妹さんとね」
「何かカレーばっかりね」
話が黄色くなってきているように感じる。カレー色に。
「何か口の中が辛くなってきたわ」
「カレーのスパイスよね」
「絶対ね」
「ええ、そうよ」
七海はそれを否定できなかった。既に自動販売機でカップヌードルを注文してそこにお湯を入れていた。パレアナはハンバーガーを買って食べている。

第七十八話　カレー薀蓄その三

「辛口がいいのよ、私は」
「彰子ちゃんは甘口だったっけ」
「確かね」
「甘口は。どうもね」
七海の顔が微妙なものになるのであった。
「好きにはなれないわ」
「甘いの駄目？」
「カレーはね」
これは七海のこだわりであった。
「どうにもこうにも」
「何かよくわからないこだわりね」
「そうよね」
日本人ではない二人にとってみればそうなのだ。何故か日本人はカレーの甘さや辛さ対して異様なまでにこだわりを見せるのだ。
「カレーの甘口辛口って」
「そんなにこだわるものかしら」
「こだわるわよ」
七海の言葉は日本人としての言葉であった。
「絶対にね。譲れないものだってあるし」
「何かねえ」
「わからないわね」
二人にはどうしても理解できないことであった。
「それって」
「そうよね。何でそこまでこだわるのか」
「カレーよ」
七海の今度の言葉はこうであった。
「カレーが甘いか辛いかっていうのはそれだけで大きな問題なのよ」

「そうかしら」
「さあ」
まだ二人には理解しかねるものがあった。というよりかは全く理解できなかった。
「それって」
「そうよね。何が何だか」
「まあわからないならわからないでいいけれどね」
「ええ。それじゃあまあとにかく」
「できたわよ」
ここでカップヌードルができた。七海はそのヌードルの蓋を九分程度剥がしてプラスチックの透明なフォークで食べだしたのであった。
「どう、美味しい？」
「ええ」
パレアナの問いに答える。答えながらヌードルをすすっている。
「やっぱりカップヌードルはカレーよね」
「カレーから離れないわよねえ」
「本当」
二人もいささか呆れ気味であった。
「何か話がそっから離れないっていうのも」
「どうしたものかしら」
「カレーは身体にもいいわよ」
それでも七海はカレーから離れないのであった。
「お肉もお野菜も入れられるし」
「そういえばそうね」
「シチューと同じね」
「しかもシチューと違って」
話は今度はカレー賛美に変わってきていた。
「御飯にもパンにもかけたり漬けられるし。それで食べられるじゃない」

「そういえばシチューは御飯にはね」
「かけるのに無理があるわね」
そういうことであった。シチューは元々洋食であり白い御飯には合わないところがある。おかずにはいいが少なくとも御飯にかけるには無理があるのははっきりとしている。
「だからよ。その点カレーは」
「違うって言いたいのね」
「私御飯の方が好きだしね」
今度は話がそちらにも行った。
「だから余計にいいのよ」
「それはいいけれどさ」
「けれど」
「今度は何？」
「まさかよ」
「ねえ」
二人の言葉は念を押すようなものになってきていた。
「あんたそのヌードルのスープをまさか」
「御飯になんてことは」
「それはしないわ」
それはないという。
「だって御飯にかけるにはあまりにも薄いじゃない」
「じゃあ濃かったら？」
「さあ」
わからないと。そうした返事であった。
「どうかしらね」
「何かねえ」
「それはやっぱり」
「邪道だって言いたいの？」
「その通り」
パレアナが腕を組んで言い切ってきた。

「流石にそれはね」
「何かお金のない大学生がしそうではあるけれど」
「幾ら私でもそれはないわよ」
彼女もそれは否定する。
「確かに濃いとわからないのは事実だけれどね」
「じゃあ危ないじゃない」
「ねえ」
コゼットがパレアナの言葉に頷いた。

第七十八話　カレー蓄積その四

「何か胸焼けしてきたし」
「カレーの話ばかりしていたら」
「そうなの。まあ食べ終わったし」
食べるのは早い。もうカップヌードルを食べ終えてスープを再生ゴミ箱に捨てていた。生ゴミ用ですぐにスープも蒸発するようにできているのだ。これもまた科学技術の結果である。それができるだけ無駄をなくすように、そして汚すのを最低限に抑えているのである。
「行きましょう」
「そうね」
「もういい時間だし」
時計を見ればそうであった。今行けば丁度ホームルームの時間であった。時間的には本当にいい感じだった。三人共納得できる時間であった。
「行きましょう」
「明日ね」
「それでお昼はどうするの？」
七海の話はもうそこに行っていた。話の中心はやはりそこにある。人間は食べないと生きていくことはできない、それは何が起ころうと変わりはしない絶対の定義である。しかし彼女の言葉はそれを超えたものがあった。簡単に言ってしまえば食い意地というやつである。これに勝るものはこの世には存在しない。これもまた何が起ころうと変わりはしない絶対の定義である。
「お昼は」
「食堂ね」
「そうね」
二人は今日はそのつもりであった。

「何がいいかしら」
「中華風レストランに行く？」
巨大な学園なので中に様々な店がある。中華風レストランだけでなく他にも様々な料理店があるのである。一体どれだけあるかというと少し見回っただけではわからない程である。
「今日は」
「いいわね、それって」
パレアナはコゼットのその提案に頷いた。
「あんた豚も食べるのよね」
「食べる前にアッラーに謝ってね」
「それでも食べるの」
「あくまで目標だから」
イスラムの決まりは実際はそうした感じのものが多いのだ。占いにしろ禁止していながら占星術が発達しているし酒はサハラでもよく飲まれている。あくまで節度ということである。
「だからいいのよ」
「じゃあ酢豚もいいわね」
「そうね。じゃあそれと炒飯ね」
「あっ、いい感じ」
昼食としては最高の組み合わせてあると言えた。日本でも昔から中華料理の組み合わせとしてはポピュラーなものである。
「それにラーメンをつけて」
「いいわね」
「あっ、ラーメンなの」
七海は今度はラーメンという言葉に反応してきた。
「お昼にはいいわね」
「あんたラーメンも好きなの」
「醤油味が好きよ」
どうやら本当に好きらしい。あえてここで醤油味というところまで指定してきたからだ。

「ラーメンはね」
「ラーメンも好きなの」
「何か定番みたいな」
「けれど実は」
しかしここで顔が曇るのであった。
「酢豚はあまり」
「あれ、嫌い？」
「酢豚は駄目なの」
「豚肉は好きよ」
それ自体は構わないらしい。それを自分でも告げた。

第七十八話　カレー蓄その五

「唐揚げにしても焼いてもね」
「豚はねえ」
「何処を食べてもね」
連合では豚肉はそれこそ骨まで食べられる。捨てるところがないとさえ言われている。なお連合では牛も鶏も羊も恐竜も何もかも内臓や耳や尻尾はおろか骨まで食べられているのであるが。あらゆる動物のあらゆる部分を食べる、それが連合各国なのである。
「いいからね」
「それでも酢豚は駄目なの」
「味付けが好きじゃないのよ」
七海が酢豚を嫌う理由はそこであった。
「どうにもこうにもね」
「ああ、酢が嫌いなのね」
「それで」
二人はここまで聞いて七海がどうして酢豚が嫌いなのかわかった。
「そういうこと。私は酢豚の代わりに焼き餃子にしたいわ」
「餃子かあ」
「それもいいわね」
二人はそれを聞いてまんざらでもないようであった。餃子もまた好きなようである。
「何かお昼が楽しみになってきたわね」
「そうね」
「何はともあれよ」
七海はここで笑う。そうして二人で言うのであった。
「今日のお昼はたっぷり食べましょう」
「そうね。明日に備えて」
「力をつけないといけないしね」

「そういうこと。まずは食べないと」
七海の笑みはにこりとしたものであった。
「どうしようもないから」
「そうね。けれど」
パレアナはふと呟いた。
「何か私達って今日さ」
「ええ」
「どうしたの？」
コゼットと七海が彼女に問う。
「食べ物の話ばかりしているような」
「うっ、そういえば」
「プールが終わってからずっと」
「特にカレーね」
パレアナは七海を見てまたカレーの話をするのであった。
「まあお昼もカレーって言わないだけましだけれど」
「じゃあカレーラーメンは？」
「そういうのもあるの」
かえってびっくりであった。そんなものもあるのかと。
「あるわよ。カレーうどんだってあるじゃない」
「それはまあ知ってるけれど」
「カレーラーメンなんて」
「カレースパゲティもあるわよ」
それだけではないらしい。
「他にもカレー鍋とか」
「何かまた胸焼けしそう」
「カレーばっかりじゃない」
「だからカレーはいいのよ」
またこういう話になる。
「どんなものにも合うから」
「合う？」

「個性が強過ぎて全部その味になるわよね」
何十種類のスパイスがそうさせる。それがカレーである。だから使い難い筈なのであるがそれでも日本人、少なくとも七海にとっては違うらしい。
「そうかしら」
「そうだけれど」
「まあそれは置いておいて」
いい加減カレーの話ばかりなので二人は話を変えてきた。
「教室に行きましょう」
「そうそう。遅れるわよ」
「そうね。それじゃあ」
七海もそれに乗るのであった。話は何とか収まってきた。
「行きましょう」
「ええ」
「それじゃあね」
本番を次の日に控えたこの日も三人はいつもの三人であった。決して緊張してはいなかった。これが非常によい方向に向かうことになるのであった。

カレー薀蓄　　完

２００８・１・２２

第七十九話　本番その一

本番

遂にこの日になった。女子サーフィン部の顔見世である。
「いよいよだけれど」
「何か全然緊張しないわね」
パレアナとコゼットはプールの更衣室でそう話し合っていた。もう既に水着に着替えて更衣室の椅子に向かい合って座って話をしている。
「今まで結構練習してきたしね」
「そうね」
「その度胸を買ったのよ」
ここで七海が二人に言ってきた。見れば彼女も既に水着に着替えている。
「あんた達のその度胸をね」
「度胸を？」
「そういうこと」
二人のところまで来てにこりと笑ってみせてきた。
「二人共たくさんの人達の前で何かをするのは慣れてるわよね」
「まあね」
「試合でも何でも」
パレアナは女子バスケ部、コゼットは女子テニス部である。大会経験も豊富だ。だから全然平気だったのである。そのうえで度胸も備えているのだ。
「だからよ。スカウトしたのは」
「ふうん」
「有り難いわね」
二人はその言葉を受けてにこりと微笑んだ。
「頼りにしてもらってるなんてね」

「それじゃあ御期待に添えますか」
「それも頼りにしてるわよ」
七海は今の二人の言葉も受けて微笑んだ。
「是非ね」
「ええ」
「ところでさ」
ここでコゼットが七海に言ってきた。
「何？」
「その女子サーフィン部だけれど」
二人が今協力している部活である。他ならぬ。
「部員はもういるのよね」
「ええ、いるわよ」
こうコゼットの質問に答えてきた。
「部長入れて五人ね」
「いるんだ」
「しかも五人って」
今度はパレアナがふと気付いた。
「あれじゃない。特撮ものでよくあるメンバーの数よね」
「そっちに話がいくのね」
七海はパレアナの言葉にくすりとした笑みになった。
「まあ五人っていったらね」
「水着の色もそれぞれそうした色だったら笑うわね」
「何でわかったの？」
七海はコゼットの今の言葉には思わず突っ込みを入れた。
「それが」
「それがって」
「本当だったの」
二人は七海の言葉に呆然となった。
「じゃあ部長さんは赤で」
「ええ」

最早伝統になっていた。リーダーは赤、一体誰が決めたのかわからないが少なくともそうなっているのである。二十世紀からだ。
「メンバーの他の色は」
「私達が紫と橙で七海が銀だから」
二人は今の自分達の水着の色を見ながら話をする。
「青、黒、黄、ピンクってところかしら」
「その通りよ」
色まで同じであった。
「正解よ」
「ううん、何だか」
「ここまで予想通りだとね」
「けれど別に悪いことじゃないでしょ？」
七海はあらためて二人に問うた。
「戦隊カラーでも」
「まあそうだけれどね」
「かえってわかりやすいし」
二人もそれは否定しない。
「それでさ」
「ええ」
パレアナはあらためて七海に尋ねる。七海もそれに応えて彼女に顔を向ける。

第七十九話　本番その二

「今度はどうしたの？」
「その部長さんだけれど」
話は何故か今まで為されなかったことに対して向かう。
「どんな人なの？」
「私達と同じ二年よ」
「あれ、同級生なの」
「ええ、そうよ」
七海はそうパレアナに答えた。
「意外だった？」
「意外っていうかな」
パレアナは彼女の言葉に少し首を捻ってから答えた。
「何かそれは思いもしなかったわ」
「そうなの」
「ええ。てっきり三年の人だと思っていたから」
部活の部長やキャプテンは三年である。これは学校の部活なら当たり前のことである。パレアナも今回もそうだと考えていたのである。
「違うんだ」
「三年生の女の人でサーフィンやってる人いないらしいのよ」
「ふうん」
これもまた初耳であった。
「一人も？」
「そう、一人も」
七海はまた答える。
「少なくとも部活でやろうって人はおられなかったのよ」
「じゃあ仕方ないわね」
「そういうことなのよ。だから彼女が部長になったのよ」

パレアナだけでなくコゼットに対しても話していた。
「わかってくれたかしら」
「ええ。それでね」
まだ聞くことがあった。パレアナはさらに七海に尋ねる。
「彼女の名前何ていうの？」
「ティコっていうのよ」
七海はまずは名前を答えてきた。
「ティコ＝ウルブズっていうのよ」
「ティコね」
「そう。水産科の娘よ」
「水産科だったの」
「ええ」
八条学園には普通科の他にも商業科や工業科、農業科、その水産科、看護科等と様々な学部がある。巨大なだけはあるのだ。
「そうなのよ。そこの二年生ってわけ」
「それでどんな娘なの？」
今度はコゼットが七海に尋ねる。
「今日ここに来ているのよね」
「ええ、もうすぐ来ると思うわ」
七海がそう言うと早速更衣室の扉が開いた。そうして黒い髪と瞳を持つ白人の女の子がやって来た。白人だがアジア系の血も入っている感じだった。背はあまり高くなく均整の取れた身体つきをしている。黒い目が大きくそれがまず目に入る。
「あっ、彼女よ」
「彼女なんだ」
「そうよ。ティコ」
七海は今度はその彼女の名前を呼んだ。
「この二人よ。いつも話している」
「助っ人の二人ね」
「そうなのよ、この二人」

にこりと笑ってティコに話している。
「何かやっと紹介できるわね」
「そうね。はじめまして」
今度はティコがにこりと笑う。その顔で二人を見てきたのであった。
「ティコ＝ウルブズよ」
「はじめまして。パレアナ＝ホグマンよ」
「コゼット＝ミナワ」
二人もそれに応えて名乗った。
「水産科で国籍はペルシャよ」
「ペルシャ人なの」
「ええ、そうなのよ」
にこりとした笑みのままでパレアナの問いに答えた。
「あまりそうは見えないってよく言われるけれど」
「それは別に」
「ねえ」
コゼットもそうは思わなかった。
「私だってエチオピア人には見えないって時々言われるし」
「私も。イロコイ人？って言われたり。ちなみに私はインドネシアよ」
「エチオピアにインドネシアなの」
「そうなの」
「宜しくね」
何気にかなり多国籍な状況になっていた。これもまた非常に連合らしいと言えるしそれと共に八条学園らしいと言えるものであった。

第七十九話　本番その三

「それでいよいよ今日だけれど」
「そうね」
「初対面だけれど」
二人は笑ってティコの言葉に応える。ティコはロッカーの一つを開けてそこに自分の荷物を入れている。それから服を脱いで着替えだしていた。
「着替えながらで御免なさいね」
「ああ、それはいいわよ」
「更衣室なんだし」
「有り難う。じゃあ今日は御願いね」
「わかってるわ」
「初心者で悪いけれど」
三人は話を続ける。その横では七海がにこにこと笑って三人の話を見守っている。
「それでもいいわよね」
「大歓迎よ」
ティコはここでも笑うのだった。
「そんなの関係ないわよ」
「そう言ってくれると有り難いわ」
「それに話は聞いているし」
ティコはこうも言うのだった。
「話って？」
「毎朝練習していたんでしょ、二人共」
「それ知ってるってことは」
「あんた」
二人はその話の流れから七海を見た。彼女はここでもにこにこと笑っていた。

「そういうこと。ちゃんと話しておいたのよ」
「そうだったの」
「それで知っていたんだ」
「バスケ部とテニス部のエースってころもね」
それも知っているティコであった。いい意味でも悪い意味でも有名人の多いクラスであるが二人の運動神経はよく知られていたのである。
「聞いているわよ」
「まあバスケとサーフィンは関係ないけれどね」
「テニスも」
二人はこう言葉を返した。
「それでもやってみたら楽しいし」
「楽しめたわ」
「そうでしょ。サーフィンって病み付きになるのよ」
ティコの言葉は続く。
「私も最初は怖かったけれどね」
「怖かったの」
七海がそれを聞いて彼女に声をかけてきた。
「初耳よ、それ」
「あれ、言わなかったっけ」
ティコはそう七海に言葉を返した。
「最初は泳げもしなかったって。言っていたけれど」
「かなづちだったの」
これも七海にとっては驚きだった。どうやら彼女は最初からできるタイプではないらしい。それもまた二人にとっては好感の持てるものであった。
「それがね。やっているうちにできるようになったのよ」
「そうだったの」
「ええ。それでこの学校に入ってサーフィン部に入ってね」
男子サーフィン部は最初からあるのだ。彼女はそこに入ったので

ある。
「マネージャーしながらやっていて人集めてこうやって」
「ふうん」
「それで遂に今日ってわけなのよ」
ここでまた笑うのであった。
「苦労もあったけれど遂にって感じね」
「じゃあその苦労実らせないとね」
「そうね」
パレアナとコゼットは笑顔で彼女に言う。
「じゃあ行きましょう」
「時間よ」
「ええ。わかったわ」
ティコは二人の言葉に頷く。彼女が頷くと二人は立ち上がった。
「よし、行きましょう」
「ええ」
ティコは今度は七海の言葉に頷いた。
「いよいよって感じよね」
「そういうこと。行くわよ」
「了解」
こうしていよいよ顔見世であった。観衆に挨拶をしてそれから実演に入る。まずは他の部員達と七海、パレアナとコゼットが波に乗った。彼女達は無事実演を終えた。
「上手くいったわね」
「お互いね」
実演を終えたコゼットを七海とパレアナが迎える。二人と手を合わせる。
「朝練のかいがあったわよね」
「そうよね」
続いてパレアナと言葉を交えるのであった。
「上手くいったわね」

「思ったより軽く動けたっていうか」
「やっぱり練習していたからよ」
その二人に七海が言ってきた。
「身体を動かしていると憶えてくれるじゃない」
「ええ」
「確かにね」
二人は彼女のその言葉に頷く。
「それで練習してもらっていたのよ」
「まあそうでしょうね」
「それはね」
二人もわかっていることであった。伊達にそれぞれの部活エースになっているわけではない。
「けれど。予想以上だったわ」
「そんなに？」
「それもかなりね」
こう二人に言う。
「おかげでほら」
観客席を指差す。まだ拍手が鳴り響いている。砂浜みたいになっている途方もなく大きなプールと向かい合うようにして観客席が上にある。そこから拍手が聞こえている。
「皆満足してくれているし」
「そうみたいね」
「この拍手がいいわよね」
「そういうこと。さて後は」
いよいよラストであった。
「ティコだけれど」
「いけるわよね」
「勿論よ」
七海の返事は有無を言わせない程確かなものであった。

第七十九話　本番その四

「だって彼女が一番の経験者だしね」
「そう、やっぱり」
「じゃあ安心していいのね」
「安心以上かもね」
七海の声も顔も楽しそうに笑っていた。
「ひょっとしたらね」
「ふうん、そんなに」
「じゃあ見せてもらうわ」
二人は彼女の言葉に頷いて自分達も観客になる。そうしてティコの演技を見守ることにした。その彼女がサーフボードを手にプールサイドに現われた。
「さて、はじまるわよ」
「遂にって感じね」
「さて、どうなるやら」
三人は期待しつつ見守る。ティコは観客達の歓声を聞きながらプールの中に入る。まずはボードに乗って手で漕ぐだけだ。しかしそこに。
「えっ！？」
「何よあれ」
パレアナもコゼットも声をあげずにはいられなかった。何とプールに。
「ちょっと七海！」
「あれはないでしょ！」
二人はそう七海に対して叫ぶ。
「何よあの波」
「何メートルあるのよ」
見れば二十メートルはある。とんでもない波だった。

「ビッグウェーブよ」
「ビッグウェーブ」
「そうよ」
七海はこうパレアナに答えた。
「それがあの波の名前よ。このプールで一番高い波なのよ」
「あれが」
「あんなのを作り出せるプールなんて」
「多分ここだけでしょうね」
答える七海の言葉は何時しか緊張したものになっていた。
「私も。話は聞いていたけれど見たのははじめてよ」
「そうだったの」
「けれど。やれるわ」
それでも七海はティコを見て言う。既に彼女はサーフボードに乗っている。
「ティコならね」
「信頼しているのね」
「もちろんよ」
ここでも言葉に迷いがない。
「だって。ティコだから」
「それだけで充分ってことね」
「そういうこと。だから」
コゼットに応えながら言う。
「見ていましょう。彼女のサーフィンを」
「腹を括ってね」
「そうさせてもらうわ」
二人も七海の言葉に頷いた。そうしてティコを見るのであった。
既にティコは波に乗っている。その波の間を滑っていた。
「むっ！？あれは」
「波の輪の中を」
見ればそうであった。波が降りるその時にできる波と水面の間。

ティコはそこをくぐって通っているのであった。
「あんなことをできるなんて」
「やっぱり噂通りね」
「そうでしょ。けれどこれで終わりじゃないわよ」
「まだあるのね」
「ええ。ほら」
プールを見るように言う。すると。
「なっ、また!?」
「波が!!」
また波が来ていた。ビッグウェーブが。
「また来るなんて!!」
「しかも同じ大きさのが!!」
「今度は。また別のを見せてくれるわよ」
七海はまた言うのだった。
「またなのね」
「そう、今度も見ものよ」
七海はそう言って笑っていた。見るのを楽しんでいる笑みであった。
「凄いのが見られるからね」
「今のよりもね」
「そういうこと。ほら」
「んっ!?」
「ってちょっと!」
ティコはボードに乗ったまま跳んでいた。そのまま波よりも高く跳んでいた。
「あんなに跳べるなんて」
「はじめて見たわよ」
「これで終わりじゃないわよ」
七海がまた言ってきた。
「というよりかこれから本番だから」

「これからなのね」
「ええ、ほら」
波の一番上に乗った。そこから。
その波の上を進んでいく。降りていく波の上を。まるで何でもないように滑っていくのであった。

第七十九話　本番その五

「これね」
「ええ」
七海は今度はコゼットに答えた。
「凄いでしょ」
「さっきのも凄かったけれどね」
コゼットは真剣な顔でティコの動きを見ていた。声には感嘆の色もあった。
「今度のも。かなり」
「最初にね。これを見たのよ」
七海は言う。
「彼女のこれをね。それで絶対にいけると思ったのよ」
「この娘なら」
「そういうこと。何だって最初は」
「スタートが一番大変なのよね」
パレアナの言葉であった。
「そういうことよね」
「ええ。けれど彼女ならいけると思ったのよ」
七海は確かな声を出していた。
「絶対にね。それに」
「それに？」
「技だけじゃなかったから」
彼女がティコに見ていたのはそれだけではなかったのだった。
「技だけじゃない。というと？」
「他には？」
「まずは体よ」
こう二人に答えた。
「凄い運動神経に丈夫な身体だし」

「丈夫ね」
「幾ら技が凄くてもね」
語る七海の身体が微妙なものになっていた。
「体が丈夫じゃなかったら。駄目だし」
「って言っても」
「七海は丈夫じゃない」
コゼットもパレアナもそこに突っ込みを入れる。七海は文句なしに健康な少女である。何しろ高校生活で今まで病気になったことがない程である。
「それでどうして」
「そんなに羨ましそうなの？」
「実はね」
その二人の問いに応えて言う七海であった。
「私子供の頃は身体が弱かったのよ」
「へっ！？」
「そうだったの！？」
「ええ。何とか鍛えて強くなったのよ」
昔を思い出すその顔が少し辛いものが混じっていた。どうやら彼女も色々あったようである。それを窺わせる顔であったのは事実だ。
「だから。彼女の健康さがわかるのよ」
「そうだったの」
「それで」
「そういうこと。それで」
話はまだ続いていた。七海が見ているのはもう一つあった。
「性格も。真面目で前向きで」
「心ね」
「それなのよ」
パレアナに答えた。
「彼女はそれもしっかりしていたし。だから」
「協力したのね」

「友達として」
「いい娘よ」
にこりと笑って二人に答えた。
「本当にね。だから」
その話の間にもティコの波乗りは続いている。大きく波の上でジャンプしていた。
「おおっ！！」
「すげえっ！！」
皆それを見て思わず声をあげる。ジャンプしながらサーフボードごと激しく宙返りする。最早神業の域に達している見事な動きであった。
「うわ・・・・・・」
「これって・・・・・・」
パレアナもコゼットも今の動きには言葉を失う。
「その三つがないとあれはできないわよね」
「え、ええ」
「確かに」
二人の目の前で今波の上に降り立つ。バランスは全く崩れるところがない。
「その通りよ」７０
「ここまでは。ちょっとやそっとじゃ」
「やっぱり。決め手は心だったけれど」
七海はポツリとした感じで言ってきた。
「彼女のね」
「心がなのね」
「確かに他の二つも大切よ」
それは自分でも認める。
「けれど。心がないとやっぱり」
「駄目だったの」
「ええ。多分、そうね」

首を捻って考えながらの言葉になっていた。
「心が凄くよかったからだと思うわ」
「彼女が？」
「そう、彼女が」
また言う。
「だから。私だってね」
「そうだったの」
「心で」
「多分。心がしっかりしていれば後の二つも結構ついてくるのよ」
「それはね」
「あるわね」
二人もそれには頷く。
「要はやる気ってことよね」
「そういうことよ。彼女にはそのやる気があるから」
今演技は終わっていた。プールの中は拍手の中に包まれている。
「だから。協力させてもらったのよ」
「させてもらったのね」
パレアナは七海の言葉の微妙な特徴に気付いた。そこに突っ込みを入れる。

第七十九話　本番その六

「あんたが」
「そうよ。させてもらったのよ」
そして七海も自分でそれに気付いている。パレアナのその問いにこくりと頷いたのがその証拠であった。
「させてもらってよかったわ」
「私もね」
「私も」
そしてそれには二人も同意するのであった。
「最初は何かと思ったけれど」
「こうして最後までやってみるとね。よかったわ」
「有り難う」
七海はその二人の言葉を受けてにこりと笑うのであった。
「そう言ってもらったら私も嬉しいわ」
「彼女ならやれるわ」
「そうね、絶対に」
二人はずっとティコを見ている。ティコは満面に笑みを浮かべて観客達の歓声を受けている。誰が見てもすぐにわかる鮮やかな成功であった。
「これで八条学園高等部女子サーフィン部の立ち上げはなったわね」
「そうね」
「これでね」
二人はまた七海の言葉に頷いた。
「万全ね。見事にね」
「それじゃあ。私達は」
「お疲れ様」
七海は二人に顔を向けてにこりと笑ってみせてきた。
「後でラーメンでもおごるわ」

「何言ってるのよ」
「冗談ポイよ」
だが二人はここで七海にこう言葉を返すのであった。表情もそうした顔になっていた。
「？ラーメンいらないの？だったらカツ丼でも」
「ラーメンでもいいわよ」
「地獄極楽ラーメンね」
八条学園の中華レストランの一つ『香港飯店』の名物料理だ。十人前の量を誇りそれを完全に食べられれば記念撮影させてもらえるというものである。ただし食べ終えることができないと食べ終えた場合の普通のラーメン一杯の値段が十杯分になるというリスクもあるラーメンである。
「それを頼むわ」
「私も」
「結局食べるの」
七海はコゼットとパレアナの言葉に突っ込みを入れるが話はそこではなかった。
「だから。それじゃなくて」
「話はサーフィンよ」
「ああ、そっちなの」
話は本格的にそちらに移った。
「そういうこと。食べるのは食べるので」
「御願いするけれど」
「地獄極楽ラーメンもいいけれどちゃんと食べ終えてね」
七海はしっかりと二人にそこは注文する。
「いいわね」
「わかってるわよ。とにかくね」
「ええ」
「サーフィンはね」
「またやらせてもらうわ」

二人が言うのはそこであった。
「またやるの」
「だって。面白かったし」
「ねえ」
二人は顔を見合わせてにこりとした笑みになっていた。
「だから是非共」
「今の部活がメインだけれど」
「何かそれを聞いたら私も」
七海もにこりとした笑みになって言うのであった。
「もっとしたくなったわ」
「そうよね」
「サーフィンもいいものよね」
「ええ。はじめたばかりではじまったばかりだけれど」
七海はまた二人に応えていた。
「これからもやっていきたいわね」
「そういうことね。じゃあまずは」
「体力をつける為に」
「ラーメンなのね」
話は結局のところ食べ物に落ち着くのであった。やはりそこであった。
「地獄極楽ラーメン」
「いくわよ」
「じゃあ私もそれにしようかしら」
七海もそれに乗るのであった。
「どうせだし」
「あんたラーメン好きよね」
「正直嫌いじゃないわ」
そうコゼットに答える。
「おうどんも焼きそばもね」
「麺類好きなのね」

「パスタも」
結構何でも食べる七海であった。
「まあ細長い系統は何でもいけるわね」
「ふうん、そうなんだ」
「だったら。行きましょ」
「そうね。地獄極楽ラーメンが私達を待っているわ」
「絶対食べてやるんだから」
三人は既にサーフィンからそちらに関心を移しだしていた。身体を動かした後だけに尚更。そうしてそこでまた別の話がはじまるのであった。

本番　　完

2008・2・6

第八十話　ラーメンの少年その一

ラーメンの少年

サーフィンを終えて香港飯店に入った三人。早速カウンターに座るとその地獄極楽ラーメンを注文するのであった。

「三つだね」

「はい、三つです」

七海が店の親父に答える。店の中は完全に中華料理店になっている。餃子やレバニラ炒めの匂いが香ばしい。それだけでかなりの食欲をそそる。

三人はその中でカウンターに三人並んで座っている。注文の後でラーメンが来るのを待ちながらあれこれと話をしている。話の内容はラーメンに関してだ。

「もうお腹ぺこぺこ」

最初に口を開いたのはコゼットであった。

「正直幾らでも入りそうよ」

「そうよね」

それにパレアナが応えて頷く。

「身体動かしてからはね。やっぱり」

「お腹空くわよね」

「そういうこと。だからこのラーメンにしたのよ」

コゼットは今度は七海に対して応えた。

「お腹空いてる時はやっぱり」

「ここの地獄極楽ラーメンかマックスターのハンバーガー盛り合わせか満腹庵のスペシャルカツ丼かアカラナータのアグニカレーか」

パレアナが今言ったのはどれも八条学園内の料理店でそれぞれこの名物である量がたっぷりのメニューだ。

「そういうのに限るわ」

「そういうことよね。やっぱり量がないと」

七海が笑顔になる。三人は男の子みたいな話をする。
「どうしようもないわね」
「そういうこと。味も大事だけれど」
なお八条学園の生徒達は大食で知られている。連合の者達自体がかなりの大食漢揃いでマウリアやサハラからは知られているのであるが。しかしそれでも今のパレアナの言葉はやはり女の子としてはかなり問題のある発言ではあった。本人に自覚はないにしろ。
「やっぱり量よね」
「私この前ピザ五枚食べちゃったわよ」
「それって普通じゃない」
コゼットが七海に突っ込みを入れる。
「地獄極楽ラーメンなんかもっとあるし」
「そうか」
「そうよ。さあ、来たわよ」
「へい、お待ち」
丁度いいタイミングで巨大な丼が三つ来た。丼からは湯気とトリガラスープの香りが漂っている。それだけで食欲をそそる。
麺の上にはナルトとシャーチュー、ゆで卵、刻み葱、そしてもやしがある。透明感のあるスープの中に縮れた麺が満たされている。見ただけで食欲をそそる姿だ。
「何かまず最初にこれを見るのが」
「いいのよねえ」
パレアナとコゼットはうっとりとした顔になっている。既にその手に胡椒と大蒜を用意している。この二つ、特に胡椒はラーメンには欠かせない。
「さあ、それじゃあ」
「食べましょう」
「残したらおしまいだしね」
なお三人共ラーメン十杯分の金は持っていない。七海が三杯分持っているだけだ。つまり食べきれない時のことは考えていないのだ。

箸をラーメンにつける。それからは電光石火であった。
瞬く間に三つの丼から麺も具もなくなっていく。スープもかなり飲まれる。実はスープまでは食べたうちには入っていないのであるが。
それでも丼の中にあるものは消えていく。十分後にはもう丼の中は殆どなくなっていた。それも三つ共である。見事ですらある。
三人は見事に地獄極楽ラーメンを食べ終えた。満足した顔でほぼ同時に丼から顔をあげる。だがそこで三人は驚くべきものを見るのであった。
「おかわり」
「えっ！？」
まずは店の親父の驚いた声が聞こえてきた。
「今何て」
「だから。おかわり頂戴」
明るい少年の声も聞こえてきた。
「このラーメン美味しいからさ」
「美味しいっていっても」
親父の驚いた声は続く。
「今一杯食べたじゃないか」
「けれどもう一杯」
それでも少年は言うのである。その明るい声で。
「欲しいんだけれど。駄目かな」
「いや、駄目って言われると」
親父も困ってしまうようである。それが言葉にも出ている。
「それはね。どうにも」
「じゃあいいじゃない。もう一杯」
「何か凄い子がいるわね」
「そうみたいね」
三人はラーメンから目を離して言葉がする方に顔を向けていた。
そうして話をする。

「地獄極楽ラーメンをおかわりって」
「普通はないわよね」
「当然よ」
七海がその顔を顰めさせて言う。
「このラーメンのキャッチフレーズはこれを食べられたら豪傑よ」
「そうだったわね」
「そういえば」
あまりセンスのないキャッチフレーズの言葉であるがその通りなのだから仕方がない。

第八十話　ラーメンの少年その二

「それをおかわりって」
「あの子何者!?」
三人は驚きを隠せない顔でその少年を見る。見れば外見は黒い髪に青い目をした白人の少年だ。ただ肌の色はアジア系のそれである。
「うちの生徒よね」
「多分」
八条学園にいるからそれはわかる。しかし何処の所属かはわからないのだ。三人は怪訝な顔をしてそちらにも話を向ける。
「商業科かしら」
「工業科じゃないの？」
とにかく学科も色々とある学校だ。なお七海達は普通科だ。
「若しかしたら中学生なのかも」
「まさか」
七海の言葉はパレアナにすぐに否定された。
「それにしては大きいわよ。顔もしっかりしてるし」
「そうね。言われてみれば」
「けれど。本当に何者なのかしら」
コゼットはまた自分の前に置かれた地獄極楽ラーメンを満面の笑みで見ている少年を見ながら言う。見れば少年の顔は全く平気な感じである。
「あれだけ食べる子ならすぐに目立つ筈なのに」
「そうよね。幾ら何でも」
「すぐに有名になるわよね」
流石に地獄極楽ラーメンを二杯である。有名にならない筈がない。例え個性的な面々ばかり集まっている二年Ｓ１組であってもだ。
「それにしてもよ」
「何？」

コゼットはパレアナの怪訝な声に問うた。
「あの子本当に食べられるのかしら」
「さあ」
そこまでは彼女もわからない。首を捻って応える。
「本人はいけるって言ってるけれど」
「普通は絶対に無理よ」
パレアナの言葉は強い。
「私達なんかもう満腹で何処にも入らないっていうのに」
「デザートも？」
「チョコレート一枚なら何とか」
七海の突っ込みに応える。甘いものは別腹というわけだ。しかしそれでも限界があるというのが今のパレアナの言葉でわかる。
「いけるけれど。それでも」
「ギリギリよね」
「別腹でも限度があるわよ」
それも言う。
「幾ら何でも。それなのに」
「男の子だからじゃないの？」
コゼットはそこに理由を求めた。
「だから二杯もって・・・・・・無理か」
「普通はね。だって力士の人だって二杯がやっとだっていうし」
当然ながら八条学園には相撲部もある。大学の相撲部の面々が二杯がやっとだったのだ。他にはプロレス同好会も何とかといったところだった。力士やレスラーは食べるものもまた仕事なのだがその彼等にしろそうなのだ。それをあんな細い少年が、である。すぐ見ただけで無理なのがわかる。
「そうだおじさん」
少年はその中でまた店の親父に声をかける。
「今度は何だい？」
「炒飯大盛りも頂戴」

「なぬっ！？」
「えっ！？」
これには店の親父も七海達も唖然とした。今何を言ったのかわからなくなる程だった。
「それと焼き餃子三人前もね」
「君、正気かい！？」
親父は目を大きく見開いて少年に問う。
「二杯目でしかもまだ頼むなんて」
「やっぱり御飯も食べないと駄目ですから」
「いや、そういう問題じゃなくて」
話が大きく擦れ違っていた。しかし少年は平気な顔のままだ。
「まだ入るんだ」
「大丈夫です、絶対に食べられますから」
少年の穏やかな笑みはここでも変わらない。
「ですから。御願いしますね」
「そりゃこっちも商売だからね」
親父はそう応えながらも動きを鈍くさせていた。
「注文されたら作るけれど。本当に大丈夫なんだよね」
「はい。いつもこんな感じですし」
「いつもって」
「胃袋が宇宙なのかしら」
三人は少年と親父のやり取りを聞いて言う。少年の耳には届いていないがそれでも彼女達の驚きは見ればすぐにわかるレベルであった。
「食べられるかしら」
「普通は無理よ」
七海はコゼットの言葉に答える。

第八十話　ラーメンの少年その三

「力士の人だってあそこまでは」
「じゃあそういうことで炒飯大盛りと餃子三人前も」
「わかったよ」
親父はもう準備をはじめていた。既に少年は地獄極楽ラーメンに箸をつけている。麺も具も見る見るうちに消えていく。三人娘以上の食欲であった。
「食べ方も凄いわね」
「ブラックホールみたいね」
彼の食べっぷりを見たうえでの感想である。
「これは本当にいけるかも」
「ひょっとしたらね。見て」
コゼットが二人に言う。
「もう半分消えてるわよ」
「うわっ、もう」
「何て勢い」
見ればもうかなり減っている。炒飯や餃子はまだ来ていないがラーメンはもうかなり減っていた。
「もうあんなに食べるなんて」
「殆ど化け物に」
「おいおい、もうそんなに食べたのかい」
今炒飯と餃子が来た。店の親父も瞬く間に減ったラーメンを見て目を丸くさせている。
「凄いね、本当に」
「だって美味しいし」
「いや、そういう問題じゃないよ」
親父は炒飯と餃子の皿をラーメンの横に置きながら応える。その間にも麺が消えていく。

「幾ら入るんだよ」
「その大盛りの炒飯と餃子を食べてからデザートを貰えば」
「甘いものもって」
「本当に化け物ね」
三人は今の少年の言葉を聞いてまた呟く。
「デザート!?杏仁豆腐かい?」
「マンゴープリンあります?それかごま団子か桃饅頭」
どれも中華料理のデザートの定番である。
「そうだな。桃饅頭御願いします」
「わかったよ。けれどね」
「はい」
ここで親父は今時分の作った炒飯を見ながら言うのだった。
「うちの炒飯は半端なものじゃないよ」
「そうなんですか」
「ほら、見てくれよ」
今度はその炒飯を指差す。
「この量。大盛りだと普通の店の炒飯の三杯分はあるよ」
「いいですね、量が多いと」
「それに餃子だって」
意に介することはない少年に対して今度は餃子を指差してみせる。
そう話している間にもうラーメンは殆どなくなってしまっていた。
「一人前十個だし。大きさだって他の店より大きめだけれど」
「はい、いいことです」
少年の言葉は親父の思惑から完全にずれている。しかし彼はそれを意に介してはいない。
「食べがいがありますよ。ラーメン終わりました」
「本当に食べたわね」
「それで続いては」
炒飯と餃子に移る。既に醤油とラー油に餃子を浸して食べだしている。炒飯もその上からどんどんと減っていっている。まるで消し

ゴムで鉛筆の字を消すように。
「まあ桃饅頭は用意しておくから」
「御願いします」
少年は食べながら親父に応える。
「それでやっと満腹できますし」
「お金の方はラーメン二杯分と炒飯大盛りと餃子三人前と桃饅頭になるね」
「はい」
お金の問題ではなくなっているが一応お金の話は出た。
「大盛りは0・五テラ増えるよ」
「了解です」
なおラーメンと炒飯は同じ値段でそれぞれ三テラだ。学生食堂だから安くなっているのである。餃子は一テラである。
「まあ食べるね、本当に」
炒飯も半分消えた。餃子も。
「こんなに食べる子ははじめて見たよ」
「あれ、そうなんですか」
「大学の力士さんやレスラーの人でも」
親父も彼等のことを話に出す。
「いなかったよ。本当に凄いよ」
「子供の頃からそうでして」
少年は炒飯をかき込みながら答える。
「実家が農家でして。それで」
「食べるのには困らなかったんだね」
「自分で作って手に入って」
そもそも連合では食べ物に困ることはない。人類は銀河に進出して食糧問題から解放されたのだ。何故なら多くの惑星でそれこそ無限に農地を持つことができるようになったからだ。

第八十話　ラーメンの少年その四

「だからなんですよ」
「そうかい。それでかい」
「うちの家じゃ皆これだけ食べますよ」
「それだけ食べて平気なのって」
「化け物の家系よね」
「そうとしか思えないわ」
三人娘は話を聞いてまたひそひそと言い合うのだった。
「妹も同じ位食べますよ」
「妹さんもいるのかい」
「はい、そうなんですよ」
爽やかに笑ったうえでの言葉であった。
「やっぱり。食べますね」
「そうなのか。それであんた」
親父は質問の内容を変えてきた。桃饅頭を出すがその時には炒飯も餃子も三分の二が消えていた。
「何処の国から来たんだい？」
「ポーランドです」
連合のポーランドだ。銀河の時代になってからポーランドは二つある。連合のポーランドとエウロパのポーランドだ。これは連合の取り込み工作の結果である。連合はポーランドの友邦リトアニアを介してポーランドを取り込もうとした。その際連合に入る派とエウロパに残る派が出来たのである。同じようにしてフィンランドやトルコ、バルカン諸国も取り込んできたのである。これも歴史だ。
「そこから来まして」
「そうかい、ポーランド人かい」
「見えませんか？」
「いや、別に」

親父はそれは否定する。
「別にそれはね。見えないこともないし」
「そうですか」
「何処の生まれかなんてわかりはしないよ」
混血が進んでいる連合だからである。
「だから聞いたってこともあるしね」
「そうなんですか」
「しかし。ポーランドから来たのかい」
あらためてそれについて考える親父であった。
「ポーランドでもこうした食べ物はあるかい？」
「ラーメンとかは何処にでもありますよ」
それなりに各国でアレンジはされている。だがそれでもあるのは事実だ。
「あとハンバーガーとお寿司、パスタは」
「そうか。まあ日本にも何処にもあるしね」
そうしたものだ。連合が広くともやはりそこにある食べ物には一定の決まりがある。何処にでもある料理というものが存在しているのだ。
「あとカレーと」
「あの和食だね」
「和食だったの」
今の親父の言葉を聞いて七海が言った。
「カレーって」
「そうじゃないの？」
「ねえ」
何とパレアナもコゼットも親父と同じ考えであった。
「あれって」
「私達もそう思っていたわよ」
「マウリア料理よ」
七海はそう主張する。日本人はこう思っているのだ。

「あれは」
「そうかしら」
「じゃあカレーパンとかカレーシチューとかもそうなの？」
「決まってるじゃない」
七海の主張は変わらない。
「そうじゃなきゃ何なのよ」
「何なのって言われてもねえ」
「ねえ」
二人の方が返答に困ってしまう形になった。
「私達にとっては和食にしか思えないし」
「本でもそうなってるし」
「何でかしら」
七海はそこまで聞いて首を傾げる。腕も組んでいる。
「あれが和食になるなんて」
「やたらと食べてるからじゃないの？」
「お好み焼きや御握りと同じで」
どちらも連合各国でもポピュラーな和食だ。和食も様々なバリエーションがある。中にはラーメンやハンバーガーも和食と考える連合の人間もいる。そこまで日本人のアレンジは進んでいるのだ。なおトンカツやハンバーグも日本人は和食とは考えてはいない。

第八十話　ラーメンの少年その五

「ポーランドのラーメンはあれなんですよ」
「あれ？」
「はい。結構こってりとしていますね」
遂に炒飯と餃子を食べ終えて桃饅頭に手をかけながら述べるのだった。
「寒いせいか」
「そういえばポーランドは寒い惑星が多いね」
「そうなんですよ。僕のいた星は結構寒くて」
「ふうん。じゃああれかい」
親父はその話を聞いて察しをつけてきた。
「豚骨とかそうした感じかい」
「ええ、具も多くて美味しくて」
「それも美味しそうね」
「ええ」
三人は彼の話を聞いてそう思った。
「けれど日本ではこうした味が多いんですか」
「まあ全体的に言えばそうかな」
あっさりとした味を好む日本人ではそうなる。それは事実だ。
「豚骨でも結構あっさりした味だしな」
「成程」
「それでうちの味はどうだい？」
そこまで聞いてあらためて彼に問う親父であった。
「美味いかい？どうだい？」
「美味しいです」
にこりと笑って親父に答えてみせてきた。
「二杯も食べましたから。おわかりですよね」
「そう言ってもらえると何よりだよ。こっちも味には命をかけてい

るしね」
　中々プロフェッショナルな親父である。それが言葉にも滲み出ている。
「その言葉を聞くとね。余計に頑張れるよ」
「そうですか」
「他のはどうだい？」
「ええ、どれも」
　少年の言葉はここでも満足感に満ちたものであった。
「堪能させて頂きました」
「それは何より。おや」
　ここで少年の皿を見ると。
「もう食べたのかい」
「御馳走様です」
　遂に桃饅頭まで食べてしまった。にこりとした言葉がいい感じだった。
「ではお勘定は」
「あいよ。それじゃあ」
　お札で受け取る。それをレジに行って入れておつりの小銭を手渡して終わりだった。
「毎度あり」
「また来ますね」
「今度は三杯でもいくのかい？」
「はい」
　いくというのだ。またかなり豪快な言葉であった。その大人しげな顔に似合わず。
「その時また御願いしますね」
「わかったよ。じゃあまたな」
「ええ。ではまた」
　こうして少年は去った。しかしその後に残ったものはとんでもないものであった。

「いやはや」
「何とも」
三人は少年が店を出たのを見届けてあらためて言うのであった。
「あそこまで食べるなんてね」
「私もはじめて見たわよ」
話すのはやはり少年に関してのことであった。それしかなかった。
「あんなに食べる子がいるなんて」
「怪物ね、本当に」
「わしだって驚いているよ」
三人の会話に店の親父も入って来た。他の客が注文した料理を作りながらだ。かなり手馴れていてしかも捌けた動きを見せている。
「あんなに食べる子なんてね」
「おじさんもなの」
「当たり前だよ」
今度は当たり前ときた。驚いた顔も隠さない。
「いやあ、本当に凄い」
「私達も凄いだろうけれど」
「それでもね。あれは」
「あれだよ。力士さんとかレスラーの人とか。あと」
親父は自分の頭の中で思い浮かぶとにかく食べる人達を出していく。やはりまず出て来るのはその二つである。これは必須であった。
「サハラ義勇軍の人達とか」
「あの人達もなのね」
「そうそう、あの人達も凄いよ」
何かあれば真っ先に火事場に飛び込むのがサハラ義勇軍である。だからその為の体力もかなり必要というわけなのだ。
「滅茶苦茶食べるから」
「そうなんだ」
「ちょっと知らなかったわよね」
これは三人にとっては初耳であった。少なくともサハラ義勇軍に

ついても名前だけしか知らなかったのだ。軍隊のことはやはり知らないのは女の子だからであろう。
「けれど。あの子は」
「それ以上なのね」
「格闘家や火事場に飛び込む人達よりも」
「うん、相当だね」
親父はまた言う。
「どんな胃袋しているんだか」
「あれじゃない？」
パレアナがここで仮想を述べる。
「胃が四つあるとか」
「それじゃあ牛じゃない」
それはコゼットが否定した。

第八十話　ラーメンの少年その六

「有り得ないって」
「じゃあコゼットはどうなってると思うの？」
「あれでしょ、やっぱり」
自分の仮想を否定されて演技であるがむくれた顔をしてみせてきたパレアナに対して言葉を返す。そのうえで答える彼女の仮想とは。
「胃の中にブラックホールがあるのよ」
「それもう完全にＳＦだし」
今度は七海が駄目出し役になった。
「絶対に有り得ないわよ」
「はい、それじゃあ次は七海」
そう言われた当のコゼットが話を駄目出しをした当人に振る。
「あんたの仮想は？」
「歯があるのよ」
七海の仮想はこうであった。
「歯が？」
「そう、食道とか胃に歯があって」
これまたとんでもない仮想であった。
「それでそこでも噛み砕いて消化しているんだと思うわ」
「それもねえ」
それはパレアナが駄目出ししたのであった。
「完全にお化けじゃない」
「やっぱりこれじゃないわよね」
「駄目よ、そこまでいくともうホラーだから」
「ないわよね。じゃあ何なのかしら」
「どっちにしろ怪物ね」
コゼットの出した結論はそれしかなかった。
「あの胃袋は」

「また来るそうだしねえ」
また親父が言ってきた。
「この学校の子なのは間違いないね」
「何処の子かしら」
「それが問題よね」
三人もあらためてそのことについて考えるのであった。
「一体何処の誰か」
「一応調べてみる？」
そのうえで話が変わった。今度はそれであった。
「何処の誰かわかれば」
「どうしてあんなに食べられるのか」
「わかるかもね」
「胃液が異常に強力なんじゃないかな」
親父の仮想はこうであった。あくまで仮想である。
「それで食べ物を一気に消化するとか。それか」
「それか？」
「お腹の中に・・・・・おっと」
慌てて右手で自分の口を塞ぐ。左手は中華鍋を扱っているので離せない。そうしたところはきちんと押さえていた。
「何でもないよ」
「やっぱりそれは言えないわよね」
「そうそう、食べ物を扱っているところじゃね」
中にいるに限らず外にいるに限らず。そうした話は料理店では厳禁である。若ししたならばそれは最悪のマナー違反に他ならない。
「だから今のはなしね」
「悪い悪い。しかし」
謝ったうえでまた少年の話に戻る。
「どうしたものかね、あれは」
「これぱっかりはねえ」
「言ってもねえ」

どうしようもない。それに三人も三人で人のことは言えない食べ方である。
「まあまた会ったら」
「何か言うかもね」
「そうかもね」
正直全然実感のない言葉であった。三人はこの時は彼が完全に無関係の相手だと思っていたのだ。ましてやまた会うとは現実には思っていない。
「何はともあれ」
「私達も完全に食べたし」
「あらためて。御馳走様」
三人で親父に対して言うのだった。
「じゃあまたねおじさん」
「お金はここにね」
「ああ、またな」
七海がお金を出す。約束通りだった。
「また来てくれよ」
「ええ、またね」
「今度は何を食べようかしら」
「新しいメニューも考えておくからな」
親父は笑いながら三人に言ってきた。もう三人は席を立っている。
「期待しているわ」
「さて、何かしら」
「期待は裏切らないのがわしの信条だよ」
親父はは顔して述べてきた。
「だから今度来たら楽しみにしておいてくれよ」
「了解」
「それじゃあ。またね」
こうして三人は店を後にしてそのまま帰路についた。そして次の日は何事もなく学校に来た。しかし昨日のことは皆に話すのだった。

「そんなに食べたのか」
「ええ、凄かったのよ」
朝の教室で七海が皆に対して話している。コゼットにパレアナも一緒だ。
「香港飯店の地獄極楽ラーメンを二杯食べて」
「二杯って」
「あれをか」
まずはこれが驚きであった。皆もそれは同じだった。
「そのうえで炒飯大盛りに餃子三人前よ」
「あの店のか！？」
「おい」
それを聞いて皆はまた驚くのであった。

第八十話　ラーメンの少年その七

「あのラーメンを二杯の後で」
「それも食べたのか」
「凄いでしょ。しかもデザートに桃饅頭よ」
「しかもデザートまでかよ」
「有り得ないだろ」
「私達も見ていて絶句したわよ」
七海はそう皆に語るのだった。
「一体どれだけ食べるんだって」
「本当に見る見るうちだったんだから」
「食べるのも早かったのよ」
七海にコゼットとパレアナも続く。この場合は話す人間が多ければ多い程話に信憑性がある。だから皆も信じるのであった。
「それもかなりね」
「化け物だな」
「ああ」
皆は三人の話を聞いて顔を見合わせて頷き合うのだった。
「そこまで食うとはな」
「人間じゃないかもな」
「この学園にいるらしいわ」
七海は今度はこう述べてきた。
「多分。高等部ね」
「高校生か」
「じゃあ会うかもな」
「ひょっとしたらな」
皆はあらためてそう言葉を交えさせる。
「一回見てみたいな」
「一体どんな奴か」

「運がよかったら会えるかもね」
七海の言葉はあまり期待していないのがわかるものであった。
「ひょっとしたら。この学校は広いけれど」
「ううん、どうかな」
「果たして何者か」
「敵か味方か」
「それは違うだろ」
そんな話をしていた。皆があれこれと話していると教室の入り口が開いた。そうしてそこから先生が入って来たのであった。
「皆さん」
「おい、先生が来たぞ」
丁度いいタイミングだった。皆は席に着く。
「お早うございます」
「はい、お早うございます」
まずはいつもの朝の挨拶からはじまる。
「今日は。皆さんに新しいお友達を紹介します」
「おっ、転校生か？」
「そうみたいね」
先生の話からそれがわかった。セーラに続いてであった。
「今度はどんな奴かな」
「普通の奴だったらいいな」
「普通ねえ」
とりあえずこのクラスには縁のないものであった。普通という単語はこのクラスのメンバーの辞書にはない。その辺りはナポレオンと同じだ。
「まあとにかく誰かな」
「男？女？」
「さてさて、どっちだ」
「では」
先生は手を叩いて皆を静かにさせてからまた声をかける。

「入って来て下さい」
「んっ！？」
「男か」
見れば入って来たのは少年だ。ところがその少年を見て七海達が声をあげる。
「嘘っ！！」
「何でこのクラスに」
「！？どうしたんだよ一体」
不意にといった感じで驚きの声をあげた七海達に顔を向けて声をかける。
「急に大声あげて」
「何かあったのかよ」
「あったも何も」
コゼットが皆に応えて言う。
「あの子なのよ」
「あの子って？」
「だから。あの大食いの」
「ああ、香港飯店の」
これを聞いて皆思い出した。朝のその話だ。
「あの地獄極楽ラーメン二杯と炒飯と餃子食った」
「あの化け物か」
「そう、あれよ」
パレアナも言う。
「あの怪物よ」
「その怪物が何でここに」
「来たのよ」
「だから転校生なんでしょ」
ペリーヌが三人に答える。
「彼は」
「ううん。そうだったの」

「何て運命の偶然」
「これも御導きです」
セーラがにこりと笑って述べた。
「偉大なるブラフマー神の」
「ブラフマーってそういう神様だった？」
「さあ」
それについては皆疑問符がついた。とりあえずブラフマーとはマウリアにおいては創造神である。だが時として調和や破壊も司る。これは調和神ヴィシュヌや破壊神シヴァの神話でもそうだが時として彼等も己の職務の他の活動も果たす。これはそれぞれの信者達が信仰する神の力を大きくしようとしたものである。
「それについてはどうにも」
「わからないけれど。何でもありじゃない？」
「そうかな」
とりあえずこれについては結論は出ない。何はともあれ転校生の話になる。
「はじめまして」
少年が皆に対して挨拶をしてきた。
「ポルフィ＝コシューシコです」
こう名乗ってきた。それと共にアルファベット、銀河語の一部で名前を書く。ついでに漢字での呼び方も。両方共銀河語なのだ。
「ポーランドから来ました」
「間違いないわね」
「そうね」
七海達はここまで聞いて昨日の彼だと確実に思ったのだった。
「昨日の子ね」
「一目でわかったけれど」
「今日からこのクラスになります。宜しく御願いします」
「さあ皆さん」
また先生が皆に声をかける。

「彼も。宜しく御願いしますね」
「わかりました」
何はともあれ転校生がまた一人入るのだった。どうにもこれまたかなりの個性的なキャラのようであるが入って来たのであった。

ラーメンの少年　　完

２００８・２・１２

第八十一話　大食漢その一

大食漢

かくしてポルフィはクラスの一員となった。それで早速。
「お昼どうするの？」
「何食べるの？」
ポルフィの席まで来て問う。皆の関心はそこであった。本当に彼が大食漢なのか確かめたかったのだ。無論言うまでもなく多分に興味本位である。七海達の話を聞いたせいである。
「お弁当だよ」
「そう、お弁当なの」
それを聞いて皆まずはそんなに多くないのではないかと思った。しかしそれは淡い幻想に過ぎなかった。さながら夏の日差しの前の雪のように。
「うん、これ」
ところが出して来たのは。
「えっ・・・・・・」
「何それ」
「だから。お弁当だよ」
穏やかで温厚そのものの笑顔で皆に答える。見ればそれは一メートル四方のものが三段だ。途方もない大きさの弁当箱であった。
「いつもこれでお弁当は食べてるんだ」
「いつもって」
「それだけのものを」
「あれ、おかしい？」
ところが本人に自覚はない。
「これだけ食べないの？皆」
「いや、それは」
「それはまあ」

「ねっ、凄いでしょ」
七海がここで皆に対して言う。
「本当に食べるんだから」
「ううむ」
「何と言うか」
流石に皆言葉もない。
「本当にそれ全部食べるの？」
「少ないかな」
「少ないって」
問うた蝉玉もまた絶句した。
「少なくなんかないわよ」
「そうだよ」
「しかもよ」
今度はペリーヌがポルフィに問う。
「太らないの？そんなに食べて」
「僕は太らない体質なんだ」
幸いにしてそうであるらしい。それこそ力士やレスラー並に普段から動いているからかも知れないがどうやらその体質は嘘ではないらしい。
「だから大丈夫だよ」
「何か羨ましい」
「しかし。それにしても」
皆今度は彼の食べっぷりを見る。見れば凄い勢いで食べ物が消えていく。弁当は三段共所謂ドカ弁である。沢山の白米におかずである。おかずは鶏の唐揚げやコロッケ、野菜の佃煮に漬物、それにデザートに蜜柑といった配分であった。日本の料理であると言っていいものばかりである。
「凄い勢いで食べるわね」
「ラーメン屋でも凄かったのよ」
七海はまた皆に言うのだった。

「あの地獄極楽ラーメンが瞬く間だったんだから」
「しかもあれを二杯だよね」
「ええ、そうよ」
速さも量もかなりのものであるということだ。
「見て驚いたの何のって」
「ううむ」
「それはまた」
「あのさ」
今度はスターリングが彼に尋ねた。
「何かな」
「お昼だけじゃないよね、そうした感じで食べるのって」
箸を見事に使って食べ物を消していくポルフィに対して問うのであった。
「朝も昼も同じだよ」
「だよね、やっぱり」
「一日三食」
「まあ五食じゃないだけましね」
「ええ」
連合は基本的には一日三食である。朝昼晩だ。ムスリムであってもラマダンの時に何だかんだと理由をつけて三食しっかり食べる者が多い。ここがサハラとは違うのだ。
「しっかりと食べてるよ」
「晩御飯はどんな感じかな」
「まあ量はお昼より多くて」
「多いんだ」
「これよりも」
皆にとってはこれも驚くことであった。
「料理はポーランド料理が多いかな」
「ポーランド料理!?」
「うん」

ここで皆には聞き慣れない単語が出て来た。実は八条学園ではポーランド人はそれ程多くはないのだ。それでポーランド料理もあまり知られていないのである。

第八十一話　大食漢その二

「どんな料理かしら」
「さあ」
皆顔を見合わせて話をするが誰も知らないので答えは出ない。
「美味しいのかしら」
「どうかしらね」
「まさかと思うけれど」
ここでコゼットがいささか失礼なことを言い出した。
「カナダ料理みたいなんてことは」
「本当に失礼なこと言うね」
カナダ人のトムがその言葉にむっとした顔になる。
「カナダ料理は美味しいよ」
「いや、それはない」
「悪いけれど」
だが彼の言葉は即座に周りの皆に否定されてしまった。
「あれが美味しいとなるとそれこそ」
「他の国の料理は何なんだって話になるよ」
「ううん・・・・・」
皆にこう言われてはトムも沈黙するしかなかった。実際のところカナダは食べ物も料理も極めてまずいことで連合の中で有名なのだ。何故か地球にあった頃からメジャーになれない地味な国家として逆に有名であったがそれは結局この時代になっても変わらないのであった。
「何でカナダはいつもいつも」
「まあ気にしないことね」
目立つ国家である日本の七海が慰めても説得力はなかった。
「カナダ料理もいい素材と腕のいい料理人が作れば美味しいわよ」
「七海、それフォローになってないわよ」

パレアナが突っ込みを入れる。
「そもそもカナダ料理のレストランなんてあるの？」
「さあ」
七海はパレアナのその問いに首を捻る。
「この学校にはないわよね」
「そうよね」
「なお悪いよ」
トムは落ち込んだ顔で二人に突っ込みを入れる。
「何でこう。カナダって」
「とにかくよ」
ペリーヌが話を強引に戻した。落ち込むトムを放置して。
「ポーランド料理ってどんなの？」
「美味しいよ」
ポルフィはにこりと笑って答える。もう弁当は二段目まで食べ終えている。
「一度食べたら病み付きになる位ね」
「病み付きねえ」
「そこまで美味しいの」
皆そう言われても今一つどころか全然実感がなかった。ポーランド料理というものをよく知らないからだ。なおポーランド人にとっては不本意だがポーランドを地球にいた頃に散々痛めつけてきているロシアの料理は連合においてはかなりメジャーであったりする。
「僕が保障するよ」
「辛いのか？」
韓国料理は辛い。その韓国出身の洪童が答える。
「辛くはないね」
「何だ、そうか」
洪童はそう言われて面白くないといった顔になる。
「まあそれもそれでいいか」
「韓国料理も好きだけれどね」

意外と食べ物にはバリエーションがあるようであった。
「チゲ鍋なんかいいよね」
「おっ、チゲ鍋好きなんだ」
洪童はそう言われて笑顔になる。
「いい趣味してるな。あれはいいよな」
「そうだよね。辛いお鍋を甘いマッコリでね」
「そうそう。それだよ」
「お酒もいけるの」
「大好きだよ」
食べるだけではないのであった。
「飲む時は大体ボトルで三本かな」
「ボトルで三本」
「かなりね」
そちらの方も豪の者であるようだ。食べるだけ、飲むだけといった人間もいるが彼はそれに関しては違うようであった。皆それを聞いてまた驚く。

第八十一話　大食漢その三

「ただ。お酒は飲み過ぎるとあまりよくないから」
「うんうん」
「それはね」
酒は過ぎると毒なのは何時の時代でも変わらない。
「だから。セーブしているんだ」
「本当はどれだけ飲めるんだ？」
「ウイスキーをボトルで五本」
「ウイスキーをかよ」
カムイがそれを聞いて唖然となる。
「ロシア人並か」
「ロシア人はもっと凄いわよ」
そのロシア人のアンネットが言ってきた。
「ウォッカでそれだから」
「ウォッカなのか」
「一日で、だけれどね」
それでも凄いことには変わりない。ロシア人はこの時代においても酒を生涯の友としているのである。酒とくればロシア人なのだ。
「飲む人はそこまで飲むわよ」
「いや、ロシア人は特別だろ」
「あそこは」
少なくともロシア人に関しては皆特別視しているのだった。だからそれを聞いても得意に驚いたり呆れたりもしないのだ。
「だからポーランドに話を戻すと」
「それは充分凄いと思うわよ」
「ポーランド人はワインとビールが多いんだ」
ポルフィはまた皆に語る。
「お米のお酒もよく飲むけれどね」

「そっちもなんだ」
連合では米が割合的に最もよく食べられる主食である。だから米の酒もまた飲まれるのである。ポーランドにおいてもだ。
ポルフィはさらに言う。
「そのポーランドのお酒もあるよ」
「おっ」
「お酒もか」
皆お酒もあると聞いて喜びの声をあげた。
「僕の実家酒屋でもあるしね」
「だからなの」
「そうだよ。じゃあ皆さ」
また皆に言ってきた。
「よかったら今日僕の家に来てよ」
「勿論」
「誘ってくれるのなら是非」
「うん、待ってるよ」
にこやかに笑って皆の言葉を受けるのだった。
「今夜ね。妹もいるから」
「妹さん・・・・・・ああ」
七海はここで中華料理店での言葉を思い出した。
「いたのね」
「あっ、知ってるんだ」
「ええ、ちょっとね」
料理店のことはまた今度の機会に言うことにした。今は置いておいた。
「まあそれは後で」
「ふうん。まあとにかく妹もいるから」
またそれを七海と皆に告げる。
「楽しみにしていてね。お酒も食べ物もね」
「了解」

「それじゃあそういうことで」
こうしてポルフィ自身の歓迎パーティーを他ならぬ彼の家でやることになるのであった。ここでまた騒ぎになるのであるがまだ皆はそれを知らないのであった。
「さてさて」
「ポーランド料理かあ」
皆あらためてポーランド料理について思うのだった。
「どんなのかしらね」
「さあ」
やはり誰も知らない。
「美味しいらしいけれど」
「具体的には何にも」
「待てよ、ポーランドだ」
ここでそれをまず指摘したのはギルバートだった。
「ポーランドといえば兄弟国家があったな」
「ああ、リトアニア」
「あそこね」
皆ポーランドの兄弟国家と聞いて気付いた。ポーランドとリトアニアは昔から、それこそ地球になった頃からの付き合いでかつては連合国家だったこともある。この時代においても両国の関係は非常に良好で連合各国の交流の中でも最も親密なものの一つとさえなっている。
「リトアニア人って」
「誰かいた？」
「さあ」
ところがこのクラスにはリトアニア人はいないのであった。皆そのことに気付いた。

第八十一話　大食漢その四

「いないわよね」
「色々な国の人達がいるけれど」
不都合なことにリトアニア人はいないのであった。このことに今はじめて気付くのであった。
「困ったわね」
「さっぱりわからないじゃない」
彼等はこのことに気付いてまた困った顔になった。
「他にポーランドと仲のいい国って」
「どっかあったかしら」
「リトアニアよりいい国はなかった筈だ」
ギルバートがまた皆に答えた。
「流石にあそこまではな」
「そう。じゃあ仕方ないわね」
「ポーランド料理はぶっつけ本番になるわね」
そういうことになるのであった。だがここでアルフレドがあることにふと気付いたのであった。
「いや、方法はあるぞ」
「方法!?」
「図書館に行けばいい」
彼はこう提案してきたのだった。
「ポーランドの資料もあったな」
「ええ、確か」
「連合の国の一つだし」
八条学園の大図書館はかなりの蔵書がある。その中には当然ながらポーランド料理に関するものもあると皆踏んだのである。
「あるわよね」
「じゃあ図書館ね」

こうして話は決まった。皆すぐに学園の大図書館に向かう。そこに入って早速本を探す。その結果すぐに一冊の本が出て来た。ポーランド料理大全という名前であった。
「さて、これだけれど」
「どんな内容かしら」
「まずは読んでみよう」
アルフレドが皆に告げる。皆一つのテーブルに集まって話をしている。
「見たところ表紙は普通の料理の本ね」
「まあよく考えたらそうだけれどね」
皆それを聞いて話し合いながら表紙を見ている。
「けれどどうなんだろ」
「カナダ料理みたいなのとか？」
「だから何かにつけて僕の国の料理について言うのは止めてよ」
トムがたまりかねて皆に言う。
「カナダ料理は美味しいんだよ」
「いえ、それはないわ」
「絶対にな」
ところがそのことは皆にすぐに否定されるのだった。
「カナダ料理ってねえ」
「地味だし」
「地味って」
トムは地味という言葉にまた悲しい顔になった。
「それも言わないで欲しいな」
「おっと、悪い」
「これは禁句だったな」
「そうだよ」
実はカナダは連合の中ではかなり影の薄い存在なのだ。国力もかなりなもので地球にあった頃からそれなり以上の地位にあり続けているのだがそれでも存在感は全くないのだ。そのことがカナダ人に

とっては最大のコンプレックスになっているのである。このコンプレックスも地球にあった頃からのものだ。
「それだけは言わないでよ」
「じゃあ料理のことは？」
「それも」
何かと言われる材料の多いトムの母国であった。
「ちゃんとした素材とシェフがいたら美味しいんだって」
「ちゃんとした素材とシェフって」
「その二つがあったら当たり前だろ」
また皆から突込みが入る。
「それでもカナダ料理って何かあったか？」
「さあ」
しかもまた言われだした。
「何処かにあるんじゃないのか？」
「この銀河の何処にも」
「何処にもって」
実は有名なメニューは殆どないカナダ料理であった。国家としてのあまりもの存在感のなさか料理にも影響しているかのようであった。
「まあいいさ。それより」
「そうね」
話は移った。
「ポーランド料理の話よね」
「さて、何があるのかしら」
皆は言い合いながらまたポーランド料理大全に注目するのだった。
「開いてみてのお楽しみ」
「さあ、今こそ」
こうして今ポーランド料理の扉が開かれる。今開かれたその中には何があるのか。皆そのことに期待と不安を抱きながらページをめくるのであった。

大食漢　完

2008・2・16

第八十二話　ポーランド料理その一

ポーランド料理

あらためてポーランド料理を見てみる。すると。
「ふうん」
「こんなのなんだ」
皆の感想は実にオーソドックスなものであった。味気ないとも言える程ですらある。
「ピロシキあるのね」
アンネットがその中で言った。
「クレープもあるし」
「ロシア料理とフランス料理の混合？」
皆が最初に抱いた感想はこうであった。
「いや、違うな」
だがそれはすぐに変わった。
「ザワークラフトもあるね」
「そうだね」
見ればザワークラフトの料理もちゃんとあった。
「ソーセージもあるし」
「冷たいスープ！？」
その中でスープの中の一つに目がいった。
「色々野菜が入ってるみたいね」
「ふうん、フウォドニクっていうの」
それがその冷たいスープの名前であった。皆そのスープに注目していた。
「これよさそうだよね」
「そうね」
「あとメインディッシュは」
それに関しては皆あまり感想を持つことはなかった。

「牛の舌に」
コーンドタンとある。
「カツレツにソテー」
「ジャガイモの料理が多いわね」
見ればドイツのそれを思わせるパンケーキもある。他にも色々と。
「これってドイツの影響かしら」
「さあ」
「大体ロシアの系列の国ってジャガイモよく食べるわよ」
またアンネットが皆に言ってきた。
「まあポーランドもロシアに近かったしね」
「近いっていうかあんた」
「それを言ったら」
皆はアンネットに苦笑いと共に突っ込みを入れた。
「ロシアは昔ポーランドを支配していたじゃない」
「忘れたの？」
「ま、まあそれはね」
今度はアンネットが苦笑いになる番であった。
「言わないでよ。大昔の話じゃない」
「今も結構ポーランドと揉めてるし」
「全く。あんたの国も変わらないわね」
「中の人達も変わらないから許して」
そう皆に言葉を返すのだった。
「素朴で親切なロシア人気質は健在よ」
「それはわかってるつもりだけれど」
実際ロシア人一人一人は連合三百国の中でもかなり評判がいい。
国家の性格と国民性がここまでかけ離れた国も珍しいとさえ言われている。アンネットにしろ性格は悪くない。多少ルシエンに対して意地悪をする程度である。
「それはそうとね」
「ええ」

アンネットは何とか話を移した。皆もそれに乗る。
「お米のサラダもあるし」
「やっぱりあるのね」
「見たら主食にもなってるわね」
やはり連合では米は欠かせない。水麦により麦の栽培量もかなりのものになっているがそれでもメインは米なのだ。どの国でもそれはあまり変わらない。
「デザートは」
「あれ、このファヴォルキって」
皆その細長い狐色の枯れ枝に似たお菓子に注目した。
「かなり美味しそうね」
「そうね、粉砂糖が何とも」
如何にも食欲をそそられるお菓子であった。皆の関心はそこにいった。
「お菓子結構充実してない？」
「林檎のケーキもあるしね」
皆が一番注目したのはデザートであった。
「これっていいかも」
「そうよね。かなり期待できるわ」
「総合的に見てオーソドックスだな」
アルフレドが最後まで見終わったうえでコメントした。
「しかし平均点は高そうだな」
「そうね。フランスやドイツの影響が強いのは嫌だけれど」
彼等がこう言う理由は簡単でフランスもドイツも連合の宿敵エウロパの国家だからだ。もっともポーランドにしろ連合の工作で分裂して連合にもエウロパにも国家がある状況なのだが。
「これは期待していいわよね」
「ああ、今晩が楽しみ」
「辛くないみたいだけれどな」
こっそりと洪童が言う。

「それがどうにも」
「辛くないのもいいわよ」
「そんなに辛いのがいいなら自分でトッピングしなさいって」
皆は笑って彼に突っ込みを入れた。
「全く。何時でも辛さなんだから」
「唐辛子は効かせていないみたいだけれどね」
「まあたまにはそれもいいか」
意外と素直な洪童であった。
「デザートもお酒もよさそうだしな」
「そうよね。デザートが特にね」
「いい感じよね」
「例え料理が好きでなくても」
アルフレドは冷静に述べる。まだメニューを見ている。

第八十二話　ポーランド料理その二

「ソーセージとマッシュポテトがあればいけるな」
「その二つがあるのは心強いわね」
「そうだ」
彼が言うのはそこであった。
「この二つはな。相当味があれでもいける」
「というかカナダ人でも普通に作れるじゃない」
「また僕！？」
「いや、待ってよ」
ここでセドリックが出て来た。
「セドリック？」
「カナダの人達の料理を馬鹿にしちゃいけないよ」
まずは彼等をフォローする。悪気はない。
「彼等だって頑張ってるんだよ」
「そうか」
「そうだったわね」
皆その言葉にまずは目から鱗が落ちる。
「確かにそうだよな」
「私達それを」
「頑張ったって仕方ない時があるんだよ」
これがセドリックの本骨頂であった。
「それを馬鹿にするなんてよくないよ。才能もセンスも何もなくてもしなくちゃいけない時だってあるんだからね」
「ちょっとセドリック」
「それは言い過ぎ」
やはりセドリックであった。天然でそれでいて実にきつい。その穏やかだが非常に毒のある言葉はそのままトムをノックアウトしたのだった。

「どうせカナダはさ。僕の国は」
「ううむ、フォローできないな」
「これはね。止めになったわよね」
「まあこの二つがあるのは心強いな」
アルフレドはまたソーセージとマッシュポテトに言及した。
「この二つにザワークラフトもある。それにビールも健在だ」
「かなりドイツっぽいわね」
アンネットがこう突っ込みを入れた。
「ピロシキもあるからそれもいいわね」
「そんなに悪くなさそうって感じ？」
皆はこう思うのだった。今のところは確かに悪くは見えない。
「期待できるわね」
「そうね。少なくともお酒で騒げるわよね」
皆が今出した結論はこれであった。何はともあれポルフィの家には行くことになった。そのポルフィの家もごく有り触れたアパートの一室だ。チャイムを鳴らすとすぐに彼が出て来た。
「いらっしゃい」
「お邪魔します。妹さんは？」
「今料理を作っているところだよ」
彼はにこりと笑って皆に述べる。
「ポーランド料理をね」
「そのポーランド料理、楽しみにしてるわよ」
「じゃあ早速」
「うん、どうぞ」
ここで皆を部屋に入れる。中にはイコンが壁に飾られ質素ながら暖かそうな部屋だった。それを見ていると皆ロシアを思い出すのだった。
「何か似てるよね」
「そうね」
そのロシア人のアンネットもそれに頷く。

「けれど微妙に違うし」
「垢抜けてるっていうかお洒落っていうか」
彼等の受けた感想はこれであった。
「そんな感じ？」
「何でだろ。ロシアの繊細さとはまた別みたいな」
ありとあらゆることに大雑把で武骨なのがロシアだが何故か芸術だのそうした話においては繊細なセンスを発揮するのがロシアだ。それは建築や家の内装にも発揮されているのだ。
「そうよね」
「これって何処のだろ」
「リトアニアのが強いよ」
ポルフィはリビングに皆を入れてから答えた。そのリビングはかなり優雅で洒落たものであった。
「ただ。他にもあってね」
「他にも？」
「ほら、ポーランドってロシアだけじゃなくてオーストリアやドイツにも分割されたじゃない」
正確にはドイツではなくプロイセンだ。所謂三回に及ぶポーランド分割だ。第二次世界大戦の時にもドイツとソ連から攻められている。
「その影響もあるしね」
「じゃあこれはオーストリアかな」
「そうかもね」
リビングを見回す皆にこう答えた。
「優雅な感じはね」
「ポーランドも色々あったんだ」
皆あらためてそのことを思う。

第八十二話　ポーランド料理その三

「昔のことだけれどね」
「昔のなのね」
「そうだよ。だけれどまだ残ってるってわけさ」
にこりと笑って皆に述べる。述べながらお茶を出してきた。
「じゃあまずは紅茶でも」
「紅茶なんだ」
「コーヒーもあるよ」
そちらも出す。
「紅茶はロシアでコーヒーはドイツとオーストリア」
「成程」
ここでもこの三国が出ていた。
「まだ影響は残ってるんだよね」
「ロシアはわかるけれどね」
連合の中の一国だからこの国に関しては皆も知っている。
「けれどオーストリアとドイツかあ」
「確かあれだったわよね」
ペリーヌがここで言う。
「どっちもゲルマン系の国なのよね」
「そうだよ」
ポルフィはにこりと笑って彼女の言葉に答えた。
「それで我が国は」
「スラブよね」
「リトアニアと同じくね」
ここでリトアニアの名前が出るのがポーランド人だった。長い間連合国家であったし分かれてからも交流は今に至るまで深い。言うならば兄弟に近い関係なのだ。
「リトアニアにも行ったことがあるけれどね」

「どう？」
「いや、いい国だよ」
まるで自分の国を語るような顔と声になっていた。
「落ち着ける国だよ。まるでポーランドにいるみたいなね」
「ポーランドに」
「リトアニアの人もこう言ってくれるんだよ」
交流は深いので互いに行き来することも多いのである。
「ポーランドはいい国だって。まるでリトアニアにいるみたいだってね」
「そうなの」
「正直連合のポーランドに生まれてよかったよ」
こうまで言うのだった。
「リトアニアもあるし皆もいるしね」
「皆って？」
「だから連合の皆」
これまた随分と範囲の広い話だった。それもかなりの広さだ。
「いてくれているから楽しいじゃない」
「そうなんだ」
「戦争もないしね」
国家同士のいがみ合いは絶えないが戦争はない。そこまでして何かを取り合わなくとも多くのものが中にあるのが連合だからである。
「だから凄く好きなんだ」
「ってあんた連合生まれじゃないの？」
ペリーヌが彼に突っ込みを入れる。
「何でそこで戦争が出るのよ」
「だってさ。ポーランドの歴史って」
ここで自分の国の歴史を出す。
「しょっちゅうどっかの国に攻められたり戦ったりだからね」
「ああ、御免なさい」
「それはね」

ロシア人のアンネットとモンゴル人のナンがバツの悪い顔をする。
そのポーランドに攻め込んだことのある二国である。どちらもかなり壮絶なことをした。
「まあ何ていうか」
「あれだから」
「別にそれはいいよ」
ポルフィもそれは笑って済ます。
「だって大昔のことだしね。ただそうした歴史を見てみると」
「平和でよかったなあ、ってことね」
「美味しいものも食べられるしね」
話はそちらに移った。
「そういうの考えていったらやっぱり平和が一番さ」
「まあ今何かエウロパと緊張が走っている感じだけれどね」
丁度今連合軍ができてエウロパのスパイ事件が発覚した頃だ。
「それでも連合では戦争にならないか」
「そうよね。ただ」
ここで皆は蝉玉とスターリングに目をやった。
「あんた達のお爺ちゃんは大変でしょうね」
「そこはどうなの？」
「御免、よくわからないんだ」
だがスターリングはこう皆に答えた。
「最近お爺ちゃんに会っていないしね」
「私も」
蝉玉もそれは同じであった。日本にいればそれも当然のことであった。
「そもそも私のお父さんもお母さんも軍とは全然関係ないわよ」
「僕の方もだよ。一応お爺ちゃんが軍人なのはわかっているけれどね」
「そうなんだ」
「そうだよ。それに家だといつも私服だし」

考えてみればこれは至極当然のことであった。軍服で家でくつろぐ人間なぞいはしない。警官が制服を着るのは警察署だけであるのと理由は全く同じである。

第八十二話　ポーランド料理その四

「あまり軍人だって意識したこともないし」
「そういうわけだから。御免ね」
「そうなんだ」
「家じゃ私服なんだ」
皆あらためてそのことを頭に入れる。実は想像していなかったことであったりする。
「まあそれはいいとして」
ポルフィが話の方向転換に入った。
「あれだよ。そろそろ来るよ」
「何が？」
「何がって。食べ物だよ」
にこりと笑って皆に告げる。
「じゃあ他に何が来るんだい？」
「それもそうね」
皆言われてそれに納得する。
「その為に来たんだし」
「人間は食べる為に生きているんだよ」
ポルフィらしい言葉が出て来た。
「だからさ。食べよう」
「ポーランド料理をだね」
「うん。ミーナ」
妹の名をここで呼んだ。
「もう何かできたかな」
「ジムネ＝ノギができたわよ」
家の奥から可愛らしい女の子の声が帰って来た。
「まずはそれでいいかしら」
「うん。あとピロシキとクレープ出して」

「わかったわ」
まずはその三つらしい。程なくして黒髪のポルフィによく似た整った顔の女の子が巨大な三つのテーブルを両手と頭に持ってやって来た。彼女がミーナらしい。
「はい、まずはこの三つね」
「お酒はあるかな」
「そこらへんにあるでしょ」
素っ気無い返事であった。
「ワインかビールが」
「そうかな。あっ」
見れば都合よく側に巨大な樽があることに気付いた。何故か普通のアパートの中なのに巨大な樽があることは不思議なことであったがあるのだから仕方がない。
「ここにあったや」
「他にもあるから探してね」
「うん。皆もよかったら探して」
皆にも顔を向けて言う。
「そこいらに結構あるからさ」
「そこいらにねえ」
「僕も妹もよく飲むからね」
にこりと笑ってこう述べる。
「だから家のあちこちに置いてあるんだ」
「んっ！？そういえばこの部屋」
「かなりボトルが多いわね」
よく部屋の中を見回してみればそうだった。あちこちに樽やボトルがある。
「樽がビールでボトルがワインだよ」
「成程」
「赤も白もロゼもあるわね」
蝉玉はそれにも気付いた。

「それもたっぷりと」
「こりゃ飲むのには苦労しないわね」
「どんどん飲んでいいよ」
ポルフィの方からもそれを勧める。
「幾らでもあるんだし」
「そういえばこのオードブルも」
「凄い量」
皆ここであらためてオードブルを載せた三つの皿を見る。クレープにピロシキと最後は何か見たことのない肉料理であった。ペリーヌがその肉料理を指差しながらポルフィに問うた。
「これがそのジムネ＝ノギなのかしら」
「そうだよ」
頷いて答える。
「豚の足の肉をね。細かく切って唐辛子や大蒜で味付けしたものなんだ」
「おっ、それはいいな」
唐辛子に大蒜と聞いて洪童が笑顔になる。
「じゃあ早速」
「あっ、また来たね」
今度はザワークラフトにお米のサラダにもう一品であった。
「今度は鶏のレバーのパテだよ」
「パテね」
「うん。オーソドオックスだけれどね」
他にはチーズもあった。ワインとくればこれである。
「あと。これも来たね」
「マッシュポテトにキノコのスープに」
スープはそれであった。マッシュポテトはやはりポーランドだから出た。

第八十二話　ポーランド料理その五

「ピズイだね」
ポルフィが言った。その料理の名前を。その横にはソーセージが置かれている。
「まあ添え物だけれどね」
「そうなの」
「マッシュポテトと同じものだと考えて」
こう皆に対して説明する。
「ソーセージと一緒に食べてよ。いいね」
「わかったわ」
「それじゃあ」
皆彼のその言葉に頷く。こうしてワインやビールと共に様々なポーランド料理を楽しみだした。人気だったのはパテとジムネ＝ノギ、それにお米のサラダであった。
「この豚肉美味しいわね」
「ええ。このパテも」
「サラダだって」
皆その三つを次々に食べる。無論他の料理もどんどん食べていく。
「こんなに美味しいなんて」
「ポーランドも侮れないな」
「家庭料理なんだよ」
ポルフィは穏やかな笑顔で彼等に述べる。
「だから暖かいでしょ」
「そうね。暖かいわ」
「何か食べていると」
皆彼のその言葉にこれまた穏やかな笑顔で頷いた。
「それだけでね」
「味も大人しいしそれが余計に」

「ポーランド料理はね。あまり激しい自己主張はしないんだ」
それがポルフィの言葉であった。それは味付けや盛り合わせに出ていた。
「だから目立たないかも知れないけれど。いいでしょ」
「ええ、とても」
「隠れた絶品ね」
「皆案外知らないんだよね」
ポルフィは笑ってまた言う。
「ポーランド料理の美味しさをね」
「何ていうか豪華な食べ物よりこっちの方がいいかも」
「そうだね」
皆そう言いながらさらに食べる。
「それに飲み物もね」
「このビールが特に」
「黒ビール、美味しいでしょ」
「ええ、普通のビールを飲むことが多いけれど」
彼等もビールをよく飲むが黒ビールは少ないのだ。なお青いビールや赤いビール、緑色のビールも存在している。それぞれ味が違ってきている。
「黒ビールもね。美味しいわよね」
「黒ビールはね。元々あれなんだ」
彼は言う。
「ドイツでよく飲まれていたけれど」
「ドイツで」
エウロパと聞くとやはり心中穏やかではいられない一同ではあった。
「そうなんだ。何せポーランドはドイツにされていた時代があったから」
またそこに話がいく。
「それで入ってきたんだ。元々うちは農業で大きくなった国だし」

「農業でなの」
「そうだよ。穀物が一杯採れてね」
話がそこからはじまるのだ。
「それを他の国に輸出してそれで豊かになってきたんだよ」
「だから食べ物には五月蝿いんだ」
「成程」
皆その話を聞いてわかった。そうした歴史だったのだ。
「今でも農業が盛んな国なんだよ」
「今でもなの」
「ポーランドのお米やパンとか。知らないかな」
「あれっ！？」
「それは」
実はこれまで周りにポーランド人がいなくてそれは知らなかったのだ。連合は三百国もあるので知らない国も多くなるのである。ポーランドはそれなりに大きい国なのだが。
「御免なさい」
「ちょっと」
「まあ知らないのなら仕方ないよ」
ポルフィもそれは気にしなかった。この辺りが連合屈指の影の薄さを誇るカナダ人のトムとは違う。ポーランドはそれなりにメジャーな国であるのだ。

第八十二話　ポーランド料理その六

「それはね。以後覚えておいてくれたらね」
「了解」
「それじゃあ今から」
「今食べているものは全部ポーランド産なんだよ」
「あっ、そうなんだ」
彼等はそれを聞いてまたあらたなことを知った。
「そうだよ。どうかな、素材は」
「いや、素材も結構いいっていうか」
「はっきり言って美味しいわよ」
皆それも認める。
「ポーランドも結構侮れないっていうか」
「食べ物美味しいのはかなりいよね」
「まずは食べないとね」
ポルフィは笑いながら述べる。
「人間食べないと駄目だよ」
「その通り」
これには皆頷く。人間は結局のところ食べないと駄目なのだ。言うまでもないことではある。
「だったらどうせ食べるのならより美味しいものを」
「そういうことね」
「ささ、だから」
ポルフィはここで勧める。
「食べてよ。どんどんね」
「勿論よ」
「しかし。それにしても」
皆ここでポルフィを見る。見れば彼は。
「あんた、本当によく食べるわね」

「どれだけ食べるんだか」
「だって美味しいからね」
そう言いながらまた食べだす。何と食パンを一斤丸ごと食べている。言うまでもなくポーランドの麦から作られた食パンである。
「どんどんお腹の中に入るんだ」
「ううむ」
「それでも」
皆にとっては驚くべきことであった。しかもだ。
「デザートもあるよ」
「まだ食べるし」
そうなのであった。まだあるのだ。
「ポーランド料理はね」
もう食パンを食べ終えて話をする。
「デザートも凄いからね」
「いや、それでも」
「まだ食べられることが」
「だから美味しいからだよ」
彼の理由は全てそこに行き着く。何が何でも食べる彼であった。
「食べるのはね」
「まあもうそれでいいから」
「じゃあデザートだけれど」
「はい、来たよ」
言っている側からであった。妹が持って来た。
「そのデザートがね」
「あっ、あれね」
「フォヴォルキ」
「知っていたんだ」
ポルフィは皆の言葉を聞いて目をパチクリとさせた。
「えっ、ま、まあね」
「それはね。有名だったし」

まさか事前に調べていたとは言えない。とりあえず言葉を取り繕って誤魔化す。
「あれよね。細長くて」
「上にお砂糖をまぶした」
「そうだよ。我が国の名物の一つなんだ」
笑顔で皆に語ってきた。
「それを食べて。是非ね」
「うん、是非共」
「頂きます」
「それとね」
勿論デザートもそれで終わりではなかった。また出て来たのである。
「ケーキもあるしね。ポーランドではケーキもよく食べるんだよね」
「ケーキもなの」
「そうだよ。ほら」
ここで出て来たのは様々なフルーツをふんだんに上に乗せた白い生クリームのケーキであった。それを皆の前に出してきたのだ。
「これ。食べて食べて」
「うわ、美味しそう」
「果物が一杯」
「果物も豊富にあるんだ」
果物にも困っていないポーランドであるようだ。どうやら宇宙に出てからさらに農業が発達したようである。これはどの国にも言えるが。連合各国で食べ物に困っている国はない。どの国も自給率は一〇〇パーセントを越えるという地球にあった頃には考えられない状況なのだ。

第八十二話　ポーランド料理その七

「特に林檎はね」
「そういえばこのケーキの上にも」
林檎が置かれていた。奇麗に切り揃えられて。
「あるわよね」
「赤い林檎も青い林檎も」
「妹も僕も好きなんだ」
ポルフィはまた答えてきた。
「それでこうしてよく食べるんだ。他にはパイにしたりして」
「アップルパイ」
「これは普通に皆食べるよね」
「うん、勿論」
スターリングが答えてきた。連合各国においてそのアップルパイはよく食べられるがとりわけアメリカにおいてはよく食べられるのである。この時代においてもアメリカ人は何かというと林檎にそれを使った料理を好んで食べるのである。アメリカ人といえば林檎なのだ。
「それは我が国でも同じなんだ。他には林檎のケーキなんかも」
「それもいいわね」
皆は話を聞くだけでうっとりとなる。
「ヤブウェチュニクっていうんだけれどね」
「ヤブウェチュニク！？」
「うん、レモンも使ってね。この言葉は昔のポーランド語だよ」
所謂スラブ語圏の言葉である。
「これもよく食べるね」
「林檎が多いのね。やっぱり」
「うん。リトアニアでもよく食べるね」
ここで兄弟国家が話に出た。

「向こうに行ってもよく御馳走してもらうね」
「そうなの」
「こっちも林檎でおもてなし」
笑顔で語る。
「それでこのクラスにリトアニアの人いる？」
あらためてそれを皆に尋ねてきた。
「いたら紹介して欲しいんだけれど」
「それは済まん」
皆を代表して学級委員のギルバートがポルフィに謝ってきた。
「いない。リトアニア人はな」
「そうなんだ」
ポルフィは彼から話を聞いてがっかりした顔になった。
「まあ覚悟はしていたけれどね。仕方ないか」
「そんなにリトアニアが好きなの」
皆はそこを彼に尋ねた。
「何かというと話に出るけれど」
「やっぱりね。付き合いが長くて深いから」
まず理由はそこであった。
「その分ね。親しみがあるんだ」
「そうなんだ」
「けれど。いないのならいいよ」
それはそれで受け入れるポルフィであった。
「それでね。今度のデザートは」
「あっ、まだあるの」
「クレープなんてどうかな。さっきのクレープとはまた違うの」
「デザートのクレープなのね」
「うん、そうだよ」
にこにこと笑いながら皆に答える。
「中にはチョコレートにバニラにフルーツに」
「若しかして青いとかはないわよね」

「クレープが！？」
ポルフィは青いクレープと聞いて目を丸くさせた。
「そんなのあるの！？」
「ええ、あるのよこれが」
「学校の近くの並木道のところにね」
「へえ、そうなんだ」
それを聞いてその目をさらに丸くさせる。
「凄いのがあるんだね」
「マンチキン産だよ」
皆はまた彼に言ってきた。
「マンチキン！？ああ」
ここでポルフィは己の記憶を辿って当てはまったものを思い出した。
「あれなんだ。あの何でも青いっていう」
「そう、そこ」
「そこは知っていたんだ」
「一応はね」
それは知っている彼であった。
「細かいことは知らないけれど」
「カップルで言ったらいいことがあるって評判のお店なんだ」
「それに凄く美味しいし」
「美味しいんだ」
彼が反応を見せたのはそこであった。目がキラリと光りだしてさえいた。

第八十二話　ポーランド料理その八

「そのクレープって」
「ええ、とても」
「普通の黄色いクレープとはまた違ってね。蕎麦粉を使ってるんだよ」
「そうだよね。クレープは本来はね」
ここで今出されているクレープをちらりと見る。見ればそのクレープは小麦のもので普通の黄色い色を見せている。これはこれでかなり食欲をそそるものである。
「蕎麦だよね」
「小麦もいいけれどね。やっぱり」
「そうそう。今日は小麦だけれどね」
ポルフィはその今出されているクレープについても言う。
「ちょっと今日はこれがいいかなって思ってね」
「それでだったの」
「別にこれでもいいよね」
言葉が少し言い訳がましいものになっているのは否定できなかった。ポルフィの顔にも少しだけ苦笑いが入っていた。それも隠すことができないでいた。
「小麦でも」
「うん、別にね」
「それもいいわよ」
皆もそれについてとやかくは言わないのであった。何故なら小麦もクレープもそれはそれで美味しいのは確かなことであるからだ。
「よかった。それにしても青い蕎麦粉のクレープなんだ」
またそれについて考える。
「一回食べてみたいな」
「是非そうしたらいいわ」

「きっと病み付きになるから」
「うん、それじゃあ」
皆からの話を聞いてあらためて決意するのであった。頷いてさえいる。
「今度行ってみるよ」
「そうしたらいいわ。それにしても」
話がまた動いた。皆テーブルの上のお菓子をワインと一緒に食べている。話はそこに向かっていた。
「このケーキ美味しいわよね」
「そうだね。クレープも」
皆そのケーキにクレープを食べながら話をする。
「お酒にも合うし」
「紅茶やコーヒーにもね」
「うちのミーナはお菓子作りが一番好きなんだ」
ポルフィはお菓子が評判なのに機嫌をよくして述べた。
「だから褒めてあげると喜ぶよ」
「そうなの」
「中でも一番得意なのはやっぱりこれだね」
そう言ってフォヴォルキを手に取る。
「これが一番好きだし得意なんだよね」
「やっぱりそれね」
「そう、フォヴォルキ」
今度は食べながらの言葉であった。
「やっぱりこれだよね」
「ポーランドのお菓子でも一番有名なのかしら」
「少なくとも皆食べるよ」
こう皆にも答える。やはり食べながら。
「美味しいよね」
「確かに」
「食べ易いし」

「食べ易いのが一番」
彼はこうも言う。
「食べにくいお菓子なんてやっぱり駄目じゃない。クレープだってそうでしょ？」
「そうそう」
「こうして気軽に食べられるのがいいよね」
そう言いながらクレープを手に取って口に入れていく。確かに食べ易い。
「いい感じに食べられるしね」
「やっぱりお菓子はこうじゃないとね」
「そういうことだよ。それにしても」
またポルフィは言うのだった。
「青いクレープか。是非」
今それを心に誓う。誓ったところで皆があることに気付いた。
「んっ！？そういえば」
「あんなにあったのに」
うず高く山の様に詰まれていたお菓子がもう奇麗に消えていたのであった。
「もうなくなったのね」
「何とまあ」
「皆もうお腹一杯かな」
その中でやはり一番食べていたポルフィが皆に尋ねる。
「ええ、もうね」
「そういえば。食べたね」
「そう言ってくれると有り難いよ」
皆のその言葉に満足した笑顔になるポルフィであった。
「じゃあ僕は明日は」
「明日は？」
「うん、ちょっとね」
ここでもにこりと笑って答える。

「行くところができたからね」
「ああ、あそこね」
「うん、行って来るよ」
皆そこが何処なのかおおよそわかった。だからあえて言わないのであった。
次の日そのクレープ屋はあっという間に店の材料をなくしてしまっていた。理由は簡単で誰かが食べてしまったからだ。それはまるで馬のようであったという。

ポーランド料理　　完

２００８・２・２３

第八十三話　ルシエンのプレゼントその一

ルシエンのプレゼント

クラスの誰もが知っていることだがルシエンはアンネットが好きである。本人もそれを隠そうともしない。

当然ながらそれはアンネットも気付いている。しかしわざとつれない態度を取ったりするのだ。

「アンネット、今度の休みだけれどさ」

「あっ、御免なさい」

デートの誘いにはよくこう返す。

「今度のお休みは用事があるの」

「えっ、またなのか」

ルシエンはそれを聞いて泣きそうな顔になる。これもいつものことだ。

「また駄目なのか」

「今度ね」

しれっとして涼しい顔で言うのだった。

「誘ってね。それじゃあね」

「あ、ああ」

しょげかえった顔で答えるルシエンであった。どうにもこうにもやりきれない顔だ。

時々誘いに応じるが時々断る。そのことの繰り返した。

「おかしいな」

ルシエンはその中で思うのだった。

「アンネットのスケジュールはいつもちゃんと把握して誘ってるのにな」

「それ本当!?」

彼は学校の喫茶店の中の一つで話をしていた。咳の向かい側にいるのは他ならぬアンネットの弟であるダニーである。

「とてもそうは見えないけれど」
「俺なりにちゃんと調べてるんだよ」
疑惑の目を向けるダニーに対して答える。
「その為に御前に協力してもらってるんだろ？」
「まあそうだよね」
ダニーはバナナジュースを飲みながら彼の言葉に答える。
「こうしていつもジュースをおごってもらいながらね」
「そうだよ」
ここで顔を憮然とさせてきた。
「美味いよな、そのバナナジュース」
「うん」
にこりと笑ってルシエンのその言葉に頷く。
「僕バナナジュース好きだしね」
「だったらわかるよな」
その言葉が少し脅迫めいていた。彼も大真面目なのだ。だからといって言葉が脅迫めいたものになっているのはいささか考えものであったが。
「しっかり飲んでくれよ。賄賂なんだからな」
「そんなにはっきり言っていいの？」
今のルシエンの言葉には突っ込まざるを得なかった。
「賄賂だなんて」
「いいんだよ。本当だしな」
しかし彼の言葉は変わらない。
「世の中持ちつ持たれつ」
「まあそうだけれどね」
それは否定できない。本当のことだからだ。
「だからだよ。それでいいんだよ」
「そうなんだ」
「それでだよ」
ルシエンはまた言う。

「何ならもう一杯、お菓子もおごるぞ」
「だから協力しろってことだよね」
「ああ。何がいい？」
座った目でダニーに問うのだった。やばい雰囲気までそこにはある。
「何でも頼むぞいいぞ」
「今はこれだけでいいよ」
しかしダニーはこれ以上は頼もうとはしないのだった。きっぱりと断ってきたのだった。
「今はね」
「何だ、無欲だな」
「だって今できることはこのバナナジュースの分だけだし」
意外と無欲なダニーであった。
「これだけでいいよ」
「そうなのか」
「うん。それでね」
ダニーから話をはじめてきた。
「今回はどうするの？」
「今回か」
「そうだよ。難易も考えていないとかじゃないよね」
「勿論だよ」
自信に満ちた返事であった。実際ルシエンはいつも考えてはいる。問題はその考えが常に暴走してしまうということだが考えているのは事実だ。
「今回はな」
「どうするの？」
「プレゼントだ」
彼は宣言した。
「アンネットにプレゼントを贈る。それでいく」
「プレゼントねえ」

ダニーはそれを聞いても特に驚きはしなかった。醒めた感じであった。
「いいんじゃない？別に」
「あまり気乗りしない言葉だな」
「だって。それもいつものことだし」
それが理由であった。
「他に何か考えてみたらどうかな」
「他にか」
「そうだよ。そのプレゼントにしたって」
ダニーはルシエンがいつもアンネットに渡すプレゼントについても言うのだった。
「ブローチとかペンダントとかさ」
「いいだろ」
彼にとってみればセンスがいいと思っているものである。

第八十三話　ルシエンのプレゼントその二

「やっぱり女の子だからな。それでな」
「それは否定しないよ。ただね」
彼はさらにルシエンに対して言う。
「たまには違うものなんてどうかな」
「違うもの？」
「だから。そうした女の子したものじゃなくて」
いささか説明することに疲れを感じていた。とにかくルシエンは一直線で正攻法しか知らない。それで彼も説明するのに苦労を感じているのである。
「他に何かないの？」
「ないかとうか言われると」
正直彼も困るのだった。
「アンネットにはそうしたのが一番似合うじゃないか。だから」
「だからそれもルシエンさんの主観なんだよ」
さりげなく答えを言う。
「主観から離れてさ。ここは少し」
「主観から離れると」
そこからの答えは彼にもわかる。少なくとも彼は馬鹿ではない。それだけは救いであった。これでフランツみたいだったならばどうしようもないところであった。
「ということは客観だな」
「そうだよ。客観的に見るとね」
ダニーはあえて率直に述べた。
「ルシエンさんは一直線過ぎると思うよ」
「一直線か」
「ストレートしか投げないじゃない」
こう言うと実にわかりやすかった。言われてみればそうである。

彼はことアンネットに冠してはストレートしか投げていない。他の球種は投げてはいないのだ。
「それじゃあ駄目だよ。読まれるよ」
「カーブやシュートもか」
「スライダーに。あとできればシンカーもね」
ダニーの注文は意外と五月蠅い。
「投げられないんじゃないでしょ？そういうの」
「一応は投げられる」
アンネット以外に関してはわりかし考えてそこそこ以上にやれるのだ。
「じゃあ問題ないよ。それで行こう」
「それでか」
「そうだよ。投げられるんだから」
「アンネットにそれを投げる」
「そういうこと」
またそれを告げる。
「投げていこう。お姉ちゃんはアベレージヒッターだけれどね」
あえて自分の姉をこう表現してみせた。
「変化球を上手く使っていけば攻略できるよ」
「そうか。じゃあやるか」
「上手くいったらさ」
くすりと笑ってあえてルシエンに囁いてみせる。
「僕の義兄さんになれるよ」
「義兄さんっていうと」
これはすぐにわかった。
「アンネットの」
「やっぱり結婚したいよね」
「他の女の子は要らないな」
またここでもストレートだった。ダニーは困った顔でそこを指摘する。

「だからそこなんだって。ストレートばかりじゃ」
「おっと、そうか」
「気を着けてよ、本当に」
困った顔のままで言う。
「お姉ちゃんは手強いから。ストレートを狙われるといつも打たれるよ」
「わかった。それじゃあな」
ルシエンはあらためて頷くのであった。
「気をつけていくか」
「そういうこと。球種は多くね」
そこを念押しする。
「アベレージヒッターを抑えるのにはね」
「ああ。それじゃあ」
「それでプレゼントだけれど」
「今回は趣向を変えてみるか」
「あげることはあげるの」
「だから。変化球を入れてな」
笑ってこうダニーに言葉を返す。
「やってみるさ」
「期待していいのかな」
「是非共期待してくれよ。そうだな」
腕を組んで考えだした。考えるのはこれまで彼がアンネットに贈ってきた数々のプレゼントについてだ。考えてみればどれも女の子したものばかりであった。

第八十三話　ルシエンのプレゼントその三

「よし、決めたぞ」
「何にするの？」
「あれだよ」
笑ってダニーに囁くのだった。
「これならどうだ？」
「あっ、それって」
そのプレゼントを聞いてダニーも顔を綻ばせる。
「いいじゃない。いい変化球だよ」
「そうだろ？ちょっと工夫すればいいんだな」
「そういうこと。何事も工夫なんだよ」
にこりと笑って将来自分の義兄になるかも知れない相手に告げる。
「だからルシエンさんもね」
「わかった、それじゃあな」
「それにしても」
ダニーは今度は感心したような顔になった。白い喫茶店の中でその顔が映える。
「やっぱり変化球も投げられるんだ」
「俺は元々どっちでもいけるんだ」
ルシエン自身の言葉であった。その声ははっきりとしている。
「何でかな。アンネットに対しては」
「それもわかるよ」
ダニーにしろその理由はどうしてであるかは察しがついた。彼の性格がわかっているからだ。それなり以上に深い付き合いになっているからだ。
「どうしてもストレートしか投げられなくなるんだね」
「ああ」
その通りであった。こくりと頷いてみせる。

「どうしてもな。正面からな」
「結構どうでもいい相手には変化球って投げられるよね」
「そうなんだよ」
そうした性分なのであった。
「けれどな。これがアンネットになると」
「本命になると力が入るってことだね」
「心でな。そうなるんだよ」
それがルシエンなのだった。どうしてもそうなるのだ。
「それがかえってよくなかったか」
「これ今まで言わなかったけれどね」
ここでダニーは言うのだった。
「何だ？」
「姉さんも見ているから」
こうルシエンに告げた。
「俺をか」
「そうだよ。ルシエンさんが何をしてくるかね。よく見てるよ」
「そうだったのか」
「だからアベレージヒッターなんだよ」
ここでさっきの言葉とリンクした。そういうことなのだ。アベレージヒッターはパワーヒッターより打球を見る傾向にある。慎重にボールをバットに当てるからだ。
そのアベレージヒッターの姉をさしてまた言う。
「ストレートを投げてばかりじゃ幾らコントロールがよくてもね」
「駄目か」
「しかもルシエンさんって」
ルシエンにはまだ問題があった。
「何処に投げるかすぐにわかるし」
「わかるか」
「凄くわかり易いよ」
こうも告げる。

「だからそこもなおしてね」
「じゃあ今回はいいんだな」
「何処に投げるかはわかるけれどね」
一応はこう忠告する。
「それでも投げる球種が違うのは大きいけれどね」
「よし、それじゃあ」
(しかし姉さんも)
ここでダニーは心の中で呟くのだった。
(本当はルシエンさんのことがあれなのに。わからないな)
「じゃあ今度の休みな」
ルシエンはまだ何処に投げるのかはっきりさせていたが今回はそれでよしとしたのだった。ここまで来て変えるつもりもなかったのだ。
「アンネットにそれをプレゼントだ」
「うん、僕からは何も言わないし」
ダニーはこう断る。
「今回もそれでいいよね」
「ああ、それで頼む」
ルシエンも彼に応えて言う。
「向こうがわかっていてもできるだけ秘密にしておきたいしな」
「それはわかるよ」
惚れた相手には何事もできるだけ秘密にしたい。そうした微妙で複雑な心境がルシエンの中にもあるのであった。彼も繊細なのだ。

第八十三話　ルシエンのプレゼントその四

「僕もそんな心があるしね」
「悪いな。そこまで見てもらってな」
「いいよ。それじゃあ」
いよいよ話が終わる。
「バナナジュースも飲み終わったし。これで解散だね」
「そうか。それじゃあな」
「有り難う、ジュース」
ジュースの礼を述べてきた。
「やっぱりこの店はバナナジュースだよね」
「そうだよな。これが一番美味しいよな」
それにはルシエンも同意して頷いた。
「フルーツジュースがここの名物だけれどな」
「そうそう。その中でもやっぱりバナナだよ」
この件に関しては二人の言葉は一致していた。
「ここの喫茶店はね」
「そうだよな。その中でもやっぱりこれか」
「けれど今のルシエンさんは」
しかしここでダニーは彼に言った。
「グレープフルーツジュースなんだね」
「ああ、これも好きなんだ」
ルシエンの好物の一つである。彼は柑橘類が好きなのだ。
「身体にいいしな」
「バナナジュースも好きだったよね」
「ああ、そっちもな」
これも認めるのだった。
「けれど今日はこれにしたんだ」
「そうだったんだ」

「まあとにかくな」
ルシエンもそのグレープフルーツジュースを飲み終えるのだった。
「プレゼント。これでアンネットもな」
「うん、期待しているよ」
にこりと笑ってルシエンに述べる。
「じゃあ次の休みにね」
「ああ、俺はやるぜ」
こうして彼等は次の休みに向かうのだった。その休みに。ダニーはアンネットを駅前のデパートの屋上にさりげなく誘うのだった。
「今日の催しさ」
「確か特撮のヒーローショーだったわよね」
「そうそう、それそれ」
姉の言葉に頷きながらデパートの階段を登る。白い奇麗な階段だ。
「姉さんの好きな俳優さんもゲストに出ているんだ。ええと」
「レッドの人よね」
「その人が来ているんだ」
アンネットの方を見てにこりと笑ってみせてきた。
「そうなの」
「そうだよ。他のメンバーも来ているけれどね」
「また随分と豪華なのね」
「特撮番組の宣伝だからね」
これも中々大変なのであった。あちこちへの宣伝やコマーシャルもまた必要なのだ。出演している俳優達自身にしてもだ。だがこうした全員が出る機会は滅多にない。
「それでも滅多にないことね」
それはアンネットもわかっていた。
「本当かしら」
「嘘じゃないよ」
確かにそれは嘘ではない。本当のことだ。
「本当に皆来ているからね」

「じゃあサイン貰えるかしら」
「多分ね」
こう姉に語る。
「子供も一杯来ているだろうし」
「それとお父さんお母さんもね」
子供には親がつきものである。特撮番組は子供と一緒に楽しむ父親や子供と一緒に見る時に顔のいいヒーローを楽しむ母親を目当てにもしているのである。子供達がメインの対象だがその子供達の他にも親もターゲットにしているのである。他にもマニアもターゲットだ。
「じゃあ屋上は一杯ね」
「だろうね」
「サイン貰えるかしら」
アンネットはそれが少し不安になった。
「一杯いたら」
「大丈夫だよ」
ダニーはにこりと笑って姉に顔を向けて答えるのだった。
「きっとね。だから安心していいよ」
「どうしてそう言えるのかしら」
「うん、まあそれはね」
「ふうん。それは、なのね」
それを聞いて眼鏡の奥の青い目が微妙な光を発した。それを見たダニーは内心まずいと思った。だが姉はまたすぐに言ってきた。

第八十三話　ルシエンのプレゼントその五

「けれど。サインが貰えたらいいわね」
「そ、そうだね」
少し焦りながら返事をした。
「期待していいよ」
「期待させてもらうわ。じゃあそろそろだけれど」
「うん」
「ここのデパートの屋上は」
ここからはアンネットだけではなく皆の得意分野であった。
「食べ物のお店が多いわよね」
「そうだよね。ラーメンにオムライスに」
所謂スナックランドなのである。
「あと冷やし飴もあったよね」
「メロンシェーキもあったわね」
結構色々揃っているのである。
「カレーライスもあるし」
「特に天丼ね」
そうしたものもあるのであった。
「あの普通の天丼の三杯分はある」
「よく知ってるね」
「結構来てるのよ」
だから知っているのであった。彼女も食べることにかけてはかなりのものだ。やはり彼女もまた二年Ｓ１組の生徒なのであった。だからこそなのだった。
「一週間に一回はね」
「そうだったんだ」
「ルシエンとね」
「えっ！？」

その名前を聞いて思わず焦った。
「ルシエンさんと!?」
「あれ、どうしたの?」
この時ダニーは気付いていなかった。姉は表情こそなかったがそれでも目の奥は笑っていた。まるで全てをみすこしたように。
「急に驚いて」
「ううん、別に」
だがダニーもダニーで演技派だ。すぐに冷静な顔になった。
「何でもないよ」
「そうなの」
「そうなんだ、ルシエンさんと」
しかし彼の名前は出す。
「一緒に来ているんだね」
「おかしいかしら」
「ううん」
首を横に振ってそれは否定する。
「時々だけれどね」
「時々なんだ」
「ルシエンはいつも誘ってくるけれど」
(やっぱり)
ダニーは今の姉の言葉を聞いて心の中で呟いた。それを聞いて納得できる。それもまた当然のことであった。この前の話を思い出すわけでもなく。
(ルシエンさんも難しいな)
「時々よ。あくまで」
「断ることも多いんだね」
「断る方が多いわね」
身も蓋もない言葉であった。かなりきつい。
「正直なところ」
「そうなんだ」

「だって毎日なのよ」
ふう、と溜息を吐いての言葉だ。しかしその表情は決して拒むものではない。
「困るわよ、流石に」
「流石になんだね」
「しかもよ」
ここからが問題なのであった。
「いつもいつも突っ込んで。引くってことを知らないし」
「知らないんだね」
「まるで闘牛場の牛みたいなのよ」
これも実感できる言葉であった。少なくともルシエンらしいと言えるものであった。話を聞いて心の中で納得することしきりであった。
「たまには曲がるなりして欲しいわね」
「曲がるんだ」
「ええ。正面からばかりだと」
顔が苦笑いになる。
「私としてもね。疲れてしまうわよ」
「それじゃあさ」
ダニーはそこまで聞いて姉にまた声をかけるのだった。

第八十三話　ルシエンのプレゼントその六

「ええ。何かしら」
「変化球だといいんだよね」
野球に例えてきた。あえてルシエンと話した時と同じにしているのである。
「直球だけじゃなくてそれで」
「ええ、そうね」
アンネットもその言葉に微笑む。どうやらそれこそが彼女がルシエンに対して望んでいることのようである。つまりダニーの読みは当たっているのだ。
「変化球もあると確かにいいわね」
「わかったよ」
またダニーはそれに頷きもした。
「それじゃあいいよ」
「!?いいって」
今の言葉はアンネットにはわからない筈だった。少なくともダニーにはそう見えた。
「何かあるのかしら」
「あっ、別に何も」
ここでもダニーは言葉を誤魔化すのであった。
「ないよ。安心して」
「そうなの」
「そうだよ。さて」
屋上への入り口が上に見えてきた。登り階段の終わりに。
「姉さん、もうすぐだよ」
「そうね」
アンネットも彼のその言葉に頷く。
「やっとって感じね」

「このデパートって屋上まで長いからね」
それがこのアパートの特徴であった。
「エレベーターも止まっていなかったし」
「運がないって言うのかしら」
アンネットは不意に言うのだった。
「そういえばルシエンは」
今度は彼女の方からルシエンの名前を出してきた。
「このデパートのエレベーターガールさんって奇麗な人が多いわよね」
「うん」
しかも制服もいい。だからこの店に来る客も多いのだ。これもまた宣伝のうちなのだ。
「けれどルシエンはその人達を全然見ないのよ」
「全然なんだ」
「そうよ、全然よ」
また言ってきた。
「私ばっかり見てね」
「そうなんだ。それも凄いね」
「本当に私だけを見るのよ」
困った笑みだがそれでも目の奥の光は決して拒むものではない。それはダニーも察するがあえて心の中でそれを隠しておくのであった。
「いつもね。本当にいつも」
「いつもそうなんだね」
「そうなのよ。たまにはね」
彼女は言う。
「ストレートじゃなくて変化球が欲しいのだけれど」
「ひょっとしたらさ」
さりげなく話を振る。今度は成功であった。
「変化球を見ることができるかも知れないよ」

「だといいけれど」
「とにかく行こう」
もうすぐその入り口であった。
「食べ物もあるしね」
「そうね。食べ物は」
話はそこにも及ぶ。サインだけではなく。
「オムライスがいいかしら」
「オムライスなんだ」
「他にも色々と食べるけれど」
身体はあまり大きくはないが大食漢のアンネットであった。
「今日はそれがいいわ」
「そうなの。わかったよ」
「自分で買うわよ」
ダニーがわかったと言ったのでこう返してきた。
「その分のお金もあるしね」
「あっ、いや」
また危ないところであった。姉の鋭さを知っているからこそ心の中で冷や汗をかくのであった。どうも今日は調子が悪いとも心の中で思った。
「そうじゃなくてね」
「どうしたの。今日は何か変よ」
「そうかな」
これは誤魔化した。苦しいと心の中では思ったが。

第八十三話　ルシエンのプレゼントその七

「別にそうは思わないけれど」
「だったらいいけれど。さて」
二人は遂にその屋上に出た。覆いで雨が防がれた中に様々な出店が並んでいる。そして中央には観客席が設けられその奥に舞台がある。簡素だがしっかりとした舞台であった。
「ショーは終わったのかしら」
「そうみたいだね」
見れば子供達がはしゃいでいてその中央には五人程の若い顔のいい男女がいる。彼等が誰であるのかアンネットはすぐにわかった。
「終わったところみたいね」
「そうみたいだね」
ダニーはアンネットの言葉に応えた。
「サインだけれど。どうするの？」
「サインペンと色紙あるかしら」
アンネットはそれを弟に問うた。
「あったら悪いけれど貸して」
「御免、それがないんだ」
申し訳なさそうにこう答える。
「悪いけれどね」
「そう。だったら」
だからといってすぐに諦める必要はなかった。アンネットは観客席に目をやった。普通はそこでペンや色紙を用意してあるからだ。向こうも商売なのでこれは当然だ。
「買おうかしら」
「その必要はないよ」
だがここでダニーは今度はこう言ってきたのだった。
「ないの？」

「そう、ないよ」
彼はまた言った。
「姉さんが買う必要はね」
「あんたがお金を出すことはないのよ」
弟に金を出してもらってまでとは思っていない。姉としてのプライドがそうさせる。
「言っておくけれど」
「だからそうじゃないって」
しかしダニーは笑って言葉を返すのだった。
「僕はお金出さないし」
「じゃあどうして」
「それはね」
「あっ、来てたのか」
ここで三人目の声がした。
「おいダニー」
「あっ、もうあるかな」
「ああ、あるぜ」
「その声は」
アンネットはその三人目の声ですぐに誰かわかった。彼女がいつも聞いている声であるからこれは当然であった。そう、いつも聞いている声である。
「ルシエン、いたの」
「ああ、ちょっとな」
にこにこと笑ってアンネットの前に出て来た。そうしてまた言うのだった。
「ここのショーを見に来ていてな」
「そうだったの」
応えながらもあまり信じてはいない顔であった。
「そうさ。いや、都合がいいよ」
「都合がいいの？」

「ああ」
「そうだ。それでな」
彼はアンネット達のところにやって来た。本当ににこにことした笑顔であった。
「アンネットはどうしてここにいるんだ？」
「ヒーローショー観に来たのよ」
彼が自分の趣味も知っていると把握しているからこその返事であった。アンネットもルシエンのことはよく知っているしルシエンもそれは同じなのだ。
「それでサインも」
「ああ、じゃあ丁度いいな」
ルシエンは彼女のその言葉を聞いてまた笑顔になる。
「だったら俺が今そのサインを持ってるからさ」
「えっ、そうなの」
「ああ、ほら」
ここで五枚の色紙を出してきた。その五人の主役それぞれのサインである。
「これだろ、欲しいのは」
「ええ、そうよ」
自分で目が輝くのを止められないアンネットであった。本当に目が輝いていた。
「もうあるなんて。けれど」
「ああ、俺のもあるさ」
しかしルシエンは笑顔でまた言うのだった。
「だから安心していいぜ」
「！？何で二セットも」
鋭いアンネットはすぐにそこに考えを及ばせた。今度はその湖の色の目に怪訝な色を見せる。
「んっ！？最初からそのつもりだったからさ」
ここでルシエンはその変化球を出すのだった。

「アンネットへのプレゼントにってな。後は俺の」
「ルシエンのなの」
「最初からこう思っていたんだ」
ここでは上手い芝居を見せた。傍観者を装って見ているだけに徹していたダニーも今の彼の演技には心の中で拍手を送るのであった。

第八十三話　ルシエンのプレゼントその八

「もう一組はアンネットにってな」
「そうだったの」
「受け取ってくれるか？」
あらためて彼女に尋ねる。
「よかったら」
「ええ、喜んで」
アンネットもにこりと笑って彼に微笑んで答えた。
「受け取らせてもらうわ」
「よかった。そう言ってくれると有り難いよ」
「だってその為にここに来たんだし」
「そうだったのか」
「そうよ」
実はここでのルシエンの言葉も芝居である。彼はあえてダニーからの情報を知らないふりをしたのだ。実際のところ中々の芸達者である。
「もらえるかしらって思っていたけれど」
「よかったよな。俺がここに来ていて」
「そうね」
「あっ、それでだ」
ルシエンはさらに言う。やはり今度も演技であるが。
「何か食べないか？」
「何かって？」
「オムライスでもな」
笑ってアンネットに提案するのだった。
「ほら、ここの出店って美味いの多いだろ」
「ええ」
何しろそれが売りなのだ。見れば子供達がそのラーメンやカレー

や冷やし飴を楽しそうに飲んでいる。実際のところその冷やし飴の殺人的な甘さに喉を鳴らしているのはダニーであった。
「ダニーもどうだ？」
「あっ、うん」
今のダニーの返事は半分芝居で半分地だ。
「いいの？それで」
「ああ。何でも好きなの頼みなよ」
「じゃあラーメンと冷やし飴にしようかな。そうそう」
ここで一応断るのだった。
「僕は自分で支払うから」
「それでいいのか？」
「うん、いいよ」
働いた分の報酬はもうあのバナナジュースで貰っていると判断したからこう答えたのである。その辺りはしっかりしているダニーであった。まだ子供だというのに。
「じゃあアンネットは」
「私はやっぱりオムライス」
実はアンネットの好物なのだ。しかも実はルシエンはダニーから携帯のメールで彼女がオムライスを食べたいと受けていた。それでオムライスをさりげなく出したのである。
「それで御願いね」
「飲み物はどうするんだ？」
「メロンジュース」
これまた凄いライトグリーンの色彩のメロンジュースであったりする。こうした出店ではよく売られている種類のジュースである。なおこの時代の人口着色料は二十世紀のそれのように身体に悪いものではない。だから過度に摂取しても問題にはならないのだ。
「それで御願いね」
「じゃあ俺はオムライスとグレープフルーツにするか」
「ルシエングレープフルーツ好きね」

「まあな」
ここでも頼んだが実はこれはいつものことである。
「やっぱりジュースはこれだよ」
「身体にいいから？」
「それとアンネットがはじめて俺にくれたプレゼントだしな」
にこりと笑って答えてきた。
「ああ、あの時ね」
「そうだよ。俺にくれたよな」
二人のはじめてのデートの時のことである。実はそのデートも彼がかなり必死にというか何度も特攻を仕掛けてこじつけたデートなのである。
「お昼のおやつにってな」
「そうだったわね。私が切って渡してね」
「そうだよ。それだよ」
二人は笑顔になっていた。そのにこやかな笑顔で話をするのであった。

第八十三話　ルシエンのプレゼントその九

「あれが美味かったからな。今でもこうして」
「食べるのね」
「飲むこともな。だからなんだよ」
「私もそうよ」
何とアンネットもであった。
「アンネットもか」
「オムライスよ」
今度はオムライスに話がいく。
「オムライス・・・・・ああ、そうだな」
ルシエンにはそれで合点がいった。
「俺がはじめてアンネットに作った料理だったよな」
「美味しかったわよ」
トルコ人のせいかどうかわからないがルシエンは料理上手でもあるのだ。特にこうした卵や御飯を使った料理は得意なのである。だからオムライスもお手のものなのである。
「それからよ。よく食べるようになったのは」
「そうだったのか」
「だから。一緒に食べましょう」
こうルシエンに提案する。
「私もグレープフルーツジュースにするから」
「そうか。全部同じなんだな」
「そうよ、全部同じよ」
またにこりと笑ってルシエンに告げる。
「ルシエンとね」
(何だ)
ダニーは今の姉を見てまた心の中で呟いた。
(何だかんだで姉さんも)

笑っていた。優しい微笑みになっているのが自分でもわかる。
（ルシエンさんにぞっこんなんだな）
「じゃあアンネット」
ルシエンはそんな彼に気付くことなくアンネットにまた声をかける。
「ええ、何？」
「二人で食べような」
「そうね。あっ」
「ああ、僕はいいよ」
にこりと笑って二人に言うダニーであった。
「ちょっと用事を思い出したしね」
「用事！？」
「本屋に行くんだ」
そう理由をつけてきた。勿論今思いついた用事である。
「だからね。またね」
「そうなのか。じゃあ仕方ないな」
「うん、そういうことだから」
ルシエンも実際のところ彼が気を利かしたのはわかっている。しかしそれもまたえて言葉には出さずに彼の言葉を受けたのであった。
それでよかった。
「またね」
「ああ、じゃあまたな」
「じゃあルシエン」
アンネットがまたにこやかな顔でルシエンに声をかけてきた。
「オムライスとグレープフルーツジュースを食べたらどうするの？」
「そうだよな。アトラクションの第二幕見るか？」
「いいわね、それ」
にこやかな顔のままで彼の提案を受けた。
「二人でね」
「ああ、二人でな」

何だかんだで熱々の二人であった。ダニーはそんな二人を見てついつい妬けたりもするがやっぱりそれは顔には出さないのであった。

ルシエンのプレゼント　　完

２００８・３・１

第八十四話　ゴールデンカップルその一

ゴールデンカップル

カップリングが多い二年Ｓ１組。まずオーソドックスな組み合わせといえばこの二人だ。

「お爺ちゃん同士が同僚だしね」

「お似合いよね」

「お爺ちゃんは関係ないでしょ」

蝉玉は皆の言葉に少し憮然とした顔で答えるのであった。

「それに私達ってオーソドックスなの？」

「何か言葉の意味がわからないんだけれど」

スターリングも言う。彼にしろ皆の言葉の意味がわからない。

「どういうことなのかな」

「とりあえず普通ってことかしら」

このクラスでは最もないものである。

「オーソドックスってことは」

「まあそういうことよね」

「答えとしてはね」

「そうなの」

それを聞いてまずは納得する蝉玉であった。それでもまだ釈然としないものを心に含んではいるが。

「じゃあ聞くけれどオーソドックスじゃないのは？」

「そうよね、それよね」

スターリングに続いて蝉玉もそれを皆に尋ねるのだった。

「普通があれば普通じゃないのもあるのは当然よね」

「誰と誰なの、それって」

「そう言われると」

皆答えに困るのだった。何故なら。

「例が多過ぎるのもねえ」

「しかもいないのもいるし」
それがカムイと洪童のことであるのは言うまでもない。何処までももてないしそうした話には縁のない二人であった。殆ど自分達のせいではあるが。
「特にあの二人はねえ」
「もう別格」
「テンボとジャッキーね」
蝉玉はこう皆に突っ込みを入れた。
「別格って言うと」
「その二人がまず来るのね」
「違うの？」
あらためて皆に尋ねる。
「他にもいそうだけれど」
「まあ同率首位はいるわね」
いるのである。
「誰よ、それ」
「ペリーヌとロミオね」
また意外なカップリングであった。
「えっ、あの二人って」
スターリングはその二人の名前を聞いて思わず声をあげた。
「付き合っていたんだ」
「どうもそうらしいわね」
蝉玉もはじめて知ることだった。彼に答えながら首を捻っている。
「何時の間に」
「いや、ついこの前なんだ」
「気付いたらね」
皆にしろそれは同じであった。この前やっと気付いたのである。
「付き合っていたのよ」
「何時の間にかね」
「そうだったの」

蝉玉はそれを聞いて眉を少し顰めさせていた。
「意外な組み合わせね」
「意外でもその内容は凄いわよ」
「もうそれこそね」
「どんなのかな」
スターリングはそこに興味を持った。
「まあ見てみればいいわ」
「そういうこと。是非ね」
それもまた言われた。
「凄いのが見えるからね」
「凄いんだ」
「桁外れの凄さだから」
今度は桁外れときたのだった。どうやらかなり凄いらしい。
「ふうん。それだったら」
「一度見てみたいわね」
蝉玉も話を聞いていて興味を抱くのであった。こうなれば元々婦唱夫随のこのカップルなので話は早かった。蝉玉はスターリングに対して言ってきた。
「それじゃあスターリング」
「どうするの？」
彼女に問うた。
「ダブルデートしてみましょう」
「ダブルデートするんだ？」
「そうよ。それだとわかるわよね」
こう提案するのだった。
「ダブルデートね。どうかしら」
「それならね」
その言葉に頷く。こうして二人はそのペリーヌとロミオという異色のカップリングに対してデートを申し込むのだった。それに対する二人の返答は。

「ええ、私達はいいわよ」
「僕もね」
二人は快くこう答えるのだった。
「どうせなら人数が多い方がいいしね」
「そうそう」
「そうなの。じゃあそれで御願いね」
「ええ。じゃあ蝉玉」
ペリーヌはにこりと笑って蝉玉に言ってきた。

第八十四話　ゴールデンカップルその二

「楽しいデートにしましょうね」
「ええ」
この時蝉玉はそのデートに何を着ていこうかと考えていた。スターリングも大体同じことを考えていた。しかしこの二人が何を考えているかは全く考えを及ぼしてはいなかったのであった。ここが最も問題であったがやはり二人は気付かなかったのであった。
その気付かないまま話が進む。そのデートの日。蝉玉は中国風の赤い上着を着ている。刺繍が服の至るところにありそれが金色と銀色だった。それと白い短めのズボンと黒い靴で可愛く女の子らしく纏めていた。黒い髪の毛は言うまでもなくお団子にしてある。
スターリングも青いブレザーにクリーム色のズボンで奇麗に決めている。二人共デートと言うことで学校にいる時よりも決めてきていた。二人はお互いの服装を見てまずは笑顔で頷き合った。
「似合ってるじゃない」
「蝉玉もね」
お互い言い合う。二人はこの時は二人だけの世界であった。しかしすぐに他の二人の世界にも目を向けることにしたのであった。
「それであの二人はどうなのかしら」
「それだよね」
それについては実のところ二人共特に考えてはいなかった。凄いとは聞いていても実際のところ何がどう凄いのかはわかっていなかったのである。というよりかは実感を持てなかった。だがそれが完全に崩れ去ることになるのであった。
「あっ、来たわよ」
最初に見つけたのは蝉玉であった。
「ペリーヌが。けれど」
「ロミオもいるね。ただ」

二人は彼等の姿を見つけた。しかし見つけても表情は晴れやかなものにはならなかった。それどころか思いきりその顔を顰めさせてさえいた。

「服、いつもと変わらないわよね」

「うん」

ペリーヌもロミオも学校で見るようないつもの服であった。若干ペリーヌのベージュのロングスカートが少しよく見える程度である。ベージュでそうなのだから他の色はもっと地味であった。その地味さが二人にとっては驚くべきものであった。そのことには驚いていた。

「何、あれ」

「いつもと変わらないわね」

二人はこう言い合う。その驚いた顔で。

「デートよね、確か」

「そうだよ」

それは確認を取ったから間違いはなかった。ちゃんと二人の記憶にもある。

「間違いなくね」

「けれどどうしてあの格好なのかしら」

二人の考えではデートの時こそお洒落をするものだ。派手好きなアメリカ人と中国人ということを差し引いてもそう考えていたのだ。ところがだ。

あの二人は違っていた。しかも全く。二人にはそれが信じられなかったのだ。

「どうしてまたそんな」

「あの格好で」

「けれど。来たものは仕方ないわね」

最初に諦めたのは蝉玉であった。

「ダブルデートしましょう」

「そうだね」

続いて諦めたのはスターリングだった。二人しかいないが二人共諦めるのにかなりの決断力が必要なことであったのだ。諦める為の決断力が。

「腹をくくってね」

「何かデートに腹を括るっていうのも」

「凄いって言っていたけれど」

ここでやっと皆の言葉を実感しだした。

「あれかな」

「多分よ」

しかしここで蝉玉の直感が動いた。女のそれというよりは彼女のものが。

「これで終わりじゃないわね」

「終わりじゃないの」

「何かね。ベトナムとかタイ、いえ」

連合ではかなり強かな国としての性格、国民性で知られている。陽気で温厚ではあるがその強さは折り紙つきとまで評価されている。ネロやフックの国である。

「イスラエルみたいな？」

「イスラエルなんだ」

その彼等よりも上とされる連合の所謂裏番とも言える国だ。

「そんな感じしない？」

「僕は別にそんなのは」

スターリングは懐疑的な顔をして首を捻るだけであった。

「感じないけれどね」

「私だけかしら」

「そうだよ、幾ら何でも」

彼はパートナーに比べてかなり楽観的であった。蝉玉は腕を組んでその顔を顰めさせているのでその表情は結構似たものがあるのだが。

「そんな極端なのはないって」

「そうかしら」
「そうそう。ほら、来たよ」
ここでその二人が彼等の前にやって来た。やはりラフというかいつもと変わらない格好である。蝉玉はそんなペリーヌに対して挨拶をするのだった。

第八十四話　ゴールデンカップルその三

「お早う」
「お早う」
ペリーヌも蝉玉に挨拶を返す。スターリングとロミオもまた挨拶をしていた。
「じゃあ今日は何処をデートするのかしら」
「ああ、それだけれどね」
蝉玉は本心を隠してペリーヌに言ってみせてきた。
「何処に行くのかはあんた達に任せるわ」
「私達に？」
「うん、ちょっと二人で考えたんだけれど」
スターリングで目で合図をしながら話す。
「私達っていつも同じようなデートしてるから」
「実はそうなんだ」
スターリングも言う。勿論蝉玉に合わせているのである。
「だからさ。今日は二人と一緒にデートしたいんだ」
「それでいいかしら」
「ええ、いいわよ」
ペリーヌは穏やかな微笑みと共に二人の申し出に対して頷いてみせた。
「それならそれで行きましょう」
「じゃあさ、ペリーヌ」
ロミオもペリーヌに顔を向けて声をかけてきた。背がペリーヌより少し高い位だ。ペリーヌはクラスの女の子の中では背が高い方なのだ。
「まずはショッピングなんてどうかな」
「そうね」
ロミオのその提案ににこりと微笑む。

「じゃあそこね。蝉玉、スターリング君」
今度は二人に声をかけてきた。
「それでいいわよね」
「ええ、まあ」
「僕達はそれでいいよ」
蝉玉は内心僅かな不安を抱きスターリングは何も思うところなく彼女のその言葉に頷いた。ここでも二人の心の中は対照的であった。
「じゃあそれで決まりね」
「行こうか」
「ええ」
ペリーヌとロミオが頷き合いそれで話は決まった。しかし話はここからがはじまりであった。蝉玉とスターリングは二人の後に続きながらヒソヒソと話をしていた。
「普通じゃない」
「今のところはね」
蝉玉はまだ警戒を解いてはいなかった。
「けれど。これからはわからないわよ」
「考え過ぎだって」
笑って蝉玉の不安を打ち消そうとする。
「幾ら何でも極端なことにはならないって」
「うちのクラスよ」
蝉玉は今度はクラスのメンバーであることを出してきた。
「何が起こっても不思議じゃないわよ」
「そうかな」
「そうよ」
さらに言う。
「だから。用心はしておくわ」
「そんなになんだ」
「何があってもね」
目がそう言っていた。

「一応は用心しておくわ」
「蝉玉がそんなに言うんだったら」
スターリングも首を捻りながら考えだした。
「僕も用心しておこうかな」
「そうして。それでね」
また蝉玉はスターリングに言う。前の二人に聞こえないようにこっそりとであるが。
「何処に行くのかしら」
「あっ、そういえば」
また蝉玉の言葉で気付いた。
「何か今まで来たことのない場所だよね」
「商店街から出たけれど」
二人は商店街のどの店にも入らずにさらに先に進んでいく。何時の間にか人通りも少なくなり店もなくなっていた。とてもショッピングできる場所ではなくなっていた。
「何処に行くつもりかしら」
「何かわからなくなってきたね」
「さあ、いよいよよ」
「二人共。いいかな」
しkしその商店街の出口において。二人は蝉玉達に顔を向けて声をかけてきたのであった。その顔は二人共見事なまでの満面の笑みである。
「お宝の山に突撃よ」
「お宝の山！？」
「ええ、そうよ」
ペリーヌがその満面の顔で蝉玉に答える。

第八十四話　ゴールデンカップルその四

「お宝の山に突撃なのよ」
「だから何よ、お宝って」
蝉玉には話が全然見えていなかった。それはスターリングも同じであった。二人は彼等の言葉の意味がわからず目を顰めさせていたのだ。
「何が何なのかわからないのだけれど」
「すぐにわかるわ」
しかしペリーヌのにこやかな顔は変わらない。
「だから。入りましょう」
「入るって何処に？」
「だからあの店よ」
そう言って前にあるダークブラウンの外装に入り口に何かライオンの置物を置いてある店を指差してみせてきた。一見で怪しい雰囲気が伝わる。
「わかるわよね」
「店、なの」
「何に見えるの？」
「何かって言われると」
少なくともその怪しい雰囲気が店に見えるわけではない。それを言いたかったのだ。
「何かしら」
「まあまずは中に入って」
ペリーヌがまた言う。
「そうすればわかるから」
「そうなの。それじゃあ」
「さあさあ、夢の冒険が今はじまるよ」
ロミオが朗らかに蝉玉に言ってきた。

「物凄いお宝の山が眠っているから」
「お宝お宝って言うけれど」
「何があるんだろうね」
蝉玉は今度はスターリングと向かい合う。だがスターリングにも全くわからなかった。わからないうえにどうなるのかさえ見当がつきかねていた。しかし何はともあれその怪しい店の中に四人で入るのであった。
店に入るとそこは。カオスであった。
「何、ここ」
「何のお店？」
二人は店の中に入っていきなりこう呟いた。服もあれば本もあるしゲームソフトもある。一応はジャンルごとに分けられているがその内装は実にカオスであった。洞窟の様な場所に様々なものが置かれやけに明るい灯りで照らされているのであった。怪しい雰囲気は店の中でも同じなのだった。
「古本屋よ」
「あと古着屋」
「古着屋なの」
二人の話を聞いて言う蝉玉だった。まだ呆然として入り口に立ったままであるが。
「そうよ。他の何に見えるの？」
「訳がわからない世界」
これ以外に言葉がなかった。
「そうとしか言えないわ」
「今回ボキャブラリーが貧困ね」
「何て言ったらいいかわからないのよ」
今度ははっきりとペリーヌに言い返した。
「こんな店はじめて見たわ」
「はじめてなの」
「お客さんは多いけれど」

見れば老若男女があちこち動き回っている。その洞窟を思わせる店の中をだ。
「ここで買い物するのよね」
「他の何をするの？」
「そうよね。じゃあやっぱり」
蝉玉は言うのだった。
「服に本にゲームソフトに」
「アクセサリーもあるわよ」
「色々とあるのね」
「ここはそういうお店なんだよ」
ロミオの声が明るい。本当にそうらしい。
「だからさ。ペリーヌは服だよね」
「ええ、まずはね」
「僕は漫画買うよ。じゃあまた後で」
「わかったわ」
二人をよそに話を決めていた。その後でその二人にも言うのだった。
「じゃあ蝉玉」
「ええ」
呆然としたままペリーヌに答える。
「あんたは何買うの？」
「服を買おうとは思っていたわ」
一応はこう答える。
「じゃあついて来て。スターリングは？」
「ゲームソフトかな」
スターリングも蝉玉と同じ感じで呆然としてしまっている。
「探しているものがあるから」
「じゃあ僕と一緒に行こう」
彼にはロミオが言ってきた。

第八十四話　ゴールデンカップルその五

「漫画とコーナーはすぐ隣だからね」
「漫画もあるんだ」
「そうだよ。だったらそれでいいよね」
「うん、じゃあ」
「よし。二手に分かれてね」
「そういうことでね」
ペリーヌとロミオだけで話は決まった。こうして蝉玉はペリーヌと一緒に服を買いに向かった。服のコーナーにはそれこそ様々な服が雑然と置かれていた。どれがどれなのかわからない程だ。しかもカラフルでありそれがまたカオスな雰囲気を助長させていた。
「さあ、何を買うのかしら」
「そうね」
その様々な服を見ながらペリーヌに答える。
「とりあえず三着。ズボンとブラウスが欲しいわ」
「そう。じゃああっちよ」
「あっちって」
ペリーヌが指差した方角を見ても何が何だかわからない。そこにも服が雑然と並べられているだけに見えたのだ。
「何処にあるのよ」
「一杯あるじゃない」
しかしペリーヌの話の調子は変わらない。
「どれでも好きなの選べばいいわ」
「・・・・・そういえば」
じっくりと見ているうちにわかってきた。見ればその雑然とした中にズボンとブラウスもある。しかし他にも様々な服が入り組んでわからなかったのだ。
「あることにはあるわね」

「そこからいいの選べばいいわ」
「わかったわ。それにしても」
「何？」
「ここ、日本よね」
言うまでもなく八条学園は日本にある。それは確かだ。
「確か」
「今更何言ってるのよ」
「マウリアじゃないわよね」
連合の者にとってはまさに秘境である。所謂秘境と呼ばれる地は連合においてはそれこそ辺境の方に幾らでもある。しかしマウリアはそれを超越した存在なのだ。彼等にしてみればマウリアとは異次元にも等しい場所なのである。かなり偏見が入ってはいるがそうした認識なのだ。
「連合よ。それも日本」
「そうよね。それでこんなのなんて」
呆然として言うのだった。
「すっごい店」
「連合にだって普通にあるわよ」
しかしペリーヌの言葉は変わらない。
「南アフリカでも普通にあるわよ。中国でももでしょ？」
「そうかも
蝉玉が知らないだけなのだ。連合は広いのだ。
「お坊ちゃんお嬢ちゃんもいいけれどワイルドなのもいいのよ」
「ワイルドなのも」
「それで服は何を買うの？」
また蝉玉に尋ねてきた。
「いいのを選ぶのよ」
「そうね。それじゃあ」
ペリーヌに促されてブラウスとズボンを探し出す。他の色々な服をどけてそこからデザインや柄のいいのを幾つか出す。それから縫

い目や端を丹念にチェックするのだった。ペリーヌはそんな蝉玉の様子を見て満足した笑みで言うのであった。
「いいとこ見てるじゃない」
「そうかしら」
「蝉玉、いい奥さんになれるわよ」
にこりと笑ってこうも述べてみせてきた。
「服は頑丈さが第一よ。長持ちするかどうか」
「そうなの」
「そう、デザインとかはどうでもいいの」
流石に蝉玉にはここまでの考えはない。ここは聞かなかった。
「まずはそれよ。そして安いか」
「安いかもなのね」
「当たり前じゃない」
これは反論の余地がないと言いたげなものであった。
「丈夫なのと安いのは同列よ」
「同列なの」
「食べ物だってそう」
今度は食べ物を話に出してみせてきた。
「安くて長持ちして栄養があるか」
「味は？」
中国人なので当然味にも五月蝿い。
「味は工夫次第でどうにもなるわよ。だからまずは安くて長持ちするかなのよ」
「そうなの」
「例えば」
ここで実例を出す。
「閉店間際のお店で安くなっているものを買って」
「うん」
「勝負はそこからなのよ」
「それだけじゃないの？」

「そうよ。後で実例を見せるわ」
今度はこう言ってきた。
「後でね」
「実例！？」
「後でわかるわ」
今はこう言うだけであった。

第八十四話　ゴールデンカップルその六

「よくね」
「そうなの」
「それにしても蝉玉もまだまだだね」
不敵に笑って蝉玉に対して言ってみせてきた。
「素質は認めるけれど」
「!?一体何のこと?」
「だからそれもわかるのよ、後でね」
「そうなの」
「それはそうと」
ここで蝉玉が選んだ服を見るのであった。上から下までまんべんなく見渡す。
「やっぱり素質は確かね」
「服のセンスの話じゃないわね」
これはもうわかるペリーヌとの今までのやり取りで。
「そんなのはどうでもいいの」
「やっぱり」
それは当たった。
「いい服選んだってことよ。丈夫なのをね」
「丈夫なのを」
「その服どれも長持ちするわよ」
こうも言うのだった。
「安心していいわよ、そこは」
「ふうん」
「さて。私も選び終わったし」
見れば色々な服を買っている。スカートもジーンズもあればブラウスもタンクトップもコートもある。どれも地味なデザインや滅茶苦茶なデザインで雑然としていた。この店と同じで。

「行きますか」
「カウンターね」
「その通り。まさか盗むわけにはいかないでしょ」
「それ、犯罪だから」
まさかとは思うが危ないものも感じたので突込みを入れた。
「ペリーヌ、わかってるわよね」
「勿論よ。それはしないから」
「当然よ。洒落にならないわよ」
「そういうこと。それじゃあ」
「カウンターね。とにかく」
「そういうこと。行くわよ」
「ええ」
こうしてカウンターに向かうことになった。見れば向こうからスターリングとロミオもやって来ている。丁度買い終わったところのようである。
「そっちも終わったのね」
「うん」
ロミオが笑顔でペリーヌの言葉に応えてきた。
「丁度終わったところだよ」
「そう、じゃあ都合がいいわね」
ペリーヌも彼の言葉を聞いて微笑む。
「じゃあこれからもう一勝負ね」
「そうだね」
「勝負!?」
スターリングは二人の言葉を聞いて眉をひそめさせた。その手の中には山程の漫画とゲームソフトがある。ロミオの手の中にあるものも同じだ。
「何を勝負するの?」
「決まってるじゃない」
「ねえ」

だがロミオもペリーヌも笑顔でこう言うだけであった。
「買ったら後はね」
「そうよね」
「何か凄い嫌な予感」
蝉玉はそのペリーヌの横で顔を顰めさせていた。
「何かとんでもないことが起こるわね、また」
「あら、心外ね」
ペリーヌは今の彼女の言葉に目を向けて述べた。
「私が変なことするって思っているのかしら」
「正直に答えていい？」
「どうぞ」
こう前置きしてからまた言葉のやり取りを再開する。
「いいけれど」
「わかったわ。それじゃあ」
ペリーヌの了承を得てまた言うのだった。
「するでしょ、絶対」
「しないわよ」
返事はきっぱりとしたものであった。
「安心していいわ」
「安心できないわよ」
これまたはっきりと言葉を返す蝉玉であった。
「不安で仕方ないし」
「あら、随分ね」
そう言われても平気な様子のペリーヌであった。かなり強い。
「言ってくれるじゃない」
「言うも何も」
服を選んだ時のことも言う。
「この店に入ってからずっと」
「大したことないわよね」
「そうだよね」

ペリーヌはロミオに対して問う。ロミオもまた同じ意見であった。

第八十四話　ゴールデンカップルその七

「全然ね」
「そうよね」
「あんた達はそうかも知れないけれど」
蝉玉は今度は二人に対して言うのだった。
「それでもね。私は違うのよ」
「僕も。ねえロミオ」
スターリングも蝉玉と同じ意見であった。怪訝な顔でロミオに対して問う。
「漫画やゲームソフトが山になっていたよね」
「この店ではそうだよ」
平然とスターリングの言葉に答える。
「そういう場所もあるよね」
「そうなの」
「まさにお宝の山でよかったじゃない」
こうも言うロミオであった。
「そうでしょ？」
「そうかなあ」
それを言われても納得できないスターリングであった。彼も蝉玉と同じなのだ。
「まあいいソフトも漫画も手に入ったけれど」
「ここは何でもあるんだよ」
笑顔でスターリングに告げる。
「探せばね。だからお宝の山なんだよ」
「そうなんだ」
「さて、それでね」
またペリーヌが言ってきた。
「勝負の第二ラウンドよ」

「第二ラウンドなのね」
「そういうこと。さあ、カウンターへ行きましょう」
あらためてカウンターへ行くことを告げる。
「気合入れて行くわよ」
「どうしてカウンターに行くのに気合が？」
蝉玉はまたしても首を傾げさせた。
「どうしてなの？」
「どうしてって」
ペリーヌは蝉玉の問いにかえって面食らったような顔になった。
「気合入れるのが普通でしょ」
「普通って？」
蝉玉には余計にわからない話であった。首を捻る。
「何がよ」
「だから。カウンターは戦場よ」
「そうだよね」
ここでまたロミオも言ってきた。
「カウンターは第二の戦場だよ」
「カウンターが第二の戦場なら」
スターリングはその話を聞いて考えた。第一の戦場が何かを。
「じゃあ買うものを選ぶのが第一の戦場なのかな」
「わかってるじゃない」
ペリーヌはスターリングのその言葉を聞いて微笑むのであった。
「その通りよ。最初の戦場はそこよ」
「そうなんだ」
「まずは何を選ぶか」
ペリーヌの言葉が真剣なものになった。
「それが最初の戦場なのよ」
「お宝争奪戦ってわけなんだ」
ロミオもまた言ってきた。
「そういうことなんだ」

「そうなんだ。それでも」
それでもスターリングにはわからないことがあった。蝉玉もそれは同じだ。
「何なの、それでカウンターでの戦いは」
「それは今からよ」
またペリーヌが言う。
「見ることになるわ」
「そうなの」
「そうよ。それじゃあはじめるわよ」
こうして前に出る。いざその戦場にであった。
「第二の戦争をね」
「むっ！？」
まずはペリーヌとロミオが並んでカウンターに入った。二人の前にはそれぞれ店員達がスタンバイしている。彼等もまるで戦場にいるような顔になっていた。
「さあ、見ていて」
「こうするんだよ」
「こうするって」
「買うだけじゃない！？」
二人はペリーヌ達の言葉を聞いてまた首を傾げる。だがそれより前に二人は動いていた。
「さあ、この服は一〇テラよ！」
「いいや、十五テラだよ！」
ペリーヌはロングスカートを出して店員に叫ぶ。店員は値段通りを要求する。
「それ以上は駄目だね」
「何言ってるの。ここ見てよ！」
ペリーヌはスカートの端の部分を指差して店員に叫ぶ。

第八十四話　ゴールデンカップルその八

「ほら、シミあるわよね」
「うっ・・・・・・」
見れば本当にその通りだ。しかしそれは虫眼鏡を使うかナンでもない限り見えないような本当に小さなシミだ。そのシミを指差して見せているのだ。
「このシミ、他にもあるわよ」
「くっ、見破ったか」
「そうよ。上手く見られたわ」
ペリーヌのその顔が不敵な笑みになっていた。
「おかげさまでね」
「しまった、こちらのチェックを」
「さあ、十テラね」
誇らしげな顔で店員に言う。
「これにもシミがあったから二つで十テラね」
「ぬかった・・・・・・」
恐ろしいやり取りであった。オークションなぞ目ではない。そんなとんでもないやり取りを行いペリーヌは十テラで上下の服を手に入れたのであった。
「何、あれ」
蝉玉は今のペリーヌのやり取りと見て唖然としていた。スターリングも同じだ。
「オークションじゃないわね」
「絶対にね」
スターリングも呆然としていた。二人は同じであった。
「まさにこれって」
「戦場っていうか」
ペリーヌの恐ろしい駆け引きは続く。そしてロミオもまた。

「このソフトだけれどさ」
「二十五テラだよ」
「ううん、九テラですね」
「何、そんなに安いわけがない！」
「安いですよ」
しかしロミオは無邪気な笑みでこう宣言するのだった。
「だって。これって三年前でしかも」
「しかも！？」
「中の説明書は痛んでますね。ディスク自体もかなり使い込まれているし」
「何故わかるんですか？」
「わかります」
自信に満ちた声で答えてみせてきた。そしてケージを指し示して。
「ここなんか随分開かれた後があるから。ここだって」
「うぬう・・・・・」
「これだけ使われてきたってことですよね。だからですよ」
「九テラだと」
「説明書も入れてですね。あと攻略本も」
見れば攻略本も既に抑えていた。実に用意がいい。
「これも見たところあちこちにシミがあるから。いいですよね」
「・・・・・わかりました」
テンボやジャッキーなぞより遥かに優れた推理力さえ見せている。
その推理力により実際の値段よりも遥かに安い値段で手に入れているのであった。
そんなやり取りが続く。かれこれ一時間も。
「ねえ」
そんな恐ろしい戦場を見ながら蝉玉はスターリングに囁く。
「こんなの見たことある？」
「ううん」
蝉玉のその言葉に首を横に振る。

「はじめてだよ」
「そうよね。まさかこんなのって」
ここでやっと皆の話の意味がわかった。こうした意味で凄かったのだ。
「考えていなかったわよ」
「どうしよう」
ポツリと蝉玉に問うてきた。
「僕達、これから」
「これからって？」
「ほら、僕達も買うじゃない」
彼が言うのはそれであった。確かに今彼等の手の中には服やゲームソフトがある。それをこれから買うのはもう決まっていることであるのだ。
「だからさ。その時だよ」
「そうだったわね。それでも」
「・・・・・あんなことできる？」
またペリーヌとロミオを見る。相変わらずの様子で勝負を続けている。
「これは八テラね。ほら、ここにほつれが」
「ぬう・・・・・」
「このソフトもかなり使われていますよね。証拠は」
「ううう・・・・・」
こんな調子であった。しかも連戦連勝である。二人共滅茶苦茶に強い。

第八十四話　ゴールデンカップルその九

「あんなふうにだけれど」
「できないわよ」
蝉玉は呆然として答えた。
「私中国人よ」
「うん、僕アメリカ人」
両方共押しの強さでは連合においても比類ない存在とされている。しかも何かを手に入れようとする意思が強いとも言われている。しかしその彼等でもだった。
「それでもあれはないわよ」
「そうだよね。無茶苦茶じゃない」
「ハードボイルド・・・・・じゃないよね」
スターリングはいささか的外れな言葉を口にした。
「あれは」
「何て言うのかしら」
とりあえず蝉玉には思い浮かぶ言葉がなかった。
「戦争、じゃないし」
「何なんだろうね」
二人には言葉がない。しかしその間にもうペリーヌ達の買い物は終わっていた。彼等はほくほくした顔であり店員達は伝説的名作漫画の最終回のボクサーの様に真っ白になっていた。完全に燃え尽きて倒れ伏さんばかりであった。ただし顔は満ち足りたものではない。
「終わった終わった」
「今日も大収穫だったね」
「お疲れさん」
二人は一応口では彼等を出迎える。
「凄かったわね」
「何ていうかね」

見ている二人も疲れる、そんな感じであった。
「満足したのかしら」
「その辺りどうなの？」
「勿論よ」
答えはペリーヌの満面の笑みであった。見ればロミオも同じ顔である。
「そうじゃなきゃやる意味がないわ」
「これぞお宝争奪だよ」
彼等の笑顔での言葉は続く。
「楽しい楽しいね」
「いや、満足したよ」
「そうなの」
呆然としたまま彼等の話を聞いていた。
「それは何よりね」
「それじゃあ」
ここでペリーヌが二人に言ってきた。その満ち足りた笑顔と共に。
「今度はあんた達の番よ」
「私達って？」
「そうよ。私達の買い物は終わったし」
「待たせて御免ね」
ロミオも同じ笑顔と共に言ってきた。
「ごゆっくり」
「健闘を期待しているよ」
「健闘なんだ」
それを言われたスターリングはポツリと呟いた。
「買い物って戦争だったんだね」
「バーゲンじゃ確かにそうだけれどね」
蝉玉がそのスターリングに力なく突っ込みを入れる。普段よりも言葉に力がない。
「それでもこれはね」

「まあさ。買うものは決まってるし」
返すスターリングにも元気がない。
「買おうか」
「そうね。買いたいのは事実だし」
「うん」
こうして二人はカウンターに向かう。しかし店員はまだ灰になっている。
「あの」
「はい・・・・・・」
力ない返事が返って来た。
「ちょっと待って下さい」
そしてこう言うのであった。
「エネルギー補給しますんで」
「エネルギーですか」
「すぐ済みます」
こうも言ってきた。
「ですから御安心を」
「そうですか」
「これを飲めば」
店員達が出してきたのはスタミナドリンクであった。マムシにオットセイに高麗人参にスッポンに大蒜を混ぜたかなり強烈なものである。
「では今から」
「華麗なる復活を」
そう言って飲むと。本当に復活した。
「ささやきーーーー詠唱ーーーー祈り」
何処からか言葉が聞こえてくる。
「念じろ！」
すると灰が忽ちのうちに。復活したのであった。特撮ものの変身ヒーローの変身よりも速いスピードで復活したのであった。しかも

完全にだ。
「お待たせしました」
「では今から」
「何か見ているだけで」
「そうよね」
スターリングも蝉玉も店員達の無茶苦茶な復活にまずは唖然とした。
「呆れるっていうか」
「タフよねえ」
「この店はタフでなければ生きていけません」
「何しろマウリアで不死の修行を積んでから来るのですから」
何気にとんでもないことを言っている。
「ですから御安心を」
「さあ、商品をこちらに」
「それはいいけれど」
蝉玉はここで疑念を抱かずにはいられないことを彼等に尋ねた。
「マウリアじゃ不死身になれるの？」
「はい」
どうやらそうらしい。
「その通りです」
「ですから御安心を」
「本当かしら」
「さあ」
蝉玉の問いにスターリングも首を横に振るだけであった。
「どうかな、そこは」
「眉唾ものよねえ」
それだけは感じる二人であった。二人の買い物は普通のものであったが普通ではないデートはまだ続くのであった。完全にもう一方のペースで。

ゴールデンカップル　完

2008・3・8

第八十五話　恐怖のバイキングその一

恐怖のバイキング

ペリーヌとロミオは買い物を終えても意気軒昂であった。元気というレベルではなく何か得体の知れない薬をやっているかのようなテンションであった。

そんなテンションで街を闊歩する。スターリングと蝉玉は後について行くだけであった。

「何であんなに体力あるのよ」

「僕達も体力には自信あったけれど」

そうでなくては八条学園にはいられない。

「それでもあの二人は」

「凄いよね」

「お腹空いてきたわね」

「そうだね」

そんな二人をよそにペリーヌとロミオは今度はこんな話をしていた。

「何か食べる？」

「じゃああそこだね」

「あそこ！？」

あそこと聞いて最初に首を傾げたのは蝉玉であった。

「何処かしら」

「さあ」

今度はスターリングが首を傾げた。しかし彼にもわからない。

「それはわからないよ」

「そうよね。何が何だか」

二人共ペリーヌ達の言葉の意味がわからない。店のことを話しているのは見当がつくが。

そんな中で。そのペリーヌ達が二人の方を向いて声をかけてきた

のであった。
「ねえ、二人共」
「いいお店があるんだけれど」
「お店！？」
「そうよ」
スターリングの疑問符つきの言葉にペリーヌが笑顔で言葉を返す。
「美味しいレストランがあるのだけれど」
「レストランなの」
「ええ。お昼はそこでいい？」
「メニューも豊富だよ」
ロミオはメニューにも言及してきた。
「それでどうかな」
「僕は別に」
「私も」
二人は彼等の言葉にこれといって反論はしなかった。静かに大人しく頷くだけであった。
「それでいいけれど」
「それでどんなのなの？」
「それは言ってみてもお楽しみ」
「悪いお店じゃないよ」
しかしペリーヌ達は二人が最も気にしている問いには何ら答えることなくこう言うだけであった。しかみ怪しい含み笑いまで含んでいる。
「だから楽しみにしていて」
「気合入れてね」
「気合！？」
蝉玉はここでまた引っ掛かるものを感じた。
「食べるのに気合、ねえ」
「何かあるのかな」
スターリングもスターリングで引っ掛かるものを感じていた。そ

れが顔にも出ている。
「とにかく言ってみないとね」
「そうだよね。それじゃあ」
「行きましょう」
とりあえずはその店に行くことになった。不安を胸にしまいこみながら。
店にはすぐに辿り着いた。外観はイタリア風で内装は和風だった。随分変わった店だった。
「外はイタリアで中は日本なのね」
「随分変わってるね」
「変わってるどころじゃないわよ」
蝉玉は首を傾げて店の中の和風の椅子やカウンターを見てスターリングに応える。内装はそのまま寿司屋である。だがそこにはネタはない。
「それでペリーヌ」
「ええ」
ペリーヌは蝉玉の言葉に応えてきた。
「ここって何のお店なの？」
「見ればわかるじゃない」
にこにことした感じの言葉と共にこう言ってきた。
「見ればね」
「！？見ればって」
「どういうことなの？」
蝉玉だけではなくスターリングも彼女の言葉の意味がわからなかった。見たところ完全にどこかの寿司屋か蕎麦屋である。そうとしか見えない。
「お蕎麦じゃないの？」
「回転寿司じゃないよね」
「お寿司もあるわよ」
ペリーヌの言葉である。

「お蕎麦もね」
「!?何が何だか」
蝉玉は今のペリーヌの言葉を聞いてさらにわからない顔になった。
寿司も蕎麦もあるということは寿司屋や蕎麦屋ではまず考えられないことであるからだ。
「わからないんだけれど」
「だから。ほら」
ここでペリーヌは店の右手を指差してきた。

第八十五話　恐怖のバイキングその二

「あそこ見てよ」
「あそこって・・・・・・あっ」
ここでようやく気付いた。スターリングも。
「そういうことよ。わかるわね」
「ああ、そういうお店なのね」
「そういうこと。わかったわね」
あらためて蝉玉達に言ってみせてきた。
「ここはね。バイキングなのよ」
「お蕎麦やお寿司だけじゃないよ」
ロミオも二人に声をかけてきた。
「他にも一杯あるからね」
「そうみたいだね」
スターリングはちらりと見てそれを察した。見ればそこには。
「凄いよ、蝉玉」
「飲茶もあるしラーメンもあるわね」
「ハンバーガーにホットドッグもね」
「シェラスコもあるよ」
ロミオの楽しそうな言葉である。中南米の系列の国ではこの時代も牛肉をふんだんに食べるのである。特に牛肉を串刺しにしてそれから焼くシェラスコは人気メニューである。
「何でもあるんだよ、本当に」
「そうよ。だから一杯食べてね」
「わかったわ。けれど」
しかし。蝉玉はここでまた異変に気付いたのであった。
「食べるのはいいけれど」
「何？」
「何よ、あれ」

顔を顰めさせてペリーヌ達に対して言う。
「あの大きさは。何なのよ」
「気にしないでいいわ」
普通の二倍の大きさはあるハンバーガーや餃子だけではない。丼に入れられている麺や御飯、パスタもかなりの量だ。連合の基準から言ってもである。
「これがこの店の特徴だから」
「この店の」
「そうよ」
それをまた言ってみせてきた。
「だからノープロブレムよ。あっ、そうそう」
ここでまた言うのだった。
「ノルマは丼五杯に飲茶とかは四十個、麺は四杯ね」
「えっ、そんなに！？」
「このお店ではそれだけ食べるとお金をまけてもらえるのよ」
「そういうこと。だからいいよね」
「バイキングでさらにまけてもらうって」
「何だか」
蝉玉とスターリングは二人の話を聞いて顔を顰めさせた。どうしてもそれは抵抗があるといった感じである。やはりそれも顔に出ていた。
「当たり前じゃない」
「ねえ」
しかもここでも二人の守銭奴ぶりは健在であった。
「お金は限りあるものよ」
「だからさ。無駄にはできないんだよ」
「それはわかってるけど」
スターリングはそれでもな納得しかねる感じであった。これもまた顔に呆然とした表情となって出ている。しかもかなり強くだ。
「それでも。これは」

「極端よ」
蝉玉はそれをはっきりと言葉に出して述べてみせた。
「しかもそれだけ食べるだなんて」
「デザートもね。わかってるわよね」
蝉玉の話を半分以上聞いていないペリーヌであった。
「ノルマはスイカ一個」
「・・・・・ってちょっと」
いきなりこう言われてかなり引いた。
「デザートでそれ？」
「食べられるでしょ」
「まあそれは」
ここで否定しないところが蝉玉もまた二年Ｓ１組の生徒であるということの何よりの証であった。これはスターリングについても言えることであるが。
「無理をすればね」
「僕も。まあ」
そしてスターリングもここで言うのだった。

第八十五話　恐怖のバイキングその三

「食べられるかな」
「そういうこと。じゃあ気合入れて食べてね」
「わかったわ。それじゃあ」
「食べさせてもらうよ」
「それだけ食べたら一割引きよ」
多いか少ないかはわからない。しかしその一割引きというところにペリーヌもロミオも心を奪われている。それだけははっきりとわかるのであった。二人にも。
「だから頑張ってね」
「ええ」
こうしてまた戦争がはじまった。先程の買い物戦争とはまた違うが今回もまたかなり激しい戦いであった。蝉玉もスターリングもとにかく勢いよく丼だの麺類だのハンバーガーだの飲茶だのを胃の中に入れていく。二人はかなり必死に食べていた。ところが。あの二人はというと。
「美味しいよね」
「そうよね」
そんなことを言いながら蝉玉達の前で食べ物を次々と消し去っていくのであった。消し去っているのである。まさに文字通りにといった感じで。
「これもいいよね」
「そのサンドイッチね」
普通のサンドイッチとはかなり違う。二倍の大きさを持つかなり巨大なものだ。しかしロミオもペリーヌもそのサンドイッチをすぐに消し去ってしまったのだった。
「あっ、中のチキンカツが」
「いいでしょ」

ロミオは笑顔でペリーヌに語っている。
「この味が」
「最高よ。病み付きになるわ」
「そうでしょ。だから持って来たんだ」
「私に食べさせてくれる為になのね」
「そうだよ」
しかもおのろけをする余裕まである。二人とは全く違う。
「あんまり美味しいからね」
「じゃあ私は」
ペリーヌはロミオのその言葉を受けて自分も応えてきた。出してきたのはやはり普通の容器の倍はある器に入ったラザニアであった。トマトとチーズの香りが食欲をそそる。
「これ。あげるわ」
「あっ、ラザニア」
「これも凄く美味しいのよ」
にこにこと笑いながらの言葉である。その顔がこのラザニアが一体どれだけの味であるかを教えている。舌と顔は連結しているものなのだから。
「だから。食べて」
「うん。それじゃあ」
ペリーヌからその巨大な器を手に取る。そしてやはり消し去ってしまった。
「本当に凄く美味しいね」
「でしょう?今日はイタリア料理が特にいいみたいよ」
「そうみたいだね。じゃあ今度はマカロニをね」
「ええ」
そんな話に興じる二人であった。二人は完全に楽しんでいる。蝉玉とスターリングはそんな二人を見て呆然としているがそれでも何とか食べている。
「あの、スターリング」

「何？」
寿司を食べながら天麩羅を食べている蝉玉に応える。
「私達にしろ随分食べる方よね」
「多分ね」
蝉玉のその言葉に答える。実際にかなり食べているのは事実だ。二人の周りにはもう既に多くの碗や皿が積み上げられている。それを見てわかることだ。
「それでもあれは」
「凄いっていうか」
「そもそもよ」
ここで蝉玉はまた言うのだった。
「あの二人ってこんなに食べていたかしら」
「食べることは食べてるよ」
だからこそ八条学園にいるのである。元々連合の者達はエウロパやサハラの者達と比べてかなり食べる。さながらシェークスピアの言うバイキング達の様に。これは彼等の身体の大きさとその生活のエネルギッシュなことから来るものである。活力を維持する為に食べているのだ。
「それでも。ここまでは」
「食べてないわよね」
「そうだね。どうしてここじゃこんなに」
「お金ね」
蝉玉が睨んだ答えはこれであった。

第八十五話　恐怖のバイキングその四

「やっぱり」
「お金なの」
「お金が絡むからよ。だから」
「あんなに食べるんだ」
「絶対にね。ただそれでも」
蝉玉は思うのだった。その思うことを言葉にも出す。
「一割だけであんなに食べるかしら」
「そうだよね。ノルマだけじゃないかも」
スターリングもそう考えだした。二人は一応ノルマ分は食べている。だがそれ止まりである。それ以上はどうにも食べられそうにもないのが現実であった。
「あの食べ方はね」
「何なのかしら」
蝉玉はそちらに考えを向けた。
「だとすると」
「何なんだろうね」
「まあ何かあるのは間違いないわね」
それは直感としてわかるのだった。
「問題はその何かだけれど」
「多分だけれど」
これはスターリングの予想であった。彼は蝉玉程鋭い直感は持ってはいないがそれをカバーする思考力があるのだった。だからどちらもそれなりに考えがいいのである。
「お金に関係することだろうね」
「でしょうね。まあ私達はね」
「それよりもだよね」
「ええ。ノルマ達成よ」

少しうんざりとした顔でスターリングに述べるのだった。
「その一割分は食べないとね」
「そうだね。それにしても」
応えるスターリングも同じくうんざりとした感じの顔になっていた。
「多いね」
「ええ。うちの学校の食堂も量が多いけれど」
それが八条学園なのだ。
「それよりも多いわよね」
「絶対にね。それに」
問題はそれだけではなかった。何しろだ。
「これバイキングだし」
「しかもノルマの目標が半端じゃないし」
彼等をしてもそうなのだ。だから相当なものであることがわかる。
「デザートもあるし」
「大丈夫かな」
「大丈夫にしないと駄目なのよ」
簡単に言えばそうなのだ。少なくともペリーヌやロミオがそれを達成しないといい顔をしないのはわかる。そもそも二人が異常なのではあるが。
「だから。頑張りましょう」
「わかったよ。それじゃあね」
「ええ」
こうして食べ続ける。二人は必死に頑張りそうして。最後のデザートであるスイカ一個に取り掛かるのであった。
「いよいよだね」
「ええ」
二人は並んでそれぞれ一個のスイカを目の前にしている。スイカが置かれている白い皿にはそのスイカと一緒に包丁とスプーンも置かれている。

「これを食べれば」
「見事達成よ。けれど」
それでもであった。
「凄い量よね」
「今までもかなり食べているしね」
「それでスイカ一個は」
「何ていうか」
きついのだ。言うまでもなく。
「けれどこれが最後なのよね」
「一割はね」
少なくともそれに関してはである。見ればペリーヌ達はそれよりもずっと食べているのであるが。ここまで来ると完全に化け物の世界である。ポルフィのようだ。
「じゃあその一割の為に」
「スイカを。食べようね」
「ええ。それじゃあね」
蝉玉もスターリングも包丁を手に取った。そうして真っ二つに切ってからスプーンを手に取る。二人はそのスプーンを手に必死にスイカと戦った。死にそうになるが何とか食べ終えた。食べ終えた二人はその場で倒れ伏した。しかしであった。
「さてと。もうすぐだね」
「そうね」
例の二人は椅子の上で倒れ伏す二人の前で相変わらずの様子であった。
「これを食べたらね」
「いよいよデザートね」
「デザートにって」
「あんた達もう」
何とか生きているといった様子でスターリングも蝉玉もその二人に対して言うのだった。

「僕達の倍、いや三倍は」
「食べてるのに」
「いやいや、これからなんだよ」
「そういうことよ」
しかし二人の態度は変わらない。相変わらずといった様子であった。

第八十五話　恐怖のバイキングその五

「デザートまで食べ終えないとね」
「本物じゃないのよ」
「で、それなんだね」
「そういうこと」
その二人の前にあるのは。巨大なデコレーションケーキであった。五段重ねでかなりのボリュームがあるのが一目瞭然でわかる。
「これとスイカ一個を食べれば」
「完全勝利よ」
「完全勝利！？」
蝉玉は今のペリーヌの言葉に目を動かした。もう目だけしか動かないといった有様なのだ。
「どういうこと、それって」
「だから。完全勝利はね」
「それを果たしたら無料なんだよ」
ロミオの言葉である。
「ここの代金がね」
「無料って」
「そう、無料」
スターリングの言葉を繰り返してみせてきた。
「無料になるんだよ」
「めでたくね」
「そうだったの」
何気にこんな話が多い八条学園とその周りであった。
「だから僕達頑張ってるんだよ」
「たっぷりと美味しいものが食べられてしかもただ」
「ただ狙いなんだ」
「当たり前じゃない」

「ねえ」
二人は平然として答えるのだった。少なくとも彼等の中では完全に当たり前のことらしい。
「そんなこと」
「お金は節約しないとね」
「やっぱりお金なのね」
蝉玉は今のペリーヌの言葉を聞いて己の考えが正しかったことを知った。結局のところ彼女とペリーヌにとってはお金が第一なのだ。
「そうよ、お金は神様よ」
「何よりも大事なのものじゃない」
「それはそうかも知れないけれど」
スターリングはそれを言われてもあまり賛成はしていない顔であった。
「それでも。あまり極端なのは」
「極端かしら」
「普通だよね」
「普通じゃないわよ」
また蝉玉が二人に対して突っ込みを入れた。呆れた顔で。
「ここまで凄いのって見たことないわよ」
「同感」
スターリングも蝉玉の言葉に同意して頷く。彼女と同じ表情で。
雰囲気が一方ともう一方で完全に違ったものになっていた。呆れと平然とに。
「まあ私達はね」
「スイカで終わるつもりだけれど」
「私達もこれで終わりよ」
「スイカとケーキを食べたらね」
「やっぱり食べるんだ」
「だから。ただになるから」
また話がそちらに向かう。どうもそこから離れない感じであった。

「当然でしょ。さて」
「食べようか」
「ええ、それじゃあ」
二人はそのデザートを食べはじめた。やはり消えた。二人が気付いた頃にはもうケーキは何処かに消え去ってしまっていてスイカが彼等の前にあった。そしてそのスイカも、であった。
「ああ、蝉玉」
スターリングは呆然としながらも蝉玉に声をかけた。
「何？」
「僕達も食べよう」
それを話すのだった。
「驚いていないで。これを食べたら」
「そうね、一割だったわね」
「そう、一割」
それを蝉玉に告げるのだった。
「一割だしね。それに最後だし」
「気合入れて食べていかないと駄目ね」
「そういうこと。ラストスパートかけよう」
「わかったわ。それじゃあ行くわよ」
「うん、スイカ一つ頑張ろう」
「ええ、わかったわ。それじゃあね」
こうして何だかんだでペリーヌ達の影響を受けながら二人もスイカ一個を食べ終えるのだった。さっき一個食べたばかりなのは実は忘れてしまっていた。

第八十五話　恐怖のバイキングその六

全てが終わってから。店を出たところで二人はそれをペリーヌ達に突っ込まれたのだった。ただを勝ち取り意気揚々としている彼等から。

「そういえばさ」

「どうしたの？」

蝉玉がペリーヌに応える。苦しい顔で道を歩きながら。その顔はスターリングも同じだがペリーヌとロミオはここでも至って平気な顔のままだった。

「二人共スイカ二個食べたわよね」

「うっ、そういえば」

「今気付いたよ、それ」

「何で二個食べたの？」

それを二人に対して問うのだった。激戦はもう過ぎ去った顔で。

「二割引きなら三個なのに」

「あれを三個って」

「それはかなり」

実は二個食べたのも今気付いた位だ。それで余計に苦しいのであるが。

「忘れていたとかじゃないよね」

「ま、まあそれは」

スターリングはロミオの問いに複雑な顔になった。図星だとは言えなかったのだ。

「それはね。何とも」

「？何かおかしいよ」

ロミオもそれに気付いたようだが深くは尋ねなかった。

「まあいいか。それにしても」

「スイカ二個。結構効くでしょ」

「効いたわよ」
蝉玉は疲れ切った顔で述べた。
「あんなに食べたのなんて久し振りだし」
「久し振りなの」
「ええ、久し振り」
はじめてではないのだった。蝉玉も只者ではない。
「満足はしたけれどね」
「食べるのは満足する為よ」
生きる為に食べるのではなく食べる為に生きる。連合ではこうなのだがそれでもペリーヌ達は突出したものがあった。それは何かというと。
「しかもリーズナブルにね」
「リーズナブルなの」
「これは絶対必要条件」
やはり金であった。
「如何に安く美味しく満足するかよ」
「まあその通りだけれど」
これは素直に頷く。確かにその通りだからだ。異論はなかった。
「だから。あえてああしたのよ」
「あえてなの」
「そう、あえて」
にこりと笑って蝉玉に告げるペリーヌであった。
「楽しいことこの上なしね」
「楽しいの？」
「滅茶苦茶楽しいわ」
こうも言葉を返してきた。
「これだからデートは止められないのよ」
「そうだよね」
ロミオも今のペリーヌの言葉に相槌を打つ。どうやら二人にとっては今のようなのが普通のデートであるらしい。蝉玉達のそれとは

違って。
「さて、次は」
「あそこに行こうよ」
「そうね、あそこね」
「あそこって？」
蝉玉はあそこというのが何処か見当がつかず二人に尋ねた。
「これで終わりじゃないのよ」
「今は第二幕が終わったところだよ」
ロミオが朗らかな笑顔で舞台に例えて蝉玉に告げた。
「全三幕でね」
「三幕だったの」
「そういうことなんだ。じゃあ次は」
「映画館にしましょう」
ペリーヌの提案だった。楽しそうな笑みを浮かべながらの提案であった。
「丁度アクションでいいのやってるしね」
「そうだね。じゃああそこで」
「アクション映画なんだ」
スターリングはそれを聞いて明るい笑顔を見せた。どうやら彼の好みであるらしい。
「それはいいね」
「そうよ。しかもね」
「しかも」
今度は彼がペリーヌの言葉に応える。

第八十五話　恐怖のバイキングその七

「三本立てよ。凄いでしょ」
「三本立てなんだ」
「だから見応えたっぷり」
こうも言ってきたのだった。
「期待していてね」
「わかったよ。それじゃあ」
「それにしても」
映画館に行くことが決まったところでまた蝉玉は言うのだった。
「何？」
「普通の映画館なの？」
彼女が気にする、いや警戒するのはそこであった。何しろ今までが今までであったからだ。これも無理のないことであった。ペリーヌもロミオも全く自覚がないのだが。
「普通のって？」
「だから。また値切りするとか」
「そうだよね」
蝉玉の言葉を聞いてスターリングも不安な顔になった。
「何か中身がとんでもない映画館とか。そんなのじゃ」
「安心して。普通の映画よ」
「マウリア映画とかじゃないわよね」
連合ではマウリア映画は異次元扱いされている。とにかく何かあれば何処からともなく人が出て来てダンシングタイムに入りやたらと長く盛り沢山の内容がそうした評価にさせているのである。
「普通の日本の映画よ」
「そう。だったらいいけれど」
「それにしてもマウリア映画のアクションって」
スターリングはここでふと思うのだった。

「どんなのなんだろう」
「あまり考えたくはないわね」
蝉玉もそこまでは思考を回らせない。回そうとしない。
「特に推理なんか」
「考えながら踊るとか？」
スターリングはふと想像した。
「やっぱりそんなのなのかな」
「それで推理できるの？」
「どうかな」
自分で言って首を傾げる。
「難しいかも知れないね」
「マイク＝ハマーが殴りながら踊る」
ハードボイルドの主人公で考えてみる。
「スパイものだったら対決の場面でいきなり何処からか黒い服の人達が出て来て踊りながら話すとか」
「壮絶だね」
だがそれがマウリア映画なのだ。だから異次元と言われているのだ。
「あと男の俳優さんが皆同じ顔に見えるとか」
「お髭のせいでね」
マウリアの男は大抵口髭を生やしている。シーク教徒はとりわけ濃く長い顎鬚になる。しかもそこにターバンがつくのである。
「あと歯が光って」
「先回りしろとか言った敵がそのまま出て来ないとか」
「そんな感じかな、やっぱり」
「それで推理になるのかしら」
甚だ疑問であった。なお連合ではマウリアでは超能力や何か得体の知れない力で事件を解決する人間がいると本気で信じている人間が多い。しかもマウリア人もそれを否定しない。
「わからないわね」

「そうだね」
「二人共よく知ってるね」
それまで話を聞いていたロミオが二人に声をかけた。
「マウリア映画に詳しいんだ」
「別に詳しくないよ」
「そうよ」
二人はほぼ同時にそれは否定した。言葉が結構強い。
「たまたま見たらそれが」
「物凄かったから記憶に残ったのよ。だからよ」
「そうなんだ」
「そうよ。一回見たら忘れられないじゃない」
「まあ確かにね」
それだけの強烈なインパクトがマウリア映画にはある、そういうことなのだ。インパクトという点においてマウリアは連合のどの国にも勝っているのだ。

第八十五話　恐怖のバイキングその八

「それは事実だよね」
「だからなんだよ。カレーもそうだけれどマウリアって記憶に残るよ」
「そうだね。まあ安心して」
ロミオはまた二人に言ってきた。
「何？」
「これから行く映画はマウリア映画じゃないからさ」
「それはないんだ」
「二人共その方がいいでしょ」
今度はペリーヌが言ってきた。
「マウリア映画よりもオーソドックスな映画の方が」
「ええ、まあ」
蝉玉が答えてみせてきた。
「日本映画よね」
「そうよ、アニメ」
しかもアニメであった。日本文化が誇る芸術とさえ言われているものである。
「それと特撮。合計三本立てよ」
「面白そうね」
「面白いから特撮よ」
ペリーヌの意見だった。彼女は特撮好きでもあるのだ。
「世界征服を企む悪の貴族集団と戦う正義の戦士達の話よ」
「貴族集団っていうと仮面ライダーの最新作ね」
「そうよ。仮面ライダーノーブル」
この時代の仮面ライダーだ。ウルトラマンはウルトラマンウィング、戦隊ものは爆発戦隊バーンレンジャーとなっている。基本的にはどれも二十一世紀と変わらない。特撮は健在であった。

「それの映画版よ。同時上演が戦隊と魔女っ子ものでね」
「お決まりのラインアップね」
「それじゃ嫌？」
また二人に問うてきた。
「嫌なら他のものがあるけれど」
「私は別に」
蝉玉はそれは断らなかった。
「いいけれど」
「スターリングは？」
「僕もいいよ」
スターリングも頷いてみせた。反論はなかった。
「戦隊もの好きだしね」
「ライダーの今度の貴族集団ってそういえば」
蝉玉はここでふと気付くのだった。
「エウロパのあれよね、絶対に」
「っていうかそのものでしょ」
ロミオがこう述べた。
「あれはどう見ても」
「敵役としてはオーソドックスだけれどね」
「そうだよね」
連合の敵であるエウロパが敵役として扱われるのは当然のことであった。これまでにもエウロパをモデルとした敵が数多く出て来ている。エウロパを敵役にすると確実に視聴率があがるというジンクスというか法則まである。そこまで連合ではエウロパは敵視されているのだ。
「戦隊の敵だってノーブルメンだし」
「あれもどう見てもエウロパ」
「まあいいじゃない」
スターリングがここで結論を出したのだった。
「エウロパが敵なら。何か納得できるしね」

「そうだよね、やっぱり」
ロミオが彼のその結論に賛成する顔で頷く。
「エウロパだとね」
「何か異星人とか地底勢力とか異次元から来た存在とか」
どれも特撮ものの定番の敵役だ。
「鏡から来た勢力とかマッドサイエンティストとか」
「最後は本当にいるわよ」
蝉玉が突っ込みを入れた。
「あの博士がそうじゃない」
「あの博士ねえ」
ペリーヌは博士と聞いて難しい顔になるのだった。何があっても平気な様子を維持し続けてきている彼女には珍しい顔であった。
「何者なんでしょうね、実際のところ」
「人間じゃないんじゃないの？」
蝉玉はふとした感じで述べる。
「大昔の日本軍と同じで」
第二次世界大戦の頃の日本軍は伝説が完全に一人歩きして時として何処かの戦闘民族扱いされている。幾ら何でも柔道で一億人殺したとあってはそれはもう人間ではない。
「洪童が日本軍マニアだったよね」
ロミオはふとそのことを思い出した。

第八十五話　恐怖のバイキングその九

「確か」
「確かね」
ただのお笑い芸人ではないのである。
「詳しいわよ。剣道で三億人殺したとか」
「下手な惑星単位ね」
流石にそれはないと冷静に意見されているが洪童はあえて喜んでそんな話を集めて悦に耽っているのだ。日本ばかり見ている韓国人にはこうした日本を見て喜んでいる人間も多いのである。非常に変わった趣味ではある。
「三億人って」
「しかも剣道でって」
すぐにわかる有り得ない話であった。幾ら何でも剣道で三億人も殺せるわけがない。なおこの時代日本軍は五十億人を殺したと言われている。勿論与太話だ。
「流石にそこまでいくと」
「漫画でもないよね」
「漫画でも出てたじゃない」
ロミオが唖然とする二人に対して告げてきた。
「ちゃんと。最強日本軍って漫画で」
「そんな漫画があるの」
「洪童の愛読書だよ」
そんなところまで日本軍マニアの洪童であった。漫画まで極めているのが見事である。
「全巻揃えてるしね」
「全巻？」
「まだ連載中だけれど今のところ百二十三巻」
「凄いわね、また」

「大河ロマン格闘ギャグ熱血スポ根戦場ファンタジー漫画だよ」
少なくとも真っ当なジャンルの漫画ではないことがわかる。何でも混ぜればいいというものではない。
「面白いよ」
「面白いんだ」
「それでも。長いわよね」
「全巻揃ってる古本屋知ってるよ」
話がそこに移った。
「あるの、そんなお店が」
「うん。よかったら今から行く？」
「ああ、いいわ」
「それはね」
蝉玉もスターリングもそれは断るのだった。今度ははっきりとしていた。
「別に」
「それより映画観たいんだけれど」
「わかったわ」
ペリーヌが二人に応えた。
「それじゃあ映画館でね。楽しみましょう」
「今度はまともなんでしょうね」
蝉玉が警戒しながらそのペリーヌに問うた。
「まともって？」
「だから。値切ったりただにする為に食べまくったり」
これだけでもう普通のデートではなかった。二人はそのことに疲れ果てていたのだ。それでも映画館で三本立てを観ようというのだからかなり体力がある。
「そんなのはないでしょうね」
「ないわよ」
一言できっぱりと答えてきた。
「安心していいわよ」

「本当かしら」
二回も凄いことになったのでかなり警戒していた。それが言葉にも出る。
「そうなればいいけれどね」
「信じていないの？」
「正直に言っていい？」
その警戒する言葉で彼女に問い返した。
「私の本音を」
「ええどうぞ」
そしてそれをペリーヌも受ける。やはり彼女は大人物だった。
「是非共」
「わかったわ。じゃあ」
それを聞いてからだった。一呼吸置いてから述べる。
「信じてはいるけれど不安よ」
それが蝉玉の本音であった。
「正直どうなるか」
「あら、心配性ね」
「心配性も何もね」
その警戒する顔でまた彼女に告げた。
「これまでがこれまでじゃない」
「言ってる意味がわからないけれど」
それを言われても平然としているペリーヌであった。流石だった。
「まあいいわ。行くわよ」
「それでその映画館はどうなってるのよ」
平然としたままの彼女に対して追いすがるようにして問う。
「また値切りシステムとかあるの？」
「ないわよ」
それも否定した。またしてもきっぱりとした口調で。
「映画館でそんなのある訳ないじゃない」
「それもそうね」

言われてみればその通りだ。だが警戒していから信じてはいなかったのだ。
「学生割引があるしね」
「そうだったわね」
言われてそれを思い出した。映画館には学生割引があるのだ。
「それがあったわね、そういえば」
「そういうことよ。だから映画館なのよ」
にこりと笑っての言葉だった。
「わかったらじゃあ」
「ええ。仮面ライダーに」
「戦隊をね」
スターリングもそれに続く。
「楽しもうよ」
「そういうこと」
こうして何だかんだと言い合いながらも映画館に向かい三本立てを楽しんだ。三人の時間は楽しいものだった。何かと色々あったがそれでも楽しいものとして終わったのであった。

恐怖のバイキング　　完

２００８・３・６

第八十六話　ベンの兄弟その一

ベンの兄弟

最近ベンがやけにせわしない。あれこれと動き回っている。
そんな彼を見てクラスメイト達は首を傾げている。どうしてそんなにせわしないのかと。
「おい」
最初に彼に声をかけたのはジミーであった。
「最近どうしたんだ？やけに暇そうじゃないか」
「暇！？」
彼の十八番である言い間違いであった。
「ああ、せわしなく動いてな。どうしたんだ？」
「それを言うなら忙しいじゃないのか？」
ベンの方から突っ込みを入れた。
「違うか？」
「だから忙しいのか？」
しかも間違いには気付いていないのだった。かなり悪質ではある。
「最近。どうなんだ？」
「忙しいよ」
率直な言葉でそれを認めるベンであった。
「もう目が回りそうさ」
「またどうしたんだ、最近」
「実はな」
ベンはそれに応えて話すのだった。疲れた顔で。
「俺には弟と妹がいるんだ」
「いたのか」
ジミーはそれを聞いて声をあげる。
「いたさ。前言わなかったか？」
「悪い、忘れていた」

実はそうだったのだ。ベンはクラスでは今までそんなに目立ってはいなかったのだ。今ようやく目立てる場面が来た、そんな感じだったのだ。

「そうだったのか」

「おい、俺は影が薄いのか？」

「別にそうじゃないけれどな」

「本当か！？まあいい」

話してもラチが明かないのでそれはいいとした。

「しかしだ。それでもだ」

「弟さんや妹さんはいるんだな」

「そう簡単にはいなくならないよな」

ここでふう、と溜息をつくのであった。

「困ったことにな」

「何が困ったなのよ」

ジュリアが出て来て彼に突っ込みを入れる。

「兄弟は多い方がいいじゃない。私なんて三人兄弟よ」

「三人か」

「お兄ちゃんが二人ね」

ジュリアにも兄弟がいるのであった。それがわかった。

「いるわよ」

「三人か。まだいいな」

「いいって。どういうことよ」

「俺のところは五人だ」

暗い声でジミーとジュリアに対して告げた。

「それも。同じ学校にいる」

「八条学園にだね」

「ああ。これまでは別々に暮らしていたんだがな」

最近まではかなり気楽な性格だった。しかし今はそれが一変しかなり疲れた感じになっている。その疲れの理由がここで語られるのだった。

「妹達が言い出したんだ」
「妹さん達が？」
「ああ。一緒に住もうってな」
「ああ、それはわかった」
ジミーがここまで話を聞いて全てを察して声を出してきた。
「家賃の問題だな」
「それだ」
そしてベンも彼の指摘に頷くのだった。その通りということだ。
「それでな。一緒に住むことになったんだ」
「家賃が高くなるからな」
「それを言うと安くなるでしょ」
今度はジュリアがジミーに突っ込みを入れた。
「逆でしょ、逆」
「まあ気にするな」
「気にするわよ」
また突っ込み返す。ジミーのいつもの悪い癖だった。

第八十六話　ベンの兄弟その二

「言い間違いばかりして」
「気にしなくていいさ。ところで」
ジュリアの突込みに返してまたベンに声をかける。
「それでどうして大変なんだ？一人暮らしじゃなくなったんだよ」
「だからだよ」
それに対して言い返す。
「一人暮らしじゃなくなったからだよ」
「気楽じゃなくなったからなのね」
ジュリアはそれを聞いてすぐにこう察しをつけてきた。
「それでなのね」
「それだけじゃない」
ベンの返事は暗さを増した。
「家事も増えた」
「家事も！？」
「妹達も弟達もな。家事が全然できないんだ」
「あらあら、それは」
ジュリアはそれを聞いてお気の毒様、と顔で言った。
「大変ね。かなり」
「かなりなんてものじゃない。五人分だぞ」
深刻な顔をさらに深刻なものにさせて述べる。
「五人分の家事。朝から晩まで」
「学校に通いながらね」
「もう。死にそうだ」
表情は完全に鬱のそれだった。
「飯を作るのでさえ戦場だ。育ち盛りが五人だからな」
「そこにあんたも入っているのね」
「まあな」

こっそりとジュリアの問いに頷く。まだその余裕はあるようだ。
「とにかくだ。五人だ」
「一口で言えるけれどかなりよね」
「あと洗濯に掃除に買い物に」
話が家庭の主婦のそれになっている。
「学校も勉強もあるんだぞ。それでなんだ」
「過労気味ってわけ？」
「そうだ」
答えはそれであった。
「しかも急にだ。もう寝たい」
「あんた居眠りとかしないしね」
またジュリアが突っ込みを入れるのだった。
「そういうのできないの？」
「自然に目が冴えるんだ」
こうジュリアに述べた。
「授業中とかはな」
「ある意味凄い有り難い体質ね」
そのせいかどうかはわからないがベンの成績はかなりいい。授業中に寝ないということはそれだけでかなり有り難いことなのである。勉強にとっては。
「何時に寝ても決まった時間に起きるし」
「目が冴えるのね」
「ああ。休日でも」
これも述べるのだった。
「それに休日は余計に」
「よくそれで倒れないわね」
「だから倒れそうなんだ」
こう突っ込みを返す。
「洒落にならない。どうすればいいんだ」
「困ったことね」

ジュリアはここまで聞いてまた言うのだった。
「家事のことはね」
「そうなんだ。どうしたものか」
「ああ、それだったらさ」
ジミーがまた話に入って来た。
「何だ、ジミー」
「家に出ようよ」
「出る！？」
ベンもジュリアも出ると聞いて思わず声をあげた。それと同時に顔を顰めさせている。
「家出か！？」
「それはこの場合何の解決にもならないわよ」
二人はすぐにジミーに対して言うのだった。顔を険しくさせて。
「逃げているだけじゃない。この場合は逃げたら駄目よ」
「だから。家に入ってだな」
「まただったのね」
ジュリアは今のジミーの言葉を聞いてわかった。また言い間違えだったのだ。今度は本人はそのことに何一つ全く気付いてはいない。
「遊ぼうか、皆で」
「ちょっと」
ジュリアはまたジミーに対して言う。再びその顔を顰めさせている。

第八十六話　ベンの兄弟その三

「ベンは疲れてるのよ。それでそんなことしたら」
「ジュリア」
しかしジミーはここでジュリアに顔を向けて微笑んできた。
「何よ」
「耳、渡して」
「耳は渡すものじゃないわよ」
ジュリアはまた彼が言い間違えたのを察しながら言葉を返した。
「手渡しできたら怖いわよ」
「だから。貸してよ」
彼が言いたいのはそれだった。やはりここでも言い間違いをしているのだった。
「耳をさ。いいだろ」
「貸すのならいいわよ」
今回も言い間違いに気付いていないのを心の中で確認しながら応える。
「それで何なの？」
「あのさ」
ジュリアの耳元に顔を近付ける。そのうえでまた言う。
「ここで耳噛んだら怒るかな」
「凄くね」
今度は冗談であった。
「だから止めなさいよ」
「わかってるよ。それでね」
「ええ」
話をはじめる。それが終わってから耳から離れて顔を見合わせるのだった。かなり近くで。
「これでいいよね」

「悪くはないわね」
ジュリアはにこりと笑ってジミーの言葉に応えた。
「それじゃあそういうことでね」
「うん、それで行こう」
二人はこう言い合う。ベンはそんな二人を見て怪訝な顔をしていた。二人の話が終わったところでその二人に対して問うのであった。
「何の話をしているんだい？」
「ああ、別に」
「何もないわよ」
しかし二人は笑顔でそれを誤魔化すのだった。
「ただお昼御飯のことを話していただけだよ」
「カレーがいいかなって」
「カレーか」
ベンはカレーと聞いてここで考える顔を見せるのであった。そしてそれから呟く。
「そうだな。今晩はハヤシライスにするか」
「ハヤシライス？」
「あれならそんなに手間もかからないし」
牛肉と玉葱、デミグラスソースでできる。簡単にできて美味いのがハヤシライスの強みだ。
「それに栄養もあるしな。それじゃあ」
「あの、ベン」
ジュリアがここでベンに声をかけた。
「何かな」
「ハヤシライスはね。たっぷり作っておいた方がいいわよ」
「皆が来るから？」
「それだけじゃなくてね」
それも理由だったが他にもあるのだった。ただ多量に作るだけではないのだ。
「たっぷり作るとそれだけ味がよくなるじゃない」

「ああ、そうだね」
彼女が言うのはそれだった。
「確かにそれはあるね」
「だからよ」
そういうことだった。しかし本当の狙いはここでは隠している。
「わかったわね。それじゃあ」
「わかったよ。じゃあたっぷりと作るね」
「ええ」
「あとさ」
ジミーもまた話に再び入ってきた。
「メインはハヤシライスであとは何をするの？」
「羊かな」
オーストラリアの定番が出た。オーストラリアといえば昔からこれだ。彼等は地球にいる頃から羊に親しんでいるのだ。その毛にしろ食べるにしろだ。この時代は乳も親しまれている。なお今回は食べるケースだ。羊は連合、この時代の日本においてもポピュラーな食材だ。
「それを焼いてね」
「いいと思うわ」
ジュリアがそれに賛成した。
「羊だと皆食べるしね」
「マトンでいいよね」
大人の羊の肉だ。
「それで」
「うちのクラスであの匂い苦手なのは」
マトンには独特の匂いがある。あの匂いこそがよく食欲をそそるという者も多いがそれでも独特の匂いがあるのは確かだ。非常にいい匂いではあってもどうしても好き嫌いが出る。そうした匂いではある。ここが牛や豚と羊が違う点だ。だが味は牛や豚にも匹敵するものがある。

第八十六話　ベンの兄弟その四

「いないわね」
「そうだったね」
ジュリアの言葉にジミーが頷く。
「それはね」
「じゃあそれでいいわね。けれど」
「何？」
ここでジュリアはふと思うのだった。
「何か私達ってさ」
「うん」
そしてジミーがその話を聞く。
「食べてばかりじゃない？」
「そうかな」
「気のせいかしら。けれど」
また言うのだった。
「皆が皆。何だかんだで」
「人間食べないと死ぬよ」
生きている限り絶対に離れることのできない事柄が話された。
「だから別じゃいいじゃないか」
「それはそうだけれど」
「食べるのはまず第一だよ」
この考えは連合共通のものだ。とにかく食べるのだ。
「だから別にいいじゃない」
「いいのね」
「じゃあ他に何するんだよ」
こうも言われる。
「特に今回は。そうだろ？」
「そうね。それじゃあそれでいいわ」

「そういうこと。さて」
ここまで話したうえでベンに顔を戻すジミーだった。そのうえで彼に対して言う。
「じゃあベン」
「ああ」
「そういうことでね」
「何時するんだ、それで」
「そっちに合わせるよ」
こう答えるのだった。
「何時するかはね。それでいいよ」
「そうか。じゃあ準備ができたら言うな」
「御願いするよ。ああ」
「まだ何かあるのか？」
「ハヤシライスに羊に」
また話が食べ物に戻る。やはり重点はそこであった。
「あともう一つどうかな」
「ああ、そうだな」
言われてそれに気付くベンだった。
「野菜がいいな、あとは」
「何か考えある？」
「ハヤシライスに羊だ」
まず他の二つの食材について言及される。
「それなら後はあっさりしたのがいいな」
「それで何にするの？」
「サラダだな」
ジュリアの問いに少し考えてから答えた。
「いっちょオーストラリア風にするか」
「オーストラリア風サラダね」
「ああ、オージーサラダ」
こう言うのだった。

「ちょっと考えてみるな。楽しみにしておいてくれ」
「ええ、御願いするわ」
「そういうことでな。それにしても」
話が一段落したところで。ベンはまた元の疲れた顔に戻った。そしてその顔で呟くのだった。雰囲気もそれに倣うかのように暗いものになった。
「帰ったらまた家事だな」
「それは確定なのね」
「確定も何も」
今度はうんざりとした顔でジュリアに述べる。
「逃げられないんだよ」
「家事はしないとたまるのよね」
「ああ。だからだよ」
そのうんざりとした顔でまた述べる。
「困ったことにな」
「まあ我慢するしかないわね」
言葉ではこう告げるのだった。
「頑張ってね」
「ああ、何とかやるさ」
また力のない言葉で答える。

第八十六話　ベンの兄弟その五

「気合も減ってきたけれどな」
「そこを何とかしてね」
そんな彼をジミーとジュリアは見送る。見ればその後姿も何か疲れたものがある。肩を落として生気が抜けた感じになってしまっていた。
「家事、全部やってるのね」
「そうみたいだね」
ジミーはジュリアの言葉に応えた。
「さて、それをどうにかしてあげないとね」
「皆でね」
彼等は秘策を胸にこう話し合う。それから数日後。ベンのアパートにクラスの面々が大挙してやって来たのだった。その中心にはジミーとジュリアがいる。
「待ってたよ」
「うん。じゃあお邪魔させてもらうわ」
ジュリアがベンに挨拶をする。その後ろには皆がいる。
「奥の部屋よね」
「そうだよ」
アパートは奥に部屋が見える。そこはかなりの広さがあり中央にテーブルがあるのが見える。
「もう用意できてるから」
「ハヤシライスだったよね」
「そうだよ」
今度尋ねたのはジミーだった。ジミーにも答えるのだった。
「あとマトンをケチャップ煮にして。サラダとね」
「パン？御飯？」
「両方あるよ」

用意がよかった。
「用意しておいたからね」
「そうなんだ。じゃあ早速楽しもうよ」
「そうだね。お酒も用意しているしね」
こう話をしながら皆中に入る。パーティーが早速はじまり皆楽しくやっている。その中でもベンはあまり機嫌のいい顔をしてはいなかった。
「どうしたの、ベン」
その中でクラスメイト達はベンに声をかけるのだった。
「楽しくやろうよ」
「パーティーでホスト役が暗いとどうにもならないわよ」
「うん、そうだね」
ベンもそれには頷く。しかしであった。
「それじゃあ」
「ささ、ビールビール」
ビールが出される。
「飲んで飲んで」
「それにしてもビールが増えたわね」
中の一人が部屋を見回して言う。見ればビール瓶で満たされている。樽もある。その瓶と樽により壁が見えなくなってしまっている程だ。
「またどうして？」
「あんた確かにビール好きだけれど」
ベンはどちらかというとビール派なのだ。ワイン等も飲むが一番よく飲むのがビールなのだ。これはオーストラリア人全体の傾向でもあるのだ。
「こんなに飲まなかったのね」
「それがまたどうして？」
「弟や妹達が飲むからだよ」
理由はそれであった。

「特に妹達がね」
「妹さん達がなのね」
「そうなんだよ」
また暗い顔になるのだった。
「三人いるけれど。随分飲んで」
「そんなに飲むんだ」
「僕と同じ位」
「うわ・・・・・・」
皆それを聞いて思わず驚きの声をあげた。実はベンは酒豪なのだ。
「それは凄いわね」
「そんなのが三人も」
「まあね。とにかくそれでね」
困っているというのだった。しかし理由は他にもあるのは表情でわかるのだった。
「色々とあってね。あっ」
ここで家の扉が開く音がした。
「只今」
「誰か来ているの？」
小さな女の子達の声が聞こえたのだった。その開いた扉の方から。
「あっ、帰って来た」
ここえベンはその扉の方に顔を向けて言うのだった。
「その妹達だよ」
「妹さん達ね」
「うん。八条学園のね」
彼の妹達や弟も八条学園の生徒なのは彼等も知っているのだ。これはジミーやジュリアが事前に話を聞いてのことである。

第八十六話　ベンの兄弟その六

「そろそろ帰って来る頃だと思ったけれど」
「お兄ちゃん」
ベンを兄と呼ぶ声が聞こえてきた。
「誰か来てるのね」
「それも大勢ね」
声は一つではない。複数だった。
「只今」
「どうも」
皆がいる部屋にやって来た。ベンと同じ黒い髪と同じ目にアジア系の肌と白人の顔立ちをしてそれぞれ非常によく似た顔をしている三人姉妹だった。
「クララです」
「ルーシーです」
「ケイトです」
三人はそれぞれにこりと笑って名乗ってきた。挨拶は礼儀正しいものだった。
「ごうぞごゆっくり」
「楽しんでいて下さい」
そう言って自分達は自分達の部屋に入る。ジュリアはそんな彼女達を見て悪い印象は受けなかった。それをベンに対して話す。
「悪い娘達じゃないじゃない」
「そうだよね」
ジミーもそれに頷く。
「どんな困ったちゃん達かって思ったけれど」
「ああ」
ベンは相変わらず疲れた顔で二人の言葉に頷いた。
「それはな」

「家事も手伝いそうね」
ジュリアはまだはっきりとはわからないがこう述べた。
「真面目そうだし」
「家事まで手が回らないんだよ」
「回らない！？」
ここでまた妙な言葉が出た。
「何、それ」
「だから。言ったままだよ」
また二人に対して述べる。
「回らないんだよ」
「だから何で回らないのよ」
「他に何かやってることあるの？」
「あるよ」
言葉がさらに憔悴したものになった。
「家族達の世話でね」
「家族達・・・・・・」
またよくわからない言葉が出た。
「家族達って。五人家族じゃないの？」
「人間はね」
人間という言葉が出た。これまた実におかしな言葉だった。
「人間・・・・・・」
「何がなんだか」
「だから・・・・・・あっ」
ここで部屋に新たな客が。それは。
見れば亀だった。ゾウガメだ。ゾウガメはゆっくりと、だが確実な歩みで部屋の中に入って来た。皆をまるで意識せずに堂々としたものだった。
「ゾウガメ・・・・・・」
「どうしてここに」
「家族の一人なんだ」

ベンの言葉であった。
「これがね」
「そうだったの」
ジュリアはここで合点がいった。それで納得した顔で頷くのだった。
「それであの娘達は」
「わかってくれた？」
「いいえ」
だがジュリアはそれでも首を横に振るのだった。
「それでもわからないわね」
「どうしてだよ」
「ゾウガメよ」
自分の側まで来たゾウガメの甲羅をさすりながら話をする。その感触は冷たく硬いものだった。まさに亀の甲羅のそれである。
「大人しいし草食性で餌もそんなに食べないし。飼い易い方じゃない」
「ゾウガメだけだとね」
「ゾウガメだけって」
「今まで黙っていたけれど」
ここで部屋のある場所を指差した。
「あそこ見て」
「あそこ？」
「そう、あそこ」
指差したのは部屋の奥だった。そこにあるのは。
木の枝を指差しているのだ。だがよく見れば。その木の枝の一部は。
「あっ、カメレオン」
「いたんだ」
「これもいるんだ」
カメレオンもいるのだった。

第八十六話　ベンの兄弟その七

「他にもね。家鴨や梟や豚や犬やら。あともう色々」
「ドリトル先生？」
大昔の小説の主人公の名前が出て来た。
「これって」
「オシツオサレツはいないよ」
頭が前後にある山羊だ。非常に変わった動物であるが流石にこうした動物はどの惑星にもいない。間違っても山海経に出るような動物もいない。流石に。
「ついでに言えばドリトル先生は」
「いるの？」
「同じ名前の獣医さんが近所に」
実在しているというのだ、世界は実に狭い。
「いるよ。ドクター＝ドリトル」
「ううむ」
「世の中狭いわねえ」
皆それを聞いてまずは唸るのだった。
「まさかとは思ったけれど」
「本当にいるなんて」
「いい人だよ」
ベンはこうコメントする。
「いつもうちの動物達観てくれるしね」
「そうなの」
「それにしても」
今度はヤモリを見てジュリアは言う。
「一体何匹いるの？」
「さあ」
そう言われても困るといった感じだった。ベンも首を捻る。

「妹達がいつも見つけてくるから」
「見つけるの」
「犬で三匹猫で四匹」
これだけでも相当なものだ。
「ミニ豚もいるし蛙もザリガニもいるしね」
「何でもいるんだ」
「蛇だっているよ」
ベンはジミーにも答える。
「大人しいのがね。あげた餌しか食べないんだ」
「それはいいね」
確かにそれは助かるのだった。蛇が鼠やカメレオンや卵を食べては大変なことになるのが安易に想像がつくからだ。若しガチョウの卵やガチョウ自身を食べれば。
「犬や猫もそうだしね。それは妹達がしているよ」
「餌付けを？」
「そう、餌付け」
またジュリアに答えた。
「一番大変だったのは蝙蝠だったそうだし」
「蝙蝠までいるんだ」
「うん、二匹」
しかも二匹もだった。
「ネズコンドル一号とネズコンドル二号」
「・・・・・何、その名前」
センスの欠片もない名前なのは確かだった。
「僕がつけたんだけれど駄目かな」
「何でネズコンドルなのよ。しかも一号と二号って」
「ゲルショッカーの怪人だけれど」
古典になっている特撮の名作仮面ライダーの悪の組織ゲルショッカーの怪人だ。鼠とコンドルを合わせた怪人で飛行能力も持っている。

「駄目かな」
「だから何でゲルショッカーなのよ」
ジュリアはそこに突っ込みを入れる。
「訳わからないわよ」
「何で？」
「何でって」
彼女も次第に呆れてきた。
「センス位身に着けないと」
「そうかな。個人的には気に入ってる名前だけれど」
それでもベンは言うのだった。
「他にはカナリアとか」
「何て名付けたの？」
「カナリコブラ」
これまたゲルショッカーの怪人である。
「このゾウガメはウツボガメスだよ」
「・・・・・もういいわ」
呆れ果てて言葉を失ったのである。
「わかったかな」
「名前考えるのも大変なんだよ」
とんとんと肩を叩きながらの言葉であった。

第八十六話　ベンの兄弟その八

「何時間も考えるしね」
「んっ、ちょっと待って」
ジミーは今の彼の言葉であることに気付いた。
「何時間もって！？」
「そう、何時間も」
こうジミーに答えてみせてきた。
「考えるんだよ。大変なんだよ」
「それ何時考えてるの？」
「夜に決まってるじゃないか」
決まってるとまで断言してきた。
「お昼は学校だし夕方は家事だし」
「ちょっと待った」
ジュリアもそれに突っ込みを入れる。
「あんたのその疲労ってまさか」
「それで」
「名前考えるのって大変だよね」
今明かされた衝撃の事実だった。ベンの口からそれが出た。
「特撮観ながら考えてだから。本当にね」
「止めなさい」
ジュリアの言葉は命令だった。
「すぐに。そういうのは妹さん達に任せて」
「ええっ、駄目だよ」
しかし彼はそれを右手を横に振って断る。
「あいつ等センスないし」
「センスないって？」
「名前のセンスが無茶苦茶なんだよ」
顔を顰めさせての言葉だった。

「マリーとかエーデルとか。そんな名前ばかりで」
「いや、どう考えてもそっちの方が」
「ねえ」
皆そちらの方に賛成する。普通のセンスならばというやつだった。
「あんた、センス悪いわよ」
「何でそんなこと言うの？」
ジュリアの抗議にまた顔を顰めさせる。
「僕の名前の方が絶対にいいじゃない」８
「何で絶対なんて言えるのよ」
その自信の方が彼女にとっては不思議であった。
「絶対なんて」
「だってさ。怪人だよ」
どうやら彼はそこにセンスを見出しているらしい。
「しかもあのゲルショッカーの」
「ゲルショッカーってあれじゃない」
彼女もゲルショッカーについては多少知っていた。
「二種類の動物と人間を合体させて改造させたものよね」
「そうだよ」
そのゾウガメのウツボガメスの甲羅をさすりながら答える。さすり方はいとしげである。
「他には鷲とカマキリでワシカマキリとか蟹と蝙蝠でガニコウモルとか」
「そうよね」
デザインの不気味さを思い出しながらベンの言葉に頷く一同だった。
「それはね」
「あれ、そういえば」
ここでジミーが気付いた。
「どうしたの？」
「ガニコウモルだけれど」

「ゲルショッカーの最初の怪人だよ」
「いや、そうじゃなくて」
そうしたことは言っていないのでそちらの話には乗らなかった。
「何で蝙蝠にその名前をつけなかったの？」
「そうよね」
「そういえば」
皆もそれに気付く。何しろネズコンドルなのだ。鼠か鳥ではなく何故か蝙蝠に名付けるその奇怪なセンスにも首を傾げながら話すのだった。
「何で蝙蝠に？」
「それが不思議」
「もう蟹にその名前プレゼントしたし」
「だからだったの」
「最初はカニゲルゲにするつもりだったんだ」
彼は言う。
「それでもね。ゲルゲだけは止めてくれって弟や妹達が五月蝿いから」
「そうでしょうね」
「あれはね」
理由は簡単だった。そのゲルゲはゲルショッカーの怪人よりもまだ不気味だからだ。あまりにも不気味で見ると子供が泣き出したこともあるのだ。
「それでガニコウモルにしたんだよ」
「で、蝙蝠がそれなのね」
「そういうこと。それでね」
話は続く。

第八十六話　ベンの兄弟その九

「今度の蠍だけれど。どんな名前にしようかなって考えてるんだ」
「サソリトカゲスにでもしたら？」
「それはもう蜥蜴に使ったから」
「そう」
もう使われているのだった。何時間も考えて名付けているというわりにはどうもあまり考えて名前を付けているとは思えないふしが見受けられる。
「駄目なんだ。どうしようかしら」
「その前によ」
だがここでジュリアが言うのだった。
「何かな」
「あんた、もう動物の名付け親やるの止めなさいよ」
「えっ、何で」
こう言われて怪訝な顔になるベンだった。
「それって何で？」
「結局それで疲れてるんじゃない」
真相がわかったのでこれも言う。
「そうでしょう？」
「そうかな」
「そうよ」
自覚を感じない彼に突っ込みを入れる。
「まあそれはいいとして」
「いいんだ」
「結局あんたの問題だし」
「うん」
理由はそれだった。実はパーティーから色々と理由をつけて妹達に家事を分担させるつもりだったのだが詳しい事情を聞いて方針を

転換したのである。
「だったら。もう止めなさいよ」
「動物達の名前付けるの？」
「センスないわよ」
一言であった。それで言い切ってみせた。
「だから。止めなさいよ」
「そうかな。いい名前だと思うけれど」
「全然」
それは完全に頭から否定する。
「蝙蝠にそんな名前を付けるあたりがもう駄目ね」
「そこがいいと思うんだけれど」
「とにかく」
ラチが明かないので話を強引に進めさせた。
「いいわね。もう名前はつけない」
「怪人の名前じゃなかったら怪獣を」
「同じよ」
その通りだった。
「怪獣でも怪人でも。それにね」
「それに？」
「怪獣だったらどんな名前にするのよ」
それが気になってベンに問うのだった。
「ちょっと考えつくのだけでも言ってみなさいよ」
「ベムスターとか」
いきなり物凄い怪獣が出た。
「ゼットンとかエレキングとかグドンとかかな」
「却下」
即答であった。
「そんなの絶対につけたら駄目よ」
「じゃあキングギドラとかは？」
「三つ首で空飛ぶ金色の龍飼ってるの？」

言葉に険が篭っている。なお何処の星にも何処の宇宙にも流石にそんな動物は今のところ存在してはいない。存在していれば大騒ぎどころではない。
「いや、いたら僕だって驚くよ」
「驚くどころじゃないでしょ」
また突っ込みを返す。
「連合軍が出ているわよ」
「やっぱり」
「メカゴジラでも作ってね」
何気に特撮に詳しいジュリアであった。
「けれどさ、ジュリア」
「何？」
メカゴジラと聞いてジミーがジュリアに突っ込みを入れてきた。
「あれ、強いの？」
「多分強いわよ」
ジュリアの言葉には実感というものがなかった。

第八十六話　ベンの兄弟その十

「多分だけれど」
「何かあっさりとやられて首もがれそうな気がするんだよね」
彼は首を捻って述べた。
「メカゴジラって聞くとさ」
「じゃあメカ松井は？」
メカゴジラの通称になっている。何でも二十世紀末から二十一世紀初頭に活躍した日本人野球選手の仇名がゴジラだったらしい。それで今この時代でも日本人、若しくは日系人で松井という名スポーツ選手がいればその容姿に関わらずゴジラと仇名されるのだ。
「それじゃあ同じじゃない」
「バット持って目や口からビーム放って大暴れ」
何気に強そうである。
「連合軍だったら作られるかも」
「連合軍にそんなお金あるかしら」
「多分」
あまりお金を回してもらえず長官がそれこそ家庭の主婦並のやりくりをして運営していると言われているのが中央政府防衛省だ。なおそこの長官こそがこの学園の理事長である。学園の予算が潤沢なので彼は何事もやり易いと喜んでいるという噂があったりする。
「あるんじゃないかな」
「まああってもそんなの作ったら一発で予算どころの話じゃなくなるわね」
「面白そうじゃない」
「面白いで防衛はできないでしょ」
ジュリアの言葉は実に現実的なものであった。
「怪獣退治なら光の巨人がいるし」
「まあそれは」

実在しないのはわかっていての話だ。
「そんな馬鹿げたの作ったら理事長が長官首になって防衛省の予算は大幅カットよ」
「厳しいね」
「それが現実よ」
特撮やアニメのようにはいかないということであった。
「とにかくよ」
「うん」
ジュリアは強引に話を戻してきた。
「ベン」
「あっ、僕なんだ」
「あんたがメインでしょ」
とぼけた声を出してきた彼に少し呆れる。
「それでね。もう名前つけなくていいから」
「駄目なの」
「駄目よ。妹さん達に任せなさい」
「折角考えてつけたのにな」
「だからそれが駄目なのっ」
いい加減気が立ってきていた。ジュリアの口から牙めいた八重歯さえ見えている。見れば八重歯にしてはかなり大きなものがある。
「あんたは家事だけしておきなさい。いいわね」
「何だ、面白くないなあ」
「変な名前つけられる動物達の身にもなったら？」
今度はこう言うジュリアだった。
「怪人だなんて」
「ハリネズミにハリネズラスとか」
「だからそれが駄目なんだって言ってるでしょ」
また怒るのだった。
「何よ、その凶悪な名前は」
「いい名前じゃないかな」

「だとしたらあんんたのセンスは最悪よ」
きっぱりと言い切る。
「じゃあカブトムシとかは何なのよ」
「カブト虫ルパン」
こう来た。
「ヘラクレスオオカブトにね」
「やっぱり二度と名前考えたら駄目よ」
内心ヘラクレスオオカブトにそれはないだろうと思いながらベンに対して言う。
「わかったわね」
「ちぇっ、仕方ないな」
「文句言わない。まあ何はともあれ」
ここまで話してまずはふう、と一息つく。それからまた述べた。
「これでこの話は終わりね」
「そういうことだね」
ジミーがジュリアの今の言葉に応える。
「何かと思ったけれど」
「全く」
ジュリアの呆れた溜息が最後になる。しかしベンの家の動物達の話はまだ続くのだった。

ベンの兄弟　　完

２００８・３・８

第八十七話　動物発見隊その一

動物発見隊

ベンの三人の妹のクララとルーシーとケイト。この三人には特殊能力がある。

「ねえお兄ちゃん」

「また拾ったよ」

こう言っては動物を何処からか拾って来るのだ。連合では動物を捨てることは犯罪なので野良犬や野良猫はいないが野生動物はその限りではない。野生の犬や猫もいるのだ。

「はい、トッケイ」

「可愛いわよね」

「トッケイか」

オオヤモリともいう。鳴き声からトッケイとも呼ばれているのだ。

「また随分と変わったもの見つけてきたな」

ベンは帰宅と共に台所で人参を切っている自分に見せてきた妹達とそのオオヤモリを見て呟く。

「何処でそんなもの見つけたんだ」

「川辺にいたのよ」

「ねえ」

「川辺か」

それを聞いて見つけた場所については納得した。オオヤモリはそうした場所にいるからである。これについては彼も知っているのだ。

「それでも。よく見つけてきたな」

「まあね」

「運がよかったわ」

「運がいいか？」

ベンは包丁を使いながら妹達の言葉に首を捻る。

「あまりそうは思えないんだがな」

「そうかしら」
「運がいいわよね」
「ねえ」
三人で言い合うのだった。
「オオヤモリがこんなところで見つかるなんて」
「この前なんか狼だっていたしね」
「野生の狼か」
そんなものが野外にいるだけでも驚きである。
「危ないだろ、普通に」
「あれ、お兄ちゃん知らないの？」
次女のルーシーが笑って兄に対して言う。
「狼って人襲わないのよ」
「そうなのか？」
「そうよ。野生の狼でもね」
「そうだったのか」
これについては彼も知らなかった。話を聞いて包丁を使いながら驚いた顔になる。顔は妹達に向けられたままだが包丁は正確に動いている。
「だから犬になったんじゃない」
「そうでしょ？」
「そういえばそうか」
言われてみてようやく気付いたのだった。
「人襲わないからか」
「そういうこと」
「犬が人間の友達なら」
これからの言葉もまたそうなるのだった。
「狼も人間の友達よ」
「そうでしょ？」
「まあそうだな」
ベンもそれに納得して頷く。しかしだった。

「けれど。森に狼がいるのもな」
「ああ、大丈夫よ」
しかし妹達は平気な顔のままでまた言葉を返してきた。
「それはね。全然平気」
「人を襲わないだけじゃなくて家のペットとか普通に危ないだろ」
「森の方が食べ物豊富だし」
「それに森にはちゃんと人がいて自然保護しているし」
この時代では連合各国にこうした自然保護官がいるのだ。木々や動物達の保護及び自然破壊にならないようにコントロールしているのである。
「ニホンオオカミだしね」
「ニホンオオカミか」
地球ではいなくなったと言われてきた日本にいた狼だ。普通の狼と比べて原始的でありしかも身体が小さい。森林に棲む狼なのだ。

第八十七話　動物発見隊その二

「だから小さめの犬みたいなものよ」
「人にも馴れてるしね」
「人にもか」
「そうよ。可愛いわよね」
「ねえ」
ニホンオオカミを評してこう言う妹達だった。
「秋田犬みたいで」
「ちょっと違うかしら」
「秋田犬か」
日本産の大型犬だ。この時代でもペットとして人気の犬である。
なお連合では犬も食べられる。当然ながら狼を使った料理もある。
あまりポピュラーではないが。
「そんな感じなんだな」
「そうよ。それでお兄ちゃん」
ここでまた妹達が彼に言ってきた。
「今度は何だ？」
「このオオヤモリの名前だけれど」
「名前な」
彼は名前と聞いて暗い顔になった。
「それはな。もう」
「ああ、クラスメイトから止められたんだっけ」
「お兄ちゃんの」
「そうだよ。残念だよ」
俯いて妹達に答える。
「ヤモリだったらすぐに考えつくのにな」
「そうだったの」
「ああ、いい候補があったからな」

彼にしてはそうなのだった。
「で、名前何にするつもりだったの？」
「よかったら教えて」
「ミサイルヤモリ」
今度はデストロンであった。無駄に名前のバリエーションだけ多い。
「それでどうだ？」
「やっぱりさ、お兄ちゃん」
「そうだよ」
妹達はその名前に呆れながら兄に突っ込みを入れる。
「名前のセンスどうにかした方がいいよ」
「それだと」
「・・・・・御前等までそう言うのか」
家族にまで駄目出しをされて流石に落ち込みを隠せない。俯いていたがさらにそれが深くなる。それで激しく落ち込み続けていた。
「僕だって考えているんだけれどな」
「まあまあ」
「それはそれこれはこれでね」
妹達は慰めるのではなく誤魔化すことをここで選んだのだった。
「ヤモリの御飯はどうしよう」
「そうよね。何がいいかしら」
「虫だな」
一言で答える。
「虫なの」
「ああ。もう虫は随分いるよな」
それを妹達に尋ねる。気を幾分か取り直して普通の表情になっていた。その顔で包丁を使いながら妹達に対して尋ねてきたのである。
「餌に使う」
「ええ、まあ」
「それでいいのね」

「それで駄目だったらペットショップの餌だな」
彼は今度はこう言うのだった。
「一応それも考えておくといいな」
「そうなの」
「まあこれは考えておくだけでいいだろうな」
彼はこう予想立てるのだった。
「正直なところ」
「虫でいいのね」
「そういうことだ。蛙とかカメレオンとか蜥蜴の餌に前から使ってるな」
「じゃあこれまで通りで」
「行く？」
妹達は顔を見合わせて話をする。とりあえずこれでこの話は終わりそうだった。
「あとは」
「ねえお兄ちゃん」
今度はルーシーがベンに声をかけてきた。兄と呼んで。
「ネズコンドル一号と二号の餌だけれど」
「ああ、買っておいたよ」
今度は玉葱を切りながら答える。

第八十七話　動物発見隊その三

「バナナだろ？」
「ええ」
つまりフルーツコウモリというわけだ。蝙蝠という生き物はその蝙蝠によって食べるものが様々だ。フルーツを食べるものもいれば虫を食べるものもいる。中には血を吸うものもいてこれはかなり有名だ。所謂チスイコウモリという存在である。
「もう買ってあるの」
「買ってるさ。他にはマンゴーもな」
「マンゴーも」
マンゴーと聞いて三人の妹達の顔色が少し変わった。
「私あれ好きなのよね」
「私も」
彼女達はまた顔を見合わせて言い合う。
「私達も食べたいわよね」
「ねえ」
「あ、そう言うと思ってさ」
既にそれは読んでいたベンであった。
「たっぷり買っておいたから。他の果物もな」
「やるわね」
「流石お兄ちゃん」
「ああ。ところでだ」
ここで兄は話を変えてきた。
「何？」
「不思議に思わないか？」
問うてきたのであった。こう。
「不思議って何が？」
「だから。俺は今こうして玉葱切ってるだろ」

「ええ」
見れば確かにそうだ。玉葱を細かく刻んでいる。まず最初に目につくのはその見事な包丁捌きだが彼が今言っているのはそこではなかった。
「他に何か思わないか？」
「あっ、そういえば」
末妹のケイトがまず気付いた。
「目が痛くならないわ。玉葱なのね」
「そうよね、そういえば」
次にクララもそれに気付く。
「どうしてかしら」
「玉葱に何かしたの？」
ルーシーは直接兄に問う。
「ちょっと工夫をしたんだよ」
「工夫って」
「一体何を」
「まず玉葱をおおまかにばらすだろ」
そこから話をするのだった。
「ええ」
「それでその玉葱をな」
ここで側に置かれていたボウルに顔を向ける。黄色く大きなプラスチックのボウルだった。
「水に浸すんだ」
「水に浸すの」
「それで随分と変わるんだ。目が痛くなくなるんだ」
「切ってもね」
「そういうことだ。わかったか？」
ここまで話して妹達に問い返す。
「こういうのも工夫なんだよ」
「成程、何事もちょっとした工夫で変わっていくのね」

「その通り」
　にこりと笑って妹達にまた答える。
「わかればどうってことないよな」
「確かにそうだけれど」
「それでも。玉葱を切っても目が痛くならないのはいいわね」
「そういうことさ。それでな」
　彼はまた言う。
「今日はジャーマンポテトだ」
「ジャーマンポテトなの」
「ジャガイモの余ったのはブタとかの餌な」
「イノカブトンのね」
　この家の豚の名前である。言うまでもなく名付け親はベンだ。仮面ライダーのＤＶＤを何度も何度も見てそれからつけた名前である。
彼なりに考えた名前なのだ。
「あと草食性のやつに食べさせればいい」
「わかったわ」
「ジャガイモってこういう時に便利よね」
　妹達もジャガイモには素直に喜ぶ。
「皮剥かなくてもそのままで食べられるし」
「動物はね」
　これがまた楽でいいというのだ。人間だとこうはいかない。皮を剥かないと後で皮が胃にもたれてとんでもないことになる。もっともジャガイモの皮を剥くのはベンにとっては簡単な話だが。これは調理の基本でもある。とりわけドイツ料理においては全てはこれからはじまるのだ。
「そうかあ、今日はジャーマンポテトかあ」
「楽しみね」
「あとマッシュポテトな」
　またしてもジャガイモだった。
「それと玉葱のスープ」

「中々いい感じじゃない」
「それと御飯だ」
今日は御飯なのだった。
「パンの方がよかったか？」
「ううん、別に」
妹達は御飯でよしとした。連合ではその時に応じて主食が御飯だったりパンだったりするのだ。他にもクスクスやジャガイモも主食となる。

第八十七話　動物発見隊その四

「ジャーマンポテトっていったらやっぱりね」
「だから」
「そうか。ならいいんだけれどな」
妹達の言葉を聞いて満足した笑みを浮かべる。
「じゃあ。これ切ったら御飯炊くからな」
「それ私達がしようか？」
「いつもお兄ちゃんがしてるし」
「ああ、いいよそれは」
しかしこの申し出は断るベンだった。
「幾ら忙しくても御飯は自分で炊くさ」
「またどうして？」
「自分の好みに炊けるだろ」
理由はそれだった。些細だがかなり大きな理由であった。
「だからだよ」
「何だ。何かと思ったらそんなことなのね」
クララは兄の今の言葉を聞いてまずは拍子抜けした。
「些細なことっていうか」
「こだわりかと思ったけれど」
「けれどこれって案外重要だぞ」
また妹達に述べる。
「自分の好みのものが作られるっていうのはな」
「そうなの」
「ああ。それで最近」
そうしてまた言うのだった。
「凄い元気だしな。そのせいで」
「それは多分違うわ」
「そうよ」

だが今の言葉は妹達に容赦なく突っ込まれた。
「夜更かししなくなったからよ」
「動物達の名付けで」
「何だよ、言うのはそれか」
妹達にまでクラスメイト達と同じことを言われて顔を顰めさせるのだった。
「そんなに僕のネーミングは悪いのか」
「最悪よね」
「はっきり言ってね」
妹達の言葉も同じだった。
「どうしようもないっていうか」
「流石に駄目でしょ」
「ちぇっ、わかったよ」
妹達にまで言われて憮然となる。その憮然とした顔で述べるのだった。
「じゃあそれは諦めるか」
「センスないから」
「センスないか」
「全然」
次女のルーシーの言葉だった。
「料理のセンスはあるのに」
「自分ではそうは思わないけれどなあ」
首を捻る。自分としては普通のことをしているつもりなのだ。
「まあいいや」
「いいの」
「ああ。やることをやるだけさ」
そう言いながら切り終えた玉葱をボールに移す。今度はジャガイモを出してきた。実に見事な包丁捌きをまたしても見せて皮を剥いていく。
「僕のやることをね」

「そうなの」
「じゃあお兄ちゃん」
妹達はまた兄に言葉をかけてきた。
「何かな、今度は」
「明日の晩御飯のおかずだけれど」
「今作っているのは今日のだぞ」
話を聞いていて随分早いと思っていた。しかしそれでも妹達の話を聞くのだった。何だかんだ言って彼も兄であった。なお兄弟で一番上である。
「まあいいさ。それで明日は何なんだ?」
「お蕎麦がいいわ」
「蕎麦か」
「ええ、どうかしら」
それを兄に問うのだった。
「お蕎麦で」
「今日のお昼のお弁当鮎の唐揚げと野菜のにっころがしだったじゃない」
「ああ」
昨日の夕食の残りである。そこにデザートのフルーツを切って入れて主食は御飯である。最高の組み合わせの一つである。
「それ食べていたら思ったのよ」
「お蕎麦もいいなって」
「そうか。お蕎麦か」
ベンもその話を聞いてまんざらでもない顔を見せるのだった。

第八十七話　動物発見隊その五

「悪くないな」
「お兄ちゃんお蕎麦こねれたよね」
「ああ」
実はそれも得意だったのだ。彼の料理上手は本物というわけだ。
「だったらいいわよね」
「お蕎麦」
「そうだな。ざる蕎麦にするか」
彼は蕎麦と聞いてまずそれを考えた。
「和風ならそれを極めてな」
「ざる蕎麦なの」
「他に何かいるか？」
「そう言われると」
「お蕎麦ってそれだけでいけるし」
麺類はそれ一品で主食になるしおかずにもなる。実に便利なものなのだ。だから連合ではよく食べられる支弁達も食べているのだ。
「あとは御飯はまあふりかけでもあればね」
「そうね」
「じゃあお蕎麦だな」
彼もこれで納得するのだった。
「三人共それでいいな」
「ええ、私達は」
「もうそれで」
彼女達は笑顔で話し合う。
「トブも好きだしね」
「あいつは何でも食べるわよ」
ベン達の弟だ。兄弟の中では末っ子である。
「ざる蕎麦も好きだしね」

「よし、じゃあ今晩こねておくな」
既にそば粉はあるのだった。そば粉は何かにつけて使われる。ただ麺の蕎麦として使うだけではないのだ。蕎麦掻等の菓子としても使うし他にも使うのである。
「それでいいよな」
「ええ、そういうことでね」
「それじゃあ」
こうして明日の夕食まで決まった。その次の日。放課後クララ達は三人並んで下校していた。それぞれの部活も終わってほっとした心持の下校だった。
「今日はお蕎麦ね」
「ええ、楽しみね」
ルーシーがケイトの言葉に頷いていた。
「お兄ちゃんってお蕎麦も上手いからね」
「名前のセンスがあればね。あれで」
クララは言っても仕方のないことを口にした。
「どうしたものかしら」
「そうよね。ネーミングセンス」
次に話されるのはそこであった。
「それが壊滅的にないから」
「どうしたものかしら」
「まあいいじゃない」
ケイトは笑顔でとりあえずそのネーミングセンスはよしとした。
「お兄ちゃんは家事ができるんだしそれでやってもらえばいいし」
「そうよね。それで私達は」
ルーシーは笑顔で述べる。
「動物の世話ね」
「何か実家にいる時と同じね」
彼女達は実家にいる時も動物の世話をしていた。子供の頃からだったのだ。

「そうね。ところで」
「何？」
ケイトは次姉の言葉に頷いてからふと前を見た。
「何か感じない？」
「感じない？そういえば」
クララが彼女の言葉に応えた。
「この感触は」
「ええ、間違いないわ」
ルーシーも言う。彼女も何かを感じていた。
「前からね」
「ええ」
そしてまた言い合うのだった。
「それも。これは」
「猫ね」
こう言ったその時だった。前から太った白いスコティッシュ＝ホールドが出て来たのだ。首輪をしていることから飼い猫であるのは間違いなかった。
「やっぱりそうだったね」
「そうね」
姉妹はそのスコティッシュ＝ホールドを見ながら笑顔で言い合うのだった。
「それにしてもこの猫って」
「スコティだけあって耳がね」
耳がいい具合に垂れていた。その垂れ具合がまた絶妙な猫だったのだ。
「うちのライゾウとどっちが可愛いかしら」
「それは決まってるじゃない」
ライゾウとは彼女達が飼っている猫だ。スコティッシュ＝ホールドであり大きく太っている。模様は白地に黒と灰色でホルスタインの配色をしている。

第八十七話　動物発見隊その六

「ライゾウに決まってるわよ」
「それもそうね」
「そうそう、帰ったら」
話が家に帰った時のことに移った。
「餌やらないとね、ライゾウの」
「ライゾウだけじゃなくて」
他にも色々といるのだった。
「腹ペコもいるし」
「そうそう、他にも一杯ね」
腹ペコも飼っている猫だ。雌の雉猫である。ペットショップで見た時に随分痩せていたのでこの名前になった。なおこの二匹の名付け親は三人である。ベンの介入を防いだ例だ。
「餌あげないと」
「ウツボガメスにはジャガイモでいいわよね」
「昨日のあれよね」
「そう、あれ」
他のペットにも話が及ぶ。
「生のままでいいわよね」
「いいと思うわよ。皮のままでね」
こうも話される。その間にさっきのスコティの後ろから一人の小さな女の子がやって来た。そしてその猫をそっと抱き抱えたのであった。
「やっぱり飼い猫だったわね」
「そうね」
三人は女の子とスコティを見て話をする。見れば女の子はまだ小学生のようだ。小さくで可愛い金髪の少女だ。スコティを抱く姿が絵になっている。

「何ていうか。可愛いわよね」
「猫が？それとも女の子が？」
「両方よ」
ルーシーはにこりと笑って姉に答えた。
「何か。どちらもね」
「そうね。それにしても」
ケイトが言う。
「やっぱりうちのライゾウの方がいいかしら」
「ライゾウもねえ。あれで悪さしなかったら」
実は家のペットの中で一番悪いのだ。何かにつけて悪さをするので三人にとっては一番手のかかる存在なのだ。しかしそれでも可愛いのだった。
「いいんだけれど」
「全くよ」
笑顔で話しているのが何よりの証拠だった。
「帰ったら何してるかしら」
「寝てるんじゃない？」
猫だけあってライゾウも非常によく寝るのだ。
「それか普通にしてるか」
「普通ね」
「そう、普通」
今度はケイトがクララに述べていた。
「昼は大人しいから」
「そうなのよね」
ルーシーがケイトの今の言葉に頷いた。
「お昼はね。ライゾウ大人しいわよね」
「そのかわり夜よ」
猫は元々夜行性である。
「夜悪さするのよね、いつも」
「そうなのよね。本当に」

「全く」
姉と妹がそれぞれ応えた。
「朝なんかいつも御飯食べるのだって遅いのに」
「夜になると元気なんだから」
「そもそもよ」
ルーシーは首を捻りながら言った。
「ライゾウって最初に家に来た時大人しかったわよね」
「大人しいものなんてものじゃなかったわよ」
クララが彼女に応えた。
「隅っこに逃げてガタガタ震えて」
「何日もそうだったわよね」
ケイトもその時のことを話す。ライゾウも最初はそうだったのだ。
家で一番の悪童も。
「それが今ではあれ」
「どうしたものかしら」
「そういえばよ」
またルーシーが言った。
「ペットショップでライゾウ買った時」
「ああ、あの時」
「大人しそうだったわよね」
こうクララに述べた。
「ショボーンとした感じで」
「そうそう」
そんな顔で店先にいたのである。そのライゾウという猫は。

第八十七話　動物発見隊その七

「それで一匹だけ変な顔」
「そう？」
しかしルーシーは今のルーシーの言葉には首を横に振る。
「それは別に」
「感じなかったの？」
「ええ。可愛い顔してたじゃない」
ケイトはこう言うのだった。
「メスかって思う位に」
「確かに今じゃそう思うけれど」
ルーシーも今ではそう思っていた。しかしその時は違っていたのだ。
「あの時はそう思ったのよ」
「そうなの」
「スコティッシュ＝ホールドだからかしら」
ルーシーはそこに理由を見た。
「やっぱり」
「スコティだから？」
「耳、垂れてるじゃない」
中には垂れていないものもある。スコティッシュ＝ホールドの特徴はその耳だがそれでもそうしたスコティッシュ＝ホールドもいるのだ。
「だからそう見えたのかも。それに」
「それに？」
「豚みたいに見えたし」
「豚になのね」
「豚は豚で可愛いわよ」
こうクララに答えるルーシーだった。

「けれど猫でその顔はね。ちょっとって思って」
「そうだったの」
「それでもまあ。今は可愛いと思うけれど」
そこはあっさり変わったルーシーであった。
「あんな男前の猫はいないわよね」
「そうよね」
「うちの家の猫の中じゃ一番よね。毛並みもいいし」
ケイトだけでなくクララもルーシーの今の言葉に頷く。
「それにしてもよ」
「ええ」
ケイトはここで話を戻した。
「あの時は本当に大人しそうだって思ったんだけれどね」
「お店の人言ったわよね」
「ええ、今でもはっきり憶えているわ」
クララとの言葉であった。
「お店の猫の中じゃ一番悪いって」
「悪さの常習犯だって」
「あの時は嘘だって思ったわよね」
ルーシーの言葉である。
「そんなことは」
「お店の人の言う通りだったわ」
ケイトの言葉だ。
「最初は大人しかったのにねえ」
「本当に隅っこでガタガタ震えて」
またその話になる。
「最初これで大丈夫かしらって思わなかった?」
「思ったわ」
クララがルーシーに答えた。
「こんなに震えて。どうなるのかしらって」
「ところが数日経ったら」

状況が一変したというわけだ。
「家の中をドドドドドドドド、って走り回って」
「あちこち爪研いで」
これが猫である。猫はそうした生き物なのだ。
「もうやりたい放題」
「それで今に至ると」
「触られるの嫌いだしね、あいつ」
ライゾウはそういう猫なのだ。触られると怒るのだった。
「そうしたら噛むし」
「抱っこしたら攻撃してくるし」
「困った奴よ、本当に」
そう語る三人の顔は実はそんなに困ったものではなかった。実際は。
「どうしたものやら」
「しかもライゾウだけじゃないし」
また問題児がいるのであった。
「タロだってねえ」
「そうそう」
タロというのはやはり家で飼っているペットだ。犬である。
「間抜けな癖にあれこれ動いて」
「変なことにばかりするし」
そういう犬なのである。

第八十七話　動物発見隊その八

「あの二匹一緒になったらいつも何か起こすわよね」
「困ったことよ」
また困ったという言葉が出るがやはりその顔はそんなに困ったものではない。
「どうしたものやら」
「それでね」
ルーシーがここで言った。
「あの二匹分けない？とりあえず」
「どうやってよ」
「だから。部屋は別にして」
まずはこれだった。
「それから私がライゾウの面倒を見て」
「それで。次は」
「姉さん達でタロの面倒を見る。これでどう？」
ルーシーの提案はこうであった。そのうえでまた姉と妹に対して問うのだった。
「これで随分と違うわよ」
「違うかしら」
「特にライゾウ」
ライゾウの名前が出てクララの頭にもケイトの頭にもライゾウの顔が思い浮かぶ。そのつぶらな瞳と如何にも満ち足りたような顔が。完全にボンボンの顔である。
「あいつが一番問題児じゃない」
「タロは案外そうじゃないのよね」
「そうそう」
タロはごく普通の犬なのだ。とりあえずは。
「けれどライゾウはねえ」

「本当にペットショップの店員さんの言う通りだったわね」
そうなのだった。
「悪さばっかりして」
「爪を研ぐのだってね」
爪を研ぐのは猫の習性だから当然のことだ。しかしライゾウのそれは普通ではないのだ。
「絶対に私達の見てるところでやるからね」
「しかも研いだら駄目なところで」
確信犯の悪戯というわけだ。
「わかってやってるから性質が悪い」
「そうなのよね」
「だからなのよ」
ルーシーはここでまた提案するのだった。
「分けるべきよ、そうすればかなり違うわ」
「特にライゾウね」
「猫はおおむね手間がかかるもんだけれど」
だから猫なのだ。我儘で気紛れなものなのだ。しかもそれでどうこう言っても仕方ないのが猫なのだ。それが嫌なら飼えはしない。
「それでもライゾウのあれは」
「困ったわよね」
「まずは分けましょ」
「そうね」
「そうしましょう」
そんな話をしながら家に帰る。そこでまた動物に出会う。今度は犬、それから蛙に蛇に鳩に孔雀と続いていく。とにかく動物と縁のある三人だった。

動物発見隊　　完

2008・4・11

第八十八話　生え際その一

生え際

マチアには悩みがある。それは。
「やっぱり髪の毛よね」
「五月蝿い！」
いきなり感情的になってレミに対して言い返すのだった。やはりこれであった。
「俺は禿じゃない！」
「禿じゃないの」
「額が広いだけだ」
「それを禿っていうのよ」
レミの突込みには容赦がない。
「幾ら何でも高校生でそれはやばいでしょ」
「家系で禿げてる人はいないぞ」
マチアはそのことを主張した。
「親父の方もお袋の方も」
「そうなの」
「ただ。額が広いだけだ」
一応こう言い訳はする。
「ただそれだけなんだよ」
「普通それを禿って言わない」
「まだ言うか」
マチアの劣勢は明らかだった。しかしそれでも彼は踏ん張って言い返すのだった。ここまで来て逃げるわけにもいかなかったのである。
「言うわよ。今じゃ禿だってなおるじゃない」
「ああ」
いい時代と言うべきであろう。人類は禿を克服したのだ。ついで

に言えば癌と水虫もである。医学の輝かしい勝利であった。そこまで人類は進歩したのだ。
「だったらさ。毛はえ薬でも」
「だから俺は禿じゃない」
それでもまだ言う。
「俺は別にそれは」
「違うのね」
「ああ、違う」
今度は力説になっていた。とかく髪の毛のことにはムキになるのだった。
「だから額が広いだけなんだ」
「またそんなこと言って。あのね、マチア」
レミの言葉が少し真面目になる。これまでは完全にからかいだったのだ。つまりマチアをからかって楽しんでいたのだ。結構意地が悪いところがある。
「何だ？」
「現実から目をそむけても何にもならないわよ」
「何でそこまで言われないといけないんだ」
「海草食べなさい」
まずはこれだった。
「あとカルシウム摂ってね。それで全然違うわよ」
「海草か」
「そう、海草よ」
にこりと笑ってまたマチアに対して言う。
「そうじゃなくても身体にいいしね」
「海草。そういえば食べないな」
自分でもふとそのことに気付くのだった。
「しかも全然」
「スープに入れてもサラダでもいけるわよ」
「そうなのか」

「そうなのかってあんた」
少し呆れた顔でまたマチアに対して言う。
「今まで知らなかったの、それ」
「海草は好きだったがな」
それ自体はいいというのだ。連合各国では海草は非常によく食べられる。やはり伝統的に日本人がとりわけ食べるが。海苔にしろ昆布にしろだ。
「それは知らなかった」
「そうなの。けれど髪の毛にいいのは事実よ」
レミはそれは保障する。
「だから。まずは海草ね」
「わかった」
「あとは。毛はえ薬」
続いて出たのはそれだった。
「やってる？ちゃんと」
「やってるわけないだろ」
むっとした顔で言葉を返すのだった。
「そんなもの。何でするんだ」
「馬鹿ねえ。ハゲはそれで治るのよ」
病気扱いだ。もっともこの時代はハゲは皮膚病と同じものだと考えられている。これには薄毛も入る。エウロパのマールボロ元帥は自分の頭をあえてそのままにしているので連合では変人扱いされている。ついでにやはりエウロパの人間は、と馬鹿にする材料にもなっている。

第八十八話　生え際その二

「簡単に。それをしないで」
「だから俺はハゲじゃない」
マチアも意地を張って言い返す。
「家系にもいないし。それにだ」
「それに？」
「毛根は強いんだぞ」
こう言うのだった。
「俺の髪の毛は太くて硬い。しかも量が多い」
「まあ量自体はね」
レミもそれは認める。確かにマチアの髪の毛はまるで箒だ。そのまま逆さにして掃いても掃除が出来そうな位だ。そこまで見事なのだ。
「だからだ。禿げないんだよ」
「甘いわね」
しかしレミも引き下がらない。
「その考えは」
「甘いっていうのかよ」
「そうよ。それでもハゲはやって来るものなのよ」
言葉が擬人化された。
「ジワリジワリとね」
「何か怖いな、その言い方」
「ハゲは悪魔よ」
言いながらも何故か笑っている。
「気がつかないうちに侵略してそして一気に髪の毛を」
「ああ、止めろ」
いい加減聞いていて耐えられなくなってきたのだ。
「それ以上聞くと俺は」

「けれど本当よ」
それでもレミは言う。
「来るから、急に」
「急にか」
「毎日頭洗ってるわよね」
「ああ」
身だしなみとしてそれは当然行っていた。
「それはな」
「それ自体はいいことなのよ」
レミもそれはいいという。やはり髪の毛を洗わないと不潔で仕方がない。ましてや彼等は十代で育ち盛りだ。油断するとすぐに髪の毛がフケだらけになるのである。
「それ自体はね」
「何か悪いことがあるんだな」
「そうよ」
マチアの今の問いにこくりと頷く。
「洗い方に問題があってね」
「それか」
「そうそれ、マッサージするみたいにするのよ」
そうマチアに説明する。
「そうすればいいのよ」
「わかった。じゃあそうするか」
レミの言葉を受けて頷くのだった。
「これからな」
「まあ今は髪の毛染めても傷まないし整髪料もね」
「ああ」
そういう時代になったのだ。技術の進歩は染髪にまで及んでいたのだ。そのせいで今ではかなりカラフルな髪でも平気なのである。確かにいい時代だ。
「揃ってるけれど来る時は来るから」

「それが俺だって言いたいんだな」
「頭のお肌はどう？」
次に問われたのはそこであった。
「硬い？柔らかい？」
「何かあるのか？」
「いいから。どっちなのよ」
それをマチアに対して問うのだった。
「よかったら教えて」
「そうだな。それじゃあ」
実際に頭に手をやって触ってみる。そしてわかったのは。
「柔らかいな」
「じゃあそれはいいわ」
マチアはそれを聞いて納得した顔で頷いた。
「そっちは大丈夫ね」
「大丈夫？何がだ」
「だから。肌も重要なのよ」
彼女が言うのはそこであった。
「頭のお肌もね」
「そうなのか」
「ええ。具体的に言うと」
そうして説明をはじめる。

第八十八話　生え際その三

「柔らかいといいのよ」
「柔らかいとか」
「だってそうじゃない。柔らかい土壌には草が生えやすい」
「ああ」
これはマチアにもわかった。だから畑を耕す、これについてはよくわかるのだった。
「けれどコンクリートにはどう？」
「そういうことか」
「そういうこと。頭のお肌が硬くなったら危険信号よ」
「ううむ」
「頭皮をマッサージした時に動かなくなったらね」
何気によく知っているのであった。レミもまた。
「あと毛根は」
「今度は毛根か」
「一つの毛根から毛が二本生えてたりする？」
「二本か！？」
「ええ。そこはどうかしら」
今度尋ねてきたのはそこであった。
「生えてるの？どうなの？」
「ああ、生えてるぞ」
自分の髪を上にあげての言葉だった。その時額が随分広く見える。
レミは当然のようにそこに関してもすぐに突っ込みを入れるのだった。
「やっぱり広いわね」
「放っとけ」
「まあそれは置いておいて。確かに」
そこに見える毛根をチェックする。それでわかったのだった。

「生えてるわね、しかも結構」
「じゃあいいのか」
「ええ、合格よ。何だ、禿げる要素ないわよ」
「じゃあ俺は禿げないのか」
「遺伝でも大丈夫なんでしょ」
またそこを指摘してきた。
「御家族にハゲはいない」
「ああ」
またその言葉に頷くマチアだった。
「流石にこれに関しては嘘をついても仕方ないだろ」
「治療を受けた人もいないわよね」
「それもない」
治療を受けたら治る。実はこれが結構厄介なことであったのだ。
「エア神に誓うぜ」
「エア神ね」
「何ならイツァム＝ナーにだ」
エアはメソポタミアの、イツァム＝ナーは旧中南米の神だ。人類が銀河に出てから連合においてその信仰が復活した神々の中の二柱である。
「誓って言うぜ」
「嘘じゃないのわかってるからいいわよ」
それに対するレミの返事はクールなものだった。
「別にそこまではね」
「そうなのか」
「けれど。あれね」
そのうえでまたマチアに言ってきた。
「あんた、禿げないけれど額は気をつけてね」
「禿げないけれど額がか？」
「ええ。額が広い」
そこを強調するのだった。

「これってかなりまずいわよ」
「まずいのか」
「薄毛とそれはね。誤解されやすいのよ」
また随分ときついがその通りの言葉だった。
「髪の毛が多くても細くて柔らかくてくせ毛だと」
「ああ」
何かと複雑な髪の毛だとマチアも話を聞いていてわかる。
「それで禿げているように見えるし」
「そうか」
「それが上だけで横が異常に多かったりすると」
これまた不幸な設定である。
「わかるわね」
「嫌になる位わかるな。ハードゲイのバーに単身突入した時にどうなるかよりもな」
「そこ、入ったことあるの？」
「いや」
今のは完全なジョークだ。だから首をすぐに横に振ることができた。

第八十八話　生え際その四

「入ったら俺は今頃恐ろしいことになっていたな」
「そうね。凄い世界だから」
同性愛は連合ではイスラエル以外の殆どの国で認められていてもだ。
「特にハードゲイは」
「そうだな。それで話を戻してだ」
「そうね」
ハードゲイの話は打ち切られた。
「細い毛も駄目なんだな」
「ああ、それもまずいわね」
話は今度は髪の太さに関するものになった。
「地が見えたら終わりよ」
「やっぱりな。そうか」
「だから。その場合は横を短く刈って」
あくまで治療しない場合の話だ。
「それで誤魔化したりね」
「それもいいのか」
「要は工夫なのよ」
また随分と現実的というか切実な話であった。
「そうして隠していってね」
「隠す、ねえ」
「そうよ」
また話す。
「隠すっていうか誤魔化すっていうか。それでわからないようにしたりね」
「そんなにハゲは苦労するのか」
「ハゲも薄毛もね」

レミの言葉は続く。言葉がさらに続いていくのだった。
「そこが大変なのよ」
「ううむ」
「額が広いのも同じよ」
「そうか」
「ほら、あれ」
今度は額の話になっていく。本当にレミは詳しい。こうした話題に対して。
「髪の毛を下ろしてる人いるじゃない」
「ああ、結構多いな」
「そこに隠されている額を見ればいいわ」
彼女が指摘するのはそこだった。今度はその額の話になっていく。額もまた薄毛と同じく何かと誤解というか悩みのもとになっていくものだ。
「広い人、かなりの割合だから」
「かなりか」
「そう、かなりよ」
またしても真面目な言葉だった。
「割合的には随分だから」
「そうか」
「あんたみたいな額でもそうよ」
こうも言うのだった。
「隠していたりするから」
「じゃあ俺も」
「あんた、髪下ろさないわよね」
レミはここでふと気付いた。
「髪の毛立ったままじゃない」
「生まれた時からなんだよ」
こうレミに対して述べた。首を少し傾げさせたうえで。
「実はな」

「生まれた時からそうなの？」
「ああ、赤ん坊の時からな」
自分の口からそれを述べる。懐から一枚の写真を出してきた。それはその赤ん坊の頃の彼の写真だった。見れば頭は全く変わってはいない。
「同じじゃない」
「わかったな」
その写真を見せたうえで答えた。
「髪の毛は変わらないんだ」
「また随分と癖の強い髪の毛ね」
「ジェルとかはつけたことはないな」
こう述べる。
「実際のところな」
「ないの」
「けれど。下ろしてみるか」
今のレミとの話を聞いてそれを考えるのだった。
「それであれこれ言われないんだったらな」
「やっぱり気にしてるの」
「ああ。じゃあジェルかムースは」
「使う？」
ここでレミは早速何かを出してきた。それは。
「これ。よかったら」
「ジェルか？」
「そうよ、スーパーハードジェル」
赤いジェルだった。歯磨き粉と同じようにポリに入れられている。

第八十八話　生え際その五

「これで下ろしてみる？」
「そうだな。それじゃあちょっと」
「ああ、オールバックは止めておきなさいよ」
それはあらかじめ注意するのだった。
「それはね。いいわね」
「ああ、かえって額が広く見えるよな」
「そういうこと」
額を隠す為なのに逆に見せてどうなのかということだった。
「間違ってもしたら駄目よ」
「わかってるさ。じゃあ」
「櫛はあるの？」
「それはあるさ」
今度はマチアが自分の懐から串を出してきた。赤い骸骨ブラシだった。
「これな」
「それに付けてなのね」
「髪をまとめるのは手早くワイルドにだよ」
それが彼のやり方だった。
「じゃあ早速な」
「はい、鏡」
鏡はレミが出してきた。
「使ってね」
「また随分と気が利くな」
「結構苦労してるのよ」
にこにこと笑いながら彼に話すのだった。
「これでもね」
「そういえば御前今何処でアルバイトしていたっけ」

「化粧品店よ」
こうマチアに答える。
「このジェルもそこで貰ったのよ」
「貰ったのか」
「ええ、そうなのよ」
「そうか。新品なのか？」
「よくわかったわね。キャンペーン中の商品よ」
だから気前よく出せたのだ。そういうことだった。
「それでいいかしら」
「ああ、全然オッケーだよ」
そしてマチアもそういうことにはこだわらないのだった。早速骸骨ブラシに付けていく。そのうえで髪の毛をすくのだった。そうすると。
「どうだ？」
「そうね」
レミはそれに応えてマチアを見る。見れば。
「結構いい感じじゃないの？」
「ええ。少なくとも額は見えないわ」
正直に述べるのだった。
「それでいったら？」
「そうだな」
だがマチアはここでは即答を避ける。そうしてまたブラシを取り出したのだった。
「今度はどうするのよ」
「ああ。もっと他にもやってみる」
そう言いながら櫛を操る。そのまま髪を色々といじくりだしたのだ。すると。
「どうだ、今度は」
「やっぱりあんたにはオールバックは」
オールバックにしたマチアには首を捻ってみせてきた。

「似合わないっていうか止めた方がいいわね」
「そうみたいだな」
彼も鏡を見て言う。確かに額が広く見える。
「これはな」
「額を隠す為なんだから」
そうなのだ。額が丸見えになっている。しかも髪の毛が完全に寝ている。そのせいで彼が余計に額が広く見えてしまっていたのだ。
これでは話にならない。
「それは止めておくことね」
「わかった。じゃあ今度は」
髪を立たせた。パンクだ。
「これはどうだ？」
「滅茶苦茶不自然よ」
レミは髪を派手に立たせたマチアに対して述べた。
「おまけに額も出たままだし」
「出たままじゃ本末転倒だな」
「そうよ。だからそれもね」
駄目だというのだ。結構難しい。

第八十八話　生え際その六

「止めないとね」
「俺は意外と髪型限られているんだな」
「限られているっていうか額を見せたいんだったら別にいいでしょうけれど」
これは逆転の発想だ。しかしそれには収まらないのだった。
「それを隠す為なんだからね」
「そうだよな。それじゃあ」
ここでまた櫛を出すのだった。
「これでどうだ」
「今度はストレートね」
「そうだ」
実際に髪型をストレートにしていた。ぱっと見ただけではかなりおかしな印象を受ける。
「これもな。どうも」
「似合ってないわよね」
「俺もそう思う。止めるか」
「ええ。そういえばマチア」
「何だ？」
「最初の額隠した髪型だけれど」
それについても言及するレミだった。
「どう思う？自分で」
「俺がか？」
「ええ。そっちはどうなの？」
「そうだな」
言われてみれもう一度その髪型にしてみる。感想は。
「おかしいな」
「あんたもそう思うのね」

「ああ。何かおかしいな」
「はっきり言うと似合ってないわよ」
かなりはっきりとそれを述べるのだった。率直でさえあった。
「だからね。それも」
「止めた方がいいか」
「最初のが一番じゃないかしら」
そしてこうも言うレミだった。
「やっぱり」
「その額が目立つやつか」
「少なくとも今までやってみたのの中では一番いいわ」
マチアにとってはあまりいい話ではなかった。
「だからね。やっぱり」
「今まで通りか」
「禿げないからいいじゃない」
「まあ禿げないのならな」
それには安心はした。しかし、であるが。
「それでもな」
「額が広いのが困るのね」
「どうすればいいかな、本当に」
「毛生え薬しかないでしょ」
結局話はそこに辿り着く。
「どう？いい薬紹介するわよ」
「御前がか」
「こういうのはアンジェレッタの専門だけれどね」
「じゃああいつにか」
「話してみる？」
「勇気がいる」
今の話の中で最も深刻な顔になっていた。
「それをやるのはな」
「そんなにアンジェレッタが怖いの？」

「怖いというか心配だ」
これが彼の本音だった。
「どんな薬が出て来るのかな」
「確かにね。あの娘ポケットから何でも出してくるから」
「あのポケットもどうなっているんだ」
マチアは今まで誰も言わなかったことにふと気付いた。なお彼にしろレミにしろ何処からか何かを取り出してくるのは得意である。アンジェレッタ程ではないが。
「何かっていうと薬とかが出て来るがな」
「薬だけじゃないけれどね」
レミはまた言った。
「あそこから出て来るのは」
「何が出て来るんだ?他には」
「護身用のアイテムとか」
それもであった。何でもかかんでも出すのがアンジェレッタなのだ。
「そういうのも出せるのよ」
「本当にあいつのポケットはどうなってるんだ?」
「四次元ポケットかも」
この時代でも続いている伝説のネコ型ロボットの漫画だ。この漫画は二十世紀に出て最初は二十二世紀から来たことになっていたが今ではこの時代から二百年未来から来たことになっている。それでもやっていることや出て来る道具は大体変わってはいない。やはりかなり不思議な道具に満ちているのだ。
「そうだとしか思えないわよ」
「確かにな。あれは」
「それで。どうするの?」
レミはアンジェレッタのポケットの話が一段落ついたところであらためてマチアに尋ねた。
「アンジェレッタと話してみる?」

「そうだな」
レミの言葉にまずは腕を組む。
「それもいいか」
「覚悟は決めたのね」
「覚悟か」
そう言われても頷けるものがあった。それはやはりアンジェレッタだからだ。彼女の薬にはかなり不安を感じ続けているのである。
「まあそうなるか」
「じゃあ覚悟を決めたら行きましょう」
レミはまた言ってきた。
「いいわね、それで」
「ああ、わかった」
レミのその言葉に頷く。こうして彼は腹を決めて地獄へと向かうのだった。

生え際　　完

２００８・４・１６

第八十九話　アンジェレッタ地獄その一

アンジェレッタ地獄

マチアはレミと共にアンジェレッタの机に向かった。するとそこではその彼女が机に座りながら怪しげな薬の調合を行っていた。青と緑、紫の粉末が見える。

「何だよ、それ」

「漢方薬よ」

アンジェレッタ本人の言葉ではそうだ。

「まあ色々とブレンドしてみているのよ」

「ブレンドか」

「これを飲めば一週間寝ないでも平気」

麻薬に似ている。

「何を飲まなくても食べなくてもやっていけるわよ」

「それって覚醒剤じゃないの？」

レミはアンジェレッタのその言葉を聞いて思わず呟いた。当然ながらこの時代にも麻薬は存在し所謂覚醒剤も存在している。どの世界においても頭痛の種である。

「大丈夫よ。常習性はないから」

「そういう問題じゃねえだろ」

「とにかくこれを飲めば元気ハツラツよ」

話を聞いてもいない。

「何があっても安心。不死身になれるわよ」

「それはいいとしてよ」

話してもラチがあかないと見てレミは単刀直入に話を出してきた。

「何？」

「マチアのことで相談に乗って欲しいのよ」

「髪の毛のこと？」

「何でわかるんだよ」

思わずアンジェレッタに突っ込みを入れたのはマチアであった。
「俺はまだ何も言っていないぞ」
「そんなのすぐにわかるわよ。だってマチアだから」
「俺イコール髪の毛なのか」
「そういうこと」
言葉に容赦がない。まるでナイフの様に鋭い言葉をマチアに投げ続ける。
「実際にまた一センチ広くなってない？」
「なってねえよ」
マチアの方もいい加減頭にきてきていた。
「額の広さは変わってねえよ。子供の頃からな」
「そう。だったらいいけれど」
「それでだ」
とにかく話をする。
「まあ禿げない体質なんだ」
「嘘でしょ」
「だから話を聞け」
信じようとしないアンジェレッタに言葉がさらに荒くなる。
「何なら調べてみろ。それはないから」
「ふうん」
「さっき御前も言ったけれど額なんだよ」
話をそこにやる。
「額が広くてな。その解消にな」
「毛生え薬が欲しいの？」
「その通りだ」
実にはっきりとした言葉であった。
「額を狭くする為にな。あるか？」
「あるわよ」
アンジェレッタは調合する手を止めて答えてみせた。
「そういうのも」

「そうか、やっぱりな」
「それでどういうのが欲しいの？」
「すぐ生えるやつだ」
とにかく即効性のものということだった。彼の言葉はかなり切実なものだった。
「今あるのなら」
「はい」
それに応えて出してきたのは白いチューブだった。それを服のポケットから取り出して彼に差し出したのである。
「じゃあこれを使えばいいわ」
「塗り薬か」
「ええ。それを毛を生やしたいところに塗るよね」
マチアに対して説明する。
「すぐに生えるから。どうぞ」
「わかったよ。じゃあ早速」
そのチューブを受け取って蓋を取る。少し力を入れて握るとそこから青い練ったものが出て来たのだった。一見するとか磨き粉に見える。
「何かこれで歯を磨けそうね」
「そうしたら歯に毛が生えるわよ」
レミに突っ込みを入れる。

第八十九話　アンジェレッタ地獄その二

「だから止めておいた方がいいわよ」
「歯に毛が」
「気持ち悪いでしょ、それって」
「気持ち悪いっていうかホラーよ、それって」
それを想像して身の毛もよだつものを感じるレミだった。頭の中で口に毛が生えた光景を思うとそれだけで全身に鳥肌が立つのを感じたのだ。
「だから。止めておくことね」
「わかったわ」
アンジェレッタの言葉に頷く。
「流石にそれはね」
「そういうこと。それでマチア」
「ああ」
今度はマチアに言葉を向けるのだった。マチアもそれに応える。
「少し塗るだけでいいから」
「額にか」
「そうよ。それだけでいいから」
そう説明する。
「そうしたら生えるわ」
「よし、じゃあ」
「んっ？」
アンジェレッタはマチアが指にその薬をつけたのを見た。
「あっ、つけたいところ以外に直接つけたら」
「何だ？」
「生えるわよ」
そう言った瞬間だった。何と指に。
「お、おいこれって！」

「何よ！」
レミも思わず叫んだ。
「指に毛が生えた！」
「まさかこれって！」
「即効性って言ったでしょ」
アンジェレッタは平然とした様子で二人に対して告げる。
「すぐに生えるのよ。しかも効果が凄くて」
「それを早く言え！」
「だから。即効性だって言ったじゃない」
またこう言うのだった。相変わらず平然とした態度で。
「だからよ」
「幾ら何でも効き過ぎだぞ」
「それ使う時は手袋とかが必要なのよ」
「そうだったのか」
「それもビニールのがね」
ほぼ劇薬扱いだった。無茶苦茶な話だ。
「必要だったんだけれど」
「それも早く言えよ」
「忘れてたのよ」
完全に他人事だった。無責任にも聞こえる。
「御免なさいね」
「何かあまり誠意の感じられない言葉だな、何か」
「じゃあ誠意出すわ」
それに応えて出してきたのは。一つの丸い瓶だった。それをマチアに対して差し出すのだった。今度は青い瓶である。何故か不気味な印象がある。
「脱毛クリームよ」
「脱毛クリームまであるのか」
「当たり前でしょ。毛生え薬があるのなら脱毛クリームもあるわよ」
「そうよね」

レミがアンジェレッタのその言葉に頷く。
「セットになってるものだし」
「そういうこと。セットは外さないわ」
アンジェレッタは当然といった感じで述べるのだった。
「お薬ってね。互いの副作用を打ち消し合うのも大切なのよ」
「というか御前の薬は全部副作用が強過ぎるんだよ」
マチアはまだ己の指に生えている毛を眺めながらアンジェレッタに言う。
「一体何処でこんなものが売ってるんだよ」
「色々」
「色々！？」
「そうよ。入手ルートは色々よ」
また随分といい加減かつ不気味な言葉であった。
「合法ルートしかないわよ」
「当たり前だ」
さらに話がとんでもないものになってきていた。
「それ以外のルートって一体何なんだ」
「それを聞いたらね」
「ああ」
話が剣呑なものになっていく。ついでにアンジェレッタとマチアの顔も一緒に。

第八十九話　アンジェレッタ地獄その三

「普通じゃいられないわよ」
「普通じゃか」
「それでも聞きたい？」
アンジェレッタはすっかり別人の顔になってマチアに問う。顔、とりわけその目は完全に真剣かつ剣呑なものになっている。実に危険な匂いに満ちている。
「それでいいのならだけれど」
「いや、止めておく」
マチアはここで身体を翻すことにした。
「それはな」
「何よ、面白くないわね」
「というか御前はそのルートを知ってるんだな」
「さあ」
白々しく惚けてみせる。本当に白々しい様子だった。
「それはどうかしら」
「どうかしらって御前」
さらにマチアに突っ込みを入れる。
「まさか本当に」
「これがね。案外高くついてね」
洒落にならない話が続く。聞いているだけで危ないような。
「けれど儲かるのよ」
「御前の家本当に普通の薬屋か？」
そもそもそれが疑問に思えてきた。それ以外のルートとは。
「マフィアか何かと付き合っているのか？」
「大学とは付き合ってるわよ」
「大学か」
「天本博士とは流石に関係ないけれど」

シャバキと並ぶ連合の奇人変人だ。奇人変人は連合四兆の中で結構な数になるがその中でもこの二人は格別であると評判になっている。どちらも破壊力まで抜群だ。

「あの博士は全然関係ないところからとんでもない薬作るだろうが」

「天才ね」

何とアンジェレッタはその天本博士を賞賛さえする。

「あれでどれだけお金になるのかしら」

「あの人はお金は全部研究費と開発費につぎ込むぞ」

卑しくもマッドサイエンティストたるもの金に執着したりはしない。あくまでそれは己の野望なり欲望なりにつぎ込むのだ。そうでなくてはマッドサイエンティストではないのだ。

「この前もそれで騒動起こしていただろ？」

「そういえば。何か劇薬を作ったとかで」

「それが普通だからな」

一億人殺せる劇薬も天本博士にとっては普通なのだ。

「あの博士は」

「つくづく凄い人ね」

「流石にあの博士とは付き合いがないか」

「ないわよ。まあルートのことは置いておいて」

「ああ」

置いておける話ではないがとりあえず置いておくことにした。そのうえでまた話をするのだった。

「話は戻すわよ」

「俺の髪の毛だよな」

「その前に」

アンジェレッタは半分忘れられていたマチアの指を自分の指で指差した。

「そこ、毛を取ってね」

「ああ、わかった」

早速そのクリームを塗る。すると瞬く間に抜けてしまった。

「随分強いな」
「これがそのクリームのいいところよ」
売っている本人の言葉だ。
「わかってくれるかしら」
「ああ。充分な」
「わかってくれたら話を再開するけれど」
「毛生え薬を額に塗ればいいんだな」
「そういうこと」
きっぱりとマチアに答えた。なお今までここにいる三人の中で誰もさっきマチアの指に生えた毛の色を見てはいない。ここが大きな引っ掛けだった。
「それだけでいいのよ」
「わかった。じゃあ早速」
「あっ、マチア」
横からレミが彼に声をかけてきた。
「何だ？」
「手袋よ」
これもまた忘れられていたことだった。かなり忘れられていることが多いのは気のせいではない。話があまりに飛んでしまっていたからだ。
「手袋しないとさっきの二の舞よ」
「おっと、そうだったな」
マチアにしろそれを言われてやっと思い出す程だった。うっかりどころでは済まされない話だ。

第八十九話　アンジェレッタ地獄その四

「それじゃあ早速」
「忘れかけてたわね」
「否定はしない」
今のは流石に嘘はつけなかった。
「ちょっとな」
「ちょっと！？」
「大いにな」
半ば強制的に言葉を訂正させられた。レミも手強い。
「これでいいんだな」
「そういうこと。それじゃあ」
ようやく手袋をしてからクリームを指に取って額に塗ってみる。すると。それだけで見る見るうちに髪の毛が生えてきたのであった。
「おいおい、本当に生えてきたよ」
「凄い効き目ね」
マチアもレミもこれには驚きだった。見れば塗ったところから早速毛が生えてきているのだ。二人はこれを見て驚いていたのだ。マチアは鏡で見ている。
「私の薬よ」
アンジェレッタも笑顔で語る。
「効かない筈がないじゃない」
「確かに」
「あんたの薬って効くことは効くからね」
問題はその効果が途方もないのだが。しかし本人はそれを気にしてはいない。
「もう一センチか」
「伸びるのも早いわね」
「そうよ、早いんだから」

「ええ。ただ何か」
「んっ、おかしいぞ」
二人はここであることに気付いた。
「生えるのが早過ぎないか」
「そうね」
二人は伸び続ける髪の毛を見て言う。
「このまま伸び続けるのか？ひょっとして」
「これってまずいでしょ」
「まずいってものじゃないよ」
マチアは危惧を覚えだした。
「このまま伸びたらそれこそ」
「大変なことに」
「しかもだよ」
まだ問題点はあった。というよりかは気付いたのだ。
「これ、色が違うぞ」
「そういえば」
髪の色が違うのだ。マチアはダークブラウンだが今伸びている髪の毛はブラックなのだ。しかもかなり濃い。それで色がはっきりと分けられてしまっていた。
「く、黒って何なんだよ」
「ああ、その育毛剤黒なのよ」
アンジェレッタがここで言う。
「さっき言わなかったっけ」
「言ってねえだろ」
「そんなの初耳よ」
二人はなおも伸び続ける髪の毛を見つつアンジェレッタにクレームをつける。
「そうだったかしら。まあそういうこともあるわね」
「そういうこともじゃねえよ！」
「明らかに不自然でしょ、これって」

「ファッションよ」
アンジェレッタは全然平気だ。二人、特にマチアとは正反対に。
「気にしない気にしない」
「御前なあ、他人事と思って」
「メッシュだと思えばあれだけれど」
「俺はメッシュは趣味じゃないんだよ」
マチアは不機嫌な顔でこう語る。
「だからな。これだって」
「しかも。何処まで伸びるのよ」
「一メートルは伸びるわよ」
しれっととんでもない発言がまた出て来た。
「一メートル！？」
「そう、一メートル」
またしてもしれっとして出て来た言葉だった。
「まあ我慢して伸びきるのを待ってから切ってね」
「一体どういう育毛剤なんだ」
マチアはアンジェレッタの話を聞いて首を傾げざるを得なかった。

第八十九話　アンジェレッタ地獄その五

「ここまで伸びるうえに色まで違うなんて」
「普通地毛と同じ色になるんじゃないの？」
「私の薬は特別だって言ってるじゃない」
一聴すると全くの支離滅裂だがアンジェレッタが言うと実に説得力のある言葉だった。
「だから色だって独自の色になるのよ」
「本当にどういう薬なんだ！？」
「何かネコ型ロボットが出してくるお薬みたいね」
「甘いわね」
この時代でも大活躍して映画も遂に千二百作を超え十三番目の殺し屋と同じだけ伝説的存在となっているロボットの名前を聞いて今度は不敵に笑うアンジェレッタであった。
「あのロボットさえ超えるわよ」
「超えるのかよ」
「それだけ私の薬は凄いのよ」
胸を張ってさえいる。
「だから。色だってね」
「それはわかったからよ」
これ以上彼女の自慢を聞く気はマチアにはなかった。
「これ、どうすればいいんだよ」
「さっきの脱毛クリームを塗れば一発よ」
「そうか、わかった」
それを聞いてまずは安心だった。
「じゃあまたあれ貸してくれ」
「はい」
早速またあの瓶が出された。マチアはそれを手に取ると慎重に額に塗っていく。間違って地毛の部分に塗ってしまわないようにだ。

塗ればどうなるかは言うまでもなかった。
「何か凄い緊張するな」
「慎重にね、慎重に」
「わかってるよ」
レミに応える。何とか薬を塗って今度はそれを専用の液体薬品で拭き取る。これで何とか騒ぎを収めたのであった。マチアはそこまで終えてようやくほっと一息ついた。
「一時はどうなるかと思ったよ」
「そうね」
レミがマチアのその言葉に頷く。
「見ているこっちまでハラハラしたわ」
「こんなの普通よ」
やはりアンジェレッタはしれっとしたものだった。
「毛が生えたり抜けたりするのだって」
「それを言ったらその通りだけれどな」
これは当のマチアも否定しない。言ってしまえばそれで終わる話なのだ。しかしそれでも。彼はあえて言うのだった。言わずにはいられなかった。
「しかしな」
「それでもってことなのね」
「そういうことだよ。髪の毛は大事なんだよ」
「長い友達ってやつね」
今度出た言葉はこれだった。
「まあ大丈夫よ」
「レミと同じこと言うな」
「だって。髪の質が」
そこを指摘してきた。見るところを見ているということか。
「頭皮柔らかいでしょ」
「ああ」
「しかも生えている量多いし」

彼女はそこも見ているのだった。見ている部分は実に多くしかもしっかりしている。
「髪の毛硬いし」
「それもわかるのか」
「わかるわよ」
また言う。
「だって。見ればそんなのは」
「そうか」
「あと。チェックしてみて」
また言ってきた。
「チェック！？」
「毛根から二本の毛が生えてる？」
それを言うのだった。
「そこんところどうなの？」
「んっ！？それは」
「はい」
またレミが鏡を出してきた。動きが早い。
「どうぞ」
「あっ、悪いな」
「いいわよ。それで見てみて」
「ああ、それじゃあな」
レミに言われるままその鏡で見てみる。すると何個か毛根から二本の毛が生えていた。それを確かめてからまたアンジェレッタに問うのだった。
「生えてるけれどそれがどうしたんだ？」
「だったらまだまだ大丈夫よ」
「禿げないのか」
「毛根から二本生えているのがあるうちはね」
彼女が言うのはそこだった。

第八十九話　アンジェレッタ地獄その六

「全然大丈夫よ。安心して」
「だったらいいけれどな」
「それだけ生える力が強いってことだから。つまり」
ここで話をまとめるのだった。それがどうも医者めいていた。少なくとも彼女は医者ではなく薬やの娘なのだが。そうしたふうになってしまっていた。
「毛が硬くて頭皮が柔らかくて二本生えていたら」
「大丈夫か」
「特に後の二つね」
頭皮と毛である。
「その二つが大丈夫なら髪の毛が柔らかくても薄くても」
「禿げないか」
「まずはね。ただ」
しかしここで言葉を付け加えてきた。また付け加える形になっていた。
「ただ。何だよ」
「薄毛とか額はまた別よ」
少し不安な顔になったマチアに告げる。
「それはわかっておいてね」
「その二つは別か」
「禿げるのとはまた別だから」
こうも彼に告げる。
「それは覚悟しておいてね」
「残念なのか」
「あんたがそうじゃない」
まともに言われた。
「その額はね」

「額はなあ」
それを言われると困るのだった。実際のところ。
「結局何とかならなかったな」
「ダークブラウンの育毛剤あるけれど」
「いや、もういい」
はっきりと嫌な顔をして彼女に告げる。
「面倒はもういいさ」
「面倒かしら」
「面倒だったよ」
さらに嫌な顔をしての言葉だった。
「全く。毛が生えるわ抜けるわ」
「それも運命よ」
「そういう問題じゃないだろ」
少しムキになってまた言い返す。
「何でこんなに色々なことになるんだ」
「それを乗り越えてこその育毛なのに」
「禿げないってことがはっきりわかったのならそれでいいさ」
意外と無欲なマチアであった。
「それでな」
「そういうものなの」
「ああ。もうそれでいいさ」
諦めが多分に入った言葉になっていた。視線は横に向けられている。
「もうな」
「随分諦めがいいのね」
「その割には未練があるような」
アンジェレッタとレミはそれぞれ彼に言う。
「だから。もういいんだよ」
マチアは今度はうんざりといった顔で彼等に応える。
「これだけ色々な目に遭うのはな」

「やれやれ。マチアもいくじなしね」
アンジェレッタはその小さい身体の肩をすくめさせて言う。
「子供なんだから。本当に」
「少なくとも御前よりはずっと大人に見えるとは思うが」
「人は外見ではわからないものよ」
今度はこの時代においても非常によく使われる正論を出してきた。

第八十九話　アンジェレッタ地獄その七

「言っておくけれど」
「そうなのか」
「そうよ。さて」
ここで顔を楽しげなものにさせるアンジェレッタだった。
「今日の放課後は」
「放課後は？」
「デートと洒落込もうかしら」
「デートってあんた」
これはレミにとってもマチアにとっても思いも寄らない言葉だった。
「彼氏いたの？」
「勿論」
にこりと微笑んで自信に満ちた言葉で答えるのだった。
「私だって女の子だし高校二年だし」
「前者は当然のことだけれど後者は違うわよ」
女の子だから作るとしたら普通は彼氏だ。そういう意味で必要条件である。ただし絶対必要条件ではないのは同性愛の場合もあるからである。だが後者は充分条件だ。高校二年でも彼氏がいない場合も多々ある。これは出会いと成り行きが作るものだからだ。
「言っておくけれど」
「まあまあ。とにかく私にも彼氏はいるわよ」
「誰なんだ、それ」
マチアはそれが気になった。それでアンジェレッタに問う。
「初耳なんだけれどな」
「前に言ってなかったかしら」
「だから。初耳よ」
レミもそれを言う。眉を顰めさせている。

「そんなの。あんたに彼氏がいるなんて」
「そうだったかしら」
「それで。誰なのよ」
彼氏がいるとわかれば次に聞くのはそこであった。
「何処の子なの。うちの学校の子？」
「それは知ってみてのお楽しみ」
にこにこと笑っての言葉だった。
「何処の誰なのかはね」
「全く。楽しんでるわね」
「勿論」
何故かアンジェレッタのその顔が猫めいてきていた。頬に髭を生やせば完璧に猫である。そんな顔だった。
「美人さんよ」
「美人さんって男の子よね」
「そうよ。すっごく美形で」
「美形ねえ」
「何処の誰なんだか」
レミにもマチアにもわかりかねる。何処の誰か全くわからない。
「さてさて、誰かしら」
「言う気は全然なのね」
「だから。知ってみてのお楽しみよ」
やはり猫そっくりの顔になっていた。
「私なんかがあんな奇麗な子と一緒になっていいのかしらって思うけれどね」
「まあどっちにしろ」
レミは少なくともあることだけはわかった。
「アンジェレッタがかなりおのろけなのは確かね」
「そうだな」
それにマチアも頷く。
「こんなにのろけてるこいつを見たのははじめてだぜ」

「何とでも言いなさい」
今にも後ろ足で顔をかきかねない有様だった。
「とにかく知ってみてのお楽しみよ」
「全くのろけちゃって」
「どうなってるんだよ」
魚を出したら飛びつきかねないアンジェレッタを見つつ言う。どうにもこうにも彼女でもおのろけだけはどうしようもないようである。

アンジェレッタ地獄　　完

２００８・４・２１

第九十話　助っ人獲得その一

助っ人獲得

「しかし大きな謎ができたわね」
「全くだ」
レミとマチアは校舎の屋上にいる。そこで外を眺めながら話をしていた。
「アンジェレッタに恋人がいたなんて」
「しかもあののろけ具体だ」
二人はそれぞれ言う。
「信じられないわよね」
「信じられたらこんな話はしないよな」
「そうね。お互いね」
レミもマチアのその言葉に頷く。
「世の中って本当にわからないわ」
「わからないついでにだ」
マチアはここでさらに言う。
「相手は一体誰なんだろうな」
「そうよ、それよ」
レミは今のマチアの言葉に応えた。
「何処の誰かもわからないしな」
「そうだ。しかしあいつ」
マチアはさらに不思議に思うのだった。
「本当に何時の間に」
「しかもよ」
不思議に思えばさらにそれが高まっていく。これは自然な流れだった。彼等はさらに不思議の中に入り込んでその中で考えあぐねてしまっていた。
「かなりいけてる彼氏らしいわね」

「いけてるか」
「アンジェレッタの言葉によると」
「いや、それはわからないぞ」
しかし彼はここでレミに告げる。
「そのところはな」
「わからないって？」
「それは主観だろ？あいつの」
彼が指摘するのはそこであった。
「主観だと何にでも見えるものだ」
「何にでも」
「ああ。男前でもない相手がそうにもな」
こう語るのだった。
「なるんだよ」
「そうかしら。それだと」
それを聞いてまた考えるのだった。
「あまりいけてないって可能性もあるわよね」
「だから。相手が誰かもわからないぞ」
彼はまたそこを指摘する。
「全然な。少なくとも身元がわからないとな」
「この学校にいても随分時間がかかるわよね」
「そうだな。人が多い学校だからな」
それであまりにも有名な学校だ。それこそ何万人といる。
「どれだけいるか」
「そのどれだけの中にいるかどうかもわからないわよね」
「年上か年下か」
マチアは腕を組んで考えだした。
「それすらもわからないな」
「何もかも、ってわけね」
「そうだ」
結局のところそうなるのだった。

「やっぱり。あれをやるか」
「追跡ってこと？」
「やるか？」
「止めた方がいいわね」
しかしレミはそれには乗らなかった。
「止めるのか」
「アンジェレッタも警戒してるわよ」
そこを言うのだった。
「彼女結構勘がいいし頭もいいし」
「そうだな。もうそれは気付いているよな」
「ええ。だからそれは止めましょう」
あらためてこう述べる。
「それでいいわね」
「ああ。しかしな」
ここでまたマチアは首を捻ることになってしまった。
「どうなんだ？それだと全然わからないぞ」
「やり方は幾らでもあるわよ」
しかしマチアはこう言うのだった。
「協力者をゲットしたらね」
「協力者を？誰だよ」
「追跡しなくてもすぐにわかる方法を持っているクラスメイトよ」
「クラスメイトっていうと」
こう言われるとマチアにもわかった。

第九十話　助っ人獲得その二

「それは」
「何だと思うかしら」
「わからないな」
首を捻ってレミに述べる。
「俺達のクラスで。推理とかなら」
「間違ってもテンボやジャッキーじゃないわよ」
「それはわかるからいい」
聞くまでもないことだった。
「あいつ等の推理はな」
「問題外なんてものじゃないからね」
「最近あいつ等騒動起こしていないがどうしてるんだ？」
話が二人に関することに少し移った。
「馬鹿やってるのは間違いないんだろうけれど」
「何か漫画部の協力してるみたいよ」
「漫画部のか」
「ええ。推理探偵漫画の原作だってことで」
「漫画の原作」
それを聞いてすぐに顔を顰めさせたマチアだった。
「冗談だろ、それ」
「それが本当なのよ」
しかしレミはこう言う。
「向こうから招かれて」
「漫画っていったらアンだよな」
クラスメイトの名前も出る。
「あいつは何も言わなかったのか？」
「さあ。何はともあれ原作者になったし」
「冒険どころじゃないな」

あらためてこう言う。本音そのままだ。
「本人達は推理のつもりよ」
「あくまでつもりだからな」
「ええ。何でも本人達には内緒で冒険漫画にしているそうよ」
「やっぱりな」
それを聞いても全く意外に思わないマチアだった。そんなことだろうと最初から予想していたのだ。
「そんなことだろうと思った」
「まあお騒がせ冒険家コンビは置いておいて」
「ああ」
話は動く。
「問題はアンジェレッタだけれど」
「それだよな。あいつの彼氏のことだ」
それをまた言う。今の最大の謎だ。
「わかるのか？」
「わかるわよ。助っ人がいるから」
「その助っ人って誰なんだ。クラスメイトっていうが」
「そう、それよ」
それをまた話す。だがマチアにはまだわかってはいない。
「誰だと思う？」
「さてな。鋭い奴なら幾らでもいるが」
マチアは考えながら述べる。とりあえず頭の中には蝉玉やビアンカといった面々が思い浮かぶ。彼女達が助っ人なら問題はないだろうとも思っている。しかしであった。
「誰なんだよ」
「ジョンよ」
ここで意外な名前が出て来た。
「ジョン！？あいつが！？」
「ええ、そうよ」
こうマチアに告げる。

「彼。どうかしら」
「待て、あいつはこういった推理関係には」
腕を組んで真剣な面持ちで述べる。
「向いていないんじゃないか。違うか？」
「何言ってるのよ、こんな時こそジョンじゃない」
しかしレミはまだ言うのだった。
「ネロでもいいけれどね。彼は今アロアとデートばかりしていてあまり捕まらないし」
「ネロでもいいっていうと」
ここでマチアもようやくわかったのだった。

第九十話　助っ人獲得その三

「ひょっとして犬か」
「そう、それよ」
ジョンもネロもやはり犬だ。二人にとって犬とは最早もう一人の自分であると言っても過言ではない。そこまで重要な存在になっているのだ。
「犬。犬に頑張ってもらうのよ」
「ジョンだとラッシーか」
ネロだとパトラッシュになる。やはりセットになっている。
「ラッシーだと賢いしね」
「賢いのはわかるが」
まだマチアはわからないといった顔をしている。その顔で述べるのだった。
「どうするんだ？アンジェレッタもラッシーのことは知ってるぞ。何かをしようとしてもすぐにわかるぞ」
「別について回ったりとかしないから安心よ」
しかしここでもレミは相変わらず楽観的だった。マチアから見れば。
「全然ね」
「全然！？」
「そうよ。だから犬よ」
犬であることを強調してきた。
「犬だから。だから」
「ああ、わかった」
犬ということを強調されてようやくわかったマチアだった。
「鼻か」
「そういうこと。これならどう？」
「そうだな。かなりいけるな」

「まあ敵もさるものだけれど」
レミの目が光った。そのうえで横目になる。アンジェレッタのことを考えているのが一目瞭然だった。目でそれをはっきりと語っていた。
「特に匂いはね」
「わかりにくいんじゃないのか？」
マチアもまた言う。
「アンジェレッタの匂いだろ」
「ええ」
「色々な薬の匂いが混ざってるぞ」
そこを指摘するのだった。
「それこそかなりな」
「まあそこは任せて」
こう言ってもレミの楽観は変わらないのだった。
「全然平気だから」
「何でそう楽観的なんだ？」
「犬の鼻は人間の何千倍よ」
昔からそれで有名だ。
「凄いなんてものじゃないんだから」
「それは知っているけれどな」
「知ってるなら大船に乗ったつもりでいていいわよ」
「大きな泥船じゃないのか？」
どうしても楽観的になれないのでこう言うのだった。
「ひょっとして」
「大丈夫、ちゃんとした白い木の船よ」
何気にかちかち山の話になっている。この時代でも日本で広く知られた御伽噺だ。他の国でもよく知られるようになっている。なおこの時代でもお婆さんは生きていて狸が最後に謝罪するというふうになっている。かつての残酷な話ではなくなっているのだ。
「安心しなさいって」

「ラッシーが木の船なんだな」
「そういうこと。テンボやジャッキーとは違うから」
「それは確かにな」
笑顔でレミの言葉に頷く。それは彼もよくわかった。
「じゃあ。その木の船のところに行くか」
「船頭にもね」
二人でこう言い合ってジョンのところに行く。見れば学校のベンチに座ってラッシーに餌をやっていた。白いパンを彼の口にやっていた。ここで二人が来たのである。
「あっ、マチア」
彼の方が先に気付いた。マチアに声をかける。
「レミも。どうしたんだい、一体」
「ちょっとね」
「御前に頼みたいことがあるんだ」
こう彼に切り出した。
「僕に？」
「そうよ、あんたとラッシーにね」
「それで。話を聞いてくれないか？」
「うん、いいよ」
ジョンは二人のその申し出に気さくに応じた。ここまで実に彼らしかった。

第九十話　助っ人獲得その四

「それじゃあ。ここで話す？」
「ううん、それはちょっと」
「ここじゃ人も多いしな。ちょっとな」
「そう。じゃあ場所変える？」
「悪いけれどそうして」
「ここはな」
あらためて周囲を見回す。キャンバスのど真ん中で人が行き交っている。こうしたところで話しては情報が完全に漏れてしまう。二人はそれを警戒しているのだ。
「それじゃあ屋上に行く？」
「ええ」
「じゃあそういうことでな」
こうして三人と一匹は屋上に向かうことになった。しかしここでマチアとレミは思うのだった。結局元の場所に戻ってしまったと。
「屋上から折角ここまで来たのにまた登ってなんて」
「ハードだな」
そんなことを言い合いながらも屋上に戻る。ジョンとラッシーにとっては向かう。三人と一匹は屋上に着くとその真ん中で座り込みまた話をするのだった。
「それで。何の用なの？」
ジョンが二人に問うてきた。彼の横にはラッシーが礼儀正しく座っている。マチアとレミは彼等に向かい合っている。
「人に聞かれたらまずそうだけれど」
「ええ、実はね」
レミがそれに応えて話を切り出す。
「アンジェレッタのことなんだけれど」
「アンジェレッタがまた変な薬使ったとか？」

「そんないつものことじゃないのよ」
アンジェレッタにとってはいつものことであるのだ。少し考えればとんでもないことなのだが最早そんな程度では驚くに値しない程アンジェレッタの薬での騒ぎはいつものことなのだ。
「実はね」
「うん、実は」
「彼氏がいるらしいのよ」
「ふうん・・・・・って、えっ！？」
流石にこれにはジョンも驚きの声をあげた。テンポが少し遅かったがそれでも驚いたのだった。その驚き様はかなりのものであった。
「アンジェレッタに彼氏！？」
「驚いたみたいね」
「驚いたってものじゃないよ」
普段は至極おっとりした彼が本当に驚いていた。
「あのアンジェレッタがなんて。嘘みたいだ」
「けれど本当よ」
しかしレミは言うのだ。
「本人も言っていたし」
「嘘じゃないよね」
「嘘だったらこんな話はしないわよ」
「しかもかなりいけてる感じらしい」
マチアもここでジョンに告げた。
「いけてるってその彼氏が！？」
「ええ。本当みたいよ、これも」
「にわかには信じられないけれど」
これがジョンの本音だった。
「アンジェレッタが薬以外のことに興味があるなんて」
「何かそれ言ったらかなりやばい奴みたいだな」
マチアは今のジョンの言葉に突っ込みを入れる。
「まあ確かにそういうところあるけれどな」

「とにかくよ」
レミがまた言う。
「それでね、その彼氏がどんな人なのか確かめたくてあんたに声をかけたわけ」
「そうだったの」
「あんたとラッシーにね」
ここでレミは相変わらず賢そうにジョンの横に控えているラッシーをちらりと見た。
「いいかしら、それで」
「まあ僕は別に」
ぼんやりとした感じの返事だったが承諾するのだった。
「いいけれど」
「そうなの。じゃあラッシーは？」
「そっちはどうなんだ？」
今度は二人でラッシーに対して問うのだった。ラッシーが賢いことをわかっての問い掛けだ。

第九十話　助っ人獲得その五

「ワン」
「いいってさ」
ジョンはラッシーの言葉がわかる。それによるといいということだった。
「そのかわり」
「そのかわり？」
「ビーフジャーキーが食べたいってさ」
「はい、どうぞ」
レミが早速袋からそのビーフジャーキーを取り出しそれをラッシーに差し出すのだった。
「これでいいかしら」
「うん、有り難う」
ジョンがにこりと笑ってレミに答える。
「ラッシーがこれで商談成立だってさ」
「何も言ってないじゃない」
正確には鳴いていない。ただ笑顔でそのビーフジャーキーを食べているだけだ。だがかなり美味そうに食べているのは事実である。
「ラッシーは」
「言ってるよ、言葉で」
しかしジョンはこう答えるのだった。
「だから鳴いてないじゃない」
「心で言ってるんだよ」
そういうことらしい。
「ちゃんとね。僕にはそれがわかるんだよ」
「心で」
「やっぱり。長い付き合いだから」
ジョンの目が温かいものになる。その目でラッシーを見る。ラッ

シーはその横でやはりビーフジャーキーを食べ続けているのだった。
ハフハフと舌も出している。
「心と心が通い合うんだ」
「何かネロと同じね」
「そうだろうね。ネロもね」
彼はネロについても言う。
「パトラッシュと深く長い付き合いだからね」
「パトラッシュも賢い犬よね」
そのことで定評のある犬だ。下手をしたら呑気な主よりもしっかりしているのではないかとさえ言われている。そこまで賢い犬なのだ。名犬であると言っていい。
「大人しいしネロをいつも守ってるし」
「犬っていいものだよ」
ジョンははっきりと言う。
「レミも犬飼ってるじゃない」
「まあね」
実はそうなのだった。レミも犬好きなのだ。
「カピとドルチェとゼルビーノね」
「お猿さんもいたっけ」
「ジョリクールね」
何気に動物好きのレミであった。
「私の家族よ、それも大切な」
「だよね。じゃあ犬の有り難さってわかるわよね」
「ええ」
あらためてジョンの言葉に頷く。
「じゃあ今回は」
「ラッシーがいるから絶対いけるよ」
にこりと笑ってレミに告げてきた。
「例えアンジェレッタがどんなガードをしてきてもね」
「そう。じゃあ任せるわ」

「うん」
「ただな」
だがここで。マチアが少し深刻な感じの顔で二人に言ってきた。
「どうしたの、マチア」
「アンジェレッタに気付かれないことだな」
「ラッシーは気付かれないよ」
「多分な」
彼もラッシーは知らないわけではない。だからこれは頷いて認める。
「そうそう滅多なことじゃな。しかし」
「しかし?アンジェレッタを侮るなってことかな」
「その通りだ。あいつは手強い」
深刻な感じから真剣になった。
「背は低いが勘はいいんだ」
「背の低いのは関係ないと思うけれど」
そうは言ってもそれがアンジェレッタの最大の特徴になっていたからレミもジョンも今のマチアの言葉には納得した顔で頷くのだった。
「そういうものかしら」
「とにかく。用心が必要だぞ」
「わかってるってさ」
「ラッシーがだな」
「うん、ほら」
「ワン」
一声鳴いてマチアに応えてきた。
「わかってるってさ。間違っても犬鍋にされるようなことにはならないからって」
「犬鍋か」
連合では犬も食べる。犬だけではなく猫や猿も食べる。だがペットは食べはしない。流石にそこまでは悪食ではないのだがこれがエ

ウロパの連合への批判になっている。人間の友達さえ食べてしまう野蛮人だと。もっとも連合の者達はそれこそ恐竜でも始祖鳥でも食べるのでそれどころではないのだが。

第九十話　助っ人獲得その六

「別にそんなの食おうとは思わないがな」
「アンジェレッタも犬鍋は食べないんだったっけ」
「アンジェレッタが好きなのは馬だったっけ」
「確かな」
馬も連合ではよく食べられる。
「この前馬刺美味しそうに食べていたし」
「そうだったな」
「じゃあ安心だね。それにしても」
「今度は何？」
「お腹空かない？」
ジョンは不意に二人にこう言ってきた。
「お腹が？」
「何かさ、かなり話したから」
「さっきお昼食べたばかりじゃないの？」
「小腹が空いたんだよ」
今度はこう述べた。
「だから。パンでも買って食べない？」
「パンね。いいわね」
「そうだな」
レミもマチアもパンと聞いて話に乗った。二人共パンが好きなのだ。
「乗る？」
「勿論」
「それでどんなパンがいいんだ？」
「蒸しパンはどうかな」
ジョンが出したパンはそれだった。
「蒸しパン。悪くないわね」

「嫌いじゃないよね、二人共」
「ええ、勿論よ」
「嫌いじゃないどころかかなり好きだな」
二人はこう答えた。
「特にチーズ蒸しパンがな」
「その名前出さないでよ」
しかしレミはチーズ蒸しパンの名前を聞くと何故かこうマチアに言うのだった。
「何でだ？」
「その名前を聞くだけで涎が出るのよ」
見ればその顔が笑っていた。特に口元が。
「チーズ蒸しパンって聞いただけでね」
「御前も好きだったのか」
「そういうこと。問題はまだそれが残っているかどうかだけれど」
「あると思うよ」
マチアはこうレミに答えた。
「あるの」
「ラッシー、どうかな」
「ワン」
また一言で答える。言葉はさっきのものと全く同じに聞こえる。しかしそう聞こえるのはどうやら二人だけでジョンはそうではないらしい。こう二人に答えてきた。
「充分にあるんだって」
「それでわかるの？」
「わかるよ」
当然といった顔でまたレミに答える。
「だから。心と心でも分かり合うことができるから」
「凄く深い絆なのね」
「だから何時でも一緒に入られるんだよ」
レミの言葉に答えてにこりと笑う。

「何時でもね。違うかな」
「そうね。ジョンが子供の頃からだったわよね」
「それを思うと長いな」
「うん。ラッシーも大きくなったよ」
つまりラッシーは犬としては結構な高齢なのだ。だがそうは見えないところがこの犬だった。いつもしゃんとしてジョンの側にいる。それがそう見せないのだった。
「僕と出会った頃はほんの子犬だったのにね」
「どうやってあんたと出会ったの？」
「もらったんだよ」
ラッシーを見ながらにこりと笑って言った。
「お隣の人から。その時にいたね」
「ふうん、そうだったんだ」
「生まれたてで。僕が最初に覚えてるのはラッシーが家に来た時だね」
「物心ついた時から一緒だったの」
「それからずっと一緒だったよ」
つまり十年以上の付き合いというわけだ。やはりかなり長い。
「ずっとね」
「成程ね。深い絆の筈ね」
「うん。じゃあさ」
あらためて二人に言う。
「買いに行こう、蒸しパンをね」
「あんたは何を食べるの？」
「僕も蒸しパンだよ」
それは決まっていた。ただしだ。
「レーズン蒸しパンをね」
「それも悪くないわね」
レミはとかく蒸しパンが好きなようだ。
「やっぱり名前を聞くだけで涎が」

「意地汚いな、おい」
「仕方ないでしょ」
ムッとした顔でマチアに言葉を返す。
「好きなんだから」
「本当に好きなんだな」
「蒸しパンと牛乳があれば完璧よ」
こうまで言う。
「それだけで最高の御馳走じゃない。違う？」
「確かにいい組み合わせだがそれは最高の御馳走か？」
マチアはその言葉に首を捻って考え込む。
「普通に買えるだろ、それって」
「美味しければ何でも御馳走なのよ」
それに対するレミの反論はこうであった。
「美味しければね」
「まあそうだけれどな。しかし」
「しかしも何だもないわよ。とにかく行くわよ」
「ああ」
「まずは御馳走食べてエネルギー補給よ」
その蒸しパンのことであるのは言うまでもない。
「さあ、アンジェレッタの彼氏が誰か」
「調べるとするか」
「何かかなり楽しくなってきたけれど」
「ワン」
三人と一匹は楽しそうな笑みを浮かべて言葉を交えさせる。一匹は鳴き声だが。今ここにアンジェレッタの彼氏を探す冒険がはじまったのだった。

助っ人獲得　　完

2008·4·26

第九十一話　鼻が頼りその一

鼻が頼り

かくしてアンジェレッタの恋人が誰か探すことになった三人と一匹。まずはレミが動いた。

「とりあえずね」

「ああ」

「何をするの？」

「あの用心深いアンジェレッタにどうにか気付かれないようにするかよ」

それを二人に対して話す。

「どうにかしてね」

「考えがあるの？」

「ええ、あるわ」

真顔で二人に答える。

「ちゃんとね」

「で、どうするの？」

ジョンが彼女にあらためて問うた。

「まさかラッシーがただアンジェレッタの周りでうろうろするってわけじゃないよね」

「それじゃすぐにわかるわよ」

笑ってそれは否定するのだった。

「そんな馬鹿なことはしないわ、絶対にね」

「じゃあもっと手が込んだやり方なんだな」

「ええ。まずはね」

マチアに応えると共に説明をはじめた。

「私がアンジェレッタのところに行くわ」

「その本人のところへか」

「そう。それで彼女と普通に色々と話をして」

まずはそれからはじめるというのだ。つまり彼女の関心や注意を自分に向けさせるというのだ。これがレミの作戦であるというのである。

「それでその間にジョンとラッシーが」

「匂いを嗅いでおくと」

「それでどうかしら」

ここまで話して二人に問うた。

「この作戦で。いけると思う？」

「そうだな。悪くないな」

マチアが腕を組んで考える顔でレミのその提案に答えてきた。

「オーソドックスなやり方だけれどな」

「オーソドックスだからいいのよ」

ここでレミは楽しげに笑ってみせた。

「オーソドックスが一番難しいのよ。わかる？」

「そうなのか」

「そうなのよ、案外ね」

それをまたマチアに述べる。

「それに何だかんだで効果があるしね」

「オーソドックスが効果があるか」

「逆に奇襲は思ったより効果がないのよ」

レミはこうも言うのだった。

「見破られた時のダメージは大きいしね」

「オーソドックスだと見破られないのか」

「見破られてもダメージは小さいわ」

答えながらにこりと笑ってみせた。

「そのうえすぐに次の策を出せるしね」

「次の策か」

「奇襲だとそれが失敗したら終わりじゃない」

また随分と色々考えているのがわかる言葉が続く。話を聞いていると彼女がそうした戦術や駆け引きが得意なことがわかる。それも

かなりの域に達していた。
「そうでしょ。失敗しても後が続くようにしないとね」
「それで終わりにしないでか」
「若しもの時の次の策も考えてあるわよ」
「ラッシーを使ってだよね」
「勿論」
にこりと笑ってジョンに言葉を返す。
「ラッシーがキードックなんだから。頑張ってもらうよ」
「キードッグね」
「キーマンだと人になっちゃうじゃない」
これはいささか言葉遊びめいていた。
「だから。キードッグなのよ」
「そうだね。そうなるね」
「それで。マチアはね」
「ああ、俺か」
今のところ何も出番がなさそうなので自分からそれを言おうとしていた。しかしそれよりも前にレミがその彼に対して言ってきたのであった。
「練習をしておいて」
「練習？」
「ええ、バイオリンの」
こうマチアに対して告げるのだった。
「いいわね、それで」
「教室でか」
「いつもしてるじゃない」
こうもマチアに告げる。
「だからよ。御願いね」
「それも戦術のうちか」
「ええ。アンジェレッタの注意をそちらに逸らす為のね」
一つではないということなのだった。

「それに」
「それに？」
「この作戦が失敗した時の後の次の作戦への伏線よ」
「伏線か」
「若しもよ」
前置きの口上を口にしてきた。

第九十一話　鼻が頼りその二

「作戦が失敗して次の作戦は」
「ああ」
「アンジェレッタは間違いなく警戒しているわ」
「それは確実だな」
もう言うまでもないことだった。一度受ければそれに身構える。
動物の本能でもある。
「だからその時の為にね」
「随分と考えてるんだな」
「二段構えは基本よ」
またここでにこりと笑ってみせるレミだった。
「作戦はね」
「剃刀みたいなものか」
「また随分と変な例えね」
「いや、だってそうだろ」
マチアは突っ込みを入れられてもまだ言う。
「二段だったらそれこそ」
「何なら三段にしてみる？」
「棒みたいだな、それだと」
今度は中国拳法だった。
「俺は七つの方が好きなんだが」
「ああ、七節棍ね」
これはレミも知っていた。連合の格闘技で使われるものだ。
「あれは凄く扱いが難しいわよ」
「そうらしいな。俺は武道とか格闘技はやらないからよくわからないけれどな」
「その分威力は凄いけれど」
「そうなのか」

「それでね」
レミはまた言う。
「悪いけれど七段構えまでは考えていないわよ」
「そこまでは、か」
「一度にそんなに考えられないから」
また実に率直な言葉だった。覆い隠そうともしない。
「とてもじゃないけれどね」
「それもそうだな。三つはともかく七つまではな」
「それにそんなことしたら作戦の一つ一つが雑になっちゃうじゃない」
レミはそうしたことにも気を払っていたのだった。一見するとあまり考えていないようで細かいところまでよく考えているのだった。それがよくわかる言葉だった。
「それだと何の意味もないわよ」
「最初の作戦で決めるつもりってことね」
「そういうこと」
ジョンに対してもにこりと笑って答える。
「そのつもりじゃないと成功するものもしないわよ」
「そうだな。その通りだ」
マチアもレミのその言葉に頷く。
「じゃあ俺は」
「音楽の方頼んだわよ」
「ああ、任せておけ」
彼はもう心の中ではスタンバイができていた。楽しそうに笑っているその顔がその証だった。
「とびきりの曲を奏でてやるからな」
「バイオリンだったらあんただからね」
「バイオリンなら任せておいてくれよ」
自信に満ちた言葉だった。これに関しては絶対の自信があるのだった。

「奏でるのも作るのもいけるからな」
「バイオリンも作ることができるのね」
「まあな。演奏しているうちに中身も気になってな」
真顔になってレミとジョンに述べる。
「それで作る方もはじめたんだよ」
「そうだったんだ」
「作るのも楽しいぜ」
心からその楽しみを出す顔でジョンに語る。
「一度やったらそのまま病み付きになる程な」
「何かバイオリン馬鹿になってきたわね」
「いいだろ、それでも」
「別に。ギャンブルとかお酒にのめり込むわけじゃないし」
「ギャンブルにのめり込むのは馬鹿だよ」
それは軽く、すぐに否定する。
「あんなのにのめり込んで破滅するのはな。馬鹿なんだよ」
「まああまり賢くはないわね」
「それでだ」
今度はマチアが話を戻してきた。
「それで行くか」
「ええ、最初で決めるわよ」
「わかったよ。じゃあラッシー」
「ワン」
ラッシーもジョンの声に応えて鳴く。
「頑張ってくれよ」
「ワン」
「何かラッシーってワンってしか鳴かないわよね」
「そういえばそうだな」
レミとマチアは今そのことに気付くのだった。

第九十一話　鼻が頼りその三

「けれどそれでも言葉がわかるのね」
「だからさ。心と心が通い合ってるんだよ」
ジョンは笑顔でこのことをまたレミに告げる。
「言葉もわかるけれどね」
「ワンって鳴いてるだけじゃないのね」
「そうだよ。そこには凄い色々な意味があるんだ」
ジョンの言葉ではこうである。
「その時その時でね」
「犬の言葉はわからないからね」
「そうだな。それはな」
これに関してはレミもマチアもお手上げというわけだ。動物の言葉は二人にはわからない。
「俺の専門外だな」
「あんたはバイオリンだからね」
「そういうことさ。バイオリンの声はわかるけれどな」
「それもよく考えたら凄いわよ」
レミはそれを聞いて彼にも突っ込みを入れた。
「バイオリンの声がわかるっていうのも」
「それがわからないとバイオリンは使えないんだよ」
しかしマチアは平然として答える。
「音楽っていうのはそういうものさ」
「そうなの」
「他の奴等がどうかは知らないぞ」
一応こう前置きはする。
「少なくとも俺はそうだけれどな」
「わかったわ。それでね」
「ああ」

話がまた動いた。
「ジョン。作戦の時は任せたわよ」
「うん、わかったよ」
にこりと笑ってレミのその言葉に頷く。
「こっちも絶対に成功させたいしね。やるからには」
「そうでしょ？それに凄く興味があるじゃない」
「アンジェレッタの彼氏か。どんな相手なのかな」
「アンジェレッタの好みは」
マチアはここで少し考えた。
「どんなのだったかな」
「実は私も知らないのよ」
レミもこれに関しては情報を手に入れていなかったのだ。それでかなり困った顔になっていた。
「どんな感じなのかね。アンジェレッタっていったら」
「ええと。小柄なのと」
まずはジョンが言う。
「それと薬ばっかりだったからな」
「そうそう、それそれ」
レミは今のマチアの言葉に突っ込みを入れた。
「その二つ、特にお薬のインパクトが物凄く大きいから」
「だから他のことが余計に見えなくなっているな」
「正体不明なところがあるのよね」
「お薬屋さんの娘さんだよね」
ジョンがそれを尋ねる。
「確か」
「ええ、コロンビアのね」
アンジェレッタはかつて中南米だった国の出身だ。もっともこの時代ではラテン系諸国出身でもラテン系とは限らないのであるが。
それは彼女も同じだ。
「アパートにお兄さんと弟さんと妹さんと四人暮らしだったっけ」

「兄弟いたんだ」
「初耳だな」
これも二人にとっては知らないことだった。
「そういえばあいつの家に行ったことはなかったな」
「そうだったね。そういえば」
二人はそのことにも気付いた。
「どういうわけか」
「しかもだ」
マチアはさらに言う。
「他にも色々と謎あるな、あいつには」
「謎って？」
「あの薬はいつも何処から調達しているんだ？」
謎とはそれであった。
「えらく怪しいのばかりだが。あいつの家は普通の薬屋なのか？」
「一応はそうらしいわ」
これについてはレミも確信が持てなかった。

第九十一話　鼻が頼りその四

「怪しいことこの上ないけれど」
「そういえば胡散臭いお薬も一杯あるよね」
ジョンも言う。
「ラッシー、変な匂いには注意しろよ」
「ワン」
やはりラッシーの返事はここでも同じだった。だがジョンに言わせるとその内容が違うということなのだからやはり何かが違うのだろう。他人にはわからないが。
「じゃあ明日ね」
「明日か」
「作戦は迅速にかつ確実に」
いささか軍人めいた言葉だった。
「それが肝心よ」
「確かにな。じゃあ今日はこれで終わりだな」
「そうだね」
マチアとジョンがそれぞれ頷く。
「これでね」
「後は。解散だけれど」
「話しているうちに腹が減ってきたな」
マチアはふとこう呟く。
「その辺りはどうだ？」
「あっ、そういえば」
レミも言われてそれに気付く。
「何かかなり」
「そうだね。僕も結構」
ジョンもであった。三人の考えがここでは一致した。
「じゃあ。何か食べに行く？」

「何にするの、それで」
「羊はどうだ？」
マチアの提案は羊であった。
「羊なのね」
「ああ。ジンギスカンの食べ放題があっただろ」
それを言うのだった。
「学校の近くに。それでどうだ？」
「いいわね」
最初に話に乗ったのはレミだった。にこりと笑っての返答である。
「じゃあジンギスカン食べ放題ね」
「ああ、それで英気を養おうぜ」
「わかったわ。私は大賛成よ」
「僕も」
言うまでもなくジャンもであった。
「羊好きなんだよね」
「ワン」
どうやらそれはラッシーも同じなようだ。ここでまた鳴いてきた。
「ラッシーもそうなんだよ」
「何か結構皆羊食べるよね」
レミはふとこのことを言った。
「日本でも」
「日本人はどっちかっていうとラムが好きだよな」
子羊のことだ。子羊の肉もかなり人気がある。羊は連合各国でもエウロパでも食べられる。とりわけサハラにおいては肉といえば羊という程よく食べる。これはイスラム社会の伝統だ。
「俺はマトンが好きだけれどな」
「あの匂いがいいのよね」
「そうそう」
二人はマチアの言葉に頷いてそれぞれ言う。
「やっぱり羊は匂いでしょ」

「あれがないと羊じゃないよ、やっぱり」
「そう思うんだがな。どうも日本人はまだ苦手っていう人が多いみたいだな」
「その割に羊のお刺身食べるじゃない」
「あれはちょっと」
羊まで刺身にする日本人だった。
「ダンなんか山羊のお刺身食べてるわよ」
「大丈夫なのかな、あれって」
「刺身か」
マチアは刺身と聞いて少し以上に微妙な顔になった。
「あれはな。かなりな」
「困りものってこと？」
「かなりどころじゃないだろ」
こうも言うのだった。
「魚とかならともかく」
「鯨はまだ許容範囲よね」
「まあそうだね」
彼等にとってはそれはまだ許せるのだった。
「養殖ものでもピラルクやピラニア、チョウザメなんかもそうして食べるし」
「蛙もね」
普通にそうして食べるので外国人からは引かれまくっているのだ。逆に日本人は接待ではまず刺身や天麩羅といった和食で応じればいい、とビジネスにおいて定着してもいる。それだけ日本人の食べ方が有名になっているということでもある。よいか悪いかは別にしてだ。

第九十一話　鼻が頼りその五

「蛙って虫いたわよね」
レミの顔が暗くなる。
「確か」
「蛙どころかピラルクとかにもいるぞ」
マチアがレミに対して答える。
「鯉とか鯰にもな」
「日本人ってそうしたものもお刺身にしているけれど」
「二十世紀あっただろ」
「ええ」
もう遥かな過去の話だ。歴史の話である。
「第二次世界大戦じゃ肺魚を刺身にして食ったらしい」
「それでどうなったの？」
「あたって死んだ」
一言だった。
「虫にな。当然の様にな」
「まあそうでしょうね」
レミはその話を聞いて頷くことしきりだった。
「というか食べる方がおかしいわよ、あんな変な魚」
「美味しいの、あれって」
ジョンはそれがふと気になった。
「僕食べたことないけれど」
「私だってないわよ」
レミもそれはなかった。
「マチアはどうなの、それは」
「俺だってないぞ」
彼も困惑した顔で首を横に振るのだった。
「あれは確実にまずいだろ」

「どう見てもね。それだけはわかるわ」
「ああ、やっぱりまずいんだ」
「ラッシーも食べないでしょ」
「ワン」
「食べないってさ」
そうらしい。らしいというのは二人はラッシーの言葉がわからないからだ。何を聞いてもワン、としか聞こえないのだ。考えれば難儀な話ではある。
「やっぱりそうだよな。まずくて」
「タチの悪い虫がいるのならね。そもそも食べる方がおかしいわよ」
「食い物がなかったからだそうだ」
補給の問題で、である。
「それで食って」
「笑うに笑えないわね、それだと」
話が少し変わってきた。
「食べられるだけましなのね。やっぱり」
「そういうことだな。羊を食えるっていうのがな」
「幸せなことよね」
「そうだね。じゃあそういうことで」
とりあえず肺魚の話は終わりになった。食べられないというのなら興味の対象にはならない。実に簡単な話だった。
「行こうよ」
「ええ」
「それじゃあな」
こうして三人と一匹で羊をたらふく食いそれを英気とした。その次の日。まずはレミが出た。
教室で。自分の席で薬を調合しているアンジェレッタに声をかけたのだ。
「ねえアンジェレッタ」
「何？」

アンジェレッタはごく自然にレミに顔を向けた。全く疑う様子はない。
「ちょっと聞きたいことがあるのだけれど」
「何かしら」6
ここからがレミの腕の見せ所だった。そして彼女は実際にそれを果たすのだった。
「そのお薬だけれど」
「ああ、これね」
「何なのかしら」
「これは漢方薬よ」
こうレミに答える。薬の話なので機嫌のいい声だった。
「漢方薬なの」
「ええ。大蒜と高麗人参とすっぽんとマムシのエキスと他に色々入れたやつよ」
「大蒜にマムシ、ねえ」
レミはそういったものを聞いてまずは内心引いた。しかしそれは顔にも言葉にも出さずにごく自然に頷いて納得する顔になってみせたのだった。
「面白そうね」
「これ一つで疲れは吹き飛ぶわよ」
すりこぎをごりごりとさせながらにこにことして話している。

第九十一話　鼻が頼りその六

「それどころか」
「それどころか？」
「体力倍増よ」
「倍増なの」
「例えばヒットポイントが一桁だったとするわね」
「ええ」
話がゲームになっていた。この時代でも当然ながらテレビゲームがある。一家に一台は常識だ。様々な機種があるのも二十世紀末期から変わらない。
「それが五桁まで全快よ」
「五桁まで」
「ええ。言うならあれね」
「体力全快魔法」
「そういうことよ」
話は完全にＲＰＧになっていた。
「それだけに作るのが大変だけれどね」
「そういえば大蒜とか以外にも一杯あるわね」
見れば机の上には色々とある。中には薬草もあれば干物もある。その干物の中にとりわけおかしなものもあるのにレミは気付いた。
「特にこれ。これは」
「ああ、これね」
上は緑の葉だが根は人型だった。随分変わった植物だった。
「マンドラゴラよ」
「マンドラゴラ」
「そう、これが特に凄いかも」
アンジェレッタはそのにこにことした笑顔でレミに語る。
「これを少し入れるだけでね」

「どうなるの？」
「お薬の効き目が全然違うのよ」
「そんなになの」
「ええ、高麗人参より凄いわよ」
「ふうん、そうなの」
マンドラゴラと言われてもよく知らないレミは頷くだけだった。
そのレミに対してアンジェレッタはさらに説明をはじめるのだった。
「それでね」
「どうしたの？」
「これって手に入れるの大変なのよ」
「高いの？」
「かなりね」
どうやらかなりの高級品であるらしい。確かにかなり変わったものではある。
「マウリアの奥にしかなくて」
「究極の秘境って言われるあの？」
「そう、そのマウリアの奥にあるのよ」
マウリアの奥にはどんな星系があるのかさえはっきりとしていない。マウリア政府も詳しく把握はしていない。完全な秘境であり時々迷い込んだ人間が得体の知れない存在に成り果てるという噂まである。そうした場所なのだ。
「そこから入手したのよ」
「そうだったの」
「インターネットでね」
また随分と簡単な入手ルートだった。これはレミも思った。
「インターネット！？秘境のものが！？」
「裏サイトよ」
だがルート自体はとんでもないものだった。
「ふつうにやったら絶対に検索できないサイトよ」
「それ本当なの？」

「冗談よ」
かなり悪質なジョークだった。
「そんなわけないじゃない」
「本気にしたわよ」
「まあまあ」
むっとした顔になるレミを宥めつつ話を続ける。
「ベッキーから貰ったのよ」
「ベッキーから」
「ほら、ベッキーって呪術使うじゃない」
「ええ」
よく考えなくてもとんでもないことだが皆もうその程度では驚かないのだ。
「それでその時使うらしくてね」
「マンドラゴラってそういうものだったの？」
こう言われるとかなり胡散臭いものを感じずにはいられなかった。
「何なのよ、それじゃあ」
「ああ、安心して」
しかしアンジェレッタは笑ってその不安を打ち消してみせた。
「それ以外にも使えるから」
「それ以外にって」
「言っておくけれど呪術には生姜とかも使うのよ」
「生姜も！？」
これは誰もが普通に食べている。生姜は連合では非常にポピュラーな香辛料だ。とりわけ中華料理にはよく使われているものである。

第九十一話　鼻が頼りその七

「そうよ。だからマンドラゴラもね」
「呪術に使われたりお薬に使われたり」
「食べたりもするし。香辛料にもなるのよ」
「へえ」
これは初耳だった。食べられるのも知らなかったのだ。
「採り方はね。ずぼって引き抜いて」
「それだけなの」
「別に抜く時に叫び声あげたりしないから」
笑ってそれはないと言う。レミはこの話は知らないが伝承ではマンドラゴラは引き抜かれた時恐ろしい叫び声をあげてそれで抜いた者を殺してしまうのだ。だから犬に抜かせたりして採ると言われているのだ。
「それは安心してね」
「わかったわ。それにしても凄い姿してるわね」
「だから余計に面白いのよ」
「ふうん」
こう話す二人の後ろではマチアがバイオリンの練習をしている。アンジェレッタの耳はそちらに関心を寄せさせている。その間にジョンはラッシーをアンジェレッタのところにこっそり行かせる。そうして匂いを嗅がせた。ラッシーはすぐにジョンのところに帰ってきた。
（よし）
レミはそれを横目に見て満足して笑う。これで作戦の第一段階は成功だった。
「で、このマンドラゴラだけれど」
「ええ」
マンドラゴラの話を続ける。実はこれに興味も持ったのだ。

「お料理にも使われるのよね」
「当然御馳走よ」
「そうよね。けれどマウリアだから」
ここが重要だった。マウリアの奥で採れるものなのだ。
「やっぱりカレーにも使われるのよ」
「それ絶対言うと思ったわ」
アンジェレッタもそれを言う。
「カレーよね、やっぱり」
「マウリアだから。そうじゃないの？」
「実際に使われてるみたいよ」
やはりそうだった。誰もが思うのはマウリア料理といえばカレーなのだ。タンドリーチキン等もあるがやはりこれであった。マウリアといえばこれしかなかった。
「セーラのお家でも使われているし」
「セーラのお家ね」
「あそこマハラジャだし」
マウリアの地方領主だ。何故か連合では今だにマハラジャといえばいきなり踊り出す怪しい領主というイメージがある。大昔の映画の影響らしい。なおマウリア映画といえば異常に長くそのうえ必ずハッピーエンドでストーリー展開は気付いたらとんでもない方向に行っていてどんな要素も入っていてしかも俳優は皆口髭を生やしていて尚且つ何かあると何処からともなく大勢の見知らぬ人達が出て来て踊る。こう思われているが実際にそうだ。
「ふつうにその程度の御馳走は出るわよ」
「そうなの、やっぱり」
「ただしよ」
ここが肝心だった。
「セーラだから」
「あまり私達の考えるみたいな御馳走じゃないのね」
「食べたら何かある程度は考えておいた方がいいでしょうね」

何気にとんでもないことを言っている。
「やっぱり」
「だと思ったわ。家にティラノサウルスがいるしね」
これだけでもとんでもない家だということがわかる。しかもその外観は昔地球にあって今はマウリアの首都ブラフマーにあるタージ＝マハールそっくりときているのだ。タージ＝マハールの周りを巨大な恐竜が闊歩しているのは異様としか思えない光景だ。
「やっぱりそれはね」
「そういうことよ」
そんな話をしていた。何はともあれ第一段階は成功だ。だが問題はこれからだった。問題は終わることがないのである。特に今のレミ達は。
アンジェレッタとの話の後でレミはすぐに屋上でマチア、ジョン、それとラッシーと一緒に話となった。レミはまずはマチアに対して礼を述べた。
「音楽有り難うね」
「あれでいいんだな」
「ええ、上出来だったわ」
こう彼に述べる。にこりと笑って。
「アンジェレッタの感心はそっちにも行っていたしね」
「耳がか」
「耳も肝心なのよ」
こうマチアに述べる。
「目や口と同じ位にね。御鼻はお薬にいっていたし」
「五感ってやつか」
「そういうこと。さて、それでラッシーはどうなの？」
「大丈夫だってさ」
「ワン」
やはりここで一言鳴くのだった。

第九十一話　鼻が頼りその八

「もう完全に全部覚えたって言ってるよ」
「そう。じゃあ後は」
「その匂いだよな、彼氏の」
「ラッシーの話だとこの学校の中にその彼氏の匂いがあるってさ」
「そんなこともわかるの」
レミも流石にそこまではわからないと思っていた。だから驚きだった。
「わかるよ。犬の鼻は凄いんだから」
「それはわかっているけれど」
それでもだったのだ。
「匂いだけで性別や年齢、あと何処にいるかまでわかるんだ」
「犬の鼻ってそこまで凄いんだな」
マチアも驚きを隠せない。
「凄いよ。だから何処の誰かはもうわかるよ」
「じゃあ。後はラッシーに案内してもらうだけね」
「うん。ラッシー」
「ワン」
ジョンに声をかけられると一声鳴いて応えてきた。
「案内して、その人のところに」
「ワン」
「わかったってことね」
「そういうこと。じゃあ行こう」
「ええ」
「わかったよ」
二人もそれに頷きジョンと共にラッシーについて行く。暫くしてやって来たのは何と隣のクラスだった。
「灯台下暗しってやつ？」

「そうだな」
マチアがレミの今の言葉に頷く。三人はそのクラスの扉の前にいる。ラッシーも。
「隣だったなんてな」
「正直ここなんてね」
普段は明るいレミの顔が急に曇っていく。
「嫌な話だわ」
「あいつがいるからな」
ラビニアのことだ。二年S1組の永遠のライバルだ。だから入るのが嫌なのだ。
「まさかとは思うけれどジョン」
「うん」
レミがジョンに顔を向ける。見ればジョンも嫌そうな顔をしている。
「ここにいるの？」
「うん、ラッシーの鼻がそう教えてくれているよ」
「ワン」
「そうだって言ってるし」
「それでも入りたくはないわね」
これは紛れもない三人の本音だった。
「ここだけは」
「けれどここにいるんだろ？」
マチアがレミに言う。
「このクラスの中に。だったら」
「入るしかないのね」
「そういうことだな。入ったらどうなると思う？」
「速攻で視線が集中するでしょうね」
忌々しげにマチアに答える。
「いや～～な視線がね」
「だろうな。かといってラッシーだけ行かせるわけにもいかないし

な」
「入るしかないね」
ジョンも言う。
「やっぱり」
「ええ、そうね」
レミはそのジョンの言葉に溜息を出してから答えた。
「じゃあ入りましょう」
「そうだな」
「覚悟を決めてね」
三人で言い合って扉に手をかける。手をかけたのはマチアだった。
だがここで。扉の方から自然に開いたのだった。
「じゃあな」
「ああ」
何やらクラスの中の人間に挨拶をしている。どうやら今から部屋を後にするらしい。見れば中から黒い髪を立たせた細い小さな目の少年が出て来た。上も下も黒い服で全体的に身のこなしが軽そうな印象を与える。そんな少年だった。
その彼が出て来た。するとラッシーはここでまた一声鳴いた。
「ワン」
「彼らしいよ」
「何か凄いタイミングで出て来たな」
マチアは今出て来た少年を見つつ述べる。
「こいつか。その彼氏っていうのは」
「そうみたいね」
レミもそれに続く。
「まあこのクラスの中に入らないで済みそうで何よりね」
「全くだ」
「んっ！？あんた達」
その少年の方も三人と一匹に気付いたのだった。

第九十一話　鼻が頼りその九

「確かアンジェレッタの」
「自分から言ってきたな」
「ええ」
レミがマチアの言葉に頷く。
「確定ね。これで」
「何か俺に話があるみたいだな」
少年は彼等の言葉のやり取りからそれを悟った。そのうえで声をかける。
「よかったら何処かで話をしないか？」
「うん、是非共」
ジョンが彼に答える。
「僕達もそのつもりで来たんだ」
「わかった。何処がいいんだ、それで」
「それはそっちに任せるわ」
レミが少年に答える。
「宜しくね」
「ああ、こっちもな」
外見は少し怖そうだが中身はそれ程でもないようだ。穏やかに言葉をかけてきているし態度も友好的だ。何はともあれ彼等は場所を変えて話をするのだった。場所は学校の屋上だった。レミ達にとっては戻った形だ。
「ここでいいよな」
「ああ、別にな」
「ここが一番落ち着くしね」
マチアとレミが少年に答える。
「それじゃあお話しましょう」
「ああ、まずは名乗るな。最初に言うがあんた達のことはもう知っ

てるさ」
「そうなの。じゃあ名乗らなくていいわね」
「ああ。俺はジョバンニ＝ポンキエッリっていうんだ」
こう名乗ってきた。
「アルゼンチン人さ。工業科の二年だ」
「工業科だったの」
「そうだよ。意外だったかい？」
「てっきりあのクラスの一員かと思ったわ」
レミだけではなく他の面々もそれは同じだった。だがマチアもジョンも今はそれを言わなかった。レミが代弁しているからだ。
「あのクラスに入るのって嫌なのよね」
「ラビニアがいるからだよな」
「わかるの」
「ああ、知ってるさ」
ニヤリとした笑みを浮かべてレミに答える。
「アンジェレッタからも聞いてるしな。それに」
「それに？」
「有名だからな」
こう答えてきた。
「二年Ｓ１組とあのクラスの仲の悪さはな。工業科でも有名だぜ」
「何か変なことで有名になってるな」
マチアはそれを聞いて顔を顰めさせた。
「何でまたそんなことで」
「しょっちゅう騒動起こしてるだろ」
ジョバンニはこうマチアに答えた。
「だからだよ。そもそも」
「そもそも？」
「あんた達のクラス自体が有名だぜ」
笑って三人に言った。
「それもかなりな」

「かなりだったの」
「知らない人間はいないって位にな」
「工業科でもなんだ」
ジョンが彼に問うた。
「ああ、その通りさ。学校の中で一番有名なクラスだろうな」
「初耳だな」
「そうだね」
今のジョバンニの言葉にマチアもジョンも顔を見合わせて言い合う。
「俺達はそんなに有名なのか」
「しかもいい意味で、じゃなさそうだね」
「わかるんだな、それは」
しかもジョバンニはそれを肯定さえしてきた。
「やっぱり自分達でも」
「悪い意味で有名になっても仕方ないわよ」
レミも憮然とした顔になっていた。
「何でまたそんなことで知られないといけないのよ」
「個性派ばかりだからな」
ジョバンニは口を尖らせているレミに答えた。

第九十一話　鼻が頼りその十

「だからだよ。ああ、いい意味もあるぜ」
「あったの。ならいいけれど」
「それでもな。あのクラスじゃあんた達の悪口ばかりだ」
こうも言う。
「それも凄いぜ。エウロパとサハラみたいなものだ」
「エウロパとサハラみたいって何なんだよ」
「そんなに言ってるの」
マチアもジョンも今の表現には閉口する。エウロパとサハラといえばお互い犬猿の仲である。互いにいがみ合い衝突し合い罵り合っている。それは連合とエウロパの関係よりも酷い。連合にしろエウロパを敵視することにかけてはかなりのものであるがそれでもなのだ。
「馬鹿だの阿呆だの変態だのな」
「あいつ等性格悪いからね」
レミの言葉である。
「悪口しか言えないのよ、頭も悪いし」
「本当に嫌いなんだな」
「大嫌いよ」
本当に一言で感情を全部表現してみせた。
「好きになれって方が無理よ、あんな奴等」
「向こうも同じこと言ってるぜ」
「特にラビニアがでしょ」
「ああ、やっぱりわかるか」
ジョバンニはラビニアの名前を聞いて笑った。
「その通りだよ。あいつが特にな」
「あいつは特に性格が悪いのよ」
「全くだ」

「あんな性格の人見たことないよ」
「ワン」
マチア、ジョンだけでなくラッシーまで答える。一声鳴くその顔が不機嫌そうに見えるから不思議だ。
「それでどうしてあんなクラスに出入りしていたの？」
「ああ、本をなの」
「本を貸していたんだ」
「ちょっとな」
こうジョンに答えた。
「あそこの奴にな。同じアルゼンチン人のよしみでな」
「へえ」
「といっても漫画だけれどな」
それは言うのだった。
「貸していたんだよ。それを返してもらっていたんだ」
「そうだったの」
「そいつとだけだな、仲がいいのは」
ジョバンニは腕を組んで答える。
「よく考えたらな」
「あんたもあのクラスは嫌いなの？」
「いや、それは別に」
首を横に振って答える。
「ないな。好きでも嫌いでもない」
「そうなんだ」
「別にな。そういう感情はないさ」
そういうことらしい。
「そいつともあまり深い付き合いじゃないしな」
「ふうん」
「で、まあそれで教室を出たところで」
「私達と会ったのね」
「そういうことだよ」

こうレミ達に語るのだった。
「けれど意外だったよ」
ジョバンニはここでまた言う。
「まさかアンジェレッタのことを知ってるなんてな」
「匂いだよ」
ジョンが笑ってジョバンニに教えた。
「匂い！？」
「そうだよ。匂いなんだ」
「あっ、そういえば」
「ワン」
ラッシーに気付いたところでそのラッシーが鳴いた。
「ああ、そういうことだったんだな。俺の匂いでか」
「鋭いわね」
すぐにそれを察したジョバンニに対してレミが言う。
「そこまでわかるなんて」
「わかるさ。犬といえば鼻だろ」
ジョバンニは笑った。何処か大人びた、それでいて知的で勝気な感じのする笑みだった。
「だからさ。わかるんだよ」
「そうなの」
「そうさ。それでな」
彼はさらに言う。話は彼のペースになってきていた。
「話はやっぱりあれか。俺とアンジェレッタのことか」
「ええ、そうよ」
レミが答える。
「もうわかってるけれどあんたアンジェレッタと付き合ってるのよね」
「ああ」
あっさりと認めた。今更という話だったからだ。ジョバンニにしても認めなかったらどうかという話ではない。だから気軽なもので

あった。
「そうだよ」
「そう、やっぱりね」
レミはわかっていたが一応頷いた。
「それならわかったわ」
「で、俺が話すことは」
「馴れ初めだろうな」
マチアが言う。
「あんたとあいつの。それでいいか？」
「俺は別に構わないさ」
ジョバンニは何でもないといった態度で答えた。
「じゃあそれを話すな」
「ああ、頼む」
「御願いするわ」
三人と一匹はジョバンニからアンジェレッタとの出会いと付き合うようになった経緯を聞く。自然とその話に引き込まれていくのだった。

鼻が頼り　　完

２００８・５・５

第九十二話　アンジェレッタとの出会いその一

アンジェレッタとの出会い

ジョバンニは八条学園に入って間も無くの頃。学園の中のダンスホールに入り浸っていた。そこではタンゴが踊られる。アルゼンチン人である彼にとっては馴染みの場所だった。

「ああ、あんた今日も来たんだね」

「ああ」

店のマスターに応える。マスターといってもれっきとした学園の事務員である。このダンスホールは学園関係者に限り無料で言うならば娯楽施設である。表向きは情操教育の為の施設であるが。

「やっぱりここが一番落ち着くんだよな」

「そうなのか」

カウンターに座る。店の中は程よい暗さで赤い光で照らされている。その中で男女がリズムに合わせてタンゴを踊っている。踊っているのは大学生かそれ以上が多い。ジョバンニはその彼等を見て言うのだった。

「まあいい感じだな」

「いい感じかい？」

「悪くはないさ」

カウンターの椅子を回して彼等の方を向いている。そのうえでカウンターの中でカクテルを作っているマスターに対して話すのだ。高校生にしてはかなり不釣合いである。

「皆かなり踊っているよな」

「タンゴは人気があるからね」

「あるのか」

「あるよ、少なくともこの学校じゃね」

こう彼に告げてきた。

「あんた、アルゼンチンから来たんだよな」

「ああ、そうさ」
マスターの言葉に答える。
「その通りさ」
「じゃあタンゴは好きなんだ」
「タンゴを踊るよりも見る方が好きだな」
「観客ってわけない」
「そんなところさ。それに」
「それに？」
マスターはここでジョバンニの言葉を聞く。
「何かあるのかい？」
「あるさ。ここの料理は美味いからな」
「おや、それはどうも」
料理を褒められて機嫌が悪くなる人間はいない。このマスターにしろ同じだ。だから彼はここでは顔を綻ばせて笑うのだった。
「そう言ってもらえるとこちらも作りがいがあるよ」
「やっぱり牛肉だな」
ジョバンニはまた言う。
「ここのステーキはいいよな」
「そうだろ。アルゼンチンといえばやっぱり」
「牛だ」
彼は断言した。
「牛がなくちゃアルゼンチン料理じゃない」
「そうだよね、まずは牛で」
「次にワインだろうな」
この時代は高校生でも飲める。だから彼もその味を知っているのだ。だがその外見からはかなりかけ離れた言葉ではあった。
「その二つがないと話にはならないさ」
「わかってるね。通だね」
「別に通じゃないさ」
しかし彼はマスターにこう返すのだった。

「アルゼンチン人なら常識さ」
「そんなものかね」
「牛食えないならもう話にもならないさ」
彼の次の言葉はこれだった。
「言うだろ?人間肉がたらふく食えるうちはまず大丈夫だって」
「聞いたことがないね。何処の言葉だい?」
「アルゼンチンの言葉だよ」
こう答えはするがマスターはあまり信じていない顔である。少しいぶかしむものになっている。
「って知らないか」
「ああ、悪いけれどね」
「お袋に言われた言葉なんだがな」
「あんたのお袋さんも肉が好きなのか」
「親父もお袋も好きさ」
笑って答える言葉だった。アルゼンチンはまず牛なのだ。だからだった。
「それこそ何かあれば牛肉だったな」
「豚や鶏はどうなんだい?」
「まあ食べないわけじゃないな」
少し考えてから答えた。

第九十二話　アンジェレッタとの出会いその二

「魚もな」
「そうかい。一応は食べるんだね」
「だが半分は牛だった」
また随分な割合だった。なお日本では牛肉もかなり食べられるがそれ以上に魚を食べる。これはそれこそ地球にあった頃から変わりはしない。
「もっと上から」
「食べ過ぎじゃないのかい？それは」
「そのせいかお袋はビヤ樽になっちまった」
ジョバンニは笑って語った。
「親父もな。二人共若い頃の写真はスリムで奇麗なものだったのにな」
「人間結婚したら変わるよ」
マスターも笑って彼に言葉を返す。
「牛肉を食べなくてもな」
「牛肉だけじゃないのか」
「じゃあマウリア人はどうなるんだ」
その牛を食べないマウリア人だ。彼等の言葉では牛は神聖な動物だ。だから食べるというのは有り得ないことだ。粗末に扱うだけでも咎められる。何とマウリアにおいては牛に危害を加えた場合の罰則まで刑法で定められているのだ。牛を無闇に殺せば死刑になっても文句は言えない。
「太ってるだろ？おばさんは」
「そういえばそうか。ここにもいるしな」
「マウリア人のいないところはないさ」
実際連合の至るところにいるのだ。さながらかつてチャイナタウンが世界中にあったように。この時代では連合のあちこちにマウリ

アタウンと言うべき存在があるのだ。
「ここにだっているしな」
「本当に何処にでもいるんだな」
「アルゼンチンにもいたかい？」
「ああ、勿論だ」
やはりいるのだった。
「色が黒くて白人の顔でターバン巻いて口髭生やしているからすぐわかる」
「女の人は女の人でな」
「一発でわかるさ。牛を食べないしな」
やはりこれが一番大きかった。
「牛を出そうものなら本気で怒る」
「まさか出さないだろう？」
「こっちだってわかってるからな。だからそういう時は鶏とか羊さ」
「サハラのムスリムみたいだな、そう言うと」
「もっと訳がわからないさ。マウリア人は」
連合の者達から見ればマウリア人はそういう存在なのだ。
「食い物は全部あれだしな」
「カレーか」
「しかも当然ビーフカレーじゃない」
これはもう常識だった。
「アルゼンチンはまずビーフカレーだ」
「そうだと思ったよ」
「チキンカレーとかそんなのでな。しかも食う時間長いしな」
「ああ、マウリアじゃあれが普通なんだよ」
「そうか」
「というかあれだよ」
マスターの言葉は続く。
「マウリアの人達の時間の概念は凄いからね」
「一日の遅れは気にしないしな」

「というかその一生自体がな」
「生まれ変わるんだったな」
「そういうことさ。だから大したことじゃないんだ」
「二時間遅れでもか？」
かつてはアルゼンチンでもそんな時間の概念だった。ラテン系独特のお気楽さだ。ただ今でもアルゼンチンといえばラテン系の陽気な国だ。今ジョバンニの目の前で行われているタンゴを見てもそれはわかる。
「それ位早い方らしいよ」
「わからない国だな」
「まあこう言うじゃないか」
マスターのこの言葉は連合全体で言われている言葉だ。
「マウリア人は異なる知的生命体だってね」
「リトル＝グレイみたいなものか？」
千年前から定着している異星人だ。灰色の身体で目がやたら大きい小人だ。体毛もない。宇宙人といえばこれだという認識が結構ある。

第九十二話　アンジェレッタとの出会いその三

「だとすると」
「そうじゃないのかい？もっと凄いかもな」
「宇宙人よりもか」
「凄いだろ、あれは」
「マウリア人って凄いんだな」
「まあこっちの常識は通用しないだろうな」
彼等の常識は別にあるというのだ。それが文明というものだ。百人いれば百人の世界がそれぞれ存在しているのと同じで文明もまた同じように存在している。そういうことなのだ。
「アルゼンチンのステーキが日本では馴染みが薄いみたいにな」
「そうか？結構食べられてるぞ」
「そうだったかね。それはわからなかったよ」
「日本人は何でも食べるからな。それでも」
「それでも。何かあるのかい」
「あるさ。牛を刺身で食うとはな」
首を捻りつつの言葉だった。
「あれは正直引いた」
「驚いたかい」
「生肉を喜んで食べるとは聞いていたがな。牛までそうして食うのか」
「牛だけじゃないさ。豚もさ」
「話を聞いて気持ち悪くなってきた」
彼の偽らざる本音だ。
「豚はまずいだろうに」
「彼等にしてみればそうじゃないみたいだな。美味い美味いって醤油で食ってるさ。新鮮な特別な豚をね」
「俺だったら絶対に食わないな」

真顔だった。
「そんなものは」
「大蒜とか生姜を薬味にして食うな」
「大蒜や生姜！？ああ」
これは話がわかるジョバンニだった。
「肉だからな。やっぱりそういったものか」
「山葵で食う人もいるけれどな」
「やっぱりそれもあるか」
「日本人は山葵だからな」
これだけは昔から変わらない。ほぼ絶対になっている話だった。
「それで食ってる人もいるな」
「山葵醤油は俺も好きだがな」
「何だ、あんたも刺身は食うんだな」
「魚とかはな」
どうやらそれ限定であるらしい。
「海のものだけさ。川のは食わない」
「そうなのかい」
「危ないだろ、普通に考えて」
それが理由だった。寄生虫を警戒しているのだ。
「養殖ものならともかく」
「じゃあ牛なんかは論外と」
「ゲテモノもいいところだな。話を聞いていて気持ち悪くなる位だ」
「日本人以外はそう言うね。そういえばここの理事長は」
「ああ、八条長官」
八条は国防長官である為こう呼ばれることが多いのだ。理事長ではあるが中央政府国防長官という要職にある為に学校には滅多に出て来ない。しかし学園の責任者としての仕事もちゃんとしている。それだけ彼が多忙であるということの証でもある。
「あの人生肉好きだったな、確か」
「日本人だからね、しかも生粋の」

「あの奇麗な顔であんなものを食うのか」
「何かそれ言うと野蛮人みたいだな」
「野蛮人じゃないさ」
これは言えない。八条はどう見ても貴公子だからだ。長身でスラリとした身体を持っておりその顔立ちは実に端整だ。この学園でも彼の人気は高い。
「日本人自体がな。エウロパの馬鹿貴族達とは違ってな」
「馬鹿貴族かい」
「あの連中こそが本当の野蛮人さ」
「そうだね」
連合では特に根拠なくこう決め付けられているふしがある。さながらかつてのヨーロッパ人がイスラム教徒を何の根拠もなく野蛮人と見ていたように。
「優雅に生肉を食うのか」
「想像できないかい」
「想像できるが想像したくない」
そういうことだった。
「そんな光景はな」
「わかったさ。じゃあ今はステーキにするかい」
「レアがいい」
焼き加減を注文する。

第九十二話　アンジェレッタとの出会いその四

「一枚で腹が一杯になるようなやつをレアで。ソースはオニオンソースだ」
「あれ、アルゼンチン風じゃないのかい」
「今日はそれがいい。玉葱が食いたくなった」
それが理由だった。
「それとワインは赤だな、やっぱり」
「肉だからね。やっぱりそれかい」
「ああ、肉は赤だ」
オーソドックスな注文であり組み合わせだった。
「それも二本な」
「また随分と飲むね」
「今日はもうアパートに帰って寝るだけだからな」
それでいいというのだ。
「これが夕食なんだよ」
「だからなのかい。じゃあとびきりでかいのを焼くよ」
「ああ頼むよ。何か食わないとやっていけない」
ポツリと本音が出た。
「この学校にいたら」
「ははは、普通の学校じゃないからねここは」
マスターは今の彼の言葉に笑う。実際にこの八条学園はありきたりの学校ではない。ただ大きいだけの学校ではないのである。
「それも当然だね」
「確かに普通の学校じゃないな」
ジョバンニもそれを言う。
「おかげで馴れるのに時間がかかっている」
「しんどいかい」
「体力が欲しい」

しみじみとした言葉だった。それを自分でも実感しているからこそ言うのだった。
「だからだ。ステーキを」
「大蒜もたっぷりとだね」
「ああ、頼む」
大蒜も頼むのだった。やはり肉料理なら香辛料であり胡椒は欠かせない。しかしそこにオニオンとガーリックがあれば最高になるのだ。ジョバンニもそれを頼むのだった。
「嫌になる位な」
「本当に疲れてるんだね」
「アルゼンチンじゃないせいかな」
自分ではこうも思ったりする。
「やっぱり」
「故郷が懐かしいってわけかい？」
「それはあまりな」
ないというのだった。少し考える目をしてから述べる。その間視線が泳いでいたがそれが止まったのだ。元に戻る形で。
「ないのかい」
「ここは確かに楽しいさ」
それは彼も認める。
「ただな。騒がしい」
「そうだろうね。毎日がお祭り騒ぎさ」
「ラテンとしてはそれでいいんだ」
言うまでもなくアルゼンチンはラテン系である。旧中南米諸国は大抵混血しているがアルゼンチンはそれが比較的少なくかなりラテンの血が純粋に残っているのである。
「けれどな。それでも」
「疲れるのかい」
「二十四時間だからな」
流石にそれは疲れるというのだ。

「少しは体力を回復させないとな」
「そういうことだね」
「そういえば皆かなり食べるな」
そもそも連合の人間自体がよく食べる。エウロパやサハラの者達から見ればそれこそ桁違いだ。体格もその分だけ大きく立派なものになっている。
「この学校は」
「あんたと同じさ。体力を使うからだよ」
「そうか、やっぱりな」
「はい、できたよ」
そのステーキが出て来た。かなり大きくしかもぶ厚い。オニオンのソースと炒めたガーリックがふんだんに乗せられ肉汁と湯気を出してそこにある。ジュウジュウという音が立っており目と鼻と耳から食欲をそそらせていた。あまりにも強烈な魅力を醸し出している。
「ワインもな。ほら」
「ああ、悪いな」
もうボトルとグラスが用意されていた。ボトルはコルクが抜かれている。後はグラスに入れていくだけだ。

第九十二話　アンジェレッタとの出会いその五

「食べるんだね。楽しんで」
「そうさせてもらうよ。しかし」
「しかし。何だい？」
「結構柔らかい肉だな」
フォークとナイフで肉を切りながら言う。
「何処の肉なんだい、これは」
「日本の肉だよ」
「日本のか」
「日本人は柔らかい肉が好きなんだよ」
マスターは答える。
「だから。品種もそうやって」
「肉が柔らかいものにしたのか」
「そういうことさ。あんたは固い肉がいいかい？」
「アルゼンチンの肉は固いな」
どっちかといえばだ。そんな感じの言葉だった。
「けれど柔らかい肉も」
「いいんだね」
「ハンバーグだって好きだしな」
全体的に肉料理が好きなようだ。
「だからいいさ」
「ああ、ハンバーグなら学校の中でいい店があるよ」
「ハンバーグもか」
「そうさ。うちはハンバーグはやってないけれどそこはハンバーグメインの店なんだ」
「そういう店もあるのか」
切った肉をフォークで口の中に入れる。口の中に肉の濃厚な味をメインとして玉葱と大蒜の刺激も加わる。その三つが最高のハーモ

ニーを作り出し味覚を完全に占領した。彼は占領される中で言ったのだった。
「本当に何でもある学校だな」
「そこも行ってみたらいいさ」
マスターは陽気に彼に言う。
「是非な」
「今度そうさせてもらうさ。じゃあ今は」
「ステーキかい」
「今食べているのを楽しませてもらうさ」
彼は言った。
「充分にな」
「うちのステーキはどうだい？」
「俺はまずいものにはまずいってはっきり言うんだよ」
まずはこう述べた。
「食べてすぐにな」
「じゃあ合格て受け止めていいんだね」
「ああ、合格だよ」
この言葉は笑顔での言葉だった。
「美味いよ」
「そう言ってもらって何よりだよ。じゃあサービスで」
「んっ！？」
そう言って親父が出してきたのは。
「これもやるといいさ」
「悪いな」
もう一枚出て来たのだ。ステーキが。ジョバンニはそれを見て笑みを浮かべる。この日は満足して学校を後にした。しかし疲れはまだ残っていた。
「やっぱりまだ疲れてるな」
そのことを実感しながら家に帰る。その日はこれで終わりだった。しかしその次の日だった。彼にとってとんでもない出会いがあった

のだった。
「ねえねえ」
「何だ？」
登校する彼にいきなり声をかけてきたのである。
「誰か呼んだか？」
「私よ」
「私！？何処にいるんだ」
ジョバンニは辺りを見回した。しかし誰もいない。
「誰もいないぞ」
「だからここよ」
しかしまた声がする。
「ここだってばさ」
「・・・・・妖精か？」
全然わからないので思わずこう呟いた。
「変わった学校だが妖精までいるのか」
「妖精じゃないわよ」
ここでまた声が聞こえる。
「私は人間よ」
「人間なら何処にいるんだ」
周りは人間しかいない。登校中だから当然周りにいるのは同じ八条学園の生徒達だ。歩いて登校している人間もいればスケボーで登校している人間もいる。

第九十二話　アンジェレッタとの出会いその六

「誰も俺に声は」
「見えないの？」
「だから何処にいるんだ」
声に対して問う。
「何処にもいないじゃないか」
「よく見てみて」
声はまた言ってきた。よく聞けば何か女の子の声のようだ。
「周りを」
「周りを」
その声に従って本当に周りを見回す。もう一度。
「それから上」
「上か」
上には空がある。今日は今一つ天気がよくないようだ。雲が多い。
「それから下」
「下だな」
「そうだよ」
その声に従い下を見ると。そこにいた。
やたら小柄な女の子だ。小学生にも見える。その娘が今彼の懐にいたのだった。本当に何時の間に、といった感じでそこにいたのだった。
「わかった？」
「誰なんだあんた一体」
まず最初に出た言葉はこれだった。
「はじめて見る顔だけれど。小学生か？」
「小学生！？失礼ね」
その小柄な娘は彼にこう言われて顔をむくれせてきた。ずっと彼の顔を見上げている。

「私は高校生よ」
「高校生!?嘘だろ」
彼はまずそれを疑った。信じなかった。
「そんな低い高校生がいるか」
「私は低くないわよ」
そのむくれた顔で彼に言い返す。
「普通の娘よりちょっと高くないだけよ」
「また随分と強引な言葉だな」
ジョバンニは彼女の言葉を聞いて呟いた。
「普通そういうのは一言で済むんだがな」
「一言で?」
「ああ、言わなくてもわかるだろ」
「随分と失礼なこと言うわね、初対面の相手に」
「初対面なのはお互い様だろ」
ジョバンニは今度はその小柄な高校生に対してこう言った。
「つまりお互い失礼ってわけだ」
「そうなるの」
「お互い様だ。それでだ」
「ええ」
とりあえずその彼女に言う。彼女もそれに応える。
「前、どいてくれないか」
「前を?」
「登校中なんだよ」
続いてこう言った。
「だからな。どいてくれないか」
「わかったわ。それじゃあ」
ジョバンニにとっては意外なことに彼女はそれに従うのだった。
すっと前からどいてきた。
「どうぞ。私も登校中だしね」
「登校中ってことはあんたも」

「そうよ、八条学園の生徒」
にこりと笑って彼に言ってきたのだった。
「そうだけれど」
「そうだったのか」
ジョバンニはそれを言われてもまだピンと来てはいなかった。
「何かな」
「まだ何か言いたそうに見えるけれど」
「言いたいっていうかな。何か」
少し首を捻ってからその娘に答える。
「あんまり急だったからな」
「まあ確かにね」
彼女の方も自覚しているようだった。にこりと笑ってそれを言う。
「いきなりなのは確かよね」
「全くだよ。それで何の様なんだ?」
「疲れてるでしょ」
今度はこうジョバンニに問うてきた。
「最近。どうかしら」
「疲れていないって言えば嘘になるな」
自分でもそれを認める。
「かなり疲れてるよ」
「やっぱりね」
ジョバンニの返事にまた笑ってみせる。
「そうだと思ったわ」
「何でそんなのわかるんだ?」
「お肌の色とかで」
わかると答えてきた。

第九十二話　アンジェレッタとの出会いその七

「わかるのよ。そういうのってね」
「肌か」
「特に顔色」
それについても話してきた。
「顔色悪いわよ」
「そうか？」
「お酒も最近随分飲んでるでしょ」
「ああ」
その通りだ。昨日もワインボトル二本だ。かなり飲んでいると言える。この学校に入ってから飲む量がかなり増えているのは間違いない。
「それ、出てるから」
「そうだったのか」
「疲れは残しておくとよくないわよ」
またにこりと笑って彼に言ってきた。
「だからね。お薬あげるわ」
「お薬！？」
「そう、お薬」
彼女が言うのはそれだった。
「お薬があるけれど。どう？」
「体力回復のか」
「疲れなんか一発で吹き飛ぶけれど。いる？」
「あるのなら欲しいな」
くれるものは貰っておく主義だ。こうした時にはとりわけ素直になるのはジョバンニの特徴だ。自分ではかなり得な性格だと思っている。
「ただだよな」

「サービスよ。だって実験でできたばかりだし」
「実験でっておい」
「それでもいいのならあげるわよ」
また言ってきた。
「どう?それで」
「ああ、それでもいいさ」
とりあえず疲れているのでそれでいいとした。彼も随分度胸が座っている。図々しい一面もあるがそれが彼にとってはいい方向に動くのは運がいいからであろうか。
「ただならな」
「案外がめついのね」
「それがアルゼンチン人なんだよ」
これは嘘である。
「アルゼンチン人はブラジル人とチリ人以外の人間からは何でも笑顔で受け取るのが掟なんだよ」
「そんな掟はじめて聞いたわよ」
「そうか?アルゼンチンじゃ有名だぞ」
どうやらそうらしい。なおかつての中南米諸国のＡＢＣと言われているアルゼンチン、ブラジル、チリは地球にあった頃から微妙な関係だったがそれはこの時代でも変わっていない。
「ブラジル人とチリ人には気をつけろってな」
「コロンビア人にはわからない話ね」
「んっ、あんたコロンビア人か」
彼女を見下ろして言う。
「そうだけれど。意外?」
「意外っていうかな。そうだったのか」
「別に驚かないのね」
「ああ、別にな」
こう彼女に答える。
「この学校は色々な国から人間が集まるからな」

「まあそれはね」
「だからだよ。別に驚かないさ」
「そういうわけだったの」
「それでだ」
ジョバンニはさらに言う。
「薬を貰う前に聞いておきたいことがあるんだけれどよ」
「何？」
「あんた何者なんだ？」
それを彼女に問うのだった。
「コロンビア人なのはわかったけれどよ」
「ええ」
彼女からの言葉だがそれは今わかった。
「何者なんだ。薬屋か？」
「ここの学校の生徒よ」
こう答えてきた。
「八条学園高等部普通科のね」
「ああ、普通科か」
「そうよ、一年」
彼女はそれを自分から答えてきた。
「一年Ｓ１組よ」
「そうか。それで名前は何ていうんだい？」
「アンジェレッタ」
こう名乗ってきた。
「アンジェレッタ＝ダラゴーナよ」
「アンジェレッタ＝ダラゴーナか」
「ええ。それで国は」
「コロンビアだろ」
「それはもう言う必要がなかったわね」
こう言って微笑んできた。
「そういうあんたは？」

「ジョバンニ＝ポンキエッリさ」
彼も名乗るのだった。自分の名を。
「宜しくな」
「ええ、宜しく。それじゃあ」
「薬か」
「そうよ。飲む？」
「遠慮したいな」
「まあそう言わずに。すぐに元気になるから」
これが二人の出会いだった。ここから話は思わぬ方向に進展してしまうのはこの学園の常だった。ジョバンニとアンジェレッタの出会いと付き合いもそうだった。

アンジェレッタとの出会い　完

２００８・５・１２

第九十三話　薬地獄その一

薬地獄

ジョバンニとアンジェレッタの出会いは登校の時にはじまった。
ここで彼はいきなり薬を勧められたのだったが疑うこととしきりであった。
「飲まないの？」
「普通薬をはいそうですかと言って飲むか？」
「飲むのが普通よ」
アンジェレッタは平然として言う。
「疲れなんか一発で吹き飛ぶから」
「薬だろ」
ジョバンニはあからさまに疑っている目でアンジェレッタを見下ろしている。小柄な彼女は逆に彼を見上げている。見事な退避が続いている。
「そう簡単にな。信じて飲めるわけがないだろ」
「騙されたと思って飲むのが普通よ」
しかしアンジェレッタは顔を見上げたまま反論する。
「違うかしら」
「違うに決まってるだろ。大体薬は薬屋にあるものだろうが」
常識ではある。あまり常識の通用しない学校ではあるが。
「それで何でこんなところで」
「今なら無料サービスだけれど？」
「余計に怪しいぞ、それ」
それを聞いてさらに突っ込みを入れる。
「薬が無料サービスってな」
「大丈夫よ。変なものは入れていないし」
「じゃあ何を入れたんだ？」
ふと興味を持ったのでそこを尋ねた。

「コカインとかマリファナじゃないよな」
「それ麻薬だし。幾ら何でも麻薬はやってないわよ」
「そうか。ならいいんだけれどな」
この時代にも当然麻薬は存在する。どの国でも勢力でも問題になっている。八条学園でも言うまでもなく禁止されていることである。
「マムシとすっぽんよ」
「おい」
その二つを聞いて思わず突っ込みを入れた。
「きついな、また随分」
「マムシ酒にすっぽんのエキスをたっぷりと入れたのよ。はい、これ」
出してきたのはマムシ酒だった。中にはマムシが一匹丸ごと入っている。朝から見る光景にしてはかなりきついものがある。流石にマムシは死んでいるようだが。
「これを飲めば疲れなんて一発だから」
「ってここで出すか！？」
ジョバンニは一升瓶に入れられたその酒を見てドン引きしていた。しかし周りはそんなに驚いてはいない。そんなことは結構日常なのだろうか。この学園では。
「マムシ酒をここで」
「飲んだら一発だから。さあ」
「飲めっていうのか」
「ささ、どうぞどうぞ」
「どうぞどうぞってな、おい」
また突っ込みを入れる。
「いきなり飲めって言われてそんなどぎついもの」
「飲みにくいのなら蜂蜜も入れてね」
聞いているようで聞いていないアンジェレッタだった。そこがかなりあれである。
「飲んだらいいわ。ささ、どうぞどうぞ」

「どうぞどうぞってな」
憮然とした顔でそのアンジェレッタに突っ込みを入れる。
「こんなの飲んだらそれこそ」
「元気になれるわよ」
「元気にか」
「疲れてるんでしょ？」
話が最初に戻った。マムシのせいで何処かに行こうとしていたが何とか戻ったのだった。
「だから。飲んでよ」
「そんなに効くのか」
「飲んだら一週間寝ないでいけれるわよ」
にこりと笑って彼に言うのだった。
「もう全然平気よ。ギンギンよ」
「・・・・・かなり嫌な言い方だな、それは」
これに関してはポツリと突っ込みを入れる。
「しかし。そんなに効くのか」
「騙されたと思って飲んでみてって」
こう言ってまた勧めてくる。
「蜂蜜もあるし」
「そういえば蜂蜜も疲労回復にいいんだったな」
ジョバンニはこのことも思い出した。
「じゃあ。飲んでみるか」
「最初からそうすればいいのに」
アンジェレッタの言葉が響く。何はともあれそのすっぽんエキス入りのマムシ酒に蜂蜜をたっぷりと入れてから飲む。しかもリッター単位のカップでである。これもアンジェレッタが出してきたものだった。
「何処から出たんだよ、そんな大きなもの」
「いつも持ってるのよ」
アンジェレッタは平然とジョバンニに答える。

第九十三話　薬地獄その二

「だからよ」
「いや、そういう問題じゃないだろ」
ジョバンニは彼女にさらに突っ込みを入れるのだった。
「何処から出したんだよ、そんなでかいの」
「普通に。ポケットからだけれど」
平然とした答えがまた返ってきた。
「何かおかしいの？」
「おかしいって御前のポケットは何なんだよ」
そう言われてはいそうですかと納得できる筈もなくまた問う。どう考えてみてもどう見ても今の彼女の持ち物にはそんなものをなおせるような場所はないからだ。
「四次元ポケットか！？この酒だって」
「気にしない気にしない」
「気にしないってなおい」
「さあ、入ったわよ」
ジョバンニの言葉をよそに酒を入れていた。見ればそのカップに酒が全部入ってしまっていた。瓶にはマムシがいるだけである。
「さああどうぞどうぞ」
「薬じゃなくて酒の飲み方だな」
その巨大なカップを受け取ってのジョバンニの言葉である。
「これってよ」
「それだけ飲まないと駄目なのよ」
アンジェレッタは言う。
「やっぱりね」
「やっぱりって言うけれどこれはまた多過ぎるだろ」
こうアンジェレッタにクレームをつける。一応は。
「一度にこんなの飲んだらそれこそ」

「酔っ払うって言いたいの？」
「そうだよ、それだよ」
ジョバンニが今度言いたいのはそれであった。
「酔わないか？本当に」
「酔うけれどそれ以上に元気になれるわよ」
「そうなのか」
「だから。一週間寝ないでいいのよ」
本当に危ない薬レベルである。
「それだけギンギンになるから」
「だから女子高生がギンギンなんて言うなよ」
「じゃあビンビン？」
「もっと駄目だよ」
コップを口に近付けながら述べる。
「教師ビンビン物語なんてな」
「よくそんなドラマ知ってるわね」
「偶然中学校の時に再放送かかってたんだよ」
非常に古い日本のドラマである。千年以上前の日本のドラマをリメイクした作品だ。アルゼンチンやコロンビアで人気だったのだ。
「それでな」
「観てたの」
「ああ。まあとにかくだ」
ジョバンニは話を少し強引に戻してきた。
「これ飲めばいいんだよな」
「そうよ」
アンジェレッタも答える。
「それで万事解決よ」
「そうか。それなら」
「ささ、一気に」
さりげなくとんでもないことを勧めるアンジェレッタだった。
「飲んで飲んで」

「一気かよ」
それに文句を言いながらも飲む。本当に一気だった。飲み終えると最初の言葉は。
「凄い味だな」
「そうでしょ」
アンジェレッタはジョバンニのその言葉を当然として受けていた。
「味はね。そうなのよ」
「蜂蜜ないととても飲めないぞ」
顔が苦味に満ちたものになっている。
「こんなの」
「味はともかくとして。どう？」
「どうって？」
「元気になってきたでしょ」
「んっ、そういえば」
実感してきた。何か身体に力がみなぎってくる。
「これ、凄いな」
「だからお勧めなのよ。これはね」
「そうだったのか。何か酔いよりも本当に」
「元気になってきたわね」
「ああ」
アンジェレッタの言葉に答える。

第九十三話　薬地獄その三

「成程、これなら本当に一週間寝ないでいけるぞ」
「私のお薬は完璧よ」
にこりと笑って右目をウィンクさせての言葉だった。
「だから。これ位は普通なのよ」
「そうなのか。今回は有り難うな」
「御礼はいいから。また何かあったら」
礼はいいとしてまた言ってきた。
「来て。万事解決よ」
「身体のことならか」
「そういうこと。少なくともそれでもう大丈夫よね」
「ああ。っていうかだ」
早速異変を感じだしたのだった。
「何だ!?本当に」
「ギンギンになってきたでしょ」
「なってきたっていうか危ないぞこれ」
戸惑いながらアンジェレッタに対して言う。
「こんな調子だとそれこそ今日一日どころか一週間の間」
「寝られないわよね」
「ああ、それだけじゃない」
それで済むとは思えないものがあった。
「身体が熱くなって。何か」
「服破いて上半身裸になりそう?」
「ああ、そうだよ」
随分古典的な話になっている。
「世紀末救世主になったらどうするんだ、おい」
「そこいらのモヒカンやっつけに行ったら?」
「あんなのが街をうろついていてたまるか」

すぐにまた突っ込みを入れる。
「核戦争後の世界とか地震が起こった後の関東とか魔界都市とかいうのもなしだからな。あんなとんでもない世界になったら縁起でもない」
「よく知ってるわね」
ジョバンニが咄嗟に出した三つの世界を聞いての言葉だった。
「そんなに」
「じゃあ俺は世紀末救世主にならなかったら鉈みたいなジャックナイフを持っている大男か煎餅屋をやっている黒づくめの美男子になるのか？」
「どれもそうそうなれるの？」
「世紀末救世主だってそうだろうが」
三つ共あまりにも個性的である為にこの時代においても古典として親しまれている作品である。とりわけ世紀末救世主のそれは連合では非常によく読まれている。
「とにかくこのままだとな」
「身体が破裂しそう？」
「そうだよ、幾ら何でもこれは」
「仕方ないわね」
アンジェレッタはそれを聞いて微笑む。そのうえで言うのだった。
「じゃあそれへのお薬あげるわ」
「そういうのもあるのか」
「言ったでしょ。お薬なら何でもあるって」
「ああ」
言葉に偽りはないということらしい。それを今ジョバンニにあらためて告げてきていた。
「元気を少し弱めるお薬もあるわよ」
「じゃあそれくれ」
聞いて即決だった。
「さもないと今にも」

「わかったわ。それじゃあね」
「まずは何だ？」
「目を閉じて」
最初にまずこう言ってきた。
「目をか」
「そうよ。目を閉じて」
「薬飲むのに目を閉じる必要があるのか？」
「あるのよ」
しかしアンジェレッタは言う。
「これがね」
「！？」
ジョバンニはアンジェレッタの今の言葉を聞いて思わず頭にクエスチョンマークを浮かび上がらせた。何が何だかわからなかった。

第九十三話　薬地獄その四

「どういうことだ、それって」
「いいから目を閉じるの」
しかしアンジェレッタはまた言う。
「わかったわね」
「ああ」
何だかよくわからないが頷いた。
「わかったよ。それじゃあな」
「わかればいいのよ」
彼が頷くのを見てまずは満足した顔で微笑むのだった。
「すぐに済むからね」
「すぐって塗り薬か？」
「それは内緒よ」
やはり答えようとしない。あくまで謎であるようだ。
「だから。早く」
「ああ、目を閉じるんだな」
「そういうこと。覚悟はいいわね」
「覚悟なあ」
その言葉を聞いて余計に訳がわからなくなる。
「何なんだ、薬飲むだけで」
「良薬口に苦しよ」
それこそ何千年も前から使われている言葉が出て来た。それを聞いてさらに訳がわからなくなる。しかしそれでもジョバンニは大人しくするのだった。
「そして」
「そして？」
「時に甘しよ」
「甘いのか」

「お薬にもよるけれどね」
「どうやらそうらしい。彼女の言葉では。
「そうなのよ」
それをまた言う。
「わかったらじゃあ」
「何かよくわからないままだがわかった」
実にいい加減な言葉だったが今のジョバンニの偽らざる心境だった。
「甘いんだな」
「そう、甘いから安心して」
「わかった。じゃあ目を閉じてだな」
「いいわね、今から」
「ああ」
こうしてまずは目を閉じた。だがそれはすぐだった。またアンジェレッタの声がしてきたのである。
「目を開けて」
「!?もうか」
「ええ」
また彼女が応えてくる。それに従って目を開けるとその前には。
「・・・・・・っておい!」
「んっ」
何とアンジェレッタが自分の顔を彼に近付けてきていた。静かに目を閉じて。そのうえで彼の頬にそっとした感じでキスをするのだった。キスをされたジョバンニは思わず声をあげてしまった。
「一体何するんだよ」
「何をってキスよ」
キスを終えたアンジェレッタはしれっとして彼に答える。顔を離し目を開けていつもの顔になっている。
「見たらわかるじゃない」
「そうじゃなくて何でキスなんだよ」

彼はこう抗議するのだった。
「薬じゃないのかよ、薬じゃ」
「お薬っていっても色々あるのよ」
やはりしれっとしての言葉だった。
「色々とね」
「その中にはキスもあるっていうのか！？」
「そういうこと。わかってるじゃない」
「何処が薬なんだ」
彼は顔を真っ赤にさせて言う。見ればその手までが真っ赤である。
どうやら相当恥ずかしいらしい。アンジェレッタは白いので見事な対比になっていた。
「これの何処が」
「けれど。治ったじゃない」
「治った！？」
「そうよ。身体が熱いの」
そもそもこれもアンジェレッタのせいであるが。

第九十三話　薬地獄その五

「治ったわよね」
「治ったどころか余計に熱いぞ、おい」
身体が真っ赤になっているのがその証拠だ。本当に赤くなっていて如何にも暑そうである。我慢できない程であるようだ。
「こんなのって」
「それもすぐよ。だってすぐに急に熱くなったら」
「ああ」
「冷めるのはすぐよ」
「ううう・・・・・・」
「はい、アイスクリーム」
またポケットから普通に出してきた。コーンの上に丸い白いアイスクリームが置かれている。
「これ食べて。さらに冷えるわよ」
「あ、ああ」
熱くなったままそれを受け取る。食べていると確かに身体が冷えてきた。もう白くなっていた。
「悪いな」
「どう？熱さが大分ましになったでしょ」
「確かにな」
それはその通りだった。否定できない事実だった。
「それはそうだけれどな」
「じゃあそれでいいじゃない。元気だけが残るし」
「そういう問題か！？」
「そういう問題よ」
またしても随分と強引な話だった。
「とにかくね。これで元気になったでしょ」
「ああ」

「御礼はいいから」
そのうえで今度はこう言ってきた。
「安心してね」
「安心するのはいいけれど今のキスは」
「何？」
「御前ひょっとして誰にでもキスするのか？」
怪訝な顔でアンジェレッタを見下ろして問う。
「まさかとは思うが」
「まさか」
自分の方からそれを否定するアンジェレッタだった。
「そんなわけないじゃない」
「そうだよな」
「気に入った相手だけよ」
そのうえでこう言う。
「気に入った相手だけね」
「気に入った相手だけっていうと」
「こっちからキスしたのよ。いいわよね」
何となくだが話がわかってきたジョバンニを見上げつつ述べてきた。
「それで」
「それでってつまり」
「断ることはできないわよ」
またしてもといった感じで随分と強引な言葉を出して来た。
「わかったわね」
「今やっとわかったよ」
ジョバンニはうんうん、と小さく頷きながら彼女の言葉に答えた。
「これでな」
「わかったら一緒に行きましょう」
自分の手と相手の手を絡み合わせる。もうそれで完全に彼氏と彼女だった。

「学校にね」
「ああ、わかったよ」
「ただし。これは内緒よ」
「内緒ってここまでおおっぴらにやってかよ」
随分と矛盾していると思ったがアンジェレッタにとってはそうではないらしい。これが彼にとっては随分と理解不能なことではあった。
「それは幾ら何でも無理だろ」
「大丈夫よ。うちの学校生徒数多いから」
「まあそれはな」
一体何万人いるのか想像もつかない程だ。少なくとも高等部で一万は優にいる。それも一学年でだ。人口の多い連合だがそれでもかなり多い。
「校門だって一つじゃないし」
「だから大丈夫か」
「そういうこと。内緒にしていればいいのよ。それに」
「それに？」
「キスは挨拶じゃない」
にこりと笑ってジョバンニに言ってきたのだった。
「違うかしら」
「挨拶か」
「そうよ、挨拶」
アンジェレッタはまた言う。

第九十三話　薬地獄その六

「ほんの挨拶よ」
「それで済ませていいのか？」
「何言ってるの、ラテン系が」
今度はラテン系であることを強調してきた。連合でもラテン系国家は多い。その評判はやはり底抜けに明るいということである。連合は全体に明るい国家が非常に多い。それにはこのラテン系が非常に大きく影響しているのである。
「こんなのアルゼンチンでも普通でしょ」
「家族同士ならな」
「だったらそれでいいじゃない。恋人も家族も同じよ」
「だから付き合うっていうのは内緒だろ」
「それでもよ。付き合ってるのは事実よ」
「しかももう付き合ってることになってるんだな」
ジョバンニにはそれもまた釈然としないものがあった。しかしもうそれは言っても仕方のないところにまで話が進んでいた。というよりはアンジェレッタが強引にそうさせてしまっていた。
「何かな」
「わかったらいいわよね。秘密よ」
「ああ、わかったよ」
釈然としないまま彼女の言葉に頷いた。
「じゃあそれでな」
「そういうことよ。さて」
話が一段落したところでまたジョバンニに言う。
「これから宜しくね」
「ああ、こちらこそな」
これで二人の秘密の交際がはじまったのだった。話を終えたジョバンニは。まずは大きく息を吐き出した。深呼吸の様に。そのうえ

でまた三人と一匹に対して言った。
「これがはじまりなんだよ」
「そうだったの」
「ああ、意外な話だったか？」
レミに対して問う。
「この話は」
「意外って言えば意外ね」
レミもそれは否定しない。
「何ていうかね。アンジェレッタは確かに強引だけれど」
「それは薬のことだけだと思っていたからな」
マチアも言う。
「そうしたことに関してもだったのか」
「そうさ。今でもかなり強引だがな」
ジョバンニはこうも三人と一匹に告げた。
「そうなんだよ。かなりな」
「まあアンジェレッタらしいっていえばらしいわね」
「そうだね」
ジョンはレミの言葉に対して頷いた。
「とんでもないお薬出すところなんか特にね」
「あれには正直参った」
ジョバンニはここで首を横に振る。その動作から本当に参っていたのがわかる。
「あれはないだろうと思った」
「マムシ酒ねえ」
レミはそのことを思って少し気持ちが悪くなった。
「物凄い味らしいけれど」
「きついぞ」
ジョバンニは彼女に答えた。
「正直に言ってな」
「やっぱりきついの」

「蜂蜜を入れないととても飲めたものじゃない」
こうも述べる。
「匂いも凄いしな」
「何か恐ろしい薬だな」
「お酒としてもあれだね」
マチアとジョンも真顔で額に汗を流していた。
「キワモノっていうか」
「普通はないな」
「確かに元気が出るっていうのは聞いてるわ」
レミが言う。これは有名だった。
「それでも普通は出さないわよね」
「あいつだからだな、やっぱり」
マチアの結論はこれであった。
「それを出すのは」
「他にはすっぽんだよね」
「ああ、そうだ」
ジョバンニは今度はジョンの問いに答えた。

第九十三話　薬地獄その七

「それが終わってからも何かあれば高麗人参だのオットセイのエキスだの大蒜だの出してくるな。食べるのもとろろとか鯉とかそういうのが多いしな」
「あとは鰻ね」
「そう、それもだ」
どれも精のつくものばかりだ。
「薬膳ものばかりだ。しかもかなりきついのをな」
「本当にあいつらしい」
マチアは言う。
「まああいつにしたらましなものだがな」
「ドードーの羽根は何の効果があるんだ？」
「さあ」
レミは今のジョバンニの言葉には首を捻る。
「ドードー自体は美味しいけれどね」
「脂が乗っててな」
「そうそう」
ついでにマチアの言葉にも頷くレミだった。ドードーはこの時代では鶏の様に養殖もされている。太っていて肉も多く美味しいのでそうなった。品種改良で卵を多く産めるようにもなり卵もよく食べられている。これは駝鳥やオオウミガラス、モア等も同じだ。八条学園の食堂でもメニューとしてある。
「けれど羽根！？」
「漢方医学か何かの感じでな。使うんだよ」
こう三人に話す。
「薬に入れてな」
「羽根をねえ」
「何かよくわからないな」

レミとマチアはそれを聞いて首を傾げることしきりだった。
「お薬にはならないわよね」
「飾りならともかくな」
「そこはあれだよね」
ジョンも言う。
「アンジェレッタにしかわからないわよね」
「そうね」
そう言い合うのだった。やはりそこはわからないのだった。
「とにかくね」
「ああ」
それでもレミはジョバンニに対して話を続ける。ジョバンニもそれに乗る。
「アンジェレッタとは付き合ってるのよね」
「今でもな」
これははっきりと認めるのだった。
「内緒だけれどな」
「よく今までばれなかったわね」
「内緒だからだ」
彼はこう言うがレミは違っていた。
「ばれなかったのは」
「うちのクラスのメンバーによ」
しかしレミはジョバンニのその言葉を否定してこう言ってきた。
「鋭い子多いからね、うちのクラス」
「そうだな。それはな」
マチアもレミのその言葉に頷いて答える。
「ジュリアとかペリーヌとかな」
「そうよね、あの二人だけじゃないし」
「とにかく個性的な顔触れの多いクラスなんだな」
「まあそれはね」
レミがまたジョバンニに応える。

「それがウリのクラスだしね」
「中には物凄いのもいるな」
「否定はしない」
それはマチアが最もよくわかっていることだった。
「気にするなという方が難しいだろうがな」
「ああ。アンジェレッタにしろな」
「それにしても。本当に驚いたよ」
ジョンの言葉だった。
「アンジェレッタに彼氏がいるなんてね」
「しかもまともだし」
「まともが悪いのか？」
「いえ、珍しいのよ」
レミの言葉もまたかなりのものだった。

第九十三話　薬地獄その八

「だから。個性派ばかりのクラスじゃない」
「ああ」
「まともな子っていないのよね」
「管はどうだ？」
「管も管で凄いじゃない」
レミはクラスで何故か極めて目立たない管について述べた。話を振ったのはマチアだった。
「特殊技能幾つも持ってるしね」
「特殊技能か。確かにな」
「それはそのものよ」
こうまで言い切るのだった。
「彰子だって。すっごい天然だし」
「あれも凄いな」
「馬鹿ツートップは相変わらずだし」
テンボとジャッキーのことである。
「最近は大人しいかしら」
「一応はそうだな」
つまり大きな騒動を起こしていないということである。この二人がいて騒動が起こらないということもない。実に困った人間なのである。
「また何かしでかしそうだがな」
「近いうちに絶対にしでかすでしょうね」
「しでかすのか」
「そういうことなのよ」
ジョバンニにも言う。
「あの二人はね」
「アンジェレッタもだよな」

ジョバンニの言葉だ。
「しでかすっていうのは」
「あんた、アンジェレッタのお薬いつも飲んでるのよね」
「いつもじゃないぞ」
こうは断りはする。
「流石にな」
「そう。それでも何かえげつない副作用に襲われたこととかない？」
「副作用か」
「例えば身体が変わるとか変身するとか」
レミも何気に無茶苦茶を言う。
「そういうのはなかったの？」
「そこまではないぞ」
ジョバンニは真顔でそれを否定する。
「幾ら何でもな」
「だったらいいけれど」
「七転八倒はしょっちゅうだけれどな」
「やっぱり」
これはアンジェレッタの薬ではよくあることだ。だから皆驚きはしない。
「そうだと思ったわ」
「特に効果があるやつでそうだな」
彼はこう述べた。
「副作用が強いのは」
「具体的にどんな感じ？」
ジョンが尋ねる。
「その副作用って」
「それはあんた達もよく知ってるだろ」
彼の言葉の返しだった。
「そういうのはな。違うかい？」
「不幸にしてその通りだ」

マチアは不幸という言葉をつけてまで述べる。見事な枕詞にさえなっているのが実に恐ろしい。同時にアンジェレッタらしかった。
「よく知ってるつもりだ」
「知りたくはないけれどね」
「一番酷かった時はな」
「ええ」
そちらにも話がいく。
「頭の髪の毛が全部抜けた」
「全部って」
随分とえげつない話であった。
「何の薬よ、それって」
「それはこっちが知りたい」
一言だった。
「風邪をなおす薬だったんだがな」
「白血病じゃなくて？」
「残念だが違った」
また随分と有り得ない話であった。少なくとも普通の風邪薬ではない。
「抗生物質の影響らしいな」
「それ、抗生物質！？」
温厚なジョンですら顔を顰めずにはいられなかった。
「本当に」
「さてな。しかしだ」
「ええ、しかし」
「その後も酷かった」
その髪の毛が一本もなくなった時のことを思い出しての言葉である。
「毛生え薬もらったんだが」
「ええ、毛生え薬」
なおこの時代禿は治る病気になっている。だから禿はかなり少な

くなっている。
「それを飲んだらな」
「どうなったの？」
「野人になった」
またしても一言だった。
「全身に濃い毛が生えてな」
「それはまた災難だったわね」
「脱毛クリーム塗って何とかなったが。顔にまでだぞ」
「顔にも毛が！？」
「猿みたいになった」
またしても一言で言う。憮然とした顔で。
「だから野人になったんだ」
「そういうことね、成程」
「全く。困ったことだった」
ジョバンニの憮然とした言葉が続く。
「どうしてこんなことになるのかな」
「それでも付き合うのね」
「ああ」
しかしこれは変わらないのだった。
「それはな」
「頑張るわね。あんたも」
「まあそれはな」
ここで少し苦笑いになるのだった。何処か楽しそうに。
「こっちも色々とな」
「じゃあ頑張りなさい」
レミの言葉が温かいものになった。目もジョバンニを見守るようなものになり表情もまた。その顔と目と言葉を彼に向けているのであった。
「よくね」
「ああ、それはな」

そしてジョバンニもそれに頷く。
「頑張るさ、これからもな」
「そうしなさい。じゃあ」
「ああ、これで話は終わりだな」
「あんたの健闘を期待してね」
これで話は終わりだった。かくしてジョバンニとアンジェレッタのことがわかった。しかしレミ達はそれは内緒にしておくのであった。

薬地獄　　完

２００８・５・１８

第九十四話　池の謎その一

池の謎

今学園内の池の一つで。ある噂が出ていた。
「河童が出るって！？」
「ええ、そうらしいわ」
コゼットがロザリーにそう話している。場所は教室で二人はロザリーの机のところで話をしていた。
「噂だけれどね」
「噂ねえ」
「まあうちの学校は」
ここでコゼットは言う。
「動物園も水族館もあるからね」
「ああ、それはな」
そういった施設も中にある。本当に何でもある学園なのだ。なお学園内には電車も通っている。あまりにも広いのでそうしたものも必要なのだ。
「時々お池に出たりもするな」
「そうね」
「けれどだ」
ロザリーはここで言う。
「それはシャチとか恐竜がだろ」
「まあそうだけれどね」
「けれど。河童はないだろ」
こうも言うのだった。
「あれは妖怪だろ？」
「まあそうね」
コゼットもロザリーのその妖怪という言葉に突っ込みを入れる。
「妖怪なのは事実ね」

「流石に妖怪はないだろ」
ロザリーはさらに言う。
「幾らこの学校でもな」
「いるかもよ」
しかしコゼットはふとした感じで述べる。
「ひょっとしたら」
「河童か」
「そう、河童」
また言う。
「河童が出るって噂なのよ」
「信じられないがな」
「信じる信じないは別にして出るのか？」
ロザリーはそれが甚だ懐疑的だった。目にもそれがはっきりと出ている。
「そんなの。そもそもどうしてそんなのがこの学校にいるんだ」
「さあ」
それについてはコゼットもわからないのだった。
「どうしてかしらね」
「どうしてかしらって。御前も知らないのか」
「知らないも何も私も見たことないのよ」
かなり無責任な言葉だった。
「河童なんて」
「河童って確か頭に皿があったよな」
ロザリーは己の頭の中にある河童のデータをやはり頭の中でイラスト化させつつ述べる。
「そうよ」
「それで口が尖っていて」
「ええ、それでね」
「背中に甲羅があったよな」
ロザリーはまたイラストを描いた。

「身体も緑色だったな」
「そうよ。日本の妖怪よ」
「けれどあれだろ？」
ロザリーはさらに言う。
「地球にあった頃の妖怪だろ？」
「ええ、そうよ」
コゼットはそのことにも答える。
「宇宙に出てからもあちこちで見たって報告があったけれどね」
「つまりあれか」
ロザリーはまた述べる。記憶を辿りつつ。
「未確認動物か」
「ＵＭＡよ」
コゼットが答える。
「つまりね」
「妖怪もそうなるのか？」
「一応はそうなるわ」
ということだった。
「正体がはっきりしないうちはね」
「エイリアンじゃないよな」
ロザリーの次の考えはこれだった。

第九十四話　池の謎その二

「ひょっとしたら」
「ああ、その可能性もあるわね」
ロザリーは言われたその場でまた気付いた。
「他の惑星からやって来た他の知的生命体かもね」
「だったら学園だけの問題じゃないぞ」
「人類社会全体の問題になるわね」
「本当のところはどうなんだよ」
ロザリーはそこも問う。
「何か話が滅茶苦茶凄いことになっているけれどな」
「それも調べてみない？」
コゼットはこうロザリーに提案してきたのだった。
「よかったら」
「河童が本当にいるかどうかだ」
「ひょっとしたら動物園か水族館から出て来た何かかも知れないし」
「人型だと猿か？」
「本当に妖怪かも知れないし」
こうも言ってみせる。
「そこんところはわからないからこそ調べがいがあるじゃない」
「それで調べて他の知的生命体だったらどうするんだ？」
「その場合はあれよ」
コゼットは答える。
「連合軍に知らせてね」
「理事長が国防長官なのが役に立つってわけか」
「そうね。あくまでその場合だけれど」
「本当に妖怪だったらどうするんだ？」
「その場合はまああれね」
コゼットは言ってきた。

「御祓いか陰陽師呼ぶかね」
「それか」
「セーラもいるし」
何気に人材の多い学園であった。
「そうした場合はね。セーラに任せるのが一番よ」
「人間じゃない相手には超人ってわけか」
「そうなるわね。あくまでその場合は、だけれど」
「アーケロンとかだったらいいけれどな」
ロザリーはここで恐竜の名前を出した。亀類の一種だが四メートルはある。最大の亀の一つとされていたが何とそれよりも遥かに巨大なグレートアーケロンも発見されている。これは十メートルを優に超えるとてつもなく巨大な亀であった。人類は様々な生物に出会っているのだった。
「けれど違うんだろうな」
「人型よ」
コゼットはそこを指摘する。
「あれは完全な亀じゃない」
「確かにな」
それは否定できない事実だった。
「エラスモサウルスでもないか」
「あんなの水族館から出たら危ないなんてものじゃないわよ」
首長竜の中でとりわけ凶暴な種類だ。とりわけ首が長い。
「ティラノサウルス並にね」
「まあそうだな」
確かに危なかった。言うまでもなく人を襲うこともあるのだ。だから水族館でも鮫や他の首長竜と同じ位注意して飼育されているのである。
「それよりましでしょ？」
「河童も危ないぞ」
しかしロザリーはここで言うのだった。

「危ないの？」
「河童は尻子玉抜くぞ」
そのことをコゼットに告げる。
「確かな」
「尻子玉？」
「何でも人間の身体にそんなものがあるらしいな」
これについてはロザリーもよく知らないようだった。名前は出したがそのうえで首を傾げもする。
「それを抜くらしいんだ」
「そうだったの」
「ああ、それで危険らしい」
ロザリーは言う。
「河とか池に引き込まれてな」
「じゃあやっぱり危ないのね」
「かなりやばいだろ。それでどうするんだ？」
「やっぱりセーラかしら」
コゼットの出した結論はそれだった。
「そんなやばい妖怪だと」
「結局妖怪になるのか？」
「そうじゃないの？」
どうもその辺りがはっきりしないのだった。やはり正体がよくわからない存在だからこれも当然であった。二人は河童が何なのかまだわかりかねていたのだ。

第九十四話　池の謎その三

「日本だし、ここ」
「日本っていえばこのクラスな」
「ええ」
「日本人少ないな」
ふとそれに気付いたのだった。
「そういえばな」
「そうね。二人だけね」
「彰子と管か」
その二人だった。
「彰子もな。何か今一つ目立たない感じがないか？」
「そうかしら」
「成績優秀でスポーツもできるけれどな」
「おっとりした性格だからね」
その性格のせいでクラスでの評判は高い。しかしどうも今一つ目立たないのだ。積極的に前に出る性格でもないということも影響している。
「それはね」
「そうだよな。あと管は」
「何考えてるかわからないわね」
「ああ、そうだな」
それが管だった。
「いるかいないかわからない時があるしな」
「存在感ないかって思ったら特殊能力多いし」
「わからない奴だよ」
そうなのだった。
「食う量だって半端じゃないしな」
これはこのクラスなら誰でもそうだがそれでもかなりのものなの

だ。
「この前マンモスのステーキな」
「ええ」
「胴体分は食ってたぞ」
「うわっ」
これを聞いてコゼットも思わず声をあげる。
「それはまたかなり凄いわね」
「ポルフィ並に食うぞ」
こうまで言う。
「とにかく食うからな」
「凄いわね、それはまた」
「ああ、そういえば河童の食い物だけれどな」
「河童の？」
「知ってるか？」
それをコゼットに尋ねた。
「何を食うのか」
「さあ」
だがコゼットはその質問に首を捻るのだった。全く知らなかった。
「何を食べるのかしら」
「知らないのか」
「お魚じゃないの？」
少し考えてからこう述べる。
「お水の中にいるんだし」
「魚か？」
「多分」
また答える。おぼろげな感じのままで。
「そうじゃないのかしら」
「そうか、魚か」
「まずはそれを用意しておく？」
「池にだな」

「ええ。そのお魚は」
「鰯にしとくか？」
「海のもの？」
「ああ、これ駄目だな」
言った側からすぐに気付いたロザリーだった。
「河のだったよな」
「ええ。だから」
「鯉にしとくか」
それにするということになった。
「やっぱりここは」
「そうね。鯉なら問題ないと思うわ」
コゼットもそれに頷く。
「河のものだし」
「そうだな。じゃあ鯉を用意してな」
「そうね。ただ」
「ただ。何だ？」
ふとした感じで出て来た今のコゼットの言葉に対して問うた。

第九十四話　池の謎その四

「何かあるのか？」
「鯉じゃない」
まずはそれを言う。
「餌にするのはどうかしら」
「そうだな。それよりもな」
ロザリーもコゼットの考えはわかった。それは。
「食べるんだな」
「そういうこと。どうかしら」
こうロザリーに提案するのだった。
「二人で食べちゃうのは」
「流石に鯉はな。そうだよな」
「そういうこと。だから囮はね」
コゼットはさらに提案を続ける。
「鮒にでもしてね」
「そうだな。鯉は私達で食っちまおう」
そういうことになったのだった。ごく自然に。やはり美味いものには勝てず話はそういう流れになるのだった。鯉はこの時代のどの国でもよく食べられているのだ。
「そうだな」
「そうよ。それじゃあ」
「ええ。鮒を用意してね」
「ああ。それでな」
ロザリーは言葉を続ける。
「まずは鯉を食ってから話をするか」
「ええ。何で食べる？」
それについても話すのだった。
「鯉。どうしようかしら」

「中華風でどうだ?」
ロザリーの考えはこうだった。
「それでな」
「そうね。それがいいわね」
コゼットも賛成する。まずは鯉を二人で油にあげてから餡かけにしたものを食べて鮒を飼ってそれを餌にすることにしたのだった。
そうして食べることにしたのだった。
「さて、とだ」
夜の学園。そこに二人はいた。ロザリーの手には青いバケツがある。その中に数尾の鮒があった。見ればかなり新鮮なものである。
それを持っているロザリーが。隣で歩いているコゼットに声をかけた。二人は並んで夜の学校の中を歩いているのであった。
「いよいよだな」
「そうね」
コゼットはロザリーの言葉に対して応える。二人は明るいものだ。周りは暗く誰もいないが。
「鯉も食ったし力もついたしな」
「やっぱり鯉よね」
コゼットはにこりと笑ってロザリーに答えた。
「美味しいわね」
「美味いだけじゃないしな」
ロザリーもまたにこりと笑っている。そのうえでの言葉だった。
「力もつくしな」
「そうなの」
「そうだ。鯉はだからいいんだ」
やはりにこにことしている。そのうえでまた言う。
「それ考えたら鯉にしておいてよかったな」
「そうね。それで餌は鮒」
「鮒も食えるぞ」
ロザリーは鮒についても言及した。

「鮒も？」
「食えるぞ。味はまあ」
ここで微妙な顔になる。
「まずいのね」
「鯉の方が美味いな」
やはりそうなのだった。鯉の方が美味しいというのだった。
「それに河童の餌だったら鮒の方がいいんじゃないのか？」
「鮒の方がいいの」
「そう、鮒がな」
また言う。
「いいんだよ」
「匂いがきついから？」
「そう思うんだがどうだ？」
それをまた問う。
「河童っていつも水の中にいるしな。だからな」
「それを言ったら鯉もだけれどね」
「鯉はあれだ」
ロザリーは答えながら少し苦笑いになった。そのうえで述べる。

第九十四話　池の謎その五

「美味いからな」
「だから人間が食べるのね」
「美味いものは人間が食べないとな」
それが彼女の考えだった。妥当だと言えた。
「そうだろう？やっぱり美味いものを食わないと駄目なのさ」
「それを考えたらいい提案だったでしょ」
「ああ。美味かった」
屈託のない笑みだった。その笑みで歩いていく。そうして。
「この池だよな」
「ええ」
その池に辿り着いたのだった。学校の数多くある池のうちの一つだ。初等部にあった。
「あの池よ」
「何かな。如何にもって感じだな」
「そうね」
その池はほとりに柳があり蓮がまばらに浮かんでいる。うっすらと蜻蛉が飛んでおり白い満月を映させている。幽玄な中に何処か朧なものがある。そうした池だった。日本風の如何にも河童が出て来そうな池であった。
「こんな池あったのか」
「っていうかさ」
コゼットが言う。
「本当に如何にもって池よね」
「全くな。本当に幽霊が出てもおかしくない」
「河童だけれどね。それでも幽霊が出そうね」
「日本の幽霊だな」
「そういうこと」

二人はこう言い合う。
「あの足がなくて手が垂れたやつね。うらめしや～～～～っていう」
「あの幽霊もよく見るな」
白い着物で頭には同じ色の三角の布がある。それこそ今だに変わらない日本の幽霊の格好である。これが変わることはまずないとまで言われている。
「テレビとかでな」
「あの柳のところにいても不思議じゃないでしょ」
「あそこが一番だな」
ロザリーはコゼットのその言葉に頷いた。そのうえでまた言うのだった。
「出るっていえばな」
「じゃああそこに置く？」
話はそこに至った。
「河童の餌。どう、あそこで」
「そうだな。いいんじゃないか？」
ロザリーもそれに同意した。確かにあそこならと思ったのだ。感覚的に。
「あそこでな」
「じゃあ決まりね。鮒を置いて」
「河童は肉食性だったよな」
「そうじゃないの？」
これは二人の完全な思い込みである。両方共今の今まで殆ど疑っていない。
「多分だけれど」
「じゃあいいよな」
とりあえずはそれでいいとしたのだった。ここでも二人は河童についてあまりよくは考えていなかった。実際のところ調べてもいなかった。河童に対して。
「あそこに置いてだ」

「離れた場所で見ておいてね」
「じゃああそこがいい」
ロザリーが指差したのは物陰だった。
「あそこに隠れて見張ろうな」
「わかったわ。それじゃあね」
「ああ」
こうして二人は柳の下に鮒を置きそのうえで物陰に隠れて見張った。しかし河童は現われずそのまま朝になってしまった。翌朝二人はへとへとの様子で教室にいることになった。そこで疲れきった顔で向かい合って話をするのであった。
「出なかったな」
「そうね」
机に座って向かい合いながら話していた。
「鮒じゃ駄目なのかしら」
「やっぱり鯉なのか？」
ロザリーはふとこう考えた。
「あっちの方が美味いからな」
「そうかもね。だったら今度は鯉にしましょう」
「ああ、そうだな」
そんな話をしていた。するとその二人のところに。セーラが天女の様な清らかな笑みを浮かべてやって来たのだった。
「どうされたのですか？」
「あっ、セーラ」
「ちょっとね。実は」
「河童ですね」
コゼットが言おうとしたその時だった。セーラの方から言ってきたのだった。
「河童を探しておられるのですね」
「ってわかるの」
「どうしてわかったんだ！？」

「テレパシーです」
いきなりこれであった。

第九十四話　池の謎その六

「心を感じました。河童を探しておられると」
「わかったのかよ」
「相変わらず凄い能力ね」
「マウリアでは超能力は大したことではありません」
彼女の言葉である。あくまで。
「ですから御気になさらずに」
「そうなのか」
「そうです。それでですね」
こう述べたうえでまた語りだしてきた。
「私も最近この学園に河童が出て来ていることは知っています」
「ああ、やっぱり知ってたか」
「はい。初等部の柳のあるお池に」
そこまで知っていた。
「あそこに毎晩出るとか」
「それが出ないんだよ」
「どうしてかしらね」
二人は言う。
「昨日餌仕掛けたんだよ」
「それでも。全然」
「鮒ですか」
セーラはそれも言ってきた。
「またテレパシー？」
「はい」
その清らかな笑みでコゼットに対して答える。
「感じました」
「超能力ね、本当に」
「他にはクレヤボレンス、サイコキネシス、テレポーテーションも

使えます」
　とにかく何でも使えるようである。
「魔術も勉強中です」
「マウリアじゃそれが普通なんだよな」
「はい、至って普通です」
　本人曰くそうなのだった。
「誰もが使っています」
「本当みたいね」
「何でそう思えるんだろうな」
　信じるロザリーもまたそれが不思議だった。不思議だがそれ以上に引っ掛かるものがあった。
「私もわからないんだけれどな」
「まあとにかく」
　コゼットは話を元に戻してきた。話をしてもラチが明かないと判断したのである。
「鮒だったらどうかしら。いいわよね」
「あまりいいとは言えません」
　しかしセーラはこう答えるのだった。
「残念ですが」
「どうしてなの？」
　答えられたコゼットはすぐにその理由を尋ねた。
「鮒じゃ駄目なの」
「河童ですから一番いいのがあります」
「河童なら？」
「何なんだ、それは」
「胡瓜です」
　ここでコゼットは意外な食べ物を出してきたのだった。あくまで二人にとっては意外である。
「胡瓜がいいのですよ」
「胡瓜が！？」

「あれがか」
「はい、河童は胡瓜が大好きなのです」
そのことを二人に対して述べるのだった。
「ですから本当に河童を捕まえたいのでしたら」
「胡瓜を用意しておくのね」
「それも生で新鮮なものを」
こうも言い加えてきた。
「用意しておくべきです。河童は妖怪の中ではかなりデリケートです」
「デリケートなの」
「はい、ですから」
これも二人に言うのであった。
「それを用意しておきましょう」
「わかった。じゃあ胡瓜だな」
「ええ。それにしても意外ね」
コゼットは今度はロザリーに対して言った。

第九十四話　池の謎その七

「胡瓜が好きだなんて」
「魚じゃなかったんだな」
「基本的に雑食みたいですけれどそれが一番好きなんですよ」
「そうか。何か意外というかな」
「そうね。かなり意外」
二人はそれに応えてまた言う。
「胡瓜だなんて」
「お寿司でありますよ」
セーラはその二人に寿司の話を出してきた。
「河童巻きって。ありますよね」
「んっ！？ああ、そういえばあるな」
「あれだったの」
言われてはじめて気付く二人だった。
「だからあれは河童なのか」
「そういう理由があったのね」
「そうなんですよ。日本人は昔から河童と親しんできていますから」
日本文化の特色として妖怪やそうした類と融和してきているのだ。これは自然と共存してきたからである。この時代では人類は二十世紀とは全く違い文明を維持しつつ自然と共存しているのである。そうした意味では人類は進化していると言えるものが存在しているのだ。
「ですからお寿司にも使われているんですよ」
「日本人は凄いな」
「そうね、かなりね」
二人はそのことを理解して感心することしきりであった。
「妖怪と共存して寿司の名前にまで使うなんてな」
「普通はないわ」

「マウリアもそうですよ」
セーラがにこりと笑ってまた二人に告げる。
「妖怪ともまた共存しています。ヤクシャやラークシャサやピシャーチャと」
「いや、その連中は違うんじゃないの？」
「っていうか本当にいるのか」
ヤクシャやラークシャサがどういった存在かは二人は童話で知っていた。簡単に言えば人を襲って食う鬼である。日本にも鬼はいるがより凶悪なのだ。
「マウリアには」
「よかったら学校にも何人か」
「や、止めろ！」
「そんなの来たら本当に食べられちゃう人いるじゃない！」
「大丈夫です。虎に食べられる人よりは少ないですから」
セーラは平気なものである。
「虎に食べられる人は雷に当たる人より少ないんですよ」
「そんな問題じゃない！」
「とんでもないことになるから！」
ずれているセーラに必死に突っ込んでそれを止めさせる。何はともあれ二人はセーラも加えて今度は胡瓜を持って河童を捕まえに再び夜の池に向かうのであった。
池のほとりで。三人は立っていた。この日も月がやけに奇麗である。その月を眺めつつまずはロザリーがセーラに対して尋ねるのだった。
「なあセーラ」
「はい」
「何か感じるか？」
気配を感じるかどうか尋ねるのだった。
「いるか？いないか？」
「いますね」

一言で答えが返って来た。
「間違いなく何かが」
「じゃあやっぱりいるのか、河童が」
「さて、それはどうでしょうか」
しかしここでセーラは懐疑的な言葉を言うのだった。
「それは」
「あれっ、河童の気配は感じないの？」
「はい。河童には河童の独特の気配があります」
どうやらそうらしい。彼女が言う分には。
「ですが今感じている気配はまた別です」
「じゃあ何なんだ？」
「静かな気配ですね」
こう述べる。
「比較的。穏やかな」
「穏やか！？」
「そういえば河童って確か」
コゼットはあることに気付いた。
「あれよね。人殺すのよね」
「ああ、尻子玉抜くんだったよな」
「そうそう」
それで有名なのだ。河童は確かにユーモラスな存在であり日本人には昔から親しまれているがそれでもこうした恐ろしい一面もあるのだ。

第九十四話　池の謎その八

「それで穏やかはないわよね」
「じゃあ何なんだ！？いるのは」
「わからなくなってきたわね」
「どうやらあれみたいですね」
「んっ！？」
ここで水面から何か出て来た。それは。
「あれっ！？あれって」
「イグアナじゃないか」
自ら出て来たのはイグアナだった。月の光にその黒い身体を見せている。イグアナはゆっくりと上にあがって胡瓜を食べはじめたのだった。
「河童じゃなくて」
「カワイグアナですね」
イグアナといっても色々な種類がある。星によっては淡水に棲むイグアナもいるのだ。淡水性のアザラシやイルカと同じようなものだ。
「これは」
「そうなのか、セーラ」
「どうやら最近このお池に来たようですね」
「ああ、それは有り得るわね」
このことに気付いたのはコゼットだった。
「だってここのお池って川につながってるじゃない」
「そういえばそうだったな」
八条学園はかなり広い学校だ。池だけではなく川も流れている。その川は海にまでつながっている。途方もなく長い川でもあるのだ。
「だったらイグアナが出て来ても不思議じゃないか」
「ないわよね、やっぱり」

「何だ、イグアナか」
ロザリーは正体がわかって拍子抜けした顔になる。
「河童かと思えばな」
「やっぱり河童っていないのかしら」
コゼットはこのことをかなり残念そうに呟く。その横ではイグアナが黙々と胡瓜を食べている。このイグアナは草食性なのである。
「いそうでいないわよね」
「ですからコゼットさん」
「何？」
「マウリアからそうした存在を御呼びしましょうか」
「ああ、それはいいから」
それはすぐに断るのだった。
「それはね」
「そうですか」
「だって。人を食べるんでしょ」
コゼットが気にしているのはそれであった。
「その存在って」
「大丈夫です。普段は魚を食べます」
普段と言う。
「ほんの百メートルの小さな魚です」
「百メートルかよ」
ロザリーはそれを聞くだけで言葉を失った。言葉は失っているがそれでも言うのだった。
「どんな魚なんだよ、それは」
「かつてアレクサンドロス大王がインドで出会ったという」
「そんなのまでいるのかよ、マウリアには」
またしてもわかった衝撃の事実だった。マウリアには恐ろしい謎が果てしなくあるのだった。
「宜しければそれを」
「絶対に止めておけよ」

ロザリーは本気の顔でそれを止めた。
「そんなの呼んだら大変なことになるからな」
「そうよ」
コゼットも言う。
「折角鰐や鮫のいない平和な川なのにそんなのがいたら」
「恐ろしいことになるぞ」
「そうでしょうか」
「ならない筈がないぞ」
ロザリーも参戦してきた。
「そんなものが出て来たらな」
「そうですか。ではそれは」
「止めておいてね。まあ謎は解けたし」
「ああ」
「帰る？もう」
「昨日徹夜だったしな」
二人は言う。それで疲れを感じているのだった。
「じゃあここは帰って寝ましょう」
「そうだな」
ロザリーはコゼットのその言葉に頷いて答えた。
「正直疲れたよ」
「全く。とんだ拍子抜けだったし」
「さて。それはどうでしょうか」
しかしここでセーラが言った。

第九十四話　池の謎その九

「果たしてそれは」
「果たしてそれはって」
「ひょっとしてまだあるのか？」
「はい、あれです」
こう述べて三人から見て左手を指差すのだった。
「あれを御覧下さい」
「イグアナはもう終わったのに」
「今度は森かって・・・・・・んっ！？」
ここで二人は見たのだった。
「な、何よあれ」
「何だあれは！？」
「モンキーマンです」
セーラは平然と二人に述べてきた。
「私の家のペットの一つです」
「ペットかよ」
「はい、肉食性の巨大な類人猿です」
どうやらそうらしい。
「木々の間を飛び交い目の前に見えるものを無差別に攻撃します」
「無差別にって」
「滅茶苦茶危ない生き物じゃないか」
「大したことはないですよ」
だがセーラの言葉は相変わらずだった。
「人間の子供も食べようとする程度ですから」
「人間の子供を食べようとする・・・・・・」
「マジで危ないな」
「虎と喧嘩しても勝てます」
「・・・・・おい」

さらに危ないことがわかる。虎といえば言うまでもなく猛獣の筆頭だ。哺乳類の猛獣の中ではとりわけ凶暴な種類の一つなのはこの時代でも同じだ。

「どうするんだよ、そんなの放置して」

「危ないなんてものじゃないじゃない」

「ですから。だいじょうぶなのです」

しかしそれでもセーラはこう言うのだった。

「至って平気ですから」

「じゃあどうするんだ？」

「これです」

出してきたのは何か得体の知れない壺であった。

「これを出します」

「それがどうなるんだ？」

「見たところただの壺だけれど」

「はい、ただの壺です」

本当にそうだった。二人は今の言葉を聞いて呆れることしきりであった。

「・・・・・あのなあセーラ」

「相手は虎に勝てる猛獣なんでしょ」

コゼットはそのことを指摘する。やはりそこが問題だった。

「そんなただの壺を出したところで」

「大丈夫だとは全然思えないんだが」

「ですから大丈夫なのです」

それでもセーラの言葉は変わらない。見事なまでに。

「全く以って」

「じゃあどうするの？」

「壺で大丈夫って言うけれどな」

「これを出しておくとですね」

「ええ」

「どうなるんだ？」

完全に信じていない顔でセーラの話を聞くのだった。とりあえず二人は今心の中でハンターか連合軍を呼ぼうと考えていた。警察よりも彼等をだ。

「すると」

「すると？」

「ほら」

「キキーーーーーーーーーーッ！」

ここで何とそのモンキーマンが出て来た。類人猿にしてはやけに大きく目は金色だ。しかも大きな牙を剥き出しにしてやけに凶暴そうである。

「おい、出て来たじゃないか！」

「どうするのよ！」

「想定の範囲内です」

今度の言葉はこれであった。

「完全に」

「そうかって言えないわよね」

「どうなるんだよ」

「詩ぜんに壺の中に入ります」

こう二人に答えた。

「それだけでです」

「そうなのか」

「何か蛸みたいね」

「モンキーマンは穴倉に住んでいまして」

どうやらそうらしい。二人にとっては思いもしない習性だ。そもそも二人はモンキーマンなぞという生き物のことを全く知らないのである。

「それでこうして穴に入ってしまうのです」

「何とまあ」

「意外な弱点だな」

「話はこれで終わりです」

壺に栓をしたうえで二人に答える。
「万事解決です。それでは帰りましょう」
「結局何が何だか」
コゼットがぼやくようにして述べる。
「わからないうちに終わったわね」
「全くだな」
ロザリーもその言葉に頷く。これ以降この河童の噂はなくなりそのかわりに池のイグアナが人気になった。思えば何ということはない騒動であった。

池の謎　　完

２００８・５・２６

第九十五話　白い影その一

白い影

八条学園においてロシュフォール先生が率いる白衣の風紀部は恐怖の存在と言われている。影の様に動き影の様に姿を現わして消える。そんな彼等を学園の者達は白い影とまで呼んでいる。とかく世の人々から恐れられている、そうした組織であるのだ。

ところが二年Ｓ１組の風紀部員であるローリーは。そんな恐ろしさとは無縁の存在だ。今日も彼は自分の教室でファッション雑誌を見ていた。そこにジュディが来て彼に尋ねる。

「今日の雑誌は何なの？」

「女の子のあれだよ」

「女の子のって」

「ほら、あれじゃない」

男がどうしてそんなものを読んでいるのかと思ったところで彼の方から言ってきた。

「男だってアクセサリー付けるじゃない」

「ええ」

それは確かにその通りであった。

「それでさ、そのアクセサリーだけれどね」

「それを探してるのね」

「実際女の子用の方がいいアクセサリー多いじゃない」

彼はこう言うのであった。

「それでこれで探してるんだ」

「成程、そうだったのね」

「そういうこと。探してみればかなりいいね」

既に赤ペンで幾つか丸をつけているものがある。どうやらチェックを入れたということらしい。

「どれもこれも。選ぶのも一苦労だよ」

「相変わらずファッションに凝ってるのね」
「まあね」
にこりと笑ってジュディに答える。
「否定はしないよ」
「それはそうとしてね」
「うん」
ジュディはそのうえでまた彼に対して言ってきた。彼もそれを受ける。
「あんたまだ風紀委員やってるの？」
「そうだよ」
あっけらかんとしてその問いに答えてきた。
「それがどうかしたの？」
「何かね。そうは見えなくてね」
こう彼に言うのだった。
「それで聞いたんだけれど」
「見えないって！？」
「だから風紀委員によ」
ジュディが言うのはそれであった。そのことをあらためて彼に言う。
「全然見えないわね」
「そうかな」
「っていうか自覚ないでしょ」
「あるよ」
平然として答えるのだった。
「一応はね」
「本当に？」
「本当だって。忘れたことはないし」
「そのわりに全然仕事してないじゃない」
ジュディの問いはかなり厳しいものだった。切れ味も鋭い。
「違うかしら」

「だって仕事する必要ないし」
やはりしれっとして答える。
「全然ね」
「そう？」
「このクラス全然風紀違反なんてないじゃない」
ローリーは言う。
「皆真面目だしね」
「真面目！？」
ジュディはその言葉を聞いて思わず顔を顰めさせた。
「何処がよ」
「だって服装は普通じゃない」
そもそもこの学校には制服がない。だからかなり自由なのだ。なお一応制服があるがそれこそ種類は無数にある。どれでも選べるのだ。
「違う？」
「服装はね」
ジュディもそれは認める。
「皆それ程間違ったものはないわね」
「じゃあいいじゃない、それで」
「服装以外はどうなの？」
ジュディが今度尋ねたのはそこだった。

第九十五話　白い影その二

「そこんところは」
「さあ」
「さあってあんた」
今の言葉には思わず突っ込まざるを得なかった。
「そこが一番大事なんじゃないの？」
「だってさ。風紀委員の仕事は風紀だよ」
「ええ」
「服装とかそんなのだけ見ていればいいんじゃない」
彼はこう答えたのだった。
「それだけで。日々の行いとかはね」
「全然いいのね」
「校則さえ犯していなければね」
こうも言う。
「僕的には全然いいよ」
「じゃあフランツとかのあれは？」
「まあいいんじゃないかな」
全然気にしていないのがわかる。
「そんなのもね」
「気にしていないの」
「だって。普通じゃない」
普通とまで言い切ってみせる。
「フランツにしろ」
「何処がよ」
ジュディはすぐにそれに疑問で返した。
「フランツみたいなのは見たことないわよ」
「あれっ、そうだったんだ」
「あんな熱血馬鹿他にいないわよ」

それをまた言う。
「滅多にね」
「何かフランツが聞いたら気分悪くしそうなんだけれど」
「そうかしら」
そういわれてもあまり実感をしていない感じだった。
「何か気にしなさそうなんだけれど」
「流石に気にすると思うよ」
ローリーはまた述べた。
「幾らフランツでも」
「じゃあ実験してみる？丁度今いるし」
「あっ、本当だ」
見ればその通りだった。よりによって叫びながら教室でシャドーピッチングをしている。フォームはかなりダイナミックなものである。
「確かにいるね」
「聞いてきたらすぐにわかるけれど・・・・・って言いたいけれど」
しかしここでジュディは難しい顔を見せてきた。
「あれは駄目ね」
「駄目って？」
「話が聞ける状況じゃないわね」
こう言って諦めるのだった。
「あんな状況じゃね」
「まあ熱中しているのは確かだね」
「とにかくよ」
ジュディは話を強引に戻してきた。
「本当にそれでいいのね」
「うん」
ジュディに対して答える。
「僕が動く必要は全然ないじゃない」

「動く必要はないのね」
「あの白衣の風紀部とは考えが違うしね」
「あの連中はねえ。何かいつも急に出て来るし」
何か違反があればすぐに出て来る。さながら秘密警察である。
「何なのかしらね」
「正体は不明だよ。そもそも」
「そもそも？」
「一応はここの生徒だよね」
そのことについても言及するのだった。
「確か」
「だからこの学校にいるんでしょ」
また答える。
「確かに連中が何時何をしているのかは不明だけれどね」
「ロシュフォール先生だけかな、知ってるのは」
その彼等を統括する実力者だ。彼がいなくてはその白衣の集団も動いたりはしない。そのことでもかなり有名になっているのである。
「けれどあの先生はね」
「近付かない方がいいわよ」
ジュディの言葉が剣呑なものになる。

第九十五話　白い影その三

「身の危険を感じたくなければね」
「何かよくわからないところもある学校だね」
「それはそうね。そういえば」
「何？」
「あの風紀部ってよく考えたらいつも急に出て来るじゃない」
そのことをまた言うのだった。
「それも校則違反をすればすぐに」
「うん」
「何かネットワークや監視システムがあるのかしら」
彼女が言うのはそれであった。
「ひょっとしたら」
「それを学園内に張り巡らせているってこと？」
「まさかとは思うけれど」
彼女は言う。
「ひょっとしたらね。あの動きは有り得ないわ」
「僕だってあれだよ」
今度は同じ風紀委員としての言葉だった。
「何かを見たち聞いたりしてから動くんだけれど」
「普通はそうよね」
「そうだよ。けれど彼等は」
「ええ」
そうしてさらに言うのだった。
「尋常じゃない速さで出て来るじゃない。それも何かしたらすぐに」
「悪事を働いたらもうその後ろに立っていてね」
「しかも集団で」
話せば話す程訳のわからない集団だ。少なくとも尋常ではないものがある。

「果たして何者なのかしら」
「これはかなりとんでもないかもね」
ローリーもいう。
「それ、調べてみるの？」
「どうしようかしら」
首をかしげてローリーに応える。
「そこのところ」
「そうだね」
ローリーもここで言うのだった。
「とりあえず考えないようにしようよ」
「へっ！？」
今のローリーの言葉に思わず顔を顰めさせるジュディであった。
「あんた今何て言ったのよ」
「だから。あの人達のことは考えないようにしようって」
それをまた言うのであった。
「これでどうかな」
「どうかなってそれだと何もならないわよ」
それをまたローリーに言う。
「何の解決にもならないじゃない。いい！？」
「うん、いいよ」
少しぼんやりとした感じでジュディの言葉に応える。
「それで何なの？」
「相手はね、謎の軍団よ」
何時の間にか軍団になっていた。どうにもこうにも話が飛躍していっている。
「謎のね」
「謎なんだ。それでも僕達には関係ないじゃない」
「関係ないってあんた風紀委員じゃない」
またその話になった。
「あの軍団と同じ」

「彼等は彼等、僕は僕だよ」
如何にも彼らしい言葉であった。
「それはね。完全にね」
「完全になのね」
「だからさ。彼等てゃまた違うんだよ」
「違うから全然そういうのないんだよ」
そのところを強調してみせるのだった。
「彼等を探ろうとかそういうのはね。そういうのこそテンボとかジャッキーの出番じゃないの？」
「あの二人は駄目よ」
瞬間的に駄目出しをした。
「絶対にね」
「絶対にって。二人は推理研究会じゃない」
「お騒がせ要員じゃない。あんたもわかってる筈だけれど」
「まあね」
流石に同じクラスで知らない筈はなかった。きっぱりと答えてみせる。
「そこのところはね」
「だったら。あの二人は駄目でしょ」
ジュディの口が尖ってきていた。

2011

第九十五話　白い影その四

「余計に」
「だからさ。結局のところはね」
「何もしないのが一番だっていうの？」
「僕はそう考えるよ」
またこう述べるのだった。
「やっぱりね」
「何もしないっていうのもねえ」
「だったら誰か助っ人を呼ぶ？」
ジュディがあまりにもこだわるので提案してきたのだった。
「誰か。いるよね」
「そうね。それだったら」
考える顔になった。そのうえでローリーに答えてきた。
「プリシラかしら」
「プリシラ！？」
「それとタムタム」
名前を出したのはその二人であった。
「この二人でどうかしら」
「そうだね、それでいいんじゃないかな」
その二人にはローリーも納得するのだった。
「大丈夫だと思うよ。あの白い影を向こうに回してもね」
「そうでしょ。二人共頭脳派だし」
ジュディはにこりとしだしていた。
「丁度いいわよね」
「うん。ただ」
「ただ？」
「プリシラはよくわからないところがあるけれど」
ローリーは首を捻ったうえでこうジュディに述べるのだった。同

じクラスであってもだった。
「何か今一つ」
「わからないのね」
「うん。そう思わない？」
このことをジュディに対しても尋ねる。
「実際に」
「まあ言われてみればそうね」
ジュディもそれは認めるのだった。
「ミステリアスって言えば魅力的だけれど」
「正体不明って言えば何か不気味だよね」
「少なくとも表情出さないしね」
プリシラは無表情で知られている。
「それも全然」
「それもあるけれど」
ジュディはさらに述べる。
「どうなのかしらね」
「どうなのかしらねって？」
「今気付いたんだけれど」
見ればジュディは腕を組んで首を捻っていた。
「私あの娘のことよく知らないわ」
「そういえば僕もだね」
それはローリーも同じなのだった。とかく謎の多い少女であった。
「一体何なんだろう」
「タムタムはわかるのよ」
「まあタムタムはね」
ローリーはまたジュディの言葉に対して頷く。
「頭脳派だしね」
「今回もいてくれたら絶対に力になってくれるわよ」
にこりと笑ってまたローリーに注げる。
「だから。誘えば」

「ただ。問題があるよ」
「問題？」
「うん。どうやって二人に協力してもらうの？」
彼が言うのはそこであった。
「そこのところは。どうやって？」
「タムタムはすぐに話が済むわ」
ジュディはこれに関しては即答できた。
「今日のお昼にサンドイッチプレゼントでね」
「サンドイッチだけ！？」
「タムタムはサンドイッチが好きなのよ」
実はそうなのだった。ローリーにそのことを教えた。
「だからね。それでね」
「サンドイッチか。じゃあ早速」
ローリーは動いた。そこにジュディが続く。
「それでタムタムに話をしようよ」
「ええ、それじゃあね」
こうして二人は教室の近くの廊下を歩いていたタムタムのところに来てまずはサンドイッチをおごることを提案してきた。タムタムはそれを聞いてまずは二人に対していぶかしむ目を見せてきたのだった。
「何かあるな」
「まあないとは言えないね」
「ちょっとローリー」
今のローリーの正直な返事にはジュディも思わず突っ込みを入れた。

第九十五話　白い影その五

「素直に答えてどうするのよ」
「だってさ、本当のことだし」
「正直に答えていいことと悪いことがあるの」
ジュディはそこを力説した。かなり本気である。
「言っておくけれどね」
「そうだったんだ」
「この場合は正直に答えなくていいの」
そのうえでこう言う。
「そうかな」
「嘘をついていい場合といけない場合もあるけれどね」
ここはさらに強調する。どうも彼女なりの譲れないものがあるようだ。そのことを今彼に対してかなり強く言っていた。
「とにかく今回はね。今の言葉は致命的なミスよ」
「そうだったんだ、御免」
まずはそれを謝罪する。
「じゃあタムタムに関しては」
「これで終わりよ。残念だけれど」
「おい」
勝手に話をしている二人にタムタムが突っ込みを入れてきた。
「何？」
「俺はまだ何も言っていないぞ」
「あっ、そうだったの」
ジュディはここでようやくタムタムの言葉に気付いた。
「そういえばそうね。言われてみれば」
「で、どんな話なんだ？」
タムタムはそこを問う。
「当然話によるがな。正直に話してくれるならまず乗るが」

「うん。実はね」
ローリーはタムタムの今の言葉を受けて話そうとする。しかしここでちらりとジュディを見る。そのうえで彼女に少し尋ねる。
「正直に言うよ」
「ええ、どうぞ」
今回は彼女も穏やかだった。
「ここまで来たらね。いいわよ」
「うん。それじゃあ」
ジュディの言葉を受けたうえで話をはじめる。あの白衣の風紀部のことを調べるということを。ありのままタムタムに対して説明したのである。
「あの風紀部か」
「そうなんだ。あの風紀部ってよく考えたら謎ばかりじゃない」
「ああ、確かにな」
それはタムタムも知っていることだった。
「考えてみればかなりな」
「その素性を調べてみたいんだよ」
また素直に述べる。
「それでどうかな、協力してくれる？」
「そうだな。風紀部か」
「ここまで来たら仕方ないわよ」
ジュディも観念していた。
「正直なところ。あんたがノーって言ってもサンドイッチおごるから」
「イエスでもノーでもか」
「ええ。一応返事を聞きたいけれどどうなの？」
「返事か」
「どうするの？」
また尋ねた。
「それで」

「ああ。いいぞ」
その問いに即答してみせた。今の言葉はジュディにとっては意外なものだった。
「あの風紀部については俺も前から不思議に思っていたんだ」
「不思議って言えばそうだね」
そもそも神出鬼没で尚且つ何時何処で何をしているかわからない連中である。ローリーもそれを言うのだった。
「俺も協力させてもらう」
タムタムはあらためてそれを宣言した。
「是非共な」
「それじゃあサンドイッチね」
ジュディは笑顔でタムタムに告げる。
「おごるわ。約束だしね」
「ああ、悪いな」
「言ったことは絶対にする」
ジュディはにこりと笑ってタムタムに告げる。
「それが私の信条だからね」
「さっきのイエスでもノーでもって言葉だよな」
「そういうこと。だから」
「よし、じゃあ遠慮なくもらうぞ」
「どうぞ」
タムタムもまたにこりと笑う。こうしてまずは一人助っ人が入ったのだった。

白い影　　完

２００８・５・３０

第九十六話　ミステリアスその一

ミステリアス

かくしてサンドイッチを奢ってもらうことになったタムタム。今彼は買ったそのサンドイッチを自分の机で食べていた。飲み物はミルクであった。

「これで一人だね」

「ええ、まずはね」

ジュディはローリーの言葉に頷く。彼等は今タムタムの机を囲んで座っている。そのうえでの言葉のやり取りであった。

「頼りにしてるわよ」

「ああ、奢ってもらっただけはやるさ」

タムタムはサンドイッチを頬張りながらジュディに答えた。

「最後までな」

「それはいいとしてね」

ジュディはここで話を変えてきた。

「どうした？」

「いえね、うちのクラスのメンバーだし」

まずはこう言う。

「それに皆がそうだからわかっていたけれど」

「皆がそうだから？」

「ええ。食べるわね」

間を見計らったようにしてこの言葉を出す。

「それもかなり」

「そうか？」

サンドイッチを食べ続けながらジュディに応える。

「俺は普通だけれどな」

「卵サンドに野菜サンドにカツサンドにベーコンレタスサンドにハンバーグサンド」

ジュディは呆れたような口調で続ける。
「鯨サンドにフィッシュフライサンド、ステーキサンドにトマトサンドってどれだけ食べるのよ」
「好きだからな」
しかしタムタムは平然としたものだった。
「このソーセージサンドにしろな」
「飽きないの？」
「サンドイッチって飽きるものか？」
逆にこう問い返しさえする。
「これとこのヌードルに牛乳があればな」
見ればカップヌードルもある。ただしこれは自分で買っている。
かなり大きめのそれをフォークで食べているのである。サンドイッチをメインに食べながら。
「もうそれでいいんだ、俺はな」
「栄養バランスは・・・・・・いいわね」
「サンドイッチは何でも挟めるからな」
今度はポテトサラダサンドを食べていた。
「それこそ砂と魔女以外はな」
「ええ、そうだね」
ローリーは今の言葉の意味をすぐに理解した。それで言う。
「つまりサンドが砂で」
「ウィッチが魔女だ。この二つだけは食べられないからな」
「他はいいのね」
「ああ、何でもな」
今度はチーズサンドであった。既にハムサンドもマークしてある。
「そうだろ？だからサンドイッチはいいんだよ」
「まあね。私もサンドイッチ好きだけれど」
ジュディもこれは同じだった。
「けれど。本当に一杯食べるわね」
「魚のサンドイッチもね」

見ればスモークサーモンサンドやツナサンドもある。こういったものも食べるのだった。
「何でもいけるんだね」
「ああ。だから砂と魔女以外は食べるんだよ、俺はな」
「じゃあエウロパ貴族の性根は？」
「それはお断りだ」
こう来た。
「煮ても焼いても食えないだろ、あの連中の性格だけはな」
「すっごい性格悪い奴等ばかりらしいわね」
連合ではこういうことになっているのでジュディもこう考えているのだ。
「あの連中って」
「貴族ってそんなもんだろ」
タムタムも平然と言葉を返す。
「働きもせずに威張って弱い人間から搾り取る」
「ええ」
かなりステレオタイプかつ古典的な見方だが連合ではエウロパ貴族はこう教えられているのだ。なお彼等はエウロパの平民達もよくは思っていないのだが。
「そんな連中だからな」
「けれどサンドイッチは」
ここでローリーは言う。
「確かイギリス人の貴族が考え出したんだっけ」
「あっ、そうだったの」
ジュディはそれを聞いて意外そうな顔になった。
「あの碌に料理も出来ない連中が」
「確かブリッジが好きなサンドイッチ伯爵がブリッジしながら手を汚さないで食べられるようにって考えたのがそれだったよ」
「そうだったの」
「だからサンドイッチ」

名前の由来にもなるのだった。

2021

第九十六話　ミステリアスその二

「そういうことらしいね」
「ああ、そうだったな」
ローリーのその言葉にタムタムが頷いてきた。
「サンドイッチはな。だから元々はイギリス料理だ」
「イギリスねえ」
「俺も正直のところ信じられないけれどな」
タムタムでさえこれには首を捻ってみせる。
「イギリスっていうのがな」
「イギリスっていうとあれじゃない」
ローリーも言う。
「まずいので有名だし」
「まずいっていうか人間の食べ物じゃないらしいじゃない」
遠いエウロパのことなので確かなことは知らない。彼等が言っているのはかなり風聞である。これはエウロパに関すること全般がそうであるが。
「イギリス人の食事って」
「けれどサンドイッチは」
「連合のサンドイッチだからな」
今のタムタムの言葉は真理だった。
「だからだな」
「連合のサンドイッチなのね」
「これにしろ」
ツナサンドを出してきた。これも食べるのだった。
「これは和食じゃないのか？」
タムタムはそのツナサンドを二人に見せながら述べる。
「ツナは」
「ツナって和食なの？」

「さあ」
二人は今のタムタムの言葉に首を傾げる。
「とりあえずそうなんじゃないの？」
「サンドイッチも和食になるんだ」
「カレーもあれだろ」
タムタムは今度はカレーを出してきた。見れば今食べているヌードルもカレーヌードルである。平ための麺にはよく合うのである。
「和食に入るぞ」
「ああ、そうらしいわね」
ジュディは今のタムタムの言葉に頷いた。
「それはね」
「マウリア人はそう言うからな」
タムタムはカレーの本場であるマウリアの話も出す。
「それはな」
「日本人って何でも食べるからね」
「まあ僕達もそれは人のことは言えないけれど」
ローリーは少し苦笑いになる。連合ではとにかく何でも食べる。宗教的に『厳格な』戒律がなければ何の問題もなく食べられるのである。
見ればサンドイッチの鯨。それもまた。
「俺達は昔鯨を食うのを反対していたんだったな」
「かなり昔ね」
「千年は前だよ」
二人はタムタムの言葉に対して頷いてみせる。
「鯨みたいな美味しいものを食べないなんておかしいよ」
「御先祖様も変わったことしていたのね」
ジュディもかなり言う。
「あんたの国はどうだったの？」
「パラオは」
「俺の国は海の中にあった」

タムタムの国であるパラオは地球にあった頃は島国だった。今でも海の多い惑星を数多く保有している。それで海産物をかなり食べている。

「だが鯨は食べていなかったようだな」

「そうだったの」

「日本人は食べていたがな」

そのことを述べた。

「昔からな」

「そういえば鯨サンドって考えたの日本人よね」

ジュディは鯨サンドを見つつ述べた。

「鯨をカツにして」

「ああ。確かこの鯨は」

「ゼウグロドンって書いてあるよ」

ローリーはビニールのところに書かれている文字を見つつ二人に告げた。

「これって確か」

「昔鯨類だな」

タムタムはゼウグロドンと聞いてすぐに昔鯨を話に出した。

2024

第九十六話　ミステリアスその三

「それは」
「確かあの細長い鯨よね」
「学校の水族館にもいたよね、小さいのが」
「ええ」
八条学園には水族館もあるのだった。何でもある学校である。
「あれなのね」
「味、どう？」
「普通の鯨と同じだな」
タムタムはその鯨サンドを口の中に入れつつ二人に対して言う。
「大して変わらない」
「鯨は鯨なのね」
「そういうことね」
「やっぱり鯨なんだ」
「それでだ」
見ればタムタムはもうサンドイッチもヌードルも殆ど食べてしまっていた。その食べる速さはかなりのものである。量だけではなかった。
「俺はこれでいいが」
「ええ、あんたはね」
「これで頼りになる助っ人が一人」
「問題はもう一人だ」
タムタムの顔が真剣なものになる。
「あいつはどうするんだ？」
「あいつ！？ああ」
ジュディが今のタムタムの言葉に気付いた。
「プリシラね」
「俺はサンドイッチさえあればいい」

食べ終えたそれを指して言う。
「けれどあいつはな」
「わからないってことね」6
「そもそも何か好きなものがあるのかどうか」
「そうなんだよね」
ローリーもそこを言ってきた。
「プリシラのことは何も知らないんだよね、僕も」
「そういえば私も」
プリシラもそれは同じだった。
「あまり知らないわね。っていうかよく考えたら全然」
「あいつもあいつで謎の塊だからな」
タムタムですら知らないのだった。
「何が趣味で何が好きなのか」
「わからないのよね」
「しかもだよ」
ローリーがここで言う。
「プリシラって普段何を食べているの？」
「何をって言われたら」
「何なんでしょうね」
それすらもわかっていないのだった。よくよく考えればプリシラも謎だらけの人間である。
「とりあえず何か食べているのは間違いないわよ」
「それは当然だな」
タムタムもジュディのその言葉に頷く。
「生きているんだからな」
「そういうこと。人間は絶対に食べないと死ぬから」
これは何がどうなろうか変わりはしない。そういうことだ。
「だから。何か食べてるのは確実よ」
「サプリメントだけとか」
ローリーがまた言ってきた。

「そんなのの可能性は？」
「有り得るかも」
ジュディは腕を組んでその可能性について言及した。
「ひょっとしたらだけれど。プリシラだからね」
「謎が多いな、確かに」
そしてタムタムもそれに同意する。
「何が何なのか」
「わからないからね。何もかもが」
「とりあえず何かあるのは間違いないわ」
ジュディはこう述べた。
「何かがね。それを調べる？」
「そうだね。けれど」
ローリーは首を捻りつつ述べた。
「何かこれってね」
「これって！？」
「ひょっとしたら白い影以上の謎かもね」
「言われてみれば」
「そうだな」
彼女の言葉にローリーもタムタムも同意する顔になった。

第九十六話　ミステリアスその四

「とにかく調べてみないと駄目だね」
「いや、待て」
しかしタムタムはここで言うのだった。
「調べる必要はないな」
「ないの？」
「今はあいつに協力してもらうんだな」
「ええ」
ジュディはタムタムの今の言葉に頷く。
「そうよ」
「だったらそれだけでいい」
「それだけでいいの？」
「多分詳しく調べてもあいつのことはわからない」
彼はこう呼んでいたのだ。
「だからいい。それはな」
「そうなの。じゃあ」
「要はあいつを味方にすることだ」
彼が言うのはそこであった。
「それだけだ。だから」
「だから？」
「とりあえずはあいつの好きなものや趣味にヤマを張るんだ」
「ヤマをね」
「それなんだね」
二人はタムタムの話を聞いて述べた。
「例えば。あいつはアルム人だよな」
「そうだったわね、確か」
ジュディが答えた。アルムもまたかつてあった古代民族の国家であり連合で復活したのだ。人種的なルーツはかなり眉唾になっては

いるが一応彼等はそう名乗っている。
「アルムといえばだ」
「何かあったっけ」
ローリーが言う。
「アルムって」
「さあ」
ジュディもアルムと言われても肩をすくめさせるだけだった。
「言われてみればそんなに」
「ないよね」
「アルムといえばグラスバンドだな」
しかしここでタムタムが言ってきた。
「グラスバンド！？」
「そう、それだ」
「グラスバンドが有名だったの、アルムって」
「グラスバンドっていえばトルコだけれどね」
ジュディもローリーもそのことを知らなかったのだ。それどころかグラスバンドといえばトルコだとばかり思っていたのである。トルコは伝統的にそれで有名なのだ。
「成程ね」
「グラスバンドか」
「うちの学校はグラスバンドも有名だからな」
「まあね」
ジュディはタムタムの言葉に対して頷く。
「幾つもあるし」
「それでだ」
タムタムは言ってきた。ここでまた。
「プリシラはそれを使えばどうかって思うんだがな」
「グラスバンドを？」
「どうやって？」
「だからだ。コンサートがあるだろ」

「ええ」
グラスバンドのコンサートも学園内で行われているのだ。そしてその回数はかなりのものになっている。しかもそのコンサートに行くには。
「チケットだな」
「それをあげるのね」
「コンサートの回数券があったな」
彼はこうも言う。

第九十六話　ミステリアスその五

「それを渡せばいい」
「回数券ね。それでいいのね」
「少なくとも受け取らないということはない」
これはタムタムの読みであった。
「それは安心していいな」
「わかったよ。それじゃあ」
ローリーは早速チケットを出してきた。服のポケットから急に出したのである。
「これを使ってね」
「何時の間にそんなものを」
これにはタムタムも少し驚いた。目を顰めさせている。
「持っていたんだ」
「ああ、たまたまだよ」
ローリーは軽い調子でタムタムに言葉を返す。
「たまたまコンサートに行こうかなって思ってね。それでね」
「そうか。何か運がいいと言うかな」
「っていうかあんたって」
ジュディも少し驚いた顔でローリーに言う。
「こういうことに関しては何かと便利に動いてくれるわね」
「そうかな」
「流行とかにはね」
ジュディはこう評する。
「かなり敏感に動くし音楽とかにもね」
「音楽は聴くの専門だよ」
にこりと笑ってジュディに答える。
「言っておくけれどね」
「それはそれでいいと思うわ。まあとにかく」

「うん」
話が進む。
「それで進めていこう」
「そうね。あるものは使うってことでね」
「プリシラが入れば大きいぞ」
タムタムは冷静に二人に告げてきた。
「これで駄目なら今度は食べ物があるしな」
「食べ物ねえ」
ジュディは食べ物と聞いて今一つ浮かない顔をした。
「彼女って好きな食べ物あったかしら」
「それがわからないんだよね」
ジュディもローリーもまた首を傾げるのだった。
「どうにもこうにもね」
「とりあえずその時はハンバーグでいいんじゃない？」
「どうしてハンバーグなの？」
「私が好きだから」
理由は実に簡単であった。主観に基づくものであった。しかし判断の根拠としては多いものである。それが正しいか間違っているかは別として。
「だからだけれど」
「それは失敗すると思うぞ」
タムタムも横から言う。
「ちゃんと調べておかないとな」
「ヤマを張るのも大事じゃない」
しかしジュディも負けてはいない。
「だからよ」
「だからか。まあ一応は考えてみるか」
腕を組んだうえでの言葉だ。
「そういうところもな」
「じゃあまずはあれね」

ジュディはあらためて述べてきた。
「コンサートのチケットでね」
「うん」
こうして話は決まった。まずは三人でプリシラのところに向かいそっとコンサートのチケットを差し出す。そのうえで話をするのだった。
「あのね」
「何かあるわね」
プリシラは三人に顔を向けて静かに問うてきた。

第九十六話　ミステリアスその六

「そうね」
「わかるのね」
「わかるわ」
また静かに答えてみせる。
「顔に書いてあるから」
「えっ！？」
ジュディはプリシラにこう言われて思わず声をあげた。
「書いてるの？」
「心の目で見えるわ」
こう来た。
「はっきりとね」
「書いてる？」
「書いてないよ」
ジュディに対してローリーが答えた。
「全然」
「そうよね。どうして書いてるなんて言えるのかしら」
「だから心の目で見えているのよ」
それでもジュディは言うのだった。その目はクールそのものだった。
「あれね。私に協力して欲しいのね」
「それもわかるの」
「それで白い影について調べたいのね」
それについても言ってきた。何とプリシラの方から。
「あの影の風紀部のことを」
「何か話す必要ないみたい」
ジュディはプリシラが何でも自分から言うので手持ちぶたさになった感じで述べた。どうにもこうにもやりきれない感じになってい

た。
「私が言うよりもわかるんだから」
「それで。グラスバンドのチケットよね」
「そうよ」
それもわかっているのだった。何でもわかっているような口調だった。
「私に協力して欲しいのね。それで」
「そういうこと。わかったら」
「いいわよ」
返事はすぐだった。
「協力させてもらうわ」
「いいの」
「面白そうだから」
こう答えるのだった。やはり返事はすぐである。その言葉には感情はないがそれでもはっきりとした答えだった。その言葉には何の迷いもなかった。
「是非入れて」
「是非って言われたら何か」
ジュディもプリシラのこの低姿勢にはかなり戸惑った。正直そこまでなるとは思わなかった。だがそれでもプリシラは言葉を続ける。
「こっちとしても」
「困るの？」
「困りはしないわ。それでもね」
「だから私はいいのよ」
また答えるのだった。
「クラスメイトの頼みを断る趣味もないし」
「あんたって意外と」
「優しいって？」
「いえ、そうは思っていなかったけれどね」
その言葉にはまた戸惑いを覚えた。

「それでも。嬉しいわ」
「白い影については色々な情報があるわよ」
「色々な？」
「ええ」
こうジュディに答えるのだった。
「詳しい話は多いけれど。聞きたい？」
「ああ」
タムタムが彼女に答える。
「是非頼むな」
「わかったわ。それじゃあここでは何ね」
「皆がいるから？」
「違うわ」
だがプリシラはそれを否定したのだった。
「聴かれるとまずいから」
「まずい！？」
「相手は秘密警察よ」
語るプリシラの表情が変わらないのが凄かった。
「何時何処で何を聞いているのかわからないわよ」
「このクラスでも？」
「例えば」
プリシラはまた言う。
「壁に盗聴器を仕掛けていたりね」
「盗聴器って何よ」
「だから。盗聴器をクラスに潜ませている可能性もあるってことよ」
「まさか。そんなことって」
「油断大敵よ」
しかしプリシラの言葉が真剣なものだった。
「だから。場所を変えるわよ」
「何が何かよくわからないけれどわかったよ」
ローリーが答えた。

「じゃあ場所、変えようか」
「そうね」
ジュディも結局のところ頷くのだった。

第九十六話　ミステリアスその七

「それじゃあそれでね」
「場所は。そうだな」
タムタムは自分の考えをここで述べた。
「野球部の部室でいいか」
「野球部？」
「ああ」
プリシラに対して答える。
「そこでどうだ？」
「あまりね」
こうタムタムに答えた。
「よくはないわね」
「野球部の部室も盗聴されてるのか」
「可能性はあるわ」
タムタムへの言葉は彼にとってかなり衝撃的な言葉だった。
「おい、まさか」
「秘密警察を甘く見ないことね」
しかしプリシラの言葉は変わらないのだった。
「何があってもね」
「何があってもって。野球部は」
「そう思うのが間違いなのよ」
それでもプリシラの言葉はそのままだ。やはり変わりはしない。
「いいわね」
「敵はそんなに手強いのか」
タムタムはここまで話を聞いてあらためて相手の手強さを認識したのだった。
「わかった。じゃあな」
「いい場所知ってるわ」

こう言って三人を案内する。彼等が行くのは茶道部の部室だった。プリシラは茶道部なのだ。そこに入ったのである。
「ここならいいわ」
「ここか」
「ええ。ここはいつもチェックしているから」
畳の静かな部屋だった。真ん中には茶器が置かれている。それを囲みながら茶を飲みつつ静かな話となったのであった。
「まずはね」
「ええ」
ジュディがプリシラに対して応える。
「これからだけれど」
「どうすればいいと思うの？」
「敵は強大よ」
「強大なのね」
「そう。まずはそれを念頭に置いておくことよ」
プリシラのクールな言葉だった。
「敵を知り己を知れば百戦危うからず」
「これは戦いだったの」
「下手をすれば死ぬわ」
何か別の世界めいてきていた。プリシラのクールな言葉には不思議な緊張が漂っている。彼女はその中で抑揚のない調子で話すのだった。
「そういう話よ」
「確かさ」
ローリーはここまで話を聞いてタムタムに顔を向けて言ってきた。
「何だ？」
「ここって学校だよね」
「ああ、そうだ」
タムタムも彼のその問いに対して答える。
「他の何だというんだ？」

「そうだよね。それで何か凄い話になっているんだけれど」
「色々とある学校だがな」
伊達に広いわけではないのだ。河童がいるという噂もあったしその他にも様々なものが出て来た過去がある。と書く普通という常識が通用しない世界なのだ。
「それでもな」
「おかしいよね、何か」
「俺もそう思うのだがな」
これに関しては彼も同意なのだった。
「だがな」
「それが常識の話になってきてるね」
「どうしたものか」
「それでね」
プリシラは二人の話をよそに自分の言葉を続ける。
「これからのことだけれど」
「ええ」
プリシラの話が行われる。三人はそれを静かに聞くのだった。

ミステリアス　　完

２００８・６・４

第九十七話　智には智でその一

智には智で

「まず相手は手強いわ」

このことをまた強調するプリシラであった。彼女の言葉はまだ続いていたのだ。

「だからこちらも慎重に行くべきよ」

「慎重にね」

「そう。狙う対象はもう決めているわ」

「対象！？」

ジュディは今の彼女の言葉を聞いて怪訝な顔になった。

「対象って何？風紀部じゃないの？」

「彼等はまずはどうでもいいのよ」

プリシラはここで意外なことを述べるのだった。ジュディ達から見れば。それを聞いてまたタムタムとローリーは顔を見合わせて言い合うのだった。

「どういうことかな」

「わからんな」

タムタムも首を傾げさせていた。

「俺なら一人一人調べていくがな」

「野球みたいにだね」

「野球はデータだ」

キャッチャーのタムタムらしい言葉であった。

「そこをしっかりしていないと勝てない」

「バッターやピッチャー、ランナーのことだよね」

「いや、それだけじゃない」

タムタムは完全にキャッチャーになっていた。その目と顔で述べていた。

「それは相手チームだけだな」

「うん」
ローリーもその問いにこくりと頷く。実際にそれだけを考えていた。
「そうだけれど」
「相手チームならまずは本拠地の球場や守備の傾向も調べないと駄目だな」
「それもなの」
「例えば相手チームのだ」
野球の話が続く。
「センターの守備が緩慢だったとする」
「そこを突くんだね」
「それも徹底的にだ。これで勝てる機会が多くなる」
「成程ね」
ローリーもそれを聞いて納得する。
「そういうことなんだね」
「自分のチームのことも当然頭に入れておかないと駄目だ」
「自分のチームも」
「特にピッチャーはな。キャッチャーはそれが仕事だからな」
「難しいんだね」
「覚えることは山みたいにある」
彼は言い切った。
「一つじゃないからな」
「何か野球も大変なんだね」
「そうね。それは確かにね」
タムタムの今の言葉にプリシラが入る形になった。
「プリシラ」
「それは今回に関しても言えるわ。ただ」
「ただ？」
「調べる対象はおおむね一人よ」
そしてこう言うのだった。

「殆どね。一人でいいわ」
「一人か、あれか」
「そう、あれ」
プリシラは今度はタムタムの言葉に頷いてみせた。
「あれよ」
「あれを狙うんだな」
「あれって!?」
プリシラとタムタムの言葉にジュディが問うた。
「あれって何のことなの?」
「白い影のトップよ」
プリシラはそのポーカーフェイスで答えてきた。
「つまりそれは」
「ロシュフォール先生だね」
ローリーもここでわかった。
「あの先生を狙うんだね」
「ええ、そうよ」
プリシラは今度はローリーに対して答えた。

第九十七話　智には智でその二

「末端を調べても仕方ないわ。トップを狙うのよ」
「いきなり派手にやるのね」
「派手に？そうね」
プリシラはその言葉に反応した。
「単刀直入を派手にやると言えばそうなるわね」
「そうなの」
「ええ、白い影はロシュフォール先生が全てを統括しているからあの先生さえ何とかすればいいのよ。あの先生を調べていけばね」
「わかったわ。けれどそれだと」
「一層警戒が必要なのはわかってるわ」
プリシラはそれをはっきりと認識していた。
「下手に白い影の末端を狙うよりもね。遥かにね」
「じゃあ止めた方がいいんじゃ」
「ハイリスクハイリターン」
プリシラの今度の言葉はこうだった。
「それよ」
「一気にいくのよ」
「いくのね」
「わかったわね。それでね」
「ええ、それで」
ジュディはじっと身を乗り出してプリシラの話を聞くのだった。
「どうするの？具体的に」
「パソコンを調べる」
「無理よ」
プリシラは一言でローリーの提案を却下した。
「それはね」
「無理なの」

「ロシュフォール先生よ。パソコンにどんなガード入れているのかわからないし」
「下手したら爆発とか？」
「有り得るわ」
ローリーの冗談めいた言葉に真剣に答えてきた。
「だから止めておいた方がいいわ」
「死ぬ？」
「死ぬわ」
また一言で恐ろしい言葉を出す。
「だから止めておくべきね」
「何か話がとんでもない方向になってきてない？」
常識派のジュディにとっては今の流れはかなり狼狽するべきものだった。少なくとも普通の学校での話ではなくなってきた。もっとも最初からただの学校ではないが。
「死ぬって」
「元々白い影が普通じゃないからな」
タムタムの言葉がここで出た。
「それは仕方がないな」
「そうなの」
「そうよ。だからそれを前提として話を進めていくのよ」
「ううん、学校の話じゃなくてスパイものになってきたわね」
「面白いかどうかっていうとどうなの？」
「命懸けね」
面白いという返事ではなくこんな返事であった。
「正直なところ」
「ううん、困ったわね」
ジュディはあらためて言う。
「けれど興味持ったし。それだからね」
「やるのね」
「やるわ。決めたらやるわ」

プリシラの言葉ははっきりとしていた。
「絶対に成功させるわ」
「絶対になのね」
「既に策はあるわ」
言葉がはっきりとしていた。
「この私の中にね」
「自信あるのね」
「あるから受けるのよ」
「そう。じゃあ」
「まずはね」
お茶を一杯飲んだところで立ち上がるプリシラだった。
「行きましょう」
「行く！？ロシュフォール先生のところになのね」
「いえ、違うわ」
それは違うというのだった。これはジュディにとってだけではなくタムタムやローリーにとっても意外な言葉だった。今のプリシラの言葉には二人も目をしばたたかせている。

第九十七話　智には智でその三

「グラスバンドよ」
「グラスバンド！？ああ、そうだったな」
「そういう約束よね」
三人に対して言ってきた。
「だからよ。それで」
「わかったわ」
ジュディは今度はにこりと笑って微笑むことができた。
「じゃあ行きましょう」
「グラスバンドのコンサートね」
「まずは英気を養わないといけないから」
彼女にとってはそれがまずはじまりだったのだ。
「だからね」
「わかったわ。じゃあ四人でね」
「ええ。それじゃあ」
こうして四人はまずはグラスバンドのコンサートに向かった。コンサートが終わってから四人は。早速プリシラを中心として行動に移るのだった。
コンサートが終わってから。プリシラはすぐに校内に潜伏した。ただし授業は出ている。
「あれ、何かプリシラって」
「いつもと同じじゃない」
ジュディもローリーもこれについては意外といった顔だった。
「潜伏してるの？」
「それで」
「潜伏してるわ」
しかし当人はこうコメントするのだった。今彼等は教室にいる。そこでプリシラの机を囲んで話をしているのだった。当然プリシラ

が話しの中心だ。
「それは本当よ」
「何処が！？」
ジュディはプリシラのその平然とした言葉に眉を顰めさせる。
「全然じゃない」
「潜伏というのは姿を隠すだけじゃないのよ」
しかし彼女はこうコメントするのだった。
「普段通りの行動をするのもそのうちの一つよ」
「そうなの」
「そういうことよ。一応話はね」
「ええ」
「順調に進んでるから」
これが彼女のコメントだった。
「情報収集はね」
「どうやって情報収集しているんだ？」
タムタムはそれが不思議だったのだ。それをプリシラに対して尋ねる。
「潜伏してそれで」
「学校の中に色々と情報が転がってるのよ」
プリシラは言う。
「それを調べてみたのよ」
「そうなのか」
「それでどうやって？」
タムタムは問う。
「調べているんだ」
「ロシュフォール先生のガードは固いのよね」
「そうよ」
プリシラはジュディの言葉に答えた。
「それじゃあどうしようもないじゃない」
「だから。情報は一つじゃないのよ」

「一つじゃない？何か」
ジュディは腕を組んで首を傾げるのだった。
「といっても白い影の構成員は調べないんだし」
「こっちとしては手段がないんじゃ」
ローリーもわからない。これではどうしようもないのじゃないかと思っていた。しかしタムタムはここであることに気付いたのだった。
「そうか、そういうことか」
「わかったみたいね」
「ああ、何となくだがな」
彼は言った。
「情報は回りに転がってるか」
「人が動けばそれだけ塵が出るわ」
プリシラは呟くようにして述べた。
「その塵を集めていけばそれだけでかなりのものになるから」
「塵を集めれば？」
ジュディはまだわからない。それでまた首を捻るのだった。

第九十七話　智には智でその四

「それで何かわかるの？」
「これがわかるのよ」
プリシラの言葉だった。
「塵一つでも色々なものが付いているから」
「！？色々なもの」
ジュディはそれを聞いてまた首を捻る。これでここで三度目だった。
「何か何なのか」
「だから。ＤＮＡとか血液型とかよ」
「ああ、それね」
これについてはジュディもわかった。
「そういうのまで調べるのね」
「そこからわかっていくのよ」
クールなコメントだった。
「外堀から埋めていくものよ。堅固な城はね」
「そういうことだな」
その言葉に頷くタムタムだった。
「攻略できない要塞はない」
「話がどんどん軍事的になっていくけれどそうだね」
ローリーも頷いた。
「あのロシュフォール先生でもね」
「今はお城の周りに陣を敷いたところね」
「陣をね」
「そういうこと。まだはじまったばかりよ」
またジュディに答えてみせた。
「これからよ。それと」
「それと？」

「タムタム」
タムタムに顔を向けての言葉だった。
「御願いしたいことがあるけれど」
「俺にか」
「ええ。集めた情報をチェックし易いようにして欲しいのよ」
「わかった」
タムタムはすぐにプリシラのその言葉に頷いた。
「それじゃあそれは任せてくれ」
「頼むわ。そういうことは得意よね」
「勿論な」
すぐにその言葉に頷いてみせた。
「できる。安心してくれ」
「頼むわ。それと」
「次は僕かな」
「ローリーは風紀部だから」
彼に対してまず言うのはそこだった。
「あまり動かない方がいいわ」
「動かない方がいいの」
「白い影には最初から目をつけられているわ」
こう指摘するのだった。
だからね。下手にはね」
「そう。けれど何かそれって」
「それでもよ」
しかしここで言葉を言い加えるのだった。
「!?何?」
「やって欲しいことはあるわ」
「それは何?」
「普通に動いて欲しいのよ」
「普通になんだ」
「それだけでいいの」

今度は念押しだった。
「それだけでね」
「それだけで僕はやっていけるの？」
「白い影の末端の目がそちらに行くわ」
「末端の目がなの」
「そう。ロシュフォール先生が頂点ね」
これはもう絶対の前提だった。白い影の全てを統括する影のフィクサー。本当に学校にある組織かどうかさえ怪しいがそういう組織なのだ。
「その頂点から伸びる触手がこっちに向かうとやっぱり困るから」
「それでなの」
「だから御願いするわ」
あらためてローリーに頼む。
「いいわね」
「わかったよ。それじゃあね」
「そういうことでね。さて」
話を終わらせたところでまた言う。

第九十七話　智には智でその五

「最後は」
「私よね」
「ジュディには私と一緒に来てもらうわ」
「アシスタントね」
「そうよ。ジュディはしっかりしているから」
「有り難う」
「テンボやジャッキーに比べればずっと」
また極端な例であった。
「だから頼りにさせてもらうわ」
「・・・・・あの二人と比べたらって」
流石にこの二人と比べられてはジュディもあまり有り難くはないようだった。
「それはないんじゃないの？」
「じゃあフランツは」
「あまり大して変わらないじゃない。フランツはアシスタントに向いていると思う？」
「特攻要員ね」
また随分ととんでもない要員である。
「それが一番ね」
「特攻、ね」
「絶対に死なないし」
容赦のない言葉が続く。
「だからそれでいいのよ」
「確かに身体は不死身だけれどね、フランツ」
怪我を全くしないことで有名だ。あまりにも頑丈なのでガラスではなく要塞とまで言われている。少なくともスポーツ選手としては非常に有り難い特殊能力ではある。

「けれど特攻はないんじゃ」
「冗談よ」
「無表情で冗談って言われても」
流石に信用できないものがあるのだった。
「まあとにかく。アシスタントね」
「ええ」
これは間違いがなかった。
「御願いするわね」
「わかったわ。足を引っ張らないようにするから」
「くれぐれも証拠は残さないこと」
何気に危険な会話が出た。
「注意してね」
「証拠を残さないこと」
「携帯の電話一つでも」
話はそこにまで至る。
「そこから足がつく場合もあるわ」
「完全に秘密警察ね」
「言論弾圧はしないけれどね」
「それをしたら本当にまずいだろ」
タムタムが少し引く顔で突っ込みを入れた。
「既に学校の組織じゃないぞ」
「それはそうだけどね」
「けれど何かもうとっくに」
ローリーがここで言う。
「漫画みたいだよ」
「っていうか特撮!?」
ジュディはこう考えた。
「ここまでいったら」
「冗談抜きであれだな」
タムタムもそれに乗る。

「改造人間がいても驚かないレベルだな」
「出たな白い影の改造人間」
ジュディは冗談めかして言う。
「こんな感じかしら」
「流石にそれはないわ」
三人の冗談にプリシラは無表情で答える。
「だから安心して」
「まあそれはわかってるけれどね」
ジュディが苦笑いで応える。
「それでもね。何かそんなイメージができたから」
「変な武器とかも持っていないし」
「それじゃただのカルトよ」
思わず突っ込む。
「武器まで持っていたら」
「まあそれでも何か変な科学者がいてもおかしくないけれど」
ローリーは妙なことを言い出した。
「こんな状況だと。学生が戦闘員でね」
「じゃあロシュフォール先生はあれか」
タムタムは学生が戦闘員として一つの仮定を出してきた。
「首領か」
「そうかしらね、やっぱり」
ジュディも同じ様に考えたのだった。

第九十七話　智には智でその六

「やっぱり。怪人がいないのだったら。三年生辺りが幹部で」
「果たしてそうかしら」
しかしここでプリシラが疑問の言葉を出してきた。
「それはどうかしらね」
「違うの？」
「特撮ものの一つのパターンがあるわね」
彼女が言うのは特撮ものの話であった。
「まず表に出て来る首領はただの首領じゃない」
「裏にもう一人ね」
「黒幕がいる」
「そういうケースも考えられるわ」
タムタムに対して答えたのだった。
「ひょっとしてね」
「何かそれ言ったらさ」
またジュディが言ってきたのだった。
「完全に陰謀論なんだけれど。ロシュフォール先生の上にもう一人誰かいるの？」
「だとすると誰かしらね」
「それがわかったらもうこの学校にはいられないわよ」
ジュディの言葉は少し冗談から離れてきていた。
「下手したら裏から手を回されて」
「抹殺とか！？」
「そうじゃないの？」
ローリーに対して答える。
「このパターンだと」
「何か話が物騒になってきたんだけれど」
「確かにね」

これは紛れもない事実だった。既に学校に関する話ではなくなっていた。
「それはね。その通りね」
「けれど。何かここまで来るととことんまで話をしないとね」
「ええ」
こうして話を進めていくのだった。
「収まらなくなってきているけれど」
「まずは話を仮定するわよ」
「うん」
ジュディの言葉に頷くローリーだった。
「ロシュフォール先生は学校の先生」
「そうだな」
タムタムがそこを押さえる。
「これはまず大前提だ」
「その学校の先生の上にいるとなると」
「それこそあれね」
プリシラが言ってきた。
「校長先生とか教頭先生とか」
「理事長」
遂に学校の最高権力者の名前まで出て来たのだった。かなりとんでもないことに。
「まさかそれって」
「ひょっとして」
「八条長官!?」
言わずと知れた中央政府国防長官である。美貌の辣腕家として連合で知らぬ者はない。下手をすれば一国の首相よりも有名な人物だ。
「まさかとは思うけれど」
「あの人が」
「それはないわ」
ここでまたしてもプリシラの一言での完全な否定であった。

「確実にね」
「ないの？」
「確実にないわ」
それをまた言う。
「だから安心して」
「そう言える根拠はあるの？」
「勿論。いいかしら」
「ええ」
ジュディがプリシラの話を聞いていた。
「話して。正直疑ってるし」
「わかったわ。その理由はね」
こうしてプリシラはその理由を話しはじめてきた。それは。
「忙しいからよ」
「忙しい！？」
「そう、忙しいからよ」
また言ってみせる。

第九十七話　智には智でその七

「理事長はね。忙しいから」
「忙しいから陰の首領じゃないの」
「聞くけれど理事長の姿見たことあるかしら」
「いえ」
実はないのだった。首を横に振って答える。
「ないわ。だっていつも地球にいるかどっかの国を訪問でしょ」
「そうよ。この学校の理事長なのは確かだけれどね」
「それでも名前だけ？」
「多分にね。地球で理事長の仕事はされているみたいだけれど」
「それでもこの学校に来る余裕はないと」
「そういうこと。わかったわね」
「わかったわ。理由としては充分ね」
ここまで聞いて納得した顔でプリシラの言葉に頷くジュディだった。
「じゃあ理事長は裏の首領じゃないと」
「裏の首領って本当に凄いね」
ローリーはこのことをまた言う。
「これで実在したら凄いけれど」
「しかし理事長じゃない」
タムタムもこれは確かなものと断定した。
「いるとしたら誰だ」
「そういうのも調べていかないといけないしね」
ジュディも言う。
「あれこれ動く前に考えるのも大事だと思うわ」
「その通りよ」
プリシラはジュディの今の言葉に頷いてみせる。
「まずは考える。いいわね」

「動くよりも先になのね」
「逆は駄目よ」
こうも言う。
「失敗するもとよ。いいわね」
「いいっていうかそれってまんまあれじゃない」
ジュディの頭の中である二人のことが浮かんだ。その二人とは。
「テンボとジャッキー。考えるより先に絶対動くから」
「それが問題なんだよね、あの二人」
「動いてからも考えないしな」
ローリーとタムタムも二人に関しては容赦のない言葉を出している。悪気はないがそれでもだった。それだけ二人の行動がとんでもないというのだ。
「言ってもわからないけれど」
「フランツはリードし易いんだがな」
「あのフランツがリードし易い！？」
これに関してはタムタム以外の三人は甚だ疑問だった。プリシラは表情は変えてはいないがやはり同じことを考えているようだ。
「本当に！？」
「そうだが」
タムタムはその三人に対して述べる。
「あいつの心はわかる。俺達はバッテリーだしな」
「これは相性なんだろうね」
「そうだろうな」
ローリーに対して答える。
「まあそれは置いておいてだ。話を戻すと」
「黒幕よね、影の首領」
ジュディが言う。
「いるとしたら。誰なのかしら」
「まずは考えましょう」
プリシラは分析を続けるべきだと主張した。

「ここはね。それで」
「ええ、それで」
ジュディが応える。
「考えられるのは他に考えられるその候補者は」
「校長先生か教頭先生!?」
ジュディはその二人について考えを向けた。
「そうなると」
「その二人なのかしら」
「いや、待ってよ」
だがここでローリーは言うのだった。
「何っ、ローリー」
「校長先生に教頭先生だよね」
「ええ」
その二人だ。

第九十七話　智には智でその八

「二人共そういうタイプかな。黒幕やるなんて」
「校長先生っていえばだ」
タムタムが考える顔で述べた。
「温厚なタイプだよな。気のいいおじさんで」
「教頭先生は真面目な人よね」
ジュディは教頭先生について言う。あくまで彼女がいる学校での二人だ。八条学園は高等部でも幾つも校長先生と教頭先生がいるのだ。
「そんな黒幕になるような人かしら」
「校長先生もよね」
「そうそう、全然」
そう話をしていく。
「二人共全然そういうタイプじゃないわよね」
「いえ、それでもよ」
だがここでプリシラが言う。
「わからないかも。実際のところは」
「ううん、何かそれを言えば」
「誰もが怪しくなるよね」
「怪しいわよ」
ローリーの今の言葉にもはっきりと答えてみせた。
「そうなんだ」
「そう考えていったらいいわ」
「わかったよ。じゃあ校長先生も調べるんだね」
「ええ。とにかく何でも調べること」
そこを念押ししてきた。
「誰でもね」
「そうだな。少なくともあらゆるケースを考えるべきだ」

タムタムもそれで納得して頷く。
「何でもな」
「ええ。けれど一番のターゲットはね」
「ロシュフォール先生」
ジュディが言った。
「そういうことね」
「そうよ。あの人こそ調べていくから」
プリシラもそこを念押しする。
「いいわね」
「わかったわ。じゃあ早速」
「調べましょう」
こうして四人の調査ははじまった。その結果一つのことがわかったのだった。プリシラとジュディはこのことをローリーとタムタムに対して屋上で話すのだった。
「黒幕だけれどね」
「いたの？」
ローリーがプリシラに対して尋ねる。
「いなかったわ。それはね」
「そう。いなかったんだ」
「ただね」
「ただ？」
「面白いことがわかったわ」
こうローリーとタムタムに対して話しだした。
「面白いことというと。何だ？」
「先生はペットを飼っているわ」
こうタムタムに答えた。
「ペット！？」
「そうなのよ。ペットを飼ってるのよ」
ジュディもそれを話す。四人でお昼のサンドイッチと牛乳を食べながらの話である。

「ドードーをね」
「ドードー!?ああ、あれね」
ローリーは話を聞いてそれが何なのかすぐにわかった。ドードーとは太った大きな鳥である。かつては地球にもいたがすぐに人間の手で絶滅させられている。人類が宇宙で再会した動物のうちの一つである。そうした意味でステラーカイギュウやオオウミガラスと同じである。
「あの鳥を飼ってるんだ」
「そうなのよ。アパートで御家族と一緒にね」
「待て、今の言葉は」
タムタムは今のジュディの言葉に突っ込みを入れた。
「家族って言ったな」
「ええ、そうよ」
ジュディもそれを認める。横にいるプリシラもあえて表情を変えていないのがわかる。
「御家族よ」
「あの先生にも家族がいたんだ」
ローリーはそのことに驚いている感じであった。

第九十七話　智には智でその九

「まあよく考えればそうだよね。先生も人間なんだし」
「フーシェは愛妻家だったわ」
プリシラは何気にとんでもないケースを提示している。
「それもかなりのね」
「だから先生に家族がいても不思議じゃないんだ」
「そういうことよ」
ローリーに対してまた答える。
「奥さんと娘さんがね」
「娘さん・・・・・・」
ローリーにとってはロシュフォール先生に娘がいるということも実に不思議なことだった。少なくとも現実のものとして話を聞いてはいないふしがある。
「あの先生に娘さんが」
「いるのよ」
プリシラはクールに答える。
「驚いたかしら」
「うん、凄く」
ローリーもそれを隠さない。
「驚いたなんてものじゃないよ」
「でしょうね。私だって驚いたんだから」
ジュディも言ってきた。
「有り得ないっていうかね」
「だから言うけれど」
プリシラはここでもクールなままだった。
「あのハイドリヒにも家族がいたのよ」
「少し頭がおかしい奥さんだろ」
タムタムがすかさず突っ込みを入れる。ハイドリヒとはナチスの

親衛隊大将でありヒムラーの懐刀でありかつ最大の政敵でもあった。冷酷非情で残忍、狡猾な男として知られている。あまりにも危険な為チャーチルの工作で暗殺されたとされているがヒムラーが止めを刺したのではないかとも言われている。

「あれは」

「まあそうよ」

プリシラはこれも否定しなかった。

「それでも家族は家族よ」

「そういうものなのか」

「そういうものよ。あのベリアだって」

「あいつは最悪でしょ」

ジュディはベリアと聞いて顔を顰めさせた。

「あのベドフィリアは」

「嫌いなのね」

「好きになれっていう方が無理よ」

顔を顰めさせたままプリシラに対して言葉を返す。

「あんな人間もどきはね」

「人間もどきね」

「どんな身体でも能力でも心が人ならば人でしょ」

この時代のある特撮番組で言われている言葉である。かなり定着している言葉だ。

「だったらあんなのは人間じゃないわよ」

「そうなるの」

「ロシュフォール先生は人間みたいね」

ジュディは話を先生のそれに戻してきた。

「思ったよりも」

「今まで何だと思っていたんだ?」

「独裁者」

タムタムに対して答える。言いようによっては独裁者は人間ではないような物言いである。もっとも独裁者というものは時として己

を神と自称したりするが。
「それか秘密警察のドン」
「それまんまだろ」
タムタムは今のジュディの言葉に突っ込みを入れた。
「それは実際にそうだろ」
「あっ、そうか」
「もっともな」
タムタムはそのうえで言葉を付け加えてきた。
「学校に秘密警察があるっていうのも凄いな」
「サハラならいざ知らずね」
ローリーの言葉だ。専制的な独裁国家もあるサハラではそうした秘密警察も存在しているのだ。ティムールにしろ実はあったりしている。
「そういうものがあるなんて」
「けれど実際にあるわ」
プリシラの言葉だ。
「だから今こうして」
「わかっているわ。まあとにかく」
ジュディは言う。

第九十七話　智には智でその十

「先生については御家族のことまでわかったわね。後は」
「このまま詳しいことを調べていく？」
ローリーはこう考えていた。
「慎重にね」
「ええ、それがいいわ」
ローリーの今の言葉に賛成してきたのはプリシラだった。
「役割は今まで通りね」
「進めていく。そうだな」
「そうよ」
プリシラは今度はタムタムに対して答える。
「私とジュディで現場」
「わかったわ」
ジュディはプリシラに対して応える。
「今まで通りね」
「ええ。それでローリーは」
「相変わらずだね」
「そう、白い影の目を引き付けておいて」
やはり彼はそれであった。
「それだけ相手に隙を作ってくれればいいから」
「わかったよ。じゃあそれでね」
「御願い」
「それで俺はだ」
最後に言ったのはタムタムであった。
「情報整理か」
「そう。それを引き続きね」
「わかった。本当に今まで通りだな」
「そういうことよ。それにしても」

プリシラは話が全部整ったところで話題を変えてきた。
「何だ？」
「ドードーね」
先生のペットのその鳥のことだ。
「面白い趣味をしておられるわね」
「ああ、そうだな」
タムタムも納得した顔でそれに頷く。
「実際のところドードーって飼い易いしな」
「ええ。飛ばない鳥だから」
それで有名になっている鳥でもある。連合では鶏と同じような扱いである。愛玩用としてだけでなく食用としても有名だ。肉も卵も様々な料理で食べられている。
「可愛いしね」
「可愛いっていうかね」
ジュディは笑ってドードーについて述べてきた。
「愛嬌があるわよね」
「そうそう、それがいいんだよ」
ローリーも笑ってそれに応える。
「あの愛嬌がね。何とも言えないんだよね」
「話しているとね。何か」
ここでプリシラはさらに言う。
「食べたくなったわね」
「あっ、そっちなの」
それを聞いたジュディは自然に述べる。
「そっちに話が行くのね」
「そう。お昼はサンドイッチで」
丁度今皆で食べているそれである。
「晩御飯はドードーにするわ」
「何にするんだ？それで」
「親子丼ね」

表情を変えずにタムタムに答える。
「自分で作るわ」
「親子丼」
タムタムはそれについて考えを巡らせた。
「ドードーの親子丼か」
「それがどうかしたの？」
「ああ、少しな」
考える顔で応えるのだった。
「思うところがあるのは事実だ」
「それは何かしら」
「美味いのか？それは」
彼が言うのはそこであった。
「ドードーの親子丼は」
「実は私も知らないわ」
実は彼女もそれは知らないのであった。衝撃の事実であった。
「作るのははじめてよ」
「はじめてってちょっと」
ジュディは今のプリシラの言葉に思わず突っ込みを入れた。

第九十七話　智には智でその十一

「それで作るの」
「何でもはじめてはあるわ」
いつものポーカーフェイスでそのジュディに言葉を返してみせる。
「終わりがあるのと同じで」
「それはそうだけれど」
「それでよかったら」
ここでプリシラは不意に三人に対して言うのであった。
「よかったら？」
「私の家に来ないかしら。今晩」
「っていうと」
ローリーはそれを聞いて述べた。
「僕達にもそのドードーの親子丼を」
「ええ、そうよ」
そういうことであった。三人を目だけで見回しながら述べる。
「どうかしら。よかったらだけれど」
「そうね」
それに最初に応えたのはジュディであった。
「私ドードーは好きよ。当然食べるのもね」
「じゃあジュディはいいのね」
「ええ。それに親子丼も好きだし」
それも好きなジュディであった。
「丁度いいわ。乗るわ」
「じゃあまずは一人」
「僕も」
次に名乗り出たのはローリーであった。
「僕もドードー好きだし」
「ローリーもいいのね」

「うん、何だか面白そう」
笑顔で話に乗って来たのであった。
「だから是非入れて。いいよね」
「参加者を募ってるのは私よ」
プリシラは今度は自分から強調してきた。
「だから。来て欲しいのよ」
「そうなんだ。じゃあ」
「ええ、御願い」
プリシラにとっては非常に珍しいことに彼女からの御願いという言葉だった。
「来て。是非ね」
「うん、じゃあ」
「それで俺か」
最後はやはりタムタムであった。彼は今まで考える顔をしていた。
「俺は。そうだな」
「どうするの？」
「二人と一緒だ。是非」
「そう。じゃあ」
「ドードーは精がつく」
鶏よりもいいとされている。それで人気があったりする。なお値段もリーズナブルとなっている。かなりポピュラーな食材であり合鴨にも近くなっている。
「だからな。これからのことを考えてだ」
「栄養補給ね」
「野球にもいい」
やはりタムタムは野球人であった。今の言葉にそれがはっきりと出ていた。
「だから。俺も」
「これで三人ね」
「それじゃあプリシラ」

またジュディが言ってきた。
「四人で。今夜は」
「そうよ。親子丼パーティーよ」
また随分と変わったパーティーであった。
「これからの為にね」
「よしっ」
今の声はジュディのものである。彼女が一番乗り気であった。
「ロシュフォール先生と戦う為の力をつけましょう」
「戦うんだ」
それにローリーが突っ込みを入れる。
「僕達先生と」
「その通りよ」
ここでプリシラがローリーに言ってきた。
「いいかしらローリー」
「うん」
自然とプリシラの言葉に顔を向ける。
「情報もまた戦いの一つよ」
「ああ、そうだったね」
言われてそのことを思い出したのだった。
「スパイもそうだよね、やっぱり」
「その通りよ」
そういうことであった。
「だからここは英気を養うのよ」
「そのためのドードー親子丼パーティーなんだね」
「ええ」
そういうことであった。これで話は決まりであった。
「じゃあ今日は放課後は」
「何もなし？」
「作戦再開は明日以降」
そういうことになったのだった。最早プリシラが実質的な司令官

になっているかの様であった。もっとも司令官は最初はいなかったようだが。

「だから今日はドードーを買いに行くわ」

「了解」

「それじゃあ」

こうしてこの日は普通に終わった。だがこれは別の新たな騒動の幕開けだった。簡単に言えば一つの騒動の合間の些細とは言えない騒動のはじまりであった。

智には智で　　完

２００８・６・２３

第九十八話　ドードーの親子丼その一

ドードーの親子丼

かくしてドードーの親子丼でパーティーをすることになったプリシラ達。まずは他ならぬ食材であるドードーの肉と卵を買いに市場に向かうのだった。

「そういえばさ」

「何？」

四人は並んで歩いている。その中でプリシラはジュディの言葉に応えた。

「この市場だけれど」

「この市場ね」

「ええ、ここ」

今歩いている市場についての話だった。上には雨が降った時のビニールの天井があり左右には様々な店が立ち並んでいる。かなりレトロ風味の市場である。彼等は今そこを歩いているのだ。

「何か如何にも日本の市場って感じよね」

「当たり前だろ」

タムタムがそれに応える。今四人の周りにはおばさんや子供達が行き交っている。誰もが今買う買い物を見回して歩いていた。店からはおじさんやおばさんの陽気な声が聞こえてくる。

「あっ、このカマボコいいねえ」

「今日は鰯が安いな」

「お魚が多い辺りがね」

ジュディが言うのはまずそれだった。

「如何にもって感じで」

「だからここは日本だ」

タムタムはまたジュディに対して告げた。

「当然だろ。日本だから日本の市場だ」

「まあ言うまでもないことだけれど」
「当たり前のことを言っても何にもならないだろうに」
「けれどあれね」
しかしジュディはまだ言うのだった。言葉を続けていく。
「この日本風味がいいのよね」
「異国情緒だね」
「そうそう、それそれ」
ジュディは今度はローリーに対して応えた。笑顔になっている。
「この異国情緒がいいのよ。日本にいるって感じでね」
「日本か」
「ずっとどんな国かしらって思っていたのよ」
ジュディはまたタムタムに応える。
「不思議な国だって聞いていたけれど。そこにいる人達も」
「不思議か」
「侍や忍者がいるって聞いていたわ」
真顔でタムタムに対して答える。どうやら本当に言われたらしい。
「あと仮面ライダーやウルトラマンがいるって」
「流石にそれはないんじゃないの？」
「戦隊があちこちで戦っているっても聞いたわ」
ローリーに対して言葉を続ける。
「とても物騒な国だって思ったわ。それでも治安はいい国だっていうから変に思っていたけれど」
「滅茶苦茶だな、何か」
タムタムはジュディの今までの話を聞いて顔を顰めさせるばかりだった。
「じゃああれか。機動刑事がいたり二十世紀の日本軍が開発したサイボーグがいたり」
「普通にいると思っていたわ」
ジュディもかなりのものだったようだ。
「子供の頃はね」

「流石に今は思っていないんだな」
「当たり前よ。何で今頃侍や忍者がいるのよ」
ジュディが最初に言うのはそれだった。
「あと陰陽師や鬼や天狗がいるっても聞いたけれど」
「日本は異次元空間か！？」
タムタムは陰陽師や天狗と聞いて今度はこう呟いた。
「妖怪やサイボーグが同時に存在するとなると」
「変わった国だって思っていたわ」
ジュディはこう考えていたのだった。
「子供の頃。そんな凄い国があったなんて」
「マウリアだよ、それじゃあ」
ローリーは苦笑いしてマウリアの名前を出した。
「あそこは何でも凄い色々な人がいるらしいけれどね」
「セーラといいな」
タムタムは今度もまた真顔で述べた。
「マウリアはまた特別だが」
「特別なの、あの国は」
「連合の常識は通用しない」
これがローリーに対するタムタムの返答だった。
「だからだ。あそこはまた別だ」
「じゃあサイボーグやらミュータントやら魔法使いがいてもマウリアだったらいいんだ」
「別に驚かない」
またローリーに答えるタムタムだった。
「あそこだけは特別だ」
「そうなるんだ」
「しかし。日本は違うだろ」
タムタムは何故か日本を己の思考の範囲内で留めていた。
「流石にそこまでじゃない」
「まあそうだね」

ローリーはタムタムのその言葉に頷く。
「日本は普通の国だよ。普通のね」
「忍者はいないけれど」
ジュディは忍者を話に出した。

第九十八話　ドードーの親子丼その二

「これは少し期待していたのよ」
「忍者を見たいのならアトラクションに行けばいいわ」
プリシラがジュディのその言葉に応えて言ってきた。
「アトラクション！？」
「ええ。そうしたテーマパークもあるし」
時代劇等のセットをそのまま使っているのである。こうしたテーマパークは日本では二十世紀から存在している。連合では割りかし知られてもいる。
「そこには侍もいるわよ」
「へえ、面白そうね」
「面白いわよ」
プリシラは答えた。
「それもかなりね」
「そうなの」
「当時の服も着られるし」
プリシラはこのこともジュディに教えた。
「忍者になったり花魁になったりもできるから。一度行ってみればいいわ」
「そうね、一度ね」
興味をひかれてやまないジュディであった。
「行ってみるわ。さて」
「ええ」
話がここで戻った。
「ドードーよね」
「そう、ドードー」
今夜のパーティーの主役である。その太った大きな鳥だ。
「肉屋さんで売ってるけれど一つ面白いこと考えたわ」

「面白いこと？」
「そうよ。ほら、あれじゃない」
ジュディは今度はローリーに対して述べる。
「親子丼って普通のお肉だけ使うじゃない」
「うん」
「内臓とかは使わないわよね」
「そうだね、確かに」
ローリーもそれは知っていた。なお日本ではあまり内臓系統の料理はない。魚のそれは時々食べたりするがそれでもあまりないのは事実だ。
「内臓も食べたいけれどね」
「内臓ねえ」
ローリーは言う。
「けれど親子丼には合わないよ」
「そうそう、だからね」
ジュディはそれはわかっていた。そのうえでの話だった。
「だから。考えてるのよ」
「何を？」
「親子丼だけじゃ少し寂しくない？」
彼女が言うのはそこであった。さらに言葉を続けていく。
「だからおかずに。内臓を焼いたのなんてどうかしら」
「いいな、それは」
タムタムがそれに乗ってきた。
「俺鳥の内臓好きだしな」
「美味しいからね。レバーとかね」
「ああ」
「そういうのを焼いて。後は」
ジュディはさらに言葉を進めていく。こうなれば流れが完全にできていた。
「お吸い物ね」

「それだったらお味噌汁ね」
プリシラは味噌汁を提案してきた。
「お味噌汁。それがいいわ」
「お味噌汁！？」
「そう。親子丼といえば葱ね」
「ええ」
これは外せない。卵と同じ位外せないものだ。親子丼というものは不思議なもので鳥と卵の他に葱もまた必要なものなのである。鳥と葱の組み合わせは最高の組み合わせの一つだ。
「それを使えばいいわ」
「葱のお味噌汁。いいわね」
「だからそれで決まりね」
「ええ。メニューは完全に決まったわね」
「そうね」
確かにこれで決まった。一行はまずは肉屋に行ってドードーの肉を買った。当然内容も。それから八百屋で葱を買い最後は卵屋でドードーの卵を。これで完璧だった。
そのうえでプリシラのアパートに入った。何か無機質で生活臭のない感じの部屋であった。
「装飾がないな」
「好きじゃないから」
プリシラはタムタムに答えた。整理整頓が行き届き奇麗な部屋の中だがそれでも何か機械めいたものがありそれが無機質に見せていたのだった。

第九十八話　ドードーの親子丼その三

「シンプルイズベストよ」
「そうか」
「そう。それと清潔」
見れば至るところ実に奇麗だ。完璧と言っていい。埃一つない。
「それこそが大事だから」
「台所も奇麗ね」
ジュディは台所を見た。ピカピカと光ってさえいる。
「使い易そう」
「まずはお肉を切って」
早速包丁が出て来た。包丁も丁寧に手入れされている。如何にもよく切れそうだ。
「それからお葱もね」
「お味噌汁のダシは？」
「いりこよ」
こうジュディに告げる。
「そこの棚の中にあるから」
「そうなの」
「そう。いりこの他にも昆布もあるわよ」
だしまでちゃんと用意してある。プリシラは案外和食嗜好であるらしい。少なくともだしまでわかっているということはそれなり以上に知っていると言えた。
「何なら昆布も使っていいわよ」
「昆布もなのね」
「いりこだけじゃ駄目だったら」
そのうえでこう言い加えてきた。
「昆布も使って」
「わかったわ」

ジュデイはプリシラのその言葉に頷いた。
「じゃあ昆布も使っていいかしら」
「ええ、どうぞ」
自然に昆布も使うことになった。こうして昆布といりこが自然に棚から出される。こうして水を入れた鍋の中に昆布といりこが入れられる。すぐに火が点けられだしが取られるのだった。
そのだしを取る横では。ローリーとタムタムがドードーの肉を切っていた。
「前から思っていたんだけれどさ」
「何だ？」
タムタムは包丁を使うローリーに対して応える。彼は切った肉を生姜醤油に漬けて味をつけている。細かい工夫も忘れていない。
「ドードーの肉って脂身が多いよね」
「そうだな」
タムタムはローリーのその問いに頷いた。
「元々かなり太った鳥だしな」
「そうだね。それで有名だし」
ローリーも言う。
「けれどこの脂身がね。いいんだよね」
「ああ。鳥の脂身はな」
タムタムはさらに言葉を続ける。
「牛や豚のそれとはまた違うからな。脂身も脂身で独特の味わいがある」
「だから捨てないんだね」
「ああ。捨ててないよな」
「うん」
タムタムの言葉に対して頷いてみせた。
「僕もこの脂身好きだしね」
「しかもだ」
タムタムはさらに言う。

「この脂身はいい脂身だ」
「いい脂身？」
「普通カロリーが高いな」
油だからだ。だからこれは当然だ。
「牛や豚のそれはな」
「うん。だから赤みだけ食べるって人も多いよね」
「鶏にしろこのドードーにしろササミだけ食べたりな」
「それってかなりカロリー低いんだよね」
鶏のササミはダイエットにいい食材としてこの時代でも定評がある。中にはどう勘違いしたのかこのササミとゆで卵の白身ばかり食べて格闘家のトレーニングをして実際に格闘家の筋肉を見に着けた野球選手も過去にいた。この選手は怪我に悩まされ馬鹿者としてスポーツ史に記録されている。馬鹿者はどの時代にもいる。その最高の例である。
「だが。脂身は脂身でいい」
「そうなの」
「鶏とかこのドードーのはな。比較的太りにくい脂身だ」
「そうなるんだね」
「だからこのままでいい」
タムタムは断言するのだった。
「味もいいしな。だからこのままで行こう」
「わかったよ。それじゃあね」
ローリーは肉をさらに切っていく。包丁の切り方が中々巧い。手馴れたものであるのがわかる。自炊している証拠であることもわかる。

第九十八話　ドードーの親子丼その四

「このまま切っていくよ」
「ああ」
「それで内臓は」
おかずのことであった。
「どうしていこうかな」
「それは胡椒と醤油で味付けね」
プリシラが言ってきた。
「それで行くわ」
「ソースじゃないの」
「和風よ」
ジュディに答えた言葉はこれだった。
「和風でいきたいからよ」
「だから醤油なんだ」
「ソースもソースでいいけれど」
一応はこう前置きする。
「折角だから醤油でいくわ。それでいいわね」
「ええ、それじゃあ」
ジュディは今は葱を切っている。見ればついでに豆腐も切っている。
「豆腐はこの大きさでいいわよね」
「丁度いいわ」
ジュディの豆腐の切り具合を見て述べる。見れば小さく四角に切っている。
「その大きさよ」
「そうなの。よかった」
「後はだしが取れたらそれを出してお葱とお味噌を入れて」
「スープと少し違うわね」

「お味噌汁ははじめて？」
「実はそうなのよ」
ジュディはここで豆腐を切り終えた。
「けれど実際に作ってみると」
「どうなの？」
「いい感じね。美味しそう」
「上手くいっているのね」
「これでも料理には自信あるのよ」
ジュディは楽しげに述べてみせた。
「お味噌汁ははじめてだけれどね」
「そういえばあれだよね」
ここでローリーが話に入って来た。包丁を使いながら。
「あれって？」
「うちのクラスって皆料理上手いよね」
彼が言うのはそれであった。
「皆が皆。やっぱり一人暮らしとか小さな家族と一緒に住んでいる人が多いからだよね」
「そうね。それはね」
ジュディもその一人なので彼の今の言葉に頷くことができた。
「料理って経験だからね」
「僕も毎日包丁持ってるし」
「そういえばかなり慣れているな」
タムタムはあらためて彼の包丁捌きを見て述べた。
「肉でも何でも切れそうだな」
「一番得意なのはお魚捌くことかな」
そのドードーの肉を切りながらの言葉であった。
「烏賊も得意よ」
「そう。かなりのものみたいね」
「烏賊はスパゲティによく使うんだ」
今度はプリシラに答えての言葉である。

「イカ墨のスパゲティにね。ネーロに」
「ああ、あれか」
タムタムはイカ墨のスパゲティと聞いて不意に微笑んできた。
「あれはかなりいいな」
「好きみたいだね、イカ墨のスパゲティ」
「好きどころか大好物だ」
その笑みのままローリーに答えてきた。
「あれに大蒜と唐辛子と烏賊を入れてか」
「うん、そうだよ」
「センスがいいんだな、本当に」
「タコ墨もあるけれどやっぱり僕は烏賊かな」
少し考える顔になってからの言葉だった。
「あれが一番いいね」
「私もあれは好きよ」
何とプリシラも同じであった。
「腹黒い感じになれるし」
「腹黒いってそれは」
ジュディは今のプリシラの言葉には苦笑いになる。
「違うんじゃないかしら」
「そうだよね。確かに黒いことは黒いけれど」
ローリーも言う。

第九十八話　ドードーの親子丼その五

「それはね」
「まあそこは人それぞれの捉え方だな」
タムタムは冷静にそういうことにした。そのうえで話をドードーに戻してきた。
「それでだ。もういいな」
「そうね。そろそろ作りはじめましょう、本格的にね」
「ああ、いよいよな」
三人はプリシラの言葉に応える。こうして遂にドードーの親子丼と味噌汁、それと内臓を焼いたものが出された。テーブルの上には他に胡瓜の漬物もある。
「いただきます」
「いただきます」
まずは最初の挨拶からだ。それから食べはじめる。
ドードーは肉も卵も内臓も美味かった。ローリーは食べながら言った。
「あれだね。鳩に近い味だね」
「それは当たり前じゃない」
ジュディは今のローリーの言葉にこう返してきた。
「ドードーって鳩の仲間なんだから」
「ああ、そういえばそうだね」
言われてこのことを思い出すローリーだった。ドードーは鳩の先祖とも言っていい種類なのである。鶏と同じように思われているが実は違う種目の鳥なのである。
「ドードーって鳩だったんだ」
「そうよ。鶏とはまた違うのよ」
「鶏みたいに卵を一杯に産んでも？」
「卵を沢山産むのも本来はなかったのよ」

横からプリシラが述べてきた。彼女は巨大な丼を持って静かに食べている。
「ドードーは本来卵は一回しか産まないのよ」
「そうだったんだ」
「それにお肉だって」
ここで丼の中の肉を米ごと食べる。
「元々はあれなのよ。硬くて脂っこかったらしいわ」
「野生のドードーは今でもそうらしいな」
「ええ、そうよ」
タムタムの問いに対して答える。四人はそれぞれ四角いテーブルの一片に座って食べている。互い互いに向かい合っている形だ。テーブルの真ん中に内臓と漬物があり四人にそれぞれ丼と味噌汁が置かれていた。ただその丼が両手でも余る程大きいものである。
「家畜のものはまた別なのよ」
「品種改良されたのね」
「そういうこと」
ジュデイの問いに答えての言葉だ。
「それで鶏みたいになったのよ」
「そういえばこのドードー」
ローリーもまた親子丼の中の肉を食べながら言う。卵と混ざり合いそれが絶妙の味覚のハーモニーを作り出していた。色もまた黄と白、それに肉の独特の灰と黒の中間色がミックスされ最高の色合いを作り出していた。
「脂は多いけれどそんなに脂っこくないね」
「美味しいわよね」
「ああ」
ジュデイとタムタムも言う。
「そんなにまずいとは少なくとも思わないな」
「そうよね。けれどこれが」
「そうよ」

プリシラはまた答えたのだった。
「品種改良の結果よ。全てね」
「ドードーも最初はあまり美味しくなかったんだ」
ローリーはそのことをあらためて思う。
「意外っていうか何ていうか」
「しかも卵は一つか」
タムタムはそこも言う。
「絶滅する筈だな、地球じゃ」
「そう。それが大きかったのよ」
プリシラが次に指摘したのは卵のことであった。
「ドードーは動きが鈍いわよね」
「うん」
これは言うまでもなかった。肥満した身体はお世辞にもバランスがいいとは言えずまた鈍い。ましてやドードーは飛べない鳥なのだ。
「だから余計にね」
「余計になんだ」
「しかも人を知らなくて怖がらなかったから」
これにより絶滅した動物も多い。ステラーカイギュウもそうであるしオオウミガラスもそうだ。なお連合ではこうした動物の絶滅は大抵欧州の者達、即ちエウロパの者達の仕業であると教えられている。全て悪いのはエウロパであるということにされているのである。
「すぐに捕まって殺されて」
「悲しいわね」
ジュディはその話を聞いて俯いてしまった。

第九十八話　ドードーの親子丼その六

「それって」
「しかも人間だけじゃなかったの」
プリシラの話は続く。
「人間が持ち込んだ猿や猫がドードーを襲い」
「オーストラリアやニュージーランドと同じだな」
タムタムはその話を聞いて顔をさらに顰めさせた。
「欧州の奴等が何も考えずに持ち込んだ動物で生態系が破壊されたか」
「その通りよ。鼠もいたし」
「鼠も！？」
「船の中にいたのよ」
こうローリーに説明するのだった。
「その鼠達が船から出て来てね。陸に上がって」
「それでドードーを襲ったの？」
「雛や卵を食べたのよ」
そういうことだった。食べられるのは親鳥ばかりではないということである。むしろ子供や卵を失う方が種の存続に関して深刻な事態なのである。
「その結果。僅か百年で地球のドードーは」
「絶滅」
三人の口から自然にこの言葉が出た。
「そういうことか」
「結局のところ」
「そうだったの。それでいなくなったのよ」
「酷い話ね」
ジュデイはここまで聞いて溜息混じりに述べた。
「本当に。エウロパ人は」

「少なくとも今の連合ではない話だな」
タムタムは確信している声で述べた。
「ここは種の存続や動物保護には五月蝿いからな」
「うん、そうだよね」
タムタムの言葉にローリーが頷く。
「動物の持ち込みとかかなりね」
「種の保存は大事だ」
「その通りよ」
プリシラは今のタムタムの言葉を静かに肯定した。
「生態系の維持もね」
「エウロパの奴等はそういうことにはお構いなしか」
「酷い奴等だよね」
「最低ね」
完全にエウロパを悪者にしていた。連合においてはエウロパは紛れもない悪である。このことは自然に関することでも同じなのだ。
「おかげでドードーに会えたのは宇宙に出てから」
「他の多くの動物も」
それだけかつて地球にいた動物が絶滅してしまっていたということだ。連合ではそれを殆どエウロパの大航海時代や帝国主義時代での蛮行としているのだ。
「出会えたっていうのは」
「エウロパの罪は重いな」
「けれど出会えたわ」
プリシラはぽつりと呟いてみせた。
「そして今こうして」
「食べていると」
「親子丼パーティーの主役になってるってことね」
「ええ。だからいいと思うわ」
これがプリシラの考えであった。
「これでね。それで」

「ええ」
「食べましょう」
こう三人に言うのであった。
「話していて手が止まっているわよ」
「おっと」
「確かに」
言われてそれに気付く三人であった。見ればプリシラは話の間も静かに食べていた。気付けば彼女だけかなり食べてしまっている。
「食べないとな。折角の親子丼だしな」
「そのドードーのね」
ジュデイがタムタムの言葉に続く。
「内臓もあるしお味噌汁も」
「ああ、そうそう」
ここでローリーが言ってきた。
「何？ローリー」
「メインを食べるのもいいけれどさ」
ジュデイに応えて述べてきた。

第九十八話　ドードーの親子丼その七

「大切なこと、忘れてないよね」
「大切なこと？」
「最後はあれじゃない」
にこりと笑ってまた述べた。
「デザート。忘れてない？」
「あっ、そういえば」
言われてそれに気付くジュデイだった。
「考えてみれば誰も作ってないんじゃ？」
「済まん、俺もだ」
タムタムもここで気付いたのだった。
「デザートのことまでは考えていなかった」
「そうよね。ドードーって目立つから」
「それにばっかり目がいっちゃったね」
「そうね」
ジュデイはローリーの言葉に対して頷く。
「失敗したわね、本当にね」
「ええ。けれど」
それでもジュデイは言う。
「買いに行けばいいわよね。何にする？」
「それなら心配はいらないわ」
しかしここでプリシラが口を開いてきた。
「心配はいらない？」
「そうよ。だってもうデザートはあるから」
「あるの」
「ええ」
三人に対して声だけで頷く。その動作が何ともプリシラらしく無表情で無機質なものに見えた。そのプリシラらしくクールに言葉を

続けてきた。
「ゼリーがね」
「ゼリー」
「オーソドックスにオレンジのゼリーがね。あるわ」
こう述べるのであった。
「それでどうかしら」
「ゼリー。いいね」
「そうね」
ローリーとジュデイはそれに乗ってきた。二人共ゼリーが好きなようである。
「タムタムはどうなの？」
「俺もゼリーは好きだ」
そしてこれはタムタムも同じであった。
「それもかなりな」
「そう。じゃあ決まりね」
プリシラは三人の言葉を全て聞いたうえで納得した顔になるのだった。といっても表情が変わったようにはどうしても見えないのであるが。
「冷蔵庫にあるから」
「冷蔵庫になのね」
「ゼラチンで作ったゼリーよ」
プリシラはこうも述べる。
「だから弾力もかなりいいわよ」
「いいわね、それって」
ジュデイは弾力があると聞いてさらに顔を綻ばせる。
「ゼリーはやっぱりあれよね。弾力よね」
「寒天のそれもいいけれどね」
ローリーはそちらもお気に入りなようである。にこにことした顔で親子丼を食べながらの言葉だ。食事が自然に進みだしていた。デザートのことを聞いて。

「弾力のあるゼリーかあ」
「それじゃあまずはあれだな」
タムタムはクールに言う。
「この親子丼を食べ終えて」
「そうね。まずはそれからね」
「おかずもね」
ジュデイとローリーもそれに頷いて食べていた。
「それにしてもこの内臓って」
「これも美味いな」
ジュデイとタムタムは今度は内臓を食べていた。
「味付けもいいじゃないか」
「やっぱりお醤油よね」
ジュデイが言うのはそれであった。
「お醤油。最初はおソースにするつもりだったけれど」
「変えたのか」
「ええ。それがよかったみたいね」
「そうだな。親子丼だからな」
言うまでもなく和食である。和食を和食にしているものは何かというとやはり醤油である。これに関してはこの時代でも変わりはしないことだ。

第九十八話　ドードーの親子丼その八

「やっぱり醤油だよな」
「そうね。それで」
ジュデイは言う。
「デザートはゼリーね」
「和食の後は洋風」
プリシラは静かに述べる。
「最後は違うと思うかしら」
「そうじゃないの？」
「ねえ」
ジュデイとローリーは今のプリシラの言葉に顔を見合わせる。
「ゼリーっていえばねえ」
「しかも使ってるのはゼラチンでしょ？」
和風なら寒天である。これは一つの定義であった。
「それだったらやっぱり」
「洋風じゃないの？」
「そう思うのは甘いわね」
しかしプリシラは言うのだった。
「和食は奥が深いのよ」
「じゃあ何かあるのね」
「その通り」
こうジュデイに述べたのだった。
「まずはこれを食べてからね」
「あっ、これね」
「そう、まずはメインよ」
親子丼とお味噌汁、それに内臓である。皆かなり食べているとはいえまだ残っているのである。それを食べ終えてからデザートということである。

「それが終わってからね」
「そうね、確かに」
「メインを食べ終えてこそのデザートだしね」
「そういうことよ。じゃあ」
ジュデイとローリーに対して述べる。
「食べましょう」
「ああ」
タムタムが頷いた。こうしてまずはドードーを食べていくのであった。それを全て食べ終わり。遂にそのデザートということになったのだった。
「美味しかったね」
「ああ」
タムタムはローリーの言葉に頷いている。頷きながらそれぞれの食器を食器洗い機に入れていく。もう四人分が入ってしまっている。
「ドードーは和食にも合うんだな」
「そうだね。意外とね」
「だから言っているじゃない」
ここでまたプリシラが言ってきた。
「ドードーは品種改良でそうなったのよ」
「そうね」
ジュデイはまずプリシラのその言葉を受けた。
「だからなのね」
「美味しくないものでも品種改良したり工夫すれば美味しくなるわ」
その通りである。これにより美味くなるのが食材であり料理である。素材が大事だがその素材のレベルをあげることもまた重要なのである。
「何でもね」
「デザートもそうなのね」
「そうよ」
またジュデイに対して答える。

「それじゃあ。いいわね」
「ええ、そのデザートを」
「食べようよ」
「ゼリーをな」
三人はプリシラの言葉に続く。こうしていよいよデザートとなったのだった。プリシラが冷蔵庫から出してきたそのゼリーとは。
「あれっ、これって」
「ゼラチン使ってるのよね」
ローリーとジュデイは目の前に置かれたそのゼリーを見てまずはこう言った。見ればそのゼリーは柑橘類を半分に切ったその中に置かれているのだった。完全に和風の外見だった。
「それでこんなふうになるの」
「これは意外だったな」
「はっさくのゼリーよ」
プリシラは三人に対して述べる。テーブルの上に座る四人の前にそれぞれ置かれているのである。そのゼリーが。
「これはね」
「はっさくのゼリー!?」
「どっちかっていうとオレンジなんだけれど」
ローリーとジュデイはそのゼリーを見てまた言う。どうしても信じられない感じだというのがその言葉からもわかる。目はそれ以上に言っていた。

第九十八話　ドードーの親子丼その九

「まあ皮は確かにはっさくだね」
「そうよね、どう見ても」
「けれどあれなんだな」
タムタムはその中で述べたのだった。
「このはっさくの中のゼリーは」
「そう、ゼラチンよ」
プリシラはそこは少し強調して述べてきた。
「それは本当よ」
「確かにな」
タムタムは右手に金色のスプーンを持った。それでゼリーを突きながらの言葉だった。見ればゼリーは寒天のそれよりも遥かに強い弾力を見せている。
「これはな」
「つまりあれね」
ジュデイはここで気付いたのだった。
「これは。あえて洋風の要素を入れた和菓子なのね」
「そうよ。ただし」
「ただし？」
「まずは食べてみて」
三人に対して述べる。
「そうしたらわかるわ」
「わかるんだね」
「ええ」
ローリーに対して答える。
「だから。是非」
「わかったよ。それじゃあ」
「頂きましょう」

「ああ、そうだな」
こうして三人はスプーンを手にゼリーを食べはじめた。プリシラもまた。そのはっさくのゼリーの味はどうかというと。
「あれっ、これは」
「和風!?」
「ああ、間違いない」
三人はすぐに気付いた。その味は確かに和風のそれだった。
「この大人しい上品な味は確かに」
「和風ね」
「素材の方を生かしているのか」
「そうよ。味付けは和風よ」
そこは確かに言う。
「それは念頭に置いておいたわ」
「そうね。完全にね」
「そういえばうちのクラスって」
ローリーがふと気付いて声をあげた。
「日本の学校だけれど日本らしさって薄いね」
「ああ、それはな」
タムタムもそれに頷く。
「その通りだな。どうにもな」
「日本人って三人だけ?」
ジュデイも言った。
「彰子と管君と七海だけよね」
「あとカムイとダンが一応アイヌと琉球だよね」
アイヌと琉球は日本の兄弟国家である。両方共かつては日本において所謂大和民族と共に暮らしていた民族である。混血は日本にあった頃からかなり進んでいる。今でもその交流は深く互いの国家元首同士の訪問も多い。とりわけ日本の皇室と琉球王家の関係は深い。
「日系は五人かしら」
「少ないね、本当に」

ローリーはまた言う。
「全体の一割以下なんて」
「そもそも八条学園自体がそうじゃないのか？」
タムタムはここで言った。
「俺にしろパラオからだしな」
「私はカルタゴ」
ジュデイである。
「僕はヒッタイト。プリシラはアルムだったよね」
「そうよ」
皆国籍が違うのである。祖国からこの学校に来ているのだ。なお連合ではこうした他国の学校に入学することはかなり普通である。
「アルム人よ」
「古の民族の末裔かあ」
「それはあんたもでしょ。私もだけれど」
ジュデイはタムタムに突っ込みを入れた。
「そもそもカルタゴ人なんて歴史の中に消えたんじゃなかったっけ」
「ローマに滅ぼされたよね」
「カルタゴじゃ屈辱の歴史よ」
少し忌々しげにローリーに語る。
「実際のところね」
「本当にフェニキアと血は繋がってるのか？」
「さあ」
タムタムの問いにも首を捻るだけである。

第九十八話　ドードーの親子丼その十

「繋がってると思う？大体あっちだって」
「かなり眉唾だよね」
「そういうことよ。まずエイミーと私は他人ね」
　このクラスにもフェニキア人はいる。エイミーがそれだ。しかもフェニキア人だというのにその名前はアメリカ風なのがまたおかしな話であった。
「お互い絶対大昔のフェニキア人じゃないって思ってるわよ」
「やっぱり違うの？」
「信憑性はないと思っていいわ」
　これが現状である。そもそもローリーのヒッタイトにしろ突如として姿を現わした海の民という謎の民族に瞬く間に滅ぼされている。当時鉄器を使い精強と繁栄を誇ったヒッタイトを呆気ないまでに滅ぼしたこの民族は謎の民族とされている。この時代でもその素性は不明のままだ。
「カルタゴ人ってポエニ戦争で五万まで減ってそっから奴隷に売られたじゃない」
「うん」
　第三次ポエニ戦争でカルタゴは陥落し生き残ったカルタゴ人は奴隷として売られた。カルタゴの街は完全に破壊された。これによりカルタゴ人は歴史から消えた筈なのだ。しかし連合ではカルタゴ人の末裔達が復活して国家を築いているのである。と、されているのだ。
「何でそれで今何十億もいるのよ」
「考えてみればおかしな話だよね」
「そうでしょ？だから絶対違うわ」
「ヒッタイトだって消えてるしね」
「そういう意味でドードーよりもいることが不思議ね」

「そうだね」
連合では誰もがわかっているがこうした復活した古の民族国家は大抵自称である。まさか本当にヒッタイト人だとは誰も思ってはいないのだ。他ならぬ彼等自身にしろ。
「とりあえずエチオピアと日本とイスラエルは除外ね」
連合の中で中国の他に歴史の古い国だ。エチオピアに至ってはその成立した年は不明である。シバの女王の末裔が今の皇帝だとされている。この皇帝にしろ二十世紀には一旦断絶している。
「何が何だかわからないから」
「そうだね。三国共混血凄いけれど」
「エチオピアは元々白人の国だったな」
タムタムはふと言ってきた。
「確かそうだったか？」
「黒人じゃなかったかしら」
「いや、皇帝陛下は確か白人であられたぞ」
今も一応そういうことにはなっている。ただしそのエチオピア皇帝家もその顔にアジア系のものがかなり入り肌も黒さが加わっているが。これもまた婚姻の結果である。
「二十世紀は。確か」
「今黒人系多くない？」
「アジア系も多いわよ」
これが今のエチオピアの現状である。
「首相は完全な黒人よね」
「どう見てもね」
今のエチオピア首相は完全に黒人である。誰がどう見てもはっきりわかる黒人であり趣味はボクシングだ。元エチオピア学生大会ヘビー級チャンピオンでもある。常に政敵をノックアウトしてやると豪語するいささかとんでもない人物だ。
「人種的には曖昧なんだな」
「シバの女王ってそもそも黒人だったかしら」

「そうなんじゃないの？」
これもこの時代で議論が続いていることだ。
「そういえばソロモン王もアジア系じゃなかったっけ」
「キリストもあれよね。アジア系の顔らしいわよね」
少なくともエウロパの十字架や宗教画のそれではないのは確実とされる。あのキリストの顔はラテン系の顔だからだ。
「何でも」
「そうそう」
ローリーがジュデイの言葉に相槌を打つ。
「そうだったんだよね、確か」
「じゃああれは何なのかしら」
ジュデイはさらに首を傾げさせる。
「あれって？」
「聖骸衣よ」
突如として意味深そうな言葉が出て来た。意味深いだけではなくて神秘的な響きさえ秘めている。そんな複雑な響きのする言葉であった。

第九十八話　ドードーの親子丼その十一

「キリストのね」
「あれか」
どうやらタムタムは聖骸衣の言葉の意味が何なのかわかったらしい。
鋭い目で語るその言葉の色が理知的なものを含ませているのがわかる。
「キリストが処刑された時に亡骸を包んだ」
「それね。あれにあるキリストの顔は」
「ああ、それだ」
プリシラの言葉にも応える。
「それだよ。あのキリストの顔は」
「ラテン系ね」
そうなのだった。伝説のキリストの聖骸衣にある顔は紛れもなくラテン系の顔なのだ。ここで大きな矛盾がはっきりと出ているのである。
「だからあれは」
「おかしいんだ」
「そうよ」
プリシラがジュデイに対して答えた。
「有り得ないのよ。絶対にね」
「じゃああれは偽物なの？」
ローリーは言う。
「だとしたら」
「っていうか作られたとか？」
ジュデイはこう予想してみせた。
「誰かに。つまりそれを作ったのは」
「ラテン系の人だよね」
崇拝する人物の顔を自分達に似せて描く、これは何時でも何処で

も同じである人間の姿だ、これに関してはこの時代でも同じなのである。
「やっぱり」
「そうね。やっぱり」
ジュデイは今度はローリーの言葉に頷いた。
「そうなるわよね」
「それでよ」
ここで不意にプリシラの言葉が変わった。
「!?どうしたの?」
「プリシラ、急に」
「顔よ」
プリシラは懐疑的な顔を見せたローリーとジュデイに対して答えてみせた。
「顔なのよ」
「顔!?」
「そう、顔」
またジュデイに述べる。
「顔なのよ、キリストの顔も本当は違うわよね」
「ええ」
この話がまた出る。キリストの顔が本当は違うということが。このことはもうジュデイ達もわかっている。しかしそれでも今のプリシラの言葉がわからないのだった。
「それよ。先生の顔もひょっとしたら」
「先生!?」
「そうよ、ロシュフォール先生」
何故か忘れられていた名前が思い出された。今四人が目指しているその先生だ。その先生のことに話が戻ったのである。本当に思い出されたように。
「ロシュフォール先生だけれど」
「先生がどうしたの?」

「ドードーがペットって以外に何かあるの？」
ジュデイとローリーはそれをプリシラに対して問う。表情は怪訝なものでありどうしてもわかりけねている。わかりかねているのはわかる顔であった。
「先生に」
「私の予想だけれど」
「うん」
「予想？」
二人がまたそれを問う。タムタムは黙っている。黙ったままプリシラの話を聞いているのである。
プリシラの話が続けられる。その話が何かと言うと。ロシュフォール先生に対する一つの大きな謎の解明への道標であった。

ドードーの親子丼　　完

２００８・７・２４

第九十九話　先生の顔その一

先生の顔

プリシラの大きな仮説、それはこういうことだった。

「変装！？」

「ええ、そうよ」

プリシラはジュディとローリーに対して答えていた。そのポーカーフェイスで。

「先生は変装している可能性があるわ」

「変装か」

タムタムはここでようやくといった感じでまた口を開いてみせた。

「あの先生がな」

「ロシュフォール先生の日常生活には謎の部分が多いわね」

プリシラが次に指摘するポイントはここだった。

「それもかなり」

「それもあるな」

タムタムもそこに気付いた。ローリーとジュディもまた。

「そういえばそうだよね」

「ええと、風紀部部長で」

白い影の首領である。ロシュフォール先生という人物について語る時には決して欠かすことのできないキーワードである。そう、決してだ。

「それ以外は？」

「それ以外！？」

「そう、それ以外よ」

プリシラはあえてここを強調するのであった。

「何かわかっていることはあるかしら」

「そういえば少ないね」

「そうね」

他の三人も今このことに気付いた。気付いてそれぞれの顔を見合わせるのだった。
「正体不明って感じだよね」
「ええと。担当の教科は？」
教師ならば必ず担当する教科がある。それについて考えを及ばせた。
「何だったっけ」
「知らないな、そういえば」
タムタムが言った。
「そもそもどの授業を教えているんだ、あの先生は」
「高等部の先生よね、確か」
ジュデイはこれは知っていたのだった。何とかといった感じで。
「けれど商業科？工業科？」
八条学園は普通科以外にも実に様々な学科があるのだ。その数はかなりのものに及んでいるのである。マンモス学園であるだけのことはあるのだ。
「何処の先生なのかしら」
「ドードーをペットにしておられるだけで何かそういうのは」
「部活何処の顧問なんだろ」
ローリーはそれについても考えを及ばせた。
「先生ならやっぱり絶対顧問している部活あるよね」
「そういったことが一切わかっていないわね」
ここでプリシラが述べた。
「おかしいわよね、全てが」
「おかしいってものじゃないわよ」
ジュデイの顔が怪訝なものになっていた。
「担当の教科も顧問も何処の所属かもわからない先生なんて」
「待てよ、そういえば」
ローリーがまた気付いた。
「あの先生何処の職員室なんだろ」

「不明よ」
プリシラが答える。
「そこのところもね」
「何かもう無茶苦茶じゃない」
ジュディのたまりかねた言葉だった。
「現地調査するにしてもそんなので何かわかるのかしら」
「わかるわ」
プリシラの返答である。
「確実にね」
「わかるの」
「最初は何もわからないものよ」
プリシラのクールな言葉が続けられる。
「それでも少しずつわかっていくものだから」
「そうだな」
タムタムが今のプリシラの言葉に頷いた。
「少なくとも先生がドードーを飼ってるのはわかったしな」
「ドードーねえ」
ドードーはペットとしてはわりかし人気のある鳥である。丸々としていて可愛いというのである。とりわけ女の子間で昔から人気がある。

第九十九話　先生の顔その二

「よく考えたらあれって普通女の子が飼うものよね」
「そうだよね」
ローリーはジュデイの言葉にこくこくと頷いていた。
「だったらひょっとして」
「先生の正体は女の人!?まさか」
「いえ、有り得るわ」
またプリシラが言ってきた。
「変装は普通に女装もあるわよ」
「女装も」
「女が男になる」
言葉の響きが妖しいものになった。
「有り得る話なのは確かよ」
「確かなの」
「まずは調べることね」
クールな言葉は次の段階に進んでいた。何時の間にかであるが。
「何かとね」
「何かと」
「じゃあジュデイ」
今度は少し強引に話を進めるプリシラであった。
「まずは学園中の先生を全部チェックするわよ」
「えっ!?」
ジュデイは学園中の先生と聞いて思わず声をあげたのだった。
「この学校って先生だけでもどれだけいるのかわからないわよ」
「そもそもどれだけいるんだろうね」
ローリーも言う。
「うちの学校の先生って」
「生徒で二十万だったか」

タムタムは生徒について答えてきた。
「幼稚園から大学までで」
「職員さんまで含めればそれだけはいるわね」
プリシラはそこまでは把握しているようだった。
「確かね」
「一つの大きな街なのね、本当に」
あらためてそのことを知るジュデイであった。
「家族の人もいるし」
「あっ、家族の人達もいたね」
ローリーはまたまた気付いた。何かと気付くことの多い男だ。
「確かね」
「そうね。家族の人達の可能性もあるわね」
またプリシラが言ってきた。
「そういえば」
「何処まで可能性が広がるんだ？」
タムタムも流石に首を捻るばかりになっていた。
「下手をしたら候補者だけでも十万になるかもな」
「十万って」
「うちの学校そんなにいたの」
「いる」
タムタムは今度はジュデイとローリーに対して断言してみせたのだった。
「充分にな。それだけの数がある」
「凄いね」
ローリーはその数の前にあらためて素直に賞賛の言葉を口にした。
「多いとは思っていたけれどそれだけもいたなんてね」
「けれどローリー」
ジュデイの顔は素直なローリーのそれに比べていささか懐疑的、いや困ったような顔になっていた。これもまた心境が出ているものであった。

「十万よ」
「うん」
「それだけの数を調べるとなるともう」
「時間と労力が問題だ」
今度はタムタムが述べた。
「そうだな」
「そうよ、やっぱり」
「それは問題ないわ」
しかしここでプリシラが言ってきたのだった。

第九十九話　先生の顔その三

「それについてはね」
「問題ないの？」
「限られているから」
こうジュディに答えてみせてきた。
「だからね。それは」
「限られてるって人が？」
「確かにこの学校には人が多いわ」
これについては否定できなかった。ただでさえ何兆もの人口を抱える連合であるがこの学園はその連合の中でも屈指のマンモス学園なのだ。学校だけで街が一つ出来ていると言っても過言ではない。それが八条学園というわけなのである。これは紛れもない事実だ。
「それでも人は限られるわ」
「限られる」
「まず白いドードーを飼っていること」
これが最初の前提であった。
「これでかなり限られてくるわね」
「まあそれはね」
すぐにプリシラの言葉に対して頷いてみせた。
「目印としてはかなりのものなのは確かね」
「まずはこれよ」
プリシラはまた言った。
「白いドードーを飼っている人はこの学園でも限られている」
「まあ犬や猫よりは目立つよ」
ローリーが考えながら述べた。
「それもかなりね。変わった鳥だし」
「しかも色が白」
さらに絞られる要因であった。

「まあそうはいないわよね。この学校でもね」
「これで十万から一気に絞られるわ」
既に頭の中で検索をはじめているプリシラであった。
「少なくとも数百以下にまでね」
「そこまで」
「いくわ」
ジュデイに対して断言してみせるプリシラである。
「だってペットの数は多いし種類もかなりだから」
「その中でドードーね」
「そうよ」
静かに答えてみせる。
「しかも白よ」
「ううん、そんなにいないわね」
「っていうかだよ」
またローリーが言う。
「白いドードーを飼う人を少し調べていけばわかるんじゃないかな」
「そう、それだ」
今のローリーの言葉にタムタムが突っ込みを入れた。
「そこだ。これは非常に大きいぞ」
「十万の中で限られた要素」
プリシラはあえて述べてみせた。
「さて、その中の誰かね」
「あと要因は？」
ジュデイはさらに考えを巡らせた。
「年齢かしらね」
「年齢ねえ」
ローリーもまたそこに考えを及ばせるのであった。
「それはかなり変えられるじゃないの？変装で」
「それもそうね。性別だって」
これについても同じであった。

「女装とか男装でね。変えられるわよね」
「だからここは」
またプリシラが言ってきた。
「一つ考えがあるわ」
「考え!?」
「何、それ」
「科学よ」
人類が産業革命というものを経験してから宗教と並ぶ、人によってはそれ以上の絶対の存在のものの名前が出て来た。それを聞いて三人も目を動かすのだった。
「それを使うのよ」
「科学を使うのね」
「推理は科学よ」
オーソドックスな推理の世界になってきたようだった。
「だからここであえてそれにするわ」
「そうなの」
「それでどうするんだ?」
タムタムはその科学についてプリシラに尋ねた。

第九十九話　先生の顔その四

「科学と言っても色々あるぞ」
「この場合は眼鏡を使うわ」
「眼鏡をか！？」
「ええ、そうよ」
静かにタムタムに対して述べる。
「赤外線付の眼鏡でね。見ていくわ」
「あっ、それがあったんだ」
ローリーはそれを聞いてうんうんと頷いた。納得した顔になっている。
「確かにそれだと確かに素顔がわかるね。ただ」
「ただ？」
「ロシュフォール先生勘いいから」
ローリーが危惧するのはそこであった。やはり伊達に学校内部の秘密警察的存在のトップを務めているというわけではないのである。ハイドリヒもまた手強い男であった。
「見破られないようにしないとね」
「それは任せて」
プリシラは表情を変えずに答えた。
「こちらも下手なことはしないから」
「だったらいいけれど」
「最低素顔が男か女かまでわかればいいから」
「それだけ？」
「そう、それだけ」
今度はジュデイに言葉を返した。
「それだけわかればいいのよ」
「何かそれだとあまり大した赤外線いらないね」
「そうね」

ローリーとジュディはそれを聞いて言い合うのだった。顔を見合わせて。
「まあそれはそれでいいけれど」
「まあとにかく」
話が動く。
「それで行けばいいわね」
「そうね」
「これで大体絞られたか」
タムタムは話を纏めるようにして述べた。
「ロシュフォール先生の謎の解明もな」
「後は動くだけ」
プリシラは言う。
「やりましょう」
「ああ」
こうして四人はまた動くのだった。そしてその結果遂に先生の正体がわかったのだった。
「ああ、本籍はあそこの先生だったんだ」
「そうだったわ」
四人はまた学校の屋上に集まっていた。そこで車座になって座りめいめい牛乳やサンドイッチ、お茶にお握りといったものを食べつつ話をしていたのだった。空には青空が広がり美しい青を見せている。
「スポーツ科のね」
「スポーツ科かあ」
ローリーはプリシラの説明を聞いて何処となく納得した顔を見せていた。八条学園高等部は様々な学科がある。彼等は普通科だが他にも商業科や工業科、農業科と様々な学科があるのだ。スポーツ科もそのうちの一つというわけなのである。
「あそこは遠いからついつい行かないからね」
「そうだな。迂闊だった」

タムタムもそれについて言う。彼は玄米のお握りを食べている。
「あそこの先生だったか」
「意外にも変装はしていなかったわ」
プリシラはこのことを報告する。
「だからすぐにわかったわ」
「じゃあ別にあれこれと調べる必要はなかったのね」
「そうなるわ」
今度はジュデイに述べた。
「拍子抜けかしら」
「まあね。何だって感じ」
「けれど」
しかし。ここで何かが変わった。
「けれど？」
「一つ気になることがあったわ」
「気になることって」
「何？」
「何なんだ、それ」
三人はその気になることについて聞かずにはいられなかった。殆ど無意識のうちに身体を乗り出して彼女に対して問うていたのであった。
「あの先生はどうやらただ風紀部の顧問をしているだけじゃないわね」
「！？どういうこと？」
ジュデイはそれを聞いて首を傾げさせた。

第九十九話　先生の顔その五

「ただ風紀部の顧問をしているだけじゃないって」
「何か話がわからなくなってきたんだけれど」
ジュデイだけではなくローリーも首を傾げさせていた。
「どういうことなの、それって」
「プリシラ」
タムタムは表情こそ変えてはいないが目の光を怪訝なものにさせてプリシラの名前を出して問うてきた。
「何かあったな」
「あの先生はある人と対立しているわ」
「ある人だと」
「そう。学校の外にいる人だけれど」
話がさらに大きくなってきていた。今度は学校の外にまで話が及んでいた。
「その人とね」
「誰、それ」
ジュデイはすぐにそれを尋ねた。
「学校の外にいる人って」
「博士よ」
「博士！？」
「博士っていうと」
「天本博士」
プリシラはある名前を出した。
「天本破天荒博士。知っているかしら」
「天本破天荒博士っていうと」
この名前を聞いた一同の顔が急激に曇っていった。
「確か有名な科学者よね」
「科学者だっけ。あの人」

ローリーはジュディの今の言葉には懐疑的な表情を見せた。
「違ったんじゃないの？」
「マッドサイエンティストかしら」
「そうとしか思えないよね」
「ねえ」
「やっぱり知ってるのね」
プリシラは二人のやり取りを聞いて静かに頷いたのだった。
「あの博士のことは」
「シャバキと並ぶ連合きっての危険人物」
タムタムの言葉だ。
「確かそうだったな」
「そうよ。その博士がこの八条学園のすぐ側にいるのは知ってるわよね」
「知りたくないけれどね」
「っていうかいないことにしたいわ」
ローリーとジュディの顔に不吉なものが漂う。
「何しでかすかわからない人だからね」
「そうだよね。この前だって」
ローリーはここであることを話に出すのだった。
「ほら、人工衛星を発射してね」
「その人工衛星が無限増殖するやつだったのよね」
「そうそう、他の衛星を攻撃してね」
実には迷惑な開発である。少なくともこの様な人工衛星の開発が連合中央政府の法でも日本の法でも禁止されているのは言うまでもない。
「そんなの打ち上げて大騒ぎになったよね」
「あの時軍が出てね」
「大変な騒ぎだったよね」
「あと一歩で大惨事だったわ」
これが実際にあった話なのだから恐ろしいのだ。

「その博士よ」
「そうか」
タムタムは今のプリシラの言葉に暗い顔になる。
「あの博士が今回の話に関わるのか」
「関わるというかね」
プリシラは言葉を続ける。
「ロシュフォール先生は博士の監視をしているようね」
「監視ってちょっと」
ジュデイは今のプリシラの言葉に顔を曇らさざるを得なかった。
「それってかなりやばいじゃない。っていうか」
「命の危険があるね」
「そうだな」
ローリーとタムタムも言うのだった。
「何でそんなことを」
「事情は私にもわからないわ」
プリシラは三人に対してクールに言葉を返したのだった。
「ただ」
「ただ？」
「どうやら話が余計に大きくなったみたいね」
「ああ、それはな」
これについてはタムタムも異論がなかった。
「下手に関わるとこちらもまずいぞ」
「ええ。どうしたものかしら」
ジュデイは言う。

第九十九話　先生の顔その六

「下手をしたら洒落にならないわよ」
「洒落にならないっていうか確か」
ローリーはまた言うのだった。
「あの博士の研究所の前を通っただけで命の危険があるんだよね」
「そうらしいわね。困ったことにね」
「全く。どうしたものかね」
「俺も流石にあの博士には関わり合いになりたくないがな」
「とりあえずは様子見といくべきかしら」
四人は恐ろしい方向に話が向かっていることに恐怖を感じていた。そしてこの時。八条学園がある街の外れで不気味な笑い声が聞こえてきていた。
周りには何もない。あるのはその研究所だけだ。研究所といっても岩山の上、崖のすぐ側に建っている古城があるだけだ。そこが研究所なのだ。城の周囲を巨大な翼竜が舞っているのが不気味さを通り越して怪奇なものを漂わせていた。蝙蝠どころの騒ぎではない。
その古城の中にいるのは。白いタキシードに黒いマントの長身の老人だった。見事な銀髪を右から左に流している。顔は端整と言っていいがそこには危険なものがあった。
その彼が今。訳のわからない薬を調合しながらけたたましい笑い声をあげているのだった。
「出来た、出来たぞ」
「出来たって何がですか博士」
「決まっておろう、野上君」
後ろにいる頼り無さそうな外見の白衣の若者に背を向けたまま応える。
「新薬が今完成したのじゃ」
「新薬ですか」

「左様」
誇らしげな顔で述べている。
「この薬を飲めばじゃ」
「飲めば？」
「巨人になれる」
これがこの博士のコメントであった。
「それこそ百メートル程の巨人にな」
「本当ですか？それ」
「わしが嘘を言ったことがあるか？」
若者に顔を向けて問うてきた。薬の緑色に照らされその不気味さに拍車がかかっていた。まさにマッドサイエンティストと言っても過言ではない。
「どうじゃ？そこのところは」
「それはないです」
若者もそれはわかっているようだった。少し考えてから答えはしたが。
「博士は嘘はつかれないですよね」
「嘘なぞ三流の悪役のすることじゃ」
彼にとってみればそうであるらしい。
「超一流の科学者は嘘はつかぬ」
「そうなんですか」
「従ってじゃ」
彼はさらに言う。
「この薬もまた真実じゃ。試しに面白いことをするぞ」
「面白いこと？」
「左様」
誇らしげに述べるのだった。
「恐竜に仕掛けてな」
「恐竜ですか」
「人間にやるよりずっと面白いことになるぞ」

しかも話が飛躍していた。その辺りが実に狂気であった。
「人間の身長が大体二メートルじゃな」
「まあ連合だと一メートル九十位ざらですね」
「そうじゃ。それが百メートルになるのじゃ」
単純に考えれば五十倍となる。博士はそこに注目しているようだった。
「恐竜だとどうなる？」
「ええと。確か」
ここで若者は考えた。単純な計算だが導き出される答えはとんでもないことである。若者も答えを出してからその顔を真っ青にさせるのだった。
「ウルトラザウルスが三十メートルで・・・・・うわ」
「一五〇〇メートルじゃ」
博士は誇らしげに言うのだった。
「幾ら大人しい草食恐竜でもそこまで大きければじゃ」
「怪獣映画なんてものじゃないですね」
「街は大混乱、ビルは踏み潰され道は壊され」
まさに地獄絵図である。
「夢の様な光景じゃな」
「それは悪夢じゃないんですか？」
「何を言う、野上君」
また若者の名を呼んできた。今度は咎める調子である。

第九十九話　先生の顔その七

「決してそんなことはないぞ」
「といいますと」
「よいか」
彼は毅然として語りだした。
「この世のありとあらゆるものが破壊されていく」
「はい」
特撮ものでお決まりのシーンである。
「それの何処が悪夢じゃ。心地よい夢ではないか」
「心地よい夢ですか」
「逃げ惑う人々に蹴り飛ばされる電車」
地獄絵図は続く。
「見てみたいとは思わんか、野上君よ」
「僕は別に」
若者である野上君はそれには別に関心がないようであった。
「バイト代さえ頂ければって思ってるんですけれど」
「それは何時でも出す」
これについては気前がいいようだった。
「何時でも好きなだけな」
「それだけでいいんですけれど」
「何じゃ、夢がないのう」
博士は今の野上君の言葉にはかなり残念そうだった。
「金なぞ幾らでも手に入るではないか」
「そうなんですか」
「それこそあれじゃ」
ここでもまたかなりとんでもない言葉が博士の口から出るのだった。
「そいじょそこいらのカスをじゃな」

「カスを？」
「捕まえて内臓を借りて売ればいいだけじゃ」
「博士、それって」
言うまでもなく犯罪である。臓器売買に関してはこの時代でも様々な議論や問題が起こっている。クローン技術もあるがそれでもである。
「安心せよ。暴走族や暴力団やチンピラだけにしておる」
「それでもまずいですよ、博士」
「無駄な人口は減らすべきじゃ」
まさに狂気の発言である。
「それにじゃ。内臓は借りるだけじゃぞ」
「何処を借りるんですか、それで」
「肺に心臓に肝臓に目に。まあ全てじゃ」
「それって死にますよ」
「カスでも人様の役に立つ」
これまたとんでもない発言である。
「よいことではないか。世の中に不要な屑が人様の命を救うのじゃぞ」
「けれど犯罪ですよ」
「犯罪！？何じゃそれは」
逆に野上君に聞き返してきた。
「食い物か？そうじゃ、今夜じゃが」
「あの、博士」
博士が犯罪という言葉を知らないと見て野上君は恐る恐る声をかけた。
「ひょっとして犯罪は」
「パエリアにしよう」
もう野上君の話は聞いていなかった。
「今夜はな。それにワインは」
「ですから博士」

「野上君」
やはり話を聞いていない。
「ワインはあれにするぞ」
「僕の話聞いていますか？」
「そうじゃな、そうしよう」
一応返事は返っては来た。
「コロンビアのスカーレットワインじゃ。あれがいい」
「ですから犯罪については」
「犯罪！？そんなメニューはスペイン料理にはないぞ」
何を言っているのだと言わんばかりの顔だった。やはり博士のその頭脳には犯罪という言葉は全くインプットされてはいなかったのだった。
「勿論連合のどの国の料理にもない」
「本当に御存知ないんですね」
「いや、あったな」
しかしここで博士は言った。
「あったぞ。わしのこの知能指数二十万の頭脳にもな」
「二十万って」
およそ人間の頭脳の数値ではない。この博士の頭脳は少なくとも常人のものを遥かに越えてはいる。問題はその使い方なのであるが。
「それじゃあ特撮ものの宇宙人ですよ」
「わしをあの様な胡散臭い連中と一緒にするな」
これには不快なようであった。その顔が顰められている。

第九十九話　先生の顔その八

「わしはこの世で最も偉大な科学者」
「はあ」
「医学者でもあり理学者でもあり化学者でもあり生物学者でもあり工学者でもある」
「理系ばかりですね」
「博物学もやっておったぞ」
昔存在した学問である。
「博士号の数なぞどうでもいいのだがな」
「そうなんですか」
「問題は何をしたかじゃ」
正論であった。ただし言っている人間が問題なのだが。
「わしは数多くの異形を達成してきておる」
「異形！？」
野上君は今の博士の言葉は何かの間違いかと思った。
「偉業じゃないんですか、博士」
「異形の存在も作り上げてきた」
「ああ、そういうことですか」
そう言われてやっと意味がわかったのだった。
「化け物も作ってきたんですね」
「ライオンとドラゴンと蛇と山羊を合成させてな」
博士は早速己の過去の悪事を誇らしげに野上君に話しはじめた。ただし話す博士の方はそれを悪事ではなく偉業だと本気で思っている。
「キメラを作ったりな」
「はあ」
「他にも鵺を作ったり。凄いじゃろ」
「連合中央警察は何してるんでしょうね」

思わず呟く野上君だった。
「そんなことして捕まえに来ないなんて」
「警察!?そんなものを恐れていて科学はできんぞ」
博士以外が言えば通用する言葉である。
「科学は時として国家権力の弾圧を受ける」
「弾圧ですかね」
野上君にとっては正当な対処にしか思えないが博士にとっては違うのであった。
「しかしそんなものは叩き潰してじゃな」
「叩き潰すんですか」
「わしの崇高な発明や開発を害する者は誰であろうと許さん」
完全に勘違いしている。
「そういうことじゃ。誰であろうとな」
「そのうち連合軍が来ますよ」
「連合軍!?ちょこざいわ」
百三十億の大軍を前にしてもこの態度であった。
「かつてあの無敵皇軍とも五分で渡り合ったこのわしがあの程度の連中を恐れると思うてか」
「無敵皇軍って博士」
野上君はそれが何なのかわかった。
「二十世紀の大日本帝国陸海軍のことですよね」
「見事な奴等じゃった」
言葉に感慨が篭っていた。
「精強で勇敢、清廉でな。わしも奴等との戦いは楽しかった」
「そもそも博士は何歳なんですか」
「さて」
その返答にはとぼけたようになった。
「幾つだったかのう。そういえば」
「何か話が余計に滅茶苦茶になってきましたけれど」
「気にするな」

「気にします」
即答であった。
「人間は百十五歳が定命なんですよ」
「徳を積めばもっと生きられるぞ」
「それはそうですけれど」
博士にそんな徳があるとはとても思えなかったのだ。それどころか何時天罰が下ってもおかしくはないとさえ思える野上君なのだ。
「少なくとも千年以上生きているなんて」
「平和なぞ詰まらん」
またとんでもないことを言い出す。
「何が連合千年の平和じゃ。専念の堕落に過ぎん」
「堕落ですか」
「だからじゃ」
博士のとんでもない発言は続く。
「わしは今こそ騒ぎを起こす。この堕落しきった世を正す為にな」
「正す為ですか」
「わしの偉大なる発明は破壊」
これはその通りであった。
「堕落を壊しこの世に混乱と恐怖を巻き起こすな」
「それって全然駄目じゃないですか」
野上君の突っ込みはここでも妥当なものであった。
「この世界が堕落しているかどうかはわからないですけれど混乱と恐怖は駄目ですよ」
「混乱と恐怖は世の中を動かす」
普通の人が全く望まない方向において、である。ここが重要なのであるが博士の認識は普通の人間とは著しく違うのであった。
「今こそな。それでは今度は」
「今度は？」
「少し面白いことをしようぞ」
今度は毒々しい赤と黄色の薬を掲げて高笑いする。その赤と黄色

が博士の顔を照らしてとてつもなく恐ろしい彩色にしていた。
「このわしの最高の頭脳でな」
「また騒ぎが起こるんですか。困ったなあ」
あくまで世の中に騒ぎを巻き起こそうとする博士を見て呆れるしかない野上君であった。この博士によって恐ろしい混乱が起ころうとしていたのだった。

先生の顔　　完

２００８・８・９

第百話　天本破天荒博士その一

天本破天荒博士

この頃八条学園内にある警察署では緊張した空気が漂っていた。あまりにも広大な学園の為に内部に警察署まで置かれているのである。その為治安はいい。

緊張は署長室にまで及んでいた。署長の机に座わるカイゼル髭の男の前に数人の制服姿の男集まり誰もが深刻な顔を見せてそれぞれの口で話をしていた。

「やれやれ、またしでかしそうなのか」

「はい、残念ですが」

「またです」

「またか」

そのカイゼル髭の署長は部下達のその言葉を聞いてまずは大きく嘆息したのであった。そのうえで諦めたように言葉を出すのである。

「最近少しは大人しいと思っていたのだがのう」

「あの、署長どうして」

「何故我々が」

「んっ！？何が言いたいのじゃ」

不満げな顔を見せる部下達に対して問うた。

「我々の所轄はこの八条学園内ですよね」

「確かそう聞いていますが」

「その通りじゃが」

これについては署長もその通りだと述べた。

「それがどうかしたのか？今はその話ではないと思うが」

「どうしてあの博士のことまで管轄に？」

「かなり不満なのですが。どうして」

「くじ引きで決まったから仕方ないじゃろう」

署長も不満を露わにした顔で彼等に答えた。髭が不機嫌に歪んで

いる。
「何処があの博士に対するかな。残念じゃが」
「くじ引きですか」
「そんなもので我々の運命が決められたのですか」
「運命は所詮運じゃ」
諦めの言葉であった。それが真理だとしても。
「結局のところはな。くじを引いた奴を怨むしかない」
「そのくじを引いた人は誰ですか？」
「わしじゃ」
署長はここで自分を指差した。
「わしじゃ。わしが引いたのじゃ」
「では署長、ここは」
「何かあった時は是非署長が責任を」
「覚悟はしておる」
意外にもいさぎのいい返事であった。
「そうでなければ署長なぞやっておられるか」
「その御言葉と御覚悟は立派です」
「確かに」
部下達もそれは素直に認めた。
「ですがそれでも」
「あの博士ですよ」
「そう、それなのじゃ」
彼はまた髭を顰めさせたのであった。存外よく動く髭である。
「とにかく何かしてきそうなのじゃな」
「はい、そうです」
「残念ですがその通りです」
部下達は認めたくないことを認める顔でうんざりとした調子で述べた。心からあの博士のことが嫌で嫌で仕方がないのがはっきりとわかる。
「あの不気味な研究室に篭って何かしています」

「ネットでも怪しいものを買い込んでいるようで」
「街に出ても何かおかしなことを」
「今のうちに捕まえておくべきか？」
署長は真剣な顔で部下達の言葉を聞き終えて述べた。
「あの博士は。別件逮捕でも何でもして」
「別件逮捕といいますか明らかに挙動不審ですし」
「あの姿だけでも」
博士の出で立ちについても話される。
「何しろ夏の暑い中でも白いタキシードに黒いマントですよ」
「しかも靴は白エナメル」
確かに普通は有り得ない格好である。
「乗馬鞭まで持っていますし」
「しかもその鞭が電気鞭というじゃないですか」
言うまでもなく所持が禁止されているものである。中央政府の法律で許可なく所持していると刑事犯罪に問われる危険なものである。
「しかも何億ボルトもの高圧電流が流れるとか」
「それで星一個は楽に壊せるとか」
「話せば話す程危険な博士だのう」
「危険っていうかですね」
「ほぼ人間じゃないような」
「ふむ。確かにな」
部下達の言葉にあらためて頷く署長であった。

第百話　天本破天荒博士その二

「そもそもずっと昔から生きておるようだしのう」
「公の記録にはじめて登場した時はです」
話はさらにとんでもない方向に向かう。
「千年以上も前ですし」
「千年か」
「はい、千年です」
これだけで普通の話ではないことがわかる。
「千年前にはもう派手に暴れていました」
「しかも派手にか」
「そこいらの暴走族等を捕まえて改造実験を施したり」
言うまでもなく犯罪行為どころの騒ぎではない。
「モンスターに改造したり生体実験の道具にしていたそうです」
「何処の悪の組織なのか」
署長はそこまで聞いて首を傾げるのだった。人を実験の道具にするこのこと自体最早人間の行いではない。少なくとも真っ当な人間ではないと言える。
「千年も前から。連合を騒がせているとはな」
「しかも本拠地は日本です」
「尚且つこの街に」
この二つの言葉に彼等の偽らざる本音が出ていた。
「どうして何処かの秘境にいないんでしょうか」
「研究するのならそちらの方がいいでしょうに」
「生体実験の道具が必要だからだろうな」
署長はうんざりとした顔で述べた。
「だから。それで」
「この街にですか」
「かなり迷惑です」

「そしてそれだけではないな」
署長はさらに言う。
「あの博士が改造していくのはその殆どが暴走族や街のチンピラだ」
「はい」
「街にはそんな人間が多い」
いい人間と悪い人間はどの国にも存在している。当然ながらこの街でもだ。だから博士はこの街にいてそうした輩を片っ端から改造したり内臓を抜いたりしているのである。
「それを狙ってな」
「それ自体はまあ街にはいいことですが」
「それでも」
警官達にとっていい話ではない。
「違法な実験を繰り返していくというのはどうも」
「違法どころではないですし」
それこそが最大の問題なのであった。この博士にとっては。
「しかも改造された犯罪者が怪人になって暴れますし」
「それへの対処も」
「しかもです」
話はさらに続けられていく。彼等にとって実に忌まわしい話が。
「あの博士は劇薬の開発も行いますよね」
「そう、それだ」
署長もそれを指摘した。
「その劇薬がな。これまた星を一個普通に壊すものだしな」
「だから洒落になりませんね」
「そう、それもある」
博士は劇薬の開発も趣味なのだ。
「尚且つ危険な兵器を開発してそれを兵器で公の場で実験しますし」
「この前だってそれで」
「そうそう」
また彼等にとって忌まわしい事件が思い出されるのだった。天本

博士はトラブルを創造する人間なのだ。非常にはた迷惑な人間と言うしかない。
「ブラックホール粒子砲を暴力団の事務所に放って」
「事務所が暴力団員ごと完全に消えました」
「犠牲者約五十人」
言うまでもなく大量虐殺だ。
「殺人罪及び危険物所持法違反で捕まえたいのですが」
「他にも余罪が無数にありますし」
前科は普通に法律で考えるとそれこそ千やそこいらでは効かないのが博士である。
「この前は確かブラックホールのど真ん中に隔離したんですが」
「それでも戻って来ましたし」
博士は脱獄も得意なのであった。
「それで今平気な顔であそこにいますし」
「困ったことです」
困ったところではないのではあるが。
「とにかく。博士をどうするかですよね」
「それだ」
署長の顔がまた強張る。

第百話　天本破天荒博士その三

「捕まえるといってもな」
「はいそうですかと捕まる人ではありませんし」
「連合軍の精鋭を送り込んでも」
「送り込んでも失敗するのはわかっていますしね」
「この前ブラックホールに送り込んだ時はあれだったな」
署長はその時のことを思い出した。思い出したくはないが。
「ロシュフォール先生が活躍してくれたな」
「そうでした。あの先生がいなければとても」
「あの博士を捕まえることなぞ」
ここで急に思わぬ名前が出て来たのであった。
「できはしませんでした」
「今回も、というのは流石に悪いですし」
「本当に困った」
署長は今度は腕を組んで考える顔になった。深刻に。
「何とかしたいのだがな」
「我々に何ができるかというと」
「祈るだけと言えば怒られますね」
「それどころか今の発言がマスコミやネットに出ればどうなるか」
署長は部下の一人のその発言には顰めさせた顔で言い返した。
「君の首が飛ぶぞ」
「すいません、失言でした」
「気をつけてくれ。しかしだ」
だがここで署長もまた言うのであった。
「相手が相手だ。本当に祈るしかないな」
「そうですね。どうしたものやら」
「マッドサイエンティスト程始末に終えないものはない」
署長の本心の言葉であった。

「何をするのか全くわからないからな」
「その通りです。とにかく何か手を打ちましょう」
さっき祈るだけと言った部下はその口で今度は真面目な言葉を出した。先程とは違ってえらく真面目な顔であり真剣なのがすぐにわかった。
「我々なりに」
「そうだな。とりあえずはだ」
署長もまた真剣に彼の言葉に応えていた。
「研究所の周りを警戒態勢に置こう」
「とりあえずはそれですね」
「そうだ。まずはそれだ」
署長はまた部下に対して答えた。
「といっても。これが精々か」
「流石に相手が相手ですからね」
連合中を震撼させている非常識なマッドサイエンティストが相手である。一警察署ができる範囲はやはり限られているということであった。
「ここまででしょうね」
「そうだな。こちらとしても残念だが」
「後は八条学園のあの先生に連絡しておきましょう」
「ロシュフォール先生にだな」
「はい」
部下達はその先生の名前が出て静かに頷いた。
「やはりあの先生頼りですか」
「マッドサイエンティストの相手は正義の味方だ」
この図式は二十世紀から変わりはしない。永久に不変と言っていい図式である。簡単に言うとヒーローと悪役の構図というわけだ。
「それしかないだろうな」
「ですね。それじゃあ」
「連絡をしてそれで終わりですね」

「とりあえず我々が出来るのはこれまでだ」
署長は目を閉じて一言述べた。
「では総員警戒態勢に当たれ」
「了解です」
「それでは」
「そうだ。後はだ」
彼は続いて言った。
「軍にも連絡をしておくか」
「連合軍ですか？日本軍ですか」
連合には大きく分けて二つの軍が存在している。中央政府が管轄している連合軍と各国が管轄しているそれぞれの国軍である。国軍はかなり小規模なものだがそれでも存在しているのは事実である。かつての連合軍設立前と比べるとかなり小規模になっているがだ。
「どちらを」
「両方だな」
署長は一瞬考える目になったがすぐに返答を出した。
「両方に要請しよう」
「両方にですか」
「どちらかにだけ声をかけたらまずいだろう」
ここでは彼は政治的な判断を下したのである。

第百話　天本破天荒博士その四

「やはりこうした時は両方に声をかけてな」
「できれば両方に来てもらうのですか」
「そうことだ。そうしよう」
「ですが署長」
ここで部下の一人が彼に言って来た。
「一つ問題があります」
「んっ？何だ？」
「連合軍と日本軍の関係です」
問題はそれであった。
「その関係はどうなのでしょうか」
「そういえば連合軍の指揮系統は」
「どうなっていたのでしょうか」
警官である彼等はそこまでよく知らないのであった。人間は自分の所属する場所以外のことにはどうしても知識が疎くなるものである。
「確かこうした場合にはその国の国家元首の指揮下に入ったな」
「そうでしたか」
「ああ、確かそうだ」
署長はこう部下達に対して答えた。
「そしてどちらもその地位は一緒とされる」
「一緒だと」
「その国の国家元首が双方を指揮するからな。我が国だと」
「名目上は天皇陛下で実際は首相ですね」
「そういうことだな。さて」
ここまで話されたうえでまた署長の言葉が述べられる。
「その辺りは首相の判断だな」
「まあ首相にまでなりますと」

「我々には雲の上のお話になりますね」
「この学園の理事長は首相と親しかったな」
言うまでもなく八条義統のことである。彼は八条グループの重鎮でもあるのだ。今は彼の父が総帥となっていた弟や妹達も経営に参加している。
「確かな」
「ええ、それはその通りです」
このことは連合において非常によく知られていることだった。八条グループは古くからある巨大企業グループであり第二次世界大戦前は大財閥でもあった。この時代では連合はおろかマウリアやサハラにも進出している連合でも指折りの巨大企業グループなのである。
「さて。理事長にそれを連絡するか」
「理事長にですか」
「駄目か？」
「いえ、それよりもですね」
部下の一人はここで署長に対して言うのだった。
「国防省に連絡した方が早いのでは？」
「国防省というとだ」
「中央政府のです」
ここがかなり重要なポイントであった。
「中央政府国防省に。如何でしょうか」
「ああ、そうか」
中央政府国防省と聞いてわかった署長だった。
「理事長は国防長官だからな。だからか」
「はい、それにです」
ポイントはさらにあった。
「軍隊が動きますから。やはりここは国防省に連絡するのがいいかと」
「そうだな。それではな」
「ええ。連絡しましょう」

「それでいいかと」
「後は理事長と首相の話になるな」
署長は部下達の話を聞きつつこれからのことを考えていた。
「我々ができるのはこれまでだな」
「そうですね。これで」
「後は。イレギュラーがあればいいですが」
「あの博士そのものがイレギュラーの様な存在だからな」
署長の身も蓋もない言葉だった。
「だからこれ以上イレギュラーを期待してもいいイレギュラーとは思えないのがな」
「悪いイレギュラーですか」
「イレギュラーといっても様々だ」
これはこの通りだった。
「あの博士はその中で最悪だがな」
「何かどうしてこの世に存在しているのかわからないですね」
博士はそこまで異様な存在なのだった。
「無茶苦茶過ぎて」
「全くだ。人間なのかも怪しいな」
彼等は頭を抱えるばかりだった。対策は打っておいても自分達でそれが上手くいくとは思っていないことが悲しい。何はともあれ話は動くのだった。それでも。

第百話　天本破天荒博士その五

その頃。プリシラ達はまだロシュフォール先生について調べていた。調査の結果正体は完全にわかったのであった。

「スポーツ科で第十三野球部の顧問なんだ」

「ええ、そうよ」

ローリーに対して答えるプリシラだった。今彼等は学校の視聴覚教室にいる。そこで四人集まって先生について話をしているのである。

「変装も何もしていなかったわ。結局ね」

「何よ、それだったら」

ジュディがそこまで話を聞いて言う。

「ここまで必死に調べる必要なかったんじゃないの？」

「白い影についてもわかったしな」

タムタムも言う。同時に彼等についてもわかったのだ。

「奴等はスポーツ科の生徒だった」

「道理で素早い筈だね」

「しかも強いし」

ローリーとジュディはこれで納得したのだった。

「風紀部も率いていたんだ」

「科目は理科よ」

プリシラは先生の科目についても述べた。

「それで趣味はドードーの飼育と音楽鑑賞」

「オーソドックスね」

「性別は男」

これはもうわかっていた。

「後は。これといってないわね」

「そうなんだ」

「ええ。ただし」

ローリーに応えながらまた言うプリシラだった。
「あの風紀部はどうやらメインの仕事は風紀ではないわね」
「風紀じゃない？」
「風紀部なのに？」
「よく考えてみて」
プリシラのクールな言葉が続く。
「白い影は確かに尋常ではない機動力と戦闘力、そして隠密力があるわ」
「そうだね」
ローリーは彼女の言葉に頷いた。
「学園の組織とは思えない程にね」
「けれど。思ったより動きがないのよ」
プリシラが指摘するのはそこだった。
「学園全体でも知名度はかなり高いけれどその活動自体は少ないわよね」
「そういえばそうかしら」
「俺も殆ど見たことはないな」
ジュデイとタムタムはここでまた気付いた。
「それは何故かしら」
「何故か、か」
タムタムの灰色の頭脳が閃きはじめた。
「俺達生徒に対する組織じゃないのか」
「だとしたら一体」
「相手は何だ？」
「そう、それだ」
タムタムはジュデイとローリーに応えた。
「あれだけの力を向ける必要があってしかも学園の近くにいる存在だ」
「一人候補がいるわね」
プリシラの目がクールに光る。

「一人だけね」
「一人ってまさか」
「あの」
「そう、天本破天荒博士」
ここでこの名前が出たのだった。
「あの博士に対してじゃないかしら」
「おい、あの博士は」
冷静なタムタムでさえ天本博士の名前を聞くとその声をうわずらさせていた。このことからだけでも博士が尋常な人間ではないことがわかる。
「生半可な人間じゃないぞ」
「ええ、確かに」
プリシラもこのことはよくわかっていることだった。日本どころか連合中においても悪い意味で知らぬ者はいない程の人物なのであるからだ。
「何千年生きているのかもわからないし」
「本当に人間なのかしら」
「さあ」
ジュディもローリーも確信を持ってはいなかった。無茶苦茶さという点であのシャバキをも凌駕しているのではないのかとさえ言われている奇人だからだ。

第百話　天本破天荒博士その六

「千年以上前から大騒ぎ起こしているのよね」
「あの頃に巨大ロボット作って日本軍と大立ち回りしたんだっけ」
「自衛隊じゃなかったかしら」
「あれっ、そうかな」
この辺りはかなりあやふやになっていた。自衛隊という組織が軍ではなく当然日本軍ではないことをこの時代の人間は殆どわかっていないのだ。
「まあとにかく一国の、しかも大国の軍隊を一人で向こうに回したんだ」
「しかも生きていたのよね」
ジュデイの言葉が何よりも説得力があった。
「それだけの相手で」
「今もなあ。連合軍と対立していたんだっけ」
ローリーがここで言う。なお連合軍は百三十億の大軍であり約一万隻の宇宙艦艇で編成されている艦隊が四千個ある。言うまでもなく今の人類社会で最強の軍だ。数と装備、兵站、それに規律だけで訓練や精強さは大したことのない軍隊だと言われていてもである。
「あの連合軍と」
「今凄い光景思い浮かべたわ」
ジュデイは思い浮かべたくないことを思い浮かべた。
「宇宙空間であの博士がティアマト級巨大戦艦と対峙している光景。しかも何故か宇宙空間なのに黒マントをたなびかせてね」
「それ、有り得る光景だから」
ローリーはまた突っ込みを入れる。
「あの博士常識が一切通用しないからね」
「そうなのよね。何でも科学や魔術や錬金術でやっちゃうから」
「医学はどう見ても違法だし」

天本博士の辞書に法律という文字はない。当然ルールという文字もない。
「宇宙空間でも平気なんじゃないかな」
「言われてみればそれも有り得るかも」
「そうだよ。それでその博士がまた何かするんだ」
「気が向いたみたいだから」
プリシラは二人に答えた。
「だから動くみたいね」
「動かなくてもいいのに」
ジュデイの言葉は誰もが頷くものだった。まさにその通りだ。
「それも永遠に」
「あの博士って天災みたいなものだからね」
ローリーは半分以上諦めていた。
「それも惑星破壊するようなレベルの」
「何処まで最悪なんだ」
タムタムも絶句するしかなかった。
「あの博士は。俺達ができることは」
「ないわ」
プリシラはこれまでになくきっぱりと言い切った。
「相手は殆どというか完全に人間じゃないから」
「生物的には人間じゃなかったのか？」
「かなり疑わしいわね」
またタムタムに言う。
「千年以上は間違いなく生きているから」
「何でそんなに生きているんだ？」
タムタムは根本的な問題について言及した。
「百年やそんな問題じゃないぞ」
「それがわからないのがあの博士なのよ」
理由になっていないがそれでも何故か説得力のある言葉だった。
「錬金術か魔術か変な医術かはたまた仙術か妖術かはわからないけ

れど」
「何でも身に着けているのね、本当に」
ジュデイはあらためて言った。
「けれど。動いたのならこっちも何かしないと危ないわよ」
「ああ、それはな」
タムタムは深刻な顔で頷いた。とりあえず冷静さは元に戻した。
「とりあえずクラスの皆に話しておくか」
「災害だからね」
ローリーはまた災害だと言うのだった。
「完全に」
「思うんだけれど」
ジュデイはふとした感じで三人に述べてきた。
「今四人よね」
「ああ」
タムタムが応える。
「確かに四人だがな」
「四人だったらどうしようもないわ。けれど皆だったらどうかしら」
「皆？」
「そう、皆よ」
皆というところを強調するのだった。

第百話　天本破天荒博士その七

「皆だったらどうかしら。それでだと」
「皆か。そうだな」
タムタムは今のジュデイの言葉に腕を組んだ。考える顔で。
「四人で駄目なら五十人だ」
「そうね。一本の矢も三本なら折れないわ」
プリシラは日本の古い逸話を出してきた。毛利元就という戦国大名が三人の息子達に対して伝えたことであると言われている。伝説という説もあるが。
「ましてや五十本ならな」
「大丈夫ね」
「そうだね。多分」
今一つ確信がない感じのローリーの言葉であった。
「いけると思うよ。ここで仮面ライダーとかウルトラマンがいてくれたら万全だけれどね」
「まあ正義のヒーローがいてくれるにこしたことはないけれど」
これについてはジュデイも同意はする。
「けれど。あれはテレビでの話だから」
「それは僕もわかってるよ」
それがわかっていないローリーでもなかった。流石に夢と現実の区別はついているのであった。
「流石にね」
「わかっているのならいいけれど」
「それでも。今回ばかりはねえ」
言葉がぼやきになっていた。
「いてくれたらなあ、って本当に思うよ。やっぱり」
「正義の味方ね」
プリシラが彼の言葉に応えてきた。

「今欲しいのは」
「いないのはわかってるって」
ローリーはプリシラに対してもすぐに述べた。
「だから僕だって」
「正義の味方は期待するものじゃないわ」
だがここで彼女はクールにこう言ってきたのだった。
「期待するものじゃないのよ」
「!?どういうこと?」
ジュデイは今のプリシラの言葉に顔を向けてきた。
「期待するものじゃないって」
「自分がなるものよ」
次にこう言うのだった。
「それはね」
「正義の味方はなるものなの」
「そうよ」
また答えるプリシラだった。
「自分達がね。なるものなのよ」
「自分達がなるって」
ローリーはプリシラの言葉に何か夢での言葉を聞いているような顔になった。その顔でまたプリシラに対して言葉を返すのだった。
「どういうことかな、それって」
「言ったままよ」
言葉の返答は相変わらずの調子だった。やはりクールである。
「来てくれるのを期待するのじゃなくて自分達がなるのよ」
「立ち向かうってこと?」
「そうよ」
答えはこれであった。クールな返答のそれだった。
「そういうことよ。わかってくれたわね」
「うん」
ローリーはあらためてプリシラに対して言葉を返した。

「やっとね。そういうことだったんだ」
「ただし」
だがここでプリシラは言葉を付け加えるのだった。

第百話　天本破天荒博士その八

「ただし？」
「正義の味方はなりたいと思ってなれるものではないのよ」
「自分からなるものなのに？」
ジュデイはまた訳がわからないといった顔でプリシラに問い返した。彼女にとっては矛盾していて仕方がない話にしか聞こえなかったのだ。
「それってどういうことなの？」
「確かに自分からなるものよ」
プリシラは自分の言葉は否定しなかった。
「けれど。なりたいと思ってなれるものでもないのよ」
「やっぱり言葉は矛盾しているわね」
「矛盾していないわ」
言われても自説を曲げないプリシラだった。
「これはね」
「矛盾していないって？」
「そうよ。なりたいと思ってなれるものではないわ」
このことは何度でも言う。
「けれど。なれるのよ」
「それでもなれるの？」
「気付いたらなっているものよ」
言葉が変わった。
「気付いたらね。もうなっているものなのよ」
「気付いたらなっているもの」
「そうよ」
今度はローリーに対して答えたのだった。
「まずはなりたいと思って」
「うん」

「前に進む」
最初はそれであるというのだ。
「そうして無心で前に進んでいるうちにね」
「なっているものなの」
「かえってなりたいと思っては駄目なのよ」
ここは強調してきた。
「なりたいと思って頑張ってもなれないわ」
「ふうん」
ジュデイは今のプリシラの言葉を黙って聞いていた。
「なりたいという欲があっては駄目なのね」
「そう、欲は駄目よ」
欲についてはさらに強調された。
「かえって己を曇らせるわ」
「己をなのね」
「それを忘れてただひたすら前に出るのよ」
プリシラには珍しい精神論めいた言葉だった。
「前にね。そして気付けば」
「なっていると」
「そう、なっているの」
それをまた言うのだった。
「何時の間にかね。簡単に言えばなろうと思って後は前に進むだけ」
「それだけね」
「他には何もいらないのよ」
プリシラの断言だった。
「だから。前に出ましょう」
「よし、じゃあまずはだ」
タムタムがプリシラの今の言葉に続く。
「皆に話そう。それでいいな」
「うん」
「皆で。行きましょう」

ローリーとジュデイも彼の言葉に頷く。今二年Ｓ１組にとって最大の戦いがはじまろうとしていた。学園どころか世界を脅かす最大最悪の破壊者との。

天本破天荒博士　　完

２００８・８・１６

第百一話　博士の行いその一

博士の行い

誰も望んではいないのに活動を再開した天本博士。早速研究所から訳のわからない巨大なロボットを出撃させていた。銀色の要塞みたいなロボットだ。

「行け、エンペライザー」

「そのロボットエンペライザーっていうんですか」

研究所の前の地面を崩してそこから雄姿を現わしたそのロボットを見て野上君が博士に突っ込みを入れた。

「今はじめて知りましたよ」

「最初に作ったのは二十一世紀のことじゃ」

いきなり大昔である。

「その頃はのう。まだこれよりもずっと性能が低くてなあ」

「低かったんですか」

「精々国を一個潰せただけじゃ」

その時点でこれだったのだ。

「まだな。何億かで大国じゃと言われていた時代の話じゃ」

「その頃から作っていたんですか」

それを聞いて少し呆れる野上君であった。

「こんなものを」

「まずは作ることじゃ」

それ自体は非常にいい言葉であった。

「天才はのう。まず作る」

「まずは作り。それからは」

「破壊を行うのじゃ」

やはりこれであった。

「何もかもな。そしてその中でバージョンアップさせていくのじゃ」

「このエンペライザーはどれだけバージョンアップされているん

ですか？」
「千回というところじゃな」
「一年に一回ですか」
「天才とは何じゃ」
いきなり野上君に問うてきた。
「天才とは。何じゃと思う？」
「蜻蛉を追っていて何時の間にか山の頂上に辿り着いている人でしたっけ」
「文学的じゃな。誰じゃ？」
「確かヘルマン＝ヘッセかトーマス＝マンか」
野上君は少し首を捻って己の記憶を辿りながら述べた。
「どっちかだったと思いますけれど」
「どっちにしろドイツ文学か」
「まあそうですね」
なお野上君の趣味は読書だ。この博士の助手をしているだけあって専門は理系でありその職業も科学者になっているが好きな本は文学系なのである。
「少なくともイタリアとかフランスではなかったかと」
「ドイツの文学はよい」
博士もそれは認める。
「その哲学もな。わしは文学者でもあるし哲学者でもあるのじゃ」
「そうだったんですか」
「両方の博士号も持っておるぞ」
ここでは言葉が少し誇らしげなものになっていた。
「ちゃんとな。あんなものは幾つでも取れる」
「幾つでもですか」
「博士号を手に入れることは目的ではない」
またしても言葉自体は非常にいい言葉を述べる。
「それははじまりじゃ。学問には終わりがない」
「仰る通りです」

「問題はそこからじゃ。不断の努力じゃ」
意外とこういうところは真面目なのだった。
「精進してこそ。まことの学問なのじゃ」
「そうですね。それでです」
「うむ」
「その天才についてですけれど」
話がそこに戻った。
「博士はその天才は何だと思われているんですか？」
「古典になっておる言葉じゃが」
まずはこう前置きしてきた。
「天才とは」
「はい、天才とは」
「九九パーセントの努力と一パーセントの閃きじゃ」
エジソンの言葉である。
「それだけじゃ。つまり天才とは努力を常に続ける人間のことじゃ」
「まあ一パーセントの才能なら誰にもありますからね」
「〇．〇一パーセントでもいいのじゃ」
こうも言う博士だった。
「努力をしていればそれが一になるからのう」
「そんなものですか」
「左様。努力こそが最も大事なもの」
やはりその言葉は何処までも求道的である。

第百一話　博士の行いその二

「エンペライザーにしろじゃ。伊達に千回も改造しておるわけではないぞ」
「それでなのですか」
「エンペライザーは最早この宇宙で最強のロボットじゃ」
胸を張っての豪語であった。
「わしの千回の改造でな」
「バージョンアップですね」
「うむ。しかし最強にも限りはないのじゃ」
話はここでも求道的なものになっていた。
「じゃから。これからもバージョンアップするが」
「今回はこれを出撃させるのですね」
「左様。行けエンペライザーマーク１０００！」
本当に千であった。
「その力で街を灰燼に帰せ。容赦はするな！」
「努力されているのはわかるんですけれど」
野上君はエンペライザーに破壊を命じる博士を横目で見つつ言った。
「それが何でいつもこうなるんですか」
「こうなるとは？」
「ですから博士いつも街を破壊したり訳のわからない改造人間作ったり」
言うまでもなくこの時代でも犯罪である。テロ行為そのものだ。
「ブラックホールに暴力団の事務所送り込んだのは三日前でしたね」
「不要になったからのう」
まるでゴミをゴミ箱に捨てるかのような素っ気無い返答であった。
「ヤクザ屋共は全員わしの偉大にして崇高なる細菌実験の英霊となったからのう」

「あれって化学実験じゃなかったんですか？」
「細菌実験じゃ」
どちらにしろ違法というものではない。連合軍ですら細菌兵器や化学兵器の開発及び使用は禁じられている。これは連合中央政府の法律で銀河進出の頃から定められていることである。つまりこれもまた違法どころの騒ぎではないのである。
「エボラ菌を数十倍強くさせて空気感染できるようにしたものとかのう」
「エボラ菌って・・・・・・」
この時代ではワクチンはある。しかし恐ろしい病気なのは変わってはいない。
「コレラをさらに悪質にさせ一週間悶え苦しむようにしたスーパーコレラとかのう。それを奴等の意志に関わらず注射したりして実験してみたのじゃったな」
「それでヤクザ屋さん達はどうなったんですか？」
「今頃もうブラックホールに飲み込まれておるかのう」
何と事務所ごとブラックホールのど真ん中に転送したのである。当然ながら中にいる人達のことなぞ一切考えてはいない。他人への配慮という言葉もまたこの博士の辞書にはないのだ。
「粉々に砕けておるか。その前に宇宙空間じゃから身体が破裂しておるか」
「その前に何があったんですか？」
「面白い光景じゃった」
満足そうな笑みと共に述べてみせる博士であった。
「エボラ菌を移されて顔中から血を流し悶え苦しむ」
「うわ・・・・・・」
「ハイパーペストで顔が真っ黒になるどころか腐り果てながら死んでいく。そうしてヤクザ屋さん達は皆わしの偉大なる細菌実験の礎となったのじゃよ」
「つまり全員死んだんですね」

「うむ」
今度は一言であった。
「デクは使うものじゃよ」
「デクって・・・・・・」
木人形という意味である。つまりもう人間とは見ていないのだ。
「何なんですか、それって」
「デクはデクじゃ」
やはり言葉は非常に素っ気無い。まるで小石を放り捨てるような感じだ。
「わしの目指す最高の細菌兵器の開発の為の道具よ」
「幾らヤクザ屋さんでも」
「悪いのか？」
博士の辞書には罪悪感という言葉もない。
「流石に善良な市民を実験材料にしては問題があろう。じゃから昔からそこいらの暴力団やどうしようもない不良や暴走族をデクにしておるのじゃよ。ラットやマウスを使うのはわしの流儀ではない」
「あくまで人間を使うのですか」
「同時に街の掃除にもなる」
どうやらただ暴力団員や不良や暴走族が嫌いなだけらしい。嫌いだという理由で生体実験を行うというのもまた恐ろしい話であるが。
「いいことではないか」
「確かに僕も暴走族とかは嫌いですけれど」
野上君も彼等は好きではない。

第百一話　博士の行いその三

「けれど。生きた人間を実験材料にするというのは」
「千年どころかずっと前から続けておるぞ」
「そういう問題ではないのでは？」
「安心せよ。奴等はただわしの実験や開発の礎になっているだけではない」
　ここで博士はまた言う。
「他にも世の為人の為役立たせておるわ」
「どうやってですか？」
「簡単じゃ。奴等の内臓やらを売ってのう」
　つまりは臓器売買である。
「それで人様の役に立たせておる。生きたまま腹を切ってな」
「生きたまま・・・・・・」
「しかも麻酔なしじゃ。わしは天才なのじゃからな」
　理由には全然なっていない。
「麻酔は使わないのじゃ。一気にやってすぐに取り出す」
「つまり取られる人はその光景をずっと見ているわけですか」
「あえて。痛いようにする」
　しかもこうだ。
「そのうえ血まで抜き取って献血してもらう。ゴミもこれで世の為人の為に役立っておるというわけじゃよ」
「立派な殺人ですね」
　これまた今更な言葉であった。
「それってもう」
「ばい菌を消毒しておるだけじゃよ」
　やはり罪悪感はない。
「それだけじゃよ。それで開発の資金を手に入れておるのじゃよ」
「ひょっとして僕のお給料は」

「それは偽札じゃ」
「本当ですか？」
「いや、これは冗談じゃ」
流石にそれはないのであった。しかし野上君はこの博士ならその程度は平気でするだろうと思った。何しろ細菌実験や臓器売買を平気で行う人間だからだ。
「ちゃんと宝石を売った金で君の給料は賄っておるよ」
「宝石ですか」
「人造じゃがな」
博士にとっては宝石を造るのも造作のないことであるらしい。
「あとは錬金術でも造るのう」
「ああ、錬金術ですね」
これは野上君も知っていた。博士がするところも見ている。
「あれでですか」
「無論金も造る」
錬金術の究極の目的だ。賢者の石という伝説の石からそれを行うと言われている。
「そうやって資金を手に入れているのじゃよ」
「じゃあ臓器売買する意味ないんじゃないんですか？」
野上君の突っ込みは実に正論であった。しかしこの博士の問題点は正論などとは全く無縁の世界に生きているということである。
「そんなにお金に困らないんでしたら」
「趣味も兼ねておるからのう」
とんでもない趣味である。
「だからじゃ。気にするな」
「気にするなって」
また突っ込みを入れざるを得ないのだった。それだけ博士が非常識だからである。
「気にしますよ。生きている人から麻酔なしで内臓とか抜き取って売るなんてことは」

「所詮世の中のダニじゃ」
一言で言い捨てる博士であった。
「ダニを潰して咎められるか？」
「いえ」
流石にそれはない。極端な動物愛護団体でもない限りは。
「そういうことじゃ。だからよいのじゃよ」
「けれどヤクザ屋さんは人間ですよ」
「屑は屑じゃ」
博士の耳は人権に関することはシャットアウトできる特殊能力がある。
「その屑をわしの役に立たせておるのじゃ。いいことじゃろ」
「そう思われているのならいいですけれど」
かなり諦めが入っている言葉であった。
「けれど博士」
「今度は何じゃ？」
「それで逮捕状が来ていますけれど」
ここでその逮捕状を出してみせる。見れば優に百枚はある。物凄い数だ。

第百一話　博士の行いその四

「殺人罪と死体遺棄、危険物所持法違反に銃刀法違反、その他諸々のことで」
「今週は少ないのう」
それだけの逮捕状を見ても平気であった。
「山羊の餌にもならんぞ」
「山羊の餌って博士」
「そうじゃ、また面白いことを思いついたぞ」
早速とんでもないことを考えついたのであった。
「そこいらの暴走族なり不良を一匹捕まえてな」
「またですか」
野上君の話は結局全く聞いていないのだった。
「それの首を切って口を改造してシュレッダーにする。それでどうじゃ」
「人間シュレッダーですか」
「当然身体は別に使う」
無駄はしない博士であった。
「頭を爆弾にして人間爆弾にしてのう。それを仲間のところに潜り込ませてな」
「爆発させるんですね」
「これでまた暴走族が減るぞ」
更正という言葉もこの博士の辞書にはない。
「どうじゃ、一石二鳥の改造じゃろ」
「もう何も言いたくないです」
既に諦めに入っている野上君だった。
「本当にそのうち何があっても知りませんよ」
「国家権力には屈せん」
一聴だけでは実に格好いい言葉である。だがテロリストを擁護す

る言葉に使われることも多い。国家権力に反対するのならいいと無差別テロを容認する店員を置いていた店は暫くして潰れたという話がある。巷ではあんな馬鹿を置いていたらそれも当然だと言われた。
「何度捕まってもな」
「何度も捕まっていたら普通反省しませんか？」
「反省？知らんのう」
博士の頭には最初からインプットされていない言葉だ。
「何語じゃ、一体」
「それで終わりですか」
「だから何語なのじゃ」
本当に知らないのであった。
「それは」
「知らないのならいいです。とにかくですね」
「うむ」
野上君は少し強引に話を変えてきた。
「このロボットがメインですか、今回は」
「街を破壊する」
やはりテロであった。
「今回はそれで行く。よいな」
「エンペライザーマーク１０００でですね」
「うむ、マーク１０００じゃ」
「一体どんな力があるんですか、これは」
「まず強い」
最初にこれであった。
「光の巨人ですら倒せるのじゃよ」
「つまり五十メートルもある相手と喧嘩できるんですか」
「ついでに何処ぞの似非科学研究家も踏み潰せる」
「それは大した能力じゃないんじゃないですか？」
「これは重要じゃ。いや」
ここで博士の考えが突然変わった。

「野上君、わしは考えを変えた」
「どういうふうにですか？」
「街を破壊するのは止めじゃ」
それは止めたのであった。
「それはな。中止する」
「それはいいｋとおですけれど」
「あの似非科学研究家を潰してくれる」
だが破壊活動を行うことには変わりがないのであった。破壊衝動については最初から抑えることなぞ考えもしない博士なのであった。
「下らない本ばかり書きおって」
「まあ確かにあの人の本はつまらないですね」
これについては野上君も認めるのであった。しかも全肯定であった。
「ああだこうだと屁理屈で自分の知ってるだけのことで全部決め付けてるだけですよね」
「左様」
博士の顔が見る見るうちに不機嫌なものになっていっている。
「それであの特撮がどうとかあのアニメがどうとか。ではわしはどうなるのじゃ」
「博士も全否定していましたよ」
こうした人種に対しては最もしてはならないことである。
「有り得ないとか言っていましたね。自分の本の中で」
「しかしわしは現にこうしてここにおる」
これ以上はないまでに説得力のある言葉であった。本人が実在していてそれを否定するということは相当どころの無理ではない。

第百一話　博士の行いその五

「ここにな。それでどうして否定できるのじゃ」
「何でも非科学的だとか」
理由はこれであった。
「そう言っていますよ。科学で説明ができないと」
「科学は万能ではない」
確かにその通りであるが一応科学者である天本博士の言うべき言葉ではなかった。それ以前にこの博士が持っている肩書きは科学者だけではないのだが。
「科学で説明できんことなぞ幾らでもあるわ」
「あの人はそう思っていないですよ」
「笑止」
そうした考えを一笑に伏す博士であった。
「浅はかなり柳田算数！」
その科学の本を書いている人のことである。
「所詮貴様はその程度！その程度の輩には！」
「どうするんですか？やっぱり」
「そうよ。天誅を与えてくれる！」
実に手前勝手な言葉であった。そもそも自分が天誅を受けやしないかなどとは全く考えていない。なおこの博士の前科はそれこそ十万やそこいらでは効かない。
「その愚劣な考え、正してくれようぞ」
「だから家を破壊しに行くんですか」
「そうじゃ。その程度で済んで有り難いと思え」
これまた実に手前勝手な言葉であった。
「命は取らんからのう」
「けれど家を壊すんですよね」
「そうじゃ」

しれっとして野上君に答える。
「その通りじゃが。それがどうかしたのか？」
「あの人この前豪邸建てたばかりですよ」
野上君はこのことをテレビで知ったのだ。
「本の印税で。全財産使ったとか」
「それがどうした」
そんなことには全く頓着しない博士であった。
「そんなことはどうでもいいのじゃ」
「どうでもいいって。折角全財産使って家建てたのにですか」
「金は必要なだけあればよい」
これまた実に手前勝手な言葉である。博士には他人への配慮というものが全くない。そんなものがないからこそ平然と改造手術を行うことができるのだ。朝目が覚めた暴力団員がクラゲと狼の遺伝子を埋め込まれた改造人間にされて連合軍に倒されたということすら日常茶飯事である。改造される方はたまったものではない。
「何時でも賢者の石で手に入るわ」
「それは博士だけですから」
「とにかくじゃ。それで済ませておいてやろう」
やはり野上君の話を聞いてはいない。
「それだけでな。さて」
「エンペライザーマーク１０００出撃ですか」
「邪魔する輩はエンペライザーの指先一つでダウンじゃ」
話が何かの拳法伝承者になっていた。
「エンペライザーの指先からは破壊光線が出る」
「オーソドックスですね」
「ミサイルも出るぞ」
かなりの重装備である。
「あのティアマト級巨大戦艦も一撃じゃ」
「一撃って連合軍の象徴ですよ」
連合軍四千個艦隊のそれぞれの旗艦であり二十キロもある巨大な

戦艦である。エウロパとの戦争においてもその威容を誇示しとてつもない攻撃力と防御力を見せつけた。そのあまりもの強さからまさに連合軍の象徴となりまた一隻も沈まなかったことから不沈戦艦とまで謳われているのだ。
「それも一撃ですか」
「何なら見てみるか？」
軍を恐れる博士ではない。
「その光景を。あの男の家を破壊した後で」
「遠慮します」
それはすぐに断る野上君であった。
「そんなことしたらそれこそ今度は異次元空間に隔離されますから」
「ふむ、面白くないのう」
それを聞いてあからさまに詰まらなさそうな顔をする博士であった。
「異次元なんぞ何時でも脱出できるというのに」
「異次元人はかなり悪質らしいですから」
これは特撮で得た知識である。
「ですから止めておきましょう」
「わかった。ではあ奴の家を木っ端微塵にしてやろう」
それでもこれは行う博士であった。

第百一話　博士の行いその六

「このエンペライザーでな」
「まあ街を破壊しないだけいいですけれど」
犠牲者は少ない方がいいというわけである。
「けれど。あの人泣くでしょうね」
「それを見るのもまた一興」
悪趣味である。
「何しろ天誅じゃからな」
「そんなにあの人が嫌いなんですか」
「大嫌いじゃ」
今度の返答はいささか子供じみていた。
「いじめをする奴も暴走族も暴力団も大嫌いじゃがな」
「嫌いなもの多いんですね」
「屑は好かん」
意外な博士の思考であった。
「人間生まれたからには壮大なことをしなければならん。詰まらぬ醜悪な行いは言語道断じゃ」
「だからっていってこの前いじめグループにしたことは」
「子娘達じゃったかのう」
当然ながらこの博士にはフェミニズムなどという思想はない。以前レディースのヘッドにコレラ菌を移してもがき苦しみ死んでいく様を最後まで見届けたことで女性人権保護団体が勇気のあることに博士の研究所まで抗議に来たが博士はそれに対して改造人間の群れを放つことで対応としたのである。
「だから言っておろう。屑は嫌いなのじゃ」
「人間爆弾にするというのは」
「些細なことじゃ」
博士の改造にしては確かに随分大人しい。

「死ぬまでの恐ろしさを堪能させてやったんじゃからな。五人じゃったか」
「十人ですよ。前の前です、それは」
「ふむ。無駄な人口は増えんでいい」
博士の持論である。
「しかしのう。いじめは駄目じゃろ」
「駄目に決まってますけれど」
こんなことはもう言うまでもないことである。
「けれど。幾ら何でもですね、また麻酔なしで爆弾埋め込んでそこから彼女達を逃がして十日間死への恐怖に怯えさせるというのは流石に」
「何度見ても思うのじゃ」
博士は野上君の話をまた聞いてはいなかった。
「人間というものはのう」
「僕はいじめの話をしているんですけれど」
「あれじゃ。死ぬ間際になるととかく騒いでもがき苦しんで何があっても助かろうとするのう。特にああした屑はそうじゃな」
「しかも爆弾埋め込んだこと宣伝までして」
「疎外されているという恐ろしさも味あわせてやる為じゃ」
こうした残忍さもあるらしい。
「いじめている奴というのは痛みを知らぬ奴じゃ」
「それはそうですけれどね」
一応一理ある博士の言葉であった。
「しかし。それでも」
「残酷には残酷じゃ」
博士は言い切る。
「屑はそうやって死ぬ恐ろしさと苦しみを最後まで骨身に教えてやるのじゃよ。ついでに真の孤独もな」
「友達どころか家族にまで疎外されて死んでいましたよ」
「よいことじゃ」

それも承知の博士であった。
「真の孤独になったら人間というものは壊れやすいものじゃ」
「おまけに死への恐怖もありますしね」
「どうじゃ。それで」
博士の得意げな言葉は続く。
「あの無様な死に様は。よかったじゃろうが」
「改造人間にした方がましでしたよ」
「改造人間じゃぞ、一応は」
博士はこう力説する。
「爆弾を埋め込んだんじゃからな」
「しかしやったことがそのままどっかの悪役ですよ」
「悪!?褒め言葉じゃ」
やはりそうなのだった。この博士にとっては。
「屑を始末してやっただけじゃからな」
「全く。それについても殺人罪で逮捕状来ていますよ」
当然であった。
「明らかに問題ですよ、人間爆弾は」
「どうせなら暴力団の事務所に放り込んで爆発させるべきじゃったか」
何処までも人権思想のない博士であった。

第百一話　博士の行いその七

「そうすればまた屑が減ったのにのう。今度はそうしようか」
「人の話聞いてます？」
「じゃから。やってやるというのじゃ」
聞いていないのだった。全く。
「今度いじめをしている奴を見つければな。そいつに爆弾を埋め込んでじゃ」
「暴力団の事務所に入れるんですか」
「そこで爆発じゃ」
楽しげに語る。
「そうすれば無駄な人口が余計に減るじゃろうが」
「実験材料にはしないんですね」
「死んでいく人間の心理への研究にはなる」
普通そういったことはあくまで分析をするだけだ。だがこの博士はそれを生身の人間を使って行う。それが普通の人間とは違うのだ。
「いつもな。わしは心理学者でもあるからな」
「心理学もやってたんですか」
「学問は総合的なものじゃ」
これはその通りであった。
「一つの分野に特化してものう。それだけでは駄目じゃ」
「それで爆弾も埋め込むんですか」
「これもまた実験じゃ」
平然と言い切る。
「爆弾の威力のチェックにもなるしのう」
「そこまで見ているんですね」
「爆弾といっても色々じゃろうが」
博士の研究は何処までも細かいのであった。
「身体に埋め込む場所によっても違うからのう」

「違うんですか」
「一番面白いのは脳味噌に入れた時じゃ」
語るその口が実に楽しげだ。
「電波を送ると激痛が走るようにすると特にじゃ」
「そんなことまでしていたんですか」
「脳味噌は神経の塊じゃ」
誰でも知っていることであった。
「だからじゃ。そこにそういうことをしておくとな」
「気が狂う程の痛みでしょうね」
考えただけでもぞっとするレベルの話であった。
「それって」
「気が狂わん程度の痛みにしておくのじゃよ」
これが善意ではないのは自明の理であった。博士にはそんなものはない。
「何度も何度もそれをして最後の最後でじゃ」
「惨いですね」
「これも実験のうちじゃ」
博士の実験は他人に優しいものでは全くないのである。
「屑をそれに使ってやる。いいことではないか」
「そんなナチスやソ連みたいなことをしてですか」
「人権を排除してこその科学じゃ」
マッドサイエンティストそのものの考えである。
「そんな無駄なものを真っ先に排除してそれでやっていくのじゃよ」
「無駄ですか、人権が」
「安心せい、わしは嫌いではない人間を実験に使ったりはせん」
「けれどそれって」
すぐにわかる言葉であった。野上君もすぐに突っ込みを入れる。
「気に入らないと」
「無駄な人口は増えんでいい」
あくまで博士にとってである。

「ただでさえ百百年やそこいらで二倍だの三倍だのに増えるんじゃぞ」
「確かに人口は多いですけれど」
四兆の人口を少ないという人間はいない。
「それでも。そんなことしたらそれこそ」
「国家権力には屈せぬが」
「逮捕状がとんでもない数になりますよ」
「そんな些細なことはどうでもよい」
「本当に些細なことなんですね」
「日本軍やら超時空天下人と争った時なんぞこんなものではなかったぞ」
また訳のわからない存在と戦った経験があるようである。
「それに逮捕状は燃やすかシュレッダーにかければそれでよい」
「またすぐ決ますよ」
「そのうち新しい逮捕状が来て古いのは送らなくなるわ」
それだけ法律上無茶苦茶な行動が多いというわけである。博士の日頃の行いが何よりも説明できる行動ではある。迷惑千万なことにだ。

第百一話　博士の行いその八

「その程度のことじゃ」
「だといいんですけれどね」
「さて、あの者の家を破壊するぞ」
既にそれは決定していた。
「木っ端微塵にな」
「まあ街を破壊しないだけましなんですけれどね」
これについてはよしとする野上君であった。
「あの似非科学者の家だけならまだ」
「何じゃ、君も嫌いではないか」
博士は本格的に動きだしたエンペライザーを見つつ野上君に声をかけた。
「あの男を」
「特撮やアニメが好きな人間であの人好きな人いるんですか？」
こう博士に問い返す。
「自分の知識だけで、しかも間違ってる知識でこんなことはないって言ってるだけじゃないですか。そこにあるのは高みから見下ろしている浅はかさだけで何の進歩も夢もないですよ」
「夢がなければ科学者ではないのじゃよ」
その夢が問題なのは最早誰も突っ込まない。
「あの男は科学がわかっておらぬ」
「ただの知識馬鹿ですか」
「そう、馬鹿じゃ」
実に辛辣な博士の言葉であった。
「所詮はな。馬鹿には馬鹿に相応しい報いを与えてくれようぞ。さあ、行くのじゃ！」
持っている乗馬鞭に酷似した鞭を振りかざしエンペライザーに命じる。

「あの男の家を木っ端微塵にするのじゃ。容赦はいらんぞ」
「遂にはじまるんですね」
野上君はもう諦めていた。
「また」
「またとは何じゃ」
しかし博士は期待に胸を震わせているようだった。目がまるで冒険を前にした少年のようになっている。実に輝かしい目であった。
「毎日のことじゃろうが」
「まあ毎日ですけれどね」
毎日悪事と言われることに励んでいるのである。
「結局のところは」
「それで博士」
野上君は話を変えてきた。
「今日の夕食ですけれど」
「シーフードがいいのう」
さりげなく注文する。
「生での。どうじゃ」
「じゃあカルパッチョにします？」
それを聞いてからメニューを提案する野上君だった。
「オリーブとペッパーを効かして」
「そうじゃな。後は」
「シーフードサラダで。他は」
「パスタがよいのう」
また注文が来た。
「スペインもいいがイタリアもいいからのう」
「じゃあシーフードパスタですね」
「フェットチーネじゃ」
幅の広いきし麺に似たパスタである。
「それで頼む」
「トマトソースにしますね」

「トマトは欠かしたら駄目じゃ」
これは博士のこだわりであった。
「スペイン料理にイタリア料理にはな」
「通ですね、やっぱり」
「そしてワインは赤じゃ」
これも忘れてはならないことであった。博士は何処までもよくわかっていた。
「よいな、そこは」
「そうですか。後は」
「パンは固いものをな」
パンにも注文をつける。
「赤ワインやパスタにはそれじゃ」
「パンですか」
「リゾットがいいというのかのう」
イタリアでのお粥である。米を使っている為連合においても非常に人気のあるメニューだ。パエリアもそうであるがイタリア料理やスペイン料理が連合に完全に定着しているのは米を使っているからだ。連合では第一の主食は米、第二が麦なのである。米は偉大である。

第百一話　博士の行いその九

「ここは」
「だって博士お米派でしょ？」
「確かに米は大好きじゃ」
それについては博士も認めることであった。
「しかしじゃ。今はパンじゃ」
「パンですか」
「正確に言うとリゾットはスープ扱いじゃぞ」
「あっ、そうなんですか」
これは野上君の知らないことであった。
「それは知りませんでした」
「パスタもじゃよ」
「はあ」
「ひょっとして主食じゃと思っていたか？」
「うどんや蕎麦みたいなものだと」
日本人らしい言葉であった。彼はパスタをうどんや蕎麦みたいなものだと本当に思っていたのである。だが博士はそれは違うというのである。
「それが違うんですね」
「その通りじゃよ」
「じゃあメインディッシュも必要ですね」
「鶏肉がよいのう」
さりげなくここで注文するのだった。
「オリーブを使ってのう」
「じゃああれですね」
野上君はすぐにメニューを決定したのであった。この辺りの判断がかなり割り切っていてしかも早いものであると言えた。料理は得意なようだ。

「鶏のオリーブ煮で」
「ガーリックとトマト、それにペッパーを忘れぬようにな」
「わかりました、やっぱりイタリア風ですね」
「うむ、イタリアはよい」
ラテン系が好きなようである。
「じゃから今日はイタリアで統一じゃ」
「ここ日本ですけれどね」
「日本でもイタリア料理は食べられるぞ」
普通にこう野上君に語る。
「それも本格的なものがな」
「一千年の間敵対関係でもですね」
「エウロパでは連合の料理は食べないそうじゃがな」
「あっ、そうらしいですね」
ここが連合とエウロパの大きな違いなのであった。
「僕達はそれこそこのパスタにしろ何でも食べますけれど」
「了見の狭い話じゃ」
何だかんだと言ってこの博士も連合の人間なのであった。このことで迷惑がる人間は多々いれど嬉しいと思う人間は誰もいはしないのだが。
「そんなのじゃから人口が千億で止まっておるのじゃ」
「それとこれとは問題が違うと思いますけれど」
「まあそんなことはどうでもよい」
強引に話を変えてしまった。
「最後にデザートは」
「何ですか？」
「ジェラートじゃ」
やはりイタリアであった。
「バニラとチョコレートじゃ。よいな」
「わかりました。じゃあそれで」
「当然君の分も買っておくのじゃよ」

一応野上君についても言う。
「食事代はこっちで出すのが決まりじゃからな」
「食事代は博士まで出してくれてお給料もちゃんとですか」
「かなり待遇がよいじゃろ」
笑って野上君に告げる。
「わしは気前はいいからのう」
「それはそうですね」
これは否定できないのであった。
「確かに。お給料も高いですし」
「金なぞ大した問題ではない」
幾らでも作られるからだ。それに金銭なぞ様々な発明や開発、改造実験等を行っている博士の前には些細なことなのである。そういうことなのだ。

第百一話　博士の行いその十

「欲しいだけの給料は弾むぞ」
「はあ」
「しかし何か不服そうじゃな」
「正直何があるかわからないとは思っています」
これまた正直に答える野上君であった。
「今からだって」
「些細なことではないのか？」
あくまで博士にとってで、ある。
「似非科学者の家を壊すだけじゃからな」
「そりゃ今回は犠牲者も少なそうですけれど」
もっとも何時気が変わるかわからないのであるが。
「それでも行動は起こすんですね」
「まず動いてからじゃ」
またしても他の人間が言えば実にいい言葉を出してきた。
「行動をしてはじめて何かが起こるのじゃよ」
「それはそうですけれどね」
「わかればじゃ。賽は投げられた」
そのエンペライザーはもう宙を飛んでいた。少なくともももう博士には止めるつもりはなかった。そんな気持ちは最初からないのであるが。
「面白い騒動のはじまりじゃ」
「面白いのは博士だけだと思いますけれど」
「さて、野上君」
完全に自分に都合の悪い言葉はシャットアウトしていた。
「食事にしようぞ」
「フェットチーネですよね」
「そうじゃ。イタリア料理じゃよ」

「わかりました。じゃあ今から作りますんで」
「しかし君は料理が美味いのう」
楽しそうな顔で野上君に言う。
「色々なものが作られるしの。何処で勉強したのじゃ？」
「姉さんがいまして」
「ほう、お姉さんがいたのか」
「履歴書に書いていませんでした？」
この博士も一応助手募集の際には履歴書持参を要求するのである。もっともあまりにも悪名高い為その募集に応じる人間はいないのであるが。なお資格は不要である。それでも募集に応じる人間がいないということが博士の評判を何よりも雄弁に物語っている。
「家族構成も」
「そんなの見てもおらんわ」
「見ていないって」
またしてもわかった衝撃の事実であった。
「じゃあどうやって採用したんですか、僕を」
「たまたま助手がおらんようになってな」
「それでですか」
「足立君といった」
その助手の名前を言う。これまた彼がはじめて知ることであった。実は彼は自分の前に助手がいたことを知らなかったのである。
「高校生でなあ。よい少年じゃったが」
「何でいなくなったんですか？」
辞めた可能性もあるがあえてこう問うたのである。博士が何をしたのかわからないからだ。
「その足立君というのは」
「ある人物に憧れておってのう」
「ある人物ですか」
「連合軍人じゃ」
エウロパとの戦争に勝ったというのに何故か今一つ影が薄い存在

である。少なくとも市民達にとってはあくまで災害救助とイベントをよく行うサービスのいい人達でしかない。連合軍が戦争をする軍隊であるという意識は連合の中では実に希薄なのである。
「何でも強くて格好よくて気さくでユーモアがあって優しくて包容力があってのう」
「凄い人みたいですね」
「それでいて努力家で情熱もあってな。その人間に憧れて」
「辞めちゃったんですか」
「高校卒業と同時に医学の道に進んだ」
「医学ですか」
野上君はここでその足立という少年が軍に入ったと思ったのだがそれは違ったのだった。
「左様、医学じゃよ」
「軍人にはならなかったんですか」
「グラスバンド部に所属しておってのう」
運動部ではない。運動部に匹敵するトレーニングがあるにしろ。

第百一話　博士の行いその十一

「軍人に向かない性格だと本人もわかっておってじゃ」
「それで医学ですか！？」
「軍医じゃよ」
「ああ、そっちですか」
こう言われると納得するのだった。
「そっちになるんですか、軍医に」
「残念なことじゃ」
博士は心から悔やんでいるようであった。言葉にそれが滲み出ている。
「折角あの少年にはこの世で最も楽しい遊びを教えてやれたのにのう」
「遊び？」
「破壊じゃよ」
やはりこれであった。
「この世にあるものを破壊し尽くし無駄な人口に生体実験を施していく」
「そんなの教えるつもりだったんですか」
「至上の喜びじゃよ」
博士にとってはそうなのだった。
「それこそな。麻酔なしで首を切断してそのかわりに改造した首をくっつけたりのう」
「首を切断・・・・・」
流石にこれには引く野上君であった。
「あの、それってどんな意味がある改造ですか？」
「ないぞ、そんなもん」
何となのであった。とんでもないことに。
「脳味噌を取り出して移し変えればいいのじゃからな、作り上げた

身体にな」
「じゃあどうしてそんなことするんですか？」
「趣味じゃ」
「趣味って・・・・・・」
「電動のこぎりで首を切断する」
また随分と痛くて怖い方法を採る博士であった。
「その時のデクの恐怖強張った顔を見るのがいいのじゃよ」
「それでですか」
「そのうえで改造手術をする」
さらに言葉を続ける。
「そうしたことも教えたかったのじゃが」
「本気ですか？」
「わしは嘘は言わん」
これまた断言であった。
「教えることは教えるぞ。そうじょそこいらの教師と一緒にするな」
「学校の先生とは違いますか」
「学校の先生はのう」
昔を懐かしむような目になって語る。
「戦前の日本の先生達は立派であったのう」
「戦前！？」
「第二次世界大戦前じゃ」
呆れるまでに遠い昔のことである。
「その頃の先生達は自他共に厳しい人が多く誰もが立派であったのじゃよ」
「凄い昔ですね」
「逆に最悪は戦後の連中じゃ」
「第二次世界大戦後ですか」
「その頃の日本の教師は最悪じゃった」
今度は実に忌々しげに語る。
「日本教職員組合じゃったな」

「ええと、確か」
野上君はこの単語を聞いて自分の記憶を探った。そうしてそこから出て来たものは。
「あれでしたよね。共産主義というイデオロギーに支配されてかなり閉鎖的かつ排他的な組織だったと。確かそう聞いていますけれど」
「左様、しかもじゃ」
博士の忌々しげな顔はまだ続いていた。
「あの連中はのう。人格に問題のある奴等ばかりじゃった」
「人格障害者ですか」
「当時の日本の教師は人格障害者の割合が非常に高かったのじゃよ」
これは残念ながら事実である。閉鎖的な組織にはがいしてその様な人間が集まってしまうのだ。日教組もまたそれと同じなのであったのだ。
「酷いものじゃった」
「人格障害者が子供を教えるというのは」
「例えばじゃ」
博士は言う。
「子供をトラウマになるまで殴ってもお咎めなしじゃ」
「うわ、それは」
「セクハラをしても隠される」
「モラルがなかったんですね」
「左様、モラルも何もなかったのじゃよ」
自分のことは全く気にしていない博士であった。
「そしてイデオロギーはじゃ」
「あの共産主義ですか」
「まともじゃと思うか？」
「いえ」
共産主義がどういったものであったのかこの時代の人間、とりわけ連合の者達にとってそれは衆知のことである。カルトと認識されてもいるのだ。

「恐ろしい話ですが。あの思想を子供に教えていたのですね」
「その通りじゃ」
「よく日本が崩壊しなかったものです」
「しかけたぞ」
かなり実害があったのも事実なのであった。
「わしは悪事は好きじゃが共産主義は嫌いじゃ」
「そうだったんですか」
「ついでに言えばナチスも嫌いじゃった」
意外な一面である。
「ああした連中はな」
「どうして嫌いだったんですか？」
「嫌いだからじゃ」
理由は単純明快なものであった。実に。
「ただそれだけじゃよ」
「それだけですか」
「左様、それだけじゃ」
やはり返答は変わらない。
「まあ今は連中がおらんからな。それでじゃ」
「破壊活動にいそしむんですか」
「左様。イタリア料理を食べた後はまた発明じゃ」
「今度は何を作るんですか？」
「地底兵器でも作るか」
今度はそれなのだった。
「ドリルを付けてな」
「じゃあまずは御飯を」
「食べようぞ」
こんな話をしてからイタリア料理となるのであった。博士の活動はまずはある科学研究家の家を破壊することからはじまることとなったのであった。

博士の行い　　完

2008・8・24

第百二話　いざ集結その一

いざ集結

「昨夜の出来事ですが」
三次元テレビがニュースを伝えていた。
「突如として姿を現わしたエンペライザーは作家である柳田算数さんの邸宅を踏み潰しそのまま何処かへと飛び去ってしまいました」
画面には完全に踏み潰されたその家とエンペライザーが映っている。同時にその作家の顔写真もそこにはある。
「今連合軍がそのロボットの行方を追っています。なお幸い死者はありません」
「ここまでやって死者なしなのね」
「凄い運がいいっていうか」
テレビは二年Ｓ１組に持って来られていたものだ。蝉玉とスターリングがそのニュースを見て言っていたのである。
「何でも柳田さん達は家族で旅行に行っていたそうよ」
「ああ、それでなのね」
「それで助かったんだ」
二人はプリシラの説明を聞いて納得したのであった。確かに運がいい。
「けれどお家がねえ」
「これまた見事に」
完全に潰されている。当然ガレージも庭も何もかもだ。完全になくなってしまっている。
「中にいたペットとかどうなったのかしら」
「猫が一匹いたけれど逃げていたらしいわ」
「それは何よりね」
プリシラの話を聞いてまずはほっとするコゼットであった。
「犠牲者がいなくて本当に何よりよ」

「全く」
「まずはよかったよかった」
誰も柳田氏の不幸については考えていない。
「死人だけは出なくてね」
「そういえばだ」
ここでギルバートも出て来た。
「あの博士が何かしても犠牲者は出ないな」
「だって警報出るじゃない」
アンがギルバートに答える。博士はそれこそ台風や地震か雷と同じ扱いにされているのである。何処までも人間とは思われていないのであった。
「博士が何かしたら」
「それはそうだが」
「そうしたら皆逃げるから」
アンがまた言う。実際に天本博士は常に何をしでかすか警戒されているのである。やはり危険物や天災と同じものだと思われているのであった。
「だから犠牲者いないのよ。博士も殺すっていえば」
「ああ」
「そこらへんのヤクザ屋さんや不良とかだけじゃない。生体実験や気紛れの実験で」
「そういえばそうよね」
「そういうところはモラルあるのかしら」
皆はアンの話を聞いて博士について話をはじめた。
「無駄な血は好まないってやつ？」
「破壊できればいいってだけで」
「それでもかなり迷惑だけれどな」
「それはね」
ルシエンとアンネットが言う。それでも平気で少なくとも何億テラ規模の災厄をもたらすのであるからたまったものではないのだ。

とりわけ博士のいる日本にとっては。
「日本政府も困ってるかな、やっぱり」
「本音言うと抹殺したいでしょうね」
これは非常によくわかることであった。
「だってねえ。あんなことといつもしてれば」
「それに反省するってことないし」
反省という言葉もまた博士の辞書にはない。天才というものは決してくじけたり諦めたりしないものだと勝手に考えているのである。
「気が向いたら今みたいに出て来て」
「何かしでかすのよね」
「で、今回はこれね」
テレビには家を破壊されて泣いている柳田氏が映されているがそれは誰も見ていないのであった。博士についてあれこれ考えているだけで。
「あの博士にしては大人しい？」
「そうじゃないの？家一軒だけだし」
とりあえず今は壊れた家を見ている。ただし柳田氏には無関心である。
「とりあえずはね」
「これからどうなるかはわからないってことか」
「あの博士よ」
今度はナンがダンに告げる。
「これで終わると思う？」
「いや」
すぐに答えを出すダンであった。

第百二話　いざ集結その二

「今までのことを考えると。それこそな」
「そうでしょ。これからも何するかわからないわよ」
それが天本博士なのである。常識を一切無視してそのうえ何をするかわからない。まさに地震と雷と火事と台風と津波が一度に来たような存在であるのだ。
「博士の気が向けばね」
「毎度のことながら困ったことだな」
ダンは腕を組んで述べた。
「さて、どうしたものか」
「それでよ」
プリシラが出て来た。
「皆どう考えているかしら、今回の博士については」
「止めないといけないでしょ」
レミが言う。
「さもないと恐ろしいことになるわよ」
「さもないとっていうか」
今度はルビーが口を開く。
「普通の人間であの博士の相手ができるの？私達ただの学生だけれど」
「できることをやる」
アルフレドが述べた。
「さもないとこちらにまで災厄が及ぶことになるぞ」
「そうね。確かに」
今の兄の言葉に頷くビアンカであった。
「っていうか何時学校に向かって来るかわからないし」
「そうなんだよなあ」
「本当に何時何をするかわからないから」

意識を持ってどんな動きをするかわからない災害というわけである。実に悪質だ。

「この学校まで来る可能性は？」

「ゼロじゃないでしょ」

また皆言い合う。

「気紛れで動くんだから」

「というか前も何回か来たそうだよ」

「そうだったの」

これは皆にとって初耳であった。しかし考えて見れば博士の研究所が学園のすぐ側にあるのだからこれも当然と言えば当然のことであった。非常に迷惑だが。

「その度に凄いことになったらしいけれど」

「凄いことっていうか」

皆の脳裏に夜のビルの屋上であのマントとタキシードのまますくっと仁王立ちして腕を組んだうえで高笑いする博士の姿が浮かんだ。背景には満月まであり実に絵になっている。

「学校完全破壊されない？それって」

「洒落にならなかったでしょ」

「そうだよな。それでどうして」

彼等の中に疑念が一つ浮かんできた。

「この学校無事だったんだろ」

「どうしてかな」

「それも問題ね」

またプリシラが言ってきた。

「それがどうしてかは」

「だよなあ。あの天本博士だし」

「幾らこの学校でもね」

この学校が普通でないのはもう皆わかっていた。ただ広くて様々な施設があって人が多いだけの学校ではとてもないということをだ。

「流石にあの博士だとね」

「来たら壊れるわよね。何処かが」
「それでも壊れなかったわ」
プリシラはまた言うのであった。
「何度も襲撃を受けてもね」
「何かあるのかな」
「学校を守るヒーローがいるとか」
「ヒーローって？」
また随分と特撮めいた話になってきた。あの博士自体が現実を一切無視した特撮ものの悪役みたいな存在であるからこれは当然の流れであった。
「だから。仮面ライダーとかウルトラマンみたいなのだよ」
「ああ、ああいうのね」
「そういうのがいるんじゃないかな」
この仮説を出したのはジミーである。
「ひょっとしたらだけれど」
「ああ、そうだとしたら」
「心当たりがあるわ」
そしてここで出て来たのはテンボとジャッキーである。皆二人が出て来たところで話が一旦訳のわからない方向に行くことを確信したが口には出さなかった。
「俺さ、学校の前の喫茶店が怪しいと思うんだ」
「そうそう、あの喫茶店」
何故かここで喫茶店が出て来たのである。

第百二話　いざ集結その三

「あそこのマスターが多分改造人間なんだよ」
「脳の洗脳手術を受ける前に脱出したのよ」
何処かで見たような話である。
「それで今ああしてひっそりと街にいながら」
「博士と戦っているのよ」
「とにかくだよ」
ジミーは二人の話をなかったことにしてまた皆に言ってきた。
「少なくとも連合軍特殊部隊位はいざって時に待機してるんじゃないの？昔だったら日本軍とか」
「軍なのね」
「あの博士に対抗できるのってやっぱり」
かなり不利であろうがそこしか対抗できそうな組織を思い浮かべることができないのであった。もっとも連合において連合軍は特撮ものでしょっちゅう怪獣に敗れているが。その見事な負けっぷりが市民達の脳裏に染み付いているのもまた哀しい現実である。
「軍隊しかないでしょ」
「それはそうだけれど」
「連合軍だからねえ」
やはり市民にあまり頼りにされていない一面のある連合軍であった。彼等の認識では数は多いが戦闘になるとあまり頼りにならない強いとは決して言えない軍隊である。
「災害救助は得意だけれど」
「あの博士を止められないでしょ」
「日本軍もね」
かつての日本軍も話に出た。連合軍が設立されるまでは当然ながら彼等が日本を守っていたのである。その詰襟の軍服が人気であった。

「強かったけれど数少なかったし」
「流石に博士相手には」
「ヒーローに協力していた」
ここで仮説を出したのはトムであった。
「これならどうかな」
「協力！？」
「まあこれも特撮だけれどね」
右手を自分の頭の後ろにやって苦笑いしつつ皆に述べる。
「よくあるじゃない。警察や軍隊がヒーローに協力してるのって」
「そういえばそうね」
「逆もあったりするけれど」
その辺りは作品によって実に様々ではあった。
「そういうのが多いのは確かね」
「そうね」
「だから。どうかな」
トムはさらに仮説を出してきた。
「ほら、うちの理事長さんって連合軍のトップだし」
「その辺りの工面はできるってこと？」
「そりゃ八条家ってかなりの力もあるけれど」
日本はおろか連合全体で大きな力を持つ巨大グループである。この学園の理事長である八条義統はその家の長男であるのだ。
「有り得るかしら」
「それも」
「とにかくだよ」
トムはさらに言う。
「そうした人がいていないとあの博士の相手は無理じゃない」
「確かに」
「何しろ災害と同じ様な人だから」
だからこそ厄介なのである。
「何するかわからないしね」

「無茶苦茶するのだけはわかってるし」
「けれどそういう人を相手にするのなら」
皆も自然と答えが出て来た。
「ヒーローしかいないかしら」
「だとしたら一体」
「よし、わかったぞ！」
「あの人だわ！」
またしてもテンボとジャッキーが出て来た。
「あの人って？」
「誰なのよ」
「決まってるだろ！」
「そうよ！」
誰なのかと尋ねる皆に無茶苦茶な返事を送る。
「シャバキだ！」
「あの人しかいないじゃない！」
「シャバキって」
皆その名前を聞いて一斉に顔を顰めさせるのであった。当然であった。

第百二話　いざ集結その四

「あの人って正義の味方だったの？」
「ましてや」
シャバキといえば連合において天本博士と並ぶ奇人変人である。石が道にあるのを見ても空に雲があるのを見ても宇宙の星が輝いているのを見てもそれが宇宙や人類滅亡の序曲にしてしまうような人間なのだ。その断言には最早誰も突っ込みはしないことでも有名だ。
「あの人って今確か」
「精神病院に隔離されてなかったっけ」
「確かね」
それが何故かはもう言うまでもない。
「あれだけ無茶苦茶言っていたらねえ」
「何か隔離されていてもあんなのらしいけれど」
それがシャバキなのである。
「その人がどうしてここに？」
「それでヒーローなの？」
「決まってるだろう」
「そうよ」
二人の超絶推理は続く。それが正解かどうかは全くの別問題である。
「絶対断言の予言ハンターというのは仮の姿」
「予言ハンターね」
「そういえばあの人職業何だったっけ」
皆ここでも疑問に思うのだった。シャバキはメディアに頻繁に出没し本も数多く出版しており自分のサイトやブログでも毎日発言している。しかしその職業が何かと問われると皆返答に窮してしまうというのが現実なのであった。変人というものが職業なら話は別なのであるが。

「患者じゃないの？」
誰かが言った。
「あの人の職業って」
「患者って職業なの？」
「さあ」
実に無責任な返事であった。
「多分違うけれど」
「そういえば博士についても言っていたっけ」
「知識だけは凄い人だからね」
問題はその使い方なのであるが。知識はただ持っているだけでは駄目だ。しかしより重要なのはその使い方なのである。特にシャバキに関してはそうである。
「何でも一万人委員会の筆頭委員長らしいわよ」
「何よ、その一万人委員会って」
「世界を裏から操る謎の秘密結社らしいわよ」
また随分と胡散臭い委員会である。
「あの人の話だと。うちの理事長もそのメンバーなんだって」
「嘘でしょ」
「あの人は本当だって言っているわ」
これが現実であった。
「だから理事長と博士は裏で結託してるんだって」
「超絶的な解釈ね」
「まあそれでね。博士は他の知的生命体に人類を売ろうとしているんだって」
「あれっ、確か」
ここで矛盾に気付く人間がいた。
「博士って人類を滅亡させようとしているんじゃないの？」
「一万人委員会だって確か」
しかも矛盾は一つではないのであった。
「前は九千人委員会じゃなかったっけ」

「千人増えてるわよね」
「しかも一万人委員会って宇宙を征服しようっていう組織じゃなかったっけ」
「何で本やその場その場で言ってることが違うのかしら」
これがシャバキの特徴の一つであるのだ。
「記憶力ないのかしら」
「っていうか過去は振り返らないんでしょ」
「そうなの？」
「そういうことにしておかないといちいち考えてられないわよ」
シャバキについてはそうなのである。
「あの人の場合は」
「道理でずっと隔離されてる筈ね」
「この前脱出したけれどね」
隔離されていてもそれで安心できる御仁ではないのがまた悪質なのだ。シャバキはそうした事態を国家権力の謀略だと考える性質の人間なのだ。己の発言や行動がどれだけ異常かということは全く考慮しない。というよりは考える機能が最初から備わっていないのである。
「それでテレビの番組勝手にジャックして大暴れしていたっけ」
「そうだったわね」
「それでまた変なこと言っていたし」
それが彼なのである。

第百二話　いざ集結その五

「もうね。一分前と言ってることが違ってたし」
「本人全然気付いていなかったわよね」
「それでまた取り押さえられて隔離されたし」
「もう無茶苦茶」
「それでよ」
皆シャバキについて一通り話した後でテンボとジャッキーに顔を戻すのであった。
「どうしてその人が博士と闘うヒーローなの？」
「根拠は？」
「ここよ」
「ここだ」
二人が指差したのはそれぞれの頭脳であった。
「ここにそれはある」
「あたしにはわかるのよ」
「わかるって何が？」
「何がわかるんだよ」
「全てがよ」
ジャッキーは自信に満ちた顔で皆に答えたのだった。
「ありとあらゆることがね」
「本当だと思う？」
「まさか」
当然彼女とテンボ以外そうは思っていなかったのだった。それも全く。
「いつものパターンだろうね」
「まあそうでしょうね」
「あのミステリーハンターは世を忍ぶ仮の姿」
シャバキの職業が勝手に決められた。

「しかしその実態は」
「実態は!?」
「正義の味方ズババーンだったのよ」
聞いたこともないヒーローが出て来た。
「特殊スーツを着て闘うあのヒーローだったのよ」
「ズババーンって何?」
「さあ」
皆顔を見合わせる。当然誰も知らないヒーローだ。そんな名前のヒーローはとりあえずこのクラスの面々は誰も聞いたことがないものであった。
「架空のヒーローじゃないの?」
「絶対そうね」
「全知全能、万能のヒーロー」
ジャッキーはこうまで言う。
「それがズババーンなのよ」
「何かな」
ダンはここまでジャッキーの話を聞いたうえで首を捻りつつ述べた。
「ズババーンっていうとな」
「何だ?」
「ギター持っていそうな気がしないか」
こうカムイに応える。
「俺のイメージだとな」
「ああ、そういえばそんな感じだな」
カムイもダンのその言葉に頷くのだった。彼の話を聞いて同じイメージを抱くに至ったのである。しかもその理由もはっきりわかっていた。
「活傑って感じでな」
「そうだな。さすらいのヒーローてな」
「しかしシャバキはよ」

カムイはさすらいのヒーローとシャバキの決定的な違いを指摘したのだった。
「さすらっていないぞ」
「ああ」
ダンもまた頷く。
「そうだな。いつも精神病院に隔離されているからな」
「時々脱走するけれどな」
そのうえでテレビ局に殴り込み番組をジャックしてノストラダムスや人類滅亡の序曲や他の知的生命体の存在を叫ぶのだ。やはり異常である。
「けれどあれとは違うな」
「そもそもヒーローか？あいつ」
カムイの突っ込みは今回かなり容赦がなかった。
「ヒーローっていうよりはむしろ」
「いつも訳のわからないことをして助けられるキャラだな」
それで博士が悪役である。まさにその通りの配役である。

第百二話　いざ集結その六

「あれは」
「だから違うな」
「今こそズバーンを呼ぶ時よ」
二人が分析している間にもジャッキーは勝手なストーリーを作っていた。
「あの博士を止める為にもね」
「よし、じゃあ行くかジャッキー」
「ええ、テンボ」
二人はここで勇気に満ちた顔で頷き合うのだった。
「世界を救う為にね」
「行くか」
こうして二人は教室を飛び出て行った。ルビーはそれを見てビアンカに問う。
「止めないの？」
「止めても無駄でしょ」
完全に匙を投げた言葉であった。
「あの二人だけは」
「まあそれはそうだけれど」
「だから放っておきましょう」
やはり匙を投げてしまっている。
「もう気にしなくていいわ」
「あのまま本当にシャバキさん解放しかねないけれど」
二人はそこまで頭が気の毒なのであった。ただしそれに気付いていないのは二人だけである。これがまた頭が気の毒なのであった。
「それでもいいの？」
「毒を以って毒を制するになるんじゃないかしら」
またしても完全に匙を投げてしまっているビアンカの言葉であっ

た。
「もしかしたら」
「毒を以ってねえ」
「だって。連合で一二を争う奇人変人同士よ」
それが博士なのだった。そしてシャバキだった。
「そうなるんじゃないの？」
「そうかも。けれど」
ルビーは考える顔になってまた述べる。
「相乗効果を出してもっと酷いことにならない？」
「ううん、どうかしら」
「やっぱり止める」
「間に合わないんじゃないかしら」
脚だけは異常に速い二人だった。人様の為にならない能力はふんだんにあるのだ。
「もう。脚速い連中だから」
「それもそうね」
「まあ自爆して動き止るから」
冷酷なまでに落ち着き払ったビアンカの言葉であった。
「気にしなくていいわ」
「随分と余裕ね」
「だっていつもそうじゃない」
やはりここでも落ち着き払っている。
「二人で勝手に無茶苦茶な推理して出鱈目に動いて」
「結末は散々」
「だから放っておいてもいいわ。多分これから何故かシャバキさんのところじゃなくて暴力団の事務所に押し掛けて大変なことになると思うわ」
「何で暴力団の事務所なの？」
ルビーは眉を顰めさせてまたビアンカに尋ねた。
「シャバキさんから。話が全然違うじゃない」

「だってあの二人だから」
だがビアンカはこう言うのだった。
「普通にそういうことするじゃない」
「まあしかねないけれどね」
「っていうかしてるじゃない、いつも」
ビアンカの言葉は続く。
「推理が暴走した結果で」
「まあそうだけれどね」
「だから放っておいてもいいわ」
ビアンカの結論は変わらない。
「ヤクザ屋さんも呆れて相手にしないでしょうし」
「相手にしないの」
「あの二人が馬鹿だってことは校内どころか街の誰でも知ってることでしょ？」
今度はルビーに尋ねるのだった。
「ヤクザ屋さんだって」
「そうかも」
ルビーにも頷けることではあった。

第百二話　いざ集結その七

「あからさまに馬鹿だからね、本当に」
「つまみ出されて終わりね」
「いつも通りね、それだと」
「だから気にする必要はないわ。それでね」
またビアンカは言う。しかしここで話が変わった。
「どうするかよね」
「そうよ」
今の彼女の言葉に応えたのはプリシラだった。
「それを皆に相談しに来たのだけれど」
「わかってるわ」
プリシラのその言葉に頷くビアンカだった。
「天本博士をどうするかよね」
「そう。とりあえずは」
プリシラは言う。
「あのシャバキさんを使うっていうのも方法の一つになるわ」
「本当に毒を使うの？」
「何かされるよりはずっとましよ」
プリシラの言葉は実にクールなものだった。
「何かされてからでは遅いし」
「そうね。それはね」
ビアンカもその言葉に納得して頷く。
「あのまま柳田さんの家壊して終わるとは思えないし」
「気紛れで何でもする人よ」
プリシラの言葉はまさに真実であった。その通りには絶対になって欲しくはない真実である。
「だから。学校に来る恐れもあるし」
「そうなったら色々大変だからね」

ビアンカは腕を組んで顔を顰めさせていた。
「下手したら家まで壊されるし」
「そうよね。とにかく安易するかわからないからね」
ルビーがまた話に入って来た。
「何をするのかは打ち合わせしましょう、とりあえずね」
「そうだね、やっぱり」
ロミオがビアンカのその言葉に頷く。
「それが一番だよね」
「色々なケースがあるから」
またプリシラが言ってきた。
「何をするのかもね」
「それではだ」
ギルバートが話を纏めにかかってきた。
「まず二人は欠席扱いとする」
「欠席かよ」
マチアは今の彼の言葉に少し呆れた顔を見せた。
「行方不明じゃねえのかよ」
「いつものことだからな」
ギルバートの言葉も実に素っ気無い。
「そのうち戻って来る。だからいい」
「そうか。ならいいけれどな」
「それでだ」
また仕切りを行う。
「正義の味方の存在はまずどうでもいい。問題は博士だ」
「そもそも正義の味方がいるのかどうかってねえ」
「完全に仮定の話だったよね」
蝉玉とスターリングが顔を見合わせて言い合う。
「それより問題は博士だ」
「そうよね、あの博士」
「本当にどうするの？」

「僕としてはだ」
蝉玉とスターリングの問いに応える形でまた述べるギルバートだった。
「シャバキさんも悪くないと思う」
「悪くないのね」
「やはりあれだ」
ここで彼もこの言葉を出した。
「毒を以って毒を制す」
「それね」
「月並な言葉だがやはり効果はあるだろう」
「そうね」
その彼の言葉にプリシラも頷くのだった。

第百二話　いざ集結その八

「少なくとも博士の目はかなりそちらに行くわね」
「全て僕達に来ればどうなる？」
ギルバートはさらに皆に問う。
「そうなれば。それこそ」
「僕達生きられるかどうかもわからないよね」
「そうよね」
セドリックとウェンディが述べる。
「巨大ロボットなんて平気で出す人だからね」
「細菌兵器なんかも」
とにかく何でも開発してそれを撒き散らす博士なのだった。
「やってくるからやっぱり」
「警戒が必要ね」
「だからだ」
そしてここでまた言うギルバートであった。
「そうしたことを防ぐ為にやはりここは」
「シャバキ解放なのね」
「けれど待って」
今口を開いたのはアンネットであった。
「アンネット、どうしたんだ？」
「シャバキさんよね」
彼女が言うのは彼自身についてであった。
「シャバキさんを博士に向けるのよね」
「ああ、そうだ」
ギルバートは彼女の言葉に答える。
「それがどうかしたのか？」
「だからだ、あれだよ」
彼女のパートナーであるルシエンが言ってきた。

「シャバキさんだぞ。あの人は今」
「今、何かあったか」
「入院してるぞ」
こう告げるルシエンであった。
「精神病院にな。それこそ凶悪犯の警護みたいな感じでな」
「えっ、そんなに凄いの！？」
「凶悪犯って」
なお連合においては加害者、とりわけ凶悪犯やテロリストの人権に関しては実に希薄である。最早人間として扱われず無残な処刑を受けるのである。流石に精神病院ではそこまではいかず警護がそのレベルというだけである。だがその警護が問題であった。
「そんなになの」
「しかもただの精神病院じゃないぞ」
ルシエンはさらに言う。
「絶対零度の極寒の場所の地下深くだ」
「そんなところに病院あるの？」
「ある」
ルシエンは皆にかなり強引に語る。

第百二話　いざ集結その九

「銀河の辺境の中の辺境にな。それこそ宙図に乗っているギリギリの場所だ」
「ギリギリねえ」
「じゃあ相当危ないんだな」
連合において宙図の外は完全に別天地である。最早何がいるかわからない。また完全な自由を求めたり刑罰から逃れて辿り着く者もそうした場所に向かう。連合の人口には入っていない者達だ。
「そこにな。ある病院でだ」
「その奥深くにシャバキさん隔離されているのね」
「またそれは」
「回復の見込みがないかなり重度でしかも連合全体規模で何かをやってしまった精神か人格に障害を持つ者が入れられる場所らしい。地下百階にある」
「百階・・・・・・」
「まるで地獄だな」
そこまで行くととても常識では考えられない皆であった。
「一体何がどうなっているんだろうな、そんなところ」
「悪魔が氷漬けになっていてもおかしくないわね」
ウェンディが言ったのは神曲であった。
「そんな場所って」
「全くよ」
「シャバキさんそんなところにいるの」
「前に脱走してテレビジャックしただろ」
「ええ、あれね」
皆このことははっきりと覚えていた。
「あの大騒動ね」
「ラストは警察に実況中継で捕まってたよな」

「あれも凄かった」
そういう事態を引き起こすのがシャバキなのである。
「いきなりテレビ番組が変わって何時間も喚いて」
「それで捕まるなんてねえ」
「有り得ないっていうか」
「前代未聞」
「だからそこに入れたってわけだ」
ルシエンは最後にこう述べた。
「これでわかったな」
「そんな場所に行くのは流石に無理よね」
「そうだよなあ」
皆これで諦めようとしていた。これではもう無理だと殆どの者が思ったのだ。
「それにまあ。出て来たら本当にどうなるかわからないし」
「諦めましょう」
「いえ」
しかしここでセーラが言うのであった。
「それには及びません」
「及びませんって」
「大丈夫です」
にこりと笑って皆に述べてきたのである。
「その程度でしたら何とでもなります」
「何とでもって？」
「人の作ったものには限界があります」
また随分と怪しい響きを持つ言葉に聞こえるのが不思議であった。
「ですから。御安心下さい」
「ってことはだ」
ここまでのセーラの言葉にロザリーが突っ込みを入れる。
「あんた何か考えあるんだな」
「その通りです」

またしてもにこりとした、かつ気品に満ちた笑みであった。
「ですから。御安心を」
「いや、安心つってもなあ」
「何するのかな」
ジョルジュもそこがかなり気になるところであった。彼等だけでなくクラスの皆がであるが。何しろセーラといえばあらゆる常識が通じない相手だからだ。
「まあとにかくよ」
「ええ」
皆ビアンカの言葉に頷く。
「あの博士の悪事を止める為にはね。何でもしないと」
「毒を以って毒を制すでも?」
「それもまた時には必要よ」
それもまた戦略であった。かなり危険な戦略であったが今はそれを採用することにしたのであった。後でどんな恐ろしいことになろうとも。

いざ集結　　完

２００８・８・３１

第百三話　悪夢を召還その一

悪夢を召還

「御前達は聞こえていないのか！」
そのとてつもない精神病院の地下を実況中継している。そこには彼がいた。
「ノストラダムスが呼んでいるんだ！世界を救えと！」
シャバキであった。彼は隔離されていても相変わらずなのであった。一人あらぬ方を見て暴れながら絶叫し続けているのである。
「十万人委員会から！エドカー＝ケイシーの魔の手から！」
「言ってること理解できる？」
「できる人間いるかよ」
ロザリーがエイミーの問いに呆れた顔で返す。皆まずはそのシャバキが今どんな状態なのか見る為にテレビでのバラエティを観ているのだ。そこでのシャバキ様コーナーである。既に様付けにまでなっている。
「さっきはノストラダムスが宇宙人と密約していたって言ってたよな」
「ええ」
ほんの三十秒前の発言である。
「それで何でそのノストラダムスが世界を救えって言うんだよ。おかしいだろ？」
「この人過去は振り返らないから」
それがシャバキなのだ。
「だからじゃないの？」
「過去は振り返らないか」
「だからかも」
エイミーの返事は今一つ確かなものではない。
「というか他に理由があるかも知れないけれど」

「冗談抜きで発言滅茶苦茶だろ、相変わらず」
相変わらずなのが恐ろしい。
「何かっていうと一万人委員会とかよ」
「十万人よ」
「増えてるのかよ」
シャバキにとって数字は大した問題ではない。
「もう何が何だかな」
「あと今言っていないのは」
「人類総洗脳プログラムだ！」
これが出て来た。
「今影の宇宙政府はそれを企てている！そして連合を裏から操ろうと！」
「ほら、出て来た」
「やっぱりな」
もう皆彼の言葉はわかっていた。一人で部屋で喚いている。
「それを阻止しなければならない！そう！」
勝手に一人決意しだした。
「俺達がラストバタリオンになるのだ！」
「ラストバタリオンって確かよ」
「ナチスの残党だな」
ダンが述べる。
「地球の南極に隠れていたっていうな」
「ナチスっておい」
ロザリーはそこに突っ込みを入れる。
「二十世紀の話だろ？何で今更そんなのが」
「知らん、というかわからん」
常識人のダンには理解できない世界の発言だからだ。
「何しろ時空列まで狂わせても平気な相手だからな」
「どんどん悪化していってるな」
「超時空天下人が過去から来ようとしている」

「ああ、秀吉」
日本人の彰子がすぐに理解した。
「あの人ね」
「そして偉大なる連合文明を破壊しようとしているんだ！それは銀河暦一九九九年！」
「随分先だな、おい」
またロザリーが突っ込みを入れる。
「それは十年後だ！」
「また時空列狂ってるよ」
「何でそんなふうになるんだ？」
「古代ヒッタイトの暦ではそうなっている」
随分と怪しい暦が出て来た。
「滅亡したヒッタイトの」
「あるけれど？」
そのヒッタイト人のローリーが述べる。
「ヒッタイトは。ちゃんと」
「だからよ」
ロザリーがそのヒッタイト人に言う。
「いちいち突っ込んでいても仕方ないぞ、こいつは」
「それもそうだけれどね」
「とにかくだ。話してるぜ」
「うん」
「海の民によって滅ぼされたヒッタイトは」
これは正解だった。とりあえずは。

第百三話　悪夢を召還その二

「荒地に逃れてそこで未来への予言を行っていたんだ」
「だからそれおかしいわよ」
またローリーが言う。
「確かに私達の御先祖様は海の民にやっつけられたけれどね
なおこの海の民という民族はこの時代においても謎の存在とされている。突如として姿を現わし鉄器を使い当時最強の軍事力を誇っていたヒッタイトを滅ぼしたのだ。その後エジプト等と戦い姿を消した。今尚その素性は明らかとはなっていないのである。この時代でも。
「それでも。そんな予言していたなんて」
「そしてアッシリア人は」
シャバキの話が変わった。
「人類の未来を知ったんだ！」
「何でヒッタイト人からアッシリア人になったんだ？」
「さあ」
それはシャバキにだけわかることである。
「ヒッタイト人の直系であるアッシリア人は！」
「違うぞ」
そのアッシリア人であるアルフレドが画面で叫ぶシャバキに突っ込みを入れる。
「人類滅亡に至るまでの経緯を全て知ってしまったんだ！それは銀河暦六六六六年！」
「今度は時間まで変わったし」
「もう無茶苦茶」
「五年後だ！」
「この人の頭の中って時間滅茶苦茶になってるのね」
ビアンカの突っ込みはかなり今更であった。

「千年単位どことじゃないじゃない」
「僅か千年ですね」
セーラは穏やかに笑って述べるのだった。
「大した違いではないですね」
「流石マウリア人」
「何と」
今のセーラの言葉にも驚く一同だった。マウリアにおいては時間は悠久のものである。今ある宇宙の時間も創造神ブラフマーの一日に過ぎない。人の一生はその中で無限に輪廻転生し繰り返される。その中では千年という時間も些細なものでしかないのである。
「七年後人類は滅亡する！」
「だからいい加減時間が違うってわかれよ」
洪童ですら突っ込みを入れた。
「何処をどうやったらそんな時間になるんだ」
「謎の海の民が復活して！」
「どうやってだ？」
そもそもいきなり出て来たその民族に対する話もまた唐突にはじまった。
「そもそも十万人委員会は？」
「どうなったんだ？」
「世界を破壊し尽くそうとしているんだ！・・・・・・ううっ！」
隔離病室の中で突如として頭を抱えてしゃがみだした。
「ううう・・・・・・」
「狂ったか？」
「最初からだから違うんじゃないの？」
皆の意見はやはり冷めている。
「薬でもないようだし」
「頭の中で麻薬を無限に生産分泌できる人みたいだしね」
ある意味非常に物凄い人間である。
「まあそれは」

「違うじゃないの？」
「そ、そうか・・・・・」
起き上がってまた言い出した。
「わ、わかったぞ」
「いつもの断言だね」
「何か相変わらずの展開だけれど」
「電波だ！」
またいきなり単語を叫びだした。
「電波で人類社会を破滅させるつもりなんだ！あの恐るべきオペレーション＝ゼイリブによって！これこそ影の世界政府の究極の陰謀だったんだ！」
「話が何の整合性もないなあ」
「三言前ですら忘れてるし」
これがシャバキなのである。
「悪魔が復活する！」
またしても話が変わる。
「ダンテの神曲天界篇に出て来るあの魔王ハーデスが！」
「違う違う」
コゼットが画面に突っ込みを入れる。

第百三話　悪夢を召還その三

「あの氷漬けの魔王みたいだけれどあれ地獄篇のだから」
「しかもあれってルシファーでしょ？」
セドリックも突っ込みを入れるのだった。
「ハーデスじゃないじゃない。ハーデスはギリシア神話の冥界の神様だから魔王じゃないよ」
かつてはプルートと呼ばれ地獄の帝王であるとされた時期もあるにはある。キリスト教世界の魔王はそのルーツが異教の神である場合が非常に多いのだ。
「蘇ってその翼で宇宙を破壊するのだ！俺にはわかった」
始終こんな調子だった。このシャバキコーナーは視聴率が非常に高い。彼のあまりもの出鱈目かつ破天荒な発言が人気となっているのだ。その為にわざわざ隔離病棟にテレビカメラを置いて実況放送、若しくは録画をしているのである。なおシャバキ自身はこのことに気付いてはいない。
番組が終わってから。皆はあらためて顔を見合わせ。そのうえで話に入るのであった。
「まあとりあえずはね」
「ああ」
「呼ぶ？あれ」
アンが皆に問う。
「あれを。呼んでもいいの？」
「疑問だな」
ギルバートはその顔をかなり曇らせつつ述べた。
「正直なところ。あの人はかなり危険だな」
「世に離したらどうなるかしら」
「っていうか野放しにするんだよね」
「結果としてね」

アンは今度はトムに答えた。
「そうなるわね」
「博士がいるからいいけれど」
トムは腕を組んで深刻な顔をしつつ述べた。
「それでも。これはかなり」
「本当に毒ね」
アンは言う。まさに毒を以ってというものであった。
「しかも猛毒。果たして世に放っていいのかしら」
「相手はあの博士だけれどね」
ここで今回の話のメインが出て来た。
「あっちも確かに猛毒だけれど」
「それでもシャバキさんは」
やはり猛毒なのである。
「かち合わせる前に何かあったらもう」
「恐ろしいことになるわね」
「使う？」
アンは皆に対して問う。
「あの人。隔離病棟から出して」
「少なくとも博士を止めないといけない」
ギルバートがそのアンの言葉に返した。
「さもないと何がどうなるかわからない」
「そうよね。正直あの博士って」
アンの顔が曇る。
「放置できないしまともな方法じゃ止められないわよね」
「だからだ。どうするかだ」
話が振り出しに戻っていた。
「あの人を使うにしろ使わないにしろ。決断は下さないとな」
「それでどうするの？」
アンは今度は皆に対して問うた。
「あの人を博士にぶつけるの？それとも」

「そうだな」
ギルバートもまた腕を組んでいた。そのうえでアンに対して述べる。
「あの人を。博士に合わせよう」
「いいのね」
「迅速かつ的確にだ」
さながら軍事行動のようになってきている。
「合わせるにしろな」
「ちょっと目を離したらどうなるかな」
トムはふとした感じで恐ろしい仮定を立ててきた。
「そうしたら一体」
「大惨事よ」
アンは強張った顔で彼に告げる。
「そうしたら脱走するに決まってるから」
「うわ、それは大変だ」
「脱走したらそれこそ」
悪夢の仮定が続けられる。
「世に出て大暴れよ。捕まえるまでが大変よ」
「一瞬でも油断できないんだ」
「そうなるわ。だからやっぱり」
「軍隊みたいにしないと駄目だね」
「ええ」
「いえ」
しかしここで。セーラが不意に口を開いてきたのであった。そうしてアン達だけでなくクラスの皆に対して穏やかに告げるのであった。
「それには及びません」
「いいの？」
「はい」
語るその顔はにこやかにさえ笑っていた。

「その点に関しましては御心配なく」
「御心配なくなのね」
「私にはわかるのです」
また不意に周りにわかりにくい言葉を出すセーラであった。

第百三話　悪夢を召還その四

「何もかもが」
「何もかもがっていうと」
「まずは博士です」
彼女が最初に指摘したのは博士についてであった。
「あの博士の居場所もわかります」
「そんなことまでわかるんだ」
「博士の気配はかなり強いです」
やはり科学から離れた言葉になっていく。これはもうセーラが話すからには必然的な流れであった。何しろ魔術を使うことで有名なのだから。
「ですから。すぐにわかります」
「そうなんだ」
「後はそこに」
「シャバキさんを送り込む」
「それだけです。あの人を警戒する必要もありません」
こう述べるのであった。やはりその言葉は至って冷静なものであった。
「全ては一瞬で済みます」
「一瞬で」
「ですから」
セーラはまた言うのであった。
「御心配なく。私にお任せ下さい」
「お任せ下さいって」
「一体何を」
「召喚します」
さりげなくとんでもないことを宣言してきた。
「召喚すればいいのです」

「あのシャバキさんを？」
「はい、ここにです」
やはりさりげなくとんでもないことを言うのであった。
「この街に召喚します。しかも博士の目の前に」
「何かねえ」
だがそれを聞いて複雑な顔になる一同であった。
「そう簡単にできるのかしら」
「何せシャバキさんって」
極寒の惑星の隔離病棟の地下奥深くにいるのである。そこからこの学校まで送るとなると相当な無茶であるのは最早言うまでもないことであるからだ。
「あんなところにいるのに」
「無理でしょ、幾ら何でも」
「無理ではありません」
こう言われてもセーラの穏やかな微笑みは変わらない。
「全く。平気です」
「平気なの？」
「はい」
やはり穏やかで優しい笑みで皆に答える。
「私の魔術に不可能はありません」
「不可能はないって」
「あの方のおられる場所はわかりました」
それももうはっきりとわかっていた。一応彼の居場所はあまりにも有名な精神病院だからだ。その奥深くとなれば余計に簡単に断定できる。
「もうそれで充分です」
「じゃあ今すぐに？」
「ただしです」
セーラはここで言う。
「ここで一つ問題があります」

「っていうかさ」
「問題ばかりよね」
そもそも召喚するという行為自体がそうである。最早常識を遥かに超えたことになっている。当のセーラにはそうした自覚は全くないのだが。
「今更問題が一つって言われても」
「何なのかしら」
「つまりです。あの方を召喚する場所です」
セーラが言うのはこのことであった。
「あの方を変な場所に出してはそれこそ何処かに行ってしまいます」
「そうよね、確かに」
「それはね」
「逃げられたらそれこそ」
彼は精神病院から脱走することも多いのだ。だから今ああして地下の奥深くに隔離されているのである。絶対に逃げ出さないようにである。
「えらいことなんてものじゃ」
「だから猛毒なのよねえ」
「だからこそ。あの研究所の前に出します」
セーラの考えはこうであった。

第百三話　悪夢を召還その五

「召喚してすぐに博士と御会いできるように」
「やるのね」
「はい」
皆の問いにこくりと頷いてみせる。
「召喚は簡単です。御安心下さい」
「どうする？」
ロザリーがセーラの話を聞いて皆に問うた。
「セーラに任せる？やっぱり」
「そうね」
「そうだなあ」
皆首を傾げながら彼女の問いに応えるのであった。
「確かに危険な人だし」
「召喚する場所ならね」
「けれどさ」
疑問は消えない。話は続く。
「そもそも召喚かあ」
「どうなるかな」
このことも疑問なのだった。幾ら何でも常識外れもいいところだからだ。とはいってもこのセーラもまた常識が通用しない人間であるのは皆わかってはいる。
「まあセーラに任せるしかないんじゃない？」
「それもそうか」
「そうよね」
とりあえずは皆はセーラに任せることにした。
「それしかないか」
「あの博士は止めないといけないし」
これだけはどうしても外せなかった。

「だから。やっぱり」
「セーラに任せるか」
「じゃあ話は決まりだな」
ギルバートが皆に意見を纏めた。
「セーラ、頼めるか」
「はい」
言い出した本人であるから断る筈もなかった。
「是非お任せ下さい」
「よし、まずはこれでとりあえず話は整った」
ギルバートは話も纏めにかかった。
「皆、まずは行こう」
「あの研究所の前になのね」
「そうだ」
まずは舞台の移動であった。
「そこに移り。そして」
「シャバキさんを召喚ね」
「そういうことになる。ただ」
「ただ？」
「一つ問題がある」
ギルバートはこう言い加えるのであった。
「一つな。今度はタイミングの話だ」
「タイミング！？」
「あの博士が研究所にいるかどうかが問題だ」
つまりただシャバキを召喚するだけでは駄目だというのである。
丁度そこに博士もいなければ話にならない、彼が言っているのはこういうことだった。
「若しいなければだ」
「いなければ」
「その時点でシャバキさんが暴れ出す」
力が博士に向かわないからである。

「そしてそうなればだ。下手をすれば脱走され」
「うわ・・・・・・」
誰にとっても一番考えたくはない仮定であった。
「騒ぎは毒を以ってどころか二つの毒を撒き散らすことになる」
「それって最悪じゃねえか」
フックはここまで聞いて思わず呟いた。
「台風と竜巻を両方一変に街に出しちまったようなな」
「そうだ。だからだ」
ギルバートはさらに言葉を続ける。
「これだけは何としてもタイミングを合わせなければならない。いいな」
「はい」
セーラが彼の言葉に頷いた。
「それでしたらその時に」
「そうだ。では作戦決行は」
何時の間にか作戦にまでなっていた。話がどんどん大きくなっていっている。

第百三話　悪夢を召還その六

「博士が研究所にいる時だ。いいな」
「了解」
「それじゃあそういうことで」
クラスの皆が彼の言葉に頷く。
「まずは解散ね」
「話が決まったし」
「じゃあセーラ」
解散として立ち上がりながらセーラに声をかけるのを忘れてはいない。
「御願いね。その時は」
「ええ」
にこりと笑って皆の言葉に頷く。何はともあれ作戦が発動されることは決定した。後はそれが何時かだけであった。賽は投げられようとしていたのだった。
そしてこの時。博士はテレビを見ていた。場所はアジトでだ。博士は本拠地である研究所の他に複数のアジトも持っているのである。
見ている番組はドラマだ。しかもラブストーリーである。ワインをチーズとソーセージで楽しみつつ優雅にドラマ観賞を楽しんでいるのである。
「いいのう」
「博士そのドラマ好きですね」
「ドラマはいい」
しんみりとした口調で野上君に答える。野上君も一緒なのだ。
「心を豊かにしてくれるからのう」
「確かにそうですね」
話をしながら博士が珍しくまともなことを言っていると思っていた。

「ドラマによりますけれどこのドラマは」
「この二人はどうなるのかの」
今画面に映っている主役の若い男女を見て言う。
「幸福になれるのかの。それとも」
「なれるでしょ」
こう博士に答える野上君だった。
「だってタイトルが君とずっと一緒に、ですし」
「ふむ、そうか」
「こうしたタイトルだとまず幸せな結末ですよ」
「それを心から願うぞ」
真剣な顔で野上君に答える。
「若しもじゃ」
「若しも？」
「ハッピーエンドでなかったとする」
ワインを口に含みつつ述べる。
「その時はだ」
「どうされるんですか？」
「テレビ局にミサイルを撃ち込む」
やはりこういうことであった。
「容赦なくな」
「今度はミサイルですか」
「あくまで警告じゃ」
警告というレベルではないのはあくまで世間の常識の範囲のことである。
「わしとて情けはある」
「そうなんですか」
「だからじゃ。今回はその程度じゃ」
「ミサイルで、ですか」
「ミサイルの弾道には毒ガスを入れておくがな」
やはりこう来た。

「マスタードガスをな。死なん程度のをじゃ」
「毒ガスはまずいんじゃ？」
「大したことではない」
博士にとっては毒ガスもまたおもちゃの一つでしかないのだ。これを放って多くの人間を困らせた前科が星の数程あったりする。
「ほんの些細なことじゃ」
「毒ガスがですか」
「それよりもじゃ」
博士は言う。
「詰まらん番組にした罪は重いとは思わんか？」
「それはそうですけれどね」
少しだけ同意する野上君だった。
「けれどそれでも。毒ガスはあんまりでは？」
「気にするな」
当然ながら野上君の話は聞いてはいない。
「些細な天罰ではないか」
「些細な天罰ですか？」
「本来ならばエンペライザーで完全に踏み潰し跡形もなく破壊しておるところじゃ」
またしてもかなり無法なことを言っている。

第百三話　悪夢を召還その七

「しかしじゃ」
「毒ガスでですか」
「左様。しかも死ぬことはない」
「まあ死なないだけでもましですけれど」
何しろ人を生体実験に使ったり本人に無断で改造手術を施したりすることに何の罪悪感も感じていない人間だ。確かに誰か死なないだけでもかなりましとは言えた。
「それでも。国際法で禁止されているものを使用するとは」
「国際法なぞ知ったことではないわ」
そんなものを気にする博士ではない。
「そんなものは研究を詰まらなくする為の縛りじゃ」
「じゃあ無視するんですね」
「わしは法律には囚われん」
最初から完全に破っているのだ。これはこの博士が人類の歴史に出て来てから法律を守ったことは一度もない。当然国際法もである。
「毒ガスはいい発明じゃ」
「どうしてですか？」
「安価にできて効果も素晴らしい」
だからこそ最悪なのだが博士にとってはそうではない。この博士にとっては効果があればそれでいいのである。ついでに言えば予算も錬金術で作る為やはりあまり意味はない。
「素晴らしいではないか」
「それで毒ガスですか」
「おまけにじゃ」
博士はなおも言う。
「長い間もがき苦しむ」
「酷い話ですね」

「広範囲に拡がるしな。どうしてこれを誰も使わんのじゃ」
「だから国際法で禁止されているんですよ」
野上君はこのことをまた博士に言う。
「二十世紀から」
「第一次世界大戦からじゃな」
博士はこの頃のことを思い出していた。
「確か。そうじゃったな」
「ええ、やっぱり御存知だったんですか」
「楽しかったのう」
しみじみとした感じで語るのであった。
「色々と開発してやったわ」
「色々とですか」
「サリンあるじゃろ」
第二次世界大戦で開発された毒ガスの中でも最悪の兵器である。かつてナチス＝ドイツが開発しオウム真理教が使用した。その結果恐ろしい事態が起こった。
「あれは第二次世界大戦のものじゃが」
「あれ造ったら死刑ですよ」
もっとも死刑で済むような話では済まないことを次から次にしでかしているのがこの博士である。最早人間の悪事のスケールを越えてしまっている。
「言っておきますけれど」
「安心せい」
しかし博士は言う。
「人が造ったものなぞわしは造らんわ」
「そうなんですか」
「サリンなぞ生ぬるい」
こう来た。
「より恐ろしい究極の毒ガスを開発しておるのじゃよ」
「究極ですか」

「そう、究極じゃ」
胸を張って宣言する。ここであらためて博士が大柄であることがわかる。この博士は意外にも背が高いのである。普段の行動ばかり話題になってそれが目立たないだけだ。
「それこそな。吸えば瞬く間にもがき苦しむ」
「もがき苦しむ・・・・・・」
「一ミリグラムで地球程度の惑星ならありとあらゆる生命は全滅じゃ」
「物凄いですね、また」
「うむ。まだ使ったことはない」
残念そうに語る。
「どうもな。使う気になれんのじゃ」
「またそれはどうして」
「気が向かん」
ひどく簡単な理由であった。
「だからじゃよ。使わんのじゃ」
「そのままずっと使うべきではないかと」
「そうじゃのう。極限まで量を減らして」
この場合は毒ガスの量である。

第百三話　悪夢を召還その八

「ヤクザの事務所に撒布してみるとしようかのう」
「やっぱり使いたいんですね」
「兵器は何の為にあるか」
急に哲学的なことを言い出した。
「それは何故だと思うか」
「平和を護る為ですよね」
「違うわ」
当然ながらそれははっきりと否定する。
「平和？そんな言葉は聞いたこともないわ」
「本当ですか？」
「戯言よ、所詮は」
やはり平和という言葉は大嫌いなようである。
「平和だの法律だのそんなものを大事にしていては真の意味での発展は望めぬ」
「じゃあ連合一千年の平和は」
「徳川幕府の頃から思っておった」
少なくとも江戸時代から生きているらしい。やはり人間離れしている。
「平和なぞ人を堕落させるだけじゃ。人は闘わなければならんのだ」
「博士は闘っていたんですか」
野上君もびっくりの言葉であった。実は今まで博士は破壊と悪夢の開発、実験にのみ専念していると思っていたからだ。しかしそれが違うというのだ。
「悪事の限りを尽くしているとばかり」
「悪！？わしは悪ではない」
悪ということは否定してきた。
「例えて言うならそう。進歩の為の闘いを常に求めておるのじゃ」

「ではその闘いとは」
「いつもやっておる」
胸を張り腕を組んで宣言する。
「日々是闘いじゃ。そういうことじゃ」
「それだったんですか」
「さて、ドラマも終わったな」
丁度今終わったところである。次回の放送の予告がかかっている。
「どうやら無事終わりそうじゃな。よいぞよいぞ」
「終わらないと本当に毒ガスなんですね」
「一応警告を出しておいた」
テレビ局に直接である。
「詰まらんことをすればどうなるかわかっておるじゃろうとな」
「それって立派に犯罪ですよ」
脅迫行為である。
「毒ガス本当に使うんですから」
「試しにダムか水道に強烈な痺れ毒でも流してみるか？」
「絶対に止めて下さい」
かつて様々な悪の組織が行おうとした作戦である。毒ガスや爆弾によるテロと並んで非常に多く用いられてきた。悪の組織の常套作戦と言ってもいい。
「そんなことしたら今度は何処に入れられるかわかりませんよ」
「何、すぐ脱獄してやるわ」
博士は脱獄も趣味としているのだ。
「簡単にな。案ずることはない」
「そういえばブラックホールからの脱獄ってどうやったんですか？」
「実に簡単じゃった」
連合では極刑の一つである。切り刻んだ亡骸を糞尿や汚物と共にブラックホールに放り込んだりする。こうした刑罰はエウロパから残忍極まりないと批判も受けている。
「あそこから出るのはな」

「それでどうやって出たんですか？」
「異次元空間を通って脱出したのじゃよ」
やはり常識を無視した手段であった。
「異次元を通ってな。異次元ドアがあるじゃろ」
「そういえばそんなものもありましたっけ」
扉を開けばそこから異次元に入られるというものである。この時代においても放送されているとある番組の道具にヒントを得たものだ。その番組ではいつも眼鏡をかけた気弱な少年と青いネコ型ロボットが出てあれこれと楽しい日常生活を送っている。子供達のヒーローなのだ。
「あれを使って一発じゃった」
「それでだったんですか」
「異次元も楽しいぞ」
そのうえこんなことまで言い出す。
「異次元人もおってのう」
「あんなのと付き合ったらとんでもないことになりますよ」
異次元人については野上君も知っていた。顔を顰めさせて話している。
「物凄く卑劣で執念深くて残忍じゃないですか」
「それがいいのじゃよ」
「よくありませんよ」
顔を顰めさせたうえでの言葉をさらに続ける。

第百三話　悪夢を召還その九

「何度もこっちの世界に出ようとしてきているんですね」
「侵略でな」
「うわ・・・・・・」
やはり悪質な連中なのであった。
「子供を利用したり人の善意に付け込んできて侵略するのじゃ」
「無茶苦茶卑劣で陰湿なんですね」
「相手のしがいがあるというものじゃ」
実に楽しそうに野上君に語ってみせる。語りながらワインを一杯飲む。
「相手が強ければ強い程よいではないか」
「負けたらどうなるんですか？」
「わしが敗れることはない」
返答になっていなかった。
「安心せよ、よいな」
「まあ博士ですからね」
連合軍百三十億ですら向こうに回して平気な人間である。
「そうそう負けることはないでしょうけれど」
「思えばかつて様々な存在と闘ってきた」
ワインを飲みつつ懐かしさに浸る顔になっている。
「超時空天下人ヒデヨシや日本軍」
「日本軍！？」
「蹴り一撃で厚さ一メートルのコンクリートを真っ二つにし拳一発で鉄のドアをぶち抜き川を人とびで飛び越えた日本軍ともな。よく戦ったのう」
「どんな超人なんですか、それって」
「気合一閃戦車を一刀両断し竹槍でＢ一二九を撃墜した」
完全に人間ではない。

「素晴らしい強敵じゃったのう」
「完璧超人みたいですね、何か」
「あれよりも強かったのう」
やはり人間ではない。
「時速五十キロで歩け柔道で百万人殺したのじゃよ」
「柔道で百万って」
野上君は柔道で百万人を殺したという話を聞きまた絶句した。
「嘘みたいな数字ですね」
「他にも空手で二百四十万、合気道で百万」
「うわ・・・・・・」
「剣道で四百万じゃ」
「物凄い数ですね」
ここまで聞いてまるで夢の中にいるような気分にならざるを得なかった。
「何かもう」
「だから強かったのじゃ」
しかし述べる博士の言葉は平然としたものであった。
「日本軍はな」
「それでよく第二次世界大戦に負けましたね」
「人類史上最大のミステリーじゃよ」
博士の言葉である。
「そう言われておるぞ」
「そりゃそうですよね。それで博士」
「何じゃ？」
「その日本軍との戦いの結果はどうなったんですか？」
目を顰めさせて博士に対して尋ねる。
「凄い戦いになったみたいですけれど」
「今も戦っておるがな」
「今もって」
「時空を超えてくる奴等なのじゃ」

異次元人よりも物凄いことである。
「だから今もな。戦っておるよ」
「時空を超えて攻めて来るんですか」
「左様、ヒデヨシと同じでな」
その超時空天下人である。人の通り名にしてはあまりにも物々しく大袈裟なものとなっている。野上君もその通り名を聞いて眉を顰めさせている。
「時空を超えてくるのじゃよ」
「確か滅んではいるんですよね」
「豊臣秀吉は西暦一五九八年に死んでおるぞ」
歴史において誰もが知っている常識の一つである。彼の顔が猿を思わせ小柄であったので猿関白等と言われていたのと同じである。
「ちゃんとな」
「じゃあどうして今も出て来るんですか？」
「だから時空を超えられるのじゃよ」
「だからって」
「あの時代にいながら様々な時代に干渉できる」
神の次元である。
「そういうことじゃよ」
「また随分と滅茶苦茶な連中ですね」
「その連中ともやり合ってきておる」
博士は言う。
「ずっとな。面白いぞ」
「面白いんですか」
「何度も言うが闘争こそ人の世を発展させる」
実際のところは平和という言葉を知らないだけなのだ。
「さて、これからもな」
「破壊と開発を続けていくんですね」
「うむ、そういうことじゃ」
何処までも迷惑であり続ける博士であった。横で野上君が呆れき

っているのは見てもいないし気付いてもいない。騒動はなおも続くのであった。

悪夢を召喚　　完

２００８・９・７

第百四話　研究所の前でその二

「毎回毎回テレビとか雑誌であんな発言されたらどうだ？」
「迷惑なんてものじゃないわ」
これはもう誰もが容易にわかることだった。
「っていうか社会的に悪影響凄いでしょ。特に小学生とか」
「実際に小学生が世界は滅亡すると信じて問題になったそうだ」
「それで何で野放しなのよ」
「理由は簡単だ」
ダンは述べる。
「日本では奇人変人は罪にならない」
「それはいいことじゃない」
「隔離されもしない」
「それはまずいでしょ」
ここにはすぐに突っ込みを返すナンであった。
「流石に」
「言論の自由が保障されていたからな」
無論この時代でもこれは同じだ。ただし当時の日本のこれに関する、いや日本人の奇人変人という存在への考え方が極めて寛容であったのだ。少なくとも今のシャバキの様な人物が普通に街を歩けるまでには寛容であったのだ。これを寛容と言うかどうかは別問題としてだ。
「だからだ」
「野放しだったの」
「出版社の編集部にも投書がかなり来たらしい」
既にそこまで問題になっていたということだ。
「世界が滅亡すると思うと憂鬱だとな」
「子供ってそういうのに影響され易いからね」
「そしてその人類滅亡の序曲を叫んでいる当人は何と言ったか」

つまり当時の日本にもシャバキはいたということである。奇人変人というものは時として時空を超える存在であるようだ。有り難いかどうかというと全くそうではないが。

「何て言ったの？」

「皆不安に苛まれているようだと冷静に分析した」

「ああ、それは違うわね」

ナンは速攻でまた突っ込みを入れた。

「それを叫んでるのはあんた達だから」

「滅亡の根拠は予言だ」

「シャバキさんと同じじゃない、完全に」

「ついでに言えばノストラダムスだ」

ここまで同じなのだ。ある意味素晴らしい。

「ノストラダムスが諸世紀という本に書いてあったらしい。人類は西暦一九九九年に必ず滅亡するとな」

「じゃあ今いる私達は？」

「知らん」

ダンはきっぱりと答えた。

「予言は外れた。完全にな」

「じゃあその編集者は嘘をついていたの？」

「いや、嘘はついていない」

ダンの言葉は一聴すると矛盾したものであった。

「嘘はな」

「じゃあ何を言っていたの？」

「妄想だ」

答えはこれであった。

「妄想を叫んでいたのだ。何年もしかも前の話を完全に忘れて今度は宇宙人が出たりその次は世界を裏で操る組織が出たりそのまた次は大災害が起こったりでな」

「何かシャバキさんと全く同じなんだけれど」

ナンの言葉は全く以ってその通りであった。実にこの時からこう

した奇人変人の言っていることは変わってはいないという証拠に他ならない。

「気のせいじゃないわね」

「当時の日本はこうした人間が精神鑑定を受けずに済んだ」

「今では考えられない話ね」

だからこそシャバキは精神病院に隔離されているのだ。

「恐ろしいことよねえ」

「っていうか危ないでしょ」

この時代の人間の考えである。

「ああいうの野放しにしていたら」

「しかもそれでやっぱり子供が怖がっていたんでしょ？」

「そうだ」

ダンははっきりと皆に答える。

「それもかなりな。毎日その一九九九年が来るのを恐れていたそうだ」

「大体よ」

またナンがダンに尋ねる。

「その人は本当に一九九九年に人類が滅亡するって思っていたの？」

「ああ、それが問題だよね」

「そうよね」

トムとエイミーもそこに気付いた。

第百四話　研究所の前でその三

「嘘やデマ流す人もいるし」
「結局こういうのってどれだけ面白おかしく言うかだから」
「そこのところどうなの？」
ナンはまたダンに尋ねる。
「その人は。シャバキさんみたいに曲がりなりにも信じていたの？」
「結論から言えば信じていた」
これがダンの返答だった。
「確かにな」
「信じていたんだ」
「ああ。しかしだ」
ここからが問題であった。
「自分の言っていることがそれぞれどれだけ矛盾しているのか全く気付いていなかった。そこには科学的検証が入り込む余地もなかったしな」
「じゃあ同じじゃない」
「そうよね」
皆今のダンの言葉を聞いてこう言い合った。
「あの人とね」
「完全に同じ。っていうかさ」
ここで言ったのはマルコだった。
「ひょっとしてシャバキさんってその人の」
「生まれ変わり！？」
「そうかも。ざっと話聞いてるだけでもそっくりだし」
「ううん、言われてみれば」
「その通りね」
皆マルコのその指摘に頷くのだった。言われてみればそうである。似ているとかそういうレベルではない。ほぼ同一人物であった。

「それでその人どうなったの？」
「隔離されたりしなかったのよね」
「天寿を全うしたそうだ」
ダンは皆にこのことも告げる。
「無事な。もっとも実際のところ彼の話を信じて怖がっていたのは小学生か小学生程度の人間だけで」
「他の人はそうじゃなかったのね」
「ギャグ漫画だと思われていた」
こうした意味でもシャバキと全く同じであった。
「だから。印税は桁外れで彼はその中でも人類滅亡の序曲をその目に見ながら」
「天寿を全うしたと」
「何かねえ」
「シャバキさんはあんなのになのね」
「ねえ」
ちなみにシャバキも一応収入はある。隔離されていながらも執筆活動は書籍でもネットでも盛んでありそれの収入とテレビの出演料があるからだ。ただ隔離されている場所が場所だけにそれを使うことができないのだ。一応は金持ちと言ってもいい部類にはいる。
「時代が変われば違うのね」
「っていうか当時の日本って」
そちらへの話にもなる。
「凄過ぎるわね」
「ええ、本当ね」
日本についてもこう言われるのだった。
「あんなの野放しだったなんて」
「よくそれで平和でいられたわね」
「ある意味奇跡なんじゃないの？」
「昔から日本って変な奴は弾圧されたりとかしねえよな」
カムイがダンに尋ねてきた。

「そのシャバキさんみたいなおっさんにしろな」
「頭がおかしいと思われるだけだ」
ダンもこうカムイに言葉を返す。
「ただそれだけだ」
「だよなあ。なあ彰子ちゃん」
カムイはここで彰子に声をかけた。
「今でもやっぱりそうだよな」
「私はあまりよくわからないけれど」
しかし彰子はカムイの自分への問いに首を少し右に傾げさせていた。
「そうみたいね。多分」
「だよな。まあ何かしたら別だけれどな」
流石にその場合は問題となるのだ。
「けれど普通は頭がおかしいってだけでお咎めなしだよな」
「流石にシャバキさんみたいなのはそうはいかないがな」
彼に関しては連合の何処でも駄目というわけだ。
「それはな」
「そうだよな。さて、と」
ここで一行の前に鉄条網が出て来た。

第百四話　研究所の前でその四

「着いたぜ」
「博士の研究所ね」
「ああ。はっきりと見えるな」
鉄条網には立ち入り禁止とはっきり書かれている。その向こうに博士の研究所が実に不気味なシルエットを浮かび出させていた。まるで悪の組織の基地である。
「あれだよ」
ロミオがその不気味な研究所を指差して皆に言う。
「あれが博士の研究所だよ」
「何かねえ」
ナンシーは目を思いきり顰めさせていた。眼鏡の奥のそれがはっきりわかるまでに。
「普通にテレビとかで見るよりずっと不気味なんだけれど」
「不気味っていうかさ」
パレアナは空を指差していた。何故か研究所の周りだけ暗い。暗澹たるものだ。
「異世界みたいね」
「しかもあの烏」
ジミーが見ているのは蝙蝠だった。
「異常に大きくない？ここから見ても拳より大きいしさ」
コゼットもその蝙蝠を見ていた。
「何メートルあるのかしら、あの蝙蝠」
「絶対にあの博士が大きくしたのよね」
「それしかないでしょ」
パレアナも蝙蝠を見て言う。
「本当に碌でもないことしかいないのね、あの博士は」
「まああの蝙蝠もかなり気になるがな」

ダンは今は周りにいる明らかにこの宇宙の何処にもいそうにない不気味なシルエットの動物達を無視して話す。とりあえずセーラ達が結界を張っているので皆襲われずに済んでいる。
「とりあえず。呼ぶか」
「シャバキさんね」
「ああ。セーラ」
ここでセーラに声をかける。
「準備はいいんだよな」
「御心配なく」
静かに言葉を返すセーラであった。
「既に準備は全て整っています」
「もうなのか。早いな」
「万事順調です」
セーラはまた答えた。
「後は召喚するだけです」
「魔法陣はもうできてるの？」
「他の色々な道具は？」
「全て描いて的確な場所に配しています」
見ればその通りであった。一同の前に巨大な魔法陣がありその中と周りに塩や松脂といった退魔の道具や様々なものが規則正しく置かれていた。セーラの言う通り完全に準備万端といった感じであった。
「後は。宜しいですね」
「ええ、まあ」
「セーラがいいのなら」
「それでは。ラダメス、ベッキー」
二人の従者に声をかける。
「はじめましょう」
「はい、お嬢様」
「それでは」

早速二人が出て来て動きだした。セーラが何やら呪文を唱え二人がそれに続く。それが終わった時魔法陣から黒い光が出て来た。
「うわ、凄いのが出た」
「流石にこれを見たのははじめて」
誰もが黒い光を見て唖然となる。本来は有り得ないものだからだ。
その黒い光が消えた時。魔法陣には彼がいた。
「ノストラダムスだ！」
第一声はこれであった。
「ノストラダムスだ！来るぞ！」
「いきなりこれかよ」
「しかしノストラダムスって」
皆出て来ていきなり絶叫するシャバキを見て呆れた顔になっている。
「予想していたとはいえね」
「破天荒な」
「ノストラダムスがラストバタリオンを率いて人類を滅ぼしに来るのだぞ！気をつけろ！」
「意味がわかる？」
「全然」
意味がわかるには相当な非常識が必要なのはわかる。しかもそれだけの非常識を備えられるのは彼自身に近くなければならないこともわかるのだった。

第百四話　研究所の前でその五

「言ってることが滅茶苦茶過ぎて」
「何が何だか」
「俺は生きる・・・・・・」
皆が呆れ果てているその前でもシャバキの絶叫は続いている。
「生きて・・・・・逃げない！」
「また変なこと言ってるわね」
「逃げない？」
またしてもシャバキの言葉に首を捻る。
「何から逃げないの？」
「ラストバタリオンからじゃないの？その」
「例えエドガー＝ケイシーが異次元から迫ろうとも！」
しかし甘かった。シャバキの言っていることは過去を振り返らない性質のものなのだ。だからラストバタリオンのことはもう忘れ去ってしまっていた。
「恐れはしない！異次元に人類が飲み込まれようともな！」
「あれっ、人類って地震で滅ぶんじゃなかったの？」
「ミュータントになるんじゃなかったっけ」
以前シャバキはこう言ったこともあるのだ。
「俺は必ず敗れはしない！俺に敗北はあってはならなくてはならない！」
「今度は文法もおかしいし」
「言ってることがどんどんおかしくなっていくなあ」
「恐怖を克服する！」
とりあえず今度はその発言はまともな類だった。
「絶望も弾圧も迫害も！国家権力は恐れない！」
「国家権力って」
「また八条理事長？」

「八条義統」
この名前は散々出ているのでわかった。シャバキは気が向けば言い出すのだ。八条に関しては。ただ彼は正義を主張していると自分では思っている。
「彼こそは人類社会を裏で操る黒幕か」
「うわ、凄いスケール」
「また大風呂敷ね」
「そうだ、黒幕だ」
シャバキは突っ込まれても動じない。気付かない。
「闇の世界政府の大統領！彼こそが真実の敵だ！暗黒幽霊の帝王だ！」
ここでまたしても訳のわからない単語が生まれ出た。
「それこそがあの男！許してはならない！」
「意味わかる？」
「全く」
カトリの言葉にマルティが述べる。
「言葉と言葉がかなり矛盾してるよ」
「矛盾なんてものじゃないわよね、確かに」
「自分では気付かないかな」
当然二人の言葉もシャバキの耳には入ってはいない。彼の耳は普通の人間のそれとは構造が全く違っているのだ。都合の悪いことは最初から聞こえないのだ。
「そういうのって」
「そうみたいね、どうやら」
「とにかくだ」
ギルバートがここで出て来た。
「博士の研究所に行ってもらおう。早くな」
「ああ、そうだったわね」
ビアンカも言われてそれを思い出した。
「忘れてたわ。この人があまりにも非常識なことばかり言ってるか

ら」
「それは確かにその通りだが放置しておくとあまりにも危険だ」
「その通りね。じゃあ」
「研究所に行ってもらおう。しかしだ」
彼は言う。
「どうやって行ってもらうかだな、問題は」
「どうすればいいかしら。とりあえずここに呼んだけれど」
「それなら簡単よ」
今度出て来たのはプリシラだった。
「彼の好物を投げればそこに飛んで行くから」
「好物!?」
「ええ。予言の本よ」
やはりそれが好きなのだった。問題はそれが好物だということだ。まさか食べ物じゃないのかと誰もが思った。シャバキなら本を食べても不思議ではないからだ。
「漫画でもいいわ。それは」
「漫画?だったら」
彰子がふとここで何かを思い出したようであった。

第百四話　研究所の前でその六

「私持ってるわよ」
「予言の本？」
「古本屋で買った本だけれど」
皆に答えながら懐からその本を取り出してきた。それは文庫本であった。
「これ。ノストラダムス対銀河の凶悪犯って小説だけれど」
「それってどんな小説なのよ」
蝉玉はその小説の名前を聞いてまずは眉を顰めさせた。
「ノストラダムスはわかるけれど銀河の何とかっていうのは」
「ＳＦファンタジー小説よ」
「ＳＦファンタジーねえ」
そういうジャンルの小説もあることは確かだ。テレビゲームにおいてファンタジーの世界に機械や未来を出すというのもよく見られる演出である。ミスマッチなようでこれが意外と合っているのだ。こうした演出は日本のゲームにおいてとりわけよく見られるものである。
「ノストラダムスさんが銀河を破壊するテロリストと宇宙で対決するお話なの」
「凄そうな話ね」
「じゃあそれを遠くに投げるの？」
スターリングが彰子に問う。
「遠くに」
「それがいいのね」
彰子はプリシラに対して尋ねた。スターリングに答える前に。
「向こうに投げたらそれで」
「そういうこと。それで御願いね」
「わかったわ。じゃあ」

「あっ、ちょっと待って」
ここでスターリングが彰子を止める。彼女は丁度今その本を投げようとしていた。
「彰子ちゃん、投げるのは待って」
「!?どうして?」
「できるだけ遠くに投げた方がいいよ」
彼が言うのはこういうことだった。
「遠くにね。だから彰子ちゃんが投げるよりはね」
「ええ」
「フランツかタムタムに投げてもらった方がいいよ」
「フランツ君かタムタム君になのね」
「うん」
あらためて彰子に対して頷く。
「それでどうかな。やっぱりこういう投げることは野球部だから」
「俺で一二〇メートルだ」
タムタムがここで述べてきた。
「キャッチャーだからな。肩には自信がある」
「俺は一五〇メートルだ!」
フランツはこれまたかなり非常識な数字であった。
「しかも肩は絶対に壊れはしない!」
「フランツの肩は絶対だ」
タムタムもそれは保障してきた。
「こいつに任せれば問題はない」
「そう。じゃあ決まりだね」
スターリングは彼の言葉を聞いて頷いたのだった。
「御願いできるかな、フランツ」
「俺の辞書に断るという文字はない」
知らない可能性も高いが皆今はそれに突っ込まなかった。
「そういうことだ!投げるのなら特にな!」
「じゃあ彰子ちゃん」

「うん」
彰子はスターリングの言葉に頷いて答える。
「フランツ君ね」
「うん、それがいい」
「それで何処まで投げればいい」
彰子に対して尋ねる。
「何処までだ？」
「そうだな。とりあえずは」
タムタムは前を見つつフランツに述べた。
「研究所に向かって思い切り投げてくれ」
「距離は特にいいのか」
「ありったけの力で投げるだけでいい」
こうフランツに言う。
「それだけでな」
「そうか。それなら」
早速その本を受け取り思い切り投げた。投げるとそのまま派手にオーバーすローから大遠投だった。するとそれでシャバキは動くのだった。
「行け！」
「うわっ・・・・・・」
皆それを見てまずは絶句した。本が恐ろしい速さでとてつもない距離を飛んだからだ。本はそのまま研究所のすぐ側にまで届いたのであった。

第百四話　研究所の前でその七

「凄い距離・・・・・・」
「話は聞いたけれど本当に凄いわ」
その遠投を見ての皆の言葉である。
「あんなに投げるなんて」
「身体能力は確かに凄いのね」
「俺は最高のピッチャーだ！」
投げた後でガッツポーズをして叫んでいる。
「それがここでも確かになった！どんな強打者も恐れることはない！」
「それはわかったけれど」
カトリがその横で本を見つつ言う。
「とりあえず投げたけれどこれで本当にあの人本に飛びつくのかしら」
「大丈夫だよ」
だがここでマルティが彼女に言ってきた。
「それは。確実に」
「確実なの？」
「あの人の主食は本だし」
「山羊ね、まるで」
カトリだけでなく他の皆もそれを聞いて絶句だった。
「変な人だとは思っていたけれどそれでも本を食べる人だなんて」
「やっぱりあの博士に匹敵する奇人変人ね」
「まあ何はともあれ」
状況を見守っている。
「どうなるかしら」
「博士のところに向かうかしら、本当に」
「あれは」

ここでシャバキは本に気付いたのだった。
「間違いない。本だ。しかも」
反応していた。眼鏡の奥の目が光っている。
「予言の本だ！ノストラダムスだ！」
「本当に反応してるけれど」
「冗談抜きで人間なのかしら」
皆本当に本に飛んで行くシャバキを見て言う。
「ノストラダムス！ノストラダムス！！ノストラダムスーーーーーーーーーッ！！！」
「何、あの絶叫」
「薬じゃないわよね」
シャバキは薬の類はやっていない。ただ脳内に自然とそういった類のものが常時多量に分泌されているだけだ。だから常にこうなのだ。
「うおおお

「食べている姿も異常だけれどね」
皆シャバキの食べる姿に絶句している。しかし話はこれで終わりではなかったのだった。
ここで前から何か出て来た。それは」
「あれは」
「ロボット？」
そう、ロボットが出て来たのだ。四本足で手に刀やボウガンを持っている一つ目のロボットだ。どう見ても平和目的のロボットではない。
「あの博士つくづく法律知らないみたいね」
「ああいうのも作ってたんだ」
連合の法律ではロボットは平和利用若しくは軍事目的以外で武器として使用することは禁じられている。これを破った場合は死刑も充分考えられる重罪とされている。博士はそうした法律は最初から守っていないのだ。何しろ千年以上前から破壊だけを目的にロボットを作ってきた人であるからだ。
「何はともあれあれが出て来たってのことは」
「かなりまずいわね」
「確かに」
「大丈夫です」
皆が身の危険を感じているその時にセーラがまた言ってきた。

第百四話　研究所の前でその八

「それにつきましても御心配なく」
「大丈夫なの？セーラ」
「結界を張ってありますね」
「ええ」
「それで大丈夫なの」
「この結果はあらゆる攻撃を完全に防ぎます」
恐ろしいまでの力を持っている結界である。
「ですからあのロボット達でも。安全です」
「そうなの。それじゃあ」
「はい、あの方以外は安全です」
目の前のシャバキを指差しつつ述べる。
「シャバキさん以外は」
「そうなの。じゃあ安心ね」
「そういうことです」
にこりと笑って皆に答えるセーラであった。
「ですから今は」
「けれどよ」
ロザリーがここで言う。
「あの人はどうなるんだよ」
「あの人って？」
「だからシャバキさんだよ」
彼女が指差した対象はセーラと同じであった。そのシャバキである。
「あの人はどうなるんだよ。あのロボットは明らかにやばいだろ」
「だって最初からそのつもりじゃない」
ロザリーに答えたのはレミであった。
「あの人をぶつけるんでしょ？毒には毒でってわけで」

「ノーガードでかよ」
「大丈夫でしょ」
今のレミの言葉には何の根拠もない。
「だってシャバキさんなんだし」
「じゃああのままで全然平気だっていうんだな」
「多分ね」
「多分かよ」
「まあ何とかなるわ」
かなり無責任というか突き放したレミであった。
「その為に召喚したんだし、わざわざ」
「それもそうか。じゃあ見守るか」
「そういうこと」
「むっ、御前達は」
皆の目の前でシャバキはロボット達に気付いていた。
「そうか。悪魔の手先か」
「悪魔の手先ねえ」
「まあその通りだけれど」
博士の所業は悪魔そのものだとよく言われている。平気で生体実験や細菌実験を行うような人間を悪魔と言わずして何と言うかというレベルである。
「悪魔か。ならば容赦はしない」
「何するんだろ」
「さあ」
「このシャバキ、アングラサイケフーテン流拳法」
「拳法も使ったんだ」
「意外ね」
皆シャバキの行動に驚かなくなっていた。あまりにも言っていることが支離滅裂なのと少なくとも常人を遥かに凌駕する異常能力があることはわかっていたからだ。
「今見せよう！！ハチョーーーーーーーーーーーーーッ！」

叫びつつ天に舞うのだった。両手を首に巻くようにしてクロスさせその姿勢で跳んでいる。およそ五十メートルは。
「何だよ、あの高さ」
ルシエンがその跳躍を見て絶句している。
「あれだけ跳ぶなんて本当に人間なのか！？」
「だから真っ当な人じゃないのよ」
アンネットの言葉はまさにその通りだった。
「あの人は」
「それもそうだが」
それでも納得できないものを見て驚かざるを得ないルシエンだった。流石に今の跳躍には驚く人間もいた。これまでの行動よりもさらに非常識だったからだ。
「水のモード！！」
「水！？」
「何かしら」
シャバキのその言葉にまた注目する。
「時流破壊粉砕崩壊エクスキュージョン！！」
「拳法の技の名前じゃないじゃない」
「何の漫画よ」
言っている側から何処からともなく津波が起こった。そうしてロボット達を飲み込みそうして何処かに消えてしまった。後には着地し眼鏡をなおしているシャバキがいるだけだった。
「ふっ、笑止！」
「今の拳法！？」
「さあ」
誰もそう考える者はいなかった。
「妖術でしょ、あれは」
「でしょうね。もう何が何だか」
「甘いぞ天本破天荒博士！！」
ここでシャバキは叫ぶのであった。

第百四話　研究所の前でその九

「この程度で俺を倒せると思ったか！愚弄するな！」
「ふふふ、確かにな」
そして遂にもう一人の危険人物が姿を現わした。何処からともなく出て来た七色のサーチライトに照らされて白いタキシードに黒いマントの老人が姿を現わしてきた。手には乗馬鞭がある。
「出て来たわね、また」
「ええ」
皆その老人を見ていた。誰もが知っているその老人こそ連合最凶最悪のお騒がせ人物である天本破天荒博士その人である。今夜の闇を切り裂いて姿を現わしたのである。
「もう一人の騒動の種が」
「本当に潰し合って欲しいわね」
「全くよ」
「久しいな、シャバキよ」
博士はシャバキと対峙していた。そうして彼に対して言ってきたのだった。
「元気そうで何よりだ」
「八幡大菩薩地獄極楽無量大数不思議温泉での死闘以来だったな」
「その温泉って何処にあるの？」
「この世界にはないんじゃないの？」
少なくとも誰もそんな名前の温泉は知らなかった。
「またこうして貴様と合間見えるとは思わなかったぞ」
「それはこちらとて同じこと」
博士もこう彼に言葉を返す。
「だが。ここで会ったからには」
「どうするつもりだ？」
「倒してくれるわ」

鞭を突き出して彼に宣言する。
「今ここでな」
「ではその言葉貴様にそっくり返そう！」
シャバキは叫びつつ今度もまた怪しげな構えを取った。
「ここでな！受けよノストラダムス流奥義！」
「ノストラダムス流！？」
二年Ｓ１組の面々にとってまた不可思議な言葉が出て来た。
「何なんだろうね、今度は」
「どうせまた妖術か何かでしょ」
拳法の類とは思ってはいないのであった。誰も。
「何をするのかまではわからないけれど」
「そうだね。また碌なものじゃないのは間違いないね」
「それにしても」
ジョンはここでさらに言う。
「何かさ、シャバキさんって思った以上に訳のわからない人だったんだね」
「ええ、そうね」
それに頷いたのはローリーであった。
「拳法か妖術かわからない技まで持ってるし」
「本当にどういう人なんだろ」
「俺は生きる・・・・・・」
その前でまたシャバキが訳のわからないことを訳のわからないポーズで言っていた。
「生きて・・・・・戦う！世界平和を破壊しようとする悪の預言者に勝ち！」
「わしは予言はせんぞ」
「いや、貴様は預言者だ！」
言葉を見事に間違えているシャバキであった。
「この世を乱す悪の預言者！俺はその連中と闘う為に生まれたのだ！」

「妄想かな？」
「普通の人からみればそういうものだろうね」
やはりそう思われているのであった。
「どうせまた」
「わかっていないのは本人だけと」
「銀河を流離い暗黒黒十時団と死闘を繰り広げ」
言うまでもなく彼の脳内だけに存在している架空の組織だ。
「身に着けたこのファイナルクロスカウンター！」
「また名前変わってるし」
「もう何が何だか」
「受けてみろ天本博士！」
今度は名前を間違えなかった。
「今ここで！貴様をデリートだ！」
「ふむ。かつて多くの光の巨人や正義の味方が同じことを言ってきおったわ」
博士はそこまで危険と思われているのだった。やはり誰が見てもこれは同じなのであろう。
「しかしじゃ。誰もわしを最終的に倒すことはできなかったとだけ言っておこう」
「ひょっとしてさ」
それを聞いたスターリングが言う。
「その中に胸にエスの字書いたマントを羽織った人もいたのかな」
「いたんじゃないの？他には雲に乗るお猿さんとか」
蝉玉がそれに合わせて述べる。

第百四話　研究所の前でその十

「その他にも一杯いそうだけれど」
「宇宙猿人ですらわしには適わなかった」
宇宙規模のマッドサイエンティストをも凌駕しているのである。
「そのわしの実力を再び見せよう。出でよ！」
叫ぶと博士の後ろからとんでもないものが出て来た。
「エンペライザー！こ奴を抹殺せよ！」
「出た、巨大ロボット」
「そう来たか」
「ふっふっふ、シャバキよ」
そのエンペライザーを前にしてもう勝ち誇った笑みになっている博士であった。
「勝てんぞ。このわしが開発した究極のマシンにはな」
「俺が敗れるというのか」
「わしは宇宙一の天才よ！」
「天災じゃないの？」
「絶対にそっちよね」
誰もが同じことを思う言葉であった。
「どう見たって」
「天才は天才でも頭を使う方向を完全に間違えてる天才よね」
「それって最悪」
こうした言葉は当然博士の耳には入りはしない。勿論もう一方のシャバキの耳にも入ってはいない。こうした部分は実に似ている二人である。
「さあエンペライザーよ」
博士は今度はエンペライザーに声をかけた。
「こ奴を踏み潰せ！遠慮はいらんぞ！」
「笑止！」

シャバキはシャバキで巨大ロボットを前にしても怯むところはなかった。
「俺は不死身だ！」
また変な言葉を絶叫してきた。
「どの様な相手でも恐れはしない！それを今教えてやる！」
「では煎餅になりたいのじゃな」
「ゴマ煎餅は好きだ」
誰もこんなことは聞いていないが答えたのだった。
「しかし。肉煎餅は嫌いだ」
「ふむ、そうか」
「行くぞエンペライザー」
シャバキの全身にドス黒い気が宿っていく。
「ここで貴様を倒しその果てにある白き破邪の薬を手に入れるのだ！」
「それって何かなあ」
皆にとってはまたしてもよくわからない言葉であった。
「変な薬なのはわかるけれど」
「その為に、今！」
今度は消えた。
「消えた！？」
「一体何処に！？」
「ふむ」
相手が目の前に消えても全く動じたところのない博士だった。
「成程のう」
「博士は全然動揺してないわね」
「まあそうだろうね」
これについては皆がわかっていることだった。
「それについてはね。今更って感じなんだろうね」
「っていうかあの博士にしろね」
エイミーが指摘する。

「姿消す位平気でやれそうね」
「言われてみればまあ」
「その通りね」
クラスの皆もエイミーの言葉に頷く。その間にも博士は何も見ることはなくその場に立っている。そこに突如として影が襲い掛かった。
「今だ！」
何とシャバキは博士を素通りした。そしてエンペライザーに向かって跳ぶ。
「消えたのは陽動じゃな」
「貴様は後回しだ！」
飛翔しつつの言葉である。
「それより前にこのロボットを倒す！いいな！」
「ほう、エンペライザーをのう」
博士はそんなシャバキの言葉を冷静に聞いていた。
「素手で倒すというのか」
「俺は無敵だ！」
「そもそもさ」
アンが飛翔しているシャバキを見つつクラスの皆に尋ねてきた。

第百四話　研究所の前でその十一

「あの人って何者なの？」
「作家だろ」
ダンが彼に答える。
「職業は」
「確かに本も書いてるけれどね」
一応はその収入で生きてはいる。
「何かそれ以上に奇人変人さんってイメージが先行してね」
「最早奇人変人の域を超えてるわよね」
「戦闘力でも博士とタメ張ってるからね」
「もう何が何だか」
その間にもシャバキは飛翔し遂にはエンペライザーの頭部のところに来た。そして。またしても怪しげな技を繰り出すのであった。
「裏ジーン＝ディクソン流最終超秘奥義！」
「技の名前がまた変わった？」
「もう何が何だか」
「真！浴びせ蹴り台風疾風乱れ斬波！」
絶叫と共に浴びせ蹴りを続けて出す。それがエンペライザーの頭部をこれでもかという程打ちそれが終わってから地面に着地する。
この時赤い残像が見えた。
「予言完全！」
「言葉の意味わからないし」
「何が何だか」
「エンペライザー、恐るるに足らず」
片膝をつき頭を垂れた姿勢で呟いた言葉だ。
「所詮はこの程度だ」
「ふむ、見事」
片膝をついているシャバキと背中合わせの姿勢になっている博士

がその彼に述べた。
「エンペライザーを素手で倒すとはな」
「残るは貴様だけだ」
立ち上がりつつ博士に言う。まだ背中合わせだ。
「博士、貴様だけだ」
「よかろう」
そして博士も彼の言葉を受ける。
「では次にはわし自ら」
「来い」
いよいよ二人の勝負がはじまろうとしていた。しかしここで彰子がふとした感じで言うのだった。
「そういえば」
「どうしたの？彰子」
「エンペライザーのエネルギーって何だったのかしら」
「ブラックホールだよ」
管が彼女の言葉に答える。
「マーク？からそれは変わらないよ」
「そうよね、確か」
「えっ、ブラックホール！？」
皆ブラックホールと聞いて顔を一斉に青くさせた。
「そんなのが内蔵しているのが爆発したら」
「それこそ」
「お、おい」
ここでカムイが指を震わせてそのエンペライザーを指差した。
「エンペライザーが。何かよ」
「あちこち火噴いてるし」
「しかも煙だって」
爆発が近いのが誰の目にも明らかだった。ブラックホール搭載のマシンが爆発すればどうなるかは最早誰でもすぐにわかることだった。

「っていうことはこのままだと」
「この星自体が」
「大変だあっ！！」
皆事態を把握して一斉に叫ぶ。
「このままだとこの星が消えてなくなるわよ！」
「当然僕達も！」
これもまた言うまでもないことだった。
「何とかしないと！」
「けれどどうやって！？」
当然の問い掛けであった。
「ブラックホールなんかどうやるのよ」
「そう言われるとどうにも」
「連合軍呼ぶ？」
「無理だよ、今更」
トムが泣きそうな声で言う。
「連合軍でも間に合わないよ、もう」
「じゃあどうすればいいんだよ」
「それがわかれば僕だってこんなに焦らないよ」
トムはこう皆に返す。

第百四話　研究所の前でその十二

「違う？」
「言われてみればまあ」
「確かにその通り」
大変な状況だがそれでも納得することは納得する一同であった。
「しかしそれでも」
「この状況は。何とかしないと」
「御安心下さい」
しかしここで出て来た者がいた。
「あの程度のブラックホールでしたら何とかなります」
「セーラ」
「それにラムダスさんとベッキーさんも」
黄金のマウリアトリオであった。全ての現実を無視してしまうことであまりにも有名な三人がまたしても出て来たのであった。この危機に。
「あのエンペライザーを異空間に飛ばします」
「異空間に！？」
「はい。名付けて異界送りの念」
また随分とおどろおどろしい名前の術である。
「今よりそれを使いますので」
「それで何とかすると」
「そうです」
こう皆に答える。
「では今より」
「ついでに博士とシャバキさんも巻き込まれそうだけれどいいか」
「異次元からでも平気で帰って来そうな人達だしね」
二人のことは一切考慮されないのだった。とにかく今は危機を脱する為にセーラが二人の従者と共に術を放とうとしていた。しかし

その間にも。
「さて、次はじゃ」
「何をするつもりだ、博士」
博士とシャバキは相変わらず勝負を続けていたのだった。今度は対峙して睨み合っている。
「俺には最早どの様な兵器も通用しないぞ」
「ほう」
「そう！俺は身に着けたのだ！」
またまた叫びだす。
「理想拳法を！今遂に」
「理想拳法とな」
「見ろ！」
今丁度ブラックホールを撒き散らそうとしていたエンペライザーに拳を打ち込む。
「理想拳法唯我独尊！」
技の名前を叫ぶと一瞬だった。エンペライザーは何処かに消えてしまった。後に残っているものは本当に何一つとしてなかった。
「これが俺の理想拳法だ」
「ふむ、面白い技じゃ」
「これで私のやることはなくなりましたね」
「ええ、まあ」
皆セーラに応える。セーラは平気な様子であるが皆はまたしても呆然としていた。巨大なエンペライザーが一瞬にして消え失せてしまったからだ。
「何なんだろ、今度は」
「理想拳法って」
「燃えろ俺の大宇宙！」
踊るようにして叫ぶシャバキであった。
「今ここに！渾身の力を込めて！」
「ならばわしも」

博士の手に気付いたら大鎌があった。死神が持っているあの大鎌である。
「久方ぶりに格闘をしてみるかのう」
「俺にこの理想拳法を使わせたことを後悔させてやる」
「後悔じゃと？」
博士はシャバキと対峙しながら彼の言葉に反応してきた。
「何じゃその言葉は」
「知らないとでもいうのか？」
「わしの辞書に後悔という文字は存在せぬわ」
実に欠陥の多い博士の辞書である。
「生憎のう」
「俺と同じか」
当然ながらシャバキも後悔という文字は知っていても実はそれを感じたことは皆無なのだった。
「この俺と。ならば！」
「わしに後悔を理解させるつもりか」
「その通りだ！受けよ！」
またしても天高く跳んだ。
「これが俺の理想拳法最終究極奥義！」
「これでそういう必殺技何個目？」
「さあ」
もう皆が覚えていられない程出ていた。というよりはあまりにも滅茶苦茶なので覚えてもいられないのだった。目の前の闘いは最早人間と人間のそれではなくなっていたのだから。
「数える気もないし」
「確かに」
「もう何が何だか」
「わからなくなってきたわ」
「うおおお

またしてもシャバキが絶叫する。
「最強夢想!!!円月殺空残像斬!!!!」
「受けるがいい!」
二人の技が激突する。
「これで終わりだーーーーーーーーーーーーーーーっ!」
「わしの最強伝説に新たな一ページが刻まれるのだ!」
二人の死闘はクライマックスを迎えていた。だがここでまた誰かが姿を現わした。それは一体誰か、闘いはさらに混沌を極めていくのであった。

研究所の前で　　完

２００８・９・１８

第百五話　遅れてきたヒーローその一

遅れてきたヒーロー

「間に合ったか」
「!?あれは」
「誰かしら」
皆はここで戦場にまた一人やって来たのを見た。白銀のバイクに乗った騎士である。実にメタリックな仮面を被りその身体もまた同じだ。全身が白銀に輝いている。
「何か正義の味方みたいだけれど」
「あれは一体」
「むっ、貴様は」
シャバキは彼の姿を認めて技をキャンセルして後ろに飛び退いた。そのうえで眼鏡をなおしつつその白銀の騎士に対して問うのであった。
「何者だ」
「秩序」
騎士はバイクを止めそれから降りるとこう答えた。
「我が名は秩序だ」
「秩序だと」
シャバキだけでなく博士も技をキャンセルしていた。そしてそのうえでその謎の騎士に顔を向けているのだ。周りは二人の死闘であちこちに白い煙が起こってしまっている。
「面白い場面で出て来たのう」
「天本博士、暫く大人しくしていたがまた出て来たか」
「少し他の遊びをしていただけじゃ」
博士はこうその秩序に対して言葉を返した。
「少しのう」
「そして今はこれか」

「遊びを変えただけじゃ」
何時の間にか大鎌は手から消えていつもの電気鞭を手にしている。そのうえで秩序に対して語るのであった。既にシャバキには背を向け彼に正対している。
「破壊にのう」
「止めるつもりはないな」
「当分ないのう」
返答はこれであった。
「今はこれが楽しいからじゃ」
「わかった。ならば」
秩序の身体が光った。白銀の光はまさに星のそれであった。幾千幾万ものダイアモンドの輝きを集めたかの如き光が消えた時彼は叫んだ。
「その命神に返すのだ！」
「神にねえ」
「何かエクソシストみたいだね」
二年Ｓ１組の面々は秩序のその言葉を聞いて言う。
「っていうかあの人誰？」
「さあ」
「何処の誰かしら」
当然ながらそれを知る者は一人もいなかった。
「いきなり出て来たけれどね」
「しかも何処からともなく」
「何者？」
誰にもそれはわからない。
「っていうか正義の味方？」
「博士とは知り合いみたいだけれどね」
皆胡散臭いものを見る目で秩序を見ていた。しかし秩序はそんなことには一切構わずに剣を抜いた。右手でそれを構えてみせる。
「行くぞ、博士」

「来るのじゃ、楽しもうぞ」
博士も楽しげに笑い対そうとする。しかしこの時だった。
「待て！」
「ああ、まだいたんだそういえば」
「忘れていたわ」
シャバキであった。皆彼のことを忘れてしまっていた。
「貴様何者だ！」
「私か」
「そうだ、貴様一体」
秩序に対して問う。
「何処から出て来た」
「何処からか」
「そうだ、貴様まさか」
ここでいつものシャバキになるのだった。

第百五話　遅れてきたヒーローその二

「あれだな。ラストバタリオンか」
「今度はそれか」
「宇宙人の手先って言うと思ったけれど」
　また二年Ｓ１組の面々が突っ込みを入れる。
「そう来たのね」
「ラストバタリオンっていうとナチスか」
「ナチスの残党が何の用だ」
「？私がナチスか」
　しかし秩序はいぶかしむ声で彼に返してきた。
「この私が」
「黙れ！俺の目は節穴ではない！」
「節穴よりもずっと悪質よ」
「ねえ」
　これは皆が思っていることだった。
「何見てるんだか」
「普通の人には見えないものなのはわかるけれど」
「貴様は人類を支配する為の邪悪の救世主！」
　予言ではよく出て来る言葉だ。
「そう！偽キリストだ！」
「この単語もう完全に覚えたよ」
「何度テレビで絶叫したのよ」
　この偽キリストも実は色々な人間になっているのである。シャバキの中では。八条であったりあるプロテスタントの宗派の開祖だったり仏教の高僧だったりする。仏教の人間に対してまで偽キリストと言うところがシャバキの思考回路が常人とは違っていることの証である。
「千年に一度現われ世界を暗黒に包み込むというな！」

「私はキリストだったのか」
「白を切るな！」
秩序のいぶかしむ言葉を真っ向から否定してみせた。
「その白銀の姿こそ何よりの証拠だ！」
「じゃあ戦隊ものでよく出て来る追加メンバーはかなりの割合で偽キリスト？」
「あの人だったらそう言いかねないな」
「確かに」
その程度はシャバキの中では当然のことである。
「白銀の悪魔！死霊！」
「悪魔に死霊か」
言われる秩序の方が呆然としている。
「私はそんな存在だったのか」
「貴様は許さん！」
尚且つ問答無用でファイティングポーズに入る。
「銀河の平和の為に！喰らえ！！」
一直線に突き進んできた。
「明王合体空前絶後地獄極楽弾！」
「・・・・・・・・」
突進するシャバキに対して秩序は身動き一つしない。二年Ｓ１組の面々はそれをみてそれぞれ危惧する声をあげる。
「このままじゃあの正義の味方」
「危ないぞ」
「これで終わり！？」
アンも目を覆めさせている。
「ここからモーゼとか言い出すと思ったのに」
「何でモーゼなの？」
「ほら、シャバキさん偽キリストって言うじゃない」
ウェンディに述べる。
「だったら今度は黒いモーゼとか言うのかなって思って」

「黒いモーゼねえ」
「人類を破滅に導く闇の首領とか言って」
「一万人委員会みたいなもの？」
ウェンディは今までシャバキが実在すると主張している怪しいというものではない架空の組織の名前をここで出す。なおこの一万人というのもその時その時で数字が適当に変わる。
「それって」
「まあそうかも」
「一体そんな人間が何人いるのよ」
思わず言うウェンディであった。
「この世界に」
「あと闇の大日如来とか裏曼荼羅とかありそうね」
「もう意味不明」
シャバキは仏教までも話に持ち出すことが多い。弥勒菩薩の救済は間近いと主張するが何故かそれが人類滅亡にまでなるのがシャバキの主張だ。

第百五話　遅れてきたヒーローその三

「何、その闇曼荼羅って」
「さあ」
「さあって」
「何かあの人が如何にも言いそうだから」
アンはだから言っただけであった。しかしここでそのシャバキがその名を叫ぶのだった。
「闇曼荼羅の中に消えろ！悪不動よ！」
「あれっ、今言ったわ」
これにはアンもびっくりだった。
「予想が当たったわね」
「当たったけれど今度は悪不動って」
ウェンディはそれに首を捻っていた。
「確かお不動さんは大日如来が怒った姿だけれど」
「じゃあ闇の大日如来と関係あるのかしら」
「そうじゃないの？よくわからないけれど」
「どうなのかしら、その辺り」
それはシャバキの脳内でしかわからないことだった。その間にもシャバキのやたらと長い名前の技である突撃は秩序に迫るのだった。
「消えろーーーーーーーーーーーーーっ！！」
「ふむ、どうなるかのう」
博士もその技を見ていた。
「これであ奴が終わるとは思えんがな」
「・・・・・・・・・」
秩序はやっと動いた。腰の前にある部分に手をやってそこのスイッチを入れた。
「スタンディングバイ」
すると機械音声が出て来た。

「機械の声か」
「ええ、今のは」
皆それはわかった。そして。
「ハイスピードモードスタンバイ」
「スタート」
また声がした。やはり機械のものである。
その声と共に今まで白銀だった秩序の色が変わった。青い光に包まれて今度は青い輝きを放つ姿になったのであった。シルエットは同じであるが。
「青くなった！？」
「今度は」
「君子危うきに近寄らず」
変身を終えた秩序は言った。
「だから。避けさせてもらう」
「オオオオオおおおおおおーーーーーーーーーーーーーーっ！！」
シャバキは突進する。しかしそれはかわされた。後はただひたすら何処かに突っ切っていくシャバキであった。
「どうなるのかな、あれ」
トムがそのシャバキを指差して皆に問う。
「あの人。あのまま消えていくみたいだけれど」
「また捕まって終わりかしら」
蝉玉は随分素っ気無くトムに答える。
「いつもみたいに」
「けれどそれだと」
今度はスターリングが言う。
「捕まるまでの間また大騒ぎだよ」
「御安心下さい」
しかしここでまたセーラが出て来た。
「あの方は今から元の場所に戻しますので」

「召喚の逆だね」
「はい、そうです」
いつもの落ち着いた様子での言葉だった。
「ですから御安心を」
「そうなの。じゃあ」
「任せるわね」
「はい。それでは」
セーラは早速印を結んできた。
「エロイムエッサイムエロイムエッサイム」
「何か黒魔術じみているような」
今のセーラの呪文を聞いてアンネットは思った。
「どうにもこうにも」
「我は求め訴えたり」
やはり黒魔術めいている。

第百五話　遅れてきたヒーローその四

「召喚せし魔人を元の場所に」
「シャバキさんってやっぱりそんな扱いなんだ」
「魔人だったんだ」
そう言われても皆が納得するものが確かにシャバキにあるのも事実である。
「まあ言われてみればねえ」
「あんなの見せられたら」
「うわっ、何だ！」
その皆の目の前で今シャバキが突然空から出て来た巨大な腕に捕まった。
「俺にはまだやらなければならないことがある！放せ！」
「やらなければならないことって？」
「だから世界滅亡を止めることじゃないの？」
これがただ人類滅亡や銀河滅亡や宇宙滅亡になるだけであまり大した違いはない。シャバキ自身も全くよくわかっていなかったりする。
「やっぱり」
「止めるってそう簡単に滅亡なんかしないし」
普通の人間はこう考える。
「あの人の脳内はともかくとして」
「まあとにかく」
シャバキは完全に捕まっていた。
「放せ！放せ！」
そしてその手の中で喚いている。
「御前にわかってたまるか！ノストラダムスの恐怖を！」
「ノストラダムスもねえ」
「色々な役演じてるわよね」

「下手な俳優さんよりもね」
シャバキの中ではノストラダムスはまさに万能の存在だ。そうした万能の存在としては他にその一万人委員会や黒髭やリトルグレイやエドガー＝ケイシー、弥勒菩薩、他にも色々とその場その場で出て来る。つまり幾らでもボウフラの様に湧いて出て来るのである。
「人類滅亡への序曲が見えないのか！あの天使のラッパの音が！」
「はいはい、わかったから」
「帰って下さい」
「駄目だ、俺はまだやるべきことがある！」
それでもシャバキは叫び続ける。
「世界を救う！この俺がーーーーーーーーっ！」
結局そのまま元の場所に放り込まれた。こうして主役が完全に交代した。
「さて、変態さんは消えたしね」
「後は」
「そう、ファイナルバトルね」
皆あらためて前を見据えるのであった。
「いよいよよ」
「ええ」
誰かの喉がゴクリ、と鳴った。
「博士とあの人の」
「闘いね」
秩序と博士は相変わらず睨み合っている。そこには凄まじいまでの緊張がある。
「まだ動かないわね」
「動けないのよ」
コゼットに七海が答える。
「二人共ね」
「実力が伯仲しているからね」
「そうよ。だからこそ」

だからなのだった。
「下手に先に動けば」
「やられるってわけね」
「そういうこと」
真に実力が伯仲している証であった。だからこそ迂闊には動けないのだった。
そのまま睨み合う。何時しか見ている面々は。
「ほら、お菓子」
「サンドイッチ」
何処からか食べ物を取り出してきていた。
「お湯ある？」
「こっちに」
「ビールもあるわよ」
「はい、サワー」
お酒まで出て来ていた。
「ワインもね」
「バーボンにラオチュー」
強い酒も出される。
「ウォッカあるの？」
「はい、ここ」
アンネットの問い掛けにカトリがそのウォッカを差し出してきた。手に収まるビンに入っている。白く透明な、少し見ただけでは水に見えるものだった。

第百五話　遅れてきたヒーローその五

「九十六パーセントよ」
「それでないと飲んだ気がしないわ」
「強いわね、相変わらず」
「ああ、全くだよな」
今のアンネットの言葉にジュリアとロザリーが呆れたように言う。
「どうしてそんなに酒が強いんだかな」
「ロシア人だからよ」
アンネットはロザリーの今の言葉に平然と答える。
「だからよ」
「それだけか？」
「ええ、それだけ」
返事は不変の響きを持っていた。
「ロシア人は皆お酒が大好きでしかも強いのよ」
「それは知ってるけれどな」
連合では誰でも知っていることだ。ロシア人と酒が切っても切れない関係にあることはロシアが地球にあった頃からだ。あまりにも寒く飲まないと凍えてしまうからだ。だからロシアでは軍への給料が滞ってもまだ何とかなるが酒がなくなっては暴動が起こるのだ。酒はロシア人にとっては命なのだ。
「それでも。平気な顔で飲むっていうのはな」
「私達も人のこと言えないけれどね」
ジュリアは早速バーボンをボトルごとラッパ飲みしだしていた。
「それでも。ウォッカは強過ぎるでしょ」
「火点けたら燃えるしな」
ロザリーはブランデーをストレートでやっていた。
「ウォッカだけはな」
「ロシアじゃあれよ」

アンネットは何とそのウォッカを飲んでいる。ストレートでだ。氷も何も入れずコップにそのまま入れて水を飲むようにして飲んでいるのである。

「これを飲めれば一人前なのよ」

「ウォッカをか？」

「そうよ、まずはこれ」

九十六パーセントを飲んでも素面である。

「これを飲まないとロシア人じゃないのよ」

「凄い国だな、おい」

「そんなの飲めないと駄目だなんて」

ロザリーもジュリアも言葉がない。

「あたしには無理だよ、それだけは」

「私も」

「何、大丈夫よ」

しかし当のアンネットは涼しい様子である。

「誰でもロシアにいれば飲めるようになるから」

「寒いからか？」

「その通り」

やはり理由はこれであった。

「我が国ってあれなのよね。持ってる惑星が寒い星だばかりだから」

「あれ何でなのかしらね」

ジュリアはアンネットの今の言葉について真剣な顔でロザリーに尋ねた。

「前から不思議に思っていたけれど」

「呪いじゃねえのか？」

ロザリーも小声でジュリアに答える。

「ロシアにかけられたよ」

「呪いなの」

「ロシアだぞ」

かなりな言葉である。

「寒さからは逃げられなかったんだろ」
「そうなの」
「ロシアつったら冬だ」
最早固定観念となっている。
「春夏秋はあっという間で」
「後はずっと冬なのね」
「しかもとんでもなく寒くて凍える冬な」
それがロシアの冬である。地球にいた頃と同じような極寒の惑星ばかりがロシアにある。勿論農業はできる。ロシアは寒い惑星ばかりだがそれでも連合屈指の農業国でもある。春夏秋の間に農業が可能だからだ。これは不幸中の幸いであると言えた。
「あれからは逃げられないんだろうな」
「冬将軍ってしつこいのね」
「皆あったかい星だって持ってるのに」
アンネットは羨ましそうに言う。

第百五話　遅れてきたヒーローその六

「我が国は何処もかしこも寒い星ばかりなのよね、困ったことに」
「暖かい場所はないのかよ」
「残念だけれど」
そういうことだった。
「ないわ、そういうのは」
「そうか」
「外を出ればマンモスやオオツノシカがいて」
いきなりかなりワイルドになっている。こうしたワイルドさもまたロシアである。ロシアの自然はどの星もかなり厳しいことでも有名なのだ。普通に大型の哺乳類がツンドラの中を動き回っている。吹雪の中で彼等の咆哮を聞くことができるのもロシアならではである。
「サーベルタイガーや熊がいてね」
「随分と物騒ね」
ジュリアはバーボンを一本飲み終えたところで言った。
「ロシアっていうのは」
「それでもそれがいいのよ」
そのロシア人の言葉だ。
「そのワイルドなのがね」
「そうなの」
「そうよ。ロシア人に必要なものはね」
こうした話にもなる。
「生きていられるだけの食べ物と住むことのできる家と最低限の服と」
「また随分と質素だな」
ロザリーが今のアンネットの言葉を聞いて腕を組みつつ述べた。
「ロシア人っていうのは」

「それとお酒よ」
これがアンネットの話の最後に出たのだった。
「これだけあればもう満足なのよ」
「ロシア人って無欲なのね」
ジュリアはここまで聞いて言った。
「何か随分」
「そうかもね」
にこりと笑ってジュリアの言葉に応えてきた。
「案外ね。皆」
「あたし昔ロシアに旅行に行ったけれどさ」
ロザリーがここでかつての自分の経験を語る。
「皆素朴で親切でいい人達だよな」
「そうよ、ロシア人は皆そうよ」
「寒いけれどな。それでも人はあったかいよな」
「そうでしょ」
「まあ国としてどうよって思うんだがな」
これは言わない約束になっている。このロシアとアメリカ、中国の国家としての性格は地球にあった頃から全く変わっていないというのがおおむねの評価である。
「それでも仲のいい国にはとことんまで親切だよな」
「それはそうね」
ジュリアは今度はロザリーの言葉に頷いた。
「意外とね」
「何か私の国って随分悪く思われてるのね」
「そりゃ仕方ねえだろ」
「ねえ」
しかも二人共それを否定もしない。
「ロシアだぞ」
「この言葉だけで充分でしょ」
「まあそれはそうだけど」

そしてロザリーもそれを否定できないのだった。
「それでも。褒められたいんだけれど」
「中の人達は褒めてるじゃねえか」
「あんたもその中に入ってるわよ」
「だったらいいけれど」
「そういえばよ」
ロザリーはここまで話したところで話題を変えてきた。
「あの博士だけれどよ」
「ああ、天本博士」
まだ秩序と対峙している。やはり動けないのだ。
「何か出自が色々噂されてるよな」
「ロシア人って噂なかったかしら」
ジュリアがふとこんなことを言い出した。

第百五話　遅れてきたヒーローその七

「確かそんな話も聞いたことがあるけれど」
「ロシア人!?」
「何でも日本人とロシア人のハーフって噂があるのよ」
こうアンネットに述べる。
「本当のところは一切不明だけれどね」
「ハーフねえ」
「中国の仙人だって噂もあるし」
どれだけ生きているかわからないからだ。
「アメリカ軍の生物研究所から脱走した人造人間って話もあったかしら」
「とにかく何者か一切わからねえんだよな」
それが天本博士なのである。
「日本の皇帝陛下の宮殿で夜な夜な騒いで弓矢で撃たれたんじゃなかったか?」
「ロザリー、天皇陛下よ」
「おっと、そうか」
アンネットに言われてそこは訂正するロザリーだった。しかし彼女はここで大きな誤解をしていることに気付いてはいない。誤解だとも思っていないのだ。
「そうだったよな、確か」
「そうよ。けれどロシア人とのハーフなの?本当に」
「あくまで噂よ」
こう断るジュリアだった。
「あくまでね」
「そうなの。それでも」
「不愉快だった?」
「別にそれはないわ」

それについては特に何も思わないアンネットだった。
「けれどね」
「ええ」
「シベリアから出て来たっていうのなら信じたわ」
地球にあった頃のロシアの流刑地である。そこには実に多くの少数民族も存在していた。そこからある人物が出て来てもいるのだ。
「怪僧ラスプーチンみたいな感じでね」
「何かそれよりも変だろ、あの人は」
ロザリーは博士を見つつアンネットに述べた。
「絶対よ。人間じゃねえぞ」
「確かにね」
ジュリアはまたロザリーの言葉に頷いた。
「今までの行動見ていればね」
「青酸カリじゃ死なないわよね」
アンネットはラスプーチンが暗殺された時それを飲まされたという話を思い出していた。
「その後で銃で撃って鉄で殴りまくって氷の川の中に放り込んでも」
「千年は平気で生きている人がその程度で死ぬの？」
ジュリアの突っ込みは身も蓋もないものだった。
「それ位で」
「宇宙空間に隔離されたことあったんだっけ」
「この前はブラックホールのど真ん中だったぞ」
アンネットにロザリーが言う。
「平気な顔で帰って来たがな」
「じゃあ無理かしら」
「それこそ異次元に叩き込むか宇宙怪獣の群れの中に放り込むしかないだろうな」
「それでも生きてそう」
またジュリアが言う。
「あの博士だけは」

「さて、今回も何してくれるかな」
ロザリーはバーボンを男みたいにラッパ飲みしながら述べた。
「お手並み拝見ってやつだな」
「そうね」
「できればこのまま二度と復活して欲しくないけれど」
アンネットとジュリアが彼女の言葉に頷く。今秩序と博士の死闘が幕を開けるのだった。

遅れてきたヒーロー　　完

２００８・９・２３

第百六話　秩序その一

秩序

「楽しいのう」
「楽しいと言うか」
秩序は博士の笑みと共の言葉に反応して述べた。
「この今が」
「生きているという実感がある」
だからだというのだ。
「だからじゃよ。楽しいのう」
「貴様は戦いの中でしかそれを感じることができないとでもいうのか？」
「ふふふ、わしを侮るでない」
今の秩序の言葉は笑って否定するのだった。
「わしはその様な遊びを知らぬ者ではない」
「では他に何を楽しみとするのだ？」
「破壊に生体実験に兵器の開発に実験に使用」
全て犯罪である。
「細菌兵器もいいのう。撒布したりするのもな」
「相変わらずだな」
秩序はそれを聞いてこう言い捨てた。
「博士、貴様は」
「わしの趣味は多彩じゃ」
話を殆ど聞いていない。
「一つには留まってはおらぬ。それだけじゃよ」
「そして今は闘いを楽しむというのだな」
「左様。あの眼鏡の男との闘いも楽しかったぞ」
「離せ！離せ！」
ここでそのシャバキの声が聞こえてくる。

「俺にはやらなくてはいけないことがあるんだ！」
「やらなくてはいけないのこと？」
「それは何かな」
パワードスーツを着たうえで彼を左右から捕縛している警官達が尋ねる。見れば彼はもう無数の警官達に取り囲まれてしまっている。警察も動きが実に早い。
「俺はこの世の救世主！」
「救世主！？」
「イエス様かい？」
「違う、俺こそは最後にして最高の救世主」
イスラム教徒が聞けば失笑するような言葉であった。
「そして預言者なのだ！そう、この俺こそが！」
「預言者って確かあんた」
「預言者は世界を滅ぼすって言ってなかったかな」
彼等もシャバキのこれまでの発言は知っているのだ。知らないのは自分の発言を次から次に忘れてしまうシャバキ本人だけである。
「あの悪の偽者を倒す！」
「偽者？」
「黒髭を！」
またしてもこの名前が出る。
「一万人委員会の領袖であるあの男を！この手で！」
「一万人委員会の首領って黒髭だったのか？」
「さあ」
警官達はシャバキの言葉に顔を見合わせて言い合う。
「初耳だよな」
「あの委員会の首領は何人いるんだ？」
「その為にだ！離せ！」
「はいはい、詳しいことは病院で聞くからね」
「わかったから」
当然彼等もシャバキには本格的には取り合わない。

「今は大人しくしてくれ。飴をあげるから」
「チョコレートもあるよ」
「飴にチョコレート」
また反応を見せる。化学反応の様に顔を強張らせる。
「そ、そうか・・・・・・」
「また何か感じたらしいな」
「迷惑な話だよ」
いい加減警官達もうんざりしているようだった。
「飴とチョコレートには麻薬が入っているんだ！」
「まあカフェインが入っているけれどな」
「チョコレートにはそれ、飴は糖分の塊だよな」
「ニャントロ星人の陰謀だ！」
「ニャントロ星人？」
「何だそりゃ」
初耳なので誰もが首を傾げる。シャバキの話の特徴として突然謎の存在が話に出て来る。今回もまたそれであり誰もが馴れてはいるが納得してはいなかった。

第百六話　秩序その二

「宇宙征服を企む悪の使者だ！」
「そういう存在が宇宙には多いんだな」
「本当に特撮だな」
こうした危機を聞いても警官達は実にクールだった。
「そういえばこの話ってそもそもはじまりはあれだったな」
「ああ。柳田算数さんの家を踏み潰してな」
その元凶は今彼等の目の前にいるがとりあえずは見なかったことにしている。見たことにすればここでまた訳のわからない面倒を背負い込んでしまうからだ。
「あの人特撮にあれこれ言うからな」
「っていうかそれで食べてるしな」
そういう人間もいるのである。
「本、面白くないよな」
「それも全然な」
「あれ才能だろ」
警官達はこう言い合う。
「あれだけ下らない本を書けるっていうのもな」
「設定にいちいち文句つけるけれど科学的知識ないからな」
「全くだよ」
何気に柳田算数が大嫌いな警官達だった。
「もっともそれでもな」
「ああ」
ここからは健全な警官の話になる。
「家を破壊するのは許されないがな」
「っていうかだ」
問題点はまだあった。
「あんな無茶苦茶な破壊したからなあ、あの」

「それ以上言うなよ」
同僚の一人がここで言う。
「そして後ろを振り返るなよ」
「ああ、見たら最後だ」
だから決して後ろを見ようとしない。後ろにその博士がいるのはわかっているがあくまでそんな人間はいないことにしているのである。頑ななまでに。
「わかったな」
「見るか、絶対にな」
これについては皆同じ考えだった。
「今はこいつを連行するだけで手が一杯だからな」
「おのれジーン＝ディクソン！」
また敵が変わっているシャバキだった。
「俺はこの程度では屈しはしない！必ずや貴様を！」
「ああ、わかったからね」
「病院で静かにオムライスでも食べてくれ」
「オムライス・・・・・・」
今の警官の一人の言葉にシャバキの動きが止まった。
「オムライス！オムライス！オムライスーーーーーーーーーーーーッ！！」
「なっ、何だこいつ！突然暴れだしたぞ！」
「どうしたんだ急に！」
これには警官達も驚きを隠せない。
「オムライスが好物なのか！？」
「まさかそれを聞いただけで発作を起こすのか！」
食べ物に関しても異常なシャバキであった。
「とりあえず押さえさせろ！」
「麻酔だ麻酔！」
「ウルトラザウルス用の麻酔持って来い！」
全長三十メートルの巨大恐竜だ。ブラキオザウルスと同じ種族で

ありその重量も何もかもが途方もなく巨大だ。それ用の麻酔となるとやはり相当なものである。というよりは人間に対して使用するものではない。しかも彼等が用意してあるのはそれだけではなかった。
「何ならリバイアサン用もだ！」
「そっちの方がいいんじゃないのか？」
「それもそうか」
こっちは何百メートルもある巨大鯨だ。ある惑星にしかいない非常に稀少な種類である。それの麻酔もやはり普通のものではない。
「じゃあそれ使うか」
「ああ、躊躇している暇はないな」
「それじゃあ」
「俺は生きる！あいつは俺の母親になるかも知れないオカマだったんだ！」
「オカマが母親になるのか？」
「もう訳がわからないな」
「オムライスにはオマール海老とフォアグラとトリュフと鮑を入れろ！」
シャバキは今度はオムライスにクレームをつけてきた。

第百六話　秩序その三

「チーズもだ！オムライスは完璧でなければならない！」
「何処の国のオムライスだ、それは」
「エウロパの貴族共が食うやつか？」
「あの連中がオムライスなんて食うかよ」
警官達もやはりエウロパが嫌いなのだった。比較的反エウロパ感情がましな日本においてもこうだった。もっとも他の国はさらに酷いものだが。
「しかも十個は食わせろ！オムライスは神の料理だ！」
「ああ、わかったからな」
「じゃあざる蕎麦でも」
「ざる蕎麦！？」
今度はざる蕎麦に対して異常な反応を示すシャバキだった。
「そう！ざる蕎麦は仏の食べ物！」
「お釈迦様ってインド人だったよな」
「ああ」
今度は仏と言い出すシャバキであった。
「インドに蕎麦なんてあったか？」
「あの当時麺類なんてなかったろ」
「向こうのアニメじゃお釈迦様普通にうどん食べてなかったか？」
「マウリアじゃそんなのは普通なんだろ」
何気に物凄いアニメを放送しているマウリアである。
「そのお釈迦様の生年だって百年は普通に開きがあるからな」
「わからん世界だよな」
「全くだ」
「っていうかマウリア人蕎麦食べたかな」
「カレーだろ、やっぱり」
やはりインド人ならばカレーなのだった。

「何でそこで蕎麦なんだ？」
「しかもお釈迦様は予言は」
「見よ、蕎麦が天を舞う！」
またしても意味不明なことを叫びだす。
「これこそが仏の御意志！蕎麦を食べよと！」
「精進料理かね」
「さあ」
どう考えても理解できない警官達だった。
「こりゃ蕎麦はまずいかな」
「多分な」
「じゃあ何にする？」
「カツ丼にするか？取調べでいつも頼むあれにな」
「あれか」
カツ丼と聞いて皆納得しかけた。
「じゃあそれにするか」
「ああ、そうだな」
「カツ丼・・・・・・」
しかしシャバキはカツ丼に対しても反応を見せるのだった。実に面倒かつ悪質だ。しかし彼らしいと言えば彼らしい。いいことではないが。
「カツ丼は、カツ丼こそは」
「げっ、カツ丼も駄目なのか！？」
「ひょっとして」
「カツ丼は天命を受けた者の為の馳走だ！」
今度はこれであった。
「天の意志！即ちカツ丼を食べる者は！」
「また騒ぎ出したよ、こいつは」
「食い物にすら発作があるんだな」
「ノストラダムスを倒す者！永遠の戦いにおいて最後の勝利を収める者！」

マイケル＝ムアコックめいたものまで入っていた。
「邪神アリオッチを倒す存在となる。法と混沌、全てを集結させるのだ！」
「ホークムーンらしいな」
「ああ。ストームブリンガーは関係ないか」
その考えは甘かった。しかも実に。
「聖剣ストームブリンガーによって！全てを！」
「あれって聖剣か！？」
「魔剣だろ、どう見ても」
「なあ」
人の大きさ程もある巨大な漆黒の禍々しい剣だ。一度主の手に持たれたならば人を斬らずにはいられない血に餓えた剣である。しかも斬った相手の魂をその中に収める。斬られた者はその時に例えようもない恐ろしい絶望を味わう。どう考えても魔剣である。
「悪の支配者アンリを倒す剣なのだ！」
「今さっきノストラダムスを倒すとか言ってなかったか？」
「っていうかノストラダムスを救世主とも言っていたよな」
シャバキは過去は決して振り返ったりはしない。

第百六話　秩序その四

「そもそもアンリって誰なんだ？」
「ノストラダムスの時のフランスの王様じゃないのか？」
その通りである。アンリ二世という。彼よりも二十歳も年上でありながら老け込まない美貌で知られたディアヌ＝ド＝ポワティエを愛人にして終生夢中になっていたことで有名である。
「確かそうだったろ」
「フランスの王様も大変だな」
「全くだ。死んで千年以上も経ってから悪の支配者になっているんだからな」
「あの青髭を！」
悪名高きジル＝ド＝レイではない。急に出て来た言葉だ。またしても、であるが。
「青髭を裁く！カツ丼を食って！」
「どうやってなんだ？」
「カツ丼で人を倒せるのか！？初耳だぞ」
普通の人間ならば想像もつかないことではある。
「大体青髭！？黒髭じゃないのか」
「そのうち赤髭とか白髭とかも出てきそうだな」
「カツ丼は飯は四人前だ！」
図々しくも注文までする。
「カツは四人前！超特大しか俺は食べない！」
「いや、だからまだやるって決めたわけじゃないからな」
「勝手に断定するなよ」
「それにオムライスと蕎麦もだ！」
急にさっきのメニューを話に出してきた。
「ハンバーガーとラーメン、デザートはザッハトルテだ！大至急だ！」

「で、カツ丼はその超特大か」
「何処まで食うんだよ」
連合の者達でもここまで食べる人間はレスラーか力士かアメリカンフットボーラーかラガーマンだけである。要するに極端に身体を使うスポーツか格闘技の人間だけだ。
「その食ったエネルギーの使い先が真っ当な思考ならな」
「全くだ」
「食わせろ!!食わせろ!!」
しかもここでこれまでになく暴れだすシャバキだった。
「カツ丼を!ざる蕎麦を!オムライスを!」
「ああ、わかったからな」
「早く行くぞ」
「来る!奴が来る!」
連れて行かれながらもまだ喚いている。
「空が落ちて来る!ナマハゲによって!」
「まさかナマハゲだって言い出すなんてな」
「これは予想していなかったよ」
警官達は何とかシャバキを連れて行く。二年S1組の面々は飲み食いしながらそれを見守っているだけであった。
「何ていうか壮絶ね」
「ええ」
ハンバーグサンドを食べているナンの言葉にナンシーが頷く。
「殆ど重度の麻薬中毒者なんだけれど」
「それでもあそこまで酷くはないでしょ」
まさにその通りである。
「っていうかこれで主役の一人が去ったわね」
「ねえセーラ」
ナンシーはあらためてセーラに声をかける。お握りを食べつつ。
「これでいいの?」
「はい」

平然と答えるセーラであった。
「いいのです、これで」
「そうなの」
「戦いが終わればシャバキさんは戻すつもりでした」
「ああ、やっぱり」
流石にあれだけの危険人物を野に放すわけにはいかないということだった。もっともそれは目の前の博士についても言えることではあるが。
「そうなのね」
「そうです。手間が省けたと言えば酷いですが」
「けれど結果としては戻さなくて済んだわね」
「ええ。ただ」
「ただ？」
お握りを頬張りながらセーラの言葉に反応する。
「何かあるの？まだ」
「このままいっても問題はあります」
「問題があるの」
「あの方ですが」
セーラはカレーを食べている。マウリア人らしくチキンカレーだ。
その彼女の目の前で今博士とあの方が対峙している最中であった。
「一体何処のどなたなのでしょうか」
「正義の味方かしら」
「少なくとも悪しきオーラは感じません」
セーラはこう述べる。
「そういったものは。幸いにして」
「そうなの。悪い人じゃないのね」
「それは確かです」
セーラだからこそわかることであった。
「ですからそれは安心していいのですが」
「問題は何処の誰かなのね」

「この気配は」
探る顔でまた述べる。

第百六話　秩序その五

「何処かで感じたことがありますが」
「何処かで？」
「はい。ですがそれが何処かなのかがわかりません」
セーラにしては珍しく怪訝な顔になっていた。周りの皆もこれには結構驚いている。滅多に見られない表情であるからだ。これも当然であった。
「学校でしょうか」
「学校ねえ」
「猛々しく雄々しいです」
そしてこう言うのだった。
「まるで獅子の様に」
「ライオン？」
「はい。我が家の家にいますからわかります」
セーラの屋敷では普通にライオンもいる。庭にいたりするので皆はかなり怖がっている。なおプールには巨大な鯨がいたりする。鮫でないだけましであるかも知れないが。
「獅子と同じ気高いものも感じます」
「そうなの。じゃあ只者じゃないわね」
「そう思います」
こうナンシーに述べるのだった。
「私は」
「本当に誰かしら」
ナンシーは首を傾げつつ述べた。
「一つ。取材する必要があるわね」
「流石は新聞部ね」
ナンがそれを聞いて言う。
「そういうところは」

「褒め言葉ってわけね」
「勿論。それであんたはあの人の正体は何だと思うの？」
「それがわかれば苦労しないわ」
これが今のナンシーの返答だった。
「残念なことにな」
「そうなの」
「そうよ。本当に何者かしら」
今度はナンシーが怪訝な顔になった。
「彼と。取材しようかしら」
「彼！？」
ナンはこの言葉に反応した。
「誰なの？彼って」
「あっ、その、ちょっと」
今の失言に慌てふためくナンシーだった。
「それはね、まあ、あの」
「まあ、あの？」
「何でもないの」
こういうことにするのだった。
「何でもないわ。だから気にしないで」
「そうなの」
「そう、そうなのよ」
慌てふためきながら答える。
「実はね。だから」
「何かよくわからないけれどわかったわ」
いぶかしみながらも頷くナンだった。
「それじゃあそれでね」
「ああ、これ」
誤魔化す為か羊の胸肉を煮たものをナンに差し出す。
「これ食べる？ナン好きだったわよね、羊のお肉」
「まあね。モンゴル人だし」

殆どこれだけで話せた。
「大好きよ。じゃあもらっていいのね」
「ええ」
顔中に汗をかきながらナンの言葉に頷く。
「いいわよ」
「それにしてもナンシー」
ナンはいぶかしむ顔でナンシーのその顔を見ている。そのうえでの言葉だった。
「一体どうしたのよ」
「どうしたのよって！？」
「顔中汗でびっしょりよ」
やはり彼女もこのことに気付いているのだった。というよりかは気付かない方がどうかしているといった位までの彼女の汗であった。

第百六話　秩序その六

「急に風邪ひいたとかそんなのなの？」
「い、いえ、別に」
さらに汗をかきながらナンに答える。
「何でもないわ。至って元気よ」
「そう、何でもないの」
「え、ええ」
やはりここでも汗を見せる。
「そうよ。だから全然気にしないで」
「そう。だったらいいけれど」
「ほら、この羊肉」
自分でもその羊肉を食べてみせる。お握りをまだ頬張ったまま。
「美味しいわよ、凄く」
「それはわかるけれど」
「わかるの」
「モンゴル人は見ただけでわかるのよ」
また随分と物凄いことを言い出した。
「そのお肉が美味しいのかそうでないのかはね」
「わかるの」
「草原の勘よ」
何気に凄いものである。
「それが教えてくれるのよ。美味しいのかそうでないのかね」
「ふうん、そうなの」
「モンゴル人は草原の民」
宇宙の時代になってからもこれは変わらないことであった。彼等の足は地球にあった頃から変わらず四本足なのだ。つまりいつも馬に乗っているのである。
「食べ物のことは本当にわかるのよ」

「そうなの。凄いわね」
「ええ。ただナンシー」
「何？」
「今日は塩分余計に摂った方がいいわよ」
不意にこう言ってきたナンであった。
「今日はね」
「またどうして？」
「だって汗かいてるじゃない」
ナンが言うのはこのことだった。
「だからよ。汗をかいたらそれだけ塩分を余計に摂らないと」
「あっ」
言われてこのことに気付くナンシーであった。
「そうね。そういえば」
「そういうこと。そこはいいわね」
「ええ、そうね」
汗はひいていたがそれでも頷く。
「そういうものよね。健康管理はちゃんとしないとね」
「塩分は大事よ」
意外と健康に五月蝿いナンである。
「摂り過ぎてもいけないけれどね」
「モンゴルじゃ皆どうやって塩分を摂ってるの？」
「血からよ」
「ああ、それからね」
これはナンシーにもわかった。
「血を飲むのね、動物の」
「そういうこと。それは知ってるのね」
「結構多いからね、血の料理」
楽しく笑って答えることができた。今のナンの話には。
「だからよ。わかるの」
「日本人はね。あまりやらないけれどね」

八条学園は日本にある。だから和食も割合として多いのである。和食では血を飲むことはこの時代においても殆どないことである。
「お魚の血なんて飲まないものね」
「そういえば日本って血のソーセージもあまりないわよね」
「美味しいのにね」
「それが残念よね」
「ええ、確かに」
とりあえず内心では年下の彼氏のことを誤魔化せて安心しているナンシーであった。話はそのまま食べ物に関することに移っている。
「あの博士は血のしたたるステーキとか好きなのかしら」
「スペイン風が好きらしいわ」
ナンはこうナンシーに答える。

第百六話　秩序その七

「どうやらね」
「相変わらずスペイン好きなのね」
「そうみたいね」
博士のスペイン好きはこの時代においても健在である。ただしだからといってエウロパが好きとうわけではない。時々気が向いてエウロパに潜入して巨大ロボットや宇宙怪獣で大暴れすることもある。エウロパでは博士は連合の悪意そのものと認識している。
「じゃあ今回もそのスペインの力で」
「闘うみたいね」
「さてさて、どうなるかしら」
ナンシーはあらためて博士を見る。相変わらず睨み合っている。
「今度はね」
「そうね。これは見ものね」
「ええ。ほら」
先に動いたのは博士であった。
「遂にやるわよ」
「ええ、いよいよね」
「ほら」
博士はここで自分のマントに手をかけた。
「変身！？」
「そうかも」
彼女達は博士が何をするのかわからなかった。しかし彼と対峙する秩序は違っていた。博士のその動きを見て冷静な態度を全く崩してはいなかったのだ。
それは言葉にも出ていた。クールな声で言ってきた。
「あれをするのか」
「覚えておるようじゃの」

「忘れる筈がない」
構えを取ったまま答えるのだった。
「あのことはな」
「そうか。ではもう一度心に刻み込むのだ」
言いながらマントを投げてきた。するとそのマントが。
「!?マントが」
「変わった!?」
「変身!?いや、違う」
クラスの面々は博士のその動きを見てそれぞれ言う。
「マントがマシンに」
「漆黒のマシン」
確かにそうなっていた。博士が空に脱ぎ捨てマントが急に形を変えたのだ。烏を思わせる不気味な巨大なマシンになったのだった。
「マントがマシンにって」
「何て非常識な」
「さあ、これこそわしが開発した究極のマシンの一つブラックフッケバイン」
「フッケバイン!?何かゲームのマシンみたいな名前だな」
タムタムはすぐにそこに考えをやった。
「そんな名前の主人公機があったよな」
「そうだったな。そういえばな」
彼のその言葉にルシエンが頷く。
「何気に色々と知っている人だな」
「流石は千歳ってところかな」
なお実際の年齢は誰も知らなかったりする。博士の正体は知能指数二十万で本名が天本破天荒であるのとはた迷惑かつ非常識極まる性格であること、このことだけがわかっていることだった。その生い立ちについては滅茶苦茶過ぎてわかっていないことが多いのだ。
「しかしあのマシンは一体」
「何をするんだろうな」

これが疑問だった。果たしてどういったことをするマシンなのか。
一同固唾を飲んで見守っている。博士はその彼等の前でまた動いた。
「では。行くぞ」
「行く！？」
「何をするんだ！？」
「秩序よ」
博士は秩序に対して声をかけた。
「先に貴様に破壊されたブラックフッケバインはただの試作品よ」
「やはりそうだったか」
それを認識していた秩序だった。返事は冷静なままである。
「道理で軽い相手だった筈だ」
「軽いか」
「そうだ」
ここでも冷静な声であった。
「軽かったな。貴様のマシンにしてはな」
「ふふふ、余裕のようじゃな」
落ち着いた声で応酬する両者であった。

第百六話　秩序その八

「あの時と同じく。しかし今度は違うぞ」
「違う！？」
「その通り」
また答える博士であった。
「今度はな。あの時のブラックフッケバインは街一つを巻き込み自爆するのが主でこれといった兵器は搭載させてはおらんかったな」
「街一つねえ」
「相変わらず滅茶苦茶なマシンを」
クラスの皆はそれを聞いて呆れた声で呟く。
「けれどあれだね」
「あれって？」
皆ネロの話を聞く。
「あの博士にしては大人しいんじゃないの？」
「大人しい？」
「だってあれじゃない」
ネロはさらに皆に対して言う。
「街一つなんて。あの博士だったら星一つ位平気でやるから」
「言われてみれば確かに」
「そういえば」
これがこの博士の恐ろしいところである。
「それ位本当に何でもない人だしね」
「あんな碌でもないマシンとか兵器とかばかり造るしね」
「とにかく。今度のその本格的なブラックフッケバインって」
「何をするのかしら」
「さて、見よ」
博士は秩序に対して言う。とりあえず二年Ｓ１組の面々は観客としか思っていない。他には何も見ずにただ秩序と対峙しているのだ

った。
「我がブラックフッケバインの力をな」
「どう来るのだ？」
「こう来るのじゃ」
ここでその烏を思わせるブラックフッケバインが動くのだった。
「こうな」
「なっ！？」
クラスの面々の言葉だ。
「口からミサイル！？」
「いきなり！？」
ブラックフッケバインはいきなり口からミサイルを発射してきた。
はじまりから大技を繰り出してきたといえる。この辺りは流石に博士の開発したマシンだ。
「最初からこれなんて」
「これからはもっとなのかな、やっぱり」
「ふはははははははははは、どうじゃ！」
博士はミサイルを放ったブラックフッケバインを見上げて高笑いと共に秩序に対して言う。
「まずはこれじゃ。かわせるか！」
「かわすつもりはない」
その言葉に対する秩序の返事は実に素っ気無いものであった。
「この程度のミサイルはな」
「この程度はってこれはまた」
「飛ばしてるわねえ、何故かしら」
「斬る」
言いながら剣を出してきた。ビームソードである。青い光が刀身になっている。シュゴオ、という威勢のいい音まで聞こえてくる。
「それだけだ」
「ミサイルを斬るって」
「そんなことしたら大爆発じゃないのか！？」

二年Ｓ１組の面々は今の秩序の言葉に顔を顰めさせる。
「何考えてるのよ」
「死ぬ気か！？あいつは」
「では。行くぞ」
「ほほう、流石じゃのう」
博士はビームソードを構えた秩序を見てまたしても満足そうな笑みを浮かべる。どうやら強敵と戦うことはかなり好きなようである。

第百六話　秩序その九

「核ミサイルを斬るとはな。見事な心掛けじゃ」
「あの博士やっぱり」
「そんなものまで開発していたの」
「完全に犯罪行為よね」
「っていうかそれどころじゃ済まないし」
「そうよね」
　クラスの面々は顔を顰めさせて言い合う。この時代でも核兵器の開発は軍を含めた官公庁以外ではトップシークレット扱いであり当然無断開発及び使用は法律で禁じられている。ニュートロンジャマーもあることにはあるがこれを破ったならば死刑に相当する。それが悪質なものであれば鋸引きや車裂き、カーフブランディング、車輪刑といった死刑の中でも極刑に処せられる場合もある。重罪なのだ。
「何であの博士ってそういえば極刑にならないのかしら」
「さあ」
「よく考えたらそれって凄い不思議じゃないの？」
「確かに」
　これもまた連合の大きな謎であった。
「これだけ悪事を重ねているのにどうしてかしら」
「何故だろうね、本当に」
　彼等が首を傾げるその中で核ミサイルは秩序に向かって飛ぶ。秩序はビームサーベルを大上段に構えるとそこから思い切り跳躍した。
「チェストーーーーーーーーーーーーッ！！」
「これは」
　プリシラはこの叫び声を聞いて呟いた。
「示現流ね」
「示現流っていうとあれ！？」

「そう、あれよ」
ジュデイに対して答える。
「日本に古くからある剣道の流派の一つよ」
「薩摩のやつだったかしら」
「ええ」
このことも知っているプリシラであった。
「ただ一直線に突き進み気合一閃両断する」
単純と言えば単純である。
「まさに剛の剣よ。それを使うなんて」
「どうやらあの秩序っていう人は」
「ええ」
またジュデイに対して答える。
「使い手かもね。それもかなりの」
「そうね」
跳躍する秩序。遂にその剣を一閃させた。その時にまた叫ぶ。
「ニュートロンジャマー斬!!」
また随分とユニークな技の名前だった。その名を叫びつつ両断したのだった。
彼が着地するとその向かい側に真っ二つになったミサイルが落ちる。それが爆発することはなかった。
「我が剣に断てぬものはない」
「ほほう、ニュートロンジャマー斬か」
「そうだ」
立ち上がりつつ博士の言葉に応える。
「この技、知っているな」
「如何にも」
余裕の声で返す博士であった。
「何時見てもいい技じゃ」
「そしてだ」
「何じゃ？」

「これで終わりではないな」
「無論じゃ」
ここでも余裕を崩さない博士であった。
「この通りな」
「そうか」
「さて、次はじゃ」
博士はその余裕で以ってまた返す。
「新たな技を見せてやろうぞ」
「むっ!?今度は何を」
「何だと思う?」
「さあ」
クラスの面々には予想のつかないことであった。
「碌でもないことはわかるけれど」
「それ以外はね」
「そうね」
他のことはわからないのだった。というよりはわかりたくもなかった。世界史上最凶最悪のマッドサイエンティストの考えることなぞは。
またしても博士の開発したマシンがとんでもないことをしようとする。風雲急といった事態は果てしなく続くのであった。他人の迷惑も顧みず。

秩序　完

２００８・９・３０

第百七話　決戦の瞬間その一

決戦の瞬間

「ふふふ、このブラックフッケバインはただの大量破壊兵器とは違う」

「わかりたくてもわかるわよ、それは」

「そうだよね」

二年Ｓ１組の面々は誇らしげに笑う博士を見て言う。彼等は今も飲み食いしながらセーラの結界の中で戦いを観戦している。ビールやソーセージが特に売れている。

「そもそもマントまたはおっているけれど何時の間に！？」

「それも凄い謎だけれど」

些細なことにまで常識が通用しない博士であった。しかし博士にとってはそんなことは全く以ってどうでもいいことだった。誇らしげな笑みのまま秩序に対して問う。

「フォルコメンハイトメタルコスモよ」

「ファルコンハイドロメンココスモス！？」

ジミーが見事に聞き間違えた。

「隼と水とメンコと秋桜！？また随分変わった呪文だね」

「フォルコメンハイトメタルコスモだよ、ジミー」

そのジミーにジョルジュが突っ込みを入れる。

「完全なメタル、秩序って意味だね」

「秩序！？じゃああれだね」

ジミーはジョルジュの説明でやっとわかった。

「あの秩序さんのことだね」

「多分ね」

「あの長ったらしいのが正式名称だったの」

エイミーの言葉は覚めていた。

「あの人の」

「コスモか。何かいい名前ね」
ローリーは素直にこう評している。
「白いし似合っている名前だと思うわ」
「確かにね。まさに正義のヒーローって感じ」
「対する博士は」
皆で言うがそれについてはもう答えは出ていた。誰がどう見ても特撮に出て来るマッドサイエンティストだからだ。それ以外の何者でもなかった。
「さて、正式名称がわかったところで」
「さらに観戦といきますか」
「あっ、フランクフルト頂戴」
「こっちはアボガドのお刺身ね」
皆やはり飲み食いに専念する。とにかく盛んに飲み食いを続けていた。
彼等の宴を他所にコスモと博士は対峙を続けている。空を舞うブラックフッケバインは突如として咆哮をあげた。
「ギェエエエエエエエエエッ！！」
「叫んだだけか」
「甘いのう」
今のコスモの言葉に不敵に笑う博士だった。
「このわしの開発したマシンじゃ。ただ叫んだだけではないぞ」
「何っ！？」
「一体が二体」
そして突然こう言い出した。
「二体が三体、三体が四体」
「増殖か」
「自動分裂増殖機能を付けておいた」
相変わらず碌でもないものばかり付ける博士であった。
「この様にな」
「そうか」

「そうかって今のはねえ」
「冷静に返すところじゃないよ」
皆今のコスモの言葉を聞いて突っ込みを入れる。しかしその突っ込みは肝心の彼には全く届いてはいないのだった。戦士はそれどころではなかった。
「無論核ミサイルもそれぞれ放てるぞ」
「何て無茶苦茶な」
「本当に惑星一個位簡単に破壊できそうね」
「星一個で済むかなあ」
流石に今まで惑星、いや衛星を一個破壊した人間は存在しない。博士は興味本位でブラックホールや太陽を作り出してそれで騒動を起こすことはする。
「やっぱりやばい人ね」
「ここは是非負けてもらわないと銀河の為にならないよ」
「全くだよ」
あらためて博士の迷惑さを認識する面々であった。博士の話はその間にも続いていた。
「さあコスモよ、勝てるか」
「この五体のブラックフッケバインにか」
「その通りだ。一体ならば勝てよう」
博士もこれは最初から読んでいたようである。
「しかし。五体じゃ」
博士はこのことを強調する。
「五体もあれば勝てるか？どうじゃ？」
「勝てるかどうかは問題ではない」
コスモはビームソードを構えながら博士に応える。

第百七話　決戦の瞬間その二

「大事なのは勝たなければならないということだ」
「おや」
皆今の彼の言葉には目を瞠った。
「まさかと思うけれど正統派ヒーローみたいね」
「確かに」
そのことを確認したのであった。
「どうやらこれは」
「これまた意外ね」
「それが私の義務だ。私は闘い」
完全にヒーローの言葉だった。
「そして勝つ。ここでな」
「面白い。それではじゃ」
対する博士も博士で完全に悪の科学者になっていた。最初からそうとしか思えない外見なのはもう誰でも知っていることである。
「この五体のブラックフッケバインで今度こそ貴様を倒してくれようぞ」
「倒す」
冷静な言葉であった。
「その五体のブラックフッケバインをな。これでな」
「むうっ！？」
「ビームソードだけではない」
いきなりビームソードを収めてこう言ってきた。
「こういうものもあるのだ。私にはな」
「へえ、今度はそれなのね」
「銃ね」
コスモが今度出して来たのは銃だった。拳銃と呼ぶにはやや大型でしかも白銀に光りメタリックな外観である。コスモが持つと実に

よく似合っている。
「ここで銃を出すってことはやっぱり」
「撃墜かしら」
「シュート」
皆の言葉をよそにコスモは攻撃に入った。両手でそのガンを持ち射撃する。続けて五発巨大な青いビームの銃撃を放った。それはブラックフッケバイン達を次々に撃っていく。
「ギエエエエエエエエエ！」
「ガオオオオオオオオン！」
「ふむ、臨機応変といやつじゃな」
博士はコスモが銃でブラックフッケバイン達を攻撃するのを見て述べた。
「確かにのう。空中の敵には剣よりもガンの方が有効じゃ」
「その通りだ」
五発の攻撃を終えたうえで博士に答えるコスモだった。
「コスモソードではどうしても限度がある。しかしこのコスモガンならば」
「あの剣と拳銃の名前ってどうだったんだ」
「成程ね」
皆名前を知ってあらためて頷く。
「他の装備があればやっぱりコスモ何とかなのかしら」
「多分そうね」
こうも予想を立てている。この辺りは完全に特撮である。もっともコスモにしろ博士にしろその存在は完全に現実を無視してしまっているが。
「空の相手にも対応が容易い」
「その通りじゃ。見事と言おうか流石と言おうか」
「どちらでもいい」
銃を右手に博士に返す。
「私はな」

「では流石としておこう」
博士はそこに落ち着くことにした。
「しかしじゃ。見よ」
博士は今度は空を右手に持つ鞭で指し示し悠然と述べた。
「まだブラックフッケバイン達は生き残っておるぞ」
「ギイ」
「ギャアギャア」
一時怯んだだけだった。何と殆ど無傷であった。姿勢を取り戻し空を舞いつつ不気味な鳴き声をあげている。まるで翼竜のそれを思わせる声であった。
「どうするのじゃ？それで」
「この程度で倒せるとは思ってはいない」
コスモの冷静さは変わっていない。
「それならばだ」
銃を収めまた何かを出して来た。それは。

第百七話　決戦の瞬間その三

「今度はそれか」
「そうだ」
また博士の言葉に答える。
「コスモアックスだ」
「今度は斧なの」
「予想通りの名前だし」
右手に持つそのメカニックな斧を見ての二年Ｓ１組の面々の言葉である。
「何ていうか結構以上に正統派ね」
「おもちゃ屋さんに好かれそうね」
当然この時代でもおもちゃは売れている。ヒーローがおもちゃ屋に好かれるのはその人形や武器が売れるからだ。二十世紀にできた一つの決まりのようなものだ。
「さて、それでは正統派ヒーローはアックスをどう使うか」
「見ものね」
「受けろ」
静かに言いながら斧を投げた。
「コスモアックス」
斧は激しく回転しながらブラックフッケバインの一体の翼を撃ち抜いた。そしてブーメランの様に動きもう一体の翼も貫く。見事な動きである。
「空を飛ぶのならば弱点はおのずとわかる」
「翼じゃというのじゃな」
「その通りだ」
また博士に対して答える。
「こうして翼を貫けばそれで終わりだ」
「確かにのう」

戻って来た斧を右手で受け取るとまた投げそれで別のブラックフッケバイン達の翼を貫いていくコスモの攻撃を見つつ述べる博士であった。
「その通りじゃ。普通ならばのう」
「普通はだと！？」
「わしを誰だと思うておる」
また実に説得力のある言葉だった。
「天本破天荒じゃぞ。人類社会に現われた最大の天才」
「字が違うし」
「天災でしょ」
そっちであった。この博士を禍と見ていない人間は連合には一人もいない。まさに災厄そのものなのだ。
「わしが翼をやられただけで参るものを作ると思うたか」
「というとまさか」
「そうよ。そのまさかよ」
自信に満ちた言葉だった。
「見よ」
誇らしげにまた空を指し示してみせる。
「我が愛する鳥達はまだ健在じゃぞ」
「ううむ、何てしぶとい」
「落ちていいのに」
皆の率直な意見である。
「悪い意味で博士らしいっていうか」
「全く」
「っていうかあの博士に悪い意味以外にあるの？」
さりげないがその通りのルビーの突っ込みだった。
「ないでしょ、正直」
「言われてみればまあ」
「その通り」
誰もがそれは認めるところであった。

何はともあれコスモとブラックフッケバイン達の戦いは続いている。しかしブラックフッケバインはここで思いも寄らぬ行動に出たのだった。
「それならばだ」
「!?今度は」
「何をするつもりかしら」
「モードアインスト」
ここでいきなり言うコスモだった。
「アインストモード発動」
「アインストモードって!?」
「何か姿が青くなったわね」
「ああ」
コスモの姿が青くなった。銀と青の姿になりそして突如として消えたのだった。
「消えた!?」
「何があるの!?」
皆コスモの動きに注目する。そして今ブラックフッケバイン達が次々に撃退されていく。

第百七話　決戦の瞬間その四

「えっ、いきなり！？」
「今度は何なの！？」
瞬く間に五機のブラックフッケバイン達は撃墜されそして地上で爆発した。気付けばもうブラックフッケバインは一機も残ってはいなかった。
「すげえ・・・・・・」
「もうこれだけ倒したっていうの」
「けれどさ」
しかしここで皆思わずにはいられなかった。あることを。
「コスモさんは何処？」
「何処にいるの？」
「ふむ、そのモードを使うとはのう」
驚く皆と違って博士は冷静なままだった。
「流石じゃな。的確じゃ」
「空を飛ぶのならばだ」
コスモの声が聞こえてきた。
「このモードが一番だ」
「確かにな」
コスモが再び姿を現わした。その青と銀の姿のままだ。まるで影が出て来たようにその場に現われたのだった。しかし謎もまた出て来ていた。
「けれどどうして？」
「どうしてここに出て来たの？」
「どうやって倒したのかしら」
皆もこのことを考えている。このことは彼自身から言われた。
「しかしアインストモードは便利なものじゃな」
「そうか」

「全くじゃよ」
博士とコスモがそのアインストモードについて話をしていた。
「姿を消すことができしかも空を舞うこともできるのじゃからな」
「そうともばかり言えない」
「一分しか使えないからかのう」
「その通りだ」
見ればコスモはアインストモードから普通の姿に戻っていた。完全に普通のイクサだ。
「より長くの時間が使えれば」
「そうすればわしも面白いのじゃがのう」
「だが。まだ戦い方はある」
「今度はあれじゃな」
「そうだ。行くぞ」
また何かをしようとしだしたコスモだった。右の腰から携帯に似た何かを取り出して恐ろしい速さで数字を入力していくのだった。
「５５５、９１３、３３３、３１５、０００」
「何の数字かしら」
「暗号!?」
皆彼が入れていく数字を見て目を顰めさせる。
「若しくは入力!?」
「だとしたら何かな」
「パーフェクトモードスタンドバイ」
「よし」
機械音を聞いて頷くコスモだった。
「これでいい。これで」
「これで見るのは二度目じゃな」
博士は彼が全ての数字を入力し終えたのを見て言ってきた。
「確かな」
「二度目だったか」
「一度見たものは忘れんのじゃ」

博士の特殊能力の一つである。
「決してな。じゃからよく覚えておる」
「そうだったな。それではだ」
「さあ、早くなるのじゃ」
変身するようにさえコスモに告げる。
「早くな。そして真剣に死合おうぞ」
「死合いか」
「一つ言っておく」
博士は不敵な笑みを見せてきた。
「わしは不死身じゃ」
「でしょうね、やっぱり」
「どう見てもね」
「そしてじゃ」
皆の言葉を他所にさらに言葉を続ける博士であった。

第百七話　決戦の瞬間その五

「この鞭はさらにバージョンアップしておるぞ」
「これまで以上にか」
「一億ボルトどころではない」
誇らしげに語る。
「百億ボルトまで出せるのじゃよ」
「普通にエネルギーそれでいけるわね」
「全く」
二年Ｓ１組の面々のこれまた率直な言葉である。
「もっともそんなのに興味のある博士じゃないけれどね」
「困ったことにね」
「しかも冷気でも炎でも塩酸でも何でもござれじゃ」
「万能の兵器というわけか」
「勝てるか？」
その鞭でコスモを指し示しつつ問う。
「わしのこの鞭に。どうじゃ？」
「勝ってみせる」
コスモスはこれまでよりも遥かに巨大な剣を取り出してきて言った。見ればそれはこれまで彼が使っていた剣とは全く違っていた。己の身体程もあり両手で持つものだったのだ。博士はその剣を見て述べた。
「グレートソードか」
「そうだ」
コスモも博士の言葉に頷く。
「子すもグレートソード。知っているな」
「面白い武器じゃ」
しかしそうした巨大な武器を見ても博士の余裕は変わらない。
「かつてドイツのランツクネヒト達が使っておったのう」

「三十年戦争でも派手に暴れたらしいな」
「戦いは大好きじゃ」
実に楽しそうな言葉である。
「その中でこそわしの偉大な発明が輝くのじゃからのう」
「そのランツクネヒト達をどれだけ犠牲にした」
「百人から先は覚えておらん」
堂々と言い切る。
「所詮はゴロツキ共よ。幾ら犠牲にしてもな」
「いいというわけか」
「暴走族にしろヤクザ者にしろマフィアにしろじゃ」
いつも博士はそうした面々を捕まえて実験材料にしている。
「所詮はカスじゃ。わしの発明や研究の肥やしにしても悪いことはあるまい」
「確かにその通りだけれど」
「それでも」
皆博士の言葉に違和感を感じていた。
「何で納得できないんだろ」
「あの博士が言うからかしら」
どんな悪人でも博士程ではないからだ。何しろ人権という言葉は最初から全く頭にインプットしないのがこの博士なのである。
「しかしその剣はよい剣じゃ」
「そうか」
「それを出して来るとはの。さらに面白くなってきたのう」
「覚悟しろ」
コスモの言葉が強くなる。
「ここで決着をつける。
「ふむ。そうじゃな」
そして博士もコスモの言葉に乗る。
「それも一興。それではじゃ」
「行くぞ」

「来るのじゃ」
遂に決着の時が来た。一同固唾を飲む。しかしここで思わぬ乱入者がやって来た。
「ああ博士、大変ですよ」
研究所から野上君が現われたのである。そして博士に声をかける。
「とんでもないことになりましたよ」
「んっ！？どうしたのじゃ？」
「異次元からの侵略者です」
いきなりとてつもない存在を話に出す野上君だった。
「この前改造ペスト菌を撒布したのに怒っていますよ」
「些細なことで怒るのう」
「いや、普通怒るどころじゃないから」
「ペスト菌って」
「しかもどんな改造したのかしら」
こうしたことを平気でするのが博士なのだ。

第百七話　決戦の瞬間その六

「それでこっちに来ているんですよ」
「今どの辺りじゃ？」
「異次元の入り口です」
「ふむ、なら丁度よい」
博士は野上君の話を聞いて静かに頷いた。
「そこならあれを使えるな」
「あれを使うんですか」
「そうじゃ。縮退砲をな」
「縮退砲！？何それ」
マルコはその禍々しい名前に不吉なものを感じたが何かまではわからなかった。
「とんでもないものだっているのはわかるけれど」
「ブラックホールを凝縮して放つものだ」
タムタムが彼に説明する。
「かなりの威力がある」
「それってかなり危険じゃない」
「危険という言葉があの博士に通用するか？」
「それは」
「そういうことだ」
ここまで話してマルコの顔を見る。
「わかったな」
「わかりたくないけれどね」
「それは俺も同じだ。とにかくだ」
「うん」
「闘いがこれで大きく変わるな」
「コスモさんとの戦いだね」
「そうだ」

マルコに対してはっきりと答えた。
「これでな。さて、どうなるか」
「博士、じゃあこの闘いは」
「異次元人共との戦いは最優先事項じゃ」
博士は野上君に対して答える。今はコスモから視線を離している。
「連中を放置しておいてはこの世界の危機」
「はい」
「物凄く危険な連中みたいだな」
「ああ」
皆博士と野上君の話を聞いてこのことはよくわかった。わかりたくなくてもわかる嫌な代物であるがあまり考えないことにしてもいた。
「何気どころじゃなくてな」
「あの博士の相手に相応しいわね」
「それは即ちわしの偉大な研究と実験と開発の危機じゃ」
「問題はそれ!?」
「違うでしょ」
アンネットとカトリが呆れながら突っ込みを入れる。
「問題はそこじゃなくて世界がどうなるかで」
「博士の研究とか開発なんて迷惑どころじゃないから」
だがこうした言葉はやはり博士の耳には入らないのだった。自分にとって都合の悪いことは一切聞こえないような構造の耳を持っているからだ。
「それだけは許さん。だから野上君よ」
「すぐに戦いに向かわれるのですね」
「クローンしてあるニンゲンモドキをまず総動員じゃ」
「そんなものまで造ってたの」
「違法じゃないの?それって」
「違法も違法」
クローン技術の無断使用は中央政府及び各国の法で厳しく禁じら

れている。悪用されれば恐ろしいことになるのがわかっているからだ。

「そしてＤＮＡ改造した巨大怪獣も送り込むぞ」

「それもですか」

「マシンもじゃ。今度こそ奴等を一人残らず消し去ってやる」

それが彼の考えであった。かなり過激だ。

「そして異議元をわしの植民地にしてやる」

「植民地ですか」

「左様」

これまた何気にとんでもないことを言っている。

第百七話　決戦の瞬間その七

「わしの偉大な開発や研究、発明の素晴らしいフロンティアにするのじゃ」
「結局はそれなの」
「本当に悪事しか考えられないのね」
「傍迷惑なことこの上ないっていうか」
「では行くぞ、野上君」
「僕もですか？」
「ふむ、そうじゃな」
野上君が危険を察知して怯えた顔になったのを見てふと考えを変えてきた。
「やはりよいわ」
「そうですか」
「普通の人間が入れば一瞬で塵芥になってしまうからのう」
実に物騒な話であった。
「だからよいな」
「そうですか」
「留守番を頼む」
ほっと胸を撫で下ろす野上君にまた言う。
「留守番をな。わしが帰って来るまでな」
「犬や猫は置いていきますよね」
「生身の生物は消えてしまう」
これは人間と同じであるらしい。
「だからよいわ」
「そうですか」
「！？今の言葉ってよ」
カムイが今の博士の言葉であることを察した。
「生身の人間は異次元じゃすぐに消えてなくなるんだよな」

「ええ、確かに」
「そういうふうになるね」
アロアとネロが彼の言葉に頷く。
「けれどあの博士は普通に入られるんだよな」
「あっ、そうなるわね」
「今の言葉だと」
「だとすると」
カムイはいぶかしむ目で博士を見つつ言う。
「あの博士、生身じゃないのか？」
「だから何千年も生きてるんだろ」
洪童が言うのはそこだった。
「普通の身体じゃないんだろ、やっぱり」
「じゃああの博士改造人間か何かか？」
まずこう予想した。
「それとも。何なんだろうな」
「仙術とか錬金術で不老不死になったんじゃないの？」
ポルフィはこう予想を立てた。
「それだと普通の身体じゃないしね」
「ううむ、それか」
「どっちにしろ非常識な博士だな」
存在自体が非常識と言っていい博士であった。
「まあとにかくよ」
「闘い、終わりそうね」
「そうですね」
セーラは皆の言葉に頷いた。
「博士がそれどころじゃなくなりましたから」
「コスモよ」
博士はここでまたコスモに顔を向けた。
「また会おうぞ」
「再戦というわけだな」

「そうじゃ。異次元人共を放ってはおけん」
「異次元人か」
コスモはそこに反応した。
「よかったら力を貸すが」
「共に闘うというのか？」
「そちらさえよければだ。どうだ？」
「共同戦線ってこと？」
「そうみたいだね」
皆今の二人のやり取りからこう思った。
「何か平和になったね、急に」
「確かに」
ヒーローと敵役の共同戦線というものも特撮ものではよくあることだ。これはこの時代においても変わりはしない。しかし博士はここで言うのだった。
「それはよい」
「断るというのか」
「あのような連中わし一人で充分じゃ」
これが博士の返答だった。
「だからじゃ。よい」
「そうか」
「あれはわしの相手じゃ。貴様の相手ではない」
「わかった。では私は動かない」
「すしてくれ。では野上君」
「はい」
「行くぞ。わしの偉大な開発と発明の新たな開拓にな」
言いながら研究所に向かって行く。この時野上君はそっと博士に対して尋ねるのだった。
「それでですね、博士」
「うむ」
「今度は何を発明されるんですか？」

「毒ガスじゃ」
やはり碌なものではない。
「それを使ってみる。よいな」
「毒ガスですか」
「しかもただの毒ガスではない」
楽しそうに語っていた。
「一滴で一億人は殺せる毒ガスじゃ。凄いぞ」
「それで異次元人達を抹殺するのですか」
「その通りじゃ」
彼は完全に本気だった。もっとも博士はいつも本気である。真剣に恐ろしい兵器やら何やらを開発してそれを使用するのである。
「楽しみにしておれ、異次元人共」
最後にこう言って異次元に向かう。何はともあれ今回の騒動はこれで終わったのだった。

決戦の瞬間　　完

２００８・１０・５

第百八話　騒動が終わってその一

騒動が終わって

かくして博士の騒動は終わった。二年Ｓ１組の面々もまずはほっとした。

「終わったね」

「何とかね」

「まあ引っ掛かることもあるけれどね」

「シャバキさんどうなるのかしら」

まずはまた警察に拘束された彼に関してだ。

「やっぱりあのまま精神病院送り？」

「あの地下奥深くに」

「あそこしかないんじゃないか？」

カムイが眉を顰めさせて言う。

「下手に外に出ると何するかわからない人だからな」

「確かに」

「訳のわからない妖術を使うこともわかったし」

皆あれを拳法だとは全く思っていないのだった。少なくとも波を出したりそうしたりするのは誰も拳法とは言わない。そう言うことである。

「それもあるし発言も相変わらずだし」

「じゃあやっぱり」

「あそこしかないってわけね」

「あそこにいても言ってることは変わらないしな」

カムイの言葉は実に醒めたものだった。

「結局。騒いでるだけだからな」

「隔離ってわけね」

「それもずっと」

「多分あそこで一生だろ？」

カムイはこう予想を立てていた。
「ずっとな。一生あそこでな」
「そうなの、やっぱり」
「ずっとなのね」
「まああの人は仕方ないさ」
カムイはそれは諦めているといった感じだった。
「あれだけおかしいんだからな」
「確かにね」
「じゃああの人はこれで終わりね」
「そういうことでね」
「それでだ」
カムイはまた言う。
「博士は異次元人との戦いに向かったしな」
「異次元人ねえ」
「また変な相手ね」
「全く」
そもそもここにいる誰もが一体どういった相手なのか把握していなかった。異次元人という存在を聞いてもわからないのが本音である。
「大体異次元人って何!?」
「何者なの?」
「あれじゃない?ひょっとして」
ここでレミが言うのだった。
「赤いとんがった帽子みたいなの被って。それで細長い」
「何か不気味な連中みたいね」
「それが異次元人なのかしら」
「私だってよくわからないわよ」
レミもこのことは断る。
「それでもそれじゃないかしら」
「ああ、それ確か」

ベンがレミの話を聞いて言う。
「昔の日本の特撮で出て来たキャラクターだったよね」
「それだったの」
「多分ね。物凄く卑劣で陰湿な奴だったよ」
語るベンの顔は嫌悪感で歪んでいた。
「もう番組観るのが怖くなる位のね」
「うわ、また強烈ね」
「そんなのいつも出ていたら確かに観たくなくなるわ」
「前半それがレギュラーの敵だったんだよ」
よりによって、という感じであった。
「やっぱり子供が怖がって観なかったんだってさ。視聴率もそれで」
「伸びなかったのね」
「まあそうでしょうね」
皆ベンの言葉に納得する。
「試しに妹達や弟達に観せたら二度とレンタルしてくるなって言われたよ」
「実際に観てみたの」
「だから言えるんじゃない」
ベンの言うことはまさにその通りであった。

第百八話　騒動が終わってその二

「どういった奴かね」
「確かに観てみたい気にはなるけれど」
「実際に観てみるのは」
抵抗を感じる。皆内心そう思っていた。
「とにかく。若し異次元人がそういう相手なら」
「博士はどうするのかしら」
「っていうかさ」
ダイアナが言う。
「あの博士の相手だとそういうレベルじゃ駄目なんじゃないの？」
「そんな子供が怖がるレベルでかよ」
「あの博士よ」
ダイアナはマチアの問いにこう返す。
「そうじょそこいらの相手じゃ物足りないでしょ」
「まあ確かにな」
マチアもダイアナのその言葉に頷く。
「あの博士じゃな」
「何するかわからない人だからね」
「っていうかとんでもないことするのがわかってる人じゃないの？」
ローリーにアンジェレッタが言う。
「あの博士って」
「そうかも。言われてみれば」
「それでも何はともあれ騒動は終わったわよ」
七美はそれでよしとしていた。
「異次元人との戦いはあっちはあっちで大変なことでしょうけれどね」
「大変で済むレベル！？」
「もその人達がこっちに来たら」

ベッカとセドリックはこのことを心配した。
「大変なんてものじゃないけれど」
「どうなるの？その場合」
「大丈夫でしょ」
しかしジュリアがあっさりとその二人に対して言う。
「あの博士だから」
「根拠はないのに何でこんなに説得力のある言葉なんだ？」
フックが今のジュリアの言葉に突っ込みを入れる。
「不自然なまでにあるぞ、おい」
「確かに」
「何でこんなに」
皆もそれが少し不思議ではあった。しかし納得しているのも事実であった。あの博士はとにかく何でもありの人間だからだ。もっと言ってしまえば人間かどうかも怪しいが。
「とにかく。話は終わりね」
「ああ」
ロザリーがナンシーの言葉に頷いた。
「帰りましょう。長居は無用よ」
「そうだな。多分ここに軍隊やら警察が来るしな」
「もう来てるよ」
管が素っ気無く言う。
「あれは連合軍かな」
「ううむ、やっぱり」
「もう来たの」
「だから。もう帰ろう」
管は空を見上げつつ皆に言う。
「これ以上ここにいても仕方ないし」
「そうだよな。それじゃあ」
「帰りましょう」
「それでは皆さん」

セーラがここで皆に声をかける。
「帰る時ですが」
「ええ」
「私がお屋敷まで案内します」
「ここから？」
「はい。テレポーテーションを使います」
今度は超能力だった。
「それで皆さんを私のお屋敷まで」
「ああ、あのライオンや恐竜が普通にいるお屋敷ね」
「あそこなので」
「そこでまたパーティーを」
また飲み食いするというのであった。
「そう考えているのですか如何でしょうか」
「賛成」
「異論はないわ」
そして皆セーラの提案に笑顔で応える。やはり答えは決まっていた。
「それじゃあそういうことで」
「打ち上げにね」
「ただ」
しかしここでセドリックが言った。

第百八話　騒動が終わってその三

「一つ気になることがあるんだけれど」
「どうしたの？セディ」
コゼットがその彼に問う。
「気になることって」
「コスモさんは？」
彼が言うのはこのことだった。
「コスモさん何処行ったのかな」
「あれっ！？そういえば」
「何時の間に」
皆もセドリックのこの言葉でふと気付いた。見ればもう彼は何処にもいなかった。まるで煙が消えるかのように姿を消してしまっていたのだ。
「何処に行ったのかしら」
「消えたの？」
「諸君」
そして急に一同の後ろから声が聞こえてきた。
「一体ここで何をしているんだ？」
「何をってそりゃ」
「ずっとことの成り行きを見ていたんですけれど」
その後ろからの声に対して振り向くことなく答える。
「他に何があるんですか」
「まあ終わって何よりです」
「終わったら帰ることだ」
声はまた一同に対して告げてきた。
「わかったな。それでは」
「それではって」
「貴方、一体誰ですか？」

「私だ」
皆が振り向くとそこには。あのロシュフォール先生がいた。白いスーツを端整に着こなして皆の後ろに静かに立っているのであった。
「生徒達がいるかどうか気になって来てみればな。やはりいたか」
「ロシュフォール先生!?」
「どうしてここに」
「それはこちらの台詞だ」
静かだが何処か芝居めいた先生の言葉だった。
「危険だ。天本博士は連合でＳＳＳ級のテロリストに認定されている」
「ＳＳＳ級ですか」
「そうだ。あまりにも危険な存在だ」
なお普通のランクではＡＡＡが最高だ。アルファベットでＡからＺまででランク付けされている。しかしＳだけは特別でＡの上にランク付けされているのである。その中でＳＳＳといえば途方もなく危険な存在と認識されているのだ。なおこれに位置付けられている人物は連合広しといえどこの天本博士とシャバキしかいない。
「決して近寄ってはいけないのだが」
「大丈夫ですよ」
「ねえ」
しかし一同は平気な顔をしてこう言うのだった。
「セーラのバリアーと結界のおかげで」
「無事でした」
「無事であってもだ」
「駄目ってことですか？」
「早く避難することだ」
有無を言わせぬ口調で述べる先生だった。
「わかったな」
「ちぇっ、わかりました」
「それじゃあ」

「放課後だ。家に帰るといい」
「それじゃあセーラのお家で」
「皆で遊びます」
酒と食べ物からは決して離れることのない一同であった。
「それだといいですよね」
「お友達の家ですし」
「それは構わない」
流石にそこまでは介入しない先生であった。
「では早く帰ることだな」
「わかりました。それで」
「さようなら、先生」
「うむ。この辺りは完全に閉鎖されている筈だ」
博士が何をするかわからないからであるのは言うまでもない。街のど真ん中に平気で悪の研究所を設けている博士こそがとんでもないのではあるが。

第百八話　騒動が終わってその四

「早く帰るようにな。軍や警察にも注意されるぞ」
「そうなったら厄介ですよね」
「その通りだ。では早く帰るのだ」
「ええ、わかりました」
「そういうことで」
二年Ｓ１組の面々はセーラのテレポーテーションで彼女の屋敷に入った。屋敷に到着するともうそこには山の様な御馳走と海の如き酒が待っていた。
「何でもうあるの？」
「凄い不思議なんだけれど」
「テレパシーで伝えておきました」
セーラは皆にこう述べる。
「それでなのです」
「テレパシーねえ」
「相変わらず超能力が凄いわね」
皆それを聞いてももう驚きはしなかった。
「まあとにかく御馳走になっていいのかしら」
「この料理とお酒」
「はい」
気品のある微笑みで皆に返すセーラだった。
「どうぞです。その為のお酒と御馳走ですから」
「それじゃあ御言葉に甘えて」
「楽しく」
「今宵は様々な国のお料理を揃えておきました」
セーラはまたにこやかに述べてきた。
「我が家のシェフが」
「あっ、そういえばセーラのお家のシェフって」

蝉玉がここでセーラに対して言う。
「何でも作れるのね」
「五十人いますから」
一人ではないというのだ。
「それぞれの専門があるのです」
「五十人って」
「かなり大きなレストランじゃないの？」
「レストランで済まないわよ」
皆口々に言う。
「ホテル？そんな感じよね」
「確か軍隊で百人位いたら六人位だったっけ」
「確かね」
これは船一隻で話している。手伝いが入ったりするがおおよそこの程度である。
「じゃあセーラのお家って」
「どれだけ人がいるのかしら」
「千人もいません」
静かに微笑んで皆に話すセーラだった。
「八百人程度です」
「八百人って」
「ちょっとした村位じゃない」
途方もない人数であるのがわかる。少なくともただの留学生が連れている数ではない。少なくとも連合でそこまでの人数を連れてはいない。
「皆代々我が家に仕えてくれている者達です」
「代々！？ああ、あれね」
「そう、あれだよね」
皆セーラの話からあることがわかった。
「マウリアって何だかんだでカーストが残っているからね」
「それでだったわね」

「セーラの家ってそういえば」
セーラの家についても話される。
「マハラジャだったわね」
「どれ位あったっけ」
「四千年あります」
いきなり途方もない数字を出すセーラだった。
「わかっている限りは」
「四千年・・・・・・」
「日本の皇室よりも古いの!?」
「っていうかエチオピア皇室レベル!?」
なおエチオピア皇室の歴史は一度断絶しているとはいえかなり古い。シバの女王にはじまるとも言われている。それより以前にあったとも言われているしギリシア神話にも登場するのだ。どれだけ古いかというともう誰も知らないという程だ。そこまで古い皇室なのだ。
「わかっている限りって」
「マウリアって何か」
「短い歴史しかありません」
しかもセーラ自身はこう言うのだ。

第百八話　騒動が終わってその五

「人の一生は神にとってまばたきの際に瞼を動かすその瞬間程の時間もありません」
「神様って」
「もう何が何だか」
話はさらに途方もないものになっていく。
「四千年なぞ。ほんの一時です」
「一時ねえ」
「そうなのかなあ」
皆そうとは考えていない。ここにセーラと皆の認識の違いが出ていた。
「神の一日がこの宇宙の時間です」
「っていうと!?」
ここで皆は考える。
「宇宙って普通に何百億年よね」
「そうだったね、確か」
「その何百億年が神様の一日って」
「もう何が何だか」
「ですから人の一生、そして人類の時間なぞささやかなものなのです」
あまりにもスケールが大きくついてきているメンバーは少なかった。
「四千年といっても」
「そうなるのね」
「それだけの時間も」
「人の数にしろ同じです」
連合とマウリアではやはり数の概念が全く違っていた。
「八百人は大した数ではありません」

「そうなるの」
「我が家は二万人の使用人が宮殿にいつもいます」
「二万ねえ」
「そんな王室連合にあったかしら」
「ないわね、絶対」
そこまでの数がいる宮殿は流石に連合には存在しない。なお日本の皇室はその質素さで連合に知られておりその数も実に少ない。
「ううむ、もう何が何だか」
「途方もないものになり過ぎて」
皆わからなくなっていた。しかしそれでもセーラの話は続く。
「わからないわよね」
「もうね」
「そういえばセーラのお家って」
あのタージマハールに酷似した宮殿を思い出しつつ皆はさらに話す。
「動物園なかったかしら」
「水族館もあったわよ」
「そういえばそうよね」
「凄いのがいたし」
これは動物園にも水族館にも言えることだった。
「ブラキオサウルスがいたのは何処だったかしら」
「水族館よ」
「そうだったっけ」
恐竜の中でもかなり大きな種類である。あまりにも体重が重いので大抵は水の中にいる。こうした恐竜もかなり多いのだ。ブラキオサウルスよりも大きな種類としてウルトラザウルスというものもいる。これに至っては最早怪物と言ってもいい大きさを誇っている。
「あと蝮もいたわね」
「それは動物園よ」
「あの十八メートルあったやつね」

かつては地球にもそうした大蛇がいた。化石として残っているのだ。
「他にも三十メートルのアナコンダとかね」
「あれも凄いわね」
「十五メートルの鰐もね」
この鰐も化石で地球にある。
「オオナマケモノとか巨大カンガルーとかもいるし」
「サーベルタイガーもね」
「サーベルタイガーは珍しくないでしょ」
アンがナンに突っ込みを入れる。
「それよりもあんたの国にいるペガサスやユニコーンの方が珍しいでしょ」
「あれが？」
「そうよ。あんたの国の限られた星にしかいないじゃない」
どうしてもそうした存在は連合においても希少である。他にはドラゴンやキマイラ、グリフォンといった動物もだ。かつての生物学では有り得ないとされた動物達である。
「ああしたのよりは普通にいるじゃない」
「そういえばそうかしら」
「側にいるとわからないものなのよ」
アンはこう主張する。

第百八話　騒動が終わってその六

「どうしてもね」
「成程」
「それでよ」
アンはさらに言う。
「エラスモサウルスも水族館にいたわよね」
「あれですね」
セーラはアンのその言葉に応える。
「あれが何か」
「捕まえるの苦労したでしょ」
「いえ、別に」
「別にって」
エラスモサウルスは凶暴なことで有名な恐竜である。細長い首に鋭い牙を持っている。海においてはモササウルスと並ぶ猛獣とされている。
「子供の頃から飼っていますので」
「餌付けしてあるってこと？」
「はい」
ここでも微笑んでいるセーラであった。
「それは御安心下さい。いざという時はマインドコントロールもします」
「マインドコントロール・・・・・・」
「また無茶な」
これを本当にできるのがセーラの家の怖いところである。なおセーラ自身も相手の目を見ただけでマインドコントロールをかけることが可能である。
「ですから安全は万全です」
「まあ安全なのはいいけれど」

「それでも何か凄い話ね」
「恐竜がいる水族館もあるにはあるけれどね」
それはやはりある。動物園もだ。ただし当然ながら猛獣扱いである。ライオンや虎よりも遥かに巨大なのでその扱いは兵器に準ずるものがある。
「しかも家で持ってるなんて」
「スケールが違うわね」
「いえ、あれは私の家のものではありません」
ところがこれはセーラによって否定された。
「セーラのお家のものじゃないの？」
「はい、そうなのです」
微笑んで皆に答えてきた。
「あれは私のものになっています」
「セーラのものって」
「つまり所有物」
皆これを聞いて流石に唖然だった。
「あの恐竜や猛獣達が全部」
「あんたのものなのね」
「皆可愛い私のペットです」
しかも可愛いとまで言う。
「ですから御安心を」
「そのペットっていつも何を食べてるの？」
「連合じゃ時々あれだけれど」
ここで皆の顔が青くなる。
「死刑囚が餌になるけれどね」
「ええ」
これが連合の刑罰の恐ろしさだ。凶悪犯に対しては容赦なく惨たらしい刑罰を用意する。その中に猛獣や恐竜の餌にするというものもあるのだ。古代ローマと同じである。この処刑方法はカリギュラがキリスト教徒に対して行ったことであまりにも有名である。

「まさかと思うけれど」
「それはないわよね」
「御安心下さい、ちゃんとした普通のお肉やお魚です」
「だったらいいけれど」
「まあ動物園や水族館じゃね。それはないわよね」
「幾ら何でも」
なお連合では鮫のプールの中に死刑囚を蹴り込むこともある。鰐の場合もある。当然死刑囚は噛み付かれていきずたずたに引き千切られていく。当然生きたままだ。
「それを聞いて安心したわ」
「セーラでよかったわ」
「全くね」
「これが連合の処刑場だったら」
皆連合の人間なのでこのことはよくわかっていた。
「それこそ死刑囚がね」
「恐竜の御飯」
それが連合の犯罪者が辿り着く一つの道だ。生きながら食われる苦しみは想像を絶するものだ。凶悪犯には容赦しないのが連合の法、そして社会である。

第百八話　騒動が終わってその七

「マウリアにはそうした死刑はありません」
「そういえばそうね」
「マウリアにはね」
「マウリアにある死刑は電気椅子です」
古典的と言えば古典的な死刑の方法である。
「若しくは薬で安楽死です」
「連合にはそうした死刑ってないからね」
「凶悪犯には同情しないけれど」
加害者の人権は全くと言っていい程考慮されないのが連合の社会だ。凶悪犯がどうなろうと知ったことではない。しかしここで皆は言うのである。
「それでもあれはね」
「公開処刑はね」
それが嫌なのである。
「幾ら何でも惨殺を実況生中継でっていうのは」
「間違ってテレビのチャンネルにしたらもう最悪」
深夜放送でそれが放送されるのも連合社会である。
「いきなり内蔵を取り出されて苦しみ悶える姿とかねえ」
「でかい車輪で両手両足を砕かれるっていうのも」
これは元々は欧州、とりわけドイツで行われていた処刑方法である。元々は宗教的な意味あいの強い処刑方法だったがかなり広範囲で行われていたものである。
「車裂きとかね」
「あとは稜遅刑とか」
「連合には色々な死刑があるのですね」
「そうした工夫は忘れないんだよね」
マルコが首を傾げて語る。

「しかも全くね」
「全くですか」
「まあ僕は別にいいけれど」
こうセーラに語る。彼はそうした処刑にはどちらかというと賛成派だ。この場合はその放送等に対して賛成するという意味である。
「凶悪犯だしね。悪い奴は徹底的にやらないとね」
「それは賛成」
「私も」
「俺も」
やはり連合の者達なので二年S1組でもこの辺りはシビアである。
「御飯食べてる時には見たくないけれどね」
「タイには今日の死体なんて番組があるぜ」
今度はフックが言ってきた。
「それもかなりのものだけれどな」
「ああ、諸君」
忘れられていた人が出て来た。
「話はいいがここで話すのはこれまでにしてもらいたい」
「あっ、先生」
「おられたんですね」
「さっきからずっといる」
強い声でこう述べてきた。
「つまりだ」
「わかってますよ。あれですよね」
「帰れってことですか」
「そうだ」
やはり彼が言いたいことはこのことだった。
「ここは危険だ。早く帰った方がいい」
「わかってますって」
「それじゃあこれで」
「これでとりあえずは話は終わりだな」

皆が素直に頷いたところで満足そうに言う先生だった。
「これでよしとするか」
「そうですね」
それに応えたのはプリシラだった。
「一つ謎が残ってますが」
「謎？」
「何がなの？」
「さて」
ここでプリシラはちらりと後ろを見るのだった。そこにいるのは。
「先生」
「むっ」
「また学校で」
「う、うむ」
目に少し微妙な光を見せたがすぐにプリシラに応える。
「それではな。ラドリック君」
「はい。それでは」
「じゃあプリシラ」
ジュデイがプリシラに声をかける。
「行こう。そろそろテレポーテーションに入るわよ」
「ええ、わかってるわ」
ジュデイのその言葉に頷く。
「それじゃあ」
「じゃあ先生そういうことで」
「また学校で」
「今度からこうした場所には入らないことだ」
教師として厳格な言葉を述べる先生だった。
「それはいいな」
「はいって言わないと駄目ですよね、やっぱり」
「当然だ」
ここでも厳格に皆に告げる。

「生徒の安全を守るのは教師の義務だからな」
「義務なんですか」
「例え身体を張ってでもな」
「わかりました」
いつものポーカーフェイスで答えるプリシラだった。
「それではまた学校で」
「うむ」
「コスモにかけて」
「むっ！？」
今のプリシラの言葉に顔を顰めさせる。だが何かを言う前に彼女は皆と一緒にテレポーテーションしてしまった。これで天本博士の騒動は終わった。同時にある謎も解かれたのだがそれはプリシラだけがわかっていることであった。何はともあれ大団円であった。

騒動が終わって　　完

２００８・１０・１１

第百九話　いきなり殺人事件その一

いきなり殺人事件

博士の騒動の際完全に皆から忘れ去られてしまっていた二人がいた。あまりにも出鱈目なので多分に意図的だったのだがそれでも完全に忘れられていたのは事実だ。その二人とは。

「わかったぞ！」

「見つけたわ！」

今日も教室で勝手に騒いでいる。

「謎は解けた！」

「まるっとお見通しよ！」

「一体何をなの？」

テンボとジャッキーにベッカが突っ込みを入れる。

「推理してるの？また」

「俺にとって推理とは人生ものものだ」

「推理は哲学なのよ」

「それはいいけれどさ」

二人の力瘤が入った主張はさりげなくスルーする。

「で、どうしたの？何かあったの？」

「ベッカ、御前についてだ」

「僕！？」

「そうだ、御前だ」

「あんたよ」

いきなりベッカを指差しつつ言う二人だった。いきなりかなり失礼であるがそんなことをいちいち気にしたりする二人ではない。あくまで推理のことを考えているのだ。

「御前は今さっき何を食べていた？」

「何をって？」

「俺の灰色の脳細胞が教えている」

「あたしの緻密な捜査がね」
二人で勝手に思っていることだ。他の誰もそうは思っていない。
「食堂にいたな。第二食堂」
「そこに証拠があったのよ」
「第二食堂で証拠ねえ」
ベッカは腕を組んで首を捻りながらも二人の話を聞いていた。
「それで。僕は何を食べたっていうの？」
「スパゲティネーロ」
「ネタはあがってるのよ」
「どうしてわかったの？」
「御前の今の髪の毛の色だ」
「これよっ」
テンボは己の推理の根拠を、ジャッキーは証拠物件を出してきた。
まず問題となったのはその証拠物件である。よく見ればそれは。
「スプーン？」
「パスタを食べる時はスプーンを使うわよね」
「うん」
ベッカもこれは素直に認める。スパゲティであってもスプーンの上でフォークを使ってパスタを絡めてソースが撒き散らないようにするのである。
「そうだけれど」
「それが何よりの証拠なのよ」
「どういうこと？」
「ほら、見なさい」
そのスプーンを指し示して言うジャッキーだった。
「ここに残っているものは何？」
「チーズ？」
「その通りよ」
胸を張ってきたジャッキーだった。
「これが何よりの証拠よ」

「チーズって」
見ればスプーンにチーズの粉が着いている。粉チーズである。間違いなくパスタにかけるものだ。やはりパスタにはチーズである。
「それが僕がネーロを食べた証拠になるの」
「しらばっくれるっていうの？」
「別にしらばっくれてはいないけれど」
「誤魔化しは無駄よ。何故ならね」
「うん。何故なら？」
「このチーズに着いているソースは」
彼女が言うのはそれだった。
「イカ墨の色よ。どうかしら」
「確かにそうだな」
「ああ、間違いない」
また馬鹿をやってると思いながら見ていたクラスメイト達もこれには頷く。

第百九話　いきなり殺人事件その二

「これが何よりの証拠よ。あんたは第二食堂でイカ墨のスパゲティを食べたのよ」
「けれどさ、ジャッキー」
「何かしら。言い逃れ？」
不敵な笑みでベッカに返す。
「もう無駄だと思うけれど」
「そのスプーンさ」
「証拠のスプーンがどうかしたの？」
「第五食堂のだけれど」
ここを突っ込むベッカだった。
「それって。第二食堂と全然場所が違うじゃない」
「えっ！？」
「ほら、ちゃんとスプーンに彫られてるよ」
このことを言うのである。
「ちゃんと第五食堂って」
「えっ！？」
「えっ、じゃなくてさ」
驚きを隠せないジャッキーに対して言う。
「書いてあるよね、ちゃんと」
「そういえばそうね」
「そういえばじゃなくって」
今度は突込みを入れるベッカである。
「ほら、ちゃんと」
「何てことなの」
「つまりこれは第五食堂にあったってことだよ」
逆にベッカが判断してきた。
「しかもこれはパスタ用のスプーンじゃないよ」

「どうしてわかるの？それが」
「パスタに使うスプーンはもっと大きいじゃない」
その中でパスタを絡め取るのだから当然である。
「だからだよ。違うよ」
「じゃあ何のスプーンだっていうのよ」
「これはカレーとかスープのやつだね」
ベッカの推理はこれであった。
「その為のスプーンだね。どうやら」
「そんな・・・・・・」
「そして」
さらに言葉を続けるベッカだった。
「テンボ」
「今度は俺か」
「僕がイカ墨のスパゲティを食べたって言ったよね」
「その通りだ」
「その根拠は何なの？」
「御前自身について考えた結果だ」
「僕について考えた結果？」
「俺は天才だ」
いきなり根拠にならないことを根拠にしてきた。
「御前はシーフードが好きだな」
「うん」
このことは認めるベッカだった。
「そうだよ」
「だからだ」
「それだけで根拠になるの？」
「また言うが俺は天才だ」
どうやらこのことはやたらと自信があるようである。何かというと自負することからこのことがわかる。自分だけがそう思っているにしてもだ。

「だからわかるのだ」
「だからって」
「いいか」
有無を言わさぬ口調だった。
「御前は昨日何を食べた？」
「昨日はテンボ、君と一緒だったよね」
「だからわかるんだ」
少し聞いただけでは全く意味のわからない言葉であった。

第百九話　いきなり殺人事件その三

「だからな」
「だからわかるって？」
「御前は昨日の昼はチキンバーグを食べたな」
「それとマッシュポテトにチシャサラダ、それにクスクスをね」
「そこに答えはあるのだ」
テンボの自称灰色の脳味噌が語る。
「そこにな」
「昨日のお昼から？」
「何度も言うが御前はシーフードが好きだ」
またこのことを言う。
「だからだ。昨日は昼にはシーフードを全く食べていないな」
「確かにね」
「ならば。今日だ」
断言であった。
「今日。御前はシーフードを食べた筈だ」
「それはまたどうして？」
「昨日食べていないからこそ食べたくなる」
また言ってきた。
「そういうものだ。人間の心理としてな」
「だから僕がイカ墨のスパゲティを食べたっていうんだね」
「しかもだ」
キラリと目を光らせるテンボだった。
「おれはそいじょそこいらにいるような凡百の探偵でもない」
「あたしもね」
ジャッキーもついでに主張してきた。
「あたしも天才なんだからね」
「そう。だからわかる」

「だからわかるって」
「何が何だか」
「確かにまともな探偵じゃないけれどね」
「悪い意味でね」
後ろから皆が突っ込みを入れるがそれが耳に入る二人ではない。
残念なことに。
「それだけで充分だ。ベッカ、御前は今日のお昼はスパゲティネーロだったな」
「残念だけれど違うよ」
「何っ！？」
「確かに僕はそのスパゲティは好きだけれどさ」
「それ見ろ」
「だからといって今日それは食べないよ」
「何故だ」
少し身勝手に問い返すテンボだった。
「食べた筈ではないのか」
「だってそれ食べたのおとついだよ」
こう答えるベッカであった。
「イカ墨はね」
「何だと！？嘘だ」
「嘘じゃないよ」
驚くテンボに対してまた言葉を返す。
「大体嘘をついて何になるんだよ」
「捜査を撹乱させる為に決まっている」
また名探偵としての言葉を口にするテンボだった。少なくとも自分ではそう確信している彼なのだ。そう、彼だけが確信していることなのだ。
「嘘も工作もな」
「嘘つく必要なんてないじゃない」
また言うベッカだった。

「今回は。そうじゃないの？」
「何故そう言える」
「だってたかだか僕の今日のお昼御飯のことじゃない」
彼は言った。
「それでどうして嘘なんかつく必要があるの？」
「俺の推理は完璧だ」
勝手にそう思っている言葉である。
「それを否定する為だ。違うのか」
「全然違うし」
ベッカはそれを完全に否定した。
「だから。たかだかお昼御飯じゃない」
「たかだかだというのか。お昼が」
「そうじゃないの？」
「お昼はこの世で絶対のもの」
勝手にそう思っているテンボであった。
「それを否定するということなぞ到底考えられハしない。違うのか」
「いや、違わないし」
また言うベッカである。

第百九話　いきなり殺人事件その四

「そりゃ食べないと死ぬけれどね。何もそこまで力瘤入れてムキになる必要もないじゃない」
「御前は何もわかってはいない」
テンボは自分が何を言っているのかをわかっていなかった。
「お昼に何を食べたのかでそいつの全てがわかる」
「そうなんだ」
「黒は謀略の色」
勝手に断定している。
「そして暗黒の色だ」
「黒が黒いのは当たり前だろ？」
「また訳のわからないこと言って」
主張する皆のテンボの後ろでまた皆が呆れている。
「自分が何言ってるかわかってないな」
「全然進歩しないんだから」
「俺にはわかる」
「何が？」
またまたテンボに突っ込みを入れるベッカであるが突っ込まれた本人には当然ながら何の自覚もない。突っ込まれているのではなく自分の名推理に感動していると認識しているのだ。
「御前は今日落ち込んでいる」
「何でそう思えるの？」
「イカ墨のスパゲティを食べたからだ」
まだこのことを言っている。
「だからこそだ」
「イカ墨を食べたから落ち込んでいるんだ」
「御前はカーニバルスのファンだったな」
「うん」

このことはそのまま認める。連合のプロ野球チームの一つだ。連合全体でそれこそ全部覚えるのが困難なだけのプロ野球組織がありそして無数のチームが存在するがカーニバルスはその中の一つのチームなのである。ベッカの祖国のチームなのである。
「それがどうかしたの？」
「最近カーニバルスは不調だ」
「よく知ってるね」
「謎は既に全て解かれている」
今日だけで何度目かの根拠のない断言であった。
「そう、カーニバルスは昨日負けた」
「勝ったけれど」
この根拠はベッカの発言であっさりと覆された。
「昨日はね。それに調子は最近は上向いているよ」
「何っ、そんな筈がない」
「だって事実だし」
またそれを否定するベッカだった。
「それはさ。事実だよ」
「事実のわけがない」
何故か事実が目に入らないテンボであった。
「俺は昨日のニュースをはっきりと見たのだからな」
「昨日って今日のじゃないのかよ」
「また滅茶苦茶ね」
皆今のテンボの台詞にまたしても呆れてしまった。
「今日のじゃないと駄目だろうに」
「何言ってるのよ」
「そう、カーニバルスは敗れていた」
「だから昨日は勝ったけれど」
ベッカはあくまでテンボに対して言い返す。
「それ。わかって欲しいなあ」
「では一体何だ？」

言葉がさらに矛盾していくテンボだった。自分で自分が何を言っているのかはわかっていないがそれに気付くことは一生ない。
「御前が昨日食べたものは」
「ざる蕎麦だよ」
最大の謎がナチュラルに解かれた。
「食べたのは」
「嘘だ、それは」
「嘘だって。実際に食べたし」
「何故ざる蕎麦なんだ！？」
しかも怒りだす始末であった。
「ざる蕎麦を食べた理由は何なのだ」
「いや、食べたかったから」
実に単純明快な理由であった。

第百九話　いきなり殺人事件その五

「だからだったんだけれど」
「食べるのに理由が必要なの？」
「あるだろう。何らかの根拠が」
「じゃあ好きだし食べたかったから」
それ以外には理由がないというのがベッカの主張だった。
「だからなんだけれど」
「うぬぬ・・・・・・」
「ついでに言うと黒いざる蕎麦じゃないよ」
このことも言うベッカだった。
「赤いざる蕎麦を食べたよ」
「赤！？よし、また一つわかったぞ」
「また一つわかったって？」
「そうだ」
また言い出すのだった。やはりそれがどうしてなのかはテンボ自身にしかわからない。もっとも彼自身もわかっているのかどうか甚だ疑問であるが。
「御前はもうすぐ事件に出会うことになる」
「事件って？」
「殺人事件だ」
また随分と剣呑な話になってきた。
「それに出会うことになるぞ」
「何でそう言えるの？」
「俺は天才だ」
「それはいいから」
もう彼の主張は聞かないことにしていた。
「とにかく。殺人事件って？」
「世界は犯罪で溢れかえっている」

「そうなのよ」
さっき推理の大間違いを指摘されたジャッキーは全く落ち込むことはなく話に加わってきた。その不死身さだけは見事なものがある。
「だからあたし達がいるのよ。わかる？」
「お巡りさんじゃないんだ」
「国家権力はいざという時には全くの無力よ」
「その通りだ」
テンボも同じ考えであった。
「だからこそ。謎を解いていくのよ」
「犯罪。それはドラマだ」
今度のテンボはかつてシェークスピアの舞台俳優だった耳の聞こえない探偵に鳴っていた。少なくともそのつもりではある。
「その中でも殺人は。最大のドラマだ」
「ドラマなんだ」
「人生をかけたな。そこにあるものは劇だ」
「ドラマと劇は一緒じゃないのか？」
「また言葉が無茶苦茶してきたわね」
皆は呆れた声を出す。またしても。
「だからだ。御前は殺人事件に出会うことになる」
「話がわからないけれど」
「最後になればわかる」
自分だけは自分自身を名探偵だと確信しているテンボだった。
「最後にな」
「わかるとは思えないけれど」
「俺にわからないことはない」
それでも言うテンボであった。
「それはわかっておくことだな」
「期待しないで待っておくよ」
これでとりあえずお昼御飯の推理やら殺人事件の話も終わったのだ。話が終わってから暫く経って。ベッカが街を歩いていると道で

人が死んでいた。
「・・・・・何、これ」
「だから。死体でしょ」
丁度彼とデートをしていたペリーヌが言う。
「うつ伏せになって息をしていないから」
「じゃあひょっとしてこれって」
「殺人事件よね、やっぱり」
言葉は冷静なものだったが態度は違っていた。二人共かなりあたふたしだしている。

第百九話　いきなり殺人事件その六

「どうしようかしら」
「どうしようって警察に通報しないと」
ベッカは慌てて携帯を取り出す。そこから警察に通報するつもりだ。しかし。
ここで慌てるあまり碌でもない人間にかけてしまった。それは。
「あっ、警察ですね」
「んっ！？」
「大変なんです、殺人事件です」
「その声はベッカね！」
明るい女の子の声だった。
「やっぱり起こったのね！テンボの推理が当たったわ！」
「えっ！？」
「この声ってまさか」
ベッカだけでなくペリーヌも電話の向こうの声が誰のものかすぐにわかった。
「ジャッキーだよね」
「残念だけれどそうね」
二人はうんざりとした顔で言い合うしかなかった。
「間違えて大変な奴に電話しちゃったよ」
「あんた何やってるのよ」
「参ったな、こりゃ」
「場所は何処なの！？それで」
もう電話の向こうのジャッキーはやる気満々であった。忌まわしいことに。
「すぐにテンボにも連絡するから。名探偵二人の大活躍のはじまりよ」
「どうしよう」

「もう手遅れよ」
ペリーヌはうんざりとした顔で述べた。
「ここまでいったらやっぱり」
「そうなんだ、もう」
「やってしまったことは仕方ないしね」
「この人に悪いことしたなあ」
申し訳ない顔でその死んでいる人を見る。
「変な騒動にしちゃって」
「そうね。それにしても」
ここでペリーヌはまた言った。
「この人何で死んでるのかしら」
「事故かな」
「外傷はないみたいだけれど」
「けれど血があるよ」
見ればそれが血溜りになっている。かなり陰惨な光景である。
「ってことはやっぱり」
「あの二人はどう判断するかしら」
「それはもう決まってるよ」
ベッカの言葉がまたうんざりとしたものになった。
「あの二人がこういうのを見て言うことって言ったらやっぱり」
「あれね」
「そう、あれ」
こうペリーヌに返す。
「あれしかないよ」
「殺人事件ね」
推理ものの定番である。というよりは推理ものでの事件というとかなりの高確率で殺人事件だ。だから学園を舞台にした推理ものだとそれこそ学校の至る所で殺人事件が起こってしまう。とんでもない学校になってしまうのである。
「それしかないわね」

「多分あまり考えずに結論を下していると思うけれど」
「あっ、それは違うよ」
ベッカはペリーヌに対して言った。
「それはね」
「じゃあ何なの？」
「全然だよ」
こう答えた。
「全然考えずにそう確信しているよ。絶対にね」
「やっぱりそうなるのね」
「残念だけれど」
これからのことにうんざりとしつつ話す二人だった。話さないのは死んでいる人だけである。まさに死人に口なしの状況であった。

いきなり殺人事件　　完

２００８・１０・１５

第百十話　トンデモ推理その一

トンデモ推理

電話してからあっという間によりによって二人共やって来た。大昔の漫画の黄金聖闘士もとかくという程のとんでもない速さであった。

「相変わらず無駄に速いわね」

「無駄なんだ」

「世の中ってあれよ」

ペリーヌは大いにうんざりとした顔で事故現場にかっ飛んで来る二人を見ながらベッカに語るのだった。本当に嫌そうな顔をしているのが印象的だ。

「来て欲しい人は中々来ないでね」

「うん」

「余計な人間は来るのよ。しかも凄い速さで」

「そういうものなんだ」

「人間だけに限らないけれどね」

幸福が訪れるのは遅く、不幸が訪れるのは速いということである。悲観的な哲学的思考であると言える。しかし時として実際にそうなのは紛れもない事実だ。

「何でもそうだけれど」

「じゃああの二人は？」

「言わなくてもわかるじゃない」

「確かに」

「あんたが間違えて電話したってことは」

答えはここにあった。

「つまり。来て欲しくなかったってことね」

「どうしてもね。あの二人だけは」

「警察は呼んだの？」

「今呼ぶ？」
「手遅れだけれどそうした方がいいわね」
冷めた言葉であった。
「やっぱり」
「そうだね。それじゃあ」
ペリーヌの言葉に頷いてまた携帯を取り出すベッカであった。そしてすぐにその携帯で警察の電話番号を今度は慎重に入力して電話するのだった。
「はい、そういうことで。場所はですね」
電話の向こうから落ち着いた、かつ礼儀正しい声が聴こえてくる。
「そこです。じゃあ宜しく御願いします」
『わかりました』
こうして警察への連絡は終わった。しかし話はこれで終わりというわけにはいかなかった。むしろこれは完全に焼け石に水であった。
「一応したけれど」
「来たわよ」
当然来ているのは警察ではない。
「運動神経と体力だけは凄いんだから」
「探偵より運動選手に向いてる？」
ペリーヌもベッカももう目の前にやって来た二人を見て言う。
「ひょっとして」
「そっちも無理ね」
「無理なんだ」
「だってどちらも頭があれだから」
ペリーヌがそれを無理だと言う根拠はここにあった。
「だから無理よ」
「頭が悪いと駄目なんだ、スポーツ選手って」
「ガムシャラにやるだけじゃ駄目なのよ」
「ちゃんと考えてってこと？」
「そういうことよ」

ペリーヌの言うことはまさにこれであった。
「ちゃんとね。ほら、タムタムがそうじゃない」
「確かに」
クラスメイトを出されるとすぐにわかったベッカだった。
「ああいう感じなんだ」
「フランツがあんなのになのに上手くやっていけるのはね。タムタムがいるからじゃない」
「そうだよね。タムタムがいないフランツって」
「只の馬鹿よ」
はっきりと言い切るペリーヌであった。ここでも。
「それも天下無双のね」
「あの二人とどっちが凄いかな」
「残念だけれど甲乙付け難いわね」
つまり救いようがないということであった。
「三人共本当に壮絶だから」
「そういえばうちのクラスってさ」
「ええ」
「クラスの平均点かなり高いんだって？」
「そうよ」
実は成績優秀な面々が揃っている二年Ｓ１組である。個性派揃いだがやることはちゃんとやっているという一面もあるのである。

第百十話　トンデモ推理その二

「学園全体の高校二年生のクラスでもかなり上よ」
「そうらしいわね」
「ただし」
やはり凄いスピードでやって来る二人を見て言う。
「あの二人とフランツを入れているせいで」
「平均点がそれだけ落ちているんだ」
「残念なことにね」
これが現実であった。
「そうなのよ。どうしたものかしら」
「どうにかなると思う？」
「それは有り得ないわ」
そしてこれも現実であった。
「あの二人とフランツだけはね」
「残念だけれどそうだね」
「さて、来たわ」
そして遂にその二人が戦場に到着した。まるで生肉を目の前にした犬の様にその目をキラキラと輝かせていた。
その目で死体を見つつ。ベッカとペリーヌに対して言ってきた。
「殺人事件だな！？」
「そうよね」
「まだそう決まったわけじゃないけれど」
「いや、そうだ」
「そうに決まってるわよ」
やはり人の話を聞かない二人であった。
「見ろ、この血溜まり」
「これが何よりの証拠よ」
「血だけでそう思うの？」

「勘よ」
ジャッキーが前のお昼御飯でのことを奇麗さっぱり忘れて言い切ってきた。彼女の灰色か何かわからない頭脳には反省や過去を振り返るということはインプットされてはいない。
「勘でわかったわ」
「勘なんだ」
「あたしの勘に狂いはないわ」
しかも断言さえする。
「これは殺人事件よ。それしかないわ」
「これは通り魔じゃない」
今度はテンボが言う。
「俺の灰色の脳細胞がそれを教えている」
「灰色ねえ」
ペリーヌが今のテンボの言葉に甚だ懐疑的な目を向けていた。
「本当に灰色なの？」
「純粋な灰色だ」
また奇妙な言葉であった。
「俺の頭脳はな。クリーングレーだ」
「灰色って中間色だよね」
「それそのものよ」
ペリーヌは今度はベッカの問いに答えた。
「灰色議員とか灰色の疑惑っていう言葉もあるじゃない」
「どう考えてもさ。純粋とかクリーンとかそういうのとは全く無縁だよね」
「普通はね。ただ」
「この二人はねえ」
「全然普通じゃないから」
「これは絞殺か」
二人の話をよそにテンボはこう推理を立てていた。
「間違いないな、これは」

「そうね」
そしてジャッキーも彼のこの言葉に頷く。
「それしかないわ」
「何でそう思えるの？」
「だから言ってるだろう？いつも」
テンボはベッカの問いに己の頭を誇らしげに右の人差し指で叩いてみせる。不思議とこういう仕草をする人間にあまり賢い人間はいないが。
「俺のこれが推理しているんだよ、そうな」
「その灰色の頭脳がなんだね」
「クリーングレーのこの頭脳がな」
断言さえしてみせる。
「教えている、そうな」
「それでどうやって絞殺したの？」
「紐だ」
何故かまだ何もわかっていないのに紐でのことだと言う。

第百十話　トンデモ推理その三

「紐で殺している、これはな」
「そうなのかしら」
「どうしてわかったの？」
「何度も言うようにだ」
またしても誇らしげに己の頭を指で指し示してベッカの問いに応えるテンボだった。どうやら自分ではその仕草が気に入っているらしい。
「俺のこの灰色の脳細胞がだ」
「教えているの？」
「その通りだ」
そしてまたしても自信に満ちた言葉を出した。
「この俺にわからないことはない」
「だから紐を使ったんだ」
「しかもまだらの紐だ」
変に推理ものの読み過ぎでもある。
「それはこの辺りにある筈だ」
「この辺りって」
ペリーヌは周囲を見回す。しかし今周りには彼等の他には誰もおらずそのうえ落葉もない。ものが見えないような状況ではない。木の上にもそうしたものはかかっていない。
「何もなさそうだけれど」
「凡人にはわかる筈がない」
「凡人？」
「ペリーヌは確かに値切りの達人だ」
テンボもそれはよく知っている。
「しかしだ。推理にかけては俺は天才だ」
「本当に自分のことがわかってないんだね」

「だからそれで有名でしょ」
誇らしげなテンボの宣言を聞きながらベッカとペリーヌはまたひそひそと話をする。普通の人間なら聞こえるところだが彼は自分にとって都合のいいことしか聞こえないので大丈夫だった。
「天才って字が違うんじゃ」
「天災よ、天災」
「だからわかる。紐はすぐ側にある」
「そうよ。あたしにもわかったわ」
今度はジャッキーまで加わってきた。
「あたしの目は誤魔化せないわよ」
「じゃあ何処にあるのよ」
ペリーヌが冷めた目でジャッキーに問うた。
「この辺りにあるの？」
「それも近くね」
当然ジャッキーも自分にとって都合のいいことしかインプットされないのでペリーヌの視線には気付いていない。この辺り実に幸せだ。
「あるわ」
「じゃあ何処なの？」
「そうね。それは」
「おや？」
ジャッキーが何か言おうとしたところでたまたまそこを犬を散歩に連れているおじさんが通り掛った。その辺りにいるようなおじさんで連れている犬も普通の秋田犬だった。クリーム色の毛をしていて舌を出してへっ、へっ、とやっている。当然紐でつながれている。
「真壁さん、どうしたんですか」
「むっ」
「これねっ」
そのおじさんが通り掛ったところでテンボとジャッキーの目が光った。

「見つけたぞ！謎は全てとけた！」
「迂闊だったわね！」
そしておじさんに対して叫んできた。
「犯人はあんただ！」
「あたし達をみくびったのが運の尽きね！」
「えっ！？」
二人にいきなり言われたおじさんは目を剥くばかりだった。
「いきなり何だ？君達は」
「しらばっくれるな！既に全部わかっているんだ！」
「あんたはあれね！事件現場を調べに来たのね！」
「事件現場！？一体何が何だか」
「だから誤魔化しても無駄だ！」
「誤魔化しは無駄よ！」
二人はおじさんの話を全く聞いていない。
「犯人は御前だ！」
「その紐が何よりの証拠よ！」
「紐！？」
「紐って！？」
ベッカとペリーヌはその紐という言葉に注目した。
「まさかその紐は」
「あっ、確かに」
犬をつなぐ紐だ。見れば確かにまだらだ。
「凄い偶然だね」
「まだらの紐って」
「あんたはあれだな。その紐で被害者を殺害したんだ！」
テンボの断言という名前の勝手な推理は続いていた。

第百十話　トンデモ推理その四

「動機は私怨だ！」
「よくもやってくれたわね！」
ジャッキーもおじさんを責める。
「逆恨みで。近所の人を！」
「近所の人って」
おじさんは戸惑いながらも二人に応える。
「確かに真壁さんはお隣さんだけれど」
「ほら見ろ！」
「やっぱりそうじゃない！」
二人はここぞとばかりにまた言う。
「あんたはお隣とトラブルを起こしていたんだ！」
「公金横領でね！」
話がかなり飛んできた。
「それを密告しようとする被害者を！」
「何て卑劣な！」
「ちょっと待ってくれ！」
二人に言われ放題でおじさんは遂に切れた。
「私が犯人だというのか！」
「その紐が何よりの証拠！」
「そうよ！」
しかし二人も引かない。というかおじさんの話を全く聞いてはいない。もっと言えばおじさんの言葉が耳に入りはしないのである。
「しらばっくれるな！」
「観念しなさい！」
「いい加減にしろ！」
見も知らぬ相手に好き放題言われておじさんはさらに怒る。
「だからどうして私がこの真壁さんを殺さないといけないんだ！」

「だから動機は公金横領だ！」
「それを告発しようとするこの人を殺ったのよ！」
何時の間にか密告が告発になっているが二人の中ではそのようなことは実に些細な違いでしかないので覚えてもいない。覚えることは有り得ない。
「この極悪人が！」
「さあ、腹をくくりなさい！」
「ねえベッカ」
騒ぐ二人を見ながらペリーヌはベッカに声をかけてきた。
「どう思う？」
「どう思うって？」
「あの人が犯人だと思う？」
実に冷めた目で騒ぎを聞きながらベッカに問うのであった。
「あのおじさんが。どう？」
「絶対に犯人じゃないね」
ベッカは極めて落ち着いた様子でペリーヌのその問いに答えた。
「今たまたま通り掛かったって感じだね」
「普通はそう思うわよね」
ペリーヌは言う。
「どう見てもね」
「僕もそうだよ」
当然ベッカもそれは同じであった。
「それを何であんなに」
「そもそも絞殺かしら」
この前提からして意味不明であった。
「この人。首はよく見えないけれど」
「そうだよね・・・・・んっ！？」
ベッカは死体を見ていたがここでふと声をあげた。
「あれっ、何かおかしいよ」
「おかしいって何が？」

「ほら、見てよ」
ペリーヌに対して死体を指差した。
「この死体。何か」
「あれっ、今動いたわよね」
「うん、動いたよ」
それまで動くことのなかった指がピクリ、と動いたのである。
「ほら。それに」
「また動いたわね」
言う側からまた動きだした。
「ってことは」
「生きてるのかしら」
「ううう・・・・・・」
今度は声が聞こえてきた。
「何の騒ぎなんだ？一体」
「喋ったよね」
「確かに聞いたよ」
二人は今衝撃の現場に立ち合っていた。少なくとも殺人事件が消え去ってしまった衝撃の瞬間であった。

第百十話　トンデモ推理その五

「生きてるわね、確実に」
「しかも元気そうだし」
「あれ、若本さん」
その生きていた人真壁さんは起き上がって二人と騒ぎ続けているおじさんに声をかけてきた。どうやらこのおじさんの姓は若本さんというらしい。
「何の騒ぎですか？」
「何の騒ぎですかって・・・・・生きているんですか」
「生きているも何も」
真壁さんは首を傾げつつ若本さんに言う。
「死んだ覚えはありませんが」
「そうですか」
「ちょっと待て、何で生きているんだ！」
「聞いてないわよ！」
そして例の二人が騒ぎだす。
「今まで死んでいたんじゃないのか！？」
「それでどうして」
「だから。死んだ覚えなんてないんだよ」
真壁さんは二人を何を言っているんだ、といった顔で見つつ述べた。
「ただ薬を飲んでいただけで」
「薬！？」
「ああ、零しちゃったな」
赤い血溜りを見て言う。
「勿体無いことしたな」
「それ血じゃないんですか」
「お薬だよ」

こうベッカにも答える。
「飲み薬なんだ」
「そうだったんですか」
「最近身体が疲れていてね」
言いながらけだるい顔を見せる。
「それで買ったんだけれどね、小さな女の子から」
「小さな女の子って」
「まさか」
ここでペリーヌもベッカも一人の女の子を思い出した。
「あの、すいません」
「ちょっといいですか？」
「はい？」
真壁さんは二人の問いに応えてきた。
「何でしょうか」
「つかぬことをお伺いしますけれど」
「その赤い薬は」
尋ねるのは当然その薬のことだった。二人にとって心当たりがあるどころではなかった。
「誰から買ったんですか？」
「小柄な女の子っていいますけれど」
「はい。この人です」
こう言って真壁さんが名刺を出したそこにあった名前は。二人の予想通りだった。
「やっぱり」
「アンジェレッタ・・・・・」
アンジェレッタの名前が堂々とあったのだった。
「話を聞いてまさかと思ったけれど」
「予想通りだったね」
「身体の疲れが一発でぶっ飛ぶって聞いて買ったんだよ」
「そうだったんですか」

「何でもすっぽんやまむしの生き血を集めて作った特製ドリンクらしくて」
話を少し聞いただけで洒落にならない薬なのがわかる。少なくとも疲労回復どころではない。劇薬に達するレベルにあるものだった。
「それでそれを飲んだら」
「それで倒れたんですか？」
「いやあ、効き過ぎてね」
真壁さんは首を捻って答えた。
「倒れちゃったよ。一瞬ね」
「昏倒ってわけですね」
「うん。けれど効いているのは確かだよ」
顔が見る見るうちに明るくなっていた。しかも赤みがさしてきている。

第百十話　トンデモ推理その六

「寿命が十年は延びた感じがするね」
「どんな薬なのよ」
「アンジェレッタって一体」
「よし、もう大丈夫だ」
真壁さんは明るい顔で言う。
「家に帰るか。ところで若本さん」
「はい」
「どうですか？夜に」
右手を口元でくい、とやって飲む動作をする。
「軽く」
「おお、いいですなあ」
若本さんも笑顔で真壁さんの言葉に乗る。
「それでは夜に」
「ええ、そういうことで」
二人の話はこれで終わり真壁さんは笑顔でその場を後にする。死体が動いてその場を後にするという衝撃の結末であった。
「さて、と」
容疑者もここで口を開いた。
「何かよくわからないけれど私も帰るか」
「よくわからない！？」
「嘘よ」
テンボとジャッキーはまだ自分達に何が起こったのか把握しきれていなかった。
「何でこんなに早く終わるんだよ」
「っていうか殺人事件でもなかったし」
「そもそもねえ」
ペリーヌが呆れた顔でそんな二人を見て言う。

「何であんな短時間で殺人事件って断定できるのよ」
「相変わらず出鱈目だったね」
ベッカもペリーヌの言葉に同意して言う。
「流れも何もかもが」
「全く。まあ何はともあれ」
「うん」
「話は終わったわね」
「そうね」
これだけは確かに言えることであった。
「結局誰も死んでいなかったってことで」
「そもそもまだらの紐って」
ただし紐のことは言われた。
「何だったの？」
「シャーロック＝ホームズじゃないの？」
ペリーヌは最早伝説的な探偵となっているある人物の名前を出してきた。連合においては勝手にロンドンを出て連合各地で活躍するようになっている。実に滅茶苦茶な話だ。
「まだらの紐」
「ああ、あの小説」
ベッカもそれを効いて納得した。
「あの小説だったんだ」
「推理小説だけは読んでるからね」
それしか読んでいないと言ってもいい。
「あの二人って」
「それで出て来たんだ」
「そういうことでしょうね。つまりあてずっぽうね」
現実はこれであった。
「全く。いつもながら」
「どんな頭の構造しているのよ」
「これは敗北ではない！」

「そうよ！」
しかし二人は勝手にこういうことにしていた。
「撤退しただけだ！」
「名誉の撤退よ！」
二人だけがこう言っていた。
「ただそれだけのことだ！」
「何でもないわよ！」
「こんなこと言ってるよ」
ベッカがペリーヌに対して言う。
「まだ」
「往生際が悪いわねえ」
ペリーヌもかなり呆れている。
「大体いつものことなのに」
「そうだよね。確かに」
「いつも思うけれどあれだよね」
また言うベッカであった。

第百十話　トンデモ推理その七

「この二人諦めるってことを全然知らないよね」
「ええ。どうしたものかしら」
「まあとにかくね」
彼はここでまた言った。
「話は終わったね」
「そうね。死んだ人も生き返ったし」
それだけでもかなり凄い話だが二人はもう別にどうでもいいと思っていた。
「何処に行く？」
「とりあえずアンジェレッタのところに行かない？」
ペリーヌはこうベッカに提案してきた。
「騒動の元が気になるし」
「ああ、このお薬ね」
「そうよ。血よ」
血だった。今も道路に残っていたかなり目立っている。
「この血。本当に血だけだと思う？」
「多分じゃなくて全然違うね」
ベッカはこう見ていた。
「そうじゃなきゃ飲んでぶっ倒れるなんてことないよ」
「強精ドリンクよね」
「そうなるね」
それはわかる。
「けれど。何なのかなあ」
「何が入っているのかしら」
「あの、すいません」
ここでベッカはまだこの場にいた真壁さんに話を聞くことにした。
見れば真壁さんは若本さんと陽気に世間話に興じていた。テンボ達

は無視している。
「つかぬことをお伺いしますが」
「何かな」
「このお薬ですけれど」
「うん。僕が飲んで倒れたあれだよね」
「それです。何処で売ってたんですか？」
「道でね」
ベッカ達はそれを聞いて路上売りかと予想した。
「売ってたんだよ」
「道でですか」
「そう。そこを先に行ってね」
そのうえで真壁さんから見て右手を指し示す。
「角を右に曲がったところにいたんだよ」
「今もですか」
「丁度さっき買ったばかりでね」
これは二人にとってはまたまた意外なことだった。
「それで飲んだんだけれどね」
「それで一気にですか」
「うん。こっちも驚いているんだよ」
首を傾げて二人に語る。
「ちょっと飲んで卒倒するんだからねえ。けれどちょっと飲んだだけでね」
「元気ですか」
「本当に寿命が延びた感じだよ」
血色のいい顔でまた二人に言う。
「十八歳になった気分だね」
「おや、それでは真壁さん」
若本さんは今の真壁さんの話を聞いて笑顔になった。
「今日は飲むよりも家におられてはどうですか？」
「家にですか」

「ええ。奥さんと二人で」
若本さんの顔が少しにやけた嫌らしいものになった。
「どうですか？それも」
「そうですな。考えてみれば」
真壁さんも笑顔でそれに乗ってきた。
「それもいいですな」
「そうでしょう。たまにはそれもね」
「はい。それでは」
「何か話が変な方向にいってない？」
「まあそれはね」
ベッカとペリーヌも今は話を静かに見ているだけだった。

第百十話　トンデモ推理その八

「ある程度は仕方ないわよ」
「夫婦のことは放っておくしかないってことなんだ」
「そういうことよ。まあ」
また言うペリーヌだった。
「話は終わりね。後は」
「アンジェレッタだね」
「あの娘もねえ」
ここで腕を組んで溜息を出すペリーヌだった。
「ややこしいからねえ」
「そもそもアンジェレッタって薬の調合の資格あるの？」
「さあ・・・・・・っていうかね」
「うん」
ペリーヌはさらに言う。
「私達高校生じゃない」
「それがどうかしたの？」
「そこよ」
さながらワインが葡萄から作られるのと同じ位当たり前なことだったのであえて言わないことだが彼等は高校生なのである。
「高校生じゃない」
「あっ、ということは」
ベッカもここで気付いた。
「薬剤師の資格なんてね」
「ないよね」
「そう、絶対にね」
特別な資格が必要なのはこの時代でも同じだ。そうそう簡単には薬剤師にはなれないのだ。待遇はこの時代では医者と同じ位になっている。

「だからこれって」
「まずいよね」
「ちょっとアンジェレッタのところに行きましょう」
眉を顰めさせてベッカに提案した。
「まだいるかも知れないしね」
「そうだね。ああ、そういえば」
「何？」
行こうとしたところでベッカの言葉に動きを止めて振り向く。
「何かあるの？」
「いや、この二人だけれど」
ベッカが指差したのはテンボとジャッキーだった。この二人もまだいたのだ。
「どうしよう」
「放っておいてもいいじゃない」
ペリーヌの言葉は実に冷めたものだった。ここでも。
「もうこの二人の役目終わったしね」
「あれが役目だったんだ」
出て来て騒ぐだけ。それだけだった。
「あれが」
「推理が当たると思ってたの？」
「ううん」
今のペリーヌの言葉には首を横に振る。
「まさか。当たる筈がないじゃない」
「当たったらそれこそ天変地異よ」
これが皆の二人への正当な評価であった。二人以外は皆そう思っているのだが気付いていないのは当の二人だけという実に愉快な状況である。
「大体まだらの紐ってねえ」
「無茶苦茶な出方だったよね」
「そうよ。それじゃあ」

ここでペリーヌは話を戻してきた。
「行きましょう。アンジェレッタのところにね」
「うん」
「俺は天才だ！俺の手によって連合の推理は生まれ変わるのだ！」
「お爺ちゃんの名にかけて！犯人を発明してやるわ！」
二人は相変わらず訳のわからないことを言い続けている。少なくとも謎の殺人事件は無事終わったのだった。とりあえず死人は出ないまま。一件落着となったのであった。

トンデモ推理　　完

２００８・１０・２１

第百十一話　ポケットの中の薬その一

ポケットの中の薬

ペリーヌとベッカは真壁さんの言う通り角を曲がった。すすろそこには椅子に座り道路の端に青いビニールの敷物を敷きその上に多くの薬を置いているアンジェレッタがいた。

「あれ、あんた達」

アンジェレッタは二人に気付き顔を向けてきた。

「どうしたの？こんな所で」

「どうしたもこうしたもないわよ」

「アンジェレッタ、君のお薬だけれどね」

「ええ」

二人の咎めるような声に目を少しぱちくりさせながら応える。

「とんでもないわよ」

「あの血のお薬はね」

「ああ、あれね」

アンジェレッタもそれが何の薬であるのかわかっているようだった。

「あの精力ドリンクね」

「さっきおじさんに売ったわよね」

「うん」

ペリーヌの言葉にこくりと頷いて返す。

「そうだけれど？」

「それよ、それで大変なことになってたのよ」

「飲んだおじさんが倒れてね」

「そうでしょうね」

何とそれを言われても全く驚いたところのないアンジェレッタだった。

「あれを飲めばね。そうなるわよ」

「わかってたの？」
「あれ本当に色々なものが入ってるからね」
本人の弁である。
「血だけじゃなくて大蒜とか朝鮮人参とかね。あと本当に色々と」
「飲んだら倒れるようなものになってるのね」
「それちゃんと書いてあるけれど？」
今度はこう言うアンジェレッタだった。
「飲むとあまりの強さに卒倒するけれど命に別状はないってね」
「書いてあるの」
「当たり前でしょ。お薬よ」
この点を強調するアンジェレッタだった。
「毒じゃないから」
「あんただったら毒でも売ってそうだし」
「僕もそう思うよ」
二人のここでの見方は多分に偏見だった。
「けれどお薬なのね」
「それでも随分きついお薬なんだね」
「けれどそれだけ効果はあるわよ」
この点はしっかりと保障するアンジェレッタだった。
「それでおじさんどう？元気でしょ」
「元気っていうか寿命が延びたって言ってるし」
「相当凄いお薬なんだね」
「よかったらあんた達もどう？」
自分の前にあるその見事な血の色の瓶を二本手に取って差し出してきた。
「一本十五テラだけれど」
「高いわね」
守銭奴のペリーヌが値段を聞いてまず顔を顰めさせた。
「随分」
「そう？安いわよ」

しかしアンジェレッタはそのクレームに対して平然と返した。
「普通のスタミナドリンクとは違うんだしね」
「そんなに違うの」
「あの一番効くって言われてるあれ」
アンジェレッタは笑顔と共に語る。
「ほら、皇帝液」
「あれね」
「あれと同じじゃない」
「あっ、そういえばそうだね」
ベッカもそれに気付いた。
「値段は同じだよね」
「やっぱり高いじゃない」
ペリーヌの視点はあくまで値段にあった。
「スタミナドリンクにしては」
「まあそれはね」
ベッカもそれには頷く。やはり彼も守銭奴なのだから。
「その通りだけれどね」
「極論すれば牛乳で充分じゃない」
「それはまた極論じゃないの？」
今度はアンジェレッタが目を顰めさせた。

第百十一話　ポケットの中の薬その二

「牛乳で充分って」
「コンデンスミルクがあるじゃない」
ペリーヌが今度出したのはこれだった。
「栄養はかなりのものよ」
「それはそうだけれど甘いわね」
「甘いの」
「そう、甘いわ」
こうペリーヌに返すのだった。
「全然ね。あの黄金の蜂蜜よりもね」
「あの蜂蜜？」
「そう、究極の蜂蜜」
何故かここでアンジェレッタの顔が誇らしげな笑みになってきた。
「それよりもね。甘いわね」
「そうかしら」
「甘いわよ。ああ、勿論」
またアンジェレッタが言ってきた。
「その蜂蜜もこのドリンクに入ってるからね。安心して」
「それも入れてるの」
「そうよ。何しろ特製ドリンクだから」
その小さな胸を思いきり反り返させている。
「凄いのが一杯入っているのよ」
「で、それを飲めば十年寿命が延びるの」
「そういうこと。たったの十五テラね」
「十五テラで寿命が十年」
ペリーヌはあらためて顔を少し上にあげ右の人差し指を唇に当てて考える顔になった。
「かなり安いかしら」

「安いわよ、かなり」
アンジェレッタもそれを言う。
「何なら買ってみる？お金なら貸すけれど」
「まからないの？」
「駄目よ」
こういうことには厳しいアンジェレッタだった。
「こっちもこのドリンクには出血サービスなんだから」
「ちぇっ、厳しいわね」
「厳しい？甘いわよ」
今度は違う意味での甘さだった。
「十年が十五テラよ」
「ええ」
「それってかなり安いでしょ」
「そもそもね」
しかしペリーヌも負けてはいなかった。
「これ誰が作ったの？」
「誰がって？」
「あんた高校生じゃない」
ここに来る前にベッカと話したことである。三人は同じクラスだ。これはもう三人の間では言うまでもないことなので今更といった感じだった。
「お薬とかドリンクの調合はできないでしょ」
「まあそれはね」
それは否定しないアンジェレッタだった。
「私が作ったものじゃないわ」
「幾ら何でもそれはなかったね」
ベッカはそれを聞いて少し安心した顔になった。
「よかったよかった」
「よくはないわよ」
しかしまだペリーヌは言うのだった。顔を曇らせて。

「問題は誰が作ったのかよ」
「ああ、それ」
「そうよ」
不機嫌な顔でベッカに返す。
「問題はこれを作ったのが誰かっていうことよ。アンジェレッタ」
「何？」
「何かじゃなくてね」
その不機嫌な顔でアンジェレッタに問う。
「これ誰が作ったのよ」
「ああ、それね」
「それねじゃなくてね」
あくまで素っ気無い彼女にまた言う。
「誰が作ったのよ、本当に」
「そうだよね。こんな凄いのを」
「一体。誰が」
「お家でだけれど」
アンジェレッタはここで何でもないといった調子で二人に答えた。

第百十一話　ポケットの中の薬その三

「それがどうかしたの？」
「お家でって？」
「だからうちお薬屋さんじゃない」
やはり平然とした言葉だった。
「だからなんだけれど」
「ってことはあんたのお父さんかお母さんが作ったのよ」
「そうだけれど」
「どっちがなの？」
「両方よ。うちの家お父さんもお母さんも薬剤師なのよ」
今わかった衝撃の事実だった。少なくともペリーヌとベッカにとってはそうであったが当のアンジェレッタにとっては別に何でもないことだった。
「知らなかったの？」
「知ってるわけないでしょ」
「そうだよ」
二人は速攻でそのアンジェレッタに突っ込みを入れた。
「そんなことまで」
「っていうかそうだったんだ」
「そうよ。それでお父さんとお母さんがね」
「調合したのね」
「長い時間かけてね。自信作なんだって」
にこにことしながら二人に説明する。
「だからさ。一本どう？」
「だから私はいいわよ」
「僕も」
勧められても買おうとはしない。
「別にね。今疲れてもいないし」

「そもそもそれって中年の人の為のものだよね」
「まあね」
このことも否定しなかった。
「仕事疲れのお父さんお母さんにっていうキャッチフレーズよ」
こうしたドリンクではお決まりのキャッチフレーズである。それを考えれば真壁さんに売ったのも至極妥当なことではあった。話の展開はともかくとして。
「うちの家の自信作よ」
「自信作はいいけれど」
「騒動になるじゃない」
二人はこうアンジェレッタにクレームをつけた。
「おかげで殺人事件だって騒ぎになったし」
「大変だったんだよ」
「殺人事件って？」
アンジェレッタにとってはこっちの方が思いも寄らないことだった。
「どうしたの？一体」
「ああ、実はさっきね」
「これ飲んだ人が卒倒したのは話したよね」
「ええ」
「それでベッカが警察呼ぼうとしたのよ」
ペリーヌは少しうんざりとした調子の顔を見せて話した。
「けれど間違えて」
「ジャッキー呼んじゃって」
「事件にジャッキー呼んだの？」
「だから間違えたんだって」
顔を顰めさせてきたアンジェレッタに対して言い訳する。
「知ってて呼ぶ筈ないじゃない」
「知ってて呼んだらそれこそ馬鹿じゃない」
アンジェレッタも容赦がない。

「間違えてでも酷いわよ」
「確かに僕が悪いけれど」
「それでさっきまで大変だったのよ」
ペリーヌもうんざりとした顔になっている。
「本当にね。もう」
「でしょうね。それでジャッキーだけ？」
「ジャッキーだけって？」
「テンボはどうしたの？」
この二人はセットである。だからアンジェレッタもここで彼の名前を出したのだ。もっとも出して縁起がよくなるような名前でもないのだが。
「来たの？どうなったの？」
「どう思うかしら、その辺りは」
「ジャッキーが呼んだのね」
アンジェレッタはこう予想してきた。

第百十一話　ポケットの中の薬その四

「そうじゃないの？」
「ええ、その通り」
「それでね。騒ぎが二乗になって」
またベッカがうんざりとした顔になっている。
「大変だったんだよ、本当に」
「そうだったの。そういえば遠くから騒ぎ声が聞こえると思ったわ」
「聞こえてたの？」
「あれだったのね」
アンジェレッタもアンジェレッタで納得していた。
「今やっとわかったわ」
「そういうことなのよ」
「それでここに来たんだ」
「それでここにって」
「あの二人が勝手に勘違いしたんだよ」
またベッカが説明する。
「おじさんが卒倒して零したドリンクを血と勘違いしてね」
「まあそれは私達も同じだったけれど」
ペリーヌも言ってきた。
「それでね」
「ええ」
「それを見て殺人事件だって大騒ぎして」
「それから咲はよくわかるわ」
アンジェレッタにもすぐに察しのつくことであった。
「どうせまた出鱈目な推理でもしたんでしょ」
「ああ、やっぱりわかるんだ」
ベッカの言葉が何よりの証拠だった。
「その通り。凄かったんだよ」

「やっぱりね。灰色の脳細胞やらフレンチ警部の緻密さやらを自称してでしょ」
「そうよ。まだらの紐って言い出して」
「まだらの紐!?」
ペリーヌのその言葉にまた目を顰めさせる。
「コナン＝ドイルの?シャーロック＝ホームズよね」
「そうよ。それが何故か出て来たのよ」
「話がわからないんだけれど?」
そう簡単に話がわかる筈がなかった。筋が通らないというか破天荒な方向に歪に曲がって戻る見込みがないのがテンボとジャッキーの推理だからだ。
「どういうことなの?まだらの紐って」
「だからね。それで殺されたって」
「ドリンクで!?」
「そうよ。話、わかるかしら」
「全然」
こう答えるしかなかった。
「っていうか紐だと絞殺よね」
「ええ」
普通はこう考える。
「で、ドリンクでどうして?血と間違えたの?」
「それはその通りよ」
これは正解だった。
「けれど。そこで」
「絞殺で血は出ないでしょ」
アンジェレッタもこれはわかる。
「普通は」
「だから普通はね」
ペリーヌはその普通という言葉に重点を置いて述べた。
「普通はそうよね」

「あの二人は普通じゃないけれどね」
「だからなのよ」
話はそこであった。
「だから。騒ぎだしたのよ」
「まだらの紐で絞殺って？」
「そういうことなの」
「相変わらず訳がわからないわね」
実際アンジェレッタは今の話をまだ殆ど理解していなかった。あまりにも辻褄が合わなくて何が何なのか整合がついていないのだ。
「矛盾しまくってるじゃない」
「そうでしょ」
「そもそもよ」
アンジェレッタはさらに言う。

第百十一話　ポケットの中の薬その五

「まだらの紐は何処から出て来たの？」
「さあ」
「さあって」
「本当に急に出て来たのよ」
その通りだから恐ろしい。
「話にね。急に」
「無茶苦茶ね」
「しかも偶然通り掛ったおじさんにね」
「おじさん？」
「犬の散歩をしていた近所のおじさん」
若本さんのことだ。本当に偶然通り掛っただけだ。
「その人がたまたまだらの紐を持っていてね」
「で、犯人だって騒ぎだしたのね」
「そういうこと。わかるのね」
「目に浮かぶようだわ」
実際にその光景が脳裏にありありと浮かんでいるアンジェレッタであった。こうしたことは不思議なまでによくわかるのであった。
「どういった場面かね」
「それで。そのおじさんと大騒ぎになって」
「怒ったでしょうね、おじさん」
「怒ったっていうかねえ」
今度はベッカが言う。
「驚いてたよ」
「そっちだったの」
「そう、だっていきなりだよ」
ベッカはその時を思い出しながらまた呆れていた。
「犯人だろ、って言われたんだから」

「有り得ない展開ね」
「だからさ。もう驚いてさ」
「それでどうやって事件が終ったの？」
「呆気なかったけれどね」
ベッカは言う。
「死体が起き上がってね」
「それはそうでしょ。あれ死ぬようなやつじゃないし」
売っている本人だから実によくわかることだった。
「効き過ぎるだけでね」
「それが問題じゃないの？」
ベッカは突っ込みを入れた。
「だから騒ぎになったんじゃ」
「あんなの来たら何があっても騒ぎになるんじゃないの？」
アンジェレッタの突っ込みは正論であった。
「あの二人それこそ針が落ちても事件にしてしまうんだし」
「そうなのよね。困ったことに」
そうなのだから始末が悪い。そんな二人なのだ。
「で、今回もそうだったのよ」
「いつものパターンね。それで事件はどうなったの？」
「だから死人が起き返ってね」
このことをまたアンジェレッタに話す。
「それで終わりよ」
「すぐに終ったのね」
「ええ、それはね」
このことはすぐに頷くことができた。
「騒ぎとは反比例してね」
「よかったじゃない」
「けれどそれでもね」
「そうだよね」
ここでペリーヌもベッカもうんざりとした顔になる。

「物凄い騒ぎだったから」
「もういつものテンションでね」
「そこも相変わらずなのね」
「相変わらずも相変わらずよ」
ペリーヌの今の言葉はかなり変な言葉だった。
「いつも通り。うんざりしたわ」
「やれやれね」
「全く。何であんなに推理を外しているのかしら」
「それだけじゃないしね」
またベッカが突っ込みを入れる。
「あの二人はね」
「そうなのよね。無駄に元気」
そこも問題なのであった。

第百十一話　ポケットの中の薬その六

「無意味なまでにね」
「じゃあこのスタミナドリンクはあの二人にはいらないわね」
「あげたらどうなると思う？」
「そりゃ決まってるじゃない」
あっけらかんとペリーヌに返す。
「もうパワーアップしてそれこそ」
「手がつけられないってやつね」
「最悪の展開よ」
こうまで言う。
「それこそね」
「そうね。じゃあやっぱり」
「絶対に駄目ね。ところで」
ここまで話したうえで話題を変えてきた。
「その二人は何処かしら」
「あっ、そういえば」
「ひょっとしてまだそこにいるの？」
二人に対して尋ねてきた。
「まだ。どうなのかしら」
「まさかと思うけれど」
ベッカは顔を顰めさせていた。
「まだいるのかな、あそこに」
「そうかも知れないわね」
ペリーヌも顔を曇らせている。
「それがパターンだし」
「どうしよう」
「どうしようもこうしようもないでしょ」
アンジェレッタは二人に比べてかなり割り切っていた。

「いたらいたで止めるしかないわ」
「いなかったらそれまでってことね」
「公共の騒乱になる元は何とかしないと」
テンボもジャッキーも完全に騒乱扱いであった。無理もないことだが。
「だから。とりあえず見に行きましょう」
「それはいいけれど」
ベッカはアンジェレッタのその言葉を聞きながらもまだ怪訝な顔になっていた。
「ねえアンジェレッタ」
「何？」
「何か方法があるの？」
こう彼女に尋ねるのだった。
「方法が。そこんところどうなの？」
「あの二人を止める方法？」
「そう、それだよ」
聞きたいことはやはりそれであった。
「あの二人だよ」
「ええ」
「本当にあるの？」
怪訝な顔のままま問う。
「何かいい方法が」
「あるわ」
はっきりとベッカに答えるアンジェレッタであった。
「しっかりとね。任せて」
「あるんだ」
「そう、これ」
こう言って出して来たのはまたドリンクだった。
「あの二人にこれを飲んでもらうわ」
「また凄い色ね」

ペリーヌはそのドリンクを見て言う。何とそのドリンクは見事なコバルトブルーだったのだ。少なくとも飲み薬の色ではなかった。
「青い薬って」
「いい色でしょ」
「不気味だわ」
言いながらまた顔を顰めさせている。
「そんな色のお薬だなんて」
「こうした色のワインやビールだってあるじゃない」
「それでもよ」
それはそれ、これはこれというわけだった。
「ここまで青いとね」
「海の色だって思えばどう?」
「あれはマリンブルーでしょ」
相変わらず不気味なまでに青いそのドリンクを見ながら言う。
「これコバルトブルーじゃない」
「凄く奇麗よね」
「奇麗なことは奇麗よ」
このことについてはペリーヌも認める。
「けれど身体の中に入れるお薬としてはどうなのよ、この色」
「それは偏見よ」
アンジェレッタは負けない。
「一回飲めばそんなの一発で消し飛ぶから」
「消し飛ぶってどういう意味で?」
ベッカもその薬を見て怪訝な顔をしていた。

第百十一話　ポケットの中の薬その七

「どういう意味でそうなるのかな。かなり気になるんだけれど」
「そんなに怖がることないわよ」
「いや、怖がるなんてものじゃないし」
「そうよ」
二人はまだ言う。
「これは。かなり危険な色だよ」
「飲んで大丈夫なの？」
「大丈夫よ」
アンジェレッタだけが安心していた。
「だから。何なら今ここで飲んでみる？」
「私はいいわ」
「僕も」
やはり二人は飲もうとしない。心の中で点灯する危険シグナルをはっきりと感じていたからだ。まさに動物的な直感であった。
「また今度ね」
「そうさせてもらうよ」
「あら、面白くないわね」
「面白いかどうかっていう問題じゃないし」
「それにだよ」
ベッカの声が少し強くなっていた。
「本当にどうするんだよ」
「何を？」
「だからあの二人だよ」
彼が言うのはこのことだった。
「テンボとジャッキーのこと。どうするんだよ」
「ああ、そういえばそうね」
言われてやっと思い出したようである。

「あの二人いたのよね」
「いたかどうかじゃなくてさ」
「本題じゃない」
ペリーヌもこのことを言った。
「どうするかっていうのは」
「テンボとジャッキーだよ、問題は」
「だから。このお薬を飲ませればいいじゃない」
話がさらに戻った。
「このお薬をね。そうすれば一発で静かになるわ」
「そんなに効くの」
「ええ」
こうも二人に答えた。
「そうよ。確実にね」
「死ぬとかそういう意味じゃなくて？」
「だから大丈夫よ」
ベッカの身も蓋もない問いにも平気なものである。
「全然ね。死ぬ筈がないわよ」
「死なないんだ」
「実験用の擬似生命ロボットは大丈夫だったわよ」
この時代マウスやラット、モルモットといったものを実験に使うのは動物虐待だとして連合では行われなくなっている。そのかわりにモルモットやラット、極端な例では人間を模して造ったロボットでそうした実験を行っている。ロボットなら何度でも実験できるし便利とされている。
「全然ね」
「だから平気なのね」
「そういうことよ。だから安心してね」
「わかったわ」
「それじゃあね」
二人はとりあえずは納得することにした。そうしてまた言う。

「じゃあ行きましょう」
「二人のところにね」
「そうね。それじゃあ」
二人と共にテンボとジャッキーのところに向かう。そこに向かうとまだいた。二人で勝手に騒いでいたのですぐにわかってしまった。
「ああ、やっぱりいたね」
「予想通りね」
ベッカとペリーヌは二人が騒いでるのを見て言った。もう若本さんも真壁さんもいない。既に飲みに行ってしまったようである。
「それにしてもよくもね」
「あれだけ騒げるわね」
「いつものことよね」
アンジェレッタもこのことは予想していたらしく特に驚いてはいない。
「これもね。何かね」
「だから余計に困るのよ」
「近所迷惑だよ」
まさにその通りであった。かなり五月蝿い。

第百十一話　ポケットの中の薬その八

「だからさ。早いうちに」
「何とかしましょう」
「俺の推理は絶対だ！」
「あたしの捜査もね！」
「聞こえてきたわね」
早速二人の叫びが出て来た。
「まああの元気さを何処かに使えればいいけれど」
「全く」
ベッカがペリーヌに対してうんざりしたという顔で返す。
「あれをね。本当に」
「世の中うまくいかないわね。まあとにかく」
「これよね」
「そうそう、それそれ」
ペリーヌがアンジェレッタに対して言う。
「それよ。その青い薬を飲ませればいいのよね」
「ええ、そうよ」
相変わらずの自信を持った返答であった。
「これを飲ませればね。いいのよ」
「よし。それじゃあ」
「ただね。問題は」
またベッカとペリーヌが言った。
「どうやって飲ませるかだけれど」
「それは簡単よ」
しかしアンジェレッタの返事はあっけらかんとしたものだった。
「それはね」
「簡単って？」
「そう。こうするのよ」

こう言っていきなり二人の前に出るのだった。
「あっ、奇遇ね」
「えっ、アンジェレッタ」
「どうしたのよ」
ここでアンジェレッタに気付く二人だった。今まで騒いでいるだけで全く気付くことがなかったのである。これもかなり凄いことではある。
「何でここにいるんだ？」
「お散歩？」
「まあそんなところよ」
全く何気ないといった顔で二人に返す。
「それでここに来たんだけれど」
「そうだったのか」
「それでなの」
「ええ。それでね」
ここまで話したうえでまた二人に言ってきた。
「ちょっといい？」
「ちょっと？」
「そう、ちょっと」
軽く微笑んでみせる。
「ちょっとだけね。いいかしら」
「？よくわからないけれどな」
「別に。いいけれど」
二人は特に疑うことなくアンジェレッタに言葉を返した。
「で、それでな」
「どうしたのよ」
「プレゼントよ」
その軽い笑みでまた二人に述べる。
「プレゼント。どうかしら」
「薬か？」

「それともドリンク？」
「ドリンクよ」
微笑みはそのままだ。演技を上手く続けている。ペリーヌとベッカはその演技を見つつ彼等から離れた場所でことの成り行きを見守っていた。
「上手いわね」
「そうだね」
ベッカがペリーヌの言葉に頷く。
「このままいったらいけるわね」
「うん。それにしても」
だがここでベッカはふとした感じで言葉を出してきた。
「何で気付かないんだろう」
「何でって？」
「あの二人だよ」
言いながら当のテンボとジャッキーを指差す。
「今でもさ。アンジェレッタのお芝居に気付いてないよね」
「ええ、確かにね」
それはその通りだった。誰がどう見ても気付いたりはしていない。まるで何かの喜劇ものの探偵小説のヘボ探偵である。そのままと言っていい。
「普通気付かない？」
「気付くっていうか」
ペリーヌはここでまた言った。

第百十一話　ポケットの中の薬その九

「警戒するわよね」
「青い薬だよ」
ベッカはまたここを言う。
「それこそ。怪しいとしか思えない代物じゃない」
「普通はそう思うわよね」
ペリーヌもそれに同意してきた。
「普通はね」
「けれどさ。あの二人って」
またテンボとジャッキーを差し示す。
「全然気付いてないからさ」
「ううん」
ペリーヌは腕を組んで考える顔になった。そのうえでまた述べる。
「ひょっしたら」
「どうしたに？」
「本当に探偵！？」
「それはわかってでしょ」
「それでもだよ」
ベッカは言いたいのだった。
「あれだけ推理というか予想が外れるのに」
「それもいつもね」
「当たったことないからね」
これまでの正解率は何とゼロパーセントである。一や二といった可愛らしい数字ではない。ゼロなのだ。二人の底力が実によくわあｋる数字である。
「全然ね」
「今回もだったしね」
そして今回もこの数字は守られていたのだ。

「まだらの紐なんて出て来た時はびっくりしたわよ」
「あの灰色の脳細胞が出す答えっていつも的外れだから」
当然当たったことはないのだ。
「で、その結論だから」
「全く。まあそれはそうとよ」
「うん」
「いよいよ終わりね」
こう言うペリーヌだった。
「今回の騒動も。何とかね」
「だといいけれど」
しかしベッカの言葉は少し悲観的なものがあった。
「無事に終われればね」
「アンジェレッタ次第かしら」
「若しもだよ」
ベッカの不吉な予想は続く。
「あの二人が薬に耐性あったら？」
「アンジェレッタのドリンクに？」
「そうだよ。ほら、フランツ」
二年Ｓ一組三馬鹿の残る一人である。この三人がクラスの成績を頑張って下げていると言われている。やはりテンボとジャッキーは学校の勉強もできないのだ。
「フランツ薬への耐性異常に強いじゃない」
「フランツはね」
ペリーヌもそのことを思い出して少しうんざりした顔になった。
「確かに強いわね」
「薬だけじゃないけれどね」
フランツもまた実に面倒な体質なのである。
「怪我しないしね」
「桁外れに丈夫よね」
「病気もしないし」

まさに鉄人である。
「おまけに風邪なんか絶対にひかないし」
「馬鹿は風邪ひかない」
昔から言われている言葉である。
「まさにそれよね」
「あの二人もそういえば」
そして話は二人に関するものに戻る。
「風邪、ひかないよね」
「それも全然ね」
そうなのであった。
「ひかないわよね、確かに」
「だからさ。ひょっとしたら」
ベッカはさらに言葉を続ける。

第百十一話　ポケットの中の薬その十

「今回も。アンジェレッタのドリンクが」
「効かないかも知れないっていうのね」
「その場合どうしよう」
その不安な顔でペリーヌに述べた。
「その場合。どうしたらいいかな」
「麻酔？」
ペリーヌの出してきた案は実に物騒なものであった。
「麻酔打つ？ほら、恐竜に使うみたいな」
「アンキロザウルスに使うみたいなの？」
「いえ、もっと上のね」
恐竜と一口に言っても色々いるのである。
「ティラノザウルスとかブラキオザウルスに使うみたいなの」
「それじゃないと駄目かな、やっぱり」
「どう見ても麻酔効きそうにないから」
多分に予断と偏見に基く言葉である。
「あのドリンクが駄目だと」
「僕考えたんだけれどね」
ベッカもベッカで考えているのだった。
「お酒はどうかな」
「お酒！？」
「そう、お酒」
彼が出すのはそれであった。
「ほら、ウォッカとことん飲ませて」
「ロシア式ね」
「アンネッタから聞いたんだ」
ロシア人直伝であった。
「麻酔がない場合はね。とことんまで飲ませてそれで麻薬にしたん

だって」
「随分乱暴な話ね」
「けれどかなりいいらしいよ」
ベッカは言う。
「麻酔になるんだって。意識朦朧となってね」
「そうね。それも用意しておく？」
「そうしようか。何なら両方使ってもいいしね」
「そうね。あの二人だし」
ここでまたテンボとジャッキーを見るのであった。
「そうそう簡単には死なないしね」
「そうだね。さて」
ベッカも二人を見る。
「大丈夫かな。どうかな」
「見物ね」
「うん」
二人はこう言い合って様子を見守ることにした。とりあえずテンボもジャッキーもアンジェレッタのドリンクを受け取った。そうしてすぐに飲んでしまった。
「うわっ、一気飲み」
「よくやるわね」
ベッカとペリーヌは二人がそのドリンクを一気飲みしたのを見て思わず言ってしまった。
「あんな薄気味悪いのを」
「よく一気に飲んだわよね」
「おい、このドリンクってよ」
「美味しいじゃない」
しかし二人はこう言うのだった。
「いけるなんてものじゃないぞ」
「まだあるかしら」
「お金さえあればね」

アンジェレッタはにこりと笑って二人に話した。
「幾らでもあるわよ」
「それで幾らだ？」
「一本どれ位なの？」
「一本十五テラよ」
「あの赤いのと同じ値段だね」
「そうね」
ベッカとペリーヌは話を聞いてこう述べた。
「やっぱりそれなりの手間隙がかかってるんだ」
「味もいいみたいね」
「じゃあもう一本くれよ」
「お金ならあるから」
「そう。それじゃあ」
早速ポケットから二本のドリンクを出してきた。小さなポケットの中に入っていたとはとても思えないがそれでも中にあったのである。
「はい、どうぞ」
「ああ。じゃあな」
「飲ませてもらうわ」
こうして二人はまたそのコバルトブルーの一見しただけで怪しいことこの上ないドリンクを飲むのだった。ベッカとペリーヌはその目を思いきり顰めさせてその様子を見ていたが二人が全て飲み終えたところで彼等に対して尋ねるのだった。決意するまでに葛藤もあったが。

第百十一話　ポケットの中の薬その十一

「ところでさ」
「そのドリンクだけれど」
「ああ、二人共」
「いたの」
ようやく二人に気付いたといった感じのテンボとジャッキーであった。丁度その青いドリンクをまた一気飲みしたところであった。
「そういえばさっき何か話してたよな」
「そうだったわね」
さっきの殺人事件のことはもう忘れてしまっていた。
「何だったんだ？」
「何か事件があったような気がするけれど」
「もう忘れてるし」
「どんな記憶力してるのよ」
まずは都合の悪いことは瞬間的に忘れることのできる二人の素晴らしい記憶力に唖然とさせられる。だから学校の成績も凄いことになっているのだ。
「まあとにかく」
「そのドリンクだけれど」
「ああ、これか」
「美味しいわよ」
「どう美味しいの？」
ベッカはこのことを二人に尋ねた。
「どんな味なの？一体」
「甘いよな」
「そうよね」
テンボとジャッキーはそれぞれ顔を見合わせて話をする。
「チョコレートみたいな味でな」

「もっと飲みやすいし」
「チョコレート!?」
「青いチョコレートみたいなものね」
連合にはそんな食べ物もあるのである。他には緑や紫のものもある。
「じゃあそんな味なんだ」
「美味しいの」
「できればもう一杯欲しいんだけれどな」
「お金がね」
「そうなんだ」
「ああ。それに」
「何か」
ここで二人の目がとろんとしてきた。
「眠くなってきたよな」
「何でだろ」
「悪い、じゃあこれでな」
「帰るわ」
と言いながらもう寝てしまった。アスファルトの上にそのままだ。
「うわ、寝ちゃったよ」
「それもこんな所で」
「効いたわね」
アンジェレッタは地面の上で寝てしまった二人を見て静かに微笑んでいた。
「やっぱりお父さんとお母さんのドリンクは最高ね」
「まさか本当に効果があるなんて」
「この二人に」
「一杯だったら自信がなかったわ」
ここで言うアンジェレッタだった。
「けれど二杯飲んだからね。それが聞いたのよ」
「二杯が決め手だったんだ」

「さっきので」
「ほら、フランツのケースがあるじゃない」
アンジェレッタも二人と同じことを考えていたようである。
「ああいう感じで効かなかったらって思ったんだけれどね」
「見事に効いたね」
「それもこんなに」
「さて、騒動は終わりね」
アンジェレッタは二人に顔を向けて言ってきた。
「これでね」
「ええ、そうね」
「これでね」
二人も彼女の今の言葉に頷く。
「じゃあ帰るの？」
「私達はそれでいいけれど」
「まだ何かあるの？」
アンジェレッタはまだ何か言いたそうな二人に対して怪訝な顔を見せて問うてきた。
「騒動は終わったのに」
「だからさ。倒れているこの二人」
「どうするのよ」
「ああ、そういえばそうね」
言われてそのことに気付く始末だった。

第百十一話　ポケットの中の薬その十二

「そういえばね。寝ているんだったね」
「寝ているのならそれならそれでいいってわけじゃないじゃない」
「そうなのよね」
あらためて困った顔を見せるアンジェレッタだった。
「これで悪い連中じゃないしね」
「まあ確かに」
ベッカも彼女の言葉に頷く。
「その通りだけれどね」
「だからよ。早いうちに何とかしましょう」
ペリーヌも言うのだった。
「この二人。担ぐの？」
「そうね。自分で勝手に動くようなお薬なんてないし」
「そこまでいったら妖術だけれど」
ベッカは思わず突っ込みを入れた。
「セーラじゃあるまいし」
「今考えたんだけれどね」
「何？」
「ほら、アンよ」
アンジェレッタはアンのことを話に出してきた。
「アン。呼んだらどう？」
「アンねえ。何でなの？」
「だって。ユダヤ人じゃない」
アンジェレッタが言うのはそこだった。
「ユダヤ人よ。わかるよね」
「！？ユダヤ人がどうかしたの？」
「話がわからないけれど」
ベッカにもペリーヌにもわからない話だった。ついつい首を傾げ

る。
「それがどうかしたの？」
「どうしてなのよ」
「だからゴーレムよ」
アンジェレッタはまた随分とオカルトな話をするのだった。
「ゴーレム。あれだとこの二人も運んで行けるじゃない」
「ゴーレムってねえ」
ベッカはそれを言われても納得した顔にはなっていなかった。
「アンはそんなの使えないと思うよ」
「そうなの」
「そうだよ。そんなの言っても無理だよ」
彼はそのことはよくわかっているのだった。何故このことをわかっているかというと常識からである。つまりアンジェレッタは常識を無視して考えていたのだ。
「そんなの。やっぱりセーラじゃないと」
「そうなの。がっかりね」
「アンは漫画家よ」
ペリーヌも言ってきた。
「ラビとかじゃないんだから」
「言われてみればそれもそうね」
「そうだよ。それでどうするの？」
またベッカがアンジェレッタに尋ねる。
「この二人。このままだと風邪ひくよ？」
「仕方ないわね。じゃあ今度はこれを」
こう言ってまた懐から薬を出してきた。今度は黒い薬だった。
「使ってね」
「そのお薬何？」
「気付け薬よ」
今度はこれであった。
「これをかがせればそれだけでね」

「目が覚めるの」
「そうよ。さて、と」
実際に二人の顔にその黒い薬を近付けていく。するとそれだけで。
「んっ！？」
「あれっ！？」
目が覚めたのだった。本当にすぐに。
「俺どうしてここにいるんだ？」
「何かあったのかしら」
「都合よく覚えてないし」
「本当に便利な頭してるわよね」
起き上がった二人を見て呆れるベッカとペリーヌだった。
「まあさ。これでね」
「本当に騒動は終わったね」
「この騒動はね」
アンジェレッタはにこりと笑ってその二人に言った。
「何はともあれ終わりよ」
「何かね。その言葉」
ペリーヌがアンジェレッタに対してまた突っ込みを入れてきた。
「またすぐに騒動が起こるみたいじゃない」
「それは嫌なの？」
「嫌っていうか。騒動によるわよ」
これがペリーヌの言葉だった。
「それについてもね」
「まあとにかくさ」
ベッカがいいタイミングで話に入ってきた。
「この騒ぎはこれで終わり」
「ええ」
「それはね」
「二人も起きたし帰ろうよ」
彼が一番冷静であった。

「もうね。それでいいよね」
「終わったのは確かだしね」
「わかったわ」
「うん。それじゃあね」
何はともあれこれでこの騒動は終わった。彼等にとってみればいつもの騒動だった。しかしアンジェレッタの言う通りまた騒動が起ころうとしていた。今度は思わぬ人物からだった。

ポケットの中の薬　　完

２００８・１０・３１

第百十二話　刷り込みその一

刷り込み

二年Ｓ１組で一番温和でおっとりしているのは誰かというと。もうこれは皆が口を揃えて彼女だと言う。これは他のクラスで聞いても同じである。

「また彰子はねえ」

「のんびりしてるんだから」

皆仕方ないな、といった感じで言う。彰子はとにかくおっとりしている。

「そうかな」

しかも自覚はない。これも大抵のこうした性格の人間の特徴である。

「私そんなにおっとりしてる？」

「してるしてる」

「それもかなりね」

皆苦笑いで彼女に答えるが決して悪気はない。悪気を持たれるような人間でもないのが彰子のいいところであり特徴であるのだ。

「まあそれでもさ」

「いいじゃない」

「いいの」

「人間大切なのは性格よ」

「そうそう」

言うのはこのことだった。

「彰子ってねえ」

「天然だけれどね」

これは皆が認めるところだった。

「それでも優しいし」

「ここぞって時に気がつくし」

彼女の不思議な特性の一つである。ぼんやりとしているというのに何故かいいタイミングで動いて皆を助けるのだ。それがまた皆をかなり助けているのである。
「だからね。頼りにしてるわよ」
「クラスでの縁の下の力持ちよね」
「そうだったんだ」
「別に自覚はしなくてもいいわ」
皆こうも言う。
「彰子は彰子」
「それでいいんだからね」
「いいっていうのならそれじゃあ」
そしてそれに頷くのがまた彰子であった。
「私は。これで」
「いったらいいわ」
「そう。それでね」
「ええ」
彰子は皆の話をさらに聞く。
「最近どう?」
「誰かいた?」
「最近?誰か?」
皆にこう問われてもすぐにはわからないのが彰子である。
「何なの?最近に誰がって」
「だから。気になる人いるの?」
「彼氏とか」
「彼氏って」
これはいつものことだがこうした質問をされると首を傾げてしまうのである。ぼんやりとしている彰子にとっては彼氏と言われても思い当たることがないのである。
「別に。今は」
「いないの」

「そういう人はね」
やはりいないのであった。
「神崎亜矢ちゃん好きだけれど」
「だから亜矢ちゃんはアイドルだし」
「しかも女の子じゃない」
ここでぼけるのも彰子の常である。
「そういうのじゃなくて」
「男の子でね」
「ブラッド＝ディーンじゃ駄目かしら」
「全然駄目っていうか」
「あの子もアイドルだし」
そしてまたぼけるのである。こうしたbけこそが彼女の持ち味であり周囲を和ませてもいるのである。
「違うの。だから」
「学校でいるの？そういう人」
「ええと」
やはりここでも首を傾げるのだった。
「そう言われると」
「いないの？」
「そういう人は」
いないのであった。このことを皆に言う。
「あまり。今は」
「まあね」
「彰子らしいし」
そして皆その返事に頷くのであった。

第百十二話　刷り込みその二

「けれどあれよ」
「あれ？」
「そう、あれよ」
そしてここでまた言うのである。
「あれだけれど」
「あれって何なの？」
「だからね。いないのなら見つけるものなのよ」
彼女が言うのはこういうことだった。
「それか手に入れるのよ」
「手に入れるの」
「何なら協力するけれど」
にこりと笑ってこっそりと薬を売ろうとしていた。
「どうかしら。お薬でいいのがあるわよ」
「いいのがあるの」
「これを飲めば一発よ」
そのにこりとした笑みで彰子に語る。
「完全にね。いけるわよ」
「何が何かわからないけれど」
「わからなければわかるものよ」
また言うアンジェレッタだった。
「だからね」
「ええ」
「はい、これ」
ここで銀色の薬を差し出してきた。
「これよ。これを飲めば一発よ」
「一発なの」
「そう、一発で効果が出るから」

見ればそれは錠剤だった。三粒非常に小さいそれを手の平の上に乗せていた。銀色のそれは少し見るとＵＦＯのようであった。
「見事なまでにね」
「これを飲めばいいのね」
「はい、お水」
いいタイミングでコップに入れた水を差し出してきた。もっともこれも狙ってのタイミングであったが。この計算高さは見事なものであった。
「どうぞ」
「あっ、有り難う」
「これを飲めばもう完全にいい人が手に入るからね」
「いい人って」
「まあいいから」
あえて詳しいことは言わないのだった。
「飲んで。ほら」
「うん」
こうして彰子はアンジェレッタに言われるまま彼女の錠剤を飲んだ。水で流し込む。するとすぐに。そのまま静かに寝入ってしまったのだった。
「これでよしね」
「よしねってあんた」
「今度は何のお薬なのよ」
それまで様子を見守っていたコゼットとナンがアンジェレッタに問うた。
「また随分と怪しいお薬みたいだけれど」
「何なの、その銀色のは」
「惚れ薬よ」
にこりと笑って二人に話すのだった。
「媚薬をさらに強くしたね。これを飲めば」
「どうなるの？」

「彰子寝てるけれど」
見れば自分の席にそのまま寝入ってしまっている。完全に動く気配はなかった。
「何が何なのか」
「これでどうして誰かに惚れるのよ」
「決まってるじゃない。鴨知ってる？」
「鴨？」
「あの食べる為の水鳥よね」
彼等にとっては鴨とはこういった印象でしかない。農業に使い田や畑の害虫を食べてもらう。それが終わればそこで肉にして食べてしまうのである。
「確か」
「そう、それよ」
「だからね」
「食べるの？」
「彰子を？」
「私レズじゃないから」
密かに怪しい会話にもなっていた。

第百十二話　刷り込みその三

「彰子を食べたりはしないわよ」
「ああ、それはないの」
「鴨だからそうだと思ったわ」
「鴨は確かに食べるものだけれど」
こうした意味ではアンジェレッタも同じだった。彼女も鴨の肉はかなり好きなのである。特に燻製にしたものや鍋、オリーブ煮が好きである。
「けれど。習性があるじゃない」
「習性って？」
「何のこと？」
「刷り込みよ」
ここで彼女が言う鴨の習性とはこれだった。
「刷り込み。わかるわよね」
「ああ、生まれてすぐに見たものを親って思うあれね」
「あれのことね」
「そうよ。わかったわね」
こうコゼットとナンに返す。
「だから。目が覚めて最初に見た相手を好きになるのよ」
「成程」
「片方が好きになればやがて片方もってやつね」
「そういうことよ。さて」
ここで楽しそうに言うアンジェレッタだった。
「誰を好きになるのかしらね。そうそう」
「今度は何？」
「一応彼女持ちの子はどけておきましょう」
「それはね。絶対にね」
「要注意ね」

コゼットとナンもそれはちゃんとわかっていた。
「じゃあとりあえずはさ」
「皆いい？」
ここで今クラスにいる皆に声をかけた。話が大きくなるのはどうもこのクラスの常らしい。しかも皆それに乗ってくるところもいつものことだった。
「今から彰子が誰を好きになるか」
「はじまるわよ」
「まず彼女持ちは逃げてね」
「いいわね」
「うん、それじゃあ」
「僕達は」
早速スターリングやマルティといった面々が物陰に隠れて彰子から見えない場所に移動した。
「あとはいざっていう人以外は」
「見守っていてね」
「ちょっと待ってよ」
ここでアンが三人に問うてきた。
「話聞いていたんだけれど刷り込みしたのよね」
「ええ、そうよ」
アンジェレッタがアンに答えた。
「そうだけれど」
「だったら危ないじゃない」
剣呑な顔でアンジェレッタに言い返すアンだった。
「それってかなり」
「危ないって？」
「だから。彰子は女の子じゃない」
至極当たり前の、このクラスにいれば誰でも知っていることであった。
「その女の子が女の子を見ればね。それって」

「ああ、そうね」
「あんたユダヤ人だから」
「そうよ」
憮然としてコゼットとナンに答える。
「同性愛は禁止よ。それに私にはギルバートがいるし」
「そのギルバートは」
「とりあえずは安心ね」
見ればギルバートも物陰に隠れてしまっている。アンのことがちゃんとわかっているようだ。
「だから。私は」
「隠れるのね」
「そうよ。幾ら相手が可愛くても女の子は女の子よ」
この辺りを実に厳しく言う。

第百十二話　刷り込みその四

「同性愛はね。イスラエルじゃそれだけで罪になるんだから」
「ここ日本だけれど？」
「ユダヤ教では絶対なのっ」
アンジェレッタにムキになって返す。
「だから。隠れさせてもらうわよ」
「やれやれ。生真面目なんだから」
「そんなの守ってるのって今時イスラエルだけだけれどね」
連合で同性愛をその国の法律で正式に禁じているのはイスラエルだけである。殆ど全ての国では同性愛に関しては特に禁止条例はない。当然ながら日本においてもだ。むしろ日本ではこうしたことに関しては古来からの伝統で極めて寛容なものがある。
「まあそれはとにかくとして」
「じゃあ彼氏持ちもね」
「隠れて」
こういうことになった。
「あと今は彼氏や彼女はいいっている人もね」
「隠れてね」
「ええ、それじゃあ」
まずそそくさと移動をはじめたのはナンシーだった。
「行きましょう」
「行きましょうってナンシー」
アンジェレッタがここでナンシーの動きに気付いた。
「あんた今フリーなんじゃないの？同性愛も抵抗ないんじゃなかったの？」
「え、ええと」
いきなりこう突っ込まれて大いに焦りだすナンシーだった。
「それはそうだけれどね」

「じゃあ何で隠れるの？」
「ま、まあちょっと」
目を泳がせ顔を真っ赤にさせながら答える。
「今はいいかなって」
「そうなの。それにしても」
「今度は何？」
「風邪！？」
アンジェレッタは怪訝な顔でナンシーに対して言った。
「凄い汗だけれど」
「それは気のせいよ」
「そう？だったらいいけれど」
ナンシー本人の言葉にも今一つ以上に懐疑的な顔であった。
「風邪だったらね」
「ええ」
「お薬。あるから」
アンジェレッタはやはりこれであった。
「何だったらね。すぐに言ってね」
「有り難う」
「まあとにかく」
ナンシーとの話が終わった時にはもう。
「隠れたかしら・・・・・って」
ここでクラスの中を見渡すともうそこには。
「誰もいないし」
「皆隠れたわよ」
ナンがアンジェレッタに答える。見れば彼女も隠れてしまっている。
「クラスの皆ね」
「隠れていないのはあんただけよ」
コゼットも言って来た。
「ひょっとしてあんた」

「彰子と？」
「そういうジョークはなしよ」
ところが当のアンジェレッタはこう返すのだった。
「私はノーマルよ。女の子といちゃつく趣味はないわ」
「だったら隠れた方がいいわよ」
「後で問題になるわよ」
「わかってるわよ。それじゃあ」
皆の言葉に応えてアンジェレッタも姿を隠す。皆ベランダの方に出てそこの窓から教室を覗き込むのである。クラスにいるのは寝ている彰子だけになっていた。
「ううん、何だか」
「これってねえ」
皆そんなクラスの中を見て言う。

第百十二話　刷り込みその五

「かなり異様よね」
「クラスにいるのは一人だけ」
その彰子だけである。
「しかも寝てるし」
「つまりあれよね」
ここで言ったのはナンだった。
「眠れる美女よね」
「確かに」
「森じゃなくて教室だけれど」
そうした差はあるが確かにその通りだった。眠れる美女になってしまっている彰子だった。絵になるといえばなっている光景である。
「さて、それじゃあ」
「誰が来るかしら」
「しかしだ」
ギルバートが言ってきた。
「若しもだ。性格に問題のある人間ならどうするんだ？」
「来る人間が？」
「そう。その時は一体」
「安心してくれ」
だがここでルシエンが名乗り出て来た。
「俺がいるからな」
「ルシエン？何か考えがあるのか」
「ああ、これだ」
彼が懐から取り出してきたのはパチンコだった。
「これでな。そうした相手が来たら額を撃ってやる」
「それで退散させるつもりか」
「ああ。これなら問題ないだろ」

「そうだな。それだとな」
ギルバートも彼の言葉に頷いた。
「何の問題もない。それでは」
「後は誰が来るかね」
「さて、男か女か」
「美女か野獣か」
皆結構趣味の悪い感じで成り行きを見守っている。だがまだその相手は来ない。彰子は寝たままで一向に起きる気配がない。だがやがてアンジェレッタが言って来た。
「そろそろよ」
「そろそろって？」
「だから。目が覚めるのがよ」
彼女が言うのはこのことだった。
「そろそろなんだけれどね」
「？それじゃあ」
「相手が来なかったら」
「刷り込みの効果があるのは起きてから一分よ」
「随分短いわね」
それを聞いたコゼットが言う。
「またかなり」
「それだけしか効果が持続できなかったのよ」
語るアンジェレッタの言葉はかなり残念そうであった。
「どうしてもね」
「そうなの」
「それはまた」
「しかも効くのは一人だけ」
それを考えればかなり効果は短いものだった。
「一人だけなのよ」
「さて、その一分の間に」
「やって来るのは誰か」

「ひょっとしてだけれど」
アンがいぶかしむ顔で述べてきた。
「先生が来たらどうなるの？」
「あっ、それ有り得るわね」
「ひょっとしたらね」
「そういえば」
ここで皆気付くのだった。
「男の先生とできちゃったら問題になるじゃない」
「異性同士だとね。けれど同性だとあまり言われないのよね」
「何でだろ」
何故かこういう風潮があるのが連合の社会である。連合においては同性愛に関しては寛容であるがそれと共にフリーハンドなところも存在しているのだ。
「男が男に浮気しても」
「それが女の場合でも」
この二つのケースが考えられる。とはいっても同性愛だからこれは言うまでもない。
「まあどっちでもね」
「皆言わないわよね」
「教師と生徒の禁断の愛」
「しかもレズビアン」
話がどんどん耽美なものになっていく。
「果たしてどうなるかしら」
「妖しいなんてものじゃないっていうか」
「もう普通の学校じゃないじゃない」
なおこの学校がそうした意味とは全く別の意味で普通ではないのはこのクラスの面々もよくわかっている。少なくとも非日常的な学校である。
「そんなのなったらもうそれこそ」
「どうなるのやら」

「来ましたよ」
皆と同じ様に隠れているセーラが言ってきた。
「どなたかが」
「何でそれがわかったの？」
「魔術？」
「はい、それです」
またしてもこれであった。
「廊下に魔法をかけクラスに誰が来るのかわかるようにしておきました」
「何時の間に・・・・・・」
「何て素早さ」
皆それを聞いて唖然とするしかなかった。
「まあとにかくよ」
「誰が来るの？」
「これは女の子ですね」
こう答えるセーラだった。
「この気配は」
「そう。女の子なの」
「わかるのはそこまで？」
「そうですね。後は」
セーラはさらに言葉を続ける。
「これは一年生ですね」
「一年生なの」
「それもわかるの」
「私の魔術でわかるのはここまでです」
セーラ本人の言葉であった。
「申し訳ありませんが」
「そう。わかったわ」
「それじゃあ」
「後はその誰かが来るだけね」

それだけであった。
「果たして誰か」
「このクラスに」
皆固唾を飲んで見守る。そうして今教室の扉が開かれた。そこにやって来たのは。

刷り込み　　完

２００８・１１・４

第百十三話　禁断の愛その一

禁断の愛

今遂に教室の扉が開かれた。そうしてやって来たのは。
「・・・・・ってちょっと」
「この展開は」
皆入って来たその女の子を見て絶句した。何とやって来たのは他でもない。彰子の実の妹である明香だったのだ。彼女のことは皆知っているのである。
「妹さんが出て来るなんて」
「これはないんじゃないの？」
「うわ、しまったわ」
アンジェレッタも思わず声を出した。顔が言葉と同じものになっていた。
「これは予想していなかったわ」
「予想していなかったの」
「まさかね。こんなの考えないわよ」
また言うのだった。
「妹さんが出て来るなんて」
「私もこれは考えなかったわ」
「私も」
コゼットとナンもこれは同じだった。
「どうしてここで出て来るのよ」
「妹さんが」
「どうしよう」
アンジェレッタは困惑した顔で皆に問う。
「幾ら同性愛はよくてもこれはまずいわよね」
「まずいっていうか」
「洒落にならないから」

幾ら連合でも近親相姦というのは問題外である。これをやってしまえばそれこそルールはなくなる。皆だからこそ狼狽しているのである。

「とにかくどうしようかしら」

「どうしようかしらって」

「どうすればいいのよ」

誰もどうすればいいのか今回ばかりはわからない。しかも時間がない。

「もう目が覚めるし」

「このままだと」

「禁断の愛!?」

アンが真っ青になって言った。

「そんなのが現実に起こったらどうしようもないわよ」

「どうしようかしら」

「もうどうしようもないけれど」

「ううん」

皆深刻かつ真剣な顔で考え込んだ。

「ここは。果たして」

「ってもう彰子目が覚めるし」

皆が戸惑っている間に何も知らない明香は姉に声をかけてきた。

「姉さん」

しかし返事はなかった。妹は姉の返事がないのを見てさらに近付く。

「姉さん?」

また呼ぶ。呼びながら側まで近寄るがここでやっと姉の様子に気付いたようである。彰子はまだ気持ちよさそうに自分の席で寝ていた。

「寝てるの」

「まずは穏やかな展開ね」

「そうね」

皆そんな二人の様子を見守りつつ話をする。
「あくまで今のところはだけれど」
「けれどさ」
ここでセドリックが不安な声を出して来た。
「彰子ちゃんが目覚めたその時は」
「そうなのよねえ」
「その時なのよ」
やはり問題はその時だった。
「それももうすぐだし」
「どうしよう」
「ここは腹を括るしかないわね」
ビアンカは皆に対して言った。
「もうね。ここまで来たら」
「腹を括るって」
「何か戦争みたいじゃない」
「戦争じゃないけれどそれと同じ位の騒ぎにはなるわ」
どうにも物騒な話になってしまっている。
「だって。禁断の愛よ」
「禁断の・・・・・・」
これだけで強張るものがあるのは確かだった。皆の顔に緊張が走る。
「確かにそうだけれど」
「何か。それでも」
「昔は死刑になった程の話じゃない」
これは宗教的な戒律に起因することだ。

第百十三話　禁断の愛その二

「それこそね」
「そうだけれどね」
「それでも」
「とにかくよ。今は」
「見るしかないのね」
「そういうことよ」
ビアンカが言うのはこういうことであった。
「わかったわね。それじゃあ」
「ここはね」
「起こってしまったことは仕方がないわ」
ビアンカはもうそれはいいとした。
「問題はこれからよ」
「これからなのね」
「そう、これからどうするか」
彼女が言うのは未来であった。
「それが肝心なのよ」
こうして皆二人を見守る。明香はまだ静かに姉に声をかけていた。
「姉さん」
「ううん・・・・・」
「起きて」
静かに姉に声をかけてきていた。
「起きて。聞きたいことがあるんだけれど」
「んっ！？」
「起きてきた？」
「そうみたいね」
皆それを見てまた言い合う。
「じゃあそろそろ」

「問題発動ね」
「いよいよ」
皆ごくり、と唾を飲んだ。いよいよだった。戦いがはじまろうとしていた。それを見ていた。
「何がどうなるのか」
「そうね」
「起きて」
明香はまた姉に声をかけていた。
「聞きたいことがあるのだけれど」
「もう朝？」
まずは彰子のとぼけた声だった。
「もう朝なの？明香」
「お薬入っていても調子は相変わらずね」
「そうね」
これは変わりがなかった。
「いつものおっとりさんね」
「性格は変わらないわよ」
元凶が皆に語った。
「性格はね。好きになるだけで」
「そうなの。性格は変わらないの」
「性格を変えるお薬はないわね」
首を少し捻って皆にまた述べる。
「そういうのはね」
「そうなの。それはないの」
「今のところはね」
そして今のところはというアンジェレッタだった。
「ないわ」
「魔術ならありますが」
今言ったのはセーラである。
「受動的な方を積極的に変えたりその逆も」

「マインドコントロール系の魔術なの？」
「その通りです。魔術の基本の一つです」
優雅な微笑みをたたえての言葉であった。
「相手の心を操るのも」
「また随分と厄介だよな」
「そうよね」
皆そうした魔術があると聞いてこう思うのだった。
「使い方によっちゃ。かなり危険な代物じゃないか」
「マウリアって本当に物凄い国ね」
「マウリアでは普通ですよ」
その皆に対して優雅な微笑みのままで述べた。

第百十三話　禁断の愛その三

「こうした魔術を使うのは」
「本当にどんな国なんだろう」
「物凄い国なのはわかるけれど」
「とにかく」
アンジェレッタが話を戻してきた。
「いよいよ目が覚めてきたわよ」
「それね」
「本当にいよいよね」
「私のせいだけれどね」
一応責任は自覚しているようである。
「こうなったのはね」
「だから。言ってもはじまらないから」
今度は蝉玉が彼女に言う。
「それはね」
「これからってことなのね」
「そうよ。何かあるの？」
こうアンジェレッタに問う蝉玉であった。
「お薬でも。あるの？」
「ええと？」
とりあえず今穿いているキュロットの前のポケットを探す。まずは瓶の飲み薬が十本程度出て来た。それから錠剤やカプセルも出て来る。
他には粉薬もあった。しかしアンジェレッタはそれ等を見てもあまりいい顔をしてはいなかった。それどころか暗い顔になってしまっていた。
「ないわね」
「そうなの」

「申し訳ないけれど」
「それにしてもあんたのポケットって」
「どうなってるのよ」
皆そこにも突っ込みを入れた。本当に幾らでも出て来るからだ。
「四次元ポケットなの？」
「ひょっとして」
「とりあえず何でも入るのよ」
返答になっていない返答だった。
「私のポケットね」
「そうなの」
「何か全然原因の究明になっていないけれどね」
「まあそんなことはどうでもいいじゃない」
しかも強引に話を終わらせるアンジェレッタだった。
「参ったわね。本当にこのままだと」
「禁断の愛ってわけ？」
「そう、それよ」
やはりそれであった。
「このままいったらね。本当にまずいわね」
「ああ、今起きたわ」
そしてここで話は進んだ。
「完全にね。目がこすってるわ」
「彰子って寝起き悪いけれどね」
「ええ」
彼女の寝起きの悪さは皆もよく知っていた。だからこれには驚かない。しかしそれで問題がどうにかなるかというとそうでもないのだった。
「起きたことは起きたし」
「遂に見たわよ、妹さんをね」
そうなのだった。それが今だった。
「ああ、明香？」

「寝てたの」
「そうよ」
こう姉に答えるのだった。
「何かよくわからないけれど居眠りしてて」
「疲れてたのね」
「ええ、多分ね」
「んっ！？」
皆今の彰子の様子を見て怪訝な顔になった。とりわけアンジェレッタはそうだった。
「いつもと変わりがない？」
「そうみたいね」
今のところはそうであった。少なくとも見たところいつもの彰子である。

第百十三話　禁断の愛その四

「ねえアンジェレッタ」
「お薬って」
「間違いなく惚れ薬よ」
こう皆に答えるアンジェレッタだった。
「これはね」
「そうよね？」
「だったらどうして？」
「それが私にもわからないのよ」
アンジェレッタ自身も首を傾げさせていた。
「これがね」
「そうなの」
「効かない筈がないわ」
どうやらあの薬にはかなりの自信があるようである。
「あのお薬がね」
「そんなに凄いの？」
「トリスタンとイゾルデよ」
エウロパの古い伝承である。ワーグナーの楽劇でも有名だがこれ等の話は連合でもよく知られているしまた楽劇が上演される回数も多い。
「それに匹敵する効果があるのよ」
「トリスタンとイゾルデねえ」
「またえらく効果に自信があるのね」
「そうよ。あれを飲んで最初見た人を好きにならなかった人はいないわ」
断言であった。
「一人もね」
「じゃあ今は？」

「彰子は？」
「何の変わりもないわね」
これはアンジェレッタも認めるところであった。
「おかしなことにね」
「お薬が効かない体質なのかしら」
「ひょっとしてそれ？」
「いえ、それはないわ」
しかしここで蝉玉が断ってきた。
「それはね」
「ないの」
「この前風邪ひいた時ちゃんと効いてたし」
「そうだったの」
「現にほら」
今の話もしてきた。
「ちゃんと寝たじゃない。だからやっぱり」
「効いてはいるのね」
「絶対にね。それによ」
今度はアンジェレッタに顔を向けて問うた。
「あんたのお薬にしろそんなにやわな代物じゃないでしょ」
「勿論よ」
確かな声で頷いてみせての言葉だった。
「そんなお薬なんか何の意味もないから」
「そうよね。だから効いてるのは間違いないわ」
「じゃあどうして？」
「普段とあまり変わらないみたいだけれど」
「っていうか全然？」
そうとしか見えないのだった。
「変わらないみたいな」
「どうしてかしら」
「まだ様子見が必要みたいね」

蝉玉が言った。
「それでなのね」
「そうね。それじゃあ」
「とりあえずは見てなのね」
「それしかないわね。さて」
蝉玉はあらためて彰子を見て言った。
「どうなるかしらね」
「まだまだこれからってことね」
こうしてまだ様子を見るのだった。見れば彰子は普通に明香と話を続けていた。
「それで明香」
「どうしたの？姉さん」
「どうしてここに来たの？」
こう妹に尋ねるのだった。
「何かあったの？」
「ええ、それだけれどね」
いつもの調子での言葉のやり取りが続いている。皆それをじっと見ている。やはりおかしなところは何もなく二人共冷静なままである。

第百十三話　禁断の愛その五

「この前貸してくれたＣＤだけれど」
「ああ、あれ」
「はい」
すっと姉の前に差し出してきた。
「返すわ。有り難う」
「うん。どうだった？」
「凄く静かになれる曲ね」
こう答える明香だった。
「聴いていて。気持ちが落ち着くわ」
「アダージョだからね」
「やっぱり話していること同じね」
「そうね」
皆彰子の言葉がここでも全く変わっていないことがわかった。
「けれど効いていない筈がないし」
「どうしたものかしら」
「そういう曲を集めてＣＤにしてるのよ」
「いいわね、そういうのも」
妹は姉の言葉を受けて静かに微笑んでみせていた。
「おかげで昨日は気持ちが落ち着けたわ」
「あとね、明香」
今度は彰子から言ってきた。
「アロマテラピーだけれど」
「今度は何がいいの？」
「ローズあるの？」
こう妹に対して問うのであった。
「ローズは。どうかしら」

「ええ。あるわよ」
優しい微笑みを浮かべて姉に答える明香だった。
「それもね」
「そう。それじゃあ今日帰ったら」
「すぐに火を点けるわ」
「御願いね。今日お父さん達帰るの遅いし」
「お料理作らないと駄目ね」
「鳥の水炊きにする？」
にこりと笑って妹に提案してきた。
「それと揚げと。どうかしら」
「いいと思うわ」
彰子のこの提案に明香も微笑んで賛成した。
「それでね」
「そう。それじゃあ」
「何？」
「鳥は鶏よね」
「ええ。そのつもりよ」
鳥といっても色々ある。やはり鶏が一番ポピュラーであるが連合ではそれこそ始祖鳥まで食べられているから今の問いになったのである。
「鶏で。葱と糸こんにゃくとかも入れてね」
「揚げには生姜も必要ね」
「そうね。それを忘れたら駄目よね」
「ええ。それじゃあ今日は二人で買い物にするのね」
「そうする？」
「私はそれで御願い」
妹の方から頼み込んできた。
「できるかしら」
「わかったわ。それじゃあね」
「ええ」

「二人で」
話はそれで決まった。
「二人で。御願いね」
「そうね。何でも二人でよね」
「姉妹だからね」
「私に妹は一人しかいないしね」
にこりと笑って明香に言う彰子だった。
「明香しかね」
「私も」
そして明香もまた優しく微笑んで彰子に言葉を返すのだった。
「姉さんは一人だけよ」
「そうよね。じゃあ放課後ね」
「ええ。また」
「買い物にね」
「行きましょう」
こう約束をして二人は別れたのだった。明香が小さく手を振ってクラスから出て行く。やはり話はこれで完全に終わりだった。見事なまでに何もなかったのだった。

第百十三話　禁断の愛その六

「ええっと！？」
「これって！？」
隠れ続けている皆はここでまたしても首を捻ることになった。
「どういうことかしら、これって」
「お薬は効いているしね」
「何度も言うわよ」
その薬の持ち主のアンジェレッタが口を尖らせて皆に言ってきた。
「私の家のお薬はね」
「絶対に効くのよね」
「そうよ、絶対よ」
このことをあくまで断言するのだった。
「何があってもね。だから」
「効かないなんてことはないのね」
「絶対に有り得ないわ」
また断言してきたアンジェレッタだった。
「何があってもね」
「宇宙が滅亡してもなのね」
「その通りよ。本当に絶対にね」
あくまでこう主張するのだった。
「有り得ないわ。これは本当に絶対よ」
「じゃあどうして？」
「どうして彰子には効かないの？」
「それは」
しかしこう言われると弱いのもまた事実だった。確かに彰子にはどう見ても全然効いていないようにしか見えなかったからである。
これもまた事実だ。
「どうしてかしら」

「そうよね、やっぱり」
「効いてないし」
「そうなのよ」
そしてまた言った。
「これって。どうしてかしらね」
「何かあるのかしら」
「さあ」
「あるっていっても何でかしらね」
「全然効いていないって」
「待てよ」
だがここでふとある考えを抱いたメンバーがいた。
「これってまさか」
「あれっ!?アルフレド」
「どうしたの?」
クラスの影の実力者にしてまとめ役であるアルフレドだった。何しろ学級委員のギルバートも彼は彼で問題があり影の実力者もまた必要なのである。
「また急に」
「何か気付いたの?」
「薬は効いていたんだ」
彼は思いも寄らぬ新説を出して来た。
「薬は。効いていたんだよ」
「効いていたの?」
「まさか」
「いや、間違いない」
アルフレドは段々断言になってきていた。
「薬は効いていたんだ」
「そうなの?」
「けれど彰子は全然」
「そう、そこなんだ」

彼はそこも指摘してきた。
「そこなんだ。彰子ちゃんには効いていた」
「けれどどうして？」
「あの様子は全然」
「効いてはいたけれどそれは最初からだったんだ」
彼が言うのはこういうことだった。
「そう、最初からだったんだ」
「最初からって！？」
「だったらまさか」
「そう、そのまさかなんだよ」
また言うアルフレドだった。
「最初から妹さんを好きだったから別に」
「そういえば確かにあの姉妹って」
「そうよね」
皆ここであることに気付いたのだった。

第百十三話　禁断の愛その七

「前から凄く仲いいわよね」
「まさに仲睦まじいって感じ！？」
「そうそう」
こう言い合うのである。
「本当にね」６
「レズっぽいまでにね」
そして誰かがまた言った。
「仲いいわよね」
「だからかな」
ギルバートが考える顔で述べた。
「アンジェレッタの薬が効かなかったのは」
「うう、そうかも」
アンジェレッタは彼の考えを聞いて少し俯いて述べた。
「そうじゃなきゃ。効かないなんてことはないし」
「そうよね。やっぱり」
「アンジェレッタのお薬だからね」
皆その凶悪な効果はよく知っている。実害を受けた者もいるからこれは当然のことである。実害を受けては流石に否定することはできない。
「それが効果ないなんてね」
「やっぱり有り得ないわよね」
「じゃああれなの？」
アンがここで言う。
「やっぱり。あの二人って」
「そうなるわよね」
コゼットがアンに応える。
「元々恋愛感情に近いものをお互い持っていたってことよね」

「恋愛感情ねえ」
「姉妹で」
「そんなのあるの？」
エイミーはこのことに甚だ懐疑的なようであった。
「姉妹で。そんなことが」
「ああ、そういえばあんたも」
「そうよね」
「そうよ、四人姉妹」
言わずと知れた四姉妹である。一応美人姉妹として通ってはいるがそれ以上に酒乱の姉妹で通っているのである。奇麗な薔薇には棘があるということだろうか。
「そんなの全然ないけれど、こっちは」
「だからそれは人それぞれなんじゃないの？」
「そうそう」
皆そのエイミーの言葉に突っ込みを入れる。
「あんたのところはね。そりゃ」
「女の子より男の子でしょ」
「勿論よ」
エイミーの皆への返事は何を今更、といったものだった。
「私もお姉ちゃん達もそうした趣味は全然ないわよ」
「だからよ。こういうのってやっぱり」
「人それぞれよ」
こういう結論になるのであった。
「彰子と妹さんだとね。やっぱり」
「そうなるのよ」
「あれは昔からなのよ」
七海がここで皆に話した。
「あの二人はね」
「あっ、そうだったの」
「やっぱり」

「ええ。確か」
彼女は皆に応える形で己の記憶を辿りだした。そしてその辿る記憶は自然に。
「それこそ小学生だった頃からね」
「ねえ、よかったらさ」
「話してくれない？」
七海にアンとコゼットが声をかけてきた。
「その頃のこと」
「いいかしら」
「ええ、いいわよ」
七海も気さくに言葉を返して二人の言葉に応える。
「それはね。ただ」
「ただ？」
「何かあるの？」
「ここじゃ何よ」
くすりと笑って皆に言ってきた。
「ここじゃね。それにもうすぐまた授業だし」
「ああ、そうね」
「そういえば」
皆ここで思い出すのだった。ついでに言えば学校にいるということも忘れてしまっている者もいた。彰子のことに気を奪われ過ぎてしまっていた。
「じゃあ放課後？」
「場所は」
「あの喫茶店にしない？」
七海が皆に提案してきた。
「あの喫茶店で。ほら、前にちょっと皆で集まった」
「ああ、あそこね」
「そうね。あそこならね」
皆どの店のことかわかったので納得した顔で頷く。

「いいわね。お話できるし」
「それにホットケーキ美味しいし」
これが最大の理由であった。やはりまずは食べ物だった。人間食べ物がなくては生きてはいけない。本能には実に忠実であった。
「じゃああそこにしましょう」
「放課後ね」
「そういうことでね。それじゃあ」
七海は話がまとまったところで微笑んでまた皆に対して言った。
「そこで話すわね」
「ええ、わかったわ」
「じゃあそういうことでね」
話はこれでまとまった。彰子と明香、この姉妹の間に何があったのか、皆はこのことを知るのであった。謎は過去にその秘密があるものである。

禁断の愛　　完

２００８・１１・１１

第百十四話　幼い日はその一

幼い日は

その喫茶店において皆集まり。まずはホットケーキやら紅茶やらを頼んで楽しく飲み食いした。気持ちをリラックスさせるにはまずはお腹の中からである。

「ここに皆で来るのも久し振りよね」

「そうよね」

皆二階の席を占拠してそこでホットケーキやら何やらを食べながら話に興じていた。

「あのピーター達呼んだ騒ぎ以来？」

「そう思うとかなり昔よ」

「確かに」

お菓子を食べながらの話だった。

「あの時もかなりの騒ぎだったけれど」

「今回はね」

「そうよね」

見れば皆かなり大きなパンケーキやケーキ、クレープを食べている。丁度店の新メニューである特大シリーズを注文してそれを食べているのである。

「彰子と明香ちゃんの過去に何があったのか」

「さあ七海」

ここで一斉にその七海を見るのであった。

「話してみて」

「何があったのかしら」

「ええ。それじゃあ」

七海はパンケーキを食べていた。シロップをパンケーキの色が完全に変わるまでにかけその上にフルーツやら生クリームやらが乗っている。そのクリームやフルーツをスポンジの上に乗せてフォーク

とナイフを使って奇麗に口の中に入れながら話をしているのである。
「まずはね」
「ええ」
「まずは？」
「私がはじめて七海と会った時だけれど」
話は遡る。彼女達がまだ幼稚園児だった頃。はじめて出会った時のことである。
「わたし？わたし小式彰子っていうの」
「小式彰子ちゃん？」
「そう、そういうの」
黒く長い髪の女の子がにこりと笑って彼女に対して名乗ってきていた。幼稚園の水色のシャツと赤いズボンの可愛らしい服装がよく似合っていた。
「宜しくね」
「うん」
和泉七海は彼女の言葉に頷く。それから自分も名乗るのだった。
「私は和泉七海」
「七海ちゃん？」
「ええ、そうよ」
彼女の問いにも応えるのだった。
「七海って呼んで」
「わかったわ、七海ちゃん」
彰子は七海の声に応えてまた笑ってきた。
「そう呼ばせてもらうね。私のことは彰子って呼んで」
「彰子ちゃん？」
「そう、それで御願い」
こう話を交えさせるのだった。
「彰子ってね」
「そうなの。彰子ちゃんでいいの」
「皆こう呼んでくれてるから」

だからだというのである。
「七海ちゃんもそう呼んでね」
「うん、わかったわ」
これが二人の出会いだった。二人はすぐに仲良くなり楽しく遊びだした。その遊びは皆でもしたし色々なことをした。彰子はこの頃からおっとりとしていた。だから鬼ごっこ等でもすぐに捕まるのだった。
「はい、彰子ちゃん捕まえたよ」
「あっ、捕まっちゃったあ」
捕まっても呑気なものだった。
「何かわたしいつも捕まるよね」
「だって彰子ちゃんってねえ」
「ねえ」
皆その彰子に対して苦笑いで言うのだった。
「動きゆっくりなんだもん」
「それに隠れるのだって下手だし」
「そうかなあ」
「そうよ。それもかなり」
「だからわかるのよ」
こう彼女自身にも言う。
「何処にいてもね」
「すぐに」
「そうなんだ」
自分のことなのにやはり呑気なものだった。話を聞く皆は七海のその話を聞いて納得した顔で頷くのだった。

第百十四話　幼い日はその二

「何かその時の光景がすぐに目に浮かぶわね」
「本当」
口々にこう言うのであった。
「やっぱり彰子は彰子ね」
「その時からね」
「そうだったのよ」
話す七海もそのことを否定しない。
「本当におっとりしていたわ」
「おっとりっていうか天然？」
「それよね」
皆はこうも言うのだった。
「彰子の場合はね」
「そうよね」
彰子についてよく知っているからこその言葉だった。
「天然って言った方が」
「やっぱり相応しいっていうか」
「あの時はそこまで思わなかったのよ」
七海は少し苦笑いになって皆に述べていた。
「私も子供だったしね」
「まあそうでしょうね」
「子供だったら普通にそうだし」
そういうものである。しかしそれに留まらないのが彰子の凄いところなのである。七海の話はさらに続きそのことについても語られるのだった。
話はさらに続く。
幼稚園でお絵描きをしていると。彼女が描いたのは。
「それ誰なの？」

横にいた七海が彰子の絵を覗きながら尋ねる。見れば彼女はクレヨンで小さな女の子を奇麗に描いているのだ。幼稚園児にしてはかなり上手い。
「その娘」
「妹なの」
彰子はにこりと笑って七海に答えるのだった。
「妹なの。私も」
「妹さんいるの？」
「うん」
またにこりと笑って七海に答えてきた。
「そうなの。一つ下で」
「ふうん、そうだったんだ」
「お兄ちゃんもいるけれど。妹が一番好きなの」
また七海に言う。
「妹が。やっぱり一番好きなの」
「そうなんだ」
「名前はね。明香っていうのよ」
自分から妹の名前も七海に教えてきた。
「すっごく可愛いのよ」
「そんなになの」
「今後お家来て」
話はいきなりそういう方向に至った。
「そうしたら会えるから」
「妹さんになのね」
「うんっ」
子供らしく元気一杯の返事だった。
「そうよ。いるから」
「わかったわ。じゃあ」
「来てくれるのね」
「お邪魔していいのね？」

一応断りを入れる七海だった。
「彰子ちゃんのお家に」
「来て。だって明香を見てもらいたいから」
やはりここでも笑顔であった。
「七海ちゃんにもね」
「うん。それじゃあ」
こうして七海は彰子の家にはじめて行くことになった。皆そこまで聞いてまた頷くのだった。しきりに納得した顔で頷いていたのである。
「その頃からだったのね」
「彰子って妹さん大事にしてたの」
「もっともあれはね」
「そうだよね」
皆その顔で言い合うのだった。

第百十四話　幼い日はその三

「シスコンだからねえ」
「そうそう、完全にね」
「シスコンそのもの」
傍目から見てどう見てもそうなのだった。彰子のそのあまりもの明香への夢中ぶりは最早誰もが知っていることなのである。
「それは子供の頃からって」
「しかも聞いていたら幼稚園の頃からじゃない」
「どうなのよ」
こう言い合うのだった。
「本当にね、全く」
「けれど彰子ちゃんらしいっていうか」
「そうよね」
「納得できるのが凄いね」
こういうことだった。ここまで話してまた話が進む。こうして彰子の家に着くと。迎えて来たのは彰子だけではなかった。彼女より小さな女の子も一緒だった。
見れば髪は肩で切り揃えていてきょとんとした顔をしている。目は彰子より少し切れ長な感じで何処か彼女に似ている。その彼女が彰子の隣にいるのだ。
「いらっしゃい、七海ちゃん」
「うん」
「明香よ」
「はじめまして」
彰子に手を握られている彼女が七海に挨拶をしてきた。
「七海さんですよね」
「え、ええ」
自分の名前を知ってることに子供ながら驚いたのを覚えている。

「そうよ」
「お話。聞いてます」
明香はまた言って来た。
「お姉ちゃんから」
「そうだったの」
七海は彼女の言葉を聞いてまずは納得した顔で頷いた。
「彰子ちゃんから」
「はい」
また答えてきた。
「そうです」
「明香ってね、凄いのよ」
ここで彰子が言って来た。
「とっても凄いんだから」
「凄いの」
「頭はいいし家事もできるし」
誇らしげな顔で語る彰子だった。
「鬼ごっこだって絶対に捕まらないのよ」
「お姉ちゃん」
横で姉の言葉を聞く明香は困った顔になっていた。その顔で自分のことをまだ色々と七海に対して話し続けている姉に対して言うのだった。
「そんなの。できてないよ」
「できてるじゃない」
だが姉はあくまでこう言うのだった。
「明香みたいなしっかりした娘いないんだから」
「そんな・・・・・」
「まだお料理はできないけれどね」
「ええ」
七海は話を聞いていて子供ながらに思ったのだった。自分達が母親達のように料理ができるようになる日が来るのは何時の日かと。

そもそも大人になる日は何時なのかと。こう心の中で思っていた。
「それももうすぐね」
「できるようになるの」
「私より上手くできるようになるわよ。絶対にね」
こう言っていたのである。このことを七海から聞いた皆は。またしても呆れたような、それでいて微笑みも見せながら言うのだった。
「本当に彰子ねえ」
「そうね。彰子よね」
「全く」
実に彰子らしいと言うのである。
「シスコンなんだから」
「子供の頃から同じだったのね」
「横から話聞いて思ったのよ」
七海も皆と同じ顔になって言う。

第百十四話　幼い日はその四

「こんなに妹さんと仲がいいなんてね」
「今もねえ」
「あんな姉妹いないわよ」
「本当」
皆その微笑みのままだった。
「あんなね。仲がいいのは」
「彰子もねえ」
「それにしてもな」
ここでルシエンが言った。
「妹さんはどうだったんだ？」
「妹さん？」
「そうだよ、明香さん」
その姉妹のもう一方である。
「彼女はどうだったんだよ。話聞いていたら困惑してる感じだけれどな」
「それは今から話すわ」
こう返す七海だった。
「今からね」
「ああ。じゃあ頼むな」
「わかったわ。それでね」
また話しはじめる。話されることはまたしても皆にとって温かく、そして微笑ましい話であった。
こうして七海と姉妹の付き合いははじまった。彰子はいつも明香を見て彼女を気遣い可愛がっていた。何かといえば明香なのだ。
「このお菓子、明香が好きなの」
ある日おやつのチョコレートクッキーを見て言ったのだった。
「これね、大好きなの」

「そうなの」
「だから持って帰る」
こう言って実際にポケットにしまおうとする。
「明香にあげたら喜ぶから」
「そうだね。そうしよう」
「けれど。何か」
だがここで彰子は困った顔になってしまったのだ。
「チョコレートがおててに付いて」
「あっ、本当」
体温と周りの温度で溶けてしまっているのだ。子供だからどうしてチョコレートが溶けてしまうのかわからないのである。
「どうしよう。これじゃ明香に持って行けないよ」
「どうしよう、彰子ちゃん」
七海も一緒になって困るのだった。
「このままじゃ明香ちゃんに」
「明香に食べさせたい」
泣きそうな顔での言葉だった。
「このクッキー。それなのに」
「彰子ちゃん」
だがここで。泣きそうになる彼女に声をかけてきた人がいた。
「どうしたの？何かあったの？」
「先生」
そうだった。来たのは幼稚園の先生だったのだ。泣きそうな顔になる彼女に気付いてその側に来たのである。
「明香にお菓子持って帰りたいけれど溶けて」
「明香ちゃん！？妹さんのことなの？」
「はい」
その泣きそうな顔で先生に答えた。
「そうです。私の妹です」
「そうなの。そのチョコレートクッキーよね」

「はい」
「そうね。そうだったら冷やすのがいいわね」
「冷やすんですか？」
「アイスクリーム。あるわよね」
先生はここでまだ子供の彰子にもわかり易いように話してきた。
「あれ、冷たい場所にあるじゃない」
「はい、だから大好きです」
「それと同じなの。だから」
「冷たいっていうと氷ですか？」
「そうね」
考えながら答えた先生だった。
「それに入れたらいいけれど」
「氷・・・・・」
「氷はあるわ」
先生はこのことは彰子に話した。
「氷はね。けれど」
「氷だけじゃ駄目なんですか」
「直接氷と一緒にしたらまず駄目よ」
先生の説明は本格的なものだった。随分と生真面目な先生だったことを七海は覚えている。今もその幼稚園で、今度は園長先生としている先生である。

第百十四話　幼い日はその五

「だからね。氷をまず」
「氷をまず？」
「袋に入れて」
こうしたことまで彰子に話すのだった。
「それでクッキーも」
「クッキーもなんですか」
「そうよ。濡れないようにね」
クッキーについての配慮も言っておく先生だった。
「そうしてから一緒にして」
「それでどうするんですか？」
「箱に入れるのだけれど」
先生はこのことも彰子に話した。本当に細かかった。
「箱は」
「これでいいですか？」
彰子は先生が言おうとしたところで早速箱を見つけてきた。それはたまたま教室の端にあったもので幼稚園児にとっては大きいプラスチックの箱だった。それを持って来て先生に尋ねたのである。
「この箱で。駄目ですか？」
「その箱に入れるの？」
「はい。その袋に入れた氷とクッキーを」
実際にその考えを先生に対して話す。
「入れて明香に」
「それはいいけれど」
話す先生の顔が曇ってきていた。
「けれど彰子ちゃん」
「はい」
「重くない？」

彰子を気遣う顔で彼女に尋ねるのだった。
「今でもその箱重いでしょ」
「大丈夫ですよ」
だが彰子は明るく笑ってこう先生に返すのだった。
「だってこの箱って」
「この箱って？」
「ほら、車ありますから」
見ればそうだった。その横に左右にそれぞれ一つずつ車輪が備え付けられている。彰子と比べて彼女の半分程はある大きな箱だがそれでも持って来れたのはそれのせいだった。
「いけます」
「けれど」
彰子の言葉を聞いても顔を曇らせたままの先生だった。その曇ってしまった顔でまた彼女に対して忠告するのだった。どうしてもそうせずにはいられなかったのだ。
「本当に大丈夫なの？」
「大丈夫ですよ」
また言う彰子だった。しかし先生はそんな彼女にまた言う。
「けれどお家までよね」
「はい、そうです」
「彰子ちゃんのお家までって」
先生は彰子の家が何処にあるのか知っていた。だからこそ言うのである。
「遠いし」
「車ありますから」
「その間に交通事故とかは」
「ちゃんと気をつけます」
「いいの？本当に」
「だって明香にクッキー食べてもらいたいから」
理由はこれだった。このこと以外には全く考えていなかったのだ。

「ですから」
「そうなの。それじゃあね」
そこまで聞いてここであることを提案する先生だった。
「先生が送ってあげるわ」
「先生がですか？」
「そうよ。先生の車でね」
こう彰子に対して言うのである。
「彰子ちゃんのお家まで送ってあげるから。それだといいでしょう？」
「それは駄目です」
だが彰子は。先生のその提案にはっきりと首を横に振るのだった。
これ以上はない否定であった。
「私、それは嫌です」
「どうしてなの？」
「だって。私が決めたことですから」
幼稚園児とはとても思えないしっかりとした言葉だった。七海は今あらためてこのことを思うのだった。皆に話している間に。そして皆もそれは同じだった。

第百十四話　幼い日はその六

「うわ、彰子も言うわね」
「本当だね」
話を聞いた皆は驚きを隠せなかった。
「そこまで言うなんて」
「しかも幼稚園の時で」
「凄いなんてものじゃないわよ」
「いや、全く」
「そうなのよね。私その時横にずっといたけれど」
七海が皆に話す。だからこそ話せることではあった。
「その時はあまり何も思わなかったけれど」
「今なのね」
「ええ。今思うと」
実際にこう皆に話すのだった。
「凄いわよね、やっぱり」
「そうよねえ」
「全く」
「妹さんのことをそこまで考えているなんてね」
「しかも幼稚園じゃない、まだ」
その時からだというのに皆驚いているのだった。
「そんな時からそこまで」
「やっぱり凄いわよねえ」
「全くだよ」
皆で言い合う。彰子に驚き感心することしきりだった。そしてそれを言い終わった後でまた七海に顔を向けて。また彼女に対して尋ねるのだった。
「それでね、七海」
「ええ」

彼女もそれに応える。
「どうなったの？」
「それで彰子は」
「それでね」
七海もそれに応えてまた話しはじめた。その後の展開は。
「本当に大丈夫なの？」
幼稚園の下校時間。先生は彰子を気遣う顔で彼女に声をかけていた。
「彰子ちゃんが持って」
「はい、大丈夫です」
その底抜けに明るい声で返す彰子だった。
「だって。明香の為ですから」
「明香ちゃんの為だからなのね」
「私、何だってできます」
こうまで言うのだった。まだ幼稚園児だというのにだ。
「ですから」
「そう。わかったわ」
彰子のその幼稚園児とは思えない強い意志に遂に折れた先生だった。困ったわね、という顔になった後ですぐに納得した顔になり。
そのうえで彰子に対して言うのだった。
「じゃあ彰子ちゃん。頑張ってね」
「はい」
やはり底抜けに明るい返事であった。
「私、絶対明香にクッキーを持って行きます」
「そうして。けれどね」
「けれど？」
「先生も一緒に行っていいかしら」
こう彰子に言うのだった。
「先生も。駄目かしら」
「私車は」

「車は使わないわ」
このことは前もって断った先生だった。
「それはね。彰子ちゃんのお家まで」
「一緒にですか」
「そう、一緒にね」
何時しか先生も優しい笑顔になっていた。母親のものとはまた違う、あえて言うならば姉が妹に対して向けるようなそうした笑みで。彰子を見ての言葉であった。
「行っていいかしら」
「先生も一緒ですか」
「そうよ。駄目かしら」
「それは」
彰子は一呼吸置いてから答えたのだった。
「いいです」
「そう、いいのね」
「はい、御願いします」
ここで笑顔で言えるのはこの時からであった。
「一緒に。御願いします」
「わかったわ。それじゃあね」
「はい」
「彰子ちゃん」
そしてこの時が運命だった。七海は自分から名乗り出たのである。これは誰かに言われたからではなく本当に自然に出てしまったのだ。

第百十四話　幼い日はその七

「七海ちゃん？」
「私もいいかしら」
これが本当のはじまりだったのだ。七海が彰子という女の子を知ることになる。本当のはじまりだったのであった。
「とまあそういうわけでね」
この時のこともまた皆に話す七海だった。
「私も一緒に行くことになったのよ」
「行くっていうかさ」
「ついて行くって感じ？」
「そうだよね」
それを聞いた皆の感想である。
「それって」
「私もそう思うけれど」
「言われてみればそうね」
言われた七海もそのことに今気付いたのだった。目線を上にした考える顔で述べたのであった。
「私はただ。ついて行って」
「うん、そう思うよ」
「話を聞く限りじゃね」
皆も彼女のその言葉に対して突っ込みを入れる。
「けれどそれでも」
「それでよかったんだよね」
「ええ」
今度の皆の問いには素直に頷くことができた。
「そうよ。だってね」
「だって？」
「それから？」

「彰子のことがよくわかるようになったから」
微笑んで皆に話すのであった。
「おかげでね」
「そういうことだよね」
「やっぱりね。そういう流れになると思ったわ」
皆も笑顔で納得する。ここは七海らしいと思ったからだ。
「あんたらしいっていうかね」
「そうよね」
「私らしいの」
七海としては自分のことに話がいって意外なようだった。話しながらその顔をきょとんとさせている。それは皆にも見られていた。
「って何でその顔なのよ」
「実際のことじゃない」
「ねえ」
「実際のことって」
こう言われても何か釈然としない七海だった。今度は首を傾げさせる。
「そうなの？」
「だからそうなのよ」
「自分では自覚ないみたいだけれどね」
皆そんな七海にさらに言うのであった。
「実際そうだよ」
「ううん、私は本当に彰子のことがわかっただけなんだけれど」
「だからそれなんだって」
「そうよ。それよ」
皆はそこを指摘するのだった。
「だから。彰子のころがわかったよね」
「そこがあんたらしいのよ」
「私らしいの」
こう言われてもまだ今一つわかっていない感じの七海だった。

「ううん、そうかしら」
「そうよ。彰子のことわかろうとしたんでしょ？」
「友達として」
「それはね」
今度の言葉には素直に納得することができた。
「その通りよ。やっぱりわかっていなくちゃってね」
「そのいいところをよね」
「悪いところなんてね。誰にでもあるし」
話はここでは少し逆説的になっていた。
「そういうのは片目を瞑って見て」
「じゃあいいところは？」
「両目をはっきりと開けて」
こう言うのである。

第百十四話　幼い日はその八

「見なさいってね。子供の頃から言われていて」
「で、彰子のいいところを見たってことがなんだよ」
「あんたらしいのよ」
「そういうことなの」
ようやく皆の言いたいことがわかった七海だった。話を聞いてみればそういうことだったのかと納得して首を縦に動かすことができた。
「成程、そうだったのね」
「そうよ、そういうことなんだよ」
「やっとわかったみたいね」
皆も七海が納得したのがわかって言う。
「あんたらしいわよ」
「そうそう。それが七海のいいところなんだよね」
「正直あの時はかなり驚いたわ」
その皆に応えてまた言う七海だった。
「本当にね。箱をね」
「自分の家まで持って行ったのよね」
「ええ、そうよ」
彼女が言うのはこのことだった。
「本当にね。自分の家までね。一人で」
「幼稚園って八条幼稚園よね」
「そうよ」
八条学園にある学校のうちの一つである。この学校は幼等部から大学院までである。この面々がいる高等部に至っては商業科や工業科、農業科、水産科、看護科等普通科以外にも様々な学部が存在する。大学にもない学部学科はないとまで言われている程である。
「そこからね。彰子の家までね」

「それって結構距離あるよ」
「そうよね」
皆話を距離に移す。
「少なくとも幼稚園に通うような娘じゃ」
「しかも荷物持っていたのよね」
「車輪を利用して引いてだけれどね」
このことは言い加える七海だった。
「その通りよ」
「それでもあそこから荷物曳いてって」
「かなりのものよ」
「だからなのよ」
七海はあらためて皆に話す。
「だから驚いたのよ。私もね」
「彰子になのね」
「あの時のこともね。はっきり覚えているわ」
またその時への話になるのだった。
「本当にね。凄かったんだから」
そうしてまた話されるその時の話だった。七海の回想もまた再びはじまる。
彰子は幼稚園を出た。その手には箱の持つ部分がある。自分の半分程のその箱を本当に曳こうとしているのだ。
彼女の横には七海と先生がいる。先生は心配する顔で彼女を見て問うのだった。
「彰子ちゃん、本当に大丈夫よね」
「はいっ」
返答はやはり明るいものだった。
「大丈夫ですよ」
「いい？しんどくなったらね」
先生は彰子のその声を聞いても顔は心配させたままだった。そして表情と同じものになってしまっているその声を彼女に対してかけ

るのだった。
「何時でも先生に言ってね」
「どうしてですか？」
「どうしてですかって」
こう言われるとかえって困ってしまう先生だった。
「それは。やっぱり」
「私、絶対に帰れますから」
彰子声は相変わらず明るいままだった。
「だって明香が家にいますから」
「わかったわ。じゃあ先生はね」
根負けした顔にまたなるのだった。溜息をつきつつもその顔は微笑んでいる。不思議な顔であるがそれと共に優しい顔になっていた。
「その彰子ちゃんについて行くわね」
「御願いします」
「それで私も」
そしてそこにはやはり七海もいるのだった。
「彰子ちゃんについて行っていいのね」
「いいよ」
あっけらかんとしたまでの明るい返事だった。
「来て、七海ちゃん」
「うん。それじゃ」
こうして先生と七海も彰子が明香にクッキーを届けに家まで帰るのを一緒について行くことで見届けるのだった。彰子達がまだ幼い日の話である。

幼い日は　　完

２００８・１１・１７

第百十五話　温かい氷その一

温かい氷

かくして妹が大好きなチョコレートクッキーを彼女に食べさせてあげる為に家に帰ることになった彰子。そのクッキーを氷と共に入れた箱を引きつつ家に帰るのだった。彼女には幼稚園の先生と七海も一緒だ。三人は彰子を先頭に彼女の家まで向かうのだった。

「ねえ七海ちゃん」

「はい？」

幼稚園の校門を出たところでだった。先生は七海に声をかけてきた。七海もそれを受けて先生を見上げて顔を向けるのだった。

「何ですか？」

「七海ちゃんは彰子ちゃんのお家に行ったことがあるのよね」

「はい、あります」

先生のその問いに素直に頷いて答える七海だった。

「二回位」

「そう、二回行ってるのね」

七海のその返答に表情を変えずに頷く先生だった。

「じゃあ道はわかってるわよね」

「少しですけれど」

「先生もね。知ってるわよ」

それも知っている先生だった。見れば他の園児達も帰る時間だ。皆集まって帰っている。彰子はいつも七海と一緒だがこれは家が近いからだ。

「それはね」

「知ってんですか、先生も」

「だって。先生だから」

優しく微笑んで七海に答えるのだった。

「勿論知ってるわよ」

「先生だから知ってるんですか？」
「そうよ。先生は皆のことを知らないといけないから」
こう言うのである。
「だから知ってるのよ。よくね」
「そうなんですか」
「彰子ちゃんのことも七海ちゃんのことも」
そしてまた言ってきた。
「知ってるわよ。流石に全部じゃないけれど」
「私のことも」
「そうよ。できるだけ多くのことを知りたいの」
先生は言葉を続ける。言葉は半分独白でまだ幼稚園児の七海には殆どわからなかった。けれど先生の心は少しでもわかるものがあるのだった。
「だから今もね」
「彰子ちゃんと一緒になんですか」
「そうよ。それに車とかが来たら危ないし」
それもあるのだった。やはり子供を一人で行かせるには危ない。そうした配慮はこの時代でも同じだった。通学路でも変な人間がいないとは限らないからだ。
「だからね。今も」
「わかりました」
にこりと笑ってはいたがそれでもあまりよくはわかっていない七海だった。このことまで話すを聞いていた皆はまた言うのであった。
「いい先生よね」
「そうだよね」
「本当に」
皆は今度は先生を褒めていた。話を聞いてその先生の優しさと園児への想いがよく伝わったからである。だから褒めるのである。
「確か今の幼等部の園長先生よね」
「ええ、そうよ」

コゼットの言葉に答える七海だった。
「今はね。園長先生なのよ」
「そうなの。あの人が」
「そうやって彰子の後についてくれたのね」
「いつもね。私達のことを考えてくれていたわね」
七海は昔を思い出す目でこう語った。
「本当にね。いつもね」
「そう、いつもなの」
「優しくてね。包容力があってね」
「素晴らしい人だったのね」
「はっきり言って尊敬してるわ」
七海はこうまで言うのだった。
「今もね」
「ううん、凄いっていうか」
「あんたもそこまで」
皆今の七海の尊敬という言葉には苦笑いも入れた。

第百十五話　温かい氷その二

「言うのもね」
「相当なものなのはわかるわ」
「今でも御会いしたらちゃんと挨拶してるし」
「そうなの」
「そうよ。それにね」
七海の言葉は続く。
「将来は私も幼稚園の先生になるんだから」
「それはちょっと飛躍してるんじゃ？」
「そうだよね」
「ちょっと以上に」
七海の将来の夢語りについてはまたしても苦笑いになってしまった。
「それで将来の夢にまでなるって」
「どうかな？それは」
「駄目かしら」
だが七海はかなり本気だった。苦笑いを浮かべる皆に対して懐疑的な顔で尋ね返す程であった。彼女なりに考えてのことであるのはわかる。
「私が保育士っていうのは」
「駄目とは言わないよ」
「むしろ。ねえ」
「似合う？」
考えてみればそうだった。似合うと言えば似合う。七海は明るく面倒見のいい性格なので人から好かれている。当然子供からもだ。それを考えると確かに彼女に合っている職業ではある。
「それも結構」
「そういえばそうか」

「悪くないわね」
「だったらいいじゃない」
皆に対してまた言うのだった。
「それで。そうでしょ？」
「けれど。強引っていうか」
「思い込みが強いっていうか」
この認識は拭いきれなかった。クラスの面々は彼女の言葉からどうしてもこの印象を抱いてしまうのだった。こればかりはどうしようもなかった。
「ちょっと以上にねえ」
「どうなのかしら」
「どうって。いいじゃない」
また言う七海だった。
「それは。とにかくね」
「ええ」
「幼稚園の先生が将来の夢なんだ」
「そう思ったのよ。あの時もそのまま」
また過去の話に戻る。現在と過去の間をめまぐるしく移り動いていく話であった。
先生はずっと彰子の後ろにいる。七海も先生のその横にいて彰子をじっと見ている。彰子はその車のついた箱をずっと引いて家に向かっている。一言も話さずに。
「彰子ちゃん」
「はい？」
「お家まであとどれ位だと思う？」
「あと少しです」
先生の方を振り返ってにこりと笑ったうえでの言葉だった。
「あともう少しです」
「そう。あともう少しなのね」
「はいっ」

その朗らかな顔でまた答えてきた。
「そうです。あと少しですから」
大丈夫だというのだ。見ればその顔には疲れが全く見えない。それどころか歩けば歩く程その顔が晴れやかになっていくようだった。
そしてまた前を見て先に進む。箱はずっと引いている。
そんな彰子を見ながら七海は。心配する顔で先生に尋ねてきた。
「先生」
「どうしたの？」
「あの箱ですけれど」
彰子が今引いているその箱を見ながら先生に尋ねるのだった。
「重いですよね」
「車が付いてるからその分は楽だけれど」
先生は一応はこう述べた。
「けれど」
「重いんですね」
「ええ。重い筈よ」
見れば先生も箱をじっと見ていた。七海も先生も目の色が同じものになっていた。
「だって。クッキーも入ってるし氷も入ってるわよね」
「ええ」
「だったら。かなりの重さの筈よ」
先生もそれは完全にわかっているのだった。

第百十五話　温かい氷その三

「絶対にね」
「けれど彰子ちゃんは」
「それなのよ」
先生は今も彰子を気遣う目で見ていた。
「重い筈なのに。どうして」
「我慢しているんですね」
七海はこう思った。
「彰子ちゃん」
「そうよ。それもかなりね」
ここでも先生は七海と同じだった。二人共彼女がかなり無理をしているのがわかる。何しろ自分の半分程もある大きさの箱を一人で引いているのだ。無理をしていない筈がない。
「その筈だけれど」
「それでも。平気だって」
「妹さんの為なのね」
先生はわかっていた。
「だから」
「それでもそれだったら」
「それだったら？」
「買えばいいじゃないですか」
クッキーを買って明香にあげる。確かに話はそれで終わりだ。しかし彰子はあえてそれをしないのだ。七海にはそれがどうしてもわからなかったのだ。
「それだけなのに。どうして」
「それだけね」
先生は首を傾げる七海に対して言ってきた。
「大切に思ってるのよ、彰子ちゃんは」

「明香ちゃんのことをですか？」
「ええ、そうなのよ」
こう説明するのである。
「だから。それで」
「お家までクッキーを」
「こんな娘はじめてよ」
先生は言う。
「チョコレートクッキーは普通にお店に売ってるわよね」
「はい」
そもそもそうである。
「それなのに自分で持って行くって。ないわよ」
「どうしてなんでしょうか」
「妹さんにそのクッキーを食べてもらいたいからなのよ」
「自分が食べて美味しかったそのクッキーを」
「そういうことよ」
また七海に教えるのだった。
「だからなのよ」
「そうなんですか」
「彰子ちゃんね」
先生は彰子の後姿を見ながら語る。
「三人兄弟の真ん中よね」
「お兄さんがいるんでしたよね」
「そうよ。けれど妹さんが一つ下にいて」
それが他ならぬ明香である。
「とても大切にしてるのよ。まるで自分自身みたいに」
「自分自身みたいに」
「妹さんもそうなの」
先生は明香のこともよく知っていた。
「妹さんもね。彰子ちゃんのことを」
「とても大事にですか」

「生まれた時からの絆ね」
「絆!?」
七海は今の先生の言葉には疑問符を付けてしまった。まだ幼稚園児の彼女にはよくわからない言葉だったのだ。これは仕方のないことだった。
「絆って?何ですか?」
「大きくなったらわかるわ」
先生は今は答えなかった。こう言うだけであった。
「大きくなったらね」
「私が大きくですか」
「ええ、そうよ」
そしてこう言うのである。
「七海ちゃんが大きくなったらね」
「そうなんですか」
この時はどうしてもわからなかった。だが心にはずっと残ったのだった。幼いその心に。そしてそれは今もなのであった。またこのことを皆に話していた。

第百十五話　温かい氷その四

「というわけなのよ」
「ふうん、そこでは答えてくれなかったんだ」
「園長先生」
「それから何度か御聞きしたわ」
七海はこのことも皆に語る。
「何度もね。けれどね」
「答えてくれなかったと」
「そういうことね」
「ええ、そうなのよ」
やはりそうだった。ありのままを皆に話していた。
「結局。今までね」
「それでも今はどうなんだ？」
「今って？」
「だから。今はだよ」
マチアはそのことをダイレクトに七海に尋ねてきていた。
「今の御前は。どうなんだ？」
「その絆について？」
「ああ。わかったか？」
本当にダイレクトな問いだった。
「今は。どうなんだ？」
「そうね」
その問いに少し間を置いてから答える七海だった。
「まあ。わかったって言えばね」
「わかったのか」
「少し位だけれど」
言葉には少し謙遜もあった。
「わかったわ」

「そうか」
マチアは今の七海の言葉を聞いてまずは納得した顔になって頷いた。そうしてそれからまたその七海に対して言うのであった。
「それならいいがな」
「絆・・・・・その時に少しはわかったのかしら」
自分で首を傾げさせる七海だった。
「結局のところね」
「あれ？彰子と妹さんを見て？」
「やっぱり？」
「まあそうなるわね」
そのことを自分でも認める。
「結局のところはね」
「やっぱりそうなの」
「あの二人からだったんだ」
皆もそれを聞いて納得した顔で頷くのだった。
「それであんたもわかったのね」
「得るもの大きいじゃない」
「その時はわからなかったわ」
だが七海はその時のことはこう話した。
「それも全然ね」
「当然だな」
それを聞いても特に驚かないマチアだった。
「それはな」
「当たり前なの」
「その時はまだ幼稚園児だろう？」
「ええ」
マチアがまず言うのはそのことだった。
「それだったらな。わからなくて当然だ」
「言われてみればそうだよね」
「そうね」

皆もマチアの言葉に頷くのだった。彼の言葉に納得したのである。
「子供でわかることってやっぱり少ないから」
「気付くこともないしね」
「だからだ。子供だったからだ」
「その時わからなかったのは」
「後になってわかる」
彼はこうも言うのだった。
「後でな」
「後でなのね」
「そしてそれが今だ」
次には今だと言い切ってきた。
「今だ。今わかったな」
「ええ、確かに」
そして七海も彼のその言葉に頷くことができた。

第百十五話　温かい氷その五

「何となくだけれどね」
「見たことや聞いたことは忘れていても心の奥底に残り続ける」
無意識にまでついて語る。マチアの話は今回はかなり深いものになっていた。
「それはその時になって」
「出て来るの」
「覚えていてもわからないこともその時になればわかる」
こうも言うマチアだった。
「御前にとって今のその時だったということだ」
「そういうことなの」
「そう。そして」
彼はさらに言う。
「二人の絆だな」
「それね」
話はここで彰子と明香のことに戻った。
「そっちなのね」
「御前のことはおおよそわかったからな」
こう答えるマチアだった。
「だからだ。次は」
「本題ってわけね」
「その通り。それで二人はどうなったんだ？」
「これがね。また凄かったのよ」
「凄かった！？」
「どういうふうに？」
「ちょっと待って」
マチアだけでなく皆が聞くところで七海は少し時間を置くのだった。そして懐から缶ジュースを出してきた。見ればそれはミルクテ

ィーである。
「ちょっと。喉が渇いたから」
「一杯ってわけね」
「そういうこと。それにしても」
ここでその紅茶を美味そうに飲みながら皆に語る。
「この紅茶美味しいわね」
「ああ、三時の紅茶ね」
「それ飲んでるんだ」
皆ここで彼女が何処の紅茶を飲んでいるのかわかった。日本ではわりかし有名なメーカーが製造している紅茶のブランドだ。その味は甘みが強いことで知られている。
「その紅茶」
「確かに美味しいよね」
「それもホットが一番よ」
七海は自分から言って来た。
「寒い時はね」
「うっ、確かに今結構」
「寒いし」
皆ここで教室が結構冷えてきているのに気付いた。学校の教室というものは人が集まる為結構以上に暖かいものだがそれでも限度がある。ましてや今はヒーターを切ってしまっていた。
「ヒーターつけましょう」
「そうだね」
とりあえずヒーターをつける。その間に七海はもうホットミルクティーを飲み終えてしまっていた。飲むのはかなり早かった。
「さて、と。身体もあったまって喉も潤ったし」
「話の続きね」
「ええ。それじゃあ」
「御願い」
皆七海に対して言う。七海はそれを受けてまた話しはじめた。

「それでね。道中はね」
「どうだったの？」
帰り道。彰子はあくまで慎重だった。信号はちゃんと見て普段歩いている時でも周りをよく見ている。ぼんやりとしているのにそういうことはしっかりとしていた。
「いいわね」
先生はそんな彰子を見て感心した顔で頷く。
「彰子ちゃん、いいわよ」
「いいんですか」
「車が一番怖いから」
先生が言うのはその通りだった。交通事故が子供にとって一番危険なのは何時の時代でも同じである。当然この時代の日本もだ。
車道は勿論だが歩道も車が絶えない。だが彰子はそうした車に半ば無意識のうちに気付いてよけているのだ。その気配りが実にいいと先生は言うのだ。
「だからなのよ」
「そうですね。そういえば」
七海も言われてそれに頷くのだった。
「私もよくお父さんやお母さんに言われるし」
「幼稚園もでしょ？」
「はい」
また先生の言葉に頷く。
「先生もいつも言ってますよね」
「子供はね」
先生はさらに優しい声になっていた。
「どうしても怖いから」
「怖い！？」
これもこの時の七海にはわからない言葉であった。
「私達が怖いんですか？」
「ええとね」

今の表現はわかりにくかったと反省する先生だった。それを自分でもわかってその言葉をすぐに訂正するのだった。中々柔軟である。

第百十五話　温かい氷その六

「そうじゃなくてね」
「じゃあ何なんですか？」
「心配なのよ」
今度はこの言葉を選んで述べた。
「子供がね。心配だから」
「私達がですか」
「そうなのよ。先生達はね」
本当に優しくて暖かい声だった。七海も聞いているだけで心が和む。まだ幼稚園児でもその感触ははっきりとわかるのだった。むしろ子供だったからこそ。
「皆が心配なの」
「私達が」
「何があるかわからないから」
また優しい顔での言葉であった。
「だからね」
「そうなんですか」
「そうなのよ。先生達は皆そうよ」
こうも七海に話してきた。
「皆ね」
「幼稚園にいる先生達はなんですね」
「そうよ。少なくとも七海ちゃん達が通っている幼稚園はそうよ」
八条幼稚園は、ということだった。なお八条幼稚園もまた理事長は八条義統である。やはり彼なくして八条学園は語ることができないのだった。
「私達はそうだから」
「じゃあ先生」
七海は今の先生の言葉を聞いたうえで先生に尋ねた。

「これからですけれど」
「ええ。何かしら」
「先生も他の先生達もお父さんやお母さんみたいに考えていいんですね？」
こう尋ねるのだった。
「それじゃあ」
「ええ、そうよ」
そして先生も優しい声で彼女に答えるのだった。
「そう思ってくれていいわよ」
「そうなんですか。それじゃあ」
「だから彰子ちゃんも」
またしても彰子を見る。七海だけではなく。
「何かあったらいけないから」
「彰子ちゃんも」
「いい娘よね」
ぬくもりのある言葉だった。
「本当に」
「彰子ちゃん凄く優しいんです」
七海は彼女とはじめて会った時のことを思い出しながら話した。
「皆にも」
「そうね。いつも見ているわ」
それに気付かない先生ではなかった。
「皆に同じだけ優しいわよね」
「同じだけじゃないですよ」
しかし今の言葉に対しては言葉を返す七海だった。
「同じじゃ。ないです？」
「それはどういうことなの？」
「だって彰子ちゃん」
口を少し尖らせての言葉であった。
「私達よりも」

「皆よりも？」
「明香ちゃんにずっと優しいから」
こう言うのだった。だがこの言葉には嫌がるものも困ったこともなく純粋に語っていた。つまりそんな彰子のことも認めているのだった。
「だから」
「ふふふ。そうだったわね」
先生もそれがわかって七海に微笑を向けて頷く。
「だから今だってね」
「はい、そうですよね」
そういうことだった。
「明香ちゃんにクッキーを」
「クッキーね」
先生は今はクッキーについて言うのではなかった。クッキーという言葉を口にしても。少なくともクッキーだけを話すのではなかった。
「暖かいクッキーね」
「暖かいクッキー？」
「ええ、そうよ」
箱を見ていた。そのクッキーが入っている箱を。
「あのクッキーはね」
「けれど先生」
今度も言葉もこの時の七海にはわからなかった。これもまたこの時はわからずに後になって、大きくなってからわかる。そうした言葉だったのは。
「あのクッキー氷で冷やされていますけれど」
「だから暖かいのよ」
けれど先生はこう言った。
「だからね」
「氷で暖かく？」

「氷は心だから」
「氷は心！？」
「そう、彰子ちゃんの心」
先生の言葉である。
「だからね。暖かいのよ」
「そうなんですか。冷たいのに」
「冷たくさせているのが暖かさなの」
「！？」
この言葉も七海にはわからなかった。先生が何を言いたいのかすら理解できなくなった。だがその先生はまた七海に言うのであった。
「じゃあ。もうすぐだから」
「彰子ちゃんのお家まででですね」
「そうよ。行きましょう」
「はい」
何はともあれ彰子の家に着いた。これで一つの話が終わりまたあらたな話がはじまるのだった。暖かい話はそれからも続くのだった。

温かい氷　　完

２００８・１１・２２

第百十六話　二人で食べてその一

二人で食べて

「とまあここでね」
「やっと彰子のお家に着いたと」
「結構長くない？」
皆は七海の話を聞いて言うのであった。彼女の話はここでやっと彰子の家に辿り着いたのである。確かにかなり長くなってしまっている。
「彰子の家ってあそこよね」
「そうよ。あそこよ」
また答える七海だった。
「あそこにね。ずっとあるわよ」
「それでそこまで遠い？」
「無茶苦茶遠く感じてるんだけれど、本当に」
皆こう七海に言う。
「彰子の家だったら馬ですぐじゃない」
騎馬通学を続けているナンの言葉だ。
「移動とかしないんだし」
「そうだけれどね」
話す七海もそれは認める。
「けれどね。ほら、子供だったじゃない」
「ええ」
「それはね」
ほんの幼稚園児だ。少なくとも今とは全く違う。
「だから。その時は」
「遠く感じたっていうの？」
「そういうこと？」
「そう、そういうことなのよ」

こう話すのだった。
「その時はね。本当に長くかかったから」
「成程、そうだったの」
「そういえばあんた今はバス通学だったっけ」
「一人で通学できるようになってからね」
七海はまた皆の言葉に答えた。
「その時からよ」
「ふうん、じゃあ小学校からよね」
「じゃあその時はどうしていたの？」
根本的な話であった。
「その時は。話聞いてたら歩いてるけれど」
「どうしてたの？」
「お母さんが送り迎えしてくれていたのよ」
こういうことだった。
「携帯で電話して来てもらってね」
「成程」
「それだったら」
皆も話を聞いて納得した。
「すぐだしね」
「それなら」
「そういうこと。もうこうしてね」
実際にここで携帯を取り出してみせる。ボタン一つ押しただけで終わってしまうのがこの時代の携帯である。やはり便利さが二十一世紀とは全く違っている。
「これで終わりだから」
「メール送るだけね」
「それだけでだしね」
「そういうこと。だからその時も」
こう話すのである。
「そうして呼ぶことにして」

「まずは彰子のお家に」
「そういうことだったのね」
「ええ。彰子のお家はね」
話が今度は彰子の家のことになっていく。
「はっきり言って同じよ」
「同じ？」
「そう、同じ」
皆にまた語る。
「今と一緒だったわ。何もかもね」
「ふうん、あんな感じなの」
「どんなのかは。知ってるわよね」
「まあね」
「あそこでも皆でパーティーやったし」
とにかく誰かの家か適当な店を見つけて騒ぐのがこのクラスの面々だ。しかしこれは彼等だけでなく連合では何処でもそうなのであるから彼等だけがおかしいのではない。

第百十六話　二人で食べてその二

「ああいう感じなの」
「だったら別におかしくはないわね」
「お父さんとお母さんもいたし」
彰子の両親についても話す。
「今とあまり変わってなかったわよ、御二人共」
「あんな感じなのね」
「そうよ」
皆への返答はこれしかなかった。
「あのまま。外見もね」
「外見もって？」
「だからあのままなのよ」
こう皆にまた言うのであった。
「今とね。全然変わらないのよ」
「ちょっと待ってよ」
スターリングがそれを聞いて七海に対して問うてきた。
「今さ、あのままって言ったわよね」
「ええ、そうよ」
「彰子ちゃんのお父さんもお母さんも見たところ」
「大体二十代後半？」
蝉玉が考える目で述べる。
「その辺りに見えるけれど」
「けれどそれって実際におかしいわよ」
「そうだよね、よく考えたら」
アンネットとトムが二人に突っ込みを入れる。
「彰子のお兄さんが大学生でしょ？それを考えたら」
「彰子ちゃんのお父さんもお母さんも」
彰子の兄から二人の年齢を考える。そうするとどうしても最低で

この年齢になってしまうのであった。その年齢はどれ位かというと。
「四十代？」
「だよねえ」
トムはアンネットの今の言葉に応える。
「大学生の子供がいるんだったら」
「けれど今の御二人の外見って」
「やっぱり二十代後半だな」
ルシエンがここで言った。
「特にあのお袋さんはな」
「そうよね。保育園に迎えに来ていても不思議じゃない外見だし」
「彰子ちゃんが大人になった感じ？」
アンネットとトムがまた言う。
「そんなふうだけれど」
「けれどね。やっぱり」
「そうなのよ。とにかく外見は同じだったのよ」
七海はまた皆に述べた。
「完全にね。御顔もスタイルもね」
「十年以上変わらないって」
「何やってるんだろ」
皆それがかなり不思議になるのだった。
「彰子も妹さんも訳わからないところ多分にあるけれど」
「御両親もなのね」
そのことについて考えざるを得ないのであった。
「本当にあの娘の周りって」
「不思議な雰囲気があるわよね」
「全く」
「とにかくよ」
七海はここまで話したうえでまた話を戻してきた。
「彰子のお家に着いたのよ」
「ええ」

「とにかくやっとなのね」
「長い旅だったわ」
七海は感慨を込めたようにして言葉を出した。
「全くね。けれど辿り着いたその先には」
「お姫様がいたのね」
「そうよ。とびきりのお美しいお姫様が」
わざとふざけて返す七海だった。
「おられたのよ。宮殿に」
「成程」
皆笑顔で彼女に合わせる。そうしてまた話に入るのだった。彰子が玄関を開けるともうそこには。明香が立っているのであった。
「お姉ちゃん、遅かったのね」
「御免なさい。待った？」
「ううん」
明香は首を小さく振って姉の言葉に応えるのだった。

第百十六話　二人で食べてその三

「あまり。今まで寝てたから」
「そう、よかった」
その言葉を聞いてまずは安心する彰子だった。
「あのね、明香」
「うん」
「今日はいいもの持って来たよ」
こう妹に言いながら玄関を前に進む。七海と先生もそれについて行く。この時二人はぺこりと頭を下げて明香に挨拶をするのであった。
「幼稚園の先生？」
「そうよ」
まずは先生がにこりと笑って明香に挨拶をする。
「小式明香ちゃんね」
「はい」
明香は先生の言葉にこくりと頷いて答える。
「そうです」
「彰子ちゃんの妹ね。お留守番大変ね」
「私はお留守番していません」
だが明香はこう先生に答えるのだった。
「私は。そんなことは」
「あら、そうなの？」
「お留守番はこの子がしています」
そう言うと部屋の奥から大蛇が出て来たのであった。アナコンダだ。平気で二十メートルはある。冗談抜きで何をされるかわからない不気味さを漂わせている。
「エリザベスが」
「そうなの・・・・・」

流石に大蛇を見て思いきり引く先生だった。これは無理もなかった。
「蛇なのね」
「草食なんですよ」
「草食！？」
「はい、草食のアナコンダなんです」
こう先生に説明する彰子だった。
「我が家の大切なペットなんですよ」
「草食のアナコンダ！？そういえば」
ここで先生はあることを思い出した。
「確かカルタゴのザマ星系のあの？」
「はい、そうです」
彰子はにこりと笑って先生に答えた。
「あのアナコンダです。ですからとても大人しいんですよ」
「大人しいのね」
「それに凄く優しいですし」
見れば明香にその巨大な頭を摺り寄せている。それはまるで竜が乙女を恋い慕うようである。明香もそのアナコンダの頭を小さな手で優しく撫でている。
「我が家の家族の一員です」
「そうだったの。エリザベスちゃんね」
「はい」
名前は一応可愛いものだった。
「もう生まれて。ええと」
「五十年らしいわ、お姉ちゃん」
明香の方がよく知っていた。
「お父さんが言っていたけれど」
「そうだったね。私が生まれるよりずっと先からお家にいるもんね」
「そうよ。もうお爺ちゃんなのね」
「お婆ちゃんよ、明香」

姉が妹に突っ込みを入れた。
「だってエルザベス女の子だから」
まずは大蛇のお出迎えだった。七海はもう知っていたので彼女を見ても驚いてはいなかった。しかし先生はそれこそ腰を抜かさんばかりの有様だったのだった。
「あれはねえ」
「普通に引くからね」
皆エリザベスと先生の初顔合わせの話を聞いて口々に述べた。
「いきなり二十メートルもある大蛇が家の玄関ににゅって」
「普通はないから」
「そういえば」
アロアがここで皆に言う。
「彰子のお家も結構以上に大きいわよね」
「エリザベス普段はプールにいるしね」
「確かに」
なお連合では一戸建てならば普通に家にプールがあったりする。流石にアパートの個々の部屋にはないがそれでもどのアパートにもプールやトレーニングルーム等はあったりする。

第百十六話　二人で食べてその四

「それを考えたらやっぱりね」
「大きいわよね」
「流石一戸建て」
他の国から来てアパートに住んでいる面々から見れば素直に羨ましい話であった。
「まあ言っても仕方ないけれど」
「それでも凄いわね」
「あのエリザベスも」
アナコンダについても話す。皆知っているようだ。
「外見はおっかないけれどね」
「確かに」
二十メートルもある大蛇を最初目の前で見て驚かない人間もまずいない。それはもう想像を絶する大きさがあるのだから。頭だけで子供位はある。
「大人しいしね」
「しかも草食性だしね」
「そうそう」
そうした蛇も宇宙にはいるのだった。宇宙は実に広い。
「何の問題もないし」
「餌はどうしてるんだっけ」
「普通に水草で充分らしいわよ」
「ああ、それは楽ね」
水草はこの時代かなり安い値段でペットショップでも買える。しかも栽培も可能だ。
「それやってればいいんだから」
「増やせるし」
「けれどまあ」

ここで話が少し変わりはする。
「それにいきなり出会った先生はね」
「やっぱり驚いたわね」
「何とか立ってはいたわ」
このことも言う七海だった。
「一応は、だったけれど」
「それでもいきなりあれが出て来て立ってるのは凄いよ」
「本当」
皆口々に言って頷き合う。
「私なんか最初見た時」
「私も」
さらに言葉を続けていく。
「何なんだって思ったし」
「話を聞いていたから別に驚かなかったけれど」
気構えができているとそうはならない。何事でもそうであるがこの件に関してもそうなのだった。やはり知っていることは大きいのだ。
「それでエリザベスに会って」
「それからどうなったの？」
「それでね」
七海はまた皆に対して応える。
「とりあえずエリザベスはだけれど」
「ええ、あの娘ね」
皆エリザベスに親しみを持っているのであの娘とまで言う。今では小式の家族でありマスコットともなっているのである。随分と大きいマスコットであるが。
「とりあえず戻ってもらったのよ」
「プールに？」
「そう、あのプールにね」
その時のことの話である。

「戻ってもらったのよ」
「とりあえず騒ぎの元は去ったのね」
「それはそうだったけれど」
しかしここで七海はどうにも難しい顔をするのであった。
「先生がそれで動けなくなって」
「あらあら」
「まあそれも仕方ないか」
そうなってしまったことを聞いても落ち着いている一同だった。
「いきなり大蛇だからね」
「食べられるって思っても」
「苦手な人にはたまらない」
この時代でも当然ながら蛇が苦手な人間はいる。特に女性に。他にも蜘蛛やら蜂やら犬やら猫やら人によって様々だがこの先生の場合は。
「先生？」
「・・・・・・・・・」
七海が声をかける。だが返事はなかった。
「先生？」
「えっ！？」
ここでやっと気付いたようだった。

第百十六話　二人で食べてその五

「先生、どうしたんですか？」
「えっ、ええ」
やっと気付いたかのように声を出す先生だった。
「どうしたの？七海ちゃん」
「どうしたのって。先生」
先生の顔を見れば真っ青になっていた。やはり蛇が怖いようである。
「先生こそ。何かあったんですか？」
「ええ。ちょっとね」
その青くなった顔で述べる先生だった。
「実はね。先生」
「はい」
「こんなこと言ったら笑われるかも知れないけれど」
顔は真っ青なままでそこに照れ隠しの笑いが混ざってきた。
「蛇が。苦手なのよ」
「蛇がですか」
「普通のはそれ程じゃないけれどああした大きなのは」
ということであった。
「どうしてもね。もう見ただけで」
「駄目なんですか」
「そうなのよ。腰が抜けそうだったわ」
自分でも言うのだった。
「ちょっとね。いえ、かなり」
「かなりなんですか」
「どうしても駄目なのよ」
また言う。
「ああいうのって」

「はあ」
「けれど。もう大丈夫よ」
しかし少し無理をして元気を出して七海に述べた。
「もうね。蛇さんいなくなったから」
「はい、それは」
「それでね。明香ちゃん」
その元気を出した顔で明香に声をかける。
「実はね。お姉さんね」
「はい」
「明香ちゃんの為に凄くいいもの持って来てくれたのよ」
「凄くいいもの？」
「明香」
その彰子がここで明香に声をかけてきた。それと共に後ろのボックスの箱を開け中からあれを取り出して彼女に差し出すのであった。
「はい、これ」
「これって？」
「クッキーよ」
微笑んで妹に対して差し出したのだった。
「チョコレートクッキー。明香好きだよね」
「うん」
あまり感情が見られない返事だった。この辺りは今の彼女を髣髴させるものがある。
「だから。持って来たの」
「幼稚園から？」
「そうよ。幼稚園から」
にこりと笑ってまた妹に話す。
「持って来たの。けれど」
ここで彰子は申し訳なさそうな顔を妹に見せるのだった。
「ひょっとして熱くなってるかも」
「クッキーが？」

「お外。暑かったから」
氷も一緒に入れていたことはこの時は忘れてしまっていた。
「だから。層だったら御免なさい」
「ううん、熱くないわ」
だがここで妹は。姉がクッキーを差し出しているその手を持つのだった。そうして両手と両手を重ね合わせたままで彼女も微笑んで言うのだった。
「熱くないけれど」
「熱くないけれど？」
「暖かい」
その微笑みでの言葉だ。
「暖かい。暖かいよ」
「暖かいって。クッキーが？」
「うん」
姉の問いに対してこくりと頷いてみせた。

第百十六話　二人で食べてその六

「暖かい。凄く」
「そんなわけないけれど」
彰子は妹のその言葉を聞いて首を捻るのだった。
「だって。氷も一緒に入れたし」
「だからなの」
こう姉に返す妹だった。
「だから。暖かいの」
「氷って冷たいのに？」
「うん」
そのクッキーを手にして笑みを浮かび続けている。
「その冷たいのが暖かいの」
「どういうことなの？」
「彰子ちゃん」
先生は今度は彰子に声をかけた。やはり優しい笑みを浮かべている。
「このことは覚えておいて」
「覚えておくの？」
「そうよ。よくね」
これまで七海に対して話していたことをそのまま彰子にも話しているのだった。
「覚えておいて。そうしたらね」
「そうしたら？」
「わかる時が来るから」
やはり七海に対して言ったことと同じであった。
「何時かね。きっと」
「そうなんですか」
「お姉ちゃん」

明香がまた微笑みながら姉に声をかけてきた。
「このクッキーね」
「どうしたの？」
「皆で食べよう」
こう言うのである。
「皆で。食べようよ」
「皆でって」
彰子は明香の言葉にきょとんとした顔になる。
「それ明香のだよ」
このことを言う。
「だから持って来たのに」
「けれど。私しか食べちゃいけないってことはないわよね」
「う、うん」
戸惑いながらも妹のその言葉に頷く。
「それは。そうだけれど」
「他にもおやつは一杯あるし」
「お家のおやつのこと？」
「うん。それも入れてね」
姉に対してだけの言葉ではなくなってきていた。
「先生も七海さんも」
「あら」
「私もいいの？」
「だって。一人で食べるの勿体ないから」
二人を見つつ語る。
「だから。御願いします」
「そうね。それじゃあ明香ちゃん」
「はい」
「喜んで受けさせてもらうわ」
目も頬も笑わせて明香に応える先生だった。
「明香ちゃんの気持ちをね」

「有り難うございます」
「じゃあ。私も」
七海はそれまで戸惑っていたが今ここで答えるのだった。
「いいのよね」
「はい」
明香の返事は変わらなかった。
「御願いします。皆で」
「うん、それじゃあ」
ここで彼女も頷くのだった。これで四人になった。
「皆でね」
「クッキー。食べましょう」
先生は靴を脱ぎだしていた。こうして皆でそのクッキーを食べるのだった。幼い頃の彰子と明香の小さな、だが暖かい話であった。
「とまあね」
「そういうことだったのね」
「ええ、そういうことだったのよ」
こう皆に答える七海だった。
「そういうわけでね。それでね」
「それでだったの」
「最後まで聞くとどうにもね」
「何かね」
最後まで話を聞いた皆は顔を見合わせて口々に話すのだった。

第百十六話　二人で食べてその七

「やっぱり彰子だし」
「明香ちゃんもね。明香ちゃんね」
「その頃からそうだったんだ」
それで次はこう言うのだった。
「けれど。それで」
「その時はそれで終わりよね」
「ええ、そうよ」
七海はまた皆に答える。
「それでね。皆でそのクッキーと他のお菓子も食べて」
「終わりね」
「それからまだあるのよね、それでも」
「ちょっとそれは」
七海の言葉が急に鈍った。
「まあね」
「まあねって」
「あったんでしょ」
「この話はこれで終わったのよ」
見ればその顔も少しばつの悪いものになっていた。
「これでね」
「えっ、これで終わり!?」
「それだけなの?」
「とりあえずはお菓子を食べて終わったのよ」
こう皆に述べるのだった。
「そのクッキーをね」
「美味しかった?」
「ええ」
この質問には答えることができた。

「それはね。ただそれから長い間経って」
「それでどうなったの？」
「わかったのよ」
こう言う七海だった。
「最近にやってやっとね」
「クッキーの意味がね」
「そういうこと」
彼女が言うのはそれであった。話は一旦終わったがそれからというわけだったのだ。話は一旦終わってもそれで完全に終わりとは限らないものなのだからだ。
「それでわかったのよ。どうして暖かいのかね」
「成程」
「暖かい氷ね」
「そうよ。それでやっと」
言うのだった。
「わかったのよ。その暖かいクッキーはね」
「どうだったの？」
「美味しかった？やっぱり」
「まず言うとね」
皆に微笑み、そのうえで述べる七海だった。
「暖かかったわ」
「暖かかったの」
「そして甘かったわ」
また言うのであった。
「とてもね。今思い出してもあれが一番美味しいクッキーだったわ」
「一番なの」
「そう。今まで食べた中で一番美味しいクッキーだったわ」
七海は答える。
「あれがね」
「そういうのを明香ちゃんは食べているのね」

「そのクッキーを」
「そうなのよね。それを考えたら」
七海はさらに言葉を続ける。
「明香ちゃんってね」
「そうね。やっぱり」
「幸せよね」
「そういうお姉さんがいてね」
「そうよね。それも最近になってわかったわ」
これもわかった七海であった。
「やっとね」
「だから私のお薬も通じなかったの」
アンジェレッタもここで納得した。
「そういう絆があるから」
「そういうことね」
アンジェレッタのその言葉に頷くコゼットだった。
「だからなのよ。彰子にあのお薬が通じなかったのは」
「元々妹さんが大好きだからなのね」
「そして妹さんも」
同じだと言うコゼットだった。
「そうなのよ。やっぱりね」
「ううん、何かかなり羨ましいかも」
ここまで聞いてふと呟くアンジェレッタだった。
「そういうのって。やっぱり」
「さて、と。私の話はこれで終わりよ」
ここで話を実際に終えるアンジェレッタだった。
「これでね」
「お疲れ様」
「いい話だったわよ」
話が終わると皆から労いの言葉を受ける。
「そうかあ。昔からいい姉妹だったのね」

「けれど。何かね」
「そうね」
顔を見合わせて言い合いだした一同だった。
「何かあのアナコンダに久し振りに会いたくなったわよね」
「エリザベスに」
その草食性のアナコンダだった。
「元気かしら、今も」
「元気なんじゃないの？アナコンダって長生きだし」
普通に相当の時間を生きることで有名なのがそのソウショクアナコンダである。鶴は千年、亀は万年と言われているが流石にそこまではいかないにしろやはり長生きの生き物なのが大蛇でありその中でもこのソウショクアナコンダはかなりのものになっているのだ。
「百五十年じゃなかったっけ」
「確か今七十位だから」
「まだまだね」
純粋に考えてまだあと八十年は生きる。やはり相当な時間である。
「じゃあ行ってみましょう、今度ね」
「そうね」
皆笑顔でこう結論付けた。
「今度ね。皆で」
「そのクッキー。食べたいわね」
最後にクッキーが話に出た。クッキーそのものは食べられないにしろ。それでもそこにあるものを食べてみたくなった一同であったのだ。

二人で食べて　　完

２００８・１１・２８

第百十七話　アナコンダその一

アナコンダ

彰子の家にはアナコンダがいる。その名前をエリザベスという。二十メートルに達する巨大なアナコンダであり草食のアナコンダである。

彰子にとっても明香にとっても大切な家族である。いつも可愛がりその写真まで持っている程である。

「ほら、これ」

皆にも三次元ホノグラフィーの写真を見せる。

「この写真。可愛いでしょ」

「可愛いっていうかね」

「ちょっと。これは」

その写真は彰子が笑顔でそのエリザベスの頭を撫でている。緑のその頭はそれだけで彼女の胸までである。途方もない大きさである。

「大きいわよね」

「恐竜みたいっていうか」

「二十メートルあるから」

これが彰子の皆への返答だった。

「やっぱりね。大きいわよね」

「だからよ」

「アナコンダってそこまで大きいものなの？」

「そうだけれど」

特にどうということのない顔で皆に答える彰子だった。

「何かおかしい？」

「おかしいっていうかね」

「やっぱり」

皆言葉を少し詰まらせながらもそれでも言うのだった。

「セーラの家の恐竜もそうだけれど」

「あまり大きいペットって大変じゃないの？」
「御飯代なら大丈夫よ」
答えはするが何故か少しピントが外れている返答であった。それが彰子らしいといえば彰子らしい。そして彼女はさらに言うのであった。
「水草。栽培も簡単だし何もしなくても普通に育つし」
「何もしなくても？」
「そうよ。プールに入れておくだけで」
彰子はこう皆に説明する。
「それだけで増えていくから」
「エリザベスはそれを食べて生きているのね」
「うん。私のお家のプールでね」
そうなのであった。そのプールがエリザベスにとって家なのだ。そういうわけだったのだ。
「そこで暮らしているのよ」
「成程ね」
「それでなの」
「そうよ。今朝もね」
ここからはおのろけであった。自分の家のペットに対してのろけるのは誰でもでありそれは彼女も同じだった。だが彼女の程度は普通の人より少しばかり深く大きなものであった。
「朝起きたら枕元にいてくれたのよ」
「枕元って」
「確かあんたの部屋って」
皆その話を聞いて眉を顰めさせるのだった。そのうえでさらに言う。
「お家の二階よね、確か」
「そうよ」
何でもないという声での返答だった。
「二階だけれど」

「どうやって来たのよ」
「二階まで」
「窓を開けたのよ」
笑顔で答える彰子だった。
「エリザベスってね。頭がいいから」
「窓を開けた！？」
「蛇が！？」
言うまでもなく蛇は手も足もない。足があればそれで蜥蜴になってしまう。蛇は元々蜥蜴からなったものであるのはどの星の生態系でも同じであるのだ。
「どうやって開けたのよ」
「窓の鍵開けてあるにしろ」
「舌を使ったのよ」
彰子はここでも明るい何でもないといった調子で皆に答えた。
「それでね。窓を」
「開けたの」
「舌で」
「うん、そうよ」
そういうことだったのだ。アナコンダだけではなく蛇の舌は長い。それを使って窓を開けたということだったのだ。謎がこれで解けたのだった。

第百十七話　アナコンダその二

「それでね。窓を開けてね」
「そうなの」
「それでなの」
「うん。それで朝の挨拶してくれたのよ」
彰子のおのろけは続く。
「おはようってね」
「アナコンダって話したっけ」
「っていうか鳴くのかな」
皆またしても彰子の言葉に首を傾げるのだった。
「アナコンダっていうか蛇って」
「鳴かないでしょ」
「鳴かなくてもわかるの」
これが彰子の言葉であった。
「心がわかるの。エリザベスのね」
「ううん、何かもうそれって」
「超能力!?」
こんな言葉も皆から出て来るようになった。
「まさかと思うけれど魔術とか!?」
「流石にそれはないわよね」
「セーラじゃないから」
「魔術でも超能力でなくとも」
そしてここでそのセーラが言うのであった。
「動物の心はわかりますよ」
「えっ、どうやって!?」
「それ、どうするの?」
「簡単なことです」
にこりと笑って皆に述べるセーラであった。なお彼女が簡単だと

言う話は常に常人には到底真似のできるものではなかったりするのだが。
「その動物にそっと触れるだけでいいのですから」
「それ普通にやるよね」
「ええ」
皆もそれはする。というか動物を見て触れてみるのは子供の頃から誰でもしていることだ。だがセーラはそれでわかると言うのである。
「けれどそれでわからないわよ」
「俺もだ」
「それは。セブンセンシズに目覚めてからのことです」
「セブンセンシズ!?」
「何、それ」
セーラはまた訳のわからないことを言ってきた。少なくとも皆にとってはその常識を根本から覆してしまうような話なのは確かであった。
「よかったら説明してくれないかな」
「そうよね。それ何よ」
皆そのセブンセンシズについて尋ねずにはいられなかった。
「そのセブンセンシズって」
「何なのかな」
「人には六つの感覚がありますね」
セーラはそれを受けて話しはじめる。
「それはもう御存知ですね」
「まあそれはね」
「知ってるわ」
それについてはやはり誰もが知っていた。知らない筈もないことであった。
「まずは視覚に聴覚に」
「味覚に触覚、それと頭」

まずはこの五感である。それに付け加えてである。
「あとは勘ね。つまり」
「その六つだよね」
「はい、その六つです」
それで正解だった。その六つである。
「そしてです。それとはまた別にあるもの」
「それがセブンセンシズってわけなのね」
「これに目覚めるとわかるのです」
ということらしかった。
「動物の心も。それで」
「つまりそれって超能力かな」
「そうじゃないの？」
皆セーラの言葉からこう考えるのだった。
「やっぱり。そんなの普通ないし」
「勘にしろ人によって鋭さにかなり差があるわよね」
「そうよね」
ちらりとセーラと彰子を見比べる皆であった。セーラは鋭いどころか人間とは思えないものがありそれに対して彰子はあれである。だから見比べるのである。
「それで第七の感覚って」
「そうとしか。やっぱり」
「それだけです」
セーラはこれまた何でもないといった口調で皆に述べるのだった。

第百十七話　アナコンダその三

「それだけですので。誰でもできます」
「っていうかそれに目覚めるにはどうすればいいのかな」
「さあ」
そんなことがわかる筈もなかった。
「修行じゃないかな、やっぱり」
トムがとりあえず言ってみた。
「そうなるにはさ。よくわからないけれど」
「よくわからないの」
「とりあえず座禅？」
またとりあえず言うトムだった。
「それやってたらできるかな」
「それ、仏教じゃない」
ルビーが今のトムの言葉に突っ込みを入れる。
「禅宗でしょ？つまりは」
「けれど仏教ってマウリア発祥じゃない」
「それはそうだけれど」
一応この時代にも仏教はマウリアにおいても存在している。ただしヒンズー教の一派と考えられている。これこそマウリアなのである。
「だから。座禅したらできるんじゃないかな」
「そうかしら」
それを聞いても納得できないルビーであった。そもそも納得できる方がおかしなことであるのだが、要するにセーラ以外は誰も納得していないのだ。
「あと荒行するとか？」
「それでもできるようになるかしら」
「どうかな」

言っている本人があまりそうは思っていないトムであった。
「多分。できるかも知れないし」
「多分って」
「やっぱりよくわからないや」
結局こうなるのであった。
「どうなるかは」
「そうよね。結局は」
「セブンセンシズが何かさえわからないし」
「そもそも本当にあるかどうかだけれど」
「セーラはあるって言うけれど」
皆それを殆ど信用していないのだった。無理もないことである。
「まあそれは置いておいて」
「そう、とにかくよ」
とりあえずセブンセンシズの話はここまでにするのであった。話をしてもどうにもならないものがあるからである。だからなのであった。
「問題はエリザベスだけれど」
「舌で窓を開けたの」
「うん」
話が戻ったところでにこやかに答える彰子だった。
「そうよ。とても器用にね」
「器用なのはわかるけれど」
「けれどねえ。何かそれって」
「ねえ」
皆眉を顰めさせたうえでそれぞれの顔を見合わせ言葉も交えさせるのであった。
「怖いわよね」
「ねえ」
「怖いって！？」
彰子だけがわかっていなかった。

「何か怖いところある？エリザベスに」
「だから。大蛇よ」
「それも二十メートル」
その迫力はまさに恐竜並である。人類がまだ地球にあった頃巨大なアナコンダはアマゾン川流域に住む人々にとって常に伝説の存在だったからだ。実際に様々な逸話が残っている。その全てが真実とは限らないにしろ相当のものが真実であると言われている。
「それってやっぱり凄いじゃない」
「迫力あるわよ」
「大人しいわよ」
しかし彰子はまだわかっていなかった。
「間違っても草以外口にしないし」
「だから。そういう問題じゃなくて」
「大きさがねえ」
「そうよね」
「何で皆エリザベス怖がるの？」
どうしてもわからず首を傾げてしまう彰子だった。

第百十七話　アナコンダその四

「あんなに優しくて可愛いのに」
「可愛い、ね」
「慣れかしら」
「家族だからじゃないの？」
皆彰子の言葉にまた言うのであった。
「だから慣れていて自然になっていて」
「それかしら、やっぱり」
「五十年生きてるんでしょ？もう」
「七十歳よ」
だが彰子はこう訂正するのだった。
「ひいお爺ちゃんが買ってね。それからだから」
「それからなの」
「ひいお爺ちゃんに聞いたけれど」
彰子の曽祖父はまだ生きているらしい。かなりの高齢なのはわかる。
「最初は数センチしかなくてね」
「数センチ？卵じゃないの？」
「アナコンダは卵産まないよ」
彰子がクラスメイトの何人かに答えた。実はアナコンダは蝮等と同じ卵胎生なのである。どの蛇も卵を産むというわけではないのである。
「だから。それでね」
「だから数センチだったの」
「うん。それは今はね」
「二十メートルかあ」
「大きくなったわね」
それが大蛇というものである。歳を経るにつれ大きくなり遂には

そこにまで達するのである。何でも最初は僅かなものなのである。
「少しずつ大きくなっていったんだって」
「何十年もかけてね」
「うん。けれど」
だがここで彰子は。ふと寂しい顔をするのであった。
「これ以上はないんだって」
「これ以上はって？」
「何が？」
「もう大きくならないって言われたの」
その寂しい顔での言葉であった。
「もうね。これ以上はね」
「まあそれだけ大きくなればね」
「流石にね」
皆話を聞いてそれが当然だと思った。しかしどうやら彰子だけはそうは思っていないのであった。それを言葉にも出して言うのであった。
「もっと大きくなって欲しいわ」
「もっとって」
「二十メートルあるじゃない」
「三十メートルは欲しいの」
「幾ら何でもそれは無理だよ」
「ねえ」
皆また顔を見合わせて言うのであった。
「三十メートルはね」
「そこまで大きいアナコンダはいないわよ、流石に」
「そう思うけれど」
実際そうだとは言い切れないのが宇宙の広さであり恐ろしさである。何しろ地球ではいなくなった生き物が他の惑星では普通にいたりするからだ。恐竜にしろそうである。
「そこまではね。やっぱり」

「ならないわよ」
「多分だけれど」
「それはね」
何か今一つ自信のない発言もあった。だがとりあえずはそこまで大きなアナコンダはいないということで結論となったのであった。
しかしそれでも。話は続くのだった。
「とりあえずそのエリザベスだけれど」
「うん」
「よく懐いているのね」
今度の皆の彰子への問いはこれであった。
「彰子にも」
「懐いているんじゃなくて家族よ」
だが当の彰子はこう皆に答えるのだった。
「私達。だから仲がよくて当たり前じゃない」
「家族なんだ」
「そう、家族よ」
このことは何度でも言って強調するのであった。

第百十七話　アナコンダその五

「私達はね」
「だから起こしてもくれるのね」
「そうよ。皆だってそうでしょう？」
今度は皆に尋ね返す彰子だった。
「やっぱり。家族に起こしてもらうわよね」
「まあ僕もね」
それに最初に応えたのはスターリングだった。
「ラスカルに起こしてもらうよ、いつも」
「あらいぐまだったっけ」
「そうだよ」
皆の問いに答える。
「可愛いんだよ。甘えた声を出して」
「うわ、おのろけ」
「スターリングものろけるの」
「っていうかさ、本当のことだから」
おのろけと言われて顔を赤らめさせるがそれでもこう返すのだった。
「可愛いじゃない、あらいぐまって」
「まあそうだけれどね」
「けれどね。あらいぐまによっては」
だが皆ここで言うのであった。
「かなり凶暴だし」
「そうそう」
顔を顰めて言う面々もいる。
「爪は鋭いしね。下手な猫より強いし」
「ラスカルはそうじゃないの」
「確かに爪は鋭いよ」

スターリングもそれは認める。
「けれどさ。頭がいいし温厚だから」
「そういうことね」
「個体差があるんだ、性格って」
「人間だってそうじゃない」
彼氏を援護するようにして蝉玉が話に加わってきた。実は彼女もラスカルは好きなのだ。なお彼もまた自分のアパートにペットを飼っている。
「天本博士とかシャバキみたいな人もいれば」
「人！？」
「本当にそうかしら」
この二人がまともな人間とは誰も思わない。少なくとも連合においてこの二人を知らない人間はおらず誰もがまともだとは思ってはいないのである。
「神父やお坊様みたいな性格の人もいるしね」
「その神父さんやお坊様だってそれぞれだし」
「動物も違うのね」
「その通りですよ」
そしてまたセーラが出て来たのであった。
「それも。触れてみればわかりますので」
「ううん、そうなんだ」
「それもなの」
「そうです。心は嘘はつきません」
その穏やかな微笑みでの言葉である。
「ですから。そうしたことを見るのもいいものですよ」
「そういうものね」
「すぐにわかればいいんだけれどね」
「すぐにわかりますよ」
あくまでセーラ限定の話であるので皆参考にはしていない。
「全て。触れてみれば」

「じゃあエリザベスはどうなの？」
ふとエイミーがセーラに問うてみた。
「セーラもエリザベスには会っているわよね」
「はい」
にこやかに笑って彼女の問いに頷くセーラであった。
「何度か。小式さんのお宅にもお邪魔していますので」
「じゃあやっぱり触れたことあるわよね」
「ええ。素晴らしい心の方ですよ」
エリザベスのことである。
「前世は」
「前世って」
「そこまでわかるの」
あらためて知るセーラの凄さであった。

第百十七話　アナコンダその六

「前世はプリンセスでしたね」
「プリンセスっていうと！？」
「何処の？」
「マウリアの。イスファーン藩国の」
所謂マハラジャの治める国である。あくまでその藩国の象徴であるが名目上の国家元首として治めていることになっているのである。なおセーラの家もそのマハラジャの家である。
「第四十七王女でしたね」
「第四十七って」
「何なんだろうね」
そこまで王女が続くと流石に皆何が何なのか想像できないものがあった。
「とてもお美しく気品のあるお方でした」
「美人で気品のあるお姫様ってこと？」
「はい」
簡単に言うとそうであった。
「まさにマウリアの真珠と詠われていたそうです」
「ふうん、そんなに」
「それでその人って」
そのプリンセスについての話になる。
「どんな人だったの？」
「何時の時代の人なの？」
「二百年前の方です」
セーラはまず時代について述べた。
「その頃のイスファーンにおられました」
「二百年前ねえ」
「かなり昔ね」

「ほんの一時でした」
連合出身の皆から考えればかなり昔だがマウリアのセーラから見ればほんの一時であった。何しろ今の宇宙の時間すらが神の一日でしかないのだから。この途方もない時間の概念がマウリアの思想の特徴である。その中で人もあらゆる生物も輪廻転生を繰り返しているのである。
「その二百年前の真珠だったのです」
「まあ時間はいいとして」
「それはね」
皆ももうセーラの話のそこにはあえて突っ込まないのだった。突っ込めばその分だけ話がややこしいものになってしまうからである。
「とにかく。そのお姫様って」
「どんな御顔だったの？」
「それだけれど」
最大の関心に話をやる。やはりそこであった。
「美人って言われてもさ」
「実際どんな人かわからないと」
「何も言えないし」
「暫くお待ち下さい」
セーラはここで皆に対して言うのであった。
「念写しますので」
「念写！？」
またしても訳のわからない言葉が出て来た。皆彼女の話を聞いてそう思わざるを得なかった。とはいってもいつものことではあるのだが。
「念写ってまた」
「訳のわからないことになってきたね」
「既にエリザベスさんの思念は私の中にあります」
「いや、それもかなり」
「凄いことだけれど」

凄いというレベルではないことを平然とできるのがセーラである。
「そこにもうありますので」
「っていうかエリザベス前世のこと覚えてるの？」
「それって無理なんじゃ」
皆はこのことについても考えた。確かに前世を覚えているという話もあるが大抵の人間はそうではない。転生する時に忘れてしまうのが常なのだ。
「けれどまあそれでも」
「どうやってわかったのか知りたいけれど」
「無意識です」
セーラはにこやかに笑ってまた皆に答えた。
「それは無意識の中にあるものなのです」
「無意識ねえ」
「そういうのは流石に」
本人では中々わからないものである。この時代は無意識に関する研究もかなり進んでいるがそれでも完全にははっきりしていないのが実情なのである。それが全てわかるということはおそらくそれだけ神の領域に人という存在が近付くということでもあるからだろう。
「わからないし」
「けれどそこにあったの」
「誰もの中にあるものです」
セーラの言葉ではそうである。

第百十七話　アナコンダその七

「それもまた」
「ううん、そうなんだ」
「何か余計にわからなくなってきたけれど」
皆また首を傾げてしまった。
「それでもわかったんなら」
「どんな御顔なの？」
このこともまたとりあえず置いておいてセーラに尋ねるのだった。
「その第四十七だったっけ」
「確かね」
「何か赤穂浪士みたいだな」
日本系国家にいるダンが呟く。なお琉球でも日本の歌舞伎や浄瑠璃といったものは行われている。日本文化も琉球文化も両方残っているのだ。
「四十七と聞くと」
「こりゃ他の王家だったら百八とかいるかも」
「有り得るから怖いな」
皆マウリアをそうした物凄い国家だと思っている。少なくともマウリアはマウリアであり連合の常識が一切通用しない世界なのは間違いない。
「まあとにかく」
「ええ。念写」
そちらに話が戻る。
「それだけれどどんな御顔？」
「まだできないの？」
「できました」
それ自体はまさに一瞬であった。
「もうここに」

「あっ、速いわね」
「流石はセーラ」
やはり尋常な能力ではないセーラであった。
「一瞬で念写できるなんて」
「念写は得意ですので」
それだけで済ませるセーラだった。よく考えてみれば念写なぞできること自体がとんでもないことなのだが最早彼女にとっては些細なことであるのだ。
「ですから」
「そうなの。まあとにかく」
「どんな人かしら」
皆もうセーラのこうした能力には特に何も言わず何も思わずその関心を写真に向けた。やはり話の要点はそこに他ならなかったからである。
「美人なのよね」
「じゃあ一体どんな美人かしら」
そう言いながら写真を見る。するとそこには。
「あっ、これは本当にね」
「奇麗だよね」
「ええ」
皆その写真を見て口々に言う。そこに映っているのは浅黒いマウリアの肌に黒い星を思わせる目と彫のある整った顔立ちの見事なマウリアの美女だった。よくモデルや女優としてマウリアのテレビや映画にも出ているような。そうした女性であったのである。見事な程だった。
「成程、これは確かに」
「美人だよ」
皆こう言って納得するのだった。
「こんな人だったんだ」
「その王女様って」

「ただ美人だけではありませんでした」
セーラは言うのである。
「その御心も清らかなものでして」
「ふうん、そうなんだ」
「性格もなのね」
「非常に徳のある方でした」
セーラはこうも皆に説明した。
「そのおかげで多くの人々に慕われ尊敬され幸せな家庭を築かれ」
「ってことは結婚したんだ、この人」
今のトムの言葉は少し意外なような言葉になっていた。
「何か信じられないな」
「トム、それは当たり前だよ」
その彼にセドリックが突っ込みを入れる。
「だって女の人は大抵結婚するんだから、そうじゃないの？」
「言われてみればそうか。僕達だってそうだし」
「そうそう」
中には独身主義者もいるが大抵はそうである。

第百十七話　アナコンダその八

「だからさ。それは別にね」
「意外に思うこともないか」
「それに王女様だし」
セドリックはこのことについても言うのであった。
「政治とかの理由でやっぱり誰かと結婚するじゃない」
「お相手はマガバーン州のクシャトリアの名門の嫡子でした」
「クシャトリアなの」
「そうです」
皆の問いに頷いてみせてきた。
「王女はクシャトリア身分なので」
「ああ、マハラジャは大体そうだったっけ」
「私もですよ」
実はセーラもそうであった。確かにカースト制度は宇宙進出前に廃止されているがそれでもこの時代においても中々根強く残っているのである。この辺りが実に複雑であるがそれでも民主主義もまた連合と同じ程度には健全であるのもマウリアである。だから連合の者達から見ると実に不思議な国家なのである。
「私もクシャトリアですし」
「バラモンじゃないんだ」
「バラモンは僧侶ですから」
王族や武器を持って何かをする立場ではないのである。あくまで。
「そうした地位にはありません」
「何か複雑だね」
「っていうかバラモンだけでも階級が幾つもあるんだよね」
「確かね」
階級は三千はあるとも言われているしそもそもヒンズー教徒以外も大勢存在しているのがマウリアである。中には人口に含まれてい

ない三百億程度の人間もいる。
「もう何が何だか」
「そういえばセーラの魔術ってバラモンのものじゃないの？」
「さあ」
その辺りは皆もあまり考えてはいなかったし考えてもわからないことであった。
「どうなんだろ、そこって」
「よくわからないけれどまあいいか」
「そうだね。考えても仕方ないし」
「そうそう」
結局セーラに関してはこれで話を終わらせた。セーラについては連合の常識では何もわからないからだ。まさにマウリアそのものである。
「とにかくこの王女様はさ」
「はい」
セドリックがセーラに問うて話を元に戻してきた。セーラもそれに応える。
「その一生を素晴らしく過ごしたんだよね」
「そうです。最後まで徳を積まれて」
「そうだったんだ。成程」
それを聞いてセドリックだけでなく皆も頷いた。しかし話はまだ続くのだった。
「けれど何で蛇に生まれ変わったんだろう」
「そうよね」
皆今度はこのことに首を傾げるのだった。
「徳がある人が蛇！？」
「人間じゃなくて？」
「何かおかしくない？それって」
「いえ、それでいいのです」
だがセーラは首を傾げる皆にこう述べるのだった。

「そうなるのが道理なのです」
「道理って徳のある人が蛇!?」
「やっぱりおかしいような」
皆セーラにこう言われてもやはり首を傾げるのであった。
「普通人間よね、徳があったら転生するって」
「そうよね、何で蛇!?」
「そこがわからないんだけれど」
「ナーガです」
これがセーラの皆への返答であった。
「ナーガだからです」
「ナーガっていうと確か」
蝉玉が今のセーラの言葉であることを思い出した。
「確か。仏教で言う竜王よね」
「そうですね。そうなります」
蝉玉の今の言葉に微笑んで答えたセーラであった。
「仏教ですと」
「っていうと竜王に転生したの?そのお姫様」
「そうなるわよね」
皆セーラと蝉玉のやり取りを聞いてまた顔を見合わせて述べ合った。
「人間から竜王に転生ならまあ」
「徳があるからこそかしら」
「あのエリザベスさんはただのアナコンダではないのです」
セーラの言葉である。
「その実態はナーガなのです」
「ふうん、実はそうなんだ」
「それ考えたら確かに凄いね」
今一つ実感が湧かないのでこんな気の抜けたようなコメントを出す者もいた。
「竜王っていうのは確かに」

「けれどさ。その竜王様が彰子達のところにいるのよね」
「そうなるわよね、そういえば」
皆次はこのことに気付いたのだった。
「何で彰子のところにそんな凄い存在がいるの？」
「そこんところもわからないんだけれど」
「これもまた徳です」
また徳を話に出すセーラであった。
「彰子さん達の。前世からのです」
「じゃあ彰子は前世何だったのかしら」
「神様だったとか？」
「そのことですが」
セーラの声が急に弱くなった。まるで青菜に塩をかけたように。
「彰子さんと明香さんはどうもわからないのです」
「わからないって前世が？」
「はい。どういうわけか」
首を傾げさえするセーラだった。
「こんなことは本来ないのですが」
「ううん、何だかよくわからないけれど」
「あの二人にも何か凄いものがあるみたいね」
「そうだね。何が何かわからないけれど」
皆口々にまた言う。
「けれどセーラですらわからないなんて」
「一体あの二人って前世何だったんだろう」
「そこがかなり気になるけれど」
一つ大きな謎ができたのであった。彰子と明香の前世は一体何であったのか。皆そのことについて考えだしたのだが当の二人はというと。相変わらずの調子でマイペースに時間を過ごして楽しく生きているのだった。二人だけは変わりはしないのであった。

アナコンダ　　完

2008・12・4

第百十八話　二人の前世その一

二人の前世

彰子と明香はこの日も楽しく買い物を行っていた。スーパーの中で様々な品物をあれやこれやと二人で話をしながら選んでいるのである。

「ねえ明香」

「どうしたの？姉さん」

「この人参どうかしら」

奇麗なコバルトブルーの人参を明香に見せて問うていた。

「いいと思わない？」

「そうね。大きいし新鮮ね」

「そうよね。じゃあ人参はこれね」

「ええ。あと玉葱だけれど」

「玉葱はこれでどうかしら」

妹に台車の籠の中にあるその玉葱を見せて問う。見ればその玉葱は黒く艶さえある。

「この玉葱で」

「出雲星系の玉葱なのね」

「そう、私これが一番いいと思うわ」

日本の星系の一つである。ここで採れる玉葱は真っ黒であることで知られている。その味はかなりの絶品であることも有名である。

「これがね」

「そうね。カレーにするには一番いいわね」

妹も姉のその言葉に対して頷いた。

「この玉葱が。やっぱり」

「じゃあ玉葱もいいわね」

「ええ」

姉の言葉にまた頷いた。

「そう思うわ」
「じゃあ人参と玉葱はこれで決まりで」
「あとはジャガイモだけれど」
「それはもうお家にあるわよ」
「あのジャガイモね」
「あれでいいわよね」
妹に顔を向けて問うていた。
「あれで。駄目かしら」
「いえ、いいと思うわ」
ここでも姉に特に反対はしないのだった。とはいっても自分の考えがないわけではなく人参にしろ玉葱にしろしっかりと見ている明香であった。
「あれで」
「そうね。じゃあそれで決まりでね」
「いいと思うわ」
「ルーもあるし。スパイスも」
「ペッパーと唐辛子は？」
「あっ、それね」
妹に言われて気付いたのだった。
「それもよね、やっぱり」
「もう切らしていたから」
こう述べる明香だった。
「だから」
「そうよね。明香やっぱり凄いわ」
今の妹に対して笑顔で言う彰子だった。
「よく覚えてるじゃない」
「それは。別に」
しかし妹の方は少しおどおどとした様子で返すのだった。どうも姉にそう言われても今一つ自覚はないようである。態度にそれが出ていた。

「私は」
「いつも有り難うね」
姉はそれでも妹に対して言う。
「おかげで私買い物で忘れたことないし」
かなり天然で忘れやすい彰子がだ。クラスでは一番ののんびり屋の彼女がしっかりできているのもこの妹あってのことなのである。彰子自身もそれはよくわかっているのだ。
「今だって。忘れるところだったわ」
「じゃあ姉さん」
「うん」
妹の言葉に対して笑顔で頷く。
「香辛料のところに行きましょう」
「青唐辛子がいいと思うわ」
今度はアドバイスする明香だった。
「それがね」
「そうね。あの辛さはカレー向きよね」
「だから」
こう言うのであった。
「青唐辛子で」
「ええ。それでペッパーは？」
「それは緑が」
こうした様々な色の香辛料が存在しているのがこの時代である。その味も様々である。贖罪は地球にあった頃よりも遥かに豊かである。

第百十八話　二人の前世その二

「緑はどうかしら」
「緑ね」
「ええ、緑」
また明香に対して言う。
「緑でどうかしら」
「それでいいと思うわ」
また姉に答える妹であった。
「それで」
「じゃあペッパーも決まりね」
「最後にお肉は」
今度は肉に関する話になった。
「何にすれば」
「ラム？」
ふとした感じで彰子が言ってきた。
「ラムなんてどう？」
「ラム！？」
「そう、ラム」
所謂子羊の肉である。大人の羊であるマトンとはまた別の種類に肉に区分されている。それには確かな理由が昔からあるのである。
「ラムだと匂いもしないし」
「そうね。ラムは」
姉の言葉に頷いた。
「匂いがしないわ。じゃあ」
「ラムで決まりね」
肉もこれで決まったのであった。
「今回のお肉は」
「ええ。けれど姉さん」

「どうしたの？」
「確かにラムは匂いはしないけれど」
それでもというのである。明香はラムに対してかなりの知識があるようだった。
「それでも。羊は羊だから」
「匂い消しが必要なのね」
「どうかしら」
姉にアドバイスをするのだった。
「それは」
「そうね。確かに」
言われてそれに気付いた彰子だった。右手の人差し指を己の口元に縦一文字に当ててそのうえで考える顔になっているのであった。
「じゃあ。匂い消しにペッパーを余分に買おうかしら」
「それをお肉に塗って」
「そうね」
そこまで話を及ばせる。
「そうしましょう。それでいいわよね」
「ええ、それでいいと思うわ」
こんな話をしながらカレーの具を買う二人だった。それが終わってからスーパーを出ると。暫く歩いたところで呼び止められてしまったのであった。
「これ」
「はい！？」
二人は同時に声がした方を振り向いた。するとそこには。
一人の老婆がいた。水晶球を置き白い布を被せたテーブルを前に置きうずくまるようにして座っている。頭から紫がかったダークグリーンのフード付の長い衣を着ている。その姿を見て二人はすぐにこの老婆が何者なのかを悟ったのであった。
「ロマニーの方ですか？」
「左様」

老婆は彰子の問いに対して答えた。実に皺がれた声であった。
「如何にもわしはロマニーじゃ」
「占い師さんですよね」
「それもその通りじゃ」
老婆はまた彰子の言葉に答えたのだった。
「それは言っておく」
「はい」
彰子は素直にその老婆の言葉に頷いた。だがこれで終わりではなかったのであった。老婆は彰子だけでなく二人に対して言うのだった。
「それでじゃ」
「何ですか？」
「娘さん達」
その小さき目で明香も見つつ話をする。
「娘さん達は只者ではないな」
「只者ではない？」
「どういうことですか？それは」
「うむ。娘さん達の前世は素晴らしいもののようじゃ」
老婆は今度は水晶を見ていた。そのうえでまた二人に対して語る。

第百十八話　二人の前世その三

「むむっ」
「むむっ！？」
「どうしたのですか？」
「何としたことじゃ」
今度は驚いた声をあげる老婆であった。
「まさか。この様なことが」
「この様なこと！？」
「私達に何かあるんですか？」
「だから前世じゃ」
また言う老婆だった。
「娘さん達の前世はのう」
「私達って前世があったの」
「あるのが普通よ、姉さん」
明香が彰子に述べる。この時代の宗教では大抵がその前世を認めている。キリスト教は違う筈だが連合においてもエウロパにおいても複数の宗教が同時に信仰されているのでそのことはあまり考慮されていない。考慮する者もいるが大抵はその矛盾に悩むことになる。
「私達だって」
「そうなの」
「そうよ。ほら、セーラさんがよく仰ってるじゃない」
明香にとっては先輩なのにさん付けであった。
「前世は。誰にでもあるって」
「あっ、そういえば」
ここでも言われて気付く彰子だった。
「そうだったね。誰にでも前世が」
「だからよ」
明香はまた言う。

「私達にも前世があるわ」
「だとしたら何かしら」
彰子はそのことについて考えだした。
「私の前世って」
「女神じゃ」
老婆はここでまた二人に告げた。
「娘さん達は女神なのじゃよ」
「女神なんですか」
「私達が」
「太陽と月の二人の女神」
老婆はまた告げる。
「それが娘さん達なのじゃよ」
「私達がその女神って」
「嘘みたい」
「御前さんが太陽で」
まず彰子を指差して言う。
「そしてあんたが月じゃな」
「私が太陽で」
「私が月！？」
「そうじゃ」
きょとんとした顔になった二人への言葉だった。
「素晴らしいことじゃ。この世に神様が降臨されておられるのじゃからな」
「まさか。そんなことないですよ」
「そうです」
だが二人は老婆のその言葉を否定するのだった。これも無理のないことであった。
「私達がそんな。太陽とか月とかなんて」
「有り得ないです」
「本人にはわからんものじゃ」

だが老婆はまた二人に告げた。
「どうしてもな」
「ううん、そうなのかしら」
「それは少し」
少しどころではないがこう言ってしまった明香だった。
「神様って言われても」
「私達の身体は」
「神様は心じゃ」
しかし老婆は二人に告げ続ける。
「心じゃよ。身体でなくな」
「心って言われても」
「私達は心も」
「ふぉふぉふぉ、それもまたわからんよ」
ここで老婆は笑ってみせてきた。
「自分自身ではな」
「ううん、もうお話が何が何だか」
「私達には。ちょっと」
「ちょっとわからなくともよいのじゃよ」
語る老婆の言葉が優しくなった。

第百十八話　二人の前世その四

「ちょっとどころか全くでもな」
「全くでもって」
「私達自身はですか」
「また意識することもない」
老婆はこうも言う。
「娘さん達自身はな」
「そうなんですか」
「私達は」
「左様じゃ」
結論付けるような言葉であった。
「しかしじゃ。その徳によりじゃ」
「その徳により？」
「何かあるんですか」
「まず娘さん達にとって非常によい」
まず語ることは二人自身についてであった。
「とてつもない幸運と加護に包まれておる」
「幸運と」
「加護に」
二人はそれぞれ言う。言いはするがやはり二人には実感の湧かないことであった。二人は今は人間であるからそれも当然のことであった。
「そうじゃ。今まで何か不幸にあったことはおありかな？」
「そういえば」
「ないです」
これがその二人の返事だった。
「今まで。何かありそうです」
「最悪ですんでのところでそれが終わっています」

彰子も明香もそれぞれ今までのことを思い出しながらまた老婆に答えた。二人の一生の間でそこまで大きな不幸は今までなかった。それは思い出して再確認できたことだった。

「何でも」

「そこまではいきませんでした」

「そうじゃろうな。それこそがじゃ」

老婆はまた二人の言葉を聞いて頷きつつ述べた。

「幸運と加護なのじゃよ」

「それがなんですか」

「全ては前世の因縁」

極めて仏教的な言葉であった。

「それのおかげじゃよ」

「そのおかげだったんですか」

「だから私達は」

「しかもじゃ」

老婆はさらに言葉を続けてきた。

「さらによいことがある」

「お婆さんこのまえ助六見ませんでした?」

今の老婆の言葉に何気に突っ込みを入れたのは明香だった。

「ひょっとして」

「むっ、わかるか」

老婆も老婆でそれを認めた。

「観たぞ。第九十代市川団十郎のものをな」

「やっぱり」

「わかるとはのう。何故じゃ」

「今の御言葉で」

明香が突っ込みを入れたのはそこであった。

「わかりました」

「そうか。言葉についつい出て来るものじゃのう」

「他には何がお好きですか?」

「白波五人男じゃ」
老婆は話に乗ってこう答えた。
「あれはやっぱりとおしじゃよ」
「そうなんですか」
「その通りじゃ。そうでなければ全部わからん」
随分と通のようである。しかもその趣味はどちらかというと荒事で尚且つ江戸歌舞伎が好きなようである。仕草も自然とそれになってきていた。
「あの場面場面だけやるのはいかんのじゃよ。歌舞伎もやっぱりとおしなんじゃよ」
「そうなんですか」
「義経千本桜にしろそうじゃ」
話をさらに進める老婆だった。自分の趣味の方向に。

第百十八話　二人の前世その五

「あの狐に至るまでの。様々な場面が全部あってことじゃ」
「はあ」
「それを場面場面でくぐりよって」
嘆かわしいといった声であった。
「日本人のそこがわからん。折角あそこまで素晴らしいものを作っておきながらそれをぶつ切りにするとは。とおしでやらなくてどうするのじゃ」
「そうなのですか」
「まあそれはよい」
とりあえず不満を述べ終えたところで話を戻してきた。
「それでじゃ。ええと、話は」
「次のことですよ」
彰子が突っ込みを入れる。老婆に顔をやや近付けて。
「それで。どうなんですか？」
「おお、それじゃそれじゃ」
彰子に言われて思い出す老婆であった。どうもこの辺りは歳を感じさせる。
「それじゃったな」
「はい、そうです」
「済まん、済まん。それでじゃ」
「次に何があるんですか？」
「周りにもじゃよ」
老婆が今度言うのはこれであった。
「周りにもよいことがあるのじゃよ」
「私達の周りにもですか」
「うむ。花の香りはそこにあるだけではないじゃよ」
「はい」

これはその通りである。そうであっては花もあまり面白いものではない。
「周りにも漂うものじゃ」
「だからですか」
「左様じゃ。娘さん達の徳は周りにも及ぶ」
このことを二人に言うのであった。
「家族にも友達にもな」
「そういえば私達の家族って」
「そうね」
またここで顔を見合わせる二人であった。
「お父さんもお母さんも」
「兄さんも」
家族達について考えてみた。
「皆運がいいわよね」
「そうね」
「ご家族だけではないじゃろ？」
老婆はさらに二人に尋ねた。
「見たところ学生さん達じゃな」
「はい、そうです」
「その通りです」
二人はまた老婆の言葉に答えた。
「けれどどうしてそれが？」
「いや、それはわかるぞ」
少し呆れた顔で彰子い述べた老婆だった。
「すぐにな」
「どうしてですか？」
「年齢でじゃ。制服を着なくてもな」
「あっ、そうなんですか」
「それで」
八条学園は制服もありそれこそ様々なバリエーションがあるが特

に着なくてもいい。彰子達もその辺りは着たり着なかったりだ。今は着ていない。
「おわかりだったんですね」
「そういうことじゃ」
また彰子に述べる老婆だった。
「それもおわかりじゃな」
「はい、それで」
「わかりました」
二人はまた老婆の言葉に頷いた。そのうえでまた話すのだった。
「クラスメイトの皆はどうじゃ？」
「皆。やっぱり色々あるけれど」
「それでも」
問われた二人にもやはり思い当たるふしはあった。思い当たってみればそこから気付いていくのだった。その辺りの話の流れは早いものだった。

第百十八話　二人の前世その六

「何かあっても最悪の結果にはならないわ」
「むしろ最後には幸運が」
「そういうことなのじゃよ」
老婆は我が意を得たりといったように述べた。
「御二人のな。その神の前世が影響しておるのじゃよ」
「それでなんですか？」
「皆が」
「しかしそれでも自覚はないようじゃな」
また二人を見た。
「その辺りはな。それでもじゃ」
「それでも？」
「これは定められていたことなのじゃよ」
老婆はまだ自覚できていない二人に言葉を続ける。
「前世からな」
「はあ」
「その証拠にじゃ」
証拠という言葉を出してみせてきた。
「守護する神獣もおるしのう」
「神獣！？」
「それは一体」
「ナーガじゃよ」
マウリアの蛇神である。これについてはもう言うまでもなかった。
「それがちゃんとついておるぞ」
「そんなのいた？」
「わからないわ、それは」
やはりこれもまた二人にはわからないことだった。ここでも顔を見合わせ合った。

「それもね」
「そうよね。やっぱり」
「何度も言うがわからなくともよい」
老婆のこの言葉は変わらない。
「自身ではな。それでじゃ」
「はい、今度は」
「何ですか？」
「話はこれで終わりじゃ」
こう二人に告げたのだった。
「これでな」
「これでですか」
「それじゃあ」
「ああ、よいぞよいぞ」
明香が財布を出そうとしたところで止めたのだった。
「それはのう」
「ですが」
「自分で占ったのじゃ」
明香への言葉であった。
「じゃからな。よいのじゃ」
「そうですか」
「よいよい。それではな」
「はい」
「このことは忘れてもよいぞ」
にこりと笑って二人に告げた。
「覚えていてもどうということはないからのう」
「そうなのですか」
「達者でな」
二人に声をかけた。
「また会おうぞ」
「はい。それでは」

「また」
これで話は終わり二人は老婆と別れた。これで話は終わりであった。
話を終えた二人は帰り道を歩きながら。先程のことを話すのだった。
「ねえ明香」
「何？姉さん」
「さっきの占い師さんだけれど」
「ああ、あれね」
「どう思うの？」
姉の顔を覗くようにして窺っての言葉だった。
「あのお話。どう」
「別に」
彰子はまず妹にこう返した。

第百十八話　二人の前世その七

「別に何も」
「思わないの？」
「どうでもいいわよね」
こう言うのであった。
「結局のところ」
「どうでもいいの」
「私達の前世が神様かどうかよね、明香が言いたいのって」
「ええ」
姉の言葉に対してこくりと頷く。
「そう。それよ」
「やっぱりどうでもいいことじゃない」
あっけらかんとまでした明るい言葉をまた口に出すのだった。
「それって」２０
「どうでもいいの」
「凄い話だとは思うけれど」
彰子も一応はこう述べる。しかし今一つ自分自身の話であるとは考えていないふしが感じられるような、そうした言葉であった。
「それでも。やっぱり」
「どうでもいいのね」
「前世がどうとかなんてね」
また妹に応えて述べる。
「今の私達には関係ないわよね」
「それはね」
姉の言葉に静かに応える。
「ないわ。私達は私達」
「それよ」
ここでそれだと言うのだった。

「それ。私達は私達よ」
「だからなの」
「そう。だからどうでもいいのよ」
明るい声で妹に答えた。
「確かにね」
「確かに？」
「運がいいのは有り難いわ」
それはいいとした。彼女にとっては運がいいのはやはり有り難いことであるのだ。
「それはね。何かあった時とかそれで助かってきたし」
「私も姉さんも」
二人にしろ今まで生きていればピンチを経験したこともある。それを経験しない人間というものも存在しない。ピンチは人生につきものであるのは誰しもが同じである。
「しかも周りの皆もよね」
「占い師さんのお話だと」
「それはいいのよ」
またいいと言うのであった。
「それはね。けれどね」
「けれど？」
「前世はどうでもいいのよ」
またこのことについて述べた。
「それはね。どうでもいいのよ」
「それについてはなのね」
「大切なのは今だから」
これが彰子の考えであった。
「今の私達が大事だから」
「だからいいの」
「明香がいて」
あらためて妹に顔を向けて微笑んで述べた言葉だ。

「それでお兄ちゃんやお父さんにお母さんがいて」
「エリザベスがいて」
「それでクラスの皆がいて」
「それで充分なのね」
「前世なんてどうでもいいわ」
また言う彰子だった。

第百十八話　二人の前世その八

「神様かどうかはね。そこで何かよくないことがあったら別だけれど」
「それ以外は」
「私は私だから」
またここで己の考えを述べた。
「それでいいのよ」
「そうなの」
「明香はどうなの？」
自分の考えを述べたうえで妹に尋ねてきた。
「明香は。どう考えてるの？」
「私？」
「そう、明香よ」
見れば妹に顔を向けて微笑んでいる。背は姉の方が低い姉妹なのでどうしてもこうした形になってしまうのである。一歩間違えれば姉妹が逆に見える。
「どう考えてるの？このことは」
「同じかしら」
左手を少し拳にして口元に当てて少し俯き加減になって。そうして考える顔になって述べた言葉であった。
「私も」
「じゃあ前世はどうでもいいのね」
「運がいいのは有り難いわ」
姉と同じ言葉になっていた。
「けれど。それが何かをしなくちゃいけないものでない限りは」
「いいのね」
「ええ。私も」
姉と同じであると自分でも言うのだった。

「それで。いいわ」
「そう。だったらね、今は」
「今は？」
「早くお家に帰りましょう」
こう妹に告げる彰子だった。
「今はね。それでいいわよね」
「お家に？」
「そうよ。だってもう夕方よ」
彰子が次に言ったのは時間のことだった。確かにもう辺りは朱に染まっており夕陽がもう弱くなってしまった光を見せている。本当に日が落ちようとしていた。
「だから。帰ってね」
「カレー？」
「そうよ、作りましょう」
彰子が言うのはこのことだった。
「いいわね。さもないとお父さん達もお兄ちゃんも帰って来るわよ」
「そうね」
言われてそのことを思い出した明香であった。
「それじゃあ」
「まずはお米といでね」
「ええ」
お米をとぐのも忘れないのであった。
「お野菜とか切って。作りましょう」
「わかったわ。それじゃあ今からね」
「そう、お家に帰って」
またこのことを明香に話す。
「作りましょう、カレーを」
「わかったわ、姉さん」
姉に対して微笑んでそれから頷く。こうして二人はまずは前世のことよりも今を考えるのであった。さしあたってはそのカレーのこ

とをであった。

二人の前世　　完

2008・12・10

第百十九話　拾いものはその一

拾いものは

ベンは五人兄弟の一番上だ。もっともこれは連合においてはごく普通だ。連合はどの国も多産を奨励し続けておりそのせいで子供が多い家が実に多いのである。

しかしそれでも彼は悩んでおりしかも不満であった。何故そうなのかには彼にとっては確かな理由があった。

「何で五人全員揃ってるんだよ」

「うちだってそうだけれど？」

エイミーがその不満を言うベンに対して言った。

「お姉ちゃん達三人と一緒よ」

「けれど女同士だよな」

「まあそれはね」

ベンのその言葉には納得した顔で頷くエイミーだった。

「だから気兼ねなくね」

「しかもお姉さん達酒癖以外は普通じゃないか」

それだけは駄目なのであった。エイミーの三人の姉達はそれぞれ容姿だけでなく頭や性格もいいことで知られている。しかしその酒癖だけは悪名高いのであった。

「うちなんてさ。もう」

「クララちゃんにルーシーちゃんにケイトちゃんだったっけ」

「そうだよ」

忌々しげにエイミーに応える。応えながらクラスの自分の席で憮然としている。

「その三人に末っ子でトブな」

「弟さんよね」

「問題はこの三人なんだよ」

実に忌々しげに述べる。

「全くな。まただしね」
「またって？」
「また動物を拾ってきたんだよ」
うんざりとした顔で述べるのだった。
「しかも今度は何だと思う？」
「この前は確かイグアナだったわよね」
「野生のね」
そうしたものも普通にいたりするのがこの時代である。
「それで今度はセンザンコウなんだ」
「ああ、あの全身鎧みたいになってるアリクイに似たあれね」
「そうだよ」
憮然としてまた言った。
「野生のそれを拾ってきたんだよ、三人で」
「何処にそんなのいたの？」
エイミーはまずそれが不思議だった。地球にあった頃はセンザンコウといえば珍獣であった。この時代は結構普通にいるがそれでも街中で簡単にはいない。イグアナも野生のイグアナは確かにいるがそれでも街中で普通に見つけられるものではないのである。
「野生のセンザンコウなんて」
「僕が知りたいよ。とにかくそれで捕まえてきたんだよ」
「ええ」
「で、いつもと一緒さ」
言葉がうんざりとしたものになっていた。
「いつもとね。完全に」
「家のペットになったのね」
「リョコウバトもいればオオウミガラスもいるしクァッガもいるし」
どれも地球では滅亡したものばかりである。
「あとタスマニアデビルもいるよ」
「本当に何でもいるのね」

「何でそんなものが簡単に見つけられるんだろう」
ベンにとってもそれが不思議で仕方なかったのだ。
「野生のを。街中で」
「考えてみれば不思議な話よね」
エイミーも視線を上にやって考える顔で述べた。
「それってね」
「不思議どころじゃないと思うけれど」
当事者であるベンにとってはそうであった。
「何でこんな都会にオリオモテヤマネコがいるんだよ」
「そんなのもいるの」
「いるよ」
やはり憮然とした声である。
「しっかりとね」
「あれって山の奥深くにいるんじゃないの？」
「しかも亜熱帯にね」
地球にあった頃の日本の西表島で見つかったことがその名の由来である。原始的な猫でありその発見は奇跡とまで呼ばれていたのである。
「けれど僕の家にもいるんだよ」
「妹さんが見つけてきてなのね」
「言っておくけれどあれだよ」
ベンはまたエイミーに対して言う。
「動物園にいたのじゃないからね」
「それはわかるわ」
ベンのその言葉に静かに頷いて述べた。
「実際にあんたの家でも色々見てきたしね」
「うん。とにかくね」
ベンはうんざりとした顔になってきていた。
「何でそんなのばかり拾って来るんだろう」
「そこがわからないのね」

「子供の頃からなんだよ」
また言うベンであった。

第百十九話　拾いものはその二

「何かあればさ。そんな動物ばかり拾ってきて」
「しかも野生のなのね」
「そういうこと。一旦拾った生き物ってほら」
ベンの表情のうんざりとした感じの顔はまだ続いていた。
「絶対に役場に届け出ないといけないじゃない」
「ええ」
これは連合では中央政府の法律でも各国の法律でも定められていることである。連合は動物保護に五月蝿く拾った生き物は何であってもまず役所にそのことを届けないといけないのである。ペットショップで買うにしろ同じだ。捨てた場合は処罰される。拾ったことを役場に知らせそのうえで飼うのかそれとも役場に預けて保護を願うかを決めることになるのだ。
「その手続きはいつも僕だし」
「あんたが今ここにいる一家で一番年長だからね」
「そうだよ。だからだよ」
またうんざりとした顔での言葉であった。
「そうしてね。いつも手続きしているよ」
「大変ね」
「餌代とかはいいけれど」
それはいいというのだった。
「実家から仕送りがあるしね」
「あんたの家って大きな牧場だったわよね」
「うん、そうだよ」
結構育ちのいいベンであった。
「広くてのどかでね。いい場所だよ」
「そうなの」
「牛とか羊とか山羊が一杯いてね」

「ふうん」
「ダチョウも飼ってるよ」
この時代では連合においてはダチョウも非常によく食べられている。肉も卵も両方食べられている。ベンもエイミーもダチョウの肉は好きである。
「だからね。お金はいいんだけれど」
「問題はそこね」
「そう、もう部屋は動物達で一杯なんだよ」
今度は困り果てた顔になっていた。
「あちこちにさ。色々な動物がいて」
「ドリトル先生みたいね」
「もっと凄いかもね」
腕を組んでの言葉である。
「今の状況は。流石にオシツオサレツはいないけれど」
「代わりに何か頭が二つあるみたいなトカゲいたわよね」
「ああ、マツカサトカゲだよね」
エイミーが今言ったトカゲが何なのかもすぐにわかるベンだった。
「あれね。オーストラリアじゃ結構色々な場所にいるよ」
「あんな変なトカゲが？」
「うん」
そのマツカサトカゲというのは頭と尻尾が殆ど同じ形のトカゲである。だから頭が前後に二つあるように見えるのである。身体は全体的に平べったい。
「結構いるよ。カンガルーとかと一緒にね」
「そうなの」
「モアやそのカンガルーと同じくオーストラリアの看板の生き物だしね」
「あれがねえ」
その話を聞いて少し微妙な顔になるエイミーだった。
「何か変わってるわね」

「けれどフェニキアにもそういう生き物いるよね」
「まあね」
ベンの言葉に対して頷く。
「いるわよ。イルカ」
「イルカがそうなんだ」
「そうなのよ。いいでしょ」
「まあね。マツカサトカゲよりはずっとね」
どうやらベンはマツカサトカゲがあまり好きではないらしい。
「いいよね。やっぱり」
「海の民だから。元々は」
自分達の民族のことについて話すエイミーだった。
「だからイルカなのよ」
「成程」
「まあ私が実際にフェニキア人の血を引いているかどうかはね」
「わからないんだ」
「多分違うわ」
自分でもその辺りは自信がないようである。

第百十九話　拾いものはその三

「とは思うけれどね。わからないのよね、本当に」
「まあそれでも看板はイルカなんだね」
「ええ」
ベンの言葉に頷いてみせた。
「いいよねえ、それって」
「けれどオーストラリアはカンガルーもいるじゃない」
「カンガルーねえ」
エイミーの言葉にも浮かない顔のままである。
「あれもね。ちょっとね」
「ちょっとって？」
「はっきり言ってかなり凶暴だよ」
こう言うのであった。
「人見たら殴り掛かってくるし」
「そうらしいわね」
「ああ、やっぱり知ってるんだ」
「フェニキアにもやっぱりいるし」
惑星のその地域ごとに様々な分布がある。だからフェニキアにもカンガルーや有袋類が棲息している惑星が存在しているのである。
「だから知ってるのよ」
「そうだったんだ。まあ今じゃどの国にもいるけれどね」
「イルカにしろね」
「そうだよね。まあとにかくさ」
話を戻しにかかるベンだった。エイミーもそれに合わせる。
「そのマツカサトカゲもいるし」
「他にも色々ね」
「可愛いのもいるよ」
このことも一応は話した。

「そういったのもね」
「どんなのがいるの？」
「ウォンバットとか」
そのオーストラリア人の好きな有袋類の動物である。ずんぐりとした身体とふかふかした灰色の毛が人気の可愛い動物である。
「リスとかもいるけれど」
「じゃあいいじゃない」
「同じだけ凄い動物もいるから」
相殺されるというのである。
「それに。数が凄くなり過ぎて」
「だからなの」
「犬で一ダース、猫が十三匹」
犬と猫だけでこれだけいるのであった。
「インコが五羽にペリカンが三羽、ジュウシマツが二十羽」
「そんなにいるの」
「あと蛙が三十いるよ」
蛙もいるのであった。
「凄く色が奇麗な宝石みたいな蛙もね」
「それ毒があるでしょ」
すぐに察したエイミーであった。
「ひょっとしてじゃなくて」
「その通り。だから食べたら駄目だよ」
「そんなの食べないわよ」
うんざりとした顔になって述べるエイミーであった。
「毒があるのわかってるのに」
「うん。あとサンゴヘビもいるし」
言わずと知れた毒蛇である。熱帯におり赤や黒、白の鮮やかな色彩をしている。その毒はコブラに匹敵するとまで言われている。
「毒のないやつだけれど」
「流石に噛んで毒あるのは飼ってないのね」

「下手したら死ぬからね」
それはやはりないのであった。
「血清も置いてあるけれどね」
「あんたの家そんなのもあるの！？」
「何があるからわからないから」
こうエイミーに答えるのであった。
「だからなんだよ」
「まあ用心に越したことはないわね」
「そういうこと。とにかく今全部でどれだけいるかな」
自分で腕を組んで考えだすのであった。
「うちに。とにかく凄いよ」
「話を聞いてるだけでどれだけいるかわからないんだけれど」
「カブトムシとかクワガタもいるよ」
虫までいるのだった。

第百十九話　拾いものはその四

「すぐ増えるからあげたり売ったりしてるけれど」
「虫ってやっぱりすぐに増えるのね」
「カブトムシとかクワガタなんて土を一年ごとに変えて餌をあげてたらどんどん増えるから」
　こう言うのである。
「それですぐだからね」
「そうなの」
「虫もそうだし拾ってきてどんどん増えていくから」
「去勢とかもしてるのよね」
「できるのはね」
　それは忘れていないのであった。
「ちゃんとしてるよ」
「それでも増えるのが凄いわね」
「ひょっとして今日も」
　困った顔で呟いてきた。
「増えてるかもね」
「今度は何だと思ってるの？」
「さあ」
　そう問われても首を捻るしかないのであった。
「何かな。想像がつかないけれど」
「今まで拾った中で一番凄かったのは何だったの？」
「鰐かな」
　考えてから述べた言葉であった。
「鰐。三メートルはあったね」
「鰐を拾って来たの！？」
「馬もあったけれどね」
「馬って」

「しかもユニコーン」
只の馬ではないのであった。
「この星にユニコーンなんていたっけ」
「いないに決まってるじゃない」
エイミーはベンに顔を顰めさせて言ったのだった。
「あれモンゴルの特定の惑星にしかいないわよ」
「そうだったよね、確か」
「ペガサスとユニコーンは珍獣よ」
そもそも人類が地球にいた頃はどちらも完全に空想中の動物であった。ペガサスに至ってはその存在は科学的に有り得ないとまで言われていた。そうした動物達であるからモンゴル政府もその保護に躍起になっている。だからこの八条学園近辺でいる方がおかしいのだ。
「何でこんな場所に!?」
「さあ」
「さあって」
ベンの要領を得ない返事に眉を顰めさせる。
「何よ、その返事」
「何でいたんだろうね」
やはり要領を得ないベンの返事であった。
「それが僕もどうしてもわからないんだよ」
「あんたがわからないんなら私もわからないわよ」
エイミーもその要領を得ない返事にこう言うしかなかった。
「そもそもね」
「やっぱり」
「そうよ。それでね」
まずそれは置いておいてさらに言うのであった。
「そのユニコーンどうしたの?」
「返したよ」
こう答えるベンであった。

「役場からね。モンゴル政府に」
「モンゴルになのね」
「向こうも驚いていたよ」
　このことも言うベンであった。
「何でユニコーンが日本にいるんだって」
「何処かのお金持ちがこっそりとか？」
「それで手に入る動物かな」
「多分。無理ね」
　エイミーは腕を組んで述べた。
「流石にユニコーンになると」
「そうだよね。まあ保護はされたから」
「それは一安心なのね」
「そういうこと。まあ今までで凄かったのはそれ位かな」
　考えながら述べたベンだった。
「今のところは」
「これからまだ何を拾って来るかわからないのね」
「そうなんだよね。サーベルタイガーなんか拾って来たらどうしよう」
　言うまでもなく猛獣である。連合の動物園では人気の動物でもある。その猛々しい牙を見て子供達は歓声をあげる、そういった動物である。

第百十九話　拾いものはその五

「若しもそんなのが出て来たら」
「有り得るわね」
エイミーもそれを聞いて述べた。
「はっきり言って」
「覚悟はしておいた方がいいかな」
「そうね。用心に越したことはないわ」
エイミーもそれは否定しなかった。
「何があってもね。っていうか何を拾って来てもね」
「恐竜とか？」
「それはなかったの？」
「小さいのならあったよ」
恐竜といってもそれぞれである。一メートルに満たないものもいれば三十メートルに達するものもいる。本当にその辺りは種類によってそれぞれである。
「六十センチのね。アロサウルスの小さいみたいなの」
「それだとあまり怖くなかったでしょ」
「いや、全然」
右手を横に振ってエイミーのその言葉を否定する。
「凄い凶暴だったよ」
「そんなに？」
「アロサウルスだよ」
ここでベンの顔が顰めさせられた。アロサウルスといえばティラノサウルスの次に来る凶暴な肉食恐竜である。人も下手をすれば食べられてしまう程だ。実際に連合では凶悪犯をそのアロサウルスの生き餌にする処刑も存在している。かなり惨い刑罰ではある。
「凶暴じゃないと思う？」
「そう言われたら」

「そういうことだよ」
これが答えであった。
「だからね。大人しくさせるのにも大変で」
「そんなにだったの」
「麻酔が大量にいったよ」
語るベンの顔がうんざりとしたものになっていた。
「それも凄かったし」
「それもって」
「縄も噛み千切るし」
「うわ・・・・・・」
これを聞いてエイミーはまた絶句したのだった。
「凄いわね、また」
「牙だけでなく爪もあって」
それもであった。
「本当にね」
「肉食獣って小さくても危ないのね」
「そうだよ。だからあれだけはね」
「わかったわ。そういうことなのね」
「うん。それにしてもねえ」
言い終えて溜息をつくベンだった。
「困ってはいるよ」
「やっぱり」
「はっきり言ってね」
このことを隠しもしなかった。
「今度は何を拾うのやら」
「けれど幾ら何でもあれじゃないの？」
エイミーはとりあえず己の頭の中で最悪の事態を想定しつつ述べた。
「そんなに馬鹿でかいものは。やっぱり」
「流石にそれはないかな」

「ないわよ。大体街にそんなに巨大な野生動物いないでしょ」
あくまで彼女の常識内での言葉である。
「そもそも」
「けれどユニコーンはいたよ」
「まあそれはそれで」
とにかくそれは置いておくのだった。
「そういうことでね」
「いいんだ」
「考えていったらきりがないじゃない」
これはエイミーの考えである。
「そうじゃないの？異常な事態は」
「異常はあくまで異常なんだね」
「滅多に起こらないのが異常よ」
確かにその通りではある。

第百十九話　拾いものはその六

「そういうことよ。だから」
「じゃあそんなに変なのは来ないって考えていいんだね」
「一番凄かったのがそのユニコーンでしょ？」
「うん」
一応はエイミーの問いに答えはする。
「そうだけれど。確かに珍獣多いけれど」
「だったら安心しましょう。そんなに異常な動物は拾って来ないってね」
「そう思うことにするよ」
とにかく納得することにしたベンであった。
「それでね」
「そうするべきよ。それでね」
「何？今度は」
「あんた今日暇？」
こうベンに問うてきたのであった。
「今日は。どうなの？」
「まあ暇っていえば暇かな」
少し考えてからエイミーの問いに答えた。
「帰って夕食の支度するだけだし」
「じゃあ来ていいかしら」
「僕の家に？」
「とりあえず何人か呼んでね」
要するに遊びに行くというわけである。
「それでどんな動物がいるのか実際に見てみたくなったわ」
「まあそういうことならね」
別にいいというベンであった。
「相変わらずゾウガメもいるよ」

「あのゾウガメ元気？」
「相変わらずだよ」
今度の返事はこうであった。
「まあ。のそっとしてね」
「のそっとなのね」
「うん。いつも寝ている感じ」
実にゾウガメらしいと言えた。ゾウガメは普段はそうやってのんびりと暮らしているのである。そのせいか寿命もかなり長いものである。
「本当にいつもね」
「そうなの」
「後の動物も皆相変わらずだよ」
他の動物達についても述べるベンであった。
「のんびりとはしているよ」
「種類と数が増えただけなのね」
「まあね」
結論としてはそうであった。
「そうなるね。それで今日は」
「ええ。御願いするわ」
あらためて彼に言うのであった。
「そういうことでね」
「わかったよ。じゃあおやつも出すよ」
「オーストラリアのおやつなのね」
「ケーキにクッキーにチョコレートに」
「そんなの何処にでもあるわよ」
どの菓子もこの時代においても非常にポピュラーなものである。それこそ皆機会があれば何時でも食べているようなものである。
「ケーキにしろクッキーにしろ」
「オーストラリアって言っても」
ベンは言うのだった。

「普通の国だし」
「普通の国ねえ」
「個性が強いのは否定しないよ」
オーストラリアはオーストラリアで個性の強い国家である。もっとも連合は三百も国があるのでそれなり以上に個性が強くなくては目立てないのであるが。
「それでも。普通の国だよ」
「ううん、そうかしら」
「何かオーストラリアについて誤解してる？」
「誤解してるっていうか」
ベンのその問いに応えて述べるエイミーだった。
「先入観があって」
「先入観って？」
「野生の王国っていうか」
エイミーは彼女の中のオーストラリアのイメージをベンに語った。
「ちょっと家を出たらそこに羊やそれを追う恐竜がいたりで」
「そうした星もそりゃあるけれど」
「やっぱりあるの」
「あるよ。大変なんだよ」
うんざりとした顔でエイミーに述べていた。

第百十九話　拾いものはその七

「恐竜ってね。狼やライオンなんて優しいものじゃないから」
「優しいのね。狼やライオンが」
「だって大きさが違うから」
やはり問題になるのはここだった。恐竜はとにかく巨大である。
そんなものが牧場を襲えばそれで大騒ぎになるのは火を見るより明らかなことであった。
「それも群れだし」
「ティラノザウルスとかが群れで来るのね」
「そうだよ」
ベンはさらに語る。
「十匹以上でね。羊を襲いにね」
「うわ。どうやって防ぐのよ」
「マシンガン使ったりするよ」
それであった。
「他にも簡単な装甲車とかでね。やるんだよ」
「装甲車まで使って！？」
「だから。十メートル以上あるんだよ」
また大きさについて述べるのであった。
「普通にピストルとかで倒せると思う？」
「無理でしょ」
どう見てもそれは無理な話であった。そもそも恐竜は巨大なばかりではなくその皮もかなり重厚なものである。そんな相手にピストルなぞ通用するとは思えなかったのだ。
「やっぱり」
「ライフルでも下手な距離じゃ通用しないし」
「だから装甲車なのね」
「あとビームね」

他にはこれであった。
「そういうのでやっつけてるよ」
「牧場も大変なのね」
「まあね。他にも恐竜の牧場があるけれど」
「下手したら踏み潰されない？」
すぐに考えられる展開だった。
「あんなにでかいのが一杯いたら」
「だから命懸けの仕事になるよ。今度はヘリコプターで空から誘導するし」
「踏まれない為にね」
「そういうこと」
とにかく踏まれたらまず助からないからであった。草食恐竜、とりわけ雷竜はかなり大きい。ブラキオザウルスやブロントザウルスといった種類である。
「象より大きいよ」
「マンモスよりも？」
「比較にならない程にね。そんなの地面から誘導してたらどうしようもないでしょ」
「踏んで下さいっていうようなものね」
「だからヘリコプターなんだよ」
「大変ね、本当に」
「何かそういうのがオーストラリアのイメージになってるんだね」
実際にオーストラリアは農業やこうした牧畜でかなり有名な国になっている。ワイルドと言えばかなりワイルドな国になっているのだ。
「恐竜が」
「恐竜の牧場ってあるの連合だけじゃなかったかしら」
「マウリアにもあるよ」
こうエイミーに述べた。
「けれどやっぱり連合に多いね」

「特にオーストラリアが有名ね」
やはりそうなるのだった。
「数も規模も凄いしね」
「けれど。それが変なイメージになってるなんて」
「イメージって変なのが定着するものよ」
エイミーの言葉は確かにその通りなのでベンも言い返せない。しかしその表情は憮然としたままであった。
「違うかしら」
「まあそうかも」
それは否定できない彼だった。
「残念だけれど」
「オーストラリアには動物よ」
エイミーはここでまた言う。
「それが定着しちゃってるから」
「受け入れるしかないんだ」
「そう思うけれど。まあ放課後ね」
「うん」
「家に行くから。有志を募ってね」
「おやつ出すから」
こうしてエイミーはメンバーを探してそのうえでベンの家に行くことになった。とりあえず彼の家に入るまでは極めて平穏に話が進んだのだった。

第百十九話　拾いものはその八

そしてお菓子を楽しむ時も。それは同じだった。
「これがセンザンコウなのね」
「この鎧みたいなの来たアリクイみたいなのが」
「そうだよ」
ベンは部屋の端で餌を食べているそのセンザンコウを見て問う皆に対して答えた。
「その大きいのがね」
「思ったより大きいわね」
エイミーはセンザンコウを見てまず言った。
「それに可愛いし」
「可愛い！？」
「目が奇麗じゃない」
エイミーはセンザンコウのその目を見ているのだった。
「とても。奇麗じゃない」
「ああ、確かに」
「言われてみれば」
見ればそうだった。目はかなり奇麗だ。
「目は奇麗だよね」
「確かにね」
「毛並みだっていいし」
今度は毛並みについても話される。
「真っ白でしかもふさふさで」
「いい感じじゃない」
「言われてみればそうかな」
皆の話を聞いていてベンもそんな気になってきた。なお有志とは言ったが見ればクラスの殆どのメンバーが集まっていた。しかも誰が持って来たのか酒まであってお菓子以外の食べ物も一杯出ている

のであった。
「可愛いかな」
「そうよ、可愛いじゃない」
エイミーがあらためて彼に言う。
「このセンザンコウって」
「そうだね。よく見れば」
「あんたの家って結構色々な生き物がいるけれど」
エイミーの横にアルマジロカが来ている。これも妹達が何処からか拾ってきたものである。今では家のペットの一員になっている。
「どれもこれも可愛くて気がいいじゃない」
「そういえば性格の悪いのはいないね」
言われてこのことにも気付いたのであった。
「そういうのはね」
「そういうのも引き寄せられてるんでしょうね」
ナンが言った。
「やっぱりね」
「そうなんだ」
「そうよ。何でもそうだけれど」
ナンはさらに言葉を続けてきた。
「類は友を呼ぶっていうじゃない」
「類は友をだね」
「花には蝶が集まるともいうわ」
これは実際にあることである。俗に言われることであるが糞には糞蝿がたかり花には蝶が集まるのだ。碌でもない人間は碌でもない人間で集まりいい人はいい人で集まるのだ。これが人間と動物の関係においても言えるのである。ナンが言うのはそういうことであった。
「だからね」
「妹達が拾って来る動物達も」
「妹さん達って性格悪い？」

「いや、それは」
その問いにははっきりと答えることができた。
「ないよ。三人共性格はいいよ」
「そう、やっぱりね」
「兄貴の僕が直接言うのもあれだけれど」
ここで苦笑いを浮かべるがそれでもであった。
「性格はいいよ」
「じゃあやっぱりそれね」
「花には蝶が集まるっていうあれだね」
「そういうことよ。だったらそれでいいんじゃないの？」
「言われてみればそうかな」
ナンの言葉にそうした気になってきたのだった。
「それも。いいか」
「そうよ。それでね」
ナンはさらに言葉を続ける。
「ユニコーンだけれど。その妹さん達が拾って来た」
「あれだね」
「ユニコーンはあれよ。昔エウロパで言われてきたことだけれど」
エウロパという単語を聞くと皆その眉を顰めさせるがそれは一瞬のことだった。ナンはユニコーンについてさらに話を続けるのだった。

第百十九話　拾いものはその九

「心が奇麗な乙女にしか近寄らないのよ」
「心が奇麗な？」
「そう、それが絶対条件だったのよ」
とりあえず後者の乙女は置いて話をするナンだった。
「心が奇麗なね。だから」
「あいつ等もそうなんだ」
「伝承ではそうなるわ」
一応伝承なのは断るのだった。
「実際にね」
「成程ね。そういうことだったんだ」
「そうよ。だからあんたの妹さん達は認められたのよ」
「ユニコーンにだよね」
「そうよ。心が奇麗だってことをね」
にこりと笑ってベンに話すのだった。
「いいことじゃない。確かに何でこんな所にユニコーンがいるのかわからないけれど」
「そうだね。じゃあそう思うことにするよ」
「そうよ。それでね」
「うん」
「妹さん達そろそろ帰って来るわよね」
話題が変わった。
「そろそろ。そうでしょ」
「ああ、そういえばそんな時間だね」
ベンは部屋の壁にかけてある黒い鳩時計を見てから答えた。
「もうね」
「そう。だったら」
「妹達のお菓子も用意しておこうかな」

ふと言うベンだった。
「ええと。ここにあるのをっと」
とりあえずテーブルの上のお菓子を幾分か分けるのであった。
「これだけあればいいかな」
「まあそれだけあったらいいと思うわ」
その分けられたお菓子の量を見て言うエイミーだった。
「まずはね」
「そうだね。さて、と」
また鳩時計を見て言うベンだった。
「本当にそろそろだね」
「また何か拾って来たりして」
「それはあるかも」
今のエイミーのジョークには笑顔になれないベンだった。
「やっぱり」
「まあ何が来ても驚かないことだよね」
ネロがこう彼に声をかけた。
「鬼が出ても蛇が出ても」
「蛇は普通だしね」
ベンは蛇だとまだ安心できるといった感じであった。
「はっきり言って」
「じゃあ鬼だったら？」
「それは困るね」
流石に鬼は困るのだった。
「金棒とか持って暴れてもらったらね」
「まあそれはね」
とりあえず鬼が見つかったという話は今のところ連合においてもない。とりあえず鬼が実在するのかどうか人類の一種なのかは議論の分かれるところであるが。
「とりあえず何もないことを祈るよ」
「それは無理みたいだよ」

ここでジョルジュが言ってきた。窓を見ながら。
「どうやら」
「じゃあ今度は一体!?」
「うわ・・・・・・」
ジョルジュの次の言葉は唖然としたものであった。
「これはまた」
「これはまたって一体!?」
「見ればわかるよ」
こうしてまたしても騒動が起こるのであった。騒動というものは向こうから勝手にやって来るものなのである。実に厄介なことではあるが。

拾いものは　　完

２００８・１２・１７

第百二十話　思いも寄らぬ巨獣その一

思いも寄らぬ巨獣

ベンの妹達が帰って来た。その彼女達が連れて来た生き物とは。
「おいおい、でかいよ」
ジョルジュが窓から下を見つつ言うのであった。
「これはまた」
「大きいって？」
「立ったら三メートルは優にあるね」
こう皆に答える。
「あれはね」
「三メートル！？」
「何なんだろ、一体」
皆立ったら三メートルはあるという言葉に首を捻って考えだした。
「三メートルもなんて」
「象じゃないわよね」
「違うね」
ジョルジュは窓から見たまま皆にまた答えた。
「二本足で歩けそうだし」
「二本足！？」
「じゃあゴリラか何かかな」
「猿とかじゃないね」
ジョルジュはそれも否定した。
「それもね」
「違うの」
「うん」
答えるジョルジュだった。
「手には鋭い爪があるし」
「鋭い爪・・・・・」

「かといって虎とか豹でもなさそうだし」
二本足で歩けると聞いて皆それはないと判断した。とりあえずまだ酒や菓子を食べていることから皆の中には余裕があるようである。
「本当に何かな？」
「顔は？」
「丸いね」
ジョルジュは今度はベンの問いに対して答えた。
「それで目もそんな感じ」
「顔は丸い」
「結構のっぺりとしているね」
こうも述べるのだった。
「大人しそうな感じだけれどね」
「大きくて二本足で歩けて」
皆彼の言葉を聞きながらその大きな動物についての姿を考えだすのだった。
「爪が鋭くて」
「しかも顔が丸くてのっぺりとしている？」
ここまではわかった。
「何、それ」
「何なのかな」
「あっ、階段をあがってくるよ」
ここでアパートの階段をあがってくるというのであった。ベンのアパートは三階立てでベンは妹達とその三階を一つにした部屋に住んでいる。玄関は二階にあるのだ。
「今から」
「じゃあもう来るね」
ベンはここまで聞いてぽつりと述べた。
「ここに」
「さて、何かしら」
エイミーはまた首を傾げつつ述べた。

「とりあえず訳のわからないものなのは間違いないわね」
「二本足で歩けてしかも爪が鋭い」
ベンはとりわけこのことについて考えた。
「それって何なんだろう」
「とりあえず見てみればわかるんじゃないの？」
エイミーの言葉は要するに出たとこ勝負というわけだった。
「やっぱり。ここは」
「それしかないかな、やっぱり」
「そうでしょうね」
またベンに述べるのだった。
「ここはね」
「本当に何なのかな」
とにかくそれがわからないのであった。
「一体全体」
「そんなに性格の悪いのじゃないのは確かよね」
「それはね」
このことについては妹達を信じていた。

第百二十話　思いも寄らぬ巨獣その二

「間違いないよ」
「じゃあ後は何が出て来るかだけれど」
「本当に何かなあ」
とにかくそれが問題なのだった。
「まあ。見てみるよ」
「けれど何か」
「そうだよな」
セドリックとロザリーがここで怪訝な顔を見せてきた。
「階段の方から何か重い音がするよ」
「あれは何かしら」
「とにかく物凄く大きいんだよ」
その生き物を見たジョルジュが述べた。
「しかも毛深いし」
「猿！？」
「ひょっとして？」
皆毛深いと聞いて今度は猿ではと思うのだった。
「ひょっとして」
「どうかな」
「だったらゴリラ？」
「オランウータン！？」
どの星にもいるメジャーな猿の仲間である。なおどちらもその知能は非常に高くかつ極めて温厚な動物として知られている。とりわけゴリラはそうだ。
「だったら大人しいわよね」
「完全なベジタリアンだし、どちらも」
とりわけゴリラはそうである。だからゴリラは平和を愛する動物なのだと言う人までいる程だ。ゴリラは外見と気性が全く違うので

ある。
「けれどゴリラにもオランウータンにもそんな爪ないし」
「ねえ」
どちらも完全なベジタリアンだからそんなものは必要ないのである。ゴリラに至っては棒一本で捕まえることができるとまで言われている。抵抗もしないからだ。
「何なんだろう」
「わからないわね、やっぱり」
何はともあれここでベンの妹達の声が玄関から聞こえてきた。
「ただいま」
「お兄ちゃん帰ってる？」
「ああ、いるよ」
ベンはその不安を隠して妹達に言葉を返した。
「おかえり」
「ただいま」
「実はね、今日ね」
「ああ、今行く」
妹達に応える前に玄関に向かうのだった。
「今行くからな」
「ええ、それじゃあ」
「この子よ」
「何かしらね、本当に」
「まさに鬼が出るか蛇が出るか」
またこの言葉が出て来た。
「問題はそれだけれど」
「何だろうね、本当に」
何はともあれベンは家の玄関に出て来た。そこにいたのは。
「何、これ」
「可愛いでしょ」
「この子」

「可愛いって・・・・・・」
見れば玄関にいたのは。何と。
「何、これ」
姿はとりあえずはジョルジュの言った通りだった。毛深くて二本足で歩いている顔の丸い生き物だった。とりあえず哺乳類なのはわかる。
「この生き物」
「オオナマケモノよ」
「拾ったのよ」
「オオナマケモノって」
彼は妹達の言葉にまずは呆然とした顔になった。
「何、それ」
「何それってジャングルにいる生き物よ」
「ねえ」
「それだけれど」
「ジャングル！？」
そこにまず首を傾げるのだった。
「ジャングルって」
「そうよ。ジャングルの奥深くにいる生き物だけれど」
「ちょっと街にね。いたのよ」
「街に！？」
最早話が何が何なのかわからない域に達していた。

第百二十話　思いも寄らぬ巨獣その三

「街にジャングルにいる生き物がいるって」
「私達もそのあたりの事情はわからないけれど」
「とにかくね」
「いたの」
そのことにまた首を傾げるベンだった。
「もう何が何だか」
「それでどうするの？」
「このオオナマケモノ」
「飼うの？それとも動物園に引き取ってもらうの？」
「飼うって言われても」
ベンはそのオオナマケモノを見て言うのだった。
「これは無理だよ」
「やっぱりね」
ルーシーはそれを聞いて納得した顔を見せてきた。
「流石にこんなに大きなものはね」
「私の言った通りね」
クララも言ってきた。
「オオナマケモノはやっぱり」
「まず場所がないよ」
ベンは最初にこのことを妹達に述べた。
「場所がね」
「そうよね。こんな大きなのはね」
ケイトも言うのだった。
「やっぱり今のお家じゃ無理よね」
「オーストラリアでもちょっと」
ベンは自分の祖国の実家のことも考えながら述べた。
「飼うのは難しいよ」

「何で？」
「何でってこれってどういう生き物かわからないし」
彼が今度言うのはこのことだった。
「草食性だよね」
「ええ」
ルーシーが兄に述べる。
「それはね」
「それはわかるけれど何を食べるのか」
「ナマケモノと同じじゃないかしら」
「そうかなあ」
ルーシーの今の言葉に首を捻った。
「本当に。同じなのかな」
「だってナマケモノじゃない」
大きいが確かにそうなのだ。それは間違いない。
「それ考えたらそうじゃないの？」
「若しそうだとしてもうちにはジャングルないじゃない」
「あっ、そうか」
「そういえば」
「牧場だから」
棒状とジャングルは全く正反対の世界である。同じ緑の世界であっても木と草の違いがある。両者は全くの別物なのである。緑であってもだ。
「だからどっちにしろうちじゃ変えないよ」
「けれどどうしようかしら」
クララは首を捻るのだった。
「本当に。やっぱりお家じゃないし」
「お役所には届けておくよ」
ベンはとりあえずそれはしておくことにした。
「それはね」
「そうよね。やっぱり」

「それだけはね」
「何とかしておかないといけないから」
これだけは忘れないのだった。
「それでも。どうなるのかな」
あらためて四人でそのオオナマケモノを見るのだった。オオナマケモノ自身は極めて気楽そうな顔をしている。緊張感は全くない。
「引き取ってもらうにしろ。これは」
「ブラジル政府かしら」
ケイトがふとした感じで述べた。
「やっぱり」
「ブラジル政府が！？」
「あそこジャングルの多い国ばかりだし」
その為緑がイメージカラーにもなっている国である。
「それにオオナマケモノって地球じゃブラジルにいるのよね」
「そうだよ」
長い間絶滅したと考えられていたが見つかったのである。だがその存在はまさに珍獣そのものとなっている。そこまで稀少な動物なのだ。

第百二十話　思いも寄らぬ巨獣その四

「アマゾンの奥深くにね」
「だったらブラジルじゃないの？」
「確かブラジルに本当にいるし」
「だったらそこかな」
ベンはまた少し考えてから述べた。
「ブラジルで」
「それか何処かの動物園」
「そうじゃないかしら」
「だろうね。けれど」
だがここでベンはあることを思い出したのであった。それは。
「けれどさ。このオオナマケモノって」
「ええ」
「どうしたの？」
「クララ達が拾ったんだよね」
話を最初に戻したうえで言うのであった。
「確か」
「そうよ。その通りだけれど」
「野生をね」
「それがどうかしたの？」
「野生のオオナマケモノをねえ」
話を確かめたうえでまた考え込むのであった。
「普通にそんなのいるのかな。この星に」
「けれど実際に拾ったし」
「そうよ。間違いないわ」
「野生よ、このオオナマケモノ」
「ううん」
妹達の言葉を聞いてまた考え込むのであった。だが幾ら考えても

どうしても答えは出ないのであった。
「本当に何処から来たんだろう」
「この星にいるとか」
ルーシーもまた考える顔で兄に述べてきた。
「やっぱり」
「いたらとっくの昔に大騒ぎになってるじゃないか」
ベンは二番目の妹の言葉に突っ込みを入れた。
「それこそ」
「それもそうね」
「まあ。どうしてこの星にいるのか凄く不思議だけれど」
それでもであった。
「今はね」
「どうするかってことね」
「そういうこと。本当にどうしようかな」
「これ、何食べるのかしら」
「さあ」
それすらもわからないのが実情であった。何しろオオナマケモノと言われても実物を見るのははじめてだったからだ。それも無理のないことだった。
「ナマケモノって草食性だったよね」
「確かそうだったんじゃないの？」
「ねえ」
妹達は兄の言葉にそれぞれ顔を見合わせて言い合う。
「ずっと木にぶら下がってるイメージしかないけれど」
「それでもね」
「じゃあ。果物かな」
ベンは考えながら述べた。
「バナナでも出そうか」
「そうするの？」
「御飯は」

「うん。とりあえずね」
こう妹達に言葉を返したのだった。
「それで行くよ。後は」
「何処に置こうかしら」
次はその問題であった。クララの言葉である。
「お家には入らないわよね」
「絶対にね」
困った顔でオオナマケモノを見つつ述べたベンだった。
「こんなに大きいと。やっぱり」
「じゃあ何処に置こうかしら」
「本当に」
「ううん、どうしようかな」
ベンが困っているとそこに皆がやって来た。彼が戻って来るのがあまりにも遅いのでそれで気になって見に来たのである。しかも全員でだ。
「そう、これだよこれ」
「でっかいなあ」
「何、これ」
ジョルジュに続いて皆も言ってきた。
「この大きいの」
「哺乳類なのはわかるけれど」
「オオナマケモノだよ」
ベンは今度はその困った顔を皆にも向けたのだった。
「これはね」
「オオナマケモノって」
「この星にいたっけ？」
「野生ではいなかったような」
「まあその話は置いておいてね」
話が長くなるからそれで半ば強引に止めるのであった。

第百二十話　思いも寄らぬ巨獣その五

「とにかく。いるから」
「ううん、とりあえずは御飯と住む場所ね」
「それでどうするの？」
「御飯はバナナを出すよ」
それは既に妹達に対して言った通りであった。
「あとは。とりあえず何処に置こうかな」
「大人しいことは大人しいみたいね」
エイミーがオオナマケモノを見て言った。
「見たところは」
「まあサーベルタイガーとかそういうのじゃなかったのは不幸中の幸いだよ」
「虎とかね」
「そういうの冗談じゃないし」
実は虎はライオンよりもかなり大きい。その為その攻撃力はかなりのものなのだ。勿論街中にいればどういった惨事になるのかはもう言うまでもない。
「猛獣はね」
「これも立派に猛獣になりそうだけれどね」
「まあそれはね」
手にあるその巨大な爪を見て言い合う。
「パンダだってそうだしね」
「実はね」
あまり知られていないが実はそうだったりする。ジャイアントパンダはその大きさと爪や牙から立派な猛獣であったりするのである。
「とりあえず。猛獣だったらお役所よね」
「ああ、そうだったね」
ついついお役所のことを忘れてしまっていたのだった。

「連絡しないとね」
「早いうちにしといた方がいいわよ、こういうことは」
「そうそう。けれどもう時間が」
「今何時なの？」
「もう六時だから」
「お役所閉まってるのね」
「どうしようかな」
「ええと。じゃあまた明日連絡するの？」
エイミーは困った顔になってベンに問うた。
「それだったら」
「やっぱり。それしかないから」
「まあ当直の人はいるから連絡だけしておきましょう」
「そうだね」
お役所の件はとりあえずそれで決まったのだった。
「それじゃあすぐにも」
「ええ、そうした方がいいわ」
「ちょっと待ってね」
ベンはすぐに懐から携帯電話を取り出した。
「連絡するから。今すぐに」
「ええ。とりあえずは連絡はいいけれど」
エイミーはまずはそれはよしとした。
「それでもねえ」
「置く場所ね」
「そうよ、それよ」
ナンに対して答えた。
「どうしたものかしら、これって」
「ううん」
「でかいなあ」
皆玄関からその入り口にいるオオナマケモノをあらためて見るのだった。確かにかなり大きい。立ったら優に三メートルはある。

「流石に恐竜よりはだけれど」
「それでもこの大きさだと」
「家に入らないよね」
「やっぱり無理ですよね」
ルーシーが彼等のぼやきを聞いて述べてきた。
「お家の中に入るのは」
「この玄関が四次元ドアならいけるわ」
エイミーの言葉である。
「それだったらね」
「じゃあやっぱり」
「ええ、無理ね」
苦い顔でルーシーに対して答えた。
「どう見ても」
「どうしよう、お姉ちゃん」
「何処かに小屋あったかしら」
ルーシーに話を振られたクララは困った顔で述べた。

第百二十話　思いも寄らぬ巨獣その六

「この近くに」
「アパートの物置はどうかしら」
「あそこはもう一杯よ」
クララは末妹の言葉に返した。
「そっちもね」
「じゃあ駐車場は？」
「そこにするの？」
「駐車場ね」
エイミーは駐車場と聞いて考える顔になった。
「それってこのアパートの駐車場よね」
「はい、そうです」
「このアパートのです」
クララ達はすぐにエイミーに顔を向けて答えてきた。
「地下にあるんですけれど」
「普通に上にもありますし」
「地下ね」
地下と聞いてエイミーの目が光った。
「じゃあ。そこでいいかしら」
「今夜はそこに置くんですね」
「ええ」
妹達に対して頷いて答える。
「それでどうかしら」
「ええ、それなら」
「問題ないと思います」
妹達もそれで賛成した。
「あそこなら雨露凌げますし」
「それに人に見つかりにくいし」

「そこの隅で静かにしていればまず見つからないわ」
エイミーはあらためてオオナマケモノを見つつ言った。
「これだけ黒いとね」
「黒いとですか」
「一応聞くけれど地下の駐車場利用している人は多いのかしら」
「はい、それは」
「結構」
これが返答だった。
「やっぱり雨や霜を凌げますから」
「それで」
「そう。それじゃあ好都合ね」
エイミーはそれを好都合と言うのであった。
「じゃあ今隅にある車の横に置いてね」
「そこで一晩ですか」
「ええ。大きいといってもナマケモノだし」
これはナマケモノに対する偏見のみの言葉である。なおこれが後々の大騒ぎの発端になってしまうことをこの時は誰も気付かなかったのであった。
「動かないでしょうしね。それで」
「そうですね。確かに」
「この子って実際に」
三姉妹はそのオオナマケモノを見て言うのだった。
「動かないんですよ、あまり」
「のんびり屋さんなんですよ」
「やっぱりね」
それを聞いてやはりといった感じで微笑むエイミーだった。
「そうだと思ったわ」
「じゃあ地下の駐車場ですね」
「そこに一晩」
「そうよ。それでいいわ」

こう結論付けるのであった。
「そういうことでね」
「よし、じゃあ決まりだね」
話が決まったと見たベンはここで強い言葉を出した。
「それじゃあオオナマケモノは駐車場に置こう」
「ええ、わかったわ」
「それじゃあね」
妹達も彼の言葉に頷く。これで決まりであった。
「それで明日になったらあれね」
「お役所にね」
「うん。僕が学校行く途中に送っておくから」
ここでは気軽な言葉だったがすぐにそれにエイミー達から突込みが入った。
「学校に行く途中って」
「まさか一人で行くの？」
「そうだけれど？」
あっさりと言葉を返すベンだった。

第百二十話　思いも寄らぬ巨獣その七

「それがどうかしたの？」
「幾ら何でもそれは無理でしょ」
「ねえ」
みんなベンの言葉を聞いて呆れた顔を見合わせたのだった。
「オオナマケモノを一人でって」
「絶対に無理よ」
「そうかなあ」
しかしベンは全くわかっていないのだった。
「いけると思うけれど？」
「無理、絶対に無理」
「止めておきなさい」
皆真剣な顔でベンに忠告する。
「怪我どころじゃ済まないわよ」
「ああ、そうだね」
ここでやっと気付くベンだった。とはいってもその言葉はかなり呑気である。
「オオナマケモノは猛獣だからね」
「そうよ。やっとわかったのね」
「全く」
エイミーも皆もそんな彼に呆れるばかりだった。
「とりあえず。兄弟全員で行くことね」
「それも檻に入れてね」
「檻ねえ」
ベンはここでまた視線を上にやって思索に入るのだった。
「そういえば檻のある車もあったかな」
「そんなのあるの？」
「結構何でもあるんだよ、うちのアパートって」

いぶかしむ顔になる皆にこう答えるベンだった。
「そういう車もね。軽トラでね」
「それだったらいいけれど」
エイミーはそれを聞いてまずは納得した。
「とにかくね。明日ね」
「うん。学校に行く前に届けるから」
何はともあれこれで決まったのだった。皆は帰りベンと妹達、それにそこに末弟のトブも帰って来て五人になってからまた話をするのだった。
「さて、とまずはこれでいいよね」
「うん」
そのトブの言葉にベンが頷いていた。彼等は今その地下の駐車場にいてそこでオオナマケモノに餌をやっているのだ。餌はそのバナナである。
「御飯もあげたし」
「バナナがあってよかったよ」
「それでもさ、お兄ちゃん」
ここでトブは難しい顔を弟達に見せるのだった。
「このオオナマケモノって食べるよね」
「全く」
「凄いわね、本当に」
クララやルーシー達も少々呆れた調子で言うのだった。そのバナナを食べるオオナマケモノを見ながら。
「もう何本食べてるかしら」
「何十本よ」
言っている側から次から次にそのバナナを食べていくオオナマケモノだった。
「やっぱり身体が大きいだけあって」
「滅茶苦茶食べるわね」
「やっぱりこれだけ大きいのはうちでは飼えないね」

ベンはあらためてこのことを言うのだった。
「ここまで食べたら。やっぱり」
「やっぱり？」
「餌代はともかく餌を置く場所もないよ」
「そうなるのね」
「だってさ。もうバナナははないよ」
もう全て食べてしまったのだった。一本もなくなってしまった。
「他に何ある？」
「とりあえずは」
「オレンジにメロンに。まあ何でもあるけれどね」
「とりあえず果物あげるのね」
「それか野菜ね」
やはり菜食中心だった。
「そういうのなら幾らでもあるし」
「それじゃあ」
「けれどお兄ちゃん」
今度はルーシーが困った顔で兄に言ってきた。
「これ以上あげたら私達の晩御飯の野菜がなくなるわよ」
「しょうがないなあ。それだったら」
ベンもまた困った顔で言うのだった。
「今日はレトルトのカレーにしようか」
「レトルトの？」
「それかインスタントラーメンかな」
この時代でもいざという時や手軽に済ませたい時の定番である。
「両方にする？それとも」
「そう？それじゃあ」
「それでも」
別にいいというのだった。
「食べられればね。まあそれでね」
「そういうことで」

「あとはビールで」
それも話に出すベンだった。
「それでまあやっていけるね」
「何ならコンビニで買う？」
クララはこうその兄に対して言った。
「お野菜が必要なら」
「そうだね。インスタントラーメンだし」
ベンはそこにこだわりを見た。実は彼は結構食べ物には独自のこだわりがあるのである。
「葱と卵は必要かな」
「じゃあ葱買うわね」
「うん」
クララに対して頷く。
「じゃあそれでね」
「皆で行きましょう」
こうしてその夜は兄弟でレトルトのカレーと卵や葱を入れたインスタントラーメンにビールで夕食を済ませた。夕方の騒ぎが嘘のように静かに終わった一日だった。だがそれは一日の終わりでしかなくこの騒動の終わりではなかったのだった。騒ぎはまだ続くのだった。

思いも寄らぬ巨獣　　完

２００８・１２・２３

第百二十一話　ナマケモノを探せその一

ナマケモノを探せ

朝起きたベンはまず台所に出た。とりあえずはパンと牛乳での朝食だった。

続いて他の兄弟達も起きてくる。皆パジャマ姿に寝惚け眼である。

「おはよう」

「おはよう」

それぞれめいめいにパンを出して牛乳やコーヒーで食べだす。テーブルに座っているが朝は皆静かに食べている。そこでふとクララが兄に言ってきた。

「それで兄さん」

「何かな」

「オオナマケモノだけれど」

「ああ、あれね」

まだ半分寝ている顔で長妹の言葉に応えている。その間もパンを食べている。

「わかってるよ」

「もうお役所には電話してあるわよね」

「うん」

長妹に対して答える。

「それは昨日のうちにしてるよ」

「じゃあ後はオオナマケモノを送るだけね」

「そうだよ。僕が連れて行くから」

「皆で行きましょう」

しかしここでクララは兄に対して言った。

「ここはね」

「ああ、そういえばそんな話になっていたね」

「ええ。だからよ」

昨日の話を思い出してのことだった。
「だからね。皆でね」
「そうだね。やっぱり猛獣だし」
その理由はやはりこれだった。オオナマケモノが猛獣であるということが皆で行かせることにさせているのであった。これも無理のないことだった。
「そうしようか」
「そうしましょう。それでね」
「今度は何かな」
「ジャムあるかしら」
話は食べ物に移っていた。ごく自然に。
「ジャム。そこにある？」
「イチゴジャムならあるよ」
「じゃあそれ御願い」
「うん。ほら」
すぐに手元にあるジャムの入った瓶をクララに渡す。そこにちゃんとフォークもつけている。
「どうぞ」
「有り難う。もうジャムも残り少ないわね」
「じゃあ今日買っておく？」
「そうね。今日の夕方買っておくわ」
「わかったよ。じゃあ頼むよ」
「あと今日は」
今度は買い物の話になる。とりあえず今はオオナマケモノから話は完全に離れていた。
「何を買おうかしら」
「今日の晩御飯は何にするつもり？」
「おでんだけれど」
「ああ、日本風のだね」
「いえ、オーストラリア風にするわ」

こう兄に答えるのだった。
「食材も味付けもね」
「そうなんだ」
「ええ、久し振りに食べたくなったから」
オーストラリア風のおでんはこの時代のものはコンソメをベースにしてオーストラリアの肉や野菜、それに大豆の加工品をふんだんに入れたものである。その味はかなり独特である。なお肉は羊でラムになっている。この辺りが実にオーストラリアらしいと言える。
「それにしたいけれど」
「いいんじゃないかな」
ベンは特にそれで反対しなかった。
「後で残ったらカレーにもできるし」
「ええ。だからなのよ」
「魚介類も入れるよね」
「入れないとおでんじゃないわ」
こうも兄に答える。

第百二十一話　ナマケモノを探せその二

「やっぱりね」
「そうだよね。けれどクララ」
「何？」
「トマトは入れない方がいいよ」
ベンはこのことはクララに対して述べた。
「ちょっとね」
「何でなの？」
「だってさ。魚介類入れるよね」
「ええ」
それは変えるつもりがないので素直に答えた。
「そうだけれど？」
「それでトマト入れたらブイヤベースになるよ」
「だからなの」
「おでん作るんだよね」
そこをまた問うベンだった。
「オーストラリア風のおでんを」
「そうよ」
「だったらやっぱりブイヤベースになるのはね」
「駄目なのね」
「駄目っていうかちょっと」
言葉を少し濁らせてきた。
「抵抗があるね」
「わかったわ。じゃあトマトは入れないわ」
「そうしてくれると助かるよ」
「けれどお姉ちゃん」
ここでルーシーが姉に言ってきた。
「トマトは食べたいわ」

「トマトは食べたいの」
「ええ。今日スーパーでトマト特価よ」
そういうところもチェックしているルーシーだった。歳のわりにはかなりしっかりとしている。
「だから。買っておいたら」
「そうなの。だったら」
「どうするの？」
「サラダにするわ」
こう妹に答えるクララだった。
「それじゃあね」
「サラダ？」
「そう。トマトと細切れにしたオニオンとチーズで」
その三つを使うのだという。
「あとはそこにオリーブのドレッシングをかけてね」
「ああ、あのサラダね」
「それにキーウィも入れて」
今度はケイトが言ってきた。
「いいかしら」
「そうね。美味しくなるし」
クララは末妹の言葉も取り入れた。腕を組んで考える顔になっている。
「じゃあサラダもね」
「それでチーズは何なの？」
「カマンベールよ」
今度は弟のトブの言葉に答えた。
「それでどうかしら」
「いいと思うよ」
「私も」
「私も」
弟や妹達はそれで賛成したのだった。

「そう。じゃあお兄ちゃんは？」
「僕もそれで」
彼も頷いた。これで五人全員の賛成となった。
「いいと思うよ」
「そう。じゃあおでんとサラダね」
「うん」
「それで御飯とね」
「御飯はまあオーソドオックスでいいかしら」
この時代でのオーソドックスなライスは白米である。連合では白米が主食の中で一番よく食べられる。他にはパンや中国の小麦を練って焼いたものである餅等もあるがやはり米が一番よく食べられている。この時代の米は品種改良の結果精白しても栄養は玄米と変わらなくなっている。
「じゃあこれで決まりね」
「そうだね。それじゃあ」
「それでね」
「ええ。じゃあ後は」
話が終わったところでまた言うクララだった。

第百二十一話　ナマケモノを探せその三

「皆食べ終わったらね」
「何？」
「歯を磨いて顔を洗って」
要するに身支度であった。
「あのオオナマケモノをお役所に届けましょう」
「そうだね。それじゃあそういうことでね」
「ええ」
最後にベンの言葉に頷き話は終わった。こうして食事と後片付けに身支度を終えてから学昨日オオナマケモノを置いておいた駐車場に行く。すると。
「あれっ！？」
「いない！？」
駐車場の何処にも姿が見えないのだった。
「何処にいるの！？」
「いないわ、何処にも」
「まさか・・・・・」
「いえ、そのまさかみたいよ」
クララが駐車場を必死の顔で見回しながら述べた。
「やっぱり。これは」
「これはってちょっと」
「そんなことって」
ルーシーとケイトが姉の言葉にその顔を青くさせる。
「消えたじゃ済まないわよ」
「あんな大きな動物が」
「お兄ちゃん、どうしよう」
トブは今にも泣きそうな顔で兄に対して問うた。
「ナマケモノさんどっかに行っちゃったよ」

「まずい・・・・・・」
流石にベンもこの事態には強い基部を覚えていた。
「これは」
「もうお役所には電話してあったわよね」
「うん」
同じく怪訝な顔になっているクララに対して答える。
「それはもう言ってるよ」
「そうよね。それじゃあ」
「どうするの？それで」
「どうするのって決まってるよ」
ベンは今度はルーシーに対して答えた。
「ここはね」
「ここは？」
「探すしかないよ」
やはりこれしかなかった。
「街中をね。すぐに出よう」
「すぐにって私達でよね」
「他に誰がいるんだよ」
今度は困り果てた顔をルーシーに向けて述べたのだった。
「僕達以外に。誰が？」
「そう言われたらいないけれど」
「だからだよ。今はね」
「探すしかないの」
「そういうこと。わかったら」
またルーシーに対して告げた。
「探そう。いいね」
こう決意したその時だった。不意にベンの懐から音楽が鳴り出した。それは。
「携帯！？」
「あっ、そうだね」

その音楽はラブ＝ミー＝テンダーだった。二十世紀からある古典的名曲だ。プレスリーの名前は歴史に永遠に残っているのである。

「誰からだろ・・・・・・って」

「誰から？」

「エイミーからだ」

「エイミーさんからなの」

「何だろ。ちょっと御免」

妹達に断ってから電話に出た。すぐにエイミーの挨拶が聞こえてきた。

第百二十一話　ナマケモノを探せその四

「おはよう」
「うん、おはよう」
まずは挨拶から話をはじめる。
「昨日のことだけれどね」
「オオナマケモノのこと？」
「ええ、そうよ」
彼女が電話をかけてきたのはそのことに関してだった。
「今朝にお役所に届けるのよね」
「それなんだけれど」
「それなんだけれど！？」
ここでエイミーはベンの様子がおかしいことに気付いた。
「どうしたの！？声が青くなってるわよ」
「声に色があるんだ」
「あるわよ。とにかくね」
エイミーは心配になって彼にさらに言ってきた。
「どうしたの？何かあったの？」
「最悪な状況になってるよ」
こうエイミーに答えるベンだった。
「今かなりね」
「最悪ってまさか」
「そう、そのまさか」
またエイミーに答える。
「いなくなったんだ、オオナマケモノが」
「逃げたの」
「逃げたっていうかいなくなったんだよ」
「同じことじゃないの？」
「とにかくいないんだよ」

このことは紛れもない事実であった。
「何処にもね。今から探すつもりだけれど」
「五人じゃ無理よ」
エイミーは血相を変えた声で言ってきた。
「いい!?首輪とかはしていたのよね」
「ちゃんとしてたよ」
それで鎖にもつないではいた。だがそれは見事に断ち切られていた。オオナマケモノは彼が思っていたよりもさらに力があったのだ。
「それはね」
「そう。それにあの巨体だから探せばすぐに見つかるわね」
「だから今から探すつもりだけれど」
「待って。ここは五人だと危険よ」
エイミーは不意にこう言い出してきた。
「連れて行くのとはまた違うから」
「違うんだ」
「下手したらかなり暴れるかも知れないじゃない」
「うん」
「しかもさらに逃げることだって考えられるし」
咄嗟に様々な予測を立ててみせてきている。
「だからね。ここは」
「ここは?」
「皆を集めましょう」
これがエイミーの考えだった。
「クラスの皆をね。いいわね」
「皆をって」
「オオナマケモノは猛獣よ」
エイミーの声は危惧に満ちたものになっていた。
「だからね。余計にね」
「注意しないといけないんだね」
「そういうことよ。わかったら」

「皆を」
「そう、皆よ」
このことを強調するエイミーだった。
「さもないと見つけても対処できないからね」
「けれど。悪いよ」
ベンは弱気なことを言うのだった。
「それって。迷惑じゃない」
「迷惑とかそういうのは気にしないの」
弱気なベンに対してエイミーはこうした調子だった。

第百二十一話　ナマケモノを探せその五

「事情が事情なんだから」
「そうなんだ」
「そうよ。大体あんたたちゃんと鎖とかで止めてたわよね」
「うん」
そのことは正直に述べた。
「それはね。ちゃんとね」
「で、それを引き千切られて逃げられたのよね」
「鎖ね。確かにね」
「だったらあんたの過失じゃないわ」
こう言うのである。
「それはね」
「そうかな」
「そうよ。ゴリラとか猛獣でもつなげる鎖なんでしょ？」
「そうだよ」
このことにも抜かりはないベンだった。流石に多くの動物を飼っているだけあってこういうことは非常によくわかっているのである。これは妹や弟達も同じである。
「やっぱりそれはね。わかっているつもりだったけれど」
「じゃああんたも妹さん達も全然悪くないから」
ベンを励ますかのような言葉であった。
「だから。いいわね」
「わかったよ。それじゃあ」
「すぐに皆に一斉にメール送って」
迅速に、ということであった。
「私からも送るからね」
「わかったよ。それじゃあね」
こうして朝早く皆が召集された。皆すぐにそれぞれ自転車やバイ

クや果てには馬に乗ってベンのアパートのところに集まって来たのであった。
「で、逃げたのね」
「うん」
ベンはまずは馬に乗っているナンに対して答えた。
「そうなんだ。メールにあった通りの内容でね」
「思ったより力が強いのね」
ナンはメールに書いてあったことを思い出しながら述べた。
「オオナマケモノって」
「そうだね。見つけるのは簡単だろうけれど」
ジョルジュも言う。彼は自転車に乗っている。
「それでも。捕まえるのは苦労しそうだね」
「で、どうするの？」
今度はセドリックがベンに問うた。
「見つけるのは簡単でもどうやって捕まえるの？」
「それなんだけれど」
問われたベンはここで腕を組んで深刻な顔になって考え込んだ。
そうしてその顔で皆に対して言うのであった。
「どうしようか」
「どうしようかって」
「何も考えないの」
「どうにもこうにも思いつかないんだ」
彼の声は今にも泣きそうな感じであった。
「ちょっとね。何か」
「無理もないわね」
彼のその言葉を聞いてエイミーが述べた。
「それもね」
「仕方ないんだ」
「あんた今物凄い動転してるでしょ」
エイミーが言うのはそのことだった。

「正直言って。そうでしょ？」
「うん、まあ」
彼もそのことを素直に認めるのだった。
「はっきり言ってね。どうしたらいいかって。急にいなくなったし」
「それで考えが出るわけもないわ」
そこまで読んでいるエイミーだった。
「だから。あんたはまずは探すのに回っていいから」
「それでいいの？」
「問題はよ。どうやって捕まえるかだけれど」
やはり問題はそこであった。
「そうね。どうしたものかしら」
「ああ、それなら」
ウェンディが出て来た。
「いい考えがあるんだけれど」
「ウェンディ」
「何か考えがあるの？」
「オオナマケモノってよく食べるのよね」
彼女はすぐにベンに尋ねてきた。

第百二十一話　ナマケモノを探せその六

「話聞いていたらかなり大きいみたいだし」
「そうだよ」
ベンは彼女のその問いに大して答えた。
「もうかなりね」
「そう。だったらやっぱりこれね」
「これねって」
「何をするの？」
「まずは果物。それもとびっきりに甘いものがいいわ」
彼女が言うのはまず果物だった。
「それがあればいいけれど」
「それならマンゴーかな」
ベンは考える顔で述べた。
「あれで滅茶苦茶甘いのが一個まだうちにあるよ」
「じゃあそれがいいわ」
今度はあっさりと答えたウェンディだった。
「それでね」
「マンゴーでいいの」
「オオナマケモノって熱帯の生き物よね」
「うん」
これはまあ常識の範疇の話であった。
「ナマケモノ自体がジャングルにいる生き物だしね」
「そうよね」
オオナマケモノ自体も南米にいた。十六世紀辺りまでいたとされているがこの時代においてもまだ地球にもいるのではないかという噂もある。とにかく熱帯にいる生き物である。
「だったらマンゴーでいいわ」
「果物だからだよね」

「そういうこと。釣り餌としては最適ね」
そういうことであった。
「釣りだすのにはね」
「釣りだしね」
ナンがウェンディの今の言葉に納得した顔で頷いた。
「そのつもりだったのね」
「そうよ。ただ探しても手間がかかるし」
こうナンにも答えるのだった。
「それに見つけていざ捕まえる段階で大暴れするでしょ」
「そうなのよね。相手も必死だろうし」
「だからよ」
また言うのだった。
「ここはね。釣り餌を使うのよ」
「成程」
「それでそのマンゴーには」
話はさらに続くのだった。
「ちゃんと眠り薬を入れてね」
「こういうことの定番ね」
「これでまず大丈夫よ」
「けれどウェンディ」
ここでベンがウェンディに言ってきた。
「それはいいけれど」
「何かあるの？」
「あのオオナマケモノの頭がよかったら？」
このことを頭に入れつつ述べるベンだった。
「それこそロボみたいにね」
「狼王ロボね」
「そう、あれ」
シートン動物記で描かれている狼である。シートンが対峙した狼達のリーダーであり見事な灰色狼であった。シートンが仕掛けた餌

の毒も見事に見抜いてみせシートンと互角の勝負を繰り広げた賢明にして誇り高い狼であった。この名はこの時代でも残っていた。

「ロボみたいに賢かったらどうするの？」

「相手が狼だったら仕方ないところね」

ナンはこう言うのだった。

「狼だったらね」

「狼だったら仕方ないって？」

「そうよ。狼は偉大な生き物よ」

ナンは何故か狼に対して好意的であった。

「その狼に負けてもね。それは仕方ないわよ」

「そうなるの？」

「ああ、ナンはモンゴル人だから」

エイミーはナンの国籍から述べた。

「それは当然よ」

「モンゴル人！？ああ」

このことで気付いたベンだった。

第百二十一話　ナマケモノを探せその七

「そういういうことだね」
「そういうことよ」
ナン本人も言ってきた。
「モンゴル人は蒼き狼と白き牝鹿の子孫よ」
「そうだったね」
元朝秘史にある話だ。モンゴル民族はこの二匹の誇り高い生き物の子孫であるというのだ。かつて世界を席巻した草原の民の伝説として相応しい話である。
「だからよ。狼だったら仕方ないわ」
「狼だったら」
「そう、狼だったら」
ナンはこのことを強調した。
「けれどナマケモノだとね」
「出し抜かれたら駄目だよね」
「ええ」
ナマケモノは違うというのであった。彼女が言いたいことは結局それであった。
「それはね。駄目よ」
「じゃあ慎重にやらないと駄目だよね」
「そうね」
エイミーがベンの言葉に対して頷いた。
「それこそ。ただ表面に塗りました程度じゃね」
「ばれると思っていいよね」
「簡単な方法だとね。だからここは」
「どうしよう」
「カプセルに入れてみる？」
セドリックの提案である。

「マンゴーの中に。それだとわからないよ」
「ああ、それは駄目よ」
だがウェンディが彼の提案を没にしてしまった。
「それはね」
「駄目かな、これ」
「それね。そのロボの時にやったのよ」
話がシートン動物記に戻った。
「で、それをやって」
「駄目だったんだ」
「そういうこと。見事に見抜かれたのよ」
ロボが偉大な狼であったことを証明する話の一つである。
「それで色々あってやっとシートンは勝ったんだけれどね」
「それ考えたらやっぱり簡単にはいかないってこと？」
セドリックは腕を組んで首を捻りながら述べた。
「オオナマケモノを捕まえるのは」
「最悪の場合はね」
最悪の場合は、と断定はした。
「けれどね。それでもよ」
「それでもなの？」
「そうよ」
こう言うのだった。
「用心に越したことはないわね」
「じゃあどんなお薬使おうか」
「それよね」
それでも薬は使うのだった。それで何を使うのか考えているのである。
「問題はね」
「何かあるの？」
「一応あるわよ」
薬といえばやはり彼女、アンジェレッタが名乗り出てきた。

「いいのがね」
「ああ、あるんだ」
「ええ」
皆にこう答えるアンジェレッタだった。
「ちゃんとね。あるわよ」
「どんなお薬？」
「はい、これ」
ここでいきなりある薬を懐から出してきた。それは。
「何のお薬？」
「特別なお薬よ」
アンジェレッタは楽しげに笑いつつ答えた。
「ちょっとね」
「ちょっとねって」
「味も香りもしないのよ」
アンジェレッタはまた言う。

第百二十一話　ナマケモノを探せその八

「犬がかいでもね。わからないのよ」
「犬が」
「そうよ。全然ね」
「その狼王ロボでも見抜けないっていうのね」
「その通り」
断言であった。
「絶対にね。実際に狼がかいでもわからなかったから」
「成程ね」
エイミーはその話を聞いて考える目になった。
「色はどうなの？」
「完全に透明よ」
また答えるアンジェレッタだった。
「水と同じでね」
「水となのね」
「そう、見たところ完全に水と同じよ」
またアンジェレッタは答えた。
「これを中に入れてね」
「それだけれどね」
エイミーの顔がまた考える顔になった。
「一つ考えがあるわ」
「どういう考えなの？」
「注射を使うのよ」
エイミーは答えた。
「注射をね」
「注射！？」
「そう、注射よ」
エイミーは注射ということを強調した。

「注射を使ってね。マンゴーの中に入れるのよ」
「ああ、そうか」
最初にそれに気付いたのはベンだった。
「それをマンゴーに入れてそれでオオナマケモノに出せばね」
「そうよ。水と同じならわからないじゃない」
「うん、わかったよ」
また頷くベンだった。
「これを出していればいいね」
「そういうことよ。これで後はオオナマケモノがそれを食べるだけ」
「わかったよ。それじゃあね。そうして」
「食べて眠ったところをね」
こんな話をしてアンジェレッタの薬を注射で入れたマンゴーを街中に出しておいた。皆そのマンゴーの周りを遠巻きに隠れて見守っていた。そのオオナマケモノが出て来るのを見守っているのである。
「かかるかな」
「マンゴーの匂いは生きてるのよね」
「ええ」
アンジェレッタがエイミーの問いに答えた。
「それはね」
「そう。だったら大丈夫よ」
アンジェレッタの言葉を聞いて安心した顔で頷くエイミーだった。
「絶対に来るわ」
「絶対になのね」
「これは私の考えだけれど」
ここでウェンディが言ってきた。彼女達はそのマンゴーが置いてある空き地のドラム管の陰に隠れている。そこから様子を見守っているのである。
「オオナマケモノの鼻はかなり効くわ」
「かなり？」
「そうよ。少なくとも人間より遥かに上ね」

こう述べるウェンディだった。
「それはね」
「そうなの」
「普通動物はそうした感覚は人間より遥かに上なのよ」
「犬と同じなのね」
「そういうこと」
こう二人に対して答えたのだった。

第百二十一話　ナマケモノを探せその九

「だからね。絶対に来るわ」
「絶対に」
「来るのね」
「だって。あの巨体よ」
彼女が次に言ったのはこのことだった。
「それであれだけあったら」
「ううん。何かこうして見ると」
「かなりの量ね」
ここであらためてそのマンゴーを見る二人だった。見ればそのマンゴーは一個ではなかった。うず高く積まれたマンゴーの山が空き地の中央に置かれているのである。
「あれだけあって中に一個だけよね」
「そうよ」
アンジェレッタがエイミーに対して答えた。
「一個だけよ」
「その一個で勝負なのね」
「何だってそうじゃない」
今度言ったのはウェンディだった。
「切り札は切り札だからこそ価値があるのよ」
「一枚だからこそね。それはわかるわ」
エイミーもこれはわかったのだった。
「それはね」
「なら話は早いわね」
「ええ」
ウェンディの言葉に微笑んで頷くことができたエイミーだった。
「そういうことならね」
「そういえばあんたトランプ得意だったわよね」

アンジェレッタはトランプの話でエイミーに問うた。
「だからわかるの」
「トランプはいいものよ」
不敵に笑って言うエイミーだった。
「勝負の勘を鍛えられるから」
「勝負の勘ね」
「何でもそれが大事なのよ」
こう言うのだった。
「勘がね」
「そういえばベンってあまりそういうのがないわよね」
アンジェレッタはこのことにも気付いた。
「何かね。おっとりしていて」
「まあ。私の家はちょっと特別だしね」
「四人姉妹だからなのね」
「お姉ちゃん達もあれで結構勘がいいし」
美人だが酒癖が極めて悪いその三人の姉達である。このことはもうクラスの皆も知っていた。犠牲になってしまったからである。
「だからね。余計にね」
「あんたも勘を鍛えたいのね」
「女は勘よ」
こうも言うエイミーだった。
「何枚もあるカードから一枚を選ぶのよ」
「それで数多くの男の子から一人をゲットね」
「そういうことよ。今のマンゴーだってね」
彼女は話をマンゴーに戻してきた。
「さて、どうなるかしらね」
「オオナマケモノに勝てるかしら」
今はそうした勝負になってきていた。果たしてオオナマケモノはこのトラップに引っ掛かるのかどうか。皆固唾を飲んで見守るのであった。

ナマケモノを探せ　　完

2008・12・29

第百二十二話　捕まえたのはいいけれどその一

捕まえたのはいいけれど

エイミー達は土管の物陰にいた。ベンは兄弟達と共に木の上にいてそこから見ていた。

「ねえお兄ちゃん」

「どうしたんだ？」

「何で私達ここにいるの？」

「そうよ」

妹達は何故自分達が木の上にいるのかを問うのだった。五人で木の上に登ってそこから見下ろしているその姿はまるで猿である。

「こうして木の上に」

「どうしてよ」

「ここが一番見つからないからだよ」

「ここがなの？」

「ああ、そうだよ」

穏やかな声で妹達のその問いに答える。

「これがね」

「そうなの？」

「木の上が？」

「普通誰も木の上に登らないじゃないか」

彼はまた言う。

「ジャガーでもこういう木にはね」

「まあモミの木にはね」

「それはね」

兄のその言葉にルーシーが頷いた。

「ジャガーって熱帯の生き物だし」

「そのオオナマケモノがいる」

そんなモミの木があるような場所にどうして野生のオオナマケモ

ノがいるかという謎がまだあるのだがまずはそれはなかったことにしていた。
「だったらここにいるなんて流石に思わないってことね」
「そういうことね」
「そういうこと」
こう妹達に答えるのだった。
「だからね。ここはここにいるのが一番いいんだよ」
「そういうことなのね」
「それに隠れ易いし」
次に言うのはこれであった。
「モミの木ってね」
「逆に言えばこちらからは見えにくいけれどね」
「葉が多いから」
「確かに」
モミの木の特徴である。
「何かこの多さに困るけれど」
「隠れ易くはあるわね」
「そうね」
「だからなんだよ」
また言う長兄であった。
「ここにしたんだよ」
「そうだったの」
「そういえばオオナマケモノって」
ここでルーシーがまた言ってきた。
「どうしたの？ルーシーお姉ちゃん」
「木に登るのかしら」
トブに応える形での言葉だった。
「どうなのかしら、その辺りは」
「無理じゃないかな」
ベンは少し考えてから次妹に対して述べた。

「やっぱりそれは」
「大きいから？」
「幾ら何でも大き過ぎるじゃない」
その大きさを頭の中で思い出しながらの言葉であった。
「三メートルはあるじゃない」
「ええ」
「だったら相当な木じゃないと無理だよ」
「そういえばそうね」
「それこそ世界樹みたいな？」
所謂ユグドラシルである。北欧の信仰にある世界を司るこの大樹のことは連合においても広く知られているのである。よくゲームでも使われる話だ。
「そういうのじゃないと無理じゃないかな」
「じゃあこのモミの木は」
「熊だったらまだわからないけれど」
ベンは今度はクララに対して答えた。
「あそこまで大きいとね。やっぱりね」
「無理なのね」
「だから安心していいよ」
こう言って妹達と弟を安心させるのだった。

第百二十二話　捕まえたのはいいけれどその二

「それはね」
「わかったわ。それじゃあ」
「とりあえずはここにいるけれど」
「とりあえず。ここから見ていようよ」
また言うベンだった。
「ゆっくりとね」
「ええ、わかったわ」
「それじゃあ」
彼等以外にも皆様々な場所に隠れてことの成り行きを見守っていた。そして暫くすると。この話のメインイベンターがやって来たのだった。
「来たなっ」
「来たわねっ」
皆それぞれ小声で言った。
「遂に」
「やっぱりマンゴーの誘惑には勝てなかったな」
そのオオナマケモノである。彼はその巨体をのっそりとした感じで動かしながら空き地に入って来たのであった。
特に用心している様子はない。そののっそりとした動作で。マンゴーにゆっくりと近付いてきていた。
「さて」
「問題は」
皆そのオオナマケモノを見ながらまた言うのであった。
「あのマンゴーを食べるかしら」
「どうだろうね」
問題はそれであった。シェークスピア風に言うならば食べるのか食べないのか、それが問題であった。

「食べればそれで話は終わりだけれど」
「それでね」
皆まだこれで終わりだと思っていたのであった。この時は。
「さあ、食え食え」
「食べなさいよ」
小声でオオナマケモノに聞こえないようにして急かす。
「食べたら話はこれで終わりなんだから」
「さあ」
その彼等の言葉に応えたのか。オオナマケモノはマンゴーを手に取り口を運んできた。
「よしっ」
「食べたわね」
皆オオナマケモノがマンゴーを食べだしたのを見て会心の声をあげた。
「これでまずは合格だな」
「全部食べていれば確実ね」
「いい流れね」
ウェンディはその食べる勢いを見て呟いた。
「物凄い勢いで食べているわ」
「確かにね」
「それはね」
彼女の言葉にエイミー達が頷く。
「これだとお薬を含んだものもね」
「食べるわね」
「話はこれで終わりね」
アンジェレッタも話はこれで終わりだと確信していた。
「大騒ぎだったけれど終わってみれば」
「何でもない話だったわね。いつもあるような」
エイミーも言う。彼女達も話はこれで終わりだと思っていたのである。

そして遂に全て食べ終えた。皆それを見て内心ガッツポーズだった。
「やったぞ」
「やったわ」
やはり小声で言う。
「全部食ったな」
「これで間違いないわ」
「時にアンジェレッタ」
「何？」
アンジェレッタはここでエイミーの言葉に応えた。
「あのお薬即効性？遅効性？」
「バリバリの即効性よ」
こう答えるのだった。
「それこそ食べて一分もかからないうちにね。急激に効いてくるわよ」
「物凄いお薬ね」
「象だって一発よ」
今度は誇らしげに笑っての言葉である。
「それこそね」
「象もなの」
「マンモスもね」
マンモスもまた惑星によっては生息している。地球では絶滅した動物も地球にはいない動物達も他の惑星には棲息しているのである。
このオオナマケモノだけではないのだ。

第百二十二話　捕まえたのはいいけれどその三

「それこそ一発なんだから」
「凄いお薬なのね」
「ダラゴーナ家のお薬よ」
自分の家の名前を出してさらに誇らしげになるアンジェレッタだった。
「凄くない筈がないじゃない」
「えらい自信なのね」
「即効性のだってあるし遅行性のだってあるわ」
アンジェレッタはさらに言う。
「どちらもね」
「ふうん、何か凄いわね」
「どちらもあるっていうのは」
これにはウェンディもエイミーも素直に称賛するものがあった。
「中でも一番凄いのはカンタレラよ」
「カンタレラ！？」
その名前を聞いたウェンディの顔が一気に変わった。
「そんなのも持ってるの」
「確かカンタレラっていったら」
エイミーも顔を顰めさせて言ってきた。
「あれよね」
「そう、あれよ」
アンジェレッタはあっけらかんとした声で述べる。彼女は特に怯えた様子も剣呑な様子もない。そうしたものは見事なまでに全く見られない。
「ボルジア家のね。秘伝のね」
「毒薬よね」
それなのだった。ルネサンスのイタリアにおいて悪名を欲しいま

まにしたボルジア家の切り札にして象徴とも言える毒薬である。これで多くの政敵を葬り去ったと言われている。
「まずはね。豚の肝臓をね」
「ええ」
「それを出して上にハンミョウを磨り潰した粉をふりかけるのよ」
「それでできるの？」
「それだけ？」
「企業秘密もあるわ」
二人の問いに思わせぶりに笑うアンジェレッタだった。
「勿論ね」
「つまりそれは話せないってことね」
「要するに」
「そういうこと。無味無臭でね」
カンタレラはそうであったと言われている。
「作り加減で即効性でも遅行性でも作れるし」
「随分と便利なのね」
「だから秘伝なのよ。もっともこれ確かな人じゃないと売らないって」
「っていうか売ってるの！？」
「カンタレラを」
エイミーとウェンディにはそちらの方が驚きであった。
「それってまずいでしょ」
「あんたの家何考えてるのよ」
「死刑囚に使うだけよ」
ところが彼女はここでこう言うのだった。
「その時だけよ。死刑の方法が毒殺になった時だけね」
「あら、そうなの」
「その時だけなの」
「だから。確かな人じゃないと売れないから」
そういうことであった。流石に毒薬なぞをおかしな人に売ること

は法律に触れるからだ。なお連合ではそうした毒殺刑もある。他の連合の死刑と同じく死刑囚にできるだけ惨たらしい責め苦を味あわせることを目的にしている。

「だからね」

「ふうん。だったらいいけれど」

「死刑囚相手だったら」

それならばと二人も安心するのだった。

「けれどカンタレラってそんなに苦しむの」

「作り方によってね」

今度も作り方であった。

「あれはどうとでもなるのよ」

「そうなの」

「で、一旦食べたら最後苦しみ抜いて死ぬ」

そういうことだった。

「それはいつも通りね。実況中継でね」

「成程」

連合の死刑は実況中継される。車裂きや車輪刑といったものも全てである。

第百二十二話　捕まえたのはいいけれどその四

「放送されるってことよ」
「で、それも結構いい収入になるのね」
「そうよ。まあそれだけで暮らしてるわけじゃないけれどね」
「やっぱり」
「それにしてもよ」
ここでエイミーが話を戻してきた。
「食べ終えたけれどね」
「ええ」
「そろそろなのね」
そのオオナマケモノを見て話すのである。
「寝ちゃうのは」
「ええ、もうすぐよ」
アンジェレッタもこう答える。
「それはね」
「そういうふうには見えないけれど」
「ねえ」
エイミーの言葉にウェンディも頷く。
「全然平気なような」
「あれで？」
「大丈夫よ」
しかしアンジェレッタはあくまでこう言うのであった。
「それはね」
「本当に！？」
「効くのね」
「若し効かなかったら首をかけるわ」
アンジェレッタはここまで豪語してみせた。
「首どころか宇宙空間に生身の身体で飛び込んでもいいわよ」

「別にそんなことしろとは言わないわよ」
「それはね」
二人はその豪語にはこう返した。
「けれど。まあ効くっていうのならね」
「信じるわ」
「信じる者は救われる、よ」
この時代でも俗に言われるオーソドックスな言葉である。
「いいわね」
「あんたの言葉通りなら本当に今にもだけれど」
「どうなるかしら」
それが心配なのはこのウェンディやエイミーだけではなかった。
皆もアンジェレッタの薬が本当に効くのかどうか不安だった。だがここで。オオナマケモノの動きが不意に止まった。
「んっ！？」
「まさか」
「そのまさかよ」
アンジェレッタはオオナマケモノが動きを止めたのを見て不敵に笑った。
「効いたわね。本当に」
「まさかとは思ったけれど」
「もう効いたの？」
「ほら、もう寝だしてるじゃない」
アンジェレッタはそのオオナマケモノを見ていた。
「もうね」
「よし、じゃあこれで作戦成功ね」
「いい感じにね」
皆その眠りだすオオナマケモノを見て笑顔になった。
「もう完全に熟睡してるし」
「それじゃあ」
ここで皆出て来た。そうしてその熟睡しているオオナマケモノを

囲みつつ。これからのことを話すのだった。
「それでさ」
「ええ、わかってるわ」
「どうやって持って行くかだよね」
「そうそう、それそれ」
ベンは皆に対して応えて述べた。
「それだけれどね」
「まあとりあえずは寝ちゃったし」
「暴れる心配はないわね」
彼等が一番心配していたことはこれで完全に終わった。
「後は持ち運ぶだけね」
「そうだけれど」
不意にベンの顔が曇っていた。
「それでもねえ」
「それでも!?」
「まだ何かあるの?」
「どうやって運ぶの?」
ベンはその曇ってしまった顔で皆に言うのだった。

第百二十二話　捕まえたのはいいけれどその五

「このオオナマケモノ。どうして」
「・・・・・ってあれ！？」
「そういえば」
ここで皆ハタと気付いたのだった。
「どうしよう」
「どうやって持っていこうかしら」
誰もそこまで考えていないのだった。どうやってこの大きな生き物を役場に運んでいくのか。そこまでは全く考えていなかったのである。
「この大きな生き物」
「どうやって」
「引き摺っていくわけにもいかないよな」
マチアが眉を顰めさせて述べた。
「幾ら何でもな」
「それ普通に動物虐待よ」
ナンがすぐに突っ込みを入れた。
「寝ている動物を引き摺ったらね」
「ううん、だったら」
「それは駄目ね」
この方法はすぐに否定されたのだった。
「引き摺るのは」
「じゃあ何がいいかな」
「車でどうだ？」
今度言ったのはダンだった。
「大八車でな。それでな」
「ああ、リアカーで？」
「それで？」

「リアカーは確かにいいけれど」
それに反論したのはパレアナだった。
「けれど。限度があるわよ」
「限度！？」
「そうよ。大きさ」
問題はそういうことだった。
「それに体重だって。このオオナマケモノ重さだって相当なものよ」
「うっ、そういえばこれは」
「下手なリアカーじゃ」
無理であった。大きいのが完全に仇になってしまっていた。
「逆に潰されるわよね」
「じゃあこれも駄目だね」
「そうだね。これはね」
「悪いけれどね」
「いい案だと思ったんだけれどな」
話を引き受けたダンは今は沈黙したのだった。
「駄目か」
「そうだね。肝心の大八車がちょっとね」
「だから」
「じゃあいいさ」
それならばとあっさりと引きあがったダンだった。
「それならな」
「悪いけれどね。さて」
ここでまた言葉が出て来た。
「話は振り出しのままだけれど」
「そうだね、確かに」
とにかくどうやって運んだものか結論が出ていない。それなら振り出しということだった。
「どうしようかしら」
「どうやって運ぶ？本当に」

「持ってく？皆で」
今度言ったのはネロだった。
「皆で持ってさ」
「お役所まで？ここから結構あるわよ」
「それも無理かな」
「疲れるなんてものじゃないわよ」
エイミーがネロに対して言う。その時寝てしまっているそのオオナマケモノを見ることも忘れない。ちらりと見てからまた話すのだった。
「それって」
「じゃあこれも駄目なの？」
「駄目駄目、これから学校もあるんだし」
実は彼等はまだ学校に行っていないのである。幸いこの日は。
「午後からだけれどね」
「それだけラッキーだったけれどね」
「けれどやっぱりお役所まで運んだらお昼過ぎるわよ」
「皆で持ってなんて」
エイミーに続いてナンもウェンディもアンジェレッタも言った。

第百二十二話　捕まえたのはいいけれどその六

「だから。悪いけれどその案も」
「没なんだね」
「ええ。本当にどうしようかしら」
エイミーは溜息混じりに述べた。
「このでかいの。どうすれば」
「そうですね」
ここで不意に声を出してきた人間がいた。
「ここはですね」
「あれっ、セーラ」
「いたの？」
「最初からいましたよ
セーラは急に存在感を出してきて皆に述べるのだった。
「そうですね。お役所までこのオオナマケモノさんを運ぶのですね」
「簡単に言えばね」
「そうだよ」
皆このことをセーラに対しても話す。
「それでどうするかだけれど」
「何か考えがあるの？」
「絨毯を使ってはどうでしょうか」
セーラはいつも通り急にただ聞いただけでは全く訳のわからないことを言ってきた。
「絨毯を」
「絨毯！？」
「絨毯って！？」
「ですから絨毯です」
いぶかしむ皆にいつもの穏やかで気品のある笑みで応えるのだった。

「絨毯で運んでは如何でしょうか」
「絨毯って。何なの？」
「何でここで絨毯が」
「魔法の絨毯です」
セーラはまた言うのだった。
「それを使いましょう」
「ひょっとしてアラビアンナイトとかに出て来る？」
「あの？」
魔法の絨毯と聞いて皆ようやく察したのであった。
「あれを使うの？」
「っていうかそんなの本当にあったんだ」
「我がシヴァ家の秘宝の一つです」
こう皆に述べるセーラであった。
「己の意志を持ち一人で空を飛んでくれるのです」
「何かセーラの家って本当に色々なものがあるんだね」
「っていうか余計に訳がわからなくなってきたんだけれど」
だがそれでも納得できるものがあったのも確かであった。何しろセーラの実家だからだ。
「まあ話がそれで解決できるんならね」
「よしとする？」
「それでですね」
セーラはここでまたにこりと笑って皆に述べるのだった。
「その魔法の絨毯ですけれど」
「ええ」
「それでどうやってここに？」
「呼びます」
こう皆に述べるのだった。
「今ここに」
「呼べるの！？」
「ここに！？」

「はい」
やはりその気品のある穏やかな笑顔での返答だった。
「こうして私が念じれば」
「念じればって」
「それだけ！？」
「来ました」
「はい！？」
見ればその通りだった。本当にここにひらひらと絨毯が飛んで来たのだった。赤字にアラベスク模様のアラビアを思わせる絨毯であった。
「これがその絨毯です」
「ってもう！？」
「念じてすぐに！？」
「魔法の絨毯ですから」
またしてもこうした調子で返すセーラであった。
「こうして来られるのです」
「何かまたしても不思議アイテムだけれど」
皆そのアラベスク模様の絨毯が空を飛んで来るのを見て言った。
「何でかしらね。もうね」
「全然驚かないよね」
「そうなのよね」
最早誰もその程度で驚かなくなっていたのであった。

第百二十二話　捕まえたのはいいけれどその七

「今時これ位じゃね」
「普通！？」
そしてこう言うのであった。
「セーラのお家だとね」
「絨毯が空飛ぶ位じゃね」
「そうよね」
「さて、それで」
そのセーラがまた皆に声をかけてきた。
「このオオナマケモノさんをですね」
「ええ」
「絨毯に上に乗せるだけでいいのよね」
「それには及びません」
「及ばないって。そんな訳にはいかないでしょ」
「ねえ」
皆ここではセーラの言葉はちょっとないものだと思ったのだった。
「だってねえ。乗せて運ぶんでしょ？」
「はい」
「だったらやっぱり。上に乗せないとね」
「駄目じゃない」
「私が乗せますので」
ところがセーラはその穏やかな笑みでまた答えたのだった。
「私にお任せ下さい」
「あんたが？」
「ああ、そういうことね」
皆今の言葉ですぐにわかったのだった。もうそれで充分過ぎる程わかるものだった。
「魔法、使うの」

「そういうことね」
「そうです」
穏やかな笑みでそのまま念じる。するとオオナマケモノの身体がゆっくりと上がりそのまま絨毯にふわりと乗せられたのであった。
「後は。お役所に運ぶだけです」
「ううん、これだけなの」
「運ぶのは」
「運ぶのに手間はいりません」
こう述べるセーラであった。
「後はお任せ下さい」
「何か一瞬だったな」
「そうね」
皆騒動が終わったのを見て言い合うのだった。
「終わってみれば呆気なかったわよね」
「こんなに早く終わるなんて」
「最初いなくなった時はびっくりしたよ」
本来の当事者であるベンの言葉だ。
「いきなりいなくなったんだから」
「そうよね。鎖切ってだったし」
「そうよね」
妹達も言うのであった。
「一体全体どうなるのかって」
「焦ったし」
「焦ったっていうかね」
ベンは首を傾げて述べてきた。
「何が起こったのかわからなかったし」
「ええ。あの鎖だって強かったし」
「オオナマケモノって凄い力だったのね」
「そもそもどうやって見つけたの？」
エイミーはそこをルーシー達に対して尋ねたのだった。

「何か急に出て来たんだけれど」
「ええとですね」
「街を歩いていたら」
「前にいまして」
「前にねえ」
エイミーはそれを聞いてその首を思いきり捻るのだった。
「いたの」
「はい、そうです」
「それで連れて来まして」
「物凄い展開なんだけれど？」
エイミーはその話を聞いて思わずこう言った。

第百二十二話　捕まえたのはいいけれどその八

「こんな珍獣が街に普通にいたなんて」
「どう考えてもおかしいよね」
「動物を捨てるって犯罪だしね」
「うん」
ベンはエイミーの言葉に対して頷くのだった。連合の法律ではそうである。
連合では動物愛護に厳しく捨てたり虐待をすれば刑事犯罪となる。実際にそれで逮捕された者もいる。中には死刑になったケースもある、
だから連合では動物を飼えなくなった場合は役所に届けて引き取ってもらう。その動物は別の飼い主に手渡されるか動物ランドに送られる。そうしてそこで保護されるのである。
「大体これ野生じゃない」
「野生のオオナマケモノがここにいるのさえわからないし」
「絶対に何かあるわよ」
エイミーは眉を顰めさせて述べた。
「これはね」
「その何かがかなり気になるけれど」
ベンも言った。
「何なのかしら」
「何なのかしらっていうよりはね」
「うん」
またエイミーの言葉を聞く。
「考えれば考える程わからないのよ」
「わからないって？」
「だって。有り得ないじゃない」
エイミーはその顔を顰めさせてきた。そのうえでベンに対して語

る。
「野生のオオナマケモノがどうしてここにいるのよ」
「だからそれがわからないんだけれど」
「それは私もなのよ」
今度は腕を組んで述べるのだった。
「どうしてもね」
「この星にオオナマケモノっていないよね」
「ええ」
これはもうはっきりしていることである。
「動物園にいる位よ」
「それで野生だから」
「いる筈がないのよ」
それも絶対に、であった。
「で、考えられることっていえば」
「だよねえ」
皆にとって考えたくもない人が脳裏に浮かんできたのだった。
「あの博士、また何かやったんだね」
「それしかないわね」
「だよね。それじゃあまた騒ぎになるの？」
ベンは困った顔で言った。
「またまた。あんな騒ぎに」
「私達が巻き込まれるかどうかはわからないけれどね」
「やれやれだよ」
「最近連合軍も本気になってるし」
正規軍まで出て来ているのである。話は大きくなる一方だ。
「だから。余計にね」
「何かそのうち街で戦争になりそうだね」
「前えらいことになったじゃない」
エイミーは前の話のことも出してきた。
「ほら、あれ」

「覚えてるよ。シャバキさんとのあれだよね」
「そう、それ。ああいうことにまたなるのかも」
「何かもううんざりなんだけれど」
始終揉め事が起こるこのクラスでもそれだけは、であった。
「またあんなカオスな話はね」
「私もよ。まあとりあえずこの話はこれで終わりね」
「うん。じゃあ僕は今からお役所行くから」
こう言って前に出るのであった。
「それじゃあね」
「ああ、今から行くの」
「行かないといけないじゃない、やっぱり」
エイミーに対して返したのだった。
「だって僕の家に来たんだしね」
「そう。それじゃあ先に学校に行っておくわね」
「授業には間に合うようにするから」
この辺りは実に真面目なベンであった。
「それじゃあね。また学校でね」
「ええ。それにしても」
エイミーはここで上を見上げた。丁度目の前でその魔法の絨毯がひらひらと空を飛んでいた。当然その上には今回の話の主役が寝ているのである。
「騒ぎの割りには。まあ穏やかに終わったって言えるのかしら」
とりあえずこれから何が起こっても今はこれで終わったと思うことにしたのだった。オオナマケモノはこうして無事にお役所で保護され本来の場所に戻ったのである。

捕まえたのはいいけれど　　完

2009·1·4

第百二十三話　またまた登場迷探偵その一

またまた登場迷探偵

ここ数日二年Ｓ１組は平和であった。しかし平和というのは非常に脆いものでありそれが壊れる時は唐突でありかつ儚いものである場合が多い。今回もそうであった。

「何、これ」

最初に声をあげたのはダイアナだった。彼女が朝一番に教室に入って顔を顰めさせたのである。

「これって何なのよ」

見れば黒板ででかでかと書かれているのだ。

『御前の秘密を知っている』

銀河語で。こう書かれていたのだ。これが新たな騒ぎのはじまりであった。

その書き込みはそのまま残されとりあえず皆写メールで保存してそれから消した。そうしてそのうえであれこれと話をはじめたのであった。

「で、誰？御前って」

「誰が書いただ？」

「その秘密って？」

謎は三つあった。このどれもが一切不明であった。

「とりあえずよ」

アンがここで言うのであった。

「このクラスに書かれたじゃない」

「ええ」

「それはね」

「ということはよ」

アンは何時になく神妙な、思慮深い顔で語っていく。

「これはね。誰かはある程度わかるわ」

「ある程度って？」
「誰なの？それって」
「このクラスの誰かよ」
アンはその神妙な声で皆の問いに答えたのだった。
「これってね」
「このクラスのなのね」
「これって」
「だからうちのクラスの黒板に書いたのよ」
彼女はこう見ていた。
「だからその秘密っていうのも」
「うちのクラスの誰かの」
「秘密なのね」
「そうだと思うわ」
アンは言う。
「このクラスに書かれたんだし」
「ううん、だとすれば」
「誰かしら」
「そしてその秘密って？」
「それがわからないのよ」
アンもここでは首を傾げるのだった。
「それが何なのか。誰なのかもね」
「まあそうよね」
「流石に今見ただけだからね」
「ここでわかったら凄いしね」
アンも言う。
「っていうか漫画でもそういう展開ないでしょ」
「漫画だとね。確かにね」
「そんなスピード展開はね。確かに」
「さてと。それじゃあ」
「これからじっくりと考えようよ」

皆は熟考により答えを出そうと決めた。ところがであった。ここでまたあの二人が騒ぐのだった。
「おのれ怪盗ルパン五十一世！」
「これは挑戦状ね！」
テンボとジャッキーである。この二人が騒ぎだしたのである。
「こうなったらやってやる。秘法黄金の女神像は渡さないぞ！」
「あたしの意地にかけてもね！」
「ああ、この二人がいたのね」
アンはここで二人のことを思い出してうんざりとした顔になった。
「忘れたかったから忘れてたわ」
「忘れたかったのね」
「そういうこと」
アシスタントのルビーに対してもあっさりと答える。
「だって。騒ぎしか起こさないから」
「まあ確かにね」
ルビーもそのことはよくわかっていた。何しろ同じクラスだからである。
「それがこの連中だからね」
「しかも。二人の大好物のネタだし」
アンはあらためて黒板を見る。この御前の秘密を知っているという言葉で推理心をくすぐられない者もそうはいないからである。そういうことだ。

第百二十三話　またまた登場迷探偵その二

「当然の流れではあるけれどね」
「で、どうしようかしら」
「放置するに決まってるじゃない」
アンの出した結論はあっさりしたものだった。
「コントロールできると思う？」
「とりあえず捕まえて頭の中に変なチップを入れればね」
最早人道はそこにはなかった。
「できるけれど」
「そういうこと。だからね」
「放置なのね」
「ええ。どうせ事件とは関係ない方向にかっ飛んでくし」
「っていうかもうかっ飛んでるし」
ルビーの言葉もかなり冷たい。
「怪盗って何？」
「さあ」
アンもそれについては全く理解不能だった。
「ルパン五十一世ねえ」
「それって漫画のキャラクターよね」
「ええ。タキシードとシルクハットとマントで七人の正義の探偵と対決するね」
この時代の怪盗ものはこんな感じになっているのである。その七人の怪盗の国は日米中露ブラジルメキシコトルコとなっている。メキシコは本来はスペインだったのだが連合なのでメキシコになったのである。何はともあれその七人の探偵といつも闘っている怪盗である。
「あれよね。やっぱり」
「ネコ型ロボット同じで息の長い話ね」

「全く」
漫画の話になっているのは流石だった。だがテンボとジャッキーはそんな話をしている間にも勝手に訳のわからないことを叫んでいたのであった。
「やってやる、やってやるぞ！」
「退屈の虫が騒ぎだしたわ！」
今度は時代劇であった。
「この事件の犯人はわかってるんだ！」
「いざ！美術館に！」
こんなことを言いながら学園の美術館に向かうのだった。だがそんな二人を誰も追いはしないし止めもしなかった。完全に無視していたのだった。
「まあとにかくね」
「ええ」
アンもルビーも二人を完全に無視して話をしていた。
「問題はこれを書いたのが誰かだけれど」
「まずはそれね」
「そうよ。この筆跡は」
アンは自分の携帯の写メールを見る。
「誰のかしら」
「見たことある？この筆跡」
「とりあえずはね」
アンは真面目な顔でルビーに述べる。
「クラスの皆の筆跡を調べましょう」
「クラスの誰かってことも考えられるからなのね」
「まず中を疑え」
アンの言葉は厳しいものになっていた。
「だからよ」
「クラスの皆には悪いけれどってわけね」
「勿論私のも見てもらうわ」

言いだしっぺとしての覚悟を見せていた。
「それもね」
「そこまで覚悟を決めているのならいいわ」
ルビーはアンの言葉を受けて納得した顔で頷いた。
「だったらね」
「有り難う。それじゃあ」
こうして二人は皆の筆跡を調べた。ところがここで一つ問題が出て来た。
「テンボとジャッキーは？」
「ああ、あの二人ね」
アンはルビーの言葉に応えた。
「あの二人はいいわ」
「いいの」
あっさりと言い切ったのだった。
「だって。犯人だと思う？」
「いいえ」
ルビーはその問いにすぐに首を横に振った。どう見てもそうではないのは明らかだった。

第百二十三話　またまた登場迷探偵その三

「それだけはないわね」
「そうでしょ？あの二人だけはね」
「そうよね。そういうことはしないわよね」
「大体やったんならあんな奇天烈なこと言う？」
その発言についても言うアンだった。
「怪盗ルパン五十一世とか」
「最近現実と架空の区別もつかなくなってるみたいだしね」
「そうよね」
最近二人の暴走はそこまで至っているのだ。
「だから。今はね」
「まずはこの落書きのことだけれど」
「筆跡ね」
最初はそれについて考えることにした。
「見てみましょう、皆のをね」
「わかったわ」
こうして二人は早速皆の筆跡を見た。見たところ誰の筆跡でもなかった。
「違うわね」
「ええ」
ルビーはアンの言葉に対して頷いた。
「誰のものでもないわね」
「けれどよ」
しかしそれでもアンは警戒する顔のままであった。
「それでもわからないわよ」
「まだ犯人がいるかも知れないってこと？」
「そういうこと。筆跡は確かに重要だけれど」
「うん」

「変えることもできるわ」
その可能性も否定しない。実に慎重に考えていた。
「それもね」
「そうよね。賢い犯人だったらしてくるわね」
「そういうことよ。だからね」
「今度は。何を調べるの？」
「アリバイよ」
アンが次に指摘したのはそれであった。
「アリバイ。昨日の放課後にはなかったじゃない」
「この書き込みはね」
「けれど今朝にはあった」
時間帯はこれで限定された。
「つまり昨日の放課後から今朝までに」
「アリバイがなかった人は？」
「ひょっとしたら犯人かもね」
アンは犯人という単語をはっきりと出してみせた。
「少なくともその可能性は高まるわ」
「ううん、話がどんどん大きくなってきたわね」
ルビーはアンのアリバイや犯人という言葉を聞いて腕を組んで考える顔になって述べた。
「只の落書きがね」
「それでも書いた場所が書いた場所だし」
「黒板にね」
「しかも内容がね」
「御前の秘密を知っている」
ルビーはまたこの言葉を口にした。
「いわくありげなんてものじゃないからね」
「だからよ。悪戯にしてもね」
「ちょっと悪質よね」
「だからよ。調べてはっきりさせておいた方がいいわ」

アンも実は結構乗っていた。殆ど推理漫画になっていた。
「ここはね」
「そういうことね。じゃあ」
「ええ」
「アリバイだけれど」
そのアリバイについて実際に話になるのだった。
「まずは私だけれど」
「何してたの？」
「それはね。ええと」
言おうとしたところで何故か急に動きを止めてしまったアンだった。
「それはね。だから」
「だから？」
「つまりね。ちょっと」
「ちょっとって」
ルビーはアンが口篭るのを見て不審な顔を見せたのであった。
「あんた、アリバイ言えないの？」
「言えるけれど」
こうは言ってもだった。

第百二十三話　またまた登場迷探偵その四

「それでも。まあ」
「まあ？」
「言えるのよ」
一応はこう言うアンだった。
「それはね。けれど」
「けれどもこれもないし」
いい加減さらに不審な目で見るルビーだった。
「あんた、本当に怪しいわよ」
「アリバイはあるのよ」
またこうは言う。
「けれどね」
「言えないじゃない」
「言えるわよ。けれど」
「安心してくれ」
ここでギルバートが出て来た。
「アン君は潔白だ」
「ああ、そういうことね」
これだけで全部わかってしまったルビーだった。
「成程ね」
「これでわかったな」
「ええ、完璧にね」
ルビーは真剣な顔でうんうん、と頷きながら答えた。
「それなら言えないのはわかるわ」
「何よ、それって」
アンはそんなルビーを見てそれはそれで言うのだった。
「わかったっていうのは」
「これでわからないなんて普通いないから」

ルビーでなくともわかるというのだった。
「っていうか。あんたとギルバートのことはもう皆知ってるじゃない」
「ううう・・・・・・」
「あれだけ皆で演出に苦労したのに」
アンがギルバートのことを好きなのはかなり前からだったがそれが告白にまで至るのには随分かかったのだ。この告白の時の苦労についてルビーは言うのだった。
「それでね。どうしてね」
「わかったわよ。そうなのね」
「そうよ。わかったのよ」
また言うルビーだった。
「はっきりとね」
「とにかく。これでわかったのね」
「ええ、そっちもね」
この場合わかったのは複数なのだった。
「よくね」
「だから私はアリバイがあるわ」
「そうだ」
またギルバートも言ってきた。
「それは安心してくれ」
「それはわかったけれど」
ルビーは話を聞きながらここで微妙に話を変えてきた。
「ただよ」
「ただ？」
「あんた達それでどこまでいったのよ」
ルビーが今度問うたのはここであった。
「それで。何処までなの？」
「何処までって」
「まさかまだ何もしていないっていうの？」

ルビーの言葉はここでは問い詰めるものになっていた。
「ひょっとして」
「ひょっとしてって何も」
「僕達にやましいことはない」
また顔を赤らめさせてしまったアンだったがその横からギルバートが身を乗り出してまで言ってきた。皆これを見て流石に呆れてしまった。
「ちょっと、そこで出たら」
「まずいって」
「全く。この朴念仁は」
「それは断じて言おう」
「何にもないの」
「そうだ」
ルビーの問いは最早誘導尋問ですらなかったがギルバートは当然のようにそれには全く気付かなかった。流石に長い間アンの気持ちに気付かなかっただけはある。

第百二十三話　またまた登場迷探偵その五

「何もないからな」
「わかってくれたな」
「ええ、とてもね」
「ならいい。僕としてもわかってくれたらな」
「あ～～～あ、そこまで言い切ったし」
「アン涙目」
「っていうか本当になってるよ」
堂々としているギルバートの横ではアンが本当に俯いて泣きそうな顔になっていた。これが何よりの証拠であった。
「まあそれはいいとして」
「ええ」
「問題はこれ」
皆話を戻してきた。
「ねえアン」
「それでだけれど」
その涙目になっているアンに対して声をかけた。
「とりあえず皆のアリバイだけれど」
「いいかしら」
「え、ええ」
アンも気をそちらに戻して話を聞く。
「それよね。どうなの？」
「聞いてくれていいから」
「僕も」
「私も」
皆口々に言ってきたのだった。
「協力するのはやぶさかじゃないからね」
「だからね」

「そう。だったらね」
「ええ」
アンも皆のそうした言葉を受けて動くのだった。もっともここで答えは半分以上出てしまっているがそれはここではあえて言わないのであった。
「御願いするわ。こちらもね」
「そういうことでね」
「はじめましょう」
こうして今度はクラスの皆のアリバイ調査に移った。その結果クラスの皆はこのことに関しても全員シロだということがわかったのであった。
「何だ、やっぱり皆」
「シロなの」
「アリバイもあるしね」
アンが皆に対して言う。
「だからやっぱり」
「ううん、まあそうだと思ったけれどね」
「少し嬉しいけれどそれでもがっかりかな」
「そうよね」
皆の感想はそれぞれだった。あまりいいとは言えないものがある。
「まあとにかく全員はシロだったら」
「犯人は外にいるわね」
当然の答えであった。しかし問題はこれで終わりではなかった。
「だとすれば一体!?」
「何処の誰かしら」
「そう、問題はそれよ」
アンもここぞとばかりに言うのだった。やはりそれだった。
「一体誰が何の為に何時こんなことをしたか」
「そうなのよね。それよね」
ルビーも言う。何故かここではアンの助手のようになっている。

「誰なのがまず問題よね」
「ラビニアでもないしね」
二年S1組のライバルと言ってもいい彼女であった。とりわけトランプ勝負以降もフックとの因縁が深い。このクラスの面々にとってはいわくつきの相手だ。
「ラビニアだったら」
「ええ」
「何？」
皆アンの話を聞く。
「まずこんなことはしないわね」
「どうしてそう言えるの？」
「だって。これって愉快犯っぽいわよ」
ルビーに応える形で言うのであった。

第百二十三話　またまた登場迷探偵その六

「ラビニアって愉快犯じゃないわよね」
「っていうか真っ向からしてくるわよね、いつも」
「そう、それよ」
アンの目が光った。
「そこなのよ。それにこんな訳のわからないこともないでしょ？」
「確かに」
ルビーはアンの言葉に頷いた。
「正直これって訳わからないわよね」
「そう、訳がわからないのよ」
アンは述べながら顔を顰めさせた。
「何が何だかね」
「目的も理由もわからないし」
ルビーも考える顔になっていた。アンと動きがシンクロしていた。
「少なくともラビニアのやり方じゃないわよね」
「そうだよな」
そのラビニアととりわけ因縁深いフックも言った。
「あいつにしちゃ。ちょっとな」
「でしょう？だから絶対に違うわ」
アンはフックに対して述べながら一つの結論を出したのだった。
「ラビニアは違うわ」
「違うか」
「そう。当然ミンチン先生でもなし」
まだ姿を現わさないこのクラスの敵の一人である。
「というかあの先生落書き大嫌いだし」
「そうそう、あの婆さんといったら」
「もう落書き見たらその場でモップ出して消しだすし」
これもかなりと言えばかなりである。やはりこのクラスの敵だけ

あって尋常ではないものがある。はっきり言えば奇人変人である。
「その後で俺達怒るよな」
「じゃあ違うな」
「そうね」
「ミンチン先生も消えたな」
ここでまた一人容疑者が消えたのだった。
「結局のところ」
「じゃあ一体誰が？」
「何の為に？」
容疑者が消えてもだった。まだ誰かなのかが問題になるのは変わらない。容疑者が消えていっても犯人が消えたわけではないのだから。
「愉快犯っぽけれどそれにしても」
「誰なのかしら」
「そう、誰かなのよ」
アンの顔は深刻なままだった。その深刻な顔でクラスの中を歩き回っている。
「問題はね。誰かなのよ」
「それと目的よね」
ルビーも言う。
「何時やったのかも問題だけれど」
「それは調べられるわ」
ここで出て来たのはアンジェレッタだった。小さい身体をすっと出してきた。
「私に任せて」
「アンジェレッタ？」
「どうやって調べるの？」
「これを使うのよ」
そう言って懐から出してきたのはいつも通り薬だった。
「これをこの落書きのチョークの部分に塗るの」

「ええ」
「それでわかるの？」
「一時間以内だったら何もないわ」
アンジェレッタはまず言った。
「一時間以内ならね」
「何もないの」
「そう、何もないの」
また言うアンジェレッタだった。
「一時間以内ならね。ただし」
「ただし？」
「それ以上だったら黒く変色するわ」
こう言うのであった。
「三時間以上なら赤く」
「赤に」
「五時間以上だったら青」
時間により色が変わるらしい。

第百二十三話　またまた登場迷探偵その七

「七時間以上で緑よ」
「つまりそれで犯行時間がわかる」
「そういうことね」
「その通りよ。これならどう？」
あらためて皆に対して問うアンジェレッタだった。
「わかり易いでしょ」
「そうね。確かにね」
アンは腕を組み真剣な顔になってアンジェレッタのその問いに答えた。
「それならね」
「じゃあアンジェレッタ」
「御願い」
皆アンジェレッタに薬を使ってくれるように頼み込んだ。アンジェレッタはそれを受けて早速動きその薬を黒板に塗った。するとチョークは忽ちのうちに黄色になったのだった。
「黄色！？」
「これって何時間経ったってことなんだ？」
「九時間よ」
アンジェレッタは皆の問いに対して答えた。
「黄色はね」
「そうか。九時間か」
「九時間ねえ」
「ええと。今は」
ここでアンは自分の腕時計を見た。その時間は。
「八時半だから」
「書かれた時間は昨日の十一時位？」
「その辺り？」

「ええ、そうなるわ」
アンジェレッタはまた皆の問いに答えた。
「これが十一時間なら今度は紫色になるから」
「じゃあまず九時間辺り」
「それで間違いないよな」
「そうよ。けれど」
アンジェレッタは皆に話したところで彼女も考える顔になった。
「そんな時間に学校にいる人っていったら」
「先生も帰ってるしねえ」
「当直の先生だけ？」
この学校にも当直はあるのである。
「昨日の当直っていったら？」
「誰？」
「話は大きく動いたみたいね」
チョークが書かれた時間と当直の先生の話が出たところでアンは言った。腕を組みまた考える顔になっている。そのまま探偵の顔になっている。
「どうやらね」
「動いた。そうね」
彼女の言葉に最初に頷いたのはやはりルビーだった。
「まず。時間はわかって」
「ええ」
「当直の先生もわかったわ」
当直についても目を離さないルビーだった。
「この場合当直の先生が問題になるわね」
「ぼんやりした人だったらそもそも見逃してるけれど」
「まあしっかりした人ならね。こうはならないし」
「それで誰？」
皆の関心はその当直の先生に関するものに集まってきていた。自然に。

「その当直の先生って」
「一体？」
「ああ、それならだ」
皆がそれについて知りたいと思っていたところでギルバートが口を開いてきた。
「昨日はロシュフォール先生だった」
「ロシュフォール先生！？」
「あの！？」
「そう、あのロシュフォール先生だ」
皆に応えてまた述べる。
「あの先生が当直だった」
「おかしいわね」
ロシュフォールと聞いて顔を顰めさせたアンだった。
「あの先生が当直でこんなことできるかしら」
「無理だな」
ギルバートはアンの疑問に即答した。

第百二十三話　またまた登場迷探偵その八

「あの先生は切れ者だ」
「そう、それよ」
「しかも独自の情報網、監視網を持っている」
ギルバートはこのことも把握していた。
「だからだ。それを見抜いてだ」
「動くことは不可能ね」
「それこそ本物の秘密警察でもなければ無理だ」
こうまで断言するギルバートだった。
「それもゲシュタポやＫＧＢのようなな」
「ううん、けれどこれって真夜中に書かれているのよね」
アンはギルバートの話を聞きながらあらためて黒板の落書きを見るのだった。
「その先生の当直中にね」
「不可能犯罪か」
ギルバートの顔が曇る。
「蜘蛛の糸の如き監視網を潜り抜けたうえでの」
「有り得ないわね」
ルビーもまた顔を曇らせたのだった。
「あの先生と白い影とも言われる風紀部の目を潜り抜けてのこれは」
「まさに怪盗！？」
アンもまた話を少し以上に飛躍させてしまっていた。
「これって」
「まさか。それは」
「ないでしょ」
皆まずはそれは否定した。
「怪盗は」
「話が違うし」

「それはわかってるわ」
アンもはっきりと言葉を返したのだった。
「怪盗って。何も盗んでないじゃない」
「そうそう」
「それで怪盗って言ってもね」
「あの二人は別にしてね」
言うまでもなくテンボとジャッキーのことである。いわくつきのその二人だ。
「そんなふうには思わないから」
「いや、間違いない！」
「そうよ！」
ところがここで、であった。
「これは怪盗の仕業だ！」
「謎は全部解けたわ！」
「やはりそういうことだったか！」
「私の目は節穴じゃないわよ！」
テンボとジャッキーだった。二人は呼ばれもしないのに教室に戻って来たのだった。
「これは怪盗ネコ型ルパンの仕業だ」
「確実ね」
「怪盗ネコ型ルパン！？」
「誰、それ」
とりあえず皆はじめて聞く名前だった。
「ネコ型ロボットってあの日本の漫画の？」
「二十世紀から続いてる」
「そう、あれだ」
テンボは皆に対して真剣そのものの顔で答える。
「そのネコ型ロボットのうちの一つ」
「そいつが犯人なのよ」
ジャッキーも言うのだった。

「あのカマンベールチーズのドラ焼きを好物とする」
「あいつに間違いないわ」
「ねえアン」
漫画を専門にしているルビーは同じく漫画を専門にしているアンに対して尋ねてきた。
「確かその怪盗って」
「そうよ、フランス出身よ」
「そうよね」
ルビーはアンの言葉を聞いたうえであらためて頷いた。
「で、何でここでそのフランス出身の怪盗が出て来るわけ？」
「ここ連合なのよね」
アンは言う。言うまでもなく彼女達は連合に住んでいる。連合はエウロパと完全な敵対関係にあるがフランスはそのエウロパの一国なのだ。つまりフランスの怪盗が連合に来るなぞまあ有り得ないのだ。
「だからそれ自体が有り得ないけれど」
「何で出て来るのかしら」
「そう、これは挑戦状だ」
「間違いないわ」
アンもルビーもクラスの皆も冷静なままだったが二人だけは違っていた。

第百二十三話　またまた登場迷探偵その九

「怪盗ネコ型ルパンのな」
「遂にきたのよ」
「なあ、ところでな」
フックは彼等の叫びをよそにあることを皆に対して問うた。
「カマンベールのドラ焼きってな」
「ああ、それな」
「何か変わってるわよね」
「美味いのか？」
彼の関心はそこに行っていた。
「それって」
「さあ。どうだろうな」
「あまり美味しそうじゃないけれど」
「だよなあ」
彼にはどうしても賛同できないものがあったのだった。
「やっぱりな。ドラ焼きにカマンベールってな」
「合わない合わない」
「絶対に」
皆も結論を出した。
「どう考えてもな」
「それはな」
「そういや他にもあったよな」
フックは己の中の記憶をさらに辿る。
「ドラ焼きにマスタードとケチャップとか」
「うわ・・・・・」
「あったあった」
皆にとってはあまりい記憶ではない。
「他には醤油とラー油とかな」

「他にもタバスコとか」
「全然合いそうにないけれど」
「やっぱりドラ焼きはあれだよ」
フックはここで力説するのだった。
「普通に食べるのが一番だよな」
「そうだよな。どう考えてもな」
「それしかないわよね」
「それとお茶だよ」
黄金の組み合わせである。
「日本のな。それしかないな」
「だよねえ。その組み合わせ」
「それが一番よね」
皆で言い合うのだった。やはり皆の舌は普通であった。
「けれど。カマンベールのドラ焼きって」
「どうやって作るのかしら」
「餡子が入ってないとドラ焼きじゃないんじゃないの？」
「そうだよなあ」
「絶対にな」
「大体何でカマンベール！？」
この疑問も出て来た。
「美味しいとかどうかじゃなくて」
「フランスだからかしら」
「昔の人はわからないな」
このネコ型ロボットの漫画が生まれたのは二十世紀でありこの時代から見れば完全に古典である。だからこうも言われるのだった。
「まあとにかく。その怪盗！？」
「何で？」
「俺にはわかる！」
「私にもよ！」
テンボとジャッキーの力説は相変わらずだった。

「謎は全て解けた！」
「後はそのネコ型ロボットを探し出すだけよ！」
今度はこんなことを言い出してきた。
「さあ、行くか」
「行くわよ」
さらに言う二人だった。
「というわけでフランスに行って来る」
「後は宜しくね」
「フランス！？」
アンは二人がフランスに行くと言い出してきたのでこれまた顔を顰めさせた。

第百二十三話　またまた登場迷探偵その十

「あんた達フランスに行くつもりなの」
「あのネコ型ロボットはフランスの怪盗だったな」
「それは知ってるわよね」
「ええ、まあ」
それはもう連合にいる人間なら誰でも知っている話ではある。
「それは知ってるけれど」
「だからだよ」
「それだからなのよ」
二人の強引極まる力説は続く。
「ちょっと行って来るな」
「すぐに戻るから」
「それはいいけれど」
アンはとりあえずはそれはいいとしたのだった。
「けれどね」
「けれど。何だ？」
「何よ」
「まあいいわ」
そこから先は言う気をなくしたアンだった。
「行ったらいいわ、早くね」
「よし、じゃあな！」
「絶対に犯人を見つけてくるから！」
二人はこう宣言して姿を消した。皆そんな二人の背を見送りつつ呆れ果てた声をあげるのだった。見ればその顔も同じく呆れ果てている。
「ところでさ」
「ええ、わかってるわ」
アンはルビーの言葉に対して頷いた。

「フランスに辿り着けるかどうかよね」
「無理でしょ」
ルビーは言い切った。
「それって」
「絶対にね」５４
「というかあの二人」
ルビーは首を捻りながら言葉を続けた。
「フランスが何処にあるのかわかってるのかしら」
「わかってないわね」
アンはまたしても断言した。
「絶対にね」
「エウロパよ」
その連合の宿敵である。言わずと知れた。
「どうやって行くのよ」
「向こうから連合に入ることはできたけれどね」
「まあね」
所謂スパイの潜入である。バチカンのルートを利用してそこから潜入したりエウロパとも交流のあるマウリアから入るのだ。マウリアルートは連合も使うことができるがエウロパ側の監視があまりに厳しくこれが殆ど成功していないのである。当然連合籍の人間はエウロパには入ることができない。
「それでもこちら側からはね」
「絶対に無理なんだけれど」
「わかってないわね」
そうしたことがわかる二人ではないのだ。
「それどころかフランスが連合にあると思ってるんじゃない？」
「ああ、それはね」
アンもそれは納得できるものがあった。
「あの二人ならそれ位はね」
「あるでしょ」

「充分にね。本当に」
アンの顔はうんざりとしたものになっていた。
「まあ。どうせ適当なところでトラックにはねられて止まるし」
「放っておくのね」
「追っかけるだけ無駄よ」
最早そんなことは諦めているのだった。
「だからね。それよりも」
「この落書きの犯人を捜すことね」
「そういうこと」
あくまで話の核心を忘れないアンだった。
「それだけれど」
「当直はロシュフォール先生」
ルビーは再びそこに注目したのだった。
「あの先生だけれど」
「そこが気になるのよ」
アンはここでまた顔を顰めさせた。
「あの先生っていったら」
「鉄壁」
今度のルビーの言葉は一言だった。
「そうよね」
「こんなこと許すかしら」
「それよ」
アンはルビーの今の言葉に反応した。
「そこなのよ。まずそんなことは有り得ないわよね」
「ええ」
「それでどうして？」
あらためて落書きを見ながらの言葉だった。
「こんな落書きが起こったのよ」
「どうしてかしらね」
「とりあえずは」

だがここでアンは不意に言った。
「そろそろ授業よ」
「あっ、もうそんな時間？」
「早いわね」
クラスの面々はアンの話を聞いて学園生活に戻った。学校には授業がある。これは何時の時代でもどの学校でも変わらないことである。
「とりあえずは携帯にね」
「はい」
「これでいいね」
皆ここでそれぞれの携帯を取り出し黒板の落書きを写メールするのだった。
「一応保存はね」
「できたわね」
「ええ。とりあえずは消してもいけるわ」
アンは皆に対して述べた。
「書かれた時間もわかったしね」
「そうね。それもわかってるし」
「まずはね」
「じゃあ。消すわよ」
アンは自分で黒板消しを持った。
「はい、これでね」
とりあえずはこれで黒板の落書きを消して授業に向かうことになった。しかし謎は解決したわけではなかった。全てはこれからであった。

またまた登場迷探偵　　完

2009・1・28

第百二十四話　それで真犯人はその一

それで真犯人は
落書きは消した。しかし事件は解決したわけではなかった。
その日の昼休み。二年Ｓ１組の面々は一つに集まりそれぞれの食事を採りながら話をしていた。席を車座にしてそのうえで向かい合って話をしていた。
「で、問題は」
「犯人が誰かね」
「それよね」
話の進行役を務めているのはアンであった。腕を組んで考える顔になっている。
「誰かだけれどね」
「真夜中に書いていて」
「しかもあのロシュフォール先生の目を盗める」
「誰かしら」
そこが大きな疑問であるのだった。
「そんなことができるって」
「人間！？」
この疑問も起こった。
「本当に人間かしら」
「！？どういうこと？」
「だって。あれよ」
この疑問を述べたのはペリーヌであった。彼女は怪訝な顔でアンに言うのだった。
「普通夜に人は校舎に入られないじゃない」
「まあそれはね」
これはアンもわかっていた。
「当直の先生に見つかって怒られるわよ」

「うちの学校セキュリティしっかりしてるしね」
「そうよね」
監視カメラと警報装置が完備されているのだ。それに麻痺させるビームまである。
「それで落書きができた？」
「学校の中で」
「だからよ」
ペリーヌはまた言った。
「そんなことができる人っていないじゃない」
「まずね」
「いるとしたら」
ここで皆が脳裏に思い浮かべたのは。
「あの博士！？」
「天本博士しかいないわよね」
「そうよね、あの変人しかね」
天本破天荒博士しか思い浮かばないのだった。そうした人物は。
「けれどあの博士こんな小さいことしないし」
「それこそ怪獣で学校襲うとか巨大ロボットで街そのものを破壊しようとするとか」
博士のいつもの気紛れで起こる些細な事件である。
「そういうのばかりだから」
「悪戯するにしろマフィアのアジトに強化ペスト菌置いておくとか」
博士は細菌も大好きなのだ。
「そういうのばかりだから」
「絶対落書きなんてしないし」
「有り得ないわよね」
「そうだよな。シャバキでもないしな」
連合が誇っていないもう一人の変人だ。はっきり言えば迷惑である。
「じゃあ一体！？」

「本当に誰が！？」
「やったんだろうな」
「人間じゃない」
アンはこのことを考えていた。
「まさか」
「人間だったら間違いなく見つかってるじゃない」
ルビーはさらに言う。
「そうでしょ？人間ならね」
「そうよね」
アンはまたルビーの話に応えた。
「考えてみれば」
「だったら。人間じゃないのかも」
ルビーの言葉は続く。
「この落書きの主は」
「ちょっと待った」
しかしここでギルバートが話に入って来た。

第百二十四話　それで真犯人はその二

「人間ではない？」
「ええ」
ルビーはギルバートに対しても頷いてみせた。
「そうかもってだけだけれど」
「それはいい」
ギルバートはとりあえず人間でないのはいいとした。
「しかしだ」
「しかし？」
「では何者だ？」
「何者って言われると」
ルビーも困った顔になってしまった。
「ちょっと」
「妖怪と言うのではないな？」
この時代にもこうした存在の話は多い。むしろ二十世紀に比べるとこうした存在のことはその時と比べて遥かに身近なものになっている。科学が万能とは思われなくもなってきているのだ。科学の発展は二十世紀のそれとは比較にならなくなっていてもだ。
「それはどうだ？」
「あるかも」
ルビーもその可能性を否定しなかった。
「ひょっとして」
「そうか」
ギルバートはルビーの今の言葉に静かに頷いたのだった。
「妖怪か」
「有り得るわよね」
今の言葉からルビーが妖怪の存在を信じているのがわかる。
「ひょっとしてだけれど」

「あるんじゃない？」
「ねえ」
そして皆もその存在を決して否定しなかった。
「やっぱり。ひょっとしたら」
「それも」
「だったら話は別になるわよ」
今言ったのはアンだった。
「それだったら」
「ってどういうこと？」
「アン、それって」
「だから。今まで人間がやったと思って話をしてきたじゃない」
「ええ、それはね」
「確かにね」
皆アンの言葉にも応える。
「けれどよ。それが」
「人間じゃなかったらってことね」
「その場合は話が変わるわ」
また言うアンだった。
「オカルトになるから。そっちは私は何も知らないわよ」
「では私ですね」
今度名乗り出てきたのはセーラだった。
「そうした存在の話ですと」
「そうなるのよね」
アンはそのセーラを見つつ述べた。
「あんたに。それでね」
「はい」
「何かわかるかしら」
早速セーラに顔を向けて問うのだった。
「あんた。そういうのは」
「はい。それでしたら」

セーラは答えながら早速後ろに立って控えていたラメダスから水晶玉を受け取った。よく占い師が使うその水晶玉であった。それを出してきたのだった。

「これで」

「わかるのね」

「見ることができます」

こうアンに答えるのだった。

「さて、それでですね」

「見えるかしら」

「見えました」

もうであった。やはりセーラはこうした話にはかなり強い。

「ですが」

「ですが？」

「どうしたの？」

セーラだけでなく皆がそれに問う。

第百二十四話　それで真犯人はその三

「これは。違いますね」
「違う！？」
「妖怪じゃない？」
「はい」
こう皆に答えるのだった。
「その気配はありません」
「妖怪じゃないの」
「じゃあ一体何なのかしら」
「生き物ですね」
セーラの返答はこうであった。
「この気配は」
「生き物！？」
「じゃあ妖怪じゃないの」
「はい」
とりあえずはこのことはわかったのだった。
「それに。これは」
「また何かわかったのね」
「この気配は鳥です」
「鳥！？」
「はい、鳥です」
セーラは一同に答える。
「これは間違いありません」
「鳥っていっても」
「色々いるけれど」
「っていうか鳥が学校の中に！？」
疑問は消えないのであった。大体鳥は普通は校舎の中にいはしない。この疑問があらたに出て来たのである。疑問が疑問を呼んでい

た。
「どういうふうになってるのよ」
「また滅茶苦茶になってるじゃない」
皆あらためて顔を見合わせてそのうえで首を傾げる。
「鳥が学校の中にって」
「んっ！？だったら」
ここであることに気付いたのはペリーヌだった。
「セーラ、鳥なのよね」
「はい」
セーラはペリーヌの問いに微笑んで答えた。
「そうですけれど」
「鳥だったら」
「ああ、そうね」
アンも気付いた。
「鳥だったら」
「羽毛ね」
次に気付いたのはルビーだった。
「鳥には羽毛。そうね」
「そういうことよ。だったら」
アンはルビーに続くようにして言葉を続ける。
「一旦お掃除しましょう」
「そうだな」
当然ながらギルバートも全てを察した。そしてそれはクラスの殆どの面々もであった。
「掃除をすれば出て来る」
「証拠がな」
「証拠！？何故なんだ」
わかっていないのはフランツだけだった。
「掃除をすれば証拠が出て来るのか」
「あんたはただ掃除すればいいから」

ペリーヌはフランツにはあえてこう言うだけだった。
「それだけでね。いいから」
「それだけでいいのか」
「そう、それだけ」
あえて多くは語らないのだった。
「いいわね、それで」
「よし、わかった」
フランツは頭はあれでも動きは確かだ。
「それでは。俺は掃除をするぞ」
「隅々までね」
「よしっ」
早速席を立ち掃除用具入れから箒を取り出す。

第百二十四話　それで真犯人はその四

「やるか、今から」
「掃除機は使わないでね」
「箒だけでいいのか？」
「ええ、それだけでいいわ」
何故箒だけなのかも言いはしない。
「それだけでね」
「よし、わかった」
「じゃあまずは皆でね」
「掃除しましょう」
とりあえずは皆で掃除することになったのだった。
「さて、ここで出て来るな」
「確実にね」
こうして皆で掃除にあたった。クラス中のゴミを集めているとその集められたゴミやチリの仲において。その目的のものが出て来たのだった。それは。
「あったわね」
「これね」
アンがそれを手に取った。それは。
「よし、羽毛ね」
「これね」
その羽毛が出て来たのであった。
「この羽毛を調べたらね」
「出て来るわね」
皆で言い合うのだった。
「確かな証拠が」
「まずは鳥の種類」
これがわかるのである。

「それがわかれば大きいよ」
「どんな鳥かしら」
「じゃあ早速」
またアンジェレッタが出て来た。
「調べるわよ。いいわね」
「ええ、御願い」
「それじゃあね」
こうしてアンジェレッタはまた薬を取り出してそのうえでそこに羽毛を入れてその中で調べるのだった。その結果わかったことは。
「鳩の仲間よ」
「鳩の？」
「ええ、この反応はね」
薬から出したその羽毛を見つつ皆に述べるのだった。
「鳩ね」
「鳩って」
「また何で？」
皆鳩と聞いてここでも首を捻らずにはいられなかった。
「何でそんなのが？」
「学校に？」
「いや、ちょっと待った」
しかしギルバートがその皆に告げてきた。
「鳩の仲間か」
「んっ！？ギルバート、心当たりあるの？」
「鳩に？」
「鳩といっても色々だ」
彼は考える顔になってまた述べる。
「そう、例えば」
「例えば？」
「ドードーがそうだ」
「ドードー！？」

「あの？」
「例えば、だが」
ギルバートは一応はこう前置きする。
「あれもそうだ」
「っていうとまさか」
「まさかと思うけれど」
彼等の勘がここで動いた。
「ロシュフォール先生だし」
「ひょっとしたら」
「そうそう、羽毛の色だけれどね」
ここでまたアンジェレッタが言う。
「色は白よ」
「白、ねえ」
「それじゃあ」
皆さらにわかった。
「ロシュフォール先生のドードーも白だし」
「それじゃあ」
「ドードーね」
アンもここで考える顔になった。

第百二十四話　それで真犯人はその五

「その可能性は考えなかったわね」
「アンもなの」
「実は僕も」
「私も」
皆もこの可能性については考えなかった。しかも全く。
「けれどあれよ」
「どうしたの？ルビー」
ルビーは疑念を持つ顔を見せてきた。
「ドードーって頭いいの？」
「頭が？」
「そうよ。落書きよ」
彼女はそこも考える。謎は何かがわかったからといって全てが解けるわけではないのだ。
「落書き。人の字で落書き」
「人の字でね」
「ドードーが」
言われてみればこれもおかしかった。
「有り得るかっていうとね」
「どうかしら」
「やっぱりちょっとないでしょ」
ルビーは言うのだった。
「そもそもどうやって落書きしたの？」
「鳥だから嘴使って？」
「けれどドードーよ」
ドードーという鳥については皆よく知っていた。
「あんなに太っていて飛べないのに」
「嘴は使えても」

「やっぱり無理でしょ」
ルビーはこう考えていた。
「人の字であんな見事な落書きって」
「ううん、確かに」
「そうよね」
皆もルビーの言葉に頷くことしかできなかった。
「難しいどころじゃないわよね」
「っていうか無理！？」
そうとしか思えないものがあった。
「ドードーが書くのって」
「そうよね」
「そうよ、無理よ」
ルビーはさらに言う。
「これはね。飛べないし」
「ドードーは飛べない」
皆このことを強く意識した。
「それじゃあこれは」
「ないかしら」
「白いドードーなんてそうそう滅多にいないけれど」
少なくとも学校でそんなものを飼っている人はこの学園広しといえど一人しかいない。ドードーといってもそうそういる動物でもないからだ。
「可能性はあったんだけれどね」
「残念ね」
「いや、待ってくれ」
だがここでギルバートは言った。
「可能性を捨てるのはまだ早いな」
「けれどさ」
「そうよ」
その彼に皆で話す。

「飛べないし」
「人の字を書くなんてね」
「どう考えても」
「いや、待て」
だがここで口を開いたのはタムタムだった。このクラスでも屈指の知性派である彼がだ。今ここでも真剣な顔で口を開き言うのであった。
「ひょっとしたら」
「あるっていうのかよ」
「まさか」
「確かに普通は無理だ」
タムタムもこれは前置きした。
「しかし白ドードーだったな」
「ええ、そうよ」
ルビーは彼に対しても答える。
「白ドードーなのは間違いないわ」
「白ドードーは知性が高い」
タムタムは言う。

第百二十四話　それで真犯人はその六

「それもオウムや九官鳥並にな」
「オウム！？」
「九官鳥？」
皆ここで一つのことを察した。
「それってまさか」
「九官鳥っていったら」
「オウムも」
「話す」
タムタムはまた言った。
「人間の言葉を。そうだな」
「それ！？」
「じゃあ」
「白ドードーもそれは同じだ」
タムタムの目がさらに考えを深いものにさせていた。その深い思慮はさらに増していき真実をより求めるものになり進んでいくものになっていた。
「そして」
「そして！？」
「まだ何か」
「そうだ、訓練をすればさらに進む」
彼は言う。
「人の字を書くこともできるようになる。意味はわからなくてもな」
「じゃあ当たり！？」
アンもまた考える目になって述べた。
「それじゃあ」
「白ドードーが！？」
「だったら」

そして皆ここでさらにもう一つの答えに向かうのだった。答えは一つ済めばさらに先の答えに進む。まるですごろくの様な展開になっていた。

「やっぱりあの先生が！？」

「まさか」

「しかしだ」

だが、であった。タムタムはここでまた述べた。

「一つ疑問がある」

「疑問！？」

「それって！？」

「目的だ」

彼はまた言った。

「目的は何だ！？」

「目的！？」

「そういえば」

皆この話になると動きを止めてしまった。

「目的って言われたら」

「ちょっと」

「そこね」

アンも言った。

「はっきり言ってね、そこはね」

「見当たらないな」

「ええ」

少し忌々しげな顔になってタムタムに答えたのだった。

「残念なことにね」

「そう、見当たらない」

タムタムはここを繰り返したのだった。

「白ドードーといえばやはりロシュフォール先生だが」

「そう、あの先生だ」

ギルバートもそのポイントを指摘する。

「あの先生が悪戯をするかというと」
「有り得ないだろ」
フックがそれを完全に否定した。
「他の先生ならいざ知らずあの先生はな」
「そうだ、有り得ない」
タムタムもそこを指摘する。
「有り得ない、絶対にだ」
「そうだ。有り得ない話だ」
ギルバートも否定するのだった。
「決して。おかしな話だ」
「ましてでしょ？」
ルビーもかなり懐疑的な顔を見せている。

第百二十四話　それで真犯人はその七

「あの先生が飼ってる白ドードーならいつも一緒にいるけれど性格は」
「同じよね、性格」
その白ドードーとロシュフォール先生の性格が、ということである。
「だから余計にそれはね」
「じゃあ白ドードーじゃないっていうの？」
アンジェレッタは自分が示したその証拠について言及した。
「それってどうなのよ」
「どうなのよって言われてもよ」
「私達にもそれは」
皆もこの言葉にはどう言っていいかわからなかった。
「証拠は出てるけれどね」
「けれど動機が」
二つの事件の要素が比較されるのだった。
「ないから」
「どう考えてもこれって矛盾するし」
「動機がなかったら？」
アンは不意に言った。
「そういう事件も多いけれど」
「それはないでしょ、今回は」
「ないかなあ」
「ないわよ」
ルビーが皆に答えた。いぶかしむ面々もいるが彼女は違っていた。
「流石にそれはね」
「ロシュフォール先生だから？」
「そう、あの先生だからよ」

やはり彼女の返答の根拠はここにあった。
「ないわよ、やっぱり」
「けれど。証拠は白ドードーになってるわよ」
アンジェレッタはそれでも言う。
「これはどうなるのよ」
「それよね」
アンは腕を組みつつアンジェレッタの言う証拠に応えた。
「どうしてかしら、本当に」
「証拠はあるが動機はない」
タムタムも言った。
「それだな。本当にな」
「しかもだ」
ギルバートもタムタムに続く。
「白ドードーなんて滅多にいない」
「ドードーっていったら大抵黒だし」
「そもそも結構珍しい鳥だしな」
皆口々に二人に続いた。ドードーは地球のものは発見されてすぐに絶滅してしまった。その鈍重な動きと卵の少なさに人を恐れなかったことが災いした。そもそも孤島と言ってもいい離れた諸島にあってかなり特異な存在であった。これは宇宙の時代でも同じであったのだ。
「その白ドードーっ二匹もいないし」
「この学校でもあの先生だけだしな、飼ってるのは」
「白ドードーなのは間違いない」
またタムタムが言う。
「証拠はそれを教えている」
「けれど動機がないし」
「じゃあ何なのかしら」
「調べてみよう」
タムタムの目が光った。

「学園中をな」
「学園中を？」
「まだこの学園には謎が多い」
あまりにも広大であり生徒数も職員の数もかなりのものだ。だからこそこの学園にある謎もかなりのものになっているのである。
「その謎の中の一つに答えがあるのかもな」
「答えがそこに？」
「この事件の？」
「まだ断定はできないがな」
タムタムも今は即答できなかった。
「調べてみる価値はあるな」
「じゃあ決まりね」
アンが彼の言葉に応えた。
「それなら。すぐに皆で手分けしましょう」
「じゃあ皆それぞれ別れて調べよう」
ギルバートは持ち前の仕切りのスキルを使ってきた。

第百二十四話　それで真犯人はその八

「それでいいな」
「あの二人はどうするんだよ」
フックが問うたのは勿論テンボとジャッキーについてだ。
「今回もやっぱりあれか？」
「それしかないでしょ」
素っ気無いアンの返答だった。
「あの二人いても事件解決しないし」
「まあな」
これはもう言うまでもないことであった。
「というかいたらややこしくなるだけだな」
「だからよ」
答えは出てしまっていた。
「あの二人はね」
「まあそれでもいいか」
そしてフックもそれで納得するのだった。
「正直いたらかえって騒がしくなるしな」
「今何処に行ってるのかしら」
ルビーはこのことを考えた。
「正直不安になるけれどね」
「そのうち帰ってくるんじゃないの？」
「ねえ」
皆はこんな調子だった。楽観というよりはもうどうでもいいという感じである。
「また騒ぎ起こしてるだろうけれど」
「少なくとも今回には関係なくなったしね」
「そうね。それでよ」
アンは皆のそうした話を聞きつつさらに述べた。

「で、グループ分けだけれど」
「いつも通りでいいんじゃないの？」
アンジェレッタが述べた。
「カップルで」
「つまり二人一組ってことね」
「そういうこと」
いつものパターンであった。
「カップルはカップルで」
「いないのはそれぞれで」
「げっ、じゃあ俺ひょっとして」
カムイが今の話を聞いて顔を顰めさせた。
「こいつとか！？」
「こいつって何だよ、おい」
指差された洪童が反論する。
「俺だって女の子とじゃないとお断りだぞ」
「それは俺の台詞だ。何が悲しくて男なんぞと」
「はい、あんた達決まり」
ウェンディがクールな目でその二人に告げた。
「いいじゃない。もてない同士で」
「ううん、カップルって設定が駄目なんだろ」
「彼女いない奴には地獄の設定だぞ」
「文句言わないの。とにかくこれで決まったわね」
ウェンディは今度は二人には構わずにアンに告げた。
「調べ方はね」
「そうね」
アンも納得した顔で頷いた。
「じゃあ。皆でね。手分けして」
「探そうか」
こうして皆でカップルになってそれぞれに別れて調べることになった。アンはやはりギルバートと一緒になりそのうえで放課後校内

を歩き回ることになった。
二人は今校庭を歩いている。アンはそこで自分の横にいるギルバートに声をかけてきた。
「ねえ」
「白ドードーのことだな」
「ええ、それよ」
そのことについて話すのだった。
「どう思うの？ギルバートは」
「アンじゃレッタの調べたことは間違ってはいないと思う」
ギルバートは考える顔でアンに答えた。
「あれでな」
「じゃあ犯人はやっぱり」
「証拠を見る限りは白ドードーだ」
ギルバートもこう見ているのだった。
「間違いなくな」
「けれどね。やっぱり」
「動機がない」
この二つが矛盾しているのだった。

第百二十四話　それで真犯人はその九

「少なくともロシュフォール先生はそんなことをする人じゃない」
「そうなのよね。それが例えペットでもね」
「あのペットも先生そっくりの性格だった筈だ」
「それもあるし」
とにかく今回の事件は動機がないのだった。
「けれど白ドードーってやっぱり少ないじゃない」
「学園の関係者で飼っているのはロシュフォール先生だけ」
「そこも調べなおしてみる？」
「そうだな」
彼はアンの今の言葉にも頷いた。
「一度な。そうしてみるか」
「ドードー自体が少ないし楽でしょうね」
アンはこう考えていた。
「この辺りは」
「まずはドードーを調べるか」
「ええ、そうしましょう」
こうした話をしたうえでそのうえでまずは学園内の動物園に向かった。最初にそこにいるドードー達を調べるのであった。ドードーは鳥のコーナーにいた。
そこでは数羽のドードー達がその太った身体と曲がった嘴を見せていた。そのうえで餌を食べたり歩き回ったり静かに寝ていたりしている。二人はそのドードーを見たが。
「何かどれも」
「色は黒いな」
「白い羽毛も混ざってるけれどね」
ドードーは単色ではないのだ。
「けれどあの白じゃないから」

「全体が白いドードーだ」
そうなのだった。
「所謂アルビノだな」
「白子ね」
「そう、それだ」
これは生物にごく稀に見られるものである。蛇でも狐でも鹿でも真っ白い色の個体が生まれる。色素がないのだ。無論人間でも見られるものだ。
「そのアルビノのドードー」
「やっぱり動物園にはいないわね」
「あとは飼ってるものを調べるか」
「ってそれ余計に限られるわよ」
アンはまだ動物園のドードー達を見つつギルバートに述べた。
「ドードーなんて珍しいから」
「その通りだ。だが一応調べてみるか」
「そうね。やっぱりね」
こうして二人は今度は学園の関係者が飼っているドードーについて調べた。だがその結果は彼等にとって満足できるものではなかった。
「やっぱりっていうかね」
「そうだな」
調べ終えた二人は休憩も兼ねて学園内の喫茶店の一つに入っていた。ロシア風の扉の多い外観の喫茶店でそこでロシアンティーにケーキを食べつつ膝を向かい合わせていた。
「白ドードーを飼ってるのって」
「あの先生だけだ」
「じゃあやっぱりってなるけれど」
どうしても結論はそこになるのだった。
「けれどそれは」
「クローンの可能性もな」

「クローン！？」
「確かに白ドードーは希少種だ」
これは大前提だ。しかし前提は前提なのである。
「しかしクローンなら」
「数は増えるわね。しかも相当にね」
「それなら。どうかな」
彼はさらに言う。
「白ドードーのクローン。あの博士の」
「それなら動機も説明がつくかも知れないわね」
アンもそれには一旦は頷いた。
「クローンなら。性格は同じとは限らないから」
「クローンでも同じ行動を取るわけじゃないからな」
「ええ。けれどよ」
だがここでアンはさらに言うのだった。
「クローンはねえ」
「手間がかかるな」
「そうよ。しかもあれだけ大きな白ドードーよ」
ロシュフォール先生の白ドードーは成鳥である。つまりそれだけになるにはそれなりの年月がかかるのである。ここで年月という問題もクローズアップされるのだった。
「昨日今日ですぐにクローンできる？すぐに」
「無理だな、それは」
「そうよ。クローンじゃなくてコピーになるわ」
アンは言った。なおクローンとコピーは似て非なるものである。少なくとも生物をコピーできはしない。この時代の技術でもそういったことは不可能なのだ。

第百二十四話　それで真犯人はその十

「それだとね」
「コピーか」
だがギルバートはコピーという言葉に反応した。
「コピーならだな」
「どうしたの？」
「アン、この学園は謎が多い」
あらためて言うまでもないことであった。
「謎がな」
「それはわかってるけれど」
「だからだ。その中には怪談めいたものもある」
どの学校にもつきものの話だ。軍隊と学校には怪談の類が必ずついて回る。これもまたどの時代のどの場所でも変わりはしないことである。
「怪談な」
「オカルトってこと？」
「謎はここにあるかも知れない」
ギルバートはまた言った。
「若しかするとな」
「そこにあるの？」
「若しかしたらだがな」
こう前置きはする。
「だが。若しかしたら」
「んっ！？コピーと怪談」
アンもまた自分の頭の中であるものとあるものを結び付けた。
「それならね」
「何かわかったのか！？」
「こっちもまだ確実には言えないけれど」

彼女もまた前置きした。
「けれどね。それでもね」
「そうか。じゃあどうする？」
「セーラの出番よ」
ここで出て来たのはこの方面ではクラスきっての逸材であった。
「ここはね」
「セーラか」
「若しかするとだけれど」
また前置きはする。
「けれど。私の勘が正しければこれで事件の謎は全て解けるわ」
「謎が遂にか」
「皆を集めて」
決断したアンの行動は素早かった。
「すぐにね。上手くいったら話は今日中に終わるから」
「よし、わかった」
ギルバートもアンの言葉に頷いた。
「それならな」
「ええ、御願い」
「しかしアン」
ギルバートは謎を解こうとするアンに対して言う。
「また急にわかったみたいだな」
「閃きよ」
少し得意げに笑っての言葉だった。
「この辺りはね」
「閃きか」
「漫画を描くのに一番大事なことの一つよ」
作品を作るにあたってはこれがないとどうにもならない。ただしこれは気紛れなもので何時出て来るかわからない。実に厄介なものでもある。
「それが出て来てくれたわ」

「そうだったのか」
「何はともあれね」
アンは言葉を続ける。
「すぐに皆を集めてね」
「よしっ」
ギルバートは自分の携帯を取り出した。そうしてそれですぐにクラスの皆にメールを出す。ところがここで彼は一つミスを犯してしまった。
「しまった」
「どうしたの？」
「テンボとジャッキーにも送ってしまった」
そのクラスきってのお騒がせコンビである。
「まずいな。こちらに来るか？」
「ああ、それは安心していいわ」
アンは楽観している顔でそのギルバートに述べた。
「それはね」
「安心していいのか？」
「あの二人よ」
アンはこの部分を強調するのだった。
「あの二人。はっきり言ってまともなことすると思う？」
「それはないな」
ギルバートもこれはすぐに察しがついた。つくというよりは確信するのだった。
「絶対にな」
「そうよ。それじゃあ皆を呼んでね」
「わかった」
こうしてまた皆集まることになった。とりあえずテンボとジャッキーは完全に放置された。放置というよりはもういないことにさえされてしまっていた。

それで真犯人は

完

2009・2・19

第百二十五話　鏡の間その一

鏡の間

アンとギルバートによりクラスの皆は再び集められた。しかしその集められた場所はいつもの教室でも屋上でもなかった。無論喫茶店でもなかった。

皆が集められたのは何とミラーハウスだった。学園にある施設の一つで迷路にもなっている。大きいだけでなく何層にもなった非常に複雑な迷宮である。

皆はその前に集められた。当然そこにはアンとギルバートもいた。

「ミラーハウスじゃないか」

「どうしてここに」

「ここよ」

アンはいぶかしむ皆に対して告げた。もう夜になろうとしていて辺りは暗くなりつつあった。アスファルトが紫になりそこから急激に黒くなとうともしている。

「ここに謎があるのよ」

「今回の事件のってわけね」

「そうよ」

アンジェレッタの問いにも答える。

「ここにね。謎があるのよ」

「謎がね」

アンジェレッタはそれを聞いて考える目になった。

「あるのね」

「そうよ。ここにね」

「鏡っていったら」

今度はルビーが言った。

「あれ？やっぱり」

「わかったわね」

「有名だからね」
ルビーはわかっているといった顔でアンに言葉を返した。
「合わせ鏡の話は」
「それだけじゃないわ」
だがここでアンはさらに言うのだった。
「鏡はね。それだけじゃないわ」
「それだけじゃないって」
「どういうことなんだ？」
皆あらためてアンの言葉に顔に目を顰めさせた。
「合わせ鏡だけじゃないって」
「それって」
「合わせ鏡は十二時に悪魔が出て来るって話よね」
アンは今度は合わせ鏡の話を皆に対して話した。
「二時って話もあるけれど」
「十三日の金曜日だったな」
今度はタムタムがそれに応えた。
「その話はな」
「ユダヤ教にはそんな話はないけれどね」
アンはここではユダヤ教徒の顔になる。イスラエル人ならばユダヤ人でありユダヤ人である根拠はユダヤ教徒である。これは必然である。
「そういうのはね」
「ないの？」
「聞いたことないわ」
こうルビーにも返すのだった。
「ユダヤ教の世界ではね」
「そういえばユダヤ教ってそういう伝説とか嫌ったっけ」
「だからね。そういうのはないのよ」
そういう理由であった。だがそれでもアンは言うのだった。
「けれどね。それでもよ」

「可能性としては否定しないのね」
「ええ。科学で何でも説明できるわけじゃないから」
科学は決して万能ではない、この時代ではこれはかなり定着した考えになっている。とりわけマウリアにおいては魔術や錬金術といったものがかなりポピュラーにさえなっている。そしてその証拠としてセーラがいる。彼女はこの学園で一番の魔術や呪術の使い手でもあるのだ。
「その辺りはね」
「オカルトというわけか」
タムタムはミラーハウスの入り口を見た。
「今回の話は」
「けれどこれで説明がつくな」
ギルバートは腕を組んでそのミラーハウスの入り口を見ていた。
「白ドードーの動機はな」
「つまりあれ？」
ルビーは考える顔になってそのギルバートに問うた。
「鏡から白ドードーの分身が出て来て」
「そう、それよ」
アンもまたそこを指摘する。

第百二十五話　鏡の間その二

「それなのよ。白ドードーの分身がね」
「鏡から出て来た」
ギルバートはまた言う。
「それだな」
「また随分とおかしな鏡があるのね」
アンジェレッタもここでミラーハウスの入り口を見るのだった。
「この学園は変なものばかりだけれど」
「この学園が変なのはわかってるわ」
アンはそれは完全に納得していた。
「さて、それでね」
「ええ」
「それから？」
「その鏡が何処にあるかよ」
話はそこに移った。
「次の問題はね」
「鏡って」
「ここで！？」
皆アンの言葉に顔を顰めさせる。
「ここミラーハウスだぜ」
「それこそ鏡だらけよ」
こうアンに対して言うのだった。
「それでその中の一つを探せって」
「かなり難しいわよ」
「それについてももう考えてるわ」
ところがアンは安心したような顔でその皆に言葉を返すのだった。
「それもね」
「考えてるって？」

「セーラ」
アンは今度はセーラに声をかけてきた。
「御願いがあるんだけれど」
「はい」
「その鏡、どれかわかる？」
セーラに顔を向けて問う。
「どの鏡か。わかるかしら」
「はい、少し待って下さい」
セーラはすぐにアンに応えた。
「今調べますので」
「わかるの」
「はい」
セーラはアンジェレッタの問いにも応えた。
「この水晶玉で」
「水晶玉って」
セーラはその懐から水晶玉を出してきた。いつも何かあればそこから見る。ロマニや占い師が占いで使うような水晶玉だが何故か彼女のものは普通のものとは違って見えた。
「それで見るの」
「はい、そうです」
またアンジェレッタに言葉を返す。
「すぐにわかります」
「何かオカルト関係だとセーラになるわね」
ルビーはこれまた懐から出した豪奢な仕立てのマウリア風絨毯の上に座りそこで水晶玉の中を見るセーラを見つつ言うのだった。
「だからアンもセーラ呼んだのね」
「そうよ、皆もね」
皆もだと言うのだった。
「この事件に関係している皆もね」
「そうだったの」

「そうよ。もっとも確かにキーはセーラだけれど」
やはりこれは変わらないのだった。
「やっぱりね。こういった話はね」
「そうだったの」
「成程ね」
アンもアンジェレッタもここまで聞いて納得した顔で頷いた。そしてアンはさらに話を進めるのだった。
「そういうこと。じゃあセーラ」
「はい」
「見えた？」
セーラに対して問う。
「その鏡が」
「はい、見えました」
即答であった。

第百二十五話　鏡の間その三

「二階の出口の左側の鏡です」
「二階の出口の一番奥ね」
「三つある出口のうちの建物で一番右側の出口です」
その出口についても答える。
「そこの鏡です」
「そう。そこなのね」
「はい」
セーラはまた答えた。
「そこの鏡です」
「そう。そこなのね」
アンは話を聞いて納得した顔で頷いた。
「その鏡が」
「ただの鏡ではありません」
セーラは水晶玉を覗き込み続けていた。そのうえでさらに言うのだった。
「この鏡は」
「そりゃまあそうだな」
フックはセーラの今の話を聞いて述べた。
「それはな。何せ見たらそっからもう一人の自分が出て来る鏡なんだろ？」
「それだけではありません」
セーラはさらに言う。
「それだけではないのです。この鏡は」
「どういうことなの？」
「確かに魔性の鏡です」
セーラの言葉に何か恐ろしいものが宿った。まるでそこに何かがあるように。

「しかし魔性にも程度がありまして」
「程度!?」
「そうです。この鏡が放つ魔性は尋常なものではありません」
また言うのだった。
「これは」
「尋常じゃないって」
「どんな鏡なの?」
「魔界とつながっています」
セーラは言うのだった。
「この鏡は」
「魔界って」
「何だかもう」
皆思いも寄らないまでに大きくなってしまっている話にまずは唖然とした。
「無茶苦茶っていうか」
「途方もないことになってきたな」
「この鏡は危険です」
セーラの言葉は続く。
「あまりにも」
「魔界につながってるってねえ」
「大体それ自体が」
皆にとっては途方もない話であった。
「問題はどうるかだけれど」
「それでどうするの?」
皆は今度はセーラに対して問うていた。
「その魔界につながってる鏡を」
「どうすればいいの?」
「壊してはなりません」
セーラはまずこう言うのだった。
「壊しては。決して」

「どうしてなの？」
「それって」
「鏡は壊しても破片になります」
これについてはもう言うまでもないことだった。壊れても砕け散ってそのまま破片になる。この辺りは同じく何かを映し出すガラスと同じである。
「そしてその破片もまた何かを映し出すので」
「ということはつまり」
「あれだな」
皆話を聞いておおよそだがわかった。この辺りは鋭いと言えた。
「つまりドードーが鏡に映ればもう一つのドードーが出て来るから」
「それが複数になれば余計に増える」
「そうです」
セーラも皆の言葉に答える。
「その通りです。ですから」
「それは駄目と」
「壊すのは駄目だな」
「はい。まずはそれは駄目です」
こうして壊すことは没になったのであった。

第百二十五話　鏡の間その四

「ですが。それでもです」
「何とかしなければいけないのは変わらないわね」
アンは落ち着いた声で言った。
「それはね。そうよね」
「その通りです。さもなければまたもう一人の誰かが出ます」
セーラの声が深刻なものになっていく。
「若しそれがよからぬ人物でそのよからぬ魂が増えることになれば」
「そうなったらやっぱり」
「まずいなんてものじゃないよな」
「そうだな」
皆セーラの話を聞きながら顔を見合わせて言い合う。
「だからこそ何とかしなければいけないけれど」
「具体的には何をすればいいのかしら」
「私にお任せ下さい」
セーラはここでこう言った。
「ここは私に」
「あんたがやるの？」
「はい」
ルビーの問いに対してもすぐに答える。
「そうです。私とラメダスとベッキーで」
見れば二人の従者はいつものように彼女の後ろにいる。まるで影のようにそこに控え隠然たる存在感をそこに醸し出しているのだった。
「やりますので。ここは」
「そうなの。あんたが」
「やるんだな」
「そうです」

また答えるセーラであった。
「ですから。お任せ下さい」
「それはわかったが」
ギルバートはそれは納得した。
「しかしセーラ君」
「何でしょうか」
「一体何をするのだ？」
彼が尋ねるのはそこだった。
「するにしろ。何をするつもりだ？」
「封じます」
これがセーラの今度の返答だった。
「その鏡を」
「封じる？」
「はい、封印します」
また答えた。
「鏡を。三人の力を合わせて」
「封印するのか」
とりあえず何をするのかはこれでわかった。
「だが。封印するにしろ」
「魔界につながっている鏡か」
タムタムはその鏡について言及した。
「その魔力は尋常なものではないな」
「それはその通りです」
セーラが最もわかっていることだった。
「実際に水晶玉から見ていてもそれははっきりと感じます」
「それだけ凄いのか」
「そうです。ですが大丈夫です」
「大丈夫なの？」
「私に任せて下さい」
また言うのであった。

「ここは。是非」
「そういうのならいいけれどな」
「私も」
皆とりあえず異論はなかった。皆には封印とかそういったことはできないからだ。あくまで特殊な能力なのである。こう言った呪術関係は。
「じゃあ任せるな」
「頼んだわ」
とりあえずこう頷くしかなかった。こうしてセーラがその鏡を封印することになった。まず彼女はその鏡のところに向かう。当然皆も一緒だ。
「それにしても夜のこうした場所って」
「独特の迫力があるわね」
「そうだな」
皆ミラーハウスの中を進みながら怪訝な顔になっていた。
「何て言うか今にも何か出てきそうな」
「鏡の中から」
そうした感じは確かにする。

第百二十五話　鏡の間その五

「鏡には色々と宿るものがあります」
セーラは前に進みつつその皆に対して語る。
「そう、色々なものが」
「色々なものっていうとやっぱり」
「あっちの世界ってことよね」
「だからこそ魔界ともつながるのです」
セーラはまた話した。
「その鏡もまたそうです」
「そうなるのね」
アンもそれを聞いて頷いた。セーラが先頭を進みラメダスとベッキーがその彼女を護るようにして彼女のすぐ後ろに左右並んで歩いている。アンはその二人のすぐ後ろにいるのだ。
「何か話がオカルトに向かうなんて考えなかったけれど」
「オカルトという言葉を否定しても何にもなりません」
セーラはこうも話した。
「それは可能性として常にあるものですから」
「常にね」
「あらゆる可能性があります」
「その中にオカルトもある」
「そう言いたいのね」
「その通りです」
また皆にも話す。
「この世界での事件は常にこの世界の存在が為すとは限らないのです」
「この世界のねえ」
「意味深い言葉ね」
まさに今回の事件がそれである。何しろ只の落書きがこうした大

騒動にまで発展している。だからこそ皆意味深い言葉になっているのである。
「そしてそ鏡だけれど」
「あれね」
その鏡が見えてきた。
「さて、あの鏡ね」
「何か一見すると只の鏡だけれど」
「妖気に満ちています」
セーラが見ればそうなのだった。
「まさに魔界そのものの妖気が」
「妖気っていうとあのゲゲゲだけれど」
「髪の毛立たないぞ」
二十世紀からある古典漫画である。やはりこの作品も作者の手を離れてこの時代においても連載されている。妖怪漫画として日本から生まれた名作である。
「俺も」
「私も」
「それは彼もまた妖怪だからです」
セーラもその漫画を読んでいるのだった。
「人間である私達にはそうした能力はありません」
「そうなの」
「それでもです」
だがセーラの言葉は続く。
「妖気は感性を研ぎ澄ませば感じ取ることができるのです」
「その研ぎ澄ませばってこと自体が難しいけれど」
「ちょっとどころじゃなく」
「さて、はじめましょう」
皆の話をよそにその鏡の前に来た。その鏡の前に来るとセーラの顔が普段の温厚な表情が真剣そのもののものに一変していた。
「この鏡、まさに」

「まさに！？」
「魔界の扉です」
こう言うのである。
「妖気が湧き出てきています」
「感じる？」
「ちょっと」
やはり皆にはわからなかった。
「ただ。寒気はちょっとするかしら」
「そういえば僕も」
「その寒気こそです」
セーラは鏡の正面に立ちそれを見据えたまま皆に述べる。その後ろにはやはりラメダスとベッキーがいて何かを出そうとしている。
「それこそが妖気を感じ取っているということです」
「これが？」
「その通りです。それだけこの鏡からは強烈な妖気が湧き出ています」
また話す。
「御注意を」
「ううん、どんどん話が大きく凄くなってるわね」
「もう何が何だか」
皆も唖然とするばかりである。
「それでセーラ」
「はい」
ルビーの言葉に応える。

第百二十五話　鏡の間その六

「どうするの？それで」
「封印ですか」
「ええ。どうやって封印するの？」
彼女が尋ねるのはそのことだった。
「この鏡を」
「今からはじめます」
セーラは厳かな口調で告げてきた。
「その封印の儀式を」
「はい、ではお嬢様」
「私達も」
ラメダスとベッキーも早速動きだした。
三人はまず呼吸を合わせそのうえで呪文を詠唱した。それから手から何かを取り出したのだった。それは。
「髑髏！？」
「そうね」
見ればそれは髑髏だった。三人はそれぞれ懐から髑髏を出してきたのである。
「人間の髑髏！？いえ、これは」
「違う！？」
「原人のものね」
アンジェレッタはその髑髏を見て言った。
「あれはね」
「原人の！？」
「北京原人みたいね」
彼女は一目でそこまで見抜いたのである。
「あれは」
「北京原人の髑髏をここで！？」

「どうしてなんだよ」
この時代原人も惑星によっては存在している。彼等は哺乳類類人猿に分類され保護対象となっている。原人だが厳密には人とはされていないのである。
当然彼等はマウリアにもいる。そこの原人のものであることもわかった。
「それはね」
「ええ、それは？」
「とりあえずこれが終わってからセーラに聞きましょう」
アンジェレッタは今は腕を組んで冷静な顔をしているのだった。
「終わってからね」
「邪魔はしないってことね」
「そういうこと」
ルビーの問いにも答える。
「だからね。今はね」
「ええ、見ているだけよ」
やはり冷静に答えるアンジェレッタだった。
「後でね」
「わかったわ。それじゃあ」
「さて、次は」
話している間にもセーラ達の儀式は続く。
今度は原人の髑髏にそれぞれ蝋燭を立てる。その蝋燭もまた。
「あれも普通の蝋燭じゃないわね」
「普通のじゃないのね」
「ええ。何処から仕入れたのかわからないけれど」
アンジェレッタはまたルビーに述べていた。
「あれは始祖鳥の脂からの蝋燭ね」
「始祖鳥の？」
「こんな蝋燭はじめて見たわ」
アンジェレッタの顔はさらに真剣なものになっていた。

「始祖鳥の脂からなんてね」
「まあ普通はね」
「蝋燭っていったら」
この時代の蝋燭は科学脂のものや植物からのものが多い。だがセーラ達が出したのはこの時代ではポピュラーではない動物のものでありしかも始祖鳥のものであったのだ。
「けれど何で始祖鳥なのよ」
「それだよな」
皆は今度はそれを疑問に思うのだった。
「始祖鳥は知ってるけれど」
「普通に店でもお肉売られてるし」
連合では始祖鳥もよく食べられているのである。鳥のはじまりでありその味は鶏にかなり近い。家畜化されそのうえで食べられてもいるのである。
「けれどその脂!?」
「何でだよ」
「やっぱりそれも後からね」
アンジェレッタはここでも今は動かないのだった。

第百二十五話　鏡の間その七

「セーラに聞きましょう」
「そうね。とにかく今は見てるだけね」
アンがアンジェレッタのその言葉に頷く。
「見守りましょう」
「そういうこと。さて」
その蝋燭の火が灯された。その火は何故か青い。
「青い火!?」
「赤じゃないの」
その青い火が余計に不気味に見える。異形の髑髏に奇妙な蝋燭が立てられそしてそこに青い炎が宿る。確かに異様な光景である。
しかもその髑髏が三つだ。その髑髏が何時の間にか描かれている魔法陣の前に置かれた。そうして髑髏を置いてから三人はまた呪文を唱えはじめた。その呪文もまたかなり変わったものだった。
「!?この言葉って」
「何処の言葉!?」
皆また顔を顰めさせるのだった。
「銀河語じゃないのは当然だけれど」
「マウリア語でもないわよな」
「そうだよな」
マウリア語はかつてヒンドゥー語と呼ばれた言語である。マウリアでの公用語とされている。もっともマウリアではこのヒンドゥー語の他にも様々な言語があり方言扱いとなっている。この辺りは銀河語が公用語でありながら各国の言語も残っている連合と同じである。
「何処の言語!?」
「マウリアにも色々な言葉があるけれど」
「かなり大昔の言葉だな」

タムタムが顔を顰めさせて述べた。
「これは」
「ってタムタム」
「わかるのかよ」
「いや、わからない」
コミカルな程素直に皆に答えた。
「けれどそれでもだ」
「かなり古い言語なのはわかるんだな」
「ヒンドゥー語じゃないのは間違いない」
彼はそれはまず前提として語った。
「マウリアの言語はそれこそ無数にあるがその中でもこの言葉を使っている民族はいない筈だ」
「いないって！？」
「マウリアにも！？」
「多分な」
なおマウリアの民族数について正確に把握するのは不可能だとされている。二千億の統計人口の他にも三百億はそこにない人口がいると言われているからだ。マウリアは連合から見ても想像を遥かに超えた国家なのだ。
「今はいない筈だ」
「今はなの」
「あくまで多分だ」
タムタムも今一つ自信はないようであった。
「俺もマウリアに今どんな民族がいるのかよくわからない」
「まあマウリアだから」
セドリックの何気ないような言葉は核心でもあった。
「どういった人がいてもおかしくはないよ」
「そうだな」
タムタムもそれに頷く。
「しかし。何はともあれだ」

彼はあらためてセーラ達を見る。
「今はその言語の呪文を信じよう」
「魔界の扉を封じる為にね」
「そういうことだ」
やはり話はこれに尽きた。
「俺達が今できるのは見守ることしかない」
「歯がゆいって言えば歯がゆいけれどね」
アンもこうは言っても今はどうにもできなかった。何しろ彼女達は呪術やそういった類を使うことができないからだ。これで何かしろという方が無理であった。
その間に呪文の詠唱は終わった。すると。
鏡が紫に輝いた。そのうえで不気味な咆哮が聞こえてきた。
「これってまさか」
「鏡から!?」
「間違いないな」
残念ながらその通りだった。咆哮は鏡から聞こえていた。まるで野獣の咆哮であった。しかもそれは地の底から響くような恐ろしさがあった。

第百二十五話　鏡の間その八

「何かこの咆哮は」
「化け物のみたいね」
そう感じずにはいられなかった。
「まあ考えてみればそうよね」
「ええ」
アンはルビーの言葉に頷いていた。
「魔界につながっているんだからね」
「だからね。こんな咆哮もね」
「当然って言えば当然ね」
アンはまた言った。
「それもね。魔界だからね」
「しかも紫に輝いているし」
鮮やかな紫だが今は不気味極まる色にしか見えなかった。その色を見て心中穏やかな人間なぞいる筈もない。状況がそうさせていた。今の状況がだ。
「鏡が魔物になってもおかしくないわね」
「そうね」
だが鏡はそうはならなかった。しかし咆哮はさらに大きくなりそうしてそれが急に止まった。そのうえで鏡は割れて消え去ったのだった。
「消えた！？」
「破片が飛び散ってそれが」
消えたのだった。鏡は完全に消え去ってしまったのだった。
鏡は消えた。セーラの髑髏の蝋燭も完全になくなっていた。髑髏は蝋まみれとなりその異様な姿をさらに異様なものにさせていたのだった。
「終わりました」

セーラはその髑髏を見下ろしながら皆に告げた。
「これで封印できました」
「できたのね」
「はい」
こうも皆に答えた。
「これで。魔界の扉はなくなりました」
「それは何よりだけれど」
「けれど」
それでも皆の心にはある疑念が残っていた。それは。
「何でここの鏡が魔界の扉に？」
「最初からそうだったとか？」
「最初ではありませんでした」
セーラは皆に述べた。
「あの鏡もまた最初は魔界の扉ではなかったのです」
「そうだったの」
「ですがそれは変わるものです」
「変わるもの！？」
「鏡には元々魔力が備わっています」
またこの話になった。何故こうなったのかというとやはりこのことが前提にあるのだった。
「だからこそ。人の姿を映し出しているうちに」
「鏡の魔力が強まり」
「そうです」
また皆の言葉に応えるセーラだった。
「そうしてこの鏡は魔界の扉になったのです」
「じゃああれ？」
アンジェレッタはその話を聞いて目を顰めさせた。
「それだとどの鏡も魔界の扉になっちゃうけれど」
「勿論そうはなりません」
それは保証するセーラだった。

「普通の鏡なら」
「っていうとあの鏡は」
アンジェレッタは今のセーラの言葉からまた一つ謎を解いた。
「普通の鏡じゃなかったのね」
「そうです。あの鏡は普通の鏡ではありません」
セーラもそれを認めた。
「まさにこの世に一つあるかないかの」
「あるかないかの」
「そうした鏡だったのです」
こうアンジェレッタだけでなく皆にも告げるのであった。
「元々魔力がかなりあったと思われます」
「元々ね」
「ごく稀に存在しています」
セーラはまた言う。
「そうした鏡もまた」
「あるんだ」
「誰かが仕組んだものでなしに？」
「偶然によってのものであります」
セーラはいぶかしむ皆にまた述べた。

第百二十五話　鏡の間その九

「何者かが邪悪な意図により作る鏡はこの様な場所にはありません」
「まあ確かに」
「こうした場所の鏡は企業の大量生産だからな」
考えてみればそうなのだ。企業の大量生産の鏡がどうして何者かのよからぬ意図が入って来るのか。それは有り得ないことである。
「それはないよな」
「じゃあやっぱりこの鏡は偶然に？」
「とてつもなく低い可能性ですが」
セーラが今度言うのは可能性だった。
「何千京の中に一枚だけ」
「そうした鏡がある」
「そういうことです。今の鏡はその何千京のうちの一枚だったのです」
話がより具体的なものになった。
「それがたまたまこのミラーハウスにあったのです」
「で、魔界の扉になったのね」
アンは話を全て聞いてからまた述べた。
「成程ね。聞けば聞く程凄い話ね」
「そうね。ところで」
ルビーはあることを思い出した。
「犯人もわかって事件の元も解決したけれど」
「このなくなった鏡のこと？」
「それはもう何とかなるでしょ」
ルビーはこうアンジェレッタに返した。
「それはね」
「何とかなるって？」
「今私が出しました」

ここでセーラが早速言って来た。
「こちらに」
「えっ、もう!?」
「何処から出したの?」
「こうしたことがあろうかと常に用意しているのです」
驚く皆に対してにこりと笑って述べるのだった。
「このようにして」
「そうだったのって」
「普段からそんな大きな鏡を用意してるの」
これはこれで驚くべきことである。
「鏡は魔術や呪術にも使います」
セーラは話す。
「そして妖術にも」
「妖術って」
「そんなのまで使えるの」
とにかく常識やそういったものとは全く無縁のセーラである。少なくとも連合の常識は全く通用しない、それがセーラでありマウリアであるのだ。
「使うので用意しています」
「成程ね、だからね」
「それでなの」
皆そのことには納得する。
「まあ何処にそんな大きな鏡を持ってるのかはいいけれど」
「それはまあいいわ」
流石にそこまでは考えないことにする一同だった。しかしであった。
「けれどよ」
またアンジェレッタが言う。
「その犯人は何処に?」
次の問題はこれであった。

「その鏡から出て来た白ドードー。何処に行ったのかしら」
「あっ、そういえば」
「何処に！？」
皆もそれに気付いたのだった。
「何処にいるのかしらね」
「落書きしてから」
「それよ」
アンジェレッタはここでも話す。
「それから何処に行ったのかしら」
「つまりだ」
ギルバートがそのアンジェレッタの話を聞いて考える顔になって述べた。
「犯人はわかりその元は解決しても犯人は捕らえてはいない」
彼はその顔で言う。
「そういうことだな」
「そうなるな」
タムタムがその彼の言葉に頷く。
「今回はな。その犯人の問題がまだ残っている」
「犯人見つける？」
ルビーが皆に問うた。
「やっぱり。ここは」
「見つけて何とかしないと駄目よ」
アンのルビーへの返答ははっきりとしたものだった。
「だって。犯人を捕まえて事件は全部解決じゃない」
「そうよね。それはね」
「確かに」
皆彼女の今の言葉に頷く。
「それに捕まえて何とかしないとまた落書きするわよ」
アンはこうも話す。
「だからね。やっぱりね」

「捕まえるわよ」
返答は決まっていた。
「絶対にね」
「これで決まりだな」
こうして次やることが決まった。その鏡から出た白ドードーを捕まえる。彼等の事件への行動は鏡を封じても続いていくのであった。

鏡の間　　完

２００９・２・２６

第百二十六話　捕獲作戦その一

捕獲作戦

謎は解き事件の元も解決した。後は犯人を捕まえるだけだった。
鏡を封印した次の日。二年Ｓ１組の面々はかつてカムイのデートの時に基地にしたあの喫茶店の二階に集まりそこでこれからのことの打ち合わせに入ったのだった。やはりあのテンボとジャッキーは呼ばれてはいない。
「まああの二人はいいとして」
「ええ」
皆もそれはわかっていたのでこの話はこれまでだった。
「さて、その白ドードーだけれど」
「見つけること自体は楽だよね」
セドリックは素っ気無く述べた。
「見つけることはね」
「ええ、そうよ」
議長役を務めているアンが彼の言葉に答えた。
「あんなに目立つ外見だから」
「そうだよね。やっぱり」
「だから見つけること自体は簡単よ」
やはりそれはかなり容易であった。
「ドードーでしかも真っ白なんだから」
「ドードーは目立つ」
ギルバートも腕を組みつつ述べた。
「それを考えれば見つけるのは簡単だな」
「ただね」
だがここでアンは言うのだった。
「それでどうにかなるかしら」
「どうにかって？」

「何かあるのかよ」
「見つけることはできても」
アンは皆の問いにそれはよしとした。
「けれどあれよ。捕まえるのはどうかしら」
「？ドードーでしょ？」
アンジェレッタは声に疑問符をつけて彼女に問うた。
「そんなの楽勝じゃない。ドードーって人間怖がらないし」
「普通のドードーはね」
アンは話を限定させてきた。
「確かに。楽よね」
「普通のドードーって」
「鏡から出て来たドードーよ」
アンは今度はその顔を顰めさせて話した。
「しかもその鏡は魔界の扉だったし」
「つまり普通のドードーじゃないってことね」
「魔物の類と考えていいでしょうね」
少し深刻な顔になって述べた言葉だった。
「相手はね」
「魔物ね」
「何か話がまたオカルトになってきたな」
皆話をしながらそうなってきたことを感じ取っていた。
「さて。それだとどうなるんだ？」
「またセーラの出番？」
皆セーラに顔を向ける。彼女はいつもと同じようにその後ろにラメダス、ベッキーを控えさせそのうえでにこりと微笑んで席に座っていた。
「ここはやっぱり」
「またあんたかしら」
「用意はできています」
そのセーラがにこりと笑って皆の言葉に応えた。

「私でしたら何時でも」
「若しもの時は頼むわ」
アンは真面目な顔でセーラに頼んだ。
「本当に魔物とかだったらね」
「わかりました」
「とにかく。見つけることは簡単よ」
アンはこのことを強調した。
「ドードーだからね」
「ドードーは飛ばないしね」
ルビーはドードーの特性について言及した。
「っていうか飛べないけれど」
「そうそう」
「っていうかあの体型で飛んだら凄いぞ」
皆も言う。ドードーは極端に肥満した体型でありその為飛ぶことができないのだ。それが地球において絶滅した要因にもなっている。
「魔物だったらわからないけれどまあ大丈夫でしょ」
「あとわかったことだけれど」
アンジェレッタも言ってきた。
「あの落書きあるじゃない」
「ああ」
「その事件の発端ね」
教室にあったあの落書きである。そもそものはじまりだ。

第百二十六話　捕獲作戦その二

「あれね。ジャンプしながら書いてたわ」
「ジャンプしながら？」
「黒板の下に跳ねた足跡が一杯あったのよ」
アンジェレッタはそれも調べているのだった。
「強い足跡がね」
「ジャンプしながら必死で書いたの」
「かなり器用なことは器用だけれど」
アンジェレッタはそれは認めた。
「それでもね。飛べないわね」
「飛べないの」
「ドードーにしては高くジャンプできるけれど」
「それでも飛べない、と」
「ドードーらしく」
皆の中でこのことが強く確認された。
「成程ね。だったら」
「それは心配しなくていいわね」
「ええ、そうね」
「それはね」
このことはとりあえず安心する皆だった。
「さて、と。後はね」
「どうやって捕まえるかだけれど」
次に話すのはこのことだった。
「餌撒く？」
「餌！？」
「そう、餌」
セドリックが皆に提案してきた。
「それで白ドードーを招き寄せてね」

「それで捕まえるのね」
「うん」
皆に対して頷いて答える。
「そうだよ。それでどうかな」
「そうね」
アンはセドリックの話を聞いて腕を組む顔で頷いた。
「いい考えね」
「じゃあそれで行く？」
「基本はね」
アンの返答は腕を組んだままだった。何故かそれを解こうとはしない。
「それでいいと思うわ。私もね」
「じゃあ早速」
「餌を撒くことはいいわ」
アンはまた言った。
「それはね。いいと思うわ」
「いいんだね？」
「ただしよ」
だがここでアンは言ってきた。やはりその腕は組まれたままである。
「問題はそのやり方よ」
「やり方！？」
「そう。ただ餌撒いて上から覆い被せる罠を仕掛けるだけじゃ駄目だと思うわ」
鳥を捕まえる場合のオーソドックスな罠である。昔からあるものだ。
「それはね。意味はないわ」
「ああ、それはね」
セドリックもアンと同じことを考えているようだった。
「そんな簡単な方法で捕まえられるとは思ってないよ」

「だったらいいけれど」
「薬を使おうと思うんだ」
セドリックは今度はこうアンに話したのだった。
「ちょっとね」
「薬を？」
「ドードーの食べ物ってあれだよね」
セドリックの言葉は続く。
「稗とか粟とか食べるんだよね」
「そうね」
アンはセドリックの話を聞きながら考える顔になった。やはり腕は組んだままで言葉を出す。
「食べると思うわ」
「じゃあ稗とか粟を用意して」
「ただしよ」
アンはさらに言う。
「そういったのが好きかどうかはわからないわよ」
「好きかどうかは？」
「ええ、わからないわ」
こう話すのである。
「ほら。羊や山羊って紙食べるじゃない」
「うん」
このことはこの時代においてもよく知られている。羊に山羊といえば紙である。

第百二十六話　捕獲作戦その三

「けれど決して好きってわけじゃないわよね」
「そうだね」
セドリックもこのことはわかっていた。
「一番好きなのはやっぱり草だよね」
「だからよ」
アンの言葉は続く。
「ドードーにもそれが言えるでしょうから」
「ただ稗や粟を用意すればいいってわけじゃないんだ」
「そういうこと」
アンが言いたいのはそういうことだった。
「だから。餌も考えましょう」
「ドードーが好きな餌を用意するんだね」
「ええ。とりあえず調べて」
そうした細かい部分も調べるというのだった。用意周到だった。
「そのうえでお薬もね」
「お薬なら任せて」
やはりこうした場合出て来るのはアンジェレッタだった。
「それはね。私が持ってるから」
「頼むわ。じゃあドードーが何を好きなのかはこっちで調べておくから」
「御願いね」
役割分担も決めてそのうえでそのドードーの好きな食べ物を調べて用意した。それと共にかなり強力でしかも即効性の眠り薬もアンジェレッタが用意したのだった。
「とりあえずは揃ったな」
「ええ」
アンは餌や薬を前にギルバートの言葉に頷いた。

「まずはこれでよしね」
「後はこれをどう使うかだが」
「罠の仕掛け方ね」
またアンジェレッタの目が光った。
「今度は」
「それでどうするんだ？」
ギルバートはそのアンに対して問うた。
「その罠は」
「勿論ただの罠じゃないわ」
アンも言う。
「ただのね」
「策があるのか」
「ええ。といっても受け売りだけれど」
アンはここでは少し照れ笑いを浮べた。
「それはね」
「受け売り？」
「シートン動物記をモデルに考えてるのよ」
シートンと動物の対決や巡り合いを書いた古典である。連合においては今でも読まれている名作である。
「それでいくわ」
「シートンか」
「といってもあれよ」
ルビーがまたアンに言ってきた。
「ドードーは狼王ロボじゃないわよ」
「それはわかってるわ」
アンもそれはよくわかっていた。
「それはね」
「ロボも凄い狼だったけれど」
賢くそして気高い狼であった。日本やモンゴルにおいては狼はそういう獣だと最初から思われているがアメリカでは違う。だからシ

ートンの出会ったロボはアメリカ人にとっては全く新しい狼の姿であったという。
「今度のドードーは家畜は襲わないけれど」
「悪戯はするし」
そこも全然違っていたのだった。
「そして魔界にも関係してるしね」
「ロボよりもずっと手強いかも知れないわよ」
「だからよ。込んだ罠が必要なのよ」
だからだと。アンは言うのだった。
「込んだのがね」
「それでどういった罠なのだ？」
ギルバートもそれが気になっていた。
「普通の罠でないのはわかるが」
「木の枝を隠すのは何処かしら」
アンはまず言ってきた。

第百二十六話　捕獲作戦その四

「それは。何処かしら」
「何処か、か」
「ええ。それは何処？」
ギルバートだけでなく一同にその枝を隠す場所を尋ねるのだった。
「それは何処かしら」
「森ね」
ルビーは少し考えてから答えた。
「ブラウン神父はそう言ってたわ」
「そうね。他にも死体を隠すのなら戦場とも言っていたけれど」
このブラウン神父の話も連合では今も広く読まれている。もっともこれはイギリス人が書いたものであるが彼等は勝手に連合のものにしてしまっている。他のエウロパ系の古典も同じだ。この辺りは実に図々しいがそんなことをいちいち気にしないところもあるのが連合だ。
「とにかく枝を隠すのは森ね」
「ええ」
「じゃあドードーの餌を隠すのは？」
「ドードーの餌の中か」
ギルバートも言った。
「そこだな」
「そういうこと。しかもよ」
アンはさらに言う。
「うちの学園の動物園にはドードーもいるわね」
「ああ」
タムタムが答える。
「といっても白いのはいないがな」
「それでもドードーはいるわ」

アンはあくまでそこに重点を置いて話す。
「だから。そのドードーの餌のところに撒いておくのよ」
「成程、そういうことなんだ」
セドリックはアンの話をここまで聞いたうえで納得した顔で頷いた。
「それだとね。まず疑われないわよね」
「それでアンジェレッタ」
アンは今度はアンジェレッタに顔を向けた。その薬の持ち主だ。
「眠り薬は」
「わかってるわ。無味無臭ね」
にこりと笑ってアンを見上げつつ述べる。
「勿論。犬でも狼王でもわからないようなのね」
「御願いね。さて、後は」
アンはここまで話したうえでまた述べた。
「餌を置いておくだけね」
「そうね」
ルビーがアンの言葉に応える。
「流石にここまでやったら大丈夫よね」
「魔界に関係していてもか？」
タムタムはそこが気になった。
「それでも大丈夫なのか」
「それは御安心下さい」
そうしたことの専門家であるセーラが告げてきた。
「確かにあの白ドードーは魔界への扉であるあの鏡から出て来ました」
「ああ」
「しかしです」
そのうえでさらに話を続けてきた。
「あくまでドードーです。ドードーにしては尋常ではない行動を取ることができますが」

「それでもか」
「はい。それでもドードーです」
ドードーであることを前置きして話すのであった。
「ドードーはドードーの行動を取ります」
「人間が人間の行動を取るのと同じだな」
「その通りです」
セーラはタムタムの言葉に対して頷いた。
「ですからここはそれでいいです」
「そう。だったらそこに置いておけばいいわね」
アンはセーラの今の言葉を受けてそれでいくことを完全に決めた。
「それじゃあそうして」
「さて。これで捕まえたら」
ルビーはもう捕まえてからのことを考えていた。
「どうしようかしら」
「ペットにする？」
セドリックがこんなことを言い出した。
「その白ドードー」
「そういえばドードーって飼いやすいの？」
「さあ」
皆セドリックの今の言葉を聞いてこうした話もした。

第百二十六話　捕獲作戦その五

「あまり聞かないけれど」
「けれど飛ばないし人なつっこいし」
少なくとも人を恐れはしない。
「嘴で突かれたら痛そうだけれど」
「鶏みたいなものかな」
こんなふうにも考えるのだった。
「養殖用のドードーも何処かの国にいたような」
「今実験中じゃなかったかしら」
皆この辺りの記憶は曖昧である。連合においては様々な生き物が家畜として養殖されている。草食恐竜、ブロントサウルスやステゴサウルスの牧場もあるしそのドードーも実際に養殖されようとしている。オオウミガラスやダチョウは実際に食用として養殖されている。
「卵を多量に産ませるように品種改良するって話もあったような」
「ドードーの卵って美味いの？」
「美味しいよ」
話は食べることにも及んだがとりあえず捕まえたらどうするかという話にもなった。そう、食べることにも話が及んでいるのだった。
「ドードーって美味いしな」
不意にマチアが言った。
「鳩の仲間だしな」
「食べるのかよ、捕まえたら」
「そこまで考えてないけれどな」
ロザリーに一応はこう返す。
「けれどな。飼い主とかもいないしな」
「食べようと思えば食べられるってわけかよ」
「ドードーの親子丼か」

ロザリーはこの料理のことも思い出した。
「ああ、そういえばそれで養殖されていたんだったな」
「そういえばそうだったな」
ここで皆はやっとドードーが養殖されていることを思い出した。
「じゃあ食ってもいいか」
「あのドードー」
「カレーにしてもよさそうですね」
セーラがにこりと笑って述べる。
「ドードーのカレー。マウリアでもあります」
「ドードーは食べていいの」
「はい」
そのにこりとしていてかつ静かな微笑でアンの言葉に答える。
「ヒンドゥーで食べてはならないのは牛です」
「牛だけなの」
「他のものは大抵食べていいのです」
どうやらそうであるらしい。セーラの言葉では。
「カーストが上なら牛も食べていいとされていますが」
「あんた牛食べないわよね」
「牛には多くの神々が宿っています」
ヒンドゥー独特の考えである。
「ですから私は」
「そうなの」
「ドードーは食べたことがありますがカレーはまだ」
「ドードーのカレーねえ」
アンはあらためてその料理のことを考えた。
「面白そうであるけれどね」
「だがそういった話は捕まえてからだ」
ここでギルバートが現実的な意見を出してきた。
「全てはな。それからだ」
「そうだよな、やっぱりな」

ロザリーがギルバートのその言葉に頷いた。
「まずはそれからだな」
「じゃあ罠用意しに行こう」
セドリックが皆を誘う。
「後のことは捕まえてからゆっくり考えようよ」
「そうね。それじゃあ」
議長役のアンがその言葉に頷いた。
「そうしましょう。それじゃあ」
「いざ動物園へ」
こうしてその日の深夜に動物園のドードーのところにその眠り薬をかけた餌を混ぜておいた。セーラが魔術を使って柵を通り抜けそのうえで餌の中に入れたのである。皆それを見届けてから帰った。
そして次の日。
「やったぞ」
「引っ掛かったわ」
動物園から少し離れた茂みの中であった。そこで白ドードーが寝ていた。その白ドードーが何であるかはもうクラスの人間なら誰もがわかることだった。
「捕獲成功」
「これでよしね」
早速そのドードーを籠に入れてしまう。これでまずは作戦成功であった。
「さて、と」
話はそのうえでまた次の段階に移った。
「まずはこれでよしね」
「そうだな。後は」
「このドードーをどうするかよね」
話はそこに至った。しかしこれはこれで議論になるのだった。皆ドードー一匹の前にかなり騒ぎ続けていた。

捕獲作戦　完

2009・3・2

第百二十七話　どうするかはその一

どうするかは

白ドードーは捕まえた。しかし話はそれで終わりではなかった。
まだ話は続いていた。今度の話は。
「で、どうする？ドードー」
「食べる？」
またこの意見が出て来た。
「折角捕まえたんだし。誰のものでもないし」
「つまり食べても何も問題はない」
ギルバートは考える顔で述べた。皆またあの喫茶店の二階に集まって話をしている。今度は捕まえた祝いも兼ねてかそれぞれかなり飲み食いしながらである。
「そうだな」
「そうね」
アンは丁度クレープでアイスクリームとバナナを包んだものをフォークとナイフで食べていた。
「問題ないのならね」
「いいな」
「ええ。ただしよ」
アンはそのクレープを食べながらさらに言う。
「問題はあるわ」
「あるのか？」
「どうやって食べるのかよ」
彼女が言う問題はそれだった。
「どうやってね。料理法は」
「ローストにする？」
セドリックは素っ気無く述べた。
「ローストドードー。どうかな」

「それだとドードーの脂身がなくなるんじゃないか？」
それに反対したのはロザリーだった。
「ドードーのいいところはその脂身だろ？それがなくなったら」
「そうか。それだね」
「ああ。だからあたしはそれは反対だよ」
こうはっきりと反対を述べたのだった。
「それだったらオリーブ煮なんてどうだよ。ドードーのな」
「それもどうかしら」
ロザリーの案に反論したのは蝉玉だった。今回特に何も言わなかった彼女がここでようやく話に加わってきた。食べ物のことでであるから中国人らしくはある。
「オリーブ煮も悪くはないけれど」
「蝉玉は何がいいっていうのよ」
「北京ドードーよ」
彼女が主張するのはこれだった。
「ローストするのよりそっちの方がいいわよ。鳥は皮じゃない」
「それでお肉はスープにするのね」
「そういうこと」
彼女の案はこれであった。
「これでどうかしら」
「僕はハンバーガーにしたらどうかなって思うけれど」
今度言ったのはスターリングだった。彼も実にアメリカ人らしい。
「それよりも」
「何よ、北京ドードーは駄目なの？」
「今はハンバーガーがいいかなって」
珍しく意見が対立する二人だった。
「思うけれど」
「ううん、私はやっぱり北京ドードーが」
彼女もそれにこだわる。やはり二人もそれぞれ意見が合わなかった。

しかしそれだけではなかった。この四人以外にもマルコが言うのだった。
「タコスがいいんじゃないかな」
「タコスなの？」
「そう、タコス」
アンに対しても言う。
「ここはオーソドックスにね。どうかな」
「ありきたり過ぎない？」
マルコの案にも反論が出た。今度はレミだった。
「タコスだと」
「じゃあレミはあれ？ドードーのシェラスコ？」
「そう。どうかしら」
レミは予想通りそれを主張した。やはり彼女もブラジル人だった。
「シェラスコは」
「それも脂落ちるだろ」
ロザリーはとにかく鳥の脂にこだわっていた。
「シェラスコもな。だから」
「難しいのね」
「これが牛とか豚とか羊ならいいさ」
ロザリーもそういった肉ならいいとした。

第百二十七話　どうするかはその二

「けれどな。鳥のシェラスコはな」
「駄目なの」
「折角鳥の脂を楽しめるドードーだからな」
何処までも脂にこだわる。
「ちょっとそういったのが落ちるとな」
「今流行の和風でいく？」
ローリーが提案してきた。
「彰子に教えてもらって」
「私に？」
これまでいるだけだった彰子がにわかにクローズアップされた。
皆も彼女の方を見る。
「私なの」
「そうよ。何かいい料理ある？」
ローリーは彰子に対して尋ねた。
「ここは。何か」
「お刺身とかそういうの？」
「それはちょっと」
ローリーは刺身と聞いて難色をそのまま顔に出してみせた。
「鳥のお刺身はね。相当信用できないとまずいから」
「じゃあ唐揚げとか？」
「それはいいけれど」
ローリーはこうは言うがそれでも難しい顔のままである。
「けれど。唐揚げは」
「駄目なの？」
「ドードーって脂身多いじゃない」
彼女もこのことを言う。
「唐揚げってやっぱりあっさりしたお肉だからいいじゃない」

「うん」
彰子も彼女のその言葉に頷く。
「それで唐揚げっていうのは」
「駄目よね。やっぱり」
「和食ならあれじゃない」
そしてローリーはさらに言うのだった。
「お鍋なんてどうかしら」
「お鍋ね」
「それかちゃんこ」
鍋料理を話に出すのだった。
「若しくは鍋焼きうどんとかどうかしら」
「それだとおうどんがメインになるわよ」
彰子は特に反対する様子はなかったがそれでもさりげなく言うのだった。
「ドードーがメインだから」
「そっか。鍋焼きうどんはちょっとね」
「ええ。やっぱりね」
こう言うのだった。
「だったら。何かしら」
ローリーはあらためて考えに入った。
「ドードーの料理。いいのは」
「サムゲタンなんかどうだ？」
今度は洪童が名乗り出た。
「それならどうだよ」
「ドードーのサムゲタン？」
韓国の鶏を使った料理の一つだ。鳥を一匹丸ごと使い腹のところにもち米を入れそのうえ生姜や大蒜、高麗人参と共に煮込む。骨まで食べられる柔らかさになる。ここにさらに飯を入れて卵にして粥のようなものにして食べることも可能である。韓国料理で有名なものの一つだ。

「それならどうって？」
「これなら特に問題はないんじゃないのか？」
「そうね。言われてみれば」
ローリーも彼の暗に傾こうとしていた。
「じゃあそれもいいかしら」
「私はカレーです」
しかしここで遂にセーラが出て来たのだった。
「カレーが最もいいと思うのですが」
「ドードーのカレー」
「ドードーはカレーにすると絶品です」
彼女はそう主張する。
「ですから。カレーはどうでしょうか」
「ええと、北京ドードーにドードーバーグにシェラスコにお鍋にサムゲタンにカレーにオリーブ煮って」
「あとローストドードーも」
「そうそう、それもあったわね」
ここまで話しただけでこれだけ出ていた。
「何かどれも全員で食べるっていうのには決め手に欠ける？」
「どれも美味しそうだけれど」
確かにどれも美味そうなのは事実だった。

第百二十七話　どうするかはその三

「けれど。どれか一つにするかっていうと」
「どれがいいんだろう」
「そうよね。何がいいかしら」
皆あらためて考えるのだった。とにかく答えは出ない。
しかもであった。まだ問題があった。ポルフィがその問題をはじめて出す。
「ところでさ」
「何だ、ポルフィ」
「どうしたの？」
「そのドードーだけれど」
彼は話の原点に返ったかのようにして述べる。
「僕前ドードー二羽食べたことあるけれど」
「ドードーを二羽！？」
「またそれは随分食べたわね」
「三羽だったかな」
平気な顔をして述べた。
「それだけ食べたことあるけれど」
「ドードーを三羽って」
「また凄いな」
皆あらためてポルフィの食欲に絶句するのだった。ここで皆あること気付こうとしていた。
「待てよ、ドードーは一羽だよな」
「そうよね」
気付いたのはこのことだった。
「ってことは？」
「皆大体ドードーだったら一羽は軽く食べられるし」
「しかもそれがメインディッシュで他のも」

確かにポルフィは桁外れの胃袋の持ち主だが他の面々も充分過ぎる程食べる。
「つまり。あのドードー一羽じゃ」
「とても足らないってわけね」
「ああ、そういえばそうね」
アンもここでやっとそのことに気付いたのだった。
「ドードー一羽じゃ。皆満足しないわよね」
「全然」
「っていうか五十羽か六十羽は欲しい？」
このクラスの面々では確かにそれだけ必要だった。
「どうせ食べるのなら」
「それ考えたらやっぱり」
皆また口々に言い出した。
「足りないな、あれだけじゃ」
「そうよね」
「一羽じゃね」
皆考えてみればそうであった。
「少ないなんてものじゃないから」
「一羽だけいてもね」
「じゃあどうする？」
ギルバートがここで皆に問うた。
「食べるにしてはあまりにも少ないが」
「だったら食べても仕方ないわね」
アンが彼の言葉に応えて述べた。
「一羽を五十人かそこいらで食べても」
「じゃあ食べないのね」
ルビーは率直にアンに問うた。
「あの白ドードー。やっぱり」
「食べても仕方ないのなら食べてもね」
首を傾げるように捻らせながらルビーのその問いに答えた。

「仕方ないから」
「じゃあどうするの？」
ルビーはまたアンに尋ねた。
「あの白ドードー」
「どうするって言われると」
食べる以外には考えていなかったので困った顔になるのだった。
「ちょっと。ねえ」
「食べないのならここで捕まえていても仕方ないんじゃないの？」
ここでアンジェレッタが言った。
「それだったら」
「じゃあ放すの？」
アンは怪訝な顔になってアンジェレッタに問い返した。
「それだと」
「そう言われても」
問い返されたアンジェレッタも返答に窮していた。
「あんな魔力持ってる悪戯するドードー野放しにさせてもね」
「やばいわよね」
「また同じ騒ぎ起こすわよ」
このことはもう容易に想像がつくことであった。

第百二十七話　どうするかはその四

「絶対にね。どっかのクラスの黒板に落書きしてね」
「じゃあお解き放ちは駄目なのね」
「騒ぎ起こして平気なら別だけれど」
流石にそれはあまりにも無責任であった。
「そうじゃなかったら。やっぱり」
「じゃあやることは一つね」
「そう、一つよ」
答えはもう出てしまっているようなものだった。
「食べはしないけれどお解き放ちもなし」
「それしかないわね」
「やっぱり」
皆アンのその言葉に頷くのだった。
「けれど問題は誰があの白ドードーを持っているかだけれど」
「ペットショップに売るか？」
洪童が提案してきた。
「高く売れるんじゃないのか？白ドードーだったら」
「ドードーって保護動物じゃなかったかしら」
だがそれにすぐに突っ込みを入れたのは蝉玉だった。
「そんなのペットショップに持って行ったらどうやって捕まえたんだって言われて警察に通報されるわよ」
「げっ、そうか」
「そうなったら大事よ」
蝉玉はその子とに気付いた洪童にさらに言う。
「保護動物は捕まえたらそれだけで罪に問われるから」
「そういえばペットにするのにも特別な許可が必要だったね」
スターリングも言ってきた。
「だから。やっぱり」

「ペットショップは駄目ね」
「そうか。駄目か」
「動物園もね」
蝉玉は動物園も駄目だと言った。
「理由は同じでね」
「そうだね。持って行ってもね」
スターリングが頷きその話も終わったのだった。
しかしであった。それでどうやって話を終わらせるかだった。その結論はまだであった。
「けれど話は何とかしないと」
「それだ」
ギルバートはまたアンの言葉に頷いた。
「ペットショップや動物園が駄目なら。どうするかだが」
「誰かの家で飼うとかは？」
セドリックが言ってきた。
「それならどうかな」
「だから。保護動物だぞ」
ロザリーが怪訝な顔でセドリックに言い返す。
「それ家で飼っててもまずいだろ」
「それもそうか」
「特にドードーはそうだな」
やはり許可が必要なのである。
「問題になるぞ。ロシュフォール先生は特別なんだよ」
「家畜になってるのは別だけれどね」
ナンはそれについては把握していた。
「あっちはあっちってことで」
「そうなんだ。じゃあやっぱり」
「オオナマケモノの時凄い苦労したし」
ベンが困ったような顔で言ってきた。
「だからそれもね」

「無理ね」
「野良ドードーにするわけにもいかないし」
「どうしようかしら」
皆あらためて頭を抱え込む。しかしここで思わぬ助け舟が現われた。
「それならです」
「それなら？」
「私がお預かりさせて頂きます」
名乗り出てきたのはセーラだった。
「それで宜しいでしょうか」
「あんたが？」
「はい」
いつもの気品と優雅さに満ち溢れた微笑で返すのだった。

第百二十七話　どうするかはその五

「それで宜しいでしょうか」
「まああんたがいいっていうのならいいけれど」
「ただ」
しかしここでまた一つ問題があるのだった。それは先程から言われている問題である。
「けれど保護動物だし」
「大丈夫なの？そこんとこ」
「私の家の中はマウリア領扱いとなっていますので」
セーラはその微笑のまま皆に答えてきた。
「ですから。御安心下さい」
「あんたのお家ってマウリア領だったの」
皆このことも知ることになった。
「っていうかそれはじめて知ったけれど」
「私も」
彼等もそれは知らなかった。連合にあるのなら当然連合領だと思っていたのだ。しかしそれは全く違っていたのであった。
「どうやって許可得たんだろう」
「何か謎だらけよね」
「お父様が日本政府と中央政府にお声をかけて下さって」
「セーラのお父さんって確か」
皆またセーラの言葉に対して思索と検証に入った。その結果思い出したのは。
「マハラジャだったっけ、マウリアの」
「星系一個持ってる物凄い大金持ちだったわよね」
「マウリアでも屈指の資産家で」
とにかくかなりの家なのは間違いないのである。
「その人がお声をかけたからなのね」

「それで」
「お父様のおかげです」
何気なくとんでもない話だがセーラはそれには気付いていない。
「それでその様に扱って頂いています。お屋敷の敷地内は」
「つまり大使館と同じなのね」
「ああ、そうだな」
考えてみればそうだった。大使館の中はその国の法律が適用されその国の領内の扱いになるのはこの時代においても同じである。
「そういえばそうなるな」
「ですから。連合の保護動物扱いは適用されません」
セーラはここでまたこのことを述べるのだった。
「連合の法律そのものがです」
「じゃあ大丈夫なのね」
「連合じゃないから」
「はい。マウリアでも野生のドードーは保護動物ですけれど」
「じゃあ結局駄目なんじゃ？」
「なあ」
皆今のセーラの言葉から顔を曇らせる。
「それだったら」
「そっちでも保護動物なんだからよ」
「ただ。我がシヴァ家は野生の保護動物を保護する資格があります」
しかしセーラは今度はこうしたふうに言ってきた。
「ですから大丈夫なのです」
「ああ、そっちの資格持ってるんだ」
「っていうかマウリアじゃその資格あるの」
「かなり上のカーストでしかも厳しい審査が必要ですが」
こういう前提は必要なのであった。
「それでも。ありますので」
「成程ね。それでなのね」
「それでなの」

皆あらためて彼の言葉に頷いた。
「それで白ドードー引き取ることできるのね」
「その資格で」
「はい。ですから御安心下さい」
高貴な笑みは健在であった。
「このことは」
「そう。じゃあ御願いするわね」
「それで頼むな」
皆ここまで聞いてやっとセーラの言葉に頷くのだった。これで話は決まった。
「それではドードーは私が」
「了解」
またセーラに対して応える。

第百二十七話　どうするかはその六

「御願いするわね」
「そういうことでな」
「ドードーは既に群れを持っていますけれど」
「ドードーの群れ・・・・・・」
「そんなのまであるのね」
皆それを聞いて絶句してしまった。連合といえどドードーの群れなぞそうそうあるものではない。家畜としてのドードーは鶏と同じではあるが。
「これでまた一羽ですね。楽しみです」
「ああ、セーラ」
アンはにこにことしているセーラに声をかけた。
「一つ聞きたいことがあるんだけれど」
「何でしょうか」
「あんたのお屋敷って色々な動物がいるじゃない」
「はい」
セーラも彼女の言葉に応える。彼女が見た限りでは恐竜が庭を闊歩し巨大な湖の如き池には鯨がいる。そんな途方もない屋敷なのだ。
「ドードーその中にいて他の動物に食べられないの？」
「そういえば僕あそこで狼見たよ」
「私サーベルタイガーよ」
そんな猛獣も普通にいるのである。
「ティラノサウルスもいるし」
「川に鰐とか淡水性の鮫とかもいたし」
惑星によってはそうした鮫もいる。当然人を襲うような大型かつ獰猛なものもいる。セーラの屋敷の淡水鮫はそうした種類の鮫である。
「二十メートルの大蛇もいたっけ」

「アナコンダだったっけ」
そんなものもいたりする。アナコンダは十メートル前後が限度だと長い間言われていたが実際はそうした巨大な個体も存在してきたしこの時代もいるのだ。
「鰐だって十五メートルのとかいるし」
「キングコブラもうじゃうじゃいるし」
「コブラは神のお使いですよ」
ラメダスがにこりと爽やかな笑みを浮かべて皆にコブラのことを話す。
「ナーガの化身ですから」
「確か蛇の神様ですよね、ナーガって」
「はい」
ラメダスはアンの言葉に答えた。やはりそのにこりとした笑みで。
「その通りです」
「その蛇の神様のお使いですか」
「ですからとても尊い生き物なのです」
マウリアではそうなのだった。ナーガはマウリアが地球にあったそれこそ数千年前から崇められていた神でありその数は多く神族と言ってもいい。コブラはその化身とされているのだ。
「キングコブラも昔からマウリアにもいました」
「地球にあった頃からですよね」
「勿論です」
インドは熱い地域が多い為毒蛇も多かったのである。今毒蛇の多い惑星がかなり多い。
「あとインドコブラも勿論」
「結構物騒なんじゃないの？マウリアって」
「毒蛇だけじゃないしな」
皆ラメダスの話からあらためてそう考えるのだった。
「そのセーラの屋敷だって」
「この前忍び込んだ盗人が死に掛けてなかったっけ」

そんな事件もあったのである。
「確か壁越えて入ったその落下点がいきなりお池で」
「モササウルスに食べられかけたのよね」
「エラスモサウルスにも追いかけられて」
どちらも淡水性のものである。地球では海水性だったこうした恐竜も惑星によっては淡水性だったりするのだ。この辺りは惑星による。
「それで何とか這い上がったら虎がいて」
「九死に一生を得て警察に保護されたのよね」
「よく生きてたな」
「全く」
皆あらためてこのことを思った。
「そんなえげつない目に遭ってな」
「っていうか殆ど野放しなのね、猛獣が」
「自然は大切にしています」
セーラはそう考えているだけであった。
「ですから。彼等を束縛したりはしていません」
「そうなの」
「ただちゃんと餌付けはしていますので」
それは大丈夫らしい。

第百二十七話　どうするかはその七

「噛まれたり襲われたりはしません。お屋敷にいる者達に襲い掛かることは絶対にありませんし皆さんに対しても何もしませんよ」
「信じられる？」
「餌付けっていっても生き餌とか？」
皆セーラから言われても殆ど信じてはいなかった。
「そんな猛獣のオンパレードばかりでね」
「試しに入ったらどうなるか」
想像するだに恐ろしいことであった。
「まあとにかくドードーだけれど」
「はい」
とにかく話はそこに戻った。
「御願いできるのね」
「はい」
このことはもう決まっていた。
「ですから。御安心下さい」
「とりあえずわかったよ」
「じゃあそういうことで」
話が決まるのだった。
「御願いするわね」
「はい。それでは」
ここでセーラは右手を上に出してきた。すると。
「さあここに」
この言葉と共にその白ドードーが喫茶店に出て来たのだった。一瞬であった。
「では。今受け取らせて頂きました」
「って何で急にここに出せたの？」
「いきなりだったけれどよ」

「魔法です」
セーラは何でもないように皆に答えた。
「魔法を使ってここに呼びました」
「魔法で寄せたって」
「また何でもないように言うけれど」
やはりこうしたところでは連合の常識は全く通用しないのだった。
何はともあれセーラは白ドードーを受け取った。話はこれで終わりとなった。
「さて、一件落着？」
「そうね」
ルビーがアンに応えて頷いた。
「何とかね。話は終わったわね」
「終わってみれば呆気なかったけれど」
ルビーはここまでの流れを振り返って呟いた。
「随分と大騒ぎだったわね」
「そうね。ちょっとした話だって思ったのに」
少なくともはじまりは落書きでしかなかった。
「けれど何か話が進むにつれ」
「全く。えらいことになったわ」
これまでを振り返っての言葉だった。
「全く以ってね」
「特に鏡」
それも話に出す。
「あれがね。やっぱりねえ」
「魔界だからな」
これだけは流石に誰も予想していなかったことだっただけに今でも印象に残っているのである。残っているというよりは忘れられなかった。
「あの鏡も物凄かったし」
「北京原人の頭蓋骨とか」

話せば話す程思い出してきていた。
「もう何が何だか」
「無茶苦茶だったし」
「その無茶苦茶さもね。喉元過ぎれば」
セドリックがここでまた言ってきた。
「いい思い出になるものだけれどね」
「そうね。確かにこれで話は終わりだし」
それに応えてアンが言う。
「ほっとしてるっていうのはあるわね」
「確かに」
「それはね」
これには皆同意であった。

第百二十七話　どうするかはその八

「さて。それでだけれど」
「ええ」
「皆また随分食べてるわね」
アンはテーブルを見回してそのことに気付いたのだった。
「これまた。凄いわね」
「お腹空いてたし」
答えたのはルビーだった。
「だからね。頂いたわ」
「ええと、ルビー何食べたの？」
「まずはホットケーキでしょ」
最初はそれであった。
「それにフルーツパフェにチーズケーキ、バナナとアイスのクレープにチョコレートサンデーに」
「後は？」
「それとフルーツセット。堪能したわ」
「あと紅茶もよね」
「そうそう、ワッフルも食べたわ」
そこにもう一品であった。
「いやあ、終わったからほっとしちゃって」
「それでも凄いわね」
「そう言うアンだって」
アンジェレッタがアンを横目で見ながら言ってきた。
「相当食べてるじゃない」
「まあそれはね」
自分でも自覚するものがあるアンだった。彼女は特大のホットケーキにパフェを食べたのだ。どちらにそれぞれ優に三人前以上はある。

「やっぱり私もお腹空いてたし」
「だからなのね」
「けれど。満足したわ」
満ち足りた顔での言葉だった。
「おかげでね」
「それはいいことね。とにかく話は終わったしね」
「ええ」
やはり誰もがこのことに安心していたのだった。
「さてと。後はお勘定だけれど」
「あっ、待って」
だがここで声がした。
「ちょっと待ってよ」
「あれっ、ポルフィ」
今声をあげたのはポルフィであった。
「何かあったの？」
「悪いけれどまだ食べてるんだよ」
見ればその通りだった。彼は今アンが食べていたのと同じ特大パンケーキを食べていた。座蒲団の様な巨大なパンケーキにシロップをたっぷりかけて食べている。
「ちょっと待って、悪いけれど」
「ええと、その特大パンケーキ四枚？」
「六枚あったんだ」
実はそうなのだった。
「今二枚食べたところ」
「そうだったの」
なお普通は二枚である。
「人参のケーキデコレーションで食べて次はね」
「デコレーションって」
「それも食べてたの」
やはりポルフィの食欲は壮絶だった。ここでも他のメンバーの倍

以上は食べている。流石と言うべきだろうか。
「ケーキ一個って」
「あとクレープも五皿食べてたけれど」
「それで今それ！？」
アンは呆れながら彼に問うた。
「パンケーキ四枚も」
「ちょっと待って、本当に」
言いながらもう一枚食べ終えていた。
「すぐに食べ終えるからね」
「うわ、確かにそうみたいね」
「もう一枚食べたし」
言ってる側からなので皆絶句した。
「しかも二枚目ももう半分も」
「物凄い勢い」
「食べるのは早いんだ」
そしてこのことを自覚してもいた。
「実はね」
「それでも凄い勢いね」
「そうよ。無茶苦茶速いじゃない」
皆そのことに驚いていた。とにかくポルフィハ食べるのが早かった。
「まあとにかくあんたが食べたら」
「この話は終わりだな」
「うん、ほんの少しだけ待って」
彼はさらに食べていく。気付けばあと一枚だった。
「ちょっとね」
「ええ、わかってるわ」
アンがそれに応える。その間に彼はもう全部食べ終えていた。それと共に話は終わった。長い話がようやく幕を下ろしたのだった。

どうするかは　　完

2009・3・8

第百二十八話　面白ければいいその一

面白ければいい

ローリーはクラスの風紀委員である。しかし彼がまともな風紀委員だとはクラスはおろか学園の誰も信じてはいないし認識してもいなかった。

「あんないい加減な奴はいないぞ」

「っていうかミスキャスト？」

皆こう言うのであった。

「何で風紀委員になってたんだ？」

「二年Ｓ１組の連中は何考えてるんだ？」

「そういえば気付いたらなっていたんだよね」

当のローリーにしてもこんな調子である。

「僕の祖国と同じでさ」

「そういえばあんたってあれよね」

ジュリアが彼の言葉を聞いて言ってきた。

「ヒッタイト人よね」

「そうだよ。ヒッタイト生まれだよ」

ローリーはジュリアのその言葉に頷いた。彼はヒッタイト人なのだ。だがヒッタイトは一度滅んでいる。それも紀元前においてである。

「何で今いるんだろうね」

「それ言ったら色々な国の人がそうなるけれどね」

ジュリアもこの辺りはわかっていた。

「フェニキアとかカルタゴとかアッシリアとかシュメールとかね」

「そうだよね。連合には多いよね」

実際連合には古代民族の復興国家が多い。他にがバニロニアやペルシアもある。だがそういった国々が実際にその古代民族の末裔であるかというと根拠は甚だ怪しい。

「そうした国家もね」
「ヒッタイトって海の民に滅ぼされたじゃない」
「歴史においてはそうだね」
これは歴史の授業で習うことであるので言うまでもなかった。
「それからずっと歴史に姿を現わさなかった」
「で、何で今連合にいるのかしら」
ジュリアは首を捻りながら述べた。
「そこんところは考えたらいけないってことかしら」
「血が一滴でも入っていたらそうじゃないの？」
ローリーは適当なことを言ってきた。
「一滴でもね。赤血球の端っこ分でもあれば」
「それって誰にだって言えるレベルじゃないの？」
ジュリアがその話を聞いてそんな考えにもなった。
「結局のところ」
「そうかもね。けれどそれならそれでいいじゃない」
彼はここでもいい加減なことを言った。
「言ったもの勝ちだから。こうした話って」
「そんなこと言うからいい加減って言われるんじゃないの？」
「それならそれでいいよ」
やはり彼はこう言うのだった。
「それでね。別にそう言ったからって誰も困らないじゃない」
「誰かが困る話ではないわ」
実はそれはジュリアもわかっていることだった。
「私もイロコイ人だけれど」
「ネイティブアメリカンの部族の一つだったよね」
「そうよ」
彼女のルーツはそれである。しかし今ではかなり混血が進んでいる。それは白人もあれば黒人もある。もう色が黒く金髪のイロコイ人もいるのだ。
「もっともかなり混血してるけれどね」

自分でもそれは自覚しているのだった。
「それもね」
「連合にいたら皆同じだよ」
ローリーの今度の言葉はそれまでより幾分かはまともなものではあった。
「同じだよ。皆ね」
「ルーツはいい加減ってこと？」
「そうじゃない。血筋なんて言ってもね」
彼はまた言った。
「言った者勝ちじゃない。ＤＮＡで調べてもそれでも最低一滴は入るものじゃない」
「それはね」
例えばモンゴル人は世界のかなりの部分を征服したからそれだけ多くの遺伝子を広めている。それを考えればナンの同胞は多くなる。
「だから何とでも言えるんだよね」
「ヒッタイト人もそうなのね」
「そういうこと。だから僕はヒッタイト人なんだ」
こう言うのだった。
「それでいいよね」
「私は別にいいけれどね」
ジュリアは彼の言葉に特に反論することはなかった。何故ならジュリア自身の外見を自覚しているからだ。

第百二十八話　面白ければいいその二

「何せこの髪に目に肌だから」
「プラチナブロンドにグリーンアイに褐色のお肌ね」
「自慢の三つよ」
ここでは誇らしげに言ってみせた。
「実はね」
「それってイロコイ人の特徴じゃないよね」
「全然」
その誇りがイロコイと関係あるかというと自分で全否定するのだった。首を横に振ったうえではっきり述べるのだった。自覚しているのだった。
「イロコイ人は褐色っていうより赤茶色の肌よ」
「アジア系、それもネイティブのよね」
「そうよ」
まずはその肌について答える。
「褐色ってどっちかっていうと黒人よね」
「うん」
そういうことだった。
「そうだよね。もっとも連合って混血多いしね」
「褐色の肌も多いじゃない」
「普通なのは普通だよ」
ローリーもそれはよくわかっていた。
「普通だけれどね。けれどネイティブアメリカンのじゃないからね」
「肌はまあそれでも無理に言えるけれど」
「無理に？」
「赤茶色とか黄色に見えなくない？」
実際にかなり強引に言ってきた。
「そういうふうに」

「あまり見えないけれど」
「そういうふうにしといて。とにかくね」
話を強引に先に進めてきた。
「後の二つだけれど」
「髪の毛と目の色だよね」
「これは言い繕わないから」
まだは打破言い繕ってもであった。わかって言ってはいるのだが。
「緑の目とプラチナブロンドの髪はね」
「それは完全にコーカロイド系だね」
もう言うまでもなかった。
「白人の血だよね」
「お母さんがそうなのよ」
これは母親譲りであった。
「どうかしら」
「かなり目立つよ。実際にね」
「そうよね。この二つはお肌よりも自慢だったりするのよ」
その髪の毛を触っての言葉である。
「それでこの褐色の肌は」
何だかんだでその褐色の肌も自慢げに見ていた。
「お父さんなのよね」
「お父さんは黒人なんだ」
「黒人の血が濃いわね」
少し考える目になってから述べた。
「アジア系の顔してるけれど」
「アジア系で肌は黒いの」
「そういうこと」
こうした混血も連合では全く以て普通である。とにかく様々な人種と民族が混血しているのが連合である。ジュリアもその中に入っているのだ。
「目の色は青で」

「それはコーカロイドだね」
「ちなみにお母さんのお肌は黄色なの」
「それアジア系だね」
「そうでしょ。かなりのものでしょ」
とにかく滅茶苦茶に混血しているのがわかることはわかる話ではあった。
「で、私はそれなのよ」
「それで何処にイロコイの血があるの？」
「お父さんもお母さんもイロコイ人よ」
だがこう言うのであった。
「国籍はね」
「国籍は？」
「お母さんがイロコイ人とマケドニア人のハーフで」
「うん」
「それでお父さんもイロコイ人とタンザニア人のハーフなのよ」
「じゃあ一応イロコイの血が半分入ってるの」
「そういうこと」
事情はそうなのであった。

第百二十八話　面白ければいいその三

「これでわかったかしら」
「わかることはわかったけれど」
一応彼女がイロコイの血は引いていることはわかった。
「けれど。ルーツはやっぱり」
「イロコイだけじゃないわね」
このことも隠さなかった。
「はっきり言って」
「マケドニアとタンザニアだからね」
「それで父方のお爺ちゃんがパラオ人で」母方のひいお婆ちゃんがブラジル人なのよ」
「何か余計にわからなくなってきたけれど？」
「それでもイロコイ人よ」
こう言うのだった。
「れっきとした。ルーツだって」
「無茶苦茶になってない？それでも」
「いいじゃない。あんただって今さっき言ったじゃない」
ローリーに対して言葉をそっくりそのまま返してきた。
「血が一滴でも入っていればそうだって」
「それはそうだけれどね」
「ヒッタイト人がいるんだからイロコイ人もいるわよ」
そういう理屈であった。
「モヒカン族の人だって今もいるじゃない」
「まあね」
モヒカン族はこの時代も存在している。実は開拓時代を生き抜き今もいるのだ。なおあの独特の髪型もそのまま残されている。
「あんただってヒッタイト人だし」
「世界帝国を築いたね」

ここで少し胸を張るローリーだった。
「最初に鉄器を使って」
「鉄ねえ」
「凄いだろ」
「そういえばそうなるのかしら」
ジュリアには今一つ実感のない話ではあった。この時代鉄なぞ普通にあるものだからだ。これはもう二千五百年程度そうなっていることである。
「鉄も」
「そうだよ。何でも最初にした人は凄いんだよ」
ローリーはこう力説する。
「何でもね」
「何でもなの？」
「最初にナマコ食べた人はどう思う？」
「正直凄いと思うわ」
ジュリアも自然にこの言葉が出た。
「それはね」
「だったらわかるよね」
あらためて彼女に告げた。
「こう言ったら」
「まあね。そういうことね」
「そういうこと。だから」
「成程。ヒッタイト人は凄かったのね」
「御先祖様には誇りを持ってるんだ」
また胸を張っている。
「実際にね」
「それはいいけれど」
確かにそれはいいというのだった。
「けれどあんたは」
「僕は？」

「いい加減にも程があるでしょ」
ジュリアはじろりと彼を見ながら述べたのだった。
「本当に。どうなのよ」
「自覚はしてるよ」
それは彼も同じであった。
「はっきり言うけれどね」
「そう。自覚してるの」
「僕のことは僕が一番わかってるから」
これまた実にはっきりとした言葉であった。
「いい加減だよ。僕は」
「しかも風紀委員よね」
「うん」
このことも自覚していた。しっかりとした調子で頷く。

第百二十八話　面白ければいいその四

「そうだけれどそれがどうかしたの？」
「どうかしたのじゃなくてね」
ジュリアの顔が憮然としたものになっていた。
「どうなのよ。それで」
「それでって？」
「変える気ないの？」
こう問うのであった。
「あんた自身を。そこんところはどうなのよ」
「全然」
これが彼の返答だった。
「特にないけれど」
「ないの？」
「ないよ」
これまたはっきりとした言葉だった。
「これで自分が気に入ってるし」
「いい加減な自分もってことね」
「その通り」
今度もあっけらかんとした言葉であった。
「いい加減でいいじゃない。誰かを困らせたことはないし」
「まあそれはね」
それはジュリアもわかっていた。
「いいけれど」
「じゃあそれでいいじゃない」
「よくないわよ」
ジュリアもはっきりと述べる。
「全然ね。いいわけないじゃない」
「他の人は困ってないからいいんじゃないの？」

「あんた自身にとってよくないでしょ」
ジュリアが言いたいのはこういうことであった。
「しっかりしないと。駄目じゃない」
「堅苦しいのは嫌いなんだ」
彼にはこういう考えもあるのだった。
「実際にさ。真面目過ぎるのってどうなの？」
「それは私も」
彼女もそういうのはあまり好きではなかったりする。堅苦しい人間では少なくともない。
「好きじゃないけれど」
「じゃあいいじゃない、それで」
「あんたは酷過ぎるの」
ジュリアも少しムキになっていた。
「何をしてもいい加減で。私を一としたら」
「うん」
「あんたは十はいってるじゃない」
「そこまでいってる？」
「いってるわ」
彼女も引かない。
「もっといってるかも」
「ううん、自分ではそうは思わないけれど」
「そこは自覚しなさい。それでよ」
「今度は何なの？」
「自己変革しなさい」
強い言葉であった。
「今から。いいわね」
「自己変革って！？」
「幾ら何でも言葉は知ってるわよね」
だがジュリアのその目はかなり懐疑的なものを見る目であった。
「それはちゃんと」

「それはね。勿論じゃない」
しかしローリーの返事は今回もかなり能天気な香りのするものだった。
「それがどうかしたの？」
「どうかしたのじゃなくて」
「わかってるのならやりなさいよ」
「その自己変革を？」
「そういうこと」
ジュリアの言葉はあくまでも厳しいものだった。
「それ。わかってるの？」
「わかってるよ。まあとにかくだよ」
「ええ」
「僕別にそういうのやる気ないし」
結局彼の言葉はこうであった。

第百二十八話　面白ければいいその五

「自己変革って。何でそんなことしないといけないの？」
「あんた、人の話聞いてた？」
流石に今のローリーの言葉にはむっとしたおのを感じていたのだった。
「ちゃんと。聞いてたの？」
「当たり前じゃない。聞いてるよ」
ローリーは平然とこう返すのだった。
「だからこうして話すんじゃない」
「何処がよ。わかってるようにはとても見えないわよ」
「それは主観の相違ってことでね」
あくまでこう言う彼であった。
「そういうことでさ。いいよね」
「よくないわよ。何よ、変えるつもりはないって」
「僕は今の僕が気に入ってるんだ」
だからだというのである。
「だからさ。別にね」
「変える気はないの」
「そういうこと。だから他の人には迷惑かけてないよね」
ローリーはこのこともまた言ってきた。どうやらこのことだけはかなり気を使っているようである。ジュリアにもそれは感じ取られた。
「だったら」
「あのね。あんたね」
「ああ、今日さ」
まだ言いたいジュリアに対して今度は彼から声をかけた。
「風紀部の会議もないし」
「それがどうかしたの？」

「遊びに行かない？それか買い物にでも」
「買い物って？」
「携帯のストラップでもさ」
こうジュリアに提案してきた。
「買いに行かない？どう？」
「そうね」
根はとても明るく流行やファッションには極めて関心の高いジュリアだ。実は携帯のストラップも集めているのだ。だからこの話にも自然と目を向けてきていた。
「それだったら」
「行くんだね」
「ええ、行かせてもらうわ」
さっきまでのお説教は何処に行ったのかもう明るい顔になっているジュリアだった。
「丁度買いたいのがあったのよ」
「そうだったんだ」
「だからね。一緒にね」
顔はさらに明るくなってきている。にこにことさえしている。
「行きましょう。今度のストラップはね」
「どんなのが欲しいの？」
「派手なね。薔薇のストラップがいいわ」
笑顔で語るジュリアだった。
「それ探してたのよ」
「じゃあそれを買うんだね」
「そのつもり。あればいいけれど」
「そうだね、それじゃあね」
そんな話に変わっていた。ローリーの自己変革の話は完全に消えていた。そしてその日の放課後。二人はアクセサリーショップで話をしていた。
「あったわ」

「よかったね」
ローリーはお目当ての薔薇のストラップを見て喜ぶジュリアに対して声をかけていた。アクセサリーショップの中はアクセサリーというよりもアンティークなものでありその内装は古風な、十九世紀の欧州のそれを思わせるものがある。何処かイギリス調である。
「あってね」
「ええ。それにして」
「何？」
「いつも思うけれどこのお店の内装ってあれよね」
ジュリアもそのお店の内装を見回して言うのだった。
「アメリカよね、これって」
「そうだね。アメリカだね」
実は連合においてはこうしたイギリス調のものはアメリカにされたりケルトにされたりする。彼等は十八世紀アメリカ東部のものだと思っているのだ。
「これって」
「レトロな趣味ね」
「ここのお店のマスターの趣味らしいよ」
こうジュリアに説明するのだった。

第百二十八話　面白ければいいその六

「どうやらね」
「そうなの。マスターのなの」
「うん。それ考えたら趣味のいい人だよね」
「ええ。いつも見てるけれどいいものね」
ジュリアも言う。なおこのマスターにしろイギリス調とは思っていない。マスターはマスターでケルトのものだと思っていたりするのだ。
「これもね」
「アメリカって国はね」
ローリーはふとそのアメリカについても言ってきた。
「正直かなり厄介な国だけれどね」
「まあね」
このことについて同意なのはジュリアだけではなかった。実際のところアメリカという国家の性格は地球にあった頃と殆ど変わっていない。6
「あと中国とかロシアもね」
「スターリングや蝉玉達は違うけれどね」
この二人は確かにアメリカ人や中国人であるがそれでも彼等の祖国とはまた別である。当然ながらその性格も全く違うものである。
「ああいう国だけれどね」
「ええ」
「それでも。いいものは一杯持ってるよね」
「そうね。それはね」
今度は素直に頷くことができたローリーだった。
「こうしたこととかね」
「いいものは認めないと」
ローリーは言うのだった。

「駄目だよ。何でもね」
「それはその通りよ。それでローリー」
「何？」
「話の続きだけれど」
目を少ししばたかせたうえで彼に話すジュリアだった。
「あんたのそうしたいいものは素直に認められるところはわかったけれど」
「うん」
「けれど。それでもよ」
今度は眉を顰めさせて言うのだった。そこに彼女の感情がはっきりと出ていた。
「そのいい加減なことと関係はないじゃない」
「あるよ」
ところが彼は彼でこう返すのだった。
「それはね。ちゃんとあるよ」
「あるの？」
「あるよ。そこにこそあるんだよ」
眉をさらに顰めさせるジュリアに対してまた話すのだった。
「そこにこそね」
「どういうことかさっぱりわからないんだけれど？」
「だから。いいものは認めないと」
アメリカの車の模型を手に取りながらジュリアに話してきた。その模型は赤いブリキ細工のもので二十世紀の古典的な形の大型の乗用車のものだった。
「ちゃんとね」
「認めるって。いい加減にやってるだけじゃないの？」
「車だって一つじゃないじゃない」
今度はこう言うローリーだった。
「この車だってね」
「！？」

「だから。いいものはそのままにしておかないと」
また言うのであった。
「何でもね。だからそういうものにはね」
「何にも言わないの？」
「雑草って草はないよ」
二十世紀に賢君の誉れ高かった昭和帝の御言葉である。昭和帝はこの時代においては理想の君主の一つの形とさえされているのである。
「そしてガラクタっていうおもちゃやアクセサリーもないよ」
「つまりそれぞれにいいところがあるってことね」
「うん」
彼が言いたいことはそういうことだった。
「そういうこと。わかってくれた？」
「まあね」
納得しきれていない顔だが一応頷きはするジュリアだった。彼女は十字架をモチーフにしたゴールドのネックレスを見ている。

第百二十八話　面白ければいいその七

「そういうふうに言ってもらえたらね」
「あの白服の軍団と違うし」
その学校の風紀部員達である。八条学園には風紀部も幾つもあるが彼等はその中で最も有名でありかつ異様な集団と言われているのである。
「僕はね」
「っていうかあんたあの軍団と対立してなかった？」
「対立はしてないよ」
それは否定するのだった。
「それは別にね」
「それはないのね」
「向こうはどう思ってるかわからないよ」
一応こうは言う。
「けれど僕は」
「意識してないの」
「僕は僕、あっちはあっち」
今度の言葉はこうであった。
「だからね。別にね」
「どうだっていいのね」
「少なくとも僕はそうだよ」
また同じ様な言葉であった。
「別にね。どうでもいいから」
「そうなの。けれどあんた風紀部員の仕事は」
「する必要ないし」
「ないって。それじゃあ今まで話してること何の意味もないじゃない」
またしても呆れるジュリアだった。

「結局いい加減じゃない」
「いい加減じゃなくて言う必要ないから」
彼の考えはそれで纏まっているのだった。そこから変わることはない。
「このクラスって全然ね」
「そう？」
これに関してはジュリアは甚だ疑問の顔を浮かべるのだった。
「全然そうは思えないけれど。っていうか私の格好かなりあれじゃないの？」
「校則そこまで厳しくないし」
あくまで言うローリーだった。
「うちの学校って。それこそ学校でストリーキングでもしないと」
「それもう頭おかしいから」
即座にローリーに対して突っ込みを入れたのだった。
「まんま変態じゃない」
「だからそういうの以外はね」
「いいっていうのね」
「そういうこと。学校だからそんなに厳しくしなくてもいいじゃない」
今度はこう話すのだった。
「軍隊じゃないんだし」
「軍隊ねえ」
ジュリアは軍隊というとある組織のことをすぐに思い出したのだった。その組織は。
「そういえば連合軍だけれど」
「どうしたの？」
「規律は滅茶苦茶厳しいのよね」
「それで有名だよね」
「何か軍規軍律はとにかく厳しくて」
それが連合軍の大きな特色である。国防省長官でありこの学園の

理事長でもある八条義統一が軍規軍律を極めて厳しいものに定めたせいである。
「それで有名だけれどね」
「あんな厳しい組織連合には他にないと思うよ」
「確かにね」
それを誇りとしているのが連合軍である。なおこの軍規軍律は日本軍をモデルにしていると言われている。八条がかつて在籍していたその連合軍である。
「何か訓練やそういったものは厳しくないみたいだけれど」
「そのせいで実際の戦闘は弱いみたいだね」
「っていうか軍規軍律だけじゃない」
ジュリアはここでは辛口の評価だった。
「あそこが凄いのって」
「装備も凄いらしいけれどね」
「けれど訓練は大したことないのね」
「悪いことをしなければいいんだって」
八条の連合軍の特色の一つである。こういった考え方もだ。
「それさえしなければね」
「それだけなの」
「そう、それだけなんだ」
この評価は連合だけでなくエウロパやサハラ各国、同盟勢力であるマウリアにおいても同じである。彼等はあくまで軍規軍律が厳しいだけなのだ。
「悪いことをしない。それだけなんだって」
「まあ兵隊さんが悪いことしたらね」
「お話にならないからね」
そういうことであった。規律が悪く統制も取れていないような軍は軍ではない、八条は強くそう考えてその軍規軍律を厳格なものにしたのである。

第百二十八話　面白ければいいその八

「けれどさ。ここ軍隊じゃないから」
「学校だからいいのね」
「うん。そうじゃないの？」
あらためてジュリアに対して話すのだった。
「気楽にいこうよ。気楽にね」
「あんたはそれでも気楽過ぎるんじゃないの？」
「いいのいいの」
今度の返事はいい加減なものであった。
「そんなのはね。別にね」
「何か結局のところあんたにはこういうの言っても無駄みたいね」
「わかってるじゃない」
「もう諦めたわ」
遂にこの言葉を出すジュリアであった。
「結局のところね。それにしてもよ」
「何？」
「この店だけれど」
ジュリアはもうローリーにはあれこれ言わずに再び店の周りを見回したのだった。
「結構古いお店なのかしら」
「古いって？」
「天井とか見てよ」
ジュリアは今度は天井を見上げていた。見れば天井は木造で支えに使われている黒い木は埃もあり中々古いものを感じさせるものがあった。
「ほら、あそことか」
「ああ、もう何十年も経ってる感じがあるね」
「そうよね。思ったより古いみたいね」

「そうだね」
ローリーもジュリアの言葉に頷く。
「アンティークっぽくていいよね」
「ええ」
二人はここではそういう意味でこの店の古さを感じていたのであった。
「雰囲気が出てね」
「やっぱりこういうお店って年季を経ないと駄目なのかしら」
ジュリアは首を捻ってから考えながらまたお店の中を見回すのだった。今度は天井ではなく様々なアクセサリーを見回している。
「品物も違って見えるし」
「気に入ったんだ、このお店」
「ええ、それはね」
それは彼女も同じであった。
「気に入ったわ、凄くね」
「それは何よりだよ。それじゃあさ」
「どうしたの？」
「これ買う？」
こう言ってあるものを差し出したのだった。それは。
「このトーテムポールだけれど」
「何か私の国にあるのと同じのだけれど」
見ればそれはネイティブアメリカンのそのトーテムポールであった。こうしたものも置いている店なのである。
「それって」
「ああ、そういえばジュリアの国ってね」
「イロコイだから」
そのネイティブアメリカンの子孫の国であるのだ。
「こういうのはね。親しみがあるのよ」
「そうだったよね。ネイティブだからね」
「何か。複雑な気分よ」

こう言って悲しいような、それでいて嬉しいような。そうした複雑な笑みを浮かべての言葉だった。そのうえでまたローリーに対して言ってきた。

「アメリカっていう国はね」

「そうだったね。ネイティブをね」

「ええ。追い出して作った国だから」

このことは歴史にある通りであり書かれている。ただし連合の中においてはそれぞれの国のことに配慮してこうした話はかなりオブラートに包まれて資料とされている。ただしエウロパが帝国主義時代にしてきたことはかなり誇張して事実を書いている。

「その国にこうしたものがあるとね。何かね」

「けれど今じゃアメリカにもネイティブがルーツの人が一杯いるじゃない」

これもまた事実であった。アメリカもまたそうした意味では変質している部分も多いのだ。確かに国家としての性格は全く変わってはいないが。

「今じゃね」

「私達の国も持てたしね」

「そうそう。だからそんなに昔のことを思う必要はないんじゃないの？」

「そうね」

ローリーの今の言葉に頷くのだった。

「そういうものね。それじゃあ」

「買うの？そのトーテムポール」

「ええ、そうするわ」

にこりと笑ってローリーに答えた。

第百二十八話　面白ければいいその九

「気に入ったしね」
「そうだね。そうしたらいいよ」
ローリーもジュリアのその言葉をよしとするのだった。
「そうしたらね。じゃあ僕は」
「何を買うの？」
「これにするよ」
こう言ってトーテムポールのアクセサリーの近くにあったスプーンを取り出してきたのだった。
「これをね」
「スプーン？」
「ケルトの神様でほら、いるじゃない」
その木製のスプーンのアクセサリーをジュリアに見せながら話す。
「大食漢で女好きの神様で」
「ああ、ダーザね」
その神が誰なのかジュリアにもわかった。
「むさ苦しいあの神様ね」
「そうそう、あの神様」
ダーザは連合では人気のある神の一人である。髭だらけの赤ら顔をした巨漢であり幾らでも出て来るオートミールの壺や巨大な棍棒といったものを持っている。スプーンは彼が愛用している魔法の食器なのである。それをアクセサリーにしているというのである。
「あの神様のスプーンをね」
「アクセサリーにしてね」
「そういうこと。こうして」
実際に自分の胸に飾ってみせる。それはネックレスであったのだ。
「どうかな」
「いいんじゃないの？それで」

その木製のネックレスを見てコメントするジュリアだった。
「似合ってるわよ」
「そう？じゃあこれでね」
ジュリアにいいと言われてこれで決めることにしたのだった。
「買うよ。僕はこれね」
「いいと思うわ。じゃあ買い物が終わったらね」
「どうするの？」
「カラオケ行きたいけれど」
次はそれであった。やはりジュリアは遊び好きであった。この辺りは楽しむのである。
「行く？何なら一緒に」
「あっ、いいね」
ローリーもカラオケと聞いて笑顔になるのだった。
「それじゃあね。カラオケだよね」
「ええ。行きましょう」
今度ははっきりと誘ってきた。
「何なら皆も呼んでね」
「そうだね。誰か空いてるのは」
二人共早速携帯を取り出してそのうえでメールを送っていくのだった。
「いるかな。誰かな」
「あっ、彰子いたわ」
まずはジュリアが声をあげた。
「これでまずは一人ね」
「こっちは管だよ」
ローリーにも返信が届いた。
「これで四人だね。こんなものかな」
「彰子に管ね」
この二人で微妙な顔になるジュリアだった。
「どうかしら」

「何かあるの？」
「彰子はおっとりだし」
まずは彰子について述べた。
「それに管って」
「何考えてるかわからないってこと？」
「そういうこと。あまり話したことないのよね」
首を捻って言うのだった。
「カラオケにっていうのもはじめてだし」
「僕もそうだよ」
これはローリーも同じであった。
「管ってね。何考えてるかわからないところあるし」
「かなり謎の人よね」
「そうだよね。かなりね」
「彰子もそうだし」
「さて、どうなるかな」
ローリーはこれからのことを少し考えて述べた。

第百二十八話　面白ければいいその十

「このカラオケ。楽しいものになればいいけれど」
「なるんじゃないの？」
ジュリアはとりあえず楽観的な言葉を出した。
「彰子ってあれで結構明るいし」
「明るいの？」
これはローリーの知らないことであった。今はじめて話を聞いたといった顔を見せていた。
「あの娘って」
「明るいわよ。普段何も言わないけれどね」
「言わないっていうか天然？」
ローリーは首を捻ってから彰子について述べた。
「そんな感じじゃないの？」
「天然は失礼じゃないの？」
「それはそうだけれど」
それでもそうとしか思えないのだった。実際彰子はクラスでは天然として知られている。おっとりとした性格で世間知らずというわけだ。
「それに管は」
「冗談抜きで何考えてるかわからないわね」
ジュリアもこれは否定できなかった。
「普段何してるか一切不明だし」
「何かいつも無表情でそこに立ってるって感じ？」
ローリーは家持をそうした人間と見ていたのだった。
「ぼーーーっとはしていないけれどね」
「気付いたら仕事してるしね」
「そうそう」
やることはやっているのである。

「掃除だって何でもね」
「けれど本当に何してるかわからないから」
ローリーはここでまた首を捻った。
「何か。こん顔触れでどうなるのかな」
「ええと。彰子だけれど」
ジュリアはまた自分の携帯を見ていた。そうしてメールを確認しているのだった。そのうえでまたローリーに対して言うのだった。
「随分乗り気よ」
「乗り気なの」
「管が来るって書いたら絶対行きたいって」
「ふうん。そうなんだ」
「ええ、そうよ」
二人はここでは気付いていなかった。何故彰子のメールが元気なものになったのかを。
「何か急にテンションあがったって感じ」
「やっぱりメンバーが多い方がいいってころかな」
「そうじゃないの？やっぱり」
「それで管だけれど」
ローリーもまた自分の携帯を見ていた。彼は家持のメールを見ていたのだった。
「こっちは相変わらずだね」
「相変わらずなの」
「一言だよ。行くってね」
彼のメールはそれだけなのであった。
「それだけ。本当にそれだけ」
「何か凄いメールね」
「顔文字とか携帯言葉とか全然なしだよ」
実際にジュリアにそのメールを見せるが本当にそれだけだった。ただ行く、とだけ書かれている。他には何も書かれてはいない。
「ある意味凄いよね」

「本当に変わった顔触れになってるけれど」
これは自分達も入れての言葉だ。ジュリアも自分が変わり者だと認識している。当然ローリーもだ。しかしそれでも別にどうとは思っていない二人であった。
「まあいいわ。カラオケ行きましょう」
「うん、そうしよう」
それでもカラオケは行くのだった。こうして四人でのカラオケがはじまった。

面白ければいい　　完

２００９・３・２３

第百二十九話　カラオケにてその一

カラオケにて

彰子、家持とカラオケに行くことになったローリーとジュリア。とりあえず二人と駅前の本屋で待ち合わせすることになったのであった。

二人はアクセサリーショップからそのまま本屋に向かっている。だがここでジュリアはローリーに対して問うのだった。

「待ち合わせはいいけれど」

「うん」

「何で本屋で待ち合わせなの？」

このことをローリーに対して問うのだった。今二人は本屋の入り口の雑誌コーナーの前にいる。そこで二人並んで話をしているのだった。

「ここで。噴水のところとかじゃなくて」

「待ってると結構待ち遠しかったりするじゃない」

ローリーはジュリアの問いにまずはこう答えたのだった。

「だからさ。時間潰しにもいいし」

「だから本屋なの」

「うん。どうかな」

あらためてジュリアに対して問うのだった。

「本屋で待つって。悪くないと思うけれど」

「そうね。言われてみればね」

ジュリアはここで雑誌をちらりと見て答えた。

「待つにはいいわよね。確かに時間潰せるし」

「だからなんだ。さて、と」

ここまで話したうえであらためて言葉を出すローリーだった。

「もうそろそろ来るかな」

「さあ」

ジュリアは今のローリーの言葉には首を捻る。前の道路と通りは車や人の行き交いで満ちているがそこに二人の姿は見えない。
「来るとは思うけれど」
「もうすぐ時間だけれど」
ローリーは今度は自分の左手の腕時計を見ていた。
「時間通り来るかな」
「二人共日本人だから来るんじゃないの？」
「日本人だから？」
「日本人ってきっちりしてるから」
これはジュリアの主観であった。
「だから大丈夫だと思うわ」
「日本人だからっていってもね」
だがローリーは今のジュリアの言葉にはいささか懐疑的なようであった。それを声にも出しているし顔にも少しであるが出て来ていた。
「それでも確実とは言えないと思うよ」
「日本人でもいい加減な人はいるってこと？」
「そうだよ。その辺りは人それぞれだよ」
彼はこう言うのだった。
「本当にそれぞれじゃない」
「言われてみればそうかしら」
ジュリアもローリーの言葉を聞いてからこうも考えだしたのだった。
「やっぱり」
「そうだよ。まあそれでもね」
ローリーはここで言葉を少し変えてきた。
「あの二人は遅れることはないだろうね」
「それは日本人だからじゃないのね」
「あの二人だからね」
だからだというのだった。

「あの二人真面目じゃない」
「真面目・・・・・まあそうね」
ジュリアはまた考える顔になったが一応は言葉を返したのだった。
「二人共ね。どうも何考えてるかよくわからないところがあるけれど」
「だからわかりにくくはあるよね」
「そうなのよね。困ったことに」
腕を組み思案する顔になっているジュリアだった。
「まあそれでもよ」
「うん」
「二人ならきっとね」
「そうだよ。時間通り来てくれるんじゃないかな」
ローリーも何となくそう思えてきたのだった。
「さて、そろそろ本当に時間だけれど」
「あっ、来たわ」
ここでジュリアが自分の先の方を見て声をあげた。
「彰子よ」
「管も」
ローリーは自分の視線の先に家持を見ていた。

第百二十九話　カラオケにてその二

「来てるよ。これで揃ったね」
「ええ。心配することなかったわね」
来たからこその言葉だった。
「これでね。安心できるわ」
「うん。ねえ管」
ローリーは早速家持に声をかけた。もう彼は声が聞こえる範囲にまで来ていた。歩いているだけなのに何故か走っているのと同じだけの速さであった。
「こっちこっち」
「待った？」
家持はもう二人のすぐ側まで来ていた。
「遅れて御免」
「ううん、丁度だよ」
「そうだったの。よかったわ」
ローリーの言葉を聞いて彰子が微笑む。彼女も何時の間にか二人のすぐ側まで来ていた。彼女にしろその速さは思った以上であった。
「間に合ったのね」
「それじゃあ」
ジュリアは内心二人の日本人のその動きの速さに驚きながらもそれを隠して話をするのだった。
「行く？カラオケに」
「うん」
「それじゃあ」
彰子は微笑んで、管は無表情で彼女の言葉に頷いた。
「行こう。今からね」
「そこにね」
こうして四人はカラオケに向かった。そうして入ったカラオケボ

ックスだったが部屋に丁度ギターがあった。家持はそのギターを見てふと呟いた。
「ギターだね」
「あっ！？うん、そうだね」
「ギターね」
ローリーとジュリアは今の家持の言葉が急だったので少し驚いた。そしてそれを隠せなかった。
「けれどそれが何か？」
「若しかして使うとか？」
「うん」
二人の言葉にこくりと頷いてきた。
「使ってもいいかな」
「その為のギターだしいいと思うよ」
「けれど管」
二人は戸惑いながら家持に対して話す。
「あんたギター使えるの？」
「使えるよ」
感情の見られない声でジュリアの問いに応えてきた。
「一応だけれど」
「そうだったの」
ジュリアがはじめて知る事実だった。衝撃と言えば衝撃である。
「あんたがギターをね」
「意外？」
「あっ、いえその」
これが相手がフックやカムイといった面々ならすぐに意外と答えるところだった。しかし相手がよりによってクラスで最も謎に満ちた管だったのでこれははばかれた。だからいつもよりもずっと静かな態度で言うのだった。
「そうじゃないと思うけれど」
「いいんだ」

「そうじゃないかしら」
やはり言葉にいつもの感じはなかった。
「誰にだってねえ」
「うん、そうだよ」
ローリーの言葉もジュリアの今と同じだった。
「あれだよね。何か似合うものっていうかね」
「管がギターって」
当の家持には聞こえないようにして話す二人だった。
「合わないわよね」
「今まで考えもしなかったよ」
「それでもまあ」
だがそれでもジュリアはここで言葉を変えてきた。
「ギター弾けるっていうんならね」
「そうだね。御願いしよう」
それで話はまとまってきた。
「とりあえずね」
「そうする？それじゃあ」
「うん。じゃあ」
二人の話を終えてそのうえで家持に顔を向ける。そうして言うのだった。

第百二十九話　カラオケにてその三

「じゃあ御願いね」
「ギターね」
「わかったよ。それじゃあ」
席に着いて早速ギターを抱くようにして持つ家持だった。試しか早速演奏をはじめてきた。曲はラブミー＝テンダーだった。プレスリーの名曲である。
弾いてみるとこれが。ローリーもジュリアも呆然とするものだった。しかもその呆然とした理由がいい意味でのことであった。これは二人にとってさらに驚きだった。
「上手いわよね」
「うん」
呆けたような顔で互いに顔を見合わせた。
「っていうか普通にね」
「余計に意外」
ジュリアはその目を点にさせていた。
「こんなに上手いなんて」
「マチアに匹敵するかな」
「するわね」
クラスはおろか学園でも屈指のギターの弾き手である彼と比べてもだった。
「このギターは」
「これは凄い」
「こんな感じでどうかな」
とりあえず曲を中断して二人に問うてきた家持だった。何時の間にかその横には彰子が座っている。二人はこれにはまだ気付いていない。
「ギター。どう？」

「合格、合格っていうか」
「上手過ぎるわよ」
二人はその呆然としたものを隠さないまま彼に話した。
「そこまでいいなんて」
「いけるわよ」
「そう。いけるんだ」
家持は表情も声の調子も変えないまま二人の言葉に応えた。
「それはよかった」
「嬉しいのかな？」
「さあ」
いつもの様に無表情で何を考えているのかわからない家持の返事には二人は困ってしまった。もっともそれはいつものことであるのだが。
「とりあえずそうみたいだけれど」
「わからないわよね」
「うん、これはちょっとね」
「私も」
二人も彼が何を考えているかは全くわからない。何しろいつも無口で無表情で気付けばそこに立っている人間だ。そうした人間が何者かをわかるというのは尋常なものではない。
だがそれでもだった。ギターが上手いことはわかった。二人はそれを話してこの場を進めることにしたのだった。
「まあさ。とにかくさ」
「ギターはジミーが持ってて」
「うん」
ジミーも小さくこくりと二人の言葉に頷いた。
「わかったよ。それじゃあ」
「歌も歌ってね」
「期待しているわ」
「プレスリー。いいかな」

ラブミー＝テンダーに続いてまたプレスリーだった。
「監獄ロック。いいかな」
「監獄ロックって」
「これはまた」
彼等にとってはまたまた驚く話だった。監獄ロックもまたプレスリーの名曲である。しかしロックと名がつくだけあって激しい曲である。古典的名曲であるがそれでも家持のイメージに合っているかというと否だ。やはりこれも普段の彼からは想像できない話であった。
「歌えるの？本当に」
「監獄ロック」
「うん」
また無表情な顔と声で二人の問いに答えるのだった。
「歌えるよ」
「それならいいけれど」
「それじゃあ」
「家持君踊ったりするの？」
唖然としたままの二人にかわって彰子が何気なくといった感じで彼に尋ねてきた。ここでも二人は意識していないし特に気付いていないが彼女は彼の隣にいる。
「監獄ロックのダンス」
「それはちょっと」
この問いにはこう返す家持だった。

第百二十九話　カラオケにてその四

「ダンスはしないんだ」
「そうなの」
「まあそうだろうね」
「やっぱりね」
二人は今の彼の言葉を聞いてとりあえずは安心した。
「流石にあの踊りはね」
「想像できないわ」
「じゃあいいかな」
気付けばもうその監獄ロックを予約していた。動きは思ったよりずっと速い。
「えっ、もう予約！？」
「何時の間に」
「いいって言ったから」
その動きの速さに驚く二人への言葉だった。
「だからだけれど」
「まあいいって言ったのは確かだけれど」
「それでも」
驚かずにはいられない二人であった。しかし何はともあれ曲ははじまるのだった。その監獄ロックである。ラブミー＝テンダーとは比べ物にならない速いテンポの曲だ・
その曲を歌いギターで奏でる。これもまた。
「上手いね」
「そうね」
二人はまた彼を褒めることになった。
「音程も合ってるし」
「プレスリーにもなってるわ」
「そうだよね。踊りはないけれどそれでもね」

「なってるわ」
そうなのだった。見事にプレスリーを歌っていたのだ。真似ているのではない、歌っているのだ。それが彼の今の歌なのだった。
「いや、この歌もいけるなんて」
「まさかとは思ったけれど」
二人の口からはもう賞賛の言葉しか出なかった。
「凄いよ、本当に」
「こんなに上手いなんて」
「プレスリー好きだから」
歌い終えてぽつりと答える家持だから。
「家に。ＣＤもあるよ」
「ＣＤもなの」
「あとＤＶＤも。生前の映像ね」
もう彼が死んで千年以上経つ。流石にかつてあったような生存説はありはしない。しかしそれでも伝説になっているのは事実である。プレスリーは永遠の存在となっているのだ。
「そうしたのもあるから」
「それでそんなに上手いんだ」
「よく聴いてるのね」
「あとビートルズも」
やはり二十世紀の伝説のグループである。彼等はイギリスのリバプール出身だがアメリカに移ってしまったので連合では連合の人間になってしまっている。エウロパではイギリス出身なのでエウロパの人間になっている。この辺りが実に複雑だが何処か幼稚であると言ってもいい。
「聴くよ」
「ビートルズもなんだ」
「それもなの」
「ヘルプ！とか大好きだよ」
ビートルズの中でも名曲の一つである。

「他にはレットイットビーもね」
「最後の曲だったね」
「そうね」
二人は彼の言葉からこう言い合う。そのうえでまた気付くのだった。
「つまりそれだけ知ってるんだね」
「音楽詳しいのね」
「二十世紀の曲だけれど」
こう前置きはするがだった。
「結構以上に好きだよ。ロックやバラードだけじゃなくてジャズもね」
「ジャズまで」
ローリーはこれまた驚きの声をあげることになってしまった。
「それまでなの」
「ジャズだったらサッチモかな」
ルイ＝アームストロングの通称である。ジャズ創成期に活躍した伝説の歌手であり奏者である。今でもアメリカ、とりわけアフリカ系の血が入っている、こう言ってしまえばそれこそこの時代では連合の人間の殆どになってしまうがその彼等の間ではジャズが人気のある音楽のジャンルだがそれをそうさせた功労者の一人でもある。彼なくしてジャズはなかったという意見すらある。
「あとはチャーリー＝パーカー」
「そっちも本格的だよ」
「っていうか物凄いわよ」
ジュリアはもうこう言うしかなかった。

第百二十九話　カラオケにてその五

「ジャズもやれるなんて」
「サックスも。好きだから」
ギターだけではなかった。
「だから。それでね」
「凄いのね」
今の言葉はローリーのものでもジュリアのものでもなかった。
「管君って。凄いわ」
「凄いの」
その隣にいた彰子にもいつもの調子の家持だった。
「僕って」
「本当に凄いわ。プレスリーにビートルズで」
ちゃんと聴いているがやはりローリーとジュリアは彼女のことに気付いていない。家持に対することだけでもう一杯一杯になってしまっていた。
「それにジャズもなんて。サッテモよね」
「サッチモだよ」
「そうそう、サットモ」
「だからサッチモ」
「サッチモ。その人のも歌えるなんて」
「そうだよね」
ローリーは彰子が家持の隣の席にいることの意味にまだ全く気付くことなく呟いた。
「ここまで歌えたなんて」
「全くよ」
彰子に気付いていないのはジュリアも同じだった。というよりかは今は彰子は目には入ってはいなかった。家持だけを見てしまっていた。

「意外を通り越して衝撃よ」
「全くだよ。けれど」
「けれど？」
「これはいいことだよ」
こう言うローリーだった。
「これってね」
「いいことなの」
「歌が上手いことはいいことだよ」
ローリーはこのことは素直に賞賛していた。
「それはね。それだけでいいことじゃない」
「まあそれはね」
ジュリアにも異論のない話ではあった。
「いいことね。確かにね」
「そうだよね。だからそれはいいよ」
「けれどなのね」
「うん」
結局はそうなるのだった。話はどうしてもイメージの話になってしまう流れだった。
「管って。どうもプレスリーとかビートルズってね」
「イメージじゃないのよね」
「ギターを持つのだって」
そのこともだった。どうしても二人のイメージではなかったのである。
「絶対に想像できなかったし」
「わからなかったわよね」
「ううん、しかも凄く上手いし」
「あれね」
ここでジュリアはよく言われる言葉を口にした。
「人は見かけによらない」
「それだよね。やっぱり」

「あんたも風紀委員だし」
「僕もなの」
自分の話にもなったのはローリーの計算外のことだった。
「僕もその中に入るの」
「当たり前でしょ」
ジュリアの言葉にいつもの歯切れが戻った。
「あんたが風紀委員って聞いて暮らすの外じゃ驚く声が多いじゃない」
「それが楽しいんだけれどね」
「楽しんでもいるし」
そこも指摘するジュリアだった。
「そういうところなのよ」
「そうだったんだ」
「そうよ。まあとにかくよ」
また言うジュリアだった。
「管に関してはね」
「とりあえずイメージを捨ててだよね」
「そうよ。そういうふうにしないと」
どうしようもない、そう結論を下したジュリアだった。
「それでいいわよね」
「僕はそれでいいよ」
ローリーにしろ偏見の乏しい人間なので彼女の言葉に素直に頷いた。

第百二十九話　カラオケにてその六

「それでね。それじゃあ」
「ええ」
「これ、皆にも教えてあげた方がいいかな」
今度はこう考えだしたのだった。
「ちょっとね。どうかな」
「皆に？」
「人の悪いことは広めないで人のいいことは広める」
ローリーは言った。
「それっていいことじゃない」
「逆のことしたら人間として最低だけれどね」
ジュリアは今の彼の言葉は逆手にした。
「その場合はね」
「そんなことはしないから」
幸いにしてローリーはそういう人間ではないのだった。
「もっとも好きな人のことはいいことばかり広めて嫌いな人だと嘘のことまで言い回す人は知っているけれどね」
「それもよくないわね」
「そうだよね、これもね」
「前半はいいけれど後半は最悪じゃない」
こう言ってそのことを批判するのだった。
「だったら結局同じよ。まあそういう人もいるのね」
「残念だけれどね」
「それでよ」
ジュリアはまた話を戻してきた。
「今のあんたの話だけれど」
「うん」
「いいじゃない」

賛成の言葉だった。
「じゃあそれで行きましょう」
「うん。それじゃあ」
「いいものは皆が味合うべきよ」
にこりと笑って彼に述べた言葉だった。
「だからね。皆にもね」
「そういうことだよね」
「そういうことよ。それにしても」
ここでまた家持の音楽を聴く。今度はスティービー＝ワンダーだった。二十世紀から二十一世紀にかけて活躍したアメリカのアフリカ系歌手である。盲目だったがその音楽は最高のものだった。やはり彼も伝説の存在になっているのである。
「今度はスティービー＝ワンダーね」
「そうだね。今度も凄いわね」
「ええ、全くね」
ジュリアはもうその顔をうっとりとしたものにさせていた。
「こんないい曲。皆が聴かないとね」
「宝の持ち腐れだよ」
「さて、面白いことになるかしら」
今後のことを考えればそれだけで笑みになるのだった。
「この曲を聴いたら皆驚くわよ」
「それだけじゃないよ」
ローリーも言う。
「最初はイメージギャップに苦しんでね」
「私達みたいにね」
「そういうこと。まあこういうことはいいよね」
「悪戯はいいのよ」
いつもの二人だった。
「それはね」
「そうそう」

二人で言い合い頷き合う。
「けれどそれでも」
「そうだよね。いいことは皆でね」
「いいことは皆に教えて悪いことは自分の中に収めておく」
ジュリアはまたこうした言葉を口に出してきた。
「私の国の古い言葉よ」
「イロコイのだよね」
「インディアン嘘つかないわよ」
右目を悪戯っぽくウィンクさせてそのうえで明るく言うのだった。
「この言葉は知ってるわよね」
「まあね」
インディアンとは言うまでもなくネイティブアメリカンのことである。彼等の古い呼び名だ。この時代では殆ど使われていないがそれでも残っている言葉ではある。
「西部劇でね」
「まあ古い言葉だけれどね。それと一緒よ」
「そうだったんだ」
「だから。いいことだから」
あらためてこうローリーに話すジュリアだった。
「そういうことでね」
「わかったよ。それじゃあね」
「ええ。明日早速皆に話してね」
「だね。面白いことになりそうだよ、本当に」
また微笑んで語るローリーだった。
「これからね」
「本当にね」
ジュリアも笑顔で応える。彰子はその間もずっと家持の隣にいる。
しかしそのことには全く気付くことのない二人なのであった。

カラオケにて　　完

2009・3・28

第百三十話　ラブミー＝テンダーその一

ラブミー＝テンダー

その話を聞いたマチアとダイアナは即座にその話を否定した。
「嘘だろ？」
「そうよ」
「あいつがギターってよ」
「しかもプレスリーにビートルズ！？」
二人は顔を顰めさせてローリーとジュリアに対して言い返した。
「ないない、絶対にない」
「何でそうなるのよ」
「信じないんだね」
「ああ」
はっきりとローリーに答えるマチアだった。
「絶対にな。信じないからな」
「リバイアサンが空飛んでもね」
ある星にいる超巨大鯨だ。今のところ宇宙にいる生物で最大である。その大きさは個体によっては一キロにも達する。途方もない巨大鯨である。
「それはないわ」
「またえらい否定の仕方ね」
ジュリアは今のダイアナの言葉を聞いて言った。
「リバイアサンが空飛んでもって」
「じゃあ言い方変えるわね」
ダイアナはジュリアの言葉を受けてこう返してきた。
「ダイアポロンズが二十連覇する方が信じられるわ」
連合のアメリカンフットボールのチームである。あまりにも弱いことで知られている。今のところ十年連続最下位であり三十年のうち実に二十七回も最下位になっている。ダイアナの祖国であるチリ

のリーグのチームだ。
「まだね」
「そこまで言うの」
「何処をどうやったら信じられるのよ」
あらためてジュリアに言い返してきた。
「あの管が。プレスリーなんて」
「まさかとは思うけれどな」
マチアも怪訝な顔で言ってきた。
「あれか？腰振って踊るのか？」
「プレスリーよね」
プレスリーはその踊りでも有名であった。腰を振るその踊りが猥褻だというので問題になったこともある。その時についた仇名がヘルペス、つまり骨盤というわけだ。
「それだったら踊りだけれど」
「あいつがプレスリーの踊りなんてな」
「ああ、それはないから」
ローリーがそれは否定した。
「安心して。それはないよ」
「そうなの」
「うん。踊りはしないんだって」
また彼等に説明した。
「だからね。それは安心して」
「そうなの」
「けれどね」
しかしここでローリーはまた二人に話した。
「凄いから」
「凄いって何がだよ」
「まずはギター」
こうマチアに告げた。
「これが物凄いんだよ」

「ギターがかよ」
「もうね。聴いていて唖然とする位」
「俺のギターよりも上か？」
「同じ位じゃないの？」
「ねえ」
ジュリアとローリーは彼のギターをこう評したのだった。
「多分だけれど」
「とにかく凄いのは確かよ」
「そんなにか」
マチアはこの話を聞いて考える顔になった。
「そんなに凄いのか」
「それで歌は？」
ダイアナが聞くのはこのことだった。
「歌はどうなの？」
「それがね」
「これが最高なのよ」
二人はこうダイアナに話した。

第百三十話　ラブミー＝テンダーその二

「もうね。一回聴いてみたらいいよ」
「冗談抜きで凄いから」
「そこまで凄いのか」
マチアは二人の言葉からその目を真剣なものにさせた。
「それじゃあ一回聴いてみたいな」
「乗るんだね」
「ああ、乗る」
今度はローリーの問いにはっきりと答えてみせた。
「乗らせてもらう。それでいいな」
「そう言うと思ったよ」
ローリーは彼の言葉を受けて静かに微笑んだのだった。
「絶対にね」
「読んでいたのか？」
「読んでいたって言えばそうなるね」
彼もそれを隠さない。しかしそれは開き直りではなかった。
「マチアなら言うだろうなって思ってたよ」
「そうか」
「うん、悪いけれどね」
「悪くはないさ」
マチアはそれはいいとしたのだった。
「別にな。とにかくな」
「管の音楽を聴きたいんだね」
「ああ。それであいつは何処だ？」
あらためてローリーに問うマチアだった。
「まだ学校に来ていないのか？」
「あれっ、そういえば」
「見ないわね」

ローリーとジュリアはクラスの中を見回した。そのうえで言うのだった。
「何処かな」
「まだ来ていないのかしら」
「あれっ、確か」
しかしここでダイアナが言った。
「さっき見たわよ」
「それ本当？」
「ええ、見たわ」
こうジュリアに答えるダイアナだった。
「はっきりとね。見たわよ」
「それ何処でなの？」
「この教室でだけれど」
また答えたダイアナだった。
「けれど。今はいないわね」
「じゃあ何処かにいるのね」
「それは間違いないけれど」
少なくともこの学校にいる。このことはわかったのだった。しかしそれでも彼が今何処にいるのかは全くわからなかったのだった。
「けれど。何処かしら」
「そういえばな」
ここでマチアは顔を顰めさせて述べたのだった。
「あいつ気付いたらいつもいないよな」
「そうだよね。そういえば」
「それで気付いたらいるのよね」
「そうそう」
あらためて家持の謎の生態が話されるのだった。
「普段ぼーーーーっとしているようで気付いたら仕事してるし」
「クラスで何かあったらね」
「気付いたら仕事してるわよね」

「そうそう」
こうしたことも話されるのだった。
「本当に気付いたら重要な仕事してるから」
「それも言う前にね」
「謎の多い奴だな」
マチアは腕を組んでこのことを述べたのだった。
「一体何時何処で何をしているのかわからないしな」
「そうよね」
ダイアナもそれに頷くのだった。
「本当に何者かっていうとね」
「誰もわからないんだよね」
ローリーも実際のところ彼のことはよく知らないのだった。実はクラスの誰も彼のことはよく知らないのである。ある意味セーラ以上に謎の存在だった。

第百三十話　ラブミー＝テンダーその三

「さて、それでだけれど」
「何処にいるかなのね。今」
「そう、それ」
ジュリアに対して答えた言葉だった。
「何処にいるかな、本当に」
「わからないわね。どうしようかしら」
ジュリアは腕を組んで難しい顔になっていた。
「見つけるにしろ」
「俺もな」
マチアもまた難しい顔になっていた。
「実はよく知らないからな、あいつのこと」
「私も」
そしてそれはダイアナも同じなのだった。
「正体不明、生態不明だからね、管って」
「それでも。今学校にはいるんだよね」
「そうよ」
このことだけは確かにローリーに答えることができた。
「それは間違いないわ」
「さっきまでクラスにいたっているけれど」
ジュリアは言いながらクラスの中を見回す。徐々にだが皆登校してきている。
「何処に行ったのかしら。トイレかしら」
「そういえばな」
ここでまたマチアが言うのだった。
「あいつトイレに行ったところ見たことないな」
「あっ、そうだね」
ローリーも言われてそれに気付いた。

「僕もないよ。そういえば」
「嘘でしょ、それ」
ダイアナはすぐに二人のその話を否定した。
「人間トイレに行かないと生きていけないわよ」
「そうよ」
ジュリアもその言葉に頷く。
「トイレに行かないと。そんな訳ないでしょ」
「いや、それがな」
しかしマチアはそれでも言うのだった。
「実際に見たことないんだよ、あいつがトイレに行くのな」
「僕もなんだよね」
ローリーもまた言う。
「そういうの。全然ね」
「そうだよな。何でだろうな」
「謎まみれなのね、本当に」
ジュリアはとりあえず二人の言葉からそのことはわかった。
「トイレに行っているところを見た人もいないなんて」
「そういう奴だからな」
マチアはまた彼女に話す。
「何が何だかな。さっぱり訳がわからねえんだよ」
「まずは見つけないといけないけれど」
ダイアナはこのことを考えていた。
「何処にいるのかしら、本当に」
「探すより誘い出した方がいいかもね」
ジュリアはそちらの方がいいと考えだしていた。
「そっちの方が見つかりやすくない？」
「誘い出すの？」
「そう」
彼女はローリーに対しても答えた。
「誘い出すの。どうかしら」

「悪くはないな」
マチアが彼女の今の案に頷いた。
「それはな」
「そうでしょ？だから」
「しかしだ」
だがここで一言言ってきたのだった。
「どうやって誘い出すんだ？」
「どうやってって？」
「こうした場合好きなもので誘い出すけれどな」
話がどうにも動物を捕まえるような感じになってきていた。
「あいつの好きなもの。知ってるか？」
「そう言われると」
首を捻ってしまったジュリアだった。実は彼女もそうしたことは知らないのだ。何しろ何もかもが謎の存在である家持だからだ。

第百三十話　ラブミー＝テンダーその四

「ちょっと。どころじゃなくて」
「知らないんだな」
「ええ、全然」
やはりこれが答えであった。
「何が好きなのかしらね、本当に」
「まずはそれからだな」
話が最初に戻ってしまった。
「あいつが好きなもの」
「そこまで考える必要ないんじゃないの？」
今度はダイアナが三人に言ってきた。
「そこまではね」
「何でだ？」
「だって。今ホームルーム前よ」
学校の授業はまだはじまってもいないのである。皆徐々に登校してきている。校門のところには今ナンがいつものように馬で登校してきているのが見える。
「一旦いなくなってもまた来るわよ」
「そうだね」
ローリーがその言葉に最初に頷いた。
「考えてみれば。後で絶対に来るよね」
「だから今何かをする必要はないわ」
また言うダイアナだった。
「今はね。静かにしておきましょう」
「とりあえずギターはあるしな」
マチアがいつも持っているそれである。
「これを貸して。それでいいよな」
「ギターはね」

「それでいいわよね」
二人の女の子が彼の提案に賛同した。ローリーも特に反対の意思は見せない。
「じゃあ後は本人が戻ってきて」
「頃合いを見てね」
「ああ。ただしな」
マチアはまた言葉を付け加えてきた。その顔はかなり警戒するものであった。
「絶対に逃がさないようにしないとな」
「それはね。とにかく神出鬼没だから」
ローリーもその点はかなり注意していた。
「何時の間にかいなくなってたりするからね」
「何か本当に珍獣捕まえるみたいね」
ジュリアはまたしても首を捻った。眉も顰めさせている。
「姿を見失うなって」
「本当に何時何をしてるかわからない人だから」
ダイアナも話をしているうちにこのことを再認識していた。
「だからよ。それは仕方ないわよ」
「そうなのね。まあとにかく」
「うん」
「あいつの曲を聴くぞ」
マチアは強い声で三人に告げた。
「とにかくな」
「興味持ってくれたんだね」
「今でも信じられない」
このことははっきりと顔に出してしまっているマチアだった。
「あいつがギター。しかも」
「プレスリーってね」
そしてそれはダイアナも同じだった。表情に完全に出してしまっている二人だった。

「あとビートルズも？」
「うん」
「余計に信じられないな」
「そうよね」
二人は実際にまた眉を顰めさせていた。半信半疑どころではない顔でそれぞれ言うのである。それが心境吐露に他ならない。
「まあとにかくだ」
「百聞は一見にしかず」
これもまた昔から言われている言葉である。
「見てみないとな」
「この場合は聞くだけれどね」
それでも一見と言ってもいいものではあった。
「あいつが来てからな」
「見せてもらうわ」
「問題は何時来るかだけれど」
ジュリアが言った。
「まだ。戻ってきてないわね」
「本当に出たり消えたりするね」
ローリーもまだクラスに彼がいないことを確かめて言う。彼がいないことは明白だった。彼の席は空いたままでクラスの何処にも姿は見えはしない。

第百三十話　ラブミー＝テンダーその五

「まあそれでも。待っていればね」
「絶対に戻って来るんだし」
ジュリアもまた言う。
「待っていましょう。いいわね」
「そうね。それじゃあ」
ダイアナが彼女の言葉に頷く。
「待たせてもらうわね」
「そうしましょう」
こうして彼等は待った。彼が戻って来たのはホームルームがはじまる直前になってからだった。やはりいきなりクラスに戻ってきていた。とりあえずこの間は置いておいてホームルームからすぐに入る一時間目が終わってすぐに。四人で家持の机に向かったのだった。
「どうしたの？」
「なあ管」
マチアが話を切り出してきた。
「ちょっとローリー達に聞いたんだけれどな」
言いながら左の親指でローリーとジュリアを指差す。
「御前ギターできるのか」
「うん」
静かにかつ無表情に応える家持だった。
「弾けるよ」
「それもプレスリーいけるんだな」
「いけるよ」
やはりここでも静かで表情がない。
「けれどそれがどうかしたの？」
「よかったらここで弾いてくれ」
早速背中に背負っているそのギターを彼に手渡すのだった。

「是非な」
「今日はギターだったんだ」
しかし家持の突っ込みは他の人間とは違っていた。
「バイオリンじゃないの」
「あっ、ああ」
この突込みには思わず戸惑ってしまったマチアだった。
「まあな」
「どうしてなの？」
「今日は部室に置いてるんだよ」
これはその通りだった。今日ギターを持ってきていたのはたまたまである。部活でギターも使うからだ。彼はバイオリンだけではないのだ。
「それでな。今日はこっちを持って来てたんだよ」
「そうだったんだ」
「とにかくな」
話を続けるマチアだった。
「御前のそのギターな。聴かせてくれないか？」
「曲は？」
「プレスリーな」
やはりこれだった。
「それを頼む。いいか？」
「うん、それじゃあ」
早速マチアからギターを受け取る。そうして演奏をはじめるが。
「上手いな」
「そうね」
まずこう言うマチアとダイアナだった。
「この曲な。かなりな」
「いいわよね」
「そうでしょ？かなりいいでしょ」
その二人に対して顔を向けて言うジュリアだった。

「私達も最初かなり驚いたんだから」
「もっとびっくりするよ」
ローリーはこうその二人に告げた。
「もっとね」
「歌か」
「それね」
「うん」
二人の言葉に対して頷く。その通りだというのである。
「そうだよ。歌も凄いから」
「ほら、はじまるわ」
ラブミー＝テンダーの序奏がまず終わった。ここからだった。
歌がはじまると四人は言葉を発さなくなった。そのまま聴いていく。そして歌が完全に終わったうえで。それぞれこう言うのであった。

第百三十話　ラブミー＝テンダーその六

「おい、これって」
「まさかとは思ったけれど」
まずはマチアとダイアナが言う。
「すげえじゃねえかよ」
「歌手でもいけるわよ」
絶賛であった。
「ここまで上手いと。なあ」
「ギターも歌もね」
太鼓判を押すのはどちらかではなかった。両方に対してであった。彼の演奏も歌もそこまで凄いのであった。しかも太鼓判を押したのはクラスでも音楽通の二人であった。
「ねっ、凄いでしょ」
「僕達も最初驚いたよ」
ジュリアとローリーがその驚く二人に対して笑顔で話す。
「だから是非にって思ってね」
「才能を埋もれさせておくのはよくないじゃない」
「別に才能じゃないよ」
しかし当の家持はこう言うのだった。
「ただ。好きなだけだから」
「好きでも下手な奴はいるぞ」
「そうそう」
マチアとダイアナは今の家持の謙遜の言葉に対して即座に言い返した。
「だからな。その歌もギターもな」
「自信持っていいわよ」
「そうなの」
「そうだよ。しかしここまで凄いとな」

「そうね」
二人で話に入る。
「クラスの皆にも聴いてもらいたいな」
「是非ね」
「ああ、二人もそう思うんだね」
ローリーは今の二人の言葉を聞いて笑顔になった。
「絶対にそう言ってくれるって思ってたよ」
「そうだったのかよ」
「そうなの」
「うん。きっとね」
その笑顔でまた言うローリーだった。
「だからさ。今日のお昼なんてどうかな」
「いいな」
「そうね」
二人はローリーの今の提案に対して頷いた。
「弁当でも食いながらな」
「丁度いいわね」
「ああ。まずはクラスの皆を確保してな」
「それでなのね」
「ただしよ」
この計画にちょっと言葉を入れてきたのはジュリアだった。
「食堂に行くメンバーもいるから」
「僕も」
家持がここで手をあげた。
「今日は食堂だから」
「そうだったの」
ジュリアは今の彼の言葉を聞いて少し意外といった顔になった。
「っていうかあんた食堂派だったの」
「その時によって違うけれど」
こう答えるのだった。

「今日は食堂なんだ」
「ふうん、今日はなのね」
「そこでマンモスのステーキ食べるつもりだから」
連合ではそういったものも食べる。マンモスの肉といっても皮のまま生で食べるわけではない。マンモスの皮と毛は厚く長くとても食べられたものではないのである。
「だから少しね」
「いないの」
「すぐ戻るから」
こうジュリアに言うのだった。
「その間はね」
「わかったわ。音楽はなしね」
「うん」
「だったら」
ローリーはここまで聞いて一つの考えを出した。
「暫くさ。お昼休みは時間を置こうよ」
「時間をなのね」
「皆お昼休みになったらすぐに食堂に行くじゃない」
まずは食べることである。これはこの学園でも同じだ。その時間購買部も食堂も修羅場になるのも同じである。食堂や売店が幾つあってもだ。
「だからさ。その時間は置いておいてね」
「そうね。音楽は食べてから聴いてもいいし」
「そういうこと。だからね」
「ええ、わかったわ」
ローリーの言葉に頷くジュリアだった。
「それじゃあそういうふうにね」
「しようよ。じゃあお昼休みが終わったら暫くしてからね」
「ええ。じゃあ管」
ローリーと話をしたうえで主役に顔を向ける。

「それでいいかしら」
「うん」
感情は見られなかったがそれでも頷いてきた。

第百三十話　ラブミー＝テンダーその七

「僕はそれで」
「話は決まりね」
ジュリアはここまで打ち合わせをしたうえでまた頷くのだった。
「じゃあお昼にね」
「さて、次はどんな曲なんだろうな」
「楽しみね」
マチアとダイアナはこう言ってそれぞれ笑みを浮かべている。
「俺もな」
「何？」
「音楽は皆が聴くものだと思ってるんだよ」
こう語るローリーに語るマチアだった。
「だからな。是非皆にな」
「そうだよね。やっぱりね」
「僕。音楽好きだよ」
家持自身も言う。
「皆がそれを聴いてもね」
「いいんだな」
「うん」
こうマチアにも答えた。
「そうだよ。だから」
「よし、じゃあ話は決まりだな」
マチアは家持の言葉も聞いて満面の笑顔になった。そのうえで話を変えてきた。
「じゃあローリーよ」
「何？」
「今日のお昼だけれどな」
彼が言うのはこのことだった。

「何食うつもりなんだ？」
「まだ考えてないけれど」
少し首を捻ってから答えるローリーだった。
「何にしようかな」
「レバカツなんてどうだ？」
「レバカツ？」
「ああ、レバーをカツにしたんだよ」
このメニューのことをローリーに対して話す。しかしこれはローリーにとってはこのメニューははじめて聞くものだった。それはジュリアもダイアナも同じだった。
「レバーってカツにできたの」
「初耳よね」
「ねえ」
彼女達も顔を見合わせて言い合う。
「ちょっと。それって美味しいのかしら」
「私レバー好きだけれど」
「私も」
彼女達もレバーは好きだがそれをカツにするという発想はなかった。それで顔を見合わせているのだ。
「普通生？」
「あとレバニラ？」
どちらも極めてポピュラーである。
「他にはそのまま炒めたりとか」
「焼肉よね」
「そういうところよね」
「俺の国じゃそうやって結構食ってるんだよ」
しかしマチアはその彼女達に笑顔で話した。
「レバカツな。美味いぜ」
「そんなに美味しいの」
「牛でも豚でもな」

牛だけではないというのだった。
「どっちでもいける。どうだよ」
「あれ美味しいよね」
ここで家持が不意に言ってきた。
「じゃあ僕もお昼はそれにしようかな」
「御前もレバカツ食うんだな」
「大好物だから」
何とここで彼の好物がわかるのだった。意外な展開である。
「それ。食べるよ」
「よし、じゃあ五人で行くか」
マチアがそういったふうに話を決めた。
「楽しくな。レバカツ定食な」
「定食にもなってるんだ」
ローリーにとっても驚きの真実だった。
「っていうかうちの学園にそうしたメニューあったんだ」
「アルゼンチン料理のレストランにあるんだよ」
言うまでもなくマチアはアルゼンチン人である。祖国愛はこれでも高い。
「そこでな。まあ百聞は一見にしかずだからな」
「ここでもその言葉出るのね」
「確かにその通りだけれど」
ジュリアとダイアナは今の彼の言葉に頷きはする。
「けれど何ていうのかしら。食べたことないから」
「美味しいかどうかっていうと」
「美味いんだよ、これがな」
マチアはこのことに絶対の自信を持っていた。
「騙されたと思って食ってみな。後悔はしないからな」
「そこまで言うんならね」
ローリーも乗った。続いて女組も。家持は最初からだった。こうして彼等は家持の音楽を聴く前にまずレバカツを楽しんだ。そのう

えで今度は彼の音楽を楽しむのだった。それは確かに誰もが聴くに値する最高の音楽だった。

ラブミー＝テンダー　　完

２００９・４・２

第百三十一話　住所不定その一

住所不定

家持の音楽は皆が知ることになった。そして知られたことは他にもあった。

「それで好きなものはレバーか」

「ああ、そうだ」

マチアはアルフレドの言葉に応えていた。

「でかいの三枚な。ぺろりとな」

「レバカツを三枚だな」

「そうさ。マジで好物だった」

そのアルゼンチン料理のレストランにおいてのことを彼に話すマチアだった。

「俺も二枚食ったけれどな」

「彼は三枚か」

「勿論他にも色々食ってた」

それだけではないのだった。

「食う量もかなりだったな」

「意外だな」

アルフレドはそこまで聞いてこう言ったのだった。

「レバーが好きでしかも大食漢か」

「っていうか俺等あいつのこと何も知らなかったよな」

「そういえばな」

あらためてこのことに気付くのだった。

「何者なのかな」

「わかっているのは日本人ってことだけだな」

「そうだな」

本当にそれだけであった。

「全く。何者なんだ？」

「まず話さないからな」
アルフレドはこう言って腕を組んだ。
「気付けばいつもいて」
「そういえばな」
マチアもこれまでのことを振り返りながら言った。
「これまでうちのクラス色々な騒ぎがあっただろ」
「そうだったな。もう数え切れないだけな」
「デートだの天本博士だのドードー鳥だのな」
「オオナマケモノもあったな」
「他にも色々あったな」
「もう一つ一つ覚えていられないまでな」
「それでもだよ」
マチアはここまで話したうえでさらに言ってきた。
「あいつは全然話に絡んでないな」
「それどころじゃない」
アルフレドは言葉を付け加えてきた。
「気付けばいつも場にいたぞ」
「んっ!?」
「よくその時その時の場を思い出してみろ」
彼は言った。
「いただろ。いつもその場に」
「!?そういえば」
言われてはっと気付くマチアだった。
「あいついたな。いつもな」
「僕達の場にいたぞ、絶対にな」
「おい、今気付いたぞ」
マチアは驚いた顔になってアルフレドに述べた。
「何かいつも端にいるイメージがあるけれどよ」
「しかしいつもいた」
「ああ」

あらためて彼の言葉に頷いた。
「いたな。確かにな」
「これが何を意味するのか」
アルフレドもさらに言う。
「それだな。あいつは何者だ?」
「それだよな。結局何者なんだ?」
マチアはここで腕を組んで考える顔になった。
「気付けばいつもいるしよ」
「何時何をしているのかわからない」
「家族構成とかもな」
「全くわかっていない」
「趣味は?」
「それも不明だ」
とにかくわかっていないことだらけなのである。
「何もかもがだ。全てな」
「やっとギターと歌が上手いってわかったけれどな」
本当にやっとである。これまで何一つわかっていなかったのである。しかも誰もがそれに気付くこともなかったのである。信じられないことに。

第百三十一話　住所不定その二

「しかしな。それでもな」
「他のことはまだ全くの謎だ」
「やっとレバーが好きだってわかった位か」
これも微々たるものでしかない。
「何者なんだろうな、本当に」
「そこまで謎に包まれた人間がいるとはな」
「しかし。あれだぜ」
マチアはこれまでの話を転換させるようにして言ってきた。
「ここで調べたりするのもな」
「嫌か」
「嫌かっていうか俺達誰かの謎を調べたりばかりしてないか？」
ふとこのことに気付いたのである。
「考えてみればな」
「そういえばそうだな」
アルフレドも言われてそのことに気付いたのだった。
「じゃあ調べたりするのは」
「ああ、止めておこうな」
「そうだな」
こう結論付けるのだった。
「そんなことはな」
「それでだ」
マチアはそのうえでまた話をしてきた。
「あいつの謎はとりあえず置いておいてな」
「ああ」
「レバーな」
話をレバーに移してきた。
「御前もあれは好きか？」

「牛のレバーはあまり好きじゃないな」
まずは牛のレバーについて述べるアルフレドだった。
「あれはな」
「御前牛肉いけたんじゃないのか？」
「それでも牛のレバーはあまり好きじゃない」
こう限定するのだった。
「あれはな」
「そうだったのかよ」
「しかし豚とか鶏とかのレバーはかなり好きだぞ」
「ああ、どっちもいいよな」
マチアはどちらのレバーも好物なのだった。
「特に鶏な。あれいいな」
「他には羊のもな」
「羊もか」
「あれもいいよな」
羊は極めてポピュラーな肉である。これは連合だけでなくエウロパでもそうであるしサハラでもだ。サハラでは肉といえば羊である。イスラムの伝統だ。
「羊の内臓は全体的に好きだ」
「というか御前内臓系好きか？」
「実は大好きだ」
こう答えてニヤリと笑うアルフレドだった。
「いいな。あの独特の味が」
「栄養もあるしな」
そしてそれはマチアもであった。
「しかも安い」
「サハラでは内臓は食べないらしいな」
「あそこじゃ血も飲まないぜ」
それもなのであった。しかもこれにはしっかりとした理由があった。その理由が何であるかはもう誰もが知っていることであった。

「コーランに書いてあるからな」
「この前コゼットホルモン食べてたぞ」
インドネシア人の彼女がだ。なおこの時代においてもインドネシアはイスラムの国である。ムスリムは連合にもかなりの数がいるのだ。
「確か。豚のな」
「こっちじゃそういうの五月蝿くないからな」
連合のイスラムはこの辺り実にいい加減である。
「っていうかあいつ大酒飲みだろ」
「ああ」
「まあこの辺りはサハラでも飲んでるけれどな」
サハラでも酒は飲まれているのである。
「この辺りはいい加減か？」
「イスラムでは食べる前にアッラーに許しを乞えばいいからな」
それだけで済むのもまたイスラムなのだｔ。
「それだけでな」
「それ考えたら厳格一辺倒じゃないんだな」
マチアはあらためてイスラムについて思った。

第百三十一話　住所不定その三

「イスラムもな」
「だから人類社会に今でも広くあるんだろう？」
「それもそうか」
そうした柔軟さがないととても広まらない。イスラムがこの時代においてもかなりの勢力を持っているのにはそれだけの理由があるのである。
「それ考えたらいい宗教か」
「そうなるな。俺はムスリムじゃないがな」
「俺もな」
実は二人共自分達が一体どれだけの宗教に入っているのかあまり把握してはいない。連合では複数の宗教に入っているのが常識となっているところがある。
「まあとにかく。あいつはレバーが好きだ」
「わかっているのはこれだけか」
「レバーで。今度何か食うか？」
マチアはそのうえでこんなことを言うのだった。
「とりあえずな。何がいい？」
「レバーだけじゃなくて内臓全体がいいな」
その内臓好きのアルフレドの言葉である。
「何かいいのがあるか？」
「俺の国肉滅茶苦茶食うけれどな」
マチアの国はアルゼンチンである。アルゼンチンといえば肉料理なのはこの国が地球にあった頃からの伝統と言ってもいいことである。
「それで内臓もな」
「食うのか」
「ああ。それで俺の家に来るか？」

提案だった。
「皆な。あいつも呼んでな」
「それで何が好きか見てみるか」
「それ抜きにしてもどうだよ」
彼は言うのだった。
「肉料理な。いいだろ」
「そうだな。しかしその肉料理は」
ここでアルフレドは彼に問うた。
「誰が作るんだ？」
「誰って。決まってるだろう？」
マチアはアルフレドのその問いに対して何を今更という顔を見せたのだった。
「そんなことはな」
「決まっている？」
「そうだよ。俺だよ」
こう彼に言うのだった。
「俺が作るんだよ、その料理な」
「御前料理できたのか？」
アルフレドは今の彼の言葉に目を顰めさせて問い返した。
「初耳だが」
「できるさ。俺だって一人暮らしだしな」
少し胸を張っての言葉だった。
「ちゃんとな。だからな」
「そうか。やるのか」
「ああ、やらせてもらうさ」
また言うのだった。
「是非な」
「内臓ものもか」
「勿論だ」
返答も決まっていた。

「やらせてもらうさ。喜んでな」
「そうか。御前が料理か」
アルフレドは彼の今の言葉を聞いてもまだ何か思っているようだった。
「安心していいか」
「男の料理だから少しワイルドだけれどな」
「ワイルドか」
その言葉に少し不安な色を見せた。
「そうか」
「まあ安心してくれよ」
彼は笑ってアルフレドに話してきた。
「俺も料理はそんなに下手じゃないからな」
「自己申告でもな」
しかしアルフレドは彼の今の言葉をそのまま信じようとはしなかった。
「確かなものがなければ」
「じゃあ言い方変えるか」
実際にそれを変えてきたのだった。
「その腕を確かめる為にもな」
「来いということか」
「これならどうだ？」
悪戯っぽく笑ってきての言葉であった。
「これならな」
「そうだな」
アルフレドはいぶかしむものを消していた。そうしてそのうえで彼に対して答えたのだった。

第百三十一話　住所不定その四

「それならいい」
「よし、流石に話がわかるな」
アルフレドの今の返事こそマチアが待ち望んでいたものだった。
笑顔が満面のものになった。
「それじゃあな。明日俺の家でな」
「いや、待ってくれ」
しかしここで考えを少し変えたアルフレドだった。
「御前の家に行くのはな」
「駄目か？」
「それよりも管の家に行かないか？」
こう言うのだった。
「あいつの家で御前が料理を作る」
「俺がか」
「そうだ。これならあいつのことも何となくわかるだろ」
話は先程のことと少し混ざっていた。
「これならどうだ？」
「ああ、そうだな」
マチアもアルフレドの話を聞いて考える目になってから述べた。
「それもありだな。それにあいつのギターも聴けるしな」
「悪くないだろう。じゃあこれでいいか？」
「いいと思うぜ」
マチアは答えた。
「それでな。じゃあ肉は俺が持って行くな」
「持って行くのはいいがどれだけあるんだ？」
「百キロ位か？」
少し考えてから述べたのだった。この時代においても量りの単位はキロである。グラムやトンといった単位もそのまま使われている。

「多分な」
「持って来れるのか？」
アルフレドは百キロと聞いてすぐに眉を顰めさせた。
「それだけあって」
「まあ大丈夫だろ」
しかしマチアの返事は何でもないといったものだった。
「勿論肉だけじゃないけれどな。全部で二百キロ辺りだと思うがな」
「余計に難しいだろ」
アルフレドは眉を顰めさせたままま彼に言った。
「一人で持つには」
「大丈夫だよ、ちゃんと移送用のカーがあるしな」
この時代にはそうした便利なものもあるのだ。
「一トンまでいけるしな」
「だから大丈夫か」
「内臓、たっぷりとあるからな」
にんまりと笑ってアルフレドに述べてきた。
「それは楽しみにしておいてくれよな」
「そうか。内臓がか」
好物があると聞いてアルフレドも笑顔になった。
「いいな。やはり肉は内臓だ」
「普通の肉もいいけれどな」
「ライオンは獲物の肉は内臓から食べる」
ライオンは無造作に食べるわけではないのである。その食べ方には法則があるのだ。まずは仕留めた獲物の内臓から食べるのである。
「だからだな」
「当然肝臓もな」
「尚更いいな」
やはりレバーの話も出て来た。
「心臓もな」
「心臓の肉もまたいいものだ」

筋肉であり美味いのだ。二人はとにかく内臓について詳しかった。
その辺りの通であった。
「それじゃあ。楽しみにしているからな」
「ああ。そういうことでな」
こうして皆で家持の家に行くことになった。料理をするのはマチアだ。しかし皆ここであることに気付いたのであった。
「管のお家って？」
「何処にあるの？」
皆彼の家に行くと言われてもキョトンとした顔になるばかりであった。
「そういえば何処だったっけ」
「知らないよな」
「ええ」
戸惑う顔で言い合う。
「っていうか家あったの」
「初耳だけれど」
「そういえば」
ここで言いだしっぺのアルフレドも気付いたのだった。
「僕もあいつの家が何処にあるのか知らないな」
「えっ、兄さんもなの？」
ビアンカは兄の今の言葉に驚いた顔になってしまった。

第百三十一話　住所不定その五

「兄さんも管の家が何処にあるのか知らないの」
「家はあるな」
「それは当然でしょ」
ビアンカはまずこう兄に述べた。
「それかナンみたいにああした移動式のお家か」
「どちらにしろ家はあるな」
「ない筈はないわ」
とりあえずこうした話になってしまっていた。
「それは絶対にね」
「しかし。何処にあるんだ？」
問題はこれであった。
「一体何処に」
「住所録見てみる？」
ビアンカはまずは現実的な案を出した。
「ここは」
「住所録か」
「それには絶対に載ってるじゃない」
「そうだな」
これは道理だった。普通住所不定なぞ有り得ない。アルフレドも考えてみればそうだと頷いた。もっともナンの住所は住所録には移動式と書かれているのであるが。
「それじゃあ。それでな」
「調べてみましょう」
こうしてまずは住所録から調べられた。幸いにしてそこには彼の住所もしっかりと載っていた。しかしそこに書かれていた住所とは。
「あれっ、これって」
「どうしたんだ？」

「うちの学園の住所よ」
ビアンカは兄に対して述べた。
「これって」
「うちの学園って八条学園のか」
「ええ、間違いないわ」
また兄に述べた。
「そうなってるけれど」
「うちの学校に!?」
「どういうことかしら」
ここに至って二人は首を捻ることになった。左右対称になっている。
「学校が住所って」
「学校に住んでいるのか?」
「それはちょっとないんじゃないの?」
ビアンカはそれは否定した。
「そりゃ校内に住めないことはないでしょうけれど」
「流石にそれは有り得ないな」
「でしょ?じゃあ何なのかしら」
「学校の中にテントを張って暮らしている?」
アルフレドが次に考えたのはこのケースだった。
「それだと」
「確かにこの学校広いし」
その敷地面積はかなりのものだ。それで学園の中に電車さえ走っているのである。ヘリコプターを使うケースさえあるのだから相当なものである。それでヘリポートまであったりする。
「何か勝手に棲みついてる生き物もいるけれど」
「人は。どうかな」
「いそうだけれどね」
いかねないのがこの学校の恐ろしいところである。もっとも棲みついている生き物の中には危険なものがいるという噂もあるので中

にテントで住むにはかなりのチャレンジが必要であるが。
「けれど。やっぱりそれも」
「現実的じゃないな」
「そうでしょ？だからこれも」
「そもそも御家族はどうされているんだ？」
アルフレドの疑問はそこにもあった。
「御家族はおられるんだな」
「そうじゃないの？」
このことに関しては要領を得ないビアンカの返答だった。
「多分」
「家族構成はわかっていないのか」
「兄さんも知らないでしょ」
「ああ」
妹の問いに答えた。
「全くな。そもそも御家族は」
「全く不明よね」
「僕達他の国の人間は親は祖国にいるが」
「けれど管って日本人じゃない」
つまりこの星に家族がいても何の不思議もないのだ。むしろ自然である。八条学園は日本にあるのだから。言うまでもなく家持の母国である。
「だったら御家族も」
「一緒にいてもだな。しかし」
「それもわからないのよね」
そうなのであった。

第百三十一話　住所不定その六

「これも今はじめて気付いたけれど」
「家族構成もわかっていない」
アルフレドはこのことについて言葉を出したのだった。悩むというよりは唖然としている顔で。
「そんなことが有り得るのか」
「プライバシーどころじゃないわよね」
ビアンカも困惑した顔になっていた。
「やっぱり。これはね」
「僕もそう思う。それが書かれているものは」
「ちょっとないわね」
それはないのだった。
「残念だけれど」
「それじゃあわかったのは住所だけだな」
「しかもそれはこの学校の敷地内」
どれだけ広いかわかったものではない。
「どうする？本人に聞く？」
「聞くにしても」
とりあえずクラスの中を見回す。しかし彼の姿は何処にもなかった。またしても何時の間にか何処かへ行ってしまっていたのだった。
「いないぞ」
「今回も神出鬼没なので」
「全く。それじゃあ調べるしかないか」
「そうね。じゃあ調べましょう」
「ああ」
妹の言葉に対して頷いた。
「この学園の中をな」
「探していればわかるわよね」

「そう思う」
不安に満ちていることがわかる今のアルフレドの返事だった。
「多分な」
「私も自信ないけれど。それでもね」
「調べるか」
「そうするしかないわね」
こうしてこの学園内を調べようと動きだした二人だった。しかし思わぬところでストップがかかったのだった。
「ああ、僕の家だけれど」
「あっ、管か」
「何時の間に！？」
二人共まずはここでもいきなり出て来た管に対して驚きの声をあげたのだった。
「ちゃんとあるよ」
「あるのか」
「けれどこの学園の中よね」
「うん」
このことも認めてきた。しかもかなりあっさりとであった。
「そうだよ。だって僕の家ってね」
「ああ」
「この学校の用務員さんだから」
「そうだったのか」
ここでもわかった衝撃の事実であった。彼の家は八条学園の用務員であったのだ。今まで誰も知らなかったことであったが今それがわかったのである。
「だからこの学園の中にお家があるんだ」
「それで住所がここになっていたの」
「そうなんだ。僕の他にもそういうお家があるよ」
このことも二人に話したのだった。
「ちゃんとね」

「何処の学校にも用務員さんはいるな」
「ええ」
これも考えてみれば言うまでもないことである。何処の学校にも用務員はいる。それは事務員や教師がいるのと同じである。もっと言ってしまえば学校に生徒がいるのと同じだ。用務員もまた学校には絶対に欠かせない存在であるのだ。だから家持も学園の中にいるのだ。
「しかしそういう家が幾つもあるのか」
「広い学校だから」
「そうよね」
ビアンカは今の彼の言葉にその通りだと頷いた。
「広いからね、うちの学校って」
「だからだよ。十か二十はあるかな」
「もっと多そうね」
ビアンカはこの学園の巨大さを思い出しながら述べた。
「ここまで広い学校だと」
「生徒だけで何万もだからな」
アルフレドも言う。
「それなりに用務員さんも必要だな」
「そういうことね」
「それで僕の家に来るんだよね」
家持は話を先に進めてきた。自分から。
「今日か明日に」
「ああ、そのつもりだ」
「皆でね」
「だったら高等部のすぐ側だから」
こう二人に家の場所を話した。
「そこでレストランもやってるからすぐにわかると思うよ」
「レストラン！？」
「高等部の側で」

二人は高等部のすぐ側のレストランと聞いてまた己の記憶を辿った。自分達が通っている学園ならばその周りのことは全部頭に入っている。だからこそ辿ったのである。
「色々とあるがな」
「どのお店かしら」
「森の中にあるよ」
家持はここでまた二人に話してきた。
「そのレストランはね。僕のお家もね」
「森の中」
「高等部のすぐ側で」
「そこにレストランだな」
「だとすると」
二人の頭の中でそういった断片が次々とつながっていく。それはまるでパズルケースが一つになっていくかのようであった。そうして完成されたケースは。
「あそこか」
「あそこね」
二人は同時に声を出した。
「あのレストランか」
「若狭よね」
「うん、そこ」
声だけで頷いて二人に述べる。やはりここでも表情は見せないのだった。
「そこなんだ。僕のお家は」
「あそこが御前の家だったのか」
「物凄い意外ね」
アルフレドもビアンカもこのことをはじめて知りまたしても驚きを隠せなかった。
「しかし。わかればな」
「すぐに行けるわね」

「御馳走用意してるから」
家持は静かに二人に告げた。
「けれど。お肉は」
「お肉！？」
「マチアが持って来てくれるんだよね」
そのことを言う家持だった。声をあげたアルフレドに向けた言葉である。
「そうだよね。確か」
「あ、ああ」
アルフレドは彼の言葉に少し戸惑いながらも答えた。
「そうだけれどな。肉とか一杯な」
「それでも御馳走は用意しておくよ」
それもだというのだった。
「僕のお家でもね」
「御前の家でもか」
「どんな御馳走かしら」
二人は彼の言葉からその家で出されるという御馳走について考えだした。
「何が出て来るか楽しみだな」
「そうね」
そしてまた二人で言うのだった。
「そういうことも楽しみにしてな」
こうした話をしたうえで家持の家に行くことになった。とりあえず彼の家が何処にあるのかはわかってほっとしてそのうえで行くことができたのは幸いであった。

住所不定　　完

2009·4·8

第百三十二話　意外と怪力その一

意外と怪力

皆放課後家持の家に向かう。そこは皆がいつも通っている学園のすぐ側の森の中にある。彼の話を聞いてそのうえでそのレストランに向かうのだった。

「まさかここだったなんてな」

「意外ね」

皆まだ信じられないといった顔で森の中を進む。森の中は鬱蒼としていてそのうえ森の中のあちこちから狐や狸やイタチの姿が見える。そうした森だった。

「まあとにかく若狭ならな」

「何回か行ってるの？」

「ああ」

マチアはダイアナの問いに答えた。当然ながら彼等もいる。ただしマチアはリアカーを押している。そうしながら森の中を進んでいるのだ。

「一応な」

「そうだったの」

「和食も好きだからな」

こうダイアナに答えるのだった。

「だから。何回か行っていたんだけれどな」

「管の家って気付かなかったの」

「全くな」

そうだったのだ。彼はその店が家持の家とは全く気付かなかったのだ。それで今も唖然とした顔で皆と一緒に森の中を進んでいるのだ。

「そんなの気付かなかった」

「お店の人を見ても？」

「そういえば似てるか？」
マチアはダイアナの言葉からあることを思い出したようだった。
「顔は」
「お店の人の顔？」
「ああ、あいつにな」
ここではそれは当然家持のことをさしていた。
「似てるかもな。そういえばな」
「そう。似てるの」
「そんな感じはする」
またダイアナに述べた。
「無表情でな。気付いたら側にいるしな」
「気付いたらなの」
「店に入って気付いたら横に立っていて注文を尋ねてくるんだよ」
このことをダイアナだけでなく皆にも話すのだった。
「もうな。気付いたらな」
「何かそれって管じゃない」
ダイアナは彼の言葉からそれそのものだと述べた。
「気付いたら何時の間にかって」
「考えてみればそこがそっくりなんだよな」
そしてマチアもこう言う。
「神出鬼没でな」
「それでその神出鬼没の管だけれど」
「ああ」
「御馳走用意してくれてるのよね」
ダイアナが次に言うのはこのことだった。
「そうよね。確か」
「ああ、そうらしいな」
マチアもこのことは聞いて知っていた。それでダイアナにも淀みなく答える。
「和食だから魚だろうな」

「美味しいの？」
料理を扱う店において最も重要な話であった。
「それで管のお家のお店のお料理って」
「ああ、美味いぞ」
彼はすぐにその必須条件に対して答えた。
「定食がな。かなりな」
「そうなの」
「かなりいい」
また言うのだった。
「病み付きになるってところまではいかないけれどいいな。味付けもいい感じでな」
「成程ね」
「特に味噌汁がいいな」
「あっ、お味噌汁が美味しいの」
ダイアナは味噌汁がいいと聞いて顔を一気に晴れやかなものにさせた。
「それいいわね。やっぱりお味噌汁よね」
「って御前味噌汁好きだったのかよ」
「ああしたスープ系って好きなのよ」
朗らかな顔になっての言葉だった。

第百三十二話　意外と怪力その二

「だからね。お味噌汁もね」
「そういうことか」
「そういうことよ。じゃあ期待していいわね」
笑顔でまたマチアに言ってきた。
「お味噌汁がいいのなら」
「ああ。それが好きならな」
「期待するわよ。それであんただけれど」
「今度は俺か？」
「しんどくないの？」
じっと彼の顔を見て問うてきた。
「リアカー、一人で」
「いや、別に」
しかし彼は何でもないといった顔でダイアナに言葉を返した。
「辛くとも何ともないけれどな」
「そんなに重いの持って」
ダイアナは今度はリアカーの中身を見た。そこには途方もない量の肉と野菜があった。まるで肉屋か八百屋をするかの量だった。
「大丈夫なの」
「森の中って聞いてこれにしたんだよ」
マチアはこう彼女に話してきた。
「運搬用の車じゃ森の中進みにくいだろ」
「ええ」
「だからこれにしたんだけれどな」
「それが重くないの？」
「いや、全然な」
またこう言うのであった。
「いけるんだよ、これが」

「二百キロはあるのに？」
「リアカーだといけるんだよ」
まあダイアナに言葉を返した。
「リアカーだとな」
「どうして？」
「車だからだよ。だからこうして引くだけでもな」
「いけるのね」
「そうさ。試しに持ってみるか？」
「ええ。それじゃあ」
マチアの言葉に頷き少し交代して引いてみる。すると確かに思ったよりずっと軽く引くことができたのだった。ダイアナの予想以上に。
「あっ、本当ね」
「そうだろ？便利だろ」
マチアはダイアナの横から笑って言ってきた。
「こんな簡単に引けるんだからな」
「二百キロだととても持ち運べないのに」
「けれどリアカーならいけるんだよ」
また言うのだった。
「こんなに簡単にな」
「これって凄いことじゃない」
まだ引きながら彼に言う。
「二百キロもあるのにこんなに簡単になんて」
「そうだよな。俺もこれ知ったのこっちに来てからなんだよ」
「日本に来てから？」
「それまで運搬車ばかりだったんだよ」
それまで運搬車ばかりだというのだ。そのこの時代の文明の利器ばかりと。
「けれどな。アパートの大家さんが持っててな」
「じゃあこれ大家さんの？」
「そうさ。借り物さ」

また語るのだった。
「借りさせてもらってな。それで今こうして持って来てるんだよ」
「そうだったの」
「借りれてよかったよ」
如何にも嬉しそうに語った。
「本当にな」
「おかげでこうしてなのね」
「そうさ。じゃあ後は俺が持つからな」
「ええ。じゃあ」
こんな話をしながらその家持の家の前に来た。家は如何にもといった感じの和風の店の入り口であった。筆で漢字の名前が書かれた看板が掲げられている。
「若狭」
「ここだな」
「ええ、間違いないわ」
皆で言い合う。確かにここであった。

第百三十二話　意外と怪力その三

「ここでね。それにしても」
「どうしたの？」
ダイアナがビアンカに対して尋ねた。
「それにしてもって」
「いえ。ここが管のお家だったなんてね」
ビアンカは首を捻ってダイアナのその問いに答えた。
「まさかと思ったけれど」
「思いも寄らなかったの」
「っていうかそんなこと考えたこともなかったわ」
こうダイアナに答えたのだった。
「そもそも管のお家が何処かなんてのも考えたことなかったし」
「あっ、それ僕も」
「私も」
クラスの殆どのメンバーがそうなのだった。
「っていうかあいつ何かよくわからないし」
「物凄い無口だしね」
普段は全く喋らないことでも有名なのである。
「それで気付いたらいるし」
「仕事も何時の間にかやってるし」
やはり家持はそうなのだった。何をするにしても皆が気付いたらもう、なのであった。どうにも常人とは違うものがそこにはあった。
「忍者！？っていうか」
「そんな感じじゃない？」
「忍者か」
アルフレドは皆の言葉を聞いて腕を組んで考える顔になった。
「考えて見ればそうか。日本人だしな」
「そうだよね。日本なら忍者」

「そんなイメージあるし」
やはり日本といえばこの時代も侍とこの忍者であった。どうにも拭うことのできない定着してしまったイメージであった。固定観念と言ってもいい。
「まあ忍者というには外見があれだけれど」
「大人しいっていうかね」
「けれど忍者なんだな」
アルフレドは皆の言葉を反芻するのだった。
「管は」
「少なくとも侍じゃないだろ」
彼に対してマチアが言う。
「あいつは」
「ああ。刀を持って戦うイメージはないな」
「どちらかというと手裏剣を持って投げる方が合ってるよな」
「確かにな」
マチアの話を聞きながら黒装束を着てそのうえで高く跳び手裏剣を一度に何発も投げる家持の姿を想像する。以外にも絵にはなっていた。
「外見は関係ないのか？」
「装束の覆面で隠れるだろ」
「ああ、そういえば」
またマチアに言われて頭の中の想像に対して頷くのだった。
「そうだな。隠れるな」
「だから別に構わないんだ」
「そうだな。外見はな」
「しかし。考えてみれば本当に忍者だな」
アルフレドはこうも言うのだった。
「彼はな」
「というよりは仙人か？」
マチアが今度出したのはより異質な存在だった。

「何かそんな感じしないか？」
「仙人か」
「武器より杖の方が似合いそうだしな」
「ううむ、確かに」
言われてみれば確かに、であった。
「そうだな。仙人か」
「仙人も神出鬼没だったよな」
「仙術が使えるからな」
だから仙人なのである。他にも仙人といえば不老不死である。実際にそれを為し得た人間は少なくとも公にはいないとされている。
「しかし実際管が仙術を使えても」
「違和感はないな」
「全くだ」
こんなことも話す。そうこうしながら店の中に入る。するとそこには同じ顔が三つ並んで立っていた。
「はじめまして」
「どうも」
「兄がいつも世話になっています」
出て来たのは三人の女の子だった。どの顔も屋か持ちそっくりで髪の毛は黒いおかっぱである。背も体型も何もかも同じで尚且つ草色の和服の上に白い割烹を着ているのも同じだった。

第百三十二話　意外と怪力その四

「ええと、クローン！？」
「鏡！？」
皆その三人の女の子を見てまずこんなことを考えた。
「これって」
「狐か狸が化けたとか？」
「私達は管家持の妹です」
「三つ子です」
「そうなのです」
すると三人は彼等にこう言ってきた。声も全く同じだ。
「八条学園の中等部にいます」
「二年です」
「同じクラスです」
「何か嘘みたいな話だけれどね」
「そうだよね」
皆今の三人の言葉をかなり唖然となって聞いていた。
「っていうかあいつ妹さんいたんだ」
「しかも妹さん達！？」
複数だとは流石に思わない。
「おまけに顔一緒だし」
「しかもあいつにそっくり」
三人共であった。表情がないところまでそうなのだった。
「冗談抜きで祟りか何かに思えるけれど」
「そうよね」
しかもこれだけではなかった。次に出て来たのは。
「祖父です」
「祖母です」
「父です」

「母です」
今度は四人出て来た。しかしその四人も全く同じ顔であった。おまけに髪の毛以外は老けていない。仮面を被ったように同じ顔が出て来た。姿勢まで同じである。
「・・・・・呪い!?」
「これって何かの」
皆両親はおろか祖父母まで彼と同じ顔なのでさらに唖然となった。
「妹さん達だけじゃないなんて」
「これって何なの?」
「あっ、来てくれたんだ」
ここでやっと家持が出て来たのだった。今彼等は店の中にいる。店の中は落ち着いたもので和風の机や椅子、、それにカウンターにテーブルがある。全て木造であり品書きにもなっている。
「いらっしゃい」
「いらっしゃいはいいけれど」
「これって何?」
「何って?」
家持はクラスの皆の言葉に応える。
「何かおかしなことがあったの?」
「だから。御前の家族ってよ」
「クローン!?」
「それとも御兄弟だったの?皆」
このことを彼に問うのだった。
「顔も何もかも皆同じって」
「どういうことなのよ」
「只の似た者同士だよ」
しかし家持は皆に平然とこう述べるのだった。
「只の」
「似た者同士って?」
「お爺ちゃんとお婆ちゃんもお父さんとお母さんもそうだよ」

彼は言うのだった。
「皆それだけだよ」
「それだけって」
「別におかしくないじゃない」
彼は平然と皆に述べた。
「世の中似ている人って結構いるよね」
「まあそれはね」
「確かに」
皆も今の彼の言葉にはとりあえず頷いた。
「それはそうだけれど」
「その似た者同士が結婚したんだ」
彼にとっては何でもないといった口調だった。
「ただそれだけだから」
「それだけなの？」
「うん」
やはり話している本人は至って落ち着いている。表情も相変わらずだ。
「それだけなんだ」
「それだけって」
「それで説明つかないでしょ」
皆今の家持の言葉に全く納得しなかった。それも誰もがである。

第百三十二話　意外と怪力その五

「血縁関係ないんだな」
「ないよ」
家持はアルフレドのいぶかんで仕方のない説明にもはっきりと答えた。
「お父さんもお母さんも親戚関係じゃないよ」
「お爺さんとお婆さんもよね」
「うん」
ビアンカの問いにも答える。
「そうだけれど」
「じゃあ何でこんなにそっくりさんが？」
「しかもクローンって」
「同じ惑星にそっくりの人が三人はいるっていうけれど」
かつては同じ世界にそっくりの人間が三人いると言われていた。しかし宇宙の時代になってそれが惑星単位となったのである。世界が広くなったせいだ。
「それでもこれはねえ」
「何ていうか」
「それでだけれど」
しかし家持は皆の言葉をよそに話を切り出してきた。
「御馳走だけれど」
「もう用意しています」
その全く同じ顔の母が言ってきた。聞いてみると声は家持の妹達、つまり彼女の娘達と同じ声である。流石に家持とは声は同じではなかった。
「どうぞ」
「あっ、そうなんですか」
「それはどうも」

皆この言葉には素直に頷いた。
「それじゃあ御言葉に甘えまして」
「それで」
「あとですね」
そしてマチアもまた出て来た。
「俺、食材持って来たんですけれど」
「食材ですか」
家持の父が彼の言葉に応える。声は家持のものである。何処からどう聞いても彼の声にしか聞こえないところがまた物凄かった。
「それでは台所お使いになられますね」
「ええ、よかったら」
マチアにしては珍しく丁寧な態度であった。
「御願いします」
「はい、それではどうぞ」
「こちらを」
今度は祖父と祖母であった。祖父の声は家持の、祖母の声は妹達のそれそのままだった。やはり何もかもが同じなのであった。
「お使い下さい」
「是非」
「すいません、それじゃあ」
マチアはその言葉を受けて台所に入る。その時食材を思い出して持って来ようとしたがそれは家持と妹達がもう持って来ていた。
しかしであった。マチアは彼等がその食材を持って来たのを見て思わず声をあげてしまった。
「おい」
「どうしたの？」
「どうしたものこうしたもじゃねえよ」
何か見てはいけないものを見てしまった顔でその家持に対して言うのだった。
「御前が持っているその肉な」

「うん」
冷凍肉の塊である。
「溶かしたら百キロあるんだぞ」
「凄い量だね」
「凍らしてあって水分そのままだから余計に重いぞ」
水分をそのまま凍らせているのが冷凍だからだ。従ってその重さはかなりのものとなる。これは化学の基礎の基礎の話である。

第百三十二話　意外と怪力その六

「それをそんなに軽々かよ」
「重いね、そういえば」
それを言われてもこんな調子であった。
「このお肉」
「そういえばじゃねえだろ」
マチアは顔を顰めさせた。
「そんな軽さじゃないんだぞ」
「それじゃあマチアさん」
「お野菜はここに」
「調味料も」
言っているその側から妹達が野菜や調味料を台所に入れていく。
彼はそれを見てまた言うのだった。
「それだけの野菜とかをそんなに軽々とかよ」
「食堂の娘ですから」
「これ位は」
表情を全く変えないでの言葉であった。
「鮪一匹かつぐこともありますので」
「平気です」
「鮪一匹をかよ」
マチアは今の妹達の言葉にまた絶句した。
「そんなのも扱ってるのかよ、ここは」
「うん、そうなんだ」
やはり家持の言葉は何でもないといった感じだった。
「和食だから、うち」
「和食は確かに鮪よく食うさ」
マチアもこれはわかっている。
「鮪だけじゃなくて魚全体をな」

「他には鮫一匹とか」
「鮫もかよ」
「アオザメとかシュモクザメとかね」
なおどれも人食い鮫である。この時代の連合では鮫を食べることもわりかしポピュラーになっている。メガロドンを食べる場合もある。
「それも一匹丸ごと。冷凍で」
「だから力があるっていうのかよ」
マチアは話しているうちにこう思ったのだった。
「御前も」
「子供の頃からだから」
だというのである。
「自然とね。そうなったんだ」
「そうか。何か意外だな」
マチアは彼の今の言葉を聞いて思わず唸った。
「その細い身体でな」
「如何にも力はって感じだけれどね」
ダイアナもそこを言う。
「案外そうなのね」
「みたいだな。しかし人間本当に見かけじゃ」
「わからないわね」
「ああ、全くだ」
今はこの結論に至った。とりあえずマチアの持って来た肉や魚も台所に入れられる。そのうえで今御馳走が振舞われようとしていたのだった。

意外と怪力　　完

2009.4.12

第百三十三話　好きこそもののその一

好きこそものの

マチアは早速台所に入り料理をはじめる。とりあえずは瞬間解凍機でその冷凍を溶かしていく。とりあえずはそれからであった。

その間に野菜を切っていく。隣で手伝いに来たダイアナはその包丁捌きを見て言うのだった。

「上手いじゃない」

「そうか？」

「ええ、上手いわ」

素直にこう賞賛するのだった。

「その包丁の使い方、慣れてるのね」

「いつもだからな」

マチアの返答はこうだった。

「そりゃ慣れるさ」

「そう、いつもなの」

「ああ」

答えながらその包丁をさらに動かしていく。野菜達は忽ちのうちに見事な形と大きさに切られていくのだった。実に素早くかつ丁寧にである。

「包丁はな。だから俺アパートだろ？」

「自炊してるってわけね」

「だったら自然に料理も上手くなるさ」

これが彼の意見であった。

「やってりゃ何でも上手くなるんだよ」

「それはそうだけれどね」

ダイアナもその言葉には頷く。

「けれど。それでもよ」

「それでも。何だよ」

「本当に上手いわね」
あらためて感嘆する言葉だった。
「それただの経験だけじゃないでしょ」
「経験なんだけれどな、本当に」
「あんた才能あるわよ」
「そうか？」
「ええ、あるわ」
このことを強く言うのだった。
「本当にね。そもそも包丁持って何年よ」
「十四年か？」
少し首を捻って記憶を辿ってから述べるのだった。
「それ位だな」
「年季も半端じゃないじゃない」
ダイアナはあらためてこのことを知った。
「つまり三つの頃から包丁握ってなのよね」
「まあそうなるよな」
「やっぱり凄いわ」
そしてまた言うのだった。
「あんた立派よ」
「包丁使うのがそんなに立派かよ」
「包丁使うのは楽器を使うのと同じよ」
今度はこんなことを言い出してきた。
「だからよ。それを使いこなせてるあんたは」
「立派だってのか？」
「そういうこと」
強く頷いての言葉であった。
「立派ってわけよ」
「そんなものかな」
「誰でもね。何かをしていれば立派よ」
ここでまた言葉を変えてきたのだった。

「それがいいことならね」
「いいことならか」
「そう、いいことをしている姿って奇麗なのよ」
話が少し求道的なものにもなってきたのだった。
「あんたもそうよ」
「褒めてるのか？」
「そう聞こえない？」
逆にこう返す程だった。
「言ってるつもりだけれど」
「お世辞言っても何も出ないぜ」
マチアは俯いて表情を消しながら包丁を使い続けていた。
「そんなことしてもな」
「あら、本当のこと言っただけよ」
しかしダイアナは悪びれずこう言い返してきた。
「ちゃんとね。あんたのその包丁の腕を見てね」
「じゃあそこでさらに見ているんだな」
彼はまた言ってきた。
「俺のその立派な姿ってやつをな」
「そうさせてもらうわ。さて」
ここでダイアナはまた声をあげた。

第百三十三話　好きこそもののその二

「この切った野菜とかだけれど」
「ああ」
「籠に入れとくわね」
言っている側から次々にザルに入れていく。
「あとお肉解凍できたわよ」
「よしっ、丁度いいタイミングだな」
「狙ってたの？」
ダイアナは今のマチアの言葉にくすりと笑って問うた。
「ひょっとして」
「いや、わかっていた」
だがマチアはこう答えるのだった。
「もうそろそろだってな」
「解凍の時間もだったの」
「そうさ。それでだ」
「ええ」
「野菜はまずはマッシュしてな」
そうするというのである。
「ジャガイモをメインにしたマッシュポテトに」１２
「人参とか玉葱はどうするの？」
「それは炒める」
炒めるというのだ。
「そこに茸も入れてあとはソーセージを入れてな」
「あっ、それいいわね」
要するにソーセージと野菜と茸の炒めものである。当然ソーセージもその解凍の中に入っていた。ここでも抜かりはなかったのだった。
「それでだな」

「味付けは？」
「塩に胡椒」
まずはその二つだった。
「それと唐辛子だな」
「それも？」
「そう、それもだ」
彼はそれも入れるというのだ。
「肉は辛くな」
「センスいいわねえ」
「何だ？御前もわかってるんだな」
「当たり前でしょ。だからこうして手伝えるんじゃない」
その解凍した肉を出しながらの言葉だった。
「でしょ？私だって料理はするわよ」
「そうだったのか」
マチアは今のダイアナの言葉を意外といった顔で受けた。ダイアナはその彼の顔を見てあまりいい顔をせず言い返したのだった。
「ちょっとその顔は」
「いや、本当に意外だからな」
それを実際に言うマチアだった。
「御前も料理をするんだな」
「そうじゃなきゃ何を食べろっていうのよ」
ダイアナはマチアに対して正論で返した。
「そうでしょ？さもなければコンビニとかそういうのばかり行くようになって」
「かえって高くつくな」
マチアは今のダイアナの言葉を聞いて述べた。
「それに栄養も偏るしな」
「だからよ。私だって作るわ」
そのうえでまた答えるマチアだった。
「イギリス人みたいにはならないわよ」

「ああ、あの連中か」
マチアはイギリスという国の名前を聞いて早速その顔を曇らせた。なお連合の中でイギリスといえば宿敵エウロパの国々の中でもとりわけ不人気な国家の一つである。それはフランスと並びとにかく嫌われている。過去の歴史にこれでもかと創作を叩き込んで宣伝された結果だ。
「あの連中はそれこそな」
「味が滅茶苦茶よね」
「もう相当なものらしいな」
これもかなり誇張が入って伝えられている。実際のところは。
「何でも生煮えの魚とか平気で食べるらしいな」
「そうらしいわね」
こんなデマまで普通になっている程だ。

第百三十三話　好きこそもののその三

「他にもあれでしょ？もうコシも何もないパスタとか」
「それが店に出るらしいな」
「連合でそんなの出したらお客さんと大喧嘩よね」
「確実にそうなるな」
「そうよね、本当に」
これもまた連合である。
「しかし噂には聞くけれどイギリスって」
「どれだけ料理のセンスがないんだろうな」
とにかくエウロパがけなされるのが連合である。何はともあれマチアはその中で今度は肉を切りだしていたのだった。やはりその動きも早い。
「お肉どうするの？」
「ステーキだな」
マチアは述べた。
「それを作る」
「そう、ステーキなの」
「嫌か？」
「いいえ」
ダイアナは今の問いには首を横に振って返した。
「ステーキ好きだし」
「そうか。ならいいな」
「問題はどういうステーキにするの？」
ダイアナが問題にしているのはそこだった。
「やっぱりあれ？アルゼンチン風にするの？」
「ああ、そのつもりだ」
やはりそうするつもりのマチアだった。
「それでいいか？」

「アルゼンチンねえ」
ダイアナはアルゼンチン風と聞いてその目を動かしたのだった。
「お肉をよく食べるのは聞いてるけれど」
「だったら安心できるか？」
「まあね」
一応は、という返事であった。
「少なくともイギリスよりはね」
「だから何でそこでイギリスなんだ」
「だってまずいから」
勿論ダイアナはイギリスの食べ物を食べたことはない。しかしそれでも言うのだった。
「だからなのよ」
「そうかよ。まあそれでいいけれどな」
「いいのね、それで」
「いいさ。どうせイギリスだからな」
彼はまた言った。
「連合じゃないしな。まして俺もイギリスは嫌いだしな」
「ああ、やっぱり」
「お高く止まった奴は好きじゃない」
彼はこうも言うのだった。
「それにしてもだ。御前の切り方はまた」
「何よ」
「かなり分厚いな」
顔を顰めさせてそのうえでダイアナの肉の切り方を見るのだった。
それはかなり分厚いふうに切っていてマチアも言わざるを得なかったのだ。
「っていうあんたも同じ位分厚く切ってるじゃない」
「アルゼンチン方式だ」
マチアは自分のその切り方をこう表現した。彼の肉の分厚さもダイアナのそれと変わらない。

「ワイルドかつ豪快にだ」
「そうやって食べるのね」
「そうさ。そこに特製のソースやバターをかけてな」
「それで食べるの」
「ああ。しかも焼き方はだ」
切りながら満面の笑みを浮かべて述べた。
「レアだ」
「ミディアムじゃないの」
「肉はそれで食べると一番美味いんだよ」
食べる前からもう楽しそうに笑っている。
「レアでな」
「いいわね、それがわかってるなんて」
「それじゃあ早く食べる為にな」
マチアはさらに肉を切っていく。こうして肉を瞬く間に切り終え後はその肉を次々に焼いていくのだった。肉は店の巨大な鉄板で次から次にであった。焼けたそばからその特製ソースをかけて皆に配っていくのだった。

第百三十三話　好きこそもののその四

「ほら、食えよ」
「どんどんあるわよ」
「うわ、これはまた
「凄いっていうか」
皆その分厚いステーキを見て驚きの声をあげるのだった。
「この分厚さってどうなのよ」
「アルゼンチンじゃいつもこんな分厚いステーキなのかよ」
「いいや」
マチアは皆のその問いには首を横に振って述べた。
「まさか。こんな分厚いステーキあるかよ」
「じゃあこれ何だよ」
「この者凄いステーキって」
「俺はいつもこうやって切るんだよ」
こう答えるのだった。
「肉はな。豪快かつワイルドにな」
「で、それがアルゼンチン方式っていうのね」
ビアンカがここで彼に問うのだった。
「この焼き方が」
「その通りだ。これがアルゼンチンだ」
彼も誇らしげに言う。
「わかったな。わかったらどんどん食ってくれ」
「食うのはいいがな」
アルフレドはまずはそれはいいとした。
「しかしな」
「しかし？何だよ」
「このステーキ火が通っているのか？」
彼が言うのはそのことだった。そのあまりもの分厚さを見ての言

葉である。
「中までしっかりと」
「レアだぞ」
今のアルフレドの言葉にはむっとした顔で反論した。
「レアは中まではだ」
「いや、それでもちゃんと焼けているのか？」
彼が言うのはこのことだった。
「ちゃんとな。表面は大丈夫みたいだが」
「ああ、それは安心しろ」
しかしマチアはそれは保障するのだった。そのうえでアルフレドに対して言う。
「何なら切ってみろ」
「このステーキをか」
「そうすればわかる」
こう言うのだった。
「切ればな。それで確かめてみろ」
「わかった。それではな」
マチアの言葉に従い実際に肉を切ってみる。するとちゃんと中まで火が通っていたのだった。レアではあるがレアとして健全に、である。
「むっ、これは」
「どうだ？ちゃんと焼けてるだろ」
「ああ」
その肉の焼き方を見て頷くアルフレドだった。
「間違いない。ちゃんと焼けている」
「次に食べてみろ」
マチアはさらに彼に言う。
「そのステーキな。どうだ？」
「これは」
肉を実際に食べる。するとソースと見事に絡み合い肉汁もよく生

きている。肉の濃厚な味もよく生きている。一言で美味いと言えるものであった。
「美味いな」
「そうだろ？俺の焼いた肉だからな」
マチアは誇らしげな声で言うのだった。
「まずい筈がないんだよ」
「また随分と自信があるんだな」
「アルゼンチン人は肉で生きているんだよ」
彼は断言した。
「だから美味いんだよ」
「肉でねえ」
「昔からな。特に牛肉な」
「それはうちじゃないの？」
ここでステーキを食べながら言ってきたのはレミだった。マチアが焼いたその肉とフォークとナイフで実に美味そうに食べながらの言葉だ。
「ブラジルじゃ」
「まあそっちも牛肉随分食うよな」
「そうよ。シェラスコね」
この料理が出て来たのだった。

第百三十三話　好きこそもののその五

「あれよね、やっぱり」
「あれも随分豪快な料理よね」
ダイアナもシェラスコと聞いて言うのだった。
「お肉の塊を串に刺してそれを焼くからね」
「それがまたいいのよ」
レミは誇らしげに笑ってまた肉にかぶりつく。
「あの焼き方がね。しかも量も多いし」
「そういえばあれ軍隊でも結構食うんだろ？」
マチアは肉をさらに焼きながらレミに尋ねた。
「何か肉をたっぷり食えるっていうんで評判いいらしいな」
「そうらしいわね。簡単に作れるしね」
レミはシェラスコについてこうも述べた。
「鉄の串に突き刺して後は火の中に入れるだけだから」
「焼く場所があればそれでいけるわよね」
「そういうこと。だからシェラスコはいいのよ」
レミはさらに言うのだった。
「もうね。シンプルだし」
「それでその肉をナイフで切って食っていくんだな」
マチアもその食べ方はよく知っていた。
「あれがまたいいんだよな」
「やっぱりあんたもシェラスコ食べるの」
「食わない筈もないだろ？牛肉好きだからな」
どうしても牛肉から離れないマチアであった。
「だからな。食べるさ」
「じゃあ今度一緒に食べに行く？」
レミはもうステーキを奇麗に食べ終えていた。そのうえで一緒に焼かれていた内臓を食べている。肝や心臓もそこにはあった。

「シェラスコ。どう？」
「いいな。じゃあ行くか」
「決まりね。しかしそれにしてもね」
今度は内臓を焼いたものを食べながらにこにこにことしていた。
「内臓の料理の仕方もわかってるじゃない」
「言っただろ？肉を食って生きているってな」
マチアの言葉はここでまた誇らしげなものになった。
「肉はただの赤身や脂身だけじゃないだろ」
「内臓も勿論そうね」
「脳味噌とかもな」
そういったものもだと言うのだった。
「そうだろ？全部肉なんだよ」
「鳥の皮とか豚の耳もそうだっていうのね」
「どっちも御馳走だな」
やはりマチアはそう認識していた。
「どっちも捨てる場所がないからな」
「牛もってわけなのね」
「勿論。羊も山羊もな」
マチアの話は続く。
「どれも捨てる場所なんてないさ。あるとしたら」
「あるとしたら？」
「声だけだな」
こうまで言い切ってみせた。
「牛の皮は流石に食うのは難しいけれどな」
「まあそれはね」
ダイアナも牛の皮については頷くのだった。
「あれはちょっと以上にね。無理よね」
「一応食えるらしいがな」
マチアはここで目線を上にやって述べた。
「何か食うものがなくなった時に靴を煮て食ったらしいからな」

「本当に食べられるの？それで」
「皮だからじっくりと煮て柔らかくして」
実際にその方法を述べるのだった。
「それから食ったらしいな」
「何かあまり美味しくなさそうに」
「美味かったら皆もう争って食ってるさ」
マチアの今度の言葉は素っ気無いものだったが真実であった。
「そうだろ？美味く食えるんだったらな」
「考えてみればそうね」
ダイアナも肉を焼きながら考えつつ述べた。
「それこそ皆ね」
「まあ皮は皮で役に立つしな」
今度はこんなことを言うマチアだった。
「あれはな」
「そうそう。やっぱり牛も捨てる場所がないってわけね」
「骨からスープも取れる」
それも忘れないマチアだった。
「鳥とか豚もだしな」
「お肉って本当に役に立つのね」
「立つんじゃない、立たせるんだよ」
しかしマチアはここでこう言うのだった。
「努力してな。美味いものだって努力して作るよな」
「ええ」
またマチアの言葉に頷くことになったダイアナだった。
「そういえばそうなるわね、本当に」
「料理も努力なんだよ」
マチアはこのことを力説してきた。
「音楽と同じでな」
「音楽は才能じゃないの？」
レミはまた肉を食べながらマチアの今の言葉に言い返した。

第百三十三話　好きこそもののその六

「やっぱり。それじゃないの？」
「つまり天才だけの世界だって言いたいんだな」
「ええ」
このこともはっきりと言い切るレミだった。
「だからよ。そうじゃないの？」
「じゃあ天才って何なんだよ」
マチアはさらに天才とは何かということに関しての話に移るのだった。
「何て言われてるんだよ」
「エジソンの言葉を言って欲しいのよね」
「そうさ」
また堂々と言い切ってみせたマチアであった。
「そうだよ。何て言ってるんだよ」
「九十九パーセントの努力と一パーセントの閃き」
レミも当然ながらこの言葉はよく知っていた。あまりにも有名な言葉であり知らない方がおかしい。これはこの時代でも同じであった。
「それでしょ？つまりは」
「そうさ。だから人間努力なんだよ」
あくまでこう主張するのだった。
「だから要は料理にしろ音楽にしろな」
「それはわかるわ」
レミもそのことはよくわかっていた。能天気なようでわかっていることはわかっているのだった。この辺りはかなりしっかりとしていた。
「それでもね。あれよ」
「あれって何だよ」

「その九十九パーセントの努力だけれど」
「ああ」
「まあ一パーセントはどうでもいいわ」
これはどうでもいいとしたのだった。
「こんなのは誰でもあるから」
「誰でもね。まあそうね」
ダイアナはマチアの横で彼女の今の言葉に応えて頷いた。その間も肉はしっかりと焼き続けている。マチアも同じで話を聞きながらそのうえで焼き続けているのだった。
「それはね。その通りよ」
「それでよ。大切なのはその九十九パーセントの努力だけれど」
レミはそこにかなりこだわってきた。ある意味マチア以上にだ。
「これできるのってあれじゃない。好きだからじゃない」
「好きだからか」
「そうじゃない。人間嫌いなものに対して努力なんてできないでしょ」
「そうよね。それもね」
またレミの言葉に頷くダイアナだった。
「私だって。歌うの好きだから」
「音楽のことが話に出たから言うけれどモーツァルト」
神童、ミューズの息子とまで言われた不滅の作曲家だ。その音楽的才能は有史において空前絶後とまで言われている。天才という言葉はモーツァルトの為にあるとまで言われている。
「音楽大好きだったじゃない」
「作曲しなければ苦しくなるとまで言っていたそうだな」
「それってそれだけ音楽が好きだったってことにも考えられるわよね」
レミはこう言うのだった。
「そうじゃないの？やっぱり」
「そうだな」

また頷くマチアだった。
「確かにな。そうなるな」
「私はそう思うけれどね。だからよ」
「御前の言う天才はあれだな」
また肉を焼き終えてそれを皿に乗せる。すぐにアルフレドがそれを取って食べはじめる。彼とビアンカは今は食べることに夢中であった。
「その何かが好きな奴のことを言うんだな」
「それも滅茶苦茶ね」
一応制限はあった。
「ハードルの高い。そういう人よ」
「そうか」６４
これでレミの言う天才とは何かよくわかったのだった。
「そういう奴のことを言うんだな」
「ええ。好きこそものの上手なれ」
それを古い言葉で出してきた。
「そういうことよ。あんたお料理作るの好きでしょ」
「見ればわかるよね」
「で、やっぱりお肉よね」
「その通りだ。肉を料理するのが一番楽しいな」
まさに今していることだった。話をしている間も始終肉を焼き続けている。肉を焼くジュウジュウという音とその匂いが場を完全に支配していた。
「実際にな」
「そういうことよ。だからあんたは音楽も料理も結構いけてるのよ」
「結構か」
「まっ、流石にモーツァルトとかには劣るわ」
「幾ら何でもあんなのと一緒にするな」
マチアも思わず言い返した。
「俺はあそこまではいかない」

「自分もわかってるじゃない。サッカーだったらペレね」
やはり彼も伝説の存在となっているのだ。神とまって呼ばれたのは伊達ではなかった。この時代では神格化さえされてしまっている。
「やっぱり好きだからよね。やっていれば絶対に上手くなるしね」
「特に好きならな」
「その通り。じゃあお肉は食べたし」
二枚目も奇麗に食べ終えてしまっていた。
「次は。管のお家の御馳走だけれど」
「何が出るかしら」
「そろそろ出て来るみたいだな」
丁度ここでマチアは肉を完全に焼き終えた。絶好のタイミングだった。
「それもな」
「さて、何かしら」
「多分和食でしょうけれど」
日本人がやっている和食の店だ。ならばメニューが何かはおおよそ察しがついた。これも先入観であるがそれでもあながち外れでもなかった。
「楽しみね」
「あっ、来たわよ」
ダイアナとレミがそれぞれ声をあげた。
「そのメニューが」
「いよいよね」
こうしてそのメニューが運ばれてきた。こうして家持の家の御馳走も持って来られたのであった。

好きこそものの　　完

2009·4·17

第百三十四話　豪快な和食その一

豪快な和食

皆の前に出された家持の家の御馳走。それは。
「なっ・・・・・・」1
「これって・・・・・・」
皆それを見てまずは絶句だった。
「鮪一尾丸ごと!?」
「しかもかなり大きな鮪だな」
「色々考えたけれどこれにしたんだ」
家持はその鮪の側に立って相変わらず表情のない顔で皆に述べるのだった。
「鮪にね」
「じゃあこれってお刺身?」
「やっぱりそれ?」
「うん」
やはり何でもないといったような返答だった。
「それだよ。もう切ってあるから」
「そうか。鮪のお刺身か」
「また凄い大きさの鮪だけれど」
見れば十メートルはある。当然部屋に一杯である。皆そのとてつもなく巨大な鮪を取り囲んでそのうえで食べようとしているのである。
「これ何処の鮪?」
「こんな大きな鮪って」
「確かフェニキアだったかな」
「私の国じゃない」
フェニキアと聞いたエイミーがそれを聞いて声をあげた。
「そういえばティルス星系で物凄く大きな鮪が採れてそれが特産品

になってたわね」
「それがこの鮪なんだ」
また語る家持だった。
「十メートルのね。オオマグロっていうんだけれど」
「オオマグロねえ」
「確かに物凄い大きさ」
皆その鮪を見てあらためて言う。
「目だけでもね」
「何十センチあるのよ」
見れば目も相当な大きさであった。優にサッカーボールを超えていた。
「それで管よ」
カムイがここで家持に問うてきた。
「刺身だよな」
「うん、そうだよ」
「じゃあ頭とかは使わないのか？」
彼が問うのはこのことだった。
「頭はよ。どうするんだ？」
「それは心配しないで」
すぐにカムイの問いに答えてきた。
「もう決めてあるから」
「決めてあるの」
「うん、カブト煮にするよ」
今度はエイミーの問いに答えるのだった。
「それでどうかな」
「おお、いいなそれ」
カムイはカブト煮と聞いてすぐに顔を綻ばせてきた。
「あれも美味いんだよな、かなり」
「身体にもいいしね」
エイミーもかなり乗り気の顔を見せてきていた。

「特に目のところがね」
「らしいな。美味いし身体にもいいし」
「そうそう」
「お酒も用意してあるから」
またぽつりと言う家持だった。
「楽しみにしていて。本当にね」
「おうよ、それじゃあな」
「カブト煮もね。期待させてもらうわ」
「お醤油と山葵と」
「早速食うか」
皆早速この巨大な鮪の刺身を食べはじめた。ステーキを食べたばかりだというのにまだ食べる。やはり若いだけあって皆かんりの健啖家であった。
とりわけポルフィは凄かった。その大食ぶりをここでも遺憾なく発揮している。
「やっぱりあれだよね。お魚っていいよね」
「あんたさっきはお肉がいいって言ってなかった？」
ダイアナがそのポルフィに対して突っ込みを入れる。
「確か言ってたわよね」
「そういえばそうかな」
もうそのことは都合よく忘れているようである。

第百三十四話　豪快な和食その二

「まあいいじゃない。美味しいし」
「そうだけれどね。それにしてもこのお酒も」
ダイアナは刺身を食べながら酒も飲んでいた。澄み切った水のような酒である。
「いいわね。日本酒よね」
「そうだよ。お米で作ったお酒」
また家持が説明してきた。
「それだけれど。どう？」
「いいわね。あまり日本酒って飲んだことなかったけれど」
ダイアナはガラスのコップの中のその日本酒を飲みながらまた述べる。
「飲みやすいし」
「だよな。特にこの酒はな」
カムイもぐびぐびとやっている。
「日本人って羨ましいぜ、いつもこんなもんが食えるんだからな」
「ってあんた」
「アイヌ人じゃない」
今の言葉は皆から速攻で突っ込まれるものだった。
「兄弟国家じゃない」
「いつも食べてるんじゃないの？アイヌも」
「そういやそうか」
言われて思い出したような顔になって述べるカムイだった。
「アイヌも和食多いしな」
「琉球と同じでかつては同じ国だったんでしょ」
「確かそうよね」
「北海道ってところにいたんだよ」
話はかつての地球にいた頃のことにも及ぶ。

「その時代にな、日本の文化が滅茶苦茶に入ってきてな」
「琉球と同じだな」
ダンも横で話を聞いて言った。
「日本になってな。それで日本の文化がな」
「長い間日本人だったんだよな」
かなり遠い昔の話である。この時代では。
「仏教徒や天理教ともその時代にかなり増えたしな」
「こっちもだ」
こうした事情はアイヌも琉球も同じであったのだ。日本の歴史の一幕である。
「よくアイヌの文化なくならなかったね」
「琉球の文化も」
「日本人書き残しておいてくれたんだよ」
「こっちもだ」
二人は皆の問いに答えた。何処かの民族と同じ国家にいることになれば多数派の民族の文化に吸収されてしまうことが多いのだ。それは歴史でよくあることだ。
「だから独立した時にな。その文献使ってな」
「文化を復活させた」
「あっ、それって滅茶苦茶羨ましいわ」
「私も」
二人の今の言葉を聞いたエイミーとビアンカが言った。
「うちなんてフェニキアよ」
「こっちはアッシリア」
どちらも古の民族の復活国家である。連合の特徴としてヒッタイトなりシュメールなりカルタゴなりアルムなりそうしたかつての民族の国家も存在しているのだ。その民族の末裔と主張して建国を言いそれが中央政府に認められればそれで話は決まる。それでなるのだ。
「もうね。文献なんて殆ど残ってないし」

「残っていても現代には全然使えないし」
流石に楔形文字はこの時代では使えない。粘土板もだ。
「だからそういう文化を復活できるのってね」
「羨ましいわよ、本当に」
「そういうものか」
「そうなんだな」
カムイにもダンにもそれは実感のないことであったらしい。
「何かそれ考えたら俺達って運がいいんだな」
「日本の統治ではそれなりのこともあったみたいだがな」
「そんなのエウロパの奴等に比べたらましだろ？」
「っていうか天国と地獄位の差があるだろ」
帝国主義時代の欧州の行いはまさに悪として描かれているのが連合である。ここには一切の妥協がなくエウロパへの反感を育む土壌ともなっている。
「まあそうだよな」
「俺達は少なくともここにいる」
二人はまた言った。

第百三十四話　豪快な和食その三

「こんな美味い和食食ってな」
「それが何よりの証拠か」
「まあアイヌとか琉球の食べ物もいいけれどね」
「私琉球料理好きよ」
エイミーはにこりと笑ってダンに告げた。
「特にそーきそばがね」
「あれは琉球じゃうどんやそばみたいなものだ」
まさにそういうものだというのだ。
「それかラーメンだな」
「それだけよく食べるってことね」
「そうだな。ここでも普通に食べているしな」
八条学園の中にも琉球料理の店はあるのである。ダンはそこによく通っているのだ。
「美味いしな」
「こっちはラーメンだな」
カムイも言った。
「こってりとしたな。アイヌはラーメンだよ」
「ってラーメンって中国のじゃないの？」
「ねえ」
皆アイヌ名物がラーメンと聞いてすぐにこう言い合った。
「ラーメンっていうんならね」
「そっちじゃないの？」
「あれ中国のラーメンじゃないから」
横からその中国人の蝉玉が言ってきた。彼女はスターリングの横で刺身と日本酒を楽しんでいた。その顔がほんのりと赤くなっているのが可愛らしい。
「中国のラーメンはああしたのじゃないのよ」

「あれ、そうだったの」
「違うの」
「違うわよ」
また言う蝉玉だった。
「確かに中国にもラーメンあるけれど」
「そうよね」
「っていうか源流じゃないの？」
「源流は源流よ。けれど日本のラーメンって」
ここで少し難しい顔になる蝉玉だった。
「もうね。何か全然違うから」
「そんなになの」
「あれはもう和食よ」
そしてこう言うのだった。
「アメリカのラーメンもね。あれはアメリカ料理よ」
「そうだったんだ」
横でスターリングが驚いたような顔になっていた。
「あれ中華料理じゃなかったんだ」
「違うのよ、あれは」
こう自分の彼氏に対しても語るのだった。
「どうもね。まずフライドチキン上に乗ってるじゃない」
「うん」
「それがまず違うのよ」
少し眉を顰めさせたうえでの言葉だった。
「それにダシの取り方も違うし」
「それもなんだ」
「麺もね。中国のやり方じゃないわ」
「そこまで違ってたんだ」
「もう完全にね。日本のラーメンだってあれじゃない。お魚でスープ取るのがあるじゃない」
そうしたラーメンはこの時代にもあるのだった。

「あれはもう完全に中国のラーメンじゃないわ」
「じゃあアイヌのラーメンもかよ」
「そうよ、完全にアイヌ料理よ」
蝉玉は強い言葉で主張するのだった。
「どう見てもどう食べてもね。アイヌ料理よ」
「そうか。じゃあ俺の国の名物って考えていいんだな」
「誇り持っていいと思うわよ」
蝉玉はこうまで言うのだった。言いながらその鮪の刺身を食べ続けている。
「そもそもこのお刺身だってね」
「ああ、そうだったね」
スターリングは恋人の言葉からあることに気付いて明るい顔になった。

第百三十四話　豪快な和食その四

「元々中国の料理だったね」
「そうよ。古代ローマにもあったらしいけれど」
ローマのところでは顔を顰めさせる蝉玉であった。
「中国にもあったのよ」
「それで日本のお刺身はそこから来たんだよね」
「そうなのよ。けれどもう完全に和食じゃない」
「うん」
また蝉玉の言葉に頷くスターリングだった。
「日本のお刺身でね。中国のお刺身とは別になってるわよ」
「だからこれは和食なんだな」
「ええ」
またカムイの問いに対して答える。
「あんたの国のラーメンと同じでね」
「納得したぜ。じゃあ俺も祖国の料理に胸を張れるな」
「自分の国の料理に胸を張れない人はそれだけで不幸になってるのよ」
こんなことも言う蝉玉であった。
「もうそれだけでね」
「そうだね。やっぱり自分の国の料理には胸を張りたいよね」
スターリングもそれには同意だった。
「僕だってハンバーガーやフライドチキンには胸を張れるし」
「そういうこと。それにしてもこのお刺身って」
相変わらず刺身を食べ続けている蝉玉であった。
「美味しいわね。お醤油もいいわね」
「大豆のお醤油だよ」
横から家持が言ってきた。
「日本の大豆のお醤油だよ」

「成程、それなの」
「日本のお醤油なんだ」
「うん、しょっつるも考えたけれど」
家持は今度は変わった名前を出してきた。
「けれどこれにしたんだ」
「しょっつる？」
「しょっつるって何？」
ところが皆はしょっつると聞いても首を傾げるばかりだった。どうやら皆よく知らないらしい。
「聞いたことないけれど」
「何かの調味料？」
話の流れからそれはわかるのだった。しかしわかるのはそれだけだった。皆しょっつると聞いても何が何なのかさっぱりわからないのであった。
「しょっつるはね」
しかしここで家持と同じ日本人である彰子が皆に対して説明をはじめた。もう一人の日本人である七海は今はお刺身を食べるのに必死であった。
「あれなのよ。お魚から作ったお醤油なのよ」
「じゃああれか」
それを聞いたタイ人のフックがすぐに応えてきた。
「ナムプラーと一緒か」
「そう。一緒よ」
フックのその問いに答える形になっていた。
「それと同じなのよ。要するに」
「ああ、それなら」
「わかるよな」
「ええ」
皆ナムプラーと聞けばわかったのだった。それは連合においてはかなり知られた調味料である。醤油の一種としてだ。もっともこの

時代では醤油といえば日本風に大豆から作るものと考えられている。そちらの方がメジャーにはなっているのもまた事実なのである。

「それならね」

「成程、ナムプラーか」

「あれはあれで独特の味があるから」

また皆に答える家持だった。

「考えたんだけれどオーソドックスにって考えて」

「それでお醤油なのね」

「じっくりと寝かせた特別のお醤油だよ」

こうも皆に話すのだった。

「だからさ。美味しい筈だよ」

「確かにね」

「鮪だけじゃなくてこのお醤油もいいわね」

「山葵もね」

やはり刺身に山葵は欠かせなかった。これはまさに和食の為にあると言ってもいい香辛料だ。ここでも当然のように使われているのである。

「これも日本の山葵？」

「うん」

また皆の問いにこくりと頷く家持だった。

第百三十四話　豪快な和食その五

「そうなんだ。この山葵もね」
「美味いな、この山葵も」
「ええ」
皆ここでまた頷き合うのだった。そのうえでまた話をする。
「山葵も日本ってわけか」
「凄い辛さだけれど一瞬だし」
それこそまさに山葵なのである。
「お刺身にはこれよね」
「そうだよな」
「山葵だけれどね」
家持はふと言葉を出してきた。
「特別に注文しているんだ」
「特別に？」
「うん、知り合いの農家の人にね」
こう言うのである。
「注文しているんだ」
「あれっ、山葵って農家で作るの？」
「そうだったの」
「そうなんだ。山葵は山で作るものなんだ」
皆知らなかった衝撃の事実であった。何故かそれを知らなかったのである。
「山でね。作られるんだよ」
「それも農家でだったんだ」
「嘘みたい」
「嘘じゃないよ」
ここでもそのおつりとした口調は健在だった。
「結構栽培が難しいんだ」

「胡椒もそうだったけれど」
「唐辛子もね。どっちも農家の人が作るよね」
このことを思い出す彼等だった。山葵もまた香辛料なのでそれがわかるのだった。
「だったら同じか」
「そうなるわよね」
「そうだよ」
また言う家持だった。
「だから山葵もね」
「成程、そうだったの」
「けれど香辛料なら」
また言う彼等だった。
「普通にお店で手に入るじゃない」
「ねえ」
「そうだよね」
皆香辛料にはあまり深く考えていないようである。少なくとも家持の家がどうして特別に頼んでいるのかどうか全くわからないのだった。
「特別に注文するって」
「そんなに山葵って大事なの？」
「山葵とお醤油はね」
また醤油も話に出してきたのだった。
「特別だから」
「特別なの？」
「和食にはね」
彼は言うのだった。
「その二つが不可欠なんだよ」
「だからわざわざ特別に注文しているの」
「そうなんだ」
また答える彼だった。

「お醤油と山葵がないともう和食は駄目だから」
「その二つなの」
「今お刺身に使ってる」
「うん、この二つ」
家持の言葉は続く。
「この二つだからね。この二つはだから何があってもね」
「特別にってわけか」
「何かそういうの考えたら」
皆自分の皿の中にあるそれぞれの醤油と山葵を見た。見ずにはいられなかった。家持の話をここまで聞けば。
「お刺身って簡単じゃないんだ」
「そうね」
皆このことも知るのだった。
「生のお魚切って食べるだけらしいけれど」
「それだけじゃないの」
「うん、それだけだとね」
家持もまた言う。
「それだけじゃないんだ。切るだけじゃね」
「お醤油と山葵がないとなのね」
「それでなの」
「その二つがないと駄目なのね」
また言い合う彼等だった。

第百三十四話　豪快な和食その六

「それ考えたら難しいんだ」
「お刺身も」
「うん。だから皆是非食べて」
ここまで話したうえでまた彼等に告げた。
「お醤油と山葵もね」
「それでそれが終わったらだけれど」
「何？」
今度は皆から彼に言うのだった。
「やっぱりあれ？頭は」
「うん、もうすぐ出来るよ」
カブト煮についてもであった。
「それももうすぐね」
「鮪のカブト煮ねえ」
「何かそれ食べるのもはじめてだけれど」
「これもね」
それについても話すのだった。やはり和食はかなり深いようである。
「これもお醤油使ってるんだ」
「やっぱりそれもなのね」
「あとみりんと生姜」
それもだというのである。
「だから匂いもきつくないし食べやすいと思うよ」
「けれどこれはね」
しかしビアンカはここで苦笑いを見せるのだった。
「あんまりにも。何ていうか」
「どうしたの？」
「豪快過ぎない？」

その苦笑いで家持にも言うのである。
「もうね。何ていうかね」
「豪快なのが売りだから」
しかし家持はあくまでこう言うのだった。
「カブト煮っていうのは」
「カブト煮ってそういうものなの」
話を聞いてもまだ納得のいかないところのあるビカンカだった。
「豪快なのも」
「見た目も大事だから」
家持はまた話してきた。
「だからだよ。もう豪快にね」
「つまりあれだな」
マチアは家持のこれまでの話を聞いてそのうえで述べるのだった。
「目でも楽しむ。そうだよな」
「うん」
相変わらず無表情であるがマチアの言葉に頷く家持だった。
「そうなんだ。和食はね」
「そうそう、お料理って見た目も大事なのよね」
「だよな」
皆このことにも気付くのだった。気付いたうえでそのうえであらためてその鮪のカブト煮を見るのだった。見事な大きさの鮪の頭であった。
「それはな」
「それで管」
「何？」
「そのこれだけれど」
言うまでもなくカブト煮のことである。
「そのままお箸に取って食べるのよね」
「それでそれぞれのお皿に取って」
「うん、そうなんだ」

言葉に表情がないのも同じだった。
「そうやって食べて。よかったら生姜も」
「生姜もかよ」
「生姜は身体にいいから」
彼は生姜についても話すのだった。
「是非食べて。ただの調味料じゃないから」
「ああ、そうだよな」
マチアは彼の今の言葉にまた笑顔で頷くのだった。
「生姜は身体にいいからな」
「この鮪のカブト煮自体がそうだけれどね」
また述べる家持だった。
「それも考えて使ってるんだ」
「成程、ただ味をよくする為だけじゃない」
「そこまで考えて作ってるのね」
「だから是非食べて」
家持のその感情が見られない言葉が続く。
「皆でね。是非」
「了解ってね」
「じゃあ」
皆彼の言葉をまた受けてそのうえで食べようとする。そうして既に用意してあったその取り箸で鮪の肉を取っていきそのうえで食べる。食べてみると。

第百三十四話　豪快な和食その七

「お刺身と違って」
「これも中々っていうかかなり」
「いけるわね」
「鮪はお刺身にしたりお寿司にしたりするだけじゃないんだ」
家持もそのカブト煮を食べながら皆に述べるのだった。見れば痩せたその身体からは想像もできない程によく食べている。健啖家と言ってもいい。
「こうしてカブト煮にしたり」
「他にもあるんだ」
「あとステーキにしたり」
「ステーキかよ」
ステーキと聞いて思わず声をあげたのはそのステーキをさっきまで延々と焼き続けていたマチアである。
「魚のステーキかよ」
「うん、あるんだ」
彼の少し驚いた言葉にストレートに返す家持だった。
「それもね」
「そうだったのかよ。魚でもステーキできるのかよ」
「しかしな」
驚く彼にアルフレドが言ってきた。
「鯨のステーキもあれば」
「ああ」
「ステラーカイギュウのステーキもある」
連合ではこうしたものも食べられているのだ。シーフードの一種として考えられているのである。
「だからだ。魚のステーキもだ」
「考えてみれば普通かよ」

「結局は鯨のそれと同じだ」
そしてこうも話すアルフレドだった。
「それはな」
「考えてみればそうか」
「それにこのカブト煮はね」
家持の皆への話は続いていた。
「目も食べられるんだ」
「目も！？」
「うん、目も」
また述べる家持だった。
「目もね。食べられるよ」
「まさか。そんな筈が」
「あるっていうの？」
「そもそも魚の目なんて」
ダンがここでいぶかしむ顔と声になって言うのだった。
「それはあれだろ。妖怪の取り分じゃないのか？」
「妖怪！？」
「何で！？」
皆ダンの今の言葉にも首を捻るのだった。いきなりここで妖怪という存在が話に出るとは思わなかったからまさに狐につままれたような顔になるのだった。
「何でここで妖怪が出て来るのよ」
「話がわからないんだけれど」
「ああ、俺の国だけれどな」
ダンは次には自分の国の話をはじめた。言うまでもなく琉球王国である。日本から分かれた国家の一つでありかつての琉球王家の子孫を国王としている。かつて沖縄県だったことと琉球王家はかつて日本の皇室の一員だったことから今でも日本とは極めて絆が強い。アイヌ連邦と並んで日本の兄弟国家である。
「キジムナーって妖怪がいてな」

「キジムナー！？」
「何それ」
皆キジムナーと聞いてもわからなかった。
「はじめて聞くけれど」
「琉球の妖怪よね」
「ああ。琉球のな」
また答えるダンだった。
「ガジュマルの木に住んでいて日本で言うなら河童みたいなものだな」
「河童なんだ」
家持はそれを聞いてぽつりと述べた。
「別に胡瓜とかは食べないんだ」
「胡瓜のかわりがそれなんだよ」
魚の目ということだった。
「魚の目が好きなんだよ」
「変わってるわね、それって」
「魚の目が好きなんて」
「だから琉球じゃ魚の目は食べない」
ダンはまた言った。
「キジムナーの好物だからな」
「そういうことだったのかよ」
「成程ね」
「だからこの鮪にしろ」
また鮪を見るダンだった。特にその大きな目を見ている。
「目を食うなんてな。まさかと思うが」
「美味しいよ」
家持の言葉はキジムナーと聞いても変わらない。

第百三十四話　豪快な和食その八

「とてもね。だから食べて」
「目もよね」
「二つしかないから早く食べた方がいいよ」
感情のない言葉だが誘いは続く。
「早いうちにね」
「ってどうする？」
「どうするって」
皆彼の言葉を聞いてまたそれぞれ顔を見合わせる。顔を見合わせながらそのうえで考える顔になりそのうえでまた言い合うのだった。
「お魚の目なんて」
「食べないからね」
「そうよ。鮪のも」
「日本じゃ食べるから」
しかし家持の言葉は変わらない。
「だからいいよ。さあ、食べて」
「あっ、じゃあ私もらうわ」
「私も」
遂に誰かが出て来た。見ればそれは彰子と七海だった。その日本人の二人だ。
「家持君、もらっていいのよね」
「鮪の目。もらうわね」
「うん、どうぞ」
二人に頼まれて静かに頷く家持だった。
「味わって食べてね」
「ええ。それじゃあ」
「有り難く」
二人はにこにことしてその鮪の目を取り出すのだった。皿に取る

とその大きさがさらにわかる。二人はその目を笑顔で箸に取り食べはじめたのだった。
皆その二人を少し唖然としながら見て。そのうえで尋ねるのだった。
「それで美味しいの？」
「魚の目って」
「ええ、とても」
「美味しいわ」
こう答える皆に答える二人だった。
「皆も食べればよかったのに」
「こんな美味しいのってそうそうないわよ」
満面の笑顔で皆にまた答える。
「折角だったのにね」
「勿体ないわよね」
「そうそう」
「本当に美味いみたいだな」
ダンは笑顔で食べ続ける二人を見て呟いた。
「鮪の目は」
「じゃあ今度食べてみる？」
「いや」
しかしそれでも家持の誘いには乗らなかった。
「やっぱりそれはいい」
「キジムナーの食べ物だからなんだね」
「キジムナーに悪い」
そしてこうも言うのだった。
「キジムナーに悪いって」
「何かおかしいよね」
「だよな」
「ちょっとな」
皆今のダンの言葉にそれぞれ言い合いだした。

「妖怪なのに悪いって」
「どういうことよ」
「妖怪がそんなに悪いか？」
しかしダンの方でもいぶかしむ顔になって彼等に言い返すのだった。
「そんなに。悪いのか？」
「だって妖怪じゃない」
「ねえ」
「そうだよ」
皆はここでまた言い合うのだった。どうしてもダンの言葉がわからないといった感じだった。
「妖怪なのに」
「何で気を使うのよ」
「そもそも実在するの？」
「実在する」
彼は断言さえするのだった。このことに関して。
「それは間違いない」
「妖怪の実在？」
「いや、これって」
「考えてみれば不思議じゃないか」
「そうよね」
皆ドードーの騒ぎを思い出したのだ。あの魔界の鏡の時のことをだ。その時のことを思い出してそのうえで納得して頷いていた。

第百三十四話　豪快な和食その九

「ああしたこともあったし」
「それにセーラも」
彼女の存在もあった。
「よく考えたらそうか」
「そうね。妖怪の存在自体はね」
「妖怪なんてしょっちゅう見るよ」
家持の言葉はここでも何とでもないといった調子であった。
「本当にね。あちこちにいるじゃない」
「あちこちにいるのかよ」
「そんなにいるのか？」
「街を歩けば猫がいるよね」
まずは猫のことを話す家持だった。
「猫が」
「猫がどうかしたの？」
「よく見ていればわかると思うけれど」
また言う家持だった。
「時々尻尾が二本ある猫いるから」
「尻尾が二本？っていうと」
「猫又？」
彰子と七海が今の彼の言葉からこの名前を口に出した。
「確かそうだったかしら」
「長生きした猫がなる妖怪よね」
「それが時々いるから」
こう皆に話すのである。
「あと長靴を履いた猫とかね」
「ああ、ケット＝シーね」
スターリングがその長靴を履いた猫に反応してきた。

「あれもいるんだ」
「時々ね、これも」
また話す家持だった。
「いるよ。だからうちの学校にもガジュマルの木がある場所がある
じゃない」
「ああ、あそこか」
ダンは家持の話からそこが何処なのかすぐに察した。
「あそこなんだな」
「そう、あそこ」
また言う家持だった。
「あそこにあるから」
「そこにキジムナーもいるのか」
「何か話が余計に複雑になってない？」
「っていう御馳走から変な方向に話がいってない？」
「そうだよね」
とりあえず話が別の方向にいっているのは間違いなかった。
「一回見てみるか」
そして皆をよそにこんなことを言い出すダンだった。
「あのガジュマルのところにな」
「キジムナーがいるっていうのね」
「ああ、そうだ」
また皆に答えるダンだった。
「そこにな」
「じゃあ行ってみるといいよ」
家持もそれを薦めてきた。
「是非ね。興味があったら」
「ちょっと管」
「それは駄目だよ」
皆怪訝な顔で今の彼の言葉を止めるのだった。
「妖怪じゃない」

「そんなところに行けばいいなんて」
「大丈夫だよ」
しかし家持はその皆に対してここでも平然と述べるのだった。
「心配いらないから」
「心配無用ってこと？」
「妖怪は優しいよ」
今度はこんなことを言い出してきた。
「とてもね。だって自然と同じだから」
「自然と同じって」
「今僕達は自然と一緒でもあるから」
かつての文明とはここが違っていた。この時代の文明は自然と同化している一面もあるのだ。破壊もしているが同化もしている、連合はそうした一見相反する二面性の中にあるのである。
「だからね」
「妖怪も怖くないっていうのね」
「妖怪は自然の象徴なんだよ」
「えっ！？」
「そうなのか！？」
皆今の家持の言葉にも唖然だった。
「妖怪が自然の象徴！？」６
「どういうこと！？それって」
「妖怪は簡単に言えば妖精と同じなんだよ」
彼はまた言ってきた。
「妖精とね。同じなんだよ」
「そうなのかしら」
「さあ」
これもまた彼等にとっては意味不明な話であった。

第百三十四話　豪快な和食その十

「何処がどう同じなのかしら」
「そうよね」
「さっぱりわからないけれど」
「妖精って可愛いだけじゃないよ」
家持はいぶかしむ皆にまた話すのだった。
「可愛いだけじゃなくて。悪質な悪戯もするし」
「悪質な悪戯っていったらそれこそ妖怪の」
「十八番だけれど」
時には悪戯では済まないレベルの話もある。河童が行うとされている尻小玉を抜くという話もだ。これは実際には水死体が自然に肛門が開くだけなのであるがそう言われていたのだ。
「それと一緒っていうの？」
「悪戯も」
「そうなんだ。実際には妖怪と妖精の差って殆どないよ」
「何か違和感あるけれど」
「同じっていうのは」
そう言われてもすぐには納得できない一同だった。
「じゃあ座敷わらしとブラウニーが一緒とか？」
「そうなるわよね、その話だと」
「そうだよ」
何とその通りだと断言する家持だった。
「同じような存在なのは事実だよ」
「何でなの、それって」
ビアンカがもういい加減何が何なのかわからないといった顔で彼に問うた。
「全然違うじゃない」
「どちらも家の人達に幸福をもたらせてくれるじゃない」

家持はビアンカの今の問いにこう答えるのだった。
「だからね」
「だから同じだっていうの？」
「そういうことなんだ」
また頷いてみせて答える家持だった。
「だからね。同じなんだよ」
「そういうものなのかしら」
「そうみたいね」
ビアンカだけでなくレミは釈然とはしない顔だったが頷いていた。
「言われてみればまあ同じかしらね」
「ううん、じゃあ座敷わらしも妖精になるのかしら」
「なりますね」
ここで答えたのはセーラだった。
「管さんのお話ですと」
「そうだな。確かにな」
そして今度頷いたのはダンだった。
「妖怪と妖精は同じものだ」
「わかってくれたんだね」
「何となくだがな」
納得した顔ではなかったがそれでも家持の言葉にも頷くダンだった。
「わかった。成程な」
「だから気をつける必要はあるけれど怖がる必要はないんだ」
「琉球の人間はキジムナーを怖がったりはしない」
ダンはここではくすりと微笑む顔になっていた。
「ずっと昔からの友達だからな」
「お友達！？」
「ずっと一緒に暮らしてきているからな」
皆にもこう答えるダンだった。
「友達になる」

「河童と同じなのね」
彼の今の言葉を聞いて彰子はぽつりと言った。
「それじゃあ」
「あっ、そうね」
七海も彰子の今の言葉には頷いた。
「それだったらね」
「ええ、そうよね」
「なるわ、本当にね」
「河童か。そうだな」
そしてダンもまた二人の言葉に頷くのだった。
「言われてみれば似てるな。キジムナーも水辺によく現われるしな」
「そのキジムナーの細かいところはわからないけれどそうよね」
「そうなるわよね」
「そうだな。何か話を聞いていると面白いな」
ダンは話をしているうちにさらに笑みを明るくさせるのだった。
「そういうものか。キジムナーもな」
「それでガジュマルのところに行くんだよね」
「ああ」
もうそれは決めているのだった。
「明日にな」
「安心していいけれど気をつけてね」
またこう告げる家持だった。
「くれぐれもね」
「ああ、わかった」
パーティーの中でそんな話をするのだった。そしてその次の日。
ダンは実際にその学園ないのガジュマルの木のところに向かうのであった。

豪華な和食　　完

2009・4・25

第百三十五話　ガジュマルの木へその一

ガジュマルの木へ

ガジュマルの木に向かうダン。しかしそれは彼一人ではなかった。
「御前も来るのか」
「駄目かしら」
ナンであった。にこりと笑って彼に尋ねてきた。
「一緒に行ったら」
「別に駄目じゃないけれどな」
ダンはそれはいいというのだった。しかしであった。
「けれどな」
「けれど？」
「キジムナーが見たいのかよ」
「ええ」
また彼の問いに答えてきた。
「そうなの。やっぱり興味があってね」
「変わってるな、御前も」
そんなナンの言葉を聞いて述べる。
「妖怪なんて見たいなんてな」
「自分でもそう思ってるけれどね」
また笑って答えるナンだった。
「それでもね。興味があったら見ないと気が済まないのよ」
「気がかよ」
「そういうこと。何でもね」
こうも言うのだった。
「見ないと気が済まないのよ」
「それモンゴルでもか」
「モンゴルだと馬で何処でも行けるから」
まさに何処までもである。モンゴルの保有している惑星はどれも

草原が広がっている。皆そこを馬で移動しているのは昔からである。
「だからね。少し興味があったらもう」
「それで今もか」
「そういうこと。だから来たのよ」
そういうことにしているようである。
「嫌なら別にいいけれど？」
「いいさ」
しかし彼は言うのだった。
「来たいっていうんならな」
「来る者は拒まずってことね」
「ああ」
またナンの言葉に頷いてみせる。
「そうさ。それが俺のポリシーだからな」
「じゃあ行きましょう」
むしろナンの方が急かしてきていた。
「そのガジュマルのところにね」
「こっちだ」
左手の方を指差すのだった。
「こっちの湖のところにある」
「そっちだったの」
話を聞いてはじめて知るといった感じの今のナンの言葉だった。
「そっちの方だったの」
「知らなかったのかよ」
「全然ね」
今度は首を捻っていた。
「この辺りも行ったことがあったけれど」
「行ったことあったのに何で知らなかったの？」
「ガジュマルに興味持ったことなかったかしら」
こうも言うのだった。
「だから別にね」

「まあ草原だとそんな大きな木もないか」
「あるのはもう草ばかりよ」
だから草原なのである。
「見渡す限りのね」
「木の区別もあまりつかないみたいだな。それじゃあ」
「まああれよ」
ここでまたダンに言ってきた。
「針葉樹と広葉樹の違いはわかるわ」
「それはわかるのかよ」
「あとツンドラとジャングルの違いも」
それもわかるというのだった。
「けれどね。ガジュマルなんて言われてもちょっと」
「モンゴルだったら仕方ないな」
今度はこんなことも言うのだった。

第百三十五話　ガジュマルの木へその二

「それもな」
「木がないからなのね」
「それだとわからないだろ」
彼はまた言った。
「どれがどの木なんて。草原だったら」
「草の違いはわかるわ」
それはわかるナンだった。
「もうね。どれがどれか一目見ただけで」
「野原の花とかもか」
「食べられるかどうかもわかるわよ」
それもなのだった。
「何から何までね」
「いや、草は食べないだろ？」
今のナンの言葉には目を少し顰めさせて否定形であった。
「人間は。幾ら何でも」
「食べるのは羊よ」
「そうだよな。やっぱりな」
流石に今は納得することしきりであった。
「人間は草なんて食わないよな」
「モンゴル民族の主食はお肉と乳製品」
これは昔から変わらない。
「それだけれど？」
「確か酒もそこからか」
「ええ、馬乳酒」
やはりこれであった。
「それ前にも飲んだじゃない」
「住んでいるのがあのゲルでか」

「全部わかってるじゃない。まあ私のゲルに来たことあるから知ってもらってて当然だけれど」
アンはダンの話に応えながら述べた。８
「それもね」
「そうだよな。モンゴルもモンゴルで結構あるんだな」
「何もなくて単純な生活と思ってた？」
「羊追ってるだけだと思っていたな」
実際彼もナンと知り合いになるまではそう思っているのだった。
「モンゴルの平原でな」
「それが違うのよね」
ナンはにこにこしながら語るのだった。
「モンゴルも結構色々あるのよ」
「草原での暮らしもか」
「そういうこと。冬には冬の、夏には夏の」
草原にも季節があるのだった。
「暮らしがあるしね。冬なんか長いし吹雪は物凄いし大変なのよ」
「そんなにか？」
「そんなによ。だってあれよ」
自分の故郷であるその草原の話をさらに続けるのだった。
「何もないのよ。山も木も森も」
「っていうとあれか」
こう言われるとすぐにわかったダンだった。
「風も雨も雪も防ぐものは何もないんだな」
「そうよ。何もね」
やはりそうであった。
「もう嵐も来るし。羊の食べ物も気にしないといけないし」
「普通に漁をしたり畑耕すみたいな状況じゃなくてか」
「そういうこと。気候のコントロールもモンゴルじゃしないし」
気候はある程度コントロールできるようになっているのだ。この時代ではだ。

「そういうのは天に任せているのよ」
「何でだ？」
「テングリは主よ」
ここでこんなことを言うのだった。
「テングリはね。それをコントロールすることはしないのよ」
「天の神に全てを任せるんだな」
「そういうこと。モンゴルではね」
テングリとは即ち天のことである。モンゴルでは昔からシャーマニズム信仰がある。それはラマ教と共に今もモンゴル人の信仰の柱となっているのである。
「それに天気予報があるからそれを避けることはできるし」
「その度に場所を変えるんだな」
「そういうこと。学校の授業はインターネットでの通信教育」
それで行われるのだった。

第百三十五話　ガジュマルの木へその三

「こっちに来るまではそうやって学校の授業受けてたのよ」
「大変だったんだな」
「いえ、全然」
それは否定するのだった。
「自然にやってたからそれはもうね」
「何ともなかったのか」
「そう、何ともね」
はっきりと答えさえする。
「ないわよ。だってモンゴルじゃそれが普通だからか」
「そうか」
「おトイレだってモンゴルじゃ外でするし」
「そうだな。ゲルにはそんなものはないからな」
「今はね。そういうわけにはいかないけれど」
ここで少しだけ困った顔になるナンだった。
「まあ近くのおトイレいつも使ってるけれどね」
「公衆便所か」
「そういうこと。お風呂は組み立て式の簡易シャワーでね」
そういうものも発明されているのがこの時代だ。水や熱は大気中から集めてそれで作っていくのである。考えてみれば物凄い発明である。
「それかドラム缶のお風呂ね。私は学校のシャワー使ってるけれど」
「シンプルな生活なんだな」
「草原はそうなのよ」
笑顔に戻ってまた話すのだった。
「何でもね。最低限しかないのよ」
「凄い生活なんだな」
「いい生活でしょ」

ダンにとってはそうでありナンにとってはこうなのだった。
「シンプルでそれでいて楽しくて」
「楽しいのか」
「モンゴル人にとってはね」
今度はこう言うのだった。
「それが最高なのよ。だからここでもゲルで暮らしてるのよ」
「それで馬で通学してか」
「ゲルと馬は絶対よ」
馬についてもなのだった。
「モンゴル人は馬に乗らないとモンゴル人じゃないのよ」
「モンゴル人の足は四本か」
「そういうこと。ずっと昔からね」
これもチンギス＝ハーンより遥か前から変わらないことである。
「モンゴルではそうなのよ」
「馬はないと生きていけないか」
「まず無理ね」
はっきりと言い切るのだった。
「もう馬がないとそれこそね」
「最初見た時はびっくりしたぞ」
「そうなの？」
「馬で通学だぞ」
次に話すのはこのことだった。
「普通あるか？」
「普通じゃないっていうの？」
「絶対にない」
はっきりと言い切ったのだった。
「馬なんてな。それはな」
「モンゴルじゃ普通だけれど」
あくまでモンゴルを基準に話すナンだった。
「馬はね」

「だからここは日本だぞ」
たまりかねたようなような顔で話すダンだった。
「モンゴルじゃないんだぞ」
「だから皆馬に乗ってなくて驚いたのよ」
腕を組んでそれが不思議で仕方がないといった顔だった。
「本当にね」
「そもそも今でも馬か」
ダンは次にこのことを考えて顔を少し上にやるのだった。
「モンゴルも凄いな」
「燃料とかいらないし」
彼は言うのだった。
「もう全然ね」
「いらないのか」
「だって草を食べてるのよ」
ナンが言うのはこのことだった。
「もう草原だと燃料が何処にでもあるようなものじゃない」
「だからか」
「そういうこと。オートバイとか車よりずっと楽なのよ」
ナンはそういったものよりも馬だとあくまで主張する。
「ガソリンとか電池とかいらないから」
「エコにもいいのか」
「いいでしょ。大気エネルギータイプのもあるけれどね」
この時代オートバイや車の燃料もそれぞれなのである。昔ながらのガソリンもあればそういった電池や電気、大気エネルギーといったもので動くものもある。中には水で動くものもある。本当に様々なエネルギーで動くようになっているのである。これも技術の進歩の結果だ。

第百三十五話　ガジュマルの木へその四

「やっぱり馬よ。しかも」
「しかも？」
「心があるのよ」
今度言うのはこのことだった。
「それってやっぱり凄いじゃない」
「心があるってことがか」
「その通り。まあここじゃわざわざ餌買ってるけれど」
流石に草原ではないので餌は何処にでもあるというわけではなかった。
「草原だとそうよ」
「ここじゃ餌を買ってるのか」
「仕方ないわね」
苦笑いでそれは受け入れるしかないのだった。
「草原じゃないんだし」
「だからってそれでも馬を乗り続けるんだな」
「バイクや車はね」
難しい顔も見せるのだった。
「あれだから。苦手だし」
「苦手なんだな」
「そうなのよ。酔ったりもするし」
これまた意外なことであった。
「だから馬なのよ。モンゴルからそのままね」
「そういえばあの馬は」
ダンはナンの馬の話を聞いているうちにその馬のことについても気付いたのだった。
「あれだな。競争馬じゃないな」
「わかる？」

「わかるさ。足の形とか全然違うからな」
この時代の競争馬はサラブレッドからさらに進化している。走る速さはさらに速くなりそのうえ足も丈夫になっている。ガラスの足ではなくなっているのだ。
「それに大きさもな」
「ちょっと違うでしょ」
「ああ」
また答えるのだった。
「ちょっと小さいか？」
「それがモンゴルの馬なの」
こうダンに話すのだった。
「小さくて頑丈なのがね」
「頑丈か」
「そういうこと。長く適度な速さで走ることができる」
ナンは話を続ける。
「だって草原で競争したりしないじゃない」
「それはないよな」
「でしょ？だから別に滅茶苦茶速く走る必要ないから」
だからだというのである。
「ああいう形なのよ」
「小さくて頑丈か」
「私にぴったりかしらね」
それを受け入れているような残念なような。今度はそれがいささか読めないような微妙な笑顔であった。その笑顔で話すのであった。
「そういう馬が」
「さてな。けれどな」
「けれど？」
「いい馬だな」
ナンのその馬達を褒める言葉だった。
「どの馬もな」

「そうでしょ？モンゴルの頃からのパートナーよ」
つまりモンゴルからわざわざ連れて来ているのである。
「どの子もな」
「そうだな。性格もいいみたいだしな」
「あっ、わかるの？」
「何となくな」
こうもナンに話すのだった。
「目とか顔立ちでな」
「それだけでわかるのね」
「人間だってそうだろ？」
今度は人のことも話すのだった。
「人間だってな。性格って結構目とか顔立ちに出るだろ」
「少なくとも明るい時には明るい顔にはなるわね」
ナンもこれは実感できた。

第百三十五話　ガジュマルの木へその五

「あと暗い時は暗い顔になって」
「そういうことだ。顔には色々なものが出る」
「そういうこと、よく見るのね」
「見るんじゃない」
彼はそれは否定したのだった。
「見えるんだ」
「見えるの？」
「ああ、見える」
ダンはここで嫌なものを見たような顔を見せるのだった。
「見えるんだ。それがな」
「そうなの。見えるの」
「子供の頃からな。見たいと思わない時でも見える」
「何かそれって今から見に行くキジムナーと同じね」
ナンはふとこんなことを言うのだった。
「見たくなくても見えるっていうのは」
「妖怪と同じだっていうのか」
「ええ。妖怪も見たくて見えたりはしないらしいし」
ナンの言葉はその妖怪の類を見たことのない人間の言葉に他ならなかった。そしてそれを隠すこともなく話をするのだった。
「妖精もそうよね」
「そういえば同じだな」
ダンはここまで話してそれで今のナンの言葉の意味がわかったのだった。
「見たくなくても見えるのはな。妖怪も人の心もな」
「人の心の嫌な部分ってことよね」
「正直妖怪は好きだ」
ダンはそうなのだった。

「そのキジムナーはな。好きだ」
「キジムナーはなの」
「けれどマジムンは嫌いだがな」
「マジムンって？」
「琉球の方の妖怪だ。人の股の間を潜り抜けてそれで殺したりする悪い妖怪だ」
「嫌な妖怪もいるのね」
ナンはダンの言葉を聞いて口を嫌そうにすぼめさせてしまった。そのアジア的な少しふっくらとした顔が梅干のようになった。
「琉球にも」
「これに逢ったことはないがな。うちの爺様は見たって言ってる」
「そうなの。いるの」
「みたいだな。けれど人の心の嫌な部分はな」
「そうよね。もっとよね」
ナンは腕を組んで言った。
「もうどうしようもない奴は本当にどうしようもないからね」
「そういう奴の心を見るのが一番嫌だ」
ダンの言葉はさらに忌々しげなものになっていた。
「本当に妖怪よりもな」
「そうなの。それでそのキジムナーだけれど」
「ああ」
話はここでようやく本格的にキジムナーに関するものになるのだった。
「で、どんな妖怪なの？ガジュマルにいて魚の目が好きなのはわかるけれど」
「ケルトで言うと妖精で」
ダンはナンの言葉に応えて述べた。
「日本だと河童だな」
「河童！？ああ、あれね」
ナンは話を聞いてすぐにわかったのだった。

「あの頭にお皿があって甲羅背負ってる妖怪ね」
「琉球にも河童の話がある」
「そうなの」
「昔はなかったがな。それが変わってな」
この辺りは日本文化の伝播の一つの証明であると言える。琉球はかつて日本であったので当然日本文化もかなり流入しているのである。今も兄弟国の関係でありとりわけ日本の皇室と琉球王家が友好的な関係にあることは連合の中ではとりわけ有名な話である。
「河童も入って来たんだ」
「そうだったの。琉球にもそれで河童が」
「そういうことだ。アイヌはどうかわからないがな」
「まあカムイが河童に見えないこともないけれど」
ナンも随分なことを言う。
「何かね。猿にも見えるし」
「河童と猿は仲が悪い」
ダンはここで思わぬことを言うのだった。
「ついでに河童と犬も仲が悪い」
「じゃあカムイとは仲が悪いのね」
これまた実に酷いナンの言葉だった。
「あいつ実際犬とよく喧嘩するし」
「ああいう奴だからな」
おまけにダンも彼を全くフォローしないのだった。実際カムイもテンボやジャッキー程ではないがそれでも結構あれナ人間だと思われているふしがある。

第百三十五話　ガジュマルの木へその六

「犬ともな」
「とりあえず河童と犬と猿はそれぞれ仲が悪いのね」
「それもかなりな」
犬猿の仲は河童にも言えることなのだった。
「だからだ。うちのクラスに入るとだ」
「河童は無事では済まないわね」
二年Ｓ１組はペットを飼っている人間が多い。これは連合の何処でもだが。尚且つその中で犬派はかなりの割合になっている。とりわけ有名なのがネロとジョンの二人である。
「絶対にね」
「そういうことだな。まああいつのことは置いておいてな」
「とりあえずはね」
「キジムナーはいい妖怪だ」
また話はキジムナーに戻っていた。
「あれはな」
「そうなの。いい妖怪なの」
「魚の目をあげればそれだけで大漁を約束してくれる」
まずはそれであった。
「養殖ならいい魚を保障してくれる」
「ふうん、有り難い妖怪なのね」
「確かに妖精に似ているか？」
話しながら家持の家でのパーティーの席での話も思い出すのだった。
「考えてみればな」
「そうね。本当に妖怪と妖精の違いってあまりないのね」
「そうだな」
彼はまたナンの言葉に頷いた。

「近いな。俺の家も水族館だがな」
「そうだったわね」
彼の家は琉球の水族館なのである。琉球は水の多い惑星を数多く持っており水の文化が発達しそこにいる動物達も多く棲息しているのだ。
「じゃあそこにもキジムナーが？」
「いるらしいな」
こう言うのだった。
「どうやらな。お客さんの子供達が見たって言うからな」
「子供達がなのね」
「ああ。何か弱っている魚に手を触れていたらしい」
そういうことをしているというのだ。
「そうしたらその魚が元気になってな」
「いいじゃない、それって」
「だから悪い奴じゃないんだよ」
また言うのだった。
「キジムナーはな。だから俺は怖くない」
「そうね。そんな気のいい妖怪ならね」
「俺の家でも魚の目の玉は絶対に残している」
彼の家でもなのだった。
「そしてそれを食べてもらっている」
「で、やっぱりなくなるのね」
「なくなるな。いつもな」
そうだというのである。つまりキジムナーが食べているのだ。
「時々猫と取り合ったりしているようだけれどな」
「猫！？」
「水族館の前が猫ランドなんだよ」
また随分と物凄い場所が向かいにあると言える。
「猫は魚が好きだよな」
「っていうか主食よね」

猫といえばやはり魚である。他に鼠や鳥も好きだがやはり好きなものは魚である。これは誰もが猫といえば連想するものであった。
「やっぱり」
「餌はたっぷり貰ってる筈なのにまだ足りないらしくてな」
「猫も食いしん坊だからね」
「キジムナーは魚の目の玉をしゃぶっていると猫ランドから出て来て取ろうとするらしい」
「脱走してでもね」
この辺りが実に猫らしいと言えた。
「かなりタチの悪い猫達ね」
「しかも食ったらすぐに戻る」
このおまけ付きであった。
「向こうの人達が気付かないうちにな」
「猫はねえ。そういうところに異常に頭が回るからね」
ナンは苦笑いで腕を組みながら述べた。
「忍者みたいにね」
「少なくとも妖怪と喧嘩ができる」
ダンはそこを指摘した。
「犬もそうみたいだけれどな」
「動物は見えるらしいからね」
ナンはこうも述べた。
「妖怪とか妖精がね。わかるらしいからね」
「あとマウリア人もわかるらしいな」
その代表がセーラというのだった。
「どういう能力かわからないがな」
「まあマウリアだから」
完全にナンの偏見に基く言葉だがそれでも納得できるのが連合である。それだけ異質なものがあるのもまた事実であるからだ。
「それもね。普通よね」
「普通なのか」

「私はそう思うけれどね」
なおナンの祖国モンゴルはかつて世界を席巻したがインドには入っていない。ガンジス川で止まってしまったのである。モンゴル帝国を以ってしてもインドは征服できなかったのだ。
「あそこはね」
「まあそうかもな」
そしてダンもそれを否定しなかった。
「あそこだけはな」
「異質よね」
「そうだからな。さて」
ここでダンの言葉が一旦止まった。
「見えてきたな」
夜の学校の中で前を見ての言葉だった。
「目指す先がな」
「ガジュマルの木がね」
「ああ、あれだ」
言いながら前を指差す。するとそこには。
川辺に沿うように生えている木が何本もあった。如何にもという感じの南方の木だ。彼はそれを指差しながらそのうえでナンに語るのだった。
「あの木だ。あれがガジュマルだ」
「あそこにキジムナーがいるのね」
「そうだ。キジムナーはあそこにいる」
彼は強い言葉で語った。
「あそこにな」
「じゃあ。行こう」
ナンの方から声をかけてきた。
「今からね。向こうに気付かれないようにね」
「もう気付いているにしてもな。静かにな」
「ええ、行きましょう」

こうして二人で向かうのだった。ガジュマルの木には今は誰もいない。しかし二人はいるものとしてそのうえでガジュマルを見ていた。

ガジュマルの木へ　　完

２００９・４・３０

第百三十六話　キジムナーその一

キジムナー

ダンとナンはそのガジュマルの木の側まで来た。しかしまだそこには何も見えなかった。ただ夜の闇と空に黄金色の月があるだけである。

「姿消しているのかしら」

「それか隠れているかだな」

ダンは周りを目だけで見回しながらナンに対して述べた。

「何処かにな」

「隠れるの上手いのね、やっぱり」

ナンは今のダンの言葉を聞いて納得したように頷いた。彼女にしろ目で周囲を見回している。当然それでキジムナーを探しているのである。

「妖怪だから」

「妖怪はそう簡単に見つからないからな」

ダンは言う。

「確かに姿を消すことができるのもいる」

「キジムナーもそうなの？あと見えない人には見えないとか」

「見えない人間もいるみたいだな」

首を捻ってまた言うダンだった。

「この辺りは本当にな。見えない奴は本当に見えない」

「座敷わらしだったかしら」

ナンが今度出したのはこれまた日本の妖怪であった。日本には実に様々な妖怪が存在している。その座敷わらしもその一つなのである。

「確か。お家の中にいていたら家がお金持ちになったり幸せになったりするっていう」

「確かあれだったな」

その妖怪のことはダンも知っていた。
「子供にだけ見えるんだったな」
「そうらしいわね。今でもいるのだったかしら」
「日本でも聞くな」
「今でもなのね」
「ああ。やっぱりいるらしいな」
やはりこの時代でも座敷わらしはいるようである。
「子供が見たとか部屋の中で遊んでいるとかな。話があるな」
「やっぱりいるのね」
「子供しか見えない」
座敷わらしはそれであまりにも有名な妖怪である。彼等が知っている程にだ。
「キジムナーは。どうだったかな」
「見えてもやっぱり隠れるの上手いのよね」
「そうだろうな。おいそれとは見ることができないな」
「じゃあどうするの？」
「これを持って来た」
ダンは不意に背中からあるものを出してきた。それは。
「釣竿？」
「まずはこれで魚を釣る」
その釣竿を前に出しながらナンに述べる。述べながらガジュマルの木にさらに近付いていく。
「それで魚を釣って横に置いておいて」
「それでどうするの？」
「そうしただけでわかる」
また答えるダンだった。
「それだけでな」
「ああ、置いていたらお魚の目がなくなるからね」
「その通りだ。キジムナーは魚の目が好きだ」
何度も話されるキジムナーの最大の特徴である。とにかく魚の目

が好きなのである。
「それを食べるからな。だからすぐにわかる」
「成程ね。だから釣りをするのね」
「そういうことだ。御前もするか？」
「そうね。面白そうね」
楽しそうに応えるナンだった。
「夜釣りもね」
「モンゴルでも釣りはするな」
「そうよ。モンゴル人は釣りも得意なのよ」
そのモンゴルの服を着て胸を張って言っただけに説得力はかなりのものだった。
「そっちもね。安心して」
「わかった。じゃあほら」
早速釣竿をもう一本出してきて彼女に手渡すのだった。
「使え。これな」
「有り難う。それじゃあね」
「それで釣った魚はだ」
ダンはその話もする。
「食べるぞ」
「食べるの」
「釣ったからには食べる」
まさに釣りの原点である。
「それ以外に何かあるか？」
「いいえ、その通りよ」
そしてそれはナンも同じ考えであった。この辺りも実にモンゴル人らしい。
「釣ったからには食べないとね」
「釣りはスポーツじゃない」
ダンはこうも言うのだった。
「釣った魚は食べる。絶対にな」

「そうそう。お魚以外にも釣れるものあるしね」
ナンは今からとても楽しそうであった。月灯りにそのにこにことした顔が映し出されている。

第百三十六話　キジムナーその二

「すっぽんとかね」
「モンゴルでもすっぽんを食べるのか」
「基本的に何でもね」
楽しそうに笑って答えるナンだった。
「食べるわよ」
「肉や乳製品だけじゃないのか」
「確かにその二つが主食だけれどね」
この二つだけはどうしても離すことができないのがモンゴルの食事である。何しろ酒まで馬の乳から作ってそれを飲んでいる程である。
「他のも食べるわよ。草原って物凄く過酷だから」
「食べられるものは何でもか」
「必要とあらば何日も食べないこともできるわよ」
そういったことも可能だというのである。
「今だってね」
「何でそんなことができるんだ？」
ダンは何日も食べなくて平気と聞いてまた驚いたのだった。
「平気か？それで」
「だから。それが草原の生活だから」
「過酷だからか」
「そういうこと。特に私達なんてチンギス＝ハーン以来の暮らしを守ってきているのよ」
言わずと知れたモンゴルの歴史上最大の英雄である。ナンだけでなくモンゴル人にとって彼は最早英雄どころか神格化さえされているのです。
「だからそういうことができるのよ」
「さながら野生動物だな」

「そうね。はっきり言って近いわ」
自分でもそれを認めるナンだった。
「狼とかにね。けれどそれでもよ」
「妖怪は見えないか」
「見えないわね」
言葉が残念そうなものになっていた。
「隠れることが上手いのよね、確か」
「そうだな。かなり上手いのは間違いないな」
ダンは今度は顔全体で周囲を見回して探している。しかしそれでも何もおかしなところは見当たらないのだった。何一つとしてだ。
「元々見つかりにくい姿をしているしな」
「見つかりにくいの」
「小さな子供の姿をしている」
彼は今ここではじめてキジムナーの姿について説明してきた。
「確か髪は黒いおかっぱでだ」
「おかっぱね」
「基本的には人間に近い姿をしている」
こうだというのだった。
「人間にな。ただし爪が鋭くてな」
「爪ね」
「後牙もある」
それもだというのだ。
「そして目が猫のそれに似ている。とりあえず姿は人間に近い」
「そう?」
キジムナーの姿についてここまで聞いたうえで首を捻るナンだった。
「牙に爪があってしかも猫の目で?」
「そうは思わないのか?」
「あまりね」
やはりそうは思えないのだった。

「っていうかそれって目立つと思うけれど？猫の目なんて」
「しかしそれでも他の妖怪に比べれば目立たないだろう？」
「まあそれはね」
そう言われると頷くことができた。そうした話をしながらガジュマルの木を背にしてそのうえで川辺に座る。そうしてそのうえで釣り糸を垂らすのだった。こうして釣りをはじめた。
「その通りだけれど。河童とかそういうのに比べたら」
「そうだろう？だから目立たないんだ」
また話すのだった。
「他の妖怪に比べるとずっとな」
「まあね。それにしても夜釣りだけれど」
「それがどうかしたか？」
「何か面白いわね」
ナンの声が少しうきうきとしたものになってきていた。ただ座ってそのうえで釣り糸を垂らしているだけだが。それでもであった。
「こうやって実際やってみたら」
「面白いか」
「っていうか風流じゃない？」
こう言うのである。

第百三十六話　キジムナーその三

「これって」
「風流か」
話を聞いてやっとそうかもな、という感じになった今のダンの顔だった。
「そういうものか」
「ほら、見て」
ナンはここで池の水面を指差した。夜の中で黒くなり時折銀色の光がそこに見える。そしてもう一つのものが映されていた。その映し出されているものは。
「あの月」
「月か」
「そうよ、月ね」
ここでまた楽しそうに笑って述べるナンだった。
「お月様を見ながら釣りって。いいわよね」
「そういえばそうだな。ただ」
「ただ？」
「気をつけろよ」
ダンの言葉が警戒するものになっていた。
「魚がかかって取る時にはな」
「その時はなのね」
「昼と違ってあまり見えないからな」
だというのである。
「エイとかそういうのだったら危ないぞ」
「ああ、この学校のお池って色々なお魚いるからね」
「水面にも気をつけろ」
そこもだというのだ。
「鰐が出て来たりもするからな」

「鮫だっているしね」
「そういうことだ」
なお淡水産のエイや鮫である。この学園には様々な生き物が棲息している。
「幾ら大きいのは随時捕まえられていてもな。噛まれたらやっぱり痛いからな」
「そうね」
実際には痛いでは済まない。
「あと淡水産のうつぼもな」
「危ないの結構多いのね」
ナンは話をしているうちに思うのだった。
「河での釣りも」
「釣りは決して安全なものじゃない」
ダンはそこをあえて強調するのだった。
「一歩間違えたら死ぬ。水の傍でやるしな」
「水は一見穏やかだけれど火より危ない」
ナンはふとこんなことも言う。
「そういうことね」
「それはモンゴルの言葉か？」
「ええ。お爺ちゃんに教えてもらったの」
「そうか」
「最初は中国の古典にあったらしいけれど」
韓非子である。法家の本であり秦の始皇帝がこのうえなく愛したものである。彼はこの書から法をさらに知り国を動かしていたと言われている。
「モンゴルにも伝わってそのまま残っているのよ」
「そうだったのか」
「それと一緒ね。モンゴル人は泳ぐことも得意だけれど」
「馬だけじゃないのか」
「だって河とかよくあるじゃない」

草原はただ草があるだけではないのだ。
「何かあったらそこで泳いだりするわよ」
「こっちじゃ海で泳ぐけれどな」
「そうよね。琉球だとやっぱりそうよね」
「ああ、こっちはな」
この辺りはまさに国の違いであった。
「そうする。それでそっちはそれか」
「そういうこと。それで河で泳ぐ時だけれど」
その時の話もするナンだった。
「あれよ。昔は裸で泳いでいたのよ」
「服を脱いですぐか」
「水着とかなかったから」
昔にそんなものがある筈がなかった。
「だからね。もう裸だったけれど」
「今は水着でか」
「ゲルの中で着替えてそれでそれを下に着てまた服を着て」
結構手間がかかる話であった。
「それで泳いでるのよ」
「皆でか」
「そうよ。何か懐かしいわ」
水の中に照らされた釣り糸を見て話すのだった。
「今思えばね。そうやって河の中で泳いだことも」
「そうか。懐かしいか」
「とてもね」
こうも言うのだった。
「また河で泳ぎたいわね」
「けれど今ここで泳ぐとな」
「何あるかわからないからそれはしないわ」
流石にそれはわかっているナンだった。

第百三十六話　キジムナーその四

「モンゴルでもピラニアのいる河には入らないし」
「モンゴルにもピラニアがいるのか」
ダンは今のピラニアの話に少し意外な顔になった。
「意外だな」
「これがいるのよ。寒冷地のピラニアでね」
少なくとも地球にはいなかった種類である。
「食べたら美味しいけれど物凄く凶暴でね」
「それがいる河は泳げないか」
「泳ぐどころか渡ることもできないわ」
うんざりとした声で述べた今の言葉だった。
「中に入ったら馬だって五分で骨よ」
「五分か」
「そう、ものの五分よ」
あえて時間まで話すナンだった。
「だから絶対に入らないのよ。その河にはね」
「誰だって骨になりたくないからな」
「そういうこと。あれって熱帯にいるだけじゃないのよ」
ナンは何かを釣り上げながらまた話すのだった。
「寒い場所にもいるのよ」
「琉球には海にもいるぞ」
「それはまた大変ね」
釣った魚を見る。それは。
「ああ、そのピラニアよ」
「それか」
「うわ、悪そうな顔」
月明かりの中に見える魚の顔を見ての言葉だった。
「何か釣られたのが物凄い嫌みたい」

「後で煮て食う」
ダンはそのピラニアをちらりと見て述べた。
「似てな。それで食うとしよう」
「お刺身じゃないのね、日本風に」
「淡水魚でそれはな」
しないというのだった。
「危ない。虫がいる」
「モンゴルでも生の魚は食べないけれどね」
「日本人は違うがな」
ダンの言葉は少しばかりぞっとしているものだった。
「淡水魚でも生で食べる」
「ピラルクとかナマズとかよね」
「かなり危ないんだがな」
そうした魚のことも話す。なおどちらも熱帯に多い魚である。地球ではアマゾンでナマズが非常に多い。中には何と三メートル以上のナマズもいる。こうしたアマゾンのような惑星は連合においては非常に多い。連合はとかく緑や水に恵まれた惑星が多いのである。
「生だとな」
「そうよね。肺魚なんか特にそうらしいわね」
「あれはそもそもまずくて食えたものじゃない」
ダンの声が憮然としたものになっていた。
「肺魚はな」
「そんなに美味しくないの」
「じゃあ何処かの国で肺魚を食う国があるか？」
「ないわね」
ナンはとりあえず記憶を辿ったが一つも引っ掛かるものはなかった。
「全然ね。そういえば」
「日本人すら食べない」
その魚好きの日本人ですらである。

「当然琉球でもな」
「食べないの」
「だから。食えたものじゃない」
また言うダンだった。
「あんなものはな」
「って食べたことあるの」
「ある」
激しい後悔を露わにさせている言葉であった。
「中学生の時にな。釣ってそれを焼いて食ったが」
「まずかったのね」
「あんなにまずい魚はない」
また言うダンだった。
「後味の残る途方もないまずさだった」
「まあ確かに美味しそうな魚じゃないけれど」
また一つ釣りながら応えるナンだった。ダンもここで一つ釣った。
「あっ、今度はナマズだったわ」
「それは食えるぞ」
ダンはナマズを見て述べた。

第百三十六話　キジムナーその五

「少し泥臭いところもあるが味は中々いい」
「ってナマズは美味しいの」
「癖がなくてあっさりしている」
こうも言うのだった。
「食べやすい。天麩羅にしても刺身にしてもいける」
「ってこれも虫いるでしょ」
自分が釣ったそのナマズを見ながらダンに話す。
「ちゃんと。川魚だししかもいつも川底にいるし」
「養殖ものはいないぞ」
「ふうん、ナマズも養殖してるの」
「日本ではしている」
ダンはナンに対して答えた。
「他にもブラジルやアメリカや中国でな」
「何か何でも食べる国ばかりね」
「東南アジア諸国でもそうだったか。あの辺りも川魚を結構食べていたからな」
「とりあえずナマズは美味しいのね」
「ああ、美味い」
肺魚の時とは全く違った言葉だった。
「これはいいぞ。食ってみたらいい」
「わかったわ。じゃあこれは取っておいて」
またクーラーボックスの中に入れるのだった。しかしピラニアだけは別のボックスに入れるのは忘れない。当然他の魚が食べられるからだ。
そしてダンの釣った魚は。鯉だった。
「当然これは美味しいわよね」
「川魚の頂点にいるな」

ダンの声は微かに笑っていた。
「やっぱり川魚はこれだ」
「これは聞いてるわ。この前蝉玉が油で揚げてそれにあんをかけて美味しそうに食べてたから」
「あれは魚の最も美味い食べ方の一つだ」
ダンはまたその言葉を綻ばさせていた。
「流石に蝉玉はわかってるな」
「スターリングと一緒に仲良く食べてたわよ」
食事の時もアツアツの二人なのであった。
「そういうの見たら。鯉はね」
「当然俺も好きだ」
声は鯰の時以上に笑っていた。
「さて、ピラニアは煮て鯉と鯰は揚げてだ」
「楽しみね」
「さて、次は何かな」
ダンはこうしたことを言いながらまた糸を垂らすとすぐに反応があった。引き上げると今度釣れたのは淡水産のエイであった。ダンはそのエイを注意深く手に取りすぐに懐から出したナイフでその尻尾の付け根にある鉛筆の様な突起を切り取ったのだった。
「それは切るのね」
「何かわかるよな」
「毒針よね」
ナンにもそれが何かすぐにわかった。
「そうでしょ、それって」
「その通りだ。だからエイは危険だ」
毒針を切り取ったそのエイもクーラーボックスに入れたうえでまたナンに述べた。
「こんな鋭いのに刺されたらそれこそ大怪我じゃ済まないからな」
「それで死ぬ場合もあるのよね」
「だから余計に危険だ」

ダンの言葉は真剣なものだった。
「夜釣りで注意しないといけないものの一つだ」
「あとゴンズイとかオコゼとかもよね」
「そういうのがいるからな。気をつけないといけない」
毒のある魚も多いのである。
「日本でも琉球でもオコゼは食べるがな」
「あんな不恰好な魚まで食べるの」
「最高に美味い」
オコゼもまた絶賛するダンだった。
「あれは何にしても美味い」
「そんなに美味しいの、オコゼって」
「モンゴルではそれも食べないんだな」
「ええ、っていうか日本人や琉球人程食べないわよ」
ナンの結論としてはそれしかなかった。
「アメリカ人や中国人よりもね」
「あいつ等肉も大量に食うぞ」
彼等の大食は大柄でエウロパ人達からバイキングの再来とまで言われた連合の者達の中でもとりわけ物凄いものである。そうしたことでも有名なのだ。

第百三十六話　キジムナーその六

「勿論魚もだがな」
「まあ蝉玉とかスターリング見てたらね」
「あいつ等もあれで食うからな」
「そうなのよね。まあポルフィ程じゃないけれど」
「あいつは特別だ」
ポルフィに関してはこう言われるのだった。
「化け物だ、あれは」
「鮪一匹食べられるんだったっけ」
「ああ。二メートルのな」
それがポルフィなのだった。
「他にも食ってそのうえでな」
「どういう胃袋してるのかしらね」
「とりあえずあいつのことは置いておく」
あまりにも桁外れ過ぎて論外であるからだ。人間には何でも限度というものがあるが彼はその限度というものを遥かに逸脱しているのである。
「あいつだけはな」
「それで常識の話なのね」
「琉球も日本も海が多いからな」
話をここに戻してきた。
「だから必然的にな」
「お魚食べるのね」
「そういうことなんだよ。よしっ」
ここでまた一匹釣ったポルフィだった。
「今度は鱧か。いいな」
「鱧？その細長いお魚が？」
見ればそれは鋭い歯を持っていて目つきの悪い魚であった。お世

辞にも美味しそうではない。何か喧嘩を売ってきそうな魚である。
「食べられるの？」
「これも最高に美味い」
しかしダンはこの魚についても言うのだった。
「海にいるのが主流だがこうした淡水産のもな。いいんだ」
「へえ、そんなに人相っていうか魚相が悪いのに美味しいの」
「食べてみればいい。最高にいい」
ダンはあくまで鱧の美味さを主張する。
「吸い物にしても何にしてもな。最高にいい」
「そうか。そんなにいいのか」
「絶品だ」
「そんなにいいの。じゃあ私も食べてみようかしら」
「鱧の美味さがわからない奴は不幸だ」
彼はこうまで言うのだった。
「だからだ。後でこの魚でな」
「ええ。パーティーね」
そんな話をしながら魚をさらに釣っていく。そうしてもうこれでもかという程釣った後で。ダンはクーラーボックスを覗いて言った。
「やっぱりいるんだな」
「キジムナーが？」
「ああ、見てみろ」
言いながらナンに対してクーラーボックスの中を指し示す。するとそこにいる魚達は。
「目、ないわね」
「どれも片方だけないな」
「ええ、確かにね」
ナンもまた頷く。見れば確かに魚達はどれも片目がなくなっている。それは蛸や烏賊といったそうした魚ではないものにまで及んでいた。
「くり抜かれたみたいにね」

「キジムナーは魚の目が好きだ」
そしてこのことをまた言う。
「だからこうして釣っておくとな。取っていくんだ」
「片目だけなのね、それでも」
「あまり欲はないからな」
ダンはまたキジムナーに対して語る。
「片目だけでいいんだ」
「ふうん、片目だけで満足できるんだ」
「それで片目だけ貰ったら」
ダンの言葉は続く。
「それと引き換えに人間にあれこれいいことをしてくれる」
「気前いいのね」
「それを考えたらいい妖怪だな」
「そうね。気持ちのいい妖怪ね」
ナンもこう言って微笑む。
「とても」
「だから愛されてるんだ」
ダンの顔が微笑みになった。

第百三十六話　キジムナーその七

「気のいい奴等だからな」
「琉球じゃ皆このキジムナーとずっと付き合ってるのね」
「ああ、本当にずっとな」
「何かそれ聞くと羨ましいわ」
ナンの顔も自然に微笑んできた。
「気のいい妖怪達に囲まれててね」
「妖怪もこんな奴ばかりじゃないけれどな」
これはキジムナーでなくとも、またいい意味だけでなく悪い意味でも言われる言葉であった。
「それでもな。キジムナーはいい奴だ」
「そうね。確かにね」
「さて。それじゃあ行くか」
「もう帰るの？」
「ああ、釣るものは釣ったしな」
こうナンに対して告げる。
「これでな」
「そうなの。あっさりしてるのね」
「キジムナーもいるってわかったしな」
そしてこのことも話してきた。
「もう話は終わった」
「そうね。姿は見えなかったけれど」
「それでも目は食べられてるからね」
それでわかるのだった。
「ちゃんとね。そういうことね」
「その通りだ。まあもっともこんな話も」
そしてふと言うダンだった。
「テンボとかジャッキーだとな」

「話がややこしくなるわね」
「確実にな」
その通りであった。あの二人ならば確実にそうなる。どんな話でも大袈裟にさせてそのうえ混乱させる、それが二人の特殊能力である。
「とにかくこれで話が終わったからな」
「そうね。後はじゃあ」
「酒はこっちにある」
酒のことまで話すのだった。
「ちゃんとな」
「日本酒？」
ナンはふとこの酒を話に出した。
「それってやっぱり」
「それもあるが琉球の酒もある」
それもあるというのである。
「これはかなり強いけれどな」
「それとビールもだ」
それもだった。
「琉球ビールな。どうだ？」
「あっ、ビールもあるの」
ナンはビールと聞くと顔がさらに明るくなった。
「いいわね。お酒にはビールだからね」
「しかもフライにするからな。それに天麩羅にな」
「だったら余計にビールね」
話を聞いてさらに言うのだった。楽しそうに頷きながら。
「それが一番ね」
「馬乳酒は魚に合わないか」
「モンゴルにいる時はそんなに気にならなかったけれど」
モンゴルにいればなのだった。その時はわからなかったと言うのである。

「やっぱりあれはお肉とか乳製品に合うのよね」
「そうだな。モンゴルではそれを食べるからな」
だからなのだった。酒はその国の料理に合うものになる。これは必然である。酒は料理に合わせるものだからだ。合わなくては飲めはしない。
「必然的にそうなるな」
「だから日本のお酒はお魚に合うのね」
「琉球もだ。それでな」
そうなるのも当然であった。
「琉球の酒は魚に合う」
「じゃあ今から楽しみにさせてもらうわ」
ナンの顔はさらに微笑んできていた。
「食べてばかりの気もするけれどね」
「それは言うな」
実はダンも最近そんな気がしてはいた。
「じゃあ。今から俺の家に行ってな」
「馬に乗ったらすぐよ」
こんな話をしながらダンの家に向かう。そうしてそこで魚を楽しむのだった。魚は確かに美味く二人はキジムナーが食べた後の片目のない魚を琉球の酒で楽しんだ。

キジムナー　　完

２００９・５・５

第百三十七話　不死身のラムダスその一

不死身のラムダス

二年Ｓ１組には誰もあえて突っ込まないことがある。それは何かというと。

「そういえばあんたのとこのクラスのよ」

「何だよ」

中将棋をしながらラビニアが相手である宿敵フックに対して言ってきていた。

「あのお嬢様いるじゃない、マウリアからの」

「セーラのことか？」

「そう、その後ろにいる二人」

彼等のことである。

「何っていったっけ」

「ラムダスさんとベッキーちゃんのことか」

「あの二人って学生さんじゃないわよね」

そしてあえて突っ込まないこととはこれであった。

「前から思っていたけれど」

「ああ、そうだぜ」

フックは将棋の駒を動かしながらラビニアの質問に答えた。

「それがどうかしたのか？」

「何で学生さんじゃないのに教室にいるの？」

ラビニアもまた駒を動かしながらフックにさらに問う。

「だったら何で？二人共いつもあのお嬢様の後ろに立ってるけれど」

「気にするな」

フックの返答はよりによってこれであった。

「気にしても何にもなりゃしないからな」

「気にするなって随分強引ね」

「強引も何もあの人達はセーラの従者だぞ」

マウリアのマハラジャの娘であるから当然その地位も富もかなりのものである。従者を二人位持っていても当然のことなのだ。
「いて当然だろ？それも」
「授業中もいつもいるのよね」
「ああ」
そのことにも素っ気無く答えるフックだった。
「いるぞ」
「やっぱりおかしいじゃない」
ラビニアはまた駒を動かしながら言う。
「クラスの人でもないのに普通にクラスにいるって」
「普通はそうだけれどな」
フックもそれはわかっていた。
「普通はな」
「じゃああれは普通じゃないっていうの？」
「だから相手はマハラジャの家の御令嬢だぞ」
「マハラジャねえ」
「何なのかはわかるよな」
その点もラビニアに対して言う。
「マハラジャって何なのかはな」
「いきなり何処からか出て来た人と一緒に踊るのよね」
しかしラビニアはこんなことを言い出してきた。
「確か」
「そりゃ踊るマハラジャだよ」
フックはこう述べてそれは違うと言った。
「だからな。マハラジャっていったらよ」
「わかってるわよ。マウリアの王侯貴族よね」
「そうだよ」
もっとはっきり言うと藩王である。マウリアのそれぞれの星系を治める王家である。マウリアでは様々な国家内国家が存在しているのである。

「それだからな」
「で、仮住まいがあの宮殿ってことね」
「ああ、あのタージマハールそっくりのな」
「あれが仮なのね」
「仮でも何でも中には動物園や博物館に美術館があるんだよ」
「えっ！？」
さしものラビニアもそれを聞いて唖然となった。
「仮住まいなのよね」
「ああ」
「それで何でそんなものまであるんだよ」
「何でも向こうの親父さんの方針らしいんだよ」
「方針！？お家の中に動物園や博物館や美術館があるのが！？」
「あと水族館もあるけれどな」
「余計に凄いじゃない」
つまり一式あるということだ。なお連合でも相当な金持ちでない限りは自宅の中にそうしたものを一式中に入れることはできはしない。

第百三十七話　不死身のラムダスその二

「しかもお庭に恐竜がうろうろしてるのよね、確か」
「ティラノザウルスな」
しかもよりによってそれである。
「マウリアじゃ普通に飼われてるペットらしいな」
「いや、それはないから」
ラビニアは速攻でそれは否定した。
「幾ら何でもティラノザウルスなんて」
「一応危害は加えないけれどな」
フックはそれは否定した。
「餌付けされててな」
「恐竜を餌付けねえ」
「いや、何かマインドコントロールしていたか？」
話がここで妙な方向に進む。
「ベッキーちゃんが」
「マインドコントロールって何よ」
「マウリアじゃ誰でもできるらしいな」
「それも絶対違うから」
ラビニアはここで一手さして言った。
「はい、王手」
「おうよ」
フックはそれに応えて静かに駒を動かしてそれに応えた。
「これでいいな」
「ふん、また腕をあげたわね」
「当たり前だろ。こっちだって意地があるんだからな」
こうポーカーフェイスで述べるのだった。
「そうそう負けてたまるかよ」
「さっさと負ければいいのに」

「そうはいくか。とにかくだ」
また一手さすフックだった。
「やっぱり普通じゃないのか」
「マウリア人のはったりって有名じゃない」
これも地球にあった頃からの話である。インドと呼ばれた頃からマウリア人は何でもかんでもはったりをかけることで有名なのである。
「知らないことを知ってるって言うし」
「あと自分の興味のある方向に強引に話をもっていくしな」
「それで何で発言をいちいち真に受けるのよ」
「だってよ。実際にセーラ達って無茶苦茶非常識なことできるからよ」
マウリア人に連合の常識は一切通用しない。
「魔術だの呪術だの妖術だの仙術だの使えるしな」
「つまり一式使えるのね」
「セーラが特に凄いんだよ」
やはりまずは彼女だった。
「姿消したり壁抜けもできるしな」
「人間？それで」
「多分な」
その辺りはあまり自信のないフックだった。
「ひょっとしたら違うかもしれんがな」
「っていうか人間じゃないでしょ」
セーラは実に率直に今の言葉を述べた。
「それって」
「一応生物学的には人間らしいぜ」
「けれどやってること人間の限界超えてるじゃない」
少なくとも『連合の』人間のものではなかった。
「あれはもう」
「魔術に妖術に呪術に仙術に幻術だからな」

「しかも増えてるし」
それだけではないのだった。
「幻術まで使えるの」
「確かな。何でもマウリア一のそうした術の天才らしいぞ」
「ってそれって完全にファンタジーだし」
連合では完全に小説や漫画やゲームやアニメの話である。
「もう何が何だか」
「エウロパだったら確実に異端審問だな」
「ああ、それ今は流石にないから」
すぐにまたフックに突っ込みを入れる。
「今時異端審問なんて」
「ああ、そりゃないか」
「あるわけないじゃない。幾らエウロパでも」
「そこまで野蛮じゃねえか」
「多分ね。それにしても魔法使いねえ」
ラビニアはセーラをあえてこう呼んだ。呼びながら頭の中で黄色い三日月を背にして箒にあの黒い服と縁の大きなあの黒い帽子で空を飛ぶセーラを想像していた。
「話が一気に訳のわからない方向にいってるわね」
「セーラだけじゃねえぞ」
話はそれに留まらないのだった。
「後ろの二人だってな」
「やっぱり何かあるの？」
「ラメダスさん不死身だぞ」
今度はこれであった。
「何やっても死なないからな」
「幾ら何でもそれは嘘でしょ」
セーラも不死身というのは信じようとしなかった。
「何よ、その世の中の摂理を完全に無視した話は」
「俺が知るかよ」

これまた随分無責任な返答だった。

第百三十七話　不死身のラムダスその三

「誰もあえて突っ込まないんだよ、それはな」
「あまりにも理解不能だから？」
「じゃあ御前目の前にリトルグレイ出て来て名乗ってきてそれを信じられるか？」
「そんなのできるわけないじゃない」
「そういうことだよ」
なおリトルグレイとは小さく目がやたらと大きい宇宙人のことである。二十世紀に話が出て来てそれがまだ話が残っているのである。
「だから誰も突っ込まないんだよ。わかったか？」
「はっきり言ってもう何が何だかわからないんだけれど」
言いながら何とか将棋の駒は動かしている。
「不死身ねえ」
「ああ、不死身だ」
「具体的に今までどんなことがあったのよ」
「頭に鉄筋が落ちてきてもダンプにはねられても平気なんだよ」
「頑丈ね」
「サイボーグ並にな」
この時代一応そうした技術もある。ロボット技術もかなり発達していて連合はその分野でも他の国々や地域を圧倒しているのである。
「丈夫だぞ」
「何か話聞いてたら見てみたくなったわ」
ラビニアはここでふと好奇心を巻き起こさせたのだった。
「それならね。ちょっとね」
「その不死身ぶりをかよ」
「是非ね。どんなのかね」
「まあ見たいっていうんならよ」
フックはここでまた駒を動かした。そうしてラビニアに対して言

ってきた。
「王手だぜ」
「うっ、しまったわ」
その手を見て思わず苦い顔になるラビニアだった。
「そう来たのね」
「油断したみたいだな。これはどうするんだ？」
「逃げるわよ」
憮然としながら自分の王将を動かす。
「参ったわね。この展開は」
「残念だったな。とにかくラメダスさんだけれどよ」
「ええ」
「今日の放課後な」
時間の指定は彼がしてきた。
「具体的に見たらいいさ。どれだけ不死身なのかな」
「わかったわ。それじゃあね」
そんな話をしながらそのうえで将棋を続ける。二人の将棋は何だかんだで一進一退を続けつつこの場では決着がつかなかった。そうしてその放課後であった。
「さて、と。その放課後だけれど」
「ああ、何かあっという間だったな」
「で、ラメダスさん何処なの？」
ラビニアは自分から二年Ｓ１組に来ていた。そのうえでフックに対して尋ねていた。
「見たところいないけれど」
「今教室を出たところだぜ」
そうその問いに答えるフックだった。
「今な」
「えっ、じゃあ入れ違い！？」
「安心しな。すぐに戻って来るからな」
しかしフックは落ち着いた顔で困った表情になった彼女に告げた。

「すぐにな」
「あっ、そういえばセーラまだいるわね」
ここでラビニアはクラスにまだセーラが残っていることに気付いた。彼女は静かに教室の自分の席に座りベッキーからお茶を受け取っていた。かぐわしい香りの紅茶が豪奢な白と青の陶器のカップに注がれその中で優雅な放課後の一時を過ごしていた。
「お嬢様、ではお菓子は」
「ケーキを御願いします」
「わかりました。では薔薇のケーキを」
「はい」
微笑みながらベッキーの問いに応えていた。彼女はいつも放課後はまず教室でこのようにしてお茶とお菓子を楽しむのである。
「何か異様な光景ね、あれで充分過ぎる程」
「まあ気にするな」
フックはラビニアに対して告げた。教室で優雅に紅茶を楽しむ姿は確かに場違いだがそんなことをいちいち気にしていてはセーラを見ることはできないのだ。
「それはな」
「まあとりあえずそれは納得したけれど」
それはいいとしたラビニアだった。
「けれどね。不死身なのよね」
「そうさ。まあ凄いからな」
「っていうかもう凄いとかそういうレベルじゃないけれどね」
ラビニアの言葉は極めて現実的なものだった。

第百三十七話　不死身のラムダスその四

「まあその不死身さ。見せてもらうわ」
「例えばな。あそこにコブラがいる」
「ええ」
見ればセーラの足元に巨大なコブラがいた。優に五メートルはある。キングコブラだ。キングコブラは個体によってはそこまで大きくなるのである。
「物凄く危ないわね」
「セーラのペットでな。普段は壺の中にいるんだけれど時々ああやって出ているんだよ」
「毒蛇がペットなのね」
「他には恐竜もペットにいるし狼とか虎もペットにしてるからな」
危険な動物ばかりである。
「言っておくが当然猛毒持ってるぞ」
「わかるわ。噛まれたら死ぬわよね」
「ああ」
それは言うまでもなかった。キングコブラの毒はただ強いだけではない。量が多く噛まれたらまず助からないことでも非常に有名なのだ。
「ほぼ確実にな」
「それで丁度いいタイミングで戻ってきたけれど」
話の対象が戻って来たのだった。両手で色々と抱えている。
「お嬢様、お待たせしました」
「あったのですね」
「はい、まずはヒキガエルの干物に」
最初からかなり怪しいものである。
「熊の頭の毛に墓場に生えていた青い百合の花」
「何か物凄いものばかりね」

ラビニアはそれを聞いてまた顔を顰めさせていた。
「黒魔術に使うのかしら」
「それに千年生きた狐の尻尾に海底に眠っていたシャコ貝のパール。全て集まりました」
「有り難うございます」
セーラはラメダスの話を聞いて微笑んだ。
「それではこれであの薬が作れますね」
「はい、それでは今より屋敷に帰りまして」
「はい」
ラメダスはそうした怪しいことこのうえないアイテムを懐に収めたうえで主の方に足を進める。しかしここでその足元にいるキングコブラを踏んでしまった。
こうなると後の展開は一つしかなかった。そのコブラに噛まれてしまった。ラビニアはそれを見てフックに対して思わず言ってしまった。
「死ぬじゃない」
「だから安心しろって」
しかしフックは言うのだった。
「あの人は不死身なんだからな」
「キングコブラに噛まれてもなのね」
「ああ。見てみろよ」
こう言ってラビニアに見守るように告げる。すると噛まれたラメダスは一向に平気な顔であった。何事もなかったかのように平然としている。
「大丈夫なの？」
「言ったろ。不死身だってな」
フックはあらためてラビニアに告げた。確かにラメダスは平気な顔をしておりにこやかに笑ってセーラの後ろについていた。コブラはセーラが差し出してきた壺の中に入った。その壺はベッキーが受け取りしまってしまった。

「あの人はな」
「けれど毒が効くのはもうちょっと後よ」
ラビニアは目を顰めさせながらも一応はこう言った。
「後だけれど。全然平気みたいね」
「だろ？まず毒が効かないんだよ」
「どの毒もなの」
「ああ。とりあえずキングコブラに噛まれても平気なんだよ」
またラビニアに対して教えていた。
そしてラメダスはその間にであった。セーラの命を受けていた。
「それで次はですね」
「はい」
「あれを御願いします」
「あれですね」
「そう、あれです」
セーラは言っていた。
「マンドラゴラを御願いします」
「わかりました。それでは」
彼はセーラの言葉を受けてまた教室を後にする。そうして何処かに向かおうとする。フックはそれを見てすぐにラビニアに対して言ってきた。
「おい、俺達も行くぞ」
「ええ」
ラビニアはすぐに彼の言葉に頷いた。
「それじゃあすぐにね」
「行くか。じゃあな」
「それにしてもマンドラゴラよね」
ラビニアはフックと共にラメダスを追いながらそのうえで言うのだった。
「あれって確か」
「知ってるみたいだな」

「有名じゃない。漫画とか小説とかアニメによく出て来るじゃない」
だからだというのだった。

第百三十七話　不死身のラムダスその五

「あの根っこが人間の形のあれよね」
「それだよ。で、それを引っこ抜くとな」
「知ってるわよ、それも」
ここでラビニアの顔が曇った。
「物凄い叫び声あげるのよね」
「それでその叫び声を聞いたら」
「死ぬ」
フックははっきりと答えた。
「確実にな」
「そうだったわよね。だからマンドラゴラを集めるのって」
「色々と工夫が必要だと言われてるな」
「死刑囚に抜かせたり犬に抜かせたり」
方向は様々である。
「色々とな」
「どっちにしろ死ぬのね」
「そうなってるよな。ゲームとか小説とか漫画じゃ」
「どっちにしろ碌でもないものね」
ラビニアはあらためて言った。確かにマンドラゴラを集めようと思ったらそれは命懸けである。少なくとも命を一つ捨てなくてはならないのだ。
「マンドラゴラって」
「野菜に似てるけれどな」
その葉や茎の部分はである。
「しかしな。それこそ引っこ抜いたら」
「叫ぶと。何か野菜死ねって言いたくなるわね」
「そうか？」
フックは今のラビニアの言葉にはあまり賛成しなかった。

「そうなるか？マンドラゴラに」
「私は何となくね」
なるというのだ。
「言いたくなるわね。それ聞くと」
「まあとりあえずだ。マンドラゴラを抜くとなるとな」
「あれね。耳栓ね」
「いや、耳栓だけじゃ駄目だ」
フックはラビニアが早速取り出してきたその耳栓は一応受け取りながら述べた。
「それにこれもな」
「ヘッドホンも？」
「これも必要だ。二重にしないとな」
「そこまでしないと駄目なのね」
「とにかく凄まじい声を出す」
そのマンドラゴラを引き抜いた時にだ。
「死にたくないだろ？まさかとは思うけれどな」
「当たり前でしょ。進んで死にたい人なんていないわよ」
ラビニアは今度は憮然として答えた。
「大体まだ十七なのに。人生これからよ」
「御前は楽しい人生過ごしたいのならその性格なおせよ」
しかしフックの言葉は厳しい。
「その根性曲がりの性格な」
「失礼するわね。私の何処が根性曲がりなのよ」
「その性格全部がだよ」
フックはまだ言う。
「頭の髪の毛の先から足の爪の先までな」
「言ってくれるわね。じゃああんたの耳栓に細工しておくわよ」
「俺に死ねっていうのかよ」
「っていうか一回死ねば？」
半分本気の言葉だった。

「それで生き返ってカルマを脱却したらいいわよ」
「悪いが俺もまだ今生きている人生を楽しみたいんだよ」
話に微妙に輪廻転生が入っていた。
「ここで死んでたまるか」
「わかったらもう言わないことね」
憮然としながらもそれでもちゃんとした耳栓は手渡すラビニアだった。
「これでね。はい、これと」
「これな」
何だかんだでフックもヘッドホンをラビニアに手渡す。
「これで大丈夫だな」
「少なくとも死ぬ程までは声は聞かないわけね」
「ああ、まあ気分が悪くなる位か？」
首を少し傾げながら答えるフックだった。
「少しばかりな。それ位で済むな」
「マンドラゴラを引っこ抜くのも大変なのね」
「それを見るだけでもな」
しかし言い換えればそうまでして引っこ抜くだけの価値がある、そういうことだった。

第百三十七話　不死身のラムダスその六

「こんなに用心が必要なんだからな」
「そうよねえ。大体マンドラゴラって何に使うの？」
「何だろうな」
実はそのマンドラゴラを何に使うかはラビニアもフックも知らないのだった。
「薬草よね、確か」
「毒草じゃなかったか？」
実は話によってまちまちだったりする。
「麻薬だったっけ」
「幻惑の薬ってのも聞いたしな」
「結局わからないのね、詳しいところは」
実際のところそうなのだった。どういったものに使われる薬かは誰も知らなかったりする。この辺りは何処かいい加減だったりする。
「あのほら、連合一危険な科学者の」
「天本博士か」
フックの顔が一気に曇った。
「あの人間の命なぞ塵芥にしか思っていないマッドサイエンティストだな」
「あの人もマンドラゴラ集めるの好きらしいわね」
「暴走族やヤクザ屋さんに無理矢理抜かせてるんだよ」
あの博士は科学者となっているが他にも呪術や錬金術も行っているのである。その際人命の犠牲を一切考慮しないことで有名なのだ。
「身体をコントロールさせて意識だけそのままにしてな」
「相変わらず残虐非道ね」
「あの博士のやることはいちいち突っ込むな」
フックは憮然とした顔のまま返す。
「それこそ考えても仕方のないことだ」

「そうね。まあとりあえずは」
「ああ。そっとついて行こう」
こうして二人はラメダスの尾行に入る。しかしそれでもラビニアは言うことがあった。
「そういえばよ」
「まだ何かあるのか？」
「マンドラゴラって実在したのね」
彼が言うのはこのことだった。
「ちゃんと。あるのね」
「それな。俺も今知った」
実はそれはフックも同じだったのである。
「マンドラゴラって本当にあるんだな」
「やっぱりないって思ってたわよね」
「小説の中だとばかりな」
そうとしか思っていなかったのである。現実のものとは何一つだった。
「それがな。まさか」
「で、その実在する場所って確か」
ラビニアは続いてこのこともついても考えを巡らせる。
「あれよね。処刑場のすぐ側よね」
「それか墓場か」
この辺りはそのマンドラゴラが出て来る小説やゲームによって違う。様々であるのだ。
「どっちにしろそういう場所だったな」
「そうね。どちらにしろ碌な場所じゃないわね」
ラビニアの顔は思いきり暗鬱なものになってしまっていた。
「何か出て来るとかかしら」
「かもな」
フックもその可能性を否定しなかった。

第百三十七話　不死身のラムダスその七

「何せセーラの話だからな」
「大体あの娘ってマハラジャの娘さんよね」
「ああ」
フックはまた彼女の言葉に答える。
「そうだけれどな」
「何で呪術とか魔術とか極めてるの？」
このことについても述べずにはいられなくなっていたのだ。
「そんなお嬢様が」
「ああ、そういえばそうだな」
フックもまたそのことにふと気付いたのだった。彼もだった。
「何で使えるんだ？あいつが」
「何か物凄い変なことよね」
「そうだよな。マハラジャの家ってそんなことまで勉強するのか？」
「いや、しないでしょ」
ラビニアはあくまで常識から語った。
「そんなのまず」
「そうだよな。マハラジャっていえば」
所謂王族である。マウリアにおいてはそれぞれの星系によってマハラジャが象徴であったり中央政府から知事が派遣されたりしている。この辺りが連合と違っているのだ。
「普通はそんなのしないわよね」
「しないよな、やっぱり」
フックもまた言う。
「妖術か陰陽道とかな」
「しかも日本のものもあるじゃない」
ラビニアが言うのは陰陽道についてだった。
「何でもやってるのね、あの娘って」

「正体不明だな」
フックはつくづく思うのだった。
「あいつも」
「マハラジャ自体がね」
「怪しいか」
「ええと、物凄いお金持ちなのよね」
「あいつの家のことは知ってるよな」
「それはね」
それを知らない人間はもうこの学園にはいないのだった。誰もである。
「知ってるわよ、充分にね」
「あれが仮住まいだからな」
「ひょっとして」
ラビニアの顔がここで曇った。
「まさかって思うけれどね」
「何かあるのかよ」
「セーラの呪術とかで物凄い儲けてるじゃないかしら」
目を顰めさせ首を捻っての言葉だった。
「あの娘のお家って」
「否定できないな」
フックもその可能性はゼロではないと内心思うしかなかった。
「呪術って儲かるんだったな」
「っていうか占い師の人だってその一種じゃない」
「あれもか。そういえばそうだよな」
「そういうこと。有り得るわよ」
ラビニアはまた言う。
「これもね」
「マハラジャっていうだけでもかなりの財産あるんだけれどな」
「それでもよ。魔術とかっていったら」
「あいつのそうした妖術とかにしろな」

とにかく色々な術を身に着けているのだった。
「金になるか」
「マンドラゴラなんかそうでしょ？特に」
「ああ」
これも小説やゲームでの知識ではあるが。
「なるな。確かにな」
「だったら今回のことだって」
「また話がややこしくなってきたな」
ここでフックはぼやいてしまった。
「全く。何かあればいつもそうなるな」
「仕方ないじゃない。この学校は何処でもそうよ」
「やれやれだな。まあとにかくな」
「行きましょう」
こうしてラメダスを追っていく二人だった。何はともあれマンドラゴラの声への備えは忘れずにそのうえで今二人で彼の不死身をさらに見に行くのであった。

不死身のラメダス　　完

２００９・５・１２

第百三十八話　マンドラゴラその一

マンドラゴラ

マンドラゴラを取りに行くラメダスとその彼を尾行するフックとラビニア。ラメダスは一人で実に寂しくかつ不気味な場所へと向かっていた。

「ねえここってやっぱり」

「ああ、そうだな」

フックはラビニアの言葉に頷く。人気がなく鬱蒼としたその道を歩きながら。

「処刑場に行く道だな」

「そうよね。確かこの前も」

ラビニアは少し前の出来事を思い出しながら言うのだった。

「死刑あったわよね」

「殺人犯がな」

連合では殺人はまず死刑である。なおその死刑の数も割合も他の勢力に比べてかなり多くなっている。それもかなりの割合で、である。

「鋸引きにされてたな」

「しかも逆さにね」

日本の鋸引きは首から下を地に埋めてそのうえで首を引いていくものだ。道の往来にその罪人を埋め道行く人々に切らせるのだ。だが実際にはそんなものをしようという者はおらず大抵は一週間程度で鋸引き失敗とした上で打ち首にしてしまう。はっきり言えば晒しものでしかなかった。

しかし欧州でよく行われていた逆さ鋸引きは違う。罪人を逆さに吊るし局部の辺りから切っていくのだ。その残虐さと痛みは日本のそれとは比較にならない。

「それで殺されてたじゃない」

「その前は串刺しだったな」
「確かね」
連合では串刺しもよく行われるのである。そのうえで晒しものにするのはドラキュラ公と同じである。やはりかなり酸鼻な処刑方法である。
「じゃあやっぱりあそこで」
「間違いないな」
そして二人はここで確信するのだった。
「処刑場で抜くな」
「普段はあんな場所には人が来ないしな」
処刑が行われていない処刑場に好き好んで行く人間もまずいない。
「まあないか怪しいものを手に入れるにはおあつらえ向きの場所だな」
「その通りね。そういえば処刑場に結構草って生えてるしね」
「それがマンドラゴラだったのか」
今わかった衝撃の事実であった。
「それで子供の頃処刑場の草なんて抜くなって言われたのか」
「死ぬからだったのね」
引き抜いたその時の声によってである。
「それも確実に」
「物騒だな、それ考えたら」
フックはあらためて口を尖らせて述べた。
「処刑場っていうのもな」
「まあそもそも誰も処刑場の草なんて抜かないし」
やはりこれもなかった。
「っていうか普段見向きもしないしね」
「処刑場で見るのは処刑だからな」
「そうそう」
連合では公開処刑が普通である。その一部始終を録画して放送したりＤＶＤとして販売したりもしているのである。これが結構人気

があるのだ。
「そういうものだからね、あそこは」
「そうしたことを考えれば本当に異様だな」
フックはラメダスの後姿を見ながらあらためて思うのだった。
「セーラの術っていうのはな」
「はっきり言って黒魔術じゃないの？」
「確実にそうだと思う」
そもそも処刑場に生える草を使うこと自体がすこぶる怪しいものであるからである。
「あいつが使う術はな」
「妖術だって使うしね」
中国では普通妖術といえばあまりよろしくない筋の人間が使うものとされている。だからこそ『妖しい術』となっているのである。仙人の仙術は法術とは違うのである。
「そういうの考えたらやっぱり」
「あいつのはかなり黒魔術の系統だな」
「そうとしか思えないわね。他にはあれでしょ？」
「呪術に錬金術だからな。勿論仙術とか陰陽道もあるけれどな」
「何かやっぱりあっち系なのね」
「そしてマンドラゴラか」
話は嫌な感じでつながっていた。

第百三十八話　マンドラゴラその二

「何に使うのかも気になるしな」
「その通りね。まあとにかくもうすぐよ」
「ああ」
またラビニアの言葉に頷く。丁度ここでその処刑場が見えてきたのだった。前の方から不気味な静けさをたたえているのが見える。
「あれだな」
「何か今にも出てきそうね」
ラビニアはその処刑場を見て言うのだった。
「幽霊でも妖怪でもね」
「時々天本博士もうろうろしているしな」
「何か噂によると死刑囚の死体を勝手に取ってそれで何か作ってるって？」
「らしいな。フランケンシュタインでも作ってるのか？」
「その可能性はあるわね」
なおこのフランケンシュタインの話は実際にあったことである。だが本当にその人造人間が命を持ったかというとそれはわかってはいない。
「あの博士だと」
「マンドラゴラも集めてるらしいしな」
「何か話してるうちにセーラってあの博士並に危ない人に思えてきたんだけれど」
本当に話をしているうちにであった。
「気のせいかしら」
「いや、絶対にそうじゃないな」
フックもそれを否定しなかったのだった。
「まずな」
「そうよね、やっぱり」

「ああいう性格だから大事には至ってないけれどな」
何事も性格なのだった。性格が悪ければそれは持っているものにも当然ながら影響する。そういうものである。
「それでも。持っているものはな」
「一歩間違えればあの博士になっちゃうのね」
「ならなくて本当にいい」
心からの今のフックの言葉だった。
「さもなければ今洒落にならないことになっていたからな」
「そうよね。セーラは性格いいから」
「穏やかで気品があって温厚だからな」
いい意味でお姫様なのである。もっとも本物のお姫様であるが。
「あの博士はそれこそな」
「趣味が生体実験に兵器や細菌の開発で」
「あと破壊活動に世の中に混乱をもたらすことだからな」
少なくとも真っ当な人間の趣味ではない。完全にマッドサイエンティストの趣味であった。
「そんな人間と同じ性格だったらって思うとな」
「心からぞっとするわね」
「ああ。それで今はな」
またラメダスを見るフックだった。
「あの人が手に入れるマンドラゴラをどうするかだな」
「お薬に使うのよね、やっぱり」
マンドラゴラの基本的な使い方である。
「まあそれも気になるけれどまずはね」
「ああ、用意してきたぞ」
フックはラメダスを見ながらここでまず耳栓を出した。
「いいな」
「ええ。ところで耳をガードするのはいいけれど」
ラビニアはその手に耳栓を持ちながらフックに言ってきた。
「その間のやり取りはどうするの？一体」

「ああ、俺は手話ができるけれどな」
これまた意外な特技であった。
「御前はどうなんだ？」
「ええ、一応できるわよ」
ラビニアもにこりと笑って彼の言葉に応えてきた。
「これでも幼稚園児の保母さんになるのが夢なんだから」
「絶対に止めておけ」
今のラビニアの言葉は何と〇・〇一秒で応えたのだった。
「御前が幼稚園の保母さんなんてな。天地がひっくり返っても有り得ないからな」
「随分と言ってくれるわね」
「はっきり言おう、合わない」
これまたはっきりと言い切るのだった。
「御前の性格にはな。合わない」
「何でそう言えるのよ」
「御前みたいな意地悪な奴が保母さんなんかできるか」
それが彼の主張の根拠であった。確かにラビニアは意地悪として有名である。その意地悪さから意地悪婆さんとまで言われている程である。
「あれだ。御前は他の仕事を目指せ」
「他の仕事？」
「スパイとか工作員とかな」
何故かそういう仕事なのだった。
「そういうのにな」
「悪いけれど軍隊とかには興味ないから」
彼女はそもそも軍とは何かも殆ど知らない。

第百三十八話　マンドラゴラその三

「そういうのにはね」
「それで保母さんか」
「そうよ。子供好きだし」
「嘘つけ」
このことも速攻で否定してしまうフックだった。完全にラビニアがどういう人間なのか確信していた。最早何のぎねんもないレベルである。
「御前が子供好きか。何だ？黒ミサの生贄にするのか？」
「あのね、あんた私を何だと思ってるのよ」
彼があまりにも言うのでいい加減頭にきているのだった。
「私が魔女か何かだっていうの？」
「実際魔女になってみたらどうだ？」
フックの言葉は本気であった。
「魔女にな。合ってるぞ」
「それで人を呪う仕事したり怪しい薬作れっていうの？」
「丁度マンドラゴラも前にあるぞ」
「冗談でしょ。私にそんな趣味ないから」
顔を顰めさせて彼に返すのだった。
「黒魔術とかそういうのはね」
「合っていると思うがな」
「だから。私がなりたいのは保母さんなのよ」
あくまでこう主張するのだった。
「他のじゃないから。わかったわね」
「だから何度も言うが保母さんは止めておけ」
「あんたに言われる筋合いはないわよ。ところでね」
「ああ」
ここで話が戻ってきた。

「そろそろだけれど」
「ああ、そうだな」
フックはラメダスに視線を戻して応えた。
「いよいよだな」
「耳栓して。それから」
「ヘッドホンな」
二重に守るのであった。打ち合わせ通り。
「これでいいわね。じゃあ」
「隠れるぞ」
今の会話は手話であった。二人は早速それで話をはじめるのだった。見れば二人共かなり手馴れている。特にラビニアの手話は見事であった。
「上手いな、御前」
「だから。目指してるって言ったでしょ」
その手話を出しながら誇らしげに笑みを浮かべている。
「保母さんをね。ちゃんとね」
「まあそれは止めておけ」
それは何度も止めるフックだった。
「子供達が可哀想だからな」
「言ってくれるわね。それで私が魔女に向いてるって言うのね」
「絶対に天職になるぞ」
こうまで言い切るのだった。
「どうだ？」
「遠慮するわ」
それはきっぱりと言い切るのだった。
「だから私がなりたいのは保母さんだから」
「本当に諦め悪いな、御前も」
「諦めが悪いのが私の長所なのよ」
今度の言葉は胸を誇ってのものだった。
「絶対に保母さんになってみせるから」

「まあそれで大勢の人を不幸にしてろ」
「魔女になったらもっと多くの人を不幸にしない？」
とりあえず今はあの箒に乗ってそのうえで鍋で妖しい薬を作るあの真っ黒い服を着て三角帽子に曲がった長い鼻を持っているあの魔女をイメージしていた。
「黒魔術で」
「それはそうだけれどな」
フックも嘘をつかない。

第百三十八話　マンドラゴラその四

「まあどっちみち御前に誰かを幸せになんかできるものか」
「私ってそこまで性格悪いかしら」
「悪いな」
ここまで言い切ってみせる。
「だから向いてるんだよ。いいな」
「じゃああんたに真っ先に魔術かけてやるからね」
そんなことを手話で話す。そうこうしている間にラメダスは草のうちの一つに手をかけた。二人はそれを見てヘッドホンの上にさらに手を当てる。そうしてそのうえでラメダスがマンドラゴラのそれを引き抜くその様子を見守るのだった。とにかくその声を聞かないようにして。
ラメダスはその草を引き抜いた。するとすぐに耳をつんざくような凄まじい悲鳴が聞こえてきた。それは二人にも聞こえたのだった。その叫び声を聞いて倒れそうになる。耳栓にヘッドホンをしてそのうえで手でガードしてもそれであった。三重のガードをしていてもこれであった。
「な、何て叫び声なのよ」
「あれがマンドラゴラかよ」
ラビニアもフックも何とか生きている自分達を確認しながら言った。
「これだけガードしても倒れそうになるなんて」
「洒落にならねえな、本当に」
「けれど」
ラビニアは何とか気を取り直してそのうえでラメダスの方を見た。
「ラメダスさんは？」
「普通は死ぬぞ」
フックもふらふらになりながらも言う。

「それでも生きているのかしら」
「どうなんだ？」
見ればだった。やはり生きていた。平然とした顔でその人の形をした不気味な植物を持っている。しかもにこにことさえしている。
「さて、戻りますか」
こう言い残してそのうえで処刑場を後にするのだった。それだけだった。
「やっぱり生きてるわね」
「というか何でもないみたいだな」
二人はそんなラメダスを見てまた言い合う。
「あの叫び声を聞いても」
「何ともないか」
「人間かしら」
ラビニアは今度は首を傾げて言うのだった。
「あの人、本当に」
「言っただろ？不死身なんだよ」
フックの言葉は変わらなかった。
「何があっても死なないんだよ、あの人は」
「化け物じゃないわよね」
「さてな」
その可能性を否定できなかった。
「マウリア人なのは間違いないけれどな」
「何かそれってマウリア人が人間じゃないみたいね」
「そんなことは言ってないけれどな」
「けれどそう聞こえるわよ」
耳栓を外しながら述べた。
「本当にね」
「とりあえずあの人は不死身なんだよ」
フックは強引に話をそっちに戻した。
「これでよくわかったよな」

「ええ。キングコブラに噛まれても全然平気だし」
「血清打ってないのも見たよな」
「血清打ってもどうにかなる相手じゃないけれどね」
あまりにもそれが強くしかも量が多い為だ。キングコブラはそこまで恐ろしい蛇なのである。
「けれどとにかく生きてるし」
「他にも爆弾の直撃受けても生きてたことがあるぞ」
彼はまた話す。
「それも核爆弾な」
「放射能の影響は？」
「なかった」
はっきりと言い切った。
「天本博士が気紛れで行った核実験を止める時間にな」
「気紛れで核実験ね」
ラビニアはそのことにも呆れた。
「あの博士も何とかしないと本当に人類にとって問題よね」
「そうやって何千年も迷惑かけてる人だしな」
この博士もかなり人間離れしている。

第百三十八話　マンドラゴラその五

「あの人はな」
「とりあえずブラックホールの中に隔離した方がいいんじゃないの？」
「それをやっても脱出してきただろ？」
「そうだったっけ」
「それも何回もな」
博士にはブラックホールも意味がないのだった。
「平気な顔で飽きたって感じでな」
「ブラックホールへの隔離が飽きただけで終わるのね」
「それが博士なの」6
「そうなんだよ。あの博士だけはどうしようもない」
「しかも不老不死って」
悪いことはさらに続くのだった。
「一体全体何処まで迷惑なのかしら」
「下手をしなくても海賊やテロリストより迷惑な人だけれどな」
これは誰もあえて言わないがわかっていることである。連合においても博士の存在は常に警戒の対象である。日本政府だけではなく中央政府にとってもだ。
「あの博士のマンドラゴラの採り方もな」
「暴走族やヤクザ屋さんに無理矢理なのね」
「何でも死を前にしてそれから逃れようともがき苦しむのを見るのが楽しくて仕方がないらしい」
だからだというのである。
「それであえて意識だけはそのままにして身体を操ってな」
「採らせるのね」
「そういうことだ」
そうしていつもマンドラゴラを手に入れるのが博士のやり方なの

だ。
「悪趣味なことこのうえないがな」
「悪趣味どころじゃないじゃない」
ラビニアは目を座らせてフックに言い返した。
「っていうか犯罪じゃない。それも殺人」
「あの博士に法律が通用すると思うか？」
フックはこれ以上はない程にストレートにラビニアに問い返してきた。
「そもそも」
「それは絶対にないわね」
ラビニアもそれはよくわかっていることだった。
「あの博士に限って」
「法律なぞは自分の偉大な研究の邪魔でしかない」
とんでもない法解釈である。そもそも法解釈にすらなっていない。
「これだからな」
「だから人を殺しても平気なのね」
「今まで殺した人間は何人だった？」
ふとここでこんなことも考えるのだった。
「一日辺りで百人として」
「一年で三万三千六百六十五人」
簡単に計算しても物凄い数字である。
「それで何千年もだからな」
「それより殺してるのは間違いないわよね」
「宇宙海賊を突然襲撃して全員怪獣の餌にしたこともあったしな」
「そういえばそんなこともしてたわね」
当然博士が生み出した怪獣である。博士は昔から怪獣を生み出しそれで気に入らない相手のところに送り込んで暴れ回らせることが好きなのだ。
「それで犠牲者二十万だったかしら」
「ああ、連合で一番大きな宇宙海賊だったからな」

それだけの規模も海賊も存在しているのが連合なのである。
「それだけいたな」
「それだけの海賊を皆殺しって」
「そういうことが年に何回もあるからな」
しかもしょっちゅうなのである。
「あの博士だけはな。本当にな」
「二億は平気で殺してるってことね」
「まあそれ位か？」
少し考えてからまた述べるフックだった。

第百三十八話　マンドラゴラその六

「間違いなく人類史上最悪の殺人数だ」
「ヒトラーやスターリンより上なのね」
「確実に上だ」
つまり人類史上最凶最悪の犯罪者であるのだ。
「そんな人だ」
「幸いなのは実験とか怪獣とかで殺す人達が暴走族とかテロリストだけってことだけれど」
「そうじゃなかったらもっと大変なことになっていたな」
「けれど何でそういう相手ばかり攻撃するのかしら」
ラビニアはふとそのことも考えるのだった。
「連合軍とか警察とかは絶対に狙わないのよね」
「それはな。ちゃんとした理由がある」
「あるの」
「嫌いだからだ」
それが理由だというのだ。
「暴走族にしろヤクザ屋さんにしろテロリストにしろ海賊にしろ」
「ええ」
「嫌いだから殺すらしい」
それだけなのだ。
「五月蝿いからしい」
「って博士自身が最悪の犯罪者じゃない」
むしろ宇宙海賊等の方が遥かにまともな位である。
「はっきり言って」
「そうだけれどな。それで殺しまくっているそうだ」
「実験だの何なのでね」
「ああ。本当にセーラがそういう奴じゃなくてよかった」
フックはしみじみと言うのだった。

「全くな」
「そうね。セーラ性格いいから」
実は学園でも屈指の人格者なのである。その温厚で気品がありそれでいて公平で飾ることのない性格は聖女とまで謳われているのである。
「おかげで凄くいいことになってるわね」
「しかし。マンドラゴラをどう使うかだな」
しかしフックはそれはまだ不安に思うのだった。
「あれをな。どうするつもりだ?」
「さあ。けれど物凄いことに使うと思うわよ」
「物凄いことか」
「だって。マンドラゴラよ」
何度言葉に出してみてもそれだけでとてつもないものを感じさせるものである。
「それこそ何ができるやら」
「そうだな。少しセーラを見てみるか」
「ええ。まあセーラだから」
ラビニアはこれまた少し考えてから述べた。
「おかしなことには使わないとは思うけれど」
「それでも誰も考え付かないことに使うかも知れないぞ」
「誰も考え付かない、ね」
「今まで普通のことをしたか?あいつが」
フックはあくまで連合の常識の中で話しているのだが彼等のいる世界は連合なのでそれは通用するのだった。もっともセーラはマウリア人なのだが。
「したか?思い出してみろ」
「思い出すまでもないわ」
実にストレートなラビニアの返事だった。
「それこそ光の巨人の方が普通よ」
「あの連中よりもか」

「そうじゃない。あの人達まだ普通よ」
特撮の定番ともなっている巨人達だ。普段は人の姿を借りているが怪獣や宇宙人が出て来るとすぐに変身して光の巨人に戻る。二十世紀からある伝説的特撮番組だ。
「魔術とか妖術とかは使わないし」
「そうだな。それはな」
少なくともそういう番組ではないしそれに近いことはしても決してセーラのそれのような説明することも理解することも全く不可能なものではない。
「ないな」
「それ考えたらセーラは光の巨人より物凄いわよ」
「あいつは宇宙人以上に厄介な存在だったのか」
「そういうこと。とにかく暫くセーラから目を離せないわよ」
「そうだな。本当にな」
こうしてラメダスだけで話が終わらなかったのだった。マンドラゴラを巡る話はさらに続く。しかも話の先が誰にもわからない状況の中で。

マンドラゴラ　　完

２００９・５・１６

第百三十九話　何に使うのかその一

何に使うのか

「これは」

「お嬢様、如何でしょうか」

処刑場でマンドラゴラを手に入れた翌日、ラメダスは教室で己の主に対してそのマンドラゴラを献上していた。彼女の前に控えたうえで。

「このマンドラゴラは」

「見事です、実に立派なマンドラゴラです」

セーラはにこりと笑ってラメダスの言葉に応えていた。その顔だけ見れば確かに気品に満ち溢れた優雅なものである。まさにプリンセスだ。

「これで見事なものが作られますね」

「はい、確かに」

そう話をしていた。しかしクラスの面々は朝のホームルーム前の爽やかな空気の中でその人の形をした異様な植物を見て。怪訝な顔をしていた。

「本当にあったのかよ、マンドラゴラ」

「っていうかラメダスさんが採ってきたのよね」

「ああ、そうだ」

フックが皆に対して答える。

「昨日その現場を見た。耳栓をしてな」

「それで助かったのね、マンドラゴラの叫び声を聞いて」

「何とかな。もっともラメダスさんは耳栓なんてしていなかったがな」

そんなことは全くしていなかったのである。

「それでも全然平気だったんだよ」

「相変わらず不死身なんだな」

「マンドラゴラの声を聞いても死なないなんて」
その程度で死ぬことはないのである。ラメダスに限って。
「それであのマンドラゴラを手に入れたと」
「それにしてもあのマンドラゴラって」
皆は思いきり怪しいものを見る目でマンドラゴラを見続けていた。
マンドラゴラは既にセーラの手にあり彼女はそれを見てにこやかに笑っていた。
「見れば見る程不気味ね」
「っていうか処刑場に生えてるんだよね」
「そうだ。本当にそこに生えていた」
フックはこのことも皆に話した。
「あの天本博士が手に入れていると聞いていてまさかと思っていたがな」
「まああの博士はね」
「常識が全く通用しない人だから」
そういう意味ではセーラと同じではある。
「そもそも科学者なのに錬金術とか魔術もするし」
「だよね。何かセーラと似てる？」
セドリックがふと言った。
「そういう怪しい術をマスターしてるってところは」
「けれど決定的なところが違うのよね」
アロアはそこを指摘してまずは安心するのだった。
「セーラとあの博士は」
「セーラは性格いいからだよね」
セドリックはその決定的な違いがよくわかっていた。
「やっぱり。それだよね」
「あの博士モラルとかないから」
そんなものは全く気にしないのが博士なのだ。その存在自体が人類社会の深刻な危機なのである。しかしセーラは少なくともそうではない。

「セーラは悪いことしないからね」
「そうよね。それは安心だけれど」
しかし完全に安心できないのもまた事実であった。何故なら。
「マンドラゴラをどうするつもりかしら」
「あれ使って何かするつもりみたいだけれど」
怪訝な顔でマンドラゴラを見続けていた。
「果たして何かしら」
「すっごい不安なんだけれど」
「とりあえず様子見だな」
フックはそのセーラを見ながら皆に対して言った。
「ここはな」
「様子見ね」
「ここで」
「それしかないだろ」
フックは冷静に述べるのだった。
「やっぱりな、もう」
「けれど放っておいたらどうなの？」
ここで言ったのはウェンディだった。
「マンドラゴラよ。何に使うのかわからないのに」
「まあ確かに何に使うのかはわからないな」
フックもそれはわかっていた。わかっていたがそれでもだった。
「けれどな。セーラが何かするかというと」
「ないの」
「多分ないだろ」
彼はあまり確かではないがそう見ているのだった。
「本当にこれがあの天本博士ならわからないけれどな」
「っていうかあの博士だったら今頃このクラスどころか連合全体での騒ぎよ」
ウェンディは速攻で今のフックの言葉に対して突っ込みを入れた。

第百三十九話　何に使うのかその二

「毒薬を作ることだって趣味なんだから」
「マンドラゴラって毒薬にも使えたんだ」
「っていうか何にでも使える？」
皆顔を見合わせてまた話をはじめた。
「媚薬にも使えるっていうし万能薬にも使えるっていうし」
「それに毒薬にもって」
皆で話をする。話をすればするだけ何かよくわからないものに思えてくるのだった。しかし話せば話す程謎は深まってもいくのだった。
「セーラって毒薬も作ってたっけ」
「呪術もやってたからそうじゃないの？」
ウェンディが皆の問いに答える。
「妖術だって使えるし」
「そういえば黒魔術もだったよね」
「じゃあ間違いなく」
「使えるんだ」
「そもそも黒魔術と白魔術は表裏一体だからな」
フックは腕を組み眉を顰めさせ考える顔になっていた。
「薬だって治療薬になれば毒薬にもなる」
「だからマンドラゴラもそうなるんだ」
「毒にもなれば薬にもなるね」
「問題はその使い方だな」
フックはあらためて言った。
「そして使う本人だ」
「その言葉だと安心していいってことになるわよ」
ウェンディはここまで聞いてそのうえでフックに告げた。
「だってセーラだから」

「そうだな。少なくとも悪い目的には使われない」
これははっきりと断言できるようになってきていた。
「けれどな。何に使うんだ？」
「誰かの病気をなおす？」
「怪我？」
「それとも惚れ薬？」
こんな意見まで出て来ていた。皆あれこれ考えるが答えは出ない。
「何なのかしら、一体」
「それこそが問題なんだけれど」
結局答えは出ていない。そういうことだった。
「まあとにかくだ」
「やっぱり様子見しかないのね」
「俺はそう思う」５４
またウェンディに言うフックだった。
「それはな」
「わかったわ。じゃあまずは様子を見ましょう」
「ああ。それにしてもマンドラゴラか」
フックだけでなく皆がその奇怪な植物に目をやる。それは確かに普通のものではなかった。明らかにこの世のものではない異形の存在であった。
「本当にあることもまだ信じられないな」
「処刑場ってことはよ」
ウェンディはこのことからまた考える。
「あれ？やっぱり栄養は死刑囚の」
「そういえばこの前の処刑ってさ」
「そうそう」
連合では死刑は多い。凶悪犯は容赦なく惨たらしい処刑にする。しかも公開処刑である。他には顔に刺青をしたり手首を切ったり断種手術も行う。死刑囚の内臓はそのまま動物の餌にされるのが普通だ。凶悪犯の人権は一切考慮されない、これが連合なのである。

「串刺しだったわよね」
「お尻からぶすっとね」
そうした昔ながらの処刑も実に多く行われている。他には鋸引きや八つ裂きもある。
「あれっ、逆さ鋸引きじゃなかったっけ」
「じゃあ串刺しはその前ね」
当然ながら生きたままで執り行われる。無論麻酔なぞは一切ない。公の場で苦悶の顔を浮かべつつ何日も苦しみ抜いて死ぬのである。
「その血とかが養分なんだ」
「まんま妖怪よね」
「確かに尋常な植物じゃないな」
フックもそれはよくわかっていた。
「だからこそ魔術に使えるしな」
「そうよね。そんな怪しい存在だからね」
「高く売れるらしいしな」
「そんなに？」
「一本で家が建つらしいな」
フックはまた言った。
「ということがゲームで出ていた」
「何よ、ゲームなの」
「じゃあ本当かどうかわからないよ」
「いえ、けれどよ」
しかしウェンディはそのフックを援護するようにして皆に話す。

第百三十九話　何に使うのかその三

「実際滅多に手に入らないものよね」
「っていうか叫び声聞いたら死ぬから」
「滅多にどころじゃないんじゃ？」
簡単に言ってしまえばそうなる話だった。とにかくマンドラゴラといえばその叫び声でありそれを聞けば死んでしまう。それは誰もが知っている。
「つまり普通に考えて人命が必要だから」
「それで高価になるよね」
「そんな高価なのを使うからな」
フックがここでまた言う。
「やっぱり凄いものになるのは間違いないな」
「そうだよね、やっぱり」
「そうとしか考えられないわよね」
「まあ今これ以上話をしてもな。仕方がない」
そして今はこれで話を打ち切るのだった。
「様子見だな」
「了解。それじゃあ」
「落ち着いてね」
こうして皆とりあえずは様子見となった。その日は何もなかった。だが次の日。学校に来た一同は教室に入って唖然となってしまった。
「何、あれ」
「さあ」
「もう何が何だか」
朝の教室で行われているその儀式を見て言葉を失う一同だった。
見ればセーラは教室の真ん中に巨大な窯を置いていた。それはそのまま魔女が怪しい黒魔術を使う時に使う窯だった。しかもその窯の下では火が点けられており窯の中身もぐつぐつと煮え立っている。

中には得体の知れないものが多く浮かんでいる。
「ええと、あれヤモリの干物？」
「蛇の皮？」
「あとは高麗人参？」
「大蒜もあるな」
「一体何なんだ？あれは」
フックも彼女が何をしているのか全くわからなかった。
「とりあえず魔術みたいだがな」
「そうね。それはわかるわ」
ウェンディが今日も彼の言葉に応えて頷く。
「けれど白魔術かしら」
「そうは見えないな、全くな」
しかしこれも言えるのだった。
「少なくともあの窯と中身を見ていると全くな」
「何作ってるのかしら」
ウェンディは首を捻って怪訝な顔になっていた。
「本当に。あっ、今そのマンドラゴラ出してきたわよ」
「ああ」
見ればその通りだった。セーラは黒いフードのついたその魔女の服からマンドラゴラを出してきていた。赤い人形の根がはっきりと見える。
「後はあれを入れてよね」
「それだけだけれどな」
「他にも怪しいもの一杯入れてるし」
「また何か入れたよ」
ここで皆また言うのだった。
「あれは・・・・・内臓かな」
「レバーよ、あれ」
一人が言った。
「豚のレバーね」

「豚のレバー！？まさか」
ここでフックの目が動いた。
「まさかとは思うがな」
「何か知ってるのね、フック」
「ああ。豚のレバーにハンミョウを磨り潰した粉をかけて作る毒薬がある」
彼は真顔で皆に話しはじめた。
「名付けてカンタレラだ」
「カンタレラっていうと」
「あのルネサンス時代の」
「そうだ。ボルジア家が使っていた毒薬だ」
あのアレクサンドル六世やチェーザレ＝ボルジアを生み出した家である。ルネサンス時代のイタリアにおいてその権謀術数で覇を唱えた。なおルネサンス期きっての美女と言われるルクレイツァ＝ボルジアはこのチェーザレ＝ボルジアの妹である。
「それは豚のレバーを使うがな」
「けれどああして煮ないわよね」
「それはあるの？」
「いや、ない」
しかしそれはないのだった。
「それに今度は鰻も入れたな」
「ええ、はっきりとね」
「それにセロリも入れたよ」
「セロリか」
何か急に怪しげなものから健康的なものになってきていた。

第百三十九話　何に使うのかその四

「あとは林檎にすっぽんにって」
「すっぽん！？」
「何でここですっぽんが？」
皆それを見てさらにわからなくなった。
「すっぽんていったら精がつくけれど」
「それに胡桃も入れたし」
「チーズまで。あれは山羊のだね」
「ヤモリに蛇にすっぽんに高麗人参にセロリにレバーに胡桃にチーズ」
フックはここでまた考えだした。
「この組み合わせは」
「ひょっとしてよ」
ウェンディも間が込む顔で言ってきた。
「まさかと思うけれど」
「そうだな。精力剤だ」
フックが言った。
「これはな。そういえばマンドラゴラもだ」
「使われたっけ、ゲームとかじゃ」
「ああ、確かな」
「何かどのゲームか忘れたけれど」
「っていうかマンドラゴラ出てる作品多いし」
実際のところあまりにも有名なので出ている作品もかなり多い。
それこそファンタジーというジャンルが小説や漫画やゲームで確立されてからずっと出ている。
「何かであったよね、確かに」
「その数も多かったけれど」
「それにしても精力剤にしろだ」

フックの顔がここで顰めさせられてきた。
「どんな精力剤なんだ、一体」
「確かに何か一杯入れてるけれど」
「あれだけ入れたら死者でも蘇りそうだけれど」１０
それだけのものが確かに入れられていた。その窯の中は最早得体の知れない不気味な緑色になっていた。まさに黒魔術のそれであった。
「っていうか今度は何か草も一杯入れてるし」
「何、あれ」
「コリアンダーに？」
インサイのことだ。香りの強い香草でありタイ料理やベトナム料理で頻繁に使われる。香りに抵抗がある人間も多いか味は確かにいい。
「それにチコリにジンジャーに」
「フェンネルにローズマリー」
とにかく何でも入れているのだった。
「カモミールにサフランにマレインも入れたし」
「キャラウェイも入れてるよ」
「何なの？一体」
また首を捻るウェンディだった。
「香草も一杯入れてるし」
「どんな精力剤なのかな」
「最早何が何だかさっぱりわからないな」
フックもお手上げといった顔になっていた。
「とにかく様子は見させてもらうがな」
「それでもなのね」
「見るんだ」
「何かをしてももう手のほどこしようがない」
実際そうなのだった。最早あそこまで訳のわからないまでに色々と入れていては何が何なのかさえもわからなくなってしまっている

からだ。
「見るしかない」
「そうなのよね。これ最初からだけれど」
ウェンディも言うのだった。
「まあとにかくどうなるやら」
「俺は絶対に飲まないぞ」
フックは真顔でその窯を見ながら述べた。
「あんなの飲んだらそれこそどうなるかな」
「だよね。戦闘民族になってもおかしくないし」
日本のある漫画に出てきた猿の尻尾を生やした登場人物達のことだ。漫画が進むにつれて非常識なまでに強くなっていき髪が金髪になったうえで余計に強くなったりもした。
「人間じゃない何かになる可能性もあるし」
「あんなの飲んだら怖いよ」
「だから俺は飲まないからな」
フックはまた言ったのだった。
「あれだけはな」
「そうだよね。っていうかセーラの作るものだし」
「ここは用心してね」
こう言ってとにかく今まさにできようとするその精力剤は飲まないように用心する面々だった。そして遂に今その薬ができたのだった。
「できましたわ」
「さあ、ちょっと散歩に行こうかしら」
「僕も」
「私も」
皆薬ができたところでそそくさと教室を後にする。誰もセーラと目を合わせようとしない。
「いけない、教科書忘れたわ」
「じゃあ借りに行かないとね」

七海がコゼットに言うがそのコゼットは自分の手にちゃんと教科書を持っている。ノートまで丁寧に透明のプラスチックケースに入れて持っている。

第百三十九話　何に使うのかその五

「私も付き合うわ」
「有り難う」
「さて、購買部に行くか」
「消しゴム買いに行こうよ」
ネロとセドリックもこう言い合って姿を消す。
「消しゴムのストックがないとな」
「さて、砂消し買おうっと」
そんな話をしながら姿を消すのだった。見れば皆あっという間に姿を消してしまっていた。まさに一瞬のことであった。全員が消えるのは。
だが二人だけ残っていた。それは。
「テンボさんにジャッキーさん」
「ああ、何かジュース作ってるんだよな」
「面白そうね」
やはり勘違いしている二人だった。なおもう一人頭がかなりあれだとされているフランツは今もタムタムと一緒に朝練中である。彼は毎朝二人で激しい練習をしているのである。それで二人だけが残っていたのだ。
「だったら是非飲ませてくれないか？」
「美味しいの？」
「味も折り紙つきです」
セーラはにこりと笑って二人に告げるのだった。
「それもまた」
「ふうん、だったら」
「頂戴」
まさに無知は勇気であった。
「何か凄くいい匂いするしな」

「食欲をそそるわ」
なお皆は悪臭によっても逃げている。その色々と入れたものの中にはドリアまであり他の香草や香辛料や内臓の匂いがクラスの中に立ちこめていたからである。
「だから是非な」
「飲ませてよ」
「はい、どうぞ」
そしてセーラも早速その窯の中のものを差し出してきたのだった。
「これです」
「美味そうだな」
「そうね」
二人は顔を見合わせて笑顔で言い合う。
「これ飲んだら凄いパワーアップするんだな」
「これでさらに凄くなったら」
二人はそれぞれもう強くなった気でいた。
「あたし達は無敵よ」
「そうさ、無敵の探偵コンビだ」
探偵というよりは特撮に相応しい表現であった。
「これでどんな難事件も万事解決だ」
「やってやるわよ」
しかも表現も少しおかしくなっているがそれも気にしていない二人だった。
「無事な。やってやるぜ」
「さあ、その為にもその美味しそうなお鍋」
二人はそれを鍋と考えていた。確かに中には香草や大蒜がありそのうえレバーやら蛙やらがかなり入っている。鍋に見えなくもない。
「食べてね」
「力つけるぜ」
「ではどうぞ」
「召し上がれ」

ラメダスとベッキーが満面の笑顔でお椀に入れたそれを出してきた。丁寧にスプーンまで付けている。それで食べよというのである。
「是非共」
「頂いて下さいね」
「ああ、それじゃあ早速な」
「いただきます」
こうして二人はその得体の知れない薬を飲み食いするのだった。
しかもそれは一杯ではなかった。
「美味いよな」
「ええ。滅茶苦茶」
「香草を入れていますので」
セーラはにこりと笑ってこのことも話した。
「それに色々なものを時間をかけて煮ていますから」
「その味が出てるんだな」
「その通りです。この窯の空間だけ時間を進めさせていました」
「時間をって？」
「どういうこと？」
二人は今のセーラの言葉には首を捻った。
「時魔術を使いまして」
「時魔術？」
「そんなのあるの」
「はい、あります」
ここでもセーラの気品のあるにこやかな笑みは健在であった。

第百三十九話　何に使うのかその六

「魔術には白魔術と黒魔術がありまして」
「ああ、それは知ってるよ」
「魔術の大きな源流よね」
「はい、それに青魔術と時魔術があるのです」
こう二人に話すのだった。
「青魔術は魔物や動物の力を使うもので」
「へえ、そういうのもあるのかよ」
「何かそれも面白そうね」
「それで時魔術は時や空間を操るものです」
「ふうん、それも何か凄そうだな」
「それで窯のところの時間を進めてるのね」
セーラの言葉を聞いてそのまま素直に頷く二人だった。
「で、時間をかけて煮たことになってか」
「この味なのね」
「はい、おかわりをどうぞ」
そしてまた窯の中のものが二人に差し出されるのだった。
「召し上がって下さい」
「ああ、それじゃあな」
「また貰うわ」
こうして二人はまたその窯の中の得体の知れないものを食べるのだった。そうして腹一杯食べると。
「ああ、美味かった」
「本当にね」
まずは満面の笑顔で言い合うのだった。
「こんな美味いのそうそうないよな」
「っていうか癖になりそう」
「我がシヴァ家の秘伝です」

秘伝とも言うのだった。
「この霊薬は」
「霊薬だったのかよこれ」
「お鍋だと思ってたけれど」
クラスの面々の騒ぎは耳に入っていなかったのだった。ついでに言えばこの二人の耳は見事な鉄砲耳であり聞いたことはすぐに忘れてしまう。
「そうか、薬なのか」
「良薬口に苦しっていうけれど」
「本当に聞くお薬は美味なものです」
セーラは穏やかな笑みと共に述べるのだった。
「そしてそれがこの霊薬なのです」
「成程な」
「それでこのお薬の名前何ていうの？」
「ソーマと申します」
また随分と物凄い名前である。二人はそんな名前は全く知らないがそれでもだった。
「これを一口でも食べればどんな疲れも消え去り」
「おいおい、そりゃ凄いな」
「一口でなの」
「一杯飲めば一日それだけで疲れを知らず過ごせます」
「あれっ、俺達十杯は食べたけれどよ」
「じゃあどうなるの？」
「効果は二乗されます」
しかも効果はこうなるのだという。
「このソーマは」
「そうか。じゃあもう俺達は」
「無敵なのね」
「どんな銃弾もビームも弾き返します」
セーラは真面目な声で穏やかに話した。

「そう、つまりは」
「俺達は死ななくなった」
「不死身になったのね」
そしてこう解釈するのだった。
「よし、じゃあ怖いものなしだ」
「早速難事件にあたっていくわよ」
「事件にですか」
「俺達のパワーアップした頭脳と体力があれば」
「どんな事件でも万事解決よ」
あくまで二人の主観でしかない。二人は自分のことを最もわかっていないのだった。当然他のあらゆることもわかっていないか勘違いしているのだが。

第百三十九話　何に使うのかその七

「じゃあよ、サンキュな」
「行って来るわ」
「どちらにですか？」
「事件のあるところにだよ」
テンボは太陽の如き眩い笑顔でセーラに述べた。白い歯が眩しく輝く。
「俺達のいるところ事件がある」
「そこに行くだけよ」
「事件でしたら」
「どうぞ、お嬢様」
ベッキーが予定調和の如く水晶玉を差し出してきた。セーラはそれを小さな両手で受け取るとその水晶玉を宙に浮かせ。そのうえでその中を見だしたのであった。
「見えます」
「んっ、何がだ？」
「今日のお昼御飯？」
こんなことを言うのがやはりジャッキーであった。
「私エビフライ定食にしようかしら」
「俺はハンバーグ定食だな」
「事件はこの校舎の中にあります」
セーラは水晶玉を見ながらさらに述べるのだった。
「そこにあります」
「そうなの。学校の中ね」
「だったら何処だ？」
ジャッキーもテンボも彼の言葉を聞いてすぐに考え込みはじめた。
「それで詳しい場所は何処なの？」
「ちょっとわからないんだけれどよ」

「はい、広い場所です」
セーラは相変わらず水晶玉の中を見ている。
「そこで事件がです」
「広い場所？一体」
「何処なんだ？いや」
ここでテンボは言ったのだった。何かが閃いたかのように」
「わかったぞ」
「ええ、そうね」
そしてジャッキーもそれに応える。
「あそこね」
「そうだ、あそこしかない」
二人は顔を見合わせて言い合うのだった。
「あそこにかね」
「そこにしかないな」
「じゃあ行きましょう」
ベッキーの方から誘ってきたのだった。
「事件はもう解決したわ」
「俺達の頭の中でな」
「御二人の頭の中！？」
「それはまた」
ラメダスとベッキーは二人の言葉を着て微妙な顔になるのだった。
「あまり強く思われない方が」
「言いと思いますけれど」
「いや、俺にはわかった」
「あたしにもよ」
しかしここでまた言う二人だった。
「あそこだ。そして犯人はあいつだ」
「もうわかったわ」
殆ど麻薬中毒者のようになって言う二人だった。
「じゃあ行くか。これで全部終わる」

「そうよ。行きましょう」
こうして何処かへと向かう二人だった。教室に残ったのはセーラとラメダス、そしてベッキーの三人だった。他に残っているのは誰もいなかった。
「さて。どうなるでしょうか」
「いつものパターンではないでしょうか」
ベッキーがラメダスに対して冷静に述べた。
「あのまま動かれそのうえで騒動を大きくされて」
「オチがつくのですね」
「いえ、今回は違います」
だがセーラはまだ水晶玉を見ていた。その水晶玉に映るものを見ているのだった。
「私には見えます」
「お嬢様にはですか」
「見えておられるのですね」
「そうです」
また言うセーラだった。
「この水晶が私に見せてくれています」
「それではお嬢様」
「これから起こることは」
「素晴らしいことです」
セーラはこうまで言い切った。
「まるで夢のように」
「そうですか。それはよいことです」
「ではお嬢様。お嬢様はまた」
二人は恍惚としたような顔になってまたセーラに対して言ってきた。
「カルマを積まれました」
「また一つよい転生に辿り着けましすね」
「はい。善きことをすれば善き来世に辿り着けます」

これはマウリア独特の輪廻転生の考えであった。
「それにあの方々もよいことをされます」
「全ては運命なのですね」
実にマウリア的な話が続く。しかし騒動はマウリア的なおおらかさとは全く無縁の展開になるのだった。

何に使うのか　　完

２００９・５・２２

第百四十話　ソーマの力その一

ソーマの力

「えっ、テンボとジャッキーが飲んだの！？」
「それも全部」
「はい、そうです」
セーラは頃合いを見て教室に戻ってきたクラスの面々に穏やかな顔で答えた。
「実に美味しそうに」
「そういえばあいつ等もいたか」
「そうだったわね」
皆ここでやっと二人のことを思い出すのだった。
「あの二人なら普通に飲んでも」
「平気よね、本当に」
「全部気持ちよく飲んで食べておられましたよ」
セーラはにこりとしてまた皆に話すのだった。
「ですからもうソーマはありません」
「いや、それはいいけれどね」
「ソーマがなくなったのは」
皆それは気に留めていなかった。むしろ恐ろしい霊薬とやらがなくなってほっとしている位であった。それだけセーラの薬は恐れられているということだ。
「それはいいんだけれど」
「あの二人が」
「どうしたものかしら」
ウェンディは困り果てた顔で皆に問うた。
「あの二人頭は悪いけれど体力と行動力と機動力はあるから」
「だよね。それに防御力と回復力もね」
「余計な能力は高いのよね」

それがテンボとジャッキーだった。
「しかも思い込みも凄く激しいし」
「周り見ないし」
つくづく探偵には不向きな二人である。
「ああ、あと予測は絶対に外してるし」
「しかも検証能力もないし」
つまり頭は全くないのである。頭を使わない探偵なのだ。
「その二人がパワーアップかあ」
「最悪ね」
「全ては運命です」
そしてセーラはそれを簡単に運命という言葉で終わらせるのだった。
「御二人はよいカルマを積まれます」
「カルマねえ」
「っていうかもう何が何だか」
それについては皆話は聞いているがよく理解できないものだった。
「要するにあれ？仏教で言う業とか？」
「あと善行とか悪行とか？」
「はい、そうです」
セーラはまたにこりと笑って皆に話した。
「簡単に言えばそうなります」
「ふうん、そうか」
「それならわかるわね」
仏教は連合にも多くの信者がいるのでわかることだった。もっともそれでも完全にはわからないが。完全にわかればそれで悟りを開けるものだ。
「仏教はヒンズー教の一派ですから」
「おい、待て」
「それ何？」
皆今のセーラの言葉には速攻で突っ込みを入れた。

「仏教がヒンズー教の一派!?」
「何よそれ」
「仏陀はヴィシュヌ神の転生した姿の一つです」
セーラはその彼等の問いに穏やかな顔のままのベルのだった。
「ですからそうなるのです」
「お釈迦様って神様の転生した姿だったの?」
「さあ」
皆セーラの言葉に困惑した顔を見合わせるだけだった。
「確かに悟りを開いた人だけれど」
「神様だったなんて」
「全ては偉大なるヴィシュヌの御力です」
その間もセーラの言葉は続いていた。
「人と世界を導く為の」
「っていうかヴィシュヌってクリシュナじゃなかったか?」
フックはその眉を顰めさせ腕を組みそのうえで口をへの字にさせて考える顔になっていた。

第百四十話　ソーマの力その二

「そんなこと本で読んだぞ」
「クリシュナも確かにそうです」
セーラもそれを認めた。
「そう、転生の一つなのです」
「転生の一つって」
「じゃあ他にも転生した姿があるのね」
「偉大なるヴィシュヌ神の転生した姿は大きく分けて十あります」
セーラの説明は続くのだった。
「その中にはあの英雄ラーマもいます」
マウリアの有名な大河的詩であるラーマーヤナの主人公である。
なおクリシュナはもう一つの大河的作品であるマハーバーラタに出て来る。つまりヴィシュヌはどちらの作品にも関わっているのである。
「全ては偉大なるヴィシュヌ神の活躍なのです」
「っていうかクリシュナとラーヴァナってキャラクター全然違わない？」
「そうだよね」
「というより皆さん」
しかしここでその皆にセーラが突っ込みを入れてきたのだった。
「それは間違いです」
「えっ、間違いって？」
「何が？」
「ラーヴァナは敵ですよ」
穏やかな笑みと共に彼等に話すのだった。
「ラーマーヤナでラーマ王子と敵対する存在ですが」
「あれっ、同一人物じゃないの？」
「名前似てない？」

「ところが違うのです」
名前が似ていても違う存在である。マウリア神話では非常によくあることだった。
「ラーヴァナはラークシャサの王でありラーマの妻シータの父でもあります」
「ってことはシータってラークシャサの血を引いてるんだね」
「そうなるわね」
話をしていてわかるこの血脈だった。
「っていうかそれってありなのかな」
「どうかしら」
これは連合の神話の常識ではあまり頷くことのできないことだった。
「っていうかそのシータもあれよね」
「ヴィシュヌの奥さんの」
マウリア神話は連合のどの神話よりも複雑な構造になっている。ありとあらゆる神が普通に化身になったり転生するからだ。これを理解することはかなり困難である。
「それがラークシャサ？」
「いいのかな」
「大した問題ではありません」
しかしマウリアではそれは非常に些細なことでしかない。
「輪廻転生しただけですから」
「たったそれだけ？」
「それだけで話が済むの？」
「何か問題があるのですか？」
しかしセーラには全く自覚がないのだった。
「輪廻転生してそのうえでまたヴィシュヌの妻となっただけですけれど」
「マウリアでは何の関係もないみたいだね」
「凄い腑に落ちないけれど」

「ヤクシャやラーヴァナも神になることができます」
マウリアではこうしたこともあるのだ。
「クベーラもまたヤクシャですし」
「クベーラって？」
「確か毘沙門天だけれど」
七海に彰子が答える。
「あの上杉謙信の」
「ああ、あれなの」
七海も毘沙門天に上杉謙信と聞けばわかるのだった。
「あれがそうなの」
「そうよ。毘沙門天って元々マウリアの神様だから」
「仏教の四天王なのは知ってたけれど」
これであまりにも有名である。あくまで連合では、であるが。
「そういえばそもそも仏教って」
「だからヒンズー教の一派だから」
「そうね」
納得できないながらも頷く彼等だった。
「ヒンズー教だったわね」
「だからそうなるのよ」
無理にでもそれで納得しようと努力しているのがわかる二人の会話であった。

第百四十話　ソーマの力その三

「だからよ」
「わかったわ。だからクベーラは元々マウリアから出て来て」
「仏教に入って毘沙門天になってなのよ」
「まあ弥勒菩薩もね」
このあまりにも有名な菩薩についても言う七海だった。
「ミトラ教のミトラ神だからね」
「だからそんなに不思議なことじゃないわよ」
「とりあえず納得したわ」
七海はここまで話してやっと納得したのだった。ただし仏教がヒンズー教の一派であるという考えには全く納得してはいない。
「それはね」
「それでです」
またここで話すセーラだった。
「御二人は今あらゆる能力を最大にまで発揮されています」
「最大までに」
「そう、最大です」
こう皆に語るのだった。
「最早神の力に匹敵します」
「マウリアの神様って確か」
「うん、それこそ世界を」
皆セーラの言葉にまた暗い顔になるのだった。
「世界を平気で壊したり」
「いきなり巨大化してそれで三歩で世界を全部歩いたり」
これがマウリア神話である。およそ桁外れのことが普通に書かれているのだ。
「あと神様の一日が世界の一日だったり」
「そういう力よね」

連合のどの神々もまずここまでの力は持っていない。キリスト教の神でもここまでの圧倒的な力は持っていないと思われる。しかもそうした神が何柱もいるのだ。

「そこまで達してるって」

「もう何が何だか」

「話が見えなくなってきたんだけれど」

「それではです」

しかしセーラは平然と話を続けるのだった。

「御二人はです」

「ええ」

「世界を征服でもできるの？」

「それも夢ではないでしょう」

セーラは平然と答えてみせた。

「ソーマの力があればそれこそ」

「世界って」

「もう滅茶苦茶」

滅茶苦茶どころではない。この場合の世界とは人類社会全体のことである。最低でも連合全体のことを指し示している言葉である。

「っていうかそんな霊薬作れるって」

「あんたも一体」

「些細なことです」

セーラの言う言葉もかなり酷いものがある。

「世界なぞ。人が支配している間はほんの一時です」

「ほんの一時ねえ」

「そんなものかな？」

「人の一生は僅か百年」

セーラは言う。彼女はその百年を何でもないと考えていることが実によくわかる。もっともこれは彼女だけでなくマウリア人全体にある考えである。

「そして人類自体の繁栄も宇宙では僅かの間です」

「僅かの間って」
「人類の歴史が？」
その人類社会の歴史にしろもう有史で五千年はある。しかし彼女はその五千年の時間すら何でもないと言ってのけるのである。
「僅かの間？」
「原人とか入れたら五万年はあるのに」
「五万年。神の一日は何百億年です」
またしても神の概念から語られるのだった。
「宇宙が終わればまた新しい宇宙が生まれます」
「宇宙が生まれるって」
「何が何だか」
話はマウリアらしく途方もないものになっていく。
「っていうか宇宙って無数にあるんだったっけ」
「パラレルワールドだよね、それって」
「うん、それ」
この概念も存在している。つまり世界とは縦と横二つの方向からそれぞれ出来上がっているのである。世界も一つではないのだ。
「それがあるから」
「じゃあその全ての世界も神様の一日かな」
「そうじゃないの？」
「創造神ブラフマーは同時にあらゆるものを生み出すことができます」
またここで出されたセーラの言葉はやはりマウリア特有の途方もないスケールのものであった。

第百四十話　ソーマの力その四

「世界を同時に幾つも創り出すことなぞ」
「何でもないんだ」
「そんなことも」
「ほんの些細なことです」
マウリアの感覚ではまさにそうである。そうでしかない。
「ですから。一時世界を征服できたとしてもです」
「いや、それでも問題だから」
「その通り」
皆今のセーラの言葉にも一斉に突っ込みを入れた。
「世界を征服するなんてなったら」
「大変じゃない」
「けれどね」
しかしここでウェンディが言うのだった。
「あの二人が世界を征服するの？」
「えっと、まあ」
「そうなるわね、お話の展開だと」
「思い切り有り得ない展開じゃないの、それって」
こう皆に話すのだった。
「テンボとジャッキーが世界征服なんて」
「そう言えば言われてみれば」
「それってかなりっていうか全然」
「一番かけ離れてるわよね」
皆少し考えてみれば全く考えられないことだった。テンボもジャッキーも確かに頭がかなりあれだがそれでも野心はないのだ。世界征服などということには全く興味がない。ただ事件を解決することだけが生きがいである。それはそれで大迷惑なことであるが。
「だよね、やっぱり」

「じゃあ有り得ないわよね」
「そう、やっぱり有り得ないのよ」
ウェンディはここでまた皆に話した。
「あの二人にそれはね」
「じゃあ大きなトラブルの危険はないのね」
「それだったら」
「まあそれは安心していいと思うわ」
また皆に話すウェンディだった。
「二人が興味のあることだけれど」
「やっぱり推理しかないよな」
「あの二人の関心って」
二人のことをよく知っているクラスの面々は述べ合った。考えれば考える程それしかない。やはり二人にあるのはそれだけなのだった。
「それじゃあここはまずは」
「二人の馬鹿を止めるか、いつもみたいに」
「そうね」
こう結論を出してとりあえず二人を止めることにした。とりあえずは学校の授業はちゃんと出る。しかしテンボとジャッキーはクラスにいなかった。
「あの二人はまたあれか？」
「はい、いつものあれです」
「どっかに行きました」
「わかった」
授業をしている先生は生徒の返答を聞いて頷くだけだった。
「じゃあ欠席だな」
「御願いします、それで」
「とりあえず気が向いたら戻ってきますので」
「後で補習だ」
先生も実に慣れたものである。

「全く。進級させてやるのも一苦労だ」
「苦労なんですね」
「苦労以外の何者でもないな、正直」
実にはっきりと言う先生だった。
「あいつ等だけはな」
「やっぱりそうなんですか」
「苦労なんですか」
「まず言ってることを全く理解しない。いや」
言葉を途中で訂正するのだった。
「全く違う方向に理解するからな」
「ですよね、やっぱり」
「本当に」
「あの二人は馬鹿だ」
これまたはっきりと言う。
「それも始末に終えないレベルの馬鹿だ」
「そこまで馬鹿ですか、やっぱり」
「っていうか先生そこまで言います？」
「言わずにいてられるか。補習をしなくちゃいけないんだぞ」
顔を顰めさせての言葉だった。

第百四十話　ソーマの力その五

「これでな。只でさえ赤点しかないのにな」
「そういえばこの前全教科赤点だったっけ、二人共」
「しかも全部一桁か十代」
まともな点数ではない。誰がどう見ても。
「団子もあったわよね」
「それも何個もね」
「そんな連中だぞ。補習してやっと二年にさせてだ」
とにかく途方もなく勉強ができないのである。それは普段の生活や行動から実に容易にわかるが。なおフランツもかなりのものだが彼は出席は皆勤賞なのでそれでやっていっている。彼の身体はまさに不死身であり病気も怪我も何一つとしてしないからである。
「三年にさせて卒業させて」
「それってそんなに苦行かな？」
「みたいね」
また皆は顔を見合わせて言い合う。
「どうやら」
「そこまであれなのね、やっぱり」
「まあいい。いないのなら仕方がない」
完全に諦めていた。
「このまま授業をするぞ」
「わかりました。それじゃあ」
「御願いします」
こうして授業に入る。それが何教科か終わってそれから皆で二人を探しに行く。二人がいそうな場所はもう幾つか察しがついていた。そのうちの一つは。
「ここだよな」
「そう、ここ」

「ここね」
皆で来たのはある駐車場だった。そこはスーパーの駐車場であり様々な色の車が並んでいる。皆まずはそこに来たのである。
何の変哲もない駐車場だ。離れた場所には親子連れやカップルも見える実にのどかな場所だ。スーパーから多くの人が出入りしている。そこでまずはフックが言った。
「ここは前に大事件があったからな」
「ああ、あれね」
ウェンディがそれに応えて言ってきた。
「連続窃盗事件があったっていう」
「犯人はまだ捕まっていないししかもまだ起こっている」
現在進行形ということである。
「この事件に二人はかなり興味を持っていたからな」
「じゃあやっぱりここに」
「いる可能性はかなり高いぞ」
「あっ、本当だ」
ここでネロが皆に言ってきたのだった。
「パトラッシュが。見て」
「確かに」
見ればパトラッシュは地面をくんくんとかいていた。パトラッシュの鼻も賢さも皆が実によく知っているところである。それもかなりだ。
「じゃあやっぱりここにいるの？」
「この駐車場に」
「あっ、けれど違うみたいだよ」
「本当だ」
ジョンも言うのだった。ジョンもここにラッシーを連れて来ている。実際のところテンボやジャッキーよりもパトラッシュやラッシーの方が遥かに事件を解決してきている。
「こっち？」

「こっちに行ったの」
「うん、そうみたいだね」
ネロが皆に答える。見ればパトラッシュはそのまま駐車場を出てそのままある方向に向かっている。その先にあるものは。
「この先ってあれじゃない」
「あれだよね」
「うん、交番に行く道だよ」
丁度近所に交番があるのだ。交番はこの時代でも街の治安に非常に役立っている。
「？どういうこと？」
ウェンディはここで眉を顰めさせた。
「あの二人が交番に？」
「いつもなら不審者ってことで入れられてるけれど」
「違うの？」
皆ここでまた随分なことを言うのだった。
「ひょっとして」
「捕まってるんじゃなくて」
実は二人は警察にその名前をよく知られている。勿論名探偵ではなくお騒がせ人物としてだ。警察にとって二人はトラブルメイカー以外の何者でもない。
「まさか犯人を？」
「嘘だろ、それって」
皆その可能性をまずは疑った。二人の過去の行動はあまりにも非常識で犯人を捕まえたりすることなぞなかったからである。

第百四十話　ソーマの力その六

「あの二人に限って」
「絶対にね」
「さて、それはどうでしょうか」
だがここでセーラは言うのだった。
「ソーマの力は偉大です」
「偉大なのね」
「何度も申し上げますが世界を征服できる程度です」
そこまでの力があるのだ。ソーマとは。
「そしてそれは必ずプラスの方向に働きます」
「そうなの」
「っていうか絶対になんだ」
「ソーマはディーヴァの力です」
マウリア語で神という意味だ。インドと呼ばれていた時代からの言葉だ。
「正しいことに使われない筈がありません」
「けれど」
「そうだよな」
しかしここで皆はひそひそと話し合った。
「カーリー神が善神になる国だし」
「そうよね」
戦いの女神だがカーリーの戦いは違う。殺戮と流血を司る。彼女は漆黒の肌を持ち四本の腕を使い縦横無尽に暴れ回り相手の血を飲んで殺戮のダンスを楽しむのだ。それがカーリーの戦いでありマウリアにおいては彼女もまた善神とされているのである。
「カーリーは偉大な善の女神です」
しかしセーラはカーリーについてもにこりと笑ってこう述べるのだった。

「悪を打ち滅ぼし尽くす清き心を持たれています」
「らしいね」
「そうね」
やはり皆はセーラの言葉をあまり信じてはいない。
「そしてお茶目でもあります」
「ええと、敵を殺しまくってその血を飲んで楽しく笑ってるけれど」
「それがお茶目なのかしら」
「夫であるシヴァ神の制止を受けてぺろりと舌を出されます」
戦いが終わってもあまりにも激しく暴れ回るので夫であるシヴァが踏み台になってそのうえで彼女を止めた。カーリーはそれに気付いてついついぺろりと舌を出すのである。
「そうした神ですから」
「そうだったの」
「とりあえず善い神なんだ」
なおカーリーはドゥルガーというこれまた戦いの女神の化身であるがこのドゥルガー自身も実はシヴァの妃であるパールヴァティーの化身である。即ちカーリーはパールヴァティーでありシヴァの妃になるのだ。マウリアの神々の化身は実に多いのである。
「ううん、それすらもわからないところが」
「マウリアって何が何だか」
「さて、この事件ですが」
「ええ」
「それでどうなるの？」
「既に解決されています」
セーラはにこりと笑って述べた。
「それは御安心下さい」
「もう解決してるんだ」
「そうです。交番に行けばわかります」
こう言って皆をその交番に誘う。そうしてやって来た交番で彼等が見たものとは。４６

「えっ、これが？」
「これが犯人だったの」
「いやあ、まさかこいつだったんてね」
交番にいるお巡りさんもまさかという顔であった。見れば鳥かごの中に一羽の烏がいる。烏だというのにやけに表情豊かでその籠の中で憮然とした顔になっている。
「こいつはね。烏の団十郎っていいましてね」
「団十郎！？」
「歌舞伎の？」
「ああ、こいつの仇名なんですよ」
お巡りさんはこう皆に説明するのだった。その表情豊かな烏を見ながら。
「何処か気取っていて動きが芝居めいていましてね」
「そうなんですか」
「それで団十郎なんですか」
「この辺りで評判の悪党なんですよ」
その団十郎烏を見ての言葉である。
「こいつが車の窓に石をぶつけて割ってそれから中いあるお金を取ってたんですよ」
「ああ、そうですよね」
「烏って光るものが好きだから」
烏の特徴である。その巣には大量のコインやガラスが集められるケースが多い。
「だからそれで車の窓を割って」
「それで取ってたんですか」
「はい、石は足で掴んで上から落として割って」
実に頭がよいと言える。

第百四十話　ソーマの力その七

「それでだったんですよ」
「物凄く悪い奴なんですね」
「本当に」
皆その団十郎烏をあらためて見て言うのだった。確かに憮然としているがふてぶてしい表情をしており如何にも悪そうな顔をしている。
「そうなんですよね。いや、それでもこいつも年貢の納め時ですよ」
「年貢のですか」
「こいつは家族共々動物園行きです」
「動物園にですか」
「悪烏としてね。晒しものの刑です」
「けれど家族もっていうのは」
「ちょっと」
皆は酷いではないのかと思った。しかしそう思ったのは早計であった。
「家族全員で駐車場の窃盗やってましたからね。名付けて団十郎ファミリー」
「マフィアみたいだね」
「というかそのままね」
皆それを聞いてまた言い合う。
「じゃあ容赦する必要はないんですね、こいつの家族全員」
「悪党だから」
「更正する筈もありませんしね」
殆ど人間に対する言葉になっていた。
「だからもう動物園行きってことです」
「動物園なんですか」
「殺すわけにもいかないでしょう？」

お巡りさんは今度はこう皆に述べた。
「まさか」
「そうですよね。やっぱり」
「動物を殺すのは」
皆これはよくわかっていた。動物を殺すと必要でない場合は罪に問われる。動物虐待や無意味な殺傷はそれだけで罪に問われるのは連合中央政府法でも各国の法でも定められているのである。
「だからですよ。動物園ですよ」
「何か動物園でも悪さばかりしそうですよね、この家族」
「うわあ、本当に目つき悪い」
ヤクザ屋の目をして一同を睨んでいるのであった。
「何ていうかな。何か悪事を企んでるっていうか」
「そんな目よね」
「動物園の隔離コーナー行きです」
「えっ、隔離コーナー！？」
「っていうと」
皆ここであることを思い出した。隔離コーナーとは八条学園の中の動物園にあるコーナーでかつて悪事の限りを尽くした動物達を収容しているコーナーである。もっとわかり易く言えば動物達の刑務所である。そうした場所も八条学園にはあるのである。
「あそこですか」
「こいつら私達の学園に」
「ああ、君達八条学園の生徒さん達なんだね」
お巡りさんは皆の話を聞いてまた述べた。
「というとやっぱりあのお騒がせコンビの」
「はい、クラスメイトです」
「あの二人がこの悪烏一家を捕まえたんですか」
「そうなんですよ、こんなことははじめてですよ」
お巡りさんは心から驚いた顔を見せてきた。
「あの二人が犯人を捕まえるなんて」

「今までは捕まる側だったんですね」
「その通りなんだよね」
今度は困った顔になって話すのだった。二人のそうした行動に頭を悩ませるのはクラスメイト達だけではない。一番困るのはやはり警官達なのである。

第百四十話　ソーマの力その八

「本当にね。困ってたんだけれど」
「そういえば普段だったらこんな事件起こったら」
「余談と偏見でよりによってマフィアのドンを捕まえようとしたり大騒ぎ起こして」
これが二人のいつもの行動なのである。
「そうしていくものだけれど」
「違うからね」
「何かあったんですか？本当に」
お巡りさんは真顔で皆に尋ねるのだった。
「この異常事態は」
「まあちょっとありまして」
「神様の力が備わったと思って下さい」
皆のコメントはこれ以上はないという程胡散臭いものだった。
「マウリアの神様の」
「その力が」
「ええと、マウリアの神様っていうと」
ここでお巡りさんが思い出したのはよりによって最も危険な神であった。そのマウリアで最も危険な神は何かというと。実際そうした神が善の側にも非常に多いのがマウリアであるが。
「確かあれだね。シヴァだよね」
この神であった。
「破壊神だったよね。世界を最後に破壊するっていう」
お巡りさんは話しているそのうちに顔を剣呑なものにさせていく。そうしてまた言うのだった。
「あの二人にそんな力が授かったんですか？それはかなり危険なのじゃ」
「いえ、シヴァじゃないです」

「その神様じゃないです」
「じゃあカーリーかい？」
お巡りさんもこの女神の名前を出すのだった。カーリーのことは連合でもかなり有名である。それだけ独特の女神であるからに他ならない。
「じゃあやっぱり危ないよね」
「別にそうした流血とか破壊の神様じゃないですから」
「安心して下さい」
「それは無理な相談ですね」
お巡りさんの返答も真面目なものであるだけに怖かった。
「あのお騒がせコンビにさらに力が備わったらそれこそ」
「ですがそれによって烏は捕まりました」
しかしここでセーラがこう言うのだった。
「それは事実なのではないでしょうか」
「あっ、そうですね」
しかしお巡りさんはセーラの今の言葉に頷くのだった。
「それは確かに」
「そういうことです。善き神は二人に正しい力を授けてくれています」
お巡りさんにもにこりと微笑んで語るのだった。
「ですから御安心下さい」
「そうですね。それじゃあ」
お巡りさんもこれで頷く。これで話は終わった。
しかし終わったのは交番での話だけであった。皆は交番を出てもまだ二人を追っていた。結局彼等の行方はわからずじまいであったからだ。
「それで今度は何処なの？」
「うん、こっちだってさ」
ネロが皆に述べる。述べながら道の右の交差点を指差す。パトラッシュが地面を嗅いだ後で顔を上げて言っていた。

「ワオン」
「パトラッシュが言ってるよ」
「そうだね。じゃあそっちだね」
「パトラッシュが言うなら」
皆ネロとパトラッシュに対して頷いて答える。彼等の捜査能力は実際のところあの二人よりも遥かに高かったりする。これはジョンとラッシーも同じである。
「こっちだね」
「じゃあ行きましょう」
「また。善きことが行われています」
セーラがここでまた言った。
「ですからまた」
「何かあの二人じゃないみたいだけれど」
「ねえ」
皆このことがかなり怖かった。しかし今はそれでも行くしかなかった。二人が何をするのか見ずにはいられなかったからである。

ソーマの力　　完

２００９・５・２８

第百四十一話　確変は続くその一

確変は続く

二人を追う形になっている一行。しかしまだ誰も今のこの状況を現実のものであるとははっきりと認識できないままであった。それも当然であった。

「何かな、本当にな」

「そうよね」

フックもウェンディも困惑した顔で言い合っていた。そうしながら足を進めている。

「あの二人が事件を解決するなんてな」

「解決しないどころか余計に大きくするんじゃなくて」

それが彼等なのである。

「天変地異が起こっても時空が歪んでもな」

「有り得ない話だと思っていたのに」

ここまでその推理能力が信用されていない、いや確信されていた二人である。

「しかもそれに留まらず」

「また事件を解決していたら」

「あっ、見て」

ルビーが上を指差してきた。

「何か急にお空が」

「暗くなってきたけれど」

「あれ地震雲！？」

縁起でもない話であった。

「じゃあ地震が？」

「しかも稲光まで」

暗くなった空に見えてきたのは地震雲だけではなかったのだ。

「それにあそこじゃ山火事！？」

「気象情報で急に台風出て来たけれど」
ルビーは今度は携帯を見ていた。それで検索した気象情報ではその台風の情報が入っているのであった。自然災害が四つもである。
なお戦乱のない連合ではテロリストや海賊といった存在を除いて怖いものといえば地震、雷、火事、台風の四つであるとされている。今ではそういったものも全てある程度以上コントロールできるようにはなっている。しかしそれは決して万全ではない。自然をコントロールすることはこの時代の技術をもってしても容易ではないのである。
「何て不吉な」
「っていうかやばいよね、これって」
「確実にやばいわ」
ルビーはその空を見上げてまた言った。
「この状況はね」
「何かねえ。本当に」
「二人が事件を解決しただけでこれだけのものが呼び起こされるんだ」
皆唖然とさえしている。しかしそれだけで話が終わるものではなくなっていた。
「まあとにかくね」
「二人は今何処なのかしら」
「こっちです」
ここでラメダスが皆に言ってきた。言いながら前を指差す。指差したその先にも道が続いている。今度は住宅街であり道の左右に家が連なっている。
「こっちに気配を感じます」
「二人の気配をですね」
「そうです」
こう答えるラメダスだった。
「はっきりと」

「じゃあこっちなんですね」
「今度は一体何が」
「泥棒が見えます」
今度はそれだというのである。
「泥棒が捕まっているのが」
「じゃあ泥棒を捕まえて」
「まさか」
「そのまさかのようです」
しかしここでラメダスはまた皆に告げた。
「喚声が聞こえました」
「聞こえる？」
「全然」
皆顔を見合わせて言い合う。
「っていうかラメダスさんの耳ってどうなってるんだろう」
「それが問題なんだけれど」
「私は十キロ先の針の落ちる音を聞くことができるのです」
そのラメダスの言葉である。
「そして視力は七・〇あります」
「私モンゴル人で五・〇なんだけれど」
ナンが言った。モンゴル人は言うまでもなく草原の民である。従ってその視力は相当なものである。ナン位の視力の持ち主が幾らでもいるのだ。
「それよりも上って」
「そして超音波で物事を確かめることもできます」
特殊能力はまだあった。
「それだけです」
「やっぱり人間じゃないんじゃないのか？」
「そうよね」
そこまで話を聞いたフックとウェンディはまた顔を見合わせることになった。

第百四十一話　確変は続くその二

「超音波って」
「もう何が何だか」
「鼻は犬のそれに匹敵します」
鼻もなのだった。
「ですから私にはわかるのです」
「マウリア人って全員超能力者なのかしら」
「異常能力じゃないの？」
流石にラメダスの能力を見てはこう言うしかなかった。
「しかもラメダスさんって不死身だし」
「この世界の人なのかしら、冗談抜きで」
「見えます」
今度言ったのはベッキーだった。
「御二人が賞賛の声を受けているのが」
「見えるの」
「はい、見えます」
こう皆にも答えるベッキーだった。
「この目にはっきりと」
「見えているって一体」
「どうやって？」
「私の目は千里眼なのです」
ベッキーが言うのだった。
「ですから見えていないものまで見えるのです」
「何なんだ？それって」
「千里眼って」
少なくとも常識の範疇の能力ではない。
「他にもセブンセンシズもあります」
「いや、それ漫画だから」

「ねえ」
人間には六つの感覚があるという。目に耳、鼻、口、神経、それにプラスされて第六感である。この第六の感覚は所謂勘のことであるのだ。
「それで第七の感覚って」
「どの黄金聖闘士なのよ」
「この小宇宙の高まりは」
今度はこれであった。
「はっきりと感じます。御二人の小宇宙は今かなりのものです」
「もう何が何だか」
「理解不能」
皆首を傾げるばかりだ。しかしであった。
ベッキーはここでまた言うのであった。そのセブンセンシズというものに目覚めたという顔でそのまま言葉を出していくのであった。
「御二人は捕まえたものを今度は住民の方に引き渡しています」
「住民になんだ」
「それじゃあ」
「はい、こちらの家です」
こう言って左斜め上を指差すのだった。
「こちらにおられます」
「そうか、こっちか」
「それじゃあすぐに行きましょう」
「うん」
ベッキーに導かれるまま進むのだった。そうしてそのうえで向かう。するとそこに辿り着いたのは一軒のごく普通の家であった。何の変哲もない。
チャイムを鳴らすとごく普通のおばちゃんが出て来た。そうして笑顔で皆の言葉に応えるのだった。
「あの二人がねえ。凄いわよね」
「あれっ、あの二人御存知なんですか」

「テンボとジャッキーを」
「知らない人はいないよ」
これがおばちゃんの返答だった。
「だってあれだけ馬鹿なこといつもしてたんだよ」
「だからですか」
「それで有名だったんですか」
「当たり前じゃない」
そしてこうも言うのであった。
「毎度毎度あんなことばかりしてたらね」
「まあそれはそうですけれど」
「けれどまさかその二人が」
「迷子だったうちの猫見つけてくれたんだよ」
今度はそれであった。
「もうね。実は家の裏のどぶに落ちてたのよ」
「どぶにですか」
「それでもうどろどろでねえ」
話が猫のことに及んでいた。
「ちゃんと身体も洗って拭いてくれてね。凄いでしょ？」
「あの二人が猫を洗うって」
「嘘みたい」
皆にとってはこのことも驚くべきことであった。
「いつも猫を電子レンジに入れようとして大暴れされてるのに」
「そんなまともなことをするなんて」
それがあの二人なのである。もっとも実際に猫が電子レンジに入れられたことはないが。それでもそうしようとしているのである。

第百四十一話　確変は続くその三

「それでそんなまともなことするなんて」
「やっぱりそれがソーマの力？」
「ソーマ？」
おばちゃんはそのソーマという言葉を聞いてこんなことを言ってきた。
「ソーメンか何かかい？」
「あっ、違います」
「まあ何て言うか」
ここで彼等はおばちゃんに対して誤魔化して説明するのだった。
「あれです」
「あれって？」
「お菓子なんですよ」
こういうことにするのだった。
「マウリアの端の方で売られてる」
「それなんです」
「へえ、マウリアのお菓子なのかい」
そしておばちゃんでそれで納得してしまった。
「それでそれって美味しいのかい？」
「まあ一応は」
「人によって好き嫌いがありますけれど」
こういうことにするのだった。
「美味しいですよ」
「結構」
「ふうん、まああたしはお菓子は日本のだけで満足だけれど」
おばちゃんがこう言ってくれて皆それでほっとするのだった。
「日本のやつだけでね」
「そうなんですか」

「まあとにかくだよ」
しかしここでまたおばちゃんは言うのだった。
「今回はあの二人に助けられたよ」
「そうなんですか、本当に」
「助けられたんですか」
「そうだよ。まあたまにはこういうこともないとね」
こうは言いながらも笑っているおばちゃんだった。
「さて、じゃあうちの猫だけれどね」
「もう洗って乾かしたんですよね」
「そうだよ。ほら、これ」
ここで家の中から出て来たのはペルシャ猫だった。銀髪の見事なペルシャである。その顔はかなり整っており美形であると言ってもいい。
「この娘だよ。さくらちゃんっていうんだよ」
「さくらちゃんっていうんですか、その猫」
「本当によかったよ、見つかってね」
暫く猫の自慢話になる。そうしてそれが終わってからだった。皆はおばちゃんに別れを告げてそのうえでまた彼等を探しに行くのであった。
一行が今度来た場所は火災現場だった。しかもガソリンスタンドの。
「おい、何だよこれは」
「流石にこれはないでしょ」
派手に燃えているそのガソリンスタンドを見てフックもウェンディも唖然としている。
「ガソリンスタンドってよ」
「何よこれって」
「おい、早く消火しろ！」
「急げ！」
しかしその中で消防隊員達が必死に動き回っている。そうしてそ

のうえで消火活動にあたっている。誰がどう見ても立派な火事であった。
「それにしても今度は火事って」
「推理と関係ないんじゃないの？」
「事件は事件ですから」
しかしセーラはいつもの調子で皆に話すのだった。
「それを解決されたのです」
「成程、そういうことなんだ」
「それでなの」
「その通りです。今回の事件ですが」
「そうそう、それでどうなったのよ」
ウェンディはこのことをセーラに対して尋ねるのだった。
「あの二人ここでどうしたのよ」
「まさかと思うけれど」
ここで皆とんでもないことを思い浮かべてしまった。
「放火魔を捕まえようとして頭から水を被ったと思ったらそれがガソリンで」
「大火災にしてしまったとか？」
「いえ、違います」
セーラは顔の前に浮かんでいる自分の水晶玉を覗きながら彼等に答えるのだった。
「見えるのは犯人を追っている御二人です」
「犯人っていうと」
「放火魔よね、やっぱり」
「そうです。鍋常です」
今度はこの名前が出て来た。

第百四十一話　確変は続くその四

「人相の悪い醜悪な男です」
「ああ、そいつって確か」
ウェンディはセーラの今の言葉を聞いてまた述べた。
「有名な放火魔よ。それこそ何度も事件を起こしてる」
「そんな犯罪者なの」
「放火をする理由がまた凄くて」
何故かそんなことをよく知っているウェンディなのであった。この辺りは若しかするとマニアなのかも知れない。犯罪者マニアというやつである。
「世を儚んだりイカを焼こうとしたりスプリンクラーを確かめようとしたりして」
「何か物凄い理由」
「っていうか無茶苦茶だね」
「この前の晩御飯がまずかったからやった放火から出所したばかりなのに」
思えばこれもまたとんでもない理由である。
「それでもうしたのね」
「で、二人はそいつを追っかけているのか」
フックがウェンディに対して問うた。
「今その放火魔を」
「みたいね。どうやら」
「はい、その通りです」
ウェンディだけでなくセーラも答えてきた。
「物凄い速さで追い掛けています」
「じゃあ俺達も追い掛けるか」
「そうね。それでセーラ」
「はい」

彼等は彼等で話をするのだった。
「その二人はどっちなんだ？」
「それで何処に行ってるの？」
「あちらです」
こう言って今度は左手を指差すのだった。
「あちらに行っています」
「そう、それじゃあ今度はそっちに」
「追いかけましょう」
「ただしです」
しかしここでセーラは皆に対して言ってきたのだった。
「鍋常は五十ＣＣのバイクで逃走しています」
「バイクで？」
「はい、二人はそのバイクを走って追跡しています」
皆それを聞いてその眉を思いきり顰めさせた。
「バイクを走って！？」
「嘘だよ、それは」
流石に信じられなかった。誰がどう考えてもそれは不可能だからだ。
「バイクだよ、そんなのとても」
「追いつけないわよ」
「ですが確か」
セーラは少しきょとんとしたような顔になって皆に話すのだった。
「口裂け女は百メートルを五秒か六秒で走るのでしたよね」
「いや、あれ妖怪だよ」
「人間じゃないわよ」
皆その伝説の妖怪に対してはこう述べた。
「とりあえずあれは人間じゃないから」
「人間はバイクには追いつけないわよ」
このことを念押ししてセーラに話す。なお連合においてはマウリアでは普通に妖怪達が跳梁跋扈し人間達と共存していると思われて

いる。
「それは幾ら何でも」
「有り得ないから」
「そうなんですか」
しかしこう言われても口裂け女が人間だと考えているふしのあるセーラであった。
「ですがこれは普通のことです」
「人がバイク並の速さで走るのが？」
「それが？」
「はい、そうです」
あくまで冷静なセーラであった。どんな異常現象に対しても。
「これもまたソーマの力です」
「ソーマを飲んだら超人になれるみたいだね」
「そうだね」
「ソーマは神の御力です」
セーラはまたこのことを言う。
「ですから絶対のものです」
「絶対ねえ」
「三歩で世界をまたぐっていう」
「いえ、二歩です」
セーラはこう訂正する。しかしだからといってマウリアの神々のとんでもなさが消えたわけではない。むしろかなり増大してしまっていた。
「二歩だけ世界を全てまたぎ三歩目でそれを授けた相手を踏み潰しました」
「えげつないんじゃないの？幾ら何でも」
「世界を授けた相手を踏み潰すって」
話を聞いただけではとんでもない裏切りである。しかしセーラの言うことはより複雑であった。しかしそれはそれでかなりとんでもないことであった。

第百四十一話　確変は続くその五

「いえ、その相手はアスラだったので」
「アスラ!?ああ」
「ディーヴァと敵対する神様達ね」
「そうです」
マウリアの神々は一つの系列だけではない。ディーヴァだけではない。アスラもまた神々なのである。例えばアスラの一人ヴィローシャナは密教では大日如来である。
「彼等がディーヴァから世界を奪ったのでそれを奪い返したのです」
「とはいっても相手を踏み潰すって」
「それが神様なのかしら」
やはり連合のそれぞれの信仰の概念ではそれはあんまりな話であった。
「また滅茶苦茶っていうか」
「そもそも何で世界奪われたの?」
「いや、信じがたいことだが」
ギルバートが真面目でありしかも深刻な顔になって皆に話してきた。
「マウリアの神話では世界を奪われることも多い」
「はい!?」
「神様が世界を!?」
「それも何度も」
これもまた驚くべき話であった。神が世界を奪われるということは即ち世界が滅びることである、多くの神話や信仰において常識となっていることだ。
「何でそれで神様なの!?」
「何かもう話が何が何だか」
「これも運命です」

しかしセーラはそれを言われても平然としていた。
「世界がアスラに奪われるのも」
「何度も奪われるのが」
「運命だっていうの」
「そう、運命です」
だから何でもないといった口調であった。
「そうしたものは全く」
「運命で何でも片付くって」
「マウリアって一体」
皆呆然とする。しかしその中でもセーラの話は続く。
「何なのかしらね」
「そもそも」
「ですがディーヴァのものに戻るのもまた運命なのです」
それもだというのである。話は皆から見れば矛盾してもいた。
「だからこそ二歩で世界をまたぎ三歩でアスラを踏みつけたのです」
「そもそも三歩だけの世界をくれって言われたんだったな」
ギルバートがセーラに問うた。
「そうだったな」
「はい、ですから三歩です」
一応契約は守っているのだった。ただし別の次元で極めて悪質な詐欺と思われても仕方のない一面がそこには見受けられるものではある。
「三歩だけ世界を譲られたのです」
「けれどいきなり巨大化して三歩って」
「無茶苦茶だよね」
この無茶苦茶さに納得できる者はセーラ達以外にはいなかった。
「まさかテンボ達も巨大化するとかは」
「それはないよね」
「巨大化しようと思えばできます」
だがセーラの言葉は彼等の願いを完全に裏切っていた。

「神々の力なのですから」
「そうなんだ」
「それも神の力なのね」
「あらゆることに変身することも可能です」
最早それは万能薬であった。
「ですから必ず放火魔も捕まえることができます」
「そんな薬よく開発したな」
フックは顔を顰めさせてセーラに問うた。
「また何でなんだ、そんな薬を」
「お告げを聞いたからです」
セーラは霊媒体質でもある。しかもかなり強力な。
「ですから私は」
「そう、聞いたからなのね」
「それで」
「はい、ソーマを作りました」
それからの言葉はもう一つしかなかった。
「それこそが運命なのです」
「運命って変えられるものだったよね」
「そうよね」
「はい、変えられます」
セーラはこのことも認めることは認めた。

第百四十一話　確変は続くその六

「人は神にもなれますし」
「けれど何がもう何だか」
「わからないっていうか」
皆話は聞いたがそれでもわかりはしなかった。わかるにはあまりにも異質な話であった。マウリアの話は。
「まあとにかくだよ。あの二人は」
「鍋常を追いかけているのよね」
「追おう、とにかく」
話は元に戻った。
「そうして皆でね」
「行こうか」
こう言って皆で二人のいる場所に向かった。二人は異常な速度でバイクに乗るノーヘルの人相の悪い男を追いかけていた。皆は丁度そこに出くわしたのだ。
「待て！」
「待ちなさい！」
二人は実際にバイク並の速度で追いかけていた。皆それを見てまずは唖然とする。
「おい、あの速さ本当に」
「バイクより速いじゃない」
「あれもまたソーマの力です」
セーラはここでも微笑んで言うのだった。
「必要とあれば瞬間移動も可能です」
「瞬間移動までって」
「そこまでできるの」
「はい、可能です」
最早完全に超能力者となっているのだった。

「その通りです。しかし今はその必要はないみたいですね」
「そうね」
ウェンディはここでまた彼等を見て述べた。
「あの速さを見ているとね」
「もう追いつくな」
フックが言ったその時にはもうテンボの手が鍋常の背中に迫っていた。
そしてだった。彼の手が放火魔の襟首を掴み。そのまま天高く放り投げたのだった。
「喰らえ、大噴火投げ！」
「大噴火投げ！？」
「まさかあの技をしようっていうの！？」
皆大噴火投げと聞いて目を瞠る。それは最早柔道において伝説の技となっていた。それを使うと聞いて驚かざるにはいられなかったのである。
「けれどあの技は」
「そうよね」
またフックとウェンディが話す。
「相当な体格、特に首の強さがなければ駄目だが」
「できるの？あれが」
「できます」
しかしまたセーラが皆に説明するのだった。
「その程度のことは」
「まあそうよね」
ウェンディはそれを聞いて当然だと思うのだった。
「それはね。正直なところ世界だって征服できるんだから」
「大噴火投げ程度はか」
フックも言う。
「世界征服と比べたらな」
「だからなのね、やっぱり」

「そうです。御覧下さい」
皆が話しているその側においてだった。鍋常は天高く舞い上がっていた。
「うわあああああああーーーーーーーーーっ！！」
「城山大作のあの技！」
テンボは人の名前を間違えていなかった。
「テンボが人の名前を間違えてないなんて！」
「何てこと・・・・・・」
そして皆もこのことにこれまた驚いていた。
「やっぱりソーマの力って凄いんだ」
「頭までよくなるなんて」
「悪党に今、叩き付ける！」
その間にもテンボの言葉は続く。鍋常は落下してきた。投げられたものは必ず落ちてくる。重力があるならば当然そうなることであった。
「ここで！」
鍋常は落ちたところをテンボの頭で腹を受け止められた。まずはその凄まじい衝撃が彼を襲い悶絶する。そしてそれはこれで終わりではなかった。
「もう一度だ！」
「ぐわあああああああっ！」
また投げられるのだった。天高く。
そしてまた腹をテンボの頭で受けられる。そしてまた投げられる。
これが何度も繰り返され鍋常は気を失った。そのうえで無様に倒れ伏し地に転がるのだった。これで全てが終わりとなるのだった。
「終わったな」
「そうね」
テンボとジャッキーはその鍋常を見て言う。
「後はこいつを警察に突き出してだ」
「もう連絡はしてるわ」

ジャッキーの手には携帯がある。既にそれで連絡をしているのだった。

第百四十一話　確変は続くその七

「もうね」
「ってジャッキーが手回ししてるし」
「確変がここまで続くなんて」
皆の驚きはさらに続く。
「しかも悪党を倒すなんて」
「何なのよ」
「じゃあジャッキー」
「ええ、テンボ」
その間にも二人は顔を見合わせて話をしていた。しかもその表情はきりっとしていた。いつもの何かを勘違いしたような美形崩れのものではなかった。
「次に行くか」
「悪党を探し出して倒す為にね」
こう話して何処かに消えた。何時の間にかだ。
皆呆然としてそれを見ていた。後には転がっている鍋常の残骸だけだった。
「とりあえずこいつどうなるの？」
「死刑じゃないの？」
鍋常に対しては皆どうでもいいという感じだった。
「放火も幾つもやってるし」
「そうよね。今回のガソリンスタンドなんてかなり悪質だし」
「死刑かあ」
皆今度は死刑について考えだした。
「さて、どんな死刑なのかな」
「串刺しじゃないの？」
これも連合ではポピュラーな処刑である。全裸にしてそのうえで肛門からゆっくりと突き刺していくのだ。そのまま腹から出させて

そのうえで何日も晒す。酸鼻を極めるいい処刑方法である。
「多分」
「火炙りじゃないの？」
しかしこの処刑方法も予想されるのだった。
「放火魔だし」
「火炙りねえ」
「放火魔の末路に相応しいじゃない」
「確かに」
火炙りもまた非常によく行われる。わざと弱火にしてじっくりと焼いて殺すのだ。
「それもいいけれど」
「何かしら」
「見えます」
ここでまたセーラが皆に告げてきた。
「あの男の末路が」
「それでどうなるの？」
「串刺し？それとも火炙り？」
「磨り潰しです」
それだというのである。
「臼でゆっくりとです。磨り潰されていくのが見えます」
「ああ、それなの」
「まあそれでもいいけれど」
皆セーラが水晶玉を覗き込みながら述べる言葉を聞いてそれぞれ述べるのだった。だが中には少しばかり残念そうな声もあった。

第百四十一話　確変は続くその八

「折角串刺しだと思ったのに」
「火炙りがいいのに」
「前から思っていましたが」
ここでラメダスが真面目な顔で彼等に対して問うてきた。
「連合では残酷な処刑が多いようですが」
「ああ、それはね」
「その通りよ」
皆もそれは認める。事実に他ならないからだ。
「けれどそれって悪いことなの？」
「悪人がそういう末路を迎えるのってね」
「当たり前よね」
「そうだよね」
これは連合での感覚である。そういうモラルなのだ。悪人というものはこのうえない惨たらしい刑罰によって処刑されるべきである、これが連合での考えなのだ。
「それが悪いのかしら」
「当然だけれど」
「少なくともマウリアの考えとは違います」
ラメダスは厳かな口調でまた述べた。
「マウリアでの処刑は身体に蜜を塗って軍隊蟻の餌食としたり」
「軍隊蟻って」
「それも」
皆マウリアのその処刑方法を見て言葉を失った。
「象に踏み潰させたりするものですが」
「それも結構以上に酷くない？」
「そうだよね」
皆彼の話を聞いて顔を見合わせて話をする。

「そこまではしません」
「そうです、人は生まれ変わるものです」
ベッキーも言うのだった。
「ですから。この世のカルマは次の世のカルマに引き継がれはしても永遠のものではありませんから」
「だからこそです」
二人の話はいささか以上に理解しにくいものになっていた。皆にとっては。
「そこまで酸鼻である必要はないと思います」
「あくまで。罰するだけですから」
「それはそうだけれど」
「何か話が」
皆頭が混乱してきていた。
「何はともあれです」
「えっ、今の話これで終わり!?」
「嘘・・・・・」
皆今のセーラの言葉に唖然とする。なおマウリア人の特徴として話は自分の興味のある方向に強引に持って行くというものがある。
「御二人のことですが」
「あっ、そうだったね」
「あの二人よね」
やっとテンボとジャッキーのことを思い出した。話は明らかに混乱していた。
「それで何処に行ったの?」
「やっぱりそれもわかるのよね」
「はい」
やはりそれがわからないセーラではなかった。その常識を遥かに凌駕する能力によって。
「今度は公園の方に行かれました」
「ええと、公園っていうとあの」

「お花畑のあの」
「いえ、別の公園です」
そこではないというのだった。また別の公園であるという。
「列車が置かれている公園です」
「ああ、あそこね」
「あの公園だね」
皆列車というだけでわかったようである。どうやら皆が知っている公園であるらしい。
「二人はあそこに向かってるのね、今」
「それじゃあ僕達も」
「はい、行きましょう」
セーラは皆に対しても声をかけてきた。
「いざ、公園へ」
「さて、次は何が起こるのかな」
「それが問題ね」
フックとウェンディが歩きはじめながら言葉を交えさせる。何はともあれまた二人を追う一同だった。

確変は続く　　完

２００９・６・２

第百四十二話　確変が終わりその一

確変が終わり

二人を追い掛けて公園に向かう一同。ここでジョンが言うのだった。

「ラッシーの反応が凄いよ」

「そうね。確かに」

「公園の方見てるわね」

皆彼の言葉を受けてラッシーを見る。見ればその通りだった。じっと公園の方を見ておりそうして鼻を地面に寄せてくんくんとさせている。まさに犬の動作である。

「じゃあ二人はこっちにいるのね」

「間違いなくね」

「そうだね」

そしてネロも言うのだった。

「パトラッシュも同じだし」

「パトラッシュもそうなら」

「確実か」

これで確率は百パーセントとなったのであった。

「じゃあこっちでいいよね」

「そうね」

皆あらためて頷き合うのだった。

「けれどさ。どうなんだろうね」

「どうなんだろうって何がよ」

アロアがここでネロに対して尋ねる。

「何かあるの？ひょっとして」

「いやさ、あの二人のあの変貌だけれど」

彼はいぶかしむ顔で言葉を出してきた。

「どうなんだろう。あのままずっとなのかな」

「ずっとって？」
「だからさ。ずっとあんなハイパー化なのかな」
「そういえば」
アロアもここでそのことについて考えだした。
「二人があのままだったら」
「何か物凄く違和感あるんだけれど」
ネロは真顔でこのことを語るのだった。
「何か二人じゃないみたいで」
「っていうかもう完全に別人だしね」
アロアは眉が一つにならんばかりに顰めさせ顎が梅干のようになるまで口をへの字にさせてそのうえで空を見上げながらネロに言葉を返した。
「あの二人って」
「そうだろう？あんな調子がこれからもずっとだったら」
「事件は解決していくわよ」
これは確実に言えることではあった。
「今日のこれまでの話と同じでね」
「それは有り難いよ」
ネロもそれは素直に歓迎してはいた。
「けれどさ。ずっとあのままだったら」
「あのハイパー化のままで」
「いたらかなり怖くない？違和感あり過ぎて」
「言われてみれば」
アロアはネロの言葉を受けて今度は考える顔になった。
「それもかなりね」
「二人共さ、確かにあれだけれど」
流石に頭の構造がどうとかは言わなかった。テンボもジャッキーもその成績は学年で下から数えた場合のツートップを誇っている。
なおもう一人凄いのがいるがその人間はここにいる。
「フランツが頭脳派ピッチャーになるようなものだからね」

「それ全然想像できないわね」
二人はその最後の一人の名前も出すのだった。
「はっきり言ってね」
「そうだろ？やっぱり全然できないよね」
「ええ。あのままの状態が続いたらかなり怖いわ」
アロアはまた言った。
「違和感があり過ぎてね」
「だからさ。あの状況がこのまま続いたらだよ」
ネロもまた言うのだった。
「それはそれで何かね」
「二人共ね。確かにトラブルメーカーだけれど」
このことはもう誰もが知っていることである。
「けれどさ、それでも悪い人間じゃないのよね」
「性格は悪くないよ」
ネロもこれは大いに認めることだった。
「むしろね」
「かなりいい方よね」
「空気を読んだりとかはしないというかできないけれど」
二人にそんなことができる筈もなかった。答えは簡単でそこまで頭脳が回ることがないからだ。もっとも二人が考えが回らないのは空気を読むことだけではない。
「それでも二人なりに気を使ってくれるし」
「困ってる人は見捨てないしね」
二人はそういうことは決してしないのである。

第百四十二話　確変が終わりその二

「だからね。あの個性がないっていうのはね」
「寂しいわよね」
「それだな」
フックもここでネロとアロアに応えて言うのだった。
「あの二人はあのままでいいからな」
「そうなのよね」
ウェンディもフックの今の言葉に頷く。
「あのままがいいんだけれど」
「今のあいつ等はあいつ等じゃないだろ」
フックは今度はいぶかしむ顔になっていた。
「あのままだったら」
「名前とか顔は同じだけれど別人？」
ウェンディはその状態の二人をこう評した。
「あのままだったら」
「それでだ。セーラ」
フックは作り主に対して尋ねてきた。
「そのソーマの効果は何時までなんだ？」
「ソーマの効果ですか」
「まさか永遠とかいうんじゃないな」
「それはやっぱりないわよね」
ウェンディも真剣な顔で彼女に尋ねる。
「それは」
「はい、それはないです」
セーラは気品のある笑みでその問いに答えるのだった。
「ですから。御安心下さい」
「そうか。だったらいいがな」
「それだったらね」

フック達だけでなく他の面々もその言葉にほっとした顔になる。
しかしここで。
「いや、待ってくれ」
「どうした、ギルバート」
「セーラは効果がどれだけ続くのか言っていないぞ」
こうフックだけでなく皆に対して述べるのだった。
「どれだけ続くのかはな」
「あっ、確かに」
「そういえば」
「それだけれど」
「どうなのかしら」
皆それが何時まで続くのか、そのことを考えだしたのだった。
「まさかとは思うけれど」
「神様の一日とか？」
こうした予想も出て来た。
「それって確か四百億年？」
「宇宙ができて終わるまでだったよね」
それが創造神ブラフマーの一日だと言われている。つまり彼の一日がそのまま宇宙の時間となっているのだ。あまりにも壮大なマウリアの時間である。
「あれがこれから二百億年も続くなんて」
「っていうかそれって不老不死なんじゃ？」
このことにも気付いたのだった。
「二百億年も生きたら」
「だよねえ」
「いえ、それはありません」
セーラはそれは否定したのだった。
「れっきとした人の時間です」
「ああ、よかった」
「そうだったの」

皆これを聞いてとりあえずは安心したのだった。
「流石に何百億年とかはないのね」
「よかったよかった」
「いや、待てよ」
しかしここでフックがまた言うのだった。
「人の時間なのはいい」
「そこにまだ何かあるのね」
「それは何十年かも知れないぞ」
フックはその褐色の顔をいささか強張らせて言葉を出した。
「下手したら百年かもな。生きている限りなのかもな」
「そういえば」
ウェンディもそのことにはたと気付いたのだった。
「そうよね、そうなるわよね」
「そうだろう？だからだよ」
フックは顔を強張らせたまま続ける。
「あの二人はあのままなのかもな」
「だとしたらやっぱり」
「それもありません」
しかし幸いなことにこの危惧もセーラによって否定された。

第百四十二話　確変が終わりその三

「そこまで長くはありません」
「じゃあ何年なんだ？」
「それとも何ヶ月なの」
二人はマウリアの時間を途方もないものだと最初から決め付けていた。
「その時間は」
「どれだけなのよ」
「半日です」
ここでセーラの言葉が出されたのだった。
「ですから間も無くその効果がなくなります」
「えっ、半日！？」
「それだけなの？」
皆それを聞いて逆に驚いてしまった。
「ソーマの力って」
「それだけなの」
「勿論一生その効果が続くものもあります」
セーラは一応こうも述べた。
「ですが今回私が作ったソーマはです」
「半日だけなのか」
「その効果があるのは」
フックとウェンディはまたそれぞれ言った。
「半日しかないんだな」
「何か意外っていうか」
「インドラの武器を入れませんでしたから」
「インドラの武器って！？」
「それ何！？」
皆それを聞いてまた首を傾げてしまった。

「それって何なの？」
「インドラってマウリアの神様よね」
「はい、そうです」
セーラの気品のある微笑みはここでも同じである。
「その通りです」
「仏教だったら帝釈天だったよね」
「ああ、あの神様ね」
帝釈天と聞くと連合でもかなり通じるのだった。
「十二天の一人で」
「戦いを司る仏様の一人だったわよね」
「ヒンズーではそうです」
セーラはヒンズーと答えたがマウリアでは仏教はヒンズー教の一派と考えられているのでそうなるのだった。連合ではそうは考えられていないが。
「それが入れられていないのです」
「そのインドラの武器って？」
「一体？」
「雷です」
セーラはこう皆に答えたのだった。
「雷とそして風と水と土と火も」
「何か話がわからないんだけれど、また」
「そんなのお薬に入れるの？」
「そうじゃないの？」
「そうです。そういったものも入れるのです」
またここで答えるセーラだった。
「本来は。そうすれば人は一生素晴らしい力を手に入れることができます」
「何かもう何だか」
「話が」
皆完全に話がわからなくなってきていた。

「そんなものどうやって入れるんだろう」
「そうよね。お水はわかるけれど」
とりあえずわかるのはそれだけだった。
「火に土に風に雷ってどうやって入れるの？」
「どうやってなのよ」
「はい、それですが」
しかもこのことについてまで説明するセーラであった。
「方法がありまして」
「あるんだ」
また驚く彼等であった。
「そうです。精霊を召喚しまして」
「精霊って。いきなり？」
「そんなの本当にいたの」
「ありとあらゆるものに精霊はいます」
セーラは穏やかに笑って述べるだけだった。
「森羅万象ありとあらゆるものに」
「ありとあらゆるものにって」
「神様は確かにそうだけれど」
一神教だけではなく多神教も多い連合だからこその考えであった。

第百四十二話　確変が終わりその四

「それでも何がもう何だか」
「精霊ってこの世にいたのね」
「精霊はこの世界にも精霊界にもいます」
セーラの言葉によればそうなるのである。
「ですから。召喚しまして」
「それでどうするの？」
「その力をソーマの中に入れるのです」
そしてこう述べるのだった。
「そうすればソーマの力はさらに増すのです」
「そうなんだ。それでなんだ」
「ソーマの力が増すんだ」
皆話は聞いて覚えはした。しかし理解はできていなかった。
「何かよくわからないけれどそうなんだ」
「成程」
「御二人が召し上がられたソーマはです」
二人が飲んだそのソーマの話に戻った。
「あまり効果が続くものではありませんからもうそろそろ効果がなくなります」
「それで効果がなくなったらどうなるんだ？」
「そうね、その時はどうなるの？」
フックとウェンディがまたセーラに問うた。
「力がなくなったら」
「やっぱり今までに戻るのよね」
「はい、その通りです」
セーラの言葉はここでも穏やかなものであった。
「戻ります。普段と同じ御二人になります」
「そうか、ならいいな」

「そうよね。いつもの二人ならね」
彼女の言葉を聞いてとりあえずはほっとする二人であった。
「このままならな」
「何の心配もいらないわ、正直」
「けれどさ。いつもの二人だったらだよ」
セドリックがここで皆に対して言ってきた。
「事件解決できないよね」
「あっ、確かに」
「それは」
皆このことにも気付いた。もっと言えば気付かされた。
「今の公園でも事件あるみたいだけれど」
「はい、今御二人はその公園に着きました」
セーラはまた目の前に水晶玉を浮かばせている。その水晶玉を見ながら皆に話すのだった。
「いよいよ推理開始ですね」
「それでそろそろ元の二人に戻るって」
「まずいわよね」
「うん、事件は解決しないよ」
本来の二人の事件を解決する能力はもう言うまでもなかった。
「それどころか余計に騒ぎが大きくなるから」
「急がないと」
皆焦りはじめた。
「それで何とか事件を解決しないと」
「二人の代わりに」
「急がれるのですね」
セーラはここでまた皆に尋ねてきた。
「公園に」
「うん、何があっても急がないと」
「さもないと大事になりかねないわ」
皆急に本気の顔になった。状況がわかっているからだ。

「急ぎましょう、本当に」
「駆けていって」
「駆けることはありませんよ」
しかしここでもセーラの調子は変わらない。
「それは別に」
「ないの？」
「どうして？」
「すぐに行くことができます」
そしてこう言うのであった。
「そう、今すぐに」
「そんなの絶対に無理だよ」
ジョンが今の彼女の言葉を否定した。
「だってさ、ここから公園まで五キロはあるよ」
「歩いて一時間よね」
「走って三十分」
大体その程度なのだった。
「結構距離あるけれど」
「すぐになんて」
「ですから。駆けられることも歩かれることもないのです」
セーラの言葉は余計に訳のわからないものになっていた。
「縮地法を使いますので」
「縮地法って！？」
「何、それ」
皆それが何かは知らなかった。とりあえず彼等には聞き慣れない言葉であった。

第百四十二話　確変が終わりその五

「何か妖術の類みたいだけれど」
「何なの、それって」
「簡単に言うとテレポーテーションです」
セーラは皆にこう説明するのだった。
「それを使います」
「テレポーテーションかあ」
「セーラってそういえば超能力も使えるのね」
「クンダリーニチャクラを開放させれば」
話がまたマウリア的なものになる。
「超能力を使うことも容易なのです」
「クンダリーニって！？」
「今度は何？」
「ああ、それはだ」
ギルバートがいぶかしむ彼等に説明するのだった。
「身体の中心に七つある蛇の形で現わされるものだ」
「蛇で？」
「それでなの」
「そうだ。それを修業により一つずつ開放し」
これはヨーガの奥義であり目的でもある。マウリアの術はかなり深いのである。
「そのうえで超能力を使えるようになるのだ」
「成程、そんなのだったんだ」
「また随分と凄い術なのね」
「人は誰でもクンダリーニを開放することができます」
セーラによればそうである。
「そしてそれによりです」
「超能力を使えるってわけなんだ」

「それで」
「その通りです。それではです」
セーラの言葉が続く。
「皆さん、円になって下さい」
「!?」
「こう!?」
皆セーラの今の言葉に従いとりあえず円を作った。車が道を通っていないことが幸いした。大きな円がすぐに作られてそこに出来上がったのだった。
「これでいいんだよね」
「これでいいの?」
「はい、次に手をつないで」
「何かフォークダンスみたいね」
そのフォークダンスの本場であるイスラエル人であるアンがふと呟いた。
「これって」
「それか何かの必殺技使うみたいな?」
ウェンディはこう表現するのだった。
「そんな感じだけれど」
「まあ何はともあれそんなことなら」
「これでいいのよね」
「はい」
手をつないだ皆に対してもにこりと笑うセーラであった。
「それでいいです」
「で、どうするの?」
「これでさ」
皆円になってそれぞれの両手でお互いにつなぎ合ってからまたセーラに尋ねた。セーラはその人の円鎖の中でラメダス、ベッキーと共に三人でいる。
「後はこれで縮地法を使います」

「これでなんだ」
「それで」
「はい、その通りです」
また答えるセーラであった。
「後はです。このまま私が念じればです」
「公園に移動できるんだ」
「それだけで」
「はい、それだけでできます」
何ともないといった口調であった。
「それでは今から」
「早速なんだ」
「もう」
皆セーラが早速その縮地法を使うと聞いて少し驚いた。
「精神集中とかしなくて」
「もうなの」
「私の心はもう澄み切っています」
穏やかな笑みからもそれはわかった。
「このまま。では」
こうしてセーラが念じるとすぐだった。皆は公園にいた。緑の木々と草原がそこに広がっておりそして草原の上に古風なＳＬ式の列車が置かれていた。
皆その武骨な黒い列車を見てわかった。ここが何処なのかを。
「あの公園よね」
「間違いないな」
フックがウェンディに対して答える。
「あのＳＬが何よりの証拠だ」
「そうね。本当にテレポーテーション使ったのね、セーラって」
「他にはサイコキネシスやクレヤボレンスも使えますよ」
そのセーラの言葉である。

第百四十二話　確変が終わりその六

「後は。テレパシーも」
「それ、止めてよね」
「テレパシーだけはな」
テレパシーについては彼等も止める。なおサイコキネシスは動かずとも物を動かす能力でありクレヤボレンスとは透視のことだ。どちらも超能力である。
「まあとにかく公園に着いたけれど」
「肝心の二人は？」
「それで事件は？」
皆とりあえずそうしたものを探し回るのだった。しかしどちらも見当たらない。
「あれっ、いないよ」
「何処なのかな」
とりあえず二人がいなくて周囲を見回す。
「果たして」
「あちらです」
しかしすぐにまたセーラが言ってきたのだった。
「あちらにいます」
「あれっ、そこって」
「そこは」
ここで首を傾げる面々だった。そこは森の中である。セーラはそこを指差したのだ。
「何か如何にもって場所！？」
「だよね、如何にも事件があったみたいな」
皆その森を見て言う。その森は深く中が見えない。鬱蒼とさえしている。
「そこに二人がいるのね」

「まさか」
皆首を傾げる。その中にいるとなれば何かがあると決まっているとさえ思った。
「死体があるとか？」
「それも猟奇事件？」
またしても皆怪しいものを感じだしていた。
「それを調べる為にもまず中に入ろうか」
「そうね」
「やっぱりそれしかないね」
皆口々に言う。何はともあれそれしかなかった。そうしてそれを実行に移した。皆でその深い外からは何も見えない森の中に入ったのである。
森の中はやはり深かった。針葉樹が生い茂り暗い。その中を進んでいると暫くしてあの二人が見えた。そうしてその足元にあるのは。
「！？あれって」
「何！？」
そこにあるのは穴だった。穴があるだけだった。その穴を覗いてみるとそこには。何と様々な金銀財宝があるのだった。幸い殺人事件ではなかったが。
「盗難事件！？」
「だよね」
皆その穴を見てまた言い合う。
「これってやっぱり」
「誰が？」
「ああ、皆いらっしゃい」
ここでジャッキーがいぶかしむ皆に対して声をかけてきた。
「どうしてここにいるの？」
「いや、皆幸せだよ」
そしてテンボはこう言うのだった。
「ここに来てな」

「何で幸せなの？」
ウェンディはいぶかしむ顔で彼等に問うのだった。
「それで何でなの？」
「いぶかしむも何もこれを見てわかるじゃないか」
「そうよ」
またジャッキーが言ってきた。
「これ見たらわかるじゃない」
「事件だよ」
テンボの目はいつもの彼の目だった。完全にだ。
「これはな。絶対にな」
「問題は犯人が誰かだけれどね」
「あっ、そうです」
今度口を開いたのはセーラだった。
「もうソーマは」
「切れる時間なのね」
「その効果が」
「はい、そうです」
実にいいタイミングであった。話を混乱させる為には。
「ですからもう」
「それじゃあもう推理も」
「事件を解決することも」
そうなるのだった。極めて自然にそういう流れになってしまった。

第百四十二話　確変が終わりその七

「というとこの事件は」
「二人では解決できないのね」
「よく見たら二人の目だけれど」
皆ここで二人の目を見る。見ればその目は完全にいつもの目だった。二人共極めて検討の外れた目で何かを見ていた。間違える目だった。
「あれじゃあやっぱり」
「滅茶苦茶な捜査になるのね」
皆で話すのだった。これもいつもだというのである。
「さて、もうどういったとんでも推理をするやら」
「それも見ものだけれど」
皆ここで考えをすぐに切り替えた。いつもの二人に戻ったらそれはそれでどうなるかだ。彼等は冷静に二人のやり取りを見守るのだった。
「テンボ、何だと思う？」
「これは巨大な怪盗が動いているんだ」
テンボのジャッキーへの返事はいきなり出鱈目な文章だった。
「そう、怪盗アルセーヌ＝ルパンは実在したんだ」
「サイモン＝テンプラーかも知れないわね」
「どっちも実在したっけ」
「してないしてない」
二人共架空の人物である。しかしテンボもジャッキーもそんなことがわかる筈がない。二人にとって常識やそうしたものは全く無縁なのもなのだ。
「それはないよな」
「やっぱり漫画と現実の区別がついてないの」
そう思うしかないことだった。

「やっぱり。これって」
「捜査は滅茶苦茶になるんだろうな」
しかしそれからだった。彼等は一体何をするか、それだった。
「これは悪魔が集っている」
「ええ、巨大な悪魔が」
今度は悪魔であった。皆最早何が何なのかわからなくなっている。
「蠢いているわね」
「怪盗アルセーヌ＝ルパン」
とりあえずそれで話が決まった。ルパンに。
「あいつの仕業だ」
「そうね、これはルパンよ」
二人の暴走はもうはじまっていた。
「これだけの金銀財宝を集めるとなると」
「二十面相かも知れないけれど」
江戸川乱歩まで出る。なお二人は推理小説だけはよく読んでいる。
教科書は開いても文字が見えないのではないのかとすら思われるが
推理小説だけはよく読んでいるのだ。
「これはルパンだな」
「確実にね」
「なあ」
フックが彼等の話を聞きながら怪訝な顔で皆に尋ねた。
「一つ聞きたいんだけれどな」
「どうしたの？」
その彼にウェンディが応える。
「ルパンって盗んだものを穴の中に入れるか？」
「そんな話聞いたこともないわ」
これがウェンディの返答だった。
「そんな話はね」
「そうだよな何でそんな話になるんだ？」
フックにも訳がわからないことだった。

「ルパンがこんなところに金銀財宝を集めるなんてことにな」
「しかもよ」
ウェンディはさらに言ってきた。
「ルパンってお金より美術品がずっと好きじゃない」
「ああ」
基本的に芸術家なのだ。アルセーヌ＝ルパンの特徴として彼独自の美学がある。それに反するようなことは決してしない。怪盗であるが紳士であり騎士道精神を持っているのだ。
「けれどこの金銀財宝って」
「雑多だな」
「そうでしょ？何かガラクタみたいなのもあるし」
見ればそうだった。如何にも安物のブローチもあれば只のガラスもある。価値のありそうなものもあれば見ただけでないとわかるものもあった。
「ルパンじゃないわよ、絶対にね」
「実在するかどうかは別にしてな」
「そういうこと。ましてや二十面相でもね」
「絶対にないな」
「ええ、これは元に戻ったわね」
そしてその二人を見て言うのだった。

第百四十二話　確変が終わりその八

「あの二人、完全に」
「さて、これからどうするんだ？」
フックもまたその二人を見ていた。
「どんな滅茶苦茶な推理を立てていくんだろうな」
「それが見ものだけれどね」
「これはアルセーヌ＝ルパンからの俺達への挑戦状だ」
「やってくれるわね」
テンボとジャッキーだけが完全に異空間の中にいた。
「よし、それじゃあ一気に行くぞ」
「ルパンの居場所はわかってるわ」
最早完全にルパンが実在人物と確信していた。頭の中ではそうなっている。
「俺達の学校の裏にいる」
「そこにいるわ」
「ルパンって八条学園の関係者だったの？」
「そんな訳ないじゃない」
アロアにネロが思いきり否定する声で答えた。
「あの人十九世紀のフランス人だよ」
「そうよね。子孫は日本人になってるけれど」
この時代でも知られている彼の孫のことだ。なおこの時代ではルパンの子孫達はホームズの子孫やメンゲレ警部の子孫達と共に一緒に連合にいる。しかも多くの国にそのルパンの子孫達がいてあれやこれやと訳のわからないことをしている始末である。
「絶対にそれはないわよね」
「有り得ないよ、本当に」
とにかくネロはその可能性を完全に否定する。
「というか何でそんな考えになるんだろう」

「あの二人だからでしょ」
今度はアロアが言うがこれまたとんでもない返答だった。
「やっぱり」
「あの二人だからなんだね」
「もうこれで充分説得がいくでしょ」
「確かにね」
そしてそれで納得できるのがテンボとジャッキーの物凄いところだった。
「もうそれだけでね」
「だからよ。あの二人の考えなんてね」
その彼等のことである。
「もう何が何だかわからないから」
「それであの二人これからどうするつもりなんだろう」
「さあ」
それについては首を捻るアロアだった。
「とんでも推理が続くのは間違いないけれどね」
「そうだね。それだけはわかるけれど」
「中身は予想できないわよ」
アロアのネロへの言葉は続く。
「全くね。まあとにかくよ」
「うん」
「何があってもいいように覚悟だけはしておきましょう」
「そうね。それじゃあね」
こう言葉を交えさせたうえであらためて二人を見る。見れば二人は相変わらず奇想天外な推理を続けているのだった。しかもそれが止まることがない。
「そうだ、ここは先手を取ろう」
「そうね」
話はさらにおかしな方向に向かっていた。
「学校へ戻るか」

「いえ、待ってテンボ」
おまけに二人だけでストーリーを作って進めている。
「今学校に行ってもルパンはいないわ」
「実在しねえって、だから」
「って言ってもわからないのね」
勿論皆の言葉は彼等には届きはしない。
「まあわかってるけれど」
「さて、どうなるのかな」
皆今度はこれからどうなるかということに考えを及ばせた。
「何がどうなるかな」
「よし、先んずれば人を制すだ」
「そうよ」
テンボとジャッキーは項羽の言葉を出していた。しかし二人が言ってもどうにも説得力がないのが問題だった。何しろこの二人だからだ。
「一気に行きましょう」
「いざ敵の本拠地へ」
「って学校じゃない」
「八条学園」
まさにそこだった。二人は勝手にそこを怪盗の根城に想定したのだ。何故そうなったのかは最早誰にも理解できるものではなかった。
「そこに行ってどうするのよ、一体」
「まあ言ってもわからないだろうけれど」
「さあ、見ていろアルセーヌ＝ルパン」
「今度こそあんたの年貢の納め時よ」
やはり二人はわかっていない。何もかも。そしてそのままいつものように突き進むのだった。確変は終わりまたしてもいつもの二人が引き起こす騒動になっていた。

確変は終わり　　完

2009・6・9

第百四十三話　怪盗を求めてその一

怪盗を求めて

次の日二人は早速学校の中を探し回っていた。皆それを見て言うのだった。

「何だ？あいつ等」

「また馬鹿なことやってるのか？」

既に二人のことは学園の誰もが知っていた。

「で、今度は何やってるんだ？」

「何かゴミ箱漁ってるぞ」

「朝飯でも探してるのか？」

こんなことを言われる有様だった。実際に学園内のゴミ箱を漁っていた。そうしてそのうえで意固地かつ頑迷な調子で叫んでさえいた。

「何処だ、何処にいる！」

「アルセーヌ＝ルパン、きっといる筈よ！」

こんなことを言ってゴミ箱を漁っているのだった。ひっくり返しゴミを校内にぶちまける。奇声さえ発しその中にいると信じている者を探していた。

「俺達の目は誤魔化せない！」

「何処に隠れようとも無駄よ！」

「何だ？今度は人探しか？」

「アルセーヌ＝ルパン？」

皆はこの人命に首を捻った。

「ルパンってあの小説の怪盗？」

「そうみたいだけれど」

当然学園内のどの図書館にも置かれている。今だに愛されているシリーズだ。理知的かつダンディな紳士怪盗の活躍は少年探偵団シリーズと双璧を為す子供達のヒーローだ。

「俺達に挑戦したのが運の尽きだ！」
「絶対に捕まえてやるわ！」
「ええと、つまりは」
「あれってこと？」
皆彼等の話を聞いてわかった。ある程度は。
「ルパンが実在してるって思ってるの？」
「しかもこの時代に」
アルセーヌ＝ルパンは十九世紀の人間である。しかもだ。
「おまけにここ日本だけれど」
「三世じゃなくて一世が？」
アルセーヌ＝ルパンは怪盗の名門ルパン家の始祖であり言うまでもなく一世である。だが二人はそんなことは一切知らないのだ。気付いてもいない。
「どういう頭の構造してるんだ？本当に」
「いつものことだけれど」
いつもそうなのが問題なのである。この二人にとっては。
「それにしてもまあとにかく」
「後片付けはするんだろうな、あいつ等」
問題はそれだった。とにかくゴミ箱をひっくり返してそうしてそのゴミを校内にぶちまけてくる。皆はこのことを問題視しているのである。
「ここにはいないな」
「どうやらあたし達に恐れをなしたようね」
ゴミ箱をくまなく探してから忌々しげに言うのだった。
「しかしまだ遠くには行っていない」
「そうよ、生ゴミはまだ温かいわ」
「さっき俺が捨てたんだけれど」
見ている人間の中の一人が言った。
「腐ったもの。それが温かいんじゃないかな」
「俺達から逃げられると思うな！」

「何処にいるのかはわかってるのよ！」
言いながらせっせせっせと生ゴミをなおしたうえでそのアルセーヌ＝ルパンがいると思っているその場所に向かうのだった。後には唖然とする皆を残して。
「また馬鹿やってるんだな」
「本当につける薬ないわね」
皆が唖然とするその中で事件の捜査が行われていた。しかし捜査は二人は順調に進んでいると思っていたが迷走していた。そもそもルパンなぞ実在しないから当然だった。
クラスでもこのことが問題になっていた。皆まずは呆れていた。
「何ていうかなあ」
「元に戻ったのはいいとして」
皆まずはそれはいいとした。
「どうしようかな」
「この騒動終わらせるには」
終わらせないと二人はさらに学園内を騒がしていく。だからこそどうにかしなくてはならない状況だった。しかし、それでもなのだった。
「けれどなあ」
「あの連中止めるのはね」
「しかも今の状態じゃ」
おまけに二人は絶好調なのだった。さらに悪いことに。
「止めるどころか何処にいるのか確かめるだけでも」
「えらく苦労するわね」
「けれどよ」
しかしそれでもなのだった。
「どうやって止めるの？」
「どうやってって？」
「だから。あの二人をよ」
問題はそれなのだった。とにかく。

「麻薬中毒者を止めるようなものだけれど」
「麻薬中毒者ねえ」
「確かに」
その表現に納得できる皆だった。
「いつもの二人だからね」
「もう漫画と現実の区別がつかないからね」
小説もこの場合漫画の中に入っているのだった。
「だからさ。麻薬中毒者を止める方法だけれど」
「麻酔撃って捕まえるか」
フックが考えた方法はこれだった。
「象用の麻酔をな。それを撃つか」
「撃つのね。撃つじゃなくて」
「ああ、撃つ」
しかも言葉は間違いではないのだった。
「ライフルか何かでな。撃ってそれから止めるか？」
「確かにそれいいけれど」
「名案だけれどね」
しかも皆それで納得するのだった。人を象用の麻酔で撃つことにだ。
「けれどさ。それで大丈夫かな」
「大丈夫かって？」
アロアが今のネロの言葉に顔を向けた。
「何かあるの？ネロ」
「だってさ、あの二人だよ」
ネロは真顔で二人のことを話すのだった。
「あの二人。もう身体は凄い頑丈だから」
「身体能力もねえ」
「そういうのは常人離れしてるからねえ」
「そうそう」
そのことを話すのだった。皆が加わって。

「けれど頭はないからね」
「だから問題なんだけれど」
「象の麻酔で大丈夫かな」
そしてここでネロはこう皆に対して言うのだった。深刻な顔で。

第百四十三話　怪盗を求めてその二

「それで効くかな。本当に」
「象でも無理か」
「薬物への耐性も凄いじゃない」
「そうだな」
フックはネロの言葉にあらためて深刻な顔で頷いた。
「そっちの方も凄いものがあるからな」
「だからさ。象用じゃなくてね」
そうしてネロはとんでもないことを言うのであった。ここで。
「あれ使わない？恐竜用の麻酔」
「恐竜用ね」
「それもクロノサウルスとかウルトラザウルスとかに使うようなの」
どちらも二十五メートルを超える途方もない巨大な恐竜である。
惑星によってはそうした恐竜が闊歩していたりするのが連合なのだ。
「トリケラトプスとかアンキロサウルスに使うのでも不充分じゃないかな」
「ティラノサウルス用はどうかしら」
アロアはそれを提案するのだった。
「そっちでもいいんじゃないかしら」
「ティラノサウルスか」
フックはその名前を聞いて眉をぴくり、と動かした。言うまでもなく恐竜の中でも屈指の凶暴さと戦闘力を誇る種類である。通称暴君竜という。
「あれもな。相当だけれどな」
「一匹捕まえるだけでもそれなりの手間がかかるわよね」
「そうだな。今でもな」
「そうでしょ？だからよ」
そもそも恐竜を捕まえることはこの時代でも中々骨が折れること

である。勿論こちらが踏み潰されたり食べられたりする可能性もあるのだ。
「こっちの麻酔でどうかしら」
「じゃあやっぱり恐竜用ね」
ここでウェンディが言った。
「それ使いましょう」
「恐竜ので決まりか」
「ええ。しかもウルトラザウルス用」
その最大の恐竜のものであった。
「あれにしましょう」
「よし、じゃあ話は決まりね」
「それで決まりだね」
皆もそれで頷くのだった。その麻酔でだ。
「それでライフルは使えないし」
「そうなのよね」
ここでまた一つ問題が出て来るのだった。
皆まだ未成年だ。しかも銃の所持は連合中央政府及び各国の法で許可制になっている。かつてのアメリカのように誰でも買ってそれだけで手に入れられるものではないのだ。
「いざ撃つってなってもね」
「それができないから」
この問題も話されることになった。
「けれどさ。実際に止めないといけないしね」
「あのまま放置したら本当にまたとんでもないことしでかすからねえ」
「そうなのよねえ」
皆とにかく頭を抱えていた。
「何とかしないといけないけれど」
「銃は使えないし」
「どうしようかしら」

あれこれと考えながらも答えが出ない。しかしここで、であった。
「あっ、そうだ」
「あれっ、蝉玉」
「何か考えがあるの？」
「ええ、これならね」
はっきりとした声で皆にも答えた。
「できるかもって思うんだけれど」
「それでどうするの？」
交際相手でもあるスターリングが彼女に問うた。
「あの二人に対して」
「あれよ。上から被せるのよ」
「上から？」
「そうよ。上から被せるのよ」
また話す蝉玉だった。
「上からね。どばってね」
「ああ、っていうとあれだね」
スターリングは彼女の話し方から何を考えているのかわかった。
話を聞けばそれはある程度察しがつくことだった。彼にしてみればすぐにであった。
「バケツで」
「そう。教室に入る時にね」
蝉玉はそのまま彼と皆に話し続ける。

第百四十三話　怪盗を求めてその三

「トラップで。どうかしら」
「ああ、それいいわね」
ウェンディが彼女の提案に同意して頷いた。
「それはあの二人にとっては銃よりも効果があるわよ」
「そうでしょ？確かにあの二人は身体能力は凄いわ」
それも無駄に、である。無駄に身体能力が高い人間程始末に終えないものはない。そしてそれがテンボとジャッキーなのだった。
その二人に対してあえてトラップで向かう。蝉玉が言うのはそれなのだった。
皆はそれを聞いてそのうえで。それぞれ話すのだった。
「銃よりずっと安上がりだしね」
「しかもあの二人頭はどうしようもない程度あれだしね」
「それが一番大きいわよね」
「確かに」
二人の頭こそを狙う、それだった。相手の弱点を衝くことこそ戦略戦術の基本であり作戦立案の根幹である。ならば出される答えは一つだった。
「じゃあ上にバケツを置いて」
「二人が教室に帰って来た時に」
その時を狙うというのだった。
「一気に麻酔がたっぷり入ったバケツを仕掛けておいてね」
「それでどばっと」
「やればいいわよね」
皆で話していく。話は動けばそのまま流れていくことが多い。今がまさにそれであった。
「じゃあ早速仕掛けてね
「よしっ」

これで話は決まった。そうしてそのうえで早速トラップを仕掛けだした。トラップといってもそれはただ教室の入り口にバケツを置いて付けてある縄を引けばひっくり返って中にある麻酔がさかさまに溢れ出るというものだった。それをここに仕掛けたのである。

「さて、後はだ」

フックがその入り口のバケツを見て言う。

「あの二人が来るだけだな」

「後は何時来るかだけれど」

ウェンディはここでまた言った。

「何時来るかしら、それで」

「ああ、それはすぐよ」

その彼女に答えたのは蝉玉だった。

「今携帯のメールで呼んだから」

「呼んだの」

「そう、呼んだの」

こうウェンディに述べるのだった。

「ちゃんとね。呼んだからね」

「呼んだだけであの二人来るの？」

「来るわよ。だって少年探偵団の新作が出るってメールしたから」

「少年探偵団の？」

「そう。テレビ版の最新シリーズのＤＶＤがね」

それが出たというのである。この時代も少年探偵団のシリーズは時折テレビ化されるのである。当然敵はあの怪人二十面相である。彼しかない。

「出てここにあるってメールしたから」

「私が用意させて頂きました」

クラスどころか学園一のお金持ちのセーラがここでにこりと笑って述べた。

「連合の文化を学ぶ一環として買ったものですがもう一つ買っていたのです」

「それでそれをあの二人にね」
「はい、プレゼントです」
セーラにとってみればそうなのだった。おびき出す餌とは考えてはいないのだ。
「その為にです。ですから」
「いいわね。それじゃあ」
そしてそれにウェンディも頷くのだった。
「それでね。やりましょう」
「もうすぐよ」
またここで蝉玉が言う。
「今こっちに向かってるってメール来たから」
「今どの辺りなの？」
「もうこの校舎に入ったわ」
こうスターリングに答える。
「いつもの凄いスピードに決まってるから」
「いや、もっと凄いな」
だがここでフックが述べた。
「間違いなくな。普段の比じゃないな」
「もっと凄いっていうのね」
「あの二人の大好物があるんだ」
彼が言うのはそのことだった。それを言うのである。
「それで速くない筈がない」
「そうね。それは確かにね」
「それこそ今あれね」
アロアが考える顔になって述べた。
「廊下をダッシュしてるわ」
「あの百メートル十秒台のあの速さでだよね」
「ええ、テンボはね」
ネロの言葉にも答えるアロアだった。とにかく二人の運動能力は普通ではない。しかし陸上部には入らない。見事に選択を間違えて

いるのだ。

第百四十三話　怪盗を求めてその四

「ジャッキーだってね。その速さは凄いし」
「うちのパトラッシュに長距離でも勝てそうだしね」
瞬発力だけでなく持久力もある二人なのだった。
「何か本当に天才ではあるんだね」
「多分に天災だけれどね」
アロアの言葉には明らかに毒があった。
「あの二人は」
「その天災が今来るけれど」
「来たわよ」
耳をすませていた蝉玉が皆に言ってきた。
「音がしてきたわ」
「あっ、確かに」
「来たね、本当に」
ここで音がするのだった。その音はまさに駆ける音だった。しかも二つだ。
「さてと、それじゃあ」
「後はタイミングね」
皆ここでその罠を見るのだった。
「この罠で動けなくするだけだけれど」
「いけるかな？果たして」
「大丈夫だ、任せてくれ」
縄を持っているギルバートが皆に答えた。
「扉が開いたその瞬間にやるからな」
「頼んだよ、ギルバート」
「クラス委員の実力見せてよね」
皆彼に声をかける。そうしてそのうえでこれからの展開を見守るのだった。そして音がすぐそこまで来た。それと共に扉が開けられ

たのだった。
「少年探偵団！」
「もらったわ！」
二人はこの声と共に教室の扉を開けた。その時だった。
「よしっ、今だ！」
「ギルバート！」
「よし！」
ギルバートは皆の言葉に応えてすぐに縄を引いた。するとすぐにバケツの中の麻酔が二人を襲った。二人はその麻酔を頭から被り動きを止めてしまい次に倒れ伏してしまった。
「うわ、一瞬」
「すぐ終わったわね」
皆それを見て言った。前のめりに倒れ動かなくなった二人を。
「物凄い威力」
「流石は恐竜用の麻酔だね」
その麻酔の威力にあらためて驚いていた。
「さて、後はどうしようかしら」
「二人の身柄は確保したけれど」
とりあえず第一段階は終わった。しかしそれは終わりではない、そういうことだった。
「これで終わりじゃないよね、やっぱり」
「残念だけれどね」
蝉玉は寝ている二人を見ながらスターリングに答えた。確かに二人の暴走は止めたがそれはあくまで止めただけに過ぎなかったからだ。
「ここからどうするかなのよね、問題は」
「アルセーヌ＝ルパンが実在しないってわかってもらわないとね」
スターリングもそれはわかっているのだった。
「どうしようもないからね」
「だからそれが難しいのよね」

蝉玉は困った顔になっていた。
「二人にそれをわからせることがね。不可能に近いレベルでね」
「そうだよね。本当にどうしたものかな」
二人はここであらためて困っていた。そしてそれはクラスの皆も同じだった。そうしてそのうえでどうするべきか思案に耽るのであった。
「あのね」
ルビーがここで口を開いてきた。
「私考えたんだけれど」
「何、その考えって」
彼女に応えたのはアンだった。
「どうすればいいっていうの？」
「あれよ。この騒動ってほら」
ルビーはアンの問いに応えて話を続けるのだった。
「あれじゃない。公園のあの穴からはじまったわよね」
「ええ、そうよ」
アンは彼女のその言葉に頷いた。
「そうだけれど。あの穴にある色々なのを二人が勝手にルパンがいるって言い出してね」
「だからよ。あの穴の事件を解決させましょう」
ルビーが言う解決案とはそれであった。
「犯人が誰かね。話はそれからよ」
「あの穴にものを集めている犯人ねえ」
アンはルビーの話を聞いてそれについて考えだしたのだった。
「あれってやっぱり犯人は人間じゃないわね」
「人間じゃないのね」
「っていうか何よあれ」
アンはルビーに応えながら顔を顰めさせてきた。

第百四十三話　怪盗を求めてその五

「確かに価値があるのもあるけれどガラクタも多いわよね」
「そうね、それはね」
「確かにね」
ルビーだけでなく他の皆もそれに頷くのだった。
「ああいうの見たらやっぱりね」
「人間じゃない」
「そういうことね」
「ええ、そうよ」
こうも皆に答えるアンだった。
「それで何かっていうと」
「犬かなあ」
「それよねえ」
皆この辺りは大体察しがついてきていたのだった。
「穴掘って埋めるっていったらねえ」
「やっぱり」
「私もそうだと思うわ」
そしてそれはアンも同じ考えなのであった。
「どう考えてもあれは人間がやったのじゃないし」
「烏とか鳥だったら」
一応そのケースも考えられるのだった。
「巣に入れるからね」
「だから絶対に違うよね」
「そういうこと。だから犬だと思うわ」
また皆に述べるアンだった。
「ほぼ確実にね」
「まあそうだろうね」
「埋めてる時点でね」

皆もここで自分達の予想を振り返ってそのうえで言うのだった。
「それしかないだろうし」
「っていうか他にはないよね、やっぱり」
「確かに」
答えはこれで出てしまった。やはりそれ以外にはなかった。
「それでさ、問題はどの犬かだけれど」
「野良犬なんていないしね」
「そうそう」
連合では野良犬や野良猫はいない。無断でペットを捨てればそれで法律に問われる。そして飼えなくなった場合は保健所に渡し引き取り手がいなくなったならば所定の惑星に送られそこで過ごすことになる。これや犬や猫だけでなく他のペットにも当てはまっている。
「野生かしら」
「街中に野生っていうかな?」
「この前野生のオオナマケモノいたじゃない」
このことも言われるのだった。
「可能性としてはあるけれど」
「けれど野生だったらね」
しかしここでこうも言われるのだった。
「それはそれで問題だし」
「確かに」
「市役所に保護してもらわないとね」
「そうよね」
野生なら野生でそうなるのだった。もっとも街中で野生になっている動物がいたらやはりそれも保護の対象となるのでる。
「やっぱり。どちらにしろ」
「調べないと」
野生動物だった場合の結論は出た。
「とにかくよ。これから何としても見つけないとね」
「その犬をね」

「だったらさ」
ネロが皆に対して言う。
「あの公園に行こうよ」
「公園に？」
「そう、公園に」
こう言うのだった。
「それで調べてみよう。相手は絶対に来るしね」
「そうね」
アンが彼のその言葉に頷いた。
「隠し場所がはっきりしているのなら。絶対にそこに来るわよね」
「そういうこと。だからね」
やはりこの辺りはよくわかっているネロだった。伊達に彼はパトラッシュを飼っているわけではない。犬のことは非常によくわかっているのだった。
「それでいくわよ」
「了解、それじゃあまずは皆でね」
「行くか」
結論が出された。こうして皆でその公園に向かうのだった。公園に向かう際にテンボとジャッキーを念入りに縛っておくのも忘れていなかった。
そして公園に着くとだった。あの穴はもう埋められていた。ジョンがその埋められた後を見てそれから皆に対して言ってきた。
「ああ、これね」
「どうなの？」
「間違いないね」
まずはこう言うのだった。
「これ、犬が埋めた後だよ」
「そう、やっぱりね」
「犬なんだ」
皆彼の言葉を聞いて確信になった。

「犬が何でもかんでも集めて」
「それで集めたのね」
「やっぱりそうだったの」
答えがここで出てしまったのだった。

第百四十三話　怪盗を求めてその六

「さて、問題はどんな犬かだけれど」
「飼い犬かしら」
「そうかも知れないよ」
「何か。気付いたみたいだけれど」
また皆にネロとジョンが言ってきた。見ればパトラッシュとラッシーがそれぞれその埋められた穴のところをくんくんと嗅いで調べていた。
「それでパトラッシュ」
「何かわかった？ジョン」
それぞれのパートナーに対して問うた。
「何処の犬かな」
「それで何て犬なの？」
その問いに対して二匹は。まずは一声鳴きそのうえで二人と皆より先に歩き出した。それはまるで手招きしているかのようであった。
「ああ、こっちだってさ」
「こっち来いって」
二人はそんな彼等の動きを見て皆に言う。
「こっちに行けば証拠があるみたいだよ」
「ジョン達が言うにはね」
「そうか」
「それだったら」
皆も二人の言葉を聞いて納得した顔になってきた。
「行く？今から」
「そうしようか」
こうして彼等は二人と二匹の案内を受けてそちらに行く。行くとそこは住宅街であった。左右に様々な形の家が立ち並んでいて塀に囲まれていた。

「住宅街ってことは」
「やっぱり犬かな」
「そうだろうね」
こう口々に言い合う一同だった。
「犬って穴掘ってそこに埋めるし」
「だったらそうね」
「問題はどんな犬かだね」
セドリックがここで言った。
「どんなね。セントバーナードとか土佐犬みたいに大きなのかな」
「そうじゃないの？やっぱり」
「あんな大きな穴だし」
皆その穴の大きさも思い出した。確かにその穴はかなり大きくそれを考えてみるとやはり掘ったのは犬だとすれば大きいものだと思えるのだった。
「大きな犬よね、だとしたら」
「そうよね」
「大きな犬、ね」
ジョンはそれを聞いてまた考える顔になった。
「だとしたら限られるね」
「そうだね。犬っていっても色々だから」
ネロもジョンの言葉に応えて述べる。
「だとしたら。どんな犬かな」
「それが問題だよ」
こんな話をしていた。そうして二人の先を行くネロとパトラッシュはある家の前で立ち止まったのだった。見ればそこは少し大きな日本風の家であった。
「ここ？」
「ここなんだ」
皆はその日本風の家を見て言った。屋根も壁も黒くそれが結構な威圧感を見せていた。庭からは松や柿の木が見えておりそういった

ものも日本の趣を見せていた。
「結構立派な家だよね」
「確かにね」
皆その家を見せて言った。
「何かここにいる犬ってやっぱり」
「秋田犬とか土佐犬とかかしら」
「どっちも気をつけた方がいいよ」
ジョンは秋田犬や土佐犬に対しては皆に注意するように言ってきた。
「どっちもね」
「そんなに危ないんだ」
「危ないっていうか怖いね」
ジョンは秋田犬や土佐犬についてまた述べた。

第百四十三話　怪盗を求めてその七

「秋田犬って狩りに使った犬だし」
「ああ、だからあんなにしっかりした体格なんだ」
「それでだったのね」
「それで土佐犬はさ。闘犬だし」
この時代でも闘犬というものはある。ただしこの時代では賭けやそういったものではなく多分にレスリング等のように犬同士のスポーツとして考えられている。もっと言えばドッグレースやそういったものとして考えられているのである。連合では動物愛護の精神が徹底しているからである。
「やっぱり。怖いよ」
「特に土佐犬はそうみたいね」
「闘犬だからねえ」
「身体も相当大きいし」
しかもなのだった。
「そんなのがいきなりにゅっと出て来たらね」
「それこそ危ないよね」
「確かに」
皆そんな話をしていた。とにかく秋田犬が出ても土佐犬が出てもいいように気構えはしていた。しかしここで家の中から出て来た言葉は。
「こら、ベートーベン」
「ベートーベン！？」
「ってあの！？」
皆ベートーベンという名前はわかった。言うまでもなくあの音楽家である。なおその国籍についてはこの時代でもドイツかオーストリアか議論がある。
「どう見てもこのお家に合ってる名前じゃないけれど」

「何なのかしら」
「全く。散歩散歩と五月蝿い奴だな」
困った顔をして玄関から出て来たのは。
セントバーナードだった。かなり大きな。和風の門にかなり不似合いなその犬がここで出て来たのである。そして声の主もそこにいた。
「うわっ、これはまた」
「突っ張ったお兄さんね」
ちょんまげにしているアジア系の若い男であった。目は緑だがそれでも顔立ちはアジア系であった。何と頭をちょんまげにしているのだ。
連合ではちょんまげはかなり過激な、不良でも相当気合が入った者しかしない髪型とされている。他にそうした髪型としてはモヒカンや辮髪がある。
「それで羽織袴って」
「傾いてるわね」
「あれっ、あんた達」
その究極に突っ張った兄ちゃんが彼等に気付いた。
「何でここにいるんだい？」
「ああ、それはですね」
「実は」
「ああ、そうか」
しかしここで兄ちゃんの方から言ってきたのだった。
「サインだよね」
「えっ！？」
「サインって！？」
「だから君達僕のファンなんだろう？」
しかも一人称は僕であった。外見に似合わず意外と紳士のようである。
「だからサインを貰いに来たんじゃないの？」

「サインっていいますと」
「一体？」
しかし彼等はそれを聞いてもかなりわからない顔になってしまっていた。
「何かこの人有名人なのかな」
「誰だったかしら」
「あっ、確か」
ここで声をあげたのは七海だった。
「ちょんまげしてるアバンギャルドな漫画家さんで」
「漫画家さん！？」
「そうよ。橋爪潤一郎」
この名前を出すのだった。
「確かこの辺りに住んでるって聞いたことがあったけれど」
「僕がその橋爪潤一郎だけれど」
そのちょんまげのお兄さんがまた述べてきたのだった。
「あれっ、知らなかったの？」
「橋爪潤一郎って確か」
「そうだよね」
皆その名前を聞いて思い出したのだった。やはり名前が出ればそれでわかってくるのだった。
「あの売れっ子少女漫画家だったよね」
「売れっ子かどうかは知らないけれどね」
橋爪は笑いながら彼等に述べてきたのだった。
「僕がその橋爪だよ」
「やっぱり」
「それで何の用かな」
あらためて彼等に問うのだった。
「サインかな。やっぱり」
「あのですね」
「実は」

その彼に対して話すのだった。そして橋爪もその話を静かに聞くのであった。この大騒動もようやく終わりが見えようとしていた。

怪盗を求めて　　完

２００９・６・１５

第百四十四話　話のわかる漫画家その一

話のわかる漫画家

「あのですね」
「実は」
皆はまずこう口火を切ってきたのだった。
「お話長くなるんですけれど」
「あの古いＳＬのある公園で」
「ああ、あそこだね」
橋爪もＳＬのある公園と聞いてすぐに冊子がついたようであった。
「あの公園だね。知ってるよ」
「知ってるんですか」
「うん。だってこの犬の散歩のコースだから」
言いながら手綱を握っているそのセントバーナードに顔を向けるのだった。実に優しくいとおしげな目からこの犬をかなり可愛がっているのがわかる。
「ベートーベンのね」
「ベートーベンって名前なんですか、その犬」
「そうだよ。子犬の時に飼ったんだけれどね」
それからだというのだ。
「いや、大きくなっちゃってね」
「セントーバーナードですからね」
「やっぱりそうですよね」
皆それを聞いて納得した顔になるのだった。
「大きいので有名ですからね」
「しかもかなり」
セントバーナードは大型犬で有名である。元々は雪山での遭難者を救助する為の犬である。だからこそかなり大型になっているのである。

「けれど何でそんな名前なんですか？」
「ベートーベンって」
「ああ、僕の趣味なんだ」
橋爪は穏やかに笑って述べたのだった。やはり温厚な笑顔である。その究極まで突っ張ったパンクな格好からはとても想像できないものだった。
「この名前はね」
「だからなんだよ」
「ベートーベンがお好きなんですか？」
「うん」
だからだというのである。
「そうだよ。これでもクラシックが好きなんだ」
「意外と理知的な人？」
「みたいね」
皆彼の穏やかな物腰とその言葉を聞いて述べた。
「どうやらね」
「かなりそうみたいね」
「そういえばこの人の漫画って」
七海もここで皆にこっそり話すのだった。
「純愛漫画なのよ」
「純愛なの」
「そうなの。心理描写が繊細で」
やはりちょんまげからは想像できないことだった。この時代の連合では最早ちょんまげといえば究極の不良がする髪型だったからである。
「そこまで凄いんだ」
「意外過ぎるけれど」
「凄くいい奴なんだよ」
橋爪は相変わらずそのベートーベンを明るい目で見ていた。
「気は優しくて力持ちでね」

「そんなにですか」
「うん、しかも頭も凄くいいんだ」
完全に自分のところの犬を褒め称えていた。親馬鹿と言ってもいいものだった。
「僕にとってはかけがえのない家族だよ」
「へえ、凄い犬なんですね」
「この犬って」
「そうだよ。本当に家族なんだよ」
また言う橋爪だった。
「ベートーベンとはね」
「そうなんですか。かけがえのない存在なんですね」
「橋爪先生とは」
「いや、先生っていうのは」
その呼ばれ方にはかなり抵抗があるようだった。
「止めて欲しいな。それはね」
「あれっ、どうしてですか？」
「漫画家なのに」
彼等は橋爪のその謙遜には目を少ししばたかせた。

第百四十四話　話のわかる漫画家その二

「漫画家さんって先生って呼ばれるじゃないですか」
「そうですよ」
彼等はそのことをよく知っている。漫画家や小説家を先生と呼ぶのは二十世紀からの呼び方である。だから彼等もこう呼んだのである。
「それでそんな謙遜することは」
「ないんじゃ？」
「よくそう言われるけれどね」
橋爪は困ったような笑顔で彼等に述べた。
「それでもね。やっぱりね」
「抵抗があるんですか」
「うん、そうなんだ」
やはりそうなのだった。
「だからね。何かね」
「けれどねえ。漫画家さんだから」
「やっぱり」
しかし彼等の言葉は変わらなかった。顔を見合わせてそのうえで言い合うのである。
「先生でいいんじゃ」
「それ以外の呼び方ってある？」
「さあ」
先生以外の漫画家の呼び方となると誰も知らないのだった。それはスポーツ選手を何某選手と呼ぶのと同じである。だからこそないのだ。
「ないよね、やっぱり」
「知らないわ」
「だからね。仕方ないけれどね」

橋爪はまた苦笑いを浮かべて言うのだった。
「先生って。呼んでもらうんだ」
「そうだったんですか」
「そうした事情があったんですか」
「うん。まあこのことは別にいいよ」
そしてそれはいいとも延べるのだった。
「それでね。ここに来た理由だけれど」
「あっ、はい」
「それですけれど」
彼等はここではっとした顔になって彼に言ってきた。
「実はですね」
「そこのセントバーナードの。ええと」
「ベートーベンだね」
名前をついつい忘れてしまった七海に述べる。
「この子がどうかしたのかい？」
「何か癖とかありません？」
七海はまずはオブラートに隠して述べるのだった。
「癖。ありませんか」
「癖って？」
「例えば。何か大事なものを集めるとか」
こう話すのであった。
「そういうこと。しませんか？」
「ああ、それね」
橋爪は七海の言葉を聞いて静かに応えてきた。
「実はね、あるよ」
「やっぱり」
「それじゃあ」
皆は今の彼の言葉を聞いてそれぞれ顔を見合わせた。
「このベートーベンがだよね」
「間違いないね」

「実はね。僕がベートーベンにあげたものだけれど」
「はい」
「そういったのはどうなってるんですか？」
「穴に入れるんだ」
こう話すのだった。皆に対して。皆それを聞いていよいよその表情に確信したものを浮かべるのだった。話がこれで終わる、誰もがそう思った。
「自分が掘ったその穴にね」
「間違いないわね」
「ああ」
「謎は解けたな」
そして皆会心の顔で言い合った。
「そういうことだったのか」
「この犬が」
「それでね。実は」
「はい、宝物とかあげてましたよね」
「ベートーベンに」
「そうだよ」
また答える橋爪だった。話は皆の予想通り、そして希望通りに進んでいると言えた。
「あげてるよ、いつもね」
「じゃあ公園のあれはやっぱり」
「この犬が」
「君達あの穴のこと知ってたんだ」
橋爪の言葉はここでも皆の希望通りのものであった。
「そうだったんだ。あの穴のことを」
「ええ、まあ」
「ちょっとクラスメイトの中で大騒ぎしたのがいまして」
この辺りを言う時は苦笑いだった。しかしそれでもテンボとジャッキーだるというのは隠していた。流石に言うわけにはいかなかっ

た。

第百四十四話　話のわかる漫画家その三

そしてそのうえで。彼に話すのだった。
「それでなんですけれど」
「あの穴にあれだけ入れたのは誰かなって」
「あれはね。ベートーベンの趣味なんだ」
そして趣味だと話すのだった。
「あれはね」
「そうだったんですか」
「趣味だったんですか」
「そうだったんだよ」
またしても穏やかな笑顔で話す橋爪だった。
「あれはね」
「けれどそれでも」
「ねえ」
しかしであった。彼等はここで顔を見合わせてそのうえで暗い顔をするのであった。
「あそこで若し他の人に見つかったら」
「公園ですよ」
彼等は口々に橋爪に対して述べてきた。
「そこで見つかったらまずいですよ」
「あの、色々な人がいますし」
「それもわかってるよ」
やはりこう答える橋爪だった。穏やかな笑顔はそのままである。
「それもね」
「じゃあどうしてなんですか？」
「そこまで」
「こう考えてるんだ。あれはベートーベンにあげたもの」
「このワンちゃんにですよね」

アロアはそのベートーベンに顔を向けて言った。ベートーベンは賢そうな顔をして主の傍らに礼儀正しく座っている。それを見るとやはり賢明な犬であるのが窺える。
「あげたんですか」
「だからベートーベンがどうしようといいんだ」
「どうしようとですか」
「それにね。実はね」
彼はさらに話すのだった。
「ベートーベンは無欲なんだよ」
「無欲、なんですか」
「うん。御飯があればそれでいいんだ」
生き物ならば食べなくてはならない。だからこれは必需なのであった。
「それもね。何でもいいんだ」
「何でもですか」
アロアがまた応える。橋爪はそれを受けてまた話してきた。
「納豆を上にかけた麦御飯が一番好きなんだ」
「麦御飯がですか！？」
「納豆をかけた」
皆このメニューにはかなり驚かさせられた。少なくともそれは犬が食べるメニューとしてはあまりないものである。どちらかといえば人間のメニューである。
「まあ何でも食べるけれどね。食べればそれでいいから」
「それだけで満足するんですか」
「あそこに埋めるのはね。誰かが見つけることを待っているからなんだよ」
「じゃあわざとなんですか」
「そう、わざとなんだ」
こう語る橋爪だった。
「実はね。あえてだったんだよ」

「またどうしてわざとそんな場所に埋めるんですか？」
「それも見つけてもらう為にって」
「その高価なものを欲しい人が持って行くよね」
橋爪の皆への言葉はここでも変わってきた。
「何かしらの理由で」
「ええ、まあ」
「確かに」
「そうした人が持って行くようにね。だからなんだよ」
「そうだったんですか」
「それでだったんですか」
「うん。そうなんだ」
ここでその理由もわかったのだった。
「ベートーベンから皆へのプレゼントなんだ」
「そして橋爪先生の、ですね」
「ううん、僕じゃないよ」
しかし彼は自分ではないというのだ。あくまで。
「だってベートーベンがあげてるじゃない」
「あっ、だからですね」
「それでですか」
「そうだよ。だからベートーベンがあげたんだ」
そういうことになるのだった。この場合は。何しろ彼から貰ったものをベートーベンが埋めてそれを欲しい人に渡しているからである。だからそうなるのだ。
「けれど先生って」
「僕かい？」
「あれじゃないですか」
今度彼に言ったのはアンだった。クラスきっての漫画の描き手の彼女である。

第百四十四話　話のわかる漫画家その四

「ボランティア活動にも熱心で」
このことを話すのである。
「寄付だって随分してるじゃないですか」
「それでもですか」
「これはね。啓示だったんだ」
「啓示、ですか」
「僕はね。実は」
これまた皆にとっては驚くべきことを話す橋爪だった。
「神父の資格も持ってるけれど」
「神父っていうと」
「カトリックですよね」
「そうだよ。カトリックだよ」
穏やかな笑みはここでも同じであった。
「カトリックなんだ」
「じゃあ啓示っていうのは」
「その神様からですよね」
「そうしろって。そうしたらある人が救われるからとね」
「啓示があったんですか」
「何か変わった啓示ですね」
皆その啓示のことを聞いて述べた。
「それってかなり」
「僕も最初は疑ったよ」
橋爪もまた述べるのだった。
「まさかって思ったよ」
「ですよね。やっぱり」
「啓示にしろ変わってますよね」
「だよね」

皆も同じことを思いそして言った。
「啓示にしろねえ」
「何か違うし」
「普通啓示ってあれですよね」
そしてここで言ったのはネロだった。
「こうした場合は寄付しようとかそういうのですよね」
「一応だけれど教会を一つ建てるだけはね」
橋爪はネロのその言葉に応えてまた延べた。
「お金はあるんだけれどね」
「けれどそれをしないで、ですか」
「その啓示ですか」
「おかしいと思ったけれどね」
また皆に対して話す橋爪だった。
「けれどそれに従ったんだ」
「それでベートーベンにですか」
「贈り物をあげたんですね」
「うん、そうなんだ」
また話すのであった。皆にこのことを。
「それであげてみたけれどね。その時だって」
「どうだったんですか?それで」
「どうされたんですか?」
「ベートーベンが受け取らなかったら止めるつもりだったんだ」
今度はベートーベンを見て話をするのだった。
「それでね。止めるつもりだったんだ」
「この犬が受け取らなかったら、ですか」
「それで」
「うん。ベートーベンは賢いからね」
ここでもベートーベンへの絶対の信頼が見られた。彼の愛犬への信頼はかなり強いものであることがここでもよく窺えるのであった。
「若しその啓示が間違いなら受け取らないって思ったから」

「けれど受け取った」
「だからやったんですね」
「そうだったんだ。それで今もああやってるんだ」
「そうだったんですね」
「それでだったんですか」
皆ここまで聞いてはっきりと納得した顔で頷いたのだった。
「成程、啓示だったんですね」
「神様の」
「きっとこれを受け取ってくれる人がいるよ」
彼は言った。
「そしてその人は救われるんだ」
「橋爪先生によってですね」
「ううん、僕じゃないよ」
それも否定する橋爪だった。
「救うのはね」
「別の人なんですか？」
「神だよ」
人ではなかった。神だと言うのである。
「神が救われるんだ。僕はそれの橋渡しに過ぎないんだ」
「橋渡しに過ぎないんですか！？神様の」
「何かそれって」
「いや、そうなんだよ」
いぶかしむ皆に対してまた述べるのであった。至極当然といった口調で。

第百四十四話　話のわかる漫画家その五

「それも当然だよ。だってこの世は神が治めているんだよ」
「神がなんですか」
「キリストの神様が」
「ああ、神様は一人じゃないだろうけれど」
これは連合特有の考えであった。連合ではやはり多くの宗教がありそれが共存しているからこうした考えに至るのであった。神父でもある彼でもだ。
「キリスト教の神様もね。治めているから」
「あの神様もなんですね」
「それで他の神様も」
これが連合の考えである。エウロパでも大体同じだ。やはり複数の宗教が同時に存在しているとこうした考えに至るのである。
「そういうことなんですね」
「それでですか」
「うん。僕の信じている神様が治めているから」
そして今度はこう言うのであった。
「だから。そうなるんだ」
「そうですか。それでなんですね」
「この世界は治まっているんですか」
「そう思うよ。それじゃあ後は」
話が終わったと見てだった。橋爪はここで話を変えてきた。
「今から散歩に行くけれど」
「あっ、はい」
「それじゃあこれで」
「いや、時間はまだあるから」
皆彼に礼をして帰ろうとしたがそれを呼び止めるのだった。
「だからね。よかったらだけれど」

「よかったら？」
「何かありますか？」
「サインしていいかな」
こう自分から申し出てきたのであった。彼自身からであった。
「どうかな。何かあればよかったら」
「えっ、サインって」
「先生がですか！？」
売れっ子漫画家のサインである。皆この申し出にびっくりした。
「私達にですか」
「いいんですか！？それって」
「いいよ」
ここでも穏やかな微笑みであった。
「さあ、色紙はこっちで用意してあるし」
「色紙もあるんですか」
「サインペンもね」
それも用意しているというのだ。何もかも用意しているのだった。
「あるからね。だから喜んでさせてもらうよ」6
「そうですか。それじゃあ」
「御願いします」
彼等としても願ったり適ったりの話であった。やはり悪い話ではない。
「僕はシャツにも御願いします」
「私は帽子に」
「うん、待ってね」
まずは色紙を用意して次にサインペンを取り出す。そうしてそのうえで彼等にサインを書いていく橋爪だった。やはりその間も温厚な笑みを浮かべている。
「さて、これでいいかな」
「はい、有り難うございます」
「どうもです」

皆そのサインを書いてもらった。やはり喜ばしいことであった。
「それじゃあ有り難うございました」
「これで」
「またね」
双方共に挨拶をした。
「今度は単行本持って来てくれたらね」
「それにサインしてくれるんですね」
「単行本に」
「うん、させてもらうよ」
やはりこう答えるのだった。
「是非ね」
「それじゃあ今度は」
「持って来ますね」
「その時またね」
こんな話をしてそのうえで別れるのだった。彼等は笑顔で橋爪と別れた。そうしてそのうえで今は戻るのだった。そしてその中で話をしていた。

第百四十四話　話のわかる漫画家その六

「それでだけれどね」
「ああ」
「何だ？」
あらためて皆で話をしていた。
「あの二人だけれど」
「ああ、あの二人ね」
蝉玉がスターリングの言葉に応えた。
「覚えてるわよ。っていうか忘れられないし」
「全く。確変が終わったらすぐにこの騒ぎ起こしてくれたし」
「本当にね」
皆このことを話して口を苦いものにさせていた。
「あの二人を何とかしないとね」
「どうしようかしら」
「とりあえずさ」
スターリングが皆に話す。
「麻酔が解けたらだけれど」
「その時よね」
蝉玉も腕を組んで難しい顔をしていた。
「またルパンがどうとかって大騒ぎするの確実だから」
「そうなんだよね。いないって言ってもね」
「理解しないし」
それが二人の物凄いところなのだった。
「また騒ぎが起こるわよ」
「つまりだ」
ギルバートもここで言う。
「あの二人がルパンは実在しないことを理解しない限りこの騒ぎは終わらない」

「じゃあ永久に終わらないってこと？」
アンは悩む顔でとてつもなく不吉な未来を述べた。
「だってあの二人よ」
「いや、それは幾ら何でも」
「永久に終わらないってのは」
皆それは何とか否定しようとする。しかしそれでも否定できないものがあった。
「あの二人だからねえ」
「何かを理解するなんて」
絶対にない、それはもうわかっていたことだった。
「それじゃあやっぱり永遠に？」
「この騒ぎ続くの？」
「正直言ってうんざりね」
アンも眉を顰めさせていた。
「もうね。こんな馬鹿騒ぎが続くと」
「どうするの？それで」
スターリングも首を傾げていた。
「何とかしないとたまったものじゃないよ」
「永久に麻酔かけるというのは？」
セーラはここでとんでもないことを言った。
「そうすれば騒ぎが再発しませんが」
「いや、それって死ねってことじゃない」
「だからそうじゃなくてさ」
皆流石にそれは止めた。
「マインドコントロールは」
「それもちょっと」
「止めるべきよ」
セーラのこの提案も止めるのだった。やはりとんでもないものであった。
「だから。それよりももっと」

「何か平和な方法でね」
「話終わらせようよ」
「そうよね」
ここで蝉玉も皆の言葉に頷いた。
「とりあえず二人の頭にルパンが実在しないことをインプットさせるのよ」
「というか事実そうなんだけれどね」
「空想と現実の事実がつかないから」
蝉玉はこのことをまた言うのだった。
「そこが問題なのよね」
「そうなんだよね」
スターリングもこのことを聞いて溜息を出すばかりだった。
「あの二人。それがないからね」
「言ってもわからないしね」
しかもなのだった。
「人の話聞く耳ないし」
「っていうかあの耳って何の為にあるのかな」
スターリングもあらためて思うのだった。
「一応普通の人よりずっと聴力はあるんだよね」
「山猫並にね」
それだけあるというのだった。
「あるわよ。それこそ何キロも離れた針の音だって聞けるしね」
「凄いね、それって」
スターリングは蝉玉の今の言葉に素直に賞賛の声をあげた。
「それだけだったら皆迷惑しないのにね。本当にね」
「頭のない非常識な能力は迷惑でしかないわ」
蝉玉の言葉は容赦がない。
「さて、そんな相手にだけれどね」
「そうだね。何とかしてね」
「ルパンがいないってわかってもらおうか」

「そういうことね」
そんな話をしながら今はあれこそ考えるだけであった。しかしその時は答えが出ず学校に戻ってもそれは同じであった。騒動は最終局面になっていたがまだ終わらなかった。

話のわかる漫画家　　完

２００９・６・２０

第百四十五話　思い込ませるその一

思い込ませる

学校に戻った一同。時間はもうすぐ夜になろうとしていた。
「さえとあともう少しで門限だし」
「どうしよう」
幸いにもまだ眠っている二人を見て言うのだった。二人は教室で椅子に縛られたままぐっすりと眠っている。流石に眠った状態で動いたりはしなかった。
「この二人にルパンがいないってわからせないとね」
「どうインプットしようかしら」
「とりあえずはだ」
真面目なギルバートが皆に述べてきた。
「もう時間がないぞ」
「そうなのよね、門限なのよね」
アンも困った顔で言う。
「部活もそろそろ全部終わりだしね」
「夜間の人達が来る前に帰らないとね」
「そうなのよね。それより前に帰らないと」
皆で話す。八条学園には夜間部もあるのだ。この時代にも夜間学校というものは存在しているのである。これはそれぞれの人の事情から必要になるものだ。
「けれど答えは出ないし」
「どうしたものかな」
「まずは外に出よう」
ギルバートはこう提案するのだった。
「まずはだ。それでいいな」
「そうね。門限は守らないといけないしね」
アンは今度は溜息と共の言葉だった。

「まずは出ましょうか」
「そうね。じゃあこの二人引っ張って行って」
「そうしようか」
彼等はこう話してそのうえでまずは学園を出た。学園を出る時に二人を持って行くのも忘れてはいない。大八車に乗せてごろごろと引っ張って行った。
昔ながらのその大八車を引っ張るのはフランツだった。彼がその不死身ともいえるスタミナで引いている。そして皆その周りを囲んで歩いていた。
「とりあえずはさ」
「何？」
皆今度はナンの言葉に応えた。
「私の家に来ない」
「ゲルに？」
「ええ。今はここからすぐの場所にあるし」
こう馬上から皆に述べるのだった。やはりここでも馬に乗ってそのうえで話していた。
「そうしましょう。いいわね」
「そうね。それだとね」
「そこがいいね」
皆ナンのその提案に頷くのだった。
「それじゃあまずはナンのゲルに入って」
「そこで話をしようか」
「そうね」
こうしてまずはナンのゲルに入ることになった。そうしてその中でその二人を取り囲んで車座になって。あらためて話をするのであった。
「それでよ」
「どうしよう」
皆まだ寝ている二人を見ながら話をはじめた。

「今の状態じゃどうしようもないしね」
「起きてないのはいいけれど」
「どうやってインプットしよう」
「言っても聞かないし」
「そうだ」
ここで言ったのマルコだった。
「ルパンはもう千年以上前の人だしとっくに死んでるって言えばどうかな」
「ああ、それね」
トムも彼のその言葉に応える。
「それいいかも。そりゃ千年以上も生きている人なんていないからね」
「だからだよ。どうかな」
「うん、それで行こうか」
「待って」
しかしその二人に対してルビーが言ってきた。
「それで信じると思う？あの二人が」
「いや、普通千年生きる人なんていないよ」
「あの博士以外は」
天本博士のことである。しかしこの博士は元々人間かどうかさえかなり怪しい人物だ。何しろビッグバンから生きているからである。
「流石に信じるよ」
「人間は巨木じゃないんだから」
「絶対にそれはないわ」
しかしここでルビーは真剣な顔で皆に告げるのだった。

第百四十五話　思い込ませるその二

「あの二人はそんな常識は理解しないわ」
「じゃあやっぱり」
「信じないんだ」
「間違いなくね。だからルパンを今もいるなんて言えるのよ」
言われてみれば確かにその通りであった。
「そんな二人に言い聞かせるなんてね」
「言葉じゃ無理か、やっぱり」
「じゃあどうしよう」
「洗脳？」
ナンがふと皆にこれを話してきた。
「催眠術で信じ込ませるとかは？」
「催眠術ねえ」
「それかあ」
「そうよ。それしかないんじゃないの？」
ナンはそのモンゴル服の袖に手を入れたうえでまた皆に述べた。
「あの二人に対しては。言ってもわからないし」
「諦めることもしないしね」
「忘れることは物凄く多いけれど」
「あっ、それって」
アンはその忘れるという言葉に反応を見せたのであった。
「それじゃないの？忘れる」
「忘れるって？」
「そうよ、忘れさせるのよ」
アンはまた皆に話した。
「忘れさせてね。それでどうよ」
「そうだよね。それって」
「いいかも」

皆もそれに頷くのだった。確かにそれはいいことであった。
「じゃああの連中のとてつもない忘却力を利用して」
「話を終わらせようか」
こうした能力まで常人のそれを遥かに凌駕しているのであった。
40
「それで」
「そうだよね、それが一番穏健だし」
「賛成」
これで話が決まるのであった。
「それじゃあそういうことでね」
「やってみようか」
「それでよ」
ここでまた言うアンであった。
「問題はどうやって忘れさせるかだけれどよ」
「起きたらもう忘れている場合もあるぞ」
ギルバートが言ってきた。
「それもかなり多いな」
「そうなのよね。そうしてもらったら本当にそれで終わりだけれど」
アンもそれだといいとしていた。
「けれどね。余計な方向には話が大きくなる連中だから」
「それじゃあ念の為にやっぱり」
「仕込んでおく？策っていうのを」
「勿論よ。兎を追ってる人に兎を忘れさせるには」
「別の兎を見せる」
ギルバートがここで言った。
「つまりだ。毒を以って毒を制すだ」
「その通りよ」
アンはまたギルバートの言葉に対して頷いてみせた。
「そういうこと。それで行くつもりよ」
「ルパンのことを忘れさせるには」

「別の怪盗を出す？」
「いいえ、それだと同じよ」
アンはネロが出してきたその提案は否定するのであった。
「それだとまた駄目よ」
「駄目なの。それは」
「そうね。駄目だわ」
アンはこうネロに話す。皆ナンのゲルの中で車座になったまま話す。ゲルの一番上から照らされている灯りを頼りにそのうえで話をしている。
「同じ騒動になるから」
「そう。だったらどうしようか」
「怪盗が駄目なら探偵を出したらどうかしら」
こう提案してきたのは蝉玉であった。
「それだと」
「探偵って！？」
「どういうこと！？」
皆今の蝉玉の言葉にはすぐに怪訝な顔になった。
「まさかとは思うけれどシャーロック＝ホームズとか出すの？」
「その通りよ」
にこやかに笑ってスターリングの問いに答えてみせる。
「ホームズじゃなかったらバージル＝ティッブスでもいいわよ」
「バージル＝ティッブスでもって言われてもね」
しかしそう言われてもスターリングは首を捻るのだった。
「実在しないしおまけに千年以上前の人だよ」
「あれっ、アメリカのどっかの署じゃまだ特別出張中ってなってるんじゃないの？」
トムがそのことに突っ込みを入れた。

第百四十五話　思い込ませるその三

「確か」
「まあそれはね」
これはスターリングも認めた。
「その通りだよ。けれどあれってジョークだよ」
「あの二人は冗談と本気の区別がつかないわよ」
ここでまた言い加えてきた蝉玉だった。
「残念なことにね」
「そうだよね。それはね」
スターリングは今度は実に残念そうな顔で頷いた。
「その通りなんだよね。これがね」
「だからなのよ」
しかし蝉玉はここで言葉を明るくさせるのだった。
「だからこそ。それでいくのよ」
「それでって？」
「そうね。ホームズでもティッブスでもいいけれど」
楽しそうな笑みを浮かべ考える顔で述べた言葉だった。
「名探偵のサインを作り出すのよ」
「名探偵の？」
「そういうこと。それを作るのよ」
蝉玉の提案はこういうものだった。
「そしてそれを二人に渡せば」
「ああ、成程」
スターリングもそれを聞いて納得した顔で頷くのだった。
「そういうことだよね。それだったらね」
「どうかしら。いいわよね」
「うん、かなりいいよ」
スターリングは今度は確かな笑顔で応えた。

「これだと完全にあの二人ルパンのこと忘れるのね」
「ただしよ」
ふとここで言い加えもしてきた蝉玉であった。
「そこにアルセーヌ＝ルパンのサインは入れないこと。絶対にね」
「あれっ、ルパンって怪盗だよ」
今の彼の言葉に怪訝な顔で返すネロだった。
「怪盗なのに探偵のサインなんておかしいんじゃないの？」
「そこが少し複雑なのよ」
しかし蝉玉はここで注意してきた。
「ルパンは確かに怪盗だけれど」
「うん」
これは動かせない事実だ。しかしその他にもまだあるというのだった。この辺りが実に複雑なのであった。話は一面だけではないのである。
「探偵でもあったのよ」
「怪盗なのに探偵！？」
ネロはそれを聞いて思わず首を傾げてしまった。
「何、それ」
「だから。ルパンはやがて怪盗よりもそっちになっていったのよ」
こうネロに対して説明をはじめてきた。
「色々と事情があってね」
「怪盗を辞めて探偵にね」
「元々騎士道精神を重んじる紳士で愛国者でもあったし」
つまり人格的には卑しい人物ではなかったのである。それに盗み方も盗む相手も実に痛快なやり方で正々堂々と行うのを常としてきたのだ。
「その素質はあったのよ」
「そうだったんだ」
「あんたそういう話は読んでなかったの」
「ルパンは怪盗のしか読んでないよ」

ネロは答えた。
「そういうのしかね」
「そうだ。だったら仕方ないわね」
蝉玉もそれを聞いて納得した。
「それもね」
「うん。少年探偵団なら随分読んだけれど」
どちらかというと彼はそちらなのだった。
「ルパンはね。本当にね」
「けれど。これで事情はわかったわよね」
「うん」
今度は納得した顔で頷くネロだった。
「これでね。そういうことはよくわかったよ」
「そういうことなのよ。だからルパンは駄目」
あらためてこのことを皆に告げられた。
「他の探偵なら誰でもいいわよ」
「じゃあ僕は銭形平次だ」
ギルバートがここで言った。

第百四十五話　思い込ませるその四

「江戸時代の日本の岡っ引もいいんだな」
「あの二人に時代考証なんてないから」
そんなものがある筈もなかった。
「別にいいわよ」
「よし、これでいい」
何と色紙にサインペンで銭形平次のサインを書いてしまったのだった。
「これでな」
「ええ。ちゃんと書けてるじゃない」
蝉玉はそのアルファベットでの銭形平次のサインを見てにんまりと笑っていた。
「オランダ語ってことでいいわね」
「何か凄い設定だね」
かくいうスターリングは人形佐七であった。やはり彼もアルファベットで書いている。そうしてそのうえで青いカラーのサインペンでテンボ君とジャッキーちゃんに、と書いている。
「それって」
「いいのよ。わからないから」
二人の頭脳の出来をよく把握しての言葉であった。
「とりあえず皆書いて。さて、私は」
蝉玉はドルーリ＝レーンであった。彼が服毒自殺していることは知っているがそれでもあえて彼ということにして書いてしまったのである。
「これでよし、ね」
「ホームズできたわよ」
「ハニー＝ウエストも」
偽造は続く。

「あとは。ネロ＝ウルフに」
「九十七分署の面々も書こうよ」
こうして瞬く間に普通の人間ならば誰が見てもおかしいどころではないサイン入りの色紙が出来上がっていった。そして皆それを用意したうえで二人を起こすのであった。
「大変だ！」
「シャーロック＝ホームズが来たぞ！」
「何っ、シャーロック＝ホームズ！？」
「本当なの！？それって」
二人共実際にそれで目を覚ましたのであった。
「それで何処なんだ！？ホームズは」
「何処にいるの！？一体」
早速辺りを見回す。しかしそこはナンのゲルの中だ。そして皆がいるだけである。それでも二人は周囲をしきりに見回していた。
「何処に行ったんだ！？」
「まさか消えたとか！？」
「ああ、さっきまでそこにいたのよ」
こう二人に答えたのはルビーであった。
「残念だけれどもういなくなったわ」
「くっ、そうなのか」
「私達に会うのが怖くなって逃げたのね」
何故かこうした考えに至る二人であった。しかしそれでもまだ辺りを見回してはいる。
その二人に対して。まずは蝉玉が歩み寄ってきて告げるのだった。
「それはそうとね」
「ああ」
「どうしたの？」
「面白いもの貰ったわよ」
こう告げるのであった。
「それも一杯ね」

「面白いもの！？」
「一杯！？」
「はい、これ」
言いながら自分が書いたドルーリ＝レーンのサインを差し出すのであった。勿論それが偽者であることは言うまでもないことではある。
「ドルーリ＝レーンのサインよ」
「おい、そんなの本当にあったのかよ！」
「凄いじゃない！」
二人はそのサインを見て会心の声をあげた。
「復活していたんだな」
「死んだと思っていたのが実は生きていて」
二人が勝手にそう思っていることである。
「それが今こうしてか」
「夢みたいな話ね」
「そうでしょ？二人プレゼントしてくれって」
言いながらそのサインを出すのであった。しかも丁寧なことに二枚ある。一人に一枚ずつというわけだ。勿論そうしたことも考えてのことである。
「言い残してこれ置いていってくれたのかよ」
「すげえな、あの名探偵のサインかよ」
「耳が聞こえなくても活躍してるあの名探偵の」
まずこの時点でおかしかった。この時代は耳が聞こえなくても機械や移植でどうとでもなるのだ。これは目や舌、鼻にしても同じである。

第百四十五話　思い込ませるその五

「そのサインかよ」
「それを貰ってきたの」
「ええ、そうなのよ」
誇らしげに言ってみせる蝉玉であった。
「はい、これ」
「よし、一生の家宝にするぜ」
「私もよ」
完全にそう思い込んでいる二人であった。最初からドルーリ＝レーンが実在人物だと信じているのである。ルパンに対するのと同じであった。
「他にもあるんだよ」
「他にも？」
「何かあるの？」
「はい、これ」
スターリングが出してきたのはやはり彼自身が書いた人形佐七のサインである。江戸時代の人間なのに色紙でサインペンで書いているのだからどう見ても偽造である。最早偽造にすらなってはいない。それでもやはり二人は信じるのであった。
「これは人形佐七かよ」
「あの美男子の」
「写真もあるよ」
スターリングが今度出してきたのもまた無茶苦茶なものであった。何と立体映像である。それでちょん髷の男が出て来たのだ。これは時代劇のものである。
「ほらね」
「これはまさか」
「生写真？」

「うん、そうだよ」
これで信じるのもこの二人だけであった。
「これもあげるってさ」
「すげえ、佐七さんのサインだけじゃなくて」
「生写真なんて」
「だから何で信じられるんだ？」
「それはないだろ」
流石に皆内心呆れ果てていた。
「幾ら何でもな」
「これはな」
「さあ、他にもあるよ」
「ホームズにチャーリー＝張に」
「明智小五郎に金田一耕介に」
とにかく誰でもいいから偽造したのである。
「ブラウン神父もあるよ」
「凄いな、おい」
「そんなに皆私達にサインをしてくれたの」
やはり信じている彼等であった。
「よし、確かに受け取ったぜ」
「全部ね」
二人はそれぞれサインを受け取って御満悦であった。
「これだけのものあったらな」
「もう他には何もいらないわ」
「そう。よかったわね」
蝉玉はそんな彼等の言葉を聞いて満面に笑みを浮かべていた。
「喜んでもらって何よりだわ」
「しかし本人達に会えなかったのは残念ね」
「そうね」
だがここで二人はこうも言って残念がるのだった。
「いてくれたらよかったのにな」

「握手もしたかったのに」
「忙しい人達だからね」
アンがここで芝居をすることにした。

第百四十五話　思い込ませるその六

「それは仕方ないわよ」
「それもそうか」
「そうね」
「例えばよ」
頷いた二人に対してさらに話すアンだった。
「フレンチ警部なんかあれじゃない。公務員だから」
「あっ、そうか」
「そうね」
なお二人は警官が公務員であるということもわかっていない。当然メグレ警部にしろドーヴァー警部もである。他の警官達についてもだ。
「あまり長居はできないか」
「上司から呼び出されたりするし」
「そういえばアブナー伯父さんも」
タムタムもよりによってとんでもない人物を出して芝居にかかってきた。
「言っていたぞ。時間がないとな」
「あの人もなのか？」
「時間はないの」
「ああ、そう言っていた」
アブナー伯父は家にアメリカ開拓時代の人物である。まだ荒くれ者の集まりだった新世界において法律と民主主義を説く良識派の探偵である。なお当然ながらドラマではちゃんと開拓時代のアメリカであると設定されているが二人にとっては目に入らないことである。
「だから去って行った」
「くそっ、握手したかったぜ」
「伯父様のファンなのに」

とりわけジャッキーが悔しがっていた。そしてその伯父様のものと強引にされているサインペンでの色紙をその手に抱くのであった。
「握手したかったわ」
「やっぱり実在人物と思ってるよな」
「そうよね」
皆そんなジャッキーを見てまた思うのだった。
「だから実在人物じゃないっていうのに」
「どうしてもわからないのね」
それがこの二人であるのはどうしても変わらないことであった。
「まあそれでも」
「話は終わったのね」
「そうだね」
しかしこのことはよくわかるのであった。
「これで何とか」
「ルパンのことは完全に忘れたし」
「それじゃあ皆」
ナンもまたここで言うのであった。手を叩きながら皆に対して告げる。
「私もそろそろ寝るからさ」
「ああ、そうだな」
「そうね」
テンボとジャッキーがにこにことした顔で彼女の言葉に頷いた。
「帰るか。色紙持ってな」
「いや、悪いわね本当に」
やはりどの色紙も本物だと思っているのであった。
「じゃあ皆また明日」
「学校でね」
二人は疾風のようにナンのゲルを後にした。後に残った皆もそれぞれの家に帰る。話は全て終わった。だが後に残ったのは清々しさではなかった。

「やれやれね」
「やれやれか」
「そうよ。やれやれよ」
アンが溜息をついていた。ギルバートがその横でそれを聞いていた。
「本当にね。やっと終わったわ」
「一時期はどうなるかと思ったわ」
「ええ。それにしてもあれを本当に信じるなんてね」
彼女はあの誰がどう見ても偽物どことかおもちゃにすらなっていない色紙をである。
「どうかしてるわよね」
「まああの二人だからな」
それで納得できるから凄いことではある。
「何はともあれ話は終わったな」
「そうね。それだけは確かね」
このことに納得してそうしてそれぞれの家に帰るのだった。何もかもが終わりはしたがそれでも疲れが残った一連の騒動であった。

思い込ませる　　完

２００９・６・２４

第百四十六話　乗馬の新星その一

乗馬の新星

ナンはモンゴル人である。従って常に馬に乗っている。
登下校も常に馬である。その乗馬はかなり見事なものである。
「それは生まれた時から乗ってるしね」
「生まれた時からか」
「あんたは何歳ではじめて泳いだの？」
「確か四つか？」
話を聞いていたダンは彼女の問いに答えた。
「それ位だったな」
「私はもう生まれた時からなのよ」
その時から馬に乗っているのであった。
「その時からだからね。馬に乗ってたの」
「歩く前から乗っていたのかよ」
「そういうこと」
こうダンに答えるのであった。
「お母さんの腕の中に抱かれてね」
「それで物心つくようになればなんだな」
「そうよ。もう馬に乗ったのよ」
それはモンゴル民族が地球にあった頃からである。彼等は遊牧民でありまさに四本足で生きているのである。騎馬の民というのは偽りではない。
「それで今もね」
「生まれてから馬か」
「だから馬にかけては誰にも負けないわよ」
実際に馬を自分の手足と同じように動かしていた。
「モンゴル人はね」
「だから乗馬部でもエースなんだな」

「乗馬は日常よ」
まさに何でもないといった言葉であった。彼女は学校では乗馬部に所属している。しかしそれは彼女にとってはまさに日常生活でしかないのである。
「だからもうね。得意のつもりよ」
「そうか。それでか」
「そうよ。馬だったら鞍やあぶみがなくても乗れるわよ」
「無理だろ、それは」
流石に鞍やあぶみがないと馬に乗ることは無理だと考えているダンだった。
「鞍やあぶみ、あと手綱もか？」
「手綱なしでも大丈夫よ」
見てみれば今も手綱を握っているがそれでもだというのである。
「馬だったらね」
「何もなくても乗れるのか」
「馬の考えわかるし」
こうも言うのであった。
「本当に全然平気よ。馬はね」
「じゃあできるのか？」
ダンも流石に信じきることができずに話すナンに問い返した。
「それが本当に」
「できるわよ。やってみせてもいいわよ」
「今ここでできるか？」
「はい、それじゃあ」
実際に馬に乗りながらその手綱とあぶみ、おまけに鞍まで外してしまった。これにより馬は全くの丸裸になってしまった。しかしであった。
ナンはその馬に平気な顔で乗り続けている。両脚だけで馬に乗っているのであった。
「これでわかったかしら」

「本当にできたんだな」
「そうよ。本当に何でもないわ」
平気な顔はそのままであった。
「これ位ね」
「丸裸の馬にも乗れるのか」
「モンゴルじゃ馬は裸でも乗るのよ」
ナンの言葉はここでも何でもないような感じであった。
「普通にね。そりゃやっぱり手綱や鞍やあぶみがあるに越したことはないわ」
「まあそうだな」
それはよくわかることであった。やはりないよりあるに越したことはなかった。
「それはな」
「けれど全く裸でも大丈夫なの」
言いながらさらにその裸の馬に乗り続けていた。
「こういうふうにね」
「脚だけで乗っているのか」
両脚で馬の背中を押さえている。そうして乗っていると見たのである。
ところがであった。ナンは違うことを言うのであった。それは。
「ああ、馬は身体で乗るんじゃないのよ」
「身体で乗るんじゃないのか」
「確かに身体は必要よ」
このことは断るのだった。

第百四十六話　乗馬の新星その二

「自転車と同じでね。身体は必要よ」
「それでもそれだけじゃないってことか」
「心なのよ」
そしてこう言うのであった。
「車は心なのよ。心ね」
「心か」
「そう、心」
「心か」
「馬にも心があるのよ」
このことをまた言う。
「だから。馬と心を通わせてね」
「それで乗るのか」
「わかったかしら。馬と心を通わさないと完全には乗れないのよ」
「そうだな。馬にもこころがあるからな」
「そういうこと。わかってくれたわね」
「ああ。俺は馬には乗れないし馬の心もよくわからないがな」
それはあまりわからないのであった。正直に言うところが実にダンらしかった。
「それでもそういうものか」
「そうなのよ。この馬スブタイっていうけれどね」
「スブタイか」
「偉大なるモンゴル帝国の名将の名前よ」
ここまで話してにこりと笑うのであった。
「モンゴル民族の英雄でもあるわ」
「チンギス＝ハーンの関係者か何かか」
「その下にいた将軍なのよ」
それだというのである。

「アンネット達はあまり好きじゃないみたいだけれど」
「ロシア人にはか」
「ちょっとね。ロシアじゃチンギス＝ハーンって人気ないから」
モンゴル帝国がロシアに攻め込み圧政の限りを尽くしたからである。モンゴル帝国の圧政は他には朝鮮半島で苛烈を極めた。その恐ろしさは日本の統治がさながら弥勒菩薩のように見える程であった。まさに圧政、虐政と呼ぶに相応しいものであったのだ。
「あの娘達の前ではあまり言えないけれどね」
「それでも英雄は英雄か」
「そうよ、英雄よ」
このことははっきりと言い切るナンだった。
「私達モンゴル民族にとってはね。永遠の英雄よ」
「そうだろうな。あれだけの人物だからな」
当然ながらダンもまたチンギス＝ハーンについては知っていた。知らない筈がなかった。
「やっぱりそうなるか」
「その通りよ。私だってね」
そして自分のことも言うナンだった。
「そのチンギス＝ハーンの血が流れているのよ」
「そうなのか？」
「そうよ。モンゴル人は皆あのチンギス＝ハーンの子孫よ」
これはモンゴル人独特の考えである。
「だからよ。私だってね」
「そうなるんだな」
「そういうこと。私はチンギス＝ハーンの娘よ」
「いや、娘じゃない」
ダンはそれは否定した。
「少なくとも娘じゃないな」
「それどういうこと？」
何か違う意味かと思い少しむっとした顔でダンに問い返すナンだ

った。
「私がチンギス＝ハーンの娘じゃないって。子孫だって認めないってことなの！？」
「違う。娘というより孫だ」
そちらだというのである。
「孫だ。違うか？」
「あっ、そうね」
言われて気付いたことだった。
「曾孫とかそういうどころじゃない孫になるわね」
「二千年前の人だったな」
「そうよね。じゃあやっぱり娘じゃないわね」
言われてやっとこのことに気付いたようであった。
「じゃあチンギス＝ハーンはお父さんじゃなくてひいひいひいひいが何個も続くお爺ちゃんになるのね」
「そうだろうな。少なくとも親どころじゃない」
「確かに。まあとにかくね」
それでも話はするナンだった。
「私はチンギス＝ハーンの子孫なのよ」
「蒼き狼と白き牝鹿のだな」
この二匹の神獣のことも出た。モンゴル民族の祖ともされている。所謂トーテミニズムである。この時代のモンゴルではこの神獣達も崇拝されている。

第百四十六話　乗馬の新星その三

「それなんだな」
「その通りよ」
こんな話をしていた。そうして彼等が話をしているその時。ポルフィが乗馬部の部室にやって来ていたのであった。
ロッカーが左右に並び中央にプラスチックと鉄パイプのテーブルと椅子があるその部室の中で彼は顧問の先生と話をしていた。
「入部を希望するのね」
「はい」
彼はにこりと笑ってその問いに答えた。
「御願いします」
「わかったわ。それじゃあまずはね」
その顧問の先生は女の人だった。赤い髪を上で束ねている。胸がやけに大きくそれがジャージからもはっきり見えている。
「サインしてね。入部届けに」
「これですよね」
「そうよ。これよ」
テーブルの上に置いてあるその一枚の紙を見ての言葉である。
「この紙に書けばいいから」
「わかりました。それじゃあ」
「一応この部が第三乗馬部になるわ」
「あれっ、乗馬部って幾つもあるんですか！？」
ポルフィはそのグラマーな先生の言葉を聞いて思わず声をあげた。
「第三ってことは」
「そうよ。いくつもあるのよ」
先生もそれを否定しなかった。
「うちの学園はね」
「やっぱり生徒が多いからですか」

「そうよ。とにかく物凄い数だから」
だから同じスポーツでも部が幾つもあるのである。
「だからそうなったのよ」
「それで第三ですか」
「幾つあったかしら」
ここで先生は首を捻った。
「乗馬部だけでも。幾つあったかしら」
「乗馬ってそんなに多いんですか？」
「多くはないけれどやっぱり生徒の数が多いから」
だからだというのである。やはり数であった。
「だから部活も幾つもあるのよ」
「何か物凄い学校ですね」
あらためてこのことを知るポルフィであった。
「ここって」
「凄いわよ。生徒の数じゃ連合一だそうだし」
先生はまた言った。
「何万人だったかしら。本当に」
「高等部だけでもですよね」
「そうよ。とにかくうちは第三乗馬部だから」
このことをあらためて言うのであった。
「何はともあれようこそ。楽しんでね」
「はい、わかりました」
「さて、馬だけれどね」
乗馬部だから馬がある。これは当然であった。
「こっちよ。厩舎に来て」
「はい」
こうして彼はその第三乗馬部に入ったのであった。しかしこのことが皆の話題になることはなかった。次の日クラスでそれを知っている者は誰もいなかった。
しかしであった。その日の放課後。ポルフィは早速馬に乗った。

「えっ、もうなの!?」
「何か?」
「部活に入って二日目だけれど」
顧問の先生は驚いた顔で馬に乗るポルフィに対して言った。先生は相変わらずのジャージ姿である。しかも先生は馬には乗っていなかった。
「もう乗ってるの」
「はい。ずっと馬に乗っていましたし」
「そうだったの」
「馬には馴れてるんですよ」
にこりと笑ってこうも話すのだった。
「実は」
「馬に馴れてるの」
「僕ポーランド生まれなんですよ」
「ポーランド?ポーランドっていえば」
先生も乗馬部の顧問である。それでポーランドといえば思い出すことはあった。しかもその思い出したことは一つではなかったのである。

第百四十六話　乗馬の新星その四

「確かポーランド騎兵だったわよね」
「はい、それですね」
まずはこれであった。
ポーランド騎兵といえばかつて勇名を誇った。フランスやハンガリーと並んで欧州においてその勇名を轟かせた。かなり強力な軍だったのである。
その勇名は欧州に鳴り響き第二次世界大戦初期のまだ騎兵という存在があった頃でもあのドイツ軍を警戒させていた。機械化部隊が広まるまでその強さは言われていたのだ。
「それも確かにありますよ」
「そうね。それに今でもポーランドは」
先生はさらに言うのであった。
「今でも乗馬でいつもメダルを取っているわよね」
「はい、そうです」
次はこのことであった。
「ですから国中で乗馬が盛んなんですよ、今でも」
「それで貴方も乗馬をしてたのね」
「はい」
そういうことであった。
「その通りです。ずっと昔から乗馬をしていました」
「幾つからなの？」
自分の記憶を辿りながらの言葉であった。
「五つ位だったでしょうか」
「はじめたのは」
「そうなの。五つからなの」
「はじめはポニーでした」
小さな馬である。だが小さくともその力は強い。この時代では品

種改良により道産子やモウコノウマよりも頑丈なポニーも多い。
「それからはじめました」
「その頃から乗ってたのね」
先生はポニーに乗っていたことにはあまり関心がないようであった。
「凄いわね。ポーランドって」
「凄いですか？」
「凄いわよ。やっぱり血なのね」
今度は血と言うのであった。
「馬にそこまで親しめるのって」
「そうですかね。これって」
「そうよ。それに乗り方も」
今度は彼のその馬の乗り方を見ての言葉だ。
「いいじゃない。いい姿勢よ」
「有り難うございます」
「やっぱりいつも乗ってたのよね」
「部活はそれでした」
乗馬部だったというのである。
「小学校の時にはクラブに入ってましたし」
「そうなの。じゃあ完璧ね」
「いや、完璧かどうかって言われますと」
こう言われるとついつい苦笑いになってしまうのだった。
「そこまではいきませんけれど」
「けれど大丈夫みたいね」
それでも先生はにこりと笑って彼に告げた。
「私が何も言わなくてもね」
「何もですか」
「だって。姿勢はいいし手綱捌きだって」
そういったところまで見ているのだった。
「いいし。もうそのまま乗れるわよね」

「はい」
実際に馬を前に歩かせる。それも実にさまになっている。
「こういった感じで」
「やっぱり私から何も言うことはないわ」
歩かせるのを見てさらに太鼓判を押すのであった。
「もうね。貴方はそのままいったらいいわ」
「そのままですか」
「そういうことよ。若し何かあったら言うから」
締めるところは締めはするのであった。
「けれどそのままでいったらいいわ」
「わかりました。それじゃあ」
こうして彼は第三乗馬部において即戦力となった。そうして馬を飼っているともうその姿がジョルジュに見つかってしまった。そのクラスきってのカメラマンにであった。
「えっ、あれはまさか」
その驚異的な視力を誇る目で見つけたのだった。
「ポルフィ!?あいつ乗馬できたのか」
「そうみたいね」
そしてその彼の横には何時の間にかナンシーが来ていた。
「これはスクープよ」
「そうみたいだね」
「準備はいい？」
レポート用紙とペンを何処からか出したうえでジョルジュに尋ねる。
「このスクープに対する用意は」
「勿論だよ」
ジョルジュも既にカメラを出してきていた。

第百四十六話　乗馬の新星その五

「ほら、ここにね」
「流石ね」
ナンシーもそれを聞いて微笑むのであった。
「学園屈指のカメラマンだけはあるわね」
「そう言ってもらえると嬉しいよ」
「そうでしょ。じゃあ頑張って」
「頑張るのはいいけれど」
ジョルジュはとりあえずそれはよしとした。しかしであった。
「けれどナンシーさ」
「どうかしたの？」
「最近何か変わったね」
こんなことを言いながらナンシーに顔を向けて言うのであった。
「柔らかくなったっていうか」
「そうかしら」
そう言われると自覚はないのであった。ナンシーはだ。
「自分ではあまりそうは思わないけれど」
「若しかして彼氏とかできたとか？」
ジョルジュは何気なくこう言っただけであった。
「そうしたら女の子って優しくなるからね」
「えっ、何それって」
何故かこう言われるとびくり、とした顔になるナンシーであった。
「何が何だかわからないけれど」
「言葉の文法おかしくなってない？」
ジョルジュは今のナンシーの言葉を聞いて言うのであった。怪訝な顔になって。
「どうしたの。急に」
「どうしたもこうしたもないけれど」

「いや。どうしたもこうしたもじゃなくて」
また問うジョルジュであった。
「急に慌てだしたみたいだけれど」
「き、気のせいよ多分」
顔中から汗を吹き出して狼狽しきった声での言葉であった。
「絶対そうよ。だから気にしないでいいわよ」
「そう？気にしないでいいの」
「そうよ。別に気にして悪いってこともないわよね」
やはり言葉の文法がかなり怪しくなっているナンシーであった。
「だったらそれでいいじゃない」
「まあね。僕は別にね」
ジョルジュも話がわからないながらそれでも言うのであった。
「構わないけれどね。とにかくスクープよね」
「そうよ」
一瞬で真面目な顔になるナンシーであった。とりあえず汗を拭いてそのうえで真面目な顔になる。その顔は真面目そのものになっていた。
「それよ。スクープよ」
「よし、写真ゲット」
もう早速写真を撮るのであった。
「こっちはこれで終わったよ」
「そう。じゃあ後は文章ね」
「これが終わったら今度はスポーツだけれど」
「わかってるわ。そっちもね」
もうそれもわかっているナンシーであった。やはりこうしたことは実によくわかっていた。流石にこの学園きってのジャーナリストではなかった。
「とりあえず書き終わったし」
「野球部巡りに行こうか」
「そうしましょう」

こう話してそのうえで野球部に向かう。しかしポルフィのスクープはもうゲットしていた。そうしてそのスクープは次の日の八条スポーツの一面にでかでかと載っていた。

『第三乗馬部に新しいスター誕生！？』

こうなのだった。そこに映っているのはやはりポルフィで馬に乗っている。勿論その写真を撮ったのはジョルジュであり文章を書いたのはナンシーである。

「おい、今日の八条スポーツ」

「そうだよね。まさかポルフィが」

「乗馬をやってたなんて」

当然ながら二年Ｓ１組でも評判であった。もう皆であれこれと話をしている。しかも話はそれだけではなく当のポルフィもまたそこにいるのであった。

そうして当のポルフィはというと。穏やかな顔でこう言うだけだった。

「あれっ、皆知らなかったんだ」

「知らなかったって」

「別に隠してもいなかったの」

「隠す必要なんてないじゃない」

ポルフィもまた言うのであった。

「こんなこと。別に隠すこともないし」

「まあ言われてみればそうか」

「そうよね」

皆もその彼の言葉を聞いて納得するのであった。言われてみればその通りであった。

「それじゃあ聞くけれど」

「いいかな」

「何を？」

話を振られたポルフィは何でもないといった顔で彼等のその言葉に応えるのであった。

第百四十六話　乗馬の新星その六

「何かあるの？それで」
「いや、第三乗馬部なのよね」
「そこにいるんだよね」
「そうだよ」
ここでもポルフィの返事は実に素っ気無いものであった。
「それも別に隠すつもりないし」
「あれっ、スクープだって思ったのに」
「そうよね」
ここで拍子抜けしたのはそのスクープを取ったジョルジュとナンシーだった。見れば二人はその新星へのインタヴューの為かもうその手にそれぞれカメラと書くものを出している。
「何だ、隠すつもりないなら」
「八条芸能には使えないわね」
「あんた達一体幾つの雑誌の掛け持ちしてるのよ」
「芸能までやってたんだ」
皆二人の今の言葉に突っ込むものがあった。
「けれどさ。悪意ある報道じゃないからいいじゃない」
「私達そういうのはしないわよ」
二人はこのことは力説するのであった。
「報道はあくまに公平に」
「事実だけを記事にするのよ」
「それ本当！？」
「それがジャーナリストなの！？」
ところが皆彼女の今の言葉には驚いた声をあげたのだった。それは真剣に驚いていて真実だとは全く思っていないようなものであった。
「それこそジャーナリズムっていったら」

「嘘書くようなものじゃない」
「それが違うっていうの」
「だからそうしたマスコミじゃないから、僕達」
「そうよ」
二人は皆のその驚いた言葉に対してむっとした顔で告げるのだった。
「それはつまりあれじゃない」
「その辺りのスポーツ新聞とかゴシップとかじゃない」
「いや、普通の新聞もだよね」
「そうよね」
連合ではマスコミは信頼されていない。むしろインターネットでの記事の方がより信頼できる、そうまで言われているのが現実であるのだ。
しかしであった。彼等は言うのだった。
「けれど僕達は違うからね」
「嘘は絶対に書かないから」
二人の言葉は確かなものだった。
「それは誓うからね」
「絶対にね」
二人で話すのであった。少なくとも彼等に関してはジャーナリストという存在が口だけでは偉そうに言うがそんなものは全く信じていない良心を持っていると言えた。
そしてまた。彼等は言うのだった。
「だからだよ。意地悪いようにもしないから」
「記事だってありのまま書いてるでしょ」
「ああ、そういえばこのポルフィの写真も」
「いい感じよね」
「そうだよね」
あらためてポルフィの馬に乗っている写真を見て皆また言い合った。

「結構以上に格好いいし」
「よく映ってるし」
「さまになってるよね」
「被写体は女の子だけじゃないよ」
ジョルジュは不敵な感じになっていた。
「男の子もね。こうびしっと格好よく」
「センスあるよな」
「そうよね」
皆彼のその写真をあらためて評価している。
「馬上にいる若者って感じでね」
「凛々しいし」
「いつもよりずっと格好よくない？」
「いつもよりっていうのは余計だよ」
ポルフィがその言葉に苦笑いになった。
「僕だって何時の間にこんな写真がって思ったし」
「文章もいいでしょ」
今度はナンシーが胸を張っていた。

第百四十六話　乗馬の新星その七

「この感じ。どうかしら」
「そうだね。この文章もね」
「上手いじゃない。やっぱり」
「奇麗で格好いい感じよね」
「女の子は奇麗で可愛く」
ナンシーは微笑んで皆の言葉に答えた。
「そして男の子は奇麗で格好よく書かないとね」
「奇麗なのは絶対なんだ」
「それは外せないの」
「何でもかんでも奇麗でないと」
これはナンシーのこだわりであった。
「意味ないじゃない。そうでしょ」
「まあそれはね」
「その通りだけれどね」
皆彼女の言葉にも頷くものがあった。
「奇麗じゃないとやっぱり」
「文章でも何でもね」
「文章は見た目よ」
ナンシーは断言さえしていた。
「そこから目を惹いて中身に入り込ませるのよ」
「外から中に」
「そうなんだ」
「そうよ。最初から中にいることはできないでしょ」
話が少し文章かどうかというと他の意味も含まれているようなものにもなってきていた。
「だからまず外から惹き付けるのよ」
「如何にもジャーナリストって言葉ね」

「本当だよね」
「ジャーナリストだからよ」
その自負はもうそこにあった。
「だからそうした文章にしているのよ」
「成程ねえ」
「しかしこの記事全体で見たら」
話は記事全体についてもなるのだった。
「何かさ。ポルフィの乗馬って」
「うんうん、もうかなり」
「ナンに匹敵する位に思えるけれど」
「私になのね」
自分の名前が出て来てすぐに反応を見せたナンであった。
「私と同じ位の乗馬ね」
「いや、それはどうかな」
しかしこれにはポルフィは異論を唱えてきた。
「流石にあれだよ。ナンには負けるよ」
「あれっ、勝負しないんだ」
「何だ」
皆今のポルフィの言葉にかなり残念そうだった。
「折角面白いものが見られるって思ったのに」
「何だ」
「何だも何も乗馬ってそういうものじゃないじゃない」
ポルフィの言葉はかなり優等生めいたものであった。
「そうじゃないの？馬と人の心の触れ合いじゃない」
「わかってるじゃない」
ナンもその言葉を聞いて微笑んだ。
「その通りよ。それが乗馬よ」
「わかってるつもりだよ。けれどナン」
「何？」
「一度ナンの乗馬を詳しく見せてくれないかな」

こう彼女に話すのだった。
「乗馬。いいかな」
「ええ、いいわよ」
ナンもその彼の言葉を微笑みで受ける。
「それじゃあね」
「そう。じゃあ明日の放課後いいかな」
「いいわよ。じゃあ明日ね」
「うん」
二人は笑顔で頷き合う。皆それを見て言い合うのだった。
「ナンの乗馬かあ」
「どんなものかしら」
「そういえばモンゴルって」
モンゴルのことまで話されるのだった。
「ペガサスやユニコーンにも乗るのよね」
「そうそう」
これは連合ではかなり有名なことである。騎馬の民と言われたモンゴル民族はただ馬に乗るだけではなくそうした馬まで乗るのである。
そのモンゴル人であるナンを見て。彼等は言い合うのだった。
「じゃあ相当なものが見られそうね」
「どんなのかな、本当に」
皆期待を胸に明日を待っていた。ナンの妙技を期待しているのだった。

乗馬の新星　　完

２００９・６・３０

第百四十七話　騎馬の話その一

騎馬の話

ナンがポルフィと約束したその日の放課後。クラスの面々は乗馬のグラウンドの観客席にいた。ここで競技も行われたりする広い場所である。

「そういえばここって」

「来たのはじめてよね」

「そうだよね」

多くのクラスのメンバーがこう話すのだった。

「何か馴染みがないっていうかね」

「馬に乗らないとちょっとね」

「そうだよね」

「俺もそうだ」

ダンもここで皆に言うのだった。

「乗馬はしないからな」

「ダンってやっぱり海だからね」

七海がそのダンに話した。

「馬じゃないのね」

「北馬南船か」

ダンはこの言葉をふと出したのだった。

「それは中国だったか」

「そうよ。中国よ」

その中国人の蝉玉の返答である。

「地球にあった頃の中国の地形よ」

「そうだったな。北は馬での移動が容易で」

「南は河が多かったのよ」

その中国の地形の大きな特徴であったのだ。だから戦略や戦術も大きく違ったものになったしそれは政治にも及んでいたのが中国な

のだ。
「まあ私はその時代に生きていないから実感はないけれどね」
「実感できれば怖いぞ」
ダンは言った。
「それはな」
「まあね。千年も生きていたら仙人だからね」
なお天本博士は仙人以上に生きている。
「そこまで生きていたら」
「けれど中国は北と南なんだ」
スターリングがふと口を開いた。
「アメリカじゃこれが東と西だって言われていたんだよね」
「東と西？」
「ほら、西部劇あるじゃない」
スターリングは蝉玉に応えて述べた。
「あれ。あるよね」
「ええ、あれね」
西部劇が何かは言うまでもなかった。アメリカの開拓時代、フロンティアの時代を舞台にしたジャンルである。ガンマンやカウボーイが荒野で銃を手に戦う世界だ。
「あれのことね」
「西部は馬なんだよ」
その西部についての話であった。
「もう荒野をそれで移動していたんだ」
「映画にある通りだな」
ダンは彼の話を聞いて納得した顔で頷いた。
「それは」
「うん。それで東だけれど」
西部のことを話した上で今度は東部の話をするのだった。
「東はミシシッピー河があってね。それを使って移動していたから」
「それで船か」

「そういうこと。ミシシッピー河を船で移動していたんだ」
このことは長江と同じであったのだ。中国の経済の大動脈であったその長江とだ。
「だから僕達は言うなら東船西馬だったんだよ」
「その地域によってそれぞれ違うか」
ダンはこのことを実感するのだった。
「昔の移動手段は」
「馬だけじゃないのよ」
蝉玉はこのことを強調するのだった。
「今だってそうじゃない」
「宇宙船は確かにあるけれどね」
スターリングもそれに続く。
「ほら、惑星の中だとそれこそ」
「車もあれば鉄道もあるな」
すぐにそういったものを話に出すダンだった。
「船もあれば飛行機もある。そういうことか」
「だから昔も馬だけじゃないのよ」
このことをまた言う蝉玉だった。
「中国でもアメリカでも。そういうものだったのよ」
「ああ、そういえば」
ロシア人のアンネットもふとしたように気付いたのだった。
「ロシアだってそうだったわね」
「ロシアもなの？」
コゼットはそれを聞いて目を少しキョトンとさせた。
「けれどロシアって平地ばかりだから」
「馬だって言いたいのね」
「違うの？」
実際にそれを聞き返すコゼットだった。

第百四十七話　騎馬の話その二

「馬じゃないの？」
「コサックのことよね」
アンネットもコゼットが何について言いたいのかはもう察していた。わからない筈もないことだった。ロシアといえばコサックという考えはこの時代でも健在である。
「それって」
「そうよ、コサック」
やはりそれであった。
「あの伝説のコサック騎兵の」
「確かにコサックは馬もよく使ったわよ」
アンネットはあえて『馬も』としてきたのだった。
「馬もね」
「馬も？」
「それだけじゃなかったのよ」
こうも言うのだった。
「馬だけじゃね」
「っていうと？」
「だから。ロシアって平地ばかりじゃないのよ」
こう述べるのだった。
「平地ばかりじゃね」
「あれっ、そうなの！？」
こう言われてかえって唖然となるコゼットだった。
「平地ばかりじゃないの！？地球の頃のロシアって」
「河も随分とあったわよ」
アンネットは河を出してきた。
「それこそボルガ河とかドン河とかね」
「そうだったの」

言われてはじめて気付いた感じのコゼットだった。
「ロシアにも河があったの」
「別に氷と雪ばかりじゃないから」
この時代にまで受け継がれているロシアのイメージである。実際にロシアの星系には雪や氷で覆われた惑星がかなり多いのである。
「幾らロシアでもね」
「そうなの。河もかの」
「コサックは元々河を使って移動していたのよ」
これがコサックの一面であるのだ。
「それで馬もだったのよ」
「そうだったの」
「だから。馬だけじゃないのよ」
アンネットもこのことを言うのだった。
「別にね」
「地域によって違うか」
ダンはこのことをかなり強く意識するのだった。
「そしてモンゴルやポーランドは」
「馬に特化した地域なのよ」
「そうなるね」
蝉玉とスターリングが言ってみせた。
「さて、どちらが凄いってなると」
「本当にどっちなのかな」
「ナンじゃないのかな」
マルコは何気なく述べた。
「やっぱり。モンゴルだし」
「いや、それはわからないよ」
それに反論したのはトムだった。
「それを言ったらポルフィだって」
「ポーランドっていうんだね」
「実際に乗馬はかなりのものだし」

今度はそれぞれの技術についても話された。
「それに足だって長いじゃない」
「乗馬に足の長さって関係あるの？」
マルコは今のトムの言葉に少しキョトンとした顔になった。
「そんなの関係ないんじゃないの？」
「いや、それがあるんだよ」
しかしトムはそれでもこうマルコに話すのだった。
「足の長さってね。やっぱりあるよ」
「馬に乗るのに？」
「だってさ。跨るじゃない」
トムが指摘するのはそこであった。
「それに乗る時だって轡をかけるのにも」
「ああ、そうか」
そこまで言われて納得するマルコだった。
「そうだね。言われてみれば確かにね」
「そういうこと。だから必要なんだ」
「そうだよ。まさか鞍も鐙も手綱も何もなしで乗れないしね」
「しかも足が必要って」
マルコはあらためて足の長さについて言う。
「馬も難しいんだね」
「あれなのよね。足が短いと」
今度言ったのは七海であった。
「まともに乗ることさえ難しくなるのよ。ほら、あの人」
「あの人って？」
「今川義元だけれど」
日本の戦国大名の一人である。桶狭間の戦いにおいて織田信長に敗れたことで名高い。どちらかというと統治者、文人としての方が戦術指揮官、戦略家としても評価の高い人物であると言ってもいい。眉を丸くしてお歯黒をし、髷を公家風にして都落ちしてきた公家達と毎日遊んでいたことでも有名だ。

第百四十七話　騎馬の話その三

「あの人だけれど」
「何かあったの？」
「生まれた時に奇形かって驚かれたのよ」
こうマルコ達に話すのであった。
「あんまり手足が短くて胴が長くてね」
「それで馬に乗るのが下手だったの」
「鐙に足が届きにくくてね」
そうなるのである。
「そういうこともあるから」
「何か馬に乗るのも大変なのね」
蝉玉もこのことを思うのだった。
「足の長さも必要だなんて」
「そういえばナンもポルフィも」
スターリングは二人のことを思い出して述べた。
「二人共足長いよね」
「ナンって結構小柄だけれど？」
だがトムはここでこう言う。
「それに足もそんなに長いかな」
「短くはないんじゃないの？」
マルコはトムに突っ込みを入れた。
「あれ位だとね」
「そういうものかな」
「まあポルフィは確かに足が長いわね」
七海はポルフィに関しては異論がなかった。
「あの足の長さだと馬にも充分に乗れるわ」
「要は足なのね」
アンネットはこのことを強く思うのだった。

「馬も」
「モンゴル人の足は四足よ」
ここで誰かが言った。
「私には足の長さなんて問題じゃないけれどね」
「その声は」
「もう準備できたんだ」
「今さっきね」
今度はその声が笑ってきた。見ればそこにはもう馬の上に跨るナンがいた。いつも通りそれが極めて自然な様子で馬に乗っているのだった。
「できたわよ」
「そうか。今さっきね」
コゼットはその彼女の言葉を聞いて言った。
「それにしても何かあんたは随分と身軽そうだけれど」
「だから。馬に乗るのはいつもじゃない」
見れば簡単な鞍に鐙がある他は手綱を握っているだけである。その手綱は動かすことが全くない。本当にただ持っているだけであった。
「何でもないわよ」
「その足の長さは？」
「全然問題ないわ」
にこりと笑って七海の問いにも答えてみせる。
「確かに私ちっちゃいけれどね」
「ええ」
「モンゴル人はあれよ。生まれた時から馬に乗っているのよ」
それがモンゴル人ということだった。所謂騎馬の民である。今も尚モンゴルにおいてはその生涯を馬上で過ごす遊牧民が多いのである。
「それで身体の大きさとか足の長さなんてね」
「関係ないの」

「馬は身体の一部よ」
そしてこうも言うのであった。
「もっと言えば分身よ」
「分身なの」
「そうよ。馬はもう一人の自分よ」
これもまたその生涯の殆どを馬に乗って過ごすからこその言葉であった。少なくとも宇宙船や車や船をここまで言う人間はいない。
「それで何でそういうものが必要なのよ」
「じゃあ何が必要なの？」
「心よ」
にこりと笑ってトムに答えてみせる。見ればその乗っている馬もここでにこりと笑ってみせてきた。まさに一心同体と言ってもいい様子であった。
その馬の澄んだ目を見ながら。皆ナンの言葉を聞くのだった。ナンはさらに言う。そのにこりとした笑みはそのままにした様子で。
「心を通わせることが大事なのよ」
「心なの」
「私なんてあれよ」
さらに言うナンだった。
「馬なんて鞍も鐙も手綱もなくても乗れるわよ」
「嘘・・・・・・」
「嘘じゃないわよ」
こう皆に言葉を返してみせる。
「実際にやってみせるわよ。ほらっ」
「えっ！？」
「嘘・・・・・・」
皆ここで驚くことになった。見れば彼女は丁度隣に来た裸馬に飛び乗ってみせたのである。ひらりとした動作で飛び乗りそうしてしたことは。
その裸馬を乗っただけで操ってみせたのだ。まさにその背中に乗

っているだけだ。しかしそれでも馬は大人しく彼女を乗せて歩きだしてみせたのである。

「ほら、こういうふうにね」

「嘘だろ、こんなのって」

「何もなくて馬を操ってみせるなんて」

「当然鞭なんて全然必要ないわよ」

見ればその通りであった。彼女はそうしたものは一切持ってはいなかった。なおこれもいつものことである。彼女が鞭を持つことはない。

「これだけで充分なのよ」

「意志が伝わるからね」

「そういうこと」

にこりと笑ってさえみせる。

第百四十七話　騎馬の話その四

「第一鞭なんて使ったら可哀想じゃない」
「可哀想って？」
「だから鞭よ」
今度は鞭について詳しく話すナンだった。どうやら彼女は鞭が嫌いらしくあまり浮かない顔で話を続けている。表情だけでなく声もそうであった。
その浮かない声でさらに言う言葉は。こんなものだった。
「打たれたら痛いでしょ」
「確かにね」
「鞭だからね」
皆もそれはよくわかることだった。この時代においては鞭はそれこそそうした特別な風俗店でない限り見られないものである。少なくとも連合においてはそうである。
「そんなのを馬に使うなんてとんでもないわよ」
「じゃあモンゴルじゃやっぱり」
「鞭は使わないの？」
「使わない人は多いわ」
実際にこう言うナンだった。
「そんなの使わなくてもいいしね」
「乗ってるだけで意志が伝わる」
「だからなのね」
「これはユニコーンでもペガサスでも同じよ」
その連合でもかなり稀な動物達である。どちらもモンゴルにおいて馬のように乗られはするがそれでも極めて貴重な動物であるとされているのだ。
「鞭に頼って乗るのは二流よ、二流」
「二流なの」

「本物はそんなの使わなくても平気よ」
このことを強く言いさえするのだった。
「全然ね」
「そうだよね」
そしてここでまた声がしてきた。
「鞭なんか使わなくてもね。馬は充分に乗れるよ」
「あっ、その声は」
「来たのね」
「うん、来たよ」
にこやかな声であった。その声を聞いた皆が声の方に顔を向けると。颯爽とした姿で馬に乗るポルフィがいた。乗馬用の服に帽子といういでたちであった。
「ふうん、やっぱりね」
「似合うね」
皆そのポルフィの格好を見て言う。
「乗馬服、似合うわね」
「帽子だってね」
「そうかな」
皆に言われて照れ臭そうに笑うポルフィだった。黒い帽子が実によく似合っているのは確かであった。その白いズボンも同じである。
「そんなに似合ってるかな」
「ええ、似合ってるわよ」
ナンもにこりと笑って彼に言ってきた。
「その姿。様になってるわよ」
「だったらいいけれどね」
「それでね」
ナンはさらにポルフィに対して言うのだった。
「あんたも鞭は使わないのよね」
「勿論だよ」
当然だと言い切りさえするのだった。

「そんなの。当たり前じゃない」
「そうよね。当たり前よね」
「そうだよ。鞭なんか使ったら可哀想じゃない」
主張はナンと全く同じだった。やはり鞭を使うのは馬にとって可哀想なことであると、こう言うのだった。これは彼も同じなのであった。
「自分が使われたらそれこそね」
「使われたら使い返すわ」
ナンの今度の言葉は本気であった。
「鞭なんてね」
「まああんたはそうでしょうね」
蝉玉はそんなナンの言葉を聞いて納得する顔で頷いた。
「それこそね。使われたらね」
「当たり前よ。やられたらやり返す」
実際にこう言いもするのだった。
「それが私よ。モンゴル人よ」
「モンゴルってそうなんだ」
「そうよ。目には目を、歯には歯を」
今度はスターリングに対して返す。誰に対してもその主張は変えない。これまた実にナンらしいと言えることであった。少なくとも彼女は己は曲げようとはしていない。
「そういうことよ」
「わかったわ。そういうことね」
「そうよ。それでポルフィ」
話が一段落ついたところでポルフィに顔を向けて言うのだった。

第百四十七話　騎馬の話その五

「あんたはどうしたいの？」
「ああ、競争ってこと？」
「そうよ。ただ走って勝負をつけるだけじゃ詰まらないと思わない？」
楽しそうに笑って問いかけるのだった。
「それだけじゃね」
「確かにね」
ポルフィもまたにこやかに笑ってそれに応える。
「それだけじゃ面白くないよね、確かに」
「そうでしょ？だったら面白いことしよう」
その楽しそうな笑みでまた提案するのだった。
「ここはね」
「うん。じゃあ何がいいかな」
「まずは手綱を使わないで」
最初はそれであった。
「それで曲芸とかどうかしら」
「曲芸って」
「馬に乗って！？」
皆ナンのこの提案にまずは驚きを隠せなかった。
「そりゃそういうのもあるにはあるけれど」
「危険だよね」
「そうよね」
「大丈夫よ」
しかしナンはにこりと笑ってこう答えるのであった。
「馬に乗っての曲芸なんてね」
「そうそう」
ポルフィもナンも同じ笑顔で皆に返した。

「そんなの普通だよね」
「そうよね」
「いや、それ全然普通じゃないし」
「そうよ」
ところが皆はこう言う。見事なまでにナンとポルフィの意見は皆のそれとかけ離れてしまっていた。ここに大きな齟齬があるのは言うまでもない。
「危険なんてものじゃないし」
「落ちたらどうするのよ」
皆が心配するのはこれだった。落馬である。
「骨折で済めばいいけれど」
「首の骨とか折ったらそれこそ」
「そうよね」
「だから大丈夫よ」
しかしナンの楽天は変わらないのだった。
「そんなの。全然平気よ」
「じゃあ聞くけれど」
コゼットが目を顰めさせてそのナンに聞き返すのだった。
「あんた落馬したことあるわよね」
「勿論よ」
当然といった顔ではっきりと答えてみせるナンだった。
「そりゃ馬に乗ったらあるわよ。当然でしょ」
「だったら何でそんなことが言えるのよ」
コゼットは眉を顰めさせて言うのだった。
「落馬したことあったらどれだけ危ないのかわかってる筈じゃない」
「ポルフィも落馬したことあるよね」
今度はトムが尋ねていた。尋ねる相手こそ違えど、であるにしろ。
「やっぱり」
「うん、あるよ」
ポルフィもまた当然といった返事だった。

「やっぱり馬に乗ってたらね」
「だったら何で二人共曲芸なんかしようっていうの？」
マルコもまた眉を顰めさせて二人に尋ねるのだった。
「それで何で」
「落馬が怖くて馬には乗れないよ」
「そういうこと」
これがポルフィとナンの返答だった。
「だって馬に乗ってたら普通にあるしね」
「私だって普通に何度も落馬してるわよ」
「それで危なくなかったの？」
「モンゴル人は落馬で死なないわよ」
あっさりと七海の問いに答えるナンだった。
「そんなのじゃね。絶対に死なないわよ」
「それはどうしてなの？」
七海はさらにナンに尋ねた。こうまであっさり言われたら引き下がる人間もいたりするのだが彼女に関してはそうではないのだった。
「落馬では死なないっていうのは」
「だからあれよ。落馬の仕方知ってるのよ」
だからだというのである。
「だから死なないのよ」
「受身の仕方知ってるってこと？」
「そういうこと。だから大丈夫なのよ」
「僕もね」
そしてそれはポルフィも同じだというのである。

第百四十七話　騎馬の話その六

「落馬の仕方はちゃんとわかってるよ」
「落馬にもやり方あるのね」
「そうみたいだね」
蝉玉とスターリングはその話を聞いて顔を見合わせて話した。
「何かよくわからないけれど」
「落馬するだけじゃなかったんだ」
「そのまま落ちたら確かに危ないわ」
これはナンもよくわかっていることだった。
「けれどね。ちゃんと受身をして落ちればね」
「大丈夫なんだね」
「そうよ。骨折することもないわ」
それもだというのである。
「ついでに言えばすぐに起き上がって馬に飛び乗ってね」
「すぐに？」
「馬は自分が乗っているのだけとは限らないじゃない」
この辺りは遊牧民族ならではの考えを見せてきていた。
「他の人が乗ってる馬に踏まれたりするじゃない」
「それですぐに起き上がらないといけないんだ」
ポルフィもここでもまた言う。
「本当にすぐに起き上がってね」
「それで馬に飛び乗るのよ」
「何か一瞬の勝負みたいね」
コゼットはそうした話を聞いて呟いた。
「さもなければ、なのね」
「そうよ。けれど受身の方法を知ってたらね」
「大丈夫だよ」
またこう皆に話すナンとポルフィだった。

「だから安心して見ていてよ」
「何だったら受身のやり方も見せるけれど」
これまた実に余裕のある様子であった。
「どう？それは」
「いや、それはいいから」
「別に」
皆受身についてはそれ程興味がないようだった。
「どうせあれだよね。柔道みたいなものだよね」
「そうじゃないの？」
「まあそうよ」
ナンも実際にそうだと答える。
「背中から落ちてね。それで衝撃を最低限に抑えてね」
「やっぱり」
「ただし。この時背骨はちゃんと護る」
このことはしっかりと言うのだった。
「そうやってるのよ。いつもね」
「僕も同じだよ」
そしてこれまたポルフィも同じなのだった。
「受身はそうして背中からちゃんと落ちてね」
「そうやるんだ、やっぱり」
「ポルフィも」
「うん。まあとにかく受身の話はこれ位にして」
ポルフィの方からその話を止めてきた。
「じゃあナン」
「ええ」
ナンはにこりと笑ってポルフィの今の言葉に応えた。
「それじゃあ本当にね」
「はじめよう、曲芸ね」
「最初は何にする？」
曲芸といっても色々ある、少なくとも二人は知っているのだった。

「何がいいかしら」
「簡単なのでいいんじゃないから」
ポルフィは軽く笑ってナンに答える。
「簡単なので。ウォーミングアップだしね」
「そうね。最初はね」
ナンもその軽く、という言葉に頷く。
「そうしましょう。それじゃあ」
「明るく楽しくね」
こうして二人は曲芸をはじめた。まず何をやるのか、見守る皆ははじまる前からもう緊張した面持ちになっているのであった。もう既に。

騎馬の話　　完

2009・8・2

第百四十七話　騎馬の話その一

障害物競走

こうして曲芸に入るナンとポルフィ。その二人がまずはじめようとしていることは。少なくとも皆から見て簡単なものでは到底なかった。

「えっ、それ!?」

「それするの?最初に」

目を瞠って言うのだった。何と的を出して二人は弓を持ちだしていたのだ。

「ええと、これって」

「流鏑馬?」

七海が言った。

「それよね。馬に乗りながら弓で的を撃つのよね」

「あっ、日本じゃそう言うんだ」

ポルフィは七海のその言葉を聞いて明るく笑った。もうその両手には弓矢がある。何時でも放てるようにしてあるのであった。用意がいいと言えば用意がいい。

「この騎射って」

「神社とかでの特別な行事よ」

七海はこうポルフィに話すのだった。

「昔から行われてる。けれどこれって」

「これって?」

「相当難しいじゃない」

ここで顔を顰めさせる七海だった。

「私少なくとも乗馬部でできる人知らないけれど」

「弓使えないからよ」

七海はだからだというのだった。

「これ弓が必要だから。それができないとね」

「あんたはできるのね」
「当然よ」
今回もまたにこりと笑って質問に答えるナンであった。本当に何でもないかのように答えるその顔には何の屈託も見られなかった。
「そんなの。モンゴル人よ」
「モンゴル人は皆弓が使えるの」
「今でもね。あのモンゴル帝国だって」
モンゴル人が最も誇りとする空前の大帝国である。まさに世界を席巻し支配した、十三世紀に誕生したチンギス＝ハーンの帝国である。
「皆馬に乗れるだけじゃなくて」
「弓も使えたの」
「そうよ。今じゃ女の子だって使えるのよ」
やはり屈託のない笑みであった。
「当然私だってね」
「じゃあ弓にも」
「自信あるわ」
さも当然といった言葉は変わらない。
「あんな的に当てるのなんて訳ないわよ」
「僕もね」
ポルフィもなのだった。
「僕アーチェリーもやってるし」
「結構多才なのね」
「馬に乗るのと弓を撃つのが趣味なんだ」
これまた随分と格好のいい趣味であった。ポーランド人ということもあり皆ポルフィが何か騎士のようにも思えてきたのも事実であった。口に出しては言わないが。
「だから大丈夫だよ」
「そうなんだ、アーチェリーも」
「だったらいけるかな」

「負けないよ、ナン」
隣にいるナンに笑みで言葉をかける。当然二人はそれぞれの馬に乗ったままである。
「いいね」
「それはこっちの台詞よ」
ナンもまた受けて立ってきた。
「私は馬に乗ったら誰にも負けないんだから」
「それじゃあ僕が最初に勝つ人になるかな」
「いえ、それは違うわ」
言葉のやり取りはもうライバル同士のそれになっていた。だがライバルといってもそこには清々しいものがあるだけだ。まさにスポーツでのライバルであった。
「あんたは私に今度負ける相手よ」
「おやおや、随分と言うんだね」
「事実を言っただけよ」
言葉はこんな調子だがそのリズムには暗いものはなかった。
「だって私で馬に勝てる人なんてね」
「いないっていうんだね」
「その通りよ。だからあんたは負けるのよ」
実に単純明快な結論だった。
「わかったわね。それは」
「いや、わからないね」
しかしポルフィも軽く笑ってこう返すのだった。
「だって僕だって馬に乗って誰かに負けたことはないからね」
「ふうん。じゃあ見せてもらうわ」
はじまる前から火花を散らし続ける二人だった。

第百四十八話　障害物競走その二

「それが本当かどうかね」
「それじゃあ御言葉に甘えて」
ポルフィはまた不敵に笑って応える。
「見せてあげるよ。それをね」
「じゃあ。はじめましょう」
こうして二人は騎射に入った。二人共既に弓をその手に持っており的も出されていた。実に設備の整っている競馬場であった。
まずはナンであった。彼女は右手に弓、左手に矢を持っている。手綱は一切持たずそのうえで馬を操り前に進んでいた。
そんなナンの乗馬を見て皆は。まず感嘆の声を漏らした。
「やっぱりねえ」
「凄いわね」
両手を使わないで馬を操っているそのことを褒めていた。
「あれだけで乗れるなんて」
「しかもあんなに上手なんて」
「言うだけはあるね」
ナンは嘘はつかなかった。彼女は乗っているそれだけで馬を操ってみせていた。手綱を使わずとも、それでも見事に馬に乗っている。
そうしてそのうえで的に進む。馬は次第にその速度を速める。駆け出すその馬の背にあってナンはバランスを崩すことなく的を見据えていた。
「さあ、どうなる？」
「当てられるかしら」
皆ナンが的に向かうのを固唾を飲んで見守っていた。
「果たして的に」
「かなり難しいけれど」
駆けるその馬の上でナンは真剣な顔をしていた。バランスは両足

で取っている。両手には先程と同じく弓矢がある。今その弓矢を構え的に来たところで。一気に放ったのだった。

「当たった！」

「お見事！」

ナンはその的を見事に射抜くことができた。射抜いてそのうえで的の先に駆けていく。駆けながら弓矢を鞍に収め手綱を持つ。だがその手綱はここでも持っているだけで馬は自然にその足の速度を穏やかなものにさせ次第に歩くものへと変えるのだった。

馬が止まったその時に皆ナンに歓声を送る。彼女はその自信通りのことをしてみせたのだった。

「どうかしら」

「御見事」

ポルフィは自信に満ちた笑みで自分のところに来たナンに言葉を返した。

「凄いね。的の中心を射抜いてるよ」

「今度はあんたの番よ」

ナンはその自信に満ちた笑みをそのままにまた彼に告げた。

「さあ、見せてもらうわよ」

「わかってるよ。もう新しい的が出て来たし」

先程ナンが射抜いた的はもう下げられていた。そうして新しい的がもう出されていた。種類は先程の的と全く同じものであった。

その的を見ながらポルフィは。強い声で言った。

「僕も見せてあげるよ」

「あんたのその腕をよね」

「勿論」

今度の言葉は簡潔なものであった。

「それじゃあ。行くよ」

「頑張りなさいよ」

ナンは馬を進めだしたポルフィの背中に一言かけた。

「私には勝てないにしろね」

「大丈夫だよ」
ポルフィはその彼女に振り向くことなく彼女に告げた。
「僕も馬に関することなら誰にも負けたことはないからね」
「相変わらず言うじゃない」
ナンはここでも楽しそうな笑みを浮かべさせた。その笑みは今はポルフィには見えないがそれでも浮かべてみせたのだった。
「それじゃあその自信の程は」
「見せてあげるよ」
こうしたやり取りの後で今度はポルフィが競技に趣いた。やはり彼も両手に弓矢を持ってそのうえで馬を進ませる。彼も馬はただ足に乗っているだけだった。
「これが凄いのよね」
「そうだね」
スターリングは隣にいる蝉玉の言葉に頷いた。
「足だけで馬を操れるなんてね」
「以心伝心でね」
二人にはそれはとても無理なことに思われるものだった。
「そんなのできないわよね」
「僕馬に乗ったことないし」
「私もよ」
「そうだよね。だからね」
そんなことができるのかどうか。その時点で疑問なのだった。
「二人共本当に凄いわ」
「ナンにしろポルフィにしろ」
「しかもよ」
蝉玉はさらに言い加えるのだった。

第百四十八話　障害物競走その三

「ああやって弓まで使えるっていうのがね」
「弓だって使い方が難しいんだよね、確か」
「ええ、そうよ」
二人に七海が答えた。
「私もちょっとだけやったことがあるけれどね」
「難しいんだ、やっぱり」
「私にとっては泳ぐ方がずっと簡単ね」
スターリングに水泳部ならではの言葉で返す七海だった。
「弓なんか全然駄目よ」
「全然なんだ」
「あんただってそうでしょ？」
マルコに対して問い返すのだった。
「あんたサッカーよね」
「うん、そうだよ」6
「サッカーと弓どちらが得意なのよ」
「僕弓矢なんて持ったことないから」
マルコはこう七海に答えた。
「それはもう」
「そうでしょ？あんたもそうだし私もそうなのよ」
このことに関して二人は同じだといのだった。
「弓はね。とにかく慣れていないとね」
「慣れなのね」
「そうよ、何でもそうだけれど弓は特にね」
慣れないと駄目だというのだった。
「一日やそこいらで身に着くものじゃないのよ」
「難しいんだ、やっぱり」
「一年経ってもそうは上手くならないわ」

七海はこうも言った。
「そんなに難しいものだから」
「それをナンやポルフィはあそこまでできたんだ」
「凄いね、しかも馬に乗りながらなんて」
プラスアルファであった。ただ弓を放つだけでなく馬に乗りながらなのだ。もっともこの場合は馬に乗りながら弓を放ったということとなのだが。
「ナン。それで的の真ん中を射抜いたんだ」
「ポルフィはどうかな」
話をしたうえでポルフィを見守るのだった。彼は今まさに的に近付こうとしていた。
「的を射抜けるかな」
「さてね」
七海は皆のこの言葉には難しい顔を見せるのだった。
「どうかしらね、それは」
「難しいっていうの？」
「それって」
「はっきり言ってそうよ」
このことを実にはっきりと答えるのだった。
「難しいわよ」
「まあそうでしょうね」
彼女のその分析に頷いたのは蝉玉だった。
「あんなのどう考えてもね」
「そうだよね。難しいよね」
次にスターリングが蝉玉の言葉に頷いた。
「それはやっぱり」
「そうよ。難しいわよ」
このことをまた言う蝉玉だった。
「だって。弓も乗馬もかなり難しいじゃない」
「うん。それはね」

このことはどちらも最初から話されていることだった。確かに今更といった話だがそれでも皆あえてまた話をしているのである。そういうことなのだ。

「じゃあポルフィが射抜くのは」

「ポルフィの弓の腕次第ね」

七海が答えた。

「それ次第だけれど」

「さて、その腕がどうなのか」

「見させてもらおうかな」

こうして皆で見守る。そして遂に的に接近し弓を放つ。すると彼もまた。その的を見事に真ん中で射抜いたのだった。

彼はアーチェリーをそのままにして馬の速度を緩めさせる。彼もまた見事に的を射抜いてみせたのであった。

「凄い・・・・・・」

「ポルフィもやったよ」

皆それを見てまた驚いたのだった。

「まさかとは思ったけれど」

「やったわね」

「どうかな」

そのポルフィは得意気な笑顔でナンのところに近付いたうえで声をかけていた。

第百四十八話　障害物競走その四

「これで」
「やるじゃない」
ナンは笑顔でポルフィに返した。
「まさかとは思ったけれどね」
「弓の方はそんなにやっていないけれどね」
「どうかしら」
ポルフィのその言葉は信じていないようだった。
「それは。あの腕前見たらそうは見えないわよ」
「いや、実際に弓はね」
謙遜しているのか隠しているのかわからない今のポルフィの言葉だった。
「あまりしたことがないんだ」
「乗馬に比べたら、ということよね」
「さあ」
やはりとぼけている感じであった。
「どうかな。それは」
「いや、本当だよ」
だがポルフィはあくまでこう言うのだった。
「弓はそんなにだったんだ」
「じゃあそういうことにしておいてあげるわ」
ナンはポルフィのその謙遜か隠しているのかわからない言葉にあえて乗った。彼女も意外と狸な部分があると言えた。
「それじゃあね」
「そう思ってくれて嬉しいよ。それじゃあ」
「ええ。次ね」
「次は何をするの？」
ナンの顔を見て問うポルフィだった。

「次は」
「あんたは何がしたいの？」
ナンは逆にポルフィに問い返してみせた。
「私は何でもできるけれど」
「僕が何をしたいかって？」
「そういうこと。私はそれに合わせさせてもらうから」
「つまり何でもできるってことだよね」
「そうよ」
やはり馬のことにかけては絶対の自信があるナンだった。
「何だったら馬で泳いでもみせるわ」
「言うね。それじゃあ」
ポルフィは今のナンの言葉を受けて言うのだった。
「それにしようか、今度は」
「馬での競泳ね」
「そう、それにしようよ」
これを提案するのだった。
「それでどうかな」
「いいわよ」
そしてやはりそれを平然と受けて立つナンであった。しかしであった。
ここで彼女はさらに言うのであった。
「ただしよ」
「ただし？」
「ただ泳ぐだけじゃ面白くないわね」
こう言うのである。
「ただ馬で泳ぐだけじゃね」
「じゃあ何がいいのかな」
「こうなったらあれよ」
彼女はここで言った。
「何でもやってみない？」

「何でも？」
「つまり馬での障害物競走よ」
それをしようと提案するのだった。
「馬でね。どうかしら」
「また随分と滅茶苦茶なこと言うなあ」
「そうね」
皆今のナンの提案を聞いて観客席で顔を顰めさせていた。
「馬での障害物競走って」
「また凄く難しいじゃない」
これもまた言うまでもないことであった。
「それをしようなんて」
「ナンも無茶言うなあ」
「全く」
皆はこう思っていた。しかし当のナンとポルフィはというと。全く別の考えなのだった。
「どうかしら。それで」
「いいね」
ポルフィはここでも楽しげに笑ってナンの提案を受けるのだった。
「それじゃあそれでね」
「よし、これで決まりね」
「さてと。それじゃあ」
ここでポルフィは競技場を見る。見ながらある場所に近付きそこにあるボタンを押した。すると。

第百四十八話　障害物競走その五

「えっ！？」
「競技場が！？」
皆競技場が急激に変わっていくのを見た。それまでごく普通の競馬をする場所だったのが忽ちのうちにプールやハードル、それに落とし穴等があるさながらアスレチックジムのような異様な競技場に変貌したのだった。それもまさに一瞬でそう変わってしまったのだ。
「こんなふうに変わるんだ」
「物凄い競馬場だね」
皆その急に変貌した競馬場を見て唖然とした。
「何ていうかもう」
「特撮ものみたい」
「本当にこの学園って色々な設備があるわね」
だがナンはこれだけで話を済ませてしまった。
「本当にね」
「そうだね」
そしてポルフィもこれで終わらせるのだった。
「設備は本当に凄いね」
「八条学園はね」
言わずと知れたこの学園であり皆が通っている学園である。その生徒数も設備も連合で随一なのである。それで有名でもあるのである。
「さてと。それじゃあ」
「やりましょう」
二人は今回も何でもないといった調子で競技に趣いた。早速二人並んでスタートラインに立つ。しかも二人は同時にお互いに言うのだった。
「ねえ」

「いいかしら」
顔を向かい合わせて同時に言い合う形になった。
「あれっ」
「ひょっとして」
それと共に笑みを浮かべ合った。そしてそのうえでまた言い合った。
「同じこと考えているのかな」
「そうかもね」
その楽しそうな笑みのままた言い合う。
「手綱を握らずにね」
「それでしましょう」
「また滅茶苦茶言ってるわね」
コゼットは今の二人の言葉にこれまで以上に呆れてしまった。
「手綱握らないで障害物競走って」
「流石に無理なんじゃないの？」
トムも怪訝な顔になっている。
「そんなのって」
「下手しなくても危ないよ」
マルコも流石にそれは無理だと思った。
「普通の競争じゃないんだし」
「止めたら？」
「そうだよ」
そして皆で二人にこう言うのだった。
「流石にそれはね」
「危ないわよ」
「大丈夫だよ」
「そうそう」
しかし当の二人は相変わらずこんな調子であった。
「これ位のハンデがないとね」
「面白くないわよ」

「面白くないって」
「障害物競走でそれって」
皆またしても言いはした。
「何かあったらどうするのよ」
「怪我だけじゃ済まないよ?」
「だから。何度も言うけれど」
それでも平然としたままのナンであった。
「私は手綱なくても大丈夫なのよ」
「僕もね」
ポルフィも平然としたままであった。
「全然大丈夫だから」
「どうしてもなのね?」
アンは釘を刺すように彼等に問うた。
「絶対に大丈夫なのね」
「ええ、絶対よ」
ナンの返答には何の淀みもなかった。
「絶対に大丈夫だから」
「僕だってそうだよ」
ポルフィの返答にも淀みが全くない。

第百四十八話　障害物競走その六

「だから。安心していいからさ」
「手綱がなくてもね。さっき言ったじゃない」
「けれど今回は普通じゃないから」
「危ないなんてものじゃないわよ」
皆は二人の言うことを中々信じようとはしなかった。
「それこそ。本当に落馬して首の骨折ったらどうするのよ」
「洒落にならないわよ」
「全く。心配性も度が過ぎるわ」
ナンはそんな皆の言葉を全く聞いていなかった。
「まあ見ていなさいって。普通にできるから」
「そういうこと。実際にやってみたらわかってくれるよね」
「いや、実際にやったらそれこそ」
「本当に危ないけれど」
皆はなおも言うがそれでもだった。ナンとポルフィは本当に手綱から手を放して完全にフリーハンドになってみせた。その状態で実際に競技に挑むのだった。
「冗談抜きでやるんだ」
「もう何が起こっても知らないわよ」
皆ここまできたら流石に何も言わなかった。もっとはっきり言えば言えなかった。二人のその頑固というよりはあまりもの余裕に言えなくなったのである。
二人は横に並ぶとまずは合図を待った。コンピューター操作によって合図の撃つ音が鳴る。それと共に一斉に動きはじめるのだった。
「さて、行くわよ！」
「これで勝負を決めるから！」
二人は一斉に前に飛び出した。馬達は自然に動いている。その自然な動きのままであるが二人の手は完全に自由だ。本当に何も持っ

ていない。
「あのままでバランス取れるのかしら」
「実際に取ってるけれど」
皆そんな二人を見てまた観客席で言い合う。
「よくあんなことができるよね」
「信じられないわ」
信じなくとも、であった。二人は実際にそうやって乗馬での障害物競走をはじめた。鐙に足をかけたままであるがそれでも馬は満足に動いてくれている。二人は馬の上に乗っているだけである。
馬はまずハードルを幾つも超えた。見事な動きだ。
「落ちない！？」
「嘘だろ！？」
二人はその上で平然とした顔で乗り続けているだけであった。
「あんなに揺れてるのに」
「身動き一つしないけれど」
「本当に脚だけで踏ん張れてるみたいね」
七海はそんな二人を見ながら呟くようにして言った。
「まさかと思ったけれど」
「じゃあ手綱はいらないっていうのは」
「はったりじゃなかったんだ」
「はったりは真実になったらはったりじゃなくなるわ」
こんなことも言う七海だった。
「それでね」
「そう。それではったりじゃなくなるんだ」
「それで」
「そうよ。二人が言ったことは本当だったのよ」
はったりでなければ何かということだった。それは真実になる。
そういうことだった。
「実際にね」
「本当だったなんて」

「まさか」
「けれどそのまさかよ」
また言う七海だった。
「ほら、実際に二人はそれをやってみせてるじゃない」
「確かにね」
「その通りよ」
皆も目の前で実際に起こっていることを否定することはできなかった。
「手綱を握らないで足だけで乗ってるわ」
「それで障害物競走をしてるね」
「ナンもポルフィも凄いわ」
七海は素直な感嘆の言葉を口にした。
「本当に手綱を使わないでやってみせるんだから」
「さて、それじゃあ」
「どうなるかな」
皆はそんな二人をあらためて見て言うのだった。
「どちらが勝つかしら」
「この勝負」
今二人はプールの中に足を進め馬を泳がせている。どちらの馬も泳ぎまで達者で見事に前に進んでいる。しかし二人は相変わらず馬に乗っているだけである。
馬は同時にプールを出た。続いては落とし穴であった。
「さて、これはかなり危ないけれど」
「どうかな？」
皆ここでも二人から目を離さない。
「やっぱり手綱を握らないけれど」
「そうじゃなくても危ない場所だけれど」
「本当にそのまま行くなんて」
「本気なんだ」
そう、本気だった。やはりここでも手綱を握らない二人だった。

しかも馬はどちらも全速力だ。二人はそのそれぞれの馬の上で全く平気な顔をしていた。

第百四十八話　障害物競走その七

「これ位じゃね」
「何でもないね」
「それこそ戦場だとね」
いきなり話を飛躍させるナンだった。
「落とし穴どころじゃないから」
「そうだよね。マキビシ捲かれたりするし」
「そうそう」
「マキビシ！？」
「それって」
皆今のポルフィのマキビシという言葉にすぐ反応した。
「モンゴル帝国が退却の時に捲いていたっていう」
「あれよね」
これは実際にモンゴル軍がやってきたことである。それを捲いて追撃する敵の妨害をするのである。なお連合軍も撤退の際はそれと同じように機雷を撒くことがマニュアルにある。
「あれをするって」
「モンゴルってまだそんなことしてるの？」
ある意味恐ろしいことであった。しかしナンはこのことについてポルフィとの話でそれを否定することになった。
「まあ今はそんなことはしないけれどね」
「家族同士の喧嘩でもしないんだ」
「今はそういうことは話し合いか裁判で決めるから」
やはりモンゴルも連合の中にあり法治国家なのだった。
「だからそれはしないわ」
「そうなんだ」
「もっとも何かの競争とかで内輪で話を収めることはあるけれど」
それはあるというのだった。

「それはね」
「今みたいにやるんだね」
「そういうことよ。はいっ」
今ここで声をあげた。するとナンの乗っている馬がひらりと跳んでそのうえで落とし穴を避けたのである。見事な跳び方で避けていた。
「こんな調子でね」
「さて。落とし穴はもうすぐ終わりで」
「今度はあれね」
トンネルが二人の目の前にあった。人が頭を屈めてそのうえでやっと通れるような。そんなトンネルが二つ並んでそこに出て来ていた。
「今度はトンネルって」
「そんなものも出すの」
このとんでもない障害にまた呆れる皆だった。
「あれもかなり危ないけれど」
「それでも出すんだ」
「面白いものが出て来たわね」
「そうね」
しかし当の二人はそのトンネルを見ても全く平気な顔のままだった。
「この程度じゃね。頭屈めたら終わりじゃない」
「どうってことないよ」
言いながら早速それぞれの身体を屈める二人だった。
そのうえでトンネルに向かう。そうしてすぐに入った。
「無事みたいね」
「一応入ることは入れたけれど」
皆このことはまず確認した。
「けれど。ちょっとでも頭上げたら」
「頭が削られてね」

そうなるのは自明の理であった。
「大根おろしになるわよね」
「頭が奇麗になくなって」
高速で頭をぶつけながら進めばどうなるか。言うまでもなかった。実際に同じ様な事態で首がなくなってしまったスタントマンもいるのである。
「それでおしまい」
「あんなの誰が置いたんだろう」
考えてみればあまりにも危険である。しかし出て来た二人はどちらも頭があった。その頭をあげてまた進みはじめたのであった。
「はい、終わり」
「楽勝だったね」
やはり平気な顔の二人であった。
「何とでもなかったわね」
「ただ屈んでいればいいんだから楽だよね」
二人は顔を見合わせてすっきりとした笑顔になっていた。
「それだけでいいから」
「本当に簡単だよね」
「簡単ねえ」
「一歩間違えたら死ぬのに」
皆二人のそんな言葉を聞いて口をシャコ貝の様に歪めさせた。
「それでよくあんなこと言えるわね」
「どういう神経してるのよ」
「さて、次は」
「何かな？」
しかしここでも二人は平気な顔のままであった。

第百四十八話　障害物競走その八

「矢でも鉄砲でも持って来いだけれど」
「どんな障害が出て来るのかな」
「うわ・・・・・・」
二人はわくわくしていたが皆はここでまた驚いていた。
何故驚いていたかというと次の障害物を見てしまったからだ。それは。
「この障害物競走ってさあ」
「そうだよね」
皆は怪訝な顔になって言い合う。ここでまた。
「何か競技する人を超人って思ってるような」
「そういう感じよね」
こんなことを言い合うのだった。
「あんなの本当にやったら」
「死ぬよね」
「下手しなくてもね」
今までは下手をしたらであったが今は下手をしなくても、であった。そのランクが間違いなくあがっているのだった。しかも悪い意味で。
「あんなのに向かったらそれこそ」
「穴だらけよ」
しかも穴だらけなのであった。
「ジャンクマンになるっていうかね」
「そうなるよね」
大昔の漫画に出て来た悪役である。この時代ではこの漫画は伝説的古典漫画の一つとされている。超人達がリングで闘う漫画である。その破天荒なストーリーと豪快な必殺技が連載当時大人気になり続編も書かれこの時代にも生き残っているのである。

「誰があんなの考えたんだろうね」
「本当にね」
「そこに突っ込むのも」
「ちょっと避けそこなったらそれで終わり」
皆その障害を見ながら話していく。
「兵隊さんでもしないような競争だけれど」
「それを学園でやるのもね」
「もう何が何だか」
色々言いながらも見ている面々だった。見ればそれは大きな棘が無数に出ている鉄の壁である。それが幾つも二人の前に出て来ているのだ。
「さて、これが」
「最大の難所だね」
「あら、難所かしら」１０
ナンは平然とした言葉をここでもポルフィに返した。
「こんなのどうってことないわよ」
「どうってことないんだ」
「当たらなければいいんだから」
言うだけならばその通りの言葉であった。
「それだけでいいんだから。楽よ」
「そうだね。楽だね」
「そうでしょ？さて、行くわよ」
「うん。それじゃあね」
二人はそのまま全速力で、尚且つ手綱を握らないままでその鉄の壁に向かう。壁は複雑に入り組み二人を待ち受けている。
「自分の脚で走ってなら問題ないけれど」
「馬だとね」
「これは難しいよ」
皆今度はこれまで以上に固唾を飲んで見守っていた。
「ジグザグに入り組んでいて」

「馬一頭がやっと潜り抜けられる感覚しかないじゃない」
しかもそんな有様であった。
「それで通り抜けられるのかしら」
「本当に冗談抜きで死にかねないけれど」
皆本気で心配しながら見ていた。しかし二人はこのまま突っ込んでいく。何とジグザグに進みそのうえで通り抜けてしまったのだった。
「えっ！？」
「あっさりって」
「そんなに簡単に」
二人共通り抜けてしまったのだった。本当に何でもないといった調子で。

第百四十八話　障害物競走その九

「通り抜けたけれど」
「まさか」
「さて、次は」
「丸太だね」
「ええ」
皆が驚いているのをよそにさらに進む二人だった。今度は人口の池の上に横切るようにして丸太が幾つも並んでいる。そこを越えろというのだ。
見れば丸太は絶えず回転している。しかし二人はそこにも躊躇することなく入りそうして。丸太の上に馬を着地させて次々と跳んでいくのであった。
「はい、こうやって」
「楽々ね」
「楽々って」
「どうやったらそんなに簡単にいけるのよ」
皆唖然とした顔で見て言うのだった。
「あの丸太回ってたのに」
「それを何でもないようにって」
「何なのよ」
こう口々に言って唖然としているのだった。
「もう何が何だか」
「馬ってあんなに簡単に乗れないのに」
しかし二人にとってはまさに何でもないといった調子であった。
「それがああって」
「何なんだろ」
言っているその間にゴールだった。二人は同時にゴールに着いてしまった。鼻の差もそういうこともない本当に同時にゴールに着い

てしまった。
「引き分けね」
「そうだね」
ポルフィは少し残念な笑みでナンの言葉に返した。
「勝てると思ったんだけれどね」
「それは私の台詞よ」
ナンはこうそのポルフィの言葉に返すのだった。彼女もだった。
「全く。私と引き分けるなんて」
「驚いた？」
「今まで生きていて一番驚いたかもね」
こうまで言うのだった。
「本当にね」
「そうだったんだ。そこまで驚いたんだ」
「そうよ。まあとにかく」
ここでこうした話は中断させてそのうえでまた言うのだった。
「いい汗かいたわね」
「そうだね。何か気持ちいいね」
「冷や汗かいたよ」
「全くよ」
見ている皆はそうであった。
「見ていてハラハラっていうか」
「ヒヤヒヤっていうか」
見れば本当に健康に悪そうな汗をかいている皆であった。
「全く。驚かせないでよ」
「それもずっと」
「じゃあこれからどうするの？」
「御飯にする？」
しかし当の二人はまことに何でもないといった様子のままである。
「晩御飯にね」
「いいわね。じゃあジンギスカン家で作るから」

「僕も羊肉持って来るよ」
「そうしましょう」
「皆も呼んでね」
こうして激しい運動の後で爽やかな夕食を食べる一同だった。とりあえず話は終わったがまた別の話がはじまるのだった。騒動は本当に終わらない。

障害物競走　　完

２００９・８・８

第百四十九話　サハラの商人その一

サハラの商人

ペリーヌはこの時趣味のショッピングに興じていた。
「あの、お嬢ちゃんね」
「何？」
急に道で声をかけられ振り向くペリーヌだった。
「何処から来たの？」
「何処からっていうと？」
「連合の人だよね」
こう彼女に尋ねてきたのは屋台にいるおじさんだった。浅黒い肌に彫の深い顔をしており口髭を生やしている。髪は黒檀の様に黒く輝いている。
見れば服は連合のものではない。サハラのものを思わせる。そして屋台に実に様々なものを置いてそれを売りに出しているのであった。
「そうだよね」
「そうですけれど」
一応ここは丁寧な言葉で返すペリーヌだった。
「南アフリカ生まれです」
「おお、南アフリカなのか」
「はい」
またとりあえず頷いて応える。
「そうです。南アフリカです」
「それはいい。私はね」
ここでこのサハラ風の男はさらに言うのであった。
「実は南アフリカに行ったことがあるんだよ」
「そうだったんですか」
「南アフリカのサバナ星系」

南アフリカの星系の一つだ。商業地帯として知られている。
「あそこにね」
「サバナに行かれたことがあるんですか」
「いや、あそこはよかったよ」
何故か上機嫌で話してきた。
「とてもね。よかったよ」
「確かにいいところですけれど」
南アフリカ人なのでそれは知っているペリーヌだった。彼女自身そのサバナ星系には何度か行ったことがあるのである。彼女は昔から外によく出歩いているのである。
「それが何か？」
「何かじゃなくてね」
この男はまた言ってきた。
「いや、君は友達だよ」
「友達っていうと」
誰のことかまずはよくわからなかったペリーヌであった。
「誰のことですか？」
「だから君のことだよ」
こう返す男であった。
「君だよ。君は僕の友達だよ」
「あの、私別に」
さしものペリーヌも今の男の言葉にはついていけずペースを乱していた。そうして完全に彼のペースで話を進めさせられていたのである。
その中で男は。さらに言うのであった。
「それでね。友達ね」
「ええ」
「これはどうかな」
言いながらあるものを出してきた。それは。
「遠くティムールからの帽子だけれど」

「ティムールっていうと」
それが何かは今のペリーヌでもわかったし言えることであった。
「サハラ北方に新しくできたあの国ですね」
「おお、知っていてくれているんだね」
男は今のペリーヌの言葉を聞いてさらに笑うのだった。
「流石友達、知っていてくれたんだ」
「まあよくテレビでもネットでも出て来る国ですから」
そうしたことで知っているのである。
「一応は」
「いや、知っていてくれるだけでも有り難いよ」
男はやたら愛想のいい笑顔で言ってきた。
「もうね。それだけでね」
「いいんですか」
「そう、そしてこの帽子」
見れば女用の帽子である。サハラ風というよりは完全に連合のものである。それを考えると随分と胡散臭いものであるが男はあくまでサハラ、それもティムールのものと言うのである。
「これを大特価でね」
「幾らですか？」
「五十テラ」
それだけだというのである。

第百四十九話　サハラの商人その二

「それでどうかな。五十テラで」
「五十テラね」
だがその金額を聞いて早速難しい顔を見せるペリーヌだった。
そうしてそのうえで。彼女は男に対して言うのであった。
「高いわね、それは」
「えっ、高い！？」
「そう、高いわ」
男に詰め寄るようにしてこう告げてみせた。
「五十テラはね。高いわ」
「いや、それは参った」
男はペリーヌにそう言われ困った顔を見せてきた。
「上手いね、友達は」
「上手いって何が？」
「商売上手」
こう言ってペリーヌを褒めてきたのだった。
「上手いよ、本当に」
「褒めたって何も出ないわよ」
「いや、わかったよ」
ペリーヌの言葉をよそにこう言ってきた。
「わかった。じゃあ私は負けたよ」
「それじゃあまけてくれるのかしら」
「うん、半額にしよう」
今度の言葉はこれであった。
「半額にするよ。これならどうかな」
「半額ね」
それを聞いてすぐに自分の頭の中で電卓を叩くペリーヌだった。
なおこれが算盤であったりコンピューターの計算機である場合もあ

る。
「それだと二十五テラね」
「これだとどうかな」
「まだね」
しかしペリーヌは厳しかった。
「まだね。それじゃあ」
「まだって」
「十テラね」
いきなり五分の二にまで値段をおろしてみせた。しかしそれで終わりではなかったのだ。
「いえ」
「いえ!?」
「五テラかしら」
瞬く間に五分の一であった。ほぼ一瞬にして。
「それだといいわ。買ってあげるわ」
「と、とんでもない！」
サハラの男は五テラと聞いて即座に言葉を返すのであった。
「五テラ!?そんなのだったら」
「それ位の価値じゃないの?この帽子って」
「友達よ、貴女は酷い人だ」
彼はこう言ってペリーヌに抗議してきたのである。
「私に首を吊れっていうのか」
「そんなこと一言も言ってないじゃない」
しかしペリーヌの返答は実にクールなものであった。
「全く。そうじゃないの?」
「恐ろしい」
男の言葉はさらに芝居がかったものになっていた。身振り手振りが極めてオーバーでかなり大袈裟である。だからそう見えるのである。
「貴女は恐ろしい人だ。しかし」

「しかし？」
「貴女は私の友達だ」
なおペリーヌは彼が友達とは一言も言ってはいない。あくまで彼だけが言っていることである。そう、彼だけが言っていることなのだ。
「友達だ。それなら」
「はい、それなら」
ここでもペリーヌはクールであった。
「どうしてくれるのかしら」
「誠意を見せよう」
こう来た。
「ここで誠意を見せるのが友達だ」
「誠意ね」
「そう、誠意を見せる」
彼はまたこの言葉をペリーヌに告げてきた。
「その誠意は」
「それで幾らなの？」
「十三テラだ」
つまり値下げということであった。彼が今言うその誠意は。
「十三テラ。二十五テラからそこまでだ」
「駄目ね」
だがペリーヌはその自称友人のその誠意に対しても一言であった。
たった一言でばっさりと切り捨ててみせたのである。実に簡単に。

第百四十九話　サハラの商人その三

「十三テラじゃ駄目ね」
「じゃあどれだけならいいんだ、友達よ」
「五テラよ」
またこの額であった。
「何度も言うけれど五テラよ」
「五テラ・・・・・・」
「そうよ。それ以上は駄目ね」
冷酷なまでに冷めた目での言葉であった。氷と表現してもまだ足りない、さながらドライアイスの如き冷たさを持った目であった。
「それ以上はね」
「五テラ、それは酷い」
サハラの男は五テラという言葉に今度は泣きそうな顔を作ってみせた。
「それだけだったらもう私は首を吊らないといけない」
「吊られても吊られなくても五テラよ」
だがペリーヌは全く引かない。一歩も。まるでその両足が大地に完全に根をおろしてしまっているかのように一歩も引かないのであった。
「それ以上は駄目ね」
「くっ、それなら」
男はここで苦渋の顔を浮かべながらも言うのであった。
「十テラだ」
「十テラね」
「そう、これならどうだ」
そしてさらに言うのであった。
「友達よ」
「凄いわね十テラなんて」

五十テラから十テラである。これは確かに凄い。
だが凄いのはこの値下げだけではなかった。ペリーヌもまた。全く違う意味で凄かった。しかもその凄さは桁外れなものであった。
「けれど出せないわ」
「これでも出せない！？」
「だから五テラよ」
またしてもこの値段であった。
「五テラ。それだけよ」
「それ以上は出せないというのか」
「絶対にね」
まさに絶対零度であった。今のペリーヌは。ドライアイスさえ超えてしまっていた。
「出せないわね」
「貴女は酷い人だ」
男の泣き言がまた出された。
「私に誠意を要求するのか」
「それでどうするの？」
絶対に自分は友達と言わないペリーヌだった。そこに何かがあるのがはっきりとわかっているかのように。あくまで言わないのであった。
「五テラ以上は出せないけれど」
「なら七テラ」
またしても値切りする男であった。
「これならどうかな、友達よ」
「そうね」
ようやくここで山が動いたのだった。
「それならいいかしら」
「おお、納得してくれたか」
「五テラね」
納得してくれていなかった。

「それならもういいじゃない。これで」
「五テラか」
男は今のペリーヌの言葉に酷く落胆したように見えた。
「結局それなのか」
「それでどうするの？」
さらに容赦なく突っ込みを入れるペリーヌだった。
「五テラでいいわよね」
「わかった」
遂に陥落したのであった。この男も。
「五テラだ。それでいい」
「よし、それじゃあ」
早速懐から財布を取り出すペリーヌだった。その財布からコインを出してきた。
それは一枚であった。一枚のコインを出してそのうえで。男に告げるのであった。
「これでいいわよね」
「いい」
苦渋に満ちた顔を作る男であった。
「それでな。友達の為だ」
「いい買い物をしたわ」
ペリーヌはここでまた楽しげに笑うのであった。
「それじゃあね」
「友達よ、また来てくれ」
男はあらためてペリーヌに告げた。
「待っているからな」
「覚えていたらね」
このやり取りのことは次の日にペリーヌ自身の口によってクラスに広まった。皆それを聞いてまずはペリーヌのえげつなさに唖然とするのであった。

第百四十九話　サハラの商人その四

「五十テラを五テラって」
「あんまりじゃないの？それって」
「何言ってるのよ」
しかし当のペリーヌは平然としたものであった。
「それでも高い位よ」
「十分の一に値切っておいて高いって」
「それってどうなのよ」
「大切なのは値段に見合うものかどうかよ」
だがペリーヌはこう皆に言うのだった。
「例えばよ。一テラのチョコレートに十テラ出せるかしら」
「まさか」
「そんなの誰も出さないわよ」
皆すぐにペリーヌの今の例えに答えるのだった。
「一テラのものに十テラなんて」
「とてもね」
「そういうこと。だから私は五テラにしたのよ」
彼女が言うのはそういうことだった。
「五テラにね。一歩も引かずにね」
「やっぱりあんた強いわよ」
「全く」
だが皆はそのペリーヌに対して同じように返すのだった。
「それでも一歩も引かないって」
「そうはできないよ」
「こういうことは覚悟よ」
ペリーヌはそれこそが大事だというのだ。
「覚悟を決めてね。一歩も引かないことよ」
「一歩もなの」

「そう、一歩も」
とにかく引かないということを強調するのであった。
「引かずに押し切る。時として技も必要だけれどね」
「技って？」
「それって？」
「相手を見抜いてそのうえで仕掛ける」
それだというのである。
「言葉尻を取ってそのうえで揚げ足を取ったりね」
「そうやって勝ち取っていくんだ」
「値切った品物を」
「とにかく引かないの」
ペリーヌの今の言葉はさながら鉄の扉であった。
「引かずにそのうえでね」
「勝ち取るの」
「今回も散々友達って言われたけれど」
今度言うのはこのことだった。
「それでもそういう言葉は無視してね。勝ち取るのよ」
「成程ねえ」
「あくまで引かないのね」
「その通りだね」
ペリーヌのそうした行動や考えに賛同の言葉を述べたのはロミオであった。彼女と似たものを持っている彼が頷くのであった。
「やっぱり。見合った値段にさせないと駄目だよね」
「そういうことよ。やっぱりわかってるじゃない」
ペリーヌはそのロミオの言葉に応えて微笑んだ。
「ロミオならわかってくれると思ったわ」
「わかるよ。それでね」
そしてここでペリーヌに問うロミオだった。
「そのサハラ人のやってるお店だけれど」
「何処にあるのかって？」

「うん。何処にあるの？」
それをペリーヌに尋ねるのだった。
「何か面白そうだけれど。友達って」
「確かあそこはね」
昨日のことを思い出しながら語るペリーヌだった。
「赤い煉瓦の並木道だったわね」
「赤い煉瓦の。ああ、あそこだね」
それを聞いてすぐにわかったロミオであった。
「あそこにいるんだ」
「そうよ。あそこにね」
ペリーヌも言う。
「今日もいるかしら」
「そう。それじゃあ」
それを聞いて考える顔になるロミオだった。そうしてそのうえで言う。

第百四十九話　サハラの商人その五

「僕も行ってみようかな」
「それで値切ってみるのね」
「勿論」
今度はにこりと笑ってペリーヌに答える。
「そうじゃないとね。自分でもやってみないと」
「何か酷いことになりそうだね」
「そうね」
皆今のロミオの言葉を聞いて顔を見合わせるのだった。
「ロミオも大概酷いしね」
「まさに男版ペリーヌって感じで」
なおペリーヌの仇名は男版ロミオである。簡単に言ってしまえばどちらもどちらである。商売をする人間にとっては二人共天敵であると言ってもいい。
「本当にどうなるのかな」
「お店の人首吊らないといいけれど」
「大丈夫だよ。首は吊らないよ」
ロミオはそれはないというのである。
「ああ、そうなんだ」
「だといいけれど」
皆それを聞いてまずはほっと胸を撫で下ろした。しかしそれは一瞬のことですぐにその眉を顰めさせることになった。何故ならロミオがこう言ったからだ。
「血の涙を流す位かな」
「いや、それもかなり」
「血の涙って」
皆それを聞いてやはりといった感じであった。何はともあれロミオは実際にその赤い煉瓦の並木道に向かった。ただし一人である。

「あれ、あんたは」
「あんたは行かないの」
皆はいつものように離れた場所で見守っている。しかもそこにはペリーヌもいる。
「どうしてなの？」
「一緒に行けばいいのに」
「まさか」
だがペリーヌは皆のその怪訝な言葉にくすりとおかしそうに笑って返すのだった。
「私が行ったら駄目に決まってるじゃない」
「駄目って」
「どうしてよ」
「昨日買い物をしたのよ」
彼女が言うのはこのことだった。
「昨日買い物してかなり値切ったのに。その私が行ったら」
「ああ、そうか」
「そういうことね」
皆彼女のその言葉を聞いてわかった。
「マークされているからね」
「だからか」
「そうよ。だからよ」
理由はそれなのだった。彼女がそのサハラの商人にマークされていると見ているからだ。この読みは彼女らしい慎重なものであった。
「だからここでね。見ているだけにするわ」
「そうね。それがいいね」
「向こうも警戒するから」
「はじめての相手はわからないのよ」
ペリーヌは実に楽しそうな笑みを浮かべていた。
「一体どんな相手かね」
「だからペリーヌにもふっかけたのかしら」

「そうじゃないの？」
皆はそのサハラの男が彼女に対してふっかけたと思っていた。サハラで本来の値段よりも遥かに高くふっかけることが非常によくあるからだ。
「やっぱり」
「相手を見てやれってことだけれど」
「それでこの帽子だけれど」
ペリーヌはその昨日買ったその帽子を出してきた。そのうえで皆に見せる。
「幾らの価値があると思う？」
「ううん、そうだね」
「あまりはっきりとは言えないけれど」
皆それを聞いてから帽子を見て言うのだった。
「五テラ？」
「それ位？」
「そうよね。五テラよね」
皆その帽子を見てあまりはっきりとした口調ではないが述べた。

第百四十九話　サハラの商人その六

「そんなもの？」
「それ位じゃないかな」
「そうよね。やっぱり五テラよね」
ペリーヌは皆の言葉を聞いてあらためて頷いた。
「それ位のものよね」
「それで五十テラって」
「ぼったわね」
まさにぼったくりであった。本来の価値と十倍の開きがあるのだから。これをぼったくりと言わずして何と言うかという話であった。
「流石サハラ商人だけれど」
「どうなの、それって」
なお連合でそうした商人といえばサハラ商人の他にマウリア商人がいる。マウリア商人に至ってはその商いは異次元とさえ言われている。
「よく見たら五テラでも高そうだけれど」
「四テラでもおかしくないんじゃ」
「まあ五テラにしておいてあげたけれど」
ペリーヌの優しさであった。
「やっぱりあこぎよね」
「うん、あこぎだと思うよ」
「私も」
このことは皆も同じ意見であった。
「十倍ってねえ。やっぱり」
「ぼったくりにも程があるわ」
「全くだよ」
「さて、それで」
また言うペリーヌだった。

「ロミオはそのぼったくりに対してどう向かうのかしらね」
「ええ。それね」
「どうするのかな」
皆もそのことに注目するのであった。ロミオがそのぼったくりのサハラ商人に対してどうするか。それをじっと見守るのであった。
そのロミオは道をまっすぐに歩いていく。それは何の迷いもないかのようだった。
「それでさ」
「何？」
ベンがペリーヌに声をかけてきた。ペリーヌもそれに応える。
「そのお店ここにあるんだよね」
「昨日はあったわ」
ペリーヌは何でもないといった顔でこう答えた。
「昨日はね」
「じゃあ屋台だからないかも知れないね」
ベンはその可能性についても指摘するのだった。
「屋台はすぐに動くことができるから」
「いえ、あるわ」
しかしペリーヌはこう言うのだった。
「あのお店は絶対にここにあるわ」
「あるんだ」
ベンはペリーヌの断言にその目を少し動かさせた。そこにかなりはっきりとした自信を見たからである。この道にあの店が今日もあるのだという。
「何でそう言えるのかちょっとわからないけれど」
「勘よ」
ペリーヌの自信の根拠はこれであった。
「勘がね。そう教えてくれてるのよ」
「勘ねえ」
ベンは勘と聞いてまずは微妙な顔になるのであった。

「勘も外れる時があるけれど」
「けれど今回は大丈夫よ」
そう言われても変わることのないペリーヌの今回の自信であった。
彼女は元々自信家で自分の言ったことに不安を抱いたりしないタイプであるが。
「絶対にね。まあ見ていなさいって」
「そこまで言うのならだけれど」
ベンもその強い自信に押されてしまった。
「僕も見させてもらうよ」
「そうしてもらったら嬉しいわ。さて」
「んっ！？」
「まさか」
ここでベンだけでなく皆がその見えたものを見て言うのであった。
「お店だよね、あれ」
「それも屋台のお店」
皆それを見て悟ったのであった。これ以上はないまでの確固たるものであった。

第百四十九話　サハラの商人その七

「ということはつまり」
「今日もあったの」
「私の言った通りでしょ」
ペリーヌ一人がにこりと笑っていた。そうしてそのにこりとした自信に満ちた笑みで皆に対して言うのであった。まるで戦いに勝利を収めたかのように。
「あったでしょ。お店が」
「確かに」
「あったわね」
皆流石にお店を見ては納得するしかなかった。やはりこれ以上はない証拠だからだ。
「じゃああのお店にいるのね」
「そのサハラの人」
「あっ、いたわ」
見ればペリーヌは今度は望遠鏡を出している。それでお店を見ながら皆に言うのだった。
「その昨日の人が」
「ああ、あの人ね」
「あの人なんだ」
ここで皆もそれぞれ望遠鏡を出してその屋台を見る。彼等はそこでその一人の口髭を生やし浅黒い肌をした彫の深い顔立ちの男を見るのであった。
「見たままサハラの人ね」
「お髭生やしてるし」
この時代ではサハラの者だからといって髭を生やしているとは限らない。アッディーンやシャイターンを見るまでもなく生やしていない者も実に多い。だが連合でのイメージではサハラの男は髭、そ

れも口髭を生やしているというイメージが強いのである。それもかなり。

「間違いないわね」

「あの人サハラの人ね」

「でしょ？さて、ロミオが近付いていくけれど」

「ええ」

「どうするのかしら。ロミオ」

皆今度はロミオの行動に注目する。

「それで」

「お店のことはわかってるのかな」

「わかったみたいね」

またここでペリーヌが言う。

「ほら、お店に近付いていってるわ」

「あっ、本当だ」

「わかったみたいね」

皆ロミオが実際にその屋台に近付いていっているのを見てこのことについては安心した。

「じゃあこのまま」

「後は勝負ね」

「ここからが肝心なのよ」

ペリーヌの声も表情も引き締まったものになった。

「相手に対して一歩も引かない」

「一歩もなのね」

「ただただ押す」

かなり強引ではある。少なくとも整っていると言っていいペリーヌの顔から出るような言葉ではなかった。

「そうして勝利を勝ち取るものなのよ」

「引かないのね」

「そういうこと」

何につけてもそれだというのである。

「何があろうともよ」
「じゃあロミオもそうするのね」
「引かないのね」
「私にはわかるわ」
また誇らしげに言うペリーヌであった。
「ロミオがこれから何をするのか」
「そう。それじゃあ」
「またとんでもない値切り合戦なんだ」
皆はこう思うのだった。何はともあれ今ロミオはそのサハラの男の店に入った。再び激しい戦いが幕を開けようとしていたのである。

サハラの商人　　完

２００９・８・１４

第百五十話　何と相手はその一

何と相手は

ロミオはそのサハラの男の店の前に立った。いよいよであった。

「さて、と」

「はじまるわね」

皆彼を遠くから見ながら言う。道の曲がり角に隠れてそこから望遠鏡まで使ってそのうえで様子を見守っているのである。これもいつものことであった。

「どうなるかしら」

「ロミオもあれで手強いけれど」

何しろ男版ペリーヌである。この通り名は伊達ではない。

「果たしてどう攻めるか」

「それが見所ね」

「何か見たところ」

ペリーヌは今は屋台の中を見ていた。その商品をである。

「売ってるものは昨日とは違うわね」

「えっ、違うの！？」

「そうなの」

「昨日はあれだったのよ」

そしてまた皆に話すペリーヌだった。

「帽子とかね」

「うん、それよね」

「その帽子だね」

彼女が昨日あの男から値切りに値切って五テラで引き落としたというその帽子だ。彼女が今も出に持っているその帽子をここでも見るのであった。

「その帽子を売ってたけれど」

「今は違うの」

「何かおもちゃを売ってるわ」
「あっ、本当ね」
「確かに」
皆ここでそれぞれの望遠鏡で屋台の中を覗いてみた。見れば確かにその通りであった。
モデルガンがあればプラモデルもある。それにゲームソフトや駄菓子屋で売っているような小さなおもちゃまである。一応なニでも揃っていた。
「何か品揃えがばらばら？」
「しかも妙に連合っぽいような」
このことまで見て考える彼等であった。
「あれって絶対に連合のゲームソフトだし」
ベンがゲームソフトを見ながら述べた。
「スーパーボールやビー玉だって」
「結構質がよくない？」
「そうね」
皆そうした小さなものも見て話すのだった。
「サハラのものじゃないよね」
「っていうか今サハラのものないんじゃ」
このことも見抜く彼等であった。
「完全にどっかの夜店の品揃えだし」
「何なのかな、あれって」
「けれどあれよ」
その中で言うペリーヌであった。
「お店にいる人は同じよ」
「同じなんだ」
「そのサハラの人よね」
「ええ。あの顔で友達とか言ってくるのよ」
昨日のことをまた皆に話す。
「どうもそれで好感を持たせて買わせるつもりなんでしょうけれど」

「それサハラ特有だよね」
「そうよね」
皆ここでこんなことも話す。
「もうそうやって買わせるのって」
「しかもぼったくるのって」
「サハラじゃ普通だし」
やはり彼等はサハラの商売をこう見ているのである。なお連合ではサハラのビジネスもまたそうした感じであると認識されている。
「何かあこぎっていうか」
「それなのに妙に憎めないっていうか」
「けれど情は無用よ」
この辺りは冷酷なまでにシビアなペリーヌであった。
「絶対にね。何があってもよ」
「そうなんだ。何がっても」
「情は無用なの」
「お金は命よ」
ペリーヌ独特の考えである。哲学であると言ってもいい。
「そのお金を出すんだから情をかけたら」
「駄目ってことか」
「そうなのね」
「勿論よ。だから昨日だってね」
また昨日の話になる。

第百五十話　何と相手はその二

「私は引かなかったのよ。絶対に」
「それで勝ち取ったのね」
「五テラで」
「そういうことよ。まあちょっと優しかったかもって思ったりするけれど」
五十テラのところを五テラで買ったその帽子を見ての言葉である。
「それでも。いい買い物になったわね。楽しかったし」
「楽しかったって」
「何か楽しみ方があれのような」
皆そんなことを言うペリーヌに少し怖いものも感じていたりしていた。
「まあそれでもロミオね」
「どうなるかしら」
「今話しはじめたけれどね」
「勝てるかしら」
話は勝敗にさえなっていた。そうしてその中でロミオはそのサハラの男と対峙していた。
「どうも」
「おおっ、よく来てくれた」
いきなり男は明るく言うのであった。
「私の友達、よく来てくれました」
「はい」
ロミオはその彼に対して明るく挨拶を返した。
「こんにちは。僕は友達なんですか」
「勿論だよ。友達だよ」
男も彼に合わせてか陽気に言うのであった。
「それで友達よ」

「ええ」
「今日はどうしてここに来たんだい？」
今度はこう彼に尋ねるのであった。
「何か私を助けてくれるの？」
「よかったら」
笑顔で言うロミオであった。
「助けさせてもらえるのなら」
「おお、これこそ私の友達だ」
随分とハイテンションの言葉であった。
「友達が困った時に助けてくれるのこそが友達だ。だから貴方は」
「はい、友達だって認めてくれるんですね」
「そうだよ。それじゃあね」
「ええ。それじゃあ」
「どうぞ」
こう言って差し出してきたものは。
「このモデルガンだけれど」
「あっ、このモデルガンって」
「そう、ＡＫ４７」
それだというのである。見れば骨董品と言っていいまでに古い形の銃である。
「あのロシアの銃だよ」
「ロシアのですか」
「銃大国ロシア」
男は勝手にそう言っているかのようだった。
「そのロシアで開発製造された銃の中で最高傑作の一つだと言われているんだ」
「本当なの？」
「それって」
見ているクラスの面々は怪訝な顔になってそこにいるアンネットに問うた。

「初耳だけれど」
「ロシアって銃大国だったの」
「初耳よ」
こう皆に答えるアンネットだった。
「そんなの」
「あれ、違うの？」
「ロシアって銃大国じゃないの」
「人口が多いとか資源が多いとかは聞いたことがあるけれど」
アンネットは首を傾げながら言うのだった。
「銃大国っていうのは」
「ないのね」
「バレエ大国よ、うちは」
実際にこう言っているのがロシアである。ロシア人のバレエ好きはこの時代でも健在である。これはロシアという国にバレエが伝わってからの伝統である。
「銃なんか作ってたの」
「そりゃ作ってるんじゃない？」
「銃位」
皆それぞれまた言う。
「銃を持つには免許が必要だけれどね」
「それでもどこの国にもあるし」
なお連合の銃の所持にはどの国にも免許が必要である。それにより治安を守っているのである。中央政府も各国もそうさせているのである。

第百五十話　何と相手はその三

「ロシアも作ってるんじゃないの？」
「銃は」
「私銃には興味ないし」
アンネットはここでもまた首を傾げるのだった。
「別にロシアが銃を作るのは」
「そういうものなの」
「そうなんだ」
「別に麻薬作って売ってるわけじゃないし」
「ああ、それイギリスだから」
今でもイギリスは麻薬を栽培させてそれを売っているというプロパガンダも存在している。アヘン戦争のことを今だにしていると喧伝して反エウロパ感情を増長させている。なおエウロパもエウロパでそうした宣伝をしているから同じと言えば同じである。どちらもどちらだ。
「ロシアはお酒でしょ？」
「ウォッカだよね」
「ウォッカはお薬よ」
ロシア人はあくまでこう主張しているのである。どれだけ強い酒であっても。
「だから飲んでよ、どんどん」
「あんなのストレートでどんどん飲めないよ」
「下手したらそのまま倒れるから」
ウォッカのアルコール度は伊達ではないのである。
「まあそれは置いておいて」
「ＡＫ４７って」
「何時の銃なのかしら」
皆また首を傾げさせる。そうしながら様子を見ていると。男はさ

らにロミオに対して言うのであった。まさに畳み掛けるといった勢いであった。
「そしてこの銃は」
「この銃は？」
「まさに芸術品なんだよ」
随分と持ち上げていた。
「その芸術品が今や五万テラ」
「五万テラ！？」
「そう、五万テラ」
それだけだというのである。なおモデルガンの標準値段は品によって違うが大体一万テラ前後である。それが相場である。
「五万テラだよ。どう？」
「五万テラね」
それを聞いて考える顔を作ってみせたロミオであった。
「そうだなあ。どうしようかな」
「安いよ、もうこんなの手に入らないよ」
二度と手に入らないとまで言う男であった。
「さあ、だからね」
「ううん、どうしようかな」
「五万テラ」
男はまた値段を言ってきた。
「安いよね」
「ううん、高いよ」
だがロミオはにこりと笑ってこう彼に返すのだった。
「それってかなりね」
「高い！？」
「だってそうじゃない」
驚いた顔になる男に対してまた述べるロミオだった。
「普通あれだよ。モデルガンって一万テラじゃない」
標準値段を出してみせたのだった。

「それで五万テラって高いじゃない」
「いや、これはだな」
だが男も負けるつもりだった。必死の顔で彼に言い返してきた。
「物凄い掘り出しものだから」
「だから五万テラっていうの？」
「そうだよ」
これが彼の言い分であった。彼も商売だから必死の様子である。
「掘り出しものだから。それだけの価値はあるよ」
「僕はそう思わないけれど」
「いやいや、友達よ」
ここで切り札を出す男だった。もっともこの切り札にしている友達という言葉は昨日ペリーヌには全く効かなかった。しかしそれでも彼は出すのだった。
「このモデルガンは特別でね」
「特別？」
「そうさ。モデルガンの本場でもあるロシアのものなんだ」
こう言うのである。
「だからかなり高いんだよ」
「本当かな」
「本当だよ」
ロミオに話すのだった。だがそれを聞いてアンネットはまた言うのであった。他ならぬそのロシア人の彼女がである。これはかなり説得力があるものだった。

第百五十話　何と相手はその四

「そんなの初耳よ」
「今度も！？」
「そうなの」
「そうよ。完全にね」
少し憮然とした顔で皆に告げるアンネットだった。相変わらず望遠鏡でロミオと彼のやり取りを見ている。なお聞いているのは遠距離用の集音機を使っているのだ。
「そりゃプラモデルは作っているけれど」
「モデルガンは何だ」
「私が興味ないから知らないだけかもしれないけれど」
そう前置きはするがそれでも言うのだった。
「それでもね」
「知らないんだ」
「じゃあ眉唾！？」
「今回も」
「そう思っていいわね」
今言ったのはペリーヌだった。
「大体五万テラのモデルガンなんて」
「凄い骨董品だけれどね」
「そうだよね」
こうしたことには詳しい男組が言うのだった。やはりモデルガンといえば女の子より男の子の方が強かった。これは伝統的なものである。
「そんな価値あるかな？あのモデルガンに」
「さあ」
それについては皆かなり懐疑的な様子であった。
「詳しく見ないとわからないけれど」

「サハラの人がそんなの知ってるなんて」
「まずないよね」
「そうだね」
ここで答えが出てしまった。やはりかなり胡散臭いということだ。
「あのモデルガンなんて」
「絶対に五万テラの価値はないのね」
「まず確実にね」
皆はそう見ているのだった。そして対するロミオはというと。むしろその彼等よりきつく尚且つ研ぎ澄まされた感覚で男と対しているのであった。
男をじっとした目で見てそのうえで。言うのだった。
「それでだけれど」
「五万テラだよ」
「おじさんだけれど」
彼は男の顔を診ながら男自身のことを問うてきたのだった。
「前に会ったことなかったかな？」
「えっ、前に！？」
「うん。何処かでね」
怪訝な顔で男の顔を見ながらの言葉だった。
「見たような気がするんだけれど」
「な、何を言っているんだ友達よ」
何故かそう言われてかなり焦りを見せる男であった。
「そんな筈ないじゃないか」
「本当に？」
「本当だよ」
やはり必死に否定する。
「その可能性は天地がひっくり返っても有り得ない」
「だってさ」
だがロミオは彼のその必死の言葉にも惑わされず言うのだった。
「僕前に会ったよ」

「前に！？」
「うん。おじさんにそっくりの人に」
こう言うのである。
「何かその時は西瓜売っていたけれど」
「西瓜を・・・・・・」
西瓜という言葉を受けて何故かギクリ、とした顔になる男であった。それはまさに何かしらの心当たりがある人間の顔そのものであった。
「まさかあの時の」
「あの時の！？」
「あっ、いや」
失言であった。しかもロミオはそれを聞き逃さなかった。
すぐに彼に問う。そしてさらに。その顔を見て言うのだった。
「顔が青いけれど」
「何もないですよ」
そうは言っても実際に顔は蒼白になっていた。浅黒い肌だったがそれすらも超えてであった。
「本当に」
「そうかなあ。確かあれって」
ロミオはその男をよそにさらに記憶を辿るのであった。
「ベネズエラのグアンピ星系のチャベスで」
「ギニア星系のカラカッソだったよ」
男の方からの言葉だった。
「それは」
「そうそう・・・・・・って」
ここでロミオは気付いたのだった。

第百五十話　何と相手はその五

「何でおじさんが知ってるの？このこと」
「あっ、しまった」
続いての失言だった。男ははっとした顔になっていた。
「これはその」
「やっぱりそうだったじゃない」
ロミオはここぞとばかりにこの男に対して言うのであった。
「おじさんあの時も西瓜をとんでもない値段で売っていたよね」
「あれは南アフリカで特別に取れた青い中身の西瓜で」
「いや、紫だったよ」
「何でそんなことまで覚えているんだ」
「覚えてるよ。一万テラで西瓜売りつけようとして」
ロミオは男を指差して言うのだった。
「そんな西瓜何処にあるんだよ。一万テラって」
「そう言うあんたはあれだったじゃないか」
男は逆キレ気味になってロミオに言い返してきた。彼も言う。
「千テラにまで引き落とさせたじゃないか。粘りに粘って」
「それが西瓜の妥当な値段だよ」
ロミオが言うのが正解だった。連合ではスイカの値段は一個丸ごとだとおおよそ千テラである。一万テラという方がおかしいのである。
「千テラがね」
「折角青い西瓜を売ったのに・・・・・・」
「だから紫だったじゃない」
ロミオはまた彼に突っ込みを入れた。
「青と紫じゃ全然違うよ」
「大した違いはないよ」
「あるよ。それでもだよ」

ロミオはさらに言うのであった。
「後で調べたけれど南アフリカじゃ紫の西瓜が普通じゃない」
「くっ・・・・・・」
男は口ごもってしまった。ここで皆がその南アフリカ人のペリーヌに対して尋ねるのであった。丁度いい具合に彼女は南アフリカ人であるのだ。
「それ本当？」
「南アフリカじゃ中が紫の西瓜が普通なの」
「ええ、普通よ」
平然とした顔で皆に答えるペリーヌだった。
「やっぱり赤が多いけれどね」
「ふうん、じゃあ今の話本当なんだ」
「とりあえず南アフリカで紫の西瓜が普通なのは」
「ついでに言えば青い西瓜もね」
これについても言うペリーヌだった。
「本当にあるわよ」
「そうなんだ。中身が青い西瓜も南アフリカにはあるんだ」
「結構色々あるのね」
「西瓜は我が国の名産品だからね」
ペリーヌはまた言った。
「結構色々あるわよ。それもかなり美味しいし」
「ふうん、何かそれっていいわね」
「様々な色の西瓜って」
「ええ。それにしてもあの人」
ペリーヌはあらためて男を見て言う。
「ロミオと会ったことがあったのね。凄い展開ね」
「確かにね」
「まさかって思ったけれど」
そう思ったのは皆も同じだった。そうしてさらにロミオと男のやり取りを見守るのだった。

「それでさ。おじさんさ」
「何だよ、一体」
「どういう人なの？本当に」
思いきり怪しむ目で男を見ての今のロミオの言葉だった。
「一体何やって暮らしてるんだよ」
「だから商人だよ」
一応はこう言うのであった。
「こうしてれっきとして商売をしてだな」
「いや、れっきじゃないし」
また速攻で突っ込むロミオだった。
「そこまでぼってれっきとしてなんてよく言えるね」
「サハラじゃこれが普通なんだよ」
「サハラ生まれは本当なんだね」
「その通り」
今度は腕を組んでしっかりとした言葉で答えてみせてきた。
「これは本当のことだ」
「何か今までの言葉が嘘みたいに聞こえるけれど」
「それでもサハラ生まれなのは本当のことだよ」
このことは絶対というのである。確かに今は本気で言っている。
「サハラの北方のね。ガジャラーン共和国の生まれだよ」
「ガジャラーン共和国！？」
その国名を聞いても首を傾げるロミオだった。今一つ以上にわからない顔をしている。

第百五十話　何と相手はその六

「そんな国サハラにあったっけ」
「あったんだよ」
今の男の言葉は過去形であった。
「昔はね」
「あったっていうと」
「エウロパに滅ぼされたんだよ」
こう言って悲しい顔を見せてきた。彼が今まで見せたことのない顔だった。
「エウロパにね」
「そうだったんですか」
「それでここに流れ着いたんだ」
今度はその目が遠いものになっていた。
「連合にね」
「じゃあおじさんは難民なんですね」
「そうなるかな」
こうもロミオに答えた。
「そうした証明書も持っているしね」
「難民証明書も」
「もう僕の国はないから」
遠い目での言葉は続く。
「もうね」
「それで難民証明書は？」
「あっ、そうよね」
「それよね」
皆ロミオの今の言葉に離れた場所にいるとはいえ頷いたのだった。
「本当に難民として連合に来ているんなら絶対に持ってるよね」
「そうよね」

連合は難民を受け入れているがその際は難民証明書を発行してそれを手渡しているのである。そうやって身元を確かにしているのである。

「いつもの口八丁手八丁じゃなかったら」

「絶対に持ってるわよね」

「そうそう」

「それにサハラ出身でも」

彼等は今度はサハラ出身というそのことについても話されるのだった。

「別に連合に来れるんだしね」

「普通にそれあるわよね」

「さて、どうなのかしら」

ペリーヌは腕を組んで様子を見守っていた。

「果たしてあるのかどうか。本当にね」

「それが問題ね」

「どうなのかしら」

そんな話をしながら二人を見守る一同だった。すると男は。

「これだよね」

「あっ、それは」

「これがその難民証明書だよ」

彼は懐から出したそのカードをロミオに見せながら述べた。

「これ、見たのはじめてかな」

「え、ええ」

こくこく、と頷きながら答えるロミオだった。実際のところ彼が本当にその難民証明書を持っているのかどうか半信半疑だったので本当に出してきて驚きもしていたのだ。

「実は」

「難民はね。悲しいよ」

言いながらまた悲しい顔になる彼だった。

「本当にね。国がないっていうのはね」

「悲しいですか」
「連合にいたらわからないだろうけれどね」
「連合にいたら」
「連合はいいね」
心からの言葉だった。心から羨む言葉だった。
「祖国があるっていうのは当然のことだよね」
「ええ、そうですけれど」
ロミオはその連合の常識において答えたのだった。その祖国があって当然である連合の常識で。答えたのである。
「それはもう」
「サハラでは多くの国家が出来ては消えていっているからね」
「出来ては、ですか」
「そしてエウロパも攻め込んできたし」
しかもこのこともあるのだというのだ。なおエウロパのサハラ侵攻と難民の発生については連合は中央政府も各国も激しく非難してきている。
「そして僕みたいな人間も多く出来るのがね」
「サハラですか」
「だから僕は今ここにいるんだ」
連合にいるということである。

第百五十話　何と相手はその七

「そして豊かさも全然違うしね」
「豊かですか」
「連合は豊かだよ」
このことについても言うのであった。
「サハラと比べたらずっとね」
「ずっとですか」
「何もかもあるじゃない」
何でもある、この言葉はロミオだけでなく皆の心にも届いたのだった。
「何でもねえ」
「そういえば連合では餓えってないしね」
「全然ね」
連合では動物まで飢え死にすることがない。野良犬や野良猫といった捨てペットのような存在さえいない程である。サハラではそうはいかないのだ。
「そんなものないし」
「むしろ食べ物が余っている感じかな」
「あり過ぎてねえ」
つまり飽食というわけである。この連合の飽食と言ってもいい状況も連合が成立してから実に長い間続いているのである。繁栄すればそれだけ食べ物も生じるからだ。
「けれどサハラは違うんだ」
「それも全然」
「連合に難民として来て驚いたよ」
笑いさえする男だった。
「あんまりにもものがあるからね」
「そんなに驚いたんですか」

「そうだよ。実は僕はあれだよ」
自分の話に戻りもした。
「売っているのはどれも連合のものばかりだよ」
「ああ、やっぱりそうなんですか」
「サハラでもこうした出店をやっていたけれどね」
懐かしむ目も見せてきたりしている。
「帰りたいよ」
「帰りたいですか」
「当然だよ。祖国だよ」
また祖国という言葉を口に出すのだった。
「祖国なのに帰りたくはない筈がないじゃないか」
「そうですか。やっぱり」
「もうないけれどね」
しかしなのだった。このこともわかっているのだった。今の彼は最早存在しなくなった愛するものを懐かしむ。そんなパラドックスの中にいるのである。
「なくても。それでも」
「それでも」
「帰りたいね。そう思うよ」
「今は無理なんですか」
「もうエウロパはいないけれどね」
連合との戦争の時に戦局悪化により総督府軍を本国に召喚した。この際に護る存在がいなくなったことを受けそこにいた者も全員引き揚げそれによりエウロパ人はサハラから去ったのである。今では彼等は最早そのサハラには一人も残っていないのである。
「それに今はティムールだけれど」
「祖国じゃなくて」
「ティムールは僕の祖国じゃないよ」
また言うのだった。
「僕の祖国じゃない。別の国なんだよ」

「だから帰らないんですか」
「本音は違うけれどね」
相反する二つの感情はそのままであった。彼はその間にいるのだった。
「やっぱりね」
「わかりました」
ロミオは悲しい顔で彼のその言葉に頷いた。
「おじさんのことは。まだ完全じゃないですけれど」
「ははは、完全なんて無理だよ」
彼はそれは笑って否定した。
「それはね。無理だよ」
「無理ですか」
「その人を完全に理解することは無理だよ」
そしてまた言う彼だった。
「絶対にね」
「無理ですか」
「その人が果たして何を考えているのか。無意識までわかるかい？」
男の声は優しいものだった。しかしその優しさこそにあるのだった。
「無意識までは」
「無意識なんてそれは」
言われたロミオもそれを言われると困った顔になるしかなかった。

第百五十話　何と相手はその八

「専門家じゃないですし。僕は」
「専門家でもわからないものだよ。完全にはね」
「完全にはですか」
「うん。だからね」
わからないというのである。
「それについてはね」
「何かまだ僕にはよくわからないですけれど」
ロミオは難しい顔になっていた。その難しい顔での言葉だった。
「そういうものなんですね」
「うん。じゃあそれでね」
「わかりました」
ロミオはまた頷いた。これで話は終わりだった。そしてそのうえでまた言うロミオだった。
「それでおじさん」
「何だい？」
「その商品ですけれど」
話は商品に戻っていた。彼が戻したのだった。
「ちゃんとした値段で買いますから」
「そうだね。それでいいよ」
何と彼もそれでいいというのだった。皆それを聞いて目をしばたかせることになった。そうしてそのうえで皆で話をするのだった。
「心変わりしたのかしら」
「そうみたいだね」
「今の話で」
皆そう捉えていた。
「改心かな」
「そうじゃないの？」

改心という言葉もあがった。
「やっぱりこれって」
「いや、そうじゃないかも」
「そうね。これは」
その中でペリーヌが言う。昨日彼と対峙した彼女がだ。
「ほろりときたのじゃないかしら」
「ほろりと」
「じゃあ改心なのかな」
「そう思うわ。私はね」
彼女も改心と見ていた。それは決して同情やそうしたものから見ているのではなかった。あくまで冷静に見てそのうえで言っているのだった。
「改心したんでしょうね」
「成程ね」
「そうなったのね」
皆これで納得した。その間にもロミオと彼は話をしていた。それは商売の話だった。
「じゃあこのモデルガンは」
「君の言った値段の通りだよ」
こう述べたのだった。
「それでいいよ」
「じゃあ一万テラですね」
「うん」
穏やかな微笑と共に頷いてみせたのだった。
「そうだよ。一万テラだよ」
「わかりました。それじゃあ」
ロミオは自分の財布からすっと一万テラを出した。男もそれを受け取る。そのうえでモデルガンを引き渡しそれで話は終わったのだった。
「有り難う」

「はい」
男もロミオもそれぞれ言う。
「また来てね」
「ええ、また」
挨拶は温かいものだった。
「縁があれば」
「そうだね。アッラーのお導きがあれば」
如何にもサハラの人間らしい言葉だった。
「来てね。またね」
「わかりました」
こうして二人は別れた。ロミオはそのモデルガンを持って帰った。
その彼を皆が出迎える。そうしてしんみりとした調子になってる告げてきたのだった。
「いい買い物したわね」
「うん」
ロミオはまずはペリーヌの言葉に対して頷いた。
「満足しているよ」
「そうでしょうね。そのモデルガンよね」
「これ。お宝になるね」
ロミオはこうも言うのだった。
「これね。ずっと持っているから」
「そうするべきよ。それじゃあね」
「帰ろう」
ロミオから皆に告げた言葉だった。
「これでね。行こうか」
「ええ。それじゃあ」
また言うペリーヌだった。彼女が主にロミオと話す形になっている。
「何処に行こうかしら」
「僕の家なんてどうかな」

ここで自分の家でと提案するロミオだった。
「僕の家で皆で。どう?」
「あっ、そういえば」
「今までロミオの家に行ったことないわよね」
「確かにね」
皆このことに気付いたのだ。誰もロミオの家に行ったことはないのだ。ロミオにしろ実は自分の家に誰かを招いたことはないのである。
そのことに気付いたうえで。皆話をするのだった。
「それじゃあ」
「いいかしら」
「うん、いいよ」
ロミオとしてもいいということだった。
「それじゃあね。今から僕のお家にね」
「行きましょう」
「そうして楽しくね」
そんな話をしたうえで皆でそのロミオの家に行くのだった。サハラの男との話は終わり今度はロミオの家での話となるのだった。

何と相手は　　完

２００９・８・２０

第百五十一話　ロミオの御馳走その一

ロミオの御馳走

こうしてロミオの家に行くことになった一同。ところがここでルシエンが言うのだった。
「そういえばロミオってな」
「うん」
「ベネズエラ出身だったよな」
彼が言うのはロミオの祖国のことだった。
「そうだったよな」
「そうだけれど」
「ベネズエラか」
ルシエンはその国名を口にしながら考える顔を見せるのだった。
皆でそのロミオの家までの道を歩いている。その道は至ってごく普通の道であった。
「俺行ったことないんだよな」
「いい国だよ」
にこりと笑ってこう答えるロミオだった。
「とてもね」
「そうなの。いい国なの」
「とても明るくてね」
こうペリーヌにも答えるロミオだった。
「悩みも心配事も少ないとてもいい国だよ」
「何か如何にもラテンって感じね」
ペリーヌはそれを聞いてこう述べるのだった。
「本当にね」
「そうだよ。ベネズエラはラテンの国だよ」
ロミオも彼女に応えて上機嫌で言う。それは心からの言葉だった。
「ラテンでね。楽しくやってるよ」

「それはわかるわ」
「確かにね」
これはペリーヌだけでなく皆が頷くことだった。
「あんた見ていたらね」
「とてもね」
「太陽の国って言われることもあるから」
この時代は恒星ならどれも太陽と呼ぶ。言うまでもなく明るさの象徴でありまさにベネズエラは底抜けに明るい国ということである。
「だからね。そうなんだよ」
「その明るい国の人間の家か」
ルシエンはあらためて考える顔を見せる。
「どんな家なんだろうな。本当にな」
「家自体は別に何ともないよ」
ロミオはそれについてはこう述べるのだった。
「家はね。普通のアパートだよ」
「ああ、アパートなの」
「普通の」
「そうだよ。それは皆と同じだよ」
彼が言うにはであった。
「皆とね」
「アパートっていっても色々あるけれどね」
しかしペリーヌはここで言うのだった。
「普通のアパートとかそれこそお化け屋敷みたいなアパートとか」
「お化け屋敷って」
今のペリーヌの言葉には少しばかり微妙な顔になるロミオだった。
「別に幽霊が出たりしないよ」
「だから。例えよ」
ペリーヌはまたロミオに言葉を返した。
「それだけ不気味とかぼろぼろだっていうことよ」
こう話すのである。

「だからお化け屋敷なの」
「そういうこと」
そうだというのである。
「そういう意味で言ったんだけれど」
「けれど僕の家はちゃんとしてるよ」
ロミオはまたペリーヌに言葉を返した。
「ちゃんとね。しっかりとした奇麗な家だから」
「そうなの」
「そうだよ。ほら、見えてきたよ」
ここで前に出て来たそのアパートを指差すのだった。そこは三階建てのごく普通のアパートであった。
「ここが僕の家なんだ」
「ふうん。メゾンハルマゲドン」
「凄い名前のアパートだね」
「何でも管理人さんがユダヤ系でね」
ロミオはその名前にかなり唖然とする皆に話した。
「それでこの名前になったんだって」
「ユダヤ系だからハルマゲドンって」
「むしろユダヤ系というよりは」
皆の脳裏に連合最凶最悪の電波の名前が思い浮かんだのだった。
「シャバキっていうか」
「それよね」
「そう言えばあの人今何をしているんだ?」
ルシエンはそのことを皆に尋ねた。

第百五十一話　ロミオの御馳走その二

「それで。どうしているんだ？」
「さあ」
「まだ精神病院の中じゃないの？」
するとその皆からこうした返事が返ってきたのだった。
「精神状態は相変わらずらしいし」
「だから」
それでずっといるのではというのである。
「あれじゃあやっぱり出て来られないでしょ」
「自分から電波を生産して発散しているようなものだし」
電波を受信しているどころではないというのである。シャバキの域になればそれこそ自分から電波を作り出して拡散することができるというのである。
「ずっと隔離されてるんじゃない？」
「脱獄は試みてると思うけれど」
「脱獄か」
脱走では、と突っ込もうとしたがそれを途中で思い止まったルシエンだった。彼の場合はそれでも大して意味が変わらないと思ったからだ。
「どちらにしろ隔離されているのか」
「そうでしょ、やっぱり」
「ずっとあのままでしょ」
クールな返事が返ってきて続けている。
「出たって話聞かないし」
「出られる筈もないし」
「その方が世の為人の為だがな」
ルシエンもこのことはよくわかっているのだった。
「あれだけ無茶苦茶なことを言っていたらな」

「一万人委員会に影の世界政府に」
「それに宇宙規模の災害？」
「あと他の知的生命体？」
ネタは実に多いシャバキなのだった。
「それも超巨大ブラックホールとか惑星の異常衝突とか」
「何度人類は滅亡するのかしら」
「しかも同じ日に」
シャバキの主張の特徴としてある日に災害なり何なりが起こって人類が滅亡するというものがある。ただしその滅亡する要因がその時の話によって全く違うのである。
「しかもその日何度も過ぎてるけれど」
「あの人それに気付いていないのかしら」
「気付いていないのだろうな」
一言で言い切ったルシエンだった。
「本人はな」
「じゃあ自分の主張がおかしいってことに気付いていないのね」
「それも全然」
「つまりそれって」
そこから導き出される答えは一つだった。これしかなかった。
「頭がおかしいってことね」
「それも完全に」
「だから出られないのね」
一つの答えがそのまま次の答えまで導き出していた。その流れはさながら少し凝った数学の問題の如きであった。ただし中学校レベルの。
「まあ出て来なくてもいいけれど」
「時々シャバキスペシャルとかいってバラエティにまた出て来るでしょうし」
「病院から実況中継で」
バラエティであるが本人だけがそう思っていないのである。

「そういうことでね。あの人はね」
「いいわね」
「そうだな。それでだ」
ここでルシエンが話を戻しにかかった。ロミオに顔を向けて問う。
「それでロミオ」
「うん」
「何階だ？」
このメゾンハルマゲドンの何階に彼の部屋があるかということだった。
「何階にあるんだ？御前の家は」
「二階だよ」
こう答えるロミオだった。
「じゃあ今から行こうか」
「そうね。それじゃあ」
「行こうか」
こう言い合って二階の階段をあがる。だがここで彼等は気付いたのだった。
「ってちょっと」
「このアパートって」
皆目の前に広がる光景を見て言うのだった。
「横に広いの？」
「縦じゃなくて」
「そうだよ」
こう皆に答えるロミオだった。
「横に広いんだ、ここって」
「それはわかったけれど」
その話を聞いてもペリーヌは多少難しい顔になっていた。
「それでも随分極端ね」
「そうかな」
「そうよ。極端よ」

こう言うのである。
「ここまで横に広いのはかなり極端よ」
「まあ部屋の中は普通だから」
「部屋自体は普通なのかよ」
「そうなの」
「うん、普通だよ」
また言うロミオだった。

第百五十一話　ロミオの御馳走その三

「だからね。来てよ」
「最初からそのつもりだったしね」
「それじゃあ」
こうして皆はロミオに案内されてその部屋に入った。彼は自分の家のその扉のところまで来ると鍵を使った。そのうえで扉を開けて中に入るのだった。
「只今」
「どうも」
「お邪魔します」
皆挨拶をしたうえで中に入る。鍵を開けたところを見ると誰もいないことがわかっていてもだ。それでもこう挨拶をするのが礼儀だからだ。
確かに部屋には誰もいなかった。中自体はごく普通のアパートであり整理整頓もできていれば実に落ち着いてもいる。何もかもが整然としている。
「へえ、奇麗だね」
「落ち着いてるわね」
皆はそのロミオの家の中を見回して言う。
「これといっておかしなところはないし」
「いいお家じゃないの？」
「ほらね。中は普通でしょ」
にこりと笑って皆にこのことを言ってきたロミオだった。
「お家の中は」
「確かにね。横に広いアパートだけれど」
「中自体はね」
至って普通である、皆またこのことを述べた。
「テレビもパソコンもちゃんとあるし」

「おトイレもお風呂もあるんだ」
「全部揃ってるよ」
またにこりと笑って皆に話すロミオだった。いつもの穏やかな笑顔である。彼は確かにお金には五月蝿いが普段は温厚なのである。
「そういったものはね」
「じゃあ何の心配もなく」
「楽しくやってるのね」
「うん。ただね」
「ただ？」
皆ここであらためてロミオの話を聞いた。
「何かあるの？」
「一体何が？」
「一人暮らしなんだよね」
少し寂しげな微笑みになっていた。
「ここってね。実はね」
「ああ、そうだったね」
「あんた一人暮らしだったわね」
皆もこのことを思い出したのだった。彼には兄弟がいないのである。ここがこのクラスのメンバーの多くと違うことだった。
「御兄弟はあれ？祖国に？」
「そっちにおられるの？」
「そうなんだ。皆ね」
そうだというのである。やはり。
「向こうに残ってるんだ」
「何かそれって寂しいよね」
「そうね」
皆ここではじめてロミオに対して同情するものを感じた。これまで彼のその守銭奴ぶりと普段の明るさにそうしたことを感じることもなかったのである。
「一人ってやっぱり」

「寂しいからね」
「ペットでも買おうかな」
そのうえでこうしたことも言うロミオだった。
「何か」
「うん、それはいいと思うよ」
「私も」
皆このことは賛成して応えてきた。
「やっぱりペットがいるとね」
「全然違うわよ」
「そうだよね。それじゃあやっぱり」
彼等の言葉に応えてそのうえで考える顔になるロミオだった。
「何か飼おうかな」
「いいことね、それは」
ペリーヌもにこりと笑ってその考えに賛成してみせた。
「あんたにとってもね」
「僕にとってもなんだね」
「飼い方によっては動物達にもね」
続いて動物達も、と言うのだった。

第百五十一話　ロミオの御馳走その四

「いいことよ」
「動物達にもいいことなんだ」
「あくまで大切に飼えばだけれど」
この前提はまさに絶対条件だった。ペリーヌの考えでは。
「とてもいいことよ」
「そりゃやっぱり僕だって」
ロミオもその言葉に応えて述べた。
「あれだよ。動物をいじめたりなんかしないよ」
「確かにロミオはそんなことしないよね」
「そうよね」
皆このことはよくわかっていた。
「そういうことはしないわよね」
「そうだね」
「じゃあいいんじゃない？」
「ペット飼うの」
そして皆言うのだった。
「それも」
「ロミオにとってもいいし」
「問題は何を飼うかよ」
ペリーヌはこのことも話すのだった。
「どんなペットがいいかよ」
「どれかって？」
「だって。ペットって言っても色々よ」
あらためてこう彼に話すのだった。
「一杯いるから。もう星の数だけね」
「犬とか猫とか」
「その犬とか猫もよ」

ただ犬や猫というだけではないというのである。
「犬だって秋田犬もいればブルドッグもいるしダッグスフントもチャウチャウもいるじゃない」
「うん」
「本当に色々な種類がいるんだから」
まずは犬だけでもこれだけの種類があるということだった。
「猫だってヒマラヤンもいればアメリカンショートヘアもスフィンクスも」
「色々いるんだね」
「しかも犬や猫だけじゃないし」
ペットはまさに千差万別であった。
「兎もハムスターも種類沢山あるわよ」
「えっ、兎とかハムスターもなんだ」
「そうよ。犬や猫と同じ位ね」
種類があるというのである。そしてこれは嘘ではなかった。
「もうどれだけいるのかわからない位にね」
「そうだったんだ」
ここまで話を聞いただけでもお腹一杯といった感じのロミオだった。
「兎やハムスターまで」
「亀とか蛇とかイグアナとか」
「爬虫類もあるんだ」
「蛙とかアホロートルもあるわよ」
今度は両生類だった。
「本当に一杯いるけれどどれにするの？」
「そう言われると」
困ってしまうロミオだった。
「そこまで一杯いたらちょっとね」
「とりあえず考えてみて」
ペリーヌは今はこれ以上言わないことにしたのだった。

「もうちょっとね」
「うん、そうするよ」
ロミオも今は考えることを止めたのだった。
「それじゃあ」
「さて。それでね」
ペリーヌはここで話を変えてきた。
「お酒と食べ物とかは」
「あるよ」
今度はすっきりと答えることができたロミオだった。
「ちゃんとね」
「そう。それで何なの？」
「まずはね」
言いながら一旦家の奥に消えるロミオだった。そうして持って来たのは。
「どうぞ」
「おっ、黒ビール！？」
「いいわね」
「後はこれ」
歓声をあげる皆に続いて出してきたのはソーセージだった。
「他にはハムとか一杯あるよ」
「ドイツ風ってわけか」
「やるじゃない」
「あとワインにパスタも」
そういったものもあるというのだった。
「あるけれど」
「ドイツにイタリアか」
「何かエウロパっぽくない？」
「味は連合だよ」
しかしロミオは笑ってこう返すのだった。

第百五十一話　ロミオの御馳走その五

「ちゃんとね。連合のやつだから」
「そうだよね。やっぱり連合なんだし」
「味はね」
言ってみれば当然のことだった。何しろここは連合だからだ。連合の味なのも当然と言えば当然のことであった。エウロパではないのだから。
「それにさ」
「それに？」
「エウロパの味ってどんなのなのかな」
ロミオは首を傾げて言ったのだった。
「それって」
「そういえば確かに」
「エウロパの味ってどんなのかしら」
皆今のロミオの言葉に首を傾げさせてしまった。
「僕食べたことないけれど」
「私も」
「僕も」
「当然私もよ」
それは皆であった。やはり誰も食べたことがない。しかしここでセーラが言うのだった。
「エウロパの味はですね」
「あっ、セーラ」
「そういえばあんたって」
「はい」
気品のある笑みで皆に答える。言うまでもなく彼女はマウリアのマハラジャの娘である。連合の人間ではないのである。
「食べたことがあります」

「何処でなの？」
「エウロパで？」
「エウロパには行ったことはありませんが」
それはないというのであった。
「ですがマウリアの大使館であります」
「マウリアの大使館？」
「マウリアの大使館って？」
「マウリアにあるエウロパ大使館です」
それだというのである。
「マウリア中央政府の大使館もあれば各国の大使館もありますよ」
「そうだったな」
ここで気付いたのはルシエンだった。
「マウリアはエウロパと国交があったんだな」
「そうなんですよ」
「それなりに深い交流があります」
セーラの侍従であるベッキーとラメダスも述べてきた。
「それでエウロパ各国の大使館もありますし」
「本場の味そのままのエウロパのレストランもあります」
「本場の味っていうと」
「エウロパの味よね」
「そうだよね」
こうした話も為されるのだった。
「何か兵隊さん達のお話だと」
「量は少なくて味も薄い」
これはエウロパとの戦争で実際にエウロパに出征した連合軍の将兵達のコメントである。彼等はエウロパ各地でレストランを食い潰したりしてきたのである。
「そうらしいけれど」
「実際はどうなのかしら」
「味は薄いですよ」

セーラもそれは認めるのだった。
「エウロパ風のミルクやクリームの味が多いですし」
「ああ、やっぱり」
「それね」
皆セーラの今の話を聞いて納得した。エウロパといえばそうした味だという認識が彼等の中に、そしテ連合の中にあるのである。
「出ムグラスソースやトマトソースにしろ」
「味が薄いのね」
「そうなんだ」
「はい。エウロパの方々は素材を生かしていると仰います」
そうだというのである。
「それで味が薄いのです」
「何かそれって」
日本人の彰子がその話を聞いて述べた。
「日本のお料理でもそういうのあるし」
「ああ、古都風ね」
同じく日本人の七海が今の彰子の言葉に応えた。
「あれよね」
「そう。京風ね」
彰子はその古都風をこうも言うのだった。
「それだけれど」
「あれはそうらしいわね」
七海は首を少し捻ったうえでまた述べた。
「味は薄めで花鳥風月を重んじるって」
「花鳥風月？」
「っていうとやっぱり素材の味なんだね」
「そういうことになるわ」
皆にも答える七海だった。
「私は京風料理はあまりよくは知らないけれど」
「和食っていったら山葵とお醤油ってイメージがあるけれど」

「そういうのもあるの」
「そうなの。それみたいなものかしら」
あらためて言う七海だった。
「エウロパ料理っていうと」
「そうです。エウロパは階級社会ですね」
「ええ」
「貴族が威張ってる社会だね」
彼等の中の階級社会とはそうした社会なのである。貴族達が威張り散らし好き放題している。そうした歪んだ社会だと考えているのである。

第百五十一話　ロミオの御馳走その六

「その貴族が食べるものは」
「素材を生かしてるんだ」
「そうなのです。それがエウロパ料理です」
その本当のエウロパ料理を知っているセーラの言葉であった。
「カレーにしてもです」
「マウリアの料理ね」
「やはり味が全く違います」
カレーにしろそうというのである。
「連合のカレーとマウリアのカレーがそれぞれ全く違うようにです」
「何か全然違うみたいだね」
「そうね」
皆セーラの話を聞いているうちに大体わかってきたのだった。マウリアのカレーは皆セーラの家で食べたことがある。それはまさにマウリアのカレーであり連合のカレーではなかったのだ。完全に違うものであったのである。同じカレーとは思えない程にであったのだ。
「そもそもエウロパってお米あまり食べないのよね」
「お米は野菜だったっけ」
なお連合では米は麦と並ぶ主食である。
「パンとジャガイモが」
「お芋はこっちでもかなり食べるけれど」
「じゃあカレーなんかも」
「パンに付けて食べます」
ここでセーラは述べた。
「そうして食べます」
「そうだよね。やっぱりね」
「そうして食べるのね」

「本当に連合とエウロパでは料理は味も食べ方も何もかも違っています」
また言うセーラであった。
「そうなっているのです」
「じゃああれだね」
ここでロミオがまた言ってきた。
「パスタにしろソーセージにしろ」
「全く味が違います」
セーラは彼に対しても答えた。
「外見までもが」
「じゃあこのソーセージもパスタも連合の料理だね」
「そう考えられるべきです」
そうだというのであった。
「味が全く違うのですから。外見も」
「それ日本に来てよくわかったわ」
「僕も」
ここで言ったのは蝉玉とスターリングだった。
「日本のラーメン食べたらね」
「ハンバーガーも」
彼等が言うのはそうした料理のことだった。
「何か味が全然違うのよね」
「っていうかあれ別の料理だよ」
「そうかしら」
だが彰子はそれを言われてもあまり自覚はないといった顔であった。首を傾げさせてとても不思議そうな顔をして二人の話を聞いている。
「それって」
「それも何も脂っこさが全然違うし」
「色々入れてあるしね」
「脂っこさに色々って」

そう言われてもまだわからない顔をしている彰子だった。
「そんなに日本のラーメンって違うの」
「あっさりし過ぎてるのよ。日本らしいけれど」
「ハンバーガーのお肉も何か玉葱とか一杯入れてるし」
二人は同時にその彰子に話した。
「そこがね。もうね」
「全然違うんだよね」
「ああ、日本のパスタっていったら」
今度言ったのはロミオだった。彼も言うのであった。
「あれだよね。納豆とかタラコとか。それでお醤油使うんだよね」
「そうだけれど。おかしい？」
「納豆とパスタって合うの？」
そこがロミオにとっては納得できないのだった。話を聞いても今一つ以上にわからないといった顔である。今度はロミオがそうした顔になっている。
「その組み合わせって」
「結構合うけれど」
「そういうものかな」
ロミオは彼女の言葉を聞きながらパスタを食べている。それはトマトと大蒜、それにマッシュルームとセロリのフェットチーネである。
「納豆とパスタって」
「どうかなあ」
「何かわからないわよね」
まだ納豆パスタやそうしたものを食べていない面々は怪訝な顔でそのパスタを食べたりソーセージを食べたりしている。ジャガイモもだ。

第百五十一話　ロミオの御馳走その七

「日本人らしいけれど」
「正直不気味なものを感じるし」
「僕もね。ちょっとね」
今度はソーセージを食べるロミオだった。食べながら言うのだった。
「ソーセージに納豆とかは」
「ないよね」
「やっぱり」
「ちょっと遠慮したいね」
こう言うのである。
「その組み合わせはね」
「それでだけれど」
「この味ってやっぱり濃いね」
パスタやソーセージを食べながらの言葉である。
「どうにもね。味がはっきりしてるし」
「香辛料多め？」
「うん」
そうだと皆に答えるロミオだった。
「ベネズエラ風にね。特に唐辛子をね」
「そうか。パスタに赤が目立つと思ったら」
「やっぱりこの辛さは唐辛子ね」
「唐辛子と他にはコーヒー豆も使ってるよ」
「コーヒー！？」
「それもなの」
「隠し味にね」
使っているというのである。
「使ってるんだ」

「そうだったの」
「それを使って」
「うん」
また皆に答えるロミオだった。
「それでこの味なんだ」
「コーヒーはあまり感じないかな」
「言われてみればってやつ？」
皆料理をあらためて食べながら述べる。
「そんなに強くは」
「感じないわよね」
「あまり入れたら他の味が負けるからね」
だからだというのである。
「だからそれはね」
「ふうん、成程ね」
「あくまで隠し味なのね」
「そういうこと。メインは香辛料だよ」
「香辛料なの」
彰子はそのロミオの言葉を聞いて述べた。
「ベネズエラでよく使うのは」
「日本じゃやっぱりお醤油よね」
「それよね」
「うん、やっぱりそれよ」
彰子の今の返答は皆が予想したその通りであった。
「第一はやっぱりお醤油なのよ」
「あとは山葵や生姜もあるけれど」
それもあるが、ということだった。
「お醤油がないとやっぱりね」
「というと納豆スパやタラコスパにも」
「お醤油が」
「そうよ。使うわよ」

実にあっさりとした、当然といった返答だった。
「お醤油使うのよ。スパゲティにも」
「お醤油をスパゲティに」
「何ていうか」
「どうなのかしら」
皆口々に言う。
「合うのかな」
「どうかな」
また顔を見合わせて話すのだった。
「何ていうか味が想像できないし」
「納豆だけでもあれだし」
「どうなのかしら」
「まああれじゃないかな」
ロミオはパスタを食べながら述べた。
「食べてみないとわからないんじゃないかな」
「食べてみないと？」
「そうだよ。何でもそうじゃない」
彼は言うのであった。
「食べてみないと。話や外見だけじゃね」
「そうよね」
ロミオのその言葉に頷いたのはペリーヌだった。

第百五十一話　ロミオの御馳走その八

「確かにそれは言えるわね」
「そうだよね。一見デテモノに見えるものでも」
ロミオはまた言うのだった。
「食べてみるととても美味しいっていうのがあるし」
「ナマコとかホヤだったわね」
ペリーヌが話に出したのは日本で食べられる海の幸だった。これは彰子や七海に対しても言っている言葉だった。その日本人の彼女達にだ。
「あの外見でも食べるとね」
「美味しいよ」
「とてもね」
彰子と七海はすぐに彼女に答えた。
「もうお酒と凄く合うし」
「身体にもいいし」
「日本では昔から食べてるよ」
今度は家持が言ってきた。
「本当に昔からね」
「よくあんなの食べたよな」
「全くよ」
皆はそのことに心から驚いていた。
「普通食べようなんて思わないよね」
「ウニとかもそうよね。よく昔の日本人は食べたわ」
「しかもよ」
ペリーヌはさらに言ってきた。
「ほら、ナマコの内臓」
「コノワタね」
「あれも食べるじゃない」

彰子に応えながら述べるのだった。
「あれも美味しいのよね」
「そうよ。やっぱり昔から人気のある食べ物よ」
「結局そういうことなのよ」
ここで話をまとめにかかったペリーヌだった。
「外見はあれでも美味しいものって一杯あるし」
「じゃあタラコスパも」
「納豆スパも」
皆あらためて言うのであった。
「美味しいのかな」
「特に納豆スパ」
「そういえばさ」
またロミオが口を開いてきた。彼は今度はソーセージを食べている。その連合料理であるソーセージを食べながら皆に告げてきたのだ。
「このソーセージだって」
「ソーセージ？」
「それがどうしたの？」
「ソーセージだってさ。内臓に入れてるじゃない」
彼はソーセージのことを皆に話すのだった。
「挽肉とかをさ。腸に入れるよね」
「ええ」
「それがどうかしたの？」
「考えてみればこれも結構以上に気持ち悪いよ」
皆に言うことはこのことだった。
「だって。内臓の中に入れてるんだし」
「そういえばそうかな」
「意識したことなかったけれど」
皆ここで話すのだった。
「そういえば色々なもの中に入れるし」

「血とかも入れるし」
「やっぱりそのまま見たら何だこれってなるんじゃないかな」
ロミオはあらためて言う。
「何も知らない人がはじめて食べたら」
「そういうものかな」
「ソーセージも」
「つまり。こうすればいいのよ」
微笑んで言うペリーヌだった。
「今度皆で納豆スパ食べましょう」
「その納豆スパを」
「皆で」
「ええ。皆で食べましょう」
またその皆に話すのだった。
「作ってね」
「納豆スパを作るんだ」
「それで皆で食べるんだ」
「どうかしら」
あらためて皆に問うてきた。

第百五十一話　ロミオの御馳走その九

「それって」
「ううん、どうかな」
「かなり冒険よね」
「そうだよね」
皆の中には難色を見せる者もいた。
「納豆でパスタ」
「とりあえずどんなのか」
「チャレンジね」
「とにかく今はさ」
ロミオはまた横から彼等に対して言ってきた。
「ベネズエラ料理を食べていかない？」
「あっ、もう食べてるよ」６
「私も」
このことにはすぐに返す皆だった。
「まあ納豆のことは置いておいてね」
「今はこれね」
「そうそう。美味しいよね」
ロミオは味のことを皆に尋ねた。
「ベネズエラの料理も」
「そうね。特に」
「このトマトが」
皆はとりわけパスタのトマトを食べてそのうえで言うのだった。
「かなり味がいいっていうか」
「これもやっぱりベネズエラの？」
「そうだよ。ベネズエラ産だよ」
にこりと笑って皆にも述べる。
「いい味でしょ。本当に」

「うん、こんな美味しいトマト滅多にないよ」
「普通のトマトよりずっと美味しいけれど何でなの？」
「ベネズエラのカラキト星系のトマトでね」
そこの産だというのである。
「またそこのは特別美味しいんだ」
「カラキト星系？」
「っていうとベネズエラじゃ有名なの」
「お米とか麦とかがかなり採れるし」
ロミオの言葉を聞けばそこは穀倉地帯ということになる。星系そのものが穀倉地帯だというのも連合においてはよくある話である。
「こうしたトマトなんかも沢山採れるんだ」
「へえ、いい場所だね」
「お米や麦だけじゃなくてこんなに美味しいトマトまで採れるなんて」
「さあ、だからどんどん食べて」
ここぞとばかりにそのパスタを皆に勧めるのだった。
「このソーセージもカラキタ星系のだよ」
「それもなんだ」
「ソーセージも」
「カラキタ星系じゃ牛や豚も有名だから」
穀倉地帯ならば家畜の飼育も容易にできる。だからこそこうしたものもできるのである。肉となる家畜は穀物によって育てられるからである。
「それも食べてよ」
「カラキタって何か」
「いい場所みたいね」
「そうだね」
皆にもこのことはおおよそながらわかった。
「それじゃあそのカラキタの味」
「心ゆくまで楽しもうか」

「そうしましょう」
「勿論ビールやワインもね」
今度は酒のことも話すロミオだった。
「カラキタのだから」
「何でもカラキタ？」
「さっきからカラキタばかりだけれど」
「実はカラキタに親戚がいるんだ」
ロミオは少し照れ臭そうに種明かしもしてきた。実はそのカラキタ星系に親戚がいるというのである。これは皆はじめて聞くことだった。
「そうだったの」
「カラキタに親戚がいたの」
「何とまあ」
「驚いた？」
このことを話したうえで皆に問いもするロミオだった。
「実はそういうことだったんだけれど」
「まあはじめて聞いたけれど」
「それを聞いたらそうかなあって」
「思うけれどね」
それで終わったのだった。実際のところ有り得る話だったので聞いてみると成程、と頷いてそのうえで終わってしまう話なのだった。
「それで送ってもらうんだ」
「いいわね」
「正直羨ましいっていうか」
「いいことじゃない」
「叔母さんが向こうの農業と牧場やってる人の家に嫁いでね」
それで縁があるというのである。
「それで時々送ってくれるんだ」
「かなり多くない？」
「クラス全員かなり食べてるけれどまだあるし」

「実際のところ困ってたんだ」
今度は種明かしではなく真実を述べるのだった。
「どうしようかって」
「それじゃあ僕達が来たのって」
「助かったのね」
「正直ほっとしてるよ。アパートの皆におすそ分けしてもまだ余ってたし」
「こんなに余ってたの」
皆そのことを聞いてあらためて唖然となった。
「嘘みたいっていうか」
「嘘でしょ、それは」
「嘘じゃないんだよ、これが」
しかしロミオはまだ言うのだった。
「本当に皆来てくれないとどうなるかわかっていなかったよ」
「私達が来てよかったってことね」
「別に利用するつもりはなかったけれどね」
ペリーヌの言葉にも述べる。
「けれど助かったよ」
「そう。それならよかったわ」
ロミオの言葉に微笑んだのはペリーヌだけではなかった。何はともあれ彼等にとってはいい一日となった。美味いものを食べることができたのだから。

ロミオの御馳走　　完

２００９・８・２７

第百五十二話　納豆の魔術その一

納豆の魔術

皆先日ロミオの家で話したことを反芻していた。
「納豆ねえ」
「何ていうか」
「あれだよなあ」
「奇食ってやつ？」
納豆からのイメージなのは言うまでもない。
「それよね、やっぱり」
「納豆をスパゲティにかけて食べるっていうのが」
「想像できないし」
こうまで言うメンバーもいた。
「美味しいのかな」
「さあ」
「食べてみないとわからないものだよ」
その皆に対して言ったのは家持だった。
「それはね」
「けれど納豆よね」
「あの糸を引いてる」
「うん」
まさにそれだと。頷くことによって答えた家持だった。
「そうだよ。その納豆だよ」
「どうかしら」
「やっぱりねえ。奇食？」
「そうよね」
皆どうしてもそれとしか思えないのであった。
「何かほら、スウェーデンにあるっていう」
「ああ、あの伝説の缶詰ね」

「シュール何とかっていったっけ」
皆これは噂でしか知らない。エウロパのことは全てを知っているというわけにはいかないのだ。何故なら国交そのものがないからである。
「あれも凄いっていうけれど」
「納豆だって凄いわよね」
「腐った豆って」
これはよく言われることである。
「もう何ていうか」
「それ自体が有り得ないし」
「日本人って何であんなの食べるの？」
「腐ってないよ」
しかし家持はその腐っているということを否定するのだった。
「発酵させたんだよ」
「発酵！？」
「そうだよ。言うならヨーグルトと同じだよ」
それと同じだというのである。
「ヨーグルトとね」
「それを言ったらデザートになるけれど」
「それでも糸を引いてるのは」
皆とにかくそれが引っ掛かるのだった。糸を引いている、即ちそれは腐っている、食べられないと。どうしてもそう考えてしまうのである。
「ないわよねえ」
「日本人って本当に昔からあんなの食べてるんだ」
「あっさりして美味しいわよね」
「そうよね」
家持と同じ日本人である彰子と七海の言葉だ。
「健康にもいいし」
「お寿司にも入れられるし」

「お寿司にもって」
「そんなのもあるんだ」
「納豆巻きだ」
日本の兄弟国家である琉球人のダンの言葉だった。
「そうした寿司もある」
「納豆巻き」
「何かそれは御勘弁って感じだけれど」
「全く」
皆納豆巻きについてもこうした感情であった。
「というか食べられるの？本当に」
「食べてお腹壊さない？」
「昔から日本人のそれがわからねえんだよ」
ダンの琉球王国と同じく日本の兄弟国家であるアイヌ人のカムイがうんざりとした顔で言うのだった。

第百五十二話　納豆の魔術その二

「俺の国アイヌだろ」
「ああ」
「そうだけれど」
「昔からずっと日本と仲よくて交流も多いんだよ」
その付き合いの深さがまさに兄弟国家である。彼等と日本の絆はかなりのものなのである。これは琉球とアイヌもまた同じである。
「それで和食とかもよく食うんだけれどな」
「納豆は駄目？」
「アイヌ連邦じゃ人気ないの？」
「熊に羊にジャガイモに海の幸な」
どれもアイヌの特産品である。
「それは大好きだぜ。日本の刺身なんてもうな」
「けれど納豆はなんだ」
「それだけは」
「アイヌでも食わない奴は多いぜ」
「琉球もだ」
また言ってきたダンだった。
「俺も正直なところな」
「兄弟国家の人達にも敬遠されるなんて」
「納豆って一体」
何だということだった。
「どんなの食べ物なんだよ」
「日本人だけが食べる魔性の食べ物」
最早魔物扱いであった。
「それが納豆なんだ」
「何て恐ろしい」
「いや、本当に美味しいから」

皆がこう言っても家持の態度は変わらなかった。それも全く。
「一度食べてみたらわかるよ」
「その納豆を」
「納豆スパを」
「最初は納豆スパでなくてもいいから」
譲歩もする家持だった。
「オーソドックスに御飯にかけたりしてね」
「御飯にねえ」
「そうやって食べるんだ、納豆って」
実はそうしたことも一切知らなかったクラスの皆だった。
「どうやって食べるのかって」
「ずっと謎だったけれど」
「あれっ、知らなかったの？」
七海はその皆の言葉を聞いて意外といった顔になった。
「知ってると思っていたけれど」
「いや、知らないよ」
「ねえ」
しかしその皆はこう返すのだった。
「御飯にかけて食べるって」
「あんなのを」
「あんた達も知らなかったの？」
七海は今度は怪訝な顔でカムイとダンに問うた。
「兄弟国家なのに」
「だからよ。こっちじゃ納豆は食わねえんだろ」
「同じくだ」
カムイは少し怒ったように、ダンは憮然となって彼女に返した。
「あんなのよ。何で食うんだよ」
「琉球でも和食は普通に食べるがな」
それでもそれだけはというのである。
「タラコとかは食うけれどな」

「お茶漬けもな」
「何でそういうの食べて納豆は駄目なの？」
彰子にとってはそれが不思議でならなかった。怪我な顔で首を傾げるのだった。
「それがわからないけれど」
「いや、全然わからねえのはこっちだよ」
「糸を引いたものを口の中に入れるのはな」
どうしても抵抗があるというのだった。
「食ったら腹壊すだろ」
「如何にも身体に悪そうだ」
「最高にいいよ」
しかしここで家持はまた言うのである。
「もうね。糖尿病にも痛風にもいいし」
「血も奇麗になるのよ」
「何せ大豆だし」
彰子と七海も言う。しかし誰も信じてはいなかった。

第百五十二話　納豆の魔術その三

「本当かしら」
「さあ」
「日本人って時々訳のわからないことするし」
日本のこの評価はこの時代でも変わっていない。何処か抜けたところがあったり妙なものにこだわったりすると言われているのである。
「まあそれ考えたらね」
「あんなのも食べるのかしら」
「だから食べてみればわかるよ」
家持はこれの一点張りであった。
「是非ね」
「だから食べるのがどうも」
「抵抗あるっていうか」
「ねえ」
皆はこう言う。平行線であった。
「それがどうもなのよ」
「本当に腐ってるってしか思えないし」
「何て言うか」
「それじゃあ」
しかし家持はへこたれない。いつもの無表情と抑揚のない声でまた言ってきたのであった。
「その糸とかが見えないといいんだね」
「そうだけれど」
「何かあるの？それで」
「あるよ」
無表情のまま答えた言葉だった。
「ちゃんとね」

「何かしら」
「さあ」
「何かあるみたいだけれど」
皆ここで顔を見合わせた。
「何かな、それで」
「何かしてくれるの？」
「まずはこれを出して」
家持は何処からかミキサーを出してきた。料理用のミキサーである。
「そしてこの中に納豆を入れて」
「うん、入れたね」
「確かに」
蓋で閉じられたその納豆を出してミキサーの中に入れる。何個も何個も入れていく。
そのうえでミキサーのスイッチを入れる。忽ちのうちにその褐色のものが潰れていく。
「納豆は潰れてるけれど」
「それがどうかしたの？」
「続いてこれをね」
皆の言葉を聞きながら淡々とこなしていく家持だった。
次にその潰した納豆をボールに入れて醤油を入れて掻き混ぜる。
すると今度は醤油色にもなった。
「お醤油で味付けするんだ」
「そこは和食らしいわね」
「それでこれにかけて」
今度出してきたのは丼に入れたうどんだった。見れば冷凍うどんを茹でたものである。既に少しだけつゆも入っていてその黒さも見える。
「おうどん」
「何時の間に」

「今茹でたんだ」
今回も素っ気無く答える家持だった。
「それでこの納豆をおうどんの上にかけて」
「それで食べるんだ」
「刻んだ海苔も上に乗せて」
「どうぞ」
早速皆にその納豆かけうどんを差し出してきた。
「人数分あるから」
「だからそんなの何時の間に」
「それも不思議なんだけれど」
「気にしないでいいから」
そんな奇妙なことも家持にとっては何でもないことであった。
「食べて」
「納豆うどんってわけだよね、これって」
「そうよね」
皆その丼の中のうどんを見て言う。それは確かに色こそ少し違うがそう見えるものだった。
「山かけうどんに見えないこともないけれど」
「どうなのかしら」
「そう考えてもらっていいよ」
ここでまた言う家持だった。
「栄養が高いのは同じだし」
「しかもお腹も膨れてカロリーも低いから」
「かなりいいのよ」
七海と彰子も笑顔で皆に告げるのだった。

第百五十二話　納豆の魔術その四

「だから食べてよ」
「騙されたと思って」
「そうする？」
「そうしようかしら」
ここで皆あらためて顔を見合わせる。怪訝な顔になっている。
「ここはいっそのこと」
「覚悟を決めてね」
こう言いながらようやく箸を手に取ってその納豆かけうどんを食べてみる。うどんの麺に細かく潰された納豆が付いている。それをすするのだった。
実際に口の中に入れた。その味は。
「えっ、これって」
「美味しい！？」
「そうよね」
皆驚いた顔で見合うことになった。
「味自体はあっさりしてない？」
「癖もないし」
「確かに匂いはきつけれど」
「いける！？」
驚いた顔での言葉が続く。
「思った以上に」
「そうよね、これって」
「本当に意外っていうか」
「ほらね」
ここでまた言ってきた家持だった。
「納豆って美味しいでしょ」
「確かに」

「言われてみれば」
皆その彼の言葉に頷くことになった。
「こんなに癖がないなんて」
「何でなの？」
「糸引いてるのに」
何処までもこのことが言われるのだった。
「それで何でこんなに癖がないのよ」
「どうして？」
「それが納豆なのよ」
七海は誇らしげに笑って言い切るのだった。
「納豆はね。実はあっさりとしてるのよ」
「そうだったの」
「こんなに食べやすいなんて」
「嘘みたい」
「わかったらどんどん食べて」
見れば納豆もうどんもさらに出て来ていた。
「まだまだあるから」
「確かに。山かけうどんみたい」
「どんどん入るし」
「お蕎麦でもいけるかしら」
「いけるわよ」
今度は彰子が勧めてきたのであった。
「お蕎麦でもね」
「そうなんだ」
「お蕎麦でも」
「おうどんでもいけるのはお蕎麦でもいけるわよ」
にこりと笑って皆にこう告げる彰子だった。
「どちらでもね」
「じゃあよかったらそれも」
「納豆かけそばも」

「はい」
早速その蕎麦が丼に入れられて出されるのだった。動きが実に早い。
「さあ、食べて」
「ううむ、これも」
「いけるわね」
「確かに」
皆その蕎麦も食べてみて言うのだった。
「美味しい」
「まさかこんなにいけるなんて」
「どう?美味しいよね」
見れば家持も食べている。そのうどんも蕎麦も。表情こそ全くないがそれでも食べる量はかなりのものだった。どちらも何杯も食べている。
「納豆って」
「確かに」
「外見や匂いはともかく味は癖がないし」
「言うだけはあるわね」
皆も食べてみてそのうえで認めるのだった。舌は誤魔化せない。

第百五十二話　納豆の魔術その五

「それじゃあもう一杯いいかな」
「もう何杯も食べてるけれど」
「いいよ」
表情はそのままで答える家持だった。
「おうどんでもおそばでも」
「日本人のソウルフードの一つ」
「言うだけはあるのね」
「さて、それでどうかしら」
今度言ったのはペリーヌだった。
「納豆スパは。花氏の中心の」
「納豆スパ」
「どうかな」
皆納豆スパになると微妙な顔になってしまったのだった。
「日本とイタリア」
「この組み合わせって」
「意外と合うってことは」
「ないわよねえ」
こう言い合うしかないことだった。誰もが。
「大体オリーブとお醤油ってどう？」
「合わない合わない」
「そうよね」
またこう言い合う面々だった。
「お寿司にオリーブかけてもね」
「何か違うじゃない」
和食といえば寿司である。だからそれにイタリア料理といえばのオリーブが出て来て話をするのだった。これはあながち間違いではなかった。

「というか見るからに」
「水と油」
まさしくこれなのだった。
「お酢とオリーブなら合うけれど」
「ちょっとねえ」
「それだよ」
しかし家持はここでまた言うのであった。
「それだよ、お酢とオリーブ」
「えっ、まさか」
「スパゲティにお酢！？」
「和食ってそんなことするの！？」
「しないよ」
しかしそのことは否定する家持だった。
「お酢はスパゲティにかけないじゃない」
「じゃあどうして」
「そんなこと言うの？」
「水と油は駄目だけれどお酢と油は合うじゃない」
要するにこのことを言いたい家持なのだった。
「それはね」
「？やっぱり意味がわからないよね」
「そうだよね」
また話をする彼等だった。話をしても中々わからないといった顔を見せていた。
「もう何が何なのか」
「どういうことなの？」
「だからあれなんだ」
しかし家持の言葉は続く。皆がかなり意味不明な様子になっているがそれでもだった。それでも彼は話をするのであった。
「お酢は納豆で」
「納豆？」

「納豆がお酢なの」
皆で話すのである。そういうように。
「そしてスパゲティがオリーブ」
「そういうことね」
「それでもよ」
さらに話す皆だった。意味がわかりかねるまま。
「何がもう何なのか」
「意味不明なままよ」
「だから何？」
「どういうことなんだろう」
「合うんだ、これが」
彼が言いたいのはこういうことなのだった。
「納豆にスパゲティはね」
「このお蕎麦みたいに？」
「おうどんみたいに」
「そうだよ。見ていて」
語る家持だった。
「それをこれから見てもらって食べてもらうから」
「美味しかったらいいけれど」
「韓国じゃキムチパスタってあるけれどな」
洪童はこんなことまで言うのだった。

第百五十二話　納豆の魔術その六

「キムチな」
「それもあれ？」
「何かゲテモノっぽいけれど」
「おい、キムチはゲテモノじゃないぞ」
今度は洪童が言うのだった。
「それどころか栄養もある素晴らしい食べ物なんだぞ」
「それはよく聞くけれど」
「キムチパスタも」
「想像できないよ」
「そんなの食べてみないとわからないだろっ」
家持と違っていささか短気な家持だった。話をしていてもすぐに声を荒くさせる。
「そうじゃないか、キムチパスタだってな」
「というと納豆と同じね」
「そうだね」
皆そのことはわかるのだった。
「それじゃあ納豆パスタも？」
「食べるの？」
「嫌でも食わせてやる」
ムキにさえなる洪童だった。
「絶対にな」
「絶対か」
「逃がさないってわけね」
「俺は誰であろうが絶対に逃がさない」
何故か刑事もののドラマみたいな言葉になっている洪童だった。
「だから食わせてやるからな」
「納豆とキムチか」

「匂いの強いのばかり」
「しかもキムチって」
その話もする彼等だった。
「どうなのかしらね」
「癖の強い味だけれど」
「まあこうなったらあれね」
ペリーヌは腕を組みながらさらに話す。
「両方共食べる？」
「両方共食べるの？」
「納豆パスタもキムチスパも」
皆は怪訝な顔でペリーヌに問い返すのだった。
「まさかと思うけれど」
「両方って」
「結局のところ食べるしかないじゃない」
ペリーヌは目を少ししばたかせたうえでまた皆に述べた。
「そうでしょう？どんな味かどうかを確かめる為にはね」
「そう。食べるしかないの」
「やっぱり」
皆で話すのだった。そういったふうにだ。
「納豆もキムチも」
「両方共」
「だから美味しいよ」
「キムチは誰に対しても誇れる食べ物だ」
家持と洪童が珍しく歩調を合わせてきていた。普段は完全にマイペースの家持と暴れまわる感じの洪童は一緒になることはないからだ。
「納豆さっき食べたじゃない」
「皆キムチいつも食べてるだろ？」
「それはそうだけれど」
「まあその通りだけれど」

皆納豆は今食べたしそのうえキムチはいつもと言っていい程食べている。キムチは連合全体でわりかし以上にポピュラーな食べ物になっているのだ。

「じゃあ両方ね」

「どっちも食べるの」

「それが一番だと思うわ」

こう言いはするペリーヌも今一つ進まないような顔である。

「ここはね」

「イタリアに日本と韓国を入れる」

「もう何だか」

イタリアは言うまでもなくエウロパである。だから実際はあまり知らないところもある。だが日本と韓国が誰がどう見ても連合だ。しかもどちらもそれぞれかなり強い個性を持っている国々である。

「納豆とキムチを合わせたら」

「どうなのかしら」

こんな話まで出て来ていた。

「まあここまで来たらって感じになってきたし」

「それじゃあね」

「うん、今日はもうおうどんとお蕎麦食べたし」

何時の間にか仕切る家持だった。

「明日食べよう」

「明日かなあ」

「どうなるのかしら」

殆どの人間にはこれからのことは想像しかねるものだった。果たしてどうなってしまうのか、それは誰にもわからないものだった。

納豆の魔術　　完

2009.9.1

第百五十三話　二つのパスタその一

二つのパスタ

日が経つのは実に早い。もうその翌日になってしまった。

「今日ね」

「そうだね」

皆学校に来てまずこう言い合った。

「納豆にキムチのパスタ」

「どんな感じなのかしら」

「さあ」

やはり誰にも想像もできないものだった。誰もが腕を組んで悩んだ顔になっている。

「納豆は美味しいってわかったけれど」

「キムチはよく知ってるし」

韓国人は常にキムチを食べないと元気が出ないとまで言われている。その為世界のあちこちにわざわざキムチを持って行ったりもしている。このことは時代が変わろうとも変わりはしないことの一つである。キムチがなければ韓国人は生きることができないのではとまで言われている。だから世界のあちこちにキムチが置かれるようになってしまったのである。

「それでも。納豆にパスタ」

「キムチにパスタ」

「どうなのかしら」

「美味しいとはあまり」

実際に思えないものがあるのだった。

「けれど運命の今日」

「時間からは逃げられないからね」

その通りだった。時間を止めることはこの時代でも不可能なことなのだ。なおこの時代でも今だに続いているネコ型ロボットの漫画

での技術の殆どはこの時代でも実現されていない。一説ではあのロボットの道具はどれも錬金術か魔術ではないかとさえ言われている。
「だから。ちょっと」
「覚悟するしかないわね」
結局はそうなのだった。食べるしかなかった。その納豆とキムチのそれぞれのパスタをである。それしか選択肢はないのだった・
「さて、どうなのか」
「どんな味かしら」
「何かこれマカロニ野郎に食べさせたいな」
「全く」
こうした底意地の悪い話まで出ていた。マカロニ野郎とは連合におけるイタリア人への侮蔑した言葉である。連合内でもこの表現はよく使われていてそれぞれお握り、ハンバーガー、ラーメン、ピロシキ、シェラスコ、タコス、キムチ、トムヤンクン等と無闇に豊富である。ただそれぞれの国の食べ物を冠しただけであるがそれでも使われている。差別用語というよりは愛称に近いという一面もある。
「あの連中に食わせてみたいよ」
「どんな顔するかしら」
「けれど日本人は美味しいっていうし」
「韓国人も」
彼等はそれぞれ言うのである。
「けれど韓国人ってさ」
「洪童もそうだけれど」
洪童は言わずと知れた韓国人である。自分でそのことを強く誇りにしているまでである。
「キムチ何にでも入れるし」
「本当に何でも入れるからね」
「ラーメンはまずわかるけれど」
ラーメンやうどん、蕎麦、ハンバーガーにまで入れるのが韓国人なのだ。

「それでもパスタはないでしょ」
「オリーブにキムチ!?」
誰もが首を捻る類のものだった。
「組み合わせとして想定の範囲外だよね」
「オリーブもよく使うけれど」
「想像しにくくてとても」
こんな話をしていた。その間にも時間は経ち遂に。その二つのパスタを食べる時が来たのだった。
「さて、それじゃあさ」
「早速作るからな」
「もうなの」
「動きが何か」
皆が言っている側から早速作りはじめていた。湯もぐつぐつと茹でだしている。しかも納豆やキムチも既に用意されてもいた。
それを見て実際に作りだされようとしているのが誰の目から見ても明らかだった。
「さて、それじゃあ」
「食べる?」
「そうね」
皆覚悟を決めるしかなかった。後は待つだけだった。
待つ時間がかなり長い。その間皆困った顔をしていた。
「待つ間が何か」
「こんなに長いなんて」
「何でなの?」
その待つ間も言い合うが困り果てた顔である。
「食べたくないっていうか」
「恐いっていうか」
「だからね」
やはりこれであった。皆恐いのである。食べるのが。
しかし言っている側からもうパスタが茹で終わった。後はもう勢

いのままだ。
「さて、できたね」
「そうね」
それを見てまた言い合う皆だった。
「お酒もあるけれど」
「ワインじゃないね」
「あれって」
見ればそれはビールであった。家持も洪童もビールを用意していた。それが何なのかというと飲む以外に存在理由がないのは明白だった。

第百五十三話　二つのパスタその二

「ビールなのね」
「納豆にワイン合うと思う？」
「いいえ、全然」
「それはないわね」
皆それは否定した。それにもう一方もだった。
「キムチにワインっていうのもね」
「ないわね」
これもだった。やはり合わないのである。
「じゃあやっぱりビールかあ」
「そこは考えてるみたいね」
「そうね」
そこは一応納得できた。しかそれは完全ではなかった。むしろこれで納得できる方がおかしいというのが現状だったそれは有り得なかった。
「けれど油は何かしら」
「そうそう、それそれ」
「納豆にオリーブ」
「キムチにオリーブ」
どちらにしろオリーブである。やはりパスタにはオリーブである。
「どっちでも何か」
「無理？っていうか」
「有り得ないわよ」
何度言ってもそれはどうにもならなかった。問題外だった。
「言っている間にもできたし」
「待ったなしね」
「ここまで来たら」
既にそれぞれの前に二種類のパスタが出される。そしてそれを食

べることになった。まずはそれぞれの国の習慣に従ってすることは。
「いただきます」
「いただきます」
これを言うのだった。そうしてからフォークを手に取る。そのうえでパスタを恐る恐る口の中に入れていく。するとその味は。
「あれっ！？」
「美味しい！？」
「意外と」
まず納豆パスタを見て言うのだった。
「美味しいよね」
「あっさりしてるし」
「しかもこれって」
「オリーブじゃないわ」
油もそれではなかったのだった。しっかりと。
「これはごま油？」
「うん、それだね」
「それね」
皆食べてから話すのだった。それも問題なかった。
「美味しい？」
「案外悪くないかも」
「それにお醤油も効いてるし」
これは欠かせなかった。やはり和風だからだ。
「お醤油もいけるし」
「食べやすいし」
「いけるわ」
「どうかな」
皆の話を聞きながらそのうえで問うてきた家持だった。
「納豆パスタ。実際にどう？」
「美味しい」
「少なくともまずくない」

「そうね」
皆家持に対してもその感想を素直に述べた。
「食べられる」
「全然わけじゃ」
「言った通りでしょ」
無表情は今も同じであった。やはり家持の表情はない。
「悪くないよね」
「ええ、確かに」
「管の言った通りだね」
皆さらに食べる。また食べてみたが確かに悪くないものだった。
「普段トマトとかクリームとかバターのパスタばかりだけれど」
「こういうのも悪くないわね」
「意外性もあって」
それもあるのだった。
「納豆パスタは合格ね」
「うん、それでいいね」
「いけるわ」
納豆パスタには合格が出た。食べられるということだった。
「納豆パスタよし」
「それで次はいよいよ」
「キムチパスタね」
「これは最高だぜ」
洪童がここでまた皆に告げる。

第百五十三話　二つのパスタその三

「もうな。一回食べたらわかるからな」
「美味しくてもまずくてもわかるよね」
「そうね」
セドリックの密かにふんだんに込められた毒の言葉に皆頷く。
「どっちにしろね」
「確かに」
「何につけても」
「食べればそれで」
「じゃあ食べてくれよ」
しかし洪童にはそうした毒は通用しない。至って平気な顔で皆に返す。
「キムチパスタな」
「とにかく食べるか」
「嫌味は抜きにして」
皆もこれでようやく食べはじめた。そうして本当に口の中に入れてみると。
「あれっ！？これも思ったより」
「食べられる！？」
「想像していたのよりましだったわ」
皆実際に口の中に入れるとすぐに意外な顔になった。
「この味も何か」
「思った以上に」
「だからキムチは完璧なんだよ」
洪童はまずキムチを褒めるのだった。そのキムチをである。
「何に入れても最高に合うんだよ」
「最高か。これって」
「確かに思った以上に合うし」

「わかったら遠慮せずに食えよ」
そうして皆にさらに食べるように勧めるのだった。
「そんなの全然いらないからな」
「了解」
「わかってるわよ」
皆彼のその言葉を受けたうえで本格的に食べはじめる。気付けばそのキムチパスタも納豆パスタも全て食べ終えてしまった。
「話を聞いた時は何だそりゃって思ってけれど」
「見ても有り得ないと思ったけれど」
食べ終えた彼等の感想である。
「いざ食べてみると案外」
「食べられるわね」
「確かに」
「千年以上前からある食べ物だよ」
「まずかったら消えるだろ?千年の間に」
家持と洪童はその味について話す。
「それなりに美味しいから残ってるんだよ」
「キムチパスタだってな」
「納豆もキムチもかなり恐ろしい外見だけれどね」
「最初見たら」
どうしてもその糸を引いた姿と赤い色が抵抗を与えるのだった。
納豆にしろキムチにしろ他の国の人間から見るとまさにそうなのだった。
「それでも食べてみたら」
「美味しいけれど」
「合うようにするのが料理だしね」
「これでもアレンジもしたしな」
二人はこうした内幕もここで話した。
「全部食べてもらって何よりだよ」
「もっとも皆パスタに入れるより他のに入れた方がいいみたいだな」

「そこのところはどうかな」
「やっぱりうどんやラーメンに入れる方が合うか？」
「そうだね」
セドリックが彼等の問いに最初に答えた。
「納豆はやっぱりおうどんだよね」
「それかおそばね」
「そうね」
皆もその彼の言葉に続く。やはり納豆には和食だった。皆は前に食べたその納豆うどんに納豆そばの味をはっきり覚えていたのだ。
「それとキムチは辛いラーメンに」
「韓国風ラーメンか」
「それか冷麺ね」
どちらも韓国を代表する麺類である。韓国のラーメンはかなり辛く熱いことで有名である。中国や日本のラーメンとは全く違うのだ。なおアメリカにもラーメンがあるがこちらもかなり違う。殆どヌードルといっていいようなものである。国によってラーメンも違うのだ。
「そういうのが一番合うわね」
「それも抜群に」
「まあそうだろうな」
洪童も韓国風ラーメンや冷麺と聞くと頷く。

第百五十三話　二つのパスタその四

「特に冷麺はそうだな」
「冷麺好き？」
「洪童もやっぱり」
「当たり前だろ。冷麺が嫌いな韓国人がいるか」
こうまで言い切るのだった。
「いない、絶対にな」
「おそば食べられない日本人はいるけれど」
「ねえ」
彰子と七海はそんな話をした。
「蕎麦アレルギーでね」
「どうしてもね」
「それは仕方ないけれど冷麺嫌いな奴は韓国人じゃない」
洪童はさらに言うのであった。
「いたら俺が矯正してやる。何があってもな」
「あんたの妹さんはどうなの？そこんところ」
「ああ、春香ちゃん」
「そうよね」
皆それを聞いて話すのだった。
「あの娘はどうなの？」
「冷麺食べるよね」
「当たり前だろ。いつも一緒に食ってるからな」
ここでも当然といった口調の洪童だった。
「ただしな」
「ただし？」
「何かあるの？」
「あいつの食べ方は最悪だ」
何故かむっとした顔になる洪童だった。

「全くな」
「最悪って」
「冷麺の食べ方で？」
「ああ、そうだよ」
言葉まで少し荒いものになってきていた。不機嫌なのはそれを見ても明らかだった。
「本当にな。あれはないぜ」
「あれはないって」
「何でそんなに怒るのよ」
「冷麺なんて」
ここで皆その冷麺についてとりあえず思い出しながら言った。
「あれじゃない。食べ方なんて」
「お箸で取って食べる」
「それしかないよね」
「ねえ」
「普通はそうして食べるよな」
だが洪童の言葉はまだ荒いままだった。
「そうやって。箸とスプーンだけれでな」
「ああ、スプーンもあったね」
「そうね」
皆ここで冷麺を食べる時にもう一つ使うものを思い出した。韓国料理というものはお箸だけでなくスプーンも使ってそのうえで食べるものなのだ。
「それも使って食べるけれど」
「何か他に使ったっけ？」
「まさかと思うけれど手は使わないわよね」
皆流石にそれはないと考えた。
「キムチたっぷりなのにそんな中に手を入れたら」
「滲みるし匂いもするし」
「それはないよね」

「手を使った方がましだ」
彼はこうも言うのだった。
「本当にな」
「手を使って食べる方がまし！？」
「どういうこと？」
皆それを聞いてさらに首を傾げさせてしまった。
「それって多分韓国でも最低の食べ方だと思うけれど」
「そこんところどうなの？」
「そんなことをする奴は絶対にいない」
冷麺を手でそのまま食べるという方法はまさに全否定だった。
「人間だったらな」
「人間だったらって」
「じゃあどんな食べ方よ」
「例えて言うならだ」
洪童の忌々しさに満ちた言葉はさらに続く。

第百五十三話　二つのパスタその五

「味噌汁やスープを飲んだ後の味噌汁茶碗や皿があるよな」
「ええ」
「それはね」
「そこに痰を吐く」
　このことを言うのであった。
「それと同じ位最悪だ」
「っていうかそれ人間として最低だから」
「幾ら何でも食べた後の食器に痰吐くって人間のすることじゃないわよ」
「普通の人はしないわよ」
「そんなことしたら僕の国じゃ」
「私の国でも」
　皆その食べ終えた食器の中に痰を吐くなどという行為がどこまで下劣な行為であるかは当然ながらわかった。わからない筈がなかった。
「やったらすぐに親にぶん殴られるよ」
「普通より多少駄目な親でもそうするわね」
「それは流石にね」
「それと同じ位酷いことをやるんだ、あいつは」
「あいつあいつって」
「春香ちゃんよね」
　皆ここでその春香について考えだした。彼女のことは皆よく知っていた。とりあえず悪い印象はない。むしろかなりいい印象を持っている。
「奇麗だしおしとやかだし」
「気品もあって礼儀正しい」
「しかも優雅で頭もいい」

いいことばかり思い浮かぶ。
「そんな娘じゃない」
「あんたいつも自慢してるじゃない」
「そんな娘が一体何やるのよ」
「鋏を使う」
彼はことさら忌々しげに言ってみせた。
「鋏をな。冷麺を食う時にな」
「鋏！？」
「何でそこに鋏が出るの？」
皆それを聞いて首を傾げるしかなかった。
「鋏って」
「冷麺食べる時にそんなの使うの？」
「冷麺はコシがあるな」
彼はこのことについて話した。
「それもかなりな」
「知らない人はいないと思うよね」
「ねえ」
皆それを聞いてまずは当然だといった顔になった。
「冷麺のコシはね」
「っていうかあのコシこそが冷麺だからね」
「そうだ、あのコシなんだよ」
洪童もここで言葉をさらに強くさせる。絶対であるといったようにだ。
「あのコシを無視して鋏で切って食べるんだ」
「へえ、そういう食べ方もあるんだ」
「はじめて知ったわ」
皆それを聞いてまずは目をしばたかせたり丸くさせた。
「鋏で途中を切って食べるの」
「そういう食べ方あったんだ」
「実は昔からあるんだけれどな」

洪童はこのことも話した。
「韓国じゃそうやって食べることもあったんだ、昔からな」
「ああ、あんまりにもコシがあるからだよね」
「それでよね」
「それが許せないんだよ」
あくまでこう主張する洪童だった。
「なあ、そう思うだろ？」
「僕達に同意を求められても」
「ちょっと」
皆同意を求められてもそれでもだった。
「だってさ。別に他人の食べ方なんて」
「滅茶苦茶無作法でもない限り」
別にどうでもいい。そういうことだった。
「だから。流石に食べ終わった食器の中に痰吐くとかじゃないし」
「流石にそういうのは論外だけれど」
マナーとかそういうこと以前の話であるというのだ。
「冷麺に鋏使うのは」
「別にね」
「ただでさえコシが半端じゃないのに」
「冷麺は韓国人のソウルフードなんだよ」
しかし洪童はあくまで引こうとしないのだった。
「だからおろそかにはできないんだよ」
「できないから駄目なの」
「何かよくわからないけれど」
「焼肉とプルコギとビビンバ、チゲ鍋、チヂミ、何よりもキムチはな」
「多いね」
セドリックがさりげなく今洪童が言葉に出した韓国料理について述べた。

第百五十三話　二つのパスタその六

「それに冷麺も。どれも正しい食べ方があるんだよ」
「それはわかったけれど」
「殆ど煮るか焼く料理じゃない」
「っていうか冷麺以外」
実はそうなのだった。韓国料理といえばまさに煮るか焼くかである。これはこの時代でも同じでその二つの料理法が異常に多いのである。
「おまけにどれも辛いし」
「これは冷麺だってそうだし」
「その冷麺の食べ方が許せないんだよ」
なおも言う洪童だった。
「何度も言うが鋏で途中で切ってそれで食べるのはな」
「じゃあさ、洪童」
「あんたに聞きたいけれど」
皆頑強に主張し続ける彼に対して問うた。
「冷麺の正しい食べ方って」
「どんなのなの？」
「そうだよね。それだよね」
セドリックもそんな皆の言葉に頷いて応える。
「鋏を使うのが間違ってるっていうんなら正しい食べ方があるみたいだけれど」
「それって一体」
「どんなのなの？」
「決まってるだろ」
皆の問いにこれまたそれだけでは答えになっていない答えを返すのだった。
「それはな。普通に箸とスプーンを使ってな」

「それで食べるの」
「麺は噛み切るんだよ」
彼は断言した。
「自分の歯と顎でな。そのとことんまで長い麺を噛み切ってな」
「それで食べるっていうのね」
「オーソドックスに」
「それしかないだろ。違うか？」
問うているが異論を許さない口調だった。
「もうな。冷麺っていったらな」
「何かかなり強硬な主張だけれど」
「言っていることは正攻法ね」
「っていうかオーソドックスじゃない」
皆彼の話を聞いて言った。
「てっきり特別な食べ方があるのかって思ったけれど」
「ごく普通の食べ方じゃない」
「だからなんだよ」
しかし洪童はだからこそだとここでも主張するのだった。
「そうじゃなきゃ意味がないんだよ、冷麺を食べるのはな」
「じゃあ掻き混ぜるのは？」
「後でキムチなりコチュジャンをたっぷり入れるのは？」
コチュジャンとは韓国の調味料である。所謂味噌であるが韓国らしく唐辛子がふんだんに使われており真っ赤になっているのである。
「それはいいの？」
「どうなの、そこは」
「それは一向に構わないんだよ」
急に寛容になる洪童だった。
「韓国料理はとにかく掻き混ぜるんだよ」
「ああ、それはね」
「知ってるよ」
この学園にも韓国人は多い。彼等は常に熱く辛いものを徹底的に

掻き混ぜて食べる。それはとりわけビビンバやクッパ等を食べる時によく行う。

「それをしないと駄目なんだよ」

「じゃあ掻き混ぜるのはいいと」

「もうどれだけやっても」

「いいんだよ、それが美味いんだから」

今度はこんなことを言うのだった。

「掻き混ぜたのがな」

「じゃあキムチやコチュジャンを途中から入れるのも」

「いいんだ」

「どんどん入れるべし」

こうだというのである。

「好きなだけな」

「それで鋏は駄目」

「何かねえ」

「それが法律なんだよ」

勝手に法律にしてしまうのだった。

第百五十三話　二つのパスタその七

「誰であろうとそれだけはやっちゃいけないんだよ」
「そこまで言うって」
「もう何が何だか」
「春香の奴、見ていろよ」
メラメラと身体を燃え上がらせてさえいた。
「何時か絶対に止めてやるからな」
「限りなくどうでもいいわね」
「全く。好きにしたら？」
「おい、何言ってるんだよ」
しかしここで洪童は皆に対して言うのだった。
「皆にも協力してもらうからな」
「えっ！？」
「何で！？」
皆今の彼の言葉に思わず目が点になってしまった。
「何で僕達が冷麺の話に？」
「協力しないといけないの？」
「当たり前だろ。聞いたらもうそれで決まりだろ」
「いや、っていうか話がわからないんだけれど」
「話聞いたらそれで終わりって」
「敵は本能寺にありだ」
的外れも甚だしい日本の言葉であった。有名な本能寺の変において明智光秀が織田信長を討つ時に言った言葉だが今では諺にもなっている。本当の敵はそこにこそいるという意味でありこの時代もそうした意味で広く使われている諺なのである。
「だからだよ」
「余計に意味がわからないけれど」
「そうよねえ」

「あんたひょっとして馬鹿？」
「馬鹿！？成績は普通だぜ」
馬鹿という言葉にはこう返す洪童だった。
「ちゃんと学校の成績だけで八条大学に入学できるけれどな」
「いや、学校の成績じゃなくて」
「人間としてなのよ」
そういう意味でというのであった。なおこのクラスにはテンボやジャッキー、フランツといった学校の成績もダントツならば人間としてもダントツの人間がいる。
「何か今の言葉聞いていたら」
「かなり不安になってきたけれど」
「不安！？そんなのは動いたら消えるんだよ」
あくまで強引な洪童だった。
「あんな変な癖あったらな」
「そんなに変な癖じゃないんじゃ？」
「ねえ」
「お嫁に行けないだろ」
皆の言葉は見事なまでに聞いていない言葉だった。
「立派なお婿さんを貰えなくなるからな」
「お嫁さんって」
「また極端な」
「あいつのお婿さんになるにはそれ相応じゃないと駄目なんだよ」
今度はこんなことを言う洪童だった。
「だからな。皆協力してくれ」
「だからまだ何も言っていないけれど」
「協力するも何も」
皆洪童の強引さにかなり辟易していた。
「それを無視して話進めても」
「人の話聞いてくれない？」
「だから聞いてるだろう？」

ただ単に聞こえていないだけであるらしい。
「ちゃんとな。だからこうするんだよ」
「だからって言われても」
「激しく意味不明」
「同感」
皆またそれぞれ洪童に告げた。
「何時の間にか協力することになったし」
「本当に何が何だか」
「よし、じゃあ決まりだ」
やはり聞こえていないのだった。
「行くぞ。皆」
「人の話聞かないね」
「妹さんが絡むとね」
その皆はそんな洪童にただひたすら呆れていた。

第百五十三話　二つのパスタその八

「協力するなんて誰も一言も言ってないし」
「少し位は聞いたらいいのね」
「ついでに言うがな」
不意に話も変えてきたのであった。
「あいつのお婿さんになるにはな」
「ええ、それで」
「どうなのよ」
「どんな条件かな、それで」
「決まっている、人間であることは絶対必要条件だ」
そこまでであるというのである。
「人間なのはな」
「そんなの誰でもそうじゃない」
「ねえ」
皆そんな彼の言葉を聞いて述べた。
「もっともそれだけじゃないのはわかるけれど」
「他の条件は？」
「成績優秀、スポーツ万能、つまり文武両道でだ」
いきなりこの条件であった。
「幾つもの芸を持っていて武芸百般に通じ成績だけでじゃなくて本当の意味で頭もよくてだな」
「つまりあんたと全然逆の性格ね」
ここまで話を聞いてうんざりとした顔になったアンが彼に問い返した。
「つまりは。そういうことね」
「そう。俺みたいなな」
皮肉が通用しなかった。
「しかも人格円満で性格温厚で寛容で心が温かくてな

「つまり完璧人間じゃないと駄目なのね」
「そういうところなんだ」
「幾ら何でも滅茶苦茶じゃない、その条件」
「そうだよね」
皆彼の言葉を今まで聞いて述べた。
「そこまでの逸材って」
「いないと思った方がねえ」
「いいわよ」
「そういう人間じゃないと駄目だ」
ここでも聞く耳を持っていない洪童だった。
「だからだ。あいつにはだ」
「はいはい、わかったよ」
「協力すればいいんでしょ、協力すれば」
「ああ、協力してくれるのか」
ここで皆にその満面の笑みを向けるのだった。
「有り難い、本当にな」
「何か強引だけれど」
「仕方ないかしら」
皆釈然としないがそれでも頷くしかなかった。
「とにかく。妹さんの食べ方ね」
「訂正するのね」
「あいつがいいお嫁さんになる為に。
異常なまでに飛躍した話がそのまま続いている。
「やってやる。絶対にな」
「やれやれ」
「何か限りなくどうでもいいけれど」
それでも洪童に協力することになったのだった。話は一旦動くともう止まらない。それは今も同じであり話が終わるまで止まらないものなのだった。

二つのパスタ　完

2009・9・7

第百五十四話　真っ赤なお店その一

真っ赤なお店

皆洪童に協力することになった。しかしそれでも釈然としないものはそのままであった。

「そんな。食べ方なんて」

「大体だよ」

皆は洪童が来ていない学校の図書館の一つで話をしている。この学園には図書館も幾つもあるのだ。やはり大きな学園だからだ。

「冷麺の食べ方なんて」

「そうよね。人それぞれよね」

「鋏使うのは確かに変わってるけれど」

「いや、これがだよ」

ここでセドリックは手に一冊の本を持っていた。見ればそれは韓国料理の本であった。表紙に焼肉とキムチ、その冷麺の写真がある。

「その鋏を使う食べ方だけれどさ」

「うん」

「それはどうなの？」

「ちゃんと昔からあるよ」

こう皆に述べるのだった。

「もうね。これあの時に話に出ていたけれど」

「そうなの。昔からあるの」

「じゃあはっきりした食べ方なんだ」

「だから凄いコシがあるから」

冷麺といえばコシである。これはもう言うまでもないことだ。

「だから途中で切って食べるんだよ」

「そうよね。だったら別に」

「あんなに大袈裟に行くことないじゃない」

「全くよ」

「これは韓国風の食べ方なんだよね」
ここでまた言うセドリックだった。
「本を読んでるとね」
「韓国風！？」
「だから韓国じゃない」
皆今のセドリックの言葉に怪訝な顔になった。
「それで何で韓国風？」
「韓国の食べ物なのに」
「ほら、二十世紀後半から二十一世紀前半」
この時代から見て千年以上昔の話である。
「その時北朝鮮もあったじゃない」
「ああ、あの独裁国家ね」
「市民を百万単位で餓死させてたっていう」
連合では市民という表現が使われるのでここではこう呼ばれるのだった。連合では国民といった表現は殆ど使われないのである。
「それで独裁者の個人崇拝をしていたっていう」
「漫画の馬鹿な国家そっくりだったあそこよね」
「うん、あそこだよ」
また皆に答えるセドリックだった。
「あそこのことだけれどね」
「あの国って食べ物なかったらしいけれど」
「何かあったの？」
「洪童はそこの食べ方なんだ」
北朝鮮風だというのである。
「その国の冷麺の食べ方なんだ」
「そうだったんだ」
「北朝鮮風だったんだ」
「もう北朝鮮なんて国はないけれど」
その政権が無様に崩壊し韓国に併合されたのである。これを半島統一という。その後も経済格差や様々な社会問題を引き起こしてし

まったことは歴史に残っている。
「その食べ方は残ってるんだって」
「それが鋏を使わない食べ方なのね」
「成程」
「北朝鮮は確かに馬鹿な国家だったけれど」
その馬鹿な国家を手放しで賛美していたのが当時の日本の知識人達である。およそ人間として考えられないまでに愚劣かつ破廉恥な連中であったことも歴史に残っている。
「その食べ方だけは残ってたんだ」
「何か化石っていうか」
「全くよ」
皆今回の騒動の原因なのでぶつくさと不平を述べている。
「別に残らなくてもいいのに」
「鋏使ってもいいじゃない」
「洪童がこの北朝鮮風ってことは知っているかどうかわからないけれど」
セドリックはここでまた言う。
「それでも。箸とスプーンだけのやり方にこだわってるんだ」
「全く。それで妹さんは？」
「どうなんだろうね」
「別にこだわってないでしょ」
「お兄さんがどう食べようかね」
「あいつだけか」
ここで一つの結論が出た。
「あいつだけがこだわってるのか」
「何かさ」
セドリックがここでまた皆に言ってきた。
「僕思うんだけれどね」
「どうしたの？」
「思うって」

「春香ちゃんを何とかするより洪童を説得した方がよくない？」

こう言うのである。

第百五十四話　真っ赤なお店その二

「そっちの方がね。どうかな」
「いや、それは無理だ」
だがそれはタムタムが否定した。
「それはな」
「つまり人の話に耳を貸さない」
「そういうことね」
「普段はそうでもないんだがな」
話しているうちに難しい顔にもなるタムタムだった。
「それでもな。妹さんのことになるとな」
「だよねえ」
「本当に人の話聞かなくなるから」
まさにそれが洪童なのであった。
「周りも見えなくなるし」
「場の空気だってお構いなしだし」
「そんな状況の奴に何を言っても無駄だ」
タムタムはここえで結論も述べたのだった。
「ここはな」
「じゃあどうしようかしら」
「それじゃあ」
「妹さんに言うしかないな」
タムタムはここでまた言うのであった。
「その方が遥かに現実的だ」
「その鋏で冷麺を切ることよね」
「それを」
「じゃあ早速だけれど」
皆すぐに言っていく。そのうえで話を進めていく。
「妹さんに連絡する？」

「それで会って話して」
「いや、そこまでする必要ないと思うよ」
ところがここでこう言ったのはセドリックだった。
「そこまではね」
「っていうと？」
「どうしてなの？」
「だってさ。今日のお昼に会えるし」
「お昼にって」
「何処で会えるのよ」
「食堂で会えるよ」
こう皆に話すセドリックだった。
「そこでね」
「ああ、韓国料理の食堂ね」
「そこね」
「そう、そこよ」
そこだというのである。
「そこで会えるからさ。お昼に行けばいいじゃない」
「それだけでいいの」
「何か話が簡単なような」
「会うことはな」
ここで言い加えるタムタムだった。
「それ自体は簡単に進めることができる」
「けれどそれからはなのね」
「上手くはいかないのかもって」
「食べ方はこだわりだ」
タムタムはさらに言う。
「妹さんもそれが強いとな」
「ああ、有り得るね」
「洪童の妹さんだからね」
そのことへの最大の根拠はこれだった。何しろ洪童の妹である。

今回の騒動を引き起こしている本人の妹であるからです。その彼女も騒動の一方だから余計に複雑だ。
「こだわりあっても不思議じゃないね」
「そうなるわね」
「じゃあ覚悟を決めてね」
「そうね」
結果としてそうして行くことになってしまったのだった。
「もうこの訳のわからない騒動を終わらせる為に」
「腹を括って行きましょう」
こうして皆は午前中は静かに過ごした。そうして昼になると早速韓国料理の食堂に向かうのだった。ここで皆こんなことも話すのだった。
「そういえば食堂に行くし」
「ついでにそこで御飯食べる？」
「そうする？」
丁度いい話だった。食堂に行くとなればそこで食べればいい。これは当然のことであった。

第百五十四話　真っ赤なお店その三

「じゃあそこでお昼食べながら」
「妹さんと話してね」
「そうしましょう」
これで話は決まった。皆ついでに昼食もそこで採ることになった。
こうしてその韓国料理の食堂に入るのであった。
食堂に入ると中はまさに真っ赤であった。入り口から見た店の内装は壁も柱も机も椅子も何もかもが真っ赤であった。あまりにも赤くて目がちかちかなりそうになるメンバーもいた。
「また何ていうか」
「派手っていうか」
「真っ赤なんて」
皆このことに驚くことしきりであった。
「何このお店」
「韓国ってこんなのなの？」
「派手な国なのは知ってるけれど」
その色彩が非常に派手なことでは連合中に知られている国である。
「それでも赤一面っていうのは」
「もう何か」
「ああ、店の名前だけれど」
セドリックはふと店の看板を見て皆に話す。赤地に白文字で書かれているのは銀河語だった。しかし店の中はハングルが氾濫している。
「レッドデビルだってさ」
「つまり赤い悪魔か」
「だから赤なのね」
皆とりあえずそこからどうして店が赤一面なのかわかった。
「それでも。何か見ているだけで」

「もう目が疲れて」
「サングラスするか」
ダンが皆に言ってきた。
「それだと」
「サングラスでお店の中に入るのもねえ」
「ちょっとね」
その辺りはわきまえている彼等だった。この時代でも店の中に帽子を被ったままで中に入ったりサングラスをかけたままというのは無作法にあたるのである。
「だからそれはね」
「止めておいた方が」
「そうだな」
提案した本人もみんなの言葉に頷くのだった。
「それは確かにな」
「ビージェントルマン」
家持がぽつりと言った。
「だから」
「紳士であれ、ね」
「昔のアメリカ語よね」
「うん」
この時代では連合では英語という表現はまず使われない。アメリカ語やオーストラリア語となっている。確かにかなり『英語』とは離れてしまってもいるのであるがそれ以上に連合特有のエウロパへの反感や敵愾心があり英語とは呼ばれなくなっているのである。
「それだよ」
「言ったのは確か」
「クラーク博士だよ」
また皆に答える家持だった。
「素晴らしい教育者だったんだ。アメリカから来たね」
「僕その人知らないけれど」

そのアメリカ人のスターリングのコメントである。
「教育者でそういう人いたかな」
「あれっ、あんたが知らないの」
彼の横にいた蝉玉がそれを聞いて怪訝な顔になった。
「アメリカ人なのに」
「知らないよ、本当に」
彼女の問いにも答えるスターリングだった。
「教育者でって。何時頃の人なの？」
「十九世紀後半の人だよ」
このことも答える家持だった。
「新渡戸稲造やそういった人達を北海道で育てた素晴らしい人だったんだ」
「やっぱり知らないけれど」
腕を組んで首を捻るスターリングだった。
「日本に行った人でそんな人いたかな」
「そんなに知られてないの？」
「嘘でしょ」
このことは彰子も七海も驚くことだった。
「日本の教科書じゃ絶対に出る人よ」
「テストにだって絶対に出るのに」
「何で知らないのよ」
「知らないことは知らないよ」
だがスターリングはこう言うばかりだった。

第百五十四話　真っ赤なお店その四

「だって。アメリカの教科書には載ってないし」
「そんな。かなり有名な人なのに」
「アメリカじゃ知られていないって」
「こういうことってあるのね」
蝉玉は彼等の話を聞いてこう述べたのだった。
「そういえばうちの学校の世界史の授業で名前は聞けるのかしら」
「日本史だったら載ってるよ」
家持がこう述べた。
「三年で受けるあれに」
「じゃあその時にわかることね」
蝉玉は彼の言葉を聞いて言うのだった。
「そのクラーク博士って人に」
「少年よ大志を抱け」
今度はこう言うスターリングだった。
「こうも言ったんだ」
「偉大な人なのは間違いないみたいだね」
「そうね」
クラークのことを知らないスターリングも蝉玉も日本人達の言葉からこのことはわかったのだった。
「立派な教育者だったんだ」
「私達が知らないだけで」
「日本人が知っていても祖国の人が知らないってことも」
「あるのね」
彰子と七海があらたにわかったことだった。そんな話をしてお店の中に入ると。聞こえてくるのが銀河語と韓国語の二つであった。
「ええと。何て言ってるの？」
「怒ってないよね、別に」

「そうよね」
皆韓国語を聞いてまずは怪訝な顔になった。
「別にそんな」
「表情は普通だし」
「いや、怒ってる人もいるわよ」
見れば確かにそういう人もいた。今にもつかみ合いにならんばかりにテーブルで言い争いをしている若い二人の男が丁度いた。二人のテーブルの上には真っ赤な料理がある。
「何て言ってるのかしら」
「さあ」
ここにいる皆はだれも韓国語はわからなかった。
「とりあえず怒っているのはわかるけれど」
「それ以外はねえ」
「わからないわよね」
「それにしても」
ここでセドリックが言うのだった。
「本当に真っ赤だよね」
「確かに」
「床とテーブルは流石に違うけれど」
そういった場所は木造りで白であった。品書きは赤地に白である。それがかえって目をちかちかとさせる効果になっていた。とにかく赤であった。
「もう壁も天井も」
「当然料理も」
「韓国そのものね」
遂にこの言葉が出た。見れば品書きは銀河語で書かれていることは書かれているがしっかりとハングルでルビが振られてもいた。
「ここに来たら何か」
「お店の人もそうかしら」
「アンニョンハシムニカ」

ここで赤い料理人の服を若い男が皆に声をかけてきた。
「お客さん韓国人じゃないね、皆」
「え、ええ」
「そうですけれど」
皆その若い男の言葉に応えて頷いた。
「その通りです」
「それじゃあ駄目ですか？」
「いや、別にいいよ」
韓国人でなくともいいという返答だった。
「それはね。じゃあ席はあそこね」
「あっ、はい」
「わかりました」
丁度空いていた何十人も座れる円卓を指し示されたのであった。
そこも白いテーブルであった。赤の中に白が浮かぶ形になっている。
「じゃあこの席を」
「失礼します」
「メニューはどうするんだい？」
兄ちゃんは次にこのことを尋ねてきたのだった。店の者なら当然の質問だった。
「一体どれにするんだい？」
「とりあえず韓国風ラーメンを」
「あとはチヂミとビビンバ」
「それと豚とキムチの炒めもの」
「あとキムチ盛り合わせ」
「それ人数分御願いします」
こう注文してそのうえで席に着く。皆席に着き頼んだメニューを食べながらそのうえでまた店の中を見回しながら話すのだった。
「まだ来ていないみたいだな」
「そうね」
意中の人物を皆で探していた。

「結構広いお店だけれど」
「いないわね」
「けれどここに来るよ」
セドリックがここでまた言った。
「絶対にね」
「絶対になの」
「うん、間違いないよ」
確かな調子で皆に断言してみせる。

第百五十四話　真っ赤なお店その五

「だって春香ちゃんは韓国人だからね」
「韓国人は韓国料理を食べる」
「だからなの」
「洪童だってそうじゃない」
彼に関してもそうだというのである。今回の騒動を引き起こしている彼もだ。
「しょっちゅう韓国料理食べてるよね」
「まあね」
「お弁当の時は絶対にキムチ入れてるし」
言うならば和食で言う漬け物だが韓国人にとってキムチは漬け物以上に汎用性のあるものである。それこそ何にでも入れているものなのだ。
「匂いがきついのはあれだけれど」
「美味しいしね」
「キムチ何時でもだからね」
「だからだよ。春香ちゃんも韓国人だよ」
兄である洪童がそうなら妹である彼女も当然そうなることだった。
「そうだろう？だからね」
「けれどこの店に来るかな」
「どうかしら」
皆このことには幾分か懐疑的であった。ラーメンを食べながら首をかしげているメンバーもいる。その中にはタムタムもいた。タムタムはここで自分が箸に取っているラーメンを見て言った。
「そういえば韓国料理の店じゃラーメンは」
「どうしたの？」
「インスタントラーメンの場合もあるんだな」
見れば確かにそれであった。薄くスライスした豚肉や細長く切っ

た葱やニラ、卵、それに何よりも多量のキムチと赤いスープの中にあるのは確かにインスタントラーメンだった。彼はそのインスタントの麺を箸に取りながらそのうえで皆に対して言うのであった。
「これは意外だな」
「ああ、そうなんだよ」
「韓国料理じゃそうなのよ」
知っているメンバーがそれぞれタムタムに話すのだった。
「生のあの麺の場合もあれば」
「こうしたインスタントの場合もあるのよ」
「インスタントの麺を出すのか」
タムタムはそれがあまり信じられないようだった。箸に取りながらも今も少し戸惑った顔になっている。どうやらまだ食べていないらしい。
「そういうものか」
「まあそれは国それぞれだからね」
「ちゃんと料理はしてるじゃない」
「まあな」
それは認めるタムタムだった。
「色々入れているしな」
「それに生の麺のラーメンより安いし」
「これも二十世紀からしいし」
「二十世紀からか」
タムタムはこのことも聞いたのだった。
「歴史があるんだな」
「その冷麺を鋏で切るのと同じでね」
「それもよ」
ここでまた話す彼等だった。
「洪童このことにも文句つけるかしら」
「さあ」
「どうかな」

皆このことにも懐疑的であった。
「つけるかも知れないし」
「そうじゃないかも」
「気紛れだからね、本当に」
「全く。それにしても」
ここでまた店の中をそれぞれ見回す彼等だった。
「まだいないわね」
「来てないね」
春香の姿を見回しての言葉である。
「全然ね」
「来ないかもね」
ここで言ったのはルビーだった。
「ひょっとしたら」
「確かに」
「その可能性も」
皆彼女の言葉を聞いて口々に言う。
「春香ちゃんだっていつも韓国料理とは限らないし」
「それ考えたら」
「いや、来るよ」
しかしそれでもセドリックはこう言うのだった。
「春香ちゃんはこのお店に来るよ」
「それ勘で言ってるの？」
「まさかと思うけれど」
「うん、そうだよ」
これが彼の根拠なのだった。
「勘で言ってるんだけれどね」
「何か勘で動くことない？僕達」
「確かにね」
皆ここでこのことにも思うのだった。振り返って考えてみればそうであった。

第百五十四話　真っ赤なお店その六

「何か何かをするにしても」
「勘でやること多いわね」
「けれどいいじゃない」
しかし当のセドリックは平気な顔で言うのだった。
「勘でも何でも目的を達成できたらね」
「それはいいけれど見つからなかったらどうするの？」
ルビーはそのことを問うた。
「その場合は。春香ちゃんが来なかったら」
「大丈夫だよ、来るって」
話が半分以上噛み合っていなかった。
「絶対に来るから。安心してよ」
「何でうちのクラスって勘の話になるとこんなに根拠がないのに自信たっぷりになるのかしら」
ルビーはこのことを思い首を傾げることになった。
「何でもかんでも」
「それでも不思議なことに勘で動くといつも成功するからな」
タムタムはこう述べたのだった。
「いつもな」
「それはもっと不思議なのよね」
ルビーはそのことにも突込みを入れた。
「成功したり見つかったりするのが」
「今回もだから」
ここでも気楽に言うセドリックだった。
「だから安心して待っていようよ」
「そうする？それにしても」
ルビーはここでまた言うのであった。とはいっても今度の話題は勘に関するものではなくそれとはまた別のことに関するものであっ

た。
「あれね。ここのお店って」
「どうしたの？」
「メニューの一つ一つの量が多いわね」
このことを言うのであった。見れば確かに一つ一つの量がかなりのものである。
「ラーメン二つ入ってるんじゃないの？キムチや豚肉だって多いし」
「そういえば炒飯も結構」
「このチヂミもそうだし」
「何かわからないけれど一品プラスされてるけれど」
見れば豚キムチ炒めもあった。それの量もかなりのものである。
「何でこれがあるのかしら」
「ああ、それ炒飯についてるやつだよ」
ここで皆に対して先程の店員が言ってきた。彼が丁度皆のところに来たのである。
「それはね」
「炒飯にこんなのがついてるんですか」
「そうだったんですか」
「そうだよ。韓国じゃ何処でもそうなんだよ」
店員は気さくな笑みを浮かべて話すのだった。
「こうやってね。炒飯に一品プラスされるんだ」
「何か凄いね」
「そうね」
皆このことは知らなかったし予想もしていなかったので驚くことしきりであった。
「まさかもう一品って」
「凄いっていうか」
「韓国じゃとにかく辛いものをたっぷり食べるんだよ」
また言う店員の兄ちゃんだった。
「だからこの店もそうなんだよ」

「汗かきそうだね」
「っていうかもうかいてるわよ」
辛いものを多く食べればどうなるか。それはもう自明の理であった。
「かなり辛いから、どの料理も」
「韓国料理だよ」
店員の兄ちゃんはそれは当然だというのである。
「大蒜と唐辛子がなくて何が韓国料理なんだい？」
「それで真っ赤ですよね」
「そうでなかったらですか」
「そうだよ。だからいいんだよ」
また皆に話すのだった。
「値段は変わらないから気にしないでくれよ」
「ええ。だったら」
「それで」
皆も値段のことを言われると急に安心した。そのうえでまた食べるのだった。そして食べているとであった。その彼女が来たのであった。
「あっ、来たわよ」
「そうね」
「確かにね」
アンが声を上げた方を見ると確かに。そこに楚々とした顔立ちの女の子がいた。丁度この店の中に入って来たばかりであった。
「春香ちゃんが来たわね」
「ええ」
「ほらね」
ここでセドリックが少し誇らしげに皆に言う。
「来たじゃない、本当に」
「あんたの勘も当たるのね」
「見事だと言っておくよ」

「もっと褒めてもいいよ。さて」
調子に乗りながらさらに言うセドリックであった。
「それでだけれど」
「どうしたの？」
「見つからないようにしよう」
ここでこう皆に告げた。
「春香ちゃんにね」
「ああ、そうね」
「それはその通りだね」
皆彼の今の言葉に頷いた。その理由もわかっていた。
「ここで見つかったらね」
「まずは何でもないふりをして」
「食べましょう」
こう話をしてそのうえでその巨大な円卓に普通の客を装って顔を俯けさせて食べはじめた。春香はその横を通ってカウンターに着いた。彼等に気付いた素振りはない。

第百五十四話　真っ赤なお店その七

「よし」
「まずは成功だね」
皆彼女に気付かれなかったことをまず喜んだ。
「それじゃあ今度は」
「何を頼むか見ようかしら」
「冷麺を頼めばいいけれど」
次の問題はこれであった。春香が冷麺を頼むかどうかだ。それが問題なのであった。その食べ方が実際にそうなのか確かめないと駄目だからだ。
「どうなるかな」
「頼むかしら。それとも違うメニューかしら」
「御安心下さい」
しかしここで、であった。セーラが言うのであった。
「それは私が何とでもできます」
「何とでもって」
「まさかまた魔法を」
「そうです。これを使います」
言いながら懐から出して来たのは怪しげな手であった。見れば何かの類人猿の手である。そのやたらと毛だらけのそれを出してきたのである。
「この手を」
「この手をって」
「それって何の手なの？」
「イエティの手です」
それだというのだ。連合の多くの惑星にもいる雪の岩山に棲む大型の類人猿である。二十一世紀までは正体不明のＵＭＡであった存在だった。

「それです」
「イエティって」
「それの手なの」
「はい。この手はただの手ではありません」
そしてこうも言うセーラだった。
「松脂に三年漬けて塩に三年漬けて」
「まんま魔術なのね」
「確かに」
「そしてマウリアの一部だけにある幻の高麗人参、三年間干したヤモリと一緒に煮たものなのです」
それがこのイエティの手だというのである。
「これで指差されると魔術を使っている人の言うことに全て従うのです」
「まさに魔術ね」
「それも黒魔術なんじゃ」
「白魔術も黒魔術も使う人の心次第です」
今度はこう話すのであった。
「ですから御安心下さい」
「まあ白でも黒でもいいんだけれどね、僕は」
セドリックはそれにこだわってはいなかった。
「セーラが使うんだったら特に問題ないし」
「っていうかセーラが使うと何か」
「呪術に近いっていうか」
皆のセーラへのイメージから来る言葉であった。
「そんな感じだからね」
「だからね」
「まあとにかくね」
ここでまた言うセドリックだった。
「それでこっそりと指差すだけで話は終わるんだね」
「私が妹さんに冷麺を食べるように念じれば」

セーラも彼の問いに答える。
「それで全てが終わりです」
「じゃあそれで頼むよ」
セドリックもそれでいいというのであった。
「話が簡単に進むからね」
「はい。それでは」
早速そのイエティの手で店員達に見つからないように指差すセーラであった。
そしてそのうえで。こう呟くのであった。
「冷麺を食べて下さい」
「それだけなんだ」
「それだけでいいのね」
「はい、これでいいです」
実際にこう返すセーラであった。

第百五十四話　真っ赤なお店その八

「これで後は冷麺を食べられます」
「そう、それじゃあ」
「後は注文だけれど」
「いらっしゃい」
皆が見守る中であの店員の兄ちゃんが席に座る春香に声をかけてきた。皆に対するよりもさらに砕けて気さくな感じであった。
「今日も来たんだね」
「はい」
その兄ちゃんに礼儀正しく応える春香であった。物腰も実に謙虚なものである。
「宜しく御願いします」
「こちらこそ。それで何を食べるんだい？」
「冷麺を御願いします」
「やった」
「これでいいわ」
皆それを聞いてまずは密かにガッツポーズになった。無論食べながらである。
「それとカルビクッパと」
さらにであった。
「プルコギとホルモンも下さい。それぞれ三人前」
「えっ！？」
「プルコギとホルモン三人前！？」
皆それをまずは聞き間違えかと思った。しかし別の意味で聞き間違えだったが外れではなかった。
「すいません、間違えました」
「そうだよね」
「三人前なんて幾ら何でも」

「五人前御願いします」
こう来たのであった。何と五人前である。皆これには唖然としてしまった。
「五人前って」
「嘘でしょ」
「それと生レバ、あとはサラダも御願いします」
「あいよ。デザートは？」
「フルーツ盛り合わせを御願いします」
デザートまでというのである。
「それで御願いします」
「わかったよ。それじゃあね」
「はい」
こうして注文は終わった。しかし皆話を聞いていて唖然であった。
「春香ちゃんって大食だったんだ」
「あんなに食べるなんて」
「まあそれには驚いたけれど」
これについてはあくまで驚いただけなのであった。今彼等は自分達の本来の目的ははっきりわかっていた。わかっていない人間はいなかった。
「何はともあれね」
「そうだよね。鋏だよ、鋏」
「どうなるのかしら」
皆春香に密かに注目しているのであった。その鋏を使うのかどうかで、である。
「果たして」
「使ったら止める？やっぱり」
「さもないとあいつが五月蝿いわよ」
洪童のことに他ならない。この時のあいつとは。
「さて、それじゃあ見せてもらいますか」
「そうだね」

こうして彼等はじっくりと見ることにした。まずはそれからであった。

真っ赤なお店　　完

２００９・９・１３

第百五十五話　鋏を使ってその一

鋏を使って

皆相変わらず韓国料理を食べ続けている。しかしその食べ方が少し変わってきた。大人しくなったのである。

「そっとね」

「気付かれないようにね」

こう話をしながら食べていた。音を立てないようにしてだ。

「春香ちゃん鋭いし」

「空気になってね」

「空気か」

タムタムはその皆の言葉に疑問符の顔になったのだった。

「それはかなり難しいと思うんだが」

「まあそうだけれどね」

それは否定しないセドリックだった。彼も食べ続けている。その激辛でおまけに熱い韓国料理をだ。色は当然ながら真っ赤である。

「それはね」

「うちのクラスは個性派が多いからな」

多少以上に今更の言葉だった。

「目立たないようにと言われてもな」

「難しいよ」

また言うセドリックだった。

「正直なところね」

「けれど声を小さくすることはできるわ」

ルビーはそれについて述べるのだった。

「それだけで全然違うから」

「声をか」

「そうよ、声をね」

また語るルビーだった。

「正直うちのクラスって皆声が大きいからね」
「そうだよね。まあとりわけ声の大きいあの二人はいないけれど」
見ればテンボとジャッキーの二人がいない。クラスきってのお騒がせ人物であるその二人だけは完全に別行動となっているのだった。
「洪童が流石にまずいと思って適当な謎言ったからね」
「適当ねえ」
ルビーはその適当という言葉を聞いて微妙な顔になった。
「適当な理由でもそれを滅茶苦茶にできるのがあの二人だけれど。どんなクエストを言ったのよ」
「何だったかな」
それを言われるとこんな返事を返すセドリックだった。
「僕はよく知らないって」
「よく知らないけれどね」
セドリックの今のいささか無責任とも取れる言葉に少し難しい顔になるルビーだった。
「どういうこと？」
「どういうことも何も適当なクエストでも大騒ぎ起こす連中よ」
また話すルビーだった。
「それで適当っていうのは。やっぱり」
「確か動物園でステラーカイギュウの謎を探せだったな」
ここで言ったのはタムタムだった。
「それだったな」
「動物園って学校の中の動物園よね」
ルビーはその動物園が何処かはすぐにわかった。
「そこのステラーカイギュウって」
「そうだ、それの謎だ」
それだというタムタムだった。
「動物園のステラーカイギュウのな」
「ステラーカイギュウって」
ルビーはそのステラーカイギュウという言葉を聞いてそのうえで

考えたのだった。
「あれ海にいるじゃない」
「うん、そうだよね」
「海にいるのにどうして動物園なの？水族館じゃないの？」
「それだ」
まさにそれだと。語るタムタムだった。
「何故動物園にいるから。ステラーカイギュウがな」
「それは簡単なことじゃない」
話を聞いただけですぐにわかってしまったルビーだった。最早それは彼女にとっては謎でも何でもない至極当然のことであった。
「動物園の隣に水族館があって」
「そうだな」
この学園の動物園と水族館は隣同士でそのうえでつながっている構造になっているのである。あえて見学し易いようにしているのである。
「丁度ステラーカイギュウは双方の境にある。つまり」
「それが謎ってわけね」
ルビーはこう返した。
「そういうことよね」
「そうだ。しかし二人はそのことを知らない」
「っていうか何一つとして知らないんだけれど」
テンボとジャッキーの最大の問題点の一つである。無数にある問題点の中の一つに過ぎないということもこれまた怖ろしいことである。
「何もかもについてね」
「それで動物園に行ってもらったんだね」
「今間違いなく動物園の中を走り回っている」
そのことは実に容易に想像がつくことなのだった。
「そうさせておけばいい。今回の話の間はな」
「そういうことね。まあそれにしても」

ここでルビーはこんなことも言うのだった。

第百五十五話　鍒を使ってその二

「あの二人は相変わらずね」
「そうだね」
セドリックが彼女のその言葉に頷いた。
「何ていうかね」
「どういう頭の構造してるのかしら」
あらためて思うのであった。
「一体全体」
「多分妹さんに関することになった洪童と同じで」
今回の話の元凶である。言わずとしれた二年Ｓ１組のもてないコンビの一方でもある。もう一方はカムイである。二人は何時もそれを言っている。自分でだ。
「ああいう状態が二十四時間なんだと思うよ」
「きついわね、それは」
話を聞いてこう言うしかなかったルビーだった。
「そんなのだろうと思うけれど話を聞けば余計にね」
「だから二人にはね」
「制御不可能ね」
まさしくそれであった。
「全く。動物園でも何するかわかったものじゃないわね」
「ああ、それは大丈夫だよ」
しかしそれは大丈夫だと答えるセドリックだった。
「それはね」
「どうして大丈夫なの？また勘で言ってるの？」
「いや、勘じゃなくて分析だよ」
今回はそれだというのだ。勘ではなく。
「分析で言ってるんだ」
「分析なのね」

「考えてみればわかるじゃない。動物園の中でいつもの二人の調子で騒いだらさ」
「係の人に捕まるわ」
ルビーも話を聞いて容易に言えた。
「もうそれこそ簡単にね
「そういうこと」
セドリックはここで笑顔で話したのだった。
「絶対に捕まるから。放っておいてもいいよ」
「それで放り出されるのね」
ルビーはこうした未来も導き出したのであった。
「何か。本当に簡単に想像がつくね」
「だから今はね」
また言うセドリックだった。
「春香ちゃんのことに専念しよう」
「そうね。その春香ちゃんだけれど」
あらためてその彼女を見るのだった。すると。
彼女は今はホルモンとプルコギ等を食べている。まずは肉やそういったものからだ。
「あれっ、冷麺はまだ？」
「食べないのかしら」
「ああ、あれはね」
ここで家持が皆に説明してきた。
「韓国では冷麺はお肉とか御飯の後で食べるんだ」
「えっ、そうなの」
「そうだったの」
それを聞いて意外といった声をあげる皆だった。
「お肉とか御飯の後で食べるの」
「そんな順番だったの」
「そうなんだ。それにどれだけ食べても冷麺は食べるんだ」
家持はこうも皆に話したのだった。

「どれだけ食べてもね」
「何でなの、それって」
「冷麺は別腹って言ってね」
家持はセドリックの質問に対しても答えた。
「それで食べるんだ」
「ふうん、そうだったの」
「それでなんだ」
皆話を聞いてまずは頷いた。
「それで冷麺は最後に、しかも絶対に」
「食べるの」
「とにかく焼肉とかの後で冷麺ね」
また言う家持だった。
「それは外せないんだ」
「そういえば合うかも」
「確かに」
皆焼肉等の後で冷麺を食べるという話を聞いてそれはそれでいいと思うのだった。
「脂っこいものの後であっさりっていうのはね」
「その通りね」
皆で話すのだった。

第百五十五話　鋏を使ってその三

「韓国料理って結構以上にお肉食べるし」
「確かにね」
「じゃあ待とうか」
「そうね」
皆でまた話すのだった。
「その冷麺が来るまで」
「それまでね」
こうして彼等は自分達のメニューを食べ終えてからもお茶を飲みながら見守っていた。そうして遂にその冷麺が彼女の前に来たのであった。
「よしっ」
「来たわね」
皆でここで話すのだった。
「その冷麺が来たよ」
「いよいよね」
「さて、どうなるかな」
「鋏は？」
問題はそれであった。鋏である。彼女が本当に鋏を使って冷麺を食べるのかどうか。皆そのことに全神経を集中させて見守るのであった。
冷麺を乗せているお盆を見る。するとそこには。
「ある？」
「どうなの？」
「ないわね」
ルビーがそのお盆をじっと見たうえで皆に答えた。
「どうやら」
「あれっ、ないの」

「話が違うんじゃ？」
「けれど確かにないわ」
また確かめたうえで皆にまた答えるルビーだった。
「間違いなく」
「鋏がなければ使えないけれど」
「どういうことなのかしら」
皆もその冷麺を上に置いているお盆を見る。見れば確かにそのお盆の上には鋏はなかった。あるのは箸とスプーンだけであった。
「やっぱりないよね」
「ええ」６
皆見てみてそれを確認して頷き合う。
「やっぱりないわ」
「あれ、洪童の言っていることと違うけれど」
続いてこのことも話すのだった。
「どういうことかな」
「何かあるのかしら」
皆そのことに不思議に思いながらその冷麺が春香の前に置かれるのを見守る。やはりそこに鋏はなく彼女は箸とスプーンで食べている。
鋏は何処にもない。冷麺をそのまま口の中に入れて食べているのが見えるだけであった。
「まさか」
「まさか？」
「どうしたの？管」
「冷麺を使った御願いがあるんだ」
ここで家持は春香がその冷麺を食べているのを見ているうちに気付いたのである。そしてその気付いた、思い出したことを言うのである。
「冷麺の麺を器に入っているだけ全部食べるとね」
「食べるの」

「うん。食べるっていうか飲み込むっていうかね」
こう話すのである。
「一度も噛まず飲み込んで食べ終えたら願いが適うってね。言われてるんだよ」
「そんな御願いあったの」
「冷麺に」
「僕も今思い出したよ」
その令面を見ながらの言葉だった。
「そのことをね」
「ふうん、それじゃあ」
「今春香ちゃんが鋏を使わないのは」
「多分ね」
また皆に話すのだった。
「御願いがあってそれでなんだ」
「何かそれって」
「日本のざる蕎麦と同じだよね」
「そうよね。噛まずに飲み込むっていったら」
このことは日本にいればすぐにわかることだった。一部の蕎麦通と称する人々はこの時代も噛まずに飲み込むことを好むのである。
こうした食べ方が健在なのである。
「おそばと同じだよね」
「冷麺でもそうだったの」
「韓国だからじゃないの？」
セドリックはここでこんなふうに言ったのだった。

第百五十五話　鋏を使ってその四

「韓国って何でもかんでも日本の真似するじゃない」
「確かに」
「韓国はね」
皆それを聞いて納得した顔になる。この時代でも韓国は何かにつけ日本の真似をするのである。常に日本を見続けているのは二十世紀から変わっていないのである。
「それじゃああれ？おそばを食べるのを真似して」
「それであああして食べてるんだ」
「そうじゃないかな」
こう皆に答えるセドリックだった。
「冷麺は冷たいからすぐに食べられるしね」
「ふうん、そうなんだ」
「それで噛まないの」
「願い事が適うって理由にして」
「実際はどうかわからないよ」
一応断りはするセドリックだった。実際のところ今回も勘で言っているのだが今回は先程の春香が来るという予測よりも自信がないのである。
「けれど。韓国だからね」５４
「有り得るっていうか」
「いつものことだし」
いつもなのも昔からなのだった。相変わらずなのである。
「ああだこうだって理由つけるけれど」
「日本のことばかりの人達だからね」
「だからそうじゃないの？本当に」
また言うセドリックだった。
「けれど春香ちゃんがそれを知っているかっていうとね」

「それはどうかってこどだな」
「うん、知らないかもしれないよ」
タムタムの言葉に対して答えるのだった。
「そこまではね」
「春香ちゃんって賢い娘だけれど」
「知らないかしら」
「知らないね。これも多分ね」
また話すセドリックだった。
「知っていたらする娘じゃないんじゃないかな」
「春香ちゃん日本あまり意識しなかったっけ」
「どうだったかしら」
「馬鹿兄貴は特に意識していないっぽいわね」
ルビーは彼女の兄をここではわざとけなしてみせた。しかしその顔は笑みを浮かべていた。つまり悪意はないということである。
「韓国人にしちゃ珍しいけれど」
「洪童は殆ど自分がもてることと妹さんのことしか頭にないからね」
「他のことあまり考えてないからね」
「確かに」
少なくとも妙に日本を意識しているというわけではないのである。この点において彼はこの時代も健在な韓国人の特質の一つは持っていないと言えるのである。
「それがいいか悪いかは別にして」
「そうみたいね」
「それじゃあ春香ちゃんも」
「そうなのかな」
兄のことを検証したうえでそのうえで彼女自身について考えてみる。そうするとやはり彼女がそうしたことを知っているとは思えなかったのである。
「じゃあやっぱりただの御願いで」
「飲み込んで食べてるのかしら、今」

「だと思うよ」
セドリックは今一つはっきりしない歯切れのまま述べた。
「春香ちゃんはね」
「日本風の食べ方ねえ」
「しかも江戸っ子風の」
その食べ方にはしっかりと呼び名まであるのだった。これは実際に江戸時代の江戸にいる人達が蕎麦を噛まずに飲んでいたことに由来している。
「それを冷麺っていうのは」
「何か消化に悪そうだけれど」
「緑豆だしね」
誰かがこの豆の名前を出した冷麺を作っているその豆だ。これを使うことにより冷麺はその圧倒的なコシを作り出しているのである。
「ちょっと噛まないと消化は」
「よくないでしょうね」
「まあさ。お蕎麦だってそうだよ」
セドリックはここで今話になっている食べ方の元のそれについても言うのだった。

第百五十五話　鋏を使ってその五

「お蕎麦だってさ。そのまま飲み込んだらやっぱり」
「消化に悪いよね」
「やっぱり」
これは誰でも容易に想像がつくことであった。食べ物をそのまま飲み込んではそれだけで胃にかなりの負担をかけてしまうことは自明の理である。
「けれど何でだろうね」
「昔の日本の人って何でそんな食べ方したのかしら」
「凄く不思議だけれど」
皆今度はこのことについて考えるのであった。
「消化に悪いどころじゃないのに」
「どうしてそんなふうに食べてたのかしら」
「それはね」
ここでまた家持が出て来た。そうしてそのうえで皆に説明するのである。
「江戸特有の食べ方だったんだ」
「江戸特有？ああ、だからか」
「江戸っ子風っていうのは」
皆その江戸という地名から江戸っ子風の由来をはっきりとわかった。江戸とは言わずと知れた江戸時代の日本の幕府所在地である。人口は百万に達し世界一の繁栄を見せていた街である。
「そこでそうして食べていて」
「それで江戸っ子風」
「江戸はお蕎麦をよく食べたけれどおつゆがね」
ざる蕎麦の話だけではなかった。
「物凄く辛かったんだ」
「辛かったの」

「そうだったんだ」
皆この話は知らなかった。なお八条学園だけでなくこの星系全体でうどんやそばのつゆは薄口醤油に鰹、昆布、そういったものを使っているものである。
「うん。もう墨汁みたいでね」
「つまりジャパニーズインク」
「書道とかに使う」
「そんな黒さだったんだ」
家持はその黒さについても皆に説明した。
「お醤油をたっぷりいれてだしも大阪や京都に比べて採れるものが少なくて」
「それで辛かったの」
「そうだったんだ」
「お醤油と摩り下ろした大根」
その二つだというのである。
「それでお蕎麦を食べていたんだ」
「何か凄く辛そうだね」
「確かに」
皆醤油と摩り下ろし大根と聞いてすぐに述べた。
「それであまり辛さでそばの風味を殺して味あわないように」
「飲み込んでいたんだ」
「そうだったんだ。これでわかってくれたかな」
その江戸っ子風の食べ方の起源についての言葉であった。
「どうして飲み込んで食べていたのか」
「そう。それでだったんだ」
「お蕎麦のおつゆにも色々あるのね」
「そうだよ。本当に色々あるよ」
また話す家持であった。
「今じゃとてもわからないけれどね」
「僕ざる蕎麦にはおつゆ結構漬けて食べるけれど」

「私何回も噛まずにはいられないわ」
「おつゆも少しだけ漬けるものだったんだ」
このことも話す家持であった。
「江戸っ子風わね」
「お蕎麦の食べ方五月蝿かったんだね」
「お蕎麦ごときでって思ったりするけれど」
「それが通だって思われていたから」
だからだとも皆に述べるのであった。
「それでだったんだ」
「通ねえ」
「如何にも日本人らしい言葉ね」
この学園はそうでもないがやはり日本だけあって日本人と日本文化に溢れている。だからその中にいる彼等もその日本人や日本文化のことはわかってきているのである。だからこその今の言葉であった。
「それを出されるとそう食べずにいられない」
「そうなったのね」
「そうなんだ。だから江戸っ子風は残ってるんだ」
通の食べ方故ということだった。
「僕はその食べ方はあまりしないけれどね」
「ひょっとして管ってルーツ大阪かしら」
「京都じゃないかな」
皆彼の今の言葉を聞いてそのルーツについても考えだした。

第百五十五話　鋏を使ってその六

「だからお蕎麦噛むのかしら」
「うちの学校のおうどんとお蕎麦のおつゆも話聞いたら江戸風じゃないし」
それはわかるのであった。
「じゃあやっぱり」
「そうなるのかしら」
「それでだけれど」
彼等のひそひそ話をよそにまた言ってきた家持であった。
「妹さんね」
「あっ、そうね」
「春香ちゃんだよね」
皆彼の今の言葉で春香のことを思い出したのだった。それまではうどんや蕎麦、とりわけそのつゆのことについつい考えをやってしまっていた。
「何か勢いよく食べてるけれど」
「本当によく食べるよね」
「あれは全部食べられそうだね」
家持もまたそれを見て述べた。
「それにしても」
「それにしても？」
「今度はどうしたの？」
「何を御願いしてるんだろうね」
彼は今度はこのことを考えているのであった。
「それが気になるけれどね」
「確かに」
「けれど年頃の女の子だったらやっぱり」
「あれってこと？」

皆ここで一つのことに至ったのだった。それは。
「彼氏ができたとか」
「好きな人ができたとか」
「そうかもね」
セドリックは皆の今の言葉に応えて頷いたのだった。
「可能性は皆無じゃないよ。っていうか」
「意外と可能性が高い？」
「だって春香ちゃんも女の子だし」
「恋せよ乙女」
ここで言ったのはルビーだった。
「命は短し人よ恋せよってね」
「そうよね。だったら」
「やっぱり。春香ちゃんも」
「それは余計にまずいかもね」
セドリックはそうであったならばまずいのではと。こう言うのだった。
「鋏どころじゃなくてね」
「確かに」
「若しそうだったら」
皆ほぼ同時に、しかも一斉にその脳裏に洪童の顔を思い浮かべた。
他ならない春香の兄であり今回の騒動の元凶そのものである。
「絶対に大騒ぎになるわね」
「どうしようかしら」
「とりあえずはまだ見ていようよ」
セドリックが提案したのは様子見だった。
「まだね。だってはっきりしていないんだし」
「それじゃあ続行ってことね」
「そういうことだね」
「うん。まだ妹さんを見ていよう」
あらためて皆に告げるセドリックだった。

「まだね」
「そうだね。じゃあ」
「続行ね」
こうして方針が決まった。皆はすぐにその方針でいくことに決定した。当の春香は今は冷麺を食べ終えてそのうえで最後のデザートを食べていた。

鋏を使って　　完

２００９・９・１７

第百五十六話　オペラハウスへその一

オペラハウスへ

「さて、あいつはいないわね」
「呼んでないよ」
「安心していいよ」
皆はルビーの問いに応える。見れば皆いつもの喫茶店の二階に集まっている。そこでめいめいお茶やお菓子を前にしてそのうえで話をしていた。
「洪童とテンボ、ジャッキーはね」
「呼んでないから」
「来てもいないし」
「よし、じゃあ安心ね」
ルビーはそれを聞いてまずは納得した顔になった。そのうえでまずは右手に持っているそのロシアンティーを口の中に含んだのであった。
口の中に紅茶独特のかぐわしい香りと上品な苦さが漂う。そこに苺のジャムのまたりとした甘さもある。まさにロシアンティーの味わいであった。
「それだったら」
「うん。まずはね」
「安心していいわ」
「別に盗聴器とか使ったりしないし」
セドリックはここでこう言うのだった。
「洪童はね」
「そんなの普通の学生が使ったらかなり怖いわよ」
ルビーは盗聴器については流石に有り得ないと思っていたし実際にそうであった。まさか普通の高校生がそういったものを使う筈もなかった。

「それこそ漫画じゃない」
「ああ、そういえばルビー」
ここでいつも彼女に自分の漫画を手伝ってもらっているアンが言ってきた。
「今度の新作の読み切りだけれどね」
「漫画部の月刊スワロー増刊号ね」
「ええ。それの読み切りスパイものにするから」
「わかったわ。それじゃあ」
「またアシスタント御願いね」
こんな話もするのだった。何気に色々と漫画を出している部活である。
「その時ね」
「ええ、わかったわ」
ここまで話してからまた話を本来の方向に戻すのだった。ルビーはセドリックに対して問うた。
「それでよ」
「うん」
「実際にところ春香ちゃん彼氏とかいるのかしら」
「今のところはいないみたい」
こう答えるセドリックだった。
「誰か男の人とか男の子と付き合ってる形跡はないね」
「そう。それはないの」
「ないよ。間違いなくね」
セドリックは言葉を続ける。
「そうした人はね」
「だとすると一体」
「何かしら」
「ひょっとして」
ルビーがここで考える顔で皆に言ってきた。
「彼氏じゃなくてもよ」

「彼氏じゃなくても？」
「ってことはつまり」
「彼女じゃないかしら」
彼女が言うのはそちらであった。つまりはレズビアンということである。連合だけでなくエウロパでも同性愛はかなりポピュラーなものとなっているのだ。
「若しかしたらだけれど」
「可能性はゼロじゃないけれどね」
「春香ちゃん女の子にももてる感じだし」
実際に春香は楚々とした美少女である。黒い髪に黒い瞳はまさにアジア系の美貌である。この美貌は連合ではかなり人気のあるものの一つであり続けている。
「じゃあそれかな」
「彼女との仲を祈ってか彼女ができるようにか」
「それじゃないかしらね」
こうも皆に話すルビーであった。
「それも有り得るでしょ」
「だとすると相手は誰かしら」
「同じ女の子だとすると」
皆の考えはそこに焦点が移っていた。だとすれば相手は一体誰なのか、そういう問題になっているのだった。
「あの娘と一番仲のいい娘っていったら」
「確か」
ここで皆の脳裏に浮かんだ女の子は。彼女であった。
「明香ちゃん？」
「そうかしら」
「明香って」
皆の言葉を聞いた彰子はここできょとんとなった。彼女にとってはまさに寝耳に水の話であったからである。
「それはちょっと」

「ないかな」
「だって春香ちゃんといつも一緒にいるし」
「同じ部活だし」
歌劇部である。二人はよく舞台で共演したりもしている。先日のベルリーニの歌劇『カプレーティとモンテッキ』も評判だった。なお春香は純然たるソプラノだが明香はソプラノだけでなくメゾソプラノの役を歌うこともできるそうした幅広い声域を持っている。一応二人共ソプラノということになっている。

第百五十六話　オペラハウスへその二

「共演だって多いわよね」
「しかも息がぴったりじゃない」
「それでも明香がレズっていうのは」
まだそうとは思えない彰子だった。言葉にそれがはっきりと出ている。
「有り得ないんじゃないかしら」
「いやいや、そう思っていることこそが」
「あるものだから。世の中って」
「そうかなあ」
言われても実感はとてもできないのだった。
「明香と春香ちゃんがって」
「そういえば名前同じ文字入ってるわね」
ルビーはふとこのことに気付いたのだった。
「香って文字がね」
「それ言うと姉妹みたいだね」
セドリックもこのことに突っ込みを入れた。
「美人姉妹ってわけだね」
「そうね。まあ彰子もかなり可愛い方だけれど」
「そうかしら」
自分ではその自覚のない彰子だった。あまり自分がどうとかいうことに対してこだわりはないらしい。少なくとも自信家ではないようである。
「私は別にそんなのは」
「いいのよ。可愛いのは事実なんだし」
ルビーはこれで彰子を可愛いと断定したのであった。
「まあ春香ちゃんと明香ちゃんは実際は血縁関係はないけれど」
「それでも美人姉妹でレズって」

「しかも年齢考えたら双子よ」
皆の話は妄想に近くなっていた。しかもかなり危険な香りのする妄想であった。
「もう何ていうか」
「妖しい雰囲気が」
「調べてみる必要がさらに出来たわね」
真顔そのもので言うルビーだった。
「どうやら」
「それじゃあ」
そしてセドリックも言うのだった。
「二人を調べようか」
「明香なら私がいるけれど」
ここで彰子が加わってきた。何となく小さくなっている彼女だった。
「別に調べることなんかないと思うけれど」
「ああ、そうか」
「今も一緒に住んでるんだったわね」
「ずっと一緒よ」
皆の言葉にこうも述べる彰子だった。
「生まれた時から今もそうだしこれからもね」
「過去も現在も未来も」
「深いね、本当に」
「だから明香のことは調べなくてもいいわ」
妹が調べられることが内心面白くないらしい。言葉には出さないうえに本人も今一つそのことをはっきり認識していないようだが態度には出ていた。
「別にね」
「じゃあ春香ちゃんだけね」
「そうだね」
皆彰子の言葉を受けてこう方針を決めたのだった。

「調べてみる？」
「まずは部活から」
「何かね」
アンは話が決まっていく中で溜息をついた。腕を組んでそのうえでどうにもやりきれないといった顔になってそのうえで言うのだった。
「同性愛ね。私それはどうも」
「相変わらずだね、そこんところは」
「駄目なの」
「だから。何があっても駄目なのよ」
皆の問いにその顔で答えるのだった。
「それだけはね」
「それだけはっていうけれど」
そのアンに対して相棒と言ってもいいルビーが突っ込みを入れてきた。
「あんた制約物凄く多いじゃない」
「仕方ないじゃない。私ユダヤ教徒よ」
その根拠はそれだと。自分からも言うのだった。
「やっぱり。色々とあるのよ」
「ユダヤ教ってそこが難しいわね」
「自分でもそう思うわ。けれど私はイスラエル人よ」
そのことには強い誇りを持っているらしい。そのことをあえて自分から言うところに彼女のそうした感情が出てしまっているのだった。

第百五十六話　オペラハウスへその三

「それは守らないと」
「ユダヤ教で同性愛って絶対のタブーだったしね」
「今でも法律で禁止されてるし」
イスラエルの国内法では、である。何とこの時代においてもイスラエルでは憲法にはっきりと同性愛を禁じる項目が存在しているのである。
「流石に今は死刑にはならないけれど」
「っていうか死刑になったの！？」
「同性愛て」
「ソドムとゴモラよ」
驚く皆に対して出したのは聖書に出て来るあの二つの街だ。ソドムがホモセクシャル、ゴモラがレズビアンの街だったと言われている。
「っていうかエウロパじゃそれで死刑になった人もいたんじゃなかったかしら」
「まあここは連合だからね」
「流石にそういうのはなかったけれど」
連合では地球の頃からそうしたことには寛容な国が多かったのである。とりわけこの学園がある日本ではそうだった。あの織田信長も森蘭丸という美童を側に置いていた。
「エウロパはまた違うし」
「大体あそこだって今は」
「他の人の趣味には口出さないけれど私は絶対に駄目なのよ」
ムキになってさえいるアンだった。
「そういう趣味はね」
「じゃあ今回は降りるの？」
「どうするの。若しそっちの話だったら」

「いえ、乗るわ」
しかしバスからは降りないというアンだった。
「このままね」
「それじゃあメンバーは固定だね」
「そうね」
皆アンが降りないと聞いてこう言い合いもした。
「それだったら」
「ベストメンバーのままってことで」
「それでだけれど」
また言うアンだった。
「実際のところ春香ちゃんと明香ちゃんってやっぱり怪しいのかしら」
「仲がいいのは間違いないよ」
セドリックが彼女の問いに答える。
「それはね」
「そう。仲がいいの」
「そして二人共彼氏はいないね」
このことも既に把握しているのだった。
「両方共ね」
「それだったらやっぱり有り得るかしら」
ここまで聞いてまた述べるアンだった。
「そっちの可能性も」
「うちの学校でも結構そういうカップル多いしね」
こんなことを言うルビーだった。
「ラビニアの奴もそっちの気あるみたいだし」
「ああ、あいつな」
フックが彼女の名前を聞いて声をあげた。実は彼にとっては強敵と書いてそれで『とも』と読む、まさにそうした間柄なのである。
「あいつそっちだったのかよ」
「彼氏もいけるらしいけれど」

こうも言いルビーだった。
「そっちもいけるんだって」
「両刀使いかよ。あいつも結構複雑なんだな」
「けれど処女だっていうし」
「何か訳わからねえな」
両刀使いの処女と聞いて思わず首を捻ってしまったフックだった。
「何でどっちもいけてまだそれなんだよ」
「さあ。ラビニアも結構身持ち固いってことじゃないかしら」
「へっ、そんなの守っても何にもならねえよ」
「何なら付き合ってみる？」
ここでルビーはフックに対して言うのだった。
「ラビニアと。どうなのよ」
「おい、俺がかよ」
ルビーにそう言われて思わず声をあげたフックだった。
「俺があのジャジャ馬とかよ」
「何だかんだでいつも一緒にいるじゃない」
だからだというのである。ルビーによれば。
「だから。どうかしら」
「どうかしらってな」
それを言われて苦虫を噛み潰した様な顔になるフックだった。チョコレートサンデーを食べているというのにそんな顔になってしまっていた。
「俺とあいつはな」
「だからいつも一緒にいるじゃない」
「いつも喧嘩してんじゃねえかよ」
「喧嘩する程っていうじゃない」
ルビーの方が一枚上手であった。あからさまにからかう顔でフックに告げてきていた。
「そうでしょ？特に男の子と女の子だったらね」
「あのな、俺はな」

まだ言い続けるフックだった。劣勢であっても負けるつもりはないのだ。

第百五十六話　オペラハウスへその四

「あいつとは本当にな」
「それにあんた今フリーじゃない」
「フリーでも何でも相手が大事なんだよ」
これは確かにその通りだった。彼にしても誰でもいいというわけではないのである。
「あいつと一緒にいたらそれこそ始終喧嘩じゃねえかよ」
「それもまた楽しじゃない」
いささか無責任にも思える今のルビーの言葉であった。
「喧嘩するのもね」
「じゃあ今御前と喧嘩してやろうか？」
「私喧嘩嫌いだから」
自分で言っておきながらの今の言葉であった。
「別にいいわ」
「おい、また随分と無責任だな」
「そもそも今ここであんたと喧嘩する意味ないじゃない」
上手い具合にフックをかわしながらのやり取りであった。
「そうでしょ？別にね」
「今の言葉にむかついたんだけれどな」
「怒りはそれで収めるべきよ」
言いながら指し示すのは彼の目の前にあるケーキだった。やたらと大きなザッハトルテである。フックが注文したのはそれであったのだ。
「そのケーキ食べてね」
「くそっ、相変わらず口が上手いな」
「別に上手くはないわよ。ただね」
「ただ。何だよ」
「実際にあんたラビニアと何だかんだと一緒にいるじゃない」

それでもこのことは言うのであった。
「大嫌いだって言っているわりにはね」
「あいつとはな。腐れ縁になっているからな」
今のルビーの指摘には目を顰めさせて反論するがあまり反論にはなっていなかった。
「だからだよ。別に何ともねえよ」
「本当に？」
「嘘言って何になるんだよ」
「本当に本当かしら」
無意識のうちに目を逸らす彼に対して幾分意地悪く問うルビーであった。
「本当に何もないのかしら」
「何かあったらどうするっていうんだよ」
「別に。ただ」
「ただ？」
「面白いかなって思って」
だからだというのである。多分に興味本位であるのだった。
「それだけだけれどね」
「そう思うのなら好きに思っとけばいいだろ」
いい加減やりきれなくなってザッハトルテを食べることに専念しだしたフックだった。
「俺はもうこれ以上は言わないからな」
「わかったわ。まあ話を元に戻してね」
こう言って実際に話を戻しにかかるルビーであった。それは当然春香に関するものであった。
「意外と見極めは簡単だと思うわ」
「簡単なんだ」
「まず春香ちゃんにはいつも一緒にいる人が二人いるから」
まずはこのポイントを指摘するのであった。
「二人ね」

「ええと、一人は」
「あいつね」
「そう、あの馬鹿兄貴」
見事なまでにはっきりとした表現であった。
「洪童。あいつは見たもの聞いたものを何でも大騒ぎして言っちゃうから」
「わかりやすいよね」
「確かに」
皆このことは実によくわかった。実感さえできた。
「もう。何ていうか」
「全く何も考えてないから」
「だからあいつから自然に情報も入るし」
それもあるというのである。
「一つはこれで大丈夫よ。マークも何もしなくていいわ」
「自動的にあいつがやってくれるからかあ」
「こっちとしてもやり易い話だけれど」
「そしてよ」
それを確かめてからさらに話を進めていくルビーであった。
「二人目だけれど」
「ああ、彼女だね」
セドリックは今のルビーの言葉に対してすぐに突っ込みを入れた。

第百五十六話　オペラハウスへその五

「明香ちゃんだね」
「御名答」
今のセドリックの言葉に対してにこりと笑ってみせるルビーだった。
「その通りよ。明香ちゃんよ」
「ってことは」
それを聞いて今度声をあげたのは彰子だった。言わずと知れた彼女の姉である。
「私が何かするってこと？」
「あっ、それはいいわ」
それはいいというルビーだった。彰子に対してもにこりと笑ってみせる。
「彰子も動かなくていいのよ」
「そうなの」
「ただ。皆で行く場所があるわ」
そのうえでこう皆に告げるのであった。
「皆でね。いいかしら」
「行く場所っていうと」
「そこは一体」
「歌劇場よ」
そこだというのである。
「そこに皆で行きましょう」
「歌劇場」
「その春香ちゃんがいる」
「そこに行けばわかるわ。それだけでね」
かなり強気の言葉であった。さながらエルキュール＝ポワロが安楽椅子から立った時の様に。しっかりとした自信にみなぎってさえ

いた。
「もうそれだけでね」
「歌劇場に謎が隠されている」
「何かミステリーね」
「ミステリーを解くのがいいのよ」
にこりと笑って言うルビーだった。
「それこそがね」
「そうね。だったら」
「行くか」
「そうね」
皆ミステリーという言葉に釣られた。今まで様々なそうした類の話を経験してきているのですっかり病み付きになってしまっているのである。
それで皆次の日早速その学園内部の歌劇場に入った。しかしこの日は上演はなかった。
「今日はなしみたいね」
「そうね」
それを確かめてまずはがっかりすることになった。やはり上演がないオペラハウスというものはどうしても寂しいものになってしまうからだ。
それで多少がっかりしているとだった。ここでルビーが言うのであった。
「だから今日にしたのよ」
「今日って」
「上演ないわよ」
「だから。上演がないからよ」
その誰も座っておらずがらんとした客席の中で皆に話す。証明もついておらず舞台にも誰もおらず何もない。その寒々とした場所での言葉であった。
「だから来たのよ」

「調べる為か」
タムタムは話を聞いてそう察してみせた。
「それでだな」
「そうよ。上演はなくても絶対に部員はいるわ」
このことを言うルビーだった。
「絶対にね。楽屋に行けばね」
「あっ、それに」
次に気付いたのはセドリックだった。彼はその今は誰もおらず何もない完全に空白となっているその舞台を見て皆に言うのだった。
「上演はなくても練習があるよ」
「あっ、そうか」
「確かに」
皆彼に言われてこのことに気付いた。
「上演がなくてもね」
「練習はあるわよね」
「どんな部活でも練習は絶対にやるからね」
彼は言うのだった。むしろ部活とは練習の方がずっと多い。ただ上演や試合をするだけでは何も上達しはしないものである。だから練習をするのだ。
「それを考えればね」
「そうか。じゃあちょっと見せてもらおうかな」
「練習もね」
「確か」
ルビーはここでまた言うのだった。

第百五十六話　オペラハウスへその六

「今度の舞台はフィガロの結婚だったわね」
「ああ、あのモーツァルトの」
「あのオペラね」
「そうよ。フィガロの結婚だったら」
ルビーはさらにフィガロの結婚について考えるのだった。このオペラは天才とまで謳われたモーツァルトの数多いオペラの中でも傑作とされている。この時代でも上演される機会は非常に多いのである。
「まず春香ちゃんがケルビーノね」
「ケルビーノっていうと」
「貴族の少年で女の人が演じる役だ」
タムタムがケルビーノと言われてもすぐにピンとは来ないメンバーに対して述べた。
「ソプラノもメゾソプラノもやる役だ」
「だから春香ちゃんの声には合ってるのよ」
ルビーからも皆に話した。
「多分それね」
「そうなの」
「春香ちゃんがその役なの」
「そしてよ」
ルビーのオペラに対する推理はさらに続く。
「明香ちゃんだけれど」
「彼女は何かな」
「何の役なの？」
「伯爵夫人ね」
それだと見るのだった。
「それね」

「伯爵夫人っていうと」
「貴婦人かしら」
「その通りだ」
また答えるタムタムだった。
「屋敷の主アルマヴィーヴァ伯の奥方だ。清楚で落ち着いた貴婦人だ」
「明香ちゃんにぴったりの役みたいね」
「そうね」
「劇の中ではケルビーノって多情な男の子なのよ」
このこともよく知っているルビーであった。
「もうね。かなりって」
「っていうとつまり」
「伯爵夫人にも言い寄ったりとかするの？」
「するわよ」
こう答えるルビーだった。
「しっかりとね」
「じゃあやっぱり」
「これは」
「やっぱり有り得るわね」
同性愛の可能性をここでも否定しないルビーだった。
「それは否定できないわ」
「ううん、そうなんだ」
「じゃあ役での間柄からそのまま」
「まあそれは見ていこうよ」
セドリックが確信しそうになる皆に対して述べた。
「これからね」
「断定は駄目」
「そういうことか」
「そうだよ。確かに怪しい感じはするけれど」
それはセドリックも否定しなかった。

「それでもね。見ていかないとね」
「そうね。それじゃあ」
「ここはもっとね」
「メンバーを分けるか」
クラス委員のギルバートがここで仕切りパワーを見せた。
「とりあえずは」
「分けるの」
「五十人近くも同じ場所にいても何もならない」
ギルバートは皆に対してこうも告げた。
「だからだ。ここは分けよう」
「じゃあまずはここに残るメンバーと」
「それと楽屋に回るメンバーね」
その二つだというのであった。
「それじゃあそれぞれ分けて」
「やっていこうかしら」
「そうするといい。それではだ」
皆ギルバートの言葉通り二手に分かれた。こうしてそのうえで今回の話の情報収集及び聞き込みにかかるのであった。このオペラハウスにおいて。

オペラハウスへ　　完

２００９・９・２２

第百五十七話　見えてきたものその一

見えてきたもの

二手に分かれた一同。ここでまずは劇場に残ったメンバーが言い合う。

「さて、どうなるかしら」

「何がわかるかしらね」

皆劇場の物陰に隠れながら話をしている。歌劇場の席はカーテンの裏や柱の裏と様々な隠れるのに相応しい場所があり隠れるのには苦労しなかった。

そこで隠れながらであった。皆であれこれと話をしているのだ。

「問題は春香ちゃんが出て来るかだけれど」

「明香ちゃんもね」

「それだけれどね」

ここでルビーが皆に言う。彼女はここに残っているのである。

「一つ問題があるのよ」

「問題って？」

「何なの、それって」

「フィガロの結婚だけれどね」

彼女が言うのはオペラについてであった。

「ケルビーノは殆ど出ずっぱりだけれどね」

「その役って春香ちゃんがやるっていう役だよね」

「その役はずっと出てるのね」

「そうよ。それでストーリーを引っ掻き回すの」

そういう役だというのである。所謂トリックスターである。モーツァルトの喜劇の系列にある作品では必ずと言っていい程こうしたキャラが出て来る。

「そういう役なんだけれど伯爵夫人はね」

「あまり出ないとか？」

「そういう役？ひょっとして」
「出番は結構あるのよ」
このことは言うのであった。
「結構ね。歌だって二曲もあるし」
「二曲あるの」
「自分だけの歌で二曲あるの。アリアっていうけれど」
独唱のことである。
「それだけ重要な役だけれど出番は結構遅いのよ」
「そうなんだ」
「遅いってどうなってるの？」
「第二幕に出るのよ」
その時に出るというのである。この伯爵夫人という役は。
「若し第一幕の練習だったら明香ちゃんは確実に出ないわね」
「えっ、じゃあ半分わからないけれど」
「相手かも知れないのに」
「だからよ」
ここでまた言うルビーだった。
「それが問題なのよ。第一幕じゃなかったらいいけれど」
「そうだね」
「それだったら」
ここでアンが動いた。すぐに自分の懐から携帯を取り出しそれでメールを送ったのだった。
「これでいいわね」
「ギルバートに連絡したのね」
「ええ。今日の練習はどの場面するかね」
まさにそのことについてメールを送ったのであった。流石に頭の回転が早い彼女であった。こうした動きは伊達ではなかった。
「ちょっと聞いて欲しいってメール送ったわ」
「上出来ね。じゃあまずはそれは聞けるわね」
ルビーも彼女の言葉を聞いて安心したように述べた。

「まずはそれ待ちね」
「そういうことね。それじゃあ」
ここでルビーに言うアンだった。
「一つ聞きたいけれど」
「どうしたの？」
「このオペラハウスにロイヤルボックスってあるじゃない」
座敷の部屋も幾つかある。学園内のオペラハウスなので基本的に無料で開放されているので誰もが同じ席に座る。しかし来賓用にそうした場所も設けられているのである。その中にそのロイヤルボックスも存在している。アンが今言うのはそれについてであった。
「ロイヤルボックスだけれど」
「それがどうかしたの？」
「あそこ誰が座るの？」
こうルビーに対して問うのであった。
「うちの学校に王様なんていないし来賓用はあるし」
「ああ、あの場所へ」
話を聞いてすぐに応えるルビーであった。
「あそこはね。理事長が座るのよ」
「理事長ってあの」
「そうよ。八条義統理事長」
言わずと知れた八条グループの御曹司であり連合中央政府国防長官でもある。この学園においても理事長を務めているのである。しかも八条グループの後継者でもある。

第百五十七話　見えてきたものその二

「あの人が座る場所なのよ」
「そうなの。あの人が」
「理事長と知り合いの人も招かれて一緒に座るそうよ」
「何か凄い場所なのね」
それを聞いてあらためて思うアンだった。
「伊達にロイヤルボックスじゃないってことね」
「そういうことね。まあ正確にはロイヤルボックスじゃないけれど」
王族が座るわけではないからだ。しかしこう呼ばれているのも事実である。
「そういうことなのよ」
「そうだったの」
「ええ。まあ理事長は忙しい人だし」
その中央政府国防長官という仕事がである。従って八条グループ次期総帥としての仕事もこの学園の理事長としての仕事も今は殆どしておらずそちらの部下達に任せているのである。
「滅多に学校に来ないけれどね」
「じゃあ今は空席なの」
「殆どね」
こう答えるルビーだった。
「残念って言えば残念だけれどね」
「そうね。それはそうと」
「ええ。どうしたの？」
「客席が静まり返ったオペラハウスっていうのは不気味ね」
今度はこのことを思うアンだった。
「今にも何か出てきそうね」
「確かにね」
「オペラ座の怪人っていうか」

皆もアンのその言葉に同意して頷く。
「まさにそんな感じ」
「幽霊とかいても」
「そういえばだけれど」
ここでまたルビーが言うのであった。
「このオペラハウスも確か」
「確かっていうとまさか」
「出るの？」
「七不思議があるのよ」
どちらにしても出るという類の話であった。こうして七不思議やそうした類の話はこの時代においてもどの時代にも存在しているものである。
「ええ。例えば舞台のカーテンが自然に開閉したりとか」
「一人でに開くカーテンね」
「誰もいない筈の舞台で歌う女の人に真夜中に彷徨う係の人」
これは学校の職員がしているのである。
「それと空かずの間に十二時に光る着替え室の鏡に何処からともなくすすり泣く声」
「そういう話って何処にもあるのね」
「何ていうか」
皆話を聞いてこう思うのであった。
「定番なのね」
「本当に」
「そうね。あとは」
ここでロイヤルボックスをちらりと見るのであった。そこには誰もいないがあえて見て。そうしてそのうえでまた皆に対して語るのであった。
「あそこにも出るそうだし」
「ロイヤルボックスにもなの」
「あそこにも出るの」

「大成功の舞台に何時の間にか来ている謎の貴人」
それだというのである。
「通称オペラ座の怪人がね。いるそうよ」
「そのままなのね」
アンはルビーの話をここまで聞いて言うのであった。
「本当に」
「そうね。本当にオペラ座の怪人よ、その通りの意味で」
アンに対して言葉を返したルビーであった。
「まあ全部七不思議で確かめた人もいるかどうかわからないけれど」
「それでもあれね」
それを聞いたうえでまた言うアンであった。
「出て来てもおかしくはないわね。今のこの観客席を見ているとね」
「そうよね。何が出て来てもね」
彼女の今の言葉に頷くルビーだった。
「果たして何が出て来るかしら、本当に」
「まあそれも気になるけれど」
今はそれよりも、であった。果たさなければならないことがあった。それについての話もはじめた一同であった。
「今ギルバートからメールで連絡があったわ」
「それで何て？」
「楽屋で春香ちゃん達と会ったそうよ」
こう連絡があったというのである。見れば今アンは自分の携帯を見ていた。どうやらその携帯からギルバートのメールを受け取ったらしい。
「それでこれから話すんですって」
「そうなの」
「明香ちゃんもいるそうよ」
一緒に彼女もいるというのである。
「かなり好都合な話よね」
「そうね。あの娘もいるのだったらね」

ルビーはそのことに対して頷くのであった。

第百五十七話　見えてきたものその三

「丁度いいわね」
「じゃあ私達はこのままここで練習がはじまるのを待って」
「ええ」
「後はあちらのメンバーに任せましょう」
「そうしましょう。じゃあとりあえずは」
「ここで休憩ね」
とりあえず今観客席にスタンバイしている面々は安むことにした。その頃セドリックやギルバート達は実際に楽屋において春香や明香達と話をしていた。
楽屋は衣装や鬘があちこちに置かれている。椅子の前には大きな鏡がある。そうした如何にも舞台の楽屋といった場所で皆は二人と話をしているのであった。
「それじゃあフィガロの上演はもうすぐなんだ」
「はい」
明るい言葉でセドリックの質問に答える春香だった。今彼女は普通の白いジャージで椅子に座りそこで皆と話をしているのであった。
当然明香も一緒である。彼女は青いジャージであった。やはり椅子の一つに座ってそこから皆と話をしているのであった。二人一緒であった。
「もうすぐです。ですから今とても緊張してます」
「舞台の前はいつもよね」
「本当にね」
ここで二人顔を見合ってそれぞれ言うのであった。
「何度してもね」
「緊張して大変なんですよ」
「そんなに緊張するんだ」
セドリックはその話を聞いて述べた。

「それもいつも」
「はい、今回のフィガロはまだ衣装を着てのリハーサルはまだですけれど」
「それももうすぐですし」
「そのリハーサルが終わってからいよいよ本番だよね」
また尋ねるセドリックであった。
「それからだよね」
「はい、そうです」
「いつもそれからです」
「だよね。けれど今からなんだ」
それを聞いて考える顔になるのであった。気楽な方の性分であるセドリックにしろよくわかる話であった。だからこそそうした顔になるのであった。
「大変だね、本当に」
「だからおまじないもするんですよ」
春香は明るい顔でここで言ってきた。
「私なりのおまじないを」
「おまじないって？」
「冷麺をですね」
ここで冷麺が出て来た。
「食べてます」
「冷麺を！？」
内心それか、と思いながらも彼女の話を聞くセドリックだった。皆も彼と同じことを思ったがそれは言葉に出さず話を聞くのであった。
「食べるんだ」
「はい、おまじないで」
そんな彼等のことには気付かず言葉を続ける春香であった。
「冷麺を一気に食べるとですね」
「それがおまじないになるんだ」

「御願いが適うって言われてますから」
彼女自身からの言葉を聞いた皆は。ここでひそひそと話すのであった。
「そのままね」
「そうね」
「おまじないだよね」
「ええ」
思いも寄らぬ方向に話が進んでいた。皆それをさらに聞くことにした。自分達の心はあえて隠して。そのうえで彼女の話を聞くのであった。
「舞台が成功しますようにって」
「それで冷麺を食べるんだ」
「そうしてるんです」
ここで真相がわかった。彼女は舞台の成功を願ってそれで今は鋏を使わないで冷麺を食べている。少なくとも今はそうしているのであった。
「あえて」
「普段は鋏を使うんだ」
「そうなんです」
このことをさりげなく春香に問うセドリックだった。彼女はここでも気付くことなくそのまま答えた。
「実は。兄さんはそれを嫌うんですけれど」
「何で嫌うのかな」
「何か正しい食べ方じゃないって言って」
だからだというのである。このことはそのまま洪童が言っていることと同じであった。
「それでいつも怒るんです」
「そうなんだ」
「何かですね」
ここでさらに言う春香だった。

第百五十七話　見えてきたものその四

「私の鋏を使うのは韓国風らしいんですよ」
「春香ちゃんの国だよね」
「兄のそれは北朝鮮風でして」
この時代にも悪名を残している悪辣な独裁国家である。その卑劣さと醜悪さは人類の汚点、恥として永遠にその醜名を刻まれている。
「兄は北朝鮮は大嫌いなのですけれど」
「まああの国はね」
当然ながらセドリックもその国のことは知っていた。同時にその国を支持どころか賛美さえしていた当時の日本の学者やマスコミといった類の連中も非常に悪い意味で歴史に名を残している。具体的に言えば安江良介や筑紫哲也、朝日新聞、社会党といった連中である。
「誰でも嫌いだよね」
「けれど冷麺の食べ方だけは」
違うというのである。
「どうしても北朝鮮風がいいって言って聞かなくて」
「北朝鮮風っていうと？」
「私が願掛けで今食べているやり方です」
それだと答えるのであった。
「それなんです」
「その鋏を使わないで食べる」
「はい。噛まずにそのまま飲み込む」
まさにそれだというのである。
「それです」
「そうなんだ。それなんだ」
「北朝鮮風は普通に噛みますけれど」
こう言い加えはする春香であった。

「兄はいつも噛まないで飲み込んでます」
「日本のざる蕎麦と同じ様な食べ方なんだね」
「そうですね。それです」
まさにそれだと答える春香だった。
「兄の食べ方は」
「それだと消化に悪くないかな」
セドリックは話を聞いていて本気で彼女に問うた。
「冷麺って日本のお蕎麦よりずっとコシがあるし」
「はい、それもかなり」
「緑豆使ってるからね」
何につけてもそれであった。冷麺のコシに秘密はそれであるのだ。
「やっぱりね。凄いものになってるよね」
「実際に消化にはあまりよくないです」
それは彼女も認めることだった。
「どうしても」
「けれどお兄さんはいつも冷麺はそうやって食べるんだ」
「兄にはいつも言ってます」
ここで困った顔を見せてきた。
「いつもそうして食べるのは消化によくないって」
「あいつもあいつで」
「注意されてるの」
「お互い様？」
皆その話を聞いてまたひそひそと話をする。
「それならもう」
「一緒じゃない」
「兄は何故いつもあの食べ方なのでしょう」
そのことに困った顔さえ見せてきた。
「本当に止めて欲しいのですけれど」
「まあそれはね」
セドリックはここでは彼女の言葉に答えなかった。あえて流すこ

とにしたのであった。
「お兄さんにもお兄さんの考えがあるだろうし」
「そうなんですか」
「それよりもね」
流してそのうえで話を変えてみせた。中々のテクニックである。
「舞台のことだけれど」
「はい」
「御願いが適うといいね」
あえて優しい笑みを浮かべてみせたセドリックだった。
「春香ちゃんの御願いがね」
「はい、絶対にです」
「それで舞台が成功になればね」
「そうです。本当に成功させたくて」
その御願いの内容もここで皆にはっきりとわかったのだった。
「私頑張ります」
「私もです」
明香も言ってきた。彼女もだというのだ。
「実はですね」
「うん。明香ちゃんはどうしてるの？」
「毎朝御祈りしています」
彼女がしているのはそれだというのである。
「神棚に。これは普段からですけれど」
「神棚になんだ」
「はい、お祈りをしています」
「そのこと彰子ちゃんは知ってるのかな」
「多分」
一旦前置きしてからの言葉であった。

第百五十七話　見えてきたものその五

「知らないと思います」
「お祈りをしていることは？」
「それは知ってますけれどお祈りしてる内容までは知らないと思います」
「そうなんだ。こっそりとお祈りしてるんだね」
「はい」
こうしているというのである。今の彼女は。
「それは駄目でしょうか」
「駄目じゃないと思うよ」
それは特に悪いと思わないセドリックだった。他の皆もそれは同じだった。その証にそのことに関しては誰も何も言うことがなかった。
「別に誰かに言うことでもないしね」
「そうですか」
「ただ」
「ただ？」
「本当に緊張しているんだね」
こうその彰子に述べるのだった。
「今の二人って」
「はい、やっぱり」
「とても緊張してます」
二人は真面目そのものの顔でセドリックの言葉に対して答えた。
「もうとても」
「本当に成功させたくて」
「そうだよね。それはね」
このことは実によくわかるセドリックだった。それはもう二人の態度や話からもうわかっていたがあえてあらためて尋ねたのである。

「そこまで御願いしてるんだしな」
「モーツァルトの作品って人気がありますし」
「沢山の人が観ますし」
この時代でも人気の高いクラシックの作曲家なのである。やはりモーツァルトといえば天才でありその評価もそのままになっている。それもあってよく上演されるのである。
「それに演出も」
「今回凄いみたいですし」
「演出もなんだ」
セドリックはそれを聞いて目を少し動かした。
「それも凄いんだ」
「はい、まだリハーサルやってないので詳しくわからないですけれど」
「それもあって」
「凄い舞台になりそうだね」
ここまで聞いたセドリックの感想である。
「本当にね」
「はい、ですから」
「楽しみにして下さい」
こう言うのは忘れなかった。何だかんだで舞台人になっている二人だった。
「頑張りますから」
「絶対にこの舞台成功させます」
「頑張ってね。ただね」
「ただ？」
「何ですか？」
二人はここでセドリックの言葉に対して問うたのだった。
「何かあるんですか？」
「あるとしたそれって」
「僕もね。君達に教えたいおまじないがあるんだ」

にこりと笑って二人に告げるのだった。
「君達にね。いいかな」
「私達にですか？」
「そのおまじないって」
「緊張するのもいいけれどそれで硬くなったらいけないから」
実は二人を見てそれが心配になったのである。何事においても過剰に緊張するのはよくないからだ。だから今ここで言うのであった。
「それでだけれどね」
「はい」
「それでどんなおまじないですか？」
「これを飲んでね」
言いながらあるものを取り出してきた。見ればそれは酒瓶であった。青いサボテンから作られたと思われるコバルトブルーのテキーラであった。
「テキーラですか？」
「それって」
「うん、そうだよ」
にこりと笑って二人に話す。見ればラベルにサボテン、しかも青いそれが描かれている。ハニワを思わせるそのサボテンの形が実にいい。

第百五十七話　見えてきたものその六

「これを飲んで十分目を閉じればいいんだよ」
「それがおまじないなんですか」
「セドリックさんの」
「そうだよ。一本全部飲んでね」
にこりとしながら二人に話を続けるのであった。
「それでいいから」
「それだけですか」
「それでいいんですね」
「緊張が解けるよ」
その為のおまじないだというのである。
「これでね」
「緊張が解けるって」
「それが悪いんですか？」
「時々は緊張を解かないと駄目だよ」
生真面目な二人だからこそ告げることであった。
「だからだよ。飲んで」
「そうですか。じゃあお家に帰ってから」
「私も」
二人はセドリックの言葉を聞きながらそれぞれそのテキーラを受け取った。それは見事なまでに青くまるで海がそのまま中に入ったかの様であった。
「ええと。それでやる場所とかは」
「そういうのはありますか？」
「場所はベッドの中が一番いいよ」
場所についても答えるセドリックだった。
「その中に入って十分目を閉じるんだ」
「十分ですか」

「それでベッドの中に入るまでに飲んでおくんですね」
「それだけ。もうぐいってね」
飲み方まで丁寧に教えていく。
「飲んで後はそうするだけだから」
「わかりました。じゃあやってみますね」
「いつも緊張するのもよくないからね」
セドリックはここでこう言うのであった。
「だからね。そうやって」
「緊張をですね」
「二人共だよ」
このことは強く言うセドリックだった。
「真面目過ぎるのもよくないから」
「真面目過ぎてもですか」
「そうなんですか」
「何でも匙加減ってことなんだ」
セドリックは普段からはあまり想像できないことを二人に話す。
彼も意外とあれこれと考えているということであった。少なくとも普段は見せない顔であることは間違いない。
「いいかな、それで」
「はい」
「その為にもですね」
「お酒はその為には凄くいいからね」
話してにこりともしてみせてきた。
「おまじないとしてもね」
「有り難うございます」
「僕からはこれで終わりだよ」
彼はここで話を終えたのだった。
「じゃあ。後はね」
「はい、練習頑張ります」
「息抜きをしながら」

二人は満面の笑みで答えた。それで話は終わりだった。セドリックは皆と一緒に楽屋を出る。その時に携帯でルビー達に連絡をすることを忘れなかった。

「明香も頑張ってるのね」

「そうだよ。凄くね」

劇場を出る時にその明香の姉である彰子に話すセドリックだった。彼女は楽屋にはおらず観客席の方にいてそのうえで見ようとしていたのである。

第百五十七話　見えてきたものその七

「頑張り過ぎだね」
「昔からそうだったのよ」
彰子は言うのだった。
「明香って。何でも物凄く頑張るから」
「そうみたいだね」
「それで張り詰めてもいて」
それもあるのであった。
「少し見ていないと倒れるまでってこともあって」
「ああ、それは駄目だよ」
セドリックは彰子の今の言葉にすぐに突っ込みを入れた。
「そこまでやったらね。かえって駄目だよ」
「そうよね。私もそれなりに注意して見ているけれど」
しかし彼女は妹と違ってかなりおっとりとした性格である。天然だとも言われている。だからその辺りはどうしても限界があるのも事実なのだ。
「それでも」
「だからおまじない教えてあげたよ」
セドリックはこのことを彼女にも話した。
「そういうことがなくなるおまじないをね」
「そうなの」
「安心していいよ」
彰子に顔を向けてにこりと笑ってみせた。
「これでかなり大丈夫だからね」
「そう。そのおまじないでね」
「舞台も上手くいくよ」
舞台についてもだというのだ。
「あれだけ練習して時々休んだらね。いけるよ」

「そうなの。いけるの」
「うん、大丈夫だよ」
また言うセドリックであった。
「大成功に終わるから」
「モーツァルトよね」
彰子はここで今度上演するその舞台のことを話した。
「明香昔からモーツァルト大好きなのよ」
「それでなんだ。あそこまでね」
「多分春香ちゃんもね」
ルビーが話に入って来た。彼女もだというのである。
「大好きね、話を聞いていると」
「モーツァルトかあ」
セドリックは二人の話からあらためてモーツァルトについて考えた。
「いいことはいいけれど今まで真面目に聴いていなかったかな」
「モーツァルトはいいぞ」
ここでマチアが彼に言ってきた。
「天才だからな」
「それは聞いてるけれど」
「神童だぜ」
この時代でもモーツァルトの代名詞になっている言葉である。彼のその天才ぶりはこの時代でも凌駕する人物が出ていない程のものであるのだ。
「一回真面目に聴いてみたらいい」
「じゃあ舞台楽しみにしておくよ」
にこりと笑ってマチアにこう返した。
「今度の二人の舞台ね」
「フィガロはその中でも特に傑作だな」
マチアはその題目についても話した。
「もうな。最初からして違うからな」

「ああ、あの序曲だよね」
あまり真面目に聴いていなくともマチアが何を言いたいのかはすぐに察することができたセドリックであった。
「あれはいいよね」
「あれがはじまりに過ぎないからな」
「それからなんだね」
「それからだよ。だから凄いんだよ」
流石に楽器を演奏しているだけはあった。マチアはモーツァルトのことを実によく知っていた。
「モーツァルトっていうのはな。そうだな」
「どうしたの？」
「俺も一回真剣に演奏してみるか」
にやりと笑って言うマチアだった。
「モーツァルトな」
「いいんじゃないの？」
彼女の今の言葉にルビーが言ってきた。
「やってみても」
「そうか、やってみるか」
「モーツァルトってバイオリンの曲も作ってたわよね」
「モーツァルトは何でも作ってるぜ」
こう答えるマチアだった。
「音楽だったらな」
「何でもなに」
「天才だからな」
それに尽きるのだった。やはりモーツァルトといえば天才である。
「あるぜ」
「じゃあやるのね」
「ああ」
確かな言葉で頷くマチアだった。
「やってみるか」

こうして今度はマチアがやることになった。その中で舞台は成功に終わった。春香も明香も見事な歌唱だった。そして今度はマチアなのだった。

見えてきたもの　　完

２００９・９・２７

第百五十八話　モーツァルトその一

モーツァルト

マチアがモーツァルトに向かおうとしていたその頃。春香の話が完全に終わっていた。
「願掛けだったのか」
「ああ」
「そうよ」
皆がクラスで洪童に話していた。彼はそれを聞いて頷いていた。
「それでな。話は上手くいったからな」
「オペラの方はね」
「大成功だったよ」
「それで成功か」
洪童はそれを聞いて述べた。
「よかったよ、それだったらな」
「それで冷麺だけれど」
「食べ方はどうなの？」
「俺考えたんだけれどな」
ここで言う彼だった。
「あいつにはいつも願掛けしてもらいたいんだけれどな」
「願掛け？」
「それなの」
「ああ、それならいつも鋏使わないで冷麺食べるだろ？」
だからだというのである。彼は。
「それならな。それに尽きるだろ」
「ああ、そうだな」
「確かにね」
皆彼のその言葉に対して頷く。そうしてそのうえで言うのだった。
「彼氏ができますようにって」

「そう御願いしたらいいわね」
「それは却下だな」
今の皆の言葉には顔を顰めさせて返す洪童だった。
「あいつに彼氏ができたら」
「おい、駄目なのかよ」
「どうだっていうのよ」
「その彼氏はまず俺と勝負してもらう」
こんなことを言い出す彼であった。
「この俺とな」
「それかよ」
「勝負って二十世紀中頃の日本の漫画？」
所謂熱血漫画である。その時代にはよく不良番長やそうした存在がよく出ていたのである。この時代も不良といえばそうした格好をしている者もいる。
「あの下駄にやたらとぼろぼろの超長ラン着て」
「それと帽子？」
「ああ、それだよ」
まさにそれだと語る洪童である。
「それで俺と勝負してやる」
「それよりあんたは」
アンがここで彼に容赦のない突込みを入れた。
「自分の彼女作ったら？」
「うるせえ」
今のアンの突っ込みにはこれ以上はない憮然とした顔で返す洪童だった。
「俺のことは放っておけ」
「放っておけっていうけれど」
しかしアンはまだ言う。やはり彼女の方が上だった。
「あんた生まれてこのかた彼女できたことないでしょ」
「だから俺のことはいいじゃねえか」

洪童の機嫌はさらに悪いものになってきていた。
「そうだろ?そんなことよりもよ」
「はいはい、春香ちゃんね」
アンもいい加減呆れて彼に返した。
「彼氏ができたらってことね」
「まず俺に勝って」
とにかくそれが前提なのだった。
「そのうえで生涯の伴侶にしないと駄目だ」
「生涯の伴侶ねえ」
「また随分と言うね」
皆今の彼の言葉を聞いてこれまた呆れてしまった。
「じゃあ若しその彼氏が浮気したら?」
「どうするの?」
「殺す」
今度は一言であった。
「何があっても殺す」
「殺すって」
「何よ」
皆今の彼の断言にこれまでで最も呆れてしまった。そのうえで彼に言葉を返した。
「本気なのはわかるけれど」
「この場合本気になったら駄目じゃない」
「駄目とかそういうのじゃねえよ」
しかし彼はまだ言うのであった。
「そんなな。春香を裏切る奴はな」
「許さないっていうのね」
「絶対に」
「ああ、絶対にだ」
そこには鋼鉄があった。鋼鉄の意志である。
「そんな奴は十三番目の殺し屋を雇って始末してやるからな」

「やれやれ」
「春香ちゃんも大変ね」
皆洪童の今の言葉を聞いて呆れ返ってしまった。
「こんな兄貴だと」
「これからが大変ね」
「もっともだ」
しかし当の彼はさらに言うのであった。

第百五十八話　モーツァルトその二

「あいつに限って間違いはないけれどな」
「あれ、信頼してるんだ」
「何か今まで抹殺とか言ってたけれど」
「あいつはあれで強いしな」
話は何故か戦闘力に関するものにもなっていた。
「それこそな。豹と喧嘩しても勝てる」
「豹って」
「それじゃあ何処かの格闘家じゃない」
「いや、本当にあいつは強いんだ」
それは嘘ではないと。洪童は力説するのだった。
「韓国の格闘技でテッキョンっていうのがあってな」
「テッキョン!?」
「テコンドーじゃなくて？」
「それとは別にあるんだ。まあ元は暗殺拳だけれどな」
何気に話は物騒な方向にも及んでいた。流石に暗殺拳というとかなりのものである。
「それを子供の頃からやってるんだよ」
「オペラの他にそんなのもやってるの」
「それはまた怖いね」
「だからまあ特殊部隊が何人も来ない限りは大丈夫だ」
こう断言さえするのであった。兄として。
「それに身持ちもいいしな」
「ああ、それはね」
「確かにね」
皆それはよく知っていた。それですぐに頷くことができた。
「しっかりしてるよね」
「真面目過ぎる位に」

「そうだろ?顔は奇麗で頭がよくて強くて身持ちがいい」
話は妹自慢にもなっていた。兄として誇らしいことがはっきりとわかる様子だった。
「しかも料理上手なんだよ」
「何か金内相みたい」
「そうよね。韓国人だし」
中央政府内相である。その知的な美貌と生真面目な性格で連合の女性の憧れの的となっている。女性から見て最も上司にしたい人とまで言われている。
「将来はああなるのかしら」
「甘いものも好きみたいだし」
「いいな、ああいうふうにか」
洪童も金の名前が出て来てまんざらではないようであった。
「なったらいいな。あいつもな」
「欠点は一つだけだね」
「そうね」
ここで皆こうしたことも言った。
「残念だけれど」
「それだけね」
「欠点!?」
その言葉を聞いた洪童の目がぴくりと動いた。
「あいつに欠点があるのか?それは何だ?」
「今僕達の目の前にあるけれど」
「これはどうしようもないわね」
「目の前!?」
そう言われてまずは目を顰めさせる洪童だった。
「目の前っていうと」
「だからあんたよ」
ペリーヌが彼自身に告げた。
「あんた自身よ。それがあの娘の欠点なのよ」

「俺が欠点なのかよ」
「もれなくこの馬鹿兄貴がつくからねえ」
わざと少しばかり意地悪い調子で言ってみせるペリーヌだった。
「こりゃ妹さんもその相手も大変よ」
「そこまで言うのか」
「じゃあ言われないようにしなさい」
実に厳しいことも言うペリーヌだった。
「わかったわね、あんただけが問題なんだから」
「糞っ、えらい言われようだな」
「あんただからよ」
ペリーヌの攻撃は続く。そんなやり取りが行われていたのであった。
そしてマチアはというと。その洪童と春香の騒動以降毎日楽譜を見ていた。その楽譜が何かというと。
「モーツァルトね」
「ああ」
自分の席の側に来て覗いてきたルビーに対する返事だった。
「あれから本気になった」
「本当にモーツァルトやるのね」
「こうして楽譜見て演奏してみるとな」
「どういう感じ？」
「かなりいいな」
まずはこう述べるのだった。

第百五十八話　モーツァルトその三

「どれだけ難しい曲でも演奏できないってわけでもない」
「あんた腕いいしね」
「いや、腕だけじゃない」
それだけではないというのだった。マチアは。
「曲自体がそうだ」
「そうなの。曲もなの」
「そうだ。どれだけ難しくても演奏できる」
言いながらまだ楽譜を見ている。事実上その楽譜と睨めっこであった。
「不思議なことにな」
「難しくても演奏できるの？」
ルビーは話を聞いて首を捻ってしまった。
「何かそれって」
「いえ、そうなのよ」
ここで出て来たのはダイアナだった。クラスで一番の歌い手と言われている彼女がであった。
「モーツァルトはね。昔からそうなのよ」
「昔からって？」
「どんな難しい曲でもどういうわけか演奏したり歌ったりできる人がその時代に必ずいるのよ」
こうルビーに話すのだった。
「絶対にね」
「何かそれって凄い話ね」
ルビーはその話を聞いて無意識のうちに言ってしまった。
「どんな難しい曲でもって」
「例えば後宮からの逃走とか魔笛だけれど」
どちらもモーツァルトの代表作の一つである。ドイツ語で歌われ

るオペラでありこの時代の連合でも非常に人気のある歌劇である。
「両方共物凄く難しい曲があるのよ」
「そうなの」
「もうこんなの歌えるのかって思える位にね」
コロトゥーラ＝ソプラノというソプラノでも最も高い声域で歌われる曲である。モーツァルトはコロトゥーラの技量にも重点を置いて作曲してきたのである。
「物凄い曲だけれど」
「歌えるの」
「不思議といるのよ」
あらためて話すダイアナだった。
「私はそこまで声域が高くないから駄目だけれどね」
「歌える人がいるのね」
「この曲だったな」
ここでマチアがバイオリンだけでそのうちの一曲を演奏してみせた。それはその魔笛の第二幕で歌われる『復讐は地獄の様に』であった。夜の女王が歌う超絶的なコロトゥーラである。
その演奏を聴いて。ルビーはすぐに言うのだった。
「物凄い音が高くない？」
「しかも転がすみたいな感じになってるでしょ」
「ええ」
マチアのその演奏を聴きながらダイアナの言葉に頷くのだった。
「その通りね」
「だから難しいのよ」
あらためて話すダイアナだった。
「後宮からの逃走にしても凄く難しいしね」
「これだな」
マチアは今度はその歌劇の曲の演奏をしてみせた。第二幕でコンスタンツェが歌う『あらゆる拷問も』である。なおコンスタンツェはモーツァルトの妻の名前でもある。

「これもどう？」
「これも歌うってなると難しいでしょ」
そのこともすぐに察したルビーだった。
「やっぱり」
「そういうことなのよ。とにかく難しいのよ」
「それでも歌ったり演奏できる人がいるなんて」
「モーツァルトが不思議な理由よ」
ダイアナはこうも述べるのだった。
「だからなのよ」
「そうなの。それでマチアは」
「何とかできるようにしている」
マチアは演奏を止めてそのうえでルビーに述べるのだった。
「努力してな」
「そう。それでなのね」
「確かにかなり難しい」
それは彼自身も認めることだった。実際に演奏しているからこそわかることだった。
「しかしだ」
「できそう？」
「何とかな」
それでもできるというのである。
「できそうだな」
「あんたもできるの」
「一応子供の頃からバイオリンをやっていたしな」
年季はあるというのである。それも結構以上にだ。

第百五十八話　モーツァルトその四

「だからできるがな」
「成程ね。じゃあ頑張ってね」
「そうする。それでだ」
「どうしたの？」
マチアが話を変えてきたのを受けて問うた。
「何かあったの？」
「誰かピアノしないか？」
彼は不意にピアノを話に出してきたのだった。
「ピアノだ。しないのか？」
「ピアノって」
「モーツァルトはピアノの曲も作曲したのよ」
ここでまたダイアナが話すのだった。
「ピアノもね」
「本当に色々作曲した人なのね」
ルビーはあらためてそのことを知ったのだった。モーツァルトの作曲した数は僅か三十五年で亡くなったとは到底思えないものがある。三十五年しか生きていないとはいえその音楽的な人生は他の作曲家達と比べても全く遜色の無い、いやかなり充実したものなのである。
「ピアノもって」
「それで誰かいたか？」
マチアはさらに問うてきた。
「誰かいたら教えて欲しいが」
「ピアノねえ」
そう言われても今一つピンと来ないルビーだった。
「少なくとも私じゃないね」
「御前は駄目か」

「私は漫画だけよ」
それだけだというのだった。
「ピアノとかそういうのはね」
「あれもかなり特別な技術だからな」
「そうよ。ピアノはね」
ルビーもピアノについてはある程度だが知っていた。しかし演奏はできないのであった。
「私は駄目だし」
「アンはどうだ？」
「アンも同じよ」
漫画だけだというのである。
「ピアノは無理よ」
「そうか」
「ダイアナは？」
ルビーはここで彼女に顔を向けて問うた。
「あんた歌えるし。ピアノとかは？」
「悪いけれどピアノは駄目なのよ」
しかし彼女はこう言葉を返すのだった。
「楽器はね」
「そうなの」
「クラシック系だけじゃなくて全般がそうなの」
言葉をさらに付け加える。
「自分でも残念だけれどね」
「そっちはどうにかならないの？」
「これればかりは才能よ」
寂しそうな苦笑いと共にルビーに答えるのだった。
「だからね」
「歌とはまた違う才能なのね」
「才能はそれこそ色々よ。歌にしろ楽器でもね」
「じゃあ漫画を描くのもそうなのかしら」

「その通りよ。それも才能よ」
漫画家と言ってもいいルビーについてもそうだというのであった。
「漫画もね」
「成程ね。じゃあ私も才能持ってるんだ」
「そういうことになるわね。それでマチアは」
「ああ」
またダイアナに応えるマチアだった。
「あんたはバイオリンの才能は確かにあるし」
「これでやっていっていいんだな」
「いいと思うわ。ただしね」
じっと彼を見たうえで。そうして告げた言葉である。
「練習はしっかりとね」
「練習はか」
「まず練習、続いて練習」
ダイアナは言う。
「それから練習、休んでまた練習よ」
「何でも練習しないと駄目なのはその通りだな」
「そういうこと。じゃあわかったわね」
「ああ」
ダイアナの言葉にしっかりとした声で応えてそのうえで頷いた。

第百五十八話　モーツァルトその五

「よくな」
「モーツァルトはそれについてもいいのよ」
「練習にもか」
「どう？実際に演奏してみて」
再び彼に問うのだった。今度はその練習のことについてであった。
「違うでしょ、結構」
「難しいが練習はし易いな」
素直に演奏の練習をしてみての感想を述べるマチアであった。実際にしてみるとそれだけで色々なことがわかるのは音楽においても同じなのだった。
「本当にな」
「モーツァルトはオペラ歌手は若い人が歌うことも多いのよ」
「若い人がなの」
「そうよ。確かに難易度は高いけれど」
このことを踏まえてルビーに応えながら話すダイアナだった。
「それでもオペラ歌手としての技量を磨くにはうってつけでね」
「何か凄くよくできた話ね」
ルビーはダイアナのその話を聞いて考える顔になって述べた。
「それって」
「そうでしょ？私はクラシックの歌はあまり歌わないけれど」
どちらかといえばロックやそうした系統なのである。彼女はバンドやそうしたことの方がメインなのである。
「それでも学園の歌劇場にもよく行くし」
「そこでモーツァルトのオペラもってことね」
「そういうことよ。だから知ってはいるわ」
確かな顔で笑って述べるのだった。
「モーツァルトのこともね」

「難しいイメージあったけれど」
ルビーはふとした感じで言葉を出した。
「けれど若い人が歌うのね」
「音が軽やかで入り易いし」
これもまたモーツァルトの音楽の特徴である。昔からまるで天使の響きの様と評されてきている。軽やかで華やかでかつそこにオペラだと登場人物達を生かしているのである。
「それもあってね」
「そういえば今のマチアが練習してる曲も」
「軽やかでしょ」
そのバイオリンの曲についてもなのだった。
「音楽が」
「難しいけれど入り易いな」
マチア自身もそれを認めた。
「いい感じでな」
「そういうことよ。さて、じゃああんたは」
「練習か」
「そうよ。マスターしたかったらやっぱり練習よ」
ダイアナはとにかくこれなのであった。
「少しでも才能があれば練習したら伸びるものだからね」
「少しでもか」
「一ならそこから増やして百にでも二百にでもできるじゃない」
「零だったら無理でもか」
「そういうこと。ほんの少しでもあればね」
才能は一でもいいというのであった。ダイアナは。
「伸びるのよ」
「よし、わかった」
ここまで聞いてしっかりとした顔で頷くマチアだった。そうして再びそのバイオリンを構えるのだった。
練習を再開する。ルビーはそんな彼を見ながら今度は少しだけ意

地悪い顔になってそのうえでこんなことを彼に対して言ってきたのであった。
「熱心なのはいいけれど」
「何だ？」
演奏しながら彼女に応える。
「何かあるのか？」
「神経すり減らして髪の毛に影響与えないようにね」
「黙れ」
声だけむっとさせていた。神経を演奏に集中させながら。
「それを言うと只じゃおかないぞ」
「毛生え薬も忘れないでね」
なおも言うルビーであった。やはり少しばかり意地が悪い。
「禿は治るから」
「俺は禿じゃない」
声は意固地な響きを帯びていた。
「断じてな」
「禿よね、絶対」
「そうよね」
これはダイアナから見ても同じであった。
「マチアのそれはね」
「あのな、これはな」
そう言われてもガンとして認めようとしないマチアだった。そしてこう反論するのだった。

第百五十八話　モーツァルトその六

「気のせいだ」
「気のせい！？」
「それは」
「そうだよ、気のせいなんだよ」
そういうことにしてしまうのだった。彼自身は。
「この髪の毛のことはな」
「けれど。どう見てもあんたって」
「額広いし」
二人はそう言われても全く納得していなかった。なおも食い下がりそのうえでまたマチアに対して言葉を返す。彼のその額を見ながら。
「まだ十七でそれはやっぱり」
「かなりのものよ」
「ここで止まるってのは考えないのかよ」
「全然」
「それはまずないわ」
またしてもマチアの言葉を否定するのであった。
「っていうか額本当に広いじゃない」
「それも入学した時よりもさらに」
「だからそれは気のせいなんだよ」
マチアも必死だった。何とかそういうことにしてしまおうとしているかの様ですらあった。
「俺のこの額はな」
「だから。毛生え薬あるから」
「育毛もしてみる？」
その手段もあるのである。この時代は禿に対しては実に様々な対処法方が確立されている。人類は見事禿を克服できたのである。

「それで」
「どうかしら」
「だから俺には必要ないものなんだよ」
あくまでこういうことにしようとするマチアだった。
「そんなのはな」
「いや、必要よ」
「どっちでもいいからしたら？」
二人も引き下がらない。あくまで彼を禿としてそのうえで攻撃を続ける。禿が克服されてもそれでもまだ言われ続けるのであった。
「禿げてからでも遅くないけれど」
「してみたら？」
「まだ言うのかよ」
いい加減うんざりとした顔になってきたマチアだった。そしてまた言うのである。
「御前等な、いい加減にな」
「言っておくけれどからかってないわよ」
「結構真剣なんだから」
ルビーとダイアナは確かにその顔は真剣なものであった。そして今の言葉も。
「禿って病気だからね」
「遺伝病でもあるし」
「それは俺も知ってるけれどな」
この時代ではそこまで考えられているのである。そうしてそのうえでまた言われるのだった。マチアも知らないわけではないのである。
「けれどな。俺はな」
「まだ違うっていうの？」
「そう言い切るのならそれでいいけれど」
ルビーとダイアナはここで言い方を変えてきたのであった。こうしたふうにだ。

「けれど現実は怖いわよ」
「どんなに言い繕ってもね」
「禿るっていうのかよ」
マチアもまた真剣な顔で二人に応えた。
「俺が」
「今もじゃない」
「実際にね」
二人の言葉は容赦のないままだった。

第百五十八話　モーツァルトその七

「毛生え薬なら普通に薬局でも売ってるしね」
「通販でも買えるわよ」
それも実際に効果があるものがである。そうした意味ではこの時代は非常に素晴らしい時代になっていると言える。男のうちの幾割かにとっては。
「私達が言うのはそれだけよ」
「それだけだけれどね」
「海草も食えってか」
ほぼ無意識のうちに相手の話に乗ってしまっているマチアだった。
「それもだよな」
「あと牛乳よね」
「髪の毛ってカルシウムだから」
二人も何だかんだで彼にアドバイスをする。確かに髪の毛と額のことを指摘はするがそこには決して悪意がないことがわかるものだった。
「それでちゃんとしていたらね」
「尚且つストレスも溜めない」
「ああ、それもだな」
これについてもこの時代においても同じことだった。ストレスが髪の毛に非常に悪いことは人体そのものへの影響だからである。
「出来る限り心掛けてるからな」
「あっ、やっぱり」
「自覚してるじゃない」
今のは失言だった。二人ははっきりと彼に言ってきたのだった。
「ちゃんと」
「じゃあ何とかしなさいね」
「くっ、しまった」

こうなっては仕方がなかった。マチアも自身の劣勢をここで認めるしかなかった。それも今まさに敗北が決定しようとするレベルでの劣勢である。

「まあそれはな」

「はい、じゃあ今日は薬局ね」

「いいお薬買うことね」

「そこまでやばいのか」

あらためて自分の額について考えるマチアであった。そうした言葉だった。

「俺の額は」

「何度も言うけれどね」

「ロックオンされてるレベルね」

二人の言葉は相変わらずの調子である。

「だから。何とかしなさい」

「モーツァルトは髪の毛はあったから」

少なくとも禿げたとは言われてはいない。もっともあの頃の欧州の貴族社会は誰でも彼でも鬘をしておりそうしたことはわかりにくかったが。

「そういうところもね」

「しかりした方がいいんじゃない？」

「そういうものか？何はともあれな」

またバイオリンを構えるマチアだった。そのうえでの言葉だった。

「こうして練習をしていくか」

「音楽はそのままでいいと思うわよ」

「私もね」

二人はそちらにはもうあまり何も言わなかった。

「練習していったらね」

「上手くなっていくから」

「そうだな。とにかく練習だな」

マチアもそれはよくわかっていたので練習を続ける。髪のことは

とりあえずは置いておいて練習の方は順調に進んでいっていた。

モーツァルト　　完

２００９・１０・２

第百五十九話　鬘選びその一

鬘選び

練習を続けるマチア。その演奏は次第にものになってきていた。
「いい感じね」
ダイアナがその演奏を聴いて微笑んでいた。マチアは今は学校の屋上で演奏をしていた。彼女はそこに来てそのうえで声をかけてきたのである。
「またよくなってきたじゃない」
「そうか」
「大体一日でどれだけやってるの？」
「時間は測ってないな」
それはしていないというマチアだった。今も演奏をしてそのうえでダイアナと話しているのである。
「特にな」
「そうなの。時間は気にしていないの」
「時間があればする主義だからな」
気にはしていないが意識はしているということだった。
「練習はな」
「ふうん、そうなの」
「特に測ってはいない」
また話すマチアだった。
「特にな」
「わかったわ。そうなのね」
「朝に起きてまず練習してだ」
起きるとすぐなのである。
「それから学校でも昼休みや部活で練習して」
「家でもなのね」
「勉強のこともあるしトレーニングもしているがな」

「トレーニングもあるの」
「演奏は体力だぞ。走ったり筋力トレーニングをしないとな」
駄目だというのである。そうしたところまで真面目に考えてしているマチアだった。
「もたないからな。とてもな」
「何かそういうところは歌い手と同じね」
マチアのそうした話を聞いて述べたダイアナだった。
「私だって実はランニングとか腹筋とかしてるのよね」
「御前もなのか」
「やっぱり体力いるし」
それは彼女もまた同じということだった。
「それにライブあるじゃない」
「ああ」
「ライブの時って派手な服着るでしょ？露出の多いの」
「ロックとかヘビメタはな」
「私どっちも歌うし。パンクとかメタルも」
本当に色々なジャンルの歌を歌うダイアナだった。彼女の所属は軽音楽部である。そこでヴォーカルとして活動しているのである。
「だからね」
「プロポーションの維持も必要ってことか」
「そういうこと。何なら見てみる？」
ここでくすりと笑ってマチアに言ってみせてきた。
「結構自信あるのよ」
「いや、それはいい」
だがマチアはそれは断るのだった。結構無愛想な様子で。
「別にな」
「あれっ、私がいいって言ってるのに」
「大体どんな格好をするつもりなんだ？」
いぶかしむ顔を彼女に見せながら問うのだった。
「それでだ。どんな格好で俺の前に出て来るつもりだったんだ」

「ステージ衣装だけれど」
それだというのである。
「それでね。出て来るつもりだけれど」
「ステージ衣装か」
「黒いジーンズでね。右足のところは付け根からなくて」
つまり脚が露わになっているということである。
「それで上は白のタンクトップなのよ。凄いでしょ」
「如何にもロックらしい格好だな」
「そうでしょ。もう胸なんか凄くてね」
「見えるぞ、派手に動いたら」
「だからあれよ。対策もちゃんとしてるのよ」
それは忘れていないというのである。
「乳首に二プレス貼って下着はティーバックで」
「そこまでするのか」
「こっちだってそこまで見せるつもりはないし」
それなりに考えているということだった。

第百五十九話　髪選びその二

「別にね」
「そうか。ならいいがな」
「とことんまで見せるのは彼氏に対してだけ」
こんなことも言うのだった。
「この世で一人だけよ」
「彼氏か」
「今のところはいないけれど」
ここでは少し苦い顔にもなった。
「それでもね」
「いないのか」
「十七年ばかり」
つまり生まれてからということである。
「そういう相手はいないのよ」
「意外だな」
「まあ何ていうかね」
少しばかり視線を上にやっての言葉だった。
「縁がないっていうかね」
「縁か」
「気付いたら今までいなかったってわけなのよ」
そういうことだというのだった。自分では。
「まあそれでも別に困ってもいないけれどね」
「その辺りはカムイや洪童とか違うんだな」
「あの連中は馬鹿でしょ」
身も蓋もない言葉だった。
「っていうか彼女できないで帝王親衛隊とか何よ」
そんなことを言って何処かの核戦争後の世界の様な格好をして学園内のカップルに嫌がらせを続けているのである。一応瞑目として

は不順異性交遊撲滅委員会となっている。
「汚物は消毒だとか言って」
「ああしたら余計にもてないんだがな」
マチアもそれは非常によくわかっていた。
「本当にな」
「わかっていないのか本当に馬鹿なのか」
こうも言うダイアナだった。
「それか両方なのかもね」
「普段はあまりそういうわけでもないんだがな」
マチアの今度の言葉は多少二人を擁護するものだった。
「けれどな。ああした話になったらな」
「あの二人は急にああなるのよね」
ダイアナも彼に合わせて言う。
「困ったことにね」
「二人共外見はそんなに悪くないと思うがな」
「そうよね。普通よね」
取り立てて悪くないというのである。
「性格だって。悪くはないし」
「むしろ性格はいい方だな」
「カムイも洪童もね」
それはいいというのである。人間何につけても性格である。結局のところどれだけ顔がよくても性格が悪くてはどうにもならない。これはこの時代でも変わらない。
「それなのにね」
「まあ放っておくしかないな」
マチアはこう結論を出したのだった。
「あの連中はな」
「そうね。まあそれでよ」
「ああ。御前の彼氏のことか？」
「それもどうでもいいのよ」

やはりそうしたことにはこだわっていないダイアナであった。声の色も素っ気無いものだった。
「別にね」
「いいのか」
「だって。私は今は音楽に集中したいし」
だからだというのである。
「そっちには興味がないからね」
「そうか。だからか」
「そうよ。だからよ」
また言うのであった。
「別にね。それでよ、私の音楽だけれどね」
「そのロックとかパンクか」
「あんたはそっちの方興味ある？」
今度は彼女の方から彼に問うたのだった。
「そうした音楽は」
「別に嫌いじゃない」
マチアはすぐにダイアナの問いに答えた。

第百五十九話　髪選びその三

「むしろ好きな方だな」
「そうなの」
彼の今の言葉を聞いて微笑むダイアナだった。
「好きなの」
「どちらかといえばだがな」
「けれど好きなのね」
それをまた確かめるのである。
「ロックとかパンクも」
「ヘビメタもメタルもな」
「いいじゃない、じゃあ今度私のライブ来てみる？」
「ライブか」
「あんたのコンサートにも行くから」
それが交換条件というわけであった。
「だからね」
「そうだな。悪くないな」
それを言われてまんざらでもないといった感じのマチアだった。
「それもな」
「それじゃあそれはそれでいいわね」
彼の言葉を受けてすぐに決めてしまったダイアナだった。
「今度私のライブに来てね」
「ああ」
「それで私はあんたのコンサートにね」
「頼むぞ」
「曲はやっぱりあれよね」
話を決めたうえでさらに問うてきたのであった。
「モーツァルトよね」
「他にも演奏するつもりだがな」

「それでもメインでしょ」
このことを確かめることもした。
「モーツァルトが」
「それはな。そのつもりだ」
あっさりとそのことを認めもした。
「今もこうして練習してるしな」
「そうよね。やっぱり」
彼は今も演奏の練習を続けている。それは一曲ごとに僅かだが上達している感じだった。やはり継続は力なのであった。音楽に関しても。
「それじゃあ期待してるわね」
「是非な。期待し続けてくれよ」
「わかってるわよ。それでだけれど」
ここでまた話を変えてきたダイアナだった。今度の話は。
「あんたどういう格好で演奏に出るの？」
「格好！？」
「そうよ。衣装はどうするのよ」
このことを彼に問うてきたのだった。
「それは。かなり大事よ」
「衣装はもう一つしかないだろ」
何をわかりきったことを、と既に言葉に含ませているマチアだった。
「そんなことはな」
「じゃああれ？タキシード？」
「クラシックは常にそうだ」
少なくとも男はそうである。これが女ならばそれこそ様々なドレスに凝らなくてはならないがこの点は男の方がかなり気楽ではある。
「それしかないだろ」
「何かあまり面白くないわね」
それを聞いて実際にあまり面白くなさそうな顔をしてみせるダイ

アナだった。
「もっとさ。パンクとかヘビメタみたいによ」
「派手にやれっていうのか」
「面白くない？」
実際にそれを勧めてもきたのだった。
「それも」
「あまりな」
だが彼はそう思わないと返したのだった。
「少なくとも俺はそうは思わない」
「何でよ。やってみたらいいじゃない」
「クラシックの世界は保守的なんだ」
これはこの時代でも同じである。もっともこの点でも連合はエウロパのそれに比べるとかなりリベラルというか多種多様ではある。エウロパは貴族社会でありそうした儀礼には特に五月蝿いからだ。
「そんなことができるものか」
「何だ、面白くないわね」
「面白いとか面白くないとかそういう問題じゃないだろう？」
むっとしてダイアナに言葉を返すのだった。
「それは」
「そうだけれどね。まああれね」
あらためて彼に対して言うダイアナだった。
「あんたのコンサートはよ」
「ああ」
「楽しみにしてるから」
それでもこう答えるのだった。

第百五十九話　髪選びその四

「それはね」
「楽しみにしておいてくれ。こっちも練習していく」
「私もね。練習して衣装も凝るから」
「ああ、それは俺が楽しみにしておく」
マチアは少しだけ微笑んで彼女に返した。
「俺がな」
「そういうことでね。じゃあその時にね」
「またな」
こう言葉を交えさせてであった。彼等はこの場は別れた。そうしてその日マチアが部室に行くと。顧問の先生にこう告げられたのだった。
「当時の衣装ですか」
「うん、考えたんだけれどね」
若い飄々とした先生だった。表情は気楽で能天気そうなものである。
「それにしようかなって思ってるんだ」
「タキシードじゃなくてですか」
「あれだよ。規定とかそういうのは打破する為にあるんだ」
先生はここで如何にも芸術家らしいことを言ってみせた。
「そう、そこから新しいものが生まれるんだよ」
「規定観念の打破ですか」
「考えてみればいいよ。軍隊は軍服で演奏してるじゃないか」
「はい」
連合軍のことである。他ならぬこの学園の理事長がその軍のトップである国防長官だからこの話は実にわかりやすい話であった。
「そうだろう？タキシードでなくてはならない理由はないんだよ」
「ないんですか」

「そう、そして昔にも立ち返り」
こんなことも言うのだった。
「ここは当時の服を来て演奏するべきだよ」
「当時のですか」
「そしてマチア君」
今度は彼自身に顔を向けて話す先生だった。
「君はモーツァルトをやるんだったね」
「はい、そうですけれど」
「なら君はロココ時代の服を着るんだ」
「ロココですか」
「忌まわしい貴族文化ではあるけれどね」
やはりこの先生も連合の人間だった。エウロパ的なもの、とりわけ貴族的なものが嫌いであった。もっともクラシック界ではエウロパを嫌ってはクラシックそのものを否定しかねないが。
「それでいってもらうよ」
「はあ。ロココですか」
「バロックとロココがあって」
これは世界史の授業であった。
「モーツァルトはロココだからね」
「何か思い切り派手そうですね」
「そうだね。マリー＝アントワネット」
ギロチンの露と消えたそのロココの女王である。
「そしてサン＝スーシー」
「エウロパの総統官邸のモデルになったあれですね」
「そう、あれだ」
プロイセンのフリードリヒ大王がポツダムに建てた宮殿である。
「あれのようにだね」
「壮絶な格好になりそうですね」
「確かに女性はそうなる」
それは否定できなかった。実際に当時の貴婦人達の髪型は物凄い

ことになっていた。さながら博物館の様な有様になっていたのである。髪型がだ。
「しかし。それこそが既存のものの破壊なんだよ」
「規定のですね」
「そう、規定のね」
ここでは既存も規定も一緒のものになっていた。
「わかったね。じゃあロココだよ」
「その時の服をですか」
「着てそのうえで演奏をする」
また言う先生だった。
「そう、音楽は」
「音楽は？」
「爆発だから」
二十世紀の日本の芸術家と全く同じ言葉であった。
「それでわかったね」
「わかりました」
先生の暴走に従うしかなかった。とても止められなかった。
「それじゃあ」
「そしてだけれど」
先生はマチアが頷いたのを受けてさらに言うのだった。
「鬘はね」
「鬘！？」
「そう、鬘ね」
それの話をするのだった。

第百五十九話　鬘選びその五

「鬘はしっかり選んでおいてね」
「何で鬘が必要なんですか？」
マチアは今度ばかりは怪訝な顔にならざるを得なかった。その顔で先生に問うのだった。
「鬘なんて」
「だから。昔の衣装なんだよ」
またこのことを話す先生であった。
「昔のね。昔の服はわかってるよね」
「そのロココの服ですよね」
「そう、それ」
それは変わらなかった。やはりロココ時代の服である。
「当時の貴族の服で演奏するからね」
「となると」
「鬘じゃない」
先生の言葉はまさに普遍のものを語る言葉だった。
「お化粧をして鬘を被ってね」
「あの格好ですか」
「そういうことだよ。わかったかな」
「わかりました」
難しい顔をして答えるマチアだった。
「それじゃあ」
「暑いけれどそこは我慢してね」
マチアが難しい顔をしている理由はそれだと思った先生だった。
実は理由は他にあるのだがそうは考えなかったのである。ある意味幸せな人である。
「いいね、そこは」
「ええ、わかりました」

こうしてそのロココ期の貴族の衣装で演奏することになったマチアだった。早速演劇部に部員達と共に行きそこで衣装を選ぶことになった。

「ああ、これだよな」

「そうよね」

皆演劇部の衣裳部屋に入ってそのうえで話をする。そこにはその時代の貴族達の服も多くあった。それこそ様々な服がそこにある。

「こういうドレスとか」

「こうした靴もあるんだな」

貴族の編み上げ靴を見ても話す一同だった。

「演劇部には」

「あれっ、ていうか」

「そうだよな」

そして皆ここで気付いたのだった。

「この衣装って確か」

「歌劇部の」

明香や春香が所属しているその部である。歌劇場でいつも歌っている彼等のことである。

「ふうん、あの衣装ってここにあったの」

「歌劇部のも」

「ああ、それね」

彼等を部屋に案内してそのうえであれこれと紹介していた演劇部員がここで彼等に言った。

「うちの衣装は歌劇部と一緒になってるんだ」

「そうだったの、やっぱり」

それを聞いて納得した顔で頷くマチア達だった。

「何かそうかなって思ったけれど」

「そういうことだったんだ」

「そうだよ。この衣装ってね」

その演劇部員は皆に話すのだった。

「一つ一つが物凄く高いし」
「そんなに高いの？」
「これって」
「絹だしね」
丁度今回マチア達が着るその服である。ロココ期の貴族の服である。
「結構値が張るんだよね」
「まあ絹はね」
「確かに」
この時代ではただ糸だけを取って作れる蚕も存在しており絹の生産もかつてより遥かに大規模になっている。しかしそれでも木綿やポリエステルに比べれば高価なままである。
「それもこんなにあったら」
「やっぱり高いしね」
「だから演劇部と歌劇部両方で使ってるんだ」
お互いが持てばそれだけお互いの部費の負担になるからである。
「そうしてるんだ」
「成程、それじゃあ」
「これもなんだ」
「そうだよ」
部員達は今度は日本の鎧兜を見つけた。何とそれも本物である。他には西洋の甲冑もまる。十字軍の鎖帷子や槍等までである。
「流石に武器は模造だけれどね」
「まあそれはね」
「流石によね」
「本物使ったら死ぬから」
これは言うまでもないことであった。

第百五十九話　髪選びその六

「刃を落としたのでも危ないからね」
「あっ、これプラスチックだ」
「ゴムも使ってるわ」
実際に触ってみるとわかることだった。
「これを使ってなんだ」
「そうしてやってるのね」
「そうなんだ。武器だけは流石に本物じゃないから」
演劇部員はこのことは念押しするのだった。
「そうしてるんだ」
「成程ね」
「安全にも気を使ってるのね」
「流石に人死んだら洒落にならないから」
もっともな理由であった。
「他の衣装とか道具関係は本物でもね」
「まあそれはね」
「流石に本物じゃないのね」
「そういうこと」
演劇部員はまた話した。
「だからそれは安心していいよ」
「そうさせてもらうわ」
「俺達は武器は使わないけれど」
それでも用心に越したことはないということだった。彼等はそんな話をしながらそのうえで衣装を選ぶのだった。
そこには当然ながらマチアもいた。彼も衣装選びに余念がない。
色々と衣装を見ているうちにだった。奏楽部員の一人が彼に声をかけてきたのだった。
「なあマチア」

「何だ？」
「御前はどの服にするんだ？」
こう彼に問うてきたのである。
「それでどんな服にするんだ？」
「まだ決めてないんだけれどな」
彼の返答はこうであった。
「まだな」
「何だよ、まだなのかよ」
「そういう御前は決めたのか？」
「ああ、これな」
彼はにこやかに笑って自分が持っているその衣装をマチアに見せてきた。それは赤紫に銀の刺繍と白いフリルのついたみらびやかなものであった。その服を見せて言うのだった。
「これにするな」
「それか」
「どうだよ、これで」
そしてマチアに対して問うのだった。
「この服でな」
「いいんじゃないのか？」
彼の容姿とその服を見比べたうえで述べるマチアだった。
「それで」
「そうか。じゃあこれでいいな」
「いいと思うぞ、それでな」
「よし。じゃあ御前はどうするんだ？」
「俺は。そうだな」
彼はまだ衣装を選んでいる。その中である者を見つけたのだった。
「これがいいか」
「それか」
「どうだろうな、これでな」
言いながらだしてきたのは黄緑の服だった。やはりこれにも銀の

糸で刺繍が施されておりそして袖や襟は白いフリルが付けられている。
「黄緑な」
「何か歌劇部のフィガロの結婚で使われてなかったか？その服」
「そういえばそうだったか」
「ああ、確かな」
ここでマチアと彼はこのことを思い出した。マチアにしろ彼の服をまた見てみて言うのだった。
「そういえば御前の服もな」
「そうだよな。使われてたよな」
「ああ。何かそれ思うと面白いものだな」
「さっきも言ったけれど歌劇部でも使ってるから」
ここでまた説明する演劇部員だった。
「それでね」
「そうか。それでか」
「一応洗ってもいるんだよな」
「一度使ったらクリーニングね」
それは忘れていないというのである。
「してるから安心していいよ」
「そうか。ならいい」
マチアはそれを聞いて安心したように笑った。

第百五十九話　髪選びその七

「それならな」
「あと髪もね」
演劇部員は今度はそれを話に出してきた。
「髪もちゃんとしてるよ」
「それか」
マチアは髪と聞いてその顔を少し微妙にさせたのだった。
「髪もあったか」
「あるよ。そっちも虱が沸かないようにちゃんとしてるから」
こう言うのである。
「衛生的にね」
「髪もしなくちゃいけないんだな、やっぱり」
「ロココ風だよね」
演劇部員もそれを知っているのだった。そのうえでの言葉であるのははっきりとわかるものだった。
「そうだよね、確か」
「ああ、そうだ」
少し憮然となった顔で答えるマチアだった。
「それもだけれどな」
「髪はね」
部員は早速その髪を出してきた。それは。
「まずこんなのがあるけれど」
「何だそれは」
「バッハタイプ」
それだというのである。見ればそれは確かに音楽室の肖像画にある音楽の父そのままの髪であった。見事なまでにバッハの髪型であった。
「こんなのがあるけれど」

「止めておくな」
マチアはすぐにそれは断ったのだった。
「何か物々しい」
「物々しいんだ。それじゃあ」
部員はここでまた一つ鬘を出してきた。それは。
ダークブラウンでやけに長い毛の鬘だった。癖毛である。
部員はそれを見てだった。こう告げた。
「ルイ十五世タイプだよ」
「ルイ十四世ではなくてか」
「うん、十五世」
そちらだというのである。幼少よりフランスきっての美男と謳われ肖像画においてもその美麗な顔を見せている。王としての資質はともかくとして美男ではあった。
「その髪型を再現したんだ。鬘だけれど」
「それもな」
やはりこれにも難色を締めるマチアだった。
「ちょっとな」
「駄目かな」
「派手過ぎるだろ」
だからだというのである。
「これはな」
「そんなに駄目かな」
「バイオリンだからな。長いものは邪魔になるしな」
それもあるのだというのである。
「それに」
「それに？」
「暑い」
それもなのだった。
「あまり長いとな」
「そうなんだ。じゃあこれは駄目なんだね」

「悪いな」
こう言ってその鬘を断るのだった。
「その鬘はな」
「じゃあ短い鬘がいいんだね」
「それで頼む」
こう演劇部員に対して話した。
「その鬘をな」
「じゃあこれなんかどうかな」
部員はすぐに他の鬘を出してきたのだった。その鬘は白く短い鬘だった。マチアはその鬘を見て言った。
「んっ!?その鬘は」
「モーツァルトなんだ」
それだというのである。

第百五十九話　鬘選びその八

「モーツァルトタイプの鬘なんだよ」
「それなのか」
「うん、あの肖像画のモーツァルトね」
バッハの次はモーツァルトだった。奏楽部に相応しいと言える流れである。
「その髪型なんだ」
「白髪なんだな」
「あれは多分染めてるけれどね」
白い髪の理由はそれなのである。ロココ時代はかなり髪の白い人間が多かったのはそのせいだったのである。そしてそれを染めているやり方というと。
「あれは小麦を使っていたんだ」
「小麦！？」
「そうだよ、小麦粉ね」
それだというのである。
「小麦粉を髪の毛とか鬘にかけてね」
「それで白くか」
「小麦粉は白いじゃない」
真っ白である。これはもう言うまでもないことだ。
ただしそれはその時代のことでこの時代では黒いものもあれば青いものも黄色いものもある。それこそオズの魔法使いの世界の如く青や黄色や赤、紫、緑のパンもあるのだ。
「だからそれでね」
「小麦粉をかけて色を白くしていたのか」
「そういうこと。多分モーツァルトもね」
「そうやって髪の毛を白くしていたのか」
「それか鬘を」

鬘の可能性も否定しないその演劇部員だった。
「白くしていたんだ」
「そうだったのか。それで白くしていたのか」
「まあその時はね」
部員はここで話を歴史に移してきた。
「あれだよ。小麦粉でパンを作るから」
「それはな」
最早自明の理である。
「それなのに貴族が自分達のファッションにパンの元を使うから」
「庶民にとってはたまったものじゃないな」
「そうだよ。だから庶民にはその白い髪は評判が悪かったんだ」
自分達の大切な食べ物を贅沢の為に使われてはたまったものではないというのである。欧州の貴族の贅沢は時としては途方もないものになっていたのだ。
「それでね」
「そうだったんだな」
「まあそういうこともあったけれど」
「その鬘は元から白いんだな」
「白髪で作ったんだ」
そうだというのである。
「これはね」
「お年寄りの白髪じゃなくてか」
「実はアルパカの毛だったりするけれど」
言葉が少し口ごもる部員だった。
「それをコーディネイトしてね」
「それで鬘にしたのか」
「そう、アルパカでね」
またそれだと話す部員であった。
「アルパカの毛を人間のものに見せているんだ」
「よくそんなことができたな」

マチアはアルパカを人間の毛にしたことにかなり感心していた。
「凄いものだな」
「そうだろう？それでどうするの？」
「それにするか」
マチアはそれだと決めたのだった。
「それじゃあな」
「モーツァルトでいいんだね」
「ああ、それでいい」
また言うのだった。
「もうそれでな」
「モーツァルトを演奏するからか」
「それでか」
周りからもマチアに声がかかってきた。
「まあそうだな」
マチア自身もそれを認めるのだった。
「やっぱりモーツァルトだしな」
「そうか。それじゃあ」
「決まりだな」
「じゃあ」
部員がその鬘をマチアに手渡してきた。
「どうぞ」
「ああ、じゃあな」
そのアルパカの鬘を今受け取った。
「借りるな」
「どうぞ」
こうして彼はその鬘を被ることにしたのだった。彼にとっては大きな決意だった。そしてその決意と共に演奏の本番に向かうのだった。

髷選び　完

2009・10・8

第百六十話　アルパカの鬘その一

アルパカの鬘

「アルパカねえ」
「ああ、そうだ」
また昼休みに演奏の練習をしている。その中でダイアナに対して話すのだった。
「アルパカの毛を使った鬘をな」
「また面白い鬘借りたのね」
ダイアナはその話を聞きながら述べた。話を聞きながら屋上のベンチに座ってそのうえで昼食を食べている。それはサンドイッチだった。
「アルパカだなんて」
「アルパカについては知ってるか？」
「よくね」
知っているというのだった。
「あんたも知らないってわけじゃないでしょ？」
「アルゼンチンにも昔からいるからな」
彼は言うのだった。アルパカは昔から中南米諸国で家畜として飼われている。この時代においては中南米諸国以外の国々でも広く飼われている。しかし最もよく飼われているのは中南米諸国であるのは伝統である。家畜の飼われる状況にもそれが関係しているのだ。
「一応は知ってるけれどな」
「そう、やっぱりね」
「ただそんなには知らない」
こう言い加えるマチアだった。いつも通りバイオリンの練習をしながら。
「そんなにな」
「そう。知らないの」

「山で飼われるんだったな」
「ええ、高山でね」
そのことをマチアに対して話すダイアナだった。
「高山で飼うものよ、基本はね」
「そうだったな」
「昔は毛を取るだけだったけれど」
つまり羊等と同じだったというのである。
「もう荷役に使ったりお乳飲んだり」
「あとは食べてだな」
「そういうこと。何でも使えるのよ」
とにかく何でも食べるのが連合である。それはアルパカとて例外ではないのである。アルパカもそれこそ音以外全て役に立てられているのである。
「アルパカはね」
「それで鬘にも使われるのか」
「それがちょっと意外なのよ」
ダイアナは言った。
「実際はちょっと以上だけれど」
「意外なのか」
「毛皮には使うわ」
それはあるというのである。
「加工してマフラーに使ったりもね」
「しかし鬘になるとか」
「帽子とかじゃないわよね」
マチアにこのことを尋ねたのだった。
「それじゃないのよね」
「ああ、鬘だ」
また答えるマチアだった。
「それだ」
「鬘ねえ」

そこまで聞いて首を捻るダイアナであった。食べながらそうしている。
「それだったら羊の毛とかでもできるってなるけれど」
「できるみたいだな」
マチアは演奏を続けながらまた述べた。
「どうやらな」
「あれっ、それでもできるの」
「あれだぞ。十八世紀のエウロパ貴族の鬘だぞ」
マチアはその鬘について詳しく話した。
「ロココのな」
「ああ、それだったらわかったわ」
それだったら、というのだった。
「あの時代のあそこだったらね」
「それでわかったんだな」
「よくね。成程ね」
実はダイアナは鬘と聞いてもそこまで考えていなかったのである。
それもそこまではだった。
「ああいう感じだったらね」
「わかってくれたか」
「まあね。実物は見てないけれどね」
「暖かい。というか暑いな」
その鬘への感想だった。

第百六十話　アルパカの髪その二

「実際に被ってみたらな」
「ああ、髪被ったことないの」
彼の言葉を受けてふと笑ってみせたダイアナだった。
「あんたまだ」
「ないがそんなにおかしいのか？」
「被ってなかったら何だっていうんだ？」
「いい予行練習じゃない」
からかうような笑顔だった。
「それも」
「俺の将来にか」
「そうよ。髪着けるの？それとも育毛剤にするの？」
どちらにしてもはげ対策というわけである。この時代も髪は健在なのだ。
「どっちにするの？」
「どっちでもない」
演奏の練習を続けながらムキになっている顔を見せていた。
「どっちでもな」
「そうなの。どっちでもなの」
「それが悪いのか？」
「禿頭晒すのは辛いわよ」
今度は幾分か意地悪そうな言葉だった。
「それもかなりね」
「俺は禿じゃない」
強引にそう言い切るマチアだった。
「それにこれからも禿げない」
「随分強気ね」
「事実を言っているだけだ」

「だといいけれど」
しかしダイアナの言葉は相変わらず冷たいものだった。
「それでね」
「事実は変えられないんだよ」
マチアの強引な主張はなおも続くのだった。
「絶対にな」
「確かにね」
ダイアナもそれは否定しなかった。事実が変えられないということはだ。そのことは彼女も否定しないし言い切るのであった、
「それはね」
「だったらいいな」
「けれどよ。あんたはよ」
またしてもマチアに顔を向けての言葉だった。
「明らかにね。髪の毛が」
「やばいっていうのか」
「そうよ。危ないよ」
はっきりと述べるのだった。
「あんたの髪の毛。特に額がね」
「額は普通だよ」
彼は主張し続ける。
「至ってな」
「そう言っていられるのも今のうちだったりしてね」
「まだ言うのか？」
「何度でも言うわよ」
ダイアナは言い続ける。
「額。何とかしなさい」
「額はな、生まれつきだしな」
「じゃああんたの一年の頃の写真だけれど」
言いながら出して来たの携帯電話だった。そこにははっきりと彼の一年前の写真が写っていた。見れば彼の額は今と比べると。

「後退してるじゃない」
「後退してないだろ」
あくまでこう言い張る。
「全然な」
「それは主観ってことよね」
「主観じゃない、客観だ」
まだ言うのであった。
「誰が何と言おうとな」
「まあそれで二十になったら見事なまでにいってるわよ。そういう人知ってるし」
「二十でか」
「そうよ。二十でいった人いるから」
つまり二十で禿げたということである。世の中にはそうした人もいるのである。これは昔から今に至るまで変わらないことである。

第百六十話　アルパカの髪その三

「もうね。髪の毛が一本もなくなったのよ」
「一本もか」
「何もかもがなくなったのよね」
実に恐ろしい会話であった。
「もうね。十六からどんどんいって」
「二十になったらか」
「私の実家の前に済んでいたお兄ちゃんだけれど」
つまり彼女にとって古い知り合いというわけである。
「もうね。見事なまでにね」
「そうか。辛い話だな」
「髪の毛一本もなくなってそこから育毛剤使ってね」
これもまたよくある話であった。
「それで元に戻ったのよ」
「元に戻ったのならいいんだがな」
「何とかね。ただ」
「ただ？」
「その時思ったのよ」
しみじみと語るダイアナであった。
「つくづくね。髪の毛って怖いなって」
「聞いていて身震いするものがあるな」
「ほら、そこ」
まさにそれだと指摘するダイアナだった。
「あんた怖いって言ったわよね、今」
「それがどうしたんだ？」
「やっぱり禿げてるの気にしてるんじゃない」
それを見抜いての言葉なのだった。ダイアナは鋭かった。
「そうでしょ」

「気のせいだ」
何とか否定しようとするマチアだった。
「それはな」
「それにしても。何かね」
また言うダイアナだった。
「世の中どうなのかしらね」
「どうなのかって？」
「そのお兄ちゃんいい人なのよ」
ダイアナは寂しそうに言うのだった。
「もうね。かなりね」
「いい人でも不幸に逢うのか」
「禿るのは不幸よ」
また話すダイアナだった。
「理不尽なものね。世の中はね」
「全くだな。そういえばな」
「何かあったの？」
「いや、フックから聞いた話だけれどな」
フックが話に出て来たのだった。
「あいつからな」
「フックから？」
「後で話すな」
今はその話を止めようとしたのだった。
「嫌な話だ」
「今すぐに聞かせてくれない？」
しかしだった。ダイアナの目の色が一変した。それは明らかに不審なものを感じ取った、そんな目であった。
「いいかしら」
「聞くんだな」
「そこまで話振っておいてそれはないでしょ」
ダイアナの言葉が鋭いものになった。

「違う？」
「よし、じゃあいいな」
マチアも意を決した顔になった。それでだった。
「話すぞ」
「ええ」
ここであることをダイアナに話したマチアだった。そしてそのうえで演奏の練習も終わった。
そして演奏は。見事なものであった。
マチアはそのモーツァルトを見事に演奏してみせた。それが終わると拍手と共に。
「アンコール！！アンコール！！」
これであった。もう一回というわけである。
それに応えてアンコール演奏をする。それも終われば。
「ブラボーーーーーッ！！」
これであった。最高の賛辞である。彼の演奏は大成功であった。
何度も頭を下げて舞台を行ったり来たりしてそうして礼をする。
そのうえで楽屋に帰る。するとそこではもう部の仲間達が笑顔で待っていた。
「よかったな」
「大成功だったな」
こう彼に笑顔で言うのだった。
「頑張ったかいがあったよな」
「練習のな」
「ああ」
普段はあまり笑わない彼も今日は違っていた。笑顔で応えるのだった。

第百六十話　アルパカの髪その四

「やったよ、本当にな」
「満足か？今」
「どうだよ、そこは」
「満足してるさ」
まさにそれだというのだった。
「充分にな」
「そうか。じゃあいいぜ」
「あんたがそうならね」
「よし、これで話は終わりだな」
マチアはあらためてこう言うのだった。
「俺の話はな」
「御前の？」
「それってどういうことよ」
「俺の演奏はこれで成功に終わってな」
今の自分の言葉にいぶかしむ仲間達への言葉である。
「そりゃまた次の演奏があるけれどな」
「今はか」
「とりあえず終わりってことか」
「ああ。俺自身の為にすることは終わった」
そういうことだった。
「次は他の奴の為にする番だ」
「他の奴って」
「何があったの？」
「それはこっちの話でな」
それは言わないということだった。少なくとも詳しくはである。
「まあ簡単に言うとな」
「ああ」

「何なの？それで」
「人助けだな」
それだというのである。
「人助けをしてくる。ちょっとな」
「人助けか」
「つまりいい人になるのね」
「いい人かどうかはわからないけれどな」
それはわからないというのである。しかしそれでもこうも言うのだった。
「少なくとも許せないことを成敗するってところだな」
「じゃああれじゃないか？」
「いい人じゃない」
「そうだよな」
皆それを聞いて言った。話を聞く限りはそう思えるものだった。
「許せないことを成敗するって」
「怪人を倒すのも同じじゃない」
「怪人を倒す奴がいい人だとは限らない」
しかしであった。マチアはここでこんなことを言うのだった。
「とんでもない卑劣で残忍で陰湿な奴でも怪人を倒したりするよな、特撮じゃ」
「まあそれはな」
「その通りだけれど」
皆もそれを言われると思い当たるふしがあった。この時代でも特撮は健在だがその中で彼等そうした番組の中で出て来るヒーローの中にはそんな存在もいるのである。
「じゃああれか？」
「あんたダークヒーローにでもなるの？」
「そういうのかな」
「なりたくてなるつもりはないがな」
それはそうではないと言いはする。

「しかしな。必要だったらな」
「何か物騒ね」
「そうだよな」
皆そんなマチアを見てひそひそと話した。
「っていうか明らかに何かおかしいだろ」
「深刻っぽいけれど」
「当事者にとっては深刻で見聞きしていて気持ちのいい話じゃない」
マチアの今度の言葉はそうしたものだった。
「それもかなりな」
「まあ何かはわからないけれどな」
「頑張ってよね」
そんなことも言った彼に対して皆はこう言うしかなかった。
「それで人助けか」
「ちゃんと最後までやり遂げてね」
「ああ、そうさせてもらう」
真剣な顔でこくりと頷くマチアだった。
「そういうふうにな」
「まあ次の演奏までちょっと時間があるしな」
「その間に終わる話よね」
「絶対に終わらせる」
こう言い切ってみせたのだった。

第百六十話　アルパカの髪その五

「何があってもな」
「その意気だからな」
「頑張ってよね」
「そうさせてもらう。それでは今はな」
「打ち上げな」
部員の中の一人の言葉だった。
「それでいいよな。店は何処がいい？」
「シェラスコでいいじゃない」
褐色の肌の少女が言い出した。
「お肉とビールでどうかしら」
「あっ、いいなそれ」
「そうよね」
皆もそれに賛成する。そしてそれはマチアもだった。
「俺もそれだな」
「あれっ、シェラスコなのに」
「いいの？」
「ああ」
また応えてみせるのだった。
「それでいい」
「ブラジル料理なのに」
「まさか」
「意外か？俺がブラジル料理を食べるのは」
「だってな」
「そうよねえ」
皆顔を見合わせてそれぞれ言う。そうしてそのうえでまた話すのだった。
「御前アルゼンチン人だから」

「ブラジルは好きじゃないでしょ」
「確かにあまり好きじゃない」
こう言って微妙なものを隠さない。やはりアルゼンチンとブラジルはこの時代でもその間にどうにも微妙なものを持っているのである。
「本当にな」
「けれどいいんだな」
「それで」
「俺だってたまにはシェラスコを食べたくなる時がある」
だからだというのだった。
「それがたまたま今だったというだけだ」
「そう。たまたまね」
「それでか」
「実はブラジルは嫌いじゃない」
嫌いかというとそうではないというのである。
「別にな」
「嫌いじゃないのかよ」
「さっきあまり好きじゃないって言ったじゃない」
「けれど嫌いじゃない」
それは確かに言うのだった。
「別にな」
「まあ嫌いじゃなかったらいいけれどな」
「別にね」
皆それならそれでいいとするのだった。確かに何かを嫌うという感情はお世辞にも好ましい感情ではない。それは抱く方も抱かれる方も幸せにはしない感情であるからだ。
「それじゃあ行くか」
「シェラスコね」
「そうだな。それにしてもな」
ここでまた思うマチアだった。

「シェラスコを美味く食うにはだ」
「ソースをかける」
「それもお気に入りのソースを」
皆は何もわからずこう言うだけだった。彼の言葉の意味をこう捉えただけである。
「それでたっぷりと食べる」
「シンプルかつゴージャスにね」
「そうだ、ソースをかけるんだ」
皆のその言葉に頷く彼だった。
「最高のソースをな」
「最高のソース、そうそう」
「あそこのお店のソース最高なのよ」
肉料理はただスパイスをつけてそれで焼いたり煮たりしてそれで終わりではない。それにソースも必要なのだ。そのどちらもなければ最高にはならないのである。
皆はその話をしていると思っていた。だがマチアは違っていた。彼はまた別のシェラスコを見ていてソースを考えていたのである。
「ソース、作るか」
「えっ!?」
「作る!?」
皆またマチアの言葉に顔を向けた。
「作るって!?」
「あのお店おソース自分で作るお店じゃないけれど」
「ああ、違う」
そうではないと応えるマチアだった。
「というか何でもない」
「そう。なにでもないの」
「そうか」
「じゃあ。行くか」
ここまで話してだった。

「それじゃあな」
「ああ、シェラスコな」
「食べに行きましょう」
皆で言い合い遂に打ち上げに向かうのだった。マチアは演奏会を成功させた。しかしそれと共に何としても終わらせなくてはならない問題も抱え込んでしまったのだった。

アルパカの髭　　完

２００９・１０・１１

第百六十一話　いじめその一

いじめ

マチアから話を聞いたのはダイアナだけではなかった。クラスの皆がだった。

「えっ、それって」

「本当のこと!?」

皆それを聞いてまずは一斉に顔を顰めさせた。

「そんな奴がいたのかよ」

「っているのか」

言葉はすぐに訂正された。

「信じれないけれど」

「私も」

皆で言い合うその顔も顰められたものであった。

「それでうちの学校だよね」

「中等部よね」

「ああ、そうだ」

マチアが皆に話す。皆今は教室にいる。そこで皆聞いているのである。

「中等部の三年だ」

「三年Ｇ４組か」

「そこなのね」

「そこで行われている話だ」

マチアの顔も同じだった。かなり顰められている。

「そこの動物の保育係がな。やってることなんだよ」

「何でわからないんだ?それ」

こう言ったのはフックだった。

「そんなことをしていてな」

「だよな」

「わからないようにしているってことだな」
マチアは皆に対してこう述べた。
「つまりはな」
「わからないようにか」
「ずるい話だな」
「だからそういうことするのよ」
今度言ったのはペリーヌだった。実に忌々しげな口調であった。
「そういうことするのはね」
「卑怯だからってことか」
「そうなるわね」
皆それを聞いてこう考えたのだった。
「それでなのね」
「何か嫌な話だな」
「嫌な話だからだよ」
マチアはまた言った。
「何とかしないといけないって思ってな」
「そうだな」
フックはここで頷いたのだった。
「それでどうするんだ？」
「解決方法ってこと？」
「そうだよ。それだよ」
あらためて皆に問うフックであった。
「このまま何もしないって訳じゃないだろ？」
「何もしないんならそもそも話さないさ」
こうフックに答えたマチアだった。
「こんな話な」
「そうだな。じゃあな」
皆それを聞いて述べたのであった。
「具体的にはどうするかだけれど」
「誰かいい考えあるの？」

「そうね」
ここで一人出て来た。それはビアンカだった。
「私に考えがあるわ」
「ビアンカ」
「それでどういった考えなの？」
「そうよ、いいかしら」
「ええ」
「それでどうするの？」
「奴等がそういうことをする場所はわかっているのよね」
このことを皆に尋ねるのであった。
「それはね」
「ああ、中等部の飼育小屋だ」
そこだというのである。
「そこに入ってしているんだよ」
「なら話は早いわ」
そこまで話を聞いて頷くビアンカであった。そうしてそのうえでさらに述べるのだった。
「それだったらね」
「飼育小屋に入るんだな」
ここで彼女に問うたのは彼女の双子の兄アルフレドだった。彼が問うのであった。
「まずはそれだな」
「入ることは入るわ」
まずはこう答えるのだった。

第百六十一話　いじめその二

「まずはね。ただしよ」
「ただしか」
「それは私達じゃないわ」
だというのである。
「そうね。姿が消せてそのうえで連中を一旦動けなくできる人がいたら」
「私ですね」
ここで出て来たのはベッキーであった。セーラの従者の一人でラメダスと一緒に彼女の後ろにいつも控えている彼女である。彼女が出て来たのである。
「それは」
「そうね。ベッキーがいいわね」
ビアンカは彼女の姿を見て述べたのであった。
「ここはあんたが一番ね」
「そう。だったらまずは私が」
「飼育小屋の中に入るのよ」
最初はそうするというのである。
「それで連中が来たらすぐに動けなくさせて」
「了解」
「ただし。今は懲らしめる位でいいわね」
言いながら述べた彼女であった。
「それはね」
「懲らしめる位かあ」
「それ位でいいかな」
「確かに動物達をいじめるのは最低よ」
それは確かにそうだというのである。彼等が今問題としているのは動物虐待の話である。それを聞いて見過ごせないというのである。

「それはね」
「けれど懲らしめるだけでいいの」
「もっとえげつないことすると思っていたのに」
「流石に殺したりしたら私だって容赦はしないわよ」
その場合は、というのである。
「けれど殺してないでしょ」
「ええ」
「それは間違いないみたいだね」
「だったらいいわ」
こう話すのである。
「その場合はね」
「そう。だったら」
「それだけでいいかな」
「いいわよ」
また話すビアンカだった。
「それ位でね。ただ」
「ただ？」
「懲らしめるにしても徹底的によ」
そうするというのであった。
「やらないとね」
「それはそうだけれど」
「それでも。懲らしめるだけなのね」
「そうよ。それで終わらせるべきよ」
ビアンカはあくまでこう主張するのだった。
「ただしね」
「ただし？」
「懲らしめるにしてもそれこそ失禁する位のことはするわよ」
それは当然だという口調だった。
「絶対にね。やるから」
「失禁ね」

「そこまではやるのね」
「その通りよ。まあ見ていなさい」
ビアンカは腕を組んでいた。そうしてそのうえで語るのだった。
「絶対にやってもらうからね」
「絶対にね」
「そうなの」
「さて、後は実行に移すわよ」
あらためて言う彼女であった。
「いいわね。ベッキー」
「任せて。私の魔術を使ってね」
にこりと笑っての言葉であった。そうしてそのうえで、であった。
次の日に早速動くのだった。皆でその飼育小屋に向かうのだった。
それからだった。彼等は隠れて陣取る。ベッキーが皆が見守るその中で飼育小屋に入る。そうしてそれからであった。
姿を消したのだった。完全に」
「消えたわね」
「ええ」
「完全に」
そう、彼女は消えてしまった。まさに霧の如くであった。

第百六十一話　いじめその三

「そういう魔術も使えるからね」
「我がマウリアではああした魔術もあるのです」
セーラもいた。物陰に隠れながら皆に話していた。それぞれ木陰や草陰に隠れてそのうえで飼育小屋を見守っている。時間は昼休みである。
昼休みの飼育小屋は平和なものである。しかしその中にいる兎達は怯えていた。まるで何かが来るのを恐れているかの様である。
「兎達のあの態度は」
「ええ」
「間違いないよ」
皆はその兎達を見ながらビアンカの言葉に頷いた。どの兎達も小屋の隅っこに固まってがたがたと震えている。どう見ても尋常な様子ではない。
「あんなに怯えて」
「話は本当だったの」
「決まりね」
ビアンカはその怯えている兎達を見て言い切った。
「お仕置きするわよ」
「そうね。それじゃあ」
「ビアンカの言う通りにしようか」
「ベッキーは姿を消したし」
最早何処にいるのか全くわからない。インビシビルであった。
「その連中が来てね。それからよ」
「あっ、噂をすれば」
「来たわよ」
話しているとだった。すぐに来たのであった。
三人だった。彼等はやたらとどす黒い顔をしていた。セーラはそ

れを見て言った。
「醜い顔ですね」
「確かにね」
「何ていうか如何にも悪事を働きそうなね」
「人の行いはその顔に出てしまいます」
セーラはさらに言うのだった。
「醜い行いをしていればそれがそのまま顔に出てしまうのです」
「だからあの連中あんな顔になってるのね」
「それでなの」
「はい、その通りです」
だからだというのだった。そしてセーラの言葉通りのものをはっきりと感じさせるものがその顔にあった。やはり醜いものが浮き出ていた。
そしてその言葉もだった。実に醜いものであった。
「なあ、今度はどうしてやる?」
「逆さ吊りにしてやるか?」
「ライター近付けてやろうぜ」
「いや、蛇けしかけてやろうぜ」
その醜い顔をそのまま表した様な言葉であった。
「どっちにしろまたいたぶってやるか」
「そうだな」
そんな話をしていた。ビアンカは彼等のそうした言葉を聞いて述べた。
「今ここで懲らしめて正解だったわね」
「確かにね」
「あのままいったらそれこそ」
「殺してたわ」
ビアンカは断言した。
「兎達をな」
「今報いを与えることが彼等の救いにもなります」

セーラは達観した様な澄んだ声で述べた。
「今ここで、こそです」
「あの連中を救おうって気持ちはないけれどね」
それはないというビアンカだった。
「兎達が助けられるんならね」
「それでいいっていうのね」
「あんたは」
「そうよ。それでいいのよ」
彼女はこのことだけを考えていた。実際のところは。
「懲らしめて救いなんていうのは考えてないわ」
「あくまで兎達を助ける」
「そういうことなのね」
「その通りよ。まあ殺してないから懲らしめるだけでいいっていうのは本気だけれどね」
「それではだ」
彼女の言葉を聞きながら問うたのはアルフレドだった。
「殺していたらやっぱり」
「それこそライオンの餌よ」
言葉は本気であった。
「そうしてやったわ」
「そうか」
「それで悪い？」
兄に顔を向けて問うた言葉だった。

第百六十一話　いじめその四

「それで」
「いや、悪くはないよ」
「っていうかそれで当然よ」
「犯罪なんだし」
皆ビアンカのその考えに賛成した。連合においては動物虐待は立派な犯罪である。殺せばそれで死刑になるケースもあるのだ。動物の命も人の命も同じだけの重さがあるというのである。ただし犯罪者の命は何よりも軽いのもまた連合という社会なのである。
「それ位はね」
「当然じゃない」
「もうそれはね」
「その場合はね」
「そもそもよ」
ここで言ったのはペリーヌだった。
「今あの連中がやってるってことだけで犯罪じゃない」
「動物虐待だからなのね」
「そうよ」
まさにそれだとビアンカに答えるペリーヌだった。
「今の時点で」
「だから。死ぬ思いで懲らしめるのよ」
死ぬ思いだというのであった。
「それこそね」
「死ぬ思いなの」
「さて、何をしてやろうかしら」
ビアンカは腕を組んで考える顔になっていた。
「捕まえてやったら」
「そうね。もう絶対にしないっていう位のことはしないとね」

ペリーヌも言う。それは当然だというのである。
「それこそね」
「それでどうするんだよ」
「捕まえたら」
「捕まえてから考えるわ」
それはこれからだというのである。
「それからね」
「何か適当だな」
「そうね」
皆今のビアンカの言葉を聞いてつい首を傾げてしまった。
「これからなんて」
「せめて今から考えないの？」
「すぐに決められるし」
しかしビアンカはまだ言うのであった。彼女にしてはいささかい
い加減であった。
「それはね」
「決められるんだ」
「すぐに」
「そうよ」
また述べるビアンカであった。
「捕まえて。まあ今でもある程度は考えてるし」
「ある程度ね」
「そうなの」
「よし、じゃあまずは捕まえましょう」
何につけてもそれからだというビアンカであった。
「捕まえないと何にもならないしね」
「まあそうだけれどね」
「それはね」
あらためて皆でそれを確かめ合う。考えてみればまず捕まえない
と何にもならない。その懲らしめることもどうにもならないのであ

る。
「それじゃあ」
「ベッキー、頼んだわよ」
こうしてベッキーを見守る。するとだった。
その連中が動けなくなった。瞬く間にであった。
「何っ!?」
「う、動けねえ!?」
「これこそ我がマウリアに伝わる伝統の呪術」
それだというのである。
「伝説の金縛りの術です」
ここで、であった。ベッキーは己の姿を現わしてみせたのである。
小屋の中に。
「えっ、あんたあの」
「マウリアの妖術使いの手下のかよ」
「妖術使いとは?」
それを聞いたセーラがふと言った。

第百六十一話　いじめその五

「誰のことでしょうか」
「まあそれはね」
「考えないでね」
それはさりげなくフォローする皆であった。
「呼び方は大したことじゃないから」
「別にね」
「そうだよ、別にだよ」
「気にしない気にしない」
「それでだけれど」
さらに話す彼等であった。
「連中金縛りになったけれど」
「どうしようかな、それで」
「動物園か水族館に行きましょう」
ビアンカがここで言った。
「そこにね」
「水族館って？」
「何するのよ」
「それに動物園って」
「動物をいじめた奴には動物の怖さを味わってもらうわ」
そうするというのである。
「じっくりとね」
「じっくりとなの」
「それじゃあどっちにしようかしら」
「考えてるけれど」
ビアンカは右手の手を当てて考える顔になった。そうしてそのうえで述べるのだった。
「鮫の餌にしてみる？」

「鮫の？」
「そう、鮫のね」
何気に下手をしなくても死ぬ域に達しているお仕置きであった。
「確かうちの学園の水族館って鮫もいたわよね」
「ホジロザメにアオザメにシュモクザメにヨシキリザメにイタチザメね」
七海がその鮫達を次々と挙げていく。
「どれも素晴らしい人食い鮫達よ」
「そこに放り込もうかしら」
こんなことを言うビアンカであった。
「鮫のプールにね」
「ああ、それいいね」
「面白いわね」
皆もそれに賛成する。実際に連合では死刑囚を鮫の餌にするのも普通である。それを公開で行うというのが連合の処刑の一つである。他には無数の海蛇の餌食にするというのもある。
「鮫の恐怖を味わってもらう」
「いいかも」
「それかよ」
ビアンカはさらに言うのであった。
「ハゲタカの餌にするか豹の餌にするか」
「それもいいんじゃない？」
「そっちも面白そうね」
こうした刑罰も連合では普通である。
「どれも」
「それでどうするの？」
「ちっ、何だよあんた達」
「何処の誰なんだよ」
ここでその悪事を働こうとしていた中学生達が彼等に対して言ってきた。全員動きが完全に止まってしまい口だけを動かしているの

だった。
「俺達が何したんだよ」
「まだ何もしてねえだろ」
「それは嘘ね」
ビアンカはその彼等を冷ややかに見ながら言ってみせた。
「何もしていないってのはね」
「嘘だっていうのかよ」
「俺達が嘘ついてるっていうのかよ」
「ええ、そうよ」
はっきりと彼等に対して答えてみせた。
「その証拠に兎達がね」
「この連中がどうしたってんだよ」
「何かあったのかよ」
「見なさい。怯えているわ」
このことを言うのだった。見れば確かに兎達は小屋の隅で固まって震えている。それは彼等の姿を見てのことである。
「それが何よりの証拠よ」
「そんなのが証拠になるのかよ」
「兎って怖がるものだろうがよ」
あくまで白を切る彼等であった。嘘を吐き通そうとする。

第百六十一話　いじめその六

だが今はそれは無理だった。ここでセーラが目の前に水晶球を浮かばせてきた。そうしてそこにある場面を映し出してみせたのである。

「ほら、見なさい」

「うっ、それは」

「俺達じゃねえか」

「そうよ。あんた達よ」

ビアンカは彼等を見ながらまた言ってみせた。

「紛れもなくね」

「そ、それは」

「気のせいだよ」

「まだ白切るって」

「とことん性根が腐ってるみたいね」

周りはそんな彼等を見て心の奥底から深い怒りを覚えてきた。

「こりゃさ。容赦しなくてもいいよ」

「反省しないでしょ、もう」

「そうみたいね」

ビアンカも今の彼等を見てこう言うのだった。

「じゃあ一番怖いのにするわ」

「それで何にするの？」

「その怖いのって」

「ピラニアにするわ」

それにすると決めたのだった。その怒りを顔にはっきりと出しながら。

「もうね。それでいいわよね」

「ピラニアか」

「それにするの」

「いえ、それよりも」
だがここでビアンカの気が変わった。他のものにしようと思いなおしたのである。
「それよりも虫の方がいいかしら」
「虫？」
「虫を使うの？」
「そうよ。ゴキブリにしようかしら。それとも回虫か百足にしようかしら」
どちらにしろ生理的嫌悪感を沸き立たせる相手である。
「それのお池に放り込んでやるわ」
「ああ、それいいな」
「そうね」
皆もそれに賛成した。連合では虫を使った処刑も存在している。惨たらしい刑罰には全く事欠かないのが連合なのである。
「それじゃあ多数決取る？」
「どれがいいか」
こうしてその被告人達の前で裁決を取るのだった。その結果決まったのは。
「よし、百足っていうか」
「蛇蝎の穴」
「これね」
ただ虫だけでは物足りないとなったのである。決まったのはこれであった。
「じゃあ早速そこに連れて行く？」
「っていうか用意できる？」
「はい」
すぐにセーラが応えてきたのだった。
「穴を作ることも虫達を用意することも」
「できるのね」
「じゃあ御願いするよ」

「それでは」
言ってすぐであった。セーラはその魔術でその場に大きな深い穴を開けた。そうしてその中に無数の蛇や百足、それに蠍や毒蜘蛛達を呼び寄せた。苦手な人間にとってはもう中を覗いただけで卒倒しそうなおぞましい光景であった。これも連合ではよくある処刑法である。
「よし、後は」
「この連中放り込んで」
「それで終わりね」
皆で言い合う。そうしてまだ石像の如く固まっている彼等を皆で担ぐのだった。
「俺達はやってねえよ！」
「そうだよ！証拠あるのかよ！」
「ねえだろ！」
この期に及んでも白を切る彼等であった。
「ねえのにこんなことしてよ！」
「後で覚えてろよ！」
「訴えるからな！」
「安心しなさい、絶対にできないから」
だがビアンカは喚く彼等に言うのであった。
「絶対にね」
「何でだよ」
「殺すっていうのかよ」
「さっきと言ってること違うじゃねえかよ」
「殺しはしないわ」
それは確かに言うビアンカだった。
「ただね」
「ただ？」
「何するんだよ」
「死ぬ思いはさせてあげるわ」

凄みのある笑みになっていた。そうしてその笑みを浮かべたうえで。彼女は皆と一緒にその中学生達を学校の水族館に連れて行くのであった。

いじめ　　完

２００９・１０・１６

第百六十二話　報いの後でその一

報いの後で

中学生達は水族館に連行されていく。ベッキーの魔法で硬直させられたままなのでまさにマネキンを運ぶ様である。しかし一つ違っていた。

「離せ！」

「訴えるぞ！」

「警察呼ぶぞ！」

始終喚いていた。しかしここでビアンカはまた凄みのある笑みを浮かべてその彼等に対して告げるのであった。笑みと同じ質の声で。

「呼べないようにって」

「やっぱり殺すの？」

「だから。殺さないわよ」

それはまた否定するビアンカだった。

「殺すことはしないわよ」

「けれどどうするのよ」

「そうだよ。殺さないけれど呼べないようにするっていうのは」

「見ていなさいって」

ビアンカは今度は楽しそうに笑ってみせた。

「見ていればわかるわよ」

「見ていればね」

「それでわかるんだ」

「そういうこと。見ていればいいのよ」

その言葉を繰り返してみせるのだった。

「死にはしないけれど死ぬよりもおっかないことがあるからね、世の中には」

「へっ、勝手に言ってろ」

「言えるのも今のうちだぜ」
中学生達はまだ減らず口を叩いている。その態度が変わることはない。例え身体が動けなく引き摺られる様にして連行されていてもだ。
「世の中警察があるんだからな」
「弁護士だってな」
「ああ、最初に言っておくけれど」
しかしであった。ビアンカはその彼等を黙らせるようにして言ってみせたのだった。
「もう証拠は掴んでるからね」
「嘘つけ」
「どうやったらそんなことができるんだよ」
「俺達がやったその証拠がな」
まさに悪人の自白であった。悪事をしている人間の言葉に他ならない。
「なかったら謝罪しろ！」
「覚えていろよ！」
「本当のこの連中って」
「屑だね」
皆彼等の言葉にかなり辟易していた。うんざりとなっている。
「人間ってここまで醜くなれるのかな」
「っていうかどんな教育受けきてんのかしら」
この場合は家庭の教育となる。
「本当にね」
「何処まで醜いんだろうね」
「いいな！絶対に忘れないからな！」
「わかってんだろうな！」
「はい、証拠」
ビアンカは立体写真を出してきた。それはであった。
何とそこに彼等が小屋の兎達をいじめている現場がありありと写

っていた。紛れもなく彼等であった。
それを見て彼等は。また言うのだった。
「嘘つけ！偽造写真だろうが！」
「どうやって撮ったんだ！」
「私の過去を映写する能力です」
セーラの言葉であった。
「念写してできました」
「念写って」
「超能力なんじゃないの？」
皆セーラのあらたに判明した能力についてひそひそと話した。
「だよね」
「それってね」
「とにかく。これでわかったわね」
ビアンカは冷ややかに彼等に対して告げ続けていた。
「あんた達、訴えてもいいけれどこれが公になるわよ」
「うっ・・・・・・」
「つまりは」
「動物虐待は重罪よ」
さらに冷ややかに告げる彼女だった。
「下手したら死刑よ」
「死刑・・・・・・」
「まさか」
「嘘じゃないわよ」
このことも話すビアンカだった。
「連合を甘く見ないことね」
「じゃ、じゃあよ」
「訴えないからよ」
「解放しろよ」
それで諦めたわけではなかった。まだ言う彼等だった。
「そうだよ、俺達をよ」

「解放しろよ」
「そんなことする訳ないでしょ」
ビアンカの言葉はここでも冷酷極まりないものであった。

第百六十二話　報いの後でその二

「わかる？あんた達は捕まってるのよ」
「うう・・・・・」
「それで何で解放するのよ、今更」
こう言うのであった。
「そんなことする訳ないじゃない」
「ああ、そろそろよ」
「ピラニアのプールだぞ」
話しているうちにだった。もう辿り着いたのであった。
「じゃあ後は」
「この連中放り込むだけね」
「ちょっと待って」
ところがであった。ここでまた言うビアンカだった。
「その前にやることがあるわ」
「やること？」
「何、それ」
「ねえアンジェレッタ」
今度はアンジェレッタに顔を向ける彼女だった。
「血、あるかしら」
「血！？」
「そうよ。スッポンかマムシの血」
それだというのである。
「精力剤のあれ。あるかしら」
「ああ、これね」
言われて早速それを出してきたのであった。
「スッポンよ。これよね」
「そう、それよ」
まさにそれだと答えるビアンカだった。

「生き血よね、それ」
「勿論よ」
それは当然だと答えるアンジェレッタだった。
「だって精を付ける為にはやっぱり生き血じゃないとね」
「そう。だったら余計にいいわ」
生き血と聞いてさらに喜ぶビアンカだった。満面の笑みにさえなっている。
「じゃあこれを早速」
「はい、どうぞ」
アンジェレッタから受け取ってだ。すぐに水槽の中に全て入れてしまったのであった。
水槽の中にその赤い血が拡がっていく。皆それを見てまずは首を傾げさせた。
そうして。いぶかしみながらそのビアンカに問うた。
「飲まないの？」
「何で？」
「ああ、飲まなくていいのよ」
それはいいというのだった。
「っていうか私が飲む為に貰ったのじゃないし」
「だったらあれか」
ダンはその拡がっていく血を見て察したのだった。
「この血でピラニア達をか」
「そうよ。そういうことよ」
まさにそれだというのだった。
「ピラニアとか鮫って鼻が凄いじゃない」
「それこそコップ一杯の血でその辺りにいるピラニアが集まって来るからな」
「だからそれを入れたのよ」
そういうことなのだった。
「さて、それじゃあよ」

「入れるのね」
「いよいよこの連中を」
「そうよ。入れるわ」
まさに今だというのだった。
「入れるわよ。いいわね」
「お、おい」
「まじかよそれ」
今遂に入れられると聞いて流石に声を震わせる中学生達だった。
「おい、そんな中に入れたらよ」
「死ぬじゃねえかよ」
「殺人かよ」
「骨がいいレイアウトになるわね」
何とか言い逃れしようとする彼等にこんなことをうそぶくビアンカだった。
「皆もそう思わない？ピラニアの水槽の中に人の骨が転がってるって」
「ああ、確かに」
「それって絵になるわよね」
「そうよね」
皆彼女のその言葉に納得した顔で頷く。
「如何にも獰猛って感じで」
「食肉魚でね」
「もうぴったり」
「ああ、よく見たらこれって」
しかしここでビアンカは水槽のガラスのところに書かれているピラニアの種類を見て言うのだった。このピラニアが何かというと。
「ホネクイピラニアだったら」
「ホネクイピラニア？」
「何それ」
「ピラニアの中で一番凶暴なのよ」

そうしたピラニアだというのである。

第百六十二話　報いの後でその三

「もうね。獲物の骨まで全部食べるピラニアなの」
「骨までね」
「全部なの」
「そう、食べた後には何も残らないの」
ある意味とてつもなく恐ろしい話であった。
「完全殺人にも使われるし」
「この場合は丁度いいね、それじゃあ」
「証拠隠滅でってね」
皆さりげなく恐ろしいことを和気藹々と話す。
「じゃあ早速中に入れて」
「消えてもらう？」
「完全に」
「そうよ。消えてもらうわ」
ビアンカはここでまたうそぶいた。
「骨も残さずにね」
「中学生三人が謎の失踪」
「証拠も手懸かりもなし」
「いいことね」
皆もそれに合わせるのだった。
「よし、じゃあ今すぐに」
「放り込もうか」
「それっ」
「う、うわあああああっ！！」
「助けてくれーーーーーーーーっ！」
三人は本当に放り込まれてしまった。もうそこにはピラニア達が群がっている。
「こ、殺される！」

「食われる！」
「安心しなさいって」
しかしビアンカは喚く彼等にこう言うのだった。
「そのピラニアは動くものに反応するから」
「ああ、今彼等動かないから」
「食べられないのね」
「そういうことよ」
こう皆にも答えるのだった。
「だから安心していいのよ」
「つまり流木みたいなものだって思われてるんだ」
「そういうことなのね」
「そうよ。そういうこと」
まさにそれだというのである。
「ま食べられても別に困らないけれどね」
「証拠は残らないからなのね」
「こんな連中はそうなってもいいわよ」
何気に動物虐待に厳しいビアンカであった。
「まあそれはね」
「確かに」
そしてそれは皆も同じ考えだった。連合では動物虐待は大罪であるからだ。
「さて、それでだけれど」
「何時出すの？この連中」
「一体何時」
「気が向いたらね」
何時出すかは全く考えていないのだった。
「出してあげるわよ」
「それまでに精神崩壊してるかも知れないけれど」
「いいの？それで」
「全く問題ないわ」

そしてそれを意に介さないビアンカだった。
「それも考えていたし」
「想定の範囲内か」
「そういうことなの」
皆これで納得したのだった。
「まあそういうことなら」
「何時でもいいね」
「何時でもっておい！」
「本当に発狂したらどうするんだ！」
その中学生達が周りにピラニア達が暴れるのを見ながら抗議してきた。
「そこまでやるのか！」
「ちょっと待て！」
「まだ狂ってないわね」
そんな彼等を見て平然と言うビアンカだった。まるで医者が患者を診る様である。ただしその医者はナチス党員で患者は死刑囚である。

第百六十二話　報いの後でその四

「じゃあもうちょっとね」
「鬼か！」
「それでも人間か！」
「さてと。それじゃあね」
ビアンカはこれで彼等から目を離した。そうしてまた皆に言うのだった。
「待ってる間は」
「どうするんだよ」
「この間は」
「お茶でも飲みましょう」
全く何でもないといった言葉だった。
「水族館の喫茶店でね」
「って今本当は閉館時間だし」
「お店やってないわよ」
皆すぐに彼女に突っ込みを入れた。実は彼等は水族館に忍び込んでいるのである。だから人をピラニアの池に投げ込むこともできたのだ。
「だからお茶っていっても」
「どうするのよ」
「ピクニックみたいにすればいいじゃない」
しかしビアンカはこう述べるのだった。
「ほら、ここでね」
「ああ、ピクニックね」
「それじゃあ」
皆ここで一斉にポケットからめいめいお茶やお菓子を出した。カップまである。敷物も敷いてそのうえで皆でお茶を楽しむのだった。
「音楽は」

「この連中の喚き声ね」
「ざけんな！」
「早く出せ！」
「おい、お茶なんか飲むんじゃねえよ！」
最早けたたましいまでであった。
「本当に狂わせるつもりか！」
「何処まで非道なんだ！」
「全然反省してないわね」
そんな彼等の言葉を聞いたビアンカの言葉だった。
「今も」
「そうね。じゃあやっぱり」
「とことんまでやるしかないね」
皆も言った。
「これはもうね」
「それじゃあお茶を飲んで」
「発狂するまで待ちましょう」
そうすることにした。そうしてやがて。三人は静かになったのだった。
お茶を飲んでいた一同だがここで声がしなくなったのを見て覗いてみるとだった。彼等は遂に発狂してへらへらと笑っているのであった。
「終わりね」
「これでね」
皆その彼等を冷静に見ながら述べた。
「成敗完了っと」
「さて、水槽から出して」
「はい、それでは」
セーラが魔術を出して彼等を浮かび上がらせた。
そうしてであった。そのまま浮かび上がらせられたまま連れて行かれるのであった。

「それでだけれど」
「後始末はどうするの？」
「その辺りに捨てておけばいいわ」
こう皆の問いに答えるビアンカだった。
「それでね」
「捨てるの」
「それで終わりね」
「そう、それで終わり」
その声は実に素っ気無い。
「じゃあお茶を飲んだらね」
「捨てに言って」
「それで」
「ゴミ箱の側でいいわね」
やはり素っ気無い口調である。
「その辺りのね」
「ゴミ箱ね」
「中に入れる？」
「袋に包んで頭だけ出してればいいでしょ」
やはり素っ気無い言葉である。
「それだけでね。へらへら笑ってるから死体には間違えられないし」
「そう。それだったら」
「今からね」
持って行くというのだった。実際に彼等は引き摺られはじめている。

第百六十二話　報いの後でその五

そうして引き摺っていってだった。ゴミ箱の周りに本当に頭だけ出して捨てた。これで終わりであった。
「一件落着っと」
「犯人っていうのはばらさないの？」
「それは」
「あそこまでやったら充分よ」
だからしないというのである。
「もうね」
「そう。充分なんだ」
「あれで」
皆ビアンカのその言葉を聞いた。
「じゃあ話はこれで終わって」
「帰ろうか」
「さてと。兎達だけれど」
しかしここでビアンカはその被害を受けた兎達のことを考えていた。
「あの子達だけれどね」
「他に飼育係選ばれるんじゃないの？」
「もっとましなのが」
「いえ、ここはちょっと推薦したいわ」
こう言うのである。
「さもないと下手したらまた変な飼育係選ばれるじゃない」
「そういえば確かに」
「あんなのがなってたんだし」
言われてみればそうだった。問題はそういう飼育係を選ばないことだ。皆このことまでは考えていなかったというよりは楽観視していたのである。

「もっと酷いのがなるケースだって有り得るし」
「それだったら」
「最後までしっかりとしないとね」
また言うビアンカだった。
「最後の一手までね」
「じゃあ懲らしめたのは」
「その中の一手に過ぎないってことなの」
「そういうこと。あれは前半戦ね」
それだというのである。
「これからは後半戦よ」
ここであらためて考えるビアンカだった。
「果たして誰がいいかしら」
「じっくり考えるか」
今彼女に言ってきたのは双子の兄であるアルフレドだった。
「今すぐに結論を出さないでだ」
「っていってもできるだけ早いうちにね」
ビアンカはこう兄に返した。
「出さないと。兎達が困るから」
「確かにね。それにしても」
「この小屋って」
皆その兎小屋の前にいた。あらためてその中を見るとだった。
ようやく怯えが消えて小屋のあちこちに移っている兎達だった。
しかしその小屋の中は実に汚かった。糞や食べ残しで満ちていた。
「全然掃除してなかったんだな」
「そうね」
皆その小屋を顔を顰めさせて言い合う。
「いじめるだけで」

「本当にとんでもない飼育係だったのね」
「餌にしておけばよかったかな」
こんな意見まで出て来た。
「これだったら」
「そうかもね」
こうまで言われる。しかし今はそれよりもだった。
「何とかしないとね。このままじゃ兎達が可哀想だし」
「お掃除しましょう」
ビアンカが皆に言ってきた。
「兎達の為にもね」
「中等部のだけれどいいの？」
コゼットはそこが少し気になって彼女に問うた。
「それでも」
「あんたはどうするの？」
問われたビアンカは楽しそうに笑ってそのコゼットに問い返した。
「こうした場合は」
「決まってるじゃない」
そのコゼットはにこりと笑って言葉を返してみせた。
「こうした場合はね」
「ええ。こうした場合は」
「するのよ」
一言であった。
「お掃除をね。するのよ」
「そういうことよ」
彼女の今の言葉ににこりと笑ってみせたビアンカだった。
「それじゃあ」
「わかったわ。皆で手分けしてね」
「皆でやったらすぐよ」
こうも言うビアンカだった。
「っていっても希望者のみだけれど」

「じゃあ全員ね」
「僕も」
「私もよ」
今ここにいる全員が希望者だった。こうしたところは真面目な彼等だった。
「兎達の為にね」
「ちょっと頑張りましょう」
こうして小屋掃除をボランティアでするのだった。これでビアンカの言う前半戦は終わった。

報いの後で　　完

２００９・１０・１９

第百六十三話　推薦その一

推薦

動物虐待は成敗した。そうしてであった。
「さてと」
「その後半戦だけれど」
「新しい飼育係ね」
「誰がいいのかしら」
皆今はいつもの喫茶店の二階にいた。そこでこのことを話し合っていた。
「一体誰が」
「中等部ね」
中等部となるとだった。皆首を捻ってしまった。
「そう言われても私中等部に通ったことないし」
「僕も」
「俺もだ」
「私も」
殆どのメンバーが高校から入っている。しかも日本以外の国からである。だから中等部については皆殆ど知らないのである。
だから皆首を捻っていた。どういった場所で誰がいるのかわからないのだ。
「あんな屑もいたけれど」
「やっぱりああいうのばかりじゃないよね」
「そうよね」
それはわかることだった。全員が全員どうにもならない人間ばかりとは流石に誰も思わなかった。世の中はそこまで腐ってはいないのだから。
「しかしそれでだけれど」
「ええ」

「誰がいるのかしら」
あらためて言い合うのだった。
「それで一体」
「誰が」
「ああ、そうだ」
ここで声をあげたのはベンだった。
「クララだけれど」
「あっ、君の妹の」
「そうだったわね」
皆ベンの言葉に顔を向けたのだった。
「この学校の中等部に通っていたんだ」
「そうだったわね」
「うん、三年でね」
学年のことも話される。ここでベンは気付いたのだ。
「ああ、そうだ」
「どうしたの？」
「あの連中も三年だったね」
そのゴミ箱に捨てた屑達のことである。
「そうだったよね」
「だったらどうかな」
ここまで話しながらまた言うベンだった。
「クララは。どうかな」
「ああ、いいかも」
「そうよね。クララちゃん動物好きだし」
「確かに」
それぞれ言い合うのだった。おおむね賛成であった。
「それじゃあクララちゃんにする？」
「そうする？」
それで話がまとまろうとしていた。しかしであった。
「いや、ちょっと待ってよ」

「あれっ、ベン」
「何かあるの？」
「クララにするのはいいけれど」
彼はそれ自体はいいとするのだった。
「けれど。一人だけじゃない」
「そうか。一人か」
「一人だけなのね」
皆も彼の言葉からこのことに気付いた。
「一人だけだったらやっぱり」
「クララちゃんも辛いわね」
「というか無理よ」
飼育係を一人でやるということをなのだった。
「そんなの。一人じゃね」
「他にも誰か必要だね」
「そうね」
「二人はいるね」
今度はその話になった。

第百六十三話　推薦その二

「二人。誰かいるかな」
「クララちゃん以外に」
「それも中等部で」
「ああ、そうだ」
ここでまたベンは言った。
「ルーシーとケイトもいるよ」
「ってあんたの妹さん達じゃない」
「クララちゃんと同じで」
「そうだよね」
皆このことに気付いたのだった。ベンの三人の妹達である。
「確か三年と二年と一年だったっけ」
「うん、そうだよ」
まさにそうだと答えるベンだった。
「それぞれ歳子なんだ」
「三人」
「飼育係の数はそれでいいし」
「あの娘達だと」
三人の資質についても話される。
「動物のことに慣れてるし」
「適材適所よね」
「そうだよね」
このことも確認された。
「じゃあ丁度いいわね」
「そうだね」
「じゃあ後は」
ビアンカがここで言った。
「あの娘達にこのことを話して」

「中等部の先生達にも」
「それで決まりだね」
「あっ、ちょっと待って」
ところがだった。今度はアンネットがあることを思い出したのだ。
それは。
「あの連中のことどうしようかしら」
「あのゴミね」
ビアンカはすぐにそれがどの連中かわかった。ピラニアの水槽に放り込んだ彼等である。他ならぬこの騒動の元凶達である。
「あの連中のことね」
「何で飼育係できなくなったかは」
「頭がおかしくなったでいいじゃない」
それで終わらせるビアンカだった。
「天本博士の実験にでも遭ったってことでね」
「それでいいの」
「兎達をいじめていたのは内緒にしてあげるわよ」
それはいいとしたのだった。
「それはね」
「ただしなのね」
「あれはそのままで」
「時間が経てば元に戻るわ」
実に素っ気無い言葉であった。
「それでね」
「だからいいんだ」
「それで」
「そう、もっとも元に戻らなくてもいいけれど」
こうも言う。
「別にいいのよ」
「まあ悪いことをしたからね」
「それも当然ね」

「因果応報だね」
皆こう考えるのだった。
「それじゃああの連中はそれでいいとして」
「新しい飼育係は」
その話になるのだった。
「誰にしようかしら」
「やっぱりクララちゃん達？」
「あの娘達にやってもらう？」
「そうだね」
ここで三人の兄であるベンが言った。
「三人にはぴったりだね」
「そうだよね、間違いないね」
「合ってるわ」
皆それぞれ彼の言葉に頷いた。
「性格的にもだし」
「動物に好かれるし」
「動物の相手慣れてるし」
まさに適材適所というわけだった。
「それならそれで」
「いいかしら」
「後は」
ここでまた言うベンだった。

第百六十三話　推薦その三

「三人にこのことを話すよ」
「やれるかどうか」
「それね」
「まあ大丈夫だね」
ベンはこのことには完全に安心していた。
「確実にね」
「いけるの」
「大丈夫？」
「飼育係ってそんなに時間かからないよね」
ベンはまず時間について皆に尋ねた。
「学校の兎達の世話って」
「ええ、大したことじゃないわ」
ここで言ったのは彰子だった。
「実は私ね」
「あっ、彰子って確か」
「中学校ここだったっけ」
「うん、そうなの」
彰子は中等部もこの学園にいたのだ。そういう意味で生粋である。
「それで飼育係していたけれど」
「そうだったの」
「兎達の」
「兎じゃなかったわ」
それは違うというのだった。
「鶏の飼育係だったの」
「そう、鶏の」
「そっちだったの」
「孔雀のもしていたけれど」

そちらもだというのだ。中等部には兎や鶏だけでなく他の動物達も飼育されているのである。動物についてもとかく充実しているのである。
「鶏だったの、メインはね」
「それでどれだけ時間かかっていたの？」
「やっぱり長かったの？」
「いえ、全然」
かからなかったというのである。
「かからなかったわ」
「そうなの。大丈夫なの」
「それじゃあ」
「ええ、大丈夫よ」
また言う彰子だった。
「お家のこととかできる時間は問題ないから」
「兎でもかな」
「兎の係にはなったことないけれど」
ベンにこのことは前置きはする。
「けれど一緒の時間にはじめて一緒の時間にいつも終わってたから」
「時間は大丈夫なんだね」
「ええ」
そうだと答える彰子だった。
「そうよ。間違いないわ」
「よし、わかったよ」
そこまで聞いて頷くベンだった。
「それじゃあ」
「それでいいんだね」
「話するのね」
「うん、するよ」
こう皆にも答える。
「今日にでもね」

「そうしたらいいわ。まああの娘達が志願したら」
ビアンカがそのベンに対して言う。
「まずそれでいけるわね」
「よし、じゃあ一見落着か」
「これで」
「兎達にとってもね」
ビアンカは微笑んで兎達のことも話に出した。
「いいことになるわ」
「そうだね。あの子達にとっても」
「いい飼育係が来てくれて」
「まずはそれよ」
兎が第一だというのだった。
「生きてるんだから。幸せにならないとね」
「生きるってことは幸せになるってこと？」
「そうなの」
「それが義務よ」
義務だというのだ。

第百六十三話　推薦その四

「生きていれば幸せにならないと」
「駄目っていうのね」
「絶対に」
「そうよ、駄目よ」
ビアンカの今の言葉は絶対の響きのあるものだった。
「何があってもね」
「絶対に幸せにならないといけない」
「誰もが」
「だからよ。あの連中は許せなかったのよ」
「俺はな」
マチアがここで言った。
「いじめをしていることが許せなかったな」
「それもあったわ」
ビアンカもいじめは嫌いである。それが動物に対してもだ。人間同士のそれも醜いことだが動物が相手でも醜いことには変わりがなかった。
「けれどね。それ以上によ」
「兎が不幸になってること」
「それなのね」
「そうだったのよ。確かに私は兎は好きだし」
これは否定しなかった。
「何よりも兎達をいじめて楽しんでいてそれで兎達が苦しんでいるのが」
「何よりも許せない」
「そういうことだったの」
「ええ」
まさにそうだというのである。

「そうよ。それでだったのよ」
「それじゃあさ」
ビアンカの話をここまで聞いたベンが問うてきた。
「クララ達でいいんだよね」
「妹さん達さえよければね」
こう答えるビアンカであった。
「御願いするわ」
「わかったよ。伝えておくよ」
このことを強く約束するベンだった。
「ああ、一つ言っておくけれど」
「何？」
「クララ達確かに兎は好きだけれど」
「ええ」
「兎食べるよ」
このことも言うのだった。
「それはいいよね」
「別にいいわよ」
それは構わないというのである。
「食べるのはね」
「食べるのはいいんだ」
「そうよ、だって生きる為には食べないといけないでしょ」
「うん」
ビアンカのその言葉に頷くベンだった。
「それはね。やっぱり」
「だからいいの」
また言うビアンカだった。
「遊びでいじめたりとかじゃないから」
「それは絶対にしないから」
妹達のこのことは保障するベンだった。
「色々食べるけれどね」

「いいことじゃない」
「ねえ」
皆今のベンの言葉に納得した顔で頷く。
「食べることはね」
「悪くないわよ」
「そういえば昔」
ふとあることを思い出したビアンカだった。
「ベン、あんたには悪いけれどね」
「僕なんだ」
「オーストラリアは捕鯨反対してたわよね」
「ああ、あれね」
その言葉に頷くベンだった。
「はっきり言って馬鹿な話だね」
「ああいうことは論外よ」
ビアンカはそれは完全に否定するのだった。
「しかもあんたの国は捕鯨反対していて他の動物は殺していたわよね」
「恥ずかしいことにね」
ベンの顔が苦いものになっていく。それも無理のないことだった。

第百六十三話　推薦その五

「オーストラリアの汚点だよ」
「カンガルーとかディンゴとかウォンバットとか」
あらゆる星にいる動物達である。有袋類は皆に人気のある動物の一つである。特にカンガルーはこの時代でもオーストラリアの象徴である。
「一杯殺したんだっけ」
「それで捕鯨で日本を攻撃して」
「挙句に日本が本気で怒っちゃったんだよね」
ベンの顔も声も苦いものになる一方だった。
「もう滅茶苦茶にね」
「今やったら洒落にならない騒ぎになってるね」
「連合規模でね」
流石にこの時代に連合内でそこまでの話はない。確かに構成国家間でのいざかいが絶えることのないのが連合であるがだ。
「日本が怒ってそれで」
「大変なことになったの」
「そうだよ。もう少しで戦争になるところだったんだ」
ベンはこう皆に話した。
「本当にね」
「まあオーストラリアが悪いけれど」
「それって」
「僕もそう思うよ」
そしてベンもそう考えているのだった。
「正直なところね。祖国だけれどね」
「捕鯨反対っていうのもねえ」
「意味ないしね」
この時代では連合全土で鯨を食べている。当然オーストラリアも

である。
「そんなことしても」
「というか何で鯨食べなかったの？」
「確かね」
ベンは記憶を辿りながら述べた。それは彼にとってはあまりいい記憶ではなかった。思い出しても不快なものを感じざるを得ない記憶であった。
「あれなんだ」
「あれって？」
「あれっていうと？」
「鯨は人間の次に頭がいいって理由でね」
この理由で実際に日本の捕鯨に反対していたのである。
「それで鯨を食べることに反対していたんだ」
「人間の次に頭がいいって？」
「それって犬なんじゃ？」
「猿じゃないの？」
「あれ、象なんじゃ」
この辺りは実はこの時代では諸説あるのだ。その他にも竜がいる。竜の知能の高さは最早人間に匹敵するまでであるのである。
「どれなんだろ」
「鯨も確かに頭がいいけれど」
「それでね。そうした理由でね」
ベンはさらに言うのだった。
「食べたら駄目だって日本に言って」
「あの日本にね」
「そんな理由で喧嘩売るって」
「まずいでしょ」
ここでは今の日本の国力と外交から言った彼等だった。日本の国力は連合の中でもかなり高い。三百の国々の中の四大国である。
そして外交はというと。かなり強かなことが知られているのであ

る。
「何されるか」
「わかったものじゃないわよ」
「その時は国力は高かったけれど外交は下手だったらしいんだ」
その当時、つまり二十世紀後半から二十一世紀前半の日本である。この当時日本の外交は国内の左翼勢力の悪影響によってとかく弱腰なのであった。それがオーストラリアに対する時にも出てしまっていたのである。これは歴史に残っている通りである。
「それで当時の我が国は国家単位で日本にそれを主張して」
「日本が切れたんだね」
「そうなったの」
「本当に切れてね」
つまりは弱腰だと思っていた日本が本気で怒ってしまったのである。
「今にも戦争をしそうになって」
「うわ・・・・・」
「それはまた」
皆これを聞いて絶句した。なお連合では国家間の武力衝突は禁じられている。他の国の艦艇や惑星に対する攻撃は中央政府及び各国の法で禁じられている。各国軍に分かれていた時は他国に入る場合には事前にその国の厳重な許可が必要だったのである。

第百六十三話　推薦その六

彼等はここでも今の視点から考えていた。連合構成国同士での戦争なぞ彼等にとっては想像もできない様なとんでもない話であった。

「極端ね」

「日本もまた」

「それに驚いた他の太平洋諸国がね」

また話すベンだった。

「急いで仲裁に入ったんだけれど」

「それで捕鯨は？」

「どうなったの？」

「日本が強引に認めさせたよ」

つまりオーストラリアの前面敗北だったのである。

「もうね。仲裁に入った国々にも何も言わせなくて」

「太平洋っていうと」

「アメリカや中国もロシアも入ってるのに？」

「ＡＳＥＡＮ諸国もいるのに？」

「それなのに？」

「うん、認めさせたんだ」

ベンは皆に話した。

「全てね。その時は調査捕鯨とか限定していたり理由を付けていたけれどそれもひっくち変えさせてね」

そうしたというのである。

「凄いでしょ」

「凄いなんてものじゃ」

「流石日本」

「その頃からそうだったの」

彼等の時代の日本の外交をここで見たのであった。

「要求を全部飲ませるなんて」

「あの顔触れが仲裁に入っていて」
「正直ね、恥ずかしい話だよ」
ベンは実際に苦い顔になっていた。
「そんなこと言っていたなんてね、自分の国が」
「確かに」
「お世辞にもね」
「無茶言ってるよ」
皆もこう言うのだった。
「そりゃオーストラリアが悪いよ」
「そうそう」
「どう考えてもね」
「全くだよ。それでも今は」
ここでまた言うベンであった。今度の言葉は。
「僕達も鯨食べてるしね」
「オーストラリアじゃどんな鯨食べるの？」
「それでどういう風に？」
「マッコウクジラとかが多いかな」
まずはその食べる種類について述べるベンだった。
「それでステーキとかにして食べるんだ」
「鯨のステーキね」
「結構ポピュラーよね」
「肉が結構固くて苦戦するけれどね」
この辺りは苦笑いになるベンであった。
「だから玉葱とかパパイアの酵素で柔らかくしてから食べることが多いよ」
「牛と同じなんだ」
「その辺りは」
「そうなんだ」
「うん、お肉を柔らかくするにはね」
ベンも中々料理に詳しかった。

「そういうのがいいからね」
「確かに鯨ってね」
「固いし」
「それまたいいんだけれど」
連合では鯨はかなりポピュラーである。養殖までされて食べられている程である。また身体のどの部分も使えることでも知られている。
「それを柔らかくする為にね」
「パパイアね」
「パイナップルもいいかな」
ベンは今度はこれを話に出した。
「それで柔らかくしたのをね」
「どっちにしても柔らかくしてから」
「それからステーキね」
「うん、それが一番じゃないから」
ベンは鯨はステーキでだという。

第百六十三話　推薦その七

「牛や豚とはまた違っていいじゃない」
「確かに」
「鯨のステーキはかなり」
皆も好きである。しかしここでダンが言ってきた。
「いや、待ってくれ」
「待ってくれって？」
「何かあるの？ダン」
「鯨のステーキも美味いがな」
彼はそれは認めた。
「しかし。生姜焼きや鍋にしてもいいぞ。他には唐揚げもだ」
「ああ、いいよね」
「そういったのも」
「それはそれでまた」
皆今度はダンの言葉に頷いた。
「生姜に合うからね」
「あとお鍋にしたらお野菜にも合うし」
「それに」
皆またしても口々に言うのだった。
「おでんに入れるコロとかね」
「鯨のベーコンも」
「あれはお酒に丁度いいよね」
「そうそう」
とにかく色々な方法で食べられている鯨だった。ある意味非常に愛されていると言える。少なくとも食べ物としてだけでなく動物としても嫌われていないのは間違いない。
「あれで一杯ね」
「それがまた」

「そしてだ」
ダンの言葉はさらに続く。
「刺身にしてもいい」
「出たね」
「やっぱりそれに行き着くのね」
皆ダンが刺身を出たところで楽しそうに笑った。
「流石日本の兄弟国家」
「やっぱりそこね」
「そうさ、鯨の刺身は最高だぜ」
ダンの国である琉球王国と同じく日本の兄弟国家であるアイヌ連邦人のカムイもそれに同調する。確かに兄弟国家同士はある連携になっていた。
「あれを大蒜醤油でかけてビールでな」
「いや、山葵醤油で沖縄の地酒じゃないのか？」
だがここで。二人の意見は完全に分かれてしまった。
「それでじっくりと食べていくのがな」
「そうか？鯨の刺身には大蒜だろ」
だがカムイはあくまでこちらを主張する。
「それで体力もつけるんだよ」
「海だから山葵だと思うが」
ダンも引かない。
「それにビールか」
「そっちは違うんだな」
「ああ、地酒だ」
あくまでそれだというのだ。
「琉球のな。国王陛下も愛されているものをな」
「うっ、そっちは王様出してきやがったか」
ダンにとっては伝家の宝刀である。それを抜かれてしまったカムイはそれ以上は言えなくなってしまった。引き目になっているのが顔にも出ている。

「それを出したらどうしようもねえじゃねえかよ」
「しかし本当のことだからな」
「こっちには王様いねえんだよ」
そのことがカムイのダンに対する弱点だった。アイヌ連邦は大統領制で王室を持っていないのである。これはアイヌ民族自体が統一された国家でなかったことに理由がある。
「残念なことにな」
「日本からお迎えしたら？」
「皇室の方でも」
その彼に周りが言ってきた。
「それなら問題ないんじゃないかな」
「元は同じ国家で今だって兄弟国家なんだし」
「その話も昔からあるんだけれどな」
腕を組んで難しい顔になってそのうえで述べるカムイだった。
「けれどなあ。実際はな」
「実現には至ってないんだ」
「それは」
「そういうことなんだよ」
苦いものもその表情に浮かび出させていた。

第百六十三話　推薦その八

「まあ仕方ねえな」
「琉球は元々王様だったしね」
「一時日本の皇室におられたのよね」
「そうだ」
ダンは自分の国の王室についてよく知っていた。はっきりとした言葉で皆の問いにも答える。
「それで今はだ」
「琉球王家に」
「日本の皇室とは縁が深いし」
「よかったじゃない」
「今の御后様も」
ダンはここで王后のことを言うのだった。
「日本の皇室からの方だからな」
「内親王殿下よね」
「確か」
「そうだ。今の日本の天皇陛下の叔母上だったか」
「おおっ、それはまた」
「凄いじゃない」
皆今のダンの言葉に羨ましそうな声をあげる。
「じゃあ人類社会で唯一の女帝陛下の御親戚じゃない」
「しかも王様ってそれだと叔父さんになるのね」
「そうだな、そうなるな」
ダンもみんなの言葉に頷いた。
「だから日本の天皇は陛下のことを叔父上と呼んでくれる」
「ちぇっ、いいわよね」
「本当にね」
中国人の蝉玉とアメリカ人のスターリングは蚊帳の外にいるかの

様に如何にも羨ましそうな顔で羨ましそうな声を出したのだった。
「皇帝とか王様がいる国って」
「そういうところはね」
「全くよ」
それに頷くのはアンネットだった。
「ロマノフ家って今じゃ公国だからね」
「ああ、そういえばロシアも昔は」
「皇帝だったっけ」
「そうだったのよ」
無念さに満ちた顔で皆に言葉を返すアンネットだった。
「ロシア革命でね。まあなくなって」
「レーニンが悪いんじゃないの？」
「ソ連が」
「ソ連はソ連でこっちじゃそれなりに評価されているわよ」
あくまでロシアの中では、である。全体主義国家としてそのイメージは非常に悪いままである。連合では全体主義は人類の負の遺産とされている。時折エウロパがその全体主義だとして批判する時もあるのだ。エウロパにとっては心外な言葉である。
「それなりだけれどね」
「っていうかさ。ロシアの偉大な政治家って」
「イワン雷帝とかピョートル大帝とか？」
蝉玉とスターリングはアンネットにロシアで有名な皇帝や政治家について尋ねた。
「他にはエカテリーナ女帝とかスターリンとかよね」
「プーチン大統領もそうだったっけ」
「そうよ。それが悪いの？」
アンネットはいささかむっとした顔で二人に返した。
「ロシアじゃ皆人気があるけれど」
「どう考えてもねえ」
「そうだよね」

二人は彼女の今の言葉を受けて言う。なおこの時代もアメリカと中国は今一つロシアと仲がよくない。時折国益により手を結ぶことはあってもである。
「怖い人達よね」
「それも桁外れに」
「ロシアではそれ位で丁度いいのよ」
しかし当のロシア人のアンネットはこう主張する。
「あくまでパワフルで豪腕で」
「豪腕か」
ダンも今の彼女の言葉にはかなり言いたそうであった。
「豪腕でいいんだな」
「いいのよ。今だってね」
地球にあった頃の話だけに終わらなかった。
「もう全てをはねつける様なリーダーがいいんじゃない」
「そういえばロシアの大統領って」
「権限大きいよね」
また蝉玉とスターリングが彼女に突っ込みを入れた。

第百六十三話　推薦その九

「結構以上に」
「何ていうかね」
「だから。ロシアよ」
理由はそれに尽きると言わんばかりの言葉であった。
「ロシアはね、まず力よ」
「力って」
「それだけ？」
「ロシアにあるのは体力と生命力と回復力」
この時代においてもこの点においては他のどの国家よりも図抜けているとされている。連合の国家ではないマウリアは置いておいてである。連合の中での話だ。
「つまりあらゆる全てにおいてロシアは最高の域にあるのよ」
「その三つだけが全て？」
「強引過ぎないかな、その主張」
今の言葉に呆れたものを感じたのは蝉玉とスターリングだけではなかった。
「ちょっと以上に」
「どうかな、それは」
「じゃあ他に何が必要なのよ」
こうも返すアンネットだった。
「いらないでしょ、他には」
「そんなこと言うのってロシアだけだと思うけれど」
「他にも色々必要じゃない」
「その三つがあればどうとでもなるのよ」
どれだけ桁外れの失政をしようとも暫くすれば元に戻る、連合におけるロシアの評価は基本的に地球にあった頃から変わってはいない。ロシアもこの時代では民主主義なのは確かだがそれでもそこに

あるものは基本的に地球にあった頃から変わってはいない。
「それだけでね」
「ロシアの不死身さはわかったわ」
ビアンカがここで三国、いや三人の仲裁に入った。普段は仲のいい彼等だがこうした話になると喧嘩とまではいかないが言い合いになるのが常だからだ。
「それよりもよ。これで決まったわね」
「決まったって？」
「何が？」
「次のクラスでの演劇よ」
それが決まったのだという。
「文化祭の出し物ね」
「あっ、そうだね」
「もうそういう季節だね」
「言われてみたら」
皆も今の彼女の言葉に頷いた。
「もうそろそろ」
「用意とかして」
「演劇はロシアものでいったらどうかしら」
ビアンカは皆にこう提案した。
「アンネットの祖国のね」
「ロシアものね」
「それもいいかもね」
「それでお店は」
次々に話が進む。一つの話が終わるとまたすぐに別の話がはじまる、このクラスには休息という言葉は全く縁のないものであった。

推薦　　完

2009・10・26

第百六十四話　ロシア風にその一

ロシア風に

文化祭の演劇と店の話がはじまった。その会議はクラスで行われることになった。

「それでだが」

クラス委員のギルバートが壇上から皆に問うた。

「まずは演劇はロシアものだったな」

「そうよ」

ビアンカは自分の席から彼に言葉を返した。

「それはね。前に話した通りよ」

「そうか。ロシアものか」

「ロシアものっていっても」

ここでそのロシア人のアンネットが言ってきた。

「色々あるけれど」

「ロシアっていったらバレエじゃないの？」

ここで言ったのはナンシーだった。

「確か。あとオペラよね」

「まあバレエの方が有名ね」

こうナンシーに返すアンネットだった。

「やっぱり。特にチャイコフスキーね」

「ああ、あの人なんだ」

「出て来るのは」

「そうよ、チャイコフスキー」

やはり彼だというのである。アンネット自身もだ。

「あの人が一番有名なのは間違いないわね」

「それじゃあバレエにする？」

「いや、それは無理じゃないかな」

ジミーがそれに反論した。

「バレエだってオペラだって特別な技術がいるからそのままだとやっぱり無理があるよ」
「そう言われればそうね」
ビアンカは彼の今の言葉に頷いた。
「ましてやこうした作品ってまず音楽と踊りがあってのものだから」
「それをそのまますまするのはやっぱり無理があるよ」
また述べるジミーだった。
「どうしてもね」
「そうよね。じゃあバレエとオペラはなしにする？」
アロアが言った。
「できないから」
「じゃあ文学？」
「ロシア文学から？」
皆次に思い浮かべたのはこれであった。ロシア文学である。
「トルストイとかドストエフスキーとか」
「あとプーシキン？」
皆思い浮かべるのはこうした作家であった。ロシアといえばこうした作家である。とりわけ有名なのはトルストイなのはこの時代でも同じである。
「あと現代ものとか」
「幾らでもあるけれど」
こうした十九世紀の作家だけでなく千年もの連合の時代にも無数の文豪を生み出しているのがロシアという国である。やはり偉大なことは偉大な国だ。
「けれど何か暗いもの多いわよね」
「確かに」
「ロシア文学って」
この暗さは不変であった。千年以上もの間。
「何か万人受けしそうもないわよね」
「というか問題あるんじゃ？戦争と平和とかどう？」

「あれ舞台じゃ完全再現無理よ」
ここでまたアンネットが言ってきたのであった。
「言っておくけれど」
「そうよね、あれは」
「まずね」
皆その言葉には頷くしかなかった。トルストイのこの超大作は戦争の場面もある。それを再現できてしかも迫力があるのは舞台ではとても無理な話であるのだ。
しかもであった。彼等は無意識のうちに完全再現を目指していた。完璧主義なのである。
「じゃあやっぱり」
「戦争と平和は無理ね」
「残念だけれどね」
皆止むを得なくこれは取り下げた。そうしてであった。
「じゃあ何にする？」
「どれがいいかしら」
「ドストエフスキーは」
今度出したのはこの作家であった。そのトルストイと並ぶロシアの文豪である。彼の作品もこれまた実に暗いものがあることで有名だ。
「どうかな」
「罪と罰とか？」
「そう、それ」
こう言ったのはベッカであった。

第百六十四話　ロシア風にその二

「大作だけれどどうかな」
「凄く暗いわよ」
それに言ってきたのはエイミーだった。
「ドストエフスキーは」
「暗過ぎるかな」
「ちょっと。あまりにもじゃない？」
こう言うのである。
「暗いのもいいけれど子供だって観るし。それに難しいから」
「じゃあ駄目だね」
「これも」
「明るくなら」
またアンネットが皆に言ってきた。
「一つ面白いのがあるわよ」
「面白いのって？」
「何があるの？」
「オペラだけれど」
こう断ったうえでの言葉である。
「三つのオレンジの恋っていうのがあるわよ」
「三つのオレンジの恋？ああ、あれね」
それを聞いて頷いたのはプリシラだった。
「プロコフィエフのね」
「そう、それ」
まさにそれだと答えるアンネットだった。
「その作曲家のよ」
「エウロパ軍の女参謀総長と同じ名前だね」
「そういえば」
皆ここでその軍人のことも思い出したのだった。

「あの人と同じ名前」
「確かお貴族様だったっけ」
ふとこんな皮肉めいた言葉も出て来た。
「それで参謀総長になったんだって」
「お貴族様っていいよね」
「本当にね」
それでこうした皮肉を込めた話にもなった。彼等にとってはエウロパ軍の軍師もそうした存在でしかなかった。貴族だからなったというのである。
そうしてそのうえで。こんな言葉も出た。8
「そんなお貴族様と一緒の名前だけれど」
「まあいいか」
「そうだね」
それが不満だというのだ。そうしてさらに話は続く。
「それでその話だけれど」
「どんな感じなの？」
「どんな感じなのかな」
「面白い話よ」
まずは皆にこう述べるアンネットだった。
「あれはね」
「面白い話っていうと」
「童話みたいな感じ？」
「あんなの？」
「そう、童話よ」
まさにそれだというのである。童話だというのだ。
「童話なのよ。王子様が主人公で王女様を見つける為に冒険に出て」
「何か本当に童話ね」
「そうだね」
皆彼女の話からそう考えるのだった。
「童話でそんな話だと」

「いい話になるんじゃ」
「いい魔法使いと意地悪な魔女も出て来るのよ」
アンネットは続いてこうしたキャラクターも出て来ると話した。
「他にも魔法とか一杯出て来て」
「何か面白そう？」
「余計に」
皆彼女の話を聞いてまた言い合う。
「それじゃあそれにするの？」
「そのオペラを」
「ただしあれよね」
アロアがここでまた言う。
「オペラは無理だから」
「うん、演劇がいいわね」
それがいいというアンネットだった。
「オペラから変えてね。それがいいわね」
「よし、じゃあ」
「それでいいわね」
彼女の今の言葉に頷く皆だった。
「じゃあそれで」
「お芝居は決まりね」
「それと」
芝居は決まった。だがここでまた。次の話をするのであった。

第百六十四話　ロシア風にその三

店のことだった。そのことについて話すのだった。
「これもロシア風にするんだよね」
「そうよね、確か」
「ロシア風っていうと」
今言ったのはパレアナだった。
「あれ？ロシアンティー？」
「やっぱりそれよね」
「まずはそれだよね」
皆今のパレアナの言葉に頷く。ロシアでの飲み食いするものといえばどうしてもそれが最初に思い浮かぶのであった。まずはそれだった。
「それで後は」
「お菓子は」
「お菓子はね」
またアンネットが皆に話をしてきた。
「プニャリキね」
「プニャリキっていうと」
「あのやたら甘いのよね」
「そうよ」
それだとここでも皆に答えるアンネットだった。
「まずはそれね」
「そう。だったらそれも作って」
「後はケーキとか？」
「ロシアケーキだったっけ」
「そうよ、それも出しましょう」
ここでも言うアンネットであった。
「あのケーキもね」

「ロシアのケーキって面白いでしょ」
くすりと楽しそうに笑って述べるアンネットであった。
「固くてそれで中にドライフルーツやジャムが入っていて」
「最初見た時はこれがケーキかって思ったけれど」
「美味しいわね。あれも」
「皆も好きでしょ。だからなのよ」
アンネットの笑顔での言葉は続く。
「あれがいいって思うけれど。どうかしら」
「よし、それじゃあ」
「決まりね」
皆また頷いた。出す食べ物も決まったのだった。
「他のもロシアもので」
「統一していきましょう」
「ロシアになった気分で」
「それじゃあ店の名前はだ」
それまで皆が話をしているのを教壇のところから聞いているだけだったギルバートが言ってきた。話が整うのを待っていたのである。
「それもロシア風だな」
「そうね。それもね」
「やっぱり」７８
これは当然のことであった。
「その名前は」
「何がいいかな」
「ロシアっていったら」
今口を開いたのは彰子だった。
「エカテリーナとかどうかしら」
「エカテリーナっていったら」
「あの女帝じゃない」
「どうかしら」
その名前でどうかと皆に問うのだった。

「いい名前だと思うけれど。奇麗でしょ」
「奇麗だけれど」
「怖さもない？」
皆こう反応するのだった。
「エカテリーナって」
「何か」
「そうかしら」
しかし当のアンネットは満足した様子であった。その面持ちで言うのだった。
「いい感じじゃない」
「ロシアじゃ人気なの？」
「エカテリーナって名前が」
「大人気よ」
実際にそうだと答えるのだった。

第百六十四話　ロシア風にその四

「女の人の名前に本当に多いし」
「あのおっかない女帝の名前でもなんだ」
「それでも」
「あれ位しないと駄目でしょ」
しかしロシア人としてはこう言うのであった。
「やっぱり」
「あれ位って」
「あれだけやって」
エカテリーナ女帝の業績はいい意味でも悪い意味でもあまりにも有名になっている。とりあえず連合の他の国では『まさにロシアの君主』であるとされている。なおこの女帝は元々もはロシア人ではない。ドイツ生まれであるがロシアの国母になったのである。
「何ていうかロシアって」
「凄いっていうか」
「後はピョートルとかイワンとか」
言うまでもなくピョートル大帝とイワン雷帝のことである。
「人気あるけれど」
「どっちも何か」
「特にイワンは」
血も凍る様な恐怖政治を敷いた暴君であるというのが連合だけでなく人類社会での評価である。しかしここでもアンネットはこう言うのである。
「偉大な皇帝じゃない」
「偉大って」
「暴君じゃなくて」
「だからあれ位でいいのよ」
アンネットはここでもこの言葉を出すのであった。

「他にはウラジミールとか」
「流石にヨシフはないのね」
「ジュガシビリだったっけ。本名」
前者はプーチンのことであり後者はあのスターリンのことである。この時代でもスターリンはロシアではそれなりに人気がある。その人気は彼の母国グルジアのそれより上である。
「まああの名前は流石に」
「っていうか男の名前は駄目だよね」
「それはね」
アンネットも流石にそれはわかっていた。
「やっぱり女の子の名前にしましょう」
「けれどやっぱり」
「エカテリーナはよくないと思うわ」
皆はそれにはどうしてもというのであった。
「その名前は」
「だから他のにしようよ」
「他のなの」
「仕方ないわね」
言い出した当人である彰子とアンネットは仕方なく頷いた。しかし名前はまだ決まっていない。話は結果としてまだ続くのであった。
「それじゃあ」
「何がいいかしら」
そうしてだった。今度彰子が出して来た名前は。
「ソフィアはどうかしら」
「えっ、その名前も駄目だよ」
「そうだよ」
皆その名前はエカテリーナ以上に困惑した顔で駄目出しをしたのだった。
「あの絵の人じゃない」
「あの人はちょっと」

皇女ソフィアという絵である。太った大柄な女が寝巻き姿でふてぶてしい顔をして腕を組んで立っている。その部屋の窓には髭の男が首をくくられて吊るされている。そんな絵であるのだ。

皆その絵を知っているから。それで駄目出しをしたのである。

「止めておきましょう」

「余計にまずよ」

「そうなの」

そう言われてまた残念な顔になる彰子であった。

「どうかなって思ったけれど」

「あの絵を模写して飾るとかは？」

アンネットもアンネットでこんなことを言い出してきた。

第百六十四話　ロシア風にその五

「駄目なのね」
「だからあの絵が駄目じゃない」
「洒落にならないよ」
「そうそう」
皆また彼女に言うのであった。
「だから他の名前」
「何かないの？」
「それだったら」
ここでまた名前を出す彰子だった。やはり彼女が名前を出すのだった。
「タチヤーナはどうかしら」
「あっ、オネーギンの」
「ヒロインだよね」
「うん。この名前は？」
「いいじゃない」
最初に賛成の声をあげたのはアンネットだった。
「あのヒロインはいいと思うわ」
「小説の方もオペラの方もなのね」
「あのヒロインは」
「そうよ。いいと思うわ」
また言うアンネットだった。
「タチヤーナだとね」
「じゃあ決まり？」
「この名前で」
皆もそれでいいとするのだった。
「タチヤーナね」
「これで」

「よし、それではだ」
ここでギルバートがまた言ってきた。
「皆その名前でいいか？」
「賛成」
「異議なし」
店の名前はこれで決まったのであった。とりあえずアンネットを軸にして話は決まった。しかし話はこれで終わりではなかったのだった。
「さて、それでだけれど」
「メニューは」
「あと内装は」
そういった具体的なことだった。すぐにそれに取り掛かっていた。メニューはやはりロシアのものである。演劇のことと並行して進めていくのであった。
「やっぱりロシアンティーよね」
「それとロシアンケーキ」
「この二つがメインなのね」
「思いきり甘くして」
このことをしっかりと言うアンネットだった。やはりロシア人の彼女が皆にアドバイスをしていた。祖国のことだけに詳しい彼女であった。
「味付けはね」
「思いきり甘く」
「そうするの」
「そう、ロシアは寒いから甘いものが凄く有り難いのよ」
だからだというのである。ロシアの寒さは宇宙の時代でも健在である。
だからである。彼女はその寒さを考慮して言ったのである。
「だからね。いいわね」
「物凄くね」

「甘くなの」
「それで御願いするわ」
重ねて言うアンネットだった。
「とにかく甘さが大事なのよ」
「とことん甘くか」
「それがロシアなの」
そうしてだった。アンネットのアドバイスは続く。
「お酒も必要よ」
「お酒っていうと」
「ウォッカ！？」
「いえ、それではないわ」
ウォッカではないというのである。ロシアを象徴するその酒ではないというのである。皆それを聞いてまずは目をしばたかせた。今それぞれメニューを考えてノートを開いてそうして料理のレシピも開いている。そのうえで細かく話をしていくのであった。アンネットの話も聞いてだ。

第百六十四話　ロシア風にその六

「あれは強過ぎるのよ」
「確かに」
「あの強さは」
ウォッカの強さについては最早言うまでもなかった。皆よく知っていた。
「もうかなりだし」
「ちょっと以上に」
「お菓子には強過ぎるのよ」
今度は具体的に話すアンネットだった。
「どうもね。だから」
「それではなくて」
「他のお酒なのね」
「ブランデーよ」
彼女が出してきた酒はそれであった。洋菓子にもよく使われる酒だ。当然ながら連合でもよく飲まれている酒の一つである。
「それを使うのよ」
「ふうん、ブランデーね」
「それをなの」
「そう、使わせてもらうわ」
また話すアンネットだった。
「ブランデーをね」
「何か洒落てるな」
彼女の彼であるルシエンがぽつりと言った。
「ロシアのお菓子っていうのも」
「フランス料理の影響があるから」
彼氏の言葉にこう返したアンネットだった。実際にロシア料理というものはフランス料理にその影響を受けている。ロシアが西欧文

化を取り入れてからの話である。
「だからなのよ」
「それで洒落ているのか」
「洒落ているけれどそれだけじゃないわよ」
楽しげに笑ってさらに話すアンネットだった。
「ロシアの大地の味がするのよ」
「ロシアのね」
「不死身になりそうだな」
「まあロシアは不死身だけれど」
この時代も健在のロシアという国の特殊能力である。その体力と生命力、それに回復力は他の国の追随を許さないのである。
「ロシアのお菓子を食べて不死身にはならないわよ」
「仙人にならないの」
「別に」
「仙人は中国だしね」
ロシアではないというのである。
「だからね。不死身じゃないから」
「とにかく洒落て甘く」
「そうしていくんだ」
「お洒落でね」
まただった。意外と西欧風というのである。
その西欧風の菓子のメニューを皆で考えていく。メニューはこれで進めていく。
内装はというと。これまたロシア風である。とはいっても白やオレンジを基調としたこれまた西欧風のものであった。皆そのエウロパの香りに幾分か困惑しだしていた。
「何か段々」
「エウロパになってきて」
「どうなのかしら」
「いいじゃない」

しかし当のアンネットはそのエウロパ風の内装にも落ち着いたものであった。
「ほら、サンクトペテルブルグ風でね」
「あの街？」
「地球にあった」
「そうよ。これもロシアなのよ」
微笑んで話すのであった。ここでも。
「私の住んでたマルコフ星系ってサンクトペテルブルグを再現したテーマパークがあってね」
「ロシアのテーマパークっていうと」
「やっぱりバレエあるのね」
「勿論よ、バレエは絶対よ」
これまたロシアであった。ロシア人のバレエ好きはこの時代にも変わらない。バレエがあってこそロシア人は何かをしようとすると言っても過言ではない。芸術においては。
「そのテーマパークがこんな感じなのよ」
「エウロパ風が」
「何か抵抗あるけれど。ロシアじゃないみたい」
「だからこれもロシアなのよ」
あくまでこう言うアンネットであった。
「これもね」
「何かロシアって」
「色々みたいね」
「そうだね」
皆次第にロシアが様々な顔があることがわかってきた。
「何か寒くてでかいだけじゃないんだ」
「意外と繊細なものもあって」
「複雑なのね」
「ロシアは奥が深いわよ」
そのロシア人が楽しそうにまた皆に話す。

「さあ、それじゃあどんどん進めていきましょう」
「うん、お店も演劇も」
「両方ね」
今はロシア尽くしになるクラスであった。そこにあるのはクレムリンではなく北の都であった。その香りの中で皆作業を進めていた。

ロシア風に　　完

２００９・１０・３０

第百六十五話　人骨都市その一

人骨都市

皆お店と演劇の準備を同時に進めていく。しかしこれが、であった。

「ええと、それで？」

「トンカチ何処行った？」

「鋸は？」

皆店や舞台や小荷物を作るのに忙しい。全員総がかりで何日もやっている。

しかも演劇の練習をしながらだ。それは多忙というものではなかった。

「気付いたらまた」

「もう夜じゃない」

「時間経つの早いわね」

そのことにかなり戸惑ってもいる。とにかくハードな毎日であった。

そのペテルブルグ風もだ。彼等にとっては実にわかりにくかった。

「エウロパみたいな感じって言われても」

「馴染みないよね」

「そうなのよね」

理由はそれだった。エウロパ風というものに実に疎いのである。かろうじてそのペテルブルグ風を肌で知っているアンネットによって進められている有様であった。

しかしその彼女もである。演劇の主役と脚本と演出を担当していてそちらにもかなり力を注いでいる。そのうえで店も見ているから大変であった。

「それでここはこうするのよ」

役の衣装のまま絵の具を塗って訂正させている。

「こうなのよ」
「ああ、そうなんだ」
「そうするのね」
皆彼女が実際に柱を白く塗っているのを見て驚きの声をあげていた。
「その色なんだ」
「思いつかなかったわ」
「ペテルブルグはとにかく奇麗な街を意識してなのよ」
色を塗りながらそうだと言うのである。
「だからね。とにかく白を基調にしてオレンジでね」
「成程」
「そうしてなの」
「色はそれでね」
衣装のままで話を続けていく。
「全体的な建築様式は」
「ロココ？いや、バロックなのか？」
ギルバートが彼女に問うた。彼はピエロの格好をしている。これも演劇の衣装である。
「エウロパだと」
「バロックかしらね」
腕を組みながら答えるアンネットだった。
「ピョートル大帝の時代だから」
「そうか、バロックか」
「ロココでないのは間違いないわ」
ロココであるのは違うというのである。
「ほら、ロココっていうと」
「確かあれだったな」
ギルバートはピエロの格好のまま考える顔になった。しかしその考える顔は今はピエロの化粧の中に隠れてはっきりとわかりはしない。

「あのエウロパの総統官邸がだ」
「あれがロココ風だったわよね」
「確かな」
そうだったというのである。
「オレンジの色のな」
「確かあの総統官邸って」
「あれだったわよね」
皆エウロパのことであるから好意的な顔ではないがそれでも話してきた。
「サンスーシーをモデルにしていたんだっけ」
「プロイセンの」
「確かそうだったな」
ギルバートは彼等のその言葉に頷いた。
「あの官邸はな」
「サンスーシーねえ」
「またお高いこと」
やはり皮肉が出ていた。プロイセンのフリードリヒ大王がポツダムに造らせたものである。その壮麗さはベルサイユにも匹敵する。
「そんな感じっていうと」
「やっぱりこれとは違うわね」
「まあペテルブルグもね」
しかしまた言うアンネットであった。

第百六十五話　人骨都市その二

「あれよ。普通にロココもあったりするけれど」
「あるの、ロココも」
「それも」
「ピョートル大帝の後でエカテリーナ女帝が出て来たじゃない」
またこの女帝の名前が出されるのであった。
「あの女帝やたらと文化的なことが好きだったから」
「それでロココも取り入れたと」
「そうなるのね」
「そういうこと」
まさにその通りだというのであった。
「それでそうした離宮も造ってね」
「離宮？」
「エル＝ミタージュよ」
これまた実にそれらしい名前であった。フランス語である。
「それがその離宮の名前なのよ」
「あれは博物館ではなかったのか」
ピエロのギルバートがそれに問う。
「確か」
「殆どの間はそうだったけれどね」
今も地球にあるものはそうなっている。ただし中央政府の管轄になっている。
「それでも最初はそうだったのよ」
「離宮だったのか」
「そう、宮殿だったのよ」
要するにそうなのだ。言うならば別荘の様なものである。
「エカテリーナ女帝が建てさせたね」
「それがあれなんだ」

「あのフランスの宮殿みたいな」
「あれが時代的にロココね」
それだと話すアンネットだった。
「そうなるわ」
「ロココがあれで」
「街はどっちかっていうとバラックで」
「そう考えてデザインしていくといいから」
具体的な話にもなった。
「わかってくれたかしら」
「ううん、ある程度は」
「わかったけれど」
皆実感はできないが理解できるものは幾分かはあった。ただしそれは学校の授業を聞いたうえで理解するといった性質のものである。
「そんな感じなんだ」
「じゃあこんなの？」
「これでいいかしら」
「そうね」
皆が描いたそのデザインを見て頷くアンネットだった。
「そんな感じで。華やかにね」
「華やかに」
「それも西洋の華やかさ」
どうしても連合に華やかさになってしまうのだった。これはもうどうしようもないまでになっていた。
何はともあれ描いてデザインしていく。そして衣装もである。その中で遂に一つずつ出来てきたのであるがふとセーラが言ったのだった。彼女は魔女役である。見ればトンカチを宙に浮かしてそれを動かして作業もしている。魔術か超能力かはわからないがそうしたものを使ってである。
「これは」
「これはってセーラ」

「何かあったの？」
「怨念を感じます」
急に真顔でこんなことを言い出してきたのであった。
「それもかなり強い」
「怨念ってまたいきなり」
「何なのよ」
「舞台とお店両方からです」
感じる場所は即ち彼等が今行っているものからである。
「強く感じます」
「ええと、何かあるのかな」
「怨念って」
「アンネットさん」
セーラは真面目な顔でアンネットに顔を向けて問うてきた。
「心当たりはありますか？」
「心当たりって？」
「この怨念の」
「怨念っていったら」
アンネットは腕を組んで考える顔になった。そのうえで話したことは。

第百六十五話　人骨都市その三

「ペテルブルグってね」
「何かあったの?昔」
「大変なことが」
「ロシアの北の方に築いた街だけれど」
まずはその置かれた場所から話すのだった。
「極寒の地で皆借り出して造ったんで人がばたばた死んだのよ」
「ばたばたって」
「そんなに」
「もうね。昔だから重労働だったしおまけに事故も多くて疫病まで出て」
苦難が続いたというのである。
「その結果ね。大勢死んだのよ」
「そんな歴史があったんだ」
「そんなことが」
「そうなのよ。それと」
おまけにであった。まだあったのだ。
「第二次世界大戦でドイツ軍が攻めて来て」
「今度は戦争か」
「災厄が続いたのね」
「数百年開いてたけれどね。それでドイツ軍に囲まれて」
今ではエウロパの主要国家の一つである。かなり存在感を持っている国である。
「何年も包囲受けて餓死者が物凄く出たのよ」
「それだけ死んだから」
「それで怨念が、ってことかしら」
「名付けて人骨都市」
実に不吉な仇名であった。

「そう呼ばれていたのよ」
「何か怨念に相応しいような」
「歴史と名前ね」
「全く」
皆それがわかって実に納得した顔で頷くのだった。
「じゃあここは何とかしないと」
「御祓いできるかしら」
「その怨念を」
「はい」
皆が抱きだした疑念に対してすぐに答えてきたセーラだった。
「できます、すぐに」
「だったら」
「御願いできるかな」
皆で彼女に頼み込んだ。
「その怨念が何時爆発するかわからないから」
「できれば」
「わかりました」
何の迷いもなく答えてくれたセーラであった。
「それではです・・・・・むんっ」
両手で印を結んで一念した。するとでった。
「これで終わりました」
「えっ、もう!?」
「終わりなんだ」
「はい、終わりです」
にこりと笑って皆に述べてみせる。
「御安心下さい」
「何かおわったのは」
「あっさりしていたわね」
「何かって思ったいたけれど」
「実際の街ではなかったですから」

だからだと答えるセーラであった。
「それで、です」
「ああ、実際のペテルブルグだったら」
「こんなものじゃないの、やっぱり」
「はい。あれだけの街になると写真からも感じます」
そこからさえだというのであった。
「人骨都市の名前は伊達ではありません」
「そうだったの」
それを聞いたアンネットも目をしばたかせていた。
「あの街ってそこまで怖かったの」
「ってあんた歴史知ってるじゃない」
「それで今の台詞は」
「ないんじゃないの？」
「私そういうのには疎いのよ」
だからそれは仕方ないと自分で言う彼女だった。

第百六十五話　人骨都市その四

「だから。御免なさいね」
「まあそれだったらいいけれど」
「仕方ないけれどね」
皆は知らないのなら仕方ないとした。話がとりあえずまとまってそれに知らなくてもそれで済むような話だったのでそれで収まったのであった。
しかしであった。話を聞いてもだ。皆あらためてそこに恐ろしいものを感じ続けていた。
「何ていうかね」
「そうよね」
「おっかない話だよ」
「奇麗な薔薇には棘があるっていうけれどな」
ここで言ったのはフックだった。
「美しい街には怨念か」
「街は人が造るものです」
ここでまた言うセーラだった。
「人がです。ですから人の業もです」
「出て来るのね」
「っていうか含まれていくの」
「そうなのです」
セーラはまた話すのだった。
「街にはそうした意味で光と闇があります」
「光と闇が」
「そこには」
「あるっていうと」
「全部のことに言えるってわけね」
アンネットもここで言うのだった。

「全てのことになのにね」
「世界があるのは」
「何かが」
「じゃあ」
アンネットは腕を組んで考える。そして舞台の服を見てまた言った。
「服とかにもあっても不思議じゃないわよね」
「この舞台の服には何もついてはいません」
それについても語るセーラだった。
「幸いにして」
「そう、何もね」
それを聞いてまずは安心したアンネットだった。
「それはよかったわ」
「ただ。気をつけて下さい」
しかしこうも言ってきたセーラだった。
「服にもそうした存在は憑きますので」
「何でも憑くのね、本当に」
アンエットは話を聞いて顔を曇らせていた。
「油断できないのね」
「人が創るもの、生きるものには全てです」
またセーラだった。
「憑きますから」
「それ考えたら迂闊だったかしら」
首を傾げて言ったアンネットだった。
「ペテルブルグにしたのって」
「迂闊ではありません」
それも否定するセーラだった。
「どれについても有り得ることですから」
「どれにもだから」
「全てにです。あの街はたまたまそれが強いだけなのです」

「けれどそれを聞くとショックね」
今度はこう言ったセーラだった。
「やっぱりね」
「ショックですか」
「好きな街なのよ」
だからだというのである。
「はっきり言ってね。好きなのよ」
「ペテルブルグがですね」
「確かにエウロパ風よ」
それはセーラも好いていないようである。
「けれど奇麗なのは確かだから」
「成程」
「ロシアってあれじゃない」
セーラに苦笑いと共に話していく。

第百六十五話　人骨都市その五

「皆武骨でばかでかいってイメージあるでしょ」
「ええ」
「それはな」
「否定しないよ」
皆実際にこう答えるのだった。
「ロシアっていったらやっぱり」
「それだよね」
「ねえ」
「ほらね」
皆の声を受けてまた言う彼女だった。
「皆こう思ってるから」
「武骨でばかでかい」
「やっぱりそれは」
「どうしようもないみたいね」
彼女も皆の言葉を聞いて頷くしかなかった。
「まあそれでもよ。繊細な一面もあるから」
「ロシアに繊細」
「何か想像できないけれど」
「チャイコフスキーとかそうじゃない」
あまりにも有名なロシアの作曲家である。その名声や評価についてはこの時代においても残っていることから言うまでもないものである。
「あの音楽は繊細でしょ」
「ああ、確かにね」
「あの人の音楽は」
「ロシアは武骨でばかでかいだけじゃないのよ」
とにかくこのことを強調して言うのだった。

「繊細なロシアもちゃんとあるから」
「ちゃんとね」
「あるの」
「そう、あるのよ」
必死になって言うアンネットだった。
「そういうのも今度のこの文化祭で見せたいわね」
「じゃあ紅茶もだな」
フックがここで言ってきた。
「その繊細さを強調するんだな」
「いえ、そのままよ」
強調はしないというのである。
「そのままロシアの味でいくわよ」
「ロシアの味って」
「それで繊細になるの」
「そうよ。元々繊細だからよ」
いけるというのである。皆は懐疑的だがアンネットだけは本気である。彼女だけはそれは可能だと考えているのであった。そのままの味で。
「いけるわよ」
「どうかなあ」
「いけるかな」
「そうよね」
しかし皆は懐疑的な顔なのだった。その顔を見合わせている。
「そのままの味でいいって」
「そういえば」
ここで皆あることにも気付いたのだった。
「ここって日本だけれど」
「日本のロシアンティーってどうなのかしら」
「そうよね。どんなのかしら」
そのことについて思うのだった。当然ながら日本人には日本人の

味の嗜好がある。そしてロシア人にはロシア人の嗜好があるのである。

「ロシア人から見てどうなの？」

「そのままの味なの？」

「全然違うわね」

するとこう答えたアンネットだった。

「作り方や味付けは同じだけれどね」

「違うの」

「同じなのに？」

「そうなのよ。ほら」

ここで彼女が言うことには。

「お茶もジャムもあれじゃない。日本のでしょ」

「日本のだから作り方とかが同じでも」

「違ってくるの」

「そう、ロシアのお茶はロシアのお茶の味がするから」

だからだというのである。

「だから同じロシアンティーでもね」

「味が違ってくるってことか」

「成程ね」

「そういうこと。だからね」

さらに言うアンネットだった。

第百六十五話　人骨都市その六

「お店でロシアのお茶とジャムを買って」
「何かさらに本格的になってきたよね」
「確かに」
皆アンネットの言葉を聞いて言い合う。
「まさに全てがロシア」
「ロシア風どころか」
「そう、ロシアよ」
アンネットはそのロシアであるということを強調するのだった。
「ロシアの味はね。本当のものになるとロシアのものから出されるのよ」
「よし、じゃあここは」
「お菓子もロシアの素材を使って作るのね」
「そういうことよ」
にこりと皆に笑って話すアンネットだった。
「ロシアのものだからね」
「よし、じゃあ早速」
「材料はロシアからの輸入店で買って」
「いいお店知ってるわよ」
そこにも気を回す彼女だった。
「もうね。いいお店をね」
「どんなお店なんだ？」
ルシエンが彼女に問う。
「それでそのお店は」
「名前はボルシチっていってね」
「ボルシチねえ」
「何かあまりセンスがいい名前とは」
少なくとも輸入品店としてはいい名前には思えないものがあった。

「それでも品揃えはいいのよ」
アンネットも店の名前のセンスについてはあえて言及しなかった。
「本当に何でもあるから」
「っていうとチャイナタウンみたいな感じね」
「アメリカンストリートみたいなものだね」
この時代もチャイナタウンは何処にでもあるがアメリカ人達もこんな集まりを築いているのである。日本人街もある。一応厄介者達を集めているのではないということになっている。
「まあロシアンタウンってのはないけれど」
「それはね」
「まあロシア人って一人一人は穏やかだから」
アンネットだからこそよく知っていることだった。
「あまり積極的に前にも出ないしね」
「そういえばあんたもね」
蝉玉がその彼女に言ってきた。
「どっちかっていうとそうよね」
「今は違うけれどね」
スターリングもそれに加わる。
「前に出てあれこれやるの好きじゃないのね」
「結構何でもそつなくできるけれど」
「性格的にね。そういうのは得意じゃないのよ」
自分でもそうだと話すのだった。
「どうしてもね」
「やっぱりそうなのね」
「ロシア人だからかな」
「そうかもね。やっぱり私はロシア人よ」
自分でもそのことを言って認めてみせるのだった。
「だから穏やかなのかも」
「ロシアって国はともかくとして」
「中の人達はそうなのね」

「ロシア人はいい人達よ」
またしてもロシア人としての言葉である。にこりと笑って見せて言う。
「本当に素朴で親切で無欲でね」
「じゃあロシアンドリームってのは？」
ペリーヌがその彼女に問う。
「そういうのもないの？」
「あることにはあるわよ」
こう彼女に返しはする。
「一応はね」
「そうなの。あるの」
連合ではアメリカンドリームやチャイニーズドリームが有名である。即ち一介の普通の家の息子や娘が一躍スターダムにのし上がって大金持ちになる。こういった国々では昔からある立身の話である。大統領になるのもまたそのうちの一つなのである。
「そういうの」
「ウォッカを飲めて温かいお家に住めて」
アンネットはそのロシアンドリームを語った。

第百六十五話　人骨都市その七

「あと祖国が強ければ」
「それがって」
「何かいつもあるような」
「そんなことじゃない」
少なくとも連合ではそういったことは実に簡単に手に入るものだ。強い祖国というのも国家の安全が保たれるという意味では常識である。
「それがロシアンドリームって」
「また無欲な」
「っていうか普通の生活？」
「そう、それがロシアンドリームなのよ」
まさにそれだというのである。
「それがロシアンドリームなのよ」
「ロシアってそんなに貧しい？」
「貧しくないよね」
蝉玉とスターリングがまた話す。
「というか連合の中でも市民所得高いし」
「人口だって国力だって」
連合の中でも国によって市民取得に差がある。とはいっても最も多い国と少ない国で三分の二程度しか離れていないのであるが。
「それでそれだけ？」
「ロシアンドリームって」
「だから無欲なの」
このことをまた言うアンネットだった。
「ロシア人はね」
「ううん、無欲過ぎて」
「宗教家みたいだけれど」

「何となくわかるわ」
いぶかしむ皆の中で言ったのは彰子だった。
「アンネットのそのロシアンドリームって」
「そうよね」
同じ日本人である七海も彰子の今の言葉に頷いた。
「最低限あればそれでいいわよね」
「ええ。だからね」
「そうだね」
家持もそれに同意するのだった。
「幸せに生きていければ」
「それで充分じゃないかしら」
また言う彰子だった。
「何も贅沢なんて」
「そういえばジャパニーズドリームっていうのも」
「ないような」
皆日本人にも気付いたのだった。
「無欲なのね、日本人も」
「日本の場合は国家も」
この辺りがロシアと違うと言えば違うことだった。
「そういう無欲さってささやかだけれど」
「何か連合じゃないみたい」
こんな言葉も出て来た。
「無欲もいいものかしら」
「どうかしらね」
少なくとも連合ではあまり顧みられるものではない。
「やっぱりゴージャスに贅沢に」
「派手にだよね、連合って」
「それも悪くないけれどね」
アンナットはそうした贅沢も悪くはないとした。
「けれどやっぱり。穏やかな幸せがいいわ」

「ロシア人ってそういうのなんだ」
「そうなの」
また皆に微笑んで答える。
「それがロシアよ」
「けれどロシアって国は」
「何でああなのかしら」
「全く」
これはこの時代も変わらないことであった。ロシアという国とロシア人、何故かその両者はあまり結びつかないものもあるのであった。

人骨都市　　完

２００９・１１・３

第百六十六話　準備万端その一

準備万端

あれやこれやと騒いでいるうちに舞台も喫茶店も準備ができてきていた。
「よし、じゃあ」
「あとはここをこうやって」
「完成ね」
丁度店の看板ができたところだった。白を基調とした奇麗な看板がである。
それを見て皆で言うのだった。
「これで看板もできたし」
「後は」
「メニューできた？」
ペリーヌがマルコに問う。
「コピーできたの？」
「うん、できたよ」
笑顔で応えて十五枚程度のメニューを彼女に手渡す。
「はい、これね」
「有り難う。じゃあこれをケースに入れて立てて」
「これでメニューはいいよね」
「ええ、万全よ」
微笑んで述べた言葉だった。
「上出来よ」
「よし。じゃあ後は」
「テーブルとか椅子とかは」
「できたよ」
それもだというのだ。普通の机や椅子だがそれも既に用意されていた。

「後はこれをお店の中に並べるだけだね」
「そうね。じゃあお店は万全ね」
「舞台の方はどうかな」
「こっちもできたわよ」
コゼットが応えてきた。
「万全よ。こっちもね」
「いけたの」
「衣装もね。ばっちりよ」
こう言って微笑んでさえきたコゼットだった。
「皆のがね」
「そう。じゃあ後は本番だけね」
「材料も揃ったし」
「台詞も随分と覚えたし」
それぞれ言い合うのだった。
「さて、天命を待つとしますか」
「そうだね」
こうして準備が整ったことを喜び合う。そうして今は休む。皆教室の中で寝袋や毛布を出してそのうえで雑魚寝に入るのであった。
「何かこうして寝るのも」
「そうよね」
アンネットは隣の寝袋のルシエンの言葉に応える。彼女もまた寝袋に入ってその中で寝ようとしている。皆入り混じって寝ている。
「不思議な気持ちよね」
「普段は何でもない教室だけれどな」
「授業をするだけのね」
「けれど今はな」
「ええ。皆が生活をする場所になってるなんて」
「それが不思議だな」
こう言うルシエンだった。
「考えてみるとな」

「言い換えれば学校でも生活できるのね」
アンネットはこのことに気付いたのだった。
「そうなるわよね」
「ああ、そういえばそうだな」
ルシエンの彼女の言葉からこのことに気付いた。
「何かそれもな」
「実感できないけれど」
「けれど今こうしてな」
「皆で寝泊りして色々やってるし」
「シャワーだってあるしな」
「お風呂もあるし」
そういう設備まで完備しているのである。この学園には大浴場まであるのだ。もっとも皆時間がないので今はシャワーを使っているが。
「お洗濯だってできるし」
「本当に何でもあるな」
「ないのってあるかしら」
「とりあえずないな」
寝袋の中で言ったルシエンだった。
「思いつく限りな」
「そうよね。結構以上に充実してるわよね」
「ああ。ないって言えば」
「食べる場所もものもあるし」
「本当にないか」
これが結論だった。
「学校には」
「それに今は皆がいるから寂しくないし」
「そうだよな。見る場所も多いしな、この学校は」
「ねえルシエン」
アンネットはここで話を変えてきた。

「私思ってるんだけれど」
「どうしたんだ？」
「この学園に入ってよかったわ」
こう言うのである。

第百六十六話　準備万端その二

「八条学園にね。入ってよかったわ」
「よかったのか」
「中学までずっとロシアにいたけれど」
その彼女の祖国である。言わずと知れたそのロシアである。
「実は最初は高校もロシアの高校に入るつもりだったのよ」
「それで何でここにしたんだ？」
「弟がね。八条学園に入りたいって言って」
「ダニーがか」
「ええ。あの子日本好きだから」
だから日本の大学に入りたいと言ったということである。
「それで八条学園受験するって言い出して」
「御前も一緒に受けてか」
「そういうこと。それで入ったの」
そういう経緯だったのだ。
「本当に最初はね。ロシアの地元の学校で普通に暮らすつもりだったのよ」
「それがこの学校に入ってか」
「最初何だって思ったわよ」
言いながら苦笑いになる彼女だった。
「だって。色々な国の子がいるし物凄く大きな学校だし」
「オペラハウスも球場も動物園も何でもあるからな」
「こんな学校あるんだって思ったわよ」
アンネットは言うのだった。
「凄く広いし大きいし」
「ああ、それは俺も思った」
「ルシエンもなの」
「俺も中学までトルコだったんだよ」

その彼の祖国である。
「トルコにもこうしたでかい学校はあるにはあるけれどな」
「あるの」
「ロシアにはどうなんだ？あるのか？」
「一応はね」
あるというのである。
「確か第三士官学校が相当大きいけれど」
「士官学校か」
「中に空港があってね」
つまり軍事訓練で使うのである。だからあるのだ。
「それでかなり広いのよ」
「軍事関係だとやっぱり広くなるんだな」
「普通の学校でだと。そうね」
腕を組んで自分の記憶を辿りはじめたアンネットだった。そのロシアのことに関してである。
「ゴルチャコワ学園かしら」
「ゴルチャコワ学園？」
「ここと同じで幼稚園から大学院までである学園でね」
そうした意味で八条学園と同じというのである。
「そこもかなり広くて大きいのよね」
「そうなのか」
「そういうところはあるけれど」
そしてまたは地上学園について話すのだった。
「実際に入学してみるとね。凄いわよね」
「そうだな。外から見るよりも中から見た方がな」
彼等は話すのだった。
「余計にわかるな」
「そうよね。凄い学校よね」
「何でもあるしな」
二人は話をしていく。

「それでだけれど」
「ああ」
「こういう話聞いたことある？」
不意にまた言ってきたアンネットだった。
「学校の怪談とか。まあ変なことばかり起こったりもするし」
「河童がいるとかキジムナーとかだな」
「鏡の話とか今まであったじゃない」
「そうした話には事欠かないよな」
「そうでしょ？やっぱりこの校舎にもいるのかしら」
「いるだろうな」
この辺りは少しばかりおぼろげな返答をするルシエンだった。
「何かしらな」
「そう。やっぱりいるのね」
「何がいるのか知らないし聞いたこともない」
少なくとも彼等はこの校舎に何がいるのかは知らないのだ。しかし何かがいるだろうとは考えているルシエンなのだった。

第百六十六話　準備万端その三

「けれどな。今までのことでわかってきたからな」
「この学園には色々いるのね」
「第一学校の外にもな」
彼はまた言った。
「凄い人達いるだろ」
「ああ、博士ね」
言わずと知れた天本破天荒博士である。連合最凶の奇人変人である。
「あの博士はまた特別ね」
「他にもシャバキ氏もいるしな」
「あの人また隔離されたの？」
「ああ、またあの地下の隔離病棟に入れられた」
そこだというのである。最早彼の居場所になっている。
「そこから出ることはない」
「そうか」
「ああ、また変なことして出て来るだろうけれどな」
シャバキもまたあらゆる常識が通用しない人間なのである。他人にとっては甚だ迷惑なことにである。
「あの人はな」
「学校の外にもいるから」
「中だと余計にだろ」
彼は言うのであった。
「学校はそれこそそうした話の宝庫だからな」
「そうよね。そういえば何か」
「どうしたんだ？」
「こんな話をしているせいだと思うけれど」
微かに笑った上で述べるのであった。

「外の廊下に誰かいるような気がするわね」
「そうだな」
彼女の今の言葉を受けてルシエンも笑った。
「そんな気がするな。本当にな」
「そうよね。話をすればね」
「そんなふうに思えるな」
「ああ。本当にな」
こんな話にもなるのだった。
「そう思うと寝られなくなってきたな」
「明日も大変なのにね」
「飲むか？」
こう提案してきたルシエンだった。
「それで一気に寝るか？」
「飲むってお酒？」
「ああ。ウイスキーあるぞ」
それだというのである。連合でもエウロパと同じくウイスキーが飲まれているのである。
「飲むか？」
「そうね。いいわね」
ウイスキーと聞いてまた笑顔になるアンネットだった。
「あまり強くないし、あれなら」
「おいおい、ウイスキーだぞ」
今のアンネットの言葉には苦笑いと共に突っ込みを入れるルシエンだった。
「それが弱くないのか」
「私にとってはね」
そうだというのである。
「別にね」
「凄いな」
今のアンネットの言葉を聞いて素直に驚くルシエンだった。

「ウイスキーが強い酒じゃないのか」
「ウォッカなのよ」
ここでもロシアの代名詞が出て来た。
「いつも飲んでるのがね」
「ウォッカに比べたらか」
「そういうこと。全然弱いわよ」
「まあウォッカはな」
当然ながらルシエンもウォッカについてはよく知っている。その強さはまさに凄まじいものであり連合でも強さでは最強とされている位である。
「あれは殆どアルコールだしな」
「火が点くからね」
これは本当のことである。
「冗談抜きでね」
「ああ、確かにあれは凄い」
また言うルシエンだった。
「あれを飲むからか」
「ウォッカ。あるわよ」
言いながらその透明の酒を出してきたアンネットだった。一見すると水に見えるがそこから発せられるオーラがそうではないことを示していた。

第百六十六話　準備万端その四

「どうする？飲むの？」
「いや、今はウォッカはいい」
その申し出を断るルシエンだった。
「ウイスキーでな」
「そうなの。じゃあ私が飲むわね」
「ストレートで行くのか？」
「ええ、そうよ」
そうするというのである。
「一気にね。それで寝るわ」
「俺もそうするか」
自分が今持っているウイスキーの瓶を見ながらの言葉だった。
「これを飲んでな」
「飲むと寝られるからね」
「ああ、すぐにな」
それが酒の魅力である。飲んだら寝られることがである。
「じゃあ寝るか」
「それで明日もお店と舞台の準備ね」
「それだな。けれどそれもな」
「もうすぐ終わりね」
アンネットはそのウォッカを飲みながら言った。何処からかコップを取り出してきてそれに入れて一杯ずつ飲んでいる。ルシエンも同じで彼は氷も入れていた。
「文化祭がはじまるから」
「そうだな。いよいよ本番か」
「どう？それで」
あらためて彼に問うてきたのだった。
「文化祭は。楽しい？」

「そうだな」
こう言葉を置いてからの返答だった。
「楽しいことは楽しいな」
「そうね。賑やかだし」
「何かいつもより色々な人がいる気がするけれどな」
「色々ね」
「中等部や大学からも来るしな」
他の学部からもというのである。
「それに商業科や工業科も来てくれるしな」
「小学生だってね」
「他には」
ここでルシエンは首を少し捻った。そのうえでの言葉だった。
「何か変な外見の人達も見たんだがな」
「変な外見って？」
「いや、だからな」
話はふと戻った。
「妖怪みたいな感じのな。いるだろ」
「いるの？そうしたのも」
「ただ単に仮装しただけだと思うがな」
一応こう考えることにする彼だった。
「けれどな。そういう人も確かに見るからな」
「妖怪も混ざってるの」
「河童とかキジムナーとかな。他にも色々とな」
「ちょっと見ただけじゃメイクとわからないのかしら」
「そうじゃないのか？」
ここでも今一つ以上に要領を得ない返答であった。
「だから混ざってな」
「お祭の中にね」
「まあ実際はわからないけれどな」
またこう言って自分の言葉と考えに保健をかけるルシエンだった。

「学校の中にそういうのがいたとしてもな」
「そうね。わからないわよね」
「まあ賑やかなのは間違いないな」
ルシエンはそれは素直に認めた。
「それはな」
「そうね。賑やかなのはね」
「だから俺達も賑やかにやるか」
ウイスキーを飲みながらの言葉だった。氷が割れる音がする。
「それが文化祭だからな」
「そういうことね。じゃあ」
ここでウォッカを完全に空けたアンネットだった。
「お休みなさい」
「ああ、また明日な」
「ええ、またね」
こう言葉を交えさせて今は休むのだった。文化祭の準備はそれからも進められるのであった。
舞台の練習は空いている適当な部屋で行われていた。クラス全員が出るので皆喫茶店の用意をしながらそちらも進めていた。

第百六十六話　準備万端その五

「よし、旅に出るぞ！」
「えっ、旅にですか」
「そうだ！」
王子役のマルコが道化師に扮しているギルバートに応えていた。
「姫を探すその旅にだ。行くぞ！」
「何でまた急に」
二人共練習とは思えないかなり白熱した演技であった。
「こんなことに」
「見て下さい、姫よ」
嘆く道化師の横でさらに言う王子だった。
「我が愛の前にはどの様な障壁も無意味です」
「いい感じね」
そんな二人の芝居を見ながら満足そうに微笑むアンネットだった。
「この調子だと上手くいきそうね」
「そうね」
ペリーヌもそれに同意して頷く。
「舞台の方もね」
「お店もいい感じだし」
アンネットはお店についても話をした。
「満足できそうね」
「味はロシアの味を忠実に再現ね」
「それはね」
先に言った通りであった。
「ちゃんとロシア雑貨店から手に入れたし」
「ロシアそのままの味ね」
「皆のお口にも合うわよ」
それも保障するアンネットだった。

「ちゃんとね」
「ロシア料理って癖強くないの」
「全然」
それはないというのである。
「というか癖ないのよ。アメリカ料理とか中華料理とかと違ってね」
「ボルシチとかピロシキも」
「ないのよ」
またないと答えるのだった。
「食べやすいわよ。ピロシキだってね」
「何か意外ね、それは」
「国の個性が強いからそう思ってしまうのね」
「ええ」
実際にそう思ってしまっていたペリーヌだった。実際のところ彼女もロシア料理を深く食べたことはこれまでなかったのである。
「それはね」
「和食よりも癖はないわよ」
「いや、和食は」
和食の話が出ると戸惑った顔になる彼女だった。
「あの個性は別格でしょ」
「特別だっていうのね」
「実際にそうじゃない」
その通りだと返すのである。和食については。
「生のお魚とかそういうのは出るし」
「お肉も生で食べるし」
「それにも」
他の国の人間の多くが驚くのがやはりこれであった。刺身という生の魚や肉を山葵や生姜、大蒜で味をさらにつけた醤油に漬けて食べる。それにまず驚かされるのである。
「驚いたし。子供の頃はじめて見てね」
「私も。ロシアじゃ生のお肉とかお魚食べないから」

「ロシア料理にはないのよ」
「ないわよ」
右手を横に振ってそれを否定する。
「そんなの全然」
「アメリカ人や中国人は食べるみたいだけれど」
「何だかんだでね」
それでも中国では料理に火を通すのが普通である。中華料理に火を通すというのはこの時代でも常識になっていることなのである。

第百六十六話　準備万端その六

「ロシアは寒いし。それはね」
「ないのね」
「生で食べるのは果物位ね。パイナップルとかバナナとかマンゴーは大人気よ」
「果物位なの、生で食べるのは」
「そうよ」
あらためてそうだと答えるアンネットだった。
「まあ和食みたいにお醤油やお味噌みたいな独特の調味料はないし」
「ナムプラーやコリアンダーは？」
「使わないわよ」
こちらは東南アジア、とりわけタイである。
「癖の強い調味料や香辛料はね」
「じゃあ食べやすいのかしら」
「デザートもね。だから安心していいわ」
あらためて答えるアンネットだった。
「それはね」
「そう。そういえばメニューを見てもそうね」
「ただ。どうしてもこれだけはっていうのは」
ここで顔を真面目にさせるアンネットだった。
「あるけれどね」
「そういえば熱帯のフルーツよく使ってるわね」
ペリーヌもそこに気付いたのだった。
「それもかなり」
「それよ。ロシアじゃ熱い場所で採れる果物が人気なのよ」
そうだというのである。
「昔からね」
「だからなの。マンゴーもキーウィも多いし」

「寒いからね」
やはりそこに根拠があるのであった。
「どうしても熱帯のフルーツが人気になるのよ」
「成程」
「昔こんな話があったのよ」
ここでアンネットはかつてのロシアの話をするのであった。
「ほら、ソ連だった頃」
「地球にあった時代なの」
「ヨシフ＝スターリンが言ったのよ。バナナ以外は何でもあるって」
「つまりバナナはどうしても手に入らなかったのね」
「寒いからね」
やはりここに理由があるのであった。
「バナナにしろパイナップルにしろそういうのは」
「今は簡単に手に入るでしょ」
「それでもその時の名残で今も人気があるのよ、ロシアでは」
そうなるのであった。
「皆いつも食べるわよ。もうシロップとかたっぷりとかけてアイスも付けてね」
「太りそうね」
ペリーヌはシロップとアイスも一緒だと聞いて思わず述べた。
「その組み合わせは」
「まあロシアの女の人はね。ちょっと」
「歳を重ねたら太るのね」
「そうなのよ」
ここで困った笑顔になってしまったアンネットであった。
「うちのお母さんもそうだし」
「やっぱり」
「実際のところね」
その困った笑顔のまま話を続けてきた。
「私も。諦めてるのよ」

「太ることはなのね」
「そう、絶対に太るから」
その言葉には達観すら込められていた。
「ロシア人である限りはね」
「絶対に太るのね」
「それにね」
さらにロシア特有の話が続けられていく。
「ロシアでは女の人はその方がいいってされるのよ」
「そうなの」
「ええ、そうなのよ」
こう話すのであった。
「太ってる方がいいって言われるのよ」
「何かそれも凄くロシア独特だけれど」
「お婆さんなんか皆太ってるのよ」
皆という今の言葉にはこれ以上はないまでにしっかりとした説得力が見られた。
「皆ね」
「お婆さんになるとなのね」
「そう、誰もが太っている方が頼もしいって言われるし」
これもまたロシア独特のことであった。やはりこの国はかなり独自色が強い国であった。このことは否定できないものがあった。

第百六十六話　準備万端その七

「それもあってね」
「太ってる方がいいの」
「私はちょっと嫌だけれど」
今度は難しい顔になっていた。
「そういうのはね」
「太るの嫌なの」
「あまり好きじゃないわ」
実際に言うのであった。
「ずっとこのスタイルを維持していたいけれど」
「十代のままのスタイルをってことね」
「そういうこと。駄目かしら」
こうペリーヌに対して問う。
「そういうのは」
「私はそういうのは」
問われて少し困った顔になって言葉を返すペリーヌだった。彼女にとっては返答することがどうにも難しい話であったからだ。
何故なら。その理由を今彼女自身が話した。
「私ロシア人じゃないわよ」
「うっ、そうだったわね」
「そうよ。ロシア人じゃないから」
またこのことを言うのだった。
「南アフリカ人よ」
「南アフリカ人ってことは」
「ロシア人のことはやっぱり」
難しい顔のままアンネットに話をしていく。
「どうもね」
「ロシア人が一番わかるってことなのね」

「つまり。ここでは」
アンネットを見ての言葉であった。
「あんたが一番わかることよ」
「私がなの」
「そうよ。あんたがね」
また話すペリーヌだった。
「あんたが一番わかってることじゃない」
「確かに」
言われてみればその通りだった。今回のこともアンネットの様々なアドバイスがあったからこそ舞台も店もここまでいけたのである。実に順調にだ。
「そうなると」
「あんたがわからないとやっぱりね」
「ううん、そうなのね」
「実際どうなの？ロシアの女の人って」
「三十代半ばになるともう」
実際の年齢まで述べられた。
「急激にね」
「新陳代謝が落ちたらなのね」
「もうそこから急に」
そうなっていくというのである。
「私の場合は二十年位は安心だけれど」
「じゃああれじゃない？」
そこまで話を聞いて述べたペリーヌだった。
「その二十年の間考えてみたら？」
「二十年の間？」
「そんなに待つことないじゃない」
こう言うのである。
「別にね」
「二十年の間じっくりと考えてね」

「そういうこと。これでどうかしら」
「そうね」
言われてみればだった。その言葉に頷くことができたアンネットだった。
「それじゃあじっくりと考えてみるわ」
「そういうこと。別に焦って決める話でもないじゃない」
「その間に考えが変わるかも知れないしってこと？」
「変わってもおかしくないじゃない」
ペリーヌの言葉は続く。
「とにかく二十年はあるのよ」
「だったら」
「そういうことよ。いいわね」
「ええ。じゃあ」
ここまで聞いてまた頷くアンネットだった。
「それはそれでね」
「じっくりとね」
「二十年って長いわね」
あらためてこのことを思うアンネットだった。
「言われてみれば」
「そうよ。長いわよ」
これはペリーヌもわかっていることだった。それもかなりである。
「私達の歳よりもまだあるから」
「三十代半ばの私達ってどうなってるのかしら」
こうした考えにもなるアンネットだった。
「一体どんなのかしら」
「さあ。どうとでもなってるんじゃないのかしら」
ペリーヌはこう問われてもそんな先のことまでとてもわからなかった。
「はっきり言えばさっぱりわからないわね」
「全くなのね」

「どうなってるか」
「本当に」
「ただね」
また言うペリーヌだった。
「一つだけ言えることはね」
「何なの？」
「今を頑張るってことね」
それだというのである。
「そうすれば絶対に未来につながるから」
「二十年後の私達にも」
「ええと、トムの国の診だったかしら」
カナダである。
「未来は今にあるってね」
「未来は今に、なのね」
「あんただってそうじゃないの？」
アンネットに顔を向けての今のペリーヌの言葉だった。
「あんただってね。ほら、ロシアでの知識が今の舞台やお店になってるじゃない」
「あっ、そうね」
このことを言われてわかった彼だった。
「そういうことだったわ」
「私だってそうなんでしょうね」
ペリーヌ自身もそうだというのである。
「未来は今にあるってね」
「そうね。それじゃあ」
「今を頑張りましょう」
笑顔でアンネットに告げたペリーヌであった。とにかく今の舞台や喫茶店を頑張ることにしたのであった。まずはそれからであった。

準備万端

完

2009・11・9

第百六十七話　酒のないロシアその一

酒のないロシア

遂に当日となった。遂に文化祭がはじまったのだ。
「ロシアの喫茶店！？」
「どんなのなんだ？」
他のクラスの面々はそれを聞いてまずは首を捻った。
「お酒が出るとか？」
「それもウォッカ」
誰もがウォッカを最初に連想するのだった。
「それがお店に出るかな」
「喫茶店でも」
「そうよね」
やはり皆それを考えるのだった。ウォッカをである。
「やっぱりそれが出るのかしら」
「お茶にそれが入ってるとか」
皆その話をしていた。そうしてその店に向かうのだった。
「さて、と」
ウェイトレス姿のアンネットが店でスタンバイしていた。しかしその姿はウェイトレスというよりはメイドであった。黒と白のコントラストと長めのスカートがまさにそれである。頭にある白い覆いがさらに彼女をメイドらしく見せているのであった。その彼女がいた。
「皆驚くわよ」
「驚くのね」
「そうよ」
楽しげな顔で隣にいるペリーヌに応える。彼女もメイドそのもののウェイトレス姿である。
「絶対にね」

「けれどメニューは普通よ」
ペリーヌは今の彼女の言葉にはこう返した。
「ごく普通のじゃない。あんたが言うロシアのスイーツじゃない」
「それに驚くのよ」
「何でなの？」
「それはもうクラスで少し話してることよ」
そうだというのである。
「もうね」
「というと」
アンネットの今の言葉を聞いて勘のいいペリーヌはすぐに察した。
「あれね」
「そう、あれよ」
アンネットの笑みはさらに誇らしげなものになっていた。
「あれがないからよ」
「あれのイメージって強いのね」
「それを逆手に使うことこそが重要なのよ」
そうだともいうのである。
「それが今回の秘策なのよ」
「秘策ね」
「さて、それで驚かせて」
まずは驚かせることからなのであった。
「そこからさらに仕掛けるわよ」
「わかったわ」
頷くペリーヌだった。
「それじゃあそれに乗るわ」
「そうしましょう。じゃあね」
「ええ、それじゃあ」
こうしてスタンバイする彼女達だった。そして遂に最初の客が来た。
「いらっしゃいませ」

「ようこそ」
女組だけでなく男組も挨拶をする。彼等もウェイターというよりは執事の格好をしている。こういう格好にしているのは客受けを考えてである。
「こちらです」
「どうぞお座り下さい」
「あれっ、メイド喫茶？」
「執事喫茶？」
皆それを聞いてまずはそれをイメージした。
「ここって」
「ロシア喫茶じゃなくて？」
「ロシア喫茶よ」
アンネットがにこりと笑ってまずはそのメイドや執事にしか見えない彼等にこうイメージを抱いた客達に対して言ってみせた。
「ここはね」
「ロシア喫茶ねえ」
「じゃあお酒？」
「ウォッカ出るの？」
「出ないわよ」
こうも客達に答えるのだった。

第百六十七話　酒のないロシアその二

「それはね」
「えっ、ウォッカが出ないって」
「他のお酒は？」
「お酒は出るわよね」
「出ないわよ」
また皆に答えるアンネットだった。
「一切ね」
「お酒の出ないロシアって」
「そんなのってあるの」
「あるわよ」
皆にはっきりと返してみせた。
「ちゃんとね」
「そうだったのか」
「お酒がないロシアもあるの」
「凄く意外」
見事にアンネットの予想通りになっていた。皆まずはそのことに唖然としていた。
そうしてであった。アンネットはその彼等に対してさらに言ってきた。
「それでメニューは」
「メニュー！？」
「一体何があるの、それで」
「ロシアンティーよ」
まずはそれであった。
「それがあるけれど」
「ああ、ロシアンティーか」
「それがあるの」

皆これには納得した。やはりロシアといえばロシアンティーである。この認識は誰もが持っているものだった。酒以外にロシア人が飲むものとしてである。
「ジャムを入れた紅茶」
「それよね」
「そうよ。それはどうかしら」
あらためて皆に問うのだった。
「ロシアンティーは」
「ええ、じゃあ」
「まずはそれを」
貰うことにするのだった。やはり最初はこれであった。
「それじゃあ次は」
「デザートだけれど」
「ケーキがあるわよ」
今度はそれだというのである。
「ケーキはどうかしら」
「あっ、ケーキあるんだ」
「じゃあそれを」
「ロシアンケーキとフレンチケーキがあるわよ」」
アンネットはまたにこりと笑って話してきた。
「どちらがいいかしら」
「ええと、ロシアンケーキ!?」
「何それ」
今いる客達はそれを聞いてもわからなかった。誰もロシアケーキと言われてもどうにも察しがつかなかったのだ。どういったものかをである。
「何か雪が降ってるとか?」
「氷とか?」
「やたら大きいとか?」
「そういうケーキ?」

「違うから」
皆のこうした予想を正面から否定するのだった。
「別に雪とか氷があったりしないし滅茶苦茶大きくないから」
「そうなんだ」
「そういうのは別にないの」
「ないわよ」
また皆に答える。
「それはね」
「そう。だったら」
「どんなケーキかしら」
「一応フランスケーキはね」
そちらについても話すのだった。この辺りは丁寧にしている。
「普通のケーキよ」
「普通！？」
「じゃあロシアンケーキは普通じゃないってこと！？」
「どんなケーキなのよ、本当に」
「だからそれは見てみてのお楽しみよ」
にこりと笑ってそこは言わないのだった。

第百六十七話　酒のないロシアその三

「どんなのかはね」
「見てみてね」
「どんなのが出て来るのかな」
「あとロシアンパンケーキ」
そういったものもあるのだという。
「これはわかるかしら」
「ジャム？」
「ジャムがあるの？」
皆それを聞いてすぐに察した。
「上にジャムをかけるパンケーキ？」
「それ？」
「そう、それよ」
まさにそれだというのである。
「それはどうかしら」
「何か平凡？」
「ロシアにしては」
何気に随分と失礼な言葉である。なおこの時代もロシアという国は何事につけても恐怖に値する国家とされている。民主主義になってもロシアなのである。
「けれど何か面白くないわよね」
「そうだよね、ロシアだし」
「美味しそうではあるけれど」
「美味しいわよ」
それは保障するアンネットだった。
「フレンチケーキもロシアンパンケーキもね」
「じゃあ僕フレンチケーキ」
「私はロシアンパンケーキ」

皆メニューを決めてきた。そうして中には。
「ロシアンケーキ」
「それを貰うわ」
「よし、それね」
ロシアンケーキと聞いてここぞとばかりに微笑むアンネットだった。
「それでいいのね」
「ええ、それでね」
「頼むよ」
ロシアンケーキを頼んだ彼等は言う。
「畏まりました」
ここではウェイトレスに戻る。
「それではこちらの席に」
「接客は普通なんだな」
「意外っていうか」
「だって。ロシア人よ」
ここではまた素に戻るアンネットだった。客達の後ろを振り向いて言う。
「ロシア人は素朴で親切で無欲なのよ」
「それがなあ」
「嘘っぽいよなあ」
「ロシア人っていったら」
ここで彼等がイメージするロシア人が語られていく。
「お酒が」
「だから酒乱って」
「まあお酒飲んで暴れる人は確かに多いけれど」
アンネットもそれは否定できなかった。酒乱は人類の永遠の問題の一つである。
「それでもよ。皆いい人達よ」
「そうなんだ」

「そうよ。だから私もよ」
今の話の展開はかなり強引なものであった。
「いい人だから。安心しなさい」
「まあ接客はまともだし」
「あとはメニューをね」
「楽しませてもらうから」
こうしていよいよそのロシアの紅茶とデザートを味わうことになった。まず出て来たものは。
「フランスケーキは何か」
「普通のケーキじゃないか」
「何処にでもある」
それはまさに何処にでもある苺ケーキであった。何の変哲もない。
「味もまあ変わらないし」
「っていうかケーキよね」
「全然同じ」
「けれど」
しかしなのだった。ここで話が動いた。
彼等がもう一つ頼んだそれである。クッキーの様なものの上にジャムやドライフルーツ、それにチョコレートが乗せられている。そうしたものが出て来たのである。

第百六十七話　酒のないロシアその四

「これって何？」
「クッキー？」
「だよな、どう見ても」
「それがケーキよ」
しかしアンネットはこう答えるのだった。
「それがロシアンケーキよ」
「えっ、ケーキ！？」
「これが！？」
「そうよ」
驚く客達に落ち着いた顔で述べるのであった。
「それがケーキだけれど」
「どう見たってクッキーだけれど」
「そうよね」
「絶対にケーキじゃないし」
「それに」
他にもあるのだった。見ればそれはケーキの生地の間に餡を挟んである、そうした和食を思わせるお菓子であった。少なくともケーキには見えないこともない。
「ええと、これも」
「ケーキか？」
「日本のお菓子の何かじゃないわよね」
「シベリアケーキよ」
それだというのである。
「これはサービスで出してるんだけれどね」
「シベリアケーキ」
「聞いてるだけで寒くなりそう」
「流刑地で食べるもの？」

シベリアといえばまさにそれであった。このイメージがずっと残っているのである。
「そうじゃないかしら、やっぱり」
「だよなあ」
「怖い由来だな」
「ああ、別に流刑とかは関係ないから」
ここでまた説明するアンネットだった。
「このシベリアケーキはね。たまたまそういう名前なのよ」
「そう、よかった」
「とりあえずは」
「で、これとそのロシアンケーキがロシアのケーキよ」
あらためて客達に説明するのであった。
「どう?美味しそうでしょ」
「美味しそうっていうか」
「どう見たってケーキじゃないし」
「特にロシアンケーキ」
とりわけこのケーキの評判が悪いのだった。
「絶対ケーキじゃないわよ」
「クッキーだろ、これ」
「そうよ、どう見ても」
「だよな、やっぱり」
「けれどケーキよ」
アンネットの言葉は変わらない。
「安心していいから」
「安心って」
「ケーキってことを?」
「そうよ。ロシアではね」
ロシアのことも話されるのだった。
「焼き菓子全般のことをケーキって呼ぶのよ」
「えっ!?」

「そうだったんだ」
「そうよ。皆それは知らないのよね」
実は彼女にしても学園でこのことを話したのははじめてのことである。
「ロシアでは焼き菓子は全部ケーキっていうのは」
「初耳だよ」
「そうよ、生まれてはじめて聞いたことだけれど」
「だから。ロシアンだったりフランスだったりで分けているのよ」
「何とまあ」
客達はそこまで聞いて呆然となっていた。
「それでだったんだ」
「焼き菓子全体がケーキだったの」
「これもロシアだけじゃないかしら」
「そうでしょうね」
そのロシアだけということについても否定しないアンネットだった。

第百六十七話　酒のないロシアその五

「ロマノフ公国でもそうだと思うけれど」
「いや、あそこロシアだし」
「兄弟国家じゃない」
今のアンネットの言葉に一斉に突っ込みを入れる客達であった。
「紛れもなく」
「そうじゃない」
「まあそうだけれどね」
実際にロマノフ公国は白系ロシア人の末裔がロマノフ家を呼んでそれを大公として国家元首に戴いた国家である。紛れもなくロシアの兄弟国家である。
「多分そこもだと思うけれど」
「焼き菓子全体がケーキなら」
「じゃあクッキーもなのよね」
「そうね」
そうなることは自然の成り行きだった。クッキーはどう見ても焼き菓子だからである。
「じゃあこれ他の国なら」
「クッキーよね」
「そうなるよね」
皆でそのロシアンケーキを見て言い合う。
「このシベリアケーキはともかくとして」
「クッキーじゃない」
「美味しいのかしら、それで」
「味は確かよ」
それは太鼓判を押すアンネットだった。
「騙されたと思って食べてみなさい」
「ロシアに騙されたその時は」

「まず命がないんじゃない？」
ロシアという国のイメージがここでも語られる。
「そのまま極寒の地に御案内とか」
「しかも片道切符で」
「今は犯罪者に対してしかそういうことしないから」
何気に問題発言の今のアンネットの言葉だった。
「安心しなさい」
「って昔は犯罪者じゃなくても」
「そうした場所に送られてたんだね」
「そういう時代もあったわ」
実に何気なくその怖い話をするのだった。
「もう些細なことで大粛清とかでね」
「スターリンか」
「それね」
血も凍る様な恐ろしい独裁者である。ただしどういうわけロシアでは今だに人気があったりする。他にはイワン雷帝やピョートル大帝、エカテリーナ女帝が人気だ。
「他には農奴とか」
「そういうのも？」
「流石に農奴とかコルホーズもないわよ」
流石にそれもなかった。
「安心して」
「じゃあ何があるの？」
「今は」
「普通に他の国と同じよ」
こう答えるのだった。
「もうね。普通によ」
「お百姓さんやってるの？」
「農業は」
「そうよ。他の国と同じよ」

そうであるというのだ。
「幾ら何でも今時コルホーズとか農奴とかはないわよ」
「小作農もないか」
「っていうか連合にそんなのないけれど」
今の連合は全て自作農か企業経営である。そこで社員として雇われている場合はあるが幾ら何でもそうした過去の遺物は存在しないのである。
「幾らロシアでも」
「そうよね」
「そうよ。ロシアだって連合よ」
このことを強調してきたアンネットだった。
「そんな無茶苦茶な国じゃないから」
「そうか。そうだよな」
「そういえばこのロシアンケーキ」
女の子の一人がここでやっとそのケーキを口にした。

第百六十七話　酒のないロシアその六

「美味しいじゃない」
「あっ、確かに」
「いけるね」
「そうだね」
皆もそれを食べて頷く。
「結構以上に味もいいし」
「物凄く甘いし」
「そうそう」
「ロシアのお菓子は徹底的に甘いわよ」
アンネットはここでは誇らしげな顔になっていた。
「もうね。本当に徹底的にね」
「やっぱり寒いから？」
「それでなんだ」
「そうよ。寒いからカロリーがないとね」
皆の予想通りそこに理由があった。
「それとウォッカで。それかその紅茶で」
「ロシアンティーで」
「そういえばこのジャムも」
「凄く甘い」
ジャムもなのだった。
「滅茶苦茶甘いけれど」
「これもロシアの」
「ええ、ロシアのジャムよ」
また胸を張って述べる彼女だった。
「今回料理の素材は全てロシア産よ」
「っていうと何もかもが」
「本場ロシアを再現なのね」

「ロシアを味わって」
こうも言うアンネットだった。
「よくね」
「ううん、それを言われると」
「かなり怖かったりするけれど」
またロシアという国についての言葉が出る。
「それでも確かに」
「美味しい」
「優しいし素朴でそれでいて」
「しっかりとした味」
皆それぞれ評価を述べる。
「何か思ったよりも上品だし」
「いいじゃない」
「満足してもらってるわね」
アンネットも彼等の言葉を聞いて微笑んだ。
「よかったわ。こっちもね」
「よかったの」
「美味しくて」
「当たり前でしょ。私がプロデュースしてるのよ」
確かにその顔は満足そうなものだった。
「それで嬉しくない筈ないじゃない」
「そういえば確かに」
「僕だってそう思うし」
「私も」
自分が今のアンネットの立場だとどう思うか。答えはそこで出るものだった。
そうしてであった。皆こう言った。
「それじゃあだけれど」
「またくれるかな」
「お茶とお菓子おかわり」

「あら、いいのね」
今の皆の言葉を聞いてさらに微笑むアンネットだった。
そしてその顔でその皆に問うのであった。
「お金は別よ。それでもいいのね」
「うん、それでもね」
「御願い」
「おかわりね」
それでもだというのだった。これで決まりであった。
喫茶店は好調な滑り出しだった。そしてそのままの勢いで進んでいく。まずは商売繁盛となるのだった。

酒のないロシア　　完

２００９・１１・１３

第百六十八話　お客は色々その一

お客は色々

タチヤーナは繁盛していた。客がひっきりなしに来る。

「うわ、何か忙しいわね」

「予想以上にね」

ベンとレミがそれぞれお皿やカップをなおしながら話をしている。

「何かお仕事が次から次にやって来るし」

「食器を洗わないといけないし」

「お菓子も作らないといけないし」

ベンは執事風、そしてレミはメイド風の格好である。そのうえでまずは食器を泡立つ容器の中に入れて洗いはじめていた。

「それでお菓子はどうなったの？」

「今タムタムが作ってるよ」

ベンはレミに対して答えた。二人並んで食器洗いにかかっている。

「丁度今ね」

「そう。タムタムがいるの」

「だからそっちは大丈夫だと思うよ」

こう述べるベンだった。

「そっちはね」

「わかったわ。じゃあそっちはタムタムに任せるわ」

「そうしたらいいよ。それでだけれどね」

「ええ」

「食器は」

今洗っている食器の話をするのだった。

「アンネットが言うにはとにかく真っ白にしてってね」

「徹底的に洗えってことね」

「そういうこと」

簡単に言えばそうなることであった。洗いものの基本である。

「そうしてくれってね」
「わかったわ。それじゃあ」
レミは頷いてそのうえで洗い続けるのであった。その動きは実に手馴れたものである。
一つ、また一つと洗っていく。そして洗ったものを水の容器に入れる。するとベンはそれを泡を落としさらに奇麗にしていくのであった。
「洗ったらだけれど」
「どうしたの？」
「このスポンジで泡を徹底的に落とさないとね」
言いながら薄いスポンジで何度も水洗いしているベンだった。
「油とかが落ちないし」
「徹底してるわね」
「洗いものの基本だからね」
だからだと答えるベンだった。
「これもね」
「確かにね。潜在って結構落ちにくいからね」
「そうなんだよね。それがね」
問題だと話すのだった。
「お客さんにそういうの出さないわけにはいかないし」
「そうそう」
「ああ、そういえばだけれど」
ここでベンはあることを言うのだった。それは。
「ほら、僕達こうして念入りに洗うじゃない」
「ええ」
「連合はね」
連合という言葉を出してきたのだった。
「洗剤で丁寧に洗ってそれをちゃんと水洗いして洗剤を徹底的に落とすじゃない」
「そうじゃないと不衛生よね」

「ところがイギリスとかはね」
「イギリス!?」
「うん、あそこだと泡をそのままタオルで拭くだけなんだって」
顔を顰めさせてレミに話す。
「それだけらしいよ」
「嘘でしょ、それ」
まずはその話を信じようとしないレミだった。
「それは幾ら何でも」
「いや、これは本当らしいんだよ」
「マジで!?」
思わずこう言ってしまったのだった。
「それって」
「そうらしいんだよ。シャワーを浴びてもね」
「泡を吹くのね」
「うん、それだけなんだって」
「信じられないわね」
幾ら話を聞いてもこう言うレミだった。
「それってお肌荒れるでしょ」
「お皿だって」
「衛生に悪いってものじゃないじゃない」
「結局それがエウロパなんだろうね」
これまた随分と馬鹿にした言葉だった。

第百六十八話　お客は色々その二

「上品ぶっていてもね」
「何かそれじゃあたかが知れてるわね」
「普通お皿は」
「こうするのが当然でしょ」
言いながらベンが自分が洗ったその皿を奇麗にゆすぐのを見ている。
「今のあんたみたいにするのがね」
「そうだよね、やっぱり」
「常識じゃない」
また言うのであった。
「そんなのって」
「シャワーを浴びた後は」
「泡を全部じっくりと落とす」
レミは断言さえしてみせた。
「そうじゃないととてもね」
「だよね。何でエウロパではそんなことするんだろう」
「ああ、それはな」
ここで、であった。丁度メニューを作り終えたタムタムが二人のところに来た。そうしてそのうえで彼等に対して言ってきたのである。
「今はそれはしていない」
「していないんだ」
「ちゃんと水で流してるのね」
「身体もお皿もな」
どちらもそうしているというのである。
「ちゃんと水で泡を流し落としている」
「じゃあこの話って」

「デマなの？」
「デマかというとそうでもない」
それもまた否定するタムタムだった。
「それもだ。違う」
「じゃあどういうことなんだろう」
「それって」
「地球にあった頃の話だ」
その頃だというのだ。
「地球にあった頃のイギリスはそうしていた」
「泡を拭くだけで」
「それで終わりにしていたのは」
「地球にあった頃だけだ」
またこう話すのだった。
「少なくとも今じゃない」
「地球だった頃の話だったんだ」
「まさかって思ったけれど」
「地球にあった頃は水を奇麗にする技術もまだ弱かった」
まずは技術的な問題もあった。
「それにイギリスは水が少なかったからだ」
「ああ、それでなんだ」
「泡を長し落とさなかったのね」
「今みたいに砂漠でも水が好き放題使える時代でもなかった」
それはあくまで今だからの話しなのだった。
「だからそうなっていた」
「別に怠け者とかそういうのじゃ」
「なかったの」
「必要にかられてだったということだ。そもそも」
「そもそも？」
「今度は一体」
タムタムの話をさらに聞く二人だった。その間も手を止めてはい

ない。
「欧州の水の悪さは全土の問題で風呂にしてもだ」
「だから何年にも一度なんて話だったんだ」
「年に四回も贅沢だったのね」
「そういうことになる。水も贅沢なものなんだ」
タムタムはこうも述べた。
「今のこの時代の俺達とは違うということだ」
「成程」
「そういうことね」
二人はそれを聞いて納得したのだった。
「それでなんだったんだ」
「わかったわ」
「少なくとも今はそういうことはない」
あらためて言うタムタムだった。
「そしてだ。今から」
「今から？」
「どうするの？」
「メニューを出して来る」
話は自然と仕事のそれに戻っていた。
「それじゃあな」
「うん、じゃあ」
「そっちも御願いするわね」
二人は今は平和にタムタムを見送った。そうしてタムタムが店に出ると。そこには一見しただけで普通ではない客も大勢座っていた。

第百六十八話　お客は色々その三

「！？」
その彼等を見てまずはいぶかしんだ。
「何だあれは」
「どうしたの？」
「いや、お客さん達だが」
こう丁度店にいた彰子に話すのだった。
「変わった人達もいるな」
「あっ、そういえばそうね」
おっとりとした彰子はここでやっと気付いたのだった。
「仮装かしら」
「あれは仮装か？」
タムタムは今の彰子の言葉にいぶかしむ顔になった。
「あれは」
「そうじゃないかしら」
彰子はいつものっとりとした調子であった。
「あれって」
「仮装か」
「だって今時蓑着ていたりとか」
大昔の日本の雨衣である。
「頭に笠被っていたりとか」
「赤い赤ん坊の服をきたお年寄りもいるな」
「そんなのってやっぱり」
だからだというのである。
「仮装としか」
「そういえば肌が緑色の人もいるな」
しかもその人は背中に甲羅を背負ってもいた。
「そういうのはやはり」

「そうよ」
やはり仮装だというのである。
「そうじゃないかしら」
「そうだな。やっぱりな」
「そうよ。絶対にないわよ」
また言う彰子だった。
「仮装以外には」
「そうだな。あれは仮装だ」
タムタムもそれで納得したのだった。
「それ以外にはない」
「そうよね」
「しかし。それにしても」
ここであらためて思うタムタムであった。
「よくできているな」
「そうよね」
「よくできた仮装だ」
仮装と思い見続けている彼であった。
「あれはな」
「何処の誰が作ったのかしら」
「特撮研究会か？」
この学園にはこうした部活もあるのだ。
「あそこの衣装とかはかなり精巧だからな」
「あそこかしら」
「可能性はあるな」
「けれど特撮研究会だったら」
彰子は首を少し右に捻って述べた。
「ああいうふうなの作るかしら」
「ああした仮装か？」
「あれって日本風じゃない」
言うまでもなく彰子の国であり今学園があるその国に他ならない。

「私の国の。そうよね」
「どう見てもな」
タムタムが見てもであった。江戸時代のものである。
「あれはな」
「うちの特撮研究会って和風ものもやってたかしら」
「やっていたんじゃないのか？」
朧な調子ながらこう答えるのだった。
「確か」
「そうだったの。やってたの」
「和風の特撮もあるだろう？」
タムタムは言った。
「確か古典で」
「変身忍者嵐とか快傑ライオン丸とか？」
「あと仮面ライダーでもあったな」
「響鬼ね」
こうした作品も残っているのである。今では立派な古典だ。特撮もまた文化とみなされているのがこの時代の連合の文化であるのだ。

第百六十八話　お客は色々その四

「そういうのよね」
「だからあるだろう」
タムタムはまた言った。
「そういうのも」
「あるのね」
「だからそんなに気にすることでもないな」
彼はまた言った。
「特にな」
「じゃあそんなに考えることじゃないのね」
「そうだと思う。それにしても」
タムタムの言葉は続く。
「本当によくできてる仮装だな」
「ええ、確かに」
「お金もかかってるだろうし」
「手間隙も」
「よくあそこまでできたものだ」
心から感心している言葉だった。
「作った人は誰かな」
「やっぱりうちの学校の人よね」
「それは間違いないな」
やはり彼等はそう考えているのだった。
「特撮研究会だからな」
「そういえば特撮研究会も出し物あるのよね」
彰子はふと言った。
「確か」
「ああ、確かな」
タムタムは学校の壁にあった貼り紙の一枚をここで思い出した。

「上演とアトラクションだったな」
「その二つか」
「かなり派手にやってるらしいわよ」
とにかく何でも本格的にやるのがこの学園であるがそれは特撮においても同じなのである。それこそかなりのものになっているのである。
「だからね」
「忙しいな」
「それの息抜きで来てるみたいね」
「じゃあ存分に息抜きしてもらうか」
「そうね」
二人は好意で言うのだった。
「それじゃあ。サービスしましょう」
「そうだな。何がいいかな」
「サービスだったら」
マスターでもあるアンネットが言ってきたのであった。
「いいのがあるわよ」
「いいのって？」
「何があるんだ？それで」
「ケーキよ」
にこりと笑ってそれだというのである。
「ケーキがあるわよ」
「っていうとあれ？」
「ロシアンケーキか」
「そうよ、それよ」
まさにそれだというのだ。やはり今もにこりと笑っている。
「それでいいじゃない」
「いいと思うけれど」
しかしであった。ここで彰子は首を捻ってアンネットに言ってきた。

「アンネットって」
「私が？」
「うん。そればかりじゃないの？」
ロシアンケーキばかりではないかというのである。
「何か。言うのって」
「だって美味しいじゃない」
アンネット自身が言うにはそうなのである。
「ロシアンケーキって。それに食べやすいでしょ」
「食べやすいのはね」
それは彰子もわかっていた。
「クッキーみたいで」
「大きさも手頃だし。それに手で食べられるじゃない」
何処までもクッキーに似ている。それがこのロシアンケーキであった。
「それに一杯あるし」
「そんなにあるのか」
「そうよ。かなりあるのよ」
タムタムにも答えるのだった。
「だからね。もうサービスもして」
「採算は？」
「取れてるわよ」
それは大丈夫だというのである。
「サービスは普通の半額だけれど」
「それでもいけるの」
「充分よ。ロシア式勘定を甘くみないことね」
「それは駄目じゃないのか？」
ロシア式勘定と聞いてすぐに突っ込みを入れるタムタムだった。
なおこの時代においてもロシアという国もロシア人も商売や貿易が上手いという評価はない。

第百六十八話　お客は色々その五

「ロシア式だと」
「ロシア人は細かいところにはこだわらないのよ」
この気質が地球にあった頃から全く変わっていないのである。
「それでもよ。大丈夫よ」
「大丈夫なの」
「大量に山みたいに買ってそれを売る」
一応商売の基本ではある。
「そうしてるし。大丈夫よ」
「お店の採算とかいけてるの？」
「それは大丈夫だ」
そういうことに強い頭脳派のタムタムが彰子に答える。店のそうしたことは彼がかなりの部分を請け負っているのである。適材適所であった。
「できている」
「だったらいいけれど」
「しかし。アンネット」
「サービス出してもいいわよね」
「それはいいがちゃんと勘定もしてくれ」
かなり無茶なことを言うタムタムだった。
「ロシア式じゃなくてな」
「ロシア式でいいじゃない」
「それをできるのはロシアだけだ」
まさにその通りだった。
「ロシアはそれこそだ。多少以上のことがあっても平気な国だな」
「まあね」
ここでついつい誇らしげにもなってしまうアンネットだった。
「ロシアはね」

「その国のやり方をこの学園に持ち込んでも」
「駄目なの？」
「無理がある」
こう表現したタムタムだった。
「どうしてもな」
「そうなの。無理があるの」
「ここは日本でしかも他の多くの国の人間が集まっているんだ」
八条学園の特徴である。
「それで何でもロシア式にいっても無理が出て当然だ」
「言われてみればそうね」
「だからだ。少なくとも採算については連合のオーソドックスでだ」
「とりあえずわかったわ」
この辺りは聞き分けのいいアンネットだった。
「じゃあそれでね」
「わかってくれればいい」
「ええ、それにしても」
ここで彼女は話を変えたのだった。彰子に対して問うてきた。
「ねえ彰子」
「どうしたの？」
「あそこのお客さん達だけれど」
また異様な客達に気付いたのである。
「あの人達って随分と精巧な仮装してるわよね」
「アンネットもそう思うの？」
「人間じゃないみたい」
彼女はこう言うのだった。
「何か」
「人間じゃないって？」
「あまりにもリアルじゃない？」
その客達を見ながらの言葉である。
「何もかもが」

「あれっ、そういえば」
ここで彰子も気付いた。
「目が」
「目が？」
「何か違うわ」
このことに気付いたのである。
「作り物じゃないみたい」
「作り物じゃない！？」
「ほら、見て」
その彼等を見るようにアンネットに告げる。すると。
目が動いた。その動きであった。
「あの動きって」
「そうね。何かあれって」
その目の動きはアンネットも見た。それを見るとだった。
「リアルよね、かなり」
「本物みたいよね」
「よくできてる・・・・・って言うべきかしら」
こう言ったアンネットだった。とりあえずは。

第百六十八話　お客は色々その六

「これは」
「本物じゃないわよね」
今度はこう言う彰子だった。
「あれって」
「本物って？」
「妖怪さんとか」
少しぼんやりした口調になっていた。右手の人差し指を自分の唇に当ててそのうえでこう言ったのである。まさかと思っているのがその態度に出ている。
「そういうの？」
「まさか。それはないわよ」
それはすぐに否定したアンネットであった。
「そりゃいるかも知れないけれど」
「それは否定しないんだな」
「私もそこまで頑迷じゃないわよ」
この時代は妖怪の存在もかなり信じられているのである。だからタムタムの今の問いにこう返したのである。
「というか今までそんなこと何度でもあったし」
「そうだったな」
「でしょ？例え妖怪でもね」
「驚かないのか」
「ええ。ただしよ」
しかし言葉を付け加えはしてきたのである。
「こんな真昼間から出て来ないでしょ」
「昼にはか」
「妖怪って夜に出て来るものじゃない」
これはよく言われていることであった。

「夜にね。だから」
「それはないか」
「違うと思うわ」
少なくともアンネットはこう考えているのであった。
「それはね」
「やっぱり違うかしら」
「お金だってどうするのよ」
アンネットは今度は彰子に告げた。
「お金。セーラがお勘定してるけれど何も言わないでしょ」
「ええ」
「偽者とかだったらあの娘すぐに見抜くし」
そうしたあやかしに関するものはやはり彼女であった。
「だからあの人達は。普通の人達だと思うわ」
「そうなの。普通なの」
「ただ仮装しているだけでね」
それだけだというのである。
「だから。そんなに気にすることないわよ」
「あの格好で来るというのは流石に普通ではないがな」
一応こう言いはするタムタムだった。
「それでもだな」
「中身は普通の構造の人間でしょ」
あくまで肉体は、という意味であった。精神までは言及していない。
「だから。別にね」
「そう。妖怪さんじゃなかったわ」
アンネットにここまで言われて頷いた彰子だった。
「別になのね」
「そうそう。それじゃあ商売よ」
「ええ、じゃあ」
「まずは何よりも商売よ」

この辺りはかなり真面目になっていた。
「頑張りましょう」
「そうだな。じゃあ頑張るか」
「頼むわよ、参謀」
タムタムににこりと笑って告げもした。
「頼りにしてるからね」
「頼りにか」
「当たり前でしょ。あんたの頭脳はわかってるんだし」
タムタムのその鋭い頭脳をというのである。
「それがあってこそのお店ってところもあるし」
「俺はそこまで凄かったのか」
「皆がそうよ」
こうも言うアンネットだった。
「皆がね」
「皆か」
「皆があってこそのこのクラスだし」
この考えはアンネットにも強くあるのだった。

第百六十八話　お客は色々その七

「このお店だってね」
「そうだな。それはな」
今の言葉には微笑むことができた。かなり素直に。
「じゃあ頑張らせてもらうぞ」
「頼むわ。それじゃあ私は」
「何処に行くんだ？」
「ちょっとお芝居の方見て来るわ」
同時に進めている三つのオレンジの恋の舞台のことである。
「そっちにね」
「そっちはどうなってるんだ？」
「とりあえず順調みたい」
こう答えるのだった。
「道化師やってるギルバートの話だとね」
「そうか。順調か」
「私ヒロインやるし」
そちらでもメインなのであった。
「お姫様役だから頑張らないとね」
「魔女じゃなかったか？」
ふとこう言うタムタムだった。
「確か」
「代わったのよ」
しかしアンネットはこう返すのだった。
「あれからね。役がね」
「そうだったのか」
「ルシエンが王子様になって」
それも代わったようである。
「それで私は王女様で」

「カップルで主役同士か」
「そういうこと」
今のタムタムの言葉ににこりとなった。二人の仲はもうクラスでの周知の事実である。
「それがいいかなってことでね」
「御前が代えさせたのか？だとしたらそれは」
「幾ら何でもそれはしないわよ」
アンネットは首を横に振って笑ってそれは否定した。
「幾ら何でもね」
「それはないか」
「ないわよ。皆がそうしてくれたの」
そうだというのだった。
「それはね」
「そうか。皆気遣ってるんだな」
「そういうあんたも出てる筈よ」
また言うアンネットだった。
「舞台にね」
「そういえばそうだったか」
「喜劇役者だったと思うけれど」
「そっちの練習もしないといけないな」
それはわかっているが、であった。
「ちゃんとな」
「まあ出番少ないしそんなに気にすることないわよ」
「じゃあ俺はこっちがメインか」
「それで頼むわ。向こうもしっかりとした人が多いしね」
「そうだな。ギルバートもアルフレドもいるしな」
「ギルバートはちょっとあれなところがあるけれど」
彼については苦笑いのアンネットだった。
「暑苦しいし結構以上に鈍感だし」
「確かにな。アンのこともな」

「あれ本当に気付かなかったからね」
「全くな。あれには呆れた」
かつての告白までの話を心の中でそれぞれ反芻しながらの話である。アンはギルバートに自分の気持ちを中々気付いてもらえなかったのである。
「殆どの人間が気付いていたのにな」
「そうよね」
「あっ、そうだったの？」
ところがであった。ここで彰子がこんなことを言い出したのである。
「皆気付いてたの」
「えっ！？」
「気付いてなかったのか！？」
二人は今の彰子の言葉に店の中であるのに思わず声をあげてしまった。

第百六十八話　お客は色々その八

「ひょっとして」
「まさかとは思うが」
「そうだったんだ」
まさに今更の言葉であった。
「アンってずっとギルバートのこと好きだったのね」
「って彰子」
「ずっと見ていただろうに」
二人は唖然としながら彼女に告げる。
「それでも気付かなかったの！？」
「あれは流石に誰も」
「そうだけれど」
やはり気付いていなかったのだった。
「それが何か」
「何かって。ちょっと」
「それはな」
流石に二人も言葉を失いそうになっていた。
「ううん、思いも寄らなかったわ」
「全くだ」
「それでアンもお芝居に出てるのよね」
「脚本も手伝ってくれたしね」
アンネットは何とか気を取り直して彼女の言葉に応えた。なお脚本は主に彼女が書いている。ストーリーを知っているからである。
「宣伝の紙のイラストもやってくれたし」
「頑張ってるんだ、じゃあ」
「ああ、それであんだだけれど」
アンネットはその彰子に言ってきた。
「魔女よ」

「魔女って？」
「だからお芝居の魔女の役になったから」
それだというのである。
「ファタ＝モルガーナになったから」
「私魔女なの」
「それで魔法使いが管になったから」
このことも話すのだった。
「宜しく頼むわよ」
「うん、じゃあ」
おっとりとした調子で頷く彰子だった。
「わかったわ。それじゃあ」
「三つのオレンジは魔法のお話だから」
アンネットはこのことも彼女に話した。つまりファンタジーということである。
「だからね。頼んだわよ」
「わかったわ。じゃあ」
「何かキャラクターに合ってない気がするけれど」
その彰子を見ながらどうかな、という感じで首を捻るアンネットだった。
「どうにもね。彰子と魔女って」
「そうだな。それはな」
タムタムもそれは否定しなかった。彼も気を取り直している。
「どうにもな」
「そうよね。まあそれでもね」
「それでいくんだな」
「そういうこと。それでいいってなったから」
いいというのであった。
「もう動かないわ」
「わかった。じゃあ俺は店で」
「ええ、御願いね」

彼のメインはとにかくそちらであった。
「それでね」
「ああ。またお客さんが来たな」
「頼むわね」
今はそちらに専念する彼等だった。だがこの客達の正体が何かというと。これが実にとんでもないものであるのであった。そしてそれに挑むのは。

お客は色々

完

２００９・１１・１９

第百六十九話　騒ぎにしてしまう二人前編その一

騒ぎにしてしまう二人前編

テンボとジャッキーは推理研究会の部室にいた。この文化祭においてこの部は古今東西の漫画や小説やアニメの探偵たちの分析を発表していた。

「それでホームズは」

「ポワロは」

「コロンボは」

それ自体は至極推理研究会らしいものであった。しかし中にいるのがテンボとジャッキーだ。彼等はクラスの出し物の合間に部活に顔を出していたのだ。

彼等の担当は自分達で強引に解説者であった。皆にそれぞれの探偵を説明しているのである。

「そう、このドルーリ＝レーンは」

「目が見えないのよ」

いきなり間違えていた。

「それでドフト何とかの喜劇の役者で」

「その台詞をよく引用するのよ」

客達はそれを聞いてまずは唖然となった。誰もが間違いに気付いたのだ。

「レーンってシェークスピアじゃないの？」

「そうだよなあ」

これは最早推理に興味のある人間なら常識の話であった。

「ドフトエフスキーって」

「しかも喜劇って」

流石にこれは誰も間違えなかった。

「それで目が見えないって」

「耳じゃないの」

「最後は華々しく割腹自殺をして」
「劇的な最期を遂げるのよ」
ここでまた間違えた二人だった。
「日本人らしくね」
「見事なものよね」
「名前でわからないのか？」
「しかも切腹！？」
皆またしても唖然となった。
「何で推理もので切腹するのよ」
「相変わらずだな、本当に」
皆テンボとジャッキーのことはわかっていた。しかしそれを超えたものがそこにあった。それで呆然となりながら話を聞いているのであった。
しかし二人はそれに気付いていない。それで言い続けるのだった。
「ポワロは長身で髪の毛がふさふさで」
「怪人一億面相はね」
あまりにも凄いのでかえって話題になっていた。とにかく繁盛はしていた。
その繁盛の中でふと新たな客が入った。それに他の推理研究会のメンバーは怪訝な顔になるのであった。見ればその客達は。
「あれっ、あれは」
「仮装にしては出来過ぎてるな」
「そうだな」
タチヤーナに来た彼等がここにも来たのである。何人もいる。
「あの布がひらひらしているのは」
「ラジコンにも思えないしな」
「そうだよな」
そのひらひらいている布には小さな手があり顔もあった。
「一反木綿みたいだな」
「この国の妖怪だったな」

「そうだったかな」
この部活も外国からの生徒が多い。だからこんな話になった。
「あとあの壁は」
「あれもおかしいよな」
「中に人が入っているようにはな」
「見えないな」
今度は塗り壁だった。他にも色々といた。
しかしであった。テンボとジャッキーはその彼等を見てこう言うだけであった。
「面白いお客さん達が来たな」
「そうね」
本当にこう言うだけであった。
「何か楽しそうな」
「そんな人達よね」
「それだけか、こいつ等」
「それで終わらせるのか」
部員達は今の彼等にあらためて唖然となった。
「怪しいとは思わないのか」
「あからさまだろうに」
「よくあんなの作ったよな」
「傘なんて特にね」
から傘も見ている。見れば本当に日本の古い傘に一本足と両手、それと一つ目に口から赤い舌を出している。どう見てもあのから傘である。
「ろくろ首もいるし」
「一つ目小僧もね」
「鬼までいるぞ」
「本当によくできてるわね」
その異様な顔触れを見てもこうであった。
「こういうイベントはやっぱりな」

「仮装よね」
全く気付かないままである。

第百六十九話　騒ぎにしてしまう二人前編その二

「何か他にもいそうだな」
「そうね、それに」
ここからが二人の本領発揮であった。
「まだいそうよ」
「ああ、日本のだけじゃないな」
こんなことを言い出してきたのである。
「これはな」
「まだいるわ。それも校内に」
「よし、それなら」
「行きましょう」
いつものとんでもない行動の開始であった。
その解説の仕事を放り出してであった。何処かに行こうとする。
他の部員達はそれを一斉に止めようとする。流石に解説者がいなくなっては困るからだ。
「ちょ、ちょっと待てよ」
「何処に行くつもりなんだ？」
「仕事は？」
「事件だ」
「事件の香りがするわ」
こんなことを言い出してきたのだった。
「だから行くんだ」
「やってやるわ」
「またか」
「はじまったわね」
皆そんな二人を見て呆れてしまった。
「いつもの発作か」
「全く。厄介なことになったのね」

同じ部活の面々からもそう思われている彼等だった。
「全く。何て言ったらいいのやら」
「つける薬ないし」
彼等の評価もこんなものだった。
「まあ放っておくか」
「そうね。どうにもならないから」
こう言って本当に放置した。二人はそのまま部室を出て何処かに行く一行を追うのだった。
「さあ、推理のはじまりだ」
「このうえないスリリングなゲームのね」
二人共今はハードボイルドになっていた。
「じゃあ行くか」
「見つからないようにね」
とか言いながら彼等の五メートル程度後ろを歩きながら騒いでいる。部員達はそれを見て流石に総員でこけた。呆れる以上のものであった。
「おい、それが尾行か！」
「何考えてるのよ！」
こう叫ぶ。
「何処の大昔の特撮なんだ」
「まぼろし探偵じゃないのよ」
彼等もこの古典的作品を知っているのであった。
「それを今やるか」
「しかも騒ぎながら」
有り得ないことだがそれをやらかすのが彼等なのだった。
皆唖然としながらその彼等を見送る。それからまた話をした。
「どうなると思う？」
「どうなるって？」
「だから。連中は目的を達成できるかどうか」
「具体的に言えばあの人達の正体がわかるか」

そういう問題なのであった。
「どうかな、それは」
「できるかな」
「無理でしょ」
結論はすぐに出た。
「いつも通りね」
「まあそうだろうな」
「あいつ等自分達でまともに事件を解決したことないしな」
「騒動を大きくしたことはあるけれど」
つまりトラブルメーカーというわけである。
「出て来るだけで話を無茶苦茶にするし」
「一応風紀部に連絡する？」
「そうだな」
そしてこんな話もするのだった。
「野放しにしておいたらまずいし」
「何するかわからないし」
扱いはまさに危険物であった。

第百六十九話　騒ぎにしてしまう二人前編その三

「じゃああの白い人達に」
「そうしようか」
こうしてあの白い悪魔達に連絡が行くのであった。するとだった。早速何処からか集まった白い服の者達が整列していた。彼等の前にはロシュフォール先生がいた。
先生は彼等に対してこう告げた。
「まただ」
「あの二人ですか」
「騒動を起こしそうなのですね」
「そうだ、何かしでかそうとしているらしい」
最早その内容については問われなかった。
「諸君達にはまず彼等を監視してだ」
「そのうえで、ですね」
「何か起こせば」
「捉えるのだ」
その白い詰襟の服の彼等に対して告げた。所謂白ランであるが一見すると連合軍の夏期礼装に見える。ボタンは五つで今は超長ランになっている。
それは男女共であった。ズボンも同じ白である。
その格好で今。彼等は動くのだった。
「では今より」
「任務にかかります」
「それで」
「それで」
「うむ、頼んだぞ」
先生がこう告げるとだった。一斉に動いた彼等だった。まさに風となってその場から消えた。白い風となって消えたのである。
テンボとジャッキーはその仮装と思われる一行についていってい

る。そうしながらそれぞれの自説を大きな声で話をしていや。嫌が否でも目立つ。
「何だと思う、あいつ等」
「多分改造人間ね」
ジャッキーはそう見ているのだった。
「ほらあれよあの伝説の組織の」
「ショッカーか」
「そう、それよ」
二十世紀に誕生したその組織である。
「それに違いないわ」
「俺はだな」
今度はテンボが言うのだった。学校の廊下で大声で喋り続ける。文化祭なので行き交う人達がどうしても彼等を見てしまう。そして顔を顰めさせていた。
「またあの二人か」
「騒動起こすな、また」
「考えを言うなっての」
「馬鹿なんだから」
誰もがそう認識しているのだった。
「動かないといいのに」
「今度は何をしでかすのかしら」
しかしそうした言葉は彼等の耳に入ることはない。そうしてテンボは己の見解を述べるのであった。
「あの人達はだ」
「何だっていうの？」
「スルメシュだ」
スパイ小説であった。
「あのナポレオン＝ソロの宿敵のな」
「それなのね」
「ああ、間違いない」

こんなことを言い出したテンボだった。
「この連中はな」
「そうだったの。工作員だったの」
そしてそれを信じるジャッキーだった。
「こいつ等そんな連中だったの」
「注意しろよ」
こう相方に忠告する彼だった。
「油断したらな」
「何をされるかわからないのね」
「そうだ。油断したらな」
まさにそうなるというのである。
「銃でボカンだ」
しかもドカン、ですらなかった。何かを間違えていた。これもいつものことではある。
「爆発物でテロとかな」
「何か怪しい相手ね」
「だからスルメシュなんだぞ」
あくまでそう考えているテンボだった。

第百六十九話　騒ぎにしてしまう二人前編その四

「悪名高きＫＧＢのしかも裏部隊だ」
「そうよね、だからこそ余計にね」
それを背中で聞いている追跡されている面々はというと。やはり気付いていた。それどころか気付いていない方がおかしなことである。
「何か後ろの二人が」
「好き勝手言ってるけれど」
「あれ何？」
彼等も怪訝な顔になっている。
「無茶苦茶言ってるし」
「ショッカーとかスルメシュとか」
「スルメシュって」
とりわけスルメシュについて突っ込みたくて仕方なかったのだった。
「確かソ連ってもうないよね」
「あれ地球にあった国家だし」
「じゃあ今は」
「ないよ」
こう話される彼等だった。
「当然」
「あのロシアの前身だったっけ」
「っていうか名前だけソ連で中身はロシアだったんじゃ？」
ある意味において身も蓋もない言葉である。
「確かね」
「それはね」
「じゃあスルメシュってもう」
「ないよ」

結論はすぐに出された。
「だってＫＧＢないし」
「そうだよね。大体ＫＧＢって秘密警察だし」
「今時秘密警察って」
少なくとも連合にはない組織である。幾らロシアでも連合においてそうした組織は存在しない。そして一応ながら言論の自由も存在してはいる。
「何でそんなのあるって言うかな」
「おまけにショッカーって」
「千年前の組織じゃない」
今度はその組織の話もしたのだった。
「ショッカーって今頃ないし」
「今何ショッカーだったっけ」
「エウロパショッカーだったような」
エウロパこそがショッカーだという設定になっているのである。何処までもエウロパを敵視してやまない連合であった。それが特撮にも出ているのだ。
「大体俺達エウロパと関係ないし」
「行ったこともないしね」
「それで何であんなこと言うんだろう」
彼等にしても全く訳のわからない理屈であった。
「後ろの二人」
「確かあの二人って」
「そうだよな」
テンボとジャッキーについては彼等も知っていた。
「学園でのへぼ探偵コンビよね」
「へぼっていうかアホっていうか馬鹿っていうか」
どっちにしろいい言葉ではない。
「その連中だけれど」
「どうしようかな」

「驚かす？」
塗り壁が言ってきた。
「ここは」
「驚かすの」
「そうするの」
「それで追っ払う？」
それが彼の考えであった。
「そうしたら楽になるし」
「じゃあそうしようか」
「いや、それもね」
ところがそれに輪入道が反対してきた。
「意味ないと思うよ」
「意味ないの、それは」
「ないよ。だってあの二人だよ」
そのテンボとジャッキーに対する話である。

第百六十九話　騒ぎにしてしまう二人前編その五

「頭の悪さはそれこそ超絶的なもので」
「恐れを知らないんだよね、確か」
「それわかる頭ないから」
少なくともその頭の構造はかなりのものであるのは間違いなかった。
「だからね」
「じゃあ止めておくか」
塗り壁は輪入道のその言葉を受けたのだった。
「それじゃあ」
「そうしよう。だからここはね」
「ええ、それで」
「どうするの？」
「消えよう」
これが輪入道の提案だった。
「ここはね」
「消えるの」
「ぱっと」
「そう、ぱっとね」
まさにそれだというのである。
「消えよう、それでいいじゃない」
「消えるんだ」
「それでいくんじゃな」
「鬱陶しいし」
最大の理由がこれであった。テンボとジャッキーは彼等から見ても充分そう言われるに値するだけに鬱陶しく騒がしい存在であったのである。
「だからね」

「そうだね。じゃあ」
「消えよう」
これで話は決まった。消えることになった。
しかしであった。それはそれで問題があった。それは何かというと。
「ただ。何時消えようか」
「ああ、そうだね」
「それだよね」
そうなのだった。何時消えるかが問題なのだ。実はそこまで考えていなかったのである・
「下手に消えてもおかしいしね」
「僕達の正体がわかるし」
「だからね」
何につけてもそれであった。どうするかというのである。
「とりあえず今は駄目だね」
「そうだね」
「少なくともね」
それは間違いなかった。今は廊下を歩いている最中である。それでいきなり消えてはおかしいというレベルのことではない。異常事態と言ってもいい。
「それじゃあ頃合いだけれど」
「何時がいいかな」
「曲がったところでいいんじゃないかな」
豆腐を持った小僧が言ってきた。
「そこでぱっと消えてね」
「ああ、それいいね」
「そうだね」
それに頷く他の面々だった。
「よし、じゃあ」
「そうしよう」

こうして消えるタイミングも決定した。そして今まさにその曲がり角が見えた。そこに入ってすぐに、であった。このチャンスを逃さなかった。
「よしっ」
「これでっ」
まさにぱっと消えたのであった。丁度その二人が曲がり角に入った時にはだ。もうそこには誰も残ってはいないのであった。
「何っ！？」
「いないの！？」
そのことに気付き周囲を見回す二人だった。
「消えたなんて」
「どういうことなのかしら」
「そうか、そういうことか」
ここでまたおかしなことを言い出すテンボだった。
「やはりそういうことか」
「そういうことかって？」
「俺達の存在に気付いていたんだ」
この予想は珍しく当たった。

第百六十九話　騒ぎにしてしまう二人前編　　完

２００９・１１・２３

第百六十九話　騒ぎにしてしまう二人後編その一

騒ぎにしてしまう二人後編

「それで逃げたんだ」
「そうだったのね」
「問題は何処に逃げたかだ」
ただし消えたとは考えていなかった。
「そう、そこは」
「そこは？」
「プールの中だ」
何故かそうした結論になった。
「第十五プールの中にいる、絶対にだ」
「あのプールにいるのね」
「そこで俺達をやり過ごし」
超絶解釈は続く。
「そのうえで暗躍を再開する筈だ」
「世界を破滅に導く為の暗躍をというのね」
「おのれスルメシュ！」
まだスルメシュという組織が実在すると思っているテンボだった。
「貴様等の悪事はわかっている」
「そうね。ショッカー」
ジャッキーはジャッキーで彼等だと信じ込んでいた。やはりそうした組織が実在するかどうかは考えていない。考えるだけのものも備わっていない。
「悪の巣を突き止めたからには」
「暴く！」
ここだけは探偵らしかった。
「そして正義の鉄槌を下してやる！」
「私達の頭脳を甘く見ないでよ！」

この世で最も甘く見ていいものである。
「謎は全て解けた！後は！」
「悪を成敗するだけよ！」
こんなことを言いながらその第十五プールに向かった。今そこでは釣り部が魚の手掴み退会を開いていた。二人はそこに殴り込んできたのである。
「見つけたぞスルメシュ！」
「そこにいたのねショッカー！」
「スルメシュ？ショッカー？」
「あいつ等今度は何言ってるんだ？」
いきなりプールに出て来た彼等を見てそこにいた皆はまずは何かと思った。
「そんな組織があるものか」
「スパイ小説や特撮の世界でしょうに」
「相変わらず漫画と現実の区別がついてねえな」
彼等がそんなことを言っているとだった。二人はここでさらにおかしなことを言うのだった。
「そうだ！魚に化けているな！」
「私達の目は誤魔化されないわよ！」
「魚って」
「また馬鹿なことを言うな」
「許さん！」
「もうばれているのよ！」
プールの縁まで来てその中に泳いでいる魚達に向かって叫ぶ。
「そこになおれ！成敗してやる！」
「仮面ライダーがいないからって何でもできるって思ったら大間違いよ！」
「ってお い」
「何血迷ってんだ」
釣り部の面々がその二人に対して突っ込みを入れる。既に彼等が

暴れ出さないようにその周りを囲んでいる。殆ど獣を捕らえる態度である。
「魚に化けてるって」
「どうしたらそんな考えになるんだ？」
「簡単な推理だ」
しかしテンボはこう言う。
「スルメシュはＫＧＢの組織だ」
「そうらしいな」
「確かな」
それは今二人を取り囲んでいる釣り部の面々も歴史の知識として知ってはいた。
「あれだろ？工作担当だったか？」
「ベリアも使ったっていう」
「それだったよな」
「だからだ」
彼はまた言った。
「だから変装しているんだ」
「変装って魚にか」
「それをしてるっていうのかよ」
「そうだ」
見事なまでに言い切ってみせたのだった。
「奴等は魚に変装している！俺の目は誤魔化せないぞ！」
「幾ら何でもそれはないだろ」
「魚に変装って」
「馬鹿とかそういうレベルじゃないだろ」
皆こう言って完全に呆れた顔になってしまった。しかし彼等が呆れたのはテンボに対してだけではなかった。もう一人いるのである。
「そうよ、それかよ」
「今度はこいつか」
「何を言い出すんだ、それで」

「ショッカーの改造人間なのよ」
ジャッキーが言うのはまさに特撮であった。

第百七十話　騒ぎにしてしまう二人後編その二

「昔から蛇とかそういうのに変身できるじゃない」
「まあそうだけれどな」
「特撮はな」
「だからそれよ」
何の論理性もない断言であった。
「お魚に化けてあたし達から逃げようっていうのよ。あたし達の名推理からね」
「そもそも何でスルメシュやショッカーの話になってるんだ？」
「だよな、それもな」
「訳わからないよな」
「意味不明だしな」
皆その話もするのだった。それも当然だった。いきなりそう主張されたからである。
「何だ？通りすがりの人を勝手にそう思ってるのか？」
「ひょっとして」
「俺達の目は誤魔化せない！」
「そうよ！」
しかし彼等はこう主張するのだった。
「絶対にだ！」
「この目は節穴じゃないわよ！」
「じゃあ何なんだ？」
「一体」
「俺達は部室に入った客を見た」
「それをね」
部の発表から話すのだった。
「突如部室に入って来たその異形の集団」
「それを見てピンと来たのよ」

だからだというのであった。
「あの連中は怪しいってな」
「すぐにわかったわ」
「ああ、いつものことか」
「また勝手に思い込んだんだな」
「どうせそうだろうと思ったけれどな」
周りの言葉は実に冷めていた。冷え冷えとさえしている。
「全く。毎回毎回騒動ばかり引き起こすな」
「迷惑な奴等だ」
「だからだ。俺にはわかったんだ」
「あたしもよ。奴等の正体が」
それがそのスルメシュでありショッカーであるというのである。
やはり滅茶苦茶な暴論である。もっと言ってしまえば暴論の域を超えてすらいる。
「スルメシュの工作員だとな」
「ショッカーの改造人間達だってね」
「何でそんな連中が学校の中をうろついてるんだ?」
「だよな」
皆まずそれは言うのだった。
「そんな連中がうろつく学校って」
「ないない」
「絶対にないって」
やはり常識に基く話であった。
「そんなのな。何があってもな」
「大体実在すらしないし」
「スルメシュも今は」
「その俺達に見つかったのが運の尽きだ!」
「覚悟しなさい!」
しかし二人の暴走はまだ続くのだった。
それぞれプールの中を指差してだ。叫ぶ。

「神妙にしろ！」
「お縄頂戴よ！」
「今度は何をしでかすんだ？」
「だから普通の魚だっての」
二人に常識は通用しない。耳に入らない。
だからこそ叫び続けるのだった。今度はこんなことを言い出してきた。
「プールの中に引き篭もるのなら！」
「そこに飛び込むまでよ！」
「おい、ちょっと待て！」
「売り物だぞおい！」
「何する気だ！」
こう言って二人を取り押さえる釣り部の一同だった。

第百七十話　騒ぎにしてしまう二人後編その三

「下手に傷でもつけられたら大変だ！」
「止めろ！」
「おい、ロープ持って来いロープ！」
「取り押さえろ、早くだ！」
「ぬうっ、邪魔するな！」
「悪を成敗するのが探偵の仕事よ！」
ここでも意味を取り違えているのだった。
「だからこそここで！」
「魚達に正義の裁きを！」
「まずい、馬鹿だ」
「わかっていたけれど」
これまた身も蓋もない言葉であった。
「馬鹿も進化するんだな」
「しかもなおらないのか」
「これもわかっていたにしても」
馬鹿は不治の病と思われているのもこの時代でも同じであるのだ。
「それにしても凄過ぎるな」
「さすが二年Ｓ１組の三馬鹿の中の二人」
「まさしく」
最後の一人はフランツである。とにかくこの二人の頭がそれであるという認識は学園の誰もが知っていて言うまでもないことになっているのである。
その彼等はさらにであった。暴れ回るのだった。
「いかん、世界の為だ！」
「悪を討たせなさい！」
「だからただの魚なんだよ！」
「どうやったらそこまで馬鹿になれるんだ！」

言っても仕方ないことだが言わずにはいられなかった。
「とにかく取り押さえろ！」
「ひっくくれ！」
「縄用意できたぞ！」
ここでその縄が持ち込まれたのだった。それをそれぞれ手に持って。
「よし、ひっくくれ！」
「捕まえろ！」
「そのまま隔離しろ！」
しかし二人は強かった。無意味どころか有害なまでに。
「そうか、わかったぞ！」
「あんた達敵の組織のスパイね！」
「工作員か！」
「学校の中にもいたのね！」
完全にそう思い込んでいた。そのうえでさらに暴れる。
縄で捕まえようにもそうはいかない。何と引き千切ってしまった。
くくってもである。何と力を込めてそれで千切ってしまうのだ。
「何でこいつ等こんなに力が強いんだ？」
「ゴリラみたいだな」
「そうだよな」
その怪力を見て釣り部の面々も唖然であった。
「馬鹿だからか？」
「それで力が強いのか？」
「行くぞジャッキー！」
「ええ、テンボ！」
また言い合う二人だった。
「いざプールへ！」
「魚に化けていても誤魔化されないから！」
こう言って今まさにプールに向かおうとする。しかしであった。
ここで謎の一団が来た。彼等は。

「やっと見つけたぞ」
「手を焼かせる」
「何処にいたかと思えば」
「あっ、白い影か」
「特別風紀部か」
釣り部の面々はその白い超長ランを見ながらほっとした顔になった。
そうしてであった。その彼らに対して言うのだった。
「よく来てくれたよ」
「っていうか遅かったよ」
「済まない、とにかく何時何をするかわからないからな」
「この二人は」
まさに歩くアクシデントなのである。

第百七十話　騒ぎにしてしまう二人後編その四

「しかし見つけたからにはだ」
「任せてくれ」
「それでどうするんだ？」
「見つけてくれたのはいいけれど」
「こうする」
一人が釣り部の面々の言葉に応えながら一歩前に出た。そうしてであった。
注射針を出した。それは一メートルはあろうかという巨大なものであった。
もう一人出て来た。彼もまた同じ注射針を持っている。
「注射針？」
「そこにあるのは？」
「麻酔だ」
「これを使う」
それで大人しくさせるというのである。
「これなら間違いない」
「恐竜用だからな」
「恐竜か」
「それを使うんだな」
釣り部の面々はそれを見てまた言うのだった。
「何か凄いな」
「それを使うなんてな」
「しかもウルトラザウルス用だ」
「クロノサウルス用もなる」
風紀部の彼等はこうも言うのだった。釣り部の面々はその恐竜の名前を聞いて思わず言ってしまったのであった。
「確かウルトラザウルスって」

「クロトザウルスもな」
「そうだ、地上で最大の恐竜だ」
「クロノサウルスは海中でだ」
そうしたとにかく巨大な恐竜達である。なおウルトラザウルスは三十メートルあり黒のザウルスは二十五メートルある。とてつもない大きさなのである。
そうした巨大な恐竜達に使うその麻酔を二人に向ける。そして一気に突き刺した。
「よしっ、これでいい」
「これで大人しくなる」
効き目はすぐだった。彼等もその動きを止めたのだった。
そうして眠ってしまった。これで騒動は終わった。
「やっとだな」
「そうだな」
釣り部の面々はここでようやくほっとしたのであった。
「全く、いつも人騒がせな奴等だ」
「本当にな」
「まあこれでともかく」
「騒動は終わりで」
「一件落着ってな」
彼等は確かにそれで終わった。しかしであった。
「やれやれだったよな」
「だよね」
「あの二人にはね」
学園のある場所で車座になって話す一団がいた。
「スルメシュだのショッカーだのって」
「違うって」
「全く」
あの彼等だった。その今は誰もいないい体育倉庫の中で話していた。

「それで何であんなこと言ってたのかな」
「さあ」
それは彼等にもわからないことだった。
「どっちでもないっていうのに」
「普通間違えないけれどね」
「だよね、僕等の姿見たら」
「絶対に」
こう話すのだった。
「それで間違えるっていうのが」
「謎っていうか」
「意味不明だよね」
「本当にね」
こう話していくのだった。そしてこうも話すのだった。

第百七十話　騒ぎにしてしまう二人後編その五

「妖怪って知らないのかな」
「そうじゃないの？あの二人だｔったら」
「それも有り得るよ」
今ある単語を出した彼等だった。
「それもね。やっぱり」
「あるっていうかね」
「あの二人なら」
とにかくかなり頭が悪いと彼等に思われているのは間違いなかった。
「それも普通にね」
「あってもね」
「何かそれはかえって凄いね」
「僕達そのままの姿出してたのに」
「人間の姿を取らなくて」
そのままの姿のままで、というのである。確かに見ればその格好である。何も隠しているところはない。その姿で今もいるのである。
そうしてその姿で今話しているのであった。
「文化祭だからあえてこの格好していたけれど」
「仮装で通るからね」
「そうそう」
だからだというのである。その格好だったのは。
「皆そう思っていたしね」
「普通僕達がそのままの格好で歩くなんて誰も思わないしね」
「これこそ逆転の発想だよね」
「そういうことだね」
このことは自分達でもやってみて誇らしげなことであるらしい。
言葉にそれが出ていた。

「成功していたし」
「けれどあの二人はあえて言ってきたのは」
「凄かったけれどね」
　このことは褒めてさえいた。しかしであった。
「まあ。それでもね」
「スルメシュやショッカーっていうのはね」
「ないない」
「絶対にないよ」
　このことは有り得ないと彼等は断言した。
「まあ。これであの二人は今回連行されたし」
「隔離されてこれ以上は騒げないし」
「話は終わりだね」
「じゃあ」
　ここまで話して結論とするのだった。
「また何処か観に行こうか」
「そうだね、一年に一度のお祭だし」
「楽しまないとね」
　こう言い合ってまた何処かに行くことにしたのである。彼等も今の文化祭を楽しんでいた。しかもそれは心からのことであった。

騒ぎにしてしまう二人後編　　完

２００９・１１・２５

第百七十一話　ばれていた交際その一

ばれていた交際

「そう、それで今いないのね」
「そうだ」
タムタムがナンシーに話していた。今は舞台裏で二人で作業をしている。
「それでだ」
「まあ何か騒ぎは起こすって思ってたけれど」
話を聞き終えたナンシーは極めて冷静に述べた。
「何かしらね」
「思っていたのか」
「起こさない筈がないって思ってたわ」
そこまで確信していたというのである。
「絶対にね」
「あの二人はいつもだからか」
「そうよ。アンネットもそれを見越して」
二人は今はステージ衣装を着ている。演技の打ち合わせをしながら舞台の手入れもしているのである。仕事は中々大変な状況なのだ。
「舞台の役入れてなかったじゃない」
「それでか。二人に役がなかったのは」
「でしょうね」
言いながら釘を打っていくナンシーだった。意外と慣れた手つきである。
「それ目に見えてたし」
「確かにな。言われてみればな」
タムタムは小さなゴミを拾っている。彼は掃除をしているのだった。
「あの二人だとな」

「それでいなくなっても」
「予定事項か」
「そういうこと。起こるのが確定していたことよ」
実に素っ気無いナンシーの言葉だった。
「本当にそれだけじゃない」
「言われてみればそうか」
「そうじゃない。それでだけれど」
「ああ。何だ」
「お芝居だけれど」
その話もするのだった。
「どうなの？そっちは」
「今やってる通りだ」
そうだと返すタムタムだった。
「細かいことが多くなってるな」
「細かいことなのね」
「本番が近付くとそうなってきたな」
それが今回の舞台だというのである。
「妙にな」
「三つのオレンジの恋ってね」
ナンシーはその舞台のことも話した。
「結構細かい演出とかが重要な作品みたいだし」
「重要な？」
「そうなのよ。結構出る人間も多いじゃない」
「ああ」
「童話だけれどそれでもよ」
ナンシーの釘を打ちながらの話は続く。
「だからこそね」
「童話だからか」
「そう、童話だから」
そこにあるものは細かいというのだ。

「そうなるのでしょうね」
「そういうものか」
「あんたに向いてる作品かもね」
そう言って今度はタムタムに顔を向けてきた。
「細かいから」
「そうかもな」
そうだというのである。
「言われてみればな」
「あんた野球部のキャッチャーじゃない」
「ああ」
フランツと黄金バッテリーを組んでいる。天才ピッチャーだがその頭脳は何もないと言っても過言ではない彼が勝てるのもタムタムのリード故なのだ。
その彼にしてみればだ。言われてみれば確かにその通りであった。
「そうだな」
「でしょ。わかったわね」
「ああ。そういえばな」
「楽しい？」
「楽しいな」
実際にそれを感じている彼だった。それが今言葉に出たのである。

第百七十一話　ばれていた交際その二

「こうしているだけでな」
「そうよね。私もね」
「楽しいか」
「とてもね」
見ればナンシーもだった。にこにことした顔で釘を打っていた。
一つ一つ的確な釘の打ち方をしてそのうえでタムタムと話をしていた。
「私もこういうの好きなのよ」
「そうなのか」
「そうよ。あと」
ここで余計なことを言ってしまったのだった。
「教えてあげるのもね」
「ああ、そういえば御前」
そしてであった。タムタムは今彼女の予想しないことを言ってみせたのだ。
「後輩の子と付き合っているな」
「な、ななな!?」
そう言われて瞬く間に狼狽を見せるナンシーだった。
「何でそれ知ってるの!?」
「今自分で言ったぞ」
「あっ、これはね」
顔を真っ赤にして焦りまくりながらの今の言葉だった。最早隠そうにも隠せない。そうした状況で狼狽しきりでなおも言っていた。
「気のせいよ」
「気のせいか」
「あんたの耳に聞こえている幻聴よ」
強引という言葉すらはばかれるまでに無茶なものだった。

「わかったわね。幻聴よ」
「そういうことにするんだな」
「そうよ、幻聴よ」
本当にそういうことにしてしまうのだった。
「いいわね」
「俺がそれで納得しなかったらどうするんだ？」
「眠ってもらうわ」
言いながら右手の金槌を見せるのだった。
「これで殴られたらいい夢が見られるわよ」
「言っていることが殆どサハラの独裁国家だな」
「そうかしら」
「そうだ。しかし御前のことはな」
「何だっていうの？」
「もう皆知ってるぞ」
こう彼女に言うのだった。
「知らないのは鈍い面々とあれな面々だけだぞ」
「じゃあ殆どの人に」
「四十人以上は知っている」
四十人以上はというのである。
「もうな」
「四十人以上になの」
「ざっとな」
知られていると話すのだった。
「皆あえて言わないがな」
「何でここで言ったのよ」
「気付いていると思ったんだがな」
「まさか気付かれていたなんて」
「他人は見ているものだ」
だからだというのだ。タムタムが言っていることは確かにその通りだった。

「見ていないようでな」
「見ているのね」
「そういうことだ。見ているんだよ」
その今のナンシーにとってはきつい真理の言葉が続く。
「それはわかっておくんだな」
「わかってるつもりだったわ」
自分では確かにそうだったのだ。だがそれは主観であった。
「けれど。まさか」
「まさかだったんだな」
「ばれていたの」
今度は溜息と共の言葉だった。
「全く」
「自分ではわからないものだからな」
「そうね。それは本当にね」
そのこともあらためて思うのだった。
「その通りね」
「まあ気にすることでもない」
今度は慰めてきたタムタムだった。

第百七十一話　ばれていた交際その三

「別にな」
「そう言われても」
しかしだった。へこんだままのナンシーだった。それでそうなってしまった声でまたタムタムに返すのだった。どうしてもといった感じでだ。
「もうね。ショックよ」
「そうだろうな。それはな」
「必死に隠していたのに」
「相手が誰かもわかっているしな」
「あの子ってことね」
「歳下キラーとも言われてるぞ」
「だって可愛いから」
本音を出してしまった。ここでは。
「それでなのよ」
「可愛いからか」
「母性本能をくすぐるっていうかね」
言葉は次第にのろけになってきていた。
「そういうのわかるかしら」
「俺は男だからそういうのはわからない」
このことは断るのだった。しかしこうも言うのだった。
「だが何かを守ろうといった気持ちはな」
「それはわかってくれるのね」
「少しはな」
わかると返すのだった。
「わかる気がする。男だとあれか」
「まあエウロパの言葉なんであまり好きな表現じゃないけれど」
こう前置きしてから述べるナンシーだった。

「ナイト精神ってやつよね」
「好きな相手の盾になるだったな」
「そう、それ」
まさにそれだというのだ。それこそがナイトというものだと考えられているのである。もっともエウロパでもこれは理想ではあるが。
「それはね」
「わからないでもない」
実際にこう述べるタムタムだった。
「少しはな」
「そうよね。男の子にもそうした感情あるわよね」
「そういったものはある」
また述べたタムタムだった。
「確かにな」
「それで女の子はね」
あらためて自分のことを話すナンシーだった。
「あれよ。母性本能ってあるから」
「だからそれか」
「そう、それなのよ」
そうだとわりかし必死に話すのだった。
「それでなんだけれど」
「それで年下の彼氏か」
「まだキスもまだだけれど」
このこともばらしてしまった。
「それでもね」
「御前さっきから全部言ってないか？」
それがあまりにも凄いので思わず突っ込んでしまったタムタムだった。
「俺の聞いていないことまでな」
「こうなったら仕方ないじゃない」
顔を真っ赤にさせての言葉だ。明らかに開き直っていた。

「だって。言っちゃったんだから」
「それでか」
「そうよ。もうやけよ」
開き直っていることも自覚しているのだった。
「こうなったら。本当にね」
「別にやけになっても今は傷付かないがな」
「これ以上はないって位に傷付いてるしね」
それは彼女本人だけである。しかしそういう自覚はあるのだった。
「全く。困ったことになったわ」
「皆別に何も言わないぞ」
「言わなくても知られたら終わりじゃない」
とにかく秘密にしておきたかったということである。
「それだけで」
「そう思うのなら別にいいが」
「やれやれよ」
ここでまた溜息を吐き出すナンシーだった。

第百七十一話　ばれていた交際その四

「全くね。どうしたものかしら」
「その彼氏も舞台に来るんだな」
「そうなのよね」
この話になると一転してのろけきった顔になるナンシーだった。
もうその表情はとろけそうなものになっていた。かなりのものである。
そしてその顔で。彼女は言うのだった。
「来てくれるのよ。わざわざ私の為にね」
「そうか」
「幸せよね」
のろけの言葉がさらに続く。
「そうした相手がいるって。人生の喜びよね」
「確かに嬉しいことだろうな」
タムタムの今の言葉は断定形ではなかった。
「それはな」
「あれっ、あんた彼女とかは」
「いない」
はっきりと答えたのだった。
「残念だがな」
「そうなの」
「これからできればいいと思っている」
そしてこうも言うのだった。
「これからな」
「できるわよ」
話を聞いて言ったナンシーだった。
「絶対にね。あんただったらね」
「できるか」

「できるわよ、きっとね」
「そうか」
「これは縁なのよ」
こんなことも言うナンシーであった。
「彼女とか彼氏はね」
「それで御前はなのか」
「幸せが来てくれたのよ」
さらなる言葉はかなりのものだった。そしてその言葉は。
「王子様がね」
「王子か」
「あの子は王子よ」
おのろけ以外の何者でもなかった。
「その王子が見てくれてるから」
「頑張るのか」
「ええ、頑張るわ」
にこりとしてそのうえしっかりとした顔だった。
「絶対にね」
「「それで頑張れるならそうするといい」
「そうするわ。さて」
また釘を打つ彼女だった。
「劇、絶対に成功させましょう」
「ああ、そうだな」
こんな話をしながら舞台裏の仕事をしていた。そして舞台もだった。
ナンシーは魔女の役だった。つまりファタ＝モルガーナである。
童話に出て来る魔女の格好そのままであった。その姿で練習をしている。
そしてそれが終わるとだった。服を着替えてその彼氏のところに行くのだった。
「待ったかしら」

「いいえ、全然です」
その後輩の子が穏やかで優しい笑顔で彼女を迎えるのだった。
「今丁度来たばかりで」
「そうなの。よかった」
私服に戻っている彼女はそれを聞いてまずは笑顔になるのだった。
「だったらいいけれど」
「ええ。それでね」
「それで？」
「何処に行くの？」
ナンシーも穏やかな笑顔だった。その笑顔で彼に問うのだった。
「これから」
「そうですね。学校の中は」
「ああ、それだけれど」
この話になると困った顔になってしまった彼女であった。そうしてその顔で言うのだった。
「ちょっとね」
「ちょっと？」
「ばれたみたいなのよ」
このことを彼にも言うのだった。

第百七十一話　ばれていた交際その五

「実はね」
「ばれたっていいますと」
「だから私達のことよ」
そのものずばりだった。
「私達のことがね。ばれたのよ」
「そうだったんですか！？」
それを言われて驚く彼だった。学校の庭のベンチに横に並んで座って話していた。
「僕達のことが」
「今日言われたのよね」
ふう、と溜息をついての今の言葉であった。
「実際にね」
「クラスメイトの人にですよね」
「そうよ」
それがタムタムだということまでは言わなかった。
「言われたのよ。ばれてるって」
「慎重にお付き合いしていたのに」
「人って見ているみたいね」
ここでまた溜息を出すのだった。
「やっぱり」
「そうだったんですか」
「そうよ。見てたのよ」
言う度に溜息が出ることばだった。
「それで気付かれていたのよ」
「厄介ですね、それは」
「全くね」
溜息が顔にも出てしまっていた。

「参ったわ、本当に」
「それでどうしましょうか」
「もう開き直るしかないわ」
それしかないというのだった。
「ここはね」
「開き直るしかですか」
「そっちは大丈夫かしら」
彼に顔を向けての今の言葉だった。
「ばれてないの？」
「それは」
「多分皆知ってるわよ」
こう彼に言うのである。
「そっちのクラスでもね」
「そんな、誰にも内緒でこっそりなのに」
「それでも皆見てるみたいね」
それでもだというのだ。実際は。
「困ったけれど」
「それで開き直るしかですか」
「ないみたいね」
仕方ない選択肢だというのである。
「もうね。こうなったら」
「まずいですね、それは」
「まずいっていう状況は終わったわ」
それはもうだというのだった。
「とっくにね」
「本当に開き直るしかなんですね。だったら」
「もう堂々としましょう」
ナンシーも覚悟を決めていた。顔が真剣そのものである。
「いいわね、それで」
「はい。それじゃあ」

「御免ね」
ここで謝りもする彼女だった。
「私が至らないばかりに」
「至らないって」8
俯いて謝る彼女を見ての言葉だった。
「あの、それって一体」
「私が迂闊だったからばれて」
それを自分のせいだと考えているのであった。彼女としてはだ。
それでなのだった。今謝るのである。
「御免ね、本当に」
「いえ、そんな」
しかしであった。彼はそうは考えていない。しかも全く、である。
それで目をしばたかせてしまいそのうえで彼女に対して返すのだった。

第百七十一話　ばれていた交際その六

「先輩のせいじゃないですよ」
「そうかしら」
「そうですよ」
こう彼女に言うのだった。
「何で先輩のせいなんですか」
「だって私のせいでばれたから」
「だってこういうのってばれるものだって」
先程のナンシーの言葉をそのまま言ったものであった。
「先輩仰ったじゃないですか」
「そうだったかしら」
「そうですよ」
こう言って励ますのだった。
「だから別に」
「私のせいじゃないって言ってくれるのね」
「むしろそれは」
彼にしては、であった。それは自分のせいではと思うのであった。彼は彼でこう思ってつい自分を責めてしまうのだった。ナンシーと同じようにだ。
「僕のせいかも知れないですし」
「あなたのせいって」
「そうかも知れないじゃないですか。僕だって迂闊だし」
こう彼女のその細い眼鏡を見ながら言うのだった。眼鏡の奥のその顔は実に可愛い。赤茶色の髪をショートっぽくしているのも実に似合っている。
「僕のせいかも」
「それはないわよ」
だがナンシーはナンシーで彼を庇うのだった。

「あなたはそんな」
「ないですか」
「ないわ」
優しい声での言葉であった。
「だから安心して」
「そうですか」
「そうよ。それでね」
さらに言う彼女だった。
「気にしたら駄目よ」
「はあ。そうですか」
「あなたが気にすることじゃないから」
やはり優しい言葉のままであった。
「それはね」
「ですか」
「そうよ。それでだけれど」
また言ったナンシーだった。
「これから何処に行こうかしら」
「何処に、ですか」
「だからもうばれちゃったし」
ここでも開き直りの言葉を出す彼女だった。
「おおっぴらに何処にでも行きましょう」
「何処にでもですね」
「喫茶店でも映画でも」
まさに何処でもであった。
「普通のデートしない？休み時間の間だけだけれど」
「普通のですか」
「今までってほら」
彼氏に顔を向ける。その笑みもやはり優しい。
「秘密のデートばかりだったじゃない」
「そうですね。それは」

「だからね」
こうも彼に話すのであった。
「何処にでも行きましょう。明るくね」
「わかりました」
彼もナンシーのその言葉に頷いた。
「それじゃあ何処にでも」
「そうよ。それで何処にするの？」
「ええと。そうですね」
自然に選択権は彼のものになっていた。ナンシーはここでは彼を立てたのである。年下でも彼が男であるからそうしたのである。
それでだった。選択権をもらった彼は少し考えてから述べるのだった。
「それじゃあですね」
「それじゃあ？」
「お花観に行きましょう」
微笑んで述べた言葉だった。
「お花を」
「お花をなのね」
「植物園行きましょう」
彼が提案するのはそれであった。
「そこで二人でお花でも」
「そうね。いいわね」
彼のその提案に笑顔で頷くナンシーだった。
「それじゃあ植物園ね」
「二人で行きましょう」
「何かスキャンダルになりそうな気がするけれど」
新聞部らしい言葉であった。
「それでも。もういいわね」
「まあならないですよ」
それは笑って否定する彼であった。

「なるのならもうなってますよ」
「そうね。何時の間にかね」
「そうですよ。ですから」
大丈夫だというのだった。
「行きましょう。気兼ねなく」
「わかったわ。それじゃあ」
「はい、じゃあ」
二人は同時に席を立った。そうしてであった。
「行きましょう」
「はい、じゃあ」
「楽しくやればいいわよね」
彼の方を振り向いて言ったナンシーだった。
「結局のところは」
「楽しくですか」
「こういうことってね」
今は少し恥ずかしそうな顔になっている彼女だった。
「やっぱりね」
「そうですね。それは」
「だからよ。楽しくね」
「はい、それじゃあ」
こうして二人は楽しくデートをすることにした。隠さないようにするとかえって楽しくなったのであった。

ばれていた交際　　完

２００９・１１・３０

第百七十二話　ファタ＝モルガーナその一

ファタ＝モルガーナ

王子はルシエンで王女がアンネットである。これは何とか決まった。

「何か役があちこち変わって大変だったなあ」

「何でこうなったんだ？」

ギルバートも首を傾げていた。彼にしてもだった。

「そもそも」

「最初はね。私も魔女のつもりだったのよ」

そのプロデューサーであるアンネットの言葉である。

「実はね」

「それで変わったって」

「しかも急にか」

「こっちの方がいいって思ったからよ」

だからだというのである。

「それでだけれどどうかしら」

「まあ俺も主役やれるならいいし」

「それにだ」

ギルバートは道化師の格好のまま述べた。

「僕の役は最初からだったが」

「ええ、それはもう代えなかったわ」

それについては不動だというアンネットだった。

「基本として考えたのよ」

「僕が基本なのか」

「もう一つの基本は皆が出られるようにってことだったけれど」

それもだというのだ。

「この作品って登場人物多いからそれは楽だったのよ」

「そうだな。悲劇役者や喜劇役者も出るからな」

「それでそれはすぐにクリアーできたの」
そのことについてはというのだった。
「それで道化師の役はよ」
「僕にした理由は何だ？その基本は」
「意外性よ」
「意外性なのか」
「そうよ、それだったのよ」
まさにそれだと本人に対して話す。
「それであんたにしたのよ。道化師はね」
「そうか。意外だったのか」
「私の王女も意外でしょ」
微笑んで自分の役についても述べるアンネットだった。
「ちょっとばかり」
「そうだな。それはな」
「アイススケートみたいに魔女で踊るのもいいかもって思ったけれど」
最初はそう考えていたというのである。考えてみればこれもかなりのことだ。なお流石にやっている人がいないのでバレエは取り入れていない。彼女だけできてもなのだ。
「それはね」
「止めたんだな」
「私が魔女だったらそのままじゃない」
こう言ってまた微笑む彼女だった。
「そうでしょ？正直のところ」
「僕はそこまでは思わないがな」
「けれど実際そう思われてるのよ」
この周囲のイメージをよくわかっている彼女だった。わかっているからこそあえて、というところにその考えがあるのであった。それもかなり強くだ。
「だからそれを逆手に取ってね」

「観る人間を驚かせるのか」
「インパクトよ」
今度言ったのはそれだった。
「まずはインパクトよ」
「それで観客を驚かせてか」
「そして引き込むのよ」
顔が今度は不敵そうな笑みになっていた。
「そういうことなのよ」
「成程な」
「それで俺が王子なのは何でなのかな」
ルシエンがここで彼女に問うてきた。
「それも意外性なのか？」
「そうよ。あんたも結構王子ってイメージじゃないじゃない」
「どっちかっていうと武将とかそういうのだよな」
「まんまアラビアンナイトのね」
こう言うのはやはり彼がイスラム圏出身だからだ。トルコはこの時代では連合最大のイスラム教国となっている。かつてのオスマン＝トルコの栄光を取り戻しているのである。
「だからそこで意表を突いてよ」
「それで王子か」
「まあ私とあんたのカップリングは」
ここではかなり恥ずかしそうな顔になりはした。
「あれだけれどね」
「かなりわかりやすいな」
「自覚してるわ」
顔が赤くなっているところにそれが出ていた。

第百七十二話　ファタ＝モルガーナその二

「実際ね」
「まあそれはな」
見ればルシエンもだった。同じ顔になっていた。
「やりやすいことはやりやすいけれどな」
「周りの目は気になるけれど」
「それでもあえてか」
「そういうこと」
こう言うのであった。
「それでいいわよね」
「ああ、いいさ」
彼女に返したのだった。
「それでな」
「それだったら」
「けれどあれだよな」
ふとした感じでまた言ってきたルシエンだった。
「俺達同士でやるとな」
「何なの？」
「普段のそれが出てきそうだな」
こんなことも言うのだった。
「普段の付き合いがな」
「ふふふ、そうかもね」
今の彼の言葉に思わず笑ってしまったアンネットだった。
「私もちょっとね」
「ヒーローとヒロインだからな」
「それ言ってら特撮よ」
アンネットもリラックスして返す。
「そのままね」

「流石に特撮は無理か」
「ちょっとね」
それは無理だと実際に返す彼女だった。
「ロシアにも特撮あるけれど」
「ああ、やっぱりあるのか」
「そうよ。トルコにもあるでしょ」
「それはな」
やはりトルコにもあるのだった。これはどの国にもあるものである。少なくとも連合ではどの国にもそれぞれ特撮番組があるのだ。
「光の巨人もあるしな」
「ああ、それもあるのね」
「そっちにもあるのか？」
「こっちは雪の巨人だけれど」
それだというのである。
「凄いわよ、それこそ」
「雪の巨人か」
「ただ強いだけじゃなくて生命力も凄いのよ」
それもあるのだという。
「巨人だから体力あるのは当然だけれど」
「体力だけじゃなくてか」
「回復力はヒドラで生命力はドラキュラ伯爵よ」
どちらもモンスターと言われる類である。
「死んでも死んでも生き返るのよ」
「それ本当にヒーローか？」
話を聞いて思わず問い返したルシエンだった。
「ヒドラやドラキュラ伯爵って」
「例えだけれどとにかく物凄いタフなのよ」
「十三日の金曜日思い出したぞ」
古典となっているホラー映画の一つである。ホッケーマスクを被ってチェーンソーを振り回す彼の姿は今でもよくモデルにされてい

る。
「何かな」
「ええと、必殺技は怪力で殴り倒すのと」
その技についても話すアンネットだった。
「あとは投げ技とかだけれど」
「何かまんまロシアだな」
「まあね。とりあえず力と体力だけで戦ってる感じ」
「本当にロシアだな。そんなヒーローなのか」
「子供達の永遠のヒーローよ」
しかもそうなっているというのだ。
「それも友情出演させようかなって思ったけれど」
「止めたんだな」
「ロシア人以外にはマイナーだと思って」
それで配慮したというわけだ。
「それで止めたの」
「正解だったな。そこで入れてたら誰にもわからなかったぞ」
「そうよね、やっぱり」
「そこはロシア人なんだな」
そのロシア人のアンネットを指し示しての言葉だった。

第百七十二話　ファタ＝モルガーナその四

「この人はな」
「ヒロインはこういう人なのよ」
「何か凄いギャップだな」
そのことにもう言葉を失いかけているルシエンだった。
「それはまた。マッチョに美人か」
「そうよね。まあこの人も多分二十年後には」
「ああ、もうそれはわかる」
これは言うまでもないことだった。
「太るんだな」
「そうなの。太るの」
まさにそれだというアンネットだった。
「っていうか太らないと駄目だから、ロシアは」
「女の人は太っている方が頼もしいんだったな」
「お婆さんなんか皆太ってるわよ」
この時代もロシア名物となっているお婆さんである。お婆さんの知恵こそがロシア人の知恵であり生活の知恵であると今も言われているのである。
「殆ど例外なくね」
「例外なくか」
「ヒロインのお母さん役の人だけれど」
その立体写真も出した。するとだった。
見事に太った中年の女の人だった。中央政府外相であるニキータ＝カバリエと比較しても遜色ないまでの。見事な太り方であった。
「こういう人よ」
「まさにロシアの女の人だな」
「ロシアじゃ結構有名な人なのよ」
そうなのだと語るアンネットだった。

「演技派女優でね」
「有名な人なのか」
「そうなのよ」
そう話してからまた言うのだった。
「その人の昔の写真もあるけれど」
「昔の？」
「デヴュー当時、十八歳の頃よ」
「十八の時か」
「見てみたい？」
このことを真顔でルシエンに問うてみせてきた。
「その写真」
「ああ。どんな感じだ？」
「こんな感じよ」
言いながら取り出して来た写真にも妖精がいた。髪と目の色でそれがわかった。ついでに言えばその整った顔立ちでもだ。体型ではわからないことだった。
「どうかしら」
「本当に太るんだな」
「だから太らないと駄目だから」
その女優もまたロシア人というわけである。
「そういうことでね」
「それでか」
「ロシアなのよ」
全てはそこにあった。
「だからね」
「それでなのか」
「このヒーローもヒロインもお母さん役の人もね」
「ロシアだからこうなるんだな」
「そういうことよ。それでこの王女もね」
話がそこに戻った。

「実際のオペラでもロシア人が演じたら」
「歌手が若いと妖精でそうでないと」
「そういうこと。太ってるから」
何につけてもそうなるのだった。
「それはわかってくれるわね」
「よくな」
わかると返すルシエンだった。
「そうか。じゃあ魔女もか」
「やっぱり太るのよ。その魔女役は」
「ナンシーだ」
彼女だというのだ。
「あの嘘が下手な魔女だ」
「そうね。隠し事は下手ね」
その彼氏の話だ。
「顔にする出るしな」
「仕草にもね」
皆それでわかってきたのだ。

第百七十二話　ファタ＝モルガーナその五

「本人は気付かないけれどな」
「ばればれなのよね」
「それでその魔女は今何処なんだ？」
ルシエンはそのこともアンネットに問うた。
「今は一体何処にいるんだ？」
「デートみたいよ」
それだというのだった。
「その後輩君とね」
「開き直ったんだな」
それもすぐに察した彼だった。
「遂に」
「ばれたとわかったらもうそうしたみたいね」
「まあそれでいいんだがな」
「そうね」
そしてそのことについては批判しないのだった。
「それこそが正解なのよ」
「別に隠す話でもないしな」
「多分恥ずかしかったんだと思うわ」
アンネットの読みは深く鋭かった。ナンシーのそうした繊細さまでわかっていたのだ。この辺りは同性だけはあるといったものだった。
「それでだったのよ」
「それでか。秘密にしていたのは」
「ばればれでもね」
「成程な」
「つまりあれよ」
今度は微笑んでの言葉だった。

「秘密の結婚よ」
「それもオペラだったな」
「そうよ」
ここでも言葉は微笑んでいた。
「それだけれどね。あらすじは全然違うけれど」
「それにあの二人結婚はしてないしな」
「一応もうできるけれどね」
連合では十六歳になれば男女共結婚できる。ただしこれは国によって幾分かの違いがある。ここでも各国の法律が出ているのである。
「それはね」
「結婚か」
「そうよ。まあそれを言ったら高校生全体がそうだけれど」
「俺達もか」
ルシエンの今の言葉は失言だった。
「できるんだよな、それは」
「そ、そうね」
それを言われるとだった。急に顔を真っ赤にさせてしまったアンネットだった。白い顔が瞬く間にその色を変えさせてしまったのだった。
「それはね」
「そうだよな。あれ、どうしたんだ?」
ルシエンも彼女の顔が真っ赤になったのに気付いた。
「急に顔が赤くなったけれどな」
「何でもないわよ」
口では一応誤魔化しはした。
「何でもね」
「何でもないのか」
「そうよ。何でもないから」
あくまでこう言って押し通すことにしたのだった。
「別にね」

「だったらいいけれどな」
　このことには最後まで気付かないルシエンだった。そのうえでさらに話す。
「それでだけれどな」
「ええ。それで」
　アンネットも顔を元に戻し話を続ける。
「この作品はハッピーエンドだよな」
「それは最初から変えるつもりなかったし」
「そうなのか」
「こういうお話はハッピーエンドでないとね」
　笑顔で話すのだった。
「やっぱり駄目じゃない」
「それもそうだな」
「だからなのよ。ハッピーエンドよ」
　にこりとした顔での今の言葉だった。
「それでなのよ」
「そうなんだな。じゃあ練習を続けるか」
「そうしましょう。もうすぐしたら皆も来るし」
「そうだな。衣装も用意しておいてな」
「そうそう、衣装よ」
　衣装の話になるとこれまたかなり真面目になったアンネットだった。
「衣装は歌劇場から借りたけれど」
「やっぱりあそこなんだな」
「凄いわよ、あそこは」
　思わず唸っての言葉だった。

第百七十二話　ファタ＝モルガーナその六

「もうね。本当にね」
「そんなに凄いのか」
「何でもあるのよ」
まずそれを言うのだった。
「王子様の服も王女様の服もね」
「それに魔女の服もだな」
「道化師もね。とにかく一杯あるのよ」
そのことに驚いているのだった。
「軍服まであるし」
「軍服！？」
「演出によっては必要になるのよ」
軍服と聞いて怪訝な顔になったルシエンへの言葉だ。
「ワーグナーとかってよく舞台がＳＦチックだったりするから」
「ＳＦか」
「そう、ＳＦ」
それだというのである。
「そうした演出もあるから」
「オペラにＳＦか」
「つまり今みたいな時代とか未来ってわけ」
具体的にはそうした時代に移し変えた演出だというのだ」
「普通にマフィアチックにしたヴェルデイのオペラもあったりするし」
「マフィアか」
「舞台は二十世紀前半のアメリカで」
丁度アメリカの最初の黄金時代である。この時代のアメリカの繁栄は禁酒法という影もありさらに映えるものになっていたのである。
「その時代に移し変えてね」

「そういうこともありなんだな」
「あるのよ。ただこのオペラはね」
「それはないか」
「ええ。ちょっと考えたりもしたけれど」
それも言ったりする。
「それでもオーソドックスでいくことにしたのよ」
「それでか」
「そういうこと。さて、魔女は今どうしてるかしら」
「何かそっちも面白そうだな」
「あれでナンシーもね」
くすりと笑って言うアンネットだった。
「結構以上に夢見る乙女だしな」
「えっ、そうだったのか」
ルシエンはそれを聞いて少し驚いた顔になる。
「あいつあれで」
「そうなのよ。気付いてなかったの？」
「どっちかというと。いや、かなりすました感じだけれどな」
「甘いわね。実際は違うのよ」
ここで楽しげな笑みになるのだった。
「あれで本当は夢見るなのよ」
「そうだったのか」
「さて、今もそうね」
アンネットはそのことを想像して楽しい顔になっていた。
「夢見てるでしょうね」
「そうなのか」
そしてアンネットのこの予想は当たった。その頃ナンシーは。件の彼と二人で植物園にいた。そこで二人楽しく一緒にいるのだった。
緑の中に赤や白の様々な花達がある。それを見てであった。
「この薔薇。いいわよね」
「はい、何か普通の薔薇じゃないですよね」

「ええ。凄く奇麗ね」
黄色い薔薇を見て幸せな顔になっていた。
「そういえば黄色い薔薇ってね」
「幸せの色ですよね」
「そうなのよね。黄色い薔薇は幸せ」
こう言って微笑む彼女だった。
「だからね。見ているだけでね」
「幸せになれます？」
「今は最初から幸せだけれど」
不意にこんなことも言うのだった。
「だって」
「だって？」
「一緒にいるから」
彼を見て真っ赤な顔になった。

第百七十二話　ファタ＝モルガーナその七

「だから」
「僕と一緒にいるからですか」
「一緒にいられるだけで本当に幸せよ」
言葉はのろけになっていた。まさにアンネットの言う通りだった。
「それでこのお花も見られて」
「何か先輩にそう言ってもらうと」
「ちょっと。先輩っていうのは」
のろけはまだ続く。その先輩という言葉に対してだった。
「止めてくれないかしら」
「あれっ、駄目なんですか？」
「だって。折角付き合ってるんだし」
真っ赤な顔はそのままで仕草がもじもじとしてきていた。かなり純情な性格であることがここでも読み取れる。それも見事なまでに。
その純情な仕草で。さらに言ってみせたのだった。
「だから」
「ええと、だったら」
後輩は今の彼女の言葉を受けて戸惑いを見せていた。
「何て呼べばいいんですか？」
「だから。付き合ってるんだから」
言うことは何につけてもそこからだった。
「そんな他人行儀じゃなくていいのよ」
「っていいますと」
「ナンシーでいいわ」
それだというのだ。
「ナンシーって名前で呼んで」
「名前で、ですか」
「そうよ。呼んでみて」

実際に言うように急かしてきた。
「私の名前ね」
「え、ええと」
それを言われた彼はかなりの戸惑いを見せた。そのうえで何とか言葉を出そうとする。しかしそれは中々できないのだった。
「ええとですね」
「言えないの？」
「ナ、ナナナナナナ」
言おうとする。だがどうしてもだった。言葉が詰まってしまっていた。
「すいません、ちょっと」
「無理なの？」
「やっぱり。名前で呼ぶのは」
「そうなの」
結局言えなかった。それでしょげかえってしまう彼だった。
「すいません」
「謝る必要はないわ」
ここでは年上の余裕が出ていた。
「それはね」
「すいません」
「だから謝る必要はないのよ」
また言う彼女だった。
「けれど。言えないのならね」
「ええ」
「やっぱり先輩でいいわ」
にこりと笑っての言葉だった。
「先輩でね」
「はい、先輩」
「ええ。それじゃあ」
ナンシーは笑顔で二人で応えた。

「写真撮りましょう」
「写真ですか」
「二人一緒にね」
こうも言ったのだった。
「お花の中でね」
「じゃあ写真は僕が」
「御願いするわ」
「それじゃあそれで」
「写真は二人一緒じゃないとね」
ここでまたのろけを見せる。
「一人じゃ寂しいから」
「そうですよね。二人ですよね」
「そういうことだからね」
「ですよね」
こうしたのろけたままでデートを楽しむ二人だった。魔女も今はただの女の子だった。それ以外の何者でもないのであった。舞台を離れると。

ファタ＝モルガーナ　　完

２００９・１２・５

第百七十三話　リハーサルその一

リハーサル

舞台はいよいよ本番に近付いていた。皆その中で緊張を感じていた。

それはナンシーも同じだった。彼女は衣装合わせにおいてこんなことを言うのだった。

「大丈夫かしら」

「お芝居のこと？」

「ええ、それよ」

こうアンジェレッタに答えるのだった。彼女も喜劇役者で出るのだ。

「それのことだけれど」

「確かに緊張は必要だけれど」

アンジェレッタもそれは必要だという。

「けれどね」

「けれど？」

「あんた緊張し過ぎよ」

こうそのナンシーに言うのだった。魔女の服を着てメイクもそうなっている彼女にだ。

「ガチガチになってるじゃない」

「そんなになってるかしら」

「なってるわよ」

そしてまた言うのだった。

「かなりね」

「けれど実際」

「本番なのはわかるわ」

このことには理解を示しはした。

「けれどね」

「けれど？」
「ガチガチだったらかえってよくないわよ」
「それはわかってるけれど」
「わかってたらリラックスしなさい」
微笑んで優しい言葉をかけるのだった。
「わかったわね、それで」
「リラックスね」
「そうよ。それよ」
まさにそれだというのだった。
「いいわね。リラックスしなさい」
「そうね。じゃあちょっとお茶でも飲んで」
「はい、これ」
それでリラックスしようとした彼女にあるものを差し出してきた。
それは。
一本の瓶に入ったブラウンの液体だった。それを出してきたのである。
「これ飲みなさい」
「これ何？」
「お薬よ」
それだというのである。
「お薬よ。だから飲みなさい」
「そう。お薬なの」
「これを飲めば一発でリラックスできるから」
「一発なの」
「一気に一本飲めばもう無敵よ」
こう言ってまた優しい言葉をかけるのだった。
「それだけでね」
「わかったわ。それじゃあ」
「どうぞ」
「ええ」

その薬と言うものを受け取る。そうして言われるまま一気に飲み干す。そうするとまず胃の中が燃える様に熱くなるのを感じた。
「これは」
「どうかしら」
「何か凄いのが来たわ」
「リラックスできるでしょう？」
「ええ、少しずつ気分がよくなってきたわ」
顔を赤くさせていきながらの言葉だった。
「何か」
「このお薬はそういうのなのよ」
微笑んで告げるアンジェレッタだった。
「どう、もう一本いく？」
「いえ、今はこれだけでいいわ」
それはいいというのだった。
「もう充分よ」
「じゃあリハーサルもいけるわね」
「ええ、これでね」
その満足した顔での言葉だった。

第百七十三話　リハーサルその二

「それじゃあ今度は」
「安心してリハーサルに出るのよ」
「ええ」
こうしてリハーサルに明るい顔で向かうナンシーだった。アンジェレッタはその彼を明るい顔で見送る。しかしその彼女にジョンが声をかけてきた。
「あのさ」
「何かしら」
「今のお薬だけれど」
それを差し出してから見る場面まで見ているのだった。
「あれってお薬じゃないよね」
「お薬よ」
ジョンの問いにしれっとして返すのだった。
「れっきとしたね」
「あれお酒じゃないの？」
ジョンはこう見ているのだった。
「ひょっとしなくても」
「酒は百薬の長よ」
するとしれっとした顔で言う彼女だった。
「だからいいのよ」
「百薬の長ね」
「お酒はお薬よ」
そしてまた言うのであった。
「ちゃんとしたね」
「あくまでそう言うんだね」
「そうよ。実際にそのお薬もあるわよ」
「お酒の」

「これとかね」
言いながら出してきたものは。
それは瓶の中に蝮がある酒だった。それを出すのだった。
「はい、これね」
「蝮酒か」
「これを飲むともうそれだけでね」
「元気が出るんだな」
「疲れは一発で吹き飛ぶわよ」
実に誇らしげな言葉だった。
「さあ、飲んでみる？」
「いや、それはいいよ」
ジョンはそれは断った。
「今は元気だから」
「そうなの。だからなの」
「いいよ。それに蝮酒なんて」
「何？」
「何でそんなの持ってるんだよ」
彼が今アンジェレッタに対して問うのはこのことだった。
「漢方薬じゃないの？それって」
「うち漢方薬も扱ってるのよ」
落ち着き払った態度で答えるアンジェレッタだった。
「ちゃんとね」
「そうだったんだ」
「うちの漢方薬は凄いわよ」
そして誇らしげにまた話すのだった。
「他にも一杯あるし」
「漢方薬がなんだ」
「漢方薬も漢方薬でかなりのものなのよ」
アンジェレッタのそうした話が続く。漢方薬にも詳しい彼女であった。

「中には精神を安定させるものも一杯あるしね」
「じゃあそれシャバキさんに飲ませたら」
「あの人はどうにもならないわ」
彼については完全に匙を投げている彼女だった。
「もうあそこまであれだとね」
「漢方薬でも駄目なんだ、あの人って」
「つける薬ないでしょうね」
ここまで言うアンジェレッタだった。
「だって何でもないことから。それこそこの蝮酒から」
「うん」
「人類滅亡の序曲に話がなるじゃない」
それがシャバキという男である。常識が一切通用しないのだ。彼の頭の中では常に人類は滅亡に向かってひた走っているのである。

第百七十三話　リハーサルその三

「他にも他の知的生命体とか一万人委員会とか」
「あと何があったかな」
「ナチスの残党もあったし」
特撮の設定でもこの時代はないものだ。
「ラストバタリオンだったわよね」
「あれっていないでしょ」
「いる筈ないじゃない、幾ら何でも今は」
これが常識人の考えることである。
「千年以上前に」
「他に何があったっけ」
「ノストラダムスだったわね」
まだ名前が残っている伝説の預言者である。
「そういうのに何でも結びつけるから」
「やっぱり普通じゃないんだね」
「絶対にね。だから隔離されてるし」
「確かに」
その地下奥深くにだ。出られなくなっているのである。しかしそれでも常識を一切無視した行動により出て来るのが彼なのである。
「それはね」
「あの人だけはどんなお薬でも無理よ」
「じゃあずっとあのまま？」
「そう、あのまま」
それしかないというのである。
「どうしようもないから」
「困ったね、それは」
「まあ仕方ないわよ」
実に素っ気無い口調でもあった。

「どんなお薬でも治せる人とそうでないh地位とがいるから」
「それはどうしてもなんだね」
「そういうこと。あとあの博士も」
天本破天荒博士のことだ。考えようによってはエウロパやテロリストよりも連合にとって危険極まる存在である。それがあの博士なのだ。
「どうにもならないから」
「楽にするお薬とかは？」
「普通の人用なら幾らでも」
あるというのである。
「あるわよ」
「あるんだ」
「お店に出してはいないわよ」
一応こう言いはする。
「言っておくけれどね」
「まあそれは幾ら何でもね」
「法律に引っ掛かるから」
だから出せないというのである。
「調合したらすぐだけれど」
「出せるんだ」
「何時でもね。ただしあげないから」
「そんなの欲しくないし」
そこまで物騒ではないジョンであった。
「まあとにかくね」
「ええ」
「あれでナンシーはいけるんだ」
「ウイスキーボトル一本だから」
これがそのお酒の正体であった。
「大丈夫よ」
「大丈夫ってそれだけ飲んで？」

「それ位は普通じゃない」
あっけらかんとして答えたアンジェレッタだった。
「ウイスキー一本位」
「それもそうかな」
「そうでしょ？ウイスキーの一本じゃ」
またこう言うのであった。
「まあどうってことないわよ。ナンシーもお酒結構強いし」
「確かにね。あれで結構ね」
ジョンもそれはよく知っていた。そしてここでふと動いて舞台の方を見るとだった。
舞台では明るく動いているナンシーだった。実に心地よくだ。
「よく動いてるし」
「あれ位がいいのよ」
アンジェレッタもここで来た。そうして言うのであった。

第百七十三話　リハーサルその四

「ナンシーって気が小さいからね。お酒が入るとね」
「それで丁度よくなるってことね」
「そういうこと」
また言う。彼女もまた今のナンシーを見ていた。
見ればナンシーはであった。うごきもいい。とてもである。
「普段のナンシーって結構以上に強がってるじゃない」
「そうだよね。かなりね」
「けれど実は」
ここでさらに言うアンジェレッタだった。
「気が小さくて引っ込み思案なのよね」
「自分はばれていないと思ってるけれどね」
「実はね」
そうなのだ。彼女のそうした素顔はもう皆が気付いていることなのだ。
その彼女の演技はいいものだった。悪巧みをしてもだ。
「いいわ、そうしてあげるわ」
「いいというのか？」
「そうよ、貴方には負けないわよ」
こう相手の魔法使いに返す。その相手の魔法使いを演じているのはフックである。彼もまた魔法使いの服を着て見事に演じている。
「何があろうともね」
「よし、それならだ」
ファタ＝モルガーナの彼女に合わせて演じる。
「私も御前の悪巧みを何があろうともだ」
「防ぐというのね」
「そうだ」
まさにそうだというのである。

「絶対に。それを今言っておく」
「それなら私は」
「意地でも引かないというのか」
「そうよ。私は私のしたいようにするのよ」
邪悪な笑みを浮かべての言葉だった。
「何があってもね」
「おのれ」
いい演技であった。二人で息のあった演技を見せている。そのまま順調に進めていく。リハーサルとはいえかなりの演技であった。
それを見て安心した顔になるアンジェレッタとジョンだった。彼等もである。
「まさにお酒のおかげね」
「そうだね」
二人は満足した顔で頷く。
「これを狙ってなの」
「そうよ。ただ」
「ただ？」
「これは予想以上ね」
首を捻っての今の言葉だ。
「どうにもね」
「ここまで乗れるなんて？」
「思わなかったわ。どうなのよ」
「ひょっとしてナンシーって」
「そうかもね」
「お酒に乗りやすいのね」
そのことをあらためてわかったのである。
「どうにも」
「これは飲ませ過ぎたら潰れないけれど」
酒に強いからである。
「それでもね」

「ええ。飲ませたらもっと凄いことになるわ」
そうなるというのだ。これがよくわかるのだ。
「確実にね」
「加減を知らないとまずいかもね」
「笑い上戸っぽいし」
演技でのその笑みを見ての言葉である。
「どうにも」
「そうだね。あれは」
「笑い上戸よ」
また言うアンジェレッタであった。
「あの娘はね」
「何か泣き上戸っぽいけれど」
「実は違ったってことね」
そうだったというのである。何かと意外なところの多い彼女である。
「実際のところは」
「成程」
それを聞いて頷くジョンだった。

第百七十三話　リハーサルその五

「そういうことなんだ」
「私最初ナンシー見た時の印象はね」
「堅苦しくて真面目なイメージだったんだね」
「そうなのよ。けれど」
それはあくまで第一印象でしかないのだ。第一印象は第一印象に過ぎない。
「よく見てみるとね」
「確かに真面目だけれどね」
「実は気弱でね。あがり性で」
「そうそう」
内面はかなり弱い彼女なのだ。
「実はね」
「気付いてまさかって思ったわよ」
さらに言うアンジェレッタだった。
「あの時は」
「僕も。何か見ていて」
「意外だったわよね」
「そうだよね。ぱっと見には」
ジョンも話を合わせていく。
「あれだよね。冷静沈着そうで」
「恋愛とかしませんって感じで」
「そうそう」
これがイメージなのは事実だった。
「新聞部でもホープでね」
「そういうの見ていたら。どうしてもそう思ってしまうから」
「けれど実際はね」
「それ無理して作ってたから」

そうだったのである。彼女の地ではなかったのである。今話されているのはその地である。それこそが一番問題であったのである。
「実際はすぐうろたえるし」
「芝居下手だし」
「舞台でのお芝居は上手いけれど」
舞台での芝居と現実世界での芝居は違うというのである。
「それが自分では気付いてないって思うしね」
「すぐにわかるんだよね」
「目がすぐに泳ぐから」
それだった。ナンシーの眼鏡の奥に秘密があるのである。
「もうね。すぐにね」
「そうそう。わかるから」
まさにそれだと話すジョンだった。
「本人は演じているつもりでもね」
「アクトレスとしてはいいけれど」
今のアンジェレッタの言葉もあくまで舞台にいる時の彼女である。
「実際はね」
「大根なんてものじゃないよね」
「そうなのよね。とにかく自分では気付かないのよね」
ふう、と苦笑いと溜息を同時に出しさえする。
「中々ね」
「それに」
今度はジョンが言うのであった。
「咄嗟のことに弱いよね、ナンシーって」
「予定外のことが起こるとすぐに狼狽するからね」
そうした癖もあるのだった。何かと観察しがいのある彼女なのだ。
「もう見たら」
「あっ、こけたわ」
ここで、であった。リハーサル中につまづいて前のめりにこけてしまった。それで思いきりどて、と前に崩れてしまったのであった。

そうしてだった。彼女は。
「痛い・・・・・・」
泣きそうな顔で言うのだった。
「何でこうなるのよ・・・・・・」
「何でって」
「大丈夫？」
「こけたけれど」
「大丈夫じゃないわよ」
その泣きそうな顔で心配して周りに来た皆に応える。

第百七十三話　リハーサルその六

「何かあったの？足元に」
「何もないけれど」
「奇麗なものよ」
「じゃあ何でこけたのよ」
自分のことをさらに言う。倒れたままで。
「痛いし」
「だからたまたまよ」
「気にしない気にしない」
「ううう・・・・・・」
フォローの言葉をかけてもらってもである。その顔は変わらない。ついでに言えば起き上がることもしない。どうやらかなりショックだったらしい。
「痛いよ・・・・・・」
「だから起きなさいって」
「仕方ないわね」
呆れたルビーとアンネットが左右に来て起き上がらせる。それで何とか泣きそうな顔のままの彼女を起こしたのであった。それから言うのだった。
「何か子供みたい」
「本当にね。アクシデントに弱いんだから」
「だって」
その二人にも言い返す彼女だった。
「こんなこと急に起こるって思わないじゃない」
「こけるのなんて普通じゃない」
「ねえ」
「何を今更」
また皆言うのだった。

「それでこんな」
「それによ。あんた主役格なんだから」
「しっかりしてもらわないと」
「わかってるわよ」
それでもまだ泣きそうな顔のままである。
「それは」
「だったらいいけれど」
「はい、これ」
「気持ち落ち着けてね」
「ううう・・・・・・」
古典的なペロペロキャンディが出て来た。それを受け取る。
それを舐めてやっと落ち着くのだった。それを見たアンジェレッタとジョンがまた話す。
「ねえ」
「何？」
「ナンシーってお酒飲むとさ」
「そうね。笑い上戸になるだけでなくて」
それに留まらなかったのである。
「子供に返るみたいね」
「何かややこしいね」
「元々子供っぽいところあるしね」
そのすぐ狼狽する性格のことだ。
「ああしてアクシデントに弱いし」
「そうだね。けれど」
「けれど？」
「憎めないんだよね」
ここでこう言ったジョンだった。
「そういうところがね」
「確かにね。それはね」
これはアンジェレッタも認めた。

「ああしたところがね」
「全くね」
温かい目でそんなナンシーを見ているのだった。文化祭の中でそうした温かいものも感じて皆は楽しい時間を過ごしているのであった。

リハーサル　　完

２００９・１２・９

第百七十四話　本番の舞台裏その一

本番の舞台裏

舞台は遂に本番となった。上演場所は学園内の劇場の一つである。この学園内には歌劇場の他にも幾つもの劇場が存在しているのだ。

「歌舞伎にミュージカルに京劇にバレエのもあるし」

「小劇場もあるから」

「それで考えたのはね」

本番前にまた皆に話しているアンジェレッタだった。

「普通の劇場だったのよ」

「あの一般劇場だったの」

「そこにいたんだね」

「そうだったのよ」

こう皆に話している。その場所は舞台裏の倉庫の部屋だった。そこで話をしているのである。

「人も結構多いじゃない」

「確かにね。出演者も」

「かなり」

それも考慮してであったのだ。

「それでなんだ」

「それでここに」

「そうなのよ。さて、成功するかしら」

ここで少し首を傾げさせたアンネットだった。

「果たして」

「成功するかしらじゃないだろ」

それを聞いてすぐに言ってきたルシエンだった。

「それは」

「かしらじゃないって？」

「成功させるんだろ？」

それだというのである。
「この場合は」
「そうね」
アンネットは今のルシエンの言葉を聞いて微笑んだ。
「そうしないと駄目よね」
「そうだ。それでいいんだ」
また言うルシエンだった。
「強気にいかないとな。やっぱり駄目だからな」
「そうね。それじゃあ」
「成功させるぞ」
アンネットだけでなく皆にも話した言葉である。
「いいな。それでな」
「ああ、それじゃあ」
「頑張るか」
こう言い合って本番に入る。そうしてであった。
舞台の幕が開いた。出演者達はそれぞれの出番で動き舞台裏では出番のない面々がせっせと作業にあたっている。舞台転換の用意もしている。
「ほら、そこな」
「ああ、わかっている」
フランツがタムタムの言葉に応えていた。鍋を持っている。かなり巨大で重そうな鍋だがそれでもその鍋を軽々と持っている。その彼に対してすぐに言うタムタムだった。
「いいか、今もな」
「今も。何だ？」
「腕には気をつけてくれ」
それを言うのだった。
「その肩にはな」
「肩もか」
「痛めない様にしてくれよ」

それをくれぐれもだというのだ。
「だから無闇に持ち上げないようにしてくれよ」
「わかった。それじゃあな」
「あとはな」
タムタムは彼にさらに言う。
「肘もぶつけないようにしてな」
「それもか」
「手首や指もだ」
言うことはかなり細かい部分にまでなっていた。それはかなり強いものでもあった。
「見たところ手袋をしていてくれてるんだな」
「御前が五月蝿いからな」
だからだというのだ。
「それでな」
「いいことだ。自分の身は自分で守らないとな」
「それでか」
「自分で何とかしないと駄目なんだ」
タムタムの言葉はさらに真面目なものになる。

第百七十四話　本番の舞台裏その二

「身体のことはな」
「御前が言ってくれるまで気付かなかったけれどな」
「気付いて動くのは自分だからな」
「だからか」
「ああ、だからだ」
また言うタムタムだった。
「とにかく利き腕ハ命だからな」
「ピッチャーのか」
「俺は御前のボールが好きだ」
かなりあからさまな告白だった。
「御前のボールを受けたいからな」
「俺もな」
そしてそれに応える形でフランツも言ってきた。
「御前しかいないからな」
「俺しか、か」
「俺の最高のボールを引き出してくれて」
まずはこのことを話すのだった。
「そして受けてくれるのはな」
「最高のボールを引き出して受けてくれるのはか」
「御前しかいないからな」
鍋を持って歩きながらの言葉である。
「だからな。これからも頼むな」
「ああ、わかっている」
そんなやり取りをしながら裏方の仕事も行う二人だった。そうしてであった。
舞台に出て演技をする。そうしてだった。
「さあさあ王子」

「これは如何ですか？」
ルシエンが演じている王子の前でおどけた動作をするのであった。
「この喜劇は」
「如何でしょうか」
「・・・・・・・・・」
ルシエンはその彼等の前で俯いて沈黙している。これは面白くないからではなく演技でだ。この王子は魔女の呪いで聾になっているのである。
それで沈黙しているのである。そういうことだ。
その演技は中々のものだった。観客もそれを見て言い合う。
「ルシエンって結構ね」
「演技派！？」
「そうよね」
その評価はいいものであった。
「結構以上に」
「やるじゃない」
「ねえ」
そしてであった。ナンシーもまた。
見つかってしまい魔法を使っているのがばれてしまった場面で。
言うのであった。
「こうなったら！」
「何をするつもりだ！」
舞台の中で皆に問われていた。
「一体何を！」
「王子よ、あらたな呪いを受けるのだ！」
強い言葉でその王子に対して告げていた。魔女の服で。
「三つのオレンジの姫に恋をするのだ！」
叫びながら魔法をかける。その演技もいいものであった。
そして舞台裏では。またアンジェレッタとジョンがその彼女を見

て話をしていた。
「今回はお薬は？」
「あげてないわ」
こう言って彼の問いに首を横に振る。今の彼の横にはラッシーがいる。何と犬まで登場させているのである。その彼の相棒もである。
「今日はね」
「それであの演技なの」
「本番で腹を括ったみたいね」
それだというのである。
「どうやらね」
「そうなんだ」
「そうよ。ただ」
ここでアンジェレッタはジョンの横にいるそのラッシーを見る。彼の足元に座って賢そうな顔をしている。しかしその彼を見て言うのだった。
「ラッシーだけれど」
「ラッシーがどうかしたの？」
「さっき何で怒ってたのかしら」
このことを言うのだった。
「劇場に入る前にね」
「ああ、あれね」
ジョンも言われてそのことに気付いた。
「そうだったね。何かね」
「あれどうしてかしら」
「あの仮装の人達ね」
ジョンはその時のことを話した。

第百七十四話　本番の舞台裏その二

「身体のことはな」
「御前が言ってくれるまで気付かなかったけれどな」
「気付いて動くのは自分だからな」
「だからか」
「ああ、だからだ」
また言うタムタムだった。
「とにかく利き腕ハ命だからな」
「ピッチャーのか」
「俺は御前のボールが好きだ」
かなりあからさまな告白だった。
「御前のボールを受けたいからな」
「俺もな」
そしてそれに応える形でフランツも言ってきた。
「御前しかいないからな」
「俺しか、か」
「俺の最高のボールを引き出してくれて」
まずはこのことを話すのだった。
「そして受けてくれるのはな」
「最高のボールを引き出して受けてくれるのはか」
「御前しかいないからな」
鍋を持って歩きながらの言葉である。
「だからな。これからも頼むな」
「ああ、わかっている」
そんなやり取りをしながら裏方の仕事も行う二人だった。そうしてであった。
舞台に出て演技をする。そうしてだった。
「さあさあ王子」

「これは如何ですか？」
ルシエンが演じている王子の前でおどけた動作をするのであった。
「この喜劇は」
「如何でしょうか」
「・・・・・・・・・」
ルシエンはその彼等の前で俯いて沈黙している。これは面白くないからではなく演技でだ。この王子は魔女の呪いで聾になっているのである。
それで沈黙しているのである。そういうことだ。
その演技は中々のものだった。観客もそれを見て言い合う。
「ルシエンって結構ね」
「演技派！？」
「そうよね」
その評価はいいものであった。
「結構以上に」
「やるじゃない」
「ねえ」
そしてであった。ナンシーもまた。
見つかってしまい魔法を使っているのがばれてしまった場面で。
言うのであった。
「こうなったら！」
「何をするつもりだ！」
舞台の中で皆に問われていた。
「一体何を！」
「王子よ、あらたな呪いを受けるのだ！」
強い言葉でその王子に対して告げていた。魔女の服で。
「三つのオレンジの姫に恋をするのだ！」
叫びながら魔法をかける。その演技もいいものであった。
そして舞台裏では。またアンジェレッタとジョンがその彼女を見

て話をしていた。
「今回はお薬は？」
「あげてないわ」
こう言って彼の問いに首を横に振る。今の彼の横にはラッシーがいる。何と犬まで登場させているのである。その彼の相棒もである。
「今日はね」
「それであの演技なの」
「本番で腹を括ったみたいね」
それだというのである。
「どうやらね」
「そうなんだ」
「そうよ。ただ」
ここでアンジェレッタはジョンの横にいるそのラッシーを見る。彼の足元に座って賢そうな顔をしている。しかしその彼を見て言うのだった。
「ラッシーだけれど」
「ラッシーがどうかしたの？」
「さっき何で怒ってたのかしら」
このことを言うのだった。
「劇場に入る前にね」
「ああ、あれね」
ジョンも言われてそのことに気付いた。
「そうだったね。何かね」
「あれどうしてかしら」
「あの仮装の人達ね」
ジョンはその時のことを話した。

第百七十四話　本番の舞台裏その三

「あの人達だよね」
「確かによくできた仮装よね」
アンジェレッタもまさか人間以外はは入っているとは思っていない。
「けれどあんなに唸ってたし」
「あんなのははじめてだよ」
彼は言う。
「あんなラッシーはね」
「賢いだけじゃなくて大人しい犬だしね」
「しかもね」
「そうだね」
今度はネロが出て来た。彼は悲劇役者の格好をしている。
「パトラッシュもそうだったし」
「そうそう」
パトラッシュも相棒の足元にいる。最早ペットではなく相棒と言ってもいい関係になっている。彼等の絆はそこまで至っているのである。
「だからね。あの人達って」
「何なのかな」
「大学の人達かしら」
アンジェレッタは首を傾げながら述べた。
「大学の特撮研究会の人達かしら」
「その割には小さい人多くない？」
「やたらと精巧な造りものもあったし」
だがジョンとネロは彼女の言葉にこう返したのだった。
「何かね。あれは」
「造りものも生き生きしていたし」

「じゃあ仮装部かしら」
アンジェレッタはまた首を傾げさせた。
「それだったら」
「どうだろうね、それは」
「とにかくわからないけれど」
「とりあえず今は大人しいし」
またそのラッシーとパトラッシュを見るアンジェレッタだった。
「そろそろこの子達も出番ね」
「そうだね。じゃあ」
「行こう、パトラッシュ」
「ワン」
「ワオン」
それぞれ相棒の言葉に応える。そうして舞台裏の檻に向かう。そこには他にはナンの馬までつながれていた。当然ナンもそこにいる。
「それにしても檻まで使うなんてね」
「これは演出なのよ」
プリンセスの格好のアンネットが彼女の隣にいて馬を見ながら言う。
「砂漠の上の檻はね。私のオリジナルよ」
「馬や犬に曳かれる檻？」
「何となく面白いじゃない」
だからだというおである。
「そういうのもね」
「何かチグハグじゃない？」
ナンはラッシーとパトラッシュが檻につながれるのを見ながら彼女に問い返す。
「普通一種類にするものじゃない、曳く動物は」
「だからあえてなのよ」
「そこをあえてなのね」
「アンバランスによ」

それを考えてのことだというのである。
「してみたのよ」
「何でアンバランスに？」
「どうしてしたの？」
「魔法のお話だからね」
こうにこりと笑って述べてみせた。
「それでなのよ」
「魔法だから」
「それで」
「そうよ」
また言うのであった。
「だからこうした橇にしたのよ」
「そうだったんだ」
「それでなの」
「そうよ。それでね」
アンネットの話は続く。
「実は橇自体もね」
「どうだっていうの？」
「橇は」
「お話に出ないし」
それも言うのである。

第百七十四話　本番の舞台裏その四

「それを出すしね。それなら余計にって思って」
「こんな凄い橇にしたんだ」
「それで」
「砂漠に馬ね」
ナンもそれにはかなり戸惑いを覚えていた。
「駱駝じゃなくて」
「スレイプニルも考えたけれど」
「ああ、あれね」
スレイプニルと聞いて少し頷いた彼女だった。
「あの馬ね。八本足の」
「あれもどうかしらって考えたけれど」
「ああ、あの動物園にいる」
「あの馬だね」
ジョンとネロにもわかった。八本足の馬のことはだ。それは八条学園内の動物園にもいる。珍獣として連合でもかなり有名な生き物である。
「元は北欧神話に出ていた」
「あのエウロパのお話にだよね」
「それで考えたのよ」
また言うアンネットだった。
「それを出そうかしらって」
「それで何で止めたの？」
「どうしてなの？」
「絶対に借りられないって思ったからよ」
だからだというのだ。
「動物園からね」
「まあそうでしょうね」

ナンが彼女の言葉に納得した顔で述べる。
「あの馬はね」
「だから止めたの」
アンネットはまた言った。
「残念だったけれど」
「そうだね。やっぱりね」
「ただね」
ジョンとネロの言葉がそれぞれ変わってきた。
「あの馬ってエウロパのお話に出て来るじゃない」
「ああ、そうだよね」
ジョンがネロのその言葉に頷いた。
「そういえば確かにね」
「それでも連合にいるからね」
「エウロパにはいなくて」
「それって考えてみれば不思議なことだよね」
「そういえばね」
ここでナンもその話に加わってきた。
「そのスレイプニルってよ」
「うん」
「私の国にもいるけれど」
モンゴルにだというのだ。
「他にもペガサスとかユニコーンもいるじゃない」
「モンゴルにはそういう馬が多いよね」
「こうした馬もエウロパにはいないらしいわね」
そうなのだった。全て連合にいるのである。
「それでモンゴルにはどれもいて」
「それって凄い縁だよね」
「確かにね」
ジョンとネロは彼女のその言葉に頷く。
「連合にいるけれどエウロパにはっていうのは」

「しかもモンゴルには全部いて」
「馬だからかしら」
こんなことも言うナンだった。
「モンゴルにいるのは」
「モンゴル人は今でも馬に乗るわよね」
アンネットはこのことをその彼女に話した。
「今でもね」
「ええ、そうよ」
まさにそうだと答えるナンだった。
「馬はモンゴル人にとってはね」
「足かしら」
「足と言ってもまだ足りないわ」
それ以上だというのである。
「そうね。分身ね」
「分身なの」
「馬のない生活なんて考えられないわ」
ナンはこうまで言った。
「私だってそうじゃない。ゲルに住んでそれで」
「馬に乗って登下校してね」
「とにかく馬よ」
何といってもというのだ。

第百七十四話　本番の舞台裏その五

「馬があってこそのモンゴルよ」
「成る程ね」
「だから馬は私達モンゴル人にとっては分身よ」
「分身なの」
「そうよ、昔からね」
そこまでだというのである。
「モンゴル人は馬は絶対に食べないのよ」
「じゃあ日本人みたいなのは」
「駄目なんだね」
「信じられなかったわよ」
実際にかなり困惑した顔をここで見せてきた。
「馬を食べるなんて。馬刺しなんてね」
「そういえばナンって絶対に馬刺しには箸を着けないわね」
ここで出て来たアンネットもこのことに気付いたのである。
「飲む時でも」
「馬乳酒は飲むけれどね」
「お肉は駄目なんだね」
「そうよ。馬のお乳はモンゴル人の命の源よ」
それはいいというのである。
「モンゴル人は馬か羊のお乳、それと羊肉があれば生きていけるのよ」
「今でも？」
「それってかなり凄いけれど」
「だから馬は分身なのよ」
ここであらためてこのことを言うのだった。
「お乳だって飲ませてくれるし」
「チーズとかバターにもするんだね、それで」

「ヨーグルトにも」
「そうよ。その通りよ」
まさにそうだと答えもするのだった。
「馬はだからいいのよ。足でもあるし」
「成程ね」
「まさに遊牧民だね」
「正直ね。日本人のあの馬刺しは」
そのうえでまたうんざりとした顔になるナンだった。
「有り得ないわよ。もう子供の頃に話を聞いただけで」
「嫌だったんだね」
「そこまでいってたんだ」
「想像できなかったわよ。しかもそれを見て」
その日本に来た時のことも話すのだった。
「本当だったんだって。何か人間の肉を見た気分よ」
「まあその例えは極端じゃないかなって思うけれど」
アンネットは少し恐る恐る述べた。
「そこまではちょっと・・・・・・ね」
「けれど実際にそう思ったのよ」
「モンゴル人だからなのね」
「そうよ。まあそれでも日本人が何を食べようと文句は言わないけれどね」
それはしないのだという。
「馬を食べることもね」
「そこはあんたらしいわね」
アンネットは今のナンの言葉を聞いて優しい微笑を浮かべた。
「そこはね」
「そうでしょ。まあそれじゃあそろそろ出番だし」
「ええ、行って来て」
その笑顔でナンを送り出すのだった。
「砂漠での御者、頼んだわよ」

「了解」
馬に乗ってそのうえで舞台に向かう。ラッシーとパトラッシュも一緒だ。そのうえで舞台に出ると皆驚きの声をあげる。この演出も成功のようだ。
二転三転の舞台は続きそして最後の場面。ファタ＝モルガーナがまた出番だ。
しかしここでナンシーは。舞台裏でかなり戸惑っていた。
「最後よね」
「そうよ」
後ろにいるアンジェレッタが彼女に応える。
「クライマックスよ」
「そうよね」
見ればであった。彼女は困った顔をしていた。
「最後なのよね、いよいよ」
「最後の見せ場よ」
あえてこう言ってみせるアンジェレッタだった。
「いよいよね」
「ええと」
しかしであった。ここで彼女は困惑した顔になっていた。
「どうしようかしら」
「どうしようって？」
「緊張してきたわ」
見ればであった。その顔色は真っ青であった。
「足がすくんで」
「最後で決められるかどうかなのね」
「あのお薬ある？」
彼女に顔を向けて問うてもきた。

第百七十四話　本番の舞台裏その六

「この前のお薬だけれど」
「あるわよ」
それはあるというのである。
「けれどね」
「けれど？」
「今は必要ないわ」
しかし彼女はここでこう言ったのである。
「今はね」
「必要ないって」
「だって。あんたはできるからよ」
だからだというのである。
「ちゃんとね」
「けれど私」
そう言われてもナンシーの顔は晴れない。眉を顰めさせて不安に満ちた顔になっている。
「足が動けないし」
「一歩踏み出せばそれでいいのよ」
だがアンジェレッタはその彼女にまた言うのだった。
「それだけでね」
「けれど」
「けれど？」
「それができないなら」
アンジェレッタはにこりと笑ってきた。
「いい方法があるわよ」
「けれどお薬は」
「ないわよ」
それはないのだというのだ。

「それでもいい方法があるのよ」
「それって何なのよ」
「あんた今どうしても前に出られないのよね」
このことを確かめてきた。再びである。
「今は」
「ええ、ちょっと」
実際にそうであった。表情は暗いままであった。
そしてその暗鬱な顔で。足が震えていた。
「どうしてもね」
「それじゃあ余計によ」
「余計に？」
「前を向いて」
またナンシーに告げた。
「前を向いて。いいわね」
「前を」
「そう、前をよ」
言葉が少し強くなってきていた。
「前を向いて」
「前って舞台の方よね」
恐れる声でまた確かめた彼女だった。
「舞台の方をよね」
「そうよ。そこを見て」
アンジェレッタはとにかく言う。その足がすくんで動けないナンシーを無理にでも前を向かせるつもりだったのだ。ここはどうしてもであった。
「前をね」
「わかったわ。じゃあ」
それで振り向くとだった。アンジェレッタはその背中を両手で押したのだった。
「えいっ」

「あっ・・・・・・」
これで舞台に出た。丁度いいタイミングだった。
それで前に出ると足が自然に動いた。舞台でも動けたのである。
その結果クライマックスの場面を無事に演じられた。彼女の演技は好評で何度もカーテンコールを受けて拍手や歓声を浴びせられた。
ナンシーは満面の笑顔で舞台から降りた。その手には観客から投げ渡された花束がある、
その花束を手にしているナンシーを見て。アンジェレッタは笑顔で言う。彼女は自分の役の道化師の衣装を着ている。小柄な彼女によく似合っていた。
「大人気だったわね」
「ええ」
満面の笑顔で彼女に応えるナンシーだった。
「これでね」
「おめでとう。それでだけれど」
「それで？」
「あのおまじないどうだったかしら」
見ればアンジェレッタも同じだった。満面の笑顔である。その笑顔でナンシーに言ってきたのだ。
「背中を押したのは」
「何か足が一気に動いて」
「よかったでしょ」
「ええ、最初はびっくりしたけれど」
このことも言うのだった。しかしであった。
「何か一気に動けて。それでね」
「全然違ったわよね」
「本当にね。何か凄い違うわ」
「これがなのよ」
アンジェレッタはさらに言う。
「これがおまじないなのよ」

「ただ背中を押して前に押し出すだけなのに」
「これ実は実際にやってた人がいるのよ」
アンジェレッタはこんな話もしてきたのだった。
「実際にね」
「いたの、そういう人が」
「いたのよ。イタリアのオペラ歌手だけれど」
エウロパの一国である。エウロパの中では主要国家の一国である。
連合で言えば日米中露土伯の様な存在である。エウロパの他の主要国は英仏独、それにスペイン等だ。
「マリオ＝デル＝モナコって人がいたのよ」
「マリオ＝デル＝モナコっていうと」
ナンシーはその名前を聞いてだ。あることを察した。
「男の人よね」
「それはわかるわよね」
「まあね。それはね」
彼女もそれは察した。連合ではイタリア系も結構いる。

第百七十四話　本番の舞台裏その七

「わかるわ」
「二十世紀イタリアの名テノールなのよ」
アンジェレッタは彼が歌手であることも話した。
「もう凄いテノールでね」
「そんなに凄かったの」
「カルーソーとか」
これも伝説的歌手である。
「ジーリとかスキーパとかに並ぶね」
「そういう名前は聞いたことがあるわ」
それはナンシーも知っている名前だった。
「その人達はね」
「知ってるのね」
「ええ、どれも凄いテノールよね」
「そうよ。そしてそのデル＝モナコもね」
そうだというのである。
「凄い歌手だったのよ」
「成程」
「けれどこの人ってあがり性だったのよ」
そしてこのことも話した。
「それで背中をね」
「押してもらって舞台に出ていたの」
「自分の奥さんにね」
「奥さんにだったの」
「そうなのよ、いつもね」
そうしてもらったと。話をするのだった。
「そうしていつも舞台に出ていたのよ」
「それで今私にもだったの」

「そうだったのよ」
にこりとして話すのであった。
「これでわかってくれたかしら」
「ええ、それは」
アンジェレッタのその言葉を聞いて確かに頷いた。
しかしここで。ナンシーはこうも言った。
「けれどよ」
「どうしたの？」
「奥さんよね」
言うのはこのことだった。
「自分の奥さんに背中を押してもらったのよね」
「ええ、そうよ」
「私女の子だけれど」
「それがどうかしたの？」
「奥さん貰う立場じゃないけれど」
それを言うのである。
「普通は男の人をお婿さんに貰うんじゃないかしら」
「同性でも結婚できるわよ」
アンジェレッタはこのことを話した。連合でもイスラエル等の特別な宗教的制約がある場合以外は殆どの国で男同士でも女同士でも結婚できるのである。
「言っておくけれど」
「それは知っているわよ」
ナンシーもそのことは知っていた。
「私の国だってそれ可能だし」
「じゃあそれもありじゃない」
「けれどそれだったらよ」
彼女はまだ言う。
「私が」
「ナンシーが？」

「アンジェレッタをお嫁さんにするってことじゃない」
困った顔での言葉だった。
「それだったら」
「ふふふ、そういえばそうね」
「そういえばじゃないわよ」
アンジェレッタは今のナンシーの言葉に笑って返したがナンシーは違っていた。困った顔になってそのうえで彼女に対してまた返している。
「私ノーマルよ」
「そういう趣味はないのね」
「そうよ。同性愛は否定しないけれど」
それはいいというのである。
「それでもよ。アンジェレッタは」
「私のこと嫌いとか？」
「好きよ」
逆の言葉が出された。
「それでもよ。あくまでお友達としてよ」
「恋愛対象じゃないってことね」
「そうよ。そんな訳ないじゃない」
むくれた顔での返事だった。
「私はノーマルなんだから」
「どうしてもね」
「そういうこと。それはないから」
また言うのだった。

第百七十四話　本番の舞台裏その八

「まさかと思うけれど」
「まさか？」
「あんたひょっとして」
怪訝な顔で返していた。
「私をそういう目で？」
「だったら面白いかもね」
アンジェレッタは今のナンシーの言葉に満面の笑みで返した。
「それもね」
「それもねって」
「安心して。それはないわ」
その笑みのままでの言葉だった。
「私もノーマルだから」
「そう、よかった」
ナンシーはそれを聞いてまずはほっとした。
「だったらいいけれど」
「それでもよ」
しかしアンジェレッタはここでこうも言うのであった。
「女房役にはなりたいわ」
「女房役に？」
「そうよ。女房役にね」
それになりたいというのである。
「なりたいわね」
「そうだったの」
「意外かしら」
「意外っていうか」
ナンシーはこれまでの焦った様な顔からきょとんとしたものになっていた。

「キャラじゃないんじゃないの？」
「そうかしら」
「女房役っていうよりは」
アンジェレッタのその小さな身体を見て言う。やはり誰が見ても小柄である。
「娘さんって感じよ」
「ストレートね」
「だって本当にそう思うし」
そのことを収めることはしなかった。
「私はね」
「そうなの。私は子供なのね」
「性格はともかくね」
そちらは子供ではないというのである。
「しっかりとしたね」
「その言葉は嬉しいわ」
「けれど女房役って感じじゃないわ」
このことをまた言うのだった。
「どうもね」
「そうなのね」
「そうよ。やっぱりね」
ナンシーはさらに言う。
「だから女房役って言われても」
「けれどどうだったかしら」
「あの背中を押してくれたこと？」
「そうよ。それはね」
そのことはどうかというのである。
「どうだったかしら」
「有り難う」
これが返事だった。
「あの時ああしてくれて」

「それが返事ね」
「そうよ」
まさにそれだというのだ。それがナンシーの返事だった。
「おかげでおどおどしていたのがなくなって」
「演技できたでしょ」
「満足にね。アンジェレッタのお陰でね」
「それでいいのよ」
アンジェレッタはナンシーの言葉をここまで聞いて満足した微笑みで笑った。
「それでね」
「そうなの」
「それでだけれど」
ここまで話してさらに言うアンジェレッタだった。
「後は何があるかわかってるわね」
「何がって？」
「キャンプファイアーよ」
それがあるというのだ。
「キャンプファイアー。わかってるわね」
「ああ、そうだったわね」
ナンシーはアンジェレッタの言葉でそれを思い出した。実は彼女に言われるまでそのキャンプファイアーのことは完全に忘れてしまっていたのである。

第百七十四話　本番の舞台裏その九

「そういえばそれも」
「文化祭の最後は何といってもあれでしょ」
「そうよね。あれがないとやっぱり」
「紅茶のない紅茶よ」
「いや、それもう紅茶じゃないし」
今の彼女の例えには速攻で突っ込みを入れた。
「それだと」
「まあそれだけ大事だってことよ」
そうだというのである。
「文化祭にキャンプファイアーはね」
「そういうことなのね」
「そういうことよ。それじゃあね」
「ええ、それじゃあ」
「あんたは頑張りなさい」
ここでまた彼女の背中を押した。しかし今回は押したというよりは叩いた。右手でばん、と叩いてみせたのである。それもあえてだ。
「その彼氏とのことをね」
「一緒になれってことなのね」
「そういうことよ。いいわね」
「わかったわよ」
今度はあまり嬉しそうな顔をしていなかった。
「それはね」
「何よ、あまり嬉しそうじゃないわね」
「何かそう言われるとね」
そのあまり嬉しそうでない顔で話す。
「どうもね」
「素直じゃないわね、応援してるのに」

「応援してるっていうより楽しんでるでしょ」
アンジェレッタにそうではないかと問うのだ。
「あんた今確実に」
「気のせいよ」
しかしそうは言ってもその顔は笑っていた。それににやにやとしている。
「だから気にしないで」
「気にするわよ。まあとにかくね」
「頑張りなさいよ」
アンジェレッタはここでまた言った。
「いいわね」
「わかったわ。その言葉はよ」
「応援って思ってくれるわね」
「そう思うことにするわ。それじゃあね」
「皆それぞれカップルになるわよ」
アンジェレッタは言いながらまた楽しい顔になる。
「それを見るのがこれまた楽しいのよ」
「あんた彼氏は？」
「さて、どうかしら」
その質問には含み笑いで返してみせてきた。
「ご想像にお任せするわ」
「そう来たのね」
「あんたはまあその後輩の子と仲良くね」
「わかったわ。それじゃあね」
何だかんだでその言葉を受ける。そうしてそのキャンプファイアーに思いを馳せるようになっていた。アンジェレッタはそれを見て微笑んでいた。

本番の舞台裏　　完

2009・12・15

第百七十五話　ラーメンとハンバーガーその一

ラーメンとハンバーガー

蝉玉とスターリングは舞台が終わってからは。それぞれメイクを落として衣装も着替えていた。そのうえで二人で舞台の後始末をしていた。

「お店の方はどうなってるの？」

「あっちはあっちで皆頑張ってるよ」

そうしているというのである。

「ちゃんとね」

「そう。向こうもなのね」

それを聞いて満足した顔で頷く蝉玉だった。

「それじゃあ安心できるわ」

「それじゃあこれでいいよね」

「ええ、いいわ」

また言う彼女だった。

「こっちのお仕事が終わったら」

「それですぐに自由時間だよ」

「それでスターリング」

蝉玉は大道具を持って来ながら彼にまた声をかける。

「どうするの？それで」

「それでって？」

「その自由時間よ」

その時のことを具体的に尋ねたのである。

「何処に行くの？それで」

「そうだね。まずはね」

彼はトンカチをなおしながら彼女に返した。

「何か食べない？」

「何かって？」

「そろそろお腹空いてきたから」
こう言うのである。
「だからね」
「そうだね。そういえば」
彼女に言われてスターリングも考える顔になった。何かを確かめる顔である。
「僕もそろそろ」
「そうでしょ？お芝居で随分身体を動かしたし」
「それが大きいよね」
「だからよ」
蝉玉はまた彼に話した。
「どうかしら、何か」
「いいね、それじゃあ」
スターリングはここまで話して蝉玉の言葉に頷いた。
「じゃあ何がいいかな」
「ハンバーガーにする？」
アメリカ人である彼のことを意識しての問いである。
「それじゃあ」
「ハンバーガーね」
あらためて彼に問うのだった。
「それはどうかしら」
「ハンバーガーね」
彼もそれを聞いて考える顔になった。
「いいね、それも」
「それかラーメンか」
今度は中国人である自分を意識しての言葉であった。
「どっちがいいかしら」
「ハンバーガーかラーメンか」
「それとも」
ここで蝉玉はふとこんなことも言い出した。

「両方にする？」
「両方！？」
「そう、両方ね」
それも言うのである。
「両方はどうかしら」
「ハンバーガーとラーメンの両方をね」
「いいね、それも」
スターリングは両方という案に一番強いニュアンスで返した。
「それじゃあそれでね」
「それでいいわよね」
「うん、いいよ」
今度ははっきりと頷いてみせた。
「それじゃあそれでね」
「何か思ったよりお腹空いてきたし」
蝉玉はここで自分の腹に手を当てた。そのうえでの言葉だ。
「両方食べてやってって感じだし」
「じゃあ何処に行こうかな」
「アメリカ料理のレストランでラーメンもあるわよね」
「中華料理店でハンバーガーは？」
二人はこのことをお互いに問い合う。八条学園ではアメリカ料理のレストランも中華料理の店も両方あるのだ。それも複数あるのである。

第百七十五話　ラーメンとハンバーガーその二

「どうかしら」
「どんな感じなの？」
「正直言ってね」
まず答えたのは蝉玉だった。首を捻りながらの言葉だ。
「中家風のハンバーガーってね」
「うん」
「あんかけ風でね」
そうなっているというのである。
「中がそうなっていて。ハンバーグ自体も」
「やっぱり中華風なんだ」
「そうなのよ。中華風なのよ」
中国のハンバーグもある。それはあんをかけているのである。ソースではないのだ。
「レタスやピクルスが入ってるんじゃなくて人参や胡瓜でね」
「それじゃあ味は」
「アメリカの味じゃないわよ」
それは断言するのだった。
「アメリカ風のね」
「中国風のハンバーガーはそんなのなんだ」
「当然マスタードとケチャップもないわ」
ハンバーガーを象徴する味である。
「それもね」
「何か全然違うんだね」
「そうなのよ。それで」
今度は蝉玉から尋ねてきた。
「アメリカのラーメンはどうなのかしら」
「アメリカのラーメン！？」

「ええ。どんな感じ？」
それを尋ねるのである。
「アメリカのラーメンは」
「ヌードルだね」
スターリングはそれだと答えた。
「麺が平たくてね。縮れ気味で」
「カップヌードルみたいな感じなのね」
「そうだね。それにまあ刻んだ肉や野菜が入っていて」
「スープは」
「カレーとかコンソメとかそんなのだよ」
そういう感じだというのだ。
「だから中国のそれとは」
「全然違うみたいね」
「そうなんだよ。別物に近いね」
「それをお箸で食べる」
「それはね」
そうなっているという。この時代は連合全体で箸が使われるようになっている。箸と同時にフォークにナイフ、スプーンやレンゲも使われる。
「同じだよ」
「こっちもハンバーガーは手でね」
「食べるんだ」
「それはアメリカのハンバーガーと同じなのよ」
そうだというのだ。
「それはね」
「食べ方はお互い同じみたいね」
「そうね」
それだけは同じであった。
「けれど。本当に違うわね」
「何かさ」

そしてここで言うスターリングだった。
「そこまで聞いたら」
「どうしたの？」
「かえって食べたくなってきたね」
こう言うのである。
「その中国のハンバーガーだけれど」
「実は私も」
「蝉玉もなんだ」
「そのアメリカのラーメン」
彼女もだというのである。
「日本のラーメンは食べたけれどね」
「僕も日本のハンバーガーはね」
両方共それはあるのだという。
「あれはまあ。かなりあっさりで」
「細かい味だね」
それが二人から見た日本のラーメンとハンバーガーの味であった。
なおこの時代も和食といえばあっさりしていることで有名である。
「美味しいことは美味しいけれど」
「やっぱり日本だって思ったよね」
「そうそう。お魚をだしに取ったラーメンって」
「脂肪分がやけに少ないハンバーガーで」
具体的にどんなものなのかも話される。

第百七十五話　ラーメンとハンバーガーその三

「本当にあっさりしていてね」
「香辛料とかも薄くてね」
「本当に日本なんだなって」
「お醤油も使ってね」
「けれど。アメリカのラーメンは」
「中国のハンバーガーは」
そしてまたそこに話をやるのだった。
「全然違うみたいね」
「面白そうだね」
「だったら、だけれど」
「そうだね。お互い食べてみようよ」
二人の結論はそこに辿り着いた。お互いそれを食べてみようというのである。
「それをね」
「じゃあ注文する？」
スターリングはこう蝉玉に提案した。
「その中国のハンバーガーとアメリカのラーメンね」
「注文できたの？」
「無理かな。同じ学校の中だけれど」
「無視でしょ、それは」
蝉玉はそれは無理ではないかと返す。話をしているうちにもそれぞれ手は動いていて作業は順調に進んでいる。二人共仕事は休んでいない。
「幾ら何でも」
「じゃあこれが終わったら」
「食べに行きましょう」
こう言うのである。

「それでいいじゃない」
「そうか。それだったら」
「まずはどっちを食べる？」
「ハンバーガーにしよう」
まずはそれだというのだ。
「中国のね」
「わかったわ。それじゃあまずは中国のハンバーガーね」
「それからラーメンにしよう」
そちらはハンバーガーの次だというのである。
「それでどうかな」
「ええ、いいわ」
蝉玉もそれで納得して頷いた。
「それじゃあそれでね」
「決まりだね。さて、それじゃあ」
「お仕事早く終わらせて」
「キャンプファイアーがはじまるまでに腹ごしらえってことで」
「そうしましょう」
こう話してであった。二人は仕事を終わらせてまずは学園内の中華料理店に入った。そこは如何にもといった感じの赤い内装でテーブルは黒い。そこに座ってハンバーガーを頼むのだった。そして二人共ここでラーメンも一緒に頼んだのであった。
その理由はというと。その二人の口から出て来た。
「やっぱりね」
「そうよね」
「お腹空いたね」
「それもかなり」
だからだというのである。
「ちょっと。量を食べないと」
「もたないからね」
こういう理由でラーメンも頼んだのだった。やがてその中国のハ

ンバーガーが来た。ラーメンもである。ラーメンは普通のトリガラスープだが日本のものより濃厚である。

そのラーメンも食べるがやはりハンバーガーであった。それを食べたスターリングの感想は。

「これは」

「どうかしら」

「美味しいね」

こう蝉玉に対して答える。

「パンも違うんだね」

「包よ」

それだというのだ。見ればそれは俗に言うパンではない。白く饅頭の生地にそっくりである。中華料理でよく使われる生地である。

「それを使っているのよ」

「成程、それだったんだ」

「それであんかけのソースでね」

「中には人参とか葱とかで」

「それでハンバーグもね」

それも違っていたのである。やはりその中国のハンバーグである。何処か肉団子を思わせる中身である。

「そうなってるけれど」

「いいね」

それがいいというのである。

第百七十五話　ラーメンとハンバーガーその四

「これがもう」
「気に入ってもらえたみたいね」
「ラーメンもいいけれどね」
しっかりラーメンも食べているのだった。トリガラスープのをだ。
「これはまあ何度も食べてるけれど」
「そうよね。中国のラーメンはね」
「蝉玉の家でも食べるしね」
「そうそう」
何気に割合深い付き合いになっている二人だった。
「それもね」
「それにしてもハンバーガーってこういうのもなんだ」
「変わってる？やっぱり」
「別物に見えるね」
そう見えるというのである。
「それもかなり」
「そうなの」
「味もかなりね」
それもだというのである。
「けれど美味しいよ」
「そうでしょ」
またその話になるがそれでも嬉しい蝉玉だった。
「それじゃあ合格ね」
「合格だよ。この白い生地と中国風のハンバーグが凄く合ってるね」
「中国人よ」
蝉玉はそれを根拠とするのだった。
「中国人は何でも料理できるのよ」
「確かにね。昔からそうだね」

「アメリカ人もそうじゃない」
そのスターリングの国もだというのである。言わずと知れたアメリカ合衆国である。地球にある頃から何かと話題を振りまいている国家である。
「何でも作られるじゃない」
「まあラーメンもだけれどね」
「それじゃあ次はそのラーメンね」
「うん、アメリカのラーメン」
次はそれだった。
「アメリカのラーメン食べようよ」
「そのヌードルみたいなラーメンね」
「まあ簡単に言えばそうだね」
それは否定しないスターリングだった。確かにそれはヌードルである。
「それはね」
「それも美味しそうだし。じゃあ」
「行こうか」
「行きましょう」
ここで二人は食べる速度を早くさせた。一気であった。
その中華風のハンバーガーとラーメンを食べてだ。それで店を後にして今度はアメリカ料理のレストランに入った。今度はプラスチックや大きな窓ガラスが目立つ白と金色の店の中に入ってである。そこでそのラーメンとハンバーガーを頼んだのである。
白い木と黒いプラスチックのテーブルに向かい合って座り。そのうえでそれを待ち受けた。
ハンバーガーはそのままである。そしてラーメンは。
「話通りね」
「どうかな」
その縮れた平たい麺を前にして蝉玉に尋ねる。箸とスプーンも置かれている。

「このラーメン」
「スープはコンソメなのね」
「これも言った通りだよね」
「白いってことは」
「牛だよ」
それからスープについて話したのだった。
「牛の骨や肉から取ったんだ」
「牛のね」
蝉玉はあそれを聞いてその目を少ししばたかせた。
「牛の骨とか肉からダシを取るの」
「中国じゃ鶏とか豚が主流だよね」
「そうよ。アメリカじゃ牛も使うの」
「そうなんだよ。それじゃあね」
「食べよう」
「ええ、じゃあ」
こうしてそのラーメンを食べてみる。まずは四角く切ったミンチ肉や細かく切った野菜や蟹の切れ端を食べる。その味はというと。
「美味しいわね」
「そう、それならよかったよ」
「意外と薄味なのね」
蝉玉はその肉や野菜を食べながらまた言う。

第百七十五話　ラーメンとハンバーガーその五

「具もスープも」
「そうなんだよ。それにね」
「それに？」
「麺だけれど」
今度は麺を食べていた。
「この味は」
「それはどう？」
「コシがあるわね」
まず言ったのはコシについてだった。
「充分に」
「そうなんだよ。このラーメンはコシもね」
「あるのね」
「そうなんだ。これで結構ね」
「ええ、それに」
蝉玉は箸で麺を食べながらさらに言う。
「スープがよく絡まってね」
「いいよね」
「それが余計にいいわ」
こう評するのだった。
「麺自体の味もいいし」
「それじゃあ合格かな」
「ええ、合格よ」
微笑んでそれを告げるのだった。
「充分ね」
「よかった。じゃあハンバーガーは」
「それもよ」
蝉玉はそれも食べていた。そのうえで言うのだった。

「いけるわ」
「そう、これはわかってたよね」
「何度も食べてるから」
にこりと笑う蝉玉だった。
「アメリカのハンバーガーはね」
「それでアメリカのラーメンは」
「よかったわ」
あらためてそのことを話した。
「最初はどうかって思ったのは確かだけれど」
「それでも心配したよりはなんだね」
「そうよ」
その笑みは言葉以上に物語っていた。
「美味しいわ。そうなのね、これがアメリカのラーメンなのね」
「口に合うよね」
「かなりね。アメリカ人も結構お料理いけるのね」
「二十世紀はともかくとしてね」
アメリカもかつては料理に造詣が低いと言われていた。ただしその評価はあくまで二十世紀までのことで二十一世紀からは好転しているのである。
「今はそうだよ」
「移民の国だから食べる料理のジャンルは」
「多いよ」
それも理由にあるのだった。
「実際に」
「それがアメリカなのね」
「うん。ただね」
ここでスターリングは何故か首を傾げさせた。そうして言うのであった。
「このラーメンはどうもね」
「どうも？」

「お醤油が入ってるね」
それがあるというのである。
「ハンバーガーにもそんな気がするし」
「お醤油が」
「ほら、この学校って日本にあるじゃない」
「そうよね」
八条学園は日本にある。それをだ。
「日本にね」
「だからかな。気のせいじゃなくて本当に」
「確かに」
蝉玉はここでそのアメリカ風のラーメンとハンバーガーをまた食べてみた。そうすひて確かめた結果わかったことは。彼女はそのことを言った。
「入ってるわ」
「やっぱり」
「しかも大豆のお醤油ね」
それがだというのだ。
「日本風のね、間違いなくね」
「そうなんだ。やっぱり」
「中国のお醤油と日本のお醤油って違うのよ」
蝉玉は今度はこのことを話した。

第百七十五話　ラーメンとハンバーガーその六

「それもかなりね」
「同じお醤油でもね」
「アメリカのお醤油だってそうでしょ？」
この時代はアメリカでも醤油を使っている。一応大豆である。
「ただこういうのには使わないでしょ」
「うん、あえてそういうのは使わないラーメンとハンバーガーにしたけれど」
「それでも。少しだけ入れてるわね」
「隠し味にだね」
「ここってやっぱり日本だからね」
このことがここでは重要であった。
「日本人って日本のお醤油がないと抵抗があるから」
「あれで味付けに五月蝿いからね」
「口に出しては言わないけれどね」
これが日本人であった。言葉には出さずあれこれ考えていたりして掴みどころがないという評価は不変であった。ここから狐だの狸だのとも呼ばれている。
「それはね」
「そうだよね。そういえばさ」
「今度はどうしたの？」
「中国のハンバーガーも」
「あっ、そういえば」
言われてそのことに気付いた彼女だった。
「少しだけだけれど。日本のそれも入ってたわね」
「日本人も食べるように」
「！？しかも」
「そういえば」

今度は二人共気付いた。そのラーメンを食べながら。
「この麦は」
「そうよね。お肉も」
「あのお店だって」
「日本産ね」
「確かに」
このことにも気付いたのだ。
「アメリカの料理でも」
「中国の料理でも」
二人はそのことにも気付いたのだ。
「日本の素材を使ったら」
「日本人の舌にも合うわね」
「しかもここのシェフってね」
「あのお店の料理人も」
気付くことはさらにもあった。まだまだあるのだ。
「日本人だし」
「それなら余計に」
話がどんどん進んでいく。
「日本人に合うようになっていても」
「当然なのね」
「日本人らしいね」
スターリングは今度は思わず苦笑いになっていた。
「一見アメリカのものでも」
「そう、中国のものでも」
「実は日本人に合うように」
「そうしてあるなんて」
わからないようにして、である。それが極めて日本的だというのである。
「思わぬところに隠してあってね」
「そこが凄いどころだね」

蝉玉もスターリングもそれぞれ言う。
「それでさ」
「ええ、何？」
「この後だけれど」
その話をするのだった。
「どうする？すぐにキャンプファイアー行く？」
「すぐに？」
「それか教室に一旦戻る？どうする？」
「そうね。一旦戻らない？」
蝉玉はハンバーガーを食べながらそのうえで述べるのだった。
「一旦ね」
「戻るんだ」
「まだ時間があるし」
だからだというのである。戻る理由はだ。
「それでキャンプファイアーまではね」
「時間をもう少し潰すのね」
「それでどうかな」
こう蝉玉に対して提案した。
「皆のところにね」
「そうね。じゃあ一旦戻りましょう」
「それでクラスに戻ったら」
スターリングはラーメンを食べながらくすりと笑って述べた。

第百七十五話　ラーメンとハンバーガーその七

「日本のラーメンとハンバーガーがあったら笑うね」
「うふふ、そうね」
蝉玉はそれを聞いて楽しげに笑った。
「それがあったらね」
「彰子ちゃんとか管とかね」
「他に七海もね」
彼女の名前も出た。日本人なのは言うまでもない。しかも日本系の国家を祖国に持つ面々はこの三人だけではなかったのである。
「カムイとかダンもだしね」
「日本系の国家だしね」
日本といっても一口に言えないものがあるのである。アイヌ連邦や琉球王国もかつては日本であり日本の味には通じているのである。
「合わせて五人か」
「ひょっとしたらひょっとするわね」
笑いながらそんな話をしていた。そうしてだった。
教室に戻るとだった。皆いた。テンボとジャッキー以外はだ。
「あれっ、あの二人は？」
「さあ」
「どっか行ったみたいだけれど」
教室の中を見回してもやはりいなかった。
「隔離されてる？」
「みたいよね」
「どうやら」
そう言われても皆あまり騒いでも心配してもいなかった。何しろあの二人は気付いたら揉め事を起こして捕まる日々を過ごしているからである。
「じゃあ二人は仕方ないってことで」

「そうよね」
「それでも注文はするけれど」
「余ったのは適当な人が食べて」
こう言い合って話を決めてだ。彰子が携帯を取り出した。
「あっ、すいません」
こう言って頼み込んでいた。
「それじゃあラーメンとハンバーガー。五十人前ずつ御願いします」
こう言うのだった。スターリングと蝉玉はその彰子の話を聞いてすぐに彼女に問うた。
「あの、一体」
「何してるのかしら」
「あっ、二人もいなかったのね」
彰子はここで二人に気付いたのだった。二人に顔を向けて告げる。
「そういえば」
「あれっ、皆いるし」
「テンボとジャッキー以外は」
やはりその二人はいなかった。
「いるみたいだし」
「何かあったの？」
「ちょっとね、時間があるから」
「皆ここで休んでるのよ」
そうだというのだ。喫茶店に使われた教室の中は机も椅子も一旦外に出されていてがらんとなっている。皆その中に座っているのである。
「そうしているけれど」
「二人もなの？」
「うん、ちょっとね」
「まだ時間があったから」
二人もその理由は同じであった。

第百七十五話　ラーメンとハンバーガーその八

「それで帰って来たんだけれど」
「皆いるとは思わなかったわ」
「あれだね」
トムが明るい顔で言ってきた。
「皆考えることは同じってことだね」
「そうなるみたいだね」
「確かにね」
二人もそれで納得することになった。皆それぞれ御茶やお菓子を口にしている。店の残りものであることはすぐに察しがついた。
「それで彰子ちゃん今」
「何処に電話したの？」
「出前したの」
彰子はそうしたというのだ。
「管君のお家にね。特別にね」
「管のお家っていったら」
「あの学校の中の日本料理店の」
「そうよ、そこにね」
おっとりとした声で話す。
「注文したのよ」
「ラーメンとハンバーガーって」
「和食なのかしら」
「和食よ」
彼女が言うにはそうであった。
「これはね」
「いや、それはかなり」
「無理があるんじゃないの？」
二人は今の彰子の言葉に速攻で突っ込みを入れた。

「何ていうかそれは」
「やっぱりね」
「そうかしら」
しかしそれを言われても動じていない彰子であった。
「私は別に」
「そうじゃないっていうの？」
「やっぱり」
「ええ、だって」
ここでその出前が来た。それは。
魚のだしのラーメンと豆腐のハンバーガーである。二人はそれを見て。
「まこれはね」
「確かにね」
二人はそれを見て頷くのだった。
「何ていうかね。これはね」
「和食ね、確かにね」
「皆で食べようよ」
彰子はその魚のだしのラーメンと豆腐のハンバーガーを皆に見せて話す。
「いいわよね、これで」
「そうだね。これはこれで美味しいしね」
「それじゃあ」
スターリングと蝉玉もそのラーメンとハンバーガーを食べていく。
既にかなり食べていたがそれでも気合を入れて食べるのであった。

ラーメンとハンバーガー　　完

２００９・１２・２１

第百七十六話　相変わらずの二人その一

相変わらずの二人

秘密の作戦室において。ロシュフォール先生は風紀部員達の話を聞いていた。そうしてそのうえで目を閉じて瞑目するような顔になっていた。

「そうか、いつも通りか」

「はい、そうです」

「全く以ってです」

「困ったことだな」

「何をしても変わりません」

「全くです」

報告をする風紀部員達は直立不動で述べていく。

「あの変わらなさはです」

「恐ろしいまでです」

「そうだな」

ここで先生の目が開いた。

「わかっていても呆れることだ」

「それで先生」

「どうしましょうか」

ここで風紀部員達は彼に問うてきた。

「これ以上隔離していてもです」

「何の効果もないと思われますが」

「それはわかっている」

先生は自分の椅子に座ったまま冷静に述べた。

「それもだ」

「ではここは」

「釈放ですね」

「丁度隔離する時間のリミットだ」

それも理由だというのである。
「釈放してやれ」
「はい、それでは」
「今から」
「しかし。あの二人はだ」
先生の呆れた言葉はさらに出された。
「これで何度目だったか」
「隔離されたことでしょうか」
「そうだ。何度目だったか」
彼は言うのだった。
「あの二人を隔離したのは」
「わかりません」
「いつものことですから」
彼等もこう答えるしかなかった。
「とにかく毎度毎度問題を起こしますから」
「ですから」
「どうしたものかな」
それを聞いて静かに言う先生だった。今度はそうなるのだった。
「処置なしか」
「だからといって悪人ではありませんし」
「騒動は起こしてもです」
風紀部員達もそれを言うのだった。
「退学になるようなこともしませんし」
「ただのお騒がせ人物というだけで」
「ではこれからも同じだな」
先生はここまで話を聞いて述べたのだった。
「それは」
「はい、何かあれば隔離して」
「それでやっていくしかありません」
風紀部員達も投げやりであった。

「ここはです」
「仕方ありません」
「わかった。ではそうしていこう」
先生もここで決断を下した。
「これからもな」
「はい、それでは」
「その様に」
そんな話をしてからだった。テンボとジャッキーは釈放された。
しかし二人はその中においても一向に静かにはなっていなかった。
「だから俺はスルメシュを追っていたんだ！」
「ショッカーをだ！」
「ああ、わかったわかった」
「それはな」
白衣の風紀部員達はそんな彼等の相手をしながらうんざりとしていた。

第百七十六話　相変わらずの二人その二

「だから今は大人しく帰れ」
「いいな、釈放したからな」
「早く出て行け」
まさに追い出しであった。
「いいな、早くな」
「おのれ、国家権力の陰謀なんだな！」
「私達がそんなものに屈すると思ってるの！」
「うちは私立校なんだけれどな」
「国家権力って何なんだ」
部員達の呆れる顔は続いていた。
「全く。何処の探偵なんだ」
「何を勘違いしているんだ」
「だが俺達は屈しないからな！」
「国家権力の陰謀で私達の推理は破られないわよ！」
既に言っていることが滅茶苦茶である。だが二人は釈放された。
釈放されたというよりは見事に叩き出されてしまったのである。
そして叩き出されて世に再び出された二人は。こう言うのだった。
「あの怪しい一団をまた探すか」
「そうね、何処に行ったのかしら」
あの妖怪達の話をする。しかし彼等は妖怪とは気付いていない。
「スルメシュ、絶対に逃がさないぞ」
「ショッカーといえどもね」
二人の言っていることはそれぞれ全く違うがそれは意に介してはいなかった。
「今度こそはだ」
「謎を解いてあげるわ」
滅茶苦茶なことを言ってである。そうしてある場所に向かう。そ

こは学園の大グラウンドである。そこで丁度キャンプファイアーの準備をしていた。
そしてそこに辿り着くと。いきなり呼び止められた。
「あんた達何してんの？」
「今ここ忙しいんだけれどな」
こう周りが呼び止めてきたのである。
「忙しいから何か手伝ってくれるかな」
「手とか空いてる？」
「別に何もないが」
「どうしたっていうの？」
何はともあれ二人はその言葉に応えるのだった。
「俺達は今スルメシュを探してるんだが」
「それで忙しいけれど」
「何もないって今言ったのに」
「いきなり矛盾してるし」
周りは二人のその言葉にまずは首を傾げさせた。
「まあいいや。それでだけれど」
「手伝ってくれるかしら」
「困っているというのなら是非」
「やらせてもらうけれど」
人助けには抵抗のない二人であった。頭の構造はともかくその正義感や善意には何の問題もないのである。決して悪人ではないのである。
「それは」
「是非ね」
「よし、じゃあ頼むな」
「いいわね」
「それじゃあ早速」
こうして二人はキャンプファイアーの準備をするのだった。そうしてだった。

それはすぐに終わった。二人はそれが終わるともうその妖怪達のことを忘れてしまっていた。見事に忘れてしまったのである。

「怪しい」

「そうね」

またこんなことを言ってきたのだった。

「あそこにいる男」

「あれは何かあるわ」

目の前にいるその人間を見て言うのだ。ただの学生をである。

「絶対にな」

「そうね。企んでいるわ」

こう言ってである。彼等はその人を追っていくのであった。するとである。

向こうでも二人に気付いた。そして言うことは。

「まずいな、あの二人か」

テンボとジャッキーのことはあまりにも有名になっている。それで二人が尾行してきていることに嫌なものを感じたのである。

それで捲くことにした。それしかなかった。

「下手なことになったら困るからな」

そう言って曲がり角で物陰に隠れる。するとだった。

第百七十六話　相変わらずの二人その三

「いない！？」
「消えた！？」
「まさかあいつは」
「組織の一員！？」
「何でそうなるんだ？」
それを言われて難しい顔になる彼だった。そして一人呟いた。
「あの二人は噂以上の馬鹿なんだな」
そしてその馬鹿二人はというと。
「そうか、それならだ」
「こっちにだって考えがあるわよ」
「考え！？」
また首を傾げさせる彼だった。
「何をする気なんだ？」
「こうなったらだ」
「徹底的に追うわ」
「こっちだな」
「ええ、気配がするわ」
こう言ってある場所に向かうのであった。物陰を調べもしない。
「逃がすか！」
「私達から逃げられると思っているの！」
「いや、気付いてないし」
物陰から出ながらの言葉であった。
「それってどうなのかな。まあいいや」
ここで彼は自分のズボンのポケットから携帯を取り出した。そうして連絡するのであった。
「ああ、僕」
「どうしたの？」

携帯の向こうから返事が来た。
「そろそろ時間だから？」
「うん、そうだけれど」
にこにことした顔で話す。
「それでどうかなって思ってね」
「そうね」
向こうの声も微笑んでいた。
「それじゃあそろそろね」
「喫茶店で待ち合わせしてね」
「それでね」
そんな話をしながら何処かに消えていく彼だった。彼のことはこれで終わった。しかしテンボとジャッキーはこれからなのであった。
「おのれ、何処に逃げた！？」
「私達の目は誤魔化せないわよ！」
言いながら周りを見回している。
「どうやら俺達はとんでもない奴等と闘っているみたいだな」
「そうね」
そして勝手にこんなことを言い出した。
「それならこっちもだ」
「ええ、そうね」
「徹底的にやるわ」
こう言い出すのである。
「容赦はしない」
「何があってもね」
「それじゃあジャッキー」
「ええ、テンボ」
今度は顔を見合わせる。そのうえで言い合う。
「敵を容赦することなく」
「探し出しましょう」
「じっちゃの名にかけて！」

「やってやるわ！」
こんなことを叫びながら周囲を見回してだ。そのうえでまた走り去る。そして今度向かったのは何処かというと。歌劇場に来たのである。
「よし、ここだな」
「ここね」
見れば舞台も終わり後片付けをしている。そこで黒人に扮した部員が二人に気付いた。彼もそうだが皆それぞれ舞台をなおしていた。服はまだ脱いでいないのである。
「あれ、あの二人は」
「テンボとジャッキーだよな」
「そうよね、推理研究会のお騒がせコンビ」
歌劇部でも二人の評判はこんなものだった。
「何であの二人がここに？」
「また変なことやってるんじゃないかしら」
「いたぞ、あいつだ！」
「私の目は誤魔化せないわよ！」
その黒人の彼を指差して叫ぶのだった。

第百七十六話　相変わらずの二人その四

「あいつが犯人だ！」
「見逃さないわよ！」
「いや、僕確かに舞台で殺したけれど」
「私をね」
白人に扮した隣にいる女生徒が応える。
「だってデズデモナだし」
「僕はオテロだからね」
「そうよね、オテロなんだから」
「それはね」
舞台はオテロだった。ヴェルデイの最高傑作の一つである。シェークスピアの作品を歌劇にしたものだ。人間オテロが陥る悲劇である。
「確かに殺したけれど」
「死んだしね」
「そうそう」
そんな話をしているとであった。テンボとジャッキーは舞台に突っ込んで来て。そうしてそのうえでまた周りから見れば訳のわからないことを叫ぶのであった。
「容赦はしないぞ！」
「警察に引っ立ててやるわ！」
「俺達の目は誤魔化せないからな！」
「例えお天道様を誤魔化せてもね！」
「絶対に勘違いしてるよね」
「そうよね」
「また」
歌劇部の面々はそんな二人を見て事情を察した。
「どうしようかな、これは」

「説明してわかるかしら」
「無理だろうね」
それはもうすぐに却下された。
「あの二人だから」
「じゃあここは一体」
「どうしようかしら」
「お芝居をする？」
ここでオテロ役の彼が言った。
「それで二人を誤魔化すっていうのはどう？」
「誰かが犯人になって？」
「それで何とかする？」
こう提案するのであった。
「それだと何とかなりそうだし」
「よし、じゃあそれで」
「いきましょう」
こうして話が決まった。歌劇部の面々はもう舞台の直前まで来てオーケストラのピットを越えそうな二人の前で芝居をはじめたのであった。
まずはオテロ役の彼がだ。うずくまって叫んだ。
「何故ばれたんだ！」
「そうか、やっとか」
「罪を認めたのね」
それを見た二人は言った。
「これで事件は解決したんだな」
「そうね、これでね」
「遂にね」
こう言ってであった。二人はそれで納得した。
「後は警察に任せよう」
「そうね。これでね」
「さあ、来るんだ」

「罪を償おう」
周りが彼を舞台の外へ引っ立てていく。こうして全ては終わった。
事件は解決した。二人の仲では。二人はそれを見届けてまた述べた。
「よし、それじゃあな」
「帰りましょう」
「ああ、キャンプファイアーに行こう」
「そうね」
こう言い合って立ち去る。それで二人は騒動を忘れてしまった。
歌劇部の面々はそれを見届けてから。あらためて言うのであった。
「やれやれ、これでな」
「お騒がせ人物は去ったし」
「後は全部なおして」
「着替えて」
それぞれ話していく。
「キャンプファイアーにね」
「行きましょうよ」
「とにかく早く」
「そうだね。それにしても」
ここでまたオテロ役だった彼が言う。

第百七十六話　相変わらずの二人その五

「あの二人もかな」
「あの二人もって？」
「一体何が？」
「いや、キャンプファイアーに出るのかな」
そのことを気にしているのであった。
「やっぱり。どうかな」
「そうじゃないかしら、それは」
「あの二人もカップルだし」
「それはね」
「じゃあまた騒動を起こすのかな」
彼が危惧しているのはこのことであった。
「あそこでも」
「それは有り得るよな」
「確かに。あの二人だし」
「それだったら」
歌劇部員達はそのことを危惧しはじめた。それも当然のことだった。
「何もなければいいけれどね」
「本当に。首に鈴付けたらいいけれど」
「どうなるかな」
そんな話もするのだった。
「猫の方が扱いが楽だよね」
「というか猫は寝てばかりだけれどあの二人はね」
「かなりね」
厄介だというのである。
「やれやれ、どうなるかな」
「平和な終わりになって欲しいのに」

「爽やかにね」
そんな話をしていた。しかしであった。二人は歌劇場を出たところでまた騒動を起こすのであった。ある意味騒動を起こす天才である。
「あれは何だ！」
「あれは・・・・・犯行ね」
ゴミ箱を漁る烏を見て言うのだった。
「烏といえばだ」
「確かオーディンの従者だしね」
「そうだったな」
こうした知識は僅かだが持っている。持ってはいるがそれでもそれがいい方向には決していかないのがこの二人なのである。
「そうだ、ということはだ」
「あの烏はエウロパのスパイね」
「スパイ烏だ！」
「そうよ、そうに違いないわ！」
滅茶苦茶な思考だがそういう方向に至るのである。そうして二人は考えるのと行動が一緒である。というよりかは全く考えずに行動する。
「知行同一だ！」
「そうよ、やるわ！」
「やってやる！」
「こら、この烏！」
「カア？」
烏は二人に顔を向けた。尚この烏は赤い。連合にだけいるアカガラスである。連合では烏は黒いという命題も当てはまらない。
ただしエウロパでは烏は黒いものしかいない。だが二人はこのことを知らない。
「エウロパのスパイめ！」
「まさかこの学園の謎を集めてるの！？」

「だとしたら許せん！」
何故エウロパのスパイがこんなところにいなければならないのかということは二人の頭の中には全く考慮されていないことである。
「エウロパは連合の敵！」
「三百国共通の敵よ！」
これは連合の常識である。
「それならだ。最早容赦はしない」
「覚悟しなさい！」
俗に連合三百国というが実際はそれよりも遥かに多い。全ての国が連合加盟国として法的には対等に扱われている。確かに大国と小国の違いはあるにしてもだ。
「捕まえるぞ！」
「神妙にしなさい！」
「いいな！」
「さあ吐きなさい！」
こんなことを叫びながら烏に襲い掛かる。しかしであった。
「カア」
烏は一声鳴くと天に飛んで行った。それで難を避けたのだ。

第百七十六話　相変わらずの二人その六

しかし二人はそれを見て。また叫ぶのだった。
「逃げるか、それが証拠だ！」
「エウロパのスパイね！」
「そうだ、それに決まっている！」
「これではっきりしたわ！」
その天を飛ぶ烏を見て喚いていた。
「連合の敵が！」
「エウロパのスパイ！」
「エウロパのスパイ？」
「また馬鹿なこと言ってるんだな」
周りはそんな二人を見て呆れた眼差しであった。
「全く。何なんだ今度は」
「何で学校にエウロパのスパイが来るんだ？」
「理解不能だぞ」
しかし二人は別であった。
「許さん！」
「降りて来なさい！」
「さもないと許さないぞ！」
天に向かって叫ぶのである。
「エウロパの陰謀だけは！」
「何があってもね！」
「だからエウロパのスパイはな」
「こんなところに来ないって」
「ねえ」
そもそもそうである。しかし二人にわかる話ではない。
「そんなの常識だけれど」
「しかも烏じゃない、只の」

「また訳のわからないこと言うな」
「そうよね」
これが常識であった。しかし二人にはそもそも常識が存在しない。それでまた言い出したのである。最早誰の手にも負えない有様であった。
「おのれエウロパ！」
「生物スパイまで送り込むなんて！」
「いや、違うぞこれは」
「何だっていうの！？」
「俺の灰色の脳細胞が言っている！」
その誰もが頭を抱える頭脳が言っているというのである。
「エウロパは魔法使いを送り込んで来たんだ！」
「そうね、間違いないわ！」
そして同じだけ問題のある頭脳の持ち主こそがジャッキーであった。つまり厄介な存在が二倍どころか二乗なっているのである。
「どうする！？この事態！」
「やっつけるしかないわ！」
「探偵として！」
「ええ！」
「待っていろ伝説の魔術怪盗アルセーヌ＝ルパン五十一世！」
勝手にルパンを魔法使いにまでしていた。尚連合ではもうアルセーヌ＝ルパンは連合の人間になっている。連合を股にかけた怪盗になっているのである。
「ここで会ったが百年目だ！」
「今度こそ成敗してやるわ！」
「ええと、何だ？」
「話を総合すると」
周りは二人のここまでの話をとりあえず照合してみた。そうしてわかったことは。
「ルパンは魔法使いで烏に変装していて」

「それでエウロパのスパイ？」
「そうなるわよね」
「何だ、そりゃ」
皆ここまで考えてあらためて首を捻った。
「何ていうかそれって」
「意味不明？」
「っていうか矛盾した設定だし」
皆で言うのだった。
「何ていうか」
「もう滅茶苦茶」
「そうよね」
「けれど何かな」
さらに話すがそれでもだった。やはり訳がわからなかった。

第百七十六話　相変わらずの二人その七

しかもその間にもだった。彼等はまた言うのであった。
「怪盗を退治するのは俺達だ！」
「私達の仕事よ、だからこそ！」
「覚悟しろ！」
もう烏のいなくなったその空を見上げて話す。
「俺達を甘く見るなよ！」
「決して諦めないからね！」
「大理石の様な天に誓う！」
その空は快晴である。見事に晴れ渡っている。
その空を勝手に大理石の様なものに見てだ。それで言っているのである。
「俺達は勝つ！」
「どんな苦難にもね！」
「何があってもだ！」
「やってやるわ！」
「とりあえずどうする？」
「あのままいったらまた馬鹿やるし」
それはもう既にしていた。そんな彼等を見てまた言う皆だった。
「風紀部呼ぶ？」
「そうよね、ここはね」
「呼ばないとまた暴れるし」
「それだったら」
一人が携帯を取り出して風紀部を呼んだ。二人にとっての最大の天敵であるあの白い制服の彼等だ。その彼等があらためて呼ばれたのである。
彼等が出て来てだ。それですぐに呆れた顔になったのであった。
「何だ？またあいつ等か」

「全く、出て来たらすぐにか」
「いい加減にしてくれよ」
いつもは仮面を被った様に表情を変えない彼等がうんざりとしていた。何しろ追い出したばかりだというのに早速問題を起こしてきたからである。
「もうトラ箱に放り込むのもな」
「先生もうんざりしてるしな」
「どうする？」
「どうするって」
「あんた達がそれ言ったら」
「そうよ」
周りも困ることだった。お騒がせ人物を放置されてはだ。
「困るから」
「何とかしてくれよ」
「その為の風紀部でしょ？」
「それはそうだけれどね」
皆が周りから話すのだった。彼等もそれに応える。
「けれどな、釈放したばかりであんなことされたら」
「どうなんだよ」
「これって」
そのさらに騒ぐ彼等を見ての話である。風紀部にしてもうんざりとなっていた。
そのまま動こうとしなかった。動くに動けなかった。動きたくなかったからだ。
それでもであった。周りの声には勝てなかった。相当無神経な人間でもない限り周りの意見を聞かないことはない。だからなのである。
「仕方ないな」
「だよな」
「ここはな」

こう言ってであった。仕方ないといった様子で取り出したものはだ。空気銃であった。
「これでな。終わらせるか」
「睡眠薬は入れたか？」
「ああ、恐竜用のやつをな」
「ブロントサウルスのをな」
それをだというのである。
「如何にあの二人でもこれを撃てば」
「一発か」
「ああ、間違いない」
「だったらな」
そんな話をしながら照準を合わせて撃つ。それで何とかであった。二人はすぐに動きを止めてその場に倒れ込んだ。皆それを見届けてあらためて胸を撫で下ろすのだった。
「やれやれね」
「そうね」
「一時はどうなるかって思ったけれど」
「これで万事解決ね」
「有り難うね」
皆風紀部に感謝の言葉もかけていた。
「これで何とか」
「助かったわ」
「それじゃあこれからは」
こう言ってであった。騒動を終わらせてである。
そのうえでキャンプファイアーに気持ちを向けるのだった。それで話は終わった。騒動はこれで終わった。そして彼等の心は最後の楽しみに向かうのだった。

相変わらずの二人　　完

2009·12·26

第百七十七話　キャンプファイアーその一

キャンプファイアー

キャンプファイアーであるが。二年Ｓ１組の面々もいた。そうして今まさに火が点けられんとしている巨大なキャンプファイアーの周りに集まっていた。

そうしてそれを眺めながら。皆であれこれ話すのであった。

「やれやれっていうか」

「長いようで短かったわよね」

「そうだよね」

文化祭のことを振り返って話をしていた。

「準備も凄かったし」

「お店とお芝居も」

「色々あったなあ」

「全く」

火が点けられる前の台を見ながらしみじみと話すのであった。

「何ていうかね」

「とてもね」

「成功したし」

「万事よし、ね」

満足していた。それは間違いなかった。

そうしてその満ち足りた中でやがて。それぞれのカップルになっていくのだった。

中には。こんなカップルもあった。

「男同士で悪いな」

「いや、いい」

フランツとタムタムは一緒になっていた。野球部のバッテリーはこの時もだった。

「俺は同性愛者じゃないけれどな」

「俺もな」
二人はそうした趣味はない。だがそれでもなのだった。
「彼女がいないとな」
「それは仕方ないな」
それでバッテリーで一緒になっている。しかし周りはそんな二人を見ても至って落ち着いていた。そうしてそのうえで言うのであった。
「あの黄金バッテリーだけはな」
「ああして一緒じゃないとね」
「そうそう」
誰もゲイのカップルとは見ていなかった。野球部の黄金バッテリーとして見ているのである。この辺りが二人の評価が出ているところだった。
「ああじゃないと」
「何かしっくり来ないのよね」
こうまで言われる。二人のバッテリーは完全に認められていた。しかしであった。これがカムイや洪童だと。皆こう見るのであった。
「やっぱり一人だな、あの連中は」
「まあ想像していたけれど」
「予想通りだな」
「おい待て！」
「そりゃどういう意味だ！」
周りのその声に怒って返す二人であった。何故一人なのかは言うまでもない。
「俺だってな！彼女がいれば！」
「こんなことにはならないんだよ！」
こう喚くのであった。
「ちっ、何でなんだよ」
「俺達だけ何で彼女がいないんだよ」

言うことはこういうことだった。
「いい加減彼女できないか？」
「誰でもいいからな」
「そういう考えだから駄目なんだよ」
「それがわからないかしら」
「全く」
皆そんな二人を見て呆れていた。もてない理由はそこにあった。だが二人にはそんなことはわからなかった。全くわからないことであった。
それで二人はキャンプファイアーから離れた場所に座った。そんな二人を見ながらルビーとアンジェレッタは顔を見合わせて話をした。
「今の二人に近付くのはね」
「そうね。止めた方がいいわね」
「触らぬ神には祟りなしね」
「そういうこと」
こう結論付けられるのであった。
「若し今触ったらね」
「災厄に巻き込まれるから」
「大変なことになるわね」
こう言ってそれで止めるのであった。まさにそんな今の二人であった。

第百七十七話　キャンプファイアーその二

それで二人で如何にもむかついた顔で座りながら。まだ言っていた。
「やれやれ、キャンプファイアーなんてな」
「大嫌いだ」
「バレンタインもな」
「ああ、そうだな」
とにかくそうしたイベントが嫌いなのであった。
「そんなの糞食らえだ」
「ブラックホールの中に放り込んでしまえ」
「全くだ」
こう言ってであった。彼等はふてくれされた顔で座っていた。二人だけ別世界にいてそこで別の時間を過ごしているのであった。
その二人をよそに。周りはというと。
「それじゃあもうすぐね」
「そうだね」
「火が点けられて」
キャンプファイアーを待っているのであった。
「いよいよ」
「クライマックスだね」
大抵の面々は幸せな結末を迎えようとしていた。それは彰子も同じだった。
彰子はにこりと笑ってだ。皆と話すのであった。
「それじゃあ私は」
「ああ、彰子」
ここで同じ日本人の七海が彼女に声をかけてきた。
「あんた呼んでる人がいるわよ」
「私を？」

「そう、あんたをよ」
彼女を見て見てにこにことしていた。
「呼んでるけれど」
「私をって」
「はい、行って」
こう言うのである。
「そっちにね」
「ええと」
「迷ってる暇はないわよ」
彼女に考える時間を与えない。そうしてであった。
何時の間にかその人の前に来た。それは。
「えっ」
「あれっ、小式さん」
家持だった。彼がいたのである。
「どうして君が」
「ええと、これって」
彰子は彼の前に連れて来られて目をしばたかせる。そしてそれは彼女だけでなく彼もであった。表情は変わらないがそれでも言うのだった。
「何があったのかな」
「だから。キャンプファイアーよ」
今も彰子の横にいる七海が二人に言ってきた。
「キャンプファイアーだからね」
「だからって」
「どういうことかな」
「だからよ」
今では二人のその鈍さに少し呆れていた。
「あれよ、あれ」
「あれじゃわからないけれど」
「僕も」

二人はここでも二人であった。
「何なのかしら」
「よかったら言ってくれないかな」
「こりゃ駄目だ」
思わず本音を出してしまった七海だった。呆れてしまっていた。
「こんなのじゃ先が思いやられるわね」
「先が？」
「先がっていうと」
「もういいわ」
七海は一旦言葉を切ってそれをリセットとして仕切りなおした。
「それでよ。とにかくね、二人になりなさい」
「二人になって」
「それで」
「踊りなさい」
それをするというのである。

第百七十七話　キャンプファイアーその三

「いいわね、折角のキャンプファイアーなんだし」
「けれどそれだったら」
こう言われても彰子のおっとりとした声は続く。やはりこうしたことにかけても彰子は彰子であった。そして家持も同じであった。
「カムイ君とか洪童君は」
「あの二人はいいから」
右手を横に振って答えた言葉である。
「どうでもいいのよ」
「どうでもいいの」
「放っておいていいわ」
完全に切り捨てていた。見事なまでに。
「どうせ馬鹿しかしないんだし」
「どうせって」
「だからいいのよ」
あくまでこう言うのであった。
「あの二人はね。キャンプファイアーじゃそうしておくのが一番いいのよ」
「それじゃああのまま？」
「そう、放置」
七海はここで今も憮然とした顔で二人並んで座っている彼等を見た。今にもテロを起こしそうな、そんな顔で座り込んでいるのであった。
「それでいいから」
「いいの」
「何かしようとしたら縛って隔離するから」
そうするとまで言うのである。
「気にしないでいいわ」

「どうしてもなのね」
「ええ、とにかくあの二人はいいのよ」
あくまでこう言うのであった。
「わかったわね」
「あまり賛成できないけれど」
「賛成しなくてもいいのよ」
七海の二人に対する言葉は何処までも突き放したものであった。
「とにかく。あんた達はね」
「二人で」
「いればいいの」
「そう、それでいいのよ」
こう言うのであった。
「これでわかったわね」
「何となく」
それに頷く彰子であった。七海は彼女のその動作を見届けてからそのうえで今度は家持に顔を向けて。そうして彼にも言うのであった。
「あんたもね」
「うん」
「わかってるわね」
「一応は」
こう返すのであった。
「わかったよ」
「わかったらいいけれど」
彼の反応にはかなり疑問を抱いていた。
「頼んだわよ」
「それじゃあ」
「本当にわかってるのかしら」
いい加減彼女も不安を覚えた。
「あんた本当に」

「わかっているよ、本当に」
「だったらいいけれどね。とにかくね」
「一緒にいればいいんだね」
「ええ、そうよ」
それは頷くのであった。
「それじゃあいいわね」
「うん、じゃあ」
彰子が頷いて応えた。七海はそれを受けてから二人の下を離れる。
しかしであった。
今度は彰子の方から。彼女に尋ねるのであった。
「あの、七海」
「どうしたの？」
「七海はどうするの？」
「私は私でね」
その問いには思わせぶりな笑みで返すのであった。
「ちょっと用事があるから」
「そうなの」
「だからね」
本音を隠しての言葉は続く。

第百七十七話　キャンプファイアーその四

「二人で楽しんでね」
「私達で？」
「僕達ってことなんだ」
「そうよ」
また笑顔で二人に話した。
「わかったわね。それじゃあね」
「ええ、何となくだけれど」
「わかったよ」
こうしてであった。七海は二人を後にした。そうして彼女の行く先は。
彼女はすぐにマルコのところに来た。そのうえで彼に話した。
「やっておいたから」
「早いね」
「手早く確実に」
料理の作り方みたいなことも言う。
「それが一番だからね」
「それでなんだ」
「まあ二人だけどうでもいいから放置してるけれど」
ここでまたカムイと洪童を見る。二人は相変わらずであった。くすぶっている。
「何か不発弾みたいだけれどね」
「不発弾なんだ」
「それか地雷か」
どちらにしろ相当物騒である。
「そんな存在だけれどね」
「何であそこまでもてないのかな」
「だってガツガツしてるじゃない」

七海の女の子の視点で二人を述べた。これはかなり公平でしかも冷静なものであった。彼女は見るべきものは見ている人間なのだ。
「何かにつけて彼女欲しいでしょ」
「一日一回は叫んでるよね」
「しかも相手は誰でもいいっていう感じだし」
このことも指摘するのであった。
「それじゃあとてもね」
「もてないんだ」
「無理ね」
一言で切り捨てた。
「そんなの絶対に。もてないわよ」
「だからああなんだ」
「もてる方がおかしいわよ」
容赦のない言葉が続く。七海も言う時は言う。
「あんなのじゃね」
「あんなのなんだ」
「そうよ。二人共顔はそんなに悪くないのよ」
まず言うのは顔だった。人間どうしても第一印象が重要になってしまう。これはこの時代においても変わることのないことであった。
そして次に言うポイントは。
「それとルックスもね」
「悪くないよね」
「特にカムイはね」
彼が特にだというのである。
「垢抜けてるしすらりとしてるし」
「もてそうなんだけれどね」
「黙ってればいいのよ」
こうまで言うのだった。
「カムイは特にね」
「洪童は？」

マルコは彼のことも問うた。一人だけだと不公平だと内心思ったからである。
「どうかな、あっちは」
「洪童も洪童でいいのよ」
いいというのである。
「面白いでしょ、人間として」
「ハイテンションで裏表がなくて」
それが洪童である。そういう性格なのだ。
「コメディアン気質だよね」
「女の子ってそういうのも好きなのよ」
「いいんだ」
「普通にしてればね」
ただし言葉が付け加えられた。
「それでいいのよ」
「けれど洪童も」
「普通じゃないから」
身も蓋もない言葉とはまさにこのことだった。本当に何の用者もない。

第百七十七話　キャンプファイアーその五

その普通でない状況が何であるのかというとまさにこれであった。
「毎度毎度ね」
「じゃあどうすればいいのかな」
「はっきり言って黙るのが一番ね」
それだというのである。
「彼女彼女って言わないことね」
「それだけでいいんだ」
「そう、それだけよ」
シンプルイズベストな言葉である。
「それだけでいいのよ」
「何か楽だね」
「あの二人には物凄く難しいけれどね」
「彼女が欲しいなんて言わないことが？」
「まず無理ね」
容赦のない言葉がさらに続けられていく。
「あんな状況じゃね」
「困った話だね」
「見ているこっちも呆れるしね」
「だよね。何度も何度もね」
「バレンタインになると暴れるし」
こんなこともするのである。
「あれは。かなりね」
「ああはなりたくないね」
何気にマルコもきつい。それもかなり。
「だからもてないのよ」
「二人共だね」
「彼女彼女って言い過ぎなのよ」

「同じ男としてね」
「いや、それは言い過ぎなんじゃ」
「っていうかあの二人は極端だから」
だからだというのである。
「もうあんまりじゃないかな」
「まあ言われてみれば」
実際に七海もそれは否定しなかった。できなかったと言ってもいい。何しろことあるごとに騒いで揉め事を起こす二人であるからである。無理もなかった。
「昔の映像とかも見てもね」
「昔の映像って？」
「二十世紀の日本だけれど」
「また凄い昔の話だね」
「その時のね」
とにかくその時の日本の話にもなっていた。
「女の子の映像なんかを見てもね」
「騒ぐんだ」
「滅茶苦茶騒ぐのよ。当時の女の子っていいなってね」
「その頃の日本人の女の子ってそんなに美人揃いだったんだ」
「それだけじゃなくてね」
勿論それもあるという。しかしそれだけではないのだ。
「学校での体育での服だけれど」
「ジャージじゃないの？」
この学園ではジャージである。これはこの時代の連合ならばどの学校でも同じである。男も女も上下ジャージだ。夏になると精々半ズボンにティーシャツになる。
「やっぱり」
「二十世紀の日本で僅か。数十年の間だけれどね」
「凄く短い間だね」
「その間のことだけれど」

とにかくその短い間での話だという。
「その時は女の子の服装は違っていたのよ」
「ジャージじゃなくて？」
「ブルマーっていうのだったのよ」
「ブルマー！？」
マルコはブルマーと聞いて眉を顰めさせた。

第百七十七話　キャンプファイアーその六

「何、それ」
「やっぱり知らないわよね」
「そんな服あるの」
「あったのよ。ショーツみたいな形でね」
「うん」
「生地はポリエステルと木綿が混ざっていて色が黒とか赤とかでね」
こう説明していく。
「女の子はそれをはいて授業に出ていたのよ」
「ショーツのままで授業をしていたみたいな感じかな」
マルコは首を少し傾げさせてその想像するものを述べた。こう考えると彼にしても内心かなりいやらしいものを感じていたのも事実である。
「それじゃあ」
「まあそんな感じね」
七海もそうだと言う。
「それか上はジャージとかシャツで下は水着とかって感じね」
「それは危ないね」
「当時の日本はそんな服装だったのよ」
その僅か数十年の時期はそうだったのである。
「凄いでしょ」
「それじゃあやばい犯罪とか多かっただろうね」
「実際それで色々なところから批判があがってね」
「廃止になったんだね」
「スパッツとか半ズボンとかジャージとか」
「今みたいな感じに」
実際にその頃から体育の服装は決まったのである。少なくとも女の子の下着はそれで決まり連合全体に広がったのだ。そういう流れ

であったのだ。
「なったんだ」
「そうだったのよ」
「今それ復活させたら恐ろしいことになるね」
「私は嫌よ」
はっきりと言い切る七海だった。
「太股丸出しでお尻のラインとかもはっきり出るから」
「その映像を二人が見たんだ」
「それで大騒ぎだったのよ」
「まあそうだろうね」
それはわかることだった。実によくである。
「で、騒いでどうせ」
「御名答」
もうマルコが何を考えたか。既に見抜いていた。
「ブルマー復活させろっていうのよ」
「黙らせたんだね」
「二人の頭思いきりぶん殴ったわ」
実力行使だったのである。
「速攻でね」
「そんなこと言う方が凄いね」
「だからもてないのよ」
これではもてないのも道理だった。少なくとも女の子に好感が持たれる筈がない話だった。
「おまけに相手は誰でもいいっていうから」
「しょうがないね」
「そんな二人がまた暴れたらね」
「やっぱり殴るんだ」
「これでね」
何かの漫画の如く何処からか巨大なハンマーを持ち出してきた。
それで殴るというのだ。

「黙らせるわ」
「やっぱり実力行使なんだ」
「やってやるわよ」
しかも本気であった。
「その時はね」
「まあ穏便にね」
「穏便に一発で済ませてあげるわ」
しかし殴るというのである。それは外せないというのである。
「それだけでね」
「一発で穏便なのかな」
「苦しまないわよ」
だからだという。
「それでいいでしょ」
「そんなものかな」
「そうよ。それじゃあね」
そんな話をしてから。彼の前に手を差し出してきた。
そのうえで言うのだった。
「いいかしら」
「僕でよかったら」
マルコは微笑んで返した。こうして二人は踊りはじめる。キャンプファイアーがはじまろうとしていた。

キャンプファイアー　　完

２００９・１２・２０

第百七十八話　カレーとは何かその一

カレーとは何か

「それじゃあさ」
「そうね」
「踊ろう」
「曲もはじまったし」
皆はそれぞれ笑顔で話をはじめそのうえで踊りはじめた。しかしであった。
「ちっ、俺達ってよ」
「何なんだよ」
「全くな」
カムイと洪童は不機嫌そのものの顔で座り込んだままだった。二人に声をかける者は誰もおらずそれで孤独でかつ陰惨なオーラを放っていた。
その中で。彼等はまた言い合うのだった。
「なあ」
「何だ？」
「ストレスたまらないか？」
カムイが洪童に尋ねてきた。
「ちょっとな」
「ちょっとどころじゃないな」
これが洪童の返答だった。
「かなりな」
「それでどうする？」
カムイはあらためて彼に問う。
「このままストレス溜めておくか？」
「それはないだろ」
ストレスを溜め込む様な趣味は洪童にはない。確かに彼は彼女と

いう存在に対して餓えてはいるがそれでもマゾではないのである。
そこが違うのだ。
「そんなのしても何にもならないぞ」
「じゃあどうする？」
「彼女見つけるか」
またこんなことを言い出すのであった。
「誰かいないか？」
「いるだろ、誰か」
カムイはやや無責任な調子で述べた。
「一人位はな」
「じゃあ今から探すか」
「そうだな、それがいい」
こんな話をしたうえで立ち上がる。そうして誰かいないか探し回りに出た。彼等にとって幸いなことに今その七海はマルコとのダンスに夢中だった。彼等のことは忘れてしまっていたのだ。
それを幸いに誰かいないか探しはじめたが。これが面白いまでにいなかった。
「おい、誰もかよ」
「誰もいないのか？」
「何でなんだ？」
女の子が見当たらないことに不平を漏らしていた。誰もがカップルになっている。見れば一人でいる男もいない。彼等だけであった。
そんな寂しい中を進みながら。また話す二人であった。闇夜の中心に燃え上がるキャンプファイアーの火だけがやけに眩しい。
「こんなことって」
「有り得るのかよ」
「しかも見渡す限りな」
「カップルだけだよな」
「ああ」
二人にとってはさらに悪いことにであった。周りはカップルしか

いないのであった。これは精神衛生的にもかなり悪いことであった。
そうして二人は次第にやさぐれていった。だがここで。
「御二人はどうされたのですか？」
二人に声をかける者がいた。
「一体」
「あれっ、その声は」
「ラメダスさん？」
「はい、そうです」
気付けば彼がいた。丁度二人の前に立っていたのです。
「私ですが」
「ああ、また急に出て来てくれたのよ」
「どうしたんだよ、それで」
「何かお困りでしょうか」
彼は親切な物腰で二人に尋ねた。
「どうも焦っておられる様ですが」
「ああ。これはな」
「気にしないでくれよ」
彼に対しては天邪鬼になった。

第百七十八話　カレーとは何かその二

「別に何ともないし」
「そうそう」
「お困りではないのですか」
「まあ特にな」
「それはな」
「わかりました」
ラメダスはまずは二人の言葉をそのまま受け取った。しかしそれからであった。
彼はあらためて二人に言ってきた。
「それではです」
「あれっ、何かあるのか？」
「ひょっとして」
「これから晩御飯は如何でしょうか」
二人を食事に誘って来たのである。
「お嬢様が今からお夕食なのですが」
「ひょっとして一緒にってことか？そりゃ」
「そういうことだよな」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのである。
「如何でしょうか、それで」
「やっぱりカレーなのかな、晩御飯って」
「マウリアらしく」
「鶏のカリーです」
やはりであった。しかも所謂チキンカレーだというのだ。
「日本風のです」
「おっ、いいな」
「キムチがあれば尚更だな」

二人は日本風カレーと聞いて喜ぶ声をあげた。連合では各国ごとに様々なカレーがある。日本風カレーがその中でもかなり人気のカレーなのである。

とろりとしていてそのうえじっくり煮込まれている。その味は極め付けなのである。だからこそ二人共喜ばしい声をあげたのである。

「じゃあそれでな」

「御願いするよ」

「わかりました、それでは」

こうしてラメダスによって案内される。そこは屋台であった。

二人は屋台の前に来て。怪訝な顔になって彼に問うた。

「あのさ」

「屋台だけれど」

「それが何か？」

ラメダスの返答は何でもないといった調子であった。

「何かありますか？」

「屋台だけれど」

「いいのかよ」

「屋台でカレーを出すのですが」

その返答は変わらなかった。

「それが何かおかしいでしょうか」

「マウリアじゃそうなのか」

「屋台でカレーを」

「いえ」

ところがであった。それは断るラメダスだった。

「それはありません」

「えっ！？」

「ないって！？」

「お嬢様はいつも私達の用意するものを召し上がられます」

こう言うのである。セーラは学校でもいつも左右にラメダスとベッキーが控え二人が出す食事を食べる。これは学校の食堂で食べる

場合も同じである。
「ですから」
「屋台では食べない」
「そうなのか」
「確かにマウリアでも屋台はあります」
それはあるとは言う。
「カレーのものもです」
「じゃあやっぱりあるじゃないか」
「そうだよ」
「お嬢様は召し上がられたことがありません」
二人にとっては訳のわからない話になっていた。全く以って、である。
「そうしたお店でのカレーは」
「じゃあこれは何なんだよ」
「そうだよ、屋台じゃないか」
「なあ、どう見てもな」
「屋台そのものだよな」
「それを演出したのです」
ラメダスはここでまた言うのであった。

第百七十八話　カレーとは何かその三

「お嬢様が一度屋台のカレーを食べてみたいと仰ったのです」
「ああ、それでか」
「それでなんだな」
これで二人もやっと話がわかった。ようやく、である。
「それでわざわざ屋台か」
「それでなんだな」
「はい、その通りです」
また答えるラメダスだった。
「おわかり頂けましたでしょうか」
「それで俺達も一緒に」
「お客になってか」
「お金は頂きませんので」
それはいいというのである。
「思う存分お召し上がり下さい」
「じゃあそうさせてもらうか」
「御言葉に甘えてな」
二人は彼の言葉に頷いた。しかしここでこうも言うのだった。
「けれど二人だけだとな」
「ああ、そうだよな。何かな」
「俺達ばかり美味いものを食うってのもな」
「よくないよな」
こう言うのである。
「だからここは」
「なあラメダスさん」
「はい、他の方々もですか」
「呼ばないか？もっとな」
「賑やかにしたいんだけれどさ」

「畏まりました」
二人の申し出を笑顔で受ける彼だった。
「それではその様に」
「ああ、それじゃあ決まりだな」
「おおい、誰でもいいから来いよ」
二人は早速周りにいる学園の面々に声をかけた。
「カレーあるぜ、食べ放題な」
「それもただでな」
「えっ、カレー！？」
「それもただで？」
皆この言葉にすぐに顔を向けた。
「いいな、それって」
「そうね」
「和風カレーな」
「どうだい？」
二人はそのカレーがどういったカレーなのかも話した。
「何杯でもいいってな」
「チキンカレーな」
「私あれ大好きなのよね」
「僕もね」
和風チキンカレーと聞いて余計にであった。彼等は乗り気になった。
そうしてその屋台に向かう。既にそこにはテーブルや椅子も並べられている。そうしてそこに座るとだ。すぐにその山盛りのカレーが出て来たのである。
「これはまた」
「とろりとして美味しそう」
「お米もいい感じね」
皆そのカレーを見て口々に言うのだった。
「お野菜も鶏肉もたっぷりだし」

「いいじゃない」
「ああ、皆で食べようぜ」
「文化祭の終わりにね」
見ればカムイと洪童はもうそのカレーを食べている。見れば既にルーと混ぜられているそおカレーに卵とソースを入れている。
そうしてそのカレーを食べて。さらに言う言葉は。
「おいおい、本当にな」
「美味いよな」
「ああ、滅茶苦茶な」
それは間違いなかったのだった。
「こんなに美味いカレーってな」
「滅多にないよな」
「だよな」
「カレーはマウリアよ」
ここでベッキーが出て来て言うのだった。彼女もいるのだ。

第百七十八話　カレーとは何かその四

「だからね。これはね」
「当然っていうんだな」
「美味いのは」
「和風でもね」
その前提があってもであった。
「美味しくて当たり前よ」
「そうか、カレーはやっぱりマウリアだからな」
「それでか」
「和風っていうから考えたのよ」
どうやらこのカレーはベッキーが作ったものであるらしい。彼女の今の言葉からこのことが察せられた。彼女は料理もできるらしい。
「どうするかってね」
「和風カレーっていったら」
「やっぱりとろりだよな」
「そうだよな」
「なあ」
カムイと洪童は和風カレーについてこう話していく。
「何ていってもな」
「それがまずあって」
「これにお米はな」
「白いジャポニカ米な」
米の種類も重要なのだった。ルーだけではないのである。
「日本人のタ大好きなあれな」
「あれじゃないとな」
「そうよ、それも考えたのよ」
ここでまたベッキーが言ってきたのだった。
「和風カレーには日本のお米よ」

「だよな、やっぱり」
「下手にインディカ米でやってもな」
「合わないのよね」
ベッキーがここでまた二人に言うのだった。
「お米って連合でもインディカ米が主流よね」
「まあそうだな」
カムイが彼女の言葉に応えて頷いた。
「日本圏以外は大体そうだな」
「っていうかよ」
洪童がその彼に突っ込みを入れた。
「日本圏って日本の他は御前の国と琉球だけだよな」
「まあそれはそうだけれどな」
カムイもそれは認めた。日本圏とは日本とアイヌ民族の国家であるアイヌ連邦と琉球民族の国家である琉球王国の三つしかない。尚日本にとってはどちらも交流の深い兄弟国家である。
「それでもだよ」
「その三国じゃジャポニカ米なんだな」
「それが主流だな」
こう言うのだった。
「炒飯とかもそれで結構作ったりするな」
「あまり合いそうじゃないな」
洪童は炒飯についてすぐに述べた。
「カレーにしろあっさりとしたインディカ米が合うからな」
「けれど日本人はやっぱりジャポニカ米なんだよ」
「それは外せないか」
「ああ、外せないな」
どうしてもというのである。言いながらそのジャポニカ米のカレーを食べ続ける。見ればカムイの方が洪童より美味そうに食べている。
「それはな」

「そうか」
「カレーにしろな」
そして話はカレーに戻るのだった。
「ジャポニカ米に合うカレーになったんだよ」
「まず米があってか」
「米が主食だからな」
そこに核心があるというのである。まずは米ありけりなのだった。
「それがあってルーがあるからな」
「ルーが先じゃないのね」
ベッキーがこう突っ込みを入れてきた。
「お米なのね」
「そうじゃないのか？」
「ルーが先じゃないの？」
ベッキーが言うにはこうであった。

第百七十八話　カレーとは何かその五

「やっぱり。カレーなんだから」
「いや、お米だろ」
「だからカレーだからね」
二人の話は平行線になろうとしていた。
「ルーがないとお話にならないし」
「しかしお米がないとな」
「そうは言ってもね。やっぱり」
「いや、だからだ」
話が完全に平行線になりこのままでは衝突になりそうになったところで。また出て来た人間がいた。それはまさにカレーの女王様であった。
「どちらも大事ですよ」
セーラは気品に満ち溢れた声で二人に告げてきたのだった。
「お米もルーも」
「あっ、セーラかよ」
「お嬢様、これは」
カムイは普段どおりだったがベッキーは控える。この辺りに二人の立場の違いが出ていた。
「申し訳ありません、つい」
「いや、別にな」
カムイはさりげなく彼女のフォローをした。
「何でもないしな」
「そうなのですね」
「ああ、何でもないよ」
こうセーラにも説明するのだった。
「ただカレーの話をしていただけだしな」
「そうですね。ルーあってのお米でありお米あってのルーなのです」

「どちらも対等ってわけだな」
「はい」
まさにその通りだというのである。
「その通りです。これはです」
「これは？」
「パンであっても同じです」
パンも話に出て来た。
「エウロパではパンに付けて食べもしますが」
「まあ連合でもな」
「それするけれどな」
カムイと洪童はその食べ方を知っていた。
「それと同じか」
「そうみたいだな」
「はい、その時もパンあってのルーでありルーあってのパンであります」
やはり両方があってこそだというのである。
「ですから」
「成程、それでか」
「どっちもなんだな」
「マウリアではナンですが」
セーラはこんなことも言った。
「カリーに付けて食べるのは」
「あの平べったいパンだよな」
「あれだよな」
「はい、あれです」
セーラは二人の問いにもそのまま答えた。
「あれをルーに付けて食べます」
「成程な」
「そういうことか」
「はい、そうです」

また答えるセーラだった。
「それを食べます」
「そうだよな。パンでもな」
「それもルーあってなんだよな」
「その通りです」
「成程、それでなんだ」
「どっちもなのね」
周りの食べている生徒達も彼女のその言葉に頷いた。
「お米もルーも大事」
「考えてみればそうね」
「だからジャポニカ米でね」
今度はベッキーの話である。
「それとルーに面白いものを入れたわよ」
「そういえばこれは」
ここでカムイがルーを食べながら言うのだった。
「このカレーの中に味噌入れてるな」
「わかったみたいね」
「ああ、これは味噌だな」
そのルーを御飯と食べながらさらに話していく。

第百七十八話　カレーとは何かその六

「あとは。山椒も入ってるな」
「それもわかったのね」
「味噌の独特の風味と山椒の辛さだ」
彼は食べながら難しい顔になっている。食べながらそのうえでルーの中にあるそのものを少しずつ、だが確かに検証しているのである。
「間違いないな」
「御名答。そこまでわかっていたら見事よ」
「そういうことだな。それで和風を出したんだな」
「その通りよ。まあもっと食べてくれたらいいから」
ベッキーの言葉は笑っていた。
「お嬢様と一緒に食べ放題だから」
「ここまで考えた和風カレーはないな」
「そういえばな」
洪童もここで言ってきた。
「なあカムイ」
「何だ？」
「日本って蒟蒻カレーもあったな」
このカレーの話もするのだった。
「そうだったよな」
「ああ、あれか」
「あれって菜食主義者のカレーか？」
それではないかというのだ。
「俺は食べたことはないけれどな」
「野菜カレーはマウリアにもありますよ」
ラメダスがここで言った。
「それもちゃんと」

「いや、そうじゃなくてな」
洪童はそうした野菜カレーではないというのだ。
「あれだよ。本当に蒟蒻のな」
「蒟蒻カレーですか」
「日本にはそういうのもあるんだよ」
こう話すのである。
「それは知らなかったみたいだな」
「蒟蒻は知ってましたが」
「それはね」
ラメダスだけでなくベッキーも言う。
「けれどそれをカリーに入れるのですか」
「そういうこともできるの」
「あれは何でできたんだ？」
洪童はそれを言うのであった。
「何なんだ？あのカレーは」
「禅宗ですね」
セーラが応えてきた。
「それは」
「あれっ、セーラ知ってるのか」
「はい」
実際に知っていると答える彼女だった。
「見たことはありませんが聞いたことはあります」
「それでか」
「禅宗の方々は精進もの以外は駄目でしたね」
「ああ、そうだ」
カムイが彼女の言葉に応える。この辺りは流石に詳しい。
「それはな」
「それで蒟蒻カレーを召し上がられるのです」
「他は精進ものしか入れてないんだな」
「そうです」

蒟蒻以外もそれだというのだ。
「そういうカレーなのです」
「そうだったんだな」
「はい、あれはあれで面白いカレーです」
「それはわかったよ」
洪童もそれは納得した。しかしであった。

第百七十八話　カレーとは何かその七

彼はいぶかしむ顔で。さらに彼に対して話すのだった。
「なあ、それでな」
「それで？」
「何でそんなこと知ってるんだ？マウリア人のあんたが」
彼はそれをセーラに対して問うのだった。
「日本の禅宗のことにそこまで詳しいんだ？」
「はい、それはです」
その質問にもすぐに答えてきたセーラであった。
「ヒンズー教のことですので」
「へっ、ヒンズー教って？」
「何言ってるんだ？」
洪童だけでなくカムイも今の言葉には？となってしまった。
そしてそのうえで。あらためて二人でセーラに対して問うのだった。
「あのな、禅宗って仏教なんだぞ」
「言っておくけれどな」
「はい、だからです」
こう言われてもセーラのその落ち着いた表情は変わらない。いつもの神秘的でそこに深い叡智を讃えた微笑みと共に話すのである。
「仏教だからです」
「仏教とヒンズー教って全然別物なんだが」
「同じインド起源でもな」
「いえ、同じものですよ」
しかしセーラはこう言うのだった。
「全く同じものではないですか」
「えっ、同じって！？」
「何を言ってるんだ！？一体よ」

「ですから。仏教はヒンズー教の一派なのです」
彼女はこう主張するのだった。
「ヒンズー教のです」
「・・・・・何でそうなるんだ？」
「意味がさっぱりわからないんだがな」
「仏教の開祖は釈迦ですね」
セーラは今度は流石に誰でも知っていることを話してきた。仏教の開祖については流石に間違える人間は連合には存在しない。連合では仏教徒も多いのである。
「そうですね」
「ああ、それはな」
「その通りだよ、それはな」
二人の言葉はいささか引っ掛かるものにはなっていたがそれでも言うのだった。
「だからです。釈迦はヴィシュヌ神の転生した姿ですから」
「ヴィシュヌっていったら」
「あのマウリアの」
「調和神です」
セーラはこのことにも答えた。
「三大神の一柱です」
「そうだったよな。あの神様は」
「マウリアのな」
「釈迦はその偉大なヴィシュヌ神の転生の一つなのです」
そうだというのである。
「ですからヒンズー教の一派なのです」
「・・・・・わかるか？」
「いいや」
洪童はカムイの言葉に首を横に捻るばかりであった。

第百七十八話　カレーとは何かその八

「全く」
「そうだよな。俺もだ」
それはカムイもであった。二人共完全に狐につままれた顔になっていた。
「何処をどうやったらそんな発想ができるんだ」
「さっぱりわからねえ」
「ヒンズー教のことなので勉強したことがあるのです」
だからだというセーラであった。
「ですから」
「何か話が全然わからなくてな」
「混乱してるんだけれどな」
二人のその混乱は実際に顔に出てしまっていた。そしてそれを隠すことすらできなくなっていた。
「まあそういう考えもあるのか？」
「どうなんだろうな」
「今度はその蒟蒻カレーもいいですね」
そんな二人をよそにこんなことも言うセーラであった。
「それは御願いできるでしょうか」
「はい、お嬢様」
「それでは」
ラメダスとベッキーがその彼女に応えて言うのであった。
「明日にでも」
「できますので」
「それでは明日のお昼に」
その時にだというのだ。
「召し上がりたいと思います」
「畏まりました」

「では明日の昼食はその蒟蒻の和風カレーに」
「はい」
「お飲み物は玄米茶にしましょう」
「あとは和風サラダとお味噌汁、それに揚げを煮ますので」
こう主に話す二人であった。
「それではその様に」
「これで宜しいですね」
「はい、それで御願いします」
こうして彼女の翌日の昼のメニューは決まったのであった。
そしてそれを聞いていたカムイと洪童の感想は。
「何か随分と本格的な和食だな」
「ああ、完全に菜食だしな」
「別に完全なベジタリアンではありませんが」
セーラはこのことは断るのだった。
「ですがそうしたヘルシーな食事も好きです」
「マウリアは菜食主義者が多いんだったな」
「はい、それは確かに多いです」
セーラはカムイのその問いに頷いた。
「それもかなり」
「そうだったよな。それでか」
「身体にいいのですよ」
にこりと笑って彼に返す。
「お野菜は」
「まあそれは知ってるけれどな」
「それはな」
これはもう言うまでもないことだった。二人もよく知っていることだ。
「それじゃあマウリア人って健康的なんだな」
「やっぱり」
「成人病は少ないですね」

また言うラメダスだった。
「そうした病気は連合と比べますと」
「そうなんですか、やっぱり」
「そうなりますよね」
「はい、そうです」
ラメダスの返答は続く。
「その通りです」
「それに香辛料も使うし」
「汗もかくから」
「脂肪率もあまり高くないわよ」
今度はベッキーが答えてきた。
「そう考えていくとカレーっていいでしょ」
「ああ、そうだな」
「本当にな」
二人もそれで納得する。そしてセーラがまた言った。
「では皆さん」
「ああ、それじゃあ」
「皆でこのカレーをだな」
「召し上がりましょう」
こう言ってそうして食べていくのであった。カップルでなくとも楽しく過ごせたキャンプファイアーであった。

カレーとは何か　　完

２０１０・１・４

第百七十九話　ダンスがはじまりその一

ダンスがはじまり
いよいよ音楽がはじまろうとしている。皆その中で。
「さて、いよいよね」
「そうだよね」
「じゃあ」
カップル同士で顔を見合わせてである。はじまりを待っていた。
そうして曲がはじまると二人一組で踊りはじめる。典型的なフォークダンスだ。
アンもその中にいた。ギルバートを相手に踊っている。そうしながら彼に対して言ってきた。
「ねえ」
「どうしたんだ？」
「私の踊りどうかしら」
彼の前で身体をひらひらとさせながらの言葉である。
「この踊り。いい？」
「いいっていうよりかは」
「ええ」
「何か可愛い感じだな」
彼はそれだというのである。
「どうにも」
「可愛いの」
「ああ。慣れた感じもする」
それもあるのだという。
「慣れているのはやっぱり」
「そうよ、子供の頃から踊っていたのよ」
このことを彼に語る。
「実際にね」

「やはりそうか」
「だってフォークダンスっていったらイスラエルじゃない」
このことも言うのであった。これは本当のことでフォークダンスはイスラエルからはじまっている。それで彼女も子供の頃から踊っているのである。
「だからだけれど」
「それで慣れているんだな」
「そういうこと」
微笑んで述べるアンだった。その間にも彼の動きに合わせてひらひらと踊っている。それはまさしく赤い蝶そのものの動きであった。
その蝶になりながら。さらに言うのだった。
「それでね」
「それで？」
「ギルバートも動きいいじゃない」
このことも言うのである。
「かなり。練習とかしたの？」
「いや、別に」
それはないという。
「ダンスはあまり踊ったことはない」
「ふうん、そうなんだ」
「それで自信はないが」
「いいわよ」
今の彼の足のステップを見ての言葉である。
「充分にね」
「そんなにいいか」
「充分よ」
にこりと笑って告げるのだった。
「それだけ動ければね」
「だといいがな」
「実は私もね」

ここで少し苦笑いになるアンであった。そうして言うのだった。
「最近ダンスとかしてなかったし」
「高校に入ってからか」
「そう、漫画部じゃない」
言わずと知れたことである。彼女は漫画部のホープである。それでいつもルビーという頼りになるアシスタントのサポートを受けて描いているのである。
「だからそういうのはね」
「していないのか」
「そういうこと。だから大丈夫かしらって思ってたけれど」
「いいと思うぞ」
こうアンに告げる彼だった。
「そこまで動ければだ」
「そう。ならいいけれどね」
「それでだ」
さらに言う彼だった。

第百七十九話　ダンスがはじまりその二

「アン」
「今度は何かしら」
「この後どうするんだ？」
「この後って？」
「ダンスの後だ」
そのことを彼女に対して尋ねてきたのである。
「それからは自由時間だけれどな」
「そうね。飲まない？」
くすりと笑ってギルバートに対して言うアンだった。
「皆でね」
「僕達だけじゃなくてか」
「だって二人だけだと言われるわよ」
だからだというのである。
「だからね。皆を誘ってね」
「そうだな。それがいいな」
「そうでしょ？それでいいわよね」
「ああ、僕はそれでいい」
ギルバートは彼女のその提案に賛成したのだった。
「それではだ」
「そうね。それじゃあ後はね」
「ダンスの後はパーティーか」
「皆で賑やかにやればいいじゃない」
こんな風にも言うのだった。
「いつも通りね」
「そういえばそうだな。うちのクラスは何かあったらいつも」
「最後は皆で賑やかにだからね」
「それがいいな」

そしてそれでいいというギルバートだった。
「最後の最後まで楽しくな」
「そういうことよ。それじゃあね」
「まずはダンスを楽しんでだな」
「ええ、まずはね」
こんな話をしながらそのダンスを楽しむ二人だった。それは二人だけではなく。七海が会わせた彰子と家持もであった。彼等も見事に踊っていた。
彰子がひらひらと舞い家持がそれをリードする。そうして見事に踊っていた。
「あれっ、あの二人って」
「ダンスできたんだ」
「意外っていうか」
「しかも」
そんな二人を見て少しばかり驚いている周りであった。
「上手いし」
「確かに」
「音感あったんだ」
しかも二人共である。それがまた意外なのである。
「身体の動きもいいし」
「軽やかよね」
「どっちもね」
彰子だけでも家持だけでもなかった。どちらもであるのだ。
二人はキャンプファイアーに照らされながら踊っていく。それを見ながら七海はにこりとしていた。そうしてそのうえで今はパートナーになっているマルコに対して言うのであった。
「ねえ」
「どうしたの？」
「あの二人よ」
目で彼女達を見ながらの言葉だった。

「いいわよね」
「いいっていうか」
マルコは七海の目を見て二人を見ながら述べた。
「凄いね」
「あそこまでいいとは思わなかったわ」
これは彼女の言葉である。
「本当にね」
「予想以上ってことだよね」
「ええ。踊りが上手なだけじゃなくて」
それだけに留まらないというのである。
「あれはね」
「そうだね。息も合ってるよね」
「日本人同士とかじゃなくて」
「相性ってやつかな」
「そうそう、それよ」
まさにそれだというのである。相性だというのだ。

第百七十九話　ダンスがはじまりその三

「二人って合ってるのよね」
「人と人としてなんだ」
「合ってるわ、それもかなり」
太鼓判さえ押すのであった。
「見事なまでにね」
「ううん、それって何か凄いね」
マルコは話を聞きながらこう述べた。
「相性までいいなんて」
「気付いてるでしょ？彰子のこと」
七海は踊りながらマルコにこのことを囁いてきた。
「実はね」
「わかってるよ、好きなんだよね」
「そうよ。本人絶対言わないけれど」
「管のことがね」
「そうなのよね。管の方はどうかわからないけれど」
「まあ管はね」
彼に関しては少し苦笑いになって述べる二人であった。
「無口だしね」
「何考えてるかわからないしね」
「だからどうなのかわからないけれど」
「少なくとも相性はいいわ」
それは確かだというのである。
「フランツとタムタムみたいにね」
「あの黄金バッテリーみたいに」
「ええ、滅茶苦茶いいわよ」
こうした言葉まで出してそれを表現するのであった。
「太鼓判押せるわよ」

「じゃあ七海のしたことは正解だったんだ」
「予想以上の正解よ」
そこまでだというのだった。
「あれはね」
「ううん、何か凄いことになりそうだね」
「とはいっても凄いことになるのはまだ先ね」
それはだというのだ。
「それはね」
「先なんだ」
「だって。彰子はね」
まずは彼女についてから話すのだった。
「ああいう性格じゃない。おっとりしてるから」
「それも半端じゃなくね」
彼女のそのおっとりさはあまりにも有名である。クラスでも随一である。
「だからね。進展もね」
「ないんだ」
「まああまり期待できないわね」
そうだというのである。
「これはね」
「それで管は」
「あんなのだし」
彼についても言うのであった。
「何考えてるかわからないから」
「確かにね。あれはかなりね」
「そういう二人だからね」
「急な進展は望めないかな」
「デートでもよ」
カップルとしては当然の行動である。まずはデートから全てがはじまる。連合においては恋愛についてはこう考えられているのであ

る。
「それに辿り着くことでもね」
「まだまだなんだ」
「かなり気を長くして待たないと駄目ね」
そこまでだというのである。
「あの二人の場合はね」
「やれやれだね。それじゃあ」
「ええ。待つしかないわ」
また言う彼女であった。
「見ている方もね」
「じゃあ今二人を合わせたのは？」
「合わないと何もはじまらないからよ」
だからだというのである。微笑んで述べた言葉であった。
「だからよ。最初はね」
「見合ってからなんだ」
「お見合いから全てははじまるのよ」
今度はこんな風にも言った。
「だから今もね」
「わかったよ。じゃあ見させてもらうことにするよ」
「そういうことよ。それじゃあ」
ここまで話して話題を変えてきた七海であった。今度はこう言うのである。

第百七十九話　ダンスがはじまりその四

「いいかしら」
「いいって何が？」
「私達は私達でね」
微笑は今度はマルコに向けていた。そのうえで言うのである。
「踊りましょう」
「ダンスだけ？」
「勿論それだけじゃないわよ」
微笑はそのままであった。
「これが終わったら飲むんじゃない」
「ああ、そうだったね」
「楽しくやりましょう」
そのことを言うのであった。
「最後の最後にね」
「そうだね。お祭は最後まで楽しまないとね」
マルコもラテン系らしく明るく笑って返すのだった。
「お話にならないからね」
「そういうことよ。それじゃあ」
「うん、じゃあ」
こうしてダンスに専念することになった二人だった。二人の動きも見事なものであった。
皆それぞれダンスを踊りカレーを食べて楽しい時間を過ごした。
それが終わるとであった。
皆ある店に集まっていた。彰子の兄がアルバイトをしているあの居酒屋にだ。そこで話をするのであった。全員集まってそれで席についている。
「それじゃあ皆今回はね」
「うん」

「それじゃあ」
アンネットが音頭を取っている。喫茶店を仕切り舞台でヒロインだったからだ。
「乾杯！」
「乾杯！」
杯を打ち合わせあってそのうえで。酒を飲む。
それから色々なものを食べる。まずは楽しいはじまりであった。
「それにしてもよ」
「どうしたんだ？」
ルシエンがアンネットに対して問う。
「何かあったのか？」
「いや、今回だけれど」
「文化祭のことか」
「上手くいったわね」
このことを喜んでいるのだった。
「それもかなりね」
「そうだな。大成功だったな」
「予想以上よ」
彼女はこうまで言うのだった。
「もうこれはね」
「そんなによかったのか」
「だって喫茶店も繁盛したし」
まずはそれについてであった。
「それに舞台もね。好評だったじゃない」
「アンネット随分頑張ってたからな」
「私だけじゃないわよ」
それは自分だけではないと。このことも言うのであった。
「あんただって」
「俺もか」
「王子役で頑張ってお店も手伝ってたじゃない」

「だからか」
「そうよ。他の皆もよ」
それは彼だけではなく皆もだというのである。
「皆も頑張ってくれたからね。成功したのよ」
「皆があってか」
「そうよ。皆のおかげよ」
ビールのジョッキを片手に笑いながらの言葉である。
「皆がいたからよ」
「そうなのか」
「皆の力よ」
そしてまた言うのであった。
「それがあったからよ」
「成功したっていうんだな」
「その通り」
言いながらそのビールを勢いよく飲む。一気に半分空けた。
「そうじゃなかったらとてもね」
「成功しなかったか」
「一人じゃどうしようもないわよ」
こうも言うアンネットであった。
「絶対にね」
「そうか。本当に皆でなんだな」
「そうよ。まさか私一人で全部できたとかは言わないわよね」
「ああ、それはない」
このことはルシエンも言ってきた。

第百七十九話　ダンスがはじまりその五

「流石にそれはな」
「一人でできることなんて限られてるのよ」
アンネットはそう言っていくのだった。
「けれど。皆だとね」
「できるんだな」
「そういうことよ。力を合わせてこそよ」
「そうか。だったら他のこともだな」
「勿論よ」
また微笑んで言う彼女だった。
「一人より二人」
「そして二人より皆か」
「皆が力を合わせると何でもできるわよ」
アンネットはそのことを確信していた。それもかなり強くである。
「そういうことなのよ」
「そうだな。じゃあ今度何かあってもな」
「皆で力を合わせれば成功するわよ」
「その通りね」
アンジェレッタがその話を聞きながら微笑んでみせてきた。
「一人の力なんて所詮はね」
「人間なんて一人じゃね」
アンも言ってきた。
「漫画も描けないし」
「いや、それは描けるだろ」
ロザリーがすぐに今のアンの言葉に突っ込みを入れた。
「それは」
「限度があるのよ」
そうだというのである。

「一人で描くとね」
「そんなになの」
「そうなのよ。漫画って描くのが大変なのよ」
こうビールをぐいぐいと飲みながら話していく。そばかすのあるその顔が見る見るうちに真っ赤になっていく。そして牛のサイコロステーキも食べている。
「手間がかかって本当に」
「だからルビーもいるのね」
「頼りになるアシスタントよ」
こう言って彼女も褒めるのだった。
「いえ、アシスタントっていうよりは」
「いうよりは？」
「パートナーね」
そこまで言うのであった。
「本当にね」
「そうなの。パートナーなの」
「漫画についてはそうよ」
微笑みながらアンジェレッタに話すのだった。当然ルビーにもだ。
「頼りにしてるわよ、実際に」
「ユダヤとかそういうのにはこだわらないんだな」
ロザリーはこのことを言ってきた。
「漫画には」
「確かにユダヤ教は大事よ」
これは譲れなかった。イスラエル、ひいてはユダヤ人を作っているものは何か、それは紛れもなく宗教そのものだからである。
「けれどね。漫画はね」
「それとは別なんだな」
「戒律に関わらないから」
だからだというのである。
「それは別にね」

「成程ね」
「それでなんだな」
「そういうこと。とにかくね」
アンは二人に対してさらに話していく。
「漫画のことじゃルビーは本当に頼りにしてるわよ」
「私もよ」
そのルビーも言ってきた。四人は同じ席にいてそれで飲んでいるのである。
「私だってね。アンにアシスタントしてもらってるし」
「あれっ、ルビーも漫画描いてるのかよ」
ロザリーは彼女のその言葉を聞いて少し驚いた声をあげた。

第百七十九話　ダンスがはじまりその六

「アシスタント専門じゃなかったのかよ」
「最近は私もメインで描いてるのよ」
そうだというのである。
「ちゃんとね」
「そうだったのか」
「何時までもアシスタントじゃ終わらないわよ」
にこりと笑ってそのロザリーとアンジェレッタに対して述べるのだった。
「やっぱり漫画が自分がメインで描いていくものだからね」
「そうそう」
アンもにこりと笑って彼女の今の言葉に同意する。二人は横に並んで座っている。そのうえでアンジェレッタとロザリーに対しているのである。
「だからね。私も最近はね」
「描いてるってわけよ」
「へえ、成長したってことかしら」
「そうだな」
アンジェレッタとロザリーは話を聞きながらこうルビーを評した。
「メインでやるようになったって」
「本当にな」
「それでね」
ここでまた言うルビーだった。
「今新作のアイディア探してるのよ」
「新作の？」
「そうなのよ」
こうアンジェレッタに返した。
「今ね。何を描こうかってね」

「アンジェレッタの漫画って面白いのよ」
アンの言葉である。
「特にそのネタがね。絶品なのよ」
「へえ、そうなのか」
「そうなのよ。それでね」
「ああ」
「それに付き合うのも面白いのよ」
そうだというのである。
「これがね」
「そうなのか」
ロザリーはそれを聞いて目を動かした。
「それはまた」
「興味持った？」
「ああ、まあな」
アンの問いに問われるまま頷いた。
「それはな」
「それじゃあ話は決まりね」
「決まりって？」
「だから。今度のネタ探しの話よ」
アンはこう言ってきたのだった。
「ネタのね」
「ネタ探しって。あたしもか」
「だから興味持ったのよね」
またこのことを問うてきたのであった。言葉尻を完全に捉えていた。
「ネタにね」
「だからなのか」
「面白いのよ、これがまた」
アンの言葉はさらに続く。
「大冒険になるわよ」

「ネタ探しに大冒険！？」
それを聞いてまた首を傾げるロザリーだった。
「何だそりゃ」
「何だって大冒険なのよ」
言葉はそのまま返されていた。
「本当にね」
「冒険って。ネタ探しにかよ」
「そうよ、冒険なのよ」
「何だよそれって」
怪訝な顔で思わず突っ込むロザリーだった。
「話がわからねえけれどよ」
「話は参加してわかるわよ」
「今度は参加かよ」
「そう、冒険の旅に参加よ」
話はさらに訳のわからない方に動いていた。少なくともロザリーにとっては訳のわからない話になっていた。しかも完全にそうなってしまっていた。
「どうかしら」
「何かよくわからないけれどわかったよ」
ロザリーは首を捻りながら返事を返した。
「それじゃあね」
「いいのね、じゃあ」
「ああ、いいさ」
また応えるロザリーだった。
「じゃあルビー」
「ええ」
「それで頼むな」
あらためて彼女に対して言うのだった。
「その冒険にな」
「ネタ探しがこれまた楽しいのよ」

そのルビーはにこにことしながら彼女に話す。
「とてもね」
「漫画のネタ探しにかよ」
「そういうことよ。さあ、それじゃあ」
ルビーからあるものを出してきた。それは。
白い色の酒だった。ミルクにも見える。ロザリーはそれが何なのか問うた。
「これって馬乳酒か？」
「そうよ」
まさにそれだというルビーだった。
「馬のね」
「モンゴルのだよな」
「ええ」
馬乳酒といえばやはりであった。モンゴルであった。モンゴル人が昔から飲んでいるのがこの白い酒なのである。モンゴル人の心の酒である。
「ナンもお勧めのね」
「私もこれは好きだよ」
微笑みながらその酒を受け取るのだった。
「美味いよな」
「そうよね。独特の味でね」
「癖があるけれどそれがいいんだよ」
言いながらもう飲んでいた。そのうえでの言葉である。
「これがな」
「そうよね。本当にね」
そんな話をしながら打ち上げを楽しんでいた。そんな楽しい終わりであった。
ダンスがはじまり　　完

2010・1・8

第百八十話　ネタ探しへその一

ネタ探しへ

文化祭が終わって三日後。ロザリーは自分の席で気持ちよく寝ていた。昼休み、昼食後のささやかだが貴重な休息の一時であった。しかし。その休息の時は儚く消え去ったのであった。

「起きて」

「んっ！？」

まずはその声に気付いた。

「誰だよ、何かあったのか？」

「私よ」

「あれっ、あんた」

ルビーであった。彼女の前に出て来たのである。

「何の用なの？」

「今日の放課後よ」

こう彼女に言ってきたのである。顔をあげた彼女の前に立っているのだ。

「いいわね」

「今日のって何がだよ」

「だから三日前言ってたじゃない」

「三日前って」

起き抜けの頭で考える顔になった。そのうえでの言葉である。

「確か文化祭の打ち上げだったよな」

「その時馬乳酒飲みながら言ってたじゃない」

「ああ、そういえば話してたよな」

問われてそのことを思い出してきた。それは。

「ネタ探しだったか？」

「そうよ、それよ」

にこりと笑って言ってきたルビーだった。

「思い出してくれたわね」
「ああ、まあな」
言われてそのまま返す形になっていた。
「そのことか」
「わかったらいいわね」
「よくわからないけれどわかったよ」
これがロザリーの今の返答だった。
「何を探すのかはわからないけれどな」
「面白いものを探すのよ」
ルビーは笑ってその彼女に返してきた。
「それは間違いないわ」
「面白いものをか」
「面白くないとネタにならないでしょ」
「まあそれはな」
当然のことである。ロザリーにしても頷くしかない言葉だった。
「その通りだな」
「わかったらいいわね」
「今日の放課後だよな」
「そうよ。楽しんで行くわよ」
「ああ、わかった」
彼女の言葉に頷いてである。そのうえで放課後を迎える。その運命の放課後になると。
ルビーの方からロザリーの席に来た。そうして言ってきたのだ。
「じゃあいざよ」
「行くんだな」
「その通り。ネタ探しの冒険にね」
「冒険なのかよ」
その表現に首を傾げさせるロザリーだった。
「ネタ探しが」
「そうよ、冒険よ」

あくまでそうだと言うルビーだった。
「これは冒険なのよ」
「何かわからないけれど用意するものはあるのか？」
「二本の足」
まずはそれだという。
「それとね」
「他には何だ？」
「少しばかりの勇気よ」
次はそれだというのである。やはりネタ探しに相応しいものではない。
「それと人一倍の好奇心よ」
「その三つなんだな」
「そうよ、その三つだけよ」
にこりと笑ってロザリーに告げてきた。
「どう？やってみる？」
「ああ、頷いたからにはな」
これは最初からそのつもりだった。彼女にしろである。

第百八十話　ネタ探しへその二

「一緒に行かせてもらうさ」
「その三つはもう持ったわね」
「話を聞いていたら持ってることに気付いたよ」
微笑んでこう返してみせるロザリーだった。
「たった今な」
「いいわ。それじゃあね」
「行くか」
「行く場所は」
そのことも言ってきたルビーだった。
「まずはね」
「まずは？」
「動物園よ」
そこだというのである。
「動物園に行くわ」
「動物園かよ」
「最近どうも話題になってることがあるのよ」
今のルビーの顔は怪訝なものである。しかしそれ以上に好奇心に満ちた、そうしたわくわくとした感じをあからさまにさせた笑顔であった。
「あそこでね」
「学園の中の動物園でかよ」
「何でもペンギンが空を飛ぶらしいのよ」
そうなっているというのである。
「オオウミガラスもね」
「おい、ちょっと待てよ」
今のルビーの言葉に思わず突っ込みを入れるロザリーだった。
そうしてそのうえで。彼女に対して怪訝な顔で問うた。

「今ペンギンが飛ぶって言ったよな」
「オオウミガラスもね」
「何でペンギンが飛ぶんだよ」
　このことを問い返した。
「ペンギンは空を飛ばない鳥だろうが」
「海を泳ぐ鳥よね」
「オオウミガラスもだよ」
　なおオオウミガラスの方が最初ペンギンと呼ばれていたのである。地球のオオウミガラスは絶滅してしまっている。これも連合では愚劣なエウロパ人の過去の蛮行の一つということにされていて学校の教科書にもはっきりと書かれていることであったりする。
「どっちも空なんてよ」
「飛ばないわよね」
「木の葉が沈んで石が泳ぐ様なものだぞ」
　こんな表現を使うロザリーだった。
「それってよ」
「とにかく不思議よね」
「不思議っていうか異常だろ」
　まさしくそうだというのだった。
「ペンギンとかオオウミガラスが空を飛んだらよ」
「だから見に行くのよ」
「ネタにしにだな」
「そういうこと」
　まさにその通りであった。
「それが本当なら実際に漫画にするから」
「漫画にするよりもっと凄いことじゃねえか、それってよ」
　ロザリーは話を聞きながら言った。
「本当にペンギンやオオウミガラスが飛んだら」
「今それで話題になってるのよ」
「だろうな」

あまりにも有り得ない話である。ならば当然であった。
「それはな」
「さて、それじゃあね」
「その動物園だな」
「ペンギンとオオウミガラスのところに行くわよ」
「よし、とにかくな」
「いざ冒険へ」
こうして二人は学園内の動物園に向かうことになった。そうしてそこに辿り着くとであった。
まずは寒い場所の動物のコーナーに行く。いきなり白熊が出て来た。
「またでかいな」
「白熊だからね」
こうロザリーに返すルビーだった。
「寒い場所にいると哺乳類って大きくなるのよ」
「それでなんだな」
「そうよ。アザラシだってそうだし」
今度はゾウアザラシが目に入った。これまた途方もなく大きい。右側のアザラシの鼻が象の様子になっている。左右のコーナーの中にそれぞれその巨体を見せている。だが左側のそれは頭が丸かった。

第百八十話　ネタ探しへその三

「右がキタゾウアザラシで左がミナミゾウアザラシだけれど」
「キタの方が大きいな」
「地球でもそうらしいけれど寒い場所の方がね」
「大きくなるんだな」
「そういうことよ」
そのゾウアザラシ達を見ながらの言葉だった。
「それはわかってくれたかしら」
「それはな」
ロザリーもそれはわかったと返しはした。
「それでもな。ゾウアラシはいいとしてだ」
「ペンギン？」
「そうだよ、それだよ」
まさにそれだというのである。
「その空を飛ぶペンギンってのは何処なんだよ」
「それはね」
話し合いながらさらに寒い動物オコーナーの先に進む。そうするとであった。
そこにいたのであった。ペンギン達がだ。彼等はちゃんと巨大な氷山と海水がある場所に入れられていた。ガラス張りのそこにである。
天井までである。そこはコンクリートだ。そのエリアを見てロザリーは言うのであった。
「これだよな」
「そうよ、ここがペンギンのコーナーよ」
まさしくそこであるというのである。
「ここがね」
「じゃあここのペンギンがか」

「空を飛ぶらしいのよ」
「それは本当か？」
ペンギン達を見てもまだ首を傾げるロザリーだった。顔もいぶかしむものになっている。
「どのペンギンもよ」
「そうは見えないっていうのね」
「隣もな」
ペンギンのコーナーの隣にはである。オオウミガラスのコーナーがあった。その彼等のエリアはペンギンのそれと同じ構造になっていた。
「全然見えないけれどな」
「空を飛べる筈がないっていうのね」
「ああ、そうだよ」
まさにその通りだというのである。
「どう見てもよ。あの翼じゃな」
ペンギン、オオウミガラス特有の明らかに泳ぐことに特化した翼を持っている。それをしきりに動かしている動作がかなりおかしい。
「飛べないだろ。あんたはどう思うんだ？」
「まあ私もね」
そしてこの認識はルビーも同じであった。
「それはね」
「どう見たって飛べないよな」
「ペンギンの体型では絶対に無理なのよ」
まさにそうだというのである。
「空を飛ぶのはね」
「じゃあ何でそんな噂が出てるんだ？」
「それを知りたくてここに来たのよ」
そうだというのである。
「そういうことなのよ」
「それでか」

「そういうこと。それでね」
「ああ」
「見たところ空は飛んでないわよね」
「泳いでるけれどな」
ペンギンもオオウミガラスもである。どちらも見事に泳いでいる。
空を飛んではいないが塩水の中は見事に泳いでいるのであった。
「それだけはな」
「してるわよね、ちゃんとね」
「これを間違えたんじゃないのか？」
ロザリーは言うのであった。
「こうして泳いでるのをな」
「勝手に空を飛んでるって」
「誰か。酔っ払いでもいてそう言ったんだろ」
そうではないかというのである。
「多分な。そういう感じだろうな」
「そうね。それじゃあ」
「何かネタにならなかったな」
「いえ、これはこれで使えるわ」
しかしここでこう言うルビーだった。

第百八十話　ネタ探しへその四

「これはね」
「飛ばないのにか？」
「四コマで動物もの描いてるのよ」
こんなことも言ってきた。
「それにね、使うわ」
「四コマにかよ」
「ちょっとアイディア出たから」
言いながら早速ノートとペンを出す。そうしてペンギンやオオウミガラスを見ながら何かを素早くかつ一生懸命に書いていくのであった。
「これで書いておいたわ」
「そうか。じゃあこれでいいんだな」
「そう、万事解決よ」
にこりと笑っての言葉であった。
「これでね」
「じゃあ帰るか」
「そうしましょう。そういえばね」
「んっ、今度は何だ？」
「ヒョウアザラシって知ってるかしら」
不意に何やら物騒そうな名前の動物が出て来た。
「そういうアザラシは」
「何かえらい凶暴なアザラシらしいな」
「そうなのよ。それもいるけれどね」
「この動物園にかよ」
「白熊並に隔離されてるのよ」
そうなっているというのである。
「これがね」

「そんなに凶暴なのかよ」
「凄いわよ」
こう言うルビーだった。
「もうね。かなりね」
「そんなに凄いのかよ」
「下手に近付いたら噛まれるから」
そこまでだという。
「がぶってね」
「がぶっ、かよ」
「まんま猛獣だから」
ルビーはきっぱりと言い切った。
「ヒョウアザラシって」
「そんなに危険なアザラシなのか」
「アザラシも色々よ」
こんなことも言うルビーだった。
「トドよりも怖いから」
「トドよりもか」
「そうよ、トドよりもね。当然セイウチよりもね」
「っていうと白熊よりもか」
白熊の話も出るのであった。白熊は猛獣でもあるのだ。
「危ないのか」
「でしょうね。だから猛獣指定も受けてるし」
「ふうん、海っていっても色々なんだな」
「あそこに行ったらもっと凄いのいるじゃない」
動物園の向こうの水族館の方を指差しての言葉である。
「あそこにはね」
「恐竜だよな」
「エラスモサウルスとかティロサウルスね」
「ああいうの捕まえるのって相当難しいんだろうな」
「麻酔とか色々あるけれどね」

今はそうした巨大な猛獣を捕まえる機械もあったりもする。とにかく色々なものが存在しているのである。中には兵器みたいなものも存在していたりする。

「それでも危険なことは間違いないわよ」

「そうだよな。やっぱりな」

「軍隊みたいなことになってるし」

そこまでだというのである。

「その規模もね」

「そうなのか」

「下手しなくても踏み潰されたり食べられたりするしね」

「ティラノサウルスとかか？」

「わかるでしょ、あれ」

あまりにも有名な暴君竜である。子供達からは圧倒的な人気があるがその凶暴さは連合の数多くの惑星にいる生き物の中でもとりわけ有名である。

「あんなの捕まえるのよ」

「海だとそのエラスモサウルスとかだよな」

「空のプテラノドンとかね」

「壮絶な世界だよな」

「恐竜捕獲は公だと軍隊も動員されるし」

実際に軍隊も動いたりするのである。

第百八十話　ネタ探しへその五

「もうね。そういう世界だから」
「それ考えたら何かよ」
「ヒョウアザラシは可愛く見えるって？」
「空飛ぶペンギンよりもそっちの方がネタになったりしないか？」
「恐竜ものはもう描いてるのよ」
それはもうだというのである。
「恐竜大進撃って漫画をね」
「恐竜大進撃！？」
ロザリーはそんタイトルを聞いてまずは首を捻った。
「何かよ、それって」
「それって？」
「特撮みたいなタイトルだよな」
こう言うのだった。
「何かな。それってな」
「ええ、そうかもね」
そしてそれは作者自身も認めるのだった。
「それはね」
「まあ狙ってはいたわ」
実際にそうだったというのである。
「特撮っぽくって考えてたし、タイトルは」
「そうなのか」
「それにね」
さらに話してきたルビーだった。
「今度はその動物だけれど」
「んっ！？」
そんな話をしているとだった。不意にペンギンがである。ジャンプして水野中に飛び込んでいた。その時の動きがそのままなのであ

った。
「おい、あれってよ」５６
「あっ、そうよね」
ルビーもそのペンギンを見て言う。
「そのまま」
「飛んでるよな、あれって」
「ってことはつまり」
「あれか？」
ロザリーはまた言うのだった。
「あれを見てそれでな」
「ペンギンが飛んだって」
「オオウミガラスだってな」
今度はそれを見ての言葉である。見ればそっちもであった。
「飛んでるよな」
「そうよね。ジャンプして海の中に飛び込んでるわよね」
「それがそう見えたのか」
そのことを今よくわかった二人であった。
「空を飛んでるってな」
「そうだったみたいね」
「何だって感じだな」
今度はこんなことを言うロザリーだった。
「真相がわかってみればな」
「そうね。それでもね」
「それでも？」
「いいネタにはなりそうね」
にこりと笑ってこう言うルビーだった。
「これは本当にね」
「じゃあここに来たのは」
「成功だったわ」
その笑顔でまた言った。

「充分にね」
「そうか。ならよかったな」
「それでね」
そのうえでさらに言うのであった。
「これからだけれど」
「これから？」
「水族館に行きましょう」
その水族館にというのである。
「そこにね」
「今度はそこかよ」
「どうかしら」
またロザリーに言ってきたのだった。

第百八十話　ネタ探しへその六

「それで」
「まあ別にいいけれどな」
特に反論することはなかったロザリーである。彼女も特にだ。
そしてその理由も言うのだった。
「私も暇だしな」
「暇なの」
「ああ、あんたが気が済むまで付き合うよ」
そしてこんなことも言うのだった。
「そのネタ探しにな」
「そう。それだったらね」
「恐竜見るのか？」
「ううん、どうしようかしら」
その言葉には少し考える顔になったルビーだった。
「それはねえ」
「行かないのか？エラスモサウルスとかのところ」
「また別の場所に行こうかしら」
こんなことを言うのであった。
「今回はね」
「そうなのか。別の場所か」
「ええ。何処がいいかしら」
それはまだ決めてないという。何処からあやふやな今のルビーの言葉だった。
「行くとしたら」
「自然に歩いていいんじゃないか？」
ロザリーは迷いを見せる彼女にこう告げた。
「それだとな」
「自然に？」

「そうだよ。気が赴くままにな」
「気が向いた場所を歩けってこと？」
「そうだよ。どうだよ」
まさにそうだというのである。
「それでさ」
「そうね。それだったらね」
ルビーもロザリーのその言葉を聞いて頷いたのだった。
「そうしてみるわ」
「ああ、だったらな」
「行きましょう」
こんな話をしてだった。二人は今度は水族館に向かうことになった。本当に気の赴くままにそちらに向かおうと決めたのである。
そしてその後ろでだ。ペンギンがまたジャンプしていた。オオウミガラスもだ。ロザリーはその鳥達を横目で見てまた言うのであった。
「まあ確かに飛んでるように見えるな」
「そうよね、本当にね」
ルビーも同じものを見ながら答えるのだった。
「そう見えるわね」
「全くだよな」
そんな話をしながら水族館に向かう。今度もネタ探しであった。

ネタ探しへ　　完

２０１１・３・９

第百八十一話　タツノオトシゴその一

タツノオトシゴ

二人は水族館に向かった。そして最初に向かったのは。
スナメリのコーナーだ。そこで白くのっぺりとした小さい鯨を見て二人で言う。
「私ね」
「どうしたんだ？」
ロザリーがルビーの言葉に問うた。二人はそのスナメリのいる水槽の前にいる。スナメリはその二人の前で優雅に泳いでいるのであった。
「こうした海豚とか鯨が好きなのよ」
「そうだったのかよ」
「ええ、そうだったのよ」
また言うルビーだった。
「何か見ていて落ち着かない？」
「ああ、そういえばそうだな」
ロザリーも彼女のその言葉を聞いて微笑む。
「何かな」
「不思議よね。見ているだけで落ち着けるなんて」
「ラッコとかもそうだよな」
今度はこれを話に出すロザリーだった。
「ラッコも見ていたらな」
「そうよね。海の上にぷかぷかと浮かんでいてね」
「それだけなんだけれどな」
「見ていると落ち着くよな」
ラッコについても話していく。話をしながらそのうえでスナメリのコーナーから離れてである。そのラッコのコーナーへと向かうのであった。

ラッコはだ。やはり塩水の上に浮かんでいる。そうしてそのうえで仰向けになって貝を食べている。そうしたラッコが数匹コーナーにいた。
ロザリーはそれを見ながらだ。またルビーに言ってきた。
「なあ」
「何？」
「いやさ、このラッコってな」
「どうしたの？ラッコが」
「相当食うらしいな」
彼女が言うのはこのことだった。
「何でもな」
「ああ、そうらしいな」
まさにそうだというのである。
「見ろよ、実際にな」
「無茶苦茶貝を食べてるわよね」
そのラッコを見ればである貝を次から次に食べているのであった。
他のラッコ達もである。時々泳ぎはする。しかし飽くなきとまで言っていい程貝やら海胆やら魚やらを次々と食べているのであった。
「他のものもね」
「外見は可愛いけれど滅茶苦茶食うんだな」
「そうよね。ステラーカイギュウだってね」
「あれもか」
「ステラーカイギュウはかなり大きいし」
「何メートルあるんだ？あれって」
ロザリーはステラーカイギュウのその大きさについて尋ねた。
「あれってよ」
「確か九メートル位」
それ位はあるのだという。
「それ位よ」
「九メートルか」

「大きいでしょ」
「っていうか大き過ぎるんじゃないのか？」
それを聞いて首を傾げさせるロザリーだった。
「そこまでだとな」
「それ見る？ステラーカイギュウ」
そのことも話すのだった。
「どう？今から」
「そうだよな。いいな」
ロザリーは少し考えてから彼女の提案に乗るのだった。
「それじゃあ。そこにもな」
「これが平和な生き物なのよ」
ルビーは微笑んで彼女に告げた。
「凄くね」
「平和なんだな」
「穏やかで性格もいいし」
そうまで言うのである。
「そういう生き物なのよ」
「へえ、そりゃ下手な人間よりも性格いいんだな」
「仲間が傷ついたら庇い合うし」
このことも話すルビーだった。
「凄くいい生き物よ」
「じゃあ余計に見てみたいな」
それを見てまた言う彼女だった。
「それじゃあ。行くか」
「ええ、そうね」
こうしてである。二人で話してからそのステラーカイギュウのところに向かう。そこは上からも横からも見られるかなり大きな水槽のコーナーであった。

第百八十一話　タツノオトシゴその二

氷が所々にあり下には海草が生い茂っている。それを見てロザリーは言った。
「なあ」
「何？」
「いやさ、これな」
「この水槽？」
「ああ。カイギュウだよな」
「そうよ」
そこから話すロザリーだった。ルビーも聞く。とりあえずは今はそのステラーカイギュウはあまり見てはいない。とりあえず今は、であった。
「そうだけれど」
「寒い場所にいるカイギュウか」
彼女が言うのはそのことだった。
「カイギュウって普通暑い場所にいないか？」
「普通はそうだけれどね」
「ここって氷あるしよ」
「ステラーカイギュウは寒い場所にいるのよ」
そうだというのである。
「そういうカイギュウなのよ」
「そうなのか」
「だからかなり珍しいのよ」
「成程、そうなのか」
「このカイギュウはね」
ここで、であった。今度はカイギュウを見る。見ればそのステラーカイギュウはぷかぷかと浮かんでいる。そのカイギュウを見ながらの話である。

「あとはね」
「あとは？」
「美味しいのよ」
「ああ、マナティーとかジュゴンってそうだよな」
「養殖もされてるわよね」
「ああ」
連合ではカイギュウも養殖されているのである。海にあるものは全て食べていく。それが連合である。とにかく何でも食べるのである。
「だよな。これもか」
「国によってはしてるわよ」
そうだというのである。
「ロシアとかだとね」
「寒い場所が多い国だからだよな」
「そういうこと」
ルビーはにこにことしている。ステラーカイギュウのその肉の味を思い出しながらの言葉であるというのは聞いていればわかることであった。
「だからなのよ」
「そうか。それでか」
「あとはね」
さらに話すルビーだった。
「何処に行く？」
「何処って？」
「いや、ステラーカイギュウは見たわよね」
「ああ」
「見たし」
それで終わりだというのである。
「それじゃあ後はね」
「何処に行くんだ？」

「とりあえず休みましょう」
そうするというのであった。
「何か色々歩いたし」
「そうか。じゃあ何か飲むか？」
「コーラでもどう？」
ルビーが勧めてきたのはそれであった。
「コーラでも。どうかしら」
「そうだな。それだったらな」
「それにしましょう」
こうしてであった。二人はベンチに座ってコーラを飲みはじめた。
そうしながらルビーは穏やかに笑って言ってきたのであった。
「そういえばね」
「どうしたんだよ」
「こうしてロザリーと一緒に色々なところ行くってことなかったわよね」
「そういえばそうだよな」
ロザリーも言われてそのことに気付いたのだった。
「今までな」
「そうよね。私ってね」
「いつもアンと一緒だよな」
「あとウェンディね」
この二人の名前が出されるのだった。
「二人と一緒のことが多いからね」
「漫画の関係だよな」
「そうよ。それでね」
まさしくそれだというのである。漫画である。

第百八十一話　タツノオトシゴその三

「一緒だからね」
「あたしはプリシラとかと一緒の場合が多いしな」
「ロザリーって誰とでも仲良くない？」
ルビーはコーラを飲みながら彼女に問うた。
「結構」
「まあ嫌いな奴はいないな」
ロザリーもコーラを飲みながら正面を見て答えた。
「実際な」
「このクラス気に入ってるのね」
「ああ、大好きだよ」
ここではさらに微笑んで述べた彼女だった。
「かなりな」
「そう、よかった」
「あんたもじゃないのか？」
ロザリーはこのことをルビーに対して問い返した。彼女に顔を向けながらである。そのうえで彼女に対して言葉を返したのである。
「それは」
「ええ、そうよ」
そしてその通りだと。ルビーも認めてきた。
「私も。やっぱりこのクラスはね」
「そうだよな。いいクラスだよな」
「落ち着くしね。しかも」
「それで賑やかだしな」
「両方合わさったクラスなんてそうはないわよ」
だからだというのである。
「アンとも仲良くやってるし」
「アンとは一年の時はどうだったんだ？」

「一年の時はクラスが違ったのよ」
「別々だったんだな」
「部活だけ一緒だったのよ」
それが二人の関係だったのだ。今の様にクラスでも一緒だったというわけではないのである。
「その時だけね」
「じゃあ付き合いもか」
「そう、その時だけ」
あくまで部活限定だったというのである。
「本当にね」
「そうだったんだな」
「今みたいに一緒にいるようになったのはね」
「やっぱりあれか」
「そうよ、一緒のクラスになってからよ」
その時からなのだ。やはりクラスが同じであることは大きいのである。
「その時からなのよ」
「そうか、やっぱりな」
「けれど一年の時からね。私がアンの漫画の手伝いをしていたのよ」
「それは変わらないんだな」
「ええ、変わらないわ」
それはだというのである。
「全然ね」
「それを考えると相性いいんだな」
「そうね。アンってね」
「ああ」
「結構気が強そうじゃない」
アンの話になる。その赤毛のイスラエル人の女の子のことだ。
「それでもあれで案外」
「繊細だよな」

「引っ込み思案だしね」
「ギルバートのことだってな」
「中々言わなかったよね」
「言えなかったんだな」
ロザリーは微笑んでこう訂正した。
「あれはな」
「気が弱いからね、案外」
「一年の頃からだよな」
「そうよ」
それはその通りだという。
「あんな風でね。ギルバートのことは好きだったけれどね」
「何だよ、その時からかよ」
「そうだったのよ。一途じゃない」
「だよな、それもあるよな」
かなりわかりやすい性格でもあるのだ。アンという娘は。
「じゃあやっぱりか」
「何時言うのかしらって思ってたけれどね」
「知らないのはギルバートだけだったんだな」
「あいつそういうことには鈍感だからね」
ギルバートについては批判めいて述べる。この辺りアンの側に立っていることがよくわかる言葉の出し方であった。やはりルビーはアンの親友である。

第百八十一話　タツノオトシゴその四

「どうしてもね」
「わからないからか」
「はっきりと言わないとわからない相手じゃない」
「ああいうことに関してはな」
「だからよ。やきもきして見てたのよ」
実際そうだったというのである。
「何時言うかどうなるかってね」
「それで結果は」
「やっとよ」
ほっとしたような、呆れたような言葉だった。
「ああなったのよ」
「一年以上かけてか」
「そう、たっぷりそれだけかけてね」
その二つの感情が混ざった言葉がまた出された。
「やっとだったのよ」
「やれやれな奴なんだな」
「恋愛漫画得意なのにね」
「自分のはってことなんだな」
「そういうこと。全く」
呆れてはいても喜んでいる。そんな顔をするルビーだった。
そしてその顔で。さらに話すのであった。
「困った娘よ」
「なあルビー」
「何？」
「あんたアン好きだろ」
こう言ってきたロザリーだった。
「やっぱり」

「ええ、好きよ」
そしてルビーもそれを否定しない。にこちと笑って答えるのだった。
「大好きよ」
「けれどあれだよな。同性愛とかじゃないよな」
「私もその趣味はないわ」
それは彼女もだという。アンは宗教的な戒律もあって同性愛は大嫌いである。彼女はかなり生真面目なユダヤ教徒でもあるのである。
「それはね」
「そうだよな。じゃあやっぱり」
「友達よ」
それだというのである。
「私達はね」
「親友か」
「そういうこと」
まさにそうだという。それは彼女も認めた。
「私とアンはね。本当にね」
「あんたがアシスタントで」
ロザリーはさらに言う。
「それで手綱も締めてな」
「そうなのよね。中々先に進もうとしないから」
「恋愛とかはな」
「強気なようで気弱だからね」
そうしたアンの性格はもうよく知っているのであった。
「そんな娘だから」
「そうだよな。それじゃあな」
「ええ」
「まだネタ探すのか？」
そのことに話を戻してきた。
「ネタは。まだか？」

「そうね。それじゃあ」
「今度は何処に行くんだ？」
「小さいお魚とか見たいわね」
こう言うのであった。
「ステラーカイギュウとか見たしね」
「それでか」
「うん。浅い海にいる可愛らしいお魚ね」
「ああ、そういうのもいいよな」
ロザリーもそれを聞いて微笑になった。
「小さな海老とかが水槽の中で砂の上を歩いていたりするのってな」
「そういうの見るのもいいでしょ」
「ああ」
ルビーのその言葉に微笑のまま頷く。

第百八十一話　タツノオトシゴその五

「それじゃあな」
「行く？今から」
「そうするか？じゃあな」
「ええ、それじゃあ」
二人は残っているコーラをそれぞれ一気に飲み干してである。それからベンチから立った。そうしてそのうえでその小さな魚や海棲動物のコーナーに向かった。
そこは無数の水槽が壁の中に埋め込まれる形で並べられていた。壁は黒く水槽の中を光で照らしそれで動物達を見せている。
二人はその中を歩き回りながら。また話をしていた。
「ねえ」
「見つかったか？ネタ」
「鰻もいるわね」
それを見つけて笑って言うルビーだった。
「鰻がね」
「鰻なんて何処にでもいるだろう？」
「違うわよ。この鰻って」
「ああ」
「青いじゃない」
見ればそうであった。奇麗なコバルトブルーの色をした鰻が水槽の中に寝ているのである。それを彼女達以外のギャラリーも見ている。
「この鰻って」
「青い鰻か」
「こういうのって面白いよね」
にこりとしながら言うルビーであった。
「青い鰻っていうのもね」

「そうだな。言われてみればな」
ロザリーモルビーのその言葉に頷いた。
「普通の鰻って黒いからな」
「何処の鰻かしら」
「ああ、これあれだよ」
ロザリーはここで鰻の水槽のところにある説明の一文を見た。そこには。
「コロンビアの鰻だってよ」
「コロンビアのなの」
「モンロビア星系の鰻だってよ」
そこの産のだという。
「そこの鰻は青いんだな」
「そうだったの。コロンビアの」
「みたいだな。何か青を見たらな」
「そうよね、マンチキン」
あの青いクレープの産地である。
「あそこ思い出すわよね」
「青っていったらやっぱりあそこだよな」
「そうそう」
笑顔でロザリーの言葉に頷く。
「本当にね」
「あそこ思い出すよな」
「黄色だったらギリキンでね」
「赤だったらカドリングで紫だったらってな」
「で、緑は」
「都だよな」
オズシリーズはまさに不滅の作品になっていた。この時代も彼女達の心にそれはしっかりと存在し続けているのである。千年以上もである。
「それをどうしても思い出してね」

「何か面白いよな」
「あっ、これも」
ルビーはここでまた言った。今度は。
タツノオトシゴを見た。その色は。
「カドリングよ」
「ははは、真っ赤なタツノオトシゴだな」
「そうね。何か」
「何か？」
「ネタに使えそうね」
楽しげに笑って言うルビーだった。
「これって」
「ああ、見つかったか」
「青い鰻もね」
それもだという。

第百八十一話　タツノオトシゴその六

「いい感じで目立ってるわよね」
「そうだよな。青い鰻もな」
「赤と青ね」
今度は色の話になる。
「対比として丁度いいし」
「それじゃあか」
「ええ、いいわよね」
またロザリーに対して話す。
「これも」
「そうでしょ？それじゃあ」
「よし、決まりだな」
ロザリーも彼に応えて述べた。
「この赤いタツノオトシゴはな」
「ネタに使うわ。青い鰻もね」
「よかったな、またネタが決まって」
そのことを彼女に笑顔で話すロザリーだった。
「ここに来た介があったな」
「そうね。このタツノオトシゴと鰻はね」
「どんな漫画に使うんだ？」
「四コマ漫画ね」
それだという。
「それでどうかしら」
「四コマか」
「私はいいと思うけれど」
ルビーはそのつもりだった。そうしてさらに言う。
「それもほのぼの系でね」
「ほのぼのか」

「タイトルはまだ考えてないけれど」
それはまだだという。
「けれどね。それでもね」
「そうだな。いいな」
それでいいとするロザリーだった。彼女もであった。
「それでな。四コマでな」
「舞台は当然海よ」
もうそこまで考えていた。
「海でのほのぼの四コマよ」
「まあ魚だから海だよな」
「四コマ漫画もね。あれで難しいのよ」
ルビーは今度は漫画について話す。それもであった。
「ほら、起承転結がはっきりとしてるじゃない」
「ああ」
「だから余計にね。基礎的でね」
「基礎的か」
「それだけに技術とかがはっきり出るのよ」
この辺りは流石に漫画研究会であった。よくわかっている。
「何につけてもね」
「四コマもそうなんだな」
「そうよ。アンだってね」
「あいつもか」
「四コマ描くわよ」
彼女もだという。
「それも結構ね。描くわよね」
「そうだったのか」
「それは知らなかったのね」
このことについて話すのだった。
「そのことはね」
「ああ、ストーリーだけじゃないんだな」

「四コマもなのよ」
彼はまた言った。
「そっちも結構描いてるから」
「じゃあそっちで腕を磨いてるのか？」
「それもあるわ」
ルビーはまた答えた。
「アンって漫画に対して物凄く真剣だから」
「あいつ真面目だからな」
「そうでしょ？だから余計にね」
「四コマもか」
「そしてストーリーものも」
話は一つだけではなかった。どちらもである。

第百八十一話　タツノオトシゴその七

「そうして技術を磨いていっているのよ」
「漫画に精進してるってことか」
「勿論私もね」
自分もだと。ルビーは話した。
「大真面目よ、これでもね」
「似てるんだな」
今度はこう言ったロザリーだった。微笑んで、である。
「あんた等ってな」
「似てる？」
「ああ、似てるよ」
ルビーとアンがということである。
「本当にな」
「そうかしら。自分ではそうは思わないけれど」
「いや、それでも似てるよ」
ロザリーの言葉は続く。
「外見は確かに全然似てないさ」
「それはどう見てもよね」
「それでも性格は似てるよな」
「そうかしら」
それを言われてもまだ首を傾げさせるのルビーだった。
「私はそれは」
「根っこが似てるんだよ」
そうだというのである。
「そこがな」
「自分ではわからなかったわ」
ルビーはそこまで聞いて首をしきりに捻りながら述べた。
「ちょっとね」

「それで今気付いたってわけか」
「ええ」
まさにその通りだった。
「かなりね」
「それでも今気付いたよな」
「ええ」
「どんな気持ちだ？今」
ロザリーは笑いながらまたルビーに言ってきた。
「それで」
「そうね。悪い気はしないわ」
微笑んで応えるルビーだった。
「アンもそうなのね」
「あんたもな」
「それじゃあ」
ここまで話してさらに言うルビーだった。ロザリーに対してである。
「いいかしら」
「今度は何処に行くんだ？」
「ネタ探しはこれで終わりよ」
それはだというのである。
「これでね。終わりだからね」
「そうか。それじゃあな」
「喫茶店行く？」
微笑んでロザリーに告げた言葉である。
「今からね」
「そうだな。それじゃあな」
「お店は何処がいいかしら」
「いつもの場所でいいんじゃないか？」
ロザリーは場所にはこだわらなかった。今はである。
「別にな」

「そうね。じゃあケーキを食べにね」
「ああ、行くか」
こう話してそれから二人で水族館を後にする彼女達だった。今は二人で静かにかつ幸せに水族館を出る。漫画のネタ探しはこれで終わった。

タツノオトシゴ　　完

２０１０・１・１７

第百八十二話　いざ描いてみてその一

いざ描いてみて

漫画研究会の部室においてである。アンとルビーはお互いに向かい合って席に座っている。その机の上には漫画道具が全て揃えられている。

そしてである。まずはアンが言うのであった。

「それでだけれど」

「何？」

「ネタ探しは上手くいったみたいね」

微笑んでこのことを言ってきたのであった。

「どうやらね」

「どうしてそう思えるの？」

「その表情見ればわかるわよ」

笑ってこう話すアンであった。

「満足した顔してるからね」

「まあね」

そしてルビーもそれを否定しない。包み隠さずといった感じである。

「実際にね。上手くいったわ」

「やっぱりね」

「四コマの主人公も決まったし」

まずはこのことも話した。

「ペンギンの漫画も決まったしね」

「じゃあ描けるわね」

「ええ、描けるわ」

はっきりと答えることができた。

「充分にね」

「じゃあ今からは」

「描くわ、アシスタントは」
「任せて」
アンはアシスタントについては自分から志願した。
「それはね」
「そう。それじゃあね」
「期待していていいから」
ルビーを後押しする様に言ってみせるアンだった。
「わかったわね」
「ええ、じゃあ」
「早速描くけれど」
ここでルビーの言葉はふとした感じで言ってきた。
「ただね」
「ただ。何だ？」
「主人公だけれどね、四コマのね」
「それがどうかしたの？」
「赤いタツノオトシゴと青い鰻だけれど」
ロザリーと一緒に見た水族館のそれをである。今ここでまた話すのであった。
「それでどうかしら」
「赤いタツノオトシゴと青い鰻ね」
「そうよ。私はいいんじゃないかって思うんだけれど」
「いいんじゃない？」
アンは特に注釈をつけることなく答えた。
「それでね」
「いいと思うのね」
「キャラのインパクトはいいわ」
まずそれについて言及するのであった。
「それはね」
「そう、インパクトは合格ね」
「赤と青で対称的だし」

色についても話す。
「それもいいわ」
「じゃあ合格なのね」
「大体はね。ただね」
「ただ？」
「大切なのはデザインね」
それが問題だというのである。
「それだけれどね」
「デザインなのね」
「それはどうなの？」
それについても問うのであった。
「これで」
「そうね。いいと思うわ」
それでいいと返すアンであった。そうしてまた言うのであった。
「ただね」
「ただ？」
「もう少しインパクトが欲しいかしら」
こう言うのである。
「少しね」
「インパクトなの」
「ちょっと地味じゃないかしら」
ルビーが描いたそのタツノオトシゴと鰻を見ながら話す。それは確かに可愛らしいが何処か地味な印象を与えてしまうものであった。

第百八十二話　いざ描いてみてその二

「これだと」
「じゃあどうしようかしら」
「目を変えてみたら？」
アンが言うのはそこであった。
「目ね、そこを変えてみる？」
「目なのね」
「そう、目よ」
アンはまた言った。
「キャラクターってやっぱりまず目が見られるじゃない」
「ええ」
「それを考えたらやっぱり目よ」
そこだというのである。
「だからね。どうかしら」
「そうね。言われてみれば」
パートナーの言葉を受けてである。ルビーはあらためて考える顔になった。そうしてその顔で自分のキャラをもう一度見るのであった。
そうしてそのうえで。言った。
「わかったわ」
「変えるのね」
「こんな感じでどうかしら」
ラフ画を描いてみた。先程のものよりも大きく可愛く描いた。それを見たアンは。静かに言うのであった。
「そうね。それだとね」
「いいのね」
「ええ、いいわ」
今度は合格であった。

「これでね」
「そう、それならいいわ」
それを聞いて満足な顔になるルビーだった。
「それじゃあね」
「とりあえず主役はこれでいいわね」
そのタツノオトシゴと鰻で、ということであった。
「さて、後は」
「脇役ね」
「それはもう考えてるわよね」
「ある程度はね」
もう考えていると答えが返って来た。
「海栗とかね。ヒトデとかね」
「他には？」
「ウミウシとかナマコとか小魚とか」
そういったものを挙げていく。
「これでどうかしら」
「完全にほのぼの系なのね」
そうした動物を聞いて言ったアンだった。
「それだと」
「ええ、そうよ」
まさにそうだと返しもした。
「そのつもりだけれど」
「四コマには合ってるわね」
アンは微笑んで述べた。
「完全にね」
「そう。じゃあ脇役も合格ね」
「ちょっと描いてくれるかしら」
「そういった脇役もね」
「ざっとでいいから」
ラフ画でいいというのであった。

「だからね。御願いね」
「わかったわ。それじゃあ」
また描いてみた。ヒトデやイソギンチャク達を可愛くキャラクター化してだ。それを見てあらためて言うアンだった。彼女も真剣である。
「それも大体いいわね」
「そう、有り難う」
「ただね。気をつけて」
しかしここでまた注意が入った。
「ルビーってね」
「どうかしたの？」
「四コマだとちょっと油断したら目がストーリーもののそれになってるから」
「目がなの」
「そう、キャラクターの目がね」
それがだというのだ。
「小さく真面目になってるから」
「大きくコミカルになのね」
「要は可愛くよ」
そうであるというのである。
「可愛くね。いいわね」
「デフォルメみたいに？」
「そう、そんな感じ」
まさにそれだというのである。
「四コマはそれでいいから」
「成程、そうなのね」
「それを意識してくれたらいいから」
こうルビーにアドバイスするのである。

第百八十二話　いざ描いてみてその三

「問題はそれだけね」
「わかったわ。じゃあそれもね」
「そういうことでね。後は描くだけね」
「そうね」
話はそちらに移った。
「まずは第一話ね」
「はじまりがよ」
「そうよね、肝心よね」
「まずは描きだしよ」
そこを強調するアンだった。
「それをしっかりとしないとね」
「何もかもが駄目ね」
「ルビーは立ち上がりが大事だからね」
彼女のことをよくわかっているからこそであった。こう言うのである。彼女は結構作品の出来にムラがある方なのである。だから言うのである。
「余計にね。気をつけて」
「ええ、だったら」
「最初はうんと面白く」
アンはまた言う。
「気合入れてね。そうしたらね」
「後はそのままいけるのね」
「そうよ、いけるわ」
このことには太鼓判を押した。
「それからずっと面白い作品になるから」
「それじゃあ余計に」
「チェックは任せて」

それはというのであった。実はルビーの作品はアンがチェックしているのである、同時にアンの作品はルビーがチェックしている。まさにパートナー同士である。
「それはね。いつも通りね」
「御願いするわね、それは」
「それでだけれど」
「それで？」
「何回でも描いてもらうわよ」
アンの言葉は真剣そのものであった。
「いい作品ができるまでね」
「わかったわ」
そしてルビーもそれを受けるのだった。
「それじゃそれでね」
「受けて立つのね」
「やっぱり描くからには面白くないとね」
それは自分でも言うのであった。
「だからね。そうさせてもらうわ」
「よし、じゃあ」
「ええ」
こう言い合ってそのうえで二人向かい合って描きはじめる。それが終わったのはもうかなり遅い時間だった。終わった時二人はもうへとへとだった。
ルビーがだ。まずアンに問うてきた。
「ねえ」
「何？」
「皆は？」
他の部員達のことを尋ねるのであった。
「どうしたの？」
「あっ、そういえば」
言われてここで周囲を見るアンだった。見ればである。

「皆もういないわね」
「帰ったのね」
「そうみたい。鍵は」
「あるわよ」
ルビーが微笑んで言ってきた。気付けば二人が座っているその席に鍵が置かれていた。誰かが置いていったものらしい。この部では最後に帰る人間が戸締りをして部室の鍵は職員室の当直の人に返す決まりになっているのである。この辺りがやはり学校だ。
「ここにね」
「あっ、それじゃあ」
「本当に私達だけみたいね」
「そうね」
二人で言い合う。
「じゃあこれでね」
「帰りましょう」
「漫画は」
ここでアンが言った。
「なおさないと」
「ああ、それなら私のロッカーにね」
「入れておくっていうの？」
「また明日ここで描くんでしょ？」
ルビーはこう彼女に返した。

第百八十二話　いざ描いてみてその四

「だったらね。それでいいんじゃないの？」
「それもいいけれど」
しかしであった。ここでアンは考える顔で言うのであった。
「それよりもよ」
「それよりも？」
「これから帰って描かない？」
こう言うのである。
「二人でね。どっちかの部屋でね」
「部活が終わっても」
「丁度乗ってきたしどう？」
微笑んでルビーに問うのであった。
「もう一気にね。描いてしまわない？」
「そうね」
一呼吸置いてから答えるルビーだった。その返答は。
「いいわね」
「そう思うのね」
「ええ。それだったらね」
「私の部屋だったらビーグルがあるわよ」
アンはそれを出してきた。
「それがね。あとお茶と」
「またビーグルなの」
ルビーはビーグルと聞いて思わず苦笑いになってしまった。またか、という言葉に彼女の感情がそのまま出てもいた。しかもはっきりとである。
「あんたそれ好きね」
「イスラエルだからね」
それが理由なのだという。

「やっぱりビーグルでないとね」
「朝も昼もよね」
「当然晩もね」
ビーグル尽くしというわけだ。
「それでどうかしら」
「まあいいけれどね」
ルビーも微笑んでそれはいとした。
「それでね」
「他にも作るけれどね」
「イスラエル料理を？」
「そうよ。どうかしら」
「イスラエル料理ねえ」
「何度も食べてるでしょ？」
このことは確かである。ルビーはアンの家に何度も言っていてその都度彼女の料理を食べているのだ。無論アンもルビーの料理を食べている。
「じゃあわかるわよね」
「まあね。ただね」
「ただ？」
「今日は私のところに来ない？」
ルビーの方から言ってきたのだった。
「よかったらね」
「あんたのところに？」
「ええ、そうよ」
そうしてはどうかというのだ。
「よかったらだけれどね」
「そうね。それじゃあね」
「ええ」
「そうさせてもらおうかしら」
微笑んで応えるアンだった。

「ただね。御願いわね」
「わかってるわよ。戒律ね」
「それは守らないといけないから」
急に真面目なことを言うアンだった。
「ユダヤ教の戒律はね」
「相変わらず真面目ね」
「これだけは外せないのよ」
何としてもというのである。彼女も真剣である。
「私はユダヤ教徒だしね」
「乳製品と牛肉は一緒にしない」
「あと海老とか鱗のないお魚もね」
「制約が今だに多いのね」
「それがユダヤ教なのよ」
これで有名でもあるのだ。今ではイスラエルが連合にありユダヤ人達が一斉にエウロパを去り連合に入った歴史的経緯からユダヤ人は連合にしかいなくなっている。サハラやマウリアにはビジネスや仕事でいるだけである。エウロパには一人もいなくなっている。

第百八十二話　いざ描いてみてその五

「だからね」
「難しい宗教ね」
「実際そう思うわ」
アンもそのことは否定しなかった。
「ちょっと以上にね」
「そうよね。どうしてもね」
「困ったことにね」
あらためて苦笑いになるアンだった。
「一体何でこんな決まりがあるのかしらって思ったりもするし」
「鰻も海老も食べられないことね」
「あれがわからないのよ」
どうしてもというのである。これは当のユダヤ人でもであるのだ。
「どうしてもね」
「その通りなのね。それじゃあ」
「何を作ってくれるの？」
「羊肉ならいいわよね」
言ってきたのはそれである。
「羊だったら問題ないわよね」
「羊はいいのよ」
それは一向に構わないのである。ユダヤ人は元々遊牧をしていてそのせいで羊は昔から食べているのである。だからそれはいいのだ。
「だからね」
「じゃあ羊とね」
「ええ」
「牛のチーズを使って」
それも使うという。
「あとサラダね」

「それもなのね」
「それとパン」
米は選ばなかった。何故かというとだ」
「漫画が終わったら飲みたいしね」
「ワインなのね」
「ええ。羊はハンバークがあるから」
「ハンバーグなの」
「五〇〇グラムの凄いのがね」
ここでにんまりと笑うルビーだった。肉が大きいとどうしても笑みになってしまう。人間の心理に深く影響することである。食べる量というものは。
「それが幾つもあるし」
「そんなにあったの」
「昨日作っておいたのよ」
「ふうん、そうだったの」
「それでね。それがあるから」
ハンバーグがあると話すのである。
「だからね」
「そう。それだったら」
「ハンバーグの上にチーズを置いて」
そうするというのである。
「スープはね」
「それもなの」
「朝のオニオンスープが残ってるから」
「そういうことね」
「そう。だからね」
そのオニオンスープだというのだ。
「それでいいわよね」
「玉葱は好きよ」
微笑んでルビーに答える。

「その通りよ」
「ならいいわ。それでね」
「ええ。それで？」
「ワインは赤よ」
それだというのである。
「赤でいいわよね」
「最高よ」
これがアンの返答である。
「肉料理にはやっぱり赤よね」
「そうよね。だからそれもあるから」
「それじゃあ私はね」
「あんたは？」
「デザート用意させてもらうわ」
にこりと笑ってルビーに話す。

第百八十二話　いざ描いてみてその六

「それはね」
「デザートはなの」
「何がいいかしら」
デザートのことをルビーに対して問う。
「ルビーは何が食べたいの？」
「別に何もでいいわ」
こう答えるルビーだった。
「それはね」
「何でもいいの」
「そう言われてもね」
ルビーは言いながら首を捻る。そのうえでの言葉である。
「思いつかないのよ」
「そうなの」
「そうねえ。本当に何でもいいけれど」
「ええ」
「アンは何が好きなの？」
そのことをまた彼に問うた。
「それで」
「私？」
「そうよ。何が好きだったかしら」
「何でも好きよ」
目をしばたかせて答えるアンだった。
「甘いものならね」
「じゃあ何でもいいのね」
「ルビーも何でもいいのよね」
「私も甘いものは何でも好きだしね」
「それじゃあ」

ルビーの今の言葉を聞いたうえでまた言うアンであった。
「二人で選ぶ？」
「二人でなの」
「どうせだからね。それで何がいいかしら」
「何でもいいでしょ」
また言うルビーだった。
「それじゃあ」
「そうね。二人で選べばいいわね」
「それはそれで楽しいしね」
「そうそう、そうよね」
「お菓子を選ぶのもね」
笑顔で話すアンだった。ルビーも同じ顔になる。
「それもね。楽しいわよね」
「そうそう。ケーキにしてもババロアにしてもね」
「何でもいけるしね」
「じゃあまずはそれを選びに行く？」
「そうしよう」
ルビーからの言葉だった。
「二人でね」
「それがいいわね。それじゃあね」
「これでね」
「ええ、これでね」
二人で漫画道具をなおしたうえで部室を後にする。二人はルビーの部屋で楽しく漫画と食事を楽しんだ。そうしてそのデザートはというとだ。
「やっぱりこれよね」
「そうそう」
「これよね」
満面の笑顔で食べているのはプリンであった。紫のプリンである。
「プリンって最後に最高よね」

「落ち着くしね」
「食べていたらね」
こう言いながら食べていく。
「それでだけれどね」
「それで？」
アンはルビーの言葉に問う。
「どうしたの？」
「アンって今グルメ漫画描いてるわよね」
「ええ、そうよ」
その問いに素直に答えるルビーだった。
「それがどうかしたの？」
「じゃあ今度はそれにしない？」
「プリンを選ぶの」
「そう、デザート勝負とかでどうかしら」
こう彼女に提案するのであった。
「それって」
「そうね。いいわね」
アンは笑顔で彼女の提案に頷いたのだった。そうしてそのうえで言う。
「それじゃあね」
「次はプリンね」
「ええ、そうさせてもらうわ」
実際にこう答えるのであった。
「それじゃあね」
「それで決まりね。じゃあプリンを食べたらね」
「少し描いてそれからは」
「お風呂に入ってね」
これは忘れない。女の子だけあって身だしなみには気をつけているのである。ルビーもアンも漫画を描いていてもやはり女の子である。

「それからワインにしましょう」
「そういうことでね」
二人の夜は過ぎていく。女の子だけの夜である。しかしその夜も昼のそれと同じく実に充実したものであった。夜も楽しく過ごす二人であった。

いざ描いてみて　　完

2010・1・21

第百八十三話　アイドルタレントその一

アイドルタレント

連合の芸能界は華やかである。各国、各惑星ごとでもそれはかなり凄いものがある。

そして連合全体でもである。それは細かくチェックされている。

今彰子が七海の話を聞いている。彼女は晴れ渡った顔で彰子に話している。

「それでだけれどね」

「うん」

「このＣＤ」

今人気の男性アイドルグループの新しいアルバムを出して来ての言葉である。

「凄くいいのよ」

「そんなにいいの」

「もう最高よ」

その晴れ渡った顔での言葉である。

「言い様がない位にね」

「そんなにいいの」

「証拠も聴いてみる？」

実際に彼女に勧めもする。

「よかったら」

「いいの？聴いて」

「是非ね」

満面の笑顔で彰子に勧めてもいる。

「聴いて」

「それじゃあ」

「はい、どうぞ」

自分からウォークマンを出す七海だった。

「さあ、早く早く」
「えっ、もうなの？」
「思い立ったらすぐよ」
最早彰子に選択肢はなかった。何時の間にか完全に消えていた。
「だからね」
「そう。だから」
「いい音楽は聴かないとわからないわ」
今度はこんなことを言ってきた。
「だからね」
「それはそうだけれど」
「それなら迷うことなしよ」
本当に七海が一方的に話を進めてきている。彰子はそれに対してただ聞いて頷いて用意を受けるだけである。本当にそれだけになってしまっている。
そうして耳にウォークマンを付けられてだ。既にＣＤはセットされている。
「これでよしね」
「いいの」
「はい、聴いて」
スイッチも入れられた。すると。
耳の中に音楽が入って来る。脳に直接聴こえる感じだ。
そうして曲を感じる彼女にだ。また七海が言ってきた。音楽の外から声がしてきた。
「それでね」
「え、ええ」
「どうかしら」
早速音楽の感想を聞いてきたのである。
「この曲」
「そうね」
聴きながらの言葉である。

「最初だけれど」
「出だしはどう？」
「いきなり歌からはじまるのね」
「そうでしょ、ソロで」
「それがまずいいわね」
客観的に聴きながらの言葉である。
「それがね」
「それからは？」
「そこから演奏で。この曲の感じは」
彰子はその曲が思ったよりも激しい調子なのを聴いてそのうえでまた言った。
「ダンスの曲なのね」
「グループがグループだからね」
「あのアイドルグループよね」
「ほら、所属の事務所がね」
七海はそこから話すのであった。事務所からである。
「男性アイドルグループばかりで歌とダンスがウリじゃない」
「だからこんな曲なのね」
「映像はまた見てないけれど」
七海はそれはまだだという。
「けれどね。それでもね」
「ダンスは絶対に入るのね」
「そうよ、絶対にね」
これはもう言うまでもないことだった。その事務所のグループではもう決まっていることであったのである。だからこそ言うのである。

第百八十三話　アイドルタレントその二

「それは欠かせないから」
「それで踊りながらダンスね」
「そうよ。いつもの通りね」
「成程」
それを聞いて頷く彰子だった。その間も音楽を聴き続けている。
「そうした曲ね、確かにね」
「いいでしょ」
「ええ、いいわ」
途中まで聴いての感想である。
「確かにね。それに」
「それに？」
「何かメンバー同士の息が合ってない？」
彰子はこのことにも気付いたのである。
「いつもよりも」
「あっ、そうなの」
ところが七海はそれを聞いてきょとんとした顔になって述べた。
実はこのことは彼女の気付いていないのことだったのである。
それでだ。声まできょとんとさせて彰子に問うた。
「そうなってるの」
「ええ、何か」
まさにそうだと述べる彰子だった。
「いつもよりもね。バランスが取れてるわね」
「ふうん、そうなの」
「いい感じね」
その息が合っていることへの言葉である。
「この感じって」
「それ聴くと何か余計にこの曲好きになったわね」

「そんなに？」
「ええ、やっぱり買ってよかったわ」
そうして微笑んで言うのであった。
「本当にね」
「確かにいい曲ね。はい」
「はい？」
「有り難う」
にこりと笑ってイヤホンを外してウォークマンを七海に返す。そのうえでの言葉であった。
「よかったわ」
「ああ、聴き終わったのね」
「そうよ。どうも有り難う」
また彼女に微笑んでの言葉である。
「確かにいい曲ね」
「そうでしょ。いいでしょ」
「ええ、確かに」
「だからこのグループ好きなのよ」
七海はこうまで言う。歌からそれを歌グループにである。
「とてもね」
「じゃあ」
「じゃあ？」
「今日はカラオケ行かない？」
話はそこに移った。遊びにである。
「カラオケにね。どうかしら」
「カラオケなの」
「そう、この歌歌いましょう」
聴いたら歌いたい、その望みに素直に従っている七海だった。
「二人でね」
「そうね。いいわね」
彰子はにこりと笑ってそのうえで七海の提案に応える。

「それじゃあ二人でね」
「カラオケもいいわよね」
「ええ、それじゃあ」
こう話してであった。二人でカラオケに行くことにした。
放課後になるとすぐにカラオケボックスに入った。その暗い備え付けのソファーのある部屋の中で二人仲良く揃ってである。楽しく歌っていた。
まずはデュエットだった。それを歌ってから七海が彰子に言ってきた。
「彰子って」
「どうしたの？」
「歌上手いよね」
こう彼女の歌を評したのである。
「はじめて聴いたけれど」
「歌上手いかしら」
「上手いわよ」
太鼓判さえ押してみせる。
「自信持っていいから」
「そう。そんなに？」
「私が言うから間違いないわ。彰子の声もね」
「声もなの」
「奇麗だし」
声の色もいいというのである。

第百八十三話　アイドルタレントその三

「やっぱり声が奇麗じゃないと歌が上手くても何かよくないし」
「そうなの。声の色も」
「それ大事よ。勿論音感もだけれど」
それもだという。
「どっちも揃ってだからね」
「成程、そうなのね」
「そうなのよ。彰子はどっちも持ってるわ」
「有り難う」
「御礼はいいわ」
それはいいというのである。
「本当のことだし」
「その七海も」
「私も？」
「歌上手いわね」
彼女もだという。お互いを褒める感じになっていた。
「声は低めで」
「私の声はね」
「声は？」
「メゾソプラノなの」
それだというのである。
「実はね」
「メゾソプラノっていうと」
「そうよ。女の人の声で低い方の声」
こう七海に対して説明する。
「ソプラノ、メゾソプラノってあってね」
「その低い方ね」
「アルトというのもあるけれど」

「アルトはどういう声なの？」
「メゾソプラノの下」
要するにさらに低い声であるということだ。
「もっと低い声なのよ」
「メゾソプラノより低い声なのね」
「そうなのよ。ただ」
「ただ？」
「最近はあまり分類されないみたい」
二十世紀終わりから度々そうなっているのである。
「メゾソプラノに入るみたい」
「そうなの、一緒になってるの」
「そうなのよ。メゾソプラノっていっても種類があってね」
「何か複雑なのね」
「アルトはドラマティックメゾね」
そう分類されるのだという。
「その声になるわ」
「ドラマティックなのね」
「そう、それよ」
七海はこう彰子に説明する。
「それになるのよ」
「じゃあ七海はどうなるの？」
「レッジェーロに。メゾソプラノの中では高い方ね」
「そっちになるのね」
「そう、私はまだ極端に声は低くないわよね」
「そうね」
これは耳で聴く通りである。確かにそこまで低くはない。彰子よりは低いが極端に低い声ではなかった。その歌声はである。地声も大体同じではあるがだ。
「それは確かに」
「だからそうなるのよ。彰子はね」

「私は？」
「リリコ＝レッジェーロかしら」
「それはどういう声なの？」
「ソプラノで高い方の声よ」
そうであると彼女自身に説明する。
「その声の域がね」
「そうなの。私の声ってそんなに高いのね」
「流石にコロトゥーラまでいかないけれどね」
「コロトゥーラ！？」
「ソプラノで一番高い声なのよ」
それだというのだ。
「それで独自の歌だってあるし」
「そうなの」
「モーツァルトとかリヒャルト＝シュトラウスとかね」
そうした作曲家の名前を挙げて説明していく。
「そうした人達が作ってるのよ。そうそう」
「今度はどうしたの？」
「ここにも曲あるんじゃないかしら」
言いながら曲が書いてあるその本を開く。そのうえで入力コード等を調べる。こうした本もこの時代においてもしっかりと存在しているのである。

第百八十三話　アイドルタレントその四

「若しかして」
「モーツァルトもカラオケで歌えるの」
「オペラ自体がね」
そうだというのである。
「カラオケで歌えるのよ」
「曲が入ってるのね」
「有名な曲は大抵入ってるから。そういえば」
ここでまたあることに気付いた七海だった。
「あんたの妹って」
「明香？」
「明香ちゃんって歌劇部じゃない」
そのことを話してきた。
「そうだったじゃない」
「ええ、それは」
そのことは当然彰子も知っていた。自分の妹が入っている部活が何かということを知らない姉というのもそうそういないものである。
「知ってるけれど」
「妹さんって確かこの前」
「この前？」
「カプレーティとモンテッキィ歌ってたわね」
今となってはかなり昔の話だった。
「確かね」
「あのロミオとジュリエットのそれね」
「そう、それ」
まさにそれだと話すのだった。
「あれでジュリエット歌ってたけれど」
「それがどうしたの？」

「あれね。コロトゥーラの役なのよ」
「そのコロトゥーラの」
「そうだったのよ。つまりは」
ここから出される答えは一つしかなかった。
「明香ちゃんはコロトゥーラね」
「その声が高い」
「普段からそうよね」
「ええ、確かに」
それはその通りだった。明香の声はかなり高い。清楚な外見と共にその声の高さと奇麗さもよく知られていることなのである。つまりもてるということだ。
「それじゃあ本当にその」
「コロトゥーラなのよ」
あらためてこのことが話された。
「妹さんはね」
「明香がコロトゥーラ」
そのことを認識して意外な顔になる彰子だった。
「その声が一番高い」
「実際にあんたも声高いわよ」
「私もなのね」
「そのコロトゥーラの次にね」
そうだと教えるのであった。
「高いわよ。それでだけれど」
「ええ、それで」
「あんたはそういうことはしないの」
「オペラとか？」
「合唱とか。他のジャンルの音楽でもいいけれど」
ジャンルはまずはいいとしたのだった。
「歌ったりしないのね」
「ちょっとね」

少し苦笑いになってからの返答だった。
「歌うのって」
「苦手？」
「恥ずかしいから」
だからだというのである。
「そういうことはね」
「そう。だからなの」
「人前で歌うのって恥ずかしいから」
より具体的な言葉だった。
「どうしてもね」
「成程ね。そういうことってね」
「そういう人って私だけじゃないわよね」
「結構多いわよ」
それは否定しない七海だった。彼女もこのことは知っていた。

第百八十三話　アイドルタレントその五

「実際にね」
「そうよね、やっぱり」
「ただしよ」
それでもここで七海はさらに言ってみせたのだった。
「あんたの歌もね」
「私の歌も？」
「いいわよ」
にこりと優しい笑みを浮かべての言葉だった。
「とてもね」
「いいかしら」
「ええ、いいわよ」
また彼女に告げた。
「充分過ぎる程ね」
「そうなの。私も歌も」
「歌が上手いにこしたことはないわ」
「上手なのになの」
「何でもそうでしょ？上手ならね」
にこりと笑って彰子にさらに話していくのであった。
「それに越したことないじゃない」
「だからなのね」
「そう、何でもね」
そうだというのである。
「上手ならね。それにだけれど」
「ええ」
「歌好きでしょ」
こうも言ってきたのであった。
「彰子って」

「それはね」
そしてその問いに対して素直に答える彰子であった。
「聴くのも歌うのも好きよ」
「だからよ。上手いのよ」
「好きこそものの上手なれってことかしら」
「そうよ。だから歌が上手いのよ」
「だからなの」
「子供の頃からずっと歌っていて。そうね」
ふと思い立った様にも言うのだった。
「妹さんと二人で歌ったりしたかしら」
「ええ、よく二人で歌ったわ」
七海の予想通りであった。彼女はそうして歌っていたというのであった。
「幼稚園の頃から色々な歌をね」
「だから上手いのよ。好きだから歌ってね」
「そうしてさらになのね」
「歌えば歌うだけ上手になっていくから」
七海の言うことは同じであった。
「だからいいのよ」
「じゃあ私はこれからもどんどん歌えば」
「それだけ上手くなっていくわ。そうする?」
「そうね」
少し間を置いた。この辺りはおっとりとした彰子らしい動きであった。そうしてそれからゆっくりと七海に対して言ってきたのであった。
「それじゃあ」
「歌いましょう。いいわね」
「うん。じゃあ」
「今度は何を歌うの?」
早速であった。笑いながら彰子に言ってきた。

「どの歌にするの？」
「そうね。今度はね」
「ええ、今度は」
こうして彰子は楽しく歌っていく。その声は確かに見事なものであった。その歌唱力もである。どちらもかなり見事なものであった。

アイドルタレント　　完

２０１０・１・２５

第百八十四話　二重唱その一

二重唱

家で明香が彰子に声をかけてきた。夕食も終わり憩いの時にである。

「姉さん」

「少しいいかな」

「どうしたの？明香」

彰子はリビングでテレビを観ていた。だが妹の言葉に応えてその顔をテレビから離してそのうえで彼女に対して顔を向けるのであった。

「何かあるの？」

「実はだけれど」

応えながら姉の隣に来てさらに言ってきた。二人並んでリビングのソファーに座る。

「部活の今度の舞台のことだけれど」

「舞台？」

「二人で歌う場面があって」

こう姉に話していく。

「そのことで」

「そのことで何かあったの」

「そうなの。よくわからなくて」

姉に対しておずおずとした口調であった。

「それで姉さんに相談があって」

「私オペラのことはわからないけれど」

まずはこう前置きしてから言う彰子であった。

「それでもいいの？」

「ええ、御願い」

それでもだというのであった。

「それでね」
「うん、それで」
「練習したいの」
相変わらずその様子はおずおずとしている。楚々とした外見が彼女を余計にそう見せている。容姿は姉とは対称的だがそれがかえってお互いをよく見せている。
「その歌を」
「つまりあれね」
彰子は妹の話をここまで聞いて述べた。
「私が明香の相手役になって歌うのね」
「駄目かしら」
「いいわよ」
微笑んで返してきた彰子であった。
「それなら」
「有り難う。実は」
「実は。今度はどうしたの？」
「その相手の声が丁度姉さんと同じ声の域なの」
「私の声になの」
「そう、ソプラノなの」
七海が言った指摘と同じであった。やはり彼女の声はそれであった。
「それもかなり高い声だから」
「それで私なのね」
「相手のその娘とも部活で練習はしているけれど」
それは欠かしていないようであった。この辺りは真面目な彼女らしいと言えた。
「それでも難しい曲だから」
「お家でも練習しないとってことね」
「そうなの」
まさに彰子の考え通りであった。何処までもよくわかっていると

いう感じですらある。
「それでなの」
「それでどんな曲なの？」
受けると答えたからにはであった。次はそのことについて尋ねる彰子であった。
「それでどんな曲なのかしら」
「すぐに歌詞持って来るわ」
それはもう用意してあるということであった。
「それと曲はね」
「ＣＤがあるの？」
「ええ」
そちらもであった。実に用意がいい。
「それもあるから」
「じゃあ練習には充分ね」
「充分なの」
「早速はじめるの？」
彰子は早速明香に話してきた。
「それで」
「はじめていいの」
「私はいいわよ」
にこりと笑って話す彰子だった。
「明香がいいのなら」
「けれど姉さんにも都合が」
「都合なんてどうでもなるし」
そうだというのである。
「だって今はテレビを見てるだけだしね」
「それだけなの」
「そうよ、それだけじゃない」
まさにそうだと話すのであった。
「テレビなんて何時でも観られるじゃない」

「じゃあ本当に」
「ええ、それじゃあ」
「はじめましょう」
こうして練習に入ることになった二人だった。実際にＣＤをセットしてそのうえで歌いはじめる。それをまずは一回やってから。明香は姉に言ってきた。

第百八十四話　二重唱その二

「姉さんの歌って」
「どうしたの？」
「上手いわ」
素直に感嘆する言葉を出したのだった。
「本当に」
「そう？美味いの？」
「ええ、美味いわ」
それは確かだというのである。
「本当にね」
「そう。だったらいいけれど」
「姉さんって歌前より上手くなったし」
「そうかしら」
「それだけ上手かったら」
そう話していく。
「歌劇部にも入られるわよ」
「それはないわよ」
妹の今の言葉は笑って否定した姉だった。
「歌劇部はプロじゃない」
「プロじゃないわよ」
それは否定する彰子だった。
「だって」
「だって？」
「部活だから」
ここでは妙なまでに真面目になる明香だった。
「部活はプロじゃないわよ」
「そこまで凄いってことだけれど」
「まだまだよ」

この言葉は謙遜のものではなかった。本当に言っていた。
「それはね」
「まだまだなの」
「そうよ。本当の歌手になるとこんなものじゃないから」
そしてある歌手の名前を出してきたのであった。
「二十世紀の歌手だけれど」
「うん。誰なの？」
「モンセラート＝カバリエって歌手がいたのよ」
「カバリエ？ええと、中央政府の外相ではなくて」
連合ではカバリエといえば外相である。そうしたイメージで完全に定着してしまっているのである。それで彰子も今こう言ったのである。
「違うの」
「名前は一緒だけれど」
違うというのである。
「あと外見もそっくりだけれど」
「そうだったの」
「私の部屋にカバリエの写真あるから持って来ていい？」
「ええ、御願い」
それで頼むと答える彰子だった。
「それだったら」
「わかったわ。少し待って」
こうして少し席を外してそれを持って来るとであった。確かに本の中のモンセラート＝カバリエはニキータ＝カバリエにそっくりであった。まさに生き写しである。
その彼女の写真を見て彰子も言った。
「これは確かに」
「そっくりよね」
「ええ、本当にね」
こう言ってそのことを認めた。

「全く同じ人みたい」
「この人の歌も残ってるし」
「CDになのね」
「そうなの。歌った役がとても多くて」
そのカバリエの話になっていた。非常に有名な歌手なのはこの時代に名前が残っていることからもはっきりとわかることである。
「そのどれもが完璧だったのよ」
「完璧だったの」
「イタリアオペラだけじゃなくて」
やはりオペラはまずはイタリアである。この時代の連合でもそれは同じだ。
「ドイツオペラにフランスオペラ、ロシアオペラまで歌ったのよ」
「それってかなり凄いわよね」
「同じスペインの歌手だったプラシド＝ドミンゴもそうだったけれど」
「ドミンゴは私も知ってるわ」
彰子はその名前を聞いてすぐに答えた。
「二十世紀から二十一世紀はじめのテノールよね」
「そうよ。それこそ物凄い歌手だったのよ」
「その人は私も知ってるわ」
音楽史に名前が残る大歌手である。

第百八十四話　二重唱その三

「学校の授業でも出たし」
「カバリエは出なかったかしら」
「マリア＝カラスは出たわ」
出たのは彼女であった。
「音楽を変えた歌手だって書いてあったわ」
「カラスは別格だったから」
明香は当然彼女のことも知っていた。
「その歌だけじゃなかったから」
「他にもなの」
「カリスマが凄かったのよ」
カラスの何が一番凄かったかというとである。カリスマだったのだ。こればかりはどれだけ技量があろうとも決して身につけられるものではない。
「本当にね」
「カリスマがなのね」
「そう、だからあそこまで知られているのよ」
「歌はどうだったの？」
「当然歌も凄かったわ」
それも言うまでもないことだった。実際にカラスはオペラを変えたとまで言われる技量も持っていた。しかしそれだけではなかったのである。
「映像も残ってるけれど」
「映像もあるの」
「昔のだけれどね」
そうした注釈はついてもである。
「あるけれど。観る？」
「あれ、明香カラスのＤＶＤも持ってるの」

「最初は白黒だったのをカラーで再現したものなの」
この時代はそうした技術も存在しているのである。
「それがあるけれど」
「今はいいわ」
それはいいというのである。
「今はね」
「それはいいの」
「ええ、いいわ」
また言う彰子だった。
「けれどカラスってそんなに凄かったのね」
「演技力も高かったのよ」
このことも話されるのだった。
「もうね。鬼気迫るっていうか」
「そんなに凄かったの」
「技量も演技力もそれぞれ凄い歌手は多いわ」
伊達に歌手というわけではないのである。そのカバリエにしてもであるのだ。
「それでも。カラス程の歌手は」
「いないのね」
「そう、いないわ」
また言う明香であった。
「私はカラスとは声の域が違うけれど」
「マリア＝カラスはソプラノじゃないの？」
「ソプラノはソプラノでも」
明香の言葉に足すものが出て来た。
「かなり特殊だったのよ」
「特殊って？」
「ソプラノにしては声がかなり低くてね」
「低いの」
「そう、メゾソプラノに近いのよ」

それがカラスの声だという。明香はそのことを話していく。
「とてもね。メゾソプラノの歌手の人との二重唱だと区別がつきにくい位に」
「そんなに低いの」
「聴き分けるのに苦労したわ」
「そんなに苦労したの？」
「そうなの。どちらがカラスなのか一瞬わからなかったわ」
明香はそこまで言う。見れば部屋の中のＣＤケースの中には多くのオペラのＣＤがある。そこにはカラスの名前も見られた。確かにだ。
「カラスの声はドラマティコ＝ソプラノって言っていい位だから」
「ドラマティコっていうと」
「ソプラノで一番低いソプラノよ」
それだと姉に話した。
「カラスはその中でもとりわけ低いわね」
「何かよくわからないけれど」
「聴いていればわかるから」
それはわかるというのである。
「それで」
「それでわかるの」
「カラスはすぐにわかるわ」
こうまで話す。

第百八十四話　二重唱その四

「それでね」
「うん、それで」
「その歌も歌う？」
「カラスの歌も？」
「どうかしら」
　このことを提案してきたのである。
「それで」
「それはいいわ」
　いいというのであった。
「だってカラスの声は低いのよね」
「そうよ」
「けれど明香の声は高いし」
　まずは妹のことを話した。そのソプラノでも最も高い声の彼女をである。
「喉に負担かかるわよね」
「そういう曲ばかりじゃないけれど」
「けれどいいわ」
「やっぱりいいの」
「だって明香は本当に歌手じゃない」
　歌劇部という意味である。このことを言ってきたのである。
「歌手でしょ。だから喉に変な負担をかけたらいけないわ」
「だからなの」
「そう、だから」
　また話すのだった。
「止めておきましょう」
「それじゃあまた」
「さっきの曲練習しよう」

にこりと笑って妹に話した。
「またね」
「わかったわ。それじゃあ」
「この曲いい曲よね」
「モーツァルトよ」
「モーツァルト？ってことは」
彰子は今の明香の言葉を聞き逃さなかった。そのうえで言うのだった。
「次の舞台はモーツァルトなのね」
「後宮からの逃走っていうのだけれど」
「後宮からの逃走って！？」
「モーツァルトのドイツ語のオペラなの」
それであると姉に説明した。
「喜劇で」
「喜劇なのね」
「私はそれのヒロイン役なの」
「凄いじゃない、それって」
「物凄く難しい歌もあって」
ここでふと顔を曇らせた。
「今から成功するかどうか心配で」
「そんなに難しい役なの？」
「コンスタンツェという名前なの」
その名前も話すのだった。
「モーツァルトの奥さんの名前で」
「そうだったわね」
彰子もモーツァルトの妻の名前は知っていた。
「その役だけれど」
「それが難しいの？」
「かなり。技術的に難しくて」
「そのコロトゥーラが」

「コロトゥーラね」
その話を聞いて考える顔になる彰子だった。
「そうなの。それで」
「ええ、それはわかったかしら」
「わかったわ。ただ」
「ただ？」
「だから練習してるのよね」
そのことをまた言ってきたのである。
「明香も」
「ええ、そうだけれど」
「じゃあ練習しよう」
微笑んで妹に告げた言葉だった。
「一緒にね」
「そうよね。わかったわ」
姉の言葉に頷いてであった。明香はまた言うのだった。

第百八十四話　二重唱その五

「それじゃあまた」
「その難しい歌も歌うのよね」
「そのつもりだけれど」
「それも二人で歌う歌なの？」
「一人なの」
こう答えるのだった。
「一人で歌う歌なの」
「一人で歌う歌は確か」
「アリアよ」
オペラ用語だった。完全にである。
「アリアなの。その後宮からの逃走で最も有名な歌で」
「一番有名だったら特になのね」
「今から緊張しているの」
そうは言ってもである。明香はあまり表情が変わらないタイプである。それで今も表情には出てはいない。しかし声にははっきりと出ていたのである。
「実際ね」
「そうよね。それはわかるわ」
そして彰子は妹のその緊張をもう察しているのであった。
「明香今とても緊張しているわよね」
「できるかしら、本当に」
「できないと思ったら」
「練習なのね」
「そうすればいいから」
その妹の緊張をほぐす為にあえて微笑んでみせた彰子だった。
「今から練習しましょう」
「じゃあ」

姉のその言葉を受けてだ。妹も笑顔になった。そうして応えてであった。
「またに重唱の練習を二回位してからね」
「後でそのアリアね」
「そうするわ。姉さんにはね」
「私は？」
「聴いていて欲しいの」
これが今の彼女の姉への願いだった。
「その練習の歌を」
「わかったわ。それじゃあ」
「時間取ってしまうけれど」
「いいのよ、それは」
それはいいというのであった。
「それはね」
「いいの？」
「だって難しい歌よね」
「ええ」
それはもう言った通りである。その難しさは他ならぬ明香自身が最もよく知っていた。少なくともそのつもりではあった。自覚があった。
「とても」
「それだったら横で確かめる人が必要よね」
「姉さんがそれをしてくれるのね」
「私でよかったら」
まさにそうだというのである。
「そうさせてもらうわ」
「有り難う。だったらね」
「そのアリアの時もいるからね」
「それじゃあ」
こうしてそのアリアの練習も聴いてもらうのだった。この日はそ

うして家でも練習した。その次の日の部活である。体力をつける為のロードワークに筋力トレーニングの後で舞台での練習に入った明香は。その難しい歌を歌ったみた。ジャージ姿であるが今はそれでよかった。

その歌を聴いてだ。同じ歌劇部の部員が言ってきたのである。

「何か昨日よりもね」

「昨日よりも？」

「歌上手くなってるわよね」

その彼女の歌のことである。

「何か」

「上手くなってるのね」

「ええ。その歌って難しい歌じゃない」

歌の難しさはよく知られていた。見せ場でもあるから余計にである。

「しかも明香ってどっちかっていったらイタリア派じゃない」

「ええ」

ドイツオペラとイタリアオペラである。彼女のレパートリーはどちらかというとイタリアオペラの作品の方が多いのである。これは昔から別れている傾向がある。

第百八十四話　二重唱その六

「それでドイツ系のコロトゥーラの歌だから大変なのに」
「姉さんに聴いてもらったの」
ここでこのことを話した。
「実は」
「お姉さんに？」
「ええ、そうなの」
昨日の練習のことを話すのだった。
「それでだけれど」
「そうなの。聴いてもらったのね」
「それで何処をどうしたらいいかって教えてもらって」
「へえ、凄いじゃない」
その部員はその話を聞いて素直に驚いていた。
「それでだけれど」
「お姉さんって確か二年Ｓ一組だったわよね」
「ええ。知ってるの」
「普通科の」
そこまで言うのだった。
「そうだったわよね」
「そうよ。普通科の」
「あのクラス個性的な人が多いから」
このことで有名なクラスであるのだ。そしてそれは間違いではなかった。
「だから知ってるけれど」
「そんなに有名なの」
「あのクラスはね」
彰子自身がとは言わないのだった。
「お姉さんはそんなに目立たないけれど」

「姉さんはおっとりしてるけれど」
彼女のそのおっとりとした性格は明香もよくわかっていた。実の姉妹だけあってそれは当然のことだった。非常によく知っているのである。
「けれど他は」
「そうよね。静かな人よね」
「どちらかというと」
そうなのである。クラスの中では比較的ではあるがだ。
「だから」
「そのお姉さんに教えてもらったの」
「姉さん歌も上手いから」
そのことをまた話すのだった。
「だから」
「歌そんなに上手いのね」
「この部活にも入られる位に」
「それって凄くない？」
その友人は明香の今の話を聞いてその目を少し丸くさせて言った。
「専門の訓練とか受けてないのよね」
「ええ」
このことも話す。これも本当のことである。
「そうなの」
「それでそんなに歌上手いの」
「それで二重唱の相手もしてもらったし」
「ねえ」
彼女はそこまで聴いて、である。真剣な顔になってそのうえで言ってきたのである。
「一つ考えがあるけれど」
「考えって？」
「あんたはコンスタンツェよね」
「ええ」

そのヒロイン役である。
「その一人だけれど」
「そうだけれど」
オペラでは主役は一人が全てやるとは限らない。二人が交代でやる場合もあるのだ。一人が今日舞台に出ればもう一人が次の日に出る、そういう風になっているのである。
それはこの学園の歌劇部でも同じだ。明香はコンスタンツェ役の一人であるのだ。
「ブロンデは今一人よね」
「そうね。もう一人はこれから選ぶのよね」
後宮からの逃走のもう一人のヒロインである。コンスタンツェの侍女であり非常に頭の回転が早く気の強い垢抜けた娘である。彼女もソプラノなのだ。
「確か」
「お姉さんどうかしら」
その真剣な顔での言葉である。
「ブロンデのもう一人に」
「けれど姉さん歌劇部じゃないわよ」
「入ればいいじゃない」
しかし彼女の返答はこれであった。
「入部していないなら入る。そうでしょ?」
「じゃあ誘うの?」
「あんたから言ってみたらどうかしら」
今度は囁いてきた。

第百八十四話　二重唱その七

「あんたからね」
「私からなのね」
「そうよ。妹が言えばかなりの効果があるわよ」
微笑んで囁くのだった。
「どうかしら。本当にブロンデが決まらないし」
「けれど姉さんは」
「オペラ興味ないとか？」
「どうなのかしら」
首を横に振っての言葉である。
「それは」
「その辺りはわからないの」
「歌を歌うのは好きだけれど」
それはというのである。
「けれど。歌劇部に入ってくれるかしら」
「駄目で元々よ」
その辺りは随分割り切っている言葉であった。
「まずは声をかけてみることよ」
「それからなのね」
「そう、まずは声をかける」
何処かナンパを思わせる話になっていた。
「そうしないと何もかもはじまらないわよ」
「じゃあ今日にでも帰ったら」
「そう、声かけておいてね」
そのことを妹である彼女に話すのだった。
「それでいいわね」
「わかったわ。それじゃあ」
明香も遂に頷いた。

「話してみるわ。私から」
「ブロンデも確保できるし」
彼女はまた言うのだった。
「それに」
「それに？」
「凄い人材が手に入るかも知れないし」
このことも頭の中に入れているのであった。
「部活にとっていいことよ」
「まだ入るって決まってないけれど」
「入った場合よ」
多分に希望的観測であった。
「その場合はなのよ」
「いいのね」
「こちらは失うものはないし」
リスクはないのだという。
「いいじゃない。それだったらね」
「やる価値はあるのね」
「ノーリスクハイリターンよ」
最高の割のいい話だというのだ。
「だからね」
「歌劇部にとってはなのね」
「まあ無理にとは言わないけれど」
流石にそこまでは言わなかったし思ってもいなかった。彼女にしてもだ。
「それはね」
「けれど声だけでもかけてみたら」
「そういうこと」
具体的にはその通りであった。
「それでいいかしら」
「ええ、わかったわ」

友人の言葉に頷きはする明香だった。
「それじゃあ」
「さて、それだったら」
「ええ、そうね」
「お姉さんを御願いね」
このことを言うのである。
「本当にね」
「姉さんが歌劇部に入ったら」
その時のことも考えはじめた。自然にである。
「私と部活でも一緒に」
それは彼女にとっても悪い話ではなかった。妹してである。
「いられるのね」
「歌も上手いお姉さんって素敵じゃない」
彼女はこうしたことも言ってきた。
「それに美人姉妹の二重唱って絵になるわよ」
「美人なのは」
そう言われるとつい、であった。顔を真っ赤にしてしまいそのうえで口ごもってしまった。そう言われると弱ってしまうのは彼女の性格故であった。
「そんなことは」
「自覚はしていなくてもそうなのよ」
こう返す彼女だった。
「それじゃあね」
「声をかけるのね」
「そういうことよ」
話がまた動いたのだった。明香は姉の彰子を部活に誘うことになった。舞台の他にもこうしたことでも考えを及ばせることになったのである。

二重唱　完

2010・1・30

第百八十五話　誘ってみてその一

誘ってみて

姉の彰子を自分のいる歌劇部に誘うことになった明香。部活の練習が終わってからも話を出してきたその友人とその話をするのであった。

二人は今は喫茶店にいる。そこで話すのであった。

「それでだけれどね」

「ええ」

赤いコーヒーを飲みながら話し合う。とはいっても明香は聞くだけである。

「話す場所はお家よね」

「多分そこで」

そうだというのである。

「話すことになるわ」

「じゃあ任せるわ」

「私に？」

「そうよ、任せるわ」

こう言ってきたのである。

「だってお姉さんのことはよくわかってるわよね」

「まあそれは」

このことには答えられた。実際に姉妹であるから長い付き合いである。それは否定したくとも否定できない事実であった。明香にしろ事実を否定しはしなかった。

「姉さんのことは」

「一番知ってるとは言わないのね」

「その人でもわからないところがあるものだから」

こう答えた明香だった。

「人は」

「それはそうね」
友人も今の彼女の言葉にはそのまま頷いた。
「誰かのことを一番知っているって言う人間程」
「その人のことはわかっていないから」
「そうよね。しかも馬鹿な奴程そう言うのよね」
何故かここで彼女の顔が顰められる。
「それで馬鹿なことをして信用なくすのよ」
「昔何かあったの？」
「別に」
一応こう言いはしてきた。
「何もなかったわ」
「そうなの。だといいけれど」
「昔嫌な気分を味わっただけ」
だがこうも言うのだった。
「それだけよ」
「じゃあやっぱり」
「まあその話はいいから」
彼女の方から話を切ってきた。

第百八十五話　誘ってみてその二

「それでね」
「ええ、それで」
「お姉さんのことだけれど」
話が戻った。
「いいかしら」
「それよね」
「それじゃあ任せるけれどいいわよね」
「ええ」
明香も小さく頷いて答えた。
「それじゃあ」
「歌劇部としても人材が欲しいしね」
それが事情であった。
「だからね」
「人材がね」
「何処だって人材は欲しいわ」
これはどの組織でもであった。例え部活でもだ。
「だから余計にね」
「姉さんが入ったら」
「そう、歌劇部にとって大きいから」
部活のことを念頭に置いた話だった。
「だからね」
「そういうことね」
「そういうことよ」
そんな話をしてからであった。明香は姉にそのことを話すことにしたのだった。彼女は不安であった。しかしそれでもまた何かが確実に動いていた。

誘ってみて　　完

2010・1・31

第百八十六話　姉への言葉その一

姉への言葉

部活から家に帰ると。いつもの様に姉が夕食を作っていた。台所からその優しい声が来た。

「お帰りなさい」

「只今」

いつもの挨拶である。まずはそれからだった。

「今日の晩御飯はね」

「何なの？」

「ポークチャップよ」

それだというのである。

「それと薩摩芋のサラダ」

「薩摩芋なの」

「そう、それ」

まさにそれだというのである。

「薩摩芋の中にオニオンと胡瓜と魚肉ソーセージを入れたの」

「美味しそうね」

「明香薩摩芋好きだから」

彼女を優先してのことだというのである。

「だから考えたのよ」

「有り難う。それじゃあ楽しみにしてるから」

「それとね」

メニューはまだあるのだという。話す彰子も楽しそうである。

「スープもあるから」

「スープは何なの？」

「オニオンスープよ」

今度はそれだった。スープにも玉葱が入っているのだというのだ。

「それで御飯は十六穀御飯にしたわ」

「十六穀なの」
「これはお兄ちゃんが好きだけれど」
「私も好きよ」
実際に彼女の好物でもあった。彼女の好きなものは全て知っていてそのうえで料理を作っている彰子だった。妹のことがいつも念頭にあるのだ。
「それでデザートはね」
「デザートは？」
「買ってきたものだけれど」
彰子はここでは少し申し訳なさそうに言ってきた。その間に明香は一旦リビングに来た。そのうえでそのまま廊下なしで続いているリビングにいる姉の話を聞くのである。
「それでいいわよね」
「別に悪くはないわ」
これは本音であった。
「デザートまでなんて」
「いつも買ってるじゃない」
これはその通りであった。実際にいつも買っていたりする。それは絶対に忘れないのだった。
「アイス買っておいたから」
「アイスクリームなのね」
「そうよ、ブルーハワイ」
それだというのである。
「それとバニラ買っておいたから」
「そうなの。それだったら」
それを聞いた明香はソファーに向かう。そこの端に鞄を置いて自分は中央に座ってである。まずはテレビのスイッチを押してそのうえでまた姉に問うのだった。
「姉さんはどっちを食べるの？」
「両方」

返答はこれだった。
「両方のつもりだけれど」
「両方って」
「明香も両方よ」
すぐにこの言葉も来た。
「それは安心していいから」
「私も両方なの」
「バケツみたいに大きいの二つ買って来たのよ」」
笑顔と共の言葉だった。
「当分それでデザートいけるから」
「バケツみたいなって」
「安かったのよ」
まさに家庭の人間の言葉だった。
「だからね」
「それで買ったの」
「定価の半分だったの」
具体的な値段まで話された。
「だから買ったのよ」
「安かったのね」
「ここぞって思ってね」
言葉には会心のものもあった。
「それでなのよ」
「じゃあデザートは暫くはアイスなのね」
「その二つでいいよね」
「いいわ」
テレビを観ながら放す妹だった。アニメである。

第百八十六話　姉への言葉その二

「今日は姉さんが作って」
「明日は明香よね」
「そうよね」
「期待してるからね」
妹の料理もいいのを知っているからである。こうしたところは実によく似ている姉妹である。外見も背丈もまるで違うがそれでもであった。
「明日ね」
「有り難う」
「今度の舞台もね」
そしてそれもだというのだった。
「期待してるから」
「舞台。そうよね」
部活での友人の言葉を思い出さずにはいられなかった。
「それね」
「楽しみにしてるからね」
「うん、それで」
「それで？」
「姉さん」
料理を作っている姉に対して言うのだった。意を決して。
「いいかしら」
「いいって何が？」
「実は今歌劇部人が足りないの」
こう話を切り出すのであった。
「ソプラノの人がね」
「そうなの、あんなに人がいるのに」
「そうなの、いないの」

また話す彼女だった。
「それでだけれど」
「うん。それで？」
「姉さんよかったらどうかしら」
こう言うのだった。
「姉さんも歌劇部に」
「私が？」
「ええ、どうかしら」
また姉に言うのであった。
「ソプラノ歌手に」
「歌手って」
それを聞いて応える間も料理をする彼女だった。それは忘れない。
「私がなのね」
「それでどうかしら」
また姉に問うのである。
「歌劇部に入ってそれで歌手になるのは」
「そうね」
それを聞いてであった。彰子はすぐに答えるのだった。やはり料理をしながらだ。背中越しに妹に対して答えるのだった。
「私でいいの？」
「いいのって？」
「私なんかが歌劇部に入って」
こう言ってきたのである。
「それでいいのかしら」
「ということは」
「それってスカウトよね」
応えながらもまだ料理を続けていた。
「明香からの」
「そう言われるとどうだけれど」
まさにその通りである。友人から言われたにしろその通りである。

彼女もわかってそのうえで声をかけたのである。
「いいのね、じゃあ」
「私今部活していないし」
実はそうなのである。彼女は今のところ帰宅部なのである。従って時間はかなりあるのである。しかしそれは同時に退屈な時間も多いということだ。
それでだ。彼女はこのことも言ってきたのであった。
「時間も多いし」
「それじゃあ本当に」
「入らせてもらうわ」
これが返答であった。
「それでね」
「わかったわ。じゃあ明日から」
「そうね。明日歌劇場に行けばいいのね」
「そこで入部届け書いてくれたら終わりだから」
それだけだという。
「それで姉さんはね」
「明香と同じ部活ね」
ここで、であった。顔を振り向けてきたのである。そのうえで妹に対してにこりと笑ってそのうえで言ってきたのである。
「それってはじめてじゃないかしら」
「そうね」
口元だけで微笑んで答える妹だった。

第百八十六話　姉への言葉その三

「今まで私達部活はね」
「別々だったからね」
「そういえば姉さんって」
「どうしたの？」
「中学は料理部だったわよね」
料理上手な彼女らしい部活であると言える。
「けれど高校では入らなかったのね」
「入ろうと思ったけれど」
ここでその彼女からの返答が来た。
「それでもね」
「どうして入らなかったの？」
「何かきっかけがなくて」
だからだというのである。
「それでなの」
「機会がなかったの」
「新入部員の歓迎でも何でか料理部に声をかけられなかったし」
話は彼女の入学の時の話にもなった。
「だからね」
「料理部ってうちの学校結構数あるのに」
「それでもよ」
それでもだというのだった。
「何処からも声がかからなくて」
「自分から入ろうって思わなかったの？」
「何か入学してからあれやこれやとあって」
今のクラスだけでなく一年の頃からそうだったというのである。
「それで気付いたら」
「今に至るのね」

「けれどね」
声も表情も微笑んできた。
「それもこれで終わりね」
「歌劇部に入ってなのね」
「それで終わりよ」
微笑みはそのままであった。
「もうこれでね」
「そうね。それじゃあね」
「ソプラノよね」
今度はその声域のことを問うのだった。
「声は」
「そうよ、レッジェーロ」
明香はその細かい域まで話した。
「丁度姉さんの声の域だから」
「丁度いいのね」
「そういうこと。それじゃあ」
「楽しみね」
こんなことも言ってきた彰子だった。
「何か」
「楽しみなのね」
「そうなってきたわ」
話しているうちにであった。
「何か私もね」
「そう。だったら余計にね」
「御願いするわ」
笑顔と共の言葉だった。
「私も」
「有り難う、姉さん」
明香はそんな姉に礼を述べた。
「そう言ってくれて」

「お礼はいいけれど」
「それでも有り難う」
これは明香の心からの言葉だった。
「それで私と姉さんで」
「明香となのね」
「二人で歌えるわ」
彼女の声も自然と笑みになっていた。
「私がコンスタンツェで」
「それで私は？」
「ブロンデよ」
それだというのである。
「一緒に出る場面も多いし」
「そんな役なの。私がお嬢様で」
「お嬢様なのね。明香らしいわ」
「あくまでお芝居の中よ」
ここでこう前置きしてからまた話すのだった。

第百八十六話　姉への言葉その四

「姉さんは侍女なの」
「そうなの」
「嫌かしら」
「そんなことないわよ」
それを聞いても彰子は声を笑わせていた。それは何故かというとであった。彼女はそういうこともわかって話をするのだった。
「だってオペラよね」
「ええ」
「オペラの侍女っていい役が多いから」
「知ってたの」
「いつも観てるからね」
妹の舞台を見ていてだった。それは知っていたのである。
「だからね」
「そういえばそうだったわね。特にモーツァルトの侍女は」
明香も話していく。
「いい役ばかりだし」
「モーツァルトって侍女が好きだったのかしら」
「多分」
明香もそれは何となく思っていることだった。
「そうだと思うわ」
「結構侍女とか女中さんとか出て来るわよね」
「喜劇だと大抵出てるわ」
まさにそうだという。
「村娘とか若い女の子は絶対にね」
「そうした役なのね、私は」
「ええ。姉さんの声だとそういう役が多くなるわ」
「成程。そうなのね」

それを聞いてあらためて頷く彰子だった。勿論その間も料理を続けていく。その手際は見事なものであった。
そうして作りながらだ。さらに言うのだった。
「ねえ、明香」
「そういう役だから」
「オペラの話じゃなくてね」
ここで話が変わっていた。
「晩御飯できたわよ」
「あっ、もうなの」
「そうよ。今できたわよ」
声が微笑んでいた。
「食べましょう」
「そうね。それじゃあ」
「兄さんもまだ帰ってないけれど」
「兄さんはまたアルバイトだから」
それでいないというのだった。
「仕方ないわね」
「いつも通りね」
彰子の言葉は少し寂しげなものだった。
「それじゃあ」
「二人でね」
こう話してテーブルに着く。そのうえで頂きますからはじめてだった。
二人は食事をはじめる。その中でまた話す彼女達だった。
今はテレビを観ていない。二人だけで話をしている。そうしてである。
「ねえ」
「何？」
「お風呂だけれど」
彰子から言ってきたのである。

「どちらが先に入ろうか」
「私は別に」
明香はそれについてはどうでもいいというのだった。
「どちらでもいいけれど」
「そうなの」
「姉さん先に入ったら？」
「私もどちらでもいいわ」
彼女もであった。姉もそれは同じだった。
「先でも後でも」
「いいの、姉さんも」
「ええ。そうだ」
「そうだ？」
「二人で一緒に入らない？」
こう妹に提案してきたのだ。
「それだったら」
「二人一緒に」
「それだと先とか後だとかないじゃない」
「そうね。それは」
「それにね」
彰子はにこりと笑ってまた妹に言ってきた。
「二人一緒だと」
「一緒だと？」
「お風呂洗いも楽じゃない」
話が所帯じみてもきていた。
「だからね」
「そうね。それだったら」
「一緒に入ろう」
また勧めてきた。

第百八十六話　姉への言葉その五

「それじゃあ」
「そうね。御飯を食べたらね」
「二人でね」
こうやり取りをしてそのうえで夕食を食べて二人で風呂に入った。
二人は向かい合って湯船の中にいてだ。そのうえでまた話すのだった。
「そういえば明香って」
「どうしたの？」
向かい側にいる姉の言葉に応える。
「何かあったの、姉さん」
「背また高くなったのね」
このことを言ってきたのである。
「最近また」
「そうかしら」
「今大体どの位？」
妹にその背を尋ねる。
「一六四位？」
「多分」
最近計っていないからわからない。だがおおよそで答えた。
「それ位だけれど」
「私より八センチも高いじゃない」
「そうなの」
「そうよ。私より高いなんて」
それを言って少し不満そうな顔だった。
「羨ましいわ」
「背は特に」
「特に？」

「気にすることも」
ないだろうと姉に返すのだった。
「姉さん綺麗だしスタイルもいいし」
「そうかしら」
「そうよ。ただ」
「ただ？」
「確かに私大きいって言われるけれど」
「ほら、やっぱり」
妹の今の言葉にそれ見たことかと返す。
「大きいじゃない」
「コロトゥーラにしてはって」
「コロトゥーラにしてはなの」
「そうなの。これは個人差があるけれど」
こう前置きしてからの言葉である。
「コロトゥーラの人は大体小柄なのよ」
「そうだったの」
「身体が小さいと声は高くなる傾向があるのよ」
「ふうん、そうだったんだ」
彰子はそれを聞いて少し考える顔になった。
「じゃあ私の声が高いのも」
「だからだと思うわ」
それが理由なのだというのだ。
「それはね」
「それで明香はその声にしてはなのね」
「そういうことなの。やっぱり私の背でコロトゥーラは高いみたいなの」
「けれど声は出るのよね」
「一応は」
それはだというのだ。
「出るけれど」

「じゃあそれでいいじゃない」
彰子は妹に明るく述べた。
「声が出るのなら」
「背の大きさはいいの」
「羨ましいけれどね」
彰子はこのことを言うのは忘れなかった。
「それでも。声が出るならそれでいいじゃない」
「この場合背は気にしないでいいのね」
「私はそう思うわ」
そうだというのである。
「それにしても背の高さって声にも影響があるの」
「ワーグナーの歌手の人は大抵大きいけれど」
これは昔からである。ワーグナー歌手は男女共背の高い人間が多い。このことも話されていくのだった。

第百八十六話　姉への言葉その六

「これもね。声が低い歌手が多いからなのよ」
「だからなの」
「ワーグナーのテノールとソプラノは独特で」
明香はそこから話した。
「ヘルデン＝テノール、ホッホー＝ドラマティッシャー＝ソプラノっていって」
「何か凄い名前ね」
「どちらもテノールやソプラノでもかなり低いのよ」
「それで大きい人が多いのね」
「特にテノールはね」
ワーグナーの音楽の大きな特色は何かというとである。テノールにあるのだ。ワーグナーの代名詞と言ってもいい。
「そうなの」
「ヘルデン＝テノールが」
「そう、それがね」
まさにそれだというのだ。
「凄く大きい人が多いの」
「そんなになの」
「二メートル超えてるのが普通で」
連合の成人男子の平均身長はおおよそ一九〇である。なお女子だと一七五位である。それと比べると明香はまだ小柄である。
「もうバス歌手になると」
「男の人で一番低い声よね」
「二メートル二十とかだから」
「殆ど巨人ね」
「実際に巨人の役もあるわよ」
このことも姉に話した。

「そういう役もね」
「巨人も出るの」
「ワーグナーの作品で一番有名なニーベルングの指輪だけれど」
「あっ、それは聞いたことがあるわ」
そのタイトルは彼女も聞いていた。
「確か十五時間あるのよね」
「それで四日かけて上演するのよ」
「あらためて聞くと凄い作品ね」
オペラ史上に残る大作である。それと共にワーグナーのその名前を不滅のものにした作品でもある。あまりにも圧倒的な作品である。
「それって」
「その作品に出て来るのよ」
「巨人がなのね」
「そうなの」
姉への説明だった。
「それで実際にそれを歌う人もね」
「大きいのね」
「演出がいらないんじゃって思う位に」
「そこまで大きい人が多いの」
「私にしろ姉さんにしろ」
二人を同じにして話した。
「そうした人達から見たらそれこそ」
「小人かしら」
「そうだと思うわ」
「そうよね。一五六センチじゃね」
彰子も自分の身長のことはよくわかっていた。自分をよく知っていると言える。彼女の場合は身長に限った話ではない。
「二メートル二十の人から見たらね」
「だからね」
「そうなんだ。そういえば歌劇部ｔって」

「大きい人もいるでしょ」
「だからだったのね」
このことにも気付いたのだった。
「歌手っていっても色々なのね」
「そうよ。色々よ」
あらためてそうだと話す。
「姉さんもその中の一人になるのよ」
「わかったわ。それじゃあ」
「二人でね。これからはね」
「うん。歌劇部ね」
ここではにこりと笑う姉妹だった。
そうしてであった。彰子は湯船から出てだ。妹に言ってきたのである。
「それじゃあね」
「それじゃあ？」
「身体洗おう」
こう言ってきたのである。
「身体洗ってあげるから」
「いいわよ、それは」
姉のその言葉に困ったようでありそれでいて恥ずかしそうな笑みになってだ。そのうえでこう言葉を返したのである。
「自分で洗うから」
「いいわよ、遠慮しないでいいのよ」
しかし彰子も彰子で言う。
「子供の頃からそうだったじゃない」
「それはそうだけれど」
実は子供の頃から二人一緒に風呂に入ることが多かった。そうした時彰子はいつも明香のその身体を洗っていたのである。
「けれど今は」
「じゃあ」

「じゃあ」
「明香もそうすればいいじゃない」
彰子はこう言いながら身体を洗う用意をしている。
「そうでしょ？お互いに洗いっこすればね」
「そうすればいいの？」
「それならお互い様じゃない」
微笑んで妹に言うのだった。
「どうかしら、それで」
「お互いならなのね」
「そうよ、お互い様ならね」
このことをまた妹に話す。
「それならどうかしら」
「わかったわ」
ここまで話を聞いて頷いた明香だった。
「それなら」
「じゃあお風呂から出て」
「ええ、それじゃあ」
「何かこうして明香と一緒にいると」
彰子のその顔がほんわかとしてきた。
「落ち着くし」
「私もよ」
湯船から出ながら。明香も微笑んで言うのだった。
「姉さんと一緒にいるとそれだけで」
「落ち着くのね」
「とてもね。それじゃあ」
「洗いっこしようね」
「ええ」
こんな話をしながらだった。二人はその見事な身体に泡を付けていくのだった。彰子にとって大きな出来事となった一日であった。
明香にとっても。

姉への言葉　完

2010・2・4

第百八十七話　入部その一

入部

「ああ、そういえばそうだったよな」
「そうよね」
教室でその話を聞いてだ。ロザリーとパレアナが言った。
「あんた部活入ってなかったよな」
「何処にも」
「それでね」
彰子であった。彼女が二人ににこにことして話している。
「明香に誘われてね」
「それで歌劇部か」
「妹さんと同じ」
「これで部活も妹と同じなのよ」
その顔はにこにことしたままである。
「嬉しいわ」
「そもそも何で今まで部活入らなかったんだ？」
「そうよね」
ロザリーとパレアナはこのことを彼女に問うた。
「帰宅部だったんだよな」
「何処にも入る気なかったの」
「何となくね」
彰子は二人のその問いに首を少し捻って述べた。
「縁っていうかそういうのもあるし」
「ああ、そうだよな」
「それはね」
入部やそういうことについてはまさにそうだった。こうしたことも縁であり縁があれば入ることもある。しかしそれがなければ入りたいと思っても入らないことがあるのだ。世の中はどんなことでも

こうしたことが起こるものなのである。
「じゃあそれでか」
「今まで帰宅部だったの」
「そうなの。ただね」
ここでまた話す彰子だった。
「歌劇部は今まではね」
「考えてなかったんだな」
「それは」
「ええ、全く」
考えていなかったと。実際に話す。
「声がかかるなんてのもね」
「それでもか」
「入ることになったのね」
「本当に縁よね」
微笑んで言うのだった。
「こういうのって」
「そうだな、言われてみればな」
「縁で入った話ね、確かに」
「ええ。それでだけれど」
さらに話す彰子だった。
「私すぐに舞台に出ることになったのよ」
「えっ、もうかよ」
「入部してすぐに!?」
二人はそのことを聞いてさらに驚いた。入部してすぐに舞台に立って歌うということがどれだけ異例かわかっているからである。
「それはまた凄いな」
「大抜擢じゃない」
「それでスカウトされたのよ」
舞台に立つ為だというのだ。
「丁度ソプラノで高い声の娘が一人しかいなくて」

「それでか」
「あんたそういえば声高いしね」
地声もなのだった。勿論歌声もである。
「だからスカウトされたんだな」
「声のせいで」
「そうなの。明香が言うにはね」
まさにそうだというのである。そして明香は事実を話していた。
実際にそのせいで彼女は歌劇部にスカウトされたのである。
「私の声が高いから。それに」
「それに？」
「他にも理由があるの」
「歌が上手いからだって」
これは絶対条件であった。何しろ歌劇部だからである。歌が上手くなくては話にならない世界である。舞台で歌を歌うのであるから。
「だからって言ってもらったわ」
「ああ、あんた歌もな」
「実際に上手いしね」
ロザリーとパレアナはこのこともわかったのだった。

第百八十七話　入部その二

「じゃあもう運命的なものだな」
「スカウトされて入部するのは」
「そうよね。今日歌劇場に行ってね」
今日早速だというのだ。
「入部のサインしてそれで決まりよ」
「姉妹で同じ部活か」
「絵になるわね」
二人はこのことも言った。
「多分向こうもそれわかってるんだろうな」
「だから余計になのね」
「明香と同じ舞台に立つのね」
彰子はこのことも夢の様に思うのだった。やはりその顔は恍惚としている。
「今から本当に楽しみよ」
「あんたにとってもいい話みたいだな」
「この話は」
「そうね」
ここでもにこにことしている。
「明香も喜んでるし」
「仲のいい姉妹だよ」
「本当にね」
こう言って笑いもする二人だった。
「いつも一緒にいるしな」
「登校の時もね」
「私が生まれてすぐに明香が生まれて」
半分のろけであった。明香はそののろけた調子で皆に話すのである。

「一年後でね」
「けれどその時はあんたも物心ついてないだろ」
「お互い赤ちゃんじゃない」
「それでもよ」
笑顔での話は続く。
「ずっと一緒だったから。幼稚園の時も小学校も中学校も」
「本当にいつもなんだな」
「一緒だったのね」
「今もね。そしてこれからもね」
一緒の時は続くのだという。
「二人一緒よ」
「何か双子みたいだな」
「そうね」
そんな彰子の言葉を聞いてだ。ロザリーもパレアナも温かい笑みになるのだった。
そうしてだった。彼女にさらに言うのだった。
「じゃあ二人で仲良くな」
「いい舞台にしてよね」
「うん、頑張るわ」
彰子も温かい笑みになっていた。
「これからね」
「それで舞台は何なんだ？」
「確かモーツァルトよね」
「うん、そうなの」
パレアナの言葉に答えた。
「モーツァルトなの」
「あれって結構難しいんじゃないの？」
パレアナは少し考えてからこう言葉を返した。
「あの人の音楽って」
「そうなの」

「何か作品によって無茶苦茶難しい歌も多いっていうけれど」
彼女もこのことは聞いて知っていたのである。明香の話と一緒であった。
「それで大丈夫なの？」
「それでもって言われたの」
「入部してくれって？」
「そうなの、それでもなの」
この事情も話すのだった。
「それでだけれど」
「何か凄いことになってるな」
ロザリーはその話を聞いて言うのだった。
「彰子がオペラ歌手にかよ」
「プロじゃないけれど」
「いや、それでもだよ」
ロザリーの言葉は驚いているものであった。彼女にしてみればそうならざるを得ない話だったのだ。そしてその理由も話すのだった。

第百八十七話　入部その三

「だってな。歌うところあまり見てないしな」
「あれっ、そうだったっけ」
「あんたカラオケとか行くのかい？」
「よく行くけれど」
この質問にはこう答える彰子だった。
「結構」
「あれっ、そうだったんだ」
「ロザリーとは行ったことなかったかしら」
「ああ、ないよ」
ロザリーが覚えている限りはである。彼女とカラオケに行ったことはなかった。それは間違いなかった。
「他の場所には結構行くよな」
「そうよね。ゲームセンターとかはね」
「本当にそっちはないよな」
あらためて言うロザリーだった。
「たまたまか、それは」
「そうね。たまたまよね」
「それであんたの歌を聴いたことがなかったんだな」
「私もよ」
そしてそれはパレアナもだった。
「私も彰子の歌聴いたことないわよ」
「あれっ、パレアナとはカラオケ行ったことあったんじゃ」
「あまりって意味よ」
ここでこう言ってきたのだった。
「それはあまりなかったじゃない」
「ああ、そういうことね」
「そうよ。あまり行ったことはなかったじゃない」

「けれど歌は聴いてくれてるわよね」
「ええ」
それは確かだというのだ。
「けれど一度聴いただけだから」
「それでどうなんだい？」
一度でもだと。それでも話を聞くロザリーだった。
「彰子って歌上手いのかい？」
「ええ、上手よ」
こうそのロザリーに答えるのだった。
「それもかなりね」
「そうなんだ。それでスカウトされたんだな」
「やっぱりそうだと思うわ」
「クラシックの歌もか」
「上手だから」
「ああ、そういえば」
ここで彰子からも言ってきた。
「二人共さっきは私の歌上手いって言ってくれてたのに何か急に聴いたことないとか言ってるけれどそれはどうしてなの？」
「ああ、これな」
「これはね」
二人共その理由についても話す。
「クラシックの歌はって意味なんだよ」
「そっちの話なんだよ」
「普通の曲とクラシックは違うってことなのね」
「そうだよ。あれはまたな」
「特別だから」
だからだというのである。
「それでこんな話になってるんだよ」
「あんたのクラシックの歌って本当に一度しか聴いてないから」
明らかに普通の曲とは分けて考えていた。

「そうか。そっちもいけるんだったらな」
「それでスカウトされたのなら」
いいという二人だった。それで納得するのであった。
そしてだ。また言うロザリーだった。
「それじゃあな」
「それじゃあ？」
「楽しみにしてるからな」
微笑んで彰子に言うのであった。
「その舞台な。私も行かせてもらうよ」
「来てくれるの」
「当たり前だろ」
微笑んだまま答えた言葉だった。
「それはな」
「当たり前なの」
「友達だろ？」
それが理由だった。

第百八十七話　入部その四

「行かないでどうするんだよ、そうだろ？」
「有り難う」
「御礼なんていいさ」
今度は気さくに笑って述べた言葉だった。
「そんなのはな」
「私もよ」
今度はパレアナも言ってきた。
「是非観させてもらうから」
「二人共来てくれるのね」
「私達だけじゃないと思うよ」
「皆もね」
クラス全員だという。皆来るというのだ。
「だから楽しみにしときなよ」
「いいわね」
「そうなの。それだったら」
彰子はそれを聞いてさらに上機嫌になる。そうしてその日の放課後明るい顔でその歌劇場に行ってだ。部室で入部届けを書くのであった。
「これでいいのね」
「ええ、いいわよ」
ロッカーに囲まれたその部室の中で顧問の先生が応える。顧問の一人である。
「それじゃあ貴女は今から歌劇部員よ」
「宜しく御願いします」
「話は聞いてるわ」
顧問の先生の明るい言葉は続く。
「明香ちゃんのお姉さんよね」

「はい、そうです」
笑顔で先生の言葉に応える。
「妹に誘われまして」
「そうだったの。あの娘に」
「はい、そうなんです」
「さらにいいわ。それじゃあね」
「早速練習ですか？」
「そうよ」
話の展開は早かった。入ってもうであった。しかも入部届けにしろ今書いたばかりである。それで早速練習というのも早い話であった。
しかしだ。先生にしても彰子にしても言うのだった。
「それじゃあ今からね」
「御願いします」
「まずは声を調べたいのだけれど」
練習に先立ってそこからだった。
先生は彼女の言葉を聞いてだ。こう言うのであった。
「歌声はソプラノね」
「えっ、わかるんですか？」
「地声からでも大体わかるものなのよ」
彰子の向かい側に座ってそのうえでの言葉である。
「声域はね」
「そうなんですか」
「そうなのよ。それも」
先生はさらに話していく。
「かなり声の高いソプラノね」
「明香にも言われました」
「そうなの。明香ちゃんからね」
「言われました」
このことをここで話すのだった。

「レッジェーロだって」
「そうね、レッジェーロね」
先生もそのことを把握していた。何処までもである。
「その声はね」
「それもわかるんですか」
「声を聞けば大体わかるのよ」
「そこまでなんですね」
「実は先生はね」
にこやかで優しい笑みを浮かべながらの言葉が続く。
「大学も音楽科だったし」
「音楽の」
「八条大学音楽科だったのよ」
この学園の出身であるともいうのだ。つまりは彰子達にとって先輩にあたる。
「そこで歌を専攻していたのよ」
「それでわかるんですね」
「そうなの。今も舞台に立つし」
「今もですか」
「ええ。本職は先生だけれどね」
「舞台にも立たれるんですか」
「そうなのよ」
こう彰子に話すのだった。

第百八十七話　入部その五

「実はね」
「それでおわかりになられるんですね」
「ええ、そうなの」
「私の声の域も」
話が戻った。そうしてだった。
「おわかりになられて」
「今丁度レッジェーロの娘が一人しかいなくて」
「それで私をスカウトってなったんですね」
「そういうことね。歌手って中々揃わないのよ」
先生の顔が困ったものになる。少しずつ曇ってもきている。
「こういう言葉があるのよ」
「はい？」
「ワーグナーを演奏できる指揮者は常に何人もいるのよ」
そうした指揮者はだというのだ。言うまでもなく指揮者はオペラの中でも非常に重要な位置にある。オーケストラの演奏を指揮するからだ。
「けれどね。歌手はね」
「そうはいかないんですか」
「これはテノールの話だけれど」
これも明香と同じ言葉だった。先生に自覚はないが。
「歌手は五人とはいないのよ」
「歌手はですか」
「そう、ワーグナーを歌えるテノールはね」
それはだというのだ。
「いないのよ」
「世界に五人といないのですか」
「これは地球の頃のお話だから」

「今はもうちょっとですね」
「それでも一つの惑星に五人いるかどうかでしょうね」
どちらにしても非常に少ないというのである。
「ワーグナーのテノールを全て満足に歌える人は」
「そんなに少ないんですね」
「そうなの。歌手はそれだけ少ないのよ」
「そうなんですか」
「確かな歌手はね」
それはだというのだ。
「特に学園の歌劇部だとね」
「余計にですか」
「明香ちゃんにしても」
他ならない彼女の妹のことも話に出て来た。
「よくいてくれたって思ってるわよ」
「よく、ですか」
「そうよ、よくよ」
こう姉である彰子に話す。
「よくいてくれたわ」
「明香も」
「コロトゥーラはワーグナーテノール、ヘルデンテノールと同じ位貴重なのよ」
先生の言葉はかなり深刻だった。そうだというのだ。
「だから余計にね」
「有難いんですか」
「有難いわ。それに貴女もね」
「私もなんですか」
「オーケストラのメンバーもそれは同じよ」
彼等もだという。先生はあくまで人材を求めている。そうした意味では先生はかなり貪欲である。人材収集という面においてはである。

「それはね」
「皆ですか」
「何かが一つ欠けても駄目なのよ」
条件はさらに厳しいものになっていた。
「一つでもね」
「一つでも」
「そう、そして彰子ちゃんもその一つになってね」
「わかりました」
先生のその言葉に頷いてであった。
そのうえで練習に参加する。ジャージ姿になって舞台で歌うとだった。
「へえ、流石は」
「スカウトされただけはあるよね」
「確かにね」
周りの皆も彼女のその歌を聞いて言う。
「上手いし」
「声も綺麗だし」
「声量もあるし」
声量もいいというのだ。声量は歌劇場で歌う場合にはどうしても重要になってしまう。声量が小さいと果てまで届かないからだ。

第百八十七話　入部その六

それでその声量もチェックされたのだ。それもいいというのだ。
「小柄なのにね」
「それであの声はね」
「満足していいわね」
「そうね」
合格だというのだ。こうして彼女の役が決まった。
「ブロンデを御願いね」
「ブロンデっていいますと」
「ヒロインコンスタンツェの侍女よ」
それだというのだ。今回上演される後宮からの逃走という作品においては重要な位置にある役である。ただこれはこの作品においては全ての役にそれがいえる。これは芝居としても音楽としてもである。モーツァルトに端役なしという言葉がある。
「それをやってもらうわ」
「わかりました」
「パートナーは明香ちゃんよ」
その妹の彼女だというのだ。
「それでいいわよね」
「はい」
快い笑顔で頷く彼女だった。
「わかりました」
「姉妹だとお互いがわかってるしね」
この配慮もあるのだった。
「だから余計にね」
「それで明香となんですか」
「そうよ。オペラでも大事なのは息が合ってること」
このことも話される。

「だからね。わかったわね」
「はい、じゃあ明香と一緒に頑張ります」
「さて、これでソプラノが一人加わってくれたし
先生の顔はにこにこにことしていた。
「明香ちゃんのパートナーもできたし」
「私がパートナーですか」
「明香ちゃんのパートナーになれるわよ」
それも大丈夫だというのだ。
「実力も充分だし」
「いえ、私はそんな」
「その謙遜よ」
このことにも言ってきた。
「謙遜が大事なのよ」
「謙遜がですか」
「そう、謙遜して駄目だって思うでしょ」
「はい」
「それでさらに努力するからいいのよ」
だからだというのである。努力こそがというのだ。
「人間は努力してこそよ」
「それが大事なんですね」
「結果は絶対に出て来るから。ただ」
「ただ？」
「他の人の努力を見ようともしなかったり駄目な人間は何をやっても駄目だという人は」
先生の言葉が否定のニュアンスになり眉が顰められる。
「そうした人こそ駄目だから」
「そういう人はですか」
「そうよ。伸びないし成長もしないわ」
そうだというのだ。
「そういう考えは持たないでね」

「わかりました」
「私が言うのはそれだけ。結果よりも努力を見ていくわ」
それは絶対だというのだ。
「それでいいわね」
「はい、御願いします」
こうして彰子は正式に歌劇部に入った。早速練習だった。明香と二人でランニングに出た。その時に妹に言われたのである。
「姉さん」
「何？」
「ランニングとか筋トレは大丈夫？」
このことを姉に問うのである。学園の中を走りながら。
「そういうのは」
「正直得意じゃないけれど」
このことは素直に認めた。
「それでも走ることはできるから」
「大丈夫なのね」
「明香っていつも走ってるのね」
「ええ」
姉の問いに静かに答えた。
「毎日。部活で」
「それで歌が上手になるのね」
「上手になるのとはまた少し違って」
「違うの」
「腹筋を鍛えるのは歌には影響はあるわ」
それはあるというのである。しかし彼女がここで言うのはそれとはまた別の話であった。そのことについて姉に話すのであった。
「体力をつける為なの」
「体力なの」
「そう、体力」
これだと話し続ける彼女だった。

「オペラって普通は二時間はあるから」
「長いわよね、確かに」
「それで体力をつける為ににね」
「走ったりトレーニングしたりするのね」
「そうなの。運動部と同じ位するけれど」
それだけあるというのだ。その運動量はだ。

第百八十七話　入部その七

「それでも大丈夫よね」
「何とかね」
とはいっても姉の運動神経はあまりよくないのは知っている明香だ。それで少し心配しながら彼女の横にいて一緒に走っているのである。
明香の走りは本来はもっと速い。しかし今は姉に合わせて走っている。
そうしてだ。その中でまた彼女に言ってきたのだ。
「それでだけれど」
「うん、何？」
「辛くなったら休みましょう」
そうすればというのだ。
「その時はね」
「休んでいいの？」
「無理をすることはないから」
「そうなの」
「無理をしたらかえってよくないわ」
姉を気遣っての言葉である。だから今も隣にいて一緒に走っているのだ。
走りながらだ。また言う明香だった。
「それでだけれど」
「うん、どうしたの今度は」
「これ」
ジャージのポケットから出してきたのはレモンだった。見事なレモンイエローのそのレモンを姉に対して渡してきたのである。
そしてそれを出してだ。姉にこう言ってきたのである。
「これ食べたらいいから」

「レモンを？」
「レモン食べたら疲れが落ちるから」
それで出してきたのである。
「だからね。食べて」
「有り難う」
「レモン食べながら走りましょう」
言いながら彼女も汗をかいていた。額を流れる汗は玉の様である。
それがきらきらと散って輝きとても綺麗である。それを見せながら
であった。
「それでトレーニングの後は」
「その後は？」
「歌の練習だから」
それだというのだ。
「姉さんと私の二重唱だけれど」
「あの場面ね」
「他の場面の練習もあるから」
それは多いというのである。練習もだ。
「頑張りましょう」
「そうなの。それにしても」
ここでこんなことを言う彰子だった。
「オペラも大変なのね」
「ええ、そうなの」
まさにそうだというのだった。
「ほら、白鳥いるじゃない」
「あっ、それはわかるわ」
汗をかきながらではあるが妹の今の言葉に明るい笑顔で応えた。
「水の中では必死に、なのね」
「ええ、泳いでるわよね」
「それと同じなのね」
「そうなの。同じなの」

彼女が言いたいことは姉に先に取られた。しかしそれに頷く妹だった。
「それと同じだから」
「私が白鳥になるのね」
「それもとびきりの白鳥にね」
「そうね。なるのね」
妹の今の言葉を聞いて確かな顔で頷いたのだった。
「私も」
「だから姉さん」
「ええ」
「頑張ろう」
優しい声を姉にかけた。
「二人でね」
「ええ、私頑張るわ」
彰子もそれに応えて頷いた。
「二人でね」
そんな話をしながらトレーニングを行っていた。二人の時間ははじまったばかりだった。その実り多き時間はである。

入部　　完

２０１０・２・９

第百八十八話　レッスンではその一

レッスンでは

やっとランニングと筋力トレーニングが終わった。彰子は肩で息をしていた。

アスファルトの上にへたれ込み。そのうえではあはあと言っている。

「ふう、やっとね」

「辛かった？」

「ちょっとね」

これはかなり抑えて言った言葉だった。

「やっぱり。普段運動していないから」

「少しずつ慣れていくから」

「そうなの」

「それでだけれど」

ここで姉に対して言う明香だった。

「姉さん、太腿とかはじっくりほぐしておいて」

「筋肉痛ね」

「ええ、それ」

やはりここで言うことはそれだった。筋肉痛についてであった。

「それには注意してね」

「わかったわ。それじゃあ」

「あとは」

そしてさらに言うのだった。

「タオルでよく汗も拭いて」

「ええ」

「あとシャワーは」

姉のことを何かと気遣う。お互いに深く強く気遣い合う二人だった。

そうしてであった。明香はさらに言うのだった。
「後で浴びる？それとも」
「身体を冷やさないように？」
「風邪ひいたら駄目だから」
やはりそれだった。彼女が風邪をひくことに気をつけているのである。何処までも姉のことを深く強く気遣っている妹なのである。
「だからね」
「うん、それは大丈夫だから」
妹に顔を向けて微笑んで答えた言葉だった。
「安心して」
「じゃあいいのね」
「ええ。それでだけれど」
顔の汗をその右手に持っている白く柔らかいタオルで拭きながらの言葉だった。
「いいかしら」
「どうしたの？」
「これからだけれどね」
微笑んでの言葉であった。
「歌の練習よね」
「ええ、そうよ」
その通りだった。やはり次はそれだった。
「舞台で実際に。演技の練習もしながら」
「お芝居の」
「それぞれの役があるから」
この辺りは先に部活に入っているだけはあった。明香の方がよく知っていた。これも当然のことであるがだ。
「だから。そうした意味でもね」
「脚本も覚えないといけないのね」
「そうなの。色々あるから」
「オペラ歌手も大変なのね」

彰子は立ち上がりながら述べた。
「そんなに色々覚えないといけないなんて」
「ええ、特に私と姉さんの役はね」
「大変なのね」
「だから頑張って」
姉を励ましもしてきた。
「本当にね」
「わかってるわ」
妹のその言葉には微笑んで頷いた。もう汗はかなり引いている。
「それじゃあ」
「そうして。今から行きましょう」
「ええ、今からね」
こうして姉妹は歌劇場に戻ってそのうえで、だった。ジャージのまま舞台にあがってそのうえでだ。歌と演技の練習をするのだった。
その歌を聴いてだ。顧問の先生は笑顔で言ってきた。
「歌は合格よ」
「合格ですか」
「ええ、合格よ」
それはいいというのである。

第百八十八話　レッスンではその二

「ただね。まだはじめだからブロンデって役がわかっていないわね」
「すいません」
「ブロンデはヒロインのコンスタンツェの侍女で」
このことから話すのだった。
「明るくて元気な女の子なのよ」
「明るくて元気ですか」
「年齢もコンスタンツェより少し下かしら」
目を左斜め上にやっての言葉だった。
「多分だけれど」
「年下なんですね」
「ええ、下ね」
そうだというのである。
「下だからね」
「わかりました。それじゃあ」
「そこを意識して演技してね」
こう彰子に話すのである。
「それで悪い奴というか女好きのおじさんが言い寄ってきてもね」
「女好きのおじさんですか」
「オスミンっていうけれど」
「紅茶みたいな名前ですね」
「そうね。まあ敵役だけれど憎めない役だから」
そういう役だというのである。そのオスミンはである。
「そんなに恐い相手じゃないから」
「その恐くない人が言い寄って来てどうするんですか？」
彰子はその役のことを尋ねるのだった。
「そのブロンデって娘は」
「威勢良く引っ叩いて撃退するのよ」

「引っ叩いてですか」
「そう、そうしてなのよ」
そうした役なのだというのだ。
「これでわかったわね」
「はい、そういう役なんですか」
「男の子とか叩いたことはある？」
「それはちょっと」
先生の今の言葉には困った顔になって首を左に捻っての言葉だった。
「ないです」
「そうなの。それでもそうした役だからね」
「しっかりとですね」
「ええ、演じてね」
それだというのである。
「頑張ってね」
「オペラには演技力も必要なんですよね」
「そうよ。昔はね」
先生は昔の話もしてきた。
「そういうわけでもなかったけれど」
「そうだったんですか」
「歌えればそれでよかったのよ」
そうした時代のことを話す。そしてその時代の歌手といえばだ。
「ほら、カバリエ外相だけれど」
「あの人ですか」
「あの人みたいな立派な体格の人が多かったの」
カバリエの名前を出して説明したのである。その立派な体格をした彼女をだ。
「ああしたふうにね」
「あっ、そういえば」
ここで彰子はあることを思い出した。音楽の教科書に載っていた

昔のオペラ歌手の写真だ。その写真での歌手達はというとである。
「昔の歌手は皆」
「あの人みたいに立派な体格をしてたでしょ」
「あれはどうしてなんですか？」
「体力を使うし大きな声を出さないといけないし」
オペラ歌手の絶対条件である。まずは体力と声なのだ。歌唱力と並んでこの三つはどうしても必要なものなのである。何があっても
である。
「だからね。余計にね」
「そういうものがないとなんですか」
「そう、太ってないといけなかったの」
まさにそうだったというのだ。
「昔はね」
「今は違うんですか」
「科学的に色々わかってきたし」
まずは科学だった。この時代でも人類社会はやはり科学文明であるのだ。科学も決して万能ではないことがわかっていてもやはり科学の存在は大きいのだ。
「それでなのよ」
「それでなんですか」
「そう、オペラ歌手は太ってなくてもよくなったの」
あらためてこのことを話した。

第百八十八話　レッスンではその三

「運動で体力も声もつくわよね」
「はい」
「そしてビジュアル的にもいいし」
「ビジュアルもですか」
「実はこれが大きかったの」
その問題に重心がいっていたというのである。
「映像にもなってそれが見られるから」
「それでなんですか」
「そう、やっぱりすらりとして綺麗な歌手の方がいいじゃない」
映像として見るならというのだ。そして一人の伝説的歌手の名前が出された。
「マリア＝カラスだけれど」
「カラスですか」
「名前は聞いたことあるわね」
「はい」
まだ入部したてでオペラについて然程詳しくはない彰子でもその名前は知っていた。二十世紀の伝説的ソプラノ歌手である。
「何か凄い歌手だったんですね」
「そうよ、カラスも最初は太っていたのよ」
「えっ、そうだったんですか？」
「百キロは超えていて」
そこまで太っていたというのである。
「それでもね。ダイエットして皆が知っているあの姿になったのよ」
「それでだったんですか」
「ダイエットの方法は確か」
先生の話はいささか物凄い方向にいった。
「あれだったわ。サナダ虫を飲んでね」

「サナダ虫って確か」
「ええ、姉さん」
明香が彰子の言葉に横から応えてきた。
「寄生虫よ」
「そうよね。何メートルもあるっていう」
「もう殆どいないけれど」
これも文明の発達による衛生観念の強化の結果だ。この時代ではそれがさらに徹底しておりその結果としてもうサナダ虫にしろ回虫にしろ殆どなくなっているのだ。
「それよ」
「確か物凄く気持ち悪いものじゃなかったかしら」
「気持ち悪いのは事実よ」
先生もそれは否定しない。
「寄生虫だから」
「そうですよね。それは」
「けれどそのサナダ虫を飲んでね」
「ダイエットしたんですか」
「そう言われているわ」
まさにそうしたというのである。
「カラスはそれで痩せたと言われているのよ」
「サナダ虫で」
「まあカラスは極端な例として」
「その時からオペラ歌手もスタイルが大事になったんですね」
「そういうことよ」
話の重点はそこであった。やはりダイエットであった。
「二十世紀後半からなのよ」
「そして今も」
「彰子ちゃんも明香ちゃんも」
この姉妹を見ながらも話すのだった。
「綺麗だしスタイルはいいし」

「そんな」
「私達は」
「今は謙遜の時間じゃないわよ」
先生は笑って二人の今の言葉は制止した。そのうえでさらに話すのだった。
「とにかく。ビジュアルもいいから」
そして言うのであった。
「お芝居がしっかりできたらそれで万全よ」
「わかりました」
「それで」
二人は先生の言葉に頷いた。そうしてであった。
さらに練習に励むその日の練習はとりあえず終わった。
部活が終わると二人は一緒に帰った。彰子はその暗くなろうとする道で言うのだった。
「ねえ」
「どうしたの？」
「部活終わったけれど」
その部活のことを話すのである。
「大変なのね」
「大変なことは大変だけれど」
「そうよね、正直疲れたわ」
「けれど楽しいでしょ」
微笑んで姉に言ってきたのだ。
「ここも」
「ええ、それはね」
言われればその通りだ。彰子も満足していることはしているのだ。

第百八十八話　レッスンではその四

「とてもね」
「身体にもいいのよ」
「走ったり筋力トレーニングするからね」
「それは絶対にしないと駄目なの」
「私少し苦手だけれど」
筋力トレーニングはというのだ。それはだ。
「それも慣れるの？」
「慣れるわよ。私だって中学校は運動部じゃなかってけれど」
「そうだったわね。中学校の時は確か」
彰子は妹のその中学時代のことを話す。その頃の彼女はどうだったかというとだ。
「あれよね。美術部だったよね」
「ええ。それだったから」
「私は料理部で」
「お互い運動はしていなかったわね」
「ええ、それは全然だったわね」
まさしくそうだったのだ。二人共である。
「だからとにかく」
「それでも慣れるから」
明香はとにかくそれは大丈夫だというのである。安心していいと話すのだ。
「安心して」
「そうなの」
「そうよ。とにかくね」
「慣れることなのね」
「慣れることが大事だから」
明香の話すことはそれであった。まずは慣れることというのであ

る。そしてこれは何でもというのが彼女の主張でありそれはしないというのである。
「だからいいわね」
「そうなの。だったら」
「毎日しましょう」
また姉に話した。
「一緒にね」
「うん、だったら」
「同じ部活に入ったしこれからはいつも一緒にね」
「走って筋トレして歌って」
「お芝居して」
やることは多いのだった。そうした部活であった。
その部活の話をしながらスーパーの中に入る。そのうえで今はカレーの材料を買うのだった。人参に玉葱にジャガイモ、それにルーだった。
ルーを買おうとしたとことでだ。ふと彰子が言った。
「ねえ」
「何？」
「甘口？それとも辛口？どっちにするの？」
「姉さんはどっちがいいの？」
「この前甘口だったわよね」
前に食べたカレーのことを思い出しながら話す彰子だった。
「確か」
「そうだったわね」
「それで今日はシーフードカレーよね」
「ええ」
「それだったら」
シーフードカレーということであらためて考える彰子だった。その考えはだ。
「辛口かしら」

「辛口がいいのね」
「シーフードカレーにはそれでどうかしら」
妹に顔を向けて問うた。
「それでね」
「うん、だったら」
彰子のそのその言葉に頷く明香だった。そうしてである。
辛口のルーの一つを手に取った。そうしてだ。
「これね」
「そうね。だったらそれでね」
「あっさりとして強い辛口がいいわね」
そうしたルーを手にした。
「これがいいわね」
「そうね。じゃあそのルーで」
「それでシーフードは」
次に考えを及ばせるのはそこだった。シーフードである。
「まずは海老よね」
「それとあさりと」
「あとは烏賊」
魚介類のコーナーに行きそれぞれ籠に入れていくのであった。選ぶのはかなり早い。
「それとお魚は」
「白身はどうかしら」
明香の提案である。
「それで」
「白身ね。いいわね」
「鱈はどうかしら」
彼女が言う白身はそれだった。
「鱈で」
「ええ、わかったわ」
そしてそれに頷く彰子だった。

第百八十八話　レッスンではその五

「じゃあお魚は鱈で」
「他に何かいるかしら」
「海老にあさりに烏賊に鱈に」
そういったものをざっと挙げていく明香だった。そしてその中で。
「蟹はどうかしら」
「蟹は少し高いんじゃ？」
「蟹スティック」
妹が挙げたのはそれだった。
「それだと安いじゃない」
「あっ、そうね」
それを出されてすぐに明るい顔になる彰子だった。
「それじゃあ蟹はそれで」「いいわよね」
「ええ、いいと思うわ」
にこにことしながら妹の言葉に頷く。
「それでね」
「決まりね。それでだけれど」
「これで全部でいいんじゃないかしら」8
「いえ、林檎と牛乳が必要よ」
明香はそれも忘れないのだった。
「どちらもね」
「その二つが？」
「あとパイナップルも」
これもいるというのである。
「パイナップルは缶詰でね」
「ちょっと待って」
その三つを聞いた彰子は真面目な顔で妹に返した。
「その三つを入れると」

「まずいの？」
「甘口にならない？」
怪訝な顔でこのことを言うのだった。
「特に林檎とパイナップルが」
「だからなのね」
「ええ。甘口のカレーならいいけれど」
その場合はというのである。話す顔はやはり怪訝なものである。
「辛口よね」
「ええ」
「じゃあちょっとまずいんじゃないかしら」
その場合はというのである。
「やっぱり」
「大丈夫よ。それどころかね」
「あっ、そうなのね」
伊達に料理部にいて今も家で交代で作っているわけではない。ここからはすぐにわかった彼女だった。おっとりとしているがわかることはわかるのだ。
「ここは」
「そうよ。香辛料をうんと強くして」
「パイナップルと林檎は少し」
「牛乳もね」
「甘さで辛さを際立たせるのね」
「ええ」
それが明香の狙いだった。料理をよくわかっている人間の考えそのものである。やはり彼女もまた料理がわかっているのだ。
「それでだから」
「そうね。だったら」
「それでどうかしら」
「いいわ」
にこりと笑って頷く彰子だった。そしてそれだけではなかった。

「後は」
「林檎とパイナップルが余るわよ」
「その二つはデザートにしましょう」
無駄にはしない。そこまでしっかりしていた。
「林檎とパイナップルを細かく切って」
「ヨーグルトをかけて」
「それがいいわね。これでデザートまで決まりね」
「これで全部ね」
「さて、カレーだし」
彰子はここまで話したところで腕を組んであらためて考える顔になった。そうしてそのうえで思索そのものの言葉を出すのだった。
「これで二日はいけるわね」
「ええ。作り置きしてね」
「三日持たせる？」
彰子は考える顔のままこんなことも言った。

第百八十八話　レッスンではその六

「三日」
「三日だと飽きないかしら」
「ルーはそのままでも御飯を変えればいいじゃない」
「御飯を」
「そう、御飯をね」
彼女が今言うのはこれだった。
「御飯を変えましょう」
「それじゃあ白米以外にも」
「麦とか」
麦飯はこの時代でも食べられている。実は人気もある。
「あと十六穀御飯はどうかしら」
「十六穀ね」
「身体にもいいし」
健康への配慮も怠らなかった。
「だからね」
「そうね。オペラは身体も大事だし」
「だから余計によ。いいわよね」
「ええ」
妹も姉のその言葉に頷いた。
「わかったわ。じゃあそれでね」
「ルーは変わらないならお米を変えればいいのよ」
実に合理的な考えであった。
「麦御飯も美味しいし」
「姉さん昔からそれ好きね」
「だって美味しいじゃない」
それが好きな理由であった。
「身体にもいいし」

「ええ」
「明香は嫌い？」
その麦飯への問いである。
「嫌いじゃないわよね」
「好きよ」
微笑んでの返答だった。
「それも」
「そうよね。明香って子供の頃からそうした御飯好きだものね」
「美味しいし」
まずはそれが理由だった。
「それに身体にもいいし」
「だから好きなのね」
「そうよね。姉さんもそれと同じ理由よね」
「勿論そうよ」
そしてそれは彼女もだった。
「だからね。そうしていきましょう」
「御飯を変えていってね」
「白米だけじゃないから」
それがこの時代の食事だった。
「カレーで食べていいのはね」
「一番合うのは何かしら」
「インディカ米だっていうけれど」
所謂細長い米である。この時代でも様々な料理に使われ食べられている。連合では全体的にこちらの方が人気がある米である。
「それはどうなのかしら」
「姉さんあのお米も食べるんじゃ」
「それはそうだけれどね」
彰子もそのこと自体は否定はしなかった。
「ただね」
「ただ？」

「私はジャポニカ米の方が好きなのよ」
「カレーにもなのね」
「ええ。ほら、うちのカレーってとろりとしたカレーじゃない」
「そうね」
これは二人の両親の作るカレーがそうだったからだ。それで二人もそのカレーの好みが自然とそちらのカレーになったのである。
「それは確かに」
「とろりとしたカレーにはジャポニカ米じゃない」
これもまた彼女の好みだった。
「そうじゃないかしら」
「そうね。確かにね」
そしてこのことでも姉と同じ好みの妹だった。やはりいつも一緒にいていつも同じものを食べているとである。好みも同じになるのである。
「それは」
「だからジャポニカ米でのカレーが好きなの」
にこりとして妹に話した。
「それでだけれど」
「麦御飯も十六穀もメインはジャポニカ米なのね」
「勿論よ。それでいいわよね」
「ええ、いいわ」
姉の今の言葉にも頷いた。

第百八十八話　レッスンではその七

「それじゃあお米もそれで」
「決まりね」
二人でそんな話をして買い物を済ませて家に帰ったのだった。
そのうえで家に帰ってであった。今日は二人で料理をした。
元々料理部の彰子の包丁捌きは見事である。だが明香もだ。
その腕はかなりのものである。彰子のそれと全く遜色がない。
その腕でだ。二人でカレーを作っていく。
彰子はまな板の上で海老をさばきながらだ。妹に言ってきた。
「ねえ」
「どうしたの？」
「海老の頭はどうするの？」
このことを問うてきたのである。
「海老の頭は」
「お味噌汁でどうかしら」
「お味噌汁ね」
「野菜の残ったものとか入れて」
それを味噌汁の具とするのである。
「それでどうかしら」
「いいわね。じゃあそれでね」
「ええ、それでお味噌汁にして」
こう二人で話をしていくのだった。
「カレーとデザートの他にもう一品で」
「丁度いいわね。海老の頭っていいダシが出るし」
そうしたこともよくわかっている二人だった。やはり料理にはかなり通じている。
「そこにお野菜も入れてね」
「それでね」

「あと海老だけじゃ弱いから」
ダシという意味である。彰子はかなり細かく考えていた。
「煮干も入れてね」
「そうね。それもおかずになるし」
「あとお味噌は」
「赤味噌にしましょう」
明香は野菜の皮を切りその皮を剥いている。そのうえでの言葉である。
「それでどうかしら」
「いいと思うわ。お魚系だし」
「お野菜には合わないかしら」
「幾らか白味噌も入れましょう」
また提案する明香だった。
「それでお野菜にも合えるし」
「ああ、赤と白の」
「いいと思うけれど」
「そうね。確かにね」
これは彰子も成程と頷くことだった。はっきりとした顔で。
「それだったら」
「カレーとお味噌汁と煮干をお酢に漬けて」
明香はおかずまで考えていく。
「それでいけるわね」
「完璧ね。それだったら」
「これで」
「カレーは和風で」
味噌汁と煮干から来る判断だった。
「それでいきましょう」
「いいと思うわ。兄さんも好きだし」
「お兄ちゃんもお料理上手だけれどね」
それは二人の兄もであった。

「相変わらず帰り遅いけれどね」
「アルバイトだから」
また明香が言ってきた。
「だからそれは」
「仕方ないわね」
「だから」
「今は二人でね」
彰子からの言葉だ。
「食べましょう」
「ええ、二人で」
「いつもそうだけれど」
そしてこんなことも言うのだった。
「食べるのはね」
「そうね。少なくとも朝と夜はね」
「普段お昼はどうしてるの？」
彰子はふとそれも尋ねた。
「お弁当よね」
「姉さんと同じよ」
「そうよね。じゃあ一人で食べてるの？」
こう尋ねたのである。
「お弁当。それで何処で食べてるの？」
「クラスの皆と一緒だけれど」
明香は姉の問いに静かに答えた。
「お昼はいつも」
「そう、それならいいけれど」
「場所は教室で」
場所についても話す妹だった。
「そうして食べているわ」
「それならいいわ」
「いいの」

「食べるのは楽しく食べないとね」
これは彰子の持論であった。
「折角だからね」
「ええ、そうね」
その楽しく食べるという言葉に笑顔で頷いた明香だった。
「何にでもだけれどね」
「ふふふ、そうね」
こんな話をしながら二人でそのカレーを食べる姉妹だった。そのカレーは確かに美味かった。次の日への活力を与える程までに美味いものだった。

レッスンでは　　完

２０１０・２・１６

第百八十九話　明香の日常その一

明香の日常

朝はだ。目覚ましで起きるのではない。
部屋の中に猫が入って来る。家で飼っている猫だ。
しかも一匹や二匹ではない。五匹いる。それがいっせいに部屋の中に入って来るのだ。そしてそのうえで彼女の寝ているベッドにまで来るのである。
「ニャア」
「ナア」
「ンナア」
「ええ、わかったわ」
猫達の呼び声に応える形で起きてであった。
そしてそのまま下に降りて猫達に御飯と水をあげる。御飯はキャットフートだ。
それをあげてから今度は姉を起こす。彰子は自分の部屋のベッドの中だ。
「姉さん」
「うん・・・・・・」
「姉さん」
「うん・・・・・・」
声をかけても中々起きない。
「起きて」
「今何時？」
「六時よ」
「まだ早いじゃない」
「部活の朝の練習があるから」
ここでこう言ったのである。
「だから起きて」

「部活の？ああ、そうね」
それを言われるとであった。彰子も少しずつだが起きてきた。
そうしてであった。そのうえで言うのだった。
「朝起きてそれから部活よね」
「そうよ、ランニングとかあるから」
「わかったわ」
ここまで聞いてであった。ようやく目を開けた。それからであった。
「それじゃあ後は」
「御飯食べましょう」
「カレー？」
「温める？」
「別にカレーでなくていいんじゃない？」
言いながら身体を起こす。そしてベッドの中で身体を伸ばしてから言うのだった。
「それは」
「別にいいの」
「あったためたらそれだけ時間がかかるし」
まず言うのはこのことだった。
「それに洗いものもね」
「手間がかかるのね」
「だからいいじゃない」
これが彰子の意見だった。
「簡単なので。お漬物があるからそれで食べましょう」
「お味噌汁は？」
「それもいいわ」
それもだという。どうやら朝はあまり食欲がないらしい。
「別にね」
「それもいいの」
「ええ、いいわ」

やはりいいというのだった。
「どっちもね」
「カレーもお味噌汁も」
「白い御飯とお漬物の二つがあれば」
かなり質素ではある。
「それだけでいいから」
「それじゃあそれでいいわね」
「そうね。納豆があればそれをかけて食べて」
「パンもあるけれど」
「じゃあそれでいいわ」
パンがあるならそれでいいというのだ。やはり朝は食欲がないらしい。それが表情にも出ていて髪もかなり乱れた様子になっている。
しかしとりあえずベッドから出てだ。二人でリビングに出てだ。朝食を食べはじめた。
その食パンにジャムを塗っている。苺ジャムだ。
そのパンを食べているとだ。彰子は次第に目が覚めてきていた。
そうしてだ。ふと明香に話してきた。
「今日だけれど」
「朝の部活ね」
「そう、それがあるから」
「しっかり食べないといけないのね」
「朝は大事だから」
明香の言葉は真面目なものだった。
「しっかり食べないといけないけれど」
「いつも以上になのね」
「ええ、食べて」
しっかりとした言葉だった。

第百八十九話　明香の日常その二

「本当にね」
「わかったわ。じゃあもう一枚余分に食べるわね」
「それと後は」
それだけではないと。妹は姉に話してきた。
「お野菜も」
「サラダはないけれど？」
「野菜ジュースがあるから」
「野菜ジュースを飲むのね」
「あとは豆乳も」
そうしたものもあるのだというのである。栄養的にはかなりいい。
「その二つをミックスさせるか別々。どちらでもいいけれど」
「飲むのね」
「そうしてくれたらいいから」
実際に飲んで欲しいというのである。
「栄養はそれで大丈夫よ」
「わかったわ。けれど」
ここで彰子はふとした感じで言ってきた。
「あの、ロッキーって映画あったじゃない」
「二十世紀のアメリカのボクサーの映画ね」
「ええ、あの映画でだけれど」
この時代では古典的名作となっている映画の一つである。シルベスタ＝スタローンの名前も連合の映画史に燦然と輝いて残っている。
「卵飲んでいたわよね」
「朝の場面ね」
「ええ、あれ」
そのロッキーの中でも有名な場面の一つである。立ち上がる決意をした彼が生卵をまとめてコップの中に入れて一気に飲み込む。そ

れから走るのである。
「あの場面だけれど」
「生卵よりはお野菜だから」
「だからそれと豆乳なの」
「姉さんも卵は知ってるわよね」
「栄養は高いわね」
「それでもね」
ここで首を傾げさせる明香だった。そうしてそのうえで語るのだった。
「コレステロールが高いから」
「だから止めた方がいいの」
「ええ。卵はできたら」
「一日で一個か二個ね」
「そういうこと」
このあたりは実によくわかっている二人だった。食べ物の栄養のこともよくわかっているのだ。とりわけ彰子の方がよくわかっていることだった。
「だからね」
「わかったわ。それじゃあ」
「そういうことで」
また言う明香だった。
「御願いするわ」
「わかったわ、じゃあ野菜ジュースと豆乳ね」
「それで身体の調子はかなりよくなるから」
こうも話す妹だった。
「朝はまずそれで」
「それで朝の練習は？」
「ランニングと筋トレよ」
それだというのだ。
「雨が降っていたら雨天グラウンドでやるから」

「徹底してるのね」
「まずは体力だから」
何といってもそれであるというのだ。身体が資本というのはさながら自衛隊である。
「朝は必ずそれなのよ」
「成程」
「昨日は特別に夕方に走ったけれど普段は朝にするの」
「昨日は何でなの？」
「朝立て込んでいたから」
だからだというのである。明香の言葉ではだ。
「それでなの」
「ふうん、そうだったの」
「だからね。とにかく今日はね」
「トレーニングね」
「そうなの」
それは変わらないというのである。明香の言葉は静かで落ち着いているがそれと共に確かなものも存在している言葉であった。
「御願いするわ」
「うん、じゃあ朝ね」
「頑張りましょう」
こう話して姉と二人で学校に行く。そうしてグラウンドに向かいだ。その端にある更衣室で持って来たジャージに着替えて走り筋トレを行う。それからシャワーも浴びて登校だった。

第百八十九話　明香の日常その三

「それじゃあまたね」
「ええ。放課後に」
こう挨拶をしてそれぞれの教室に入る。彰子はあの二年Ｓ１組の教室である。明香が入ったのは一年Ｓ１組である。そこが彼女のクラスである。
「おはよう」
「おはよう」
クラスメイト達と挨拶を交えながら教室に入る。自分の机に座ると早速クラスメイト達が数人彼女のところに来て声をかけてきたのだった。
「ねえ、明香」
「助けてくれない？」
「助けてって？」
「宿題忘れたのよ」
「だからね」
「見せて。それか教えて」
学生の間ではよくある頼みごとである。
「御願い、どっちか」
「駄目？」
「いいわよ」
何でもないように無表情に答える明香だった。
「それでどっちに」
「ええと、教えて」
「そう、そっち」
「御願い」
「宿題の解き方をなのね」
そのことをまた問う明香だった。

「つまりは」
「そうなのよ、全然わからなかったから」
「それでね」
わからないからできないというのだ。
「だからね」
「教えて」
「何が何なのか全然わからないから」
「昨日の宿題は」
言いながら鞄から教科書とノートを出す。そのうえで友人達と話を続ける。
「確か」
「そうでしょ？何なのあれ」
「もう全然わからなくて」
「泣きそうになったわよ」
「私もよ」
彼女の周りに集まる皆の言葉だ。明香が出してきたのは物理の教科書とノートであった。それを出してきてそのうえで皆に応えていく。
「これね」
「そうそう、それ」
「それよ」
まさにそれだという彼女達だった。
「全然わからないのよね」
「それで明香にね」
「是非聞きたい、教えて欲しくて」
「で、どうするの？」
「本当に」
「昨日の宿題は」
明香が開いたそのページには複雑な計算と模様が書かれている。皆それを見てそれぞれの顔を顰めさせてそのうえで語るのだった。

「これよねえ」
「もう何て書いてあるかさえ」
「全くわからないって」
「何なのよ、この問題は」
「コツがあるの」
明香は落ち着いた声で話したのだった。
「この問題にはね」
「コツ！？」
「コツがあったの」
「そうなのよ。ここ」
言いながら前のページを開く。そうするとだった。
そのページを見ればだ。そこも色々と細かい計算がところ狭しと書かれている。だが皆はそれを見て今度は少し落ち着いた顔で話した。
「あっ、それって」
「その方式使うの？」
「それをだったの」
「そうなの。文章はわかりにくかったわよね」
「ええ、問題のね」
「まずそれはね」
皆また話すのだった。
「それがわからなくて」
「文章自体も」
「けれどこの方式の応用だったの」
こう話すのだった。
「それで解けるのよ」
「ううん、その方式も難しいけれど」
「それの応用って」
「えげつない問題ね」
「けれどこれで解けるから」

また話す明香だった。
「ちゃんとね」
「じゃあ教えて」
「ここからはどうなるの？」
「解き方は」
「それはね」
その宿題の話でホームルーム前の時間は終わった。そこから授業も受けて休み時間だ。明香は休み時間になると静かに本を読みだした。
「何の本？」
「それって」
また友人達が集まってきた。そのうえで彼女に問うのだった。

第百八十九話　明香の日常その四

「今度は」
「何なの？」
「これ」
言いながら見せてきたのは文芸の本だった。二十世紀の日本の小説家だ。
「へえ、夏目漱石」
「今はそれを読んでるの」
「ええ」
『こころ』であった。彼女はそれを読んでいるのである。
「この前授業で出たから」
「その作品ってちょっとあれだけれどね」
「暗いわよね」
「そうよね」
彼女達も授業を受けているだけあってこの作品のことは知っているのだった。
「我輩は猫であるはそうじゃないのに」
「私は坊ちゃんが好き」
「漱石っていったらその二つだけれどね」
「こころなの、今は」
「そうなの」
言いながらもその間にも本を読んでいる。
「どうかしらって思って」
「それでどう？」
「面白い？考えさせられる？」
「考えさせられるわ」
そちらだというのである。
「読みやすいからわかりやすいし」

「漱石の文章ってそうなの」
「わかりやすいの」
「日本語だけれど」
今読んでいる小説は銀河語のものではなかった。日本語の原語のものである。それを読んでいるのである。
「だからね。それだけれど」
「読みやすいんだ」
「日本語がやっぱり」
「日本人だからね」
そして友人達はまた言うのだった。
「それは」
「原語もいけるのは」
「多分」
ここでは少し謙遜が入る彼女だった。
「そうだと思うわ」
「まあ私達もね」
「そうよね」
「自分の国の本はね」
そうした意味では彼女達も明香と同じであった。
「読めるから。結局そういうことなんだ」
「特に特別に考えなくてもいいのね」
「そう思うわ」
実際にそうだと述べる明香であった。
「私もね。そう思うから」
「そういうことね。じゃあ私も読もうかしら」
「そうね。私も」
「私も」
皆続く。彼女達も本を読んでいくのだった。
そして昼はだ。明香は皆と一緒に御飯を食べている。食べているのは自分の弁当であり皆と席を合わせてそこで食べようというので

ある。
　その弁当を出したところで。皆言う。
「今日はサンドイッチなの」
「それにしたのね」
「時間があまりなくて」
　こう皆に答える。
「それで」
「時間がなくてサンドイッチって」
「それで？」
「兄さんと姉さんと三人で作ったから」
　その作った手順も何気なく話していた。
「それでだから」
「いや、それでサンドイッチって」
「凄いっていうか」
「ねえ」
　皆は口々に言う。彼女達からしてみれば時間がなくてもそれでサンドイッチを作られるという料理の手際は驚嘆すべきものなのだ。
　それでだ。驚いている顔で口々に言う。
「私なんか今日これだから」
「私これよ」
　一人は包であり一人はハンバーガーだった。包の中には豚腹煮込みがある。それを挟んでいるのだ。言うまでもなく中国の料理だ。
「時間ないからね」
「それでよね」
「いや、作ったのならいいわよ」
　ところがここで別の一人の女の子が言ってきた。
「私なんかほら」
「売店で買ったパンね」
「それなのね」
「そうよ。朝お弁当なんか作ったことないわよ」

それを自分から言う彼女だった。

第百八十九話　明香の日常その五

「いつもぎりぎりまで寝てるから」
「そうよね。普通はね」
「寝るわよね」
「そうそう」
それが彼女達だった。普通と言えば普通である。
「時間があればそれだけ余分にね」
「寝てるわよね」
「けれど明香はサンドイッチ」
あらためて彼女に目を向けての話になる。
「これってどうなのよ」
「全然違うじゃない」
「しかも兄弟揃って作るなんて」
「それは」
そう言われて少し戸惑いを見せる明香だった。
「何ていうのか」
「つまり。それだけ凄いのよ」
「あんたはね」
「しかも部活の朝練も欠かさずだし」
「おまけに勉強もできる」
かなり万能であるのだ。
「ちょっと急に居眠りするところはあるけれどもね」
「あと絵が下手だったり」
「ちょっとあの絵はね」
彼女の絵については皆苦笑いだった。それぞれの弁当を食べながら苦笑いになる。そうしてそのうえで話し合っているのである。
「ないっていうか」
「壮絶っていうか」

「ちょっとねえ」
「まあ。独特よね」
「絵は」
それについては本人も気まずそうである。それでも言いはするのだった。
「私も思った通りのことを書いているから」
「思った通りのことをなの」
「それをなのね」
「あれは」
「ええ」
そうだと。こくりと頷いて述べるのだった。
「そうなの」
「まあ絵はそれぞれだけれどね」
「あれはあれで印象に残るけれど」
「確かに」
皆も印象に残ることは認める。
「それでも壮絶だけれどね」
「かなりね」
「どう表現していいかわからない位に」
「まあそれは置いておいて」
しかし絵の話は終わった。一人が急に打ち切ってきたのである。
「どうなのかしら」
「やっぱり凄いっていうか」
「明香はね」
「そのサンドイッチ」
またサンドイッチの話になる。
「スパムも入ってるしお野菜も入ってるし」
「卵だってあるし」
「ソーセージもハムもね」
とにかく豪勢なのだった。

「本当に時間なかったの？」
「嘘でしょ、それって」
「サンドイッチには作り方があるから」
しかし明香はこう言うのである。
「それで作ろうと思えば」
「楽にできるの？」
「それで」
「時間も早く」
「ええ」
できるというのである。彼女の言葉ではだ。
「そうだけれど」
「嘘よね」
「そうよね」
「絶対にね」
だがだ。皆はこう言う。彼女の言葉を全く信じていなかった。
「あれよ。明香の家なんてね」
「あんただけ料理上手じゃないから」
「お姉さんだって上手だし」
「お兄さんだってアルバイトでお料理作ってるんでしょ？」
「そうだけれど」
明香が嘘を言うことはない。それでこう述べるのだった。

第百八十九話　明香の日常その六

「それは」
「じゃあ全然普通じゃないから」
「そう言えるのはあんただけ」
「普通はできないから」
「そうなの」
それを言われても自覚できなかった。実際のところ周りの言うことの方が正しかった。主観より客観の方が正しい場合も多いのである。
「そういうものなの」
「そうよ。だからね」
「あんただからできるのよ」
「サンドイッチねえ」
「確かにいいけれどね」
サンドイッチを昼食にするそのセンスがである。いいというのだ。
「それ食べてまたあれよね」
「部活も頑張るのよね」
「午後の授業もね」
「そのつもりだけれど」
昼食は何の為にあるのか。そういうことだった。食事はエネルギー補給という一面も確かに存在しているのだ。味を楽しむだけではないのだ。
「午後の授業は」
「確か芸術よ」
「美術よね」
「美術なのね」
芸術の授業は選択制である。明香は美術を受けているのである。
「確か絵だけれど」

「ええと。何ていうか」
「その絵だけれど」
「まあね」
皆かなり口ごもってしまった。言いたいことは決まっていた。
「そんなのだからね」
「大丈夫よね、今度は」
「普通の絵よね」
「私の絵は普通じゃないの」
このことを自覚することがなかった。
「やっぱり」
「まあ真面目にしていれば普通に単位は貰えるし」
「だからいいから」
「描きましょう」
こんな話をしてである。食事を食べていた。そして食べ終えてからである。昼休みは皆で遊んでいた。ボールをバレーの様に上げあいながら遊んでいる。
「明香、そっちよ」
「そっちいったわよ」
「うん」
校庭にいる。そこで遊んでいるのである。
そしてそのボールを両手であげてだ。元の場所に戻る。
動きは中々いい。しかしここで。
「ちょっと」
「ええ、ちょっとね」
「わかったわ」
皆も彼女のその言葉を聞いて微笑んだ。
そして彼女は傍のベンチに向かってだ。そこに座り込んで静かに寝るのだった。
「あの体質は変わらないわね」
「そうよね」

「急に眠くなってちょっと寝る体質ね」
所謂居眠り体質である。
「それは治らないのね」
「まあ今はお昼だし」
「別にいいけれどね」
「そうそう」
そんな話をしながら彼女を見て微笑む皆だった。
そしてだ。昼休みが終わるとだ。皆明香に声をかけた。彼女はまだベンチで寝ている。
「時間よ」
「そろそろ起きて」
「行きましょう」
「ん・・・・・」
皆の呼び声に応えてだ。目を覚ますのであった。
「そうなの」
「ええ、だからね」
「今からね」
「わかったわ」
明香の方でも応えるのだった。そうして。
「それじゃあ」
「午後の授業にね」
「行きましょう」
「いいわよね」
「ええ」
少し浮かない顔で答えはした。
「それじゃあ」
こうしてその美術の授業に向かうのだった。その明香の絵とは。

明香の日常　　完

2010・2・21

第百九十話　独特な絵その一

独特な絵

「さて、皆さん」
教壇から先生が話す。
「絵ですよね」
「それですよね」
「はい、今日はイラストを描いてもらいます」
絵といってもそれだというのだ。イラストだというのである。
「それを描きますので。それぞれの絵を描いて下さい」
「題材はどうしますか？」
「何なんですか？」
「どれも好きなものを描いて下さい」
要するに生徒に任せるというのだ。自主性というのである。
「皆さんの描きたいものをです」
「そうですか。描きたいものをですね」
「描けばいいんですね」
「シュール＝リアリズムで御願いします」
超現実主義である。この言葉はこの時代まで生き残っているのだ。
「わかりましたね」
「はい、じゃあ」
「それで」
こうして皆そのシュール＝リアリズムで描いていく。まずは下描きであるがそれを見てみるとであった。実に皆それぞれだった。
「へえ、あんたはそう描くの」
「あんたはそうなのね」
「成程ね」
「そうなるの」
皆が皆お互いの絵を見て言い合うのだった。

「何かいい感じ？」
「独特ね」
「そうよね」
「何か」
「それによ」
皆また話すのだった。そのうえでさらに描き続ける。
そして明香のそのイラストはというと。口では容易に言えないものがあった。
何か姿形がはっきりせずあやふやな線で異様な人間なのか動物なのかわからないものはあちこちに描かれている。何かを吹いたり壊したり飛んだりしている。何が何なのか全くわからない。そんな異様な絵が描かれているのであった。
「・・・・・宗教画？」
「特撮の絵？」
「何これ」
「皆を描いてみたの」
イラストの前に座る彼女は言う。
「そうだけれど」
「皆ってことは」
「私達？」
「ひょっとして」
「ここにいるのが姉さんで」
何か空を飛んでいる六枚羽の天使か何かに見える。だが目の光がなくその目も異様に大きい。そして髪があちこちに飛んでいる。
「それでここにいるのが」
「ええと、蛇？」
「ライオンじゃないわよね」
「うちの家のペットの」
あの草食性のアナコンダだというのだ。
「それなの」

「ええと、アナコンダねえ」
「そうだったんだ」
「ライオンかと思ったわ」
鬣がありしかも何故か手足が生えているのだ。それで蛇と考える方が無理だった。しかも顔が猫のそれに似ているのである。
「違ったの」
「それで」
さらにある一団を指差す。茸やもやしみたいな形で不気味に笑っていたり何故かある海面でぷかぷかとステラーカイギュウの如く浮かんでいる。何が何なのか一目でわかるには異常なまでの努力を必要とする絵であった。
「何かな、これって」
「ステラーカイギュウ？」
「もやし？」
「椎茸？」
「クラスの皆」
明香はそうだというのだった。
「皆なの」
「私達だったの」
「これって」
「そうなの」
また言いはした。

第百九十話　独特な絵その二

「似ていないかしら」
「そう、人間だったのね」
「そして私達だったの」
「成程」
「見えるかしら」
明香の今の問いは容易には答えられない種類のものだった。
「人に」
「ま、まあ何ていうか」
「独特だけれど」
「何というかね」
「シュールではあるわね」
皆かなり苦しい顔でそれぞれ話す。
「けれどあれよね」
「そうそう、芸術」
こういうことにするのだった。
「表現だからね」
「そうよね。これが私達なのね」
「何か納得しない？」
「するする」
「かなりね」
こう言いはしたがここでは普通の意味とは全く違っていた。
「とりあえず明香の目からはそう見えるのね」
「私達って」
「こんなのなの」
「茸にもやしだったのね」
「何か」
それがどうしてもわからないのは事実だった。明香のそのセンス

もだ。
「ううん、どうなのかしら」
「私達ってね」
「こんな風なの」
「皆が仲良く」
しかし明香の言葉自体は清らかなものだった。
「そう思うけれど」
「それがこの世界なの」
「皆仲良くなのね」
「ええ」
それはその通りだという。そしてだ。
皆その宙を舞う天使か何かを思わせるものを指差してだ。そのうえでまた明香に対して問うのだった。問わずにはいられなかった。
「ええと、これって」
「何なのかしら」
「誰なの？」
「皆の想い」
それだというのだ。彼の言葉では。
「それだけれど」
「ええと。想い？」
「想いなの、これって」
「神様とかじゃなくて」
「神様ではないわ」
それは違うというのだ。
「想いは実現したものなの」
「想いがねえ」
「そうだったの」
「見えないかしら」
今度はかなりストレートな質問だった。しかも明香からのだ。
「これは」

「な、何ていうかしら」
「ま、まあそうね」
「それはね」
この問いには皆どうしても普通には応えられなかった。何しろ何故そうしたものになるのか彼等には全く理解できなかったからである。
「何ていうか」
「見える・・・・・わね」
「想いは飛んで？」
「そういうことよね」
「見守っているの」
ところが彼女はこう言うのだった。
「皆を」
「見守ってるの」
「これって」
「ええ、そうなの」
また明香の言葉である。
「皆の想いが一つになって見守っているの」
「ううん、何ていうか」
「見えることは見えるかしら」
「そうよね」
「何となくね」
かなり苦しい。明香を気遣っているのだがそれでもそれが何かを認識するのさえかなり苦労しているのだから無理もないことであった。

第百九十話　独特な絵その三

「見える、わよね」
「言われてみれば」
「そうなの」
明香はそれを聞いてであった。静かに頷いた。そのうえで今度はカラーリングに入っていく。しかしそのカラーリングがまた。
「ピンクの茸」
「黄金のステラーカイギュウ」
「それに青いもやし」
これもまた非常に独創的であった。
「物凄いカラーリングだけれど」
「やっぱり私達よね」
「そうよね」
「ええ、そうなの」
やはりそうだと答える明香だった。
「どうかしら」
「まあ感性だからね」
「センスはそれぞれ」
「そうよね」
これは皆で話す。しかしであった。
内心どう言っていいのかかなり困っていたのだ。独創的過ぎてである。
「個性は出るしね」
「だからそれをどう生かすか」
「芽を伸ばすかだし」
やはり苦しい。というよりかは無理矢理言葉を出している感じである。
「それを考えるといいんじゃないかしら」

「明香の絵もね」
「それで川は」
川の色も有り得なかった。何と虹色である。
その川を見てだ。皆また言った。
「二十世紀の写真資料で見たけれど」
「産業廃棄物とか環境破壊でのあれ？」
「七色の川？」
「川には色々な素晴らしいものが流れているから」
しかし描いている本人はこう言う。
「だから」
「それでなの」
「じゃあその色は素晴らしいもの？」
「それなのね」
「そうなの」
またまたそういうことだというのである。
「それを描いたけれど」
「川は一色だけじゃない」
「流れているものは一つじゃない」
「そういうこと？」
「みたいね」
皆もそれで何となくわかったのだった。
「それなら」
「そうね。それでね」
「成程」
「あとは」
ここでさらに言う明香だった。
「間違えたところは」
「ああ。ホワイトよね」
「ポスターだからね」
パン屑ではない。それは油絵のものだからだ。

「それじゃあ描いたし」
「これからどうするの？」
「何かすぐに終わったけれど」
「授業の最後まで見ているわ」
明香はこう言いながらじっと絵を見ている。自分が描いたその絵をである。
「何処か問題はないか」
「真面目ね、相変わらず」
「そういうところは」
「本当にね」
皆彼女のその言葉を聞いて微笑むのだった。
「じゃあ私達もそうしようか」
「遊ぶのじゃなくてね」
「ここは真面目に」
「自分達の絵をね」
こう言ってであった。皆それぞれの絵に戻ってチェック等をした。こうしてそれぞれの時間を過ごして授業を最後まで過ごすのだった。
午後の授業が終わった。するとだった。
掃除の時間だ。教室の掃除も真面目にする明香だった。皆もそんな彼女につられてついついいつもよりも真面目にしているのだった。
「うう。ここまでする？」
「って感じよね」
「明香の掃除って」
隅から隅まで細かくする彼女の掃除を見ながら皆言うのだった。

第百九十話　独特な絵その四

実際に細かく掃除をする。その中でだった。
「あとはモップもかけて」
「えっ、モップも？」
「モップもかけるの」
「大掃除でもないのに」
「時間があるから」
だからだというのである。
「今のうちに」
「ううん、真面目ね」
「モップがけまでなんて」
「普段そこまでしないのに」
「ねえ」
皆あらためて言う。明香の真面目さにだ。
そして実際にモップを出して掃除をする。その中でだ。
皆も何だかんだで彼女に続いてだ。それぞれモップを出してそのうえで教室の床を綺麗にしていく。その中で言うのだった。
「明香って人にああしろこうしろって言わずに」
「自分で動くからね」
「それが一番効き目あるしね」
「そうなのよね」
人にこれと言って注意しないのが明香なのである。
「だからね。私達もついね」
「結局続くのよね」
「何も言わない人が率先してやったら」
「どうしてもね」
そうした心理効果故だった。しかし明香にはその自覚はなかった。
そしてそうしたことを意識して見せたりもしないのである。

「それはね」
「ついね」
「それでだけれど」
なお明香は彼等のその話を聞いてはいない。そのうえでの言葉だ。
「いいかしら」
「あっ、うん」
「何？」
「モップのこと？」
「そうだけれど」
まさにその通りだというのである。
「皆でしたら一回で済むわね」
「ああ、そうね」
「これだけの数でやったらすぐよね」
「そうよね」
彼女の言葉で考えを掃除に戻すのだった。
「じゃあすぐにやって」
「それで終わってね」
「後は部活ね」
「すぐに終わるわ」
明香の声は少しだけ喜んでいる感じだった。皆もそれに気付く。
「すぐにね」
「じゃあ部活よね」
「部活行くのよね、これから」
「モップがけ終わったら」
「ええ」
今度の答えもやはり少しだけ喜びが見られる。
「それで姉さんと」
「ああ、お姉さんと一緒の部活だから」
「だからね。嬉しいのね」
「それで」

「そうなの」
微笑であった。
「だから。しっかりとやってから」
「そこで急ぐとかいう発想はないの？」
「そういうのは」
「ないわ」
それはない。すぐに答えるのだった。
「それは」
「ううん、やっぱり真面目」
「確かに」
「明香ね、本当に」
こうして皆明香の言葉に続いてだった。真面目に掃除をした。明香はそれが終わるとであった。すぐに掃除用具を収めて部活に向かった。
部活に向かうとだった。歌劇場の前にもう彰子がいた。
姉は妹の姿を認めるとだ。笑顔で言ってきた。
「遅かったじゃない」
「お掃除してたから」
こう答える妹だった。
「だから。御免なさい」
「お掃除だったらいいじゃない」
姉は妹のその言葉を聞いてこう返したのだった。
「それだったらね。それなら」
「それなら？」
「お掃除真面目にしたの？」
このことを尋ねたのである。

第百九十話　独特な絵その五

「それはどうなの？」
「ええ」
それはというのであった。
「したつもりよ」
「ならいいわ」
それを聞いてであった。にこりと笑う姉だった。どうやら彼女に対してはそういたことの方を大事に思っているようである。
「それならね」
「そう、いいの」
「いつも言ってる通りよ」
また微笑んで話すのだった。
「お掃除はしっかりとね」
「そうよね。奇麗にしないとね」
「駄目だからね」
このことは真面目な口調になっていた。
「しっかりとしないとね」
「そうね」
「それでだけれど」
彰子はここまで話したところで話を少し変えてきた。その言うことは。
「ねえ」
「何？姉さん」
「中に入ろう」
こう言うのである。
「中にね」
「ええ。それじゃあ」
「朝トレーニングをしたから」

朝練から話すのだった。
「夕方はないわよね」
「ないわ。それはね」
「そうなの。やっぱり一日二回のトレーニングは」
少し困った顔での言葉であった。
「ハードよね」
「流石にそれはないから」
「運動部とは違うのね」
「私達はあくまで歌うことが部活だから」
そちらがメインだというのである。トレーニングはあくまでトレーニングでしかないというのである。メインではないというのだ。
「だから」
「そうよね。じゃあ」
「ただ。服は普段は」
「普段は？」
「ジャージよ」
それはだというのである。
「ジャージだから」
「そういえばそんなこと言ってたわね」
「ジャージは動きやすいから」
理由はこれだった。
「いつも衣装を着るというのも」
「できないのね」
「動きにくいわ。衣装をつけたリハーサルか本番でないとね」
「着ないのね」
「後宮からの逃走だと」
上演するオペラのことも話に出る。話をしながら劇場の中に入っていく。中に入るともう部員達が右に左にと動き回っていた。
部室に向かいながらだ。さらに話すのであった。
「衣装はドレスだから」

「あのお姫様のドレスよね」
「あっ、今回の演出だと私達はアラビア風の服になるわ」
「あのヴェールの？」
「それとはまた違って」
それはまた違うというのである。アラブの服といっても色々なのである。そのヴェールの服だけとは限らないのである。
「他のね」
「他の？」
「ハーレムの服なの」
そうした服だというのだ。
「その服になるかも」
「それだと動きやすそうね」
「けれどやっぱりジャージの方が動きやすいの」
それでもだというのだ。
「それに汚れてもいいし」
「あっ、そうよね」
「ジャージはだからいいのよ」
これが彼女の言うことだった。
「普段はね」
「そういうことね。それじゃあ」
「着替えましょう」
ここで更衣室に入った。二人でだ。
そして着替えて舞台に出てだ。練習をはじめる。しかし今日の練習は二人ではなかった。

第百九十話　独特な絵その六

「ああ、こんにちは」
「待ってたよ」
皆でその二人を迎えるのだった。
「じゃあ早速ね」
「練習しよう」
「いいわよね」
「ええ、じゃあ」
「御願いします」
彰子と明香二人で話す。そのうえで練習に入る。
その練習はだ。かなり内容の濃いものだった。二人はその中で熱心に歌う。
この中でだ。彰子はふと妹に言ってきたのだった。
「ねえ」
「どうしたの？姉さん」
「このオペラだけれど」
二人が今演じているその後宮からの逃走についてのことだ。
「脇役がいいのね」
「脇役っていうと？」
「主役は私達四人だけれど」
その主役四人が舞台の中心で動くのだ。しかしそれだけではないのである。モーツァルトのオペラは内容がかなり濃いのである。
「脇役の。あれ」
「オスミン？」
「そう、オスミン」
主役の四人以外にもいる役である。領主の従者という立場である。
「そのオスミンがかなり重要な役なのね」
「うん、そうなの」

妹も姉にその通りだと話す。
「実はね。そのオスミンがかなり重要な役なの」
「脇役でもなのね」
「モーツァルトに端役なしよ」
そしてこの言葉を出すのだった。
「どんな役もかなり重要なの」
「モーツァルトに端役なしなのね」
「モーツァルトは人がとても好きだったの」
これは昔から有名な話である。幼い頃から神童と謳われていた彼はその心は純粋で寂しがり屋の子供のままだったのである。
「それは作曲するオペラにも出ていて」
「端役がないようになったのね」
「全てのキャラクターに公平に素晴しい歌を与えているの」
「全てのね」
「このオペラだって」
その後宮からの逃走である。
「そうよね。重唱が多いわね」
「ええ、そうね」
彰子もそれは感じ取っていた。確かにその通りだった。
「それは」
「皆で歌ってその中でキャラクターを活かしてるの」
「それがモーツァルトなのね」
「そうなの。そしてこの後宮からの逃走も」
「オスミンもなのね」
「そういうことなの」
彰子も話を聞いてすぐに理解するのだった。飲み込みは早かった・
「オスミンはその中でも」
「その中でも？」
「オペラ全体の鍵となるキャラなの」
そういうキャラだと話すのである。

「モーツァルトのオペラの特徴の一つで」
「まだ特徴があったの」
「オペラブッファだとね」
「オペラブッファ！？」
「喜劇系統のオペラのことよ」
この辺りの説明はする。やはり妹の明香の方が一日の長があった。
「それをオペラブッファというの」
「成程、そうなの」
「その通りなの。それでね」
「ええ、それで」
「モーツァルトのオペラブッファには絶対に話全体の鍵になるキャラクターが脇役って言っていいポジションにいるの」
そしてその役とは何かも話すのだった。
「このオスミンにしてもそうだし」
「他には？」
「フィガロの結婚のケルビーノとか」
「それはどういう役なの？」
「お小姓さんなの」
連合には絶対にない職業の一つである。だがエウロパではこの時代にも存在している。復活したと言ってもいい。貴族の子弟が修業の一環として主君の家等に入って仕えるのである。かつては日本にもあった。

第百九十話　独特な絵その七

「女の子が演じる男の子で」
「女の子がなのね」
「そういう役はズボン役っていうの」
「そういう役もあるのね」
「フィガロの結婚では主役と同じ位重要な役なの」
そうした役だと話すのだった。
「姉さんの声域だと歌うことはないけれど」
「声でなのね」
「メゾソプラノの役だから」
従って明香にしても歌うことはない。オペラにおいてはまず声域ありけりなのだ。それに合わなければ基本的に歌えないのである。
「だからなの」
「そうなの」
「姉さんだったらコシ＝ファン＝トゥッテのデスピーナかしら」
「そのオペラのその役になるのね」
「姉さんだとね」
こう姉に話すのだった。
「そうなるわ」
「わかったわ。そのオペラも歌う機会あるわよね」
「うちの部活モーツァルト上演することが多いし」
そのモーツァルトだというのである。
「絶対にあるわ」
「じゃあ楽しみにしておくわね」
「頑張ってね。私も」
ここで自分のことも言う明香だった。
「頑張るから」
「明香はそういう脇役あるの？」

「夜の女王は」
不意にこの役を話に出すのだった。
「出番が少ないけれど」
「脇役じゃないのね」
「それどころか。魔笛の中では」
モーツァルトの最後のオペラである。その奇妙なストーリーと神秘主義、所々に散りばめられたフリーメイソンの奥義で有名な作品である。その音楽も実に神秘的なものである。
「主役と言っていいかしら」
「出番が少ないって言ったけれど、今」
「それでもなの。音楽的にはなの」
こう話すのであった。
「かなり重要なの」
「そんなになの」
「歌が凄くて」
オペラが何故オペラか。歌があるからだ。総合芸術であるがその中でも何といっても歌が占める割合が極めて高いのがオペラなのである。
「それで重要な役になっているの」
「前に歌ってなかったかしら、何か」
「夜の女王のアリアね」
「ええ、それお家でも歌ってなかったかしら」
こう妹に話すのだった。
「凄い歌だったって記憶しているけれど」
「不思議な歌なの」
明香はその歌についてこんなふうにも話した。
「とてもね」
「不思議な歌なの」
「とにかく物凄く難しい歌なの」
モーツァルトはそうした曲も多く残している。中には手が三本な

ければ演奏できないようなピアノソナタもある。どの様にして演奏するかというと何と鼻を使ってまでして演奏する曲であるのだ。つまり顔をピアノに押し付けてそれで鼻でもピアノを弾くのである。

そしてだ。その歌もなのだった。

「異常な位」

「けれど歌ってるんじゃ」

「それが歌えるの」

こう言うのであった。

「何故か。歌えるの」

「それでも歌えるの」

「このコンスタンツェのアリアもそうだけれど」

後宮からの逃走で今彼女が演じている役もだというのだ。

「物凄く難しいけれど」

「そうよね、凄いテクニックが必要よね」

「それでも歌えるの」

そうだというのだ。

第百九十話　独特な絵その八

「不思議なことに」
「どうしてなのかしら」
「これがワーグナーだと」
あまりにも有名なオペラ作曲家である。ドイツの生んだ楽聖とも言われている。その壮大な音楽はこの時代にも当然ながら残っている。
「そうはいかないけれど」
「そうなの」
「ワーグナーはテノールが凄くて」
男の高音である。当然ながらモーツァルトのオペラにも数多くそのテノールの役がある。
「ヘルデン＝テノールっていって」
「ヘルデン！？」
「英雄的って意味なの。エウロパの言葉で」
もっと言えばドイツ語である。
「そうした意味のテノールで」
「それは違うの」
「歌える人が滅多にいないの」
こう姉に話す。
「地球にあった頃はね」
「ええ」
「ワーグナーを歌えるテノールは世界に五人しかいないとまで言われたの」
「五人・・・・・」
「人間が五十億だった時代にね」
つまり十億に一人である。
「そこまで少ないって言われていたの」

「そうだったの」
「そうした役なの」
それを聞いている彰子は驚くばかりだった。明香も真剣な顔で話す。
「ワーグナーのテノールは。長丁場で出番も多くてしかも声の域も独特で」
「声もなの」
「テノールとしてはかなり低いの」
ワーグナーが考えたテノールの特徴である。その声の域は殆どバリトンにまで近くなっている。しかしその歌は輝かしいのである。これは大きな矛盾である。
「そうした色々な問題があって」
「難しいのね」
「とても」
そうだというのだ。
「うちの部活でもワーグナーはやるけれど」
「歌える人いるのね」
「何とか」
この表現にそのまま苦しさが出てしまっていた。
「いるけれど」
「そうなの」
「けれど。難しい作品だし」
ワーグナーはその作品も難解なのである。
「上演は多くはないわ」
「モーツァルトはどうなの？」
「モーツァルトは多いの」
そちらはだというのだ。
「難しくても歌えるから」
「明香もなのね」
「ええ、歌えるわ」

姉に微かに微笑んでの言葉だった。
「安心して、姉さん」
「うん、それじゃあね」
「歌いましょう」
また姉に微笑んでの言葉である。
「またね」
「そうね。どんどん歌わないとね」
「歌は歌えばそれだけよくなるものだから」
要するに練習するということであった。
「だからね」
「そうよね。それじゃあ」
「もっともっとね」
「ええ、歌いましょう」
姉妹の息は合っていた。それはまさに周りの読み通りであった。
二人はこのまま練習を続けていって。その本番を迎えるのであった。

独特な絵　　完

２０１０・２・２７

第百九十一話　日々の練習その一

日々の練習

本番に向けて練習をしていく彰子と明香。それは家の中でも同じであり二人は家事や勉強の合間を見つけてそれで練習をしていた。

「ねえ明香」

「どうしたの？姉さん」

「あのね」

ここで妹に言うのであった。今は家事の皿洗いを二人でしていた。彰子が洗い明香がその泡を落としていた。そのうえで籠の中に入れていく。

「今こうして家事やってるけれど」

「ええ」

「その間はね」

「その間は？」

「歌の練習しない？」

こう言うのであった。

「今この間にもね」

「そうね。丁度いい時間ね」

それを聞いて確かに頷く明香だった。

「それは」

「じゃあ」

「二重唱が一番いいわね」

明香はここで話した。

「それじゃあ」

「そうね。それに」

「それに？」

「それぞれのパートの練習もできるわね」

それも言うのであった。二人は今その時間を見つけたのであった。

そうして早速であった。二人はそのまま歌の練習に入った。家事をしながら歌っていく。家事が終わってからもさらに歌っていた。歌いながらそのうえでそれぞれの部屋に入ろうとする。だがここで。

明香がここでまた姉に言ってきた。

「ねえ」

「何？」

「姉さん勉強の時は音楽は」

「それは聴かないわ」

それはしないというのである。

「それはね」

「聴かないの」

「ええ、勉強の時には勉強に専念するから」

それが彰子だった。集中力はかなりのものなのである。

そうしてだ。彰子の方からも妹に尋ねた。

「明香はどうなの？それは」

「私も」

姉の問いにこう答える妹だった。

「それはね」

「明香もなのね」

「勉強の間は静かにしているわ」

やはり彼女もそうだった。勉強の間はであった。

「やっぱりね」

「そうよね。だったらね」

「ええ。ただ」

「ただ？」

「勉強の間の休み時間だけれど」

その時の話もするのだった。明香もよく考えていた。

「その時はね」

「そうね。音楽をかけて歌うのがいいわね」

「そうよ。それがいいわ」
まさにその通りだというのである。
「だからね。そうして練習していったら」
「かなりの練習時間ができるわね」
「ただ」
しかしであった。ここで明香はさらに言うのであった。
「喉には気をつけてね」
「あっ、そうね」
「そうよ。喉はね」
くれぐれもというのであった。
「歌えば歌うだけ上手くなるけれど」
「けれど歌い過ぎたら」
「そう、喉を痛めるから」
だから駄目だという。この辺りは仕方のないことだった。喉はだ。
「だから歌い過ぎもね」
「気をつける」
「そうよ。絶対に」
駄目だというのであった。
「歌い過ぎには気をつけて」
「わかったわ。それもね」
「あと寝る時は」
さらに話す妹だった。喉のことには何処までも気をつけていた。

第百九十一話　日々の練習その二

「タオルを巻くといいわよ」
「タオルをね」
「それをね。寝る時に巻いておいて」
「普段もしておいた方がいいかしら」
彰子は妹の話からそうも考えるのだった。
「喉は」
「かなり暑い時以外はマフラーをしておいたらいいわ」
まさにそうすればいいというのであった。
「とにかく喉は大事にしないと」
「ええ、それじゃあ」
「喉が第一だから」
歌手にとっては何かというとであった。とにかく喉であった。喉が悪くてはどうにもならない。オペラ歌手にとっては楽器であり命なのだ。
「何があっても守ってね」
「埃も駄目よね」
「勿論よ」
何処までも慎重な明香であった。
「わかってくれたかしら」
「勿論よ」
姉もにこりと笑って答える。
「喉ね」
「そう、喉」
「そこを大事にしないとね」
「さもないと歌えなくなるから」
この部分は切実であった。
「本当にね」

「喉が命」
「そう、まずは喉」
そしてここでこうした話もするのだった。
「例えば喉頭癌にかかったらね」
「歌えなくなるわよね」
「これは極端な話だけれど」
前置きはした。実際に極端な話なのは事実であった。少なくとも今の彰子や明香にとってはそうした話なのは間違いない。癌はである。
「ちょっとね。ないわよね」
「そうよね。癌はね」
「それでも注意して」
言葉はそこにあった。
「わかってくれたかしら」
「うん、よく」
「わかってくれたらいいから」
「喉かあ。歌手は」
「お酒はまあいいけれど」
それは控えるようには言わなかった。
「ただ。あまり強いお酒はね」
「ワインだったらいいわよね」
「ワインは万薬の長だから」
いいというのである。この時代においても酒というものは人々にとって非常に頼りになるうえに有り難い薬であり続けているのである。
「だからね」
「いいのね」
「そう、いいものなの」
そうだというのである。
「あとは」

「あとは？」
「煙草は絶対に駄目」
これは絶対であった。
「煙草だけはね」
「っていうか煙草は」
それについてはすぐに返す彰子だった。話を返す根拠もしっかりと存在していた。
「喉どころか」
「身体全体にも悪いわよね」
「それに未成年は」
吸ってはいけないのはこの時代でも同じである。
「だから」
「それもあるけれどとにかく吸ったら駄目よ」
これは強調するのであった。
「絶対にね」
「ええ、わかったわ」
「お酒は強いのは控えて煙草は駄目」
「ええ」
「姉さんは最初からそうだけれど」
彰子は酒は飲んでもあまり強い酒は好まないのである。それはしっかりとしているのだ。その生活習慣はかなり真面目であるのだ。
「けれど気をつけてね」
「うん、わかったわ」
「節制が大事な世界だから」
「そういえばだけれど」
「どうしたの？」
「煙草を吸う人っているのかしら」
このことをふと妹に問うたのである。

第百九十一話　日々の練習その三

「やっぱり」
「いるしいたわ」
現在と過去の話であった。
「例えばジュゼッペ＝ディ＝ステーファノだけれど」
「どういう人なの？その人は」
「二十世紀後半のイタリアのテノールよ」
マリオ＝デル＝モナコと並び称される偉大なテノールである。その声は柔らかく歌い方もそうであった。様々な録音が存在している。
「お酒が大好きでヘビースモーカーで」
「そうだったの」
「夜遅くまでどんちゃん騒ぎをするのが好きでギャンブルもね」
「遊び人だったのね」
「ええ」
当然女遊びもしていた。あの名ソプラノマリア＝カラスとのロマンスの話もある。
「だからその最盛期も短かったの」
「成程」
「姉さん」
そして真面目な顔になって姉に問い返す。
「それだけれどね」
「どうしたの？今度は」
「長く歌いたいわよね」
今問うのはこのことだった。
「やっぱり」
「それはね」
それについては異論はなかった。
「私だってね。やるからには」

「だったらね」
「節制ね」
「そう、それだから」
まさにそれだというのだ。
「普段からもね。それに気をつけていたら」
「調子がいいのね」
「だから。後は」
さらに言うのであった。
「早寝早起きも」
「何か学校で言われてることみたいだけれど」
「その通りよ。とにかく身体には気をつけてね」
「わかったわ。それじゃあ」
こんな話をしてそのうえで勉強に入る。そして次の日の朝もまた。
雨が降っていたが室内演習場でトレーニングだった。相変わらず走っていた。
「ふう」
「疲れた？」
「まだ身体が慣れてくれないのね」
「一月もしていれば違うから」
身体についてはそうだというのだ。
「だから少しずつ頑張ってね」
「わかったわ。そうよね」
「ええ。それにしても」
「それにしても？」
「今は大変ね」
肩で息をしながら言う彰子だった。
「体力がつくまでは」
「けれど身体がしっかりしてきたら違うから」
「体力がついたらってことね」
「そうよ。身体を動かせばその分だけ体力はつくから」

だからいいというのである。
「頑張ってね」
「うん、それじゃあ」
「けれどそんなに嫌じゃないんじゃないかしら」
明香は今度はこのことを言うのだった。
「汗をかくのは」
「言われてみれば」
言われてみればだった。実際のところ彰子はかなり爽やかな気持ちの中にあった。汗をかいてそのせいであったのだ。
「結構気持ちいいっていうか」
「そうでしょ？汗をかいたらね」
「気持ちよくなるのね」
「身体にもいいし」
身体を動かすことが健康にいいのは変わらない。人間の身体の構造が根本から変わらない限りそれはまずないことであった。
「だからね」
「いいのね」
「姉さん運動は元々得意じゃなかったわよね」
「それはね」
その通りだった。実は彼女はこれまでこれといって運動をしてこなかった。それは事実であった。

第百九十一話　日々の練習その四

「けれどそれでも」
「動いてみたらいいわよね」
「ええ、とても」
まさにそうだというのだった。
「いいわ」
「後はシャワーを浴びて」
それで奇麗にするというのだった。
「学校に行きましょう」
「そう思うと清潔でもあるのね」
「そうよ。ただね」
「ただ？」
「居眠りには気をつけて」
それはだというのだ。
「身体を動かしてシャワーを浴びて奇麗にしたらついつい気持ちがよくて」
「寝るからなのね」
「だからね」
それは駄目だというのである。
「それは気をつけてね」
「わかったわ。それはね」
「そういう時はコーヒーを飲めばいいから」
こうしたことにも気配りを欠かせない彼女だった。
「それで眠気を覚まして」
「ええ、わかったわ」
「そう思って」
早速魔法瓶を出してきた。
「お湯と」

「コーヒーも？」
「これ」
インスタントコーヒーの元だった。
「これを飲めばいいから」
「用意がいいのね」
「予想してたから」
だからだという。その読みが見事だった。
「飲んで。まずは一杯ね」
「それでかなり違うからね」
「コーヒーは眠気も覚めるし」
それだけではないというのである。
「元気も出るから」
「そうよね。一杯飲んだらそれでね」
「だから是非飲んで。私も飲むから」
「シャワー浴びた後でいいわよね」
「ええ、それでいいわ」
時間はそれでいいというのだ。そうしたところまでも考えている。やはりしっかりとしている明香であった。
「じゃあまずは」
「シャワーね」
「行きましょう」
こうしてシャワーを浴びてそれからコーヒーを飲んでそのうえで授業に向かう。彰子はその日実に気分よく授業を受けられたのだった。
そして部活もだ。今日は実際に衣装を着けてみた。そのアラビア風の衣装である。
彰子だけでなく明香もだ。二人はその格好で舞台に出てそのうえでまた話をした。
「似合うかしら」
「似合ってるわよ」

妹が姉に答えた。
「とてもね」
「そう、よかった」
妹の言葉に笑顔になる彰子だった。それを見る周りもであった。
「あれ、彰子ちゃんって」
「そうよね」
「案外スタイルいい？」
「それも予想以上に」
こう話すのだった。
「色も白いし顔もいいし」
「衣装映えするんだ」
「これは予想以上に」
流石にこれは誰も予想していなかった。彰子は歌を意識してスカウトされたからだ。それに何といっても明香と姉妹であることが大きかった。
そして明香も言われるのだった。
「明香ちゃんもいつもよりも」
「奇麗っていうか」
「映えるね」
「何でかな」
「二人一緒だからね」
ここで顧問の先生がこう言うのであった。
「だからなのね」
「あっ、先生」
「いらしてたんですか」
「今ね」
丁度来たというのである。

第百九十一話　日々の練習その五

「来たのよ。仕事も終わったし」
「そうですか。それじゃあ」
「何で明香ちゃん今より奇麗なんですか？」
「お姉さんと一緒だからよ」
先生は皆に対してにこりと笑って述べた。
「だからなのよ」
「二人一緒だからですか」
「それでなんですね」
「まずお姉さんと一緒にいられてそれで気持ちが普段より上ずっているのよ」
それがあるというのである。
「そのせいでね。奇麗になってるのよ」
「テンションがいいからですか」
「それでなんですね」
「明るい表情は七難隠すよ」
先生はこんなことも言った。
「だからなのよ」
「あれ、肌の色が奇麗ならじゃなかったんですか？」
「それは」
かつての日本で色の白いは七難隠すと言われていた。しかしこの時代は白人とも黒人とも混血しそれが連合全土に及んでいる為こうした言葉になっているのである。
「明るい表情もだったんですか？」
「それは」
「そうよ。そうなったのよ」
こう話す先生だった。
「今先生が作った言葉よ」

「いや、今作った言葉って」
「それはその」
「何ていうか」
皆先生のその言葉を聞いてまずは何と言っていいかわかりかねた。
「あれじゃないですか。それじゃあ」
「特に言わないんじゃ」
「言うのよ。実際に表情が明るいに越したことはないでしょ」
「まあ確かに」
「それは」
それについては誰も異論がなかった。
「明るいとそれで見ている方も楽しくなりますし」
「そういうことなんですね」
「そういうことよ。わかったわね」
「はい、まあ」
「造語には納得いきませんけれど」
それでも話の大筋では納得したのも事実であった。
「そういうことですか」
「結局は」
「それでね」
先生の話はさらに続いた。
「あと一つは」
「一つは？」
「まだ何かあるんですか？」
「ああ、さっきのことは彰子ちゃんにも言えるわよ」
明香だけではないというのだ。
「表情がいつもより明るいのはね」
「それはなんですね」
「二人一緒なんですか」
「そして今から言う言葉も二人一緒よ」
それもだというのである。

「それはね」
「それは？」
「今度の訳は」
「タイプが違うからなのよ」
これが二つ目の理由であった。
「だからなのよ」
「タイプが違うっていうと」
「二人がですよね」
「つまりは」
皆話を聞いてこうそれぞれの頭の中で分析してそれを言葉にして出した。
「彰子ちゃんと明香ちゃんが」
「それぞれ」
「そういうことよ。これが同じタイプだったらね」
先生はさらに話した。

第百九十一話　日々の練習その六

「全然見分けがつかないところよ。まして映えたりはしないわ」
「全然違うタイプ同士だからこそですか」
「表情もなんですね」
「ええ。彰子ちゃんは小柄で可愛い系列で」
まずは彼女から話したのだった。
「明香ちゃんは大和撫子よね」
「背が高めで」
「そうですけれど」
「確かにタイプが全然違いますよね」
「姉妹なのに」
姉妹であっても全く似ていない。それが彰子と明香だった。
そしてだ。その姉妹が並ぶとだ。実に絵になる。
「彰子ちゃんが可愛い系で」
「明香ちゃんがクールビューティー」
「絵になるわよね」
「そうよね」
こう話してであった。そうしてであった。
二人が舞台にいるとそれだけで絵になる。ところが片方がいなくなると。
「何か寂しいよね」
「そうよね」
「一人いなくなるとそれだけで」
「かなり寂しい」
「っていうかまた出て来て欲しいと思えるけれど」
「それよ」
また言う先生だった。
「それなのよ」

「それなんですか？」
「それがいいんですか」
「そうよ。舞台で見たいと思うわよね」
「あっ、つまりそれがいい」
「そういうことなんですか」
「舞台を観ていてそれはかなりいいですよね」
皆も先生の話を聞いて述べていく。それを聞くと確かにその通りであった。舞台というものはどれだけ人を挽きつけられるかということも重要だからだ。
「ううん、あの二人の効果って」
「かなりっていうか」
「明香ちゃんともう一人」
「凄い人材が手に入ったのかも」
「決まりね」
先生の会心の言葉が続いた。
「彰子ちゃん、今度の舞台ではね」
「今度の舞台は？」
「このままいくんですよね」
「ええ。もう一人の娘も頑張ってるし」
彰子だけではないのだった。
「いい効果が出るわね」
「けれど何かここまで凄いと」
「嫉妬も覚えますけれど」
「それは」
「アフターケアは任せて」
先生は今度は胸を張ってきた。
「そちらもね」
「アフターケアはですか」
「そっちは先生が」
「顧問は何の為にいるのかよ」

先生はあまり大きいとはお世辞にも言えないその胸を張って豪語する。まさに何でも任せておけといった口調であった。それに尽きた。

「ただ見て偉そうに言うだけじゃないのよ」

「あれっ、学校の先生ってそうなんじゃ」

「そうだよね」

「先生なんてね」

「そんなものなんじゃ」

連合においては教師の質が問題になり続けている。教師という職業はどうしても問題のある人間が多くなってしまうのである。

「けれど違うんですね」

「確かに変わった先生だけれど」

「それは安心していいんですか」

「この私に任せなさい。女西郷と言われたこの先生にね」

勝手に自分でこう言うのであった。西郷隆盛は日本の英雄である。明治維新の立役者でありその功績は比類なきものである。

第百九十一話　日々の練習その七

「任せておくのよ」
「女西郷って」
「先生身体細いじゃないですか」
「それで西郷さんなんですか？」
「それに先生ってどの国の出身なんですか？」
言うまでもなく西郷は日本人である。
「今まで考えたことなかったですけれど」
「実際はどうなんですか？」
「何処の国の生まれなんですか？」
「日本だけれど」
その日本だというのである。
「それがどうしたの？」
「日本人だったんですか」
「成程」
「はじめて知りました」
なお連合では混血の結果外見だけで国籍がわかるものではない。
誰がどの国かというと本人の言葉を聞かないとわからないのである。
「それは」
「日本人だったんですか」
「てっきりエウロパのスパイだって思っていました」
「私も」
「ちょっと待ちなさい」
エウロパと聞くとだった。先生も平穏ではいられなかった。目を座らせてそのうえで部員達に対して言い返した。
「誰がエウロパ人ですって？」
「冗談ですけれど」
「それだけには見えませんから」

「ねえ」
　これには確かな理由があった。
「だって先生お肌アジア系じゃないですか」
「そのお肌だって少し黒いですし」
「そういうのを見たら」
「エウロパ人には見えませんから」
「絶対に」
「先生の誇りよ、このお肌は」
　ただ奇麗なだけではないというのだ。その黒人のものも入ったアジア系の肌はだ。
「お爺ちゃんは黒人なのよ」
「それで少し黒いんですね」
「それでなんですか」
「先生を育ててくれたのはそのお爺ちゃんなのよ」
　こんな話にもなった。
「それで今があるのよ」
「立派なお爺ちゃんなんですか？それじゃあ」
「先生にとってはやっぱり」
「それはね。先生はね」
「先生は？」
「家庭の事情でお爺ちゃんに引き取られたけれど」
　どうやら複雑な話があったらしい。世間にはわりかしよくあることだ。
「そこで教えてもらったのよ」
「音楽とかをですか」
「そのお爺さんに」
「今丁度八十歳でね」
「まだお若いんですね」
「先生のお爺ちゃんだとすると」
　八十歳はまだ連合では平均寿命には達していない。この時代の連

合では平均年齢は男女共に百歳まで超えているのである。
「じゃあそこまでなりますよね」
「いや、もっと若くてもいいかな」
「そんな年齢じゃないの？」
年齢についての考えはまさにそれぞれであった。
「やっぱりさ」
「そうかしら」
「まあ年齢はいいとしてね」
先生はまた言った。ここで言うのは先生のその祖父のことである。
「もう曾孫もプレゼントしたしね。まずは二人ね」
「まずはですか」
「これからもなんですね」
「五人は欲しいから」
連合では子供が多ければ多いだけ補助金や様々なサービスが得られるようになっている。それにより少子化を防ぎそのうえで人口を増やすように促しているのである。多産を奨励しているのだ。

第百九十一話　日々の練習その八

「だからね」
「だからですか」
「五人も曾孫さんをですね」
「パパとママにもだけれどね」
一応両親も話に出しはした。
「そっちもね」
「御両親は今は」
「御一緒なんですか」
「そうよ。子供の頃は二人共他の国に行っちゃってたけれど」
それがその事情であった。連合では共働きも多くこうしたこともままあるのである。そしてそれによって子供が引き取られることもあるのだ。
「けれど今はね」
「一緒に暮らせてるんですね」
「晴れて」
「そうよ、晴れてね」
先生の話すその顔が明るいものになった。
「なったわよ」
「よかったですね、それは」
「本当に」
生徒達もその通りだという。やはりこれはであった。
そうしてだ。先生はさらに言うのであった。
「まあねえ。パパとママもね」
「どうしたんですか？」
「何かあったんですか？」
「お互いにもう五十超えてるのに」
苦笑いしながらの言葉だった。

「あれなのよね。子供作ったし」
「先生の弟さんか妹さんですか」
「妹よ」
そちらだというのだ。
「私の上に一人お兄ちゃんがいて。三十近く離れてるけれどね」
「そういう先生も二十代半ばでもうお子さん二人って」
「早くないですか？」
「先生は十九歳で結婚したの」
自分の事情も話すのだった。
「それで双子がね」
「ああ、双子さんだったんですか。お子さんって」
「それでなんですね」
「そうよ。二人よ」
そうだというのだ。
「二人ね。お兄ちゃんと妹がね」
それで二人だというのである。
「いるけれど。どっちもねえ」
「どっちもですか」
「悪いんですか」
「そう、悪ガキなのよ」
今度は自分の子供達へののろけであった。
「手がかかってね」
「何か先生も大変なんですね」
「そんな妹さんができて」
「しかも十九歳で結婚して」
「双子もお母さんで」
「おまけに子供の頃は両親と別居で」
中々波乱万丈な人生であると言えた。少なくとも何もない人生とは到底言い難い、そう言ってもいいところまでいっている人生であった。

「そこまでって」
「無茶苦茶凄くないですか？」
「凄いと思うでしょ。先生自身もそう思うわ」
それは自分でも思っていることであった。
「全くね。色々あったわよ」
「それで今はここにいるんですね」
「顧問で」
「そうよ。さて」
ここであらためて彰子と明香を見る先生だった。
「あの娘達もどうなるかしらね」
「何か凄い逸材ですけれど」
「それは確かに」
これは皆認めた。
「けれど先生も」
「何ていうか」
「壮絶だったんですね」
「壮絶かしら」
そう言われると今一つ実感がないような返答だった。
「先生は別にね」
「いや、凄いっていうか」
「そもそも先生って」
「何者ですか？」
こんな話にもなった。今先生のこともまた明らかにされる。先生は一体何者なのか。今ここでそのことがはっきりと知られるのであった。

日々のこと　　完

2010・3・5

第百九十二話　顧問の先生その一

顧問の先生

先生の名前もだ。今彼等ははじめて知った。
「先生の名前誰か知ってるかしら」
「ええと！？」
「何でしたっけ」
こんな返答であった。皆首を傾げさせる。
「そういえば今まで知りませんでしたけれど」
「部活に入ってもうすぐ一年ですけれど」
「それでも」
皆知らなかった。何と三年生までだ。先生の名前は誰も知らなかった。皆顔を見合わせてそれぞれ困った顔にさえなってしまっていた。
「すいません、知りません」
「わかりません」
「っていうか一度も聞いていません」
「じゃあ先生の名前を言うわね」
「はい」
「何ていうんですか？」
「コンスタンツ＝アガサよ」
それが先生の名前だという。
「わかったわね。コンスタンツっていうの」
「アガサが苗字ですよね」
「そうよ。阿賀差って読むの」
実際に漢字で書いてみせる。確かにそう書かれている。
「こうね」
「コンスタンツは日本の名前じゃないですけれど」
「それは」

「そのお爺ちゃんが名付けてくれたのよ」
ここでまたにこりと笑う先生だった。やはり楽しそうである。
「この名前もね」
「そうなんですか。それでその名前なんですね」
「コンスタンツですか」
「そうよ。国籍は日本」
このことはまた言うのであった。
「八条高校から八条大学にいってね。それで今ここにいるのよ」
「あれっ、先輩だったんですか」
「僕達の」
「意外っていうか」
「そう？意外かしら」
これは言われた方が少しきょとんとなっていた。先生にとってはそうした自覚はないのだ。自分の方ではそうしたことには気付かないものである。
「それって」
「ええ。あんまりそういうイメージないですし」
「そうよね」
「他の大学の感じするし」
「音楽大学とかね」
「大学は音楽部だったわよ」
そのものずばりだというのだ。
「それはね」
「そうだったんですか。けれど」
「八条大学って感じはしませんね」
「あまり、ですけれど」
「そうかしらね」
やはりこのことについては実感のない先生だった。返答にそれが出ている。
「先生はそうは思わないけれどね」

「まあそれは置いておいて」
「そうだったんですか」
「お名前はそれで」
「八条大学だったんですね」
それでもそうしたことがそれぞれの頭の中にインプットされていく。
「わかりました」
「っていうか今知りました」
「説明する機会とかなかったからね」
先生も今気付いたことであった。
「だから知らなくても当然ね」
「それで先生」
「先生ってこの辺りにお住まいですよね」
「勿論よ」
にこりと笑って答える。
「先生なんだから当たり前でしょ、それは」
「そこで御主人とですか」
「それとお子さんと」
「四人で、なんですね」
「パパ、ママと同居してるわよ」
所謂三世帯家族であった。
「今はね」
「じゃあお家結構大きい？」
「そうよね」
「八人家族だし」
「お家は広くてもね」
ここで、であった。先生はこんなことも言ってきたのであった。

第百九十二話　顧問の先生その二

「一人だと寂しいわよ」
「そうなんですか」
「寂しいんですか」
「二人だと違うけれどね」
次の言葉はこれであった。
「けれど一人だと寂しいわよ」
「一人だと、ですか」
「どうしてもなんですね」
「一人が一番寂しいのよ」
先生はまた言った。
「だからね。皆で一緒に住まないとね」
「まあ私達も」
「そうだよね」
「それはね」
彼等は先生の話を聞いて自分達に当てはめて考えてみた。八条学園ではそれぞれ部屋を借りて暮らしている。家賃等は学校の寮扱いなので支払う必要はない。だが絶対に兄弟が同じ学園にいると一緒に住まなければならないのである・
「兄貴と一緒に住んでるし」
「妹二人と」
「だから寂しくないよね」
「確かにね」
「一人暮らしも悪くないかも知れないわ」
先生もそれは否定しなかった。
「けれど寂しいのよね」
「寂しいからですね」
「それはよくないと」

「先生はそう思うんですか」
「少なくとも私は好きにはなれないわ」
実際にそうだともいうのである。
「どうしてもね」
「そうですか」
「それはなんですか」
「ええ。だから先生は家族皆で暮らしているの」
こう話すのだった。
「そういうわけなの」
「それでなんですか」
「成程」
「それにしても」
ここでまた一人言うのであった。
「今八人家族って仰いましたよね」
「それがどうかしたの？」
「どうして八人なんですか？」
その生徒が言うのはこのことだった。数の話である。
「先生の御両親と御主人とお子さんですよね」
「あと先生の妹達ね」
「妹達！？」
生徒達は今の言葉に反応した。
「妹達っていいますと」
「まさか」
「もう一人おられるんですか？」
「生まれたばかりの妹さん以外にも」
「中学生の妹がいるのよ」
そうだというのである。
「私にはお兄ちゃんがいてそれぞれ社会人の弟が二人いて」
男兄弟から話すのであった。
「それで中学生の妹とね。生まれたばかりの妹と」

「合わせて六人ですか」
「それでなんですか」
「そうよ、六人よ」
それが先生の兄弟達だというのである。
「六人兄弟で今は八人家族なの」
「まあ六人は普通ですけれどね」
「ちょっと多い位ですけれど」
連合では六人兄弟は割かし多いのである。理事長である八条義統にしても五人兄弟の一番上だ。連合では子沢山が美徳なのだ。
「それでも。二十歳以上歳の離れた妹さんは」
「かなり凄いですね」
「兄貴もぼやいてるわ」
苦笑いだが心地よい感じの笑みであった。
「ここでもう一人なんてね」
「ですよね。普通続けてですからね」
「二十歳以上ってのはちょっと」
「ないですよね」
「エウロパの話だけれど」
また話す先生だった。今度の話はエウロパについてであった。

第百九十二話　顧問の先生その三

「マリア＝テレジアはね」
「ああ、オーストリアの女帝ですよね」
「薔薇の騎士の時代の女帝でしたね」
彼等はそこからマリア＝テレジアを覚えているのである。オーストリアの偉大な女帝としてよりそうしたことで覚えているのである。
「その人もですか」
「六人ですか」
「十六人よ」
数が違っていた。
「それだけの子供を産んだのよ」
「十六人ですか」
「それはまた多いですね」
「凄いですね」
連合でも流石に十六人はない。そこまでの大家族もあることにはあるがあまり多くはない。
「そこまで作ったんですか」
「いや、尋常じゃないですね」
「流石にパパもママもそこまで凄くはないわよ」
先生は自分の両親について話した。
「それはね」
「ですよね、やっぱり」
「それは」
皆もそれは頷いて応えるのだった。
「ないですよね」
「十六人は」
「それを考えたらましかしら」
そして先生はこんなことも言った。

「うちのパパとママも」
「ええ、そう思います」
「六人と十六人じゃ全然違いますから」
「本当に」
皆また言った。
「まあとにかくですね」
「皆で暮らすんですね」
「家族、兄弟で」
「そうよ。皆でね」
こう話してであった。
「楽しく過ごすのが一番いいんじゃない」
「確かにそうですね」
「それにしても十六人は凄いですけれど」
「それって本当に二人の夫婦でのことですか？」
いぶかしんでこんなことを問う生徒もいた。
「マリア＝テレジアって」
「夫は神聖ローマ皇帝フランツ＝シュテファン＝フォン＝ロートリンゲン」
先生はその偉大なる女帝の夫の名前も話した。なおこの夫のことはおろか女帝のことも連合の世界史で習うことは少ない。エウロパの歴史はその侵略行為がかなり誇張されて書かれている部分が殆どであるのだ。事実をもとにそれをさらに誇張して教えているのである。
「二人の夫婦でなのよ」
「旦那さんが浮気して作ったとかじゃないんですか」
「何人かは」
「女帝は凄い人だったのよ」
先生はかなり女帝寄りの発言になっていた。
「ただ名君であるだけでなくよき母であり素晴らしい妻だったのよ」
「所謂完璧超人だったんですね」

「つまりは」
「ちなみにこれが肖像画よ」
先生が自分の携帯に出して来た絵画には麗しい淡い白い髪に丸く大きな青い瞳の美少女がいた。楚々とした顔立ちに青いドレスがよく映えている。まさに絶世の美女だ。
その肖像画を見てだ。生徒達は皆息を呑んだ。
「・・・・・あの、美人でもあったんですか？」
「何ですか、この美少女」
「才色兼備だったんですね」
「そうなのよ。こんな人だったのよ」
先生はまた話すのだった。
「凄いでしょ」
「女帝で凄い政治家でいいお母さんで素晴しい奥さんでおまけに美人」
「しかもハプスブルク家っていったら」
「そうよね」
この時代でのオーストリアは王国となっている。その王家はハプスブルク家なのだ。
「今でもエウロパ第一の名門だし」
「スペイン王家やイギリス王家よりも上」
「連合に来ても凄いっていう位の」
なお連合では第一の名門は日本の皇室とされ次がエチオピア皇室となる。エチオピア皇室は一旦断絶し傍流が探されてその人が即位して復活した為日本の皇室が第一の名門とされているのである。他にはタイ王室やブルボン家のケベック王室等が名門とされている。

第百九十二話　顧問の先生その四

「そんな家じゃない」
「その家の出身でもあるって」
「無茶苦茶凄くないですか？」
「政治家としては国を守って奮闘した人だったのよ」
オーストリア継承戦争に七年戦争である。
「それで生き残ってね」
「それで子供十六人ですか！？」
「おまけに素晴しい奥さんだったって」
「終生御主人を愛し続けたのよ」
このことでも有名な人物であるのだ。
「それこそね。愛した人は一人だけ」
「一途だったんですね」
「しかも純情だったんですか」
「そうだったのよ」
ここでまた話す先生だった。
「そして聡明な人で」
「どれだけ神様から与えられている人だったのかしら」
「全く」
伊達に当世きっての名君と謳われた女帝ではなかったのだ。
「御主人が浮気心を持とうとしてもね」
「どうしたんですか？その時は」
「ひっぱたいたとか」
「そういうことは絶対にしなかったのよ」
そしてしたことといえばであった。
「まず御主人に気付かれない様に事前に根回しをしておいて」
「根回しをですか」
「それをして」

「そして芽を摘んでそっと握り潰しておいたのよ」
その様にして夫の浮気を彼に気付かれることなく、そして恥をかかせることなく防いでいたというのだ。これは当然尋常なことではない。
「そうしていたのよ」
「凄過ぎます」
「そんな人だったんですか」
「エウロパには嫌な人間が歴史的にも物凄く多いけれど」
先生もここでは見事なまでに連合の人間である。
「この人だけは凄いわ」
「その人の時代なんですよね、モーツァルトも」
「確か」
「少年時代はそうよ」
実際にその時代に彼は生きていたのだ。
「その息子のヨーゼフ二世とは会ってもいるしね」
「そうなんですか」
「じゃあ薔薇の騎士ってモーツァルトの時代なんですね」
「そうよ。その時代だから」
こう生徒達に教えていくのであった。
「それはよく覚えておいてね」
「成程。じゃあ衣装なんかも」
「あの時代で、ですよね」
「モーツァルトとリヒャルト＝シュトラウスは同じ感じで」
「シュトラウスがモーツァルトを参考にしたのよ」
先生は具体的に話してきた。
「それであああした作品になったのよ」
「そうだったんですか。シュトラウスがなんですね」
「モーツァルトを」
「薔薇の騎士はフィガロの結婚だから」
「それの換骨奪胎ってことですか」

「フィガロの」
これはよく言われていることだ。実際にシュトラウスの方もそれを意識して作曲したのである。尚脚本を書いたのは文豪ホーフマンスタールである。
「だからね」
「だから？」
「まだ何かあるんですか？」
「今オペラのシーズンは決まってるけれど」
今度は演目の話であった。それをするのであった。
「次のシーズンにはシュトラウス入れるわよ」
「それをですか」
「入れるんですね」
「そうするわ。シュトラウスをね」
入れるというのである。
「それでいいわね」
「わかりました」
「じゃあ次のシーズンにはシュトラウスですね」
「それをですか」
「それも薔薇の騎士か」
先生は今の時点で既に演目もある程度決定していた。

第百九十二話　顧問の先生その五

「ナクソス島のアリアドネをね」
「あっ、その演目だと」
「また彰子ちゃんと明香ちゃん使えますね」
「二人共」
このことに皆気付いたのだ。それにも理由があった。
「ツェルビネッタが明香ちゃんで」
「それでアリアドネが彰子ちゃんですね」
「そのつもりよ」
微笑んでその通りだと答える先生であった。
「そうですか。二人なんですね」
「それで、ですか」
なおツェルビネッタはそのナクソス島のアリアドネの脇役キャラの一人である。脇役だが驚異的な技量を必要とする役である。この役もコロトゥーラソプラノの役である。即ち明香の役であるのだ。
「けれど彰子ちゃんがアリアドネは」
「少し声が軽いですかね」
アリアドネがヒロインとなっている。ただしこのオペラは色々と楽屋オチまで入れていてそのうえで書かれて作曲されているのである。
「けれどそれもありなんですね」
「やっぱり」
「ええ、そのつもりよ」
やはり二人をそのまま使うつもりの先生だった。
「あの二人ならやってくれるわ」
「そうですね。このままいけば」
「今のオペラの本番もいけますね」
「いい具合に」

「ええ、いけるわ」
まさにそうだと話す先生だった。
「さて、それでね」
「はい、練習ですね」
「再会ですか」
「まずは喉を潤して」
このことを言うのを忘れなかった。
「レモンの蜂蜜に浸したのも用意してあるから」
「あっ、どうも」
「じゃあ」
レモンの蜂蜜浸しは身体にいいうえで疲れも癒してくれる。だから先生はよく差し入れてとして持って来るのである。部員達への気遣いなのだ。
「それを頂いて喉も潤してから」
「そうさせてもらいますね」
「そうするといいわ。それじゃあね」
「はい、それじゃあ」
「はじめましょう」
皆で栄養を補給し英気を養ってであった。そのうえで部活に戻る。彰子と明香も楽屋を後にする為に席を立つ。だが彰子はまだジュースを飲んでいた。
彰子はそれを飲みながらだ。明香に言ってきた。
「ねえ」
「どうしたの？姉さん」
「このジュースだけれど」
話すのはその飲んでいるジュースについてであった。
「美味しいだけじゃないのね」
「豆乳と野菜ジュースのミックスだから」
「だから余計にいいのね」
「そうよ。言ったと思うけれど」

「そうね。身体が第一だからね」
またその話になるのだった。
「オペラ歌手は飲み物にも気をつけないと駄目なのね」
「豆乳と野菜ジュースは身体に凄くいいから」
そのよさについては今更言うまでもなかった。
「だから姉さんもね」
「飲めばいいのね」
「ええ」
まさにその通りだというのである。
「私も飲んでるし」
「そうよね。美味しいしね」
実は彰子は豆乳も野菜ジュースも好きである。家でもよく飲んでいる。だから今もこれといって抵抗もなく飲んでいるのである。
「美味しくて栄養のあるもの摂ってね」
「また頑張りましょう」
「ええ。オペラって体力勝負なのね」
あらためてこのことを思い知ったのであった。
「本当にね」
「そうよ。体力勝負なのよ」
それは間違いないと話す明香だった。
「前にも言ったけれど」
「そうだったわね。何度言ってもなのね」
「そう。言い過ぎることのないものだから」
だから言うというのである。

第百九十二話　顧問の先生その六

「それでだから」
「わかったわ。それじゃあ」
「行きましょう」
姉を促す。
「またね」
「うん」
こうして舞台に戻る二人だった。その二人に早速先生が言ってきた。
「今度はね」
「はい、今度は」
「どうするんですか？」
「四人での場面をやるわ」
そこをするというのである。
「それでいいわね」
「四人のっていうと」
「ベルモンテ、ペドリオとの場面ですね」
「ええ、そうよ」
まさにそこだというのだ。この二人は後宮からの逃走の男の主役と脇役である。なお両方共テノールである。このオペラはソプラノとテノールを完全に軸にしているのである。
「そこの練習をするわ」
「わかりました」
「じゃあすぐに」
先生に応える二人だった。そうしてである。
すぐに練習に入る。そしてその練習は。
「ううん」
「どうかしたんですか？先生」

「いえ、彰子ちゃんだけれど」
彼女を見ての言葉であった。首を傾げさせて難しい顔になっている。
「ちょっとね」
「何か問題あります？」
「歌もお芝居もいいんじゃないですか？」
「そうですよね」
「大人しいのよね」
先生が指摘するのはこのことだった。
「ちょっとね」
「大人しい」
「そうなんですか」
「ブロンデはそれこそ相手が大男でも引かないのよ」
そうした気の強い女の子が多いのもモーツァルトのオペラの特徴である。これは一説にはモーツァルトの女性観がかなり影響しているらしい。
「絶対にね」
「けれど彰子ちゃんはおっとりさんですし」
「ですからそれは」
「仕方ないんじゃ」
「それはわかるけれどそれでもよ」
先生の言葉はさらに上を見ているものだった。
「それでもなのよ。もう少しね」
「元気よくですか」
「そうなんですね」
「お芝居自体はいいのよ」
それについては問題ないというのである。それはだ。
「ただね」
「ただ、ですか」
「それでもなんですね」

「ええ、それでもなの」
また言う先生だった。
「彰子ちゃんには振り切ってもらうわ」
「振り切ってもらうって」
「どうやってなんですか？それは」
「完全にそうなるの」
先生はここでこう言った。
「その役にね。なりきるのよ」
「というとこの場合は」
「ブロンデにですか」
「なりきるんですね」
「要するにそういうことよ」
まさにそれだというのである。
「さて、それだったら」
「それだったら？」
「どうするんですか？今度は」
「はい、一時中断よ」
手をぱんぱんと叩いて皆に告げる。
「いいわね、一時ね」
「あっ、はい」
「わかりました」
練習をしていた面々もそれに応えてすぐに芝居を中断する。先生はそのうえでその彰子達、とりわけ彰子を見てこう言ってきたのであった。
「これからは歌劇場の中では役の名前で呼ぶわよ」
「役のですか」
「それでなんですか」
「そうよ。ねえブロンデちゃん」
「あっ、私ですか」
「そうよ。わかったわね」

いきなり彰子を見ての言葉だった。

第百九十二話　顧問の先生その七

「貴女はブロンデなのよ」
「私はブロンデ・・・・・」
「そう、気が強くて明るくて元気のいい女の子」
まさにそれだというのだ。
「わかったわね、それで」
「はい、私はブロンデですね」
「そうよ」
その通りだというのである。
「わかったわね、それで」
「はい、わかりました」
「それでコンスタンツェ」
「はい」
明香も役で呼んでみせたのだった。明香もそれに応える。
「その調子よ」
「わかりました」
「それで皆もね」
先生は今度は周り全体に話す。
「作品は一つの世界なのよ」
「一つの世界」
「そうなんですね」
「そうよ。だからね」
さらに言うのであった。
「その世界の人間なのよ、今は」
「その世界のですか」
「人間なんですね」
「その通りよ」
これは実は暗示であった。

「いいわね。その世界の人間になるのよ」
「モーツァルトの世界の人間にですか」
「そして後宮からの逃走の世界に」
「まずコンスタンツェはお嬢様よ」
コンスタンツェから話すのだった。
「れっきとしたね。非常に気品があって身持ちも固くて」
「何かそれって正反対ですね」
「そうですよね」
皆ここでこんなことも言った。
「モーツァルトの奥さんと比べたら」
「気品があったかどうかはともかくとして」
「ですよね」
モーツァルトの妻だったコンスタンツェは悪妻として有名である。
かなりの浪費家でありお世辞にもしっかりとした人物ではなかった。
そうした意味でこの時代においても評判のいい人間ではない。
「それは」
「完全にですよね」
「けれどこの世界のコンスタンツェは違うから」
先生は明香を見ながら話すのだった。
「それはちゃんとわかっておいてね」
「お嬢様ですね」
「そうよ」
その明香に微笑んで告げる。
「そういう女の子なのよ」
「わかりました」
「わかったわね、コンスタンツェ」
彼女をその名前で呼んでみせる。
「気品があって身持ちが固くて優しいお嬢様よ」
「私はそれですね」
「そしてね」

今度はブロンデを見ての言葉だった。
「貴女はしっかりとしていて元気がよくて気の強い女の子よ」
「はい」
じっと彼女の顔を見ている。特にその目をだ。
「わかりました」
「貴女はブロンデ」
「その女の子ですね」
「そうよ。女の子よ」
まさにそれだというのである。そのブロンデだというのだ。
「貴女はね。それに」
「それに？」
「ここはトルコよ」
今度は舞台についての話だった。
「トルコなのよ」
「トルコですか」
「ここは」
「そう、トルコなのよ」
まさにその国だというのだ。尚ここで言うトルコとはこの時代のトルコではない。強勢を誇ったオスマン＝トルコである。連合のトルコの前身だ。
「その領土の一つチュニジアよ」
「チュニジアっていうと」
「カルタゴですよね、確か」
「そこですよね」
皆そこだというのだった。カルタゴは古代の国家である。今は復活しているが紀元前にローマによって跡形もなく破壊されている。チュニジアはかつてカルタゴがあったその場所なのである。
「そこに、ですか」
「けれどカルタゴじゃないんですよね」
「トルコなんですよね」

「そうよ。トルコなの」
あくまでそこだというのだ。
「トルコなのよ」
「トルコですか」
「オスマン＝トルコ」
「そこに忍び込んで囚われのヒロインを救い出す」
こうした意味ではまさに王道の話である。
「わかったわね、二人共」
「はい」
「わかっています」
ベルモンテとペドリオも言う。
「それはもう」
「僕達が助け出します」
「オスミンもね」
そのオスミン役の生徒も見る。オスミンはこのオペラの鍵とも言えるキャラクターだ。敵役であるがモーツァルトは彼にも素晴しい音楽を与え非常に愛敬があり親しみやすい存在にしたのだ。モーツァルトの天才はまさに全ての存在に及ぶのである。
「いいわね」
「わかりました」
そのオスミン役の彼も頷いた。
「それじゃあ」
「さて、ここはトルコよ」
またこう言う先生だった。
「トルコ。いいわね」
「はい、じゃあ」
「後宮ですね」
皆完全に先生のペースに入った。こうした先生であるのである。

顧問の先生　　完

2010・3・10

第百九十三話　本番その一

本番

先生により皆いい具合に練習を重ねていた。それは当然彰子と明香も同じだ。二人はいい状況で本番を迎えようとしていたのだった。部活が終わり二人で風呂に入っている。浴槽の中で向かい合って入っている。彰子は髪を上にあげている。そのうなじがかなり艶かしい。

その顔を出しながらだ。妹に対して言うのだった。風呂場の中は湯気もありかなり温かい。当然湯舟の中はとりわけ温かい。その中にいて言ったのである。

「いよいよね」

「そうね」

明香は姉の言葉に静かに頷いて応えた。

「本当にね」

「そうね。本番なのよね」

「姉さん」

静かに彰子に言ってきた。

「それでね」

「それで？」

「お風呂もいいのよ」

今一緒に入浴しているそのお風呂のことも話すのだった。

「それもね」

「いいの」

「そう、いいから」

こう言うのである。

「身体はいつも温かい方がいいし」

「逆に言えば冷やしたらいけないのね」

「特に喉はね」

とりわけその喉について言うのであった。喉に対してだ。
「大事にして温めてね。何度も言うけれど」
「そうよね。喉よね」
「そう、喉」
まさしくそこだというのである。
「喉が命だから」
「それと耳ね」
「耳も気をつけて。鼻をかむ時もね」
「一度に強く噛むのじゃなくて片方ずつ静かになのね」
「そうしてかんで。鼓膜とかによくないから」
「じゃあ中耳炎は」
「絶対に気をつけて」
それは言うまでもないのだというのだ。
「よくね」
「わかったわ。とにかく色々なことを注意しないといけないのね」
「それが歌手だから」
かなり厳しいがその通りだというのだった。
「わかってくれたらね」
「ええ。それだったら」
「後はお風呂からあがったらジュースをね」
「豆乳と野菜のミックスね」
「それがいいから」
健康第一というわけだった。何といってもそれだった。
「味もいいし」
「そうよね。味もね」
「それで気をつけて。お腹でも歌ってね」
「複式もね」
「とにかく本番が近いから」
何につけてもそれが重要だた。本番が近いのだ。
「食事も変えるわ」

「だから今日は」
「そう、パスタなの」
それにするというのである。何故パスタにするかというとそこにも理由があった。明香はこのことも姉に対して話をするのだった。
「炭水化物はすぐにエネルギーになるから」
「それでいいのね」
「そうなの。舞台でもよく動けるようになるし」
「何かそれって」
それを聞いた彰子は湯舟の中で顔をあげて言うのだった。
「あれよね。レーサーかボクサーみたいね」
「それと同じよ」
「同じなの」
「そう、同じ」
そうだというのであった。
「身体全体にはその方がいいの」
「本番前には炭水化物ね」
「雑炊とかリゾットもいいから」
米系統の料理も話に出された。
「オートミールに。あとはおうどんも」
「じゃあお蕎麦もいいのね」
「本番前はお肉とかよりそういったものの方がいいのよ」
やはり何処かレーサーめいていた。

第百九十三話　本番その二

「コンディションの為にもね」
「わかったわ。それじゃあ」
「今日は私がメインで作るから」
「そのパスタね」
「そう。作るから」
こう姉に話す。
「もうお湯の用意はしてあるから」
「ソースはどうするの？」
「トマトと大蒜と」
パスタ、いやイタリアをルーツとする料理とは切っても切れないものである。これにチーズとアボガドも加わる。トマトにチーズ、それとアボガドでイタリアの国旗の色になる。
「それとセロリとマッシュルームを使うから」
「オリーブオイルはたっぷりね」
「それは欠かせないわ」
それについては絶対だというのだった。オリーブも欠かせないのだ。
「だからね」
「わかったわ。それじゃあ」
「姉さんは野菜を切っていってね」
「ええ」
妹の言葉にこくりと頷く。
「わかったわ」
「大蒜はたっぷりと入れるから」
「チーズは？」
「粉チーズがあるわ」
そちらだというのだった。

「できてからかけましょう」
「ええ、わかったわ」
「それと」
「それと？」
「野菜はかなり買ったからそれでサラダも作りましょう」
全てを使うのだというのだ。抜かりはなかった。
「それでどうかしら」
「いいわね。何か完璧ね」
「それで今日はパンよ」
パスタといえば主食はこれであった。連合では米もパンもどちらも食べられる。なお米で作られたパンも存在しているのである。
「それでいいかしら」
「デザートは？」
「ケーキよ」
デザートはそれだった。
「ラディッシュのケーキよ」
「人参なのね」
「身体にいいから」
デザートに関しても健康に気を使っているのだった。
「それと豆乳を使ってね」
「ここでも豆乳なのね」
「大豆はやっぱり身体にいいから」
それが念頭にあるのだった。それはその通りだった。だが明香はとにかく野菜と大豆を話に出す。それを彰子も言うのであった。
「最近明香って」
「どうしたの？」
「豆乳に凝ってない？」
こう言うのであった。
「あとお野菜と」
「血が奇麗になるし」

「血ね」
「淡白質としてもいいし」
これは昔から言われていることである。大豆は確かに身体にいいのである。食べていて悪いということは全くないものなのである。
「だからなの」
「植物性淡白質ね」
「それとお野菜があったら」
そして次はこれであった。
「もうそれだけでいけるから」
「成程ね」
「どうかしら、それで」
あらためて姉に問うてきた。
「それで」
「いいと思うわ。それじゃあね」
「ええ。それじゃあ」
「お風呂からあがったら作って食べよう」
姉と一緒に作ってであった。これはいつものことだ。
「それでね」
「わかったわ。それじゃあね」
「食べて。それで」
その言葉を続けていく。
「後はね」
「ぐっすりと寝てね」
「舞台にね」
風呂場の中で一緒に湯舟につかりながらそんな話をするのだった。
和風のその風呂場の中で二人はくつろいだ。そしてであった。

第百九十三話　本番その三

いよいよ本番であった。彰子も明香もいる。二人は一緒の楽屋で衣装を着ていた。そして衣装を着けてからまたお互いに言い合うのであった。

「はじめての舞台ね」

「安心して」

「安心してって？」

「緊張したらかえって駄目だから」

ここでも姉に対して言うのであった。穏やかで包み込む様な声で。

「だから」

「緊張し過ぎるなってことなのね」

「ええ」

そしてこくりと頷くのだった。

「だから」

「わかったわ」

彰子はブロンデのそのアラビア風の服で頷いた。

「それじゃあ」

「落ち着いていけばいいから」

また言う妹だった。

「練習の時と同じだと思えばいいから」

「練習の時となの」

「そう、一緒だから」

それは一緒だというのだった。

「やることはね」

「じゃあリハーサルと一緒なのね」

ここで彰子も言った。

「つまりは」

「そうなの。お客さん達は気にしないで」

「ブラボーって言葉もブーイングも？」
「ブーイングはないから」
それはないというのである。それについても話す明香だった。
「それはもう劇場の決まりであるから」
「決められてたの」
「そうなの。マナーに反するから」
「だからなのね」
「むしろブーイングした人が」
どうなるかというのであった。
「つまみ出されるの」
「そういうところもしっかりとしてるのね」
「だからそれは安心して」
ブーイングの心配はないというのである。彰子はそれを聞いて少しだけ安心した顔になった。そして安心したのはそれだけではなかった。
「あとは」
「あとは？」
「いつも一緒だから」
今度は明香自身のことを言ってきたのである。
「私達はいつも一緒だから」
「そうだったわね」
彰子もその言葉を受けてにこりと笑ったのだった。
「私達はいつも一緒だったわね」
「ええ。だから」
「安心したわ。それじゃあね」
「歌えるよね」
「歌えるわ」
その笑顔での言葉であった。
「明香がいるから」
「私も」

「明香も？」
「姉さんがいると」
彼女の顔も自然と微笑んでいた。その顔で言うのである。
「いつもよりも」
「いいのね」
「気分が上向いてるわ」
心がだというのである。
「だからね」
「そうね。二人でね」
そっと妹の手を自分の両手で握ってきての言葉だ。
「じゃあ今からね」
「そうね。行きましょう」
「まずは序曲よね」
「そろそろかかるわ」
それもそろそろだというのである。
「物凄く特徴のある曲だから」
「そうよね。あれだけでもかなりよね」
彰子もその曲のことは知っていた。モーツァルトの音楽はオペラの序曲もまた名曲揃いなのだ。モーツァルトには端役も駄作もないのである。
「あの曲はね」
「そう。だからね」
「元気よくいけるわね」
彰子は明るい声で述べた。
「あの曲を聴いても」
「モーツァルトは奇跡なのよ」
少なくともこの時代においても彼を凌駕する天才はいないとまで言われている。モーツァルトこそは天才と呼ぶに相応しい人間なのだ。
「聴いていればそれだけで」

「心が上向いてくるわね」
「それに姉さんもいてくれて」
また彼女の話になっていた。

第百九十三話　本番その四

「余計にね」
「そうね。二人でね」
行くというのであった。そして遂に序曲がはじまった。
まずはほんの少しだけ聴こえる。それから一斉に鳴る。それはまるでマリオネットの芝居がはじまり人形達が一斉に出て来るものだった。
その曲がはじまって皆も言うのだった。
「じゃあやるか、俺達もな」
「そうね。オーケストラは今日も調子がいいし」
「それなら」
オーケストラは管弦楽部である。歌劇部のオペラの時はいつも入るのだ。
「私達も行くか」
「今日も明るく楽しく」
「そして真面目ね」
そのまま劇がはじまった。まずはコンスタンツェに扮している、いや彼女自身になりきっている明香が見事な歌唱を響かせるのだった。
それは見事な拍手に迎えられた。先生はそれを見て満足した顔で微笑む。
「今日も絶好調ね」
「ええ、確かに」
「というよりは」
生徒達はその明香を見て言うのだった。
「むしろいつもより調子がいいような」
「そうよね」
「これまで以上に」

「絶好調を超えてるっていうか」
「そんな感じですけれど」
「予想以上ね」
先生も言葉をあらためた。
「やっぱり妹さんだからかしらね」
「そうよね。だからこそ」
「これは」
また言う生徒達だった。
「やっぱりお姉さんがいるから」
「彰子ちゃんが」
「そして次は」
その彰子の出番だった。舞台に出ると雰囲気が変わった。
「えっ！？これは」
「かなり」
「明るいっていうか」
「ブロンデ！？」
まさにそうした感じだった。彼女もまたそのものになっていたのだ。
「演技も軽快だし」
「演技は妹さんよりもまだ上よね」
「そうよね」
ここであらたにわかった彼女の才能だった。彼女は演技の才能もあったのだ。尚明香にしてもその演技力には定評があるのである。
「これはかなり」
「そして歌は」
「どうかしら」
その肝心の歌がどうかというとであった。歌もまた。
「えっ、これも」
「かなり？」
「レベル的には妹さんと合う位」

「そうよね」
歌のレベルも高かったのである。
「リハーサルの時よりもいいし」
「若しかして本番に強いタイプ！？」
「そうかも」
尚これについても明香はよく言われていた。彼女もまた本番においてその実力を完全に発揮するタイプなのである。やはり姉妹であった。
「うわ、これはまた」
「かなりよね」
「凄いことになったわ」
その姉妹の力を見てのことであった。
「この舞台大成功ね」
「ええ、絶対にね」
「そうなるわ」
最早それは決まったようなものであった。
「先生、ここまでと思いました？」
「あの姉妹の実力って」
「ここまでなんて」
「何度も言うけれど」
先生は周りの問いにこう置いてから述べた。
「予想以上よ」
「予想以上ですよね、本当に」
「ここまでなんて」
「まさに相乗効果」
「一人一人でも凄いわ」
二人のそれぞれの実力も確かに認めていた。
「けれどそれ以上にね」
「二人一緒にいると」
「そうなんですね」

「ええ、見事よ」
太鼓判さえ押した先生だった。
「さて、それでね」
「それで？」
「どうするんですか？」
「この舞台の後は」
それからも考えている先生だった。
「あの娘達の為にまた舞台を用意してあげないとね」
「えっ、二人専用ですか？」
「二人の為の舞台ですか」
「ええ、そうよ」
微笑んで言う先生だった。

第百九十三話　本番その五

「さて、どの作品がいいかしらね」
「ソプラノ二人って」
「かなり限られますけれど」
「そうね。モーツァルトかリヒャルト＝シュトラウスか」
どちらもドイツ系の作曲家である。オーストリアだ。
「どちらかになるわね」
「それかベルリーニですか？」
「ノルマは難しいですけれど」
「ノルマも悪くはないわね」
こうも話す先生だった。
「ただ。あれはね」
「ええ。滅茶苦茶難しいですよ」
「もう洒落にならないレベルで」
ノルマはベルリーニの代表作の一つである。タイトルロールのノルマにあまりにも困難な技術が必要とされる為かなり人を選ぶ作品なのだ。
「けれどそれをですか」
「上演するんですか」
「候補に入れておくわ」
今のところはそれだけだとは言う。
「それはね」
「いや、それでも」
「かなり凄いですけれど」
彼等は言うのだった。
「高校生でノルマって」
「冒険なんてものじゃ」
「人生は時として冒険も必要よ」

教育者としての言葉であった。
「だから時にはね」
「そうしたあえて難しい作品の上演もですね」
「必要なんですね」
「その通りよ。それじゃあ」
こうして先生は舞台を観ながら話していく。
「それについても考えていくわ」
「ううむ、何か話がかなり」
「大きくなってきたよね」
「彰子ちゃんが入っただけで」
「一人の人材の加入がそこを大きく変えることもあるのよ」
今度は組織論だった。
「それが今なのよ」
「何かプロ野球と一緒よね」
「そうよね」
「一人の加入で変わることもあるなんて」
「ただしね」
先生はこうも言った。プロ野球の話になって変えてきたのだ。
「お金を積んでそれで来てもらうってことはないから」
「やっぱりそれはないですよね」
「何処かのチームじゃあるまいし」
そうしたチームはこの時代にも存在する。ただし二十世紀後半から二十一世紀前半の日本の球界の様にあるチームがやりたい放題をすることはない。そもそもマスコミの加入も禁止されているのである。
「学校の部活ですからね」
「やっぱり」
「そうよ。部活よ」
そうなのであった。部活なのである。彼等のそれは部活なのだ。
「部活ならやっぱりね」

「そういうことできないからね」
「アメリカの歌劇場なんかは」
また言う先生だった。
「それこそ物凄いお金持ってるけれどね」
「あの国はまた別ですよ」
「もう別格」
「お金ありますから」
アメリカがそうした国なのはこの時代でも変わらない。三百国以上ある連合の国々の中でも随一の国家であるのだ。ついでに言えば性格も変わらない。
「こっちはやっぱり部活ですから」
「専用の歌劇場はあっても」
「まあ専用の歌劇場なんてね」
「普通はないですけれど」
「そうよ。けれど予算の問題じゃなくて」
先生の言葉は続く。
「とにかく何でもチャレンジよ」
「何かうちの部活凄いことになってきましたね」
「ノルマまでやるなんて」
「確かに」
皆それぞれ言う。

第百九十三話　本番その六

「何か先生燃えてません？」
「いつもよりずっと本気ですよね」
「ええ、本気よ」
それを隠そうともしない。
「というよりかはね」
「いうよりかは？」
「今が本気になる時よ」
こう言うのである。
「今こそね」
「けれどノルマっていうのは」
「この前明香ちゃんでカプレーティとモンテッキィはやりましたけれど」
これもベルリーニの作品である。所謂ロミオとジュリエットである。ストーリーがそうではなくて実際にロミオとジュリエットが主人公の作品なのだ。
「あれだってかなり冒険だったのに」
「それで今度はノルマですか」
「いいわね。それに敵は」
「ローマですよね」
「彼等ですよね」
「エウロパよ」
わざとエウロパの名前を出してみせたのだった。
「いいわね。敵はローマ、そしてエウロパよ」
「けれどポリオーネも格好よくしないと駄目ですよね」
「折角のテノールですし」
ノルマの恋人であるローマの総督である。恋人であるがノルマへの愛は冷めていて別の巫女であるアダルジーザに想いを寄せている

役なのである。
「彼も出さないと駄目ですし」
「あまりエウロパを前に出すのもどうかって思いますけれど」
「ああ、そういえばそうね」
このことは思い直す先生だった。
「エウロパについては他の作品で出すとしましょう」
「まああの連中は確かにむかつきますけれど」
「それでもやっぱり今は」
「抑えるべきですよ」
こう話すのだった。
「じゃあそういうことでいいですよね」
「今は」
「そのノルマは」
「そうね。それでいいわ」
結局それで決めるのだった。案外頭が柔らかく人の話を聞く先生であった。人として中々バランスの取れている人と言えた。
「それでね」
「はい、じゃあ次のシーズンはノルマも入れて」
「他にも入れますよね」
「その薔薇の騎士もよ」
それは忘れないのだった。
「他にはヴェルディも入れようかしら」
「ヴェルディもですか」
「派手ですね」
「これは弦楽部からのリクエストなのよ」
今ピットに入っている彼等である。歌劇部と彼等弦楽部はまさに一心同体であり深い同盟関係にあると言っていい間柄なのである。
「ヴェルディはどうかって」
「ああ、あっちも派手な音楽好きですからね」
「ズンチャカチャッチャっていう感じの」

それがヴェルディの音楽であるのだ。とにかく派手で動的なのである。

「それをしたくなったんですか」

「成る程、けれどいいですよね」

「ヴェルディも人気ありますし」

「渋さもありますし」

音楽が派手なだけがヴェルディではないのである。他にもあるのだ。

「バリトンがいいですしね」

「うちの部活バリトンは揃ってますし」

所謂男声の低音である。高い順からテノール、バリトン、バスとなっている。女声はソプラノ、メゾソプラノ、アルトとなっている。ヴェルディの作品はこのバリトンの声域の役が常に極めて重要なポジションを占めているのだ。

「バリトン勢もヴェルディ好きですしね」

「丁度いいですよね」

「あの子達やたらとヴェルディ好きなのよね」

先生もここで腕を組んで言う。

「テノールの子達もそうだけれど」

「格好いいからじゃないんですか？」

「やっぱり」

「役がなのね」

「ええ、ヴェルディのバリトンって。テノールもそうですけれど」

「格好いい役多いですし」

とにかく男が格好いいのがヴェルディなのである。

第百九十三話　本番その七

「演じがいもありますし」
「だから余計にそうだと思いますよ」
「舞台作る方もかなり楽しいですしね」
「実は先生もね」
先生はまたここで話す。
「あれなのよね。モーツァルトの演出も楽しいけれどね」
「ヴェルディもですか」
「楽しいんですね」
「ええ、楽しいのよ」
にこりと笑って話す。先生はメイン演出家も担当しているのである。尚オーケストラの指揮も基本として弦楽部の先生が担当している。
「考えるだけでもね」
「そういえば先生って演出凝りますよね」
「特にワーグナー好きですよね」
「色々考えますよね」
「ワーグナーはとりわけいいのよ」
まさにそうだというのである。
「もう凄く思い切ったことができるし」
「思い切ったことですか」
「確かにワーグナーはそうですよね」
「神話だけじゃなくて未来とか」
「現代とかにもできますし」
「音楽も凄いから」
先生はワーグナーも好きらしい。話しているうちに恍惚とさえなってきている。
「できるのよ。じゃあ次のシーズンはね」

「ワーグナーも入れるんですね」
「それで何を」
「指輪かしら」
腕を組んで考える顔になっての言葉であった。
「それはどうかしら」
「いや、指輪は今は」
「止めた方がいいんじゃ」
「そうですよ」
生徒達はそれにはあまり賛成しなかった。
「あれかなり手間とかかかりますし」
「時間だって滅茶苦茶かかりますよ」
「上演だけで十五時間ですよ」
この時代でも当然最長の上演時間を誇るオペラである。
「準備とか費用だって相当ですし」
「あれは余裕がある時じゃないとやっぱり」
「ですから次のシーズンでは」
「止めた方がいいのね」
先生は生徒達の話を聞きながら述べた。
「やっぱり」
「ええ、やっぱり」
「そう思います」
「もっと余裕のあるシーズンにしません？」
生徒達は皆で言うのだった。
「ですから今は」
「それは」
「わかったわ」
ここでも生徒達の言葉を入れて頷く先生だった。
「それじゃあ指輪は止めるわ」
「はい、それで御願いします」
「今度にしましょう」

「そうね。じゃあそういうことでね」
先生はそれを言葉に出したのだった。
「次のシーズンのワーグナーは」
「それでもマイスタージンガーとかパルジファルは」
「そういうのも」
どちらも大作である。そしてやはり費用がかかる。舞台も人もかなりのものが必要なのだ。これはワーグナーならばかなり避けられないが。
「止めた方が」
「比較的軽い方がいいと思いますよ」
「ワーグナーではありますけれど」
「じゃあ。ローエングリンね」
先生が選んだのはこの作品だった。
「それにしましょう」
「ローエングリンですか」
「次のワーグナーの作品は」
「ええ、それにするわ」
ここで決めたのだった。
「ローエングリンね」
「はい、それじゃあそれで」
「白鳥の騎士ですね」
ローエングリンの登場は白鳥に曳かれた小舟に乗って現われる。それを見てルートヴィヒ二世はワーグナーを終生愛するようになったと言われている。
「まあ時間は長いし」
「費用もかかりますけれど」
「それでもワーグナーの中じゃ」
「標準ですし」
ローエングリンも大作である。しかしワーグナーの作品の中ではかなり大人しいのである。指輪やマイスタージンガーと比べればだ。

「それじゃあ次のシーズンはそれで」
「ええ。さて」
話が決まった。先生はすぐに話を変えてきた。
「それじゃあ。今日の舞台は終わったわね」
「あっ、そうですね」
「いよいよですね」
今結末の場面だった。大団円である。
そしてそれからはだ。最後の盛り上がりだ。
「カーテンコールですね」
「それですね」
「はい、皆集まって」
先生は笑顔で一同に言ってきた。
「皆集まってそれからね」
「それからですよね」
「最後のお楽しみですよね」
「そうよ。だから皆集まって」
こう言って周りにいる部員達を集めるのだった。舞台はまさにハッピーエンドの場面だ。四人は太守の慈悲で無事故郷に帰ることになった。
「それじゃあね」
「はい、じゃあ」
「皆で」
ある場所に向かうのであった。皆今は一際にこにことしている。
そうしてそのうえで集まり舞台の方に向かうのであった。その最後の楽しみの為に。

本番　　完

2010・3・16

第百九十四話　カーテンコールその一

カーテンコール

オペラは無事終わった。しかしであった。
幕が下りたその舞台の中で明香は彰子に対して言ってきたのだった。
「姉さん」
「最後の最後ね」
「ええ、だから」
こう姉に言うのである。
「行きましょう」
「カーテンコールね」
「これは絶対にあるから」
姉に話し続ける。
「最高の笑顔を見せないと駄目なのよ」
「最高の笑顔ね」
「カーテンコールは知ってるわよね」
そのカーテンコール自体についても問うのだった。
「それは」
「ええ、まあ」
それは当然ながら知っている彼女だった。
「知ってるけれど」
「じゃあいいわ。それじゃあね」
「今からね」
「ええ、今から」
こうしてまずは歌手達でカーテンコールに出る。すると拍手に包まれるのだった。
「えっ、これって」
「どう？」

明香は姉に対して言ってきた。
「この拍手」
「凄い・・・・・・」
その拍手と歓声に恍惚とさえなる彰子だった。
「これが終わった後に」
「そうなの。最後にこれがあるの」
見れば明香の顔も上気していた。
「オペラにはね」
「そうなの、これがあるの」
「そうよ。凄いでしょ」
「何かこれを見たら」
「また歌いたいって思うわよね」
「ええ」
妹の言葉にこくりと頷いた。
「本当に」
「そしてまだあるのよ」
明香の言葉は続く。
「まだね」
「えっ、まだって」
「まずは引っ込みましょう」
こう言ってであった。一旦幕の中に入る。しかしだった。
幕の中はまだ舞台がそのままになっている。その舞台においてまた言う明香だった。
「ここからね」
「ここから？」
「一人一人出るから」
「ああ、そうね」
今そのことを思い出したのである。
「そうよね。一人一人出たわよね」
「そうよ。だから」

「わかったわ。それじゃあ」
まずは男組が出る。最初はオスミンだがかなり派手な拍手を受けた。彰子はその拍手を聴きながら驚いた顔になって言うのだった。
「うわ、これはまた」
「オスミンはこのオペラの鍵になるキャラクターだから」
また言う明香だった。
「余計に注目されるから」
「だからなのね」
「そう、だからなのよ」
その言葉が続く。
「皆注目するから余計にね。拍手も大きいものになるの」
「そういえばオスミンって」
ここでまた言う彰子だった。
「物凄くいいキャラクターよね。コミカルで愛嬌があって」
「一見すると乱暴で残酷だけれどね」
「実際は違うしね」
「だから人気があるの」
まさにモーツァルトに端役なしである。実際にオスミンはそうしたキャラクターでありオペラの中でかなり人気があるのである。

第百九十四話　カーテンコールその二

「だからこの拍手もね」
「当然のことなのね」
「ええ」
こう姉に話すのだった。
「そうなの」
「成程」
「このオペラで一番人気が出るキャラだから」
そうでもあるというのだ。
「だから。拍手は一番大きいこともあるから」
こう話すのである。
「それはわかって」
「うん」
「それでね」
妹の言葉は続く。
「私達の番だけれど」
「あっ、そろそろね」
今見ればそうだった。ベルモンテとペドリオも出て万雷の拍手を受ける。そうしてそれが終わってから遂に彰子が言ってきたのだった。
「次は私ね」
「行ってきて」
姉の背中を押す言葉だった。
「今から」
「うん、行って来るわ」
「それじゃあね」
「ええ、それじゃあ」
こうして彰子も一人でカーテンコールに出る。すると。

「ブラボーーー！」
「最高だったわよ！」
「いい歌を有り難う！」
彼女にも万雷の拍手が来た。そのうえで花束まで投げられる。勿論それは彼女へ向けての花束だった。それを受け取るのであった。
「有り難う・・・・・・」
彰子はその花束を手にして言う。
「本当に有り難う・・・・・・」
泣きながらの言葉だった。
「本当に。本当に」
その拍手の中で言うのだった。そして彼女が出ると次は明香だった。
「よかったわね、姉さん」
「ええ」
その濡れた顔での言葉だった。手には花束がある。
「これがカーテンコールなのね」
「そうよ、これがね」
「こんなに素晴らしいものなんて」
「これ以上はない程よね」
「そうね」
まさにその通りであった。
「これはカーテンコールなのね」
「歌えたその後でこれがあるから」
「オペラはいいのね」
「見て、姉さん」
姉にさらに言ってきたのである。
「皆の顔を」
「皆の？」
「歌手の人達だけじゃないから」
スタッフについても言ったのである。

「その人達の顔もね」
「顔を」
「そうよ、見て」
「ええ」
言われるままに見るとだった。誰の顔も同じだった。
満ち足りて達成した顔になっていた。そう、誰もがであった。
「こういうことだから」
「そうなの。皆なのね」
「一つのことを達成できた」
それだというのである。
「だから皆笑顔なの」
「そう、それでなの」
「それじゃあ行って来るから。話はまたね」
「ええ、また」
このやり取りの後で明香がカーテンの向こうに出る。すると彼女もまた爆発的とさえ言える拍手と歓呼に迎えられるのだった。それはかなりのものだった。
そしてそれが終わってから彼女もまたその手に花束を持って戻って来た。やはりその目は彰子のそれと同じものになっていた。
「それでね」
「ええ、話の続きね」
「最後にカーテンが開くけれど」
「その時は横一列に並ぶのね」
「そうよ。まずは並んでね」
「ええ」
「それからまただから」
こう言うのである。

第百九十四話　カーテンコールその三

「見て欲しいものがあるから」
「まだあるの」
「オペラは総合芸術だから」
これはよく言われることである。この時代だけのことではない。
「そのこともわかるから」
「舞台だけじゃないの」
「そう、それだけじゃないから」
「音楽？」
彰子はここでふと思ったのだった。
「それ？ひょっとして」
「ええ、それよ」
まさにそれだというのである。
「音楽もあるし。それに」
「それに」
「最後のこともわかるから」
こう言うのである。
「その最後のことも」
「最後の？」
「それも見て欲しいの」
穏やかで優しい言葉であった。
「姉さんに。それも」
「絶対になのね」
「そう、絶対に見て欲しいの」
まさにそうだというのである。
「だから御願い」
「わかったわ」
妹のその言葉に頷いた。

「じゃあ」
「カーテンが開くわ」
もうその時だった。二人だけでなく皆が、コーラスも含めて並ぶ。これは学園のコーラス部である。彼等は合唱がある時は助っ人に来るのだ。
その彼等と共に並んで、である。カーテンが開かれるのを待った。するとだ。そこにオーケストラがいた。彼等も満ち足りた顔をしている。
「そうよね」
「ええ。オーケストラの人達もいるから」
その彼等が指揮者の先生の手に応えて一斉に立ったのであった。そのうえで観客に向けて一礼する。やはり満ち足りた仕草であった。
「オーケストラも」
「私達だけじゃオペラはできないから」
「歌手だけじゃ」
「そう。全てが整わないとできないの」
それが総合芸術と呼ばれる由縁である。
「それを見て欲しかったの」
「そしてそれは」
「ええ」
「お客さんもなのね」
「そうよ」
言いたいことはまさにそれであった。
「それも見て欲しかったの」
「そういうことだったのね」
「見て、姉さん」
その観客を見るようにとの言葉である。
「お客さん達の顔を」
「皆同じね」

「満ち足りた顔をしてるわよね」
「ええ、とても」
どの顔もそうであった。その顔で拍手をしているのである。カーテンコールで彰子を迎えた時よりもさらにそうした顔になっていたのである。
「なっているわ」
「お客さんもあってだから」
「だから舞台が成り立つのね」
「そうなの」
言いたいことはまさにそういうことだった。
「わかってくれたわよね」
「とてもね」
にこりと笑って妹の言葉に応えた。
「よくわかったわ」
「それじゃあ姉さん。これからも」
「宜しくね、明香」
「ええ、これからも」
こう笑顔で言い合う二人だった。そして舞台の後で少し打ち合わせをして解散になった。その帰り道二人は横に並んで一緒に歩いていた。
その中でだ。ふと彰子が言ってきた。
「ねえ、明香」
「どうしたの？」
「晩御飯だけれど」
その話からだった。

第百九十四話　カーテンコールその四

「何にしようかしら」
「そうね。まだ決めてなかったわよね」
「舞台のことばかり考えていて」
他のことは考えていなかったのだ。当然夕食のこともだ。
「晩御飯。どうしようかしら」
「そうね。舞台が終わったから」
「暫く炭水化物メインだったけれどね」
「お肉にする？」
こう姉に言うのであった。
「お肉に。どうかしら」
「ステーキにするの？」
「それもいいし」
ステーキは選択肢の中に確かに入った。
「その他にもあるし」
「もう遅いから簡単なものにしたいわよね」
「昨日のポテトサラダはまだかなりあるし」
「ええ、あれもあるし」
「ステーキかしら」
少し考えてから述べた明香だった。
「それじゃあ」
「ステーキにするのね」
「スイギュウのステーキ」
話に出て来たのはこれだった。
「これでどうかしら」
「いいわね。癖があるけれど」
「その癖がいいし。他にもバイソンのステーキもあるけれど」
他にもオーロックスのステーキもある。連合ではとにかく様々な

種類の牛のステーキが食べられるのである。本当に様々であるのだ。
「どれにしようかしら」
「普通の牛のステーキもいいんじゃないかしら」
彰子が言うのはこれだった。
「牛のね。どうかしら」
「そうね。いいわね」
姉の言葉に頷いた。
「それじゃあそれにしましょう」
「もう一気に手早く焼いてさっと食べましょう」
「ええ。遅いし」
もう外は真っ暗である。二人で夜道を歩いているのである。
「それならね」
「牛のステーキにするのよね」
彰子はこのことを確認してきた。
「それよね」
「ええ、それよ」
まさにそれだというのである。
「それにしましょう」
「分厚いのがいいわね」
彰子はにこりと笑って言った。
「もううんと厚いのがね」
「それをレアで焼くのね」
「そうね。レアで焼いて」
「一気に食べましょう」
「おソースは」
明香はこのことにも考えを及ばせた。
「何にしようかしら」
「おソースはオニオンソースでどうかしら」
彰子はそれを出した。
「それでね。どうかしら」

「そうね。いいわね」
明香もそれでいいとした。姉の言葉に賛成したのである。
「それじゃあそれでね」
「そうしましょう」
そんな話をして二人で買い物をして家に帰った。するとそこにいたのは。
「あれ、兄さん」
「帰ってたの」
「ああ、今日はアルバイト休みだったんだよ」
二人の兄の貫之がそこにいた。見れば彼は台所にいる。そのうえで何かを作っていた。それは。

第百九十四話　カーテンコールその五

「今丁度できたところだよ」
「できたところって」
「お料理作っていたの」
「マトンの脛肉を煮たんだ」
それだというのである。羊はこの時代でもかなりポピュラーな肉である。よく食べられているものである。
「それとその煮た後でスープも作ったしね」
「スープもなの」
「それもなに」
「野菜スープをね。人参に玉葱、それに蕪も入れて」
わりかし豪勢である。
「あとジャガイモやガーリックも入れたんだ」
「それとサラダ？」
「ポテトサラダね」
「そう、それもね」
これは二人が作ったものなのですぐにわかった。どちらにしても食べるものである。
「それと一緒に」
「それだったら」
「後は」
さらに話すのであった。
「御飯なの？それとも」
「パン？」
「パンだよ」
そちらであった。
「食パン買ってきたから」
「食パンなの」

「それにしたの」
「何でなの？」
彰子がその理由について兄に尋ねた。
「どうして食パンにしたの？」
「だって羊だから」
最初はそれが理由だった。
「それに他のも洋食だからね」
「それでなの」
「別にいいと思うけれど」
こう彰子だけでなく明香に対しても述べた。
「食パンで。別に」
「そうね」
明香が兄のその言葉に頷いた。
「私もそう思うわ」
「そう思ってくれるんだね」
「ええ」
最初に頷いたのはやはり明香だった。
「そう思うわ」
「彰子は？」
「私もそれで」
彼女もいいと頷いた。
「いいと思うわ」
「よし、じゃあこれでいいね」
貫之は妹達の言葉を聞き終えて満足した顔で頷いた。
「主食は食パンでね」
「けれど兄さん」
しかしここで明香が兄に対して問う。
「若し私達が御飯がいいって言ったらどうしたの？」
「二人共そんな我儘言わないじゃないか」
少なくともそうした我儘ではない二人である。基本的に出された

ものは全て食べるし基本的に好き嫌いもあまりないのである。これはいいことだった。
「そうだろ？だからね」
「それは考えてなかったのね」
「ああ、そうさ」
にこりと笑って応える兄だった。
「じゃあ食べるか」
「うん、じゃあ」
「食べましょう」
「それでデザートはね」
デザートもあった。御馳走の後はデザートである。この流れは最早黄金定率と言っていいまでに決まりきったものであった。
「バナナチップスだから」
「あっ、バナナチップスなの」
それを聞いて笑顔になる彰子だった。

第百九十四話　カーテンコールその六

「いいわね、それって」
「そう思うだろ」
「うん、私バナナチップスが大好きだから」
こう言って笑う彰子だった。
「シロップはたっぷりよね」
「勿論だよ。シロップはたっぷりじゃないとバナナチップスじゃないよ」
「そうよね。それに」
「アイスクリームもちゃんとあるから」
それもだというのである。
「安心していいよ」
「うん、兄さん」
「明香もそれでいいよね」
「ええ」
兄の言葉にここでも応える。
「私も。バナナチップス好きだから」
「あれはいいデザートだよ」
兄も言う。
「マルコムエックスも好きだったしね」
「あっ、そうだったの」
「あのマルコムエックスも」
「そうなんだ。それに羊の脛肉をじっくりと煮たものも」
これについても話すのだった。その羊の脛肉についてもである。
「あれもね」
「マルコムエックスに関係があるの？」
「そうなんだ。これもマルコムエックスの大好物だったんだ」
「そうだったの。それもあの人の」

「そうだったんだ」
　こう話すのである。なおマルコムエックスとは二十世紀のアメリカの黒人活動家である。一時は暴力を肯定する分離主義者とみなされていた。だがそれは彼の思想的、人間的成長によって大きく変わっている。この時代の連合では同じく黒人活動家であったキング牧師と共に人類全体の偉大なる英雄、賢者として知られている。
「マルコムエックスのね」
「だからその二つを作ったの」
「実はね」
　その通りだというのである。
「それでなんだ」
「成程、そうだったの」
「それで羊とバナナチップスだったの」
　彰子だけでなく明香も話す。
「黒人の食べ物だったのね」
「どちらも」
「それも黒人のイスラム教徒のね」
　マルコムエックスはムスリムだった。しかもかなり生真面目なムスリムであった。
「今じゃ珍しくないけれどね」
「というか黒人の人って」
「普通にいるわ」
　この時代の連合では人種の混血はかなり進んでいる。その結果として黒人も白人も、ましてや黄色人種といっても何も問題はない。連合は確かに様々な問題も内包しているがそれでも人種問題については克服されているのだ。そうした意味でキング牧師もマルコムエックスも喜ぶべき状況になっている。
「それでもどうして」
「ここでマルコムなのかしら」
「思うところがあってね」

笑って妹達に話す兄だった。
「それでなんだ」
「思うところって」
「どうしたの、また」
「いや、本を読んでね」
そうして思ったというのである。
「買ったんだけれどさ」
「ひょっとしてマルコムエックスの本かしら」
今言ったのは彰子だった。
「それを買ったのね」
「そうなんだ。それにマルコムエックスの好物が書いてあって作ってみたんだよ」
「美味しいの？」
「多分ね」
味の方はまだわからないのだという。
「味付けはあっさりとさせたけれど」
「あっさりなのね」
「スープもね」
それもだという。

第百九十四話　カーテンコールその七

「そっちもあっさりとした味にしたから」
「あっさりなの」
「そうなんだ。とにかくまずは食べよう」
「うん、じゃあ」
「そうしましょう」
こう話してであった。兄弟三人で食べていく。そしてまずは羊やポテトサラダ、それにスープに食パンを食べてからだった。ババナチップスであった。
確かにシロップをかなりかける。それに。
「バナナにアイスクリームだから」
「カロリーは多いわね」
「ああ、多いよ」
貫之もそれは認めた。カロリーの多さがだ。
「何しろアイスクリームだから」
「それにバナナにシロップになると」
「かなりのカロリーね」
「はっきり言って食べ過ぎたら太るよ」
また言う貫之だった。
「これはね」
「けれどマルコムエックスって痩せてたわよね」
「スタイルよかったわね」
写真にも残っているからよくわかっていることだった。十九世紀以降は写真によって歴史上の人物の顔がはっきりとわかるようになったのだ。
「そうよね、それもかなり」
「スポーツマンみたいに」
「歩いていたからね」

貫之はだからだと話した。
「それで痩せていたんだ」
「歩いていたって」
「そんなに歩いていたの？」
「しかも歩く速さはかなりだったそうだし」
これも本当のことである。マルコムはとにかく歩いた。自分をそうして律してもいたのだ。ただしそれは他者、特に女性にも向けられた。
「それでスタイルを維持していたんだ」
「痩せてなんだ」
「それでなの」
「まあ今は」
ここでまた話す貫之だった。
「アイスクリームもバナナもカロリーはかなり抑えてあるけれどね」
「低カロリーのアイスクリーム使ったの」
「バナナも」
「それとシロップもね」
全てカロリー控えめにしているのだ。なお連合では肥満率は二十世紀のアメリカと比べてかなり低くなっている。その時代の日本よりも低い。
「太ったらあまりよくないから」
「そうよね、けれど今は」
「できればカロリーは多めに欲しいわ」
「ああ、そうか」
貫之は妹達の言葉であることを思い出した。
「歌劇部に入ったんだったな、彰子も」
「うん、だから」
「カロリーは多めに必要だな。じゃあまた作るよ」
「あっ、そうしてくれるの」
「彰子の為だからね」

笑って妹に話すのだった。
「是非ね。そうさせてもらうよ」
「はい、じゃあ」
「それで」
こうしてであった。食べ終わって皆でおかわりをする。そうした楽しいカーテンコールの後の兄弟での団欒の一時を過ごしたのだった。

カーテンコール　　完

２０１０・３・２２

第百九十五話　マルコムエックスその一

マルコムエックス

「マルコムエックス！？」
「そうなの」
兄に話を聞いた翌日だった。彰子は早速自分のクラスで黒人のフックに対して問うたのだ。
「フック君も知ってるわよね」
「まあな」
一応はこう返すフックだった。
「知ってるさ、教科書にも出て来たし」
「そうよね。英雄よね」
「けれどな」
ここでフックの首が左に傾げられた。
「俺はあまり知らないんだよな」
「そうなの。知らないの？」
「だって俺仏教徒だしな」
まずはその信仰している宗教から話した。
「それとアステカの神様も信仰してケルトだとルー神を崇拝しているけれどな」
「イスラム教徒じゃないのね」
「あとアメリカ人でもないしな」
彼はれっきとしたタイ人である。これは彼の誇りでもある。
「だからそこまでは」
「知らないのね」
「思い入れもこれといってね」
こうも言うのだった。
「ないしさ」
「そうなの」

「確かに名前は知ってるさ」
それでもフックはこうも話した。
「それでもさ。千年以上も前の他の国の人だし」
「あまり興味ないの？」
「だからそこまではさ。それで」
「それで？」
「小式は何でマルコムエックスに興味を持ったんだ？」
今度はフックが問うた。
「それは何でなんだよ」
「昨日兄さんが言ってたの」
その理由を正直に話すのだった。
「それでなの」
「ああ、お兄さんいたよな」
ここでフックはこのことも言った。
「そういえば」
「そうなの。それで昨日そのマルコムエックスが食べていたものを出してくれて」
「へえ、何か面白い話だな」
「そうでしょ？羊の脛肉、マトンのね」
まずはそこから話した。
「マトンの脛肉をじっくりと煮たものと」
「いきなり美味そうなのが出て来たな」
「それとバナナチップス」
これも話に出した。
「バナナチップスも食べさせてもらったのよ」
「そうか。何か美味そうな組み合わせだな」
フックはこちらには結構以上に興味を見せていた。
「よさげな感じだな」
「美味しかったわよ」
それはいいというのだ。

「それでどうかしらって思ったけれど」
「そうなのか。料理は興味を持ったな」
「今度私も作ってみようかしら」
「いいんじゃないか？そういえば歌劇部に入ったんだよな」
「ええ」
この話にもなった。
「それじゃあ料理は」
「ちゃんとやってるわ」
それは忘れないというのだ。
「作るの好きだし」
「凄いな。じゃあ今日はその羊の脛肉とバナナチップスか」
「あっ、今日はステーキにするつもりなの」
それは違うというのである。
「そっちにね」
「ステーキか」
「昨日買ったの。というか二日続けて同じメニューはあまりね」
どうかというのだ。そしてここでまた言う彰子だった。

第百九十五話　マルコムエックスその二

「やっぱり十日は空けないと」
「そうか？俺はトムヤンクンなら何日でも続いてもな」
「平気なの」
「ああ、平気さ」
爽やかな笑顔がそこに見える。
「もうトムヤンクンがあればそれで幸せだからな」
「お味噌汁みたいな感じなのね」
「そうさ。日本に味噌汁があればタイにはトムヤンクン」
まさにそうしたものだというのだ。
「まさにそれなんだよ」
「そうなの」
「そうさ。それでな」
「ええ」
「マルコムのことは悪いけれど俺が知ってるのはあまりないんだよ」
このことはというのだ。
「悪いな、それは」
「ううん、別に」
いいというのである。
「それは」
「スターリングなら知ってるかな」
フックは首を傾げながら述べた。
「アメリカ人だしな」
「アメリカじゃマルコムエックスって英雄なのよね」
「そうみたいだな。うちの国じゃ陛下がそうだけれどな」
「王様がなの」
「タイじゃ陛下がもう絶対なんだよ」
このことはこの時代でも変わらない。タイ王室の圧倒的な存在感

は健在であり続けているのだ。
「素晴しい方々ばかりだしさ」
「日本の陛下と同じなのね」
「天皇陛下な。今は女帝だったよな」
「ええ、そうよ」
彰子も皇室への敬意は強い。この時代では皇室への教育もかなりしっかりとしているものになっているのだ。少なくとも左翼教育は存在していない。
「それでだけれど」
「それで？」
「とりあえずスターリングに聞いてみようかしら」
こう言うのだった。
「とりあえずは」
「それがいいな。それじゃあな」
「ええ、それじゃあ」
フックと別れて今度はスターリングのところに向かう。彼は教室の端で蝉玉と楽しく話していた。その二人のところに来て声をかけるのだった。
「ねえ、いいかな」
「あっ、小式」
「どうしたの？」
スターリングだけでなく蝉玉も彼女に顔を向けてきた。
「あの、スターリング君に聞きたいことがあって」
「僕に？」
「そうなの。スターリング君ってアメリカ人よね」
「うん、そうだよ」
祖父は中央軍宇宙艦隊司令長官マクレーン元帥である。なお蝉玉もその祖父は中央政府参謀総長劉元帥だ。とはいっても二人にとっても周りにとってもそは大した問題ではない。
「それがどうかしたのかな」

「マルコムエックスについて聞きたくて」
単刀直入の言葉だった。
「それでなの」
「ああ、マルコムエックス」
スターリングはその名前を聞いてまずはこう返してきた。
「あの人のことなんだ」
「知ってる？やっぱり」
「まあね。アメリカじゃ英雄だし」
このことは彼も言った。
「キング牧師と並んでね」
「そうよね、アメリカじゃ英雄よね」
「誰でも知ってるよ。黒人の運動家でね」
「運動家よね。それでだけれど」
「それで？」
「詳しく教えてくれたら
あらためてこう彼に言うのだった。
「嬉しいけれど」
「うん、だったら」
「あっ、スターリング」
ここで蝉玉がスターリングに声をかけてきた。
「それだったら」
「どうしたの？」
「いい場所があるわよ」
何故か少し焦った感じで言うのである。

第百九十五話　マルコムエックスその三

「そこでお話しましょう」
「いい場所って何処？」
「お昼にそこで話したらいいわ」
ここでおおよその場所がわかることだった。
「サンドイッチでも食べながらね」
「ああ、それいいね」
スターリングはサンドイッチと聞いて納得した顔で頷いた。
「じゃあ三人で食べながらね」
「そうしましょう。彰子もそれでいいわよね」
「ええ、いいけれど」
彰子にしても特に反対する理由はなかった。彼女にしてみればマルコムエックスの話だけ聞ければそれで満足できたからである。
こうして蝉玉も交えて三人でハンバーガーショップに入った。そこにはサンドイッチもある。三人はそのサンドイッチやハンバーガーを食べながら席に座って話す。
白と黄色の派手なカラーリングの店でテーブルや椅子はプラスチック製である。そこに座って野菜ジュースも手にそのうえで話すのだった。
「それでマルコムエックスだよね」
「うん、その人だけれど」
「イスラム教徒なのは知ってるよね」
スターリングはまずはこのことから話した。話しながらスパムサンドを食べている。スパムの他にはレタスもはさんである。大きさはかなりのものだ。
「それは」
「それは聞いたけれど」
「それもかなり厳格なムスリムだったんだ」

「そんなに厳しかったの」
「そうなんだ。彼のいたネイションオブイスラムって組織はね」
今度は組織については話だった。
「まあ途中でそこからは離脱したけれど」
「うん、それで？」
「かなり厳しい組織で一日一食が基本で」
「それって確かに厳しいわね」
「お酒も豚肉も駄目で」
「えっ、お酒もなの」
「そう、それもだったんだ」
こう話すのだった。なおこの時代のレンゴウのムスリムで豚肉を食べないというムスリムはそれこそ個人的嗜好以外ではいない。
「豚肉もね」
「厳しいわね」
蝉玉はそれを聞いて困った顔になっていた。彼女はスパムバーガーを食べている。それを食べながらそのうえで言うのである。
「だって。このスパムだって」
「そう、豚肉だよね」
「豚が食べられないってかなり辛いわ」
「中華料理でも豚肉よく使うしね」
「まずは豚よ」
蝉玉はそこを強く言う。
「豚がないと。それこそね」
「そうよね。豚肉って美味しいし」
彰子も蝉玉のその言葉に頷く。
「それが食べられないと」
「しかも肥満は絶対に駄目だったんだ」
スターリングはこのことも話すのだった。
「太ったら無理にでも痩せさせられたし」
「それも厳しいわね」

「うん、とにかく修道僧みたいな生活を送っていたんだ。いや、この時代の修道僧よりも遥かに」
　連合での宗教家はかなり緩やかな生活になっている。世俗化しているという批判もあるがそれだけ宗教家も宗教も身近になっている社会でもあるのだ。
「凄かったみたいだよ」
「だからあんなスポーツ選手みたいなスタイルだったのね」
「そうなんだ。それによく歩いたし」
「あっ、それは聞いたわ」
　昨日の兄の言葉をそのまま思い出しての言葉である。
「そうだったのね、確か」
「そうなんだ。そして」
「そして？」
「よく誤解されているけれど暴力は肯定していないよ」
　スターリングの言葉が真面目なものになった。
「実はね」
「そうだったの」
「マルコムエックスっていったら暴力肯定だよね」
「ええ、まあ」
　この時代においてもそうインプットされてしまっている。これは彼の主張の過激さ故である。確かに彼はそれも止む無しとしたところもあるがそれだけではないのである。

第百九十五話　マルコムエックスその四

「けれど実際はね」
「そうじゃないのね」
「実際はそこが誤解されやすいんだ。けれどこれは」
「これは？」
「マルコム自身のせいでもあるけれど」
そうだというのである。
「何しろ過激な言葉が多いから」
「過激なのは確かよね」
また蝉玉が言う。彼女は今はダブルチーズバーガーを食べている。それは牛肉だが実に美味そうに食べている。そのうえでの言葉だ。
「マルコムエックスって」
「そうなんだ。だから誤解されているけれど」
それでもだというのだ。
「実際はそうじゃないんだ。それにね」
「それに？」
「彼の特徴は考えが変わっていってるんだ」
「変わっていったの」
「彼はムスリムだから」
そこからはじまることだった。やはりマルコムといえばイスラムなのだ。
「メッカに巡礼するよね」
「あっ、それって確か」
彰子はメッカという言葉を聞いてだ。そのうえであることを思い出した。その思い出すこととは。
「あれよね。サハラに残ってるわよね」
「連合じゃかなり廃れたかな」
スターリングはその辺りの知識はあやふやだった。

「メッカへの巡礼ね」
「ムスリムは生きているうちに一度は巡礼するのね」
「それが信仰の一つだからね」
「それでなのね」
「それはあったかな」
また言うスターリングだった。
「連合にはまだ」
「あまりないと思うわ」
蝉玉がここでも言う。
「実際はね」
「やっぱりあまりないんだ」
「連合のイスラム教ってサハラのそれとは全く違ってきているし」
それは紛れもない事実だ。だからこそ普通に豚肉を食べたり鱗のない魚を食べたりできるのである。服装もそれに同じものになっている。
「だからね」
「メッカ巡礼は廃れてるんだ」
「そう、それに」
話はさらに続くのだった。
「ハサンにあってもサハラって物騒だから」
「巡礼も楽じゃないから」
「そう、だからあまり行く人はないみたいよ」
結論としてそうなることだった。
「連合ではね」
「成程ね」
スターリングは蝉玉の今の言葉に頷く。そのうえでまた自分の話を再開するのだった。またマルコムエックスの話に戻るのであった。
「それで話は戻るけれど」
「ええ」
「メッカに巡礼して」

そのマルコムのメッカへの巡礼である。彼の思想的転機になったこととしてマルコム崇拝者、そして研究者達から注目されている場面だ。

「そこで白人を見てね」

「白人のイスラム教徒なのね」

「そう、彼等に会って」

そこからなのだった。

「それで白人への極端な攻撃性をあらためたんだ」

「それでなの」

「そう、そこから変わっていったんだ」

これは歴史にある通りである。

「彼はね。ただ」

「ただ？」

「社会主義への傾倒もあったね」

スターリングはここでは首を捻った。

「厄介なことにね」

「社会主義の」

「そう、それがあったんだ」

連合では社会主義は残照しか残っていない。所謂社会民主主義的なものがである。共産主義は全否定され邪教扱いされていたりする。

「末期にはね」

「それはまずかったのじゃ」

「まずかったよ」

実際にそうだったのだ。

第百九十五話　マルコムエックスその五

「それで周りから疑問視されている中でね」
「暗殺されたの」
「そういうことだったんだ。それが彼だったんだ」
「考えを変えていく人だったのね」
「信念は強かったけれど柔軟な考えの人でもあったんだ」
これは矛盾するようで矛盾しない。共に存在できるものなのだ。
「そうだったんだ」
「暴力肯定でもなくて」
「それに白人への敵視も変わっていったから」
「考え方の変遷もドラマティックだったのね」
「キング牧師とはまた違って。そうだね」
スターリングはここでこういう風に言った。
「キング牧師は考えを変えるということでは剛で」
「マルコムエックスは柔だったの」
「意外かな、これって」
「うん、ちょっとね」
これは彰子も実際に思うことだった。
「マルコムが柔なの」
「頭が柔らかいっていうおならね。もっともキング牧師が頭が固いかって言うとそうでもないけれど」
「キング牧師っていったら」
彼については彰子もそれなりに知っていた。どちらかというと彼の方が有名であり人気があるのだ。
「私は物凄く素晴しい人ってイメージがあるけれど」
「物凄く素晴しい人だったんだよ」
スターリングはキング牧師についてはまさに手放しだった。
「だからあれだけのことができたんだよ」

「まさに英雄だったのね」
「そう、英雄だったんだ」
連合ではまさにそうなのだ。そしてマルコムもである。
「ただ。人間だったんだよ」
「人間っていうと？」
彰子ではなく蝉玉がそれに問う。
「どういうことかしら、それって」
「人間だから完璧じゃないよ」
そういうことだった。スターリングが言うことはそれであった。
「人間だからね。女性問題とかそういうことはあったから」
「そうだったの」
「そう。それは覚えておいてね」
このことは言うのだった。
「キング牧師は人間的に素晴しい魅力の持ち主だから色々とあったけれど」
「それでなの」
「問題のない人なんていないんだ」
スターリングの言葉はいささか鈍い感じになっていた。
「それは覚えておいてね」
「ええ」
「わかったわ」
彰子だけでなく蝉玉も頷いた。そうしてであった。
スターリングの話をさらに聞く。彼の話は続く。
「マルコムだって人間だから」
「そうした紆余曲折があったのね」
「うん、実はね」
このことも話すのである。
「それはわかっておいて。マルコムも人間だったんだ」
「人間だった」
「僕は思うんだけれど」

今度は彼自身の考えも述べた。
「あれだよ。人間だから英雄になれるんだ」
「人間だから」
「そう、人間だからなれるんだ」
英雄にだというのだ。
「そのことは覚えておいてね」
「そうなの。人間だから英雄になのね」
「まああの時の我が国は」
スターリングの国アメリカのことだ。彼も愛国心は強いのである。連合ではそれぞれの所属国への忠誠心や愛国心はよく教育されている。中央政府にもだ。
「人種差別があったのは確かだし」
「人種差別ね」
蝉玉がそれを聞くと目を動かした。
「その頃はあったのね」
「うん、連合では克服されたと言ってもいいけれどね」
この時代の連合では混血が進んでいることもありそうした問題は克服されたと言っていい。だがそれはあくまで連合の中だけのことである。
「それでもね。その時は」
「だから二人が出て来たのね」
「そう、必要だから出て来たんだ」
また彰子に話す。

第百九十五話　マルコムエックスその六

「その時にね」
「英雄が出て来たのね」
「そう、出て来たんだ」
話が変わってきた。スターリングの口調もだ。
「マルコムエックスもキング牧師もね」
「二人が出て来ないといけないその時に」
「神様達が呼んでくれたのか本人達が出て来ようと思って出て来たのかだけれどね」
その辺りははっきりと言えないものがあった。運命というものはそういうものでもあるからだ。そこには様々な奇跡も介在したりするのだ。
「ただ。二人が人種差別の撤廃に貢献したのは事実だね」
「それはなのね」
「ほら、見てよ」
スターリングはここで周りを見回す。今三人がいる店の中をだ。
「ここにも色々な人がいるよね」
「ええ」
彰子は彼のその言葉に頷いた。
「そうね。皆いるよね」
「そうね、皆がね」
「色々な人達が」
「あの頃は白人は白人だけ、黒人は黒人だけ」
分離させられていたのだ。なお面白いことに黄色人種は白人用の施設を使えた。日系人がどちらを使えばいいかと尋ねたら白人用だと答えられたこともある。
「そう分けられていたんだ。バスだって席が込んでいたら黒人は立たさせられたし」

「今そんなのやったら殴り殺されるっていうか」
蝉玉がここまでの話を聞いて言う。今はハムサンドを食べている。
「考えられない話よね」
「そうだよね。絶対に考えられないよね」
「ええ、そんなこと有り得ないわ」
少なくとも今の連合ではそうである。これは宇宙進出の時代からそうなっている。連合の人種差別の克服はかなり過去に遡る話なのである。
「そんなこと言ったらもう殆どの人間が差別し合うじゃない」
「誰だって多くの人種の血が入っているからね」
「その通りよ」
「けれどあの頃はクー＝クラックス＝クランもあって」
この時代の連合ではまさに絶対悪とされている白人至上主義団体である。
「色々と問題が残っていたからね」
「そういう組織もあったのね」
「残念だけれどね」
スターリングの言葉がここで苦いものになる。
「我が国にもそうした連中がいたんだ」
「聞いたことはあるわね」
ここでまた蝉玉が言う。
「白人至上主義で」
「うん」
「しかも白い覆面被ってるのよね」
「三角のね」
スターリングも話を合わせて言う。
「真っ白い服を着てね。それで黒人を攻撃していたんだ」
「そんな馬鹿な団体もあったのね」
蝉玉はその彼等をこうまで評した。
「白人至上主義ね」

「今じゃそんな団体連合のどの国にも存在できないけれどね」
「混血してるからね」
それが最大の理由である。連合の混血はそこまで進んでいるのである。
「だからね」
「そうよね。純粋な白人なんて」
「もういないし」
「そうそう、純粋な黒人も黄色人種もね」
そうした存在もいなくなっているのだ。
「絶対に何処で血が入ってるから」
「うちの理事長もかしら」
蝉玉はふとこんなことも言った。
「やっぱり」
「そうじゃないのかな。顔は純粋な黄色人種だけれど」
八条はアジア系の美貌で有名である。長身で美麗なことでも知られている。その為少女からも熟女からもかなりの人気なのである。

第百九十五話　マルコムエックスその七

「やっぱり何処かでね」
「そうよね。私だってね」
「蝉玉も？」
「ひいお婆ちゃんの一人が金髪で」
つまり白人の血が入っているのである。
「肌が黒い親戚もいるし」
「僕だってそうだしね。ひいひいお爺ちゃんの一人黒人で目が青いし」
「それが連合だしね」
「白人至上主義なんて言ったらね」
「誰もいられないわよね」
「今はね」
それが連合なのである。とにかく混血していてそうした主義が通用しなくなっているのである。少なくとも連合では人種主義はなくなっている。
「そんなのはとてもね」
「それじゃあ」
また言う彰子だった。
「マルコムエックスも今の時代だと」
「いないね」
結論としてそうなることだった。
「はっきり言って」
「そうよね。人種がそうだから」
「そうだね、黒人至上主義だって」
白人至上主義の裏返しだがこの思想も存在していた。人種差別をしたり極端な優越感を抱いたりするのは何も白人だけではないのである。

「ないしね」
「そう思うといい時代なのね」
「うん、キング牧師もマルコムエックスも喜んでいると思うよ」
スターリングは微笑みながらこうも述べた。
「だって白人も黒人もなくなったからね」
「少なくとも連合では」
「うん、もうないから。アジア系でも」
なお連合の最初の人種区分ではアジア系が最も多かった。そして中南米のラテン系やブラックアフリカの黒人達も非常に多かった。白人の割合はあまり多くなかったのだ。
「誰でもね」
「そうよね。いい時代になったよね」
「それによ」
蝉玉はここでもにこにことして話す。
「私達の国だって昔は別々だったし」
「連合がなくてね」
「そうよね。完全に別々の国だったから」
「けれど今は」
国として分かれていても、であった。
「同じ連合の一員だからね」
「変われば変わるものよね」
「そうだよね。けれどおかげで皆こうして集まって」
店の中にいるのは三人だけではない。青い目の人間も縮れた髪の人間も黄色い肌の人間もいる。そしてそれはそれぞれ混ざっている。
「楽しくやってるしね」
「あのバルカン半島だって」
連合が組み込んだ国々である。
「ここじゃ曲がりなりにも同じ国の中にあるし」
「一緒なのね」
「エウロパとは違うからね」

スターリングは彼等のことも話に出した。
「はっきり言ってね」
「そうよね、エウロパっていったら」
「純粋な白人ばかりよね」
彰子だけでなく蝉玉も言う。
「そうよね、欧州の国ばかりだから」
「アジア系って確かハンガリーだけだったかしら」
「もう人種的には白人だから」
スターリングがここでまた言う。
「ハンガリーもね」
「じゃあエウロパは完全に白人ばかりなのね」
「もう誰もが」
「そのうえ階級まであるから」
連合では純血主義は好まれない。イスラエルにしても同じユダヤ教徒であればいいのであってその人種構成は昔から様々なのである。
「酷い社会だよね」
「そうね。そういう社会にはね」
「いたくないわよね」
「僕もそう思うよ」
スターリングはハンバーガーを食べながら言う。
「全くね」
「マルコムはもういないけれど」
彰子は最後に言う。
「その考えや行動は忘れたくはないわよね」
「うん、確かにね」
「それはね」
スターリングと蝉玉も頷く。三人の話は温かいものになっていた。

マルコムエックス　　完

2010・3・28

第百九十六話　豚肉は駄目その一

豚肉は駄目

蝉玉はスターリングのマルコムエックスの話を聞いたその日。部活のバスケ部の練習が終わってからそのうえで皆に対して言うのだった。

「ねえ」

「んっ、どうしたの!?」

「何かあったの？」

「あのね」

こう皆に話しはじめる。

「皆豚肉食べるわよね」

「ええ、まあ」

「そうだけれど」

皆はすぐに返事を返してきた。

「私豚好きだけれど」

「私も」

「スペアリブがいいわよね」

「豚バラ煮込みもね」

「そうよね。皆食べるわよね」

蝉玉も皆の話を聞きながら頷く。まだバスケの服を着ている。青い爽やかな格好である。

「豚肉は」

「私イスラムだけれどね」

一人の黒人の少女がここで言う。

「それでもね。食べるわよ」

「今時ね。ムスリムでも食べるわよね」

「そうそう」

「アッラーにお許しを言えばいいのよね」

このことは連合ではあまりにも有名だった。連合のムスリム達はアッラーに許しを言うことで豚肉なり鱗のない魚なりをふんだんに食べているのである。
「それでいいのよね」
「サハラとは違って」
「うん、そうよ」
その黒人の少女も皆の言葉に応える。
「ちなみに私日本人だけれどね」
「日本だったらお魚も多いしね」
「食べてるよね」
「うん、今日もお魚らしいから」
黒人の少女はまた言う。
「鰻だって」
「鰻ね。あれもいいわよね」
「美味しいわよね」
「今じゃどんな宗教でも皆色々なものを食べてるわよね」
蝉玉がここでまた言った。
「本当に皆色々」
「ユダヤ教徒の人は別だけれどね」
「食べ物じゃないけれど同性愛だっていいしね」
「別に」
「そうよね」
蝉玉は話を聞きながらまた述べた。
「別にもうそんなのないわよね」
「そう、ないわよ」
「ねえ」
「今時は」
「マルコムエックスみたいなことって食べ物でもないのね」
このことをあらためて思ったのだった。
「豚肉食べたら駄目とかそういうのは」

「まあマウリアじゃ牛肉駄目だけれどね」
「菜食主義者多いらしいわね、あそこ」
「そうそう、だからスリムな人が多い」
マウリアの肥満率は連合より低い。
「鶏肉がメインらしいし」
「あれも宗教からだからね」
「ヒンズーね」
「連合にはヒンズー教の人殆どいないし」
あくまでマウリア限定の宗教なのである。地域宗教と呼ばれているものだ。
「牛肉はまあ関係ないわね」
「連合だしね」
「あれはね」
「しかし連合は」
そのことをあらためて話す。
「そういう戒律って殆どないわよね」
「どのお肉もお野菜も好きなだけ食べられる」
「もうどんなものもね」
「何でも」
「そうよね」
また話す蝉玉だった。
「それはないし」
「蝉玉は中国人だから豚肉好きよね」
「そうよね」
「ええ、それはね」
蝉玉は皆の問いにこくりと頷いて答える。

第百九十六話　豚肉は駄目その二

「今日も夕食豚肉だし」
「何するの？」
「何食べるの？」
「ええと、焼き豚」
それだというのだ。
「それと青梗菜ね」
「ふうん、それなの」
「火を使ってなのね」
「中華料理は火だからね」
火の料理であるというのはこの時代でも同じである。
「だからね。あとは果物も買うし」
「ふうん、じゃあ御飯ね」
「主食はそれね」
「ええ、それ」
所謂米だ。それだというのだ。
「お米炊くつもりだけれど」
「お米ね」
「それなのね」
「焼き豚に青梗菜だからね」
つまりおかずの組み合わせから来る判断だというのだ。
「それで御飯にするつもりなの」
「っていうと白米？」
「それにするの？」
「そうね。白米にするわ」
米といっても色々である。麦飯もあれば雑穀飯もある。玄米もある。この時代では米は白米とは限らないのである。これはパンにしても同じだ。

「今日はね」
「成程ね、豚だからね」
「それだからなの」
「今日は焼き豚で次に豚肉のお料理する時は」
蝉玉はもうその先のことを考えていた。既にである。
「スペアリブにしようかしら」
「スペアリブ？」
「そう、それにしようかしら」
こう話すのである。
「それにするわ」
「スペアリブもいいわよね」
「そうそう」
「あれも美味しいわよね」
「お醤油と生姜で似て。ＸＯ醤も入れて」
蝉玉の考えはもうそちらに進んでいる。彼女は料理を作ることも好きなのだ。食べるだけが好きではないのだ。両方好きなのである。
「そうして作ろうかしら」
「何か話聞いてるだけで涎出そう」
「私も」
周りはそうなっていた。実際に何人かはもうそうした顔になってしまっている。部活が終わって空腹を感じだしてもいるせいもあった。
「うう、帰ったらすぐに食べよう」
「それに焼き豚なら」
「残っても使えるしね」
「そうそう」
「ラーメンね」
蝉玉は普通に言った。
「ラーメンに入れる。そうね」
「ラーメン、いいわね」

「蝉玉はラーメントリガラ派？」
「それなの？」
「トリガラなの？」
「あっ、その時によって違うわ」
それはだというのだ。違うというのだ。
「実はもうスープの用意もしてあるの」
「うわ、用意がいいわね」
「もうなの」
「うん、そうなの」
中華料理にもスープは定番である。欧風料理のそれでもそうだが中華料理にもスープはかけがえのない存在であるのだ。
「それもね。焼き豚に付いていた骨を使って」
「じゃあラーメンのスープはそれ？」
「豚骨の？」
「そう、白湯のそれにするわ」
まさにそれだというのだ。
「今日も飲むつもりだけれど」
「白湯ね」
「そのスープもいいわよね」
「しっかりとお野菜も入れたし」
蝉玉はそれも忘れなかった。
「あっさり味にしたわ」
「本当に話聞いてるだけで涎出そう」
「もうすぐに帰らない？」
「そうよね。お家に帰るまで待てないかも」
「お腹マジで空いてきた」
「私も」
皆そうなってきていた。運動の後でこうした話はまさに劇薬である。誰もがそうなって当然のことだった。

第百九十六話　豚肉は駄目その三

「途中で何か食べるかも」
「ラーメンね」
「それね」
「私も話してたら」
そして蝉玉もまた。
「そうね。今日は焼く豚と青梗菜だけじゃなくて」
「もう一つ何かするの？」
「若しかして」
「それにラーメンも作るわ」
それもだというのだった。
「ラーメンね。それも作るわ」
「明日にしないの」
「それはしないの」
「気が変わったわ。っていうか」
言葉を続けていく。
「お腹空いたから」
「話してるうちにね」
「そうなったのね」
「ええ、そうなの」
彼女自身もだった。そうなるのだった。
「それでなの。焼き豚もあるし丁度いいわね」
「じゃあ明日どうするの？」
「それじゃあ」
「明日は明日で決めるわ」
そうするというのだ。
「けれど今日はラーメンにするわ」
「それと焼き豚と青梗菜ね」

「三つなのね」
「ちょっと御馳走になりそうね」
蝉玉は話しながら着替えていく。バスケの服から私服になる。そうしてだった。
「今日は思ったよりも」
「それでデザートもあるし」
「そうよね」
「それじゃあ今日はそうするわ」
こうして蝉玉は家に帰ってその焼き豚にラーメン、それと青梗菜を作った。程なくして家に兄の公明も帰ってきた。兄は家に帰るとすぐにこう言った。
「今日はラーメンか」
「わかったのね」
「匂いでわかるさ」
それでだというのだった。
「やっぱりね」
「そう。じゃあ何ラーメンかも？」
「豚骨ラーメンだね」
そのものずばりだった。
「それだよね」
「そうよ。やっぱり匂いでわかるのね」
「豚の匂いは独特だからね」
だからだというのだった。
「ただ」
「ただ？」
「今日は焼き豚じゃなかったのかい？」
それを問うのだった。
「それでラーメンは明日だったんじゃ」
「何だったら明日もするけれど」
「明日もなのか」

「そう、明日もどう？」
兄に対して問う。
「明日もラーメンで」
「スープは同じでいいけれど麺は変えてくれないかな」
これが彼のリクエストだった。
「よかったら」
「麺はなのね」
「今はラーメンの麺だよね」
「そうよ。細麺ね」
それだというのである。
「じゃあ明日は」
「どんな麺でもいいけれどさ」
「じゃあ刀削麺なんかどうかしら」
蝉玉がここで言うのはこの麺だった。中華料理にある独特の麺の一つだ。小麦粉の生地を実際に削ってそのうえで茹でる。蝉玉はそれができるのだ。

第百九十六話　豚肉は駄目その四

「それは」
「刀削麺か」
「ええ、それ」
まさにそれだというのだ。
「それでどうかしら」
「そうだね。じゃあそれでね」
「焼き豚はそのままで」
それはそのままだという。
「青梗菜は変わるけれどね」
「じゃあ野菜は何に？」
「八宝菜にしようかしら」
首を捻っての言葉だった。
「今お野菜余ってるし」
「そう。だったらそれでね」
「お野菜とシーフードが余ってるし」
「あと豚肉もだよね」
「それもあるし」
豚肉も余っていたのだった。
「だからね」
「そうそう」
「お兄ちゃん豚肉好きよね」
蝉玉はふと兄に話した。実際に彼は豚肉が好きである。
「それもかなり」
「中国人にとって豚肉はもう切っても切れないものだろう？」
「まあそれはね」
「だからだよ。それは御前だって同じじゃないか」
「そうだけれどね。ただ」

しかしここでこうも言うのだった。
「お兄ちゃん豚肉が食べられなかったら困るよね」
「中華料理が成り立たないよ」
「そうよね。じゃあイスラム教徒には」
「今は食べられるけれどそれでもなりたくはないね」
そうだというのだった。
「豚肉についてあれこれ決まりがあったら」
「そうよね。やっぱりそうよね」
「当たり前だろ？それは御前もだろ？」
「私も豚肉がないとちょっとね」
それは彼女自身もだった。どうしてもである。
「駄目だから」
「豚肉はソウルフードじゃないか」
公明はこうまで言った。
「中国人にとっては」
「それこそ何千年も前から」
「そう、何千年もね」
妹への話は続く。
「イスラム教ができる前から」
「そうよね。じゃあ明日も白湯スープで」
まずはそれがあった。
「刀削麺で」
「それと八宝菜だね」
「それでいいわよね」
「充分だよ。じゃあ明日は僕が作るよ」
「兄さんがなの」
「刀削麺は無理だけれどね。八宝菜はね」
彼は刀削麺は作れない。あくまで蝉玉だけの特技である。この時代でもこの麺を作られるということはかなりの特技なのである。
「作らせてもらうよ」

「じゃあ明日は兄妹協同ってことね」
「そうだね。しかし豚肉なら」
豚肉の話はまだ続くのだった。
「あれだね」
「あれって？」
「アメリカ人もかなり食べるね」
彼等についての話にもなったのだ。
「そうよね。スターリングも」
「御前の彼氏か」
「ええ・・・・・・って知ってたの？」
兄の今の言葉にすぐ返す。
「ひょっとして」
「ああ、知ってたよ」
公明は微笑んで妹に言葉を返した。
「っていうか何かあったら電話してるだろ？」
「うっ、確かに」
「それだったらわかるよ。彼氏がいるのはさ」
「そうだったの」
「スターリングっていったら確か」
「そう、スターリング＝マクレーンよ」
その名前は自分から話した。

第百九十六話　豚肉は駄目その五

「わかるわよね」
「連合軍宇宙艦隊司令長官のお孫さんか」
「私達と同じね」
「そうだな。そうか、お爺ちゃんのなあ」
「凄い縁よね」
「全くだよ。いや、あの人のお孫さんがこの学園にいるのは知ってたよ」
それはだというのだ。彼は確かに知っていた。
「けれどさ。御前の彼氏っていうのは」
「考えていなかったの」
「全くね」
そうだというのである。
「想定していなかったな。そうか」
「そうなのよ。別にいいわよね」
「それこそ碌でもない奴でもない限りいいよ」
こう妹に述べた。
「そういう奴でもない限りはね」
「スターリングは大食漢だけれどそれはないわ」
「じゃあ御前と同じか」
「ちょっと待って」
蝉玉は兄の今の言葉を聞き逃さなかった。それですぐに言い返した。
「大食漢っていうの？私が」
「女の子だからまた字は違うけれどね」
「いや、それでもそれ何よ」
その言葉を聞き流さなかった。むっとした顔でくってかかる。
「私が大食だなんて。心外よ」

「実際に食べるの好きじゃないか」
「まあそれはね」
自分でもそれは認めた。
「けれど私は中国人よ」
「当然僕も中国人だよ」
蝉玉が言うのは国籍だった。今更ではあるがそれでも言うのは彼女がそこに理由を見出しているからである。だからなのである。
「それがどうしたんだい？」
「中国人は食べる為に生きるじゃない」
「連合全体がそうだけれどね」
「じゃあ食べないで何だっていうのよ」
兄に口を尖らせて言い返す。
「どうだっていうのよ」
「だから食べるんだね」
「そうよ。大食じゃなくてそれが生きる目的だからよ」
まさに食べる為に生きるである。
「それで大食なんて心外よ。それは違うわ」
「あくまでそう言うか」
「何度でも言うわよ。楽しみだからよ」
これが蝉玉の主張だった。
「わかったわね」
「わかったよ。まあ話を戻すけれど」
「ええ」
「アメリカ人も豚か」
「そうよ。バーベキューにもするし」
この時代では豚肉もバーベキューにするのである。バーベキューに使う機械の進歩で瞬く間に火が通るようになったからである。
64
「スパムだってそうじゃない」
「あれもか」

「他にはスペアリブだってあるし」
「ポークチョップもか」
今度は公明から料理を出した。
「それもだよね」
「そうよ。ポークステーキだってあるじゃない」
「アメリカ人も豚肉好きなんだな」
「内臓だって食べるし耳だって足だって食べるし」
中国人もそうだが彼等もなのだ。
「特に耳ってね」
「そうか、アメリカ人もそうか」
「黒人が特にそうだったらしいけれど」
アメリカ黒人は独自の文化を築いてきた。それがそのままアメリカ全体の文化になったのである。こうした意味でもキング牧師やマルコムエックスの行動は無駄ではなかった。
「だから」
「豚肉はいいね」
また言う彼だった。

第百九十六話　豚肉は駄目その六

「本当にね」
「そうよね。それでだけれど」
「うん、今日はラーメンで」
「明日は八宝菜ね」
それだというのだ。
「それにしましょう」
「やっぱり豚よね」
蝉玉は笑って兄に話した。
「お肉は」
「そうだね。豚だね」
これは公明も同じだった。
「豚を食べないとね。ただ」
「ただ？」
「コレステロールがね」
公明がここで言うのはこれだった。
「それが問題だからね」
「コレステロールね」
「それを分解しないと」
それだというのだ。
「コレステロールはどうするか。それが問題だからね」
「それをどうするかも中華料理よね」
「その通り。中華料理はただ食べるだけじゃない」
こう話すのである。
「医食同源だからね」
「そう、医食同源よね」
「だからコレステロールも分解して」
また話す。

「尚且つ美味しいものにする」
「生姜にそれと」
「他には？」
「漢方薬も入れているわ」
こう話すのだった。
「ちゃんとね」
「そうそう、身体にもよくないと」
公明はそれも話したのだった。
「ちゃんとね」
「ちゃんとなのね」
「そう、二人でどうぞ」
また話す彼等だった。そうしてである。
その夕食を食べるとこのうえなく見事な味だった。作った蝉玉も大喜びである。
「美味しい、大成功よね」
「うん、確かに」
「ねえ、それでだけれど」
蝉玉はラーメンを食べながらだ。また言うのだった。
「明日はお兄ちゃんよね」
「任せておいてくれ。明日は凄い御馳走になるから」
「わかってるわ。楽しみにしているから」
「ええ、じゃあ」
こうしてだった。また食べてだ。
食べてそれからだ。食器は皿洗い機に入れて終わらせる。そのうえでだ。
その日は休んだ。だがそれで終わりではなかった。
公明は蝉玉とテレビを観ながらだ。その明日のことを話したのである。
「それで八宝菜は」
「それね」

「思いきり身体にいいものにするから」
こう言ったのである。
「楽しみにしておいてくれよ」
「当然味もなのね」
「勿論だよ。味もね」
「そう、味も」
「健康と味は両立させるものだから」
これも中華料理の考えであると共に彼の考えだった。
「だからね」
「だからなのね」
「そう、だから」
こう言うのである。
「楽しみにしておいてくれよ」
「わかったわ。じゃあ明日ね」
「今日も御馳走で明日も御馳走だよ」
彼は話す。
「毎日ね」
「そうよね。うちの家はね」
この話を食べながら幸せな食後の一時を過ごす。そうして明日に備えるのだった。今日のことは終わり明日がはじまるのであった。

豚肉は駄目　　完

２０１０・４・２

第百九十七話　タイとベトナムその一

タイとベトナム

フックの肌は黒い。それで彼のルーツははっきりわかることだった。

「タイ人だけれど黒人だからな」

「そうだよね」

「それはわかるわ」

皆その彼に対して突っ込みを入れる。

「けれど髪は金髪だから」

「しかも真っ直ぐだし」

「昔のタイ人の感じじゃないってのは言われるな」

周りに対しても述べた。

「それもな」

「それも言われるんだね」

「やっぱり」

「まあタイでも俺みたいな人多いしな」

これはタイだけでなく連合の国ならば何処でもである。多くの人間が肌が黒かったり金髪だったりする。それはもう連合そのものであると言ってもいい。

「実際な」

「まあタイの人の雰囲気じゃないけれど」

「服装も」

「服もか？」

それを言われると微妙な顔になるフックだった。

「そうか？」

「ちょっとね」

「それはね」

まさにそうだと返す皆だった。

「もっと薄着じゃないかな、タイの人って」
「そうじゃないの？」
「ねえ」
「星や場所によるぜ」
だがフックはこう皆に返した。
「それはな」
「あれっ、そうなの」
「星によって違うの」
「当たり前だろ。タイっていっても星系はかなりあるしな」
これはどの国にも言えることだ。この時代では国家は星系単位で構成されている。星系がそのまま州や県、省というわけなのである。
「その中には暑い星もあれば冷たい星もあるんだよ」
「まあそうよね」
「色々な星があるし」
「それに星の中だってね」
「そうだろ？熱帯もあれば寒帯もあるだろ」
こう話すのだった。
「だからそれでな。服だってな」
「それぞれか」
「気候によって」
「タイにだって四季はちゃんとあるさ」
地球にあった頃はとてもそうではなかった。タイといえば熱帯であったのだ。熱帯では服は自然と薄いものになる。これはこの時代も一緒だ。
「ちゃんとな」
「そういうものか」
「まあそうよね」
皆言われてみて気付いたのだった。
「それでもタイって暑いイメージがあるけれど」
「星によって。場所によってね」

「俺の生まれた場所は温帯でな」
フックはその生まれについても話した。
「春夏秋冬があって服も色々あったんだよ」
「色々ねえ」
「だからなの」
「そうさ。それでな」
「それで？」
「俺の国だってな」
また話す彼だった。
「黒人でも寒帯にいたりするさ」
「寒帯でもね」
「そうなんだ」
「だからこれはどの国でも同じだろ？」
また言う彼だった。
「連合なんだからさ」
「タイ人に見えないあんたでも」
「そうなの」
「俺寒いところでも平気だぜ」
彼は今度はこんなことを口にしてきた。

第百九十七話　タイとベトナムその二

「全然な」
「ううん、タイなのに寒い場所があって」
「しかもそれに平気っていうのも」
「まあタイは確かに暑い星や場所が多いさ」
彼もそれは認める。
「けれど寒い場所もちゃんとあるんだよ」
「ううん、違和感が」
「それでも料理はやっぱり」
「ああ、辛いぜ」
それは笑って認めた。
「辛くないタイ料理なんて何でもないだろ」
「まあ。そっちの方がかなり違和感あるっていうか」
「想像できないっていうか」
「トゥクトゥクのないタイと同じで」
「ああ、あれか」
フックもそのトゥクトゥクについて話す。
「あれな。あれもあったな」
「何かもう名物になってるけれど」
「あれもタイに欠かせないものよね」
「まあな。殆ど日本の人力車みたいな感じだけれどな」
「ああいう感じか」
「じゃあ観光用に」
「ああ、そうさ」
まさにそうだという。トゥクトゥクとは三輪の自動車でありタイではタクシーとして使われている。それがこの時代でも残っているのである。
「だってよ。今じゃリアカーじゃないか」

「流石に普通は乗らないのね」
「やっぱり」
「そうだよ。タイ人は商売上手だからな」
実はそうだったりする。地球にあった頃からタイという国は微笑みの国とされていて素朴だと思われているが商売も外交もかなり見事なのである。
「そういうのはちゃんとしてるからな」
「ううん、そういうところもしっかりしてるのね」
「ちゃんと」
「そうだよ。してるんだよ」
こう話すのだった。
「まあそれはそう割り切ってくれたらいいさ」
「観光用ね」
「そういうのだったの」
「そうさ、つまりは」
フックの言葉は続く。
「割り切って乗るものだからな。今タイ人は乗ってないからな」
「何か意外っていうか」
「納得っていうか」
皆それを聞いて頷きながら述べる。
「タイ人も強かなんだな」
「本当に」
「ああ、強かだよ」
フックもそれを否定しない。
「伊達に今まで生きているわけじゃないしな、連合でな」
「まあタイって国はね」
ここで言ったのはネロだった。
「昔からやり手だしね」
「それはそうだけれどな」
フックはそのネロに対しても言葉を返した。

「ただな」
「ただ？」
「御前の国もかなりだろ」
こう彼に返したのだ。そのネロにだ。
「ベトナムもな」
「そうかな」
「そうだよ。かなり凄い国だろ」
「ベトナムもかなり苦労してきたからね」
ネロはフックの言葉を受けてしみじみとした感じで話す。
「特に二十世紀はね」
「うっ、それを言われると」
「ちょっとね」
彼の言葉に困った顔になったのはスターリングと蝉玉だった。
「まあ過去はそれで」
「許してくれないかしら」
「ああ、それはいいから」
アメリカと中国は二十世紀にベトナムと派手に戦争をしたことがある。ベトナム戦争と中越戦争である。なおベトナムはどちらの戦争にも勝利を収めている。

第百九十七話　タイとベトナムその三

「千年前のことだし。僕が言ってるのはね」
「アメリカのことじゃなくて？」
「中国でもないの」
「フランスには随分とやられたから」
いつもは温厚なネロの顔が少し歪む。
「本当にね。散々だったよ」
「ああ、フランスね」
「あの国は悪辣だから」
なおフランスと戦った独立戦争はベトナム戦争や中越戦争よりも先である。しかしベトナム人の間ではこの戦争をこそ最大最悪の苦難としているのだ。なおそれ以前の圧政はさながら何処かの特撮ものの悪役の如き扱いである。特撮でなければアニメである。
「何もかも奪ってね」
「しかも物凄いケチなのよね」
「そうだよね。お高く止まっている癖に」
ネロも言う。尚彼等は誰もそのフランス人に会ったことはない。
「そんな連中だからね」
「しかしそのフランスに勝ったよな」
「弱かったらしいね」
ネロはフックに実に素っ気無く返す。
「戦争は」
「ああ、フランスは弱いらしいな」
「口程にもなかったそうだよ」
実際にフランス軍はベトナム軍に実に呆気なく敗れている。
「もうね。偉そうにして威張っているだけでね」
「そんな奴等か」
「苦労したのは事実だけれどそんなに強い相手じゃなかったから。

別にそこまで言われるようなことはないと思うよ。少なくとも僕はね」
「いや、その時代だけじゃなくてな」
また返すフックだった。
「今もな」
「今もって」
「ベトナムは今もかなり外交上手いじゃないか」
「そうかな。別にね」
「別にじゃなくてな。実際にかなりだろ」
「生きる為にしているだけだよ」
ベトナム側から見れば本当にそれだけだった。
「ただそれだけだよ」
「本当に生きる為だけか？」
「そうだよ」
こうフックに返す。
「普通にね」
「それであそこまでやるのか」
「だからそこまで言われる程かな。そんなにえげつない？ベトナムって」
「えげつないっていうか頭の回転が早いな」
フックは自分の右手をその顎に当てて述べた。
「それもかなりな」
「頭がいいってこと？」
「いいだろ。いつもここぞって時に素早く的確な動きをするだろ」
「タイもかなりだと思うけれど」
「我が国もか」
「そうだよ。立派だよ」
今度はベトナム人から見たタイへの評価だった。
「本当にね」
「そうか？こっちも生きる為だけにな」

「それ越えてると思うよ、タイは」
「そうなのか。俺達自身は結構素朴で付き合い下手だと思ってるんだがな」
「うちだってそう思ってるし」
ネロもだった。
「ベトナムなんて普通に素朴で大人しい国じゃない」
「いや、それは全然賛成できないんだがな」
「そう言うんだ」
「何かな、ベトナムってな」
タイとベトナムの話が続く。尚この両国の関係とそれぞれの見方は今の二人に見事なまでに表われている。説明が不要なまでにだ。
「黒豹みたいな感じでな」
「それを言ったらタイは白象じゃないの？」
「ああ、実際の国の象徴になってるけれどな」
「そうだよね、タイは象だよね」
「王室も仏教もそれに出ているからな」
そうした理由からだ。この時代でもタイは仏教国なのである。
「だからな」
「そうだよね。しかしベトナムは豹なんだ」
「何かそういうイメージがあるんだよ」
「そこまで強くもないししなやかでもないけれど」
「いや、そうだからな」
ここでも言うフックだった。

第百九十七話　タイとベトナムその四

「俺はそう思ってるけれどな」
「それは買い被りだよ」
「それを言ったらそっちもだぜ」
フックは屈託のない笑顔でネロに返した。
「タイもそこまで凄い国じゃないさ」
「そうかな。かなり凄いと思うけれど」
「そうか？何かお互い過大評価してないか？」
「いや、それはないな」
「そうよね、それはね」
「少なくともね」
しかしここで周りがその二人に対して言ってきた。
「タイとかベトナムっていったらもう百戦錬磨じゃない」
「表ではにこやかに笑っていても裏では」
「そんな感じだよな」
「おい、待て」
「今の言葉はないんじゃ」
二人も周りの言い草に流石に突っ込みを返した。
「タイってそんなに酷いか？」
「ベトナムって評判悪いの？」
「酷くも評判も悪くないけれど」
「まあ何ていうか」
「ねえ」
こう言うのである。
「洒落にならないっていうか」
「油断できない国ではあるし」
「連合の中でも特に」
「そうよね」

「随分な言われようだな」
「そうだね」
フックもネロも周りの言葉にいささか口を濁してしまっていた。
「普通だと思ってるんだけれどな」
「そうだよね」
「いや。普通じゃないっていうか」
「まあ東南アジアの国絶対がそうだれどね」
「確かに」
それも確かに話されるのだった。
「外交上手を通り越して」
「えげつないものがあるし」
「さながら」
さらに話されていく。
「御馳走を一緒に食べながらその中に一服盛るような感じで」
「それも料理は生春巻とかトムヤンクンとか」
「それってまんまベトナム料理だし」
「トムヤンクンっていったらタイか？」
二人にとってのソウルフードである。生春巻もトムヤンクンもベトナムやタイにおいては非常によく食べられるまさにソウルフードなのである。
「それに毒って」
「幾ら何でもそこまではな」
「いや、一服っていっても自白剤とか」
「そういうのだから」
「一緒じゃねえか、それって」
「そうだよね。やっぱり心外だよ」
フックとネロはどうしても釈然とできなかった。そんなやり取りであった。彼等にとって周りの言葉はどうにも納得できないものであった。
そしてだ。昼食の時だ。二人は学校の食堂で一緒の席に着いてだ。

そのうえで話をしていた。食べているのはそれぞれの国の料理だ。
フックはそのベトナム料理を食べながらだ。楽しげな笑みを浮かべて述べた。
「美味いな」
「そう、美味しいんだ」
「ああ、美味い」
それを言うのだった。
「ベトナム料理も美味いんだな」
「タイ料理もね」
そしてネロはタイ料理を食べている。当然トムヤンクンもある。
「コリアンダーの香りがいいね」
「ああ、それわかるか」
「タイ料理っていったらこれだよね」
「そうだよ、それなんだよ」
フックはコリアンダーを褒められて最高の笑顔になる。
「コリアンダーが大事なんだよな、タイ料理は」
「ベトナムでもよく使うしね」
「ああ、そうだな」
フックは実際にそのベトナム料理の中のコリアンダーを味わいながら話す。

第百九十七話　タイとベトナムその五

「この味がいいな」
「タイ料理とベトナム料理って似てる部分多いよね」
「まあな。近かいしな」
「そうそう」
タイとベトナムはそれぞれ近い場所にある。尚両国の間には小国が幾つか存在している。この時代でもラオスやカンボジアは両国の間にある。
「料理が近いのもな」
「当然だね」
「それに米な」
フックはにこやかに笑って米のことを話してきた。
「それが大事だよな」
「インディカ米だね」
「日本にいるとあれだからな」
「お米がね」
「ジャポニカ米が主流だからな」
それを言って困った顔になる二人だった。
「粘り強いよな」
「味もね。合わないし」
「日本人あれないとあまりいい顔しないしな」
「だよね。ベトナムに観光に来てもね」
日本人のこの嗜好はこの時代でも健在であった。味の好みというものはそう簡単には変わらないがそれはこの時代でも言えることであった。
「お米にはいい顔しないし」
「コリアンダーにもな」
「日本人ってね」

ネロはその日本人についてさらに話す。
「結局ジャポニカ米と大豆のお醤油がないと駄目だからね」
「それは譲らないよな」
「そうそう、口には出さないけれどね」
「日本人はあまり口には出さないけれどな」
しかしなのである。
「それでもな。態度にこっそりとな」
「出してくるし」
「厄介なんだよな。一見するとわからないんだよ」
「アメリカ人や中国人はその辺り違うけれどね」
「僕達は？」
「わかりやすいの」
丁度ここにはスターリングと蝉玉もいた。しかし彰子や七海といった日本人組はいない。いるのは他の国々の面々だけであった。
「まあ感情はストレートに出すね」
「言いたいことは言わないと」
「そうだよ、だからわかりやすいんだよ」
「本当にね」
フックとネロもそれがいいというのだ。
「食べる前に言ってくれたりするだろ」
「それでね。やりやすいよ」
「そうなんだ。まあ言うべきことは言わないとね」
「気が済まないし」
アメリカ人や中国人のこうした特性も変わっていない。彼等の性格は基本的に千年前からあまりというか殆ど変わっていないと言える。
そしてだ。二人もその特性について話すのだった。
「それがアメリカ流だし」
「中国テイストよ」
「洪童はもっとわかりやすいけれどな」

「そうだね」
二人はここで洪童にも顔を向けた。
「絶対に大蒜と唐辛子だからな」
「キムチ味だよね。味は」
「韓国人はそれないと駄目なんだよ」
本人もそれを認めて言う。
「もうな。絶対にな」
「それに御前感情は隠さず言うよな」
「言わなくてもいいことまで」
「言わなくてもとかいうのは余計だよ」
ネロのその言葉にはすぐに言い返す。
「全く。とにかくな」
「大蒜と唐辛子だよな」
「それがないと」
「ラーメンにもハンバーガーにもスパゲティにもキムチだからな」
洪童はそれをはっきりと言った。

第百九十七話　タイとベトナムその六

「韓国じゃそうだしな」
「韓国だよなあ」
「全く」
「そうだよ、韓国はキムチなんだよ」
これは譲れないというのだ。
「絶対にな。これを外すことは何があってもできないんだよ」
「そういえば御前この学校でも」
「一番行くのは韓国料理の店だよね」
「他の料理も食うけれどやっぱりキムチが一番なんだよ」
とにかくこだわりがあるというのだ。
「それがないとな。どうにもならないからな」
「タイにはな。キムチはあまりないからな」
「ベトナムにもね」
どちらも辛い味が多いがそれでもだ。キムチの辛さとタイ料理やベトナム料理の辛さはまた違うのだ。それははっきりとした違いである。
「だからっていって持って来るのはな」
「あれには驚くけれど」
「だから韓国人はキムチがないと駄目なんだよ」
それを言う洪童だった。
「食べないと力が出ないんだよ」
「難儀な体質だな」
「全く」
「まあ最近キムチ持って来る人いないだろ」
洪童は二人にこのことを問うた。
「それはないと思うけれどな」
「まああまりいないけれどな」

「確かにね」
二人もそれは認めた。
「昔は凄かったらしいけれどな」
「それで凄い匂いがしたって」
地球にあった頃の話だ。
「けれど話に聞いたよりずっといないしな」
「それはほっとしているけれどね」
「キムチが匂いがきついからな」
韓国人の彼も自覚していることだった。
「それがな。どうしてもな」
「まあそれは止めておいてくれ」
「食べるのはいいけれどね」
「ああ、食べてるさ」
しかしだった。ここで彼はふと難しい顔になってだ。そのうえで言うのであった。
「けれどな」
「んっ、どうしたんだよ」
「急に表情が変わったけれど」
「あれなんだよな。キムチの匂いでなあ」
そのキムチの匂いの話からであった。
「どうもな。そのせいで」
「だからどうしたんだ？」
「困ったことがあったみたいだけれど」
「ああ、実はな」
こうしてその事情を話すのであった。
「今困ってるんだ」
「何だ？彼女とか以外の話なら相談に乗るぜ」
「女の子の話題以外ならね」
「もてなくてな」
しかし洪童は言った。

「それでな」
「ああ、じゃあな」
「さようなら」
今の言葉を聞いて素っ気無く帰る二人だった。手を振ってそれで別れようとする。本当に実に素っ気無い。愛想すら見せない位である。
「明日また会おうな」
「またね」
「おい待て」
しかし洪童は怒った声をその二人にかけた。
「まだ一時間目もはじまっていないだろうがよ」
「だから女の子の話以外と言っただろ？」
「彼女の話以外って」
「それしかないだろうが」
「まだ諦めていないのかよ」
「全く」
フックもネロも呆れてはいた。しかし帰るのは止めたのだった。

第百九十七話　タイとベトナムその七

そしてそのうえでだ。あらためて彼の前に来て話を聞くのだった。
「それでだ」
「キムチの話と関係あるのかな」
「あるも何も大ありなんだよ」
そうだというのである。フック自身の言葉ではだ。
「それもかなりな」
「キムチがって」
「どういう関係が？」
「何か最近キムチの匂いが嫌われてるらしいんだよ」
洪童は困った顔で二人に話す。
「雑誌とかネットでもな。しょっちゅう言われてるんだよな」
「そうなのか？」
「聞かないけれど」
フックとネロはそれを聞いてそれぞれ首を傾げさせた。
「キムチなんて今じゃ皆食べるしな」
「かなりポピュラーだよね」
「ああ、そうだよな」
「だよね」
二人はこうも言った。
「っていうか韓国人がキムチ臭いとか言う奴もういないだろ」
「むしろ食欲がそそられるっていうかね」
「俺も今までそう思っていたさ」
実際にそうだったと。洪童も話す。
「もう皆キムチ食べるよな」
「俺も好きだしな、結構」
「僕もね」
二人もそうだと返す。

「韓国料理だってな」
「食べる時多いし」
「けれど何か最近おかしいんだよ」
また話す彼だった。
「その雑誌とかネットでな。キムチの匂いのする奴はもてないとかあってな」
「じゃあ韓国人全員もてないのか？」
「それはないんじゃ」
「若しキムチ臭いのが嫌われるのなら」
しかし洪童はまだ言うのだった。
「俺はどうすればいいんだよ」
「ううん、それな」
「それだったらね」
二人も話を聞いているうちに親身になってきていた。そうしてそのうえで洪童に対して話すのであった。二人の顔は真面目になっている。
「キムチ食わないってのはどうだ？」
「それはどうかな」
「えっ、食わないのかよ」
洪童はそれを聞いてだ。まさにこの世の終わりが来たような顔になった。
そしてその顔でだ。二人に対して言うのであった。
「キムチとか？」
「だってよ。食うからキムチの匂いをするんだろ？」
「食べるからだよね」
「ああ、それはそうだけれどな」
洪童は困った顔で言葉を返す。
「しかしな。それってな」
「駄目か？」
「できないの？」

「俺、韓国人なんだよ」
彼が言うのはこのことだった。
「韓国人ってな。キムチがないとな」
「駄目か？」
「ひょっとして」
「死ぬんだよ」
本当に死にそうな言葉である。
「もうそれだけでな」
「キムチ食わないと死ぬのかよ」
「韓国人って」
「じゃあ御前等コリアンダーないとどうなんだ？」
逆に問い返す洪童だった。

第百九十七話　タイとベトナムその八

「スターリングもハンバーガーなかったり蝉玉もラーメンなかったら」
「辛いね、それは」
「生きる楽しみのかなりの部分がなくなるわ」
二人もすぐに返した。
「ちょっと以上に困るね」
「麺類は中国人の永遠の友人だから」
「そうだろ？韓国人にとってはキムチなんだよ」
実に切実な言葉であった。
「それがないとな」
「死ぬか」
「そうなんだ」
そこまでだというのだ。
「本当にな」
「韓国人ってどうなってんだ？」
「キムチがないと死ぬの」
「だから本当に死ぬんだよ」
洪童はこのことを力説する。
「冗談抜きでな。俺だってさ」
「御前もかよ」
「そうだよ、死ぬんだよ」
フックに対して強く話す。
「もうな。確実にな」
「難儀な体質だね、本当に」
ネロはそれを聞いて述べた。
「とてもね」
「俺もそう思うさ。とにかくな」

その洪童がさらに話す。
「俺はキムチがないと死ぬ」
「それは絶対になんだな」
「どうしても」
「しかしキムチの匂いは女の子に嫌われる」
同時にこのことも言う。
「じゃあどうすればいいんだよ」
「食わないと死ぬんならどうしようもないだろ」
「もうね。それはね」
二人だけでなく周りの皆もそれを言う。
「女の子を諦めるしかな」
「命あっての物種じゃない」
「そうそう、キムチを取らないと」
「ここはね」
「それも死ぬんだよ」
ところが洪童は皆にこうも返すのだった。
「女の子がなかったら俺は死ぬんだよ」
「どっちにしろ死ぬのか」
「ひょっとして生きる力弱いとか？」
フックとネロの突っ込みも呆れたものになってきていた。
「全く。本当に困った体質だな」
「自分自身にとって迷惑な体質だね」
「俺自身にか」
洪童は今の言葉にふと気付いた様に返した。
「俺自身になのか」
「だってよ。俺は特に困らないしな」
「僕もね」
そうだというのだった。
「見ている分には面白いしな」
「それに死ぬとかいうのは僕達じゃないから」

「ちぇっ、そういうことかよ」
二人の言う言葉を嫌々ながら理解した。理解したくはなかったが。
「じゃあいいさ。それはな」
「じゃあキムチ諦めるんだな」
「それか女の子？」
「どっちもなかったら死ぬんだよ」
洪童はまたこのことを言った。
「俺はどうすればいいんだよ」
「まあじっくり考えろ」
「本当に死んだりしないようにね」
二人の言葉が最後に来た。洪童にとっての試練の時が突然来た。

タイとベトナム　　完

２０１０・４・８

第百九十八話　絶キムチその一

絶キムチ

「生きるべきか死すべきか」
洪童は一人呟いていた。
「それが問題だ」
「兄さん、何を言ってるの？」
その彼に妹の春香が突っ込みを入れる。二人は今自分達の部屋にいる。そこで今から夕食というわけだ。料理や食器は春香が出している。
「ハムレットじゃない」
「シェークスピアだがな。今の俺は本当にそうなんだよ」
「どうしたの？不治の病とかはないから言っておくね」
「それはないっていうのかよ」
「兄さんに限ってそれはないわ」
こう言うのである。
「そういうキャラじゃないし」
「随分言ってくれるな」
「そんなこと言ってる間に御飯食べられるし」
妹までにも素っ気無く言われる。
「だからね」
「どうということはないか」
「そうよ、どうということはないわ」
やはり妹の言葉は素っ気無い。
「とにかく食べましょう」
「ああ。じゃあ今日の夕食は何だ？」
「羊の鍋よ」
それだという。
「お餅とお野菜も入れたから」

「いいな、それもか」
「あと当然キムチもね」
春香はこれも話に出した。
「それもたっぷりと入れたから。コチュジャンも当然ね」
「そうか。キムチか」
「兄さん好きじゃない。私もだけれど」
「韓国人にキムチ嫌いな奴がいるものか」
実際にはいたりするがそれはここでは言わない約束だ。
「そんな奴がな」
「じゃあ早く食べましょう」
「ああ。しかし」
しかしであった。彼はここで言うのであった。
「今は」
「ダイエットとかじゃないわよね」
「そんなことするものか」
それはすぐに全否定した。
「痩せたければ食べろだ」
「そうよね、兄さんはね」
「人間食べないと死ぬ」
そしてこうも言った。
「だからそれはないからな」
「じゃあ食べましょう」
「ああ、しかしな」
「しかし？」
「キムチか」
妹とその鍋を前に難しい顔をするのだった。
「どうもな」
「どうしたのよ、キムチよ」
春香は兄の言葉にきょとんとした顔で返す。
「兄さん大好きじゃない」

「ああ」
それは彼も認めた。
「そうだけれどな」
「じゃあ食べたら？」
また言う妹だった。
「早く。どうなのよ」
「ああ、わかってるさ」
「後でラーメンも入れるから」
春香はそれも入れるというのだ。
「いつも通りね」
「そうだな。鍋の最後はラーメンだ」
「インスタントラーメンね」
それだという。この時代においても韓国ではインスタントラーメンは人気の食べ物である。鍋の最後に入れて食べるのも同じである。
「それでいいわよね」
「ああ」
「ほら、だったら早く」
急かす様な口調になっている。

第百九十八話　絶キムチその二

「食べましょう。はい、御飯」
「あ、ああ」
兄の戸惑いをよそにそのうえで御飯を出してきた。御椀の上に山盛りになっている。その米は柔らかく炊かれている。見事なまでに。
「それじゃあな」
「はい、どんどん食べてね」
妹はにこりと笑って兄に告げる。
「まずは食べる」
「そうだな」
「人間食べないと死ぬからね」
「ああ、その通りだな」
「そして韓国人はキムチを食べないと死ぬ」
洪童の言葉そのままだ。
「だからね。いいわね」
「俺がいつも言ってることだな」
「そうよ」
まさにその通りだという。
「だから食べましょう。洗いものは」
「任せてくれ」
これは言うのだった。あまり元気がない様子はそのままにしてもだ。
「それはいつも通りな」
「わかったわ。卵も入れるわよね」
「それは後でいい」
卵は後でと答える洪童だった。
「ラーメンの時でいいな」
「それもそうね。ほら、お餅もういけるから」

「ああ、じゃあまずは餅だな」
「そうよ。お餅もたっぷりとあるからね」
そんな話をしてだった。結局そのキムチをたらふく食べる彼だった。彼は自分の欲求に勝てなかった。妹の急かす言葉があったにしてもだ。
そして朝はだ。春香は昨日の鍋のスープの残りを使ってだ。雑炊を作ってそれを兄と自分の前に出してきたのであった。赤い雑炊だ。しかもその中にはキムチが入っている。そして卵でとじている。
「朝はそれにしたから」
「またキムチか」
「そうよ、何につけてもキムチよ」
まさにそうだというのだ。
「いつも通りね」
「確かにいつも通りだけれどな」
「早く食べよう。学校行かないといけないし」
「それはわかっているけれどな」
「わかっていたら早く食べて」
朝も兄を急かすのだった。
「それじゃあ。早くね」
「ああ、わかった」
こうしてまたキムチを食べる洪童だった。そのうえで学校に行くとであった。早速フックとネロに対してこう言われたのであった。
「おい、こう言ったら何だけれどな」
「匂ってるよ」
「ああ、わかってるさ」
洪童も憮然とした顔で返す。
「キムチだよな」
「かなり食ったな」
「凄い匂いがするよ」
「だろうな。昨日鍋にたっぷりと入れてな」

このことを話すのだった。やはり憮然とした顔だ。
「それに朝は雑炊にも入れてな」
「だからか。そんなに匂うのは」
「いつも通りだね」
「韓国料理には欠かせないんだな」
彼はあらためて言った。
「本当にな」
「今更何言ってんだよ」
「それも韓国人が」
「再認識したんだよ」
自分の席に座りながら述べた。
「いや、本当にな」
「とにかく食ったんだな」
「キムチを」
「たっぷりとな」
その通りだと答える。
「食った」
「じゃあ女の子はどうするんだ?」
「そっちは」
「どうしたらいいんだ?」
本人も困った顔で言う。
「それで」
「どうしたらいいって言われてもな」
「ちょっとね」
しかしであった。二人も困った顔で話すのだった。

第百九十八話　絶キムチその三

「食ったものは仕方ないしな」
「匂いを消さないと」
「香水とかか？オーデコロンか」
洪童はふとこれを話に出した。
「それを使うのか？」
「ああ、それ止めておいた方がいいな」
フックがオーデコロンについては止めた。すぐにであった。
「それはな」
「駄目か」
「御前今までオーデコロンつけたことないだろ」
「ああ」
「あれは香りのバランスが難しいんだ。特にキムチの匂いとはな」
「そんなに難しいのか」
「キムチの匂いは癖がある」
フックはそのことをよくわかっていた。そのうえでの言葉だった。
「そこにオーデコロンとミックスさせるとな。中々合うのがない」
「そうなのか」
「店に行ったら教えてもらえるけれどな。しかし御前オーデコロンは好きか？あれはあれでかなり癖のある匂いのものが多いぞ」
「正直言って好きじゃないんだよな」
洪童自身の言葉だ。
「ああいうのつけるのはな」
「そうだよな。御前つけたことないしな」
「男の匂いは石鹸の匂いだろ」
そしてこんなことを言う。
「清潔感こそがそうだろ」
「それはいい考えだね」

ネロは彼の今の言葉には大いに頷いた。
「そういえば洪童って服も身体もいつも奇麗にしてるよね」
「シャツもトランクスもいつも着替えて」
洪童は実際にネロの言葉に応えて話す。
「それに」
「それに？」
「風呂だって毎日入ってるからな」
こう話すのだった。
「奇麗にするのには気をつけてるからな」
「それは本当にいいと思うよ」
「奇麗好きは女の子にもてる第一歩だからな」
「確かにそうだね」
「だからだよ。俺だってな」
彼はしっかりとした言葉で話した。
「そういうのはわかっているつもりなんだよ」
「オーデコロンに頼らないのはいいことだな」
フックがここでまた言った。
「俺にしてもあれはあまり使わないからな」
「御前がか？」
「意外か？それは」
「ああ、意外だな」
実際にそうだと返す洪童だった。
「外見とかかなり気を使うからな。それはしないのか」
「頼らないな。一つのものに頼ると他がおろそかになるからな」
「だからか」
「それに俺もな」
フックは今度は難しい顔になった。そのうえでの言葉だった。
「コリアンダーの匂いがするだろ」
「タイ人だからだな」
「僕もだけれどね」

ネロも笑って言ってきた。
「コリアンダーはベトナム料理でも使うし」
「あれの匂いも強いからな」
フックがまた言う。
「それをどうするかなんだよ」
「それか」
「そうさ。だから問題なんだよ」
彼はまた話した。
「あれの匂いとどう合わせるのかがな」
「それでか」
「ああ、色々と難しいんだよ。確かにお店で聞けばわかるさ」
「それも嫌なのか」
「そこまですることじゃないしな」
また言うのであった。
「だからな」
「そうか。だからか」
「ああ、オーデコロンはあまり使わない」
それがフックの結論だった。

第百九十八話　絶キムチその四

「そういうことさ」
「そうか。俺と大体同じだな」
「それで洪童」
今度はネロからだった。
「実際にはどうするの？」
「どうするかって？キムチだよな」
「匂いは石鹸じゃ消えないでしょ」
「キムチの匂いはそんな甘いものじゃないからな」
具体的に無理だと断言した。
「だからな。それはな」
「それでも女の子にはもてたいよね」
「男に生まれたからにはな」
洪童はここまで言い切った。
「女にもてたいだろ」
「そうだけれどな」
フックが彼の今の言葉に最初に頷いた。
「それはな」
「そう思うよな、やっぱりな」
「ああ。ただな」
「ただ？」
「御前は極端過ぎるだろ」
今度は呆れた顔で言うのだった。
「それもかなりな」
「極端か」
「極端だよ」
また彼に言う。
「かなりな」

「そうか？俺は普通だぞ」
「何かっていうと女にもてたいもてたいってな」
「生物としての本能じゃないか」
「それだけれどそこまでだとかえってもてないぞ」
正論だった。むっとした顔になっての洪童への言葉だった。
「それもな」
「そうか」
「そうだよ。まあそれでだ」
「ああ、それで」
「それは置いておいてな」
言っても駄目だとわかったのか。今の話を止めてそうしてその話を戻してきた。洪童の相手も女絡みだとかなり大変であるのだ。コツがいるのである。
「御前それでどうするんだ」
「女かキムチか」
「どっちにするんだ？」
それを具合的に問うのだった。
「どっちかにしないとやっぱり駄目だろ」
「だからどっちもな。ないとな」
「死ぬっていうのかよ」
「ああ、死ぬ」
断言だった。
「俺はそれで死ぬんだよ。どうすればいいんだよ」
「女もキムチもか」
「彼女が死ぬ程欲しい」
また断言をする。
「一人でいいからな」
「普通は一人だぞ」
「オットセイや猿は周りに幾らでもいるじゃないか」
所謂ハーレムである。尚ライオンもそうである。男にとっては羨

ましい話なのは間違いのない事実である。女もそうであるかも知れないが。
「俺はそこまで望んでいないけれどな」
「無欲なのかな」
「一応はそうだな」
フックは今度はネロの言葉に頷いた。
「一人でいいっていうのはな」
「相手が問題だけれど」
「俺を好きになってくれる娘でいい」
こう答える洪童だった。
「まあ好みもあるけれどな」
「どんな娘がタイプなんだ？」
「小柄で楚々とした感じでな」
フックの問いに応えてそれについても話すのだった。
「それで髪は黒くて長くしていて。まあ髪は伸ばせばいいからな」
「やっぱり無欲だよね」
「そうだな」
また頷く二人だった。洪童の話をまた聞いたうえでの言葉だ。

第百九十八話　絶キムチその五

「しかも自分を好きでいてくれる娘ならそれでいい」
「結構いい心掛けだな」
「そうか？」
「高望みする奴は多い。特にだ」
フックは腕を組んで前に出てだ。そしてこうも言った。
「アダルトゲームの主人公はだ」
「俺はああいうところまでいくか？」
「いかないな。だからいい」
それでいいというのである。
「一人でいい問いうのはな。それはいいことだな」
「本当に一人でいいんだよ」
言葉はかなり切実なものだった。
「それでキムチもな」
「それも外せないか」
「だからどうしたらいいんだよ。どっちも必要なんだよ」
必死の顔にもなっている。
「俺はどうすればな」
「死んでもらったら困る」
フックはこのことは言い切った。
「絶対にだ。それは困る」
「そう言うんだな」
「ああ、何度でも言うぞ。御前は死ぬな」
真剣な顔の言葉だった。戦場ではないというのにだ。
「何があってもな」
「友情か？」
「御前みたいな面白い奴が死んだら寂しい」
しかしフックは真顔でこうも言ったのであった。

「それもかなりだ」
「おい、俺はお笑い芸人か何かか」
「見ている分には飽きない」
肯定の言葉だった。
「ゴルゴダの丘の十三番目の人とはまた違った意味でだ」
「俺をあんな変態ブリーフ男と一緒にするな」
誰のことかすぐに察した洪童だった。この漫画もこの時代でもまだ続いているのである。ネコ型ロボットや仮面ライダー、光の巨人達と同じだ。
「幾ら何でもな」
「変態ブリーフ男って」
「男の下着はトランクスだろ」
今度はネロに対して言う洪童だった。そしてさらに言う。
「それに皆もそうだろ」
「まあブリーフはな」
「ちょっとね」
二人もそれには同意する。連合では男の下着は殆どトランクスかボクサーパンツになっている。女はショーツなのも昔から同じだ。
「とにかくだ。俺はな」
「ああ、死ぬなよ」
「絶対にね」
それはフックも言った。
「何があってもな」
「死んだら寂しいからさ」
「わかってるさ。それならな」
さらに言う洪童だった。しかしその顔は曇っている。
「本当にどうすればいいんだよ」
「キムチか女か」
「どうするかだよね」
「何度も言うが俺はどっちかがないと死ぬんだ」

これを確かに言うのだった。どうしてもだった。
「キムチもな。それに女の子もな」
「しかしキムチ臭いのが駄目なんだろ？」
「雑誌とかネットで書いてあったんだよね」
「何でなんだ」
今更になって困った様なことを言った。
「皆何でキムチの匂いが駄目なんだ。あんな食欲をそそる匂いがな」
「まさに韓国人の言葉だな」
「そうだね」
それは否定できなかった。まさに韓国人の言葉だ。韓国人はキムチがなければ生きていくことができない、彼も同じなのである。
「それはね」
「俺は死ぬつもりはないからな」
当然洪童自身もそうであった。
「絶対にな。だからな」
「じゃあどうするんだ？」
「それで」
「決めるしかないよな」
言葉が苦渋に満ちたものになっていた。しかしそれでも言った。

第百九十八話　絶キムチその六

「よし、俺はだ」
「ああ、御前はだ」
「どうするの？」
「キムチを食う」
胸を張って言い切った。
「キムチをな。食うぞ」
「食うのか、やっぱり」
「それは絶てないんだね」
「俺はキムチがなくてはどうしようもないからな。韓国人だからな」
洪童は見事なまでに韓国人だった。これはいい意味においてである。
「絶対にだ」
「よし、それはわかった」
「キムチは食べるんだね」
フックとネロはそれを聞いて確かな顔で頷いた。
「それならいいさ」
「けれど。もう一つの方はどうするのかな」
ネロはこのことを尋ねた。それならば、であった。
「女の子の方は」
「それもだ。女の子もだ」
それもだというのだった。
「絶対にゲットするぞ」
「匂いはどうするんだ？」
「そのキムチの匂いはさ。どうするの？」
「そんなことはどうでもいい！」
強引にそういうことにしてしまった。
「俺のこの匂いを強引に気に入ってもらう、何があってもな！」

「強引に言い切ったな。ある意味見事だな」
「けれど洪童らしいね」
二人もそれで納得した。確かにそれで引いては洪童ではなかった。
彼はあくまで前に進む、時として悪い結果になるがそれが彼だった。
「そうだな。じゃあそうしろ」
「それじゃあね」
「よし、やるぞ」
洪童の目は燃えていた。真っ赤にである。
「俺はな。このまま彼女をゲットするぞ」
「まあ頑張れ」
「それじゃあね」
二人の言葉はここで突き放したものになった。
「ゲットできるかどうかはわからないがな」
「それでもやるといいよ」
「おい、何か醒めてるな」
洪童は二人の言葉に突っ込んだ。
「何かこう応援とまではいかなくても。熱い言葉が欲しいんだけれどな」
「何となくわかるからな」
「だからね」
やはり醒めた口調であった。二人もそれを変えようとしない。
「未来が見えるからな」
「もう充分にね」
「未来は自分で切り開くもの！」
しかし彼は言う。
「先のことはまだわからないからな！」
「いや、予想はできるからな」
「それもかなり楽にね」
二人の言葉は変わらない。
「だから別にな」

「もうそれについては言うことはないから」
「ああ、俺は行く」
そして勝手に熱くなる彼だった。
「このままな」
「そうか。よし、この話は終わりだな」
「そうだね。騒ぎになったけれど」
二人はここでこう言い合った。
「今日の昼は韓国料理にでもするか」
「そうだね、景気よくね」
「ああ、食うぞ」
ネロに続いて洪童も言う。
「ソルロンタンにキムチをどっさり入れてな」
「それでキムチなんだな」
「それなんだね、もう」
「もう外せないからな」
満面の笑みでの言葉だった。
「キムチはな。それを食って俺に振り向いてくれる女の子をゲットするさ」
「ああ、それでいけ」
「大体引っ込み思案とか洪童らしくないしね」
「よし、じゃあ今日も派手に食うか。飯はカルビクッパだ」
そんな話をして気持ちを取り戻す洪童だった。彼は元に戻った。

絶キムチ　　完

２０１０・４・１４

第百九十九話　もてない君その一

もてない君

洪童はもてない。だがもてないのは彼だけではない。
カムイもだ。彼もであった。
「女の子いないのかよ」
「いるよ」
その彼に管が言う。
「世界の半分は女の子だよ」
「それは老若に性転換を入れてだな」
「うん」
相変わらず素っ気無い返答の彼である。
「そうだよ」
「ついでに言えば両性具有も入れてないか？」
「そういう人もいるね」
管の素っ気無い返答は続く。
「それがどうかしたの？」
「で、何が言いたいんだよ」
いぶかしむ顔で彼に返す。
「世界の半分がどうとかってな」
「だから女の子が欲しいっていうから」
「世界の半分がってか」
「そうなんだけれど」
「俺が言ってるのはそういうのじゃなくてな」
口を苦くさせて歪な形にしての言葉だった。
「あのな、彼女が欲しいんだけれどな」
「だから世界の半分がそうだよ」
「一人位いるっていうのかよ」
「連合の女の人の数二兆人」

管の言葉は続く。
「それを考えたら絶対に」
「流石に幼児とかお婆さんとかもう相手がいる人は駄目だろうが」
「それはそうだね」
「そうだね、じゃなくてな」
話が噛み合っていない。見事なまでにだ。
「俺は彼女が欲しいんだよ」
「だから相手は絶対にいるから」
「いるのかよ」
「運命の赤い糸」
今度出してきたのはこれであった。この時代においてもこの運命の赤い糸のことはよく知られている。それも連合中で、である。
「それがあるから」
「俺にもあればいいけれどな。中には生涯独身の人だっているしな」
「その時は諦めるといい」
「そうだな・・・・・って諦められるか」
すぐに突っ込み返すカムイだった。
「そうそうな。絶対にな」
「諦めないんだ」
「諦めてたまるか、俺はとにかく彼女が欲しいんだ」
このことを力説するのであった。
「誰かいないのか？本当に」
「だから二兆人いる」
「それはいいんだよ。あんまりにも丼勘定過ぎてわかるかよ」
「そうなんだ」
「そうだよ。しかし管な」
「うん」
「誰か知らないか？」
あらためて彼に対して問うた。
「誰かな。知らないか？」

「知ってるよ」
管はここでこう答えたのだった。
「一人ね」
「おっ、知ってるのかよ」
「僕の従妹でね」
「へえ、それでどんな娘なんだ？」
無意識のうちに身を乗り出して問うていた。しかしここでこう言われたのであった。カムイにとっては衝撃の言葉であった。
「小学校一年生」
「・・・・・・待て」
目の色を消して管に返した。
「小学校一年生っていったら幾つだ？」
「六歳だけれど」
相変わらずの無表情で答えた管だった。
「駄目かな」
「俺は十七歳だぞ」
「十一歳違いの夫婦も多いから」
「犯罪だろうがよ」
今度は声を荒いものにさせていた。
「小学生に手を出したらよ」
「十年待てば」
「待てるかよ、っていうか俺はロリコンか！？」
「そういう趣味の人もいる」
「俺はロリコンじゃねえっ」
ムキになり肩を怒らせての言葉だった。
「誰がそんなことするかっ」
「駄目なんだね、じゃあ」
「当たり前だろうが。小学生はパスだ」
「そうなんだ」
「そこまでするか」

カムイはまた言った。

第百九十九話　もてない君その二

「小学生以外にはいないのかよ」
「いるよ」
また言ってきた管だった。
「他にもね」
「今度はどんな人なんだ？」
「うちのお店のお客さんで」
「御前の店のお客さんってことは」
管の店は八条学園の中にある。そこで一家で暮らしているのである。
「学園の関係者だよな」
「そうだよ」
「そうか。じゃあ今度は普通の人なんだな」
「八十歳だけれど」
今度は老人だった。
「大学の名誉教授でね。去年御主人に先立たれて」
「おい、今度はお婆さんかよ」
また突っ込むカムイだった。
「極端過ぎるだろうがよ」
「小学生は駄目だって聞いたから」
「それで何でお婆さんなんだよ」
「年配の人がいいと思って」
だからだというのである。
「どうかな、これで」
「あのな。八十歳ってな」
カムイは激しく脱力しながらもそれでも管に返す。
「幾ら何でもそれはないだろうがよ」
「駄目なんだ」

「駄目も何も常識で考えてくれ」
「女の人は幾つになっても少女だよ」
「歳相応ってのを考えてくれ」
その脱力の中での言葉だった。
「俺は十七歳だぞ」
「うん」
「だったらな、幾ら何でも八十歳っていったらな」
「愛があれば年の差なんて」
「関係あるよ」
有無を言わさない言葉だった。
「言っておくけれどな」
「そうなんだ」
「俺のひい婆ちゃんと同じ歳じゃねえかよ」
そしてこうも言うのだった。
「お袋が四十で婆ちゃんが六十二でな。ひい婆ちゃんが八十なんだよ」
「代々早婚なんだね」
「そうだよ、ついでに言えばひい爺ちゃんも八十歳だよ」
「御存命？」
「ぴんぴんしてるさ」
何気にカムイの家族の話にもなっていた。
「高校卒業と一緒に婚姻届出して出産したんだよ、一年前に大叔父さんを一人産んでいてよ」
「高校生で出産していたんだ」
「そうだよ、ちゃんと学校に行ってな」
この時代では高校生で出産してもいいことになっている。中学生でもだ。常に人口を増やしたい連合全体の政策によってそうなっているのである。
連合では婚姻は十八歳からが普通だがそれ以前の出産も認知さえすれば学校側も退学等の処分は取らない。その辺りは寛容である。

「そうしたんだよ」
「そうだったんだ」
「そうだよ。それで何で八十歳の人紹介しようとするんだよ」
話は元に戻っていた。
「ひい婆ちゃんと同じ歳のよ」
「御主人が老衰で亡くなられてから寂しそうだったから」
「老衰？」
「百二十歳で大往生されてね」
「百二十っていうと」
「四十歳差の結婚だったんだ」
これまた物凄い話であった。
「実はね」
「何かそれも凄いな」
「うん、大学の教授と生徒の関係からはじまって。その時御主人が前の奥さんを亡くされていてその奥さんは事故で」
「話がややこしくなってきてないか？」
「よくある話だから。それで十九で結婚されて」
「じゃあダイアモンド婚までいったんだな」
話は何気にダイナミックなものになっていた。
「それはよかったな」
「だけれどね」
「そうか。御主人が亡くなられたんだな」
「どう？その人」
ぽつりと無表情で勧めてきた管だった。またしてもである。
「よかったら紹介するけれど」
「だからいいって言ってるだろ」
少しむっとした顔で返したカムイだった。

第百九十九話　もてない君その三

「その人はよ」
「いい人だけれど」
「だからひい婆ちゃんと同じ歳だろうが」
それをまた言うのだった。
「そんな人と交際できるかよ」
「じゃあ何歳までだったらいいのかな」
「四十八だな」
そこまでだというのだ。
「せめてな」
「そうなんだ」
「下は十四までな」
「ストライクゾーンは広いんだね」
「それ以上を二球も投げてきたのは誰なんだよ」
何気にそれを言う。やや嫌味に。
「全くな。無茶苦茶じゃねえかよ」
「気にしたら負けだよ」
「御前が勧めたんだろ。他に相手いないのかよ」
「いないよ」
今度もあっさりとした返答だった。
「もうね」
「そうか、いないのか」
「紹介所は？」
「無料のを利用してるさ」
無料というところに学生らしさが出ていた。
「出会いのあれな」
「そっちはどうなの？」
「駄目なんだよ」

落ち込んだ顔での言葉だった。
「これがな」
「そう、駄目なんだ」
「いつも会ったその瞬間でパスされるんだよ」
「合コンは？」
「そっちもな」
駄目だというのである。
「断られてばかりだよ」
「告白は？」
今度は古典的な方法だった。この時代でも当然の様に残っている。
これは断られた時の精神的ダメージは先の二つの比ではない。
「そっちは？」
「もう三百敗したぜ」
「三百なんだ」
「凄いだろ、野球のピッチャーでここまで負けるピッチャーいないだろ」
「勝つ方もいないね」
三百勝に到達したピッチャーは稀なままである。この時代においてもまさにそれは偉業である。二百勝ですら稀であるから当然である。
「そこまでは。もう殆ど」
「十七で三百敗だよ」
「どう言うべきかな」
「ここまで振られた奴はいないさ」
カムイは自嘲めかした顔になっていた。
「俺は振られた数ではエース中のエースさ」
「傷ついてる？」
「ダメージは受けたさ」
それは確かだというのだった。
「その度にな。けれどな」

「けれど？」
「いちいちそれに気落ちしてたまるか」
この辺りは流石であった。
「七日連続で振られたことだってあるさ」
「全員別の女の子だよね」
「そうさ、全員に振られたよ」
そうしたこともあったのだという。これもかなりのものだ。
「それも凄いだろ」
「まあ滅多にある話じゃないね」
「振られ方もよかったしな。俺の場合はあっさりと振られてばかりだからいいんだよ」
「だからいいんだ」
「振られ方にも色々あるんだよ」
こんなことも話したのであった。
「もうな。ダメージが残る振られ方もあるんだ」
「そうなんだ」
「振られるのは投げられた時と同じさ。柔道のそれとな」
「柔道と？」
「受身ってのがあるんだよ」
その何度も振られた人間の言葉だ。だからかなりの説得力があった。少なくとも彼はそうしたダメージのことはよくわかっているのだった。
「それを知らないで思い切りぶつけられたらな」
「怪我をするんだ」
「ああ、それも身体にじゃなくて心にな」
何時になく真剣な顔のカムイであった。その顔での言葉である。
「受けるから問題なんだよ」
「成程」
「それも投げられる場所は畳ばかりとは限らない」
こうも話す。

第百九十九話　もてない君その四

「コンクリートやアスファルトの上に投げられる場合もあるんだよ」
「そこが柔道と違うんだね」
「そうさ、告白には注意しないとな」
カムイの言葉は続く。
「受身を知らない奴はやるべきじゃない。ダメージを受けてからじゃ遅い場合もある。それをわかるかどうかが問題なんだよ」
「色々あったんだね」
「振られて自殺した奴だっているんだ」
これも昔からだ。
「周りも絶対にこのことをからかっちゃいけないしな。それって振られた奴にとっちゃ物凄く辛いからな。俺はそこまでされたことはないけれどな」
「けれど見たことはあるんだね」
「よくあることさ」
また言ったカムイだった。
「残念だけれどな」
「カムイはそういう時はどうしたの？見た時は」
「後で囃し立てた連中に言った。自分がそうなったらどうかってな」
真顔での言葉である。
「人間他人の痛みはわかりにくいものさ。受けてからわかる場合もある」
「受けてから。それはそうだね」
「心の傷が一番辛いんだよ」
「けれどカムイはそれでも告白するんだね」
「ああ、俺はするさ」
笑みを戻した。そのうえでの言葉だ。
「次こそはだ」

「そういう強さが囃し立てられないところかな」
「人間弱っている奴をさらに叩く習性もあるんだよ」
カムイの今の言葉は普段の彼とは違っていた。真剣そのものだ。
その言葉は何時になく哲学的で辛いものさえその中にはあった。
「残念だけれどな」
「醜いね」
「醜いのも人間なんだよ」
カムイはまた言った。
「奇麗なばかりじゃないさ」
「哲学的な言葉だね」
「そうか？哲学には興味はないぜ」
このことにはこう答えたのだった。
「そういうのにはな」
「そうなんだ」
「そうだよ。まあ三百回も振られてりゃある程度はわかるさ」
「奇麗なだけでなく醜くもある」
「それが人間さ。俺も振られ続けないとわからなかったさ」
カムイはまた言った。
「そういうものさ」
「成程ね」
「まあ御前が紹介できないのならな」
「だから二人いるけれど」
話は自然に元に戻っていた。まだ言う管だった。
「どうかな」
「だから却下だよ」
それはしっかりと返すカムイだった。むっとした顔だ。
「というか論外だよ」
「十一歳年下の相手もいるけれど」
「相手の年齢が問題なんだよ。小学校一年生だろ」
「うん」

「そんな娘と交際なんてできるかよ。向こうもそういうのわかってないだろ」
「そうかもね」
「そうかもじゃなくて絶対にそうだろ」
カムイはムキになったような顔になった。そのうえでの言葉だった。
「全く。何考えてるんだよ」
「気にしたら駄目だよ」
「気にしないでいられるかよ。誰を薦めるかって思ったらな」
「それじゃあ八十歳の人は」
「俺がせめて七十歳だったら考えていたな」
「それじゃあ玉手箱いる？」
浦島太郎のあれである。この時代でも浦島太郎の話は童話としてよく読まれている。当然桃太郎や金太郎もである。他にはかちかち山もある。尚この時代のかちかち山も改変されておりお婆さんは狸に殺されて鍋にされず殴られて寝込むだけになっておりその狸も兎に殺されず懲らしめられてそのうえでお爺さんとお婆さんに謝罪させられる結末になっている。何気にこうした改変というものは残るものなのである。
「それを使って一気に」
「御前そんなの持ってるのか？」
「ないよ。けれど煙で白髪になるから」
「それじゃあただの変装だろうがよ。そんなことするかよ」
「残念だね。折角彼女ができたのに」
「まだ言うのかよ」
カムイは管の言葉に唖然となった。それと共に冗談を感じたがそれはあえて言葉には出さず相手をするのだった。相手をしたらそれこそきりがないように思えたからである。
「ったくよ。まあとにかく今はな」
「自分で探すんだね」

「下は十四歳だ」
つまり中学二年である。

第百九十九話　もてない君その五

「それで四十八歳だな、上限は」
「守備範囲広いね」
「職業問わずで髪の色も肌の色もな」
どちらもだというのだ。
「問わないからな」
「そこまで言うのだったら人いないかな」
「いるさ、星の数程な」
今度はロマンチックな話になった。
「けれど告白しても全然な」
「三百敗なんだね」
「合コンも出会いも駄目でな」
このことも言うのだった。
「星の数程いても相手になってくれるのは一人なんだよ」
「一人だけいればいいんだ」
「何度も言うけれどな」
「そこは真面目なんだね」
「というか普通一人しか相手できないだろ」
カムイは口を少し尖らせてこう述べた。
「普通はな」
「イスラム教徒は四人までだけれど」
「連合じゃ一人だぜ」
あくまでサハラのムスリムの話だ。そのサハラにしても普通は一人だけである。四人を養うにはかなりの財力が必要なのはこの時代でも同じだ。
「それはな」
「そうだけれどね。一応コーランにはね」
「そう書いてはあるな」

「うん、だから」
「四人も一度に相手できたら凄いぞ」
カムイの今度の言葉はこうしたものだった。
「それこそな」
「確かにね。四人も公平にだから」
コーランはしっかりとそうしたことも書いているのである。
「それはかなりね」
「体力的にも精神的にも大変だぞ」
「できないんだ、カムイには」
「ああ、俺には無理だ」
しっかりと自覚していることだった。
「やっぱりな」
「成程ね」
「だからそれはしないさ」
彼はまた言った。
「浮気とかそうしたことはな」
「いいことだね、それは」
「けれどな。相手がな」
ここでまたしても困った顔になるのだった。
「いないからな」
「チャレンジし続けるしかないね」
「だからやってるんだよ」
「だからなんだ」
「俺は負けないからな」
勝手にこんなことも言うのだった。
「そう、何があってもな」
「それはいいことだよ」
それを聞いて静かに答えた管だった。
「人間諦めないことも大事だから」
「そうだよな。だから今日もだ」

「どうするの？今日は」
「俺は負けないんだよ」
こう言ってであった。尚何に対して負けないかということは全くわからない。とりあえずカムイにしても言ってみただけのようではある。
「そう、行って来る」
「何処に？」
「放課後にな。街に出てな」
「ガールハントでもするの？」
「そうさ。全ては出会いからなんだよ」
そうであるというのだ。
「だからちょっと行って来る」
「頑張ってね」
「御前はそういうことしないのかよ」
カムイは不意に隣にいる管に対しても言ってみせた。
「それはどうなんだよ」
「別に」
管の返事は無関心なものだった。問われてもこんな調子である、
「そういうのは」
「興味ないのかよ」
「うん、特に何も」
また言うのであった。
「だからね。一人で楽しんできたらいいよ」
「楽しんできたらか」
「うん、面白いから」
また言ってきた管だった。

第百九十九話　もてない君その六

「それじゃあね」
「ああ、じゃあ行って来るな」
こうしてこの日の午後はガールハントにかかるカムイだった。彼と一緒にいるのは洪童である。キムチ入りのお好み焼きを食べながら彼の横にいる。
その洪童にだ。カムイは細めさせた目で言った。
「なあ」
「何だよ」
「御前がいるのはいいとしてな」
「じゃあ特に何も言うひつようないだろ」
「何で御前それ食ってるんだ？」
問うのはそちらだった。キムチに関してである。
「キムチ入りのお好み焼きなんてな。何でなんだよ」
「悪いか？お好み焼き食って」
「ガールハントの時に食うものじゃないだろ」
「お好み焼きは身体にいいんだぞ。知らないのか？」
「それは知ってるさ」
その細めさせた目のままの言葉であった。
「それはな」
「じゃあいいじゃないかよ」
「何でキムチを入れたんだよ」
その細かい内容にもなる。
「キムチ入りのお好み焼きなんてな。何でなんだよ」
「美味いからだよ」
だからだと返す洪童だった。見れば座布団程もあるその巨大なお好み焼きを凄まじい勢いで食べていく。相変わらずの健啖家である。
「キムチは韓国人の味の友だぞ」

「ガールハントに行くんだぞ、これから」
「ああ、だからだよ」
「じゃあ匂いなんてさせるなよ」
カムイは憮然とした顔で返した。
「そんなの食ってな」
「いや、俺は決めたんだ」
「何をだよ」
「俺は食うんだよ」
こう言うのであった。
「キムチをな。何があってもな」
「言っている意味がわからねえよ」
「俺がわかればいいんだよ」
これが洪童の返答だった。
「だから気にするな」
「俺とは離れて声をかけろよ」
カムイはあくまでキムチを食べる洪童にこう返した。
「いいな、それはな」
「わかったさ。じゃあな」
「ああ、食ったら行くか」
「ああ」
二人はお好み焼き屋にいるのだった。尚カムイはソーセージ焼きそばを食べている。その量にしても優に十玉はありそうである。
そのそれぞれかなりの量のお好み焼きと焼きそばを食べてから店を出る。そうして二人が向かうのは街のアーケード街であった。
そこに入ってだ。二人は満足した顔で話していた。
「食ったな」
「ああ」
「美味かったな」
二人は笑顔であった。そのうえで今は缶コーラを飲んでいる。やはりお好み焼きや焼きそばに合うのは炭酸飲料である。この時代で

もそれは同じだ。
そのコーラを飲みながらだ。二人で話をしていた。
「御前随分鰹節かけていたな」
「そうだな。御前青海苔滅茶苦茶使ってなかったか？」
「御前もな」
こんな話をしていた。
「あとソースにマヨネーズな」
「どっちも欠かせないよな」
「まあそれはな」
ここでカムイは言った。
「焼きそばにはかけないけれどな」
「そういえば御前等そうしたのはかけていなかったな」
洪童はカムイが焼きそばにマヨネーズをかけなかったことについて問うた。
「それは」
「焼きそばはマヨネーズにはいらないだろ」
だからだというのだった。
「紅生姜だろ」
「それか」
「ああ、それだよ」
カムイは力説に入っていた。

第百九十九話　もてない君その七

「焼きそばにはそれが一番だよ」
「焼きそばにもキムチだろ」
だが洪童はここでもキムチを話に出すのだった。
「やっぱりな」
「キムチは絶対なのかよ」
「韓国人にとってはそうなんだよ」
彼もまた力説するのであった。
「もうな。何につけてもキムチだろ」
「いい加減キムチ臭くならないか？そこまで食ったら」
「いいんだよ、それが韓国人なんだよ」
こうも言うのだった。
「韓国人はまずキムチなんだよ」
「だからか」
「そうだよ。だから焼きそばにもキムチなんだよ」
「キムチ焼きそばか」
「美味いぞ」
洪童は言う。
「それもかなりな」
「そうか、美味いのか」
「ああ、美味い」
断言であった。
「御前も食ってみろよ」
「俺もキムチは食うさ」
「じゃあいいよな」
「それでも三食いつもキムチはないだろ」
「韓国人の主食の一つだぞ」
「もうそうなっているのかよ」

「なってるんだよ。朝も昼も晩もキムチなんだよ」
とにかくキムチなのだという。尚韓国でもこの時代では米以外の主食もかなり食べる。麦やとうもろこしのパンやジャガイモ、サツマイモ、それに稗や粟、大豆等だ。尚稗や粟は大抵米と一緒に食べられている。そうした様々な主食が豊かにある、それが連合なのだ。他にも米のパンもある。
「絶対にな」
「パンにもキムチか」
「ああ、食パンの中に挟んでな」
「そういえばキムチサンドもあったな」
「美味いぞ」
しかも味もいいというのである。
「かなりな」
「そうか、あれそんなに美味いのか」
「日本にも納豆サンドとか納豆パンとかあるだろ」
「まあな」
アイヌ連邦は元々日本の国家であった。北海道にいたアイヌ民族の一部が宇宙進出の時に独立したのである。独立してから今に至るまで日本とは密接な関係にあり兄弟国家の関係にあるのだ。
「美味いぞ」
「それと同じだよ。俺達に言わせるとは」
「言わせると？」
「日本人は納豆にこだわってるぞ」
「俺もか」
「アイヌも琉球も日本だろ？元々」
これは洪童も知っていることだった。
「だったらそれもな」
「当然か」
「ああ、当然だよ」
こう言うのだった。

「実際に納豆よく食べるよな」
「国全体がそうだな。料理も同じものが多いからな」
「多いか」
「ああ、多い」
また答えたカムイだった。
「お互いに影響を与え合ってもいるしな。これあ琉球も同じだな」
「仲のいい兄弟国家同士なんだな」
「ああ、かなりな」
それはあるというのであった。
「大統領が就任したら最初の外遊先は絶対に日本だしな」
「そうだな、確かにな」
「それは事実だな」
カムイはしっかりと認めた。
「それで納豆か」
「日本人は納豆臭いぞ」
洪童はここでこのことを言った。
「それもかなりな」
「納豆臭いか」
「ああ、匂うな」
「自覚はしていないんだけれどな」
「少なくとも醤油の匂いは絶対にする」
こうも言ったのだった。
「それは間違いないからな」
「醤油か。俺達もか」
「御前もダンもな」
その琉球人のダンもだというのだ。
「醤油の匂いがきついな」
「醤油か」
「俺はキムチの匂いがするんだよな」
「ああ」

カムイは洪童に対して言葉を返した。
「それも間違いない」
「そうだろ?それと一緒だよ」
「じゃあ日本人が他の国で女の子に声をかけても」
カムイはここで気付いた。

第百九十九話　もてない君その八

「問題になるか」
「キムチ程じゃないかも知れないけれどな」
「やっぱりそうなるか」
「匂いは気になるものだからな」
「醤油もか」
「ああ、そうだな」
洪童は話す。
「やっぱり気になるぞ」
「そういうものか」
「キムチだけじゃないんだ」
「キムチだけじゃないさ」
そして洪童はこうも言った。
「コリアンダーだってそうだしな」
「ああ、そういえばフックやネロは」
「わかったな」
「ああ、匂いがするな」
それに気付いたのだった。
「いつも食べているからか」
「そうさ。いつも食べていれば匂うんだよ」
こう話すのだった。
「日本人の場合はそれが醤油になるんだよ」
「それで思ったことだけれどな」
「それで？」
「イギリス人はどういう匂いがするんだ？」
エウロパのその国を話に出したのである。
「それだとな」
「匂いなんてしないんじゃないのか？」

洪童の返答は実に素っ気無いものだった。
「それだったらな」
「そうだよな。イギリス人の味覚ってな」
「あれだろ？調味料は塩と酢だけなんだろ？」
こう話されるのだった。
「それだけなんだろ？確か」
「ああ、そうらしいな」
カムイもそれに応えて言う。
「それで匂いなんてな」
「それを考えたら匂いがするのもいいだろ」
「というかイギリス人は何をどうやったらそんな料理のままでいられるんだ」
「エウロパだからだろ」
洪童の今の言葉は完全に偏見である。
「だからだろ」
「それでか」
「素材を大事にするんだろ？あそこは」
「そう言っていつも自慢しているらしいな」
「それで俺達の料理なんてな」
ここでは連合全体の料理のことを言うのだった。
「調味料や香辛料を乱暴に入れただけの野蛮な料理だっていうからな」
「調味料を利かせるのはかえって駄目なんだな」
「あそこはな。フランスもそう言うしな」
「けれどイギリスは違うんだろ？」
「ああ、あそこはただ下手なだけだ」
言い切った。
そしてであった。洪童は言った。
「味覚がないんだよ、あそこの連中はな」
「何か戦争でイギリスに行った兵隊さん達が本気で怒ったらしいな」

「その料理のまずさには」
そうしたエピソードもあったのである。尚連合軍の者達はエウロパにおいてその料理は味がないと常に文句を言っていたのである。
「それで悶着もあったらしいな」
「大変だったんだな」
「しかも食う量も少ないらしいな」
「えっ、少ないのか」
「エウロパの連中の方が小さいからな」
「ああ、そういえばそうだな」
カムイも洪童の今の言葉に頷いた。エウロパの成人男子の平均身長は一八〇前後である。それに対して連合の成人男子のそれは一九〇を超える。食べているものの違いがここに出ているのであった。
「それのせいか」
「俺達だって向こうに行けばかなり背が高いらしいしな」
「俺達背は普通だと思ってたんだがな」
「それでも向こうだと高いんだよ」
洪童は言う。
「何かバイキングみたいだって言ってたらしいな」
「バイキングか」
「ああ、バイキングな」
それだというのである。
「そこまで違うらしいな」
「俺達向こうじゃそうなのか」
「だから食う量だって違うんだよ」
「味がなくて食う量も少ないのかよ」
カムイはここまで聞いてうんざりとしたような顔になった。
「嫌な話だな」
「やっぱり食わないとな」
「匂いがするまでだな」
「ああ、そこまで調味料や香辛料を効かせたのじゃないのな」

「それに量もな」
幾ら調味料を多く使っても少ししか食べないのでは匂いはつきはしない。つまり匂いの強いものを多量に食べることなのである。
「必要だからな」
「そういうことか」
「ああ、だからキムチの匂いもいいだろ」
「そうなるな」
「じゃあ行くぞ」
「ああ」
あらためてガールハントの話になった。
「そして女の子をな」
「ゲットだよな」
「今日こそはだよ」
今の洪童の言葉はもてないが故のものだった。
「もうな。絶対にな」
「そうだよな。俺も」
カムイもそのもてないが故の言葉を出していた。
「今日こそはな」
「よし、それじゃあな」
「行くか」
「ターゲットロックオンだ」
こうしてガールハントをはじめようとする。しかしそれは突如として現われたとてつもない災厄によって中断されることになった。
その災厄とは。

もてない君　　完

２０１０・４・２２

第二百話　シャバキ復活その一

シャバキ復活

カムイと洪童はガールハントをはじめようとした。しかしここで。

街が急に騒がしくなったのだ。それは。

「で、出たあっ！」

「あいつだ！」

「何でこんなところに！」

まるで爆発が起こった様な騒ぎである。

「に、逃げろ！」

「警察呼べ！」

「軍隊だ！」

「軍隊って」

「何だ？一体」

カムイと洪童も騒ぎがしている方を見ていぶかしんだ。

「まさかとは思うが博士か？」

「天本博士がまたやったのか？」

その騒動の人物を想定したのだ。連合で随一のナンバーワンのお騒がせ人物である。それは最早歩くブラックホールと言っても過言ではない。

「おい、じゃあどうするんだ？」

「逃げるか？」

二人も避難の話をはじめる。流石に博士が出て来てはガールハントどころではない。逃げなければ何に巻き込まれるかわかったものではないからだ。

「しかしな」

「そうだよな」

そしてこんな話もする二人だった。

「いい加減あの博士はな」
「永久に隔離できないのか？」
「だよな。エウロパ軍よりやばいだろ」
「あんな危険物を野放しにしてたらな」
もっと言えば連合軍でもどうしようもない存在なのだ。
「しかし早く逃げないとな」
「危険だな」
二人はそのまま去ろうとする。しかしであった。
来たのは博士ではなかった。もう一人の危険人物である。それは。
「げっ、シャバキ！？」
「生きていたのかよ」
「おい、あいつは生きているぞ」
「ああ、そうだったな」
カムイに言われて思い出した洪童だった。
「隔離されているだけで」
「そうだよ。隔離されているだけなんだよ」
あくまでそれだけなのだった。
「けれどその隔離されている先がな」
「そうだよな。精神病院の地下深くだったよな」
「そうだよ、そこだよ」
こう話されるのである。
「そこに隔離されていたのにな」
「何で出て来られたんだ？」
洪童はその彼を見ながらまた言った。
「おかしいと思わないか？」
「いや、誰でもそう思うだろ」
カムイもこう返す。
「あんな場所それこそアルセーヌ＝ルパンでもサイモン＝テンプラーでもな」
「脱出できないよな」

「ああ、絶対に無理だ」
カムイは断言した。
「それをどうして出て来たんだろうな」
「わからないな。しかし今度はあいつな」
「ああ。何をするんだろうな」
それが問題だった。そしてそのシャバキが喚いていた。
「人類滅亡の序曲だ！！！！！！」
「ああ、また言ってるよ」
「そればっかりだな」
カムイと洪童の目は冷めていた。
「何かあいつの言うことってな」
「一つ一つが矛盾してるからな」
「出鱈目しか言わないからな」
「本人は気付かないけれどな」
それがシャバキであるのだ。
「しかし。今度は何だ？」
「何言うんだ？」
それが問題であった。そのシャバキの言葉は。
「出て来る！伝説の怪獣が！」
「怪獣！？」
「何だそれ」
「アポロードスの預言書にあるあの妖怪が！」
言っているそばからだった。怪獣が妖怪になっている。
「宇宙を飲み込もうとしているのだ！」
「ラグクラフトみたいだな」
「ああ、それか？」
「人類は滅亡する！」
まさにいつもの台詞である。そして。
「無数のブラックホールの突然発生によって！」
「今さっき怪獣って言ったよな」

「妖怪じゃなかったか？」
相変わらず言っていることが完全に破綻している。
「恐ろしい！」
「恐ろしいのはあんただよ」
「だから何でここにいるんだよ」
「そう、全てはエドガー＝ケイシーの陰謀」
今度は二十世紀の予言者である。

第二百話　シャバキ復活その二

「闇のアカシックレコードに洗脳された彼の策謀なのだ！」
「言っている意味は相変わらずわからねえな」
「っていうか滅茶苦茶言ってるだけだろ？」
常識人にはそうとしか聞こえない。
「シャバキの言葉ってな」
「まあそうか」
そんな話をしながらだった。見ていく。そしてシャバキの次の言葉は。
「おおっ！！」
突然上を見て言ったのである。
「見える、見えるぞ」
「今度は何だ？」
「何が見えたんだ？」
「あの一万人委員会、そうか奴等が黒幕か」
こんなことを言い出したのだ。
「あいつ等だったのか」
「本当に全然変わらないな」
「そうだな」
カムイと洪童は完全に醒めていた。
「あれじゃあ隔離されても当然だな」
「どう見てもあれだしな」
「他の知的生命体と手を組みそして」
さらに言う言葉は。
「アメリカ政府や中国政府と結託し！」
「今度は大国か」
「そして次に出るのはあれだな」
「ユダヤ＝フリーメーソンが今！」

こうした陰謀論ではこの時代も出る名前だった。
「その隠された牙を剥く。あのモーツァルトの調べに乗って！」
「モーツァルトっていったらな」
ここでカムイがふと言った。
「あれだぞ。フリーメーソンに暗殺されたって説があるんだが」
「そうなのか」
「ああ、サリエリ説もあるけれどな」
この時代でもこの議論は続いている。人類史上最高の音楽の天才の急死は尚もはっきりしていないのである。尚彼の墓標はエウロパにある。
「そもそも暗殺かどうかすらわからないけれどな」
「暗殺説ではそっちもあるのか」
「一応な。まあ信憑性はな」
「はっきりしないか」
「少し眉唾なものもある話だ」
こう洪童に話すのである。
「実際な」
「そうだったのか」
「魔笛にフリーメーソンの奥義が隠されているという話もある」
その説も残っている。
「しかし実際のフリーメーソンはただのキリスト教の団体だからな」
「ユダヤですらないんだな」
「ああ、違う」
それも否定されるのだった。
「だから本質的に矛盾した設定なんだがな」
「あの兄ちゃんの頭の中ではそうじゃないみたいだぞ」
「元々おかしいからな」
洪童の言葉は身も蓋もないものだった。
「連合随一の奇人変人だからな」
「あの博士と並ぶな」

「ああ、眉唾とか矛盾とか一切頭に入らない人だからな」
まさにそうした人間であるのだ。
「そもそも本当にユダヤ、イスラエルが謀略とかしていたら」
「あの兄ちゃんすぐに抹殺されるよな」
「抹殺できるかどうかはわからないけれどな」
シャバキは怪しい拳法も使うからだ。それは最早拳法ではなく妖術の類なのだがそういうことになっているのである。シャバキの言うことではだ。
「それでもそうされるだろ」
「それで何もなっていないのは」
「そういうことがない何よりの証拠だよな」
これが結論だった。
「あの兄ちゃんの言っていることについてのな」
「おお！」
シャバキはまた喚きだした。不意に上を見上げてだ。
「見える、見えるぞ」
「今度は何を見たんだ？」
「というかこいつ預言者だったのか？」
「酷い預言者もいるもんだよ」
周りはそんな彼を取り囲んで口々に言う。その中には携帯を出して。
「ああ、ここです。はい」
「こっちに出没しています」
何人か何処かに連絡をしていた。

第二百話　シャバキ復活その三

「すぐに来て下さい」
「さもないと何するかわからないんで」
どうやら警察か軍隊に連絡しているらしい。シャバキという男は最早連合共通の危険人物である。歩く迷惑とまで言われている存在だ。
「御願いします」
「すぐに捕まえて下さい」
こう連絡される。そしてだった。
シャバキの絶叫を聞くのだった。今度言う言葉は。
「ナチスの残党だ！ラストバタリオンだ！」
この組織の名前が出て来たのだ。
「今それが出て来る！ヒトラーが復活したのだ！」
「ヒトラーか、今度は」
「そう来たか」
皆それを聞いて静かに呟いた。
「ハルマゲドンとかだと思ったんだけれどな」
「ソ連の復活とか言うとも思ったんだけれどな」
「サン＝ジェルマン伯爵とかな」
とにかく無意味にネタの多い男なのである。
「それじゃなくてそう来たか」
「ナチスネタもよく出るよなあ」
「本当に」
「今ここにドイツ第四帝国が蘇る！」
エウロパとは言わないのがシャバキだ。
「そう、あのハーケンクロイツが禍々しく回転してだ！」
「言っている意味わかるか？」
「いいや」

カムイは洪童の問いに首を横に振る。
「理解できん」
「だよな。ハーケンクロイツが回転？何だそりゃ」
「多分適当に言っているだけだ」
いつものことではある。
「だからな」
「そうか、気にすることはないか」
「そう思うけれどな」
こう話している間にもシャバキの絶叫は続いていた。
「恐ろしい、何という恐ろしいことだ」
「恐ろしいのはあんただよ」
「あんたが一番恐いっての」
二人はすかさずシャバキに突っ込みを入れた。
「全くな」
「しかし。本当にどうして脱出したんだ？」
それがそもそもの謎だった。
「一体な」
「しかもどうして日本になんだ？」
「俺は死なない！」
シャバキはさらに破天荒な絶叫を続ける。
「そう、一万人委員会を倒すその日まで！」
「だからそれ実在するのか？」
「そうよ」
「ねえ」
周りの人達もそれを言う。
「前は三百人委員会とか言ってたのに」
「それが一万人になってるし」
「論理的に滅茶苦茶だし」
「そうだよな」
「来たか！」

また何かを勝手に見たシャバキだった。
「おのれラストバタリオン！」
「ああ、いたか」
「いて欲しくなかったですね」
「全くだよ」
見れば連合軍と警察だった。皆シャバキの姿を確認して早速うんざりとした顔になった。本当に今ここにいるとは思いたくなかったのだ。
「精神病院で隔離されていたのに」
「また出て来たのか」
「脱走とかそういう人様に迷惑な才能には恵まれてるからな」
「人の役に立つ才能はないからな」
「ある意味凄い奴ですね」
そうした意味では天本博士と同じである。まさにお騒がせ人物なのだ。
「とにかくだ。催涙ガスを用意しているな」
「はい、ここに」
「あとこれも」
ビームライフルも出て来た。
「ショックで一瞬で気を失うようにしています」
「ウルトラザウルス用です」
三十メートルに達する巨大恐竜である。

第二百話　シャバキ復活その四

「それも一撃で気絶させられます」
「これでいいですよね」
「ああ、それでもないとな」
駄目だというのだ。連合軍はその武装を遠慮なく持って来ていた。見れば戦車まであるし上空にはあの巨大戦艦まで来ている。
「あれティアマト級だよな」
「ああ、間違いない」
「あれだよ」
連合軍の象徴とも言える二十キロに達する巨大戦艦である。一隻で一個艦隊に匹敵する強さであるとまで言われ一個艦隊に一隻ずつある。
それが上空に展開している。艦載機まで出してきている。
「大捕り物だな」
「というか戦争みたいだけれど」
「確かにね」
市民達は上空の様子を見てそれぞれ言う。
「何かそのまま降りてきたら」
「スターウォーズみたいだけれど」
「だよなあ」
映画史上に残る古典的名作である。尚連合軍は何故か反乱軍に位置付けられエウロパ軍が帝国軍とされている。規模は全く逆であるが。
「凄い迫力」
「あれを持って来るって」
「たった一人の人間に」
「相手はシャバキです！」
「市民の皆さん気をつけて下さい！」

警察も警察で動いていた。市民達を安全な場所に誘導しはじめたのだ。
「さあ、こっちです！」
「早く避難を！」
「えっ、シャバキを見たいのに」
「そうよ、折角出没したんだから」
「見ないとな」
「そうしないと」
しかし市民達は口を尖らせて抗議する。彼等にしてみれば折角出て来た珍獣を見てだ。そのうえでこう言って残ろうとするのだ。
「じゃあ代わりに見せる方法用意してくれよ」
「何かないの？」
「それはもう実況中継しますから」
「後でパソコンでも流しますよ」
マスコミまで来ていた。彼等も働いている。
「ですから今はここは避難を！」
「後は私達に任せて下さい！」
また警官達が言う。こうして市民達は避難させられた。
その中にはカムイと洪童もいた。二人は今は携帯を出していた。そこにはしっかりとシャバキが映っている。しかも動いている。
「生で見られなくなったけれどな」
「ああ、こうして携帯で見るか」
「そうするか」
「何処か店に入るか？」
ここで洪童が提案してきた。
「今からな」
「ああ、喫茶店にでも入るか」
「そうしようぜ」
こう提案するのだった。
「それでどうだ？」

「ああ、わかった」
カムイも彼の言葉に頷いた。
「それならな」
「とりあえず連合軍、警察とあいつの対決だな」
「凄いことになったな」
唸る様に呟くカムイだった。
「正規軍との戦いか」
「凄いどころじゃないだろ」
洪童も唸るしかなかった。
「何処をどうやったらこんな展開になるんだ？」
「たった一人にあの巨大戦艦がかよ」
「不沈戦艦がな」
ティアマト級巨大戦艦はエウロパ戦役では一隻も沈んでいない。
エウロパ軍の攻撃をことごとく弾き返してきたのだ。宇宙海賊との戦いもだ。
その巨大戦艦が出て来てだ。市民達はさらに興奮していた。
「よし、やれ！」
「どんどんやれ！」
それぞれの携帯を見ながら応援している。

第二百話　シャバキ復活その五

「シャバキを捕まえろ！」
「頑張れよ！」
「くっ、国家権力の弾圧か！」
その巨大戦艦を見上げて言うシャバキだった。
「おのれ、やはり俺は誰かに監視されている！」
「監視されてるのは事実だけれどな」
「それはな」
連合軍の面々もそれは否定しない。
「というかあんた危険人物だから」
「自覚しないんだろうな、やっぱり」
「頭のおかしい奴は自分を自覚しないからな」
軍人らしい冷静な分析だった。尚日本陸軍も冷静な分析をしていたことは意外と知られていなかった。ただ人を見る目がなかっただけだ。
「さて、どう捕まえる？」
「無駄に身体は丈夫だからな」
「それが問題なんだよな」
「御前達の後ろにいるのは誰かわかっている！」
シャバキはその連合軍の軍人達を指差しながらまた喚く。
「そうだ、あの他の知的生命体だな」
「知的生命体キターーーーーーーーーーッ！！」
「定番キタワァ・・・・・」
携帯で見る市民達は今のシャバキの言葉に喝采を立てる。
「今出るか今出るかって思ったがな」
「やっと出て来たよな」
「待ってたよ」
こう言う彼等だった。

「しかし。あれだろ?その知的生命体って」
「ああ、いつものあれだよ」
「リトルグレイだよ」
この存在だった。二十世紀から健在の息の長い宇宙人である。
「他に宇宙人いるだろうにな」
「あいつの頭の中じゃ知的生命体って二つしかないみたいだな」
「そうだよな、前から思っていたけれどな」
「実際はな」
それを話すのだった。
「もっといるのが普通だろ?」
「ウルトラマンだってかなり宇宙人いるしな」
「そうだよな」
こう話されていくのだった。特撮の方がシャバキの発言より現実味があるのである。それだけシャバキが滅茶苦茶だということである。
「それで何で何時までも二つだけなんだ?」
「私達人類とリトルグレイだけしかいないって」
「しかもリトルグレイってどの星にいるんだ?」
この疑問もあった。
「シャバキってそこまでは言わないんだよな」
「っていうかシャバキ頭脳じゃあれなんでしょ」
「あれって?」
皆あれやこれやと話をする。今の彼の行動は連合中に実況されている。それは最早完全にエンターティメントとなってしまっているのでる。
「そんなことはどうでもいいんでしょ」
「いや、侵略者だろリトルグレイって」
「シャバキの頭の中じゃ実在するんだから」
言葉を換えれば彼の頭の中以外には存在しない。
「そういう相手なのに?」

「本拠地を知らない？」
「っていうかそこまで考えてない？」
「どうなのそれって」
実際に考えていない。これが問題であった。
「ロズウェル事件から謀略しているらしいけれど」
「ああ、あの事件か」
「あれ本当にあった事件かね」
「さあ」
アメリカ政府との密約があったとされている。このことも実際にはかなり眉唾である。というよりかは架空の話である可能性が高い。
「疑わしいし」
「確かに」
殆どの人間が思っていることだった。
「アメリカ政府が何時の間にか中央政府になってるし」
「そのプロセスも言わないしな」
「だからそんなことはどうでもいいんだろうな」
シャバキにとってはそんなことは些細なことでしかないのだ。
「しかし。無茶な奴だよな」
「おまけに一人で軍隊と戦うしな」
「どうなるんだ？」
皆その展開に注目していた。
「はじまったぞ」
「軍隊が銃を向けたぞ」
「っていいのかね」
一人が言ってきた。

第二百話　シャバキ復活その六

「一応素手だけれどな」
「けれどテロリストと変わりないからな」
「下手なテロリストより危険だからな」
これもまた事実だ。シャバキは存在自体が危険物である。
「まあそれも仕方ないな」
「さて、どうなるか」
「シャバキも構えたしな」
実際に彼も構えを取っていた。戦いがはじまろうとしていた。
「さて、何をするかな」
「今度は」
「行くぞ！」
そのシャバキの言葉だ。
「予言流奥義！」
「んっ！？」
カムイは今のシャバキの言葉を聞いてあることに気付いた。
「前言っていた格闘技の流派とは違うんじゃないのか？」
「言っていることが常に矛盾している奴だぞ」
洪童がこのことを言った。
「それ位何でもないだろ」
「何でもないのか」
「ああ、そんなことを気にする奴じゃないからな」
シャバキは決して過去を振り返らない。彼にとってはそんなことはどうでもいいことなのだ。尚未来も僅か一日に数多くのことが起こると主張してもいる。
「大体な。あいつの言うことを全部真実とするぞ」
「ああ、真実だと仮定するんだな」
「妄想を真実にするぞ」

珍しくまともなことを言う洪童だった。
「そう考えるぞ」
「ああ、有り得ないけれどな」
「有り得ないにしてもだ」
それでも言うのであった。確かに妄想ではあるがだ。
「全部真実とする」
「人類は一日に何度滅亡するんだろうな」
「まず宇宙人が攻めてくる」
シャバキの主張の定番だ。
「そして宇宙が崩壊する」
「ブラックホールだったか？」
「あと大規模な隕石の大量発生だったな」
それもあると主張しているのである。
「宇宙の惑星全部を襲ってな」
「どんな隕石の発生なんだ、それは」
「俺にもわからない」
洪童はそもそも理解する気もない。
「何処をどうやったら宇宙規模で出て来るのかな」
「そして他にもあったよな」
「ああ、宇宙磁気で人類の脳が破壊される」
「その根拠もわからないんだったな」
「電波だからな」
これはシャバキへの言葉である。
「電波で脳が破壊されるらしい。それに」
「それに？」
「一万人委員会に人類が全部洗脳されたな」
「あれっ、一万人委員会って人類滅亡を企んでいるんじゃなかったのか？」
「時と場合によって言うことが変わるからな」
常にそうなのがシャバキである。

「まあ一万人委員会は同時に世界を滅亡させようともしている」
「行動が矛盾しているな」
「まあそれでも一万人委員会も出て来てだ」
「ナチスの残党もだよな」
「ああ、ヒトラーが復活してな」
千年以上も前の独裁者がである。
「そしてエウロパからアンゴルモアの大総統が出て来る」
「ああ、火星のあれだよな」
「それがエウロパを統一し一千億の人間を全部兵隊にして連合に攻め寄せる」
最早経済も政治も何もあったものではない。
「そして第五帝国を築くらしいな」
「第五帝国って何だ!?」
「ナチスは第三帝国だっただろ」
洪童はそこから話す。所謂ドイツ帝国だ。第一帝国が神聖ローマ帝国、第二帝国がプロイセンを中心としたドイツ帝国である。第三がそのナチスである。
「それで第四帝国が今のエウロパなんだよ」
「で、第五帝国か」
「しかしエウロパ一千億が全部軍隊になるのか」
「それで連合に攻めてきて征服するらしい。黒幕はリトルグレイだったな」
またリトルグレイであった。

第二百話　シャバキ復活その七

「まあ人類を滅亡させようとしている話とは矛盾するがな」
「それでもエウロパも入るのか」
「ああ。宇宙人にナチスにエウロパに宇宙磁気に一万人委員会にだ」
「忙しいな」
「他にもあったな」
シャバキの主張に整合性なぞない。次から次に自分の脳内に見えたものを喚いているのでその主張は破綻どころではなくなっているのである。
「ああ、世界を裏から操る存在だったな」
「何だそれ」
「うちの理事長もそれの幹部らしい」
「ユダヤ＝フリーメーソンか？」
「いや、新モンゴル帝国らしい」
また新しい名前が出て来た。
「何でもな」
「新モンゴル帝国か」
「ああ、一説によると。正確に言うとあいつの脳内の設定だけれどな」
身も蓋もない言葉であった。
「人類社会を征服することが目的の影の秘密結社らしい」
「秘密結社って多いんだな」
思わず突っ込みを入れたカムイだった。
「しかも秘密結社で帝国か」
「名前は何とでも付けられるからな」
こう素っ気無く述べた洪童だった。
「気にしたら負けだぞ」
「今の拳法と同じか」

「そういうことさ。それでな」
「ああ、それでか」
「その影の支配者がうちの理事長らしい」
その八条義統だというのだ。
「やがて連合を手中に収め暗黒の帝国を作るらしいな」
「何が目的でそんなのを作るんだ？」
「黒髭との契約らしい」
またしても予言の定番の存在が出て来た。
「黒髭とのな」
「黒髭？」
「予言に出て来るだろ」
こうカムイに説明する。
「ほら、ノストラダムスのな」
「色々出て来るからいちいち覚えていないぞ」
「あの征服したりされたりのな」
そのカムイへの説明が続く。
「そういう奴なんだよ」
「征服したりされたり？」
「そうだよ。そういう奴なんだよ」
こう話すのであった。
「何かよくわからないけれどな。それとの契約らしいな」
「黒髭との契約な」
「意味がわからないんだけれどな」
ここまで聞いて首を捻るカムイだった。
「黒髭っていうのは悪魔か何かなのか？」
「さてな。本当に何なんだろうな」
この黒髭についても本によって様々なことが言われている。またシャバキにしても黒髭について言うことがその都度変わる、丁度今もであった。
「おお！」

「また叫ぶか」
「拳法はどうなったんだ？」
「見える、見えるぞ！」
拳法は何時の間にか忘れていて再び上を見上げて叫んでいた。
「アトランティス、あの古の失われた大地から四匹の獣が現れる！」
「今度はアトランティスか」
「無駄にネタだけ多いな」
「全くね」
「そう、それに乗っているがだ！」
そして出すのだった。
「黒髭だ！」
「おっ、黒髭か」
「それで？」
「黒髭が世界を征服する為に出て来る！」
そして言ったそばからだった。

第二百話　シャバキ復活その八

「そうだ！それにより人類滅亡への序曲が奏でられるのだ！」
「あれっ、今世界を征服するって言わなかった？」
「そうよね」
「今確かに」
皆もそれを言うのであった。
「それで何で人類滅亡の序曲になるのかな」
「世界を征服するのなら意味ないんじゃ？」
「矛盾してるよな」
「恐ろしい！」
だがシャバキは喚き続けている。
「そしてサハラから出て来る！七つ頭の竜が！黒髭を従えた竜が！」
「待て」
それを聞いたカムイの言葉だ。
「黒髭はアトランティスから出たんだったな」
「ああ、世界を征服して人類を滅亡させてだな」
「それも矛盾してるがな」
洪童もいちいち突っ込みを入れる。
「とにかくだ」
「それは気にするな、か」
「気にしたら負けだからな」
こうも言うのであった。
「それでだな」
「ああ、それでか」
「黒髭は一応一人だからな」
洪童はそれは断ったのだった。
「いいな、それは」
「二人いるようにしか聞こえなかったがな」

「本人は一人だと思っている」
シャバキ自身はそうなのだった。自分の中だけはである。
「それでだな」
「ああ、それでか」
「その黒髭だけれどな」
シャバキはまだ黒髭について言っていた。
「黒髭は契約をした。あの現代のルシファー八条義統とだ」
「あの長官堕天使だったのか？」
「さあ」
「この前は魔王とか言ってたよな」
「薬剤師とかも言っていたぞ」
「いや、世紀末覇者だろ」
とにかく言う都度にその存在が変わるのであった。
「その前は悪の枢機卿だったな」
「どういう意味だ？それ」
「俺もわからないんだけれどな」
市民達もそれを話す。
「何か言っていたぞ」
「枢機卿なあ」
「あの長官天理教だろ？」
「仏教は浄土真宗じゃなかったか？」
「なあ」
「それで枢機卿か」
矛盾しているどころではなかった。
しかもである。シャバキはこんなことも言うのであった。
「ユダヤ＝フリーメーソン！」
「また出たか」
「好きね、フリーメーソン」
「どんな組織かちゃんとわかってるのかしら」
「そ、そうか！」

そして何故かここで気付いた様に叫ぶ。
「わかったぞ！」
「誰も聞いてないし」
「っていうかフリーメーソンってただの慈善団体だから」
皆の突っ込みは聞かない。シャバキの耳と目は自分の興味があるものしか見えないし聞こえないのである。本人にとっては非常に有り難い機能である。
「八条義統は裏フリーメーソンの最高幹部だったんだよ！」
「な、何だってーーーーー」
皆棒読みだった。
「そう、世界をこの手に掌握しようとしているんだ！」
「裏フリーメーソンか」
「初耳だよな」
また二人で話す。カムイと洪童だ。
「何だってんだ？それは」
「さあ。理解されようとは思ってないだろうな」
「というか思いつきで言ってるだろ」
「そうだろうな」
「よし！」
シャバキの職業が変わった。この瞬間でだ。
「謎は全部解けた！」
「あれっ、探偵？」
「そうみたいね」
「この俺の灰色の頭脳は騙せない！」
またしても話が飛んでいた。
「そう、誰であってもだ！」
「それはいいから今度は何だ？」
「探偵になったみたいだけれど」
「預言者じゃなかったのかよ、こいつ」
テレビやネットの画面の向こうでもこう話される。

「路線もはっきりしないんだな」
「っていうかどんどんカオスになるな」
「流石シャバキ」
そして映像に実況でそのまま書き込まれていく。動画は盛況だった。
そのシャバキが謎を解いたのである。そしてその謎とは何か。最早常人では予測は不可能であった。そもそもシャバキの頭脳自体が普通ではないのだから。

シャバキ復活　　完

２０１０・４・２８

第二百一話　狂気の探偵その一

狂気の探偵

「俺の目は誤魔化せない！」
「というか何が見えてるかわかってたまるか」
「全くだ」
カムイと洪童はそれぞれの携帯の動画からシャバキを見ながら述べた。見ながら喫茶店でコーヒーを飲んでリラックスもしている。
「というか何でこんな展開になったんだかな」
「意味が全然わからないな」
「というよりな」
「だよな」
二人で話していく。
「拳法はどうなったんだろうな」
「本人の頭の中じゃもう消え去ってるみたいだけれどな」
そのシャバキはである。さらに話すのであった。
「八条義統は全人類を洗脳しようとしているんだ！インターネットの電波を通じて！」
「おお、電波か」
「定番だよな」
「そう来たのね」
皆クールに突っ込みを入れる。
「それでどうなったんだ？」
「電波で俺達を洗脳するのか」
「どういう理屈でなのかしら」
「あの古のネクロノミコンにある」
シャバキはネクロノミコンがあると信じている。
「八条義統は今それを実行に移したんだよ！」
「ネクロノミコンって読んだことあるのかよ」

「実在しないっての」
「ラグクラフトの創作なんだけれど」
「伝説の預言者ラグクラフトはそれを見たんだよ！」
シャバキはラグクラフトも誤解している。
「リトアニアとポーランドの隙間に生まれたあの伝説の邪神を蘇らせてなんだよ！」
「えっ、リトアニア！？」
「それにポーランド！？」
市民達だけでなく軍人達も今の言葉には唖然であった。
「俺リトアニア人だけれど知らないぞ」
「俺ポーランド人だけれどな」
尚ポーランドは連合とエウロパ両方にある。連合が宇宙進出時代に抱き込みを画策しその影響で分裂してそのまま片方ずつ連合とエウロパに入ったのである。
「何だその隙間って」
「しかも邪神！？」
「推理になったんじゃないのか？」
シャバキにとってはそんなことは些細なことだ。
そしてだ。さらに言うのであった。
「恐ろしい！」
また喚いた。
「あの邪神を取り込み今あの男は究極の闇となった！」
「黒髭はどうなったんだ？」
「新モンゴル帝国は？」
皆それを突っ込む。しかしシャバキの絶叫はまだ全開だった。
「そう、四凶と四罪を取り込んだのだ！」
「いや、それ中国だから」
「リトアニアともポーランドとも関係ないからな」
「飛躍とかいうレベルじゃねえぞ」
またしても携帯の向こうで突っ込まれ書き込みが殺到した。書き

込みの数は一分で三百を超えている。最早弾幕に近くシャバキが見えないまでだ。
「その八つを取り込んだあの男が次に目指すのはだ！」
「だから世界征服だろ」
「それなんだろ」
「世界の滅亡だ！」
何故かそっちになっていた。
「世界の滅亡を目論んでいる。今マルスの星が光った！」
「マルスはノストラダムスだろ」
「ラグクラフトじゃねえだろ」
皆また言うがシャバキには当然届かない。そのうえでだった。
「そして今国家権力で俺を捕らえようとしている！だが俺は負けはしない！」
「ああ、わかったから」
「話は病院で聞くからな」
軍人達の言葉はクールである。
「だから大人しくしてくれ」
「おのれ、国家権力！」
人の話を聞くというかそれが耳に入るシャバキではない。そうした意味で彼の耳は全く役に立っていないと言える。少なくとも常人の耳ではない。

第二百一話　狂気の探偵その二

「事実を指摘されそれを弾圧にかかるか！」
「いや、違うから」
「それはな」
「これが民主主義なのか！」
今度はこんなことを喚きだした。
「これが連合の民主主義なのか！」
「民主主義以前に言っていることがおかしいだろ」
「全くだ」
「自覚しないんだな」
勿論軍人達は弾圧しに来たのではない。異常者を捕まえに来ているだけである。
「自分のことはな」
「しかし俺達色々仕事してるよな」
「そうだよな」
「こいつの言うことを聞いてるとな」
その仕事の内容たるや実に多岐に渡るのだった。
「ええと、世界を征服して？」
「あと滅亡させて？」
「宇宙人の手駒になったりな」
「他には全人類を洗脳してか」
それだけではない。
「ラストバタリオンの手先になってか」
「黒髭と契約して」
「一万人委員会とも結託してたな」
「それとゼーレだったか？」
「ティターンズだったか？」
シャバキはアニメと現実の区別が全くつかない。小説でも何でも

読めばそこから人類滅亡の序曲にとつなげてしまう。特殊能力ではある。
「いや、影の世界征服だっただろ」
「ショッカーだったか？」
全てシャバキが過去出してきた勢力である。実在すると思っているのだ。
「何か俺達が結託している組織ってな」
「ショッカーの正体が中央政府だったこともあったよな」
「ああ、原作の設定そのままでな」
「そんなことも言っていたよな」
原作の仮面ライダーではショッカーの正体は当時の日本政府だということになっている。実際の日本政府にそこまでの能力があればかえって凄いのであるがだ。
「テレビだとナチスの残党が最初だったな」
「それが首領が出て来てな」
「そうなったよな」
「だったな」
こう話されていくのであった。
そしてである。兵士の一人のそのシャバキという言葉を受けてである。またしても訳のわからないことを喚き主張してきたのであった。
「ショッカー・・・・・そうか」
「あっ、はじまったな」
「絶対無敵の断言だな」
「それだな」
軍人達も何気に期待している。そして。
「ショッカーの正体は暗黒星雲の宇宙人だったんだよ！」
「ああ、テレビだな」
「それだな」
話のプロセスは置いておいてこう言われるのだった。

「それで来たか」
「スカイライダーの話だよな」
軍人達はまた話す。
「それを出してきたんだな」
「まあいつも通りだよな」
この程度の破天荒な飛躍はまさにいつも通りなのだった。
そしてだ。シャバキの破綻どころではない論理ではない絶叫がまた響いた。
「来た！」
「何が来たんだ？」
「それで」
「人類を破滅ささんとする邪悪なるアカシックレコードの意志！」
こんなことを言うのである。
「それを出してきたか！おのれ悪魔め！」
「悪魔ねえ」
「何か前は破壊の天使とか言ってたしな」
「光の巨人もあったな」
ここでも話が矛盾する。シャバキはとにかくその場その場で喚くのである。
「そしてそれが化けているのが連合軍だ！」
「俺達って絶対に悪者なんだな」
「それだけ変わらないよな」
「国家権力ってか」
「俺は権力には負けない！」
自分も権力者だという自覚は全くないシャバキである。圧倒的な生命力と行動力を持ちあちこちで発言し本も出しネットでも有名である。影響力があるのだ。それで権力者でないとは言えないのであるがシャバキは権力は国家権力しかないと思っているのだ。

第二百一話　狂気の探偵その三

「何があっても！」
「だから現実見ろって」
「俺達が何時市民に何かしたんだよ」
「っていうか俺達は市民軍だぞ」
この自覚もシャバキにはない。
「市民の軍隊なのによ」
「何で市民を害するんだよ」
「矛盾するだろうが」
「俺は負けない！」
だがシャバキはまだ喚く。
「そう、ノストラダムスを倒すその日までだ！」
何故か全く無関係の上空の巨大戦艦を指し示している。
「俺は絶対に負けない！」
「特撮かアニメじゃないんだからな」
「いい加減に現実を見てくれよ」
「行くぞ悪の連合軍！」
つまり自分が正義なのだというのだ。
「俺のこの最強無敵必殺流の技受けてみるのだ！」
「また流派の名前変わってるな」
カムイがそれを聞いて突っ込みを入れた。
「本人自覚していないみたいだけれどな」
「そういうことはどうでもいいんだろ」
洪童の言葉も素っ気無い。
「結局な」
「いいのか？流派の名前って大事だろ」
これは拳法だけではない。ありとあらゆるものに言えることである。名前はそのまま看板である。その名前がどうでもいい筈がない。

常識ではだ。
「それでもなのか」
「そう、どうでもいいんだろ」
また素っ気無い声で言う洪童だった。
「あいつにとってはな」
「そうなのか。相変わらず滅茶苦茶だな」
「まあその滅茶苦茶があの人のエンターティナーだからな」
「だからか」
「だから皆喜んで見ているだろ」
それも言う洪童だった。
「笑顔でな」
「そうだな。しかし」
「しかしか」
「この展開終わりが見えないな」
カムイはパンケーキにシロップをかけながら述べた。洪童も同じものを食べている。
「どうなるんだ？このまま」
「オチがわからないのもシャバキ流エンターティメントだからな」
「何でもかんでも人類滅亡への序曲だけれどな」
「本当のオチはそこからだろ、いつも」
そこからまた大騒ぎして周りを巻き込むのだ。それがシャバキという男だ。
それでだ。今回もその無茶苦茶さを遺憾なく発揮しているのだ。
連合軍の将兵達を前にしてそのうえで怪しい構えを取ってそうして言うのだった。
「行くぞ！」
「今度は気をつけろ」
「いいな」
こう言ってそのうえでシャバキを警戒する。そしてシャバキは技を出した。

「究極覇道理想流！」
「またまた流派の名前変わったぞ」
「一回言う度に変わるな」
「いい加減なんてものじゃないけれど」
また突っ込む一同だった。
「どうなってるんだ？」
「全く」
「無茶苦茶ね」
連合の市民達も呆れる他ない。そうしてだった。
遂にシャバキの攻撃がはじまった。それは。
「砕骨微塵攻！」
こう言って繰り出した技は。
無茶な攻撃だった。何と地面からマグマが吹き出てきたのだ。
「拳法だよな」
「そう言ってたよな」
連合軍の将兵達はそのマグマを見ていぶかしむのだった。
「それで何でマグマなんだ？」
「拳法の技かと思ってたけれどな」
「違うのかよ」
違っていた。しかもである。
そのマグマが吹き出てであった。間欠泉の様になった。アスファルトを突き破りビルよりも高く吹き出る。かなり厄介な有様になってしまっている。
しかも一本だけでなくだ。何本も出るのだった。
「な、何だ？」
「この事態は」
「どういうことなんだ？」
「さあ受けろ俺の技！」
シャバキが言うには技なのだった。

第二百一話　狂気の探偵その四

「この技をだ！」
「だから技か？それ」
「妖術の類じゃないのか？」
「なあ」
「絶対にそうよ」
ネットの動画でも一斉に書き込まれる。
「何だこの有様」
「相変わらず滅茶苦茶だな」
「何がもう何だか」
そしてシャバキと対峙する将兵達もだった。彼等は困った顔で話をしている。
「後が大変だな」
「道路をなおさないといけないし」
「マグマの処理もな」
とりあえず他人の迷惑なぞ最初から頭の中にインプットされていないシャバキである。彼の頭の構造は非常に問題があるとしか言えない。
「全く。何でこう面倒なんだ？」
「本当にな」
「どうなんだか」
そしてだ。シャバキはまだ言うのであった。
「行くぞ！」
「今度は何をするんだ？」
「何処までやるんだ」
「いでよ義経！」
話がまた妙な方向に行っていた。
「チンギス＝ハーンとしての力見せるのだ！」

「今度はトンデモ歴史観か」
「そういえばそちらでも造詣深かったな」
「そうだったな」
とにかく無駄なことばかり知っているシャバキである。
「全く。どうなんだ？」
「何でこんなに破天荒なんだよ」
「人様を騒がせることにかけては天才的だな」
こう言われる始末であった。そうしてだ。
マグマがさらに拭き起こりだ。連合軍に対して向かおうとしていた。
「殺しはしない！」
一応こう叫ぶシャバキであった。
「だが！俺は国家権力には屈しない！」
「まだわかってないのか」
「困った奴ね」
「俺は決して負けない！」
その前に突込みが効かない。
「何があろうともだ！」
「だから国家権力じゃないだろ」
「どんな特撮よ」
「っていうか頭大丈夫か？」
「いや、大丈夫じゃないから」
ネットでの書き込みによる突込みが続く。
「全くな。何だってんだ？」
「何処をどうやったらこんな人間になるんだよ」
「薬じゃないかしら」
シャバキが何かおかしな薬をしているのではないのかという説は昔からある。何しろ桁外れに無茶苦茶なことを言っているからだ。
それも道理である。
「だよな、ここまで来ると」

「その前に妖術使いっぽいし」
「あれ拳法じゃないから」
「そうよね」
このことも話されるのだった。
「氏素性は一応データにあるけれど」
「何者なんだろうな」
「本当にね」
その正体不明のシャバキがさらに言うのだった。
巨大戦艦に対してだ。そうしてだった。
「なっ！？」
「飛んだ！？」
「今度はそれか！」
「例え天にあろうともだ！」
天高く飛びながら言うシャバキだった。
「それでもだ！俺は辿り着く！」
「あれっ、俺達は？」
「俺達はどうするんだ？」
ここで街でシャバキを取り囲んでいた兵士達が呆気に取られて述べた。
「俺達が相手だったんじゃないのか？」
「ああ、さっきまでそう言ってたよな」
「それで何で巨大戦艦に行くんだ？」
「相変わらずわからない奴だな」
皆呆気に取られ続けている。

第二百一話　狂気の探偵その五

「訳のわからない動きが多いよな」
「理屈が通らないっていうかな」
「本当にな」
そうしてだった。さらに言うのであった。
「しかし単身あの巨大戦艦に殴り込むか」
「というか絶対に辿り着けないだろ」
「空にあるんだぞ」
しかしシャバキは飛んでいる。常識も理屈も完全に無視しているがそれでもだ。彼は実際に空を飛んでいる。それは間違いなかった。
それを見てだ。また言うのだった。
「実際に飛んでいるからな」
「けれど生身で何千メートルも飛べるか？」
「普通は絶対に無理だろ」
これが常識である。
「しかし。あいつだからな」
「溶岩も出したしな」
「何でもありだからな」
まさに常識も理屈も無視する。それがシャバキだ。
そして巨大戦艦に向かって突き進む。しかしであった。
巨大戦艦の方も唖然となっている。だが彼等も軍人だ。冷静な対応はできるのだ。
「艦長」
「わかっている」
艦長はその充実した設備の中の艦橋で部下達の言葉に応える。モニターには下から突き進んで来るそのシャバキがはっきりと映っている。右手を前に突き出しそのうえでスーパーマンの様にして来ている。

「まさかとは思うがな」
「しかし現実に移っていますし」
「本当に人間か？」
艦長はふとこう言った。
「あの男は。人間なのか？」
「どうでしょうかね」
「かなり疑わしいと思いますが」
「あれは」
部下達も首を傾げながら言う。
「予言者とは言っていますが」
「妖術使いでは？」
「おそらくまともな人間ではありません」
「まともな人間でないのは間違いないな」
その艦長の言葉だ。
「どう考えてもな」
「はい、そうですね」
「それは間違いありません」
「普通溶岩を出したり空を飛んだりはしません」
常識で考えてそれが出来る筈がない。当然拳法でもだ。
「あの能力は一体」
「どういう原理なのでしょうか」
「科学的根拠は」
「さて」
軍人というのは科学を元にして戦う。それでその科学的根拠を一切無視しているシャバキの行動を肯定出来る筈もなかった。間違ってもだ。
「あるのかどうか」
「そしてあの国は」
「どうなんだ？」
しかしである。実際にシャバキは飛んできている。そうして巨大

戦艦に近付いてだ。
　一直線に突き進んでだ。遂にであった。
　艦長もそれを見てだ。一つの決断を下した。
「よし」
「どうされますか？」
「撃ちますか？」
「そうだ、撃つ」
　実際にそうすると。今はっきりと言い切ったのだ。
「あの男を撃つ」
「まああの男には非常事態も止むを得ないとされてますしね」
「天本博士とあの男だけは」
　連合では最悪のテロリストとされているのだ。
「それを考えたら」
「それだからこそだ」
「これも当然ですね」
「攻撃も」
「それも既に出ている」
　連合軍も容赦がない。
「それも大統領からだ」
「大統領命令ですか」
「そうだったのですか」
「そうだ、大統領閣下直々にな」
　命令を出したというのである。
「あの男には遠慮なく攻撃していいと言われている」
「では艦載機を出しますか」
「既に周囲に飛んでいますが」
「そうだな。艦載機で攻撃をさせよう」
　具体的な話にもなっていた。

第二百一話　狂気の探偵その六

「そしてだ。そのうえでだ」
「あの男を倒す」
「そうするのですね」
「気をつけろ、相手は妖術使いだ」
まさにそれだと思われているのである。既にだ。
「何をしてもおかしくはないからな」
「今も空を飛んでいますし」
「それなら」
「そうだ、航空長」
「はい」
艦長の後ろにいる将校の一人が応えた。
「指揮を任せていいか」
「有り難うございます」
その将校は袖に三本の太い線と一本の短い線がある。大佐であった。その右の袖が動いてであった。敬礼をしてそのうえで艦長の言葉に応えたのである。
「ではその様に」
「司令は今おられん」
ティアマト級はそれぞれの艦隊の旗艦だ。だから司令が乗り込むことが普通なのだ。しかし今回は単艦なので艦長が指揮を執っているのである。
「宜しく頼むぞ」
「はい、わかっています」
「では」
「各機に伝えよ」
航空長のその大佐はすぐに指揮に入った。
「それぞれ小隊編成になれ」

「小隊編成ですね」
「それでなのですね」
すぐに各機から返信が来た。
「ではすぐに」
「そしてそのうえで」
「そうだ、すぐにだ」
大佐はこうも命じた。
「かかれ。いいな」
「はい」
「わかりました」
こうしてだった。彼等はすぐに動きはじめた。五機が一組になりそのうえで今も空を飛んでいるシャバキの周りに展開しだしたのである。
連合の市民達はそれを見てだ。呆気に取られて言うのだった。
「まさかここでな」
「ああ、航空戦か」
「もう何でもありだな」
皆で言うのだった。
「しかし。シャバキって」
「どういう奴なんだ？」
「本当の妖術師なんじゃ？」
「人間かどうかも妖しいな」
少なくとも現実を無視した能力を多く持ってはいる。
「どういう原理で空を飛んでるんだ？」
「しかもあの速さで」
平気で超音速で動いているのだ。当然生身でだ。
「化け物だな」
「ああ、最早何が何だか」
「あっ、撃たれた」
丁度ここでビームで撃たれたのだった。

連合軍の戦闘機はタイガーキャットという。可変翼で大型の戦闘機だ。大気圏でも宇宙でも戦えるうえにかなりの重武装を誇る。エウロパ戦役ではエウロパ軍のエインヘリャルをその数もあって圧倒している。

その彼等がだ。今シャバキに攻撃をしたのだ。

「ロックオン！」

「シュート！」

こう言ってだ。それぞれビームを放つ。

しかしだった。シャバキは宙を飛んだまま。

構えを取った。そうしてである。

「大逆無道流奥義！」

「おい、またまた流派の名前変わったぞ」

「また訳のわからない名前だな」

洪童もカムイも突っ込みを入れる。

「結局どういう流派なんだ？」

「拳法にしてもな」

しかしシャバキは過去を振り返らない。そして言ったのは。

第二百一話　狂気の探偵その七

「究極障壁！」
「なっ、何っ！」
「バリアーを出しただと！」
これには連合軍のパイロット達も唖然だった。
そしてだ。彼はそのバリアーでだ。ビームを防いだのである。身体の周りに出したドス黒いバリアーでだ。ビームを完全に防いでしまったのだ。
「ま、まさか」
「そう来るというのか」
「妖術か、これも」
誰がどう見てもであった。
「ビームが通じないか」
「どうする？それでは」
「ミサイルか？」
タイガーキャットのそのミサイルだ。一度に十発放てる超長距離射程のミサイルである。
「それを使うか」
「そうだな、それしかない」
「やるか」
やり過ぎという言葉は何処からも出なかった。
「あの男にはな」
「最早何の容赦も不要だ」
「だからこそ」
こうして決断してだ。そのミサイルを一斉に放つのだった。
「ターゲットロックオン！」
「行け！」
こうしてミサイルを放ってだ。シャバキを吹き飛ばそうとする。

しかしであった。
彼はまた妖術を放った。本人は拳法と主張しているがだ。
その妖術はだ。こうしたものだった。
「無制限最高破壊流！」
「またか」
「また流派の名前変わったな」
「そうだな」
市民達はまたしてもその名前が変わったことを聞いた。
「そう来るか」
「一体本当の名前は何だというんだろうな」
「本人も知らないだろ」
それより前に流派の名前が変わっているという自覚すらしていない。シャバキにとっては人類滅亡の序曲やノストラダムスこそが重要なのだからだ。
「そんなことはな」
「知らないか」
「ああ、知らないだろ」
また言われるのだった。
「どうでもいいだろうしな」
「無茶な奴だな、本当に」
市民達はもうわかっていることを今更ながら言い合いネットに書き込むのだった。そしてである。彼はその何か得体の知れない妖術を放った。
「魔王落雷陣！！」
「何だそりゃ」
「落雷！？」
「雷を使うのか？」
軍人達も市民達もいぶかしむ中でだ。彼は放ったのであった。
その両手から見数の雷を放つ。それであった。
皆それを見てまた突っ込みを入れた。

「落雷じゃないだろ」
「全然違うじゃないか」
「放ったじゃねえかよ」
皆それを言うのだった。かなり冷めているし呆れてもいる。
「相変わらず言葉が矛盾しているな」
「本人だけが気付かないけれどな」
「いつも通りな」
こう話してだ。戦いを見守るのだった。
その雷達が縦横無尽に荒れ狂いだ。そしてミサイル達を撃ち砕いていく。その勢いは圧倒的であり無数のミサイル達が砕かれていくのであった。
こうしてミサイル達は一発もなくなってしまった。その雷で、である。
「相変わらず無意味に戦闘力だけはあるな」
「最早特撮のレベルだな」
カムイと洪童もそれを突っ込む。
「今度は雷か」
「何でもありなんだな」
「そうだな。けれど連合軍はどうするんだろうな」
「次の手か」
「ああ、それだよ」
カムイはこう洪童に返した。言葉を返しながらそのうえで今はパイナップルのケーキを食べている。洪童はキーウィのケーキを食べている。
「それな。あいつ放置したら駄目だろ」
「だから巨大戦艦が来てるんだしな」
「徹底的にやるんだな」
まさにその意思表示に他ならない。連合軍の象徴の登場はだ。

第二百一話　狂気の探偵その八

「やっぱりな」
「そうだろうな。じゃあ後は艦艇の攻撃か」
「主砲撃つのか？」
カムイは考える目で述べた。
「それで吹き飛ばすのか？」
「いや、巨砲じゃないのか？」
洪童はそれではないかというのだ。
「それで一気にな」
「あれでか」
「そうじゃないのか？あれなら幾ら何でもな」
「確か一撃で三百隻は沈めるんだったな」
それがティアマト級巨大戦艦の巨砲だ。三門あるがその一斉射撃で一万隻の艦隊のうちの三百隻は簡単に消し飛ばしてしまうのである。
その巨砲でだ。吹き飛ばすというのである。
「それじゃないのか？」
「また極端だな」
「相手が相手だからな」
こう答える洪童だった。
「それもあるだろ」
「そうか、やるのか」
「問題は何処でぶっ放つかだけれどな」
「大気圏内じゃまずいか」
「まずくはないが派手過ぎないか？」
洪童はそれはどうかというのである。
「それも」
「どうだろうな。少なくとも相手は派手好きだしな」

「それじゃあそれもあるか」
「大気圏内でのそれはかなり凄いけれどな」
「ああ、その連合軍の切り札か」
戦いの最初にいきなり放ってそれで敵の数を減らすのだ。威力だけでなく射程も相当なものなので敵は自分達の攻撃の前にそれを受けてしまうのだ。
「見せてもらうか」
「実際にな」
そしてであった。艦内ではだ。
「巨砲の威力」
「ここでまた」
「艦長」
そしてだ、准将である艦長にも声がかかった。巨大な戦艦である為にその艦長は大佐ではなく将官である准将になっているのだ。そこまでの艦なのだ。
「それでは」6
「うむ」
その艦長も厳かに応える。
「それではだ」
「巨砲ですね」
「一旦場所を変える」
こうも言った。
「今あの男は下にいるな」
「はい」
副長が応える。彼は大佐の階級であった。
「その通りです」
「下に向けては市街地に被害が及ぶ」
それはよくわかっていた。連合軍は決して市民に対して危害を加えてはいけないとだ。軍規にもはっきりと書かれていて絶対視されているのである。

「だからだ。それは駄目だ」
「それはなのですか」
「そうだ、駄目だ」
また言うのだった。
「少なくとも速度ではあの男よりも速いのだしな」
「まあそれは確かに」
「それは」
流石のシャバキでもだ。宇宙空間で必要とあらば光速で動ける巨大戦艦よりはその動きは遅い。それでも超音速で動けることは動けるのである。
「そこまではありません」
「それでは」
「では移動するぞ」
艦長はまた言った。
「そしてだ」
「そしてですね」
「次は」
「艦載機に砲撃コースから離れるように告げろ」
このことも忘れなかった。
「決してだ。それはいいな」
「わかっています」
先程の航空長の言葉だ。
「では今すぐに伝えます」
「上空にあがれ」
具体的にはそうしろというのである。
「そしてだ。かわせ」
「ではその様に」
「そしてだ」
命令が続く。それは迅速である。
「そのうえでだ」

「いよいよ攻撃ですね」
「巨砲で」
「三つ全て使う」
しかもであった。三つ共というのだ。
「それで一気に吹き飛ばすぞ」
「一つではありませんか」
これを言ったのは副長だった。
「三門全てを使われるのですか」
「相手が相手だ」
艦長の言葉は本気だった。
「だからだ。吹き飛ばすぞ」
「わかりました、それでは」
「すぐに」
「艦の位置を移動させる」
艦長はまた厳かに告げた。
「いいな、それではだ」
「はい、それでは」
「すぐに」
こうしてだった。巨大戦艦が動いた。そのうえでシャバキを吹き飛ばそうとだ。その巨砲に力を込めるのだった。いよいよクライマックスになろうとしていた。

狂気の探偵　完

２０１０・４・２８

第二百二話　巨砲発射その一

巨砲発射

巨大戦艦が動く。カムイと洪童はそれも携帯で見ていた。
そうしてだ。そのうえでまた話すのだった。
「一斉射撃だな」
「ああ、来るな」
「巨砲のか」
カムイの顔は真剣なものだった。
「エウロパ軍を叩きのめしたあれか」
「相当な威力があるらしいな」
洪童も真顔で言う。
「要塞の主砲と同じ位だったな」
「それを受けたら普通はな」
「ああ、死ぬな」
「死ぬどころじゃないだろ」
カムイはここでも真顔だった。
「それこそな。消し飛ぶぞ」
「向こうもそれだけ本気だってことだな」
「本気で叩き潰すか」
「そしてそれだけじゃない」
それに留まらないと言う洪童だった。
「それにだ」
「それに？」
「もう終わらせたいんだろうな」
「いい加減シャバキ関係の騒動はか」
「正直滅茶苦茶過ぎるからな」
まさにその通りであった。シャバキが引き起こすその破天荒な騒ぎはだ。相手をする者にとっては凄まじいまでの気力と体力を消耗

させるものだからだ。
だから終わらせたい。そういうことだった。
「さて、それでだ」
「砲撃か」
「もうそれで決着といきたいんだろうな」
「そうか」
洪童がカムイの言葉に頷いていた。
「それでか」
「まあ幾ら何でもあの巨砲で撃たれたらな」
「終わりか」
「流石に終わりだろうな」
こう言うカムイだった。
「幾らシャバキでもな」
「じゃあそれを見せてもらうか」
こう話してであった。携帯の画面からことの成り行きを見守る。
その戦いはだ。
「巨砲、発射用意完了」
「ロックオン完了」
次々に言葉が届く。
「艦長、それでは」
「宜しいですね」
「よし」
艦長もだった。ここで言うのであった。
「それではだ。いいな」
「了解です」
「それでは」
キビキビとした言葉が続く。そうしてだ。
艦長の右手があがる。それから。
一気にその右手を振り下ろしてだ。言うのだった。
「撃て！」

「撃て！」
攻撃が復唱される。それと共に三門の巨砲が火を噴いた。
それを見てだ。誰もが思った。
「惜しい奴だった」
「ああ」
「そうだったわね」
シャバキを懐かしむ言葉だった。
「おかしな奴でもあったしな」
「何をしでかすかわからなかったし」
「変態だったな」
「妖術使いでもあったな」
懐かしむ言葉が続く。遠い目にすらなっている。
「悪気はなかったしな」
「ああ、悪気はな」
「それはなかったな」
それは間違いなかった。シャバキには悪意はないのだ。一応善意で動いているのだ。一般人と見えているものが違い行動が出鱈目なだけでだ。
「あれでまともだったらな」
「どれだけ人類に貢献したかな」
「本当に惜しい奴だったよ」
そういう意味においてもなのだった。
「面白かったけれどな」
「あれはあれでな」
「被害はなかったしな」
誰もが電波だとわかっているからだ。お騒がせ人物であり常識を無視した行動を取ってもだ。それでも彼は実は人を殺したことや傷付けたことはないのだ。

第二百二話　巨砲発射その二

誰もがそれを知っていた。だからこそ言うのであった。
「笑わせてもらったよ」
「さらば、シャバキよ」
「あんたのことは忘れないわよ」
あるサイトにはもう追悼スレが立った。そこで次々に文字が書かれていく。
「逝ったか」
「無茶しやがって」
「御冥福をお祈りします」
中には所謂アスキーアートまである。二十一世紀初頭に出て来てそのまま定着している。顔文字と並んでインターネット文化の一つである。
そうしたものがそのスレに次々と書き込まれていくのだった。
「何か涙が出て来るぜ」
「連合も寂しくなったよな」
「ああ、全くだ」
「後はあの博士だけか」
こう言っているとであった。
ここでだ。巨砲の光が完全に消えた。艦長はここで自分の周りにいる士官達に対してこう問うたのだった。将官らしく威厳のある言葉でだ。
「消え去ったな」
「はい」
「生きている筈がありません」
士官達も冷静に答える。
「巨砲の攻撃は要塞すらダメージを与えられます」
「テューポーンも倒しましたし」

ティアマト級を集めての巨砲の一斉射撃を浴びせてだ。そのうえでエウロパ軍の切り札テューポーンを攻略したのだ。射程も威力も巨砲の方が勝っていたのだ。

そしてである。彼等はそうしたことを踏まえてだ。そのうえで言っているのだ。

「ですから」

「絶対にです」

「生きている筈がありません」

「塵一つ残ってはいません」

確かに常識ではだ。そして軍人は常識の中で生きる存在である。軍人でなくとも確信するものだった。ところが。

そこにはだ。いたのだ。幻影ではなくだ。

「レーダーに反応があります」

「モニターにも映っています」

「間違いありません」

「な・・・・・」

士官達の唖然とした言葉での報告を聞きながらだ。艦長も呆然となっていた。

その呆然とした声でだ。こう言うのであった。

「生きているだと」

「まさかとは思いますが」

「確かにです」

「傷一つありません」

誰もが信じられないといった感じである。

「どういうことでしょうか、これは」

「要塞をも陥落させる巨砲の直撃を受けた筈です」

「それでどうして」

「わからん」

艦長も呆然となっていた。

「何故だ、これは」

「わかりません」
「私もです」
誰もがであった。我が目を疑っていた。
「これは一体」
「生きているとは」
「しかもノーダメージです」
「人間ではないのか」
こうも言った士官がいた。
「まさか」
「いや、これが妖術ではないのか」
「それではないのか」
こうした意見も出た。現実的かどうかはともかくとしてだ。
「だから生き残っているのか」
「それで」
「それで艦長」
そんな混乱した中でだ。士官の一人、中佐の階級の美女が艦長に言ってきた。
「どうされますか」
「ここはか」
「はい、どうされますか」
こう彼に問うのだった。
「ここは」
「このままだと何にもならない」
流石に艦長である。そして将官である。彼は我を取り戻していた。
今はモニターに映る空中で仁王立ちしているシャバキを見ているのだった。

第二百二話　巨砲発射その三

「そうだな」
「はい、ですから」
「わかっている。それはだ」
こう答える艦長だった。
「ここはだ」
「はい、ここは」
「総攻撃だ」
それをするというのだ。
「あるだけのエネルギーもミサイルも叩き込む」
「そうされるのですね」
「そうだ、そうする」
これが彼の決断だった。
「巨砲で駄目ならばだ」
「それで今度こそですか」
「完全に吹き飛ばす」
艦長の言葉はしっかりとしたものになっていた。
「何があってもだ」
「そうですね、今度こそ」
確かな顔で頷くその中佐だった。しかし彼女はここで言うのだった。
「ですが」
「ですが？」
「成層圏でのそれは止められるべきです」
考える目での言葉だった。
「ここでの総攻撃はです」
「それはか」
「はい、環境及び下にある市街への影響が心配されます」

だからであるというのだ。軍人はそうしたことも考えて行動しなければならない。連合軍では軍の行動はできる限り環境や市民生活に影響が出ないように考えられているのだ。

「ですから」

「そうだな。それではだ」

「一度宇宙空間に上がりましょう」

また言うのだった。

「そしてその上で彼を」

「遠慮なく消し飛ばすか」

「普通宇宙空間ですと」

その宇宙空間についても離される。

「人は生きていられません」

「普通はな」

艦長も言う。確かにである。生命ある存在が宇宙空間に出ればだ。真空状態のその中で忽ちにして身体は破裂して死ぬ。これは最早自明の理である。

しかしである。相手はシャバキだ。それが問題であった。

「だがあの男は」

「普通ではありません」

「だからだ。宇宙空間でもだ」

「生きていると考える方が妥当です」

さりげなく物凄いことを言う中佐だった。

「ですからそこに引き出しましょう」

「わかった。それではだ」

「はい」

「宇宙空間に出るぞ」

艦長は命令を出した。

「いいな、そしてそこでだ」

「決戦ですね」

「シャバキと」

「そうだ、決戦だ」
まさにその通りだというのだった。
「あの男を遂にだ。吹き飛ばす」
「はい、わかりました」
「それでは」
こうしてであった。巨大戦艦は宇宙に出た。戦いはまた場所を変えた。
それを見てだ。連合の者達はさらに言うのであった。
「しかしな」
「ああ、そうだな」
「どうなるんだ？」
市民達はまた口々に言う。
「これからな」
「宇宙か」
「話が大きくなる一方だな」
「全くな」
また書き込まれたりもしていく。
「どうなるやら」
「宇宙での戦いか」
「海賊退治みたいだな」
「あれより滅茶苦茶なんじゃないのか？」
挙句には宇宙海賊との戦いまで引き合いに出される。
「あれは一応船と船の戦いだからな」
「今度は生身の人間だからな」
「宇宙空間に出てな」
有り得ないことである。普通ならだ。
「ないよな、普通」
「というか宇宙に出て平気なのか？あいつ」
「平気なんだろ」
また言われる。

第二百二話　巨砲発射その四

「普通にな」
「平気か」
「そうなのか」
「だってシャバキだぞ」
これが結論であるところがまた物凄いことだった。
「それ位普通だろ」
「相変わらず非常識な話だな」
「連合で一、二を争う非常識人だしな」
そしてもう一人は天本博士である。どちらもこの世の常識が全く通用しないということにおいてはまさに同じである。厄介なことにだ。
「さて、生身の人間の宇宙での戦いか」
「前代未聞だな」
その前代未聞の戦いがはじまろうとしている。その中でだ。
巨大戦艦は宇宙空間に出た。まずは戦艦がだった。
成層圏から宇宙に出る。そこはもう銀河の帳だった。そこに出てだった。
「さて、後はだ」
「奴が来るのを待ちましょう」
「そうですね」
艦橋でまた話されていく。
そしてだ。シャバキはだ。
まだ惑星に留まっている。しかし敵の動きはしっかりと見ていた。
そしてだ。こう言うのだった。
「悪は許さん！」
「だから御前は予言者だろ」
「違うだろ」

皆でまた突っ込むのだった。その正義の味方の言葉にだ。
「悪とかそういうのじゃないだろ」
「何でそうなるんだよ」
「それでどうやって宇宙に行くんだ？」
「一体な」
それも気になる。そしてであった。
彼はまずは両腕を己の前でクロスさせた。
そうしてだ。言う技は。
「猛打！竜虎相殺拳！」
「猛打！？」
「野球か！？」
カムイも洪童もいぶかしむ顔で携帯から掲示板に書き込んだ。実況である。
「野球と戦いは別だろ」
「相変わらず言っていることが滅茶苦茶な奴だな」
「それにだよ」
まさに突っ込みどころ満載である。シャバキはやはりシャバキだ。
「拳法の名前がまたまた変わってるしな」
「だよな。今日だけで何度変わってるんだ？」
「非常識な奴だな」
こんなことを話しながら見続ける。そしてだ。
何とだ。消えたのである。この声と共にだ。
「無為字音の極！」
技の名前らしい。その名前を叫んで姿を消した。
そのうえで宇宙にいる巨大戦艦の前に姿を現わした。そうしてである。
巨大戦艦に対してだ。こう叫んで見せたのだ。
「遂に決着をつける時が来た！」
「これ現実だよな」
「らしいけれどな」

艦内にいる兵士達もいぶかしむ顔だった。
「宇宙空間に生身の人間がいるけれどな」
「それも普通に喋ってるしな」
何処までも宇宙の摂理を無視している男だった。
「全然平気なんてな」
「しかもワープしてきてるしな」
そもそもそんなことまでしているのだ。
「何なんだろうな、一体」
「漫画でもこんな出鱈目な奴いないよな」
「変態にも程があるだろ」
完善に変態扱いだった。しかしそれもやはり無理のないことだった。
巨大戦艦の前に仁王立ちしてだ。そして言うシャバキだった。
「いいか、連合を征服せんとする悪の秘密結社ビルゲニアショッカー！」
「ビルゲニアショッカー！？」
「何だよそれ」
また艦内の兵士達が言い合う。モニターを見ながらだ。
「確か二百年前の仮面ライダーの敵だったな」
「ええと、仮面ライダーの何百作目だった？」
「千作記念作品だったか？」
仮面ライダーも実に息が長い。その他には戦隊とウルトラマンもある。

第二百二話　巨砲発射その五

「仮面ライダーアノマロカリスだったか？」
「そうだったよな」
「確かな」
「その時の敵だったな」
とりあえず記憶が辿られる。そしてだ。
シャバキの話を聞いていく。その出鱈目な話をだ。
「無駄無駄無駄ーーーーーーーーーーッ！！」
今度は何故かこう言うのである。
「この俺はノストラダムスに遅れは取らない！」
「今さっきビルゲニアショッカーって言ったよな」
「ああ」
「それの敵だったしな」
「アノマロカリスのだよな」
「どういう頭の構造になってるんだ？」
またこのことを話す彼等だった。
「何か現実と漫画の区別がつかないんだな」
「だからああなるんだろ」
そしてそのああなった彼はだ。また言うのだった。
「俺は！俺は！」
「俺は？」
「それで何だ？」
「俺にもわからないことはある！」
何の脈絡もなく言った言葉だった。
「そう、この俺にもだ！」
「いや、意味がわからねえよ」
「そんなのよ」
「何処をどうやって今の言葉は出るんだ？」

それを言うのだった。皆またしても彼を観ながら首を捻ることになった。
「ビルゲニアショッカーからな」
「どうやったらなんだ？」
それが意味不明だった。それも全くだ。
そしてだ。さらに見ていくとだ。彼等はまた気付いた。
「大体わからないことって言うけれどな」
「いつも絶対無敵の断言するのにな」
「何でそんなことを言えるんだ？」
これすらもわからないことだった。
しかもだ。シャバキは今さっき言ったことをすぐに忘れる、それも完璧に忘れてしまえる人間だ。それはここでも遺憾なく発揮されたのだった。
「この全てを知る俺に！」
「言ってることがどんどん滅茶苦茶になってるよな」
「だよな」
「何なんだ？」
皆それを首を捻りながら突っ込む。
「さっきわからないことがあるって言ってな」
「今全てを知るってな」
「はっきりと言ったしな」
「話が矛盾してるだろ」
当然の突っ込みであった。
「だから何でわからないって言ったんだ」
「しかもすぐに前言撤回してな」
「これってよ」
「ああ、酔っ払いそのものだな」
「それか精神病患者か？」
実際にそこに隔離されている。地下奥深くの独房の様な病室に隔離されているのである。それだけ厄介な人物であるからに他ならな

い。
「言ってることが出鱈目過ぎるしな」
「ああ、無茶だしな」
「そうだよな」
「自分でも言ってることわかってないだろうしな」
「それにだよ」
シャバキについてさらに話される。
「あいつ、何か今度は」
「んっ、何するんだ？」
「一体」
両手を手首で合わせてだ。そうしてだ。
それを思いきり引き込む様にして力を溜める。言う技の名前は。
「ガリック波！」
「！？艦長！」
「ビーム攻撃です！」
「今度はそれか！」
艦長もそれを見て声をあげた。
「それで来たか！」
「喰らえ、俺のマグナムシュート！」
また技の名前がすぐに変わった。

第二百二話　巨砲発射その六

「例え恒星でも破壊するこれをだ！」
「何だ！？あれは」
「エネルギー波だ、間違いない」
「それを出してきたのか」
軍人達も唖然だった。そうしてだ。
そのビームが巨大戦艦を撃つ。しかしだった。
それは何とかバリアーが防いだ。そう、何とかだった。
「ふう、よかったな」
「ああ、何とか防いでくれたか」
「この巨大戦艦のバリアーでなければとても」
「防げるものじゃなかったぞ」
そのエネルギー波の測定値を見てだ。皆唖然となる。
そしてだ。それを見るとだ。彼等は冷や汗を流していた。
「恒星は無理でも下手な隕石はな」
「ああ、破壊できるな」
「何て奴だ」
「恐ろしい妖術だ」
ここでも妖術と言われていた。
「普通の戦艦だったら大破は免れていなかったぞ」
「いや、撃沈されていた」
「そこまでの攻撃を放つか」
尚連合軍の艦艇は他の国のそれよりも防御力はかなり上である。
「あの男、一体」
「何者だ」
「本当に人間なのか」
そもそもそれすら怪しいというのだった。そしてだ。
その怪しい男がだ。また言った。

「今度はだ！」
「何をするつもりだ」
流石に艦長は冷静を保っていた。その妖術を見てもだ。
そのうえでだ。彼はシャバキの動きを見ながら言うのだった。
「今度は」
「さて、何をしてもです」
「おかしくはありませんが」
後ろの士官達が言う。
「またぞろ何をするか」
「それが問題ですね」
「巨砲でも生きていた」
艦長もそれから話す。
「だからだな」
「はい、用心しましょう」
「まさか。撃沈されはしないでしょうが」
不沈戦艦の絶対の自信があるからの言葉だった。
「しかしそれでも」
「用心しておかないと」
「相手が相手ですから」
「ここは」
「わかっている。それではだ」
こう話してだった。三人で言うのだった。そうしてだ。
総攻撃に入ろうとする。そしてシャバキもだ。
「うおおおおおおおおおおおっ！」
また吼えていた。
そしてだ。両腕を胸の前でクロスさせてだ。そのうえで全身に青い炎を燃え上がらせていた。
「燃えろ俺の黒いソーマよ！」
「駄目じゃねえか、それって」
「何よ、黒いソーマって」

「それは邪悪な方だぞ」
連合の市民達がまた掲示板や画像に突っ込みを入れる。
「それアスラ神群だったよな」
「マウリアじゃ邪神の一派だろ？」
「いや、善神だったかな」
「阿修羅だからそうじゃないのか？」
「いや、それ仏教だろ」
ここで少しした議論にもなるのだった。
「確かな」
「けれどよ、マウリアじゃよ」
「どうなんだよ」
「何かあるのか？」
話は何時の間にかマウリアについての話にもなる。この辺りはカオスだった。
「確かあれだろ？」
「あれって？」
「何なんだ？」
「仏教はヒンズー教の一派だろ」
「ハァ！？」
今の言葉には顔文字でこの言葉が殺到したのだった。

第二百二話　巨砲発射その七

「何だその論理」
「だから何でそうなるんだ？」
「滅茶苦茶意味わからないぞ」
「確かに仏教はマウリア発祥だけれどな」
それは言われるのだった。これは誰もが知っていることだった。
「それでも。全然違うんじゃないのか？」
「なあ」
「何でそんな論理になるんだよ」
「それがな」
ところがだった。恐ろしいことにこのことについても説明が為されるのだった。
「ヒンズー教の主神の一人ヴィシュヌ神だけれどな」
「ああ、調和神な」
「あの神様か」
この神の名前は連合でも広く知られていた。ヒンズー教徒は連合にはほぼいないと言っても過言ではあるがだ。名前は知られているのだ。
「あの神様がどうしたんだ？」
「それで」
「転生の一つにお釈迦様があるんだ」
「おい、何だそれ」
「聞いてないぞそんなの」
連合の者達にとっては唖然とすることだった。尚連合では仏教徒は少なくとも二兆はいる。連合の宗教人口十三兆の中で、である。
「どういう理屈だ、それってよ」
「お釈迦様がヴィシュヌの転生かよ」
「マウリアじゃそうなってるんだよ」

しかしマウリアではそうなのだというのだ。
「これがな」
「出鱈目以前だな」
「何だそりゃ」
「聞いても全然わからないんだけれど」
「マウリア人の考えなんてわかるか」
究極の言葉だった。
「そんなのよ」
「誰にもわからないか」
「それは」
「ああ、わからないさ」
そしてこうも言われた。
「あんな言葉な」
「とてもな」
「しかし。とりあえずアスラって悪になるのか？」
「ヒンズー教じゃそうらしいな」
一応こう結論が出された。
「じゃああいつ邪悪なのか？」
「本人自覚していないけれどそうみたいだな」
「だよな」
かなりあやふやに話されてだった。そうしてだ。
皆で戦いを見守る。その行方はだ。
その黒いソーマをみなぎらせながらだ。彼は言うのだった。
「来い！メテオシャワー！」
「メテオ！？」
「今度はそれか」
要するに隕石であった。
「これで倒す！」
「最早妖術か何かすらわからないな」
「そもそも何処であんな術を身に着けたんだ？」

「確か元は出版社の編集さんだろ？」
一応はそういうことになっている。そのプロフィールではだ。
「それで確か作家になって」
「今は精神病院の患者さんだったよな」
「凄い人生の略歴だけどな」
「それで妖術は何処で身に着けたんだ？」
「一体」
本人の言う拳法だとは誰も思わないのだった。そしてだ。
その隕石がだ。シャバキを撃ったのだった。
「あぐっ！」
「えっ！？」
「自分の隕石にぶつかったぞ」
「ああ、何だこりゃ」
皆それを見て流石に唖然となった。
そしてだ。シャバキはそのまま何処かに吹き飛ばされていくのだった。
「うわあああああああーーーーーーーーっ！！」
「艦長、シャバキの姿が消えていきます」
「どうしましょうか」
「行方を追え」
ここでも艦長は冷静さを保っていた。
「放置する訳にはいかんからな」
「はい、わかりました」
「それでは」
こうしてすぐにシャバキの行方が追われた。それ自体はすぐにわかった。
惑星の軌道上にある衛星の一つにだ。そこにいた。

第二百二話　巨砲発射その八

隕石の直撃を受けてそこに落ちてだ。黒焦げになって地面にめり込んでいるのだった。
軍人達はまずはその彼の身柄を確保した。彼の現状はだ。
「気絶しています」
「とりあえず生きています」
「身体中黒焦げではありますが」
「そうか、生きているか」
艦長は部下達の報告を静かに聞いていた。
そのうえでだ。今度は自分から問うのだった。
「それでだ」
「はい」
「何でしょうか」
「完全に気を失っているのだな」
問うたのはこのことだった。
「それは間違いないな」
「はい、完全にです」
「意識はありません」
「そうか」
そこまで聞いてまずは頷いた。そしてそれからだった。
「わかった、ではまずは身体を完全に拘束しろ」
「拘束ですか」
「まずはそれですか」
「特殊合金の鎖で身体をがんじがらめにする」
最初に命じたのはこれだった。
「そしてだ。目も耳も塞げ。口もだ」
「外界との遮断ですか」
「それもせよと」

「外からの情報がなければ動くことはできない」
それがわかっての指示だった。まずは動けないようにしてからだというのだ。
「そしてだ。それからだ」
「それからは」
「どうされるのですか」
「麻酔をかけろ、リバイアサン用の麻酔だ」
宇宙で最大の生物とされている。ペルシャのカラハル星系の惑星カラハラにいる。全長一キロ近くにもなる途方もなく大きな鯨である。海に棲んでいる。
「それを使え」
「リバイアサン用ですか」
「それを投与するのですね」
「流石にあれならば当分は起きまい」
その前にリバイアサン用なぞ人間に投与していいかどうかは全く考えていなかった。
「だからだ。いいな」
「はい、ではその様に」
「そうしましょう」
それに頷いてだった。そうしてでだった。
「棺桶型のボックスに幾重に入れる」
「そして独房にですね」
「高圧電流を置いた」
「そうする。そのうえで精神病院にまで運ぶ」
実に徹底していた。
「わかったな」
「畏まりました」
「ではすぐに」
こうして彼は拘束されたのだった。話はこれで終わった。
シャバキが気付いた時にはだ。彼はあの精神病院の地下深くの独

房にしか見えない部屋に隔離されていた。そこで喚いていた。
「ノストラダムスだ！」
またこの名前だった。
「ノストラダムスが世界を滅ぼそうとしている！」
こんなことを喚いていた。しかしであった。
カムイと洪童は今は学校にいた。そこでそれぞれの携帯を見ながら突っ込みを入れていた。
「だからノストラダムスは預言者だろ？」
「予言者じゃなかったか？」
カムイが洪童に対して突っ込みを入れた。
「確かな」
「そうだよな。そういえばそうだったか？」
「その辺りいい加減だよな」
「どうでもいいんだろうな、この人的には」
「それにな」
また話すカムイだった。
「予言者が世界を滅ぼすのか」
「さあ、どうだろうな」
「また無茶なことを言ってるな」
その無茶な男の今度の言葉である。
「相変わらず」
「そうだな」
「おお！」
ここでまた叫ぶシャバキだった。
上を見上げてだ。そのうえでの言葉は。
「ま、まさか」
「ああ、またはじまったな」
「そうだな」
二人だけでなく誰もがそれを見ても冷静だった。
「エドガー＝ケイシーが新神聖ローマ帝国を復活させるんだよ！」

「はい、言ったな」
「また変な国の名前が出て来たな」
「これこそ人類滅亡への序曲だ！」
「序曲って本当に多いんだな」
「だよな」
醒めた目で見ている一同だった。カムイと洪童もそれは同じだった。そしてこれこそがである。シャバキという人間への楽しみ方だった。

巨砲発射　　完

２０１０・５・１１

第二百三話　ヨーグルトの食べ方その一

ヨーグルトの食べ方

ルシエンはトルコ人である。これは誰もが知っている。
そしてだ。トルコ料理のこともこれまた皆が知っていた。
その彼がだ。今教室で昼食を採っていた。そこでパンを食べているがだ。
彼と一緒に食べているセドリックがこう言ってきた。
「あのさ」
「何だ？」
「ヨーグルトも食べるんだね」
「ああ、そうだけれどな」
パンの横にはヨーグルトがある。七個程度のパンとそれと羊のソーセージにヨーグルトである。他にはオレンジやバナナといったフルーツもある。
「駄目か？」
「駄目じゃないけれどね」
それはいいというセドリックだった。
「ただ」
「ただ？」
「固形のヨーグルトなんだ」
彼が言うのはこのことだった。
「それなんだ」
「ああ、このヨーグルト美味いからな」
「それ飲むの？」
怪訝な顔でルシエンに問う。
「ひょっとして」
「ああ、飲むんだよ」
言いながらスプーンを出してきた。そうしてだった。

それをかき混ぜてだ。それからまた言ってきた。
「こうして徹底的にかき混ぜてな」
「うん」
「それでパンをつけてな」
実際にそのヨーグルトケースの中にパンを入れてだ。そうしてそのうえでまた言うのだった。パンはヨーグルトで真っ白にさえなっている。
「それで食べてな」
「うん」
「残りは飲むんだよ」
そうするというのである。
「わかったな、それはな」
「わかったけれど。ただ」
「ただ？」
「結構独特な食べ方だね」
セドリックが言うのはこのことだった。
「ルシエンのヨーグルトの食べ方って」
「そうか？そういう御前だってな」
「僕も？」
「変わってるぞ、結構な」
こう彼に言うのだった。
「実際に今ヨーグルトに何入れてるんだよ」
「これ？」
「ああ、それだよ」
ルシエンもまたヨーグルトを食べているのだった。彼は半ば液状のどろりとした感じのヨーグルトである。それにサンドイッチにハンバーガーというメニューである。
それを見ながらのルシエンの言葉だった。
「それ何なんだよ」
「蜜だけれど」

それだと答える。実際に今ヨーグルトにそれを入れているところだった。
「黒蜜ね」
「美味いのか？それ」
「美味しいよ」
実際にそうだと答えるルシエンだった。
「これもね」
「美味いのか」
「うん、美味しいよ」
はっきり答えた。
「やってみる？」
「いや、いい」
セドリックの申し出をすぐに断った。
「それはな」
「いいんだ」
「今の食べ方が一番だ」
そしてこう言うのだった。
「パンにつけてそれから残りを飲むのがな」
「甘くしないの？」
「しない」
甘みを入れていないヨーグルトなのだという。つまりヨーグルトの味をそのまま楽しんでいるというのである。これも結構癖のある食べ方である。
「そのまま食べる」
「それで食べられるの？」
「美味いがな」
ルシエンは真剣な顔で答えた。

第二百三話　ヨーグルトの食べ方その二

「実際にな」
「そうなんだ」
「それよりもヨーグルトに黒蜜か」
今度はルシエンが言うのだった。
「それか」
「ジャムよりもずっと美味しいよ」
「だといいがな」
しかしルシエンは美味しいと言われてもあまり信じてはいなかった。
「だが」
「だが？」
「俺はいい」
「いいんだ」
「そういう食べ方はしない」
だからだというのである。
「だからだ。いい」
「そうなんだ」
「本当に美味しいのか？それ」
そして怪訝な顔でセドリックに問うのだった。
「そんな食べ方をしてな」
「美味しいよ」
セドリックの言葉は変わらない。
「いや、本当にね」
「そうなのか」
「そうだよ、だから勧めてるんだけれど」
「ううむ、そうか」
ルシエンは話を聞いてもまだ信じられない様だった。今はヨーグ

ルトを飲んでいる。
「俺はこうした食べ方が一番いいけれどな。だが」
「だが？」
「諺の通りなんだな」
腕を組みながらの言葉になっていた。
「本当にな」
「諺って」
「言うだろ、ヨーグルトの食べ方は人それぞれってな」
彼が言う諺はこれだった。
「そう言うだろ」
「ヨーグルトの食べ方は？」
「言わないか？」
「ちょっと言わないけれど」
少しきょとんとした顔で返すセドリックだった。
「そんな言葉あるんだ」
「トルコの古い諺だけれどな」
「ああ、君の国のね」
「そうだよ、知らなかったか」
「つまりこういう意味だよね」
セドリックはこれまでの彼との話からだ。その意味を読み取って言うのだった。
「人それぞれってことだよね」
「ああ、そうだ」
まさにそれだというのだ。
「だからだ」
「そうか、そういうことなんだ」
「確か日本、この国の言葉だと」
「確か十人十色だったよね」
「そうそう、それだ」
「成程ね、トルコじゃそう言うんだね」

「ああ。日本のそれとは意味は同じだな」
また話すルシエンだった。
「成程な」
「そうだね。ヨーグルトの食べ方は本当にそうだね」
「アンネットなんかはな」
「呼んだ？」
ここでそのアンネットが出て来て問うてきた。
「何か用？」
「なにかいきなり出て来たね」
セドリックがその彼女に対して言う。
「ひょっとしてアンネット今来たところ？」
「ルシエンと一緒にお昼食べようと思ってたけれど」
言いながらその手にはパンが多量にある。それはだ。
「ピロシキでね。あとこのヨーグルトミルクとフルーツね」
「ヨーグルトミルクか」
「ヨーグルトとミルクは元々同じだし」
アンネットはにこりと笑って述べてきた。
「一緒になっても美味しいのよ」
「アンネットはそうやってヨーグルト食べるんだ」
「そうだけれど？」
少しきょとんとしながらセドリックに返す。そうしながら二人と同じ席に座る。そのうえでピロシキとフルーツをそのヨーグルトミルクで食べはじめた。
そのうえでだ。またセドリックに問うた。

第二百三話　ヨーグルトの食べ方その三

「ヨーグルトミルクがどうかしたの？」
「いや、そこにヨーグルトが入ってるよね」
「ええ」
「アンネットはそうしてヨーグルト食べるんだ」
「そうだけれど」
応えながらさらに食べている。ここでルシエンが言ってきた。
「アンネットはヨーグルトは絶対にミルクと一緒に飲むからな」
「そうなんだ」
「俺はパンにつけるかストレートだ」
彼はそうなのだというのだ。
「どちらかで食べる」
「似ているようで違うね」
「ヨーグルトミルク美味しいわよ」
アンネットの言葉だ。
「それはね」
「どんな味かな」
セドリックは首を少し捻りながら述べた。
「それって」
「食べたことないの」
「ヨーグルトは飲むんじゃなくて食べる派だからね」
アンネットにもそのことを話すのだった。
「それも黒蜜を入れてね」
「それ結構変わってるわね」
アンネットはルシエンと同じ反応を見せた。
「何かね」
「アンネットもそう言うんだ」
「ヨーグルトはミルクと混ぜて飲むものじゃない」

そして自分の食べ方を言うのだった。
「やっぱりね」
「そういうものなんだ」
「これが身体に一番いい食べ方じゃないかしら」
こんなことも言うのであった。
「やっぱり」
「まあヨーグルトは実際に身体にいい食べ物だけれどね」
「ほら、エウロパのあの国の」
アンネットの顔がここで微妙に歪んだ。エウロパを話に出してだ。
「ブルガリアって国あるわよね」
「ああ、ヨーグルトのあのね」
「あの国の人間っていつもヨーグルト食べてるから健康らしいわよ」
「不健康どころか全員死んで欲しいけれどね」
セドリックも忌々しげに言う。
「エウロパの人間なんてね」
「まあそれでも健康なのはね」
「ヨーグルト食べてるからなんだ」
「だからしいわ」
こう話すのだった。
「それで健康らしいわ」
「そういえばな」
「そうだね」
ルシエンとセドリックはここで言った。
「ブルガリアは地球にあった頃はな」
「ルシエンの国が征服していたよね」
「ああ、オスマン＝トルコの時代な」
その時だというのだった。
「あの時代に少しな」
「昔のトルコも凄かったからね」
「あの時はあの時で凄かったからな」

こう話すルシエンだった。この時代の連合の中においてもトルコはかなりの大国なのである。連合では六大国の一国に入っている程である。

「ブルガリアどころかな」

「あちこち征服していたよね」

「エウロパも征服できた」

彼は言った。

「あの時にしていればな」

「今あの連中あんな場所にいないね」

「完全に征服していたな」

ルシエンは腕を組んで述べた。

「もっとも。それはな」

「それは？」

「ナンの国の方が可能性は高かったな」

こう言うのだった。

「むしろな」

「ああ、モンゴル」

「あの国は圧倒的だったからな」

「そうよね。モンゴル帝国ね」

アンネットも言うのだった。

「凄かったもんね、あの国は」

「本当にフランス辺りまで一気に突っ切ってくれていたら」

「あの連中は存在していなかったね」

「そうなってくれればね」

「全くだ」

三人で話すのだった。

第二百三話　ヨーグルトの食べ方その四

「しかし。それでも連中は生きているし」
「今の私達は攻める気ないしね」
「戦争はな」
セドリックもアンネットもルシエンもだ。決して好戦的ではなかった。連合は中央政府にしても各国政府にしても市民達にしてもだ。好戦的ではないのだ。
「そんなのしなくてもいいし」
「というか兵隊さんに迷惑だし」
「しなくていいな、俺達は」
そしてこう言い合うのだった。
「それでオスマン＝トルコだけれど」
「ああ」
ルシエンはアンネットが話を戻してきたのに応えた。
「あの国がブルガリア征服してね」
「それか」
「それでヨーグルト伝えたんだったっけ」
問うのはそのことだった。
「確か。そうだったわね」
「ああ、確かな」
それにルシエンも頷く。
「そうだったな」
「それであの連中もヨーグルト食べるようになったの」
「御先祖様も悪いことをしたな」
そしてこんなことを言うのだった。
「あんな連中を健康にさせるなんてな」
「うん、物凄い悪行だね」
「イギリスの帝国主義時代の収奪より酷いわね」

セドリックもアンネットも言う。
「そんなことをしたから」
「オスマン＝トルコには天罰が当たったんじゃ」
「かもな。オスマン＝トルコの統治は穏健だったしな」
その穏健な統治は異民族統治のモデルケースの一つとも言われている。
「人種も関係なかったしな」
「それは素晴しいけれど」
「あの連中に美味しいものを教えたのは」
「やっぱり悪事だな」
ルシエンは腕を組んで言った。
「本当にな」
「そうよ。まあ今言っても仕方ないけれどね」
「大昔の話だしね」
二人もそれはわかっているのだった。
「けれど。ヨーグルトはね」
「美味しいことは事実だよね」
「ああ、確かにな」
このことは一致した考えだった。
「身体にいいのもな」
「事実だし」
「その通りだしね」
「元々はモンゴルから生まれたものだったな」
ルシエンはここでこうも言った。
「そうだったよな」
「ああ、そうよね」
「そうだったね」
二人もそれに気付いた。
「遊牧民の中で生まれたものだから」
「それなら。モンゴルになるよね」

「匈奴とかそういう時代の話だがな」
かつて北の草原を制覇していた強大な国家である。中国の漢王朝と争い続けてきた。言うまでもなくモンゴル民族の祖先の一つである。
「そうなるな」
「モンゴルねえ」
「そのナンだね」
「そういえばあいつ相変わらず家は」
「ないわよ」
アンネットはこうルシエンに答えた。
「普通の家はね」
「これまで通りゲル暮らしか」
「あれが一番落ち着くからってね」
「それと馬と一緒か」
「そういうこと」
ゲルと馬である。この二つは今もモンゴル民族の友人であるのだ。
「まあ遊牧民だからね」
「そこは僕達とは違うよね」
「一応トルコも元はそうだけれどな」
ここでこう言うルシエンだった。
「遊牧民だがな」
「ああ、そういえばそうだね」
セドリックもその言葉に頷く。
「トルコ人って元々はね」
「今は違うけれどな」
「定住したってことだね」
「遊牧民の名残は残っているけれどな」
それでもだというのである。

第二百三話　ヨーグルトの食べ方その五

「今は違うからな」
「そういうことだよね」
「それでだ」
ルシエンはここで話を変えてきた。
「ナンもヨーグルト食べるんだよな」
「ああ、それは当然よね」
アンネットが彼の言葉に頷く。
「っていうかさっき話してたことじゃない」
「それもそうか」
「そうよ。ヨーグルトね」
そのヨーグルトの話をまたはじめる。
「それね」
「あいつはどうやって食べるかだな」
「モンゴル人にとっては主食だったっけ」
セドリックはこのことを指摘した。
「羊肉と並んでね」
「結構凄い食事ではあるわよね」
アンネットは乳製品と羊肉が主食というモンゴル人の食文化について述べた。
「それも」
「そうだよね。かなりね」
セドリックもアンネットの言葉に頷く。
「それに精悍な感じだしね」
「そうなのよね。そのモンゴル式のヨーグルトの食べ方だけれど」
「どんな感じだろうな」
今のはルシエンの言葉だ。
「それで」

「見てみる？」
セドリックはこう提案した。
「ナンのその食べ方」
「そうね。そういえば」
「そういえば？」
「モンゴル人ってお肉焼かないし」
それはないと言うアンネットだった。
「煮るだけだし」
「ああ、そういえばそうだな」
「そうだったね」
ルシエンとセドリックはアンネットのその指摘に頷いた。
「あいつに御馳走してもらった時いつも肉は煮ていたな」
「絶対に焼かなかったよね」
「モンゴルでは昔からそうらしいのよ」
こう二人に話す。
「お肉は焼かないで煮るのよ。それにナンはね」
「ずっと遊牧で生きてきたからな」
「昔ながらの生活でね」
「代々昔ながらの遊牧生活だからか」
「お肉は焼かないんだ」
「そういうことになるわ」
また話すアンネットだった。
「チンギス＝ハーンの時代に決められたことらしいけれど」
「二千年以上の決まりをまだ守っているのか」
「それも凄いね」
「昔は何もない生活だったらしいわ」
その二千年以上前のモンゴル人の生活である。
「流石に今はノートパソコンや携帯テレビや折り畳み式のお風呂とか洗濯機はあるけれど」
「それでもか」

「基本はお肉は焼かないんだね」
「煮る方が燃料使わないしそれに煮た後のお汁も飲めるからしいわ」
「ああ、それもあったのか」
「そうだったんだ」
二人は言われてこのことに気付いた。
「燃料と後の汁か」
「その関係だったんだ」
「モンゴルの自然って過酷だったらしいからね」
この辺りにまさにモンゴル人の事情が出ていた。
「それで羊はそうして食べて後は乳製品ね」
「何か随分と過酷な生活だな」
「そうだね」
二人はアンネットの説明からあらためてこのことを認識した。
「今でこそ色々な文明の利器があるにしても」
「昔は本当に凄かったんだね」
「その彼女だけれど。ヨーグルトには五月蝿いでしょうね」
「主食の一つだからだな」
「余計に」
「そうなるわね。さて」
アンネットはここで顔をあげた。そうしてだった。
「そのナンだけれど」
「ああ」
「何処かな」
「いないわね」
探してみればそうなのだった。
「何処に行ったのかしら」
「昼まではいたけれどな」
「さっきまではね」
「それでも今はいないわね」

「何処に行ったんだ？」
ルシエンは怪訝な顔で彼女を探す。

第二百三話　ヨーグルトの食べ方その六

「それで」
「さあ。けれどさ、また戻って来るよ」
セドリックはその中で落ち着いていた。
「またね」
「まあそれはね」
アンネットも安心した顔で彼の言葉に頷く。
「だって、授業があるから」
「だからか」
「ナンは授業は真面目にいつも出るから」
律儀な性格なのである。素朴でしかも律儀なのが彼女の美点だ。
「だからね」
「その後で聞けばいいんじゃないかな」
セドリックは別に探すことなく述べていた。
「それでね」
「それもそうだな。それじゃあ今は」
「御馳走様してね」
アンネットは微笑んで言う。
「それで何処かに行かない？」
「何処に行くの？」
「グラウンドで何かしましょう」
こう二人に提案するのだった。
「皆も呼んでね」
「そうか、それならな」
「そういうことでね。皆でソフトでもして」
「あっ、いいね」
セドリックはソフトと聞いて笑顔になった。
「それかサッカーかね」

「どちらにしろ球技だな」
「それをして遊びましょう」
こう二人に提案を続けている。
「明るく楽しくね」
「よし、じゃあな」
「今からね」
二人も笑顔で頷いてだった。そうしてだ。
皆も誘って外に出てた。楽しい昼休みを過ごすのだった。
その頃そのナンはというとだ。競技場にいた。そこで馬に乗りその右手にスティックを持っている。それを手にポロに興じているのだった。
「おいナン」
「そっちに行ったわよ」
「ええ、わかってるわ」
馬を全速力で駆りながら仲間達に応えている。
「それじゃあね」
「ああ、頼んだからな」
「そっちはね」
「よしっ」
そのボールをスティックで打つ。その打った方向には仲間達がいた。
見事な運動神経と乗馬の技術である。彼女は打ってから微笑んでいた。
「これでいいわね」
「ああ、上出来だよ」
「有り難う」
「馬に乗ってのことなら任せておいてね」
微笑んで言った言葉である。
「もうね。何だってできるから」
「馬に乗ったらなのね」

「そうよ、乗ったらね」
その通りだというのである。
「だってモンゴル人だし」
「モンゴル人って馬に乗って御飯食べるんだ」
「それも驚きだけれど」
「そうよね」
「えっ、普通じゃない」
これがナンの返答だった。硬い土のグラウンドの上で馬に乗ったままである。そのうえでこう仲間達に答えを返してみせたのである。
「それって」
「いや、普通じゃないから」
「やっぱり」
「モンゴルじゃ普通よ」
これがナンの返答だった。

第二百三話　ヨーグルトの食べ方その七

「何日も馬の上ってことだってあるし」
「何日もって」
「本当なの！？それ」
「本当よ」
素っ気無くその通りだというのだった。
「もう何日もね。馬に乗ったまま御飯食べて水を飲んで寝て」
「馬に乗ったまま寝るって」
「それも凄いけれど」
皆このことにも驚く次第だった。
「それがモンゴル人なの」
「あらためて凄いね」
「私達の間じゃ普通だけれど」
モンゴル人として話すナンだった。
「ここじゃ普通じゃないのね」
「僕達遊牧民じゃないから」
「そうよ」
こう返答が来た。これも当然だった。
「そんなの。とても」
「考えられないし」
「そこまでなの」
それを聞いて首を傾げさせるナンだった。今は休憩中だ。ナンの額には爽やかな汗がある。それが粒の様に滴り落ちている。
「モンゴル人の生活って」
「何もかもが馬なのね」
「モンゴル人の足は四本よ」
このことを笑って言ってみせた。
「四本だからね」

「じゃあ歩いてるのと同じ？」
「そうよね」
「そうなるわよね」
「そうよ、一緒よ」
まさにその通りなのだという。
「完全にね」
「そう、一緒なのね」
「本当に」
「だから今だってね」
馬の手綱を握って微笑みながらの言葉だった。
「こうして普通にね。本当は手綱だってね」
「いらないのね」
「それも」
「手綱だけじゃなくて鞍も鐙もよ」
その二つもなのだというのだ。
「どっちもね。いらないのよ」
「それもいらないって」
「凄くない？」
「ねえ」
「だからモンゴルじゃ普通なのよ」
またモンゴルということが強調される。
「生まれた時から乗ってるんだから」
「えっ、生まれた時からなの」
「じゃあお爺さんお婆さんも」
「子供もね。当然私みたいな女の子でもね」
馬に乗るというのである。
「乗ってるわよ。ちゃんとね」
「そうなの。皆なの」
「子供もお年寄りも」
「昔からね。極論すればお母さんのお腹の中にいた時からね」

その時からなのだと話すのだった。
「馬に乗ってるから」
「それで何もなくても乗られるのね」
「そういうことなのね」
「そうなのよ」
皆に話を続ける。
「実はね」
「ううん、モンゴル人恐るべし」
「本当に」
「馬に親しみ過ぎよね」
「何度も言うけれどモンゴル人の足は四本よ」
この言葉もまた言うのだった。
「馬が足なのよ」
「じゃあポロもあれ？」
「ラクロスとかホッケーの感じなのね」
「むしろラクロスよりもやりやすいわね」
にこりと笑っての言葉だった。
「ホッケーとかよりもね。だってこれも子供の頃からやってたし」
「馬が友達」
「っていうか分身なの」
「もう一人の自分ね。これで登下校もしてるしね」
そのことも話すのだった。とにかく馬には親しんでいるところではなかった。そしてそれはただ足であるだけではなかったのである。

ヨーグルトの食べ方　　完

２０１０・５・１６

第二百四話　モンゴルのヨーグルトその一

モンゴルのヨーグルト

ナンがいつも通り馬で学校に来るとだった。教室に入ってきた彼女に対してルシエンが尋ねた。その尋ねた内容はというとであった。

「なあ、ナン」

「どうしたの？急に」

「まずはおはような」

「ええ、おはようね」

挨拶は忘れなかった。それからであった。

「それでだけれどな」

「あらためて何なの？」

「御前ヨーグルト好きか？」

「大好きよ」

返答は実にシンプルなものだった。そしてこう言うのだった。

「だって。主食の一つだし」

「ああ、やっぱりそうか」

「乳製品はモンゴル人にとっては主食よ」

こうも言うのだった。

「羊肉と乳製品の二つはね」

「そうだよな。やっぱりな」

「けれどそれがどうかしたの？」

ナンは自分の席に座りながらフックの話を聞く。そうしながらだった。

あらためてルシエンの話を聞くのだった。そのヨーグルトの話をだ。

「ヨーグルトが。モンゴルじゃ違う名前だけれど」

「名前は後で聞くにしてもそれで食べ方はどうなんだ？」

「ヨーグルトの食べ方ね」

「ああ。御前はどうやって食べるんだ？」
「基本は飲むかしら」
少し考えてからの言葉だった。
「やっぱり」
「飲む派か」
「食べるヨーグルトも好きだけれどね」
それもだという。
「どっちも普通に食べるわよ。ただしね」
「ただし？」
「食器がなかったら食べるヨーグルトもミックスしてから飲むわ」
そうするというのである。
「その場合はね」
「食器がなかったらか」
「モンゴルって遊牧民の国じゃない」
「ああ」
言うまでもないことだった。連合ではかなり珍しくなっているがそれでもだ。モンゴル人は古くから草原の中を遊牧で生きている国なのである。
その国の生まれであるナンがだ。こう話すのだった。
「それで食器がない場合もあるのか」
「そうよ。洗えない場合だってあるしね」
そのケースも話す。
「例えば食器洗い機が壊れている場合とかどうしても水がない場合とか。水を作る機械も使えない場合とかそういう場合はね」
「色々なケースがあるんだな」
「遊牧はありとあらゆるケースに遭うものよ」
「色々なか」
「お水が手に入らない場合もあるし」
そうした場合もあるというのだ。
「そうしてお水を作られない時だってあるし」

「街とか農園での生活とは違うんだな」
「全然ね」
まさにそうだというのだ。
「いつも何かが。お金さえ払えば手に入る世界じゃないのよ」
「厳しい世界だな」
「楽しい世界よ」
しかしナンは微笑んでこう言うのだった。
「かなりね」
「楽しいのか」
「遊牧は一度したら止められないわよ」
「それで今も街の中を転々としているのか」
「そういうこと。馬と一緒にね」
「ないのは羊だけか」
ルシエンはここで言った。羊だけないというのだ。
「それだけか」
「羊も連れたいけれどね」
今度は少し寂しい笑顔になるのだった。
「それでもね。それはできないから」
「流石にそれは無理か」
「けれどゲルで移動はしているわ」
それはだというのだ。

第二百四話　モンゴルのヨーグルトその二

「ちゃんとね」
「ゲルは欠かせないか」
「ゲルと馬はね。それに馬は」
「馬は？」
「お乳も出してくれるし」
にこりとした笑みになる。表情はかなり豊かであった。
「だからね」
「ああ、モンゴルは牛はいないからな」
ルシエンも気付いた。牛は農業に使う家畜である。放牧もされるがそれはあくまで牧場の中でのことである。遊牧にはあまり適した生き物ではないのだ。
「だからだな」
「そうよ、馬よ」
「そうだな」
「それに羊ね」
それもだというのだ。
「羊のお乳も飲むわよ」
「それにその乳製品もか」
「それもね」
それもだというのである。乳は飲むだけではすぐに腐ってしまう。それで加工して乳製品にしてだ。そのうえで食べるのである。これも人類の叡智の一つだ。
「あるから」
「馬に羊か」
「そうよ。普通に売ってるわよね」
「ああ」
この時代ではミルクにしても乳製品にしてもだ。牛のものだけと

は限らないのだ。その馬に羊、それに山羊に豚のものまである。カイギュウのものすらある。
そしてだ。ナンはその馬や羊のものを言うのだった。
「私はそっち派なのよ」
「食べ方や飲み方以上にか」
「そうよ、馬や羊のお乳がね」
好きだというのである。
「そっちがいいから」
「そうか、食べるものが大事か」
「ルシエンは違うの？」
「俺は食べるのはな」
「どれでもいいのね」
「どのミルクも好きだからな」
だからだというのである。
「それでいいさ」
「そうなの」
「しかし御前ミルクは牛とかは駄目なのか」
「駄目って訳じゃないけれど」
首を少し捻りながらの言葉だった。
「あまり食べないわね」
「そうか」
「飲まないし」
食べると飲むはここでは一緒になっていた。
「やっぱりね」
「カイギュウは駄目か」
「モンゴル人よ」
答えはそこにあるというのだ。
「海はね」
「だからか」
「っていうかモンゴル出るまでカイギュウのミルクとかあるって知

らなかったし」
「トルコでもあるが」
「トルコじゃないから」
あくまでモンゴルであるというのだ。そこだというのだ。
「モンゴルは草原の国よ」
「しかしどの惑星でも海はあるな」
「あることはあるけれど私は内陸の方にいたから」
「だから知らないのか」
「淡水性のアザラシとかカイギュウがいる星でもなかったし」
他には淡水性のイルカや鯨もいる。カイギュウといってもただ海の中にいるだけではないのである。星によってはそうしたものもいるのだ。
「だからね」
「知らなかったのか」
「そう、知らなかったの」
また言うのだった。
「ちょっとね」
「図鑑とかで知っているだけか」
「あっ、それも知らなかったわ」
それもだというのだった。
「全くね」
「そうだったのって」
「知らなかったの」
「だから草原にいたから」
理由はとにかくそれに尽きた。

第二百四話　モンゴルのヨーグルトその三

「海はねえ。弱いのよ」
「けれど泳げるわよね」
「それはちゃんと」
「モンゴル人は泳ぐのも必須だから」
こう一同に話すのだった。ルシエン以外のメンバーも来ていたのだ。
「だからなのよ」
「モンゴルでは泳ぎもするんだな」
「そうよ。馬に乗るだけじゃないのよ」
こう皆に話す。
「昔はそれに弓もあったのよ」
「それってモンゴル帝国？」
「だよね」
「もう完全に」
「モンゴル人は生活そのものが戦闘訓練って聞いてたけれど」
遊牧民族としてである。生まれながら馬に乗っていてそのうえで弓も操る。これはそのまま戦闘訓練になる。これはモンゴル帝国の時代である。
「そういう生活をしていたんだ」
「成程」
「今は弓は使わないわよ」
それはないというのだった。
「ただ、銃はね」
「使うんだな」
「獣とかいるからね。狼以外は撃つわよ」
こうルシエンに答える。
「狼以外はね。あと鹿もね」

「何で狼と鹿は駄目なんだ？」
「御先祖様だから」
だからだというのである。
「だからなの」
「御先祖様！？」
「狼と鹿が！？」
「そうよ。蒼き狼と白き牝鹿」
ナンがここで言うのはこのことだった。
「モンゴル人の祖先はそれなのよ」
「ああ、トーテニズムね」
イロコイ人のジュリアが応えた。
「それね」
「そうなの、それなの」
「やっぱりね。それはわかるわ」
「ジュリアの国って元々ネイティブだったわよね」
「だからわかるのよ」
所謂アメリカの原住民、ネイティブアメリカンの国だというのだ。イロコイ族はその部族の一つなのだ。彼等はトーテニズムが信仰の中にあるのだ。
「それでなのよ」
「そうなの。それじゃあどうしてモンゴル人が狼と鹿を撃たないのかわかるわよね」
「ええ」
にこりと笑ってナンに答えるジュリアだった。
「よくね」
「狼は父で鹿は母なの」
「ああ、そういえばあれか」
ここでルシエンも気付いたのだった。
「何かのゲームであったな。モンゴル人は蒼き狼とその妻である白き牝鹿の間に生まれたのがそのはじまりだってな」

「そうよ、誇り高きね」
言いながらにこりと笑ってさえいる。
「それがモンゴル人なのよ」
「そうか、それでなのか」
「それで撃たないのよ。羊を食べられても悪さをされてもね」
「そういうことか」
「モンゴル人はそうなのよ」
また話すのだった。
「それは絶対にしないの」
「成程な」
「それでね」
さらに笑顔で話すナンだった。
「モンゴルの草原の生活はかなり色々あったりするのよ」
「遊牧民ねえ」
「そんなに」
「豚とか牛は食べなくて」
このことも皆に話す。
「この学校に入ってはじめて食べたのよ」
「はじめてね」
「そうなの」
「そうよ、はじめてよ」
このことをまた言うのだった。

第二百四話　モンゴルのヨーグルトその四

「本当にね」
「栄養偏らない？」
セドリックはこのことを素朴に尋ねた。
「食べるのはお肉と乳製品だけだよね」
「ええ」
「それで栄養大丈夫なの？」
「大丈夫よ」
しかしナンはにこりと笑ってこう答えたのだった。
「全然ね。だって馬や羊は身体にいい草を食べるから。その馬や羊のお肉やお乳を食べたり飲んだりするモンゴル人も健康なのよ」
「そういうことになるんだ」
「それにね」
ナンはさらに話すのだった。
「血も内臓も食べるし。お茶もあるし」
「ああ、お茶」
「それも」
「だから栄養は充分よ。モンゴル人はね」
「ううん、そうだったんだ」
セドリックはここまで聞いて衝撃の事実を知った顔になっていた。
「それでなんだ」
「そうなの。私だって病気一つしたことないでしょ」
「確かに、それは」
「ないわね」
ナンは健康優良児なのだ。それもかなりだ。
「それを考えたら」
「そうだな。しかしヨーグルトだが」
「ええ」

「馬だな」
「馬が一番オーソドックスよ」
ヨーグルトの話が続く。
「それがね。乳製品はまとめてね」
「まとめて？」
「ツァガーン＝イデーって呼ばれているのよ」
こう話すのだった。
「まとめてね」
「まとめてなのか」
「そうよ。ヨーグルトはタラグって呼ばれてるのよ」
ヨーグルトの呼び名も話す。
「水と割ったりして飲むこともあるわ」
「そうか」
「ああ、言っておくけれど」
こう話していく。
「お砂糖とか入れないから」
「えっ、そうなの」
セドリックはそれを聞いてだ。思わず目を丸くさせた。
「入れないの」
「入れないわよ」
「じゃあジャムとか蜜は？」
「ジャムって。モンゴルよ」
またこうした返答だった。とにかくモンゴルであるということが返答の大きな部分になっていた。ナンはそういた意味で生粋のモンゴル人だった。
「ある訳ないじゃない」
「果物食べないんだ」
「基本的にね。だからお肉と乳製品だけなのよ」
「甘いものの味は」
「今は当然手に入るけれど昔はなかったわよ」

そういうことだった。
「勿論ね」
「そうなんだ」
「草原に果物、お野菜もそうだけれど」
果物だけでなく野菜もなのだという。
「農業自体がないから」
「それでか」
「そうよ、ないわよ」
また話される。
「ジャムもね。苺もオレンジも人参もね」
「ううん、そうなんだ」
「蜂蜜も昔はかなり高価だったし」
モンゴル帝国の時代の話である。この場合の昔とはだ。
「だからヨーグルトも普通に酸っぱいものよ」
「ううん、ヨーグルトのイメージじゃないわね」
アンネットもそれを言う。
「それもかなり」
「そうよね。だってタラグだから」
またこの呼び方を口にしたのだった。
「ヨーグルトと同じ様で少し違うのよ」
「そうなるのね」
「そうよ。けれど美味しいわよ」
このことはにこりと笑って保証するのであった。

第二百四話　モンゴルのヨーグルトその五

「それもね。お酒も馬のあれだし」
「ああ、馬乳酒か」
「あれは皆飲んだことあるわよね」
「ああ」
ルシエンはナンのその言葉に頷いて応えた。
「あれはな」
「あれも美味しいでしょ」
「そうだな」
かつてナンのそのゲルに招かれた時のことを思い出しながら答えた。何回かクラス全員で招待されているのだ。一度だけではないのだ。
「あれもまたな」
「アルコール度は低いけれど大量に飲むものなのよ」
「大量にか」
「そう、大量にね」
そうして飲むものだというのだ。
「飲むものだから」
「ビールみたいなものなんだね」
セドリックはあまりアルコールの強くないこの酒を話に出した。
「ああいう感じだね」
「そうね。私も前からそう思っていたけれど」
「ああいう感じで沢山飲むんだ」
「そうよ、そうして飲むものだから」
酒の話もするのだった。
「どんどんね」
「そうか。それでか」
「私も家じゃいつも飲んでるわよ」

ナンはまた話した。
「時間があればね。馬はただ走るだけじゃないのよ」
「色々使えるんだ」
「そうね」
セドリックとアンネットも彼女の話を聞いて頷く。
「馬って今も」
「凄く役に立つのね」
「そうよ。今じゃペガサスもユニコーンも乗るけれどね」
これは惑星によってである。そうした馬がいる星もあるのだ。
「私はオーソドックスな馬が一番好きね」
「スレイプニルなんてどう？」
セドリックはここでこの馬を話に出してみせた。
「あれは」
「八本足ね」
「あれも人気あるじゃない、速いし」
「乗ったことないのよ」
「ないの」
「ええ、ないわ」
こう一同にも話す。
「モンゴルではね。私の星にはいなかったから」
「あれも珍獣だからなあ」
「そうよね」
珍獣なのは事実である。そもそも人類が地球にいた頃は完全に空想上の、北欧神話にのみ出て来る馬だったからである。実在するとは思われなかったのだ。
「それがいる星って」
「滅茶苦茶限られてるし」
「そうよ。ただね」
ここで笑顔になって言うナンだった。
「モウコノウマは一杯いるわよ」

「ああ、野生の馬ね」
「それはなのね」
「そうよ、いるわよ」
笑顔での言葉だった。
「一杯ね」
「馬がいたらそれでいいのね」
「やっぱり」
「ユニコーンやペガサスも確かにいいわ」
そうした馬もいいと言いはした。
「けれどね。やっぱり私は」
「普通の馬がいいのね」
「乗るには」
「そうよ。オーソドックスなの」
好みを英語で表現してもみせたのだった。
「好みはね」
「成程ね」
「そうなのね」
「あとこれ重要だけれど」
ここでナンは少し真面目な顔になって述べてきた。

第二百四話　モンゴルのヨーグルトその六

「モンゴル人は馬は食べないわよ」
「馬はなの」
「食べないのね」
「そうよ、絶対に食べないの」
このことは確かだというのである。
「何があってもね。馬のお乳は飲んでも」
「友達だから？」
「だからなの？」
「家族だからね。幾ら何でも家族は食べないでしょ」
「そうだよね。それはね」
セドリックがその言葉に頷く。
「ペットでも。家族だからね」
「普通は食べないな」
「そう、モンゴル人にとって馬は家族なの」
家畜では済まないというのである。この辺りは長きに渡って草原においてその馬達と共に生きていたわけではない。モンゴル人ならではの言葉だった。
「だからよ。それはね」
「しないんだな」
「そう、馬を捨てることも絶対にしないわ」
ルシエンの問いにこのことも言うのだった。
「まあ今は動物捨てたらそれだけで犯罪だけれどね」
「じゃあ怪我した馬とかは手当てするの？」
「勿論よ」
当然だとアンネットにも返す。
「どうしてもそれが無理でも最期まで看取るのよ」
「本当に家族と同じなのね」

「足でもあるしね」
その四本足だというのである。
「それもあるからね」
「それでなの」
「そういうこと。馬は足であり家族でもあるのよ」
また言うナンだった。
「だから何があってもね」
「それはしないのね」
「その通り。それじゃあ」
「ええ、じゃあ」
「ちょっと食べさせて」
皆に対してこう言ってきたのである。
「そのタラグをね」
「朝飯か？」
「朝御飯はもう食べたけれどね」
少し苦笑いになってルシエンに答えたのである。
「喉が渇いたから」
「それでか」
「ええ。ちょっと飲むだけよ」
そのまま水筒を出してきてだ。そこから白いものを出して言うのであった。
「今からね」
「そうか。それならな」
「さてと。これを飲んで」
水筒のそのコップに白いものを注ぐ。どろりとしていて粘り気も見られる。独特の匂いもまたそこから濃厚に放たれていた。それを飲むというのである。
「それでね」
「本当に乳製品も主食なのね」
「朝は羊のお肉を煮たもの。昨日の晩御飯の残りでね」

「今はそれなのね」
「羊と馬があれば生きていけるわよ」
タラグ、つまりヨーグルトを飲みながらの言葉だった。
「その二つだけでね」
「本当にそうだから凄いな」
「つまりお肉とお乳ね。全部自分で作ってるし」
「それも凄いな」
ルシエンはあらためて述べた。
「自分で作るというのもな」
「じゃあ誰が作るのよ」
ナンはこう問い返しもしてきた。
「自分が作らないと」
「それもそうか」
「そうよ。何でも自分で作るのよ」
そしてそれがだというのだった。

第二百四話　モンゴルのヨーグルトその七

「遊牧民はね」
「ワイルドなのね」
「まあね。けれど凄くいい生活よ」
目が温かいものになっていた。そのうえでの言葉である。
「とてもね」
「馬かあ。それに羊」
「その二つで」
「暮らしていけるんだ」
皆ナンのその言葉を聞いて言うのだった。
「ううん、極限の生活だよな」
「ジャングルの生活とはまた違ったベクトルで」
「ジャングルねえ」
ナンはジャングルと聞いてだ。ふと言うのだった。
「あっちの生活はね」
「やっぱり無理？」
「ナンには」
「絶対に無理ね」
それは自分でも認めるのだった。
「だって。馬乗れないでしょ」
「森の中だからな」
「しかも密林の」
「川とか湖だって多いし」
連合の惑星は緑の多い惑星が非常に多い。その中には密林も多くあるのである。そこは自然の宝庫でもありその意味でも貴重な場所なのである。
「そこじゃ馬はね」
「やっぱり無理でしょ」

「歩くしか」
「だから無理ね」
また言うナンだった。
「私は馬がないとね。駄目なのよ」
「草原の生活が基本」
「それがベース」
「そう、だからよ」
にこやかに笑っての言葉だった。
「だからなのよ」
「そうか、やっぱりね」
「馬と羊と草原ね」
「街でも馬がいつからやっていけるの」
それがあるからだというのだ。
「羊はお肉やお乳は手に入るし」
「それでなのか」
「まだ我慢できるの。草原は郊外の広場に出るし」
こうルシエンに話す。
「それでこれも我慢できるから」
「しかしジャングルでの生活はか」
「無理ね、どうしても」
このことをまた言うのだった。
「そうした場所は」
「ジャングルかあ」
「あそこも過酷だからな」
「それもかなり」
皆今度はジャングルに思いを馳せた。その恐ろしいまでに危険な自然をだ。そこはただ鬱蒼と茂った密林があるだけではないのである。
「川や湖には鰐や大蛇がいて」
「獰猛な肉食魚も巨大魚も」

水の中にも危険があるのだ。
「上からが猛獣が襲い」
「足元には毒蛇」
「人食い草もあるし」
「中には巨大毒蜘蛛も」
「まさに緑の地獄」
それがジャングルへの評価だった。
「恐竜がいたりもするし」
「凶暴な巨大鼠とか巨大アルマジロとか」
「行くのはまさに命懸けの冒険」
「そんな場所だから」
「そういえばうちの学園の動物園でも」
アンネットの言葉だ。
「ジャングルコーナーは壮絶よね」
「そうそう、水族館と合同でやってるコーナー」
「あそこは凄いよね」
「まさに戦場」
そしてだ。そんな話をしているうちにだ。
自然に行きたくなってだ。皆言った。
「行く？今度」
「そうだね」
「有志でね」
そんな話になる。そしてナンはだ。
「ジャングルは遠慮するわ」
こう言ってそのタラズを飲んでいた。それで喉を潤していたのであった。

モンゴルのヨーグルト　　完

2010・5・21

第二百五話　緑の地獄その一

緑の地獄

ジャングルと聞いてだ。ブラジル人のレミが言う。
「ああ、ああしたところはね」
「知ってるよね」
「ブラジルって連合で一番ジャングルが多い場所だし」
「地獄よ」
彼女も言うのだった。
「下手に入ったらね」
「生きて帰れない」
「そういうことだよね」
「一歩入って天国よ」
それだというのである。
「本当にそれだけでね」
「一歩入って」
「それで」
「そう、それで終わり」
断言であった。
「天国に行けるから。恐竜に丸呑みとか毒蛇に噛まれるとかで」
「うわあ・・・・・」
「本当にそうなんだ」
「リアルで」
「入ることは勧めないわよ」
このことも言うのであった。
「自殺志願者でもない限り」
「そこまでやばいんだね」
「ジャングルって」
「仮面ライダーアマゾンなら平気よ」

仮面ライダーの一つである。
「あそこまで強いとね」
「っていうかあれ完全に野生だし」
「獣人食うし」
「ねえ」
それが仮面ライダーアマゾンなのである。仮面ライダーは異形のヒーローとして知られているがその中でもとりわけ異形の存在であるのだ。
「元々ジャングルで暮らしていたし」
「別物でしょ」
「まあね。あれはね」
レミもそれは認める。
「っていうかブラジル人はああいうのじゃないから」
「流石にジャングルの中で暮らしてる人はいないのね」
「やっぱり」
「自然の中で暮らしたい人はジャングルの中の町とか村にいるわよ」
そうしているというのである。
「ただね。それでもね」
「やっぱり中に入っては」
「生きていけないのね」
「ジャングルじゃ」
「今時アマゾンの奥地で暮らす部族もないし」
そもそも移住した惑星でそうした部族がいる筈もない話である。しかしここでだ。レミはこんなことも言うのであった。そのこととは。
「自殺志願者とか悪いことして逃げてる人が潜伏していて何時の間にか野生になってるってことはあったりするでしょうけれど」
「ううん、何かね」
「それって辺境の話みたい」
連合の辺境の定められた国境の外ではまだ開拓されていない星に

逃げ込んでそこで暮らしている連合の人口に入っていない人達もいる。大体百億はいると言われている。
「けれどそうした人達もすぐに見つかって悪い人だと逮捕されたりちゃんと住民票に登録されたりするからね。結果としてはね」
「完全に野生で暮らしてる人はいないのね」
「そういうことなのね」
「ええ、やっぱりいないわ」
まさにそうなのだという。
「そんな人口統計や住民票に出なかったり載っていない人はね」
「そこが辺境と違う」
「そういうことね」
「そうよ。連合だし」
「そうなのですか」
それを聞いていたセーラがふと言ってきた。
「マウリアでは統計に出ていない人口もありますけれど」
「だからマウリアはねえ」
「何ていうか」
ここで皆口ごもってしまったのだった。
「何ていうか。連合と違うから」
「そうした人がいてもね」
「自然っていうか」
「三百億はいるそうです」
連合のその辺境の外の統計に出ていない人間より多かった。百億よりもだ。
「確か」
「ちょっと大きな国位いるし」
「普通に」
「そうして裏のＧＮＰがです」
そんなものがあるのもマウリアだけであった。普通この時代ではＧＮＰは表の話だけである。とにかくマウリアはそこが違うのであ

る。

第二百五話　緑の地獄その二

「表の三倍はあったかと」
「表の三倍って」
「どういう国なのよ、マウリアって」
「本当に」
「二十世紀では納税者は全人口の一パーセントでした」
これは恐ろしいことに事実であったらしい。
「また一説では今の全人口は三千億とも」
「プラスマイナス一千億！？」
「何それ」
「ですから連合に来て驚きました」
セーラ自身の言葉である。
「ちゃんとした人口統計やＧＮＰがありますから」
「普通に人類社会一の大国なのに」
「まだそんな力があるって」
「マウリアって」
皆マウリアのその底知れぬものを知り唖然となっていた。
「恐ろしい、マウリア」
「っていうか国自体がジャングル！？」
「そんな国？」
「マウリアはいい国ですよ」
しかしセーラは言うのであった。
「本当に」
「いい国かも知れないけれど」
「カオスっていうか」
「牛多いし」
「あれもね」
「牛は神の使いですから」

セーラはこのこともにこりと笑って述べた。
「大切にしないといけません」
「水牛はいいの？」
レミは水牛について尋ねた。
「そっちは」
「水牛が何か？」
「いや、セーラって水牛は普通に食べてるから」
それで言うのであった。
「ですから。それは食べていいのです」
「えっ、いいの」
「水牛はいいの」
「はい、いいのです」
平然と答えさえしていた。
「一行に」
「どういうことかな、それって」
「さあ」
誰にもわからない論理だった。
「何が何だか」
「牛と水牛って同じものじゃ」
「そうよね、どう考えても」
「これは」
皆こう考える。しかしであった。
セーラは普通にだ。こう言うのである。
「牛と水牛は別の生き物です。何故なら」
「何故なら？」
「名前が違います」
こう来た。
「それに角の大きさが違います。ですから水牛は牛とは違います」
「え、ええと！？」
「どういう論理！？それって」

「意味わからないけれど」
誰もが呆然となってしまっていた。
「牛と水牛ってね」
「水牛のチーズだってあるし」
「そうそう」
所謂モツァレラチーズである。この時代でも独特の歯ざわりと食感が人気である。
「あれだってあるし」
「牛なんじゃ」
「牛は神の使いです」
これはマウリアでは非常によく言われていることである。若し牛を交通事故でも死なせてしまったならば。この時代ではエアカーや動物や虫が避ける様な匂いを放つ塗料を含んでいるアスファルトが使われていてそうしたことは殆どないとしてもだ。
何と人間に対するのと同じ刑罰が科せられる。それがマウリアなのだ。
「ですから食べることは絶対に許されません」
「しかし水牛はいい」
「ううん、謎だ」
「そうよね」
「まあその水牛だけれど」
ここでレミがまた言ってきた。

第二百五話　緑の地獄その三

「ジャングルにいたりもするのよね」
「ああ、種類によってはね」
「いるわよね」
「水牛もジャングルに」
「動物は豊かなのよね」
レミは再びジャングルについて話をした。
「やばい動物が異常に多いのが問題だけれど」
「虎にジャガーに」
「鰐に大蛇」
「それに毒蛇」
「蠍や毒蜘蛛も一杯」
「それがかえって問題なんじゃ？」
そんな意見も出て来ていた。
「豊かな生態系自体がね」
「そうよね。その動物達がサバイバルだから」
どの自然の世界でもそうなのだがジャングルはとりわけそうなのだ。
「例えば蛙を食べてもね」
「あれ一発でわかるから」
「そうそう」
皆レミが蛙を話に出してきたところで一発で察した。
「色が派手過ぎるし」
「だからね」
「ドクガエルでしょ」
「そうそう、それそれ」
まさにそうだと皆の言葉にも返すレミだった。
「それを食べたらね」

「一発で死ぬからねえ」
「あれもねえ」
「大概だし」
「しかも河や湖の中には」
しかもまだあるのだった。
「ピラニアがいて人食い鯰がいて」
「デンキウナギもいるし」
「吸血魚もいるし」
「危険が一杯だよね」
「空には吸血蝙蝠もいるわよ」
空にもなのだった。尚人食い鯰は星によっては十メートル程度のものまでいる。殆ど鮫と変わらない。ちなみに淡水性のホオジロザメがいる星もある。
「狂犬病を移すからね」
「まさに戦場だな」
「だよねえ」
「ジャングルって」
「それでブラジルはそのジャングルが物凄く多いの」
レミはここで祖国の話をした。
「連合で一番にね」
「そんな戦場が多いって」
「凄い国なんじゃ」
「それでも空気は奇麗よ」
それはあるというのである。
「緑が豊かだから」
「けれど滅多に入られないと」
「危険過ぎてね」
「恐竜とかいたりするし」
「船が普通にエラスモサウルスに襲われる話もあるわよ」
レミはまた怖い話をする。

「ナチュラルにね」
「そんなのナチュラルであって欲しくないし」
「全く」
皆それを聞いて言う。
「怖いから」
「それでだけれど」
ここまで話してだ。レミはまた言ってきた。
「うちの動物園と水族館のそのジャングルのコーナーだけれど」
「そこね」
「それなんだね」
「そうよ、そこよ」
まさにそれだというのである。
「そこに行ってみない？」
「悪魔の園に」
「緑の地獄に」
「そうよ、猛獣と怪魚がいる世界にね」
「おまけに恐竜もいるし」
「命の危険はマックスの世界に」
この時代でもだ。それは変わらないのだった。
「行くのね」
「チャレンジね」
「そうよ。どう？」
レミはそれを勧めてきた。

第二百五話　緑の地獄その四

「皆でジャングル行かない？」
「命は大丈夫かな」
ネロが視線を上にやって述べた。
「そんな場所に入って」
「ああ、それは大丈夫よ」
レミは命については保障した。
「だって。水中も潜れる水陸両用のカーで行くから」
「それに乗るからか」
「大丈夫なのね」
「そうよ、大丈夫よ」
また言うレミだった。
「それに乗るから。恐竜に噛まれても大丈夫だし巨大アナコンダに飲み込まれることもないし。だから絶対に大丈夫だからね」
「っていうかそんなものに乗らないと行けないって」
「かえって凄い場所よね」
「そうなるよね」
「サバンナより凄いし」
今言ったのもネロだった。
「それって」
「だよね、サバンナってライオンとか豹とかチーターはいるけれど猛獣がいるのは事実である。
「けれどね。それだけやばいのがわんさかといたりしないし」
「恐竜もいるにしても」
「姿は見えるし」
「そこまで酷くはないし」
アマゾンは鬱蒼とした密林の中だ。姿が見える筈もなかった。
「ずっと安全だよね」

「確かに」
「だからね。本当にね」
「ジャングルよりずっと安全だから」
だからである。そこまで頑丈な車に乗って回らないのである。そうなのだ。
「じゃあジャングルって」
「それだけやばい世界かあ」
「人食い鮫もいるし」
大海と変わらないのであった。そうした意味ではだ。
「あと毒蛇車の中に入らないようにしてね」
「そうそう、それそれ」
「えげつない毒があるし」
「ああ、その毒蛇だけれどね」
ここでまたレミが皆に話してきた。
「一匹や二匹じゃないから」
「一匹や二匹じゃないっていうと」
「十匹や二十匹？」
「それとも百匹？」
「甘いわよ」
レミは皆の言葉に右手の人差し指を立ててだ。それをメトロノームの様にして振ってからだ。そのうえでこう言ってきたのであった。
「千匹よ」
「千匹！？」
「千匹って」
「千匹単位で密集しているのよ」
そうだというのだ。
「巣にね。凄いんだから」
「千匹単位の毒蛇・・・・・・」
「それってまさに」
「そうよ、蛇蝎の穴よ」

レミはここで中国の古典の話が出て来た。
「それよ」
「蛇じゃなくて蠍もいる」
「そうなんだ」
「そうよ、勿論蠍もいるわよ」
それも当然だというのである。蠍がいることもだ。
「当たり前じゃない」
「いや、当たり前じゃないから」
「そんなのって」
皆呆れながら話す。
「何千匹の蛇に蠍」
「それが密集」
「だから。アマゾンよ」
今はアマゾンと言うのである。
「だからそれもね」
「当然になるって」
「説明不要？」
「そう、不要になるのよ」
たったそれでけでだというのだった。
「アマゾンだから」
「ううん、下手なお化け屋敷よりも凄いっていうか」
「恐ろしいものが」
「けれど行くわよね」
レミの言葉はあっけらかんとさえしてきていた。

第二百五話　緑の地獄その五

「ジャングルに」
「まあね」
「車の中にいるし」
「それだと安全だしね」
皆何だかんだで行くというのだった。
「ちゃんとね。ただ」
「ただ？」
「車の外に一歩でも出たら駄目よね」
見れば彰子だった。
「車の外は」
「速攻で死ぬわよ」
こう話すレミだった。
「出たら」
「そうよね。やっぱり」
「本当に物凄い世界だから」
そしてさらに言うレミだった。
「殆ど世紀末とか地震の後の関東だから」
「わかったわ。それじゃあ」
「車からは絶対に出ないことね」
それだというのであった。
「動物園も水族館もそれは注意するし」
「言い換えればそれだけ危険」
「そういうことなのね」
「十メートルもある人食い鯰よ」
そんなものがいるからこそ怖いのだった。
「ジャガーもいるし」
「上から猛獣」

「水の中にも」
そうした存在で満ち満ちているという認識は変わらないのだった。
「それだったら余計にね」
「ここは」
「そうよ、注意してね」
このことは強く言われる。皆そのうえで動物園に水族館に向かうのだった。
そうしてだ。そこに入るとだ。
目の前に鬱蒼としただ。見事なジャングルがあった。その奥から不気味な声が聞こえてきている。まるで魔物の咆哮の様であった。
「ええと？」
「魔界？」
「何だろうあの声」
「中にいる動物の声よ」
レミが皆に対して答える。
「あれ全部ね」
「猿の声かしら、あれ」
「うん、そうだね」
ネロがアロアの質問に答える。
「あれはね」
「その他にも色々いるね」
猿だけではないというのであった。
「ジャガーもいるしオセロットもいるし。湖の中からの咆哮は」
「今度は何？」
「怪物とか？」
「恐竜かな」
それではというのだ。
「何かそれっぽいね」
「ええと。何かね」
レミはここで動物園のパンフレット、そのアマゾンのコーナーに

関するものを見た。そこにはここにいる動物達のことも載っていた。
それを見るとだ。あまり会いたくない恐竜達も随分といた。
「会ったら速攻で餌になりそうなのばかりいるわね」
「エラスモサウルスにモササウルスかあ」
「肉食性のアーケロンって」
見ればかなり凶悪そうな種類のアーケロンまでいた。ワニガメの様な顔をしている。
「確かに車にいないと」
「確実に死ぬわね」
「この車にしてもね」
レミはパンフレットに書かれてある水中も潜れる水陸両用の車のことも読みながら話す。同時に凶悪な動物達のデータも見ている。

第二百五話　緑の地獄その六

「装甲あるしショックガンも装備されてるし」
「それで守れってことか」
「つまりは」
「ええと、危険度は二十一世紀のヨハネスブルグレベルだって」
それもパンフレットに書かれているのだった。
「それか核戦争後の世界か地震が起こった後の日本の関東か世紀末か使徒が徘徊するミットランドかそのレベルって書いてあるわ」
「どれも最悪だね」
ネロもここまで聞いて呆れていた。
「僕の国も地球にあった頃からジャングル多いけれどそこまでいかないよ」
「アマゾンは特別なのね」
「まさに緑の地獄ってことだね」
そのことを再認識することになった。
「つまりは」
「ええ、地獄みたいね」
まさにそれだというのだった。
「本当に」
「ええと、若し指を河の中に入れたら？」
アロアもパンフレットを取り出してそれを見ていた。
「というか近寄った時点で鰐に襲われて終わりなのね」
「しかも岸辺には十五メートルの鰐が集団で棲息ね」
「近寄る以前だし」
皆もそのパンフレットを見ながら話す。
「冒険というよりは」
「自殺スポットに見えるし」
「滅茶苦茶だなあ」

「凶悪な生き物ばかりだし」
「けれど装甲車に乗るから」
レミはあくまでそれを言う。
「大丈夫よ」
「そうね。それじゃあね」
ペリーヌもここで話す。
「まずは装甲車に乗ってね」
「入りましょう」
「ええ、間違ってもね」
レミの言葉も真剣だ。
「生身で外に出たらね」
「武装しても危ないだろうしね」
「軍隊でもね」
軍でも生身であればというのだった。
「普通に丸呑みされたり」
「車とかの中にいないと」
「十メートルとかだし」
しかも凶暴な生き物がである。尋常なものではない。
「ぺろりと美味しくね」
「食べられるからね」
「気をつけないと」
そんな話をしてである。その装甲車の中に入る。それは何と参加しているクラスの人間全員が乗り込めるバスの様なものだった。それに乗るのだった。
そして用意されている道をホバリングしながら進むのであった。
「動物轢かないようになの」
「ホバークラフトなのね」
「はい、そうです」
ガイドのお姉さんが席に座りながら言う皆に説明してきた。
「その通りです」

「気を使ってるんですか、つまりは」
「そういうことも」
「動物園の車が動物園の動物を轢いたらお話になりません」
まさにその通りの正論だった。
「ですから」
「成程、それで」
「それでなんですか」
「はい、そうです」
また言うのだった。
「変形して水中にも入られますよ」
「ううん、何気に高性能」
「確かに」
「はい、連合の技術の粋を集めたものです」
ガイドさんの説明は自信に満ちたものだった。

第二百五話　緑の地獄その七

「そうしたことも考えています」
「ううん、動物の命もまた尊い」
「その通りね」
「凶悪な猛獣や恐竜や毒蛇でも」
「それでも」
「またバスの中は乗車前に何度も厳重にロボットでチェックしています」
ガイドさんはまた話してきた。
「間違っても毒蛇や毒蜘蛛や蠍が入らないようにです」
「ええと、噛まれたり刺されたら」
「やっぱり」
「血清は用意してありますが」
しかし、というのであった。ここにもう答えがあった。
「それでもです」
「命の危険があるんですね」
「つまり」
「キングコブラ以上の猛毒の後主ばかりです」
この時代でも毒蛇の王者と言われている。恐ろしい蛇である。
「その毒の強さだけでなく量もです」
「量もですか」
「それも」
「中には十五メートルの巨大な毒蛇もいます」
とんでもない生物の話まで出て来た。
「そんな生き物は流石にバスの中に入っては来ないですが」
「十五メートルの毒蛇って」
「まさに魔界都市」
「はい、外は魔界と思って下さい」

そんな世界だというのである。実際にだ。
「絶対に生身で外には出ないで下さいね」
「絶対に死ぬからですよね」
「それは」
「ここはあえて自然のままにしています」
アマゾンそのままだというのである。
「ですから」
「出たら死ぬ」
「そういうことですか」
「確実に死にます」
ガイドさんはレミと全く同じことを言ってきた。
「そういうことですので」
「じゃあ装甲車から見ますので」
「わかってますし」
「はい。では出発です」
ガイドさんは笑顔で言ってきた。
「いざ、緑の地獄へ」
「既に動物園の話じゃないし」
「水族館でも」
しかも学園の中にあったりするのだ。
「それじゃあ。今から」
「見ましょうか」
「魔界の中を」
「いざ」
バスが進むとだった。早速であった。
右手からだ。ブロントサウルスがその巨体をジャングルの中から出してきた。そしてそのうえで一行のそのバスを見ているのであった。
「いきなり恐竜かあ」
「雷竜ね」

「このバスは恐竜に踏まれてもびくともしません」
ガイドさんはこう説明してきた。
「ですから安心して下さい」
「つまり踏まれたりするんですね」
「そういうことですか」
「水中で尻尾で打たれてもびくともしません」
話はまたしても物騒な方に向かう。
「全くです」
「尻尾って」
「恐竜ですか」
「淡水性のモササウルスやエラスモサウルスもいます」
皆この場合はあまり聞きたくない名前であった。
「それに巨大鰐もです」
「十五メートルあるっていう」
「あれですよね」
「このバスの大きさならです」
ガイドさんの不吉極まる説明はさらに続く。

第二百五話　緑の地獄その八

「巨大アナコンダに巻き付かれてもまだ大丈夫です」
「二十五メートルですか」
「壮絶ですね」
「殆ど怪獣映画ですね」
「惑星によってはです」
まだ話されるのだった。二十五メートルどころではないというのだ。
「百メートルの大蛇もます」
「百メートルねえ」
「本当ですか？」
「映画とかじゃないですよね」
「残念ですがそうではありません」
こう来た。
「図鑑には載っていますがこの動物園、いえどの動物園にもいないのではっきりいるとは言えませんが確かにいるのです」
「あまりいて欲しくないなあ」
「だよねえ」
「四十メートルの恐竜は知ってますけれど」
カミナリ竜である。ウルトラサウルス等そうした巨大恐竜もいるのだ。
「百メートルですか」
「いるんですね」
「この動物園にはいません」
このことはまた言うのだった。
「ですから安心して下さい」
「はい、よくわかりました」
「それを聞いて安心しました」

「あと猿の攻撃にも耐えられます」
ここでだった。意外にも猿の話もするのだった。
「猿もです」
「猿って」
「そんなに怖いんですか？」
「凶暴なんですか？」
「凶暴というものじゃありません」
ガイドさんの話はここでも真剣なものだった。
「集団で一斉に襲い掛かってきます。ジャガーや鰐よりも恐ろしいものがあります」
「猿が、ですか」
「そこまで」
「ヒヒの仲間でして」
ヒヒは主にアフリカに似た気候にいる。だがここではそれもいるというのだ。
「ですから」
「ヒヒ、ああそういうことですか」
「マンドリルとかは」
「確かに凶暴ですよね」
「そういえば」
そしてだ。彰子がここで言った。
「お猿さんってあれで結構」
「ああ、そうよね」
同じ日本人の七海もそれに応えた。
「怖いから」
「凶暴だし」
「集団で襲い掛かるし」
実はだ。ニホンザルはかなり凶暴なのである。猿は種類によってその性質が大きく異なる。チンパンジーにしろ凶暴なのである。
「それ考えたらやっぱり」

「バスに襲い掛かるのも」
「それでゴリラやオランウータンは分けています」
ガイドさんはまた話してきた。
「実は」
「大人しいからですね」
「どちらも」
「はい、特にゴリラはです」
ゴリラの話になった。尚ゴリラはかなり大人しい動物である。
「大人しくて。無抵抗なところがありまして」
「こうした地獄には置いておけない」
「そういうことですね」
「はい、ですから置きません」
また話される。
「とても」
「ううん、まさにここは地獄なんですね」
「じゃあ注意します」
「一旦出発したらゴールまでバスの扉は絶対に開きません」
ガイドさんの言葉は厳しい。
「そう、絶対にです」
「若し外に出れば」
「その時は」
「命の保障はありません」
こう話される。
「そういうことですので」
「何度も聞いてますけれど」
「地獄だからですか」
「では地獄巡りスタートです」
本当にこう言われた。
「説明は私がさせてもらいます」
「はい、御願いします」

「それじゃあ」
「楽しい旅になりますよ」
最早今更にしか聞こえない言葉だった。だがこう言われたのである。
「期待しておいて下さいね」
「はい、ある意味凄く」
「そうしてますので」
「では出発です」
こうして地獄の門が開いたのであった。既に出発しているがだ。

緑の地獄　　完

２０１０・５・２８

第二百六話　水の中でもその一

水の中でも
動物園の中のアマゾン見物がはじまった。その中はだ。
相当な広さがあった。それはまさにジャングルであった。
「ええと、かなり広いけれど」
「ここって一体」
「どれだけの広さが」
「はい、八条ドーム二十個分です」
ガイドさんがこう説明してきた。八条学園の中にある球場だ。
「それだけあります」
「ドーム二十個分もあったんだ」
「そこまで」
「この動物園の中で最も広い施設です」
こうも述べられる。
「熱帯にいる動物も魚類もここに集められています」
「鳥もですよね」
「植物も」
「植物園は別にありますが」
ガイドさんはこのことも説明してきた。この辺りの細かさはやはりプロである。
「当然それも集められています」
「そういえばあれって」
「食虫植物？」
「みたいだけれど」
右手にウツボカヅラがあった。ただし普通のものではない。
大きさがだ。普通のものの優に十倍はあった。
「ちょっとした動物も入るし」
「あそこのハエトリソウなんてもう」

「人間ですらも」
「猛獣も捕らえられます」
ガイドさんがここでまた話す。
「人口ですから気をつけて下さい」
「シャコ貝みたいですね、それって」
「本当に」
「そんな感じなんですけれど」
「もっと凶悪ですから」
海中にいてダイバーの足を挟むこともある巨大な貝である。それによる事故はこの時代でも起こることがある。この時代ではちゃんと口をこじ開けられる携帯用の機械もあるがそれでも危険な存在のままである。
「人口ですから」
「うわ、鬼ですね」
「そんなのまでいるって」
「それに木の上には」
ジャングル特有の鬱蒼とした木々の間にだ。爛々と光る目が見える。よく見ればそこにはジャガーがいる。明らかに獲物を待っている。
「ジャガーねえ」
「まさに猛獣」
「やっぱりいるし」
「ジャガーも一口ですから」
ガイドさんはまた巨大ハエトリソウの話をしてきた。
「勿論人間もです」
「あの中で溶かされて食べられていくんですね」
「しかも生きたままですよね」
「ですから処刑に使われることもあります」
それもあるのだという。
「死刑囚が餌として使われます」

「食人植物ですか」
「そういうことですね」
「はい、ブラジルでは結構あると聞いています」
「ああ、聞いたことあるわ」
そのブラジル人のレミも答えてきた。
「ブラジルじゃ猛獣とか魚とかの餌にする死刑って多いけれど中にはね」
「食人植物の処刑もある」
「そうなの」
「そういうこと。まあそれなりにあるみたいね」
こうも話すレミだった。
「結構ね」
「ううん、そうなの」
「まあ死刑囚はね」
「そうなって当然だけれど」
連合では犯罪者、とりわけ凶悪犯には人権はない。死刑は残虐であればある程度いいとされているのである。それもまた連合だ。
「しかしできればね」
「そんな死に方しないし」
「本当にね」
そんな話をしているうちにだ。河に入った。するとその瞬間にだ。

第二百六話　水の中でもその二

前からだ。凄まじい速度である生き物が来た。それは。
「イルカ？」
「みたいだけれど」
「ああ、そうか」
「アマゾンだし」
ここで皆頷く。そのイルカを見てだ。前の画面はモニター状になっていて河の中の景色でもだ。奇麗に見えるようになっているのだ。これは周りの窓も同じで周囲三百六十度そうなっている。
「河にもイルカいたんだっけ」
「鮫までいるし」
「はい、海と変わりません」
ガイドさんの説明も来た。
「そうですから」
「カワイルカなんですね」
「つまりは」
「目は退化してあまり見えません」
これはカワイルカの特徴である。
「それでも超音波を出しますので」
「それを反射させて泳いでるんですね」
「カワイルカは」
「はい、そうなんです」
こう皆に話すのだった。
「カワイルカは大人しいですから安心して下さい」
「カワイルカは、なんですね」
「つまり他の生き物はそうではないと」
「そういうことですね」
「はい、そうです」

ガイドさんの返答はこれしか用意されていなかった。
「ですから恐竜や巨大魚や鰐がいますから」
「他にピラニアもいて、ですね」
「色々いて」
「あまりにも危険な生き物が大勢います。本当に川の中で水浴びは」
「できませんよね」
「一発で相手の御馳走ですね」
「それだけで」
緑の地獄はジャングルだけではないのである。その河の中もだ。青の世界もまた地獄であり生きられるという保障は一切ないのである。
「ううん、何て危険な」
「洒落にならない世界っていうか」
「全く」
「このバスも普通のバスだったら間違いなく駄目になってしまいます」
ガイドさんはまたしても怖いことを言ってきた。
「恐竜の顎の力って凄いですから」
「あと鮫もいるんですよね、確か」
「鯰も」
「はい、どちらも凄いですから」
おまけにだ。この魚の名前も出て来た。
「二十メートルのピラルクにぶつかったりとか」
「二十メートルって」
「そのまま鯨なんですけれど」
「鯨もいますし」
とにかく何でもいるというのだ。最早海と全く変わりがない。そうした世界なのだ。
「そうした動物にぶつかったら」
「下手なバスじゃそれだけで終わりですね」

「確かに」
水陸両用、水中も潜れるバスという意味での話である。
「ううん、デンジャラスですよね」
「全く」
「それで特別に開発したんです」
それがこのバスだというのである。
「絶対に生きて帰られるように」
「生きて帰る、ですか」
「サファリパークより凄いですね」
「ジャングル、特にアマゾンはサファリよりずっと危険なんですよ」
しかもこう言われる始末だった。
「ここはもう完全にサバイバルの世界ですから」
「あの、それだったら」
話を聞いていてだ。レミがガイドさんに尋ねた。今バスのその三百六十度モニターには川の中とその中を泳ぎ回る多くの魚や動物達がいた。実際に巨大アナコンダもいれば鯨もいる。そして鮫が小魚達を襲って食べてもいた。

第二百六話　水の中でもその三

「ここの餌は」
「餌ですか」
「はい、それはあげてるんでしょうか」
「その必要はありませんから」
ガイドさんの返答はこれだった。
「そういうことは全くです」
「じゃあ餌は何も」
「あげません。そのまま生物連鎖の中に生きています」
こう話すのだった。
「危険過ぎてあげられませんともいいますが」
「というかそれが本音なんですね」
「その通りです」
それを隠さないガイドさんだった。
「どうしてもという場合は上から降らせます」
「ああ、上からですか」
「水分もそこから降らせています」
アマゾンは雨が多い。水がなくてはジャングルは成り立たない。
このコーナーはドーム式になっている。とてつもなく巨大なドームなのだ。
「火事になってもすぐに消せるようにです」
「それでいざという時はなんですね」
「基本は放任です」
放任せざるを得ないともいうのだった。
「ですから」
「成程、そうなんですね」
「たまに死刑囚が放り込まれます」
ここで話が怖いものに戻った。別の意味でだ。

「確実に死にます」
「まあそうでしょうね」
「恐ろしい最後になるでしょうね」
「骨さえ残りません」
おまけにこう言われる。
「骨も噛み砕かれますので」
「うわ・・・・・・」
「骨まで」
「ですから怖い場所なのです」
「怖過ぎるんですけれど」
「骨も残らないって」
皆唖然となっていた。そしてその間にもだ。モニターに映る世界では今度は淡水性のダイオウイカが鯨に巻きついていた。見れば淡水性のマッコウクジラである。
皆その姿も見てだ。また言うのであった。
「それも当然かしら」
「そうね」
「こんな化け物がひしめき合ってるんだから」
「しかし。淡水性の烏賊って」
「そういうのもいるんですね」
「アマゾンには何でもいますよ」
そうだというのであった。ガイドさんの言葉ではだ。
「本当に」
「壮絶ですね」
「まさに海ですね」
「はい、海と言ってもいいです」
実際にそうだという。
「この学園でもとりわけ広い場所にありますし」
「八条動物園でもありますしね、ここって」
「そうですよね」

正式名称を八条第一動物園及び第一水族館というのである。学園と一緒になっていてそのうえでかなり広大な敷地面積を持っているのである。

「広いですよね」

「何か昔の小さな国位」

地球にあった頃の国のことだ。

「ありますよ」

「それも確かに」

「はい、地球のブラジル領と同じ面積があります」

ここでまた話すガイドさんだった。

「動物園全体で」

「広いと思ってたけれどそんなに」

「そんなにあるんですね」

「動物園と水族館を合わせてですけれど」

それだけあるというのである。

「それだけあります」

「そしてこのアマゾンは」

「その中でも特にですね」

広いというのである。

第二百六話　水の中でもその四

「広いですからかなり多くの生き物がいます」
「それあの鯨もですか」
「巨大烏賊も」
彼等は今も死闘を繰り広げていた。海の死闘に見得る。
「いるんですね」
「ああして」
「そういうことです、ここは特別ですから」
ガイドさんはまた話す。
「動物園と水族館の中でも」
「ううん、何か水底にですね」
「物凄いものも見えますし」
見ればだ。今水底に途方もない大きさの生き物がいた。それは。
ペリーヌはそれを見てだ。いぶかしむ顔でガイドさんに尋ねた。
「あの」
「はい？」
「水底に何か見えますけれど」
それを指し示しての言葉だった。
「あれは何ですか？」
「あれは鯨ですね」
ガイドさんはすぐに答えた。
「それです」
「鯨ですか」
「はい、鯨です」
またペリーヌに話してきた。
「それです」
「あれは鯨なんですか」
「巨大鯨ですね」

見ればだ。十メートルはあった。そのアマゾンにいるという人食い鯰である。
「あれは」
「そういえばそんな顔してるよな」
「確かにね」
「あれは」
皆それを見てだ。また話す。
「確かに鯰だし」
「間違いなく」
「大きいだけで」
「普段はああして底の方にいます」
ここでも説明するガイドさんだった。自分の仕事に忠実であると言える。
「ですがお腹が空くとです」
「上の方にあがって」
「それで食べるんですね」
「小舟なんか一口ですよ」
何故かにこりと笑って話すガイドさんだった。
「もう本当に」
「それってまずいんじゃ」
「あの、一口ですか」
「本当に」
「はい、一口です」
やはりにこりと笑って話す。
「鯰一口です」
「ブラジルの言葉ね」
レミがすぐに言ってきた。
「それって」
「はい、そうですね」
ガイドさんもレミのその言葉に頷いてみせる。

「これは」
「鯨一口って」
「それってどういう意味？」
「ブラジルの諺でね」
諺であるとだ。そこから話すレミだった。
「大物は小物をあっさりと退けられるってことなのよ」
「鯨が食べるみたいに」
「そういう感じなのね」
それを聞いてわかった皆だった。実にわかりやすかった。
「ううん、小物かあ」
「この場合は小舟と」
「そこに乗っている人になるのね」
「だから人食い鯨なんですよ」
やはりガイドさんの口調は楽しそうである。
「時々イルカを丸ごとってこともありますし」
「イルカもですか」
「丸ごと」
「口が大きいからあっさりと入ります」
こう皆に話す。

第二百六話　水の中でもその五

「実にあっさりと」
「凄い話ですね」
「はい、凄いんですよ」
その鯰の話である。
「本当に一口で食べますから」
「鯰ってそんなに凄いんですか」
「口が大きいのは確かですけれど」
「それでもあのイルカを一口って」
「鮫より怖いかも知れませんね」
このコーナーにもいるその鮫以上だというのだ。淡水性のホオジロザメよりもだというのだ。ガイドさんの話はかなり怖いものになっている。
「鮫と喧嘩することもありますから」
「鮫と喧嘩って」
「本気でやばい生き物なんじゃ」
「なあ」
「そんなのって」
「しかしです」
ここでガイドさんの話が変わった。
「ここにはさらに怖い生き物がいます」
「鰐ですか？」
「アナコンダですか？」
「それとも鯨ですか？」
「シャチです」
それだというのである。
「シャチが一番怖いですから」
「シャチですか」

「淡水性のシャチもいるんですか」
「そういうのも」
「はい、鮫や鯨よりも凶暴で」
その猛獣達よりもだという。
「しかも身体は大きいし群で襲い掛かって」
「いつも群ですか」
「シャチって」
「はい、群で襲い掛かってです」
これは海水性も同じである。シャチは常に群で襲い掛かる生き物である。
「アナコンダでも何でも食べます」
「えっ、アナコンダでも!?」
「そのアマゾンの主もですか」
「それまで」
「必要とあらば食べます」
皆それを聞いてだ。唖然となった。
「鰐も鮫も鯨もです」
「うわあ、何でも食べるんですね」
「一切容赦なしですか」
「えげつない」
「しかも頭もいいです」
おまけにこのこともあった。
「鮫や鯨と違って」
「哺乳類ですからね」
「余計にですね」
「ですから」
「はい、シャチは哺乳類です」
哺乳類は魚類や爬虫類よりも頭がいい。このこともまた問題なのだった。
「イルカも食べますし」

「やっぱり一口ですよね」
「あの口で」
「ぺろりです」
言葉は一言だった。だからこそ怖いものがあった。
「そして顎の力は鮫以上ですから」
「何でそんなに強いんですか？」
「シャチって」
「反則じゃないですか」
「数は多くありませんから」
その個体数は少ないというのである。
「強過ぎる生き物は必然的に数は少なくなります」
「そうですよね」
レミもそれを聞いて納得した顔で頷く。
「そうしないと生物連鎖がおかしくなりますから」
「はい、だからです」
それで少なくなる。つまり自然の摂理である。
「それで少ないです」
「そういえばここにもシャチいるんですよね」
「けれどまだ見ないし」
「少ないんですね」
「生物連鎖のことも頭に入れて動物を集めていますから」
ただ集めているというのではないということだった。

第二百六話　水の中でもその六

「ですから」
「成程、だから」
「数も少ないと」
「とにかく何でも食べて」
そうした面でもかなり凶悪だというのである。
「アシカもアザラシもマナティーも食べます」
「とにかく食べるんですね」
「大人しい動物まで」
「尻尾で吹き飛ばして気絶させてから食べることもあります」
これはシャチが実際にすることだ。気絶させて動けなくしてからだ。そのうえで食べてしまうのである。実際に頭を使うのである。
それがシャチだ。
「あの巨大な尻尾で」
「シャチって大きいですしね」
「十メートル近くありますし」
「はい、ただ人間は襲わないので」
これがシャチのいいところである。
「見たことのない相手は襲いませんから」
「じゃあ川の中でもシャチには襲われないんですね」
「つまりは」
「鮫や鰐には襲われますが」
それはという。
「しかしシャチはないですから」
「安心していいんですか？」
「それは」
「少なくともシャチはです」
極めて限定的な言葉であった。

「そういうことです」
「ううん、何かそれって」
「ねえ」
「あまり嬉しくないような」
「勿論他の生き物は違います」
やはりこう来た。
「勿論そういうことはなく」
「人間も御馳走なんですね」
「つまりは」
「その通りです」
また答えるガイドさんだった。
「その時は覚悟しておいて下さい」
「わかりました」
「というか絶対に外に出ませんから」
「そういうことで」
「それでなのですが」
彼等はさらにであった。ガイドさんに対して問う。
「あの、それで」
「それで？」
「この川随分長いですけれど」
「しかも深いですけれど」
川自体についての問いであった。
「これって人工ですよね」
「人工の川ですよね」
「はい、そうです」
このことも律儀に答えるガイドさんだった。
「その通りです」
「そうですか、やっぱり」
「人工なんですか」
「そうだったんですね」

「全て一から造ったものです」
川だけではなくだ。ジャングルそのものについてもそうなのだというのだ。伊達にドームになっているのではない、そういうことだった。
そしてだ。さらに話すガイドさんだった。
「川はこれ位になりまして」
「またジャングルですよね」
「そこに入るんですよね」
「その通りです。ジャングルです」
またそこだと話す。
「では行きましょう」
「はい、それではまた」
「行きましょう」
「しかしあれね」
レミが浮上するバスから水の中の景色を見ながら話す。
「そうした物騒な動物も多いけれど」
「それだけじゃないっていうの？」
「ええ、よく見て」
ペリーヌに話す。

第二百六話　水の中でもその七

「ほら、マナティーだっているし」
最初にそのマナティーを指摘する。見れば静かな場所に群で暮らしている。穏やかにそこにある水草を食べてだ。そのうえで暮らしている。
「あそこにいるし」
「他にもイルカもいるしね」
「そうよ。猛獣ばかりじゃないのね」
「アマゾンには色々な動物がいますよ」
ここでまた話すガイドさんだった。
「本当にね」
「そうですか、色々なんですね」
「色々な動物が」
「はい、いますから」
話は元に戻ってはいた。
「穏やかな動物もいますよ。当然ジャングルの中にも」
「らしいわよ」
ペリーヌはここまで聞いてレミに話した。二人は一緒の席に並んで座っている。そのうえでにこやかに話をするのである。そうしていた。
「どうやらね」
「ああ、バクとかね」
レミは話を聞いてすぐに頷いた。
「他にも色々といるしね」
「そういう動物もいるのね、ちゃんと」
「そりゃ生態系は猛獣ばかりじゃ成り立たないから」
これは一応正論であった。彼等も正論を話しはしていた。
「そうした動物もいるわよ」

「まあそうだけれどね。肉食動物ばかりじゃね」
ペリーヌも少し考えてだ。そのうえで答えた。
「やってけないわよね」
「川の中だって小魚一杯いるでしょ」
「ええ」
今丁度だ。魚の群が団子みたいになっていた。直径数メートルの団子である。
「あれよね」
「だからジャングルの中でもね」
「まともな動物も多いのね」
「ええ、ただし」
しかしここでしかし、となるのがアマゾンであった。
「気をつけてね」
「やっぱり？」
「ええ、カエルはわかるわよね」
「ドクガエルね」
「それもいるけれど」
ここでまた話を変えたレミだった。
「それでも普通のカエルも一杯いるから」
「普通のなのね」
「ちょっと変わってるだけよ」
引っ掛かる言葉であった。
「ちょっとだけよ」
「本当にちょっとだけ？」
「多分ね」
レミの言葉がここでは少し変化した。
「ちょっとだけよ」
「何か他にも一杯変な蛙がいそうね」
「主観によってはそうね」
レミはこうペリーヌに返した。

「ひょっとしたら」
「ひょっとしたらって」
「恐竜の子供を食べる蛙がいるけれど」
こんなことを言うのだった。
「気にしない気にしない」
「気にするわよ。やっぱりとんでもない蛙もいるじゃない」
ペリーヌはむっとした顔でレミに返す。
「恐竜の子供って」
「ベルゼフォンっていってね」
蛙の名前も話された。
「ツノガエルの大きなもので」
「そういうのもアマゾンにいるの」
「そうなのよ、熱帯の生き物だからね」
それでいるというのである。
「これが物凄い大きさで。四十センチもあってね」
「蛙で四十センチなの」
「他にも一メートルはある蛙もいるし」
とんでもない存在はまだいるのであった。最早怪物の世界である。
「凄いから」
「やっぱりとんでもないじゃない」
ペリーヌは目を少し細くさせて白けさせたものにさせてレミに返した。
「何よ、その一メートルっていうのは」
「まあ見ていきましょう」
レミは至って平気であった。
「そのアマゾンをね」
「こんな場所軍隊でも入れないんじゃないかしら」
ペリーヌはこんなことも考えるのだった。そうしてであった。
バスはさらに進む。そのうえで様々な動物達を見ていた。

水の中でも

完

2010・6・3

第二百七話　サハラ義勇軍特殊部隊その一

サハラ義勇軍特殊部隊

八条動物園の中でだ。迷彩服に完全武装の軍人達がいた。合わせて十人いる。

その彼等がだ。前に立つ指揮官の言葉を直立不動の姿勢で聞いていた。見れば指揮官の階級は大佐である。彼もまた迷彩服を着てそこにいる。

「いいか！」

「イエス、サー！」

連合軍とは思えない緊張がそこにある。

「我々はこれよりだ」

「はい、アマゾンの中での訓練ですね」

「それですね」

「そうだ、我等は何だ！」

「はい、義勇軍です！」

「サハラ義勇軍です！」

こうそれぞれ名乗るのだった。

「では聞こう！」

「イエス、サー！」

またしてもその大佐の言葉に応える。

「サハラ義勇軍とは何だ！」

「史上最強の軍であります！」

「無敵の軍であります！」

「そうだな、サハラ義勇軍は無敵だ」

実際に銀河最強の軍であると言われている。それが彼等である。

「ではこれからの訓練は何だ」

「はい、只の散歩です！」

「それでしかありません！」

「よし、それではだ！」
ここまで話してだ。そうしてであった。
「これよりこの動物園のアマゾンの中で一週間のサバイバル訓練をする！」
「イエス、サー！」
「中にはペットしかいない！」
この言葉を信じる者は連合市民ではいない。尚連合軍でこうした訓練をすれば確実に政府への糾弾になるレベルで批判される。連合軍にとって人命は最も貴重なものなのだ。
「わかるな、それは」
「無論です！」
「可愛い動物しかいません！」
「ぬいぐるみと同じです！」
「よって殺すことはならない！」
こうも言われる。動物園の中の生き物なのでそれは厳禁なのだ。
「従って食料は携行のものだけだ！」
「イエス、サー！」
「御馳走であります！」
「最高であります！」
「それだけで一週間生き抜く！」
こうも告げられる。
「足りないならば水を飲め！」
「イエス、サー！」
「アマゾンの水をだ！ワインより美味いぞ！」
この言葉も連合では誰も信じない。
「そして植物なら食ってもいい！ただしだ！」
「ただしですか！」
「何でありますか！」
「毒のあるものが多い！人を襲う植物もいる！」
物騒極まりない世界である。誰が聞いてもだ。

「そいつ等を倒して食え！猛獣達を潜り抜けてな！」
「イエス、サー！」
「わかりました！」
「わかったらすぐに入れ！」
地獄に入れというのである。
「本番のジャングル訓練と同じだ！」
「同じでありますか！」
「全くですか！」
「そうだ、全く同じだ！」
そうだというのであった。
「我等はこのまま入る！いいな！」
「イエス、サー！」
「畏まりました、サー！」
こうしてであった。彼等はその地獄の中に飛び込んでいった。一応完全武装ではある。しかし野獣達を殺傷することは許されないのだった。
それを見送る動物園の係りの者達はだ。怪訝な顔であった。
「あそこはうちの動物園でも一番危ないけれど」
「そこに入ってって」
「正気かしら」
「幾ら義勇軍でも」
義勇軍は連合軍であるが正規軍とは別の軍だ。サハラの難民達で構成され鬼の如き訓練を常に施され軍律も正規軍よりまだ厳しい。その訓練と軍律によって鍛えられ縛り上げられている、そんな軍である。
しかしその彼等でもだ。こう言われるのであった。

第二百七話　サハラ義勇軍特殊部隊その二

「無理だよなあ」
「一人も生きて帰れないんじゃ」
「あそこには」
「けれどよ」
しかしであった。
「向こうはそれでいいって言ってるし」
「大丈夫だって」
「武装まであるし」
それもあるのだというのだ。
「だから大丈夫だっていうけれど」
「命の保障は全くないのに」
「巨大な恐竜までいるし」
他にも色々といる。とにかく危険な場所である。そこにサバイバル訓練だというのだ。
そこに入ってだ。彼等は訓練に入るのであった。
その訓練がはじまるとだ。いきなり襲われた。
「ガアアアア！」
「くっ、ジャガーか！」
「こっちはアナコンダか！」
「恐竜もいるぞ！」
密林に棲む小型の肉食恐竜も襲い掛かって来たのだ。小型のゴロザウルスに見える。恐竜といっても大型のものばかりではないのだ。
「いきなりか！」
「ベトコンみたいだな！」
「恐れるな！」
大佐の言葉である。
「俺達の服は野獣の牙にも爪にも破れはしない！」

「はい！衝撃も完全に吸収します！」
「そして！」
「武器もある！」
ショック弾が入ったライフルを出すのだった。
「撃て！気絶させろ！」
「イエス、サー！」
「それでは！」
「撃て！」
こうして銃撃が為されてだった。猛獣達はすぐに気絶させられた。
そしてだ。
彼等はそのまま密林の中に進む。誰一人として単独行動は取らず慎重に進む。
この中でだ。大佐がまた言ってきた。
「いいか」
「はい」
「次は」
「上から来るぞ」
密林の、空を完全に覆っているそれを見上げての言葉だった。
「上からな」
「ジャガーがですか」
「それが」
「蜘蛛もだ」
それもだというのだ。
「聞いてるな、ここには巨大な昆虫もいる」
「人食い蜘蛛ですか」
「それもですか」
「そうだ、来るからな」
こう話すのである。
「地蜘蛛もいれば巣もある。単独行動は絶対に取るな」
「トイレもですね」

「それも」
「そうだ、どんな時でも単独行動は取るな」
やはり周囲を警戒している。それもだった。
「わかったな」
「はい」
「それでは」
「一人になればそれで死ぬ」
それだけでだというのだ。
「食い殺されるぞ」
「俺達がですか」
「食われると」
「ここはアマゾンだ」
アマゾンならばというのだ。そうなるというのである。
「どうなってもおかしくないぞ」
「それに足元にもですね」
「毒蛇もいる」
「蠍も」
「血清はある」
それは当然の様に用意してあった。
「だが、だ。それでもだ」
「警戒するに越したことはない」
「そういうことですね」
「そうだ」
まさにそれだというのである。
「何度も使っていてもな」
「訓練にならない」
「だからですか」
「そして一気に飲まれるならだ」
この場合についても話される。
「口の中を攻撃しろ」

「口の中をですか」
「そこを」
「噛まれる前にやれ」
あまりにも危険な話だった。

第二百七話　サハラ義勇軍特殊部隊その三

「噛まれる前にだ。口の中をショックガンで撃て」
「そしてそのうえで」
「生き残れと」
「その通りだ。死ぬことは許さん」
大佐は断言した。
「わかったな、あと踏み潰されるな」
「それもですか」
「踏み潰されない様にですか」
「そうだ、わかったな」
今度はこれだった。
「恐竜もいる、だからだ」
「了解です」
「それではそれに対する対処は」
「気をつけろ」
そうしろというのである。
「いいな、気をつけろ」
「その為に単独行動を慎めというのですね」
「何があっても」
「死にたくなければ単独行動をするな」
何につけてもそれなのだった。
「わかったな、死ぬことは許さん」
「イエス、サー！」
「それならば！」
こう話してであった。彼等はそのままアマゾンの中に留まる。そうしてそのうえで訓練を進めていく。そしてその時になのであった。
二年Ｓ１組の面々を乗せたバスがテントの側を通った。するとだ。
「あれっ、テント！？」

「テントがありますよ」
「誰かここに住んでるんですか？」
「原住民？」
今言ったのはマルコである。
「それかな」
「原住民って今時いるのかな」
「移住した人がそれなんじゃ？」
「そうよね」
「この動物園にもいるんですか？」
「いませんよ」
ガイドさんはここでまた皆に話した。
「そういう人達は。ここには人は」
「けれどテントがありますよ」
「確かにありますけれど」
「あれは一体」
「ちょっと待って下さいね」
ガイドさんはここで携帯を取り出した。そのうえで、だった。
そのまま連絡を取る。するとだ。
「あっ、そうなんですか」
電話の向こうの話を聞いてだ。頷くガイドさんだった。
「わかりました。そうなんですね」
こう話してだ。確かな顔で頷くのであった。
「そういうことで」
ここまで話してそのうえで電話を切る。そのうえで皆に話す。
「あの人達はです」
「サバイバルですか？」
「それですか？」
「はい、そうです」
ありのまま話すのであった。
「サハラ義勇軍のレンジャー部隊のサバイバル訓練です」

「何かエイリアンの海兵隊みたいですね」
「そんな感じですよね」
「はい、実際にそんな中にいます」
そうだというのである。
「普通に生きて帰ることは難しいのですが」
「それでも中にいますか」
「凄い訓練ですね」
「サハラ義勇軍ですから」
それを理由にするのであった。
「こうした訓練もあります」
「何時食い殺されてもおかしくないのに」
「卵産み付けられるかな」
「それもありそうね」
「はい、その危険もありますよ」
皆ガイドさんの今のにこりとした言葉には思い切り引いた。
「えっ！？」
「あるんですか」
「しっかりと」
「虫が刺して卵を産み付けてきますよ」
ガイドさんは場違いなまでににこりと笑っている。

第二百七話　サハラ義勇軍特殊部隊その四

「そして腫れ上がってそこからですね」
「寄生虫の瘤とかですか」
「そういうのですか」
「はい、幼虫がそこで孵化してです」
身体の中でだというのだ。
「手を食い破ってして出て来ますから」
「うわあ・・・・・・」
「リアルで危険なんですね」
「そういう世界なんですね」
「ですから虫にも注意して下さい」
注意ばかりであった。
「冗談抜きに死にますから」
「世紀末救世主もびっくりですね」
「恐ろしい場所で訓練してますね」
「義勇軍ですから」
だからだというのである。
「こうした場所でもです」
「義勇軍って何か」
「凄いんですね」
「こんな場所で訓練なんて」
「連合軍そんなことしないのに」
ここで言う連合軍とは正規軍のことである。連合市民によって構成される軍でありその規律はかなり厳しいが訓練は甘くあくまで規律とみだしなみだけの軍であるとされている。
「義勇軍は違うんですね」
「無茶しますね」
「命は惜しくないんですか」

「義勇軍ですから」
ガイドさんの義勇軍への説明はこれに尽きた。
「私達は止めてますよ」
「それでもなんですね」
「あえて中に入って」
「それで訓練を」
「命の保障はありません」
ガイドさんの言葉は何時になく怖い。
「けれど義勇軍の人達は中に入ってです」
「訓練ですか」
「そうしてですね」
「今のところ死んだ人はいません
今はだというのだ。
「しかしこれからはわかりません」
「つまり何時死んでもおかしくない」
「そういうことですね」
「ここは地獄ですから」
緑の地獄だというのである。
「何があってもおかしくはありませんから」
「人口でぺろりとか」
「それも有り得ますよね」
「あと踏み潰されたりとか」
「あらゆるケースが考えられます」
あまりよくない意味で、ということである。不幸にしてだ。
「ですから私達は止めます」
「しかしそれでもですか」
「義勇軍は訓練するんですね」
「人外魔境での訓練を」
「義勇軍って二十四時間常に戦闘態勢って聞いたけれど」
ネロがふと考えながら述べた。

「そのせいかな」
「常に戦闘態勢っていったら」
「海兵隊？」
「アメリカ海兵隊？昔の」
「それっぽいよね」
皆かつてアメリカに存在したその軍隊の話もする。
「義勇軍って」
「そういえば」
「ただ、軍律それ以上みたいだけれど」
「連合軍よりずっと厳しいとか？」
「それ有り得なくない？」
連合軍の軍規軍律はかなり厳しい。これだけは徹底せよと八条が言っているからだ。彼は国防長官として軍規軍律は強く意識しているのだ。
「日本軍並だって」
「うわ、それはまた」
「えぐい」
「あんまりよね」
「そこまでいったら」
日本軍の軍規軍律の厳格さは二十世紀から銀河の時代になってもだ。健在であった。尚これはこの時代の日本軍ではない。第二次世界大戦中の頃の日本軍だ。
「鬼の如き軍律なんだ」
「命令には絶対服従」
「軍律違反は死刑」
その域まで達していたのはある意味において事実である。

第二百七話　サハラ義勇軍特殊部隊その五

「そして細部まで決められていて」
「それを誇りとする」
「その日本軍レベル」
「ちょっと入りたくないよね」
「確かに」
「そんな訓練までしてるし」
バスがテントに近寄る。すると確かに人がいた。まとまっていて何かをナイフで捌いている最中であった。その彼等を見てまた言う二年Ｓ１組の面々であった。
「何してるのかな」
「火を起こしてる？」
「それっぽいよね」
「何かね」
「ここはです」
ガイドさんの説明がここでも来た。
「火を起こしても中々燃え広がりません」
「湿気が多いからですか」
「はい、ここはジャングルです」
とにかくこれに尽きた。ジャングルは雨が多い。熱帯雨林気候であるから当然である。
「ですから普通にです」
「雨が滅茶苦茶多くて」
「湿気が多いし」
「川や湖も多いからですね」
「大火事になることは絶対にありません」
火事は乾燥しているからこそ起こる。それを考えれば当然のことであった。

「ですから安心して下さい」
「それに雨も降るからですね」
「上から」
「そうです」
今度はドーム状の天井を見上げての話である。
「ですから大丈夫です」
「まさにジャングルなんですね」
「アマゾンですか」
「そうです、ここはアマゾンです」
ガイドさんはこのことを強調するのであった。
「それをおわかり下さい」
「よくわかりました」
「嫌なことまで」
皆も実に率直に述べる。
そのうえで軍人達を見るとだ。彼等はあの巨大ハエトリグサと戦いはじめていた。それぞれナイフや斧を手にして格闘をしている。
「よし、そっちだ！」
「そっちに回れ！」
「触手に気をつけろ！」
こんな話になっていた。誰もが死闘を繰り広げている。
そのうえで襲い掛かってだ。彼等は言うのであった。
「こいつを食うか」
「そうですね、隊長」
「こいつをですね」
「食うのも訓練だ」
これが隊長の言葉だった。
「だからだ。わかったな」
「はい、よく」
「わかりました」
皆それで頷く。そうしてだった。

彼等はそのままハエトリグサに襲い掛かりそのうえで切り掛かる。
そのうえで倒すのだった。
そして倒したそれをだ。全員で解体する。まだ触手が絡み付いてもだ。
その中でだ。一人が大佐に対して問うた。
「隊長、一つ聞いても宜しいでしょうか」
「何だ？」
「これには毒があるでしょうか」
こう問うのである。
「毒はあるでしょうか」
「調べていると思うがだ」
「はい」
「毒はない」
大佐はこうその部下に答えた。
「それは安心しろ」
「わかりました、それでは」
「調べてもまだ不安か」
大佐はここで部下に対して問うた。
「それでもか」
「はい、どうもです」
怪訝な顔での言葉であった。
「アマゾンですから。毒があってもです」
「普通にそう思うか」
「不思議ではないと思いました。そうした巨大ハエトリソウもあると聞いていますし」
「緑のものには毒はない」
それはだというのだ。

第二百七話　サハラ義勇軍特殊部隊その六

「だが。赤にはある」
「赤にはですか」
「食べれば尋常ではない食あたりを起こす」
こうも話すのだった。
「それは注意しておけ」
「わかりました。では赤は」
「毒キノコのものと同じ食中毒を起こすからな」
大佐はその赤い巨大ハエトリソウの毒についても話した。
「恐ろしいことになるぞ」
「その解毒剤もありますが」
別の部下がこう述べてきた。
「それでもですね」
「毒はできるだけ身体に入れるな」
大佐の言葉は厳しい。話しているその間にもその巨大ハエトリソウを解体していく。何処かサボテンに似た感じをそこに見せていた。
「わかったな」
「はい、それでは」
「絶対に」
「茸にはだ」
そしてだ。今度は茸の話になった。
「一番気をつけろ」
「それにはですね」
「特になのですね」
「そうだ、特にだ」
大佐は指示を出す。
「死ぬ恐れもある。アマゾンは毒キノコも多い」
「恐ろしい世界ですね」

「全くです」
「そしてだ。一番恐ろしい茸は青緑の色をしている」
「青緑というと」
「これですか」
一人が図鑑を出してきた。そこに青緑色の何かナメコに似た形の茸があった。
「この茸ですね」
「それは食べたら絶対に助からない」
大佐は図鑑に出ているそれを見ながら断言する。
「だからだ。注意しろ」
「わかりました」
「では絶対に食べません」
「食べ物一つ一つに注意しろ」
彼はまた言った。
「いいな」
「一つ一つに注意しなければ」
「その時は」
「死ぬ」
今度は一言であった。
「わかったな、それで」
「よくわかりました」
「実に」
「ならだ。まずはこのハエトリソウはだ」
話がそこに戻ったのだった。ハエトリソウにだ。
「油を採るぞ」
「油をですか」
「オリーブオイルみたいなものですか？」
「そうだな、それだな」
部下の一人は冗談めかして言ったのであったがそれでもだった。
大佐は真面目な顔で言ってみせたのである。オリーブオイルみたい

なものだとだ。
「それに近いいい油だ」
「オリーブオイルって」
「そこまでなんですか」
「それにだ」
大佐はさらに言う。
「肉は美味い」
「今度はどんな感じですか？」
「サボテンみたいなものですか？」
「そんな感じですか？」
連合ではサボテンはかなり食べられている。サボテンのステーキもある。そしてその他にも多くの種類のサボテン料理があるのだ。
「じゃあこいつも料理にして美味いんですね」
「サボテンみたいな感じで」
「ああ、実際にそんな感じだ」
また話す大佐だった。
「美味いぞ」
「油も採れてさらに美味い」
「結構以上にいい食べ物なんじゃ」
「そうだよなあ」
「大きいしな」
部下達は今度は食糧という観点から巨大ハエトリソウを見て述べるのであった。しかし大差はここでだ。話を現実に戻して話すのであった。

第二百七話　サハラ義勇軍特殊部隊その七

「しかしだ」
「こんなのだからですね」
「養殖とかは無理」
「そういうことですね」
「人を襲って食う植物の栽培はできないからな」
流石にそれは連合でも無理だった。
「死ぬぞ」
「食われますね」
「確かに」
「それはかなり」
皆それぞれ話す。誰もがそんな植物を栽培しようとはしない。
そしてだ。大佐は言った。
「それもかなり凶悪な種類だからな」
「ええ、自分から襲いますからね」
「ウツボカヅラとは違って」
ウツボカヅラは所謂落とし穴である。だがハエトリソウは狙って来るのだ。
「何かあれですね。トリフィド」
「あれは塩をかけたら死にますけれどこれは違いますからね」
「こっちの方が危険ですからね」
「トリフィドか」
大佐はここでまた話した。
「いるぞ」
「いるっていいますと」
「ここにですか？」
「トリフィドもいるんですか」
「アマゾンだ」

またアマゾンだというのだ。
「そんな生き物は当然としてだ」
「いますか」
「やばいですね、それは」
「ワイルドっていいますか」
「そんなのまでいますか」
「名前もそのままトリフィルドだ」
大佐は自分から図鑑を取り出して見せた。そこには確かにだ。トリフィドがいた。あの映画に出て来る禍々しい姿のままそこにいた。
「これだ」
「そういうのまでここにはいるんですね」
「本当にワイルドな世界ですね」
「サハラにあるのは砂漠だけだ」
多くの星が砂の惑星なのがサハラである。
「しかしここは連合だ」
「そういうのまでいるんですね」
「あらゆる意味で」
「そうだ、覚悟しろ」
挙句には覚悟であった。
「わかったな」
「了解です」
「覚悟します」
部下達はまた気を引き締めるのだった。
そしてだ。二年S1組の面々はやはりバスに乗っている。そこにだった。
「あの、ガイドさん」
「はい？」
「植物が歩いてきます」
レミがガイドさんにこう話す。
「あれってあれですよね」

「はい、トリフィドです」
ガイドさんはここでもしれっと答える。
「アマゾンにはああした植物もいますから」
「攻撃してきます？」
レミはこのことを率直に問うた。
「やっぱり」
「はい」
ガイドさんの落ち着いた言葉は全く変わらない。
「バスにもしてきます」
「そうなんですか、やっぱり」
「ですが安心して下さい」
「安心、ですか」
「何かあるんですか？」
「このバスは絶対に破壊されませんから」
だからだというのである。
「トリフィドの攻撃では絶対にです」
「まあアナコンダに巻きつかれても平気ですしね」
ペリーヌがこのことを冷静に話す。
「だったらトリフィドに殴られても」
「はい、何の問題もありません」
そういうことだった。そこまで考えられているのである。

第二百七話　サハラ義勇軍特殊部隊その八

「トリフィドには知性はありませんし」
「ああ、植物だから」
「それでなんですね」
「ただ歩き回るだけです」
本当にそれだけだというのである。
「言うなら歩く大きな食虫植物です」
「何か映画のそれより怖くない？」
「そうよね」
「思ったよりも」
皆ガイドさんの話を聞きながら述べる。トリフィドは実際に昔の映画に出て来たそれとそっくりだったからこそ付けられた名前であるのだ。
「あれって知性あったからね」
「しかも目が見えないところに襲われて」
「とんでもないことになったし」
「動きは鈍いですし塩分や火にも弱いです」
トリフィドの弱点も指摘される。
「ですから猛獣達よりはずっと安全です」
「それを聞いて安心しました」
「猛獣達よりもですか」
「時々猿が襲って食べますし」
ここで猿のことも話に出て来た。
「そんなに怖い存在じゃないです」
「っていうか猿も襲うんですね」
「そっちの方が凄いんじゃ」
「ねえ」
「猿もアマゾンの猿なんですね」

「猿は何処でも凶暴な生き物ですよ」
ガイドさんは猿についてはかなりきついことを言うのであった。
確かに事実ではあるがそこには微妙に嫌悪感も出ている言葉であった。
「そう、とても」
「ニホンザルみたいなものですね」
「つまりは」
「あんな感じですか」
「はい、猿は集団で襲い掛かります
やはりこれも同じである。
「それで殺して食べます」
「そんなトリフィドでもですか」
「ワイルドですね」
「尚このバスは猿に限りはねてもいいことになっています」
このことも皆に話す。
「猿限定です」
「やっぱり凶暴だからですか」
「それでなんですね」
「はい、まとわりついて攻撃するのでそうするしかないんです」
理由はそれであった。
「ですから猿に対してはです」
「はねてしまってもいい」
「そういうことですか」
「いざとなれば駆除もします」
それもあるというのだ。
「猿に限ってです」
「何か猿が嫌いなんですか?ここって」
「だよなあ」
「そんな風に聞こえるんですけれど」
「そうでもしないと増え過ぎて」

ガイドさんはまた困った顔になる。
「それでなんです。あくまでいざという時だけですが」
「ううん、猿って怖いですね」
「そこまでしないとなんですか」
「対処できませんか」
「他の猛獣はいいんです」
つまり猿はアマゾンの猛獣達より問題というのである。
「しかし。猿だけは」
「そうでもしないとですか」
「対処しきれないんですね」
「普通にバスにも襲い掛かってきます」
こうした意味において猛獣と変わりなかった。
「その場合はそうしますので」
「わかりました、それじゃあ」
「猿が来ても」
「遠慮はいりません」
また言うガイドさんだった。
「容赦もしません」
「あの軍人さん達もそうなのかな」
「そうじゃないの？やっぱり」
「相手が猿だとね」
「エイリアンみたいなものだし」
「何処の猿でもそうなんだ」
猿が凶暴なのは最早常識になっていた。
「そうして対処しないととても」
「無理なのね」
「厄介な動物だこと」
「全く」
そんな話をしているとだった。軍人達は実際に猿達と対峙していた。ばらしたハエトリソウを狙って来た猿達と睨み合っているので

ある。

サハラ義勇軍特殊部隊　　完

2010・6・9

第二百八話　猿との戦いその一

猿との戦い

「大佐」
「何だ？」
「大変なことですね」
部下の一人の言葉だ。
「これは」
「そうだな。猿が出て来るとはな」
「予想外ですか」
「予想はしていた」
それはだというのだ。だがその顔は険しい。
「それはだ」
「ではこの場合は」
「撃て」
返答は一言だった。
「いいな、撃て」
「ショックガンで、ですね」
「殺してもいいがそれでも出来るだけなら殺したくはない」
そうしろというのだった。
「わかったな。ショックガン、それも」
「はい、それも」
「ここはマシンガンだ」
それを使うというのだ。それをだ。
「わかったな。それを使うぞ」
「わかりました」
「それなら」
彼等はそれを受けてだ。すぐにそれぞれが持っている小銃のスイッチを切り替えた。ライフルタイプから小銃、それからマシンガン

に替えたのだった。
ここでだ。大佐はまた話した。
「照準はもう合わせるな」
「それよりもですね」
「乱射ですね」
「前からではないぞ」
前からではないとも話すのだった。
「いいな、前からではない」
「ええ、横にもいますね」
「後ろにもいますよ」
「上にも」
まさに四方八方である。しかもであった。
「数はどれだけだ」
「千はいますね」
大佐の問いに対してだ。部下の一人が自分が右目にしているサングラスを思わせるスカウターから周りを見回してだ。そうして答えたのだった。
「どうやら」
「千か」
「数にして百倍」
「それだけですか」
「かなり厄介ですね」
「百倍というと」
部下達もそれを聞いて緊張した顔になった。そうしてであった。
大佐はここでまた言った。
「いいか、陣は円陣だ」
「はい」
「わかりました」
「上から来ることも忘れるな」
このことも注意するのだった。

「上からだ」
「ええ、わかってます」
「木がありますからね」
「そこから」
ちらりと上を見るとであった。無数の白い殺気に満ちた目が見える。それを見ればそこにいるのはまさに悪鬼のものであった。
その目を見ながらだ。また話すのであった。
「今にも襲い掛かってきそうですね」
「餌を寄越せ、ですか」
「そういう感じですね」
「餌はやらん」
大佐の返答は今は一言だった。
「絶対にだ」
「絶対に、ですか」
「我々の食糧だ」
だからだというのである。
「我々もこれを食わないとだ」
「そういうことですか」
「だからこそ」
「相手が誰であろうと手に入れたものは渡しはしない」
戦場にいる言葉だった。

第二百八話　猿との戦いその二

「それが軍人だからな」
「渡す前に食え」
「それ位なら、ですね」
「そういうことだ」
結論はこれであった。
「わかったな」
「はい、それでは」
「何があっても渡しません」
「そして生き残ります」
「猿は凶暴だ」
大佐はこのことも言うのであった。やはり真剣な顔である。
「いいな」
「殺されますか、下手をすれば」
「猿に」
「千匹の凶暴な猿だ」
数もあるのだというのだ。
「それだけでわかるな」
「確かに」
「捕まればもうそれで」
「ズタズタですね」
「この服はそう簡単に破れはしない」
大佐は自分達が着ているその特殊な迷彩服についても話した。
「しかしこれだけの数にはだ」
「油断はできない」
「そういうことですね」
「そうだ」
まさにその通りだというのである。

「わかったな」
「イエス、サーーー！！」
軍隊の返答であった。正規軍では殆どないものだが義勇軍では普通である。
「わかりました！」
「それではだ！」
「イエス、サーーー！！」
また返答をする。そのうえでだ。
「総攻撃だ！」
「了解！」
「一千匹！軽いであります！」
「楽勝であります！」
口々に叫んでだ。マシンガンを放つ。
猿達も襲い掛かる。まさに命懸けの勝負だった。
「キキーーーーーーーッ！！」
「ウキャーーーーーーーッ！！」
「撃っても死ぬことはない！」
「イエス、サーーーー！！」
この返答で応える間も銃撃を行う。
「だから遠慮なくですね！」
「そうでありますね！」
「そうだ！」
大佐もマシンガンを持っている。彼は上に向かって撃っている。そのうえで木の上から襲い掛かるその猿達の相手をしているのである。
「何の遠慮も無用だ！」
「死なないなら！」
「動物園からクレームがつかないなら！」
猿に対しては非常時はいいとしてもそれは気にしているのだ。
「遠慮なく！」

「撃たせてもらいます！」
「弾幕を張れ！」
そのマシンガンの一斉射撃によってだという。
「いいな、一匹も近寄らせるな！」
「はい！」
「わかりました！」
彼等はハエトリソウを廻って猿達と死闘を繰り広げていた。しかし二年Ｓ１組の麺万にはそれは射撃音でしかわからないことであった。
ジャングルの中から聞こえるそれを耳にしてだ。彼等は話すのだった。
「あの、あれって」
「銃撃ですよね」
「それもかなり派手な」
「はい、そうですね」
本当に動じないガイドさんである。
「どうやらお猿さん達と死闘を繰り広げているみたいですね」
「そのままベトナムですね」
そのベトナム人のネロの言葉である。

第二百八話　猿との戦いその三

「二十世紀のベトナム戦争みたいですね」
「アマゾンですから」
またしてもここに答えを導くガイドさんであった。
「それは普通です」
「ゲリラ相手にするのと変わらないんですか」
「つまりは」
「猛獣はゲリラですから」
同じだというのだ。
「何時何処から襲い掛かって来るかわかりませんよ」
「ゲリラって隠れられる場所で一番怖いって聞きますけれど」
「それだからですか」
「何時何処から襲われるかわからない」
これがゲリラ戦も最も恐ろしいことなのだ。市街地や密林の中等でそれを行われた時恐怖は最大限にまで高まる。これは昔からである。
「そういうものですから」
「遠慮したいですね」
「本当に」
「ですが訓練になるということで」
ガイドさんは義勇軍の立場から説明する。
「使っておられます」
「流れ弾とか怖いよな」
「そうよね、それだと」
「確かに」
皆ここでこうも話す。
「バスに来たら」
「そういうのは大丈夫ですか？」

「このバスは」
「勿論です」
ガイドさんはバスについては自信を微動だにさせない。何一つとしてだ。
「銃撃程度でやられてはアマゾンでは走れないので」
「だからですか」
「それも安全なんですね」
「はい、安全です」
そうだというのである。
「御安心下さい」
「それを聞いて安心しました」
「本当に」
皆ガイドさんの言葉に本当にほっとした。
そのうえでだ。また銃撃戦の音を耳にする。
「続いてるし」
「それもかなり激しいし」
「大丈夫かしら」
「はい、大丈夫ですよ」
ガイドさんの口癖になっている言葉らしい。
「それも全然です」
「全然なんですか」
「今まで死んだ人はいません」
まずはこう話す。
「一人もです」
「いや、それでもこれからはわかりませんよね」
「今だって」
皆このことを突っ込む。
「ちょっと」
「今なんかは」
「死んでも亡骸はわからないですよね」

このことも話される。
「死体は何もかも食べられるんですよね、アマゾンって」
「それこそ骨以外は」
「はい、死体が腐ることはありません」
それが何故かということもアマゾンではかなり独特な理由があったりする。
「何故なら骨以外は全部虫にまで食べられるからです」
「虫もいるんですね」
「それも」
「はい。ですから腐った死体というものはありません」
そしてであった。その骨についても話される。
「骨も食べられたりしますし」
「骨もですね」
「それもなんですね」
「何もかもが食べられます」
それと聞いてだ。テンボとジャッキーがさりげなく話す。
「殺人の後での証拠隠滅には最適だな」
「そうね」
何気に怖い話も為される。

第二百八話　猿との戦いその四

「あっという間に消えるからな」
「本当にね」
「死体そこに置いたら終わりよね」
「それだけでね」
「あっという間に」
「もうそれで」
二人はかなり剣呑な話をする。ガイドさんは丁寧にその二人にも話す。
「実際にジャングルに死体を置く葬儀の仕方もありますよ」
「ああ、風葬みたいな感じで」
「そういうことですか」
「はい、密林葬といいます」
そうだというのだ。
「ブラジルではあるそうですね」
「それって一部だけですよ」
そのブラジル人のレミがここでまた話す。
「アマゾンの中にいる人達の中で行われるものですよ」
「一部だったんですか」
「大抵火葬か土葬ですから」
この埋葬についてはこの時代でも変わらない。
「それに早過ぎた埋葬をしても」
「生きて食われるということだよな、それって」
「つまりは」
「御通夜はあるけれどね」
レミはこれも話す。
「けれど。それって若し生き返ったらそこで襲われるから」
「あまりない」

「そうなの」
「生きながら食べられたい？」
何気にこんなことも尋ねる。
「それは」
「嫌に決まってるだろ」
「そんなの」
皆このことにはすぐに答える。即答だった。
「絶対にね」
「食べられるのだけは」
「そうでしょ。死んでから最低三日はおかれるけれどね」
また話すレミだった。
「それでもね。蘇生して目の前には猛獣とかっていうのは」
「素敵な悪夢ね」
「確かにね」
そんな話をしてだ。皆で言うのであった。
「絶対に御免被りたいな」
「軍人さん達もそうでしょうね」
「骸骨になって帰るってのは」
「何があっても」
「実際に死んだ人はいませんから」
ガイドさんはこのことも強調する。
「これは本当ですよ」
「死なないことには理由があります？」
「やっぱり」
「まずワクチンを事前にかなり打たれますし」
最初は病気への対策だった。
「それに血清もかなり持って行って」
「それもですか」
「血清も」
「おまけにフル装備ですし」

装備もなのだった。連合軍は武装度の高い軍として有名だがそれ
でもであった。義勇軍の装備はその中でもかなりのものであるのだ。
「特殊部隊ですし」
「しかも精鋭」
「そうですよね」
「はい、おまけに決して一人では行動しません」
とにかく条件が揃っていた。
「ですから」
「相当気を使ってるんですね」
「そこまでして、ですか」
「はい、そうなんです」
こう話してであった。皆その銃撃を聞く。
それはやがてだ。終わったのであった。
「終わりましたね、これで」
「やっと」
「どうやら相手は猿でしたね」
ガイドさんはそのことを予測して話す。
「どうやら」
「あれ、そこまでわかるんですか」
「相手まで」
「はい、先程の銃撃はかなりの数と音でした」
ガイドさんはそこから話す。分析はそうしたことまでわかってい
る者の言葉だった。

猿との戦い　　完

２０１０・６・１３

第二百九話　凶悪な猿その一

凶悪な猿

「それを考えるとです」
「猿なんですか」
「そうなりますか」
「数は千位ですね」
その数も話す。
「かなりの激戦だったのは間違いないですね」
「一千のお猿さんが相手」
「エイリアンみたいですね」
「っていうかプレデター？」
「そんな感じなんじゃ」
「はい、何度も言いますがアマゾンはＳＦ映画の世界です」
ガイドさんの説明は何処までも的確である。
「卵を産み付けられますから」
「それでお腹を食い破られるんですね」
「その結果」
「はい、そうなります」
やはり恐怖のＳＦ映画の世界だった。
「ですから訓練になります」
「ううん、何という恐ろしい世界」
「特殊部隊の訓練にも使われますか」
「弾薬もエネルギーも相当持って来ておられますし」
そうもしているというのだ。
「生きる為にです」
「じゃあ弾薬やエネルギーが切れたら」
「その時は」
「確実に死にます」

またこんな言葉が出される。
「くれぐれも御気をつけ下さい」
「地獄ですね、まさに」
「恐竜までいるのがとても」
「地球のアマゾンには恐竜はいなかったから」
レミはこのことを話す。
「ところが宇宙には恐竜までいるアマゾンがあったってことよ」
「バイオレンスだよなあ」
「サバイバルっていうか」
「本当に」
「しかも二十メートルを超えるアナコンダ」
「おまけに淡水性の巨大イカに人食い鮫」
危険な動物のオンパレードである。
「何処まで恐ろしい世界だ」
「全く」
「話せば話す程」
「恐ろしい世界」
皆あらためてそのことを知るのであった。
そうしてだ。ここで、であった。
バスの前にだ。恐竜が出て来た。
それが何かというとだ。ティラノサウルスだった。恐怖の巨体をそこに見せている。
皆それをモニターで見ながらだ。またガイドさんに問う。
「大丈夫なんですよね」
「そうですよね」
「ティラノサウルスで壊れていてはここでは走れません」
そうだというのである。
「ですから御安心下さい」
「まあ水中もあんな動物ばかりいても進めたし」
「それを考えたら」

「ティラノサウルスでも、ですね」
「しかし」
あらためて見るとであった。その恐竜は威圧感に満ちていた。今にも何かを取って食べそうな。そんな不穏な気配に満ち満ちていた。
まずだ。レミが言う。
「餓えてるわね、あの恐竜」
「ここでは餌は与えませんので」
ガイドさんの説明も来た。
「ですから時として」
「バスも襲う」
「そうなるんですね」
「はい、噛まれることも蹴られることもあります」
恐竜に、ということだった。
「尻尾の一撃が一番凄いんですよ」
「ああ、尻尾ですか」
「あれですね」
ティラノサウルスのその尻尾も見る。嫌になる程大きく長くそして太い。
「このバスだからこそ耐えられる」
「そういうことですね」
「防御はこれでもかという程度頑丈にしていますから」
それを念頭に置いて造ったバスなのである。

第二百九話　凶悪な猿その二

「ただ」
「ただ？」
「モニターから見えるものは怖いですから注意して下さいね」
「よくわかります」
「本当に」
皆もそれは頷く。
「でかいですね、本当に」
「牙も爪も」
「顔も凶悪ですし」
「恐竜はアマゾンでも最強です」
実際にそうだというのだ。
「しかもアマゾンの恐竜は卵胎生です」
「っていうと」
「卵じゃなくてそのまま生まれる」
「それですね」
「はい、それです」
蝮等がそうである。卵の時が最も危ない。だから胎内で孵化させてそのうえで産むのである。哺乳類の胎生の進化の途中だとされている。
「ですからそう簡単に減りませんし」
「卵を襲われないから」
「だからですか」
「アマゾンはあらゆる生命にとって危険な場所です」
「恐竜も例外じゃないんですね」
「そうなんですね」
「はい、だからです」
また言うのであった。

「そうして卵胎生に進化しました」
「ううむ、何て危険な」
「それで進化したって」
「物凄い話ですね」
「生物はその環境に合わせて進化します」
所謂進化論である。ダーウィンのこの主張は当然ながらこの時代においても確かに存在しているのである。定説と言ってもいい程だ。
「だからです」
「危険な場所ではそれに合わせて」
「それで進化していくってことですね」
「その通りです。さて、今は」
ガイドさんの話が戻った。
「1この恐竜を避けないといけません」
「そうですよね、どうします？それで」
「ここは運転手さんが頼りですけれど」
「いつものことだからねえ」
ここではじめて話す運転手さんだった。
「こういうことは」
「恐竜が前に出るのはいつものことだったんですか」
「そうだったんですか」
「そうだよ、いつもだよ」
実に素っ気無く述べる運転手さんだった。それはガイドさんと同じでまるで何もなかったかの様に言葉を出していた。全く平気な様子で。
「こんなことはね」
「じゃあ平気なんですか」
「今も」
「避けられるんですね」
「うん、任せておいてくれよ」
前を見たままの言葉だ。

「それでね」
「わかりました」
「それじゃあそれで」
「御願いします」
「よし、頼まれたよ」
明るい顔で返す運転手さんだった。
「さて、いつも通り」
「問題をクリアーして下さいね」
「頼みましたから」
こうしてであった。運転手さんはバスを進める。そうしてであった。
何とだ。大きくジャンプしたのであった。
「えっ！？」
「ジャンプ！？」
「ジャンプって」
「こうしたこともできるんだよ」
運転手さんはハンドルを握ったまま笑顔で話す。

第二百九話　凶悪な猿その三

「このバスはね」
「ジャンプもできるんですか、このバス」
「それもかなり高いですけれど」
「何と」
「アマゾンは何があるかわからないからね」
こうも言うガイドさんだった。
「だから余計にね」
「それでなんですか」
「こうしてジャンプもする」
「そうだったんですね」
「如何にも」
心なしか言葉が誇らしげだった。
「いざという時の切り札だよ」
「そして切り札を今切った」
「そうだったんですか」
「さて、これで」
バスは恐竜の頭上を飛び越えていた。そして着地する。
後ろにいる恐竜はまだ後ろを振り向いていなかった。レミがそれを見て言う。
「ああ、恐竜って反応は鈍かったわね」
「脳味噌小さいんだっけ」
「そうだったわよね」
「はい、恐竜は確かに身体は大きいです」
ここでまた話すガイドさんだった。
「けれど脳味噌はそれ程大きくはありません」
「だから反応は遅い」
「そうなんですね」

「その通りです。爬虫類ですから」
恐竜もまた爬虫類である。このことがここでは大きかった。
「頭はあまりよくありませんので」
「じゃあそれを利用すれば」
「そんなに怖くないんですね」
「利用しなければ怖いですよ」
ガイドさんはこのことは釘を刺した。
「大きくてとても凶暴ですから」
「はい、それはよくわかります」
「とても」
このことは言うまでもなかった。
「あの爪とか牙を見ても」
「尻尾までありますし」
「このバスも何度も噛まれてるしね」
今度は運転手さんの話である。
「いや、大変だったよ」
「やっぱり怖いんですね」
「頭が悪くても」
「ですからいざという時のジャンプなんですよ」
ガイドさんの説明である。
「本当に」
「水陸両用だけじゃなくてジャンプもできる」
「凄いバスだよなあ」
「確かに」
皆このことに唸る。
「そんなバスを用意するっていうのも」
「アマゾン自体もかなりよね」
「確かに」
そしてであった。その恐竜は今度はだ。
密林の中に入って来た。そうしてだった。

「あれっ、あの方向って」
「そうよね」
「さっき銃撃があった場所だけれど」
「そっちに行くの」
「そうだよな」
そしてであった。そちらでも騒ぎが起こるのだった。
「今度は恐竜か」
「ティラノサウルスですね」
「それが来ましたか」
軍人達がまた言う。自分達の前に出て来た恐竜を見上げてだ。
「それでどうします？この連中は」
「やっつけるしかないですよね、やっぱり」
「そうですよね」
「当然だ」
大佐もそれに頷く。

第二百九話　凶悪な猿その四

「さもないとやられるのは我々だ」
「恐竜の御馳走になるってことですね」
「つまりは」
「その通りだ。刺身になる」
それだというのである。
「刺身になりたいか」
「いえ、それは絶対に嫌ですから」
「それだけは」
部下達もそれはすぐに言う。
「食べるのは好きですが食べられるのは嫌ですから」
「それは誰でもですよね」
「その通りだ。誰も食べられたくはない」
大佐もまたそれを話す。
「答えはそれだ」
「ええ、まさにサバイバルですね」
「そういうことですね」
「いいか、またショックガンだ」
大佐はそのうえでだ。部下達に目をやってそのうえで述べる。
「散開しろ」
「はい」
「了解です」
「そして各方向から撃て。いいな」
そのうえでだ。大佐はこうも話した。
「正面は俺が受け持つ」
「大佐がですか」
「宜しいのですか？」
「扇の要は指揮官が受け持つのは常識だ」

だからだというのである。
「そういうことだ。わかったな」
「はい、それなら」
「御願いします」
「いいか、一斉射撃だ」
散開した部下達にまた命じたのだった。
そうしてだ。彼等はそれぞれ散開してだった。
それから照準を合わせる。自分達を見下ろすその禍々しい恐竜を。
大佐が命じた。すぐにだった。
「撃て！」
「撃て！」
命令が復唱された。そうして。
ショックガンが放たれた。今度は一撃を重くしてだった。
さしもの暴君竜も十人からの攻撃を受けてだ。それで倒れてしまった。
軍人達はまた危機を脱した。それで安堵の息を漏らしながら言うのだった。
「いや、エウロパ軍の相手より大変ですね」
「全くですよ」
「あの連中は戦場でしか戦わないですからね」
倒れたその恐竜を見ながらの言葉だった。
「それに対してここの連中は何時何処から来るかわからない」
「本当に厄介ですよ」
「ゲリラ戦の訓練だからな」
ここで大佐が言った。恐竜の攻撃前に倒したことに機嫌をよくさせながら。
「だからだ」
「敵は何時何処から来るかわからない」
「あのベトナムと同じですね」
「敵は戦場で戦うとは限らない」

これもまた戦争の一つの定義である。敵は常に戦場にいるとは限らないのだ。街やこうした密林の中にもいたりするのである。
「そういうことだ」
「ええ。よくわかりますよ、今では」
「本当に」
「宇宙海賊やテロリストはこうだ」
彼等はまさにそうだというのだった。
「あの連中は正規軍ではないからな」
「掃討戦にはこうしてですね」
「何時何処から来るかわからない相手に対する」
「そういうことですね」
「そういうことだ。わかったな」
また言う大佐だった。
「海賊やテロリストはだ」
「掃討すべき相手」
「こうした風にですね」
「では訓練を続ける」
大佐の今の言葉は冷静なものだった。
「わかったな。それではだ」
「了解です」
「ではこのまま」
訓練は続く。そうしてその中においてであった。
彼等はまたしてもだ。恐るべき相手と対峙するのであった。

凶悪な猿　　完

２０１０・６・１６

第二百十話　何でもいるその一

何でもいる

恐竜も撃退した特殊部隊の面々はキャンプに入った。しかし。
ハエトリクサを食べているとだ。そこにまた来た。今度は。
「げっ、蠍！？」
「五十センチはあるぞ！？」
巨大蠍が来たのである。
「これは何だ？」
「こんなのもいるのか」
「そうだ、いる」
大佐は慌てて立ち上がった部下達に対して話す。
「巨大蜘蛛もいるな」
「それは聞いてましたけれど蠍もですか」
「それも巨大なんですか」
「ここではあらゆる生物が敵になる。そして」
さらに言う言葉は。
「どんな生き物がいても不思議ではないからな」
「虫も巨大ってことですか」
「つまりは」
「そういうことだ」
大佐は言いながらすでに巨大蠍に対して銃を構えていた。
そのうえでだ。部下達にこう告げる。
「いいか」
「はい」
「何でしょうか」
「蠍の殻は硬い」
言うのはこのことだった。殻のことだった。
「弾丸は跳ね返す場合があるぞ」

「恐竜の鱗よりも硬いんですね」
「そうなんですか」
「そうだ、だから注意しろ」
また言う彼だった。
「わかったな」
「それじゃあここは」
「ビームですか」
「そうだ、銃をすぐに換装しろ」
実弾からビームにというのである。連合の銃はそうしたことも可能なのだ。これもまた連合の高度な技術の一つなのである。
「わかったな」
「了解です」
「蠍は一匹だけとは限りませんしね」
「その通りだ」
大佐は真顔で話す。
「実際に周りを見てみろ」
「周り・・・・・うわ」
「来てますね」
「かなりの数ですね」
彼等は見てしまった。今度は巨大蠍の群に囲まれてしまっていた。
「百匹ってところですかね」
「そんな感じですね」
そしてだ。一人が数の範疇からこう話した。
「まあ猿の十分の一ですね」
「そうだな数はな」
「数だけはな」
仲間達も彼の言葉に応える。
「しかし相手は毒があるぞ」
「注意しないと死ぬからな」
「それはわかってるな」

「ああ、わかってるさ」
その彼もこのことはよく認識していた。蠍に毒があるということは最早常識であった。実際にどの蠍もその尾の先に鋭い針があった。
それを見てだ。また彼等は話す。
「さて、と」
「ビームで次々に撃つか」
「ああ、そうするか」
「いいか」
その彼等にだ。大佐が話す。
「合図を待て」
「はい」
「わかりました」
部下達も彼のその言葉に頷く。そうしてであった。
銃を彼等に構えてだ。そのうえでまた話す。
「いいな」
「そろそろですね」
「射撃ですね」
「ロックオンは完了しているな」
このことを確認した。

第二百十話　何でもいるその二

「全員」
「はい、完了です」
「既に」
「ならばよし」
それを聞いてからだった。
「一斉射撃だ、いいな」
「了解です」
「それでは」
こう話してそのうえでまた攻撃するのだった。彼等のサバイバルは続いていた。
しかし二年Ｓ１組の面々はというとだ。もうその旅を終えようとしていた。
「いやあ、何から何まで」
「凄かったよなあ」
「そうよね、これがアマゾン」
「ダイナミックだったわ」
「皆さん」
ガイドさんも明るい顔で彼等に尋ねてきた。
「如何でしたか？緑の地獄は」
「絶対に外に出ようとは思いませんでした」
「何があっても」
皆それぞれ言う。
「っていうかそんなところで訓練も」
「無茶苦茶凄くないですか？」
「なあ」
「義勇軍は本当に生きるか死ぬかですから」
ガイドさんはどうやら義勇軍にも詳しいらしい。それで言うのだ

った。
「ですから。こうした訓練もです」
「あるんですね」
「怖いですね」
「常時戦闘態勢ですし」
これは義勇軍だけである。
「ですから」
「ううん、やっぱり怖い」
「確かに」
「まさに生きるか死ぬか」
「そういう中にいるんですね」
「義勇軍は」
ここが正規軍と違っていた。正規軍はここまでの訓練は絶対にしないのだ。
「絶対に義勇軍には入られないな」
「そうよね」
「何があっても」
「それに」
さらに話すのだった。その義勇軍のことをだ。
「義勇軍ってサハラからの難民で構成されてる軍隊だから」
「僕達は参加できない」
「そうなるのね」
「確か。そうだったよな」
「そうそう」
「それはね」
こう話されるのだった。
「連合市民は正規軍」
「あの軍隊は義勇軍だから」
「そこが違うっていうのね」
「待遇は向こうの方がいいみたいだけれど」

この場合はそもそも何故待遇がいいかである。そうしたことについても考えると色々なことがわかってくるという寸法でもあるのだ。
「ううん、滅茶苦茶な話」
「実際にね」
「何ていうか」
皆それをまた話す。そうしてだった。
今度はだ。バズーカの砲撃音が聞こえてきたのだった。
皆それを聞いてまた言う。
「ええと、今度は一体」
「何なのかしら」
「バズーカって」
「ああ、あれはですね」
ガイドさんもそのバズーカの音を聞いたうえで話す。
「おそらく雷竜を追っ払ったと思います」
「雷竜？」
「それをですか」
「はい、見て下さい」
見ればであった。彼等の後ろにジャングルから顔を出している巨大な恐竜がいた。灰色の身体をしていて首が長い。そして頭は何か帽子を被っているようだった。
その恐竜を見てだ。ガイドさんがまた話す。
「ブラキオザウルスですね」
「ああ、あのやたら重いっていう」
「その恐竜ですか」
「はい、それです」
まさにそのブラキオサウルスだというのだ。

第二百十話　何でもいるその三

「あれに踏まれたらひとたまりもないですから」
「けれど雷竜って草食だったんじゃ」
「そうよね」
「確か」
「はい、性格は大人しいです」
ガイドさんもその性格はよく知っていた。
「ただしです」
「ただし？」
「ただしっていいますと」
「気付かないで踏み潰すことはありますから」
これは先に話された通りだった。
「ですから」
「だからですか」
「それでなんですか」
「はい、だからです」
ガイドさんの話は続く。
「だからああして追っ払う必要があるんです」
「成程、それでなんですか」
「納得」
「大人しくても危険なんですね」
「象に踏み潰される小さな動物もいます」
こんな例え話まで出された。
「それと同じです」
「この場合は人間がその小さな動物」
「恐竜が象ですか」
「アマゾンで危険なのは猛獣や毒だけではありません」
あらためて話された。

「大人しい動物達も脅威になります」
「本当に気が抜けませんね」
「確かに」
皆また頷きながら言う。
「そんな世界なんですね」
「実際に」
「このバスは踏まれても大丈夫なようにも設計されていますので」
このことを忘れてはならないという口調だった。
「ですから安心して下さい」
「何か戦車に乗ってる気分になってきました」
「だよなあ」
「もうこれって」
「実際に」
「そう思ってくれていいですよ」
ガイドさんもこのことを否定しない。
「ですから」
「アマゾンには戦車でないと入られない」
「えげつないですね」
「そこまでなんですか」
「武装する必要はないけれど」
それでもなのだった。
「ううん、難しいなあ」
「っていうか怖い」
「そうよね」
こう話してだった。さらに進んでだ。
「それこそ仮面ライダーにでもならないと」
「生きていけない？」
「そんな場所だけれど」
「それかブランカか」
どちらにしろ人間離れした存在でないと駄目だというのである。

「恐ろしい世界だよなあ」
「全く」
「生きていられないっていうか」
「昔はこうした中で生きていた人いるらしいけれど」
実際に部族としていたのである。地球にいた頃はだ。
「今は絶対に無理ね」
「確かに」
「それだけは」
こう話してだった。誰もがアマゾンで暮らそうとは思わなかった。
そして実際に。目の前にまた出て来たのである。
「うわ、川の中にアナコンダ」
「二十メートルありますね」
「それだけは」
目の前の川にだ。アナコンダが首をもたげていたのである。その大きさがこれまた途方もないものであったのだ。確かに二十メートルあった。
皆それを見てだ。口々に言うのである。
「ええと、あれも怖いですよね」
「凶暴ですよね」
「それもかなり」
「アナコンダはそうではありませんよ」
しかしガイドさんはアナコンダについてはそうではないというのだった。

第二百十話　何でもいるその四

「むしろ大人しいです」
「あれっ、そうなんですか」
「大人しいんですか」
「はい、大人しいです」
また言うガイドさんだった。
「肉食ですけれど」
「いや、それ問題ですから」
「肉食っていうのは」
「もうそれだけで」
二十メートル以上もあって肉食ならばだ。出て来る答えは一つしかなかった。そしてその答えこそが最も憂慮すべきことだった。
「人間一口ですよね」
「食べますよね」
「あの大きな口で」
「アナコンダは爬虫類です」
ガイドさんのこの言葉も問題なのだった。
「ですから」
「じゃあやっぱり危ないじゃないですか」
「大人しいって。人間食べるじゃないですか」
「それだったら」
「爬虫類は少食ですよ」
ガイドさんは性懲りもなく言う。
「ですから安心して下さい」
「いや、少食っていいましても」
「滅茶苦茶大きいじゃないですか」
「それもかなり」
爬虫類は常温動物である。だから食事は変温動物と比べて少ない。

しかしここでもアナコンダのその巨大さが問題となるのであった。
「それじゃあとても」
「少食でも人間ぺろりですよね」
「五メートル以上あったら普通に食べられるのに」
「ですから大丈夫ですよ」
まだ言うガイドさんだった。
「満腹なら襲いませんから」
「じゃあ満腹じゃなかったら？」
「その時は」
「命の保障はできません」
皆の予想した言葉だた。
「絶対にです」
「ほら、そうじゃないですか」
「食べられるんじゃないですか」
「滅茶苦茶危険じゃないですか」
「はい、確かにアマゾンに一人で会えば命の保障はありません」
ガイドさんも結局このことは認めた。
「しかしです。バスの中にいますので」
「それで安全なんですね」
「つまりは」
「外に出て会えば何人かで完全武装でないと危険ですよ」
結局そこに至った。
「注意して下さい」
「じゃあ大人しくないんじゃ」
「そうよね」
「外に一人で会ったら危険って」
「それだけで」
「ですから満腹だと襲わないですから」
またこう話しはしてきた。
「安心して下さい」

「満腹だと襲わないって常識なんじゃ」
「そうよね、それって」
「結局は」
「いえいえ、鼬ですけれど」
ガイドさんは今度はその鼬を話に出してきた。哺乳類で胴の長い生き物である。ミンクやフェレットもこの鼬の仲間になるのである。
「鼬は目の前にいる生き物には徹底的に攻撃しますよ」
「つまりアナコンダはそういうことはしない」
「だからいいんですか」
「はい、そうです」
そういうことだった。
「ですから安心していいです」
「そういえばアマゾンって餌は豊富でしたね」
「何でもいるし」
「そうなんですね」
「アマゾンでは餓えはありません」
ガイドさんは言った。
「それはありません」
「食べ物はあるんですね、それは」
「しっかりと」
「はい、食べ物はあります」
それはだというのだ。

第二百十話　何でもいるその五

「ただ」
「ただ？」
「ただっていいますと」
「生きられるかどうかは別です」８
やはりこうなった。
「何しろ食物連鎖が凄い社会ですから」
「ですよね、何故飢えがないか」
「食べ物が一杯あるからですよね」
「そうじゃないとですね」
「はい。ただ食べられる草や果物も一杯あります」
それもだという。
「ただ。生きられるかどうかは別ですから」
「その草や果物も毒のあるものが多いですよね」
「やっぱり」
「そういうのも多いですよ」
ガイドさんは全く否定しない。
「気をつけて下さいね、若し本物のアマゾンに行かれた時は」
「デンジャラスだよなあ」
「全く」
「本当にね」
皆ここまで話を聞いてあらためてこのことを強く意識した。そうしてその彼等の前のその川のところにだ。一匹の蜥蜴が見えていた。
何とその蜥蜴は川の上を走っている。そうしていたのだ。
「あれっ、川の上を走ってるけれど」
「あれってまさか」
「バジリスク！？」
「はい、バジリスクです」

ガイドさんがまた言ってきた。
「あれはバジリスクです」
「そうなんですか、あれがですか」
「バジリスクなんですね」
「そうなんですか」
「はい、水の上を走れる蜥蜴です」
それだというのである。
「非常に面白い蜥蜴ですよ」
「水の上を走るなんて滅多にできないですけれど」
「それって一体どうやってするのかしら」
「そうだよな、一体」
「それが問題だけれど」
「あっ、それは簡単な原理です」
ガイドさんの返答は明るいものだった。
「まず右足を水面に入れます」
「はい、入れて」
「それからは」
「それから右足が入れないうちに左足を前に出します」
そうするというのだ。
「それを繰り返します」
「そうして前に進むんですか」
「水面の上を」
「つまり普段の歩行を素早くしたものです」
こう一同に話す。
「バジリスクはそうやって川の上を進むんです」
「ううん、凄い生き物ですね」
「流石アマゾン」
「まさかそんなものがいるなんて」
「はい、では皆さん」
ガイドさんがここでまた話してきた。

「それではあの川を渡ったら」
「はい、その時は」
「どうなるんですか？」
「それで終わりです」
こう皆に話すのである。
「長かったこの旅もこれで終わりです」
「旅ですか」
「そうだったんですか、これって」
「けれど。言われてみれば」
「確かに」
彼等にしても頷けるものがあった。その旅という言葉にだ。
「旅でしたね」
「そうですね」
「何かそんな」
「アマゾンは確かに恐ろしい場所です」
ガイドさんの言葉は真実である。

第二百十話　何でもいるその六

「ただ。それと共に面白い場所です」
「面白いですか」
「そういう場所でもあるんですね」
「はい、ここもまた世界なのです」
こう一同に話す。
「素晴しい世界です」
「素晴しい、っていうと」
「何故かそう思えるのが」
「不思議よね」
「確かに」
「いい場所ですよ」
また言うガイドさんでした。
「私ずっとここのガイドやっていたいですし」
「緑の地獄、でもですか」
「そう言えるんですね」
「緑の楽園でもあるのですから」
地獄と楽園、相反するものが一つになっていた。
「ですから」
「楽園でもあるんですか、ここって」
「はい、楽園ですよ」
そうでもあるというのである。
「アマゾンは」
「楽園なんですか」
「こんな危険な場所でも」
「そうなるんですか」
「はい、楽園でもあります」
また言うガイドさんだった。

「だから色々な動物がいます」
「そういえば確かに」
「色々な生き物がいるよな」
「生物だけじゃなくて植物も」
「一杯いるし」
「只の地獄ならこんなに生物はいません」
ガイドさんの話はさらに一理あるものだった。
「ですからここは楽園なのです」
「成程」
「その通りですね」
「はい、そうです」
ガイドさんはまた話す。
「ですからここも楽園なのです」
「地上の楽園っていうと」
「人間が言う場所って自称でしかないし」
「そうそう」
そしてであった。人類史上にその汚点を残す国家の話が出て来た。
「北朝鮮みたいな感じの」
「ああした国ってなあ」
「あったからねえ」
「前もサハラにあったし」
「そうだよな」
サハラには時として独裁国家も誕生してきた。その中にはその北朝鮮の様な国家も存在してきたのである。ごく稀ではあるがだ。
「ああした国家って絶対に自分達をそう言うよな」
「そうよね。何でかしら」
「不思議だよな」
「確かに」
「それはですね」
このことについても話せるガイドさんだった。

「その独裁者だけにとっての楽園だからですよ」
「ああ、独裁国家は独裁者の為にある」
「だからですね」
「そういうことですね」
「例えばその北朝鮮ですけれど」
そうした腐敗国家へのサンプルである。
「金一族だけが肥え太ってましたね」
「ええ、本当に」
「他の誰もが痩せていましたけれど」
「太っていたのは独裁者だけでした」
「本当に」
まさに一人だけ肥満していたのが北朝鮮なのだ。国民が次々に餓え死にしていったというのに独裁者だけは肉や寿司やメロンといった御馳走を楽しみ高級な酒を飲んでいたのである。

第二百十話　何でもいるその七

「サハラでもいたしな」
「そういう国ってすぐに潰れますけれど」
「いますよね」
「確かに」
「そうなりますし」
「一人だけがいい暮らしをしている、一人の為だけの楽園なんです」
ガイドさんはこうした独裁者のことをこう断言した。
「それは他の人にとっては地獄です」
「はい、その通りですね」
「地獄以外の何者でもないっていうか」
「何それ?的な」
「そんな感じですね」
「しかしアマゾンは違います」
またアマゾンの話になった。
「どんな生き物にとっても楽園です」
「食べ物には困らない」
「そしてどんな生き物も暮らせる」
「すぐに死ぬかも知れませんけれど」
どうしてもそれはついて回ることだった。
「しかし水には困りませんし凍えることもありませんから」
「だから仮面ライダーアマゾンも暮らせたのね」
「それにブランカも」
「そういうことなんですね」
「一応人も野生化すれば生きられたりします」
ガイドさんも仮面ライダーアマゾンについては知っていた。
「ああした風に」
「そうなんですか、野生化すれば」

「それで生きていけるんですか」
「何とか」
「ただしです。ああいう風に強くならないと駄目です」
その仮面ライダーの様にだというのだ。
「あそこまで、です」
「仮面ライダーって」
「しかもアマゾンって素の戦闘力高かったし」
「そうよね、変身する前からもかなり」
「野生で」
「けれど。確かに」
しかしであった。仮面ライダーの話をして尚更わかったのだ。
「ああした人も生きていけるっていうのは」
「街よりも何か」
「楽園？みたいな」
「そうよね」
「考えてみれば」
皆こう言い合う。
「楽園以外の何でもないっていうか」
「そうなるわよね」
「地獄と楽園は遠いものではないのかと」
ガイドさんはこうも話した。
「ですから」
「だからですか」
「それでなんですね」
「はい、ここは楽園です」
またこう話された。
「地獄でもありますけれど」
「天国と地獄」
「それって案外近い」
「そうなんですね」

「はい、そうなります」
「二つって両立するんですね」
皆このことに首を傾げさせてしまった。
「そういうものなんだ」
「何か釈然としないところもあるし」
「けれど納得できるし」
「不思議と」
「ここは不思議な場所ですから」
ガイドさんの説明もわりかし不思議なものになっていた。
「それもいいんですよ」
「ううん、しかし」
「軍人さん達は大変ですね」
「あの人達は」
「けれど食べ物には困りませんよ」
それはだというのであった。
「食べることには」
「毒にさえ当たらなければですね」
「それで」
「はい、毒のある生き物や植物も多いですけれど美味しいものはもっと多いですから」
美味しいものと聞くとだった。皆の目の色が変わった。
「えっ、そうなんですか」
「美味しいもの多いんですか」
「そうなんですか」
「例えばトリフィドもそうですよ」
その歩く危険な植物である。
「あれだって食べれば美味しいんですよ」
「そうよね。あれはね」
またブラジル人のレミが答える。
「美味しいわね」

「ステーキにするのもいいですし鍋にするのもいいですよ」
焼くのも煮るのもだというのである。
「お刺身もいけますし」
「植物のお刺身ですか」
日本人の七海がそれを聞いて呟いた。
「確かにありますけれど」
「それもいけますから」
また言った七海だった。
「如何ですか？この見学の後でアマゾンの生き物達の料理は」
「わかりました」
「それなら」
それを聞いてだった。皆笑顔で頷く。彼等の関心はもうそちらに向かっていたのだった。

何でもいる　　完

２０１０・６・２１

第二百十一話　アマゾンの食材その一

アマゾンの食材

軍人達はだ。今度はトリフィドを捌いていた。倒したそれをなのだ。

「これって美味いんですよね」

「そうですよね」

「そうだ、美味い」

大佐がそのトリフィドをナイフで捌きながら答えた。彼もまた自分からナイフを出してそのうえで捌いているのである。指揮官であってもだ。

「それもかなりな」

「じゃあサボテンみたいな感じですね」

「そうなんですね」

「これから酒も造られる」

それもだというのだった。

「油もいいしな」

「何かそれ考えたらいい植物なんですね」

「ハエトリソウと同じで」

「そうだ、しかしだ」

だがここで、だった。大佐は部下達にこうも話した。

「危険なことは確かだ」

「襲い掛かってきますからね」

「それも積極的に」

「それを考えないとな」

駄目だというのだった。

「食べるには勇気と戦闘力が必要だということだ」

「ううん、サバイバルですね」

「本当に」

「アマゾンだからな」
大佐の言葉は奇しくもガイドさんのそれと同じであった。
「それは受け入れろ」
「わかりました」
「結局そうなるんですね」
「そういうことだ。そしてだ」
大佐はさらに話した。
「死ぬな」
「死ぬな、ですか」
「それですか」
「死ぬと食えないからな。そして食われるからな」
さらにサバイバルな言葉であった。
「だからな。いいな」
「ええ、よく」
「わかるしかありませんね」
「そういうことだ。さて、こいつの料理だが」
捌いているトリフィドを見ながらの言葉だった。
「何を食いたい？」
「何をですか」
「こいつは色々な方法で食える植物だ」
「サボテンみたいですね、本当に」
「勿論サボテンみたいにステーキにしてもいける」
それもだというのだ。
「さて、それで何で食う？」
「そうですね、今はハエトリソウのがたっぷりありますし」
部下の一人がここで述べた。
「これは保存してもいいんじゃないですか？」
「保存か」
「はい、保存です」
その部下はまた述べた。

「干して。干し林檎とかみたいにして」
「ああ、それいいな」
「そうだよな」
他の者も彼のその提案に頷いた。
「それで食うか」
「そうしたらいいな」
「難しいな」
しかしだった。大佐はその提案に対して首を横に振ったのだった。
そうしてだ。彼はこう部下達に話した。
「ここで干すのは難しいな」
「どうしてですか？」
「それは」
「ここはアマゾンだ」
またしてもアマゾンということが強調された。
「アマゾンだからだ」
「アマゾンだからですか」
「それでなんですか」
「そうだ、だからだ」
大佐はまた言った。
「ここは密林だ。湿気が多いな」
「あっ、そうですね」
「となると」
「そうだ、干すのには不向きだ」
彼が指摘するのはこのことだった。言われてみれば確かにその通りであった。

第二百十一話　アマゾンの食材その二

「しかも雨がかなり多いしな」
「じゃあ保存はできないですか」
「そういうことですか」
「手に入れたものはすぐに食う」
大佐は言った。
「それはここの鉄則だ」
「じゃあこれどうします？」
「捌きましたけれど」
部下達は怪訝な顔になってこのことを問うた。
「食べるんですよね」
「ハエトリソウもありますけれど」
「簡単なことだ。どちらも食べる」
大佐が言った解決案はこれだった。
「どちらもな」
「両方共食べるんですか」
「ハエトリソウもトリフィドもですか」
「栄養は採っておくことだ」
大佐の言葉はシビアなものだった。
「何があってもな。採っておくことだ」
「生きる為に」
「だからですね」
「ここに来てもう猿に恐竜にだったな」
一日に何度も死闘を繰り広げていた。彼等はまさに戦場の中にいるのだ。
「それにハエトリソウにトリフィドも狩ったな」
「その分だけエネルギーを消耗している」
「そういうことですね」

「その通りだ。その分は補給しなければならない」
やや機械的だが事実であった。
「わかったな。その為にだ」
「これも食べる」
「そういうことですか」
「トリフィドもハエトリソウもあらゆるビタミンが多い」
こうしたことも話した。
「栄養も豊富だからな」
「生きる為にもですね」
「たらふく食うんですね」
「アマゾンは幸い美味い食べ物も多い」
大佐はまた話した。
「植物だけでもな」
「つまりベジタリアンでも享楽的に生きられる」
「そうした場所なんですね」
「その通りだ。ならば食え」
何にしてもそうしろというのであった。
「いいな」
「はい、わかりました」
「じゃあトリフィドはステーキにしましょう」
「それで食べましょう」
「トリフィドの油をそのまま使ってもいい」
彼は笑って部下達に話した。
「鉄板の上で焼いてな」
「それでステーキにして、ですね」
「いいか、中までよく火を通せ」
大佐はこのことは念押しした。
「よくだ、ミディアムにしろ」
「レアは駄目ですか」
「食あたりの危険がある。だから火はよく通せ」

だからだというのだった。
「わかったな。それでだ」
「はい、わかりました」
「火は通します」
「アマゾンでは基本的に生は駄目だ」
それは決してというのだった。大佐は真剣である。
「いいな、それは」
「特に魚ですね。今は食べられませんけれど」
「そうですね」
「そうだ、特に魚は駄目だ」
その通りだというのである。
「死ぬぞ」
「死ぬんですね」
「虫にやられて死ぬ」
よりによってそれであった。最も死にたくない死に方法の一つである。
「だからだ」
「よくわかりました、虫ですか」
「それが来ましたか」
「そうだ、腹や身体の中を寄生虫に食い荒らされたり蠢めかれたいか？」
大佐は実際にこのことを問うた。

第二百十一話　アマゾンの食材その三

「そうして」
「いえ、それは」
「絶対に嫌です」
部下達も答える。まさにその通りだった。
「その死に方だけは」
「かなり」
「そうだな。絶対に嫌だな」
部下達がどう答えるかはわかっていた。そのうえでの言葉である。
「わかったな。だから火を通せ」
「わかりました」
「それもよく」
「植物にもいるからな」
彼等が今食べるその植物もだというのだ。
「それも必ずと言っていいな」
「必ずですか」
「ありますか」
「そうだ、ある」
その虫についても細かく話が為されるのだった。一体どうした虫かというとだ。
「身体中を這いずり回り全身蚯蚓腫れだらけにしてくれる」
「うわ・・・・・」
「そっちですか」
「そして脳にまで至りそこを食うこともある」
そうした虫だというのだ。歴戦の義勇軍特殊部隊の者達といえどそれを聞いて心穏やかではいられなかった。戦場とは違う恐怖だった。
「えっ、脳までなんですか」

「それで死ぬんですか」
「またそれは」
「それで狂い死にすることもある」
恐怖の話がさらに続く。
「わかったな」
「はい、嫌になる程です」
「そこまで怖い虫でしたか」
「トリフィドが恐ろしいのはその攻撃性だけではない」
虫もだというのである。
「わかったな」
「はい、よく」
「嫌になりました」
「とにかく火を通せ」
大佐の言葉は厳しいものだった。
「アマゾンで食うものはだ。ただしだ」
「ただし？」
「ただしといいますと」
「果物は別だ」
それはだというのだ。
「野生の果物が多くある。そうしたものは生でも食べていい」
「そうですか。それは何よりです」
「流石に食べ物はですか」
「そうだ。毒のないものだけだがな」
それでも毒について言われるところがやはりアマゾンだった。
「それだけはいい」
「それで果物の中に虫はいないのですか？」
部下の一人がまたそれを問うた。
「その中には」
「カミキリムシやカブトムシが食べることがある」
そうだというのだった。

「しかしだ。そうした悪質な寄生虫はいない」
「だから大丈夫ですか」
「そういうことですか」
皆それを聞いてだ。少しだけほっとした。果物を生で食べたいというのは当然の心境である。果物は普通は生で食べるのはこの時代でも同じだ。
「なら果物も探しましょう」
「それも」
「そうだ、果物はあちらこちらにある」
大佐はすぐ傍を指差した。するとそこにもう野生の赤いマンゴーがあった。
「あれもだ」
「よし、じゃあ」
「今から」
「しかしだ」
しかしだというのだった。
「手に取る時は気をつけろ」
「えっ!?」
「何かありますか?」
「その時を狙って蛇や猛獣が来る」
彼等であった。

第二百十一話　アマゾンの食材その四

「だからだ」
「ああ、無防備になる時にですね」
「獲物が油断したその時にですか」
「襲い掛かって来る。だから注意しろ」
ここでもサバイバルだった。
「わかったな」
「本当に危険な場所なんですね、ここって」
「普通の戦場以上ですね」
「だから訓練にもいい」
命懸けだからこそというのだ。
「そういうことだ」
「エウロパ軍は正攻法しかないですけれどね」
「あの連中は」
「けれどテロリストとかは違いますしね」
連合軍の相手はエウロパ軍とは限らないのである。治安維持もあるからだ。
「宇宙海賊も基地で暴れますしね」
「そうそう」
「だからだ」
大佐はまた言った。
「テロリスト達のことも考えての訓練だ」
「難しいですね、あの連中は」
「捕虜にはしないにしても」
「宇宙海賊やテロリストはな」
彼等は捕虜にするのは指揮官の自由な裁量とされているのだ。それは彼等が正規の軍人ではないからに他ならないのである。
「それでいいからな」

「はい」
「ですから」
「ここの動物達は殺してはならない」
動物達についても話される。
「しかし宇宙海賊やテロリスト達は違うからな」
「自由に殺してもいいですね」
「その通りですね」
「そうだ。軍人ではない」
これが大きいのだ。
「犯罪者だ」
「ではその時は」
「容赦なくやらせてもらいます」
「そういうことだ。俺もエウロパ軍が相手だと憎いにしてもだ」
エウロパ軍はどういうかというとだった。
「捕虜として扱う」
「正規の軍人ですしね」
「ですから」
「長官もそうしたことには五月蝿い」
八条のことである。この動物園のオーナーでもある。
「無闇な血を好む人ではないからな」
「そうですよね。俺達はサハラからの難民ですが」
「その俺達にも言いますからね」
「そうですよね。エウロパ軍とは戦え」
それは絶対だというのだ。
「しかし復讐はそれで終わらせろと」
「戦場でだけだと」
八条はこうしたことには五月蝿い。攻撃対象もあくまで軍人や軍事施設に限定する。戦争をしても戦場以外で人を害しようとはしないのだ。
「そういうことですね」

「つまりは」
「正しい考えですね」
「そうだ、それでいい」
大佐もそうだという。
「一般市民や軍事施設以外への攻撃はな」
「アッラーの教えでもありませんね」
「それに美しいものではない」
「だからこそですね」
「あくまで戦場でだけ」
「軍人相手にはだ」
あくまでその場合はというのである。
「そういうことだ」
「しかし宇宙海賊やテロリストは容赦なくですね」
「倒していい」
「殺してもいいと」
これは連合の考えだ。連合は犯罪者には何処までも厳しい社会なのだ。
「しかし醜い行いはするなと仰いますね」
「殺してもいいが」
「そうだな。略奪も暴行も厳禁だ」
連合軍はこれもだった。
「宇宙海賊の財宝も全て被害者に戻される」
「それは正しいですね」
「確かに」
「そうだ、それは確かに正しい」
大佐はまた言った。

第二百十一話　アマゾンの食材その五

「まあ犯罪者を殺しても心が痛まないしな」
「むしろ正義ですね」
「アッラーの仰る正義ですね」
「その通りだ」
まさにそれだけだというのである。
「それでいい。無駄な殺生は禁物だが悪は成敗しなくてはならない」
「はい、そうです」
「その通りです」
「そして」
さらに話される彼等だった。
「今は生きることですね」
「食ってですね」
「トリフィドのステーキを」
「酒は駄目ですね」
「死にたければ飲め」
大佐の酒に対する返答はこれだった。
「そうしたければな」
「死にたければって」
「そうなのですか」
「酒を飲めば身体の動きもおかしくなるし注意力も散漫になる」
「そしてそれがそのまま」
「死に至ると」
「そうだ」
まさにその通りだというのだった。
「だからだ。酒は止めておけ」
「は、はい」
「わかりました」

部下達はまた真剣な面持ちで頷いた。
「訓練が終わってからですね」
「それは」
「そうしろ。酒は何時でも飲める」
「そうですね。訓練から帰ったら」
「それこそ何時でもですからね」
「それじゃあ」
「訓練が終われば宴会だ」
大佐は微笑みはしなかったがこう言ってみせた。
「だからだ。その時まで全員生きろ」
「イエス、サー！」
「了解です、サー！」
こう話してだった。彼等は今は訓練に専念した。そうしてであった。
二年Ｓ１組の面々はだ。アマゾンのコーナーの外にあるサービスコーナーで食事を摂っていた。その食事は見事なまでにアマゾンの料理だった。
「トリフィドとハエトリソウのシェラスコって」
「それに鯰の煮たもの」
「鰐のガーリックステーキ」
「そのままね」
「ブラジルじゃよく食べるわよ」
ブラジル人のレミがここでも話す。
「私も国じゃいつもこういうの食べてるし」
「ブラジルじゃ鯰ってよく食べるんだ」
「ええ、そうよ」
その通りだとネロの問いに答える。
「ベトナムじゃジャングルの生き物は食べないの？」
「あまり食べないね」
実際にそうだと答えるネロだった。

「それよりもね」
「それよりも？」
「やっぱりお米とか。その周りで採れたり育ったりしたものを食べるから」
そうだというのである。
「だからね。それは違うよ」
「成程、そうなの」
「そうなんだ。特にお米ね」
何といってもそれだというのだ。
「ベトナムじゃね。もうまずはお米だから」
「お米ないと駄目なの」
「そういうこと。ベトナムに行ったら水田が一杯あるよ」
こうレミに話す。
「もうね。一面に何処までも続く水田がね」
「それは中々凄そうね」
「凄いよ。しかも年四回採れるから」
これは品種改良によってである。この時代では二期作が普通である。
「もう凄いから」
「年四回もお米って」
「人間が食べるだけじゃなくて家畜も食べるしエネルギーにも使えるし」
言い換えれば余って仕方がないのだ。連合ではバイオエネルギーもかなり使われているのである。それも産業になっているのだ。

第二百十一話　アマゾンの食材その六

「物凄いから」
「ベトナムが豊かなのも当然ね」
「少なくとも食べ物には全然困らないね」
それは満足しているというのだ。
「けれどブラジルはベトナムよりもっと大きな国じゃない」
「まあそうだけれどね」
レミはそのことは認めた。
「大国なのは大国ね」
「六大国の一つじゃない」
日米中露の他にトルコとそのブラジルが入るのである。
「物凄く大きくて豊かな国じゃないの？」
「あまりお金あるって印象ないのよね」
レミは腕を組んでこう述べた。
「皆かなり適当で能天気だしね」
「ラテンだから？」
「それもあるけれど国民性でね」
そうだというのである。尚連合は明るいカラーの国が多い。日本はそうではないと言われているが何かというと配色は目立ったりする。
「何か皆お金入ったらすぐ使って」
「つまりあるだけ使うってこと？」
「政府もなのよ。それであまり豊かって印象はないのよ」
「豊かっていうかそれって」
「そうだよな」
「違う意味なんじゃ」
皆その植物のシェラスコや鰐のステーキを食べながら言う。
「能天気なのは事実だけれど」

「というか使うだけのものがあるってやっぱり」
「豊かなんじゃ」
「そうなるかしら」
「まあ豊かだね」
ネロもそれは言う。
「あまり計画性ないみたいだけれど」
「ブラジル人ってそうなのよ。どうしてもあったら使ってしまって」
そのブラジル人の言葉である。
「お金なくても何かやっていけるし」
「それは豊かでしょ」
「絶対に」
皆すぐに突っ込みを入れた。
「何よ、ブラジルって」
「豊かじゃない」
「それもかなり」
「ううん、食べ物には困らないのよ」
右手を頭の後ろにやって言った。しかもネロと同じ言葉である。
「資源は豊かだし人口は多いし観光もあるしおまけに工業地帯もいいのが一杯あって」
「好条件揃い過ぎだろ」
「サハラとかとえらい違い」
連合と違いサハラは貧しい。特に国民所得はだ。人口で二十倍、国力で百倍の開きがある。国民所得も五倍以上の開きがある。
「それで豊かじゃないって」
「何なのよ」
「やっぱりブラジルって」
「そうよね」
また皆で言い合う。
「豊かっていうか」
「それもかなり」

「言われてみればそうかしら」
ここでやっとレミも頷いた。
「豊かかしら」
「豊かだよな」
「そうよね」
「連合六大国の一つだし」
何といってもこのことが大きかった。
「国は財政に困ってないでしょ」
「福祉とかも」
「あればあるだけ使っちゃうけれど」
とにかくこれは事実なのだった。この時代のブラジル式の金の使い方だ。
「それでも。困らないわよね」
「仕事は？」
「失業率は連合の他の国と同じ位よ」
つまり低いということだった。連合の失業率は一パーセント前後である。職がなければ開拓地に行けばいいという考えもこれに影響している。
「それで食べ物はね」
「餓えてないわよね」
「それはないよな」
「ないわね」
これも連合全体のことである。そしてレミの返答は。

第二百十一話　アマゾンの食材その七

「ないわよ」
「やっぱりね」
「そうなの」
「そういうのはないわね」
また言うレミだった。
「それどころかもう食べ物はいつも山盛りで色々あるし」
「こんな感じなんだね」
ネロはその山盛りに何枚も重ねられているステーキを食べている。
鰐のステーキは独特の匂いもするが鶏肉に似た味で美味い。
「こんな風に」
「そうよ、こんな風にね」
「ううん、やっぱり豊かだよな」
「そうよね」
「ブラジルって」
「そうだったのね」
レミはようやく実感したのだった。
「ブラジルって」
「まあ連合全体がそうだろうけれどね」
ネロはそれはブラジルだけではないとも言った。
「連合じゃ餓えとか貧困とか失業ってないからね」
「まあサハラと比べたらなあ」
「あそこは凄いよね」
「連合と比べたら」
サハラは貧しい。これもまたはっきりとわかっていることだった。
「餓え、あったよな」
「確かね」
「それも」

このことも話された。
「戦乱が続いてるから惑星によっては」
「ううん、戦争のせいか」
「物凄く異世界の話」
「確かに」
サハラの貧しさは戦乱故なのだ。戦乱が産業を破壊するからだ。
「それに対して連合は」
「こんな調子」
「失業率も低いし何時でも何でも食べられる」
「それって凄いことなんだな」
「そうかもね」
「凄いことだよ」
ここでネロがそうだと言ってきた。
「だって。それが国民所得にも出てるじゃない
「あっ、確かに」
「それもね」
「サハラと連合じゃ」
「それにエウロパとも」
「マウリアともですよ」
今度はセーラが言うのだった。
「全く違いますよ」
「けれどセーラって」
「そうよね」
「物凄いお金持ちだけれど」
「それでも？」
「我がシヴァ家はマハラジャですので」
所謂藩王のことである。
「そうした生活をしているだけです」
「じゃあマハラジャなかったら」
「連合よりも貧しいのね」

「そうなんだ」
「連合の三分の二程度でしょうか」
ある程度の数字であった。
「マウリアの国民所得は」
「あれっ、そんな感じ？」
「同じ位って思ってたわよね」
「そうそう」
「大体そんなものって」
「違ってたの」
「やはり違います」
こう皆に答えるのだった。マウリア人として。
「国民所得も他のことも」
「三分の二」
「そこまで違うんだ」
「マウリアはカーストがありまして」
ここで出て来たのはこれだった。法律では廃止されていてもそれでも残っているのである。職業分化、棲み分けの意義もあり中々完全には消えていない。

第二百十一話　アマゾンの食材その八

「ですから。カーストによっては」
「貧しい人もいる」
「そういうことなんだ」
「はい、それでです」
やはりそれだというのだった。
「それで乞食のカーストもありますし」
「乞食のカースト！？」
「そういうのもあるの」
「はい、あります」
今度はラメダスが言ってきたのだった。
「代々使用人やガードマンのカーストもありますし」
「そういうのもあるんだ」
「本当に職業によって定められているのね」
「例えばその使用人にしても」
ルビーも話してきた。
「お風呂とかを洗うカーストや食器を運ぶカーストがあって」
「えっ、全部するんじゃないの！？」
「そうなの」
「はい、それぞれです」
まさにそれはというのである。
「それぞれ分かれています」
「何かえらい複雑だよな」
「確かに」
「一回聞いてもわからない位」
「そこまでだけれど」
「ですから」
ここで再度セーラが一同に話した。

「所得がカーストによって違います」
「職業によって違うのと同じ」
「それともか」
「そうなるわね」
皆ここでこのこともわかった。
「それでも。三分の二って」
「確かマウリアって連合のどの国も豊かなんじゃ」
「国力あるんじゃなかったっけ」
「そうよね」
「人口が違いますから」
セーラがここで話したのは人口だった。
「ですから」
「そういえば二千億だったっけ」
「そうよね、確かその位」
「いえ、二千五百億です」
しかしであった。セーラがここで話した人口は四分の一も増えていた。何と二千億のところが五百億も増えてしまっていたのだ。
「それだけいます」
「二千五百億!?」
「あれ、実質二千三百億じゃなかったかしら」
レミは右手の人差し指を自分の唇にやって考える顔で述べた。
「確か」
「多少の誤差はつき物です。増えました」
そうだと。平然と話すセーラであった。
「ですから」
「ええと、それで二百億増える?」
「何か凄いんだけれど」
「有り得ないっていうか」
そう言われてだ。皆唖然となった。連合に置いて人口統計が正確でないということも驚きである。だがそれ以上に二百億も急に増え

るというのは有り得ないことなのだ。
「二千五百億の人口がいるから」
「だからその分国力も高いってことか」
「そうなります。マウリアはそこが違います」
そうだと話すのである。
「だからです」
「ううん、何かマウリアって凄い」
「確かに」
「ある意味において」
こうした言葉が加えられてしまうのがマウリアだった。
「異世界っていうか」
「確かに」
「そうね。それじゃあだけれど」
またレミが話してきた。
「今度またセーラのところに行く？」
「行くんだ」
「また今度」
「何かさっきの話を聞いてたら行きたくなったから」
それでだというのだ。
「だからね」
「そうだね。それじゃあ」
「またお邪魔していいかしら」
「あの宮殿に」
「宮殿ではありませんよ」
セーラはにこりと気品のある笑みを浮かべて答えたのだった。

第二百十一話　アマゾンの食材その九

「私の別邸ですから」
「いや、別邸っていうのがもう」
「何ていうか」
「ねえ」
有り得ない話であった。
「連合じゃそこまでのお金持ちってそういないし」
「しかもあれが別邸の一つじゃないわよね」
「そうだよね」
「私の別邸の一つです」
『私の』というところも何気に重要であった。
「連合には他に。ええと」
「十です」
ラメダスが考える主に述べてきた。
「連合にはそれだけです」
「そうでしたね。アメリカと中国にもあって」
「キューバにもあります」
「リゾート地にでしたね」
「はい、キューバはそれでです」
ラメダスは至って冷静に話す。
「他にもありますし」
「そしてエウロパにもありましたね」
「はい」
マウリアはエウロパと国交がある。だからそこにあっても問題はないのだ。
「そこには最近行っていませんが」
「一度行かなければなりませんね」
「そうですね。イギリスのウェリントン公爵ともお話しないと」

「はい、ですから」
「何か凄い会話」
「確かに」
皆ブラジル料理を食べながらセーラのハアなしを聞いて呆然となっている。
「セーラの家ってやっぱり凄いね」
「マハラジャは伊達じゃない」
「本当に」
「さて、そのセーラの別邸だけれど」
レミも真剣な顔になっている。
「また行かせてもらうわ」
「どうぞ」
セーラの今度の顔はにこりとしている。
「お待ちしています」
「さて、それじゃあ」
「皆でね」
「行こうか」
こうしてであった。彼等は今度はセーラの家に行くことになった。
そしてである。軍人達は。
「いいな、生き残れ」
「イエス、サー！」
「わかっています、サー！」
今度はだ。蠢く毒蛇達を前にしていた。
「この連中は光を見せて退散させろ」
「光をですか」
「それをですか」
「そうだ、光をだ」
それだというのである。
「それで退散させろ、いいな」
「了解です」

「それなら」
一人がだ。グレネードランチャーを出してきた。
それを見てだ。全員サングラスを装備した。
「目は潰れるってわけじゃないがな」
「光で暫く見えなくなりますからね」
「だからこそ」
「そうだ、一瞬の事態が死を招く」
ここでもこんなことが言われる。
「だからだ、いいな」
「本当にやばい場所ですね」
「全く」
「噛まれたら死ぬからな」
大佐の言葉は真剣だった。見れば毒蛇達の色は赤に黒に白と実に美しい。しかし誰もがその色からきけんなものを察するのだった。
「サンゴヘビですからね」
「余計にですよね」
「そうだ、サンゴヘビの毒は怖いぞ」
大佐は表情も真剣である。
「冗談抜きに猛毒だからな」
「ええ、そういうことで」
「気をつけます」
「光を放て」
大佐はそのグレネードランチャーを出してきた兵士にまた告げた。
「わかったな」
「はい、それじゃあ」
こうして光が放たれ今は何とか助かった。蛇達が散っていったのだ。
彼等は十日の間そんな訓練を続けた。全員無事に生き残って帰れた。しかしまさに地獄からの生還だった。その他に言いようのないことだった。

アマゾンの食材　　完

2010・6・28

第二百十二話　再びセーラの宮殿へその一

再びセーラの宮殿へ

「ううん、また行くとはね」
「確かにねえ」
「成り行きとはいえ」
二年Ｓ１組の面々は少し頭を抱えていた。
「あのティラノサウルスが普通に歩いてる屋敷にね」
「そういえばあの恐竜の餌ってどうなってるんだろ」
「だから侵入者じゃないの？」
物騒なことまで言われる。
「それを餌にしてるんじゃ」
「生餌かあ」
「何か物騒過ぎてなあ」
「現実に聞こえるし」
「そうよね」
皆それを否定できなかった。
「マウリアの処刑もえげつないし」
「ああ、あそこはね」
ポルフィがここで話す。
「動物を使った処刑が多いんだよね」
「連合でもそれは多いけれど」
「それ以上ってこと？」
「うん、かなり凄いんだって」
こう皆に話すのだった。
「一番ポピュラーらしいよ」
「食べさせるんだ、じゃあ」
「あの恐竜に本当に」
皆すぐにこう考えるに至った。

「残酷だなあ」
「処刑以外でもそれって」
「マウリアじゃマハラジャって凄い権力があるらしいけれど」
それはこの時代でも同じである。
「じゃあ犯罪者を消すこと位は普通？」
「そうなるのかな」
「それにあの宮殿って」
問題はさらにあった。
「確か治外法権だから」
「マウリア領になる」
「大使館みたいなものなんだ」
「そうなるの」
「じゃあ連合の法律は通用しない」
そうなることだった。治外法権だからだ。
「当然日本の法律も」
「全く通用しない」
「マウリアの法律ってどうなってるの？」
ここでのことも話される。
「それって」
「やっぱりマハラジャには逆らえないってこと？」
「そこまではいかないみたいよ」
ここで話すのはロミオだった。
「流石に今は」
「そうなんだ」
「流石にそこまではいかないんだ」
「そう、いかないんだよ」
ロミオが話す。
「幾ら何でもね」
「それは」
「しかしマウリアだからなあ」

「何があっても」
「犯罪者の処罰権はあるらしいけれどね」
今のロミオの言葉こそが問題だった。
「それはね」
「じゃあマハラジャの気分次第でどんな刑罰を加えられるかわからない」
「そうなるのね」
「つまりは」
「温厚なマハラジャだったらいいけれど」
完全に運次第ということである。
「残虐なマハラジャだったらね」
「嬲り殺しにされる」
「そういうことなんだ」
「つまりは」
「そう、残虐に殺されるんだ」
まさにその通りだというのだった。
「つまりは」
「マウリアの残虐な処刑によって」
「マウリアと連合でどっちが残虐かな」
こんな話も為される。

第二百十二話　再びセーラの宮殿へその二

「一体全体」
「どうだろうね。連合も普通に凄いけれど」
「マウリアも凄いし」
「ただし、よ」
ここではなしたのはプリシラだった。
「連合じゃ裁判で死刑の方法が決められるけれど」
「マウリアじゃそれはマハラジャの裁量次第」
「どうなるかわからない」
そうなることだった。
「つまりは」
「そっちの方がスリルあるよな」
「ロシアンルーレットみたいな」
「そんな感じ？」
まさにそれであった。
「つまりは」
「生きられるかも知れない？ひょっとしたら」
「その可能性も」
「いや、それもだよ」
だがここでだ。またロミオが言った。
「問題はどの形で生きられるかだけれど」
「どの形でって」
「それってつまりは」
「あくまで例えばだけれど」
ロミオはこう前置きしたうえで皆に話す。
「両手両足を切って目も耳も潰して舌も切って」
「つまり人豚にして」
「そのうえで生かすとかもあるっていうのね」

「生きていることは生きているからね」
それでも一応は、というのである。
「これでもね」
「生きてるっていうのかな、それって」
「一応はそうでしょ」
「生きてるんだから」
皆暗い顔でそれぞれ話す。
「だって。心臓は動いてるし」
「それだったら」
「それか人犬にするとか」
これは両手両足を膝のところで切って舌を抜くものである。こうした刑罰がマウリアにはある。尚連合ではここから処刑するのである。
「考えられるよね」
「ううん、ないって言えないところが」
「ちょっと以上に怖いし」
「確かに」
皆このことはどうしても否定できなかった。
「やりかねないよね」
「そうそう」
「それもかなり」
「してそうだし」
「っていうか実際にやってるんじゃないの？」
「そうだよな」
マウリアの恐ろしさは連合の人間は誰もがよく知っていた。だから考えれば考えるだけ頭の中でそれが現実のものとなっていった。
そうしてだ。ここでラメダスが一同のところに来たのだった。そのうえで彼等に対して問う。
「何を話されてますか？」

「いえ、まあ」
「何でもないですけれど」
「ああ、そうですか」
だが彼はすぐに全てを理解した顔を見せてきた。
「我がマウリアのマハラジャの処刑決定権ですね」
「えっ、誰も何も言ってませんよ」
「それでもわかるんですか？」
「はい、思念が漂っていますので」
言ってきた根拠はこれだった。
「ですから」
「人の心が読めるんですか」
「そこから」
「魔術の基本です」
またそうした類の話になった。
「それでわかりました」
「ううむ、相変わらず凄いですね」
「それでわかるってところが」
「誰でもできることです」
ラメダスは実ににこやかに話してきた。
「修行を積めば」
「いえ、その修行自体がもう超絶的なんですけれど」
「その術もですが」
「人の心が読めるって」
「しかし。そんなにおかしいでしょうか」
ラメダスは今度はこんなことを言ってきた。

第二百十二話　再びセーラの宮殿へその三

「マハラジャに処刑の権限があるのは」
「連合じゃ全部裁判で決められますからね」
「やっぱり」
「ですから」
だからだというのである。
「裁判官の判決で」
「それで処刑まで決められますから」
「ですから」
「マウリアではそれが違うのです」
ラメダスは至って冷静かつ理知的に彼等に話す。
「まず裁判官が決めます」
「はい」
「有罪か無罪かですね」
「そうです、最初にそれを決めます」
こう話すのである。
「そしてそこからマハラジャが死刑囚に限り死刑の方法を決めます。中には無罪判決にしたり減刑にしたりもします」
「つまりマハラジャの裁量に委ねられるんですね」
「生きるか死ぬかは」
「そうなります。死刑になるかはさらに慎重に決められます」
そうだというのである。
「それがマウリアです」
「何か死刑になる確率が減るような」
「そうだよな、裁判の後でマハラジャの裁量があるんなら」
「余計に」
「はい、その通りです」
ラメダスはまた答えた。

「ですから連合と比べますとマウリアの死刑は少ないのです」
「じゃあ人道的になるのかしら」
「そうかも」
クラスの面々はラメダスの話からこうした考えに至った。
「生きる可能性が高いし」
「死刑の方法も残虐じゃない可能性もあるし」
「まあ死刑囚は幾ら殺してもいいけれど」
「それはね」
同時に連合の考えも出されていた。連合では凶悪犯の人権についてはとかくその権利を言うことがないのである。凶悪犯に人権がないのが連合だ。
「強制労働とかね」
「それもあるし」
「マウリアでは強制労働はあまりありません」
ラメダスはこのことも話した。
「連合では凶悪犯を強制労働に就かせますね」
「はい、そうです」
「とんでもない場所に送って死ぬまで働かせます」
「他には宇宙海賊の機雷を撤去させたりとか」
中にはそのまま小舟に乗せて突っ込ませたりもする。
「そうした風に使いますけれど」
「マウリアじゃなそんなにないんですか」
「あることはありますが少ないですね」
そうだというのである。
「マウリアではそのカーストによって処刑も決まっていますし」
「ああ、じゃあやっぱり」
「そういうこともあってですか」
「死刑や強制労働も少なくなります」
こうしたことにもカーストが関係するのだった。
「残虐な処刑もそれも関係して」

「少なくなるんですか」
「成程」
「動物に食べさせる処刑が多いことは確かです」
また思念を読み取っての返答だった。
「ですが処刑はどれも残虐というわけでもありません」
「連合って普通に残虐ですが」
「見せしめやショーの為にも」
「そうした風にはならないんですか」
「処刑は刑罰です」
これもまたマウリアの考えであった。
「ですから特に」
「ううん、成程」
「そういう考えですか」
「見せしめ、そしてショーにしなければなりません」
こう話す。

第二百十二話　再びセーラの宮殿へその四

「だからです」
「そうした意味では連合と同じですね」
「確かに」
「ただしです」
ここでまた話すラメダスだった。
「マウリアの処刑は連合とはまた違いますね」
「マウリアは動物を使ったものが多い」
「連合は道具を使いますから」
この違いがあった。そうしてであった。
ふとだ。教室の中央に巨大な鍋があった。その中では黄土色のさらりとした液体がぐつぐつと煮えたぎっていた。、皆それに気付いたのだ。
そのうえで見てだ。言うのだった。
「あれってやっぱり」
「カレー？」
「あの色は」
「はい、そうです」
セーラはにこりと笑って皆に話した。
「これから皆で食べます」
「皆で、っていうと」
「私達？」
「そうなるの？」
「如何でしょうか」
セーラのにこりとした笑顔はそのままだった。
「今日の昼食にどうでしょうか」
「カレーねえ」
「オーソドックスだけれど大好きだし」

「確かにね」
「悪くないし」
そうだというのである。
「けれど鍋がもうあるなんて」
「かなりびっくりっていうか」
「有り得ないんじゃ」
「大丈夫です」
皆その教室の中の鍋を見ながら言う。
「ここで食べますから」
「いや、そういう問題じゃなくて」
「教室に鍋があるって」
「しかも煮てるし」
クラスの面々は常識から話していた。これは連合の中の常識である。
「中に入ってるのが見えないし」
「何を煮てるの？」
「まずは鶏肉です」
最初は肉について話す。マウリアではこの時代においても鶏肉を非常によく食べる。当然ながら牛肉を食べるということは絶対にない。
「それと人参と玉葱と」
「あとジャガイモ？」
「それ？」
「はい、それです」
野菜についてはこうであった。しかもまだあった。
「それとパイナップルに茄子もです」
「パイナップルは野菜だし」
「それもなんだ」
「あと枝豆も入れています」
これもであった。

「それにソーセージも」
「入れてるもの多くない？」
「そうよね」
皆ここまで聞いてあらためて思った。
「鍋もかなり大きいし」
「しかもマウリアのカレーに入れるもの以外にも入ってるし」
このことも思うのだった。
「連合風のカレー？」
「それも日本風？」
「はい、そうです」
ここでもにこりとした笑みを見せるセーラだった。
「カレーといっても色々ありますね」
「確かに」
「日本風以外にも色々なカレーがあるし」
カレーと一口に言ってもである。色々な種類があるのだ。そうした意味ではラーメンやハンバーガーと同じであると言える。奥が深いのだ。
「マウリアのカレーがカレーだけじゃない」
「そういうことなんだ」
「ですからこのカレーは日本風です」
そうだというセーラだった。

第二百十二話　再びセーラの宮殿へその五

「お昼まで煮てとろりとさせます」
「とろりとしたカレーなのね」
彰子はそのカレーのことを聞いて目を明るくさせた。
「つまり本当に日本のカレーなのね」
「はい」
まさにそうだというのだった。
「とろりとしなければ日本のカレーではないですよね」
「そうよね。さらさらとしたカレーもいいけれど」
一応はそうしたカレーも認める彰子だった。
「やっぱり。和風っていったら」
「ですからです」
まさにそうだというのである。
「もっと煮ます」
「日本風のカレーかあ」
「面白そう」
皆何だかんだでそのカレーに興味を持っていた。
「それじゃあお昼にか」
「皆で食べて」
「そしてそのうえでセーラのお家でマウリア料理をかあ」
「カレーかな、また」
「はい」
返答は率直であった。
「そうですけれど」
「やっぱりなあ。カレーかあ」
「マウリアだから」
「やっぱり」
「カレーラーメンにハンバーグカレーソースに」

やはりカレーである。
「カレー味のトムヤンクンにカレーソースのタコスにです」
「何か連合の料理にカレーで味付けした？」
「そんな感じ？」
「それにカレー鍋です」
これもカレーだった。
「シェラスコのソースもカレーですが」
「何か本当にカレーばかりなのね」
パレアナがここまで聞いて述べた。
「マウリアって常にカレーなのね」
「カレーは宇宙です」
何故かこんなことを言い出したセーラであった。
「ですから」
「カレーって宇宙だったんだ」
「そうだったの」
「はい、宇宙です」
有無を言わせぬ口調はここでもであった。
「まさに全てなのです」
「何でなの？」
パレアナは実に冷静にセーラのその一聴しただけでは異次元からの言葉に聞こえるその言葉に対して問い返した。かなり慣れも入ってはいる。
「何でカレーは宇宙なの？」
「まずカレーは無数の香辛料から作られます」
セーラはここから話した。
「少なくとも数十種類のです」
「それは知ってるけれど」
また冷静に返すパレアナだった。
「かなり複雑な調理よね」
「はい、そしてそのそれぞれの香辛料にです」

セーラはそれについても話す。
「神が宿っているのです」
「神様がなの」
「例えば牛には三億以上の神が宿っています」
マウリア独自の考えである。それだけに牛は神聖な生き物であるというのがマウリア、その中にあるヒンズー教徒の主張なのである。
「それと同じくです」
「香辛料一つ一つに神様が一杯宿っているのね」
「少なくとも一億」
また途方もない数であった。
「ですから一食のカレーには数十億の神が宿っているのです」
「カレーってそんなに凄い食べ物だったの!?」
彰子はここまで聞いて思わず唖然となってしまった。
「そこまでって」
「はい、そうなのです」
セーラはその彰子に対しても冷静に告げる。
「数十億の神が宿る。まさに宇宙なのです」
「そうだったの・・・・・・」
ここまで聞いて唖然となる彰子だった。

第二百十二話　再びセーラの宮殿へその六

「だから」
「ただ。カレーってマウリアじゃ料理そのものじゃない」
パレアナは唖然となってしまっている彰子とは対象的に実に冷静な態度を維持したままセーラに対して問い続ける。その冷静さは変わらない。
「じゃあ料理自体が」
「はい、宇宙です」
まさにその通りだというセーラだった。
「料理は宇宙です」
「宇宙・・・・・・」
「そうだったの」
「コスモです」
セーラは驚く一同にさらに告げる。
「貴方達はコスモを感じたことはありますか」
「いや、ないから」
「聖闘士じゃないから」
この時代にも残っている漫画の一つである。独特な聖衣を身にまとった戦士達が戦う話である。古典の域を超えた名作とされている。
「コスモなんてとても」
「感じないし」
「しかし料理にはそれがあるのです」
セーラは首を傾げる彼等に対して力説する。
「カレーには」
「ううん、カレーってそうだったの」
「宇宙だったの」
「では今宵は宇宙を食べましょう」
話は途方もないものになっていた。

「そしてこのお昼も」
「宇宙を食べる」
「今から」
皆このことにここでも戸惑いを見せた。
「食べられるかな」
「それにコスモを感じられるか」
「凄く不安」
「案ずることはありません」
しかしセーラの笑みは落ち着いたものであった。語るその口調も。
「難しく考えることもです」
「ないんだ」
「どうしてなの？」
「意識して感じるものではないからです」
だからだというのであった。
「無意識の中で感じるものなのです」
「宇宙を」
「それをなの」
「そうです、感じ取れます」
こう力説するセーラだった。
「カレーからです」
「ううん、壮大ねえ」
彰子は首を傾げさせながら述べた。
「そこまでいくのね」
「では皆さん」
セーラはその彰子だけでなく皆に対しても告げた。
「お昼にそのカレーをです」
「食べようか」
「その宇宙をね」
こんな話をしてそれからお昼にカレーを食べる。すると。
「辛くない」

「カレーなのに」
「むしろ甘い？」
「甘口？」
「はい、甘口にしました」
またセーラから言ってきたのだった。
「このカレーはです」
「甘口のカレー」
「これが和風の？」
「日本のカレーはマウリアのカレーに比べて甘いですので」
だからだというのだ。
「甘さはパイナップルと」
まずはそれであった。
「それと林檎を擦って入れています」
「あっ、確かに」
「そうね」
彰子だけでなく同じ日本人である七海も言う。二人はその白い皿の上にあるカレーを食べてそのうえで味を確かめながら言うのだった。

第二百十二話　再びセーラの宮殿へその七

「この甘さはそうね」
「林檎の甘さね」
「それに蜂蜜も入れました」
今度は蜂蜜だった。
「その二つの甘さです」
「ううん、考えてるわね」
「お砂糖を使わずになの」
「お砂糖の甘さはあえて避けました」
セーラはそうだと話す。
「果物と蜂蜜の甘さです」
「日本のカレーね、本当に」
彰子はセーラの説明を聞いて述べた。
「そこから甘さを出すのは」
「パイナップルは野菜だけれどそうよね」
七海は今はカレーの中のそのパイナップルを食べていた。
「甘いから」
「それに」
彰子はさらに食べながら話す。
「他にはマンゴーもあるんじゃ」
「おわかりですか」
「酵素を入れたの？」
「鶏肉をさらに柔らかくする為に」
それでだというのだ。
「それで使いました」
「凄いわね」
彰子はここでまた頷いた。
「随分と細かく調理しているのね」

「ですからカレーは宇宙です」
またこの話になった。
「それならば細かいことも道理です」
「成程」
「宇宙は細かいものです。ですからカレーもまた」
「細かくなる」
「そういうことね」
「ではその細かさをです」
セーラは彰子と七海だけでなくカレーを食べているクラスの面々全てを見ていた。その黒い琥珀を思わせる瞳は眩く輝いている。
「存分に堪能して下さい」
「美味しい」
「本当に」
彰子と七海の今度の言葉はこれだった。
「甘くて美味しい」
「間違いなく日本の甘口カレーね」
そのカレーを楽しんだ。そうしてであった。
放課後皆でセーラの宮殿に行く。一応別邸となってはいるがそれは誰がどう見ても宮殿である。皆でそこに向かったのである。
「あのタージ＝マハールみたいな宮殿もね」
「久し振りだよね」
「本当に」
こんな話をしながら向かうのだった。
「一体どんなカレー料理が出るか」
「期待できるわね」
そのカレー料理がどんなものか考えながら向かっていた。そうして。
宮殿の前に来るとだ。いきなりだった。
「ええと」
「これってブロントサウルス？」

「そうよね」
いきなり門のところに恐竜がいたのである。
「ステゴサウルスもいるし」
「恐竜が出迎えてくれるの」
「お小遣いで買いました」
セーラはあっさりと言った。
「今月の」
「お小遣いで恐竜買えるの」
「普通ないけれど」
「ないですか？」
セーラだけがわかっていない。
「私毎月お小遣いで色々買ってますけれど」
「いや、買うにしてもね」
「恐竜って」
「それはないんじゃないかしら」
「そうでしょうか」
言われてもだった。本人には全く自覚がないのがはっきりとわかった。どうやらセーラにとっては恐竜を買うことは大したことではないらしい。
「恐竜って高いよね」
「かなりね」
惑星によっていないだけではない。その巨大さや独特の飼育方法から恐竜を買うことはかなり値が張ることであるのだ。特に大型のものはだ。

第二百十二話　再びセーラの宮殿へその八

「恐竜の動物園みたいなの作るのかな」
「そうじゃないの？」
「はい、動物園でしたら」
ここでまた言うセーラだった。
「ありますけれど」
「えっ、あるんだ」
「それも」
「恐竜の動物園もあります」
こう皆に話す。
「それも幾つかあります」
「恐竜の動物園が幾つもって」
「凄いスケール」
「恐竜大好きですから」
セーラの笑みはとても澄んだものだった。
「ですから」
「ですからって」
「それでも恐竜をって」
「やっぱり凄いよね」
「凄いですか？」
やはり本人に自覚はない。素っ気無い返答である。
「それって」
「充分ね」
「充分っていうかかなり」
皆唖然とした口調で返す。
「恐竜の動物園も幾つもって」
「それも個人の所有って」
連合でも個人所有の動物園を持っている金持ちはいる。しかしそ

れでも恐竜のものだけで幾つもというだけの人間はそうはいない。
セーラの家のようなだ。
「スケールが違うね」
「セーラのお家って」
「確かマハラジャよね」
パレアナがこのことをセーラ本人に確かめた。
「セーラのお家って」
「はい、そうです」
まさにそうだと返すセーラだった。
「それが何か」
「ううん、マハラジャってそこまでお金持ちなんだ」
驚いているのはパレアナだけでなかった。皆もだ。
「マウリアのマハラジャ恐るべし」
「ブルジョワの限界超えてるっていうか」
「確かに」
「いえいえ、それがです」
ここでだった。ラメダスが出て来て皆に話す。
「セーラ様の御実家よりもです」
「まだ凄い家があるとか」
「そうなんですか？」
「はい、マウリアにはあります」
そうだというのである。
「それもかなりの家が」
「シヴァ家よりも裕福な家って」
「それこそどんなのかしら」
「ちょっと検討がつかないっていうか」
「星系を一つ丸ごと所有され」
こう来た。
「そこに住まれている方もおられますので」
「星系一つ丸ごと！？」

「連合でもそんな人いないけれど」
惑星位はいる。しかし星系丸ごとになるといないのだ。
「そこまで凄いお金持ちって」
「もう何が何だか」
「連合ではおられないのですね」
ラメダスの口調は穏やかで落ち着いたものだった。
「そうした方は」
「いませんよ」
「ねえ」
皆顔を見合わせてそれを否定する。
「マウリアってどういう国なんですか？」
「そこまでのお金持ちがいるって」
「それはマウリアに来てわかることです」
ベッキーもまた出て来て言う。
「その時にです」
「その時にわかる」
「マウリアで」
「マウリアはいい国です」
ベッキーは一応こう話す。

第二百十二話　再びセーラの宮殿へその九

「是非いらして下さい」
「ううん、何か秘境のような感じだけれど」
「行くのが怖いっていうか」
「冒険しに行くような」
そしてだった。一行が車で門に入るとだった。宮殿までがこれまた遠かった。
しかもその途中にだ。何と牧場があった。当然牛達が大勢いる。
「あっ、牛」
「この牛は食べないよね」
「ミルクを貰うだけです」
またベッキーが皆に話す。車はバスなのでそこに全員乗っているのだ。
「それだけです」
「いや、それだけでも」
「何ていうか」
「千頭位いるし」
「牛がいておかしいですか？」
セーラはいぶかしむ声で一同に尋ねた。
「それは」
「普通宮殿の中に牧場ないし」
「ましてや牛はいないでしょ」
「ねえ」
「マウリアではいますが」
ここでもマウリアでは、であった。
「街中にも普通に」
「あれねえ」
「あれはかなり」

「凄いっていうか」
「おかしいですか？」
ここでもこんなことを言うセーラだった。
「牛が街の中にいることが」
「普通ですが」
「マウリアでは」
ラメダスとベッキーもこんな調子で返してくる。
「至って」
「はい、その通りです」
「だからここ連合だから」
「しかも日本」
連合では牛が街中を普通に歩き回っているということはない。
「そんなことはないから」
「とても」
「残念ですね」
セーラはそんな彼等の言葉を聞いて実にしみじみとした、尚且つ悲しい口調で述べた。そこから本当に悲しんでいることがわかる。
「それはとても」
「牛がいないことがそんなに」
「悲しいの」
「牛は神の使いです」
マウリアでは昔からそうである。
「その神の使いがいないということはです」
「悲しい」
「そういうことなの」
「はい、とても」
まさにそうだというのであった。
「悲しいです」
「ううん、そうなんだ」
「そこまで」

皆ここでマウリアのその特異性をあらためて認識した。とにかくマウリアは連合とは全く違う。文明がそもそも根本から違うのである。

「牛って大事なんだ、マウリアじゃ」

「そこまで」

「しかも食べない」

マウリアで牛を食べることはそのまま死を意味する。何しろ牛を殺すことは実際に重罪であり普通に死刑となることであるからだ。

「増える一方だけれど」

「それでもなのね」

「そういえばマウリアの牛って」

その牛の話が続く。

「一体どれだけいるのかな」

「さあ」

「人類の国家で一番沢山の牛がいるけれど」

これは間違いなかった。

「それでもどれだけかっていうと」

「どんだけ？」

「何か街中で王蟲みたいに暴走していたことがあったけれど」

この時代も残っている古典的名作アニメに出て来る蟲である。作品中においてはまさにその存在そのものが戒律とさえなっている趣があった。

「普通に街占領するだけいるし」

「ヒッチコックの鳥みたいに」

今度は映画である。鳥の大群が街を占拠する話だ。

「そこまで多いけれど」

「どれだけいるかは」

「さて」

ラメダスは彼等の疑念に首を捻って返した。

「どれだけでしょうか」

「あれ、わからないんですか」
「そこまでは」
「はい、わかりません」
わからないことははっきりと答える彼だった。
「何十兆でしょうか」
「それって滅茶苦茶多くない？」
「ねえ」
皆何十兆と聞いてまずは唖然となった。
「しかもそれって正確な統計じゃないし」
「もっといるだろうし」
「百兆はいるかも」
遂に大台であった。
「そこまでいてもおかしくない」
「それがマウリア」
「牛は多ければ多い程度いいのです」
セーラは慈愛の女神の様な笑顔と共にこう述べた。
「ですから」
「いや、それでも多過ぎ」
「ここにもどれだけいるのかしら」
「確か」
ベッキーがその問いに答える。
「一万はいるかと」
「一万・・・・・」
「どんな牧場・・・・・」
皆その数に唖然となった。そうして唖然となったままそのうえでセーラの宮殿に入った。そこでもまたとてつもない騒動が起こるのだった。

再びセーラの宮殿へ　　完

2010・7・29

第二百十三話　宮殿の中でもその一

宮殿の中でも

宮殿の中に入ると。そこでも普通にいた。

「モオーーーーーーー」

「牛、いるし」

「しかもナチュラルに」

皆その牛達を見てまずは唖然となった。何と宮殿の中にも牛達が普通にいて歩き回ったり寝転がったり差し出される草を食べているのであった。

皆それを見てだ。また言わざるを得なかった。

「あの、何でいるのかな」

「それも普通に」

「はい、牛だからです」

セーラの返答は無茶苦茶であった。

「ですから」

「いや、牛は家の中にはいない」

ダンが強張った顔でそれを否定した。

「普通はだ」

「連合ではそうなのですか」

「そうだ、ない」

こうセーラに述べる。

「犬や猫とは違う」

「はい、牛は犬や猫とは違います」

珍しく話に接点があった。だがそれは違う意味においてだった。

「この世で最も神聖な生き物ですから」

「牛は特別」

「それでなの」

「確かに犬や猫も尊いです」

セーラは決して犬や猫を貶めても嫌ってもいなかった。実際のところ彼女はかなり博愛的な心の持ち主である。聖少女とさえ言われている。

「ですがそれでもです。牛はです」

「そこまで神聖だから」

「それでお家の中にも」

「いるのです」

まさにそれでだというのだ。

「そういうことです」

「話はわかったわ」

パレアナは一応その言葉を聞いた。そのうえでだった。

「けれどね」

「けれどですか」

「理解はできないわね」

それは無理だというのである。

「話はわかってもね」

「おわかりになられてもですか」

「牛が神聖なこともお家の中にいる理由もわかったわ」

こうセーラに対して話す。

「けれど。それでもいるのはね」

「理解できませんか」

「連合じゃ牛はお家の中にいないから」

話すのはこのことだった。少なくとも連合においてはどの国でも牛は家の中にいたりはしない。ましてやごく自然には、である。

「だからね」

「お部屋にも入ったりするのかしら」

ルビーは首を傾げさせながら述べた。

「やっぱり」

「はい、入ります」

セーラはルビーの問いにも答えた。

「それが何か」
「何かじゃないけれど」
「ううん、物凄い話ね」
パレアナもまた言う。
「とりあえず前は気付かなかったけれど」
「シロナガスクジラ丸ごと出て来たからね」
ルビーはかつてセーラの屋敷に来たその時のことを思い出していた。その時はパーティーであり牛まで見えなかったのである。
「いや、いたかな」
「確かいたわよ」
パレアナはいぶかしむルビーに対して話した。
「普通にね」
「何であの時は不思議に思わなかったのかしら」
「屋外だと思ってたからじゃないの？」
「そういえばそうね」
「だからよ」
それで、ではないかというのだった。

第二百十三話　宮殿の中でもその二

「気付かなかったのよ。物凄い話だけれど」
「クジラの丸焼きなんて出さないしね」
「あれどうやって焼いたのかしら」
これもまた謎であった。しかしこの恐ろしい謎は他ならぬセーラによって実にあっさりと、何でもなくといった調子で答えられたのであった。
「そのことですが」
「どうしたの？」
「あれだけ巨大なのは丸ごと料理できないでしょ」
「魔術です」
それだというのである。
「それを使いました」
「魔術ねえ」
「それで焼いたのね」
「科学で無理なことは魔術で補えます」
平然とこう話すのだった。
「錬金術にしてもそうですが科学と魔術は元は同じでしたから」
「それで普通にクジラ丸ごと焼ける」
「凄い話ね」
「魔術でできないこともありますが科学でそれを補えます」
連合では有り得ない会話である。
「それで、なのです」
「ううん、凄いわね」
ルビーはここまで聞いてあらためて述べた。
「普通に魔術でできるの」
「はい。魔術もまた偉大なものです」
これはセーラ、そしてマウリアの者だけがわかることだった。少

なくとも連合においてはそれは全く理解できないものである。
「ですから」
「鯨って大きいけれど」
「それでも丸ごと料理できる」
「魔術を使えば」
皆があらためて知る現実であった。
「連合じゃ魔術は使わないけれど」
「そうしたことができるんなら」
「やってみる価値はあるかしら」
「そうよね」
あらためて話される。
「まあとにかくだけれど」
「そうよね。牛よね」
パレアナとルビーはそこに話を戻してきた。
「牛が屋敷の中に普通にいるのはね」
「受け入れるしかないわよね」
「間違っても食べないで下さいね」
ラメダスはこのことを強調して注意してきた。
「いじめたりすることも駄目です」
「そんなことはしないがな」
ダンがラメダスのその言葉に答えた。
「うちのクラスにはそんなことをする奴はいない」
「それはわかっていますが」
「それでもか」
「はい、とにかく牛は神聖なのです」
このことは本当に何度でも強調された。
「よく御承知下さい」
「そうだな。牛は絶対だな」
「その通りです」
「じゃあ牛はいい」

彼はそれは割り切って述べた。
「それでだ」
「はい、それで」
「その料理は何だ」
話をこちらに変えてみせたのだった。自然にだ。
「それで何だ。カレーと聞いているが」
「連合各国の料理をカレー味にしたものです」
まさにそれだというのである。
「それを用意しております」
「まずはカレーラーメンにカレーバーガー？」
「それかしら」
「はい、それとです」
さらにあるのだった。
「生春巻きのカレーかけに」
「それもなんだ」
ベトナム人のネロの言葉だ。

第二百十三話　宮殿の中でもその三

「生春巻きにも」
「それとカレー味のトムヤンクン」
「トムヤンクンのカレー味か」
今度はフックが言った。
「そういえばそんなのは考えたことがなかったな」
「そうなのですか」
「トムヤンクンはトムヤンクンだからな」
「同じく生春巻きも」
フックとネロは同時に述べた。
「だからな。そんなのはな」
「ちょっとね」
「考えられないよね」
「発想の外っていうか」
皆その二人の言葉に頷く。そうしてだった。
そのカレーバーガーやカレーラーメンについてもだ。そういったものについても問うのだった。問わずにはいられなくなっていた。
「ええと、どういったのかな」
「カレーにハンバーガーって」
「ハンバーガーの中のソースがカレーなのです」
こう皆に答えるセーラだった。
「そしてカレーラーメンはカレーうどんと同じです」
「ああ、あんな感じなんだ」
「そうなのね」
「特におかしなことはないですよね」
皆にこのことを確かめる。
「それで」
「まあね」

「特にね」
そのアメリカ人のスターリングと中国人の蝉玉も答えた。
「別にそれなら」
「普通にあるから」
「カレーはマウリアのカレーです」
ただしこうした注意がついた。
「香辛料をふんだんに使っています」
「それならだ」
ダンはそれを聞いてすぐに察した。
「かなり辛いな」
「マウリア料理は辛いしね」
「その独特のカレーから」
「いえ、辛さは抑えてあります」
だがセーラはこう言う。
「御安心下さい」
「にわかには信じられないけれど」
パレアナは首を傾げさせながら彼女の今の言葉に返した。
「ちょっとね」
「それはどうしてですか？」
「セーラは嘘は言わないわ」
このことはわかっていた。少なくとも彼女は嘘は言わない。ただしマウリア人自体が嘘は言わないがそれでも信用するなと言われることがある。
「けれど。マウリア基準での言葉だから」
「だよなあ。マウリア基準だから」
「連合と違うから」
「本物のマウリア料理ってあれだろ？」
タイ人のフックの言葉だ。尚タイ料理も辛いことで知られている。
「派手な辛さなんだろ？」
「しかもそのマウリアのカレーって」

「どうなんだろうね」
「そうよね」
ここが問題なのだ。マウリア人はあくまでマウリア基準でものを話すのだ。セーラもそれは同じだ。尚マウリア人の特徴として知らないことを知っていると言ったり話し出したら止まらなかったり自分の専門外のことにも遠慮なく口を出したりする。その他にはったりも有名だ。これはセーラにもあったりする。
「どんな辛さなのかしら」
「これまでは私達に合わせているっていうけれど」
「一体」
「韓国料理より辛いとか？」
連合で一番辛いとされている料理である。
「まさか」
「あれ以上とか」
「おい、あれ以上なのか？」
韓国人の洪童である。

第二百十三話　宮殿の中でもその四

「だとしたら想像できないぞ」
「しかも熱い」
カレーは熱いものである。
「食べられるかしら」
「本当に」
「御安心下さい」
「大丈夫です」
しかしラメダスとベッキーはこう言う。
「それについてはです」
「何も心配はありません」
「そうかな」
「食べてみないと安心できないし」
「そうよね」
皆警戒は解いていない。
「果たしてどんな辛さか」
「かなり不安だし」
「けれど食べてみないとね」
何についてもまずはそれであった。とにかく彼等はまだそのカレー尽くしを食べてはいない。何もはじまってはいない状況なのだ。
そうしてその料理がだ。遂に来た。
「よし、来たな」
「そうね」
皆その料理に注目する。まずは。
「野菜カレーシチュー」
「まずはそれね」
「お野菜を食べないといけません」
セーラは厳かに述べた。

「それに我がマウリアは菜食主義者が多いので」
「宗教的な理由でね」
「それで、よね」
「はい、そうです」
まさにそれが最大の理由だった。とにかくマウリアは宗教の影響が強い。ヒンズー教にしてもジャイナ教にしてもである。
「ですから菜食主義者が多いのです」
「それでマウリアにはスリムな人が多いんだ」
「成程」
「マウリア人が痩せているのには他にも理由がありますよ」
今度はベッキーの言葉だった。
「スパイスを使ったカレーで汗をかきますので」
「辛くて熱い料理」
「脂肪を燃やすのね」
「はい、それもあります」
理由は一つではなかった。
「ですから痩せている者が多いのです」
「痩せるのには理由がある」
「菜食主義と脂肪を燃やす料理」
「そういうことね」
実際にマウリア国民の脂肪率は連合市民のそれよりもかなり低い。
「マウリア料理ってヘルシーなんだ」
「辛いだけではなく」
「ですから宇宙です」
またこんなことを言うセーラだった。
「マウリア料理は宇宙なのです」
「カレーは宇宙」
「だから」
「はい、だからです」
彼女の頭の中でのみつながる話である。

「だからこそ。健康にもいいのです」
「じゃあこのシチューも宇宙」
「そうなると」
「はい。そして」
ここで料理がさらに来た。見るとだ。
「カレーバーガーにカレーラーメン」
「カレートムヤンクンにカレー生春巻き」
「それにカレークスクス」
「止めにシェラスコカレーソースかけ」
とにかくカレー尽くしであった。
「連合とマウリアのコラボ」
「これがなんだ」
「さあ、どうぞ」
セーラはにこやかに笑ってクラスメイト達に告げた。
「召し上がって下さい。宇宙を」
「あれっ、韓国料理とのコラボはないのかよ」
ふとだ。洪童がこんなことを言った。

第二百十三話　宮殿の中でもその五

「それはないのかよ」
「キムチとカレー？」
「凄い違和感ある組み合わせだよね」
「そうよね」
皆この組み合わせには首を傾げさせた。
「ちょっと。合わないっていうか」
「組み合わせられないんじゃ」
「どっちも癖が強いし」
キムチもカレーもである。とにかく自己主張の強い味である。キムチはキムチ、カレーはカレーで定まってしまう程だ。
「それじゃあちょっと」
「組み合わせられないじゃ」
「ちぇっ、そうなのか」
洪童は皆の言葉にかなり残念そうな顔になった。
「それで無理なのか」
「だから個性が強いもの同士は」
「組み合わせられないから」
「ましてただ強いんじゃないから」
それに止まらないというのだ。
「強過ぎるレベルだし」
「カレーもキムチもね」
「キムチはいい食べ物なんだがな」
洪童の言葉も表情も実に悔しそうである。
「仕方ないな、それは」
「キムチはキムチでね」
「食べればいいじゃない」
「いえ」

しかしであった。セーラがここで言ってきた。
「ちゃんとカレーの付け合せでありますから」
「えっ、カレーの付け合せに？」
「ちゃんとあるの」
「はい、あります」
穏やかな顔で述べてみせていた。
「ですから安心して下さい」
「ううむ、恐ろしい」
「ここまで来ると」
皆唖然とさえしている。
「まさか付け合せでも持って来るなんて」
「マウリアは底が知れないわね」
「全くだな」
洪童も驚きを隠せない。
「実際に俺も無理だと思っていたんだよ」
「ですが焼肉はありません」
セーラはそれは断ってきた。
「牛肉は」
「ああ、それはな」
洪童もそれは納得した。
「やっぱり無理だよな」
「申し訳ありませんが」
「それはいいさ」
「いいのですか」
「仕方ないだろ？食べられないんだからな」
それはわかっているというのだった。
「だから。いいさ」
「左様ですか」
「豚肉もだったよな」
洪童はそちらについても述べた。

「それも駄目だよな」
「イスラム教徒もマウリアには多いですから」
「この屋敷にもいるのかい？」
「いえ、ヒンズー教徒だけです」
宗教的な棲み分けの結果であるらしい。セーラはヒンズー教徒なのでそれでヒンズー教徒の者しか家にはいないようだ。
「ですから基本は食べられますが」
「あまり食べないんだよな」
「鶏肉がメインです」
これもヒンズー教徒の特徴である。
「ですから」
「だからいいさ」
また言う洪童だった。

第二百十三話　宮殿の中でもその六

「それはさ」
「左様ですか」
「肉がなくてもいいんだよ」
かなり懐の広い言葉だった。
「何しろマウリア料理を食べに来たんだからな」
「そうだよな。韓国料理じゃなくて」
「マウリア料理だから」
「それじゃあその付け合せのキムチも貰うな」
明るく笑って話してみせた。
「これからな」
「はい、それではどうぞ」
カレー丼だった。それは日本のものである。そこにキムチを添えてある。つまり日本のカレーのラッキョや福神漬と同じ扱いなのだ。
「これでいいんですね」
「もっとくれないか？」
セーラの勧めるそのカレー丼を見ながらこう話した。
「キムチな」
「もっとですか」
「自分で入れていいよな」
そしてこんなことも言うのだった。
「キムチな。いいか？」
「はい、それではです」
セーラは洪童にそのキムチを添えたカレー丼を一旦手渡した。彼はそれを受け取るとだった。傍にあったそのキムチを丼の中に入れた。
「やっぱりキムチは多くないとな」
「それからどうするのかな」

「キムチをたっぷり入れて」
「これな」
今度はだ。生卵を手に取った。そしてそれを割って中身を丼に入れる。
そのうえでおもむろに丼をかき混ぜる。カレーとキムチと御飯、それに卵が混ざり合ってだ。かなり独特な料理になった。
「こうして食べるんだよ」
「何かビビンバみたいだね」
「そうよね」
スターリングと蝉玉はその洪童が持っているカレー丼を見て述べた。
「カレー丼っていうよりは」
「それに近いけれど」
「そうかもな」
洪童自身それを否定しなかった。
「けれそれでもな」
「美味しいのかな、それ」
「どうなの？」
「まずは食ってみるな」
それからだという。実際に食べてみた。
そのうえでだ。楽しげに笑ってこう言った。
「美味いな」
「美味しいんだ」
「そんなに」
「ああ、まずはこのカレー美味い」
最初に言うのはカレーのことだった。
「かなり美味い。辛くて汗が出る位だ」
「そこにキムチも入れてるしね」
「さらに辛いわよね」
「それと御飯と卵が混ざり合ってな」

その二つもだった。かなり複雑な感じである。
「かなりいいぜ」
「そこまでなんだ」
「そんなに美味しいの」
「俺にとってはな」
韓国人としてというのだ。
「美味いけれどな」
「そのカレービビンバになってるのって」
「美味しいの」
「カレー丼そのままでも美味いだろうな」
それだけでもだというのだ。
「このルーも御飯もいいな」
「それってジャポニカ米？」
彰子は洪童にこのことを確認した。
「それともインディカ米？」
「これはジャポニカ米だな」
それだというのである。
「けれどルーはな」
「マウリアのカレールーなのね」
「それでも合ってる」
組み合わせとしてというのだ。
「いい具合にな」
「そうなの。美味しいのね」
「美味しいのは間違いない」
洪童は見事太鼓判を押した。

第二百十三話　宮殿の中でもその七

「それはな」
「そう。だったら」
「それで彰子はどうやって食べるの？」
七海が彼女に問う。
「そのカレー丼を」
「まずは生卵をかけてね」
最初はそれだという。
「それからおソースを」
「成程、定番ね」
「それと福神漬も」
そして次にはそれだった。
「これを考えてるけれど」
「いいんじゃないの？」
七海は彰子のその考えを聞いて頷いた。
「それで。美味しそうね」
「そうよね。だから」
「日本人の食べ方だよな」
「そうだね」
皆彰子のその食べ方を聞いて述べた。
「その食べ方ってやっぱり」
「日本式だけれど」
「その食べ方何時できたの？」
パレアナがそれを問う。
「誰が最初にしたのかしら」
「はい、それですが」
何と答えてきたのはセーラだった。
「それは二十世紀にはじまります」

「二十世紀になの」
「随分古いな」
パレアナだけでなくダンもその話を聞いて述べた。
「もう千年以上も昔の話なのね」
「歴史があるんだな」
「はい。今も続いている自由軒というお店ですが」
「ああ、あそこ」
「あそこのお店ね」
皆その店の名前は知っていた。老舗の店でありあちこちにチェーン店もある。御飯とカレーを一緒に混ぜてあるカレーが名物だ。
「あそこからはじまりました」
「そういえばあのお店の名物カレーって」
パレアナはそのカレーを思い出して話した。
「あれよね。卵最初から入れてるし」
「そうそう」
「あそこのカレーはね」
「それがトレードマークの一つ」
皆で話す。皆そのカレーを食べたことがあるのだ。
「そこにおソースをかけて食べる」
「その食べ方はそこからだったの」
「成程、そういうことか」
「つまり日本の大阪からはじまりました」
セーラは微笑んで皆に話した。
「おわかりになられたでしょうか」
「確かに」
「そうしたことなの」
皆で言う。納得してだ。
「カレーの食べ方にも歴史がある」
「そしてその歴史はマウリア起源とは限らない」
「しかもセーラはそのことも知っている」

「つまりはそうなるのね」
「はい、カレーのことでしたら」
セーラはにこやかに笑って話した。
「お任せ下さい」
「つまり宇宙についても知っている」
「カレーこそが宇宙だから」
皆こう言って納得した。そのうえで彰子がそのカレー丼を食べるのを見る。彼女はその卵とソースを入れてかき混ぜたカレー丼を実に美味しそうに食べる。
そうしてだ。実際にこう言った。
「美味しいわ」
「やっぱりそうだよな」
「その食べ方って」
「何気にかなりポイント高いし」
「素朴だけれどね」
「カレーにはおソースよね」
彰子もこう言う。
「やっぱりそれよね」
「いや、マヨネーズもいいけれど」
「バターもかなり」
「いやいや、ケチャップも」
「マスタードも」
「タバスコだって」
皆それはそれぞれだった。ソースとは限らない。

第二百十三話　宮殿の中でもその八

「醤油もいいし」
「唐辛子をまぶすのも」
「胡椒も素朴で」
「つまりあれ？」
皆ここで気付いたのだった。
「カレーって何にでも合う？」
「そうなるか？」
「つまりは」
「ですから。カレーとはです」
ここでまたセーラはこのことを話した。
「宇宙なのですから」
「だから何でも合う？」
「今度の話は辻褄が合わないような」
「そうよね、何か」
「違う？」
「いえ、これがです」
これまでの流れ通り反論するセーラだった。
「違います」
「っていうと」
「どういう論理で」
「宇宙は全てを内包します」
言うのはそこからだった。
「ですから。カレーもまたどんなものでも」
「合う」
「そういうことなのね」
「つまりは」
「だからマヨネーズもケチャップも」

そうした調味料もだった。
「合うのね」
「そういえばコチュジャンも合うし」
「マスタードだって」
「ラー油も」
「全部合うよな」
「そうよね」
「何か凄いな、カレーは」
ダンはあらためて話した。
「何にでも合うからな」
「そう言うダンはカレーに何を入れるの？」
「醤油だな」
それだというのである。ダンはだ。
「ソースもいいが一番好きなのは醤油だな」
「あんたはそれなのね」
「醤油はいいものだろ」
七海に対して同意を求めさえしていた。
「違うか？醤油があればな」
「まあね。お醤油は最高ね」
ダンは琉球人で七海は日本人だ。共に日系国家である。日系の料理の特徴はまず醤油がある。それがなくては何もはじまらない。
「カレーにも使えるし」
「だから俺は醤油だ」
ダンはまた言った。
「俺のカレーの宇宙にはな」
「じゃあこれもそれで食べるのね」
七海はダンの前にカレーうどんを出してきた。
「これも」
「勿論だ。醤油だ」
はっきりと答えるのだった。

「カレーうどんにもだ。醤油だ」
「成程ね」
「そっちは何がいいんだ？」
「私？」
「カレーうどんには何を使うんだ？」
「カレーうどんにはやっぱりね。唐辛子よね」
それだというのである。唐辛子だとだ。
「うどんだし」
「そっちはそれか」
「そうよ。私はね」
やはりそれだというのだ。彼女はだ。
「もっともっと辛くさせてそれを食べるのよ」
「いいな、それも」
「美味しいわよ」
また話した七海だった。にこりと笑ってだ。
「それもね」
「それじゃあ今はそうしてみるか」
「いいんじゃない？」
七海はダンがふと気を変えたのを見て言葉を入れた。

第二百十三話　宮殿の中でもその九

「やってみたらいいわよ」
「一緒に入れてもいいしな」
「一つだけ使わないと駄目ってこともないしね」
「そういうことだからな」
「そうそう。それじゃあ」
「よし、じゃあこのカレーうどんはだ」
ダンはまずそのカレーうどんを受け取ってそのうえでそこに醤油を入れた。そしてそのうえで唐辛子も入れたのだった。
その二つを入れたカレーうどんを食べてみる。その味は。
「どう？」
「美味い」
ダンの言葉は一言だった。
「美味い。確かにな」
「そう。やっぱり美味しいのね」
「かなり辛いがそれでも美味い」
そうだというのである。
「美味い。確かにな」
「じゃあ私も」
「そうだな。それで醤油は」
「ええ」
「あれだな。大豆だな」
「勿論よ」
見れば二人が使っている醤油はだ。紛れもなく大豆の醤油だ。それを使ってである。そのうえで話をしているのである。
「ここではしょっつるはね」
「俺達はそうだな」
「ええ。癖のある匂いだから」

「いやいや、その匂いがな」
「いいんじゃない」
タイ人のフックとベトナム人のネロが反論する。
「しょっつるってナムプラーだよな」
「それだよね」
「ええ、それよ」
七海はその通りだと答える。どちらも魚から作る醤油である。実は大豆から作る醤油は意外と歴史が浅く古代にはこのしょっつるの系統だったのである。
「同じものよ」
「じゃあ言うぜ」
「カレーにはナムプラーだよ」
二人はあらためて主張した。
「あの匂いもカレーの匂いに混ざってな」
「いい感じになるわよね」
「そうか？」
「そうかしら」
ダンと七海は二人の主張には首を捻って返した。
「あの匂いはあれはあれでいいけれどな」
「けれど。カレーにはね」
「合わないな」
「そうよね」
ダンと七海はそれは否定とまではいかないが懐疑的に返した。この辺りは完全に平行線でありどうしようもないものであった。
しかしだ。双方互いに主張する。
「カレーに合うけれどね」
「そうだよな」
ネロとフックはまだ言う。
「ナムプラーはカレーにもね」
「それがわからないのか」

「大豆のお醤油じゃ駄目か」
「そうなのかしら」
こんな話にもなる。
「あの匂いこそがと思うがな」
「ナムプラーも悪くはないけれど」
「ううん、どうなんだろうね」
「それはね」
四人で首を捻り合う。平行線の話は懐疑にもなる。
しかしだ。ここでアロアがカレーうどんを出してだ。何とその大豆の醤油もナムプラーも入れた。二つ同時に入れてみせたのである。
それから食べる。そして言う言葉は。
「いけるわね」
「おい、両方か」
「また随分乱暴なことをするな」
フックとダンがそれを見て言う。
「そう来るか？」
「美味いのか、それ」
「美味しいわよ」
実際に美味いと答えるアロアだった。

第二百十三話　宮殿の中でもその十

「二つの味がミックスされてね、カレーの中でね」
「そうなのか？」
「本当かね」
「実際にやってみたら？」
アロアは四人にも今の彼女の食べ方を勧めた。
「そうすればわかるじゃない」
「それはそうだけれどな」
「しかし」
「しかしもそれでももなくてよ」
アロアにしては珍しく強い言葉だった。
「食べればわかるじゃない」
「まあそれはね」
「その通りだけれど」
それはネロと七海も頷く。
「けれど。何か」
「凄い味なんじゃ」
「実際そうでもないわよ」
しかしアロアは味についても話した。
「癖がないから。匂いもね」
「そこまで言うんならね」
最初に動いたのは七海だった。自分のカレーうどんにナムプラーも入れてみる。そうしてそのうえで食べてみる。するとであった。
「あっ、これって」
「美味しいでしょ」
「味が対立しないのね」
そのナムプラーと醤油がという意味だ。
「別に」

「だって。どっちもお醤油じゃない」
七海が指摘するのはこのポイントだった。
「そうでしょ？それだったら」
「そういえばそうね」
七海はアロアのその言葉に頷いた。
「どっちもよね」
「そうよ。だからいいって言ったのよ」
「食べてみてなのね」
「何か話が平行線になってたじゃない」
アロアは四人の話をだ。最初から見ていたのである。
「それで全然収拾がつかなくなっていたから」
「思いつきでやってみたの？」
「そうなの」
ネロに答える。やってみたのは本当に思いつきだというのである。
「どうなるかわからなかったけれどね」
「美味いな」
「そうだな」
ダンとフックも実際にやってみていた。そうして食べるとである。
その味はアロアや七海が言う通り美味かった。意外と癖がなくだ。
「最初は驚いたが」
「いけるんだな」
「ですから。カレーは宇宙ですから」
またしてもセーラが出て来て言う。
「全てを内包できるのです」
「カレーって偉大なのね」
アロアはあらためて頷いた。
「つくづくわかったわ」
「お醤油もナムプラーも同時に内包できます」
「そうした無茶でもなのね」
「宇宙は全てですから」

また言うのだった。この言葉をだ。
「それでなのです1
「それでなんだ」
「もう何が何だか」
「無茶だけれど」
「しかし無茶ではありません」
それは否定するセーラだった。
「味わいがそれを事実だと言っていますから」
「ううん、もう何が何なのか」
「わからないけれど」
「何処か納得できる」
「不思議だけれど」
こんな話をしてだ。カレーを食べ続ける。カレーの話はさらに続く。

宮殿の中でも　　完

２０１０・８・６

第二百十四話　カレーと酒その一

カレーと酒

皆はセーラの宮殿の中でカレーを食べ続ける。そしてだ。
ふとだ。スターリングが言った。
「カレーを食べてるとあれだよね」
「あれって？」
「お酒は食べたくなくなるよね」
こう言うのである。
「ちょっとね」
「そういえばそうよね」
彼の言葉に蝉玉も頷く。
「確かに。カレーとお酒ってね」
「合わないよね」
「ええ。カレーとはどんなお酒もね」
「バーボンは無理だし」
「老酒もね」
まずは二人のそれぞれの国の酒を話に出す。
「合わないし」
「だから紅茶とかコーヒーとかヨーグルトになるよね」
「うん、それしかないよ」
また言うスターリングだった。
「とにかく。お酒とは絶対に合わない食べ物だからね」
「そうよね。だから今だって」
見ればだ。実際に酒はなかった。皆カレー料理と一緒に飲んでいるのはヨーグルトや紅茶、それにコーヒーといったものだった。
それでかなり健康的ではあった。しかしだ。
「何かないかな」
「そうよね」

スターリングと蝉玉が話をする。
「ちょっと。お酒を飲みたいような」
「あればだけれど」
「日本酒は？」
言ってきたのは彰子だった。
「どうかしら」
「ああ、それもね」
「合わないと思うわ」
二人は日本酒についても駄目だというのだった。
「あの甘い感じはカレーにはね」
「どう考えても」
こう言ってだった。さらに話すのだった。
「小式さんもカレーと日本酒一緒に食べたことある？」
「その組み合わせは」
「ないわね」
その通りだと答える彰子だった。
「何か。カレー食べてるとどうしてもね」
「そうだよね。カレーってどうしてもね」
「お酒を寄せ付けないのよ」
「そうなるのね」
彰子も二人に言われてそれで頷いた。
「やっぱり」
「だから。カレーにお酒はね」
「合わないわよね」
二人はまたこう話した。
「どうしてもね」
「それだけは」
「あの味って独特だからね」
彰子は腕を組んで首を傾げさせていた。
「確かに。日本酒は無理ね」

「テキーラは？」
今度はマルコが出て来て話す。
「そっちはどうかな」
「無理だと思うよ」
「テキーラもちょっとね」
スターリングと蝉玉はマルコに対しても答えた。
「実際マルコもカレー食べててテキーラ飲みたい？」
「それはどうなの？」
「あまり。というか全然」
マルコの返答もだ。彰子のそれと同じだった。
「思ったことないし」
「そうだよね。だからね」
「どうしてもね」
二人はまた話した。そうしてであった。
カレーについては二人だけではなかった。皆大体合わないという。
そしてだ。セーラもカレーと酒についてはこう言うのだった。
「一緒にお腹の中に入れたことはありません」
「はい、私もです」
「私も」
ラメダスとベッキーもそうだという。

第二百十四話　カレーと酒その二

「それはどうも」
「思ったことも」
「味が強いからね」
ペリーヌの言葉だ。
「カレーの味が強過ぎてね。お酒には」
「カレー味のつまみってないわよね」
「それもね」
ここで皆また話す。
「どうしてもね」
「何ていうかね」
「どんなお酒にも合わない」
「だからねえ」
「ないのも当然」
「けれどさ」
今度言ったのはだ。ネロだった。
「印度にもお酒あるよね」
「はい、あります」
やはり答えたのはセーラだった。
「ムスリムでも飲みます」
「まあ今時ムスリムで禁酒ってのもね」
「かなり極端な原理主義でもない限り」
「飲むからね」
「普通に」
ムスリムの飲酒は実際に時代によってかなり違う。十字軍やモンゴルと戦った英雄バイバルスも馬乳酒を飲んでいた。トルコには昔から地酒がある。あのケマル＝アタチュルクはそのトルコの酒をこよなく愛していた。この辺りは本当に解釈による。

「だからマウリアでもやっぱり」
「飲むよね」
「飲まない筈がないし」
「ワインもあります」
また言うセーラだった。
「それにビールも」
「ワインにビールは定番だしね」
「どの国にもあるし」
これは連合の三百国だけではない。もっとも連合は実際には国家数は三百では済まない。それ以上の数があったりするのである。
「エウロパにもあったっけ」
「というかビールとかワインって向こうが本場か」
「そういえばそうだったっけ」
「どっちも」
勿論それはエウロパにもあった。そしてだ。
「サハラじゃワインが一番飲まれてる」
「メソポタミアがビール発祥の地」
「だからビールもね」
「そうなるわね」
「マウリアにもビールがあります」
また話すセーラだった。
「皆さんよく飲まれます」
「カレー味で飲めるの？」
「ちょっと無理なんじゃ」
「ビールにしてもワインにしても」
「やっぱりどっちも合わないし」
とにかくカレー味には酒は無理であった。
「マウリアの人って何をあてにして飲んでるの？」
「カレーはないし」
「それじゃあ何があて？」

「一緒に食べるのは」
「乾燥させた果物やナッツ類がありますが」
ラメダスが話してきた。
「そうしたものはカレー味ではありませんから」
「あっ、それか」
「それね」
皆ラメダスの説明を受けて納得した顔で頷いた。
「連合でも普通にあてにしているし」
「そういうことなんですね」
「納得しました」
「そしてです」
さらに話すラメダスだった。
「肉の燻製や干し肉もありますから」
「ああ、マウリアにもあるんだ」
「そういうのって」
「はい、あります」
落ち着いた声での返答だった。
「ない国はないのでは」
「まあそうですけれど」
「けれどカレー味じゃないんですね」
「燻製とか干し肉は」
「カレーをつけて食べることは確かにあります」
やはりカレーだった。マウリアからカレーが離れることはない。
しかしここではだ。流石に酒とカレーは一緒にはならないのだった。

第二百十四話　カレーと酒その三

「ですがお酒と一緒の時は普通はカレーはないです」
「成程」
「そうして飲んでいるんですか」
「つまりは」
「その他にはです」
さらに話すラメダスだった。
「チーズもありますし」
「カレー以外にも食べ物はありますから」
セーラの言葉だ。
「チーズ等も」
「じゃあ特にお酒のあてには困らないんだ」
「探せば結構あるわよね」
「そうだね」
皆ここでわかった。そうしてだった。
実際にだ。その乾燥させた果物や肉や燻製が出て来た。ナッツ類もあればチーズもある。ラメダスが言ったものがそのままだった。
「どうぞ」
「お酒出るのかな、やっぱり」
「こうしたものが出るってことは」
「つまりは」
「はい、そうです」
セーラがにこりと笑って言ってきた。
「その通りです」
「胡桃もあるね」
「そうね」
見ればそれもあった。
「ナツメヤシも」

「ううん、ワインと合うのも多いし」
「いい感じ？」
「確かに」
「そのワインですが」
千里眼の如きセーラの言葉だった。
「マウリアのワインです」
「マウリアにもワインがあるんだ」
「そうだったんだ」
「あったんだ」
皆ここでこのことに気付いた。
「マウリアのワインも」
「それがあったのね」
「当然って言えば当然だけれど」
しかしそれに今まで気付かなかったのだ。それが何故かというとだ。
「カレーのことばかり目がいって」
「どうしてもね」
「そっちまでは」
「カレーってインパクト強過ぎるのよね」
パレアナもこんなことを言った。
「どうしてもね」
「ワインとかビールとか考えられなくなる位ねえ」
「物凄いインパクト」
「あれは」
皆も言う。とにかくカレーのインパクトは強い。強烈なまでにだ。
「味も匂いも」
「外見も」
「だからマウリアっていったらカレーで」
「とてもそこまでは」
「考えられなくなって」

「お酒までは」
実際に連合ではマウリア産のワインやビールはあまり知られていない。マウリアの主な産業も食品加工では殆どカレーしか知られていない。
「どうしても」
「考えられなくて」
「そうなのですか」
ラメダスがここまで話してまた述べてきた。
「ですがこうして実際にです」
「はい、見えてます」
「マウリアのワインですよね」
「赤ですよね」
「その通りです。白もロゼもあります」
ワインの基本の三色だ。しかしこの時代のワインはこの三色だけではない。ラメダスもこのことを皆に話してきたのである。
「赤も青も紫もです。黒や緑もあります」
「あれっ、連合と同じ？」
「そうだよね」
「色は」
「味もですが」
ラメダスは色だけでなく味についても言及した。

第二百十四話　カレーと酒その四

「甘いものから辛いものまで様々です」
「味までなんだ」
「一緒かあ」
「成程」
「そしてです」
ラメダスの言葉はさらに続く。完全に彼のペースだ。彼もマウリア人らしく話せばそれで中々止まらなくなってしまうもののようだ。
「スパークリングワインもあります」
「あっ、それもですか」
「あるんですか」
「全てのワインがあります」
そうだというのである。
「ですから御安心下さい」
「ううん、ワインは変わらないんですね」
「マウリアにもワインは一通りあるんですか」
「あらためてわかりました」
「それでは皆さん」
言ったのはまたしてもラメダスだった。
「飲みましょう」
「はい、それじゃあ」
「是非皆で」
「飲みましょう」
皆も彼の言葉に頷いてだ。そのうえで今度は乾燥させた果物やナッツ類、それに燻製や干し肉を食べながらだ。ワインを空ける。その味は。
「あっ、美味しい」
「本当に」

「飲みやすいししかも」
「喉越しもいいし」
「こんなワインなんだ」
「このワインですが」
今度はベッキーが言ってきた。
「お嬢様のお家の畑で採れたワインから作られています」
「それじゃあセーラのお家の会社のワインなんだ」
「そうなるよね」
「はい、その通りです」
まさにそうだというのだった。
「シヴァ＝ワインです」
「その名もずばり」
「シヴァ＝ワイン」
「それがこのワインの名前なんだ」
「我がシヴァ家は様々な企業を経営しています」
あらためて話されるセーラの家のことだった。
「そしてその中にはお酒を扱っている企業もあります」
「所謂コンツェルン？」
「財閥？」
企業の集合形式の一つであり様々なジャンルの企業が一つのグループになったものがコンツェルンである。それであるというのだ。
「セーラのお家って」
「それなのかしら」
「はい、そうなります」
ベッキーもそのコンツェルンや財閥という言葉に頷く。
「我がシヴァ家はです」
「ううん、そうだったんだ」
「マハラジャであるだけじゃなくて」
「財閥でもあるんだ」
「凄いよね」

「そうよね」
皆で言い合う。
「まさに大金持ち」
「マウリアは違うよな」
「そうよね」
「本当に」
こう話してだった。さらにだ。
「そういえばセーラの家って何処にあったっけ」
「マウリアなのはわかってるけれど」
「一体どの星系だったかしら」
「何か凄い名前だったような」
「シヴァ星系です」
ベッキーが答えた。
「そこにいます」
「シヴァ星系って」
「星系がそのまま家の名前になってるってことは」
「つまりは」
容易に答えが出る話だった。それはだ。
「星系がそのまま家の所有物」
「そういうことよね」
「つまりは」
「それはよくあるのでは？」
ラメダスは素っ気無く皆の言葉に応えた。

第二百十四話　カレーと酒その五

「連合にも。資産家が星系を一つ丸ごと持っているのは」
「それはそうですけれど」
「それでも」
「家の名前がそのまま星系の名前になっているのは」
「ないですよ」
「ねえ」
皆こうそのラメダスに返す。
「連合ではないですよ」
「とてもね」
「ありません」
こう言うのだった。これは連合の常識の話だ。
そうしてだ。彼等はさらに話すのだった。
「マウリアって凄いよな」
「連合とは全然違うし」
「星系にそのまま自分の家の名前を付けられるって」
「マウリアと連合の違いはかなりですね」
セーラがこのことについて落ち着いて述べた。
「私も最初連合に来た時は驚きました」
「あれで驚いていた？」
「そうだったかな」
「ちょっとねえ」
「思えなかったけれど」
「あれは」
皆セーラが転校してきた時のことを思い出して話す。その時から彼女は泰然自若としていて自分のペースを誇示していた。そうしていたのだ。
だからだ。彼等は口々に言い怪訝な顔で話すのだった。

「むしろこっちがね」
「私達の方が驚いたし」
「けれどセーラも驚いていたって」
「本当？」
「はい、本当です」
至って穏やかな顔で話すセーラだった。
「連合のこの多様さと」
「多様なのは確かだけれどね」
「それはね」
「実際に三百以上も国があるし」
「文化も習慣も様々だし」
これが連合である。二年Ｓ１組も多くの国から集まってきている。日本にあるが日本人は三人程度という状況だ。連合の縮図でもある。
「多様なのは否定できないし」
「無茶苦茶人も多いわよね」
「四兆人」
連合の人口である。
「マウリアの二十倍？」
「一応はそうなる？」
一応になるのはマウリアの人口がはっきりしないからだ。一応二千億となっているが実際はそれより三百億多いと言われている。マウリアの人口ははっきりしないのだ。
「それだけ人がいれば多様になるし」
「それは事実」
「うんうん」
「だから驚きました」
セーラはまた話した。
「この様に多くのものがある社会があるのかと」
「それで驚いたのね」
「そういうことか」

「つまりは」
「マウリアはカレーだけです」
セーラは冷静に話す。
「しかし連合はです。様々なお料理がありますね」
「ピラフも炒飯もありますね」
「クスクスも」
ラメダスとベッキーも話す。
「他には丼も」
「主食の料理だけでも」
「マウリアってカレーばかりなのは本当なんだな」
ダンが話した。
「だから丼は珍しいか」
「カレー丼も新鮮でした」
セーラの言葉だ。そのセーラだ。
「あんなものがあるとは」
「じゃあカレーラーメンとかカレーバーガーは」
「そっちは？」
「非常に面白いものでした」
セーラの顔は微笑んでいる。

第二百十四話　カレーと酒その六

「そして美味しいものでした」
「美味しいのはいいとして」
「カレーでも料理は色々あるけれど」
「それでもマウリアにはない」
「ラーメンもハンバーガーも」
「そういえば」
ふとだ。彰子が気付いた。
「マウリアって麺類はあるの？」
「麺類ですか」
「パスタもだけれど」
彰子はパスタも話に出す。その手にはカレーマカロニがある。
「それはあるのかしら」
「麺類はないですね」
こう答えるセーラだった。
「それも」
「ないのね、やっぱり」
「マウリアは元々お米が主食です」
セーラはこの事情も話した。
「ですから麺類はです。これといって」
「発達しなかったな」
ダンが頷いて述べた。
「麦があってもそれはパンに使うか」
「ナンですね」
マウリアの伝統的なパンだ。イーストを入れないので膨らまない。
それで平たいかなり独特な形のパンである。カレーを付けて食べる。
「それにして食べます」
「ナンか。それにするから」

「やはり麺類はないです」
また言うセーラだった。
「パスタにしてもです」
「麺類がないってそれって」
麺類の本場である中国出身の蝉玉がだ。かなり寂しい顔になった。
「食事が寂しくならない？」
「しかもハンバーガーもないんだ」
スターリングはこのことを問題にしていた。
「牛肉も食べられないし」
「宗教の関係でね」
蝉玉が話す。
「それもね」
「ううん、僕もパスタは好きだし」
それはスターリングもだった。連合はどの国でも麺をよく食べる。パスタもそうであるしだ。麺類は連合では非常にポピュラーな料理である。
「それがないとなると」
「困りますか？」
「うん、困るね」
「そうよね」
スターリングと蝉玉は今はだ。それぞれカレーヌードルを食べていた。見ればヌードルはかなり太いきし麺のようなものである。
「麺類って連合じゃね」
「人類の友達だし」
こうまで言う蝉玉だった。
「ああ、そうそう」
「そうそう？」
「ステーキもないわよね」
蝉玉はこのことにも気付いたのだった。
「マウリアって」

「えっ、ステーキもなんだ」
「そう、人類の友達が」
これも友達なのだという。ステーキもまた連合で非常によく食べられているものだ。肉や魚だけでなくサボテンや茄子や豆腐もそうして食べるのだ。
「なかった筈よ」
「マウリア料理って菜食中心だしね」
「それでお豆腐とかサボテンもないから」
そのステーキの素材である。
「だからそうなるわ」
「ステーキも麺類もないって」
スターリングの顔は絶望的なものすら漂っていた。
「僕耐えられるかな」
「私は無理だと思うわ」
蝉玉はスターリングよりもさらに絶望的な色彩が強かった。
「そこまでなの」
「ううん、ビーフンも」
「ないわよね」
また話す蝉玉だった。
「お米で作った麺も」
「ああ、あれですね」
セーラもビーフンのことは知っていた。すぐに応える。

第二百十四話　カレーと酒その七

「ビーフンですか」
「やっぱりないわよね」
「はい、麺そのものがありませんので」
セーラは蝉玉にこの事情から話した。
「どうしても。それは」
「ううん、マウリア料理はやっぱりカレーなんだ」
スターリングは首を傾げさせながら述べた。
「カレーが第一なんだ」
「その他の味や他のお料理はあまりなのね」
蝉玉もまた話した。
「だから連合に来て」
「色々な味を知りました」
セーラ自身の言葉だ。
「素晴しいです、連合は」
「この多様性がなの」
「余計に」
「太平洋にアフリカ、それと欧州の一部」
連合の最初の構成国である。
「それに新興国家や古代民族の国家もありますね」
「ええ」
「とにかく多いけれど」
連合はだ。かなり多いのは確かだ。
「それを見て」
「だからこそだったんだ」
「はい、連合の多様性は素晴しいです」
セーラの言葉は手放しの域にまで達していた。
「このことを学んでいこうと思います」

「ううん、連合にいたらわからないけれど」
「確かに」
皆ここでもワインやビールをつまみと一緒に飲みながら話す。
そしてだ。ふとそのワイン等についても話した。
「連合じゃおつまみも色々あるけれど」
「確かに」
「ワインとかビールだけじゃないし」
「お酒の種類もかなり多いし」
こういう話になっていた。
「ねえ」
「それ考えたら連合って」
「恵まれてる？」
「そう思いますよ」
ラメダスの言葉だ。
「連合は色々な食べ物もお酒もあり」
「そして文化や文明も」
「そうなりますね」
「そうです。映画にしても」
ここで映画の話にもなった。
「色々な映画がありますね」
「マウリア映画っていったら」
「あの凄く長い映画？」
「それですよね」
「踊りが欠かせないあの」
マウリア映画といえば長さと踊りである。それが特徴になっている。
「連合の映画とはかなり違いますけれど」
「それもなんですね」
「マウリアの映画は好きです」
ラメダスもそれは認めた。

「しかしです。それでもです。連合の映画はです」
「色々とある」
「それがいいんですか」
「最初踊りのない映画を観て驚きました」
これこそがマウリア側からの言葉だった。
「何故踊らないのかと」
「連合じゃミュージカル映画以外は踊りませんから」
「それは」
このことはすぐに皆が言った。実際に連合ではミュージカル映画やオペラ映画がある。だがそうしたもの以外ではやはり踊らないのだ。
「それ考えたらマウリア映画はミュージカル映画なんですね」
「他にも色々入ってますけれど」
「まずは踊りです」
その通りだというラメダスだった。
「所々に踊りを入れるのです」
「それでいきなり映画の進行が止まって」
「いきなり人が一杯出て来て」
そこから踊るのである。

第二百十四話　カレーと酒その八

「そうなるんですけれど」
「あれは必須なんですね、マウリアでは」
「あれがないと皆観ません」
そこまでだというのであった。
「マウリアではそうです」
「じゃあ日本映画とかは」
「人気ないのかしら、マウリアじゃ」
彰子と七海がそれを聞いて言った。
「踊りとかないから」
「そうよね。そういう系統の映画じゃないと」
「そうですね。マウリアでは連合の映画は殆ど観られません」
実際にその通りだった。
「マウリアのものばかりです」
「時代劇とかは」
「そういうのはあるんですか？」
「時代劇ですか」
ラメダスは彰子と七海の言葉にここでも応えた。この時代でも日本の時代劇といえば江戸時代を舞台にしたものと相場が決まっている。
「それですか」
「マウリアにもありますよね、時代劇」
「歴史が古いですし」
「西部劇みたいなのですけれど」
「武侠ものみたいな」
スターリングと蝉玉も言う。二人の国でもそれぞれこの時代でも生きている映画やドラマのジャンルである。尚アメリカインディアンがルーツのイロコイ等の国でも西部劇はある。ただしこうした国

ではインディアンがヒーローになっていて白人や黒人が悪役である。
「そういうのは」
「マウリアではどんな感じですか？」
「普通ですよ」
ラメダスはいきなりこう話した。
「普通に。お釈迦様の時代やムガール帝国の時代を舞台にして」
「かなり時代の幅が広くないか？」
ダンがラメダスの今の言葉を聞いて言った。
「お釈迦様からムガール帝国までだと」
「そうでしょうか」
だがラメダスには実感がなかった。
「私はそうは思いませんが」
「そうなのか」
「マウリアの歴史は神話の時代からですから」
いきなりこんな話になった。
「二千年の幅なぞ。大したことではありません」
「いや、大したことだと思うが」
また言うダンだった。
「二千年は」
「連合ができて一千年だし」
「二千年っていったらそれこそ」
皆もダンに続いて言う。
「途方もなく長いけれど」
「それでも普通？」
「大したことないって」
「それじゃあマウリアの時間ってどうなってるの？」
皆こう考えだした。
「二千年ってどの位？」
「マウリアの感覚だと一体」
「宇宙はブラフマーの一日なのです」

本当に神様を話に出してきたセーラだった。
「それは四百億年ですね」
「ええと、それ位？」
「確かね」
「今の宇宙が二百億年だし」
「それで後二百億年位っていうから」
「そうなるよね」
皆こうしたことは授業で習っていた。それで知っているのである。
「神様の一日が四百億年」
「無茶苦茶長いけれど」
「それが一日って」
「その一日もです」
セーラは完全に神の世界に入っていた。マウリアのその悠久の神の時代にである。その中に入ったうえで全員に話すのだった。
「お昼だけです」
「えっ！？」
「お昼だけって」
「何それ」
皆このことには再び唖然となった。
「お昼だけで四百億年！？」
「どんな神様、それって」
「無茶苦茶凄いけれど」
「創造神ブラフマーが目覚めてそして眠るまでが一日なのです」
また話すセーラだった。
「私達の宇宙のです」
「じゃあ後の半日はどうなるのかな」
「そうよね、後の四百億年は」
「一体」
「眠っているだけです」
セーラの話は壮絶なまでの巨大なスケールを維持し続けていた。

第二百十四話　カレーと酒その九

「それだけです」
「それだけで四百億年も過ごす」
「他の国の神話にはないけれど」
「いや、仏教にはあるぞ」
フックが話す。タイはこの時代でも仏教国である。国王も仏教徒でなければならないとされている。それと同時に全ての宗教を守らなければならないともされている。
「それだけのスケールがな」
「けれど仏教だってあれじゃない」
七海がそのフックに突っ込みを入れた。
「マウリアが起源じゃない」
「そうなんだよな」
フックもこのことはよく知っていた。
「マウリアだからな」
「そうよね、やっぱり」
「だから必然的に時間のスケールがとてつもない」
「そういうことか」
皆ここで納得したのだった。
「マウリアだからか」
「それでスケールが巨大になる」
「つまりは」
「それでなのです」
セーラがここでまた急に話に入ってきた。
「二千年はです。些細なことです」
「確かに四百億年と比べたら二千年なんてね」
「ほんの一時」
「瞬きするようなものだけれど」

皆この時間の概念は納得できたのだった。
「けれど。それでも人間だとね」
「二千年はとんでもない時間だし」
「それだけの時間の間で作る時代劇って」
「どんなのかしら」
「しかもだよね」
ネロがまた突っ込みを入れた、
「その時代劇も踊るんだよね」
「はい、絶対に踊ります」
その通りだと答えるセーラだった。
「一話に一回は必ずです」
「銃撃やちゃんばらの間に踊る？」
「無茶苦茶凄いけれど」
「それか話し合いの時に？」
「踊るとか」
実際にマウリア映画やドラマではだ。ここぞというクライマックスの時に踊るのである。それが見所の一つでもあるのである。
「カオスな」
「何ていうか」
皆また首を捻る。
「それがドラマなのかな」
「いや、これこそがマウリアドラマ？」
「そうなる？」
こんなことも話すのだった。
「むしろそれこそが」
「踊りあってこそ」
「そうであってこそのマウリア映画」
「そういうことなのね」
「それでなのですが」
ここでセーラの言葉がいつも通り出て来た。

「映画もあります」
「何か流れるような展開」
「本当に」
皆このあまりにもセーラの意のままではないかと思える展開に次第に気付いてきた。そうしてふと思いながらそのうえで話をするのだった。
「けれどマウリア映画も面白いし」
「観ようか」
「そうね」
観ることは観るのだった。
「それでどんな映画なのかな」
「恋愛？コメディー？アクション？」
「それとも戦争？」
「ホラーとか？それかファンタジー？」
「全部あります」
セーラの返答はこうしたものだった。
「そうしたものは全部です」
「えっ！？」
「全部って！？」
「どういうこと？」
皆その言葉にはいつも通り面食らってしまった。やはりセーラの話は一回聞いただけではすぐにはわからないものであった。まさに異次元だからだ。
「全部っていったら」
「全部のジャンルが入ってる？」
「そういうこと？」
「学園を舞台にした王子様とお姫様の叶わぬ愛を叶えようとするロマンスものです」
一応はそうなのだというのだ。
「そこに二人を邪魔する冥界からの使者がいまして」

「それがホラーにファンタジーの要素」
「そういうこと？」
皆セーラの説明を聞きながらまずはこう考えた。
「つまりは」
「そうなのかしら」
「そしてです。冥界の邪神が大軍を率いて学園に攻めてきまして」
今度はこうなるというのである。
「そこで王子と王女は手に手を取って戦います」
「ああ、それが戦争」
「そうなのね、つまりは」
「そうよね」
皆とりあえずまた納得はした。
「何か凄いカオスだけれど」
「マウリア映画らしくて」
「本当に」
マウリア映画の連合での認識はまさにカオスであった。とにかく何でも入っていて訳がわからないというイメージが強いのである。
「まあとにかく観ようか」
「そうだよね。観ないとわからないし」
「それじゃあね」
「はじまりです」
映像が出て来た。立体映像である。
皆それを観る。今度は映画なのであった。

カレーと酒　　完

２０１０・８・１４

第二百十五話　マウリア映画その一

マウリア映画

映画がはじまった。その内容はセーラの言う通り色々なジャンルが入っていた。当然マウリア映画には付きものの例のものも入っていたのである。

「踊りがないとやっぱり」

「マウリア映画じゃないか」

「そうね」

皆その主人公達が何処からか出て来た人達と踊りながら愛を語り合う場面を見ながら話した。マウリア映画には本当に欠かせないものだ。

「踊りあってこそマウリア映画」

「それがないマウリア映画って何なのかな」

「何なんでしょうね」

「ところで」

そしてだ。ふと彰子が言った。

「セーラちゃん、いいかしら」

「何かあったのですか？」

「この映画ってどれ位あるの？」

上映時間を聞いたのである。

「それはどれ位あるの？」

「どれ位ですか」

「ええ、どれ位あるの？」

またセーラに問うた。

「この映画って」

「二十時間です」

セーラはにこりと微笑んでかなりの時間を口にした。

「二十時間しっかりです」

「ええと、二十時間？」
「二十時間って」
「何、それ」
皆その時間を聞いてだ。思わず唖然となるのだった。
「それ映画の上映時間？」
「ニーベルングの指輪よりも長いし」
「しかも五時間も」
ニーベルングの指輪の上演時間は合計十五時間である。それを四日に分けて上演するのだ。この作品も途方もない大作である。
「普通の映画が二本丸ごと入るだけの長さだけれど」
「しかし二十時間って」
「何、それ」
「安心して下さい」
またこんなことを言うセーラだった。
「時間についてはです」
「何で大丈夫なの？」
「どうして？」
「私達は今特別な時間の空間の中にいます」
こんなことも言ってきた。
「ですから」
「ええと、特別な空間っていったら」
「何、それ」
「ちょっとわからないけれど」
「つまりはです」
セーラの説明が来た。
「外の世界は普通に時間が流れています」
「外はなの」
「つまり外が私達の元からいる世界」
「そういうことね」
皆ここでわかった。

「つまり私達がいるのは」
「どうやって作られたかわからないけれど特別な空間」
「時間がそこだけ違う空間」
「そういうことね」
「はい、そうです」
まさにその通りだと答えるセーラだった。
「そしてその空間はです」
「セーラの魔術で作ったとか？」
「今回も」
「空間を作るのにはコツがあります」
作った本人のそれに他ならない言葉であった。
「少しでも気を抜くとです」
「何か大変なことになるんだろうね」
「やっぱり」
皆このことは容易に想像がついた。何しろ時間が関わるということがどういうことか。漫画やアニメや小説やゲームでいつも題材にされていることだからだ。
「全員別次元に飛ばされるとか」
「時空が捻じ曲がるとか」
「そういうのよね」
「別次元の存在が出て来ます」
それだというのである。

第二百十五話　マウリア映画その二

「そう、あの狂ったアラブ人が書き残したという」
「ネクロノミコンに載ってるって？」
「じゃああれ？」
「ラグクラフトの」
「そう言われています」
詳しいことはわからないというセーラだった。
「あの盲目のスフィンクスが」
「ああ、ナイアーラトホテップ」
「それね」
そのラグクラフトの考えた神々の中でもとりわけ有名な存在である。
「ってあれ実在したんだ」
「それって滅茶苦茶怖いんだけれど」
「嘘だと思いたいし」
「私達がそう言っているだけで正体は不明です」
セーラは怯えだした一同にこう話してきた。
「一体何者なのかは」
「けれど相当やばい奴だよね」
「その存在って」
「話を聞いてると」
「それに出会ったならば逃れる術はない」
実におどろおどろしくかつ剣呑な言葉だった。
「そう言われています」
「やっぱり会いたくないし」
「絶対に」
「危険な魔術だね」
「私一人でできますが危険が伴います」

セーラの言葉も真剣なものである。
「ですからこうした魔術を使う場合はです」
「どうするの？その時は」
「今も使ったけれど」
「何かしたのかな」
「ラメダスとベッキーの補佐を受けます」
そうするというのである。
「必ず」
「つまりそうしないととても使えない」
「そういうことだね」
「危険過ぎて」
「その通りです」
また話すセーラだった。
そしてだ。その彼女の横に当のラメダスとベッキーが来た。そうしてそのうえでだ。二人からもこんなことを言ってきたのである。
「私達三人で、です」
「こうした時間を使う魔術を使うことにしているのです」
「そうしなければです」
「如何にお嬢様といえど」
「やっぱり洒落にならない位難しいのね」
七海は腕を組んで真剣な顔になって述べた。
「時間の魔術って」
「そうだな。しかしセーラは」
ダンも話す。
「マウリアでもかなりの魔術の使い手だったのではないのか」
「そうですね。今は魔術師です」
「その階級にあります」
ラメダスとベッキーはダンの今の言葉に応えて説明してきた。
「ですが階級はまだまだあります」
「最上の階級になるとです」

「どんなことができるの？」
ナンがその二人に問うた。
「それでその時は」
「肉体から離れて生きることができます」
「そして精神体となって自由に動けるのです」
「それって神様なんじゃ？」
思わずこう言ったナンだった。
「精神体ってつまり魂だから」
「だよなあ。もう超能力とか魔術の域じゃないし」
「そこまでいったら」
皆もこのことにはもう驚きどころではなかった。
「魔術を極めるとそこまでなるって」
「無茶苦茶な話」
「それを自由に行えるようになるのです」
セーラの話はさらに凄いものだった。
「肉体から精神が自由にです」
「出入りできるようになる」
「そうなんだ」
「はい、そうです」
セーラだけが何でもない調子であった。

第二百十五話　マウリア映画その三

「行き来できるようになります。しかも」
「しかも？」
「しかもっていうと」
「まだあるんだ」
「あります。その肉体もです」
肉体についても話されるのであった。
「不老不死になります」
「出た、不老不死」
「今度はそれなのね」
「不老不死といっても千年ですが」
セーラはこう言葉を付け加えはした。
「僅か千年でしかありません。肉体が存在できる時間は」
「僅かじゃないから」
「だから千年っていうのは長いから」
「それもかなり」
皆はこう返した。
「大体千年っていったら」
「普通の人の平均寿命の十倍だし」
「いや、九倍だったんじゃ？」
「まあかなり長いよね」
この時代は平均寿命がかなり延びている。百歳を超えているのである。かつて五十年と言われたその時代の倍以上に達しているのである。
「だから僅かじゃないから」
「ミレニアムだし」
「だよね。千年」
「信じられない長さだけれど」

「いえ、やはり僅かなのです」
こう言ってこのことも引かないセーラだった。
「何故なら。この宇宙は神の一日に過ぎないのですから」
「だから四百億年が一日っていうこと自体があれだし」
「滅茶苦茶なのよ」
「そこから考えたらそりゃ何だって」
「短いけれど」
「千年ですらも」
物差しの基準がだ。違うのであった。
「けれどあれだね」
「あれって？」
「どうしたの？」
皆今度はマルコの話を聞いたのだった。
「千年生きても輪廻はあるのかな」
「はい、あります」
セーラはそれはあるというのだ。つまり生まれ変わりである。
「精神だけになり。その精神が解脱していなければ」
「やがて生まれ変わる」
「そういうことなのね」
「はい。ただ精神だけで動けるようになるのだけでは駄目なのです」
こう語るのであった。
「そこに解脱がなければ」
「解脱ねえ」
「仏教的だけれど」
「この場合はヒンズー教かあ」
「そっちよね」
「仏教はヒンズー教の一派ですから」
これもまたマウリア独自の考えである。マウリアにおいては釈迦はヴィシュヌ神の生まれ変わりの一つと考えられている。だから仏教はヒンズー教の一派と考えられているのである。ただし連合でこ

の考えを理解できる者は僅かだ。
「そうなります」
「解脱したら仏になるけれど」
「それも目指さないといけないんだ」
「ただ魔術を極めるだけじゃなくて」
「そうなのです。魔術は何の為にあるのか」
そういったところにまで話がいく。
「それは解脱に至る為です」
「それで神様になるのかな」
「それでやっと」
「そうなのかしら」
「そこからです」
だがセーラの話はそれで終わりではないのであった。
「解脱からさらに修行を積みます」
「魂の修行？」
「それ？」
皆大体わかってきたのだった。
「つまりは」
「それかな」
「その通りです。魂の修行を積みです」
皆の考えは今回は正解であった。その通りだとセーラが言う。
「そしてそのうえで」
「神様になるのかな」
「それでようやく」
「仙人になります」
ところが出て来た言葉はこれであった。

第二百十五話　マウリア映画その四

「まずはそれになるのです」
「仙人！？」
それを聞いて言ったのは蝉玉だった。
「マウリアにも仙人がいるの」
「はい、そうですが」
「あれって我が国のだと思っていたけれど」
中国人としての言葉であった。
「それって違ったの」
「仙人はマウリアにもいますが」
「それでも何か中国の仙人とは違うみたいね」
「中国の仙人はどうしてなるのですか？」
「まず解脱とかはしないわ」
そういうことはないというのである。
「修行してなるのは同じだけれどね」
「そうなのですか」
「それでも身体はそのままで不老不死になるから」
これが中国の仙人である。中国の仙人は昔から変わらない。だがマウリアの仙人は過去のそれとは全く違っていると言えた。
「何かマウリアの仙人って神様の前の段階みたいだけれど」
「そうですね。そうなります」
実際にそうだというセーラだった。この時代のマウリアではそうなのだ。
「マウリアの仙人は」
「中国の仙人には仙骨とか色々となるに必要な要素もあるし」
「誰でもなれないのですね」
「ある程度以上運命的なものよ」
蝉玉は今度はある本を出してきた。

「封神演義とかに書いてあるけれどね」
「封神演義ですか」
セーラはその本の名前を聞いて頷いたのであった。
「あの本ですか」
「そうよ。他には列仙伝や神仙伝って本にもあるわよ」
「古典ですね」
「まあね。そういう本に書いてるけれどね」
仙人についての記述は古来からある。それだけ中国という国では仙人に対する思想や憧れが深く強いものであるという証拠でもある。
「今でもいるしね」
「ああ、いるね」
ここでスターリングも言ってきた。
「アメリカにもいるし」
「アメリカにも仙人いるの」
「中国系が多いけれど白人や黒人の仙人もいるよ」
「ふうん、そうだったの」
「憧れて仙人の修行をしているだけだけれどね」
その詳しい事情も話すのだった。
「本物の仙人はいないね」
「実際今の中国でもいないわよ」
蝉玉もそれは否定した。
「過去も本当にいたのかしら」
「いたんじゃないの？本とか読んでたら」
「だとしたら面白いけれどね」
「面白いんだ」
「本当にいたとしたらね」
限定であるがそうだというのだった。
「やっぱり面白いとは思うわ」
「成程ね。確かにそうだよね」
「日本にもいたかしら」

蝉玉は首を傾げながらこんなことも言った。
「何かいなかったかしら」
「久米仙人かな」
言ったのは管である。
「伝説にはあるよ」
「日本にも神仙思想は入ってたのよね」
「うん。それでいることにはいたよ」
管はこうその蝉玉に返す。
「今はいないけれどね」
「そうなの。いないの」
「途中から神仙思想よりも仏教思想が強くなったから」
日本の思想の潮流の特徴である。奈良時代以降仏教思想がかなり強くなり平安時代では晩年に出家する者が多く出た。この出家というものは江戸時代になるまで非常に多かった。武田信玄や上杉謙信も出家している。

第二百十五話　マウリア映画その五

「それでね」
「それで仙人はいなくなったのね」
「そうだね。いなくなったよ」
また話す管だった。
「日本には」
「日本人の思想も独特だよね」
今度はスターリングの言葉だ。
「生死への考えが特に」
「死とはです」
セーラがその死について話す。
「転生の中の一環です」
「その輪廻の中の」
「それなんだ」
「この映画も」
今皆で観ているその二十時間の映画の話にもなる。
「それを扱っていますが」
「あれっ、この話って」
ここで管があることに気付いた。
「三島由紀夫かな」
「はい、豊穣の海です」
それだとセーラも話す。
「あの作品を元にしています」
「輪廻転生の中での愛の話だよね」
「それを全て映画にしたものです」
「それで二十時間の大作になったんだ」
「全ての作品を映画に入れました」
豊穣の海は三島由紀夫が己のライフワークと位置付けていた。何

部にも別れその中で輪廻転生しながら紡がれる愛の話である。
「それがこの映画です」
「ええと、三島？」
「これが？」
これが今度のクラスの面々の言葉であった。
「日本じゃないよな」
「どう見てもマウリア」
「カレーばっかり食べてるし」
「象も出てるし」
マウリアといえばこの時代も動物では象であるとのイメージが強いのである。
「それに熱帯だし、風景」
「海奇麗だし」
「マンゴーあるし」
「いえ、これは三島の世界です」
しかしセーラはあくまでこう主張する。
「見てわかりますよね」
「いや、全然」
「どう見て南国なんじゃ？ここって」
「あっ、ヒンズー教の寺院もあるし」
「シヴァ神の像？あれって」
「ちょっと。これは」
「連合じゃないし日本じゃないし」
これが皆の見た感想だった。
「ええと、何かマハラジャが出て来たし」
「何処が豊穣の海なんだろう」
「三島由紀夫、って言われても」
「また踊りはじめたし」
マウリア映画の常がここで出た。
「しかもこれが二十時間って」

「どういう三島なんだろうね」
「わからないっていうか理解不能っていうか」
「製作スタッフ本当に豊穣の海読んだのかしら」
「はい、読んでいます」
またその皆に答えるセーラだった。
「どの方も熱心に読んでおられましたよ。三島の他の作品まで」
「ちょっと待ってくれ」
セーラの今の言葉にダンが突っ込みを入れた。
「今皆読んでいたって言ったよな」
「はい」
「何でそのことを知ってるんだ?」
ダンが今問うのはこのことだった。
「どうしてセーラがそのことを知ってるんだ?」
「そうよね、そういえば」
「それはどうしてかしら」
「何でなの?」
皆もここでこのことに気付いた。
「高校生のセーラがどうして」
「確かにマウリア人だけれど」
「製作についての本かパンフレット読んだとか?」
「それともネットで調べたとか」
皆が考えたのは常識の範囲でのことだった。

第二百十五話　マウリア映画その六

「それでなの？」
「それでわかったの？」
「いえ、私の家の会社ですから」
ところがセーラの返答はこうしたものだった。
「ですから。よく知ってます」
「セーラの会社だったの」
「まさかとは思ったけれどセーラのお家の会社だったの」
「じゃあこの会社もシヴァグループ」
「そうよね」
「はい、シヴァ映画撮影所です」
それが会社の名前だというのである。
「一応持ち主は私になっています」
「えっ、セーラの会社！？」
「会社まで持ってたの！？」
「まさか」
「マウリアでは普通ですが」
またしてもマウリアの常識で話すセーラだった。尚マウリアの常識は連合においては非常識どころか異次元の話だと言うものすらいる。
「マハラジャの家では。他にもお金持ちなら」
「いや、高校生で社長って」
「ちょっとないけれど」
「ねえ」
「最低十九歳だし」
高校を卒業してすぐに会社を旗揚げした場合である。連合ではこうしたベンチャー企業がなりあがっていくことも多い。所謂ユニオン＝ドリームである。

「十七歳で社長」
「大金持ちのお家にいるだけじゃなくて」
「そこまで凄かったなんて」
「まさに超ブルジョワ？」
「えっ、けれど連合じゃ小学生でも」
だがまた言うセーラだった。
「社長をやっていますよね」
「ああ、あれアニメだから」
「トライダーG7よね」
「あれアニメだよ」
皆そのアニメが何かすぐにわかった。
「だから現実じゃないから」
「連合じゃ高校生が社長って有り得ないから」
「絶対に」
「そうなのですか。私は幼稚園の頃からでしたけれど」
話はさらにとんでもない方向に飛ぶ。
「そうではないのですね」
「幼稚園で社長ねえ」
「マウリアってどういう国なんだろう」
「凄いなんてものじゃないけれど」
「他にもですね」
まだ話すセーラだった。
「生まれた時からというのもありますが」
「それも社長？」
「やっぱり」
「いえ、マハラジャです」
話はさらに大きくなっていた。
「マハラジャなのです」
「つまり生まれた時から王様なんだ」
「マウリアじゃそういうことがあるの」

「色々な縁でそうなります」
これは昔からあったことだ。あのスコットランドの女王メアリー＝スチュワートも生後間も無くして女王となっている。こうしたこともままあるのだ。
「そういう話がマウリアにはありますが」
「連合ではあったかな」
「まだ子供の王様はいたんじゃ？」
「そうだよね、一応は」
連合にも実際にそうした話はあった。父母である先代の国王が何らかの事情で王の責務を遂行できなくなった場合にだ。王位に就いてである。
「それ考えたら普通？」
「王様に関しては」
「そうなる？」
皆このことはとりあえず納得はできた。
しかしである。ふと気付いたのは王国である琉球人のダンであった。
「いや、待て」
「待てって？」
「何かあるの？やっぱり」
「あるから言う」
こう皆にも話すのだった。

第二百十五話　マウリア映画その七

「連合ではどの君主も立憲君主だな」
「常識じゃないの？それってね」
「なあ」
「普通は」
「エウロパでもそれは同じだ」
ダンはエウロパについても話した。実際にエウロパでもそれぞれの国の国王なり大公は国家元首でしかない。政治に携わることはないのだ。
「しかしマウリアは」
「そういえばマハラジャも政治するんだっけ」
「藩王領によるけれど」
「そういえばそうだよね」
「ということは」
ここまで話してそれで気付いたのだった。
「赤ん坊が政治をするってこと？」
「それできないでしょ」
「そうだよね、絶対に」
「子供が政治をするっていうのは」
「はい、できません」
それはセーラも話すことだった。
「ですからその場合にはです」
「摂政だな」
ダンはここでまた言った。
「それが置かれるのか」
「摂政は御存知なのですか」
「一応連合にも存在しているからな」
「そうですか。連合にもですか」

「そうだ、いる」
再びセーラに対して話す。
「王様が動けなくなった場合に後継者が代行して政務を行うのだが」
「マウリアでは少し違うみたいだよね」
「そうよね。何かニュアンスから」
「それを感じるけれど」
「はい、マウリアではです」
そのセーラがマウリアの摂政について話す。
「マハラジャの親族や有力者が就任しそのうえで後見人として国政を司ります。そうなっています」
「何か昔の摂政なんだ」
「連合みたいに実質的なんじゃなくて」
「実際の摂政なのね」
皆は連合の視点から考えてそれで理解したのであった。
「成程ね」
「そういうことか」
「それで生まれた時からマハラジャでも問題はない」
「そういうことなんだ」
「マウリアでは議会がある藩王領とない藩王領があります」
セーラはごく自然に話す。
「あったとしてもマハラジャの力は強いです」
「マウリアの国家システムって結構複雑？」
「確かに」
「今一つ理解できないところがあるけれど」
「難しいよね」
「そうよね」
皆ふと考えて思ったのだった。マウリアは連合の様に全ての国や地方政府に議会があり完全に民主主義が浸透してはいないところがあるのだ。これは地球にあった頃から同じである。
「ううん、専制国家もあるんだ」

「議会がない場所も」
「何か凄いよね」
「連合じゃそういう国はないし」
「やっぱり連合とは違うね」
あらためてこのことを強く意識することにもなった。
そのマウリア人のセーラがまた話す。
「ですから生まれたその時からマハラジャでもいいのです」
「摂政がいるからこそ」
「問題はその摂政がどういう人からだけれど」
「やっぱりそれは人それぞれ？」
「そうなる？」
「はい、摂政の良し悪しはマハラジャの良し悪しと同じです」
セーラ自身もこう話す。
「そうなります」
「ううん、昔の王政みたい」
「っていうかそのまま？」
「そうだよね」
皆セーラの話からこう思うのだった。

第二百十五話　マウリア映画その八

「というか議会ないところもあるんだ」
「っていうと専制だよね」
「そうなるわよね」
「マウリアではそうしたシステムも残っています」
また話すセーラであった。
「それがマウリアです」
「専制っていったら悪いように聞こえるけれど」
「それは違うの？」
「そんな風に聞こえるけれど」
「悪いのでしょうか」
逆に問い返すセーラだった。
「専制は」
「ええと、そう言われると」
「民主主義だからね、連合は」
「政府と議会は絶対にあるし」
「それと裁判所も」
所謂三権分立である。立法、行政、そして司法である。この三権分立はこの時代でも健在であり連合でもエウロパでも必ずあるものだ。
だがマウリアでは違う。それがセーラの話からわかるのだった。
「サハラじゃ独裁者が全権握ったりしてたりね」
「あるよね、それ」
「ヒトラーとかスターリンみたいに」
サハラではそうした国家も存在していた。そういう国なのだ。
「けれどマウリアも？」
「ああした独裁者いるの？」
「やっぱり」

「専制王制と独裁者は違います」
セーラはそれは否定した。
「マウリアには独裁者はいません」
「あれっ、専制なのに？」
「独裁者じゃないの？」
「そうなの？」
「確かに議会はありませんが法律はあります」
それはあるのだという。
「そして常に中央政府や国民のチェックが入ります」
「的確に政治が行われているか」
「それはなんだ」
「ちゃんと」
「若し問題のあるマハラジャなら退位させられたりもします」
そうなるというのである。
「そして一族から別のマハラジャが立てられます」
「若し一族がその人以外にいなかったら？」
こう問うたのはパレアナだった。
「その場合はどうなるの？」
「養子縁組がされます」
それがあるのだという。
「他の家からです」
「ああ、そうなるの」
「マハラジャの家は途絶えさせてはなりませんので」
この辺りの事情もあるのだった。王家というものはそうした続けさせるということも仕事のうちなのだ。養子縁組もその手段の一つなのだ。
「ですから」
「成程ねえ」
「そうして続けさせる」
「日本の大名とか欧州の貴族と同じね」

「そうね」
皆特に日本の大名を思い出した。
「話を聞くとね」
「何かね」
「似てるね」
「あんな感じなのかな」
「はい、その通りです」
セーラは大名という単語に反応を示してきた。
「議会のない藩王領は江戸時代の日本の大名と同じです」
「大名だったんだ」
「そう考えると専制君主じゃなくて」
「殿様？」
「そうだよね」
「中世欧州の貴族達とはまた違います」
そうした存在ではないというのだ。
「マウリア政府の法律には従うよう決められていますしマハラジャといえど何かと従わなくてはならない取り決めが色々とあります」
「ついでに言えば生活厳しいとか？」
「日本の大名みたいというと」
大名の暮らしは厳しかった。質実剛健で不自由そのものであったのだ。

第二百十五話　マウリア映画その九

「参勤交代みたいなのあるとか」
「やっぱり」
「参勤交代はないです」
それはないというのである。
「ただ」
「ただ？」
「何かと散財することになります」
それはあるのであった。
「マハラジャは私財を投げ打ってでもことをしなければなりませんので」
「それ法律で定められてるの」
「議会のない領のマハラジャはさらに」
そうだというのである。
「そして中央政府が観ていますので」
「無体はできないんだ」
「確かに大名だよね」
「そういうのって」
「確かに」
皆ここまで聞いておおよそのことがわかった。
「マハラジャっていっても好き勝手できないんだね」
「それは誰にもできません」
マハラジャだけではないというのだ。
「無法はマウリアでも許されないことです」
「まあそうだけれどね」
「法律は絶対だし」
「それはね」
皆それは納得できた。

「というかマウリアの法律ってやっぱりあれかな」
「ヒンズー教の影響強いのかな」
「牛は食べたら駄目とか？」
「そういう感じ？」
「牛については法律では定められてはいません」
それはないというのである。
「ヒンズー教の影響もありません」
「あっ、そうなんだ」
「それはないんだ」
「確かにヒンズー教徒はマウリアでは多いです」
マウリア人の殆どがヒンズー教徒である。これは事実だ。
「ですが他にも多くの宗教が存在していますので」
「イスラム教にキリスト教にジャイナ教？」
「それとゾロアスター教？」
「あと仏教？」
こう話すとだった。しかしである。
ここでだ。セーラは言うのだった。
「いえ、仏教は」
「あるよね、マウリアにも」
「信者の数は少なくても」
「仏教はヒンズー教の一派ですから」
そうだというのである。
「ですから仏教は入りません」
「この考えがわからないっていうか」
「何故仏教がヒンズー教の一派？」
「どうしてそうなるのかが」
わからないのであった。連合の人間である彼等にとってはだ。
その一同にだ。セーラはまた話してきた。
「釈迦如来はヴィシュヌ神の生まれ変わりの一つですので」
「それ公式？」

「公式に言われてるの？」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのである。
「それでなのです」
「ううん、そうだったの」
「公式に言われてるんだ」
「お坊さんもびっくり」
実際に連合の仏教の僧侶がそれを聞いてだ。目を丸くさせてしまったことがある。連合においてはこの話は想像の外のものなのだ。
「マウリアって何か」
「よくわからないけれど」
「あれっ、そういえば」
ここでネロが映画を観る。するとであった。

第二百十五話　マウリア映画その十

何故か仏像が出ていた。その仏像は。
「あれってヒンズー教の像なんじゃ」
「だよねえ、あれって」
「どう見ても」
「何故仏像がいきなり多量に出て来るかわからないけれど」
「しかも踊ってるし」
またしても主人公及びヒロイン達と共に踊っているのである。
「何でヒンズー教の像？」
「まさかと思うけれど」
「ですから仏教はヒンズー教の一派です」
またこう言うセーラであった。
「ですから。あの像でもいいのです」
「ううん、何か全然理解できないし」
「そうよね」
「あの踊ってる仏像って何処から出て来たのかな」
「どっからともなく急に出て来たし」
しかも野外で二人と一緒に踊っている。周りは百花繚乱だ。
「これって本当に豊穣の海？」
「極楽浄土の世界？」
「何が何だか」
「はい、豊穣の海です」
セーラだけが言う。
「それ以外の何だというのでしょうか」
「全然豊穣の海に見えないし」
「これじゃあ金閣寺とかどうなるのかな」
「想像できないけれど」
「こうなりますが」

言いながら出してきたのはその金閣寺の一枚の写真であった。何とそこにあったのは黄金に輝くタージ＝マハールであった。
「これですよね、金閣寺」
「ええとね、これってね」
「タージ＝マハールだから」
「それ以外の何でもないし」
「ちょっと」
皆目が点になっていた。
「黄金なだけで」
「全然金閣寺じゃないんじゃ」
「忠実に再現しました」
だがセーラはこう主張する。
「如何でしょうか」
「どう突っ込んでいいのかな」
「だよねえ」
「もう言う気力がなくなってきたし」
「私も」
皆少しずつ疲れてきていた。
「マウリアのスケールというか凄さに」
「どう観ても三島の世界じゃないし」
「この映画だって」
映画を観ても疲れるのだった。
「二十時間あるし」
「何でそんなにあるのかも知りたいけれど」
「四部を一作にまとめるのは」
「マウリアでは普通ですが」
セーラだけが疲れを見せていない。全く平気といった顔である。
「それは」
「じゃあニーベルングの指輪も一気に観るとか？」
「まさかと思うけれど」

「あの大作も」
「私は今まで十回あの作品を観ました」
そのニーベルングの指輪をなのだという。
「ですが四回に分けて観たことはありません」
「じゃあ一回で？」
「あの作品を一回でって」
「それをいつもだっていうのか」
「はい、あの映画はそうして観るべきではないでしょうか」
今度は自説を述べるのであった。
「十五時間位なら一気に」
「いや、それはないから」
「十五時間一気にっていうのは」
「それに」
さらに話す。二年Ｓ１組のマウリア出身者以外の面々でだ。
「あの作品って一作一作長いよね」
「ジークフリートとか四時間以上あるし」
「ラインの黄金でも二時間半はあるよね」
「全部で十五時間」
「一日で観られる気力体力は」
普通の人間にはない。少なくともそうおいそれと聴ける作品ではない。ワーグナーの作品は一作一作がそうなのであるが特にである。

第二百十五話　マウリア映画その十一

「ないよなあ」
「ちょっと以上に」
「有り得ない」
「連合じゃとても」
少なくとも連合では十五時間一気に観られる人間はいない。
「けれどマウリアじゃ違うんだ」
「一気に観るんだ、あの指輪を」
「よく気力体力が続くよな」
「本当にね」
「ああ、それはですが」
だがここでだ。ラメダスが一同に話してきた。
「お嬢様だけです」
「セーラだけ？」
「そうだったの」
「この娘だけだったの」
「そうです。やはりあの作品を一気に観るというのはです」
ニーベルングの指輪のことだ。その十五時間あるものだ。
「無理があります」
「まあそうだろうね」
「普通の人には無理だよね」
「とても」
「この映画にしてもです」
その豊饒の海の話だ。
「四回に分けます」
「やっぱりそうなんだ」
「四回に分けて観るんだな」
「普通は」

「はい、しかしお嬢様はです」
セーラはだというのである。ラメダスはさらに話していく。
「それを一気に観られるのです」
「つまりセーラだけなんですね」
「そうなんですね」
皆このことを確かめた。ラメダスに対して。
「普通の人は四回に分けてですか」
「観るんですか」
「一作辺り平均五時間ですが」
二十時間の作品を四回に分けるとだ。丁度いい数字になる。割り算でも初歩の初歩である。だがこれはあくまで算数においての話だ。
「それなら観られますね」
「まあ相当な覚悟があったら」
「全部観られますけれど」
「その四部作も」
実際そこまでの大作になると四回に分けようが何をしようが観るだけで大変であった。実にかなり難しいことであるのである。
「四回に分けてでも」
「けれど一応は観られるかな」
「何とか」
「マウリア映画って長いけれど」
このことには定評があった。
「七時間の映画とかありますよね」
「五時間もざらなものとか」
「ありますよね」
「はい、それはあります」
ラメダスは今度はマウリア映画の上演時間について話した。
「七時間が最長ですが」
「それが普通は一番長いんですか」
「七時間が」

「普通はですよね」
「お嬢様の気力体力は普通人よりも上です」
ラメダスの話はセーラについてになると常識を超越したものになっていた。それは何故かというとだ。セーラ自身に原因があった。
「幼い頃より修行を積まれてきましたから」
「修行のせい」
「それでなのですか」
「はい、修行の結果です」
ラメダスの話がさらに破天荒な方角に飛んでいっていた。
「その結果気力体力は普通の人の十倍はあります」
「十倍って」
「殆ど超人なんだけれど」
「そこまでいったら」
皆その数字に唖然となる。口で言うのは一言だ。だが実際にはそうではない。十倍というものはそれだけのものがあるからである。
「っていうかどんな修行?それって」
「普通の人の十倍の気力と体力が備わるっていうのは」
「はい、アストロ球団に学びました」
そのセーラの言葉だ。
「巨人の星やタイガーマスクにも」
「漫画?」
「それも日本の古典の?」
どの作品も日本のスポーツ漫画として古典になっている。とりわけ巨人の星は日本人なら誰もが知っている古典なのである。

第二百十五話　マウリア映画その十二

「そうした漫画を見て」
「それで修行を」
「あの大リーガー養成ギプスもしました」
巨人の星の話である。
「他には鉄下駄も履きましたし」
「ああ、それは柔道一直線」
「それをしたの」
「毎日幼い頃より修行を欠かしていません」
こんなことも言う。
「魔術を極める為には」
「気力体力を備えて？」
「魔術を行う為にはそういうのも必要なんだ」
「本を読むだけじゃなくて」
「はい、そうです」
またその通りだと答えるセーラだった。
「魔術を使うにはその都度かなりの気力と体力を消耗しますので」
「そこまで？」
「そんなに気力と体力を使うんだ」
「そんなに」
「はい。ですから修行は欠かせません」
セーラは映画を観ながら一同に話す。
「そういうことなのです」
「魔術って難しいんだな」
「そうよね」
「話を聞くと」
「では映画の後で」
その二十時間の上映時間の豊穣の海を観ながらの話である。

「そのことをお話したいのですが」
「大体魔術って実際にあるなんて」
「錬金術もあるみたいだし」
「非科学的？強いて言うなら」
「そうだよね」
「科学は一つの手段に過ぎません」
セーラは科学についてはこう言うだけだった。
「人類の発展の手段の一つに過ぎないのです」
「まあ科学万能主義も古いけれど」
「二十世紀の遺物だけれどね」
「それは」
この時代では連合でも科学万能主義は卒業されている。所詮人類の世界において絶対のものや万能なものは存在しないのである。
「けれど科学と魔術は同じ？」
「錬金術も」
「同じ場所にあるんだ」
「元は同じですし行き着く先も同じです」
冷静な言葉だった。
「人類の繁栄です」
「そしてその環境も」
「動物や植物達も」
「科学ではできないこともあります」
セーラはとにかく科学についてはこう言うのであった。
「化学や医学、工学もです」
「それを言ったら魔術もだな」
ダンは話の中枢を指摘した。
「万能ではないな」
「はい、その通りです」
セーラもダンのその指摘にすぐに返した。
「魔術もまた万能ではありません」

「えっ、万能じゃないんだ」
「セーラを見ていたらそう思えるけれど」
「そうじゃないって」
「そうなの？本当に」
「はい、魔術にもできないことがあります」
セーラは自分が専門的に行っている魔術についてもだ。実に冷静かつ客観的に述べていた。しかしこうも言うのであった。
「万能なのは神だけなのですから」
「その沢山の神様だけなのね」
「マウリアの」
「はい、しかし人は仙人から神になれます」
この話に戻りもしていた。
「ですから万能にはなれます」
「神になることで」
「話が壮大になってきたわね」
「宇宙は無数にあり無限の輪廻の中にあります」
マウリアの思想ではそうなっている。マウリア人は輪廻転生という思想を見出した人達である。その悠久の思想には多くのものも含まれるのだ。
「その中で神になるのです。ただ」
「ただ？」
「それで？」
「神は人にもなることがあります」
こんなことも言うのであった。

第二百十五話　マウリア映画その十三

「輪廻転生の中で」
「それってどういうこと？」
コゼットは今のセーラの言葉に首を傾げさせた。
「神様が人間になるって」
「人が神様になるのはわかるけれど」
「その逆ってないんじゃ」」
「そうだよね」
皆もこう話す。
「神様が人間になる」
「あるの？そんなこと」
「話がわからないけれど」
「ですから釈迦です」
セーラが話に出すのはその仏教の開祖である。
「釈迦は人間ですね」
「確かどっかの国の王子様だったっけ」
「そうよね、人間なのは間違いないわ」
「釈迦はヴィシュヌ神の転生の一つです」
またこの話になった。
「ですから。神は人にもなれるのです」
「お釈迦様がヴィシュヌ神っていうのも驚きだけれど」
「神様が人間に生まれ変わる」
「それって本当だったの」
「その他にはです」
話はそれで終わらなかった。セーラの話には続きがあった。
「クリシュナもラーマもヴィシュヌ神の転生です」
「ああ、マウリアの神話の英雄ね」
「その二人もだったんだ」

「はい、半分神ですが人ですね」
このことを強調して話される。
「そうですね」
「神が人間になる」
「ううん、最初聞いたら訳わからなかったけれど」
「そうなるんだ」
「凄く自然に転生するんだ」
「転生は常です」
セーラの話は完全に当然のことを話すものであった。
「この世の輪廻は。永遠のものですから」
「輪廻転生かあ」
「豊穣の海のテーマよね」
「その通りだよね」
今皆で観ているその二十時間の映画である。
「何か豊穣の海には思えないけれど」
「それでも輪廻転生はちゃんと描かれてるね」
「名前も違うけれど」
「名前は変わります」
セーラにとっては、いやマウリアではこれも大したことではないらしい。
「輪廻転生の度に」
「いや、劇中の人物と小説の人物の名前が違うんだが」
ダンがこのことを指摘した。
「誰がどう見てもマウリア人の名前だな」
「ええと、ラーマとシータ？」
「ラーマーヤナの二人？」
「それがどうかしたのですか？」
本当に素っ気無く返すセーラだった。
「どうということはないのでは」
「映画化とかアニメ化とかオペラ化で名前変わるのはよくあるけれ

ど」
七海は一応このことを話した。
「けれど何かここまでいくとね」
「別物にしか思えないし」
「また仏像の団体さんと一緒に踊ってるし」
「毎回毎回何処から出るのかしら」
「まあマウリアらしいわね」
七海はこうも言うのだった。
「これでいいとするべきかしら」
「そうよね、マウリアはマウリア」
「日本じゃないし」
「ジャパネスクを再現しています」
だが、だった。ラメダスは堂々とこう言い切った。
「おわかりになられませんか」
「全然」
「何処が？」
「完全にマウリアだけれど」
「日本は何処に？」
皆今のラメダスの主張は即座に全否定した。
「それを教えて欲しいけれど」
「そうよね」
「何処に日本が？」
「それは何処にあるんですか？」
「何処にもないようにしか思えないですけれど」
「ここです」
ラメダスはレーザーを出して画面の一点を指摘した。
「ここにありますね」
「ええと、仏像？」
「マウリアの仏像に？」
「これは日本です」

こう言うのである。
「表情をそうしています」
「そうは見えないですけれど」
「そうなんですか？」
「あの、マウリアのヒンズー教の神様達なんじゃ」
「おわかりになられませんか」
ラメダスだけが言う。
「これだけ日本を忠実に再現したマウリア映画はないのですが」
「本気で言ってるのかな」
「ラメダスさん嘘言わないしね」
「そういう人じゃないし」
皆いぶかしんだ。そのうえでだ。さらに話をするのであった。映画はまだ上映されまだまだ続いていた。終わる気配すらなかった。

マウリア映画　　完

２０１０・８・２４

第二百十六話　ジャパネスクその一

ジャパネスク

ラメダスは言う。
「日本はありますよ」
「そうなの？」
「そうかしら」
彼の言葉にその日本人の彰子と七海が首を捻る。
「それはとても」
「思えないけれど」
「そうだよな」
「これはな」
日系国家のアイヌ人であるカムイと琉球人のダンも言った。
「マウリアだな」
「日本は何処にも見えないが」
「いえ、こちらに」
しかしここでラメダスが指し示したポイントにだ。それがあった。
「これですが」
「卍？」
「それがか」
「はい、卍です」
見ればその通りであった。それは確かに卍であった。
「これは日本でお寺を表すものですね」
「ええ、そうだけれど」
「それが仏像の額に全部あるのね」
「そうです。これが何よりの証拠です」
こう話すのがラメダスだった。
「全ての仏像の額に入れています。日本風にです」
「これで日本風なの」

「それでなの」
「そしてです」
ラメダスの話はさらに続く。
「主人公達が飲んでいるお茶ですが」
「次はお茶か」
「それはどうなんだ？」
カムイとダンがラメダスに問うた。
「見たところカップはマウリアのものだよな」
「やはりマウリアじゃないのか」
「いえ、そのカップですか」
ラメダスはそのティーカップについても述べてだ。そうしてそのうえでだ。今度はレーザービームでティーカップを指し示して話す。
「御覧下さい」
「あっ、有田焼き」
「そうね」
彰子と七海はそのカップを見て述べた。
「じゃあつまりは」
「そのカップは」
「そうです、日本のものなのです」
こう話すのだった。
「そして中に入っているのはです」
「まさかと思うけれど」
「それも」
「日本のお茶です」
それであるというのである。
「抹茶です」
「抹茶を飲んでるの」
「そうだったの」
「細部にこだわっています」
ラメダスは堂々と述べた。

「そう、この映画は細部にまで日本を再現しているのです」
「ええと」
「何て言うか」
しかしであった。彰子も七海もその意見にはかなり引いていた。普段はおっとりとしている彰子もだ。どうにもいつものリズムを崩されていた。
「あの、ラメダスさん」
「これは日本じゃないですけれど」
七海も言う。
「これはどうも」
「違いますけれど」
「そうでしょうか」
しかしラメダスはこう言うのであった。
「これこそが日本です」
「んっ、そういえばヒロインの髪型は」
「そうだな」
カムイとダンは自分達で気付いた。
「日本の飛鳥時代の女官の髪型だよな」
「それだな」
二人はそれは歴史の教科書の絵で知っていた。
「まさかこれも」
「日本なのか」
「日本の歴史は長いです」
彼はまた言った。
「ですから何も江戸時代だけを再現すればいいのではありません」
「まあそうなんだけれどな」
「それはな」
二人もそれは認めた。
「けれどな。何か違うよな」
「ああ。今度は軍人が出て来たな」

その軍人達も問題だった。

第二百十六話　ジャパネスクその二

「この場面で軍人出て来たか？」
「しかもあの軍服は」
ダンが言う。
「あれはこの前までの日本軍の軍服じゃないのか？」
「そうだよな。あれはな」
「ああ、この時代の軍服じゃないだろ」
また話す彼等だった。
「それはいいのか？」
「違う筈だけれどな」
「それは大した問題ではありません」
指摘されても全く動じないラメダスだった。
「全くです」
「あの、この時代って滅茶苦茶前ですよ」
「千年単位でなんですけれど」
「それで大した問題じゃないんですか？」
「しかも全く」
「はい、全くです」
ラメダスだけが動じていない。
「千年なぞ。神の時間では」
「あの、それを言ったら」
「もうとんでもないんですけれど」
「人がほんの十回輪廻転生する位の時間ではありませんか」
造作もなく言った言葉である。
「それで大した問題なのでしょうか」
「ええと、人が十回ってだけでも」
「壮絶なんですけれど」
「何て言いますか」

皆流石に今の言葉には唖然となった。ここでもだ。
「ですから。人間の単位で時間を考えると」
「連合の時間ではですけれど」
「もう千年単位っていったら気が遠くなりますから」
「マウリアじゃそうじゃなくてもです」
「文化の相違ですね」
ラメダスはたった一言で片付けてしまった。
「これこそが」
「この人本気だしなあ」
「しかも天然じゃないし」
これもまた問題であった。
「マウリアの本気は連合じゃ天然という限度を超えてるっていうけれど」
「ここまで至るともう何か」
「異次元っていうか異世界っていうか」
「実際に僕達今は異次元空間にいるけれど」
「それでも」
こうした話もする。そのうえでまた映画を観る。すると今度はである。源平の争いの頃の鎧兜と来た侍達と僧兵達、そして忍者達が一度に出て来た。何処からともなくだ。
そしてである。またしても主人公、ヒロイン達と踊る。何の脈絡もなくだ。
皆流石にもう覚悟を決めていた。それでもセーラ達に対して問うた。
「これもジャパネスク？」
「日本風？」
「そうなの？」
「はい、日本です」
今度はベッキーが答える。堂々と胸を張って。
「侍と忍者だけではありません。これこそがです」

「ああ、僧兵ね」
「それもなのね」
「そういうことなんだ」
皆僧兵の存在から一応それはわかった。とはいっても納得したわけではない。
「それで三つ同時に踊ってるんだ」
「侍と僧兵と忍者が」
「絶対に日本じゃない氷山のど真ん中で」
「成程」
「奇麗な氷山ですね」
ベッキーはこれだけで済ませる。
「日本にもこうした場所はありますし」
「地球にはないぞ」
ダンが突っ込みを入れた。
「地球の日本にはないぞ」
「ですが今は氷山がある惑星も多いですよね」
「しかし地球の日本にはない」
ダンはこのことをあくまで言う。
「絶対にだ」
「そうなのですか。それはまた」
「いや、それはまたじゃなくてだ」
ダンは諦めずに突っ込みを入れる。
「豊穣の海の舞台は地球なんだが」
「撮影はマウリアですから」
「だから地球なんだが」
話は見事なまでに噛み合っていない。
「何と言うべきなんだ」
「また大した問題じゃないって言うのは目に見えてるし」
「マウリアの人だしね」
「もうお決まりのパターンよね」

皆も既にわかっていた。

第二百十六話　ジャパネスクその三

「何ていうか。氷山の上で軽やかに踊る侍って」
「しかも刀や弓矢持って」
「スケートまでしてるし」
「あっ、三回転半ジャンプ」
それまでする侍がいた。見事な着地まで見られた。
「ううん、見事」
「マウリアってこうした芸当細かいけれどね」
「氷山だからアイススケートになってるわね」
「そこは考えてあるんだ」
「日本はアイススケートも凄いですから」
ベッキーはまたしてもこんなことを言い出してきた。
「それも忠実に再現したのです」
「鎌倉時代にアイススケートないんじゃ？」
「室町時代にも」
「当然戦国時代にも」
ある筈のない話である。
「ううん、女の人の武者や僧兵もいるし」
「くノ一もいるし」
「けれど衣装は男の人と一緒だよね」
「そうよね」
「マウリアでは肌は見せられません」
こうしたことはこの時代でも厳しかった。
「ですから日本映画や漫画やゲームの様なくノ一はありません」
「そうなんですか、それは」
「規制されるんですね」
「はい、だからです」
だからだというのだった。

「そういう衣装はありません」
「だからですか」
「マウリア映画もルールがあるんですね」
「ちゃんと」
「ヒンズー教は肌の露出に五月蝿いです」
まずはヒンズー教の戒律であった。
「そしてイスラムはさらにです」
「ああ、そういえばマウリアはムスリムの人も多かったですね」
「それも結構そういうの厳しいんですね」
「マウリアのムスリムは」
連合ではムスリムであっても普通に肌を見せる。そして酒もよければ豚肉もいい。アッラーに謝ればそれでいいというところがあるのだ。
「じゃあいつもヴェールですか？」
「それ着てるんですか？」
「あっ、そこまではいきません」
ヴェールはないのだという。
「ですが過剰な露出はしませんから」
「ううん、私ムスリムだけれど」
コゼットはインドネシア人である。インドネシアはこの時代でもイスラム教徒が多い、尚インドネシアにはヒンズー教も存在している。
「それでも水着とか普通にビキニ着るし」
「そうだよなあ」
「連合じゃそういうのこだわらないし」
「そうよね」
「全然ね」
「構わないっていうか」
「確かに」
しかしマウリアでは違うのだった。セーラがここで話す。

「私も水着は露出を抑えています」
「そういえば何か着物みたいな？」
「日本の海女さんみたいな服着てたような」
「水泳の授業じゃ」
「あれが私の水着です」
そうだというのである。
「肌をできるだけ見せないようにです」
「それでなんだ」
「成程、勉強になるわね」
「それがマウリア映画にも影響していて」
「それでなのね」
「はい、ですからくノ一は普通の忍者の装束です」
またこのことを皆に話す。
「それでなのです」
「そうなんだ。ただ」
「そうね」
「色はね」
皆今度は侍や僧兵やその忍者達の服を見る。見れば赤に青に黄色に緑に黒に紫に橙に白にだ。素晴しいまでにカラフルである。

第二百十六話　ジャパネスクその四

そのカラフルな侍や忍者達がだ。スケートをしているのである。無論主人公達も一緒で踊りながら陽気に歌っているのであった。

「壮絶っていうかカオスっていうか」

「もう何なのかな」

「服の色はいいんだ」

「どんな色でも」

「色は派手でなければ意味がありません」

ラメダスは自信たっぷりに断言した。

「そう、派手であってこそです」

「派手過ぎ？」

「ちょっとこれは」

「どう考えても」

「虹みたいっていうか」

「目がちかちかする」

「お花畑みたいな」

あまりにも色が派手で多彩でしかも入り乱れている。そういうのを見ているとだ。目が自然とちかちかしてきたのである。

「何か踊り長いし」

「もう十分？」

「それ位あるけれど」

「言い忘れていましたが」

また言うラメダスであった。

「上映時間二十時間はダンスを入れない時間です」

「えっ！？」

「今何て！？」

「ダンスを入れれば二十四時間になります」

つまりダンスの時間が四時間だというのだ。

「それだけありますので」
「一気に四時間増えたんですけれど」
「っていうかダンスに四時間ですか」
「そこまであるんですか」
「ダンスがなくては映画ではありません」
少なくともマウリアではそうなのである。
「ですから」
「ええと、まさに一日かけて上映って」
「最長の映画？」
「ギネスブック級なんじゃ」
「本当に」
「いえ、まだです」
だがここでだ。また話すセーラだった。
「七十二時間の映画もあります」
「・・・・・それ誰が作ったの？」
思わず問い返したコゼットだった。
「そんな映画って」
「私のお父様です」
セーラの血縁者、しかも実の父だというのだ。
「マハーバーラタです」
「ああ、あのマウリアの古典の」
「あれね」
マウリア最大の古典である。これは教科書にも出るので皆知っている。しかし読んだことがある人間はというとだ。連合の面々では一人もいなかった。
「あれの七十二時間」
「凄く長いけれど納得できるのがねえ」
「マウリアらしい」
「確かに」
「その作品はです」

ラメダスがまた話す。
「制作費は。連合の一国の国家予算分かかりました」
「はい！？」
「映画一つで！？」
「それだけなのですが」
「映画は芸術です」
そしてこんなことも言うのである。
「ですから幾らお金をかけようともです」
「ええと、セーラのお家ってそんなにお金あるんだ」
「連合の一国ってやっぱりそれなりのお金あるよな」
「小さな国でもね」
「結構。やっぱり国だし」
その分だけはあるというのである。
「ううん、何か凄いよね」
「っていうかシヴァ家ってどれだけお金あるのかな」
「相当あるのは間違いないけれどね」
「それでもどれだけあるんですか？」
「一体」
「わかりません」
返答はこれであった。
「それがどれだけあるのかは」
「えっ、わからないって」
「それだけあるって」
「そこまでお金持ちなのですか」
「計算したことは誰にもありません」
これまた随分な話である。少なくとも普通の家の話ではない。

第二百十六話　ジャパネスクその五

「気付けばあるものですから」
「お金のなる木があるっていうんだ」
「つまりは」
「映画会社だけでなく農園や様々な企業、それと株主配当もあります。他にも様々な収入が家全体にありますのでそれでなのですが」
「わからないんですか」
「そこまであるって」
「連合のお金持ちでもそんな家は滅多に」
「ないんですけれど」
「どうやったらそんなお金持ちになるんだか」
「一応表に出ている分だけです」
ラメダスの話がなにやら物騒な方向に向かった。
「確か裏になると」
「あの、裏って」
「まさかと思うんですけれど」
「あれですか？その」
「裏の社会とかですか」
「いえ、表に出る分の資産だけです」
こう説明するラメダスであった。
「裏は表の三倍はありますが」
「そこが元手かな」
「そういえばマウリアって裏のＧＮＰが表の三倍だったっけ」
「ああ、そんな噂あるわよね」
「そうよね」
実はマウリアと連合の予算の大きな違いがここにある。連合は中央政府もどの国もＧＮＰは表の分だけだ。しかしマウリアはそうではないのだ。

「ええと、確か表で普通にアメリカとか中国よりＧＮＰ上だし」
「それだけでも人類社会で一番国力が上だけれど」
それだけでかなりの国なのである。
「裏も入れたら」
「ううん、考えたくないまでの力があるっていうか」
「恐ろしい国ね」
「ええと、それで実際の人口が二千三百億？」
人口統計もあやふやな国であるのだ。
「それだけいるらしいけれど」
「実際にはもっといるんじゃないかな」
「いるかな、やっぱり」
「三千億とか？」
「そこまではいないと思います」
ベッキーが答える番だった。
「マウリアには」
「ああ、流石にそこまではいないか」
「やっぱりそこまではね」
「いないんだ」
「多分二千三百億よりも多いですが」
しかしそれはそれでとんでもない返答が来た。
「二千五百億でしょうか」
「二千五百億って」
「普通に五百億も人口統計に出ないって」
「やっぱり壮絶な国なんだ」
「大したことではありません」
またこの言葉が出て来た。
「人がそこにいることは神々が知っているのですから」
「いや、そこで話は終わらないし」
「七十二時間の映画とか」
「マウリアってどんな国なんだろう」

「何もかもが壮絶な国なのはわかったけれど」
「その七十二時間ですが」
ベッキーもまたそのマハーバーラタの映画のことを話す。
「踊りを入れると百時間になります」
「私はそれを休みなく最初から最後まで観ました」
ここでセーラも言う。とんでもないことを。
「やはり疲れますね、最後は」
「いや、百時間の映画鑑賞って」
「普通ないから」
「常識外れの数字なんだけれど」
「壮大であればあるだけそこにマウリアがあります」
セーラの話はここでも哲学めいたものになった。実際に哲学であるが。
「だからこそです」
「ううん、壮大かあ」
「壮大過ぎてもう理解できない範囲だけれど」
「合わせて百時間の映画って」
「前代未聞」
「そうだよね」
「もう無茶苦茶」
皆かなり唖然となっている。そしてであった。

第二百十六話　ジャパネスクその六

「それでその映画って」
「やっぱり人気あるの？」
「マウリアじゃ」
「あります」
あるというのである。
「それもかなり」
「あるんだ」
「ってことは観る人いるんだ」
「百時間の映画を」
「普通は一ヶ月に分けて観ます」
ベッキーがこう話す。
「そうします」
「まあ普通はね」
「通しで観られる時間じゃないし」
「っていうか百時間の映画なんて」
「よく作ったっていうか」
「それ自体も驚きだし」
「本当に」
皆驚きを隠せないものがあった。そうしてだ。
さらにだ。今の映画もであった。
「ええと、今どの辺り？」
「さあ」
「どの位かな」
皆その豊穣の海を観て話す。
「かなり長く観てるけれど」
「まだ終わりが見えないんだけれど」
「ええと、どの位？今で」

「半分位かな」
「はい、そうです」
また答えるセーラだった。
「今丁度その辺りです」
「やっと半分かあ」
「十時間かあ」
「かなり観た気がするけれど」
「まだそれだけ？」
「半分なのね」
皆あらためてその長さについて考える。
「マハーバーラタは百時間」
「ううん、もう何が何だか」
「そこまでいくとね」
「ピンとこないし」
「けれど実際にあるのよね」
パレアナが首を捻りながら述べた。
「百時間のその映画って」
「これですが」
ラメダスが何処からともかくＤＶＤのセットを出してきた。何と何十枚もある。少なくとも一作の映画のサイズではない枚数である。
「これがそのマハーバーラタです」
「これがなんですか」
「ええと、何十枚って」
「やっぱり百時間ですか」
「これだけのが」
「ディレクターカットのものもあります」
さらにあるというのである。
「それは二百時間あります」
「はい！？」
「二百時間！？」

「何ですかそれ」
「仮面ライダーでもそこまで長くありませんよ」
最初の仮面ライダーだ。全部で九十八話ある。
「確かあれで」
「一話二十五分だから」
「ええと、それで九十八話」
「それで五十時間もないし」
「それの四倍って」
「もう何なのか」
「勿論最長記録の映画です」
また言うラメダスだった。
「如何ですか、これは」
「っていうかどうやったら二百時間になったんですか？」
「どうやったらそこまで長くなるのか」
「それが疑問なんですけれど」
「オリジナルの話を入れました」
それでだというのだ。

第二百十六話　ジャパネスクその七

「マハーバーラタにラーマーヤナも入れました」
「えっ、ラーマーヤナもですか」
「それも入れて!?」
「それでなのですか」
「はい、そして」
さらにあるのであった。
「他のマウリア神話の伝承も入れましたので」
「それで二百時間ですか」
「ううん、もう何が何だか」
「っていうか本当にマハーバーラタなんですか?」
「撮影にどれだけかかったんですか?」
「五年です」
それだけだというのだ。
「そして費用は前にお話した通りです」
「ううん、超大作?」
「そんなレベルじゃないけれど」
「よくもそこまで」
「そうよね」
皆予算についても考えて言った。
「無茶苦茶なんだけれど」
「マウリア人って映画好きなんだ」
「そこまでするって」
「映画は文化です」
セーラは断言した。
「そうではないのですか?」
「いえ、その通り」
「それについては」

「もう何と言っても」
「その通りよ」
皆もそれは認めた。映画が文化だということはだ。この時代ではそう考えられているのだ。漫画やアニメにしてもそう捉えられている。
「ではそれにお金をかけるのはです」
「当然ってことかあ」
「つまりは」
「そういうことなんだ」
「はい、そうです」
これがセーラの言いたいことであった。
「ですからどれだけお金をかけても」
「いいんだ」
「それで」
「確かに収益がなければなりません」
それはだという。マウリアも資本主義である。資本主義ならば収益がなければ話にならない。理由は簡単で食べなければならないからだ。
「しかしそれでもです」
「お金はかけるのね」
「文化だから」
「それで」
「そうです。文化はお金をかけるものです」
セーラはこうも言い加えた。
「時としては」
「時と場合による」
「それはなんだ」
「お金はかけなくていい時もあると思います」
セーラはそれはわかっているかに思えた。ところがである。
「私のポケットマネーだけで充分な時も」

「セーラのポケットマネーで確か」
「テレビ番組作ってなかったっけ」
「何か特撮とか」
「今三本作っています」
ポケットマネーだけで番組を三つ作っているセーラであった。
「大したことではないですよね」
「充分過ぎる程大したことだから」
「普通はないから」
「ポケットマネーで番組制作は」
「それではですが」
周りの言葉に驚いてだ。こんなことも言うセーラであった。
「お小遣いで車を買うのは」
「それもないから」
「っていうかお金かけなくてもいいっていっても」
「元の規模が違うんだね」
「そうよね」
皆このことを再認識することになった。

第二百十六話　ジャパネスクその八

「セーラの場合はね」
「基本が違うかあ」
「持っているお金が」
「やっぱりお金持ちなんだ」
しかもかなりのものである。セーラ自身がそうなのだ。
「よく見れば着てる服だって」
「全部オーダーメイドなんじゃ？」
「そうよね」
「天然のシルクが基本だし」
着ている生地も半端ではなかった。
「シルクでも色々ランクあるけれど」
「セーラが着てるのって最上級よね」
「僕達が着てるようなのじゃなくて」
この時代絹も普通に着られるようになっている。蚕を殺さずに済むようになったしそのうえさらなる大量生産が可能になったからである。
「もう最高のシルクを最高の仕立てで着てるし」
「体操服だって普通じゃないし」
それもなのだった。
「とにかく半端じゃないよね、セーラって」
「何もかもが」
「そうでしょうか」
自覚はないセーラであった。
「私は別に贅沢は」
「はい、お嬢様はとても質素な方です」
「本当に」
だがラメダスとベッキーはこう言うのであった。

「日頃慎ましやかに過ごされておられます」
「そうなのですよ」
「そうなんですか？」
「本当ですか？」
皆あまりというか殆ど信じていない。
「ええと、基準は誰なんでしょうか」
「やっぱりマハラジャですか」
「そうした人ですよね」
「マハラジャともなればです」
ラメダスが話す。
「ダイアや黄金で散りばめた宮殿をポケットマネーで買うのですから」
「もう別世界だね」
「そうよね」
「ポケットマネーで宮殿って」
「しかもダイアに黄金って」
「どれだけ」
「それも幾つもです」
一つですらなかった。
「買いますから」
「ええと、連合の常識超えてるっていうか」
「普通じゃないし」
「ポケットマネーでって」
「何でそこまでできるのかしら」
皆それがわからなかった。連合の常識ではだ。
しかもだ。ラメダスはさらに話すのであった。
「誕生日のプレゼントに宮殿とかは」
「ありません」
「普通に常識じゃないです」
「ですから相続税とかは」

連合ではこれがあるのだ。相続税と累進課税は多少であるが存在している。かつての社会民主主義国家の様にかなりのものではないにしてもだ。

「何でしょうか、それは」

「うわ、そう来たか」

「ないんですか、相続税」

「じゃあ累進課税なんかも」

「あったかも知れませんが」

急にはっきりしないものになったラメダスの言葉だった。

「しかしそれでもです」

「それが問題にならない位の財産がある」

「どれだけ取られても平気」

「そうなのですか」

「マウリアは元々税率は高くありません」

それはないのだという。

第二百十六話　ジャパネスクその九

「二十世紀では納税者は全人口の一パーセントだったと言われています」
「本当にどういう国なんだろう」
「一パーセントって」
皆はそれを聞いても唖然となる。過去の話でもだ。
「それで国家運営していたんですか」
「国ができるんですか」
「できていました」
それもまたマウリアであった。その時はインドという国名であった。
「そうですから」
「とにかくマウリアが凄い国なのはわかりました」
「本当にあらゆる意味で」
「どうしてマハラジャがそこまでお金持ちなのか謎ですが」
これはどうしてもわからない連合の面々であった。
「会社を経営していても」
「それでもそれだけとは」
「どうしてなんですか？やっぱり領地からの収入ですか」
「それと資源の権益もありますから」
それもあるのだという。
「二十世紀のアラブの石油王と同じです」
「ああ、それでなんですか」
「それでそこまで裕福なんですね」
「ああいう感じですか」
「アラブの石油王とは比較にならない凄さですけれどね」
皆はこうも話した。
「何かマウリアって凄い国ですね」

「百時間の映画に贈りものやポケットマネーに宮殿に」
「それに魔術もあって」
「カレーも」
「マウリアは宇宙です」
またこう言うセーラであった。
「ですからそこには様々なものがあるのです」
「あり過ぎだよね」
「あり過ぎてカオスだし」
「訳がわからないまでに」
「もう無茶苦茶」
「理解するのが難しいよね」
「理解するものではありませんから」
セーラの気品のある優雅な笑みは変わらない。そういう笑顔を見るとだ。やはり彼女がマハラジャの家の姫だとわかるのだった。
その笑みでだ。セーラはさらに話す。
「感じ取るものです」
「マウリアはそうなんだ」
「そういえばマウリアに旅行に行った人って」
「何か極端にはまるか極端に否定するか」
「どっちかだし」
何故かそうなってしまうのである。
「何かはまる人ってね」
「もう何度もマウリアに行って」
「それで移住する人もいるよな」
「ずっとマウリアで暮らしてね」
「そうなるわよね」
「ということは」
ここから一つの結論が出た。
「マウリアってそこまで魅力あるんだ」
「じゃあいい国なんだ」

「統治形態もよくわからないところがあるけれどね」
「知事さんがいたりマハラジャがいたり」
マハラジャは王である。藩王であるのだ。
「それで大統領が国家元首で」
「一応共和制なのよね」
「確かね」
「それはね」
皆これは何となくわかった。
「連合でも中央政府は大統領が国家元首だけれど」
「帝国や王国もあるし」
「大公もいたりして」
尚帝国は日本とエチオピアのことだ。天皇は皇帝と同じとされそれで日本は帝国であると考えられているのである。
「それと同じ？」
「そうよね」
「連合と」
「そう考えればいいのかな」
「そうですね、そういうところは連合と同じですね」
セーラも話す。
「大統領と王様が共存しているのは」
「ううん、そう考えればいいね」
「そうだね」
「それだと」
皆頷くのであった。そうしてだ。
あらためて映画を観る。確かにそれは長い。
「長いけれどね」
「それでもね」
「面白いよな」
「うん、面白い」
面白いのは間違いなかった。確かにだ。

「ダンスもいいしね」
「マウリア映画って長いけれど面白い」
「本当にね」
こう話すのであった。皆そのマウリア映画を見てだ。そうしてその面白さを堪能していた。それは長いが確かに面白いものだった。

ジャパネスク　　完

2010・9・1

第二百十七話　イエロージャナリズムその一

イエロージャーナリズム

ナンシーは新聞部員である。それで色々な記事を書いている。
「八条スポーツ相変わらずだな」
「ああ、無茶苦茶な記事だな」
「今度は宇宙人かよ」
記事の一面に宇宙人の話が出ていた。
「この前は学校にメロンが手足を生やして歩き回っていたって記事だったしな」
「ジャックランタンまんまのくり抜きの顔のメロンがなあ」
「小さい手足を生やして」
ここで過去の八条スポーツが出た、見ればそこにそのメロンの化け物が出ていた。確かにジャックランタンの顔のメロンに小さな手足がそのまま生えている。漫画に出て来るようなものだ。
そしてだ。今日の一面はだ。
「ううん、エルビス星人？」
「何、今度の宇宙人って」
「一体」
「ああ、それね」
ナンシーがここで話す。
「それM八五星雲にいるのよ」
「何処、そこ」
「M八五星雲って」
皆まずそこから突っ込みを入れた。
「はじめて聞く場所だけれど」
「そこ何処なのよ」
「宇宙にあるの？」
「そうよ。光の国の向こうにあるのよ」

こう話すナンシーだった。
「そこから来た宇宙人なんだよ」
「ううん、そんなのいるんだ」
「宇宙って広いな」
「本当にね」
皆まずはその話を聞いた。一応はである。
「それで何？」
「何で連合に来たの？」
「侵略？それとも使節団？」
「何でなの？」
「ああ、観光なのよ」
それだというのである。
「それで来たのよ」
「観光って」
「何か拍子抜けするなあ」
「宇宙人なら侵略じゃないの？」
「ねえ」
皆ここで力が抜けた声でナンに問い返す。
「やるとしたら」
「それで観光って」
「何か違うんじゃないの？」
「侵略って。連合で侵略ってある？」
だがナンシーはその皆にこう返すのだった。
「今時」
「ないけれどね」
「だって。侵略しなくてもいいものは一杯手に入るし」
「お金さえあれば」
「開拓すれば」
連合はまさにそうした社会である。それだけで手に入るのである。
「じゃあそのメトロン星人も？」

「キュラソ星人じゃなかったっけ」
「エルビス星人よ」
訂正を入れるナンシーだった。
「エルビス星人だって同じよ。だから観光で連合に来たのよ」
「この青い肌で派手な服の人がね」
「リーゼントの」
見ればである。外見はあの伝説の歌手エルビス＝プレスリーそのままである。それに青い絵の具を塗ったような。そんな姿であった。
「宇宙人なんだ」
「成程ね」
「わかったでしょ」
こう返すナンシーだった。
「これがそのエルビス星人よ」
「どっかで見た宇宙人だけれどな」
「第三演劇部の二年のカワッセじゃないの？これって」
「あっ、確かこの顔って」
「あいつだよね」
皆正体を見破った。
「あいつだよな」
「スタイルといい顔といい」
「絵の具塗っててわからないけれど」
「あいつじゃない」
「気のせいよ」
こう言い切るナンシーだった。
「そんな筈ないじゃない」
「いや、これってな」
「そうよね」
「やっぱりカワッセだし」
「見れば見る程」
「宇宙人なのよ」

ナンシーはどんなに劣勢になっても力説する。

第二百十七話　イエロージャナリズムその二

「青い肌の人間とかいないでしょ」
「いや、だから絵の具でしょ」
「そうなんでしょ」
「これって」
「あくまで話を聞かないのね」
憮然として返すナンシーであった。
「私はこう言ってるのに」
「ううん、あくまで宇宙人だと言うのね」
「あんたも言うわね」
「大体八条スポーツだろうが」
フックがこのことを指摘した。
「そうだろ？これって」
「うん、そうだけれど」
これはナンシーも認めた。はっきりとだ。
「それがどうしたの？」
「八条スポーツは書いている内容全部嘘じゃねえかよ」
「嘘っていうのね」
「一面に堂々と嘘を書く新聞だろうが」
そうであるというのだ。
「そうじゃないのか？」
「それは気のせいよ」
しかしナンシーは澄ました顔で話す。
「それはね」
「じゃあこの宇宙人もか」
「そう、エルビス星人ね」
「いるっていうのかよ」
「だからいるって言ってるじゃない。観光で連合に来てるのよ」

「ウルグアイ領ビクトリーノ星系にか」
「そうよ、そこにね」
その来た場所まで話される。
「そこに来たのよ」
「強引だな、全く」
「そうそう、それでだけれど」
ナンシーはさらに話すのであった。
「八条新聞だけれど」
「何かあったのか？そっちは」
「スポーツ担当なのよ」
それだというのだ。
「それで今は野球の記事書いてるけれど」
「そうか、頑張れ」
「そうじゃなくてよ。最近学校の注目の選手を探してるけれど」
フックの言葉にこう返す。
「誰か知ってる？それで」
「ああ、野球か」
「そうよ。誰か知ってる？」
「一応な」
知っていると答えるフックだった。
「第二工業部の野球部でな。外野手でいいのがいるぞ」
「第二工業部なのね」
「ああ、第二工業ブラックソックスだ」
チーム名まで話される。
「そこの一年生でな。外野手でな」
「何て名前の子なの？」
「確かスター＝ガンとかいったな」
「スター＝ガン選手ね」
「ああ、そうだよ」
こう話すのであった。フックはナンシーにさらに話す。どうやら

その外野手のことをかなり知っているようである。そしてその選手は。
「強肩俊足でな」
「ふんふん、それで？」
「守備範囲もかなり広くてな」
「センターかしら」
「ああ、そうだ」
肩と足、それに守備を聞いてだ。ナンシーはすぐに察した。
「センターだ」
「それで他には？」
「パワーヒッターだ。打率は今一つだがな」
「ふうん、中々面白そうな選手ね」
「どうだ？取材してみるか？」
「ええ」
ナンシーはフックの言葉にすぐに頷いた。
「それじゃあ行って来るわね」
「そうするか。じゃあな」
「有り難う。今日にでも取材に行って来るわね」
「御前もそういうの色々と調べてるんだな」
「ジャーナリストは勉強よ」
こう答えるナンシーだった。

第二百十七話　イエロージャナリズムその三

「勉強しないと何にもならないからね」
「それで公平か」
「そういうこと。八条スポーツだって公平でしょ？」
「記事の内容は嘘ばかりだけれどな」
「だから嘘は書いてないわよ」
「じゃあホラだな」
こう返すフックだった。
「それだな」
「ホラってねえ。それは失礼じゃないの？」
「それか作り話か？」
「何か今日は随分つっかかるわね」
「気のせいだ」
「気のせいじゃないでしょ」
皆また突っ込みを入れる。
「この新聞はねえ」
「一面に嘘ですって書いてるようなものだし」
「まあネタだしね」
「普通にね」
「ちゃんと膨大な資料を綿密な検証に基づいて記事を作ってるわよ」
まだ言うナンシーだった。
「真面目に作ってるわよ」
「真面目にお笑い新聞作ってるんだね、つまりは」
「そういうことね」
「だから。八条スポーツはね」
「じゃあ聞くぞ」
フックは言い続けるナンシーに対して問うた。
「御前が新聞部員でないとする」

「ええ」
「その場合御前はこうした記事を信じるか？」
問うのはこのことだった。
「その場合は」
「冗談でしょ」
ナンシーの返答はこうしたものだった。
「何処に宇宙人が出たりＵＭＡが学校に出たとかいう新聞があるのよ」
「そうだな」
「あからさまに嘘じゃない」
本人も記者としての立場を離れればこう言うのであった。
「大ボラ。まさにそれよ」
「言ったな」
「ええ、言ったわ」
「そういうことだよ。結局八条スポーツってのはそういう新聞なんだよ」
「けれど面白いでしょ」
「面白さだけを求めてるだろ」
「それが八条スポーツよ」
今度は居直る彼女だった。
「そういうことよ」
「何かな。凄い新聞だな」
「けれどよ」
ナンシーは真面目な顔でまた話す。
「この新聞で誰かが迷惑したとかはないでしょ」
「ああ、そういえばね」
「そうしたことはないわよね」
「一度も」
「八条スポーツはイエロージャーナリズムじゃないのそれとは違うというのだ。

「そして意図的に一方に肩入れする報道もしないの」
「つまり二十一世紀までの日本のジャーナリズムとは違う」
「そういうことね」
「そうよ。あれは反面教師よ」
当時の日本のマスコミはこの時代では人類の恥とまで呼ばれている。権力を持ちそしてしたい放題をして暴利を貪ってきた彼等をだ。
タレントのプライバシーを暴き自身の気に食わない政治家をｈ某中傷し売国奴共を政権に就けた。しかもその売国奴達と思想を共にしていたのだから呆れた話だ。尚且つだ。
不況を連日連夜テレビで連呼して国民生活を圧迫した。それにより多くの自殺者も出たが連呼する本人は当時で億単位の報酬があった。これが悪質なジョークではなく歴史の事実なのである。
そのことはだ。ナンシーも言うのだった。
「あんなことはないから」
「まあ人間ならね」
「恥があったらね」
「そういうことはしないよな」
「確かにね」
「絶対にね」
皆もそのことには頷く。
「ナンシーって恥知らずじゃないしね」
「というか性格いい方だし」
「素直じゃないけれど」
「そうそう」
「な、何言ってるのよ」
褒め言葉には顔を赤らめさせるナンシーだった。

第二百十七話　イエロージャナリズムその四

「私は別にね」
「わかりやすいツンデレだよねえ」
「もうね。クラス一のね」
「すぐにわかるから」
「うう、何だってのよ」
言われて大弱りになっていた。
「全く」
「まあまあ」
「悪気はないからね、こっちも」
「からかってるだけで」
「やっぱり悪気あるじゃないの」
からかわれているということに反応しての言葉である。
「全く。私だってね」
「私だって？」
「どうしたの？」
「これでも皆を楽しませる為に記事を書いてるのよ」
そうだというのである。必死の顔でその両手を拳にしてだ。そのうえで力説するのであった。
「真面目な記事は真面目に。皆の為になるようにね」
「やっぱりいい奴なんだな」
フックが言う。
「というか絶対に嘘はつかないしな。誰がどう見てもわかる駄ボラは書いてもな」
「まだ言うのね」
「言うぞ。とにかくな」
「ええ。とにかく？」
「そっちの方に行くんだな」

「野球ね」
「その第二工業ブラックソックスだ」
チーム名がまた話される。
「そこだ」
「わかったわ、そこね」
「それで選手の名前はだ」
「スター＝ガンよね」
「覚えているんだな」
「当たり前でしょ。っていうかね」
ここであるものをフックに見せてきた。それはだ。
メモ用紙だった。それを見せての話だった。
「はい、ここね」
「これか」
「そうよ。大事なことはいつもメモしているの」
こうフックに話す。
「こういう風にね」
「いいことだな」
「当たり前でしょ。新聞部よ」
ここでの顔は得意げなナンシーだった。
「そういうことにはちゃんと気をつけないとね」
「駄目か」
「そうよ、駄目よ」
やはり得意げな顔で話す。
「わかったわね」
「ああ、わかった」
その言葉に頷く。そのうえでだった。
この日の放課後だ。ナンシーはその第二工業科のブラックソックスに取材に言った。とはいっても彼女だけではない。
「あれっ、僕もなんだ」
「当たり前でしょ」

こうジョルジュに言う。ジョルジュは如何にも不満そうである。
「あんた写真部なんだし」
「写真部は新聞部の盟友だったね」
「新聞は写真あってのものよ」
ナンシーは真面目そのものの顔でこうジョルジュに言う。
「だから一緒に行くのよ」
「ううん、それでもねえ」
ジョルジュは項垂れながら話す。
「僕これから行くところあったんだけれど」
「何処よ」
「女子ソフト部の取材にさ」
それだというのである。
「それに行くつもりだったんだけれど」
「そこで女の子の写真撮るつもりだったのね」
「勿論」
答える顔は満面の笑みである。
「そんなの決まってるじゃないか」
「却下ね」
ナンシーの返答は一言だった。語るその眼鏡の奥の目も冷たい光を放っている。そのうえでの一言だったのである。

第二百十七話　イエロージャナリズムその五

「それは」
「何で却下なんだよ」
「あんた目を離したら女の子ばかりじゃない」
「女の子を写さないで何を写すんだよ」
「他にも色々あるでしょ」
ナンシーの言葉は呆れたものになっていた。
「あのね、あんたそんなに女の子が好きなの」
「勿論」
迷うことのない返答だった。
「そんなの決まってるじゃない」
「余計に却下ね」
「余計にって」
「とにかく一緒に行くわよ」
また言うナンシーであった。
「野球部の取材にね」
「ううん、第二工業科だよね」
「そうよ」
「工業科って男子が多いからなあ」
このことはこの時代になっても変わらないことだった。工業科はどうしても男の方が多くなってしまうものなのである。そしてその逆にだった。
「商業科だったらよかったのに」
「女の子が多いからね」
「女の子の方が華やかじゃない」
何処までも女好きなジョルジュである。
「だからさ」
「何度も言うから却下よ」

「ちぇっ、何か面白くないなあ」
「あんたが面白くなくても私は面白い記事を書くの」
「そんなの新聞部の都合じゃない」
「写真部は新聞部の盟友でしょ」
またこう言うナンシーだった。
「それじゃあわかったわね」
「わからなかったら行かなくていいよね」
「わかってもわからなくても一緒に行くの」
言葉がさらに強くなった。
「わかったわね」
「結局わかったことにするんじゃないか」
「そうよ、その通りよ」
今度は居直りの言葉だった。
「わかったら行くわよ」
「わかったよ、今度こそね」
ジョルジュも観念した。そうしてであった。
その第二工業科のグラウンドに行く。そこではだ。
黒いユニフォームの一団が練習をしている。二人はそこに入っていく。
「あの」
「あっ、はい」
「何ですか？」
「スター＝ガン君はどちらですか？」
ナンシーが部員達に尋ねる。
「何処にいますか？」
「ああ、あいつならですね」
「今ランニング中ですよ」
「学校の中を」
「ランニングですか」
それを聞いてだ。ナンシーはすぐに部員達にまた問うた。

「それじゃあですけれど」
「ああ」
「それで？」
「ランニングコースを教えて下さい」
こう尋ねるのだった。
「ガン選手のそのコースを」
「えっ、コースって」
それを後ろで聞いていたジョルジュが声をあげた。
「まさかと思うけれど」
「当たり前よ。追いかけるのよ」
ナンシーはこうそのジョルジュに返したのだった。
「今からね」
「えっ、そんな」
それを確認してだ。ジョルジュは嫌そうな声をあげた。

第二百十七話　イエロージャナリズムその六

「何でそこまで」
「記者として当然よ」
しかしここでナンシーは平然として言った。
「当たり前でしょ」
「当たり前って」
「だから。ジャーナリストは何なのよ」
「僕カメラマンだし」
「同じことよ」
「えっ、そうだったんだ」
「何を今更言ってるのよ」
ナンシーは眼鏡の奥のその顔を顰めさせて彼に言う。
「本当に今更じゃない」
「そうかな」
「そうよ。とにかくね」
「追いかけるのね」
「そういうこと。いいわね」
また彼に言う。
「それじゃあ行くわよ」
「やれやれ。まさかと思うけれど走るなんて言わないわよね」
「野球選手相手に追いつけとは言わないわよ」
流石にそれはなかった。
「自転車使うから」
「ああ、よかった」
「そうじゃないと追いつけないじゃない」
「それでも追いつくんだね」
「そう、それでね」
「それで？」

「走ってそれで取材するわよ」
そうするというのである。
「いいわね」
「走ってねえ」
「できるかどうかっていうのね」
「そうだよ。走りながらって」
「できるわよ。だっていつものことだし」
ナンシーはそれはどうということはないのだという。どうもその口ぶりからそれが日常茶飯事であることが窺える。そうであった。
「それって」
「いつもだったんだ」
「ああ、あんた最近私と組んでいなかったわよね」
「うん、避けてたから」
何気にこんなことも言う。
「実はね」
「何で避けてたのよ」
「だって。女の子のところに行きたいじゃない」
結局ジョルジュが言う話が辿り着く先はそこであった。
「ナンシーって基本的に男子スポーツだから」
「担当だから当然でしょ」
「他には何か文化とかでも。女の子絡まないしね」
「だから避けてたの」
「そういうこと。僕は女の子好きだからね」
「まあ私も女の子だけれどね」
ナンシーはふとこんなことも話した。
「っていうかこれ忘れてるでしょ」
「クラスメイトじゃない」
「クラスメイトなら何だっていうのよ」
「友達だよ。それにナンシーってもう付き合ってる相手いるよね」
「えっ・・・・・」

「いるでしょ、それ」
話がいきなり動いた。
「ちゃんと」
「えっ、そ、それは」
急にあたふたと狼狽しだすナンシーだった。
「あんた何でそれを、っていうかそんな相手はね」
「いないっていうの？」
「い、いる筈がないじゃない」
顔を真っ赤にして否定する。
「そんな筈が」
「顔に書いてあるよ」
「えっ！？」
「いるわよって」
微笑んで言うジョルジュだった。
「ちゃんとね」
「嘘、そんなことが」
「だからわかるって。新聞部と写真部じゃない」
「わかるって」
「そう、わかるから」
ジョルジュはまたナンシーに話した。
「まあ相手はね」
「相手はって」
「誰かはわからないけれど」
それは、なのだった。

第二百十七話　イエロージャナリズムその七

「それに僕もそこまでは興味がないし」
「若し興味があったらね」
「うん、その時は？」
「ただじゃおかないから」
本気の言葉だった。
「わかってるわね」
「ううん、物騒だねそれって」
「当たり前でしょ。そんなの知られたら絶対にね」
「嫌？」
「嫌に決まってるじゃない」
ナンシーの言葉は実に頑ななものだった。
「そんなのばれたら」
「彼氏いるのそんなに恥ずかしい？」
「恥ずかしいわよ」
顔を真っ赤にさせたままの言葉だった。
「恥ずかしいに決まってるじゃない」
「だからそんなに言うのがさ」
「何だっていうのよ」
「余計に駄目なんじゃないかな」
ジョルジュはその首を少し傾げさせてそのうえでナンシーに話した。
「大体ナンシーってあれだよ」
「あれって何よ」
「頑固っていうかね」
まずはそこから話した。
「素直じゃないし」
「そうかしら」

「そうだよ。クラスでもそうじゃない」
彼等のクラスでの話もするのだった。
「いつも口ではあれこれ言っても皆をフォローするよね」
とにかく素直ではないのがナンシーなのである。しかしそれでもである。皆が困ると絶対に助けるのが彼女の常なのである。
「誰かが困っていたらね」
「それは」
「そうだよね。そういうのがね」
「駄目だっていうの？」
「だから素直じゃないよね」
ジョルジュはナンシーのそうしたところを言う。
「それってどうなのかな」
「別にいいじゃない」
当のナンシーは口を尖らせて言い返す。
「だって。そのまま言うのって」
「恥ずかしい？」
「それはまあ」
「けれどそうやってもじもじしたり赤くなったりするとね」
「余計に悪いっていうのね」
「そういうこと。これは言っておくよ」
「話は聞いたわ」
一応はこう返した。しかしその口は尖ったままだ。
そしてその尖った口でだ。ジョルジュに返した。
「それじゃあだけれど」
「うん、行こうか」
「行くわよ」
こう彼に言う。
「いいわよね、それで」
「っていうか行かないと話にならないよね」
「取材だからね」

それは忘れていないナンシーだった。それはであった。
「それじゃあ行きましょう」
「やれやれ。ランニングの相手を追っかけるなんてね」
「待っていても何にもならないわよ」
こうしたことには直線的なナンシーであった。人間関係については曲線的であってもこうしたことには本当にそうであった。
そしてだ。彼女はまた言うのであった。
「だから行きましょう」
「わかったよ。それじゃあね」
「外野手だけれどどんな感じなのかしら」
ナンシーは自転車に乗りながらその取材の相手について考えていた。
「一体」
「スラッガーだったっけ」
「スラッガーでもありアベレージヒッターでもあるみたいよ」
「バッティング凄いんだね」
「それで守備もいいそうよ」
「ふうん、そうなんだ」
「強肩で。ただ」
しかしであった。ここでだ。

第二百十七話　イエロージャナリズムその八

「それでもね」
「それでも？」
「完璧な選手っていないから」
彼女が今言うのはこのことだった。
「だから欠点があってもね」
「そうだね。普通だよね」
「力があってバットに当てるのも上手い」
まずはその打撃を振り返る。
「守備がよくてしかも肩も強い」
「ここまでは完璧だね」
「けれどよ」
ここでまた言うナンシーであった。
「完璧な選手はいないのよ」
「そして完璧な人間もね」
「そう、いないから」
「じゃあその選手の欠点は」
「今からそれを見ることにもなるわね」
ナンシーは言った。
「ポジションは基本的にレフトだそうだし」
「レフトなんだ」
「守備はいい筈なのに」
「ということは」
「何かの問題があるのよね」
ナンシーはジョルジュも加えてそうして考えていく。
「やっぱり」
「守備と肩はいいんだよね」
「ええ」

それはその通りだと返す。
「そうなのよ。どっちもね」
「じゃああれだよね」
「あれって？」
「足だね」
ジョルジュが言うのはこのことだった。
「足だよ。そのスターって選手は足が遅いんだよ」
「そうなるのね」
「だってさ。守備も肩もよくて」
ジョルジュもこのことを頭の中に入れて話す。
「それだったらセンターとライトだよね」
「ええ、どっちかだよね」
「もっともブラックソックスの他の外野陣の守備の都合もあるけれど」
「あのチームのその外野だけれど」
ナンシーはそちらの話もする。
「相当レベル高いらしいわね」
「相当なんだね」
「そうなの。鉄壁の守備だって話よ」
「それでレフトっていうと」
ジョルジュはナンシーの話を聞いてそのうえで頭の中で考えていく。そうしてそのうえでだ。一つの答えを出したのであった。
「足が遅いとかしか考えられないね」
「そうなるわよね、結局は」
「野球の外野の守備はね」
ジョルジュも野球についてはまんざらではない。むしろ知識はかなりのものだ。そしてその戦略についても話すことができた。

第二百十七話　イエロージャナリズムその九

「まずはセンター」
「そう、扇の要ね」
「そこが一番よくて」
ボールが最もよく飛んで来てそのうえ守備範囲も広いものになる。
それでセンターには最も守備総合力が高い人間が入るのだ。
「それで次はライトだしね」
「左バッターとか右バッターの打ち遅れとか流し打ちがあるから」
「だからそこも大事だし」
「けれど」
ここまで話してであった。
「レフトはね」
「ボール案外来ないしね」
「サードとライトもいるし」
「だから外野で一番守備があれな人が入るってね」
ジョルジュはそこにもう一言付け加えた。
「内野とかバッテリーも入れた全部のポジジョンの中でもね」
「一番問題がある人がよね」
「ファーストよりもボールが飛んで来ないからね」
こうまで言うジョルジュだった。
「だから」
「ううん、それじゃあ」
「スター＝ガン選手の足って相当遅いのかな」
「そうかも」
ナンシーはジョルジュの話を聞いたうえで考えて述べた。
「それじゃあこのまま自転車で行ったら」
「結構簡単に追いつけるかもね」
「そうかもね。それじゃあこれからね」

「コースを辿ってだよね」
「ええ、行きましょう」
ジョルジュにあらためて話した。
「それでいいわよね」
「若し嫌だって言ったら？」
「許さないわよ」
その言葉には眉を顰めさせて返す。
「そんなのは」
「わかってるよ。それじゃあね」
「ええ」
「行こうか」
ジョルジュからも言ってきた。
「二人でね」
「御願いするわね」
こんな話をしながらその選手を追いかけるのであった。ただしだ。
二人一緒なのでだ。ジョルジュが能天気に言うのであった。
「何かね」
「今度は何よ」
「こうして自転車で走ってると」
本当に能天気な声だった。それが校内に響く。
「ピクニックみたいだよね」
「この場合はピクニックじゃないわよ」
「あれっ、そうなんだ」
「ツーリングでしょ」
そちらだというのであった。
「この場合は」
「ああそうか。自転車だからね」
「そうよ。ツーリングになるわ」
「それかサイクリングかな」
「どっちでもいいけれどピクニックじゃないわね」

「まあそれでもね」
そうしたことはどうでもいいとしてであった。ジョルジュはまたしても能天気で明るい言葉を出してそのうえでナンシーに話すのであった。
「いい感じだよね」
「自転車で走るのが？」
「うん、いい感じだよね」
こう話すのである。
「とてもね」
「ツーリング好きなの」
「自転車は嫌いじゃないよ」
こうナンシーに返すジョルジュだった。
「むしろ好きだね」
「そうだったの」
「じゃあ気分よくね」
今度はこんなことを言った。そして。
二人で取材に行くのだった。しかしそれはスキャンダルのはじまりであった。

イエロージャーナリズム　完

２０１０・９・８

第二百十八話　白々しいスキャンダルその一

白々しいスキャンダル

二人で自転車を駆けさせる。そしてだった。
目の前にだ。黒いユニフォームを着て走る選手が見えた。それを見てだった。
ナンシーはすぐにジョルジュに言った。
「彼ね」
「あれがなんだね」
「そう、スター＝ガン選手ね」
その彼だというのだった。そしてだ。
そのランニングを見てだ。ナンシーはこう言った、
「それにしても」
「遅いよね」
「ええ、かなり遅いわ」
「十五段階でどれ位かな」
「三位かしら」
そこまでだというのだ。
「そこまで遅いわね」
「それってかなりの遅さだよね」
「野球ゲームでも滅多にないわよ」
十五段階でそれはだというのだ。
「初期データでもね」
「つまり最初から最後までパラメータを回さなかったみたいな感じだね」
「そう、それか足を怪我したか」
「あれっ、じゃあ彼故障とかしたんだ」
「それはデータにないわ」
それは、であった。

「つまり元々ね」
「鈍足なんだ」
「あれじゃあね」
ナンシーの言葉は今度は納得するものだった。
「レフトね」
「あんまりにも足が遅いからだよね」
「幾ら守備と肩がよくても」
それでもであった。
「あの足じゃあね」
「守備範囲狭いだろうね」
「足って大事なのよ」
ナンシーはそのポイントを指摘する。
「特に外野と二遊間はね」
「そうだよね。足はね」
「サッカーもそうだけれど野球も足よ」
こうも話す。
「やっぱりね」
「ううん、そういうことだったんだ」
「完璧な選手はいないから」
ナンシーはこのことをかなり意識していた。
「パワーヒッターにしてアベレージヒッターでもね」
「それで守備と肩がよくてもだね」
「それでも欠点はあるものなのよ」
こうジョルジュに話す。
「これは野球に限らずにね」
「どのスポーツでもだね」
「勉強でもよ」
そちらもだというのだ。
「私だって。ちょっとね」
「ああ、物理苦手だったよね」

「数学は得意だけれど」
それでもだというのである。自転車で駆けながら難しい顔になっている。そのうえで隣にいるジョルジュに対して話をするのであった。
「それでもね」
「難しいんだ」
「難しいわ。どういう訳かわからないのよ」
「僕の場合は」
「地理よね」
「あれ駄目なんだよね」
ジョルジュもジョルジュで苦手科目があった。
「どうしてもね」
「わからないの？」
「覚えられないんだ」
それでだというのだ。地理は記憶科目である。社会科は全てそうだが。
「どうにもこうにも」
「連合の歴史は？」
「それはわかるんだけれど」
「そうなの」
「地理は駄目なんだ」
また言う彼だった。
「どうしてもね」
「それと同じよね」
「だからあの選手もなんだ」
「そう、足が遅いのよ」
もう自転車はかなり距離を狭めていた。これは二人の自転車が速いのではない。その選手の足があまりにも遅いからなのだった。

第二百十八話　白々しいスキャンダルその二

「鈍足ね」
「あれじゃあ外野厳しいよね」
「サードの方がいいのかも」
ナンシーはこうも言った。
「肩も守備もいいんだし」
「そうかもね。レフトでもあの足だと」
「辛いわ」
ナンシーは言い切った。
「あれじゃあね」
「レフトも動くからね」
「そりゃチームによってはとんでもないレフトもいるけれど」
悪い意味でとんでもないというのである。
「全然守れない人がね」
「それは昔からいるね」
「レフトは確かに守備では重要じゃないけれど」
「うん」
「それでも。彼は守備と肩はいいから」
「これだよね」
ジョルジュは携帯を取り出した。そこにはそのスター＝ガンの守備の映像があった。それを実際に彼の目で見てみるとであった。
「確かにね」
「上手いでしょ」
「普通にかなりの守備だよ」
ジョルジュはこうナンシーに述べた。
「打球反応は速いしグラブ捌きもいいし」
「安定してるわよね」
「うん、それに丁寧に守ってるしね」

見ればその守備はだ。真面目であった。
「それに肩だってね」
「凄いわよね」
「強肩だね。レフトの深い場所からホームまで一直線だよ」
「けれど足は」
その映像を見てだった。やはりであった。
「遅いね」
「そうでしょ。遅いでしょ」
「うん、遅いね」
打球反応はいいがだ。遅いのだった。足が遅くてだ。打球に間に合わない場面が見られるのだった。そこが大きな問題なのだった。
「ううん、それもかなりね」
「左右の瞬時のフットワークはいいのに」
これが打球反応だった。
「だからこれを見たら」
「見たら？」
「外野には向いてないわ」
そうだというのである。これがナンシーの見方だった。
「ここをどうかすることね」
「それじゃあ何処がいいかな」
「サードね」
そこだというのである。
「サードがいいわね」
「サードなんだ」
「守備も肩もいいから」
それがあった。
「ほら、ジャンプ力だって」
「あれっ、ジャンプ力あるね」
「そうでしょ？結構なものでしょ」
「うん」

丁度ジャンプしてキャッチする場面があった。上に来たボールをそうして捕球したのだ。その跳躍は確かにかなりのものがあった。
「こういうの見たらね」
「これで何でサードじゃないのかな」
「サードの人がまた凄いのよ」
「守備が？」
「そう、鉄壁の守備でね」
それでだというのだ。
「その人がいるから」
「そんなに守備が凄い人なんだ」
「天才よ。ショートはもっと凄いけれどね」
「ひょっとして第二工業科って守備凄いの？」
「滅茶苦茶凄いわよ」
実際そうだというのである。
「もう八条学園高等部じゃダントツかもね」
「そこまでなんだ」
「そういうチームだから。このスター＝ガン選手はね」
「足が問題になるんだね」
「例えばサードとレフトをコンバートして」
ナンシーはこんな考えも披露した。

第二百十八話　白々しいスキャンダルその三

「そうしていけばいいんじゃないかしら」
「それもいいかもね」
「私はそう思うわ」
実際そうだというのである。
「やっぱりね」
「成程ね」
そんな話をしていた。そうしてであった。
そのスター＝ガンに追いついた。そうしてであった。
「あの、新聞部の者ですけれど」
「写真部です」
まずはそれぞれ名乗って彼のところに来た。
「ランニング中ですけれど宜しいですか？」
「取材を」
「あっ、はい」
その彼は気さくに応えてきた。悪い性格ではないらしい。
「わかりました」
「はい、それじゃあ」
「御願いします」
こうしてランニングをしながらの取材をした。自転車に乗りながらだがナンシーは記事を取りジョルジュは写真を撮った。その動きは見事だった。
そしてだ。その時だ。ナンシーは彼に言った。
「あのですね」
「はい」
「スター＝ガン選手のフットワークですけれど」
さりげなくはじめた。
「凄く内野向きに思いました」

「そうなんですか」
「はい、そう思います」
「ですが僕は」
首を傾げさせるスターだった。
「外野ですしね」
「そうですか」
「けれど内野ですか」
「はい」
「わかりました」
それでもだった。ナンシーの言葉は届いた。そうしてであった。
「一度監督とお話してみますね」
「そうですね。それがいいと思います」
「わかりました」
こんなインタヴューだった。それからだった。
第二工業科ブラックソックスでだ。一つの動きがあった。
「コンバートしたらしいよ」
「サードとレフトでなのね」
「あっ、やっぱりわかるんだ」
「ええ、わかるわ」
にこりと笑ってジョルジュに返すナンシーだった。
「そうなると思ってたから」
「というかそう仕向けたんだね」
「適材適所よ」
ナンシーの次の言葉はこれであった。
「あの人の守備はサード向けだったから」
「サードは足の速さよりも打球反応だからね」
「強いボールがよく飛んでくるしね」
これはジョルジュもよくわかっていた。伊達に取材に出ている訳ではない。
「だからだよね」

「そう。彼の守備だとレフトよりサードよ」
「それであのチームの元のサードは」
「足も速いから」
もう一人のこともしっかりと見ているナンシーだった。
「結果的に守備はかなりよくなるわ」
「成程ね。それでなんだけれど」
「どうしたの？急に話を変えてきたけれど」
「これ読んで」
ジョルジュはあるものを出してきた。それは。
見ればそれは新聞であった。しかし八条スポーツではない。それとは別のだ。八条スポーツと並ぶお笑い記事で知られている新聞であった。
その一面に出ていたのはだ。
「・・・・・私じゃない」
「そうだよね」
「何で私が出てるのよ」
「というか記事見た方がいいよ」
こう勧めるジョルジュだった。
「はい、そこもね」
「って何よこれ」
写真から記事を見るとだ。それはナンシーにとってさらにショッキングなものだった。

第二百十八話　白々しいスキャンダルその四

「私が熱愛って」
「相手はね」
「誰よ、これ」
顔を顰めさせて言うナンシーだった。
「ええと、人間じゃないわよね」
「確か昔の特撮に出て来た宇宙人だけれど」
身体の色が赤と青でだ。首がなく頭の形は卵そっくりである。両手が何かびらびらとした指になっている。どう見ても人間ではなかった。
「それだよね」
「こんなの学校にいたら大騒ぎだけれど」
「それでも何か記事になってるよ」
「あのね、スキャンダルにしても有り得ないでしょ」
呆れた顔で言うナンシーだった。
「これが前の取材相手だったらわかるけれど」
「宇宙人が趣味だったんだ」
「そんな筈ないでしょっ」
今度は怒った顔になる。
「あのね、大体この宇宙人ってね」
「策略家だったよね」
「煙草に細工してそれで地球侵略を企てていたのよ」
「そうそう。日本風の家に住んでいてね」
「アパートだったわよね」
「それもかなり年代もののね」
この時代の人間から見ればそうなるのだ。
「そういう宇宙人だったよね」
「このシリーズの宇宙人はどれも卑劣だったけれど」

「この宇宙人は凄かったよね」
「頭脳派でね。それでだけれど」
「うん、それで」
「何でこの宇宙人なのよ」
話が元に戻った。
「全然理解できないんだけれど」
「心当たりは？」
「ある訳ないじゃない」
むっとして返した。
「だから宇宙人なんてね」
「八条スポーツより強引な記事だよね」
「しかも私を記事にするなんて」
「これ信じる人いるかな」
「貴方は信じるの？」
むっとした顔のままジョルジュに問い返す。
「まさかと思うけれど」
「まさか。それは幾ら何でも無理だよ」
笑ってこう答えるジョルジュだった。
「これが普通のスキャンダルならともかくね」
「相手が宇宙人だからなのね」
「うん、有り得ない」
ジョルジュはまた答えた。
「絶対にね」
「じゃあこれは気にしなくていいのね」
「いや、気にした方がいいね」
「どうしてなの？」
「この記事は売れるよ」
だからだというのだ。
「それはわかるよね」
「嫌になる位ね」

ナンシーは実に忌々しげな顔で答える。
「売れるでしょうね」
「やっぱりわかるんだ」
「記事はどんな白々しい話でもいいのよ」
ナンシーの口調は実にシビアである。
「そう、八条スポーツと同じでね」
「っていうかあの新聞ってやっぱり」
「そうよ。見たらわかるじゃない」
「嘘だったんだ」
「冗談よ」
嘘ではないことは力説するのであった。
「そっちよ」
「何か強引だね」
「強引でもそうなのよ」
また力説であった。
「嘘じゃないのよ」
「出鱈目でもなくて？」
「出鱈目なのは否定しないわ」
「それでも嘘じゃないんだね」
「嘘は書かないわ」
ナンシーは胸を張って言う。

第二百十八話　白々しいスキャンダルその五

「私だって学生だけれどジャーナリストだからね」
「その誇りはあるんだね」
「二十世紀や二十一世紀の日本のマスコミとは違うの」
この時代の日本のマスコミは嘘を書いてもそれでも問題にならなかったのである。それを指摘されても平気な顔であったのである。
そうしてだ。恥じずに何度も虚報を続けていたのだ。
「それはないわ」
「僕もちゃんとした写真撮るしね」
「合成写真はすぐにばれるわよ」
「それ以前だよ」
ジョルジュの言葉もここで強くなる。
「そういうことはしないよ」
「お互いそういうところは真面目ね」
「そうだね。それでだけれど」
「ええ」
「この記事だけれどね」
話をその記事に戻すのだった。そのあまりにも、白々しいという言葉すらおこがましいような滅茶苦茶な記事についての話にである。
見るとだ。やはり宇宙人であった。その宇宙人を見ながらまた話すジョルジュだった。
「あのさ、それでね」
「その宇宙人よね」
「これを持って来るとは思わなかったよ」
感心すらしている言葉だった。
「いや、本当にね」
「そうよね。確かにね」
ナンシーも認める言葉を出した。

「これはね」
「こうした記事書ける？」
「ちょっと書けないわよね」
「いや、宇宙人は出すよ」
それはだというのだ。
「けれどそれでもね」
「そうよね、この宇宙人はね」
「ないよ」
やはりそれはであった。
「有り得ないから」
「ううん、参考にしたいわね」
ナンシーは記事を見ながら腕を組んでそうしながら話した。
「これからの記事にね」
「そうよね」
「ないわよ」
また言ったのだった。
「このセンスはね」
「記事もセンスだからね」
「どれだけ読む人の心を引き付けるかよ」
「写真もね」
「まずはそれだから」
「この記者誰かな」
ジョルジュは自然とこうした話にいっていた。ナンシーもそれに続く。
「天才だね、この記事は」
「ええ。どうやらこれって」
ナンシーは真面目な顔で言う。
「ライバル登場かも」
「思わぬところからってやつだね」
「言っておくけれど負けないわよ」

しかもであった。負けん気まで出していた。
「何があってもね」
「ううん、燃えてる？」
「燃えてるわ」
そのことを認めもする。
「もう赤から青にね」
「凄いね、青なんだ」
「青い炎よ」
実際に背中に炎を背負っていた。それが青いのである。
「どう、これ」
「熱くない？」
「熱いわ」
何気にこのことも認めた。
「かなりね」
「火って赤より青の方が温度高いしね」
「白まではいかないけれど」
「それで青なんだ」
「そう、青よ」
青い炎を背負いながらの言葉であった。
「とにかく怒ってるから」
「よくわかるよ。じゃあ」
「さて、どうしてやろうかしら」
ナンシーは本気で怒っていた。それは実によくわかることだった。

第二百十八話　白々しいスキャンダルその六

「これって」
「穏便にね」
「できると思う？」
「できると思うよ」
ジョルジュはにこりと笑ってそのナンシーに返した。
「目には目だよね」
「ええ」
「そしてペンには」
「ペンよ」
ナンシーはこう答えたのだった。
「そういうことね」
「そういうことだよ。やり返すよね」
「勿論よ。全く、こんな凶悪な宇宙人と交際なんて」
「向こうがそう来たらこっちは？」
「考えがあるわ」
真面目な顔で言うナンシーだった。
「秘策あり、よ」
「その言葉信じていいんだね」
「いいわよ」
いいというのである。
「この青い炎、きっとね」
「ペンに乗せるんだね」
「そういうことよ。問題はね」
「こんな記事信じる人は誰もいないけれど」
「むしろ信じる方がおかしいでしょ」
ナンシーは確かに怒ってはいた。しかしである。それでも現実はわかっていた。現実というものをわかっていない人間もいることに

はいるがだ。
「こんな話は」
「そうだね。大体こんな宇宙人いるのかな」
「さあ」
ナンシーはジョルジュの今の言葉には首を横に振った。
「いないんじゃない？」
「いないかな」
「だって。何十メートルもあるじゃない」
まず言うのはその大きさからだった。
「大き過ぎるじゃない」
「そうだよね。このシリーズの宇宙人全部そうだけれどね」
「まあ全部じゃないにしても」
「殆どよね」
「どういう身体の構造してるんだろう」
「あの大分前に博士に家を壊されたもの書きの」
ナンシーはある人物の話を出してきた。それは。
「柳田算数だったかしら」
「ああ、あの科学の知識がおかしい」
「あの人が色々書いてたけれどね」
「あんな下らない本書けるのって才能だよね」
ジョルジュはその柳田算数の本について話した。
「物凄く下らないよね」
「面白くないのは事実ね」
ナンシーもこのことは認めた。
「もう読んでるとそれだけでね」
「下らないよね」
「下らなさ過ぎて頭にくるわ」
ナンシーはここでまた不機嫌なものになった。
「何か科学の知識おかしいわよね」
「うん、小学校レベルでね」

「それ高校生の私にもわかるし」
「僕にもね」
「それだけおかしいってことよね」
「そうだよね」
「まああの作家の言うことは置いておいて」
それでだというのだ。さらに話をするのであった。
「実際大きさもそうだけれど力とか外見もね」
「滅茶苦茶よね」
「殆ど怪獣よ、あれは」
ナンシーは断言した。怪獣だとだ。
「っていうか怪獣と区別のつかない宇宙人も多いわよね、あのシリーズって」
「そうだよね。怪獣は自然を、宇宙人は各国をモデルにしてるっていうけれど」
「この前に出て来たフォックス星人っていたじゃない」
「ああ、あれね」
その星人のことはジョルジュもよく覚えていた。
「あの尻尾が九本あってやたらと頭のいい宇宙人だったよね」
「あのモデルは日本らしいのよね」
「日本だったんだ」
「そう、あの国だったらしいのよ」
そうだというのである。
「どうやらね」
「成程、そうだったんだ」
「そうよ。狐でわかるわよね」
「ああ、そうだね」
ここでまた言うジョルジュだった。

第二百十八話　白々しいスキャンダルその七

「日本ってよく狐か狸に例えられるよね」
「特に日本の今の首相はそうだよね」
「その狐よ」
ナンシーは意を決した顔で述べた。
「狐でいくわよ」
「狐で？」
「そう、やり返すって言ったわよね」
「記事でだよね」
「それでよ」
強気の言葉であった。
「狐でやるわよ」
「狐なんだ」
「そう、狐よ」
ナンシーはまた言った。
「そういうことでね」
「よくわからないけれどわかったよ」
ジョルジュは首を捻りながら述べた。
「僕も協力しようか」
「ああ、それはいいわ」
いいというのであった。
「別にね」
「いいんだ」
「だって私一人でできるから」
だからだというのである。
「これはね」
「狐の写真とか撮るよね」
「あっ、もう一枚いいの持ってるから」

「それもいいんだ」
「ええ、いいわ」
ほぼ同じ返答で返す。
「そういうことでね」
「わかったよ。そこまで言うのならね」
ジョルジュもそれで納得したのだった。
「僕は見ているだけね」
「復讐は一人で、よ」
ナンシーは少し凄みのある笑みを浮かべていた。
「そうしてやるものよ」
「それってナンシーの哲学？」
「そうよ。復讐は自分でやってこそよ」
その通りだというのである。
「他の人の手を汚させはしないわよ」
「立派だね」
「立派じゃないわよ」
それは違うというのである。
そしてだ。ここでまた話す彼女だった。
「当然のことよ」
「当然？」
「そう、当然よ」
ナンシーの言葉ではそうなのだった。
「やるからにはね。それに」
「それに？」
「やるからには徹底的によ」
こんなことも話すのだった。
「やってやるわよ」
「やれやれ。ナンシーも怖いね」
「マルタは元々あれじゃない。騎士の国じゃない」
「そういえばそうか」

「そうよ」
今度は歴史の話になった。ナンシーはマルタ人だがこの国はだ。マルタ騎士団があったのである。エウロパ側の国家だったが今は連合にいるのだ。
「騎士はね。復讐はね」
「徹底的だったんだ」
「戦うという意味ではね」
そうだとジョルジュに返す。
「そうするのよ」
「成程ね」
「さて、それでだけれど」
「うん」
「あんたはこれからどうするの？」
こうジョルジュに問い返すのだった。
「今のところ私は自分の記事に専念するけれど」
「まあ僕はね」
「ええ」
「自分の興味のある方に流れるよ」
そうだというのである。
「女の子の写真でもね」
「撮るのね」
「そうするよ。それじゃあ何処に行こうかな」
「まあ適当に行ったらいいわ」
「適当になんだ」
「そういうことは詳しいでしょ」
「うん」
まさにその通りであった。

第二百十八話　白々しいスキャンダルその八

「自信あるよ」
「ならそれについては何も言わないわ」
完膳に任せているナンシーであった。
「そういうことでね」
「じゃあ。アイドル研究会にでも行こうかな」
「アイドル研究会ね」
「あそこは可愛い女の子ばかりだし」
にこにことして話すジョルジュだった。
「それに衣装も可愛いしね」
「グラビアもよね」
「そうそう、それも撮影してね」
さらににこにことした顔を見せる。
「楽しくやってくるよ」
「楽しんできたらいいわ」
今はこう言うだけのナンシーだった。
「じゃあ私は今からね」
「早速書くんだ」
「ええ、書くわよ」
もう乗り気のナンシーだった。
「そして書くとね」
「ナンシーって結構速筆だよね」
「書くのはね」
自信ありげな言葉であった。
「自信があるわ」
「そうなんだ。それじゃあね」
「やるから。ただ」
「ただ？」

「どうなのかしらね」
ここで難しい顔も見せるナンシーだった。
「いや、このセンスよ」
「ああ、向こうの記事の」
「あらためて見てもぶっ飛んでるわよね」
顔を顰めさせてその記事を見る。見れば確かにであった。無茶苦茶な内容である。ただ宇宙人が出て来るだけでは済まないレベルであるからだ。
「この宇宙人出すのが」
「勝てる？」
「けれど勝てるわ」
負けん気は健在だった。
「というよりかはね」
「勝たないと駄目だよね」
「やるからには勝つ」
確かな言葉であった。
「それが私の哲学よ」
「じゃあ頑張ってね」
「頑張るわよ。目指すは勝利よ」
「発行部数で勝つことだよね」
「こうした記事はそうよ」
話は限定であった。その理由も話す。
「ただし。普通の新聞ならね」
「嘘の記事は書いたらいけないよね」
「その通りよ。嘘は駄目よ」
それはくれぐれもであった。
「絶対にね。嘘を書く新聞はもう新聞じゃないわ」
「スポーツ新聞はいいけれどね」
「だってネタだから」
だからだというのだ。

「そもそもスポーツ新聞のネタ真に受ける方がどうかしてるでしょ」
「そうそう、八条スポーツとかね」
「わかっていて騙されて騒ぐものだから」
つまり書く方も読む方も確信犯という訳である。それでなのだ。
「そういうものだからね」
「そうだよね。僕だってそうだし」
「ジョルジュはその時も真面目に写真撮るわよね」
その宇宙人や妖精や幽霊のあまりにも白々しい写真をである。撮ってそのうえで記事の写真にするのもジョルジュの仕事なのである。
「本当に」
「僕は写真についてはね」
言葉はにこりとしていない。顔はそうであったが。
「そういう主義なんだ」
「そうなの」
「そうだよ。だってカメラは友達だから」
いきなり古典的な表現だった。
「だからね」
「カメラは友達なの」
「そう、友達」
まさにそれだという。

第二百十八話　白々しいスキャンダルその九

「それ以外の何でもないよ。身体の一部って言ってもいいね」
「言うわね。けれど」
「けれど？」
「あんたが言うと説得力があるわよね」
こう言って笑うナンシーだった。
「本当にね」
「そうかな」
「あるわよ。じゃあ私はこの記事を書いたら」
「デートだよね」
「えっ、そ、それは」
ナンシーはジョルジュの今の言葉に急に狼狽しだす。
「ななな、何でそうなるのよ」
「言葉が焦ってるよ」
「それは錯覚よ」
「錯覚？」
「そうよ、心の錯覚よ」
それだというのだ。
「だから違うわよ」
「心の錯覚って何？」
「知らないの？そういうものもあるの」
そうだとだ。強引にそういうことにするのであった。
「だからそれなのよ。わかった？」
「わかったって。やっぱり強引だよね」
「いいのよ」
挙句には開き直りであった。
「そういうことだから。いいわね」
「わからなかったらどうするの？この場合は」

「無理にでもそう思ってて」
やはり強引であった。
「いいわね」
「わかったよ。それじゃあね」
「そういうことだから」
ナンシーは何とか落ち着きを取り戻して言った。
そしてだ。パソコンを出してそのワードで記事を書きだしていた。
タイプの速度はかなりのもので次から次に文字が書き込まれていく。
銀河語だ。
「そういえば」
「そういえば？」
ナンシーは書く途中に言いジョルジュもそれに応える。
「ここって日本語の新聞もあるわよね」
「日本だからね」
こう答えるジョルジュだった。
「やっぱりね」
「日本だから当然よね」
「うん、どの国でも銀河語とその国の言葉は習うからね」
つまり全ての国で二つの言葉を教えているのだ。その授業時間もかなり細かく決められている。
「だからここもね」
「銀河語が第一言語だったかしら」
「確かね」
これもどの国でも同じである。
「そうだよ」
「だったわよね。連合だし」
「っていうか銀河語だ第二言語っていうのもね」
ジョルジュは自分で言って気付いた。
「それはないか」
「ないわね。マウリアじゃないし」

「まあ銀河語は何処でも通じる言葉だけれど」
こんな言葉も出た。
「マウリアでもサハラでもね」
「そう思うと便利な言語よね」
「覚えないといけない文字の種類は多いけれどね」
銀河語はアルファベットに漢字、それにキリル文字に平仮名まで混ざっている。ハングルもある。とにかく色々な文字が入っているのである。
「それでもね」
「覚えると便利よね」
「っていうかさ」
ここでジョルジュはまた言った。
「日本語よりはずっと簡単じゃない？」
「そうね」
ナンシーは記事を書きながら頷いた。
「文法も言葉もね」
「同音異句多いしね」
「っていうか多過ぎよ」
突込みを入れるナンシーだった。
「全く以てね」
「そうそう。それで」
「それでよね」
「日本人も使いにくいって言ってるし」
ネイティブスピーカーにすら言われていることだった。
「それがね」
「厄介な言葉よね」
「全く。それで日本語の新聞だけれど」
「私そっちは知らないのよ」
ナンシーは書きながら首を傾げさせる。
「読めないしね」

「僕も。凄い記事ばかりらしいけれどね」
そんな話をしながらだった。ナンシーは記事を書いていくのだった。そしてであった。その記事を書いた後ですぐにある場所に消えたのだった。

白々しいスキャンダル　　完

２０１０・９・１６

第二百十九話　鉢合わせその一

鉢合わせ

記事を書き終えたナンシーはだ。いそいそと帰り支度をはじめた。
それを見てだ。ジョルジュは言うのだった。
「凄く早いね」
「まあね」
ジョルジュの言葉に応えながらその間も帰り支度をしている。
「ちょっとね。急ぐから」
「デート？」
「わかるの？」
ジョルジュの言葉にむっとした顔になる。
「まさかと思うけれど」
「っていうかさっき話したじゃない」
身も蓋もない返答だった。
「そうじゃないの？」
「そういえばそうね」
ナンシーは言われてこのことを思い出したのだった。
「うう、また自爆したわね」
「ナンシーって結構顔に出るしね」
「えっ、そうだったの！？」
言われてだ。びっくりとした顔を見せた。
「私顔に出てたの」
「出てるよ。って自覚ないんだ」
「全然。今はじめて聞いたし」
「嘘つけない性格だしね」
ジョルジュは微笑んでナンシーのこの特徴を話した。
「どうしてもね」
「参ったわね、それは」

「参った？」
「参ったわよ」
実際にそうだというのである。
「全く。どうしたものかしら」
「まあいいじゃない」
しかしジョルジュの返答は落ち着いたものであった。
「それでも」
「いいの？」
「いいじゃない。ナンシーは確かに嘘つけないし隠しごとは下手だけれど」
「全然よくないじゃない」
「それでも相手が誰かはね」
「わかっていないっていうの？」
「僕も知らないし」
それはだというのだ。
「実際ね。知ろうとも思わないし」
「そういえば誰も気付いていないわね」
「多分意外な相手だからだね」
「意外な相手って」
「あっ、相手が誰かは言わなくていいから」
それはいいと。ジョルジュははっきりと述べた。
「別にね」
「言わないわよ」
ムキになって言い返すナンシーだった。
「そんなこと」
「うん、だからね」
「いいの」
「人のプライベートを詮索する趣味はないし」
ジョルジュのいいところであった。
「だからね」

「そうなの。それじゃあ」
「うん、そういうことだから」
だからというのだった。
「それじゃあね」
「ええ、行って来るわ」
「行ってらっしゃい」
「ジョルジュはこれからどうするの？」
帰り支度が終わったところでジョルジュに話す。
「それで」
「僕？僕はね」
「ええ」
「家に帰ってゲームでもするよ」
それをするというのである。
「これからね」
「ゲームなの」
「今やりかけのゲームがあってね。テレビゲームね」
「携帯ゲームじゃないの」
「それもやってるけれど今はまってるのはそっちなんだ」
そうだというのである。

第二百十九話　鉢合わせその二

「そっちのゲームをやるつもりだよ」
「そうなの」
「そうだよ。まあ彼女は欲しいけれど」
「あんた盗撮魔って噂あるからね」
冷めた目になるナンシーであった。
「だから外見はそこそこでもね。女の子に評判悪いわよ」
「評判ね」
「そう、悪いわよ」
ジョルジュ自身にこのことを話すのだった。
「それ気をつけてね」
「それは誤解だよ」
ジョルジュはそう言われても笑って返す。
「僕は盗撮なんかしないよ」
「堂々とよね」
「そう、堂々と撮るよ」
笑ってこう話すのであった。
「そんなせこいことしないよ。いつも正面から堂々とだよ」
「けれど女の子はそう見ていないから」
そうだと言うナンシーだった。
「それが問題なのよ」
「重要なのは人がどう思っているかだね」
「真実よりもね。だからあんたはね」
「まあそれならそれでいいよ」
「いいの」
「誤解する人はいるけれど真実を見てくれる人もいるじゃない」
ジョルジュが話すのはこの現実だった。
「そうじゃないの？」

「それはね」
その通りだと頷くナンシーだった。
「そうだけれどね」
「じゃあそれでいいよ。連合は四兆も人がいるんだし」
「そしてそのうちの二兆はね」
「女の人じゃない。結婚してる人とか外しても一兆はいるかな」
ジョルジュは言う。
「それだけいてくれればね」
「あんたのいいところを見る人もいるっていうのね
「そういうこと」
その通りだというのだ。
「だからね。僕もね」
「確かにそういう人はいるでしょうけれど」
「そうだよね」
「ただ。相手が今一歳とかだったらどうするのよ」
「赤ちゃんだったら」
「その娘が結婚する歳になったらあんたおじさんよ」
「あはは、そうだね」
ジョルジュはナンシーのその言葉に話す。
「そうなったら僕はロリコンだね」
「そうよ。まあこのことはね」
「このことは？」
「私も。人のことは言えないけれど」
自分のことを振り返ってついつい出してしまった言葉だった。考えてみればだ。自分自身も人のことは言えないのだと思いもしたのである。
「ちょっとね」
「今それヒントだね」
「うっ、確かに」
言ってしまってから気付いて後悔する。

「そうね」
「けれどいいんだ」
「言ったことは戻らないから」
「エラーの点は帰って来ないよね」
「それよりも辛いわね」
本当に言ってしまってから後悔している。
「かなりね」
「まあ言わないから」
「有り難う。それじゃあ時間だから」
「うん、じゃあね」
何だかんだで仲のいい二人である。そうしてだった。
学校の薔薇の園に向かってだ。そこの青薔薇のところに立っているとだ。彼が来た。
「先輩、すいません」
「どうして謝るの？」
「遅れました」
後輩がだ。彼女のところに来てまずこう言うのだった。
「それで」
「遅れてないわよ」
年上の優しい微笑みでこう返すナンシーだった。

第二百十九話　鉢合わせその三

「別に」
「けれど」
「ほら、遅れてないわよ」
時間を五分だけ遅らせている腕時計の時間を見せての言葉だった。
「そうでしょ？」
「あっ、そうですね」
「それどころか三分前よ」
こういうことにしたのである。
「早く来てるわよ」
「そうだったんですか」
「ええ」
優しい笑顔で彼に返す。
「そうよ。私も今来たところだしね」
「そうだったんですね、よかった」
「いつも早いわね」
後輩をさりげなく立たせている。
「それじゃあ今からね」
「はい、じゃあ」
「デートしましょう」
ここでは目を細めさせている。
「またね」
「ええ。それで今度は何処に行くんですか」
「そうね。今日はね」
「はい、何処ですか？」
「オペラハウスに行かない？」
こう後輩に提案した。
「それでどうかしら」

「えっ、けれど」
後輩はすぐにナンシーに言ってきた。
「今日ですけれど」
「今日は？」
「オペラハウスお休みですよ」
「ええ、そうよね」
「知ってるならどうして」
「だから。オペラハウスの周りをよ」
彼に話すのはこのことだった。
「そこを周らない？」
「オペラハウスの周りをですか」
「オペラって総合芸術じゃない」
よく言われていることである。この時代だけのことではない。
「そうよね」
「ええ、そうですけれど」
後輩もこのことは聞いて知っている。オペラというものはただ歌うだけではないのだ。演技も舞台も衣装もだ。当然オーケストラもである。ありとあらゆるものが加わりそうして芸術となっている。そうした意味での総合芸術であるのだ。
それを知っているからこそだ。ナンシーに言葉を返すことができたのである。
「それは」
「だからよ。お庭もね」
「凄いんですか」
「気付かなかったの、それは」
「すいません」
彼はナンシーの今の言葉に申し訳のない顔になる。
「ちょっと」
「一度よく見てみるといいわ。本当に凄いから」
「わかりました。それじゃあ」

「行きましょう」
ナンシーから誘った。彼の手を掴んで引っ張りもする。
「今からね」
「はい」
後輩も頷いてだった。そのうえでオペラハウスに向かった。そこは確かに今日は閉じられていた。しかしその周りはというとだ。
バロック、いやロココを思わせる豪奢な左右対称の庭である。緑の草原に木々に様々な色の花々、そして彫刻達が立ち並べられている。
そこに入るとだ。後輩は思わず声をあげてしまった。
「うわ・・・・・・」
「どうかしら、ここは」
「凄いですね」
こうナンシーに言葉を返した。
「こんなに凄い場所だったんですか」
「やっぱり気付いてなかったのね」
「すいません」
「謝らなくていいわ」
それはいいというのである。
「けれど。確かにいい場所でしょ」
「はい、確かに」
答えるその声が興奮でうわずっている。
「こんなにいい場所だったなんて」
「それでだけれど」
「それで」
「ここ、ゆっくり回らない？」
ナンシーの顔がぽっと赤らんだ。

第二百十九話　鉢合わせその四

「そうしない？」
「二人で、ですね」
「勿論よ」
その通りだというナンシーだった。
「だってデートだし」
「だからですか」
「そうよ。だからね」
気恥ずかしい声だった。ナンシーもそうなっているのだ。
「今からね」
「はい、わかりました」
後輩も頷く。それで決まりだった。
二人はそのオペラハウスの周りを歩いていく。ナンシーはここで後輩に話す。
「ここはね」
「この公園は」
「乾隆帝の円明園ってあったわよね」
「ああ、あの中国の」
「それをイメージして造ったのよ」
「そうだったんですか」
「その他にも色々なお庭を参考にしているけれどね」
「つまり中国やそうした感じのお庭なんですね」
「円明園は元々バロック建築なんかを取り入れたらしいけれど」
「じゃあエウロパ風ですか？」
「それは入っているわね」
ナンシーはこうも述べた。
「やっぱり」
「バロックですからね」

「けれどね」
こう話してであった。
「それでも連合の文化よね」
「ですね。何か違いますよね」
「ええ。それに」
花を見てだった。咲き誇る菊をだ。
「この菊がね」
「いいですか」
「とてもね。私菊好きなのよ」
白い菊達である。それを見て目を細めさせていた。
「こうして見ているとね」
「和みますか」
「とてもね。ほら、菊ってね」
「はい」
「一輪一輪は静かじゃない」
菊はあまり強く自己主張しない。そのことを話すのだった。
「それでもね。集まるとね」
「賑やかですか？」
「ううん、余計静かになって」
そうだというのである。
「しっとりとした佇まいを見せるから」
「だから好きなんですね」
「そうなの」
その通りだと。にっこりと話して語る。
「とてもね」
「成程。言われてみればそうですよね」
「そうでしょ？あとね」
「あと？」
「これも好きなの」
今度は菫を見ていた。紫のその花達をだ。

「小さいけれどね」
「菫もですか」
「ええ。紫って色が好きだし」
それも好きな理由だというのだ。
「だから余計にね」
「菫でしたら」
「ええ」
「僕も好きです」
その後輩もであった。
「特に。こうして集まって咲いていたら」
「何か違うわよね」
「絨毯みたいですよね」
後輩の顔も綻んでいる。
「本当に」
「うふふ、絨毯ね」
「はい、花の絨毯です」
ナンシーに対してこう表現した。
「お花の絨毯ですね」
「そうね。紫色の奇麗なね」
「上を歩いたら踏み潰すからできませんけれど」
「お花は踏むものじゃないわよ」
それは咎めるナンシーだった。

第二百十九話　鉢合わせその五

「見て。それでね」
「それで」
「愛でるものよ」
目を細めさせて言った。
「そういうものよ」
「愛でるものですか」
「ええ、だからね」
「踏んだら駄目ですよね」
「折ったり手に取ったりするのもね」
そうしたこともだというのである。
「駄目よ」
「見るだけですか」
「見ることが一番いいの」
ナンシーは話す。その花の愛し方について。
「目から心に滲み渡っていくから」
「お花が」
「だからね。それだけでいいの」
また言うナンシーだった。
「私はね」
「そうなんですか」
「貴方はどうかしら」
ここで恋人である後輩を見る。
「お花はどうしたいのかしら」
「僕は」
「ええ」
「そうですね」
問われてだ。少し考えてから答えたのだった。

「やっぱり僕も」
「見る派なのね」
「そうですね」
こうナンシーに述べる。
「やっぱり」
「そうなのね。それならね」
「それなら」
「いいわ」
いいというのであった。
「同じなら」
「そうですか」
「ええ、それで」
「それで」
「ここ。気に入ってもらえたかしら」
この公園をというのだ。
「どうかしら、それは」
「はい、とても」
後輩は笑顔で応えた。
「また来たいですね」
「一人でかしら」
「いえ、二人です」
返答はこれしかなかった。最早だ。
「絶対に二人で」
「有り難う。オペラハウスは中で舞台を見るだけじゃないから」
「こうしてお庭を見ることもですね」
「それに外観もいいでしょ」
今度はオペラハウスを見る。白亜の左右対称に造形されたそれはまさに宮殿であった。そうした豪奢な建築をそこに見せているのである。
「オペラハウスって」

「それも大事なんですね」
「ひょっとしたら日本のね」
「日本の」
「皇居よりも豪奢かも知れないわよね」
「というか日本の皇居は」
「質素過ぎるわよね」
日本の皇居の質素さはだ。最早連合ではあまりにも有名になっていた。所謂竹のカーテンに覆われた皇室の宮殿はだ。かなり質素なものなのだ。
「小さいし」
「連合で一番古い王家やそうしたものですよね」
「ええ、そうよ」
皇室も入れた話だ。
「エチオピアは一回断絶してるから」
「分家の人を見つけて復興したんでしたっけ」
「まあ分家って言っても」
二十世紀に断絶したエチオピア皇室の分家というのだ。
「かなり血は薄いっていうか疑わしいかも知れないらしいけれど」
「そうだったんですか」
「まあ二千年か三千年続いていたらね」
シバの女王からの話である。

第二百十九話　鉢合わせその六

「血縁者も多くなるわよね」
「どれだけいるんでしょうか」
「石を投げれば当たる位じゃないかしら」
そのオペラハウスを見ながらそれとは関係ないことを話している。
「多分ね」
「じゃあ日本の皇室も」
「日本の場合は皇室が日本人のはじまりだから」
全ての家は皇室から派生しているとされているのである。
「だからね」
「じゃあ皇室関係者も多いんですね」
「そう思うわ。それであの皇居だけれど」
「凄いですよね、本当に」
「質素なのがあの国の皇室の伝統らしいけれど」
「伝統ですか」
「そう、三千六百年位のね」
伝統と言うにはかなり長過ぎるものだった。
「ちょっとね」
「ちょっとどころじゃないですね」
「まあ確かに」
後輩に言われて頷くナンシーだった。
「半端なものじゃないわね」
「そうですよね。じゃあ次は」
「中は入られないですよね」
後輩がここで言うのはオペラハウスの中だった。そこのことだ。
「やっぱり」
「ええ、閉館してるわ」
「それなら何処に行きますか？」

「そうね。お庭はもう行ったし」
「はい」
「何か食べたくなったし」
ナンシーはふと小腹が空いていることに気付いた。それならばだ。
「そうね。それだったら」
「何か食べます？」
「アイスがいいかしら」
「アイスですか」
「それどうかしら」
こう後輩に提案するのである。
「それで」
「いいですね」
後悔も笑顔で応えた。
「それじゃあ」
「ええ、じゃあアイスを食べに行きましょう」
「何処に行きます？それで」
「近くのお店でいいわね」
八条学園には出店も多くある。その中にアイスの出店もあるのだ。
「そこで」
「ええ、この近くは」
「ほら、あそこに」
右手を指差す。そこに赤と青の派手な模様の店があった。そしてそこには銀河語で大きくアイスと書いてある。それが何よりの証拠だった。
それを見てだ。ナンシーは後輩にまた言った。
「あそこどうかしら」
「あそこのお店は確か」
「何かあるの？」
「チョコレートの種類が多いんですよね」
チョコアイスがというのだ。

「それが」
「そうなの。チョコメインなの」
「はい、そうなんです」
「いいわね。私チョコアイス好きだし」
「僕もです」
「じゃあ丁度いいわね」
ここでもにこりとなるナンシーだった。
「行きましょう。そこにね」
「はい」
こうして二人でそのお店に向かう。しかしだった。
ここでだ。前からだった。
「まずいっ・・・・・」
ナンシーの顔が急に曇った。そしてだった。
後輩に顔を向けてだ。こう提案した。
「他のお店に行きましょう」
「他のって？」
「だから他のお店によ」
焦った顔での言葉であった。

第二百十九話　鉢合わせその七

「行きましょう、今すぐに」
「どうしてなんですか？」
後輩はいぶかしみながら彼女に問い返した。
「あの、急にそんな」
「気が変わったのよ」
だからだというのである。
「それでね」
「他のお店にですか」
「そう、今からね」
「何でなんですか？」
「何でもいいから」
とにかくというのだ。かなり強引な調子である。
「他のお店に行きましょう」
「けれど先輩このお店好きですよね」
事情をよく、というか全く察していない後輩はまだ言う。首を傾げさせていぶかしんだ顔でだ。こうナンシーに対して言うのであった。
「だったら」
「だから気が変わったのよ」
まだ言うナンシーだった。
「それでなのよ」
「それでって」
「とにかく他のお店にしましょう」
あくまでこう言い続ける。
「他のね」
「ううん、けれど」
「けれど？」

「もう買っちゃいましたけれど」
こう言うのだった。
「アイス」
「えっ、もう買っちゃったの」
「はい、これ」
言いながらだった。ダブルチョコアイスを出してきた。チョコレートのアイスが二段重なっている。丁寧にトッピングまでされている。
「どうぞ」
「有り難う」
受け取りはした。
「それで僕もですし」
見れば彼もだった。ちゃんと自分のアイスも持っている。それもまたダブルチョコアイスである。コーンの上に丸いアイスが二段乗っている。
そのうちの一つをナンシーに差し出していたのだ。そうしてだ。
「それでなんですけれど」
「ええ」
「座って食べません？」
こうナンシーに提案してきたのだった。
「立って食べるのって落ち着きませんし」
「そうね」
まだ焦った感じは見せている。そのうえでの返事だった。
「それじゃあ」
「ええ、じゃああそこがいいですね」
お店のすぐ傍のベンチを指し示す。そこだというのだ。
「そこに座って」
「ちょっとそこは」
だが、だった。また嫌そうな顔を見せるナンシーだった。
「他の場所に」

「移動している間にアイス溶けますよ」
「歩きながら食べればいいじゃない」
「それじゃあ無作法ですし」
後輩は真面目だった。
「ですから。座って」
「わかったわよ。それじゃあね」
「それじゃあ？」
「はい、まずはこれ」
言いながらサングラスを出してきた。真っ黒の大きなサングラスである。
それをつけてだ。続いて帽子を出してきた。魔法使いが被る様な縁の広い帽子である。それを被って顔のかなりの部分を隠してしまった。
その次にはだ。ヘリウムガスまで出してそれを吸ってだった。
「これでよし、ね」
「あの、それって」
「何？」
「変装ですか？」
後輩は怪訝な顔で彼女に問うた。
「まさか」
「そうよ」
まさにそれだというのだ。しかも何処から出してきたのかコートまで羽織りそれで服まで隠している。
「見ての通りよ」
「何かあるんですか？」
「あるから変装するんじゃない」
もっともな言葉である。

第二百十九話　鉢合わせその八

「違うの？それって」
「いえ、違いませんけれど」
「とにかくね。今はね」
「はい」
「私であって私でないから」
こう彼に言うのであった。
「わかったわね」
「そうなんですか」
「そうよ、そういうことだから」
「ううん、よくわからないですけれど」
後輩にとってはだ。首を傾げさせるものだった。
しかしそれでもである。彼女に合わせた。
「それじゃあですね」
「ええ」
「そういうことで」
笑顔で彼女に告げた。
「デート続けましょう」
「有り難う」
「けれど先輩って」
彼はここでまた言った。彼女のその声を聞いてだ。
ヘリウムガスはこの時代ではそれぞれの種類によって声が変わる。
それを聞いているとであった。彼はついこう言ってしまったのである。
「その声もいいですね」
「えっ、そうかしら」
「はい、いいですよ」
彼女の横に座って話す。

「とても」
「そうかしら」
「先輩の声って元々奇麗ですよ」
また話す彼だった。
「けれど今の声もそれはそれで」
「いいのね」
「何か気に入りました」
笑顔での言葉であった。
「ですからこのままデート続けましょう」
「有り難う」
後輩のその言葉にサングラスの奥で笑顔になるナンシーだった。
その彼女の前に来たのはだ。この二人だった。
「ここ、いいのよ」
「だからだったのか」
「ええ、そうなの」
アンがギルバートに言っていた。彼女の方から手を組んでいる。
「密かな穴場なのよ」
「穴場か」
「そう、穴場よ」
また言うアンだった。麦藁帽子の様なものを被っているがそれが実によく似合っている。赤毛も相変わらず後ろで編んでいる。
「誰も知らない穴場なのよ」
「オペラハウスはよく知られているがな」
「灯台下暗しね」
それだというのだ。
「これってね」
「オペラハウスは中だけではないんだな」
「勿論よ。総合芸術じゃない」
奇しくもナンシーと同じ意見になっている。
「だからなのよ」

「庭もいいのか」
「この学校って大体お庭いいけれどね」
それで定評があったりもする。何しろ理事長の八条義統は芸術に理解があることでも知られている。その彼が直々に庭の手入れをさせているのだ。
「それでもここは特にね」
「いいのか」
「そういうこと。しかもね」
「しかも？」
「近くに美味しいお店もあるのよ」
笑顔でこうも話すのだった。
「それもね」
「美味しいお店というと」
「アイスのお店があるのよ」
それだというのである。
「それがね」
「アイスか」
「そう、チョコアイスの種類が豊富でね」
やはりナンシーと同じことを話す。
「それが美味しいのよ」
「ならそれを食べようか」
「勿論。それも目的だったし」
また話すアンだった。
「チョコアイスね。二人でね」
「今は大丈夫なんだな」
「ええ。今日は牛は食べてないから」
「だからアイスもか」
「いけるわ」
アイスクリームには牛乳が入っている。アンはイスラエル人であり当然ユダヤ教徒である。ユダヤ教の戒律では牛肉と牛乳は一緒に

食べられない。親と子にあたるものは同時に食べられないし胃の中に入れられないのだ。

第二百十九話　鉢合わせその九

それでだ。アンはそのことを頭に入れてギルバートと話しているのである。
「安心していいから」
「そうか。ならいいがな」
「ええ、それじゃあね」
「食べるか」
こうして二人で店に来た。ここでだ。
アンはだ。ベンチに座るナンシーに気付いた。ただし彼女とは気付いていない。
それでだ。アイスを買いながらこうギルバートに言うのだった。
「ねえ」
「どうしたんだ？」
「私達だけじゃないのね」
笑顔での言葉である。
「ここを知ってるのって」
「そうだったのか」
「穴場なんだけれど穴場じゃないのね」
こう言うのだった。
「他の人も知ってるって」
「そういうものか」
「そうよ。それでもね」
「いいんだな」
「ええ、いいわ」
これが彼女の言葉だった。
「ここでデートしましょう」
「そうだな」
ギルバートも笑顔で彼女の言葉に頷く。しかしである。

二人の話を聞いたナンシーはだ。サングラスの奥で青ざめていた。
そのうえでだ。震える声で呟くのだった。
「まずいわ」
「まずいですか？」
「ええ、まずいわ」
こう後輩にも応える。
「これって」
「けれどその格好じゃ」
「油断大敵よ」
小心から来る言葉だった。彼女自身のだ。
「そういう油断や不用意がね」
「大変なことに、なんですね」
「そうよ。だからね」
「はい、だから」
「場所、変えましょう」
アイスはそそくさと食べてしまった。そのうえでだった。
「早くね」
「あの、まさか」
「そうよ、見つかったら危険だから」
アイスのコーンまでかじり終えてだった。また後輩に話す。
「わかったわね」
「わかりました。それじゃあ」
後輩も彼女の言葉に頷く。そうしてだった。
彼もそのアイスとコーンを食べ終えてだ。席を立ってその場を後にするのだった。
後輩を連れて逃げ去るナンシーの後姿を見てだ。アンは言った。
「あれっ？」
「何かあったのか？」
「ええと、あの人だけれど」
そのナンシーの後姿を見ながらギルバートにも話す。

「何かね。何処かでね」
「会ったことがあるのか」
「見たことがあるような気がするわ」
そうだというのである。
「何処かでね」
「気のせいじゃないのか？」
「まさか」
「そう思うけれどね」
アンは首を傾げさせながらギルバートに応える。
「けれどやっぱり」
「気になるのか」
「なるわね。まあ気のせいよね」
ここでこう思うのだった。
「やっぱりね」
「世の中には似ている相手もいるしな」
「そうよね。それに学校だとね」
「年齢が同じだから似ている相手もいるだろうしな」
「じゃあやっぱり気のせいかしら」
「そう考えるのが妥当だな」
ギルバートは言った。
「それじゃあ気を取り直してな」
「ええ、デート続けましょう」
アンにしてもそちらの方にずっと関心があった。そうしてである。
彼女はギルバートとのデートを続けた。しかしそれは騒動の続きでもあった。偶然の神は非常に気まぐれで悪戯好きなものであるのだ。

鉢合わせ　　完

2010・9・23

第二百二十話　また鉢合わせてその一

また鉢合わせて

何とかアンとギルバートのいるオペラハウスの前から逃げ去ったナンシーは。肩で息をしながらデートの相手の後輩に対して言うのであった。

「これでね」

「大丈夫ですか」

「ええ、そう思うわ」

こう彼に答えた。

「完全ね」

「ええと、ここですけれど」

後輩は彼女の言葉を聞きながら周囲を見回した。そこは。

「サッカーグラウンドのところですね」

「あっ、そうね」

ナンシーも言われて周囲を見回すとだ。確かにその通りだった。実際にグラウンドではサッカー部の面々がランニングをしていた。誰がどう見てもサッカーの練習場である。

そこが何処かわかってだ。ナンシーは言うのだった。

「ええと」

「どうされますか？」

「デートを再開させましょう」

落ち着いた声になっての返事だった。

「これでね」

「再開ですか」

「そう、再開よ」

そしてだった。変装用の帽子とサングラスを取ってコートも脱いでだった。完全に元の自分に戻った。ついでに声も元に戻っていた。

そしてだ。ナンシーはその姿でまた話した。

「サッカーの練習を見ながらね」
「わかりました」
「やれやれね」
完全に落ち着いた言葉だった。
「一時はどうなるかって思ったわ」
「あの、先輩」
後輩はそのナンシーに告げた。練習はあまり見ていない。その分彼女を見ている。
「ちょっとですね」
「ちょっと？」
「焦り過ぎなじゃ」
こう言うのだった。
「幾ら何でも」
「そうかしら」
「そう思います」
実際にそうだともいうのであった。
「だってそこまで変装していたら」
「ばれないっていうのね」
「普通そうでしょ」
彼は現実から物事を考えて述べていた。
「違います？そんなの」
「甘いわよ」
しかしであった。今のナンシーはだ。その現実、もっと言えば常識が通じなくなってしまっていた。かなり焦ってしまっているからである。
「それはね」
「甘いって」
「人間何処からか見破られるかわからないのよ」
「そうなんですか？」
「００７を見なさいよ」

この時代の連合では何故か日本のスパイになってしまっている。日本政府の特殊耕作機関に勤めているジェームス＝ボンド＝タニザキとなっているのだ。

「いつも相手を些細なことから見破るでしょ」

「エウロパのスパイをですよね」

「それと同じよ」

そうだというのである。

「だからね。私もね」

「それで注意してるんですね」

「そういうことよ」

こう後輩に話すのだった。

「何でばれるかわからないし。ましてや相手はクラスメイトだし」

「けれどそれでも」

「だから。相手は全員００７なのよ」

こうまで言う。

「ばれる危険は考えておくべきなのよ」

「はあ、そうなんですか」

「その通りよ。ばれたら困るから」

何故困るかというとだ。自分が交際相手を持っているということがばれてしまうと恥ずかしいからだ。だからこう言っているのである。

「だからね」

「わかりましたって言うべきなんですね、ここは」

「そうよ、わかってね」

まさにその通りであった。

第二百二十話　また鉢合わせてその二

「そういうことだから」
「ええ、それじゃあ」
「それでだけれど」
ここで話を変えてきたナンシーであった。サッカー部の面々を見ながらだ。
「サッカー部もね」
「サッカー部も？」
「あれね。元気のいい選手がいるわね」
「そういえばそうですね」
後輩も新聞部員である。それならばだ。今のナンシーの言葉に同意できた。
「何人もいますね」
「こっちは。農業科だったわよね」
「第一農業科ですね」
「そこのグラウンドね」
今ようやくこのことを確かめたのだった。
「成程ね。じゃあ次の取材先はここにしましょう」
「サッカーのですね」
「そうよ。部長には私から話しておくから」
「はい、じゃあ」
「デートがてら。取材っていうのもいいわね」
ナンシーの今の顔はにこにことしていた。
「それもね」
「そうなんですか」
「だって。デートよ」
後輩に顔を向ける。眼鏡の奥の目がとろんとなっている。垂れ目になっていてだ。恍惚とさえなっているものがそこから見えていた。

そしてその目でだ。彼女はまた言った。
「デートって女の子にとってはね」
「女の子にとっては？」
「もう最高に甘いものなのよ」
そうしたものだというのだ。
「ケーキよりもね」
「そんなにいいんですか」
「男の子は違うの？」
「楽しいとは思います」
後輩は正直にその考えを述べた。
「そうは思います」
「けれど甘くはないのね」
「甘いというのはちょっと」
ナンシーの言葉に対して首を捻って返した。
「違う感覚ですね」
「そうなのね」
「っていうかデートは甘いんですか」
「そう、甘いのよ」
まだとろんとした目になっている。クラスメイトの誰もが知らないナンシーがそこにいた。
「どんなスイーツよりも」
「そうなんですか」
「麻薬とかは知らないわ」
真面目なナンシーはそうしたことは一切しない。
「お酒は知ってるけれど」
「お酒ともまた違うんですか」
「お酒に酔うのとデートに酔うのとは違うの」
今にもくるくると回りそうな感じであった。恍惚としてその中に浸ってだ。何処までも溺れてしまいそうな感じになっているナンシーだった。

「またね」
「ですか」
「だから。デートはね」
そのデートについてまた語る。
「何よりもいいものなのよ」
「じゃあ今は」
「ええ、最高の気持ちよ」
そのデートをしているからであった。
「本当にね」
「そうですか、よかった」
彼女の今の言葉にだ。後輩は笑顔になった。
「それなら」
「本当に甘い気持ちよ、あっ」
ナンシーはその甘い気持ちを楽しみながらグラウンドを見てだ。
遠くの方にあるものを見たのだった。それが何かというとであった。
「あれは」
「どうしたんですか？」
「野球してるわね」
望遠鏡を取り出してそちら側を見ての言葉だった。
「そうなのね」
「あっ、そうですね」
後輩も遠目ながらここで気付いたのだった。

第二百二十話　また鉢合わせてその三

「そういえば」
「ふうん、練習試合ね」
「何処と何処ですか？」
「私のいる第一普通科と」
この学園は普通科といっても幾つもあるのだ。さながらかつての陸上自衛隊の歩兵部隊である。陸自では歩兵をそう呼んでいたのだ。
「それと第三商業科ね」
「それぞれのチームでなのですね」
「それに」
「それに？」
「まずいわね」
ここでナンシーの顔が曇ったのであった。声もだ。
「これって」
「まずいって？」
「いるわ、彼が」
こう言ってであった。またサングラスとマスク、それに帽子とコートを取り出してであった。変装をするのだった。やはりヘリウムガスも吸った。
そのうえで別人になってだ。ナンシーは言うのであった。
「これでよしね」
「また変装されるんですか？」
「そうよ、フランツがいるから」
「フランツさんって第一普通科バファローズのエースの？」
「そう、私のクラスメイトでもあるわ」
そのフランツである。言わずと知れた二年Ｓ１組きっての頑健な肉体の持ち主である。そしてそれと共に頭があれな人間としても知られている。

「そのフランツよ」
「あの、フランツさんって」
「何？」
「向こうまでかなりの距離がありますけれど」
またいぶかしむ顔になる後輩であった。
「相当な距離ですよ」
「それがどうかしたの？」
「どうかしたのって」
「フランツの視力はね」
「どれだけあるんですか？」
「両方共五・〇よ」
それだけあるというのである。
「だからね。これだけ離れていてもね」
「見えるんですか」
「そうなのよ、平気でね」
「凄い目ですね」
「身体能力は凄いのよ」
それはナンシーもよくわかっていた。とにかく運動神経も耐久力も俊敏性も頑丈さもだ。フランツのそれは常識を超えた高いレベルにある。肉体については問題がないのだ。
「もう超人クラスでね」
「超人、ですか」
「中二日で先発完投できて全然平気でね」
「うわ、それは凄いですね」
「しかも一五〇を超える剛速球に七色の変化球」
双方を兼ね備えているというのである。
「おまけにコントロール抜群なのよ」
「まさに天才ピッチャーですね」
「そうした相手よ。だからね」
「警戒してですか」

「見つかるのは嫌だから」
ついつい出てしまった彼女の本音である。
「だからね」
「それでなんですか」
「そうよ、それでね」
「はい」
「ここ、去りましょう」
もうそそくさと歩きはじめている。
「いいわね」
「わかりました。デート場所の変更ですね」
「見つかったら終わりだから」
彼女の中ではそうなのだった。あくまで彼女の主観である。
「だからね。いいわよね、それで」
「ええ、僕は」
後輩は反対することはしなかった。素直な返事である。

第二百二十話　また鉢合わせてその四

「先輩がそう言われるなら」
「有り難う。じゃあね」
「はい。けれどフランツ先輩って」
「知ってるわよね」
「ええ、有名な人ですから」
野球選手としてだけでなくその行動でも有名だったりする。二年S1組の中でもだ。かなり有名人の部類に入っているのである。それがフランツだ。
「新聞部の中でも有名ですしね」
「身体と勘はいいのよ」
「その二つはですか」
「ないのは頭よ」
こうも言うナンシーだった。
「それよ」
「それですか」
「そういう子なのよね」
ナンシーは変装をしながらも腕を組んで困ったものを見せていた。
「実はね」
「じゃあここは」
「立ち去るわ」
また言うナンシーだった。
「いいわね」
「それに何処に行きますか？」
「ええと」
言われるとだった。困った声をあげるナンシーだった。
「どうしようかしら」
「どうしよう、ですか」

「何処に行こうかしら」
実はそこまでまだ考えていないのだった。
「それじゃあ」
「とりあえずここは去るんですね」
「ええ」
このことだけは決まっていた。その他のことは一切決まっていない。しかし本当にこのことだけはだ。ナンシーは決めているのだった。
そのうえでだ。さらに話すのだった。
「行きましょう」
「わかりました」
「何処かにね」
こう言って後輩を急かしてだった。何処かに行く。
そしてである。フランツはだ。
ピッチング練習をしながら。相手であるタムタムに話した。
「おい」
「どうした？」
「ナンシーがいたぞ」
こう言うのだった。
「あそこにな」
「あそこ？」
「ああ、あそこにいたんだ」
彼女がいたそこを指差しての言葉だ。
「あそこにな」
「いないぞ」
「だからいたんだよ」
そうだったというのである。
「今さっきな」
「そうだったのか」
「見えないか？あそこが」

「見るには視力が五ないと駄目だな」
タムタムの言うこともナンシーと同じだった。
「やっぱりな」
「そうなのか」
「ああ、無理だ」
そしてだ。タムタムはこうフランツに話した。
「御前かナンでなければだ」
「そこまでか」
「しかし。何でいたんだ?」
「それはわからないがな」
「誰か一緒にいたのか?」
「そこまでは見ていない」
投げながら話すフランツだった。凄まじいノビを見せるボールがタムタムのミットに突き刺さる。快速球と言っていいものだった。
「だが。ナンシーは確かにいた」
「そうなのか」
「あいつもあいつで忙しいみたいだな」
そしてだ。ここからがフランツであった。

第二百二十話　また鉢合わせてその五

「陶芸部だったな」
「いや、新聞部だぞ」
「新聞部だったのか」
「いつも本人が言ってるだろうが」
「そうだったのか」
そのことを完全に忘れている彼だった。
「記憶になかったな」
「なかったのか」
「そうだ、なかった」
自然に消去されていたのである。彼の中から。
「しかし今思い出した」
「それはよかったな」
「そうだ、園芸部だった」
「だから新聞部だ」
また突っ込みを入れるタムタムだった。
「何処をどうしたらそういう話になるんだ」
「何っ、サッカー部じゃなかったのか」
また部活が困っていた。
「あいつは」
「また部活が変わってるぞ」
「そうか」
「とにかくだ。ナンシーはいたんだな」
「そうだ、いた」
また話すフランツだった。
「変装をして何処かに行ったな」
「変装？推理小説みたいな話だな」
「推理小説か」

「変装と聞くとな。まさか」
「まさか？」
「いや、それはないか」
タムタムはここでは話を打ち切った。自分でその考えを否定したからだ。
「ナンシーに限ってな。誰かと付き合うとかはな」
「付き合う？何をなんだ？」
「いや、だから何でもない」
フランツにもこう返す。そうしてだった。
ミットを構えながら彼に言った。
「よし、今度はだ」
「ああ。何を投げればいいんだ？」
「変化球だ」
それだというのである。
「何でもいいから投げてみろ」
「じゃあスライダーからだな」
「何でもいい」
変化球の種類にはこだわらないというのだ。
「とりあえず投げてみてくれ」
「ノーサインか？」
「ああ、そうだ」
まさにそれだというのだ。事前に球種を確かめることなくだ。投げてみろというのだ。
「それでいこう」
「また随分と無謀だな」
「そうか？」
「受け取れるのか、それで」
「大丈夫だ」
それがいけるというのだった。それでだった。
「それはな」

「俺のボールならか」
「ああ、御前も実際はどうだ？」
逆にフランツに問い返しもした。
「俺がパスボールをすると思うか？」
「いや」
「ないよな、それは」
「俺のボールを受けられるのはだ」
フランツはそのタムタムに対して返答する。確信している言葉でだ。
「御前しかいない」
「そうだな」
「ああ、御前しかいない」
また言ったのだった。
「そういうことか」
「ああ、そうだ。それに」
「それに？」
「御前の考えていることは大体わかる」
タムタムはフランツを見据えて言った。

第二百二十話　また鉢合わせてその六

「大体な」
「わかるか」
「ああ、わかる」
また言ったのだった。
「バッテリーだからな」
「そうか。そうだな」
「だからノーサインでもいける。やるぞ」
「わかった。それじゃあな」
こうして二人で実際にノーサインで練習をするのだった。フランツはどの変化球も見事に投げる。そしてタムタムはそのボールを全て受けた。
ナンシーはだ。相変わらずだった。
逃げ回りそしてだ。安全と見た場所で変装を外した。
元の姿に戻ってだ。そして言うのだった。
「やれやれね」
「大変でしたね」
「そうよ、大変だったわ」
ほっとした息と共の言葉だった。
「全く。デートも大変ね」
「学校の中では、ですよね」
「ううん、考えてみれば外もね」
「外もですか」
「そうよ、外もね」
学校の外もだというのだ。その話をするのだった。
「クラスの皆が何かといるから」
「だからですか」
「本当にデートも大変だわ」

ナンシーはまた言った。やれやれ、といった口調である。
「楽しいけれどそれでもね」
「止めはしないですよね」
「まさか」
このことへの返答はすぐだった。
「そんな訳ないじゃない」
「やっぱりそうですよね」
「止める位ならね」
「はい」
「最初からしないわ」
そうだというのだった。
「絶対にね。そういうものよ」
「それじゃあまだ続けますよね」
「勿論よ。けれど」
「けれど？」
「ここは何処かしら」
ふと気付いて周りを見回す。そこは校舎の中だった。白いコンクリートの壁にワックスで奇麗にされた床、天井も白い、まさに学校の校舎だった。
その中にいる事に気付いてだ。後輩に尋ねたのである。
「高等部？そこかしら」
「いえ、確かですね」
「違うの」
「ここ、大学ですよ」
こうナンシーに話すのだった。
「確か」
「えっ、八条大学なの」
「農学部ですね」
このことも話してきた彼だった。
「そこですね」

「また何で農学部なんかに来たのかしら」
「だって先輩が」
「私が？」
「とにかく無闇やたらに何処かに行くから」
「それでここに来たのね」
ナンシーも後輩の説明で事情を理解した。
「そういうことなのね」
「そうです。それでなんですけれど」
「ええ」
「これからどうします？」
至って冷静にナンシーに問うた。
「それで」
「ええと」
こう問われてだ。まずは考えるナンシーだった。
そのうえでだ。こう言ったのであった。
「農学部よね」
「はい」
「じゃあ動物いるわよね」
こう言うのだった。

第二百二十話　また鉢合わせてその七

「それじゃあ」
「動物を観るんですか？」
「そうしない？」
これが今のナンシーの提案だった。
「これから」
「牛とか豚をですか」
「あと鶏とか」
そうした生き物をというのだ。
「山羊とか羊もいるしね」
「何か和みそうですね」
「だからよ。それでどう？」
あらためて後輩に尋ねる。
「そういう動物を見て回らない？」
「わかりました。ではそれで」
「有り難う、それじゃあね」
ナンシーは後輩が賛成してくれたのを見て笑顔になった。
そのうえでだ。早速元気を取り戻して彼の手を握って急かしてきた。
「じゃあそっちに行きましょう」
「その動物達のところですか」
「私動物好きなのよ」
その自分の趣味も話した。
「だからね」
「牛とか豚もですか」
「そうなの、そういう動物も大好きなの」
あらためて話した。
「特に羊がね」

「羊がなんですか」
「だって可愛いじゃない」
だからだというのである。
「もこもこしてね。毛皮にもなるし」
「確かにそうですよね」
「羊の牧場もあった筈だし」
八条学園はその中に牧場も持っているのである。その牧場の管轄が何処かというとだ。この八条大学農学部というわけなのだ。
「そっちね、やっぱり」
「牧場ですか」
「そう、そっちに行こう」
「はい」
こうして二人はその牧場に向かったのだった。
牧場はだ。木の柵で囲まれていた。そしてその中にだ。羊達がのどかに草を食べたり寝転がったりしていた。実に平和な姿である。
その風景を見てだ。ナンシーはにこにことして言うのだった。
「やっぱりこういうのって」
「いいんですね」
「大好きなの」
そのにこにことした顔での言葉だ。
「こういうのが」
「成程、そうなんですか」
「うん。羊のところに行こう」
そして彼を誘った。
「そうしましょう」
「はい、じゃあ」
「可愛いわよね」
早速傍で寝ている羊の頬を撫でる。撫でられても何もしてこない。やはり平和だ。
その羊達の中で楽しい時間を過ごそうとした。しかしここで、だ

った。
後輩がだ。ふと言うのだった。
「あれっ、あそこ」
「どうしたの？」
「狼がいますけれど」
それがいるというのだった。
「柵の外に」
「あっ、確かに」
見れば本当にだった。黒い狼がそこにいて柵の外をうろうろとしている。一頭だがそれでもだ。確かに狼がそこにいるのだった。
「あれ狼よね」
「危ないですよね、やっぱり」
「ええ。狼と牧場って言えばね」
この二つから想像できることは一つだけだった。
「襲って来るわよね」
「退治します？」
後輩は真剣な顔でナンシーに尋ねた。
「ここは」
「ううん、一頭だけれど」
「やっぱり危ないですか」
「大学の人呼んだ方がいいわね」
いぶかしむ顔での言葉だった。

第二百二十話　また鉢合わせてその八

「ここはね」
「そうした方がですか」
「少なくとも素手で戦える相手じゃないし」
言うまでもなく狼は猛獣の一つである。確かに銃やそうしたものがあれば倒せる。しかし素手では、というとやはり普通の高校生では無理な話である。
だからだ。ここでナンシーはこう言ったのである。
「だから呼んだ方がいいわね」
「そうですか。丁度人が来ましたよ」
「あっ、いいタイミングね」
馬に乗った人が来たのである。
「じゃああの人にね」
「はい」
「お話してね」
「それでいいですよね」
「それが一番ね」
それでだ。その人に尋ねることにした。
その人は作業服を着ていた。何処かカウボーイのそれを思わせゥ作業服だ。色も茶色系統でその感じだった。帽子もテンガロンハットである。
聞けばだ。その人はだ。
「ああ、農学部の学生だよ」
「そうなんですか」
「じゃあここの人なんですね」
「うん、そうだよ」
その通りだというのだった。
「三年なんだ、今」

「そうですか。それでは」
ナンシーはそれを聞いてだ。その農学部の学生にさらに問うのだった。
「あの狼のことは知ってますか？」
「ああ、ロボね」
名前はそれだというのだった。
「あの狼のことだよね」
「あの狼ロボっていうんですか」
後輩はそれを聞いて述べた。
「狼王ですか」
「ああ、わかるんだ」
「シートンのあれですよね」
「うん、名前はそこから来たんだ」
そうだというのだった。
「あの話からつけたんだよ」
「狼だからですね」
「うん、そうだよ」
「狼って」
ナンシーはあらためて狼であることがわかってだ。いぶかしむ顔になった。
そしてそのうえでだ。こうその学生に尋ねた。
「あの、狼を置いて」
「ここにかい？」
「大丈夫なんですか？狼っていったら」
「ああ、大丈夫だよ」
しかし学生は安心した声でナンシーに答える。
「それはね」
「大丈夫って」
「だってあれ番狼だから」
だからだというのである。

第二百二十話　また鉢合わせてその九

「ロボはね。他にも何頭もいるけれど」
「狼を番に使うって」
後輩は学生のその説明を聞いてだ。腕を組んで考える顔になった。
そうしてそのうでだ。こう言うのだった。
「危なくないですか？」
「だって犬と同じじゃない」
「犬とって」
「犬は狼からなったものなんだよ」
話すのはこのことだった。
「豚が猪からなったのと同じでね」
「それと同じなんですか」
「そうだよ。狼っていうのは実際は人を襲わないんだ」
これはよく言われていることである。だから人に懐いてそれで犬になっていったのだ。決して凶暴な生き物ではないのである。
「それにちゃんと御飯をあげていればね」
「番もするようになるんですか」
「そうだよ。だからあのロボもね」
「番をしているんですね」
「そういうこと。狼はいい生き物だよ」
学生はにこりと笑って話した。
「特にニホンオオカミはいいね」
「ニホンオオカミって」
「あの森にいる狼ですよね」
「そうだよ。この農学部にもいるよ」
その狼がいるというのである。
「やっぱり番狼でね」
「番狼で、ですか」

「ここに」
「よかったら見てみるかな」
学生は二人にこう言ってきた。
「ニホンオオカミね」
「どうしようかしら」
ナンシーはその申し出を聞いて後輩に顔を向けた。そしてそのうえで彼に問うのだった。
「見てみる？」
「折角だしそうしてみます？」
後輩はこう彼女に返した。
「ここは」
「そうするのね」
「何か面白そうですし」
だからだというのだった。
「ニホンオオカミって普通の狼とは少し違うらしいし」
「森にいるのよね、本来は」
「ええ。それって珍しいのよね」
「うん、そうだよ」
学生が二人に話してきた。どうやらニホンオオカミについて詳しいらしい。
「狼って本来は平原とかにいるよね」
「はい」
「そうですよね」
「けれどニホンオオカミは違うからね」
学生はまた話した。
「だからね」
「チャンスよね」
「はい」
二人共言う。
「その珍しい狼を見る」

「ええ、確かに」
「だったらね。ここは」
「そうしましょう」
こう二人で言ってであった。あらためてその大学生に顔を向けてだ。言うのだった。
「御願いします」
「そのニホンオオカミに会わせて下さい」
「うん、いいよ」
大学生は快く承諾してくれた。彼が誘ったにしてもだ。
そうして二人はその場所に案内されるのだった。ニホンオオカミがいるその場所に。

また鉢合わせで　　完

２０１０・９・３０

第二百二十一話　ニホンオオカミその一

ニホンオオカミ

二人が案内されたのは犬小屋だった。本当にごく普通の犬小屋がそこにあった。

そしてだ。その犬小屋のところに犬にしか見えない生き物がいた。灰色の毛を持っていてその大きさにしても中型犬程度である。

大学生はその犬を見せて言うのだった。

「これがなんだよ」

「これがですか」

「ニホンオオカミなんですね」

「あまりこれといって特徴はないだろ？」

大学生は笑ってこう話してきた。二人から見てもそのニホンオオカミは寝そべっていて呑気な感じだ。狼の外見だがやはり犬に近い。

大学生はそのニホンオオカミを見てまた話す。

「小さいしね」

「確かに小さいですね」

「狼にしては」

「犬でも普通位の大きさだしね」

大学生はこうも話す。

「実際のところね」

「そうですよね、これじゃあ」

「この大きさですと」

「森の中で暮らしている狼だから」

ここに大きな理由があるというのである。

「どうしてもね。小さくなるんだ」

「そういえば森にいる狐や鹿も」

気付いたのは後輩だった。

「小さくなりますよね」

「その方が動きやすいからね」
大学生もそれを理由にする。
「だからね」
「それでなんですね」
「そうなんだ。これも進化の形態だよ」
「成程、そうなんですね」
「うん、それで平原とかにいるとね」
その場合はというのである。
「大きくなるんだ」
「大きくてもやっていけるからですね」
「小さくなるのも進化の形態の一つなんだ」
農学部の学生だがそれでもだ。その言葉は生物学のそれを思わせる一面もあった。実際に学者の様な喋り方にもなっている。
「だからね」
「ううん、大きくなるだけじゃないんですね」
後輩は腕を組んでこう言った。
「そうなんですね」
「そういうことだよ。それでね」
「はい」
「どうかな。大人しいよね」
「ニホンオオカミがですよね」
「どう？実際に。大人しいだろ？」
こう二人に問うのであった。
「実際は」
「そうですね。確かに」
ナンシーが答えた。
「狼っていうだけで怖そうだけれど」
「ゴリラもそうだけれどね」
大学生はゴリラの話も出してきた。ゴリラは実は非常におとなしいどうぶつである。完全な菜食であり他の動物を決して襲わないの

だ。
「狼も実際はね」
「だから犬になれたんですね」
「そうだよ。狼はとても優しい動物なんだ」
そしてだ。この話も出してきた。
「ほら、今でもたまにあるじゃない」
「たまに？」
「狼に育てられた子供」
この話をするのだった。
「狼と一緒に育ったとか。そういう話あるよね」
「あっ、ありますね」
学園の中でジャーナリストであるナンシーにはすぐにわかる話だった。それを聞いて確かな顔で頷く。
「昔から」
「そうだろ？狼は人を襲わないんだ」
大学生はまたこのことを話した。
「肉食だけれど。とても優しい生き物なんだよ」
「じゃあこのニホンオオカミも」
「やっぱり」
「狂犬病でない限り絶対に襲ったりしないよ」
そうだというのである。
「むしろ。こうしてね」
「大人しく寝ていたりするんですね」
「かえって番狼になるかどうか不安な位だよ」
大学生は苦笑いも浮かべた。
「実際のところはね」
「そんなになんですか」
「だって大人しいから」
これが理由だった。

第二百二十一話　ニホンオオカミその二

「それにこうしてよく寝るし」
「警戒心とかは」
「それもね」
この言葉にもう出ていた。
「不安な感じだね」
「そうなんですか」
「いや、こいつは特別だろうけれど」
今目の前にいるそのニホンオオカミがだというのだ。
「ニホンオオカミは元々羊とかは大きな動物はあまり襲わないしね」
「狼にしては小さいからですね」
「うん、それに」
後輩の言葉に応えながらさらに話す。
「あまり群れないし」
「狼なのにですか」
「ニホンオオカミは特別なんだ」
二人にこうも話すのだった。
「家族単位で生活しているんだ」
「あれっ、そうなんですか」
「狼なのに」
「森にいるじゃないか」
やはりここに行き着いた。ニホンオオカミと森は切っても切れない関係にあった。森こそがニホンオオカミを生み育むものであった。
「だから群を作るのもね」
「ないんですか」
「それで」
「そうなんだ。平原だったら作れるけれど」
「随分変わった狼なんですね」

ナンシーはこのことをつくづく実感した。
「本当に」
「だからかなり特別な狼なんだ」
大学生は今はそのニホンオオカミを見ていた。
「狼って言っていいのか不安になる時がある位ね」
「そこまでなんですね」
「実際にこいつもね」
そのニホンオオカミ自身をまだ見ていた。
「外見はこうして怖そうだけれど」
「実際は違うんですか」
「犬より大人しいんだ」
そうだというのである。
「それに優しい性格でね」
「優しいんですか」
「子供とかには絶対に吼えないよ」
「そんなになんですね」
「人懐っこいしね。こんな優しい奴ははじめてだよ」
「そこまで」
「いい奴だよ」
それは確かだと言ってだ。実際にそのニホンオオカミを温かい目でも見ていた。そうしてそのうえで二人に話をしているのである。
そしてだ。大学生は言った。
「よかったら何時でも見に来ていいからね」
「はい、それじゃあ」
「その時は」
「狼を番犬みたいに使ってみる」
大学生はこのことも話した。
「今僕達がやってみてることだしね」
「それで上手くいってるんですか」
「いってるよ」

後輩の言葉ににこりと笑った返事が返って来た。
「充分にね」
「それは何よりですね」
「食べるものさえ充分にあれば」
その場合はだというのだ。
「狼は本当に有り難い存在だよ」
「エウロパの童話とかじゃ悪魔みたいですけれど」
「まあエウロパの連中は貧しかったから」
温厚で頭がいいことがわかる大学生だったがそれでもだ。エウロパに対してはまずは悪意から入るのがやはり連合の人間であった。
「それに我儘な連中だしね」
「だからですね」
「うん、勝手に狼を悪者にして」
そうだったというのである。
「それでああいう風に書いてたからね」
「けれど実際は狼は」
「いい生き物だよ」
大学生の目がこれ以上はないまでに細まった。

第二百二十一話　ニホンオオカミその三

「それに誇り高いしね」
「誇り高い生き物なんですね」
「そうだよ。モンゴルじゃ特にそうらしいね」
この国の名前も出て来た。
「何しろモンゴル人は」
「あっ、そうですね」
ナンシーはここではっと気付いて明るい笑顔になった。まるで灯りが点いた様にだ。
「蒼き狼と白き牝鹿の」
「子孫だって言ってるよね」
「はい」
この時代でもそう言っているのである。彼等の誇り高い祖先だとだ。
「チンギス＝ハーンの血を引いてね」
「そうですよね」
「それも面白いよね」
大学生の目は細まったままであった。
「そういう話ってね」
「何か夢がありますよね」
「僕はまあ。日本人だけれど」
大学生は己の出身も話した。
「そういう話は好きだしね」
「狼もですね」
「特にニホンオオカミはね」
目の前にいるそれはとりわけだというのである。
「好きだよ。地球じゃ長い間絶滅したって言われてたけれど」
「いるんですよね、確か」

「一応見つかってはいるよ」
そうだというのである。
「数は凄く少ないけれどね」
「そうなんですか」
「実際にいる星も多くはないし」
これがニホンオオカミの現実だった。
「いる場所も。限られてるし」
「希少な存在なんですね」
「うん、もっと多くてもいいのに」
大学生の言葉はしんみりとしたものにもなった。
「少ないんだよね」
「寂しいですね、それは」
「やっぱり」
「日本人としてはね」
ニホンオオカミだからであった。
「それはね。その他にも」
「他にも？」
「まだ何か動物がいるんですか？」
「狐や狸もね」
今度はそうした動物だった。なおどちらもイヌ科である。
「そっちもね」
「そういえばさっき狐のことお話してましたよね」
ナンシーがこのことを問うた。
「そうですよね、確か」
「そうだよ。日本の狐も狸もね」
「小さいんですか」
「森の中にいるからね」
そのホンドギツネやホンドタヌキのことである。日本にいたような種類のものは他の星にいてもこう呼ばれるのである。これは他の動物もだ。

「だからね。けれどそういう種類はね」
「少ないんですね」
「数がね。どうしてもね」
そうだというのである。
「イヌ科は本来森で暮らすより平原とかの方が合ってるから」
「その代表が狼なんですか」
「うん、そういうことだよ」
大学生は今度は後輩の問いに答えた。
「それでなんだ」
「成程、そうなんですか」
「森が多い惑星もあるけれどね」
そうした惑星が多いのも事実だ。しかしであった。
「けれど。温帯の森はね」
「少ないですよね」
「ツンドラにいる種類はまた別になるから」
そうした狼はシベリアオオカミとなるのだ。狼の中でもとりわけ有名な種類の一つである。かつては絶滅危惧種であった。地球にあった頃の話だ。
「それに寒いと大きくなるから」
「あっ、そうですね」
ナンシーがまた気付いた。

第二百二十一話　ニホンオオカミその四

「寒いと動物はどうしても」
「アザラシでもそうだろ？」
「はい」
「キタゾウアザラシとかはね」
「寒いとそれだけ大きくなりますね」
「熊もそうだしね」
今度は熊だった。
「日本のツキノワグマは小さいからね」
「だから人を襲っても被害は少ないんですね」
「罷とは違うよ」
それとはというのだ。
「ましてやハイイログマとは全然別だから」
「ハイイログマっていったら」
「やっぱりロシア」
「あそこの」
「ロシアはやっぱり熊だからね」
このイメージは普遍であった。
「まああそこは寒い場所が多いし」
「だから大きいんですよね、動物が」
「それで」
「うん。熱帯だと生態系が根本から変わるし」
そこはまた別世界であった。
「狐とか狼なんてね」
「いないですよね」
「そういう動物は」
「当然狸もね」
いる筈もないことであった。

「いるのはね。あの熱帯の動物達で」
「物凄い生き物ばかりですよね、色々と」
「生き残れたら凄いっていうような」
「南米系のジャングルなんてあれだよ」
大学生も言う。
「殆ど核戦争後の世界とか地震が起こった後の関東だから」
「それかあれですよね」
「魔界都市ですよね」
「そういう世界だからね」
それだけ危険な世界だというのだ。何故危険かというとその過酷な気候とあまりにも危険な動物達、風土病、植物とあらゆるものが原因である。
「あそこにはとてもだし」
「連合ってジャングル多いから」
「だから」
「どうしても限られるんだ」
これが結論だった。
「こうしたニホンオオカミみたいな生き物がいる場所はね」
「本当に寂しいですね、それって」
ナンシーもしんみりとなっていた。
「それで希少っていうのは」
「もっと栄えて欲しいけれどね」
「はい」
「住む場所が限られてるから」
ニホンオオカミを見ながらの言葉だ。だが当の狼の方は呑気に寝そべってそのうえであくびである。本当に呑気なものであった。
「仕方ないね」
「そうなんですか」
「まあこいつはね」
今もニホンオオカミを見ている。

「産まれてからずっとここにいるけれど」
「ずっとですか」
「ここに」
「そうだよ、番狼としてね」
それでいるというのである。
「いるんだよ。親も兄弟も皆いるよ」
「じゃあ寂しくないですよね」
「それじゃあ」
「別居はしてるけれどね」
大学生はここで冗談を入れて笑ってみせた。
「それでもね。いるよ」
「家族がいれば寂しくないですよね」
ナンシーは言った。

第二百二十一話　ニホンオオカミその五

「それだけでもう」
「そうそう。ひょっとして君は」
「はい、今はアパートにいます」
自分のこともここで話すナンシーだった。
「祖国から離れて」
「八条学園はそうした子が多いからね」
「日本人以外の生徒の方がずっと多いですからね」
「うん、だからね」
「やっぱり時々寂しくなります」
ナンシーはこう言ってから実際に寂しい笑顔になった。そうしてそのうえでだ。大学生に話してそれから横にいる後輩も見るのだった。
後輩を見てからだ。彼女はまた話した。
「けれど」
「けれど？」
「そう思う時はどんどん減っています」
そうだというのである。
「今は」
「ああ、成程ね」
大学生もそれを聞いて笑顔になる。
「二人だからだね」
「はい、それで」
まさにそれでだというのだった。
「これからもです」
「このデートだけじゃなくてだね」
「えっ、デートって」
「あはは、それはわかるよ」

大学生は笑顔で言う。そのナンシーと後輩を見ながらだ。
「顔でね」
「顔で」
「お嬢ちゃんとてもにこにこしてるから」
その顔でわかるというのだ。
「それでね」
「えっ、そんな顔になってます？」
「なってるよ。にこにことね」
「ううん、そうだったんですか」
「そこのお坊ちゃんもね」
今度は後輩を見ての言葉だった。
「隣同士にいてにこにこしてるから」
「僕もですか」
「顔は言葉と同じだからね」
「表情ですか」
後輩はまた言った。
「それでなんですか」
「わかるよ。大抵のことはね」
大学生は後輩にさらに話す。
「まあデートで牧場に来る人は多いけれどね」
「そういう人はですか」
「多いよ。ただ狼を観に来る人はね」
「いないですか」
「そういう人はいないね」
そうだというのだった。
「珍しいよ」
「まあ私達もここに来るとは思っていませんでしたし」
「狼はカップルには人気がないからね」
大学生は笑って話した。
「男の子には人気があるけれど」

「子供にはですか」
「うん、大人気だよ」
子供は昔からそうした動物が好きである。だからだ。狼を観に来るというのだ。
「大人も来てくれるし」
「けれどカップルにはですか」
「うん、そうなんだよね」
ここまで言ってまた二人に話してきた。
「それでだけれど」
「それで？」
「折角来てくれたしね」
ここでも笑顔で話す。
「よかったらね」
「何かあるんですか？」
「これどうかな」
言いながらあるものを出してきた。それは。

第二百二十一話　ニホンオオカミその六

ぬいぐるみだった。灰色の狼のぬいぐるみだった。それを出してきたのだ。
「よかったらあげるけれど」
「ぬいぐるみですか」
「うん、そうだよ」
まさにそれだというのである。
「これどうかな」
「くれるんですか」
「見ての通りね」
その通りだとまた言葉を返す。
「よかったらどうかな」
「ええと、何か」
「それって」
二人はここで謙遜を見せた。そうしてだった。
「只で貰うのは」
「ちょっと」
「ああ、それは気にしないでいいから」
「いいって言われても」
「けれど」
「ニホンオオカミを好きでいてくれるから」
大学生はこう言ってきた。
「だからね」
「ニホンオオカミをですか」
「好きだから」
「だからだよ」
笑顔での言葉だった。
「あげるよ。はい」

「あっ、もう一つですか」
「これで二つですね」
「二人だからね」
だから二つだというのだ。数も合わせてくれたのである。
「どうぞ。遠慮なくね」
「あの」
ナンシーは少し怪訝な顔になって大学生に尋ねた。
「このぬいぐるみって狼が好きになった人には誰にもですか？」
「ううん、違うよ」
「けれどさっき好きになってくれたからって」
「狼は狼でもニホンオオカミだよ」
こう話すのだった。
「ニホンオオカミを好きになってくれたからだよ」
「それでなんですか」
「このぬいぐるみを」
「わかりにくいだろうけれどこの狼はニホンオオカミなんだ」
そのぬいるぐみを見ての言葉だった。見ればその二つのぬいぐるみを両方とも見ている。そうしてそのうえで二人に話すのである。
「そうなんだよ」
「だからなんですね」
「ニホンオオカミを好きになってくれた人に」
「そういうことだよ。だから遠慮しなくていいんだよ」
大学生はまた二人にその二つのぬいぐるみを差し出した。
「さあ、どうぞ」
「有り難うございます」
「それじゃあ」
ここでだ。二人も遂にそのぬいぐるみをそれぞれ受け取った。そうしてだった。
二人でだ。こう話すのだった。
「何か悪い気がするけれど」

「それでも。何かですよね」
「ええ、嬉しいわ」
「そうですよね」
二人で笑顔で話す。大学生もその二人に言う。
「可愛がってね」
「ぬいぐるみをですか？」
「ぬいぐるみもだけれど」
それだけではないというのである。もう一つの相手もだった。
「狼もね」
「ニホンオオカミもですか」
「そちらも」
「個人的な趣味だけれど好きなんだ」
彼はまた話した。
「ニホンオオカミがね。だからね」
「それでなんですか」
「どちらも」
「よかったらまた来て」
大学生はまた話した。
「ここにね」
「はい、じゃあまた」
「来させてもらいます」
「待ってるからね」
二人で話してだった。そうしてそのうえで大学生と別れて農学部を出た。そしてあえて選んだ医学部の中の。高校生がまず来ない喫茶店の中でだ。ホットコーヒーを飲みながら話すのだった。

第二百二十一話　ニホンオオカミその七

「今度からね」
「農学部もですね」
「ええ、時々行きましょう」
ナンシーはホットコーヒーを飲みながら後輩に話す。白い店の中にそのコーヒーだけが黒い。全てが白の中での黒であった。
「あそこにね」
「そうですね。ニホンオオカミですか」
「いいわよね」
笑顔で言うナンシーだった。
「何かね」
「そうですね。格好よかったし」
「それでいて可愛かったし」
「これも」
後輩はここでぬいぐるみを出してきた。先程貰ったそれをだ。
「いいですよね」
「そうね」
ナンシーもそのぬいぐるみを出してきて見ながら話す。
「可愛いわよね」
「格好よくないですか？」
「私にはそう見えるわ」
そうだというのだった。
「可愛くね」
「そうですか。可愛くですか」
「私はそう思うわ」
これがナンシーの見たそのぬいぐるみだった。どちらも全く同じぬいぐるみだ。しかしそれでも彼女は可愛いと言い後輩は格好いいと言うのだ。

「そこは違うわね」
「そうですね。捉え方は」
「それでも。何か」
また言う彼女だった。
「いいわね」
「はい、このぬいぐるみ」
「ずっと持っていましょうね」
「ええ、それは」
「絶対にね」
こう後輩に話した。
「そうしましょう」
「先輩ってそういえば」
後輩はナンシーの今の言葉にふと気付いたように話した。
「あれですよね。ぬいぐるみお好きですよね」
「わかるの？」
「わかりますよ。前からぬいぐるみあればすぐ買いますし」
「女の子だから」
ナンシーはそこに理由をつけて言い訳にするのだった。
「だからよ」
「女の子だからですか」
「そうよ。女の子はぬいぐるみが好きなのよ」
少しバツの悪い顔になって話す。
「それでなのよ」
「それでなんですか」
「ええ、そうよ」
また言うナンシーだった。
「それでなのよ」
「じゃあ女の子は皆ぬいぐるみが好きなんですか」
「少なくとも私はね」
言葉のトーンがやや下がった。

「そうよ」
「成程、じゃあ今度からは」
「今度からは？」
「プレゼントにぬいぐるみを入れますね」
そうするというのであった。
「それ駄目ですか？」
「駄目じゃないけれど」
ナンシーの顔は今度は困ったものになった。そうしてそのうえで彼に対して話すのだった。本当にいささか困った感じになっている。
「ただ」
「ただ？」
「恥ずかしいわね」
ここで顔が赤らんだ。
「やっぱり。そういうのって」
「恥ずかしいですか」
「ええ」
小さくこくりと頷いた。

第二百二十一話　ニホンオオカミその八

「ちょっとだけれどね」
「じゃあ止めますか？」
「それもね」
ここでまた言う彼女だった。
「何ていうか」
「嫌なんですか」
「恥ずかしいけれど。それでも」
こう彼に話す。
「欲しかったりするし」
「何か矛盾していません？」
「それでもよ」
「それでもですか」
「ええ、プレゼントよね」
ここで彼の顔をじっと見る。彼女から見れば実に整った顔だ。
「私への」
「勿論そうですよ」
「女の子はね」
また女の子という全体枠にして自己弁護めいて話す。
「あれなのよ。付き合ってる子からのプレゼントはね」
「そのプレゼントは？」
「何でも嬉しいのよ」
こう話すのだった。
「そう、何でもね」
「そうなんですか」
「少なくとも私はそうだから」
何だかんだで逃げられずこう話す。
「だからね」

「わかりました。それじゃあ」
「そういうことだから。それでだけれど」」
「はい」
「私もよ」
ナンシーは純粋な微笑みになって話した。
「それはね」
「それはっていいますと」
「私もプレゼントは好きよ」
そうだというのである。
「贈り物をするのはね」
「先輩もですか」
「ええ、そうなのよ」
こうナンシーに話す。
「それはわかっておいてね」
「じゃあ」
「今度のデートの時」
後輩の顔をにこりとして見ながら話す。
「何がいいかしら」
「僕はですね」
「ええ、貴方は？」
「先輩が僕にくれるものなら何でも」
目を輝かせての言葉だった。純粋な瞳でナンシーを見ながらだ。
そういてそのうえで彼女に対してこの話をするのであった。
「嬉しいです」
「そうなのね」
「はい」
これが彼の返答だった。
「本当に先輩がそうしてくれるものなら」
「わかったわ。けれどね」
「けれど？」

「何でもいいって言われるとね」
困った笑顔になって話すナンシーだった。
「少し困るわね」
「そうなんですか」
「だって。色々とあるじゃない」
「ものはですか」
「そうよ。だからね」
後輩に対して話す。
「それでなのよ」
「そうですか」
「何か欲しいものがわからないと。何をあげていいのかね」
「わからないからですか」
「そうよ。そういうこと」
それでだと話すのだった。
「だからね。そういうことを言うのは止めて」
「わかりました」
後輩も彼女のその言葉に頷いた。
「それじゃあ」
「ええ。それにしても狼ね」
ナンシーは狼の話に戻してきた。

第二百二十一話　ニホンオオカミその九

「狼っていったら」
「狼に何かあるんですか？」
「ほら、あっちでも話に出てたけれど」
その農学部にいた時のことだ。その大学生から聞いた話を今思い出して話すのだった。
「ほら、あの話でね」
「はい」
「蒼き狼と白き牝鹿ね」
「チンギス＝ハーンのあの話ですよね」
「そう、モンゴルのね」
これは連合にいたら誰でも知っていることであった。やはり狼といえばモンゴルなのである。これはもう当然の考えの流れとなっていた。
「そのモンゴル人の娘うちのクラスにいるのよ」
「そうなんですか」
「若しかしたら」
腕を組み考える顔で述べるナンシーだった。
「その娘から面白いことが聞けるかしら」
「その狼のことで、ですか」
「それで記事が一つできるかも」
こう考えたのはやはりジャーナリストとしての立場からだった。学校の新聞であってもだ。ナンシーはれっきとしたジャーナリストであった。
その考えからだ。彼女は今言うのだった。
「それ、どう思うかしら」
「そうですね。一度色々聞かれるのもいいですね」
後輩はこう彼女に答えた。

「文化欄に書けば」
「そうね。それでいいわよね」
「僕はそう思います」
「わかったわ」
彼のその言葉を聞いて頷いたのだった。
「じゃあ一回聞いてみるわね」
「わかりました」
「それで何か手に入ればいいし」
こうも言ってだった。
「入らなくてもそれでも」
「それでも？」
「何かのヒントになるだろうし」
「記事のヒントにですよね、やっぱりそれって」
「そうよ。ヒントはふとしたところからやって来るものなのよ」
まさにそうだというのだ。ナンシーは新聞部に入ってからそうしたことも学んだのである。そうした意味でもジャーナリストになっているのだ。
「だからね」
「先輩って熱心ですよね」
「そうかしら」
「やっぱり憧れます」
後輩としての言葉だった。彼氏のものではなかった。
「そうしたところは」
「有り難う。それでもね」
「ええ、それでも」
「口で言うのは易しよ」
この格言を話に出した。
「けれど実行に移すのはね」
「難しいってことですよね」
「そういうこと。私は今口では言ったけれど」

「実行はまだですか」
「そう、まずは実行」
またこう言うのであった。
「それからだから」
「新聞もそうなんですね」
「これもよく言われるけれど新聞は手で書くものじゃないから」
「足で、ですよね」
「しかも真実を書く」
かつての日本のジャーナリストが意図的に無視したことだ。
「そうしないとね」
「自分達に都合の悪いことは報道しないのは」
日本のマスコミはこれもよくやっていた。その弊害は日本全体に及び深刻極まる実害も及ぼしていたのだ。ネットのない時代は特に酷かった。
「それは」
「最低よ」
ナンシーはそういったことは一言で否定した。

第二百二十一話　ニホンオオカミその十

「絶対にやったらいけないわ」
「やっぱりそうですよね」
「だから真実をありのまま報道するのよ」
「真実をありのまま」
「それを新聞に書くの」
新聞部の基本である。
「そういうことよ」
「その言葉肝に銘じます」
「スポーツ新聞はいいけれどね」
「何でスポーツ新聞はいいんですか？」
「作り話を書いてそれで喜ばせる新聞だからよ」
だからだというのである。
「だからそれでいいのよ」
「だから八条スポーツもああやってですか」
「そう、無茶苦茶書くのよ」
やはりわかっていてやっていた。ナンシーは八条スポーツについては完全に確信犯であったのだ。なおこれは既に殆どの人間がわかっている。
「大袈裟に。何でも出してね」
「宇宙人でもですね」
「そう、出すのよ」
また言ってみせた。
「面白ければいいんだから、スポーツ新聞は」
「それってジャーナリズムなんですか？」
話を聞いた後輩は素直にこの疑問を口にした。
「新聞っていっても」
「あっ、スポーツ新聞はね」

「ジャーナリズムですよね」
「エンターティメントよ」
ナンシーが出してきた言葉はこれであった。ジャーナリズムはここでは出なかった。
「それなのよ」
「エンターティメントですか」
「ええ、そうよ」
また後輩に話す。
「それだから」
「エンターティメントってことは」
「面白いかどうかなのよ」
まさにそれだというのである。
「そう、面白ければいいのよ」
「嘘の記事でもですか？」
「宇宙人の化石とかタレントのペットの猿が動物園にいたとかいう記事信じる人がいるかしら」
「信じる方がおかしいですね」
後輩は即答で返した。
「そんなトンデモ話。どうかしてますよ」
「そうでしょ。学校の中のお池の一つに恐竜が出たりとか」
「それは普通にありそうですけれどね」
「まあ動物園から逃げたとかね」
実際にこうした疑惑もあって大騒ぎになったことがある。これは本当の話だ。
「そういうことは考えられるけれどね」
「けれど宇宙人は」
「ないわよね、普通は」
「どう考えても」
また答えた後輩だった。
「そういうことなんですね」

「そういうことよ。さて」
「はい」
「デート。再開させましょう」
ナンシーは笑顔に戻ってまた話した。
「それでいいわね」
「わかりました。それじゃあ」
「デートはまだはじまったばかりよ」
こんなことも言うのであった。
「だからもっと楽しまないとね」
「もっとですか」
「そうよ、もっとよ」
そしてさらに言ってみせたのだった。
「もっと、もっと、もっとよ」
「三倍なんですか」
「そう、通常の三倍よ」
「色は赤ですね」
「勿論、通常の三倍だから」
赤くなると通常の三倍のものになるという話はアニメから来ている。あるアニメのキャラクターの乗っているマシンの性能が通常の三倍のものだったからである。そのマシンの色が赤だったのだ。
「だからね」
「赤ですね」
「そうよ。はい、赤」
「あっ」
ナンシーが出してきたのは。赤いキャンデーだった。
「これ舐めてね」
「それで赤くなるんですね」
「そういうこと。それでいいわよね」
「はい」
後輩は笑顔でナンシーの言葉に頷く。そうしてそのうえでデート

を楽しむのだった。二人のデートは二人にとってはとても甘く幸せなものであった。

ニホンオオカミ　　完

２０１０・１０・７

第二百二十二話　蒼き狼と白き牝鹿その一

蒼き狼と白き牝鹿

後輩とのデートを心ゆくまでまで楽しんだナンシーはだ。次の日に教室でナンに対してデートの時に見た狼のことを話した。無論デートをしたということは隠してだ。

狼と聞くとだ。ナンはすぐに笑顔になってこう言ったのだった。

「私の祖先なのよ」

「それと鹿がよね」

「そうよ。モンゴル人は蒼き狼と白き牝鹿の子孫なのよ」

「所謂トーテニズムね」

「そうなるわね」

動物を祖先とし神格化したうえで崇拝することである。この時代においては連合では非常にポピュラーになっている崇拝の一つである。

「動物だからね、どちらも」

「言葉としては格好いいわね」

ナンシーはこのことを真面目に高く評価した。

「色といい動物といい」

「そうでしょ。モンゴル人に相応しいでしょ」

「かつて世界を席巻した草原の民ね」

「今じゃ連合のしがない一国家だけれどね」

「何言ってるの、統合作戦本部長モンゴルの人じゃない」

連合軍の統合作戦本部長のことである。階級は元帥だ。

「その他にも中央政府大統領だって何人も出して」

「そうだったかしら」

「歴史も古いしね」

「そういえば気付いたら草原にいたのよね」

一応匈奴がはじまりにはなっている。この時代ではだ。

「私達の祖先って」
「気付いたらなのね」
「そうなのよ。それでずっと羊を飼って暮らしててね」
「時として交易をしたり略奪をしたりね」
「私達の御先祖様にとって略奪は産業の一つだったから」
草原の遊牧民の生活ではこれも常識であったのだ。そうした世界だったのだ。
「まあそれもね」
「今やったら顰蹙どころじゃ済まないわよね」
「他の国全部から経済制裁ね」
連合ではこうなる展開である。連合各国の間では経済制裁はまさに戦争と同じだ。銃やビームは使わないが常にコインや札束での戦争が行われているのだ。
「それ間違いないわね」
「それで今モンゴルの産業って」
「羊よ」
これが出て来た。
「他には山羊に馬に」
「つまり遊牧？」
「そう、それよ」
まさにそれであった。
「それで生きてるし」
「今も？」
「大体の人がそうね」
ナンはこうナンシーに話す。
「私の家もそうだったし」
「遊牧民なのね、今もね」
「モンゴルって草原ばかりの星が多いのよ」
「草原とは切っても切れないってことなのかしら」
「多分ね。ロシアの星が氷と雪ばかりなのと一緒で」

そうした意味ではだ。両国はまさに同じであった。
「縁なんでしょうね、やっぱり」
「それで草原なのね」
「皆そこで暮らしてるのよ。そりゃ街があって定住してる人もいるわよ」
流石にそうした人間もいる。この時代ではだ。
「けれどやっぱりね。そういう人もね」
「昔ながらの遊牧民ね」
「そういう人が多いわ。やっぱり血よね」
ナンはここでにこりとなった。
「これってね」
「モンゴル人の血ね」
「そうなのよね。やっぱり草原なのよ」
また言うナンだった。
「草原で生きていくのがモンゴル人にとっては最高なのよ」
「それで今もゲルで暮らしてるのね」
「一人暮らしでね」
ここでもにこりとなっている。
「いいわよ。落ち着くわよ」
「ううん、私はちょっと」
「ナンシーはあれよね。アパートよね」
「そうよ。っていうかね」
「ゲル暮らしなのはモンゴル組だけね」
実際にその通りである。モンゴル人だけがそうして遊牧生活をしているのである。ナンの他にもモンゴル人の生徒がいるのである。

第二百二十二話　蒼き狼と白き牝鹿その二

「それはね」
「そうね。モンゴル人だけね」
「あの生活って楽しいのに」
「不便じゃない？」
ナンシーは怪訝な顔でナンに問うた。
「ゲルって要するにテントよね」
「ええ、そうよ」
「テント暮らしって。毎日だと」
「全然。携帯もパソコンもテレビもあるし」
「そういうのはあるのね」
「家具だって本だってあるし」
普通にこう言うナンだった。
「それにおトイレはね」
「外でするのよね、確か」
「そうよ。外でね」
実際にそうだというのだった。
「外でしてるわ、いつもね」
「公衆トイレよね」
「ええ、そこでね。それが近くにないと」
「その場合はどうするの？」
「携帯トイレがあるから」
そうしたことはいつも考えての遊牧であるのだ。
「だからそれもね」
「平気なのね」
「そういうこと。もう全然平気よ」
「食べ物もあるしね」
「お金はカードで振り込んでもらえるし」

実家からである。
「だから全然平気よ。それに気が向けばその度にね」
「移動するのね」
「それができるから」
いいというのである。
「遊牧っていいわよ」
「ううん、そうなのね」
「それで狼よね」
ナンはこの話に戻してきた。
「狼のことよね」
「そうそう、狼だけれど」
「モンゴルじゃ一番人気のある生き物よ」
ナンは今度は純粋な笑顔になった。子供が好きな動物を語る、まさにそうした顔になってそのうえで話をするのであった。
「ダントツでね」
「ダントツでなの」
「鹿と並んでね。つまりはね」
「御先祖様ってことね」
「そういうこと」
まさにそれであった。
「だからだし。それに」
「それに？」
「格好いいからね」
それも理由であった。
「だからなのよ」
「ううん、成程ね」
「だからモンゴルじゃね」
「ええ」
「狼に家畜を食べられても」
それでもだというのだった。

「それはいいのよ」
「いいの？大切な家畜なのに」
「狼に食べられるのは天の鳥分与」
それだというのだった。
「だからそれでいいのよ」
「かなり独特な考えね」
「そうでしょ。それはよく言われるわ」
「モンゴル人ってとにかく狼が好きなのね」
「大好きよ」
好きどころではなかった。大好きであった。
「本当にね」
「やっぱりそうなのね」
「狼が一番なのよ」
それは一番だというのだ。
「モンゴルじゃね」
「虎とか豹はいないの？」
「ああ、森の生き物ね」
「モンゴルにもあるわよね、森」
ナンシーはナンにこのことを尋ねた。

第二百二十二話　蒼き狼と白き牝鹿その三

「星によっても」
「あるけれどね。ただ」
「ただ？」
「あまり入らないわね」
そうだというのだった。
「だって森に馬はね」
「ああ、無理よね」
「ユニコーンはいけるけれど」
それはだというのだった。ユニコーンは森に棲む馬なのだ。
「それはね」
「モンゴルじゃユニコーンにも乗るわよね」
「そうよ。ただ」
「ただ？」
「やっぱり森はね」
ナンは難しい顔をしてそれで首を捻るのだった。
「どうもね」
「どうもって？」
「森は好きじゃないのよ」
やはりそうであった。何につけてもだった。
「モンゴル人はね」
「そうなのね、民族の習性なのね」
「民族のなの」
「モンゴル人っていっても混血はしてるわ」
これはモンゴル人だけではない。連合はとにかく混血が進んでいる。そのモンゴル人も肌が黒かったり目が青や緑の者も多いのだ。
「けれどやっぱりね」
「心にあるのね、その習性が」

「そうなのよ。だから森は」
難しい顔をしていた。ここでもだ。
「好きじゃないのよね、多くの人はね」
「じゃあ森に入るのって」
「変わった人だけね」
「そうした人だけなのね」
「そう、そういう人しかいないの」
そうだというのだった。
「トナカイとかを遊牧する人だけね」
「鹿をなのね」
「鹿自体は人気があるけれど」
狼を父とすれば鹿が母になるのである。そういうことだった。
「それでも。鹿の遊牧はね」
「モンゴルじゃしないの」
「あまり。やっぱり羊がメインよ」
そうだというのだ。
「それでなのよ」
「鹿は家畜によくなるけれどね」
この時代ではそうなっている。鹿の肉や乳を食べたり飲んだりするのだ。皮も使う。そうした意味では牛や豚と同じという訳だ。
「それでもなのね」
「そうなの。羊、これも」
「民族ね」
「そういうことよ。モンゴル人はとにかく羊なのよ」
こう話すナンだった。
「わかってくれたかしら」
「ええ」
ナンシーはナンのその言葉にこくりと頷いた。
「よくね」
「有り難うね。実は私もね」

「ナンも？」
「狼と一緒にいるわよ」
にこりと笑って話すのだった。
「いつもね」
「狼と一緒になの」
「いい動物よ。友達よ」
「友達なの」
「そう、モンゴル人って遊牧民じゃない」
とにかくここに話の中心があった。モンゴル人が遊牧民であるということがだ。ナンはそのことを話の軸にして話をするのだった。
「だからね」
「狼を飼ってるのね」
「飼ってるのじゃないのよ」
それも否定するのだった。
「そうじゃなくてね」
「一緒にいるっていうのね」
「そう、友達だからね」
にこりと笑っての言葉だった。

第二百二十二話　蒼き狼と白き牝鹿その四

「だからなのよ」
「それでなのね」
「そうよ、それでなの」
また話すナンだった。
「狼と一緒にいるのよ」
「そういうことなのね」
「そういうこと。だからなのよ」
「成程ね。モンゴルね」
「そう、モンゴルよ」
とにかくそこに話がいくのだった。
「モンゴルはそうなのよ」
「それじゃあだけれど」
「ええ」
「その狼今何処にいるの？」
ナンシーは今度はこのことを尋ねた。
「あんたと一緒にいたっていう」
「いたって？」
「そう、一緒にいたっていうね」
こうナンに問うのである。
「その狼は」
「今いたって言ったわよね」
「ええ」
ナンシーは己のその言葉に責任を持って答えた。
「その通りだけれど」
「言葉は過去形じゃなくてね」
ナンはその彼女の言葉に言い返す。
「現在形にして」

「現在形？」
「そう、現在形」
それにだというのだった。
「それにね」
「現在形ってことは」
「そうよ、今もね」
「一緒にいるの？」
「そうよ」
その通りだというのである。
「わかったわね」
「ってことは」
こう話すナンだった。
「そうよ、今も一緒に住んでるわよ」
「ゲルでね」
「ってことは馬とかと一緒に住んでるのね」
「そうよ、一緒よ」
まさにその通りだというのだった。そうしてであった。
ナンはだ。己の携帯を出してきてだ。またナンシーに話した。
「はい、これ」
「携帯の待ち受け動画？」
「そうよ、これ見て」
言いながら実際にナンシーにさらに見せる。そこには灰色の狼がいた。それを見るとだった。ナンシーも納得した顔で頷くのであった。
「これがなのよ」
「その狼なのね」
「そうよ。名前はね」
「名前は何ていうの？」
「テムジンっていうの」
それがその狼だというのだ。狼は今動いてへっへっへ、と舌を出

して立っている。立体映像なのでそれが余計に目立つ形になっている。
「この子の名前はね」
「テムジンっていうのね」
「格好いいでしょ」
ナンの顔が綻んだ。
「この名前私がつけたのよ」
「テムジンってあれよね」
「わかるわよね」
「ええ、モンゴル帝国の太祖の名前よね」
「そうよ、若い頃のね」
その頃だというのである。
「その名前なのよ」
「そうよね、やっぱり」
「そこから名前を取ったのよ」
「成程ね、それでなの」
「ただ」
「ただ？」
「名前を何にしようか迷ったのよ」
ナンはさらに話す。その話にのろけが入っている。そうしてそのうえでだった。彼女はナンシーに対してさらにのろけるのだった。

第二百二十二話　蒼き狼と白き牝鹿その五

「ジェベとかスブタイとかね」
「迷ったの」
「カサルにしようかとも思ったし」
こうにこにこと話していく。
「それかジュチかチャガタイか」
「何かその名前って」
「オゴタイかトウルイか」
「モンゴル帝国の関係者の名前ばかりね」
「そうよ。それでなのよ」
「迷ってたのね」
「そういうこと」
そうだと話すのである。
「それでだったのよ」
「かなり迷ったのね。っていうか」
「っていうか？」
「この狼オスなのね」
ナンシーはその狼の立体画像を見ながら話す。見れば狼は今度は寝そべりはじめた。そうして大きく欠伸をしている。その風景であった。
「そうよね」
「わかるの」
「名前で。っていうか」
「ええ」
「テムジンって名前でわかったわ」
そこからだというのである。
「その名前でね」
「そこからなの」

「実際にそうよね」
「その通りよ」
実際にそうだというナンだった。
「オスよ、この子」
「やっぱりね」
「結婚はまだだけれどね」
「相手まだいないの？」
「今募集中。狼の女の子をね」
「ふうん。だったら」
「ああ、相手の名前は」
ナンからの言葉であった。
「もう決めてるわ」
「っていうとやっぱり」
「ボルテよ」
にこりと笑うのはここでもだった。
「それしかないじゃない」
「やっぱりそれなのね」
「テムジンだからね」
「それでボルテね」
「それしかないわよね、やっぱり」
「まあそうね」
ナンシーもナンのその言葉に頷く。その通りだというのである。
「それしかね。ただ」
「ただ？」
「そこで鹿じゃないのはね」
ナンの話に合わせてだ。ナンシーも笑顔で話すのだった。意外にもここではかなりフレンドリーな調子になっている彼女だった。
「少し残念ね」
「仕方ないわね。実際には狼と鹿はね」
「結婚できないからね」

「そういうこと。狼は狼とね」
「一緒になるものよね」
「そうよ、そういうことだからね」
だからだというナンだった。
「だからお嫁さんは狼なのよ」
「それで相手見つかりそう？」
「ううん、もう少しね」
ナンの顔が微妙なものになった。
「もう少し探すわ」
「もう少しなの」
「候補者はいるのよ」
それは既にだというのである。いるというのだ。
「何匹かね」
「何匹かなの」
「そう、ネットとかネットショップで探したのよ」
「へえ、ペットシィップにも狼いるの」
これはナンシーにとっては意外なことだった。話を聞いて目をしばたかせる。その行動にこそそのまま出てしまっていることだった。

第二百二十二話　蒼き狼と白き牝鹿その六

「そんなお店もあるの」
「ちょっと特別なお店だとね」
「いるの」
「そうよ、いるわ」
その通りだというのである。
「狼もね」
「何か本当に特別なお店みたいね」
「動物保護条約は守ってるお店でね」
このことを保障するナンだった。連合は動物保護にはかなり五月蝿い国なのだ。それで彼女もこのことをあらかじめ話したのである。
「そこでなのよ」
「そこでなのね」
「学校から離れた場所にあるけれどね」
「それで何処にあるの？」
「電車に乗って駅を三つ行ってね」
「そこになの」
「そう、そこ」
こうナンシーに話す。
「そこにいるのよ」
「狼がねえ」
「白い奇麗な狼でね」
ペットショップのその狼のことも話すのだった。
「いい感じの美人さんなのよ」
「じゃあその娘と？」
「あくまで候補者よ。ただね」
「ただ。今度は？」
「白い狼なのよ、その娘」

ナンはこのことを話しながら微妙な感じになっていた。
「それでテムジンが灰色でしょ」
「ええ」
「灰色の雄の狼と白い雌の狼よ」
「その組み合わせって確か」
「わかるわよね」
「ロボとブランカね」
ナンシーは言った。
「それよね」
「そう、シートン動物記のね」
まさにそれだというのだ。この文学作品もこの時代でも広く読まれている。誇り高き狼の話だ。狼はやはり誇り高い生き物なのである。
「それよ」
「色はまさにそれね」
「それでいいかなとか思ったり」
「じゃあ決まり？」
「けれどテムジンはロボじゃないから」
ナンのこだわりがここで出た。
「それがね。問題よね」
「そこまで考えるのね」
「考えてるわよ」
まさにそうだというのだった。
「だって。ロボのことだから」
「それでなの」
「勿論。本当にどうしようかしら」
ナンは腕を組んで考える顔になってナンシーに話した。
「ここは」
「まあ焦る状況じゃないでしょ」
「ええ、それはね」

ないと返すナンだった。
「それはないわ」
「そうよね。だったらじっくり考えるべきよ」
ナンシーはここでは参謀になっていた。
「ここはね」
「そうね。生涯の伴侶だしね」
「そのテムジンにとってはね」
「ええ。それじゃあ」
「とにかく慎重に選ぶわ」
このことをまた言うナンだった。
「どんな娘がいいかね」
「名前はもう決まってるしね」
「ボルテね。それしかないわ」
「そういうことね」
「さて、それでだけれど」
話が一段落したところでだ。ナンはふと話を変えてきたのだ。
その話はだ。こうしたものだった。
「今日学校が終わったら」
「部活の後で？」
「ええ。私の家来ない？」
ナンシーを自分の家に誘うのである。
「ゲルにね」
「そこになの」
「そう。来ない？」
また彼女を誘った。

第二百二十二話　蒼き狼と白き牝鹿その七

「よかったらだけれど」
「ううん、それじゃあ」
ナンシーは話に一段落置いてから述べた。
「行っていい？」
「どうぞ」
ナンは自分から言い出しただけあって快く引き受けるのだった。
「それじゃあね」
「有り難う。じゃあ行かせてもらうわ」
「いつもの用意しておくから」
こうも言うナンだった。
「馬乳酒と羊料理ね」
「やっぱりそれね」
「それと乳製品ね」
モンゴル料理の定番ばかりだった。
「お茶も勿論ね」
「それと血もね」
「そうそう。ナンシー血は平気よね」
「ええ、平気よ」
こう答えるナンシーだった。連合においては血を扱った料理もかなり普通である。連合では動物はそれこそ息以外全て食べるのが普通なのだ。
「全然ね」
「じゃあいいわ。用意しておくからね」
「部活は？そっちの」
「勿論あるわよ」
ナンは乗馬部に所属している。馬は彼女がいつも乗っている馬をそのまま使っている。勿論その馬を操る術はかなりのものである。

「けれど早く終わるのよ、今日は」
「そうなの」
「だからお家に帰って用意しておくわ」
ナンシーに対して話す。
「そういうことだからね」
「わかったわ。じゃあ狼見させてもらうわ」
「是非ね」
「あれっ、二人共どうしたの？」
ジョルジュもここに来たのだった。そのうえで二人に声をかける。
「何の話をしてるのかな」
「ええ、狼のね」
「その話をしてたの」
「狼！？」
狼と聞いてだ。怪訝な顔になるジョルジュだった。
そうしてそのうえでだ。彼は二人に言うのだった。
「狼って」
「だから狼よ」
「あの草原にいるね」
「いや、それはわかるよ」
ジョルジュは狼という生き物についてはわかるというのである。
それはだ。
「ただね」
「ただ？」
「ただっていうと？」
「女の子が狼の話ね」
彼が言うのはこのことだった。
「それがどうもね」
「まあちょっとね」
ナンシーがいぶかしんでいるジョルジュに話した。
「思うところがあってね」

「思うところって」
「ちょっとね。それでなのよ」
「ううん、よくわからないけれど」
「まあそれはいいじゃない」
話を強引に終わらせるナンシーだった。そうしてだった。あらためてジョルジュに対して話す。ここは話を上手く進めている彼女だった。
「それで狼だけれど」
「うん、その狼だね」
「ナンの家にいるのよ」
「狼が！？」
「そう、狼がね」
こう彼に話した。
「いるのよ」
「犬みたいな感じで飼ってるのかな」
「そうよ。よくわかったわね」
ナンはジョルジュの今の言葉に少し驚いていた。
「そのこと」
「わかるよ。狼から犬ができたんじゃない」
「それはその通りよ」
「だったらね。すぐにわかるよ」
ジョルジュはこう話す。

第二百二十二話　蒼き狼と白き牝鹿その八

「このことがね」
「それでなのね」
「そういうこと。ふうん、狼なんだ」
「何なら見に来る？」
ナンは彼も誘った。
「うちの狼ね」
「御言葉に甘えていいかな」
「勿論よ」
ナンの返答は一つしかなかった。
「じゃあそれで決まりね」
「うん、それじゃあ」
「さて、後はお家で用意してと」
こう言ったところであった。また来たのだった。
「ねえ、何かさ」
「面白い話してない？」
ネロとジョンだった。この二人も来たのである。
「一体何の話？」
「犬のこと？」
「近いけれど違うよ」
ジョルジュが微笑んで二人に話した。
「それはね」
「近いけれど違うって」
「どういうこと、それって」
「狼なのよ」
今度はナンシーが二人に話した。
「それなのよ」
「ふうん、狼なんだ」

「それでその狼がどうしたの？」
「私の家にいるのよ」
ナンの言葉である。
「はい、これ」
「あっ、これって」
「確かに」
ナンはネロとジョンにも携帯の動画を見せた。その狼の動画を見てだ。二人も納得した顔になりそのうえで頷いたのであった。
「狼だね」
「間違いなく」
「そうよ。私の家にいる狼なのよ」
ナンはにこりと笑って話す。
「これがね。名前はね」
「うん、名前は」
「何ていうのかな」
「テムジンっていうのよ」
二人にもこの名前を話した。
「どう？いい名前でしょ」
「ああ、モンゴル帝国の」
「チンギス＝ハーンのことだよね」
二人にもすぐにわかった。この時代においてもチンギス＝ハーンといえばモンゴルにおいて第一の英雄だからだ。それである。
「その英雄の名前をなんだ」
「名付けたんだね」
「そういうこと。格好いいわよ」
「確かにね。この動画観たらわかるよ」
「本当にね」
ネロとジョンはこう彼に返す。しかしだった。
ここからがだ。ナンの話術であった。
「実物はもっと格好いいわよ」

「えっ、そうなんだ」
「実物はもっとなんだ」
「そうよ、もっとよ」
思わせぶりな笑顔も見せた。
「もっとね。それでね」
「うん」
「それで」
「どう？二人も来る？」
こう言って誘うのだった。
「よかったらね。私のゲルにね」
「来ていいの？」
「狼を観に」
「いいわよ」
実際にいいと言ってみせた。完全に彼女のペースである。
「モンゴル帝国の支配者、観てみない？」
「じゃあ。パトラッシュと一緒にね」
「ラッシーを連れて来るよ」
「何か君達って」
ジョルジュは今の二人の返事に思わず突っ込みを入れた。

第二百二十二話　蒼き狼と白き牝鹿その九

「あれだよね」
「あれって？」
「あれっていうと？」
「犬は絶対に傍に置いてるよね」
こう二人に言うのだった。
「何があっても」
「パトラッシュは友達だからね」
「ラッシーは家族だよ」
「それでなんだ」
「そうだよ、パトラッシュがいない生活なんて耐えられないよ」
「ラッシーがいなかったら寂しくて仕方がないよ」
これが二人の返答だった。
「だからさ。それは」
「当然だよ」
「成程ね」
それを聞いて頷くジョルジュだった。
そのうえでだ。彼は納得した顔でこう言った。
「二人共そうでないとね」
「わかってくれたかな」
「このこと」
「ここでそう言わないと本当に二人なのか疑ったよ」
「疑うって」
「僕達が本物かどうか？」
「うん、そうだよ」
その通りだというのである。
「だって犬が嫌いなネロやジョンってね」
「ちょっとね」

「考えられないわよね」
ナンとナンシーも頷くことだった。
「そういうのは」
「幾ら何でも」
「だからだよ」
ここで言ったのはネロだった。
「僕何処でもね。パトラッシュはね」
「連れて行くのね」
「そうするのね
「そういうこと。それでいいよね」
笑顔でそのナンシーとナンに話した。
「パトラッシュも一緒で」
「ええ、いいわよ」
ナンも最初からわかっているような返答だった。
「それじゃあね」
「そういうことでね。じゃあ今日放課後ね」
「僕もね。それでだけれど」
ジョンはネロと違うことをナンに言ってきた。
「一つ気になることがあるけれど」
「気になることって？」
「その狼のことだけれど」
彼が言うのはその狼のことだった。
「大人しい？それとも凶暴？」
「必要に応じて怖くなるわよ」
これがナンのジョンへの返答だった。
「時と場合によってね」
「それってどういうことかな」
「つまりあれよ。何かおかしな人が私のゲルに近付くとね」
「うん、そういう時に怖くなるんだね」
「そういうこと」

こうジョンに話した。
「そういうことなのよ」
「そうだったんだ」
「普段は本当に大人しいわよ。優しいし」
これが何の説明だった。
「わかったてくれたかしら」
「わかったよ。いい狼なんだね」
「狼はいい生き物よ」
「いい生き物なんだ」
「そうよ。人は襲わないし」
ナンはこのことをよく知っていた。何故ならば狼と共に暮らしているからだ。それで狼を知らない筈がない、そういうことだった。
「しかも賢くて誇り高いし」
「誇りもね」
「そうよ、誇りもね」
それもあるというのである。

第二百二十二話　蒼き狼と白き牝鹿その十

「だからね。いい生き物よ」
「犬の元だからね」
「そうだからだね」
ネロとジョンは犬から考える。狼と犬の関係についてはもう言うまでもなかった。狼から全ての犬が生まれていったのである。
「それはよくわかるよ」
「僕もね」
「わかってくれたらいいわ。そういえばパトラッシュとラッシーは」
ナンはその彼等のことをだ。ふと考えたのだった。
「あれよね。オスよね」
「うん、そうだよ」
「紛れもなくね」
「そうなの。じゃあ関係ないわね」
ナンはそれを確かめてから納得した顔で頷いたのだった。
「別にね」
「関係ないって？」
「何が？」
「実は今お嫁さん募集中なの」
二人にこのことも話すのだった。
「この狼。テムジンのね」
「そうだったんだ」
「この狼て独身だったんだ」
「実はそうなのよ」
こう話すのだった。
「それで今相手を探してるのよ」
「ううん、相手見つかった？」
「それで」

「候補者はね」
二人にも言うことは同じだった。
「だから順調っていうところ」
「了解。よかったね」
「早く決まるといいね」
「有り難う。じゃあ今日の放課後ね」
ナンはにこりと笑って一同に話した。
「そういうことでね」
「うん、それじゃあね」
「楽しみにしてるよ」
笑顔で応えるネロとジョンだった。そうしてであった。
二人も来ることになった。そのネロがアロアにも話すのだった。
「アロアもどうかな」
「面白そうね」
にこりと笑ってだ。ネロの言葉に応えるアロアだった。
「私もいいかしら」
「いいと思うよ」
こう答えるネロだった。
「何ならナンに今から携帯でメールしてみる？」
「ええと、ナンは」
アロアはまずはクラスを見回した。ナンがいれば本人に話すつもりだったのである。しかし今はナンはクラスにはいなかった。
「いないわね」
「じゃあやっぱり携帯だね」
「そうね。それじゃあね」
自分の携帯を取り出してメールを送る。返信はすぐにだった。ネロはここでアロアに問うた。
「それでどうだったの？」
「是非にって言ってるわ」
こう答えるアロアだった。

「来てってね」
「そう。それじゃあね」
「私もね」
アロアはにこりと笑って話した。
「狼を見られるのね」
「ただ。どうかしら」
「それじゃあ」
「どうしようかしら」
不意にだ。アロアはこんなことを言いだした。
「困ったことがあったのよ」
「困ったことって？」
「ええ、少しね」
また言う彼女だった。
「狼よね」
「そうだよ。狼を見に行くんだよ」
「どうなのかしら。狼って人を襲わないのはわかってるけれど」
「それでも駄目なの？」
「駄目じゃないのよ。犬とはまた違うのね」
「まあ元は狼だけれどね」
こう話してだった。そうしてだった。
アロアはさらに言うのであった。
「パトラッシュも元は狼だったのよね」
「ああ、犬だからね」
「全然似てないわよね」
アロアが言うのはこのことだった。それでだった。
「本当に全然ね」
「そうだね。犬って種類は多いけれどね」
「姿形はそれぞれ全然違うけれど」
「それが不思議よ」
また言うアロアだった。

「犬の形も大きさも全部かなり違うのに元は一つってね」
「違うのって凄いよね」
「考えてみればそうだね」
「本当に」
二人はこんなことも話した。そして狼と犬の関係についても話すのだった。そしてその話からだ。彼等はナンの家に向かうのだった。

蒼き狼と白き牝鹿　　完

２０１０・１０・１６

第二百二十三話　優しい狼その一

優しい狼

ジョルジュ達はナンの家に来た。彼女の今の家は学校から少し北東にある山の麓であった。そこにゲルが一つ置かれているのである。
「今度はこの場所なんだね」
「そうね」
アロアがジョルジュのその言葉に頷いた。そうしてだった。
そのゲルを見る。ゲル自体はナンが好きな青色であり彼女のゲルである。そのゲルを見てだ。皆はあらためて彼女の家だとわかった。
「ゲルって移動できるからね」
「面白いよね」
「だからナンもいるのかな」
「ゲルにね」
そしてこう考えるのだった。
「たださ」
「どうしたの、ジョルジュ」
ナンシーがジョルジュの言葉に尋ねた。
「何かあるの？」
「いや、このゲルだけれど」
「ええ」
「外から見たら普通の大きさじゃない」
「それはそうね」
「けれど中はね」
彼がここで話すのはこのことだった。
「クラス全員で入っても平気だからね」
「考えてみればそうね」
ナンシーも言われてそれに頷く。
「それって皆の部屋がそうだけれどね」

「特にこのゲルはそうだよね」
また話す彼女だった。
「中は部屋が一つだけれど」
「そうよね。一つよね」
ゲルの中は実質的に部屋が一つである。それだけなのだ。だがそれでもだ。クラスメイト全員が入られる。そうした場所なのである。
「どういう構造になってのかしら」
「訳がわからないわよね」
「ええ」
また言うナンシーだった。
「本当にどういう構造になってるのかしら」
「まあ理解不能ではあるね」
ジョルジュはまた言った。
「考えてもね」
「ううん、本当にどうなってるのかしら」
「何はともあれ」
今度はジョンが言ってきた。当然ラッシーも一緒である。そしてだ。ネロのところにもだ。パトラッシュも一緒にいるのであった。
「中に入ろう」
「そうだね。それじゃあ」
「中にね」
ネロとアロアが頷いてだった。こうして一同はゲルの出入り口の前に来た。するとだった。ナンが早速その中から出て来たのだった。
「いらっしゃい」
「ええ」
ナンシーが笑顔で彼女に応えた。
「それじゃあ今からね」
「準備は全部できてるから」
「そうなの」
「そうよ、できたわ」

こう言うのだった。
「全部ね」
「早いね」
「まあ簡単な料理だったから」
ナンは笑顔でジョルジュに答えた。
「それでね」
「簡単なんだ」
「そうよ。簡単だったわ」
またジョルジュに話した。
「いつものあれだし」
「羊の肉を茹でた」
「あれね」
「そう、あれよ」
こうネロとアロアにも答えたナンだった。

第二百二十三話　優しい狼その二

「あれなのよ」
「確かチャンスンマハ？」
「それだったわよね」
「名前は複雑だけれどね」
笑いながら話すナンであった。
「実際はただ茹でただけだからね」
「羊の骨付き肉を塩茹でだったよね」
ネロがその料理について話した。
「それのことだったよね」
「そうよ、それよ」
まさにそれであった。
「それがメインでね」
「うん」
「後は乳製品よ」
次はこれであった。
「馬のね」
「モンゴル料理だね、本当に」
「それとボーズもあるから」
それもだというのだ。
「ほら、あの包んだやつね」
「餃子とかお饅頭みたいなあれよね」
アロアもこれは知っていた。前にナンに食べさせてもらったからだ。これもまたモンゴル料理という訳である。モンゴル料理にも種類があるのだ。
「確か」
「そうよ、それもあるから」
まさにそれだというナンだった。

「今回はバリエーションも考えたから」
「別にそこまでしなくていいよ」
ネロはにこやかに笑ってそれはいいとした。
「何か悪いよ、それは」
「いいのよ。モンゴル人はおもてなしが大好きなのよ」
ナンもまたにこやかに笑って言う。
「お客さんは神様のお使いだから」
「何かそれってあれよね」
アロアがここであることに気付いた。
「ルシエンも言うわよね」
「あっ、そうだね」
アロアの言葉を聞いてネロも気付いた。
「彼もだよね」
「トルコもそう言うらしいけれど」
「モンゴルもなのよ」
ナンはまた答えた。
「そういうことなのよ」
「そうなんだ。遊牧民って」
「そういう考えがあるのね」
「そういうことね。それじゃあ」
ナンはだ。あらためて二人に言った。
「中に入って」
「うん、じゃあ」
「お邪魔します」
二人はパトラッシュと共にそのゲルの中に入った。するとだった。
もうそこにはジョン達がいた。そしてである。あの狼もいたのだった。
狼はゲルの一角に蹲っていた。そしてへっへっへっ、と舌を出している。その仕草を見てだ。ネロは面白そうに笑って話した。
「そういうの見たらやっぱりあれだよね」

「犬に見えるでしょ」
「うん、本当に」
実際にそうだとナンに返す。言葉を返しながら機械の暖炉の前に座る。他の面々もそれぞれそこに座っていて車座になっている。
「やっぱり狼から犬になったんだね」
「そうよ。それでなのよ」
「犬だね、本当に」
また言うネロだった。
「パトラッシュと同じなんだね」
「そういえばあれだね」
今度はジョンが話す。彼もラッシーが傍に礼儀正しく座っている。
「シェパードとか日本の秋田犬とか甲斐犬とかいるじゃない」
「あと柴犬だね」
ジョルジュも言ってきた。
「そういう犬だよね」
「そういう犬って狼そのままだよね」
ジョンはこう言うのだった。
「本当にね」
「そうだよね。狼って本当に犬の祖先なんだね」
「だから怖がる必要なんてないのよ」
ナンはこのことを力説した。

第二百二十三話　優しい狼その三

「そんなことは全然ね」
「そういうことよね」
ナンシーももう来ていた。自分の席に女の子座りでいる。
「何か怖いイメージもあるけれど」
「モンゴルじゃ全然違うから」
ナンはここでも祖国を語る。
「狼は最高の生き物なのよ」
「ご先祖様っていう意味でも？」
「それもあるわ。青き狼だから」
やはりこれであった。
「私この言葉大好きなのよ」
「エウロパ人が聞いたら凄く怒るらしいね」
ジョルジュはふとこんなことも言った。
「向こうじゃチンギス＝ハーンって大悪人らしいから」
「何言ってるのよ。空前絶後の世界帝国を築き上げた英傑じゃない」
だが、だった。ナンはあくまでこう主張する。
「凄いじゃない。僅かの間にほぼ世界を統一したのよ」
「何か洪童とかアンネットの国は散々だったっていうけれど」
アロアはこんなことを言った。要するに韓国とロシアである。
「それはいいのね」
「まあね。それは言わない約束で」
ナンもこのことは苦笑いでなかったことにした。
「御願いね」
「わかったわ。じゃあそういうことでね」
「それ言われると弱いのよ」
「弱いんだ」
「やっぱり」

「確かにね。チンギス＝ハーンは英雄よ」
それは変わらないことだというのである。
「けれどね」
「結構物凄いことやってるわよね」
「桁外れの数の人殺してるしね」
「街一個消したりとかも」
「他にもやったかしら」
このことをどうしても否定できずにだ。さらに言うナンだった。
「ええと、他には」
「他にはって」
「まだあるんだ」
「確かあったわ」
腕を組みながら答えるナンだった。
「私にとっては残念なことに」
「残念なんだ」
「やっぱり」
「ええ、残念よ」
このことも否定しなかった。そうした意味では非常に素直な彼女である。こうしたところがモンゴル人らしいと言われたりもしている。
「正直なところね」
「けれど言っても仕方ないわよね」
「ええ」
その通りだとナンシーに返す。
「過去は過去だしね」
「それに考えてみたら」
ここでナンシーはこんなことを言った。
「昔は戦争してそれでそういうことって普通だったわよね」
「サハラじゃ今もそうよね」
今度はアロアも話した。

「そうよね」
「そうだね。それはね」
「確かにね」
ネロとジョンはアロアの今の言葉に頷いた。
「あそこはかなり凄いらしいけれどね」
「もう滅茶苦茶だって」
「それで人口が思うように増えないのかな」
ジョルジュは腕を組んでこう述べた。
「戦争で人が死ぬから」
「戦争で死ぬ数って案外少ないわよ」
それについてはナンシーが答えた。
「実際はね」
「そうなんだ」
「だからサハラは順調に人は増えてるでしょ」
「戦争で結構人が死んでも?」
「そう、確かに滅茶苦茶だけれど」
それは事実だとしてもだった。実際にはサハラの人口増加は順調と言える程ではない。連合のそれと比べると結構以上になのだ。

第二百二十三話　優しい狼その四

「それでもね」
「それでもなんだ」
「そうよ、二千億よね」
「うん」
「エウロパの二倍じゃない」
ナンシーは数から話すのだった。
「多いじゃない」
「ううん、確か元々エウロパの二倍の人口だったよね」
「ええ」
「それで人口抑制してるエウロパの二倍っていうのは」
ジョルジュは考えながら話す。
「やっぱり少なくないかな」
「ううん、そうなるかな」
「そう思うけれどね」
こう話すジョルジュだった。
「どうなのかな、それは」
「言われてみればそうかしら」
ナンシーも言われてこの考えになった。実は彼女は結構柔軟なところもあるのである。基本的に頑固な女の子であるがそれでもだ。
「やっぱりサハラって」
「そうなると思うよ」
「まあそれでだけれど」
またナンが言ってきた。
「チンギス＝ハーンっていうかモンゴル帝国だけれど」
「うん」
「そのモンゴルね」
「確かに戦争とかで沢山の人は殺したけれど」

それはもう前提なのだった。
「エウロパの昔みたいに残虐なことはしてないから」
「それはなんだ」
「そういえばそうよね」
「あんなね、異端審問みたいな」
ここでナンの顔が曇った。
「酷いことはしてないから」
「っていうかあれって」
「酷過ぎよね」
「そうそう」
「あそこまで行くと」
「滅茶苦茶どころじゃないから」
五人もナンのその言葉には同意だった。
「つまり虐殺はしてないってことだね」
「そういうことよ」
これがナンの言いたいことだった。しっかりとジョルジュに返す。
「そんなことはしないから」
「そうだね、遊牧民はそういうことはしないね」
「エウロパの連中はまた滅茶苦茶よね」
アロアもその顔を曇らせた。
「同じ宗教同士であそこまでできるなんてね」
「連合じゃ処刑の時だけだけれど」
ジョンは自分達のことも言った。
「それでもエウロパは違うからね」
「宗教が違うと十字軍で」
「同じだと異端審問」
「もう誰でも彼でも虐殺って」
「エウロパって凄いよね」
「全く」
誰もがエウロパへの感情を露わにしていた。そのうえでの言葉だ

った。
「っていうかね」
「そうよね」
ナンシーはナンが次に何を言うのか大体察していた。そのうえでの返し言葉だった。
「エウロパって普通にあれよね」
「お高く止まってるだけよね」
これがナンの言葉だった。
「はっきり言ってね」
「そうよね、それよね」
「貴族らしいわね」
そして話はエウロパ貴族主義への批判になるのだった。連合ではとにかく小学校からエウロパへの批判的な教育を行っている。とりわけ貴族主義についてはだ。批判が強いのである。
「だからモンゴル帝国もね」
「エウロパはあっさりやっつけたわよね」
「そう、ドイツなんてめじゃなかったわよ」
にこにことして話すナンだった。
「リーグニッツでね。やっつけてやったわ」
「そのままウィーンにまで雪崩れ込む筈だったんだっけ」
ネロがこうそのナンに問うた。

第二百二十三話　優しい狼その五

「それから一気に欧州を」
「そうなる筈だったけれどね」
ナンは腕を組んだ姿勢でネロのその言葉に答えた。
「残念なことにね」
「そうはならなかった」
「そういうこと」
こう答えるのだった。
「あそこで潰してればね。エウロパを全部ね」
「あんな連中いなくなったのにね」
ジョンも言うのだった。
「残念な話だよ」
「全く。それにエウロパって」
エウロパを叩く話は続く。今度はこんな話だった。
「狼嫌ってるし」
「あっ、そうなんだ」
「そうなのよ」
こうジョルジュに述べた。
「何でも悪魔の使いだとか吸血鬼の化身だとかでね」
「やっぱりそれが嫌なんだ」
「正直許せないわ」
そうだというのであった。ジョルジュへの返答はまさにそれだった。
「全く。狼を嫌うなんてね」
「モンゴル人から見ればだよね」
「本当に狼に家畜を食べられてもね」
エウロパ、かつての欧州で狼が忌み嫌われてきた理由はこれである。ェ牧畜をしている家畜が襲われるからである。それでなのだ。

「それは天の取り分なのにね」
「向こうにとってみれば死活問題だったんじゃないかしら」
ナンシーはここでは彼等の側に立って考えてみた。
「家畜を取られるって」
「そんなの大したことないじゃない」
ナンはモンゴル人として考えて述べる。
「全然」
「全然なの」
「そうよ、家畜は一杯いるじゃない」
やはりモンゴル人としての言葉だ。
「草原に見渡す限りね。それで例え食べられてもね」
「天の取り分なのね」
「狼だって生きないといけないのよ」
こうも言うのであった。ナンシーに言う。
「だから。それ位はね」
「それでなのね」
「そういうことじゃない」
当然といった口調だった。
「エウロパ人って心が貧しいのよ。結局は」
「まあそうだね」
「連中って昔は貧しかったし」
ネロとジョンもナンの言葉に賛成だった。
「だから今だってサハラに侵攻して」
「連合との戦争に負けてぼろぼろになってどうしようもなくなってるんだね」
「結局貧しいままの連中ってことだね」
「何もかも手に入れられないんだ」
「羊や山羊のほんの数匹」
ナンはまた話す。
「何千のうちの僅かじゃない」

「ナンの家ってそんなに羊いるんだ」
「ええ、一万位いるわよ」
こうジョルジュに答える。
「それ全部草原にいて遊牧してね」
「一万かあ」
「羊が」
「多いね」
「そうよね」
皆その羊の数を聞いてこう言うのだった。
「じゃあナンの家って結構以上にお金持ち？」
「それに人も多いとか？」
「だからそれだけの羊がいるんだ」
「そうなのね」
「ああ、モンゴルじゃ普通よ」
しかしナンの彼等への返答は素っ気無い。
「一族全員でやってるから。やっていけるし」
「一族でやってるんだ」
「そう、私の一族は本流の支族だけれどね」
そうだとだ。ネロに話すのである。
「今百人位いるのよ。それで皆で草原のあちこちを移動してるの」
「何か凄い生活ね」
ナンシーには想像できないことだった。定住民である彼女にはだ。

第二百二十三話　優しい狼その六

「それって」
「そうかしら」
「私から見れば凄いわ」
「凄いの」
しかしだった。ナンの今の言葉は自覚していないものだった。
その自覚していない言葉をだ。また言うのだった。
「そうなのかしら」
「自分じゃわからないのよ」
ナンシーはそのナンにこう返した。
「そういうのはね」
「よく言われることよね」
「そうでしょ。こうしたことはね」
「じゃあ私もそうなのかしら」
ナンは首を傾げさせながら言うのだった。
「実際モンゴルの生活って今だに遊牧だしね」
「定住してる人いないの？」
「いることはいるわ」
ネロに対して答えた。
「実際にね」
「いるんだ」
「ただね」
「ただ？」
「やっぱり少ないわね」
そうだというのだった。定住者は少ないというのである。
「街自体が少ないし。モンゴル人の街はね」
「ああ、やっぱりね」
「そうなんだ」

ネロだけでなくジョンも納得して頷くことだった。
「モンゴル人は遊牧だから」
「だからモンゴル人の街はなの」
「そういうことなのよ。外国の人は違うけれど」
ここで外国人の話が出て来た。
「その人達が少し変わったモンゴル人と一緒に街を作ってるのよ」
「今の言葉はちょっと」
ジョルジュはナンの今の言葉には難色を見せた。
「変わったっていうのは」
「だって。モンゴル人よ」
「だからっていうの？」
「そうよ。モンゴル人は遊牧するものだから」
「それはもう決まってるんだ」
「ええ、決まってるわ」
その通りだと。ナンはジョルジュに返す。
「既にね」
「何か色々と決まりがあるんだね」
「決まりって訳じゃないけれど」
ナンは首を捻りながら話す。
「まあ。遺伝子にあるっていうか」
「遺伝子って」
「そう、遺伝子にあるの」
今度は遺伝子の話になった。例えであるがそれでもだ。
「モンゴル人の遺伝子にね。遊牧があるのよ」
「その蒼き狼と白い牝鹿の遺伝子が」
「ちゃんとある」
「そういうこと。モンゴル人はそこから遊牧なの」
こう言うのである。
「発祥の時からね」
「宇宙に出ても変わらないって」

ナンシーは今の時代からも考えていた。この時代では誰もが宇宙を旅する。そうして多くのものを得ている時代なのだ。それがこの時代だ。

「それも凄いけれど」

「時代遅れかしらね、やっぱり」

ナンはくすりと笑って言葉を返した。

「携帯だってパソコンだってあるけれどね」

「それに携帯のお風呂やトイレもね」

「ええ、あるわ」

それもあると答えるナンだった。

「けれどやっぱり遊牧がいいわ」

「それで狼もね」

ナンシーはまた狼を見た。その狼テムジンはずっと寝たままだ。動く気配は全くない。実に大人しい姿をしてそこにいるのである。

ナンシーはテムジンを見ながら。また言った。

「本当に犬みたいね」

「そう思うのね」

「ええ、外見もだし」

確かに犬にしか見えないものだった。

「それに大人しいのね」

「だから狼は大人しいの」

ナンはこのことを力説した。

第二百二十三話　優しい狼その七

「人間と一緒にいられるし育ててくれるし」
「狼人間かあ」
「昔から言われてるけれど」
「それもよね」
「あの話も」
「本当よ。流石に私は違うけれど」
ナンは狼に育てられてはいないというのだった。
「モンゴルじゃ家によっては狼にお乳貰う子供がいるし」
「うわ、そんなことまであるんだ」
「つまりモンゴルじゃ御先祖様から」
「勿論鹿もあるわよ」
もう一方からもというのである。
「それで狼と一緒に育てられて」
「狼みたいに精悍になれってこと？」
ジョルジュがその理由を探って言った。
「それでなのかな」
「そう、それでなの」
まさにその通りだった。ナンは実際に答えた。
「それでね。そうやって育てられるのよ。狼みたいに精悍で心優しくね」
「優しいんだ」
「やっぱり狼って」
「気高く精悍で勇敢で心優しいのが狼よ」
これがモンゴル人であるナンの言葉だった。
「そういう生き物だからね」
「あっ、そういえば」
「そうだね」

ここでだ。ネロとジョンはあることに気付いたのである。
パトラッシュもラッシーもだ。全く騒がないのである。至って静かなまま二人の傍に寝そべってだ。気持ちよさそうに寝ているだけなのだ。。6
その自分達のそれぞれのパートナーを見ながらだ。二人は言うのだった。
「パトラッシュは危ない人や生き物が来たらすぐに警戒するのに」
「ラッシーも」
それが彼等であるのだ。
「それが全くないって」
「つまりは」
「そうだね」
ジョルジュも二人に対して言うのだった。
「この二匹が全く騒がないからね」
「じゃあテムジンはやっぱり」
「大人しいのね」
「何度も言ってる通りよ」
ナンはここでも明るい顔でナンシーとアロアに話す。
「狼だからね」
「狼はそうした生き物」
「賢いのね」
「鯨にこんなこと言った人がいるけれど」
ナンはここでは歴史の出来事を話すのだった。
「ほら、人間の次に頭がいいって言葉あったじゃない」
「それ？」
「それなんだ」
「そのことも」
「そう、その言葉だけれど」
その鯨に対する言葉をだ。彼女はあらためて話すのだった。
「狼は人間と同じだけ誇り高くてひょっとすると人間以上に」

「人間以上に？」
「どうだっていうの？」
「そこは」
「優しいのよ」
心優しいというのだ。その狼がだ。
「そういう生き物なのよ」
「狼が優しい生き物なのはわかったわ」
ナンシーはそれはだというのだった。
「それはね」
「ええ」
「けれど」
それでもというのだった。
「どうしてそこまで言えるの？」
「人よりも優しいって」
「そこまで」
「それってかなりなんじゃ」
「ねえ」
「だって。さっき言ったけれど」
またただった。話は戻るのだった。

第二百二十三話　優しい狼その八

「あれじゃない。狼って人を育てるじゃない」
ナンは話を戻した。そうしてそこからであった。
「人をね。自分の子供として扱ってね」
「ああ、狼少年とか狼少女とか」
「さっきの話だよね」
「それ？」
「それなのね」
「そう、それよ」
まさにそれだとだ。ナンは話すのだった。
「その話。人間だとできる？」
「人間になの」
「それでなの」
「つまりは」
「そうよ、それよ」
こう話すのだった。話は続く。
「それでなのよ」
「ううん、確かに人間だと」
「狼の赤ちゃんを自分の子供として育てるって」
「ペットとしてならともかく」
「家族ならあるけれど」
それはまだあるというのだった。これならまだだった。ナンシー達も頷ける話だった。しかし子供になるとこれが、というのである。
それでだ。また話す彼等だった。
「子供になるとねえ」
「養子ってことだけれど」
「狼を養子に」
「いや、狼じゃなくてもそれって」

「厳しいよね」
「ええ、そうでしょ」
その彼等にだ。ナンは話すのだった。晴れやかな顔になっている。
その顔でだ。さらに話す。
「そういうのってできないでしょ？人間には」
「そうね」
ナンシーはナンの言葉にここでも頷いた。
「やれって言われてもね」
「そういうことなのよ。けれど狼はできるわ」
ナンはこのことを強調する。
「人間じゃまう無理なそのことをね」
「できる」
「やっぱり凄いよね」
「それを考えたら」
「狼って」
「だから狼は優しいの」
また言うナンだった。
「種族が違っても育てられるんだから」
「自分の子供としてね」
「どう考えてもね」
ネロが考えてから言ってきた。
「それは人間だと」
「そうでしょ？できないわよね」
「うん」
その通りだとだ。ナンのその言葉にこくりと頷くネロだった。
「やっぱりね」
「けれど狼はできるのよ」
「犬と狼ならともかく」
ジョンはパートナーであるラッシーを見ながら首を捻っていた。
「人間と狼になると」

「狼って本当に凄いのよ」
ナンはこのことをまた言うのであった。
「そうしたことができるから」
「人間でも無理なのに」
「それができる」
「凄いのは確かに」
「優しいからこそできること」
「獰猛でも狡猾でもないの」
ナンは狼が昔言われていた悪名も否定した。
「それは誤解だからね」
「このテムジンもよね」
ナンシーは今も寝ているそのテムジンを見ていた。
「この子も」
「そうよ。さっきから話してるけれどね」
「優しいのね」
「絶対に人を噛んだりしないし」
「悪い奴は？」
「それは別」
これは断るのだった。

第二百二十三話　優しい狼その九

「そういう奴には自然と襲い掛かるのよ」
「悪い奴は別なんだね」
「そうよ、別よ」
まさにそうだとだ。ジョルジュに述べる。
「狼は正しい動物だからね」
「優しいだけじゃなくて正しくもある」
「そう。だから」
ナンもテムジンを見ている。そうしての言葉だった。
「この子にはね」
「いい相手を見つけるんだね」
「そうするんだね」
「これから」
「そうよ、絶対にね」
この決意は変わらないのだった。
「そうするから」
「いい相手、見つかるといいわね」
ナンシーは優しい顔でこうナンに話した。
「本当にそう思うわ」
「あれっ、今気付いたけれど」
「だよね」
しかしであった。ここでふとネロとジョンがそのナンシーを見ながら言ってきた。本当にそれぞれ気付いた顔になっていた。顔もだったのだ。
「今のナンシーって」
「素直だよね」
「普段全然素直じゃないのに」
「ダイレクトにいいこと言うなんて」

「うっ、しまったわ」
本人もここで気付いたのだった。だがもう遅かった。
バツの悪い顔になってだ。何とか言おうとしてもだった。
「ええと、その。私は」
「まあいいじゃない」
ジョルジュが出て来て皆に話す。
「ナンシーの本音は皆すぐにわかってたよね」
「えっ、嘘よ」
ナンシーはジョルジュの今の言葉にぎくりとなった。そうして彼に言うのだった。
「私別にね。皆のことなんかね」
「そういう表現って何ていうか知ってる？」
「何ていうのよ」
「ツンデレっていうんだよ」
ジョルジュは笑ってそのナンシーに話した。
「それってね」
「ツンデレって」
「そう、ツンデレ」
まさにそれだというのである。
「ツンデレっていうんだよ」
「だから違うわよ」
劣勢が確かになったどころか敗北が確定してもだ。それでもナンシーは抵抗を見せる。彼女なりの意思表示をしているのである。
「私はそんな」
「はいはい、いいからいいから」
ここでナンがその彼女に助け舟を出してきた。そうしてだった。
あるものをだ。彼女に差し出したのだ。
「はい、これ」
「これって？」
「お酒よ」

それだというのである。
「馬乳酒。それよ」
「ああ、モンゴルのそのお酒ね」
「羊のもあるわよ」
ナンの声が笑っていた。
「よかったらそっちも出すけれど」
「馬で御願いするわ」
ナンシーはそちらだというのだった。
「馬のそれでね」
「これでいいのね」
「ええ、御願い」
また言うナンシーだった。
「それでね」
「じゃあどうぞ」
ナンは差し出したその馬乳酒をまた勧めた。
「どんどん飲んでね」
「有り難う。そういえば馬乳酒って」
「うん。どうしたの?それが」
「あれよね。アルコール度は高くなかったわよね」
「ええ、そうよ」
その通りだと答えるナンだった。実際に馬乳酒はアルコール度は高くないのである。少なくともそのまま飲む場合はそうである。

第二百二十三話　優しい狼その十

ナンもだ。それがわかってこう話すのだった。
「蒸留したのもあるけれど元のはそうなのよ」
「けれど酔うのよね」
「量飲むからね」
それでだというのだ。
「そういうお酒だから」
「量をなのね」
「そう、たっぷり飲むものよ」
そうだというのである。
「だからどんどん飲んでね」
「有り難う。それじゃあ」
ナンシーはナンからその酒を受け取った。そうしてであった。
飲む。確かに飲みやすいものだった。
甘くしかも強くない。それならだった。
ナンシーは一杯飲んでからだ。ナンに対して言った。
「あの」
「もう一杯ね」
「駄目かしら」
「勿論いいわよ」
にこりと笑って返すナンシーだった。
「皆でどんどん飲みましょう」
「有り難う、それじゃあ」
「お酒は楽しく飲まないとね。それにね」
「それに？」
「それにっていうと」
皆ナンの次の言葉を待った。その次の言葉はこれであった。
「食べないとね」

「あっ、そう来るんだ」
「食べるんだ」
「そうじゃない。飲んで食べる」
この二つはまさにセットであった。
「そうしないとね。それじゃあね」
「これね。羊ね」
「美味しいね、相変わらず」
ネロとジョンはまずは羊の肉だった。モンゴル伝統のその茹でられているものをだ。
「シンプルな味だけれどね」
「それが余計にね」
「これは昔からの味なのね」
アロアもその羊を食べている。骨のところを手で持ってた。そうして食べているのだ。彼女が今食べているのは羊のアバラのところだ。一番食べやすい場所である。
「料理法とかも」
「そうよ。モンゴルって草原じゃない」
「ええ」
やはりそこからはじまるモンゴルだった。
「だから。調味料とかはね」
「手に入らないのね」
「交易とか略奪で手に入れたけれど生産できないから」
調味料もだ。農業から生まれるものが多いからである。だから遊牧しかないモンゴルにはだ。そうしたものは生まれないのである。
「だからね」
「それでお塩だけなの」
「そう、それでなのよ」
「そうなるのね。けれどお塩も」
「ええ、ない場合もあったわ」
そうだったというのだ。過去の、それこそチンギス＝ハーンの時

代の話だがナンはそれでもそのことをはっきりと話すのであった。
「そういう場合はね」
「もう何もなしで食べてたの」
「血とかで塩分摂ったり味付けしたり」
そうしたというのである。
「羊のそれでね」
「そうしてたのね」
「そうなの。モンゴル人は羊は全部食べるから」
まさに全てをだというのである。
「内臓も血も全部ね」
「それで羊の殺し方もあの時のままなのかな」
ジョルジュはモンゴルのチーズを食べている。それを食べながらナンに問うのだった。

第二百二十三話　優しい狼その十一

「お腹を裂いてそこから心臓を掴んで握るっていう」
「そうよ、あれよ」
「やっぱりそれなんだ」
「流石に牛とかは額を頭で割ってだけれど」
「それでも羊は今もそうなんだ」
「そうなの。チンギス＝ハーンの、いえ」
ここでだ。言葉を少し訂正したナンだった。あらためてこう言い換えた。
「匈奴の頃から変わらないわ」
「その時から」
「じゃあ三千年以上」
「そうしてるの」
「そうなの。それで血も一滴も無駄にしないの」
あらためてこう話す彼女だった。
「何もかもをね」
「ううん、草原の生活を何千年もって」
「凄いね」
「そのまま守ってるなんて」
「ちょっと以上に」
皆このことをあらためて言う。感心している。
「狼だけじゃないんだ」
「モンゴルって」
「凄くないわよ」
しかし当のナンは笑ってこう返すのだった。
「だってこんなのね」
「こんなの？」
「こんなのって？」

「気楽な生活だし」
そうだというのである。
「本当にね。気楽だし」
「気楽？」
「そうなの？」
「厳しいんじゃなくて」
「私見てればわかるじゃない」
今度は自分自身を右の人差し指で指し示して見せてのうえでの言葉だった。そうしてそのうえで皆に対して話をするのだった。
「私をね。気楽にあちこち移ってるじゃない」
「気楽なのかしら」
「ちょっとそうは」
「草原って何もないし暑いし寒いし」
「そんな場所でずっとっていうのは」
「それはやっぱり」
「モンゴル人にはその生活が最高なのよ」
いぶかしむ皆にだ。ナンはこう話した。
「そういうことなのよ」
「そうなのかな」
「やっぱり」
「草原での生活が」
「馬がないと生きられないわ」
こうも言うナンだった。
「だから今も馬に乗ってるし。ほら」
「ああ、あの言葉ね」
アロアはナンが今から何を言うのかわかった。その言葉は。
「モンゴル人の足は四本ね」
「そういうことよ。草原は馬じゃないとね」
「駄目なのね」
「私だって歩く前から馬に乗ってるし」

そうしているというのだ。モンゴルではこの時代もそうなのである。

「だからね」

「馬、ね」

「そう。馬はいいわよ」

「ううん、馬ってそんなにいいの」

「そこまでいいんだ」

「モンゴル人にとっては」

「こういう人間がいてもいいでしょ」

にこりと笑ってまた話すナンだった。

「宇宙の時代でも馬に乗っている国の人達がいてもね」

「そうだね」

最初に頷いたのはジョンだった。

「色々な人がいるからね」

「じゃあ」

ここでだ。ナンはまたテムジンを見た。そして彼女もその馬乳酒を飲んでだ。そのうえでの言葉だった。

「蒼き狼に乾杯ね」

「早くお嫁さん見つかるといいわね」

「ええ、本当にね」

笑顔でナンシーに応えてだった。そのうえでその酒を楽しむのだった。

優しい狼　　完

２０１０・１０・２４

第二百二十四話　先入観その一

先入観

ナンの狼の話を聞いてだ。ジュリアはこう言うのだった。
「コヨーテじゃないのね」
「それだけなんだな」
「まあね」
こうロザリーに返す彼女だった。今二人は教室にいる。
「だってこっちも同じような信仰あるし」
「動物にのか」
「そうよ。トーテニズムよね」
「ああ、それな」
「イロコイにもあるわよ」
あらためて言うジュリアだった。
「ちゃんとね」
「ああ、そうか」
ロザリーもジュリアの今の言葉でわかった。それで納得した顔で頷いてから言うのだった。
「ネイティブアメリカンだからな」
「そうよ。祖先が動物ってこと多いから」
「イロコイ族ってそうなんだな」
「イロコイだけとは限らないわよ」
ジュリアはこのことをしっかりと話すのだった。
「他の部族だってそうよ」
「イロコイってイロコイ族の国じゃないんだな」
「名前はそうだけれど」
それでもだとだ。言葉に出ていた。
「その他にも色々な部族が一緒に暮らしてるわ」
「例えばどんな部族がいるんだ？」

「モヒカン族とか」
あまりにも有名なこの部族の名前が出て来た。
「いるわよ」
「ああ、モヒカン族な」
「名前知ってるわよね」
「勿論だよ。あれだろ？髪型が」
「そう、真ん中だけ立たせてそれで他は剃って」
この独特な髪型で有名なのだ。この時代の連合ではモヒカンや辮髪、そしてちょん髷といった髪型が所謂不良の髪型だとされているのだ。
「あれね」
「モヒカン族って滅んだんじゃなかったんだな」
「ちゃんと皆元気に暮らしてるわよ」
「そうだったんだな。あたしは滅んだって思ってたけれどな」
「モヒカン族の最後ね」
ジュリアはこの古典の作品名を話に出した。
「あれから言ってるのよね」
「けれど滅亡してなかったんだな」
「しっかりと生き残ってるから」
「アパッチとかシャイアンとかスーもか」
「ええ、ちゃんとどの部族も存在してるから」
今もだというのである。
「それで皆で生きてるのよ」
「そうなのか」
「しかも仲良くね」
そうなっているというのである。
「暮らしてるわよ」
「成程な。ネイティブも皆元気なんだな」
「そういうこと」
また話すジュリアだった。

「それでなのよ。ナンの話聞いてね」
「狼ってことにふと思ったんだな」
「こっちでも狼いるけれど」
狼の地球での分布は実に広かったのだ。ユーラシアだけでなく北米にもいた。ニホンオオカミはその亜種にあたるのである。
「それでもコヨーテの方がね」
「メジャーなんだな」
「祖先の神様としてはね」
そちらでだというのである。
「他にもライチョウとかリョコウバトとか鳥もあればバッファローとかも」
「多いな」
「部族多いからね」
だからだというのだ。
「祖先になっている動物もね」
「部族単位でってことなんだな」
「そうなの。モンゴルも部族多かった筈だけれど」
歴史からだ。これは知っているのだった。
「それでも今はそうなってるのね」
「というかそっちはまだ部族単位なんだな」
「部族は残ってるわ」
それは認めるジュリアだった。
「まあ一族みたいな感じでね」
「一族か」
「そうよ。それでなの」
またロザリーに話すジュリアだった。

第二百二十四話　先入観その二

「部族って言葉が残ってるのよ」
「成程ね」
「そういうこと。けれど」
「けれど？」
「面白い話かしら」
「面白いな」
実際にそうだとだ。笑顔で返すロザリーだった。
それでだ。彼女はこんなことも言った。
「例えばな」
「例えば？」
「鰐が祖先だったりもするよな」
「ああ、そういう部族はいないのよ」
「いないのか」
「どういう訳か鰐は人気ないの」
こうロザリーに対して話すのだった。
「ネイティブの間じゃね」
「それよりもコヨーテとかライチョウか」
「そうなのよ。具体的に言えば陸と空ね」
その二つだというのだった。
「そういうことなのよ」
「それでか」
「そうよ。それでコヨーテはね」
「コヨーテってどうだ？あれって凶暴なのか？」
「全然」
ジュリアはロザリーの今の言葉には首を横に振って返した。そのうえで言うのだった。
「大人しいわよ」

「大人しいのか」
「狼と同じよ」
また狼の名前が出て来た。
「それとね」
「むしろ狼より大人しいか」
「そうね。身体も小さいしね」
このこともロザリーに話す。
「それでなのよ」
「成程なあ。そうなのか」
「そういうことだから。あとは」
「あとは？コヨーテってまだ何かあるのか」
「色が灰色でそれが似合ってるのよ」
親しげな顔でロザリーに話す。
「これまたね」
「灰色かあ」
「そう、灰色」
今度は色についての話になってきた。ジュリアは灰色という色についても話した。
「どうしてもいいイメージがつかない色だけれどね」
「灰色議員って言葉もあるしな」
「ああいう言葉って好きじゃないのよ」
ジュリアはその言葉にいい顔をしなかった。
そしてだ。こう言うのだった。
「例えばね」
「ああ、何だ？」
「灰色のクレープがあるとね」
「クレープか」
「そば粉を使えばそういう色になるじゃない」
クレープは本当にポピュラーなスイーツである。連合ではそば粉を使った本来のクレープも非常によく食べられているのである。

そのクレープのことをだ。ジュリアは話すのだった。
「それでも皆食べるわよね」
「美味いからな」
「そうよね。灰色でも」
色のことをあえて強調する。
「そうよね」
「だよな。色がそれでもな」
「そういうことなのよ」
「先入観か」
「色ってそれがとりわけ出るからね」
「そういえばな」
ここでだった。ロザリーは自分の服を見た。オレンジのブラウスに赤いズボンだ。靴は赤だ。かなり派手な色であるのは確かだ。
その服を見てだ。彼女はこんなことを言った。
「今のあたしの服どう思う?」
「暑くなりそうね」
「暑くなるか」
「オレンジと赤だとね」
その二色は暖色だ。それならばだった。
「そうなるわ」
「そうか、やっぱりな」
「色って目から入るからインパクト強いし」
「それで先入観が余計に強いんだな」
「黒と黄色だったらどう?」
ジュリアはこの二色を出してきた。

第二百二十四話　先入観その三

「その配色は」
「虎だな」
「そう、虎」
まさにその虎の色だった。それはだ。
「危険に思えたりするわよね」
「その配色が一番目立つしな」
「だからよ。もう見ただけでそう思える」
「先入観ってやつだな」
「それで」
「それで？」
「灰色だってね」
また灰色の話になるのだった。
「先入観を払えばね」
「よく見えるんだな」
「そういうことよ」
こうロザリーに話す。
「それ考えたら灰色って損な色よね」
「そうだな。あたしも服で灰色とかはな」
「着ない？」
「ちょっとな」
実際にそうだと言うロザリーだった。
「下着とかにもな」
「そういえばロザリーって下着の色も」
ジュリアはこのことを思い出した。体育の前後の着替えの時等に見ているからだ。それで思い出すことができて今話せるのである。
「あれよね。明るい色よね」
「赤とか好きなんだよな」

実際にそうであるというのだった。
「それと黄色な」
「本当に明るい色メインなのね」
「身に付けてると明るい気持ちになれるからな」
「それも先入観よね」
「だよな。やっぱりな」
「実は私ね。今はね」
ジュリアは微笑んでだ。こんなことを言ってきた。
「下着灰色なの」
「その灰色か」
「ブラもショーツもね」
「しかもお揃いか」
「この前はじめて買って付けてみたけれど」
「どんな感じなんだ?それで」
「悪くないわよ」
実際にそうだというのだ。そしてだった。こんなことも言うのだった。
「ほら、白だったらね」
「白か」
「オーソドックスで奇麗だけれど何かありきたりに感じる時ってあるじゃない」
「まあそうだよな」
ロザリーも白の下着を持っている。だから言えることだった。
「実際そう思う時あるな。下着選ぶ時な」
「そうでしょ?かといってね」
今度出した色はこれだった。
「黒もねえ」
「それは何かあれだろ」
「そうよね、あれよね」
「いやらしいものあるよな」

ロザリーは苦笑いと共にこう話した。
「ちょっとな」
「大人って感じするけれどね」
「誘惑してるとかそういうやばい雰囲気になるよな」
「そうでしょ？だからね」
「抵抗あるよな」
「ちょっと以上にね」
これがジュリアの黒い下着に対する考えだった。そしてロザリーもだ。二人はその色の下着には抵抗があるというのである。
「ビキニだって」
「何かいやらしいよな」
「黒っていうのも不思議な色よね」
「だよな。本当に」
「白のビキニもそれはそれでいやらしいし」
「けれど灰色はか」
「案外そうじゃないのよ」
こう話すジュリアだった。
「白程清潔な感じはしないけれど」
「それで黒みたいにいやらしくはないけれどか」
「中間なのよ」
「中間か」
「そう、だからいいのよ」
こう話すのだった。
「灰色の下着もね」
「中間だからいいのか」
「そういうこと。灰色もいい時があるのよ」
「成程な。それじゃあな」
「それじゃあ？」
「あたしもちょっと考えてみるか」
ロザリーは腕を組んでこんなことを言った。

第二百二十四話　先入観その四

「色な。明るいだけの色じゃなくてな」
「他の色も？」
「ちょっと考えてみるな」
実際に考える顔にもなっていた。そのうえでの言葉だった。
「そこんところな」
「そうね。いいかもね」
「いいか」
「たまにはそういう気分転換もね」
これがジュリアの意見だった。
「いいかもね」
「そうか、それじゃあな」
「ただね」
「ただ？」
「ロザリーに明るい色以外ねえ」
こう言うジュリアだった。難しい顔になってだ。
「と、こう考えるのも先入観だけれど」
「あはは、そうだよな」
「けれどそれでもね」
「想像つかないか」
「悪いけれどね」
ここでは苦笑いになるジュリアだった。そのうえでの言葉だ。
「想像できないわ」
「やっぱりそうか」
「オレンジか赤よね」
「それか黄色だな」
「黒は？」
「アクセサリーならともかくな」

こうだ。首絵を傾げさせながら言うのであった。
「ちょっとな。メインはな」
「やっぱり抵抗あるわよね」
「暗いものを着てるとな」
また言う彼女だった。
「気が滅入ってな」
「そうなるのね」
「だからな。ちょっとな」
こう話していく。
「やっぱり明るい色オンリーになるな」
「正直言ってね」
「ああ、正直なところ？」
「明るい色ばかりじゃかえって明るさが生えないからね」
「ああ、対比か」
「そう、それ」
まさにそれだというのである。その対比の話をするジュリアだった。
「それもいいけれどね」
「対比かあ。そうだな」
ロザリーもジュリアのその言葉に考える顔になる。腕も組む。
「いいな」
「いいでしょ」
「ああ、かなりいいな」
また言うロザリーだった。
「じゃあ黒いブレスレットとかか」
「そう。どう？」
「いいな。実はさ」
「ええ、実は？」
「何か最近物足りないって思ってたんだよな」
自分でもそうだったとだ。こう話すのだった。

「そうだったんだよ」
「それでなのね」
「丁度いい機会だな。そういえば蝉玉の奴な」
「あの娘ね」
「あいつって結構色々な色の服着るよな」
蝉玉のことを話すのだった。彼女はどうかというとだ。
「赤とか黄色とかだけじゃなくてな」
「黒とか青もっていうのね」
「それと白もだよな」
「合わせて五色ね」
「暗い色も着てるのに何かバランスいいよな」
「あれは対比の他にね」
それだけではないというのだ。ジュリアはロザリーに対して話す。
彼女の話はここでは普通の色の話とは違ってきていたのだった。
「もう一つあるのよ」
「もう一つって？」
「縁起ね。要するに」
それだというのである。
「縁起の意味でなのよ」
「縁起ねえ。それなのか」
「そう、縁起ね」
また言うジュリアだった。
「五行思想ね」
「ああ、あれか」
五行についてはだった。ロザリーも知っていた。この時代の連合においては比較的ポピュラーな考えの一つであるのだ。色々なことに応用されてもいる。

第二百二十四話　先入観その五

「あれなんだな」
「そう、それなのよ」
「それを服にも使ってるのか」
「そういうことなのよ」
こう話すジュリアだった。
「だから。服の色もね」
「バランスか」
「明るい色だけじゃなくてね」
ジュリアはまたロザリーに話す。
「バランスとかも考えていけばいいわ」
「そうすれば運も開けるか」
「五行思想ってそういう意味もあるからね」
「色々とあるんだな」
「色もね。陰陽ってわけね」
今度はこの言葉も話される。
「それのバランスよ」
「バランスかあ」
「そう、バランス」
「それも考えていかないと駄目か」
「ロザリーって。言ったら何だけれどね」
「明るい色ばっかりだっていうんだな」
「確かにロザリーらしいけれどね」
このことは認めるのだった。
「それでもよ」
「ここで対比とか縁起とかも考えてか」
「それでやってみたら？」
「ああ、それってな」

ジュリアの話を聞いてだ。それでぴんときたことだった。それを今話すのだった。
「あれだよな。先入観をだよな」
「先入観ね」
「あたしは明るい色だけ」
まずはこう言ったのだった。
「そういう先入観を打破してそれでか」
「ああ、そうよね」
その言葉を聞いてだ。ジュリアも気付いたのだった。
「そうなるわよね」
「そだろ?そうなるよな」
「じゃあさっきは私も」
ジュリアも自分の言葉を振り返って言う。
「先入観で言ってたわね」
「そうだな。けれどな」
「けれど?」
「いい加減先入観先入観言ってもな」
ロザリーはたまりかねた顔になってきていた。
「いい加減あれだろ。縛りになってきたな」
「縛りね」
「先入観も駄目だけれど縛りも駄目だろ」
「それもそうね」
ジュリアもロザリーのその言葉に頷く。そしてだった。
そのうえでだ。二人はその日の放課後駅前に向かった。そこの百貨店に入るのだった。
百貨店は八条百貨店である。言うまでもなく八条グループの系列である。
その中でだった。ジュリアは白いその百貨店の中で話すのだった。
「ねえ、それでね」
「ああ、ブティックのコーナーだよな」

「そこはいつも行くわよね」
こう隣にいるロザリーに話す。
「服を買う時は」
「まあそうだな」
実際にそうだと話すロザリーだった。
「結構な。ここの百貨店いい服揃ってるしな」
「そうよね、だからね」
「それでだよな」
また言うロザリーだった。
「ここに来たのは」
「そうよ。それでなのよ」
「この百貨店って服以外にもいい品物揃ってるしな」
「そうそう、食べ物もね」
それもだというのだった。食べ物もだとだ。
「いいからね」
「だよな。それにな」
「本だってあるしね」
「でかいし色々な本が揃っててな」
「それもいいわよね」
「あたしこれでも本好きなんだよ」
ロザリーは百貨店の中をジュリアと一緒に進みながら彼女に笑顔で話す。背はロザリーの方が高い。それが目立ってもいる。

第二百二十四話　先入観その六

「漫画だけじゃなくてさ」
「他にはどんな本読むの？」
「ジュブナイルな」
それだというのである。
「それ読んでるんだよ」
「ジュブナイル小説ね」
「あと恋愛ものな」
笑顔でだ。ジュリアにさらに話した。
「好きだよ」
「ふうん、意外ね」
「意外か？」
「ロザリーってファッション雑誌読んでるところしか見てないし」
「あはは、そっちか」
それもだというのだった。ロザリーは大きく笑って返す。
「確かにいつもチェックしてるな」
「だから。小説は」
「これでも夢見る乙女なんだよ」
「夢見るの」
「そうだよ、夢見てんだよ」
「じゃあその夢は何かしら」
微笑んだ顔でロザリーに尋ねるジュリアだった。
「ロザリーの今の夢は」
「そうだな。今はな」
「ええ。今は？」
「お洒落だな」
今から行くそれだというのである。
「それでな。似合う服を見つけてそれを着ることだな」

「何か小さな夢ね」
「夢は小さくても夢なんだよ」
そうだというのである。
「ユニオンドリームだけが夢じゃないだろ」
「ユニオンドリームね」
「一介の大学生が大金持ちになる」
具体的にはこうしたことを言うのだ。ただの一介の人間が才能と努力と運により成功していくというのである。それをユニオンドリームというのだ。
これは連合のサクセスストーリーのサンプルでもある。ただしそうしてなる職業は芸能人だったり農園や牧場のオーナーだったり政治家だったり社長だったりスポーツ選手だったりする。カリスマ技術者や芸術家である場合もあるしそこは様々であるのだ。
「そういうのはな。あたしはさ」
「ないのね」
「ささやかでいいんだよ」
笑いながらの言葉だった。
「人生ってのはさ」
「ふうん、無欲なのね」
「無欲か？」
「だって。お金はあればあるだけね」
「まあないに越したことはないよな」
「連合ってそうじゃない」
その彼女達のいるその国である。正確には国家連合である。
「もう成功して大金持ちになってね」
「成功っていっても色々だろ」
「お金持ちになるだけじゃなくて」
「幸せな家庭を築くとかさ」
この例を出してきたのだった。
「それだって成功だろ？」

「あっ、そうね」
「まあそういうのはかなり先の夢でな」
「先なのね」
「結婚はな」
ロザリーはそのことについては苦笑いだった。
「幾ら何でもな」
「先よね、本当に」
「あたし達まだ高校生だしな」
「一応結婚できる年齢でも」
「やっぱり先だよ」
このことについてはそう考えるのだった。
「実はね。私ね」
「彼氏いないんだな」
「そうなの」
こうロザリーに話すジュリアだった。
「残念だけれど」
「まあそれはいいんじゃないのか？」
「いいの？」
「そのうちできるからな」
だからだというのである。

第二百二十四話　先入観その七

「それはな」
「何か凄く楽観した言葉ね」
「だって欲しいって思ってもそうそうできるものじゃないだろ」
「縁があるものだからね」
「縁があればできるけれどなければできないものだからな」
こう話すロザリーだった。
「それはな」
「ロザリーってそういうことにはこだわらないのね」
「彼氏っていってもな」
ロザリーは首を捻りながら述べた。
「あたしあれなんだよな。それよりもな」
「服？やっぱり」
「ああ、それと食べ物な」
にこりと笑っての言葉だった。
「そっちの方が関心あるしな」
「ううん、そういえば私も」
「ジュリアもかよ」
「特に食べるのがね」
にこりと笑っての言葉だった。
「やっぱり好きね」
「それじゃあ服買った後何食う？」
「おうどん？」
ジュリアが話に出すのはそれだった。
「それにする？」
「うどんか」
「ここの百貨店のうどん屋さん美味しいしね」
「結構いいか？」

ロザリーもうどんには納得するものがあった。どうやら嫌いではないらしい。というよりかは中々乗り気な顔を見せてさえいる。
「きし麺あるか？」
「きし麺好きなの」
「それか味噌煮込みうどんな」
こうジュリアに話すのだった。
「そういうのが好きなんだよ」
「っていうと海老も好きよね」
「大好きだな」
海老と聞いてだ。ロザリーは満面の笑顔になった。
「ああ、それとな」
「それと？」
「カツにほら、あの日本の味噌だったよな」
「カツに味噌っていうと」
「あるだろ、あの赤黒い味噌」
こうジュリアに話していく。
「何とかいう」
「ひょっとして八丁味噌のこと？日本の」
「それだよ、あれをカツに付けて食うのもさ」
「好きなのね」
「最高だよな、あれ」
もうその顔がにこにことなっている。
「海老は天麩羅かフライにしてな」
「完全に和食ね」
「日本に来て真っ先にはまったんだよ」
そうだというのである。
「最高だよな、きし麺も味噌も」
「ううん、濃いわね」
「それでデザートはな」
さらに言うロザリーだった。

「あれだよ。ういろうな」
「ういろうはいいわね」
「それでどうだよ。お昼はうどんに味噌カツにういろうな」
「塩分多いわね」
「多いのは確かだな」
それは否定しないロザリーだった。そうしてそのうえでだった。
話を戻してきた。彼女は言うのだった。
「その前に服な」
「そうね」
ジュリアも彼女のロザリーのその言葉に頷く。
「それじゃあ今からね」
「明るい色と対比させて暗い色か」
「それと縁起とかも考えるといいかもね」
「服の着方も色々なんだな」
ロザリーは歩きながら自分の顎に右手を当てて述べる。

第二百二十四話　先入観その八

「ただ明るいだけじゃないんだな」
「それは今まで言った通りでね」
「そういえば味もだよな」
「辛い料理だと甘いお酒が合うじゃない」
「ああ」
「ワインにもお菓子が合うし」
こうしたことも言うのだった。
「そういうことよ」
「対比って効果あるんだな」
「ロザリーの場合元がいいし」
見れば顔立ちは整っていてしかも背が高くすらりとしている。胸も大きい。女の子としてのポテンシャルは確かにいいものがある。
「明るいだけじゃ。ちょっと勿体ないわ」
「勿体ないんだな」
「そうよ、もっとよくなるから」
「言ってくれるな。そう言うジュリアだってな」
「私も？」
「可愛いからな」
こう彼女に言ったのである。
「絶対にいい彼氏できるさ」
「それはどうかしらね」
ジュリアはここでは思わせぶりな笑顔になって言葉を返した。
「案外ね」
「案外？」
「悪い男に引っ掛かって」
こんなことを言うのだった。
「それでとんでもないことになるかもね」

「おいおい、随分ネガティブな話だな」
「けれどその危険はあるでしょ」
「まあそれは誰にでもあるな」
これはロザリーも否定しなかった。それはどうしてかもわかっていた。
「碌でもない奴に惚れるってな」
「あるからね」
「そうならないように気をつけるに越したことはないよな」
「そうね。ぱっと見ただけじゃわからないし」
「父ちゃんが言ってたんだけれどな」
ロザリーはここで彼女の父の言葉を出すのだった。
「あれだよ。悪い男ってのはな」
「悪い男は？」
「目を見ろってな」
それだというのである。目を、だというのである。
「そいつの目をよく見ろってな」
「目、ね」
「目が澄んでる奴はいいってな」
まずはその澄んでいることを話すのだった。
「湖と小川みたいにって言われたんだよ」
「そういう目をした相手は、なのね」
「それで悪い奴はな」
次はその話だった。
「目が濁ってるってな」
「それはよく言われるわね」
「ドブとか沼みたいな目になるってな」
「そういえば死刑になる奴って碌な目をしてないわね」
「そうだろ？逆にいいことをしてる人はな」
そうした人間はどうなのかもだ。ロザリーは話すのだった。
「あれだろ。奇麗だろ」

「そうそう、顔つきは怖くてもね」
「目は奇麗だからな」
「そういえば」
ここでだ。ジュリアがこんなことを言った。
「あれよね。人間は四十になったらね」
「自分の顔に自信を持てって言葉だよな」
「リンカーンだったわね」
アメリカの歴史においてこの時代でも屈指の英雄とされる人物だ。奴隷解放の父、そして民主主義を守った男とされている。
「確かね」
「ああ、リンカーンの言葉で間違いないよ」
「自分の顔っていうけれど」
「この場合人相だよな」
「そういえば悪い生き方をしてる人って」
ジュリアはこれまでの人生経験から話すのだった。彼女もそれなりに色々なものを見てきている。だからこそ話せるのだった。
「人相悪いわよね」
「父ちゃんにそれも言われたよ」
「人相もなの」
「若いうちから結構出るってな」
そうだというのである。

第二百二十四話　先入観その九

「だから見ろってな」
「いいお父さんね、そこまで言ってくれるなんて」
「そうだろ？うちのクラスって確かに変わった奴多いけれどな」
「私達を含めて全員ね」
「ははは、それはそうだな」
自分も変わり者だと言われてもだ。ロザリーは笑って返すだけだった。そうした人間としての器はかなり大きい彼女だった。
「あたしだってそうだしな」
「そうそう。それはね」
「けれどな」
それでもだとだ。切り返してだった。
「あれだよな」
「あれって？」
「悪い顔の奴はいないよな」
そのクラスの面々の話であった。
「一人もな」
「そうね。あのカムイだって」
「あれはもてないから暴れてるだけだしな」
そしてもう一人槍玉に挙げられる。
「洪童だってな」
「あの二人ああだからもてないんだけれどね」
「自覚ないからな」
「黙ってればね。そんなに悪くないのに」
「人間としてはいい奴等だしな」
「そうそう」
しかしなのだった。なまじもてないと騒ぐからだった。彼等はそうした相手とは全く無縁であるのだ。そういうことなのであった。

「あれじゃあね」
「まああの連中も悪い奴じゃないしな」
「ダンも少し不良なだけでね」
「根は凄く親切だしな」
「無愛想な中の親切ね」
これがまた味があるというのであった。そしてジュリアはこんなことも言った。
「そんな感じでね」
「悪い奴はいないからな」
「ううん、顔ね」
「やっぱり目とか顔には出るんだよ」
「生き方そのものが」
「ほら、ニュースキャスターとかそうだろ」
テレビの話にもなる。
「いやらしい顔になるだろ」
「ううん、そういえばキャスターって」
「そんな顔の奴多いだろ」
「確かにね」
ジュリアはロザリーのその言葉に頷いた。
「多いわよね」
「キャスターって何でああなんだろうな」
ロザリーはうんざりとした顔で首を傾げさせて延べた。
「ああいう風にな」
「嫌な顔になることがね」
「嫌なことを言ってると嫌な性格になって」
それからだというのだ。
「嫌な顔になってくんだろうな」
「連鎖なのね」
「そうじゃないのか？やっぱり」
こうジュリアに話すロザリーだった。

「そういうものだろ」
「そうね。言われてみればね」
「だろ？やっぱり生き方って顔に出るんだよ」
またこう言うロザリーだった。
「嫌な奴は嫌な顔になってくんだよ」
「だから自分の顔にはっていうのね」
「自信を持ってな」
「生き方だから」
「それだよ。ぼうってした奴いるだろ」
ロザリーの話は続く。

第二百二十四話　先入観その十

「いつもぼーーーーーっとしてクラスの仕事とか皆がしていても自分だけ突っ立ってて何一つとしてしようとしない奴。いるだろ」
「うちのクラスにはいないけれどね」
「まあうちのクラスはな」
「ちょっと例外よね」
「個性派揃いだからな」
ここではこのことがかえってよかったのだった。
「だからな。怠ける奴はな」
「いないわよね」
「逆に変に動き回って困る奴はいるけれどな」
「テンボにジャッキーね」
ヘボ探偵二人であった。迷探偵とも呼ばれている。
「あの二人よね」
「あの二人なんか酷いだろ」
「酷いっていうか」
「最凶だよな」
「そうね、最凶ね」
そちらだと。二人の意見は見事なまでに一致した。
「あの二人は」
「少しは休んでくれたらいいのにな」
「動けばそれだけで騒動起こすしね」
「それとフランツな」
もう一人だった。彼もいるのだった。
「あいつもな」
「基本考えないからね」
「それで身体能力は異常にあるからな」
それで考えないのだ。これも迷惑な話である。

「だからあいつもな」
「そうね。迷惑よね」
「愛嬌があって悪気のない迷惑だから困るんだよな」
「そうね、本当に」
「どうなのかしら」
また言うジュリアだった。
「それって」
「けれど三人共嫌な奴でも悪い奴でもないしな」
「それは全然ないのよね」
「正直言って嫌いじゃないからな」
「私も」
これは二人共同じだった。
「むしろ好きだし」
「だよなあ、本当に」
「それでだけれど」
ジュリアはここでまた問うた。
「そういうぼーーーっとした人間って」
「顔もそうなるよな」
「そうよね。周りに気付かないとね」
「そういう顔になるんだよ」
ロザリーは眉を顰めさせて延べていた。
「どうしてもな」
「本当に顔って大事よね」
「だよなあ」
「そういうのを見るうえでもね」
「ああ、そして今はな」
「服も表情に関係あるのよね」
「あるか」
「いい感じの服だと笑顔になって」
まずはそうだというのである。

「逆だとね」
「笑顔が消えてか」
「暗い顔になってね」
「けれど服は明るいだけじゃ駄目か」
「そう、そういうこと」
話がここで元に戻りもした。行きつ戻りつといった感じだった。
「対比させたり縁起を考えたり」
「色々やりようがあるんだな、本当に」
「だからそれをやりにね」
「今からだよな」
「そういうことよ。じゃあね」
「ああ、行くか」
「そうしよう」
こうロザリーに告げてだった。
服を選ぶ。まずはだ。
「ねえ、これ」
「あっ、いいな」
二人は服を選びはじめた。そしてそのうえでだ。笑顔を見せ合い話をする。二人の服選びは今まさにはじまったのであった。それはこれからだった。

先入観　　完

２０１０・１１・１

第二百二十五話　服選びその一

服選び

ジュリアがだ。ロザリーに対して話す。
「上はそれでね」
「青か」
「それでズボンはこれでどう？」
ここでは黒いジーンズを勧めるのだった。
「下はこれでね」
「黒か」
「それでスカーフはね」
今度は赤いスカーフを出すのだった。
「この組み合わせでどうかしら」
「あれっ、何かいいな」
「そうでしょ。ここで重要なのはね」
「青のブラウスだな」
「色は水色の近い感じでね」
実際にそうした色を選んでいるジュリアだった。それをロザリーに勧めてそのうえで話すのである。彼女の顔は真剣そのものである。
「それがいいのよ」
「暗い感じにならないな」
「むしろ明るい感じでしょ」
「青とか黒でも明るい感じ出せるんだな」
「そうなのよ。特にね」
赤いスカーフをだ。ロザリーの首に巻いてみせる。それは実によく似合っている。明るい色ばかりの時よりもさらにであった。
「これね」
「スカーフは元々の明るい色か」
「それでいけばいいのよ」

「ううん、これが対比ってやつか」
「そういうこと」
「いいものだな」
ロザリーは実際にその組み合わせを着てみた。そのうえで鏡でその姿を見てだ。ジュリアに対してこう言ったのであった。
「こうした色も」
「そうでしょ。確かにオレンジや赤もいいけれどね」
「青や黒もいいんだな」
「特に黒ね」
「黒か」
「例えば。今度はこれ着てみて」
ジュリアは今度は黄色いブラウスを出してきた。
「それとこれね」
「今度は青のアスコットタイか」
「この組み合わせやってみて」
「ああ、わかったよ」
実際にすぐにその組み合わせをしてみるロザリーだった。するとこれも。
「ああ、これも」
「いいでしょ」
「いいよな。それとな」
「ええ、どうしたの？」
「考えたんだけれどさ」
こう前置きしてからジュリアに話すのだった。
「青いブラウスでな」
「青ね」
「黄色いネクタイとかよかね？」
こう言うのである。
「その組み合わせも」
「いいと思うわ。ただね」

「ズボンは黒よ」
それはだというのだ。
「アスコットタイとかネクタイの時はジーンズじゃなくて」
「スラックスだよな」
「それはわかってるわよね」
「勿論な」
にこりと笑って答えるロザリーだった。
「それはな」
「よかった。流石にジーンズにネクタイはね」
「ないからな」
「ジーンズにはスカーフかマフラーじゃないとね」
「合わないよな」
「そういうこと」
にこりと笑って話すジュリアだった。
「そこはちゃんと考えないとね」
「だよな。実はあたしさ」
「うん、何？」
「ジャージも。寝る時とか着てるんだけれどさ」
「赤とか黄色が多いのね」
「それとオレンジな」
実に派手な色のジャージを好きなのだった。
「けれど黒とか青のジャージもいいか」
「いいと思うわよ」
ジュリアは反対しなかった。

第二百二十五話　服選びその二

「っていうかロザリーって案外」
「案外？」
「思ったよりも青とか黒似合うじゃない」
「似合うか」
「ええ、似合うわ」
実際にそうだと言うのである。
「いい感じにね」
「そうか。そう言ってもらえると嬉しいな」
「本当のことよ」
嘘ではないと言うのである。
「これはね」
「そうか、だったらな」
「これからはそういう色もね」
「どんどん着てくか」
「そうそう、どんな色でもね」
「ああ、わかったよ」
笑顔で返すロザリーだった。
「それじゃあこれからもな」
「そうね。それじゃあ今度は」
「どの色がいいかな」
「とにかく対比を考えるとね」
ジュリアは今度はそれを念頭に置いて話していた。
「白と黒とかね」
「あっ、それいいよな」
「これどう？」
こう言ってだ。まずは黒のタイトのミニを出してきたのだった。
「下はこれでね」

「上は白か」
「そう、これね」
言いながら出してきたのは白のブラウスだった。それだった。
「この組み合わせってオーソドックスだけれどね」
「いい感じになるよな」
「それに大人な感じがするし」
それまるのだというのだ。
「ストッキングも忘れないでね」
「ストッキングの色はどれがいいんだろうな」
「色気を出すなら黒よ」
それだというのである。
「黒のストッキングがいいわね」
「何かいやらしくなってきたな」
「大人の魅力よ。色気を出すのも服を着るうちだしね」
「だからか」
「そう、だからよ」
まさにその通りだというジュリアだった。
「だからそういう服もいいのよ」
「それでか」
「ただ。着こなしは注意してね」
ここでジュリアは着こなしについても言及した。
「それもね」
「着こなしもなんだな」
「この場合スカートは上にあげる」
「腰のところで止めないんだな」
「そう、お臍より上のところではくの」
「そういえばタイトってそうした感じではくよな」
これはロザリーも知っていた。彼女もタイトスカートについて知らないわけではないのだ。これまではいたことがないにしてもだ。
「だからか」

「そうよ。それでできるだけ」
「できるだけ？」
「足を長く見せるのよ」
ジュリアはロザリーにこうも話すのだった。
「スカートを幾分折ってもいいから。足を長くね」
「つまり太腿出すんだな」
「そういうこと」
今のロザリーの言葉には笑顔で返す。
「話が早いわね。その通りよ」
「そうか。そうしてか」
「ええ。ロザリーって足も長いからいけるわ」
とにかくスタイルには恵まれている彼女だった。
「ズボンの似合う娘ってミニスカートも似合うのよ」
「脚が奇麗だからか」
「その通りよ。あんたいつもズボンでしょ」
「着こなしやすいし動きやすいからな」
それでズボンにしているのだった。彼女も考えて服を着ているのだ。

第二百二十五話　服選びその三

「それでな」
「それでもスカートもね」
「いいものか」
「そういうことよ。それで他には」
まだ言う彼女だった。
「首のところは」
「ネクタイかリボンか」
「タイトにリボンは似合わないわね」
「駄目か、それは」
「大人の女の人だからね。それよりもネクタイね」
そちらだというのである。
「そっちがいいわね」
「わかった。じゃあ色は」
「黒か赤ね」
どちらかだというのである。
「どちらかにしましょう」
「さっき赤だったしな」
ここでロザリーはさっきのズボンの格好を思い出しながら述べた。
「ここは黒にするか？」
「それにするのね」
「それでもいいか？」
「いいわよ。黒に赤は映えるしね」
「そうだよな。それにも気付いたよ」
「黒って結構何でも合うのよ」
「赤にも白にも青にもだよな」
「そう、結構どの色にもね」
「黒っていい色だったんだな」

それがはじめてわかったといった感じの口調だった。
「いや、本当にな」
「そうよ。どんな色とも合うしね」
「これどうかな」
黒のズボンに黄色のブラウスの格好になってみせるロザリーだった。そしてその姿をジュリアに対して問うのだった。どうかというのである。
「これは」
「それもいい感じよね」
「だよな。本当に何でも合うんだな」
「そうよ。黒は何でも合うから」
「黒に黒もいいか？」
こうも言うロザリーだった。
「それも」
「いいわよ」
「いいのか、やっぱり」
「黒尽くめってのもいいのよ」
ジュリアはまた話した。
「一色で統一するのもね」
「そういえばあたし一色で統一したことなかったな」
ロザリーは腕を組んで考える顔になった。そのうえで言う。
「いつも二色も三色もだったな」
「そこで一色で統一するのもね」
「いいか」
「やってみる？それも」
「ああ、それじゃあな」
腕を組んだまま言うロザリーだった。
「それ、やってみるよ」
「服もバリエーションがないとね」
ジュリアはまた話す。

「やっぱり駄目よ」
「ううん、あたし結構それあるつもりだったんだけれどな」
「あるにはあるわ」
それはその通りだというのである。
「ただ。それでもね」
「それでもか」
「明るい色の配色だけじゃ駄目なのよ」
「暗い色も入れたり一色で統一するのもか」
「いいか」
「そうなのよ。それじゃあね」
「ああ」
こうしてだった。ロザリーは今度は黒いブラウスにスラックスで統一してみた。そしてネクタイもだ。黒にしてみたのであった。
無論靴もだ。それで鏡の前に出てみるとだ。
「おっ、これもな」
「いい感じね」
「ああ、これいいよ」
その自分の姿を見ながら笑顔で言うロザリーだった。
「そうか、こういうのもいいんだな」
「だからロザリーって得なのよ」
「得か」
「そう、得よ」
そうだというのである。
「何着ても似合うからね」
「スタイルがいいからっていうのか？」
「結論から言えばそうね」
「それか。まああたしはそういうのはさ」
「別にいいの」
「有り難いって思うけれど自慢はしないさ」
そうした感情はないロザリーだった。

第二百二十五話　服選びその四

「そういうのはさ」
「性格いいのね？」
「そうか？」
「ええ、いいじゃない」
スタイルだけではなかったのだった。
「あんた性格もいいわよ」
「そりゃどうも」
「それ、歳取ってから出るから」
「ああ、さっきの話だな」
「そう。生き方はね」
「顔に出るってな」
二人で話す。
「そういうことだよな」
「そういうことだから」
「性格か」
「一番大事なのはそれね」
「そうなんだろうな。それでさ」
「ええ、それで？」
「あたしの服はこれでいいさ」
こう言うロザリーだった。
「一式買うさ」
「これまでの話した組み合わせ全部ね」
「お金もあるしさ。それで今度は」
ジュリアを見てだった。
「あんただけれどな」
「ああ、私ね」
「何着るんだ、それで」

彼女に対して問うた。
「服は」
「ちょっと変わった服にしようって思ってるのよ」
「変わった服？」
「実はもうすぐ集まりがあるの」
「集まり？」
「そう、部族のね」
それだというのである。
「そのネイティブのね。八条学園にいる子達の間で」
「何だそりゃ」
「まあ簡単に言えばパーティーよ」
「パーティーに変わった服って」
「要するに。部族の服よ」
「ネイディブのか」
「そう、それを買おうって思ってるけれど」
話しながら難しい顔を見せる彼女だった。
「この百貨店に民族衣装は」
「あるぜ」
ロザリーが笑って言ってきた。
「ちゃんとな」
「あっ、あるの」
「あるさ。そこだよ」
右手を指差すとそこにであった。
「その店だろ」
「あれっ、案外近くにあったのね」
「灯台下暗しだな」
「そうなるわね」
「それじゃあだけれど」
「ネイティブの服探すんだな」
「ええ」

その通りだとだ。笑顔でロザリーに答える。
「そうさせてもらうわ」
「しかしあれだな」
ここでだった。ロザリーもその店を見ながら話す。
「あんたも結構色々な服必要なんだな」
「ネイティブの服のこと？」
「あれってやっぱり着ないと駄目なんだよな」
「そうなの。その集まりの時はね」
「どうしてもな」
「絶対になのよ」
ジュリアは真面目な顔でロザリーに話す。
「実際はパーティーだけれどそれでもね」
「そういうのが必要ってことか」
「うん、精霊を呼び出す儀式ってことになってるから」
シャーマニズムから来るものである。ネイティブアメリカンの信仰は古来からの自然崇拝、即ちシャーマニズムの色彩が強いのである。

第二百二十五話　服選びその五

だからだとだ。ジュリアは言うのである。
「それでね」
「成程な、それでか」
「そういうこと。それでだけれどね」
「それで？」
「服はあれよ」
にこりとした顔になって話すことだった。
「あの頭に羽根を付けてね」
「西部劇のインディアンか」
「そう、その格好だからね」
この時代でも西部劇はある。だが必ずアメリカが正しいとは限らない。
「だからね。知ってるわよね」
「インディアンか。それか」
「あの格好結構好きなのよ」
ジュリアは笑顔のままである。
「何か嘘は吐かない気分になるしね」
「インディアン嘘吐かないか」
「あれはおおよそ本当のことなのよ」
ジュリアは祖先のことを話す。尚イロコイにモヒカン、シャイアンといっても彼等の本当の子孫かというと実は怪しかったりする。この辺りはヒッタイトやフェニキアと同じだ。
「約束は破らなかったのよ」
「あの西部劇の時か」
「そう、破ったのはね」
「アメリカか」
「インディアン、私達の御先祖様は約束を破らなかったわ」

それは強く話すジュリアだった。
「絶対にね」
「誇り高かったんだな」
「そうなのよ。だから約束を破らなかったのよ」
「それは今もなのか？」
ロザリーは現在の彼女達について問うた。
「やっぱり。条約とかは」
「まあ破らないわね」
「そうか。じゃあ今もなんだな」
「っていうか国と国の条約なんてそうそう破られないじゃない」
ジュリアはこの現実をロザリーに話す。ただしこれは連合での話だ。
「あのアメリカや中国だってそんなことはね」
「あの連中は昔はしょっちゅうだったそうだけれどな」
「それでも今はしないじゃない」
条約を破れば国際的信用をなくしてしまう。だからそれはどの国もしないのだ。
「そうでしょ？それは」
「ああ、そうだよな」
「サハラは違うけれど」
「あそこは戦争ばっかりだからな」
「約束なんてね」
「どうとでもなるものだよな」
「そう。力こそが正義だから」
実際にサハラはそうなのだ。まさに戦国時代なのである。
「それはな」
「そうよね。それでね」
「ああ、それでか」
「ネイティブは嘘吐かないのよ」
またこの話をする。

「偽証罪の数も少ない筈よ」
「本当に嘘吐かないんだな」
「そういうこと。それじゃあね」
「ああ」
「買いに行くけれど」
そのネイティブの服をだというのである。
「一緒に来る？」
「あたしも？」
「うん、どうするの？」
「それじゃあ」
ジュリアの言葉を受けてだ。ロザリーはすぐに答えたのだった。
「一緒に行かせてもらおうか」
「ロザリーは買わないわよね」
ジュリアはまたロザリーに尋ねた。
「ネイティブの服は」
「ああ、それはいいさ」
それはいいとした彼女だった。
「別にな」
「そう。それじゃあ私だけね」
「買っても面白そうだけれどな」
笑いながらこうも言いはした。

第二百二十五話　服選びその六

「それでも今は止めとくよ」
「わかったわ」
「あとな」
また言うロザリーだった。
「色とかは決まってんのか？その服の」
「色は別に」
「決まってないんだな」
「服がそれならいいのよ」
そのネイティブのだったらいいのだ。
「それでね」
「デザインはか」
「それは大きく変えられないけれど」
「色はいいんだな」
「赤でも青でもね」
具体的な色の話になる。
「それこそ虹色でもね」
「虹色っていったらインカみたいだな」
ロザリーは言った。連合にはインカの末裔達の国もある。とにかく色々な国が存在しているのが連合なのだ。個性的な国家の集まりなのだ。
「そっちの感じだな」
「そうね。けれどそうした服の娘もいるから」
「派手だな、本当に」
「派手よ」
それはその通りと言うジュリアだった。
「黄色とかもあるし」
「羽根もそうなんだな」

「羽根はすぐに染められるじゃない」
「赤にも青にもな」
「幾らでも派手にできるから」
それでだというのだ。
「私が好きなのは赤だけれどね」
「赤い羽根か」
「根っこの方は黒くしてね」
具体的な配色も話す。
「そうしてね。服は青で」
「青か」
「基調は青にしてあちこちに白を入れて」
「それも目立つよな」
「そう、だからしてるのよ」
「成程な。その色の羽根と服があればいいな」
「なかったら自分で染めるわ」
その場合はどうするかも言うジュリアだった。
「無色のを買ってね」
「凝るな、本当に」
「服は凝るものよ」
まさにそうだというのだ。ジュリアも服にはかなり真剣である。
そうしてその店の中に二人で入るとだ。そこは。
様々な民族衣装があった。デザインだけでなく色も実に個性的だ。
ロザリーはその中である服を見つけた。それは。
「ああ、これもあったか」
「チマチョゴリね」
「洪童の国の服だよな」
「そうね。韓国のね」
「そういえばあいつ妹さんいたよな」
春香のことである。
「確かな」

「そうね。一年のね」
「あいつに教えとくか。こうした店もあるってな」
「知ってるかも知れないけれどね」
「ここは知らないと思ってな」
それでだというのである。
「教えておくか」
「そうしましょう。男ものの服もあるし」
見ればだ。様々な民族衣装には女ものだけがあるのではなかった。男ものの服も多くあった。二人はそうした男ものの服も見ていた。
そうしてだ。ジュリアはまた言うのだった。
「話しておくといいわね」
「多分妹さんと一緒にこの店に来るな」
「それは確実ね」
「あいつ彼女いないからな」
だからだというのだった。

第二百二十五話　服選びその七

「それで文句垂れながらな」
「黙っていればいいのにね」
「全くだよ」
ここでは二人の言葉は一致した。
「黙ってればな。そんなにな」
「外見はひょうきんでね。決して不細工じゃないし」
「性格もそんなに悪くないしな」
洪童は確かに問題のある人物だ。しかし特に意地が悪くもなければ横暴でも強欲でもない。悪意もこれといってないのである。
それがわかっているからだ。二人もここで話すのだった。
「少し黙っていればね」
「それだけで全然違うのにな」
「けれど自分だけはわかってないから」
「その辺りあれだよな」
ロザリーはもう一人の名前も出した。
「カムイもだよな」
「そうよね。カムイもね」
「何故もてないのかわからないのかね」
それでいつも騒いでいるのがカムイなのだ。
「自分があんまりその話ばっかりするからだろ」
「私もそう思うわ」
「ああ、全くだよな」
「気付かないんでしょうけれど」
こんなことも言うジュリアだった。
「だから騒ぐんだし」
「難しい話だな」
「言っても聞かないしね」

問題はここもだった。
「参ったことにね」
「そうだよな。それでな」
「それで？」
「カムイのところの服もあったぜ」
アイヌの民族衣装だ。白を基調として赤や黒の模様がある。上の服は何処か着物を思わせる、その服を見て話すのだった。
「これな」
「ああ、それもあるのね」
「ああ、いい感じだよな」
「そうね。アイヌの服ってね」
「あいつは着ないけれどな」
カムイは民族衣装は着ないのだ。いつも普通の洋服である。
「まあ似合わないだろうしな」
「不思議とね」
「っていうかあいつってな」
ロザリーはそのカムイのことを話す。
「あれだよな。妙にな」
「変なところあるわよね」
「アイヌ人って意識妙に強いかって思ったら」
「そうした服着ないし」
「アイヌ料理っていってな」
何を出すかというのである。
「熊鍋出すしな」
「あれってアイヌ料理なのかしら」
「多分違うだろ」
それは違うと言うロザリーだった。
「あいつの熊鍋って単なる熊の石狩鍋だからな」
「お味噌で煮ただけのね」
「それは違うだろ」

また言う彼女だった。少し怪訝な顔になってこう話すのである。
「それに石狩鍋ってな」
「どっちかって言うと日本人の料理よね」
「アイヌ人じゃないよね」
「そうそう」
味噌からである。二人は断定しているのだ。そしてその断定はその通りだった。石狩鍋はアイヌ人の料理ではないのである。しかしなのだった。
「あいつは言い張るけれどな」
「そうだってね」
「アイヌ料理だってな」
「あとラーメンも」
それもなのだった。
「北海道ラーメンはアイヌ料理って言うわよね」
「ラーメンは中国だろ？蝉玉の」
見ればだ。中国の民族衣装もある。チャイナドレスだ。赤や黒でしかも派手な刺繍のあるそのチャイナドレスもしっかりと売られているのだ。

第二百二十五話　服選びその八

「やっぱり」
「蝉玉が言うにはあれは日本の料理だけれどね」
「そうなるのか？あれって」
「蝉玉はそう言ってるわよ」
その中国人はそうだというのである。
「中国のラーメンはもっと違うものだって」
「そうなのか」
「そうらしいわ。それでね」
「ああ、それで北海道ラーメンだよな」
「具体的にはどんなラーメンかもはっきり決まってないんじゃ」
ジュリアはカムイの主張するその北海道ラーメンについて話す。
「スープも何か」
「一応味噌を入れるか？」
「それだけじゃないの？塩ラーメンよね、確か」
「一応そうだよな」
「脂っ気はあるけれどそれで味はあっさりでね」
「だよな。そこにバターを入れて」
「それはわかるけれど」
それでもだというのだ。二人はその北海道ラーメンについてさらに話す。カムイが言うにはそれはアイヌ人のソウルフードなのだ。
「けれどそれって」
「日本だよな」
「そうよね」
「まあ兄弟国だけれどな」
ロザリーはこのことも指摘した。
「日本とアイヌって」
「それと琉球もね」

「けれどラーメンはアイヌ料理じゃないよな」
「多分ね」
「それにな」
ロザリーの指摘はさらに続く。そのアイヌの服を持ったままでだ。
「海鮮料理だってな」
「イクラとか鮭とか蟹よね」
「それに烏賊な」
この時代でもよく食べられているのだ。ただしこれもアイヌだけではなく日本でもよく食べられている。
「どれもこれもな」
「日本と同じよね」
「けれどあいつアイヌだって言うんだよな」
「若しかして」
怪訝な顔になって言うジュリアだった。
「カムイってアイヌ料理知らないんじゃないかしら」
「その可能性はあるな」
「そう思うわよね」
「ああ、あるな」
真剣な顔で言うロザリーだった。
「あれはな」
「そう見えるわよね」
「どうしてもな」
そうだというのだった。
「っていうかどれもこれもな」
「和食だし」
「日本人じゃないんだよな、あいつ」
「だからアイヌ人よ」
「そういやアイヌって和食も多いんだったよな」
「元々同じ国家だしね」
やはりこのことが大きかった。アイヌと日本は今でも交流が深い。

相互に子供達が訪問し合って親睦を深めたりもしている。これは琉球も交えて三国で仲良くやっているのである。
「だから普通にね」
「ダンも和食好きだしな」
「けれどダンは琉球料理出すじゃない」
彼はだというのである。
「ソーキそばとかゴーヤチャンプルとか」
「けれどカムイはな」
「出さないから」
ここは問題なのだった。
「それ見たら」
「知らないかもな」
「若しくは和食とアイヌ料理と勘違いしてたりごっちゃにしてるとか」
「どっちにしても酷い話だよな」
「幾ら兄弟国でもね」
「自分の国の料理を間違えるのなんてな」
それが酷いというのだ。あまりにもだ。
「まあアイヌ料理もな」
「あるわよね」
「ない筈ないよな」
それは当然だというのだった。連合ではどの国にもそれぞれ料理があるのである。そして連合ではないその国の名前も出るのだった。

第二百二十五話　服選びその九

「まあイギリスの料理みたいにね」
「人が死ぬ程まずいってことはないよな」
「何か。エウロパ戦役の時だけれど」
「兵隊さんが試しに食ってな」
世の中そうした怖いもの見たさでものを食べる人間もいるのである。
「死に掛けたらしいわね」
「そこまでまずいらしいな」
「どんな味なのかしら」
「カナダ料理より酷いんじゃないのか？」
ロザリーはこの国の名前も出した。尚カナダはこの時代においても連合では料理がよくない国とされている。影が薄いだけでなくだ。
「若しかしてな」
「味がないらしいわね」
「肉は焼き過ぎだってな」
それがイギリス料理の特徴だというのだ。
「パスタは茹で過ぎで」
「ソースさえかけてないらしいし」
「それって人間の食べ物かしら」
「一応イギリスも貴族いるんだよな」
「っていうか貴族の本場だし」
「それでまずいのかよ」
貴族とは即ち美食家であるというのも連合のエウロパでのイメージである。しかもそこにサハラから搾取して自分達だけ美食を楽しんでいるという教育が為されている。
「ある意味凄いな、それも」
「カナダ人はただセンスがないだけだけれどね」

「それも凄いけれどな」
「それでカムイだけれど」
ジュリアは自分の服を選びながらロザリーに話す。しっかりと目的は忘れてはいない。既に羽根と服をその手に持っている。
「あれ。どうなんでしょうね」
「和食とアイヌ料理勘違いしてるしな」
「それはどうしようかしら」
「とりあえずあいつ自身に聞いてみるか？」
ロザリーは首を捻りながら言う。
「そうするか？」
「そうよね。ここはね」
「ところでな。ジュリア」
ロザリーは話が一段落したところでふと彼女の名前を言ってきた。
「一ついいか？」
「何が？」
「あたしも服欲しくなったんだけれどな」
「お金あるの？」
「ああ、あるさ」
それはいけるというのだ。何事もまずはお金があってこそだ。連合では金がないのは命がないのと同じと言われているのである。
「それはな」
「じゃあ買えるわね」
「流石に高い服は駄目だけれどな」
「それもなの」
「そう、それでな」
「何買うの？」
「これ。どうかな」
手に取っているアイヌの服を持っていた。
「これな」
「アイヌね」

「そう、アイヌな。これどうだろうな」
「ううん、丈が長いズボンを選んだらね」
アイヌの民族衣装のズボンである。
「どうかしら」
「ズボンが問題か」
「そう、ロザリーは足が長いから」
そこを見ての言葉である。
「だからね。どうかしら」
「そうだな。それじゃあな」
ロザリーもジュリアのその言葉に頷く。それでだった。
「そうするな」
「上着はどうでもいいの」
「長さはか」
「そう、そっちはね」
いいというのである。問題はズボンだというのだ。

第二百二十五話　服選びその十

「足が長く見えるようにしてね」
「それで丈の長いズボンか」
「そういうことよ。それで色はいいから」
見ればアイヌの民族衣装は白地だけではなかった。青や黒もある。
そしてその他には赤や黄色といったものもそこにはあった。そういうものも見てだった。
「ロザリーはどの色でも似合うから」
「それはか」
「そう」
ここでもさっきの話が出た。それでだった。
ロザリーに服を選ばせる。すると彼女は。
「よし、これでいいな」
「それね」
「ああ、これにするよ」
白地の民族衣装だった。ズボンの丈はしっかりとしている。
その長いものをジュリアにも見せる。そうしてだった。
「これでいいよな」
「ええ、いいわ」
ジュリアもいいとした。ロザリーもそれを見て決めた。
「じゃあこれでな」
「ロザリーがまさかね」
「まさか？」
「民族衣装にも目覚めるなんてね」
「別にいいだろ」
「ええ、いいわ」
実際のところ民族衣装の人間も街に結構いる。連合という国はその多様性が常に出る国なのだ。

「それはそれでね」
「じゃあ今からな」
また言うロザリーだった。
「買うな」
「そうしてね。じゃあ」
「ああ、カウンター行くか」
「そうね」
「それで買ってからは」
ロザリーはそれからも考えていた。
「本屋行くか」
「本屋ね」
「ちょっと今買いたい本があるんだよ」
それでだというのだ。
「名作文学だけれどな」
「何？三銃士とか？」
「いや岩窟王な」
それだというのだ。フランスのものだが連合でもこの時代においても尚読まれているまさに古典となっている名作小説である。
「それ読みたくてな」
「モンテ＝クリスト伯ね」
「電子で読むのもいいけれどな」
「本で読むのもね」
「そっちもいいからな」
だからだというロザリーだった。
「本屋行こうって思ってな」
「じゃあ私もね」
「何か本買うのかよ」
「水滸伝でも」
ジュリアはそっちだった。
「買おうかなってね」

「あれな。そういえばあれってな」
「結構凄い場面多いけれどね」
「人食う場面とかな」
本当にあることだ。水滸伝の豪傑の一人が自分になりすまして悪事を働いていた小悪党を殺す。それで飯を食うのだがそこでその悪党の肉を焼いて食うのである。
その他にも人肉饅頭の話もある。中国の話にはこうしたものが多いのだ。
「あるけれどね。まあそれでもね」
「面白いからだよな」
「ええ、読むわ」
笑顔でこう言ってカウンターに向かうジュリアだった。ロザリーもそれに続く。彼女達は気持ちよく服を買うことができたのであった。

服選び　　完

２０１０・１１・８

第二百二十六話　アイヌ料理その一

アイヌ料理

ジュリアとロザリーがだ。教室でカムイに尋ねた。
「ところでカムイってさ」
「アイヌ料理好きだよな」
「ああ、好きだよ」
その通りだと答えるカムイだった。
「それはな」
「それでそのアイヌ料理だけれど」
「あれだよな。ラーメンとかだよな」
「ああ」
その通りだとだ。カムイは二人に対して頷いてみせた。
「それはな」
「あれよね。アイヌラーメン」
「塩であっさりとしていながらも脂ッ気のある」
「美味いだろ、あれ」
ここで幾分か笑顔になってみせるカムイだった。
「あれが北海道の味なんだよ」
「つまりアイヌのね」
「それだよな」
「そうだよ、あれこそがアイヌの味なんだよ」
そうだというのである。
「美味いんだよ、実にな」
「そうよね。美味しいよね」
「それはな」
二人もそのアイヌラーメンは食べたことがある。だから知っていた。二十世紀に札幌ラーメンと呼ばれていたものがそのアイヌラーメンなのだ。

「ただ。それって」
「アイヌ人の料理か？」
「違うのか？」
カムイは二人の今の言葉には素っ頓狂な顔になった。
「あれってアイヌ料理だろ」
「中華料理でしょ、ラーメンは」
「そうだよな」
二人はここでこのことを話す。
「どう見てもね」
「違うか？」
「そういえばそうだな」
言われてやっと気付いたカムイだった。素っ頓狂なものになった顔が普通の顔に戻った。そのうえでのやり取りであった。
「ラーメンは中華料理だよな」
「実際のところそれぞれの国のラーメンがあるけれどね」
「それでもそうなるよな」
「けれどやっぱりね」
「ラーメンはね」
「中華だな」
カムイは考える顔になって頷いた。
「そうなるよな」
「それでだけれど」
「他の料理だってな」
ジュリアとロザリーはそのカムイにさらに話す。
「あれよね。お味噌入れた熊鍋とか」
「あれも石狩鍋だよな」
「石狩鍋もアイヌ料理だぞ」
カムイは真顔で主張する。
「あれもな」
「だからあれも」

「和食じゃないのか？」
「ねえ」
「そうとしか思えないんだけれどな」
「そうか？」
言われるカムイに自覚はなかった。今度はきょとんとした顔になっていた。
「あれこそがアイヌ料理のだな」
「いや、お味噌って日本のだし」
「そのまま日本の味噌使うだろ」
「ああ」
それも認めるカムイだった。彼は少なくとも素直である。
「使うけれどな」
「じゃあそれって」
「和食じゃないのか？」
「いや、アイヌ料理だろ」
まだ言うカムイだった。
「アイヌ連邦の料理だからな」
「何か強引じゃないか？それって」
ロザリーはカムイの今の言葉に怪訝な顔になって返した。
「アイヌでの料理だからアイヌ料理っていうのは」
「そういうのじゃなくてね」
ジュリアも言う。
「あれでしょ。アイヌ民族古来の料理ね」
「アイヌ民族か」
「そうよ。アイヌ連邦ってアイヌ民族の国よね」
「ああ、そうだよ」
それはその通りだというのだ。何しろ国名自体がそれである。それでアイヌ民族の国でないと言うのはあまりにも無理のあることだった。

第二百二十六話　アイヌ料理その二

それでだ。ジュリアはさらに話すのだった。
「俺だってアイヌ民族だよ」
「ちゃんと自覚してるのね」
「してるからこそだよ」
こう返すカムイだった。
「俺はアイヌ料理をだな」
「そういうことよね。けれど」
「どう見たって日本の料理だっていうんだな」
「本当に違うの？それは」
「違うよ」
カムイは力説した。
「だからな。アイヌ料理は他にはな」
「海鮮丼か？」
「あれ美味いだろ」
カムイはロザリーの今の問いには晴れやかな顔で応えた。
「もう蟹も海栗も貝も烏賊も最高だろ。鮭にイクラもな」
「美味いな、確かにな」
「ああ、そうだろ」
「けれどな」
ここで言い加えてきたロザリーだった。その言い加えるのもまた、であった。
「あれも和食じゃないのか？」
「また言うのかよ」
「この学校の和食レストランに同じメニューあるぞ」
ロザリーは揺るがぬ証拠を示した。証拠を突きつけられてもまだ言い逃れる真性の虚言家もいるがカムイはそうではないのだ。
「あれは何なんだよ」

「俺はアイヌ料理って聞いてるがな」
「そっちの国じゃそうなのか」
「ああ、アイヌ料理だ」
カムイは言い切ってみせた。
「アイヌ料理は残念ながら和食みたいにメジャーじゃないけれどな」
「まあそれはね」
「その通りだな」
ジュリアとロザリーもそのことは認めた。
「琉球料理よりもね」
「あまり知られてないからな」
「日本の兄弟国家なのは確かさ」
これも否定できないことだった。アイヌ連邦と琉球王国はこの時代でも日本との交流が深い。人々の行き来も盛んなのである。
「けれどアイヌにはアイヌの文化があるんだよ」
「それでだけれどね」
ジュリアは話を戻してきた。
「そのアイヌ民族古来の料理な」
「それか」
「それはあるの？」
実に具体的な問いだった。
「そうした日本のお料理みたいなのの他には。あるの？」
「んっ？そういえばな」
「知ってる？それは」
「知らないんだがな」
カムイははじめて気付いたといった顔になってだ。目をしばたかせるのだった。そうしてそのうえで二人に対して話すのだった。
「そういうのもあるのか」
「いや、普通にあるだろ」
「アイヌ民族ってずっといるんだろ？」
「ああ、いる」

それは確かというのである。
「アイヌ文字とかはなかったけれどな」
「アイヌ文化はあるわよね」
「地球にあった頃からだよな」
「ちゃんとあるからな。アイヌ民族の歴史も深いんだよ」
「じゃあお料理もあるでしょ」
「残ってるだろ？それも」
二人はまたカムイに対して話す。
「ちゃんとね」
「それでどういったのがあるんだよ」
「何があるんだろうな」
こんなことを言い出すカムイだった。
「本当にな」
「だから。それ調べたら？」
「そのアイヌ料理な」
「何処かにあったか？」
カムイは今度はこんなことを言った。

第二百二十六話　アイヌ料理その三

「アイヌ料理の店とか」
「探せばあるでしょ」
「どっかにな」
「レシピも探せば出るか」
カムイは腕を組んで考える顔になって述べた。
「それも」
「だからよ。調べればいいじゃない」
「こっちも興味あるしな」
「熊とか鹿だな」
これは外せないといった感じだった。
「それも出るかな」
「それはわからないけれどね」
「とにかくまずは調べるんだな」
「アイヌ料理な」
カムイは腕を組んで言う。
「北海道料理がそうじゃなかったんだな」
「っていうかあんたって」
「何度も聞くけれどアイヌ人なんだろう?」
「アイヌ人っていってもな」
カムイは二人にそのアイヌ人についても話すのだった。
「あれだぜ。日本人との混血がな」
「ああ、相当進んでたんだっけ」
「殆ど同じ民族になってるって話だな」
「日本人。まあ大和民族だな」
この名前はこの時代も残っている。日本という国を構成する主要民族である。
「日本人って昔から混血とか抵抗なかったからな」

「それでアイヌ人ともなのね」
「混血してたんだな」
「ああ、そうなんだよ」
こう話すカムイだった。
「俺にしてもそれでな」
「あんたも日本人の血が入ってるのね」
「それでか」
「日本人以外にも色々だけれどな」
これは連合の人間なら誰でもである。連合はとにかく混血が進んでいる。それはアイヌ人も同じであるのだ。金髪や黒い肌のアイヌ人もいるのだ。
「それはな」
「そうなのね」
「それはなんだな」
「そういうことだよ。俺のひい婆ちゃんメキシコ人だしな」
ここではじめてわかるカムイのルーツだった。
「何かひいひい爺ちゃんの一人がコロンビア人だったみたいだしな」
「まあ私もお婆ちゃんの一人南アフリカ出身だし」
「あたしもケニア人の親戚いるしな」
ジュリアとロザリーにしろである。やはり連合の人間だった。
それでだ。カムイも話すのだった。
「だからな。アイヌ民族っていってもな」
「名前はそうだけれど、なのね」
「あやふやになってるんだな」
「ああ、そうだ」
まさにその通りだというのである。
「日本人だってそうだしな」
「じゃあ殆ど日本人と同じなのね」
「そうなんだな」
「そういうことだよ。それで料理だってな」

混血は即ち結婚である。それならば料理もまた一緒になってしまう。それでアイヌの料理もかなり混ざっているのであった。
「日本のが入ってるよな」
「そういうことか」
「つまりは」
「そうだよ。只でさえアイヌと日本は兄弟国家だしな」
それだけに交流は深い。琉球も交えて三国でのことなのだ。
「日本の料理も影響も受けてな」
「けれどあんたが言うアイヌ料理ってまんま日本の料理だから」
「そうだよ。違うか？」
「それでアイヌ料理って言ってもね」
「ちょっとな」
「あるのか？生粋のアイヌ料理」
カムイは二人と話しているうちにこのことを真剣に考えだしていた。
「そんなのがな」
「そりゃあるでしょ」
「琉球料理だってあるしな」
「ダンのところか」
具体的には彼であった。
「あいつ琉球料理を誇りにしてるしな」
「アイヌ人のあんただってそうした料理出せるでしょ」
「そうだろ。その石狩鍋とかラーメン以外にな」
「とりあえず探すな」
それは約束するカムイだった。

第二百二十六話　アイヌ料理その四

「何かあるだろうしな」
「じゃあそういうことでね」
「頑張ってくれよ」
こう話してだった。カムイはそのアイヌ料理について調べることにした。彼はまずは自分の部屋に戻ってだ。それでネットで調べてみた。
するとだ。学校の中にある店が見つかったのだった。
「学校の中にあったのか」
これには彼も驚きだった。
「アイヌ料理の店が。中等部の傍か」
場所もすぐにわかった。
「ええと、名前はママハハ？」
その名前を聞いてカムイはすぐにこう思った。
「継母か」
日本語であった。
「それか？まあ店があるんなら」
それならばであった。彼は早速その店に行くことにした。
実際に行くとであった。すぐに白地のアイヌの民族衣装を着た二人の女の子が出て来たのだ。
一人は黒く長い髪で楚々とした黒い目の少女でもう一人は茶色の短い髪の少女だ。二人はそれぞれこうカムイに言ってきたのだ。
「いらっしゃいませ」
「ようこそ、ママハハに」
「ああ、あんた達はこの店の店員さんだよな」
「はい、高等部の商業科の二年です」
「一年です」
二人共その学年も話してきた。しかも八条学園の生徒であった。

「ナコルルといいます」
「リムルルです」
「どっかで聞いた名前だな」
カムイはその名前を聞いてふとこう思ったのだった。
「それってな」
「はい、よく言われます」
「それは」
二人も笑顔でそのことを認めてきた。
「けれど偶然ですよ」
「似ているのは」
「そうだと思いたいけれどな」
カムイはいぶかしむ顔であった。
「その名前じゃな」
「本名ですけれどね」
「あと私達は」
彼女達自身がどうかというとなのだった。
「姉妹ですから」
「実の姉妹ですよ」
「余計にあれだな」
カムイは二人の話を聞いてまた言うのだった。言わずにはいられなかった。
「ママハハって名前といいな」
「それもよく言われますけれどね」
「とにかく色々と」
「誰だって言うさ。それでな」
カムイは話を変えてきた。そうしてだった。
彼は店の中に入ろうとする。ここでまた二人に言われた。
「それではお客様」
「御一人ですか？御二人ですか？」
「見てわかるだろ」

ここでは苦笑いになるカムイだった。
「それはな」
「いえ、御二人ですよね」
「やっぱり」
「むっ、まさかとは思うけれどな」
二人の話を受けてだ。カムイの顔が曇る。そうしてそのうえで自分の後ろを見る。するとそこにはあの男がもういたのだった。
洪童である。彼が恨めしそうな顔でいたのだ。
そしてそのうえでだ。こうカムイに言ってきた。
「おい、抜け駆けはなしだぞ」
「何で抜け駆けになるんだ」
「だってそうだろ。その女の子達は何なんだよ」
「お店の女の子だぜ、只のな」
「いや、絶対に違うな」
洪童はカムイのその言葉を否定した。
「それは絶対にな」
「何でそう言えるんだよ」
「だってその娘達アイヌ人だろ」
「はい、そうです」
「その通りです」
そのナコルルとリムルルが笑顔で洪童のその言葉に応える。
「アイヌ連邦カムイコタン出身です」
「そこからこの学校に入りました」
「そら見ろ。同じアイヌ人だからってターゲットを定めてな」
「おい、だから違うぞ」
カムイは真面目な顔で洪童に言い返す。

第二百二十六話　アイヌ料理その五

「それはな」
「あくまでシラを切るんだな」
「シラを切ってなんかないぞ」
それも否定するカムイだった。
「俺は本当にな」
「その娘達にアタックするつもりなんだな」
「だから違う。確かに俺は相変わらずもてないさ」
これは変わらなかった。そして洪童もである。この二人のもてなさは変わらない。
「それでもな。今はな」
「今は？」
「飯食いに来たんだよ」
こう言うのだった。
「飯をな。アイヌ料理な」
「アイヌ料理？そんなのがあるのか」
「ああ、あるんだよ」
その通りだとだ。洪童に話した。
「ちゃんとな。あるんだよ」
「そうだったのかよ」
「韓国料理だってあるだろ」
「かなりメジャーな料理だろ」
連合ではという意味である。
「俺の国の料理は」
「それって何かアイヌ料理がメジャーじゃないみたいだな」
「実際そうじゃないのか？」
洪童はここではかなり失礼なことを言った。
「俺も今はじめて聞いたぞ」

「難解か石狩鍋食わしてないか？」
「あれ和食だろ」
彼もそう思っていたのだった。
「それでラーメンだよな」
「あ、札幌ラーメンな」
「それは中国だしな。アイヌ料理ってな」
「だから今から食いに行くんだよ」
そうだと言うのであった。
「これでわかったな」
「じゃあ本当に飯を食うのかよ」
「そうだよ」
怒った顔で洪童に言う。
「これでわかったな」
「一応な。それじゃあか」
「ああ、御前も食うか？」
何だかんだで洪童も誘う。彼もそうしたことは忘れない。
「アイヌ料理な」
「金あるしな。ワリカンでいくか」
「そうしような。それじゃあな」
「食うか」
「今からな」
こう話してであった。彼等は店の中に入った。そのナコルルとリムルルに案内されてであった。そうしてその店の中に入るとであった。
かなり古風な内装の店だった。熊や鮭を狩るアイヌの男の絵が壁にありダークブラウンの木で飾られている。アイヌの服や釣竿等も飾られている。そうした店の中だった。
品書きを見ればだ。それは。
「日本語と銀河語だよな」
「そうだよな」

ここで洪童はカムイにこのことを尋ねた。
「アイヌ文字とかないのか?」
「ああ、そういうのないんだよ」
「えっ、ないのか」
「アイヌには文字がなかったんだよ」
そうだったというのだ。これは本当のことだ。
「実はな」
「へえ、そうだったのかよ」
「そっちは文字あるよな」
「ハングルはな」
これは有名だった。ハングル文字はこの時代でも韓国の誇りとされている。できた当時はともかくとして今は紛れもなく誇りになっている。
「その通りだよ」
「けれどアイヌはなかったんだよ」
「言葉だけか」
「日本の文字を当てはめていたんだよ」
これも本当のことである。
「アイヌの言葉にな」
「じゃあ本当に文字は」
「ああ、ない」
それをまた言うかムイだった。

第二百二十六話　アイヌ料理その六

「それでも俺達はアイヌ語を使ってるけれどな」
「文字は日本の漢字とか片仮名とか平仮名か」
「そうなってるんだよ。勿論銀河語も使ってるけれどな」
「それは必須だしな」
連合ではどの国でも公用語である銀河語とそれぞれの国の言葉を同時に教えているのだ。しかも両方友日常でも使われている。品書き等は二つの言葉を同時に書くことが定められている。
「勿論そっちもな」
「けれどアイヌの文字はなんだな」
「この辺りも日本の影響だよな」
「まあどう見てもな」
その通りだとだ。洪童も言う。
「本当に兄弟国家なんだな」
「文字まで一緒だしな」
「ダンのところとだよな」
「琉球もなあ。あそこもそうだしな」
「三人兄弟か」
「そうなるな。それでだけれどな」
カムイはここで話を変えてきた。今彼等はテーブルに座っている。そうしてそこから洪童にさらに話をするのであった。
「それで何頼むんだ?」
「とりあえず本来のアイヌ料理な」
洪童の返答はこうであった。
「それが欲しいな」
「本来のアイヌ料理か」
「日本の影響ができるだけないやつな」
かなり具体的な言葉になっていた。

「それあるだろ」
「だから俺そういうのを知らないんだよな」
カムイは困った顔で答えた。
「だってな。俺の知ってたアイヌ料理ってな」
「どれも和食の影響が強いのばかりか」
「俺の住んでた星って日本人も多かったんだよ」
「それでか」
「ああ。それでなんだよ」
これが理由なのだった。
「日本の料理の影響が強くてな」
「それでか」
「どうしてもな。そもそもアイヌって日本人多いんだよ」
やはり兄弟国家だからであった。
「日本人とアイヌ人両方が食べられる料理がな」
「必要になるんだな」
「ああ、そうだ」
まさにその通りであった。
「それでなんだよ。だからアイヌ人の舌だってな」
「日本人と近いか、好みが」
「脂っこいのが多いけれどな」
ここは違っていたのだった。和食は伝統的にあっさりとした料理が多い。天麩羅にしても揚げ物だがあっさりとしたものである。
「それでもな」
「日本人も食べられるものか」
「そうだよ。だから味噌だってあるんだよ」
「じゃあ醤油もか」
「普通に使ってるよ」
その通りだと答えるカムイだった。
「普通にな」
「じゃあ本当に和食と変わらないのかよ」

「俺の知ってる限りじゃな」
そうだというのであった。
「ええと、それでだよな」
「メニュー見るか」
「何かあるかな」
「どうだろうな」
二人はメニューを見ながら話をはじめた。するとだった。
そこにだ。ナコルルとリムルルが来てだった。そのうえで二人に対して言ってきたのであった。７４
「あの、本来のアイヌ料理ですね」
「それですね」
「ああ、それだけれど」
カムイがその二人に応える。
「何かあるのかな、それで」
「ありますよ」
「そういう料理を食べてもらうお店ですから」
二人はにこりと笑ってカムイの言葉に答えてきた。
「色々とありますけれど」
「何がいいですか？」
「色々とあるんだ」
カムイは話を聞いて少し驚いた顔になった。
「そうだったんだ」
「はい、そうです」
「本当に色々あります」
二人はまた言ってきた。

第二百二十六話　アイヌ料理その七

「鹿や熊もありますし」
「鮭も」
「食材は同じなんだな」
カムイがそうしたものを聞いて述べた。
「俺が知ってるアイヌ料理と」
「はい、ですが」
「色々と違うますから」
「そうか。それじゃあ」
カムイは二人の話を聞いてだ。少し考えてからこう言った。
「あんた達のお勧め持って来てくれるか？」
「お勧めですか」
「私達の」
「ああ、それで頼む」
これが彼の注文だった。
「二人分な」
「二人分ずつですね」
「私達のお勧めメニューを」
「それで頼むな」
カムイはここでは微笑んで言った。
「お勧めのアイヌ料理な」
「わかりました。それじゃあ」
「すぐに持って来ます」
「学校の食堂だし大丈夫か」
カムイはこんなことも言った。
「そんなに高いものは出ないか」
「はい、アイヌ料理は庶民的なものですから」
「特にそうした高いものはないです」

「ですからお金のことはです」
「心配なさらずに」
ナコルルとリムルルはにこりと笑って言う。そしてだった。
二人はすぐに店の中に入る。そこでメニューについて話しているのは明らかだった。実際にアイヌ語で話し声も聞こえてきた。
カムイもそのアイヌ語を少し聞いてだ。洪童に話す。
「面白いのが来るみたいだな」
「面白いのか」
「ああ、来るな」
そうだというのである。
「だから楽しみにしておくんだな」
「言われなくてもな」
「楽しみにしてるんだな」
「アイヌ民族本来の料理だよな」
「ああ、そうだ」
「食べたことがないからな」
だから期待しているというのである。
「さて、どんなものかな」
「辛くはないからな」
「そうだろうな」
それはわかっていると言う洪童だった。
「それはな」
「やっぱりわかるか」
「韓国料理みたいにってことだよな」
「ああ、そうだよ」
「あの味は韓国料理だけだからな」
「大蒜に唐辛子をたっぷり効かしたあれな」
韓国料理と言えばやはりそれであった。とにかく辛いのである。
その辛さが韓国料理を韓国料理にしているのである。そう言えるものなのだ。

それでだ。洪童自身も言う。
「それでな」
「ああ、それで？」
「俺だって韓国料理ばかり食べてる訳じゃないからな」
「けれど辛いのは好きだろ」
「それはそれ、これはこれだ」
いささか強引な言葉で返したのだった。
「辛くないものも食べるからな、ちゃんと」
「韓国人でもか」
「韓国人でも今はそうなんだよ」
「御前だけじゃないのか」
「春香だってそうだよ」
言わずと知れた彼の妹である。目に入れても痛くない程可愛がっているその妹だ。その可愛がり方は尋常ではないまでだったりする。
「あいつだってな」
「辛くないものも食べるか」
「そうだよ」
こう言うのだった。
「というか韓国人は辛くないものも食べるからな」
「違ってきてるんだな」
「舌の守備範囲が広くなったんだよ」
「守備範囲か」
「ああ。ショートやセンターを守られる位にな」
ジョークだった。ショートやセンターはとにかく守備範囲の広さを求められるポジションだ。野球においてのそれを言ってみせたのだ。

第二百二十六話　アイヌ料理その八

「広くなったんだよ」
「それまでかなり狭かったな」
「まあな」
洪童もそれは否定しない。
「お世辞にもな」
「広くはなかったな」
「けれどこれからは違うからな」
「広くなったからか」
「辛くなくても食べられるようになったからな」
「韓国人全体がか」
「そういうことだよ」
こうカムイに話すのである。
「だからな」
「アイヌ料理も楽しみか」
「さて、どんな料理が出て来るかだな」
実際にこんなことも言うのだった。
「今からうきうきとしてきたよ」
「だよな。何が出て来るかな」
「楽しみになってきたな」
「まあ味はな」
ここで洪童が味について述べてきた。
「脂っこいだろうな」
「ああ、それはな」
「やっぱりそうだよな」
「脂っこくてそれでいてあっさりとしていてな」
カムイ自身もこう話す。
「そうした料理だろうな」

「寒いからだよな」
「脂がないとちょっとな」
「困るか」
「ああ、困る」
カムイの話は続く。
「寒いとどうしてもそうなるんだよ」
「ロシアと同じだよな、そこって」
「寒い中で生きるにはカロリーが必要なんだよ」
これは人間も動物も同じことである。そういうことだ。
「だからな。それはな」
「それでか」
「けれど味はあっさりなんだよ」
「醤油とか味噌は本来ないんだよな」
洪童はこのことも指摘したのだった。それもだった。
「そうだよな」
「それ最近になるまで気付かなかったんだよな」
「そこまで浸透してたんだな、アイヌの中に」
「だから日本と交流が深いんだよ」
それに尽きた。日本との交流が深いとそれだけその影響を受けるということだ。それが一番出るのが料理ということなのである。
「それでだったんだな」
「日本なあ」
「韓国だってそうだろ」
「ああ」
その通りだと頷く洪童だった。
「それはな」
「日本と韓国の関係も深いよな」
「昔日本だったことがあるからな」
所謂日帝三十六年である。この時代韓国は確かに日本だった。日本の中で日本人として生きていたのが当時の韓国人なのである。

「それ以前から縁があったしな」
「それでだったよな」
「ああ、それで今もな」
「日本とは関係があるか」
「ただ。アイヌや琉球と比べてな」
どうかというとだ。韓国と比べてだ。
「歪だけれどな」
「歪か」
「韓国だぞ」
洪童の主張の要点はここにあった。
「韓国と日本だぞ」
「それでか」
「ああ、韓国人は日本人に対してな」
「本当にあれこれ言ってるな」
「日本を見ないと生きていけないんだよ」
奇妙な習性だがこれは日本から独立してからこの時代に至るまで変わらないことである。韓国人は何をするにもまず日本を見て基準にしているのだ。

第二百二十六話　アイヌ料理その九

「だからだよ。日本への見方はな」
「歪か」
「じゃあ聞くがまともに見えるか？」
「いいや」
カムイも彼の言葉に首を横に振って述べる。
「全くな」
「そうだろ。そういうことだよ」
「それでか」
「ああ、それでだよ」
また話す洪童だった。
「俺だってな。日本に来るまではな」
「歪だったんだな」
「とにかく日本、日本、日本だった」
口を開けば日本だった。それがかつての彼だったのである。
「日本に負けてたまるか、勝ってみせるってな」
「そればかり考えてか」
「ああ、何もかもやって来たんだよ」
「で、何で八条高校に来たんだ？」
「その日本に来たくなってな」
それでだというのだ。この時代の連合では他の国の学校に通うことも普通である。連合のどの学校を卒業しても共通の卒業証明や学士、それに職業資格が手に入るのである。
「それでだったんだよ」
「で、日本に来てどうだった？」
「まあよかったな」
こう答える洪童だった。
「いい国だな」

「そうだろ。日本はいい国なんだよ」
カムイも笑顔で日本について話す。
「それは知ってたさ」
「交流が深いからだよな」
「何につけてもそれだな」
「だから料理もか」
「本当に味噌とか普通に使ってるんだよ」
その日本の調味料をというのである。
「だからそれがアイヌのじゃないって聞いてな」
「驚いたか」
「ああ、信じられなかった」
そこまでなのだった。
「いや、本当にな」
「まあ韓国でも味噌とか醤油はな」
「普通に使うか」
「昔はそれは韓国起源って言ってたさ」
「そんなこともあったんだな」
「何でもかんでもだったんだよ」
洪童はこう話す。
「剣道も柔道も相撲もな」
「どれも日本のものじゃないのか？」
カムイも突っ込みを入れる。
「それってよ」
「ああ、そうさ」
「そうだよな。それが全部か」
「そうだよ。全部起源って言ってたんだよ」
「韓国に起源があるってか」
「結構おかしな話だろ」
洪童は自分から話した。
「これってな」

「そうだな。確かにおかしな話だな」
「昔の御先祖様のこの考えがな」
「わからないか」
「ああ、理解できないな」
実際にそうだというのであった。
「あれだろ。何でも自分達で創り出せばいいじゃないか」
「クリエイトだな」
「連合ってそうだろ。クリエイトだろ」
「それが一番いいってな」
「子供の頃からずっと言われてたさ」
連合では創造性が尊ばれるのだ。確かに過去は重要であるがそれ以上になのだ。創造性がとにかく重視されているのである。
それでなのだった。今彼も言うのであった。
「だからな。起源なんてな」
「自分達でそれを創り出せばな」
「できるだろ。例えばな」
「ああ。例えば？」
「ほら、韓国料理のあの激辛鍋」
仇名だが殆どそう呼ばれているのである。
「あれだってそうだろ」
「あれな。辛いけれど確かにな」
「美味いだろ。羊に野菜もたっぷりと入れてな」
「おまけに内臓も入れるしな」
「内臓がいいんだよ」
洪童は話の波に乗ってきた。それでにこにこと笑って話すのだった。

第二百二十六話　アイヌ料理その十

「特にな」
「脳も入れるしな」
「とにかく羊を全部食べよるんだったらあれだよ」
「激辛鍋か」
「韓国料理の代表だよ」
この時代の韓国料理のである。
「あれだって創られたものだしな」
「だから起源はいいか」
「俺はそう思うさ。それでな」
「ああ、それで？」
「今だってな」
「ああ、アイヌ料理か」
「起源はアイヌにあるよな」
このことを再確認するようにして話す。カムイに対してである。
「それはそうだよな」
「言うまでもないだろ」
「それは護るべきものだよ」
「護るべきか」
「そう思うさ、俺はな」
「そうか」
「大事にするべきだよ」
こうも言うカムイだった。
「だからこそな」
「食べるべきなんだな」
「よく知ったうえでな」
「自分の国の料理は大事にするべきなんだな」
「まあ味なんてあれだけれどな」

洪童は笑っても来た。そしてそのうえでの話にもなっていた。
「あれだよ。時代によって変わったりするけれどな」
「素材も調味料も変わるからな」
「変わるものはあるさ」
それはあると。認めたうえでの言葉だった。
「けれどそれでもな」
「基は護っていくんだな」
「それでいいだろ。じゃあそろそろか」
「ああ、そろそろ来るな」
話が変わった。起源と護るべきものからそちらにである。
二人の顔に緊張が漂ってきた。そのうえで見合って頷き合う。
「楽しみか？」
「ああ」
カムイは微笑んで洪童の言葉に応える。
「かなりな」
「そうか。それはいいことだな」
「どんな美味いものが出て来るかって考えただけでな」
「楽しみだよな」
「そうだろ。それでな」
「ああ、食うか」
「アイヌ料理な」
やはりそれだった。今二人はそれが来るのを今か今かと待っていた。
そしてである。何かが遠くから香ってきた。
まずはだ。カムイが言った。
「醤油の匂いがしないな」
「あっ、そういえばそうだな」
「ああ、しないよな」
「大豆の醤油じゃない」
二人共これがよくわかった。

「というか醤油自体使ってないな」
「そうだよな」
匂いでわかるのだった。
「塩か？」
「それか」
匂いがしないからこう察したのだった。
「本当にあっさりとした味付けなんだな」
「それがアイヌ料理か」
「しかしな」
ここで言うカムイだった。
「俺本当にこういうこと知らなかったからな」
「やっぱりそうか」
「ああ、醤油を使わないアイヌ料理ってどんなのだろうな」
「いや、醤油使ったらそれは和食だろ」
「それで和食になるか」
「和食っていったら醤油だろ？」
洪童は確かな顔で話す。
「それで醤油っていったらな」
「和食か」
「醤油といえば和食、和食といえば醤油だろ」
また言う洪童だった。
「だからそれはな」
「アイヌ料理って本当に醤油使うこと多いからな」
「だからだよ。そう思えるんだよ」
「何か俺が思ってたより日本って浸透してるな」
「ああ、俺も自分でそう思ってる」
アイヌ人の彼にしてもなのだった。
「そうだったんだな」
「俺にはわからない話だな。まあとにかくだ」
「食うか」

「そうしような」
こうしてだった。彼等はそのアイヌ料理を出迎えたのであった。
カムイがはじめて知るそのアイヌ料理はだ。一体何かというとであった。

アイヌ料理　　完

２０１０・１１・１７

第二百二十七話　素朴な味付けその一

素朴な味付け

まず出て来たのはだ。様々な山菜に肉を入れた鍋であった。
「オハウです」
「どうぞ」
こう二人に話すナコルルとリムルルだった。
「まずはこれを召し上がってです」
「お身体を温めて下さいね」
「ああ、それはいいな」
「そうだよな」
カムイも洪童も二人の言葉に笑顔になる。見れば透き通っていて油の浮いた湯気を出す汁にだ。本当に多くの野菜や肉が入っていた。
そしてその肉は、だった。
「これ何の肉なんだ？」
「狼です」
ナコルルが答えてきた。
「狼のオハウです」
「狼か、これ」
「はい、味付けは塩と狼のその油でしてます」
「狼っていうとあれだよな」
カムイはそれを聞いて説明するナコルルに対して言うのだった。
「犬と味は」
「はい、近いです」
実際にそうだと答えるナコルルだった。
「元々犬は狼からなったものですから」
「豚と猪の関係と同じだな」
「はい、そういうことです」
まさにそうだというのであった。

「ですから特に不思議に思われることはありません」
「犬は食べたことあるけれどな」
「俺もだ」
それは洪童もだった。犬はアイヌや韓国だけでなく連合全体で結構食べられているのである。連合では様々なものが食べられるのだ。
「ああいう感じか」
「なら抵抗はないよな」
「じゃあ早速な」
「食べるか」
「はい、では」
ナコルルはにこりと笑って二人に言ってきた。
「召し上がって下さい」
「よし、じゃあな」
「食べるか」
こうして二人はそのオハウを食べはじめる。木製の箸とその箸と同じく木製のスプーンを使ってでだ。するとであった。
「あっ、これは」
「ああ」
まずは二人で言い合う。
「アクは取ってないんだな」
「その味がするな」
「それにダシは魚か」
「それに昆布も入れてるな」
「おわかりになられますか」
今度はリムルルが言ってきた。
「それも」
「ああ、これでも味覚の鋭さには自信があるんだ」
「俺もだ」
二人でこう言うのであった。
「だからそれはわかるさ」

「細かいところまでな」
「山菜の味も出てるな」
「それで肉のアクも消したか」
「はい、そうしています」
ナコルルの話だった。
「お肉のアクは取らずに山菜に吸わせます」
「そういう料理か」
「これは」
「私達アイヌはです」
ナコルルはここから話すのだった。そのアイヌからだ。
「元々狩猟民族です」
「あっ、そうか」
言われてまた気付いたカムイだった。はっとした顔になっている。
「そういえばそうだったよな」
「って御前アイヌ人だろ？」
洪童が思わず問い返した。唖然としてだ。
「何でそれ知らないんだ」
「いや、今のアイヌの産業ってな」
「猟師さんとかいるだろ」
「いるけれど少ないぞ」
こうだ。いぶかしむ顔で洪童に話すのだった。

第二百二十七話　素朴な味付けその二

「本当にな」
「そうなのか」
「それでアイヌの産業はな」
「ああ。一番発展してるのは何だ？」
「農業なんだよ」
それだというのである。アイヌ連邦は全体的に農業やそういったものが発展しそれで有名にもなっている国なのである。無論鉱工業も有名だ。
「メロンにラベンダーにジャガイモな」
「メロンか」
「ああ。アイヌのメロンだ」
何気なく祖国の名産を宣伝している。
「美味いぞ」
「それはわかるが狩猟とは無関係だな」
「それと酪農な」
「そっちもやってるのか」
「牛に羊だ」
そういったものだった。
「ビールもあるぞ。それで観光業もやってる」
「いい国みたいだな」
「のどかでいい国だぞ」
実際にそうだと言ってここでも祖国の宣伝をしている。
「食い物も美味いしな」
「けれど狩猟とは関係ないな」
「ああ、それはない」
実際にそうだというのである。
「というかアイヌ民族は農業とか関係なかったのか」

「今はしていますよ」
ナコルルが話すのだった。
「ですがそれでもです」
「それでもか」
「はい。昔はです」
やはりしていないと言うのだ。それは間違いなかった。
「狩猟で生きていましたから。それでこうしたお料理なんです」
「それでか」
また言うカムイだった。
「こうした料理なんだな」
「はい、そうです」
「ううん、勉強になったな」
「だから御前アイヌ人だろ？」
またこう言う洪童だった。パートナーを呆れた顔で見ての言葉だった。
「自分の民族の歴史も知らないとか言うなよ」
「俺は中学まで社会科いつも赤点だったんだよ」
「そういうことか」
「ああ、そういうことだ」
これが返答だった。
「よくわかったな」
「今はどうなんだ？」
「赤点じゃなくなった」
「中学まではアイヌ民族の歴史も習ってたんだな」
「いつも寝ていた」
だから赤点なのだというのだ。その辺りは不真面目であった。
「そうしていたんだよ」
「ああ、もうわかった」
洪童は呆れた顔のままで言い返した。
「それでだったんだな」

「そうだよ。とにかくな」
「食うか」
「その狩猟の料理な」
「今はどれも養殖品ですけれどね」
リムルルがこのタイミングで二人に言ってきた。
「山菜も狼も」
「狼も家畜になってるからな」
カムイはこのことを知っていた。狼が犬になるからそれは当然だった。
「それでだな」
「で、今から食うぞ」
「ああ」
こう話してだった。彼等はそのオハウを食べてみる。まずは狼の肉をだった。
二人は食べ終えてからすぐにこう言い合った。
「犬の肉だな」
「ああ、味はそのままだな」
「そうだよな」
「けれどな」
しかしなのだった。それでもだった。

第二百二十七話　素朴な味付けその三

「匂いがきついな」
「そこは違うな」
「ああ、猪と同じだな」
「その辺りはな」
二人にはこれがわかったのだった。
「犬が豚で」
「狼が猪だよな」
「まんまそうなるな」
「そうだな」
食べてみてわかることだった。まさにそれだった。
「しかし食べてみるとな」
「狼もな」
「ああ、案外いけるな」
「そうだな」
「ただですね」
ここでナコルルが二人に少し申し訳なさそうに言ってきた。
「この狼はエゾオオカミじゃないです」
「違うのか？」
「それは」
「はい、シベリアオオカミです」
その狼だというのである。
「そうなんです」
「ああ、エゾオオカミな」
カムイもその狼の名前を聞いて述べた。
「あの狼じゃないんだ」
「そのお肉は手に入らなくて」
「それでです」

ナコルルだけでなくリムルルも言ってきた。
「それでシベリアオオカミのお肉になりました」
「そちらに」
「そうだったんだな」
カムイは二人の話を聞いて考える顔になって述べた。
「エゾオオカミじゃないか」
「エゾオオカミって何だ？」
洪童はカムイ達のやり取りに怪訝な顔になって返した。
「オオカミなのはわかるけれどな」
「ああ、そうだよ」
その通りだとだ。実際にこう答えるカムイだった。
「キタキツネ、エゾジカ、ヒグマと並ぶアイヌのマスコットだよ」
「そうなのか」
「何処の国でもいるけれどな」
惑星によっていたりいなかったりするのだ。これはニホンオオカミも同じだ。他にはリョコウバトやステラーカイギュウ、モアにドードー、バーバリーライオンやクァッガ等もだ。地球では滅亡した生物も他の星ではいるのだ。無論星によるがだ。
「アイヌじゃ地球の頃から付き合いがあった動物達だからな」
「それでマスコットになってるのか」
「ああ、そうだ」
こう洪童に話した。
「それがエゾオオカミなんだよ」
「アイヌを代表する狼か」
「シベリアオオカミもいるけれどな」
「そちらの狼の方がずっと多いんです」
「生息地の関係で」
ナコルルとリムルルがまた話してきた。
「エゾオオカミはニホンオオカミの亜種で森林にいます」
「それで生息地が限られるんです」

「森にいる狼なあ」
洪童はその話に怪訝な顔になっている。
「そういうのもいるんだよな」
「韓国にはいないか？」
「あまりいないな」
そうだというのである。
「ちょっとな」
「そうか」
「平原とか草原にはいるけれどな」
「韓国じゃなくて御前の星ではってことか？」
「ああ、そうだ」
カムイに対して話す。
「他の星は知らないけれどな」
「狼の養殖の犬もルートが変わって」
「それでなんです」
また話す彼等だった。

第二百二十七話　素朴な味付けその四

「エゾオオカミの肉が今は手に入らなくて」
「シベリアオオカミになりました」
「それでお肉の味はです」
「少し違います」
「それでか」
カムイは話を聞きながら述べた。
「何かあまりわからないな」
「っていうか味変わるのか？」
洪童はその肉を箸に取って食べながら述べた。
「同じ狼でも」
「微妙にですけれど」
「変わります」
実際にそうだというのである。
「ですからそれはです」
「申し訳ありません」
「いや、謝らなくていいけれどな」
それはいいというカムイだった。
「別にな。けれどかなりな」
「かなり？」
「かなりといいますと」
「凝ってるな」
カムイが今度言うのはこのことだった。
「本当にな」
「この店は本格派ですから」
「ですから」
「だからか」
「素材には気をつけています」

「養殖ものですけれど」
「養殖とかはいいんじゃないのか？」
これはカムイの考えだった。
「っていうか天然ものなんてそうそうな」
「手に入らないのは確かです」
「それは」
「だよな。アイヌ民族ももう狩猟民族じゃないからな」
ごく普通にだ。都会や農村で生きる民族になっているのである。
昔ながらの生活というものは彼等の中でも消えてしまっているのである。
「だからな」
「養殖ものをか」
「食べるようになったんだよ」
そうだと洪童にも話す。
「アイヌ人もな」
「狩猟って不確実だからか」
「ああ、食い物を手に入れられるか入れられないかはな」
そのことが問題なのだった。
「わからないだろ。けれどな」
「農業とか酪農とか養殖はな」
「確実だからな」
これが大きいのだった。確実に手に入ることがだ。
「まあ狼は養殖っていうよりは牧場でやってるけれどな」
「ブロイラーとはそこが違うか」
「牛とか豚みたいなものだな」
どちらかというとそちらだというのだった。
「実際はな」
「猪もそうなんだな」
「ああ、そうなるな」
実際にそうだと話すカムイだった。

「けれどこれは普通だろ？」
「まあな。韓国でも普通に犬とかそうして育ててるしな」
「韓国の犬料理な。そっちの方がアイヌ料理より有名じゃないのか？」
「それでもあまり食わないぞ」
「そうなのか」
「やっぱり牛や豚の方をよく食うぞ」
そうだというのであった。
「っていうかそっちの方が圧倒的に多いな」
「犬じゃなくてか」
「犬ってあまり食いでがないだろ」
洪童は少し参ったような顔になって話すのだった。
「痩せてるしな。いつも動いてるから当然だけれどな」
「それでか」
「ああ、それに肉食うしな」
「それよりも草とか残飯で済む牛や豚か」
「そっちが圧倒的に多いさ」
そうだというのであった。

第二百二十七話　素朴な味付けその五

「あと鶏とか鴨な」
「ああ、それは何処でもだよな」
「そういうやつの方が多いさ。犬食うのはあまりないさ」
「結局何処でもメインは牛とか豚とか鶏か」
「あとは羊だな」
「そうなるな、やっぱり」
カムイも話を聞いて納得した顔になり頷く。
「実際アイヌでも狼って思ったより食わないしな」
「だよな。あと犬料理だけれどな」
「ああ」
「二十世紀後半から随分叩かれたらしいんだよ」
洪童は今度は困ったような、しかもそこで怒りも見せた顔で話すのだった。
「野蛮とか言われてな」
「エウロパの連中にか？」
「ああ、あの連中にな」
その通りだというのであった。尚このことは歴史でも教えられるのだがアメリカやオーストラリアもそうだったとは教えられなかったりする。
「野蛮だってな」
「食文化なんかそれぞれだろうにな」
「ゲンゴロウとかタガメとか蜘蛛食うのも言ってたみたいだしな」
連合では昆虫もよく食べられる。他には蠍やカブトムシ、それに蟻や蜂、ナナフシ等もだ。非常によく食べられるのである。
「器の小さい連中だからな」
「全くだな」
「まあ殺し方は改善したがな」

それはだというのだった。
「怖がらせて殺すんじゃなくてあっさり殺すようになった」
「それはか」
「ちゃんとしたさ。とにかくな」
「ああ、とにかくか」
「韓国でも犬はあまりメジャーじゃないな」
「有名でもか」
「じゃあ聞くけれどな」
洪童はその狼の肉を食べながら真面目な顔でカムイに問うてきた。
「どっちを食いたい？」
「犬と狼か？」
「いや、犬と豚だよ」
そちらだというのである。
「どっちを食べたい？どっちかって言われたらな」
「やっぱり豚だな」
すぐにこう答えるカムイだった。
「俺の好みでもあるけれどな」
「大抵の奴はそう答えるな」
「やっぱりそうか」
「ああ、豚の方がいいってな」
そうだというのであった。
「皆言うさ」
「まあそうだよな。豚肉って安いしな」
これも大きかった。何時の時代でも価格は重要である。
「しかも何にだって使えるしな」
「サハラじゃ食べられないけれどな」
「それ言ったら牛も同じだからな」
ここではヒンズー教のことである。それぞれの宗教で食事にまつわるタブーが存在しているのはこの時代でも同じなのである。
「だからそれはな」

「まあそれは置いておいてな」
「ああ。やっぱり豚の方だな」
また言うカムイだった。
「豚バラが一番好きだな」
「いいな、それ」
「そうだな。何かそういう話してたらな」
「猪だな」
「食いたくなってきたな」
次はそれなのだった。
「猪な。出て来るかな」
「どうだろうな」
「アイヌ料理じゃ多いけれどな」
カムイはこのことを洪童に話した。
「猪はな」
「というかかなり多いだろ」
「まあな」
カムイもそれを否定しなかった。
「熊に猪はな」
「やっぱり多いか」
「流石に食い物のメインじゃないけれどな」
「やっぱりメインや牛か豚か」
「ああ、そっちだ」
やはりそうだというのであった。

第二百二十七話　素朴な味付けその六

「熊とか猪とか鹿はな。養殖はな」
「あまりしないよな」
「ああ、しない」
やはり家畜になるのは牛や豚、羊だった。熊や猪は非常に稀だった。それはこの時代においても変わらないことだったのである。
「恐竜とかもな」
「食べるだろ？」
「食べるけれどあまりな」
「メジャーじゃないか」
「アイヌじゃな」
そうだというのであった。
「食べないな」
「そうか、韓国じゃ恐竜も結構食べるけれどな」
「食べるか」
「ああ、食べる」
そうだというのだった。
「味付けは他の料理と同じだけれどな」
「あの唐辛子と大蒜か」
「それで食ってるんだよ」
やはりそれであった。韓国料理ならばだ。
「味は知ってるよな」
「鶏肉みたいな味だな」
「爬虫類の味だよ」
連合では爬虫類もよく食べられる。両生類もだ。恐竜、それも大人しい草食性のものは家畜化されそれで食べられているのだ。
「まさにそれだよ」
「美味いからな、恐竜も」

「韓国人は素材は何でもいいな」
「味付けはこだわってもだな」
「ああ、味付けはな」
それは絶対というのであった。
「やっぱり。唐辛子と大蒜だよ」
「それしかないか」
「他の味は韓国料理じゃないな」
こうまで言うのであった。
「だからやっぱりな」
「あの辛さか」
「辛さは絶対だよ」
洪童の言葉はさらに強くなる。熱さえ帯びてきている。
「それがないとな」
「韓国料理は韓国料理にはならないか」
「昔は違ったらしいけどな」
「昔？」
「唐辛子が来る前な」
相当な昔だった。それこそ千五百年以上の昔の話である。
「その頃はな」
「コロンブスのアメリカ大陸発見以前か」
「その頃は辛くなかったんだよ」
そうだったというのだ。
「唐辛子がなかったからな」
「当然って言えば当然だな」
「けれど唐辛子が来てな」
「変わったか」
「今の韓国料理になったんだよ」
「成程な。そういうことか」
「ああ。そこがアイヌ料理と違うな」
彼等が今食べているそれであった。

「やっぱりな」
「そうだな。アイヌ料理って今食べてみるとな」
「素朴な味だよな」
「大昔の猟師の料理だな」
それなのだった。
「本当にな」
「塩と油で味付けして」
「それとこれは」
カムイはまたオハウを食べてみる。そして味を確かめるとだった。
「あれか。行者大蒜か」
「おわかりになられますか」
「それだよな」
「はい、それです」
ナコルルがカムイの言葉に答えるのだった。
「鍋のお汁はだしを取っていまして」
「小魚に昆布か」
「それもおわかりですね」
「ああ、わかるよ」
味覚は鋭いカムイだった。確かなものがある。

第二百二十七話　素朴な味付けその七

「それに行者大蒜か」
「香辛料です」
それで使っているというのである。
「アイヌには胡椒やそういったものはないですけれど」
「行者大蒜があるか」
「そういうことです。如何でしょうか」
「俺これ好きなんだ」
その行者大蒜がだと。こう話すカムイだった。
「だからさ」
「満足して頂けますね」
「充分にさ」
「それはどうもです」
「俺もだよ」
洪童も笑いながら話してきた。
「この味がいいんだよな」
「そうだよな」
「その行者大蒜ですけれど」
リムルルが二人に話してきた。
「アイヌの間ではプクサといいます」
「ああ、そうだよな」
これはカムイも知っていた。笑顔で応える。
「アイヌ語じゃそうだよな」
「はい、もっとも今では行者大蒜と日本語で話すことも多いですが」
このことも話すリムルルだった。
「それは」
「そうだよな。最近特に日本語と混ざってるよな」
「私もどちらがどちらかわからなくなる時があります」

リムルルは少し苦笑いになって述べた。
「プクサと呼ぶべきか行者大蒜と呼ぶべきか」
「日本人もよく来るしな」
「そうですよね」
「元々混血してな」
「実は私は」
「私もですけれど」
リムルルだけでなくナコルルも話すのだった。
「お父さん日本人なんです」
「そうなんです」
「ああ、そうなんだ」
それを聞いても特に驚かないカムイだった。本当に何でもないといった口調である。そしてその口調のまま話すのであった。
「俺だって婆ちゃん日本人だしな」
「そうですよね。日本との交流が長くて深いですから」
「どうしてもそうなりますよね」
「やっぱりそれは」
「言葉にも出て」
「というよりかな」
ここで話す洪童だった。
「元々アイヌって蝦夷だったな」
「ああ、そうらしいな」
カムイが彼に応える。話している間にだった。
新しい料理が来た。それは。
野草と豆をもう形がなくなる寸前まで煮た煮物だった。やはり醤油は使っていない。そうしたものが二人の前に出されたのだった。
それを出してだ。ナコルルが話してきた。
「プクサラタシケプです」
「プクサラタシケプ？」
洪童はそれを聞いて首を捻った。

「随分と言いにくい名前だな」
「そうですか」
「韓国人には言いにくいな」
そうだというのであった。
「どうもな」
「そうですか」
「ああ、言いにくいな」
彼はどうしてもそれが気になっていたのだ。
そしてだ。彼はさらに話すのだった。
「それでこれ何なんだ？」
「ラタシケプの一つでして」
「そのラタシケプっていうのがわからないんだけれどな」
「簡単に言うと煮汁です」
それだというのである。
「魚油やお塩で味付けしています」
「またあっさり味か」
「はい、ではどうぞ」
ナコルルはこう言って洪童だけでなくカムイにも勧めた。

第二百二十七話　素朴な味付けその八

「美味しいだけでなく身体にもいいですよ」
「そうだよな、これは」
「それは間違いないな」
二人も身体にいいということは察したのだった。
「豆だしな」
「それは間違いないな」
「はい、それではどうぞ」
「よし、じゃあな」
「今からな」
こうして二人はナコルルの言葉に応えてそのプクサラタシケプを食べはじめた。これも箸と木のスプーンで食べる。するとであった。
「ああ、これも」
「美味いな」
「そうだよな」
合格であった。
「いい味だよ」
「アイヌ料理の味なんだな」
こんなことも言う洪童だった。
「こうしたあっさりしていて油っけがあるのが」
「そうだよな。ただ」
「ただ。何だ？」
「俺はじめて食べたよ」
カムイはこう洪童に話すのだった。
「はじめての味だよ」
「これまではあれか。醤油とか味噌か」
「ああ、そういう味ばかりだった」
まさに和食だけだったというのである。

「和食ばかりだったな」
「和食なあ。アイヌと日本って本当に関係深いな」
「かつて日本だったしな」
このことがとにかく強かった。
「だからそれはな」
「どうしてもだな、本当に」
「そうだよ。だからこの味はな」
どうかと話すカムイだった。
「いいよな」
「そうだよな」
洪童も頷く。
「この味もな」
「昔の懐かしい味みたいだよな」
「御前にとってはそうだよな」
「ああ、これがアイヌの味か」
言葉に感慨がこもってきていた。
「はじめて食べる味だから新鮮な筈だけれどな」
「懐かしいか」
「ああ、懐かしい」
そうだというのであった。
「本当にな」
「じゃあその懐かしい味をな」
「ああ」
「もっと楽しむか」
洪童はにこりと笑ってカムイに話した。
「そうするか」
「そうだな。それじゃあこれな」
「プクサラタシケプだったな」
「そうだな。名前がな」
「覚えにくいか？」

「今やっと覚えた」
カムイは話した。実際にそうだというのである。
「それをな。意外と野菜関係も多いんだな、アイヌ料理って」
「肉とか魚ばかりだと思っていたんだな」
「元々狩猟民族だからな」
「やっぱりそれか」
「農耕とかとはあまり縁がなかったからな」
祖国の歴史が赤点だったカムイもそのことは流石に知っていた。
彼等は北海道では農耕とはまた別の生活を営んでいたのである。
そしてだ。彼はさらに言うのであった。
「実際に狼の肉とか出て来ただろ」
「ああ、野草とかもな」
「だからな。こうして豆とか食うのはな」
「思わなかったか」
「意外とヘルシーなんだな」
「あまり知られていないですけれどね」
ナコルルの言葉はここでは少し寂しそうであった。
「それでもですよ」
「美味しいし健康にもいいか」
「薄味にしていますし」
調味料をあまり使い過ぎると塩分等の関係で身体によくないのはこの時代でも同じである。そのことも考慮している言葉だった。

第二百二十七話　素朴な味付けその九

「お塩もあまり使ってません」
「素材の味をか」
「それでいて匂いを消して」
それもあるのだというのだ。
「そうしていますから」
「ううん、自然なんだな」
「はい、自然食ですよ」
また言うナコルルだった。
「アイヌ民族は自然との調和を大切にしますから」
「日本人よりもだな」
「日本人とはまた違う調和の仕方ですね」
そうだというのである。
「日本人は木々に親しみますけれど」
「アイヌは動物だよな」
カムイは言った。
「そっちだよな」
「はい、そうなりますね」
「それがアイヌ人だよな」
カムイの言葉の感慨が深くなっていく。
「やっぱりな」
「それがアイヌ人の自然との調和です」
「そしてそれを食う」
「こうして」
ナコルルの言葉にもだ。感慨がこもってきていた。
「食べるのもまた。その中の一環と思いますよ」
「哲学だな」
洪童はその話を聞いて思わず呟いた。

「そこまでなるとな」
「シャーマニズムっていうんだな」
これはカムイの言葉だ。
「こういうのってな」
「ああ、そっちになるか」
「アイヌ民族ってのはそっちの信仰だからな」
この時代では様々な宗教を信仰しているがそれが残っている。むしろアイヌ民族の国家を持ってそれがさらに強まっていると言える。
「だからそうなるな」
「じゃあ哲学っていうよりは宗教か」
「ああ。つまり食うのも」
「宗教か」
「そうなるんじゃないか？」
カムイは考える顔と言葉で述べた。
「やっぱりな」
「俺の国じゃない考えだな」
洪童は彼の言葉を聞いて自分の国のことをついつい言った。
「韓国じゃな」
「韓国の宗教か」
「結構複雑なんだよ」
韓国も連合らしく多くの宗教がその中にある。その数自体が相当なものだったりする。
「仏教もあればキリスト教もあってな」
「他にも色々だな」
「俺の叔父さんの一人はムスリムだぜ」
この時代の韓国にはムスリムも存在しているのだ。
「あと爺ちゃんはアヌビス信仰していたしな」
「本当に多彩だな」
「で、俺は仏教徒でありカトリックでもあるんだ」
「二つ同時か」

「ああ、そうなんだよ」
こう話すのだった。
「実はな」
「そうか。まあ俺もな」
「そっちもか」
「実はブレスとオシリスとケツアルカトルを信仰してるんだよ」
それぞれケルトとエジプトとマヤの神だった。
「その三つな」
「三つか」
「ああ、それだけな」
「そっちも宗教的にはややこしいんだな」
「当然アイヌの信仰もやってるぜ」
それもだと話すカムイだった。
「そっちは日本の神道みたいな感じだな」
「あんな感じか」
「アイヌにも神社あったりするしな」
勿論それは日本のものである。
「それもな」
「何かアイヌも宗教的にはややこしいんだな」
「ややこしいっていうよりはかなり滅茶苦茶だな」
「滅茶苦茶か」
「主な宗教は一応民族古来のシャーマニズムだけれどな」
それでもだというのである。内実はかなり複雑だというのである。

第二百二十七話　素朴な味付けその十

そしてだ。カムイはさらに話すのだった。
「何かよくわからないんだよ」
「日本みたいにか？」
「この辺りも兄弟国家になってるな」
「じゃあ琉球もなんだな」
「そうだろうな。本当にアイヌ民族っていってもな」
どうかというのだった。一応今でもアイヌ民族と大和民族は別ということになっている。ただしそれは名前という意味においてだ。
「日本人と混ざったな」
「日本もそうなのか？」
「だろうな。日本だからな」
「そうだな。何でも取り入れる民族だからな」
「そうだな」
それはだというのだった。
「それじゃあ当然な」
「それでこんなものも日本で食えるか」
「そういうことか。じゃあ今度は」
「ああ、何が出て来るかな」
話が食べ物のことに戻った。それでだった。次に出て来たのは。
「団子か」
「それだよな」
「これって」
カムイと洪童は今度目の前に出て来たものを見て言う。それはまさに団子だった。白く煮られて串に三個ずつ刺さっている、それだった。
それを見てだ。二人は言うのだった。
「アイヌ料理に団子あったのか」

「団子とか餅とかはどの国の料理でもあるだろ」
「あるか」
「そうだろ」
「そういうものかね」
「美味いからな」
それであるのだと。洪童は話すのだった。
「美味いものは誰も食うさ」
「そうか。しかしアイヌ料理で団子か」
「シトといいます」
またナコルルが二人に話してきた。
「お米や粟で作ります」
「へえ、粟で」
「アイヌ民族は本来お米は食べませんでした」
これも狩猟民族故である。
「それでも。こうして食べるようになりまして」
「それでなんだ」
「それでか」
「食べてみるとこれがです」
ナコルルの言葉は続く。
「美味しいのでそれで」
「こうして料理として定着した」
「そういうことだよな」
「そうなります。それではですね」
「ああ、じゃあこれも」
「食べさせてもらうな」
実際に食べてみるとだ。その味もだ。
「美味いな」
「これ粟だな」
「ああ、粟だな」
「いいな、粟の団子」

この時代では粟も品種改良されて味がかなりよくなっている。それで主食の一つに返り咲いているのである。そういうことだった。
「粟の団子も多いけれどな」
「こうした味付けもいいよな」
「だよな」
「アイヌの味の団子もな」
「それもな」
「やっぱりあれだな」
ここでカムイは笑顔で話した。
「こうした主食を食べないとな」
「気が済まないんだな」
「肉とかだけじゃ今一つ足りないんだよな」
また洪童に述べるだった。
「どうしてもな」
「それでか」
「ああ、それでだ」
こう話すのだった。

第二百二十七話　素朴な味付けその十一

「御飯でもパンでもな」
「だよな、確かにな」
「最後は主食を食べないとな」
「穀物をな」
「昔は食べなかったのです」
それはリムルルも話してきた。
「狩猟民族でしたから」
「主食は肉とか魚か」
「そうだったんだな」
「はい、そうでした」
また説明するリムルルだった。
「ですが。それが変わってです」
「ああ、その米とか麦が加わってか」
「それで大きく変わった」
「食生活が」
「で、こうしたものも食えるようになった」
「はい、食事が変わったのです」
リムルルの言葉は続く。彼女はアイヌの歴史も話した。
「アイヌ料理が」
「アイヌ民族の料理っていってもそれか」
カムイも神妙な顔になって頷きながら述べる。
「時代によって変わっていくんだな」
「はい、お米が入ったのはやっぱり大きかったです」
「米っていったらな」
ここでまた言うカムイだった。
「日本のイメージが強いよな」
「そうですね。お米といえばやっぱりですね」

「ああ、日本だよな」
それだというのだった。日本と米はほぼイコールになっていた。
「影響強いんだな」
「このお店ではアイヌ料理本来の味にしています」
「それでも影響はあるんだな」
「否定するつもりもありませんし」
「ああ、それもないんだ」
「否定しても何にもなりませんから」
だからだというのだった。かなり肯定的な考えだった。
「日本を否定して何か得られるでしょうか」
「何も得られないな」
カムイはそのシト、つまり団子を食べながら話していく。
「というか失うものばかり多いな」
「ですから。日本の影響を肯定してです」
「そのうえで作ってるんだな、この店の料理って」
「そうなんです。ただ」
「ただ？」
ここでだ。ナコルルとリムルルは困った苦笑いになった。そうしてだった。
二人でだ。その笑顔でこんなことを言ってきたのであった。
「デザートはないんです」
「山の果物位しか」
「お菓子はないんだな」
「はい、デザートは果物になります」
「それでいいですか？」
「ここで不満言ったら馬鹿だよな」
「なあ」
カムイも洪童もそれはわきまえていた。彼等は確かに彼女がいない。しかしそこまで愚かでも人間性がおかしいのでもなかったのだ。
それでだ。彼等は話すのだった。

「それで果物って」
「何かな、それでな」
「はい、メロンです」
「アイヌ連邦名物の」
それだというのだ。アイヌ連邦は日本の北海道だった頃からメロンの栽培で有名である。そのメロンがデザートだというのである。
「それですけれど」
「いいですか？」
「えっ、メロンか」
メロンと聞いてだった。カムイは満面の笑顔になって言うのだった。
「それはいいな」
「あっ、お好きなんですね」
「そうなんですね」
「アイヌメロンだよな」
そのメロンの種類も尋ねるカムイだった。

第二百二十七話　素朴な味付けその十二

「あれだよな」
「そうです、そのアイヌメロンです」
「アイヌ連邦の誇るあのメロンです」
「よし、是非それにしてくれ」
もうそれ以外はいらないといった口調だった。
「それじゃあな」
「わかりました」
「ではすぐに持って来ますね」
「あのメロンがあるなんてな」
カムイは満面の笑みのまま話していく。
「いや、よかったよかった」
「御前メロン好きだったんだな」
「大好きだよ」
実際にそうだというカムイだった。洪童にも話していく。
「メロンはやっぱりあれだよ」
「何だってんだよ」
「果物の王様だよな」
「畑のメロンもあるだろ」
この時代ではあるのだ。他にも木になる西瓜もある。つまり野菜になっているメロンもあれば果物になっている西瓜も存在しているのだ。
「どっちだよ、アイヌメロンは」
「木になるんだよ」
「だから果物か」
「ああ、そうだよ」
その通りだというのだった。
「それでそのアイヌメロンの味はな」

「美味いのは御前の口調からわかるけれどな」
「最高だよ」
「そこまで美味いんだな」
「食ってみたらわかる」
カムイの今度の言葉はこれだった。
「それでな」
「そこまで言うんだな」
「ああ、何度でも言うぞ」
彼は強気にさえなっていた。
「とにかく美味いからな」
「わかった。それならな」
「食うんだな」
「最初からそのつもりだったけれどな」
洪童は笑いながら話した。
「俺メロン好きだしな」
「辛いものだけじゃなくて甘いのも好きなんだな」
「辛いのは唐辛子の辛さだろ？」
「韓国料理はそうだよな」
「だから甘いのもいいのか」
「韓国人は甘いのも好きなんだよ」
ただ唐辛子の辛さだけがいいというのではないというのである。
そうした甘さもまた好きだとだ。洪童はカムイに対して話す。
そしてだ。彼はカムイにこうも話した。
「極限まで甘いのがな」
「極限までかよ」
「辛さも極限までな」
それもだというのだった。
「それで甘さもな」
「極限じゃなくて極端って言わないか、それは」
「ははは、そうかもな」

洪童もそのことを笑って肯定した。
「韓国料理ってとにかく味がはっきりしてるからさ」
「そうだな。赤唐辛子で色も真っ赤だしな」
「白いのは御飯だけだからな」
「何でもかんでも極端な料理なんだな」
「はっきりしてていいだろ」
洪童にしてみればそうなのだった。
「違うか？それって」
「そうなるか」
「俺はそう思うけれどな。それでな」
「メロンだな」
「ああ、アイヌメロンな」
話はそこに戻った。メロンにだ。

第二百二十七話　素朴な味付けその十三

「とにかくメロン好きなんだよ」
「そこまで好きか」
「まあ。メロンっていったらな」
「昔は高かったとかいうのは二十世紀の前半のことだよな」
この時代ではスイカと同じ位のものになっている。今メロンを贅沢なものだと考える人間は少なくとも連合にはいなくなっている。
「それは」
「いや、そうじゃなくてな」
「そうじゃなくて？」
「メロンを好きだった歴史上の人物が少し問題だからな」
洪童は首を捻りながらこんなことも言った。
「それがな」
「メロンを好きだった歴史上の人物？」
「例えば麻原な」
日本の宗教史においてその悪名を残している。サリンを撒布して多くの人を殺し自分にとって邪魔な弁護士一家を虐殺した稀代の凶悪犯である。
「あいつメロン大好きだったらしいんだよな」
「そうだったのか」
「ああ、何でも信者には粗末なものを食わせて」
自分はどうだったかというのだ。
「自分はステーキ、メロン、パーコー麺、メロンってな」
「メロンは交互だな」
「それで女はべらしてガキ作りまくってな」
「実際にそんな奴いたんだな」
「そうだよ。っていうかこれ日本の話だぜ」
洪童はカムイにこうも話した。

「それでも知らなかったのかよ」
「だから俺アイヌ人だぞ」
「兄弟国家だろ」
「それでも知らないものは知らないんだよ」
こう返すカムイだった。
「悪いけれどな」
「かなり悪いな」
「気にするなよ。そうか、そんな奴がメロン好きだったのか」
「あと金正日な」
今度は人類史上最も醜悪な独裁者であった。
「あいつも無類のメロン好きだったんだよ」
「嫌な奴ばっかり好きだったんだな」
「そうなんだよな。まあそれでもな」
「食うな」
「ああ、食う」
それは絶対だというのだった。そしてだった。
そのメロンを待つ二人だった。そして来たメロンは。
青かった。見事なコバルトブルーだった。皮はマリンブルーだ。
それを見て洪童は言った。
「美味そうだな」
「そう言うか？」
「ああ、美味そうだな」
「普通こんな色のメロン見てそう言うか」
「連合じゃこんなの普通だろ」
「それもそうか。紫のメロンだってあるしな」
とにかく色々な食べ物があるのが連合なのだ。色もである。
「青いメロンなんてな」
「韓国じゃ黒いスイカがあるぞ」
「黒か」
「美味いぞ。まあとにかく今はな」

「アイヌメロン食うか」
「ああ、この青いメロンな」
こんな話をして食べはじめるのだった。二人はスプーンを握った。

素朴な味付け　　完

2010・11・26

第二百二十八話　ブルーメロンその一

ブルーメロン

そのアイヌメロンを食べるとだった。
「美味いな」
「ああ、美味い」
二人ですぐに言うのだった。
「甘いしそれにしつこくない」
「いいメロンだな」
「これがなんだよ」
カムイの言葉は実に得意げだった。
「これがアイヌメロンなんだよ」
「これがか」
「そうだよ、これがアイヌメロンなんだよ」
「こんなにいいものだったんだな」
洪童もだった。思わず感嘆の言葉を出していた。
そしてそのうえでだ。スプーンを煌かせさらに食べるのだった。
その彼を見てカムイは笑顔になってだ。こう言うのであった。
「どうだ、凄いだろ」
「ああ、言うだけはあるな」
「日本人も唸る美味さだぞ」
「そこで日本を出すんだな」
「ああ、日本でも人気なんだよ」
そうだというのである。
「もう次から次に売れてな」
「ひょっとしてそれでかなり儲けてないか？」
「儲けてて悪いのか？」
カムイはその問いにはこう返した。平然とした顔でだ。
「孔子もお金儲けを悪いとは一言も言ってないだろうが」

「何でそこで孔子なんだよ」
「韓国って朱子学が強いんじゃないのか?」
「それはそうだけれどな」
この時代でも韓国では儒教、とりわけ朱子学の影響が強い。ただし中国の、所謂宋学とされている朱子学とはいささか違っている。
「それでもな」
「それでもか」
「ああ、韓国も金儲けはいいことになってるぞ」
商人や企業家の考えである。それが肯定されているのだ。
「それはな」
「いいのか」
「というか金儲けは貪ったり悪事によるものじゃないといいだろ」
「まあそうだけれどな」
これができている人間が多くなかったりするのが困りものだが実際に連合ではそうした話が多いのもまた事実である。それは他の文明もである。
「だから別にな」
「韓国でも問題ないか」
「ああ、ものを売って儲ける」
簡単に言えばこうである。
「それって人間として正しいことだろ」
「そうだよ」
「しかしアイヌがか」
洪童が言うのはこのことだった。
「それって何かな」
「おかしいか、アイヌ人が商売やったら」
「狩猟民族が商売な」
「ああ、これも日本仕込みなんだよ」
ここでも日本が出て来るのだった。
「日本人にな。商売の仕方を自然に教えてもらったんだよ」

「随分親切だな、日本人は」
「というよりか日本だったからな」
このことも話に出た。まさにそれに尽きるのだった。
「それでその時にな」
「アイヌって日本の影響そこで受けまくったんだな」
「一応独立しても兄弟国家同士だからな」
「いいな、あの日本が兄弟で」
「いい国だぜ。何でも買ってくれるし親切だし気前がいいしな」
日本のこの性格はここでも変わらないのだった。
「おかげでメロンだってな」
「そうか。とにかく商売もか」
「ああ。教えてもらったよ」
日本にいた頃に自然に教えてもらったというのだ。当時は日本人だからだ。
「で、そのノウハウで作って売ってるんだよ」
「けれどあれだろ。日本人って好み五月蝿いだろ」
「滅茶苦茶五月蝿いな」
ここで顔を顰めさせるカムイだった。

第二百二十八話　ブルーメロンその二

「何でそんなにこだわるんだってな」
「特に米だよな」
「ジャポニカ米しか食わないからな」
「インディカ米出すとな」
「箸つけないからな」
「米なら何でもいいだろ」
韓国人の洪童の言葉だ。
「炒飯とかビビンバにしたら美味いだろ」
「俺もそう思う」
アイヌ人のカムイも同意だった。
「アイヌじゃちゃんとな。インディカ米も主食だからな」
「そうだよな。けれど日本はな」
「ジャポニカ米じゃないと駄目だからな」
「しかも米に一番こだわるしな」
「琉球もだぞ、それ」
もう一つの日本の兄弟国家である。この国も当然ながら日本との交流が深くその付き合いも長い。当然アイヌと琉球もそうである。
「あそこもな」
「ジャポニカ派か」
「そうだよ。酒は琉球の方が強いけれどな」
「そうか。そうなってるんだな」
「ああ、複雑だろ」
「その辺りはな。しかしな」
洪童は話を戻してきた。その米にだ。
「米はなあ」
「主食だからな」
「誰でもこだわりはあるな」

「韓国でもか？」
「まあうちは米はどれでもいいんだよ」
それはだと話す洪童だった。
「ただな」
「ただ、か」
「ああ、唐辛子だ」
言うのはこれだった。
「それにはこだわるな」
「韓国はそれに尽きるな」
「唐辛子はあれだよ」
さらに言うのであった。
「やっぱりな。辛さの中に味わいがないとな」
「辛いだけじゃ駄目か」
「確かにとびきり辛くないと駄目だ」
それはだというのだ。
「けれどそれでもな」
「辛さの中に味わいか」
「わかるかな、それは」
「ちょっとな」
カムイはその問いにはいぶかしむ顔になって首を捻ってから返した。
「わからないな」
「まあ唐辛子ってのは辛さが前面に出るからな」
「だからわかれっていってもな」
「難しいか」
「ああ、難しい」
実際にこう言うカムイだった。
「俺にはな」
「アイヌ人にはか」
「いや、アイヌ人だけじゃないと思うぞ」

「韓国人以外にはか」
「韓国人はあれだろ。唐辛子食べ過ぎだろ」
「だからこだわりがあるんだよ」
それでなのだった。そしてだった。洪童はこうも言うのだった。
「唐辛子はな」
「ああ」
「韓国人にとっては主食の一つなんだよ」
「只の香辛料じゃないんだな」
「もうそれを超えてるな」
そこまで話すのだった。洪童のその語る顔は真剣そのものだった。
そうしてそのうえでだった。カムイに対して話すのであった。

第二百二十八話　ブルーメロンその三

「付き合いも長いしな」
「十六世紀からか」
「ああ、豊臣秀吉が攻めて来た時からだな」
「太閤様だったな」
「そっちじゃそう呼ぶんだな」
「何か勝手に滅茶苦茶な存在になってるけれどな」
こんなことも話すカムイだった。
「超時空天下人ヒデヨシってな」
「ああ、それな」
「心当たりあるのか？」
「うちの国で滅茶苦茶に言ってた結果だよ」
こうアイヌメロンを食べながらカムイに話すのだった。
「攻めてきた相手だからな。盛大に滅茶苦茶言ってたんだよ」
「そんなにか」
「偉大な文明を根絶したとか国全体を焦土としたとかな」
「核兵器みたいだな」
「それで気付いたらそんな存在になってたんだよ」
その超時空天下人になってしまったというのである。実際に豊臣秀吉は英雄だが一部の漫画や小説ではそうした摩訶不思議な存在にもなっているのだ。
「もうな」
「何か訳がわからないな」
「文句はご先祖様に言ってくれ」
昔の韓国人にというのだ。
「わかったな」
「昔の人に言っても仕方ないだろ」
これがカムイの返答だった。

「もう皆死んでるんだからな」
「イタコさんでも使ってな」
「シャーマンに御願いするんだったら他の人呼ぶさ」
イタコはシャーマンと同一視されているのである。この時代ではシャーマンやそうした職業も一般的に存在しているのである。
「そうだな。俺はな」
「誰呼ぶんだ、それで」
「プレスリーだな」
エルビス＝プレスリーである。この時代でも伝説の存在となっている。
「それかジョン＝レノンな」
「歌手か」
「ああ、マイケル＝ジャクソンもいいな」
「じゃああれか？シャーマンの人がな」
「何だよ」
「腰振って踊りまくったりムーンウォークするんだな」
洪童はこう冷静な顔で述べた。
「憑依してもらって」
「そうなるな。そういえば」
「それってかなり異様な光景だな」
「けれど面白そうだな」
「まあな。アイヌにもシャーマンいるんだな」
「いるさ。元々そうした信仰だったしな」
こうした信仰がこの時代でも残っているのである。むしろ復権してきている程なのだ。
「だからな」
「成程な。アイヌの服を着たお婆さんが監獄ロックか」
「壮絶な光景だな」
「というかアイヌの服にプレスリーは合うか？」
「絶対に合わないな」

想像しただけで言えることだった。
「どう考えてもな」
「そうだよな、やっぱり」
「プレスリーはな」
また話す二人だった。
「アイヌにプレスリーだと」
「もっと他のはないか？」
ふとだ。カムイはここで考えてこう言うのだった。
「それならな」
「ああ、何かいいのあるか？」
「やっぱりアメリカは駄目だろ」
これは結論として決められたことだった。
「どうしてもな」
「そうだな。かといってな」
「中国って雰囲気でもない」
カムイはその国も結論として駄目だとした。
「アイヌはな」
「一番合うのは日本か」
「結局それしかないよな。ただな」
「ただ？」
「何だろうな。いや、演歌とかか」
「演歌か」
「アイヌの民謡もあるしな」
そうしたものもしっかりとあった。これもまたアイヌ文化なのである。

第二百二十八話　ブルーメロンその四

「それと演歌は結構似ているからな」
「似ているんだな」
「ああ、似てるんだよこれが」
こう話すのだった。
「北海道の方じゃ実際に混ざってたらしいしな」
「日本文化って結構混ざるな」
「何でもかんでも取り入れるからな、あそこの文化は」
「それで混ざってか」
「そのせいか俺的には違和感がないんだよ」
今度は自分の考えを基準として述べた。
「自然に感じるな」
「そうか」
「だからあれだろ。どうしてもっていうのならな」
「演歌か」
「実際アイヌじゃ演歌も人気あるんだよ」
カムイはこのことも話した。これも日本文化の影響である。
「俺もカラオケじゃよく歌う」
「御前が演歌か」
「合わないか、それは」
「今一つイメージがな」
洪童は首を傾げさせながらカムイに言葉を返した。
「その髪と目の色じゃな」
「そっちは関係ないだろ」
「あるよ。演歌っていったらな」
どうかというのだ。洪童もまた自分の考えを基準としてそのうえで話すのだった。この辺りはカムイと同じだと言える。ある程度の基準ではあるが。

「やっぱり黒だと」
「黒い髪と目か」
「それで着物だろ」
これも欠かせないというのだった。
「男でも女でもな」
「その辺りはあれだろ」
「あれって何だ？」
「固定観念だろ」
それだというのだ、カムイは洪童を少し咎める目で見て言った。
「そういうのは」
「そうか？俺は別に」
「そうは思わないんだな」
「特にな。まあ金髪の演歌歌手もいるけれどな」
日本人自体が混血しているからだ。自然とそうなることだった。
「やっぱりな。それだろ」
「黒か」
「せめて鬘だな。女の人だと髪を結ってな」
洪童は髪型についても話した。
「上にあげるのがいいだろ」
「上か」
「そうだよ、上だよ」
今度はこだわりだった。自分では自覚はないがそれを言うのだった。
「もうな。上にしないとな」
「うなじか」
「ああ、着物はうなじだ」
これまたこだわりだった。それに基づいて話を続ける。
「違うか、それは」
「御前そういえば熟女の人もだったな」
「着物の熟女の人って最高だろ」

「マニアックだな」
「だがそれがいい」
自分の趣味を認めたうえで居直って言い切った。
「違うか」
「まあ俺も着物は好きだからな」
「ならそれでいいな」
「けれどそれでも御前はちょっとな」
「ちょっと。何だ？」
「こだわり過ぎだろ」
こう指摘するのだった。強い顔でのものだった。
「多少以上にな」
「そうか？何度も言うが俺はな」
「自分ではそうは思わないか」
「別にな。まあとにかくだ」
「それで。何だ、今度は」
「話を戻すけれどな」
話が平行線になったと見てだ。いったんリセットしての言葉だった、
「米な」
「その話か」
「さっきも言ったけれど俺はどっちでもいい」
「ジャポニカでもインディカでもか」
「韓国はそうなんだな」
「大抵の国がそうなんじゃないか？」
洪童はこうカムイに言う。

第二百二十八話　ブルーメロンその五

「どっちもそれぞれ使い道があるからな」
「日本みたいに何でもかんでもジャポニカ米はないか」
「ないな」
実際にそうだというのだった。
「ちょっとな」
「じゃあ炒飯やカレーはインディカか」
「米の粘りが強過ぎるだろ」
洪童はジャポニカ米のこの特徴を指摘した。
「それもかなりな」
「そうだな。確かにな」
「けれど日本人は使うからな」
「意地でもな」
「それがわからないんだよ」
こうまで言うのだった。首を捻りながらだ。
「美味いのかって思うな。ジャポニカ米の炒飯ってな」
「日本人にとっては美味いみたいだな」
「味覚の問題か。林檎だって日本人はな」
「アメリカみたいに酸っぱい林檎をパイとかに使わないからな」
「あの甘い林檎使うだろ」
この時代の日本人はそうしているのだ。
「アップルパイにアップルティーな」
「だからどちらもかなり甘いよな」
「それでもそうするからな」
「不思議なことすると思ってるか」
「韓国人はあれだぞ。まず日本を見るんだ」
千年の間全く変わらないことだった。変わることがなかったのだ。
「そこからはじまる国だぞ」

「それもある意味凄いな」
「けれど事実だしな」
そしてそれを本当のことだと保障もするのだった。
「信じられないかも知れないがな」
「いや、それは俺も知ってるからな」
「信じるんだな」
「まあな。それでだけれどな」
またその韓国のことを話すのだった。それもだ。
「それで思ったんだよ。あのジャポニカ米の炒飯はな」
「ないか」
「ちょっと以上にな」
「俺は別にそうは思わないがな」
ここでこんなことを言ったカムイだった。
「特にな」
「そりゃあれだろ。アイヌもジャポニカ米多いだろ」
「ああ、多い」
「だからだよ。それでなんだよ」
「それでか」
「そうだよ、結局はあれだよな」
洪童は少し考えてからこう言うのだった。
「相性と。それとな」
「それと？」
「慣れだろ。子供の頃から食べていればやっぱりな」
「それが美味いって思うようになるんだな」
「そういうことだろ。俺はカレーのライスだってな」
カレーに米という組み合わせはこの時代でも健在であるのだ。米以外にもパンの場合もある。米も雑穀が色々と入れられる場合がある。
「インディカ米派だけれどな」
「俺ジャポニカだけれどな」

「だからだよ。慣れだよ」
「そうなるのか。そういえばこの学園ってあれだよな」
また言うカムイだった。
「ライス選べるよな」
「ジャポニカかインディカな」
「どっちかってな。俺はジャポニカにするけれどな」
「御握りはそれでいいけれどな」
洪童は御握りはそれだというのである。
「もっとも日本人御握りにこだわり過ぎだろ思うけれどな。ちょっと以上にな」
「あれな。御握りな」
「寿司以上にこだわってるだろ」
「日本人はまず御握りなんだよ」
「まず、だよな本当に」
「何かあると必ず御握り作るだろ」
「本当にそうだよな。あれはな」
洪童はある意味関心している顔になっていた。そのうえでの言葉だった。
「ソウルフードだな」
「キムチが中に入ってるのもあるだろ」
「ハンバーガーみたいになってるのもあるな」
「他にはメンマとかな」
「カレーもあるしな」
「何でも御握りだからな」
アイヌ人のカムイから見てもこう言えることだった。日本人の御握り好きはこの時代でも健在であるのだ。とにかくまずは御握りなのだ。

第二百二十八話　ブルーメロンその六

「食わないと死ぬのかもな」
「死ぬのか」
「多分そうなんだろうな」
カムイはまた言った。
「日本人の場合はな」
「御握りがないとか」
「他の国でもそうらしいぞ。御握りを食べたがるからな」
「贅沢か質素かわからない話だな」
「そうだよな。御握りって安いけれどな」
「普通に誰でも作られるしな」
「まあそうだな」
御握りについてもだった。
「握ればいいからな」
「それで簡単にできるからな」
「何でもないものだよな」
「本当にな」
「けれど、だな」
「ああ」
ここで二人はまた話すのだった。
「それが日本人にとってはだな」
「絶対に欠かせないものだからな」
「ソウルフードだからな」
「本当にな」
そしてだった。カムイが話したのだった。
「確かに美味いな」
「ああ、美味い」
洪童もそれは認める。

「作るのは滅茶苦茶簡単だけれどな」
「美味いんだよな」
「申し分ない位にな」
「御握りですか？」
ナコルルがふと出て来た。今は他の客の接客が終わったところだった。店の客はカムイと洪童だけではなかったのである。
「それが何か」
「あっ、いや別に」
「何もないよ」
それは言う二人だった。
「ただ話してただけでさ」
「御握りのことを」
「御握りならありますよ」
ナコルルはこう二人に話してきた。二人が欲しがっていると考えたのだ。
「それも」
「えっ、あるのか」
「御握りも」
「確かに日本の食べ物ですけれど」
それを言いはする。それでもだった。
「アイヌ人もよく食べますから」
「それでアイヌ料理になった」
「入ったんだな」
「そうなんです。今ではアイヌ料理の一つですよ」
「そうか」
「御握りもだったんだな」
二人は青いアイヌメロンを食べながら話した。まだ食べているのだ。
「アイヌ料理か」
「そうなってたんだな」

「はい、そうです」
また話すナコルルだった。
「それでなんです。そして中は」
「ああ、御握りの具」
「それか」
「それは昆布や鰯です」
海の幸だった。
「他には熊や鹿の肉です」
「それはアイヌ料理のままなんだな」
「そうなんだな」
「はい、そのままです」
まさにその通りだというのだった。
「アイヌ料理ですから」
「アイヌ風御握りか」
「それも面白そうだな」
二人はそちらにも関心を向けたのだった。
「まあ今はデザートまで食ったからな」
「注文できないか」
「あっ、御握りでしたら」
しかしここでナコルルは残念がる二人に話すのだった。

第二百二十八話　ブルーメロンその七

「お弁当にもありますよ」
「えっ、お弁当は」
「その扱いになるか」
「はい、それであります」
こう二人に話すのだった。
「それでは駄目ですか？」
「いや、それならな」
「いいな」
二人はそれで納得するのだった。
「じゃあそれでな」
「頼むか」
「小腹が空いた時にでもどうぞ」
ナコルルは穏やかな笑みと共に二人に述べた。
「それで」
「何か本当に御握りだよな」
「弁当で小腹が空いた時っていったらな」
「形もそうですよ」
ナコルルはその御握りの形についても言ってきた。
「じゃあ。それをですね」
「ああ、それじゃあな」
「そのアイヌの御握りな」
二人は実際にその御握りを頼んだのだった。ここでアイヌメロンも食べ終えてだった。そのうえで御握りの弁当を受け取って店を出た。
店を出てクラスに戻り午後の授業を受けて五時間目が終わったところでだった。洪童はカムイの席のところに来て囁いた。
「なあ」

「何だ？」
「御握り食べないか？」
言うのはこのことだった。
「今からな」
「食べるのか」
「ああ、満腹だけれどな」
それだけ食べたということだ。しかしなのだった。それでも彼は言うのだった。
「食べないか？」
「そうだな。アイヌの御握りな」
「食おうな」
こうしてであった。二人はそのアイヌの御握りを食べることにした。早速その弁当箱を出してきてだった。そのうえでそれを開くとだった。
「外見は同じだな」
「ああ、日本の御握りとな」
「同じだよな」
「完全にな」
三角にした白米に海苔を巻いている。完全に日本のものと同じだ。全部で三個ある。大きい御握りが三個でボリュームはあった。
そしてそれを実際に手に取って食べてみる。すると。
「米はあっちか」
「ジャポニカ米だな」
「アイヌでも御握りはそれなんだな」
「この店ではそうだな」
こう話をしながら二人で食べていくのだった。そしてだ。
肝心の中央に入れられているその具だった。何があるのかだった。
食べてみるとだ。それは。
「あっ、これは」
「熊だな」

「ああ、熊だな」
「熊肉の煮付けだ」
それなのだった。中に入っているのは。
「アイヌらしいな」
「養殖ものだけれどな」
「それでも美味いな」
「ああ、美味い」
「アイヌの味だよ」
二人で言い合いその味を楽しむ。そうしてであった。
その御握りを最後まで食べる。まずは一個だった。
そしてもう一個だった。全部で三個あった。今度は二個目である。
それはどうかというとだった。これも手に取り食べてみると。
「ああ、今度はな」
「鹿だな」
「今度は焼いてるな」
「そうだな」
鹿肉だったのだ。それを焼いたものだったのだ。
「味付けは塩と油だけか」
「それと行者大蒜だな」
「アイヌ料理って本当に胡椒とか唐辛子とか使わないんだな」
「ああ、それ本当にわかったよ」
実際にそうだというカムイだった。

第二百二十八話　ブルーメロンその八

そしてだった。二人でその鹿肉の御握りも食べるのだった。
ここでだ。洪童はこんなことも言ってきた。
「なあ」
「何だよ」
「アイヌ人も本当にジャポニカ米好きなんだな」
「さっき話したろ、それ」
「まあな。確かにな」
「御握りは特にそうなんだな」
洪童は食べながらそのうえで納得した顔になっていた。
「ジャポニカ米か」
「粘りがいいからな」
「それだけか？」
「いや、米の風味もな」
それもいいというのだった。
「御握りにはそれだろ」
「それでか。そういえばな」
「御握りはもうジャポニカ米しかないだろ」
「いや、韓国じゃインディカ米のもあるぞ」
そうだというのだった。
「ちゃんとな」
「それ、ちゃんとっていうのか？」
「言うだろ」
洪童は二個目を食べ終えながら話す。
「やっぱりな」
「そうか？」
「ああ。それでな」
カムイは目を顰めさせる。洪童はその彼にさらに話してきた。

「インディカ米の御握りはな」
「こんなに粘りないだろ」
「結構ぼろぼろするな」
実際にそうだというのである。
「海苔で巻き止めてる感じだな」
「やっぱりそうか」
「味もそうか？」
そしてこうも言う洪童だった。
「こっちの方が合うか」
「そうだろ？御握りは日本とその兄弟国家が一番わかってるんだよ」
「それでか」
「それでだよ。こうした美味い御握りにもなるんだよ」
「言い切るな」
「言い切れるさ。実際にこの御握り美味いしな」
実物を目の前にしているのがだ。もっとも大きいのだった。
「だから言えるんだよ」
「韓国でも食うんだぞ」
「けれど韓国料理になってるか？」
「いや」
それは即座に否定する洪童だった。まさに一言だった。
「日本のファーストフードになってる」
「だろ？韓国のじゃないだろ」
「サンドイッチみたいな感じだな」
「そっちか」
「どっちかっていうとな。それでな」
「それで？」
「中にはキムチが入ってる」
ここでもキムチだった。
「白菜のキムチだけじゃなくて他のキムチも色々とな」
「キムチの他はないのかよ」

「あるけれどな。ただな」
ここでまた言う洪童だった。
「あれだな。中の具の味付けはな」
「辛いんだな」
「韓国だからな。それは外せないな」
「やっぱりそうか」
「だからそこは日本の御握りとは違うからな」
「アイヌのそれともだよな」
「米も違うしな」
また米の話もするのだった。それもだった。
「別物じゃないけれど似て非なるものかもな」
「微妙な違いだな」
「そうだよな。まあとにかくだ」
「韓国にも御握りはあるんだな」
「そういうことだよ。御握りにラーメンにハンバーガー」
この三つの料理の名前も出て来た。
「これは連合の何処にでもあるだろ」
「日本と中国とアメリカか」
「この三国の人間は連合の何処にもいるしな」
商売や他の様々な理由からである。ロシア人は案外他の国にはいないがこの三国は違うのだ。そうしてさらにであった。

第二百二十八話　ブルーメロンその九

「中華街とアメリカンシティな」
「アメリカンシティもあるな」
「ああ、韓国には殆どないけれどな」
洪童はそれはないというのだった。
「中華街にしてもな」
「アメリカンシティな」
アメリカ人が移住先やビジネス先で作る場所である。アメリカ文化に満ちたそこを拠点としてだ。彼等は動くことが多くなっているのだ。
「あそこもかなりの場所だからな」
「そうだよな。けれど韓国にはないからな」
「ああ、そうだよな。あれ何でなんだ？」
カムイは最後の御握りを手に取っていた。いよいよ最後であった。
「中華街もないしな」
「何か韓国が合わないらしいんだよ」
こう話す洪童だった。
「アメリカ人にしろ中国人にしろな」
「そうなのか」
「昔からだな、これも」
このこともなのだった。
「中華街は韓国にだけはなかったって言われるしな」
「嫌われてたんじゃないのか？」
「かもな。そういえば中華街もアメリカンシティも連合の何処にでもあっても」
洪童も最後の御握りを手に取っていた。彼もだ・
「エウロパにはないしな」
「あそこはそもそもブラウベルグの時に連合の人間全員追い出した

しな」
移民をルーツとする市民達もである。ユダヤ人達はその前に全員エウロパを見捨てて連合についていた。そうした歴史もあったのだ。
「サハラは何時戦争に巻き込まれるかわからない」
「マウリアは」
この国も話に出た。
「あそこは特別だからな」
「合わないからな」
洪童はマウリアについてはいぶかしむ顔だった。
「どうしてもな」
「それでないのか」
「じゃあマウリアの中にな」
洪童はさらに言う。
「中華街ってさまになるか？」
「いいや」
「アメリカンシティはどうだ？」
「場違いそのものだな」
カムイも実際にそうとしか思えないのだった。
「どう想像してもな」
「そういうことだよ。マウリアは特別だよ」
「マウリアで御握りとかどうなるんだろうな」
「カレーだよ」
洪童は実に素っ気無く答える。
「やっぱりそれしかないだろ」
「そうなるか」
「他にないだろ」
洪童はさらに言う。
「マウリアだからな」
「そうだろうな。アイヌだってな」
「ああ」

「カレーはあるさ」
連合でもカレーは普通に食べられる料理だ。とりわけ日本とその兄弟国家においてはである。そうなっているのである。
「けれどそれでもな」
「カレーばかりじゃないな」
「こうした御握りもあるさ」
その最後の御握りも口に入れた。するとだ。
その中にあった具はだ。鮭だった。
「最後はこれか」
「鮭なんだな」
「何か来るべきものが来たって感じだな」
こう言うのだった。
「本当にな」
「そうだよな。けれどな」
「美味いな」
「ああ、美味い」
これは二人も認めることだった。
「オーソドックスだけれどな」
「オーソドックスだからじゃないのか？」
カムイの言葉だ。

第二百二十八話　ブルーメロンその十

「だから余計にいいんじゃないのか」
「オーソドックスだからか」
「つまり基本だな」
カムイはそのオーソドックスという言葉をこうも言い換えた。
「それだな」
「基本か」
「何でも基本だろ。基本がよくないとな」
「まずくなるよな」
「だからだよ。御握りだってそうだろ」
「和食じゃ基本だな」
「そうだよ。そしてその御握りの具の中でもな」
話はそこに至った。
「鮭っていうはな」
「基本の一つか」
「韓国の御握りだとキムチだけれどな」
これは絶対だった。あくまで韓国においてはであるがそうなるのだった。
「これが日本やアイヌだとな」
「鮭か」
「それが一つにあるんだよ」
こう洪童に対して話す。
「他にもおかかとか」
「おかか？」
「ああ、鰹節だ」
おかかとは何かという説明もする。
「それを味付けしたやつだ」
「ああ、鰹節は和食の基本的な食材の一つだったな」

「ダシを取るのにも使うしな」
「本当に基本中の基本なんだな」
「そうさ。他には梅干とかな」
梅干はこの時代でも健在だった。実にポピュラーな食品の一つだ。
「後は昆布もあるしな」
「何か結構あるんだな」
「それで鮭だ」
話が鮭に戻った。
「こうしたのが基本だな」
「その鮭か」
「鮭が美味いかどうかっていうのは重要なんだよ」
カムイは洪童に話していく。
「御握りにはな」
「そうか」
「ああ。食べてみてわかるな」
「わかった」
実際にだ。洪童はその御握りを食べる。白米、それもジャポニカ米の独特の粘りと風味、細かくばらしてあっさりと味付けした鮭の味が絡み合ってだ。えも言われぬハーモニーをその口の中で醸し出していた。
それを味わいながらだ。彼はカムイに対して話す。
「美味いな」
「言葉は一言だな」
「これで充分だろ」
「そうだな。これでな」
「そういうことだよ、だからこの御握りは美味いんだ」
「基本ができているからか」
洪童ものことを実感する。そしてだった。
二人は御握りを食べ終えた。それで話すことは。
「なあ」

「ああ」
洪童はカムイの言葉に応えた。
「それで何だ？」
「これからどうする？」
カムイはこう彼に話した。
「今日の放課後は」
「基礎を勉強しに行くか」
これがカムイの言葉だった。
「図書館までな」
「女の子のことをだよな」
「ああ、そうしないか」
また洪童に提案するのだった。

第二百二十八話　ブルーメロンその十一

「どうだよ、それで」
「そうだな。何かずっと失敗ばかりだからな」
「そうするか」
「ああ、それじゃあな」
こう話してであった、二人で図書館に向かうことにした。
二人も何だかんだで進歩していっていた。生きている中でだ。そしてだ。
八条学園の近くのアメリカンシティでだ。あることが起ころうとしていた。
「怪盗！？」
「怪盗が出たって！？」
「まさか」
こうした話になっていたのだった。
「どういうことなんだよ、それって」
「そんな漫画みたいな奴がいたのかよ」
「現実に」
「いや、いてもおかしくないだろ」
それを否定しない者もいた。
「そんな奴だってな。マッドサイエンティストだっているんだぞ」
「ああ、あれか」
「あの博士か」
「そういえばいるな」
「予言者だってな」
言うまでもなく天本博士とシャバキのことだ。連合の誇る奇人変人変態のツートップである。二人共人間ではないという説まである。
「じゃあ怪盗もか」
「いてもおかしくないか」

「そうだよな」
皆これで納得した。そうしてだった。
今度はだ。その怪盗が誰かという問題だった。
「それでどんな奴なんだ？」
「その怪盗ってのは」
「一体全体」
「何者なんだ」
「話によるとな」
ここでだった。その怪盗について少し話された。
「妙にキザな奴らしいんだ」
「キザか」
「そういう奴かよ」
「ああ、何かタキシードを着ていてな」
まずは格好からだった。
「それでマントを羽織って」
「マントか」
「かなり動きにくそうだな」
「それで怪盗か」
「しかも」
まだあるのだった。
「頭にはシルクハットだ」
「おい、それって完璧あれだろ」
「しかも紳士だろ」
「武道にも秀でていて」
「おまけに悪い奴からしか盗まない」
「それがポリシーなんだな」
こう言っていくとだった。一人の人間に行き着くのだった。それは連合においても誰もが知っているあの伝説の人物であった。
「あいつが実在していたのか」
「っていうかその真似をしてる奴だろうけれど」

「何か段々洒落にならない状況になってきたよな」
「全くだよ」
「もう何が何だか」
怪盗の話にだ。皆いぶかしむものを感じていた。そうしてだった。
何かが動こうとしていたのであった。今度は推理の方向に。

ブルーメロン　　完

２０１０・１２・５

第二百二十九話　アメリカンシティにてその一

アメリカンシティにて

二年Ｓ１組でだ。テンボとジャッキーが騒いでいた。
「怪盗だ！」
「怪盗が出たのよ！」
こうだ。皆に対して言っている。
「それも何とアルセーヌ＝ルパン！」
「凄い大物じゃない」
「いや、ルパンって」
「架空の人物じゃない」
その二人にスターリングと蝉玉が突っ込みを入れる。
「誰がどう見ても」
「それ世界の常識なんじゃないの？」
「いや、違う」
「違うわ」
しかしテンボとジャッキーはあくまでこう主張するのだった。
「俺にはわかるんだ」
「探偵としての直感でね」
「またそんなこと言うけれど」
「探偵の直感っていっても」
スターリングと蝉玉はあくまでいつも通りの二人にいささか呆れながら言う。その呆れたものを全く隠そうとしてはいない。
そうしてだ。彼等はこうその探偵達に言うのだった。
「そもそも探偵ってさ」
「怪盗と戦うのが仕事なの？」
常識人の二人が言うのはそこからだった。
「確か犬や猫を探すのが主な仕事なんじゃ」
「それと身元調査と」

「それは普通の探偵だよ」
「並の探偵がする仕事よ」
二人は悪びれずというかスターリングと蝉玉の話を全く聞かずに言う。
「俺達みたいな凄腕の探偵の仕事はな」
「そっちなのよ」
「怪盗と戦うっていうのが？」
「そっちなの」
「ああ、相手はアルセーヌ＝ルパン」
「相手にとって不足はないわ」
完全にその考えをそちらに向けていた。
「弱い者や善人からは決して奪わない義賊」
「しかも正々堂々と予告をしてから盗む」
このこともまたあまりにも有名なことだった。アルセーヌ＝ルパンはこの時代の連合においても永遠のヒーローの一人なのだ。
「それじゃあな」
「早速戦い開始よ」
「早速って」
「もうはじめるの」
いらんことを、と二人は心の中で思った。
「どうなるやら」
「そうよね」
「それでな、ジャッキー」
「ええ、テンボ」
もう何を言っても無駄だった。二人は二人の世界に入っていた。
「そのルパンが出たのはな」
「確かあそこよね」
「そう、まずは街の時計塔」
そこだというのだ。
「そこに立っていたらしい」

「そしてそこから姿を現して」
そうしてだというのだった。
「街の悪い奴に狙いを定めてね」
「盗みを開始したらしい」
「で、最初の相手は」
「悪徳弁護士仙石直人」
この人物だというのだ。どの時代にもそうした弁護士はいる。
「ヤクザやゴロツキと密接な関係にあり弱い人を脅して私服を肥やしている弁護士だ」
「そいつからなのね」
「ああ、貯め込んでいた金を全て盗んでみせて」
悪事によりそうした金であるのは言うまでもない。
「それで罪を告発して」
「見事仙石は鋸引き」
そこまでの悪事をしていたというのである。
「正義は勝つ」
「よかったよかった」
「ちょっとおかしいよね」
「そうよね」
スターリングと蝉玉はテンボとジャッキーの会話から述べた。
「怪盗なのに」
「何か違うんじゃ」
「しかしそれでこそ」
「私達のライバルに相応しいわ」
だがテンボとジャッキーはまだ言うのだった。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその二

「強敵と書いて『とも』と読む」
「そういう関係よね」
「明らかに違うね」
「絶対にね」
今度ははっきりと言い切るスターリングと蝉玉だった。
「向こうは絶対に気付いてないし」
「テンボとジャッキーのことは」
「いざ行かん終生の敵に」
「今こそ」
しかし二人のいつも通りの暴走は続く。
「アメリカンシティに」
「今すぐに行きましょう」
「学校の授業は？」
「そっちはどうするの？」
スターリングと蝉玉は常識から尋ねた。しかしだった。
テンボとジャッキーは人の話を聞いたりはしない。学校の授業なぞ全く無視してクラスを出てしまった。勿論ペンギンを連れてだ。
そうしてであった。クラスに残ったスターリングと蝉玉はだ。顔を見合わせてそのうえで出て行った二人について話すのだった。
「どうなるかな」
「まともなことにはならないでしょうけれど」
「そうだよね。推理が当たることは絶対にないから」
「何が何だろうとね」
それははっきりしていることだった。ある意味において極めつけの二人である。探偵というよりはトラブルメーカーである。
そのトラブルメーカーが行った場所は。
「アメリカンシティねえ」

「あそこに行ったのね」
「あそこで怪盗って」
「おかしいのね」
「うん、おかしいよ」
こう蝉玉に話すスターリングだった。
「あそこってそんなに盗むものないし」
「そうよね。チャイナタウンだってね」
「お金持ちはいてもそんな極端な悪徳業者の話聞かないし」
「あからさまに怪しいのってそんな普通の場所にいないから」
何処にいるかというのだった。
「まあ大抵は地下に潜伏してるから」
「そうだよね。しかもアメリカンシティに堂々と？」
また言うスターリングだった。
「ルパンが」
「タキシードにマントにシルクハットよね」
「滅茶苦茶目立つわよね」
「有り得ないまでにね」
それがルパンの格好だ。モーリス＝ルブランは怪盗というよりはビジュアル的な見栄えを意識してルパンの服を考えたのだろうか。
「そんな怪盗が実際にいるかしら」
「ないよね、絶対に」
「そんな天本博士クラスの奇人って」
「二人もいないよ」
「じゃあ何でそんな話出たのかしら」
「ただの噂だと思うよ」
これがスターリングの推測だった。
「それはね」
「噂なのね」
「噂は尾鰭がつくし」
こうも話すスターリングだった。

「そういうものだからね」
「そうなのね。じゃあどうせありきたりの見間違いがそうなっていったのね」
「そうそう、都市伝説だよ」
そうしたものだというのだった。
「だから気にしなくていいよ」
「わかったわ。けれど」
「けれど？」
「アメリカンシティね」
蝉玉は腕を組んで考える顔になって述べた。
「そういえば最近あそこには行ってないわよね」
「あっ、そうだね」
「行かない？今日にでも」
蝉玉はスターリングをデートに誘うのだった。
「どう、それは」
「そうだね。行く？」
「それでハンバーガーでも食べて」
「それと何かアメリカのを買ってね」
「あそこってそういう場所だしね」
言うなればチャイナタウンのアメリカ版である。この時代の連合の至る場所に進出したアメリカ人達が集まって観光地にもなっているのである。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその三

「それじゃあ今日はね」
「そこで」
こんな話をしてデートを決める二人だった。そしてだった。
スターリングはだ。こんなことも言うのだった。
「アメリカンシティにタキシードは」
「そのルパンね」
「合わないよね」
「ハンバーガーにタキシード」
具体的なイメージであった。
「ちょっと。何ていうか」
「ミスキャストとしか」
「だから見間違いじゃないから」
スターリングはこう考えていた。
「それってね」
「そうよね。エウロパだったらわかるけれど」
「連合でルパンは」
「それも一世よね」
ルパンには子孫がいるとされているのだ。一世は端整な紳士である。だがその孫の二世は日本人の血が入っており猿に似た顔のひょうきんな男と考えられているのだ。
二人はだ。今その三世のこともイメージしながら話すのだった。
「やっぱり連合にはね」
「全然合わないね」
「何でそんな話が出たのかしら」
蝉玉は腕を組んで考える顔になって述べた。
「本当に」
「だから噂に尾鰭がついてだよ」

「それでなの」
「そう、それでだよ」
スターリングはまた自分の考えを述べた。
「多分ね」
「成程ね。話って変なふうにいったりするからね」
「そういうことだと思うよ。それじゃあね」
「放課後ね」
「放課後はアメリカンシティで」
話はこれで決まった。
「そういうことでね」
「ええ、楽しくね」
この話はあっさりと決まったのだった。こうして二人はそのアメリカンシティに向かった。しかしその入り口に来たところでだった。
そこにだ。トムがいたのだった。
「あれっ、トム」
「どうしてここにいるの？」
「うん、待ち合わせしてるんだ」
こう二人に話すトムだった。
「ここでね」
「待ち合わせ？」
「っていうと誰と？」
「メアリーと」
従姉の彼女とだというのだ。
「これからアメリカンシティで買い物に行くからね」
「ああ、それでなんだ」
「それで待ち合わせなの」
「そうなんだ。まあ買い物の後は」
トムはにこにこしながら話していく。
「何か食べようって話になってるけれど」
「アメリカンシティだとハンバーガーか」

「若しかしてそれ？」
「そう、確か今ね」
トムはさらに話していく。
「アメリカンシティのお店の一つでハンバーガー食べ放題やってるらしいし」
「へえ、そんなのやってたんだ」
「食べ放題ね」
「そこで食べようって思ってるんだ」
二人にこのことも話すトムだった。
「晩御飯はね」
「従姉の人とか」
「二人で」
「ううん、もう一人いるよ」
トムはまた答えてきた。
「弟がね」
「そういえばトムって弟さんいたんだ」
「そうだったわね」
二人も言われて思い出したことだった。実は今まで忘れてしまっていた。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその四

「名前は。ええと」
「何ていったかしら」
「シッドだよ」
トムはまた二人に述べた。
「って忘れてた？」
「御免、ちょっとね」
「最近弟さんに会ってないし」
「仕方ないなあ。けれど覚えておいてよね」
トムは少し困った顔になって二人にまた話した。
「弟の名前ね」
「シッド君な」
「もう一度インプットしたわ」
一応はこう答える二人だった。
「確か八条学園だったよな」
「中学生だったかしら」
「うん、そうだよ」
トムは明るい顔に戻ってまた話した。
「僕より二つ下なんだ」
「それで従姉の人と三人で暮らしてるんだ」
「あのお部屋に」
「メアリーはね」
トムはまたその従姉のことを話すのだった。
「僕達兄弟にとってはお姉さんみたいな存在でね」
「実のお姉さんみたいな」
「そういう人なの」
「それで何かあったらいつも一緒なんだ」
「仲がいいんだ」

「そうなのね」
「そうだよ。とてもね」
トムは満面の笑顔になっている。
「僕達って」
「じゃあその弟さんと従姉の人と待ち合わせして」
「今からアメリカンシティで遊ぶのね」
「そうするつもりだよ」
また答えるトムだった。
「それで君達は？」
「僕達もね」
「一緒よ」
こう答える二人だった。
「今からね」
「ここで遊ぶつもりなの」
「それじゃあだけれど」
二人の話を聞いてだ。トムは考える顔になってから述べた。
「一緒に遊ばない？どう？」
「五人で」
「一緒にっていうのね」
「うん。それでどうかな」
あらためて二人に話す。
「遊ぶのなら大勢の方が楽しいじゃない」
「それもそうか」
「そうね」
二人もトムの言葉に頷いた。
「つまりダブルデートか」
「そういうことになるわね」
「ダブルデート？ああ、そうか」
今の二人の言葉を聞いてだった。トムは笑顔になって述べた。
「僕とメアリーがだよね」

「その認識はあるかな」
「そこのところどうなの？」
「従姉だよ」
トムは今度はこのことを言った。自分と彼女の続柄における関係だ。
「流石にね」
「けれど従姉弟同士でもね」
「そうよね」
スターリングと蝉玉はこのことを話すのだった。
「普通に結婚できるしね」
「そうよね」
「だから付き合うのだって」
「何の問題もないんじゃ」
「だからそういうのじゃないんだけれど」
トムは笑ってその話は否定した。違うというのである。
「僕達はね」
「そうなのかな」
「だってここで待ち合わせして今からよね」
「それだったら弟も一緒の筈がないじゃない」
トムはこのことを話に出して否定の材料とした。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその五

「そうだろ？三人のデートはね」
「まあ普通はないけれどね」
「そうしたデートはね」
それはスターリングと蝉玉もわかることだった。二人は今デートをしているからだ。だからこそ実によくわかることだったのである。
「勿論そういうのはね」
「ないけれど」
「だからさ。違うよ」
また言うトムだった。
「そういうことだから」
「そうなんだ」
「じゃあただの家族での買い物なの」
「うん。ああ、来たよ」
ここでだった。三人よりも大人の美女が来た。紛れもなくメアリーだった。彼女がトムの話通りアメリカンシティの入り口にやって来たのであった。
そしてだ。トムだけでなくスターリングと蝉玉にも笑顔で話すのだった。
「あれっ、確か」
「あっ、お久し振りです」
「どうも」
スターリングと蝉玉は親しげな笑顔でメアリーに挨拶をした。
「トム君のクラスメイトのスターリングです」
「同じク蝉玉です」
「こちらこそ。メアリーよ」
メアリーもまた温かい笑顔で応える。
「お久し振りね」

「はい、本当に」
「お元気そうで何よりです」
「そうね。本当にね」
二人はそんなやり取りをする。そしてだった。
トムがだ。その従姉にこう問うたのだった。
「あの、シッドは？」
「あの子？」
「うん、いないけれど」
「シッドだったらね」
メアリーはそのシッドについて話してきた。
「急に用事ができたらしくて」
「用事がなんだ」
「そうなの。それでね」
「来られないんだ」
「今はね」
こうメアリーについて話す。
「それはね」
「そうなんだ」
「それでどうするの？」
メアリーはすぐに従弟に尋ねた。
「これから」
「これからって。だから買い物するんだよね」
「二人でもいいわよね」
「うん、いいよ」
トムは快く頷いたのだった。しかしだ。
そのメアリーを見てだ。スターリングと蝉玉はこそこそと話をするのだった。
「ねえ」
「そうよね」
まずはこうした話からだった。

「メアリーさんって」
「若しかしてね」
「トムのことが」
「あれなのかも」
こう話をするのだった。
「それでシッド君もね」
「それがわかっているからこそ」
「わざとね」
「そうしたんじゃないかしら」
二人の予想はそうだった。そしてだ。スターリングが先に言った。
「じゃあ僕達はここは」
「一歩下がる？」
「うん、そうしよう」
こう言うスターリングだった。
「そうしてね。今日はね」
「デートすればいいわね」
「だからね」
スターリングの言葉は続く。
「今はそうしてね」
「ええ、それじゃあ」
こうしてだった。二人は今は控えめになることにしたのだった。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその六

メアリーはそっとだ。トムにその手を添えてきたのだった。
「あれっ、メアリー」
「手を握り合わせない？」
メアリーからの提案だった。
「今はね」
「手をなの」
「そう、手をね」
こう言うのであった。
「駄目かしら」
「ううん、別に」
トムは少し考える目になってから述べた。
「いいけれど」
「いいのね」
「うん。従姉弟同士だからね」
このことに何の警戒も持っていない言葉だった。
「だからね」
「そうよね。従姉弟同士だからね」
「うん。ただ」
「ただ？」
「何で今日はそんなこと言うのかな」
首を傾げさせながらの今のトムの言葉だった。
「またどうして」
「ああ、それはね」
「それは？」
「気にしないで」
今度はこう言うメアリーだった。
「別にね」

「気にしないでいいの」
「そう、自然にいきましょう」
また従弟に話す。
「自然にね」
「わかったよ。何かよくわからないけれど」
メアリーがどうしてそう言うかということがわからないのだ。
「そlれじゃあね」
「ええ、それじゃあね」
そんな二人を前に見てだ。また囁き合うスターリングと蝉玉だった。
「若しかしてメアリーさんって」
「そうよね」
「こうしたことにね」
「慣れてないわね」
蝉玉ははっきりと見抜いていた。
「これはね」
「そうなんだ、やっぱり」
「ぎこちないから」
メアリーが見抜いたのはそこからだった。
「どうにもこうにもね」
「何かもどかしい感じがするね」
「トムがわかっていないからいいけれど」
「それがいいんだ」
「この場合はね」
そうだというのである。
「だからそれでいいのよ」
「いいとしたら」
「それからどうするか」
さらに言うメアリーだった。
「問題はそれよ」

「僕達がどうするか。そういうことだよね」
「そうよ。さしあたってはね」
「うん、さしあたっては」
「見守りましょう」
そうするというのである。
「今はね」
「見守るだけなの」
「それだけでも随分違うわよ」
蝉玉の顔は今は微笑んでいる。
「だからね」
「見守ってそれから」
「見切る」
次の言葉はこれだった。
「どうしていくかね」
「つまりじっくりと観察するんだね」
「観察っていったらあれだけれど」
この言い方には少し言う蝉玉だった。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその七

「それでもよ」
「それでもなんだ」
「そう見ていましょう」
蝉玉はまたスターリングに話す。
「とりあえずはね」
「わかったよ。それじゃあね」
「私達は私達で」
ここでこう言った蝉玉だった。
「楽しみましょう」
「そうだね。二人についていってね」
こうしようという二人だった。そしてだ。
その二人にだ。メアリーが顔を向けて尋ねてきた。
「あの」
「あっ、はい」
「何ですか？」
「二人共アメリカンシティにはよく出入りするのかしら」
「ええ、結構」
「私もです」
これが二人のメアリーへの返答だった。
「アメリカ人ですし」
「こういう場所好きですし」
「じゃあ詳しいのかしら」
今度はこう言うメアリーだった。
「それだったら」
「それだったら？」
「っていいますと」
「案内してくれるかしら」

これがメアリーの二人への言葉だった。
「アメリカンシティの中を」
「はい、それでしたら」
「喜んで」
二人は今のメアリーの提案にはすぐに答えた。
「美味しいお店とかチェックしてますし」
「あとファッションも」
「私ってあれなのよ」
メアリーは少し困った苦笑いになって話す。
「方向音痴だから」
「そうだったんですか」
「方向音痴って」
「ここにも何回か来てるけれど」
それでもだというのである。
「それでも。よくわからないの」
「実はメアリー姉さんって」
トムもここで言ってきた。
「あれなんだ。方向音痴なんだ」
「御免ね、それは」
「そういえばカナダ人って結構」
「そうよね」
スターリングと蝉玉はあることに気付いた。カナダ人の特性の一つにだ。
「方向音痴の人多いような」
「どうしてかしら」
「だってねえ」
「そうよね」
ここでこんなことを言うカナダ人二人であった。
「カナダって。広い場所が多いから」
「森林とか平原とか」

「ツンドラだって多いよね」
「自然が豊富な惑星が多いの」
カナダはこの時代多くの星系を領有している。その数は連合屈指である。しかしその人口は百五十億と意外と少ないのである。
「それに人もあまり多くないから」
「だから」
「ごみごみしたところ少ないんだ」
「そうなの」
「実はそうなんだ」
「街もシンプルになってて」
市街地もだというのである。
「ごみごみしたところは苦手なんだ」
「カナダ人は」
「ううん、アメリカの街って道が入り組んでるからね」
「中国だって」
二人はそれぞれの基準を元に話をするのだった。
「もう方向音痴だとね」
「大変なことになるから」
「日本自体凄くない？」
「そうよね」
トムとメアリーは今彼等がいるその八条学園のある日本の話もした。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその八

「もう道が入り組んで」
「おまけに人も多いわ」
「まあ日本も大きい国だし」
「人も多いから」
この時代も人が多い日本だった。尚連合で人口が最も多いのは蝉玉の国中国である。二千億の人口を抱えているのである。
「しかも日本人って小道とか普通に作るし」
「それでよね」
「迷路みたいだよね、街が」
「本当に」
カナダ人二人の言葉も顔も困り果てているものであった。
「カナダなんて何処も碁盤になってるだけなのに」
「それでいいのに」
「いや、それはかなり」
「シンプル過ぎると思うけれど」
二人にとっては突っ込まざるを得ない話であった。
「カナダって何か」
「シンプルなのね」
「そうだよ、シンプルだよ」
「何でもね」
そのカナダ人二人の返答である。
「国土が広いしね」
「それで造りが簡単になって」
「成程ね」
「そうなの」
「だから日本に来たらね」
「かなり驚いたわ」

そうだというのである。
「こうした複雑な道の街もないしね」
「ものの造りだって」
「アメリカンシティでもそうなんだ」
アメリカ人のスターリングがいぶかしみながら述べた。
「アメリカも結構大雑把だけれどね」
「アメリカの大雑把とカナダの大雑把は違うから」
トムはまたこう話した。
「だから。そういうのはね」
「違うんだ」
スターリングはその言葉に応えて言う。
「そうなんだ」
「そうだよ。っていうかカナダとアメリカって付き合い長いけれど」
「それはそうだけれど」
「そういうの知らなかったんだ」
「カナダに行ったことないんだ」
スターリングは自分のこのことを話した。彼はそうなのである。
「だから悪いけれど」
「成程ね。それでなんだ」
「そうだよ。それでこのアメリカンシティだけれど」
この街の話に戻った。
「食べるのならね」
「うん」
「何処がいいのかしら」
「ここがいいよ」
こう言ってだった。スターリングは丁度目の前にある店を指差した。そこは赤い看板に黄色い文字で書かれている。そこに入ってだった。
そのうえでだ。彼は言うのだった。
「ここのハンバーガーが美味しいんだ」

「ってここマクドナルドじゃない」
「そうよね」
トムとメアリーがその看板を見て話す。この時代においても存在しているチェーン店である。当然ながら二人も知っている店である。
そこに入ってだった。四人は空いている白いテーブルに座ってだ。
そうしてそのうえでだ。それぞれ注文をするのだった。
「ハンバーガーにチーズバーガー」
「マッシュポテト」
「それとダブルバーガー」
「フライドチキン」
食べ物はこれだけだった。
「それで飲み物はバニラシェイク」
「こんなものよね」
「チェーン店だけれど」
スターリングがそういった料理や飲み物を前にして向かい側にいるトムとメアリーに話す。
「ここは美味しいよ」
「美味しいのは知ってるよ」
「それはね」
これについてはカナダ人二人も知っていた。
「マクドナルド好きだし」
「私も」
「あっ、チェーン店の味じゃないって意味なんだ」
スターリングは二人の言葉を受けて自分の言葉をこう訂正した。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその九

「そういうことだから」
「そうなんだ」
「チェーン店の味じゃない」
「そうだよ。ここは特別なんだ」
こう二人に話すのだった。
「自分の店の味なんだ」
「マクドナルドなのに」
「そうなの」
「マクドナルドにはそういうお店もあるよ」
スターリングはまた話した。
「マクドナルドの味のお店もあれば」
「独自の味のお店もある」
「はじめて知ったわ」
「アメリカじゃ結構有名な話だけれど」
スターリングはここでこんなことを言った。
「知らなかったんだ」
「僕アメリカ言ったことないし」
「私も」
「マクドナルドは連合中にあるけれど」
「カナダだから」
トムはハンバーガーの一つを手に取りながら述べた。
「ほら、カナダって」
「ああ、そうだったわね」
蝉玉はマッシュポテトを取った。そのうえでスプーンで口に運ぶ。
スターリングとメアリーもそれぞれハンバーガーなりフライドチキンなりを取っている。食事がはじまろうとしていた。
「味についてはね」

「残念なことにね」
「カナダ人って味に無頓着なの？」
「否定できないね」
トムの顔が寂しげなものになっていた。
「そのことは」
「やっぱりそうなの」
「そのことだけれど」
トムは蝉玉に対してさらに答える。
「カナダって元々イギリス領だったし」
「それはうちもだよ」
スターリングがすぐに言葉を返した。
「あの国の植民地からはじまってるよ」
「それによ」
蝉玉もここでまたトムに言う。
「カナダってフランス領でもあったんじゃないの？」
「そっちはケベックにいっちゃったから」
そうなったというのである。
「王様もルーツは向こうの人だし」
「ああ、ケベックの王様ね」
「あの人ね」
連合の王家の中でも名門でありしかも有名な家である。今のケベック国王は連合きってのいじりがいのある人物として知られている。
「そういえばそうだったね」
「じゃあ今のカナダは」
「そう、イギリス系だよ」
そちらだというのである。
「紛れもなくね」
「じゃあその料理は」
「やっぱり」
「そうだよ。移民も一杯来たけれど」

この辺りはアメリカと同じ事情である。しかしなのだった。
「それでもね。料理は」
「それってある意味凄いよ」
「それもかなりね」
こう返すスターリングと蝉玉だった。
「アメリカでも随分変わったのに」
「それでも変わらないっていうのは」
「何でかな」
トムも首を傾げることだった。
「どうしてカナダってそうなのかな」
「それはね」
そのことについてだ。同じカナダ人でありトムの従姉でもあるメアリーがだ。そっと言葉を添えてきたのである。そうして言うのだった。
「カナダってずっとそういうことにこだわらなかったからよ」
「お料理自体に」
「そうなの。食べられればいいって考えてて」
「そこまで貧しくないけれど、カナダって」
「逆よ。食べられるものが普通にあったからよ」
それでだというのである。
「だからね。結果としてね」
「カナダじゃ料理が発達しなかったんだ」
「そう、全然ね」
「アメリカじゃ二十一世紀からだったけれどね」
スターリングが話す。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその十

「料理の味を。知ろうってね」
「中国は昔からだけれどね」
その中華料理の本場の人間の言葉だ。
「どういった味にしていくかが問題だったから」
「そうだよね。食べるからにはね」
「そこまで考えないとね」
「それがカナダじゃ違うって」
二人はある意味において唖然となっていた。しかしだ。
ここで言ったのはだ。トムであった。
「そういえばカナダって」
「そのカナダだよね」
「どうたったの、実際に」
「ただ料理して食べてるだけだったね」
そうだったと。スターリングと蝉玉に話すのだった。
「食べ物を」
「味付けは？」
「それは？」
「適当に」
トムはこうも話した。
「もう本当に適当に」
「そんなの食べてたら」
「それこそね」
「だから皆言うんだよね」
トムの顔は困り果てたものになっていた。その顔での言葉だった。
「カナダは連合のイギリスだって」
「それって凄い侮辱だね」
「中国人にそれ言ったら死ぬわよ」

二人も驚く言葉であった。
「イギリスって。あの料理が伝説的にまずいっていう」
「エウロパきっての性格悪さの国じゃない」
「しかも味覚はもっと悪い」
「その国と同じって」
「カナダ人は温和だけれど」
それで定評のあるのがカナダ人だ。しかしなのだ。
「流石にそれ言われたらね」
「怒るよな、普通は」
「絶対にね」
「怒ることは怒るけれど」
それでもだとだ。トムは話す。
「アメリカ人や中国人みたいに殴ったりはしないから」
「普通そんなこと言われたら殴るよね」
「そうよね」
ところがそのアメリカ人と中国人はこう言うのだった。それは彼等のそれぞれの国民性と料理の味に対するプライド故である。
しかしなのだった。カナダ人はだ。
「料理の味に無頓着だったからね」
「じゃあカナダのハンバーガーって」
「どんな感じ？」
二人はそのハンバーガーを食べながら話す。
「これはアメリカのハンバーガーだけれど」
「また違うのね」
「うん。カナダのハンバーガーはね」
トムはそのカナダのハンバーガーについて話すのだった。
「パンとパンの間にハンバーグを挟んで」
「それが普通だよ」
「ハンバーガーのね」
「その他にレタスとトマトを挟んで」

トムの説明が続く。
「あとケチャップとマスタード」
「だからそれがハンバーガーだろ」
「違うの？」
「いや、アメリカのハンバーガーってそれだけじゃないじゃない」
しかしここでこう言うトムだった。
「ちゃんと工夫があるよね」
「まあ。このハンバーガーだってね」
「そうよね」
スターリングと蝉玉はここで顔を見合わせて話す。
「ちゃんと香辛料も工夫してるし」
「素材だって考えてるわよね」
「パンの焼き方やハンバーグの肉だって」
「それにピクルスもいいわよね」
「そういうのがないんだ」
トムは言った。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその十一

「ただ。パンがあってハンバーガーや野菜があって」
「それを挟むだけ」
「そういう感じなのね」
「それがカナダのハンバーガーなんだよ」
トムは二人に対して話す。
「どうかな、それって」
「アメリカだとそういうお店は繁盛しないね」
「中国でもよ」
これが二人の返答だった。
「っていうかそれって下手なサンドイッチと同じじゃない」
「何の工夫も芸もないじゃない」
「ハンバーガーっていっても色々だけれど」
「本当にただ挟むだけなのね」
「うん、それだけ」
また言うトムだった。
「それがカナディアンハンバーガーなんだ」
「だからカナダ料理って聞かないんだ」
「それも全然」
「皆料理でも注目してくれないんだよね」
トムの言葉に幕がかかった。
「カナダに」
「まあカナダってね」
「影が薄いわよね」
これもまた地球にあった頃から変わらないことである。とにかくカナダという国は何かにつけて全く目立てない国なのである。
それがわかっているからだ。トムも言うのだった。
「どうにかならないかな」

「そうよね」
トムだけでなくメアリーも話してきた。
「メジャーになれないのかしら」
「そうだよね。影が薄いって寂しいよ」
「カナダねえ」
「確かあれじゃない」
スターリングと蝉玉は必死に自分達の知識をそれぞれの頭の中で検索してだ。そのうえで何とか探し出した人物を言うのであった。
「ほら、連合軍のディカプリオ元帥」
「あの人カナダ人よね」
「うん、そうだね」
それは認めるトムだった。
「けれど。その人の他は？」
「他？」
「他の人ってこと？」
「誰かいる？」
実に率直な問いであった。
「カナダ人の有名人」
「歴史で言うと」
「ええと」
思い出そうとしても思い出せない。そんな二人だった。
しかもだ。出した名前がだ。
「オゴポゴとか？」
「サスカッチとか？」
「人間じゃないから」
トムの突っ込みは悲しい。
「そういうのじゃなくて」
「御免御免、人間だよね」
「それだったよね」
「そう、人間だけれど」

「ええと」
「歴史上でも」
二人は何とか思い出そうと努力を続ける。
「ちょっと」
「あれっ？いたかしら」
挙句にであった。
「誰かね」
「ほら、プレスリーとか」
「プレスリーはアメリカ人だよ」
「そうだったわね。違うわよね」
「誰かいたかな、本当に」
「いなかったんじゃ」
「これなんだよ」
トムの言葉は嘆きになっていた。
「カナダ人の有名人って」
「いないんだね」
「結局は」
「そう。誰も知らないんだよ」
トムの言葉が悲しいものになった。

第二百二十九話　アメリカンシティにてその十二

「連合の他の国の人達って」
「そもそもね」
メアリーも実に残念そうな顔である。
「カナダ自体があまり」
「知られていないし」
「だよねえ。連合創設以来のメンバーだし」
「国際的地位も高い方なのに」
尚連合各国でその地位が高いのは日米中露にブラジルとトルコである。この六国がとりわけ高い地位にあるのは誰もが認めることだ。
「国力もあるのに」
「人口だってそこそこだし」
「領土は広いのに」
「産業だってあるのに」
「けれどどうしてかな」
「目立たないのは」
二人にとってもだ。考えれば不思議なことであった。
「同じ状況でもマウリアがそこにいたら」
「絶対に滅茶苦茶目立つのに」
「マウリアは特別だよ」
それはトムも言う。
「あの国はもう強烈過ぎるじゃない」
「ああ、そうだったんだ」
「それよ」
ここでだ。二人は気付いたのだった。
「カナダってこれといって個性がないんだよ」
「強烈な個性がね」
「うっ、そうだったんだ」

「個性がなかったの」
カナダ人二人はそれぞれ強烈な個性を持つ国の出身者二人に言われていた。まさにそのアメリカと中国のことに他ならない。
「カナダって」
「それで目立たないのね」
「御飯もあれだったら」
「それで目立てそうだけれど」
「それで目立ちたい？」
「ひょっとして」
二人は身も蓋もないことを主張する。
「御飯がまずいことで」
「イギリスみたいに」
「だからあの国のことはね」
「出さないで欲しいけれど」
二人もこの提案には困った顔になる。
「せめてマウリアとか」
「あの国みたいに個性があったら」
「いや、マウリアはかなり」
「個性が強過ぎるんじゃ」
アメリカ人も中国人も言うことであった。マウリアの個性はこの時代になってその強烈さをさらに濃いものにさせてしまっているのだ。
「あの国までなると」
「ちょっと以上に」
「ううん、名物料理ないかな」
「そうよね」
二人はハンバーガーを食べながら話す。
「こういう食べ物」
「あとアメリカンシティとか」
「努力すれば出来るかも知れないけれど」

「そういうことは」
一応こう言う二人だった。しかしだ。
「けれどそれってね」
「すぐにはできないことだし」
「あれだね。何事も一日してはだよね」
「そういうことなのね」
「ケベック王国は個性が強いのに」
「どうしてカナダは」
スターリングも蝉玉も言う。
「まあとにかくね」
「今はね」
二人もいい加減気が滅入ってきたので話題を変えてきた。強引に。
「ハンバーガーを楽しんで」
「ショッピングもするんだったわよね」
「うん、そうだよ」
それはその通りだと返すトムだった。
「だからここに来たんだしね」
「だったらさ。もっと食べようよ」
「どんどんね」
「確かに。ここのハンバーガーって」
そのハンバーガーを食べながらだ。実際に答えるトムだった。
食べれば食べる程だった。その味は。
「いいよね、これって」
「そうそう。食べてね」
「楽しくやりましょうよ」
「じゃあもっと頼もうかな」
トムはここでメニューを見た。そうして言う品は。
「このチキンカツバーガーいいかな」
「あとスパムバーガーもいいよ」
「それもどうかしら」

「あっ、いいね」
スパムと聞いてだ。トムは笑顔になった。そのうえで彼はこんなことを話すのだった。
「カナダじゃスパムってよく食べるんだ」
「うん、結構以上にね」
「食べるのよ」
「成程ね」
スターリングは二人の言葉を受けて考える顔になった。そしてだった。
店のメニューを手に取った。そのうえでだった。
「それじゃあね」
「それじゃあ？」
「何かあるの？」
「ここは僕に任せて」
にこやかな顔で二人に言う。
「そうさせてもらえるかな」
「よくわからないけれど」
「そう言うんなら」
こう答えるカナダ人二人だった。
「それじゃあね」
「御願いするわね」
「うん、じゃあね」
こうしてだった。スターリングはメニューを見ながらだ。店の人を呼ぶのだった。そうしてそのうえであらたな話がはじまるのだった。

アメリカンシティ　　完

2010·12·16

第二百三十話　スパムパレードその一

スパムパレード

スターリングはだ。お店の人にだ。色々と言うのだった。
「それじゃあこれと」
「はい」
「これとこれも御願いします」
「わかりました」
「あとついでにこれも」
結構多くのものを頼んでいることはわかるやり取りだった。
「それじゃあそれで」
「わかりました」
お店の人も頷いてメニューを書いてだ。そのうえで去るのだった。
お店の人が去ってからだ。ここで蝉玉がスターリングに尋ねる。
「何頼んだの、それで」
「すぐにわかるよ」
今はこう答えるだけのスターリングだった。
「五分もすればね」
「五分ね」
「そう、五分だよ」
それだけだというのである。
「それが長いか短いかはわからないけれどね」
「長くない？それって」
中国人の蝉玉はこう考えていた。
「五分あったら色々できるわよ」
「えっ、五分しかないの」
「短いわよね」
しかしカナダ人二人はこう考えるのだった。
「五分なんてもうあっという間じゃない」

「何もできないわよ」
「いや、僕は長いと思うけれど」
アメリカ人のスターリングはこちら側だった。
「やっぱりね」
「色々できるの？五分で」
「たったそれだけで」
「五分あったら着替えられて顔が洗えるよ」
朝に例えての話だった。
「ついでに御飯も食べられるよね」
「そうよね。簡単なものだったらね」
「えっ、五分でそれだけ」
「凄いわね、それって」
二人の会話にだ。トムもメアリーも驚きを隠せない。
それでだ。こう話すのであった。
「五分だったらそのうちの一つしかできないよ」
「カナダじゃそうだけれど」
「やっぱりカナダってのんびりしているのかな」
「そうみたいね」
アメリカ人と中国人から見たことである。
「連合じゃそれ位普通だと思っていたけれど」
「違うの」
「だって。カナダだから」
「のんびりしてるのよ」
カナダ人二人はそれを理由にすうｒのだった。
「別に急がないし」
「何でもね」
「ううん、まあマウリアよりはずっとましだけれど」
「あそこと比べたらね」
マウリアの時間の概念は最早時空を超えているとまで言われている。その時間の概念の恐ろしさは連合では多くのジョークさえ生み

出しているのだ。
「けれど。それでも」
「五分あったら色々できそうだけれど」
「ロシア人も気が長いしおっとりしてるけれど」
「寒い場所が多い国ってそうなのかしら」
「だって。室内でしか何もできないから」
「そうなるんじゃないかしら」
カナダ組の返答である。
「スポーツだってウィンター系以外は室内ばかりだし」
「お家の中じゃ読書とかだし」
「そういえばカナダの企業も」
「そうよね」
スターリングと蝉玉はこのことにも気付いたのだった。
「成長したらすぐにどっかの国に買収されるよね」
「その途端に」
「特に君達の国にね」
「そうなっているわよね」
主犯はこの二国なのであった。
「何かカナダって連合全域に知られた企業ってないし」
「芸能人も」
「そうだよね。これといっていないし」
「皆有名になったらどっかの国に行って」
人材もなのだった。

第二百三十話　スパムパレードその二

「結果有名になれないんだよ」
「どうしてもね」
「困った話だね」
「そうよね」
スターリングと蝉玉は今は多少白々しくなっていた。何しろ主犯とわかったからだ。それでは白々しくなるのも当然のことだった。
「まあさ。それでも」
「それでも？」
「地道にやればね」
「アメリカ人に言われてもね」
どうかというのである。
「地道って」
「アメリカに地道って合わないかな」
「だってアメリカンドリームじゃない」
この言葉は今も健在である。
「それであるの？地道って」
「九十九パーセントの努力の結晶はあるよ」
エジソンである。
「ちゃんとね」
「それでなんだ」
「それじゃあ駄目かな。努力の結晶」
「そうなるかな」
「とりあえずアメリカ人も努力はするよ」
ここでは努力が即ち地道であった。
「それで成功を掴むのよ」
「アメリカンドリームをだね」
「そういうこと。カナディアンドリームも作ってみたら？」

こうカナダ人に提案するのだった。
「それでどうかな」
「ううん、連合って元々そうした話多いけれど」
そうした意味でアメリカンドリームは連合全域に広まっているのだ。一介の小さな農家から大規模な農園経営者になることもそれなのだ。
「カナダには少ないね」
「無欲なのね、結局は」
蝉玉はそれだと看破した。
「カナダの人って」
「普通にお家とお仕事と家族があれば」
メアリーが話す。
「もういいけれど」
「それだけ？」
「そう、それだけで」
メアリーはこう蝉玉に話すのだった。
「充分だけれど」
「ロシア人そっくりだけれど」
「そうね。そのままよね」
スターリングと蝉玉はそれぞれこう話す。
「カナダ人もそうだったんだ」
「無欲だったの」
「だって。寒いから」
「お家からあまり出たくなくなるから」
今度は寒さだった。
「それでまあ」
「結果として」
「ううん、まあ仕方ないかな」
「少しずつやっていくしかないし」
スターリングと蝉玉も今はこう言うしかなかった。

「まあとにかくね。そろそろ来るよ」
「ああ、スパムね」
「カナダでもスパム食べるって聞いたし」
「うん」
スターリングとトムはスパムの話に戻っていた。
「それじゃあね」
「食べるんだね。じゃあね」
「ほら、来たよ」
こうしてであった。そのスパムの料理が来たのだった。
まずはだ。スパムバーガーだった。大型のそれが来た。
四つあった。それぞれ一個ずつ四人の前に出される。そしてだった。
四人で食べる。その四つをだ。そしてトムは食べてから言った。
「美味しいね」
「これもスパムの食べ方なんだ」
「ハンバーガーにもできるんだ」
それがトムにとっては驚きなのだった。

第二百三十話　スパムパレードその三

「そうだったんだ」
「あれっ、知らなかったんだ」
「うん、全然」
そうだったというのである。
「カナダ人って他の国の料理にあまり興味ないし」
「それ絶対に駄目よ」
蝉玉が呆れるに足る発言だった。
「一番ね」
「駄目なの」
「料理は切磋琢磨よ」
まさにそれだと。トムに話す。
「だからね」
「ううん、じゃあスパムステーキなんかも」
「それもないのね」
「全然」
言った傍からそのスパムステーキが来た。やはり四つだ。
「こんなのって全然」
「なかったわ」
「それがちょっとね」
スターリングは二人のその言葉を聞いて少し驚きの言葉を出した。
そしてだ。
二人に対してだ。こう話すのだった。
「わからないよ」
「スパムの食べ方が限られてるから？」
「だからなのね」
「うん、それでだよ」
こう話すスターリングだった。

「スパムバーガーにスパムステーキに」
「この二つだね」
「このステーキも」
メアリーはそのステーキを食べてみる。その味は。
「美味しいわ」
「そうだね。からりと焼かれてて」
実際にトムもこう言う。その通りだとだ。
ただ焼かれているだけでなくだ。ソースもかけられている。そして香辛料も適度な味わいを見せている。その香辛料の味もだった。
「いいね。味だって」
「こういうのがカナダにはないんだ」
「味付けも」
「そうよね」
トムとメアリーは顔を見合わせて話をする。
「お塩とお酢と」
「胡椒を少しね」
「だからだよ。香辛料はしっかりと使わないと」
スターリングはまた二人に話す。いささか困った顔にさえなっている。
「駄目だよ。っていうかカナダも香辛料あるじゃない」
「うん、あるよ」
「胡椒だってマスタードだって」
そうしたものはあるというのだ。
「それに唐辛子も」
「色々とあるわ」
「そう、あるから」
「多分アメリカと同じだけね」
「それでどうして使わないのかしら」
蝉玉も不思議に思うことだった。
「あるのに使わないの」

「うん、面倒だからかな」
「そのせいよね」
こう言うカナダ人二人だった。そして今度はだ。
スパムサンドが来た。それも食べるとだった。
「やっぱり美味しいね」
「これもね」
「スパムっていっても色々料理の仕方があるから」
ここでまた話すスターリングだった。
「ちょっとした工夫でね」
「ちょっとした、かな」
「そうかしら」
しかしトムとメアリーは今のスターリングの言葉にはかなり懐疑的だった。
それでだ。二人はこう言うのだった。
「こんなのどれもカナダじゃね」
「食べられないし」
「それがおかしいと思うけれど」
蝉玉は首を傾げさせて述べる。

第二百三十話　スパムパレードその四

「中国でも今じゃスパム食べるけれどね」
「食べるんだ、中国でも」
「そうなの」
「そうよ。スパムってもう世界的な食べ物だから」
だからだというのであった。
「それで。しっかりと料理に使ってるわよ」
「流石中国人だね」
「そうね」
二人はここえはこう言うのだった。
「何でも料理できるんだね」
「スパムだって」
「豚肉みたいに使うわよ」
そうした使い方だとだ。蝉玉は話す。
「っていうかスパムって使いやすい贖罪だと思うけれど」
「そうかな」
「焼いて食べる位しかないんじゃ」
二人はあくまでこう言うだけだった。
「それ位だよね」
「ベーコンみたいにね」
「ステーキみたいのだってなかったしね」
「そうよね」
「だからそれがおかしいんじゃないかな」
また言うスターリングだった。ここでだった。
「ステーキなんて普通にできるじゃない」
「それはそうだけれど」
「スパムもって」
「発想を少し変えるだけだよ」

スターリングにとってはそれだけのことだった。アメリカ人にとってはだ。
「それだけじゃないかな」
「ううん、そうなんだ」
「そうなのね」
いぶかしげな顔の二人であった。
「ステーキって牛肉だけじゃなくて」
「いや、豚肉もあるじゃない」
「羊だって」
今の言葉にもだ。スターリングと蝉玉は驚きを隠せなかった。
「ビーフステーキだけじゃないから」
「他にも。サボテンとかカイギュウとかあるんじゃないの？」
「カナダじゃそれだけだけれど」
「違うのね、それも」
「ないんだ」
「うん、そういうのも」
「ないのよ」
またしてもこうした返答の二人だった。
「っていうか食材もね」
「少ないわよね」
こうだ。カナダ人同士で話す。
「どうしてもっていうか」
「食べる食材も限られてるし」
「だからそれ駄目だから」
「色々な食材があってこそよ」
その色々なものを食べる面々であった。
「だからビーフステーキだけじゃなくて」
「ステーキだって色々あるじゃない」
「ううん、豚は食べる人いるけれどね」
「ステーキってやっぱりあれよね」

そのスパムステーキを食べながらもだ。それでもこう言う二人であった。どうしてもわからないといった口調でだ。話を続けていくのだった。

「牛の」

「それしかないから」

「まさかと思うけれど」

蝉玉は怪訝な目で二人に問うてきた。

「あれかしら。おソースだって」

「うん、普通に黒い色のソースが殆どだけれど」

「白いソースとかはないわね、殆ど」

ソースの種類も非常に少なかった。

「ドレッシングだってフレンチばかりだよね」

「そうそう」

「何か絶望的会話だね」

「聞いていて暗澹となってきたわ」

食材も料理の種類も豊富な二人としてはだ。こうならざるを得ないことであった。それでついついこうした言葉を出してしまったのだった。

そして言いながらだ。さらに暗い顔になって言うのであった。

「だからさ。食べないと」

「種類も量もたっぷりとね」

言いながら二人もスパムステーキを食べていく。それは確かに美味い。だがその美味さもカナダ人二人には今一つわからないようである。

第二百三十話　スパムパレードその五

それでだ。疲れた顔になって言うのであった。
「まずはそれからかな」
「とにかく色々なものを食べてね」
「ううん、食べられればいいとか」
「そういうのは駄目なの」
「全然駄目だよ、美味しさを求めるうえではね」
「っていうかそれって」
二人は今の彼等の言葉にも驚きを隠せなかった。
「何時の時代の話よ」
「連合の話には思えないけれど」
連合ではだ。餓えはもう存在していない。連合で餓えという言葉が消えてからもう一千年以上経つ。宇宙進出からのことである。
「カナダって食べ物一杯あるのに」
「それでもそんなこと言うなんて」
「だから食べるものは限られてるんだ」
「どうしてもね」
「これは難しいな」
「とてもね」
スターリングも蝉玉も美味しい筈のスパムバーガーを食べながら暗い顔になっている。美味しいものも二人のそれを止められなかった。
「何ていうかね」
「どうにかならないの、本当に」
「ううん、そうした文化は全部ケベックに持っていかれて」
「フランス系は」
フランスが即ち美食なのであった。
「あの王様みたいな人はね」

「カナダにはいないから」
「駄目に駄目を重ねて」
「そんな感じね」
「駄目って言われても」
「それでも」
カナダ人たちにとってはだ。そうしたこともだった。
「仕方ないじゃない」
「ねえ」
「まあ今すぐには無理だけれどね」
「どうしてもね」
二人も今すぐにとは言わないのだった。そしてだ。
スパム入りのスープも来た。スパムサラダもだ。
「まあさ。こういうのを食べて」
「勉強しましょう」
「うん、そうだね」
「それじゃあ」
二人も頷きはする。話は聞いていた。
しかし今すぐには無理でだ。とりあえずはスパム料理とはどういったものかをその舌で知るのだった。それが今なのだった。
スパム料理を食べてからだ。一行はだ。
「それじゃあ今度はね」
「服を買いに行きましょう」
トムとメアリーは今度はそれだというのだった。
「アメリカ直輸入の服をね」
「やっぱり派手な服が多いわよね」
「ああ、それは色々だよ」
アメリカ人のスターリングが二人に答える。その彼等がだ。
「地味な服だって多いよ」
「そういえば今のスターリングの服って」
「そんなに派手じゃないわね」

青いジーンズと白いシャツ、それに黒いジャケットである。その三つを着ている。確かにあまり派手とは言えない服装だった。
その服装でだ。彼は話すのだった。
「じゃあ色々なんだ」
「服も」
「そうだよ」
その通りだというのだった。
「アメリカ人っていても色々だしね」
「だからなんだ」
「それでなの」
「そうだよ。元々移民の国だし」
それが大きかった。
「服は色々とあるよ」
「ううん、カナダはね」
「寒いからどうしても」
ここでもだった。カナダの特徴が出るのであった。
「厚着になるからね」
「服も限られるのよね」
「ううん、服はそうなるかな」
スターリングは料理の時よりもいささか軟化した態度だった。そうしてそのうえでだった。彼は服についてはこう話をするのだった。
「まあここは結構暖かいからね」
「そうした服も選んでいいんだね」
「そうなのね」
「そうだよ。まあ好きなの選んで」
スターリングは二人に対してこう話した。

第二百三十話　スパムパレードその六

「好きな服をね」
「うん、じゃあとりあえずね」
「そうさせてもらうわ」
二人もスターリングの言葉に頷いてだった。そのうえで服を探すのであった。
カジュアルショップに入る。まずはトムだった。
青いジーンズに黄色いシャツ、それと赤い上着だった。
「これどうかな」
「ううん、バランスは取れてるけれど」
「何か色が薄くないかしら」
スターリングだけでなく蝉玉も言う。
「色も大事だからね」
「派手にいきたいのよね」
「うん、そうだよ」
その通りだとだ。答えるトムだった。
「カナダじゃ地味なだけだから」
「それで三原色なのはわかるけれど」
「ちょっと」
確かにであった。その赤と青と黄色でもだった。そのそれぞれの色が明るいものでなく地味な薄い色なのだった。それが問題なのだった。
「それがね」
「もっとはっきりとした色にしましょう」
「わかったよ」
トムもだ。二人のその言葉に頷いた。
「じゃあその色を選ぶよ」
「あとは細かいデザインもよく見てね」

「そうするといいわ」
それもなのだった。二人のアドバイスはそこにも至った。
そしてだった。今度はだ。
メアリーだった。彼女についてはだ。
「これでどうかしら」
「ええと、それは」
「ちょっとね」
二人はメアリーの今の服装にはかなり懐疑的であった。何とだ。
民族衣装である。それもハワイのだ。確かに派手で目立つ。しかしその服が普通はどう見られるか。二人が見るのもそのことだった。
「あの、ちょっと」
「その格好じゃあれですよ」
「派手だからいいのじゃないの？」
「それで外歩けます？」
「普通に」
二人はだ。それを話すのだった。
「ちょっと」
「その服は駄目ですよ」
「ううん、そうなの」
言われてだ。困った顔になる彼女だった。
「駄目なの。それじゃあ」
「他の服装にしましょう」
「派手だけじゃなくて」
もう一つの条件がここで付け加えられた。
「普通に外を歩ける」
「そんな格好で」
「そうなの。わかったわ」
今一つはっきりとしない返答ではあった。
「それじゃあね」
「ええと、私にも見させて下さい」

危ういと思ってだ。蝉玉がここで出て来た。そのうえでメアリーに対して話すのであった。
「服一緒に選ばせて下さい」
「あっ、一緒に選んでくれるの」
「はい」
その通りだというのであった。
「そうさせて下さい」
「それじゃあ。お願いするわね」
「じゃあ」
こうしてだった。メアリーには助っ人が加わった。そしてトムにもだ。スターリングが来てだ。そのうえで彼に対して話すのであった。
「デザインはね」
「どんなのがいいの？」
「ロッカーをイメージするといいよ」
それだというのである。
「それもハードロッカーね」
「ロッカーをなんだ」
「ロックのステージ衣装」
具体的にはそれであった。

第二百三十話　スパムパレードその七

「それをイメージしてね」
「選ぶといいんだね」
「そういうこと。これでわかりやすいよね」
「そうだね。だったらこれかな」
ここでだ。トムが選んだのはだ。
赤い上着だ。細かいところに様々な装飾があるだ。
次には青いジーンズだった。これはあちこちが破れている。
黄色いシャツはだ。まさに原色であった。その三つであった。
「どう、これで」
「いいんじゃないかな」
スターリングもそれならなのであった。
「それで」
「そうなんだ。これでいいんだ」
「うん、そう思うよ」
スターリングはまた述べた。
「っていうかね。やっぱりね」
「やっぱり？」
「トムの普段の格好って。こうしてみると」
その話にもなったのだった。
「地味なんだよね」
「地味なんだ、やっぱり」
「だから余計に派手に見えるね」
こう話すのであった。
「それもあるね」
「そうなんだ。それもあって」
「そうだよ。けれど今は派手だと思うよ」
スターリングはそれをよしとしていた。そしてだった。

彼は今度はだ。こんな話をするのだった。
「それじゃあ他にも」
「他にも？」
「着てみよう」
こう彼に提案したのだった。
「一着だけじゃなくてね」
「何着も着てみるんだね」
「時間があればそうしてね。じっくりと選ぶのがいいんだ」
「それがアメリカ式なんだね」
「いや、アメリカ式じゃないけれど」
それは否定する彼だった。いささかきょとんとした顔になっての言葉だ。
「これって」
「あれっ、そうなんだ」
「普通に誰でもしてるけれど」
アメリカ人に限らない。これは実際のことだった。
「カナダじゃ違うの？それって」
「あっ、それは違うわ」
ここでメアリーが言ってきた。
「カナダでも普通に服はね。時間があれば何着でも選ぶわ」
「そうなんですか」
「トムはそうなのよ。一着だけなのよ」
彼はそうだというのである。
「だから。それはね」
「わかりました。トムだけなんですね」
「このことについてはそうよ」
メアリーはこうスターリングに対して話す。そうだとだ。
「それはわかっておいてね」
「わかりました。まあそれもやり方の一つだけれど」
スターリングはトムを否定はしなかった。そうしてだった。また

彼に話すのだった。
「今回はね。時間があるから」
「それでなんだ」
「うん、選ぼう」
こうトムに話す。
「じっくりとね」
「わかったよ。じゃあロッカーをイメージしてだね」
「あっ、ロックだけに絞らなくてもいいから」
「いいんだ」
「別にね。他のものでもいいよ」
そのことにはこだわらないでいいというのである。
「ファッションは色々だからね」
「普通に街で歩ける範囲で、ってことだね」
「そうだよ。まあロックだけじゃなくて」
他に挙げたジャンルはだ。こうしたものだった。

第二百三十話　スパムパレードその八

「パンクとかヘビメタとかでもいいし」
「随分派手だね」
「派手でもそうしたのだとまだ街を歩けるから」
「よし、じゃあそういうのイメージして」
「ただ。デスメタルとかになるとね」
ここで音楽のジャンルが少し過激なものになった。
「あれだけれどね」
「まずいんだ」
「っていうかデスメタルだとヘビメタとかより余計に派手になるじゃない」
スターリングの指摘するポイントはそこだった。音楽のジャンルをそのままファッションにしてだ。それで話をするのであった。そういうことだった。
「それでね」
「それでなんだ」
「そう。だからヘビメタまでだね」
「わかったよ。それじゃあ」
こうしてだった。トムはまた服を選んだ。今度の服は。
黒いブルゾンにレザーパンツ、白いティーシャツだった。あちこちにチェーンや十字架がある。そしてアクセサリーも着けている。
その服装を見てだ。スターリングは満足している顔で言った。
「いいじゃない」
「いいんだ」
「うん、ヘビメタだよね」
「こんな感じだよね」
「そうだよ。大体そんな感じだよ」
それでいいというのである。

「そうそう。そんなのでね」
「うん、じゃあね」
「まあ服装だけでいいから」
「メイクは？」
「する人もいるけれどね」
連合では男もメイクするのが普通なのである。
「けれど。トムってそういうの好きじゃないよね」
「あまりね」
実際にそうだというのであった。
「そういうのは」
「好きじゃないとしない方がいいよ」
「だからなんだ」
「うん、そういうこと」
無理強いはしないのであった。
「好きじゃないと服ってね」
「着れないんだね」
「着ることはできるよ」
それはというのだった。しかしであった。
「けれど。上手にはね」
「着こなせない」
「そういうことだよ。それはね」
また話すスターリングだった。
「だからそういうことでね」
「それじゃあ服はやっぱり」
トムはスターリングの話を聞きながら考えてだ。そのうえでだった。
彼はあらためてだ。こう話すのであった。
「気の入るようにだね」
「そう。自分でじっくりと選んでね」
「そうすればいいんだ。じゃあ」

「それもじっくりとね」
「うん、わかったよ」
こう話してであった。二人は服をじっくりと選ぶ。それで選んだ服は。
「ロックにパンクにヘビメタ」
「音楽のジャンルで言うとそうなるね」
「これでいいかな」
スターリングの言葉にここでも応える。
「ううん、実はこういう格好は」
「やっぱりなかったんだね」
「寒いのに合わせた格好ばかりだったよ」
ここで寒さについての話が出るのがやはりカナダであった。とにかくこの時代でも寒さにたたられているのがカナダ人なのである。
それでだ。それはメアリーもだった。彼女も服を選んでいたのだ。
「じゃあこの服よね」
「はい、いいです」
いいと返す蝉玉だった。彼女は青のロングスカートに白いブラウスだ。そこに青いカーディガンを羽織ってだ。その格好になっていた。
それを見てだ。蝉玉は話すのだった。
「似合ってますよ」
「そう。それじゃあこれ買ってね」
「買いますね」
「うん、そうするわ」
彼女もそれでいいというのだった。そしてだ。

第二百三十話　スパムパレードその九

その服を買うことに決めてだ。次であった。
「次は」
「その服ですね」
「これはどうかしら」
もう着替えていた。今度は右脚が露わになった赤いジーンズに黒いティーシャツである。黒いジャケットを羽織っている。それにブーツだ。
「この服は」
「そうですね。その服もですね」
「派手過ぎないかしら」
「派手過ぎるって思う方がいいですよ」
蝉玉はにこりと笑って話すのだった。
「それ位が」
「そうなの。派手過ぎる位がなの」
「特にメアリーさんは」
いいというのである。
「そう思う位がいいですよ」
「私はそうなの」
「メアリーさんの服って普段が地味ですから」
これが大きいと。蝉玉は言外に述べていた。
「ですから」
「それでなのね」
「はい、そうしてこれまでとは違う服を着て」
「そうしてなの」
「違う自分を見つけるのもいいものですよ」
蝉玉に話すものはそのことだった。
「ですから」

「そういうものなのね。それと」
「それと？」
「あと。実は寝る時の服も探してるけれど」
メアリーはこんなことも話すのだった。
「そちらもね」
「寝る時のですか」
「パジャマがいいかしら」
メアリーは首を傾げさせて述べた。
「ここは」
「そうですね。パジャマですね」
蝉玉はパジャマと聞いて腕を組んだ。そのうえで考える顔になってだ。そうしてそのうえでだ。こうメアリーに話したのだった。
「いいと思います」
「パジャマでいいのね」
「メアリーさんによく似合うと思います」
にこりと笑ってだ。メアリーに話した。
「それで」
「そう。じゃあパジャマでいいわね」
「そっちのコーナー行きます？」
いいと言えばすぐにであった。蝉玉はメアリーにすぐに述べた。
「夜の服のコーナーに」
「そうね。ええと、そこは」
「このお店だと奥です」
そこがそれだというのである。
「そこに行ってそれで選びましょう」
「奥ね。それじゃあね」
「はい、今から」
「ええ、行きましょう」
こうして二人は今度はパジャマを選ぶのだった。蝉玉はここでこうメアリーに話した。

「それでですね」
「それで？」
「パジャマで大事なのは」
そのパジャマについてだ。具体的に話す蝉玉だった。
「色ですね」
「色なの」
「はい、色です」
それだというのである。
「生地も大事ですけれど」
「生地は木綿がいいわ」
メアリーは生地はそれだというのであった。
「着心地がいいし」
「寝る時の服は着心地ですね」
「だから木綿でね。それでいいかしら」
「とてもいいと思いますよ」
蝉玉も生地はそれでいいというのだった。

第二百三十話　スパムパレードその十

「丁度その木綿のパジャマも一杯ありますし」
「そう。それじゃあその木綿のパジャマの中から」
「どの色にしますか？」
「ピンクかしら」
メアリーが選ぶ色はそれであった。
「それにしたいけれど」
「ピンクですね」
「それだとどれがいいかしら」
「これはどうですか？」
蝉玉はメアリーのリクエストを受けてすぐにだった。あるパジャマを出してきた。それはピンク一色のだ。木綿のパジャマであった。
それを見せながらだ。メアリーに尋ねるのだった。
「これならどうですか？」
「ええ、それじゃあそれでね」
「試着はされますよね」
「そうさせてもらうわ」
にこりと笑って答えるメアリーだった。
「実際にね」
「はい、じゃあ」
すぐに試着室に入ってであった。メアリーはそのピンクのパジャマを着てみる。そのうえでそのパジャマ姿を蝉玉に見せる。するとだった。
蝉玉はだ。笑顔でこう彼女に告げた。
「似合ってますよ」
「そう、よかったわ」
「メアリーさんってトムと同居してましたよね」
「あの娘の弟とね」

もう一人いるというのだ。
「三人でね」
「男の子二人とですね」
「それ、気をつけて下さいね」
「男の子と一緒だから」
「はい。ですから露出の高い服はできるだけ」
「避けるべきね」
「トムと弟さんが困ってしまいますから」
だからだというのである。
「そういうことで」
「わかったわ。それじゃあね」
「パジャマはその点いいですから」
「そうよね。露出は低いし」
開襟だが首もあまり見えない。それにズボンである。全体的にゆったりとしている。まさにパジャマであった。メアリーは今その服を着ているのだ。
「それにこのゆったりした感じだと」
「下着のラインも見えませんから」
「それも大きいのね」
「はい、ネグリジェが一番危ないです」
「あれは駄目なの」
「男の子と一緒だと」
その場合はだというのである。
「止めた方がいいですね」
「わかったわ。それじゃあね」
「はい、それじゃあ」
「このパジャマにするわ」
決定であった。
「ピンクのパジャマでね」
「ですね。それにしてもネグリジェですか」

この寝巻きもこの時代にもあるのだ。人類の服は二十世紀からそれ程変わってはいない。ただしエウロパではロココ調の貴族の服が復活している。

「あれってちょっと」

「まずいわよね」

「刺激的ですから」

蝉玉は苦笑いと共にメアリーに話した。

「ちょっと以上に」

「だからまずいわよね」

「そうです。服は一緒にいる相手のことも考えないと」

「自分が着てもね」

「相手の視線を意識してですね」

そこが重要だというのである。

第二百三十話　スパムパレードその十一

「それで、ですね」
「そういうことね。相手の視線を意識して」
「服を着るコツですね」
「そうすればお洒落にもなるのね」
「はい、そうです」
「成程ね。そういうことはこれまで考えてこなかったわ」
メアリーはまた話すのであった。
「特に私達は」
「カナダって人が少ないからですね」
「そうなのよ」
ここでもカナダであった。
「それでなの」
「人が少ないから」
「見られないし」
「それでなんですね」
「ええ。視線も意識しなくなって」
「それよくないです」
蝉玉はそこを指摘した。
「他人の視線も意識してそれで」
「服は、なのね」
「センスは磨かれていきます」
服のセンスがだというのである。
「ですから。視線はいつも意識して」
「そうなのね」
「それといつも鏡を見てですね」
「自分の服をチェックするのね」
「はい」

まさにその通りだというのである。
「そうすると余計にいいです」
「わかったわ。それじゃあね」
「それとです」
「それと？」
「あとは雑誌とかネットで勉強されることですね」
話すことは多かった。そうしたこともなのだった。
「服も」
「服も勉強しないといけないものなのね」
「何でも勉強ですから」
ここではにこりと笑って話す蝉玉だった。
「お料理もファッションも」
「ううん、カナダって本当にそうしたことには無頓着なお国柄だから」
「けれどそれでもです」
「それでもなのね」
「磨けば光ります」
今度の言葉はこれだった。
「何でも磨けばです」
「光るのね」
「はい、不磨の何とやらは滅多にありませんけれど」
これは実際にその通りだった。最初から光っているものは滅多にない。何でも磨いてからである。光っていくものなのである。
それをだ。蝉玉は今メアリーに話すのだった。
「ですから」
「私も磨いてそれで」
「カナダ自体もですね」
「磨けばなのね」
「はい、磨けば光ります」
そうだというのである。

「元々国力は高いですし」
「垢抜けた国になるには」
「磨くことです」
「わかったわ。じゃあ」
メアリーは蝉玉のその言葉に頷いてだった。そうして。
今はそのパジャマを見て話すのだった。
「とりあえずはパジャマはね」
「それにしますね」
「ええ、決めたわ」
にこりとして蝉玉に答える。
「それじゃあね」
「はい、わかりました」
服を選ぶことも終わった。そうしてであった。二人はスターリング、トムと合流する。そのうえでまたアメリカンシティで遊び続けるのであった。

スパムパレード　完

２０１０・１２・２４

第二百三十一話　モザイク国家その一

モザイク国家

アメリカンシティを見回してだ。トムは言うのであった。
「やっぱり色々なものがあるよね」
「そうよね」
それはメアリーも頷くのだった。
「アメリカンシティってね」
「色々な建物が」
「ゴシック名建物もあれば」
「現代調なのも」
「こっちは日本風のお寺で」
「こっちはカトリックの教会ね」
二人で話す。見ればそうしたものもあった。
「とにかく何でもあるんだ」
「建物にしても」
「だって移民の国だから」
スターリングはこう二人に話すのだった。
「だからね」
「それでなんだ」
「移民の国だからなの」
「アメリカはどうしてできたか」
スターリングはここから話す。アメリカ建国からだ。
「まずはイギリス人が来て」
「あの国だったね」
「最初は」
「まあその前にカルタゴ人が来たっていうし」
実際に行き来して商いをしていたという説がある。
「バイキングだっていたし」

「コロンブス以前にもう発見されていたね」
「そういえばそうよね」
「うん。まあ移民は最初イギリス人で」
何はともあれ彼等がはじまりであった。
「アイルランド人も来て」
「フランス人もだよね」
「ユダヤ人も」
「とにかく色々な国の人が来たよ」
そうしてできたのがアメリカという国なのだ。そしてそこにはであった。
「アフリカから。奴隷だったけれどね」
「けれど来たんだったね、アメリカに」
「他の場所から」
「アメリカ人ってあれなんだよ」
スターリングの話は続く。
「他の国や場所から来た人達なんだ」
「ドイツ系やイタリア系も」
「日系や中国系もよね」
「一杯いるよ」
そうだというのであった。
「まあ今じゃ連合のどの国もだけれどね」
「それでもアメリカは特に」
「昔から」
「そうなんだよね。最初から移民の国だから」
これが大きいのだった。最初からなのだ。
「それでね」
「移民ねえ」
それを聞いてだ。トムも言った。
「それってカナダもだけれどね」
「あっ、そうよね」

そのことに対して蝉玉も応える。
「カナダだってそうよね」
「そうだよ。ネイティブの人もいるけれど」
アメリカもそうであるが実はアメリカではネイティブの地位は極めて低かった。というよりはアメリカ人と認識されていなかったのである。
アメリカではアメリカ人は他の場所から来た人間なのだ。その観点から言えばアフリカ系もアメリカ人なのである。差別はされていたがだ。
「イギリス系とフランス系がね」
「それでね」
今度はメアリーも言ってきた。
「ケベックの方にフランス系がいっちゃって」
「イギリス系はカナダなんだ」
そのトム達というわけだ。
「まあ移民の人結構来たけれど」
「それで何でアメリカみたいにならなかったのかしら」
蝉玉はそのことを不思議に思うのだった。
「どうしてなのかしら、それは」
「何でだろうね」
「そういえばそうよね」
ここでトムとメアリーは弱気な顔になって二人で話した。

第二百三十一話　モザイク国家その二

「カナダも移民の人多いのに」
「昔からね」
「それでもどうしてなのかな」
「何か文化が単一的だし」
所謂カナダ文化だ。連合では目立っていないということでかえって有名になってしまっている文化だ。カナダにとって悲しいことにである。
「アジア系の人も多いよね」
「昔からアフリカ系の人もいるし」
実は二人の肌も微かに浅黒さが入り顔立ちも何処か彫の浅いところもある。こうしたところは連合的に混血しているのである。
「それでもアメリカと比べたら」
「全然マイナーだし」
「アフリカ系の音楽ないよね」
「全然ね」
それもないのであった。
「アメリカの音楽ってアフリカ系の人達が凄い貢献したのに」
「それでもカナダは」
「何でだろう」
「我が国だけ」
「アメリカはね」
そのアメリカ人の言葉である。
「まあ何ていうか」
「アフリカ系の人って差別もされてたよね」
「確かそうよね」
「それは歴史の教科書に書いてあったね」
連合では今はそうなっていることだった。あの長い差別とそれに

対する戦いは彼等が勝ち取るべきものを勝ち取って歴史になった。ただしだ。

差別は立場を変えて残っていた。それはだ。

連合とエウロパである。連合は混血を誇りとしている。しかしエウロパは白人だけだ。その混血していないのをだ。連合は差別の対象にしているのである。

「ナンセンスな話だよね」

「そうよね、それは」

「本当にだよね」

「全く以てね」

このことには全員同意であった。

「肌の色なんてどうでもいいのに」

「今じゃ皆黄色かったり黒かったりするし」

「目や髪の色も」

「皆まちまちだから」

それが連合であった。長い間の混血の結果である。

「けれど昔はそれで差別されていたんだね」

「そうだったんだね」

トムはスターリングのその言葉に頷いて答えた。

「アフリカ系の人達はね」

「けれどそれでもね」

スターリングは今回の話の本題に入った。

「音楽的な貢献は確かに凄かったね」

「ええと。ジャズに」

トムが最初に挙げたのはそれだった。

「ゴスペルにラップに」

「他のジャンルにも進出したんだよ」

スターリングはここでこう言い加えてきた。

「クラシックにもね」

「とにかく音楽なら何でもだったんだ」

「クラシックだったらレオンタイン＝プライスかな」
アフリカ系アメリカ人のソプラノ歌手である。二十世紀においてプリマ＝ドンナとして知られていた。劇的な歌唱でその名を広く知られていた。まさにアフリカ系クラシック歌手のパイオニアである。
「あの人が最初で」
「あとあれ？マイケル＝ジャクソンだよね」
「そう、あの人もいるし」
この時代では最早神格化されている永遠の存在である。
「スティービー＝ワンダーだってね」
「ああ、あの人」
「あの人もね」
盲目の歌手である。その歌唱力は素晴しいものであった。
「あの人だってそうだしね」
「黒人だったわね」
「そうだよ。他にも大勢いるから」
スターリングは何処か誇らしげに話すのであった。
「アフリカ系の歌手は昔からね」
「それは今も」
「何か羨ましいわ」
「いや、羨ましいって」
蝉玉がここで二人に言う。
「カナダもアフリカ系の人多かったんじゃ」
「多かったことは多かったけれど」
「今でもだけれど」
この時代では連合ならばどの国でも人種混ざっている。つまり黄色人種も白人も黒人もだ。全ての国に大勢いるのである。

第二百三十一話　モザイク国家その三

「それでも。何か」
「カナダの黒人の人はね」
どうかというのである。
「自己主張しないからね」
「あの人達もね」
「アメリカのアフリカ系の人達は自己主張するよ」
スターリングは彼等のことを話した。
「もうこれでもかっている位ね」
「だよねえ。それは」
「凄い位よね、今も」
「自己主張の違いかな」
スターリングはここに答えを見出していた。
「だからアフリカ系アメリカンはね」
「そこまでの業績を残せたんだ」
「そうなのね」
「音楽だけじゃないしね」
アメリカにおけるアフリカ系の功績はまだあるのだった。それは。
「スポーツだってそうだし」
「野球もバスケもアメフトも」
カナダ人二人の言葉はかなり羨ましそうである。
「どれもカナダにもあるけれどね」
「けれどカナダはどっちも」
「目立たないよね」
「そこそこの成績があるけれど」
成績はそこそこなのだった。
「目立てないからね」
「やっぱり自己主張が乏しいのね、カナダって」

「中国も自己主張が凄いけれどね」
それは中国のなのだった。
「一人一人も国家もね」
「連合の殆どの国がじゃないかな」
また言うスターリングだった。
「自己主張が凄いのはね」
「カナダだけそれが弱い」
「そういうことなのかしら」
「日本もあまり自己主張しないんじゃ？」
蝉玉がここで言った。
「私達が今いるこの国だけれど」
「あっ、そういえば日本って」
「自己主張しないわね」
トムとメアリーはこのことに気付いた。
「これといって何も」
「言わない国だけれど」
「個性が凄いじゃない」
スターリングが指摘したのはそこだった。
「もうかなりね」
「そういえば日本の個性って」
「自己主張しないけれど」
それでもだった。
「もう呆れる位目立つから」
「独特過ぎて」
「つまり自己主張しなくても」
「あまりにも目立つ個性があれば」
ここでまた一つの答えが出された。
「いいんだ」
「それさえあれば」
「けれどカナダにはなあ」

「それもないのよね」
こうしたことについてはないこと尽くしの国であった。
「ううん、本当にこれって」
「困ったことね」
「地球にあった頃はアメリカがすぐ傍にあって」
「それで余計に目立てなかったし」
アメリカの目立ちようはもう言うまでもなかった。
「今は。周りの国は」
「それぞれ自己主張が強いわね」
今も今でなのだった。
「小さい国も多いけれど」
「それでも」
「大きくても人口はそれ程じゃないよね、カナダって」
「そうよね」
スターリングと蝉玉がまた話す。
「何か色々な要素が重なって」
「そうした結果なのね」
つまり目立たない全ての条件が揃ってしまっているのだ。それがカナダという国なのだ。そうしたことを考えてもだ。二人は言う。

第二百三十一話　モザイク国家その四

「カナダの地味さって」
「それで極めつけにまでなった」
「そうしたものだったんだ」
「かなり深刻だったのね」
そのことを強く自覚する二人だった。しかしである。
「けれどそれでもね」
「そうよね」
二人で話す。カナダ人同士で。
「頑張っていけばね」
「少しずつでもよくなるわよね」
「まあ頑張ってね」
蝉玉もそんな彼等の国を応援する。
「少しずつやっていけばいいから」
「よし、それじゃあ」
「何時かはアメリカや中国みたいに目立つわよ」
「うん、それじゃあね」
「少しずつ努力していって」
スターリングと蝉玉が話す。そうしてであった。
二人は今度はだ。ゲームセンターに入った。赤や黄色の独特な、極彩色の店の中にこれまた派手なゲームが揃っている。四人はその中に入った。
そしてそのうえでだ。トムがしたものは。
「これしようか」
「そうね、それいいわね」
メアリーも頷く。二人はＵＦＯキャッチャーの傍に来た。その中にあったのは。
「ぬいぐるみだけれどやっぱり派手だね」

「そうね。何ていうか」
そのぬいぐるみ達がだ。何かというとであった。
「アメコミチックだね」
「キャラクターの造詣がそうよね」
「ああ、これね」
そのアメリカ人のスターリングが二人に話す。ここでもだ。
「これ漫画のキャラクターだよ」
「やっぱりそうなんだ」
「アメリカの漫画のね」
「そうだよ。ＳＦ格闘漫画だよ」
そうした漫画だというのである。
「ミュータントや宇宙人が入り乱れて戦うね」
「何か聞いたことあるような」
「そんな世界ね」
「そうかもね。有名な漫画だし」
二人の言葉を否定しないスターリングだった。
「日本でもコミックス売られてるよ」
「あっ、そうなんだ」
「日本でもなの」
「うん、本屋に普通に売ってるよ」
そうだというのである。
「面白いから。読んでみたら？」
「わかったよ。じゃあね」
「探してくるわ」
二人もスターリングのその言葉に頷く。そうしてであった。
そのＵＦＯキャッチャーを楽しむ。しかし楽しんだだけだった。
ぬいぐるみを獲ることはできないでいた。二人共だ。
「あれっ、何かこれって」
「かなり難しくない？」
「思うように動けないし」

「どうなってるのよ」
「あれっ、そうかしら」
蝉玉は難しいという二人のそのぼやきに目をしばたかせて返す。
「私は別にそうは思わないけれど」
「思わない？」
「そうなの？」
「それ結構簡単なんじゃないかしら」
蝉玉が見たところそうなのだった。
「そのＵＦＯキャッチャーって」
「そうかな」
「かなり難しいわよ」
「ちょっとやらせてみて」
ここでこう言ってきた彼女だった。

第二百三十一話　モザイク国家その五

「それじゃあ」
「うん、じゃあね」
「交代ね」
こうして蝉玉がそのＵＦＯキャッチャーをはじめた。するとだった。
まさに次から次にであった。ＵＦＯキャッチャーを獲っていく。
それを見てだった。
トムもメアリーもだ。驚きを隠せなかった。
「な、何でなんだよ」
「そんなに簡単に獲れるものなの？」
「っていうかこれ簡単よ」
蝉玉はまた一つ獲ってから言う。
「獲りやすい場所にあるじゃない」
「そ、そうかな」
「全然そうは思えなかったけれど」
「ああ、一つ空いてるね」
ここでスターリングも出て来た。
「それじゃあね」
「二人でやりましょう」
「うん、じゃあね」
蝉玉の言葉を受けてだ。実際にやってみる。すると彼もだった。
一つ一つ簡単に獲っていく。実に手馴れたものである。
そうしてだ。彼もこう言うのであった。
「この台簡単だよ」
「そうよね」
そしてだ。二人の手元を見ればであった。
「ああ、イージーモードだよここ」

「そうだったの。道理で簡単な筈ね」
「えっ、簡単！？」
「これが！？」
トムもメアリーも唖然として言う。
「嘘だよ、これって」
「滅茶苦茶難しいわよ」
「アメリカじゃね。これ位は」
「中国でもよ」
しかしスターリングと蝉玉はそれぞれ言うのであった。
「本当に簡単じゃない」
「そうよね」
「ううん、そうなの」
「そうなのかしら」
カナダ人二人はかなり懐疑的な面持ちであった。
「カナダじゃこれじゃあね」
「スーパーハードモードよ」
「カナダのゲームってこんなに難しくないから」
「ＵＦＯキャッチャー以外もね」
「それってねえ」
「そうよね」
スターリングと蝉玉はそんな二人の話を聞いてこう述べた。
「退屈にならない？」
「刺激が弱くて」
「刺激って」
「そう言うの」
「うん、刺激が足りないよ」
「ゲームは難しくないと。ある程度はね」
スターリングと蝉玉にしてはそうした考えだった。しかしだ。
トムとメアリーにしては違ってだ。こう言うのであった。
「こんなに難しいと」

「困るわよ」
「だよねえ」
「とてもね」
「ううん、これも文化の違いかな」
「そう見たいね」
二人はここでもこのことに気付いた。
「文化が違うとやっぱり」
「ゲームの難易度も変わるのね」
「っていうかアメリカとか中国がどうかしてるよ」
「これでイージーモードだなんて」
トムとメアリーはそのＵＦＯキャッチャーを見ながら話す。
「まさかカナダって」
「こういうの駄目なのかしら」
「のんびりとしたお国柄なのは認めるけれど」
「それでもね」
「まあまあ。いいじゃない」
スターリングが落ち込みかけた二人に穏健な声をかけた。

第二百三十一話　モザイク国家その六

「それならそれでね」
「いいの？」
「それで？」
「ゲームもそれぞれだし」
だからだというのである。
「それならそれでね」
「いいんだ」
「それぞれだから」
「そうだよ。じゃあ次は」
スターリングは店の奥を指差した。そこを見ての言葉だった。
「あそこに行こうか」
「あっ、レースゲーム」
「それするの」
「うん、ちょっとやらせて」
こう二人に話すのだった。
「今からね」
「わかったわ。それじゃあ」
「楽しんできてね」
「そうさせてもらうよ」
「私も行くわ」
蝉玉もだというのだ。
「これでも車好きなのよ」
「へえ、そうなんだ」
「蝉玉もなの」
「うん、じゃあ」
こうしてだった。二人は今度はレースゲームを楽しむのだった。
そうしてそのゲームをクリアしてからだ。一行は店を出た。その頃

にはもう夕方になっていた。
その夕刻の街を見ながらだ。スターリングは話した。
「じゃあこれからだけれど」
「たっぷり楽しんだね」
「そうよね」
トムとメアリーはにこりとして話す。
「じゃあこれからはね」
「お家に帰ろうかしら」
「いやいや、これからじゃない」
しかしだった。スターリングはここでこう言うのであった。
「夕方になってからじゃない」
「えっ、まだって」
「まだ何かあるの」
「うん、今度行く場所はね」
「何処？」
「アメリカンシティよね」
「そう、ここ」
まさにそのアメリカンシティなのだという。
「ここでね。面白い場所があるんだ」
「今度は一体」
「どんな場所なのかしら」
「ジャズのコンサート会場なんだ」
今度はそこであった。
「そこはどう？」
「ジャズねえ」
「今度はそれなのね」
トムとメアリーはそれを聞いてだ。考える顔になった。それから答えたのだった。
「それじゃあ」
「御願いできるかしら」

こうだ。スターリングに対して話すのだった。
「そのジャズのコンサートね」
「今度は」
「わかったよ。それじゃあ」
スターリングも笑顔で応えてだ。これで話は決まった。
そして蝉玉もだ。こう言うのだった。
「私もいいかしら」
「勿論だよ」
スターリングは彼女にも微笑みで返した。
「それじゃあね」
「四人でね。行くのね」
「うん、行こう」
こうしてだった。四人でそのジャズを聴きに行く。そしてここでだった。

第二百三十一話　モザイク国家その七

トムがだ。ふとこんなことを言うのだった。
「それにしてもタフだよね」
「タフって？」
「アメリカ人ってこれが普通だよね」
今度スターリングに話すのはこのことだった。
「そうだよね、これが普通だよね」
「うん、そうだよ」
スターリングの返答も当然といった感じのものだった。
「これがね。アメリカじゃ普通だよ」
「学校から帰ってここまで色々動けるって」
「体力あるわね」
「だからアメリカだと普通だよ」
またこう話すスターリングだった。
「こうして動き回るのはね」
「カナダじゃ学校から帰ったらね」
「部活は別として」
流石にカナダでもだ。それはあった。
「それでも。ここまで動き回るのって」
「ないわよね」
「中国でもこの位普通だけれど？」
今度は蝉玉であった。
「動けるだけ動くのが中国人よ」
「中国人も凄いバイタリティだね」
「タフね、どちらも」
「ううん、何かさ」
「そうよね」
ここまで話を聞いてだ。スターリングと蝉玉は顔を見合わせて話

すのだった。お互いに強く思うところが出て来たのである。それでだ。

「カナダ人って何か」

「大人しいし地味で体力ないのかしら」

「酷い言葉だけれど」

「そうよね」

「ううん、そうかな」

「やっぱり」

カナダ人二人もだ。それを否定できなかった。

「カナダ人って静かに大人しく暮らすのが普通だから」

「それも地味にね」

「っていうか本当に連合？」

「いや、まさかと思うけれど」

こう言われるとだった。トムとメアリーはすぐにこう言った。

「連合創設以来のメンバーじゃないか」

「そうよ、ずっといるじゃない」

カナダも一応そうなのである。ここで一応となるのがカナダだった。

「それはちゃんと歴史にもあるし」

「そうでしょ？」

「けれどこう言われるのって」

「やっぱりカナダしかないのね」

まさにそうであった。

「何か否定できないし」

「辛いわね」

「ううん、前途多難みたいだね」

「そうね」

スターリングと蝉玉はまた顔を見合わせて話した。

「カナダがメジャーになるのって」

「これからね」

「っていうか千年あったけれど」
「無理だったのね」
「うん、千年の間ね」
「ずっとこうだったのよ」
実際にそうした現実があった。
「アメリカや中国みたいに目立てたら」
「日本みたいにいるだけで目立てないかしら」
「いや、日本みたいって」
「それはかなり凄いわよ」
日本の恐ろしいところであった。日本はそこにいるだけ、あるだけでだ。強烈な個性故にどうしても目立ってしまうのである。この時代でもそうなのである。
「とにかく結局は」
「努力するしかないけれど」
「じゃあまずはとにかく」
「ジャズね」
話をだ。そこに戻すのだった。
「それを勉強させてもらうよ」
「アメリカ文化をもう一度ね」
「まあ勉強しなくてもいいよ」
スターリングは笑ってそれは否定した。

第二百三十一話　モザイク国家その八

「別にさ」
「あれっ、いいんだ」
「勉強しなくても」
「力入れなくてもいいよ」
そういう意味での言葉だった。勉強しなくていいとは。
「気軽にいけばいいし」
「気軽になんだ」
「そうしていけばいいのね」
「うん、そういうこと」
その通りだと。二人に頷いてもみせた。
「気軽にね。まあ専門でやるんじゃないよね」
「ううん、参考にしたいなって思うけれど」
「カナダが目立つ為にも」
「それでも。専門かっていうと」
「別に違うわ」
「じゃあ気軽にでいいよ」
あくまでそれでいいと話すスターリングだった。
「もうそれだけでね」
「そうそう。長い時間かかりそうだし」
蝉玉はこう見ていた。
「こういうことって普通に時間がかかるから」
「時間はあるんだね」
「それもかなり」
「多分というか絶対にだけれど」
蝉玉はやはり長い時間を見ていた。その目もそうしたものになっている。
「こういうことって一世代とか二世代じゃね」

「そこまで時間がかかるって・・・・・・そうだね」
「私達って」
ふと自分達について考えるとだ。よくわかることだった。
「千年の間ずっと」
「目立てなかったし」
またこの話になるのだった。
「それを考えたら」
「やっぱりそうなのね」
「というかカナダって今まで目立たなくてもよかったって思ってたんじゃ」
「そうよね」
スターリングと蝉玉はこうも言うのだった。ふと考えてだ。
「何か普通に豊かに暮らせるから」
「それで」
「ううん、確かに普通に食べていってて」
「貿易もやって」
それができるというのである。
「何となく連合の中で地位も高いし」
「困ったこともないし」
「だからそれで」
「普通に何の変わりもなく」
暮らしていって今に至るというのだ。千年の間。
「そうなんだね」
「結局のところは」
「まあそれでも日本みたいに普通に目立つ国だってあるし」
「そこはそれぞれでもあるけれど」
そうしたことを差し引いてもだった。カナダという国はだった。
「やっぱり辛いものがあるかな」
「どうしてもね」
そんな話をしながらジャズコンサートのその場所に入った。する

とだ。
アフリカ系の中年の男がだ。サックスを吹きながら歌っていた。
服はタキシードである。
それを見てだ。スターリングは言うのだった。
「ああ、サッチモだね」
「サッチモ。そうね」
蝉玉も彼のその言葉に頷く。
「あのスタイルはね」
「そのままだよね」
「ええ。タキシードにサックス」
その二つでだというのだ。

第二百三十一話　モザイク国家その九

「古典的だけれどいいスタイルだね」
「確かにね。やっぱりジャズはね」
「サックスだよ」
その通りだとだ。話すスターリングだった。この時代もまたサックスはジャズにおいてオーソドックスな楽器の一つなのである。
「それがいいんだよ」
「いいね、本当に」
「そうね」
トムとメアリーも聴いている。そのうえでの言葉だった。
「これがアメリカのサックスなんだ」
「本場は違うのね」
「あの歌手の人はね」
スターリングは今演奏して歌っているその歌手のことも話した。
「アメリカじゃ結構有名な人だよ」
「えっ、そうなの」
「そうした人なの」
「そうなんだ。ジャズ界の名演奏家の一人だよ」
実際にそうだというのである。
「今日はここでコンサートなんだ」
「そうだったの。それで僕達も」
「聴けたのね」
「日本に来たのははじめてだったかな」
歌手は今も演奏を続けている。サックスを吹いているのだ。スターリングは観客席からそのサックスを聴きながらだ。こう言うのだった。
「そういえば」
「あれっ、はじめてなんだ」

「そうだったの」
「アメリカンシティを中心に活動している歌手だけれどね」
「日本のアメリカンシティに来るのは」
「はじめてなのね」
「この星に来るのは絶対にそうだね」
それは間違いないというのである。
「入り口のポスターにも書いてあったしね」
「ああ、あれね」
「あのポスターね」
トムとメアリーも言われてそれを思い出した。
「そういえば入り口にあったね」
「あれのことね」
「そうだよ。それでね」
また話す二人だった。そうしてだ。
スターリングも話す。こうだ。
「世界中にアメリカンシティはあるから」
「一つ一つ巡るとそれだけで」
「相当な場所を巡ることになるのね」
「そういうことなんだ。大変だろうね」
スターリングはその歌手の立場になって考えていた。
「それも」
「そうだね。それはね」
「本当にね」
「中華街にしても」
今度は中国人の蝉玉であった。
「連合中にあるから」
「ない国ってあるの？中華街」
「連合に」
「ないんじゃないかしら」
実際にそうだったというのである。

「昔韓国にだけは駄目だったけれど」
「韓国にはなんだ」
「そうだったの」
「何か昔の韓国って凄かったみたい」
どう凄いかという話であった。その韓国についてだ。
「もう華僑に対する抑圧がね」
「昔はそういう話が多かったよね」
抑圧と聞いてだ。スターリングも反応を見せる。アメリカの建国神話はイギリスの抑圧からの解放ということになっているからである。
「それが凄かったんだ」
「それで結果としてね」
「韓国にだけは駄目だったんだ」
「そうらしいの」
それを聞いたカナダ人二人の言葉である。

第二百三十一話　モザイク国家その十

「あの華僑が駄目だったって」
「韓国ってそんなに凄かったんだ」
「ある意味脅威だね」
「どうやったら中華街ができなくなるまで」
抑圧できたかとだ。二人にはそこがわからなかった。
「洪童はフレンドリーなのに」
「昔の韓国は違ったのかしら」
「まあ今でも」
蝉玉はこの時代の話もした。
「中華街は連合にしかないから」
「ああ、エウロパにはないね」
「そこには」
「アメリカンシティもないし」
ある筈もなかった。そもそも国交すらないのだ。一千年の対立はこうしたところにまで影響を与えてしまっているのであった。
「まああそこはね」
「連合の人間バチカン関係者以外いないし」
「まあ論外として」
「そういうことで」
話は終わりであった。エウロパについては。
そしてだ。マウリアやサハラもだった。
「マウリアやサハラにもないし」
「だよね。アメリカンシティもそっちもだし」
とにかくないのであった。
「サハラは戦乱あるから何時でも逃げられるようにしないといけないし」
「そうそう」

「マウリアは何か」
「異次元だから」
連合の人間から見ればまさにそうであった。
「っていうか連合にどんどんマウリア人のコロニーができてるけれど」
「あれ何なのかな」
これはそれこそ二十一世紀からだ。太平洋全域にそのインド人のコロニーができていってしまったのである。その国があった。
「あそこはもう」
「何が何だか」
アメリカ人と中国人の言葉だ。
「ここよりずっと凄いよ」
「中華街よりもね」
「マウリアはね」
「ちょっとね」
トムとメアリーはマウリアまでは考えられなかった。
「っていうかこっちはコロニー作れないのに」
「向こうは平気って」
連合は耐えられなくてもマウリアは平気なのである。
「普通に街に牛いるしねえ」
「ナチュラルに」
そのインド人コロニーの特徴の一つである。
「道歩いてるし」
「あれは凄いわね」
「しかも食べ物殆どカレーだし」
「カレーしかないんじゃ？」
それもマウリアの特徴であった。
「それしか」
「多分ね」
「そして他もね」

「凄いから」
何処までもマウリアだった。
「流石にあそこと比べたら」
「駄目かな」
「アメリカでも勝てないよ」
すぐにこう答えるスターリングだった。
「絶対にね」
「絶対になんだ」
「そこまでなのね」
「だから。マウリアは違うから」
それを協調して言うスターリングだった。
「異次元だから」
「そうよね。中国人でも」
蝉玉も話す。
「マウリアは駄目だから」
「アメリカ人でもだよ。どうしてもね」
「あそこには長居できないわよね」
「エウロパは問題外で」
「そうそう」
実は連合とエウロパの対立のかなり早い時期において、ブラウベルグ登場の頃の欧州の宇宙への出発の時にだ。エウロパにいる連合系の人間は全て退去を命じられていたのだ。
当然中国系の者達もだ。それでエウロパには中華街がなくなったのだ。
「サハラは戦乱があるし」
「マウリアはそんなのだから」
「アメリカ人や中国人でも無理だったんだ」
「連合の外は」
「そうだよ。特にマウリアはね」
「無理よ」

こんな話をしながらだった。今はジャズを聴くのだった。四人はジャズを心から楽しんでからだ。長い遊びを終えて帰るのであった。

モザイク国家　　完

２０１１・１・２

第二百三十二話　マリオネットその一

マリオネット

マチアがだ。こんな話を聞いた。
「何でも街に出るってな」
「人形が！？」
「ああ、それも不気味な男の子と女の子の人形がな」
それは一体ではないというのだ。
「それぞれあってな」
「それでそれが人を襲うってか」
「人形がか」
こうした話を聞いたのだ。そうしてだ。
マチアはその話をだ。コゼットに話すのだった。
「そんな話があったんだよ」
「何よ、それ」
その人形の話を聞いてだ。コゼットはまずは顔を顰めさせた。そうしてそのうえでだった。声は剣呑なものさせてこう述べるのだった。
「私人形嫌いなのよ」
「そうだったのかよ」
「そうよ、大嫌いよ」
こうまで言うのだった。
「もうね。見ているだけでね」
「虫唾が走るのか」
「寒気もするわ」
つまりそこまで嫌いだというのだ。
「フランス人形も日本の人形もね」
「どれも嫌いか」
「こけしも嫌いだし」

何気に日本のそれも話に出すコゼットだった。
「というか人形ってね」
「どうだっていうんだよ、人形が」
「人の形をしてるじゃない」
「だから人形なんだけれどな」
「そうよ。人の形をしてるから」
だからだというのである。
「もうね。よからぬ霊とかが乗り移りやすいのよ」
「それはよく言われるな」
「そうでしょ。だからよ」
それでだというのであった。
「それはね」
「人形は駄目か」
「何でそんな話したのよ」
今度はマチアへの抗議だった。
「気持ち悪いったらありゃしないじゃない」
「それじゃあこの話は忘れてくれ」
「そうはならないわよ」
マチアの方を見て顔を顰めさせて言うのだった。
「私確かに人形は嫌いだけれど」
「他にまだあるのかよ」
「そういう話を聞くとね。もう事実かどうか確かめずにはいられないのよ」
「複雑な事情だな」
「そうでしょ。それじゃあだけれど」
話はコゼットが中心になっていっていた。軸が移ってきていた。
「その人形って何時出るの？」
「夜らしいな」
マチアはその時間についても答えた。
「真夜中に二体一組でな」

「出て来るのね」
「ああ、そうらしい」
こうコゼットに話す。
「どうやらな」
「そう、真夜中ね」
「真夜中に出て来てそれで人を襲うらしいな」
「ありきたりだけれどそれだけに怖い話ね」
オーソドックスだからこそだというのだ。ありきたりでも怖いものは怖い、人間はよく見るものに対しては習慣的に感じてしまうのである。
「それって」
「そう思うか」
「立派なホラーね」
コゼットは真顔でマチアに話した。
「そこまでいくと」
「特に人形がか」
「私がそうだけれど」
他ならぬ彼女自身がと言ってからだった。
「嫌いな人にはたまらないわね」
「お好きな人にはたまらないじゃなくてか」
「それとは正反対に」
まさに真逆であった。そうした言葉の用法になっていた。

第二百三十二話　マリオネットその二

「もう嫌過ぎるわね」
「じゃあ行かないか？」
「けれど行くわ」
それでもだと。コゼットはそこは強く返すのだった。
「確かに人形は嫌いで嫌いで仕方がないけれどね」
「それでも行くんだな」
「怖いもの見たさもあるけれど」
このことをさらりと話す。何でもないようにだ。
「それ以上によ。若しもね」
「若しも？」
「そんなのが思わぬところから私の前に出て来たらね」
「怖いか」
「思い切り怖いわ」
真顔で話すコゼットだった。
「だからその前によ」
「予防でか」
「そういうこと。出て来る前にこっちから出向いて」
「退治するか」
「やられる前にやれよ」
随分と積極的なことを言うコゼットだった。そしてマチアもそれを受けてだった。その強気でいる彼女に対してこう言葉を返すのであった。
「わかった。それじゃあな」
「二人で行くのね」
「それでいいよな」
「ええ。話の流れはそんな感じだしね」
元々マチアが言い出したことでありコゼットが乗ったからである。

「それじゃあね」
「行くか、今夜にでもな」
「ええ。ただ」
「ただ？」
「二人だけじゃ不安ね」
コゼットは慎重策も述べた。
「人間二人だけだとね」
「人間だけじゃか」
「そうよ。他の人、いなければ」
「いなければ？」
「他の動物ね」
こう言うのであった。
「何か連れて行かない？」
「動物か」
「犬とかね」
マチアが最初話に出した動物はこれであった。
「そういうのでどう？」
「犬か。いいな」
「そう。犬だと幽霊とかそうした妖怪とかに強いし」
この時代でも犬はそうした存在に強いと言われているのだ。
「だからどうかしら」
「そうだな。それじゃあな」
「犬、どう？」
「何処かで犬借りるか」
マチアは腕を組み考える顔で述べた。
「ジョンかネロか」
「確かカトリも犬飼ってたわよね」
「そうだよな。犬飼ってる面々も多いからな」
「犬や猫はね」
多いとだ。コゼットもよく知っていた。

「どうしても多いわね」
「そうだな。種類も色々だしな」
「とりあえず大きな犬がいいわね」
コゼットはどんな犬がいいのかも話した。
「それもかなりね」
「シェパードとかドーベルマンとかか」
「ああ、そうそう」
「そうそう？」
「それも強いのがいいわね」
そのシェパードやドーベルマンといった種類の名前を聞いての言葉だ。
「もうね。相当にね」
「強いのがいいか」
「だって。人に襲い掛かってくるんでしょ？」
その人形の話であった。
「だったら。それこそよ」
「戦える犬か」
「それもかなり強く」
「そうだな。確かにな」
「幽霊でも平気で倒せる位のをね」
「わかった。それじゃあな」
「そうした犬に心当たりあるの？」
コゼットは言ったところでだ。彼等の犬の話をした。ここでもだった。

第二百三十二話　マリオネットその三

「ネロのところのパトラッシュとかジョンのところのラッシーみたいな」
「ああした大きくて強くて頭のいい犬か」
「そう、心当たりあるの？」
「そうした犬を借りれる場所ならあるぞ」
「あるの」
「ああ、ある」
こうコゼットに話すのだった。
「うちの学校の生物部だ」
「ああ、生物部ね」
「あそこなら犬も一杯いるしな」
「そうね。犬牧場なんてあるし」
八条学園高等部は動物も実に多い。その生物学部にしてもなのだ。犬だけでも牧場になるだけの多くの数を所有しているのである。
「どんな犬でもな」
「いるわよね」
「じゃあまずはそこだな」
こうコゼットに言うのであった。
「そこに行ってからな」
「そのマリオネットね」
「行ってそれでだな」
「ええ、それじゃあ」
こうしてだった。二人はまずはその生物部に向かうのだった。しかしであった。
そこに行くとだ。こう言われたのだった。
「悪いけれど今犬は」
「貸せない？」

「何でなの？」
「狂犬病の予防注射があるからね」
それでだというのだ。狂犬病の対策はこの時代でも絶対にしなければならないことだった。狂犬病はまだ存在しているからである。
「それでなんだ」
「そうか。それでか」
「それでなんですね」
「狂犬病は怖いからね」
その生物部の部員はこのことを真面目に言うのだった。
「だからね」
「そうだな。それじゃあ」
「仕方ないですね」
「猫も駄目だよ」
部員はそちらもだというのだ。
「猫も狂犬病があるから」
「いや、猫は」
「この場合はいいですけれど」
二人はそちらはいいというのであった。
「けれど猫もか」
「駄目なんですね」
「うん、今貸せる動物は」
何かというとであった。それは。
「爬虫類ならいけるよ」
「爬虫類か」
「それなんですか」
「そう、トカゲにワニに亀に蛇に」
そうした動物達だった。
「カメレオンにね」
「何かな」
「そういうのはちょっと」

「あとはあれ」
あれとだ。部員は言ってから話した。
「恐竜がいるよ」
「恐竜って」
「それなんですか」
「恐竜なら何でもいるよ」
そちらはだといるのだ。恐竜はだ。
「ティラノサウルスとか。アロサウルスとかね」
「いや、そうした恐竜は」
「外に出せないですよね」
「うん、物凄く大きいし凶暴だし」
ティラノサウルスはだ。暴君竜として有名であった。
「外には出せないからね」
「だからそうした恐竜は」
「いいです」
いいというのであった。二人もだ。

第二百三十二話　マリオネットその四

「もっと。人間位の大きさで」
「番犬になるみたいな恐竜がいいですけれど」
「ああ、それだったら」
それを聞いてだ。部員が出してきた恐竜は。
「空がいいかな」
「空？」
「空っていいますと」
「プテラノドンだよ」
空を飛ぶ恐竜、翼竜の代表的存在である。長い嘴とその広い翼がそのトレードマークである。全体的に蝙蝠を思わせるシルエットである。
「それでどうかな」
「プテラノドンか」
「それですか」
「それなら何匹か貸せるよ」
しかもそれは一匹ではなかった。
「それでどうかな」
「どうする？」
「そうね」
マチアとコゼットはここで顔を見合わせて相談した。
「ここはな」
「それにする？プテラノドンに」
「しかしな。空か」
「それが問題なのね」
「いや」
しかしだった。マチアはここで考える顔になって言うのだった。
「それもかえっていいかもな」

「空からだとなのね」
「ああ、空からの方がよく見える」
それでだというマチアだった。
「だからな」
「そうなのね。それじゃあ」
コゼットもマチアのその言葉に頷いた。そしてだった。
二人はだ。部員に顔を戻して話すのであった。
「それじゃあプテラノドンね」
「御願いします」
「よし、じゃあ」
こうしてだった。話は決まりだった。
二人はだ。そのプテラノドン達を借りてだ。謎のマリオネット達を探し出しそのうえでだ。退治することにしたのであった。そうしてであった。
夜空にだ。二人は空を飛ぶのだった。プテラノドンの背中に乗りだ。
二人で一頭に乗っている。他のプテラノドン達はその二人が乗っているものについていっている。丁度編隊の形になっている。
その中でだ。コゼットはまたマチアに尋ねた。
「ねえ」
「何だ」
「この事態予想した？」
彼女がここで尋ねるのはこのことだった。
「恐竜に乗って空を飛ぶって」
「いや」
その問いには首を横に振っての返答だった。
「全然だ」
「そうよね。犬じゃなかったらね」
「普通は他の動物だな」
「ましてや恐竜なんてね」

「おまけに翼竜だ」
サプライズにサプライズが重なっていた。
「こんなことは流石にな」
「思いも寄らなかったわね」
「そうだよ。しかし」
「しかし？」
「よく見えるな」
翼竜から下を覗き込んで言うのであった。
「何もかもがな」
「そうね。道を普通に歩くよりもね」
「町全体が見える」
このことにだ。マチアもコゼットも満足しているのだった。
「これっていい感じねえ」
「かえってこっちの方がいいか」
マチアは上から町全体を見ながらこうも言った。

第二百三十二話　マリオネットその五

「こうして見てな」
「これはすぐに見つかるかしら」
「本当にいたらな」
「本当にいたらなの」
「ああ、すぐに見つかる」
本当にいる、つまり実在したらだと言うマチアであった。そしてコゼットはその言葉の意味についてすぐに尋ねるのであった。次に尋ねたのはこのことだったのだ。
「実在なのね」
「いないかも知れない」
「つまり噂かも知れないっていうのね」
「こうした話には多いからな」
それでだというのだ。話をするその間も恐竜は空を飛び続けている。
「だからな」
「そうね。確かに多いわね」
コゼットもそれは否定しなかった。
「こうした話ってね」
「どうしてもな」
「只の悪戯って可能性も高いし」
「若しくは何でもない話に尾鰭がついたとかな」
「何てこともないって可能性もね」
「否定できないからな」
マチアはその可能性を頭に入れて話すのだった。
「どうしてもな」
「ううん、じゃあ今夜飛んで何もなかったら」
「話はそれで終わりだ」

マチアの言葉は素っ気無いものであった。
「そういうことだな」
「わかったわ。じゃあ今夜ね」
「見つからなかったらな」
「終わりね」
二人でこう決めた。そうして夜空を飛んでいるとだ。一時間程したところで。
「んっ？」
「あれは」
何処からかだ。悲鳴が聞こえてきたのであった。
「あの悲鳴は」
「ひょっとすると」
「ひょっとするかもな」
「そうよね」
二人で顔を見合わせて言い合う。
「そっちに行ってみるか」
「ええ、そうしましょう」
こうしてだった。その悲鳴がした方に恐竜を向かわせる。すると。
「あれは」
「まさか」
二人は見た。彼等の真下にだ。それがいて女子大生らしく女の人を襲っていたのだ。
「あれよね」
「ああ、間違いないな」
マチアはコゼットのその言葉に頷いた。
「あれはな」
「どうする？それで」
「この場合はやっぱりな」
「あの人助けるのよね」
「そうするしかない」

見捨てるという選択肢はなかった。それでだ。マチアが笛を出したのだった。犬笛と同じく恐竜を操る笛である。この時代にはこんなものもあるのだ。
「それじゃな」
「恐竜達であの人形達をね」
「この連中ならいけるだろう」
見ればその人形は二体ある。男の子と女の子のものだ。その人形達が女の人に迫っていたのだ。上からだと実によく見えた。
そうしてだった。マチアはコゼットにまた話した。
「仕掛けるぞ」
「うん、それじゃあね」
恐竜達を急降下させた。その嘴でだった。
人形達を攻撃した。すると。
「やった!?」
「ああ、この感じは」
いけたと思った。二人共だ。
「恐竜の急降下だからな」
「人形じゃひとたまりもないわね」
「ああ、間違いない」
マチアは断言した。

第二百三十二話　マリオネットその六

「それはな」
「じゃあ確かめましょう」
コゼットはその翼竜の背からこうマチアに話した。
「その残骸をね」
「そうだな。一応は確かめないとな」
念の為ということだった。マチアも彼女のその言葉に頷いた。
「それじゃあな」
「絶対に粉々になってるわよ」
コゼットもそれを確信していた。その証拠に声が笑っていた。
「だからね」
「ああ、じゃあな」
こうして二人は翼竜の背から降りて人形達がいた場所を見る。確かに人形達は粉々になっていた。しかしそこにはだった。
「えっ、まだいるわよ」
「何だ、これは」
コゼットもマチアもだった。そこに立っている二体の人形達を見て驚きの声をあげた。そっくりそのままの人形達がそこにいたのだ。
そしてだ。口を耳まで開いてだ。二人に襲い掛かってきたのである。
コゼットがだ。まずマチアに言った。
「ちょっとここは」
「どうするんだ？」
「一時避難しましょう」
こうマチアに提案したのである。
「恐竜の背中にね」
「それが一番安全か」
「だからね」

それでだというのだ。
「そうしましょう」
「そうだな。そしてまたな」
「攻撃仕掛ければいいから」
こう冷静に述べるコゼットだった。いざとなれば肝が据わっていた。
「それが今は一番いいわ」
「わかった。それならな」
「それでいきましょう」
こう話してだった。二人はすぐに恐竜の背中に戻った。しかしであった。
これまで黙っていた女子大生風の女がだ。ここで言うのであった。
「その必要はないわ」
「必要ない！？」
「あっ、そういえば」
二人はだ。ここでその女子大生風の女を思い出したのだった。それで彼女の方に急いで顔を向ける。その彼女を見るとそれは。
黒いロングヘアに落ち着いた顔立ちをしている。ピンクのシャツに白いズボンだ。その格好は普通の女子大生と言えるものであった。
しかしその女がだ。二人に対してこう言ってきたのであった。
「もう。彼等は襲わないから」
「何でそう言えるんだ？」
「そうよ、どうしてなのよ」
二人は怪訝な顔になって彼女に問い返した。
「あんた実際襲われてただろ」
「それでどうしてなのよ」
「それは決まってるわ」
女は今度は不敵な笑みになってきた。
「その人形はね」
「人形は」

「どうだっていうのよ」
「私が作って動かしているものだからよ」
不敵な笑みのままでの言葉であった。
「だからよ」
「作って動かしている」
「この人形達を」
「そうよ」
その通りだというのである。女はだ。
「私が。そうしていたのよ」
「じゃあ今回の騒ぎは」
「あんたが」
「そうよ。私が引き起こしていたのよ」
まさにそうだというのであった。
「この私がね」
「一体何でそんなことをしたんだ」
「そうよ、何でなのよ」
二人はすぐに女に問い返した。
「こんな意味のないことをして」
「何が目的なのよ」
「こうして騒ぎを起こして誰かが来たら面白いからよ」
それが理由だというのであった。

第二百三十二話　マリオネットその七

「だからよ」
「つまりは愉快犯か」
「そうだというのね」
「ええ、そうよ」
「悪趣味な奴だな」
「あんた一体何なのよ」
二人は女の言葉を聞きながらだ。顔を顰めさせた。そのうえで問い返したのだった。
「只の女子大生じゃないな」
「何処の誰なのよ」
「アルセーヌ」
女の声が急に変わった。男のものにだ。
そのバリトンの響きの声でだ。こう二人に言ってきたのである。
「我が名はアルセーヌ」
「アルセーヌ！？」
「アルセーヌってまさか」
「そう、アルセーヌ＝ルパン」
不敵な笑みをさらに強くさせての言葉だった。
「それが私の名前なのだよ」
「まさかあの伝説の」
「怪盗がここに」
「三世から連合に移って三十代」
今度は代の話になった。
「ルパン三十三世なのだよ」
「三十三代目か」
「歌舞伎役者みたいね」
二人は彼を歌舞伎役者に例えてしまった。

「団十郎が何代目だったか」
「五十はいってたね」
「仁左衛門もだったな」
「あそこは七十代よ」
片岡仁左衛門は常に後で襲名させる。それでその分代が多いのである。
「そのルパンもか」
「三十代も続いていたのね」
「そうだ。初代はフランス人だったが」
誰もが知っている話である。ルパンは愛国者でもあった。怪盗であろうともだ。彼は紳士でありその性格は真面目なのである。
「だが今の私はだ」
「日本人か？」
「三代目はそうだったわよね」
「国籍は秘密だ」
言わないというのである。
「トップシークレットだ」
「そうか」
「怪盗だからなのね」
「連合中で活動している」
実に世紀の怪盗の子孫らしかった。
「あえて言うなら国籍は連合だ」
「ああ、そうか」
「そう考えているのね」
「連合を愛する」
愛国心は祖先譲りだった。
「だがだ。私はあくまでだ」
「怪盗だっていうんだな」
「そうなのね」
「その通りだ。それではだ」

不意にだ。顎に手をやった。するとだ。
顔を剥がした。その瞬間に。
身体も何もかもが変わった。何とシルクハットにマントにタキシードの端整な口髭を生やした長身痩躯の紳士が出て来た。それこそは。
「ルパンだな」
「それね」
「如何にも」
その通りだというのである。
「一応私の素顔と思っていてもらおう」
「一応か」
「じゃあ実際の素顔は」
ここでだ。二人は彼の祖先のことを思い出した。そのアルセーヌ＝ルパン一世はというとだ。変装の達人でありそれが高じてなのだった。
「自分でもわからないのか」
「そういうことね」
「如何にも」
やはりそうなのだった。
「その通りだ」
「何かここまで祖先にそっくりだとな」
「ある意味凄いわね」
「一世は尊敬している」
実際にそうだという。

第二百三十二話　マリオネットその八

「三世も無論な」
「あのお笑いもか」
「そうなのね」
連合では三世はアニメで有名になっている。一世とは違って猿に似た女の子に弱い軽い人物像だがそれがかえって人気となっているのだ。
「外見は全然違うけれどな」
「それでも尊敬してるの」
「我が祖先達は誰もが素晴しい」
ルパンは祖先への敬愛の情を隠そうともしない。
「その祖先の名は決して辱めない」
「つまり代々由緒正しい怪盗か」
「それなの」
「そうだ。それはしっかりしている」
彼自身が言う。そうしてであった。
「これはほんの余興だ」
「人を殺そうとかいうのはないか」
「そうなのね」
「私は無闇な血は嫌いだ」
それはしっかりとしていた。
「連合への裏切り者や外道は別だが」
「そこも祖先そっくりだな」
「そうね」
二人はまた納得した顔で話した。
「正しいことではあるな」
「泥棒でもね」
「それも言っておく。それではだ」

ここまで話してだ。ルパンはマントを翻した。そうしてだった。
何処かに姿を消した。そのうえで声だけが聞こえてきた。
「また会おう」
「ああ、またな」
「何が何かわからない初対面だったけれど」
二人の言葉は醒めていた。実にだ。
何はともあれこうしてルパンは姿を消した。人形の話も消えた。
だがこのことはなのだった。すぐにクラス全体に伝わったのだった。
「ルパンっていうよりは」
「二十面相？」
「そんな感じだよね」
その人形を使って人を驚かせるということがである。
「それじゃあ何か」
「そっちの感じだけれど」
「二十面相か」
その名前を聞いてだ。言ったのはタムタムだった。彼はすぐに考える顔になってそのうえでだ。すぐにこう言ってきたのである。
「ルパンにとっては強敵だ」
「強敵なんだな」
「友人って意味ね」
「彼がいるかどうかはわからないがな」
「というか二十面相の名前もな」
「四十面相だった時期もあったわね」
「初代だな」
すぐに突っ込みを入れるタムタムであった。
「それは」
「初代が一時期四十面相と名乗っていたんだったな」
「顔は二十どころじゃないって言い出して」
実際にその変装は二十では済まなかった。若しかすると四十よりも多いかも知れない。この人物もかなりの怪人物である。

「そんな奴だからな」
「実在していたんだ」
「それはわからない」
タムタムもそこまではなのだった。
「俺は本人じゃないからな」
「まあこの中に変装しているとかな」
「それはないわよね」
マチアとコゼットは流石にその可能性は否定した。
「幾ら何でもな」
「そんな奇想天外はね」
「というか忍び込むのって」
今言ったのはアンジェレッタだった。
「ああいう手の怪盗はしないわよね」
「少なくとも情報を収集するにはなあ」
「ないよね」
「小説を読む限りは」
「確かに」
皆もそれは否定していく。

第二百三十二話　マリオネットその九

「堂々と盗むし」
「情報収集も堂々と」
「怪盗っていうか愉快犯だけれど」
「それでもね」
「まあとにかくよ」
ここでまた言うコゼットだった。
「ルパンがどうしてここに出て来たのかね」
「それだな。何故だ？」
マチアもそのことについて考える。
「ここに何かあるのか？この町に」
「八条学園に？」
「うちに？」
何人かがこう考えた。
「それでここに？」
「まさか」
「だとしたら何を盗みに来たんだ？」
マチアはルパンが怪盗であることからこう考えた。
「うちの学園は美術館に博物館もあるけれどな」
「そこのお宝を盗みに来た」
「その為にここまで？」
「まさか」
「いや、ひょっとしたらだ」
タムタムもまた考える顔になっていた。そのうえで言うのであった。
「美術館にある宝石や」
「多いよなあ、うちの美術館」
「もう色々な宝石あるし」

「それに」
まだあった。この学園には実に多くのものがあるのだ。
「博物館にも色々と」
「遺跡なり何なり」
「古今東西のものがそれこそ」
「幾らでも」
「うちの学園の博物館は凄いからな」
タムタムは真剣な顔でこのことを指摘する。
「大英博物館なんてめじゃない位にな」
「あんな二流の博物館と比べてもなあ」
「そうそう」
「全然違うからな」
皆言う。連合においては大英博物館はそう言われている。実際にその増量では連合の多くの博物館に負けてしまっている。この時代では。
「まあとにかく」
「美術館か博物館」
「それを狙ってる？」
「ひょっとして」
「美術館で一番凄いのは」
まずはそこから話される。
「写楽の浮世絵とか北斎とか」
「魯山人の筆」
「そういったものがあるけれど」
日本の博物館だからということで所蔵しているのである。
「博物館だとねえ」
「鎧？織田信長とか武田信玄の」
「あと村正」
刀もあるのだ。
「日本のだとそういうの」

「じゃあ」
「日本のもの!?狙ってるのは」
「ルパンが狙ってるとしたら」
「それならだ」
ここでまた言うタムタムだった。
「もう少ししたらだ」
「予告状だね」
「それ来るね」
「それがルパンのやり方だからな」
先祖、それも初代からである。ルパンにしても二十面相にしても盗む前にはまずは何時何を盗むのか堂々と予告をするのである。怪盗は正々堂々としているものだからだ。
「それが来てからだな」
「とりあえずは様子見ね」
「今のところは」
「そうしようか」
皆こう話していく。
「じゃあとりあえずはね」
「普通の学園生活を送るってことで」
「そういうことで」
「問題はあれだな」
ここで言うのはタムタムだった。
「テンボとジャッキーには知られないことだな」
「ああ、そういえばあの二人今いないね」
「好都合だけれど」
「何処に行ったのかな」
皆何気にクラスの中を見回す。二人の姿は何処にもなかった。あのペンギンもだ。

第二百三十二話　マリオネットその十

「また禄でもないことしてるんだろうけれど」
「どうしたのかしら」
「この場合いなくてもいいけれどっていうか」
「いてくれたら困るけれど」
そんな二人であった。
「まあいないならよし」
「それで結構」
「そういうことね」
「何かな」
皆の話を聞いてだ。タムタムはまた話した。
「それで済むのがあるの二人だな」
「悪い奴等じゃないがな」
「それは確かだけれどね」
タムタムにマチアとコゼットも話す。
「それでもな。こと推理になるとな」
「出鱈目もいいところだから」
「どう見ても普通の探偵じゃないからな」
「お笑い探偵よね」
まさにそれだというのだ。やはり皆の周囲への評価は散々なものだ。
「とにかくいないならだ」
「それでいいからね」
「しかし」
それでもだというのであった。タムタムはだ。
「いないとそれはそれで不安だな」
「何時気付いて何するかわからないからな」
「あの二人そういうところもあるから」

とにかく問題の多い二人なのだった。そんな話をしていてだった。
ここでだ。クラスにその二人が戻ってきた。
「あれっ、皆」
「何の話してたの？」
テンボとジャッキーはすぐに皆に尋ねた。
「面白そうな話だな」
「それで何なの？」
「ああ、それな」
「実はね」
マチアとコゼットはさりげなく嘘をつくことにした。その嘘とは。
「アルゼンチン料理のステーキがな」
「今凄いことになってるのよ」
食べ物の話をするのであった。
「もうな。肉がかなりよくなってな」
「しかもソースの味もあがったのよ」
「焼き方も段違いになった」
「付け合せもね」
つまり全体的によくなったというのである。そう言うのだった。
そしてそれを聞いてだ。二人は見事なまでに真に受けたのであった。
「それは本当かい？」
「ステーキがそんなに」
「しかも安くなった」
「最高よね」
この言葉を聞くとだ。二人は余計にであった。
「ジャッキー」
「テンボ」
互いに顔を見合わせて言い合う。
「今から行くか」
「そうしよう」
「ああ、行くといいからな」

「とにかく最高だから」
マチアとコゼットは二人を煽った。
「急げよ」
「さもないと食べられないわよ」
「ああ、わかった」
「それじゃあね」
こうして二人はそのアルゼンチン料理のレストランに向かうのだった。尚授業が近いが彼等はそんなことには全く構わなかった。そしてだ。
二人が去ってからだ。また言うマチアとコゼットだった。
「これでよしだな」
「一件落着ね」
「何かな」
それを聞いてだ。タムタムは言うのだった。
「これで終わるのがな」
「探偵らしくないよな」
「そうよね」
「少なくとも正統派の探偵じゃない」
こう言うしかなかった。
「とてもな」
「少なくともルパンが相手じゃな」
「ちょっとね」
「場違いだから」
「どうしても」
皆で言っていく。
「とにかく。今はね」
「様子見だね」
「ルパンのね」
「何もしてこないってパターンは？」
今言ったのはネロだった。

「それはあるかな」
「それもあるな」
タムタムはその選択肢を否定しなかった。
「結局のところな」
「そうだよね。ルパンの興味のあるものがなければね」
「あるな」
「ルパンって見る目があるし」
このことが非常に重要なのだった。アルセーヌ＝ルパンは芸術については素晴しい目利きでもあるのだ。もっとも彼の目は芸術品以外のものも見分けられたが。
「それも考えたら」
「そうだな。ない可能性もある」
「うちの博物館や美術館でもね」
「芸術の目利きはわからない」
実際にそうだというのであった。
「その道に通じている人間じゃないとな」
「うちのクラスにそういう人いるかな」
「そこまでの人間は」
タムタムも考えていく。
「いるな」
「あっ、そうだね」
ここで気付いたネロだった。そうしてだ。
彼はそちらを見た。そこにいたのは。

マリオネット　　完

２０１１・１・１０

第二百三十三話　ルパンの挑戦状その一

ルパンの挑戦状

ネロも皆も見たその先には。彼女がいた。
「あっ、いた」
「いたね」
「確かに」
「この人が」
「私ですか」
そこにいたのはセーラであった。彼女だったのだ。
「私はそんなことは」
「いやいや、セーラだったらねえ」
「芸術とか美術にも造詣が深いし」
「というかセーラのお家って」
その有り得ない豪邸である。宮殿と言ってもいい。
「美術館あるし」
「博物館も」
「おまけにオペラハウスまで」
そうした場所まであるのである。それがセーラの宮殿なのだ。
「普通に毎日見てるし」
「じゃあやっぱりね」
「セーラが一番よね」
「こうしたことは」
「はい、お嬢様はです」
ここでラメダスが言うのであった。無論ベッキーも傍にいる。
「マウリアにおいても高名な目利きです」
「やっぱりね」
「そうだよね。セーラってね」
「そうしたことに強いよね」

「生まれも育ちもいいし」
芸術についてはやはりこれが重要になるというのだ。それだけ多くのものを見られて感性を養うことができるからだ。それで、である。
「それじゃあやっぱり」
「一旦セーラに見てもらおうかな」
「ここは」
「そうだな、ここはそれがいいな」
タムタムも皆の言葉を受け入れて頷く。
「一旦セーラに美術館と博物館を見てもらって」
「そうしだね、ここは」
「それでルパンが何を狙っているか」
「事前にそれを確かめて」
「それから」
こう話してであった。皆まずは美術館に向かうのであった。
美術館にはだ。それこそ様々な芸術品が展示されていた。中には。
「日本刀多いなあ」
「何本どころじゃないし」
「ええと、正宗？」
「こっちは菊一文字」
「あっ、関の孫六」
「虎徹まで」
とにかく多くの名刀があるのであった。そして中には。
「ええと、妖刀！？」
「村正！？」
「何だろう、これって」
「これは」
セーラがだ。その日本刀を見て言うのだった。
「素晴しい刀ですね」
「妖刀ってあるのに？」

「それでも？」
「妖気の類はありません」
そうしたことまですぐにわかるセーラだった。
「ただ。美しさがです」
「それが凄いんだ」
「この刀って」
「そちらの正宗と並んで」
もう一方のそれも見ての言葉だった。
「素晴しい刀です」
「じゃあこれかな」
「ルパンが狙うとしたら」
「やっぱり」
「この刀を」
「可能性はあります」
実際にこう話すセーラだった。

第二百三十三話　ルパンの挑戦状その二

「芸術品としての価値はかなりのものですから」
「ううん、じゃあマークしようか」
「この刀ね」
「これも」
「あとは」
そうしてだった。美術館の中をさらに見るとだった。今度は。
一枚の浮世絵があった。それは。
写楽だった。彼の浮世絵がそこにあったのだ。セーラはそれを見てまた言う。
「これは先程の刀よりもです」
「価値があるの」
「そうなんだね」
「国宝ではないのですか？」
セーラは真剣にこう話した。
「ここまでの価値があるものだと」
「そういえばなってたかな」
「そうだよね」
「確かね」
皆で話す。
「じゃあこの浮世絵は」
「かなり危ない？」
「やっぱり」
「そう思います。それにしても」
セーラはその写楽の浮世絵をさらに見ていく。それは歌舞伎役者のものだった。江戸紫の鉢巻に黒い着物に赤褌に傘のその男は。
「これは助六ですか」
「うん」

ここでは管がセーラの問いに答えた。
「そうだよ」
「歌舞伎の役の一つですね」
「そうなんだ」
管はここでさらに説明する。
「十八番の一つだよ」
「歌舞伎は今勉強中ですが」
セーラは日本文化も勉強しているのだ。その教養はかなりのものである。
「色々な役があるのですね」
「市川団十郎の家の十八番の一つ」
今度はこう話す管だった。この時代も歌舞伎の家がある。
「成田屋の」
「成田屋ですか」
「そう。そこの家の芸の一つなんだ」
「それが江戸時代にもあったのですか」
「そうなんだ。それで描かれたんだね」
「これはどうも」
セーラはその写楽の助六を見ながらさらに話す。
「危ないです」
「盗むのならこれ？」
「やっぱりこの浮世絵？」
「これをなんだ」
「狙うとすれば」
「可能性は高いです」
また言う。セーラはその間も絵を見続けている。彼等はかなり警戒していた。
そして次の日だった。美術館の話題が出ていた。
「美術館に来たらしいぞ」
「犯罪予告だ」

「浮世絵を盗む」
「三日後の夜の十二時にだ」
そう来ればだった。誰が出したのか一目瞭然であった。
「ルパンだ」
「ルパンからの予告状だ」
「遂に日本にも来たんだな」
「あの怪盗が」
ルパンは既に連合全域で有名になっていた。それも先祖代々である。
「それで浮世絵を盗むか」
「相変わらず大胆な奴だ」
「ここはどうすればいいんだ？」
「警察か？」
「いや、警察は役に立たないだろ」
警察は真っ先に否定された。
「代々取り逃がしてるんだぞ」
「そういえば捕まえたことないな」
「一度もないぞ」
そうなのであった。
「警察は怪盗には相性が悪いからな」
「二十面相も捕まえていなかったな」
「ああ、一度もな」
こちらの怪盗も駄目なのだった。

第二百三十三話　ルパンの挑戦状その三

「じゃあここはな」
「探偵だな」
「ああ、怪盗には探偵だ」
「これしかない」
結論が出された。
「じゃあ探偵を呼ぼうか」
「どの探偵かだな」
「ホームズかネロか」
「ポアロか？」
「誰にする？」
そんな話をしているとだった。呼ばれてもいないのに。
「探偵ならな！」
「私達ね！」
あの二人が来たのであった。
「やってやるぜ！」
「アルコール＝メチールを絶対に捕まえるわ！」
「いや、アルセーヌ＝ルパンだろ」
「それを言ったら」
クラスメイト達はすぐにジャッキーの間違いに突っ込みを入れた。
「久し振りの言い間違いだけれど」
「普通間違えるか？ルパンの名前なんて」
「探偵とか以前に人間として」
「間違えないだろ、あんな有名人」
「全くよ」
皆そのことにかなり呆れていた。
「全く。この連中は」
「ここぞって時に出て来るし」

「こりゃ今回の事件は」
「ルパンの完全勝利ね」
圧勝どころではなかった。完全だというのだ。
「さて、じゃあ」
「ここはもう諦めて」
「ルパンの華麗な盗みを見るか」
「そうね」
皆完全に匙を投げた。しかしである。セーラだけだ。
己の従者であるラメダスとベッキーにだ。こう話すのだった。
「今回の話ですけれど」
「はい」
「どうなると思われますか？」
「ルパンさんは盗めないです」
こう言うのであった。
「今回は」
「それはないですか」
「盗めないのですか」
「そう思います」
冷静な顔での言葉だった。
「この場合は盗めなかったらそれでいいのです」
「盗むのはあれですが」
ラメダスも主に対して返す。冷静な顔でだ。
「その写楽の浮世絵ですね」
「はい、それです」
予告状で告げられていたのはそれだったのだ。美術館の看板の一つであるその写楽の助六の浮世絵を盗むと書かれていたのだ。
「それを盗むことはです」
「ないですか」
「そうだというのですね」
「私はそう思います」

またラメダスとベッキーに話すのだった。そしてだ。
二人はだ。セーラにあらためて話した。
「ではお嬢様、ここは」
「私達は」
「見ているだけでいいです」
やはり冷静に述べるセーラだった。
「ではそれで」
「はい、それでは」
「今回は」
「それでなのですが」
ここまで話してだ。セーラは二人にこう話してきた。

第二百三十三話　ルパンの挑戦状その四

「今夜のことですが」
「宮殿でのパーティーですね」
「そのことですね」
「この学園にいるマウリアの方々をお招きした」
そうしたパーティーであるというのだ。セーラの屋敷、誰がどう見ても巨大な宮殿のそれにはマウリアの同胞達がよく呼ばれるのだ。
そのパーティーについてだ。彼女は二人と話す。
「そちらの準備は」
「順調です」
「今夜無事開かれます」
こう話す二人であった。
「ではお嬢様、今夜は」
「そちらにですね」
「参りましょう。それにしても」
セーラはここでだ。微笑んで話すのだった。
「あの方は連合でもですね」
「そうですね。元気にしておられますね」
「活躍されていて何よりです」
「あの時のことを思い出します」
笑顔でまた話すセーラだった。
「あの方とは何度もでしたし」
「そうでしたね。激しい攻防でした」
「あの時のことは忘れません」
二人もセーラの話に応える。
「あの方は。怪盗でありながらも実に見事な方です」
「紳士ですし」
どうやらだ。渦中の人物についての話らしい。

「その方と再びですか」
「それも運命ですね」
「御会いできるとは思いませんでしたが」
「それでもとは」
「今回はです」
セーラは微笑みながら話す。少女らしい可愛い笑みだがそこには優雅さと気品もあった。その心がそのまま出ている笑みであった。
その笑みでだ。彼女はさらに話すのだった。
「おそらくは」
「今夜ですね」
「来られますね」
「招待していますので」
セーラはまた言った。
「お招きには応じられる方です」
「そうした意味でも紳士である方です」
「見事な怪盗ですね」
「私も。そう思います」
こんな話をする三人だった。三人だけは落ち着いていた。他のクラスの面々と違いだ。楽観さえしていたのであった。
その他の面々はだ。やはり諦めきっていた。
「ああ、駄目ね今回」
「もうあれ？ここぞって時に絶好調の一番苦手な奴が出て来た」
「そんな感じ？」
「そうよね」
こう話していくのだった。
「もう何があってもね」
「今回は終わりね」
「勝てない勝てない」
「ルパンにあの二人って」
「絶対に」

こう言って諦めていた。そしてだ。
「ルパンもなあ」
「相手があれじゃあ」
「張り合いがない？」
「そうよね」
何時の間にかルパンの側に立って話していた。
「お笑い怪盗ならよかったのになあ」
「ルパンってシリアスだから」
「どうしてもね」
「その辺りは」
こうしてだった。ルパンの完全勝利を確信していたのだった。そして。
ルパンはだ。既に正装であった。タキシードにマント、それにシルクハットというだ。先祖代々の正装になって部下達に言うのだった。

第二百三十三話　ルパンの挑戦状その五

「ではだ」
「はい、いよいよですね」
「この星ではじめての狩りですね」
「それをですね」
「そうだ、それをする」
まさにそれだというのだ。
「今からだ」
「大胆かつ華麗にですね」
「今回もですね」
「やられますね」
「その通りだ」
また答えるルパンであった。一行は密室にいる。彼等のいるアジトにだ。その中の一室でだ。彼等の言うその狩りをするというのだ。
その中でだ。彼はふと言った。
「そういえばあの美術館がある学園にだ」
「あの魔女がですか」
「いるようですね」
「セーラ＝シヴァ」
彼女の名前をここで出すルパンだった。
「彼女がいるとはな」
「面白いことです」
「あの少女がいるとなると」
「またあの勝負がですね」
「できますね」
「狩りは素晴しい美術品を手に入れるだけではないのだ」
美学であった。ルパンのだ。
「そこに素晴しい相手がいなければならない」

「はい、そうであってこそです」
「狩りは価値があります」
「勝負があってこそ」
「その通りだ。初代からだ」
その伝説的怪盗からだというのだ。
「初代のルパン家の伝統だ」
「その勝負の中で華麗に狩りを行う」
「しかも正々堂々と紳士的にですね」
「それを果たしますね」
「見事に」
「そうする。今回もな」
また言うルパンであった。
「では。まずはだ」
「挨拶ですね」
「魔女に」
「全てはそれからだ」
ここでだ。ルパンはマントを翻す。黒で裏地が紅のそのマントをだ。黒の中に紅がだ。見事なまでに映えていた。
「私の今回の狩りはだ」
「ではルパン様」
「行ってらっしゃいませ」
「是非」
部下達も彼に告げる。恭しくだ。そこには絶対の忠誠があった。
そしてルパンも言うのであった。
「狩りに必要なものはだ」
「騎士道ですね」
「まさに」
「連合にはないものだがな」
そもそも騎士やそうした貴族的なものを否定している。それが連合である。だがルパンはここであえてそれを言うのであった。

「騎士道はな」
「あるのはスポーツマンシップですね」
「それはありますが」
「あとは」
彼等が今いるのは日本だ。日本ならばだ。
「武士道ですか」
「それになりますか」
「思えばルパン家も連合に入って久しい」
三代目からである。一説には二代目からだともいう。尚初代も日本の空手や柔道をたしなんでいた。縁はそこからだった。
「では騎士道ではなくだ」
「スポーツマンシップですか」
「若しくは武士道ですね」
「スポーツマンシップだな」
彼が選んだのはそれだった。
「私はどうも武士ではないからな」
「そちらですか」
「スポーツマンシップだと」
「それだと仰いますか」
「そうなるな」
まさにそうだと。ルパンも認めた。
「狩りはスポーツだからな」
「では。スポーツマンシップに則り」
「今回も」
「まずは挨拶からですね」
「それからだな」
こう実際に部下達に話す。そうしてであった。
「では。久し振りにだ」
「あの魔女と」
「御会いされて」

「挑戦状は送った
しかしともいうのだ。
「だが。挨拶もしよう」
「そしてそれをですね」
「戦いのはじめとするのですね」
「そうだ、狩りのだ」
こう言ってであった。彼等も動きはじめる。ルパンが動きはじめた。

ルパンの挑戦状　　完

2011・1・14

第二百三十四話　怪盗と魔女その一

怪盗と魔女

セーラはだ。八条学園にいるマウリア人達を集めてパーティーを開いていた。そこは白い大理石と絹の舞踏の間であった。そこにおいてだ。

セーラはマウリアの礼装でいた。そして客人達に話していた。

「皆様」

「あっ、お嬢様」

「どうも。今宵は」

「はい、存分に楽しんで下さい」

にこやかな笑顔で客人達に話す。

「マウリア料理と音楽を」

「それでは」

「喜んで」

「祖国のものが一番馴染むものです」

これは誰でもだ。マウリア人でもだ。

「ですから今宵は祖国のものを」

「有り難くそうさせてもらいます」

「喜んで」

彼等も応えてだった。そうしてであった。

その馳走に歌を楽しむ。マウリアの踊りもだ。

それは社交ダンスではない。マウリア独特の踊りだ。彼等はマウリアの服でその踊りを踊りながらだ。笑顔でその場にいるのだった。

そしてだ。セーラはだ。ラメダス、ベッキーと話をするのだった。

「皆さん楽しんでおられますね」

「はい、お嬢様」

「楽しく」

「いいことです」

笑顔で頷くセーラだった。
「宴は楽しむものですから」
「シェフ達も喜んでいます」
「皆様が食べて下さっていますので」
それでだというのだった。
「カレーも今宵のは違います」
「特別に二百種類も用意しました」
「いいことですね」
カレーについてもいいというセーラだった。
「まことに」
「はい、それでなのですが」
「ここにです」
「来られるのですね」
セーラは穏やかな顔のまま話す。
「あの方が」
「もう来ておられます」
「既にです」
ラメダスとベッキーは主に対してこう述べたのだった。
「この宴の場にです」
「どうされますか、それで」
「はい、御会いします」
これがセーラの返答だった。
「是非共」
「わかりました。それでは」
「私達も」
「あの時のことを思い出しますね」
共にいると話した二人にだ。セーラはこうも話した。
「私達が共にあの方と勝負を続けた日々を」
「確かに。数多くの素晴しい戦いを繰り広げました」
「よい日々でした」

「あの時もまた非常に楽しかったです」
セーラはこう話していく。
「では。あの日々を思い出しながら」
「はい、それでは」
「今から」
三人はその場において待った。するとだ。
白いターバンを巻いたマウリア式の礼装の男がだ。三人の前に来た。瀬が高くすらりとした容姿の端整な紳士がだ。三人の前に来たのだ。
セーラはだ。すぐに彼にこう言った。
「ようこそ」
「はい」
紳士はだ。気品のある笑みで彼女の言葉に応えた。
「お久し振りです」
「そうですね。お元気そうで何よりです」
「ここに来たのはです」
セーラに対してこうも言うのだった。
「挨拶に参りました」
「狩りの前のですね」
「また貴方達と競えることを喜んでいます」
紳士は礼節を崩さずセーラに述べる。
「心から」
「そうだというのですか」
「貴女もそうではないでしょうか」
セーラに問い返す。

第二百三十四話　怪盗と魔女その二

「違いますか」
「そうである筈でしたが」
しかしだ。セーラはここでこう彼に返した。
「今回はです」
「今回はとは」
「私の出る幕はありません」
微笑んでだ。こう彼に述べるのだった。
「どうやら」
「貴女との勝負ができない」
「それでいいでしょうか」
「残念です」
彼は声に実際にその感情を見せていた。
「それはまた」
「また機会があれば」
「そうですね。残念に思うのは一度で充分です」
過去は反省はするがそれに捉われることはない。これも彼の美学だ。
「ですから」
「はい、それでは」
「それで御聞きしたいのですが」
だが、だった。彼はここでこう切り出してきたのであった。
「今回の私の相手は」
「残念ですがそれも」
「いないと」
「そうなります」
こう彼に話すのであった。
「それで宜しいでしょうか」

「私は美を求めます」
だからこそだというのであった。彼が『それ』をしているのは。
「ですがそれは相手があってのこと」
「では相手がいなければ」
「それは求めません」
こう言うのであった。
「その時はです」
「そうですね。貴方はそうした方ですね」
「私は全てにおいて正々堂々とありです」
「そして美を求められますね」
「そうでなくて何の楽しみがありましょう」
毅然として語る。それはセーラに対しても全くひけを取らない。
一方の雄としてだ。彼女と堂々と対しているその姿は見事ですらある。
「違うでしょうか」
「その通りです」
セーラも微笑んで返す。
「私も貴方に同意致します」
「左様ですか」
「はい、そうです」
微笑みはそのままであった。
「では。また」
「御会いしましょう」
「お待ち下さい」
彼が去ろうとするところでだ。セーラは呼び止めたのであった。
「これでお帰りですか」
「なりませんか」
「もう少し楽しんでいかれては」
こう彼に勧めるのであった。
「そうされてはどうでしょうか」

「この宴をですね」
「そうです。そうされてはどうでしょうか」
「レディーの申し出を断るのも無作法というもの」
折り目正しい言葉でだ。語った彼であった。
「それでは」
「はい、それではですね」
「お言葉に甘えさせてもらいます」
これが彼のここでの決断であった。
「それで宜しいでしょうか」
「是非共」
こうしてであった。彼はその宴に残ることになった。そうして礼節を守りながらマウリアの馳走と美酒を存分に楽しむのであった。
その彼を見てだ。ラメダスとベッキーがセーラに話してきた。
「お話は如何でしたか」
「そちらは」
「はい、楽しく過ごせました」
にこりと微笑んで答えるセーラだった。

第二百三十四話　怪盗と魔女その三

「お話をお伝えすることもできました」
「そうですか。それではですね」
「久し振りの再会は」
「非常によかったです」
こう言うことができたのだった。
「ただ。勝負はないことはです」
「残念だというのですね」
「あの方は」
「それはと仰っています」
「やはりそうですね」
「そう仰いますね」
ラメダスとベッキーも話を聞いて納得した。そうして言うのであった。
「ですがそれでもです」
「テンボさんとジャッキーさんは」
「あの方の狩りを防がれます」
セーラはそこにも注目してみせた。そのうえでの言葉だった。
「ですからそもまた、です」
「美術品を守ることになる」
「そういうことですね」
「はい。私とあの方は五分と五分」
実力についての話である。
「ですから。私が敗れればです」
「あの写楽の浮世絵は盗まれてしまいますね」
「それで」
「それは今回は避けなければなりません」
そう考えての今回の行動であったのだ。それを言うセーラだった。

「ですから」
「わかりました。それでは」
「今回はですね」
「あの方々ならやってくれます」
セーラは完全に信頼している声であった。
「絶対にです」
「皆さんはそうは思っておられませんが」
「クラスの皆さんは」
「それは御存知ないからです」
そのせいでだというのだ。
「ですから」
「しかしお嬢様は信頼されていますね」
「あの方々を」
「その人がどういう人かわかっていれば」
セーラはここでこんなことを話した。所謂人間論に基づくものだ。
「信頼できます」
「逆に言えばわかっていればですか」
「信頼できないのですね」
「そうなるものですね」
「人というものは」
「はい、その通りです」
まさにそうだというのであった。セーラの人間論は深い。
その深い人間観をだ。ここでラメダスとベッキーに話すのだった。
「その人をよく知り判断するべきなのです」
「信頼するかそうしないか」
「それを」
「残念なことにです」
また話すセーラであった。
「信頼されるに値しない人もまたいます」
「そうした人は何処にもですね」

「いますね」
「連合にもマウリアにもエウロパにもです」
どの国にもというのである。
「そしてサハラにも」
「そして何時の時代にもですね」
「そうした人はいますね」
二人が言うとであった。また、であった。
「そして人々の中にいる」
「そういうものですね」
「その通りです。それを見極めるのが難しいのです」
セーラは見ているのだった。そうしたことをだ。
「私もかつて」
「彼ですね」
「あの御仁ですね」
「信頼していました」
セーラのその目が遠いものになった。悲しみも帯びている。
「しかしあの人はです」
「お嬢様の信頼を何度も裏切り」
「しかもそれを自覚せず反省もせず」
ラメダスとベッキーもだった。セーラと同じ目になっている。

第二百三十四話　怪盗と魔女その四

「そうして周りの信頼も完全に失いました」
「信頼という宝を」
「そう、信頼は宝です」
まさにそうだというセーラだった。
「それがあるかないかによって人はです」
「その人生が大きく変わる」
「そうですね」
「その通りです。信頼を失うということは非常に恐ろしいことなのです」
「それを自覚できない人は」
「では」
「とても悲しい人です」
まさにそうだというのである。
「あの人もまた」
「今では親族全員からも見放されたそうです」
ラメダスはその人物の末路を話した。そのセーラの信頼を何度も裏切りそれを自覚することも反省することもなかった人物のことをだ。
「そして禁治産者に認定されたそうです」
「それではですね」
「はい、破滅しました」
完全に社会的無能力者と断定されたからである。
「精神病院に隔離されたそうです」
「精神病院にですか」
「何度も平気で嘘をつき背信行為を何度も行ってきたからです」
「その結果ですね」
「そうです。隔離されました」

あまりにも他人への有害な行動を繰り返した結果である。
「そうしてです」
「社会的には抹殺されましたか」
「どうしようもなかったようで」
「わかりました」
セーラは悲しみを帯びた言葉で頷いた。
「そのことは」
「ああなると思っていました」
「私もです」
ラメダスだけでなくベッキーも話した。
「ああしたことを繰り返せばです」
「完全に破滅するものですから」
「しかし御本人はですね」
「何故自分が精神病院に入れられているか理解できないそうです」
それも自覚していないと。ラメダスは話すのだった。
「自己弁護と責任転嫁の言葉しか言わないそうです」
「誰からも信頼されなくなり人にとって益になることができないと認定されてもですね」
「はい、そうなっています」
考えようによっては悲劇であった。自業自得であるが。
「おそらく一生精神病院です」
「重度の人格障害者としてですか」
「はい、そうです」
この時代の連合やマウリアでは人格障害についてかなり研究されている。そうしてそれによって精神的な治療が為されているのである。
「そうなっています」
「そうですか」
「最早隔離するしかないそうです」
「あまりにも障害が酷過ぎてですね」

「完全に禁治産者と断定されていまして」
だからだというのである。
「それでなのです」
「わかりました」
「仕方ありませんね」
ラメダスは溜息と共に述べた。
「これは」
「はい、残念な話ですが」
セーラは遠い目をして述べた。
「あの様なことではそうなるのが当然の結果です」
「それでお嬢様」
ここでだ。ベッキーがセーラに言ってきた。
「あの方は」
「確かに怪盗ですが人柄は立派ですね」
「はい、そうですね」
「本来の職業も持っておられますし」
実はそうなのだった。それもあるというのである。
「しっかりと」
「あっ、そういえばあの人の本職は」
「何なのでしょうか」
「株をやっておられます」
それをだというのだ。実はそこまで知っているセーラであった。

第二百三十四話　怪盗と魔女その五

「そしてマンションや農園を代々持っておられます」
「そうだったのですか」
「それで資金をですか」
「手に入れていた」
「そうだったのですか」
「それは初代の方からでした」
セーラの話は初代まで遡る。その伝説の怪盗からだ。
「あの方は最後は薔薇の栽培をして暮らしておられました」
「財産はそこからでしたか」
「あそこからですか」
「三代目も何かしていたのかも知れません」
連合で今も人気の日系とのハーフの怪盗である。ルパン家にしても今では混血して完全に連合の人間となっている。フランスの血はもう殆どない。
「本職を」
「ううむ、そうだったのですか」
「本職を持っておられるのですか」
「それは殆どの人が知りません」
セーラはこのことも話す。
「怪盗の個人情報は秘密ですから」
「しかしお嬢様は知っておられるのですね」
「それもまた」
「おそらく私と他には僅かな方だけです」
「そうですか、やはり」
「そうなのですね」
「はい、そして」
そしてだというのであった。セーラはさらに話す。

「私はあの方のことはこれ以上はを誰にもお話しません」
「わかりました。それでは」
「私達も」
聞かないというのだった。それはわきまえている二人だった。
そしてそのうえでだ。彼等はまた話すのであった。
「そのうえで怪盗をやっておられましたか」
「そうされていたのですか」
「はい、やっておられます」
こう話すのであった。
「そうした方なのです」
「ううむ、これは一体」62
「妙なことですね」
「妙でしょうか」
セーラは何でもないといった口調であった。
「あの方にとっては怪盗は家の仕事なのです」
「家系の仕事ですか」
「そうだというのですか」
「そうなります。無論楽しんでされていますが」
「複雑な話ですね」
「全くです」
二人にはわからない。しかしセーラにはわかることだった。
その自分がわかることをだ。セーラは言うのであった。
「ですから私はです」
「あの方のその家系の仕事にですね」
「正面から向かわれていたのですね」
「また機会があれば」
セーラは微笑みに戻っていた。
「そうさせてもらいたいです」
「お嬢様も楽しまれていますね」
「そうですね」

「はい、そうです」
その通りだというのである。
「自然とそうなっています」
「自然にですか」
「なられていますか」
「最初の勝負の時からですが」
こうした意味において彼女は生粋の探偵であった。怪盗と対決する存在が探偵とするならばだ。彼女はまさに生粋のそれであった。
その生粋の探偵としてだ。セーラは今言っているのであった。
「では、です」
「はい、それでは」
「今はですか」
「私達のすることはありません」
またこう話すのだった。

第二百三十四話　怪盗と魔女その六

「ですからです」
「この宴を楽しむのですね」
「とりあえずは」
「宴は何の為にあるのか」
セーラは自然にそのことも話した。
「それはです」
「楽しむ為にある」
「その通りですね」
「はい、そうです」
まさにその通りだとだ。二人は話すのであった。
「それではです」
「私達もですね」
「是非ですね」
「カレーを食べましょう」
マウリア料理の定番である。看板と言ってもいい。
「まずは」
「はい。それでは」
「何カレーが宜しいでしょうか」
「羊のカレーを」
カレーといっても様々な種類がある。特にマウリア人に言われるとだ。
「それを御願いします」
「甘口ですか、辛口ですか」
「どれにされますか」
「中辛を御願いします」
辛さも色々なのだった。
「香辛料は適度なものを」

「このカレーの味の微妙な違いですね」
「それですね」
ここで二人はこのことも話したのだった。
「それがわかるかどうかですね」
「味を楽しむというのは」
「そうですね。ただ、連合では」
ここでだ。セーラは少し寂しげな顔になった。そのうえでの言葉だった。
「それがわかる方はどうも」
「はい、少ないです」
「それも非常に」
「カレーの味は一つではないのです」
セーラの言葉である。
「様々な種類があるのです」
「しかし連合ではそれがわかる方はです」
「少ないですね」
「連合は多くの味があり過ぎるのですね」
それを話すのだった。連合の味もだ。
「ですからカレーの違いがです」
「はい、残念なことに」
「それがわからないのです」
「私も無念です」
「どうしても」
こう話す彼等であった。彼等にしてもマウリア人である。だからこそカレーの味の違いがわからない連合には物足りなさを感じているのだった。
それを実際に口に出して言うとだ。自然にだった。
「では私も」
「私もです」
「はい、それでは」

セーラも彼に応えて話す。
「一緒にカレーを食べましょう」
「私は鶏肉のカレーを」
「私は野菜カレーを」
ただしカレーの種類はそれぞれ違っていた。
「辛口でいこうと思います」
「私は甘口で」
「では私は二杯目のカレーは」
実は意外と大食のセーラである。カレーをいつも何杯も食べるのである。
「カツカレーにしましょう」
「連合風ですね
「それでいかれるのですね」
「連合のカレーも美味ですから」
それでだというのだ。
「ですから」
「では私も二杯目はです」
ラメダスもおかわりについて話す。
「連合風にハンバーグカレーといきましょう」
「私はシーフードカレーを」
ベッキーはそれだというのだ。
「それにしたいです」
「カレーは本当に様々な種類がありますね」
セーラは微笑んで話した。
「素晴しい食べ物です」
「カレーは宇宙ですから」
ベッキーの言葉だ。

第二百三十四話　怪盗と魔女その七

「まさに全てです」
「はい、そしてそれを食べるということは」
「宇宙を食べることに他なりません」
話が異様に大きくなっていた。ある意味非常にマウリアらしい。
「では今よりその宇宙を」
「召し上がるとしましょう」
「そしてそのうえで、です」
セーラは真面目な顔になって述べた。
「見守りましょう」
「怪盗と探偵の戦いを」
こうしてだった。三人は今は静かに見守るのであった。
そしてルパンはだ。挨拶の後で己のアジトに戻ってだ。同志達に話すのだった。
「さて、それではだ」
「はい、挨拶は如何でしたか」
「それは」
「やはり素晴しい方だ」
セーラのことをだ。笑顔で話すのだった。
「私の生涯のライバルの一人に相応しい」
「左様ですか。それでは」
「今回もですね」
「あの方との勝負ですね」
「いや、残念だが今回は違う」
それは否定するルパンだった。
「今回の相手はだ」
「セーラ様ではないとなると」
「一体」

「また別の相手らしい」
そしてだ。ルパンはこうも言った。
「だがどういった相手かは私もまだ知らない」
「それを知るのはこれから」
「そういうことですね」
「そうだ、これからだ」
そうだというのであった。ルパン自身もだ。
「調べるとしよう」
「ではすぐに」
「今回の勝負の相手について」
「調べましょう」
「高校生の探偵二人か」
それはもうわかっているのであった。それだけはだ。
「あのお嬢様と同じ学園、そしてクラスらしいが」
「クラスメイトですか」
「そうだったのですか」
「その様だな。しかしそれ以外のことはだ」
「これからですね」
「調べることだと」
「そうだ、他のことはわからない」
ルパンにしてもだ。最初から何もかも知っている訳ではないのだ。
そうした意味で彼もやはり人間であるということがわかる。
その人間としてだ。彼は言うのであった。
「だからだ」
「はい、だからこそですね」
「今は」
「調べる。勝利にはまずは情報だ」
何においても言える絶対の鉄則である。
「だからこそだ。いいな」
「わかっております。今より」

「あの学園に潜入します」
「私も行こう」
ルパン自身もそうするというのだ。
「私の変装を見破れる者はそうはいない」
「あのお嬢様だけですね」
「そうですね」
「マウリアではあの方だけだった」
公称人口二千億、実際は二千三百億、一説には三千億いるのではと言われているマウリアでもだ。彼女だけであるのだった。
「私の変装を見破れるのはだ」
「その計算で言うと十四人もいません」
「連合においても」
「それだけしか」
マウリアの人口を三千億としたうえでの計算だった。
「では見つかる心配はありませんね」
「全く」
「あの方は気付かれるがだ」
それでもだというのだ。彼はある意味において安心していた。
そしてそのうえでだ。彼は行くというのだった。
「それでもだ」
「あの学園に入り」
「そのうえで何者か調べましょう」
「あの二人が」
「美術館にも向かおうか」
ルパンはこうも言った。
「あちらにもな」
「はい、それでは」
「美術館にも」
「ただしだ」
ここでだ。ルパンは部下達にこのことを注意するのを忘れなかっ

た。
「ターゲットは決してな」
「わかっております。決してです」
「それはしません」
部下達もわかっているという口調であった。それを言うのだった。
「あくまで予告した時間に」
「それはわかっていますので」
「ならいい」
ルパンも部下達のその言葉に納得した顔で頷いた。
「予告もなしに盗むことはルパンのすることではない」
「予告をしそのうえで堂々と盗んでこそですね」
「怪盗でありそしてルパン」
「そういうことですね」
「その通りだ。予告なき狩りは何にもならない」
ルパンはそこには何の興味も見出してはいなかった。
「そういうことだ」
「そうですね。盗むのは堂々とですね」
「そして追っ手から逃げてみせる」
「ルパン家らしく」
「私とてルパン家の者だ」
誇り故であった。彼は言うのだった。
「そうしなければならない」
「ならないですね」
「つまりは」
「そうだ、絶対にだ」
強い言葉であった。
「私自身への誓いだ」
「では。それと共に」
「学園に潜入しましょう」
こうしてであった。ルパンは部下達と共に学園に潜入するのであ

った。これもまた狩りのうちであった。

怪盗と魔女　　完

2011・1・20

第二百三十五話　迷探偵その一

迷探偵

テンボとジャッキーはだ。相変わらずであった。
「怪盗アルコール＝ルンバ五十三世か」
「相手にとって不足はないわね」
クラスで誇らしげに言っていた。
「この俺達が！」
「絶対に捕まえてあげるわ！」
「意気込みはいいんだけれどね」
ペリーヌがそんな二人に呆れながら突っ込みを入れた。
「あのね、あんた達ね」
「ああ」
「どうしたの？」
「そのアルコール＝ルンバ五十三世って何者？」
このことを突っ込まざるを得ないのだった。
「はじめて聞く人だけれど」
「だから怪盗だ」
「私達の今度の相手よ」
「また名前間違えて」
それに他ならないことだった。
「何処をどうやったらそんな間違いができるのよ」
「間違えてるか？」
「何処かおかしい？」
しかもだ。二人は自覚していない。
「だからアンコール＝ワット七十二世だろ」
「アッカーン＝ベーダー八十世よね」
「言う度に名前間違えてるし」
まさにこの二人の展開だった。

「しかも何世かも間違えてるじゃない」
「だから j百八世だろ」
「七十八世でしょ」
「だから違うから」
いい加減ペリーヌも疲れを感じていた。
「っていうか何よ、一連の名前は」
「間違えていないからな」
「そうよ、全然ね」
まだ自覚していない彼等であった。そうしてだ。あらためてこう言うのであった。
「あいつが来たその時にはな」
「絶対に捕まえてあげるから」
「まあ精々頑張って」
完全に突き放しているペリーヌだった。
「応援しているから」
「ああ、俺達はやるからな」
「秋田小太郎みたいにね」
「それを言うなら明智小五郎でしょ」
ペリーヌはまた突っ込む。最早無意識のうちにである。
「誰よ、秋田小太郎って」
「だから中年探偵団のね」
ジャッキーの間違いは続く。
「その人だけれど」
「もういいわ。とにかくね」
「ああ、頑張るからな」
「何があってもね」
二人はあくまで前を見るだけであった。それに尽きた。
そしてだ。早速であった。
「博物館に行くか」
「ええ、今からね」

行く場所まで間違えていた。
「事前の下見にな」
「そのうえでね」
「ランダを倒す」
「絶対に」
今度は倒すとまで言うのであった。そうして二人はだ。
何故か動物園に向かった。そして帰ってこなかった。
そんな彼等を見てだ。ペリーヌは呆れ果てていた。そのうえでアンジェレッタに話す。
「どうなるかしらね」
「絶対に駄目でしょ」
これがアンジェレッタの見たところだった。
「例え何があってもね」
「あの二人じゃ無理よね」
「だってルパンの名前自体間違えてるし」
その時点でだというのである。
「それじゃあもうね」
「捕まえられないわよね」
「まあ物凄いずっこけは見られるわね」
それはだと言うアンジェレッタであった。
「それは間違いないわね」
「何かいつも通りね」
「美術館に辿り着けるかどうかすら怪しいし」
「何でかわからないけれど動物園に行ったわよ」
「さっき博物館って言ってたのにね」
「その時点で理解不能よ」
アンジェレッタも完全に呆れていた。

第二百三十五話　迷探偵その二

「動物園にお宝なんてないから」
「珍しい動物はいるけれどね」
「動物って怪盗には関係ないでしょ」
「そうよね、やっぱり」
「絶対にね」
二人でこう話していくのだった。そしてだ。
アンジェレッタはペリーヌにこう提案した。
「もう勝負は見えてるし」
「誰がどう見てもね」
「ここはあの二人観ない？」
提案はこうしたものだった。
「あの二人の活躍をね」
「ある意味においての活躍ね」
ペリーヌは二人のこれからしでかすであろうことをあえてこう言ってみせた。
「それね」
「そう。それでどうかしら」
「とりあえず動物園言ってみる？」
今度はペリーヌからの言葉だった。
「あの二人が何をするのか」
「そうねえ。行動が全く予想できないからね」
「今だって何故か動物園に行ったし」
「ルパンがどうして動物園にいるのかしらね」
「その時点で理解不能だし」
だがテンボとジャッキーは本気だ。それは間違いないことだった。
「だから動物園で何をしているか」
「何をしでかしているか」

「それを観ましょう」
「まずはね」
こうしてだった。二人は今は動物園に向かった。するとそこでだ。テンボとジャッキーはだ。ヒョウアザラシのコーナーに入ってだ。その凶暴なアザラシに対してしきりに問い詰めていたのであった。
「俺達の目は誤魔化せないぞ！」
「何があってもね！」
こう喚いていた。アザラシに対してだ。
「貴様ルパンだな！」
「それで動物園に潜入して」
「そしてステラーカイギュウを盗むつもりだな！」
「きっとそうね！」
こうアザラシに言うのであった。
「何という悪い奴だ」
「無抵抗なカイギュウを盗もうなんて」
「見下げ果てたぞ！」
「この外道！」
今度はアザラシを罵りはじめた。
「それでも誇り高きルパンの子孫か！」
「何か言いなさいよ！」
「何ていうかねえ」
「相変わらずね」
ペリーヌとアンジェレッタは騒ぎを聞いてそこに来てだ。呆れてしまっていた。そうしてその呆れた顔で二人を観ているのであった。
「アザラシがルパンの変装だって思ってるのね」
「そうみたいね」
「しかもヒョウアザラシって」
「何をどうやったらそうなるのよ」
「天にかわりて不義を討つ！」
「世の為人の為！」

今度はこんなことを言い出す二人であった。
「行くぞルパン！」
「覚悟しなさい！」
こう喚いてアザラシに飛び掛る。しかしである。
ヒョウアザラシは獰猛である。他のアザラシを襲って食う程にだ。
その為動物園においても猛獣に指定されているのである。
そのアザラシに襲い掛かった。すると。
まずテンボが足を噛まれたのであった。
「何っ、抵抗するか！」
「ルパン、神妙にしなさい！」
今度はジャッキーが右手を噛まれた。その鋭い牙でだ。
「痛っ！」
思わず後ずさりするジャッキーだった。しかしである。
彼女は不屈だ。それで言うのであった。
「どうやら抵抗するみたいね」
「ああ、そうだな」
テンボも言う。二人共噛まれていても全く平気だ。
「それならだ」
「そうね。こっちも本気になるわ」
二人は何処からか手錠と縄を出した。それでだった。
あらためてアザラシに襲い掛かる。そのまま乱闘に入った。

第二百三十五話　迷探偵その三

しかしここでだ。動物園の人が来てだ。こう二人に言うのだった。
「君達一体何をしているんだ」
「知れたこと、ルパンを捕まえているんだ」
「悪辣な怪盗をね」
「ルパンだって！？」
そう言われてだ。動物園の人は目を丸くさせた。
そしてそのうえでだ。こう言うのだった。
「ここにいるのはヒョウアザラシだけれど」
「いや、違う。これは変装なんだ」
「ルパンの変装なのよ」
「ええと、つまりは」
二人の話を落ち着いて聞いてだ。動物園の人は二人が何を言いたいのかわかった。そうしてそのうえでこう二人に述べるのだった。
「このアザラシに。ルパンが変装しているっていうんだね」
「それでステラーカイギュウを盗もうとしているんだ」
「あのカイギュウをね」
「ステラーカイギュウをって」
それを聞いてまた言う動物園の人だった。
「それは幾ら何でも無茶苦茶じゃないかな」
「可愛くて無害なカイギュウを盗もうとは」
「ルパン、何処まで悪辣なの」
「ルパンはそういう人じゃないし」
二人以外の皆がわかっていることだ。
「大体ステラーカイギュウを盗むって」
「星によっちゃ一杯いる生き物なのに」
地球では絶滅したが他の星ではそうなのだ」
「それ自体が有り得ないし」

「そんなの盗んでもね」
「そうよね」
ペリーヌとアンジェレッタは常識を話していく。
「怪盗の名折れよね」
「まさにね」
こう話すのだった。
「全くあの二人は」
「相変わらずっていうか」
「何考えてるのよ」
「本当に迷探偵なんだから」
間違っても名探偵ではなかった。そちらの方であった。
その迷探偵二人はだ。アザラシと格闘しながら動物園の人に抗議していた。
「だからだ、こいつは！」
「あの怪盗なのよ！」
「ランバダだ！」
「あいつなのよ！」
「ランバダ！？」
その単語を聞いてだ。動物園の人は目を丸くさせながらこう言った。
「あの踊り？腰を絡み合わせる」
「違う！あの伝説の怪盗だ！」
「そうよ、タキシードのね」
「それってひょっとして」
動物園の人の方がわかっていた。自称名探偵の二人よりもだ。
「あれのことかな」
「そうだ、あいつだ！」
「アンパンよ！」
「だからルパンでしょ」
動物園の人の見事な突込みが入った。

「それを言うなら」
「だから違う」
「あいつがこのアザラシの中によ」
「それは絶対にないから」
ようやく全てを理解した動物園の人は冷静にこう述べた。
「あの、ルパンが変装するにしてもね」
「あいつは狡猾で突拍子もない行動を好むから」
「それでアザラシになのよ」
「変装してステラーカイギュウを狙ってたんだ！」
「とんでもない奴よ！」
「だからそれは絶対に有り得ないから」
また言う動物園の人だった。
「絶対にね」
「馬鹿な、わからない人にはわからないのか」
「所詮凡人には」
「まあ僕は確かに凡人だけれどね」
動物園の人もそれは認める。しかしだった。
そのうえでだ。こうも言うのであった。しっかりとした声でだ。
その声は間違いなく正気の人のものだった。

第二百三十五話　迷探偵その四

「けれど。そのアザラシはルパンじゃないから」
「いいや、違う！」
「こいつはアトール＝ルトールよ！」
「そうだ、間違いない！」
「私達にはわかるのよ！」
「名前が常に違うのは仕様かな」
動物園の人は今度はこのことについて思った。
「まあとにかくね」
「こいつは逮捕する！」
「絶対にね！」
アザラシとの格闘はまだ続いている。そのうえでの言葉だった。
「だから俺達は絶対に！」
「負けないわよ！」
「あっ、はい。いつもの二人です」
動物園の人は二人のその言葉を聞かずにだ。動物園の警備員の人達に携帯で連絡をしていた。
「そうです。何かヒョウアザラシがルパンの変装だって言ってまして」
「くっ、こいつ！」
「また噛んでくるなんて！」
二人はアザラシに噛まれ続けている。
「何と往生際の悪い奴だ！」
「神妙にしなさい！」
「すぐに来て下さい。話してもわからないですから」
程なくしてその警備員の人達が来た。それで二人を連行していくのだった。
二人はそれぞれ量てっを左右から押さえられながらもだ。こう喚

いていた。
「弾圧になんか負けるか！」
「私達はくじけないわよ！」
無駄に根性だけはある。
「絶対にだ！」
「ルノワールを捕まえるわ！」
「全く。また馬鹿な騒ぎ起こして」
「相変わらずね」
一部始終を見ていたペリーヌとアンジェレッタは呆れ返ってこう言った。
「何やってるのよ」
「本当にね」
「まあとにかくこれでね」
「話は終わりね」
それはよしとするのだった。
「クラスに戻ってね」
「ええ。午後の授業受けましょう」
二人は学園生活に戻った。そうしてであった。
テンボとジャッキーはだ。その日の午後は動物園の警備員の人達のお説教を受けて学校には来なかった。しかしであった。
放課後には戻って来てだ。今度は。
「よし、植物園だ！」
「そこね！」
行く場所をまた間違えるのだった。
「そこにあいつが潜んでいる！」
「そうね。ウツボカヅラに化けてるわ」
何故かそれであった。その食虫植物であった。
「だから今度こそだ」
「捕まえるわ！」
こんなことを言うのであった。

「見てろ。俺達の目は誤魔化せないぞ」
「例え世紀の怪盗でもね」
「今度は植物ね」
「相変わらず斜め上にぶっ飛んでるわね」
ペリーヌもアンジェレッタも呆れてしまっている。今回もだ。
「それでどうするのかしら」
「植物園に行くのは間違いないにしても」
問題はそこからだった。
「何をしでかすやら」
「今度は」
そんなことを話しながら二人を見る。するとだ。
その二人はだ。すぐに動いたのだった。
「よし、ジャッキー」
「ええ、テンボ」
お互いに顔を見合わせて言い合うのだった。
「行くか、すぐに」
「ええ、すぐにね」
「植物園に行きそして」
「アンコール＝ワットを捕まえるわ」
名前をまた間違えていた。
「絶対にな！」
「ウツボカヅラに化けていても！」
こうしてだった。二人は植物園に向かった。そしてだった。
ペリーヌとアンジェレッタもついていく。するとだった。
二人はだ。巨大ウツボカヅラと格闘していた。

第二百三十五話　迷探偵その五

その絡まる蔦に捕まりながらもだ。喚いていた。
「くっ、ルント！」
「まだあがくのね！」
ウツボカヅラに完全に捕まりだ。そのまま中に放り込まれようとしている。今回も立ち入り禁止の場所に勝手に入っているのだった。
「俺達を今度は！」
「溶かすつもりなのね！」
ルパンを植物と思い続けているのだ。
「そうはさせるか！」
「絶対に！」
そしてだった。二人共ナイフを出しだ。
蔦を切った。そうして逃げ出してだ。
あらためてだ。ウツボカヅラに立ち向かうのだった。
「今度こそ神妙にしろ！」
「覚悟はいいわね！」
格闘に入っている。そんな二人を見てまた言うペリーヌとアンジェレッタだった。言葉だけでなく表情も呆れ果てたものになってだ。
「全く。次から次にと」
「騒動ばかり起こして」
「っていうか何でウツボカヅラなのよ」
「しかも巨大な」
人や動物まで襲うかなり危険なものに向かっているのだ。
そしてそのうえでだ。二人は戦っていた。
だがここにであった。今度は植物園のロボットが来たのだった。
完全に人型のアンドロイドタイプである。それがやって来たのだ。
「ああ、人襲うからね」
「だからロボットなのね」

ペリーヌ達はそのロボットを見て述べた。
「つまりそれだけ危険なのね、あそこって」
「人が入ったらいけないっていうレベルの」
二人にはそれがわかった。
「全く。そんな場所に入ってって」
「何処まであれなのよ」
そしてだ。そのロボットはだ。二人のところに来て言うのだった。
「アノデスネ」
「んっ、ロボットか」
「そうね」
二人もそれはわかるのだった。
「それで何だ？」
「今取り込み中だけれど」
「ココハ危険デス」
ロボットは二人にまた言った。
「スグニ出テ下サイ」
「そんな訳にはいくか」
「こいつは怪盗なのよ」
ウツボカヅラを見据えながらの言葉である。
「だから絶対に捕まえないといけないんだ」
「私達のこの手でね」
「ココニ怪盗ハイマセン」
ロボットが冷静に答える。
「植物園ニ怪盗ハ関係アリマセン」
「怪盗に常識は通じない！」
「そうよ！だから怪盗なのよ！」
「常識ガ通ジナイノハ」
しかしロボットはあくまで冷静だ。ロボット故に。
「貴方達デス」
「何っ、名探偵の俺達を捕まえて」

「何を言うのよ」
「貴方達ハ迷探偵デス」
ロボットの今の言葉にだ。大いに頷いたペリーヌとアンジェレッタだった。
「そうそう、その通り」
「誰がどう見てもね」
こう言って頷くのだった。
「この二人はねえ」
「そっちだから」
これは二人だけでなく彼等を知る全ての人間が思うことである。しかもそれが人間だけではないということがわかったのが今である。
「全く。無茶苦茶なんだから」
「毎度毎度」
「植物に化けるって」
「動物でも頭が痛いのに」
それでもだというのだ。
「植物って何よ」
「何処をどうやって変装するんだか」
「しかも巨大食虫植物って」
誰が見ても有り得ないことだった。しかし二人はまだ言う。

第二百三十五話　迷探偵その六

「こいつをここで倒して！」
「全て終わらせてやるわ！」
「ソレデハデス」
ロボットはそんな二人に冷静に告げる。
「帰ッテ下サイ」
「だからそれはできるか！」
「絶対に！」
まだ引かない二人だった。引こうとさえしない。
「そんなことは！」
「何があっても！」
「ワカリマシタ。ソレナラデス」
ロボットはそこまで聞いてであった。遂にだ。
二人を掴んでだ。そのうえで、であった。
彼等を捕まえて何処からか出したロープで縛った。そうして何処かに運ぶのだった。
「離せ！」
「離しなさいよ！」
「植物園カラ出タラソウシマス」
ロボットはここでも冷静である。
「それではです」
「おのれ、国家権力の謀略だ！」
「それよ、それに決まってるわ！」
二人の主張は今度はこうしたものだった。
「許さないぞ！」
「国家権力になんか負けないわよ！」
「国家権力！？」
「何それ」

これにはペリーヌもアンジェレッタも唖然となった。
「うち私学だけれど」
「っていうかルパンと国家権力が関係あるの？」
それを話すのだった。
「そんなこと有り得ないけれど」
「ルパンってその国家権力と堂々と渡り合っているのに」
怪盗としてである。常に警察と渡り合っている。警察が国家権力かどうかは言うまでもない。それは何時の時代でも変わらないことだ。
「何でそこで国家権力？」
「どういう思考回路してんの？」
そう考えるのが普通だ。しかしである。
二人はまだ言う。正確に言えば喚いている。
「おのれ、国家権力なんかに負けるか！」
「くじけないわよ！」
「見ていろ、アット＝オドロク！」
最早名前も原型を留めていない。
「御前を絶対に捕まえるからな！」
「覚悟しなさい！」
「ハイ、ソウシタコトハ植物園ノ外デ」
ロボットは流石である。落ち着きをそのままにし続けている。
「言ッテ下サイ、好キナダケ」
「離せ！」
「くじけないわよ！」
こうしてだった。二人は植物園からも追い出された。しかしであった。
彼等はだ。まだ言うのであった。
「絶対に捕まえるからな！」
「何があっても！」
「あの、ひょっとして」

「そうよね」
ここでまたあることに気付いたペリーヌとアンジェレッタだった。
「この二人逮捕権は警察にあるってこと」
「全然わかってないわね」
このことに気付いたのである。
「っていうか知らないよね、絶対に」
「理解する頭もないだろうし」
そもそもわかる以前だというのだ。
「これは。ねえ」
「どうしたものやら」
「全くよ。骨が折れるわ」
「見てるだけでね」
そんな周囲である。だが二人は全くへこたれない。
「売られた喧嘩は買う！」
「絶対によ！」
今度はこんなことを喚きだした。

第二百三十五話　迷探偵その七

「相手が怪盗なら余計にだ！」
「私達は負けないわよ！」
「骨が折れるけれど飽きないわね」
「それはないわね」
ペリーヌとアンジェレッタは実際にその二人を見続けている。そのうえでの言葉だ。
「しかし。本当にルパンって来るのよね」
「予告状は本物だったらしいわよ」
「そう、だったらやっぱり」
「来るわね」
予告状が本物ならばというのである。
「絶対にね」
「ううん、本当にどうなるかしら」
「まあ相手が」
アンジェレッタはその二人を見た。そのうえでだった。
「あれじゃあね」
「確実にいけるわよね」
「素通りと一緒だから」
そこまで言う。
「何か未来がね」
「見えるわね」
「さて、それじゃあ」
ここまで話してだった。アンジェレッタがここでこう言うのであった。
「今日の放課後どうする？」
「放課後？」
「暇？今日」

こうペリーヌに尋ねるのだった。
「よかったらだけれどね。喫茶店行かない？」
「喫茶店？何処の？」
「商店街のよ。新しく見つけたお店なのよ」
「ふうん、そこっていいのね」
「美味しくてしかも安いのよ」
「えっ、安いの」
ペリーヌは安いということに反応を見せた。そうしたところに最も反応を見せるのが実に彼女らしかった。
そしてだ。アンジェレッタにさらに尋ねるのだった。
「そんなに安いの、そのお店」
「そうよ。もう学校の食堂並だから」
「いいわね、それ」
「行くわね、それじゃあ」
「勿論よ」
断る筈もなかった。
「それじゃあね」
「よし、それでこそペリーヌよ」
アンジェレッタも笑顔で彼女に返す。
「それじゃあ今日はね」
「二人で。そのお店にね」
「それでね。そのお店だけれど」
アンジェレッタはにこにことしてペリーヌにさらに話す。
「美味しいのはコーヒーに」
「コーヒーがいいのね」
「それもウィンナーコーヒー」
それだというのだ。
「それとホットケーキがいいのよ」
「あっ、ホットケーキ好きなのよ」
ホットケーキと聞いてだ。さらに笑顔を明るくさせたペリーヌだ

った。
「シロップをたっぷりとかけてよね」
「わかってるわね、そこんところ」
「勿論よ。南アフリカでもいつも食べてたのよ」
祖国にいた時からだというのだ。
「じゃあね。そのホットケーキをね」
「食べようね」
二人は怪盗の話からそちらに関心を移していた。今回の狩りが確実に成功すると思ってだ。その頃だ。ルパン達はどうかというとだ。
「何かおかしいですね」
「そうですね」
学校の職員達に変装して潜伏している部下達が最初に述べた。
「あの二人がですか」
「今回の相手なのですね」
「そうだがな」
ルパンはだ。先生に変装していた。スーツを着て普通に顔を変えただけだが教師の多いこの学校ではそれで充分過ぎる程だった。

第二百三十五話　迷探偵その八

「あれではだ」
「何か勝手が違いますね」
「いつもとは」
「ああ、全く違う」
こう部下達に話すのだった。
「あれではな」
「張り合いがないですか」
「何故か動物園や植物園に行きますね」
「あれは何でしょうか」
「一体」
「我々を惑わしているのか」
ルパンはこうも考えた。
「まさかな」
「それにしては妙です」
「あまりにもストレートに過ぎます」
部下達もだ。彼等が演技とは思えなかったのだ。
「あの二人は間違いなく」
「本気です」
「まず言うがだ」
ルパンは真面目な顔で部下達に述べる。
「私が狙っているものは美術館にある」
「はい、その通りです」
「それは間違いありません」
「確かに」
部下達もそのことに対して頷く。
「ですが彼等は」
「何故ああして動物園や植物園に行くのでしょう」

「しかもです」
実は彼等も一部始終を見ていた。そのうえで話すのだった。
「彼等はルパン様がアザラシや食虫植物に変装していると思っています」
「あれがわかりません」
「理解不能です」
「私もだ」
ルパン自身もであった。
「何を考えてあんなことを」
「正気でしょうか」
「あれは」
「おそらく正気だ」
少なくとも狂ってはいない。それはルパンもわかった。
「だが、だ」
「だがですか」
「それでもなのですね」
「彼等は私とは違うものを見ている」
深刻そのものの顔で述べる。
「それは間違いない」
「ううむ。一体何を見て何を考えているのか」
「それがわかりません」
「全くです」
こうだ。学校の理科室にこもって話すのだった。今はこの教室は誰もいない。だからこそだ。その中に入って話をするのであった。
「あれではです」
「狩りも」
「狩りは相手がいてこそだ」
それでこそやりがいがあるというのである。
「しかし。相手があれではな」
「せめて向かってくれればいいのですが」

「正面から」
「しかし今回はそれが期待できない」
しかも全く、であるのだ。
「あれではな」
「いや、まさかあれは」
「有り得ないです」
「本当にです」
部下達も言う。
「破天荒といいますか滅茶苦茶といいますか」
「あれは探偵でしょうか」
「それすらも疑問ですが」
「そうだな」
実際にだ。ルパンもこう思っていた。
「大道芸人ではないな」
「可能性はありますね」
「それも」
「否定できないかと」
部下達はまた言った。そうした可能性もあるというのだ。

第二百三十五話　迷探偵その九

「大道芸人が相手ですか」
「どうしますか、今回は」
「本当に」
「暫く様子を見るとしよう」
慎重策を採用したルパンだった。
「ここはな」
「そうされますか、ここは」
「慎重にですか」
「まずは」
「そうだ、そうする」
こう部下達にも述べた。
「焦る必要はないな」
「はい、確かに」
「それは」
部下達もそれはないと答える。そのうえでルパンに話す。
「焦っても何にもなりませんから」
「かえって失敗します」
「一人の愚か者を知っている」
ここでルパンの言葉が教訓めいたものになった。
「周囲に何度言われても焦り続け仕事を失敗した者をな」
「そうした者をですか」
「御存知ですか」
「その者はその仕事を潰して責任を取ろうとしなかった」
さらに悪いというのである。
「周囲が何を言っても虚言を弄し仕事を再開させなかった」
「それでは信頼を失いますね」
「確実に」

「他の仕事があると言い時には個人的な理由で悩んでいたとも言った」

それを聞いた部下達は呆れて述べた。

「仕事に個人的な理由を持ち出して言い訳にするとは」

「まことの愚か者なのですね」

「そうだ、そしてだ」

どうなったかというのだ。

「そうしたことを続け周囲の信頼を完全に失った」

「それで破滅ですね」

「そうなりましたね」

「そうだ、破滅した」

実際にそうした末路を辿ったというのだ。

「勤めていた会社を懲戒免職になり」

「そしてですね」

「さらに」

「親戚全員からも見放され。禁治産者に認定された」

そこにまで至ったというのだ。

「今では世に出ては何をするかわからないという理由でだ」

「隔離ですか」

「何処かに」

「精神病院に隔離されている」

そうなったというのである。

「セーラ殿とも顔見知りだった」

「ではマウリア人ですか」

「その輩は」

「そうだ、マウリアだ」

実際にその国の人間だというのである。

「マウリア人だった」

「どの国にもそうした輩はいますね」

「全くです」

周囲も呆れた顔で述べる。
「そうした輩の轍を踏まないようにもですね」
「決して焦らない」
部下達も話す。
「そうします」
「今回も」
「そうだ、そうする」
実際にこう述べるルパンだった。
「狩りまで時間はあるのだからな」
「そうですね。調べる時間はあります」
「まだかなり」
「時間は使う為のものだ」
そうした意味では金と同じである。時間も金もだ。それは使う為にあるのだ。
「だからこそだ」
「使いはするが浪費はしない」
「そうですね」
「浪費は何にもならない」
それは無駄だというのである。ルパンは怪盗である。そしてルパン家は代々気品のある生活を送ってきている。しかし浪費はしないのである。

第二百三十五話　迷探偵その十

「使いはするがだ。浪費はだ」
「無駄にはしないということですね」
「つまりは」
「そうだと」
「そうだ、その通りだ」
まさにそうだというのである。
「それはしない」
「そうしてですね」
「これからもそうする」
「そうしますか」
「今回もそうだ」
ルパンはまた言った。
「そして今回のその狩りだが」
「肝心の相手があれでは」
「どうしましょうか」
「一体」
「今のところ狩りはする」
こう部下達に告げた。
「そのつもりだ」
「左様ですか、それではですね」
「予定通りですね」
「それでは」
「そうだ。だが、だ」
それでもだというのだ。ルパンは表情を曇らせて述べた。
「相手があのままだとな」
「それもですか」
「放棄しますか」

「例えばだ」
ルパンはこんなことも言ってきた。変装しているが表情は出ている。
「檻が開いていてトラップも看守も警報もない監獄だ」
「何かそれでは」
「張り合いがないですね」
「脱獄をするにしても」
「そういうことだ。大事なのは楽しみだ」
それだというのである。
「それがなければだ。何をするにしてもだ」
「何の面白みもない」
「狩りをするにもですね」
「ですから今回は」
「こんままですと」
「中止も検討するとしよう」
ルパンは真顔で部下達に述べた。
「それもな」
「はい、そうですね」
「怪盗はその狩りを楽しむものですから」
「それでは」
「警察に優れた者がいればいいのだが」
ルパンがここで話すのはこの組織だった。怪盗の第一のライバルである。
「日本の警察は優れているがな」
「はい、優秀です」
「連合の中でトップクラスです」
「中央警察もいますし」
連合は各国の警察と中央警察が存在している。この二つの組織で治安を守っているのである。警察といっても一つではないのが連合なのだ。

「ですから。彼等はです」
「期待できますね」
「あの二人に問題があっても」
「警察にも話がいっているな」
ルパンはこのことも部下達に確かめた。
「そうだったな」
「はい、それは既に」
「警察も動いています」
「それは確かです」
部下達もその通りだと答える。
「ですからそれは御安心を」
「日本警察だけでなく中央警察もです」
「動いています」
彼等もだというのだ。
「ですからそれはです」
「警察がいますので」
「全く誰もいないという訳ではありません」
「それはありません」
「ならいいか」
それを聞いてだ。まずは安心したルパンであった。
そしてそのうえでだ。部下達に話した。
「とりあえずは続けよう」
「了解です」
「それでは」
とりあえずは狩りの中止はなくなった。今のところはである。しかしテンボとジャッキーは動き続ける。最大最悪のイレギュラー達は止まらない。

迷探偵　　完

2011・1・27

第二百三十六話　暴走するイレギュラーその一

暴走するイレギュラー

ルパンの狩りの日が近付いている。しかしであった。
テンボとジャッキーはだ。今度は校内のゴミ箱というゴミ箱を漁っていた。その二人にネロが戸惑いながら突っ込みを入れる。無論パトラッシュも一緒である。
「あの、二人共」
「ああ」
「何？」
「一体何してるのかな」
そのゴミ箱を漁りゴミだらけになっている二人に尋ねるのだった。
「さっきから」
「知れたこと、怪盗を探してるんだ」
「そのアットット＝ルトットをね」
「誰、それ」
ネロにとってははじめて聞く名前だった。それで二人にあらためて問うた。
「ひょっとしてアルセーヌ＝ルパン？」
「そう、あいつだ」
「そいつを探してるのよ」
「ルパンってゴミ箱の中にいるのかな」
ネロは言いながらそんな筈がないと思っていた。
「そういう相手だったかな」
「あいつは意表を衝くからな」
「だからよ」
しかし二人はこう主張するのだった。
「こうしてゴミ箱も探してるんだ」
「隠れているかも知れないからね」

「ゴミ箱って」
ネロは常識人である。そこから考えて言うのであった。
「いるのかな、ルパンが」
「だからそう思うことがなんだよ」
「危ないのよ」
まだ言う二人であった。
「敵は意表を衝くんだぞ」
「そんな悠長なことを言っていたら危ないわよ」
「そうかなあ」
ネロは首を傾げさせるばかりだった。パトラッシュは呆然となっている。とにかくゴミ箱というゴミ箱を漁り続ける。そうしてであった。
ネロはこのことをジョンに話す。そのゴミ箱を漁る二人のことをだ。
そしてだ。ジョンはこう言うのであた。
「それって絶対にね」
「やっぱりそう思う？」
「うん、ルパンはその中にはいないよ」
こう言うのだった。
「ゴミ箱の中にはね」
「そうだよね、やっぱり」
「っていうかあの二人今度はそれなんだ」
ジョンもまただ。呆れた顔で述べた。
「ゴミ箱にルパンがいるって」
「犬や猫じゃないんだから」
「そうだよね。ラッシーだって」
自分の犬を見る。その傍らに礼儀正しく座っている。
その自分の親友を見ながらだ。ジョンは話した。
「そんなことはね。わかるよ」
「ワン」

ここで声を出して応えるラッシーだった。その通りだというのだ。
そしてだ。ジョンはこんなことも言った。
「まさかあの二人って」
「あの二人？」
「犬とか使うって発想ないのかな」
こうネロに話す。
「ほら、警察犬とか」
「ないんじゃないかな、やっぱり」
ネロもいぶかしむ顔で述べた。
「それでだと思うよ」
「捜査に犬を使うのは基本だけれど」
「鼻がいいしね」
「しかも感性もしっかりとしてるしね」
「耳もいいしね」
「勘も人間よりずっと鋭いし」
二人は犬のそうした長所をよくわかっていた。常に一緒にいるからだ。犬のことなら何でもよく知っている。見事なトップブリーダーである。
だからこそだ。二人はこう話すのだった。
「その犬を使わないって」
「それってよくないよね」
「僕だったらパトラッシュを使うよ」
「僕もラッシーをね」
二人はそれぞれの犬も話に出した。

第二百三十六話　暴走するイレギュラーその二

「そうして捜査するけれど」
「ルパンにも対抗できるし」
ルパンの話もした。
「まあルパンは犬が相手でも容易じゃないだろうけれどね」
「それはね」
二人もだ。それはわかっていた。ルパンは容易な相手ではない。
このことは初代の凄さを見てもよくわかることであった。
しかしだ。二人はそれでもこう話すのであった。
「けれど犬はね」
「どうしても捜査には必要だし」
「人間には限界があるから」
「そう思うけれど」
それでもであった。二人はだ。
「ああして暴走してるけれど」
「果たしてどうなるかな」
「どうにもならないんじゃ」
「そうだよね」
こんな予想もするのだった。
「あれじゃあ」
「どうなるやらだよね」
「まあ僕達が言ってもね」
「どうしようもないし」
これも二人の問題点だった。
「話耳に入らないしね」
「覚えないし」
話を聞かないどころではないのだった。テンボとジャッキーはだ。
「そんな二人だからね」

「暴走するのを見るだけだから」
「結局のところは」
「どうにもならないからね」
まさにブレーキのないダンプカーであった。それだった。そのうえでだ。二人は今度はそのルパンについての話もしていくのであった。
「それでさ。ルパンだけれど」
「うん、彼だね」
「もう学校の中に潜伏しているとかしてるかな」
ネロはそのことを予測して言うのだった。
「やっぱり」
「してるんじゃないかな」
そしてだ。ジョンも彼のその言葉に頷くのだった。
「偵察とかでね」
「そうだよね。考えられるよね」
「そうだよね、そういうのはね」
「普通にね」
「してるよね」
「例えば」
ジョンはここでこう言った。
「学校の先生とか？」
「用務員さんとか？」
ネロも言った。
「そういう人にね」
「変装してね」
「それで潜伏して事前に調べてる」
「そうしてるかもね」
こう二人で話をするのだった。そしてだ。
今度はネロが言った。
「それじゃあだけれど」

「うん、何かあるの？」
「その人が本人さんか変装してるルパン一味かどうかを調べる為に」
「ああ、犬ね」
「それ使ったらどうかな」
こうジョンに話すのだった。
「警察犬総動員して。一人一人の匂いをね」
「犬の数がかなりになりそうだね」
ジョンはネロの話を聞いてこう述べた。
「それやったら」
「時間がかかっても。どうかな」
「ううん、アイディアは悪くないけれど」
「駄目なんだ」
「それやってもルパンは捕まえられないと思うよ」
こうネロに話すのだった。
「それやってもね」
「駄目かな、犬でも」
「犬の鼻は確かに凄いよ」
それは認めた。認めるまでもないことである。
「けれど。ルパンだから」
「だからなんだ」
「その変装する相手の匂いはもう完全に備えさせるとか」
「犬でもわからないような」
「そうしてくるんじゃないかな」
こうジョンに述べる。
「そうなってもね」
「ううん、ルパンだからね」
ネロもだ。ジョンの説明を受けて難しい顔になって述べた。
「そこまでも読んでるかな」
「それか完全にその中の人に成りすますか」
ジョンはこうも話した。

第二百三十六話　暴走するイレギュラーその三

「新任の先生とかでね。それだとコンピューターにハッキングしてね」
「操作しているってことにして」
「それから入ってもいいから」
それではないかともいうのである。
「そうすれば犬もわからないじゃない」
「変装していなくても」
「うん。だって新しい人だから」
既にいる人物に成りすましているのではなくそれだからだというのだ。
「その場合はね」
「そのケースだったら確かに」
「わからないからね」
「犬でも限界があるね、本当に」
「どんな動物にもだね」
ジョンはこう話した。
「それはあるね」
「万能の動物なんてね」
「そう、いないよ」
これはまさに絶対の答えだった。
「そんなのは」
「だよね。犬だってね」
「僕達人間だってそうだし」
その彼等もだというのだ。
「人間だってそうじゃない」
「うん、確かに」
ネロはジョンの今の言葉にも頷いた。

「言われてみたら」
「だから誰にでも限界はあるんだよ」
「ルパンにもあるのかな」
ネロは腕を組んでこんなこともものべた。
「その論理だと」
「あると思うよ。ただね」
「ただ？」
「その限界はかなり高いレベルだね」
「高い」
「そう、高いね」
こう話すのだった。
「それはね」
「やっぱり。あれだけの怪盗だと」
「天才と言ってもいいレベルだろうから」
「天才、そういう家系？」
「いや、九十九パーセントの努力と一パーセントの才能」
エジソンの言葉だ。彼のこの言葉はこの時代でも生きているのだ。
「そっちの天才だから」
「努力してなんだ」
「そう、努力すれば誰もが天才になれるじゃない」
こうジョンは言う。
「だからルパンもね」
「努力してるんだ」
「そうだと思うよ」
「成程ね」
ネロも腕を組んで述べた。
「そうだったんだね、怪盗もね」
「何だってそうじゃない。何かをするにはね」
「努力が必要だよね」
「うん、だからね」

「言われてみればそうだね。本当に」
ネロはジョンのその言葉に頷いた。そうしてだ。
そのうえでだ。ジョンにあらためて言ったのだった。
「テンボとジャッキーもかな」
「努力してるかってこと？」
「うん。それはどうかな」
こう彼に問うのだった。
「してるのかな、やっぱり」
「してると思うよ」
ジョンはそれはだというのだった。断言ではないがそれでもだ。
「二人共真面目なことは真面目だし」
「うん、真面目な性格なのはね」
「確かだけれど」
だが、なのであった。二人はだ。
「それでもね。あれじゃあ」
「努力はしててもそのベクトルがね」
「探偵のものじゃないよね」
「絶対にね」
そういうことだった。二人はそもそもその努力のベクトルが完全に違うのだ。何もかもが間違ってしまっているのである。それが問題なのだった。
それでだ。ジョンとネロは確かに話していく。
「どうしたものかなあ」
「言っても理解してくれないしね」
「うん、絶対にね」
「話は聞くけれどね」
聞くのと理解するのはまた別であった。違う話なのだった。

第二百三十六話　暴走するイレギュラーその四

それでだ。二人はあらためて話をするのだった。
「ううん、じゃあね」
「本当に放置するしかないね」
「答えはそれしかないし」
「それだったら」
こう話していってだった。ジョンとネロも二人については何も言わなかった。そうしてそのうえで見ているだけにするのだった。
だがその二人を見てだった。変装しているルパンが言った。
「あの二人の少年は」
「何かありますか？」
「優れていますか？」
部下達も彼に尋ねる。今彼等は教授とその助手達になっているのだ。白衣にスーツのところを見ると理系ということになっているらしい。
「探偵として」
「そうなのでしょうか」
「いや、探偵ではないな」
ルパンはそのことをすぐに見抜いていたのだった。
「それではない」
「では何でしょうか、あの少年達は」
「一体」
「トップブリーダーだな」
それだというのである。
「どうやらな」
「愛犬家ですか」
「それですか」
「そうだ、愛犬家だ」

まさにそれだというのである。
「あの二人はな」
「そうですか。愛犬家ですか」
「あの二人は」
「そしてあの二匹の犬は」
ジョンとパトラッシュの名前は流石に知らない。しかしそれでもだった。
「素晴しい犬達だ」
「そういえば。賢そうですね」
「しかも主人に忠実ですね」
「それもかなり」
「確かに」
部下達もそれがわかった。その目で見てだ。
「あそこまでの犬を飼うとなるとです」
「相当な人間でなければできませんね」
「そうですね」
「そうだ、できない」
まさにそうだというルパンだった。
「あの少年達はそこまでの人物だ」
「犬を飼うのも人としての器量ですね」
「まさにそうですね」
「その通りだ。それもまた器量だ」
こう部下達に述べていく。
「あの少年達はな」
「敵にはならないでしょうか」
「我々の相手には」
「おそらくならない」
それもだとだ。ルパンは述べた。
「探偵でも警官でもないからな」
「そうですか。残念ですね」

「それは」
「確かにな。私も残念だ」
ルパンもだ。言葉にそうした感情を見せていた。
「ああした少年達とこそ勝負したいのだがな」
「あのお嬢様は今回は出られませんし」
「相手がいませんが」
「どうしますか、それでは」
「今回は」
「狩りはする」
まだその考えでいるルパンだった。
「あのターゲットはな。やはり」
「写楽ともなるとですね」
「流石にですね」
「価値も凄いですし」
「そうだ。あれは間違いなく本物だからな」
ルパンは芸術品の目利きとしても素晴しい力がある。一目見ただけでその価値がわかる。そしてそれが偽物か本物かも見抜けるのだ。
「だからこそだ」
「はい、だからこそですね」
「手に入れましょう」
「何があろうとも」
「そうだ。手に入れる」
また言ったルパンだった。
「相手がいてこそだがな」
「警察はどうでしょうか」
「そちらは」
「警察か」
警察もまたルパンの相手だ。探偵だけではないのだ。

第二百三十六話　暴走するイレギュラーその五

そしてだ。さらに話す彼だった。
「警察となるとだ」
「はい、行動が杓子定規ですね」
「警察に共通の問題です、それは」
「そこが問題ですが」
「私の狩りの相手としてはそこが問題になるからな」
その警察を相手とする場合にはだ。そこがだというのだった。
「杓子定規ではな」
「はい、決まった行動しかしません」
「我々の奇策には弱いです」
それが彼等だというのだ。ルパンは奇策を常としている。しかしなのだった。警察はそれに対応できないのだ。奇策には弱いのだ。
それでだ。彼はまた話すのだった。
「奇策は確かに成功させる為にある」
「はい、その通りです」
「それは」
「しかしだ」
「しかしなのですか」
「それでは」
「そう簡単に成功する奇策の何が面白いのか」
ルパンは奇策に楽しみを求めているのだった。
「それだ」
「確かに。簡単に成功する奇策なぞ奇策でも何でもありません」
「相手の意表を衝くものですから」
部下達もそれはわかっている。怪盗の奇策というものがだ。
「奇策は成功した時はいいのですが失敗した時のダメージは大きい」
「そういうものですから」

「それではですね」
こう言っていく。奇策が失敗した場合のことも考えているのだ。
それを考えてだ。彼等は話すのだった。
「だからこそ使いがいがある」
「駆け引きでもありますから」
「どれだけ厳重な警護であってもだ」
ルパンも自信tご共に話す。
「私は盗んでみせる」
「しかし人間との勝負は」
「そうはいかないですから」
「そうだ、いきはしない」
まさにそうだというのであった。
「だからこそいいのだが」
「あの二人では」
「とても」
テンボとジャッキーの話にもなった。
「奇策を仕掛けてもです」
「どうにもなりません」
「そういうことだ。警察も調べておくか」
ルパンはもう一方の相手について述べた。
「彼等はどうかだな」
「日本の警察は優秀です」
部下の一人が言ってきた。
「それは間違いありません」
「優秀だな」
「はい、しかしそれは言い換えば」
「そうだ。そうならばだ」
ルパンも優秀な警察がどういったものかはわかっていた。それはだというのだ。
「やはり。機械の優秀さだな」

「融通が効かない」
「それですね」
「警察もまた官僚だからな」
官僚はどうしても機械的、組織的になってしまう。仕事をこなしていくことがその業務ならばだ。どうしてもそうなってしまうものなのだ。
だからだ。日本の警察もだというのだ。
「それではな」
「はい、そこが問題です」
「横紙破りで優秀な者がいれば」
「期待するか」
ルパンは上を見上げて述べた。
「それを」
「それしかありませんか」
「今は」
「期待するのもいいことだ」
「そうですか」
「期待もですか」
「そうだ。ただしだ」
ここでだ。ルパンはこうも話した。

第二百三十六話　暴走するイレギュラーその六

「期待と失望は表裏一体だ」
「それはなのですね」
「わかっておくべきというのですね」
「つまりは」
「そうだ。その通りだ」
こう話すのだった。
「失望しても落胆しないだけの強さがあればだ」
「期待していい」
「そうなのですね」
「そういうことだ。私は失望はしない」
それはしないというのである。この辺りはしっかりとしている。流石にそうした強さを持っている。伊達に怪盗をしているだけはある。
そしてその強さでだ。彼はまた部下達に話した。
「期待し続けている」
「ではその期待を胸に」
「これからは」
「どうされますか」
「また下見に行こう」
それをするというのである。
「美術館のな」
「何度もチェックしてですね」
「戦場を調べておく」
「そうされますね」
「そうだ。そうする」
彼は偵察を欠かさない。そうして何度も調べてだ。そのうえで狩りをするのである。基本を守っていると言える。偵察を欠かさない

という意味でだ。
それでだ。また話す彼であった。
「では美術館にだ」
「はい、向かいましょう」
「今から」
部下達も応える。こうして彼等は美術館に向かうのだった。
狩りの準備は続いていった。しかしなのだった。
テンボとジャッキーはだ。相変わらずだった。
今度は歌劇場でだ。騒いでいた。
「ここにいるな！」
「そうね。オペラ座の怪人ね！」
それだというのである。
「ここで今度は！」
「衣装を盗むのね！」
「そうはさせるか！」
「絶対に許さないわよ！」
二人だけが騒いでいる。よりによって貴賓、それも国家元首が座るロイヤルボックスにおいて騒いでいた。ここには天皇陛下も来られたことがある。それで設けられた場所なのだ。
そこからだ。二人は騒いでいた。
「ここにいれば何でも見える」
「そうね、いい席ね」
二人はここがロイヤルボックスとは知らない。
「ここからルノアールは観ているんだ」
「獲物をね」
「しかし！俺達の目は誤魔化せない！」
「私達の目は千里眼よ！」
千里眼の節穴であるのだ。
「そうだ、狙っている獲物は！」
「それよ！」

指差したのはだ。舞台にある照明の一つだった。それを指差しながらだ。二人は尚も言う。ロイヤルボックスにおいて騒ぎながら。
「それならだ！」
「あれを護るわ！」
「この俺達が！」
「そうしてあげるわ！」
こんな騒ぎを起こしていた。それを見てだ。
歌劇部員達も他の奏楽部の面々もだ。呆れ果てていた。そうしてこう話すのだった。
「あの二人何やってんだ？今度は」
「さあな。馬鹿やってるのはわかるけれど」
「ロイヤルボックスで騒ぐなよ」
「あそこ天皇陛下か来日した各国の王族の方の場所だぞ」
「勝手に入られないんだぞ」
「掃除だって校長先生が特別にしているのに」
「どうしたものだろうな」
今度は困った顔になる彼等だった。
「言って聞く連中じゃないし」
「強制連行するか？」
「追い出す？練習の邪魔だし」
「エスカレートするのは間違いないし」
それが二人なのだった。
「そんな連中だからねえ」
「放置したら危ないし」
「じゃあやっぱり」
「追い出すか」
「そうだな」
そしてだ。歌劇部員の一人が携帯を取り出してだ。すぐに連絡したのだった。

第二百三十六話　暴走するイレギュラーその七

「これでよしだな」
「誰に連絡したんだよ」
「風紀部にな」
彼等にだというのだ。
「それもあの白衣の連中な」
「ああ、あの二人の天敵のか」
「あの連中か」
「連絡したからすぐ来るよ」
連絡した部員は落ち着いた様子で述べた。
「本当にすぐね」
「何秒位でかな」
「来てくれるかな」
話は秒単位になっていた。
「果たしてどれ位で」
「すぐに来て欲しいけれど」
「呼んだか」
そんな話をしているとだった。もうだった。
白い詰襟の学生服の一団がだ。彼等の前に来た。そのうえで問うてきたのだ。
「話は聞いた」
「またあの二人か」
「ええと、五秒だけれど」
歌劇部員の一人が自分の腕時計を見ながら述べた。
「早いね、本当に」
「ううん、呼んですぐって」
「殆どワープだけれど」
「ワープは使っていないが」

白服の男の一人がそれを否定した。尚彼等の中には女子生徒もいる。
「ここまで自転車で来たんだが」
「僕もだぞ」
「私もよ」
彼等はそれぞれそうだと答えるのだった。
「ちゃんとな」
「校則を守ってね」
「それで五秒でって」
それ自体がだ。謎だった。
「有り得ないんだけれど」
「呼んだらすぐに来られるってね」
「ううん、凄い話だけれど」
「最初から歌劇場にいたんじゃないかな」
こんな疑問が話される。そんな話をしている間にもだった。
白衣の風紀部員達はだ。歌劇場の中を見回していた。そのうえでだ。ロイヤルボックスのところから騒ぐ二人を見てだ。呆れた顔になった。
「よりによってロイヤルボックスで騒ぐか」
「何を考えているんだ」
「あの場所だけは駄目でしょ」
「全くだね」
彼等も歌劇部員達と同じことを言う。
「日本の天皇陛下の場所だぞ」
「そして皇后陛下の」
御一人である。
御二人の場所である。ただし今は女帝陛下で御成婚はまだなので
「早く追い出すか」
「そうしないとね」
「駄目だよな」

こう話してだ。そしてであった。
彼等はすぐにロイヤルボックスに向かおうとする。しかしだった。
一人がだ。こう言うのだった。
「僕達が入っていいか？」
「ロイヤルボックスにか」
「入っていいかどうか」
「それなのね」
「日本の天皇陛下の場所だ」
そこが一番の問題だった。何よりもだ。
「そんな場所に入っていいのか」
「僕達みたいな一介の学生が」
「それはあまりにも恐れ多いんじゃ？」
「やっぱり」
このことを考えるとだ。どうしても躊躇せざるを得なかった。
それでどうしようか困っていた。しかしである。
ここでだ。白衣の風紀部員達の中の一人が述べた。
「いや、ここは」
「ある？」
「やり方がある？」
「ちゃんと」
「ああ、要はあそこから引き摺り出せばいいんだ」
ロイヤルボックスからである。

第二百三十六話　暴走するイレギュラーその八

「そうだろ？そうすればいいだろ？」
「確かに。言われてみれば」
「そうすればいいけれど」
「要は」
「それは」
「そうだよね。だったらね」
さらに話すその彼だった。
「話は簡単だよ。来ぬのなら来させてみせよだよ」
「豊臣秀吉か」
日本の英雄の一人である。一介の百姓から天下人にまでなった。トウジの民衆にとっては気前がよく気さくな太閤様として人気があった。
「それだよな」
「それでいくのか」
「うん、これでいこう」
こう述べる彼だった。そしてだ。
歌劇部員達にだ。こう話すのだった。
「ルパンみたいな服はあるか」
「タキシードにマント？」
「それにシルクハット？」
部員達もそれに応えて話す。
「それ？」
「それを使うの」
「そうだ。それを一人が着てだ」
そうしてというのである。
「舞台に出ればいいんだ」
「ああ、ルパンを捕まえようっていうんだから」

「そのルパンが出たら」
「そうしたらなんだ」
「簡単にいくね」
「確かに」
部員達も頷く。そうしてであった。
早速だ。一人が着替えた。そうしてだ。
舞台に出てだ。こう言うのであった。
「諸君！」
いきなり演説口調である。
「私がルパンだ！」
「ってあれって」
物陰から見ている歌劇部の面々が思わず突っ込みを入れた。
「何か違うよね」
「そうよね。ルパンっていうより二十面相？」
「そんな感じだけれど」
「それは違うんじゃ」
こう話す彼等だった。
「けれどあの二人ならね」
「あれで充分かな」
「騙せる？」
「それも余裕で」
「確実にいける」
風紀部の一人が彼等に答える。彼等も物陰に隠れている。そうしてそこからだ。出て来た二人を捕まえてしまおうと身構えているのだ。
そうしながらだ。彼等は話すのだった。
「あれで騙される」
「ううん、ある意味において凄いっていうか」
「あれで騙されるって」
「普通ないけれど」

「あの二人は特別だ」
また話す風紀部員だった。
「後は彼の芝居を見よう」
「彼なんだけれど」
そのルパンに変装している彼を見ながらの話だった。確かにルパンになっている。しかしルパンにしてはだ。妙に女性的な外見なのだ。
その声もだ。何かが違っていた。
「わかるでしょ。声が違うのよ」
「テノールはテノールでもね」
「違うんだよね」
特別なテノールだというのだ。そのテノールとは。
「カウンターテノールなんだ」
「それも地声からなのよ」
「彼はね」
女性の声域のテノールなのだ。それだというのである。

第二百三十六話　暴走するイレギュラーその九

「ルパンでカウンターテノールって」
「ルパンっていったらバリトン？」
「それか声域の低いテノール」
歌劇部員達が抱くルパンの声域のイメージであった。
「それよね、やっぱり」
「ちょっとカウンターテノールじゃないし」
「そうよね、何か」
「違うんじゃ」
「いや、それでもいい」
声域にはこだわらないというのである。
「それでもな。いい」
「いいんだ、それで」
「声域にこだわらなくて」
「そのままいけるって」
「かなり滅茶苦茶なんじゃ」
「何故なら」
どうしてかというのである。その風紀部員はそのこともまた話すのだった。
「あの二人にそうしたことはわからないからだ」
「だからなのね」
「っていうかあんた達あの二人のことよく知ってるわね」
「それもかなり」
「熟知っていうか」
「知っているのも当然だ」
これが白衣の風紀部員の返答だった。
「あの二人は常にトラブルを引きこしだ」
「その二人をいつも捕まえているから」

「それでなのね」
「知ってるんだ」
「僕達の仕事のかなりの部分があの二人を捕まえることなんだ」
それだけトラブルを引き起こし続けているというのである。非常に迷惑なことこの上ない存在だ。そうした二人に対処しているうちにというのだ。
「だからわかるんだ、あの二人のことは」
「嫌でも」
「そういうことなんだ」
「つまりは」
「知りたくて知ったことじゃない」
こうまで言う。
「けれど知ったからには」
「対処できる」
「そういうことね」
「だからあれでいいんだ」
「あの二人は脳内妄想で動く」
まさにその通りだった。
「目に入ったら考えずに突き進む」
「まんま野生動物？」
「っていうか恐竜？」
「それもあまり頭のよくない」
恐竜の中でもさらに、という意味である。
「そんな感じだけれど、それじゃあ」
「人間じゃなくて」
「そっちって」
「何、それ」
「何か違うんじゃ」
こう話すのだった。そうしてであった。
歌劇部員達はだ。こんな話もした。

「しかし、そんな二人ならね」
「あれで充分かな」
「そうかも」
彼等もそれで納得した。そうして待つのであった。彼等が来るのを。

暴走するイレギュラー　　完

2011・2・3

第二百三十七話　偽物に騙されてその一

偽物に騙されて

二人はだ。舞台にいるそのルパンを見た。
すると瞬時にだ。発作を起こした。
「いたな！」
「遂に姿を現したわね！」
「怪盗アンチョコ＝ルキール！」
「見つけたわよ！」
テンボが言ったその名前にだ。物陰から見ている歌劇部の面々が言った。
「誰、それ」
「アンチョコ＝ルキール！？」
誰も知らない名前だった。
「誰よ、それって」
「初耳だけれど」
「まさか」
ここでだ。彼等はこう考えた。その名前が何かをだ。
「アルセーヌ＝ルパンを間違えた？」
「普通間違えるかなあ」
「ルパンの名前なんて」
誰もが知っている、それこそ連合四兆の中でだ。知らない人間はそれこそ小さな、何も知らない子供位だ。そこまで知られている名前だ。
言い間違える筈がない。それにだった。
「あの二人推理研究会だよなあ」
「それでルパンを間違える？」
「有り得ないっていうか」
「何なのよ」

そんな話をした。しかしだった。ここで二人はまた言った。
「逃さないぞ！」
「イコワール＝パンダ！」
「また間違えてるし」
「しかももう原型止めてないし」
「どうやって間違えるんだか」
「もう理解不能」
推理は専門ではない彼等ですら絶対に間違えない。そんなルパンの名前をだ。二人は素で言い間違えている。それ自体が凄かった。
そしてそのある意味において凄い二人はだ。今度は。
ロイヤルボックスからだった。何と飛び降りたのだった。
「逃すか！」
「絶対に！」
「！？」
「飛んだ！？」
これにはだ歌劇部員達は驚いた。呆れから驚きになった。
ロイヤルボックスは歌劇場のかなり上の場所にある。舞台が最もよく見える場所だ。一階の観客席まで普通に十五メートル以上ある。しかしなのだった。
二人はそこから飛び降りた。普通にだ。
「死ぬ！？」
「下手しなくても大怪我！？」
「馬鹿、あの二人」
「いや、馬鹿だろ」
「しかも大馬鹿」
テンボとジャッキーがそれなのはだ。学園の誰もが知っていた。それは最早であった。知らない者はいないというものであった。
その二人がだ。ロイヤルボックスから飛んだ。そしてだ。
無事着地した。驚くべきことにだ。
当然歌劇部員達も唖然となった。そうしてまた話す。

「身体能力は高い？」
「身体は頑丈なんだ」
「あんな高いところから無事着地って」
「有り得ないっていうか」
「それが奴等だ」
白衣の風紀部員がまたここで話す。
「身体は頑丈で運動神経は高いんだ」
「ううん、そうなの」
「それであんなこともできる」
「そうなのね」
二人は両足の膝を折って衝撃を殺していた。だがそれでもかなり衝撃の筈だ。しかしそれに対して平然としてだ。すぐに立ち上がったのだった。
それを見てだ。風紀部員は歌劇部員達に話すのだった。当然彼も物陰に隠れてである。そこから二人の行動を見ているのだ。
「ないのは頭だけ」
「そういうことね」
「そうだ、それはない」
やはりそうだというのである。
「全くな」
「頭がなくて身体能力あるって」
「それ最悪なんだけれど」
「それも全然ないから」
「ちょっと」
こう話す彼等だった。そしてであった。

第二百三十七話　偽物に騙されてその二

二人はだ。立ち上がってすぐにだった。
舞台にいるルパンに変装している歌劇部員にだ。突き進むのだった。
「逃がさん！」
「覚悟はできてるわね！」
「最早ここまで来たら！」
「逃げられないわよ！」
そんな二人を見てだ。歌劇部員達は少し不安を覚えた。
「大丈夫かしら」
「そうよね。突っこんで来るけれど」
「それも凄い速さで」
陸上部員真っ青の速さであった。それも二人共だ。
「捕まえられるかしら」
「それはいけるのかしら」
「安心してくれ」
しかし風紀部の返事は落ち着いている。
「もうわかっているからな」
「それもなのね」
「普通に」
「あの二人のことはもう何でもわかっている」
風紀部員は完全にという口調だった。
「嫌になる位にだ」
「嫌になる位って」
「そこまでなの」
「とにかくいつも騒動を引き起こしてくれる」
まさに天性のトラブルクリエイターという訳なのだ。
「それに対処しているとな」

「わかるんだ」
「そういうことなんだ」
「そうだ。もうトラップは仕掛けてある」
今度の話はそれだった。トラップだった。
「既にな」
「えっ、もう？」
「もうなの」
「僕達の信条は素早く、相手に知られず」
それがこの白衣の風紀部の信条だというのである。その言葉通り彼等の行動は迅速でありしかも隠密性が極めて高いものである。
その為にだ。彼等は白い忍者とさえ呼ばれているのだ。
その彼等がだ。言う言葉だった。
「だから今も」
「仕掛けたんだ」
「トラップを」
「もう既に」
「そういうことだよ。まあ見ていてよ」
突撃する二人を見ながらまた話す。
「あの二人は絶対に捕まるから」
「じゃあ。今はね」
「信じさせてもらうわ、その言葉」
「絶対にね」
こうしてだった。彼等はだ。今は白衣の風紀部を信じてだ。ことの成り行きを見守るのだった。そうしてその間にもであった。
二人は突き進む。叫びながら。
「遂に！今！」
「怪盗を捕まえるわ！」
二人は観客席の間の通路を突き進んでいる。そこにだ。
一本のロープがあった。それに引っ掛かった。するとだ。
二人の上からだ。ネットが来た。それに捕らえられてしまったの

である。
「な、何っ!?」
「罠!?」
「トラップか!?」
「まさか!」
そのネットは自然に動きだ。二人を完全にがんじがらめにしてしまった。捕らえた相手に反応して捕まえてしまう、そうしたネットであった。
こうして二人は捕まった。部員達はその二人を見て話す。
「何か終わりはあっさりとしてるね」
「そうよね」
「大騒ぎの割には」
「これで終わり?」
「この二人の話は」
「うん、そうだよ」
その彼等にだ。風紀部員が答えた。
「これでね。終わりだよ」
「じゃあよしとする?」
「そうだね。捕まったんだし」
「それならそれで」
「一件落着だね」
歌劇部の面々は風紀部員の言葉に頷いたのだった。そしてだ。

第二百三十七話　偽物に騙されてその三

風紀部員がだ。こう彼等に話してきた。
「後はあの二人はね」
「やっぱり説教部屋行き？」
「生徒指導室？」
「うん、ロシュフォール先生の出番だから」
彼等の顧問である。通称秘密警察長官という。
「僕達は二人を先生に引き渡してね」
「あんた達の仕事も終わり」
「そうなるのね」
「そうだよ。本当によかったよ」
そのことを喜んでいるのがわかる返事だった。
「何はともあれね」
「後はルパンね」
「その怪盗ね」
二人以外にもだ。彼の問題があった。
「あの怪盗はどうしたものかしら」
「このままじゃ盗まれるし」
「どうしたものかしら」
「そっちは」
「何とかなって欲しいけれどね」
風紀部員の言葉から力がなくなった。願望のそれになっていた。
「けれど。それはね」
「あんた達の仕事じゃない」
「そういうことなんだ」
「警察や探偵の仕事だから」
そちらだというのである。そしてそれはまさにその通りだった。
「僕達には何もできないよ」

「残念ながら」
「そうなのね」
「結局は」
「うん、そうだよ」
こう答えるのだった。
「どうなるのか心配だけれど」
「誰かいたらいいけれどね」
「ルパンの相手になる人」
「本当に誰かいたら」
「いてくれたら」
歌劇部員達もだ。それを心配していた。
そしてそのうえでだ。彼等はだ。
テンボとジャッキーが連行されていくのを見届けてからだ。お互いに顔を見合わせて話をした。
「じゃあまた」
「練習を再開しようか」
「そうしよう」
こうしてだった。歌劇部は普通の日常に戻ったのだった。とりあえずお騒がせコンビのことは奇麗に忘れてしまってうえで、である。
しかしその忘れることにされてしまった二人はだ。連行されてもだった。
「離せ！俺達を自由にしろ！」
「さもないとあいつが暴れるのよ！」
「あの怪盗天本博士が！」
「あの博士の相手をできるのは私達だけよ！」
連行する歌劇部員達はとりあえずその言葉を聞いていた。
しかし話を聞くその顔は呆れたものでだ。こう言うのだった。
「あの博士って怪盗だったか？」
「初耳だよ」
「天本博士はものは盗まないぞ」

そうしたことには興味がないのである。博士はだ。
「ものを破壊したりしてもな」
「生体実験とかはしてもな」
「ものを盗むってのはな」
「一切ないからな」
「それで何でなんだ？」
二人の思考がだ。どうしてもわからないのだった。
「何でそれで怪盗になるんだよ」
「マッドサイエンティストってんなら納得できるけれどな」
「それでもな」
それでもだという彼等だった。そしてだ。
彼等は二人を連行していく。連行する先はだ。
やはり生徒指導室である。そこではロシュフォール先生が呆れる顔でいた。そのうえでその席に座っているのだった。そうしてだった。
後ろに横一列に立って座っている風紀部員達にだ。こう声をかけた。
「またか」
「はい、またです」
「またやらかしました」
まさにやらかしたであった。

第二百三十七話　偽物に騙されてその四

「例によってです」
「動物園、植物園で騒いでそしてです」
「歌劇場で騒ぎまして」
「遂に通報が来ました」
「そうか、遂にか」
その言葉にだ。頷く先生だった。しかしその顔は呆れたままだ。
「放置できなかったか」
「やはり。迷惑ですから」
「今回もそのうち通報されると思っていましたが」
「歌劇場で遂にでした」
「今回はあそこからでした」
「今は暫く放っておきたかったな」
先生の言葉は残念そうである。それもかなりだ。
「もう少しな」
「全くですね。只でさえ今は風紀強化週間だというのに」
「そうそう人を回せないのですが」
「あの二人の騒動は放っておけませんから」
「通報が来ればですね」
「そういうことだな。仕方がない」
諦めた声であった。先生はその声でまた言った。
「今回はな」
「はい、それでどうしますか」
「あの二人が来たら」
「いつも通りですか」
「注意ですか」
「注意してそれを聞く連中ではない」
それはもうわかっていた。二人の特徴として人の話は自分達にと

って都合の悪い話は完全に通過するのだ。都合のいい話は別だ。
「それではな」
「それでもですね」
「注意はしなくてはいけませんか」
「そうだ。それは絶対にだ」
騒動を起こした人滅を無罪放免というわけにはいかなかった。例えそれが悪意なぞなくてもだ。賞罰は絶対にしなくてはならないからだ。
「注意はする」
「こうしてですか。止むを得なく連行して」
「そして注意はする」
「それはやはりですか」
「しなくてはいけない」
先生はまた言った。
「それでは今は待とう」
「はい、それじゃあ」
「それで話はとりあえず終わりですね」
「あの二人に関しては」
「終わりだ。ルパンは我々は関与できない」
先生はルパンの話もした。
「だからだ。彼についてはだ」
「見ているだけですね」
「我々は」
「警察ではないしな。それに美術館はな」
「私達の入る場所ではありませんね」
「高校ではないです」
「そうだ、高校ではない」
この点が重要だった。彼等は八条学園高等部の風紀部の一つだ。従ってその行動範囲は高校の中だけに限られるのである。
だからだ。先生もこう言うのだった。

「校内ならだ」
「私達が相手をできますね」
「あの怪盗に」
「それは」
「しかし校内ではない」
先生はまた言った。
「それではだ」
「残念な話ですね」
「全くです」
「言っても仕方がないがな」
「はい、それは」
「最早」
「だがルパンの相手はしてみたいものだ」
先生の願望が出た。
「果たして。彼に勝てるかどうか」
「そうして彼の狩りを抑えられるか」
「それですね」
「そういうことだ。してみたいのは確かだ」
「依頼があればですか」
部員の一人がこう問うた。

第二百三十七話　偽物に騙されてその五

「その場合は」
「あればいいがな」
実際に先生の言葉はそれを願っている響きがあった。それでだった。
先生はだ。憂いのある顔でまた述べた。
「願っているがな」
「では今はそれを期待するしかありませんね」
「それしか」
「そうだ、それしかない」
先生はこう言うだけだった。今は動くことがなかった。
そしてだ二年Ｓ１組ではだ。テンボとジャッキーの引き起こした騒動にだ。またクラス全員で呆れていた。そしてこんなことを話していた。
「全く。いつもいつも」
「仕方ないわね」
「絶対にこうなるって思ってたけれど」
「やっぱりっていうか」
「まさに予想通りね」
こう話すのだった。そしてだ。
ペリーヌがだ。皆にこう話した。
「それでだけれどね」
「それで？」
「それでって？」
「まあ。二人は怒られて暫く自由行動は禁止になったから」
そのテンボとジャッキーについての話からだった。
「とりあえずいいとして」
「放課後は部室に隔離だったっけ」

「じゃあこの騒ぎの間は変な動きはない」
「とりあえずはそれでよしだね」
「二人については」
皆もペリーヌのその言葉に納得する。そしてだった。
ペリーヌはまた皆に話した。今度の話はこうしたものだった。
「後はルパンね」
「ああ、ルパン」
「肝心の彼がどうするか」
「それよね」
「それをどうするか」
「それよね」
「とりあえず警察が出ることになったわ」
ペリーヌが話す。
「当然だけれどね」
「警察ねえ」
「今回は警察が頼り？」
「警察がどうしてくれるか」
「果たしてルパンを防げるか」
「どうなるかよね」
こう話をしていく。話は彼等から離れてだ。警察のものになろうとしていた。
しかしだ。警察となるとだった。彼等も首を傾げるのだった。
「日本の警察ねえ」
「優秀だって言われてるけれど」
「それでも。相手はあの稀代の怪盗だし」
「大丈夫かな」
「絶対に捕まえられるかしら」
「どうかな」
皆それが不安だった。実際のところ日本の警察がルパンの相手をできるかどうかはだ。彼等にとってかなり不安なところであった。

そしてその不安さをだ。彼等は露わにしていたのだった。
「対抗できたらいいけれど」
「それができなかったら」
「浮世絵はルパンのもの」
「写楽の浮世絵が」
言うまでもなく国宝級である。それがだというのだった。
「渡したくないけれど」
「どうかしら」
「警察がしっかりやってくれるかな」
「大丈夫かな」
皆そこが不安で仕方なかった。どうなるかがだ。
それで話していく。だがそれは余計に不安を増長させてしまっていた。
その中でだ。セーラがこんなことを皆に話した。
「日本の警察の方々にです」
「警察に？」
「っていうと？」
「もう一つの力が必要かと」
こう皆に話すのだった。

第二百三十七話　偽物に騙されてその六

「警察にです」
「もう一つの力？」
「だからそれは何？」
「警察に加えるべき力は」
「はい、それは参謀です」
それだというのである。
「参謀がいれば対抗できます」
「参謀ねえ」
「つまり軍師？」
「軍師っていうと？」
「果たして誰が軍師になるか」
「それが問題だけれど」
皆話していく。軍師が必要とするならばその軍師が誰なのかだ。
それが問題になっていくのは当然だった。皆は自然にその考えに至ってきていた。
「誰？じゃあ」
「警察に必要な軍師って」
「誰かしら」
「一体」
「まさか」
ここで言ったのはだ。アンジェレッタだった。
「セーラとか？」
「私ですか」
「ええ。セーラならできるじゃない」
だからだというのである。
「それで。じゃないの？」
「私はそれは」

「駄目？それは」
「自分から言うことはないです」
動かないとだ。ここでも話すのだった。
「それはないです」
「ないの」
「はい、ありません」
また言うのであった。
「ですから」
「ううん、そうなのね」
アンジェレッタはペリーヌのその話を聞いて困った顔になった。
そうしてそのうえでだった。彼女はあらためて皆にこう話をしたのだった。
「じゃあ他に探すしかないのね」
「そうだよね」
「それじゃあね」
皆彼女の言葉に応える。だが、だった。
セーラがだ。自分からは、と言ったのには気付いていなかった。
そこにある言葉の意味についてもだ。気付かなかったのである。
それでそのうえでだ。皆はまた話していく。
「とにかく怪盗を何とかしないといけないんだよね」
「誰かが」
「警察がねえ」
「そして警察を助けられる軍師がいれば」
その軍師についても話される。
「軍師。誰？」
「警察を助けられる軍師」
「それは誰なのか」
「警察もそれに気付くかな」
今言ったのはネロだった。
「軍師が必要だってことに」

「ああ、その問題もあるね」
ジョンがネロのその言葉に頷いた。
「軍師、まあ参謀が必要かどうかって」
「本人が気付かないと駄目じゃない」
「本人達がだよね」
「だから。警察が気付くかどうかも問題だよ」
「誰かが気付いてそれをしたら」
「違うね」
二人の話はそのまま皆も聞いていた。彼等にしてもだ。ルパンに対しては殆ど警察に任せるしかない状況になってしまっていたのだった。
それでもどうしたらいいのか話していく。だが結論は出ないままだった。
そしてだ。警察でもだった。このことを話していく。
「ううむ、ルパンか」
「難敵ですね」
「これまでにない」
「全くです」
対策本部室が設けられていた。そこでの話だった。

第二百三十七話　偽物に騙されてその七

「代々の怪盗ですか」
「当代のルパンも色々なものを盗んでいますね」
「それも鮮やかな方法で」
「我々がそれを防ぐ」
「どうして防ぐかですが」
「果たして」
「そうだ、それだ」
スーツにトレンチコートの中年の男がだ。ダークブルーの制服の警官達に述べる。
「我々はルパンに対抗できるか」
「彼の今回の狩りを防げるか」
「それですね、問題は」
「果たして」
「捕まえることは無理だな」
トレンチの男はそれはだというのだった。
「残念だがな」
「警部でもそれはですか」
「銭形警視でもですか」
「俺でも無理だ」
実際にそうだというのであった。その銭形警視もだ。
「ルパンはな。あの男はどんなトラップでも逃れる奴だ」
「そしてどれだけ警官がいてもですね」
「絶対に逃れる」
「そういう相手だからですね」
「そうだ。捕まえることは無理だ」
警官であるがだ。それを諦めるしかない相手だというのだった。
「どうしてもな」

「残念ですね」
「全くです」
制服の警官達は無念さを込めて述べた。
「警官が怪盗を捕まえられないとは」
「こんなことがあっていいのですか」
「それは恥です」
「確かに恥だ」
警視もそれを認める。苦々しい顔で。
「だが。堂々と予告されてそのうえで盗まれるのはだ」
「さらに恥ですね」
「それは」
「そうだ、その通りだ」
まさにそうだというのであった。
「それだけは許してはならない」
「そうですね。確かに」
「それは最悪です」
「何としても避けたいです」
「だとすればだ」
警視は考えていく。
「我々の力だけで無理だとする」
「その場合はですか」
「どうするかですね」
「外部から力を借りよう」
これが警視の判断であった。
「そうするとしよう」
「警察が外部の組織に応援を頼むというのも」
「それもまたあまり体裁がいいとは思えませんが」
「それでもですね」
「犯人を捕まえ損ねるよりいい」
それよりましだというのである。警視の考えは合理的であった。

それは確かに警官らしい。だが警官にあるプライドはだ。今は最低限に抑えていた。

そしてその最低限にまえ抑えたプライドを隠してだ。警官達にさらに話した。

「だからだ」

「では探偵ですか」

「探偵に来てもらいますか」

「アルセーヌ＝ルパンが相手なら」

その場合の相手となるとだ。まず思いついた相手は。

「シャーロック＝ホームズですね」

「それ位の相手がですね」

「必要ですか」

「そうだ。銭形平次だけで無理ならだ」

他ならぬ彼自身のことである。それも言うのだった。

第二百三十七話　偽物に騙されてその八

「ホームズも呼んでくることだ」
「そうですね。ホームズですか」
「明智小五郎でもいいですが」
「少なくとも腕の立つ協力者ですね」
「それが今必要ですね」
ここで明智小五郎が出たのは彼もまたルパンと戦っているからである。二十面相にしてもそのモデルはアルセーヌ＝ルパンであるのだ。
「ここは」
「それが誰かなのですが」
「一人心当たりがある」
警視のその目が光った。
「一人な」
「誰ですか、それは」
「一体」
「どの探偵ですか？」
「学生探偵だ」
こう話す彼だった。
「学生探偵だ。一人いる」
「学生探偵？というと」
「正式に探偵ではない」
「そうした子ですか」
「そうした子が実際にいるんですか」
「連合の人間ではないがな」
警視はこのことも話す。話をしながらさらに真面目な顔になっている。
「マウリアの人間だ」

「ああ、あの娘ですか」
「あのシヴァ家のご令嬢」
「あの娘ですね」
マウリアと聞いてだ。警官達もすぐにわかった。この界隈においてシヴァ家とその巨大な、宮殿としか言いようのない別荘のことは有名になっていたのだ。
「あの宮殿には連合では違法の建物や所有するには特別な許可が必要な動物達が多くいますが」
「マウリアということで治外法権ですからね」
「何時何が出て来るかおかしくないので」
「何時もマークしていますが」
「マークはしない方がいい」
警視はそれは止めたのだった。
「下手なことをすればだ」
「どうなりますか」
「それをすれば」
「死ぬ」
一言だった。
「急死することになる」
「急死ですか」
「真相は藪の中で」
「急死するんですね」
「マウリアと連合は違う」
このことが一番大きかった。連合は法治であり階級というものがない。しかしマウリアではカーストによっては時折それがなくなることがあるのだ。
だからだ。警視はこのことを注意するのだった。
「若しあの家にとって知られてはいけないことを知ればだ」
「それで、ですね」
「それだけで」

「急死する」
どういう経緯で急死するかはあえて言わない警視だった。
「そうなりたいか」
「いえ、連合ならともかく」
「マウリアですし」
「まあそれは」
「そうですね」
彼等も警官なので命を惜しまない。だがそれは連合、それも日本においての話だ。相手がマウリアならばだ。しかも常識が通用しない相手となるとだ。
及び腰になってだ。そうして話すのだった。
「まあいいのではないでしょうか」
「そう思います」
「連合でないのなら」
「それで」
いいというのだった。彼等はだ。
何はともあれシヴァ家のそうした『ないこと』にしなくてはならない現実はいいとしたのだった。そしてそのうえでまた話されるのだった。
「何はともあれだ」
「はい」
「何はともあれですね」
「そうだ。あのお嬢様の力を借りる」
こう警官達に話す警視だった。

第二百三十七話　偽物に騙されてその九

「ここはな」
「では。すぐにですね」
「あの宮殿に誰かが行って」
「そうして協力を依頼しましょう」
警官達も話をまとめていく。
「問題は誰が行くかですが」
「私が行きましょうか」
「いえ、私が」
警官達はここでは使命感を出した。警官としていいことである。
それで口々に名乗り出る。だがここで警視は彼等にこう告げた。
「いや、ここは私が行こう」
「警視がですか」
「行かれますか」
「そうされますか」
「何度も言うがマウリアにはカーストがある」
法律的にはなくなってもだ。やはりそれは存在しているのだ。
それをだ。それでこう話すのだった。
「依頼者にしてもだ」
「それなりの人間でなくてはいけない」
「そういうことですね」
「だから私が行こう」
警視はまた言った。
「そうする」
「わかりました。それでは」
「御願いします」
「そうする。さて」
ここまで話してだ。また言う警視だった。

「ではすぐにな」
「はい、それでは」
「行ってらっしゃい」
こうして警視が行くことになった。しかしであった。
ここでだ。彼等のところにだ。彼等の署の署長が来た。そうして言うのであった。
「凄いことになったぞ」
「あっ、署長」
「凄いこととは？」
「何かあったんですか？」
「君達に協力者が名乗り出て来たぞ」
こう警視達に話すのだった。
「あのシヴァ家のお嬢様だ」
「えっ、あのお嬢様がですか」
「あの、あちらからですか」
「名乗り出て来たんですか」
「あの人から」
「そうだ。凄い話だろ」
署長の顔もにこにことなっている。
「これでルパンに対抗できるかも知れない。マウリアの妖術でな」
「しかし」
笑顔の署長にだ。警視が言った。
「今こちらから依頼に向かうつもりだったのですが」
「君がか」
「はい、それがなのですか」
向こうから協力を申し出て来た。それが彼には不思議であった。
それで言う。だが署長はこう言うだけだった。
「いいではないか。向こうから申し出て来たからな」
「それはそうですが」
「なら話は決まりだ。それではな」

こうしてだった。何はともあれセーラの協力が決まったのであった。何はともあれ警察にとってはいいことであった。それは間違いなかった。

偽物に騙されて　　完

２０１１・２・１０

第二百三十八話　依頼者その一

依頼者

セーラはだ。自身の部屋で紅茶を飲みながらだ。己の後ろに控えているラメダスとベッキーに対してこう話した。

「来られますね」

「はい、どうやら」

「もうすぐですね」

二人もだ。こう彼女に答えた。

「この別荘にです」

「来られます」

「私も驚いています」

とはいっても表情は変えないセーラだった。

「まさかあの方御自ら来られるとは」

「全くです」

「しかし。それだけの状況だというのですね」

「そうですね。考えてみれば」

二人は真剣な面持ちだった。そうして話すのだった。

「何しろ相手はあのルパンですから」

「お嬢様に対抗できる傑物です」

「それならばです」

「あの方御自らも」

当然だとだ。ラメダスとベッキーは話す。

そしてだ。そのうえでセーラはまた言うのであった。

「では。応接間においてです」

「御会いされますね」

「今から」

「用意をお願いします」

こう二人に話した。

「それではです」
「今から」
「では」
セーラはお茶を飲み終えるとすぐに応接間に向かった。その白い壁に赤いビロードの絨毯の欧風の部屋、それだけで優に普通の家程はある大きさの部屋から出てだ。
舞踏の場の如き広さの部屋に入った。そこはマウリア調であり既に音楽隊もいる。その中央の豪奢なソファーを前にしてだ。彼女はまたラメダスとベッキーに話した。
「この部屋ならですね」
「はい、あの方が来られても」
「招かれても問題はないかと」
「礼儀を忘れてはなりません」
また言うセーラだった。
「それは決して」
「ではそれで」
「この部屋で」
「はい、そうです」
こう話してだ。その人物を待つのだった。
やがてその人物が来た。その彼は。
長身痩躯で端整な、貴公子然とした青年だった。見事なスーツを着ておりその流麗な顔立ちからは香りが漂うばかりである。
見事な黒髪が輝き星を思わせる黒い瞳をしている。彼こそは。
「ようこそ、理事長」
「はい」
連合中央政府国防長官にして八条グループの後継者、そしてこの八条学園の理事長でもある。八条義統その人であった。
その彼が来たのだった。まずはセーラがだった。
彼に一礼してだ。こう言うのであった。
「理事長がここに来られたということは」

「はい、日本に来ていたのですが」
彼にとっては祖国へ戻ったということでもある。
「ですがそれ以上にです」
「あのことで」
「そうです。あのことです」
そこまで聞いてだ。セーラはあらためて八条にこう言った。
「わかりました。それでは」
「それではですか」
「まずはおかけになって下さい」
穏やかに微笑んでだ。こう八条に言うのだった。
「まずはです」
「そうですね。席にかけてそうしてから」
「ゆっくりとお話しましょう」
「わかりました。それでは」
こうしてだった。二人は向かい合ってソファーに座ってだ。それから紅茶を飲みながらだ。落ち着いた中でその話をはじめるのだった。
八条がだ。こうセーラに話した。

第二百三十八話　依頼者その二

「我が国の警察から依頼がありました」
「日本の警察からですか」
「そうです。彼のことで」
「アルセーヌ＝ルパンですね」
「そうです。警察は今協力者を捜しています」
当然ルパンに対する為だ。それに他ならない。
「そしてルパンに対抗できる人物」
「それが私だというのです」
「その通りです。そして私がです」
「私に協力を依頼に来られた」
「その通りです」
彼女が通う学園の理事長自らが言うのであった。そう。
「そしてこれはです」
「八条グループ全体の問題でもありますね」
「日本の、連合の問題でもあります」
話は次第にスケールアップしてきていた。果てには連合全体であった。
「あの写楽の浮世絵は我が八条グループの八条学園で保管しています」
「その中の八条学園美術館で」
「しかし。それだけではないのです」
一美術館で保管しているだけに留まらないものだというのだ。
「それは連合全体の宝だからです」
「まさに連合そのものの宝だからですね」
「その通りです。ですから」
「盗まれてはならない」
「狩られてはならないものです」

如何に相手がルパンであろうともだ。そうだというのである。
そうしてだ。八条はさらに話した。
「決して。ですから」
「私に協力の依頼をですね」
「そういうことです。御願いできるでしょうか」
「私は」
まずはだ。セーラは自分のことを話した。
「今回あの人と競うつもりはありませんでした」
「そうだったのですか」
「ですが。私の力が望まれているのですね」
「はい」
八条はセーラのその言葉に頷いて答えた。
「その通りです」
「わかりました」
八条の言葉を聞き終えてだ。こう言ったセーラだった。
「人の御願いはです」
「それはですか」
「私は。神々が許す限り御受けしなければならないのです」
「だからですか」
「はい、だからです」
いつもの優雅で優しい微笑みでだ。八条に答えた。
「是非共。協力させて下さい」
「わかりました。ではすぐに警察に連絡しておきます」
「いえ、それは私から」
「貴女からですか」
「理事長ともあろう方にそこまでして頂くわけにはいきません」
だからだというのである。
「それはです」
「そうですか。それでは」
「それにです」

「それに？」
「わざわざここまで来られるとは」
セーラはいささか驚いてだ。このことも話すのだった。
「恐れ多いです」
「私がこの別荘まで来たことがですか」
「はい、理事長先生にまで」
「いえ、それはいいでしょう」
「いいのですか？」
「教師の家庭訪問だと思えば」
八条は気品のある微笑でセーラに述べた。
「何の問題もないでしょう」
「それで済みますか」
「理事長も教師ですから」
また言う八条だった。
「ですから」
「そういえば理事長は教員免許は」
「はい、持っています」
その点からも万全であった。
「ですから」
「わかりました。それでは」
「もっとも。そうしてもです」
八条は微笑んでまた述べた。それは政治家としての顔での微笑みだった。
「そのまま信じられる方はいないでしょう」
「ただの教師の家庭訪問だと」
「ですが言い訳はできます」
「だからいいのですね」
「政治の世界は誰が見てもわかるものでも言い訳が必要ですから」
「それはですね」
「は、だからです」

それでだとだ。また話す八条だった。

第二百三十八話　依頼者その三

「今はそれで」
「わかりました。それでなのですが」
「ルパンですね」
「宜しく御願いします」
「あの方とは。マウリアで何度も競いました」
セーラは八条にこのことを話した。
「何度も勝利を収め何度も敗れました」
「何度もですか」
「まさに互角でした」
そのルパンとの対決はだ。そうだったというのである。
「あの方は決して容易な方ではありません」
「代々。そうして連合で狩りを続けていますし」
「まさに怪盗の家系です」
しかもサラブレッドだ。そうした人物だというのである。
「あの方に。今連合で対抗できるのは」
「貴女だけですね」
「もう一方おられます」
もう一人だというのである。
「その方は」
「どなたですか、その方は」
「今私の目の前におられます」
微笑んでだ。そのうえで八条に述べるのだった。
「理事長もまた、です」
「私もできますか」
「はい。理事長ならルパン氏に勝てます」
こう話すのであった。
「是非共」

「そうであれば有り難いことですが」
「ただ。今回はお任せ下さい」
今はだというのだった。
「依頼ですし」
「わかりました。それでは」
「あの方との競争。することはないと思っていましても」
また微笑みになる。そうしての言葉であった。
「いざ。するとなるとです」
「違いますか」
「心が弾みます」
こう言うのであった。
「自然とです」
「御心がですか」
「そうなります。楽しみです」
また言った。
「では。今から」
「はい、御願いします」
こうしてだった。セーラは依頼を受けて警察に協力してだ。ルパンと競うことになった。運命の相手とだ。ここでも戦うことになったのである。
そうしてであった。八条が帰った後でだった。
セーラはその宮殿でだ。ラメダスとベッキーに対してこう話した。
「やはり心がです」
「弾まれますか」
「そう仰るのですね」
「楽しみで仕方がありません」
うっとりとさえしたものをだ。その顔に見せていた。
「あの方との競いはです。最高のものですから」
「まさに怪盗ですから」
「それも代々の」

「初代に匹敵する程ですね」
そこまで話すセーラだった。
「あの方は」
「お嬢様に拮抗できる数少ない方」
「あの方こそはですね」
「そこまでの方ですから」
「お嬢様も」
「競うことはそれに拮抗する相手でなくてはなりません」
セーラはにこやかな顔になっていた。そのうえでの言葉だった。
「そうでなくてはです」
「楽しみがない」
「競うことにならない」
「一方的に走り去っては競争ではありません」
陸上競技に例える。この場合は長距離走である。
「一人で走っているだけです」
「しかし拮抗する相手なら」
「そうではなくですね」
「競争になると」
「それがいいのです」
セーラはまた話した。

第二百三十八話　依頼者その四

「そこに面白さがあります」
「そして互いに高みを目指す」
「より一層の人間としての成長を」
「怪盗であってもそれを目指す人は」
それが即ちルパンというのである。
「いいというのが私の考えです」
「確かにルパンは怪盗ですが」
「それでもですね」
ルパンがどういった人物かはだ。ラメダスもベッキーもわかっていた。それもよくだ。
「人間としての誇りがあり」
「モラルもありますね」
「あの方は紳士です」
セーラはルパンをこう評した。
「立派な紳士です」
「それは代々ですしね」
「初代から代々の紳士です」
アルセーヌ＝ルパンは怪盗であったが紳士であった。しかも愛国者でもあった。義賊であり相手はあくまで悪党や権力なのだ。
そしてだ。当代のルパンもだ。
「あの方も盗むものは」
「そうですね。予告をしてから」
「そのうえで、ですし」
「相手は悪人や強大な相手だけです」
「八条学園も然り」
八条学園といえば八条グループの中にある。連合屈指のコンツェルンのだ。そうした意味では八条グループは権力になるのだ。

その八条グループについてだ。彼等はさらに話す。
「連合でも有名なグループだからこそ」
「相手として選び」
「そして盗むものもですね」
「国宝級のものですか」
「それでこそあの方です」
ルパンだというのである。
「だからその方とです」
「はい、勝負をしてですね」
「一歩も引かない」
「そしてお互いに切磋琢磨して」
「成長していきますか」
「この生において私は」
マウリア人らしい言葉をだ。セーラは出した。
「これ以上はない好敵手に巡り会えました」
「怪盗アルセーヌ＝ルパン」
「あの方と」
「これは運命です」
またしてもマウリア人らしい言葉だった。
「この運命を喜んで受けましょう」
「はい、それでは」
「我々も」
「出陣ですね」
セーラは微笑んで述べた。
「今から」
「わかりました」
「それでは」
こうしてセーラ達も出陣したのであった。このことはすぐにだった。
ルパンの耳に入った。彼は部下達の報告をアジトで聞いていた。

そのうえで満足した笑みを浮かべてだ。ワイングラスを片手にして言った。
「素晴しい」
「あのお嬢様と競えることがですね」
「それでなのですね」
「そうだ、今回は競うことはないと思っていた」
彼はそのことを危惧していたのだ。
「しかしそれがな」
「どうもあの長官が動いたようですし」
「中央政府国防長官であるあの長官殿が」
「八条義統氏だな」
ルパンはその彼の名前も言った。
「あの長官殿ともな」
「何時かはですね」
「競いたいですか」
「あの長官殿も私の相手足り得る」
そこまでの人物だとだ。ルパンは認めているのであった。
「何時かはわ」
「左様ですか」
「競いたいですか」
「そうだ、そうしたい」
また言うルパンであった。

第二百三十八話　依頼者その五

「間違いなく楽しいものになるだろう」
「しかし今はですね」
「あのお嬢様とです」
「マウリアのあの」
「あのお嬢様とは運命を感じる」
ルパンもだ。彼女と同じことを言うのであった。
「そう、神々に導かれたな」
「宿命のライバル」
「それだというのですね」
「そうだ、それだ」
まさにそれだというのである。
「私にはじめて地をつけた相手」
「しかしその時にルパン様は」
「悔しい思いをされなかったのでしたね」
「むしろ。喜びを感じた」
感じたのはだ。それだというのだ。
「ライバルに出会えたことにだ」
「そのことにですか」
「喜びを」
「そうだ、感じた」
また言う彼だった。
「そしてそれからだ」
「御主人様がさらに成長されたのは」
「それからでしたね」
「まさに」
「好敵手がいてこそだ」
また話すルパンだった。

「全てな」
「まさに。そうですね」
「だからこそ今も」
「成長されている」
「そうですね」
「警察と競うことはだ」
今度はいささか面白くなさそうな顔になっての言葉だった。
「悪くはないがだ」
「それでもですね」
「警察というものは」
「どうしてもですね」
「硬いですね」
「そうだ。動きが硬い」
それが警察の弱点であり彼にとっては物足りないところだというのである。彼はいささか面白くなさそうな顔で話すのであった。
「杓子定規だ」
「まさにそうですね」
「どうしてもそうなりますね」
「警察というものは」
「役所だからな」
それが原因だというのだ。これはこの時代でも同じだ。
「保安官もそうした意味ではだ」
「同じですか」
「やはり」
国によってはそうした存在もいるのだ。各国政府から許可を受けて警察の仕事をする。そうした意味では警察と同じだが民間というところが違う。
「杓子定規ですか」
「やはり」
「そうだ。だから物足りない」

彼にとってはというのだ。
「フレンチ警部まで緻密なら手強いがな」
「あそこまで緻密な人物となると」
「かなり少ないですね」
「やはり」
「そうだ。フレンチ警部は天才だ」
珍しい評価ではある。フレンチ警部が天才というのはだ。
「彼は努力と根気の天才だ」
「そうした天才もある」
「そうしたことですね」
「つまりは」
「その通りだ。彼はそうした意味でホームズと同じだ」
名探偵の代名詞だ。ただし連合ではやはりイギリス人ではなくなっている。何故かアメリカ人になっていたり中国人になっている。日本人の場合もある。
「天才なのだ」
「才能は様々ですか」
「探偵であっても」
「色々なタイプがいるからこそ」
「だからですね」
「そういうことだ。あのお嬢様もそうした意味でだ」
またセーラの話になった。

第二百三十八話　依頼者その六

「やはり天才なのだ。私と同じくな」
「天才と天才の競い合い」
「それに勝つのは」
「どちらかですね」
「私は勝つ」
ルパンは強い口調で述べた。
「今回はだ」
「はい、それではです」
「我々もまた」
「及ばずながら」
「頼むぞ。同志達よ」
部下達をだ。同志と呼んだのだった。
「代々我が家に仕えてもくれているしな」
「確かに。初代からですね」
「我々がルパン様にお仕えしているのは」
「その時からですし」
「思えば長いです」
「その力も借りよう」
また微笑んで彼等に話した。
「是非な」
「有り難きお言葉」
「それでは」
「獲物も素晴しいが相手も素晴しい」
この二つが両立しているというのだ。
「そうであってこそだな」
「面白いですね」
「全てが」

「怪盗冥利に尽きる」
そこまでだというのである。
「まことにな」
「その通りですね」
「ライバルがいてこそですね」
「怪盗が輝くのも」
「怪盗は影の存在」
その自覚はあった。ルパンの頃からだ。
「そして探偵や警察は光の存在だ」
「光があるからこそ影も映える」6
「そういうことですね」
「光と影」
「その二つが揃ってこそ」
「御互いが映えるものだ」
こう話すルパンだった。
「だからそれでいいのだ」
「では今回の狩りは」
「このうえなく素晴しいものになりますね」
「今から楽しみだ」
ルパンはそう言いながらだ。手にしているグラスをだ。
一つから一ダースに増やした。何時の間にかワインのボトルも増えていた。
そのグラスとボトルを前にしてだ。部下達に告げた。
「飲むのだ」
「我々もですか」
「そのワインを飲んでいいのですか」
「今ここで」
「そうだ。狩りの前祝いだ」
それでだというのである。
「飲むのだ。いいな」

「わかりました。それでは」
「御言葉に甘えまして」
部下達もだ。笑顔で応えた。
そうしてそれぞれのグラスを手に取る。するとだ。
ボトルは自然に動いてだ。そのグラスに酒を注ぎ込む。ルビーの色をした美酒がクリスタルの輝きを放つグラスの中にたたえられる。
それを見てだ。部下達はまた話した。
「この美酒はあれですか」
「日本の甲斐星系のですね」
「あの赤ワインですか」
「この国きっての美酒という」
「日本は酒もいい」
ルパンは微笑んで話した。
「ワインもだ」
「ルパン様が認められるまでにですか」
「日本はワインもいいのですか」
「酒までもが」
「そうだ。美術品だけではないのだ」
怪盗らしくだ。美術品から話していく。
「ワインもいいのだ」
「そうですか、それではその美酒もですね」
「楽しむべきだと」
「そういうことになりますか」
「そうだ。狩りの前に楽しむのだ」
まさにその美酒をというのだ。
「チーズやソーセージでどうだ」
肴はそれだというのだ。ワインも酒である。酒であれば肴は外せない。ルパンはそのことを実に丁寧に守っているのであった。
「チーズもソーセージも日本のものだ」
「それもですか」

「日本のものですか」
「日本の酒には日本の食べ物だ」
その組み合わせだというのである。
「それが一番いいからな」
「ではそれも楽しみ」
「そうして狩りに向かいましょう」
こう話してであった。
部下達もそのワインとチーズ等を楽しみながらだ。狩りに思いを向けるのだった。宿命の二人の対決がだ。はじまろうとしていた。

依頼者　　完

２０１１・２・１６

第二百三十九話　嵐の前その一

嵐の前

警視はだ。制服の警官達の報告を受けてだ。満足してこう言った。
「よし、これで百人力だ」
「百人ですか」
「そこまでだというのですか」
「百人では効かないかも知れない」
警視は警官達にさらに述べた。
「それ以上かもな」
「あのお嬢様の助けを得ることはそこまで大きいのですか」
「シヴァ家のご令嬢」
「そこまでの方ですか」
「そうだ。ルパンがマウリアにいた時のことだ」
このことは既に日本の警察にも伝わっていた。警視はそのことも話す。
「その時にルパンと互角の勝負を繰り広げていたのだ」
「あのルパンとですか」
「互角の勝負を繰り広げていたのですか」
「あの怪盗と」
「そうだ。そうした方なのだ」
警視は真剣そのものの顔で話す。
「あのお嬢様はな」
「ううむ、そこまでだったのですか」
「そこまでの方だったのですか」
「あのシヴァ家のお嬢様は」
そう話すのだった。そしてだ。
警視がだ。また彼等に話した。
「それでは我々も行こう」

「美術館にですね」
「あの学園の美術館にですね」
「そうだ。お嬢様は既にそこにおられる」
鋭い目で警官達に述べる。
「それならだ。我々もだ」
「向かいますか」
「そうしてそこで落ち合いますか」
「そうするとしよう。では行くぞ」
「わかりました」
「それでは」
警官達も敬礼で応える。その敬礼は連合軍の敬礼であった。肘を追って小さくさせた敬礼である。連合の敬礼は警察も消防署もこれで統一されているのだ。
その敬礼をしてから全員で美術館に向かう。するとだ。
美術館の前にだ。一台の車があった。黒く巨大な車だ。
「あれはマウリアの車ですね」
「そうですね」
警官達の何人かがその車を見て述べた。
「連合の車ではないですね」
「マウリアのシヴァグループの車です」
ここでもセーラの家の話が出る。
「あちらではマハラジャ達が乗る高級車ですが」
「それが停まっているということは」
ここから答えが一つ出た。
「あのお嬢様が既にですか」
「美術館に来ていますか」
「そうだ。予想通りだな」
警視もここで言う。その見事な車を見ながらだ。
「あのお嬢様はもう来られている」
「動きが速いですね」

「もうとは」
「あのお嬢様は噂によるとだ」
その噂はだ。何かというとである。
「千里眼の持ち主らしい」
「千里眼ですか」
「それを持っておられるのですか」
「そうだ、それをだ」
持っているというのである。
「あくまで噂だがな」
「それでもうここまで来ましたか」
「ルパンに備えて」
「そして我々が来ることも察して」
「そうしてなのですか」
「おそらくだがな」
警視は己の言葉は憶測だと前置きした。しかしそこには確信もあった。セーラがそうした能力を持っていると確信しているのである。
「そうだ」
「ううむ、千里眼ですか」
「それは最早超能力ですね」
「神通力ですね」
そうした類の力だとだ。警官は話を聞いて述べた。
「天狗や鬼の」
「それか九尾の狐の」
日本では昔から言われている妖怪達だ。とりわけ九尾の狐はである。今の日本の首相である伊東の通称にさえなってしまっている。こうした妖怪達は特別な力を持っていると考えられているのだ。

第二百三十九話　嵐の前その二

「うちの首相みたいですね」
「全くです」
そして彼等も伊東が九尾の狐だというのであった。
「ただ。マウリアですから」
「狐ではないですね」
「それでは」
「マウリアでも狐はいるがな」
警視はそれはいるというのである。
「だが。我が国の様に化けるかというとな」
「それはありませんか」
「化けることはしませんか」
「それは」
「確かそうだったな。マウリアの狐はな」
狐が化けるというのは元々中国から来ている話だ。それが日本にも伝わってそれで日本の狐も化けるようになったのである。
「それはしなかった筈だ」
「ではあのお嬢様は狐ではありませんか」
「それではないのですね」
「少なくとも狐ではですか」
「そうだ。それはない」
警視はまた警官達に話す。
「それはな」
「では他の生き物ですか」
「マウリアの動物ですね」
「というと」
ここでだ。一つの動物が出た。それは。
「虎でしょうか。マウリアですと」

「虎だと猛々しくないか？」
「それもかなり」
虎の話を出した警官にだ。同僚達はすぐに突っ込みを入れた。
「お嬢様ってイメージじゃないだろ」
「どっちかっていうと格闘家になるだろ」
「そっちにな」
「じゃあ違うか」
虎を出した警官も同僚達の突っ込みに納得した。
「虎じゃないか」
「少なくともな」
「虎じゃなくて他の生き物だろ」
「虎とか。そういう猛獣じゃなくてな」
「牛でも象でもないな」
どちらもマウリアとくればすぐに連想される動物である。マウリアでは街で普通に牛が歩いている。牛はヒンズー教の神の生き物だからである。
「じゃあ何だろうな」
「蛇、違うな」
「鰐でもないし」
こうした動物がマウリアの至る場所にいたりする。
「鳥か？それじゃあ」
「孔雀とかな」
「ああ、孔雀な」
「それがあった」
皆その鳥が出るとすぐに頷いた。納得してのことだ。
「マウリアの国鳥だったよな」
「そうでもあるしな」
「それに孔雀なら」
今度はだ。その外見を見ての話だった。
「外見奇麗だしな」

「あのお嬢様に相応しいな」
「だよな、可憐な感じでな」
「いいな」
こう話をする。しかしであった。
孔雀ということで納得してもだ。警官の一人がこんなことを言った。
「けれど孔雀ってあの奇麗な模様だけれどな」
「それがか」
「何かあるのか」
「あれってオスだろ」
その警官が指摘したのはそこであった。
「オスがメスに求婚する時に見せるだろ」
「そういえばそうだな」
「あのお嬢様じゃないか？」
「それなら」
「そうなるか？」
「それに孔雀は」
その孔雀自身についても話されていく。孔雀という鳥はどうかというとだ。

第二百三十九話　嵐の前その三

「何でも食べるしな、あれで」
「蛇襲って食うからな」
「毒蛇でも何でもな」
「毒虫でもな」
「悪食だよな」
鳥類の多くは蛇や虫の天敵である。凶悪な毒を持つ蛇も天敵がいるのだ。その孔雀もそうだし梟や烏もそれに当てはまるのである。
「じゃあやっぱり」
「あのお嬢様じゃないか？」
「オスだし悪食だし」
「そうなるかな」
「やっぱりな」
「別にそこまで考えなくていいだろう」
だが警視がこう突っ込みを入れた。
「こだわらなくてもな」
「あっ、そうですか」
「注意しなくていいですか」
「孔雀なら孔雀で」
「それでいいですか」
「そう思うがな。確かにあのお嬢様は孔雀だ」
これはいい意味での言葉であった。
「そのままだ。そしてあのお嬢様が孔雀ならだ」
「ルパンですか」
「あの怪盗は何でしょうか」
「一体」
「さしづめ梟か」
それだというのだ。警視はだ。

「それか」
「梟ですか、あの怪盗は」
「その鳥になりますか」
「梟は夜に動く鳥だ」
夜行性である。その丸く輝く大きな目が特徴だ。連合では昼に動く梟もいたりするから一概にそうとは言えなくもなってはいるがだ。
「そして賢い鳥だな」
「そうですね。梟は頭がいいですね」
「忌まわしい話ですがエウロパでは」
警官までもがエウロパを嫌っている。実に連合らしい。
「神の使いでしたね」
「知恵の女神アテナの」
「だから知恵の象徴でもある」
「そうなのですね」
「そうだ。だから梟だ」
こう話すのであった。
「ルパンはな」
「成程、言い得て妙ですね」
「言われてみれば梟ですね、ルパンは」
「まさにそれですね」
「ではこの対決は」
どうかというのであった。それは。
「孔雀と梟ですか」
「その対決ですか」
「そうなるのですね」
「そうだ。しかし我々もいる」
他ならぬ自分達だ。警官達のことである。
「我々は。そうだな」
「烏ですかね、我々は」
警官の一人がやや自嘲気味に言った。

「さしづめ」
「烏か？」
「俺達はそれか」
「烏になるのか」
「夜に動きそうで夜に弱いからな」
それでだというのだ。どうしてもその検挙数が昼の方が多くなってしまい人手も昼に多いからだ。それは警察の体質でもある。
「だからそれだろ」
「そうか。俺達は烏か」
「それなんだな」
「烏か」
彼等は微妙にだ。烏をイメージして複雑な顔になる。
そしてだ。一人がこう言った。
「何かな。残飯漁るみたいでな」
「無法者だろ、烏は」
「どっちかっていうとな」
「そうだよな。秩序じゃないよな」
「どうしてもな」
そうした烏へのイメージと自分達のイメージが合わないというのである。

第二百三十九話　嵐の前その四

「制服とかの色だったら連合軍だけれどな」
「連合軍も規律正しいよな」
「ああ。かなりな」
「下手したら俺達よりもな」
国防長官である八条義統が軍規軍律を徹底的に厳しくしているからだ。彼は軍の規律を何よりも最優先させて教育させているのだ。
「同じ黒だしな」
「俺達の制服ダークブルーだしな」
「一応そうした色の烏だっているけれどな」
「それでもな」
烏といえば黒だ。その色の種類の烏が一番多いのも事実なのだ。
「烏はなあ」
「ちょっと違うと思いたいな」
「やっぱりな」
「烏とは違うかもな」
警視がここでまた話す。
「しかしだ。今回の俺達はだ」
「脇役ですかね」
「主役ではないですよね」
「残念だがそうだ」
まさにそれだというのだ。脇役だというのだ。
「主役が二人、しかもどちらもだ」
「滅茶苦茶目立ちますからね」
「まさにトップスター同士ですね」
「マリア＝カラスとマリオ＝デル＝モナコだ」
警視はオペラ歌手に例えて話した。どちらも二十世紀を代表するオペラ歌手である。デル＝モナコのオテロはこの時代でも伝説とな

っている。
「その周りにいる人間はどうなる」
「惑星の周りの人工衛星でしょうか」
警官の一人がこう例えた。
「まさにそれですね」
「何かちっぽけだな、人工衛星か」
「衛星ですらないな」
「人工だとな」
「けれどそんなもんじゃないのか?」
その警官はぼやく同僚達に言う。見れば彼は先程烏を話に出した警官とは別の警官だ。違う警官が違うことを言っているのである。
「相手がルパンだとな」
「まあ警察は初代の頃から負けっぱなしだしな」
「勝った試しあったか?」
「捕まえたことはなかっただろ」
「じゃあ勝ってないな」
「警察は怪盗を捕まえるのが仕事だからな」
答えはこの場合簡単に出るものだった。
「それが現実か」
「警察は歴代ルパンの前には雑魚」
「対抗するのは探偵だからな」
「主役はそっちになるか、どうしても」
「残念な話だな」
「だが現実だ」
警視は遠い目で述べた。
「それがな」
「残念な現実ですね」
「全くです」
警官達は本音で話す。
「せめて準主役にまでいきたいですけれど」

「ですよね。せめて」
「それ位までは」
「ミュージカルのバックダンサーですか」
まさにそれであった。今の彼等はそれなのだ。
「主役の二人が前で派手に踊って」
「俺達はバックで二人に合わせて踊る」
「お嬢様の周りにいたり」
「ルパンにしてやられたり」
そうなることだった。
「まあそれが仕事ならやるしかないですね」
「結局はそうですね」
「そういうことだ。やるぞ」
警視の言葉は掛け声になっている。

第二百三十九話　嵐の前その五

「警官としての責務を果たすぞ」
「はい、無論です」
「それは」
誰も異を唱えない。やはり彼等も警官である。
美術館の中に入る。そうして絨毯の階段を踏み締めながら写楽の浮世絵がある階に行くとだ。もうそこにその主役の一人がいた。
後ろにラメダスとベッキーを従えだ。セーラは警視に対してにこりとして述べた。
「はじめまして、銭形警視」
「セーラ＝シヴァお嬢様ですね」
「はい」
マウリア式の一礼をしての言葉だった。
「そうです」
「そうですか。日本警察の銭形です」
警視は連合式の敬礼で応える。肘を折ったかつての海軍の敬礼である。
「宜しく御願いします」
「こちらこそ。それではです」
セーラの方から話を切り出してきた。
「ルパンのことですが」
「何度かお相手されたそうですね」
「はい、そうです」
セーラの返答は簡潔なものだった。
「マウリアにおいて」
「そうでしたね。ではあの怪盗のことは」
「知っています」
今度の返答も簡潔なものだった。

「非常に立派な方です」
「立派ですか」
「確かにあの方は怪盗です」
それでもだというのだ。盗賊の類がお世辞にも品性がいい存在でないことは言うまでもない。それはどの時代でも同じである。
しかしだとだ。セーラはここで言うのであった。
「あの方はそれでもです」
「品性は確かだというのですね」
「紳士です」
そうした人物だというのだ。
「そこにはしっかりとした御考えもあります」
「怪盗としてのですか」
「そうです。ですから立派な方です」
「成程。それではです」
そこまで話してだ。警視はあらためてこう話した。
「では今回はです」
「捜査に協力させてもらいます」
「いえ、協力させてもらうのはこちらになるでしょう」
「警察の方々がですか？」
「ルパンに対抗できるのは貴女だけです」
そのセーラだけだというのだ。警視もそれはわかっていた。自分や警察ではだ。ルパンの相手をすることができないということがだ。
「ですから。私達はです」
「協力ですか」
「そうさせてもらいます」
またセーラに話した。
「今回は」
「そうですか」
「我々は脇役です」
セーラにもだ。こう話すのだった。

「主役は貴女になります」
こうしてだった。セーラがメインになってルパンに対することになった。するとすぐにだ。
彼はだ。ラメダスとベッキーにだ。こう命じたのだった。
「ではすぐにです」
「はい、すぐにですね」
「結界を張りますね」
「まずはそれです」
二人に顔を向けての言葉である。
「今回の結界は三重でいこうと考えています」
「いえ、お嬢様」
ベッキーがここでセーラに話した。
「今回は三重では足りません」
「足りませんか」
「あの方はかつてお嬢様の結界を破って狩りを成功されています」
「だから三重なのですが」
「今のあの方はあの時のあの方とは違います」
真剣な顔でだ。ベッキーはセーラに話すのだった。
「よりです。狩りの腕をあげられています」
「そうですね。言われてみれば」
ベッキーの話を聞いてだ。セーラも真剣な顔になり応える。

第二百三十九話　嵐の前その六

「あの方は常に進化される方です」
「ですから。ここはです」
「わかりました。三重では足りませんね」
こう言うのだった。
「五重でいきましょう」
「はい、ではそれでいきましょう」
「そしてです」
結界だけではなかった。セーラはそれで終わらせなかった。
「次はです」
「はい、目ですね」
今言ったのはラメダスだった。
「周囲を監視する目ですね」
「あの方は何処から来られるかわかりません」
セーラはここでも真剣な面持ちで話す。
「ですから」
「周囲に。使い魔達を放ちましょう」
「それにです」
「虫も使われますね」
「そうします」
今度はだ。虫をだというのだった。
「すぐに虫を集めます」
「どれだけ集められますか？」
「集められるだけです」
こうラメダスに答える。
「種類は問いません。ただ」
「夜でも動ける虫をですね」
「はい、昼は昼で。そして夜は夜で」

両方だった。昼も夜もだというのだ。
「それぞれの虫を集めます」
「わかりました。では虫もすぐに」
「そうします」
結界の次は目であった。セーラのルパンへの備えはまずはそうした護りと偵察からだった。そしてだ。
セーラはだ。今度は水晶玉を出した。それも幾つもだ。
その水晶玉達を見てだ。警官達が彼女に尋ねた。
「占いですか？」
「それともそこからルパンを覗き込むとか」
「そういうことに使われるんですか？」
「いえ、これは攻撃用です」
しかしセーラはこう彼等に答えるのだった。
「それです」
「攻撃用！？」
「攻撃用の水晶玉？」
「っていうと一体」
「どんなものですか？」
「それは」
「はい、それはです」
セーラはその水晶玉についての話もする。その水晶玉は。
「この水晶玉からはそれぞれのものが放たれます」
「それぞれ？」
「そうなのですか」
「炎を出すものもあれば」
まずはそれであった。炎であった。
「氷や雷を放つものもあります」
「氷もですか」
「雷もありますか」
「毒ガスを出すものもありますし」

話が物騒になっていく。
「その他には石化ガスに強酸もあります」
「石化か、凄いな」
「死ぬじゃないか、そんなもの受けたら」
警官達は石化と聞いて唸った。そうしてだ。
あたらめてだ。こんなことも話した。
「何かメデューサみたいだな」
「石化だからな」
「物騒な水晶玉があるな」
「全くだ」
「こうした水晶玉達がすべて私の意志で動きます」
しかもそうだというのであった。
「空中を飛びです」
「何かそれを聞くと」
「だよなあ」
「あれだよな、あれ」
「ガンダムとかのか」
この時代でも放送されている。ロボットアニメの古典的名作だ。
その椎ｒ一ズは何時果てるとこもなく続いている。息が長いどころではない。

第二百三十九話　嵐の前その七

「それだよな」
「ファンネルとかな」
「ドラグーンとか」
「それだよな」
そうしたものをイメージしたのだ。セーラの話を聞いてだ。
「ちょっとな」
「その水晶玉でか」
「ルパンを迎撃する」
「そうするんだな」
「何か凄いな」
彼等の間で唸る。そうしてだった。
実際にその宙を浮かぶ水晶玉達を見る。数は無数にある。一体どれだけあるかわからない程だ。そこまでの数が浮かんでいるのだ。
防御だけでなく迎撃の用意も整えられた。水晶玉達は美術館の内外を飛び回っている。まさに動く迎撃兵器なのだった。それであった。
それを見てだ。警視が頼もしそうに言う。
「これならな」
「迎撃できますか」
「防げますか、あの怪盗を」
「ルパンを」
「少なくとも可能性は出て来た」
楽観はしていない。しかし確かな声であった。
「かなりな」
「かなりですか」
「可能性が出てきましたか」
「ああ、できる」

やはり確かな声である。
「お嬢様だけではないしな」
「そういえば従者の人が二人いますね」
「あの人達もですか」
「力になるんですね」
「それもかなりな」
そうだというのだった。
「あのお嬢様がルパンと互角だ」
「そこにあの二人ですね」
「その力が加わりますか」
警官達もこう話す。
「それならですね」
「やれますね」
「確かに」
「そうだ、やれる」
また言う警視だった。
「あの二人がルパンの部下達や道具に向かう」
「ルパン以外の力を引き受ける」
「そうですね」
「そういうことですか」
「その通りだ」
こう話すのであった。
「それにだ」
「俺達もいますね」
「警察も」
「ちゃんといますから」
自分達のこともだ。何とかといった感じで話に出すのだった。
「流石にあのお嬢様みたいにはいかないですけれど」
「それでも。我が国の治安を守る俺達がいますから」
「その力もありますよね」

「やっぱり」
「そうだ。俺達もいる」
警視もこう言う。
「だからだ。頑張るぞ」
「はい、わかってます」
「俺達も力を見せてやりましょう」
「警察の力を」
「意地を見せることだ」
警視はまた確かな声を出した。
「いいな、意地をだ」
「覚悟を決めてですね」
「そうしてですね」
「覚悟は何にでも必要だ」
まさに今もだというのだ。
「いいな、絶対にだ」
「そうしてですね」
「絶対に捕まえましょう、あいつを」
「ルパンを」
「そうするぞ。ただしだ」
ここで警視はまた言った。言葉は確かだ。

第二百三十九話　嵐の前その八

「ここで重要なことはだ」
「何ですか、それは」
「まだあるんですか」
「大事なことが」
「そうだ、お嬢様達とは協力する」
そこを念押ししての言葉だった。まさにそれだった。
「張り合うようなことは止めろ」
「チームワークですか」
「それですね」
「それを肝に命じてですか」
「それも」
「そうだ。仲間割れが一番よくない」
それがだ。よくわかっているというのである。
「それが何もかもを悪くさせる」
「そういうことですね。やっぱり」
「お嬢様とですか」
「張り合ってはならない」
「仲間としてやっていくんですね」
「張り合いまでして勝てる相手か」
またしてもだ。警視の言葉はシビアである。それは現実を見据えているものだった。それを見据えながらだ。また話をするのだった。
「ルパンだぞ、相手は」
「勝てませんね、絶対に」
「あのルパンが相手だと」
「どうしても。それは」
「無理ですね」
「絶対に」

「そうだ。それは絶対にあってはならない」
警視は念押しする。何度もだ。
「いいな、今回俺達は脇役だ」
「脇役に徹してですね」
「あのお嬢様と協力して」
「そしてルパンを捕まえる」
「そうしますね」
「手柄も焦るな」
それも釘を刺す。
「手柄はルパンを捕まえることだ」
「それが手柄ですか」
「そのこと自体がですね」
「だからこそ」
「特に大事なのはだ」
警視の考えは慎重に慎重を重ねている。まさに石橋を叩いて渡るだ。
「盗まれるな」
「浮世絵をですね」
「それが一番大事なんですね」
「ですから」
「そうだ。浮世絵を護ることだ」
この言葉にだ。警官達の身が引き締まる。心もだ。その引き締まる気持ちのままにだ。警視の言葉を聞いてそうなっているのである。
「盗まれるとだ」
「お話になりませんね」
「それではです」
「どうしようもありません」
「そうだ。盗まれるな」
警視は実際にその浮世絵を見た。それは今も確かにある。
「それだけは死守する」

「それが俺達の手柄になりますね」
「そのまま」
「理想はルパンを捕まえる」
まずはそのことだった。
「しかし最低限の目標はだ」
「盗まれないことですか」
「それが手柄になりますね」
「つまりは」
「そうだ。それがそのまま最高の手柄になる」
そのものがだというのだ。
「わかったな」
「はい、よく」
「そういうことでしたら」
「俺達も決めました」
こうだ。警官達もそれぞれ言う。
「浮世絵、守ります」
「その為にもここは」
「チームワークですね」
「チームワークがあるとそれだけで有利になる」
スポーツの話になっていた。それが入っていた。

第二百三十九話　嵐の前その九

「あるとないのとで大違いだ」
「ルパンはワンマンみたいですね」
「あの男が軸になってますね、完全に」
このことも初代からだった。ルパンというカリスマの下に部下達が集っているのだ。桃
「それに対して俺達は」
「チームですね」
「それなんですね」
「そうだ、チームだ」
また言う警視だった。そしてだ。彼はさらにこんなことも言った。
「警察の力の源は何だ」
「俺達のですか」
「力の源ですか」
「それは、ですか」
「そうだ。組織力だな」
まさにそれだとだ。警視は話した。
「俺達が犯人を捕まえて犯罪を防いでいるのはそれがあるからだな」
「ええ。警察は組織ですから」
「その組織力で犯罪に立ち向かう組織です」
「その通りです」
警察もまた官僚組織である。官僚というものは一人一人で何かをするものではない。組織としてだ。そのうえで動くものなのである。
その官僚組織である警察もだ。また然りなのである。
「だからチームですか」
「そうなるんですね」
「官僚組織を毛嫌いする人間もいるがな」
この時代でもそうした人間はいる。その存在自体を悪と考えてい

るのだ。官僚組織がコンピューターであることは考えていないのだ。
「それでもだ」
「俺達は組織としてですね」
「そうして動く」
「それでいいんですね」
「一人の力はたかが知れている」
警視はまた話した。
「超人的な天才でもない限りな」
「それこそあのお嬢様みたいな、ですね」
「ルパンもそうですね」
「ああした人間は別として、ですよね」
「違いますよね」
「そうだ、一人では大したことがない」
警視は冷静に話す。
「だが組織として動けばだ」
「かなりの力になる」
「そういうことなんですね」
「一人一人をそれぞれ一本の矢とする」
毛利元就の話になる。この時代でも伝わっていることだ。
「それが何十本もあればな」
「折れませんね」
「そう簡単には」
「三本でそうなる」
毛利元就の話であまりにも有名なものだ。その三本の矢を息子達にそれぞれ手渡してだ。細かく話してみせた逸話なのである。
「それが何十本もあればだ」
「折れませんね、簡単には」
「刀で切ることも難しいですね」
「全部は」
「その通りだ。俺達は一人じゃない」

警視も真剣だ。ルパンを念頭に置いて話している。
「それをよくわかっておくことだ」
「はい、そしてそのうえで」
「美術品を守って。そして」
「ルパンを捕まえましょう」
「絶対に」
警官達も言う。そのうえでだ。
彼等は心を一つにしてセーラと共に戦うことにした。警察という組織もまた。ルパンに対して向かうことを誓っているのであった。

嵐の前　　完

２０１１・２・２３

第二百四十話　予告時間その一

予告時間

セーラも警官達も美術館に集まっている。そしてだ。
警官の一人が自分の腕時計を見てだ。警視に述べた。
「あと一時間です」
「そうか」
「もうすぐ来ますね」
こう警視に話すのだった。
「ルパンは」
「そうだな。あいつは時間には律儀な男だ。いや」
「いや？」
「何に対しても律儀な男だったな」
ルパンについてだ。こう話すのだった。
「そうだったな」
「はい、そうです」
ここで答えたのはセーラだった。彼女はだラメダスとベッキーを後ろに控えさせてだ。そのうえで浮世絵の傍に立っていたのである。
そしてそのうえでだ。警視に答えたのだ。
「あの方はとても律儀な方です」
「そうなのですか。それではやはり」
「はい、既に気配を感じています」
そこからもだ。言うのだった。
「ですから。間違いなくです」
「予告時間に来ますか」
「来ます」
確実にだと。セーラは述べる。
「ですから私達もです。もう」
「はい、厳戒態勢ですね」

警視は言った。鋭い目でだ。
「これまで以上に」
「はい、わかりました」
「それでは」
警官達も応えてだ。そうしてだった。
これまで以上に警戒態勢を強める。そのうえで一時間を過ごすのだった。
水晶玉達は美術館の内外を飛んでいる。張り詰めた雰囲気の中でだ。
警護の警官達がその水晶玉達を見上げて。こんなことを話し合う。
「不気味だけれどな」
「ああ、それでもな」
「ああして飛んでるとな」
「頼りになるな」
こう話すのだった。
「本当にな」
「ああ、攻撃してくれるし」
実際にだ。水晶玉の一つが目から炎を出していた。
「それが一杯あるからな」
「頼りにさせてもらうか」
「それもな」
「あと一時間か」
彼等もまたその時間のことを口にした。
「一時間したらルパンが来るんだな」
「どうなるかな、本当に」
「どうやって来るかだな」
「ああ、そうだな」
こんな話をしてだ。彼等も警戒していた。そうしたかなり強い緊張の中でだ。
一時間が過ぎた。時計の針が十二時になった。

その時間を見てだ。誰もがだった。
「来るな」
「ああ、来るぞ」
「ルパンが来る」
「いよいよな」
全員身構える。そしてだ。
急にだ。美術館の中がだ。真っ暗になったのだった。
「来たか！」
「仕掛けてきたな！」
「来るぞ！」
「ルパンが来る！」
全員暗闇の中で叫ぶ。その時にだ。
暗闇は一瞬で終わりだ。美術館の中に光が戻ったのだった。
照明と全く変わらないまでの明るさだった。その光は。
「こんなこともあろうかとです」
「既に術は用意していました」
セーラの後ろに控えるだ。ラメダスとベッキーが話すのだった。
「暗闇の中で美術品を盗む」
「そうしてくるのは基本ですから」
「だからですか」
また話す警視だった。
「確かに。その通りですね」
「さて、問題はです」
ここでセーラの目が光った。

第二百四十話　予告時間その二

「この一瞬の暗闇の間にです」
「そうですね。ルパンが仕掛けているか」
「既に潜入しているかですね」
ラメダスとベッキーは今度はセーラに話す。
「それが問題ですね」
「もうそうしているかです」
「はい、そうですね」
ここでだ。セーラは美術館の中を見回した。
そうしてだ。一人の制服の警官を見る。彼は美術館のその浮世絵の近くにいた。
彼を見てだ。セーラは言うのであった。
「ルパンさん、もうそこまで来られているのですね」
「えっ、ルパン！？」
「ルパンがもう来ているのか！？」
「まさか、もう」
「この部屋に」
警官達はその言葉を聞いてだ。また一斉に身構えた。
そうしてだ。セーラが見ているその警官にだ。視線を集中させるのだった。
「こいつがか」
「ルパンなのか」
「そうだったのか！？」
「まさか」
「はい、そうです」
また答えるセーラだった。話している間にだ。浮世絵の周りにだ。
無数の水晶玉が来てだ。それで浮世絵を守るのであった。
「一瞬のうちにそこまで来られるとは。お見事です」

「というか何時の間にここまで来たんだ？」
「しかも潜入して」
「俺達に紛れてか」
「そう来たか」
「木の枝を隠すにはです」
セーラがまた話す。
「その為にはです。森の中ですから」
「だから警官に化けてか」
「ここまで潜入したのかよ」
「凄いな、何か」
「ああ、全くな」
わかっていたがそれをしたルパンにだ。誰もが驚きを隠せなかった。
「とりあえず浮世絵は無事か？」
「まさかもう盗まれているとか」
「それはないよな」
「そうあって欲しいけれどな」
「安心することだ」
その謎の警官からの言葉だった。
「まだ。手はつけてはいない」
「そうか。それは何より」
「それはまだだったんだな」
「よかったよかった」
「とりあえずはな」
「おい、安心するのはまだ早いぞ」
警視が安堵の声をあげる警官達に述べた。
「ルパンが今ここにいるんだぞ」
「そうだった、今ここにいるんですよね」
「あいつがルパンですよね」
「だからですね」

「早く捕まえないと」
「いけませんよね」
「そうだ。油断するな」
警視の声はだ。警戒そのものだった。
「いいな、絶対にだ」
「わかったな」
「わかりました」
「それではですね」
「今は」
「この男を」
緊張した面持ちでだ。彼等は動きはじめた。
そのうえでルパンを取り囲む。そうしてであった。
あらためてだ。その謎の警官を見て言うのであった。
「ここまで来たらな」
「ああ、逃がしてたまるか」
「逮捕してやる」
「絶対にな」
「囲んだままでいい」
警視もだ。その包囲網の中に入って述べた。

第二百四十話　予告時間その三

「決してだ。この包囲をだ」
「緩めない、ですね」
「逃がさない」
「それですね」
「狼になれ」
警視はこうも言った。言うまでもなく獣の代表の一つだ。
「囲み次第にだ」
「はい、逃さない」
「そうします、ここは」
「必ず」
彼等もわかっていた。とにかく油断しない。そうしてであった。
セーラもだ。ここでゆっくりと前に動いてであった。
謎の警官と正対してだ。こう声をかけるのであった。
「御久し振りですね」
「はい、お元気そうで何よりです」
警官はセーラに礼儀正しく返す。
「お嬢様も」
「御互いに。それに」
「それに、ですか」
「ここでこうして御会いできたのも何かの縁でしょう」
親しげにだ。セーラに言うのであった。
「それでは。何時までもこの姿のままでは失礼ですし」
「正装に戻られますか」
「宜しいでしょうか」
セーラに対して断りの言葉を述べる。
「今から。姿を戻して」
「はい、どうぞ」

セーラもだ。礼儀正しく応える。どちらも完璧なマナーだ。エウロパの貴族達が見てもだ。火の打ち所のないまでのものだった。

そのマナーのままだ。セーラは述べたのであった。

「では私も」

「貴女もですね」

「正装に変わらさせてもらいます」

優雅な笑みと共の言葉だった。

「それでは」

「はい、それでは」

こうしてであった。お互いにだ。

ルパンは帽子を脱いだ。セーラは目をしばたかせた。その瞬間にだ。

ルパンは黒のタキシードにマント、それにシルクハットという姿になった。口髭を生やし知的な顔立ちの気品のある男がそこにいた。

そしてセーラもだ。絹の白い優雅なドレスを着てだ。そこにいた。

二人共一瞬でだ。着替えてみせたのである。そのうえでまた話をする。

「では。正装になったところで」

「はい、あらためてですね」

「お久し振りでございます」

「こちらこそ」

ルパンは舞踏の誘いの様な優雅な一礼をした。セーラはマウリア風の両手を合わせた一礼をする。そうして再度挨拶を交えさせた。

それからだ。二人は互いを見やるのであった。

「では。今から」

「狩りを再開しましょう」

「馬鹿な、今からですか？」

「今からとは」

二人のやり取りを聞いてだ。警官達が驚きの声をあげる。

「もう既に包囲しています」

「それではです」
こう互いに話をするのであった。
「最早。浮世絵を盗むどころではありません」
「後はこの男を」
「遂にここで」
「逮捕するだけです」
こう言うのであった。彼等はだ。
「それだけです」
「最早逃げられません」
「ですから狩りの再開とは」
「とても」
「それが油断だ」
しかし警視がここでまた彼等に言うのであった。
「万全と思われる状況でも万全でないことがある」
「それが今だと」
「そう仰るんですね」
「そうだ、その通りだ」
まさにそうだというのである。

第二百四十話　予告時間その四

「まして相手がルパンだぞ」
「はい、その通りです」
セーラも警視のその言葉に頷く。二人は今横に隣同士になっている。
「狩りはこれからです」
「そうですね。本当に」
「ですから」
セーラの言葉は続く。
「油断は禁物です」
「そう。私にとっては」
ルパン自身もだ。不敵に言うのであった。
「この程度の包囲なぞどうということはない」
「はったりじゃないよな、今のは」
「そうだよな」
「仮にもルパンがな」
「それはないよな」
警官達もそれはわかる。何しろ相手が相手だからだ。
「じゃあやっぱりこの包囲でもか」
「全然平気なんだな」
「突破できるっていうのかよ」
「そうできるんだな」
「では。それを今から見せよう」
ルパンは自信に満ちた声で述べた。その顔もそうなっている。端整なその顔に自信というスパイスはだ。何よりも似合うものだった。
「それではだ」
「来るぞ」
また警視が警戒する声を出した。

「気をつけるんだ」
「ええ、特にですね」
「浮世絵はですね」
「絶対にですね」
「渡せませんよね」
彼等の警戒の念はそこにも向いていた。とにかくそれだけは許すつもりはなかった。彼等にもだ。警官としての意地があるからだ。
それで身構える。それに対してセーラは。
構えずにルパンと対したままだ。こう彼に告げるのだった。
「それではですね」
「はい、こうします」
マントを翻した。するとだ。
一瞬でだ。その場から消えた。まさに一瞬であった。
そしてだ。気付けばだ。ルパンはセーラの真後ろにいたのであった。
「くっ、何時の間に！」
「何時の間にそっちに行ったんだ！？」
「超能力か！？」
「まさか」
「いえ、超能力ではありません」
それはセーラが否定した。彼女はルパンの方を振り向いてだ。そのうえでこう警官達に話すのであった。
「これは魔術です」
「魔術！？ルパンも？」
「魔術を使う？」
「まさか」
「この方は超能力も使えます」
実際にそれもできるというのだ。
「しかし今のはです」
「魔術ですか」

「それを使ってですか」
「そうして一瞬でそこまで移った」
「そうなんですか」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのである。セーラは構えていないが隙は見せない。その背からオーラがだ。明王のそれの様に沸き起こっている。
「マウリアにある魔術です」
「マウリアのですか」
「そういえばルパンはマウリアで活動していましたね」
「それで貴女と戦われてたんですね」
「それで、ですか」
「マウリアで学んだのです」
その時にだというのだ。セーラと戦っていたその時にだ。
「この方はそうされたのです」
「ううむ、何と恐ろしい男だ」
「そこまでするとは」
「魔術まで身につけるとは」
「まさに世紀の怪盗ですね」
「私は怪盗である為にはあらゆることを学ぶ」
ルパン自身もだ。そのことをマントをたなびかせながら話す。

第二百四十話　予告時間その五

「魔術であろうと超能力も覚醒させることもだ」
「するっていうのか」
「そして盗む」
「そうするんだな」
「それがルパン家だ」
彼だけではないというのだ。
「ルパン家代々の考えだ」
「そうですね。だからこそ貴方は学ばれました」
セーラもまたルパンについて話す。
「そして私に対抗されようとしましたね」
「魔術には魔術です」
それでだともいうのだ。
「ですから」
「魔術にはですか」
「そうです。魔術です」
セーラに対してさらに話す。
「私は貴女に対して勝利を収める為に魔術を身に着けたのです」
「そして今もそれを使い」
「貴女に勝たせてもらいましょう」
そうするというのである。
「それで宜しいですね」
「私も。そのつもりです」
セーラもそのルパンに言葉を返す。
「負けるつもりはありません」
「では。それでは」
「はい、競いましょう」
セーラの気がさらに沸き起こる。黄色い気だ。

そしてルパンもだ。気を出した。
それは青い気であった。黄色と青、二色の気がだ。せめぎ合いはじめた。
その気は警官達も見た。そのうえでまた話すのだった。
「オーラが見えるなんてな」
「俺はじめて見たぞ」
「俺もだ」
「俺もだよ」
彼等の多くがそうだった。
「人間ってオーラがあるんだな」
「俗に言われていたけれどそうだったんだな」
「とはいっても目ではっきり見えるなんてな」
「それはな。本当にな」
「ああ、予想外だったよ」
こう言い合いながら二人の対決を見守ろうとする。手出しができないのは彼等もよくわかった。だがここでだ。警視がまたしてもだった。
彼等に対してだ。こう話すのだった。
「いや」
「いや？」
「いやといいますと」
「見守るだけでは駄目だ」
警視が話すのはこのことだった。
「相手はルパンだけじゃないからな」
「その部下もですか」
「そうですね。連中もいるんですね」
「しっかりと」
「その連中を何とかしないと駄目だ」
警視は現実主義者だった。それと共に冷静であった。
「隙を見て浮世絵を取られるぞ」

「相手は一人だけじゃない」
「そういうことですね」
「だから今は」
「俺達はそちらに」
「ガルーダ同士の対決には入られない」
セーラとルパンのことだ。彼等は神の鳥とまでいうのだ。ガルーダはマウリアの神話に出て来る半人半鳥の神のことである。それが鳥なのだ。
「しかしだ。烏はだ」
「烏には烏のやることがある」
「烏の相手をするんですね」
「もう一方のガルーダの手下達の」
「黒いガルーダのな」
ルパンの服のカラーからの言葉だ。
「手下の相手をするぞ」
「はい、わかりました」
「ではこの場の対決はそのままにして」
「俺達は俺達で」
「動きますか」
こうしてだった。彼等は動くのだった。そのルパンの部下達に対してだ。

第二百四十話　予告時間その六

そこにだ。ラメダスとベッキーもだ。警視に言ってきたのだ。
「では私達もです」
「協力させてもらいます」
「御願いできますか」
警視は二人のその言葉に対しても応えた。
「ここは」
「ルパン氏の部下の方々もです」
「かなりの方々ですので」
伊達にだ。世紀の怪盗の部下ではないというのだ。
「ですから是非」
「私達も」
「わかりました」
警視も頷く。そうしてだった。
二人も警官達と共にだ。美術館の内外の守りを固める。そのうえでだ。
調査の為にだ。ラメダスとベッキーがであった。あるものを放ったのだ。
「それは？」
「人形です」
「私達はこれを使います」
こう話してだった。そしてであった。
そのマリオネットの人形達をだ。宙を漂わせそのうえでだ。美術館の内外の偵察をさせるのだった。
ここでだ。ラメダスとベッキーが話した。
「虫や水晶玉は全てお嬢様がルパン氏に向けています」
「ですから。私達はです」
「これを使ってです」

「あの方々に目を見張らせます」
「それをですか」
警視はここまで聞いてまた頷いた。
「魔術といっても色々なのですね」
「この人形達は見るだけです」
「それだけですが。それでもです」
「目があればです」
「それだけで大きいですから」
「確かに。その通りですね」
警視は二人の言葉にまた頷いた。
「敵が見えれば。それだけでかなり有利になります」
「この人形達は人が見えないものも見ることができます」
ラメダスの言葉だ。
「だからいいのです」
「人が見えないものもですか」
「人の目はです」
ラメダスは冷静な調子で話す。二人は今セーラ達が激突している浮世絵の前にはいない。その部屋にはいるがだ。ルパンの部下達に目を向けて離れた場所にいるのだ。
そこでだ。三人で話している。その中でのラメダスの言葉だ。
「実は不確かなものなのです」
「見えないものが多い」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのだ。
「それが人の目なのです」
「しかしあの人形達の目は」
「見えます」
はっきりとした返事だった。
「人に見えないものがです」
「見えるんですか」

「人形の目には」
「そうなんですね」
「はい、どれだけ隠れていてもです」
それでもだというのである。ラメダスは話す。
「その姿を見ることができます」
「それが人形の目なのですか」
「そうなのですか」
「ですから。ご安心下さい」
こう話してだった。そのうえでだった。
人形が見て回る。やがてだった。
ラメダスがだ。警官達に話した。確かな顔でだ。
「いました」
「ルパンの部下がですか」
「いたんですか」
「見つけたんですね」
「はい、発見しました」
まさにその通りだというのだった。
「美術館の上空にいます」
「空ですか」
「そこにですか」
警官達も言う。そこにいるとわかってだ。
そのうえでだ。息込んだ様子になってだ。ラメダスに対して話すのだった。

第二百四十話　予告時間その七

「じゃあ今すぐに上空にですね」
「そこにいる連中に対してですね」
「迎撃しましょう」
「それではですね」
今度はだ。ベッキーが言うのだった。今度は彼女だった。
「ここに何人か残って頂いて」
「予備戦力、そして守りですか」
「その為ですね」
「はい、その為です」
まさにだ。それでだというのである。
こう話してであった。彼等は。
すぐに最低限の人間だけを残して美術館の屋上に出た。屋上にも数人の警官達がいた。当然彼等も警護の警官達である。
その彼等と合流してだ。上を見上げた。
だがそこには何も見えない。星空があるだけだ。
「いないな」
「目には見えないよな」
「それはな」
「けれどなんだな」
「そうなんだな」
しかしだとだ。それはわかったのだった。
彼等はラメダスにだ。こう尋ねた。彼とベッキーも一緒に来ているのだ。
「ここにですね」
「ルパンの部下達がいるんですよね」
「上空に」
「います。確かに目には見えません」

だがだ。それでもだというのだ。
「います」
「レーダーに反応はあるか？」
警官の一人が同僚に尋ねた。
「それはどうだ？」
「いや、ない」
見ればその同僚は懐から超小型レーダーを取り出して上に向けていた。この時代では携帯用のレーダーも存在しているのだ。
「全然な」
「ステルスだな」
別の警官がこう察した。
「それだな」
「それで細工してるからレーダーにもか」
「反応しないっていうのかよ」
「手が込んでるな」
「流石と言うべきかな」
「闇夜に紛れてるってことは」
そこからも考えるのだった。
「黒く塗装しえるんだな」
「あれっ、けれど星はな」
「しっかりと見えるよな」
「ああ、何処もおかしくないよな」
「見事な星空だよ」
その部分だけ星がなかったり、星が不自然に動いたりということはなかった。本当にだ。美しい夜空だった。濃紫の天幕に様々な宝石が浮かんでいる。
そこに何かがいるとは思えなかった。しかしなのだった。
「ここにいて留まってるってことは」
「気球か？」
「それか」

「それでいるのか」
「そうだと思います」
ラメダスもそう見ているのだった。彼とベッキーも上を見上げている。
「気球か。飛行船で上にいます」
「だからわからないんだな」
「そうなんだな」
また話す彼等だった。
「問題は何処にいるかだけれどな」
「一体何処なんだ？」
「それで」
「見えないけれどな」
「全くな」
「あそこです」
だが、だった。ラメダスがここで空の一点を指差した。そこは。

第二百四十話　予告時間その八

ラメダスの丁度真上だった。それを見上げてであった。彼は言った。
「あそこにいますね」
「あれっ、ラメダスさんも見えたんですか？」
「人形しか見えないんじゃ」
「それでも見えたんですか？」
「それはまたどうして」
「目での情報をそのまま受け取りました」
そうしたというのである。
「人形からのです」
「それも術ですか」
「そうしてですか」
「普段は。人形が見たものをです」
どうしているのかもだ。それも話すのだった。
「それを人形が私の脳に知らしてくれますが」
「それでも今はですか」
「ご自身の目で、ですか」
「同じものを見てるんですか」
「そうなんですか」
「そうしています」
まさにだ。そうしているというのである。
そしてだ。そのうえでだった。彼はまた話すのだった。
「あの場所にです」
「攻撃ですね」
「今からですね」
「今度は私が」
ここで名乗りをあげたのは。彼女だった。

ベッキーだった。彼女は上を見上げながらだ。ラメダスと警官達に話す。
「私がやらせてもらいます」
「わかりました」
最初に頷いたのは同僚でもあるラメダスだった。
「では。御願いしますね」
「わかりました。それなら」
「皆さんもそれで宜しいですか？」
ラメダスから周囲に話した。
「彼女が攻撃を受け持って」
「はい、別に」
「反対する理由もないですし」
「でしたら」
警官達は特に反対することなくだ。ラメダスのその言葉に頷いた。
そしてそのうえでだ。彼に対してあらためて話した。
「我々の銃では届かないでしょうし」
「ですから。ここは」
「御願いできますか」
「わかりました」
応えたのはベッキーだった。本人であった。
「それなら。今から」
「ベッキーさんも魔術ですか」
「魔術を使われるんですね」
「そうされるんですね」
「そうします、それです」
これを話してだ。まさに魔術をだというのだ。
そしてだ。彼女はその手に印を結んだ。その魔術が今使われようとしていた。

予告時間　　完

2011・3・1

第二百四十一話　魔術探偵その一

魔術探偵

ベッキーは印を結んだ。するとだ。
彼女の周囲にだ。無数の火の玉が出て来たのだった。
赤い炎である。それが周りに幾つも出た。
そしてそれがだ。上に向かって放たれるのだった。
「火か」
「それを使ってか」
「それで攻撃するか」
「そうするんだな」
「火はあらゆるものを焼き尽くします」
火を放ってからだ。ベッキーは話すのだった。
「ですから」
「それでルパンの部下達を倒しますか」
「あそこにいる連中を」
「姿は見えませんが」
「その為の炎です」
まさにだ。そうだというのである。
「私の炎です」
「これなら勝てるか？」
「如何にルパンの部下といえども」
「これでな」
「ああ、いけるな」
「絶対にな」
「いえ、それはです」
しかしと言ったのはだ。ラメダスだった。
彼もまた上を見上げている。そうし続けている。
そのうえでだ。彼は警官達に話すのだった。

「油断はなりません」
「油断禁物ですか」
「そういうことですね」
「はい、その通りです」
まさにだ。そうだというのである。
「あの方々もまた」
「一筋縄ではいかない」
「だからですか」
「安心はできない」
「魔術を使っても」
「はい、油断禁物です」
また言う。彼もだ。
そのうえでだ。ラメダスはだ。ベッキーに対しても話した。
「いいですね」
「はい、この炎達はおそらく」
「消えます」
消えるというのだった。炎を出した本人がだ。
「消されます」
「おわかりですか」
「この気配は」
そこからだ。察したことだった。
「消されますね」
「相手は既に迎撃態勢を整えています」
ベッキーはそれを読んでいた。
「ですから炎は」
「しかしそれでもですね」
「はい、使います」
そうするとだ。ラメダスに話すベッキーだった。
「このまま続けます」
「それは見る為ですね」

「この目で見る為にです」
その為だと話す。あくまでだ。
そしてそのうえでだ。炎達をだ。その周辺に漂わせる。
するとその光に照らされてだ。彼等の姿が見えた。
「気球だな」
「ああ、それだったんだな」
「気球でか」
「そこにいたんだな」
警官達がだ。ここで話すのだった。炎の光に照らされてだ。カメレオンを思わせるまでに黒い、映像を思わせる塗装の気球を見ての話だった。
「ああしてか」
「姿が見えないようにしてか」
「そうしてそこにいたんだな」
「そうだったんだな」
「おそらく。ルパンはあそこから入ったのです」
ラメダスがこのことを推理して話す。
「カメレオンスーツを着てです」
「それで中に入ったんですか」
「成程、そうしたんですか」
「相変わらず手が込んでますね」
「見事ですね」
「それだけじゃないんですね」
また言うのだった。そしてだ。

第二百四十一話　魔術探偵その二

その気球を見る。見ればだ。
少し動いている。その動きに合わせてだ。
塗装も動いている。警官達はそれを見てまたわかったのだった。
「背景に合わせて動くんだな」
「それでわからないか」
「普通に見たらな」
「ちょっとな」
「それでわからなかったのか」
また話す彼等だった。
「流石って言うかな」
「ルパンだけはあるな」
「そして部下達もか」
「そうしてるんだな」
「つまりは」
「さて、それではです」
ここでだ。彼等はだった。
彼等はその気球を見上げる。銃を出す。しかしだ。
どう見ても当たる場所にはなかった。絶対にだ。
そしてだ。その火の玉もだった。
次から次に消えていく。消されていっていた。闇の中でだ。炎が一つ、また一つと消えていく。ベッキーがそれを見て話すのだった。
「あれはです」
「あれは？」
「あれはといいますと」
「科学で消されています」
それによってだ。消されているというのだ。
「それによってです」

「科学ですか」
「それによって消されているんですか」
「気球の中に。それを消すものがあります」
こう話す。そしてだった。
ベッキーはその気球を見る。その姿は少しずつ消えていっている。
炎が消されてだ。その中でだ。彼女はまた話すのだった。
「火には水です」
「水ですか、やはり」
「それですか」
「はい、水です」
ベッキーは落ち着いた様子で話す。
「水を使っています」
「水ですか」
「それを使ってですか」
「それで消していますか」
「それではです」
それを受けてだ。さらに話す警官達だった。
「もう火は使えませんよね」
「どうしてもですね」
「それは」
「はい、使えません」
決してだというのだ。
「絶対にです。それでは」
「それでは？」
「それではですか」
「何を使われるのですか？」
「今度は」
「闇そのものに対して」
静かにだ。ベッキーはこう話すのであった。
「それを打ち払うものをです」

「使うんですか」
「ここは」
「はい、そうします」
また言う。そして。
また印を結んだ。するとだ。
今度はその周囲に光の球を出していく。そのうえでだ。
気球に向けて放った。するとだ。
今度は永遠に照らされた。しかも炎より強くだ。
気球の姿が完全に映し出されるのだった。それを見てだ。
警官達がだ。また口々に言う。
「見えるな」
「ああ、はっきりとな」
「見えるぞ」
「あれなら」
「やれるか？」
警官の一人がだ。ここでライフルを出した。
「これならやれるか」
「ライフルか」
「それで撃つか」
「ああ、これならどうだ？」
その警官が同僚達に尋ねる。
「これで撃ったらな」
「射程はいけるか」
「そうだな。それだとな」
「ライフルだとな」
ピストルとライフルではその射程は比較にならない。それでだった。

第二百四十一話　魔術探偵その三

その警官はライフルを上に向けて構える。そして。
一気に撃った。しかしだった。それはだ。
当たっていなかった。気球は何ともなかった。それを見てだ。
警官達はだ。まずはこう話すのだった。
「外れたか？」
「いや、当たっただろ」
「そうだよな。あれはな」
「当たったよな」
「そうだよな」
それは間違いなかった。手応えはあった。
しかしなのだ。気球はそのまま上に漂い続けている。それは全く変わっていない。そこから呻き声等もだ聴こえてはこなかった。
それを確かめてだ。警官達はまた話すのだった。
「あの気球細工してるか？」
「有り得るな。何かな」
「防弾のそれな。してるな」
「どうやらな」
こう話す。そしてだ。
光に照らされるその気球を見ながらだ。ベッキーが彼等に告げた。
「これは」
「これは？」
「これはといいますと」
「ゴムを張っていますね」
そうしているというのだ。ゴムだった。
「特殊なゴムを張って。そうして」
「防弾処理にしている」
「そういうことなんですね」

「はい、ですからライフルは効きませんでした」
そうだったというのである。
「そのせいです」
「それじゃあライフルは」
「下からだと効果がないですか」
「そうなんですね」
「それだと」
「どうする？これは」
警官達は攻めあぐねるものを感じていた。しかしだった。
ベッキーがまた印を組んでだ。そのうえでだった。
「私にやらせて下さい」
「魔術ですか」
「それで、ですか」
「使われますか」
「はい、そうします」
こうしてだ。炎を出すのだった。それで撃墜しようというのだ。
ところがだ。それを察してかだった。気球はだ。
その場を後にしていく。姿はまた闇の中に消えていった。こうなってはだった。
ベッキーもだ。どうしようもなかった。
「逃げられてしまいましたね」
「そうですね。これではです」
ラメダスもベッキーに話す。
「ここであの方々を捕まえることは」
「できませんね」
「残念ですが」
ラメダスは実際にだ。その言葉に苦いものを入れていた。
「今回は諦めるしかないですね」
「はい、本当に」
「とりあえずあの方々は退きました」

ラメダスは今度はこのことを話した。
「それはよしとするべきでしょうか」
「そうでしょうか」
「はい、それではです」
完全に何処かに行ってしまった気球をまだ目では追いながらだ。
ラメダスは周囲に話した。
「ここは警戒を続けたままで」
「そのうえで、ですね」
「お嬢様達の勝負に邪魔が入らないようにしましょう」
これがラメダスの考えだった。
「そうしましょう」
「そうですね。まずあの方々は退散しましたし」
ベッキーも彼のその提案に頷く。
「今はですね」
「それがいいと思います」
「そうされますか？」
ベッキーがだ。警官達に尋ねたのだった。

第二百四十一話　魔術探偵その四

「ここは」
「はい、それでは」
「我々も」
「それでは」
こうしてだった。彼等は屋上に最低限の人間を残したうえでだ。美術館の中に戻った。そうしてそのうえでだ。セーラとルパンの対決を見守るのだった。
その対決はだ。壮絶なものだった。
水晶玉から様々なものが放たれる。それに対してだ。
ルパンはマントを翻しだ。それで弾き返すのだった。
「むんっ！」
「まだです」
そのルパンにだ。さらにだった。
セーラはさらに攻撃を仕掛ける。今度は。
右手に剣を出した。フェシングで使うレイピアだ。
それを見るとだ。ルパンもだった。
右手に持っている杖がだ。同じくレイピアに変わった。そのうえで、だった。
お互いをみやってだ。話をするのであった。
「遠距離攻撃は効果がありませんか」
「そうですね。確かに貴女の魔術は見事です」
ルパンは剣を前に掲げ一礼しながら述べた。無論セーラもそうしている。その一礼はどちらも貴族のそれを思わせるものであった。
「ですが私もまた」
「防がれますね」
「このマントはあらゆる攻撃を跳ね返します」
そうしたマントだというのだ。

「ですから」
「そうですね。こうなっては魔法ではなく」
「剣で勝負を決めるのですね」
「それで宜しいですね」
「だからこそこうして剣を出したのです」
微笑んでだ。ルパンは話した。
「私にも魔術はありますが」
見れば彼が左手に持っていた、今は腰にさしているその杖の先には虹色に輝く宝玉がある。それに秘密があるというのである。
「貴女には効果がありませんので」
「だからこそ今は剣で」
「決めるとしましょう」
「それでは」
こうしてだった。二人はだ。
御互いに剣を出してだ。攻防をはじめた。
ルパンが前に突きを出せばセーラはそれを弾く。セーラが切ればルパンがそれを止める。こうしてだ。二つの流星が煌き合うのだった。
それを見てだ。警官達が言った。
「何か怪盗と探偵とかじゃないですね」
「決闘みたいな」
「そんな感じですね」
「まさにそうですね」
「そうだな。これは決闘だ」
まさにそれだとだ。警視も話す。最早彼等にはまったく手出しすることのできない、そうした戦いになってしまっていたのだ。
「それだ」
「もう百合も交えていますけれど」
「まだですね」
「決着がつきませんね」

「それは」
「容易につくものではないな」
警視は彼等の闘いをそうしたものだと見抜いていた。
「これはな」
「じゃあ俺達はこのままですか」
「見ているだけですか」
「それしかできませんか」
「そうだ。そしてルパンは」
ルパンについての話にもなる。他ならぬその世紀の怪盗だ。
「こうした状況で隙をつく男ではない」
「部下に美術品をこっそり盗ませるような」
「そうしたことはしませんか」
「今は」
「そうだ、今はしない」
それはないというのである。

第二百四十一話　魔術探偵その五

「決闘に勝ってからだな。悠然と美術品を手に入れる男だ」
「その辺り先祖代々ですね」
「そういうことも」
「ルパンは怪盗だが紳士だ」
それは絶対のものだった。ルパン家の人間はそれを守らなくてはならない。例えユーモラスであってもそれは守らなくてはならないのだ。
「あの三世もそうだったな」
「ああ、そういえばそうですね」
「三世も何だかんだで紳士でした」
「おちゃらけていても」
「ルパン家は正々堂々と盗む」
怪盗としてだ。
「そして人の道に外れたこと、卑劣なことはしない」
「その辺りはしっかりしてますね」
「それで怪盗でなければ」
「どれだけいいか」
「俺もそう思う。見事だ」
今の闘いもだというのだ。ルパンとセーラは御互いに一歩も引かない。五分と五分の行動が何時果てるともなく続いているのだった。
「これだけのものが見られるのはな」
「それもないですね」
「滅多にですね」
「フェシングの試合でも」
「そうだ、ない」
警視は断言した。
「剣の腕も見事だ」

「あのお嬢様もですね」
「体格は劣っているのに」
長身のルパンに対してだ。彼女は小柄であった。
しかし小柄でもだ。彼女のその剣捌きは見事であったのだ。
スピードとキレがだ。ルパンの体格による優位さに対していたのだ。
そのセーラを見てだ。彼等は話していく。
「五分に進めていますね」
「ルパンの腕もかなりですけれど」
「それに対して」
「ただしだ」
だが、だとだ。警視はここで言った。
「ここでお嬢様が敗れればだ」
「厄介なことになりますね」
「ルパンを抑えられない」
「そうですね」
「獅子に対することができるのは獅子だけだ」
警視はだ。こう話した。
「その獅子が倒れればな」
「獅子を抑える者はいない」
「そうですか」
「その通りだ。獅子は抑えられない」
また話す。その中でだ。
二人の闘いは続く。そこにだ。
ラメダスとベッキー達が来た。二人だけではない。
他の警官達もだ。来たのだった。
それで浮世絵の前も固める。ラメダスとベッキーが浮世絵の前に、
警官達は二人の闘いを取り囲む。そうしてなのだった。
二人はだ。セーラに対して告げた。
「お嬢様、ルパン殿の部下の方々はです」

「帰られました」
こう主に話すのだった。
「後はルパン殿だけです」
「その方だけです」
「部下は逃げた？」
「主を見捨てて」
最初から美術館にいる警官達は話を聞いてこう述べた。
「まさかと思うが」
「そうしたのか？」
「それは違う」
だがそれはだ。他ならぬルパン自身が否定した。

第二百四十一話　魔術探偵その六

彼はセーラに突きを繰り出しながらだ。そのうえで話すのだった。
「彼等には伝えておいた」
「伝えておいた？」
「何を」
「若し攻撃を受けそれに対せられないなら」
そうならばだというのだ。
「去る様に伝えておいた」
「そう言っていたのか」
「そうだったのか」
「如何にも」
ルパンは警官達に答える。
「その通りだ」
「そうしていたのか」
「部下は逃げてもいいと」
「あの方々を説得されるのに苦労しましたね」
セーラはルパンの突きを己のレイピアで弾き返しながらだ。ルパンに対して問うのだった。彼を見据えたまま冷静にである。
「それはできないと言われる方々に」
「その通り。苦労した」
それはだというのだ。
「だが。それでもだ」
「納得されたのですか」
「何とかな。そしてだ」
「そして？」
「私は一人でも狩りをする」
そうするというのである。
「絶対にだ」

「絶対にですか」
「貴女に勝つ」
セーラを見据えたうえでの言葉だった。
「今回は」
「では私は」
セーラもだ。彼を見据えて言う。
「貴方のその申し出を受け」
「そのうえで」
「狩りを防ぎます」
そうするというのである。
「それで宜しいでしょうか」
「受けましょう」
ルパンの返答もだ。冷静なものだった。今度はセーラが攻める。
小柄な身体から繰り出す斬りはだ。尋常な速さではない。
ルパンはそれを一歩も退かず己の剣で受ける。そしてだ。
再び来る斬撃を受け。また言うのだった。
「貴女とここで会うのも運命の導きですから」
「そうですね。導きです」
二人もそれを自覚する。運命をだ。
「だからこそ。絶対に」
「負けられません」
「運命が導いたこの狩り」
「この勝負」
二人は攻防を続けながらさらに話す。
「楽しみそして」
「負けません」
こう言い合いながらだ。闘いを続ける。それは一時間近くに渡っている。
汗が散るそれを見てだ。ラメダスが言った。
「このままでは」

「そうですね。どちらかが」
ベッキーが応える。
「倒れられます」
「御二人共既に緊張状態がピークにあります」
それが問題だというのだ。
「ですから。このままでは」
「どちらかがですね」
「いえ、違います」
どちらかではないというのだった。
「御二人共です」
「そうなるのですか」
「その危険が高いです」
ラメダスは暗い面持ちでベッキーに話した。
「ですからここは」
「どうしたらいいでしょうか」
ベッキーは険しい顔でラメダスに問うた。
「ここは」
「そうですね。回復でしょうか」
それだと言うラメダスだった。
「それを使いましょうか」
「回復の魔術ですね」
「気力と体力も」
どちらも回復させるものだというのだ。

第二百四十一話　魔術探偵その七

「それを使うべきです」
「わかりました。それでは」
「共に」
二人でその魔術を使う。それで倒れるのは防いだ。
だがここでだ。警官達がであった。その二人に対して言ってきた。
「それはいいのですが」
「回復はいいのですが」
「それでもです」
「五分と五分のままでは」
困った顔でだ。こう話すのであった。
「決着がつきません」
「助力が必要では？」
「今は」
こう言ってだ。そのうえでだ。
彼等はだ。自分達で名乗り出るのだった。
「あの、我々が助太刀しましょうか」
「この拳銃でルパンを撃ちましょうか」
「外れても。牽制になります」
「ですからそれをしましょうか」
「どうしましょうか」
「止めておけ」
ところがだ。それは警視が止めた。
彼は二人の壮絶かつ華麗な一騎打ちを見ながらだ。部下の警官達に話す。顔はそこから離れることはない。見続けてのことだった。
「今はだ」
「援護はですか」
「止めておくべきですか」

「そう仰るのですか」
「そうだ、絶対にするな」
彼は強い声で言う。
「わかったな」
「それは勝負に介入するなということですか？」
「それで、でしょうか」
「無粋なことはするな」
「そうした意味ですか？」
「最大の理由はそれだ」
それだと述べる警視だった。
「勝負に外野が入るのは止めておけ」
「無粋だから」
「それで、ですか」
「それにだ」
理由はまだあった。警視はさらに話すのだった。
「若し銃で撃ってもだ」
「撃っても？」
「それは」
「弾かれる」
銃弾がという意味だ。勿論ビームでも同じだというのである。
「二人は戦いの場の周りに結界を張っているからな」
「結界！？」
「それもですか」
「それも使っているのですか」
「そうだったのですか」
「その通りだ。それは自然にできている」
結界がだ。そうなっているというのだ。
「闘いで生じたエネルギーがだ。周りに拡散してそうなった」
「闘いのエネルギーで」
「そこまでなる」

「そうなのですか」
「わかったな。だからだ」
それでまた言う警視だった。
「下手なことは考えるな。若し撃てば」
「撃てば」
「その時は」
「その攻撃が跳ね返って俺達を襲う」
かえってだ。そうなってしまうというのである。

第二百四十一話　魔術探偵その八

「だからするな。馬鹿なことで命を落としたいか」
「いえ、それは」
「そう言われますと」
「やはり。避けたいです」
「どうしても」
こう答える他ないことだった。
「ではここはですか」
「見守るだけだと」
「そうあるべきなのですね」
「そうだ。それしかできない」
言葉は限定であった。
「わかったな」
「了解です」
「それならですね」
「今は」
「美術品の周りを固めろ」
警視はあらためて指示を出した。
「そして最悪の事態に備えろ」
「浮世絵を渡さない」
「ルパンも逃がさない」
「その場合はですね」
「そうだ。絶対に渡すな、逃がすな」
「わかりました」
「それはですね」
周囲もすぐに頷く。
「俺達の責務に徹する」
「そういうことですよね」

「警官は何処から金を貰っている」
警視は給料の話もした。
「何処からだ、それは」
「はい、税金からです」
「市民の税金からです」
このことはだ。この時代でも言わずがなであることだ。もっともそれを忘れてしまっているか気付いていない人間が見られるのも同じだ。
「ではですね」
「ここは」
「責務に徹する。ルパンは市民には何もしないがな」
狙うのはあくまで美術品や悪人の財産だけだ。善良な市民に対しては何もしないのはまさにルパン一族の家訓であるのだ。
「しかし。それでもだ」
「怪盗は怪盗ですね」
「ものを盗みますから」
「それが問題だ」
まさにだ。それがだというのである。
「そうでなければ何の問題もな」
「怪盗でなければ」
「しかし怪盗だからこそ」
「俺達は責務をまっとうしなければなりませんね」
「給料の分は働くことだ」
まさにだ。それだというのである。
「わかったな」
「はい、わかりました」
「それもよく」
「ルパンを捕まえろ」
これは理想ではある。しかしそれをあえて言うのだった。
「捕まえられないにしてもだ」

「それでもですね」
「美術品は盗ませない」
「それだけはですね」
「絶対に死守する」
また言葉が強くなる。
「わかったな」
「了解です」
「しかし。この闘い」
警視はまた二人の闘いを見る。それはまだ五分と五分のままだ。
それを見てだ。彼は苦い顔で述べた。
「終わる気配はないな」
「全くですね」
「何時終わるかですね」
警官達もだ。見るしかできないのだった。
二人はだ。その闘いを続け。何時しかだった。

魔術探偵　完

2011・3・7

第二百四十二話　一時間その一

一時間

時計がだ。ここで鳴った。
それを聞いてだった。最初に動いたのは。
ルパンだった。彼は間合いを離してだ。そのうえでセーラに言うのだった。
「今回は私の負けだな」
「帰られるのですか」
「一時間」
この時間が話される。
「一時間経って。貴女に勝てませんでした」
「そしてそのうえで、ですね」
「浮世絵を盗めませんでした。それではです」
敗北を認める。そういうことだった。
「予告時間を一時間も過ぎてしまえば。それだけで」
「えっ、終わり？」
「そうなのか？」
「これで終わりなのか」
「何と」
警官達は唖然となった。勝負がこれで終わりだと聞いてだ。
「まさか。一時間過ぎて盗めなかったら終わりって」
「何か。それって」
「あっさりしてるよな」
「全くだよ」
「何だっていうんだよ」
「これがルパンのやり方なのか」
それに気付く。彼のその考えにだ。
「本当にあっさりしてるよな」

「潔いっていうのか？」
「時間を決めてそれで駄目だったら負けを認める」
「美学みたいだな」
「はい、美学です」
ベッキーが警官達にそれだと述べた。
「ルパンさんは美学を持っておられます」
「初代からの美学なんですね」
「それがあるからですか」
「だから予告時間から一時間を過ぎても盗めなければ諦める」
「そういうことですか」
「その通りです。あの方はそうなのです」
また話すベッキーだった。
「それでなのです」
「では。本当にですか」
「諦めて帰る」
「そうするんですね」
「そうします。これで終わりです」
今回は狩りはだ。それでだというのだった。
「後は」
「俺達の仕事ですね」
「ルパンを捕まえる」
「それですね」
「そうだな。その通りだ」
警視も真剣な面持ちで述べた。
「用意はできているな」
「何時でも」
「いけます」
「それならいい」
話を聞いてだ。警視も納得した顔で頷いた。
「では。いいな」

「結界がありますけれど」
「それでもですね」
「囲んで。そうして」
「囲むことだ」
それが大事だというのだ。
「猫の子一匹通すことのないまでにな」
「了解です」
「それでは」
こうしてだ。警官達はルパンを取り囲んだ。そうしたのである。
そのうえで捕らえようとする。しかしだ。
ここでだ。ルパンは言うのであった。
「それでは」
「それでは？」
「私は立ち去りましょう」
セーラに対して述べた言葉だった。
そのうえでだ。彼女にこうも言うのだった。
「では。お嬢様」
「帰られますか」
「また御会いしましょう」
「その時代を楽しみにしています」
微笑んで述べたセーラだった。

第二百四十二話　一時間その二

「これで」
「暫しのお別れです」
御互いに一礼して。それからだった。
ルパンはだ。姿を消したのだった。
警官達はそれを見てだ。驚いた顔で一斉に言った。
「あれっ、消えた!?」
「何を使ったんだ、一体」
「ここで消えた!?」
「カメレオンか!?」
「これは魔術ではありません」
セーラが驚く警官達に対して述べた。
「超能力です」
「超能力、じゃあこれは」
「瞬間移動!?」
「それか?」
「それを使ったっていうのか?」
「まさか」
「はい、それです」
まさにだ。それだというのだ。
「それを使われてです」
「ここから去ったっていうのか」
「信じられない奴だな」
「科学や魔術だけでなく超能力まで使えるのか」
「怪物みたいな奴だな」
「普通の人間じゃないな」
少なくともだ。そこが初代のルパンとは違っていたのだ。
そしてだ。そのうえでだった。警視がセーラに尋ねた。

「ではあの男は既に」
「はい、この美術館にはいません」
既にだというセーラだった。
「出られています」
「瞬間移動でか」
「そうしたんだな」
「つまりは」
「はい、そうです」
まさにその通りだというのである。
「ただ。その超能力はです」
「それは？」
「それはっていうと」
「一体」
警官達がセーラに尋ねる。するとだ。
セーラはだ。穏やかな声でこう述べた。
「あの方の超能力は多大な気力と体力を消耗しますので」
「滅多には使えませんか」
「そうだというのですか」
「ですから危機にしか使われないのです」
「今の様にですか」
「そうなのですか」
「あくまで危急の手段です」
それを聞くとだ。警官達は考えながら述べた。
「今はそれだけやばかったのか」
「そうした危急の手段を使わないといけない程」
「俺達に囲まれていたからか？」
「それでか」
「おそらくは」
それではないかと述べるセーラだった。
「そうだと思います」

「俺達も力になったんだな」
「ルパンをある程度は追い詰めてたのか」
「警察も。そうなんだな」
「力になってたんだな」
「はい、なっていました」
その通りだというのだった。今度ははっきりと言うセーラだった。
そしてだ。彼女はあらためて話すのだった。
「今回はこれで終わりです」
「そうですね。ルパンが逃げましたし」
「それならですね」
「今回の話はこれで終わりですね」
「完全に」
「終了だな」
警視も言った。

第二百四十二話　一時間その三

「それでは我々もだ」
「帰りますか」
「検証の後で」
「帰るのは翌朝以降になるな」
それは長引くというのである。
「仕事はまだあるからな」
「むしろこれからですかね」
「証拠があれば手に入れて」
とはいってもだ。それはどうかというとだ。彼等も話す。
「ルパンが証拠を残すとは思えませんけれど」
「残念ながら」
「それはないな」
警視はこのことには断言した。
「あのルパンだ。流石にな」
「ですね。けれどそれでも」
「証拠は調べますか」
「万全を期す」
警察の常識だ。警察というものは完璧主義に徹する組織だ。官僚機構というか役所というものはそうだが警察は特にそうなのである。
それでだった。警視は話すのだった。
「だからだ」
「では。早速ですね」
「念の為の警戒をそのままにして」
「証拠物件の調査ですね」
「指紋もありますかね」
この時代でもそれはかなり重要な証拠となるのだった。
そういったものが調べられていく。しかしだ。

セーラ達はだ。こう警視に話をされた。
「ここからは完全に警察の仕事なので」
「私達はですね」
「これで終わりですね」
「はい、終わりです」
警視はラメダスとベッキーに話した。
「とりあえずはですが」
「そうですか。それでは」
「私達はこれで帰っていいのですね」
「御疲れ様でした」
警視は三人に笑顔で話す。
「御屋敷に帰りゆっくりとお休み下さい」
「けれどあれですね」
ここで警官の一人が何気なく述べた。
「今から帰られても。休まれる時間はあまりないですね」
「いえ、それは大丈夫です」
セーラがその言葉に笑顔で述べた。
「異空間で休みますので」
「異空間!?」
「といいますと」
「そこは」
こう言われてだ。また唖然となる警官達だった。
そしてそのうえでだ。その唖然となった顔でセーラに尋ねるのだった。
「セーラさんが行かれてですか」
「それで休まれる場所ですか」
「お嬢様はこちらの空間とあちらの空間を自由に行き来できるのです」
ラメダスがその彼等に説明する。
「そこはこちらの世界と時間の流れが違いまして」

「こちらの一時間はあちらの十時間になります」
ベッキーも説明する。
「尚その十時間は年齢的には一時間になります」
「何か便利ですね」
「その十時間でかなりのことができますよ」
「確かに」
警官達はそれを聞いてまた驚くことになった。
その驚く顔でだ。さらに話すのだった。
「じゃあその十時間で寝たり休んだりして」
「残りで他のことできますよね」
「勉強したりとかトレーニングとか」
「必要とあらば二十四時間が二百四十時間に」
つまり十日分のものがあるというのだ。
「いや、かなり便利ですね」
「そうした世界に行けるなんて」
「はい。ただ」
それでもだと。ベッキーはここで話す。そのことについてだ。

第二百四十二話　一時間その四

「異空間に自由に行き来できるにはかなりの力が必要です」
「魔術のですね」
「それですね」
「はい、魔術と超能力です」
その二つだというのだ。魔術だけではないというのだ。
「その二つを合わせて使ってできるものです」
「それもかなり力が強い」
「そうでなくては駄目ですか」
「ですから。容易に行き来できるものではありません」
そこまでのものだというのである。しかし逆に言えばそれができるというのはである。かなりのものがあるというのである。それも話される。
「しかしそれができればです」
「それだけのものが得られる」
「そうですか」
「そうです。お嬢様はそれができます」
またセーラのことを話す。
「ですから。時間がなくてもです」
「大丈夫ですか」
「だからですか」
「はい、このことについてお気遣いは必要ありません」
時間についてもそうだというのである。そしてだ。
最後にセーラがだ。こう警視達に述べた。
「では今宵は」
「はい、お休みなさい」
「有り難うございました」
セーラからの言葉だった。

「本当に有り難うございました」
「いや、それはこちらの言葉です」
セーラにこう言われてだ。警視も戸惑う。そのうえでの言葉だった。
「本当に今回は」
「あの方と。久し振りに心ゆくまで勝負ができました」
「だからですか」
「はい、有り難うございます」
それでだというのである。
「本当に有り難うございました」
「左様ですか。それで」
「はい、それでなのです」
「わかりました。それでは」
警視も彼女の言葉を受けた。そうしたのであった。
こうして話は終わった。セーラとルパンのこの世の常識さえ超えた戦いは終わった。翌朝クラスではそのことで話がもちきりだった。
「流石っていうか？」
「だよな、ルパンと互角って」
「魔術まで使ってか」
「それでなんだな」
皆納得すると共にだ。驚いていた。
「ルパンも凄いけれど」
「セーラも凄いな」
「凄いのはわかっていたけれど」
「予想を超えてたわね」
「かなりね」
皆が言う。しかしであった。
ここでテンボとジャッキー、これまで皆から強引に忘れられていた二人がだ。いつも通り訳のわからないことを言い出したのであった。

「おのれルルンバ！」
「私達から逃げたわね！」
何故か言うのだった。
「怪盗の名折れだな」
「私達が怖くて逃げるなんて」
「何でそう考えられるのよ」
呆れながら突っ込みを入れたのはペリーヌだった。
「あのね、そもそも名前違うし」
「名前？」
「ルントの名前？」
「ルパンだから」
言うのはそこからだった。そもそもそれさえ間違っている二人だった。

第二百四十二話　一時間その五

「名前、間違えてるわよ」
「だから。ンパルだろ？」
「違うの？」
「言う度に名前が違うし」
この二人では実によくあることだ。いつもである。
しかもだ。今回はそれだけではないのであった。
「何で名前が逆さまになってるのよ」
「だから違うのか？」
「そうじゃないの？」
「だから違うから」
また言うペリーヌだった。呆れながらだ。
「とにかく。あんた達の出番はなかったから」
「これからじゃないのか？」
「真打登場でね」
「だから何処の誰が真打なのよ」
「俺達に決まってるだろ」
「それ以外に誰がいるのよ」
平然としてだ。こう答える二人だった。
「この天才美少年探偵テンボ様がな」
「超絶美少女探偵ジャッキーちゃんよ」
「美って言葉は絶対につくの？」
「いや、天才は欠かせない」
「超絶はね」
どちらかというとそこに重点を置く二人だった。
そしてだ。今度はこう言うのだった。
「このグレートスーパー探偵がな」
「ウルトラデラックス探偵がよ」

「天才とか超絶って言葉はどうしたのよ」
それが見事に消えていた。言う度に変わるのが二人だ。
しかしだ。何はともあれだった。この二人の出番はだ。
「もうないからね」
「じゃあ何をしろというんだ」
「真打なのに」
「真打かどうかも疑問だけれど」
そもそもそれ自体がだというのである。
「とりあえずルパンは暫く大人しいわよ」
「じゃあ他の怪盗を探すか」
「そうするしかないわね」
「探すって」
怪盗を探す、そのこと自体がどうかというペリーヌだった。彼女は常識の中にその身を置いてだ。そうして二人に話すのだった。
「怪盗を探すの」
「違うか？」
「そういうものでしょ、怪盗って」
「決定的に違うけれど」
その常識から述べるペリーヌだった。
「まあ他のことしておいたら？」
「よし、じゃあな」
「今はね」
こう話してだ。そうしてなのだった。
二人はまたしても騒動を起こそうとする。しかもクラスの面々はそうれはどうでもいいとした。しかし騒動は引き起こせはしなかった。
ロシュフォール先生がだ。すぐに動いたのだった。
白衣の風紀部員達にだ。こう命じたのだ。
「あの二人だが」
「はい、また動きますね」

「余計なことをしますね」
「またしてもですね」
「最高のタイミングで」
「そうしたタイミングはよく見る」
先生は無表情な声で述べた。
「無意識のうちにな」
「つまり天才ですね」
「そうだというのですね」
「悪い意味での天才だ」
全く褒めていない言葉だった。
「迷惑になるからな」
「そうですね。折角大きな話が終わったのに」
「それで今ですから」
「本当に悪い意味での天才ですね」
「全くです」
風紀部員達も話していく。
「しかし。放っておく訳にもいきません」
「ここはです」
「どうするべきか」
「それですが」
「マークしておくのだ」
そうしろと話す先生だった。

第二百四十二話　一時間その六

「いいな、そして何かしでかそうなら」
「拘束ですね」
「そして生徒指導室ですね」
「そちらに送るのですね」
「そうだ。そうする」
まさにだ。その通りだというのだ。
「絶対に気付かれないが露骨に姿を見せてマークはしないようにな」
「はい、わかっています」
「それは」
風紀部員達もすぐに答える。
「見つかればそれでおかしなことになりますし」
「また。国家権力がどうかとか騒ぎますから」
「我々は国家権力ではないのですが」
学校の風紀部員だ。国家権力と関係がある筈がない。
「ですが。それでも」
「彼等は国家権力だとか言いますし」
「国家権力ならまだいい方で」
他にもあるのである。
「一万人委員会もありましたし」
「宇宙人もありました」
「リトルグレイですね」
「後はサン＝ジェルマン伯爵の手先」
「ノイエ＝ブラックゴーストもあったでしょうか」
「ショッカー第三帝国も」
とにかくあらゆる組織の話を出してくるのだ。
「謎の組織と関係があるとか喚いて」
「それで暴れだしますからね」

「話の一つ一つが矛盾していますが」
「それについては全く気付かず言いますから」
「厄介です」
「だから見つからないことだ」
だからだと話す先生だった。
「わかっているな」
「無論です」
「では。ここは何としても」
「気付かれないようにします」
「そうしてマークしていきますので」
「頼んだぞ。何はともあれルパンの話は終わった」
それはだと話す先生だった。
「そのことは素直に喜ぼう」
「そしてここはですね」
「勝って兜の緒を締める」
「そうするのですね」
「是非」
「大きな話の後はどうしても油断する」
これは人間心理としてどうしてもそうなることだった。人間は常に緊張できるものではなくだ。大きなことをした後は安堵してしまうからだ。
「だが。そうした時にこそ」
「気を引き締めて」
「ことにかかるのですね」
「学園全体が今は安堵しているが」
その中でだというのだ。
「我々はそうした時にこそだ」
「気を引き締めて」
「そのうえで」
「動かなければなりませんね」

「そして大きな話は終わってもだ」
それでもだと話すのだ。
「また次の話がある」
「気を緩めてもまたですか」
「それがある」
「では。また」
「今は余計な大きな話を起こさせない」
テンボとジャッキーのそれだ。
「せめて次の大きな話まではだ」
こう言う先生だった。そうしてなのだった。
彼等はテンボとジャッキーをマークして結局拘束した。訳のわからない騒動はだ。誰にも気付かれなく処理されたのであった。

一時間　　完

２０１１・３・１１

第二百四十三話　伝説の体操服その一

伝説の体操服

八条学園の体操服はジャージと半ズボンが基本だ。
他にはスパッツもある。そうした格好だ。
だがここでだ。彰子がクラスでこんなことを話した。
「昔の体操服ってね」
「昔の？」
「何時頃の？」
「二十世紀だけれど」
その頃のことだというのだ。
「何か変わった体操着だったそうよ」
「変わった？」
「変わってるっていうと？」
「何かね」
どういったものなのか。彰子は皆に具体的に話をはじめた。
「色は色々とあって」
「カラフル？」
「そうなの？」
「カラフルじゃなくてその服によって色々な色のものがあるのよ」
つまり一色ずつだというのだ。
「それでもね」
「色々な色のがあるのね」
「赤いジャージや青いジャージがあるみたいに」
「そんな感じで」
「そう、それでね」
色はだ。まさにそうした感じだというのだ。
そしてだ。さらにどうかというのである。
「形はね。ショーツみたいなの」

「ショーツみたいな？」
「じゃあビキニの下みたいな」
「そんな感じなの」
「そんな体操服なの」
「そうなの。それでね」
さらに話す彰子だった。
「それを体操服の上と一緒に着ていたらしいのよ」
「何かそれってかなり」
「そうよね。上が体操服で下がビキニ？」
「太腿は丸見えだし」
「お尻のラインだってはっきりしてるし」
「いらやしいんじゃ」
誰もがそれに唖然となる。
「そんな格好で体育なんかしたら」
「男の子皆見るわよね」
「只でさえ男の子って体育の時間見たりするのに」
「半ズボンとかね」
「スパッツだと余計に」」
この辺りは個人による。半ズボンの娘もいればスパッツの娘もいるのだ。
そのスパッツ組はだ。困った顔で話す。
「スパッツって。動きやすいけれど」
「半ズボンよりまだ身体の線見えるからね」
「下着のラインだってね」
「冬も寒いし」
そこが問題だというのである。
「タイツと同じだからね」
「タイツの短いのっていうかね」
「まあ。丈の長いスパッツもあるけれど」
「あれはもうそのままタイツだし」

こんな話をしていくのだった。そしてだ。
彼女達はだ。あらためて彰子に尋ねた。
「そんな体操服あったの？」
「二十世紀には」
「そうだったの」
「うん、ブルマーっていってね」
それがその体操服の名前だというのだ。
「そうしたのがあったらしいの」
「ブルマーねえ」
「それがその体操服の名前なの」
「何か。はじめて聞いた名前だけれど」
「そのショーツみたいな体操服なの」
「二十世紀はね」
彰子はさらに話す。
「日本じゃ小学生から高校生まで使ってて」
「体育の時間によね」
「そうしてたのよね」
「そうなの。そしてね」
さらにであった。そのブルマーについて話されていく。

第二百四十三話　伝説の体操服その二

「バレーボールの時もそうだったらしいのよ」
「へえ、バレーもなの」
「そうだったの」
「そのブルマーだったの」
「何でもね。バレーの時はどの国も使ってたらしいわ」
そのブルマーをだというのだ。
「女の人はね」
「ううん、水着でバレーやるようなものよね」
「ショーツのままでね」
「上は普通の体操服でだから」
「かなりいやらしい格好よね」
「ビーチバレー以上じゃない？」
皆口々に言う。
「そんな格好で体育なんて」
「できないわよね」
「絶対に無理よ」
「何でそんないやらしい格好で体育とかバレーしてたのかしら」
「そこがわからないわね」
「そうよね。しかもね」
彰子はここでこのことも話した。
「男の子は。今と一緒でね」
「半ズボン？」
「それかジャージ？」
「そうだったらしいわ」
ずばりその通りだというのだ。
「けれど女の子はね」
「ブルマーだったの」

「そのショーツみたいな服をはいて」
「それで体育していたのね」
「特に日本ではね」
つまり彰子の祖国であり今八条学園があるその場所だ。
その国ではだ。かつてはそうだったというのである。
「けれど。何か」
「そうそう。いやらしいわよ」
「それもかなりね」
「変よね」
女の子達が話していく。顔を顰めさせてだ。
「私そういうのはね。駄目」
「私も」
「私も駄目」
「絶対に無理」
こうだ。彼女達は口々に言っていくのだった。
「そんなのはね」
「半ズボンじゃないとね」
「絶対に無理よね」
「ジャージとかじゃないと」
「せめてスパッツじゃないと」
「無理よね」
彼女達にしてみればブルマーはだ。やはり無理だというのである。
そしてだ。ここでアンが言った。
「ねえ」
「何？」
「そのブルマーだけれど」
アンは怪訝な顔になってだ。彰子に話すのである。
「動いていたらすぐにずれない？」
「あっ、そうよね」
「ずれて。くい込んだり」

そうなるとだ。ブルマーの形を想像しながら彰子に話していく。
「だって。ビキニの形よね」
「ええ、そうらしいわ」
「それじゃあ。足も丸出しでお尻のラインも見えるだけでなくて」
しかもだ。それだけではないというのだ。
「動いてたら。ずれるわよね」
「言われてみれば。そうよね」
「そうしたらよ」
アンは話しながら怪訝な顔になっていく。そしてだ。
その顔でだ。こう話すのだった。
「ブルマーの下の下着だってね」
「あっ、そのブルマーが上がったらね」
「結局それ出るわよね」
「何それ、ショーツはみ出るの？」
「最悪」
それがわかってだ。女の子達はその顔をさらに顰めさせるのだった。
「半ズボンはそこまでいかないのに」
「結構。隙間が気になるけれどね」
「そんな。はみ出たりとか」
「それって何の意味じゃないじゃない」
「最悪じゃない」
こう話していく。そのことがわかってだ。

第二百四十三話　伝説の体操服その三

「ううん、よくそんなの使ってたわね」
「それって盗撮とかも来るわよ」
「来る来る、絶対にね」
「スパッツや半ズボンでもそうなのに」
実際にだ。そうしたものを好む男も多いのである。それで学校に潜入したりしてだ。女子校生のそうした姿を狙う人間も多いのである。
「そんなのだった日にはそれこそ」
「ゴキブリホイホイに群がるゴキブリみたいな感じ？」
「そんな感じで来るわよ、変質者がね」
「絶対にそうなるわよね」
「そうよね。よくそんなのあったわね」
アンがここでまた話す。
「昔の日本人って何考えてたのかしら」
「私も。そう言われると」
彰子もだ。首を傾げさせるばかりだった。
「何でかしらって思うわ」
「動きやすいとかじゃないわよね」
「そんなの半ズボンで充分だからね」
「そうよね。それはね」
「ジャージでも普通に動けるしね」
「そうそう、そんなブルマなんてね」
「ただいやらしいだけじゃない」
これが彼女達の結論だった。そしてだ。
そのうえでだ。彼女等はこうも話すのだった。
「今それがあってもね」
「誰もはかないわよね」

「っていうかそんなのがあったなんてはじめて聞いたし」
「そうよね」
既にだ。過去の遺物だというのである。
「半ズボンとかそういうのだけしか知らなかったから」
「レオタードって普通体育の時間には使わないから」
「体操部や新体操部でも普段ジャージよ」
そうそういつも着るものではないというのだ。
「レオタードって正装みたいなものだから」
「じゃあ。やっぱりね」
「そうよね」
「ブルマーなんてとても」
またそのブルマーについて話される。
「下着隠すのにも使えないし」
「スコートよりまずいんじゃ」
「っていうかスコートってスカートの下にはくから」
そこが違うというのである。
「ブルマーってもろみたいだけれど」
「そうよね。下着のまま動くのと一緒よね」
「外見はね」
「その通りよね」
「何でそんなのあったのか」
何度も話すがそのことがわからないというのだ。
「昔の日本人って何考えてたの？」
「今そんなのはいたらね」
「問題になるっていうか」
「即刻大スキャンダルよね」
「絶対にね」
こう話す。そしてだ。
彰子もだ。首を傾げさせて言う。
「特撮だってミニスカートの下はスパッツだけれど」

「黒スパッツね」
「あれで見えないようにしてるから」
何を見えないようにしているのかはもう言うまでもない。
「特撮って結構ガード固いからね」
「半ズボンの人でもちゃんとズボンの下にスコートだし」
「それで見えないようにしてるからね」
「そこはね」
とにかくだ。徹底してガードをしているのだ。
しかしだ。当時の日本はというとだった。
「特撮でも危ういっぽいわね」
「ええ。それじゃあ」
「下着そのままとは？」
「してたんじゃ」
「スコートっていっても名前ばかりで」
こう特撮についても話されていく。とにかくだった。
皆ブルマーについて疑問の声をあげるのだった。そうして彰子も。

第二百四十三話　伝説の体操服その四

家に帰ってだ。妹の明香にだ。そのブルマーのことを話すのだった。
「そんな体操服だったのよ」
「姉さん、そんな体操服だったら」
「まずいと思うの？明香も」
「ええ、思うわ」
まさにその通りだというのである。
「そんなの穿いたらそれこそ」
「恥ずかしいわよね」
「私達も恥ずかしいし」
何しろ女の子だからだ。こう言う明香だった。
「それに」
「変な人も来るわよね」
「絶対に来るわ」
それも間違いないというのである。
「隠し撮りし放題よ」
「実際にそういうの多かったのかしら、昔の日本って」
「絶対にそうだと思うわ」
また絶対だと言う明香だった。
表情も話し方も淡々としている。それでも言うのである。
「それで問題になって」
「ブルマーはなくなったのね」
「そうとしか考えられないわ」
「やっぱり半ズボンとかジャージでないと駄目よね」
「それかスパッツか」
明香もこう話すのだった。
「そういうのじゃないと」

「駄目よね」
「そう。女の子はできるだけ」
どうあるべきか。そうした話にもなる。
「ガードしておいた方がいいから」
「おかしなことにならない為にね」
「そういうこと。私もそうだし」
明香の服は夏でも露出が少ない。今も青いブラウスに白いスラックスといったラフだが露出の少ない服装で姉と話をしているのだ。
「姉さんも」
「うん、私もそれはね」
「気をつけてね」
「自分の身は自分でよね」
「そう。だから」
それでだと。姉の服を見ながら話す。姉の服は桃色のロングスカートに赤い上着である。彼女の露出もかなり少ないものである。
「服は大事」
「ブルマーって動きやすいのかしら」
「多分」
それは察しをつけて話す明香だった。
「半ズボンと同じ位」
「同じ位なのね」
「だから半ズボンの方がいい」
彼女の結論は変わらない。
「そう思う」
「そうよね。やっぱりね」
「日本人だけれど御先祖様のことがわからない」
こうした言葉まで出たのだった。
「そんな怪しい服を考えるなんて」
「人気があったのかしら」
「男の人にはあったと思う」

これが秘密であった。
「だから消えたけれど実際にあったんだと思う」
「いやらしい話ね」
「私もそう思うわ」
実際にそう思うと述べるのだった。
「とても」
「とにかくブルマーはね」
「何があっても駄目」
これは明香もだった。
「問題外だと思うわ」
「明香も若しあったら」
「絶対に着ないわ」
また断言するのだった。とにかく全否定である。
「姉さんもよね。それは」
「うん、私もやっぱり」
どうかとだ。彰子も考える顔になって話す。

第二百四十三話　伝説の体操服その五

「そういうのは」
「よくそんなのあったって思うわ」
「本当に何でそういうのがあったのかしら」
「そういう服は多いけれど」
明香の話は服の歴史にも入った。具体的にこうしたものを挙げた。
「タイツだけれど」
「昔のエウロパの服よね」
「そう、それ」
そのタイツの話である。
「オペラでは時々着ることがあるけれど」
「当時の演出にこだわったらよね」
「そう、その場合は着るけれど」
オペラの演出といっても様々なのだ。その時代に忠実な場合もあればそうでない場合もある。ここでは忠実な場合が話されるのだった。
「あれだって」
「確かズボンはもうあったわよね」
「あったわ、エウロパにも」
実際にだ。ズボンがあったというのだ。
「それでも。タイツができて」
「皆穿いてたのね」
「ファッションになってたの」
実際にだ。そうなっていたというのだ。
「しかもそこにね」
「そこに？」
「ブルマーがあったの」
ここでもだ。この服の名前が出て来た。

「とはいってもその体操服みたいなのじゃないけれど」
「あのカボチャみたいな形した半ズボンみたいなのよね」
「そう、あれがブルマー」
ここで言うブルマーはそれだった。
「それを穿いて。タイツもだったの」
「何か凄い格好よね」
「そう。男の人でもタイツ」
「ううん、想像できないものがあるわね」
「けれど貴族の人はそうしていたから」
「シェークスピアの劇でもそうだったかしら」
この学園には演劇部もある。歌劇部とはまた別にだ。そちらでシェークスピアの劇も行われたりしているのである。無論当時の服を着たりもする。
「あの劇でも」
「そう。着たりするから」
「男の人のタイツねえ」
「その時代では普通だったの」
「じゃあブルマーも？」
「多分その時代では普通だった筈よ」
明香は体操服のブルマーについても述べた。
「私達にはとても着られなくても」
「そうなのね」
「今から見て普通じゃない服も」
当時ではだ。どうかというのである。
「その時代では普通だったの。けれど」
「けれど？」
「言われたから」
どうなったかというのである。
「それで止めたと思う」
「そういうことなのね」

「そういうこと。それでも」
「それでも？」
「そうしたデザインだから問題になって」
話が戻った。
「それで。なくなったと思う」
「そういうことなのね」
「服は見られるものだから」
見せる為に着ることも多い。服は己の身体を包むだけに留まらない。その他の様々な用途がだ。服には含まれているのである。

第二百四十三話　伝説の体操服その六

それを見ながらだ。明香は話すのである。
「問題は起こるし」
「なくなったりするのね」
「そういうこと。実は私も」
「明香も？」
「タイツは好きじゃないの」
舞台の話になった。そのタイツのだ。
「脚の線がはっきり見えるから」
「そうよね。完全に出ちゃうわよね」
「だから好きじゃないの」
また言う明香だった。
「本当は」
「けれど演出によってはなのね」
「着ないといけないから」
それで仕方なくというのである。
「姉さんはどうなの？タイツは」
「私は。あまり」
「着ないのね」
「うん、着ないから」
これはだ。声域による。
「明香ってソプラノなのに男の子の役もやったりするからなのね」
「メゾソプラノの役も歌えるから」
「だからなのね」
「それでタイツもよく穿くから」
それでだというのである。
「姉さんはタイツはあまり」
「私はないからね」

同じソプラノでもだ。違うものは違うのだ。
彰子の方がだ。声域が高いのである。同じ姉妹であっても声域が同じとは限らないのだ。ソプラノであってもそうなのである。
「ドレスが多いわね」
「そうね。姉さんは」
「ドレスは胸が出るけれど」
「エウロパの服はそうね」
「それが困るけれど」
「姉さんスタイルいいと思うけれど」
お世辞ではなくだ。素直な評価である。
「だから別にいいんじゃ」
「胸小さいけれど」
「胸は大きさじゃないから」
「違うの？」
眉を顰めさせて妹に問い返す。
「胸は大きさじゃないの」
「形だから」
それだというのである。
「胸は形だから」
「ううん、そうなの」
「そう、形」
また言う明香だった。
「大きさは関係ないの」
「だったらいいけれど」
「だから気にすることはないわ」
明香は穏やかな声で姉に話す。
「姉さんの胸って形いいから」
「有り難う、明香」
「御礼なんていいわ。事実だから」
「いや、事実でもそう言ってもらうと」

「嬉しいの？」
「ええ、嬉しいわ」
その通りだとだ。明香はにこりとして話す。
「本当にね。だからね」
「有り難うなのね」
「そうなの。だから」
こう話をするのだった。この日はこれで幸せに終わった。しかし次の日の部活でだ。姉妹はその嫌なものを見てしまうのであった。

伝説の体操服　　完

２０１１・３・１７

第二百四十四話　ブルマとタイツその一

ブルマとタイツ

明香はだ。歌劇場の楽屋でだ。無表情でいた。
しかしだ。そのオーラは暗い。何故ならだ。
目の前に用意された衣装を見たからだ。その衣装は。
「タイツですか」
「うん、そうだよ」
「それなんだ」
衣装部の面々がだ。にこやかに笑って答える。衣装部は通称コスプレ同好会とも言う。普段はコスプレを楽しんでいる。だが歌劇部には衣装で協力しているのだ。
「当時の時代を再現してね」
「その演出って聞いてね」
「こういう風にしたんだ」
「タイツにね」
黒タイツである。そして。
「ブルマね」
「王子様みたいな格好にしたんだ」
「そうですか」
暗い雰囲気で答える明香だった。
「それで」
「そうだよ。どうかな」
「いいと思わない？」
「自信作なんだよ」
衣装部の面々は爽やかな笑顔で述べる。その笑顔を見てだ。
明香は言えなくなった。笑顔の前にはだ。
「そうですね」
「いいよね、いやこの前さ」

「マウリアの人が衣装に協力してくれたけれど」
連合四兆の人間を翻弄し続けているそのマウリア人である。
「凄かったねえ」
「古代ローマなのにマウリアの服だったからね」
「そうそう、しかも演出までしたし」
自分達の専門分野でなくても何でも加わってくる、それがマウリア人だからだとだ。連合の人間は口を揃えて言うのである。
「何かあったら踊ったし」
「上演時間は倍になったし」
「凄かったよなあ」
「あれはないよ」
「ポッペアの戴冠がね」
モンテヴェルディのオペラだ。この時代でも上演されているのだ。
「それが何故かマウリアになってたし」
「流石に登場人物の名前は変わらなかったけれどね」
「ローマがマウリアって」
「しかも現代の」
「斬新ですね」
明香は戸惑いながらこう述べた。
「それはまた」
「うん、明香ちゃんはその舞台関わってなかったね」
「大学の公演だったし」
「僕達ちょっと援軍要請されて手伝ったんだ」
それで知っているのである。
「いやあ、あれじゃあ蝶々夫人だってマウリアにされそうだね」
「絶対にそうするね、その時の気分次第で」
「間違いなくね」
「そうですか」
「それで。明香ちゃん」
「この衣装どうかな」

話がそこに戻った。今の衣装のことにだ。
「このタイツとブルマでどう？」
「これでいいよね」
「役は何でしょうか」
その役のことをだ。明香は尋ねたのだった。
「ズボン役ですね」
「そうだよ。男の子の役ね」
「それだよ」
笑顔で答える衣装部の面々だった。まさにそうだというのだ。
そしてだ。明香にだ。その役のことも話すのだった。
「コシ＝ファン＝トゥッテやるから」
「デスピーナね」
「あの役は」
その役は彼女も知っていた。それもよく、である。
それでだ。それを聞いてあらためて衣装部の面々に述べた。
「あの役は女の子では」
「ほら、男の人とかに変装するじゃない」
「男の人に化けるよね」
「だからですか」
「当然普段の服も用意してあるよ」
言うまでもなくデスピーナは女の子である。そのオペラ、コシ＝ファン＝トゥッテの話を動かすかなり重要な役である。十六だがとてもそうは思えない程恋愛に長けていて人生にすれた女中である。

第二百四十四話　ブルマとタイツその二

「けれど。変装する時にね」
「これ着てもらうから」
「だからなんだ」
「あの作品は確か」
だが、だった。明香は表情を出さないままだ。こう衣装部の面々に問うた。とにかく問わずにはいられなくそうしたのである。
「他の男の人とかは」
「ああ、普通にね」
「ズボンだよ」
「そうなってるよ」
「そうですよね。けれどなんですか」
彼女だけタイツ、それにブルマだ。このことを言うのである。
「私は」
「実は。女の子からの要望でさ」
「それでなんだよ」
「明香ちゃんはね、これがいいって」
「タイツで」
そちらからのだ。要望だというのである。
「是非共ってね」
「ファンからの要望なんだよ」
「それでそうなったんだよ」
「そうですか」
実は明香のファンは男子だけではない。女子からもかなりの人気があるのだ。その歌だけでなく楚々とした容姿からもである。
「それで。私は」
「これでいいよね」
「じゃあタイツもね」

「それも用意しておくから」
「わかりました」
明香は小さい声で頷いた。
「それでは」
「よし、じゃあ決まりだね」
「他の衣装も用意できてるから」
「楽しみにしててね」
「歌と演技、頑張ってね」
「はい」
頷くしかない明香だった。こうしてだ。
彼女はタイツを穿くことになった。それを聞いた彰子は。
家でだ。夕食を食べながら妹に尋ねる。今日の夕食は二人である。
両親も兄も帰っていない。その中でマカロニにトマトやセロリ、大蒜、マッシュルームをソースとしてかけたものを食べている。
そのマカロニと野菜をスプーンで食べながらだ。姉は妹に対して言った。
「断れなかったのね」
「ちょっと」
実際にだ。できなかったというのである。
「無理だった」
「そうよね。衣装部の人達もね」
「頑張ってくれているから」
だからだ。できなかったというのである。
「それでなの」
「タイツ好きじゃないけれどなのね」
「それとブルマも」
「タイツって。やっぱりあれよね」
「脚の線が完全に出るの」
出てしまうのだ。絶対にだ。
「だからあまり」

「好きじゃないのね」
「恥ずかしいから」
だからなのだ。理由はそれであった。
「できればだけれど」
「けれど。女の子からって」
「私のタイツ姿がいいって言って」
「何か男の子のタイツよりもね」
「女の子のタイツの方が人気あるから」
「あれって不思議よね」
彰子はマカロニを食べながら首を捻る。
「うちの歌劇部も演劇部も男の子って殆どタイツ穿かないわよね」
「穿くのは女の子ばかり」
「そうそう、そうなのよ」
そうなっているのである。
「不思議なことにね」
「多分。それは」
「それは？」
「ビジュアルから」
明香は言った。

第二百四十四話　ブルマとタイツその三

「その面からの話だから」
「ビジュアルでなのね」
「そう思う」
こう姉に話す。
「それで女の子がタイツ」
「男の子はズボンなの」
「ほら、ミニスカート」
明香はここでミニスカートの話も出した。この時代でもよく穿かれるものだ。人気のあるファッションの一つと言ってもいい。
「あれが人気があるのは」
「足が見えるからよね」
「見せる為でもあるけれど」
「何にしても足はね」
「出るから」
重要なのはこのポイントだった。
「それと同じだと思う」
「ミニスカートとね」
「そう、同じ」
こう姉に話す。
「足が見えるから」
「タイツは一応包んでるけれど」
「足の線は出るから」
それだからこそというのである。
「だから人気があると思う」
「女の子のタイツが」
「そう。だから」
「ううん、そうした意味でだったの」

「しかも女の子の男装は」
この意味もあった。そのズボン役である。
「それだけでもマニアックな人気があるから」
「そこにタイツも加われば」
「さらに人気が出るから」
「だから女の子は強引にでもタイツになるのね」
「そう。必要がないような状況でも」
それがまさに今である。実際にデスピーナは男に化けるがそれでもなのだ。タイツを穿く必要があるかというとそうでもないのだ。
「穿くから」
「成程ね」
「だから私も」
明香自身もだというのだ。
「穿くことになるから」
「嫌よね」
「好きじゃない」
嫌とは言わないがこう言ったのだった。
「ラインが見えるから」
「そうよね。やっぱりね」
「けれど。それ以上に」
「それ以上に？」
「歌うことが好きだから」
こう言うのだった。
「だからタイツを穿いても」
「歌うのね」
「それで舞台に立つ」
姉に対して話す。淡々とである。
「そういうこと」
「じゃあこの舞台もね」
「デスピーナは好きな役だし」

その演じる役もだ。好きだというのだ。
「物凄くすれててあれこれ動き回るけれど」
「いい役よね」
「あのオペラはデスピーナが重要だから」
モーツァルトの喜劇ではそうした役が多い。このデスピーナにしてもそうだしフィガロの結婚のケルビーノもだ。その役如何が劇を作るのだ。
「だから」
「そうね。だからね」
「歌いたい」
また言う明香だった。
「是非共」
「そうね。多分私も」
「姉さんもなの」
「ええ。若しタイツを穿いても」
それでもだと話す彰子だった。
「やっぱり。歌は」
「そうね。歌いたいわね」
「歌うことがこんなに楽しいなんて知らなかったけれど」
「今は？」
「わかったわ。そのことが」
満面の笑顔で妹に話す。

第二百四十四話　ブルマとタイツその四

「もうね」
「私と同じね」
「歌っていいわよね。歌っていると心が癒されて」
「そして他の人も癒してくれるから」
「それが歌なのね」
「そう」
まさにその通りだとだ。妹は姉に対して答えた。
「歌は不思議な力があるから」
「本当にね」
「だから。変な格好でも」
まさにタイツがそれだ。二人にとってはそうなのだ。
「歌うことはね」
「続けたい。やっていきたい」
「私も」
「だからタイツは好きじゃないけれど舞台はしたいから」
またタイツについて話す明香だった。
「穿く」
「そうするのね」
「そうするわ。それで演技もするから」
「やりがいのある役だしね」
「そう、デスピーナは」
実際にだ。そうした役であることもわかっているのだ。
「やりたいから」
「歌ったり演じたりすることはね」
「例えタイツ姿でも」
それでもだ。いいというのであった。そんな話をしてからだ。
明香はあらためて姉に話した。

「それで姉さん」
「パスタよね」
「そう、それ」
話がそこに向かった。パスタにである。ここではマカロニだ。
「早く食べないと冷えるから」
「そうよね。早いうちに食べないとね」
「ワインも飲もう」
パスタといえばワインだ。それについて言うことも忘れなかった。
「赤でいいかしら」
「いいよ。じゃあ赤でね」
「それとパスタで」
「楽しく食べてそうしてリラックスしてね」
「また。舞台頑張りたいから」
「そうね。まずは食べて英気を養ってね」
彰子も笑って話す。そんな話をしてだ。
あらためてだ。そのマカロニと一緒にだ。ワインも出した。
そのワインはだ。見事な赤だった。
その赤ワインを飲む。するとだ。
彰子はすぐにだ。その顔を赤くさせた。そのうえで妹に話すのだった。
「ねえ明香もね」
「そうね。一緒にね」
「飲もう」
こう話してだ。そうしてだった。
明香もワインを飲む。だが彼女は顔には出ない。
そのうえでもう一杯飲む。それからの一言だった。
「このワイン、何処のワインかしら」
「確かブラジルの」
「そこのワインなのね」
「この前安かったから買ったけれど」

そうして買ったワインだというのだ。
「美味しいわよね」
「甘口ね」
「パスタの時は辛口の方がいいかしら」
「甘口でもいいと思うわ」
声を微笑まさせて話す明香だった。
「飲みやすくて。パスタと合うのなら」
「大事なのはパスタとワインが合うかどうかなのね」
「ええ。だから」
「このワインでもいいのね」
「美味しいから」
明香の声がまた微笑んだのだった。そうしての言葉だった。
「これでいいわ」
「じゃあ。もう一本ずつね」
「飲みましょう」
「何かね。明香と一緒だと」
笑顔で話す彰子だった。話しながらワインを飲み続ける。

第二百四十四話　ブルマとタイツその五

「お酒がどんどん進むのよ」
「私も」
そしてだ。それは明香もだというのだ。
「姉さんと一緒だと」
「どんどん飲めるのね」
「普段以上に美味しくて」
彼女も話しながら飲む。ワイングラスがすぐに空になる。そしてそこにもう一杯だ。注ぎ込みながら姉に話を続けていくのだった。
「それに悪酔いもしないから」
「私も。二日酔いとかないから」
連合では二日酔いで学校に来る生徒もいたりするのだ。
「だからこうして」
「飲めるわね」
「ええ。もっとね」
こんな話をしてだった。二人であった。
パスタとワインを楽しむ。そうして夜を過ごした。
その次の日の部活はだ。衣装合わせだった。
その時にだ。明香はタイツを穿いた。その上からだ。
ブルマも穿く。見事なカボチャ型のブルマである。その姿になるとだ。
女の子達がだ。口々に言うのだった。
「やっぱりね」
「そうよね。明香のタイツ姿ってね」
「一番絵になるわよね」
「スタイルがいいから」
こうだ。彼女を見ながら話すのである。
「脚奇麗だからね」

「身体自体がすらりとしてるし」
「だからいいのよね」
「ズボンよりもタイツ」
「そうよね」
彼女を見ながらの話である。
「折角脚がいいんだし」
「それ出さないと損よ」
「間違ってるよね」
「舞台なんだから」
やはりだ。彼女達なのだった。タイツを要望したのはだ。
明香もそれを聞く。しかしだ。表情を変えない。
そのうえでだ。黙って自分の姿を鏡で見る。その姿はまさに。
「何かこれって」
「王子様をイメージしたんだ」
「そうした感じでね」
衣装部の面々が言ってきた。
「どうかな、これって」
「似合ってると思うけれど」
「ええ」
本音を言わない返事で述べる明香だった。
「そうですね」
「うん、気に入ってもらったんだ」
「それは何よりだよ」
「そうそう、かなり凝ったからね」
「それで作ったものだからね」
作ったかいがあったと。こう話す彼等だった。
そのうえでだ。明香にこうも言った。
「明香ちゃんタイツ姿が評判だからね」
「だからいいんだよね」
「これで又お客さんが満杯だよ」

「立ち見席も一杯になるね」
「そうなるね」
「そうですね。それなら」
こうした話を聞くとだ。とてもだった。
明香には駄目とは言えなかった。とてもだ。
それでこのタイツとブルマ姿でいることにした。しかしだ。
家に帰るとだ。こう話すのだった。
「人気なのね」
「そうよね、大人気よね」
今日はラムチョップに野菜のシチュー、それとホウレンソウのバター炒めだ。そうした夕食を食べながらだ。彰子は明香の話を聞くのだった。
「明香のタイツ姿って」
「そうね。とてもね」
「けれどやっぱり？」
「好きになれないの」
こう言うのだった。姉には素直にだ。

第二百四十四話　ブルマとタイツその六

「脚のラインが出るから」
「けれどそれが人気が出るのよね」
「そうなの。タイツは」
「その辺り困るわよね」
「タイツを穿きたくないけれどタイツ姿が人気がある」
明香はその現実を話す。
「難しいのね」
「本人が嫌でも人気は出るのね」
「本当に難しいわ」
「けれどそれでもね」
「私、舞台はやるから」
絶対にだとだ。静かだが確かな声で話すのだった。
「デスピーナ歌わせてもらうわ」
「じゃあ私はね」
笑顔でだ。自分のやる役を話す彰子だった。彼女の役は。
「ミカエラ。頑張るわ」
「カルメンよね」
ビゼーの代表作だ。この時代でも非常によく上演されている作品だ。無論この学園の歌劇部でもだ。よく上演されているのである。
「それよね」
「そう、それなの」
「姉さんははじめて歌う役？」
「そうなの。大丈夫かな」
「大丈夫だと思うわ」
こう姉に答えた明香だった。
「ただ」
「ただ？」

「カルメンは皆がよく観ているから気をつけて」
姉に話すのはだ。このことだった。
「普通に演じていても。他の人と比べられるから」
「そうなの。そこが問題なの」
「タイトルロール程じゃないけれど」
言うまでもなくカルメンだ。ロマニの女だ。そのヒロイン像はこの時代においても様々な解釈が為されている。それよりはというのだ。
「それでもね」
「ミカエラも観られるのね」
「そうなの」
「そう、カルメンというオペラは全体が観られるから」
「だから私も」
「気をつけてね、そこは」
「ええ、わかったわ」
確かな顔で頷く彰子だった。
「それなら。頑張るわ」
「私も頑張るから」
姉妹二人でだというのである。そんな話をしながら。
妹は話を変えてきた。その話は。
「それで姉さん」
「うん、今度はどうしたの？」
「御飯おかわりいるかしら」
姉に対して尋ねるのだった。
「どうかしら、それは」
「あっ、御願い」
すぐに答える彰子だった。
「それじゃあ」
「ええ、じゃあ」
姉からお椀を受け取りだ。そうしてだった。

そのお椀に御飯を入れる。舞台を前にしての仲のいい二人であった。

ブルマとタイツ　　完

２０１１・３・２１

第二百四十五話　舞台でその一

舞台で

舞台の本番の時が来た。そこでだ。
明香はだ。まずは普通の娘の姿だった。その姿でだ。
静かに控えていた。その彼女にだ。
衣装部の面々がだ。こう話すのだった。
「その服の下にだよね」
「タイツだよね」
「それとブルマだよね」
「はい、そうです」
その時代の娘の服の下にだ。実際に着ているというのである。
「そうしています」
「すぐに着替えられるように」
「そういうことだね」
「はい、そうです」
まさにだ。それでだというのである。
「モーツァルトのオペラは着替えることが多いですし」
「そうした時にすぐにね」
「すぐに出られるようにってことだね」
「前からそうしています」
そしてだ。そうしているのは今だけではないというのである。
「すぐに」
「いいねえ」
「やっぱり明香ちゃんだね」
「そうだね」
衣装部の面々はここで彼女を褒めだした。
「その先を読む目」
「ただ歌が上手でスタイルがいいだけじゃない」

「そこもまたいいんだよね」
「本当にね」
「いいんですか」
少しきょとんとした顔になって応える彼女だった。
「それがなんですか」
「いいよ、本当にね」
「じゃあ舞台頑張ってね」
「またカーテンコール楽しみにしてるよ」
「カーテンコールですね」
オペラが終わった後で歌手達が出てだ。観客の拍手や歓声に応えるのである。これは学校の上演でもだ。ちゃんと行われているのである。
「それですね」
「うん、デスピーナは只でさえ注目される役だしね」
「その時も期待してるからね」
「わかりました」
その言葉にも頷く明香だった。そうしてだ。
本番に入る。その本番ではだ。
彼女は見事な歌と演技、それに早変わりを見せたのである。
衣装をだ。瞬く間に着替えてだ。娘の服からそのタイツにだ。舞台の上で変身してみせたのだ。これは演出にはないアドリブである。
だがこれを見てだ。観客達、特に女性のそれは思わず声をあげた。
「すごっ、そう来る?」
「服を脱いだらもう着替えてるって」
「下に着てたんだ」
それはすぐにわかったのだ。
「しかもタイツ」
「相変わらず似合うわよね」
「あのタイツ姿がいいのよね」
「そうそう、明香ちゃんってスタイルいいからね」

「タイツが一番似合うのよ」
こうだ。彼女達は話すのである。
「いい感じよね」
「早変わり。やってくれたわね」
「最高の演出よ」
実は演出ではない。彼女のアドリブだ。だがそれでもだった。
明香の行動はだ。その演出担当から見てもであった。
「ああ、そこでそう来たんだ」
顧問の先生がそれをしている。それを見て言うのだった。
「成程ね」
「あのアドリブいいんですね」
「そうなんですね」
「うん、いいよ」
笑顔で裏方のスタッフ達に話すのだった。
「あそこでああすると確かにいいね」
「服を脱いだらもうそこに着てる」
「早変わりですね」
「いいですね」
「そうですよね」
こう話される。そしてだった。

第二百四十五話　舞台でその二

先生はだ。納得した顔で頷いてだ。今度はこう言った。
「よし、じゃあこれからね」
「あの演出されるんですね」
「機会があれば」
「そう、そうするよ」
笑顔で話す先生だった。
「いい勉強になったよ」
「小式さんのナイスアドリブですね」
「そうですよね」
「アドリブっていっても色々あるんだよ」
先生はこうも話した。
「色々とね」
「あの娘のアドリブはいいアドリブですか」
「そうなんですね」
「うん、いいアドリブだよ」
まさにそれだというのである。
「人に何かを教えてくれるね」
「そうした意味でもいい娘ですね」
「そうですね」
「いい娘だよ」
実際にそうだというのである。
「オペラは歌や衣装だけじゃないからね」
「演出も」
「アドリブもですね」
「舞台でもあるから」
つまり総合芸術だ。それだというのである。
そのことも話される。その中で舞台は進んでいく。

そして舞台は最後まで終わる。幕が一旦下りた。
しかし拍手は鳴り止まない。それを受けてだ。
歌手達がカーテンから出て舞台に戻る。そこでだった。
明香はだ。周りからこう言われたのである。
「服だけれど」
「いいかな」
「あれで出てくれるかな」
「わかりました」
どの服かは言うまでもなかった。すぐに頷いた明香だった。
そしてだ。またタイツ姿になった。勿論ブルマも一緒だ。
その服でカーテンコールに応じるとだった。女の子達からだ。
花束が飛ぶ。そして歓声と拍手もだ。他の歌手よりもさらに多くのそういったものが来る。その人気は圧倒的と言ってもよかった。
「ブラボーーーーーー！」
「最高だったわ！」
「奇麗よ！」
深々と一礼する彼女にだ。こうした声がかけられるのだった。
カーテンコールは何度も続きだ。それが終わってからだ。
明香は楽屋で私服に着替えた。その服は。
青のジーンズにグレーのパーカーである。それを見てだ。
周りはだ。少し拍子抜けしたようにこう言った。
「普段着は地味なんだ」
「そうなんだ」
「あまり派手な服は」
どうかというのである。
「好きじゃなくて」
「そうなんだ。けれど舞台じゃ」
「それは違うんだね」
「はい」
またこくりと頷く彼女だった。

「舞台ですから」
「成程ね」
「そうなんだ」
周りはここで勘違いしていた。明香は舞台で派手な服を着ることを楽しみにしているとだ。こう勘違いしてしまったのである。
それでだった。こう言うのであった。
「じゃあ今度はね」
「もっと凄い服を作ろうか」
「タイツのカラー派手にする？」
「それがいいわね」
衣装部の面々が中心になって話すのだった。
「フランス革命ものだとベルサイユの薔薇みたいにしようか」
「あっ、それいいわね」
「そう思うよね。派手だし奇麗だし」
「かなりいいかも」
こう周りが話すのだった。だが明香はだ。
表情には出さない。聞いているだけである。

第二百四十五話　舞台でその三

だが家ではだ。こう彰子に言うのであった。
「オスカルは」
「ああ、ベルサイユの薔薇の」
「そう、それなの」
この時代でもこの漫画は残っている。古典の一つとなっている。尚ここでもエウロパ貴族主義への批判が言われる。何処までもエウロパを否定するのが連合なのである。
「ミュージカルでベルサイユの薔薇は」
「ポピュラーよね」
「私も若かしたらそれに出るのかも」
「オスカルになのね」
「タイツじゃないけれど」
それでもだというのである。
「オスカルは」
「好きじゃないの？」
「アントワネットの方が好きだから」
ぽつりとした感じで姉に話すのだった。
「ベルサイユの薔薇だと」
「そうなの。お姫様の方が」
「ロミオとジュリエットでも本当は」
「ジュリエットの方が好きなのね」
「ドレス好き」
ここで自分の本当の好みを言った。
「だから」
「ううん、じゃあね」
「じゃあ？」
「そういう役もしたいって言ってみたら？」

彰子はこう妹に提案した。今二人はくつろいでソファーに座りながらテレビを観ている。そうしながら二人で話をしているのである。
「皆に。明香はソプラノだから」
「そうした役も」
「できるわよね」
「ええ」
その通りだと答える明香だった。
「それは」
「じゃあどうかしら」
また言う彰子だった。
「それでね」
「そうね。それじゃあ」
「やっぱりこういうのって自分から言わないと」
「駄目なのね」
「そう思うわ。私は言わないけれどね」
彰子の場合は言わずともそういう役が来るのだ。同じソプラノでもだ。明香よりもドレスを着る役が多い声域なのである。だからなのだ。
「それでも。明香もね」
「歌えるなら」
「歌えるならよ。言わないとね」
こう妹に言う。そうしてだった。
明香は姉に顔を向けた。そのうえでの言葉だった。
「なら姉さん」
「ええ」
「私今度は」
「どういう役がやりたいの？」
「蝶々さんだけれど」
プッチーニのオペラのタイトルロールだ。日本を舞台とした作品で当然ながら日本ではかなり人気のある作品の一つである。

「それだけれど」
「蝶々さんね」
「声も大丈夫だから」
それはいけるというのである。
「だから」
「そうね。ちょっと早い気もするけれど」
「早いかしら」
「もう少しね。時間を置いてからね」
「蝶々さんは歌うべきかしら」
「難しい役だし」
その解釈と演じ方、歌い方がだ。難しい役だというのだ。
「それに他の役以上に皆が観る役だから」
「余計になのね」
「うん。もう少し時間を置いた方がいいわね」
「じゃあどの役がいいのかしら」
「どれがいいかはちょっと言えないけれど」
今はだ。彰子も即答できなかった。

第二百四十五話　舞台でその四

難しい顔になって首を捻ってだ。こう妹に話した。
「考えて。探してみてね」
「それで決めればいいのね」
「それでどうかな」
おっとりとした調子だが確かに言う彰子だった。
「どうかしら」
「わかったわ。じゃあ今は」
「考えて。そうして探すのね」
「そうするわ。とりあえずは」
「それに明香はね」
「私は？」
「ズボン役だけじゃないから」
少年の役に留まらないというのだ。確かにだ。彼女の役のレパートリーはそれなりに多い。ソプラノの役もメゾソプラノの役も歌えるからだ。
「そのドレスだってね」
「着られるから」
「考えてみればいいわ。例えば」
「例えば？」
「今メインのモーツァルトやロッシーニだけでなく」
それからさらにだというのだ。
「他の歌手の作品も」
「歌ってみる」
「どうかしら、それで」
「プッチーニもそうだったけれど」
その蝶々夫人の話にまたなる。
「それ以外にも」

「私も色々と考えてるし」
「姉さんもなの」
「ええ。今度はどの役にチャレンジしようかってね」
笑顔で話すのだった。
「自分の声域と合わせて考えているのよ」
「私だけじゃないのね」
「そう、私もよ」
こうだ。彰子は笑顔で明香に話すのだった。
姉妹でだ。笑顔で仲良く話を続ける。そうしているのだ。
「今度はどの役か」
「だったら」
姉もそうだと聞いてだった。妹はふとこう提案したのである。
「二人で考えたらどうかしら」
「私達でなのね」
「ええ。御互いに今度はどの役がいいか」
それをだ。二人で相談して決めてはどうかというのだ。
「それを相談したらどうかしら」
「いいわね、それ」
妹の今の言葉を受けてだ。姉は満面の笑みで答えた。
「それじゃあね」
「二人で話し合って」
「考えていこうね。じゃあ私は」
「姉さんなら」
早速相談に入る二人だった。そうしてだった。
次の日だ。部活に出るとだ。顧問の先生の一人に姉妹でだ。こう話したのだった。
「あの、先生」
「いいでしょうか」
「あら、どうしたのかしら」
ブロンドに紫の目の奇麗な先生である。その先生が二人の言葉を

受けるのだった。
「姉妹で。何かあったの？」
「私今度の役は」
「私もです」
二人でだ。言うのだった。
「男の人の役をしたいです」
「私はドレスを着た役を」
先生にだ。二人はこう話すのだった。
「今度したいですけれど」
「駄目でしょうか」
「ええと？」
先生はだ。まずは二人の言葉を聞いた。
そのうえでだ。自分の頭の中で整理してだ。二人にあらためて問うた。
「御姉さんがズボン役で？」
「はい」
「妹さんがドレスなのね」
「そうです」
その通りだとそれぞれ答える二人だった。
「そうしたいんですけれど」
「どうでしょうか」
「そうね。これまでは」
どうだったか。先生はこのことも話した。

第二百四十五話　舞台でその五

「逆だったけれどね」
「それをです」
「代えたいのですけれど」
「代えたいの」
「替えるでしょうか」
明香は何気に言葉を訂正させた。
「とにかくです」
「普段とは違う役をやりたいのね」
「はい、そうです」
「新しい役をしてみたいんです」
今度は明香だけでなくだ。彰子も言った。
そしてそのうえでだ。また先生に言うのだった。
「あの、それで」
「御願いできますか？」
「私は先生よ」
先生はだ。笑顔になってだ。二人に対して言った。
「先生はどういうものかわかるかしら」
「先生はですか」
「どういったものかですか」
「そうよ。先生はね」
その教師といったものがどういったものか。それを話すのだった。
「生徒のそうした向上心を伸ばすのが義務なのよ」
「だからですか」
「新しい役に挑戦するのは」
「どんどん挑戦しなさい」
先生は温かい声で話した。
「それを止めはしないわ」

「有り難うございます」
「それじゃあ」
「ええ。ただ」
「ただ？」
「ただっていいますと」
「問題はどのオペラのどの役を歌うかね」
具体的な話になった。ただそうした役を歌いたいと言うだけでは何にもならない。どの作品のどの役を歌うか。要点はそこであった。
「それだけれど」
「私はズボン役で」
「私はドレスですけれど」
彰子と明香はそれぞれ言った。それまで毅然としていたが今は少し戸惑いめいたものを見せていた。実は二人はどの作品かまでは考えていなかったのだ。
「ソプラノでズボンを穿く役で」
「ドレスは多いですよね」
「そうね。ここは」
先生は二人が姉妹であることはよく知っていた。そこからだ。
彼女達にだ。あらためて話した。
「いいオペラがあるわ」
「っていいますと」
「そのオペラは」
「リヒャルト＝シュトラウスよ」
題目から話す先生だった。
「あの音楽家でね」
「薔薇の騎士ですか？」
「それですか？」
「それも悪くないけれど」
言外にはっきりとだ。その作品ではないという先生だった。
「他の作品がいいわね」

「薔薇の騎士でなくて」
「他の作品といいますと」
「薔薇の騎士は上演が多いし」
名作だからである。リヒャルト＝シュトラウスの最高傑作とも言われている。とりわけ主人公の元帥夫人に人気が集っている。
「ここはオーソドックスは避けてみたらどうかしら」
「オーソドックスはですか」
「それは」
「そう。彰子ちゃんは確かにソプラノだけれど」
彰子の声域についても話すのだった。
「明香ちゃんに比べて声域が高いし」
「それもあるんですね」
「ええ。それでオクタヴィアンは少し合わないから」
薔薇の騎士のズボン役だ。大抵はメゾソプラノが歌うがソプラノ歌手も歌わないわけではない。だが彰子が歌うには合わないというのだ。

第二百四十五話　舞台でその六

「だから。ここは」
「どのオペラでしょうか」
「シュトラウスでといいますと」
「アラベラね」
先生は言った。
「それがいいんじゃないかしら」
「アラベラですか」
「あの作品ですか」
「ええ、あの作品がいいかしら」
こう二人に言うのだった。
「今回はね」
「じゃあ私がズデンカで」
「私がアラベラですね」
「そう、明香ちゃんがタイトルロールで」
そのアラベラだというのである。
「彰子ちゃんがズデンカよ」
「私が妹になるんですね」
「そうして私が姉に」
「あべこべになるわね」
先生はここでまた笑顔になった。アラベラという作品はヒロインアラベラとその妹ズデンカが重要な位置にあるのだ。その二人が作品の軸の一つなのだ。
「けれどいいんじゃないかしら」
「私アラベラやったことあります」
「私はズデンカを」
実は二人はそのオペラは既に演じたことがあるのだ。
「それで今度はですか」

「御互いに逆の役を」
「面白くないかしら」
先生は二人に尋ねた。
「それは」
「いえ、それは」
「いいですね」
二人で言ったのだった。
「アラベラですか」
「そこで姉妹逆になって」
「面白いでしょ」6
まずは笑顔でこう述べる先生だった。
「姉妹逆にもなるし」
「それも演じがいがありますね」
「歌いがいがあります」
「それにね」
しかもだ。さらにだというのだ。
「この舞台、注目されるわよ」
「姉妹が逆になるからですか？」
「歌う役も逆になって」
「そうよ。皆観るとなると余計にいいでしょ」
この辺り二人の歌手としての心も見て話すのだった。
「そうでしょ？注目されるのは嫌いじゃないわよね」
「観てもらいたいです」
「舞台にいるとなると」
目立ちたがりではない二人だ。しかしだ。
舞台はやはり観てもらい聴いてもらうべき場所だ。それでこう答えたのだ。
「やっぱり、お客さんがいてくれたら」
「凄く嬉しいです」
「そうでしょ。だからよ」

それでだと。また話す先生だった。
「いいわね、それで」
「はい、わかりました」
「それなら」
「アラベラで決まりね」
そのオペラでだというのだ。
「二人共宜しくね」
「私が妹になって」
「私がお姉さんになって」
二人で言い合う。その配役をだ。
「本当に面白そうですね」
「今から楽しみです」
「アラベラはいいオペラよ」
楽劇というのが正式な名称だ。しかしここであえてオペラと話す先生だった。
「キャラクターもね」
「アラベラですけれど」
明香がそのアラベラについて話した。

第二百四十五話　舞台でその七

「あのヒロインの性格はかなり大人ですね」
「そうでしょ。大人でしょ」
「はい、凄くいい意味で」
まさにそうしたヒロインだというのだ。
「落ち着いていて優しくて。気品があって」
「そうなのよね」
彰子は演じた立場から話した。
「あの役は素晴らしいわ」
「私、ずっと憧れてたの」
「アラベラをやることに？」
「それだけじゃなくて」
他にもだ。あるというのである。
「アラベラを演じる姉さんにも」
「私にもなの」
「とても。素晴らしいアラベラだったから」
それでだというのだ。
「だから。一度演じてみたいって」
「思ってたの」
「だから。今演じられるとわかって」
微笑みになった。無表情な彼女がだ。
「やっぱり。嬉しいわ」
「私もね」
今度は彰子が言うのだった。妹になる彼女がだ。
「ズデンカにね」
「憧れてたの？」
「それに好きだったの」
その役がだというのだ。

「あの娘がね。とてもお姉さん思いで」
「そうよね。あの娘もいい娘よね」
「はい、凄く」
先生にもそのまま答える。
「だから。一度やりたかったんです」
「あの作品は姉妹のどちらも素晴らしいのよ」
アラベラの魅力だ。そしてその魅力は二人だけではない。その他の役もだ。非常に素晴らしく魅力的な、そうした作品なのである。
先生はだ。そのことをよくわかって今話すのだった。
「だからいいのよ」
「薔薇の騎士もいいですけれど」
「薔薇の騎士と違うのは」
先生は今度は二つの作品の違いについて話した。
「薔薇の騎士は常に何かが死んでいくわね」
「はい」
「それは」
二人もだ。それはよくわかっていた。
「あの作品は誰も死ぬことはありませんけれど」
「常に、少しずつ何かが死んでいく」
「そうした作品ですよね」
「それが薔薇の騎士ですね」
「アラベラは違うのよ」
その薔薇の騎士とはだ。違うというのだ。
「生まれる作品よ」
「愛がですね」
「それが」
「そう、生まれる作品なのよ」
それがアラベラだというのである。
「死ぬんじゃなくて生まれるのよ」
「それも少しずつですね」

「そうなっていくんですね」
「そうよ。それは覚えておいてね」
こう二人に話すのである。
「よくね」
「私は」
「私もですね」
これまで演じてきたがだ。そう話されるとだった。
二人は思うところができた。それは。
「愛を生み出すんですか」
「そうするんですね」
「アラベラの愛は最初からあるわ」
生まれるがだ。最初からそれはあるというのだ。

第二百四十五話　舞台でその八

「生まれるのは男女の愛でね」
「アラベラとマンドリカ」
「ズデンカとマッテオですね」
それぞれの役と結ばれる男の役である。マンドリカはバリトン、マッテオはテノールである。どちらも端整な役として見事な役である。
「その二組の愛がですか」
「生まれて」
「けれど最初からある愛」
「その愛は」
「姉妹の愛よ」
先生はそれだと話した。
「それは最初からあるわね」
「そういえはアラベラとズデンカは」
「最初から凄く仲いいですよね」
二人も知っていることだった。
「アラベラはズデンカを心配していて」
「ズデンカはアラベラを気遣っていて」
「二人でその気持ちを歌って」
「最後まで護り合いますね」
「その愛が最初からあるのよ」
先生はさらに話した。
「そこに親子の愛もあるわね」
「そうですね。アラベラもズデンカも」
「一見そうではないように見えて」
「両親からも愛されています」
「それも確かに」

「親子の愛、姉妹の愛が最初からあって」
そこにだ。もう一つの愛が加わっていくというのである。
「男女の愛も生まれていくのよ」
「三つの愛が揃うんですか」
「それがアラベラなのですね」
「そのことを覚えておいて」
先生は二人に話した。
「よくね」
「わかりました」
「二つの愛にもう一つの愛が備わる作品」
「それがアラベラですね」
「愛は一つではないの」
先生の言葉は真剣なものだった。教える、まさに教師の顔での言葉だった。
「色々な愛があるのよ」
「アラベラはそれを教えてくれる作品なんですね」
「リヒャルト＝シュトラウスが創り上げた」
「脚本もいいのよ」
これはリヒャルト＝シュトラウスの作品の特徴の一つである。彼は文豪ホフマンスタールに脚本を依頼していた。脚本も立派なのである。
「だから余計にいいのよ」
「脚本もあって」
「だからこそなんですね」
「そういうことも頭に入れておいてね」
頭に入れておくことの多い作品であるのだ。
「そして二人でね」
「はい、歌わせてもらいます」
「絶対に」
彰子も明香も言った。

「アラベラからズデンカになって」
「ズデンカからアラベラになって」
そのうえでだというのだ。
「歌いきります」
「最後の最後まで」
「これは天の配剤かしら」
先生の顔がふと笑みになった。
「貴女達が姉妹でね」
「姉妹なのが」
「それがですか」
「ええ、配剤なのかしら」
またこう話す先生だった。
「そして二人共ソプラノだったことが」
「だからこうしてお互いに歌えるんですね」
「それぞれの役を」
「それも姉妹でね」
こう考えていくとだまさになのだった。
先生はだ。言わざるを得ないのだった。それもどうしてもである。
「本当にね。そうなのかもね」
「先生、私実は」
明香がだ。先生に対して話した。
「アラベラは今までは」
「今までは。どうしたの？」
「そこまで深く考えたことはなかったです」
そうだったというのである。
「アラベラについて」
「ワーグナーみたいになのね」
「はい」
まさにだ。ワーグナーよりはというのだった。
「薔薇の騎士は考えましたけれど」

「そうね。アラベラはね」
「そこまで見ませんでした」
明香はまた話す。
「そして考えてなかったです」
「どの作品でもそうなのよ」
アラベラだけに限らないというのである。
「深いのよ、実はね」
「実はですか」
「そう、どの作品もよ」
これは彰子に対しても告げた言葉だった。
そうした話を聞いたうえでだった。二人はだ。
楽屋に入ってだ。そこで今度は二人で話した。
「ううん、ただ逆になるだけじゃないのね」
「そうね。今度の舞台は」
そのアラベラの舞台がどうかというのである。
「難しくて。それで」
「やりがいのあるものになるわね」
「そうね、とてもね」
「面白いものになりそうだわ」
こんな話をしてであった。二人は舞台に向かうのであった。

舞台で　　完

２０１１・３・２８

第二百四十六話　階段でその一

階段で

明香はアラベラを、そして彰子はズデンカを。二人でそれぞれ姉妹逆の役をやるようになった。そうして舞台の練習が決まってからである。

明香はだ。姉の彰子にこんなことを尋ねた。

部活の稽古が終わって楽屋で着替えている時にだ。彰子に尋ねたのである。

「姉さん、気になるけれど」

「気になるって？」

「アラベラの最後だけれど」

その舞台の話だった。尋ねた話はだ。

「最後、階段を下りるわよね」

「ええ、コップを持ってね」

結婚を了承する儀式の様なものだ。相手の男にコップの中にある水を手渡す。作品の中でそうなっているが実際にはない風習である。

「それでね。マンドリカに手渡すのよ」

「その場面だけれど」

「そこがどうかしたの？」

「階段は」

その階段はだ。どうかというのだ。

「ただ階段を下りるだけなの？」

「それが違うのよ」

「違うの」

「そう、マンドリカの世界に入るのよ」

そうだというのである。

「階段から下りてね」

「下りるの」

「降りるじゃないと思うの、その場面では」
言葉は違うというのだ。
「下りるのよ」
「そういえば私も今は」
「下りるって言ったわよね」
「ええ、確かに」
まさにそうだと答えた。自分でもそのことに気付いたのである。
「どうしてかしら」
「上にあるのがアラベラの世界でね」
「階段の上にあるのが」
「地位の上下じゃないの。二つの世界は別れていたのよ」
「けれど階段から下りて」
「彼の世界に入ったの」
そのマンドリカの世界にだというのだ。
「そうした場面なのよ」
「あの場面は赦しの場面じゃなかったのね」
「アラベラは最初から怒っていないわ」
マンドリカはアラベラが浮気をしたと思いアラベラを責めたのだ。
それで騒動が起こる。オペラにはありがちな嫉妬もアラベラには存在しているのだ。
「戸惑ってはいたけれど」
「だから赦すというのは」
「ないのよ」
そうだというのである。
「アラベラは優しい人よね」
「ええ、とても」
「そして大人の女の人なのよ」
演じていただけによくわかっていた。
彰子はアラベラのことをわかっていた。演じた者の強みである。
「そんな大人気ないことはないのよ」

「だから赦すというのは」
「ないの。だから入るの」
「マンドリカの世界に」
「自分が入って。二つの世界が一つの世界になるのよ」
こう妹に話すのだった。これからアラベラになる彼女にだ。
「そういうことなのよ」
「そうだったの」
「だから。あの階段を下りる場面はね」
「舞台の。最高の見せ場よね」
「あの場面がどうなるか」
彰子の言葉が真剣なものになる。
「そこで違ってくるから」
「最後が一番大事なのね」
「とりわけね」
妹に対して強く話すのだった。
「注意してね、そこはね」
「コップなのね」
「そう、アラベラの見せ場だ」
彰子はさらに話す。
「そこなのよ」
「歌以上に」
「勿論歌も大事よ」
それは否定しなかった。しかしだというのだ。
「最後がよければね」
「そうね。それが一番印象に残るから」
「だから余計にコップが重要になるの」
こう妹に話す。

第二百四十六話　階段でその二

「階段の場面がね」
「あの場面は演出も凝るけれど」
「一番印象的な場面だからよ」
それでだというのである。
「だからなのよ」
「成程、じゃあ」
「じゃあ？どうするの？」
「姉さん、御願いしたいの」
「御願い？アラベラのことね」
「ええ。もっと教えてね」
こう姉に頼むのだった。
「アラベラは深い役だって。本当にわかったから」
「私もね」
「姉さんも？」
「ズデンカも深い役よね」
今度は彰子がだった。明香に尋ねるのだった。
「そうよね、やっぱり」
「ええ、そうなの」
まさにだ。その通りだと答える明香だった。
「ただ。男の子になっているだけじゃないの」
「男の子なのは外見だけなのね」
「本当は誰よりも女の子らしい娘なの」
それがズデンカだというのである。その役だとだ。
「マッテオと一緒にいる時にもそれが出るから」
「第一幕ね」
「マッテオに。友人として接していて」
「けれど実は」

「そう。愛しているの」
それがズデンカなのだ。少女故の一途さをだ。強く持っている役なのだ。
「誰よりも深く」
「友情ではなく愛情」
「けれどその愛情は見せないの」
「第三幕まではよね」
「第二幕までは。外見は男の子だから」
「特にマッテオの前ではよね」
「アラベラには見せるの」
姉である彼女にはだ。その少女としての顔を見せるというのだ。
「そこが大事だから」
「二つの顔を使い分けるのね」
「心は二つの様でいて一つなの」
「一つね」
「それと。姉さん今二つの顔って言ったけれど」
「それも違うの？」
「二つの様でいて一つなの」
それがズデンカだというのだ。顔は一つだというのである。
「それがズデンカなの」
「ううん、話を聞けば聞く程」
「難しい役よね」
「そうね。とてもね」
「多分。アラベラの主人公は二人なの」
タイトルロールのアラベラだけではないというのだ。
この場合の二人とはだ。もう一人はすぐにわかるものだった。
「ズデンカなの」
「そうなのね。やっぱり」
「だから注意して演じて歌って」
今度は妹が姉に話した。

「繊細な女の子なの」
「ズデンカは繊細なの」
「誰よりも繊細なの」
演じてきたからこそ言えた。そうした意味では彰子と同じだ。
「だから」
「繊細なのは似ているわね」
「アラベラと？」
「そう。アラベラと同じなの」
彰子はだ。その繊細なところがだというのだ。
アラベラとズデンカは似ているというのだ。その部分がだ。
「そう思ったわ。繊細なところは」
「アラベラも繊細なの」
「それを大人の心で隠して守っているけれど」
実は違うというのである。
「アラベラも繊細なの」
「姉妹は同じなのね」
「同じだけれど違う役なのね」
今度は二つの役について同時に話された。
「アラベラとズデンカは」
「似てはいないわよね」
「正反対ね」
役としてはだ。そうだというのだ。

第二百四十六話　階段でその三

「同じソプラノの役でも」
「正反対にあるのがあの二人」
「だから。本当に難しく思うわ」
「けれど。本当にだからこそよね」
「ええ」
明香は姉の言葉に静かに頷いて述べた。
「面白いわね」
「演じられて歌えるのって」
「幸せだと思うわ」
明香のその顔が微笑みになった。
「姉さんもそう思うのね」
「そうなの。私も」
姉もであった。それは。
「アラベラにね。出会えたことは」
「作品としてのアラベラね」
この場合はタイトルロールとしてのアラベラではなかった。そうした意味である。二人はそのアラベラについてさらに話すのだった。
「幸せよね」
「本当にね。それでね」
「それで？」
「少し。考えたけれど」
彰子からの提案だ。こう言ったのだ。
「他の役も勉強してみない？」
「アラベラとズデンカの他の役も」
「そう。他の役から見た二人はどうなのかしら」
「その為に勉強するのね」
「そうしたら。新しい二人が見えてくるかも知れないから」

それでだとだ。彰子は言うのである。
「どうかしら、それで」
「そうね」
少し考えてからだ。明香は答えた。
そしてだ。具体的な役を出したのである。
「マッテオや。マンドリカからね」
「マンドリカとズデンカの接点はあまりないけれど」
それでもだというのである。
「どうかしら」
「マッテオから見たアラベラは」
「最初は愛しい相手よね」
片思いのだ。この二人の愛は実らずもう一つの愛が実るのだ。
「そしてズデンカは最初は親友よね」
「最も信頼できる親友ね」
そうした意味でだ。真の親友なのである。
「それが第三幕で変わるわね」
「親友から恋人になるわよね」
「そのマッテオから見た二人はどうなのか」
「そうしたことも勉強していきましょう」
「そうね。舞台の為に」
「それを活かす為にね」
こう話してだった。二人の舞台への勉強はかなり深いものになっていた。そして舞台での上演が発表された時だ。皆驚きの声をあげたのだ。
「彰子ちゃんがズデンカで？」
「明香ちゃんがアラベラって」
「あべこべになってるのか」
「何か妙なことになってるわね」
皆その驚きの声で言う。
「普通彰子ちゃんがアラベラで明香ちゃんがズデンカなのに」

「それが今までの定番だったのに」
「それを変える？」
「奇をてらった？」
最初は皆こう考えた。それでこの配役なのだとだ。
特にだ。明香について言われた。
「あの役は。明香ちゃんに似合うのかしら」
「それが問題だよな」
「ソプラノでもアラベラに合うのか？」
「どうなんだ？」
皆口々に話す。そしてだ。
彼等はだ。舞台の進展について不安を覚えたのだった。
果たして成功するかどうかだ。それについてもだ。
「大丈夫なのかね」
「ただ奇をてらっただけで成功できるのかな」
「彰子ちゃんのズデンカも不安だけれど」
「明香ちゃんのアラベラ」
「どうなのかな、あれ」
皆が皆不安を感じる。そうなっていた。

第二百四十六話　階段でその四

そしてその中でだ。二人は舞台の練習を行っていた。その進展は。順調だった。二人は御互いに言い合う。

「いい感じね」

「そうね」

部活の後の楽屋でだ。ジャージ姿で話をしていた。まだ衣装を着ての練習はしていないのだ。そこまではまだ進んでいないのである。

「このままいけばね」

「成功するわね」７６

二人は順調な仕上がりを感じていた。しかしだ。

歌劇部や関係者はだ。やはりこう言っていた。

「この舞台、本当に」

「とんでもないことにならないか？」

「ミスキャスト臭いよな」

「それってやっぱりあるからな」

舞台にはつきものだ。このミスキャストの問題は中々難しいものなのだ。

「二十世紀のパヴァロッティの道化師とかな」

「あれはもう髭生やした道化師自体がなかったよな」

「デル＝モナコとかドミンゴが最高だったけれどな」

「ＣＤで聴いても何か違うからな」

「テノールでも合う役と合わない役があるからな」

最早伝説となっている歌手の話が引き合いに出されるのだった。

「だからなあ」

「今度も」

「やっぱりあれだよな」

「そうだよな」

ここで話がさらに動くのだった。

「彰子ちゃんはアラベラだろ」
「それで明香ちゃんはズデンカだろ」
先入観に基づいてだ。彼等は話していく。
「丁度姉妹同じだしな」
「それだとそうなるよな」
「それをあえて逆にするってなあ」
「失敗するよな」
「絶対にな」
皆でだ。話していくのだった。
彼等はだ。さらにであった。このことも話すのであった。
「記録的な失敗になるとかな」
「そういうのはないよな」
「流石にな。二人共歌は下手じゃないし」
「演技も悪くないし」
二人はそれ自体は悪くなかった。むしろ評価が高かった。
「それに演奏や演出もしっかりしてるしな」
「衣装もな」
そうしたあらゆる要素が重なり合ってのオペラなのだ。そうしたものが全てあってこそなのだ。
オペラの舞台は名演となる。それは言い換えればだ。
「ミスキャストでも。他は全部しっかりしてるしな」
「じゃあいけるか」
「そうだよな、充分な」
「いけるか」
「そうよね」
こう話していくのであった。そしてであった。
皆大失敗はないと思っていた。それは彰子のクラスでもだ。
皆だ。やはりこう言うのであった。
「彰子ちゃんがなあ。ズデンカか」
「どう考えても合わないけれどな」

「大丈夫かな、これって」
「妹さんがアラベラなあ」
「ぴんとこないよな」
「どうしても」
こう話すのであった。どうしてもだ。
彼等はそう話していく。そしてパレアナがここでこう言った。
「結構まずい展開になるかしら」
「まずいっていうと失敗か？」
「そうなるっていうんだな、御前も」
「彰子にズボンよ」
ズデンカは男の子になっている。それならばだ。
彰子も当然ズボンを穿く。その姿がだというのだ。
「皆想像できる？」
「ちょっとなあ」
「髪も長いし」
「それを切る訳にもいかないしな」
「それはどうしても」
髪の毛についてはだった。他の舞台のこともあるからだ。切る訳にはいかない。それはどうしてもなのである。
それでだ。髪の長いズボン姿をだ。皆も連想してしまう。どうしてもだった。
「駄目だよなあ」
「明香ちゃんならともかく」
「本当に何でそうした舞台にするのかな」
「かなり理解不能だけれど」
「どういうこと？」
「やっぱり奇をてらったのじゃないの？」
パレアナはそうではないかというのだった。

第二百四十六話　階段でその五

「あえてね。既成観念の打破ってことで」
「出た、それか」
「誰もが一回は考えるそれだよな」
「成功したら大きいけれど」
「失敗したら元も子もない」
しかもだ。それにはさらにこんなこともあるのだった。彼等がそれを言う。
「何故それまで誰もしなかったか」
「それも考えないといけない話なのにそれを無視してやる」
「そうすればどうなるか」
「自明の理をしてしまう」
「で、大失敗になるのよね」
何にでもあることだが演劇等では最もあることだった。
「それになるか？今回は」
「ミスキャストをあえてやって」
「それで失敗」
「その流れかしら」
「二人共真剣だけれどね」
パレアナは二人をフォローしはした。それはなのだった。
「けれどねえ。意気込みがあってもね」
「それが成功につながるかどうかはわからない」
「意気込みがあって成功するのならなあ」
「この世に成功しないものはない」
「他の要因があるから」
これが世の中の難しいところである。それも実に。
「果たしてどうなるかだよな」
「まああれよ。大失敗はないわよ」

これはパレアナも保障するのだった。
「役が合わないってだけでね」
「けれど。言い換えたら」
ここで話したのはだ。コゼットだった。
「役が合ってたら凄い成功になるのよね」
「あっ、そうね」
言われてだ。パレアナも気付いたのだった。そのことにだ。
「二人の役が合ってればね」
「まあそれはないでしょうね」
コゼットもそれはないというのだった。
「どう考えてもね」
「そうよね。ミスキャストにしかね」
「歌や演技がよくても」
それでもだとだ。パレアナはまた話した。
「合わないものは合わないのよ」
「それって大事だからね」
「だからよ。今度の舞台は」
パレアナは難しい顔で話す。
「どう考えても失敗するわ」
「失敗するのはそれだけでしょうね」
コゼットはそれを残念というのだった。
「他は失敗する要素はね」
「これといってないのよね」
「そう、ないのよ」
それは大丈夫だというのだった。これはだ。
二人共同じ意見だった。それで話すのだった。
「他の歌手もいいしね」
「演奏だって定評があるし」
八条高校管弦楽部である。その演奏は高校生ながらかなりのものだと評価が高い。その彼等の演奏ならば安心できるというのである。

「演出もね」
「もう決まってるしね」
それは先生の担当だ。その演出も既に定評となっているのだ。
「衣装もいいし」
「二人だって」
その問題となる二人もだ。
「とにかくミスキャスト以外は問題じゃないから」
言い換えればそのミスキャストが問題なのだ。
「残念な話よね」
「本当にね。それだけがね」
これが二人の考えだった。そしてだ。
それはクラスの殆んど全員が言うことだった。しかしだ。
管はだ。一人こう言うのであった。
「今度の舞台は」
「残念だよな」
「そうだな」
その管にフックとダンが言う。

第二百四十六話　階段でその六

「他はいいのにな」
「やっぱりあの二人は」
「凄いことになるね」
管は彼等にぽつりとして話す。
「最高の舞台になるよ」
「えっ、そうか！？」
「そうなのか！？」
管の今の言葉にだ。
フックもダンも驚きを隠せない。それで思わず彼に問い返した。
「どう考えてもミスキャストなのにか」
「最高の舞台になるのか」
「うん、なるよ」
また言う管だった。
「楽しみにしてるから」
「残念な舞台になるんじゃないのか」
「最高の舞台になるのか」
「今回の舞台は」
そのだ。彰子と明香のアラベラはどうかというのだ。
「奇をてらったものじゃなくて」
「そうじゃなくてか」
「別のものだっていうのか」
「そう、確かな根拠があって」
それに基づいてだというのである。
「それで配役が決まった楽劇だから」
「あの二人か」
「あの姉妹が」
「そう、なったから」

管はだ。確かな声だった。それで出す言葉だった。
「楽しみにしてるから」
「まさか。それは」
「そうだよな。ちょっとな」
「やっぱり失敗するよな」
「そうなるよ」
フックとダンも今はそうとしか考えられなかった。それが彰子と明香への先入観に基づくものであるとはだ。彼等は気付いていない。しかし人に対する先入観の乏しい管はだ。あくまでこう言うのだった。
「観ればわかるから」
「舞台を実際に観れば」
「それで」
「そう、わかるから」
管の言葉は変わらない。
「それで」
「そうなればいいけれどな」
「確かにな」
二人にしてもクラスメイト達にしても舞台の失敗を望んではいない。むしろその逆だ。だからこそ残念に思っているのである。そうだからだ。
「果たして。本当にな」
「管の言う通りになるか」
「なればいいな」
「最高の舞台になればな」
「なるから」
管の言葉は不動だった。
「絶対にね」
彼だけがそう言っていた。そして本人達は。
家でだ。笑顔で話すのだった。

「今日もいい感じだったね」
「そうね、姉さん」
「特によかったのはね」
それが何処なのか。彰子は明香にその話もした。
「最後だったわ」
「階段のところ？」
「明香わかってるじゃない」
笑顔でだ。こう妹に話すのだ。
「あそこがなのよ」
「姉さんがいつも言っているあそこね」
「そう、あそこ」
まさにだ。そこだというのだ。
「あそこをしっかりしてこそなのよ」
「舞台が決まるのね」
「些細だけれどね」
それでもだ。大事な場面だというのだ。
彰子はその場面のことを詳しく話しはじめた。やはり実際に歌ってきただけはある。そうしたことが実によくわかっているのである。

第二百四十六話　階段でその七

「階段を降りるだけでね」
「本当にそれだけだけれど」
「歌わないし」
アラベラはその場面では歌わないのだ。階段を降りるだけである。
「それで。コップを差し出すだけだけれど」
「その短い場面が」
「アラベラの一番重要な場面の一つなの」
まさにだ。そこここそがだというのだ。
「全てを決める場面なのよ」
「そうなのね。全てが」
「そう、全てがよ」
また言う彰子だった。
「これはいつも言ってるわよね」
「ええ、本当に」
「私も言われたの」
「姉さんもなの」
「そこをしっかりとしてこそだって」
舞台にとってはというのだ。
「そう言われたの」
「ええと、それだと」
明香は彰子のその話を聞いてだ。
思い出した様にだ。こう述べたのである。
「姉さんが部活に入ったのは」
「明香に勧められてだったよね」
「そうよね。じゃあ誰に教えてもらったの？」
「先生になの」
顧問の先生の一人にだというのだ。教えてもらったというのであ

る。
「教えてもらったの」
「そうだったのね」
「そうなの。それで階段の場面には気をつけてるの」
彼女も教えてもらったというのである。そうした意味では今の明香と同じである。教えを受け継いでいく、そんな風にもなってもいる。
「そうしているの」
「成程、先生から姉さんに」
「そして私から彰子にね」
「なっているのね」
「何かおかしいわよね」
彰子はにこりと笑ってだ。明香にこんなことも言った。
「部活に入ったのは私の方が後なのにね」
「それは関係ないわ」
「ないの？」
「だって。アラベラは姉さんの方が先に歌ってるから」
役においてはだ。彼女の方が先輩だというのである。
それでだ。彼女が自分に今こうして教えるのはというのだ。
「いいの」
「そうなるのね」
「ええ。それに」
「それに？」
「私、アラベラのことはよく知らなかったから」
「ズデンカのことは知っててても」
「アラベラは。観てるだけだったから」
舞台においてだ。彼女はこれまでズデンカに専念していた。しかしアラベラはだというのだ。
「だから」
「それでなのね」

「ええ、それでなの」
また言う明香だった。
「実際に演じて歌うとなると」
「そうよね。私も」
「姉さんもなの」
「ズデンカって。深いのね」
彼女が今演じているだ。その役がだというのだ。
「こんないい娘なんて思わなかったわ」
「ズデンカはいい娘なの」
実際にそうだと話す明香だった。
「姉思いで一途で」
「アラベラも妹思いだけれど」
「そうしたところは姉妹で似てるのね」
「そうね。似ている部分もあるのね」
二人でそのことにも気付いていった。
「違う部分もあって似ている部分もある」
「同じソプラノだけれど完全に同じじゃない」
「歌だけじゃなくて性格も」
「そうした二人なのね」
こう考えていってだ。そのうえでだ。二人でだ。

第二百四十六話　階段でその八

向かい合ってだ。こんなことも話した。
「私達が歌うのってまさか」
「運命だったのかも」
「そうね。若しかしたら」
「最初にそれぞれを歌って」
彰子のアラベラ、明香のズデンカである。
「次に役を交代する形で歌って」
「二つの役を歌っていくのね」
「そういうことって実は結構あるし」
彰子はこうも話す。それは実際にある。
彰子はそのこともだ。妹と話したのである。
「モーツァルトやリヒャルト＝シュトラウスだと」
「私。ケルビーノを歌ってるけれど」
「それからよね」
「ええ。ズサンナや伯爵夫人も歌いたいわ」
これが明香の願いだ。どれもフィガロの結婚の女性がやる役だ。
ケルビーノは本来メゾソプラノが歌う役だがソプラノも歌うのである。
「これからはね」
「私も。スザンヌもやって」
「伯爵夫人もね」
「歌ってるから」
彰子は既にだった。二つの役を歌っているのだ。
「同じ作品で違う役を歌ったら」
「その役からも作品を観られるから」
「凄く勉強になるわよね」
「ええ、とても」

作品を知るという意味でだ。非常に大きいというのだ。
その話の中でだ。彰子はだ。とりわけこの作品のことを話した。
「アラベラもそうだけれど薔薇の騎士ね」
「あの作品ね」
「ほら、明香のオクタヴィアンは凄い人気があるじゃない」
「そうらしいけれど」
明香は謙遜してから姉に返す。
「姉さんのゾフィーも」
「そんなに人気あるの？私のゾフィーって」
「あるわ」
実際のことをだ。明香はその通りだと話した。
「凄くね」
「だといいけれど」
「それでそこからよね」
明香は御互いに言い合ってから話を本題に進めた。
その本題は何かをだ。それを話すのである。
「元帥夫人に」
「あの役が歌えたら」
「ええ、本当に」
「アラベラと同じ位素晴らしいわ」
「若しかしたらそれ以上かも」
元帥夫人、薔薇の騎士の主人公の彼女はだ。ドイツオペラのソプラノにおいて最高の役の一つとされている。ドイツオペラを歌うソプラノの憧れの役なのだ。
彰子も明香もだ。その役はまだ歌いきれていない。それで話すのだった。
「何時か完璧にね」
「歌いたいわよね」
「ええ、本当に」
こう二人で話す。

「人間としても素晴らしい役だし」
「元帥夫人は」
彼女はだ。人間的にも優れた役であるのだ。
「包容力があって。色々なことがわかっていて」
「深いから」
そうしたことを踏まえて話す二人だった。
「何時かはね」
「歌いたいわ、完璧に」
こんな話をするのだった。その中でだ。
まただ。アラベラに話を戻していくのであった。
アラベラについてだ。明香はこれまで彼女なりにわかったことを話した。
「最初の設定とは全然違う役ね」
「御金持ちと結婚したいってあれね」
「実は違うのね」
「ええ、違うわ」
彰子は妹にはっきりと話した。
「実はね。本当に愛し合える二人と」
「結ばれたいのね」
「マンドリカが若し資産家でなくても」
それでもだというのだ。
「一緒になったわ」
「それでもなのね」
「ええ、それでもよ」
こう妹に話すのである。

第二百四十六話　階段でその九

「それがアラベラなのよ」
「マッテオを選ばなかったのは」
「わかってたのだと思うわ」
そのわかっていることも問題なのだった。
「彼女はね。マッテオと自分は」
「何処かが合わない」
「もっと言うのなら運命が絡み合っていなかったのよ」
「マッテオが絡み合っていたのはズデンカね」
「そう、彼女よ」
妹の方だというのだ。アラベラから見てだ。
「ズデンカのマッテオへの気持ちも知っていたし」
「だから余計に」
「アラベラも大人の女の人だから」
リヒャルト＝シュトラウスの愛している女性像の一つだ。彼はフィガロの結婚の元帥夫人の様な高貴であり心が豊かでかつ清らかな女性を描いた作曲家でもあるのだ。
「それでなのよ」
「成程、だから」
「凄く包容力がある人なの」
それもまたシュトラウスの描く女性像である。
「明香みたいにね」
「私はそんな」
「あるわよ」
妹の謙遜を止めるのだった。
「それは私が保障するわ」
「姉さんみたいに」
ここでだ。明香の言葉が変わった。

それでだ。姉に対してだ。こう話すのだった。
「私にも包容力があるのかしら」
「私？そんなのないわよ」
笑ってだ。それを否定する彰子だった。今度は彼女がそうしたのだ。
「包容力なんて」
「いえ、あるわ」
「あるかしら」
「私が保障するから」
今度は明香がこう言うのであった。
「それは安心して」
「そう？だったら」
「ええ。姉さんは私にとってはアラベラで」
そしてというのだ。
「元帥夫人でもあるから」
「マルシャリンって」
その元帥夫人の通称だ。それはもう舞台を越えたものになっているのだ。
「私が」
「私は。ゾフィーかオクタヴィアンだけれど」
自分はそちらだというのだ。
「けれど。姉さんは」
「マルシャリンなの」
「私にとってはそうだから」
彼女の視点から見ればだ。そうなるというのだ。
「だから。安心して」
「そう。だったら」
「それで舞台頑張ろう」
話はやはりそこに戻るのだった。今の二人の話は円である。円は回るもので最後には元の場所に戻るものだからそうなるのである。

「今度の舞台ね」
「そうね。じゃあ」
「何か飲む？」
「ワインを」
それをだという明香だった。
「ワインを一緒に」
「ロゼかしら、今飲むとしたら」
「それがいいと思う」
明香は小さく頷いてだ。それだというのだった。
「今飲むとしたら」
「そうね。今はロゼよね」
「おつまみはチーズ」
明香は一緒に食べるものについても言及した。
「一緒に飲もう」
「そうね。じゃあロゼとチーズでね」
「二人一緒にね」
「御兄ちゃんもいればよかったのに」
彰子はふとこう言った。二人の兄は今日もバイトで家にはまだ帰っていないのだ。
それでだ。彰子はこのことに残念な顔を見せて言うのだった。
「だったら三人で飲めたのに」
「そうね。けれどいないのなら」
「仕方ないわね」
「兄さんの分は置いておきましょう」
これが明香の提案だった。

第二百四十六話　階段でその十

「それで今は二人で」
「ええ、飲むのね」
「そうしていけばいいから」
また言う明香だった。
「それじゃあ」
「うん、じゃあ」
早速だった。彰子は自分の後ろからそのロゼのボトルを二本、それとカマンベールチーズとモツァレラチーズを出してきたのだ。
明香はだ。その二種類のチーズを見て話した。
「カマンベールなの」
「明香このチーズ好きよね」
「ええ」
実は彼女の好物である。チーズの中でもお気に入りなのだ。
「それでなの」
「そう。モツァレラも好きよね」
「水牛のミルク好きだから」
「だからこの二つにしたの」
それでだと話すのである。
「どうかしら。ロゼとも合うし」
「有り難う」
笑顔で応える明香だった。そしてだ。
彼女もだ。ここでこう言うのだった。
「じゃあ私は」
「明香は？」
「これを」
彼女も後ろから出してきた。それは二本のロゼのワインだった。
「ワイン？しかもそれって」

「このワイン好きよね」
「ええ、そうだけれど」
見ればだ。彼女が好きなワインだった。日本の出羽星系の産である。
「私の為になの」
「どうかしら」
「有り難う」
彰子はお礼で応えた。
「それじゃあ」
「飲むわね」
「飲むわ」
その通りだと返す彰子だった。
「喜んでね」
「二人で飲みましょう」
ここでも二人だった。
「そうしてね」８
「それとだけれど」
「それと？」
「チーズだけれど」
明香はそちらに話を戻した。彼女の好物のそれだ。
「カマンベールと。それに」
「モツァレラもよね」
「よかったらどちらも」
「はい、どうぞ」
笑顔でその二つのチーズを差し出す姉だった。そうしたやり取りをしてだ。
幸せな時間を過ごす二人だった。気力は充実していた。
階段で　　完

2011·4·5

第二百四十七話　大成功その一

大成功

彰子と明香の舞台のだ。本番の日になった。しかしである。
八条学園の新聞はだ。何処もこう書いてあった。
「この舞台は失敗する」
「成功する筈がない」
「あの二人はミスキャストだ」
「あれだけはどうしても駄目だ」
こう書いてだ。舞台の失敗を予見していた。
そしてだ。それはだ。彰子の周りでも同じだった。
二年Ｓ１組の面々はだ。クラスでいぶかしむ顔でそれぞれ言う。
「この日が来たなあ」
「遂にね」
「成功するか？」
「失敗するだろ」
こうだ。口々に言うのである。
「誰がどう考えてもミスキャストだしな」
「二人の役があべこべだからな」
「あれだけは成功しないよな」
「他はいいのに」
「残念よね」
こう話していくのだった。彼女のクラスメイト達でさえ成功するとは思っていなかった。そしてコゼットがまた話をするのであった。
「今からでも遅くないわよね」
「そうよね。役を逆にすればね」
コゼットにパレアナが応える。
「大成功よね」
「そうなるわよね」

二人で話すのだった。
「けれど逆だから」
「この状況ってね」
「失敗が決まってることをしても」
「仕方ないのに」
とにかく二人はミスキャストと考えていた。それも絶妙なまでのだ。
その絶妙なミスキャストについてだ。パレアナが指摘する。
「同じソプラノでも歌える役と歌えない役があるから」
「歌えてもその歌手の個性に合わない役があるのよね」
「そう、あるから」
コゼットもパレアナのその言葉に頷く。
「そういうことがわからないとね」
「今回みたいなことになるわよね」
「ううん、かなり不安」
「どうなるのかしら」
二人は悪意で言っているのではない。むしろ心配なのだ。それは二人が彰子の友人だからだ。
「ううん、大丈夫かしら」
「成功して欲しいのに」
「成功する要素が見当たらないって」
「辛いわよね」
「全く」
こう話すのであった。そしてだ。
彰子が暮らすに入るとだ。話を一先止めてだ。そうしてだった。
彼女にだ。こう話すのであった。
「ねえ、今日だけれど」
「舞台の後だけれど」
その時にだ。どうするかと話すのである。
「一緒に何処か行かない？」

「ファミレスでもね」
「ううん、舞台の後はね」
しかしであった。その彰子はだ。
のどかな顔でだ。こう二人に返すのだった。
「お家で妹と打ち上げするから」
「明香ちゃんと？」
「そうするの」
「うん、それがあるから」
だからいいというのである。
「だからね」
「ううん、そうなの」
「だったらいいけれど」
舞台が失敗すると見てそれで慰めの為だった。しかしなのだ。
彰子がそれをいいといえばだ。二人にはどうしようもなかった。
「じゃあ妹さんとね」
「二人で頼んでね」
「うん、そうするね」
また返す彰子だった。
「楽しく打ち上げやるから」
「じゃあね」
「そういうことでね」
二人はそれ以上言わなかった。そしてだ。

第二百四十七話　大成功その二

その二人にだ。また声をかける彰子であった。
「今日の舞台だけれどね」
「舞台よね」
「絶対に行くからね」
「来てね」
彰子は満面の笑みで二人だけでなくクラス全員に話した。
「それで観てね」
「ええ、それはね」
「絶対に観させてもらうわ」
コゼットとパレアナが皆を代表して答える。
「頑張ってね」
「いや、本当に」
「楽しみにしてね」
彰子の調子は変わらない。相変わらず彼女だけはだ。
明るい。にこやかな笑顔である。しかし皆はなのだった。
「折角あそこまで意気込んでるのになあ」
「残念だよな」
「ミスキャストでしかないから」
「それが残念」
こう言い合ってだ。舞台が失敗することに暗澹としていた。しかし時間はそのまま進んでだ。遂に放課後、即ち上演時間となった。
皆観客席に入る。そこでだった。
「はじまるけれど」
「何か新聞部も頭抱えてない？」
「抱えてるよな」
見ればだ。ナンシーもいる。彼女も言うのであった。
「もう原稿決まってるから」

「失敗だよな」
「それなのね」
「そう、そうなるから」
こう話すのだった。
「うちの新聞は明るい記事を書くようにしてるから」
「それが書けないからか」
「困るのね」
「書き方はあるわ」
ただしだ。ナンシーはここでこんなことを言った。
「他のことを書くとかね」
「つまり彰子のことは書かないの？」
「そうするの」
「予想通りになればね」
その予想がだ。的中すると確信しての言葉ではある。
「そうするわ」
「つまり要は書き方」
「そういうことなの」
「好意的な記事とか明るい記事、それも公平だったらいいじゃない」
少なくともそうした記事を書くナンシーではある。これは二十世紀から二十一世紀の日本のマスコミを反面教師にしての行動でもある。
「少なくとも悪い記事は書かないから」
「さて、どうなるか」
「それよね」
ナンシーの言葉にだ。パレアナとコゼットは言う。そうしてだった。
開幕を待つ。その間だ。
彰子と明香は二人の楽屋にいた。そこにおいてだ。
二人でだ。それぞれの服を着て最後の打ち合わせをしていた。まずは彰子がだ。当時、十九世紀後半のオーストリアの少年の服でド

レスの明香に尋ねる。
「外見はこれでもなのね」
「そう、心は女の子だから」
「そこを意識して演じるのね」
「そうするといいわ」
こう姉に話すのである。
「ズデンカはそうなの」
「わかったわ。それじゃあ」
「あとはね」
そしてだ。今度はだ。
明香がだ。姉に言うのであった。
「アラベラだけれど」
「前にも言ったままよ」
「優しくて気品のある大人の女性ね」
「それを意識して」
こう妹に答える彰子だった。
「それがアラベラなの」
「そうね。大人の女性ね」
「このことはしっかりとして」
また話す彰子だった。

第二百四十七話　大成功その三

「大人の女性ということはね」
「わかったわ。そうして心に余裕があるのね」
「元帥夫人とはまた違った完成された女性なの」
「完成されたなのね」
「そうだから」
こう話してだった。打ち合わせをする。そんな話をしてだ。
二人で楽屋を出てだ。そのうえで舞台に向かう。
その二人にだ。顧問の先生が声をかけた。
「はじまりね」
「はい、今から」
「歌わせてもらいます」
二人も先生に応える。
「私はズデンカで」
「私はアラベラを」
「皆予想してるわよ」
先生はにこりと笑ってだ。また二人に話した。
「この舞台のことをね」
「失敗するってですよね」
「言ってますね」
「皆ね。けれど」
先生の言葉が変わった。ここで言う言葉は。
「この舞台は絶対に成功するから」
「はい、そう思います」
「私も」
二人の言葉は同じだった。
「だから今まで練習してこれましたし」
「手応えはあります」

これが二人の返事だった。
「ですから絶対に最後まで」
「歌わせてもらいたいです」
「舞台はカーテンコールまでよ」
先生の言葉は実に教育的なものだった。部活も教育の場の一つだから当然である。
「いいわね。最後までね」
「はい、カーテンコールまで」
「それまで」
「頼んだわよ」
こう告げてだ。先生は二人を笑顔で送り出した。そうしてであった。
二人は舞台に出た。するとだ。
観客達はだ。まずは期待しない顔でこう言うのであった。
「はじまったけれどな」
「こんなに期待できないっていうか失敗がわかってる舞台ってな」
「これまで滅多になかったよな」
「ないない」
こうそれぞれ言うのであった。
「だからミスキャストだっての」
「全くだよ。何考えての配役なんだよ」
「姉妹の役はいつも通りだったらいいのに」
「それで何でいじったんだか」
「逆にするんだろうな」
誰もが思い言うことだった。とにかく彼等は舞台は失敗すると思っていた。そのことを確信してだ。二人が出て来たのを観たのであった。
それはだ。彼女達も同じだった。まずコゼットが言う。
「本格的なはじまりね」
「そうね」

パレアナが冷めた目でコゼットに言葉を返す。
「いよいよだけれど」
「ミスキャスト。果たしてどうなるか」
「観ることになるわね」
二人の言葉も冷めている。そしてだ。
ナンシーはだ。こんなことを考えていた。
「どう書くかよね」
「二人のことは書かないのね」
「そうするのね」
「ええ、そうよ」
まさにその通りだとコゼットとパレアナに答える彼女だった。
「だから。いいことを書くから」
「そうするのね」
「つまりは」
「ゴシップにはしないから」
この舞台についてはそうだというのである。
「それは安心してね」
「まあねえ。だといいけれど」
「とにかくはじまったしね」
二人はナンシーに応えながら舞台を観るのだった。歌と演技がはじまった。それは。

第二百四十七話　大成功その四

二人はだ。すぐにこんなことを言うのだった。
「嘘、これって」
「よくない？」
姉妹の歌はだ。見事だった。
音程も万全でしかも役にも合っていた。演技もだ。
的確に動きだ。上手であった。姉妹それぞれの位置で見合い歌い合いだ。二人のこれまでの役の時とだ。全くひけは取っていない。
それを見てだ。二人だけでなくだ。ナンシーも言った。
「これって」
「今のところは」
「そうよね」
二人もまた言う。
「凄くない？」
「彰子ってアラベラだったけれど」
「明香ちゃんはズデンカで」
それが本来の二人だった。しかしだ。
今の彼女達はだ。その逆の役をだ。万全に歌っていた。完璧なまでにだ。
演技もだ。素晴らしいものだった。それもなのだった。
「彰子ってズボン役できたんだ」
「凄い感じだけれど」
「何？これ」
「明香ちゃんと同じ位凄いじゃない」
そのズボン役で定評のある彼女と同じ域に達しているというのだ。
それが二人、ナンシーも入れると三人の今の彰子への評価だった。
「明香ちゃんもね」
「いい感じだし」

「アラベラできたのね」
そのことにまず驚くのだった。
「ドレスの着こなしもいいし似合ってるし」
「元々すらりとしてるし」
実は背は妹の方が十センチ程高いのだ。背では元々あべこべだったのだ。
「けれど今はそれ以上に」
「完璧にアラベラになってるから」
「ううん、こんなに凄いなんて」
「かなり意外」
「そうよね」
こう話しつつ観るのだった。その間にもだ。
二人の歌と演技は続く。二重唱が終わった時にだ。
観客達は拍手を送った。ブラボーの声も届く。
「おいおい、まさかいける!?」
「かなりいい!?」
「この舞台って」
皆驚きながら拍手をして言うのだった。
「二人共この役でもいけるのか?」
「このまま最後までいけるっていうのか」
「まさかと思うけれど」
「最後の最後まで」
皆今もまさかと思っていた。しかしだ。
裏方達はそんな観客席を見てだった。会心の顔で言うのだった。
「まあ観ないとね」
「わからないんだよな」
「そうそう」
こう話すのだった。舞台裏でだ。
「ミスキャストって思ってもね」
「実は違うからねえ」

「まあ僕達も最初はそう思ったけれど」
実はだ。それは彼等もなのだった。
それでだ。今こうして話すのだった。
「実際姉が妹になって妹が姉になってだから」
「普通はそう思うしね」
「しかも声域が合うかどうか心配だったし」
「二人の役も何か違ったし」
彰子達自身もそれぞれの役に合うかどうかということはだ。裏方の彼等も最初はどうかと思ったのだ。正直失敗すると思っていたのだ。
しかしだ。彼等は実際に観てだ。こう思ったのである。
「これが意外とね」
「いけるからな」
「いい感じでね」
「そうそう」
練習を観ていてだ。その結論に至ったのだ。

第二百四十七話　大成功その五

それでだ。驚く彼等を観て笑顔で話すのだった。
「まあ最初驚くのがいいからね」
「インパクトって舞台にも大事だし」
「その意味でもこの配役っていいね」
「成功してるよ」
最初でだ。もう客を掴んでいるというのである。
そんな話をしながら仕事をする彼等だった。第一幕は順調に進んでいく。
彰子も明香も順調に舞台を進めていく。それを観てだ。
ナンシーはだ。目を鋭くさせてこう言った。
「第一幕はね」
「第一幕は？」
「どうなの？」
「合格点よ」
こうコゼットとパレアナに答えるのだった。
「百点満点で。そうね」
「何点？」
「何点なの？それで」
「九十点ね」
かなりの高得点だった。
「それだけあるわね」
「そうね。この舞台はね」
「かなりいいわね」
二人もナンシーのその言葉に頷いた。そしてだ。
ナンシーにあらためてだ。こう尋ねたのだった。
「後の十点は何？」
「それは何なの？」

「まだ終わってないし」
それで満点ではないというのだ。
「だから九十点よ」
「そうなの。全部が終わってからなのね」
「満点かどうか決まるのは」
「ええ。ただね」
ナンシーは舞台を観ながら二人に話す。
「舞台は結局最後まで観ないとわからないのよ」
「とりあえず今の時点で九十点」
「そういうことになるのね」
「そう、とりあえずの点よ」
決まった点ではないというのだ。
「これからしくじったら点は落ちるから」
「ううん、厳しいのね」
「そうなるのね」
「私は批評家じゃないけれど」
記者だというのだ。この辺りは彼女は実によくわきまえている。
「舞台は観ているから」
「それで言うのね」
「採点するのね」
「そう、そういうこと」
そんな話をしながらだった。舞台を観ていく。そしてだった。
第一幕が終わった。最初のカーテンコールでいきなり拍手の嵐だった。彰子と明香は満面の笑みでそのカーテンコールを受けた。
第二幕がはじまる前にだ。先生がまた姉妹に話した。
「よかったわね」
「有り難うございます」
「そう言ってくれるんですね」
「事実だからよ」
だから言うという先生だった。

「本当によかったわよ。けれどね」
「舞台は最後まで」
「そうですね」
「そうよ。最後まで歌ってこそよ」
それでだというのである。
「全部が決まるからね」
「そうですね。ですから」
「気は抜かないで」
「そうして。最後の最後まで御願いね」
先生は二人にまた笑顔で話した。
「この舞台ね」
「そうさせてもらいます」
「是非共」
「じゃあ今は休息をね」
そのうえで英気を養えというのだった。
二人は先生の言うまま今は休んだ。そのうえでだった。
第二幕に向かう。そしてそこでもだった。
見事な歌を演技を見せた。第二幕は華やかな宴の場が舞台である。
そこにおいてだ。

第二百四十七話　大成功その六

明香がだ。見事なドレス姿を見せるのだった。皆それを見て言う。
「前からドレスも似合ってたけれどな」
「今は普段よりもな」
「いい感じだよな」
「まさにあれって」
「アラベラよね」
役にそのままなりきっているというのである。
「アラベラそのもの」
「お姉さんのアラベラもそのものだけれど」
「妹さんのアラベラもそのものだよな」
「タイプは違っても」
「それでも」
また違うタイプでだ。当たり役だというのだ。
そしてそれはだ。コゼットもパレアナも言うのだった。
「いい感じになってるわね」
「明香ちゃんね。あの娘よね」
「そう、いい感じよね」
「確かにね。あの娘は」
こう話してだった。彼女達はだ。
舞台を観ていく。観るのは明香だけではなかった。
彰子もだ。観ているとだ。
彼女も最高のズデンカだった。やはり妹が演じるのとはタイプが違う。それでもだった。
「彰子もね」
「そうね。あれでね」
「いい感じに演じてるじゃない」
「当たり役よね」

彼女もだ。そうなっているというのだ。
「あの娘って小柄だしね」
「小柄ですらりとしてるから」
そのスタイルがだというのだ。
「ズボン役も似合うのね」
「そうなってるのね」
「そうみたいね」
ここでナンシーも言う。舞台をまじまじと観ながらだ。
「歌も合ってるし」
「声もよくない？」
「そうよね」
コゼットとパレアナは彼女の声もだというのだった。
「ズデンカに合ってるわよね」
「それで」
「そう。合ってるわ」
ナンシーはまた話す。
「あの娘の声ってクリーミィよね」
「それが売りだからね、あの娘の」
「その声の奇麗さも」
彰子の声はまろやか系だ。それもまたいいというのだ。
「歌唱力ともう一つね」
「美声もあるから」
「最初はズボン役の声じゃないって思ったけれど」
「これが中々」
「多分」
舞台を観続けながらだ。ナンシーは二人に話した。
「ズデンカって純粋なズボン役じゃないから」
「だからいいの」
「そうなのね」
「そう思うわ。ズデンカは男の子になっているだけで」

普通のズボン役は完全に男なのだ。しかしズデンカは男装しているだけで中身は完全な少女である。そうした倒錯的とも言える役なのだ。

「女の子だから。それもとても女の子らしい」

「だからいいのね」

「彰子に合ってるのね」

「そうだと思うわ」

それでだというのである。

「女の子だから」

「彰子って完全に女の子の声だからね」

「そうそう、そうなのよね」

彰子の声についてはだ。二人もよくわかっているのだった。

「だからいいのね」

「ズデンカに」

「私も見落としていたわ」

ナンシーは眉を顰めさせて述べた。

第二百四十七話　大成功その七

「迂闊だったわ」
「彰子とズデンカの相性」
「それについてよね」
「そう、実は合っていたのよ」
これが今の時点の結論だった。
「あの娘にね」
「それとね」
ここでだ。ナンシーはさらに話した。
「明香ちゃんもね」
「妹さんも聴いてると」
「アラベラと相性抜群だけれど」
「声が合っているのよ」
こちらもだ。声なのだった。
「妹さんの声ってソプラノの中では低めよね」
「確かリリコ＝スピント？」
「基本はそうよね」
ソプラノで低い部類に入る声だ。その下になるとドラマティコとなる。
「彰子がリリコでね」
「妹さんはそっちで」
「だから合わないとか思ってたのに」
「これが合うなんて」
「かなり以外」
「多分ね」
ここでまた話すナンシーだった。
「ドイツオペラってイタリアオペラ程声域が限られないじゃない」
「あっ、そういえば」

ふとだ。パレアナが気付いた様に声を出した。
「あれよね。ワーグナーだけれど」
「ワーグナー？」
「そう、ワーグナー」
リヒャルト＝シュトラウスと同じドイツオペラの作曲家だ。その作品はこの歌劇場においても非常によく上演されてきているのである。
「ワーグナーだとソプラノでもメゾソプラノの役歌うじゃない」
「ああ、そうね」
コゼットはパレアナのその言葉に納得した顔で頷いた。
「クンドリーとかね」
「ええ、それもだし」
パルジファルのヒロイン的一にいる役だ。神聖さと妖美さを併せ持つ非常に不思議な女である。パルジファルの重要人物でもある。
「あとヴェーヌスも」
「あの役もそういえば」
「しかもヴェーヌスとエリザベートって一人で歌う場合もあるわよね」
「この前の上演そうだったわね」
「そういうの考えたらね」
パレアナは話していく。ヴェーヌスとエリザベートはタンホイザーの女性キャラである。ヴェーヌスは愛欲の女神、エリザベートは姫である。やはり正反対の位置にある。
しかしその二役をあえて一人の歌手が歌う演出もあるのだ。女性の二面性を強調しての演出である。予算が関わる場合もある。
「リヒャルト＝シュトラウスだって」
「いけるのね」
「ええ。あまり型にはめて考えることはないのね」
パレアナはまた話した。
「ちょっと。今回はそれが過ぎたわね」

「確かに。私も」
「私もね」
コゼットとナンシーもここでそのことを自分で認めた。
「今回はミスキャストだって思ったけれど」
「それ先入観だったのね」
「正直失敗したわ」
パレアナは難しい顔で話した。
「実はいけたのね、あの配役で」
「ええ、けれど何か」
「この舞台は」
先入観が破壊されたことが余計にだった。
観客達をしてだ。二人の歌と演技を見させていた。そしてだ。
第三幕になりだ。遂に最後の場面になった。そこでは。
「いよいよだな」
「ああ、いよいよだよ」
「階段の場面だ」
「それがはじまるな」
「遂に」
そのだ。アラベラが階段を降りる場面が近付いてきていた。それにだ。

第二百四十七話　大成功その八

皆注目していた。それがどうなるかをだ。
「無言劇だけれどな」
「それでもここがどうなるか」
「それで舞台が決まるから」
「重要だからな」
「まさに大詰め」
その大詰めに皆注目する。無論裏方もだ。
二階の建物になっている舞台の二階にいる明香を見ている。
「リハーサルでは完璧だったけれど」
「本番ではどうだろうな」
「ここまでは完璧だったけれど」
「ここでしくじったら何にもならないけれどな」
「どうしようもないからな」
こう話してだった。彼等も最後まで見る。その中でだ。
先生はだ。こう言うのだった。
「これが終わったらね」
「終わったら？」
「どうするんですか？舞台が終わったわ」
「打ち上げよ」
それをするとだ。にこりと笑って話す先生だった。
「それをするからね」
「って成功するっていうんですか」
「この舞台は」
「そうするんですね」
「そうよ。お店はね」
成功すると確信してだ。先生はさらに話した。
「駅前の居酒屋でね」

「ああ、鮫民ですか」
「あそこですね」
日本の居酒屋チェーンの一つだ。駅前や繁華街に店があることが多い。酒も肴も安く新鮮なことで評判の店だ。そこにだというのだ。
「ええ、そこでね」
「打ち上げですか」
「この後で」
「そうするから」
また話す先生だった。
「わかったわね」
「ってことはつまり」
「先生はもう確信してるんですね」
「この舞台の成功を」
「明香ちゃんが成功させるって」
「あの娘はやってくれるわ」
先生は微笑んでだ。こう話すのだった。
「絶対にね」
「絶対にですか」
「やってくれますか」
「そう、やってくれるわ」
先生のその言葉は変わらない。
「まあ見ていてね」
「それで打ち上げですか」
「鮫民で」
「まずはお刺身に」
先生は今度は肴の話をはじめた。
「それと天麩羅ね。海老にイカにキスにね」
「シーフードですね」
「それでいきますか」
「あとは生牡蠣」

先生の肴の話は続く。
「さて、白ワインで楽しむわよ」
「先生って海の好きなんですか」
「そうなんですか」
「ええ、好きよ」
実際にそうだという先生だった。笑顔で話す。
「唐揚げはオコゼでね」
「オコゼ、いいですよね」
「外見は酷いし毒もありますけれど」
「味はいいですよね」
「美味しい魚には毒があるのよ」
先生はこんなことも話した。
「河豚でもそうじゃない」
「ですね。あれも美味しいですよね」
「日本人よく食べるあれですよね」
「あの魚も毒が」
「それでも美味しいでしょ」
先生はその河豚のことも話していく。
「そういうことよ。オコゼも食べるわよ」
「じゃあ打ち上げですね」
「今から考えていきますか」
「それも」
「舞台が成功して後片付けも無事終わったら」
それでどうするかというのだった。

第二百四十七話　大成功その九

「いいわね」
「はい、階段の成功を見て」
「それからですね」
そんな話をしてだった。
彼等は明香のその見せ場を見る。すると。
彼女はだ。ゆっくりと階段を降りていく。
一歩一歩着実に降りていく。その動きはだ。
静かなだけではない。優雅で気品のあるものだった。それでいて傲慢なところは全くない。まさにアラベラとなってだ。階段を降りてだ。
マンドリカの前に来た。そうして最後の歌を歌うのだった。
幕が下りた。それが終わるとだ。
観客達がだ。万雷の拍手で迎えた。
「ブラボーーーーーーーー！」
「よかったよ！」
「最高の舞台だったよ！」
「最高だったわ！」
全員でだ。こう言うのだった。
そしてだ。花束が舞台に投げられる。そこにカーテンロールが来た。
明香が出る。すると観客席のボルテージがさらにあがった。その中でだ。
明香は何度も頭を下げる。微かに微笑んでだ。
それが三十分も続きだ。それが終わってからだった。
彰子も他の歌手達もカーテンコールを受ける。舞台は大成功だった。
ナンシーもだ。それを見届けてこう言うのだった。

「記事、決まったわ」
「大成功ね」
「こう書くのね」
「ええ、そう書くわ」
会心の笑みでコゼットとパレアナに答えたのだった。
「確実にね」
「そうよね。この舞台はね」
「それだけの価値があるわよね」
「凄かったわ」
ナンシーの声はうわずってさえいた。
「本当に予想以上だったわ」
「確かに。ここまでなんてね」
「私もちょっとね」
二人も言う。
「想像しなかったし」
「それどころか」
「絶対に失敗するって思ってたし」
「それがだから」
「予想以上だったわね」
また言うナンシーだった。
「嬉しい誤算よ」
「嬉しい誤算」
「それなのね」
「その通りよ。それを書くから」
記事にだというのである。
「本当にね」
「そういうことね。それにしても」
「満足したわ」
二人もにこやかに言う。
「この舞台、よかったわ」

「最高の舞台になったわね」
そう思ったのはだ。二人だけではなかった。
「ううん、本当に意外だったけれど」
「最高の意外ってことかな、これって」
「だよな、よかったし」
「それなら」
こういう評価だった。そうしてだ。
先生はだ。裏方のスタッフ達を連れてその居酒屋に入った。やはり打ち上げはそこしかないとだ。先生が強力に推した結果である。
そこでだ。全員でだ。乾杯してからだ。
円卓を囲んで全員で飲む。その中でだ。
先生は満面の笑顔でだ。こう言うのであった。
「よかったわね」
「確かに。最高の結果になりましたね」
「これで」
「何もかもがよかったですね」
スタッフ達も口々にこう話す。
「いや、本当に」
「特にあの二人ですね」
「小式姉妹」
「やっぱりよかったですよ」
「あの二人はやれると思ったわ」
先生は白ワインを大ジョッキで飲みながら言い切った。
「絶対にね」
「それでよしって言ったんですか」
「あの二人の提案を」
「最初はね。確かに驚いたわ」
先生もそのことは否定しなかった。

第二百四十七話　大成功その十

「まさかその配役があるなんてね」
「ですよね。実際に配役書き間違いって思いましたよ」
「声全然合ってないんじゃないかって」
「その個性も」
「何かを間違ってるんじゃないのかなって」
スタッフ達も話すのだった。こうだ。
彼等はそれぞれ刺身や天麩羅を食べてだ。そうして言っていくのだった。
「いや、本当にですよね」
「それで成功するなんて」
「あれだけはミスなんじゃないかって思ったけれど」
「それが意外に」
「最初はそのチャレンジ精神を買ったのよ」
そうだったと話す先生だった。
「それだけだったのよ」
「じゃあ失敗するってですか」
「先生も最初は思ってたんですか」
「実際にね。それを確信してあったわ」
覚悟してではなかった。それ以上だった。
その確信のこともだ。先生は話すのだった。
「けれど実際に歌っていたらね」
「そうじゃなかった」
「これはいけるって思ったんですね」
「確実に」
「そう、そっちの確信になったの」
そうだったというのだ。確信が変わったというのだ。
先生はだ。ここでアジのフライを食べた。この時代では完璧な和

食と思われている。
「いけるってね」
「そうですよね。実際の舞台観たら」
「いけるって思えますよね」
「練習を観たらですよね」
「それでわかりますね」
「そう、まず信じるのは己の目」
先生は断言した。
「そして耳よ」
「自分で見ないと確信するな」
「そういうことですね」
「それはわかってたのよ」
そうだったというのだ。
「わかってたつもりだったのよ」
「つもりですか」
「そうだったんですか」
「けれど実際は違ってたのね」
反省している言葉だった。
「それがね」
「先生でもですか」
「思っていただけ」
「そうだったんですか」
「そう、それだけだったの」
先生は首を捻った。その自省に基づいてだ。
「今回はそうした意味でも勉強になったわ」
「あれっ、先生も勉強するんですか？」
「そうなんですか！？」
スタッフ達はだ。先生の今の言葉にだ。
きょとんとした顔になってだ。こうそれぞれ言うのだった。
「先生が教えるのに」

「それでなんですか」
「人生は常に勉強よ」
先生の言葉が強いものになった。
「それも一生ね」
「死ぬまでなんですか」
「そうよ、死ぬまで勉強なのよ」
それが人間だというのだ。
「だから彰子ちゃんと明香ちゃんはね」
「凄いんですか」
「その意気も買ったんですね」
「そう。失敗してもって思ったし」
その話がまた為される。
「成功に終わって何よりだわ」
「そうですね。じゃあ次の舞台も」
「チャレンジですね」
「そうよ。チャレンジよ」
まさにだ。そうだと話す先生だった。
「そうするわ」
「ではその次のチャレンジに向けてですね」
「今は」
「ええ、飲みましょう」
こうしてだった。今は飲んでいく彼等だった。舞台は終わりだ。
次の舞台に向かう前のだ。賑やかな息抜きの時を過ごすのだった。

大成功　　完

２０１１・４・１４

第二百四十八話　記事その一

記事

彰子と明香の舞台は大成功だった。その記事はだ。
ナンシーは舞台が終わるとすぐにだ。新聞部の部室に戻って書きはじめた。その書く速さはかなりのものだ。その書くのを見てだ。
後輩がだ。こう彼女に言うのだった。
「あの、先輩」
「どうしたの？」
「今日はとりわけ書くの速くないですか？」
その速筆さを見ての言葉だった。
「どうしたんですか、一体」
「普通に書いてるだけだけれど？」
ナンシーは彼に顔を向けて答えた。その間も書いている。
「今まで通りね」
「普通にですか」
「そうだけれど。何か違うかしら」
「いつもより速いと思いますけれど」
また言う後輩だった。
「僕の気のせいですか？」
「気が乗ってるからかしら」
そのせいではないかと話すナンシーだった。
「いい舞台だったから」
「確かに。いい舞台でしたね」
「そうでしょ。いい舞台だったわね」
ナンシーはそれを後輩に話す。生地はパソコンのワードで書いている。キーボードを押すその動きがだ。尋常なものでないのだ。
「予想以上にね」
「ええ。じゃあ僕も」

「貴方も？」
「記事書きます」
彼もだ。そうするというのだ。
「スポーツですけれど」
「野球よね、確か」
「はい、第三野球部のインタヴューに行って来ました」
それでだ。記事を書くというのである。
「そうします」
「わかったわ。じゃあ書きましょう」
「はい、二人で」
こんな話をしてだった。二人は記事を書いていく。部室のパソコンを並んで使ってである。そして先に終わったのはというとだ。
後輩の方だった。書き終えてだ。彼も驚いて言った。
「あれっ、僕の方が先に終わりましたね」
「そうね。何か貴方も最近」
「書くのが速くなってますかね」
「そうみたいね。前よりもずっとね」
「こういうのって急に速くなったりするんですか？」
「人によるけれど」
それでもだと話すナンシーだった。
「やっぱり。書いていればね」
「速くなるものなんですね」
「タイプ打つのも文字書くのも慣れだから」
何でもだ。慣れればだというのだ。そうした意味では書くのも他のことと変わりない。やはり何事も慣れることが大事だということだ。
「そういうことだと思うわ」
「ううん、それにしても」
「本当に急に速くなったわね」
「そうですね。それに」

「それに？」
「実は最近なんですけれど」
どうなったかとだ。後輩は書いた記事をメモリーに記録させてから自分が使っていたパソコンの電源を切ってだ。ナンシーに話すのだった。
「背もなんです」
「伸びたの？」
「急に伸びました」
そうだというのだ。
「一年程前からですけれど」
「そういえば」
ナンシーはその後輩を上から下までまじまじと見てだ。こう言うのだった。
「入部した時と比べて」
「大きくなってますよね」
「十センチは大きくなってない？」
こう言うのである。
「特に足が」
「足ですか」
「足が伸びたわ」
要するにコンパスが広くなったというのだ。
「羨ましいわね」
「足ですか」
「そう、足よ」
彼のその足を見ながらだ。ナンシーは話すのだった。

第二百四十八話　記事その二

「足が長いってのはいいことよ」
「ううん、それは自覚していませんでした」
「背が伸びたことだけ気付いたの」
「ええ、それで喜んでました」
背が伸びただけでも喜ぶのが人間というものだ。ここで足の長さにまで気付くかどうかということはだ。実は中々難しいことなのである。
それはだ。この後輩でも同じだったのだ。それで言うのだった。
「ううん、足ですか」
「そう、足ね」
「足って中々気付かないんですね」
それがわかった彼だった。
「そうなんですね」
「それ自慢？」
「自慢じゃないですけれど」
「いや、自慢に聞こえるから」
ナンシーは実際に羨ましそうに彼に話す。
「それだと」
「けれど先輩も」
今度は後輩から話すのだった。ナンシーのその青いズボンを着けている足を見てだ。見ればその足はだ。どうかというとだった。
「足長いですよ」
「長いかしら」
「長いと思いますよ」
実際に見ればだ。その通りだった。ナンシーはすらりとしているのだ。
「奇麗ですよ」

「だといいけれど」
「先輩って自分のスタイルには」
「自信。ないから」
曇った顔になってだ。それで答えるナンシーだった。
「胸の大きさもそうだし足も」
「どっちもですか」
「ウエストもよ」
つまりだ。全てだというのだ。
「お尻だって」
「そうですか？先輩は全部」
「いいっていうの？」
「いいと思いますけれど」
こう話す彼だった。ナンシー本人を見ての言葉だ。
「けれど自信ないんですか」
「男の子みたいなスタイルじゃないかしら」
「あっ、それがいいんですよ」
「それがいいって」
「スレンダーじゃないですか」
女の子のスタイルの理想系の一つである。女の子のスタイルは実は何種類もある。胸が大きいだけではないのだ。それもまたよしであるがだ。
「それがいいじゃないですか」
「スレンダーだから」
「はい、僕はいいと思います」
笑顔で話す彼であった。
「僕の好みですけれど」
「そうなの。貴方が好きなのね」
「はい。そうなんですよ」
「それならいいわ」
ナンシーは後輩の今の言葉にだ。優しい笑顔になった。

そしてそのうえでだ。また話すナンシーだった。
「私もそれでね」
「いいですか」
「ええ、それならね」
相変わらずだ。パソコンで記事を書きながら話す。
「いいわ」
「わかってくれましたね」
「わかったわ。それじゃあね」
「はい、それじゃあ」
「こっちも仕事終わったから」
ここでだ。それが終わったというのである。
メモリーに記録させてからパソコンを落としてだ。あらためて彼に話した。
「さて、それじゃあね」
「はい、それじゃあですね」
「帰りましょう」
満面の笑顔であった。これから本当の楽しみがはじまるといった笑顔だった。
「一緒にね」
「はい、一緒に」
「デートよね」
楽しみとは何かをだ。実際に言うナンシーだった。
「一緒に帰るのもね」
「ですね。何処かに寄られますか？」
「何か食べるとか？」
「あっ、けれど」
「けれど？」
「もう外は真っ暗ですね」
オペラを観終わってから記事を書いたからだ。もうそんな時間になっていた。

第二百四十八話　記事その三

そしてだ。ナンシーもその外を見て話すのだった。
「そうね。ちょっと何処かに行くのは」
「時間がないですからね」
「そうね。仕方ないわね」
ナンシーは心から残念そうに述べた。
「これじゃあね」
「それじゃあどうしますか？」
「一緒に帰るだけね」
それだけだというのである。
「これじゃあね」
「そうしますか」
「ええ、そうしましょう」
「わかりました。それなら」
「まあそれでもいいかしら」
これは自分に言い聞かせての言葉だ。それで納得させる為にだ。
「一緒にいられるから」
「じゃあ一緒にですね」
「ええ。ただ」
「ただ？」
「誰かに見られないようにしないと」
それはだ。気をつけるというのである。
「それが問題だからね」
「そのことですか」
「そうよ。秘密だから」
ナンシーはその顔を曇らせて話す。
「見つかったらね。駄目だからね」
「何か前から思ってたんですが」

後輩がそのナンシーに話すのだった。
「先輩僕達のことかなり隠してますよね」
「ええ、隠してるわ」
その通りだと答えるナンシーだった。
「実際にね」
「何で隠すんですか？」
「だって。見つかったら恥ずかしいじゃない」
それでだと話すナンシーだった。その眉を曇らせての言葉だ。
そうしてだ。彼女は後輩にこうも言うのだった。
「交際してるってことは」
「そうなんですか」
「そうよ。交際なんてばれたら大変よ」
彼女にとってはだ。そうなのだ。
クラスでは強気だがだ。実際はなのだ。ナンシーは繊細で恥ずかしがりなのだ。その性格が交際を秘密にさせているのである。
だからだ。後輩にもこう言うのである。
「だから。絶対に隠してね」
「隠すんですか」
「そう、隠すのよ」
それは絶対だというのだ。
「絶対にね。見つからないようにしてよ」
「ううん、それってどうも」
「秘密にしておきたくないの？」
「僕は秘密にする必要ないと思いますけれど」
これが後輩の考えだった。
「特に」
「あるわよ。だから見つかって色々言われたら」
「恥ずかしいですか」
「私死んじゃうわよ」
困った顔でだ。ナンシーはまた後輩に言った。

「そんなことになったら」
「僕が相手だから嫌っていうんじゃないですね」
「そんな筈ないじゃない」
それは否定するのだった。後輩に顔を向けて必死の顔で断言する。
「だって。私はね」
「先輩は？」
「君だからいいのよ」
顔を赤らめさせてだ。後輩に話すのである。
「君だからなのよ」
「僕だからですか」
「そうよ。誰でもいいって訳じゃないのよ」
実はかなり純情でもあるナンシーだった。
それでだ。また話すのだった。
「本当に好きな人と一緒でないとね」
「駄目ですか」
「そう、駄目だから」
「ううん、何が何だか」
「何だかって？」
「先輩の気持ちはわかりました」
それはだというのだ。そうしてそのうえでだ。

第二百四十八話　記事その四

後輩はだ。また彼女に話すのだった。
「けれどですね」
「けれど。何よ」
「そういう好きな気持ちって隠すものなんですか？」
彼は言うのだった。ナンシーにだ。
「隠して秘密にするものですか？」
「そうじゃないの？」
「何か違うと思いますけれど」
首を傾げさせての言葉だった。
「そういうのって」
「だから。恥ずかしいじゃない」
どうしてもだ。恥ずかしいという気持ちを否定できないナンシーだった。そしてそれが彼女の今の動きを決めてしまっているのだった。
「何ていうかね」
「何ていうか？」
「そうよ。恥ずかしいじゃない」
この気持ちを言葉にも出してしまうのだった。
「どうしても」
「考え過ぎですよ」
またナンシーに言う後輩だった。
「そこまでは」
「考え過ぎって」
「気にしなかったらいいじゃないですか」
彼は明るく言うのだった。
「そんなことは」
「見つかっても平気だっていうの？」

「僕はそうですよ」
明るく答える彼だった。
「全然平気です」
「強いっていうの？それ」
ナンシーは眉を曇らせてだ。その彼に言った。
「何ていうか」
「別に強いとは思わないですけれど」
「だから私は駄目なのよ」
それはだ。どうしてもだとだ。ナンシーの言葉は変わらない。
「どうしてもね」
「じゃあ若し誰かに見つかったら」
「死ぬわ」
本気の言葉だった。
「確実にね」
「だから大袈裟なんじゃないですか？」
「大袈裟じゃないわよ」
ナンシーはもう泣きそうな顔になっている。声も必死なものだ。
「私、そうなったら」
「けれど先輩のお友達には」
「ジョルジュね」
「あの人にはもう見つかってますけれど」
「ジョルジュはまだいいのよ」
彼に関してはだ。いいというのである。
「別にね」
「それはどうしてなんですか？」
「だって。気心が知れた相手だから」
それでいいというのである。ナンシーとジョルジュは性別を越えた親友関係にあるのだ。新聞部と写真部の関係でもあったりする。
「だからいいのよ」
「それでなんですか」

「見つかっても人に言い触らしたりはしないし」
ジョルジュはそういうことをする人間ではないのは確かだ。
「そういう子だからね」
「いいんですね」
「そう、ジョルジュはいいの」
また言う彼女だった。
「御互いに隠し合うことなんてない間柄だから」
「随分と仲のいい相手なんですね」
「そうよ。親友よ」
自分からこう言うナンシーだった。
「まさにね。そうなのよ」
「成程、そうなんですか」
「だから見つかっても安全なの」
後輩に対しても安心している顔で話す。眼鏡の奥の表情は今はよく動いている。
「そういうことなのよ」
「わかりました。そうなんですね」
「そうなのよ。それでね」
「それで？」
「デートのことだけれど」
今から二人が行うだ。それの話に戻すのだった。

第二百四十八話　記事その五

「こっそりとだけれど何処に行こうかしら」
「もう夜ですしね」
「部屋に帰らないといけないし」
部屋に帰る、これはまさに常識だった。
「貴方のお部屋って私の部屋と近いわよね」
「はい、歩いてすぐです」
「けれど。流石にお互いの部屋に行くのは」
「まずいですか」
「不純よ」
純情なナンシーから見ればだ。まさにそうした行為はだ。
そうした単語があてはまるものに他ならなかった。彼女はそういうところにも妙に真面目な女の子なのだ。
「だからそれは駄目よ」
「ですよね。じゃあ」
「仕方ないわね。やっぱり」
不本意という顔でだ。結論を出すナンシーだった。その結論は。
「貴方のお部屋の前までね」
「その前まで、ですか」
「二人で帰りましょう」
こう提案するのだった。
「それでどうかしら」
「ううん、それよりも」
「それよりもって？」
「僕が先輩のお部屋まで行くってのはどうでしょうか」
彼は逆にナンシーに提案し返した。
「それでどうですか？」
「そうするのね」

「はい、これでどうでしょうか」
また言う彼だった。
「夜道ってやっぱり危ないじゃないですか」
「ええ」
「先輩が僕の部屋の前までだと先輩は一人で帰ることになりますよね」
「私の部屋までね」
「それでどうでしょうか」
「確かに。夜道って」
夜の街のだ。その危険さはやはり安心できないものがあった。誰がいるかわからない。
「危ないしね」
「はい、ですから」
「そうね。どうせ同じデートならね」
「安全な方がいいですよね」
「安全第一よ」
真面目なナンシーらしい言葉だった。
「そういうことならね」
「話は決まりですよね」
「そうね。決まったわ」
ナンシーは後輩に対して頷いてみせた。こうしてだった。
二人はナンシーの家までデートをすることになった。外は真っ暗である。
照明で照らされそこに虫が集る夜の街をだ。二人で歩いてだった。
ナンシーはだ。横にいるその後輩にこんなことを言った。
「ナイトね」
「ナイトですか」
「ええ、騎士よね」
笑顔で言うのだった。
「今の貴方って」

「先輩と一緒にいるだけですけれど」
「それだけでもよ」
「一緒にいるだけで」
「そう、騎士だから」
微笑んでだ。後輩に言うのである。
「それだけでいいのよ」
「ううん、そうなんですか」
「違和感あるのね」
「はい、それは」
そのことはだ。否定できないと返す後輩だたt。
そしてだ。彼はこう言うのだった。
「だってナイトっていったら」
「もっと凛々しいイメージっていうのよね」
「ええ、ですから」
それでだとだ。後輩の返事は戸惑ったものだ。
そしてその戸惑った顔でだ。彼はナンシーに話す。夜道を二人で話しながらだ。そのうえでその灯りに照らされた闇の中を進んでいく。
「そういうのは」
「だから。それは貴方の主観なのよ」
「僕のですか」
「貴方の主観と私の主観は違うの」
こう彼に言うのである。

第二百四十八話　記事その六

「また別のものなのよ」
「じゃあそれで？」
「いいのよ、それで」
実際にそうだと言うナンシーだった。
「そういうことでね」
「そうなんですか」
「そうよ。私にとって貴方はナイトだから」
「騎士ですか」
「まあ私はね」
自分のことも話す。するとだった。
あまりはっきりしない笑顔になってだ。こんなことを言うのだった。
「お姫様じゃないですけれど」
「いえ、それは」
「違うっていうのかしら」
「はい、先輩は僕にとっては」
真剣な面持ちでだ。彼はナンシーに話す。
「お姫様です」
「プリンセスなのね」
「そうです、プリンセスです」
あくまでだ。そうだというのだ。
「僕から見ればそうです」
「ううん、そうは思わないけれど」
「多分。これも」
「主観？」
「そうだと思います」
まさにだ。それだというのだ。これが後輩の言葉だった。

「僕の主観と先輩の主観って違うんだと思います」
「そうね。人それぞれだから」
「ですから。僕から見た先輩は」
「プリンセス」
「はい、プリンセスなんですよ」
後輩は今度は笑顔で話す。
「本当にそう思います」
「あまり可愛くないプリンセスね」
「それもとんでもないですよ」
本気でだ。うわずった声で話す後輩だった。
「先輩は可愛いですよ」
「また主観なのね」
「そうなりますね」
「そうね。主観ね」
「それですね」
二人で笑顔になってだ。それでこう言い合うのだった。
主観と主観だ。しかしそれは衝突ではなくだ。融和であった。
その融和の中でだ。二人は話していくのだった。
「僕達ってその主観で」
「御互いを見て」
「客観的に見たらどうなんでしょうか」
後輩はこんなことも言った。主観性となればその対比は客観性になる。その客観性においてはだ。二人はどうかというのである。
「僕達って」
「客観的にはね」
「はい、どうなるんでしょうか」
「だから。それはね」
その客観的という言葉にはだった。ナンシーは顔を曇らせた。
そしてだ。こう彼に言うのだった。
「なしにして」

「なしですか」
「だから。見られたくないから」
それでだというのだ。なしにして欲しいというのだ。
「そういうのはね」
「誰にもですね」
「だから。その話はね」
「はい、わかりました」
後輩はナンシーの今の言葉に素直に頷いた。
「それじゃあそれで」
「そうしてね。後ね」
「後は？」
「主観でいいのよ」
それでだ。いいというのである。
「恋愛って主観だから」
「それに基づくものだからですか」
「そう、それでいいのよ」
これがナンシーの恋愛への考えだった。それを話すのだった。
「別にね。そういうことでね」
「ですか」
「そう。それにしてもね」
ナンシーはここまで話してだった。ふと話題を変えてきたのだ。

第二百四十八話　記事その八

「今ってね」
「今ですか」
「お月様がないから」
上を見上げる。するとだ。
月はない。この星の月は幾つもあるがどの月もだ。出てはいなかった。
「だから。暗いわね」
「そうですね。確かに」
「こうした時にこそね」
ナンシーの話がここで変わった。
「出て来るのよ」
「変質者がですか」
「そう、月のある夜ばかりじゃないから」
昔からよく言われている言葉だった。
「だからね」
「じゃあ余計に用心しないといけませんね」
「もうすぐ私の部屋だけれどね。それでもね」
「はい、気をつけないと」
そんな話をしていた。その矢先だった。
不意にだ。二人の前にだ。
何かが出て来た。それは。
得体の知れない巨大な生き物だった。変質者どころではない。
その巨大な生き物の姿は暗がりの中なのでよくは見えない。それが一体どういう存在なのか二人は識別できなかった。しかしだ。
身の危険を察した。それでだった。
ナンシーはすぐにだ。後輩に対して言った。
「逃げて」

「逃げてって？」
「これ、危ないわよ」
こう彼に言うのだ。
「何かはよく見えないけれど」
「いえ、ここは」
「いえって？」
「僕が食い止めますから」
後輩は無意識のうちにナンシーの前に出た。そのうえでだ。
彼女をその謎の生き物から庇いながらだ。こう言うのだった。
「先輩は今のうちに」
「逃げろっていうの？」
「お部屋、もうすぐですよね」
前にいる謎の生き物を見ながらだ。後ろにいるナンシーに話す。
「それでしたら」
「今のうちに逃げろっていうのね」
「僕も後から追いかけますから」
だからだ。そうしろというのだ。
「先輩は今のうちに」
「駄目よ、そんなの」
そう言う後輩にだ。ナンシーは必死の声で言い返した。
「そんなの絶対に駄目よ」
「絶対にって」
「そうよ。君一人で行かせてどうするのよ」
眉を思いきり顰めさせてだ。ナンシーは言うのだ。
「自分が盾になるつもりでしょ」
「盾にって」
「あのね、何かあった時は一緒よ」
ナンシーの考えはそのまま出ていた。出してしまったのだ。
「例え変質者が出てもね」
「それが出ても？」

「こういったものもあるし」
ナンシーは懐から色々と出してきた。三段式の特殊警棒にスタンガン、それに警報ブザーだ。その他にも匂い玉等色々とある。
そうしたものを出してだ。後輩に言うのだ。
「だから大丈夫だから」
「何か一杯持ってますね」
後輩はそのナンシーを後ろ目で見ながら述べた。
「全部護身用ですか」
「そうよ。君もこれ持って」
「警棒ですか」
「二本持ってるから」
見れば同じ特殊警棒をもう一本出してきていた。それを後輩に手渡してだ。
彼女はだ。また言うのだった。
「その他にも一杯あるから」
「じゃああの生き物も」
「ええ、二人でね」
意を決した顔でだ。後輩に言うナンシーだった。
「護身術は知らないけれど武器があれば」
「何とかなりますね」
「ええ、だからね」
そんな話をしてであった。彼等はだ。
謎の生き物に向かおうとする。見ればその生き物は。
異様に大きい。背の高い後輩よりもまだ高い。そしてしっかりとした身体をしている。足は四つの様だ。そして目が夜の中で光っている。
その生き物に二人で向かおうとする。そこにだ。
何処からかだ。女の子の声が聞こえてきたのだった。
「ああ、そこにいたのね」
「そこ？」

「そこっていいますと」
「全く。夜の散歩もいい加減にしなさいね」
声は次第に近付いて来る。そうしてだ。
謎の生物のところに来てだ。こうその生物に言うのだった。

第二百四十八話　記事その九

「馬は夜歩くものじゃないのよ」
「馬？」
「馬って」
「わかったわね、ジェベ」
声をここまで聞いてだ。ナンシーはだ。
眉を顰めさせながらだ。目の前の暗がりの中でちらりと見えた相手にこう問うのだった。
「まさかと思うけれどナン！？」
「あれっ、ナンシーなのね」
見ればだ。彼女だった。ナンだった。
その彼女がだ。ナンシーの前に出て来てだ。明るい笑顔を見せてきたのだ。
灯りの前に出て来てだ。彼女はこうナンシーに言った。
「いや、実はね」
「その生き物馬なの」
「そうだったの」
「そうよ。実はこの子ね」
目が慣れてきた。するとだ。
ナンも彼女の馬も見えてきた。実に大きな馬だ。
その馬をいとしげに撫でながらだ。ナンはナンシーに話すのである。
「一人で散歩するのが好きなのよ」
「それも夜になの」
「馬が夜に散歩って」
それを聞いたナンシーはだ。まずはいぶかしむ顔になった。
そしてそのうえでだ。こうナンに問い返した。
「馬って夜行性だったのかしら」

「違うわよ。昼に動く生き物よ」
「そうよね。それでどうして夜の散歩なんかするのよ」
「この馬は特別なのよ」
だからだとナンシーに答えるナンだった。
「それでなのよ」
「そうなの。それでなの」
「そう、本当に変わった馬だから」
「そんな馬はじめて聞いたわ」
ナンシーは首を捻りながらまた言った。
「そういう馬もいるのね」
「驚いたみたいね」
「かなりね」
実際にその通りだと答えるナンシーだった。ここでは本音を出して話している。
「そんな馬がいるなんてね」
「そうよね。けれどこの子は見た通りだから」
「ううん、成程ね」
「面白いでしょ。ところでね」
「ええ。どうしたの？」
「その子誰なの？」
ナンは後輩を見ながらナンシーに尋ねた。
「今あんたと一緒にいる子誰なの？」
「えっ！？」
その問いにだ。ナンシーはだ。
まずは目をきょとんとさせた。そのうえでナンに言うのだった。
「何よ、急に」
「だから。その子誰なのよ」
またナンシーに尋ねるナンだった。
「一緒にいるけど。彼氏？」
「あっ、それはですね」

後輩が答えようとする。しかしだった。
それはだ。ナンシーが彼のその口を咄嗟に塞いでだ。言えなくなった。彼をそうしてからだ。ナンシーはそっと彼に囁くのだった。
「それ言ったら駄目じゃない」
「駄目って？」
「そう、駄目よ」
こうだ。強い目になって後輩に囁くのである。
「そんなこと言ったら」
「あの、けれどあの人」
「いいから。言わないの」
表情も必死だ。その顔と目での言葉だ。
「わかったわね」
「言ったら駄目なんですね」
「言ったら死ぬから」
これがナンシーの返答だった。
「いいわね」
「わかりました。先輩が死んだら困りますから」
「そういうこと。わかったわね」
「わかりました」
こんな話をしてであった。ナンシーはだ。
ナンにあらためて向かう。ナンはその彼女にまた問うた。
「で、その子誰なの？」
「うん、彼はね」
「彼？」
ナンはその言葉にすぐに反応を見せた。
「彼って言ったわよね、今は」
「あっ、ちょっとこれは」
「これは？」
「あの、その」
「それでその子誰なの？」

突っ込まれて慌てふためく姿になったナンシーにだ。ナンはさらに突っ込みを入れる。こうしてだった。

ナンとナンシーの攻防がはじまった。ただしそう認識しているのはナンシーだけである。ナンは無意識のうちに彼女に問うていくのだった。

記事　完

２０１１・４・２０

第二百四十九話　ナンシーの不覚その一

ナンシーの不覚

ナンはだ。ナンシーにさらに問うのだった。
「誰なの？それで」
「ええと、この子はね」
「この子はっていうとやっぱり」
ナンは何気なく呼んでいた。しかしナンシーもそう呼んだのを見てだ。あることを確信したのだった。
「後輩の子？新聞部の」
「そう、そうなのよ」
ナンシーは必死だった。ナンのその言葉にすぐに飛びついてだ。強引と思われようがそう言い繕うことにしたのだ。事実だが最も重要な事実を隠してだ。
そうしてだ。こうナンに話すのだった。
「実はね」
「ふうん、そうなのね」
「そうなのよ。今夜じゃない」
「夜道に女の子一人はね」
「危ないわよね」
「確かにね。私だって」
ナンが言うとだ。彼女の足元にだ。
犬が数匹出て来た。その犬達は。
「この子達連れてるしね」
「ああ、ナンがいつも連れてる子達よね」
「そうよ。ボディーガードよ」
くすりと笑って話すナンだった。
「この子達がね」
「そうよね。その子達がよね」

「犬がいないとね。それならなのね」
「この子が自分から言ってくれたのよ」
やはり一番重要な事実を隠して話すナンシーだった。
「それで今こうしてね」
「一緒にいるのね」
「そうなのよ。優しい子だから」
これも事実である。重要な事実を隠す為の技術だ。
「だからこうして家まで送ってくれてるのよ」
「よかったわね」
ナンはにこりと笑ってナンシーのその言葉に頷いた。
「つまりあれね」
「あれって？」
「ナンシーのナイトなのね」
ナンは言った。
「それなのね」
「ナイトって」
「だから。ナイトじゃない」
ナンはにこりと笑ったままナンシーに話していく。
「ナンシーを守ってるのよね」
「そうなるけれど」
「じゃあナイトじゃない。モンゴルにはナイトはいないけれど」
「騎馬の民なのに？」
「騎士はいないのよ」
そうだというのだ。モンゴルにはいないというのだ。
「騎兵はいるけれどね」
「あの世界を席巻した伝説のモンゴル騎兵ね」
「けれどナイトはいないの」
そもそも文化と文明が違う。モンゴルに騎士は存在しないのだ。
「というかナイト殲滅したし」
「それもボコボコにしたわよね」

「ええ。モンゴル人に敵はないわ」
かつてのモンゴル帝国の侵攻である。それは欧州にまで及びだ。リーグニッツにおいてドイツ、ポーランドの騎士団をまさに殲滅したのだ。
その歴史をだ。ナンは誇りを以て話しているのだ。
「まあそういうことだからね」
「それでもナイトだっていうのね」
「モンゴルじゃ女は戦わないけれど自分で身を守るから」
それはだ。ナンを見ればわかることだった。
「馬に乗って相手踏み潰すから」
「それがモンゴル式？」
「馬に乗って襲い掛かってきたら蹴落として」
そうするというのである。
「それで踏み潰させるから」
「モンゴルの女の子って強いのね」
「草原は強くないと生きられないのよ」
「っていうか馬って人踏み潰すの？」
ナンシーは眉を顰めさせてだ。このことを問うのだった。
「確か馬って凄く繊細な生き物よね」
「しかも心優しいわよ」
「足元に木の枝があっても避けるのよね」
「ええ。けれどね」
「けれど？」
「飼い主が踏み潰せと考えたらね」
この辺りはだ。まさに以心伝心だった。馬は賢い動物である。だから飼い主がその対象を踏み潰そうと考えればだ。そうするというのだ。
「やってくれるかな」
「そうなの」
「ほら、あの漫画だってそうじゃない」

ナンはまた笑顔で話す。

第二百四十九話　ナンシーの不覚その二

「あの世紀末救世主の漫画ね」
「ああ、あの胸に七つの傷がある」
この時代では新たなシリーズが展開しているだ。伝説的な古典漫画だ。
「あの漫画に出る。馬鹿でかい黒い馬ね」
「あの馬人踏み潰すじゃない」
「まあね。何百人も踏み殺してるけれど」
象位の大きさがある馬だ。時によっては怪獣位の大きさになる。その巨大さでだ。人を平気で踏み殺す恐ろしい馬なのである。
「あれと同じなのよ」
「モンゴルの馬って怖いわね」
「だから。草原は半端じゃないのよ」
それがモンゴルだというのだ。
「過酷な生活だからね」
「ううん、何か連合でもかなり危険な場所なのはわかるわ」
「だから女の子も自分の身は自分で守るの」
「変な奴は踏み潰してなのね」
「それで恐竜とか猛獣からは馬で走って逃げて」
そうした意味もあることだった。
「生きないといけないから」
「そういうのからもなの」
「だからモンゴルにはナイトはいないの」
女の子を守る男の子はだ。そもそもいる余地がないというのだ。
「だから。そういうのって見てるとね」
「どうなの？見てると」
「微笑ましいのよね」
ここでまたにこりとなるナンだった。

「いやいや、本当にね」
「そうなの。本当にいい子なのよ」
「ただ。何か」
その草原に生きる故の勘がだ。ナンに言わせた。
「今のナンシーとその子ってね」
「私達がどうしたの？」
「妙に仲がいい感じね」
その二人を見ての言葉である。
「まるで」
「まるでって。何よ」
「カップルみたいね」
こう言うのだった。悪気なくだ。
「そんな感じだけれど」
「そ、そんな筈ないじゃない」
それはだ。ナンシーは必死に否定するのだった。
顔を真っ赤にさせ狼狽する調子でだ。それで言うのだった。
「何でそうなるのよ」
「違うの？」
「違うわよ」
こう答えるナンシーだった。
「だから違うから」
「違うのね」
「ひょっとしてそう見えるとか？」
「見えるから言うんだけれど」
ナンはこう言うのだった。
「けれど違うのね」
「そうよ。ただの後輩だから」
それをまた言うナンシーだった。しかしだ。
ここでだ。彼女はこう言ってしまったのだった。
「ちょっとね」

「ちょっと？」
「一緒にいたい気持ちはあるけれど」
「あるのね」
「まあね。あるわ」
無意識のうちにだ。言ってしまった彼女だった。
「それはね。何ていうか」
「ッてことはやっぱりあれじゃないの？」
そこまで聞いてだ。ナンは言うのだった。
目をしばたかせながらだ。ナンシーに話す。
「彼氏になるんじゃないの？」
「だから何でそうなるのよ」
「だって今自分で言ったじゃない」
ナンの返答は冷静である。少なくとも意地悪な感じはない。ナンは意地悪な性格ではない。ただし野生児のせいか勘が鋭いのである。
その彼女がだ。ナンシーに言うのである。
「ほら、一緒にいたいって」
「しまった」
また言ってしまった彼女だった。

第二百四十九話　ナンシーの不覚その三

唖然とした顔になってだ。そうして言うのだった。
「それは」
「それは？」
「あれなのよ。後輩じゃない」
「だからそれは聞いたけれど」
「だからなのよ。一緒にいたいのよ」
とにかく必死にだ。言い繕うのだった。
「大切な後輩だからね」
「ううん、そうなの？」
「そうなのよ。ナンにだって後輩の子っているわよね」
「第四乗馬部の後輩の子ね」
「いるでしょ、そういう子」
こういうことにしるのだった。八条学園では乗馬部も幾つかあるのだ。そしてだ。ナンシーにとって幸いなことはだ。何かというとであった。
ナンはだ。恋愛についてはだ。こうした感じだったのだ。
「そうね。何かと私に声をかけてくる子はいるわね」
「そういう子がいるじゃない」
「そうね。そういう感じね」
「だから。そうなのよ」
それでだと話すナンシーだった。ここぞというばかりにだ。
「この子は私の大切な後輩なのよ」
「成程ね」
「そう。それでね」
「それで？」
「ナンはこれからどうするの？」
話を変えた。やはり内心必死になってだ。

ナンにだ。これからどうするか尋ねるのだった。
「やっぱりゲルに帰るの？」
「この子見つけたしね」
それでだとだ。笑顔で答えるナンだった。
「後はもうね」
「帰るだけよね」
「ええ、後はお風呂屋さんに行ってね」
ゲルに風呂はない。テントだからだ。
「それで寝るわ」
「ああ、お風呂屋さんに行ってからなのね」
「そう、それからね」
笑顔で話すナンだった。
「寝るわ」
「ゲルってお風呂ないからそこは大変ね」
「買おうって思ったら携帯用の折り畳みシャワーもあるけれど」
「それは買わないの？」
「シャワー好きじゃないから」
それでだと答えるナンだった。
「お風呂に浸かるのが好きなのよ」
「そうなの、シャワーは好きじゃないの」
「何か。疲れが取れなくて」
この辺りはそれぞれの嗜好もあった。ナンは風呂で疲れを取るタイプなのだ。
「それでなのよ」
「だからお風呂好きなのね」
「そうなのよ。だから今から行くわ」
こう言うとだ。すぐにだった。
馬に飛び乗った。まさに何でもないといった感じでだ。
そうして馬の上からだ。ナンシーに話した。
「それじゃあまた明日ね」

「学校でね」
「ええ、またね」
こうナンシーに言ってだ。それからだ。
後輩も見てだ。微笑んでこう話すのだった。
「じゃあナンシーを御願いね」
「は、はい」
後輩は上から言われてだ。少し戸惑いながら答えた。
「わかりました」
「ナイトになってね。じゃあ」
こう告げてからだ。それからの言葉は。
「お休みなさい」
「ええ、お休みなさい」
「お休みなさい」
二人もナンに夜の別れの挨拶をしてだ。そうしてだった。
彼女と別れた。それから二人に戻ってだ。
ナンシーの家に向かう。扉の前まですんなりと着いた。
後輩はだ。そこでだ。ナンシーに言うのだった。
「じゃあ僕はここで」
「ええ、じゃあね」
「また明日ですね」
笑顔で話す後輩だった。

第二百四十九話　ナンシーの不覚その四

「また明日。御会いしましょう」
「そうね。また明日ね」
ナンシーも言う。しかしだ。
ここでだ。彼女は自分の部屋の扉を見た。そのうえでだ。
こう言うのだった。
「ちょっとね」
「ちょっと？」
「ううん、何でもないわ」
言おうとして。すぐだった。
首を横に振ってそれを否定してだ。訂正したのである。
「何でもないから」
「そうなんですか」
「そうよ。じゃあまたね」
「はい、明日ですね」
「明日また会いましょう」
こう言うことだけしかできなかった。踏み込んで言うことはナンシーにはできなかった。勇気がどうしてもだ。起こらなかったのである。
そうしてだ。ナンシーはだ。後輩が帰る姿を見送ってだ。
自分の部屋の扉を開けてだ。その中に入り飼っている猫達の世話をしてお風呂に入って夕食を食べてだ。宿題をしてから寝るのだった。
そして次の日だ。教室に行くとだ。
ジョルジュがだ。彼女のところに来て言うのだった。
「いいかな」
「どうしたの？」
「昨日ナンと話してたよな」

このことを言ってきたのである。
「学校の帰りに」
「見てたの？」
「たまたまな。ただな」
「ただって？」
「気をつけた方がいいからな」
明らかなだ。忠告だった。
「人の目は何処にでもあるからな」
「わかってるわよ。けれどね」
「ナンはそういうことには疎いから助かったんだ」
ジョルジュの忠告はだ。かなり突っ込んだものだった。
「けれどな。鋭い奴だったらな」
「気付くのね」
「絶対に気付くよ。しかも」
「しかも？」
「お喋りな奴だったらどうなるかだよ」
忠告は核心に至った。そこが問題だというのだ。
「今頃クラスで話題になってたぞ」
「うっ、新聞部がスクープされるのね」
「そうなったら洒落にならないだろ？注意しておけよ」
「わかったわ。それじゃあね」
「僕はそういうのは言わないけれどな」
この辺りは信義である。ジョルジュはナンシーの親友になる。だからこそだ。そういうところはしっかりと守っているのだ。元々そうした人間であることも大きい。
「それでも他の奴は違うからな」
「そうね。それはね」
「クラスメイトだったらまだ気心が知れてるにしても」
それでもだというのである。
「他のクラスの奴は色々なのがいるだろ」

「意地悪いのとかお喋りなのとか」
「そう、それが問題なんだよ」
ジョルジュの視野は広かった。カメラから見ているだけではないのだ。カメラの外のものもだ。充分に見ているのである。だからこその言葉だった。
「誰が見ているかわからないからな」
「注意しないといけないのね」
「そうだよ。くれぐれもな」
「わかったわ。それじゃあね」
「そういうことでな」
そんな話もしたのだった。ナンシーにとっては危ないところだった。ナンは実際に何も言わない。これは彼女にとって幸せなことだった。
こうして助かったナンシーはだ。考えるようになった。後輩とのことをどうするべきかだ。
そしてそのことをだ。ある日の昼休みにだ。ジョルジュと話すのだった。
学校の屋上でパンと牛乳を食べながらだ。話すのだった。
「あのね」
「彼氏とのことだよな」
「そう、それよ」
屋上のコンクリートに敷きものをしてだ。そこに向かい合って座ってだ。二人で話をするのだ。お昼のパンと牛乳をしっかりと食べつつだ。

第二百四十九話　ナンシーの不覚その五

「それなのよ」
「どうしたものか困ってるんだな」
「まず言うけれどね」
ナンシーはハムサンドを食べながら話す。
「別れるなんてことはね」
「絶対しないよな」
「そんなの論外よ」
強い顔での言葉だった。
「絶対にしないのよ」
「そうだろうな」
「わかるのね、それは」
「ナンシーはそういう娘だからな」
だからだと話すジョルジュだった。やはり彼女のことはよくわかっている。
「別れるなんてな」
「しないからね」
「それだけあの子が好きなんだな」
「ええ、大好きよ」
真剣な顔での言葉だった。
「だから一緒にいるのよ」
「そうだよな。だよな」
「じゃあジョルジュはどうなのよ」
ナンシーは今度は必死な感じの顔になって彼に問うた。
「嫌いな相手といつも一緒にいたいの？」
「随分変わった趣味の話だよな、それって」
「そういう人っていないでしょ」
「まあ滅多にいないよな」

こう返すジョルジュだった。
「いるとしたら変態クラスのマゾだよな」
「そういうことよ。普通はないわよ」
「そういうことだから、だよな」
「私あの子が好きだから一緒にいたいの」
それは絶対にだと。とにかく退かない感じのナンシーの返答だった。
「わかってるじゃない。それは」
「まあね。わかってるから今こうして話を聞くんだしな」
「そうでしょ。けれどね」
「けれど？」
「言えないのよ」
ナンシーの言葉が怯んだ感じになった。
「どうしてもね」
「公にすることは」
「そんなことになったら死ぬわよ」
ジョルジュにも言うのだった。
「恥ずかしくて。考えただけで怖いわよ」
「怖いんだな」
「そう、怖いわ」
また言うのであった。
「ずっと秘密にしたいし」
「気持ちはわかるよ」
「わかってくれてるのね」
「けれどなあ」
ジョルジュは野菜サンドを口にして言うのだった。そのうえでだ。
青緑のパンを食べながらだ。彼はナンシーに話す。
「皆普通に公にしてるじゃないか」
「交際してるってことをっていうのね」

「ほら、ギルバートとアンだってな」
ジョルジュはこのカップルのことも話した。
「普通に公になってるじゃないか」
「あの二人ね」
「それと同じじゃないのかな」
「同じかしら」
「そう、同じじゃないか？」
ジョルジュはまたナンシーに話した。
「だからそんなに隠蔽することも」
「けれど。付き合ってる相手は」
「後輩なのが問題だって言うのかい？今度は」
「それもわかってるわよね」
「また言うけれどわかっているからこそ」
ジョルジュはこう前置きして答えた。そうして今はプルーンジュースを飲んで一呼吸置いたナンシーにだ。また言ってみせたのである。

第二百四十九話　ナンシーの不覚その六

「こうして話を聞いてこっちも言ってるんだよ」
「そうよね、やっぱり」
「そうだよ。それでだけれどな」
「ジョルジュはこのことどう考えてるの？」
「その相手が年上でも年下でも」
どちらでもだとだ。ナンシーに話す。
「例え同級生でもだよ」
「関係ないのね」
「僕はそう思うさ」
ジョルジュは言った。
「そう思うけれどな」
「じゃあ公にしろってこと？」
「強制はしないさ」
それはしないというのだ。この辺りはおおらかなジョルジュだった。他人に無理強いをしたりすることもだ。彼にはないのである。
「それもさ」
「しないのね」
「ナンシーで考えたらどうかな」
これがジョルジュの言葉であり考えだった。
「それで自分で決めてさ」
「そうしろっていうのね」
「僕ができるのはアドバイス」
それだというのである。
「それだけだからね」
「そうよね。私だって立場が逆だったら」
「同じ感じになってただろ？」
「そう思うわ」

自分のことを考えての言葉だった。
「やっぱりね」
「そうだよね。だからね」
「ううん、自分で決める」
「隠しておきたいならそれでいいし」
その選択肢もだ。ジョルジュは否定しなかった。
「けれど公にしたいのならそれはそれで」
「いいのね」
「結局はナンシーと彼だよ」
後輩のことも話すのだった。
「どうするか決めるのはね」
「そうなのね」
「うん、そう思うけれどね」
ジョルジュは穏やかに彼女に話した。
「僕はね」
「ううん、どうしようかしら」
ここで言うナンシーだった。
「本当に」
「今すぐでなくてもいいけれどね」
「今すぐでなくて」
「じっくり考えていいことだろうし」
それでだとだ。ジョルジュも返す。
「そういうことだからね」
「じっくりね」
「そう、じっくり考えて結論を出せばいいから」
ジョルジュは穏やかな口調でナンシーに話していく。その彼の話を聞いてだ。
ナンシーは考える顔のまま話していく。
「一回話していくわ」
「その後輩君とだね」

「そうするわ」
ナンシーは言った。
「一度ね。そうして決めるから」
「それが妥当だね」
「じゃあね。ただ」
「ただ？」
「どうした答えが出るのかはわからないから」
不安な顔でだ。ナンシーは話すのである。
「どうなるかしら、本当に」
「まああれだよ」
「あれって？」
「ナンシーが今考えているよりかはね」
どうかというのである。
「悪い結果にはならないよ、絶対にね」
「どうしてそう言えるの？」
「世の中はナンシーが思っている以上にありきたりでね」
「ありきたりって？」
「こうした話は何処にでもあるし」
今度はこんなことを話すジョルジュだった。

第二百四十九話　ナンシーの不覚その七

「それにナンシーが彼と付き合ってるのがわかってもね」
「それがわかっても？」
「皆最初は驚くだろうけれど」
「笑ったりしない？」
「しないよ、そんなこと」
それはだ。ないというのである。
「絶対にね」
「本当に？」
「うちのクラスにそんな奴いる？」
ジョルジュはこのことを話すのだった。彼等のクラスでした。そうした人間が一人でもいるかどうか。そうナンシーに対して問うのである。
「いたら言ってくれるかな」
「いないけれど」
ナンシーはそれは確かにいえた。
「一人も」
「そうだよね。いないよね」
「ええ、誰と付き合っても。笑うなんてことは」
「そうだよ。いないしね」
ジョルジュはさらに話す。
「それに誰かと誰かのカップルなんて」
「カップルなんて？」
「学校のあちこちにいるじゃない」
今度はそれだった。そうした話になった。
「ありきたりだし」
「私もそうなの？」
「別に二股とかさ。禁断の愛とかじゃないよね」

「そんなの絶対にないわよっ」
声を荒くさせて反論するナンシーだった。そのことにはだ。
「私とあの子にはね。やましいところなんて一つもないから」
「ないよね」
「ないわよ。キスだって」
自分からだ。言ってしまうのだった。
「してないし」
「ああ、そういうことさえ言わなかったら」
「うっ、しまったわ」
「全然大丈夫だから」
ぎくりとした感じの顔になってしまったナンシーにだ。また話すジョルジュだった。
「大事なのは言わなくていいことを言わなかったらいいんだよ」
「それだけなの」
「そう、それだけ」
ジョルジュは笑顔で話す。
「本当にそれだけだから」
「ううん、じゃあ公にしても？」
「悪いことは何もないよ」
「そうなのね」
「まあ僕はアドバイスできるだけはしたから」
話はだ。ここまでだというのである。
「後はナンシー次第だよ」
「私と。あの子のね」
「そう。よく話し合って考えて決めてね」
「そうさせてもらうわ。それじゃあ今は」
「今は？」
「食べることにするわ」
それだった。今言うことはだ。
「パンと。ジュースね」

「おっと、そうだね」
ナンシーに言われてだ。ジョルジュも思い出した。今度は彼がそうなった。これまでとは逆になっていた。食べものについてはそうなった。
「それじゃあね」
「ええ。それにしてもパンもね」
「パンも？」
「何か最近あまり食べてなかったのよ」
「そうだったんだ」
「あの子、御飯派だから」
それでだというのだ。
「私もね」
「御昼はそうなんだね」
「ええ、そうなの」
こうジョルジュに話す。
「パン食べたの久し振りなのよ」
「ああ、つまりはあれだね」
「あれって？」
「御昼いつも一緒なんだ」
そのことだ。ジョルジュはすぐに見抜いた。ナンシーのその話からだ。
「いつも一緒に食べてるんだ」
「えっ、何でそれがわかるの！？」
「いや、わかるよ」
戸惑った顔になるナンシーにはだ。ジョルジュの薄い苦笑いが向けられた。彼は今はその苦笑いでナンシーに話をするのだった。

第二百四十九話　ナンシーの不覚その八

「それは」
「だからどうしてわかるのよ」
「だって。あの後輩君は御飯派だよね」
「ええ、そうよ」
「それでナンシーも御飯ばかりなんだよね」
ジョルジュはあたふたとした感じを見せているナンシーに話していく。
「それだとね」
「わかるの、それ」
「簡単にわかるよ」
本当にだ。そうだというのだ。
「一緒に食べてるから。彼に合わせているからだよね」
「私が御飯ばかりになったのは」
「うん、すぐにわかったよ」
「ジョルジュって名探偵だったの!?」
挙句にはこんなことを言い出したナンシーだった。
「まさか。テンボやジャッキー以上の」
「あの二人は迷探偵だと思うけれど」
「けれど一応推理研究会所属よ」
「だから。普通の探偵じゃないじゃない」
この二人に限ってはだ。まさにそれだった。
何しろ正解に辿り着いたことが一度もないのだ。必ずあさっての方向に向かいそこから複雑な道を辿っていく。それがテンボとジャッキーなのだ。
「あの二人は」
「まあそうだけれどね」
「それにさ。今度のことはね」

「どうなの？」
「本当に簡単にわかるから」
また話すジョルジュだった。
「好きな子と一緒に食べてたら一緒のもの食べるよね」
「ええ、自然とね」
「それで彼が御飯派なら」
「自然と私も」
「本当に簡単な推理だと思うけれど」
ジョルジュはこうナンシーに話していく。
「というかナンシーってあの子が絡むとね」
「どうだっていうのよ」
「何か何も見えなくなるね」
このことを指摘するのだった。
「盲目になっちゃうんだね」
「眼鏡かけてるけれどちゃんと見えてるわよ」
「いや、そういう話じゃないから」
「違うの？」
「全然違うよ」
また笑って話すジョルジュだった。
「そこはね」
「そうなの」
「そうだよ。それでね」
「それで？」
「話を戻すけれど」
そうするというのである。ジョルジュは言うのだった。
「彼氏とのことはね」
「このままでいくか公にするか」
「それは考えておいてね」
「わかってるわ」
こくりと確かな顔で頷いてだ。ナンシーは答えた。

第二百四十九話　ナンシーの不覚その九

「それはね」
「そういうことでね。それじゃあね」
「ええ。じゃあちょっと本屋に行くから」
ナンシーは笑顔でジョルジュにまた話した。
「そこで本買って来るから」
「何の本？」
「歴史の小説よ」
そうした本だというのだ。
「ほら、百年前のエウロパのサハラ侵攻の時のね」
「ああ、あそこで負けたサハラの」
「そう、あの英雄の話なのよ」
所謂悲劇の英雄だ。サハラの歴史では非常に多い。それだけ多くの国が滅びてだ。多くの英雄が悲劇の英雄となっているということなのだ。
「その本がいいっているからね」
「それで買うんだ」
「連合が舞台の歴史小説になると」
それはだ。どうなるかというのだ。
「あれじゃない。戦争とかはなくて」
「アメリカンドリームな話になるよね」
「それはそれで面白いけれど」
「今は戦争の話が読みたいんだ」
「ええ。そういう話も面白そうだから」
歴史小説に戦争はある意味つきものだ。戦争はハレになる。そのハレとそれによって歴史がどう動くのか、それを読むのも歴史小説の醍醐味なのだ。
「だから。読んでみるから」

「わかったよ。それじゃあね」
「少し行って来るわね」
ナンシーは立ち上がって言った。
「本屋さんにね」
「そういうことでね。じゃあ僕はね」
「ジョルジュはどうするの？」
「暫くここにいるよ」
屋上にだというのだ。彼等が今いるだ。
「空でも見てるよ」
「ロマンチストなの？」
「ははは、そう思うかな」
「若しかして違うの？」
「ここからだよいい写真が撮れるからね」
ここでだ。ジョルジュはだ。
普段の顔になった。カメラマン、それもあまりよくない評判のだ。
「だからちょっとね」
「上から盗撮するの？」
「ほら、風がひらりとかね」
ジョルジュは早速下心を露わにさせて話す。
「そういうのがあるから」
「そういうのばかり狙ってたら何時かぶん殴られるわよ」
「女の子に？」
「そうよ。女の子の彼氏とかね」
殴りそうな候補が結構いるのだ。これはジョルジュにとってはいいことではない。しかしそのことにへこたれるようなジョルジュでもないのである。
それでだ。彼は果敢な調子で言うのであった。
「そんなことを怖がってたら何もできないからね」
「本当にそのうち殴られるわね」
「大丈夫大丈夫」

かくしてだった。ジョルジュは撮影の機会を窺うのだった。だがそれがだ。大変な騒ぎを引き起こしてしまうのだった。また別の騒ぎをだ。

ナンシーの不覚　　完

２０１１・４・２７

第二百五十話　謎のシルエットその一

謎のシルエット

ジョルジュがナンシーと二人で屋上で話した次の日のことだ。彼は新聞部の部室に駆け込んできた。そうしてそのうえでナンシーに言うのだった。

「大変だ！大変だ！」

「大変だって何がよ」

ナンシーはパソコンで記事を書きながら古典的なやり取りで返すのだった。

「大変の大安売りでもしてるの？」

「自分古いネタ使うね」

「そうかしら。とにかくどうしたのよ」

「いや、昨日屋上から写真撮ったじゃない」

彼が言うのはこのことだった。

「それでね」

「スカイフィッシュならペットが逃げ出したんじゃないの？」

ナンシーはとりあえずこの動物を言ってみせた。星によっては普通に飛んでいる生き物である。ＵＭＡもこの時代では星によっては普通の存在なのだ。

「驚くことないじゃない」

「スカイフィッシュ？そんなありきたりな生き物じゃないよ」

「ドラゴンが逃げ出したとか？」

「いやいや、もっと凄いのだよ」

「じゃあ何よ」

ナンシーは記事を書きながらジョルジュに尋ねる。

「何があったのよ」

「写真にだよ」

「写真を撮ってたのはわかるわ」

「僕はカメラマンだからね」
「それでその撮った写真に何が写ってたの？」
かなり具体的にだ。ジョルジュに尋ねるのだった。
「それで」
「妖怪なんだよ」
それだと話すジョルジュだった。
「それが写っていたんだよ」
「妖怪って！？」
「そう。ほらこれ」
ここでようやく写真を見せるジョルジュだった。そこに写っていたのは。
普通の学校の上からの写真だ。生徒達が遊び木々や池もある。本当にありきたりの場所である。しかしその中にであった。
ナンシーはすぐに見つけた。その池の中にだ。それがいたのだ。
「これ、何かしら」
「何だと思う？」
「甲羅があって？」
ナンシーがまず言うのはこのことだった。
「それで肌が緑色よね」
「そうだよね、しかもね」
「頭にお皿があるわよね」
「うん、手には水掻きまであるし」
「つまりこれって」
そういうものを見ていくとだ。その写真に写っているのが何かをだ。ナンシーはすぐに名前を出した。その名前は。
「河童よね」
「そうだよね、間違いなく」
「前から噂があったけれど」
また言うナンシーだった。
「本当にいたのね」

「うん、うちの学校の池に河童がいるってね」７６
「その話は知ってたけれど」
「まさかね。偶然撮ったのよね」
「最初は腕鳴らしに風景撮ったんだよ」
「ジョルジュが？風景を？」
「僕だって風景も撮るよ」
そのことについてはだ。ジョルジュは口を少し尖らせて返した。
「確かに少ないけれどさ」
「そうだったの」
「それで。その風景写真に写ってたんだよ」
そうだったというのだ。ジョルジュは真剣に話す。
「それがね」
「河童が」
「何だったら検証もしていいよ」
写真の検証もしていいというのだ。合成やトリックをしているかどうかだ。
「そうしてね」
「その必要はないわ」
静かに答えるナンシーだった。
「ジョルジュは合成とかしないから」
「それを信じてくれるんだ」
「そうよ。確かにジョルジュは問題の多いカメラマンよ」
それはナンシーもよくわかっていた。

第二百五十話　謎のシルエットその二

「女の子撮るの大好きでしょ」
「ライフワークだよ」
まさにそれだとだ。断言して答える彼だった。
「まさにね」
「そうよね。やっぱりね」
「女の子の胸やお尻や脚」
話が具体的なものになっていく。
「そういうのを撮ることがね」
「ライフワークだね」
「いや、パンチラやブラチラは最高だけれど」
「それについては？」
「滅多にないから」
残念そうにだ。話すのだった。
「偶然的なものだからね」
「そうよね。偶然よね」
「もろに見えるのなんて全然駄目だし」
今度はこだわりを話すジョルジュだった。
「そう、チラリズムにこそ撮るべきものがあるんだよ」
「とりあえずはね」
「とりあえずは？」
「私だから聞ける話だけれど」
ジョルジュはここでこんなことを話すのだった。
「他の女の子にそれ言ったらドン引きよ」
「そうなるかな、やっぱり」
「少なくとも二度とお話してもらえないから」
ナンシーはその女の子の立場から離した。
「気をつけてね」

「ううん、そうなんだ」
「まあとにかくね」
ナンシーはここまで話してだ。そうしてだった。
話を戻す。河童の話だ。
「さて、この河童だけれどね」
「何でここにいるのかな」
「というか妖怪よね」
「うん、妖怪だよね」
河童が妖怪でないと言える人間もいない。妖怪でないとするならお化けになる。とりあえず人間や普通の動物でないのは確実に言えることだ。
「間違いなく」
「ううん、本当に河童がいるなんて」
ナンシーはあらためて話す。
「これって大変なことよ」
「調べる？どうする？」
「記事に書くわ」
そうするとだ。ナンシーは確かな声で答えた。
「そうするわ」
「それじゃあ。二人で行く？」
「私が記事を書いて」
「僕が写真を撮ってね」
そうしてはどうかというのだ。
「それでどうかな」
「ええ、それでいきましょう」
ナンシーもジョルジュのその言葉に頷いて応える。
「これはスクープよ」
「そうだよ。河童が本当にいるってわかったらね」
「スクープ間違いなし」
「取材に行かない理由はないわよ」

「話は決まったから。それじゃあね」
こう話してだった。ジョルジュとナンシーはその池に行くことに決めた。話はこれで決まった。しかし決めてからがだ。また話の元になるのだった。
ジョルジュはだ。不意にだった。こんなことを言うのだった。
「ただ河童ってね」
「河童って？」
「人襲って食べるんだったっけ」
「あっ、それはないわ」
「そういう妖怪じゃないんだ」
「河童の好物は胡瓜だし」
このことはこの時代でも変わらない。河童といえばやはり胡瓜なのだ。
「人を襲って食べたりはしないわ」
「じゃあそれは安心していいんだ」
「尻子玉は抜くけれどね」
それはするというのである。

第二百五十話　謎のシルエットその三

「それはあるからね」
「尻子玉って？」
「何か人間の中にそういうものがあるらしいのよ」
「そうなんだ」
「それを抜くらしいわ」
そうだとだ。ナンシーは話すのである。
「抜かれたら死ぬらしいわね」
「結局同じじゃないの、それって」
「そうなるわね」
「だったらやっぱり危ないじゃない」
「だから。ここはね」
ナンシーはジョルジュにこんなことも話した。
「犬と猿連れて行きましょう」
「犬と猿？」
「そう、犬と猿をね」
取材に連れて行くというのである。
「その二種類の生き物をね」
「犬と猿ねえ」
「どうしてかって思ってるでしょ」
「うん、どうして犬と猿なのかな」
実際にそれは何故かを尋ねるジョルジュだった。
「河童用にだよね」
「そうよ。相手が河童だからよ」
「っていうと」
それを聞いてだ。ジョルジュはだ。
考える顔になってだ。こうナンシーに尋ねた。
「あれかな。河童が苦手な生き物なのかな」

「そうなの。河童は猿が苦手なの」
「それと犬もなんだ」
「そうなの。犬と猿が苦手なの」
「それで何かあった時に備えて連れて行くんだ」
「これだと何の問題もないわよね」
ナンシーはそうしたことを知ったうえで話すのだった。
「河童が尻子玉を狙ってきてもね」
「うん。実際にそんなのが人間の中にあるのかどうか知らないけれど」
「多分ないけれどね」
「ないんだ、やっぱり」
「だって。人間の内臓は全部わかってるじゃない」
既に判明していることだ。人間の内臓の全貌についてはだ。既にルネサンスの頃にはだ。解剖も行われわかっていることなのだ。
だからだ。ナンシーは言うのだった。
「そんなのがないってね」
「じゃあ何で尻子玉を抜くなんて話になるのかな」
「多分。水死体だけれど」
「水死体って？」
その単語を聞いてだ。ジョルジュはだ。
顔を急激に曇らせてだ。こうナンシーに返す。
「話が物騒になってきたけれど」
「実際に水死体を見たことはないけれど」
ナンシーはこう前置きしてから話す。
「水死体ってお尻の穴が開いてるらしいのよ」
「ああ、だからなんだ」
「それで河童が尻子玉を抜くって話になったみたいね」
「そういう事情があったんだ」
「そうみたい。とにかくね」
「河童にお池に引き込まれないように」

こうしてだった。彼等はだ。
実際に猿と犬を連れて取材に行くことになった。しかしである。
ナンシーはここで大きな問題を見落としていた。実際に犬を連れて行くことにしてだ。ジョンに対してラッシーを貸してくれるように頼んだ時にだ。
ジョンにだ。こう言われたのである。
「河童がいるかどうか走らないけれど」
河童の話も聞いたうえでだ。ジョンはナンシーとジョルジュに話すのである。
「それでもさ。猿も一緒なんだ」
「ええ、そうなの」
「猿と犬が必要なんだ」
「駄目だよ、それは」
ジョンは顔を曇らせて言うのだった。
「ちょっとね」
「駄目って？」
「どうして？」
「犬と猿って仲悪いから」
ジョンが言うのはこのことだった。トップブリーダーらしい言葉だった。

第二百五十話　謎のシルエットその四

「顔を見合わせたら喧嘩するじゃない」
「あっ、そうね」
「そういえばね」
「そうだよ。絶対に駄目だよ」
また言うジョンだった。
「それこそ大変なことになるよ」
「ううん、そうよね」
「犬と猿って仲悪かったね」
ナンシーもジョルジュもこのことに気付いたのだ。
「それじゃあ一緒に連れて行くのは」
「無理かな」
「河童以前にお互いが喧嘩するよ」
その犬と猿がだというのだ。
「文字通り犬猿の仲だから」
「厄介よね」
「確かに」
「だからラッシーは今回は」
ジョンの話は本題に入った。
「貸せないよ。悪いけれどね」
「わかったわ。じゃあ」
「そういうことでね」
「本当に御免ね」
ジョンは申し訳ない顔で話した。
「それはね」
「いいわ。仕方ないから」
「そうしたことならね」
二人もそれで納得した。しかしだ。

ナンシーはそれでもだった。こう言うのだった。
「それでも犬と猿はね」
「必要なんだ」
「河童を取材に行って河童に悪さされたら元も子もないから」
だからだというのだ。
「そういうことだからね」
「ううん、それじゃあどうするの？」
「考えがあるわ」
ナンシーは真面目な顔でジョルジュに話す。
「犬と猿ならいいのよ」
「だからそれはさ」
「犬よ、犬」
何故かここで強調して返すナンシーだった。
「そして猿は猿よ」
「って何が言いたいの？」
「犬と猿ならいいのよ」
またこう言うナンシーだった。
「ここ、重要なんだけれど」
「重要って言われても」
「まあ見ててよ。犬と猿は集めるから」
「けれど一緒にしたら喧嘩するじゃない」
「大丈夫よ。犬と猿でもね」
「それでも？」
「喧嘩はしないから」
ナンシーは確かな笑顔でジョルジュに対して断言してみせる。
「もうね。何があってもね」
「そこまで言うんならね」
「納得してくれたかしら」
「納得はしないよ」
それはしないとだ。ジョルジュは答えた。

「だって。犬猿の仲っていうから」
「犬と猿でも犬と猿じゃないのよ」
「余計に意味がわからないんだけれど」
「じゃあまずはね」
「お池に行く前に何処か行くんだ」
「動物園に行きましょう」
学園内の動物園である。それこそ実に様々な生き物がいるだ。動物園の他には植物園や水族館もあるのがこの学園の特徴である。
「そこにね」
「動物園？」
「そう、動物園にね」
そこに行くとまた言うナンシーだった。

第二百五十話　謎のシルエットその五

「まずはそこにね」
「話が読めないけれど」
それでもだとだ。ジョルジュは応えた。
「行くしかないみたいだね」
「見ていて。私の考えはね」
「何か不安なんだけれど」
「いいから。その不安を覆してみせるから」
こんな話をしてだった。二人はだ。
ナンシーが言うままにだ。その学園内の動物園に入った。そしてそこでだ。ナンシーは二種類の動物をレンタルしたのである。
それは確かに犬と猿だった。しかしであった。
「成程ね」
「これでわかったかしら」
「確かに犬と猿だね」
ジョルジュはその動物達を見て答えた。
「間違いなくね」
「そうでしょ。確かにね」
「けれど犬と猿じゃないね」
同時にこうも言う彼だった。
「そういうことだったんだ」
「そうよ。まずはね」
ナンシーは自分が手綱を引いているその動物を見た。それは。
犬に似ているがより毛が多くふさふさとしている。その毛は灰色だ。しかも大きい。その動物こそがだ。何かというとであった。
「この狼ね」
「シベリアオオカミだね」
「そうよ、これね」

狼の中でもとりわけ大型であるだ。それだった。
「あとはね」
「猿だね」
「猿は猿よ」
ナンシーは後ろを振り返った。そこにはだ。
やたら大きく怖い顔をした生き物がいた。それは。
「ゴリラだけれどね」
「ローランドゴリラだね」
「そうよ。これなら喧嘩しないでしょ」
「シベリアオオカミは賢いし」
犬よりもだ。賢いかも知れないのだ。
「それにゴリラもね」
「賢いんだったっけ、ゴリラって」
「サル科の中でもかなり知能が高いのよ」
意外にもだ。ゴリラは知能が高いのだ。その外見からは想像もできないまでにだ。
「しかも大人しいしね」
「争いを好まない生き物だったね」
「そうよ。またの名を森の賢者っていうのよ」
賢くだ。しかも大人しいからだ。
「その狼とゴリラならね」
「確かに喧嘩はしないね」
「しかも犬と猿だから」
おまけにこのことも加わるのだった。
「河童もやっつけられるし」
「だからいいんだね」
「そう。むしろ普通の犬や猿よりもいいかも知れないわ」
「戦闘力はこっちの方が上だね」
「ゴリラは確かに大人しいけれど」
ナンシーはそれでもだと話すのだった。

「いざとなったら。やってくれるわ」
「戦ってくれるの？」
「まずは胸を両手を拳にして叩いて威嚇するのよ」
ゴリラのその威嚇の動作である。
「それでそれからね」
「いよいよなんだ」
「それは本当に最後の最後だけれど」
それでもだ。選択肢としてはあるというのだ。

第二百五十話　謎のシルエットその六

「狼だってそうだし」
「じゃあ。何かあっても」
「まあ河童だったらね」
「平気なんだね」
「何とかなるわね」
太鼓判といった感じの言葉だった。
「狼とゴリラだから」
「力技もできるし」
「素早いしね」
「ああ、ゴリラって案外素早いだったっけ」
「そう、外見よりもずっとね」
身体能力も高いのだ。知能だけではないのである。
「素早いからね」
「ううん、じゃあ河童が出て来ても」
「大丈夫よ。ただね」
「ただ？」
「今回はちょっとね」
ナンシーは残念な顔になってだ。そのうえでだ。
ジョルジュに対してこのことを話したのである。
「彼は連れて来てないから」
「あっ、そういえば」
言われてだ。ジョルジュもそのことに気付いた。今回はだ。
ナンシーは後輩を連れて来ていないのだ。彼女とジョルジュ、それに狼とゴリラである。そのパーティーで今回の取材に来ているのである。
「そうだね。何でなの？」
「危険な取材になりそうだから」

それが理由だというのだ。
「だからね」
「それで連れて来なかったんだ」
「河童が相手よ。やっぱり危ないじゃない」
「本当にいたらね」
「あの写真見る限り本当だから」
ジョルジュの撮っただ。あの写真のことである。
「だからそれはしないの」
「彼のことが大事だから」
「それでよ。幾ら狼とゴリラを連れていてもね」
「やっぱり危ないよね」
「そういうこと。だから私とジョルジュだけなのよ」
「成程ね」
「それでいいわよね」
ここまで話してだ。ナンシーは彼の顔を見た。
そのうえで彼に尋ねたのである。どうかとだ。
「彼を危険な目には逢わせないのは」
「いいと思うよ。カップルとしてはね」
「カップルとしては？」
「厳しいことを言うけれど」
ジョルジュは前置きをしてきた。今度はだ。
「そのあえて厳しい取材をするのもね」
「ジャーナリストっていうのね」
「そうした考えもあるよ」
「それはわかってるわ。私もね」
「けれどそれでもなんだ」
「こうした超常現象とかそうした類の話はまた別よ」
ナンシーは言う。
「まだあの子には危険よ」
「じゃあいずれはなんだ」

「何時かはね。そうした取材も一緒にできるようになりたいわ」
「正解だね。まあ学校の新聞の取材で危険とかもないけれど」
「うちの学校は特別だから」
伊達に広く様々な設備があるわけではないのだ。七不思議も何セットもある。その中には尋常でない内容のものもあるのだ。

第二百五十話　謎のシルエットその七

だからだ。ナンシーは今はだというのである。
「そういうことでね」
「わかってるよ。じゃあ今は二人で」
「河童の取材よ」
「河童ねえ。果たして本当にいるのかどうか」
「宇宙人だったりするかもね」
ここでこんなことを言ったナンシーだった。
「その可能性もあるかも知れないわね」
「宇宙人もなんだ」
「河童って正体がよくわかっていないのよ」
「妖怪だしね」
妖怪とはそのままだ。正体不明という意味もあるのだ。
「だったらね」６４
「正体がわかっていないのなら」
「妖怪の可能性もある」
「そうなるからね」
「ううん、宇宙人だとしたら」
ジョルジュはそのケースについても考えた。
そしてだ。こんなことをナンシーに話した。
「ＵＦＯがいても不思議じゃないよね」
「それ普通にあるわよね」
「宇宙人っていうか」
この表現は古いが。別の表現もあるのだった。
「他の知的生命体っていったらね」
「だったらＵＦＯは付きものよね」
「セットだからね、この二つって」
「そうでしょ？だからね」

「それが出て来る可能性もあるね」
「それが出て来てもよ」
どうなのかとだ。ナンシーは声に気合を入れていた。
「取材するわよ。特ダネ狙いよ」
「世紀のスクープゲットだね」
「八条スポーツの一面よ」
八条学園ではあまりにも有名な。お笑い新聞だ。誰がどう見てもわかる誤報で笑いを取る、そうしたスタンスの新聞紙なのである。
「それも本当の記事でね」
「八条スポーツでそれね」
「ええ、珍しく真実の記事でね」
それだけ誤報が多いのである。意図的なだ。
「書けるわ」
「そして僕もね」
「女の子のきわどい写真だけじゃないわね」
「いや、それは新聞には載せてないから」
それはすぐに否定したジョルジュだった。それはないとだ。
「そういう写真はね」
「けれどメインで撮ってるわよね」
「撮ってはいるけれど」
「その写真どうしてるのよ」
「自分で持ってるよ」
そうしているというのである。自分で保管しているというのだ。
「ちゃんとね」
「ちゃんと？」
「そう、自分で保管してるから」
それはないというのである。
「ちゃんとしてるから」
「ネットに流れたりとかしないわよね」
「そういうこともないから」

安心していいというのである。
「っていうかそれって僕がまるで変態みたいな物言いだね」
「変態じゃない」
はっきりとした口調で告げるナンシーだった。
「何処からどう見ても」
「変態って。普通だよ」
「まだそう言うんだ」
「女の子のチラリとした写真ばかりよね」
「そうそう、スカートとか袖とかがね」
そうした写真を撮るのがだ。ジョルジュの趣味なのだ。だからミニスカートや半ズボンや半袖といった服装が大好きなのである。

第二百五十話　謎のシルエットその八

「そうしたきわどい写真だけれどね」
「やっぱり変態じゃない」
横目を冷たいものにさせての言葉だった。
「何処からどう見ても」
「心外だなあ」
「心外って言えるの？」
「言えるよ」
悪びれずに言う彼だった。
「自信を持ってね」
「一歩間違えたら犯罪なんだけれど」
「女の子に興味があるのは自然じゃないか」
「そうした写真を撮るのも？」
「そうだよ。男なら当然だよ」
「女の子に興味があるのはっていうのね」
「誰だって興味があるよ」
まさにだ。男ならばだというのだ。
「それはね」
「全く。そんなことを言って」
「女の子を見てるっていうんだね」
「実際に見てるし」
「まあそれはそうだけれど」
「それで撮ってるし」
そこまで見て考えてだ。ナンシーはジョルジュに話した。
「完全に変態だから」
「ううん、女の子はそういうことしないんだ」
「しないわよ」
またはっきりと言い切るナンシーだった。

「女の子はそういうチラリとかそういうことには興味ないから」
「じゃあ何に興味があるのかな」
「心よ」
それだとだ。ナンシーはジョルジュに述べた。
「心に興味があるのよ」
「何かいきなりど真ん中のストレートだね」
「悪い？それで」
「ホームランにしていい？」
「どうぞ」
そのままストレートで返すナンシーだった。
「打ち返していいわよ」
「心かあ。そう来たんだ」
あらためて言うジョルジュだった。打ち返す前にだ。
「じゃあ後輩君の性格は？」
「大好きよ」
ナンシーは言いながらその顔を赤らめさせた。顔は正面でやや俯いたものになっている。

第二百五十話　謎のシルエットその九

「素直で。真面目で」
「それに明るくて」
「謙虚でね。凄く好きよ」
「だから一緒にいるんだ」
「外見も大事だけれど」
それ以上にというのだ。
「やっぱり。まずはね」
「性格なんだね」
「性格美人って言葉もあるから」
この言葉が出された。
「それは男の子もじゃない」
「確かにね。幾ら顔がよくでもね」
「性格が悪かったらどうしようもないじゃない」
「エウロパ貴族みたいなのは？」
「最悪ね」
エウロパ貴族は連合においては最悪の性格の連中ばかりとされているのだ。傲慢で底意地が悪く陰湿で執念深いとされているのだ。
「ああいうのだと絶対に嫌よ」
「付き合うのは？」
「願い下げよ」
そうだというのだ。
「絶対に嫌よ」
「そうだよね。女の子でもそうした人だと」
「ジョルジュも嫌でしょ」
「写真に撮りたくないね」
そこまで嫌いだというのだった。ジョルジュもだ。
「性格がわかっていればだけれどね」

「そうでしょ？だからまずはね」
「性格だね」
「そうよ。性格よ」
このところを強く言うナンシーだった。
「性格ブスなんて。最悪だから」
「ううん、あの後輩君は最初はそれを見られたんだね」
「そうよ。とてもいい子だからね」
「成程ねえ。じゃあ」
「じゃあ？」
「僕もかな」
ジョルジュは自分もそうかとだ。ナンシーに尋ねるのだった。
「僕も。そうなのかな」
「ジョルジュもって？」
「僕達。親友だよね」
「そういう関係ね」
「僕を親友って認めてくれるのは」
ナンシーを見ながらの言葉だった。
「やっぱりあれなのかな。僕の性格を見てくれたからかな」
「確かにジョルジュはドスケベよ」
ナンシーがジョルジュにまず言うことはこのことだった。これはナンシーだけでなく他の誰もが言うことだった。ジョルジュのその部分はだ。
「盗撮マニアだし。その辺り変態だし」
「変態だったんだ、僕って」
「ええ。けれどね」
それでもだとだ。ここでナンシーは本題に入った。
「気配りしてくれるし。人の嫌なことは言わないし」
「自分がされて嫌なことはしないよ」
「それに私の相談にいつも乗ってくれるわよね」
「頼まれたら基本的には断らないよ」

また応えるジョルジュだった。
「そういう相談もね」
「だからよ。嫌いじゃないわ」
「それで親友でいてくれるんだ」
「逆に考えてみたらジョルジュもじゃないの？」
ナンシーは話を切り返してきた。
「ジョルジュも。やっぱり」
「ナンシーの性格？」
「それ、どう思うかしら」
「素直じゃないけれどね」
中々そうはなれない彼女の性格はわかっているのだ。
「けれどそれでもね」
「それでもなのね」
「意地悪じゃないし。一途だし純情だし」
「だからいいの」
「そういうところ。嫌いじゃないから」
ナンシーに微笑みを向けての言葉だった。
「だからこうしてね」
「親友でいてくれるのよね」
「そうなるね。じゃあその親友同士でね」
「そうね、それじゃあね」
話が戻った。お互いに意を決した顔になって話をしてだった。
そのうえで河童が写っていた池のところに来た。そしてそこで取材をはじめるのだった。

謎のシルエット　　完

２０１１・５・３

第二百五十一話　胡瓜その一

胡瓜

池のほとりに狼とゴリラを連れてだ。ナンシーとジョルジュは来た。そこでだった。

ナンシーがだ。ジョルジュに言うのだった。周りは夜に入ろうとしている。その急激に暗さを増していく世界の中で彼に顔を向けている。

後ろの空はもう青から夜の帳に移ろうとしている。星も輝きだしている。木々も校舎もその色をなくし黒の幕でその身を包もうとしている。

その中でだ。彼女は言うのだった。

「河童だからね」

「河童っていったらやっぱり」

「胡瓜よね」

それだというのである。

「胡瓜が好きだったわよね」

「そうだね。河童っていったらね」

「それを出してね」

「誘い出すんだね」

「そうしましょう」

これが彼女の提案だった。そしてだ。

今着ている上着の胸ポケットからだ。大きなダンボールの箱を出してきた。そこに。

「この中にあるから」

「ダンボール単位なんだ」

「そうよ。こうした場合は思い切らないとね」

「河童の好物を出してそうしてね」

「河童をおびき出すのよ」

まさにだ。釣り餌だというのだ。
「これでね」
「ううん、何か定番だね」
「確かに定番ね」
それは否定しないナンシーだった。
「河童に胡瓜はね」
「そうだね。けれどなんだね」
「やっぱりこれでしょ」
また言うのだった。
「胡瓜が一番だからね」
「うん。ただね」
「ただ？」
「ゴリラに食べられないようにしよう」
彼等が今連れているだ。そのゴリラにだともいうのだ。
「ゴリラって胡瓜も食べそうだしね」
「完全なベジタリアンだしね」
「そうだよね。だからね」
それでだというのだ。ジョルジュもゴリラの菜食主義は知っているのだ。
「それは気をつけてね」
「ゴリラは賢くて大人しいけれど」
またゴリラのその性質が話される。
「それでもつまみ食いとかあるよね」
「あるわね、確かに」
「だったらそれはね」
「注意しないと駄目ね」
「そうそう。それで何か考えてる？」
「考えてるわ」
即答だった。ナンシーは話した。
「ちゃんとね」

「そうなんだ。もう考えてるんだ」
「そう。実はこの子だけれど」
そのゴリラを見ながらだ。ナンシーは話すのだった。見ればその場に座ってだ。そのうえで静かにしている。実に大人しく思慮深げな感じだ。
「ある程度だけれど人間の言葉わかるの」
「そこまで賢いんだ」
「そう、だからね」
それでだというのである。
「ちゃんと駄目って言ったら」
「それで大丈夫なんだ」
「そう。こっちの子もね」
今度は狼を見ながらジョルジュに話した。
「この子も大丈夫だから」
「ちゃんと駄目って言ったら聞いてくれるの」
「そう。賢い子だから」
狼の方もだというのだ。賢いというのである。
「ちゃんと聞いてくれるの」
「何か有り難いね」
「そうでしょ。有り難いでしょ」
「うん、この場合はね」
そうだとだ。ジョルジュも話す。

第二百五十一話　胡瓜その二

「本当に有り難いよ」
「それでだけれど」
ナンシーはさらに話す。
「胡瓜を。これからは」
「どうするの？その胡瓜を」
「お池に流しましょう」
そうするというのである。具体的にはだ。
「胡瓜を置いてそれでね」
「それで？」
「私達は木の陰にでも隠れて」
「わかったよ。それで河童が出て来たら」
「写真に撮ればいいのよ」
これがナンシーの考えだった。
「そうすればどうかしら」
「いいね」
ジョルジュもだ。納得した顔になった。
そしてその顔でだ。ナンシーに応えるのである。
「それならね。いけるね」
「若し。河童が私達に気付いて」
その場合についてもだ。ナンシーは考えていたのだ。今回の彼女は実に用意周到だった。恋愛の時とは全く違っていた。本来の彼女と言っていい。
「それで私達のところに来てもね」
「それでもだね」
「そうよ。その為にこの子達がいるから」
ここでも狼とゴリラを見て話す。
「安心していいわ」

「二重三重って感じだね」
「実際にそうよ」
二重三重なのは確かだというのだ。
「河童がそんな怖いのだったらね」
「妖怪だしね、その辺りはね」
「妖怪って何するかわからないから」
だから妖怪と言ってよかった。人間では理解できない行動を取ることも多い。少なくとも人間の世界とは別の世界の存在なのだ。
「そうでしょ？だからね」
「ううん、その河童って昔から日本人に親しまれてるけれど」
「河童巻きって言葉あるしね」
「そうそう」
今度は河童巻きの話だった。胡瓜の巻き寿司だ。
「ああしたところに河童への親しみが出てるわよね」
「実際にいるかどうかわからないのにそれでも」
「河童ってあれなのかしら」
ナンシーは言う。
「キジムナーとかそんなのと同じかしら」
「琉球の妖怪だね」
「あのお魚の片目を食べるね」
キジムナーの好物である。キジムナーは漁師が獲った魚の片目だけを獲ってそれを食べるのだ。キジムナーの特徴の一つである。
「そういえば河童とキジムナーって似てるわよね」
「ああいう感じで親しんでるのかな」
「人を殺しかねないのに」
そうした怖い存在でもだ。日本人は親しんできている。
そのことにだ。ナンシーもジョルジュも不思議に思うのだった。
「日本人ってわからないところがあるけれど」
「このことは特にだよね」
「ええ。日本人って懐が深いのかしら」

ナンシーの言葉だ。
「それでなのかしら」
「そんな妖怪でも親しむのかな」
「それにね」
さらに話すのだった。
「鬼もそうよね」
「ああ、鬼だね」
「そう、鬼よ」
もう一つのだ。日本人に昔から親しまれている妖怪だ。
角が生えていて虎の腰巻を身に着けていて金棒を持っている。この姿は日本人がこの時代でもイメージするだ。鬼の姿である。

第二百五十一話　胡瓜その三

その鬼についてもだ。彼女は話すのだった。
「あれはもっと怖いわよね」
「確実に人を食べるからね」
「鬼とか悪魔って表現もあるし」
「それでも日本人って鬼とも親しんでるのが」
「不思議なのよ」
ナンシーは言った。
「その辺りね」
「感性が独特なのかな」
「そうね。感性がね」
「日本人の感性って。そういう存在でも親しむんだ」
「その辺りがわからないわ」
ナンシーも首を傾げさせることだった。
「どうしてもね」
「そうだね。けれどね」
「けれど？」
「その河童が出て来たら」
「そうね。写真に撮ってね」
その話に戻った。現実の話にである。
「それで記事にしましょう」
「記事だね」
「八条スポーツの一面ね。絶対に書くわよ」
意気込みを見せる。そのうえでだった。
池に胡瓜を撒いていく。その胡瓜達が池にぷかぷかと浮かぶ。それは胡瓜を洗っている様にも見える、そうした風景ができてしまっていた。
そしてだ。その池を見ながらだった。ナンシーがまた言った。

「さて、これでね」
「物陰に隠れてだね」
「そう。見つからないようにしてね」
「そうしてだね。待とう」
「河童が来るのをね」
「河童ね。出て来たら本当に凄いね」
「私の予想だけれど」
どうかとだ。ナンシーはジョルジュに話す。
「多分出て来ないわね」
「出て来ないんだ」
「こうした話の常でね」
どうかというのだ。ナンシーは冷静である。
「写真には写っても。実際に出て来るとなると」
「それはないんだ」
「それが常だからね。まあそれならそれでね」
「いいんだ」
「胡瓜は回収して後で食べればいいし」
まずは胡瓜についての話だった。
「ゴリラにもあげてね」
「それも忘れないんだ」
「だって。わざわざ連れて来たから」
そのだ。報酬だというのである。
「その御礼はしないとね」
「そうだね。じゃあ狼にも？」
「ソーセージがあるわ」
実際に懐からだった。ナンシーは大きなソーセージを出してみせた。赤い肉が腸の中に詰められている。茹でるか焼けば実に美味そうだ。
「これをあげるわ」
「成程、狼にはそれだね」

「そう、これをあげるから」
ナンシーはそのソーセージを手にしたまま話していく。
「そうするから」
「報酬はその胡瓜とソーセージで」
「記事は適当に書くから」
もう一つの重要課題の話にもなった。
「八条スポーツらしく胡散臭い記事でいくわ」
「胡散臭いねえ」
「そう、河童が出た!?ような気がするとか」
実にだ。スポーツ新聞らしい記事であった。この時代においてもスポーツ新聞はまともな記事を求められはしない。如何に笑えるかが問題なのだ。
「ジョルジュも写真はね」
「あの写真とか?」
「いいえ、溶解博物館の河童のハリボテ撮って」
それだというのである。
「それを記事と一緒に載せるから」
「いつもの展開でいくんだ」
「そう、八条スポーツのいつもの展開でね」
まさにそれだというのである。
「そういうことだから」
「わかったよ。それじゃあね」
ジョルジュもそれで頷くのだった。

第二百五十一話　胡瓜その四

「それでいこう」
「そういうことでね。さて」
ここまで話してだった。あらためてだ。
二人は木陰にゴリラと狼を連れて隠れる。そのうえで池を見守る。
暫くは何もなかった。それを見てだ。ナンシーが言う。
「一時間して何もなかったら」
「帰る？」
「カメラ置いてね」
そのうえでだというのである。
「帰りましょう」
「ビデオカメラを置いて帰るんだね」
「そう、それに映っていれば御の字でね」
やはりだ。河童が実際に見られるとはだ。思っていないのだった。
「それでいいわよね」
「いいと思うよ。それじゃあね」
「ええ、それじゃあ一時間したらね」
「胡瓜を回収してそれで」
「帰りましょう」
「胡瓜かあ」
ジョルジュは自然とその胡瓜の話をした。
「もろきゅっていいよね」
「ああ、あれね」
「そう、もろみをたっぷりと付けてね」
それで食べる。連合において今もある胡瓜の代表的な食べ方の一つである。
「あれがいいからね」
「後は野菜スティックにしてもいいし」

「サラダに入れたりとか」
「どれもいいからね」
「和食だけじゃないのよ」
ナンシーは笑顔で話す。
「胡瓜は色々使えるのよね」
「そうだね。それにしても」
「それにしても？」
「ナンシーって胡瓜好き？」
ジョルジュはナンシーに尋ねた。
「色々な食べ方知ってるけれど」
「ええ、好きよ」
実際にこうだと答えるナンシーだった。
「あっさりしてるし食べやすいしね」
「それでなんだね」
「だから好きなのよ。実は今も」
今の時点でだ。どうかというのだ。
「あの胡瓜ねえ」
「食べたい？」
「ええ、食べたいわ」
池の上に撒き餌として撒かれているその胡瓜を見ての言葉だった。
「実はね」
「じゃあ河童が出なかったら」
「ゴリラに報酬としてあげるけれど」
それは忘れない。律儀なのである。
「それでもね。胡瓜はね」
「食べたいんだね」
「ええ。他には西瓜も好きなのよ」
それも好きだというのだ。西瓜もだ。
「胡瓜と匂い似てるし」
「というか同じ種類じゃなかったっけ」

そのだ。胡瓜と西瓜はというのだ。
「どっちもね」
「そうよね。西瓜も胡瓜もね」
「瓜だからね」
その種類なのだ。だから匂いが同じなのも道理だ。しかしであった。
ナンシーはここでだ。こんなことも言った。
「じゃあ河童って西瓜も好きなのかしら」
「西瓜もかな」
「だって。河童って胡瓜好きじゃない」
そのことが前提になっての話だった。
「だからね。西瓜もね」
「好きなのかな」
「そうじゃないかしら。ひょっとして」
「じゃあ西瓜も置いてみる？」
ジョルジュはこう提案した。
「西瓜もここでね」
「そうね。それじゃあね」
ジョルジュの言葉に頷いてだ。すぐにだった。

第二百五十一話　胡瓜その五

ナンシーは今度もポケットからだ。西瓜を出したのだった。
そしてそれをこれまたポケットから出した包丁で切ってだ。そのうえだ。
すぐに池の方に出てだ。そのほとりに切った西瓜を置いてだ。木陰に戻った。
それでジョルジュに話すのだった。
「これでいいわね」
「西瓜もなんだ」
「そう、どうなるかしら」
ナンシーは西瓜を見ながら話す。
「果たして出て来て食べるかしら」
「どうかなあ」
「まあ出て来たら本当に御の字で」
この考えは変わっていなかった。ナンシーは河童が実際に出て来るとはあまり思っていなかった。ＵＭＡや妖怪の常としてである。
「出て来ないのなら西瓜も食べてね」
「食べものが豪勢になってきたね」
「そうね。なってきたわね」
西瓜と胡瓜だからだというのだ。
「胡瓜で野菜スティックにサラダで」
「デザートに西瓜でね」
「贅沢になってきたわね」
「ゴリラって西瓜も食べたっけ」
ジョルジュはゴリラのことも話した。
「それも食べたっけ」
「甘いものも食べるわよ」
「そうなんだ」

「ええ。だからゴリラって完全なベジタリアンだから」
このことが大きかった。とにかく肉も野菜も食べないのだ。
「果物も食べるから」
「だから甘いものもなんだ」
「そうなの。そういえば河童って」
「河童って？」
「こんな話を聞いたけれど」
ナンシーの聞いているその話だった。
「ある人が川で岩魚を獲って食べてたら」
「そこに河童が来たんだ」
「それで一匹獲って食べて来たのよ」
そうだというのだ。河童が岩魚を獲ったというのだ。
「焼いている岩魚をね」
「河童は魚も食べるんだね」
「雑食みたいね」
河童の生態であった。妖怪だから当然だがその生態には謎が多い。しかし人気のある妖怪だからその生態は妖怪の中では詳しく知られている方だ。
「どうやらね」
「河童は雑食なんだね」
「御魚は食べるかもね」
「というかその話って河童が実際にいるってことにならない？」
漁師から岩魚をすくねて食べたその話が事実ならというのだ。
「凄い話じゃない」
「まあそうだけれどね」
「じゃあ今回もひょっとしたら」
「写真に撮れるかもっていうのね」
「そうかもね」
こう言うのだった。
「河童がそこまで人前に出て来るのならね」

「河童ってそういえば」
ふと言うジョルジュだった。
「あれだね」
「あれって？」
「童話とかだと人懐っこいよね」
彼が言うのはこのことだった。
「それもかなり」
「そうね。人間慣れしてるわね」
「だったら、かな」
ジョルジュは考える顔で話していく。
「河童も僕達の前に普通に」
「出て来るかもね」
「その場合は仕方ないね」
「胡瓜のことよね」
「食べられるよ」
そもそも撒き餌である。それならばだった。

第二百五十一話　胡瓜その六

「その場合はね」
「仕方ないわね。その場合はね」
ナンシーも元より覚悟のうえであった。そのことは。
「食べられるわ」
「特ダネを優先させるね」
「させるわ」
まさにそうするというのである。
「だってその為だから」
「ううん、それじゃあね」
「ええ、そういうことでね」
「いいか」
「また別の胡瓜を食べるわ」
こうした話をしてだった。二人はだ。
胡瓜を餌にしてそのうえで河童を待つのだった。するとだ。
暫く経ってだ。池がだ。
その水面が動いた。そしてであった。
「出た！？」
「ひょっとして」
「河童が？」
「来た？」
二人はそう思った。しかしだった。
それはただの魚だった。水面で跳ねただけだった。ジョルジュはその魚が跳ねたのを見てだ。いささかがっかりとした顔で言ったのだった。
「何だって感じだね」
「そうね」
ナンシーもその口調だった。

「河童かって思ったけれど」
「お魚だったね」
「お魚が跳ねるのはいつもだからね」
ナンシーは言う。
「けれどがっかりしたわ」
「本当にかと思ったからね」
「ええ。けれどね」
「けれど？」
「まだ待とう」
こう言うジョルジュだった。
「まだね。もう少しね」
「もう少しね」
「うん。来なかったらカメラ置いていけばいいから」
話は先程と同じ内容になっていた。
「それまではね」
「そうしましょう。とりあえずは」
「とりあえずは？」
「お腹空かない？」
少し苦笑いになってジョルジュに尋ねたのだ。
「ちょっとね」
「うっ、そういえば僕も少し」
「そうよね。何か待ってるだけでも」
「緊張してるせいかな」
それでカロリーを消耗したのではないかというのだ。
「そのせいかな」
「そうかもね。それじゃあね」
「ええ、じゃあね」
「うん、じゃあ？」
「はい、これ」
ナンシーはあるものを出してきた。それは。

パンだった。その黒いコッペパンを差し出してだ。ジョルジュに話すのだった。
「これ食べる？」
「ああ、パンだね」
「中にはクリームが入ってるわ」
クリーム黒パンというわけだ。
「それでいいかしら」
「うん、有り難う」
笑顔で応えるジョルジュだった。
「それじゃあね」
「どうぞ」
そのコッペパンをジョルジュに手渡した。無論彼女もだ。同じパンを出して食べる。そうしながらだ。
「飲み物はね」
「あっ、それ？」
「僕が持ってるから」
ジョルジュが言う。

第二百五十一話　胡瓜その七

「はい、これ」
「定番ね」
「牛乳ね。どうかな」
「有り難う」
今度はナンシーが笑顔で受け取るのだった。
「それじゃあ。パンと牛乳を食べながら」
「張り込みだね」
「張り込みになるの？」
「この場合はなるんじゃないかな」
ジョルジュは考える顔で答えた。
「実際に陰からこうして見てるし」６
「そうね。言われてみたら」
「そうだよね。やっぱりそうなるよね」
「それじゃあ」
どうなのか。頷いてから答えるナンシーだった。
そのうえでパンと牛乳を食べる。やはり張り込みだった。
その張り込みの間にゴリラと狼にもだった。
「はい、これね」
「食べてくれよ」
ゴリラにはセロリ、狼には干し肉をだ。二人は差し出した。
彼等もそうしたものを美味そうに食べる。それを見てだ。ジョルジュはあらためてナンシーに対してだ。こんなことを言うのだった。
「やっぱりゴリラって菜食主義なんだね」
「そうよ。お肉は絶対に食べないのよ」
「虫も？」
「食べないわ」
動物性タンパク質は一切だというのだ。

「何があってもね」
「本当に完全に野菜や果物だけしか食べないんだ」
「意外でしょ」
「知ってるけれどね」
ゴリラのだ。そうしたことはだというのだ。
それでもだ。彼はこうも言った。
「けれど。外見だけ見たらね」
「そうは思えないわよね」
「怖そうだから」
そのだ。いかつい顔を見ての言葉だった。
「その顔を見たらね」
「怖いわね、確かに」
「狼だってそうだよね」
ジョルジュは狼の話もした。
「人、襲わないんだよね」
「それどことか育てるから」
狼に育てられた狼少年はこの時代でも存在する。
「狼もそういうことはしないから」
「誤解されやすいね、どっちも」
「そうなのよ。ゴリラはとても大人しくて」
そしてだというのだ。
「狼は人を襲わないわ」
「何で誤解されたのかな」
「エウロパでそう思われていたからじゃないの？」
連合にとっての永遠のヒールがまたしても登場した。
「狼ってエウロパじゃ家畜を襲ってたじゃない」
「それでゴリラは胸を叩いて威嚇するから」
「そういうので悪者って思われたんじゃないかしら」
「赤頭巾ちゃんとかでなんだね」
「あと狼と七匹の子山羊ね」

狼を悪役にしてしまった二つの童話である。どちらも連合にも伝わってこの時代にも残っている。他には三匹の子豚もそうである。

「そういう童話にもなってるし」

「狼少年もあったよね」

「エウロパじゃ狼はいつも悪役だから」

やはり家畜を襲うからである。

「昔は狼を退けることは難しかったからね」

「今じゃ何とでもできるけれどね」

「昔は銃もなかったし」

それでなのだった。狼は災厄以外の何者でもなかったのだ。エウロパにおいてはそう考えられていたのである。

「そういうことでね」

「あの連中ってすぐに他人のせいにするしね」

「エウロパ人だからね」

二人もエウロパへの嫌悪感を持っていた。それを露わにして話すのだ。

第二百五十一話　胡瓜その八

「狼を退けられない無能さを棚に上げて」
「その狼のせいにして」
「狼はいい生き物なのにね」
ナンシーは狼への好感を表に出して話す。
「誇り高いし食物連鎖に貢献してくれるし」
「草食動物も増え過ぎたら困るからね」
「そうそう。しかも孤児を育ててくれるじゃない」
「犬と同じだしね」
犬のルーツは狼にある。最早誰もが知っていることだ。
「狼って」
「犬はいいけれど狼は駄目」
その論理についてはだ。ナンシーはこう言った。
「ナンが聞いたら怒るわね」
「モンゴル人って狼が祖先だって言ってるからね」
「蒼き狼と白き牝鹿ね」
モンゴル民族の始祖とされている。トーテミズムだ。
「実際にナン狼好きだしね」
「狼も連れてるしね」
まさに犬としてだ。連れているのだ。
「馬と狼はモンゴル人にとっては絶対の生き物になるから」
「そうそう。それで狼を馬鹿にするとね」
「本気で怒るのよね、あの娘」
ナンシーはこうナンのことを話す。
「狼はそれだけの生き物だから」
「ゴリラもだね」
「どっちもいい生き物よ」
ナンシーも笑顔で話している。

「そういうことだから」
「その狼とゴリラが僕達の傍にいてくれたら」
「河童が例え何をしてもね」
「そこまで考えてたんだ」
「そのことはあまり考えてなかったわ」
素直に述べるナンシーだった。
「けれど。狼とゴリラについては信頼してたから」
「そうした動物だってことでだね」
「噂や誤った認識は好きじゃないし」
「偏見は駄目だってことだね」
「狼もゴリラもそうだけれど」
彼等を通じての話になっていた。そこからだ。
「人でもいるじゃない。偏見を受けやすい人って」
「ああいるね、確かにね」
「まあ中にはカムイとか洪童みたいにね」
彼等はどうかというとだった。
「偏見じゃなくてそのままあれな面子もいるけれどね」
「あの二人はねえ。もてることしか考えてないから」
「それが駄目なのよ」
かえってだ。駄目だというのだ。
「ガツガツしているように思われるから」
「実際にガツガツしてるしね、あの二人は」
「そうなのよね。あとテンボやジャッキーも」
クラスどころか学校でも最悪の迷探偵である。彼等の数多くの非常に悪い意味での武勇伝はだ。あまりにも有名になっているのだ。
それでだ。彼は話すのだった。
「偏見を受けていないけれど」
「偏見は受けてないね、確かに」
「皆が見ての評価だから」
偏見を受けてはいないがだ。それでもだというのだ。

「あれだけのことをやってきているから」
「ううん、困った話だね」
ジョルジュもそれを話す。
「あの二人に関しては」
「カムイと洪童もね」
「偏見と評価は違うんだね」
「全然違うわ」
それは強く言うナンシーだった。
「評価はよくしないといけないもので」
「偏見は取り払うものだね」
「そう、取り払わないといけないわ」
また偏見の話になる。それはそうしなければならないというのだ。
その話をしてだ。再びだった。
ナンシーはだ。河童がいるという池を見て話すのだった。
「河童もそうね」
「河童に対する偏見は取り払わないとね」
「そうそう、その為にも」
「河童を見ないといけないんだね」
「ええ、そうよ」
その通りだと答えるナンシーだった。
「その通りよ」
「僕達が河童に偏見があったら」
「それは取り払わないとね」
「そうね。さて」
それではだとだ。あらためての口調になった。
そのうえでだ。彼女は池を見て述べる。
「河童、出てくれるかしら」
「まだ待つ時間はあるよ」
「待つわ」
実際にそうするというのだった。

「ぎりぎりまでね」
「そうしようね」
こうしてだった。今は待つ二人だった。その河童が出るのをだ。

胡瓜　　完

２０１１・５・１０

第二百五十二話　河童その一

河童

二人は河童を待ち続ける。そうしてだった。
一時間経った。その時計を見てだ。
ジョルジュがだ。ナンシーに述べた。
「時間だよ」
「そうね」
「じゃあ。帰ろうか」
「胡瓜は明日の朝まで置いていくわ」
それはだ。そうするというのだった。
「それで朝になっても何もなかったら」
「僕達が食べてだね」
「ゴリラにもあげるわ」
そのゴリラを見てからだ。ジョルジュに話した。
「そうするからね」
「わかったよ。じゃあそうしよう」
「そういうことでね。ただね」
「ただ？」
「やっぱりこの目では見られなかったわね」
そのことをだ。残念がって話すのだった。
「仕方ないわね、それは」
「そうだね。予想していたけれどね」
「こういうのって出て来ないのよ」
ナンシーは残念な声になっていた。
「ＵＭＡっていうのはね」
「連合はＵＭＡ多いけれどね」
「その殆んどがその目で見られないからね」
連合は広い。それだけに数多くのＵＭＡが言われている。

しかしその殆んどがだ。正確に確認されていないのだ。もっとも正確に確認されればその時点でだ。ＵＭＡはＵＭＡではなくなる。
「まあ妖怪もね」
「そういうものだしね」
「考えてみれば不思議よね」
ナンシーはここでこうも言った。
「写真とかには写って。目撃例もあるのに」
「実際に捕まえたとかいう話はね」
「ないのよね」
それがＵＭＡや妖怪の特徴の一つなのだ。
「妖怪はそういうものだと考えたらそれで割り切れるけれど」
「腑に落ちないんだね」
「そう。まあ科学だけでお話してもね」
「結局は説明しきれないよね」
「科学は万能じゃないから」
ナンシーだけではなくだ。この時代は科学は万能だとは考えられてはいない。実際にこの世で万能なものなぞありはしないのだろう。
「科学で説明しきれないこともあるから」
「それも結構多いよね」
「そう、多いわよね」
「それもかなりね」
「妖怪はその最たるもので」
二人が今待っているだ。河童こそその最たるものだった。
「見つかるものじゃないんだよね」
「簡単にはね」
そんな話をしながら池を見守るのだった。そしてだ。
一時間経った。するとだった。ジョルジュがここで言った。
「一時間だよ」
「経ったのね」
「うん、それでどうするの？」

あらためてナンシーに尋ねるのであった。
「帰る？」
「そうするべきね」
ナンシーもジョルジュのその言葉に頷く。
「待っていても来ないものは来ないから」
「カメラだけ置いてそうして」
「胡瓜だけ置いてね」
それで待つというのだ。既にパンも牛乳も食べ終えている。張り込みでの必需品ももう消えてなくなってしまっているということだ。
それもあってだった。二人は決めたのである。
「じゃあね」
「もうこれでね」
カメラを置いた。そのうえでだ。
二人はその場を去ろうとする。ところが。
不意にだった。狼とゴリラがだ。池の方を見て威嚇する顔を見せた。

第二百五十二話　河童その二

それを見てだ。すぐにだった。ナンシーは察したのだ。
「まさか」
「まさかって？」
「そう、出たかも知れないわ」
こうジョルジュに言うのだった。
「その河童がね」
「河童がなの」
「そう。出て来たかも知れないわ」
こう言ってだ。ナンシーはすぐにだ。
ジョルジュではなく狼とゴリラに顔を向けてだ。こう囁いた。
「今は静かにね」
「彼等を静かにさせるんだね」
「そう。声が漏れたら駄目だから」
それでだというのだ。
「だからね。ここはね」
「慎重だね」
「見つからないに越したことはないわ」
「それでなんだ」
「そう。今は静かにしてもらうわ」
ナンシーは狼とゴリラの首を撫でながらジョルジュに話す。
「声をあげてもらう時はあげてもらうから」
「今はその時じゃないんだ」
「そう思うから」
「わかったよ。それじゃあね」
こうしてだった。二人は再び木陰に隠れた。そのうえでだ。
池の様子を見守る。するとだ。
池の水面が騒ぎだした。そしてだった。

そこからまずはだ。皿が見えた。
「皿！？」
「皿だね」
ナンシーもジョルジュもそれを見て話す。
「あれはそうだね」
「そうね。お皿ね」
ナンシーはジョルジュに対して述べた。
「あれはね」
「お皿ってことは」
「本当に出て来たのかも」
ナンシーは真剣な顔で呟いた。
「河童が」
「まさか。本当にいるのかな」
「それはこれからわかることよ」
池の水面を見続けながら。ジョルジュに話す。
「これからね」
「そうだね。これからね」
「いい？動いたら駄目よ」
「動いたら。見つかるね」
「できたら気配も消して」
これはジョルジュだけでなくだ。狼とゴリラにも告げている言葉だ。
「そうしてね」
「うん、わかったよ」
ジョルジュはナンシーに対して頷いた。勿論狼とゴリラもだ。
「そうしてね」
「そうするわ」
こうしてだった。彼等はだ。
様子を見守る。池を見続ける。するとだ。
今度はだ。皿だけではなかった。

顔が出て来た。その顔は。
緑色でしかも嘴がある。まさにだった。
「河童だね」
「そうだね」
二人で話す。明らかにだった。
河童だった。その河童は一匹や二匹ではなかった。
何匹もいる。それを見てだ。ジョルジュが言った。
「何匹いるかな」
「ええろ」
ナンシーは指で指し示しながら数える。するとだ。

第二百五十二話　河童その三

「十五匹はいるわね」
「多いね」
「ええ、こんなに出て来るなんて」
思わなかったというのだ。
「ちょっとね」
「つまりここの池って」
「村だったみたいね」
ナンシーはそれだと言った。
「河童のね」
「河童の村だったんだ」
「河童にだって村はあるでしょ」
ナンシーはこう言ってだった。そのうえでだ。
このだ。日本の小説を話に出すのだった。
「ほら、芥川龍之介の小説であるじゃない」
「ああ、河童？」
「そう、河童」
その小説のタイトルを話すのだった。
「あの作品って河童の世界書いてるじゃない」
「ああ、そういう作品だったの」
「あれっ、読んでないの？」
「芥川の小説で末期の作品はね」
どうかとだ。ジョルジュは話すのだった。
「読んでないんだ」
「そうだったの」
「あれって芥川の末期の作品だよね」
「もう自殺する直前のね」
芥川は自殺している。精神が崩壊していたと言われ麻薬に溺れて

いたという説もある。睡眠薬を常用していたのは事実である。
「その直前の作品よ」
「その頃の芥川の作品はね」
「駄目なのね」
「読まないようにしているんだ」
そうだというのだ。
「だから。精神的に崩壊しているからね」
「確かに作品にそれが出てるわよね」
「あの頃の芥川っておかしいでしょ」
ジョルジュはそのものずばりで話した。
「明らかにね」
「それはそうだけれどね」
「だから。ちょっとね」
それでだというジョルジュだった。
「あの作品はね」
「成程。それでなのね」
「うん、だからその作品は読んでないんだ」
はっきりとナンシーに話した。
「河童だけじゃなくて芥川の末期の作品はね」
「確かに。読んでいたらね」
「あれだよね。やっぱり」
「おかしいと思うわ」
ナンシーも言うのだった。その時の芥川はだ。
「あれってね」
「とりあえず点鬼籍を読んで」
所謂闇魔帳のことである。中国では霊を鬼と呼ぶ。それでこの表現になるのだ。芥川は和漢洋とあらゆる国の教養も備えていたのである。
「ついていけないって思ってね」
「賢明って言えば賢明ね」

「賢明なんだ」
「だって。確かにおかしいから」
それはナンシーも否定しなかった。芥川の末期の精神状況がだ。
「私最後の作品まで読んだけれど」
「ええと、最後の作品って」
「或阿呆の一生とか歯車とか」
遺稿として知られている作品である。
「そうした作品よ」
「どう？読んでみて」
「感想ね」
「うん、その感想」
「きてたわね」
これがまさにだ。感想だった。
「末期症状というか何というか」
「おかしかったんだね」
「末期の芥川ってね」
ナンシーはその感想を詳しく話しだした。その芥川の作品についてだ。

第二百五十二話　河童その四

「二つの作風があるのよ」
「おかしいだけじゃないんだ」
「そのおかしさにも二種類あるのよ」
そうだというのだ。
「一つはひたすら暗鬱でね」
「それでもう一つは？」
「狂気そのものか」
「その二つなんだ」
「そう、その二つの種類があるのよ」
「河童はどっちなのかな、それで」
「暗鬱かしら」
そちらかとだ。それだというのだ。
「歯車とかは狂気でね」
「あの作品はそっちなんだね」
「まあ。狂気の作品の方が問題なのよ」
「そこまで酷いんだ」
「ううん、精神鑑定的な視点ではいいけれど」
その視点ではというのだ。
「それでもね。ちょっと読んでるとね」
「嫌になるんだね」
「なるわ」
実際にそうだと答えるナンシーだった。
「あまりお勧めしないわ」
「読むにはなんだ」
「楽しんで読もうと思うのならね」
「そうした作品なんだね」
「文学的価値も」

それについてもだ。どうかというとだった。
「芥川は多分前期の方がいいから」
「末期の作品は駄目なんだ」
「有名は有名だけれど」
それでもだというのだ。
「それでもね。作品としてはね」
「あまりよくはないんだね」
「私は前期の方が好きね」
芥川はその前期の作品で瞬く間に作家としての揺ぎ無い地位を築いた。羅生門や鼻といっただ。古典を題材にした作品によってだ。だが、だ。そこから作風を変えようとしてだ。行き詰まり変わってしまったのだ。
「やっぱり末期はね」
「そういうことだね」
「そう、だから読むのなら前期ね」
「河童は。じゃあ」
「ああした河童じゃないわね」
目の前に今実際にいるだ。彼等とは違うというのだ。
「少なくともね」
「そうなんだ」
「そうなのよ。河童は河童でもね」
「何かが違うんだね」
「そう、違うからね」
それを話すのだった。
「河童を通して芥川の考える人間社会を書いてるのよ」
「つまり作品に投影させたんだね。河童を使って」
「そういうこと。それがその作品なの」
「ううん、じゃあその河童は人間に近いだ」
「作品自体は暗鬱としててかなりおかしいけれどやはりだ。そこは末期の芥川だというのだ。

「それでも人間の世界だね」
「ええ。ただあの河童は」
話はまた、だ。目の前の河童に戻った。
彼等は餌に置かれていた胡瓜や西瓜を美味そうに食べていく。そうして食べながらだ。あれこれと何かを話しているのだった。
その話を聞いてだ。ジョルジュがナンシーに言った。
「何を話してるのかわかる？」
「河童語みたいね」
それだと話すナンシーだった。
「だから。何て話してるのかは」
「わからないよね」
「何かケペケペって言ってるけれど」
それはわかるのだった。しかしそれ以外はだった。

第二百五十二話　河童その五

「それでも。何て言ってるのかしら」
「とりあえず僕達には気付いてない？」
「こっちは見てないわね」
「仲間内であれこれ話してるけれど」
「何なのかしら」
それがわからなかった。河童語は全くだった。
「ううん、じゃあ今は」
「このまま隠れて見ている方がいいね」
「下手に動いたらまずいわ」
ナンシーは警戒する目で言った。
「見つかったらね」
「そうだね。それじゃあね」
「ええ、動かないでここにいましょう」
「うん、それじゃあね」
「そうしましょう」
こう話してだった。二人は様子を見守るのだった。河童達はというと。
「ケペペ」
「ケペペエ」
「ケペッペ」
やはりだ。二人には何を言っているのかわからない。胡瓜や西瓜を食べながら話をしていることはわかる。わかるのはそれだけだ。
そしてだ。狼にゴリラもだ。
警戒はしている。しかしだ。
やはり動かない。彼等もだった。
「動かないね」
「この子達もわかってるのよ」

ナンシーがジョルジュに話す。
「今は動くべきじゃないってね」
「それがわかってるからなんだ」
「ええ、動かないのよ」
それでだというのだ。
「あえてね」
「けれどこっちに来たら」
「この子達も動くわ」
河童達がこちらに来たならばだというのだ。
「その場合はね」
「そうなんだ。その場合は」
「それまでは安心していいわ」
ナンシーは落ち着いている。そのうえでジョルジュに話す。
「本当にね」
「かえって動いたらまずい」
「焦りは禁物よ」
こうも話すナンシーだった。
「焦って失敗した話は多いからね」
「そうだね。焦らなくてもいい話で焦ってね」
「失敗したら馬鹿よ」
ナンシーはこうまで言った。
「そうはなってはならないからね」
「だよね。本当にね」
「そう。だから今は」
「待っていましょう。慎重にね」
「そうしようね」
こうしてだった。二人と狼、そしてゴリラはだった。
慎重にだ。木陰に隠れてだった。様子を見るのだった。河童達はだ。
相変わらず胡瓜や西瓜を食べている。そうしてだった。

食べ終わるとだ。それでだった。
池の中に戻ってしまった。これで終わりであった。
その光景を最後まで見届けてからだ。ナンシーはだ。
ジョルジュに顔を向けてだ。そうして言うのであった。
「写真、撮った？」
「撮ったよ」
ジョルジュはすぐに答えた。
「何枚もね」
「そう。よかったわ」
「これでいいよね」
ジョルジュはナンシーに問い返した。
「写真に撮ったから」
「いいわ。ジョルジュの仕事はそれで終わりよ」
「うん。あとはね」
そのだ。河童を撮ったカメラを見ながら話すのだった。

第二百五十二話　河童その六

「ネガから復元してね」
「それを新聞の一面に載せて」
「それでナンシーは記事を書いてね」
「ええ。私の仕事はね」
見ればだ。彼女はその手にペンとレポート用紙を持っていた。既にそのレポート用紙にはだ。文章が書かれていた。それもかなりの量がだ。
「もう終わったわ」
「あれっ、速いね」
「後はこれをワードに打ち込んで」
そのだ。パソコンのだ。
「それで終わりよ」
「速いね」
「速筆も芸のうち」
にこりと笑ってこう言うナンシーだった。
「それは絶対に生きるものよ」
「今みたいにだね」
「そういうことよ。さて、それじゃあね」
「部室に帰ろうか」
「そうしましょう。じゃあ写真の復元御願いね」
「そうさせてもらうね」
こう話してであった。二人はだ。
池のほとりから帰る。だがそこでだ。
ジョルジュはだ。ふと思い出した様にナンシーに言った。
「そうそう、ゴリラと狼だけれど」
「この子達ね」
「そう、この子達」

こうだ。その狼とゴリラを見ながら話すのだった。
「ちゃんと動物園に返さないとね」
「そうね。今回は幸い何もなかったけれど」
「頼りにさせてもらったし」
ジョルジュは微笑んで狼の頭を撫でた。撫でるとだ。犬の様にその目を細めさせる。それはまさに犬そのものの仕草であった。
「御礼もしてね」
「御礼も用意してあるから」
「ああ、さっき言ってた」
「そう、それをあげてね」
それからだというのだ。
「それもしてね」
「動物園で渡すんだね」
「そうしましょう。それじゃあね」
「まずは動物園に寄って」
それで動物達を戻してというのだった。その話をしてだ。
彼等はだ。笑顔でだ。
動物園に寄ってそれでだった。ゴリラと狼にだ。
野菜や果物、それに肉をあげてだ。笑顔でこう言うのだった。
「一緒に来てくれて有り難う」
「御疲れさん」
ナンシーもジョルジュもだ。にこりと笑っている。そのうえでの言葉だった。
「幸い河童はこっちには来なかったけれど」
「一緒にいてくれてよかったよ」
感謝の言葉を二匹に話す。そうしてだった。
そのうえでだ。二人は新聞部の部室に戻ってだ。それでだった。
記事を完成させる。それで終わりだった。
記事を完成させてからだ。ジョルジュはだった。ナンシーに尋ねた。丁度部室を出る時にだ。

「それでだけれど」
「それで？」
「今日は彼とは一緒にいないのかな」
こう彼女に尋ねたのである。
「あの彼とは」
「今からよ」
「今から？」
「そう、今から」
見ればだ。ナンシーの顔はにこやかに笑っていた。
そしてその笑顔でだ。ジョルジュに話すのである。
「今から待ち合わせしてね」
「デートなんだね」
「彼も彼で取材行ってたし」
「ああ、そうだったんだ」
「今日はアメフトの方にね」
八条学園には様々なスポーツ部が存在する。アメフトもあるのだ。
「そっちに行ってるから」
「それで今からなんだ」
「そう、待ち合わせをしてね」
またそのことを話すのだった。

第二百五十二話　河童その七

「これからね」
「それは忘れないんだね」
「忘れないわよ」
絶対にといった口調であった。
「忘れたらもう生きている意味がないわよ」
「言うね。何かそれってね」
「それって？」
「そのまま恋する女の子だね」
ジョルジュは笑ってナンシーに話した。
「そうなってるね」
「何かそう言われると」
ジョルジュの今の言葉を聞いてだ。ナンシーは。
困った顔になってだ。こう返したのだった。
「恥かしいけれど」
「恥ずかしい？」
「ええ、恥ずかしいわ」
実際にそうだというのである。
「恋するって」
「実際にしてるじゃない」
「だから。そういう言い方はね」
「わかったよ」
そんな恥ずかしそうなナンシーを見てだった。
ジョルジュも折れた。それでだった。こう言うのだった。
「じゃあ。言わないよ」
「そうしてくれたら助かるわ」
「そういうことでね。それじゃあね」
「うん、じゃあね」

「帰ろうか」
「ええ。それにしても」
ここでナンシーの話が変わった。
「何かね」
「何かって？」
「河童がいるって記事に載せても皆信じないわよね」
「まあ普通は信じないね」
それはジョルジュも頷くことだった。
「しかも八条スポーツの記事だし」
「スポーツ新聞の記事ってネタだしね」
「そう、如何に笑いを取るか」
そうした新聞もあるのだ。
「そして注目されるかだからね」
「まあ誰も信じないわ」
彼等が書いて撮っただ。その河童の記事をだというのだ。
「信じる方がおかしいわよね」
「僕達前科があるしね」
「八条スポーツではね」
二人でだ。そうした前科も持っているのだ。
「宇宙人の化石ね」
「実際はあれハリボテだったし」
それを化石だと言ってだ。新聞の一面に持って来たのである。勿論その記事を信じた教師も生徒もいない。それこそ一人もだ。
「それやったしね」
「だから今回も信じないわね」
ナンシーは断言さえする。
「誰もね」
「そうだね。誰もね」
「けれどそれでいいのよ」
それでもだというのだった。

「むしろその方がいいから」
「誰も信じない方が」
「結果としてね。河童なんているとわかったらね」
「しかもこの学校に」
「大騒ぎになるわ」６０
「だよね、やっぱり」
「それを狙ってもいたけれど」
こんなことも言うナンシーだった。
「実はね」
「スクープで？」
「そう、それでね」
そうした場合もだ。ナンシーは考えていたのだ。
「けれど考えてみたら結局はね」
「誰も信じないね」
「ＵＭＡだったこの星にもいたんだってことで話は済むけれど」
その星にいないと思われている生物が目撃された場合に認定されるのがこの時代のＵＭＡなのだ。だからこれはさして驚くことではないのだ。
「けれど。妖怪は」
「いないって思う人が多いし」
「そうなのよね。だからね」
「こうして大々的なら余計に」
「信じないわね。まあそれならそれでいいわ」
ナンシーは実に大胆に割り切っていた。

第二百五十二話　河童その八

「それでもね」
「いいんだね」
「そう、売れるのは間違いないから」
新聞がだというのだ。新聞でも何でも面白ければ売れるのである。
それはスポーツ新聞ならば余計に言えることなのである。
「それならね」
「それでいいんだね」
「いいわ。普通の新聞なら残念だと思うけれど」
そこでは事実を伝えるべきと考えているからだ。しかしスポーツ新聞ではだ。ナンシーは読者を楽しませることに専念しているのだ。
それでだ。彼女もこう言うのだった。
「割り切っていきましょう」
「売れること第一で」
「そうしようか」
「だからスポーツ新聞だから」
またそのことを前面に出して話すナンシーだった。
「それでいいのよ」
「面白かったらね」
「面白くないスポーツ新聞なんてスポーツ新聞じゃないわ」
こうまで言うのであった。
「だからよ」
「それで面白さ第一で」
「売れることを考えてね」
こう話していく。
「それでいきましょう」
「そうだね。じゃあ明日の記事はこれでね」
「完成よ。大反響ね」

「大反響かな」
「また嘘を書いてるってね」
そうした意味で反響だというのである。
「凄くなるわね」
「ううん、いいような悪いような」
「いいのよ」
「スポーツ新聞だからだね」
「だからいいのよ」
「嘘だからいい」
これもまた、だった。スポーツ新聞の論理だった。
それを話しながらだ。ナンシーは話す。
「もっとも恋愛ではね」
「嘘は駄目なんだね」
「そういうの好きじゃないから」
真剣な顔での言葉である。
「やっぱりね。真面目にね」
「恋愛は真面目に真剣にだね」
「スポーツ新聞も真面目に真剣だけれど」
しかしだった。この場合はである。その意味が違っているのだった。真面目も真剣もだ。その都度内容を変えるものなのであるからだ。
「あれは嘘を吐くことに対してだから」
「ネタとしてだね」
「そう、ネタを真剣に真面目にやるのよ」
それだというのだ。
「そういう意味だから」
「それじゃあ恋愛の真面目と真剣は？」
「誠意よ」
ナンシーは言い切った。
「それなのよ」

「誠意ね」
「そう、誠意よ」
また言った。
「それなのよ」
「誠意ね。大事だね」
「誠意がないと駄目よ」
ナンシーの言葉は変わらない。その言葉を出す心もだ。
「それがないと何にもならないわ」
「じゃあ。今からその誠意で」
「彼に会うわ」
そうするというのである。
「そうするからね」
「わかったよ。じゃあ応援するよ」
ジョルジュは微笑んでそれをするというのだった。
「それでいいかな」
「有り難う」
ナンシーもだ。笑顔で応える。
「じゃあ行って来るわね」
「僕は一人か」
ふとだ。彼は寂しい顔も見せた。

第二百五十二話　河童その九

「僕も誰かそういう相手が欲しいかな」
「見つけたら？」
これがナンシーの返答だった。
「誰かね」
「誰かいるかな」
「神様が用意してくれたりするのよ」
「神様が？」
「どの神様かはわからないけれど」
そこまではだというのだ。
「けれど。神様は多いから」
「どの宗教の？」
「とりあえずどの宗教かもわからないけれど」
それでもだ。とにかくだというのだ。
「いるからね」
「ううん、変な神様じゃなかったらいいけれど」
「アナトとかは？」
バビロニアやそうした地域の戦の女神だ。かなり血生臭い女神である。
「その神様の引き寄せだったらどうかしら」
「遠慮したいね」
ジョルジュは即答した。
「だって。その神様だと絶対にね」
「血生臭い娘が来るっていうのね」
「そういう話は苦手だから」
それでだというのだ。
「できれば。優しい女神様のね」
「引き寄せで逢いたいのね」

「そうしてもらいたいね」
ジョルジュは言った。
「是非共ね」
「まあ。何もかもが引き寄せだから」
「その辺りはわからないんだ」
「人の出会いはね」
それ自体がだ。どうかというのだ。
「運命だからね」
「運命だね」
「人がどうこうできるものじゃないわよね」
「確かに」
ジョルジュもだ。頷く。
そしてそのうえでだった。また話す彼だった。
「じゃあ努力はするけれどね」
「出会いを待つことにするのね」
「ナンシーみたいなパートナーが見つかればいいね」
「あら、言うわね」
ナンシーはジョルジュの今の言葉にだ。微笑んで返した。
「私みたいになの」
「そう、ナンシーみたいにね」
こう話すのであった。
「そうなることを願うよ」
「私だって。奇跡だったから」
「奇跡だったんだ」
「そう、奇跡だったのよ」
そのだ。後輩と出会えた、そのことがだというのだ。
それを話してだ。こんなこともジョルジュに話した。
「まあ。洪童とかカムイみたいに騒がなかったら大丈夫よ」
「あの二人なんだ」
「あれは失敗する話だから」

そうしただ。反面教師だというのだ。
「ああはならないでね」
「あの二人は。ちょっと」
「悪人じゃないけれどね」
「むしろ善人だよね、二人共」
「それでももてないもてないって騒いで」
それがだ。洪童やカムイの欠点だった。人間なら誰でも欠点があるがそれでもだ。二人のそれはだ。かなり深刻な欠点なのだった。

第二百五十二話　河童その十

ナンシーもそれがわかっているからだ。それで話すのだった。
「しかももてる様に変な努力して」
「かえって駄目になってるよね」
「だから。ああはならないでね」
ナンシーの言葉は釘を刺すものだった。
「その辺りはしっかりしてね」
「それで相手を探すよ」
「まあその盗撮癖はね」
ジョルジュの欠点はそれだった。それで校内でも有名になってしまっている。もっと言えばだ。その有名は悪名とも言うものだったりする。
「仕方ないけれど」
「仕方ないんだ」
「それを受け入れてくれる相手を見つけないとね」
「何かハードルが急に高くなったけれど」
それはジョルジュ本人もだ。よくわかることだった。
「それを乗り越えていかないと駄目なんだ」
「相手がね」
「ううん、大丈夫かな」
「大丈夫な時は大丈夫よ」
「そうかな」
「ジョルジュも根は悪人じゃないし」
それは確かだった。彼は悪人ではない。
「だからそうしたいいところを見る人ならね」
「僕と付き合ってくれるんだ」
「そういう人ならね。じゃあ」
「うん、それじゃあ」

「今度こそね」
こう前置きしたうえでだ。ナンシーはジョルジュに話した。
「また明日ね」
「うん、また明日」
ジョルジュもナンシーに挨拶を返す。
「会いましょう」
「新聞の売れ行きを楽しみにしながらね」
「何気に凄いことだけれど」
校内に河童がいる、そのこと自体がだ。
「学園の七不思議よね」
「七不思議どころじゃないけれどね」
「妖怪が学校にいるなんて」
「探せば他の妖怪もいそうだね」
そのだ。ドードーを使った時の話である。その時の大騒ぎのことは二人もよく覚えているのだ。
「この学校も不思議なお話多いわよね」
「うん、一体幾つあるのかな」
こんな話を別れ際にしてであった。二人は別れた。
そしてナンシーは後輩とのデートを楽しみジョルジュは新たな誓いをした。そうして次の日の朝だ。
「新聞どうかな」
「凄いわよ」
ナンシーは笑顔でだ。ジョルジュに話した。学校の教室の中でだ。
「飛ぶ様に売れてるわよ」
「記事は大成功だったんだ」
「そう、大成功よ」
ナンシーは笑顔でジョルジュに話す。
「スクープ扱いよ」
「ネタとしてだね」

「やっぱり信じてる人はいないわね」
そのだ。河童の話をだというのだ。
「あの池に河童なんていないって皆言ってるわ」
「まあ普通はそうだね」
「そうそう。シャバキさんでもない限りは信じないわ」
「あの人はそこから宇宙人の侵略や人類滅亡に話をもっていくけれどね」
それがシャバキである。彼は精神病院に隔離されていても相変わらずなのだ。何処からか電波を受信してだ。それで喚くのである。
「けれどまあ。信じてくれなくて幸いだね」
「今回に限ってはね」
「けれどさ。そのシャバキさんがこの記事見たら」
「絶対に喚くわね」
彼の場合はなのだった。
「河童が一万人委員会とかほかの知的生命体になっていってね」
「それで人類滅亡にまでなるよね」
「いつもだからね」
「そう、あの人の場合は」
シャバキはだ。そうした人間だということは連合の常識になっている。困ったことにだ。
「それが当然のことだから」
「人類滅亡ね」
「これまで何十回主張してたかしら」
そこまで至るのだ。
「些細なことから。それこそ誰かがスプーンを落とすようなことがだから」
「人類滅亡に至るんだよね」
「何であそこまで人類滅亡が好きなのかしら」
「電波を受信してるんじゃないかな」
身も蓋もない、まさにそう言うべき今のジョルジュの言葉であっ

た。
「それでじゃないかな」
「電波ね」
「それか電波を自分で生み出しているか」
尚悪い話だった。
「それでじゃないかな」
「ううん、そうかもね」
「まああの人はそういう人だから」
「気にしたら負けね」
「そうね」
そんな話をしてだ。彼等は以後は河童の話はしなかった。しかしそれだけではなくだ。話はそれで終わりではなかったのであった。

河童　　完

２０１１・５・１８

第二百五十三話　ネットを通じてその一

ネットを通じて

シャバキはだ。相変わらずだった。精神病院の地下深くでだ。

「俺には見える！そ、そうだったのか！」

「ま、まさか！」

こう叫んでからだ。

「一万人委員会の陰謀だ！」

「四兆の人類全てを洗脳しようとしているんだ！」

「異なる知的生命体が来る！」

「リトルグレイだ！」

「宇宙規模の災害だ！」

「予言されていたんだ！」

こうだ。喚いていくのだ。

「ノストラダムスは全てわかっていたんだ！」

「火星！アンゴルモアの大総統は八条義統だったんだ！」

「黒髭！黒髭に征服され征服する！」

「バビロンの大淫婦が攻めて来る！」

「恐ろしいことになる！」

「破滅への序曲だ！」

「全ては今ここにはじまりここに終わるんだ！」

精神病院の地下数百メートルの特別の病室でだ。喚いているのだ。

そんな彼を監視カメラから観ながら。医師達は話すのであった。

「相変わらずだな」

「そうだな。これではな」

「退院は一生無理だな」

「このまま隔離するしかないな」

「出したらまた騒ぎを起こすぞ」

明らかにだ。彼は患者であった。

「言っている意味がわからない」
「人類が滅亡すると喚いているのはわかるが」
「その主張の一つ一つが矛盾している」
「過去を振り返ることがないのか？」
シャバキにはその能力が先天的に備わっていない。その他にも様々なことからだ。彼はこうして精神病院に隔離されているのである。
その彼を見てだ。医師達は話すのだ。
「入院する前からおかしいとは思っていたんだがな」
「実際にここまでおかしいとな」
「何で世の中を歩けたんだ」
「明らかな患者だろうに」
「やはり世の中おかしいな」
シャバキを通じてだ。連合社会の病理の話が為された。
「異なる知的生命体もな」
「あのリトルグレイにクトゥルフか」
「他にも色々と言っているな」
「光の巨人の敵達もいたな」
「それと一万人委員会か」
シャバキの主張には彼等もいるのだ。
「精神鑑定をしたら異常だと出たしな」
「それも極めて深刻な」
「なのに最近まで入院していなかったんだ」
「あそこまで喚いていたんだ」
「本来なら早いうちに入院させるべきだった」
「幾ら手遅れでもだ」
シャバキの精神鑑定がそう判断せきるものであるのはこの時代でも同じなのだ。とにかくだ。彼は極めて異常だと認識されているのだ。
その彼はだ。病室でまだ喚いていた。
「ネットだ！ネットを観ればわかるんだ！」

「ネットを観てもこれですしね」
「スポーツの記事が人類滅亡にまで行き着く」
「普通そうした考えにはならない」
「本人が箸を落としてもだ」
食事中によくしてしまうことがだ。これがなのだった。
「そこに至るからな」
「どういう頭の構造なんだ」
それもわからないというのだ。
「異常なのは鑑定結果でわかっているがな」
「それでもあれはな」
「即刻入院させるべきだった」
「そして一生隔離させるべきだった」
最初から治療は無理だとだ。彼等はわかっていた。

第二百五十三話　ネットを通じてその二

「それが遅れたから騒ぎを起こしてしまったな」
「幸い犠牲者はいなかったがな」
「それでも。これは問題だ」
シャバキが世にいたことそれ自体がだ。問題だというのだ。
「しかも時々脱走するしな」
「困った患者だ」
「警護をより厳重にするしかないな」
「そうだな」
こんな話をする彼等だった。そしてそのシャバキは。
今度は精神が分裂してだ。複数の人格が同時に話をしていた。
「ま、まさか！」
「な、何だってーーーーーーーーっ！！」
「ネットにも工作が進んでいるんだよ！」
こう叫ぶのだった。それぞれの人格でだ。
「だから俺達はネットも監視しなくてはならないんだ！」
「くっ、ネットまで手を及ぼすのか！」
「これが宇宙を管理する奴等の手か！」
「とんでもない奴等だ！」
「だが俺達は負けない！」
完全にだ。シャバキの中に複数の人格が登場していた。無論これもまた正常な状態でないのは言うまでもない。シャバキは正常でないのだ。
「この事態にもだ！」
「そうだ！奴等がネットで来るなら俺達もネットだ！」
「ネットの場に乗り込んでだ！」
「戦うんだ！」
「奴等の工作を阻止するんだ！」

「み、見える！」
シャバキの人格の一つが絶叫した。
「銀河はアカシックレコードの予言通りナチス第四帝国によって滅亡するんだよ！」
何故か話がそこに至った。
「ノストラダムス！奴はそこまで読んでいたんだ！」
「くっ、ノストラダムス！あの悪魔の預言者！」
予言と預言を完全に取り違えている。シャバキでは常だ。
「何もかも仕組んでいたのか！」
「恐ろしい悪魔！」
「破壊者だ！」
ノストラダムスはこの時代でも健在だった。
「悪魔の千年王国を築いて！」
「それで今もネットで工作をするのか！」
「恐ろしい魔人め！」
「俺達の存在に気付いて！」
シャバキは一人で喚いていく。同時に病室の中で暴れ回っている。
最早誰がどう見てもだ。精神病院から一生出られない患者だった。
その患者がだ。さらに喚くのだった。
「ネットの破壊工作を許してはならない！」
「ナチス第四帝国を破る！」
「アカシックレコードを操るノストラダムス！」
「奴を破壊する！」
こう叫んでだった。そのうえでだった。
パソコン、病室に患者の心の慰めに置いてあるそのパソコンのスイッチを入れてそのうえでネットに接続する。するとであった。
彼の目にだ。偶然だった。
八条スポーツの記事が目に入った。河童がだ。
その河童を見てだ。彼は言った。
「河童?学校にか」

「そうだな、これは河童だ」
「妖怪と言われている河童だ」
「間違いないな」
とりあえずまともな言葉だった。一つの口で複数の人格が喋っていること以外は。
「学校にまで河童が出るんだな」
「学校の七不思議の一つだな」
「それが新聞に出たんだな」
「成程な」
ここからがシャバキだった。まさにだ。
シャバキの人格の一つがだ。喚きだした。
「ま、まさか」
「まさか？」
「何があったんだ、一体」
「どうしたんだ？」
「この河童はラストバタリオンの尖兵なんだよ！」
こう叫ぶのであった。何の脈絡も伏線もなくだ。

第二百五十三話　ネットを通じてその三

「学校に潜伏して工作をしてるんだよ！」
「な、何だってーーーーーーーーーっ！」
またしてもこの言葉であった。
「河童もか！」
「河童も工作だったのか奴等の！」
「第四帝国の陰謀だった！」
「そうだったっていうのか！」
「悪魔はいたんだ！」
何故か悪魔になるのであった。
「それが河童なんだよ！」
「そ、そういえば河童は」
「そうだよな。前から怪しいと思っていたんだ」
複数の人格がだ。それぞれ言う。
「どうして人間社会に溶け込んでいるんだ？」
「それで胡瓜を食うんだ？」
「甲羅があるんだ？」
話に脈絡がない。何一つとして。
「尻子玉も抜くしな」
「危ない奴等だ」
「そういえば河童は妖怪だ」
「そうだ、妖怪だ」
「妖怪とは何だ！」
またしてもだ。シャバキは暴論に入る。
「妖怪は正体がわからないんだよ！」
「そうだ、何者だ！？」
「妖怪とは何者なんだ！」
こうそれぞれの人格で話していってだ。結論が出た。

「ま、まさか」
「どうしたんだ！？」
「まさか！？」
「何がわかったんだ！」
「江戸時代の文献に徳川家康が妖怪を見たという記述がある！」
いきなりだ。話は歴史になった。
「肉人という目も鼻も口もない頭と手足だけがある存在とな！」
「肉人！？じゃあその妖怪にか」
「何か秘密があるのか」
「そうなんだな！」
「そうだ、肉人はその手で天を指し示していたんだ！」
この記述自体は事実である。文献にしっかりと書かれてはいる。
「即ちこれは肉人が宇宙人という証だ！」
「そうか！それなら妖怪は宇宙人か！」
「そうなるんだな！」
「今で言う異なる知的生命体に！」
「妖怪はそうなんだな！」
「ああ、そうだ！」
シャバキの人格の中でも中心になっている存在が言う。
「妖怪は宇宙人だったんだよ！」
「な、何だってえええーーーーーーーーーーっ！」
複数の人格が同時に叫ぶ。一つの口で。
「奴等の正体は異なる知的生命体だったのか！」
「そうだったのか！」
「何ていうことだ！」
「ならこの河童は！」
「奴等はまさに！」
「ああ、そうだ！」
一つの口で次々に喚いていく。
「異なる知的生命体の侵略の手先だったんだよ！」

こうだ。シャバキはシリアスな顔で叫ぶのだった。
それを聞いてだ。シャバキのその複数の人格はさらに叫ぶのだった。
「それがわかったならだ！」
「ああ、行くか！」
「シャバキ特別探偵団出動だ！」
「行くぞ！」
「八条学園に！」
こう隔離された病室で喚く。それをモニターで観てだ。

第二百五十三話　ネットを通じてその四

医師達はだ。真剣な顔でそれぞれ話した。
「また脱走を企てていますね」
「極度の精神分裂症を発病したかと思えば」
「今度は脱走ですか」
「困ったことですな」
「全くです」
彼等は医師としての立場から考え話している。
「これまでにも幾度も脱走を企てていますし」
「実際に脱走もしていますし」
「警戒が必要ですな」
「本当にです」
こう話してだった。彼等はだ。
病室の壁と外にだ。高圧電流を放った。それによってだ。
シャバキを動けないようにした。そのうえでだ。
彼等はだ。さらに仕掛けたのであった。
「では病室の扉を完全封鎖にして」
「今の七重を十四重にしましょう」
「食事は当分抜いて気力と体力を減らしましょう」
「そうして脱走を防ぎましょう」
猛獣よりもだ。警戒されている。
そうしてであった。シャバキへの隔離がさらに堅固なものにされたのだった。
しかしだ。シャバキはだ。その高圧電流が流れている壁に対してだ。
何度もぶつかりだ。電流を受け黒焦げになりながらも叫ぶのだ。
「まだだ！」
「そうだ、国家権力の弾圧などに屈するか！」

「俺は負けない！」
「何があろうとも！」
またしても複数の人格でそれぞれ喚く。
「河童を倒すんだ！」
「人類を滅亡に導くナチスの残党の手先！」
「ラストバタリオンの生物兵器！」
設定がだ。何時の間にか変わっていた。
「八条学園に潜む河童を！」
「殲滅するんだ！」
「ま、待て！」
高圧電流を浴びながらだ。ここでまた騒ぐのであった。
「八条学園だな」
「あ、ああ。あそこだ」
「河童が出て来たのは八条学園だ」
「そこに出て来たんだ」
「そこに何かあるのか」
「そうだ。八条学園だ」
まさにだ。そこにあるというのだ。
「あの学園の理事長は八条義統だな」
「あの男はそういえば」
「そうだったな」
またしても自分の中で複数の人格が言い合う。彼にとってみれば実に自然にだ。
「一万人委員会の若き総帥だ」
「影の世界政府の首相だ」
何時の間にかそうなってしまっているのだ。
「そして宇宙人の手先だ！」
「ノストラダムスの生まれ変わりだ！」
「エドガー＝ケイシーの再来だ！」
互いに矛盾する設定が一つの口から叫んでいる。

「恐るべき魔王だ！」
「悪の手先だ！」
「その奴がいるあの学園！」
「断じて放ってはおけない！」
「よし、出動だ！」
また無理にでも脱走しようとする。
「そして世界の危機を救うんだ！」
「そうだ、連合だけは救われるかも知れない！」
何故かこんな話にもなる。
「連合を救うのは俺達だ！」
「隕石雨から救うんだ！」
「宇宙を襲う謎の怪獣達！」
「そいつ等の侵略を許すな！」
「ネットだ！」
人格の一つがネットの話をする。

第二百五十三話　ネットを通じてその五

「ネットで反撃だ！」
「よし、マグネシウムミステリーサーチャーズ出動だ！」
訳のわからないチームの名前も出る。
「俺達がいる限り連合は滅びない！」
「何があってもだ！」
「ノストラダムスに勝つ！」
「そう、アルセーヌ＝ルパンに！」
何時の間にかだ。話の対象が八条からルパンに変わっていた。そしてだ。
彼、シャバキはだ、今度はこんなことを喚いた。
「待て、さっき隕石雨と言ったな」
「ああ、言ったぞ」
「文献にあった」
「ゴトー＝スタデーの本にあった」
「あの預言者の本にだ」
連合の小説家の一人だ。ノストラダムスだのそんなのを題材にして何かしらの事件は予言されていたという本を書く人間だ。この時代でもそうした本を書く人間はいてだ。シャバキに影響を与えているのだ。
「あの書にあったぞ」
「ノストラダムスの遺言にだ」
「それに書いてあった」
「人類は宇宙全体を襲うブラックホールによって滅びるってな」
隕石雨は何処かに消えてブラックホールになっている。
「そう書いてあったぞ」
「じゃあやっぱりこれは」
「そ、そうか！」

またしても絶対無敵の断言が出た。
「人類は今絶体絶命の危機に立たされているんだ！」
「絶対絶命の危機！？」
「何なんだ、それは！」
「俺達を襲う危機！」
「それは何なんだ！」
「携帯電話だ！」
ブラックホールは彼方に消え去った。
「携帯電話の電波が人体を狂わせるんだ！」
「電波が人体を狂わせる！？」
「そうなるのか！？」
「そうだっていうのか！？」
「電波は互いに反響し合い」
そしてどうなるかというのだ。
「人体を破壊するんだ！」
「何っ、じゃあ俺達の携帯電話は！」
「人類を破壊させる為のものだったのか！」
「そんな恐ろしいものだったのか！」
「そうだ、電波を使った秘密兵器だったんだよ！」
携帯電話がだ。それだったというのだ。
「ナチス第五帝国の残党ネオ＝ラストバタリオンの開発した兵器だったんだよ！」
「な、何だってえええーーーーーーーーーっ！！」
またしても同じ断言だった。やはり一つの口から複数の人格が叫ぶ。
「ナチスが連合に関わっている！？」
「馬鹿な、奴等は滅んだ筈！」
「第一次世界大戦で敗れてだ！」
「極東軍事裁判で全員処刑された筈だ！」
実はシャバキは歴史を勘違いして覚えている。

「それでどうして生き残ったんだ！」
「そして連合に関わっているんだ！」
「何故だ！」
「それはわからない」
シャバキの中心人格が深刻な、一人だけ深刻な顔で言う。
「しかしだ」
「しかし？」
「しかしっていうと？」
「何があるんだ？」
「ナチスは実在する！」
断言であった。根拠も何もない。
「それは間違いない！」
「今も実在するっていうのか！」
「ナチスはこの連合にか！」
「生き残っているっていうのか！」
「そして連合の中枢に潜んでいるんだ！」
何故かナチスの寿命がそこまで延びている。

第二百五十三話　ネットを通じてその六

「再び世界を征服する為に！」
「な、何て奴等なんだ」
「そんなことまでしていたのか」
「奴等は」
「おのれ！」
そしてだ。今度出て来た名前は。
「日本帝国首相伊東！」
彼女の名前が出て来たのだ。
「遂にだ。出て来たのだ！」
「そうか、出て来たのだ！」
「あの女こそ連合の黒幕だったんだ！」
「恐ろしい奴！」
「まさに狐！」
とりあえず狐の仇名だけは正解だった。しかしそれ以外はなのだ。
何もかもが間違いだった。しかもだ。
伊東が中央政府の関係者だと勘違いしている。勿論日本の首相は中央政府の関係者ではない。しかしシャバキの頭の中では違うのだ。
それを言ってだった。彼は。
「あの雌狐、許せん！」
「こうなればあの女を！」
「あの女を糾弾する！」
「ネットの力見せてやる！」
「俺達の力を！」
こう叫んでだ。そしてだった。
彼はだ。ネットのキーボードを叩きに叩く。その書き込みは。
『伊東はフリーメーソンの手先だった！』
『八条はナチス第五帝国の影の総統だ！』

『ラストバタリオンが来る！』
『一万人委員会の陰謀だ！』
こう書き込んでいくのだった。そしてだ。
その書き込みを見てだ。医師達はまた言い合うのだった。
「もう何でもありですね」
「あの、書き込みは全てスルーされてますよ」
「こんな書き込みなんて誰も信じませんよ」
「信じる人間いませんよ」
「そうですね」
こんなことを話していく彼等だった。
「一つ一つの主張があまりにも出鱈目です」
「まさに患者の書き込みですし」
「しかもその主張をそれぞれ照らし合わせるとこれまた」
「酷いものですし」
とにかくだ。精神異常者そのものの書き込みであるのだ。
それがわかってだ。彼等はなのだった。
「やはり一生隔離しますか」
「それしかありませんね」
「費用は政府が出してくれていますし」
中央政府である。即ちシャバキは連合単位での危険人物なのだ。
何しろその発言や行動がだ。異常の中の異常であるからである。
その彼についての治療はというとだ。
「治療は無理ですし」
「あそこまでいきますともう」
「完全に駄目です」
「何もできません」
医師達も匙を投げるのだった。
「やはり。あの患者はあのままですね」
「脱走しないように気をつけてですね」
「そのうえで見ていきますか」

「そうしていきましょう」
こうしてだった。シャバキは死ぬまで隔離されることになった。
しかもだ。
ネットではだ。そんな彼の発言や行動、隔離病室において実況中継されているそれを見てである。そのうえでこんなことが話されるのだった。
「やっぱりいかれてるな」
「狂ってやがるな」
「ああ、やっぱりシャバキは平常運転だな」
「相変わらずで安心したぜ」
「いや、パワーアップしてるな」
かえってだ。以前より悪化しているというのだ。

第二百五十三話　ネットを通じてその七

「あのまま狂い死にしそうだけれどな」
「いや、どうも死にそうにないな」
「死なないか？」
「あれだけ高圧電流に体当たりしてもか」
それが人体にとって死に至るまで危険であることは言うまでもない。
「それでもあいつは死なないっていうのか」
「確かに丈夫だけれどな」
「それであいつも死なないっていうのか」
「そうなのか？」
「あれだけ暴れ回る奴がそう簡単に死ぬか」
こんな話が出た。
「普通は死なないさ」
「まあな。おかしいのは頭だけじゃないしな」
「身体もおかしいしな」
つまり何もかもがおかしいのだ。
「拳法とか言って異常な術使うしな」
「しかも身体を使ってな」
「それでか」
あらためてこう話されるのだった。
「頭に見合う身体があるからか」
「それで全然平気なんだな」
「そうなんだな」
「じゃあこのまま見ていていいか」
「そうか」
彼等は至って楽観的、もっと言えば楽しんでシャバキを観ている。
「多分死ぬまであそこから出られないだろうけれどな」

「脱走する以外にはな」
脱走することはもう規定路線だった。
「まあ脱走したらしたで面白いしな」
「余計に無茶するしな」
「あの天本博士とやり合ったしな」
シャバキと並ぶ連合の危険人物だ。趣味は生体実験に大量破壊兵器の開発と製造、それに大量殺戮である。人権思想なぞ皆無の怪人だ。
「そうなってもいいけれどな」
「あの対決をまた見るのもいいよな」
「それもいいんだけれどな」
「とりあえず脱走だな」
「そうしてもらってからだよな」
あくまで楽しみとして見て話す彼等だった。
「それなくてもこの無茶ぶりはいいんだけれどな」
「高圧電流が流れてる扉に体当たりか」
「あれ何百万ボルトだ？」
高圧電流といってもその電流の強さは様々だ。具体的にはどれだけかというのだ。
「結構以上に高いだろ、やっぱり」
「あのシャバキを脱走させない為だからな」
「どれだけなんだろうな」
「本当にな」
「一億ボルトらしいぞ」
それだけだというのだった。一人が書き込んだ。
「一億ボルトの電流が流れてるらしいな」
「一億ボルトか」
「それだけの電流が流れてるのか」
「一億ボルトっていったら」
どれだけかというとだった。

「もうな。触れたら確実に消えるだろ」
「黒焦げどころじゃ済まないよな」
「それに何度も体当たりしてピンピンしてるのか」
「凄いな」
「ああ、尋常じゃないな」
彼等も驚くことだった。とにかく普通の生き物ならばどんなものであろうとも確実に消え去ってしまう様な高圧電流だ。しかしなのだった。
シャバキはそれに触れても平気だった。平然と起き上がりだ。
そのうえで壁にぶち当たっている。見ればだ。
何時の間にかネットを離れてだ。壁に向かって複数の人格で叫んでいた。
「こんな壁！」
「高圧電流が何だ！」
「俺を阻むものは何もない！」
「何人たりとも俺は止められないんだ！」
こんなことを散々叫んでからだ。そのうえで、であった。
壁に何度も体当たりしてだ。壁を破壊しようとしている。しかしだ。
高圧電流を受ける。それで止められる。
だが何度も起き上がりだ。やはりぶつかるのだ。

第二百五十三話　ネットを通じてその八

それを繰り返すのを見て。また話すネットでの視聴者達だった。
「不死身か？」
「本当に死なないな」
「死なないままやってるけれど」
「飽きないのか？」
「別の脱出方法考えないのか？」
彼等の方から考えての書き込みだった。
「今ふと思ったんだけれどな」
「ああ、そういえば壁にぶつかってばかりだよな」
「牛みたいにそれで壊そうとしてるけれどな」
「高圧電流にあえて突進して」
「そうしてばかりだよな」
「他に幾らでも方法あるだろ」
彼等は正論を書き込んでいく。
「そういうの一切考えないで突進してばかりでもな」
「どうにもならないだろうに」
「それでもやり続けるってどうなんだ？」
「やっぱり頭おかしいよな」
そのことはもう連合の誰もが知っていることではある。しかし今の彼を見ているとだ。そのことを再認識せざるを得ないのだった。
彼等が見ているその前でもシャバキは突進を続け。遂には。
倒れた。倒れ込んでしまった。それを見てまた書き込み視聴者達だった。
「死んだか？」
「いや、ぴくぴくと動いてるぞ」
「あれは断末魔の痙攣じゃないな」
すぐにこう書かれている。

「別に死ぬ訳でもないな」
「ただ気絶しただけだ」
「何だ、それ位か」
何でもないように書かれていく。
「じゃあまたすぐ起き上がるな」
「ティアマト級巨大戦艦より頑丈な奴だからな」
「まあ起き上がったらまた見るか」
「そうするか」
こんな落ち着いた様子でだ。彼等は楽しんでいた。しかしである。
起き上がったシャバキはだ。今度はこんなことを喚くのだった。
「こ、これは！」
「ああ、間違いない！」
「来るぞ！」
「奴が来る！」
「恐怖の大王が！」
いきなり今度はこれだった。
「アンゴルモアの恐怖の大王が来るぞ！」
「宇宙を破壊しにやって来る！」
「世界を破壊し何もかもを喰らい尽くす！」
「その存在が暗黒の世界から！」
こんなことを喚く彼を見てだ。また医師達は話す。
「監視を厳重なものにしましょう」
「より厳しいものにしてですね」
「そうしていきますか」
「これはまた何をするかわかりません」
「脱走します」
こう話すのだった。
「しかし。治療の見込みがないとはいっても」
「悪化するばかりですね」
「全くです。困ったことです」

「どうしたものでしょうか」
医師ならば病を治療したいと思うのが当然だ。医師の性である。しかしなのだ。
シャバキについてはそれは無理だ。だからこそなのだった。
「残念ですね。医師が病を治せないというのは」
「あそこまで悪化しているとどうしても」
「最初から見込みがなかったとはいえ」
「病を見ているだけしかできない」
「医師にとっての最大の屈辱です」
まさにだ。医師としての言葉だった。
「何とかしたいのですが」
「それができるかというと」
「無理ですね」
「手の施しようがありません」
殆んど死にゆく患者についての言葉である。

第二百五十三話　ネットを通じてその九

「あそこまで重度ですと」
「あそこから出して治療もできませんし」
「出たら即座に脱走します」
それもあってだ。何もできないのだった。
「本当に厄介な人です」
「どうしたものでしょうか」
「一体全体」
「困ったことですね」
彼等はシャバキについてだ。どうしていいのかわかりかねていた。
それでなのだった。今は地下の奥深くに隔離するしかなかったのだ。
だがシャバキはだ。己のことはわかっていなかった。
こうだ。今日も叫ぶのだった。
「八条学園に行こう」
「あの学園にか」
「あそこにか」
「あそこにはピラミッドがあるな」
本当にある。しかもエジプト式だけではなく南米式のものもだ。
「あのピラミッドに謎があるんだ」
「ピラミッドの謎だって！？」
「そんなものがあるのか？」
「そうだ、あるんだ」
複数の人格での話し合いが行われる。
そしてだ。今回も不意にでだった。
たまたま食べていた昼食、ビーフステーキのソースを食べて言うのであった。
「シャリアピンソースか」

「ああ。オニオンのソースだな」
「やっぱり美味いよな、これ」
「そうだよな」
ただのソースだ。それ自体には何というものはない。
しかしだった。何しろシャバキである。こんな展開になった。
「ま、まさか」
「あれっ、どうしたんだ？」
「何かあったのか？」
「そうか！」
喚く。一つの口で。
「そうだったのか！玉葱だ！」
「玉葱！？」
「玉葱に何かあるのか？」
「玉葱はノストラダムスがピラミッドに隠された人類滅亡への序曲を未来の俺達に教える為のサインだったんだよ！」
何故かだ。こんな展開になった。
「それだったんだよ！」
「玉葱が人類滅亡のサイン！？」
「そうだったっていうのか！？」
「まさか！」
「いや、そのまさかだ！」
複数の人格がそれぞれ喚いていく。
「玉葱は日本語で玉葱と言うな」
「あ、ああ。そうだ」
「英語読みではオニオンだよな」
「そうだけれどな」
「玉葱とオニオンを組み合わせる」
どういう理屈かそうなる。
「玉葱オニオンになるな」
「その呼び方に何か理屈があるのか？」

「そこに」
「ああ。文字数は八つだ」
日本語においてはだ。
「人類滅亡は何文字だ」
「八文字だ」
「同じ八文字だ」
「そこに秘密があったんだよ！」
シャバキは有り得ないまでの絶叫で喚いた。
「その同じ八文字に！ノストラダムスはメッセージを込めたんだ！」
「な、何だってえええええええええーーーーーーーーっ！！」
何度目かのこの絶叫だった。
「ノストラダムスは俺達にそれを教える為に！」
「あえて今俺達にこのシャリアピンステーキを出してきたのか！」
ただのビーフステーキにシャリアピンソースをかけただけだ。シャリアピンステーキとはまた別なのだがシャバキは料理を知らない。
「今もこうして！」
「挑んできているのか！」
「ノストラダムスは何でも見ているんだよ！」
そのだ。遥か昔の人間がなのだ。これだけならば凄いことではある。
「そう、遥か未来の俺達もな！」
「それでこのメッセージか！」
「人類は滅亡する！」
「それを言ってか！」
「俺達にどうするかっていうんだな！」
「何て恐ろしい奴だ！」
電波全開で喚いていく。
「最終予言者！」
「闇の仕掛け人！」
そうした存在だというのだ。

「あの男、今も生きていて俺達を！」
「試しているってのか！」
「その秘密がピラミッドにある！」
そのだ。八条学園にだというのだ。
「あの二つのピラミッドに！」
「ではそのピラミッドにな！」
「連合ミステリー調査は出動だ！」
「行くぞ！」
「今からな！」
こうしてだ。また高圧電流に体当たりしていくシャバキだった。
彼のこの狂気そのものの行いは連合全体で見られていた。しかし彼はそのことに全く気付かないのだった。

ネットを通じて　　完

２０１１・５・２５

第二百五十四話　ピラミッドの四姉妹その一

ピラミッドの四姉妹

ジョーはだ。ネットを見ながら妹のベスに話した。今は四姉妹が全員家にいる。彼女は缶ビールを飲みながらパソコンのネットを見ているのだ。

そうしてだ。ベスに言うことは。

「何かうちの学校のピラミッドにね」

「八条学園のあの？」

「そう、二つのピラミッドね」

そのだ。二つのピラミッドにだというのだ。

「あそこに謎があるらしいわ」

「ピラミッドの謎？」

「あのシャバキがそう喚いてるのよ」

シャバキその異常ぶりをネットで観ていたのである。

「何かそこにナチスがどうとかって」

「ああ、あの人ね」

ベスもシャバキと聞いて頷く。刺繍をしながら次姉の話を聞いているのだ。

「今度はナチスなの」

「そう、ナチスの残党があそこのピラミッドに潜伏しているんだって」

「うちの学校ってナチスと関係あったの？」

「らしいわね」

ジョーはビールを飲みながら話す。

「八条グループの黒幕らしいわ」

「初耳ね」

「シャバキの言うことだから」

実に素っ気無く言うジョーだった。

「話の整合性については考えたら駄目よ」
「それはないからなのね」
「そうよ。だって今はね」
「今は？」
「ピラミッドにはリトルグレイがいるって叫んでるから」
ナチスからだ。主役が交代していた。
「ナチスの存在は頭から一時的に消えたみたいね」
「それっていつも通りね」
「うん。まあとにかくね」
「うちの学校のピラミッドね」
「そこに何かあるって喚いてるから」
勿論ジョーも何かあるとは思っていない。二人が通っているその八条学園のピラミッドは言うなら博物館の付属品である。ピラミッドはどういうものかを忠実に復元したものなのだ。だから何かある筈がないのだ。
「今度は一万人委員会の会合の場だって言ってるわ」
「何でもいるのね、ピラミッドって」
「そのうちノストラダムスも出て来るから」
シャバキの永遠のライバルである。少なくともシャバキはそう思っている。
「とにかく。ピラミッドだけれど」
「それがどうかしたの？」
「行ってみる？」
こうベスに尋ねるのだった。
「今度の土曜か日曜にも」
「そうね。何か面白そうね」
ベスもだ。次姉のその話に乗った。
「それじゃあ。行ってみる？」
「そうする？」
「うん。ただね」

「ただ？」
「私達二人だけっていうのはね」
それはだ。どうかというのだ。
「どうせだから四人全員でいきましょう」
「姉妹全員でなのね」
「そうしない？どうせだから」
ベスはこうジョーに提案するのだった。
「二人より四人の方が楽しいしね」
「そうね。確かにそっちの方がいいわね」
ジョーもベスのその言葉に頷いた。
「行くのなら多い方が楽しいしね」
「じゃあ決まりね。お姉ちゃんとエイミーにも言ってね」
「それで決めましょう」
「そういうことでね。じゃあ」
ここまで話してだ。ベスはだ。
刺繍を終えてだ。ジョーに言った。
「刺繍終わったし」
「ああ、終わったの」
「ビールまだあるの？」
「幾らでもあるわよ」
こう答えるジョーだった。

第二百五十四話　ピラミッドの四姉妹その二

「冷蔵庫にね」
「じゃあ何本か貰うわね」
「最近あんたビール飲まないじゃなかったの？」
「まあそれはね」
否定しないベスだった。冷蔵庫に向かいながら次姉に答える。
「最近ビールよりワインの方が好きだったから」
「ワインも冷蔵庫にあるわよ」
「けれど今はビールにするわ」
「私が飲んでるの見て飲みたくなったのね」
「ええ、そうなの」
それでだというのだ。
「それでね。ちょっとね」
「よくある話ね。けれどね」
「けれど？」
「私飲んでるの黒ビールだけれど」
「ああ、黒ビールだったの」
「それでもいいわよね」
「別に」
構わないというのだ。
「黒ビールもいけるし」
「何よ、ビールもいけるんじゃない」
「だから飲めることは飲めるのよ」
それはいいというのだ。しかしだった。
ベスだ。そのビールについてこう話すのだった。
「けれどよ。ビールって太るじゃない」
「まあね。カロリー高めよね」
「プリン体あるし」

「かなり改善されてるわよ」
品種改良によってだ。そうなったのだ。
「それでも飲んでなかったの」
「何となくね」
こう次姉に話すベスだった。既にその手には缶ビールを幾つも持っている。
「ほら、ビールっていえばおつまみは」
「ソーセージにハムにベーコンに」
「ちょっと。カロリーがね」
「だからそんなの気にしなかったらいいじゃない」
「太るから」
それでだというのだ。
「最近ちょっとそれが気になって」
「まあビールね。ドイツ人を太らせていた元凶だったし」
「そうよね。太らせていただけじゃなくて」
それだけではなくだ。ビールがドイツ人にもたらしていた災厄は。
「痛風もあったわね」
「そう、だからプリン体で」
ジョーはまさにそれだと話す。
「ドイツ人を長い間苦しめてたのよね」
「しかもドイツ人っていったら」
「禿ね」
連合の共通認識の一つだ。ドイツ人といえば禿げている、連合ではドイツ人はまさにだ。禿げていてしかも痛風だという先入観があるのだ。なおこの時代痛風は既に治せる病気になっている。
「そういうこと聞いたらちょっとね」
「女の子でそんなの気にするの？」
「禿げることとか痛風は気にしていないけれど」
「太ることね」
「そう。それが気になって」

「大丈夫よ。そのビール低カロリーだから」
ジョーは缶をもう一本空けながらベスに話す。その目はずっとネットの画面に釘付けだ。それを見ながら妹に話しているのである。
「安心していいわ」
「そう。じゃあ」
「それによ」
ジョーはさらに言い加える。
「おつまみもね。そういうドイツ風じゃなくて」
「ソーセージとかベーコンじゃなくて」
「軽いものにすればいいじゃない」
こう話すのだった。
「柿の種とかね。そうした軽くて比較的カロリーの少ないのにね」
「そういうのだったらいいのね」
「そうよ。ビールって結構色々なものに合うから」
それでいいというのだ。
「それでどうかしら」
「そうね」
話を聞いてだ。ベスも頷いた。そして丁度いい具合にだ。

第二百五十四話　ピラミッドの四姉妹その三

見れば部屋のテーブルの上にだ。それがあった。
「柿の種ね」
「それとピーナツもね」
そうしたものもあるというのである。
「あるわよ」
「黄金の組み合わせね」
「それだといいでしょ」
「わかったわ」
話を聞いて。それで頷くベスだった。
それでだった。テーブルに座ってそうしてだ。柿の種とピーナツを口にしてそうしてビールを飲む。そうしながら次姉とまた話すのだった。
「それでだけれど」
「ビール美味しい？」
「美味しいわ。ただビールの話じゃなくてね」
「ふうん、ピラミッドにケーキ屋があって？」
ジョーはまだシャバキの主張を見ている。今度はそんなことを言っているのだ。
「ああ、あのピラミッドってそういえば中に喫茶店とかあったわね」
「そこのお店の店長は実はロスチャイルドグループのスパイで」
またしても陰謀史観であった。
「そこから世界を操ろうとしているらしいわね」
「ケーキ屋さんが？」
「そうみたい。どういう理屈かわからないけれど」
「何かもう何でもありね」
「シャバキは過去を振り返らないから」
だから何とでも言えるのだ。それで精神病院にも隔離されている

のだ。
「そんなことも言うのよ」
「だよね。はた迷惑なことにね」
「まあとにかくね」
「とにかく？」
「メグお姉ちゃんとエイミーにもお話してね」
その残る二人の名前を出した。
「それからね」
「それで四人でね」
「ピラミッド行くのよね」
「四人で行かないと」
駄目だと言うジョーだった。
「だって私達四人姉妹じゃない」
「だからこそね」
「そうよ。じゃあ二人にも声をかけて」
「そうしよう」
こうした話をしてだった。その時にだ。
丁度メグが家に帰って来た。そうして二人に言う言葉は。
「エイミーは？」
「今お友達の家に行ってるわ」
ジョーが姉に話す。
「ええと、確かコゼットちゃんね」
「ああ、あの娘のね」
「そう、あの娘のところに行ってるから」
「今日帰るの？」
「そうみたいね」
家には帰って来るというのだ。
「多分酔って帰って来るでしょうけれど」
「相変わらず飲んでるのね」
「まあ私達もだけれどね」

酒の話についてはだ。ジョーも苦笑いで返す。実際に今黒ビールを飲んでいる。これではエイミーを言える筈もなかった。
そのビールを飲みながらだ。ジョーは話すのだった。
「それでよ。お姉ちゃんもね」
「飲むかっていうのね」
「ビール飲む？」
「黒ビールよね」
「そう、黒ビール」
まさにだ。その黒ビールをだというのだ。
「飲む？どうする？」
「そうね。それじゃあね」
メグもだ。妹の言葉に乗った。そのうえでだ。
冷蔵庫を開けてビールとだ。魚肉ソーセージを出してテーブル、ベスの向かい側に座ってだ。そのうえでビールを飲みはじめた。
ソーセージも食べながらだ。またジョーに尋ねた。
「それであんた何観てるの？」
「ピラミッドのことよ」
シャバキはもう観ていなかった。今はそれを観ているのだった。
「うちの学校のピラミッドね」
「ああ、あそこね」
「今さっきベスと話してたんだけれど」
チーズ、つまみのそれを食べながら姉に話す。

第二百五十四話　ピラミッドの四姉妹その四

「四人でそのピラミッドに行こうかって言ってたんだけれど」
「四人でなのね」
「そう、私達四人でね」
それで行こうという話になっているというのだ。
「どう？ピラミッドね」
「どっちのピラミッドなの？」
メグは缶のビールを飲みながらジョーに問うた。
「エジプトの？アステカの？」
「両方どうかしら」
ベスが言って来た。ベスは今は柿の種を食べている。
「どっちのピラミッドもね。四人で行かない？」
「悪くないわね」
すぐにこう答えるメグだった。
「長い間行ってなかったし」
「そう。それじゃあね」
「後はエイミーね」
ジョーとベスは姉の言葉を受けてそれぞれ言った。
「あの娘がよしって言えばね」
「四人全員揃うわね」
「そうね。どうせ行くのならね」
どうするべきか。メグは話した。
「四人じゃないとね」
「そうそう、私達四人姉妹だったし」
「いつも一緒だったから」
四人姉妹の絆はかなり強い。だからこその今の言葉だった。
「じゃあ。ピラミッドね」
「楽しく行きましょう」

「エイミーが帰るのを待って」
どうするか。今は三人で話していく。
「それで聞けばいいわね」
「それで話を決めてね」
「じゃあ今は」
今現在はどうするかという話にもなった。
メグはだ。飲みながら二人の妹に提案した。
「飲まない？」
「引き続きよね」
「そうしてなのね」
「そう、こうしてね」
メグはまたジョーとベスに話した。
「それでエイミーを待ちましょう」
「じゃあ。ビールどんどん出しましょう」
ジョーは早速上機嫌で缶ビールを出して来た。その黒ビールのだ。
「それとおつまみは」
「私はソーセージがあるから」
「私は柿の種ね」
メグとベスはもうそれぞれのつまみで満足していた。
「それでジョーはチーズね」
「それでいいのね」
「チーズはたっぷりあるし」
見れば乾燥チーズだ。それが結構あった。
それをかじりながらだ。ジョーはパソコンの前から二人に話した。
「私もこれでね」
「満足なのね」
「ジョーお姉ちゃんも」
「そう。けれど三人なのはちょっとね」
それについてはというのだ。
「やっぱり。飲むのも四人じゃないとね」

それはだというのだ。
「物足りなくない？」
「確かにね。それはね」
「その通りね」
二人もその言葉に頷く。それでだった。
三人で飲みながらだ。その中でまた話すメグだった。
「エイミーの分のビールあるわよね」
「あるわよ」
ジョーがすぐに姉に答えた。
「もう幾らでもあるから」
「そんなにあるの」
「そう、だから私達にしても幾ら飲んでも大丈夫だから」
実際にまた一本開けるジョーだった。勿論開けた傍から飲む。
「おつまみもあるしね」
「じゃあ安心して飲んでいいのね」
「そうそう。安心していいから」
ジョーがこう言うとだった。ベスもだ。
また一本開けてだ。それで飲んで話すのだった。
「黒ビールっていいわね」
「そう思うでしょ」
「ええ、この味がいいのよ」
にこにことして次姉に話す。
「コクがあってね」
「そうよね。普通のビールとは違ってね」
尚連合では黄色のビールの他にも黒ビールもあればだ。赤や青も緑もある。ビールを造る麦の種類によってだ。それぞれの色になるのだ。

第二百五十四話　ピラミッドの四姉妹その五

その中の黒ビールについてだ。彼等は話すのだった。
「この独特のコクがいいのよね」
「そうそう」
「それにね」
メグも飲みながら話す。
「飲みやすいしね」
「そうよね。飲みやすいわよね」
「黒ビールも黒ビールで」
「幾らでも飲める感じね」
メグはさらに飲む。
「いい感じよね」
「あっ、何かそんなお話してたら」
ベスが壁にかけてある時計をふと見た。見ればだった。
もう十時だった。その時間を見てだ。こう姉達に話すのだった。
「ドラマ観る？」
「ドラマ？」
「そういえば今ドラマの時間よね」
「ええ。何か観る？」
テレビのスイッチを点ける。そうしてさらに話すのだった。
「面白いドラマあったかしら」
「それよりもね」
ジョーは言いながらパソコンのスイッチを落とした。それからまた話すのだった。
「ゲームしない？」
「ゲーム？」
「そう、今面白いゲーム買ったのよ」
こう姉と妹に話すのだった。

「恋愛育成ゲームね。女の子が複数の男の子に誘われてね」
「それでなのね」
「その中から一人の男の子を選んで」
「そう、ハッピーエンドを迎えるストーリーなのよ」
そうした話だというのだ。
「そうしたお話だけれどね」
「それでどんなゲームなの？」
「どんな感じなのかしら」
「こんなのよ」
ゲーム機とそのソフトを出してだ。二人に話してだ。
それをテレビにセットしてだ。実際にはじめてみる。そうして二人はジョーとあらためて話すのだった。
「ふうん、そんな感じね」
「そうしたゲームなのね」
「そう、こんな感じだから」
こう話すのだった。ジョーは今そのゲームの中のキャラの一人を攻略している。そうしながらだ。彼女は姉と妹に話していくのだった。
「このキャラがね。結構ね」
「攻略しにくいの？」
「そうなの？」
「曲者なのよ」
そうだとだ。チーズをかじりながら話す。
「気まぐれでね。デートに誘ってもね」
「乗って来ないのね」
「中々なの」
「そう、中々なの」
実際にそうだというのだ。
「だから困るのよ」
「そういうキャラってこういうゲームに絶対一人はいるわよね」

「そうよね。あとオカマキャラね」
ここでベスはメグにその手のキャラの話をした。
「絶対に出て来ない？立場が逆だと一人称が俺とか僕の女の子」
「いるわね、確かに」
「何か定番よね」
「絶対にいるわね」
また話すメグだった。
「そういうキャラって」
「そうなのよね」
こうだ。ジョーのプレイを観ながら話すのだった。当然ビールとそれぞれのつまみを飲み食いしながらだ。そうして話していっているのだ。

第二百五十四話　ピラミッドの四姉妹その六

「そうしたキャラって癖強いけれど」
「案外攻略しやすくてね」
「付き合うのは楽よね」
「個性の強いキャラは案外ね」
「やりやすいのよね」
「そうそう」
ジョーも姉妹のその言葉に頷く。それから言うのだった。
「それがね。意外と普通そうなキャラがね」
「性格的には厄介なのね」
「そういうものよね」
「そうなのよね。ゲームスタッフの方も考えてるわ」
スタッフもキャラクターを作るのならばどうしていくかというのだ。
「そうしたところはね」
「それで個性の強いキャラは付き合いやすくして」
「外見が普通だと性格に癖がある」
「そうしていってるのね」
「スタッフの方も」
「でしょうね。実際にこのキャラだってね」
ジョーが今攻略しているそのキャラはどうなのか。彼女はビールにチーズを楽しみながらプレイしてそのうえで話をするのである。
「やりにくい」
「逆に言えば外見も性格も癖のあるキャラってね」
「いないわよね」
「ゲームだけじゃなくてね」
そうしたキャラはだ。ゲームだけではないというのだ。
「漫画でも小説でもそうだし」

「何もかも個性が強いっていうのは」
「そういないわね」
「マウリア人は違うけれど」
ふとだ。ベスが言った。
「ターバン巻いて。超然とした性格で」
「衣装も性格もよね」
メグも話す。
「マウリア人は強烈よね」
「マウリアって国自体がね」
国からその強烈な個性がはじまっていると。ジョーも言った。
「凄いわよね」
「マウリアの恋愛ゲームってどんなのかしら」
ベスは首を捻りながら話した。
「ちょっと想像できないものがあるけれど」
「あれ？やっぱり踊るのかしら」
メグはマウリア映画で身に着けてしまった先入観から話す。
「マウリアのゲームもしょっちゅう踊るのよね」
「そうよ。どんなジャンルでもね」
またジョーが話す。
「絶対にここぞって場面は踊りが入るから」
「やっぱりそうなの」
「シューティングでもアドベンチャーでもシュミレーションでもＲＰＧでもよ‥」
とにかくだ。どんなジャンルのゲームでもだというのだ。
「何処からともなく人が一杯出て来て踊るから」
「ストーリー中断しない？それだと」
「するけれどね」
それはなると話すジョーだった。
「それでも踊りが優先されるのよ」
「何かカオスね」

メグはその展開を聞いて唖然となった。
「踊りがナチュラルに入るって」
「あと町には普通に牛がいるから」
マウリアではだ。今もそうなのだ。人と一緒にだ。牛が町を歩いているのだ。電車にいたりもする。それがマウリアの日常なのだ。
「牛を攻撃できないようになっていて」
「ＲＰＧではそうなの」
「話し掛けることもできるわ」
ベスにも話す。

第二百五十四話　ピラミッドの四姉妹その七

「情報くれたりもするから」
「そうなの」
「流石に牛に告白するゲームはないけれどね」
如何にマウリアといえどもだ。それはないのだった。
「とにかくよ。マウリアのゲームは凄いわ」
「凄いっていうか何ていうか」
「カオスっていうか」
「そうよね」
話を聞いてだ。メグもベスもこう思った。
「流石マウリアね」
「聞いていて唖然となったわ」
「実際に私今持ってるわよ」
ジョーは姉妹達に再び話す。
「そのゲームね」
「えっ、持ってるの？」
「そのマウリアのゲーム」
「ええ、持ってるわよ」
まただ。持っていると話すジョーだった。
「何ならしてみる？」
「ううん、ちょっとそれはね」
「遠慮させてもらうわ」
メグもベスもジョーのその申し出には困った笑顔になって断った。
「何かするのが怖いし」
「それだからね」
「そうなの。じゃあやりたくなったら何時でも言ってね」
ジョーは二人の話を聞いてからこう述べた。そのうえでだ。
ビールとチーズを飲み食いしつつゲームをしていく。そうしてい

るとだ。
家の扉が開いてだ。それでだった。
「只今」
「よし、最後の一人ね」
「エイミーが帰って来たわよ」
「そうね」
メグもベスもジョーもだった。それぞれ言った。
そうして部屋の入り口の方を見るとだ。赤い顔をしたエイミーが来た。
「あれっ、ビールなの」
「ああ、お帰り」
姉達はまずは挨拶からはじめた。
「飲んできたわよね」
「うん、結構ね」
笑顔で姉達に話すエイミーだった。
「スパークリングワインね」
「シャンパン飲んでたの」
「あれなの」
「ええ、少しね」
実際にだ。そうしたワインを飲んでいたというのだ。
「コゼットに。アンとね」
「三人で飲んでたのね」
「女の子三人で」
「そうしてたのよ。それで帰ったら」
ビールがだ。目に入ったというのだ。
「それも黒ビールなのね」
「どう？飲む？」
ジョーがゲームから目を離してエイミーに尋ねた。
「ビールも」
「飲んでいいの？」

「だから誘ってるのよ」
ビールをだ。どうかというのだ。
「そうなのよ。それでどう？」
「ううん、じゃあ御願い」
エイミーもだ。姉の誘いに応えた。
そしてそのうえでテーブルに座りビールの缶を受け取り開けてすぐに飲む。つまみはその辺りにあったカシューナッツにしていた。
ビールを飲みナッツをかじりながらだ。姉達に尋ねる。
「ひょっとして何かお話してた？」
「ええ、ピラミッドのことね」
「学校にあるあれね」
「ああ、あれね」
メグとベスの話を聞いてだ。エイミーも言う。
「あのピラミッドね。エジプトのと南米のがあるわよね」
「そのピラミッド行かない？」
ジョーはまたゲームから顔を離して末妹に尋ねた。
「四人でね」
「私達全員でなのね」
「そう。どう？」
こうエイミーに尋ねるのだった。

第二百五十四話　ピラミッドの四姉妹その八

「四姉妹揃って行かない？」
「そうね。考えてみれば」
エイミーはビールの缶を手にしながら次姉の言葉に応えた。
「どっちのピラミッドも殆んど行ってないし」
「それなら余計にね。どう？」
「ピラミッドの中って色々あるし」
ジョーの言葉を受けながらだ。エイミーも話す。
「面白いし」
「じゃあいいわよね」
「そうね」
次姉の言葉に頷くのだった。
「じゃあ四人一緒にね」
「これで決まりね」
「ピラミッドねえ」
頷いてからだ。エイミーはあらためて言う。
「うちの学校の。エジプトのピラミッドだけれど」
「あのピラミッドがどうかしたの？」
「あのピラミッドの中ってかなり凄いわよね」
今度はベスに話した。三番目の姉にだ。
「色々トラップもあって」
「それも忠実に再現したそうね」
「それであしした風になってるのね」
「ただ。死ぬ様なものじゃないから」
それはないとだ。ベスはエイミーに話した。
「流石に学校の学習用のもので人が死んだら洒落にならないから」
「そうよね。やっぱりそれはね」
「だからそれは安心していいから」

ベスは微笑んでエイミーにまた話した。
「アスレチックみたいなものだから」
「アスレチックね」
「エイミーはアスレチック好きだったわよね」
メグがにこりと笑って末妹に尋ねた。
「昔から」
「うん。ああいうの好きなの」
実際にそうだとだ。エイミーはにこりと笑って話す。
「色々なのを突破していくって感じがね」
「そうよね。じゃあ丁度いいわよね」
「それで王様のお墓に行くのよね」
ピラミッドが造られた目的はファラオの墓としてだ。だがその他にもだ。公共事業としても意味合いもあった。農業ができない時期の民衆の失業対策でもあったのだ。
「あのお墓の中には」
「ミイラ男がいるかもね」
ジョーが楽しそうに話す。
「ピラミッドには」
「いるの？」
「だって。ピラミッドじゃない」
だからだというのだ。
「ピラミッドっていったらミイラ男でしょ」
「何か古典的な映画よね」
「そうね。アメリカ映画のね」
メグとベスがそれを聞いて言う。二十世紀初頭のアメリカ映画ではミイラ男がよく出て来た。出て来る場所は大抵ピラミッドだったのである。
「そうした感じよね」
「それだとね」
「じゃあミイラ男も出るかな」

「アトラクション扱いでね」
「出るかな」
四人姉妹がそれぞれ話していく。
「他には何が出るかしら」
「呪いとか？」
メグがエイミーに話す。
「ピラミッドっていったら」
「ああ、エジプトだからね」
「ほら、ファラオの呪いっていうじゃない」
「ツタンカーメンよね」
「それがあるかも」
「それは再現不可能でしょ」
ジョーが二人の話に突っ込みを入れた。
「呪いは。幾ら何でも」
「そうよね。普通は無理よね」
ベスも話す。

第二百五十四話　ピラミッドの四姉妹その九

「呪いは幾ら何でもね」
「無理よね、やっぱり」
「マウリアだと普通だけれど」
このことはベスも知っている。マウリアにおいてはだ。呪いもまたごく普通のことなのだ。何故かというとそれがマウリアだからなのだ。
「流石に呪いはね」
「ないわね」
「やっぱりミイラ男とかトラップ位だと思うわ」
ベスは姉達と妹に話した。
「確か前はトラップだけだったけれどね」
「それもエジプトの方だけだったわよね」
エイミーがこう三番目の妹に尋ねた。
「確かね」
「そうだったわ。ただね」
「ただ？」
「この前マヤのピラミッドの方工事してたから」
その話もするのだった。
「あそこも何かできるようになってるかもね」
「中に入られるのね」
「そうなってるみたいよ」
「マヤのピラミッドの中って」
ベスの話にだ。エイミーは考える顔になって話した。
「どんなのかしら」
「わからないわよね」
「エジプトの方は知ってるけれど」
そちらはだ。あまりにも有名だった。

「それでマヤの方は」
「何かあれみたいよ。皆ピラミッドってエジプトの方見るじゃない」
ジョーがまた話す。
「学校としてはそれだと教育が偏るからって」
「それでマヤの方にも力を入れたの」
「そうみたいね」
その辺りの事情を話す次姉だった。
「実際に皆エジプトの方ばかり行くから」
「マヤの方もいいと思うけれど」
メグはそちらもいいと話すのだった。
「やっぱりピラミッドっていったらエジプトなのね」
「そうみたいね。それにね」
「それに？」
「ああいうのってマヤとかアステカが熱心だから」
連合の国家である。インディオの子孫が建国した国である。尚こうした国々も実際のルーツはかなり怪しいものがあったりする。
「そっちからの働きかけもあったみたいよ」
「そうだったの」
「その辺りも複雑みたいね」
ジョーはこう末妹に話すのだった。
「マヤとかアステカにしてみればね」
「自分達のことだからなのね」
「そう、御先祖様のことや文化に関わることだから」
彼等にとってみてもだ。真剣にならざるを得ないことだったのだ。
そしてだ。そのことはだ。この四姉妹についても同じだった。
「私達だってそうじゃない」
「私達？」
「そう、フェニキアにとってもね」
ジョーはエイミーに話す。彼女達はフェニキア人なのだ。国籍はそうなっている。

「一緒でしょ。フェニキアの歴史については五月蝿いでしょ」
「確かにね。フェニキアのことになったら」
エイミーもだ。酔ったままだが真剣な顔になる。
「宣伝してるししたいし」
「それと同じでしょうね」
「だからマヤやアステカとしてはなのね」
「そうだと思うわ」
ジョーは末妹にさらに話す。
「それでね」
「成程ね。そういうことね」
「さて、そのマヤのピラミッドも」
ジョーはまたビールの缶を開けながら放す。
「楽しみになってきたわね」
「そうね。どんなのかしら」
エイミーも顔を微笑みに戻して話す。
「一体どういう構造になってるのかしらね」
「そうね。じゃあ尚更にね」
「行くべきね」
メグとベスも言う。
「どっちのピラミッドにもね」
「是非共」
こうした話をしてだった。四人は両方のピラミッドに行くことになったのだった。四人もまただ。学園生活を満喫しているのであった。

ピラミッドの四姉妹　　完

２０１１・６・１

第二百五十五話　マヤのピラミッドその一

マヤのピラミッド

四人が最初に行くピラミッドはだ。マヤの方になった。
そのマヤのピラミッドについてだ。エイミーが姉達に尋ねた。
「確かあのピラミッドって」
「儀式用なのよ」
「その為のものよ」
メグとジョーがこうエイミーに話した。
「一番上に祭壇があってね」
「それでそこで儀式をするのよ」
「マヤとかの儀式っていったら」
それについてだ。エイミーは不吉なものを感じ言った。
「あれよね。やっぱり」
「生贄よね」
ベスが話す。四人は今休日を利用してピラミッドについての話をしていた。その話も間もだ。しっかりと酒を飲んでいる。それは外せなかった。
エイミーは焼酎を飲みながらだ。姉達に話すのだった。
「マヤっていったら」
「そう、生贄よ」
「それを捧げる為の祭壇だったのよ」
メグとジョーはベスに対しても話した。
「そこで生贄を殺してね」
「心臓を取ったりしてたのよ」
「何か物騒ね」
その話を聞いてだ。エイミーはストレートの焼酎を飲みながら述べた。
「それって」

「流石に今はしないわよ」
ジョーはつまみのするめを食べながら話した。
「生贄は人間じゃなくて動物だから」
「その動物をお祝いの場で殺してから食べるのよ」
メグも焼酎を飲みながら話す。
「そうした儀式だからね」
「特に怖がる必要もないわ」
「食べるのね」
エイミーが突っ込みを入れたのはそこだった。
「やっぱり食べるのね。生贄は」
「食べないと勿体ないわよね」
ベスもそれについては同意だった。
「殺した動物はね」
「ええと、それで儀式によってはね」
「殺した生贄をね」
どうするかというのだ。その生贄をだ。
「ピラミッドの頂上から落としたりしてたのよ」
「首を切った生贄をね」
「それってかなり残酷じゃないの？」
エイミーは説明をする長姉と次姉に言い返した。
「首を切ってさらにそうするって」
「それが信仰だったから。マヤの」
「中南米独特ではあるわね」
中南米のインディオの世界ではそうだったのだ。生贄は欠かせないのだ。それでなのだった。
「まあ。今は動物の生贄もそんなことはしないから」
「それをしたら食べられないから」
ピラミッドの頂上から死体を落とせばあちこちにぶつかってぼろぼろになってしまう。もっともそれを意図した儀式ではあったのだ。
「生贄はお祝いで食べるものなの」

「美味しくね」
「その為のものがマヤのピラミッドなのね」
エイミーは姉達のその話に頷いた。
「そういうことなのね」
「この学校じゃそうした儀式はしないわね」
ベスがふとといった感じで話した。
「流石にね」
「ここは日本だから」
「マヤやアステカの神様は信仰されていてもね」
それでも日本では少数なのだ。そちらの神の信仰は。
「儀式っていっても殺して食べるだけだし」
「捌くのと同じね」
「じゃああれなのね」
話を聞いてまた言うエイミーだった。ここでまた焼酎を飲む。

第二百五十五話　マヤのピラミッドその二

「生きている鶏の首を切って食べるのと」
「神様にお祈りを捧げるかどうか」
ベスも言う。
「それだけの違いね」
「そうよね。大した違いじゃないのね」
エイミーは今の時代の基準に合わせて話していた。今の時代の信仰にだ。
「それだとね」
「そのピラミッドよ」
「私達が最初に行くのは」
「王様のお墓じゃなくて祭壇なのね」
エイミーはまたこのことを話した。
「ピラミッドっていっても色々なのね」
「形も全然違うけれど」
ベスは焼酎が入ったコップを片手にガイドブックを見ていた。
「大きさも違うのね」
「あっ、そうなの」
「うん。こっちのピラミッドは五十メートル位の高さよ」
高さがだ。それ位だというのだ。
「あまり大きくないわね」
「エジプトのと比べればそうよね」
エイミーもそのことはわかった。
「大きくないわよね」
「あまりね」
「そうなのね」
話を聞いてあらためて頷くエイミーだった。
「あそこまで大きくないのね」

「まあエジプトのピラミッドはね」
また話すジョーだった。
「大きいのはかなり大きいからね」
「そうよね。大きいよね」
「マヤのに比べると」
メグとエイミーもそのことを話す。
「学校のピラミッドにしても」
「相当な大きさだし」
「あれじゃあ迷路にもなるわよね」
ジョーはピラミッドのその中の話もした。
「トラップがあってミイラ男がいて」
「マヤのピラミッドにはミイラ男いないわよね」
「いないわよ」
ジョーはエイミーにそれはいないと返した。
「だって。ミイラ男ってエジプトのモンスターじゃない」
「マヤじゃないからなのね」
「そう、いないわ」
やはりだ。いないというのだ。
「というかいるっていったら」
「いるのは？」
「チョンチョンじゃないかしら」
ジョーはここで変わった名前の妖怪を出してきた。
「人間の頭だけの妖怪でね」
「何かゲームで結構出てきそうな感じね」
「実際に結構色々なゲームに出てるわよ」
そのチョンチョンはだ。ゲームにも出ることが多いというのだ。
「耳が大きくてそれで空を飛んで移動するのよ」
「中々不気味ね」
「いるとしたらそれね」
そのだ。チョンチョンだというのだ。

「マヤのピラミッドだと」
「いるかしら、そのチョンチョン」
「ミイラ男だったらアトラクションでいけるけれどね」
人間が包帯を巻けばそれで完成だ。だからミイラ男はお化け屋敷にも結構多い。彼女達の通う八条学園でもだ。そうしたミイラ男なのだ。
「けれど。首だけだと」
「機械かしら」
「それじゃないかしら」
ジョーはロボットの可能性を指摘した。
「出て来るとしたらね」
「チョンチョンのロボットね」
「これってかなり不気味よ」
「そうよね。顔だけで飛ぶロボットって」
「しかもその顔の裏側にはね」
ジョーはさらに話すのだった。

第二百五十五話　マヤのピラミッドその三

「機械の素顔があるのよ」
「本物よりもさらに不気味ね」
「まあ。いるかどうかは中に入ってからのお楽しみよね」
「そうよね。まずはピラミッドに入ってね」
それからであった。何はともあれだ。
そうした話をしてだった。メグとベスもだ。二人で話すのだった。
するめを食べながらだ。メグはジョーに言った。
「生贄って何かしらね」
「人間じゃないことは間違いないけれど」
「牛とか豚かしら」
「マヤって牛とか豚ってあまり食べなかったんじゃないの？」
ベスが話す。それはないというのだ。中南米の文明は高山地帯にあった為そうした平地にいるような家畜はいなかったのである。
その代わりだ。いるのはだ。
「アルパカとかそういうのだったと思うわ」
「アルパカね」
「そういうのじゃないかしら」
「アルパカの生贄って？」
メグは首を捻って言うのであった。
「あまりぴんと来ないわね」
「そうよね。生贄って感じの動物じゃないわよね」
「羊や山羊なら」
そうした動物ならばだというのだ。二人で話していく。
「生贄って感じするわよね」
「けれどアルパカだと」
それだとだ、どうにもだというのだ。
「生贄にしにくいし」

「それによ」
ベスはアルパカについてさらに話す。
「アルパカって唾を吐くじゃない」
「あの唾が曲者なのね」
「そう、凄く臭いのよ」
それがアルパカの武器なのだ。その異様に臭い唾がだ。
「それ生贄にされる時に吐かれたらね」
「そうよね。嫌よね」
「アルパカは生贄には向かないと思うわ」
これがベスの結論だった。
「毛が多くて刃物も通りにくいし」
「外見も生贄って感じじゃないし」
「しかも唾ね」
何につけても唾だった。アルパカといえば。
「だから生贄っていっても」
「アルパカは駄目よね」
「あれじゃないかしら。山羊じゃないかしら」
「山羊なのね」
「山羊なら生贄とかでよくあるし」
話に微妙に悪魔崇拝も入ってきていた。
「あれならね」
「中南米の雰囲気にも合ってるわよね」
あくまでその当時の中南米である。
「じゃあ山羊かしら」
「山羊とか羊を生贄にするのかしら」
「そうして食べるのかしら」
生贄と食べることはこの場合イコールだった。
そうした話をしてであった。四人はだった。
まずはマヤのピラミッドに向かうことにした。四人は動きやすい服で出発した。

その中でだ。メグは言った。
「ズボンが一番いいわよね」
「っていうかズボンしかないじゃないこの場合は」
ジョーが微笑んで姉に話した。
「だからよ」
「ズボンしかね」
「そうよね。登るしあちこち入るし」
「お姉ちゃんいつもロングスカートだけれど」
それはメグの好みである。彼女はロングスカートが好きなのだ。

第二百五十五話　マヤのピラミッドその四

「今回は流石にズボンにしたのね」
「動きやすいしかえって汚れないし」
「ひらひらしてるとあちこちに当たったり触れたりするからね」
「だからいつも動く時はズボンよ」
そのだ。ズボンだというのだ。
「そうしてるからね」
「ズボンはいいわよ」
ズボン派のジョーらしい言葉だ。
「動きやすいし見えないしね」
「見えないのね」
「スカートだとどうしても気になるじゃない」
ジョーはそのスカートについて話した。
「中が見えるかどうか」
「ロングスカートだとその心配殆んどないけれど」
「それでも可能性はゼロじゃないでしょ」
ジョーは慎重な感じで姉に話す。
「だからね。私はね」
「いつもズボンなのね」
「そうよ。それにね」
「それに？」
「ズボンってスタイルが出るじゃない」
その脚で歩きながらの言葉だ。
「スカートよりもね」
「そうよね。ズボンはね」
「男の子の目もそっちにいくわ」
「ズボンの方が注目させるの」
「そういうこと。私胸にはあまり自信はないけれど」

しかしだ。ジョーの胸は小さいとは言えなかった。ダークブラウンの上着から見えるその大きさはだ。中々のものである。
その胸を見てだ。メグも言う。
「そんなに小さいかしら」
「大きくはないでしょ」
「結構大きいわよ」
こう妹に言うのだった。
「だから。目立ってるわよ」
「目立ってるかな」
「脚もね。確かにね」
メグはここで自分の脚を見た。クリーム色のズボンに包まれた脚をだ。
そのうえでだった。今度はこうジョーに話した。
「ズボンの方が目立つかしら」
「姉さんは体型見える方が好き？」
「ううん、それは」
「あまり好きじゃないみたいね」
「恥ずかしいわね」
姉の答えはこれだった。
「やっぱりね」
「そうよね。お姉ちゃんはそういうタイプよね」
「あまり見られるの好きじゃないから」
本音を話す姉だった。
「スタイルとかはね」
「胸も？」
見ればだ。メグの胸はジョーよりも大きい。姉妹で一番だ。
「見られたくないの？」
「恥ずかしいから」
やはりだ。胸もだった。
「そういうのはちょっとね」

「だからいつもロングスカートとか露出の少ない服なのね」
「けれどジョーは違うのね」
「まあ。スタイルを見たら服も見るじゃない」
「服なの」
「自分の着てる服は見せたいわ」
服にだった。ジョーはこだわりを見せるのだった。
「ズボンとか。特にジーンズはね」
「ジーンズなのね」
「今ははいてないけれど」
普通のスラックスだった。ブラウンのだ。
「それでも。ジーンズ好きだから」
「ジーンズね。私はジーンズははかないわね」
「正装系好きよね、姉さんは」
「そうね。その方がね」
実際にそうだと答えるメグだった。
「好きね」
「やっぱりそうなのね」
「露出は少ないし」
何につけてもまずそれを気にするメグだった。

第二百五十五話　マヤのピラミッドその五

「それに上品だし」
「上品ね」
「そう、それが好きだから」
メグの好みが出ていた。
「エレガントな感じが」
「そういえばお姉ちゃんって」
今度はベスがメグに話す。やはり彼女もズボンだ。淡い赤いズボンと桜井色のシャツである。かなり女の子らしい服装である。
「あれよね。昔からそうした感じの服が好きよね」
「子供の頃からね」
「国にいる時からだったわよね」
「そうね。けれど最近特に」
ベスは長姉を見ながらまた話す。
「その傾向が強いわよね」
「そうかも。何か日本にいたら」
この国にいたらというのだ。日本にだ。
「そういう服のお店が多いからかしら」
「そういえば多いわね」
ベスも言われてそのことに気付いた。日本には優雅な感じのデザインの服を売っている店が多いのだ。四人の周りでもそうなのだ。
そのことに気付いてだ。ベスはさらに話した。
「他のブティックとかも多くない？」
「多いわよね」
エイミーも話す。
「確かにね」
「というか日本ってそういうお店が多いような」
ベスは考えながら話していく。

「服を扱うことが多いようね」
「その通りよね。だから私もね」
「エイミーもなの」
「私も。いい服結構見つけたし」
それならというのだ。エイミーはさらに話す。彼女は青いズボン、ジーンズではなくスラックスにだ。ダークブルーのセーターである。その服でだ。彼女も歩いている。そうしながら話すのだった。
「またお金が入ったら買うわ」
「そうするのね」
「そうするわ。それでね」
「それで？」
「お姉ちゃんもそうするの？」
エイミーはベスに尋ねた。
「やっぱり。服買うわよね」
「今度実家のお父さんとお母さんの仕送りが来て」
これは毎月来ている。彼女達は学生である。その立場からまだ親達から仕送りを受けているのである。そのことを踏まえての話だった。
「それとアルバイトのお金が入ったらね」
「それからね」
「そう、それから」
服を買うというのである。
「そうするわ」
「そうね。その時にね」
「その時が楽しみよ」
ベスは話をしながらにこにことなっている。
「どの服を買おうかしら」
「ベスはあれよね」
メグがベスに話す。
「大人しい服が好きよね」

「うん、大好き」
ベスの服の好みはそうしたものだった。彼女は大人しく目立たない感じの服が好きである。それでこのことを話すのであった。
「目立たない服がね」
「目立たない服は」
エイミーがここでまた言う。
「日本には多いの？」
「結構多いわよ」
ベスは話す。エイミーにだ。
「それでもね。多いわよ」
「多いのね、やっぱり」
「ええ、探せば結構あるのよ」
そのだ。大人しい服はだというのだ。結構多いというのだ。

第二百五十五話　マヤのピラミッドその六

「どの店にもあるわ」
「私は活動的な服がいいわね」
ジョーはそちらだった。彼女らしい言葉である。
「動きやすいのがね」
「私は華やかな服がいいわね」
エイミーはそちらだった。
「ほら、ゴスロリとか舞踏会に出る様な」
「エイミーの服の趣味はね」
ジョーは末妹の服の趣味については顔を曇らせて言う。
「ちょっとね」
「ちょっとって？」
「悪趣味じゃないの？」
そうではないかというのだ。
「そう思うけれど」
「そうかしら」
「ゴスロリってどうなのよ」
ジョーはとりわけゴスロリについて話す。
「あれって派手でしかも」
「しかも？」
「嫌でも目に入るし」
「だからいいのよ」
完全にだ。嗜好の相違だった。姉妹でもそこが違っている。
「それがね」
「いいって？」
「服は目立つ為のものじゃない」
これがエイミーの服への考えだった。
「だったら。これ以上はない位派手じゃないと」

「やれやれ。相変わらずね」
ジョーが呆れる笑みで末妹にも話す。
「エイミーの派手好きは」
「駄目なの？」
「駄目とは言ってないわ」
そういうことはだ。決して言わないジョーだった。それでこんなことを言うのだった。
「エイミーらしいって思ってね」
「私らしいの」
「そう、とてもね」
とにかくだ。そうしたところがエイミーの特徴だというのだ。
そのことを話してだ。エイミーの今の服装、ズボンのそれも見て話す。
「色は普通だけれど」
「デザインはどうかしら」
「派手ね」
一言だった。
「かなり目立つわね」
「それを狙ってのだけれどね」
そのデザインはあちこちがジーンズの様に破れてしまっている。
そうしたスラックスもだ。この時代には存在しているのである。
そのジーンズをはいてだ。エイミーはジョーに話す。
「こういうズボンって何ていうのかしら」
「アバンギャルド？」
「そう、それよね」
まさにだ。そのアバンギャルドだというのだ。
「これってそれよね」
「アバンギャルドね」
「派手っていっても色々だから」
「色々？」

「そう、色々なのよ」
そうだというのだ。
「アバンギャルドだけじゃなくてパンクとかヘビメタもあるし」
「音楽のジャンルってそのままファッションになるからね」
「和服もいいわよね」
所謂ジャパネスクだ。連合の数多い文化の中でもとりわけ独特なものとしてだ。連合の中でも人気のあるファッションのジャンルなのだ。
その話をするとだ。ジョーはこんなことを言うのだった。
「そういえば日本の服ってね」
「持ってないわね、私達は」
「そういえば」
「私も持ってないわ」
メグ、ベス、エイミーの順に話していく。

第二百五十五話　マヤのピラミッドその七

「それはないわよね」
「和服は一着もないわね」
「振袖も浴衣もね」
そういったものは本当に一着も持っていないのだ。
ジョーもだ。そのことも話した。
「私も持ってないし」
「今度お金が入ったら買おうかしら」
エイミーは次姉の言葉に腕を組んで考える顔になる。そうしながら歩いていく。話をしながらもピラミッドには向かっているのである。
「和服ね」
「和服って凄いわよね」
「目立つけれど地味で」
メグとベスはその一見相反するものが同時にだ。和服にはあると話した。
「しかも綺麗で」
「誰でも着られる服だから」
「そうよね。私もそう思うわ」
その考えはジョーも同じだった。それで話すのだった。
「あの服。いいわよね」
「どんな服がいいかしら」
エイミーはもうどの服を買おうかという考えになっている。
「赤がいいかしら。青がいいかしら」
「色も大事よね」
「どの色が大事なのか」
「それもね」
大事だとだ。姉達は次々に話していく。

「それと振袖か浴衣か」
「冬には振袖で夏には浴衣」
「大きく分けてそうなるかしら」
「浴衣って面白いよね」
エイミーはどちらかというと浴衣に注目している。
「軽い感じで何か色気もあって」
「色気ね。それって大事だからね」
ジョーはエイミーのその話に乗って述べた。
「ほのかな艶やかさっていうか」
「ううん、艶やかって言われたら」
「ちょっと」
メグとベスは艶やかという言葉に反応してだ。
困った顔になってだ。こう話すのだった。
「そういうのはね」
「駄目かしら、私は」
「けれど露出はないわよ」
ジョーは二人に浴衣の露出について話した。
「身体は全部隠れるわよ」
「アオザイと同じよね」
エイミーはベトナムの民族衣装を話に出した。この時代でも着られているベトナム女性の服だ。丈の長い上着とズボンからなる服装である。
「そうしたところは」
「けれどアオザイも」
「そうよね」
メグとベスは困った顔のままアオザイについても話した。
「スタイルが完全に出るから」
「それが」
「それは仕方ないわよ」
ジョーはスタイルが出ることについては仕方ないと話す。

「出るなら出るよ」
「それで着るのね」
「わかったうえで」
「そう、出るものは出る」
ジョーははっきりと言い切った。
「それを受け入れてあえてなのよ」
「それで着るのね」
「浴衣もアオザイも」
「そういう服もあるから」
こう話してだった。ジョーはこんなこともだ。姉妹に話した。

第二百五十五話　マヤのピラミッドその八

「嫌なら着なければいいし」
「それだけなのね」
「嫌なら」
「そう、それだけだから」
ジョーはメグとベスに話す。
そしてそれからだ。姉妹達にこんなことも話した。
「マヤの民族衣装は確か」
「インディオよね」
「それよね」
「そう、インディオのあの派手な色のやつよ」
そうだとだ。ジョーはインディオの民族衣装に色から話した。
「まあ色は色々変えられるけれどね」
「それを着て。儀式とかするのよね」
「今でもそうよね」
「ええ。そうなっているわ」
メグとベスにだ。ジョーは再び話す。
「生贄もね」
「生贄の儀式もなのね」
「あの服で執り行うのね」
「そう、山羊とか羊を殺してから食べるね」
まさにその儀式だった。
「その時は宗教的な理由で着るのよ」
「何か面白そうね」
エイミーはここまで聞いてこう言った。
「一度観てみたい気もするわ」
「そうよね。何かね」
「面白そうね」

「そういうのも」
姉妹でそんな話をしてだった。四人はだ。
遂にマヤのピラミッドに着いた。そこはだった。
階段が中央にある白い石のピラミッドだ。階段のところに神像やそういったものが並べられて置かれている。そして頂上には祭壇だ。
そこまではごく普通のマヤのピラミッドだ。しかしだった。
その周りにいるものを見てだ。まずはベスが言った。
「ええと、ちょっと」
「これは想像しなかったわね」
「ええ」
こうだ。ベスはエイミーにも答える。彼女もエイミーも幾分か呆然となっている。
メグもだ。首を捻りながらジョーに尋ねた。
「ねえジョー」
「このことよね、姉さん」
「ええ。マヤのピラミッドの象徴になる動物って」
「多分。コンドルかジャガーよ」
ジョーは中南米のそうした動物を話に出した。
「それになるわ」
「そうよね。中南米だからね」
「若しくは蛇ね」
ジョーは今度はこの動物も話に出した。
「緑の翼のある白い蛇よ」
「それって確か」
「そう、ケツアルコアトル」
中南米の神の一柱だ。主神として信仰されてもいる創造や豊穣を司る神だ。
その神を話に出してだ。ジョーは首を捻る。
「その像とかならわかるけれど」
「どうしてあの動物なのかしら」

「私もわからないわ」
こう言ってまた首を捻るジョーだった。右から左にだ。首が動く。
「カピバラよね、あれって」
「ええ、あれはね」
そうだとだ。今度はメグが答えた。見ればだ。やけに大きな鼠がピラミッドの周りにいる。しかもどれも丸々と太っている。それが一杯いるのだ。

第二百五十五話　マヤのピラミッドその九

「間違いないわ」
「ピラミッドにカピバラ！？」
ジョーは左に傾いている首を右に戻した。
「どうしてかしら」
「生贄じゃないわよね」
「多分違うわ」
また言うジョーだった。それはわかった。
「あれはね」
「ううん、どういうことかしら」
「本当に理解不能よ」
ジョーは明らかに戸惑いを見せていた。
「これはね」
「ううん、そういえば」
ここで話すのはベスだった。彼女もだ。首をしきりに捻りながら話す。
「マヤって鼠多かったわよね」
「それも大型のものがね」
メグが次妹に話す。この場合はげっ歯類という意味だ。
「あのカピバラとかヌートリアとかね」
「他にもかなり大きな鼠もいたわよね」
「いるわ。地球じゃ絶滅したようなのがね」
「それでかしら」
こう考えだしたベスだった。
「今もピラミッドの周りに」
「何か。それに」
今度はエイミーが言う。
「他の動物も出て来たし」

「あっ、そのアルパカ」
「あれは間違いなく」
「それよ」
先程姉妹が話してだ。アルパカも出て来たのだ。それも何匹もだ。
ピラミッドの周りは忽ちのうちに異様な風景になってしまった。
「何か嫌な予感がするわね」
「そうね。アルパカがいるなんて」
メグとジョーの顔が次第に曇る。
「唾には気をつけないとね」
「あれって凄く臭いらしいから」
その唾がだまた警戒されるのだった。
「じゃあ今は」
「警戒して進みましょう」
「ええ、わかったわ」
ベスも姉達の言葉に頷く。
「それじゃあ今は」
「そうよね。アルパカって危険だから」
エイミーもだ。アルパカへの警戒の念を持っていた。
その警戒のままだ。彼女はこんなことも言う。
「それにしてもシュールね」
「アルパカがピラミッドを包囲してるって」
「しかもピラミッドの上にも階段にもいるし」
「他の動物達も一緒だから」
そのカピバラ達だ。それに加えてだ。
ヌートリアまで出て来た。アメリカバクもだ。その動物達を見てだ。
ジョーはだ。こう言うのだった。
「近くに水辺があったわね」
「そういえばこのピラミッドの傍に」
メグもここで気付いた。

「動物園があったわ」
「それでなのね。ピラミッドまで出て来たのね」
ジョーはこう考えた。
「成程ね。というか動物園は何をやってるのかしら」
「野放しじゃないわよね」
ベスは流石にだ。その可能性は否定した。
「アルパカなんて野放しにしたら」
「唾吐きまくって大変よ」
エイミーは顔を顰めさせて言う。

第二百五十五話　マヤのピラミッドその十

「恐ろしいことになるわよ」
「つまり。考えてこうしているのね」
エイミーは話した。
「このピラミッドを囲ませているのね」
「動物と触れ合うということかしら」
ベスはこう考えた。
「それでああしているのかしら」
「そうじゃないかしら」
ジョーもだ。こう考えるのだった。
「それでああして」
「けれど。アルパカって」
エイミーはとにかくだ。アルパカのことを懸念材料にしている。
そのうえでだ。彼女は話すのだった。
「あんなの置かれると」
「中々近寄れないわね」
ジョーは眉を顰めさせて言った。
「困ったわね」
「帰る？」
ベスは最終手段を提案した。
「機会をあらためてまた来るってことで」
「それがいいんじゃないかしら」
メグが最初にベスの提案に乗った。
「幾ら何でもアルパカは」
「そうね。相手が相手だから」
次に賛成の言葉を述べたのはジョーだった。これで三人だった。
「また今度でね」
「そうよね。ピラミッドは逃げないから」

エイミーもだ。今回は仕方ないといった顔だった。
「また今度ね」
「決まりね」
メグが長姉として決断を下した。
「先にエジプトのピラミッドに行きましょう」
「マヤは後でね」
「後回しにしてね」
「まずはそっちに行きましょう」
こうしてだった。四人は踵を返してエジプトのピラミッドの方に行こうとした。しかしであった。
四人の前にだ。若い作業服の女の人が出て来た。彼女は。
「あっ、確かお姉さんって」
「そうよね。確か」
エイミーとベスが彼女の顔を見て言う。
「動物園のマヤのコーナーの」
「飼育係のお姉さんですよね」
「ええ、そうよ」
彼女もだ。にこりと笑って応えてきた。帽子の奥の顔はだ。浅黒い肌に黒い髪と目だ。何処かラテンも入っている中南米の顔である。
その彼女がだ。四人に言ってきた。
「アルパカがいるからよね」
「はい、引き返そうと思っています」
「今は」
メグとジョーがお姉さんに話す。
「唾は嫌ですから」
「後でここに来ます」
「大丈夫よ」
お姉さんはにこりと笑って二人にも話した。
「うちのアルパカ達はね」
「えっ、大丈夫って」

「けれどアルパカは」
「躾けてるから」
だから大丈夫だとだ。お姉さんは言うのである。
「安心していいわよ」
「そうですか？」
「本当にですか？」
「だって。あの唾はね」
お姉さんもアルパカの唾について話す。
「凶器だから」
「だから禁じてるんですね」
「躾けて」
「そうよ。そうしてるのよ」
お姉さんのこの話は続く。

第二百五十五話　マヤのピラミッドその十一

「アルパカには要注意しないとね」
「それは育成にもなんですね」
「そうなの。癖の強い動物だから」
つまりだ。癖が強いのは外見だけではないというのだ。
そのアルパカ達を見ながらだ。お姉さんは四人姉妹にさらに話す。
「まあ安全だから」
「ピラミッドに入っても大丈夫ですか」
「すりすりしてくる位よ」
お姉さんは笑顔のまま四人に答える。
「それだけだからね」
「そう。それじゃあ」
「今から行きましょう」
「ピラミッドに」
こうした話をしてだった。四人はだ。
ピラミッドに向かうのだった。するとだ。
アルパカ達がだ。すぐに四人の傍に集ってきた。そうして身体を摺り寄せてくるのだった。
それを受けてだ。エイミーが笑顔で言う。
「こうしてるとアルパカもいいわよね」
「そうね」
ベスが笑顔で妹の言葉に答える。
「ピラミッドにアルパカって確かに何か違うけれど」
「それでも。可愛いわよね」
「とてもね」
ベスは笑顔のままだ。そうしてだ。
今度はだ。ヌートリアを見て話した。
「このヌートリアも」

「確かヌートリアは害獣だったのよね」
メグがこのことを話す。
「確か」
「ええ、そうよ」
ジョーが姉の言葉に答える。ここでもだ。
「作物を食い荒らすね。困った動物だったらしいのよ」
「今じゃ普通にいる動物だけれど」
「そうね。川に普通にいるわよね」
「家畜にもなってるしね」
食用及び毛を使うのだ。毛は何度も刈る様に品種改良されている。
この辺り羊のそれと同じ様になっているのだ。それが家畜のヌートリアなのだ。
「別に害獣には思えないけれど」
「地球の。日本の自然じゃそうだったみたいよ」
「日本の、なのね」
「そう、あの国のね」
あくまでそこに限定して話すジョーだった。
「アマゾンだったら普通だから」
「今の連合だと害獣にはならないわよね」
「全然ね。連合の自然は凄いから」
他の文明に比べてだ。連合にはそうした惑星がかなり多いのだ。
ヌートリアどころか恐竜や巨大な魚類が普通にいる惑星ばかりだからだ。
「ヌートリア位だとね」
「考えてみれば」
四人はピラミッドを登っていく。そうしつつ動物達を触れ合いながら話すのだった。
「恐竜とかに比べたらアルパカは」
「全然大人しいわよね」
「そうよね。ティラノザウルスなんて」

ジョーが話すのはよりによってこの恐竜だった。
「今ここにいたら」
「確実に逃げたわね」
「そうしたわね」
メグは妹の言葉にこう真顔で答えた。
「あれは流石に」
「恐竜は海でも凄いし」
何処でもだ。巨大で狂暴な種類が存在しているのが恐竜だ。
「エラスモサウルスなんてもう」
「ティロサウルスとかも怖いわよね」
「あんな海に一人で落ちたら」
「確実に死ぬわね」
容易に予想できる展開である。
「それに比べたら唾も」
「確かにかけられたくないけれど」
それもだった。
「食べられるよりはましよね」
「相手が相手だし」
そのだ。巨大かつ狂暴な恐竜ならばだというのだ。
「もう一口よ」
「ぺろりよね」
「鰐だって。恐竜に分類される鰐だと」
その大きさ故にそうなるのだ。ジョーはそうした鰐についても知っているのだ。
「もうね。二十メートルだからね」
「このピラミッドと比べてもかなり大きいんじゃないかしら」
二十メートルと聞いてだ。ベスは今自分達が登っているピラミッドと比べて話した。
「何匹も集っていたら余計に」
「うわ、嫌な光景ね」

エイミーは実際に想像してみてこう言った。
「それって」
「そうよね。ちょっとね」
「ないわ、それは」
「やっぱり。それに比べたら」
アルパカもヌートリアもなのだった。
「こうした動物もね」
「安心して見られるわよね」
「命の危険がないから」
とにかくそれに尽きるのだった。そうした話をしながらだ。
一行はピラミッドの頂上に着いた。そこは祭壇だった。
その祭壇の前でだ。メグが言ったのである。
「それじゃあ今からね」
「ええ、中にね」
「ピラミッドの中に入りましょう」
ジョーとベスが応えてだ。エイミーも言う。
「中には何があるのかしら」
「それも見ましょう」
メグは笑顔で末妹に話してだ。そうしてだった。
その祭壇の中に入りだ。ピラミッドの中にも入るのだった。

マヤのピラミッド　　完

２０１１・６・９

第二百五十六話　猫と駱駝とジャッカルとその一

猫と駱駝とジャッカルと

ピラミッドの中はだ。簡素だった。
そこは石造りでだ。灯りに照らされている。しかしその灯りは松明ではなくだ。それを模したイミテーション、蛍光灯によるものであった。
その灯りの中でだ。まずエイミーが話した。
「そういえばマヤのピラミッドって」
「うん、中は何もないのよ」
こう話すジョーだった。
「本来はね」
「けれどこのピラミッドは中にこうしたものがあるのね」
「祭壇だからでしょうね」
それでだとだ。ジョーはその祭壇の中を見回しながら話す。
「けれどここで何をするかっていうと」
「石の寝床があるわね」
ベスがそれを見た。祭壇の中央にはだ。装飾が施されているその石の寝床がある。それを見てだ。彼女は姉妹に話すのだった。
「つまりあそこでね」
「生贄を捧げるのね」
メグはすぐにわかった。そのことがだ。
「山羊とか鶏とか」
「これで赤ちゃんとかも生贄だったら」
エイミーはここで嫌な想像をしてしまった。
「それこそ魔女よね」
「そうね。あのサバトよね」
ジョーがここで言うサバトは悪魔のサバトだ。悪魔の儀式はその全てがキリスト教の裏返しでありミサも黒ミサと呼ばれているので

ある。
「それになるわよね」
「マヤってそういうイメージ強いわよね」
どうしてもだとだ。メグは首を捻りながら述べた。
「生贄のせいね」
「あとあれは」
ベスはだ。壁にかけられている無数の石仮面を見ていた。
そしてその仮面を見てだ。彼女は話すのだった。
「あれってまさか」
「ああ、あれね」
ジョーが妹の言葉に応えて話す。
「あれに血を付けたらよね」
「いきなり無数の牙が出て来て」
どうなってしまうのか。ベスは予想を話していく。５０
「頭をぶすりとか」
「それで吸血鬼になるのよね」
エイミーは三番目の姉に続けた。
「それで柱の男の御飯になって」
「そういうのじゃないわよね」
「そんなのあったら怖いわよ」
ジョーは笑って妹達の話を否定した。
「間違ってもそうじゃないから」
「じゃああれは」
「只の飾りなのね」
「絶対にね」
こうまで言うジョーだった。
「そもそもそんなおかしな仮面実際にはないし」
「そうよね。言われてみればね」
「幾ら古代マヤ文明でも」
妹達もだ。次姉の言葉を聞いて頷いた。

「流石にそこまではね」
「ないわよね」
「まああれよ」
ここでこんなことを言うジョーだった。
「今じゃそうした生贄とかおかしな儀式もないから」
「そんなことしたら大問題よ」
メグも常識から笑って話した。
「殺人事件じゃない」
「カルト教団になるわね」
ベスも少し考えてからこの結論に至った」
「確実に」
「そうよ。確実によ」
メグは二番目の妹に笑顔を向けて話す。
「だからそれはないわ」
「まあカルト教団自体はあるけれどね」
ジョーの言葉は嘘ではない。連合にもそうした宗教団体は存在している。残念だがそうした組織もまたこの世から消えることはない。

第二百五十六話　猫と駱駝とジャッカルとその二

「それでも普通のマヤの信仰は今は違うから」
「ただ。生贄の動物を殺して食べるだけだったら」
それは何か。エイミーはこんな風に言った。
「闘牛もそうよね」
「そうね。マタドールね」
「言われてみればマタドールは近いわよね」
「生贄に」
「文明は違うけれど」
闘牛士はスペインのものだ。もっともラテンアメリカ全体に広がってはいる。スペインが彼等の宗主国にあたるからそうなっているのだ。
「それでもね」
「似ているっていえば確かに」
「似てるわよね」
「そうよね」
こう話す四人だった。そしてだ。
エイミーは自分の口に右の人差し指を当ててだ。こう言うのだった。
「そういえば闘牛って」
「あれは？」
「残酷よね」
こう姉達に話すのだった。
「だって、牛に次々と剣刺して殺すし」
「ああ、あれねえ」
ジョーもその闘牛について話す。
「かなり残酷ではあるわね」
「ファアグラの作り方もだけれど」

ガチョウの首から下を埋めて特別な飼料を食べさせて太らせたものの肝臓である。そうしたやり方はこの時代でも健在なのである。

そのことについてだ。エイミーは話すのだった。

「エウロパってそっちには文句つけないわよね」

「自分達の文化にはそうよね」

ジョーはまた末妹に話す。

「絶対にね」

「けれど連合の生贄には」

「昔から文句つけてるわ」

「そうよね。いつもね」

「何かにつけて連合は残酷だって言ってるわ」

「それってかなり勝手よね」

今度は目を顰めさせるエイミーだった。

「何だっていうのよ」

「それがエウロパじゃないかしら」

ベスは毒舌だった。

「自分勝手な。お貴族様でしょ？」

「それとカルトみたいな市民団体？」

エイミーも言う。連合でのエウロパのイメージは傲慢な貴族に独善的な市民団体の二つが大きい。この二つは連合各国の教科書の主人公の一つでもある。

「そういうのばかりよね」

「だから。クレームつけてくるのよね」

また言うベスだった。

「エウロパだから」

「自分達のことは気付かないのよ」

メグの言葉は少し聞くだけでは長姉らしい言葉だった。

「それがエウロパ人なのよ」

「さっさと滅べばいいのに」

エイミーにも反エウロパ感情は健在だった。

「あんな連中」
「そうね。あのまま自滅してね」
ジョーもエウロパについてはこんな感じだった。
「石器時代みたいな生活してればいいのよ」
「石器時代？姉さんって優しいのね」
ベスはそのジョーにこう言うのだった。
「世紀末救世主とか。魔界都市とか地震の後の日本の関東とかは言わないの？」
「ああ、ああした世界ね」
「それか神の手が降臨した世界とか」
ベスの毒舌が続く。
「そういうのになったらいいのに」
「ああ、それいいわね」
ジョーも妹のその話に乗った。
「どっちにしても世紀末になればいいわね」
「そうよ。エウロパはそれでいいのよ」
また言うベスだった。当然悪意はある。
「ああして文句ばかりつけてくるんだから」
「貴族様はお姫なのよ」
メグもこんな調子だった。

第二百五十六話　猫と駱駝とジャッカルとその三

「だからそんなことを言うのよ」
「貴族って働かないのね」
エイミーは連合で言われていることをそのまま言葉に出した。
「それで身分だけで偉い人になるのよね」
「それが貴族でしょ」
ジョーもそう考えているがこれが連合の標準である。
「特権貪って。やりたい放題やるのがね」
「それで平民？だったわね」
今度はベスの毒舌だった。
「クレーマーばかりなのね」
「だからエウロパは駄目なのね」
メグの結論は連合全体で言われていることだ。
「ああして。狭い中で生きているのよ」
「最悪ね」
エイミーは一言だった。
「本当にエウロパなのね」
「そのエウロパの言うことはね」
どうなのか。メグは言い切った。
「気にしなくていいわね」
「生贄だって文化だしね」
ジョーも言う。
「命を粗末にしてるんじゃなくて大切にしているからこそね」
「捧げものにするのよね。神様の」
「そうよ、その為の生贄よ」
こうベスにも話すジョーだった。
「粗末になんかしてないわよ」
「そうよね。それは絶対にね」

「してないから」
だからこそだ。その生贄を後で食べるのだ。そうした儀式なのだ。
その儀式をだ。エウロパは批判しているのだ。しかしそのエウロパに対してだ。四人はこう言うのだった。
「そんな他の国に文句ばかりつけて」
「自分達はどうなのかしら」
「サハラに攻め込んだし」
「もっと野蛮じゃない」
これが姉妹の意見だった。
「そんなエウロパに何を言われてもね」
「どうってことないわね」
「生贄を粗末にしていないし」
「神様に捧げてそうしてちゃんと食べるから」
だから何の問題もないというのである。
そしてだ。そうした話が終わってだ。エイミーが姉達に尋ねた。
「今日はここで生贄はないの」
「ここではしないわよ」
それはないと話すジョーだった。
「そういうことはね」
「しないんだ、ここじゃ」
「そうよ。だってここは模型みたいなものだから」
原寸大だがだ。それになるのだ。
「だから。そういうことはね」
「しないのね」
「あくまでこうしたものだって学習の為に再現しているから」
学園の中にある博物館の一環としてあるからだ。
「だからね。別にね」
「そういうことはしないのね」
「そう、ここはただあるだけの場所だから」
儀式はしないというのだ。

「別に何ともないわ」
「わかったわ。それじゃあ」
「さて、と。もうあらかた見たわね」
メグが妹達に話す。
「それじゃあもうね」
「そうね。マヤのピラミッドはもうこれでね」
ベスが長姉の言葉に応えて話す。
「次の場所にね」
「行きましょう」
そうするべきだとだ。また言うメグだった。
「次はエジプトのピラミッドよ」
「いよいよって感じね」
エイミーは腕を組み神妙な顔になって。こう言うのだった。
「その王家の墓ね」
「ミイラ男もいるわよ」
ジョーは微笑んでこうエイミーに話した。

第二百五十六話　猫と駱駝とジャッカルとその四

「あとは呪いも」
「王家の墓の呪い？」
「それもあるかもね」
「まさか。それはないでしょ」
エイミーは笑って呪いについては信じなかった。
「幾ら何でもそれは」
「まあね。実際はないわ」
それはないとだ。ジョー自身も言う。
「ただね」
「ただ？」
「あそこも七不思議みたいな話があったりするのよ」
学校には付きもののだ。そうした話もあるというのだ。
「まあ。石棺が動いたとか仮面の目が赤く光ったとか」
「そうした話は本当に絶対にあるわね」
「セットになってるわね」
メグとベスも言う。
「まあ。悪党が中で呪い殺されたとかなら」
「別にいいけれどね」
「そういえば学園の中に胸に七つの傷がある男がいて」
エイミーはこんな話もした。
「そうして悪い奴等をミンチにしていくって話もあったわね」
「ミンチ？」
「ミンチって？」
「そう、相手の急所を突いてね」
そうしてだというのだ。
「他には気の赴くままに遊んで殺すとかいう話もあるわ」
「それあの漫画よね」

ジョーにはすぐにその話の元がわかった。
「日本のあの漫画よね」
「というかそのままよね」
「あれじゃないの？また天本博士がおかしなことしたんじゃないの？」
連合最悪の危険人物がよからぬことをした結果ではないかというのだ。天本博士の所業によって無数のヤクザ者や暴走族が惨死しているのだ。
「それで出て来たんじゃないかしら」
「そうかしら」
「だと思うわ。本当にいたとしたらね」
こう話すジョーだった。
「あれはいたら本当に怖いわよ」
「それにしても。あの漫画を読むと」
ベスが言う。
「核戦争が終わったらああした世界になってね」
「それでよね」
エイミーも姉に話す。
「ああした主人公が出てね」
「そんな世界になるって思うと」
もうそれで、なのだった。
「怖くて仕方ないわよね」
「あの時代は本当に核戦争が恐れられていたのよ」
メグがベスに話す。
「実際にね」
「それでああした漫画ができたの」
「ほら、今でも連合がエウロパや他の知的生命体に占領された漫画とか小説とかあるわよね」
「ええ、ああいう感じなの？」
「そうなのよ」

メグはこうベスに話す。
「ああした感じでね」
「成程ね。それにしても」
納得したうえでだ。さらに言うベスだった。
「核戦争の後ってあんなに荒廃するのかしら」
「多分しないわね」
そのことについてはジョーも言う。
「というかあの世界って」
「何もかもが滅茶苦茶よね」
「完全にね」
ジョーもベスに言うのだった。

第二百五十六話　猫と駱駝とジャッカルとその五

「地震の後の関東にしても魔界都市にしても」
「政府とか全部破壊されて残っているのは」
何なのか。メグの話がそこに移った。
「突然変異の人達だかりで」
「何でモヒカンが多いのかしら」
エイミーが突っ込むのはこのことだった。
「あの世界って」
「それも異常に筋肉が発達してるのに弱くて」
「バイクばかりあって」
「舞台何処かよくわからないのも」
一応日本になってはいる。しかし多くの人間が日本ではないのではないかと考える。理由はあまりにも日本人離れした悪党ばかりだからだ。
「あの作品世界って」
「普通に核戦争が怖くなるような」
「そういう世界よね」
メグもジョーもベスもだった。こう考えるのだった。
そうした考えをしながらエジプトのピラミッドに向かうのだった。するとだ。
今度はだ。砂漠をイメージした場所の中央にあるその巨大なピラミッドの周りにだ。マヤのそれと同じくかなりの数の動物達がいた。その動物達は。
「何で猫なの？」
エイミーが言うのだった。
「ピラミッドに猫って」
「あれね」
ベスがそのエイミーに応えて言う。

「あれは猫が古代エジプトでは神の使いだったからよ」
「それでなの」
「そう、それでなの」
こう妹に話すのだった。
「それであああしてね」
「猫がピラミッドの周りにいるの」
「そうなるわ。それと」
勿論猫だけではない。その他にいたのは。
駱駝だった。駱駝達も大量にいるのだった。その駱駝も見てだ。
エイミーは言うのだった。
「エジプトっていったらやっぱりあれなのね」
「そうね。あれは説明不要よね」
「ええ」
その通りだと答えるエイミーだった。
「エジプトだからね」
「もうエジプトって国はないけれど」
サハラの中に消えたのだ。その戦乱の中でだ。
「それでも文化は残ってるから」
「考えてみれば不思議よね」
ここでこう言ったのはジョーである。
「サハラでは消えたのに連合には残ってるのも」
「エジプトの神様達も」
その神々について話したのはメグである。
「連合ではいるから」
「それの象徴がピラミッドなのね」
エイミーはまたピラミッドを見て話す。
「うちにもある」
「エジプトっていったらピラミッド」
「皆そう思うわね」
「そうよね」

姉達もエイミーのその言葉に頷く。やはりエジプトといえばそれだ。

そしてそのピラミッドに向かおうとする。しかしここでだ。

エイミーがまた言った。今度言ったことは。

「ただ」

「ただ？」

「ただって？」

「砂に猫よね」

今度言うのはこの二つの因果関係についてであった。

「ってことは」

「砂の中に、なのね」

「猫ちゃんのうんこね」

「それがあるかも知れないっていうのね」

「だって。猫よ」

その猫が問題なのだった。

第二百五十六話　猫と駱駝とジャッカルとその六

「絶対にうんこしてるわよ」
「そこが犬と違うのよね」
「猫ちゃんは砂にうんこするから」
「それが習性みたいなものだから」
「そうでしょ？じゃあこの砂場かなり危険なんじゃ」
エイミーは足下を見る。その砂場は。
白い。白い砂の世界だ。だがそこにあるかも知れないものは。
「今のところはないわね」
「けれど何時出て来るかわからない」
「しかも踏んだら終わり」
「そうなのね」
姉達も警戒している。明らかにだ。
「一個でも踏んだら終わりだから」
「気をつけていきましょう」
「そうしないといけないわね」
「猫もねえ」
エイミーはあらためて難しい顔で言う。
「悪戯好きだから」
「悪戯をするのが猫なのよ」
ジョーは猫に対する己の考えを断言して述べた。
「そして寝るのがね」
「そうよね。猫って寝るか悪戯するか」
「それか食べるかでしょ」
「その三つしか行動のない生き物なのね」
「だからよ」
今もだ。その足下にだというのだ。
「うんこがあってもね」

「普通よね」
「そういうことよ。あとは」
ジョーはさらにだ。生き物も話に出した。
「スカラベね」
「スカラベ？」
「フンコロガシよ」
それだというのだ。
「スカラベは復活する生き物って考えられてたから」
「けれど。うんこを」
「そう、うんこよ」
またしてもだ。うんこなのだった。
「うんこがあるからね」
「エジプト人ってうんこが好きだったのかしら」
「好きではなかったけれど、取り立てて」
少なくともだ。スカトロやそうした趣味はないというのだ。スカトロ趣味はこの時代にも存在している。かなり変わった性的嗜好として。
「たまたまだけれどね」
「フンコロガシも猫も」
「猫が砂場にうんこをするのは修正だし」
「フンコロガシはそうした動物だから」
「特にうんこと縁がある訳じゃないのよ」
そのだ。古代エジプト文明がだというのだ。
「むしろエジプト人は砂と水のお陰でかなり清潔だったわ」
「気候も乾燥してたから」
「そうした面では快適だったのよ」
ジョーはエイミーに話すのだった。そうしてだ。
そうした話をしてだ。四人は足下を警戒し続けながら先に進む。
しかしだ。
その目の前にだ。今度はジャッカル達が群で出て来たのだった。

今度はだ。ベスが言うのだった。
「ああ、そういえばジャッカルも」
「そうよ」
メグがベスに対して答える。
「エジプトでは重要な生き物だったから」
「あれよね。アヌビス神」
この神の名前が出て来た。エジプト神話において死を司る神だ。
冥界の支配者であるオシリス神の忠実な側近でもある神である。
「あの神様よね」
「そう。だからジャッカルもね」
「ここにいるのね」
「そういうことよ」
「ううん、これは怖いわね」
ベスは目の前にいるジャッカル達の群を見ながら言った。

第二百五十六話　猫と駱駝とジャッカルとその七

「ちょっとね」
「それでもよ」
「前に進まないとピラミッドまでは行けないわよね」
「ええ、そうよ」
まさにその通りだというのだ。
「けれど。このジャッカル達って」
「大人しいわよね」
「まるで犬みたい」
元々犬の仲間である。『みたい』に見えるのも道理だった。
「それよね」
「そうよね。これって」
「ああ、このジャッカル達も猫達もね」
またしてもだ。何処からか声がしてきた。
「大人しいし決まったところでうんこするから」
「あっ、そうなんですか」
「じゃあ足元もそれ以外の場所も」
「安全だよ」
若い男の言葉である。
「だから安心していいよ」
「そうなんですか」
「それじゃあ」
「そう、駱駝もいるしね」
見ればだ。駱駝達もいた。エジプトにつきものの動物達が揃っている。
そして駱駝のうちの一匹の上にだ。若い日に焼けた顔の男がいた。
サファリパークに行く様な服を着たその若い男がだ。四人姉妹に言うのだ。

「マヤのピラミッドの方から連絡があったよ」
「こっちに来るってですか」
「その連絡が」
「そうだよ。従妹からね」
ここでだ。思わぬ話が出て来た。
「連絡があったんだよ」
「従妹さんって」
「じゃああの女の人とお兄さんって」
「親戚同士なんですか」
「そうなんだ」
この事実が今明らかになるのだった。
「驚いたかな」
「いえ、別に」
「これといって」
姉妹達は普通に答えた。
「何となく見た目でわかります」
「ですから」
「そうなんだ」
姉妹に言われてだ。お兄さんもだった。少し拍子抜けしながらも言うのだった。
「わかるんだ」
「はい、それでなんですけれど」
「このジャッカルは大丈夫なんですか」
「襲ったりとかしないんですね」
「ちゃんと飼育してるからね」
それでだ。大丈夫だというのである。
「餌もあげてるし躾もしてるし」
「ジャッカルって躾けられるんですか」
ベスは躾けられていると聞いてすぐに問い返した。
「それ。できるんですか」

「うん、できるよ」
できるとだ。お兄さんはにこりと笑って即答した。
「だって。犬の仲間じゃない」
「犬の仲間だからですか」
「犬は躾けられるよ」
この辺りはプロらしい確信に満ちた言葉だった。
「ちゃんとね」
「狼と同じですね」
「狼から犬になったから」
このことは誰もが知っていることだ。犬は最初から犬だったのではないのだ。狼が人と共にいるようになりそれで犬になったのである。

第二百五十六話　猫と駱駝とジャッカルとその八

その犬の仲間だからジャッカルも躾けられるとだ。お兄さんは四人に話すのだった。

「だからいけるから」

「そうなんですか」

「うん、そうだよ」

また四人に言う。

「むしろネコ科の動物より楽かな」

「ネコ科はそうですね」

ジョーはネコ科についてはすぐに納得した。

「気まぐれで我儘ですから」

「それと比べたらね」

「楽なんですね」

「そう、楽なんだ」

お兄さんは自分の周りに来たジャッカル達の頭を撫でている。確かによく躾けられているのか慣れたものである。

「確かに狼よりは難しいけれどね」

「躾けられる」

「そういうことですか」

「だから安心して。いいジャッカル達だから」

「わかりました」

四人はお兄さんの言葉に頷く。しかしだ。問題はまだあった。

それぞれの足下を見てだ。四人は怪訝な顔でお兄さんにさらに話す。

「あの、砂のところに」

「猫のうんことかは」

「ありますよね」

「やっぱり」

「ないよ」
それもだ。大丈夫だというのである。
「猫のうんこも躾けてるから」
「だからですか」
「砂場でうんこしないようにですか」
「ちゃんと躾けてるんですか」
「それも」
「猫の世話をするうえでは基本だよ」
うんこをする場所について躾けるのはだ。そうだというのである。
「ちゃんとそれぞれのトイレでしかうんこしないようにしてるから」
「そうですか。じゃあ砂場にはですか」
「うんこはないんですね」
「猫のうんこは」
「勿論蛇や蠍もいないから」
砂漠といえば付きもののだ。そうした物騒な存在もだというのだ。
「安心していいよ」
「まあ。そんなのは流石にいないと思いますけれど」
「刺されたり噛まれたりしたら洒落になりませんから」
「勿論ピラミッドにもいないから」
四人が目指すだ。そこにもだというのだ。
「というかそれやったら洒落にならないから」
「そういえばマヤの方にもいなかったですね」
「ちゃんとしてましたね」
「毒のある生き物は絶対にですね」
「外には出せないんですね」
「クレオパトラの演出はできないから」
クレオパトラはその自慢の胸をコブラに噛ませて自害したと言われている。伝説の話の可能性も高いが絶世の美女に相応しい絵になる結末ではある。
「だからね」

「じゃあ安全な動物達だけですね」
「どっちのピラミッドにいるのも」
「勿論駱駝もだよ」
見ればだ。駱駝達はのどかに歩き回っている。
「別に噛んだりしないから」
「駱駝もですか」
「そうだよ。駱駝は結構癖のある動物でね」
癖があるのは外見だけではないのだ。
「噛んだりおしっこで攻撃したりするけれど」
「ですよね。駱駝って結構」
「そういうこととしますから」
「それも躾けたから」
駱駝についてもであった。
「安心してね」
「わかりました」
「じゃあ安心してピラミッドの中に行かせてもらいます」
「そうさせてもらいます」
こうしたやり取りをしてからだ。四人は安心した気持ちになって砂場を進めるようになった。

第二百五十六話　猫と駱駝とジャッカルとその九

その砂場を通る中でだ。次第にピラミッドの実際の大きさが見えてきた。その大きさは。
「でかいわねえ」
「かなりね」
ベスがエイミーの言葉に応えて言う。
「大きいわね」
「このピラミッドって確か」
エイミーはここで言った。
「あれよね。地球のピラミッドを再現したのよね」
「そうよ。クフ王のピラミッドね」
ジョーがそのピラミッドだと妹達に話す。
「それを再現したのよ」
「今もそのピラミッドは地球にあるわ」
メグが話す。
「ちゃんとね」
「それで再現なのね」
「なくなっていたら復元になるわ」
この辺りが言葉の複雑なところである。
「だから再現なのよ」
「再現になるのね」
「そういうことよ。それにしても実際に見てみると」
メグはピラミッドを見上げる。するとだった。
そのとてつもない大きさにだ。息を飲み言うのだった。
「山みたいよね」
「そうね。ちょっとした山位はあるわね」
ジョーもそうだとだ。姉に同意する。
「これ作るのってお金かかってるわよね」

「そうみたいよ」
お金の話にもなる。何かを作るのには金が必要だ。それは学校においても同じだ。
「数学的な計算もかなり高度なのよ」
「ピラミッドは理系の塊でもあったわね」
ピラミッドの別の一面だ。ただあるだけではないのだ。
「四角すいの形で中も」
「ええ。今の時代もね」
この時代でもだ。ピラミッドにそうしたものが必要なのである。
「だから。思うと」
「ええ。ピラミッドを造った時代になると」
メグとジョーはそれぞれ話していく。
「相当なお金と技術、それに頭もね」
「労力とか時間は言うまでもないわよね」
「紀元前でこんなのを幾つも造るって」
「エジプトって凄かったのね」
「確か。ピラミッドって」
ベスも話す。そのピラミッドについて。
「王様が仕事のない時期の民に仕事を与える為だったのよね」
「そうよね。農業ができない時期に」
エイミーも知っていた。学校の授業で習ったことだ。
「その時期に王様が国家事業として」
「それで造ったものだったわね」
「何か色々あったのね」
ジョーは妹達の話を聞きながら頷く。
「ピラミッドの意義とか。その中にあるものって」
「オーパーツね、一種の」
メグはピラミッドをこうまで評する。オーパーツとはその時代では本来有り得ない技術や知識で造られたもののことだ。古代マヤの水晶の髑髏等がそれにあたる。

「ここまでくると」
「そうかも。少なくとも当時のエジプトにはそれだけの知識と技術があったのよ」
ジョーはその古代エジプトの話もする。
「紀元前の。四千年前のエジプトに」
「歴史ね」
メグは微笑んで言った。
「それなら今からね」
「その歴史に入りましょう」
四人はピラミッドの前に立った。その周りにも動物達が集っている。石の一つ一つが人間以上の大きさがあるが。猫達は普通にかなり上のところまでいる。

第二百五十六話　猫と駱駝とジャッカルとその十

猫はおろかジャッカルや駱駝までいる。その動物達を見てエイミーは首を傾げさせて言った。
「猫はまだわかるけれどどうしてジャッカルや駱駝があんな上までいるのかしら」
「まさか石を跳んで？」
ベスはこう考えた。
「それであそこまでのかしら」
「それは有り得ないんじゃ」
エイミーは三番目の姉のその考えに疑問を呈した。
「駱駝が跳ぶのは」
「ジャッカルは？」
「ジャッカルってそんなジャンプ力あるの？」
エイミーはまたメグに言った。
「イヌ科の動物って。あの石人間以上の高さだし」
「どうやって登ってるのかしら」
四人が首を捻っているとだ。あのお兄さんが来てだ。こう話すのだった。
「階段があるからね」
「階段？」
「階段がですか」
「そう、ピラミッドを登る階段がね」
それがあるというのである。
「それに登ってなんだ」
「そうだったんですか」
「階段を使ってですか」
「それで登って」
「そうだったんですね」

四人もこれでわかった。階段を使えばだった。
「そういえばピラミッドって階段もあるし」
「それで登ったり降りたりするから」
「そういうことだったんですか」
「そうだよ。だから駱駝やジャッカルも登れるんだ」
そうした跳躍力のない動物達でもだというのだ。
「これでわかったかな」
「というか駱駝って階段使えるんですか？」
ジョーが気にするのはこのことだった。
「そんなことができるんですか」
「ちゃんとね」
「やっぱりそれも躾ですか」
「躾というかこの場合は訓練だね」
その結果としてだ。できるようになったというのだ。
「それでできたんだ」
「成程、そうなんですか」
「そうだよ。ジャッカルもね」
駱駝達だけでなくだ。ジャッカル達もそうした訓練を施しているというのだ。
「動物って階段が苦手なのもいるからね」
「特に駱駝はですね」
「そう、駱駝は蹄だし」
そして身体が大きい。だから階段は辛いというのだ。
そうした話をしてだ。お兄さんは四人にあらためて話した。
「それじゃあ中に入るんだね」
「はい、今から」
できるとだ。お兄さんはジョーに明るく答えた。。
「ああ、それだね」
「そんなことできるんですか？」
「できるよ」

「そうさせてもらいます」
「楽しんできたらいいよ」
にこりと笑ってだ。四人に話すのだった。
「思う存分ね」
「ピラミッドの中って罠が一杯あるんですよね」
「うん、トラップがね」
にこりと笑ってだ。お兄さんはベスにも話す。
「それの宝庫だから」
「宝庫ですか」
「ピラミッドっていったら罠じゃない」
それこそ古代エジプトの頃からの常識である。ピラミッドの中の財宝を狙う墓泥棒に対する罠だ。無論それで命を落としている者もいる。
その罠もだ。多くあるというのだ。
「勿論一杯あるよ」
「下手したら死ぬ様な罠ですか？」
「普通学校にそんな罠はないよ」
笑って答えるお兄さんだった。
「再現はしてるけれど安全はしっかりしてるから」
「安全なんですね」
「安全でないと問題になるよ」
「そうですよね。やっぱり」
「それとも死にたいとか？」
お兄さんは冗談でこんなことも言ってきた。
「それならリアルのピラミッドに行けばいいよ」
「いえ、生きたいです」
ベスはお兄さんにすぐに答えた。
「まだやりたいこと一杯ありますから」
「自然な答えだね」
「それでなんですが」

さらに言うベスだった。
「今から行かせてもらいます」
「楽しんで来てね」
「じゃあ行きましょう」
メグが長姉として妹達に笑顔で話す。
「中にね」
「うん、それじゃあね」
エイミーがにこりと笑ってだ。そのうえでだ。
それを合図に四人で一緒にピラミッドに入る。遂にそのエジプトのピラミッドの中に入るのだった。

猫と駱駝とジャッカルと　　完

２０１１・６・１７

第二百五十七話　複雑な迷宮その一

複雑な迷宮

四人はピラミッドの中に入った。その中は。
石造りでだ。しかも薄暗い。その薄暗い中にだ。何か不気味なものが漂っていた。
それを感じ取ってだ。ベスが姉妹に話す。
「何かもういきなり」
「そうね。出てきそうね」
ベスが妹の言葉に応えて言う。
「早速ね」
「何が出て来るかっていうと」
「ミイラ男ね」
ジョーが言うのはまずそれだった。
「それでよ」
「罠もあるわよね」
「ない筈がないわ」
それは絶対にあるとだ。断言するジョーだった。
「っていうかもうあるってパンフレットにも書かれてるし」
「楽しいスリル満点の罠がよね」
「それが一杯ね」
あるというのだ。
「そういうのも楽しんでね」
「ピラミッドの中に進んでよね」
こんな話をしてであった。
四人姉妹は一歩前に出ようとする。しかしここで。
いきなり床が開いた。早速だった。
四人は大きく前に跳躍した。それで難を逃れたのだった。
「いきなりって」

「また凄いわね」
四人共着地してから冷や汗を拭く。
「流石はピラミッドっていうか」
「容赦しないわね」
「あれっ、確か」
メグがだ。顔の汗を拭いたハンカチをしまいながら言った。
「入り口に罠があるなんて聞いてないわよ」
「えっ、そうなの」
「ええ。同じ学部の友達にさっきメールで聞いたけれど」
携帯電話を出してだ。そのうえでエイミーに話すのである。
「その娘前にピラミッドに言ったことがあるから聞いたけれど」
「ないの」
「その筈だけれど」
「じゃあどうして？」
エイミーも首を捻って言う。
「こんな最初に」
「まさか」
ベスがだ。ふと察した顔で言ってきた。
「ピラミッドの罠って」
「まさか日によって違うとか」
「そういうのかしら」
「ちょっと待ってね」
姉達に応えながら自分の携帯を出すベスだった。その携帯をネットにつなげてだ。
このピラミッドを検索して調べる。その結果わかったのは。
「やっぱり。ここの罠って」
「日によって違うの」
「変わるのね」
「ええ、毎日コンピューターで制御してね」
それでだというのだ。

「毎日変わってるんだって」
「そうだったの」
「それってつまりは」
「そう、生半可な知識じゃ楽に通れない場所よ」
罠が日によって変わる、それによってだ。
「もっとも命の危険はないけれど」
「危険があったらまずいわよね」
また言うエイミーだった。
「校内の施設だし」
「それは何度も話してるけれどね」
そのエイミーにジョーが返す。
「実際はやっぱり違っていたのよね」
「ええ、勿論よ」
その古代のピラミッドについてはメグが話す。四人でその何処に罠があるのかわからない道を進みながらだ。四人は話しているのだ。
周囲に何があるのかわからない。無論警戒している。
だがそれでもだ。順調に進みながら話すのだった。
メグはだ。周りを見回しながら妹達に言う。

第二百五十七話　複雑な迷宮その二

「だって。墓泥棒を寄せ付けない為に」
「実際に死ぬ様な罠を」
「そう、ふんだんに仕掛けていたのよ」
言っている傍からだ。二人のすぐ後ろに石が落ちてきた。ただしその石は発泡スチロールだ。当たっても驚く程度で終わるものだった。
「例えば後ろの石も」
「本物の石で」
「当たったら終わりよ」
つまりだ。死ぬというのだ。
「その為の罠だから」
「娯楽としての罠じゃなくて」
ジョーは姉の話を聞きながら話す。
「本気で殺す為の罠」
「戦争のあれと同じね」
メグはピラミッドのその罠を戦争のトラップに例えてきた。
「ほら、ベトナム戦争ってあったじゃない」
「あの三回やったっていう？」
「相手がそれぞれ変わったっていうあの？」
「ベトナムが独立した戦争」
「そう、あの戦争」
この時代の連合ではベトナム戦争はアメリカとの戦争だけでなくその前のフランスとの戦争や後の中国との戦争も含めて話されるのだ。
「あの戦争でジャングルの中に罠一杯あったじゃない」
「映画であったわね」
ベスはその罠について具体的に話す。

「ジャングルの中に落とし穴があって」
「そしてその落とし穴の中には」
エイミーも言う。その落とし穴の中について。
「先の尖った竹槍が一杯よね」
「勿論落ちたら串刺しで」
ベスは映画の話をさらにする。
「天国行きよね」
「それは実際のピラミッドもだったのよ」
メグがまた話す。言っているその傍からだ。
左右の壁から壁の一片が突き出てきた。いきなりだ。
だが四人はそれもかわしてだ。話を続けるのだった。
「こうした感じでね」
「この壁が当たれば串刺し」
「そうなるのね」
「だから墓泥棒はかなり危険だったのよ」
そうだったというのだ。
「本当にね」
「ううん、けれどこのピラミッドは」
ジョーは少しジャンプした。足下が崩れたのだ。
その足下には落とし穴があった。またただった。
しかもその下には無数の大きな棘が見える。ただしゴムのものだ。

他の三人もその穴をかわしてだ。また話すのだった。
「ランダムだから」
「スリル満点」
「そうよね」
「そうね。いつも同じ罠だったら飽きるから」
完全に娯楽として話されている。
「毎日変わるのね」
「ただし。あれみたい」

ベスはここでも携帯のネットを見ている。それを見ながら姉妹に話す。
「迷路の構造自体は変わらないのね」
「ピラミッドの中の構造は？」
「全然変わらないの」
「そう、変わらないみたい」
そうだというのだ。
「変わるのは罠だけみたい」
「罠だけなの」
「それだけなの」
「そうサイトに書かれてあるわ」
携帯を見ながらの言葉だ。
「後はやっぱり」
「やっぱり？」
「やっぱりって？」
「いるみたい」
こう姉妹に告げるのだった。
「あれがね」
「ああ、あれね」
エイミーもベスに応えて言う。

第二百五十七話　複雑な迷宮その三

「ピラミッドっていえばっていう」
「そう、ミイラ男」
やはりそれはいるというのだ。ピラミッドといえばであった。
「それはいるらしいわ」
「ふうん、じゃあ今にも出て来るのね」
「ええと、アルバイトの人が入っていて」
「アルバイトの人も大変ね」
「サイトでも募集してるわよ」
そうしたこともサイトに書かれているというのだ。尚八条学園内のアルバイトなので八条学園の生徒が多いのは言うまでもないことである。
「結構時給もいいし」
「暑いからよね」
メグは時給のいい理由をそこから察した。
「全身に包帯巻いてメークまでして」
「そうよね。全身に包帯って」
「暑いわよ」
メグは包帯について断言した。
「夏場なんて。もうね」
「包帯ね。大変なのよね」
ベスも包帯のことを話す。それも自分の体験からだ。
「この前こけて。左手に巻いてたけれど」
「ああ、あの時ね」
「ええ。ビールを五リットル飲んでそれからお風呂に入った時」
とにかく酒の好きな姉妹である。こうしたことも日常茶飯事なのだ。
「あの時ねえ。ムダ毛処理で剃刀使っていたら」

「安全剃刀じゃなかったの？」
「酔ってたから普通の剃刀使ったのよ」
それで剃刀を間違えたというのだ。飲んでいれば有り得る話だ。
「で、すぱっとね」
「切っちゃった」
「そう、やっちゃったのよ」
まさにそうだというのだ。
「いや、血が吹き出るわ痛いわね」
「全く。何やってるのよ」
姉のメグもだ。妹の愚行に呆れ顔になって言う。
「そんなのクリーム使えばすぐじゃない」
「たまたま切らしてたのよ」
脱毛クリームがなかったのだ。それで剃刀だったというのだ。
「それでも。酔ってムダ毛処理なんてするものじゃないわね」
「姉さん、それは下手したら」
どうなるのか。ベスが怪訝な顔で話してきた。
「志賀直哉の小説になっていたわよ」
「日本のあの小説家の？」
「そう、剃刀って小説ね」
そのものずばりの題名である。私小説家の彼だが決して私小説ばかり書いているわけでないのだ。様々な作品を書いているのだ。
その作品を出してだ。ベスは姉に話すのだった。
「あれって最後首筋をね」
「切っちゃうのね」
「そう、剃刀でね」
まさにだ。そのものずばりであった。
「お客さんをそうしちゃったのよ」
「そのお客さん死んだでしょうね」
「そうみたい。血が噴出したってあったから」
首を切ってしまえばそうなる。当然の結末だった。

「もうね。あえて一気にずばってやったから」
「そういう小説なのね」
「だから。ああした剃刀って危ないし」
「お酒飲んで刃物使うのは」
「それだけで自殺行為だから」
顔を顰めさせて姉を注意するベスだった。
「気をつけてね」
「ううん、五リットル位ならって思ったけれど」
ベスの主観からの言葉だ。酒豪は健在なのだ。
「ビールだしね」
「確かに。ビールはお水みたいなものだけれど」
それはベスも同じだ。四人姉妹にとってビールなぞそういうものに過ぎない。
「けれど。お酒はお酒だから」
「用心しないといけなかったのね」
「それで包帯巻いたのね」
「そうだったのよね」
「暑かったのね」
話が本題に戻った。包帯を巻いていると暑いということにだ。
「それもかなりよね」
「ええ、夏は本当に辛いわ」
その左手を見せながら話すジョーだった。もう傷は残ってはいない。だがそれでその左手を切ってしまったと姉妹に話をするのである。

第二百五十七話　複雑な迷宮その四

「だから時給いいのね」
「そうなるわよね」
メグもジョーに応える。
「お金が困ったらそれかアトラクションの着ぐるみか」
「着ぐるみもお金いいの」
「ええ、いいわよ」
メグは怪訝な声でのエイミーの問いにも答えた。
「だって。ハードだから」
「暑いのにさらに暑いのを株って動く」
「よく考えたらそうよね」
ジョーとベスはその着ぐるみを頭の中に置いてから話す。
「ちょっと。やってくれって言われても」
「まずは考えるわよね」
「私は無理ね」
メグは自分はそうだというのだった。
「ちょっとね」
「私も」
「私もそれは」
ジョーとベスも同じだった。
「多分。途中で倒れるから」
「暑いのは苦手じゃないけれど」
「あまりにも暑いっていうしね」
「熱射病って怖いから」
「そうよね。言われてみれば」
エイミーもだった。姉達に続いて怪訝な顔になって言う。
「そうしたアルバイトは」
「そういうこと考えたら」

どうかとだ。メグが妹達の話をまとめて言った。
「仮面ライダーとか特撮のスーツアクターの人って」
「ああ、あれはね」
「もう凄いなんてものじゃないわよね」
ジョーとベスはこのことについても姉に同意する。この時代でもスーツアクターは存在している。激しいアクションも兼ねることも同じだ。
「着るだけでも凄いのに」
「あれだけ激しいアクションもして」
「しかも危険だし」
「スタントマンでもあるのよね」
「だから怪我が絶えないらしいわね」
エイミーも言う。
「ああした仕事の人って」
「そうよ。まあミイラ男もね」
そのミイラ男の話も為される。今このピラミッドにいる彼等だ。
「あれも確かに暑いわね」
「そうよね。危険じゃないけれど」
「あれっ、けれどこのピラミッドって」
ベスはピラミッドの空気を感じながら話す。暗い回廊の中の空気は。
「涼しいわよね」
「そうね。寒いってところまではいかないけれど」
ジョーもどうかという。その中でだ。
「暑いっていうのはないわよね」
「涼しいって言っていいわよね」
「間違いなくね」
そうした話をしているとだ。不意にだ。
四人の周りにだ。彼等が出て来たのだった。
「うおおおおおおお!!」

「うわあああああああ！！」
ミイラ男達だ。四人を取り囲み両手をあげて唸り声をあげてくる。
そのミイラ男達の一人の顔を見てだ。ジョーが言った。
「あっ、あんた」
「あれっ、ジョーか」
「こんなところでアルバイトしてたの」
「ああ、そうなんだよ」
急にフレンドリーな会話になる。襲われている気配はまるでない。
ジョーはさらにだ。そのミイラ男の肩を叩いて言うのであった。
「どう？上手くやってる？」
「やってるよ。楽しいアルバイトだよ」
「けど暑いでしょ」
「暑いことは暑いけれどさ」
「倒れたりしない？」
「そこまでは暑くないから」
ミイラ男は笑いながらジョーに話す。
「全然平気だよ」
「そうなの。大丈夫なのね」
「しかも時給もいいしな」
アルバイトでまず問題になることだ。このことと待遇がアルバイトの問題である。

第二百五十七話　複雑な迷宮その五

「いいアルバイトだよ」
「そう。いいアルバイトなのね」
「ジョーもどうだい？」
スカウトだった。彼女もどうかというのだ。
「このアルバイトするかい？」
「私はいいわよ」
ジョーは笑顔でその誘いは断った。そのうえでこう言うのだった。
「どうも。倒れそうだから」
「そこまで暑くないぜ」
「それはあんただからよ」
「おいおい、そう言うのかよ」
「あんた特撮研究会じゃない」
そうした部活もある。特撮を専門的に調べたりする部活である。
「そこでスーツとか着るでしょ」
「ああ、着るぜ」
「だからあんたは平気なのよ」
そうだというのだ。
「慣れてるからよ」
「まあ慣れてることは事実だけれどな」
「普通の人は違うから」
「何だよ。折角誘ったのによ」
「もう他にアルバイトしてるし」
ジョーは笑ってこうしたことも言った。
「別にいいから」
「ああ、それじゃあな」
「本屋でアルバイトしてるのよ」
「ああ、それが御前のバイトか」

「そうよ。楽しいわよ」
実はジョーは読書家でもある。活発な性格からあまりそうは思われないが実は文学も好きなのだ。恋愛小説も好きだったりする。
「今度来てみてよ」
「じゃあ特撮の雑誌でも買うか」
実に特撮マニアらしい言葉だ。
「その本屋でな」
「そう来たのね」
「特撮研究会だからな」
それでだというのだ。
「だから。そうするさ」
「相変わらずね。けれどね」
「けれど？何だよ」
「だがそれがいい、ね」
にこりと笑ってだ。ジョーは答えた。
「あんたはそれでいいわ」
「いいだろ？じゃあ今度店に行かせてもらうな」
「その時を楽しみにしているわ」
「それじゃあな」
こう話をしてだ。そのうえでだった。
四人はミイラ男達と別れた。そうして罠を避けながら先に進むのだった。その中でだ。
不意にだ。前からだった。
巨大な石が迫って来た。それを見てエイミーが言う。
「あの石ってね」
「本物じゃないわよね」
「本物だったら死ぬわよね」
こうベスに答える。
「確実に」
「じゃあ何の石かしら」

「発泡スチロールだと思うわ」
それではないかというのだ。
「だから当たってもね」
「命に別状はないのね」
「そう思うわ。ただね」
それでもだとだ。ここでエイミーはこう言った。
「あの石に当たったらね」
「まずいことになるわね」
ベスもこう予想するのだった。
「当たったら別のトラップが作動すると思うわ」
「それじゃあ避けないと」
エイミーは周りを見回す。しかしだった。
逃げ道はない。何処にもなかった。狭い通路の中を巨大な石が前から転がってきている。これでは逃げられる筈もなかった。
その中でだ。メグが決断を下した。

第二百五十七話　複雑な迷宮その六

「反転するしかないわね」
「そうして逃げるしかないわね」
「ここは」
「後ろしか」
「そうよ。だから」
どうするか。メグは妹達に話す。
「後ろに向かって進撃しましょう」
「ええ、そうね」
「それじゃあ」
こうしてだ。四人は石に背を向けてだ。
そのうえでだ。石から逃れるのだった。その石は四人を追いかけてくる。
四人は通路を駆けながらだ。こうそれぞれ言う。
「何かピラミッドっていうよりは」
「探検映画っぽい？」
「秘境を進むみたいな」
「そんな風になってきたけれど」
「けれどあれよね」
メグが駆けながら笑顔で妹達に話す。
「何か面白いわよね」
「そうね。スリルがあるわ」
「とてもね」
ジョーとエイミーがメグの言葉に応える。
「こうした感じって」
「楽しいわ」
「私も。何か」
ベスもだ。笑顔で駆けながら姉妹に話す。

「面白いわ」
「ピラミッドっていいわね」
メグは妹達に笑顔で話す。
「何かまた来たくなったわ」
「姉さん、そう言うのは早いわ」
ジョーが姉にこう言ってきた。
「まだよ。これからよ」
「これから？」
「そう、これからよ」
楽しんでいる笑顔でだ。姉に言うのである。
「だって。まだゴールに着いてないから」
「王様のお墓には」
「だからまだよ」
こう姉に言うのである。
「そう言うのはね」
「そうね。ゴールに辿り着いてからね」
「それからにしましょう」
「わかったわ。じゃあ今の言葉は取り消すわ」
メグも頷く。そうしてだった。
四人で石から逃げる為に駆け続ける。その前でだ。
不意にだ。床が開いた。それでだ。
危うく落ちそうになった。しかし寸前のところで。
四人は一斉に跳びだ。その落とし穴をかわした。そこにだった。
石が落ちる。それもすっぽりと入った。それを見てだ。
エイミーがだ。にこりと笑って述べた。
「これで一件落着ね」
「そうね。けれどこれって」
「そのまま探検映画ね」
「そのものよね」
「面白いじゃない」

そしてジョーがこう言った。
「正直ここまでとは思ってなかったわ」
「燃えてきた？」
「かなりね」
楽しむ笑顔でベスにも答える。
「こうでないとね」
「そういうところ姉さんよね」
「そうでしょ。私らしいでしょ」
「ええ、確かにね」
ベスは次姉の言葉に納得した顔でいる。その顔でだ。

第二百五十七話　複雑な迷宮その七

微笑みつつだ。前を指し示して姉妹に話す。
「じゃあ。あらためてね」
「ええ、前にね」
「進んでいこう」
姉妹達も応えてそうしてであった。
一行は再び前に進む。その中でだ。
不意に足下にだ。あるものを感じた。それは。
「コブラ！？」
「まさかと思うけれど」
「ピラミッドだから」
「あっ、違うみたい」
ここでだ。エイミーがその足下を見て答えた。
「コブラじゃないみたい」
「違うの」
「それじゃないの？」
「だって」
よく見るとだ。四人の足下にあったのは。
只の縄だった。細長い縄だ。それが数本落ちているだけだった。
それを見てだ。エイミーは姉達に話した。
「目で驚かせる為のやつね」
「その為のロープ」
「それなの」
「暗いからよくわからないから」
それでロープ、即ち縄だというのである。
「驚かせるトラップなのね」
「ちょっと悪質と言えば悪質ね」
メグはそのことがわかってから首を捻って述べた。

「こんな罠は」
「そうよね。大した罠じゃないけれど」
それでもだと話すのはベスだった。
「気をつけてないと驚くわよね」
「正直蛇だって思ったら」
ジョーもそのことを考えずにいられなかった。そのうえでの言葉だった。
「もう。どれだけ驚くか」
「だから。驚かせる為のトラップだから」
エイミーもそのことを指摘する。
「こういうこともあるわよ」
「あるのね」
「驚いたら負けよ」
またこう言うエイミーだった。
「落ち着いていれば大丈夫よ」
「落ち着いてかつ冷静に」
「そういうことね」
「そう、そういうことだから」
そんな話をして縄を通過していってだ。さらに進む。
通路は迷路で上下になっていて右に曲がり左に曲がりだ。無数の罠とミイラ男達がひっきりなしに来る。その中を進んでいくのだった。
そして遂にだ。その部屋の前に来たのだった。
「ここよね」
「ええ、ここね」
「この中が」
玄室の前に来た。そこそがだった。
「王の部屋よ」
「つまりファラオね」
ジョーはメグの王という言葉をエジプト風にして言ってみせた。

「それなのよね」
「そう、ファラオの棺がある場所よ」
「ということはよ」
ジョーはそのことを確めてからこんなことを口にした。
「あの黄金の仮面があるのね」
「あれってツタンカーメンじゃないの？」
それではないかとだ。ベスが言う。
「だから。ここには」
「ないっていうのね」
「そうじゃないかしら」
首を捻って考える顔になっての言葉だった。

第二百五十七話　複雑な迷宮その八

「それは」
「ああ、それね」
ここで言ったのはメグだった。
「どうやらそれみたいよ」
「黄金の仮面あるの」
「それもツタンカーメンの」
尚且つそれだというのである。
「それみたいよ」
「時代が違うんじゃないの？」
「無視したみたい」
そうしたところは実にあっさりだった。
「あえて史的価値を考えてというか」
「というか？」
「エジプトには欠かせないからみたい」
それが理由だったというのだ。
「ピラミッドと一緒にね」
「何かそれって」
「ご都合主義っていうか適当っていうか」
「そんなのだけれど」
「いいおかしら」
「そんなので」
「よくある話だから」
だからだとだ。メグは妹達に話す。
「ほら、時代劇とかあるじゃない」
「衣装がどの時代も同じよね」
「違う筈なのに」
「特に日本のね」

今姉妹達が暮らしているその国の時代劇はどうかというと。
「ほら、全部同じ時代の服じゃない」
「江戸時代の二百六十四年がね」
「全部同じ服よね」
「そんなのってあるのかしら」
「だからそこなのよ」
二百年以上同じ服でいるということがなのだ。
「そんな筈ないのよ」
「当然服は変わるわよね」
「戦国時代が終わってからすぐと幕末じゃそれこそ」
「全く違うから」
「それじゃあ」
「それでも皆見てるから」
そのだ。有り得ない服の変化のなさがである。
「それと同じよ」
「クフ王のピラミッドなのにツタンカーメンの仮面がある」
「それもなのね」
「いいのね」
「少なくとも歌舞伎よりもましよ」
そのだ。歌舞伎よりはだというのだ。歌舞伎はどうかというとだ。
「だって。室町時代や鎌倉時代でも平安時代や飛鳥時代でもね」
「滅茶苦茶長くない？」
「合わせて何百年もあるけれど」
「多分千年はあるわよね」
妹達はその時代の間隔を聞いて話していく。
「その千年の間に？」
「服が全然変わらない？」
「有り得ないんじゃ」
「しかもずっと江戸時代の服だから歌舞伎って」
「幾ら何でも飛鳥時代に江戸時代の服って」

「時代考証どうなってるのかしら」
「歌舞伎に時代考証はないから」
そんなものは最初からないというのだ。メグは大胆に言い切った。
服だけでなくだ。歌舞伎にはこんなことまであるというのだ。
「鎌倉時代にお蕎麦をお店で食べてるのよ」
「鎌倉時代にお蕎麦なんてないでしょ」
ジョーは速攻で突っ込みを入れた。
「あれ室町からできていって江戸時代で定着したじゃない」
「そうよ。江戸時代よ」
「それにお店っていうと」
今度はベスが突っ込みを入れる。

第二百五十七話　複雑な迷宮その九

「出店だと思うけれど食べ物を出すお店って鎌倉時代にないから」
「そう、それも江戸時代よ」
「鎌倉時代に江戸時代の文化をそのままって」
「何か強引過ぎて」
「酷いんじゃないかしら」
エイミーもだ。考えながら話す。
「無茶苦茶にも程があるわ」
「それと比べたらピラミッドにツタンカーメンの仮面があるのも」
そうした強引な組み合わせもだと話す。
「納得できなくても頷けるでしょ」
「確かに納得できないけれど」
「不思議と頷ける様な」
「微妙に」
「マウリアはもっと凄いから」
メグが次に出すのはよりにとってこの国だった。
「もうね。一万年前なのに普通に今の時代の服装とかだから」
「まあ。マウリアはね」
「あそこは全然違うから」
「それも当然だけれど」
妹達はそれぞれ言う。
「あそこは何でもありだから」
「それで普通に踊るし」
「マウリアは話に出せないでしょう」
「そう。マウリアはこんなものじゃないから」
エジプトも日本もだ。マウリアの前には吹けば飛ぶ様なものだった。
「ピラミッドや歌舞伎なんてね」

「ううん、些細なものね」
「その程度の時代考証の強引さは」
「本当に」
「そうそう。まあマウリアの十戒だけれど」
かつてあった名作映画をマウリア人がリメイクしたのだ。その映画とは。
「象は出るし砂漠じゃなくて牛が一杯いる今の時代の街中でおまけに王様はマハラジャで」
「何処が十戒なの？」
「エジプトじゃないでしょ、それって」
「ファラオじゃなくてマハラジャなの」
「しかもピラミッドはあるけれど」
流石にそれはあるがそれでもだというのだ。
「ピラミッドの上や周りでね」
「あのいつものダンスね」
「踊ったのね」
「スペクタル。三千人のダンサーよ」
「三千人がピラミッドで踊る」
「凄いんだけれど」
誰もが聞いただけで唖然となることだった。
「そんな国はちょっと」
「他にないけれど」
「マウリアだけ」
「そう、マウリアだけよ」
メグもだ。話をしながら驚きを隠せない。
「そこまでできるのはね」
「それでそのピラミッドって」
エイミーはそのマウリア映画のピラミッドが果たしてエジプトのものかどうか不安になりだ。そのことをメグに対して尋ねたのだった。

「どんなピラミッドだったの？」
「色は極彩色で」
いきなりこうであった。
「中から光が溢れ出て中からミイラ男が出て来た」
「で、踊るのね」
「そう、主人公のモーゼ達と戦いながら」
そういう映画だというのだ。
「歌って踊ってね」
「それ本当に十戒なの！？」
ベスは話を聞いていてそのこと自体が考えられなくなった。
「じゃあモーゼが海を渡る場面は」
「スペクタルだけれど」
この映画の見せ場の一つだ。その時代の技術の粋を結集して作られる場面だ。海が二つに割れモーゼ達がその中を渡るのだ。

第二百五十七話　複雑な迷宮その十

その場面はマウリア映画ではだ。どうなるかというのだ。
「海が割れて」
「うん、そこは普通なのね」
「そうなのね」
「それでヘブライの民が喜んで」
ここから話がおかしくなる。
「海から出て来た人達と一緒に踊りながら進んで」
「そこで踊るのはもう」
「マウリアなのね」
「それでエジプトの兵士達にファラオも」
続いてだ。彼等もなのだった。
「驚いてそれを踊りで表現するの」
「御免、何が何かわからない」
ジョーの思考の許容範囲を超えている内容だった。
「それが十戒って」
「で、踊りながら海の底を渡って」
だがまだ続くのだった。マウリア映画は。
「ファラオは兵達をピラミッドに乗せて」
「ピラミッドに乗せて！？」
「まさかそれで」
「そう、ピラミッドをその絶大な力で飛ばせて」
最早その時代の技術も完全に無視していた。マウリア人にとっては一万年や二万年の時差も大したことではないのだ。技術面からも。
「それでモーゼ達を追うけれど」
「海を割った意味がないわね」
ピラミッドが空を飛んで追って来ると聞いてすぐに言うエイミーだった。

「それだと」
「けれど。ヘブライの民が海を渡り終えたら」
「海が戻ってなのね」
「そう、その海が荒れ狂って」
ここからはオリジナルの演出だった。
「ピラミッドのところまで襲って行く手を阻むのよ」
「やっぱり海を割った意味ないわね」
ここまで聞いてまた言うエイミーだった。
「それだと」
「理不尽に思える？」
「理解不能だけれど」
エイミーも頭痛を感じていた。
「そこまでいったら」
「私も」
「私もちょっと」
そしてそれはだ。ジョーとベスもだった。
頭痛を感じながらだ。こう言うのだった。
「そこまでぶっ飛んでると」
「奇天烈どころじゃないから」
「実は私もね」
その映画を実際に観たと思われるメグもどうかというとだ。
「最初から最後まで理解できなかったわ」
「そうでしょうね。幾ら何でも」
「そこまでいくと」
「ちょっと」
「そうよね。もうね」
首を捻りながら言うメグだった。
「最後もカオスで」
「どんな結末？」
「それで」

「やっぱり踊るんだけれど」
そこでもだった。
「何かエジプトの兵士から何から何まで登場人物が全部出て」
「どうやってその人達来たの？」
「そもそも」
「いえ、急に来て」
そうしてだというのだ。
「踊ってたの。何か知らないけれどハッピーエンドだったわ」
「十戒で大団円？」
「ううん、どうしてなのか」
「わからないけれど」
「それも」
「神様から有り難い教えを貰って」
ここでも連合から観れば違うがそうなっているというのだ。

第二百五十七話　複雑な迷宮その十一

「それで金の牛の像を囲んで踊るのよ」
「あの像は禁じられる筈だし」
「大体が」
「まあそうだけれどね」
「けれどそれでも？」
「牛の像はそのままで？」
「踊ってハッピーエンドなの」
そういう話になるというのだ。
その話を聞いてだ。三人はそれぞれ言うのだった。
「何か全然違うけれど」
「っていうかユダヤ教は偶像崇拝を禁じてるからね」
「それで偶像の前で踊って終わりって」
「どういう宗教的解釈なのかしら」
「そもそも」
「どうやらね」
メグはどうなるのかとだ。妹達に話す。
「モーゼも神様の転生らしいから」
「ああ、あれね」
そう言われてすぐに察したベスだった。
「あのヴィシュヌ神やシヴァ神って色々転生した姿があるからよね」
「そう。そのうちの一つらしいのよ」
この時代のマウリアのヒンズー教ではそうした解釈もあるのだ。
尚釈迦はヴィシュヌ神の転生の一つと定義されているのである。
「それでなのよ」
「そう、それでね」
「何か違う様な」
ベスは首を捻りながら言った。

「モーゼがマウリアの神様の転生って」
「けれどマウリアではそうした解釈が実際にあるのよ」
「それ言ったら何でもありなんじゃないの？」
ベスはいよいよ話がわからなくなってきた。
「それこそ」
「それは否定できないわね」
メグもだ。それはだった。
「実際凄い考えだって思うし」
「凄いっていうか壮大っていうか」
「破天荒？」
「最早何でもあり？」
ベスだけでなくジョーとエイミーもそれぞれ言う。
「マウリアらしいっていえばらしいけれど」
「もうほかの国の人達がついていけない」
「そんな感じよね」
「とにかくね」
メグはまた言った。
「だからいいのよ」
「イスラエルの人が聞いた何で言うかしら」
言いながらだ。エイミーは頭の中にアンを思いだした。そのユダヤ人の彼女である。
「怒る、いえ呆れるかしら」
「いや、そこは呆れるでしょ」
「まず確実にね」
メグとジョーがエイミーのその言葉に答える。
「あまりにも破天荒な主張だから」
「そこまでいくと」
「起源の主張みたいなちゃちなものじゃないから」
ベスも言う。そんな生易しいレベルの話ではないとだ。
「ちょっとね。マウリアらしいけれど」

「しかもピラミッドで踊るって」
エイミーは再びこのことを話した。
「あの国って一体何なのかしら」
「マウリアだから」
メグはここでは一言で済ませた。
「だから」
「マウリアだからなのね」
「そう、マウリアだから」
理由付けはこれだけで充分だというのだ。
「空飛ぶピラミッドなんて普通考えないでしょ」
「ＳＦとかならともかく」
「歴史ものでそれは」
「まあないっていうか」
妹達もだ。言葉がくぐもってはっきりしないものになる。
「人間の考えることじゃないっていうか」
「時代考証を無視してはじめてできる」
「というかそうしたことを最初から頭に入れていないか」
それもまたマウリアなのだ。連合の常識は通用しないのだ。
そんな話をしてだ。四人はようやくだった。
一歩前に踏み出して。部屋の中に入るのだった。
「それじゃあね」
「今からね」
「中に入りましょう」
「いざダンジョンの目的地へ」
そのだ。ファラオの眠る部屋に入るのだった。
「その仮面を観にね」
「あの仮面って凄いわよね」
エイミーが顔を少し上にやって言った。
「あの時代によくあんな精巧なのが」
「しかも黄金にエメラルドを使ってね」

ジョーも話す。
「今じゃエメラルドも黄金も人工で造られるけれど」
「あの時代は無理よね」
「そうよ。無理だったわ」
「それでもあえてふんだんに使って」
そうして造られたのがだ。ツタンカーメンの仮面なのだ。ファラオの為にその富と技術を惜しみなく使って造ったものなのである。
「贅沢よね」
「今も結構お金がかかるらしいわ」
メグはお金の話をした。
「黄金にエメラルドだから」
「人工でもよね」
「そう、結構なお金がね」
仮にも黄金と宝石である。人工でも高価なものは高価なのだ。その高価なものを古代にふんだんに使ったのだ。ファラオならではだ。
その立派な芸術作品を見る為にであった。四人は中に入った。そうして実際に見るのだった。

複雑な迷宮　　完

２０１１・６・２６

第二百五十八話　呪いの仮面その一

呪いの仮面

四人はファラオの玄室に入った。そこには。
まずは棺があった。白の石の棺である。
それを見てだ。ジョーがまず言った。
「この中にあるのよね」
「ええ、その仮面がね」
メグがジョーの問いに答える。
「それがあるのよ」
「けれど。この棺だと」
石の棺を見てだ。それで話すジョーだった。
「ちょっとやそっとじゃ開きそうにもないけれど」
「私達で開けるの？」
力に自信のないベスは不安そうな顔で姉達に問うた。
「この棺を」
「別にそんなことは書かれていないけれど」
こう答えるメグだった。ここでも携帯でピラミッドのホームページを見ている。そこにはかなり細かいところまで書かれているのだ。
それを見てもだ。そこには。
「棺ねえ。開くみたいよ」
「開くの？」
「この棺が」
「ええと。人が近付くと」
携帯でホームページを見ながら妹達に話す。
「自然に開くみたいね」
「自動なのね」
「自動式で開閉するの」
「ええ、そうみたい」

また妹達に話すメグだった。
「そうした場所みたい」
「それじゃあここは近付くのね」
そうしようと話したのはエイミーだった。
「そうすればいいのね」
「ええ、そうみたい」
メグは今度はエイミーに話した。
「そうすれば開いてね」
「仮面が見られるのね」
「ただ。注意とも書いてあるわ」
メグは今もホームページを見ている。
「仮面に触れるなってね」
「仮面に？」
「触れるな？」
「そう、触れるなって書いてあるわ」
そうだとだ。メグは話すのだった。
「仮面に触れたら大変なことになるって」
「大変なことねえ」
「それって多分」
「そうよね」
妹達はすぐに察した。その大変なことは何なのかをだ。
玄室の中を見回す。そのうえでの言葉だった。
「ミイラ男なり罠なりで」
「襲われるんでしょうね」
「そうみたいね」
このことは容易に想像がついた。それでだ。
ベスはここは慎重案を提案するのだった。
「じゃあ見るだけにしましょう」
「その仮面をね」
「見るだけね」

「もう罠は散々経験したし」
それでだ。罠はもういいというのである。
「ミイラ男も帰りに遭遇するでしょうし」
「だからいいのね」
「ここでは」
「触れて何かいいことがある訳でもないでしょうし」
だが悪いことが起こるのは間違いない、それではだった。
「それじゃあね」
「別に触れなくてもいい」
「そういうことになるわよね」
「そう。だからね」
ここはもうそれでいいのではないかと姉妹に話すのである。

第二百五十八話　呪いの仮面その二

「もうそうしましょう」
「そうね。それじゃあ」
「ここは見るだけにして」
「それで帰ればいいわよね」
姉妹達もそれぞれ頷きだ。そうしてだった。
四人で棺に近付く。するとだった。
「あっ、本当に開いたわ」
「自動にしてあるのね」
「ホームページにあったそのままね」
四人はその開く棺を見て話す。そしてその中から。
少しずつだが確かに見えてきた。その仮面がだ。
包帯に巻かれた遺体を思わせるその顔のところにだ。仮面が被せられていた。少年の顔をした黄金と黒、そして緑の仮面こそだった。
「ツタンカーメンの仮面ね」
「そうね。これこそがね」
「間違いないわね」
こうそれぞれ言うまさにそれこそがだった。
「あの噂の呪いがあるという仮面」
「それでいて芸術品としては最高だっていう」
「いわくつきの仮面ね」
「これこそが」
こう話していくのだった。姉妹で。
「多くの人を呪い殺した」
「その仮面ね」
「レプリカだけれど」
レプリカはレプリカでもだ。それでもだというのだ。
「いわくつきの仮面が今ここに」

「謎の塊のピラミッドにある」
「時代は無視しているけれど」
それでもなのだった。
「中々面白いわね」
「そうよね」
こう話してだ。四人はその仮面を見る。その中でだ。
エイミーがふとだ。姉達にこんなことを話した。
「ひょっとしてこのファラオも」
「動くっていうの？」
「ひょっとして」
「そうなるっていうのね」
「だって。ここってそういう場所だから」
勉強の為の施設ではあるが半分以上レジャー施設である。それならばだ。
「普通にファラオのミイラが動いたりとか」
「ああ、それね」
メグが末妹の言葉に応えて話す。
「有り得るわよね」
「そうよね。確かに触るのはあれだけれど」
絶対に何かあるからだ。それはしないのだった。
しかしそれでもだ。このミイラ自体がどうかというとだった。
「何か妙にね」
「動きそうな気配がするし」
「よく見てみれば」
「じゃあやっぱり」
動くのではないかとだ。四人も考えた。それでだ。
これ以上驚くのも何かと思いだ。棺から離れた。するとだ。
棺は自然に閉まりだ。全てが終わった。それで仮面も見えなくなり何もかもが終わった。だがこれで終わりではなくであった。
帰りも何かと出て来てそれから逃れながらピラミッドを出たのだ

った。
すると外ではだ。相変わらずだった。
「駱駝いるわね」
「それにジャッカルも」
「猫も」
この動物達が健在だった。ただしだ。
「そういえば」
「どうしたの？」
ベスがエイミーの言葉に応える。
「何かあるの？」
「うん。エジプトの動物がいるけれど」
そのだ。駱駝なりジャッカルなりがだ。

第二百五十八話　呪いの仮面その三

だがその中でいない生き物がいるというのだ。それは。
「ライオンはいないわよね」
「確かにね。ライオンはいないわね」
「危ないからよね」
そうだとだ。ジョーも話す。
見れば周りにライオンはいない。それはいないのだった。
「やっぱり危ないから？」
「ライオンは猛獣だしね」
「いないのも当然よね」
「考えてみれば」
四人もライオンがいないのは何となくわかった。流石にあれだけの猛獣となるとだ。おいそれと放ってはいられないと考えたのである。
それで動物園の兄ちゃんに尋ねるとだ。兄ちゃんもこう言うのだった。
「そうだよ。危ないからだよ」
「やっぱりですか」
「そうなんですね」
「コブラと一緒だよ。危ないからね」
危険という意味ではライオンもコブラも一緒だというのだ。
「食べられたくないよね」
「その死に方はちょっと」
「勘弁して欲しいです」
四人もこう言うのだった。
「やっぱり。普通にピラミッドから帰りたいですし」
「そうした冒険は」
「そうだよね。それにね」

しかもだとだ。兄ちゃんはこうも話す。
「ライオンは砂漠駄目だからね」
「砂漠では生きていけないですか、ライオンって」
「そうだったんですか」
「そうだよ。ライオンはサバンナの生き物だから」
それでだというのだ。つまり棲息できる地域が砂漠ではないというのだ。
「こうした場所には放てないんだ。星によっては乾燥地帯に住むライオンもいるけれど」
「けれど砂漠にはいないんですか」
「ライオンは」
「ネコ科は水が好きだし」
これは虎がとりわけ顕著だ。ネコ科の動物はイヌ科に比べて水が好きなのだ。
「だからね」
「成程、ライオンも弱いものがあるんですね」
「砂漠は駄目だったんですか」
「ちょっと意外ですね」
「意外かな。僕はそうは思わないけれど」
知識のある兄ちゃんから見ればそうなのだった。
「これも普通だけれどね」
「ううん、その辺り違いますね」
「ネコ科ってそうなんですね」
「水が必要なんですね」
「うん、星によっては水ライオンなんてのもいるし」
サーベルタイガーから進化した半水棲のライオンである。
「だからね」
「ライオンには水ですか」
「水が必要なんですね」
「だから砂漠にはいられないんだ」

そうだというのだ。
「ライオンはね」
「だからなんですね」
「ここにはいないんですか」
「危ないし」
「そういうこと。けれどね」
それでもだとだ。兄ちゃんは言ってだ。
少し離れた場所を指差す。そこにあるのは。
「あれはあるから」
「ああ、スフィンクス」
「あれですね」
「そう、ピラミッドといえばね」
スフィンクスだった。エジプトではファラオの墓の守護者とされている。ギリシアの謎をかけてくるスフィンクスとはまた別物である。

第二百五十八話　呪いの仮面その四

そのスフィンクスを指差してだ。兄ちゃんは四姉妹に話す。
「あれはあるけれどね」
「人の頭にライオンの身体」
「あれはあるんですね」
「スフィンクスがないピラミッドなんてね」
ひいてはエジプト文明は何かというと。
「それこそクリープのないコーヒーだよ」
「完全なブラックですね」
「それなんですか」
「そう。女神にもライオンの頭の女神がいるし」
セクメトという。戦いの女神で狂暴な一面もある。
「エジプトでもライオンは親しまれているんだ」
「そうですね。昔から」
「崇拝されてますね」
「ライオンは誇り高い生き物だからね」
この認識はこの時でも一緒である。
「だからね」
「エジプトでもですね」
「ああして」
「うん。これでわかったかな」
兄ちゃんが言うとだ。四人もだ。
笑顔になって頷きだ。それで兄ちゃんに言葉を返した。
「ううん、砂漠にはいなくてもなんですね」
「ライオンはエジプトでは親しまれていて」
「崇拝もされていた」
「そうだったんですか」
「そうだよ。そもそもエジプトにあったのは砂漠だけじゃなかった

しね」
　完全な砂漠では人は住めない。
「ナイル川があったから」
「ナイルですか」
　メグがナイルと聞いて笑顔で応えた。
「エジプトはナイルの賜物ですね」
「そう。ナイル川はエジプトに多くのものをもたらしてくれたんだ」
　豊かな土壌、そして農作物、水そのものに文明までもだ。
「そうなんだよ」
「エジプトはナイル川があってこそでしたね」
「川の周りは緑があったから」
　それはだ。しっかりとあるのだ。
「そこにライオンもいたんだよ」
「ライオンはそこにですか」
「川の。水のあるところだからですね」
「それでいた」
「成程。それでエジプト人もライオンを知ってたんですね」
　四人はここでまた頷くのだった。
「そのナイル川ですか」
「ナイルがないエジプトってもう」
「エジプトじゃないんですね」
「ピラミッドやスフィンクスのないエジプトはね」
　兄ちゃんはまたこの話をした。
「クリープのないコーヒーだけれどナイルのないエジプトは」
「もうエジプトじゃない」
「存在すらできないんですね」
「そう。水のないところに文明はないから」
　人間も生きている。それならば水が必要だ。
　そして文明は農耕社会から生まれた。その農業に水は不可欠なのだ。

だからだ。川のあるところに文明が出来上がったのである。そういうことだった。
「ナイル川があってこそのエジプト文明」
「そういうことですね」
「そうだよ。じゃあ僕の話はこれで終わりだよ」
兄ちゃんは気さくに笑って四人に話す。
「それじゃあ帰り道も楽しくね」
「はい、それじゃあこれで」
「さようなら」
「また今度」
「元気で会いましょう」
こんな話をしてだ。四人は兄ちゃんと別れた。そのうえでだ。
部屋に帰る。その途中でだ。

第二百五十八話　呪いの仮面その五

メグがふとした感じでだ。三人にこんなことを話した。
「今夜の夕食は」
「何にするの？」
「何か考えてるの？」
「エジプトの料理にしようかしら」
こんなことを言うのだった。
「それでどうかしら」
「エジプト料理って」
「そんなのあるの？」
「あるでしょ。それは」
「エジプト料理っていうと」
「一体？」
そう言われても妹達は。
そんなものがあるのかという顔になってだ。それでそれぞれ言うのだった。
「今はもうエジプトって国はないし」
「とっくの昔にサハラの戦乱の中で消えて」
「エジプト料理もないし」
「それじゃあ」
こう言ってだ。エジプト料理が今もあるかというのだ。
「ないんじゃないの？」
「ねえ」
「ちょっと」
「ううん、ないのね」
実はメグも知らない。それでだ。
こんなことをだ。言うのであった。
「モロヘイヤは」

「只の野菜じゃない」
ベスが姉にモロヘイヤはそれだと言う。
「連合じゃ何処でも食べるような」
「ただエジプト発祥っていうだけで？」
「そう、それだけ」
只の野菜だからだ。そうだというのだ。
「エジプト料理はないわよ」
「消えたのね。完全に」
「メニューは残ってるかも知れないけれど」
それでもだと。ジョーは言い加える。
「連合の料理になってるわよ」
「もうエジプトという国自体がないから」
「そういうこと。だからエジプト料理っていっても」
「国という定義じゃないのね」
「文明は残っててもね」
サハラでは消えたエジプト文明はその神話も含めて連合では健在だ。この辺りは人類社会の微妙で複雑なところであると言える。
「それでもね」
「それじゃあやっぱり」
「エジプト料理は諦める？」
「ええ、諦めるわ」
実際にそうすると。メグは言った。
「仕方ないわね」
「じゃあどの国のお料理にする？」
「エジプトが駄目なら」
それならばだというのだ。
「同じ古代文明で」
「古代文明で？」
「インダスで」
インダスとくればだった。その国は。

「カレーにしようかしら」
「カレーにするの」
「そう、インダスといえばマウリアだから」
そしてだ。マウリアといえばだ。
「カレーにしようかしら」
「いいんじゃない？カレーで」
「そうよね」
ベスとエイミーがカレーでいいと述べた。

第二百五十八話　呪いの仮面その六

「丁度食べたいって思ってたし」
「暫くお家じゃ作ってなかったしね」
「そうでしょ。じゃあカレーね」
「悪くないわね」
ジョーもそれでいいとだ。姉の言葉に頷いた。
「美味しいし栄養もあるし」
「カレーのいいところよね」
「それじゃあ決まりね」
「ええ、カレーよ」
こうしてこの日の四人の夕食はカレーに決まった。だが、だ。
妹達はそれぞれだ。姉に尋ねた。その尋ねることとは。
「で、何カレーにするの？」
「豚？それとも鶏？」
「シーフード？」
「ええと。何にしようかしら」
姉の返答は今一つ要領を得ないものだった。首を捻って言う。
「それじゃあ」
「それ決めてないの」
「何のカレーにするかまでは」
「それまでは」
「ええ、決めてないわ」
その通りだとだ。姉は妹達に話す。
「具体的にはね」
「じゃあチキンカレー？」
「ラムカレー？」
「それともポークカレー？」
羊肉のカレーの話も出る。

「ハンバーグカレーとか」
「ソーセージカレーもあるわよね」
「カツカレーも」
実に色々だ。カレーと一口に言っても。
「カレーも色々あるけれど」
「食べるのは一種類」
「そのカレーは」
「本当に何がいいかしら」
まだ決められないメグだった。具体的に何カレーにするのかは。
それでだ。こんなことも言った。
「全部のカレーはできないから」
「カレーの種類は多くてもね」
「作れるカレーは一種類」
「本当にそれだけ」
妹達もこのことはよくわかることだった。
「果たしてどのカレーにするか」
「それが問題だけれど」
「それでどれにするの？」
「マヤにエジプトを回ったけれど」
メグはピラミッドの話もした。
「けれどどっちもカレーとは違うからね」
「マウリアだから。別物だから」
「イメージはつながらないよね」
「それもかなり」
「そうなのよね。エジプトとカレー」
メグはこの組み合わせを考えた。だが、だった。
どうしても重なることはなかった。どうしてもだ。
そして今度はだ。こちらだった。
「で、マヤとカレーだけれど」
「タコス？」

「タコスにカレー？」
「それかテキーラか」
妹達が挙げたのはメキシコ料理だった。マヤ文明の跡地にメキシコという国が建国されたからだ。この時代メキシコはマヤ文明の後継者と自称している。
「タコスにカレーはともかくとして」
「こっちは合う？」
「メキシコでもカレー食べるし」
「そうよね。じゃあ」
メグは妹達の話を聞いてだ。これを話に出した。
「メキシコ風にとても辛くしてね」
「タバスコをたっぷりと使って」
「それで思いきり辛くしたらね」
「そういうカレーにするのね」
「ええ。それにタコスだから」
それならばとだ。メグはさらに話す。
「鶏肉にトマトを使ったね」
「そのカレーね」
「鶏肉とトマトを入れた辛口のカレー」
「それでいくのね」
「それにしようかしら」
メグの考えも決まってきていた。

第二百五十八話　呪いの仮面その七

「勿論人参や玉葱も入れてね」
「それは外せないわよね」
「カレーだったらね」
「それだったら」
妹達も頷く。こうしてだった。
四人の夕食が決まった。メキシコ風カレーだった。
そしてだ。ついでにだった。メグはもう一品言ってきた。
「モロヘイヤにするわ」
「モロヘイヤをどうするの？」
「まさか生でとか？」
「そうじゃないわよね」
「ええ、それはしないから」
モロヘイヤはだ。生で食べないというのだ。
「ちゃんとバターで炒めて食べるから」
「じゃあメキシコ風カレーとモロヘイヤのバター炒め」
「今日はその組合わせね」
「それでいくのね」
妹達も話を聞いて納得した。こうしてだった。
四人の夕食は完全に決まった。そのうえでスーパーに向かう。するとその途中で。
ケーキ屋があった。そのケーキ屋には。
四角すいの形の白いケーキがあった。それを見てだ。
エイミーがだ。最初にこう姉達に話した。
「ねえ、これって」
「ええ、ピラミッドよね」
「そうよね」
店のそのショーケースを見てだ。ジョーとベスも言う。

「何処からどう見ても」
「それよね」
「ピラミッドって食べられるの」
エイミーはこんなことも言った。
「そうだったのね」
「そうね。そういえば」
メグも言うのだった。
「デザートは決めてなかったわね」
「じゃあこのケーキにする？」
エイミーはメグに顔を向けて尋ねた。
「デザートは」
「そうね。エジプトだから」
それでだというのだ。メグはまだ覚えていたのだ。
「だからそれにしましょう」
「それとね」
ジョーはふと気付いた顔になって姉にこんなことを言った。
「お酒は今日はね」
「どれにするの？」
「ビールにしよう」
それだというのだ。
「ビールにね」
「どうしてビールなの？」
「エジプトでも飲まれていたからよ」
ビールは古代エジプトでも飲まれていたのだ。他にはワインも飲まれていた。
「だからね」
「それでなので」
「どうかしら、お酒はそれで」
「けれど」
「けれど？」

「ビールは」
それはというのだ。ビールは。
「カレーには合わないわよ」
「というかカレーにはね」
「お酒は合わないわよね」
「どうしても」
妹達も言う。カレーにはどんな酒も合わないのだった。
それでだ。メグはこんなことも言った。
「カレーは止めておく？」
「ビール飲む為によね」
「それで」
「ええ、それでね」
ビールを優先させての言葉だった。
「だからね」
「それも一つの考えね」
ジョーは姉のその考えにまずはこう返した。

第二百五十八話　呪いの仮面その八

「ビールを取るかカレーを取るかね」
「ええ、どっちにしようかしら」
「カレーは確かにいいけれど」
ジョーは腕を組み考える顔になって述べた。
「それでも。お酒はね」
「合わないから」
「特にビールかワインはね」
合わないというのだ。そうしたものはだ。
「だからどうしようかしら」
「ええと。これはどうかしら」
ここで言うのはベスだった。
「カレーを早めに食べてね」
「それで？」
「そう、それでね」
どうするかというのだ。エイミーに対して話す。
「夜遅くにビールを飲むのはどうかしら」
「それいいんじゃないの？」
エイミーは三番目の姉の提案に晴れやかな顔になって応えた。
「どっちも食べられるし」
「そうでしょ。だからいいと思うけれど」
「カレーが消化されてから」
それからビールだというのだ。
「それならね」
「ちょっと待って」
だがここでだ。またメグが言う。
「確かにいい考えだけれど」
「問題があるの？」

「ええ、あるわ」
そうだというのだ。あるというのだ。
「今日のカレーはレトルトじゃないのよ」
「だから作るのに時間がある」
「そうなのね」
「それが問題なのね」
「そう、今日は本格的メキシコ風カレーよ」
メグはどういったカレーかを強調して話す。それはあくまでレトルトの、すぐに食べられるものではない。彼女が言うのはこのことだった。
「だからね」
「作るのに時間がかかるから」
「結局カレーを取ったらビールは飲めない」
「そしてビールを取ったらそれで」
「カレーは食べられない」
「そういうことになるわよね」
「完全な二者択一に」
妹達はそれぞれ話す。こうしてだった。
話は彼女達に残念なことになりそうだった。しかしだ。
ここでだ。エイミーが言うのだった。
「じゃあさ」
「じゃあ？」
「何か考えがあるの？」
「カレー、四人で作りましょう」
これがエイミーの提案だった。
「私達全員でね。そうすれば」
「それだけ早く作られて」
「早く食べられて」
「ビールも飲めるわね」
「ええ、だから」

それでだとだ。エイミーは姉達に話す。
「そうしましょう。これでどうかしら」
「ううん、確かに」
ジョーは腕を組んだままだ。エイミーの提案に応えて言う。
「それ悪くないわよね」
「そうでしょ。だからね」
「普段は姉さんだけが作ってるけれど」
「ジョーお姉ちゃんもベスお姉ちゃんもお料理できるわよね」
「勿論よ、それは」
「できるから」
二人の姉はすぐに答えた。
「私だって女の子だし」
「そういうことはね」
できると答える。そしてだ。
エイミーもだ。こう言うのだった。
「私もできるから。メグお姉ちゃん程じゃないけれど」
「イギリスみたいのは駄目よ」
メグは冗談で妹達に釘を刺した。

第二百五十八話　呪いの仮面その九

「あんなのはね」
「っていうかよりによってイギリス人って」
「それってあんまりなんじゃ」
「幾ら何でも」
妹達もイギリス人に例えられると困った顔になる。イギリス人は連合においては超絶的にまずい料理を作る人間と思われているのだ。
だが、だ。この三人にしてもだ。
幾ら何でもそこまで料理が下手ではない。それはメグも認めることだった。
それでだ。長姉はあらためて言うのだった。
「まあ。頼んだわよ」
「ええ、じゃあ四人でね」
「楽しく作って食べて」
「その後で」
「ビール」
「それにしましょう」
こうして話は決まった。しかしだ。
ここでまた問題があることに気付いた。それは。
「さて、ビールのおつまみね」
「それは何がいいかな」
「ソーセージなんてどうかしら」
ベスはそれを推した。
「オーソドックスに」
「ソーセージはこの前食べたじゃない」
しかしジョーがこう妹に突っ込みを入れた。
「だから別のにしない？」
「そういえばそうね」

言われてだ。彼女も気付いた。
「じゃあソーセージは今回は」
「そう、また次にしましょう」
「そうね。それじゃあ」
ベスもそれで納得した。かくしてソーセージはなくなった。
しかし問題はこれで振り出しに戻った。四人の今現在の最後の問題がとうなるか。彼女達は仕切り直しという形でまた話をした。
「ソーセージ以外には」
「ハムもこの前食べたし」
「それにベーコンも」
「じゃがバターも食べたし」
「そういうのはね」
脂っこいものはだ。最近全て食べてしまっていた。
「ビールのおつまみって多いけれどね」
「多いとかえって困るのね」
「そうなのよね」
それでかえって迷っていた。その中でだ。
ふとだ。エイミーが話した。
「ここはあっさりでいったらどうかしら」
「あっさり？」
「あっさりした感じで」
「そう。ビールってあっさりしたおつまみにも合うし」
それがビールのいいところだ。あっさりしたつまみにも脂っこいつまみにも合うのだ。だからこそこの時代でも広く飲まれているのだ。
そのあっさりしたものはだ。どうかというのだ。
「だからここはね」
「そうね。晩御飯はカレーだし」
メグはここから話した。
「だったら。余計にね」

「そういうのがいいわよね」
「確かにね」
メグは末妹のその提案に賛成した。
「それで。カレーは皆で作るから」
「おつまみは簡単なのがいいわね」
「もうすぐに食べられるようなのが」
ジョーとベスも話す。
「それなら何がいいかしら」
「一体」
「あれね」
ここでまた言ったエイミーだった。それで出す食べ物は。
「お豆腐なんてどうかしら」
「お豆腐ね」
「それね」
「そう。あれならあっさりしてるし」
豆腐のあっさりした感じはこの時代でも健在だ。あっさりとしていてしかもカロリーは低く栄養の塊なのだ。豆腐のよさは変わらないのだった。
「余計にいいでしょ」
「そうね。しかも」
メグはさらに言った。
「冷奴ね」
「あっ、それいいわね」
「美味しいしあっさりしてるし」
ジョーとベスもそれで頷く。
「じゃあ。おつまみは冷奴」
「それで決まりね」
「うん、そうしよう」
また笑顔で言うエイミーだった。

第二百五十八話　呪いの仮面その十

「あっさりとね」
「冷奴以外には」
メグはさらに言った。ここでだ。
「もう一つあったらいいかしら」
「もう一つ？」
「もう一つっていうと？」
「ええ。やっぱりあっさりとしたもので」
それでだとだ。メグは妹達に続ける。
「しかも身体にいいもの」
「ううん、冷奴みたいにね」
「そうした感じの」
「じゃあ一体」
「何がいいかしら」
妹達は首を傾げさせる。それでだった。
もう一つのつまみについても考える。それでだ。
三人はそれぞれだ。こう話すのだった。
「お豆腐の他ね」
「簡単であっさりしていて身体にもいい」
「となると」
「これはどうかしら」
メグがふとした感じで言ってきた。
「胡桃ね」
「ナッツ？」
「それ？」
「ビールに合うでしょ」
これはその通りだ。胡桃はビールに合う。ピーナッツ等と同じくだ。

「だから。それどう？」
「いいわね、それ」
「身体にもいいしね」
「美味しいし」
妹達は姉の提案に今回も頷く。
「それじゃあね」
「お豆腐とナッツで」
「それで飲みましょう」
これで話は決まった。そうしてだ。
四人は家に帰る途中にだ。スーパーに寄ってだ。
材料を買った。当然ながらカレー、そのメキシカンカレーの材料をだ。
その中でだ。メグは妹達に注意する。店の中には商品がこれでもかと置かれて林の様になっている。その中で言うのである。
「香辛料が大事だから」
「メキシコ風カレーはそうなのね」
「そう、タコスのスパイスよ」
こうジョーに話す。
「それは注意してね」
「普通のカレーとはそこが違って」
「そう、それに加えてなのよ」
タコスに使うスパイスが加えられるというのだ。
「その辺り注意してね」
「ええ。じゃあ」
ジョーは姉の言葉に頷く。そうしてだ。
そのタコス用のスパイスを持って来た。ところが。
同時にだ。それはベスもだった。
彼女の手にもメキシコ風のスパイスがある。それを見て言うのだった。
「何時の間に持って来たの？」

「多分。お姉ちゃんより前に」
既に手に入れたというのだ。
「それでだけれど」
「ううん、私はさっきだったけれど」
鉢合わせしなかったのだ。手に取る時に。
「じゃあここは」
「どうしようかしら」
二セットはいらない。一セットで充分だというのだ。
「どうする？私が下がる？」
「いえ、私が下がるわ」
こうだ。鶏肉を選んでいるメグの横で話すのだった。一行の周りには当然他の客達もいる。彼等もそれぞれ買うものを選んでいる。
その中でだ。今度はだ。

第二百五十八話　呪いの仮面その十一

エイミーもだ。そのメキシコ風のスパイスを持って来て言うのだった。

「あれっ、お姉ちゃん達も？」

「エイミーもなの」

「それ持って来たの」

「ええ、必要だと思って」

それでだ。持って来たというのだ。

だがこれで三セットになった。こうなっては余計にだった。

「一つでいいのに」

「三つもだと」

「困ったわね」

「誰が籠に入れるの？」

そのだ。買い物を入れる籠にだ。

「それで誰と誰が下がるか」

「それよね」

「どうしようかしら」

三人で考える。その中でだ。

ジョーがだ。ここで言うのだった。

「ジャンケンしよう」

「そうね、ここはね」

「それで決めるのが一番よね」

ベスとエイミーも次姉の言葉に頷く。そうしてだ。

三人はそれぞれジャンケンの構えに入る。それから。

「じゃあ」

「今から」

「ジャンケンで」

こうしてだった。三人でジャンケンをしてだ。決めたのだった。

結果として残ったのはエイミーだった。彼女が籠に入れてだ。
そのうえで決まった。そして残った二人はだ。
それまで鶏肉を選んでいたメグにだ。こう言われたのだった。
「じゃあジョーはね」
「私は？」
「おつまみ御願い」
彼女はそれだった。
「それでベスはね」
「ええ」
「ビールをね」
ベスにはそれを頼む。
「そうして手分けしてね」
「やっていきましょう」
こうした話をしてだった。二人もそれぞれ向かうのだった。
そしてだった。材料にビール等も素早く買ったのだった。
レジで会計を済ましてからだ。メグは店を出る時に妹達に言った。
「やっぱり。四人で買うと」
「そうよね。それもね」
「早く済むわよね」
「一人よりもね」
「やっぱり四人ね」
妹達も笑顔で頷いて言う。
「それだと何でもね」
「早く済むわよね」
「何をやるにしても」
「四人だと」
こう話しながら店を出てであった。
四人は自分達の部屋に入って。早速カレーを作りはじめる。
メグはだ。野菜を切りながらジョーに話す。
「貴女は鶏肉御願い」

「了解、そっちね」
「ええ、ジョーはそれで」
後の二人も見てだ。メグはさらに話す。
「ベスはルーを作って」
「私はそれね」
「それでエイミーはね」
「私は何なの？」
「お鍋とお皿の用意御願いするわ」
彼女はそれだった。
「あと皆のお手伝い」
「ええ、それじゃあね」
「さて、手分けはできたし」
とりあえずそうしたことは決まった。しかしであった。
まだはじまったばかりだ。メグは次々と進めていく。鶏肉は切り終えた。
それで彼女のやることが終わったかというとだ。これが。

第二百五十八話　呪いの仮面その十二

「じゃあジョー」
「手伝ってくれるの？」
「ええ。手が空いたから」
それでだというのだ。
「それじゃあ人参渡して」
「ええ、玉葱はもう切ったから」
「あら、早いのね」
「玉葱切るのは得意なのよ」
ジョーはにこりと笑ってこう答えた。
「だからね」
「そうだったの。玉葱切るのはなの」
「そうなの。昔からね」
「何でまたそうなったの？」
「アルバイトでよく切るから」
そのだ。玉葱をだというのだ。
「ついでに言えば玉葱を切っても涙流さない方法も知ってるわよ」
「事前に水に浸してよね」
「それはやっぱり知ってるのね」
「いつも切ってるからよ」
にこりと笑ってそうだと返すメグだった。
「だからね」
「経験ってことね」
「そういうこと。それじゃあ人参ね」
「はい、これ」
「ジャガイモの皮は剥いた」
「今これからよ」
「そう。それじゃあ」

ジャガイモの話を受けてだ。メグはエイミーを見て。それで言った。
「エイミー、ジャガイモ御願いできるかしら」
「次はジャガイモね」
「そう、皮剥いて」
「わかったわ」
エイミーもすぐに頷いてだ。そうしてだった。
早速皮を剥きはじめる。手慣れた動きでそうしていく。
そしてベスも。そのルーを。
「できたわ」
「ルーできたのね」
「ええ、今ね」
にこりと笑って長姉に答える。
「できたわ」
「そう。それじゃあエイミーの仕事手伝って」
「ジャガイモの皮剥くのね」
「それ御願いしたいけれど」
「わかったわ」
快諾だった。ただし解答は一つしか用意されていない。
そのたった一つの解答を選んでだ。ベスは早速包丁を握ってだ。
ジャガイモの皮を剥きはじめる。二人でやると倍の速さだった。
全て剥き終えてから切ってだ。それが終わってから。

第二百五十八話　呪いの仮面その十三

「よし、後はね」
「鶏肉とお野菜を入れて」
「それで煮ていって」
「完成ね」
「ええ、完成よ」
まさにそれで、であった。
こうして全てが煮られてだ。カレーが作られるのだった。
それが終わってからだ。メグは妹達に言った。
「じゃあ。後は煮えたら」
「それで完成よね」
「それで」
「一時間程煮たらいいから」
しかもとろりとだ。もうやることは終わったも同然だった。
「少し休憩してから食べましょう」
「じゃあ私本読むわね」
「私は刺繍して」
「私は自分の部屋でダンスの練習するわ」
妹達はそれぞれの趣味で時間を潰すことにした。
こうして話を決めてだ。それでだった。
一時間程すると。メグが言った。
「御飯よ」
「了解」
「それじゃあ今からね」
「食べましょう」
妹達はすぐに集った。そうしてだった。
四人で一緒のテーブルに座り。手を合わせて。
「いただきます」

「いただきます」
この挨拶からだった。四人はまずカレーを食べた。
それから少し時間を置いてだ。それからだった。
今度はビールだ。冷奴に胡桃を出してだ。
同じテーブルで飲む。その中でだ。
エイミーがこんなことを言うのだった。そのビールを飲みながら。
「今日は一杯歩いたせいかね」
「疲れたとか？」
「そう言うの？」
「疲れるってところまではいかないけれど」
けれどそれでもだというのだ。
「汗かいたせいか」
「それでなのね」
「ビールがっていうのね」
「ええ、美味しいわ」
こう姉達に言うのである。
「いつも以上に」
「そうね。確かに」
「今日のビールは美味しいわよね」
ジョーとベスがだ。エイミーのその言葉に頷いて。それで二人も飲む。
「ビールって汗かいてると余計に美味しいのよね」
「他のお酒と比べて」
「そうそう、喉の感じがね」
「全然違うのよね」
二人もだ。同感だった。
そしてメグもだ。冷奴と一緒に食べながら言うのだった。
「これがいいのよ。暑い季節は」
「夏にはビール」
「それなのよね」

「そう、エジプト人も多分」
古代に生きた彼等もだというのだ。
「あれだったと思うわ」
「エジプトは暑かったから」
「砂漠だったから」
しかしその暑さはさらりとした暑ささ。湿気がないので凄しやすいことは凄しやすかったのである。アマゾン等と比べてだるが。
「ビールは美味しかったと思うわ」
「冷やしてなくてもね」
「そうなのね」
「そう。それでもね」
古代に冷蔵庫なぞない。氷もかなりの貴重品だ。それでは冷えたビールなぞないのも当然だ。しかしそれでも美味いものは美味いのだ。
「暑い時はビール」
「黄金の組み合わせね」
「それで」
しかもだった。それに加えてだった。
「これよね。冷奴にナッツね」
「ビールって和風にも合うからね」
「色々な料理にも」
「ビールは神様の飲み物ね」
エイミーはこんなことまで言った。
「こんな素晴しい飲み物なんて他にはないわよ」
「じゃあ今も飲んで」
「神様に感謝しましょう」
「ピラミッドの神様達にね」
四人はこう言いそうして飲むのだった。今四人は幸せだった。一日の最後にその神の飲み物を口にして。そうなっていたのだ。

呪いの仮面　　完

2011・7・5

第二百五十九話　ビールとワインその一

ビールとワイン

エイミーはビールのことをクラスで話した。それは神の飲み物だとだ。

その話はだ。かなり熱いものだった。

「やっぱりビールがあると幸せになれるわよね」

「それはその通りよね」

「ビールは美味しいからね」

「特に暑いと」

クラスの面々もだ。それは同感だった。

「ビール飲んでそれでね」

「楽しくやるのが最高だよね」

「神の飲み物だよね」

「まさにね」

「そうだよね。ビールはね」

笑顔でだ。ポルフィも話してきた。

「とてもいい飲み物だよね」

「ポーランドでもかなり飲むの？」

「飲むよ。ビールもね」

それもだとだ。ポルフィはエイミーに笑顔で話す。

「それもかなりね」

「ポーランドってビールの消費量多いの？」

「かなり多いよ」

実際にそうだというのだ。

「もうどれだけでも飲むよ」

「そうだったの」

「元々。東欧はね」

尚ポーランドは元々はエウロパにいた。それが連合の引き抜き工

作でだ。ポーランド人のかなりの割合が連合に入りだ。連合のポーランドとエウロパのポーランドに分裂したのだ。これはフィンランドも同じだ。
「ビールよく飲むから」
「それでなの」
「そう。だから今でもよく飲むんだ」
そうだとだ。エイミーに話すポルフィだった。
「僕も結構ね」
「ポルフィだとやっぱり」
「一回で五リットルは飲むね」
いきなりこの量だった。
「一回の食事でね」
「ネロ＝ウルフ並ね」
二十世紀の推理小説の探偵だ。安楽椅子型の探偵で美食家でもありビールを好物としている。
その彼の名前を出してだ。エイミーは話すのだった。
「そこまで飲んでると」
「美味しいからね」
だからだというポルフィだった。
「そこまで飲めるんだ」
「あんたって食べるだけじゃなかったのね」
「うん、飲むのもね」
「そこまで飲めたの」
「ビールは飲みやすいから」
だからだというのが彼だった。
「ついつい飲んでしまうんだよね。いつもね」
「いつもなの」
「ワインだったらボトル三本ね」
ワインはそこまでだというのだ。
「お酒はアルコール濃度によるね」

「弱いと沢山飲めるのね」
「そうなんだ。実は」
「ビールはね」
エイミーはそのビールのアルコール濃度について話した。
「アルコール濃度は強くないからなのね」
「強くて五パーセント位だよね」
「ええ、それ位よ」
ビールのアルコール濃度はこの時代でも変わらない。それはだ。
「それでワインは」
「大体十五度で」
「そんなのだからね」
「だからボトル三本位なの」
「そうだよ。それ位」
「お酒強いのね」
エイミーは彼の話をここまで聞いて述べた。
「そうなのね」
「いや、これがね」
「これがって？」
「それ以上強いお酒はね」
つまりだ。アルコール度がワイン以上ならというのだ。

第二百五十九話　ビールとワインその二

「駄目なんだ」
「飲めないの？」
「アルコール度の強いお酒は飲めないんだよ」
そうだとだ。ポルフィは少しにがわらいになってエイミーに話した。
「ワイン以上だと」
「じゃあウイスキーとかバーボンは？」
「駄目、全然」
「老酒とか焼酎も」
「身体が受け付けないんだ」
「そうなの」
「うん、だからアルコール度の高くないお酒を」
そうした酒をだというのだ。
「がぶがぶ飲んでるんだ」
「成程ね」
「ほら、ウォッカを一本ストレートとか」
ポルフィはここでこんなことも言った。
「そういうのは絶対に無理なんだ」
「ウォッカをストレートで一本って」
この話を聞くとだ。エイミーもだ。
いささか引いた顔になってだ。こう言うのだった。
「私も駄目よ」
「飲めない？それは」
「無理ね」
このことをはっきりと言う彼女だった。
「絶対にね」
「そうだよね。それってやっぱり」

「ロシア人の専売特許よ」
「ロシア人しかできないことかな」
「だって。ロシア人よ」
そこから話すエイミーだった。
「もうウォッカでも何でもね」
「平気で飲めるよね」
「まあそうね」
ここでだ。そのロシア人のアンネットが出て来てそれで二人に応える。
「それ位は普通ね」
「やっぱり飲むの」
「ウォッカをストレートで」
「だって寒いから」
だからだというのだ。
「お酒であったまらないと死ぬのよ」
「それでウォッカなの」
「あの強烈なお酒なんだ」
「ロシアの星って寒い星ばかりだから」
このことで定評がある。とにかくロシアが所有している惑星は寒い星ばかりなのだ。恐ろしいまでに地球にあった頃から変わっていない。
「飲まないとやってけないのよ」
「あのアルコール度九十何パーセントっていうお酒も」
「必然性があるんだ」
「そうよ。ってウォッカって」
ここでポルフィにこう言うアンネットだった。
「ポーランドでも飲んでるでしょ」
「まあそうだけれど」
「ポルフィは飲まないの？」
その彼に問うのだった。

「ウォッカは」
「うん、ちょっとね」
ポルフィはアンネットに対しても話す。
「駄目なんだ」
「ううん、それは残念ね」
「というかね」
どうかとだ。ここでポルフィはこんなことも言った。
「体質の問題だから」
「アルコールの強いお酒が飲めるかどうかよね」
「そう、それね。僕はね」
「アルコール強いと駄目なのね」
「身体が受け付けないから」
「じゃあカクテルとかは？」
「それは平気だよ」
カクテルだといけるというのだ。

第二百五十九話　ビールとワインその三

「というかストレートが駄目だから」
「そういうことなの」
「水割りとかも駄目だけれど」
「じゃあ飲めるお酒限られてるわね」
「自分でもそう思うよ」
自覚はしているというのだ。そのことはだ。
「だからビールやワインがメインなんだ」
「ビールね」
アンネットはビールについてだ。こう言うのだった。
「あれはちょっとね」
「嫌いとか？」
「そうなの？」
「アルコール度弱いから」
それが問題だとだ。アンネットはポルフィだけでなくエイミーに対しても話すのだった。これはロシア人から見た視点でもある。
「あまり飲んだ気になれないのよね」
「そうなの」
「だって。ロシア人はメインはウォッカよ」
やはりそれだとエイミーにも話す。
「それでビールなんて」
「弱いのね」
「ジュースと同じよ」
そこまでだというのだ。
「もうね。幾ら飲んでも酔わなくて面白くないわよ」
「そうなの？ビールって」
エイミーはエイミーの視点から話す。ロシア人以外の視点である。
「三リットルも飲むと」

「結構酔うよね」
「そうよね。かなり」
こうポルフィにも話す彼女だった。
「それで全然酔わないって」
「だから。ロシアだから」
「ロシアだから？」
「ビールじゃ生きていられないのよ」
こうまで言うのだった。生きていられないとだ。
「寒くてね」
「結局それなのね」
「寒いからなんだ」
「寒いから飲むのよ」
これに尽きた。ロシアでこのことは変わらない。
「だからウォッカよ」
「だからこそなの」
「そう、だからこそ」
また言うアンネットだった。
「実はワインでもね」
「ジュースみたいな感じ？」
「ワインも」
「ロシアじゃ葡萄ジュースって言われてるわ」
実際にそうだというのだ。ワインはジュースだというのだ。
「ビールは水よ」
「水って。ビールがなの」
「それなのね」
「あれ位じゃ全然酔えなくて」
「ううん、ロシアって何か」
「凄いわね」
ポルフィもエイミーもだ。このことには唖然だった。
ロシアのその酒についての常識はだ。他の国ではだった。

「お酒の国って聞いてたけれど」
「そこまでいったんだね」
「ロシア人から酒を取ったら本気で暴れるわよ」
アンネットはこんなことも話す。
「もうね。大暴れよ」
「つまり暴動？」
「それなんだ」
「そう、暴動起こすから」
実際にソ連時代にゴルバチョフが失脚したのは酒に対して厳しく国民の支持を得られなかったからだとさえ言われている。ロシアでは酒を飲まないで働けと言うことはそのまま死ねという言葉と受け止められるのだ。
「特にウォッカね」
「やっぱりウォッカかあ」
「それが来るのね」
「ウォッカは神の飲み物よ」
こうまで言うのだった。

第二百五十九話　ビールとワインその四

「あれがないと死ぬわよ」
「じゃあ他のお酒は飲まないのかな」
「そのお水やジュースも」
「当然飲むわよ」
平然とだ。アンネットは言った。
「だって。お酒だけ飲んでる人っていないでしょ」
「それはそうだけれど」
「ウォッカだけっていうのは」
「やっぱり」
「それはないから」
また否定するアンネットだった。
「ちゃんとお水も飲んでるわよ」
「まあねえ。普通はそうよね」
「お酒だけ飲んで生きているってのはないわよね」
「そういうことよ。それでね」
アンネットはまた話す。
「ロシアはお酒の種類は豊富なのよ」
「それこそいつも飲んでるからよね」
「そうなるのね」
「そう。採れるものからは徹底的にね」
造っていくというのだ。
「麦からはビール、葡萄からはワインやブランデー」
「あとウイスキーとかバーボンも」
「老酒とかもよね」
「お米も採れるし」
寒くともだ。品種改良や稲作ができる場所で造るというのだ。
「そこから日本酒もね」

「ああ、日本酒もなの」
「それも飲むんだ」
「ロシアでもお米食べるから」
そうなったのだ。連合に入り宇宙に進出してからだ。ロシア人達はパンやジャガイモ以外にもだ。主食を手に入れたのである。米がそれだ。
無論米だけでなく他の穀物も主食としている。その中には。
「とうもろこしやそういったものも食べるし」
「そして全ての作物からなのね」
「お酒を」
「そういうこと。あとお米から」
米の話を再びするのだった。
「マッコリも造るわよ」
「韓国のあれよね」
「あのお酒だよね」
「マッコリは私も好きよ」
アンネットは笑顔になってマッコリのことを話した。
「飲みやすいしね、あれ」
「そうそう。甘くてね」
「あの濁った感じもいいよね」
「濁酒っていうのかしら」
この時代ではあえてそれで造っている場合もある。独特の味が親しまれているのだ。無論清酒もある。尚この時代では赤や青の日本酒もある。原材料の米の種類の関係でそうした色になるのだ。
その濁酒についてだ。アンネットは話す。
「ああいうお酒ってね」
「濁酒なのね」
「マッコリってそうなるんだ」
「だって、実際に白く濁ってるじゃない」
アンネットはこのことを指摘した。

「だからあれは濁酒じゃない」
「その独特の味がよね」
「いいっていうのね」
「そう、結構好きなの」
笑顔でエイミーとポルフィに話す。
「お酒なら何でも好きよ」
「ううん、流石ロシア人って言うべきだけれど」
「飲むの本当に好きなんだね」
「大好きよ」
実際にそうだと話す彼女だった。
「毎日何かのお酒飲んでるし」
「毎日なのね」
「そう、毎日ね」
アンネットの笑顔は屈託がない。実にだ。
「結構酔ってから寝てるわ」
「それで何と一緒に飲むの？」
「肴は」
「色々ね」
その種類は一つではないというのだ。様々だというのだ。

第二百五十九話　ビールとワインその五

「ビールの時はソーセージとかハムが多いし」
「定番ね」
「ワインだとチーズやパスタで」
これも定番だった。
「ウォッカだと干し肉よ」
「ウォッカにはそれ？」
「干し肉？」
二人はウォッカの肴はそれと聞いて。意外とシンプルなことに驚いた。
それでだ。アンネットに対して尋ねるのだった。
「アルコールの強さは関係なくて」
「それなんだ」
「そうよ。実は肴には」
そのだ。肴はどうかというのだ。
「ロシア人は質素なのよ」
「っていうかお酒も何か」
「ありきたりっていえばありきたりよね」
「まあそうね」
種類は多いがそれでもだというのだ。
「そうした感じよね」
「それでもいいの」
「ロシア人は」
「そうよ、ロシア人は質素なのよ」
実際にそうだとだ。彼女はロシア人として話す。
「無欲なのよ」
「連合で無欲って」
「結構以上に凄いよ、それ」

「だって。ロシア人って」
そのロシア人はどうかと。またロシア人として話す彼女だった。
「お家とね」
「まずはそれね」
「それは不可欠だね」
「御仕事があって」
絶対になくてはならないものだ。家と並んで。
「それでパンがあってウォッカがあれば」
「それでいいんだ」
「満足できるのね」
「充分だから」
本当にそうしたものがあればいいというのだ。
「というかもうそれで幸せだから」
「何か仙人みたいじゃない」
ここまで話を聞いて言うエイミーだった。
「そうしたのさえあればいいって」
「そうだよね。他にはいらないの？」
ポルフィはアンネットに対して問い返す。
「お金とか。そういうのは」
「全然。ロシア人はお金にも無頓着よ」
そうだというのだ。
「貯金はするけれど浪費もこれといってしないし」
「じゃあとことんまで無欲なのね」
「お金もそうって」
「だってお金って」
金はだ。どうかというのである。
「あれじゃない。必要なだけあればいいじゃない」
「そう考えられるのが凄いのよ」
エイミーはその必要なだけ、というところをあえて指摘した。
「普通の国の人間ってそうじゃないから」

「そうそう」
ポルフィはエイミーのその言葉に頷いて応える。
「普通はあればあるだけだから」
「連合ではそれが普通よね」
「けれどあるだけで満足って」
「ロシア人ってどれだけ」
「ロシアンドリームってね」
アンネットは今度はその夢というものについて話す。尚連合ではアメリカンドリームやチャイニーズドリームとは社会的に成功し億万長者になることを示す場合が多い。

第二百五十九話　ビールとワインその六

「ちょっと違うのよ」
「そうしたささやかな生活？」
「そういう感じ？」
「そう、そうした感じ」
あくまでだ。その普通の生活が夢だというのだ。
「だって。満足できれば幸せで夢じゃない」
「そこで満足して終わるんだ」
「普通の生活で」
「勿論違う人もいるけれど」
全員が全員だ。そうした慎ましやかな生活を好む訳ではないというのだ。
「けれどね」
「殆んどがなんだね」
「無欲なのね」
「そう。ロシア人はお酒を飲んでいれば幸せなの」
まさにそうだというのだ。
「それだけでね」
「じゃあ今日も？」
「学校から帰ったら飲むんだ」
「そのつもりよ」
アンネットはにこにことした顔でそうだと話す。
「今日はブランデーかしら」
「ウォッカじゃなくてそれ」
「そっちなんだ」
「そう、そういう気分だから」
それでだとだ。アンネットはエイミーとポルフィに説明する。
「それにするわ」

「ブランデーね」
「また随分と大人なお酒だね」
「飲みたいものを飲むようにしてるの」
酒はだ。そうしているというのだ。
「その時でね」
「まあそれが美味しいよね」
ポルフィは飲みたいものを飲むということには同意だった。
「おつまみもね」
「ブランデーだと。まあさっきはウォッカの気分だったけれど」
そのブランデーの肴はというと。
「クルミがいいわよね」
「ああ、クルミね」
「あれは確かにいいわね」
「あっさりとしてて香ばしいし」
だからいいというのだ。
「それにしてるの」
「成程ね。ところでね」
「ところで？」
「学校では飲まないのね」
エイミーが今問うたのはこのことだった。
「それはしないのね。ロシアでも」
「ああ、ロシアでは学校でも飲むわよ」
ところがだった。アンネットはロシアではだ。学校の中で酒は飲まれるというのだ。
「普通にね」
「けれど今は」
「ロシアでは、よ」
その国の中ではというのだ。
「寒いから」
「いや、寒くても校内で飲むのは」

「仕事中とかも」
「まずいでしょ。勉強中にそれは」
「赤い顔でお仕事っていうのも」
「ロシアじゃ普通よ」
こう言って引かないアンネットだった。彼女はあくまでロシアの常識で話す。
それでだった。どうかというとだ。
「流石に今は飲んでないけれどね」
「日本ではそうだね」
「八条学園じゃ」
「だって。寒くないから」
これが理由だった。寒くないからだというのだ。
「ウォッカはね。普通の気温だとちょっと飲んだらね」
「暑くて仕方なくなるよね」
「実際に夏にウォッカ飲んだことはないけれど」
「ウォッカは極寒で飲んでこそよ」
こだわりでもあった。
「というかロシア人は確かにお酒大好きだけれど」
「だよね。それは否定できないよね」
「絶対に」
「否定するつもりもないし」
最初からそれはしていなかった。

第二百五十九話　ビールとワインその七

「もう実際にお酒ないと死ぬから」
「けれどロシアから出れば」
「普通の飲み方になるんだ」
「必要がなくなるから」
勉強中や仕事中にだ。飲む必要がなくなるというのだ。
「凍えなくて済むから」
「凍えるって」
「ロシアってそんなに寒い星ばかりなの」
「そうなのよね。ロシアと寒さはね」
銀河に進出してもだった。その関係は。
「絶対に切れないものだから」
「それって何か」
「物凄い腐れ縁だよね」
エイミーもポルフィも言う。無論彼等の国にしても寒い星や地域はある。しかしそれでもだ。そうした星や地域ばかりかというとそうでもない。
だがロシアはだ。どうかというと。
「ロシアってその星系の殆んどがね」
「寒い星ばかりなのね」
「どの星も」
「あんまりそういう星ばかりだから」
それでだ。どうかというのだ。
「もう惑星開発でもね」
「温かくしないの」
「そういうことは」
「全然」
全くしないというのだ。

「ロシア人はやる気のないことは徹底的に手を抜くから」
「そもそも温かくする気がないって」
「ある意味凄いんだけれど」
「何かね。ちょこちょこ議会とかに出るのよ」
そのだ。温暖化の話である。
「でもね。全部の惑星にするとなると」
「っていうか全部の惑星って」
「そんなに寒い星ばかりなんだ」
「そうよ。もうね。キューバにあるみたいなね」
連合で最も温かい星や地域に恵まれている国だ。その気候の温暖さというよりは熱帯の心地よさはロシア人から見れば別世界である。
「ああいう星って」
「あるの？熱帯の星」
「それとか地域」
「殆んどないわよ」
なかった。まさにだ。
「全部リゾート地として大人気で」
「ああ、やっぱりね」
「そうした場所には人が集まるのね」」
「もう何時でも満員で」
しかもだ。そこまでなっているというのだ。
「予約さえ大変なのよ」
「まさにロシアだね」
それを聞いてだ。こう言うポルフィだった。
「温かい場所が憧れって」
「けれど全部の星には」
「そう、無理よ」
まさにだ。無理だというのだ。
「とてもね。もっともお金があってもね」
「そういうことはしない」

「さっきも言ったわよね」
「ええ、言ったわ」
その通りだと答えるアンネットだった。
「確かにね」
「惑星開発ってお金がかかるしね」
「しかもね」
アンネットはさらに話す。
「人も時間もね」
「だからしないんだ」
「そもそもお金がかかり過ぎるのよ」
「それで。よね」
エイミーも話す。

第二百五十九話　ビールとワインその八

「あえてそのままにしているのね」
「そういうこと」
「成程ね」
「だからしていないのよ」
「それでいいことあるの？」
「ロシアにとって」
「悪いこともないから」
別にいいといった感じのアンネットの返答だった。
「寒いままでね」
「いや、寒いこと自体がさ」
「困ったことじゃないかしら」
こうだ。ポルフィとエイミーが話す。
「しかもロシアの寒さってマイナス二十度とか三十度だよね」
「普通に全部凍っちゃうわよね」
「ええ、凍るわ」
これもその通りだった。ロシアは凍るのだ。
「お陰でスポーツはね」
「陸上とかは何処でするの？」
「そういうのは」
「屋内のトレーニング場があるのよ」
そうしたものがあるというのだ。尚ロシアはこの時代でもスポーツ大国でもある。だがその様な凍土でできるかというとだ。それは疑問だというのだ。
そのことについてだ。アンネットは話すのだ。
「そこで皆身体動かすのよ」
「ああ、室内の」
「そうした場所で」

「そうしたところにはお金かける国なのよ」
温暖化には興味を示さなくともだというのだ。
「ちゃんとね」
「健康にはなんだ」
「それには気をつけて」
「それでね」
アンネットはここでさらに話す。
「皆屋内でスポーツしているから」
「だから雪だらけの国でもスポーツ大国になれる」
「そういうことなの」
「そうよ。お酒ばかり飲んでたら身体によくないし」
こうした配慮もしていることはしているのだ。
「だからスポーツは奨励されてるわ」
「そうしたところはしっかりしてるのね」
「そうなのね」
「そう。しっかりしてるから」
そしてだ。アンネットは。
今度は笑顔でだ。こんなことを話した。
「ただ問題はね」
「問題？」
「問題っていうと」
「お酒飲んだ後で身体動かしたら」
その場合はどうなるかというのだ。
「身体に悪いから」
「っていうかそれって自殺行為だから」
「洒落にならないから」
「だからそれは禁止されてるから」
アンネットは笑顔のままで話す。
「身体を動かすのはお酒を飲む前によ」
「それはちゃんとしてるんだ」

「その辺りは」
「法律でも定められてる」
今度は法律だった。
「スポーツはお酒を飲む前にするべしってね」
「それ法律で定めること？」
「常識じゃないの？」
「そう思うけれど」
「違うの？」
「ロシアじゃちょっとね」
違うのだった。法律で定めないとだ。してしまう人間がいるというのだ。

第二百五十九話　ビールとワインその九

「お酒は切っても切れないものだから」
「ううん、何が何でもお酒って」
「酒落にならないでしょ」
「寒いからね」
またこれだった。
「皆飲んじゃうから」
「いや。そこがそもそもおかしいから」
「大体」
また突っ込みを入れる二人だった。ポルフィにしてもエイミーにしてもそれぞれの国の基準で話をする。もっと言えば連合の基準だ。
しかしアンネットはだ。あくまでロシアノ基準で話すのだった。
「困ったことよね」
「大いにね」
「酒落にならない位に」
「とにかく。一にお酒、二にお酒」
「ロシアらしいわね」
「ううん、実はロシアでもね」
「ロシアでも？」
「っていうと？」
二人はアンネットの言葉の変化に気付いた。それで問い返した。
「何かあるの？」
「そのロシアに」
「お酒を飲めない人もいるのよ」
これは体質故にだ。どうしてもそうした人はどの国にもいるのだ。
だがそうした人はどうなのかとだ。アンネットは話すのだった。
「けれどそういう人はね」
「生きられるの？ロシアで」

「果たして」
「生きられるわ」
それは大丈夫だというのだった。
「かなり苦労するけれど」
「そりゃそうだね」
「お酒がないとね」
二人もそれで頷く。
「ロシアじゃ辛いわよね」
「下戸だと」
「お酒は神の飲み物だから」
アンネットもこう言う。
「それが飲めないとなると」
「凍えて仕方ない？」
「それだと」
「そう、私は飲む人だからよくわからないけれど」
飲める者には飲めない者の気持ちはわからないという。それはロシアではとりわけ言えることだった。何しろ飲む人間の国だからだ。
それでだ。どうかというのだ。
「親戚の子でいるのよ」
「お酒が飲めない人がだね」
「いるのね」
「それで苦労しているの」
そうだというのだ。酒が飲めなくてだ。
「寒くても飲むのはコーヒーとかで」
「ああ、ロシアでコーヒー出しても」
ポルフィが言う。それはどうなるかというのだ。
「ホットでもあっという間にだよね」
「そう、凍っちゃうし」
「そうらしいね」
「アルコールだから凍らないのよ」

そうなるのだった。だから酒、ウォッカが飲まれるのだ。
「けれどコーヒーはね」
「ホットでもだね」
「もう瞬時に」
「だから。外じゃ飲めなくて」
身体を温めるものがだ。無理なのだ。
「かなり厚着して中にはカイロ一杯なのよ」
「ああ、カイロね」
エイミーはカイロについて話す。当然ながらこの時代にもカイロ、しかも使い捨てカイロは売られている。寒い国で人気のある商品だ。
「あれロシアじゃ売れてるでしょ」
「生活必需品よ」
そこまで至るというのだ。

第二百五十九話　ビールとワインその十

「もう飲めない人は特に」
「カイロが必要なの」
「じゃあその親戚の人なんて」
ここで話がつながった。そこにだ。
「それこそなのね」
「カイロがないとね」
「どうしようもないのね」
「それこそ」
「そう、カイロは欠かせないのよ」
まさにそうだというのだ。カイロがあってこそなのだ。
「お酒が飲めないとね」
「お酒かカイロか」
「そうなるんだ」
エイミーもポルフィも納得した。そしてだ。
それに加えてだ。アンネットはその二つを組み合わせて話した。
「ただ。両方必要な場合があるのよ」
「あんまりにも寒いとだよね」
「そう、ロシアだから」
そのだ。ロシアのあまりもの寒さ故にだというのだ。
「ウォッカだけでもカイロだけでも過ごせない時があって」
「そういう時はカイロだけじゃ辛い」
「そういうことなんだ」
「そう、もう極寒地獄だから」
まさにそれだった。ロシアにはそうした寒さも実際にあるのだ。
「厚着をしてカイロもたっぷりつけてウォッカを飲んで」
「そこまで重装備しないと外には出られない」
「ロシアって凄いね」

「だから犯罪者を流刑にしたら」
ロシアだけでなく連合ではこの時代もそうした刑罰がある。死刑にならない凶悪犯は流刑地で非常に粗末な設備や食事の中でだ。強制労働をさせられるのだ。
その彼等がだ。どうなるかというのだ。
「もう下手したらね」
「一発で凍死よね」
「もうそれこそ」
「ええ、ロシアの流刑囚の寿命は凄く短いの」
この辺りも変わっていないロシアである。
「食事も粗末で刑務所は寒いし」
「それも改善する気ないんだね」
「ロシアだから」
ポルフィに答えることも最初はここからだった。
「そんなこと考えないから」
「全くなんだ」
「ええ、そうよ」
まさにそうだというのだ。
「それに相手は凶悪犯だしね」
「死んでも構わないけれど」
「だから余計になの」
「そう、死ぬまでこき使うのよ」
犯罪者に対する連合での共通の考えではある。連合で加害者、犯罪者の人権が考慮されることはない。だから死刑も非常に多いのだ。
「そうしてね」
「成程。それでなの」
「そう、何の考慮もしないの」
本当に何一つとしてなのがロシア流だ。
「だからもう来てその日に氷の柱になるのもいるから」
「流刑地でウォッカは？」

「あえて支給されないの」
「そう、しないの」
やはりあえてであった。
「だって支給したらね」
「生き残るからよね」
「それでよね」
「ええ、そうよ」
まさにその通りだった。

第二百五十九話　ビールとワインその十一

「だからそういうことはしないの」
「考えてみれば残酷だけれどね」
「まあ当然よね」
「犯罪者だから」
そうした対応も当然だというのだ。
「普通にしてるから」
「ロシアって凄いね」
「そうよね」
ポルフィとエイミーがそれぞれ言った。
「そこまでできるって」
「怖いまでに凄いわ」
「そうでしょ。ロシアって凄いでしょ」
アンネットはその凄いという言葉に反応を見せた。
「我が国って凄いのよ」
「まあ確かにね」
「国土は一番広いし」
「星系も一番多いし」
「惑星の数も」
そういったものが一番多いのもロシアなのだ。
「資源だって連合一だし」
「エウロパ幾つも養えるんだっけ」
「そうよ。それこそエウロパが幾つもね」
入るだけの資源があるというのだ。
「国土だって。どれだけ広いかしら」
「そんな国だから」
「そうしたこともあるの」
「ロシアは昔からロシアよ」

アンネットは自信に満ちた言葉で言い切った。
「広くて大きくて凄いのよ」
「その他は？」
エイミーはふと気付いて尋ねた。ロシアに他のものはあるかとだ。
「小さくまとまったりとか繊細とかは？」
「何それ」
アンネットはきょとんとした顔になってエイミーのその言葉に応えた。
「小さくまとまるとか繊細とかって」
「いや、そういう言葉はあるでしょ」
「あるにはあるけれど」
ロシア語にもだ。それはちゃんとある。当然連合の公用語である銀河語でもある。だがここでは言葉のニュアンスがどうにも違っていた。
そのうえでだ。アンネットは言うのだった。
「それでもね」
「いい意味じゃないの」
「そう、大きくて広いこと」
アンネットはこのことは誇らしげな顔で述べる。
「それがロシアなのよ」
「ロシアなのね」
「その大地は不死身の大地よ」
「星のそれ？」
「そう、ロシアの星の大地は不死身よ」
ロシアは昔から大地の国だ。雪の他にそうしたものもあるのだ。
「何があってもね」
「蘇るのね」
「体力と生命力と回復力」
今度出て来たのはこの言葉だった。
「ロシアには国家に必要なこの三つ」

「その三つが？」
「備わってるんだね」
「そう、その国家に必要なもの全てが」
その三つで全てだと。ロシア人は言い切った。
「ダントツだから」
「あの、幾ら何でもその三つが全てって」
「暴論じゃないの？」
それについてはだった。ポルフィもエイミーもだった。
いぶかしむ顔でだ。こう突っ込みを入れたのだった。
「その三つの他にも」
「国家に必要なものって」
「結構あるけれど」
「沢山ね」
「えっ、いるの！？」
またきょとんとした顔で返すアンネットだった。

第二百五十九話　ビールとワインその十二

「その他に」
「いや、いるでしょ」
「普通にね」
「そうよ。だって体力と生命力と回復力だけじゃ」
「あとパワーだよね」
ロシアといえばパワー、パワー国家ぶりも健在だった。
「その四つだけで完全って」
「幾ら何でも」
「だっていらないじゃない」
その他のことは不要だというのだった。
「他は」
「いらないって」
「また言うんだ」
「ううん、何かもう」
「ロシアらしいけれど」
「けれどかなりの暴論だし」
「それって」
ポルフィもエイミーも首を捻りながら言う。
「それで納得できるのもね」
「凄い話よ」
「だから。細かいことはどうでもいいのよ」
アンネットは平然と笑って述べる。
「大きくてパワーがあれば」
「それで充分」
「そうなのね」
「そう、ロシアは大きいからいいの」
少なくとも小さいロシアは考えられなかった。アンネットの中で

は。
「それで力が強くて」
「不死身なんだね」
「それで充分なのね」
「それ以外は何もいらないわ」
まさにだ。そうしたものだけで充分だというのだ。
「ロシア人はその他には何も求めないから」
「強い祖国があって」
「ウォッカとお家と食べ物と仕事があれば」
「それで充分」
「じゃあもう達成できてるじゃない」
既にだった。この時代のロシアでは達成されていることだった。
国力の大小の違いはあってもだ。連合では宇宙進出の時代からどの国でも達成されている。
そのことについてだ。二人はアンネットに話す。
「もうとっくの昔に達成されていて」
「それでもう満足してるのね」
「そう。満足よ」
アンネット自身もにこりと笑って話す。
「ロシア人は今のロシアに凄く満足してるから」
「無欲よね、本当に」
「ロシア人って」
「いいでしょ。ロシア人って」
「ううん、無欲なのもいい」
「それもまた」
二人はそのことが何となくわかったのだった。そうしてだ。
そのアンネットにだ。今度は。
ルシエンが来てだ。そうして声をかけてきた。
「ねえアンネット」
「どうしたの？」

「今度のことだけれど」
「あっ、休日のデートね」
「本当にあそこでいいの？」
彼は少し戸惑いながら彼女に尋ねた。
「居酒屋で」
「そう、そこでね」
「デートするんだ」
「その前に色々行くけれどね」
「居酒屋でデートっていうのも」
「駄目かしら」
楽しげに笑いながらルシエンに尋ねる。
「それって」
「ううん、アンネットがいいならいいけれど」
「じゃあいいのね」
「けれど普通デートに居酒屋は」
それはないのではないかというのだ。ルシエンが言いたいのはこのことだった。

第二百五十九話　ビールとワインその十三

しかしだ。アンネットはその彼にこう言うのだった。
「ロシアじゃ普通だし」
「ロシア式のデートなんだね」
「そうよ。バーの場合もあるけれど」
「デートって普通バーじゃないかな」
「それでもね。ロシアはね」
「居酒屋の方がポピュラーなんだ」
「パブもだけれど」
どちらかというとバーよりパブの方が庶民的とされている。尚エウロパではバーに入るのは貴族でパブに入るのは平民とされている。法律で定められている訳ではないが慣習として定まっているのだ。
そのパブについてもだ。アンネットは話す。
「まあパブでもいいけれどね」
「パブねえ」
「それでもやっぱり今は」
「居酒屋なんだ」
「そこで二人で楽しくやりたいの」
飲んで食べて、というのだ。
「それでどうかしら」
「うん、まあね」
ルシエンもだ。二人と言われてだ。
いささか考えを変えてだ。こう答えた。
「じゃあそれでね」
「決まりね」
「いいよ」
今は少しだがにこりと笑っての返答だった。
「じゃあ二人でね」

「楽しく居酒屋までね」
「デートしようね」
こうして話が決まった。ルシエンは話が決まると一旦そこから離れた。アンネットは彼を手を振って見送ってからポルフィとエイミーに向き直った。
そしてだ。二人に笑顔で話すのだった。
「まあ。こうしたこともね」
「ロシアだね」
「居酒屋でデートも」
「基本雰囲気よりも楽しむことなのよ」
そちらを重視する国というのだ。
「そういう国だから」
「楽しくね」
「何ごとも」
「確かに雰囲気を大事にすることはあっても」
それでもだ。第一はなのだった。
「楽しむことよ」
「ロシアらしく楽しむ」
「それね」
「そういうことだから」
また言うアンネットだった。
「雪もまた楽しむのよ」
「ロシア人の器は大きい」
「それは間違いないわね」
「ロシアは大器よ」
アンネットの胸は誇らしげに反り返ってきていた。
「ただ大きいだけじゃないのよ」
「ううん、そういう国にいれば」
「アンネットみたいになるんだね」
エイミーとポルフィは最後にこう言った。その彼等の言葉を受け

ながらだ。当のアンネットはルシエンと居酒屋のデートに向かうのだった。

ビールとワイン　　完

２０１１・７・１６

第二百六十話　野球での矛盾その一

野球での矛盾

アンネットとルシエンのデートのことについてだ。スターリングがふと蝉玉に言った。
「アンネットはお酒が大好きだけれど」
「ルシエンもなの？」
「確かトルコも」
彼の祖国のだ。そのトルコもだというのだ。
「お酒かなり飲む筈だよ」
「そうだったの」
「元々イスラムだけれど」
それでもだというのだ。トルコ人はかなり飲むというのだ。
「トルコ独自のお酒もあって」
「あるのね」
「そうなんだ。それも結構強いお酒だよ」
「ふうん、そうなのね」
「だからルシエンも」
ひいてはだ。彼もだというのだ。
「時々一緒にいるけれどね」
「飲むの」
「そう、飲むから」
「それでアンネットもよね」
「ウォッカだからね」
ウォッカの強さはもう言うまでもなかった。
「これはどっちもね」
「お酒をかなり飲む」
「お酒のデートになるかもね」
「何かそれって」

そうした話を聞いてだ。蝉玉も言う。
「高校生のデートじゃないわよね」
「サラリーマンとＯＬみたいな？」
「そんな感じだと思うけれど」
「確かにそうよね」
そうだとだ。二人で話すのだった。
「何かが決定的に違うと思うけれど」
「デートでお酒は程々にしないとね」
「けれどそうはいかないみたいね」
「多分ね」
「お酒ね」
蝉玉はその酒について話した。
「ある程度ならいいけれど」
「滅茶苦茶に飲むとね」
「それデートにならないわよ」
「飲み友達同士の付き合いになるからね」
「まあ。アンネットって」
蝉玉はアンネットの話もした。
「お酒がないと死ぬ娘だけれど」
「そうそう。お酒がないとロシア人ってね」
「どうしようもなくなるから」
「それでかな」
「だからあの娘は仕方ないけれど」
「それに加えてルシエンともなると」
「大変なデートになるわね」
これが結論だった。
「間違いなくね」
「なるね。暴れなければいいけれど」
「ルシエンって酒乱？」
「酔うとおかしくなるよ」

「どんな感じに？」
「もう何が出て来るかわからないんだ」
そうした意味でだ。おかしいというのだ。
「その都度ね」
「何が出て来るかって」
「笑ったり黙ったり」
スターリングはその事情を蝉玉に話していく。
「あと歌ったり」
「それが何時出て来るかわからないの」
「そう。それがね」
「アンネットは変わらないよね」
「ああ、あの娘はね」
そのだ。アンネットはというと。

第二百六十話　野球での矛盾その二

「幾ら飲んでも」
「平気な感じだから」
「あの辺り凄いよね」
「流石って言うべきかしら」
ここで蝉玉が言うのはロシア人、ということである。
「ウォッカをお水として飲む国よね」
「そうだね。ロシア人だからね」
「で、ルシエンもなの」
「一緒にいたらよく飲むよ」
そうだというのだ。
「それも強いお酒をね」
「何か凄くなりそうね」
「そうだね。そういえばだけれど」
ここでだ。スターリングはこんなことも言った。
「僕達にしてもね」
「私達も？」
「そう、僕達もね」
彼等のだ。その話もするのだった。
「あれだよね。それぞれ強いお酒あるよね」
「ああ、老酒ね」
「こっちはバーボンね」
彼等の国にもだ。そうした強い酒はあるのだ。
それでだ。スターリングはそのバーボンの話をはじめた。
「あれも少し飲んだらすぐだからね」
「一発で酔うわよね、あれは」
「老酒もね」
「あれは昔から強いって評判だから」

「そういうお酒がそれぞれあるけれど」
「けれど。あれよ」
ここで蝉玉はスターリングにこう話す。
「そういうのだけ飲んでる訳じゃないから」
「他のお酒もだからね」
「そう、飲んでるじゃない」
バーボンや老酒ばかりではないのだ。アメリカにしろ中国にしても。
「ワインも飲むしビールもね」
「色々飲むからね」
「ロシアは。それこそ」
「まあワインも飲んでるみたいだけれど」
もっと言えばビールもだ。飲んでいることは飲んでいるだ。
しかしだ。イメージとしてはなのだった。
「やっぱりウォッカだよね」
「それがメインよね」
「あれってアルコール度九十五超えてたよね」
「九十六度位よ」
そこまでだというのだ。
「もうそれこそ殆んどアルコールだから」
「きてるよね」
「あれはまた別格だから」
「そのウォッカをメインだから」
「また格が違うわ」
バーボンにしろ老酒にしろそこまで強くはないのだ。精々四十パーセントだ。どう考えてもウォッカにはアルコール度では惨敗している。
それがわかっていてだ。蝉玉も言うのだ。
「勝負にならないから」
「既にだね」

「そうよ。まあウォッカは別にしてね」
「まあ置いておいて」
「トルコのお酒ね」
話をそこに移すのだった。そのトルコの酒だ。
「そんなに強いの」
「やっぱり。凄いみたいだよ」
「一回飲んでみようかしら」
蝉玉はふと興味を覚えてこう述べた。
「一度ね」
「いいんじゃない？一回飲んでみたら」
「そうよね。そうしようかしら」
また言うのだった。
「一回はね」
「僕もそうしようかな」
こんな話をしていた二人だった。そして渦中の二人はというと。

第二百六十話　野球での矛盾その三

デートにおいてだ。まずは。
本屋に行きだ。そこで本を選んでいた。
二人でラノベのコーナーに行きだ。それで話をしていた。
「そういえばアンネットって」
「そう。どっちかっていうと女の子が一杯出て来る作品がね」
「そういうの好きだよね」
「賑やかだから」
だからいいというのだ。
「そうしたのが好みよ」
「成程な。僕はさ」
「ルシエンはあれよね」
「戦う話が好きだね」
彼はそうした作品が好みだった。この時代においてもラノベは女の子や戦いを扱った作品が多い。それで二人もそうした作品を読んでいるのだ。
そレでラノベの前でだ。二人は話してだった。
それぞれのよさそうな本を手に取ってだった。
「これね」
「買おうか」
こう言い合いだ。ラノベはそれで決めた。
そしてそれからだ。今度はゲームの攻略本のコーナーだった。今度は。
「野球よね」
「そうそう、野球ゲームね」
「実況ワンダフルのシリーズがいいけれど」
「ああ、私もね」
アンネットもそれだというのだ。

「あのゲームのシリーズ好きなのよね」
「いいよね、あのシリーズって」
「安定してるのよね」
ゲームの出来がだというのだ。
「だから。やっててても」
「楽しめるし」
「個人的にはピッチャー重点でやってるのよ」
アンネットはそちらだった。
「野球はピッチャーだから」
「僕は打線かな」
「そっちなの、ルシエンは」
「そう、打線」
彼はそちら重視だった。
「あと守備ね」
「そうそう、守備よね」
「幾ら打ってもね」
「幾らピッチャーがよくても」
二人の主張はここで一致した。6
「結局同じだからね」
「負けるのよね」
そうなるというのだ。
「守備悪いのが一番いらいらこない？」
「くるわ」
アンネットはルシエンのその言葉に頷く。
「エラーだけじゃなくて打ち取ってもね」
「それが内野安打とかになって」
そうしてだった。そこから。
「アウト一つふいにしてそこから打たれて」
「そういうのって困るんだよね」
「とてもね」

そうだと話していく。
「特に二遊間とセンターだね」
「サードとライトも」
こうしたポジションが重要なのはこの時代でも同じだ。
とりわけだった。重要なのは。
「キャッチャーよね」
「そうそう、あのポジション」
「ここが駄目だったら同じなのよね」
「リードがよくてね」
ルシエンが最初に大事だとしたのはリードだった。

第二百六十話　野球での矛盾その四

「キャッチングに肩」
「ブロック能力も」
「キャッチャーって求められること多いわよね」
「扇の要だから」
「そう、要」
まさにそれだった。
「要をどうなのか」
「それでチームって決まるから」
「色々と考えていかないと」
「難しいわよ」
こう話される。
「そうよね。キャッチャーが大事だから」
「そうそう。キャッチャーだよ」
「第一はそれだから」
ここでも二人の考えは一致していた。
「まずはキャッチャー」
「それも打つキャッチャー」
しかしここではだった。
アンネットはだ。こうしたキャッチャーを理想とした。
「四番でスラッガーのキャッチャーよね」
「四番なんだ」
「そう、主砲ね」
そうしたキャッチャーがいいというのだ。
「そうしたキャッチャーがいいけれど」
「ううん、僕は」
ところがだ。ルシエンはこう主張した。
「アベレージヒッターかな」

「主砲じゃないの」
「そう、ホームランを打つんじゃなくて」
それとは別にだというのだ。
「ヒットを打つキャッチャーよね」
「ヒット？」
「そう、ヒット」
それを打つのがいいというのだ。
「ヒットを打つのがいいと思うけれど」
「ヒットね」
「そう、ヒットだよ」
「ホームランはいいの」
「ホームランはクリーンナップが打つから」
それでだ。キャッチャーはだというのだ。
「六番ね」
「六番なの」
「そう、キャッチャーは六番でいいじゃない」
また言うルシエンだった。
「スラッガーの後でね」
「ううん、キャッチャーはそれでいいの」
「そうじゃないかな。まあそのキャッチャーのバッティング次第だけれど」
「それでも理想は？」
「キャッチャーはアベレージヒッターかな」
やはりそうだというのだ。
「僕としてはね」
「私はやっぱり」
だがアンネットもアンネットでだった。こう主張していく。
「四番でね」
「四番なの」
「そう、四番ね」

四番を打つキャッチャーがいいというのだ。
「そう思うけれど」
「何かそこは違うね」
「そうよね」
二人で話していく
「キャッチャーについての考えって」
「っていうかバッターとしてのキャッチャーだね」
それが違うというのだ。
「それは随分と違うね」
「私も今気付いたわ」
「僕もだよ」
ゲームの話をしてだ。それでだった。
そしてその中でもだ。二人はあるものを見ていた。
「けれど。キャッチャーも打って欲しいっていうのは」
「それは同じなのね」
「どんなポジションにいてもね」
ルシエンは熱い声で話す。

第二百六十話　野球での矛盾その五

「打って欲しいよね」
「バッターボックスに立つのなら」
「ピッチャーにしてもね」
投げることが仕事のだ。そのピッチャーもだというのだ。
「やっぱり打って欲しいね」
「ピッチャーもなの」
「そう、打って欲しいけれど」
こうアンネットに話すのである。
「それはどう思うかな、アンネットは」
「まあ私もね」
アンネットもだ。ルシエンに対して答える。
「実際打って欲しいわ、ピッチャーにも」
「そうだよね。実際に打席に立つのなら」
「もうそれならね」
打席に入ればバッターである。どんなポジションでもだ。そしてそれならばだとだ。アンネットも確かな顔と言葉でルシエンに話していく。
「打ってくれないと。ただ」
「ただ？」
「ピッチャーの本分はあくまで投げることだから」
「それをメインにして欲しいんだ」
「そう思っていつも育成してるの」
ゲームにおいてだ。そうしているというのだ。
「いつもね」
「ううん、ピッチャーも打ってくれないといけないけれど」
「投げることが仕事だから」
第一にして最大のだというのだ。

「野球はまずピッチャーだから」
「まあ僕もね」
「ルシエンもよね」
「ピッチャーを育てる時は」
その時はだというのだ。彼もどうするかというと。
「やっぱり投げることがメインだね」
「打つことメインのピッチャーは」
「有り難いけれど投げることがおろそかになると」
「本末転倒だし」
「それに僕がよくやるリーグはいつも指名打者があって」
「別に打つことは」
「シリーズ以外殆んどないから」
それでだというのだ。
「もう投げることメインに考えてやってるね」
「私も。よくプレイするリーグは指名打者があるから」
「じゃあやっぱり」
「もうピッチャーは投げることだけ」
念頭に置いてそれで育成しているというのだ。
「そうしてるけれどね」
「それで指名打者だよね」
「クリーンアップ、そう思って育ててるわ」
「じゃあ指名打者の守備は」
「打つことだけを考えてるから」
そういうことだった。考えている育成はそれだった。
「完全にね」
「徹底してるね、それって」
「ええ。その指名打者を軸にしてね」
「打順も考えてるんだ」
「まあ。キャッチャーは絶対に四番も打てないと」
「それでパワーヒッター」

「そう思ってるわ」
ここでもキャッチャーはそれだった。どうもそのこだわりはルシエンのそれよりも大きい。ピッチャーの次位にこだわっていると言ってよかった。
「けれど全体としてね」
「ピッチャー中心でいってるんだね」
「ええ。打たれなかったら勝てるから」
防衛的思想と言えた。
「だからね」
「打たないと勝てないんじゃないの？」
「抑えたら勝てるじゃない」
ここは二人共違っていた。
「それでね」
「じゃあ理想は？」
「完封よ」
やはりピッチャー中心のアンネットだった。

第二百六十話　野球での矛盾その六

「ロシア人は大抵ここで打ちまくるべきって言うけれどね」
「それって本当にロシアだね」
「けれど私は違ってね」
「抑える方なんだね」
「抑えて。それで勝つ」
アンネットの言葉はややうっとりとしているものになっていた。
「それが好きなのよ」
「じゃあそれこそピッチャーは」
「強力な。先発どころか」
「中継ぎや抑えまで充実させて」
「抑えは二人で」
つまりダブルストッパーである。普通は一人のストッパーを用意するだけでも中々難しい。だがここであえて二人と言うのがアンネットだった。
「それでいきたいのよ」
「贅沢じゃないか？それって」
「贅沢かしら」
「ストッパー二人は」
このことはだ。ルシエンも驚きながら話す。
「幾ら何でも」
「けれど。二人いたら」
どうかとだ。アンネットは引かずに話す。
「終盤凄く楽じゃない」
「二枚看板で抑えられるからだね」
「そう、だからよ」
「八回に一人、九回にもう一人」
「それでもう完璧じゃない」

「しかも中継ぎもだよね」
アンネットの構想にはそれもあった。抑えだけではないのだ。
「それこそ一人一殺が可能な位の」
「そうよ。万全の中継ぎ陣」
やはりそうだった。アンネットは中継ぎも求めていた。
「勿論先発陣もね」
「つまり何もかもが完璧な」
「そう、最強の投手陣」
アンネットの理想を一言で言うとそうなった。
「どんな強力打線でも抑えられるみたいな」
「何か僕の考えとは」
「正反対なのね」
「僕の理想の打線は」
それは何かというのだ。ルシエンの理想とする打線は。
「どんなピッチャーでも打ち崩せる打線だけれど」
「どんな投手陣でもなのね」
「そう、完璧にね」
彼もまただ。完璧と言うのだった。
「何かそれを言ったら」
「矛盾よね」
「そうだね。最強の矛と最強の盾」
中国の古典韓非子にある逸話だ。この時代でも健在の話だ。
「そうなるよね」
「そうね。ピッチャーが盾で」
「打線は矛だね」
「どっちが強いかしら」
具体的にはどちらが上か。そうなるとだ。
アンネットもルシエンもだ。二人で話すのだった。
「今度実際にやってみようか」
「ゲームでね」

「まあ。僕はアンカラベアーズだけれど」
「私はシベリアウルフルズで」
それぞれの贔屓のチームだった。
「そのどっちが強いか」
「見極めたいわね」
「けれど」
「そうよね」
それぞれのチームの名前を出してから。二人はあることに気付いた。
そのことをだ。まずルシエンが言った。
「確かシベリアウルフルズって」
「そうよ。打線のチームよ」
実はそうなのだ。そのシベリアウルフルズは。
「伝統的に強力無比の打線のチームだから」
「餓狼打線で」
「そう、それが看板のチームだから」
「だったよね」
「それと。アンカラベアーズって」
アンネットからだ。ルシエンに話した。

第二百六十話　野球での矛盾その七

「ピッチャーのチームよね」
「オーナーが代々ピッチャー好きだから」
「その影響でピッチャーの育成と補強に熱心よね」
「それで投手陣が凄いんだよ」
「そうよね」
お互いにだ。贔屓のチームとは正反対のチームカラーを目指しているのだった。
「けれど。実際とは違う感じでね」
「贔屓のチームを見いよね」
「ウルフルズってピッチャーは今一つだから」
「ベアーズは貧打線だし」
これが実際だった。
「だから余計にね」
「見たいんだよね」
贔屓のチームの実際とは違う姿をだというのだ。
「ロシアって最近野球は今一つだし」
「トルコもね」
そうした事情もあった。
「ブラジルとか急に強くなって」
「キューバは伝統的で」
中南米がまずあった。この時代こうした国々はサッカーだけではなかった。野球においてもだ。かなりの強さを誇っているのだ。
それでだった。ロシアやトルコは。
「寒くてもドームがあるけれど」
「というかロシアってドームでしか野球できないんじゃないの？」
「キャンプもそこよ」
寒い場所ばかりだからだ。キャンプもそうした場所においてなの

だ。
「他の国みたいに温かい場所ないから」
「難しいね、そこは」
「正直文明が有り難いわ」
「若しドームがなかったら」
「ロシアじゃ野球はできないね」
まさにそうだった。
「春でもね」
「まだ雪があるとか？」
「そうした場所も多いから」
やはりロシアだった。そうしたところなのだ。
「だから。もうそれこそ」
「ドームの温かさと守りがないと」
「野球できないのよ。他のスポーツもね」
「サッカーとか陸上競技も」
「そう、無理だから」
「まさにドームあってだね」
「そうなの。だから大昔は」
二十世紀までをだ。アンネットは今はこう定義して話した。
「それこそ。柔道とかホッケーとかね」
「室内でできるものだけだね」
「そういうのしかできなかったの」
「他にはスケートとかだね」
「水泳もね」
そうしたものはロシアは今も圧倒的に強い。
「シンクロとかね」
「シンクロ。確かにロシアのシンクロって」
「凄いでしょ」
「フィギュアスケートもね」
当然こちらの話も出た。

「バレエが絡むと我が国は昔から強いのよ」
「バレエだよね。ロシアって」
「ロシア人はバレエがあると余計になのよ」
燃えるというのだ。
「何かバレエが入った時代から」
その時代からだった。ロシアはバレエに魅せられたのだ。
そうしてだ。どうかというとだった。
「夢中になってるから」
「そうだね。野球とかサッカーの応援でも」
「バレエ入れるわ」
そうだというのだ。そこでもだった。

第二百六十話　野球での矛盾その八

「というか応援団、ロシアのチアガールって」
「バレエなんだ」
「どのチームのチアガールもね」
「バレエを取り入れて」
「そうしてるけれど」
「ロシア独特だね」
ここまで聞いてだ。ルシエンは思わず言った。
「というか絶対にバレエ入れないと気が済まないんだ」
「何ていうかね」
「じゃあバレエ禁止されたら？」
「ロシア人はやる気のないことはしないわ」
このことは徹底しているロシア人だった。
「とことん手を抜くわよ」
「成程ね。そうなんだ」
「わかりやすいでしょ」
「うん。とてもね」
「雪があってバレエがあって」
そしてさらにだった。
「ウォッカがある。ロシアの出来上がりよ」
「それでスポーツはドームで」
「それでなんだけれど」
今度はアンネットがだ。ルシエンに尋ねた。
「トルコはそういうのないの？」
「トルコは色々な星があるからね」
ロシアノ様に寒い星ばかりではないというのだ。
「密林もあるし砂漠もあるし」
「バラエティに富んでるわね」

「うん。大草原の惑星もあるよ」
「大草原ね」
「ロシアにはないんだ、やっぱり」
「一面銀世界ならあるわよ」
これがロシアの大草原だった。緑ではないのだ。
「そういえばロシアの雪って何処でも白いわね」
「それと銀色だよね」
「そう。赤い雪とかはないのよ」
星によってはあるのだ。赤い砂が混ざってそうなる。黄色い砂が入れば黄色くなる。この辺りは怪奇現象やそうしたものではない。
そのこともだ。アンネットは話した。
「トルコにはあるの？」
「あるよ。青い大草原もあるし」
「いいわね。青い大草原なんてあるの」
それを聞いてだ。羨ましい顔になるアンネットだった。
「凄いじゃない、それって」
「他にも紫のジャングルとか」
「まだあるの？」
「赤い山もあるし」
とにかく自然は豊富だ。トルコはそうなのだ。
「ううん、けれどそれを聞いても」
「羨ましくはないとか？」
「凄いと思うけれど」
それでもだというのだ。
「羨ましいとかは」
「思わないんだ」
「そうした欲もないから」
ここでも無欲なロシア人だった。
「だから雪で落ち着けるのね」
「本当に無欲なんだな。ロシア人は」

「そうね。無欲なことにかけては」
それについてだ。どうかというと。
「多分連合でも屈指よ」
「確かに。何かを欲しがるっていうのは」
「あるだけで満足するから」
ごく自然にだ。そうするというのだ。
「そこが違うわよね」
「連合はな。それこそ」
「なければ造るだから」
「そうだよ。なければ造るか造り変える」
それこそだ。惑星の気候すらだ。

第二百六十話　野球での矛盾その九

「それが普通だからな」
「ロシア人はあるだけで満足するから」
「日本人みたいだな」
「そうそう、日本人もね」
彼等が今いるだ。この国の国民性もなのだった。
「無欲よね」
「欲しがらないよな、あれやこれやと」
「あるものだけでいいっていう風で」
「本当に無欲だよな」
「ロシア人と日本人は連合の中ではね」
とにかく無欲なのが目立っていた。しかしだ。
アンネットはだ。こんなことも言った。
「けれど無欲っていいことかしら」
「いいことだろ。どんな宗教でも言ってるしな」
「けれど。あまり無欲だと」
どうかというのだ。それならばだ。
「満足ばかりして何かを積極的にしたいとかね」
「ああ、文明の進歩とか」
「そういうことがなくなるわよね」
その時点で満足すればだ。そうしたことはなくなるというのだ。
その話はだ。ルシエンもだった。
頷きそうしてだ。こう言うのだった。
「だよな。ゲームだって」
「私達がしているその野球ゲームにしてもよ」
「今の時点で満足すればな」
「それでそれ以上システムとか発展しないから」
「欲も大事なんだな」

「ロシア人の欲って」
そのだ。ロシア人の欲はどうかというとだ。
「食べ物と飲み物は」
「ウォッカにパンにピロシキにボルシチだけあればだよな」
「それとジャガイモね」
こうしたものでだった。
「これだけでいいから」
「それってアメリカ人とか中国人とかだとな」
そのだ。彼等の場合はというと。
「思いつく限りの食べ物と飲み物言うからな」
「それが連合じゃ標準よね」
「そこからさらにだからな」
満足してもさらに求める、連合はそうなのだ。
大衆消費社会とはそうした一面がある。満足してそれで終わってはそのまま文明が停滞してしまう。これもまた事実だ。
それでなのだった。彼等は消費しさらに消費するのだ。
しかしロシアはだ。そこで大きく違うのだった。
「国家としてはどれだけでも欲しがるけれど」
「肝心の国民はだよな」
「たっぷり飲み食いできれば安心するのよ」
「それはかえってよくないかも知れないっていうんだな」
「うん。そうかも」
アンネットもこう考えだしていた。しかしだ。
ここでだ。ふとだった。
アンネットはだ。また話した。
「多分。国があそこまで強欲じゃないと」
「ロシアは強くならなかったか」
「そう思うわ。大きいだけの国で止まっていたわ」
確かに大きい。所有している星系の多さでは連合随一だ。ただし人口では一位ではない。

「連合の田舎になっていたわね」
「田舎か」
「そう、田舎にね」
なっていたというのだ。
「なってたわ」
「日本人は凝り性で興味があるものはとことんまで研究し倒すからな」
ここが違っていた。ロシアとだ。
「それが物凄い技術とか生み出すからな」
「ううん、ロシア人はそれもないから」
「やっぱり今あるだけで満足するんだな」
「そうなるのよ」
「ゲームもやっぱりなんだな」
そのだ。彼等が今攻略本を見ている野球ゲームの話にもなる。

第二百六十話　野球での矛盾その十

「今のゲームシステムで大抵満足して」
「そう。ロシアって他の国に比べたら結構古いシステムのゲーム多いわよ」
「そうなのか。やっぱりな」
「無欲は確かにいいけれど」
それでもなのだった。
「あまり無欲だとかえってよくないのね」
「欲があってそれを得る為に何かするのが人間だからな」
「よきにしても悪きにしても」
「いい方向に働いたらな」
それが文明や技術の発展につながる。これもまた人間なのだ。
「その辺りがな」
「難しいわね」
「ああ、本当にな」
「欲ねえ」
「野球にしてもな」
そのだ。野球もだった。
「やっぱりメジャーになりたい、勝ちたいって思ってだからな」
「そうそう、そこからね」
「全部はじまるからな」
「欲のない野球選手って」
「少なくとも打ちたい、勝ちたいっていう欲がないとな」
そうでなければだというのだ。
「どうしようもないからな」
「負けまくってもそりゃ話題になるけれど」
それもあるというのだ。
「中には壮絶に負けるチームもあって」

「傍目だと面白いけれどな」
そうしたチームもだ。やはりあるのだ。
スポーツに勝敗があるならばだ。負けるチームもある。それで壮絶に連敗するチームはそれはそれで話題になる。そういうことだった。
それでだ。アンネットも言うのだった。
「自分の贔屓のチームがそれだと」
「ああ、最悪だな」
「我がシベリア狼軍団はそこまでいかないけれど」
「僕のアンカラ熊軍団も」
そのどちらもだというのだ。
「確かに常勝ってところまではいかないけれど」
「それでもな」
流石にそこまで弱いチームではないというのだった。
「あの。ほら」
「ああ、ヨハネスブルグモヒカンズな」
「あそこは凄いわよね」
「連敗しまくってな」
そのせいでだ。どうなっているかというとだ。
「ファンが暴れ回って」
「フーリガンなんて甘い状況になってな」
そのせいでだ。どうなっているかというと。
「球場世紀末になって」
「無茶苦茶だからな」
「確かに傍目だと面白いわね」
「自分達のことじゃないからな」
全てはそこにあった。自分達の贔屓のチームのことではないのだ。
それでだ。彼等はこう言うのだった。
「ええと、三十九連敗だったっけ」
「四十連敗じゃなかったか？」

「二十連敗でファンが暴れだしてね」
「文字通りモヒカンズになってな」
ファン達がそうなったのだ。連合ではモヒカンというと何故か世紀末の世界でバイクに乗って暴れ回っているということになっている。ある漫画の影響だ。
それでなのだった。そのチームとファン達は。
「球場は破壊されて」
「バイクまで走ってな」
「グラウンドの中でね」
「ファンが暴れて」
そうなっているというのだ。今は。
「もう凄いからね」
「チームも勝つ気なくしてるだろ」
ここで話がつながった。それでなのだった。

第二百六十話　野球での矛盾その十一

「負け続けてそれで」
「士気がなくなってな」
「それでさらに負けて余計に士気が落ちる」
「悪循環だよな」
そうなっていった。まさにだ。
そうした話をしていってだ。それでなのだった。
攻略本を買った。二人共だ。
そのうえで本屋を後にする。しかしデートはまだこれからだった。
アンネットはその中でだ。ふと言った。
「前まではデートする時凄く警戒してたわよね」
「そうそう。もう誰にも見られないようにして」
それでだというのだ。
「こそこそとしてたけれど」
「今は」
堂々としていた。彼等も。
そしてだった。見つかってもいいというのだった。
そのことについてだ。アンネットは話した。
「何かその方がいいわよね」
「そうだよな。皆に隠さずにこうしてな」
「堂々とデートするのが」
「やっぱり自然だよな」
こうしてだった。二人は楽しくデートをするのだった。その彼等にだ。
後ろからだ。こんな声をかける者達がいた。
「おのれ、悪魔の所業だ！」
「こんなことを許すな！」
「絶対にだ！」

「何があろうとも！」
カムイと洪童がだ。こう喚いていた。
「嫉妬団連合オールスター出撃だ！」
「腐ったカップルを一人残らず粉砕だ！」
「よりによってよね」
「そうだな」
声の方を振り向かずに話すカップルだった。
「あの二人って」
「無視するか」
「それが一番ね」
「ここはな」
こうしてだった。二人は。
カムイ達を無視してそのまま行く。だが彼等は。
「逃げたぞ！追うぞ！」
「逃がしてたまるか！」
「人類の敵カップル！」
「俺達が撲滅する！」
こんな訳のわからないことを言ってであった。
彼等はアンネットとルシエンを追いはじめた。しかしだった。
ここでだ。とんでもない騒動を引き起こしてしまった。その騒動とは。

野球での矛盾　　完

２０１１・７・２４

第二百六十一話　ぶつかってしまいその一

ぶつかってしまい

アンネットとルシエンを追おうとするカムイと洪童。しかしだった。

追おうとしたそこで、であった。

擦れ違う通行人にだ。ぶつかってしまった。

「くっ、スパイか！」

「カップル防衛部隊の刺客か！」

何故かだ。ぶつかった相手をこう認識した。

それでだ。抗議しようとするとだった。その通行人は。

パンチパーマに向こう傷、それにサングラスに趣味の悪い柄のスーツとネクタイ。それは。

誰がどう見てもだ。そちらの人だった。

「なっ、この人はスパイじゃないぞ」

「ああ、違うな絶対に」

「スパイじゃないが」

「この人は」

「ああ、そうだよ」

怒った声でだ。その通行人は言ってきた。スーツはよく見れば背中に桜吹雪、表には龍や虎の刺繍。何かが違っている。

そのスーツ姿でだ。すごんできながら言ってきたのだ。

「俺はヤクザだよ」

「し、しまった」

「ヤクザ屋さんにぶつかったぞ」

「よりによって何てこった」

「最悪だな」

二人もヤクザ屋には弱い。それでだ。

何とかこの危機を脱しようとあれこれ考えだす。この時代でもヤ

クザ者とぶつかればどうなってしまうか。それは言うまでもないことだ。
最悪命の危険も考えた。しかしだった。
そのヤクザ者はだ。二人にこう言うだけだった。
「おい坊主共」
「は、はい」
「何でしょうか」
「元気があるのはいいことだ」
そのこと自体はいいというのだ。
「けれどな。前はよく見ろ」
「す、すいません」
「失礼しました」
「それだけだ。じゃあな」
「あれっ、それだけですか!?」
「それで終わりですか!?」
「ああ、何もしない」
また言うヤクザだった。
「というかガキいじめるヤクザなんか五流だからな」
「だからですか」
「俺達は」
「わかったらさっさと行け」
本当に何もしないというのだ。
「いいな。それじゃあな」
「は、はい」
「それじゃあ」
二人は直立不動でヤクザ者の言葉に頷き。そうしてだった。
その場から駆け去った。その時には既に。
二人は何処かに消えていた。それを見てだ。
カムイも洪童もだ。困惑して言うのだった。
「参ったな。見失ったな」

「ああ、そうなったな」
「ヤクザ屋さんからは見逃してもらっても」
「こうなるとはな」
「どうする？いなくなったぞ」
カムイが洪童に言う。
「何処にもな」
「仕方ないな。こうなったらな」
「ああ、こうなったら」
「諦めるか」
これが洪童の提案だった。
「もうな。見えなくなったしな」
「何だ、諦めるのか」
「それよりもな」
ここでだ。洪童は周囲を指差した。その周りでは。
それこそカップル達が笑顔でいた。それを見てだ。
彼はだ。カムイに言うのだった。

第二百六十一話　ぶつかってしまいその二

「俺達の敵はあの二人だけじゃないからな」
「そうだな。周りにもな」
「これだけいるんだ。この連中も」
「ああ、打倒しないとな」
「俺達の敵は二人だけじゃない！」
洪童は馬鹿を言った。
「ここにいるカップル達を全て！」
「そうだ、打倒だ！」
そしてカムイも馬鹿を言う。
「この聖皇近衛隊がだ！」
「汚物を！カップルを消毒だ！」
こんなことを往来の真ん中で叫ぶと。すぐにだった。
カップル達は二人を見てだった。
「通報しようか」
「危ない人達みたいだし」
「そうね」
こうしてだった。早速だ。
複数のカップルがだ。通報してだった。一瞬のうちに来た。
「ああ、あの二人だね」
「そうですね」
「あの二人ですね」
黄色い救急車から出て来た看護士達が二人を見てそれぞれ言う。
「何かカップルを粉砕するとか言ってるな」
「自分達をモヒカンか何かだって言ってますし」
「どう考えてもおかしいですね」
「通報通りですね」
そう判断してだ、彼等は。

二人をそれぞれ左右から捕まえてだ。そうしてだった。
「はいはい、静かにしてね」
「大人しくしてね」
「とりあえず病院で話聞くから」
「お、おい待ってくれよ」
「俺達まさか狂人って思われてるのか！？」
左右から捕まってようやくだ。カムイも洪童も気付いた。
「違うぞ、俺達はただカップル達をな」
「余を乱すカップル達を成敗しようとして」
「やっぱりおかしいな」
「そうですね」
「嫉妬に狂ったな」
「間違いなく」
聞けばわかることだった。どちらにしても狂っているのは間違いない。
そう断定されてだ。二人は。
身柄を拘束され救急車に放り込まれ。そのまま。
病院に放り込まれた。そしてそこで数日を過ごすことになった。
カムイと洪童が病院に担ぎ込まれるというか放り込まれていた頃アンネットとルシエンはというと。デートを続けながらこんなことを話していた。
「次はね」
「ああ。何処に行くんだ？」
「まだ居酒屋開く時間じゃないから」
それでだというのだ。次に行く場所はと。
アンネットは考えながらだ。こうルシエンに話した。
「何か観に行く？」
「何か？」
「映画か何か。それかカラオケか」
「カラオケな」

「どう？どっちにする？」
「カラオケじゃないのか？」
少し考えてからだ。ルシエンは答えた。
「何かそんな気分だしな」
「そうね。それじゃあカラオケね」
「時間も潰せるし楽しいしな」
それでだとだ。カラオケだというルシエンだった。
アンネットもルシエンの言葉に頷く。それでだ。
二人はカラオケ店に向かう。ところがその途中でだ。
ふとだ。アンネットは右手にだ。あるものを見つけたのだった。
「あっ、これって」
「これって？」
「これってよくない？」
そこにあったのはひまわりだった。小型の。五十センチ程に品種改良されたひまわりだ。それが花屋に飾られていたのだ。
そのひまわりを見ながらだ。アンネットは笑顔で言うのだった。

第二百六十一話　ぶつかってしまいその三

「ひまわりね」
「ああ、そういえばアンネットはな」
「そう。お花だとひまわりが一番好きなのよ」
「ロシア人だしな」
「ロシア人はひまわりよ」
ロシアの国花でもあるのだ。その花なのだ。
「お日様の花だから」
「余計に好きなんだな」
「そうなのよ。畑にもあるし」
それにだった。
「こうした小さいひまわりはお家の中で飾るのよ」
「家の中でひまわりか」
「小さいからね」
それでだ。飾れるというのだ。
「それができるの」
「そうか。何か面白いな」
「ひまわりは奇麗なだけじゃなくて」
さらにあるというのだ。いいことがだ。
「種も食べられるし」
「ああ、種な」
「リスも食べるけれど人間が食べても美味しいのよ」
「だよな。あれ美味いよな」
「お日様の味がするってね」
アンネットは今もその小さくなっているひまわりを見ている。そうしてルシエンに話すのだ。
「ロシアじゃ言われてるのよ」
「ひまわりは太陽の味か」

「そうよ。お日様のね」
「何か面白いな」
その話を聞いてだ。ルシエンは。
顔を頬笑まさせてだ。こう言ったのだった。
「太陽の味か」
「ロシアでしか言われてないことだけれど」
「それでもだよな」
「ええ、言われてるの」
「面白いな、それって」
またこう言ったルシエンだった。
「太陽の味か」
「それ。居酒屋でもあればいいわね」
「そうだよな」
アンネットの言葉にだ。心から同意してだ。
そうしてだ。彼はこう彼女に言った。
「なあ」
「何？」
「ひまわり欲しいか？」
こうアンネットに尋ねる彼だった。
「このひまわりな」
「小さなひまわりを」
「ああ。どうだ？」
ルシエンは再びアンネットに尋ねる。
「この花な」
「それは」
「アンネットの家に今ひまわりなかったよな」
「それはね」
ないとだ。アンネットは確かな声で答えた。
「他の花はあるけれど」
「それじゃあ。買うな」

そうだとだ。アンネットに対して言ったのだった。
「今からな」
「えっ、そんな」
「悪いっていうのか？」
「そんなの別にいいわよ」
困った顔になってだ。アンネットはルシエンに返した。
「プレゼントなんて」
「いや、トルコじゃな」
「トルコじゃ？」
「もてなすのがいいんだよ」
トルコ人のもてなし好きはこの時代でも健在だ。それは客が来た時に顕著だがデートの際もさ。かなりそうすることで知られているのだ。
そのトルコ人の彼がだ。アンネットに言うのだ。
「だからな」
「プレゼントしてくれるの」
「花をここで買って」
そうしてだというのだ。さらに。

第二百六十一話　ぶつかってしまいその四

「そっちの家に送ってもらえばいいからな」
「本当に買うつもりなの？」
「ったくよ。ロシア人は無欲だからな」
その無欲さがだ。今はというのだ。
「遠慮するのはよくないぜ。日本人みたいにな」
「日本人みたいかしら」
「無欲だとそうも見えるんだよ」
それでだ。日本人の様だというのだ。
「こうした場合は遠慮しなくていいんだよ」
「じゃあ」
「それに花をプレゼントするのはデートの定番だろ？」
ルシエンは笑ってこのことも話した。
「だからな。それでな」
「じゃあこのまま」
「幾つ欲しいんだ？それで」
話をさらに進めてだ。買う数の話をするのだった。
「花はどれだけ欲しいんだ？」
「一個」
鉢一個だというのだ。
「一個頂戴」
「何だよ。一個だけか」
「一個だけでいいから」
やはり無欲なアンネットだった。それでこう答えたのだ。
「だからね」
「わかった。じゃあ一個だな」
「そう。それだけで御願いね」
「わかったぜ。じゃあどの花がいいかだな」

次はそのひまわりの中からいいものを選んでだった。アンネットに対してプレゼントしたのだ。それが終わって郵送まで頼んでからだ。

ルシエンは笑顔でアンネットに話した。

「これでいいよな」

「何か強引ね」

「この場合は強引でいいんだよ」

「男の子がリードしてなのね」

「ああ、だからだよ」

ルシエンは笑顔でアンネットに話す。

「まあ花を買うのは花を持たせてもらうってことなんだよ」

「花を買うことが」

「そう。花を持たせてもらうってことなんだよ

「買うからお金を払う」

「ああ。それは持たせてもらうってことだろ?」

「何でそうなるの?」

「だから。花を買うだろ」

まずはそこから説明するルシエンだった。それがどういう意味かだ。

「華やかなものを買って手に入れるんだよ」

「それでなの」

「花を持たせてもらうことになるよな」

「そうなるかしら。けれど」

この場合はどうなるか。アンネットは首を捻ってだ。

そのうえでだ。ルシエンにこう話した。

「この場合は違うでしょ」

「アンネットにあげたからか」

「うん、それでよ」

違うとだ。今はだ。

「花を失うってことじゃないの?」

「いや、持たせてもらってるよ」
「どうしてそうなるのよ」
「花を貰った相手が笑顔になるよな」
ルシエンが言うのはこのことだった。
「だからだよ」
「笑顔が花」
「そうなるんだよ」
「ロマンチックね」
「トルコ人だからな」
だからロマンチックだとだ。ルシエンは答えた。
「チューリップだって大好きだしな」
「基本的にお花が好きなのね、トルコ人って」
「嫌いな奴いるかな。花が嫌いな人は」
「それはね」
どうかとだ。アンネットもすぐに答える。

第二百六十一話　ぶつかってしまいその五

「いないと思うわ」
「だからどの国にも国花があってな」
「ロシア人もね。それとだけれど」
「それと？」
「最近のルシエンって」
彼自身がだ。どうかというのだ。
「あれよね。喋り方一定してないわよね」
「ちょっと考えてるんだよ」
そうだとだ。彼は今はいささか砕けた口調で話す。
「一人称だけは変えたけれどね」
「そういえば前は俺って言ってたわよね」
「うちのクラスはな」
「僕って言う人の方が多いわよね」
「そういうの見てたらな」
「一人称それにしようって思ったのね」
「ああ。俺だと何か偉そうだしな」
それでだ。僕に変えたというのだ。
「実際あまり偉そうなのって嫌いなんだよ」
「そうね。ルシエンはね」
「ざっくばらんはいいさ」
それ自体はいいというのだ。
「けれどな。偉そうなのはな」
「嫌いなのね」
「ああ、好きじゃない」
実際にそうだと答えるルシエンだった。
「だから変えたんだよ」
「じゃあ私っていう一人称は？」

「何かそれってな」
「それは嫌？」
「おかしくないか？一人称で私は」
こう言ってだ。ルシエンは首を捻って話す。
「妙に畏まった感じだからな」
「よくないっていうのね」
「それも好きじゃないんだよ」
そうだというのである。
「偉そうじゃなくて僕に合った喋り方をな」
「さがしてるのね」
「ああ、そうなんだよ」
それでだというのだ。
「今色々と試してるんだけれど」
「穏やかにしたりこれまで通りにしたり」
「一人称だけは決まったさ」
そのだ。僕にだというのだ。しかしそれ以外はというと。
「他はどうもな」
「決められないのね」
「色々と喋ってテストしてみてもな」
「どう？決まりそう？」
「どうだろうな」
今はこれまでの通りの話し方だった。
「まだかかるかもね」
「本当に一定しないわね」
「どうしようか」
自分でこんなことも言う彼だった。
「どうした喋り方にするべきか」
「それが問題ね」
「ああ、本当にね」
今度はこれまでと穏やかが混ざっていた。

「悩んでるさ」
「まあ。悩んでいてもね」
「悩んでいても？」
「答えは出るから」
それはだ。出るというのだ。
「絶対にね」
「出るかな」
「こうしたことについては出るというのよ」
喋り方やそうしたことはというのだ。
「自然とね」
「自然と？」
「本人に合った喋り方になるから。まずは」
最初にだ。どうかというと。

第二百六十一話　ぶつかってしまいその六

「一人称が決まったじゃない」
「あ、僕に」
「実際にルシエンってその方が合ってるわよ」
「そうか。僕で」
「出たでしょ」
「言われてみれば」
本人もここで気付いた。
「そうだね」
「まあ今はどっちも。他の喋り方もやってみて」
「そうしてると」
「自然にそうなるから」
自分に合った喋り方になるというのだ。
「だから悩むこともないわ」
「そう。じゃあ」
「喋ることね」
まずはそれだというのだ。
「そのうち身に着くから」
「だからなんだ」
「そう。このまま喋っていきましょう」
アンネットはにこやかに笑ってルシエンに話す。
「そうしましょう」6
「そうだね。それじゃあ」
「そういうことでね。それでね」
「それで？」
「お花買ってくれるのよね」
話がそこに戻った。花にだ。
「そうしてくれるのよね」

「ああ。それじゃあな」
「有り難う」
また礼を言うアンネットだった。
「お部屋に飾らせてもらうわ」
「そうしてよ。是非ね」
「小さいひまわりね。思えばね」
そうしたひまわりについてもだ。アンネットは笑顔で述べる。
「ひまわりって本来は大きいものじゃない」
「そうそう。元々の種類は」
「それでも。小さい種類も出て来て」
「部屋に飾れるようになった」
「凄いことよね」
そのことをだ。笑顔で感謝しているのだった。
「やっぱり有り難いわ」
「じゃあ有り難いから」
「お部屋に飾ってルシエンと」
「僕と？」
「品種改良してくれた人と」
花を栽培する農家がそうしたのだ。小さなひまわりを生み出したのだ。
「それと神様にね。感謝するわ」
「アンネットは確か」
「ロシア正教よ」
彼女の宗教はそれだった。
「他には真言宗も信仰してるけれどね」
「ああ、仏教徒でもあったんだ」
連合特有のだ。複数の宗教を同時に信仰することをだ。彼女もしているのだ。
「それじゃあ仏教の方は」
「大日如来を信仰してるわ」

「お日様だね」
「そう。ひまわりと一緒よ」
太陽だからだ。そうなるのだった。
「そうしてるわ」
「成程な。そうか」
「そうよ。そうしてるの」
そんな話をしてだった。二人は。
ルシエンが花を買いそのうえでだ。その花をアンネットの部屋に郵送してだ。
それが終わった時にだ。もういい時間だった。
アンネットの方からだ。ルシエンに言ってきた。
「じゃあ。遂にね」
「居酒屋だよな」
「飲むわよ」
実に楽しげにだ。言う彼女だった。
「もう溺れる位にね」
「溺れる位か」
「そう、飲むわよ」
とにかくだ。飲むというのだ。
「何を飲むかは」
「ウォッカ？」
「ウォッカもいいけれど」
それとは別のものだという口調だった。

第二百六十一話　ぶつかってしまいその七

それでだ。彼女が今言う酒は。
「そうね。テキーラとか？」
「メキシコ？」
「ウォッカのつもりだったけれど」
最初はそうだった。しかし今はだった。
「変えたわ」
「テキーラにするんだ」
「テキーラってあれよね。サボテンからよね」
「うん、そこから造るお酒だよ」
「それ飲んだことないのよ」
そうだというのだ。テキーラはだ。
「ロシアにサボテンなんて」
「ないんだな」
「だって。あれ暑い場所の植物だから」
しかも乾燥している。つまり砂漠地帯の植物なのだ。
だからだとだ。アンネットは話す。
「ないのよ。食べることもできるらしいけれど」
「サボテンのステーキとかか？」
「そうそう、そういうの」
連合、とりわけメキシコでは結構食べられている。ありきたりの料理の一つだ。
「ああいう感じのもね」
「サボテンなあ」
「トルコにはあるのね」
「一応ね」
あると答えるルシエンだった。
「あるよ」

「それで食べるのね」
「美味しいよ」
ルシエンは味についても言う。
「何枚でもいけるよ。ステーキだと」
「サボテンのステーキって」
「メキシコじゃそうして食べるんだって」
「メキシコ人の好みって」
どうかとだ。アンネットは首を捻って言った。
「何か凄いわね」
「ロシアでもステーキはあるよな」
「あるわ。それはね」
ステーキは連合全体でポピュラーな料理の一つだ。
切った肉を焼いて焼く。簡単だが美味な食事としてだ。連合ではよく食べられているのだ。ただしその肉は牛肉とは限らない。
「もっぱら牛肉よ」
「牛なんだ」
「それか豚か」
つまりポークステーキである。
「羊も食べるけれど」
「サボテンはないんだ」
「トナカイとか熊はあるけれど」
ここで如何にもロシア的な話になる。
「けれどサボテンはないから」
「そもそもだよな」
「そう。ロシアでサボテンって」
まさにだ。そのこと自体がだった。
「想像できないでしょ」
「あの大雪原でサボテンは」
「そう。考えられる？」
「いや、全然」

まさにだ。それはだった。
「ツンドラの中にオアシスみたいな」
「そうでしょ。有り得ないでしょ」
「うん、かなり」
「サボテンがあるのは植物園だけよ」
その他の場所ではだ。まさになのだ。
「趣味でサボテン栽培してる人はいても」
「そうした人は食べるんじゃ？」
「かもね」
その可能性は否定しないアンネットだった。しかしだった。
「けれど。栽培はともかく」
「食べることになると」
「少数派だと思うわ」
そうだというのだ。

第二百六十一話　ぶつかってしまいその八

「それもかなりね」
「ああ、やっぱり」
「ロシアでも当然お野菜も果物も食べるけれど」
「農法は？」
「ビニール栽培にドーム栽培よ」
暖かくしたドームの中で栽培するのだ。ビニール栽培の大規模なものである。この時代はこうした技術も使って農業を行うのだ。
「それでだけれど」
「サボテンの栽培は」
「だから。食べることには」
「しないね」
「そう、しないわ」
やはりそうだった。
「ちょっとね」
「だろうね。ロシアじゃ」
「それはないから」
また言うアンネットだった。
「テキーラも輸入だけよ」
「それだと高いでしょ」
「まあ。自分の国で造るお酒よりは」
やはりだ。高いというのだ。
「ちなみに一番安いお酒はね」
「ウォッカ？」
「そう。まずはそれよ」
そのだ。ウォッカだというのだ。
「それが第一よ」
「ウォッカねえ」

「ロシア人の友達だから」
その域にまで至るのだ。ロシア人にとってだ。
「もうね」
「ウォッカねえ」
「ルシエンはウォッカは」
「トルコでも一応造ってるけれどね」
「ああ、造ってるの」
「けれどそれでもね」
「それでもなんだ」
「あまり飲まないよ」
やはりそうだというのだった。
「実際ね」
「成程ね」
「トルコはトルコの地酒にワインかな」
「それとビール？」
「そんなところだな」
やはり喋り方を統一しないまま話す彼だった。
「ビールもよくね」
「まあビールはね」
「正直どの国でも」
「飲むわね」
つまりそこまでメジャーな酒だというのだ。
「私も結構飲むし。お水みたいに」
「ビールは水か」
「ロシアではね」
まさにそうだというのだ。
「軽いものよ」
「やっぱりな」
「アルコール度低いから」
それが理由だった。ロシアでビールが水扱いなのは。

「どうしてもごくごく飲んでね」
「何かそれは」
「品種改良してるビールならともかく」
それ以外のビール、昔のままのビールはというのだ。
「プリン体ね」
「そうだよな。ビールは」
「乳酸によくないから」
昔のビールの問題はそれだった。
「下手に飲み過ぎたらそれこそ」
「痛風だよね」
「女の子はあまり心配しなくていいけれど」
「僕達みたいなのは」
「そうでしょ。やばいでしょ」
「昔のままのビールの味もいいけれど」
それでもだというのだ。そうしたビールはやはりだった。

第二百六十一話　ぶつかってしまいその九

「痛風なあ。まあ十代のうちは心配しなくてもいいけれどね」
「それでもよね」
「そう、中年の人とかは」
そうしたビールを好む人はどうかというと。
「困ってる人多いね」
「痛風って物凄く痛いらしいけれど」
「そうらしいね」
二人は痛風にういては実体験からは知らなかった。
「本当に風が吹いただけで」
「凄く痛いっていうけれど」
「ううん、怖いわね」
アンネットは痛風について心から恐怖を感じていた。
「できればなりたくないわ」
「僕もね」
「確か痛風ってあれよね」
その痛風の話をしながらだ。アンネットはこんなことも言った。
「ドイツで凄かったらしいわね」
「ああ、ドイツっていうと」
「ビールだから」
ドイツといえばビール、最早この二つは切っても切れない関係にある。
「朝からビールだったわね、ドイツって」
「しかもね」
さらにあった。ドイツのビールに関する問題は。
「ビールの中に生卵を入れて飲むから」
「ああ、それってもう」
「確実に痛風になるよね」

「一日にビールを何リットルも飲んで」
そもそも量が違っていた。ドイツ人のビールは。
「それで朝にそれで」
「他に一緒に食べるものは」
そうしてだ。それも問題なのだった。
「ソーセージにベーコンにハムに」
「それてとバターをたっぷり乗せたジャガイモ」
「痛風にならない方がね」
「不思議だから」
「何かね」
どうかとだ。また言うアンネットだった。
「ドイツ人というかエウロパ人って何考えてるのかしら」
「自分から痛風になりたい？」
「そう思えるわ」
「だよね」
アンネットだけでなくルシエンもこう言う。
「そこまでいくと」
「馬鹿みたいというか」
「まあエウロパ人だから」
「そうね」
これで話が済むのが連合だった。
「まあ向こうは向こうで」
「そうそう、連合の悪口言ってるし」
「何でも食べる野蛮人とか」
実際に言われていることだ。エウロパではだ。
「言ってくれてるから」
「本当に」
「あとは」
そしてだ。さらにだった。
アンネットはだ。ビール以外の酒のことも話した。

「ワインとかもね」
「やっぱりビニールとかドームで栽培して」
「そう、ロシアでも作ってるのよ」
「何か何でもドームだけれど」
「雪の中で農業はできないから」
「何かにつけて不便だね」
どうしてもだ。雪ならばそうなってしまうことだ。
しかしだ。それでもだというのだ。アンネットはそのロシアについて話す。

第二百六十一話　ぶつかってしまいその十

「ロシア人はその雪の中でね」
「生きてるからか」
「ドームで頑張るのよ」
農業はそうしているのだった。
「中々面白いでしょ」
「まあ確かに気合は感じるな」
「輸入に頼るのも危ないし」
このことは国家戦略だった。
「そもそもロシアって人口も多いし」
「一千億だったな」
「多いでしょ」
「トルコも多いけれどな」
それでも一千億の国家は連合では三つしかない。米中とそのロシアだ。
そのロシアの一千億がなのだ。
「皆だよな」
「そう、雪と氷の星にいるのよ」
「それも凄いよな」
「大昔ならともかく」
十九世紀までならというのだ。
「今だと雪と氷でも生きていられるから」
「だよな。文明って有り難いよな」
「文明がないと」
まさにだ。ロシアではだった。
「何もかもやっていけないわよ」
「そうだよな、本当に」
「特にね」

ここでまた言うアンネットだった。
「その農業よ」
「お酒を造るね」
「そう。それこそが技術の集大成だから」
まさにだ。そうしたことはだった。
それでだ。彼等はだった。
いよいよ居酒屋に向かう。しかしここで。
「カップル撲滅隊復活！」
「俺達は蘇ったぞ！」
まただ。カムイと洪童だった。
その彼等がだ。口々に喚いていた。
「警察が何だ！」
「国家権力が何だ！」
「俺達を止めたければ仮面ライダーを連れて来い！」
「それか戦隊をな！」
こんなことをだ。往来のど真ん中で叫んでいた。
そしてだった。その彼等は実際に道を行くカップル達に喚いていた。
「悪だ！悪を見つけたぞ！」
「許せん！成敗する！」
「一悪一滅！」
「俺達は許さないぞ！」
「例え何があろうとも！」
そんな二人を見てだ。アンネットとルシエンは。
まず呆れる顔になりだ。そのうえでだ。
ルシエンがだ。こうアンネットに尋ねた。
「何でいると思う？」
「お巡さんが釈放しちゃったんでしょ」
それでだ。復活したというのだ。
「多分。大した連中じゃないって思って」

「まあ騒いでるだけだしね」
「騒いでるだけならね」
「特に問題はないから」
叱ったそれで終わりだ。酔っ払いと同じ扱いだ。
そうして釈放されたと考えるのだった。そしてだ。
二人もだ。実際にこう叫んでいた。
「警察に何を怒られようとも！」
「俺達は負けない！」
「何度も言うが国家権力には屈しない！」
「絶対にだ！」
こう言って引かないのだった。あくまでだ。

第二百六十一話　ぶつかってしまいその十一

しかしだ。その彼等はだった。
また騒いでいる為にだ。その結果として。
再びだ。通報されたのだった。
「ああ、警察ですか」
「はい、何でしょうか」
その警察が礼儀正しく挨拶をしてきた。
「何かあったのですか」
「はい、何かカップルを攻撃する二人がいます」
「ああ、あの二人ですか」
すぐにだ。警官もわかったのだった。
「釈放してすぐにですか」
「ちょっと居酒屋の前で騒いでいます」
「居酒屋の名前は？」
「清流の滝です」
日本の居酒屋チェーンの一つだ。日本全星系に展開している。
その店の前でだ。彼等は騒いでいるのだった。
「その前でカップルを糾弾とか喚いています」
「わかりました。清流の滝ですね」
「はい、そこです」
「では今からそこに人を行かせます」
「御願いします。それでは」
こうしたやり取りの後でだ。五秒程してだ。
すぐにだ。警官達が自転車で来てだった。二人に言うのだった。
「ああ、君達だね騒いでいるのは」
「ちょっと交番まで来てくれるかな」
「むっ、国家権力か」７８
「また来たのか」

二人は警官達を前にして言う。
「俺達の邪魔をしに」
「その為に」
「だは俺達は屈しない！」
「当局の弾圧にも！」
何故かだ。弾圧になっていた。
「例えどれだけ弾圧されようとも！」
「この世からカップルを消し去ってやる！」
「はいはい、詳しい話は交番でね」
「じっくりと聞くから」
警官達は冷静だった。それで、だった。
彼等をそれぞれ左右から掴み連行していく。こうして彼等はまた捕まったのだった。
それを見てだ。アンネットはルシエンに話した。
「本当に進歩ないわね」
「あの二人だけはね」
「全く。ああいうことさえなかったら」
「いい連中なんだけれど」
つまりだ。言い換えれば仕方のないろくでなしだ。
「困ったものね」
「本当にね」
こんな話をしてだった。二人はデートの本来の目的地に入ったのだった。居酒屋にだ。

ぶつかってしまい　　完

２０１１・８・１

第二百六十二話　居酒屋その一

居酒屋

アンネットとルシエンは居酒屋に入った。その店は。
和風の店だった。畳の座敷もあれば座布団もある。メニューはお品書きであり壁も椅子もカウンターもだ。全て木か竹のものだ。
その中に入ってだ。まずはアンネットが言った。
「テキーラあるかしら」
「日本にテキーラ？」
「ちょっと合わないわよね」
「イメージじゃないな」
それはルシエンから見てもだった。
それで二人で店の中を見回してだ。それからだった。
今度はルシエンがだ。こう言ったのだった。
「この店に合う酒は」
「日本酒よね」
「それか焼酎か」
ルシエンはこの酒も話に出した。
「そういう感じだよな」
「ウォッカは」
「やっぱり違うだろ」
「じゃあ羊のお肉は？」
「和食で羊なあ」
トルコ料理といえば羊である。しかしだ。
この畳とお品書きの世界、こげ茶色と淡い白がかった黄色の世界ではだ。そうした羊の料理、連合ではポピュラーな料理もだった。
「ないだろ」
「羊のお刺身とか？」
「それはありそうだけれどな」

「それでもよね」
「やっぱりトルコ料理はな」
「サボテンのステーキも」
アンネットはこの料理も話に出した。
「違うわよね」
「かなりな」
「じゃあ」
どうかとだ。また言うアンネットだった。
「やっぱりここは」
「和食で飲む？」
「そうする？」
二人でそう話をしていく。
「じゃあ日本酒に」
「お豆腐とか刺身か」
「何か思ってたより凄くあっさりになるけれど」
「それはそれでいいか」
こうした話をしているとだった。和服に割烹着の若い女の人が二人の前に来てだ。
そのうえでだ。こう尋ねてきたのだった。
「御二人様ですか？」
「はい、そうです」
ルシエンがその人に答える。
女の人、おそらくバイトの店員はだ。彼の言葉を聞いてだ。
そのうえでだ。こう答えたのだった。
「ではこちらの席にどうぞ」
「はい、それじゃあ」
「御願いします」
二人も店員さんの言葉に頷いてだ。そのうえでだ。
座敷の四人用の席に二人で向かい合って座った。席はそれぞれ仕切りで分けられている。その席に二人で座ってだった。

メニュー、お品書きのそれを見る。するとそこには。
「あれっ、ウォッカあるわ」
「羊料理も」
まずはだ。そうしたものが目に入ったのだ。
そしてその他にもだった。
「テキーラもあるわね」
「サボテンのステーキも」
「和食のメニューが確かに多いけれど」
「その他にも色々あるね」
「うちの店はそうなんですよ」
笑顔でだ。二人を案内した店員さんがその二人に話す。
「各国のお酒やお料理を置いてるんですよ」
「けれどお店の中は」
「和風ですけれど」
「我が国はあらゆる文化を受け入れますから」
だからだとだ。店員さんは笑顔のまま話す。

第二百六十二話　居酒屋その二

「ですから」
「いいんですか、それで」
「和風の中でも」
「ギャップがあって面白いですよね」
このことも狙ってだった。
「そうですよね」
「ううん、何ていうか」
「日本人って時々思わぬ意表を衝くけれど」
「これはかなり」
「凄いね」
二人でこう言い合ってだ。それからだった。
店員さんにだ。こうしたものを注文した。
「じゃあ僕は」
「はい、何にされますか？」
「シシケバブに」
羊料理だった。それだった。
「それとトルコワイン」
「その二つですね」
「まずはその二つ御願いします」
ルシエンはその二つを店員さんに頼んだ。
そしてだ。アンネットもだった。
「私はテキーラに」
「お酒はそれですね」
「サボテンのステーキを」
「味付けはメキシコ風ですね」
「それで御願いします」
彼女はこの二つだった。

「それで」
「わかりました。それでは」
こうしてだった。注文が為されたのだった。それからだ。
暫くしてだ。その注文されたメニューが来た。それはまさにだった。
誰がどう見てもトルコ、そしてメキシコの料理だった。和室にそれがありだ。ルシエンもアンネットもまずはこう言った。
「何ていうかな」
「凄く場違いな感じはするわね」
「トルコ料理が日本のお店に出るって」
「メキシコ料理もね」
「ロシアにもメキシコ料理のレストランあるよね」
「お店の中は滅茶苦茶暖かくしているけれどね」
それでもだ。あるにはあると答えるアンネットだった。
「ただ。サボテンのステーキはね」
「それはないんだ」
「まあ。あるにしてもロシアのサボテンよ」
メキシコ産のサボテンではないというのだ。そうした意味でロシアにはサボテンのステーキ、本場のものはないというのである。
「テキーラも実はあるけれど」
「ロシアなんだね」
「外見だけでわかるけれど」
テーブルの上のだ。そのテキーラとサボテンのステーキを見ながら話す。
「ロシア産は全然違うのよ」
「具体的にはどんな感じだよ」
「ロシアのサボテンはもっと大きくてね」
一切れにしてもそうだというのだ。
「色も薄くて中身も詰まってない感じなのよ」
「そんな感じか」

「そう。だから香辛料やソースをたっぷりかけて」
そうしたステーキだというのだ。
「食べるのよ。あまりサボテンの味は楽しまない感じかしら」
「じゃあテキーラは」
「テキーラも色が薄いわ」
目の前のメキシコのテキーラを実際に見ての言葉だ。
「ロシアのはね」
「ロシアのとはそこまで違うんだ」
「そう。ロシア人はお酒命だから」
これは変わらなかった。ロシアだからだ。
「テキーラも頑張って作ったけれど」
「それでも」
「そう、それでもよ」
違うというのだ。本場のものとはだ。
「味もどうかしら」
「じゃあ今から」
「食べて飲んでみるわね」
「僕もね」
ルシエンもだ。トルコ料理を食べてみる。その味は。
アンネットはだ。まずはだった。
メキシコ直輸入のテキーラとそのサボテンのステーキを食べてだった。こう言ったのだった。

第二百六十二話　居酒屋その三

「味付けは多分日本風だけれど」
「このシシケバブもそうだな」
「ああ、やっぱり」
「トルコのはもっと香辛料効かせてるんだよ」
それがトルコのシシケバブだというのだ。
「けれどこのシシケバブはな」
「香辛料が弱いのね」
「ああ、弱い」
実際にそうだというのだ。
「素材を活かしてる味っていうのか？」
「日本の味付けね」
「そうだよな。けれど」
「トルコのシシケバブには近付けようとしているな」
「じゃあこのサボテンのステーキも」
「多分そうだろ」
やはりだ。日本が入っているというのだ。
「ここ日本だし」
「日本人って料理アレンジするからね」
「色々な料理を食べていても」
「絶対するからね」
「醤油ないと駄目だから」
日本人のこの嗜好は昔から変わっていない。
「どうしてもね」
「醤油の味するよな」
「するわ」
「シシケバブもだよ」
そちらにもだ。醤油の味がするというのだ。

「醤油使ってるよ」
「そういえばこっちも」
「醤油だよな」
「ソースに使ってるわね」
「美味しい、そっちも」
ルシエンは味のことをアンネットに尋ねた。
「醤油使ったソースは」
「美味しいわよ」
味はいいというのである。
しかしだ。アンネットは難しい顔でこうルシエンに話した。
「けれど何か違うわ」
「違うんだ」
「ええ。サボテンのステーキっていうとメキシコよね」
「メキシコっていうとやっぱり」
「タバスコじゃない。少なくともお醤油は使わないでしょ」
「そうだよな。まあトルコ料理でも醤油はな」
トルコ料理は連合でも有名である。だが醤油を使うとなるとだ。
そのトルコ人のルシエンもだ。こう言うのだった。
「殆んど使わないからな」
「あれ？昔のローマみたいにお魚に」
「そう、魚醤油だよ」
所謂しょっつる、ナムプラーと呼ばれているものだ。それは使うには使うというのだ。
だがだ。その使う量はというとだ。
「殆んど使わないからな」
「こうした大豆のお醤油は？」
「ないよ」
トルコではないというのだ。
「これってまんま日本じゃない」
「じゃあ使わないわよね」

「それはロシアでもだろ？」
「ロシア料理にお醤油ないから」
これがアンネットの答えだった。ロシア料理にはそうしたものはないというのだ。
ただしだ。こうは言うのだった。
「ロシアにも和食や中華料理のレストランはあるから」
「食べることは食べる」
「ロシア料理にないだけでね」
「じゃあ味は知ってるんだよな」
「味はね」
それはだというのだ。
「けれど。ロシア料理には使わないから」
「じゃあ馴染みはないか」
「ううん、正直今も」
サボテンのステーキを食べながらだ。アンネットは微妙な顔になる。

第二百六十二話　居酒屋その四

そのうえでだ。こんなことも言った。
「素直に美味しいっていう気持ちにはならないわね」
「何か拒否反応がある」
「あるわ」
アンネットはまた言う。
「というか普通ステーキにお醤油って」
「日本だけだよな」
「中国のステーキも使うかしら」
「あっちは確か色々入れたソースだから」
「お醤油は？」
「使う時と使わない時があるだろ」
中華料理は和食程醤油を使わないのだ。醤油を最もよく使うのは和食なのだ。醤油なくして和食はないと言っても過言ではない。
それでだ。このサボテンのステーキもなのだ。
「こんなに何かにつけてはな」
「日本人ってやっぱり」
「醤油がないと生きていけないんだろ」
「何か韓国人の大蒜と唐辛子みたいね」
「まあそうかもね」
ルシエンは口調が統一されないまま答えた。
そしてまたシシケバブを食べてだ。言うのだった。
「何か食べれば食べる程な」
「そうね。お醤油の味がね」
アンネットも食べながら応える。
「強くなってきてるから」
「香辛料はあまり使ってないよな」
「何といってもお醤油なのね」

「ああ。けれどな」
それでもだった。酒も一緒に飲むとだ。
妙にだ。合ってだった。
「美味いな」
「あっ、本当ね」
アンネットもテキーラを飲んでみる。それでわかったことだった。
「お酒にはこれで」
「合うんだな」
「お醤油にテキーラねえ」
「普通合うなんてな」
「考えないけれど」
それでもだ。実際に一緒に飲んで食べてみるとだった。
その相性はだ。かなりよかったのだ。
アンネットは再び交互に飲み食いしてからだ。また言った。
「お料理をお酒に合わせたのかしら」
「そうじゃないのか？やっぱり」
「そうなのかしら。じゃあ工夫してるのね」
「そうだろうな。日本人の得意技だからな」
そうしたアレンジはこの時代でも日本人の十八番だ。それは料理にも如実に現れているのだ。
それを今だ。二人も味わってだ。
結局二人共今飲み食いしている酒も肴も全て胃の中に入れてしまった。
そしてだ。そのうえでだった。
「じゃあ次は」
「注文するのね」
「何がいい？」
あらためて尋ねるルシエンだった。
「それで」
「ううん、そう言われると」

「ここはもうオーソドックスにいく？」
「オーソドックスにウォッカ？」
まさにロシア基準だった。
「それでどうかっていうのね」
「うん、アンネットの好きな様にね」
「ウォッカは今はいいわ」
しかしだった。アンネットは今はそれではないというのだ。
「ワインにしたいわ」
「ワインか」
「そう、ワイン」
それだというのである。
「それにするわ」
「ワインか。じゃあ一緒に食べるのは」
「ソーセージにチーズ」
肴はその二つだった。

第二百六十二話　居酒屋その五

「それにするわ」
「あっさりだね」
「さっきはステーキだったから」
それでだ。今度はあっさりとしたものだというのだ。
「それにするわ。それでルシエンは」
「僕もかな」
「ワインにするの」
「ただしシャンパンね」
彼はそれだった。ワインはワインでもだ。
「それにするよ」
「一緒に食べるのは？」
「牡蠣だな」
彼が選んだのはそれだった。
「生牡蠣な」
「それにするのね」
「僕もやっぱりあっさりと」
生の牡蠣にするというのである。そうした話をしてだ。
そのうえでだった。二人はまた注文をした。それからだ。
二人でだ。それぞれのワインと肴を楽しむ。そのシャンパンを飲みながら。
ルシエンはアンネットが食べているそのソーセージを見ながら話す。
「そのソーセージもやっぱり」
「そうみたい。味が薄めで」
「それで素材の味が生きていて」
「燻製だけれどね」
それでもだ。素材の味を生かしているというのだ。

そのソーセージはだ。どうかというと。
「素材生きてるわ」
「そうなんだ。やっぱり」
「日本のソーセージね」
「日本人が作った」
「豚の肉だけれど」
日本のソーセージは豚や牛や羊から作られるとは限らないのだ。
その他にだ。あるものは。
「お魚のソーセージじゃないから」
「魚肉ソーセージな」
「あれって凄くいわよね」
「あの発想はないよな」
「ないわ」
アンネットもそれを言う。
「しかも食べたら結構美味しいし」
「だよな。しかも」
「そう。ああしたソーセージもあるんだって」
彼等にとってはその魚肉ソーセージもまさに異文化だったのだ。
それでだ。アンネットは今は豚肉のソーセージを食べてだった。
そのうえでだ。また言うのだった。
「このソーセージ香辛料弱いわよ」
「日本的に」
「あまり使ってないわね」
「香辛料効かせるのがいいのに」
「日本人が作ってるから」
どうしてもだ。好みはそちらになるというのだ。
「それに主に日本人が食べるから」
「日本の味か」
「流石にお醤油は使ってないけれどね」
「ソーセージはつけるものだからな」

「お醤油にね」
「だからやっぱりそれはないだろ」
「言われてみれば確かにね」
言われて納得するアンネットだった。そしてだ。
ソーセージを一本食べてからだ。チーズをナイフで切ってフォークで口の中に入れてだ。そうして今度はこんなことを言ったのだった。
「このチーズは」
「日本のやつだな」
「けれどチーズの味は変わらないわ」
「流石にそれはか」
「ええ、普通のカマンベールチーズ」
それだというのだ。
「美味しいわ」
「そうか。僕の牡蠣は」
見ればだ。ルシエンは。
その牡蠣にレモンと酢をかけそれだけで食べている。醤油は使わない。

第二百六十二話　居酒屋その六

それを見てだ。アンネットは尋ねたのだ。
「あっさりしてるわね」
「これだけで充分だからね」
「そういう時こそあれじゃないの？」
アンネットはあの調味料を話に出した。
「お醤油ね」
「シーフードだからだね」
「そう、だから」
だからっこそだ。醤油だというのだ。
「大豆のにしてもお魚のにしてもね」
「まあお醤油はさっき食べたし」
「だからいいの」
「そう、いいんだ」
また答えるルシエンだった。
「今は酢とレモンだけでな」
「酸っぱい系列ばかりね」
「それでもいいだろ」
ルシエンの今の言葉は半ば居直りめいていた。
「別にな」
「まあね。それじゃあね」
「ええ、じゃあ」
「今は」
こうした話をしてだった。二人は。
今の酒と肴も飲み食いする。そうしてだ。
楽しい時を過ごしていく。しかしである。
ルシエンはふとだ。ワインを飲んでいるアンネットに尋ねた。
「平気なんだな」

「ああ、酔わないっていうのね」
「さっきテキーラで今それだろ」
「そう、そのワインもね」
見ればだ。アンネットが今飲んでいるワインはもうすぐ完全に空けられようとしている。その飲むペースもかなりのものである。
その彼女にだ。ルシエンは尋ねているのだ。
「もう一本欲しいわね」
「酔わないのか」
「だから。ウォッカでいつも鍛えられてるから」
それでだというのだ。
「平気なのよ」
「そうなのか」
「そうよ。平気なのよ」
「凄いな、ウォッカは」
「殆んどアルコールだから」
九十七パーセントだ。桁外れの強さだ。
「それをいつも飲んでたら」
「普通に強くなるか」
「どのお酒に合うか合わないかもあるけれど」
そうしたことも関わる。酒はその人によって合ったり合わなかったりするのだ。
それでだ。彼女もだった。
「ワインはね」
「合ってるんだ」
「そう、幾ら飲んでも平気なのよ」
実際にそうだと言ってだ。飲み終えてだった。
アンネットはワインをもう一本頼んだ。だがルシエンは。
まだシャンパンは半分以上残っている。それを飲みながらまたアンネットに言った。
「しかし本当にな」

「お酒強いっていうのね」
「ああ、強いな」
また言うのだった。
「本当にな」
「だから。特にワインはね」
「いけるか」
「さて、と」
その来た新しいワインを自分でグラスに注いでだ。そうしてだった。
それを一気に飲む。そしてまた言ったのだった。
「今日はこの一本で終わるから」
「本当にか？」
「ロシア人はお酒については嘘は言わないから」
「その他のことは？」
「時と場合によるわ」
「わかりやすいな」
「ロシア人はわかりやすいのが長所なのよ」
つまり素朴ということだ。実際にロシア人の素朴さは連合でも有名である。

第二百六十二話　居酒屋その七

「だから。今日はお酒はね」
「それで終わりか」
「ルシエンはどうするの？」
「僕もこれで」
今飲んでいるそのシャンパンでだというのだ。
「終わるよ」
「そうするの」
「シャンパンはあまり強くないけれど」
普通のワインに比べてだ。アルコール度は弱いのだ。
「それでもね」
「結構酔った？」
「さっきもボトル一本空けたからな」
それがきているというのだ。
「だからもうこれでな」
「そういうことね」
「ああ。それでお互いに飲み終えたら」
「もうそれで終わりね」
「家まで送るよ」
ルシエンは紳士だった。少なくとも粗野でも下品でもない。
だから礼儀正しくだ。こうアンネットに言ったのである。
「そうしていいよな」
「有り難う」
アンネットは微笑んで答えた。
「じゃあお言葉に甘えて」
「帰るところまでがデートだからね」
「そうよね。お家に帰るまでね」
「だから送るな」

「若しもよ」
ここでだ。アンネットはふとこんなことを言った。
「馬に乗ってらね」
「ナンだね、それって」
「そう。あの娘みたいにね」
そのだ。ナンの様に馬に乗っていればというのだ。
「帰るのはすぐだったわね」
「馬な。あれは確かに速いな」
「ナンにとっては足らしいわね」
「モンゴル人の足は四つ足」
古来からモンゴルで言われている言葉である。
「それだからな」
「つまりモンゴル人は地面を自分の足で歩かないのね」
「ナンだって学校で馬を停める以外は」
それ以外の時はだ。どうかというと。
「いつも馬に乗ってるしね」
「そうね。町を行き来する時は」
「馬だから」
「正直ね。一緒に遊びに行った時ね」
アンネットは苦笑いでルシエンにその時のことを話す。
「あの娘が馬に乗って来てね」
「それからずっと」
「そう、馬に乗ってたのよ」
最初から最後までだ。馬上にあったというのだ。
「周りは慣れてる感じだったけれど」
「この町モンゴル人も多いから」
「それなりにね」
尚モンゴルはそれ程人口は多くない。昔から、それこそモンゴル帝国の時代からモンゴルは人口自体はそんなに多くはないのである。
それはこの時代でも同じでだ。モンゴルの人口は少ないのだ。

しかしだ。この町はというと。
「留学生がいるからね」
「そうだよな。モンゴルからの留学生」
「結構いるから」
そのだ。彼等もだというのだ。
「馬に乗ってるからね。皆」
「やっぱりモンゴル人は」
「馬に乗るものなの」
まさにだ。そうだというのだ。
「モンゴル人は騎馬の民族よね」
「生粋の遊牧民だね」
まさにそれだとだ。ルシエンも言う。
「ナンは今もゲルで暮らしてるし」
「最初ああして草原の中で暮らしてるって聞いて」
アンネットにとっては。そうした生活はというと。

第二百六十二話　居酒屋その八

「信じられなかったわよ」
「僕もだよ。子供の頃聞いて」
「つまりずっとテント暮らしじゃない」
彼等定住民の視点ではそうなることだった。
「それって結構辛いっていうか」
「生きていけない？」
「そう思うから」
「そうよね。しかも草原ってロシア以上に寒いらしいし」
「ああ、そうなんだ」
「凄いらしいわ」
モンゴル人が言う草原は大陸性気候だ。だから熱しやすく冷めにくいのだ。モンゴルにはそうした草原の惑星が多く存在しているのである。
「もうね。牛の額が凍って割れて」
「牛の額がって」
「マイナス二十度とか三十度がざらで」
「それってモロシアもじゃないの？」
「ロシアはまだあれよ。暖かいお家があって」
その家の造りもだ。ロシアならではのものである。
「ドームもあるから」
「ずっとましなんだ」
「そう、まし」
モンゴルよりはだというのだ。
「テントなんて外との障壁ｔって薄い壁だけじゃない」
「その壁の向こうは」
「まさに地獄でしょうね」
「あまりもの寒さに」

「ロシアのお家ってね」
そのだ。アンネットの国の家のことである。
「窓は三重で」
「それで寒気を遠ざける」
「壁もなのよ。分厚くて」
「寒さには万全の対策をしてるんだな」
「そうよ。お家の中は春みたいよ」
そこまで暖かく快適だというのだ。
「けれどゲルって」
「まさに薄皮一枚」
「寒いでしょ」
もうそれは想像するまでもないことだった。アンネットにとっては。
「よくそんなので生きていられるわね」
「じゃあ実際にナンの家に行ってみようか」
「そうしようかしら、寒い時に」
「そうすればわかるからな」
「モンゴル人が頑健にしても」
ほぼ自然の中で生きている。文明はあるがかなり縁遠いモンゴル人の生活なのだ。
「幾ら何でもモンゴルの寒さじゃ」
「普通はやっていけない」
「そうでしょ。テント一枚よ」
何につけてもそこだった。
「それで草原よね」
「草原はそれこそ風が吹いても何も遮るものがないから」
「しかも地面は冷えるし」
人間にとってだ。草原とは実に暮らしにくい場所なのだ。
だがそこでも人は生きている。それがアンネットにとっては驚くべきことでだ。

ルシエンにだ。いぶかしむ顔で言うのだった。
「ゲルってそんなに暖かいのかしら」
「中で火を焚いたり暖房は使うけれどね」
「それでも一枚よ」
布一枚だけが覆い、それが問題だというのだ。
「やっぱり寒いわよ」
「ナンは平気だったのかな」
「それで平気なことが凄いっていうか」
「一度ナンに聞いてみるか」
そのだ。他ならぬモンゴル人にだというのだ。
「そうすればわかるよ」
「そうね。本人に聞くのがね」
「一番だから」
こう言うのである。
「じゃあそうしようか」
「そうね。それじゃあね」
こうしてだ。この話は決まったのだった。

第二百六十二話　居酒屋その九

二人はそんなことを話しながらだ。アンネットの家への帰り道を一緒にいた。しかしだ。

ここでだ。そのナンがだった。

不意に二人の前にだ。出て来て言うのだった。

「あれっ、デート？」

「え、ええ」

「そうだけれど」

二人はいきなりぬっと出て来た彼女にだ。少し驚いて応えた。何しろ彼女は馬に乗って闇夜から出て来たのだ。これは驚くものだった。

それでだ。二人はだ。

何とか気持ちを落ち着けてだ。ナンに尋ねた。

「それでどうしたの？」

「夜のお散歩？」

「ええ、そうよ」

その通りだとだ。ナンは馬上から答える。

「ちょっと食べ過ぎてね。腹ごなしにね」

「それでのね」

「馬に乗って」

「そうなの。太るとね」

どうなのかとだ。ナンは笑いながら二人に話す。

「その分重りになって馬が可哀想だし」

「それで自分も馬に乗りにくくなるから？」

「それでなんだ」

「そう。体重にはいつも気をつけないと」

ナンは笑顔のまま話す。

「すぐに太るし」

「モンゴルって過酷ね」
「少しでも太ると駄目だから」
「そうよ。まあいつもそうしてるから」
実際にだ。どうかというと。
「こうして体型も維持できてるのよ」
「そういえば学校のモンゴルの人って皆」
「太ってる人いないけれど」
「モンゴル人はいつも身体動かしてるから」
それでだ。どうかというと。
「痩せてるのよ」
「そうなのね」
「馬に乗って身体を動かしてるから」
「乗馬は普通だし」
モンゴル人にとっては普通なのだ。この時代でも彼等は騎馬の民なのだ。
「それをやっていけばね」
「普通に痩せられる」
「そうなの」
「そういうこと。身体を動かしてるから健康になるし」
「それでもよ」
どうかとだ。アンネットはだ。
いぶかしむ顔になってだ。ナンに尋ねようと思っていたことを尋ねたのだった。
「それで聞きたいんだけれど」
「どうしたの？」
「ええ。それでだけれど」
こう前置きしてからだ。ナンに尋ねた。
「あんたっていうかモンゴル人ってね」
「ええ」
「あれよね。ゲルで暮らしてるわよね」

「そうよ。モンゴル人は昔からね」
「寒くないの?草原であれは」
こう本人に尋ねたのだった。
「布一枚で暮らしてるって」
「暖かいわよ」
しかしだ。ナンはにこりと笑って答える。
「あの布も工夫してあるから」
「どういう工夫?」
「夏は薄い布を使っていてね」
まずはだ。ナンは夏の場合から話した。

第二百六十二話　居酒屋その十

「それで冬は厚い布をなの」
「そうして工夫してなのね」
「そうやってるから」
こう話すのだった。
「大丈夫なのよ」
「そうなのね」
「モンゴル人は生活の知恵についてはね」
それについてはどうかとだ。ナンは微笑みながら話す。
「天下一品よ」
「若し生活の知恵がなかったらどうなるの？」
ルシエンはこうナンに尋ねた。
「その場合は」
「死ぬわよ」
ナンの返答は一言だった。
「草原は暑いし寒いし」
「生きていくには過酷なんだ」
「そういう場所なのね」
「その草原で何千年も生きてきたから」
地球にあった頃からだ。そうだというのだ。
「今は無茶苦茶楽になってるわよ」
「文明が発達してよね」
「そのお陰で」
「おトイレもあればお風呂もあるし」
どちらもあるというのだ。
「携帯用の折り畳みのね」
「あれっ、昔のゲルって」
「おトイレやお風呂なかったの」

「そうだったの」
「そういえば中にないよね」
「昔はおトイレは外でしてて」
ナンはその草原の生活について話す。
「お風呂は入らないでたまに水浴びをするだけだったの」
「洗濯は？」
「そういうのは？」
「しなかったわ」
洗濯をだ。モンゴル人はしなかったというのだ。
「全然ね」
「全然って」
「そうなの」
「おトイレとかお風呂は移動の際に持って行ってだったけれど」
そのだ。折り畳み式のものを今はそうしているというのだ。移動は馬を使ってすることだけは昔もこの時代も変わらないことである。
「洗濯機も今はそうできるけれど」
「昔はできなかったのね」
「そうなんだ」
「そうよ。全然できなかったから」
まさにそうだというのだ。
「洗濯もね」
「ううん、相当過酷だったのね」
「モンゴルの生活って」
「だから。生活の知恵が必要だったのよ」
そうした理由からだというのだ。
「ちょっと油断すると死ぬから」
「ロシアは暖かくすればそれでよかったけれど」
アンネットは言う。ロシアならばだとだ。
「けれどモンゴルは」
「寒さだけじゃなくて暑さもあって」

それに加えてだった。
「何もかもを節約したぎりぎりの状況でね」
「生きていっていた」
「その生活だったんだ」
「生きていくのは大変よ」
また話すナンだった。
「草原ではね」
「で、そのゲルもなの」
「夏には薄いの一枚で」
「冬は思いきり分厚いのね」
「けれどそれで生きていけるの？」
「何とか」
ナンのアンネットへの返答は恐ろしいものだった。
「雪も風も防いでね。モンゴル人は生きているのよ」
「何処まで過酷なのよ」
「いや、それを考えたら」
ナンの笑顔が屈託のないものになって。そうして話すことは。
「町の中でゲルで暮らすって天国みたいね」
「草原の生活って楽しいの？」
「実際どうなの？」
「楽しいわよ」
楽しいことは楽しいというのだ。
「遊牧は一回やったら止められないから」
「本当かしら」
「どうだろうね」
この辺りは疑問な二人だった。だがナンの話も偶然とはいえ実際に聞けてそのことに満足したうえでだ。アンネットの部屋までのだ。デートの最後の道を楽しんだのだった。

居酒屋　完

2011・8・8

第二百六十三話　琉球の音楽その一

琉球の音楽

ダンにだ。ある時だ。
タムタムがだ。こう尋ねてきたのだ。
「御前確か琉球で音楽やってたよな」
「誰からそんな話聞いたんだ？」
「Ａ４組のな」
そのクラスのだというのだ。
「真樹って奴だけれどな」
「あいつか」
「あいつ野球部にいるんだよ」
つまりだ。タムタムと同じ部活だというのだ。
「そいつから聞いたんだよ」
「俺が音楽やってたってか」
「ああ。それは本当か？」
「今まで言わなかっただけだ」
それだけだとだ。タムタムは答える。
「実は音楽をやってたことはやってた」
「何で今していないんだ？」
「気が乗らない」
それでしていないというのだ。
「どうもな」
「それでしないのか」
「ああ。そういえばこの学校にも」
「そういう部活は多いぜ」
伊達にだ。巨大な学園ではなかった。
「軽音楽部も幾つもあるしな」
「幾つもか」

「人気のある部活だからな」
軽音楽はこの時代でも人気があるのだ。
「それもロックやポップスだけじゃなくてもな」
「他にもあるんだな」
「パンクにヘビメタにデスメタルにな」
その他にもだ。タムタムは挙げていく。
「カントリーロックだってあるしな。ジャズやゴスペルもあるしな」
「それぞれの専門か」
「ああ。ロック部とかジャズ部って感じでな」
「他にもありそうだな」
「中国音楽とかレゲエもあるぜ」
中国にジャマイカだ。尚ジャマイカはこの時代でも底抜けに明るく楽しい国として連合の中で愛される国として知られている。
「まあ色々だからな」
「色々か」
「で、御前さんの音楽は何だ？」
タムタムはダンの音楽のジャンルを尋ねた。
「ロックか？それともポップスか？」
「沖縄の音楽だけれどな」
それだとだ。ダンはタムタムの問いに答えた。
「それなんだよ」
「沖縄？琉球か」
「ああ。琉球の伝統の楽器を使った音楽なんだよ」
ダンは淡々とした口調でタムタムに話す。
「俺はそれをやっていた」
「成程。琉球か」
「日本の雅楽や三味線とかとはまた違うんだ」
「また別の音楽か」
「ちょっとな。違う」
それとは違うというのだ。

「別の音楽だ」
「へえ、面白そうだな」
「そう思うか」
「ああ。興味ができたな」
タムタムは腕を組みだ。実際にこう言った。
「一回聴いてみたいな」
「聴いてみたいか？」
「一回な。駄目か？」
「気が乗らない」
どうにもだとだ。タムタムに返すのだった。
「高校に入ってからどうもな」
「中学までは違ったんだな」
「あの頃は素直に楽しめた」
「確か中学までは琉球にいたんだよな」
「地元の中学にいたんだよ」
実際にそうだと答えるダンだった。
「高校は日本に親戚もいたしな」
「それでこの学校に入ったんだな」
「いい学校でいい国だよ」
学園生活も日本自体もだ。彼は気に入っていた。
しかしだ。それでもだとだ。ダンは話した。

第二百六十三話　琉球の音楽その二

「けれど音楽はな」
「琉球の音楽はなかったか？」
「いや、部活としてはあるんだよ」
「けれど入らないし気が乗らないか」
「一度覗いたら何か違っていた」
実際にだ。見て聴いたことはあるというのだ。
「けれど。琉球の人間もいなかったしな」
「本場の音楽じゃなかったか」
「それで入部する気になれなかった」
「成程な。琉球の人間から見ればか」
「ああ、駄目だった」
タムタムに深く話す。
「だから今はそっちの音楽はしてないんだよ」
「成程な」
「今はどうか知らないけれどな」
「じゃあまた行ってみるか？」
ここでこう提案するタムタムだった。
「それならな」
「部活にか」
「それって入学の頃の話だよな」
「ああ、そうだ」
その通りだとだ。ダンも答える。
「入学して三日目だった」
「あれから一年経ってるんだ。部活も変わってるだろ」
「それで行ってみてか」
「やるかどうか決めてみたらどうだよ」
タムタムはこうダンに提案する。

「それでどうだ？」
「そうだな」
そしてだ。ダンもだった。
タムタムのその言葉に頷きだ。そうしてこう答えた。
「一度また覗いてみるか」
「そうしたらいいさ。それにな」
「それに？」
「ここは日本だからな」
タムタムが今言うのはこのことだった。
「琉球じゃないからな」
「それも頭の中に入れてか」
「しかもこの学園はな」
タムタムは八条学園の特色のことも話す。
「あれだろ。連合中から集るだろ」
「マウリアからもな」
「それなら色々な奴がいるさ」
彼はこのことも話すのだった。
「だから。本場の琉球音楽じゃなくてもな」
「当然か」
「ああ、仕方ないだろ」
こうダンに話すのである。
「それもな」
「そうか」
「やっぱりあれか。本場の音楽は違うか」
「違う。琉球の音楽は琉球人でないとな」
「本来のよさは出せないか」
「そう思う。けれどそうだな」
ダンはタムタムの言葉にだ。納得するものを見た。
そうしてだ。こう言うのだった。
「それで駄目とかそういうものじゃないな」

「そうだろ?日本人が他の国の雅楽に文句を言うか」
「言わないな」
むしろだ。他国の人間がしていると喜ぶのが日本人だ。実際にそうして茶道にしても華道にしても連合中に広まっているのだ。
「それと同じか」
「そう思っていいだろ。だからな」
「特に気にすることはないか」
「まずはあれだ」
タムタムはさらに話す。
「音楽を聴くことだ」
「その琉球音楽をか」
「そうだ。聴くんだ」
「わかった。じゃあ聴いてくる」
「俺も行っていいか?」
タムタムはダンに同行を願い出た。

第二百六十三話　琉球の音楽その三

「そうしていいか？フランツも連れてな」
「あいつもか」
「あいつも連れて行きたいんだ」
「ここでもか」
「音楽は野球選手にも、とりわけピッチャーにとっていい」
スポーツそのものにだ。音楽、即ちリズム感がいいのはこの時代でも言われていることだ。それでタムタムは今言ったのである。
「だからだ」
「そこでタムタムなんだな」
「あいつは俺が知ってる中で最高のピッチャーだ」
そこまでのピッチャーだというのだ。
「あそこまで能力の高い奴はいない」
「ピッチャーとしてはか」
「天才だ」
タムタムは確かに言う。
「しかも身体は頑丈だしな」
「確かにな。あんな頑丈な奴はそうはいないないな」
「だから余計にいい」
身体の頑丈さはスポーツ選手が大成するには必須だ。若し怪我に弱ければそれで終わってしまう。スポーツ選手にとっては何時でも怪我は最大の敵なのだ。
「だからあいつも連れて行きたい」
「あいつ音楽センスはあるのか？」
「ある」
こう答えるタムタムだった。
「歌わないがリズム感はある」
「それにも恵まれてるんだな」

フランツにないのは頭だけだと言われている。
「それでか」
「とりあえずあいつには色々な音楽を聴いてもらっている」
バッテリーとしてだ。そうしているのだ。
「だから今回もな」
「聴いてもらうんだな」
「それでは。連れて行くぞ」
「じゃあ三人だな」
こうしてだった。三人になってだった。ダンはその琉球音楽部に向かうのだった。
その途中だ。タムタムが言った。
「それでだけれどな」
「それで？」
ダンが彼に問う。
「何かあるのか？」
「いや、琉球の音楽は」
それ自体に尋ねてきたのだった。
「どんな感じだ？」
「まああれだな。やっぱり日本に近いか」
「そうか。そうなるんだな」
「音階が独特だ」
それが違うというのだ。
「今の音楽は西洋音楽の音階だな」
「そこが違うんだな、まずは」
「ああ。ドレミファソラシドで」
この時代も健在の音階である。
「レとラがない」
「じゃあ音階は六か」
「それで成り立っている」
音階はそうなっているとだ。ダンは話す。

「そこがまず違っていてだ」
「楽器はどんな感じなんだ？」
「日本の古来の楽器に似ているな」
それはそうなっているというのだ。
「笛やそうしたものもあるしな」
「何だ、やっぱり日本の影響があるんだな」
「長い付き合いだからな」
日本と琉球はそうだというのだ。
「一緒の国だった時代も長いしな」
「今でも兄弟国だったな」
「アイヌともな」
日本と琉球、そしてアイヌ連邦は兄弟国同士とされている。そうした関係にあるのだ。
「だからな」
「文化も似てくるんだな」
「影響を受け合うからな」
そのことはダンも認める。
「俺も日本文化は嫌いじゃない」
「日本はどうなんだ？」
フランツはダンに日本自体はどうかと尋ねた。
「この国はな」
「好きだ」
一言でだ。ダンは答えた。

第二百六十三話　琉球の音楽その四

「いい国だな。それにな」
「それに？」
「長い付き合いでよく知っている」
このこともあるというのだ。
「御互いにな」
「やっぱり兄弟国なんだな」
「陛下もな」
琉球国王だ。あの尚氏である。王家として復活しているのだ。
「日本の天皇陛下と仲がいいしな」
「確か血縁関係だったよな」
「ああ、そうだ」
その通りだとダンはだ。タムタムに答えた。
「陛下の祖母だった方、先の先の王后陛下がな」
「日本人だったんだな」
「日本の皇室の方だった」
それでだ。縁戚関係にあるというのだ。
「確か日本の今の天皇陛下もだ」
「ああ、あの人か」
フランツは日本の天皇陛下についてふと思い出して言った。
「あの可愛らしい感じの若い女の人だよな」
「あの方も確か琉球王家の血が入っておられる」
「そうなんだな」
「御互いに婚姻も重ねている」
これは日本と琉球だけではない。各国の皇族、王族同士でそうしているのだ。連合では婚姻でつながりを深めることもしているのだ。
「だからな」
「本当に兄弟国なんだな」

「国家元首同士もそうか」
「そうなる。だから日本は嫌いじゃない」
これもだ。婚姻政策の成果だった。
しかしだ。ここでだった。
タムタムはだ。ダンにこのことを尋ねたのだった。
「しかしダンもな」
「俺も？」
「王室への敬意はあるんだな」
「ない筈がない」
ダンはそれは当然だと答えた。
「何しろ我が国の王家の方々だからな」
「王家に敬意を払うのは」
「自分の国への愛情と同じだ」
「そうなのか？」
そう言われてだ。フランツがだ。
いぶかしむ顔になってだ。こうダンに問い返した。
「国家元首に敬意を払うのは普通か？」
「俺もそれは」
タムタムもだ。いぶかしむ声になっている。
「ぴんとこないな」
「そうだよな。ちょっとな」
「ああ、それはな」
ダンは二人が何故そうなのか。すぐに指摘してみせた。
「そっちは両方共大統領だったよな」
「ああ、選挙で選ぶぞ」
「大統領だからな」
「だからだな。大統領になるとな」
大統領と国王の違いがだ。ここで出た。
「選挙で落選もするし政治に実際に関わったりするしな」
「しょっちゅうかわったりするしな」

「悪かったらそれで終わりだからな」
「琉球ではそれは首相がやる」
琉球王国も立憲君主制だ。それで首相が実質的に全てを取り仕切るのだ。
それでだ。国王はというと。
「陛下は象徴だからな」
「ああ、政治には関わらないでか」
「それで国家行事だけに専念しておられるんだな」
「陛下は政治はされないからな」
これは琉球でも同じだ。そしてこのことも同じだった。
「祭事をされるからな」
「祭事なあ」
「俺の国にはな」
「俺の国もだ」
「ないな」
フランツもタムタムもそれぞれ言う。尚フランツはニュージーランド人、タムタムはパラオ人だ。どちらも大統領が政治を行う国である。

第二百六十三話　琉球の音楽その五

そしてだ。共和制の国は。
「祭事はないな」
「ないか？」
フランツはタムタムの言葉に問い返す。
「そうだったか？」
「ああ、ない」
こうはっきりとフランツに返すタムタムだった。
そのうえでだ。こうフランツに前置きしてきた。
「難しい話になるけれどいいか？」
「聞くことは聞けるぞ」
理解するかどうかは別だった。
だがそれでもだ。フランツは話は聞くというのだ。
それを聞いてだ。タムタムも納得してだ。そのうえで話をはじめた。
「それじゃあ話すな」
「それでどうして祭事がないんだ？」
「共和制は近代になって生まれた国家だ」
十八世紀末のアメリカ合衆国建国からはじまる。
「それまで王制の国は王は政治を行うと共にだ」
「それと一緒にか」
「祭事も行ってきた」
そしてそれが何故かということもだ。タムタムは話す。
「祭事は昔から国家にあった」
「そうだったのか」
「授業であったが」
フランツは成績がかなり悪い。それも全教科だ。
「それで聞かなかったか」

「知らないな」
「そうか」
そしてタムタムもこのことはそれで終わらせた。そしてだ。
あらためてだ。話を再開させた。
「昔の神権政治が残ってだ。キリスト教なりになってもだ」
「残っていたのか？」
「残っていた。欧州では皇帝や王は教会と密接な関係にあった」
カトリックでもプロテスタントでもだ。イギリスでは国教会の首長はイギリス国王だ。宗教も国家の下において統一されるということなのだ。
「宗教は祭事を行う」
「王様が行うんだな」
「だから王制の国には祭事がある」
そうなるのだった。宗教が違っていてもだ。
「しかし共和制の国には王はいない」
「じゃあ祭事は」
「なくなる」
それも否定してできているのが共和制なのだ。
「国家が宗教をそのシステムから排除したのが共和制だ」
「大統領がいるだけじゃないんだな」
「大統領は政治に専念する」
祭事は行わないのが大統領だというのだ。
「就任式で聖書に手を当てていてもな」
「ああ、アメリカだよな」
それは知っているフランツだった。ただしだ。
「何か聖書と一緒に仏教のお経とか神話の本とかも一緒に台に乗せて全部に手を当ててそれで宣誓したりしているよな」
「それでも祭事は行わない」
共和制の国ではだ。
「王様は別だがな」

「そうだったのか」
「王制にはそうした意味合いもある」
祭事が国にあるというのだ。
「そういうことだ」
「成程な。そうなんだな」
「それでだ」
「それで？」
「王様は必ず何処かの宗教を信仰している」
そもそも人自体がそうだ。尚連合の人口は四兆だが宗教人口は十七兆近い。一人が複数の宗教を信仰していたりするのだ。
そしてだ。王族も当然信仰している宗教がある。そのことについてはだ。
ダンがだ。こうフランツに話した。
「琉球じゃ仏教だからな」
「仏教徒か？琉球の王様って」
「日本から入って来た」
それで信仰しているというのだ。

第二百六十三話　琉球の音楽その六

「陛下は敬虔な仏教徒でもあられる」
「へえ、そうだったのか」
「ただ。国民の宗教はかなり多彩だな」
「仏教徒だけじゃないんだな」
「色々いるな。キリスト教もあれば仏教もあれば」
そして他にはというと。
「エジプトやらケルトやらメソポタミアやら。各国の神話の神様も信じられているしな」
「じゃあ日本の神様もいるんだな」
「アイヌの神様もいるぞ」
地球にあった頃は日本の北の端と南の端にそれぞれあったがそれでもだ。この時代では宗教では雑多な状況の中にあるのである。
「本当に色々だな」
「そうみたいだな」
「琉球の王様は仏教徒でならないといけないけれどな」
ダンはこのことは絶対だと話す。
「それでも全部の宗教を保護しないといけないからな」
「信仰の自由だな」
タムタムがそれだと指摘した。
「それだな」
「ああ、それだ」
まさにだ。それだというのだ。
「琉球でもそれは守られている」
「まあ信仰の自由は連合だったら何処でもだしな」
タムタムも言ったこのことは中央政府も各国も法で定めている。
「怪しいカルト教団はあってもな」
「あるからな、ああいう教団は」

「何処にもな」
タムタムはダンにこう返す。
「あるからな」
「厄介なことにな」
「ああいう教団は別にしてな」
とりあえずだ。例外というのだ。例外は何時でも何処でも存在している。
「信教は自由だからな」
「連合ではそうだな」
「けれど琉球の王様はか」
「絶対に仏教徒でないとけない」
これは絶対だというのだ。
「それは絶対だ」
「そのうえで信仰の自由は守るか」
「そうしないといけない」
「成程な。そうした事情があるのか」
そうした話をしながらだ。一行はその琉球音楽部の部室の前に来た。
その扉はだ。ごく普通だった。
「普通だな」
「当然だがな」
ダンがフランツに応える。
「相当胡散臭い部活でない限りはな」
「入り口は普通か」
「胡散臭い部活は扉から既に怪しい気配が漂う」
ダンは言う。
「何かが違う」
「そして中に入ればだな」
「その怪しさが最高のものになる」
そうなるというのだ。

「しかしこの部活にはそれがない」
「まともな部活か」
「とりあえずはそうだろうな」
普通の部活だというのだ。
「部員も極端におかしな人間はいないな」
「じゃあ中に入ろう」
それならばだとだ。タムタムがダンとフランツを誘う。そうしてだった。
ダンがだ。左から右に開く扉を引いてだ。挨拶をした。
「はじめまして」
「あれっ、新入部員の人？」
「ひょっとして」
彼が挨拶をするとだ。部室の中からだ。
それぞれだ。男と女の声がしてきた。見ればそこにいるのは。
何故かだ。テンボとジャッキーだった。二人の姿を見てだ。
ダンはまずこう言った。
「怪しい気配はしなかったがな」
「まさかの展開だな」
タムタムは言葉に表情を消して述べる。
「この二人がいるとはな」
「確か推理研究会だった筈だが」
「ああ、実はな」
「探しものを頼まれたのよ」
それでいるとだ。二人は三人に答える。

第二百六十三話　琉球の音楽その七

「それでなんだよ」
「今ここにいるのよ」
「成程な」
「そういうことか」
話を聞いてだ。ダンとタムタムは納得した。
しかし二人の横にいるフランツは首を捻ってこう言った。
「掛け持ちはしていないか」
「それはないさ」
「あたし達は推理一筋だから」
テンボとジャッキーの方からそれを否定する。
「だから。探しものを頼まれたんだよ」
「ちょっとね」
見れば二人は部室の中を荒らし回っている。探しものというよりは下手な大掃除だ。部室の中は最早嵐の過ぎ去った後の様になっている。
その状況を見てだ。ダンは二人に尋ねた。
「それで探しものは何だ？」
「ああ、肝心のな」
「それのことね」
「それは何だ」
ダンは尋ねながらだ。二人がその探しもの自体を忘れている可能性も考慮した。二人にはこうしたこともあったりするからだ。
しかし今回はその懸念は杞憂に終わった。二人はダンにこう答えた。
「笛だよ」
「それなのよ」
「笛か」

「そう。黒い琉球音楽の笛な」
「それを探してるのよ」
そうだというのだ。
「ただな。それが何処にあるのか」
「それがわからないのよ」
「琉球の笛ってどうした感じだろうな」
「それがわからないし」
「黒い琉球の笛だな」
ダンは二人の話を聞いて静かに言った。
それでだ。彼はその荒らされ回っている部室の中を見てだ。
そのうえでだ。あるものを手に取った。それで二人に見せた。
「探しものはこれか」
「ああ、これだよ」
「これよ」
黒い琉球の笛がだ。ダンの手にあった。その笛を見てだ。
二人は笑顔になってだ。こう言うのだった。
「一体何処にあったんだ?」
「幾ら探しても見つからなかったのに」
「壁にかけてあった」
そうだったとだ。ダンは冷静に話す。
「そこの壁にな」
「何っ、壁にかけてあったのか!?」
「そんな場所に」
「今テンボがたまたま床に落ちていたこれを手にしてだ」
何とだ。彼は既に見つけていたのだ。
「それを壁にかけた」
「あれっ、何時の間に」
「そうなったのよ」
「今さっきだが」
こう答えるダンだった。

そしてだ。彼は二人にこうも尋ねるのだった。
「しかしだ」
「しかし？」
「今度は何よ」
「今まで気付かなかったのか」
言うのはこのことだった。
「すぐに見つかったが」
「いや、目立たないからな」
「どうしてもね」
「そうなのか？」
二人の言葉にはだ。タムタムもだった。
首を傾げさせてだ。こう言うのだった。
「簡単に見つかったけれどな」
「こんなに黒く」
ダンはまず笛のその色から話す。見ればだ。
見事なまでの漆黒だ。見栄えがいい位だ。
そしてだ。その大きさについても言うのだった。
「大きいのにな」
「んっ、そういえばその笛は」
「大きいな」
タムタムだけでなくフランツも言う。
「それが琉球の笛か？」
「そんなに大きいのか？」
「いや、この笛は別格だ」
あくまでそうだとだ。ダンが話す。
「こんなに大きな笛は琉球にもない」
「じゃあ特別か」
「特別の笛か」
「そうだ。特別大きい」
とにかく大きくて目立つ。ダンはその笛を見ながら話す。

第二百六十三話　琉球の音楽その八

「しかもこの色だからな」
「目立たない筈がないが」
タムタムもその笛を見てだ。また話す。
「しかしな」
「そんなに目立つか？」
「この笛って」
「目立つが」
ダンはテンボとジャッキーのことはわかっている。しかしだ。
それでもだとだ。二人は言うのだった。
「それでもわからなかったのか」
「いや、笛ってな」
「何かこう」
ここでだ。二人は何故かだった。
笛を出してきた。しかしその笛は。
クラリネットだった。その笛を見せてダン達に話すのである。
「これだろ？」
「これが笛っていうんでしょ」
「そんなのが笛なんてな」
「誰も思わないでしょ」
「いや、思うだろ」
ダンは呆れながら二人に返す。
「というか知ってるだろ」
「知ってるも何も」
「笛ってだからこういう縦に吹くのを言うんでしょ？」
「フルートとか知っているのか？」
ダンはさらに呆れながら問い返した。
「それは」

「フルートって何だ？」
「食べられるの？」
返答はよりによってこんなものだった。
「果物のことか？」
「そうじゃないの？」
「だから違う」
また言うダンだった。
「笛といっても何種類もある」
「へえ、そうだったのか」
「一種類じゃないの」
「本当に知らないんだな」
ダンは二人が笛についての知識があまりに薄いことを知った。
それでだ。実際にその黒く大きな笛を手にしてだ。
あらためてだ。二人に話すのだった。
「これはな」
「それでどうやって吹くんだ？」
「どうするのよ」
「こうする」
横にして吹く。そうしてだった。
その音色を聴いてだ。まず言ったのはフランツだった。
「いいな」
「わかるか？」
「ああ、いい音程だ」
こうだタムタムに答えるのである。
「外してもいないな」
「そうだな。本当にかなりいいな」
タムタムもだ。聴いてみてだ。
確かな顔でだ。こう答えた。
「上手い」
「これがダンの笛なんだな」

「どうだ？いいリズムを聴いて」
それでどうかとだ。タムタムはバッテリーの相方に尋ねる。
「何か得られそうか？」
「それはわからないが」
まだだ。それはだというのだ。
しかしだった。その表情は確かでだ。その言葉は。
「だが。感じるな」
「感じるんだな」
「ああ。何かを感じる」
こうバッテリーの相棒に言うのである。
「これでいいのか？」
「感じればそれで充分だ」
タムタムは微笑みだ。相棒であり親友である彼に話した。
「それでいいんだ」
「そうか。いいんだな」
「まず感じることだ」
また言ったのだった。

第二百六十三話　琉球の音楽その九

「感じてそこから」
「そこからか」
「実になるからな」
「だからいいんだな」
「ここに来た意味があった」
タムタムは微笑みこうまで言った。
「御前が何かを得てくれればいいと思っていたんだ」
「音楽からか」
「リズム感はスポーツ選手に必須だからな」
「いつも言ってるよな」
「テンポもある」
投球にもテンポが重要なのだ。二十世紀に日本で活躍した江夏豊というピッチャーはピッチングのテンポがいいことでも有名だったのだ。
フランツはテンポもいい。それを見てタムタムは彼をここに連れて来たのだ。
そしてだ。その成果があったのだ。
「いい感じだな」
「ああ、かなりな」
「それなら」
ここまで話してだ。タムタムは。
今度はだ。笛の音を聴いてだ。こう言うのだった。
「いいな」
「いいか？」
しかしだ。吹いている本人はというと。
顔を曇らせてだ。こう言うのだった。
「俺は今は」

「駄目か？」
「笛は久し振りだ」
それでだというのだ。
「だからな。本調子じゃない」
「それでか」
「ああ、こんなのじゃ駄目だ」
納得していない顔での言葉だった。
「もっとな。いい感じじゃないとな」
「厳しいな」
「音楽は完璧じゃないとな」
よくないというのだ。
「けれどな」
「けれどか」
「やっぱり楽しいな」
微笑みだ。タムタム達にこう答えたのである。
「笛を吹くのは。それに」
「それに？」
「琉球の音楽は」
いいというのだ。それ自体が。
「聴いていても演奏していても」
「いいか」
「温かい」
こうまで言うのだ。
「自分の国の音楽だからか」
「それはわかるな」
ここで言ったのはフランツだった。
「俺の国はニュージーランドだが」
「確かニュージーランドは」
どういう国なのか。フランツはこのことも話した。
「マオリ人との混血だったな」

「はじまりはな」
今はさらに混血してカオスな状況になっている。連合の他の国と同じく。
「まあそれでマオリの音楽もな」
「残ってるんだな」
「残ってるさ」
実際にそうだと言う。
「あの南洋のな」
「ああいう感じのな」
「それであああした音楽を聴くとか」
「気持ちが落ち着く」
フランツはそのマオリの音楽にそれを感じるというのだ。
「その他にはな」
「イギリス系の音楽もか」
「あれもいいな」
こう言うのである。
「ニュージーランドは元々両方から成り立ってるしな」
「それはわかったけれどな」
ここで言ったのはダンだ。彼はこうフランツに言った。
「けれどイギリスか」
「イギリスは嫌いか？」
「好きになれない」
そうだというのだ。エウロパのその国は。

第二百六十三話　琉球の音楽その十

「それはそっちも同じじゃないのか？」
「まあな。俺もイギリスはな」
「好きじゃないんだな」
「けれどイギリス系の音楽は実際に入って来たからな」
これは紛れもない事実だというのだ。
「だからそれはな」
「受け入れているんだな」
「音楽はいいからな」
つまりいいものは取り入れるというのだ。
「だからな」
「確かに音楽はいい国だったな」
「そうだったな」
ダンとタムタムは頷く。イギリスの過去に。今のイギリスとは交流がないからはっきりとしたことは言えないのだ。これはエウロパ全体についてである。
「料理はともかくな」
「あれは取り入れてないか」
「最初はあったんじゃないのか？」
フランツの返答が実に曖昧なものになった。
「多分な」
「おい、それは知らないのか」
「イギリスについて知ってるのはな」
この辺りは勉強が苦手なフランツらしかった。
「あれだろ。山賊の国だろ」
「海賊だな、そこは」
タムタムがすぐに指摘する。
「イギリスといえばな」

「あれっ、イギリスって山の国じゃなかったのか？」
「イギリスは海の国だった」
ここから既に間違えているフランツだった。
「山はあまりないぞ」
「そうだったのか」
「じゃあ聞くがな」
「ああ、何だ？」
「シェークスピアは何人だ？」
かなり基本的な質問だ。連合でも小学校で出る問題だ。しかし。
フランツはだ。こう答えてしまったのだった。
「アッシリア人だったか？」
「アッシリアは連合だぞ」
「だから連合の人間なんだろ？シェークスピアって」
「違う。エウロパの人間だ」
「あれっ、そうだったのか」
「じゃあ代表作は何だ」
これまた小学生の問題である。しかし。
フランツの返答は。これまたこんなものだった。
「走れメロスだったな」
「それは太宰治だ」
言わずと知れた日本の作家だ。尚シェークスピアは劇作家であり太宰は小説家である。このことも既に大きく間違えているフランスだった。
「全然違うぞ」
「そうだったのか」
「そうだ。とにかくだ」
タムタムは相方に呆れない。それでだった。
その話は置いておいてだ。彼にあらためてこう話した。
「じゃあもっとな」
「この音楽を聴くんだな」

「そうしような」
これが彼の提案だった。
「暫くな」
「ああ、じゃあな」
「笛だけじゃないからな」
ここでだ。ダンはだ。
笛を一旦止めてだ。こう二人に話した。
「他の楽器もあるからな」
「他の楽器も演奏できるんだな」
「ああ、できる」
実際にそうだというダンだった。

第二百六十三話　琉球の音楽その十一

「琉球にいた時は色々やっていたからな」
「それでか」
「じゃあ笛が終わったらだ」
その時にだというのだ。
「演奏していいか」
「歌もあるか？」
「歌も歌える」
そのだ。琉球の音楽をだというのだ。
「それもいいか」
「頼む」
タムタムは微笑んでダンに答える。
「それじゃあな」
「何か面白そうだな」
「そうよね」
テンボとジャッキーはまたいた。それでだ。
顔を見合わせてだ。こう話すのだった。
「じゃあ今からな」
「時間もあるしね」
「聴くか」
「そうしよう」
こうしてだ。二人の残ることにした。しかしだ。
フランツはだ。二人にこう尋ねたのだった。
「いいのか？事件の解決を言わなくて」
「ああ、それ」
「それはもう終わったから」
何でもないといった口調で返す二人だった。そのうえでだ。
ジャッキーがあるものを出してきた。それは。

携帯電話だった。それをフランツに見せながら説明する。
「これで連絡したから」
「事件は解決したか」
「もうちょっとしたら部員の人も集まるし」
「そうか。部員も来るんだな」
「ええ、来るって返信があったわ」
携帯のやり取りは流石にできるジャッキーだった。幾らその頭に問題があってもだ。そうした最低限のことはできるようである。
そのジャッキーがだ。話すのだった。
「だからね」
「もういいんだな、それは」
「ええ、いいわ」
「本当にそうだといいんだがな」
タムタムはジャッキーの言葉を信じられなかった。何しろこれまでのことがあるからだ。
それでだ。首を捻りながら彼女に確認した。
「本当にそう返信が来たのか？」
「来たわよ」
「じゃあ悪いが」
こう前置きしてだ。彼女に言った。
「そのメール見せてくれるか？」
「ええ、いいわよ」
何でもないといった口調でだ。ジャッキーは応えてだ。
そのうえでそのメールを見せる。するとそこには。
解決したのは本当にあんた達か、と書いてあった。そのうえでだ。
何はともあれ解決してよかった、そう書かれてあった。
それを見てだ。タムタムは言った。
「大体わかった」
「わかってくれたのね」
「とりあえず前半はどう書いてある？」

「解決してくれて有り難う」
「そう書いてあるな」
テンボも言う。相変わらず自分達に都合の悪い言葉とかは見えない。
それでだ。こう言うのだった。
「御礼も書いてあるし」
「何か問題があるか？」
「そう思っているのならいいが」
タムタムも二人のことはわかっている。それでだ。
これで納得してだ。いいとしたのだった。
それからだ。二人から顔を離してフランツに話した。
「じゃあ今からな」
「ダンの歌を聴くんだな」
「ここまで来たらな」
それも聴くべきだというのだ。
「そうしよう」
「わかった。それじゃあな」
こうしてだった。二人はだ。テンボとジャッキーも一緒に。
ダンの歌を聴く。そうすることにしたのだった。

琉球の音楽　完

２０１１・８・１８

第二百六十四話　琉球の歌その一

琉球の歌

ダンはだ。まずはだ。
ある楽器を手にした。それは。
琴だった。その琴はというと。
「日本の琴と同じだな」
「ああ。使い方も同じだ」
こうタムタムに応えてだ。琴の前に座りだ。
それから少し弾いてみる。その音色は。
「いい音だな」
「そうだな。いい琴だな」
今度はフランツに応えるダンだった。実際に弾いてみてわかることだった。
そうして弾いてからだ。また言うダンだった。
「これならいい歌が歌える」
「歌もか」
「いい楽器と一緒ならだ」
それならばというのだ。
「いい歌が歌える」
「つまりあれだな」
その話を聞いてだ。タムタムが話した。
「料理と食器の関係だな」
「そうだな。見事な食器がな」
「美味い料理が合う」
そうした話だった。
「自然と釣り合うものになるからな」
「そうだな。楽器は食器だ」
ダンはそれだと言う。そしてさらにだった。

「歌は料理だな」
「そうなるな」
「ああ、じゃあ歌うか」
こうしてだった。ダンは実際に歌いはじめた。その歌は。
テノールだった。西洋の声楽で言うと。
だがそれ程高くない。その歌を聴いてだ。
タムタムがだ。静かに言った。
「声もいいな」
「そうだな」
フランツもタムタムのその言葉に頷く。
「それに音程もな」
「全くぶれない。これは」
「これは？」
「機械的な位だな」
そこまでだ。音程がしっかりしているというのだ。それに加えてだった。
タムタムはダンの歌をさらに聴きながらこう話した。
「それでいて人間味もあるな」
「人間の感覚か」
「音程がしっかりしている」
それは歌が上手であることの必須だ。しかしだ。
それだけで歌はよくないこともだ。タムタムはわかっていた。
それでだ。こう言うのだった。
「それに加えてだ」
「人間味もか」
「その二つがあってだ」
完璧だと。そうだというのだ。
「いい歌になる」
「技量に加えてか」
「心も込める」

つまりはそういうことだった。その二つがあってなのだ。
「それでいい」
「じゃあダンの歌は」
「両方を備えている」
まさにそうだとだ。タムタムは言う。
「見事だ」
「そうだな。聴いていて心が落ち着く」
「これがか」
「アイヌの歌なのね」
テンボとジャッキーも話す。ただしダンの国は間違えている。

第二百六十四話　琉球の歌その二

「そうだよな。失われた北朝鮮の歌か」
「それを今に伝えているのね」
「北朝鮮ときたか」
この国の名前が出たのはタムタムも予想していなかった。
それで少し呆れてだ。こう言ったのだった。
「今その国はないぞ」
「あれっ、確か洪童の国だろ」
「そうじゃなかったの？」
「あいつの国は韓国だ」
このこと自体が間違いだった。
「北朝鮮ではない」
「そうだったのか」
「洪童の国って韓国だったの」
「同じ民族の国だが違う国だ」
そこはかなり違うというのだ。
「何故そうなる」
「北朝鮮ってもうないのか」
「今はじめて知ったわ」
「とっくの昔に崩壊して消え去っている」
そうなったとだ。タムタムはテンボとジャッキーに噛んで含める様に話した。
「韓国に併合されたぞ」
「ううん、何かそういう国があったから」
「それでだと思ったけれど」
「けれどもうないのか」
「そうだったのね」
「そうだ、ない」

タムタムはさらに説明する。
「何でそんな国の名前が出て来たのか不明だが」
「まあ何ていうかな」
「ちょっとね」
テンボとジャッキーの返答はかなり曖昧なものだった。
その曖昧な返答でだ。こう話したのだった。
「北朝鮮の映像とか見たらな」
「凄いインパクトだし」
「それにあの国家元首とかな」
「有り得ない位酷いから」
金正日の名前は歴史に残っている。史上最低最悪の独裁者、人類の恥としてだ。尚同じ人類の恥には鳩山由紀夫や管直人、そしてその彼等の政党を擁護していた日本のマスコミ達も入っている。
その彼等の映像を観てだ。二人は考えたのだ。
「あの国がまだあるか」
「思ったのよ」
「連合の国は全て民主主義だ」
タムタムは今度はこのことについて言及した。
「あの国は民主主義じゃなかった」
「けれど国名は」
「民主主義臣民共和国だったけれど」
「嘘だ」
タムタムはその国名自体が嘘だと断言した。
「あの国は世襲制の独裁国家だった」
「じゃあ国名もか」
「嘘なのね」
「そうだ、嘘だ」
また断言するタムタムだった。そうした話をしてだ。
彼等はだ。あらためてだ。
ダンに目を向けてだ。それでフランツに話した。

「それならな」
「聴くか」
「はじまる」
途中テンボとジャッキーのいつもの勘違いがあったがそれでもだ。
ダンの音楽は二曲目がはじまていた。そしてだ。
彼はだ。前の曲と同じく琴を弾いてだ。歌っていた。それを聴いてだ。
フランツはだ。こうタムタムに言った。
「この曲は」
「何かいい曲だな」
「ああ、違う」
そうだというのだ。違うとだ。
「何かがな」
「これが琉球の音楽か」
ダンはだ。笛からだ。
まただ。認識をあらたにするのだった。
「聴いていて落ち着く。それでいて」
「それで？」
「懐かしい感じがするな」
「あれっ、そうか？」
「そうなの？」
フランツの言葉にだ。テンボとジャッキーは。

第二百六十四話　琉球の歌その三

きょとんとした顔になってだ。それで言うのだった。
「俺は別に」
「あたしも・・・・・・いえ」
ここでだ。ジャッキーはだ。ふと気付いた様な顔になってだ。
それでだ。こう言うのだった。
「何か感じるわ」
「感じるのか！？」
「そう、何か」
こう言ったのである。
「何か懐かしい感触が」
「そうだな」
ここでだ。タムタムも言った。
「俺も感じる」
「あんたもなの」
「そしてフランツもだな」
「ああ」
そのフランツもだ。こくりと頷いてだ。タムタムの言葉に答える。
「懐かしい」
「かつて島国だった国ばかりだな」
タムタムはフランツとジャッキー、そして自分自身を見てそのことがわかった。そしてだ。
琴を弾き歌っているダンを見てだ。また言った、
「太平洋の島国だった国ばかりだな」
「太平洋か」
「そうだ、太平洋だ」
タムタムはこうフランツにも話す。
「太平洋の島国ばかりだな」

「太平洋？」
テンボはその名称を聞いてだ。腕を組んで首を捻りだ。
そのうえでだ。こんなことを言った。
「それどんな池だ？」
「あれっ、川じゃないの？」
ジャッキーもこんなことを言う。
「どっかの星の」
「地球にある海だ」
その二人にここでも言うタムタムだった。
「俺達がまだ地球にいた頃その海の中にある島で生きていたんだ」
「ああ、そうなのか」
「そうだったのね」
「テンボも酷いが」
タムタムは首を捻ってから二人を見てまた言う。
「だがジャッキー。御前はその太平洋の島国の人間だろう？」
「フィリピンがそうなの」
「太平洋を知っていて何で川とか言うんだ？」
「違ったの」
「違う。全くな」
尚テンボとジャッキーは学校の勉強は全教科赤点の記録を入学から更新し続けてきている。それはフランツも同じである。
「それはだ」
「そうだったの」
「そうだ。とにかくだ」
二人への話をそれ位にしてだ。タムタムは。
フランツに対してだ。こう話したのだ。
「俺達島国の人間のルーツの一つにだ」
「ルーツ？」
「御先祖様のことだと思ってくれ」
フランツにわかりやすく話したのだった。

「その御先祖様の一つが同じなんだ」
「俺とダンはか」
「俺やジャッキーもだ」
タムタムはそのジャッキーの話もした。
「同じなんだよ」
「そういえば俺の御先祖様に」
フランツもだ。タムタムの話を聞いてだ。
考える顔になりだ。こう述べた。
「マオリ族の人がいるな」
「今もニュージーランドにいるな」
「ああ、いるぜ」
「ニュージーランド人の主要構成民族の一つだからな」
それでいるというのだ。
「今もな」
「そのマオリ族か？」
「マオリ族はその太平洋の島国にいた」
流石に今は宇宙に出ているがだ。地球ではそうだったのだ。

第二百六十四話　琉球の歌その四

「だからだ」
「ルーツは琉球と同じか」
「それで懐かしさを感じるのだろうな」
「御前もだよな」
「そうだ。俺もだ」
同じく太平洋の島国からはじまったパラオの人間としてだ。タムタムも答える。
「俺も懐かしく感じる」
「民族のルーツだからか」
「そういうことになる。それでだ」
「それで？」
「懐かしいものを感じるのもいいことだ」
タムタムは今度はこんなことをだ。フランツに話した。
「そうしたこともだ」
「いいことか」
「スランプになった時に」
野球の話だった。ここでもだ。
「昔に立ち返ることも大事だ」
「前にか」
「答えは過去にある場合もある」
スランプを抜け出すだ。その答えがだというのだ。
「だからだ。それもだ」
「いいのか」
「そうだ、いい」
また話すタムタムだった。
「非常にいいことなんだ」
「前を見るだけじゃ駄目なのか」

基本的にだ。フランツはそうだ。過去より未来を見て動いている。尚常に周りは見ない。そこはタムタムがフォローしているのだ。
「後ろもか」
「たまには見るんだな。若しそれが必要な時に御前が気付かないと」
「その時はどうすればいいんだ？」
「俺が言う」
彼がだ。そうするというのだ。
「そうするからな」
「だからいいのか」
「そうだ。そうしておいていい」
この辺りはまさにバッテリーとしての話だった。
「だから今はな」
「琉球の音楽を聴けばいいか」
「最後まで聴こう」
タムタムはまた話す。
「そうしよう」
「いい曲をだな」
こうした話をしてだった。彼等は実際に音楽を聴き続ける。
テンボとジャッキーもだ。今はだ。
静かに聴いている。そうしてダンの歌が終わってからだ。
二人はだ。しみじみとしてこう言うのだった。
「いいよな」
「ああ、テンボもわかるの」
「俺は天才だからな」
関係ないことを言ってもだ。それでもだった。
彼もだ。感銘した顔で言うのだった。
「いい曲だったよ」
「そうよね。とてもね」
「ああ、ハーブな」
「アイリッシュハーブね」

「琴だからな」
ダンが二人に突っ込みを入れる。その演奏した彼がだ。
「何処がアイリッシュハープに見えるんだ？」
「あれっ、琴なんだろう？」
「琴ってハープのことよね」
「それはそうだ」
琴を英語ではハープと呼ぶ。このことは事実だった。
だが、だ。二人は根本的なことを間違っている。ダンが言うのはこのことだった。それであえてだ。二人に対して言ったのである。
「しかしだ」
「違うのか？」
「アイリッシュハープじゃないの」
「そうだ、全然違う」
ダンの言葉が一層はっきりしたものになる。

第二百六十四話　琉球の歌その五

「というか普通は間違えないが」
「けれど琴は間違いないからな」
「そう思うけれど」
「アイリッシュハープはアイリッシュハープだ」
ダンは今度はここを強調した。
それでだ。また言うのだった。
「琴は琴だ。この琴はだ」
「どういう琴だ？それで」
「どんな感じなのよ」
「日本やアジア圏にある琴だ。あれは西洋の琴だ」
「西洋のか」
「ああ、そうなの」
ここまで聞いてだ。ようやくだった。
テンボもジャッキーも納得した顔になった。そうしてだ。
あらためてだ。彼に言った。
「何となくだけれどな」
「わかったような気がするわ」
「やっとか？」
ダンは二人から言葉を受けた。しかしだ。
あまり安心はせずにだ。こう言うのだった。
「何か不安だがな」
「絶対にわかっていないから安心しろ」
そのダンにタムタムが話す。
「いつも通りな」
「そうだろうな。この二人だとな」
「琴とアイリッシュハープのことを知らないのだ」
そもそもだ。その二つのことさえ知らないというのである。

「だから何を言ってもな」
「わからないか」
「話を聞かないのではないんだ」
テンボとジャッキーは人の話は聞くのだ。尚人の話を聞かないよりさらに悪いのはだ。人が何を言おうが己のエゴをどれだけ悪事を重ねようとも嘘を吐こうとも続ける輩だ。そうした輩こそつける薬がない。
少なくともテンボもジャッキーもそうした人間ではない。悪意はないのだ。
それがわかっているからだ。タムタムは言うのだ。
「話を理解しないのだ」
「できないんだな」
「そうだ、できない」
二人はこちらだった。それでだ。
タムタムはダンにはだ。この話はこれで止めるように勧めるのだった。
「じゃあな」
「じゃあか」
「ああ。琴と歌は聴かせてもらった」
それはいいというのだ。しかしだ。
ここでだ。タムタムはダンにこう言ってきたのだった。
「俺とフランツ、それにな」
「テンボとジャッキーだな」
「そしてだ」
「そして?まだいたか?」
「来ていた」
タムタムは彼にしては珍しくだ。
微笑んでみせた。そうして話すのだった。
「見るんだ」
「あっ・・・・・・」

ダンが彼の後ろに目を凝らすとだ。そこには。
色々な顔触れがいた。
アジア系、ヨーロッパ系、アフリカ系、それぞれが混血した連合独特の多彩な肌、目、髪の色の面々がいた。その彼等はというと。
すぐにだ。ダンは悟ったのだった。
「琉球音楽部か」
「うん、そうだよ」
「俺達がそうだよ」
「琉球音楽部なんだよ」
そうだとだ。彼等もダンの言葉に応える。
そしてだ。その彼等がだ。
笑顔でだ。ダンに言ってきたのだ。
「よかったらだけれど」
「俺達と一緒に琉球音楽やってくれない？」
「君の音楽は凄いから」
「だから」
「凄いからじゃないな」
だが、だった。ダンはだ。
目を鋭いものにさせてだ。まずはこう返した。

第二百六十四話　琉球の歌その六

それでだ。彼等にあらためて話したのだった。
「俺がやっぱり」
「やっぱり？」
「やっぱりっていうと？」
「好きだからだな」
こうだ。ダンは言ったのだった。
「俺が好きだからだな。琉球の音楽をな」
「それでか」
「それでなんだな」
「琉球音楽が好きだから」
「あの演奏ができたんだな」
「好きでないとな」
どうかというのだ。ダンは思慮する顔になってだ。
そうしてだ。また話すのだった。
「音楽は演奏できないからな」
「好きならな」
タムタムがここで、だった。
ダンにだ。こう問うたのだった。
「どうする？それなら」
「答えをどうするか、か」
「ああ。どうするんだ？」
そのことをだ。タムタムはダンに問うたのである。
「続けるか？それとも」
「しないか、か」
「どっちにするんだ？好きなんだな」
「好きだ」
今はだ。ダンもだ。

隠さなかった。そうしてだ。
確かな声でだ。こう答えたのだった。
「好きならか」
「他の雑念は必要か？」
「必要ないな。好きならな」
演奏するべきだ。ダンも答えを出した。
そのうえでだ。さらにだった。
タムタムはだ。そのダンにだ。さらに話した。
「それは御前だけじゃないな」
「誰でもだな」
「その音楽が好きならそれでいいじゃないか」
「誰が演奏してもか」
「琉球の音楽は琉球人だけのものか？」
かなり具体的にだ。タムタムは言ってみせた。
「それはどうなんだ？」
「琉球の料理だけれどな」
ダンはここでは率直に答えなかった。
料理を話に出してだ。そして述べたのである。
「誰にでも食べて欲しい」
「美味いからだな」
「美味いだけじゃなくて身体にもいい」
琉球王国は連合の中でも長寿の国として知られている。その秘訣は健康的な食事にあると言われている。琉球の料理は美味なだけではないのだ。
それでだ。彼等はだった。
「だから是非な」
「食べて欲しいな」
「そうだな。音楽もだな」
ダンはまた答えを出した。
「そういうことだな」

「そうだな。じゃあ」
「琉球料理は誰にも作って食べてもらいたい」
再び料理の話をしてみせた。例えとして。
「そしてだな」
「ああ、そしてな」
「音楽もだ」
その考えにだ。ダンは遂に至った。
それでだ。また言ったのだった。
「料理も音楽も文化だしな」
「その文化は。素晴らしければ素晴らしいだけな」
「皆で楽しむものだから」
「ならな」
「決めた」
今は一言でだ。彼は言った。

第二百六十四話　琉球の歌その七

そしてだ。さらにだった。言葉を続けたのだった。
「琉球音楽部にな」
「入部してくれるか？」
「それじゃあ」
「そうしてくれるか？」
「入部させてくれるか」
お互いにだ。言い合いだ。
そしてだ。遂にだった。
決まった。双方の考えが一致して。
「じゃあ」
「今日から宜しくな」
「同じ琉球音楽部の部員として」
「楽しくやっていこうよ」
「好きな者同士でね」
「ああ」
ダンはだ。微笑んだ。
その微笑みでだ。彼はまた言った。
「そうさせてもらう」
「これでいいんだ」
ここでだ。タムタムも呟く。
「人は好きなものは素直に楽しむべきだからな」
「俺みたいにか？」
フランツもこのことはわかった。それでタムタムに問うた。
「素直に楽しめばいいんだな」
「スポーツでも音楽でもな」
「どっちでもか」
「楽しく楽しむべきだ」

まさにだ。そうするべきだというのだ。これがタムタムの言葉で考えだった。
「何でもな」
「こういうことはか」
「こういうこともだな」
タムタムも笑って話す。
「素直でいいんだ」
「素直が一番か」
「どうもダンはな」
彼はだ。どうかというのだ。
「今一つ素直じゃないからな」
「素直になるのはな」
ダン自身もだ。このことについて話す。
「どうも性に合わない」
「そうなのか」
「だからな。俺はな」
「だが好きなものならな」
「素直にやればいいか」
「だから素直になれ」
言うのはこういうことだった。タムタムも正面から言う。
「いいな」
「そうだな」
ダンはまた頷いた。こうしてだった。
彼は琉球音楽部に入ったのだった。正式に。
そしてだ。彼は忽ちのうちにこの部の花形になった。その彼を見てだ。
テンボとジャッキーはだ。こう話すのだった。
「ヒッピーエンドか？」
「ハッパーエンドでしょ」
二人はハッピーエンドという言葉も間違えていた。

「あれっ、チョッパーエンドだろ」
「チョップエンドじゃなかったかしら」
「ハッピーエンドだからな、そこは」
タムタムがその二人に突っ込みを入れる。
「違うぞ」
「そうそう、コップエンドだ」
「ワッパエンドね」
「何でそこまで間違えられるんだ」
タムタムは二人のあれっぷりにあらためて首を捻った。
だがそれでもだ。気を取り直してだ。
そうしてだ。二人にこう話した。

第二百六十四話　琉球の歌その八

「とにかくな。ああしたことはな」
「素直になるべきなんだな」
「そういうことね」
「確かに本場の人間は演奏していなかったさ」
琉球音楽部には琉球人がいなかった。そのせいだ。
「けれどそれはな」
「それは？」
「それはっていうと？」
「理由付けだったんだよ」
そうだったというのだ。
「ただのな」
「そうなのか」
「それだけだったの」
「あいつは根はいい奴だ」
親切で気が利くのはクラスの皆が知っている。
「それでもな。素直じゃないからな」
「それで自分の気持ちに従わないでか」
「部活に入らなかったの」
「入りたい部活に入って楽しめばいいんだ」
さらにだ。その部活が楽しめる雰囲気ならだ。
余計にだ。そうすればいいというのだ。タムタムが言うのはこのことだった。
それでだ。彼は言うのだった。
「理由付けをしてもそれはいいことを生み出さないんだ」
「それなら素直にいくべき」
「そういうことね」
「そうだ。俺はあいつの背中を押したんだ」

そうしたというのだ。
「そうしたんだ」
「じゃあいいことをしたのか」
「そうなるわよね」
「いいことかどうかはな」
「わからない？」
「そうなの？」
「そうだ。だからハッピーエンドかどうかもわからない」
それもわからないというのだ。そしてだ。
タムタムは今度はだ。こんなことを話した。
「けれど素直になって好きなことをやれるのならな」
「いいか」
「そういえば私達もだしね」
テンボとジャッキーはここで強引にだ。自分達のことに当てはめてだ。
そしてだ。こう話すのだった。
「自分達の好きな探偵やってるし」
「しかも天職のな」
「そうそう。私達は天才よ」
「連合のシャーロック＝ホームズだ」
「それはどうかと思うがな」
タムタムは二人に対しても素直だった。
「ちょっとな」
「何だ？俺達の推理に嫉妬しているのか？」
「タムタムらしくないと思うけれど？」
「いや、別にな」
実際にだ。タムタムは二人に嫉妬していない。そもそも彼は嫉妬深くない。基本的に人は人、自分は自分という考えなのである。
その彼はだ。とにかくだ。ダンについてはだ。
「あいつはあれで一つ楽しみを見つけられた」

「それがどうなるか」
「ダン次第なのかしら」
「そうなるな」
実際にそうだというのだ。
「それはな」
「ダン次第なあ」
「そういうことなの」
「どれだけ素晴らしいものが多く手の届く範囲にあってしかもそれがどれだけでも手に入れられるとしても」
そうしただ。最高と言ってもいい情況でもだというのだ。
「手に入れるかどうか決めるのは本人だからな」
「そういえば俺も」
「私もよ」
テンボとジャッキーはタムタムの言葉に自分達の事情から考えて話した。

第二百六十四話　琉球の歌その九

「事件が一杯あったらな」
「全部私達で解決しようとするわよね」
「手に届く範囲になくてもな」
「この天才探偵コンビに不可能はないから」
「それで解決した事件はあるのか？」
タムタムはここでも顔は冷静だが声は呆れさせていた。
「今まで一度でも」
「何言ってるんだよ。俺達の事件の解決率は凄いんだぞ」
「百パーセントよ、百パーセント」
自分達ではそう思っているのだ。
「凄いだろ、これって」
「滅多にできないわよ」
「何しろ俺達は人類史上最高の名探偵だからな」
「エルキュール＝ポアゾンよりも上よ」
「ネタ＝ウルフルズよりもな」
「ずっと上なんだから」
この時代でもよく読まれている不滅の名探偵達、それこそ推理研究会のメンバーなら誰でも知っている名前もだ。彼等は見事に間違えている。
しかもだ。それを自覚することなくさらに話すのだった。
「その俺達ならな」
「どんな難事件も一発で解決よ」
「そう思っているのならいいんだが」
タムタムもここでは多くは突っ込まなかった。
そうしてだ。話を変えた。二人に気付かれない様にして。
「それでだが。二人共今日の昼は」
「ああ、昼食な」

「それよね」
「ダンは間違いなく琉球料理を食べる」
これはだ。確実だというのだ。タムタムはこう読んだ。
「琉球音楽部に入ったからな」
「母国の音楽を再開して自分への祝いに？」
「それなの」
「そうだろうな。それで俺達もだ」
翻ってだ。彼等はどうするかというのだ。
「琉球料理を食べないか？」
「ああ、いいな」
「琉球料理ね」
二人もだ。それを聞いてだ。
まんざらではないといった顔になってだ。そしてタムタムに応えた。
「じゃあそーきそばがいいか」
「ゴーヤチャンプルもいいわね」
「それにミミガーな」
「足てびちも」
次々に琉球の料理が挙げられていく。
「それにへちまだな」
「あの食べられるへちまね」
「琉球の料理もいいものだ」
タムタムも言う。
「実に美味いな」
「そうだな。それならあいつも入れて四人でな」
「今日のお昼は食べましょう」
「いや、五人だ」
しかしだ。ここでだ。タムタムは二人に言った。
「あいつも入るからな」
「あいつって？」

「誰なの？」
「フランツだ」
絶対のパートナーの名前をだ。彼はここで出した。
「あいつがいないとな」
「ああ、そうかフランツか」
「やっぱりバッテリーだからよね」
「昼はいつもあいつと食べている」
そうしているのだ。彼は。
「バッテリーとしてな」
「絆はここでも健在か」
「お昼も」
「食事を一緒に食べると」
そこからどうかとだ。タムタムはここではキャッチャーとして話していた。
「色々なことがわかるからな」
「へえ、そうなのか」
「御飯を一緒に食べると？」
「よくわかる」
声を微笑まさせてだ。タムタムは二人に話す。
「考えていることや悩みがな」
「食べているとそういうの出るのか？」
「そうなの？」
「出る」
実際にそうなるとだ。タムタムは話していく。
「だからいい」
「俺達は別にないよな」
「そうよね」
テンボとジャッキーもいつも一緒に食べている。二人の仲はいいのだ。ついでに言えば息も合っている。しかし推理には役立っていない。

その二人はだ。ここでも自分達に当てはめて考えてみる。だが答えは当然として見当違いな方向に向かう。しかしそれはなのだった。
タムタムがだ。止めてきた。
「それならいいが」
「いいのか」
「そうなの」
「特にな。そうだったらいい」
「ならいいけれどな」
「それなら」
そしてだ。二人もだった。
それで納得した。その彼女にだ。
今度はだ。フランツがタムタムに言ってきた。
「ところでタムタム」
「何だ」
「琉球料理は何が一番いいんだ?」
「味か?それとも栄養か?」
「どっちもだな。やっぱりピッチャーというかスポーツ選手なら」
「身体にいいものをしっかりと食べる」
タムタムはそこは言い切った。

第二百六十四話　琉球の歌その十

「そうしないといけないからな
「なら何を食べればいい」
「今御前の前にある料理を全てだ」
そのそーきそばに足てびちにだ。豆腐やゴーヤチャンプル、ヘチマといったものがだ。勿論そこには白い御飯もある。琉球でも主食は米なのだ。
そうしたものを見せてだ。タムタムはフランツに話す。
「食べればいい」
「そうか、これを全部か」
「味だけでなく栄養も健在だ」
それが琉球料理だともいうのだ。
「琉球料理はこのまま食べてもいいんだな」
「そういうことだ。だから琉球人は長寿だ」
これは昔からだ。彼等の長寿には定評がある。
「他にはだ」
「これ何だ？」
フランツはここでとぐろを巻いている黒い焼かれたものを見た。それもテーブルの上にある。見たところ鰻か何かに見えないこともない。
それを見てだ。タムタムは言った。
「鰻か穴子か？」
「いや、蛇だ」
それだとだ。タムタムはフランツに話す。
「それは蛇だ」
「蛇？」
「エラブウミヘビだ」
今度はその琉球人のダンがフランツに話す。

「それだ」
「ウミヘビか」
「琉球では昔から食べている」
そのだ。ウミヘビをだというのだ。そしてだ。
ウミヘビの横にあるだ。蝉を水揚げしたものについても話した。
「それもだ」
「ああ、蝉もか」
「それも昔から食べている」
「美味いのか、やっぱり」
「美味だ。しかもだ」
ダンもだ。タムタムと同じことを話す。
「身体にいい」
「そういえば虫って結構美味いよな」
「蝉は食ったことはなかったのか」
「ああ、なかった」
フランツはそれはなかったというのだ。蝉を食べることはだ。
「蟻とかはあるけれどな」
「ニュージーランドで食う虫はそれか」
「ミツアリを食ってるんだよ」
尻のところに蜜を溜める蟻だ。かつてはオーストラリアのアボリジニー達が甘みを取る為に食べていた。つまりデザートなのだ。
それだとだ。彼は話すのだった。
「けれど蝉はな」
「美味だがな」
「そういえば琉球料理であったか？」
ニュージーランドにも琉球人はいる。各国の人間がそれぞれ混在しているのだ。
それでだ。フランツの国にもダンの国の人間はいるのだ。
そのことを話してだ。彼は。
あらためてだ。こうダンに話した。

「もっと前に食っておいた方がよかったか」
「かもな。けれどな」
「けれどか」
「今食える。ならそれでいい」
そうだというのだ。
「食べてみてくれ」
「わかった。それじゃあな」
フランツも頷きだ。そのウミヘビと蝉をだった。
箸で取りだ。そうしてだ。
実際にウミヘビも蝉を食べる。そうして言うのだった。
「いい味だな」
「美味いか」
「ああ、美味い」
また言う彼だった。
「ウミヘビに蝉もどちらも」
「美味いんだな」
「かなりな。いけるな」
「だから昔から食べている」
ダンもだ。そのウミヘビと蝉を食べながら話す。
「琉球の味としてな」
「それでか」
「ああ、それでだ」
こうした話をしながらだった。彼等は昼に琉球料理を楽しみだ。
クラスメイト同士の交流もしていたのだ。

琉球の歌　　完

２０１１・８・２５

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1062b/

八条学園騒動記

2011年11月18日02時47分発行